流星のロックマンR ラストナンバーズ

antinous

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
流星のロックマンＲ　ラストナンバーズ

【Ｎコード】
Ｎ２２４４Ｈ

【作者名】
ａｎｔｉｎｏｕｓ

【あらすじ】
例えば、世界を変えられる力を手に入れたとしたら？　小学６年生のスバルは、とても強い正義の味方だ。宇宙人やサイボーグも敵ではない。だが宇宙の外にいる化け物は例外で、彼らは勝ってはならない敵だった。そしてスバルはそんな化け物を敵にしたまま、世界を変える最後の物語を始めてしまったのだった。現在、星河スバル編を連載中。

サテライトサーバー（1／10　up date　163mem）（前書き）

＞i130666―1567＜「ふう。やっと着いた。ここがサテライトサーバーか。思ってたより広い場所なんだな」
＞i130663―1567＜「どうだ！　すごい場所だろう。驚いたか、スバル？」
＞i130666―1567＜「うわ！　暁さん。いつの間に！」
＞i130663―1567＜「よし！　とにかくこの場所の説明といくぜ！　ここはサテラポリスが管理している。サテライトサーバーだ！　個人情報満載だ！　なお、更新は一番下に追加していく形式をとる！　よく覚えておけ！」
＞i130666―1567＜「へえ。すごいや」
＞i130663―1567＜「でも、注意しなければならないことがある！」
＞i130666―1567＜「なんですか。それは？」
＞i130663―1567＜「ここの個人情報はとにかく危険な代物ばかりだ。戦いに不慣れな初心者ウェーブバトラーにはお勧めできない」
＞i130666―1567＜「ゴクリ……」
＞i130663―1567＜「だから物語を進めて、『自分も一流のウェーブバトラーだ』と思った時にここに訪れるといいぞ」
＞i130666―1567＜「へえ……。一流のウェーブバトラーですか」
＞i130663―1567＜「そうだ！」
＞i130666―1567＜「了解！！」

サテライトサーバー（1／10　up date　163mem）

・星河　スバル
＞i29551―1567＜
本作の主人公。
小学6年生で心やさしい少年。一見普通の子供だが、ロックマンになって世界を3度、救った世界のヒーローである。
宇宙が大好きで、将来は宇宙飛行士になって父親を捜しに行くことを夢見ている。
相棒のウォーロックが不在の為、電波変換は出来なくなってしまった。だが、大切な者の為なら単身で危機に立ち向かうだけの勇気を持っている。

・星河　大吾
＞i19851―1567＜
スバルの父親。
宇宙飛行士でもあり優秀な科学者でもあった彼は、4年前宇宙ステーション『キズナ』の乗組員として宇宙に旅立った。だが、不幸な事故に巻き込まれたために、未だ消息不明。
大吾にまた家族と笑いあえる日々は訪れるのだろうか。

・星河　あかね
＞i32276―1567＜
スバルの母親。
いつも元気に家庭を守る、優しい女性。
得意なことは料理を作ること。
今も大吾の帰りを願い続けている。

・白金　ルナ
＞i３１６４０―１５６７＜
スバルの友達。
コダマ小のクラス委員長であり生徒会長でもある女の子。
以前ロックマンに助けられたことから、彼を慕い恋心を抱くようになった。しかし、スバル達の前では高飛車な姿勢は崩そうとはしない。
本当は心の優しい女の子であるが、その事から本当の気持ちが伝わらないこともしばしば。

・牛島　ゴン太
＞i１８３８０―１５６７＜
スバルの友達。
クラスのガキ大将的な存在。
好物は牛丼。電波変換してオックス・ファイアとなる。

・最小院　キザマロ
＞i１１３４５９―１５６７＜
スバルの友達。
名前が示すとおり、かなり小柄な少年。
頭の良さはゴン太以上、ルナ未満。

・響　ミソラ
＞i３３３５４５―１５６７＜
スバルの友達。

国民的シンガーソングライターでアイドル業や女優業までこなす多忙な少女。スバルの初めてのブラザーで、互いに心の支えとなっている良き間柄。
ＦＭ星人のハープと電波変換することによってハープ・ノートになることが出来る。

・ソロ
＞ｉ２９５５０―１５６７＜
ムー人の末裔。
自分の力のみを頼りにする。孤高の少年。一人で電波変換したその姿は、何物にも頼らないという意味から、ブライと自らをそう名乗る。
ムーの遺産を探して、世界のみならず宇宙を巡る。

・暁　シドウ
＞ｉ２９５４９―１５６７＜
かつてのサテラポリスのエース。
ディーラーアジト制圧作戦の際、爆発に巻き込まれて重傷を負った。その後遺症の所為で前線に立って戦うことは出来なくなってしまった。現在は専ら作戦の指揮系統を任されている。
好物はうまい棒。

・天地　マモル
＞ｉ１９８５８―１５６７＜
大吾の後輩でスバルの良き理解者。
優秀な科学者であり、ニホンのＷＡＸＡに協力して『トラッシュ』を開発した一人。

・宇田海　深祐
＞ｉ１９８７６―１５６７＜
アマケンの職員。
以前の人間不信は治りつつある。

・ウォーロック
＞ｉ１９８７７―１５６７＜
ＡＭ星人でスバルのウィザード。
メテオＧの一件でスバルと離れ離れになってしまった。
スバルとウォーロックは星の壁を越えた親友同士である。

・シューティングスターロックマン
＞ｉ１８７０３―１５６７＜
かつて世界を救った電波人間。その正体は星河スバルという名の少年だった。現在は存在しない架空の戦士となりつつあるようだ。

・謎の電波体
＞ｉ１４４６１―１５６７＜
シューティングスターロックマンと交戦した電波体。どうやらスバル達に恨みを持っているようだ。

・謎の電波体の手下
＞ｉ１４４６０―１５６７＜
ロックマンを取り囲んで数で攻めるも、大吾のお気に入りのバト

ルカード、カイザーナックルで一網打尽にされた。

・モード

＞ｉ１２９２６―１５６７＜

ルナのウィザード。

性格は礼儀正しく、お洒落ポイントもインプットされている、女の子一押しのウィザード。

・アシッド

＞ｉ１２９０６―１５６７＜

暁のウィザードだった、人工電波生命体。

登録コード及び正式名称は、プロジェクトＴＣ試作機Ａｎａｔｈｅｒ―Ｃｕｓｔｏｍ―Ｉｄｅｎｔｉｆｙ―Ｄｏｍａｉｎである。

人間との電波変換を初めて成功させたプロジェクトＴ・Ｃの集大成機。

・トラッシュ

＞ｉ１９８７４―１５６７＜

最新型の人工電波生命体。

登録コード及び正式名称は、プロジェクトＴＣ実験体Ｔｒａｎｓ―Ｒｅｐｒｅｓｅｎｔ―Ａｃｉｄ―Ｓｙｓｔｅｍ―Ｈａｒｄ０２．ｅｗｘｅである。

人間とのスムーズな電波変換を可能としたＷＡＸＡが誇る高性能機。

・オープンマン

＞ｉ１９８６５―１５６７＜
スバルが所有しているナビ。
スバルが小学生になった時、あかねに買ってもらった思い出のナビ。
ちなみに、オープンマン．ＥＸＥはコダマデパートで一体２９８０円で売っている。
口癖は『～だぞ』

・育田　道徳
＞ｉ１４４５９―１５６７＜
スバル達の担任。
髪型は天然のアフロで、肩から常にフラスコをぶら下げている理科教師。
子供が６人いる大の子供好き。

・レイダー
＞ｉ１２９３０―１５６７＜
アメロッパのＮＡＸＡが独自に開発した拠点制圧用戦術兵器。
開発時期からアシッドの兄型機に当たる。
元々、人間と電波変換することには主眼を置いていない戦術兵器としての設計上、出力、運動性、耐久力はアシッドの数倍もの数値を計測では記録したが、電波変換における人間への負担はアシッドのそれを軽く上回る。
その反省から、プロジェクトＴＣの概念の大まかな基盤となった機体と言える。

・オックス

＞ｉ１４４６２―１５６７＜
牡牛座のＦＭ星人。
かつて、宇宙ステーション襲撃の切り込み隊長的な役割を任されていたが、現在はゴン太のウィザードとしてルナ達一行と平和な日々を過ごしている。

・オックス・ファイア
＞ｉ１３４６２―１５６７＜
ゴン太とオックスが電波変換した姿。
豊かな体格から分かるように力任せな攻撃を得意とする。電波変換をものにしていない為他の電波人間より一歩出遅れている感はぬぐえない。

・ノーマルウィザード
＞ｉ１５５４１―１５６７＜
青色と赤色のタイプがある。
ウイルスバスティングをする最低限の戦闘能力を備えてはいるが、バトルウィザードのそれに比べたら微々たるものである。

・ヒールウィザード
＞ｉ１５５３３―１５６７＜
おもに黒色のタイプを指す。
裏のウェーブロードの住民であることが多い。性格は凶暴な者が多いが、全員がそうという訳でもないらしい。

・ハープ

＞ｉ１２９１３―１５６７＜
響ミソラのウィザードで琴座のＦＭ星人。始めは地球侵略の為にミソラに近づくが、ミソラの底抜けの明るさに影響されたのか、すっかり地球に馴染んでいる。
ウォーロックとはよく口喧嘩をする。

・白金　ユリ子
＞ｉ１４９９０―１５６７＜
ルナの母親。
最近はルナの為に、料理をあかねから習っている。

・南国　ケン
＞ｉ１５５４０―１５６７＜
バトルカードショップ、ビッグウェーブの店長。
典型的なサーファーといった風貌で軽いノリが特徴。

・サーフ
＞ｉ１５５４３―１５６７＜
南国のウィザード。
主人同様軽いノリが特徴。店番やカウンター業務をこなす働き者でもある。

・ジョニー・サンダープリッツ
＞ｉ２３３３９―１５６７＜
数多の武勇伝を持つ、すべてが謎に包まれた豪傑。南国の親友らしい。噂ではコダマタウン七不思議に数えられているとかいないと

か。
　とても自由気ままで、存在するだけで人々に希望を与えることができる伝説の男性。

・ブロンド女性
＞ｉ１９８４９―１５６７＜
　ブロンドの髪と容姿が美しい女性。
だが、創世主の使いを名乗る謎の生命体に自身の体を乗っ取られてしまう。
　左手の薬指には夫との指輪が悲しく光る。

・ヘラ
＞ｉ１５５３４―１５６７＜
　地球にやってきた謎の生命体。特徴である不定形の体は、遠い世界からやってきたことを示している。
　自身を神様とも形容する。口調が丁寧な悪妃。

・ハープ・ノート
＞ｉ１８７００―１５６７＜
　ミソラとハープが電波変換した姿。ハープが武器となった姿のギターを使って攻撃する。戦うアイドルでアーティスト。

・ジャミンガー（スラム街の男性）
＞ｉ１９８５３―１５６７＜
　たまたま、ブロンド女性が襲われた時にその場、居合わせていたスラム街の男性が電波変換した姿。

逃げられた妻と寄りを戻すことなく、天に召された。

・ジャミンガー（スラム街の男性その２）
＞ｉ１９８５４―１５６７＜
上に同じく、ブロンド女性が襲われた時、その場に居合わせていたスラム街の男性が電波変換した姿。胡散臭いアメロッパ語を使う特徴をもつ。
人並みの幸せを得ることなくやはり天に召された。

・ヘラ・ローズガーデン
＞ｉ１２９１２―１５６７＜
レギオンが一人ヘラが人間と合体した姿。地球侵攻の手始めとして、人間を誘拐していた。しかし自己の趣味の側面が多分にあった。
バラを主に植物を操る。

・スターダスト・ロックマン
＞ｉ１９８７２―１５６７＜
スバルとトラッシュの変身した姿。シューティングスターロックマンを灰色にしたような姿をしている。
戦闘能力は並の電波人間を軽く凌駕する。

・ソウル・レイダー
＞ｉ１８７０５―１５６７＜
ミライとレイダーの合体した姿。規格外のレイダーと電波変換することによって得る強大なエネルギーは電波人間最強クラス。

・ブライ

＞i１８６９８―１５６７＜

孤高の電波人間。絆を大切にするロックマンと幾度となく衝突した。手に持つ武器は、ラプラスの変化した物である。

人には頼らず自分のみを信じる彼だが、その強さは折り紙つき。

・シリウス

＞i１９８７１―１５６７＜

ブラックホールサーバーの管理人。その眩い輝き放つ体は、全天一の輝きを持つ星の名にふさわしい。　ブラックホールサーバーの中の情報を網羅する彼の知らないものは皆無である。

・響　ワタル

＞i３２２９１―１５６７＜

ミソラの父。ごく普通の研究員だったが、ある事件でフェニックス・リボンに電波変換可能になってしまった。

・響　カンナ

＞i２６５５８―１５６７＜

ミソラの母。ミソラを残し死去。

おしとやかな人物で、いつもワタルやミソラに迷惑をかけていたことを気にしていた。

・フェニックス

＞i１３４５４―１５６７＜

生命を司るＡＭ星の女王。ワタルと電波変換して、フェニックス・リボンになる。故郷を滅ぼしたＦＭ星人に強い恨みを持つ。

・ペガサス
＞ｉ１４９８５―１５６７＜
知恵を司るＡＭ星の三賢者。フェニックスとともに地球に逃げ延びた。フェニックスの命令で地球に氷のアンチフィールドを張る。地球人に電波技術を教えた。

・レオ
＞ｉ１４９８４―１５６７＜
勇気を司るＡＭ星の三賢者。フェニックスとともに地球に逃げ延びた。フェニックスの命令で地球に炎のアンチフィールドを張る。地球人に電波技術を教えた。

・ドラゴン
＞ｉ１４９８１―１５６７＜
思慮を司るＡＭ星の三賢者。フェニックスとともに地球に逃げ延びた。フェニックスの命令で地球に大地のアンチフィールドを張る。地球人に電波技術を教えた。

・ヘル・スコルピオ
＞ｉ１４９８７―１５６７＜
レギオンの一体。猛毒を用い敵に苦痛を味あわせてから仕留める。

・サーフ・サーファー
＞ｉ１９８６９―１５６７＜
南国ケンが電波変換した姿。電波変換の経験は浅いが、センスで補った戦いをする。

・フェニックス・リボン
＞ｉ３２２８８―１５６７＜
電波変換を完全にマスターした電波人間。その力はロックマンにも劣らない。

・ジェミニ
＞ｉ１９８５７―１５６７＜
ＦＭ王に代わってＦＭ星を実質的に支配している宰相。雷神のジェミニとして恐れられている。

・メトリー
＞ｉ１８７０２―１５６７＜
夜太郎のウィザード。その正体は突然変異でウイルスからウィザードになったウイルスウィザード。
メットリオ時代はミスメットリオに選ばれたほどの実力を持つ。

・六角　キミドリ
＞ｉ１９８６１―１５６７＜
テンキュウ高校の高校生。チームを盛り上げるムードメーカー的存在。
電波変換してスコープ・スナイパーとなる。

・アストラル
＞ｉ１２９０８―１５６７＜
プロジェクトＴＣの理念にのっとり生み出された人工電波生命体。正式名称はＡｎｏｔｈｅｒ　Ｓｙｓｔｅｍ　ｆｏｒ　Ｔｒａｎｓ　Ｒａｄｉｏ　Ａｐｐａｒａｔｕｓ　ｉｎ　Ｌａｒｇｅ。
アストラルの登場によって、特別な資質を持つ人間でなくとも電波変換をすることが可能になった。

・ドクターオリヒメ
＞ｉ１９８６６―１５６７＜
天の川王国の科学者。電波科学の第一人者。特にムー文明に関した知識は世界でトップクラスのものがある。
現在はスバル達と同じチームで任務に取り組む。

・ハートレス
＞ｉ１９８５２―１５６７＜
大吾のＷＡＸＡ時代の元部下。そしてあかねの親友。優秀な科学の知識を持つ。そしてスパイ活動を得意とする。
現在はスバル達と同じチームで任務に取り組む。

・双葉　ツカサ
＞ｉ２２７０６―１５６７＜
スバルの元クラスメイト。おっとりとした性格だが、二重人格者である。

・尾上　十郎
＞ｉ１９８６４―１５６７＜
園芸職人。乱暴な風貌と口ぶりだが、仕事は丁寧である。電波変換してウルフ・フォレストとなる。

・クインティア
＞ｉ１１２９２１―１５６７＜
ロイヤルフラッシュ王国のお姫様。だが元犯罪者である。性格は冷静。電波変換してクイーン・ヴァルゴとなる。

・ジャック
＞ｉ１１３１７４―１５６７＜
クインティアの弟。姉と同じく元犯罪者。性格はぶっきらぼう。電波変換してジャック・コーヴァスとなる。

・長官（守丘　デン助）
＞ｉ１２２７０５―１５６７＜
ＷＡＸＡニホン支部で長官を勤める男性。主に作戦の指揮系統を任されている。

・守丘　アトム
＞ｉ１２２７１１―１５６７＜
デン助の子供で、純粋な優しい心を持った幼い少年。足に障害があり車いす生活。
夢は歩けるようになって友達と元気よく遊ぶ事。

・ミラ
＞ｉ１５９７０―１５６７＜
鯨座のＡＭ星人で突然変異の化け物。純粋な子供と電波変換する事により正真正銘の化け物となる。アトムと電波変換する事により、ミラ・イノセントとなる。

・ミラ・イノセント
＞ｉ１５９７３―１５６７＜
正真正銘の化け物と言うに違わない容姿の電波人間。その力は未知数。

・ブライ・オリジン
＞ｉ１３４５６―１５６７＜
ブライがオーパーツよりムーの力を得た姿。ムー人として真の力を解放した、その戦闘周波数は圧倒的である。

・スカッド
＞ｉ１３４６６―１５６７＜
シドウの新しいウィザード。アストラルをベースにアシッドの系譜を組んだ改良が加えられている。ＷＡＸＡが誇る高性能バトルウィザードである。

・グリット・メトリー
＞ｉ１８６９９―１５６７＜

夜太郎とメトリ―が電波変換した姿。ウイルス人間から電波人間に昇華したその力は並大抵のものではない。ツルハシが変形したような大鎌が特徴的。

・ゴールデン・エメリオル
＞ｉ１８３８１―１５６７＜
機械骨格である、メカニカルバイオフレームを完全に電波と同調させた姿。
生身の体では不可能な圧倒的なシンクロ率を実現している。

・ヒカル
＞ｉ２２７０９―１５６７＜
ツカサの中のもう一人の人格。非常に攻撃的な性格をしており、ツカサとは正反対である。
しかし、以前のような凶暴性は幾分か改善されたようである。

・スコープ
＞ｉ１９８７０―１５６７＜
キミドリのウィザード。その正体は望遠鏡座のＦＭ星人の女の子。
写真を撮るのが得意である。
面倒見がよく、大らかな性格を持っている。いつもキミドリの世話を焼いている。

・スコープ・スナイパー
＞ｉ１３４６７―１５６７＜
キミドリの電波変換した姿。特徴的である大口径スナイパーライ

フルはいつも携帯している。
それは武器にもなるし、望遠鏡とカメラにもなる優れもの。スクープを狙い撃ちだ。

・ラプラス
＞ｉ１３４６３―１５６７＜
いつもソロのそばにいる謎の電波生命体。何を考えているのかは一切不明。
なぜソロにつき従っているのかも不明で不気味な存在だ。

・ケフェウス
＞ｉ１３４５８―１５６７＜
幼きＦＭ星の王様。かつて地球を侵略しようとしたが、ロックマンに阻止される。
最終兵器のアンドロメダを行使する権限を持つ人物でもある。現在はスバルの友達。

・デンパくん
＞ｉ１３４５７―１５６７＜
電波社会にいなくてはならない重要人物。とても働き者で、気の利く良い電波だ。
この世界のマスコット的存在。

・プルト・キグナス
＞ｉ１４４６３―１５６７＜
元ＦＭ星人で知略に長けた戦士。ロックマンに倒されて残留電波

となって宇宙空間を漂っていたところ、ある人物に救われた。そしてその時レギオンの力を手に入れてプルト・キグナスとなった。
時空を渡ることが可能。性格は残虐なものに変貌。

・トレイス
＞ｉ１４４６５―１５６７＜
ラプラスに良く似た謎の生命体。シュンランの子供。

・デンパちゃん
＞ｉ１４４５７―１５６７＜
デンパくんの彼女型の電波。なかなかにお熱い関係だ。

・ギガント・オリジン
＞ｉ１４４５８―１５６７＜
最強の究極電波人間。何物も寄せ付けない圧倒的なパワーと、防御力を誇る。きずなクルーの究極の力を得た至高の電波人間。

・キリン
＞ｉ１４９８２―１５６７＜
正義を司るＡＭ星人。
ＡＭ星の裁判長であった。その姿勢は厳格で悪を許さない。ＡＭの三賢者と肩を並べるほどの地位を持つ。
現在はフェニックスに付き従い命令を遂行していく。

・キリン・ライトニング

＞ｉ１４９８３―１５６７＜
キリンと元きずなクルーのジョニーが電波変換した姿。その戦闘周波数はフェニックス・リボンに迫るほどである。
電撃を用いた攻撃を得意とする。戦闘スタイルは二本の槍を駆使した本格派である。

・ロックマン・スターノート
＞ｉ１４９８９―１５６７＜
ロックマンの新しい力。
アカシックレコード内のラーニングレギオン領域にアクセスすることによって変身した姿。
解放ポートはハープ・ノートの記録領域で音波を使った攻撃を得意とする。
主武装はシューティングギター。

・ジェミニ・スパーク―Ｗ
＞ｉ１５５３６―１５６７＜
双葉ツカサがジェミニと電波変換した姿。物腰は柔らかいが知的なファイターだ。
もう一人のジェミニ・スパークとのコンビネーションで戦う。

・ジェミニ・スパーク―Ｂ
＞ｉ１５５３７―１５６７＜
双葉ヒカルがジェミニと電波変換した姿。とても乱暴で破壊衝動に身を任せた戦いをする。
もう一人のジェミニ・スパークとの合体技、ジェミニサンダーはとても強力である。

・インフィニット
＞ｉ２９５４２―１５６７＜
神の究極作品、レギオンズナンバー：ゼロ。全てを超越した強さを持った剣士である。
現在はワタルにオーパーツを集めさせてディメンション・ゴーレムの復活を目論む。

・デューオ
＞ｉ１５５３２―１５６７＜
正式にはディメンション・ゴーレムの一体でコード：デューオ。
とある惑星から宇宙を監視している。
ある人物の命令で定期的に人類を削除している。

・アシッド・エース
＞ｉ１５９６５―１５６７＜
伝説の電波人間。サテラポリスを代表して戦った人工電波人間のパイオニア。
バランスのとれた戦闘能力は付け入るスキを与えない。

・スカッド・エース
＞ｉ１５９７５―１５６７＜
超高性能バトルウィザードと暁シドウが電波変換した姿。
並の電波人間の数十倍の戦闘能力を誇るサテラポリスのエース格。

・ハイド
＞ｉ１５９６７―１５６７＜
かつてオリヒメとともにスバルを苦しめた者の一人。
自称紳士の謎の男性だ。しかしその身のこなし只者ではない。

・五里　門次郎
＞ｉ１６８９９―１５６７＜
かつてオリヒメとともにスバルを苦しめた者の一人。
成金風でプライドの高い悪人である。しかしその権力只者ではない。

・セツナ・Ｗ・リフレイン
＞ｉ１８７０４―１５６７＜
ミライの七年前の姿。
その実、いじめられっ子で泣き虫だった可愛そうな男の子である。
乙女チックなガラスのハートの持ち主。

・ロックマン・エクスレイド
＞ｉ１８３８５―１５６７＜
アカシックレコード内のラーニングレギオン領域にアクセスすることによって変身した姿。
解放ポートはソウル・レイダーの記録領域で研ぎ澄まされた剣術で敵を討つ。
主武装はサザンクロスカリバー。

・ロックマン・ジュニア

＞ｉ２２７０７―１５６７＜
光彩斗の息子。その正体は来斗の従兄で光爽斗。
電波ウイルスのルーツであるプロトＷトランスＰＧＭを組み込んでいる。
人間軍である電波ウイルス部隊のリーダーとして記録されている。

・ＷＲボス
＞ｉ１８３８９―１５６７＜
電波人間傭兵組織の長。かつての優しさを押し殺し修羅に徹している。
電波変換においては、きずなクルーを凌ぐほどの技巧を誇る。

・キング
＞ｉ１９８６２―１５６７＜
かつてスバルに倒された紳士。
生死の境をさまよった事が傷からうかがえる。

・ロックマン・ルナハート
＞ｉ１９８６７―１５６７＜
アカシックレコード内のラーニングレギオン領域にアクセスすることによって変身した姿。
解放ポートは白金ルナの記録領域で、防御力が高いのが特徴。
ＡＦＢは小さな月を撃ち込むメテオオブルナ。

・トラッシュＰＸ
＞ｉ１９８７５―１５６７＜

ようやく見つけることができたトラッシュ。
それを胸に戦いぬいた姿。

・アストラル・ホープ
＞ｉ２１２８９―１５６７＜
アストラルと人間が電波変換した姿。
特別な資質を必要としない量産型電波人間である。

・ブラッド・ホープ
＞ｉ２１２８４―１５６７＜
レベッカカスタム仕様のアストラル、ベリーと電波変換した姿。
その戦闘能力はとてつもなく高い。

・ロックマン・プラントロード
＞ｉ２１５６２―１５６７＜
アカシックレコード内のラーニングレギオン領域にアクセスすることによって変身した姿。
解放ポートはヘラの記録領域で、絶対防御とオールレンジ攻撃を得意とする。
ＡＦＢは鋭利なバラの花びらで切り刻むスカーレッドハリケーン。

・ロックマン・ディープワンダー
＞ｉ２１５６３―１５６７＜
アカシックレコード内のラーニングレギオン領域にアクセスすることによって変身した姿。
解放ポートはキグナスの記録領域で、素早い動きと、空間操作能

力を用いる。しかし空間操作は実戦レベルではない。
ＡＦＢは空間ごとねじ切る高速回転のナイトメアワルツ。

・アルゴル・ミラー
＞ｉ２２２９３―１５６７＜
チームＡＭの一体。ミラ・イノセントと同様のミューテートである。
その能力はあらゆる者に対して、恐ろしいダメージを与える事が可能。

・アリエス・デビル
＞ｉ２２７１２―１５６７＜
牡羊座のＡＭ星人で四天王の一人。圧倒的戦闘能力と煉獄の業火で敵を焼きつくす。
闇魔の化身。

・レイン・アクエリア
＞ｉ２２７０８―１５６７＜
水瓶座のＡＭ星人で四天王の一人。高圧水流を操り、敵をびしょぬれにする。
水魔の化身。

・シュンラン
＞ｉ２９５５２―１５６７＜
全ての母ともいえる存在。インフィニットに口出しできる数少ない人物の一人。

ソロの事を気にかけている。名前の花言葉は「控えめな美」

・マキン・ヴァルキュリア
＞ｉ２３３３７―１５６７＜
哀しい運命に礫にされた女性。
現存する全ての電波体を超越した力を持ち、底のない慈愛に満ちた戦乙女。

・サン・ゴッド
＞ｉ２４００７―１５６７＜
惑星地球第一級監査官にしてレギオンズナンバー2。
その正体は電波体であるサンと貴族であるヴィシュヌ・クローヌ・ヴェルモンド・ジョルジョワーヌ伯爵が電波変還した姿。
パワー、スピード、テクニック全てにおいてインフィニットに比肩する。

・ソロ
＞ｉ２４００６―１５６７＜
世界の全てに否定され、それでも世界と戦うことを決意したソロ。
孤高を逃げ道に使って、自分の持つ無限の可能性を否定し続けた彼の姿はもうない。

・カペル
＞ｉ２６１３４―１５６７＜
プロジェクトＴＣの５ｔｈウィザードでエリアに忠誠を誓う誠実な騎士。そして汎用電波変換の脆弱性を解決した作品。

２００年の年月を経て熱斗と炎山の負の遺産を継承するに至った。

・パラス・アテナ
＞ｉ２６１３５―１５６７＜
エデンの番人。レギオンズナンバー６にしてインフィニットの右腕。
レギオンの中でもかなりの古株。

・ジェイル（少年）
＞ｉ２６４２８―１５６７＜
二十五年前の姿。とても凶悪な少年。たくさんの人を苦しめて生きてきた。

・ジェイル（大人）
＞ｉ２６４２９―１５６７＜
現在の姿。電磁波監獄に閉じ込められている。自他ともに認める凶悪犯。

・ラスト
＞ｉ２９５４６―１５６７＜
髪を切り捨て、真の意味で男となったミライ。

・リツ
＞ｉ２９５４４―１５６７＜
プロジェクトＴＣ六型電波変換環境を解放したキミドリ。

・ゴンタレス
＞ｉ２９５４１―１５６７＜
ゴン太に良く似ている。とても優秀な学生で頭がよく帝王学に精通している。さらにはかなりの探究心を持つ生まれながらの冒険家。かなりのニホン通でニホン語がとても上手。なぜかアキンド弁だ。
彼こそが何を隠そう、ＷＡＸＡ本部次期長官の最有力候補である。愛に生きる義理深い男である。

・サイデスビートＢ
＞ｉ２９５３８―１５６７＜
ウォーロックの本当の力を解放した究極館全体のロックマン。その戦闘能力はフェニックス・リボンを優に超え、インフィニットにすら迫る。

・アンドロメダ
＞ｉ２９５３７―１５６７＜
流星のロックマンリスペクト。ＦＭ星の最終兵器である。

・ラ・マリア
＞ｉ２９５４８―１５６７＜
流星のロックマン２リスペクト。電波神。

・ゴッドブレス・ドラゴン
＞ｉ２９５３９―１５６７＜

流星のロックマン3リスペクト。キングの第二形態。

・キング・キメラ
＞ｉ２９７６５―１５６７＜
カニと合体したキング。第三形態。

・キング・レギオン
＞ｉ２９７６６―１５６７＜
怨念の塊となったキング。第四形態。

・キング・ステラ
＞ｉ２９７６７―１５６７＜
ついに星となったキング。最終形態。

・ウォーセヴティ
＞ｉ２９５５３―１５６７＜
ウォーロックにとてもよく似ている。スバルとウォーロック、ひいては星河家の最大最悪の敵。
宇宙叡智の全てを集結して生まれた神の申し子。

・彩道　ミライ
＞ｉ３１６３４―１５６７＜
現サテラポリスのエース。
トランスコード００１の欠番を埋める、サテラポリス屈指の戦闘要員でリフレインの息子。

アメロッパからコダマ小学校に転入してきた小学六年生の少年。彼はアメロッパの大学で博士号をもらっており、今回はある目的を持ってコダマ小学校にやってきた。性格はクール。
チャームポイントはチョンマゲ。レイダーと電波変換できる唯一の存在。

・五陽田　ヘイジ
＞ｉ３１６２８―１５６７＜
サテラポリスに属するお堅い刑事。かつてサテラポリスでデン助と共に二枚看板を務めたかなりの実力者。口癖は『御用だー』

・レベッカ・レッドリバー
＞ｉ３１６３７―１５６７＜
きずなクルーで大吾の先輩にあたる女性。性格は強気で男勝り。長年の電波化により電波変換における圧倒的な優位性を持っている。
今はその特異体質を駆使してソロ達を特訓している。また医者でもあり、キズナクルー式肉体改造手術を手がけてくれる凄腕。

・ノズミ
＞ｉ３１６３５―１５６７＜
スバル達にとってはなじみ深い司会のお姉さん。しかしＷＷＲがなくなってしまったことにより、無職となってしまった可哀そうなお姉さんでもある。ジョニーの後をストーカーしていたところ、リフレインに捕獲される。

・エリア・ポート・伊集院
＞ｉ３１６２６―１５６７＜
お金持ちなお嬢様。スバルより一つ年下で、見る者を発狂させるほどの生意気な性格。
そのためか友達が一人もいなくなってしまった。そして友達が一人もいないことを気にしつつも強がり続けて、とうとう誰からも相手にされなくなってしまった猛者でもある。

・リカ・ポート・伊集院
＞ｉ３１６３９―１５６７＜
エリアの母親で大企業の社長代理。ヘラに体を乗っ取られていた過去がある。ブロンド女性として暴虐の限りを尽くした時の記憶に悩まされている。現在は月面都市でスバル達をバックアップしてくれる強く美しい女性。

・スティーブ・ポート・伊集院
＞ｉ３１６４２―１５６７＜
エリアの父親で、大企業の社長にして、元ＷＡＸＡ職員、そして元空軍大佐にして、あげくの果てにはきずなクルーのベテランパイロットを務める完璧超人。その異常なまでの完璧さはデザインベイビーとして生を受けたからである。それゆえに完璧な人間ではあるものの細胞の劣化が速く、実はリカよりも年下であるということはエリアも知らない秘密である。

・レベル１
＞ｉ３１６３２―１５６７＜
時の試練におけるソウル・レイダーの相手。インフィニットＺＦ

1と世界を懸け死闘を演じた英雄である。そのロックバスターの威力はシューティングスターロックマンをはるかに上回る。正式には電波人間ではなく、メカニカルフレームに電波情報を定着させているだけである。

・レベル４

＞ｉ３１６３３―１５６７＜

時の試練におけるハープ・ノートの相手。インフィニットＺＦ４と世界を懸け死闘を演じた英雄である。女性らしく回復技に長けており、ハープ・ノートにチューンリカバリーなる周波数変換術を授けた。正式には電波人間ではなく、レプリカントアンドロイドのひな形である。

・カノン

＞ｉ３１６３０―１５６７＜

無口な女の子。最近は比較的よく喋るようになった。

ウインナー好きでヒトリにもよくなついている。ジェイルとは深い因縁があるようだ。

・ヒトリ

＞ｉ３１６４１―１５６７＜

ムー人の女の子。ソロの親戚としてコダマ小学校に転校してきた。カノンに姉扱いされて慕われている。

料理や家事全般をこなし、買い物上手という家庭的な一面があり、クラスの男子の注目の的となっている。さらに毎朝空き缶拾いに赴くという、ボランティア精神に溢れた女の子でもある。そして何より小学生離れした肉体の持ち主で巨乳でスタイルも良くて、非のつ

けどころが何もない。そのため押しも押されぬクラスの人気者。

・ロックマン・レアフェニックス
＞i３１１６３８―１５６７＜
　アカシックレコード内のラーニングレギオン領域にアクセスすることによって変身した姿。
　解放ポートはフェニックスの記録領域で、セルフリカバリーと虹色の羽を用いて戦う。ロックマンの変身としては、最上級の戦闘能力を有する。攻守ともにバランスが良く能力に隙がない万能型。
　ＡＦＢは光の翼で敵を両断するレインボーディバイン。

・フランソワ
＞i３１１６２７―１５６７＜
　あかねが掘り返した墓穴の中にいて、一匹でずっとあかね達を待ち続けていた不気味な忠犬。
　その正体の一切が不明で、たまに人語を発する奇天烈な存在である。好物はチキンの丸焼きで、それを取り合ってウォーロックとよく喧嘩をする。

・クァッド
＞i３１１６３６―１５６７＜
　トラッシュの軌跡の力が生んだ四重電波変換体。その戦闘能力はロックマンや普通の電波人間をはるかに上回る。核ミサイル爆発の危機の中で、暗黒太陽を相手どった英雄。

・シャオ・ロウ

＞ｉ３１６４３―１５６７＜
きずなクルーで一番の武闘派であるチョイナ人。とにかく戦いを欲する達人で、チョイナ式武術を駆使して、罷をも素手で殺す。
一見恐ろしいが、宇宙人と戦いたいという理由で宇宙飛行士になったお茶目な一面も持つ。その夢が叶い、四年前に宇宙ステーションをＦＭ星人たちに襲撃された時には、ＦＭ星人相手に生身で互角に渡り合った。大吾との対戦成績は１００戦５０勝４９敗１分け。

・ヴィーナス
＞ｉ３１６４４―１５６７＜
女の子型のレギオン。ナンバーは５で、インフィニットと同じく神のお気に入りである。
全身を黄金で包むきらびやかで可愛らしい容姿とは裏腹に、その実力はウォーセヴティとほぼ同等。
ナンバーこそ５であるものの、その実力はインフィニット級と言える。

・ケルベロス
＞ｉ３１６３１―１５６７＜
オリヒメ筆頭の宇宙船開発チームが、ヘラの宇宙船をベースに作り上げた地獄の番犬。三つのデッキはまさにケルベロスと呼ぶにふさわしく、ワイル粒子ブースターを三基積んでいる本格派。そして対レギオン用の武装を数多く搭載しており、攻守ともに高い次元でまとまっている。
メイドイン地球初の巨大宇宙戦艦として、機械仕掛けの神との戦いに挑む。

・アイリス

＞ｉ３１６２９―１５６７＜

電脳獣との戦いで消し炭となって電脳空間を漂っていた存在。だが熱斗やスバルのおかげでこの世界に再び蘇ることができた少女。彼と共に闘った経験から彼らに好意を抱くようになる。

彼女は主にゼロフレームのソフトウェア部分を担当しており、生前の熱斗が残してくれた形見と言える。

・ゼロ

＞ｉ３１６４５―１５６７＜

アイリスと共にデリートされたはずの存在。２００年の時を経て、コールドスリープから解除されて蘇った。

彼は主にゼロフレームのハードウェア部分を担当しており、生前のワイリーが残してくれた形見と言える。

・アストラル・ジャマー

＞ｉ３２２７７―１５６７＜

キングに操られた電波人間。電波人間としてはそれほどの戦闘能力ではないが、それでも生身の人間にとっては脅威の存在である。

・アストラル・マージャ

＞ｉ３２２７８―１５６７＜

キングに操られた電波人間。特別にキングの改造が加えられており、比較的高度な行動をとって襲ってくる。

・メトリー（イマジンヒューマン）

＞ｉ３２２８３―１５６７＜
夜太郎と電波変換したことにより、彼の深層心理をインストールした姿。
もはやウイルスというよりも、七歳の人間の女の子である。
しかし人間にはなりきれない卑しい存在として上層部に判断されてしまい、リフレインに特攻ミッションを課せられてしまった。

・裏霞　夜太郎
＞ｉ３２２９２―１５６７＜
スバルたちに感化されて立ち上がった人。元サラリーマンで現在無職。
十年間もウラ世界に身を隠していたので、戸籍上では死人扱い。なのでリフレインに捨て駒として特攻ミッションを課せられてしまった。

・機械仕掛けの神
＞ｉ３２２７９―１５６７＜
流星のロックマンＲリプレゼンツ。
圧倒的戦闘能力を持つディメンションゴーレムの首魁。その体の中は機械と電脳が混じりあった小さな宇宙である。

・エメリオル
＞ｉ３２２８０―１５６７＜
銀河連邦アンドロメダ宇宙軍元大佐。《人間要塞》と称されている。
夜太郎と激闘を繰り広げて、スバル達と共に機械惑星を救うために戦ったナイスミドル。そうして地球人を認め、いつの日かともに

戦う日を夢見ている。

・オフィーリア
＞ｉ３２２８７―１５６７＜
銀河連邦提督。《銀雲の軍姫》と称されている。
麗しき容姿を持つ、女性サイボーグ。しかし見た目からは想像できない圧倒的パフォーマンスを実現し、その実力は上位レギオンと同等かそれ以上。

・トニック・Ｗ・リフレイン
＞ｉ３２２８９―１５６７＜
全世界のＷＡＸＡを統括するＷＡＸＡアメロッパ本部の長官。
基本的にスバル達に協力してくれるが、非人道的な行為もいとわない現実主義者。そんな冷徹とも言える部分から、大きな確執が実の息子との間にできてしまった。
しかしその頭脳は天才的で、機械骨格エクスフレームを完成させてミライに見事適合させた。

・ヨイリー
＞ｉ３２２９３―１５６７＜
ニホンのＷＡＸＡに協力してくれる天才科学者。基本的にお茶目な老人だが、思慮深い一面も合わせ持つ。
リフレイン同様、ある人物の親戚で選ばれた側の人間と言える。

・ナガレ
＞ｉ３２２８６―１５６７＜

プルト・キグナスとインフィニットによる時空改変が起こらなかった世界のスバル。ウォーロックと共にロックマンとして世界を救う活躍をしていた。
彼は選別の日以来、レジスタンスのリーダーとなり、生き残った人間を救うためにたった一人で神の軍勢に挑んでいる。

・ロックマン・アイン
＞ｉ３２２９０―１５６７＜
ウォーロックを徹底的に研究されて作りだされた、真のロックマンを継ぎし者。その戦闘能力はたった一人で宇宙艦隊を殲滅してしまうほど。
ウォーロックの欠点を全てなくし、ウォーロックの優れた点をさらに改良しているのでまさにロックマンの上位互換と呼べる存在。
ＡＦＢは全てを吹き飛ばすゴッドナックル。

・唯一皇キザマロ
＞ｉ３２２８１―１５６７＜
ついにその正体を表したキザマロ。最小院グループの御曹司という使命感から、ついにスバル達に牙を剥くに至った。
神に裁かれて疲弊した世界に舞い降り、そしてロックマン達に新たなる世界を懸けて戦いを挑む革命家である。

・天翔院　マシュマロ
＞ｉ３２２８２―１５６７＜
腹違いのキザマロの姉。容姿、頭脳、身長、カリスマ、人間性といったキザマロが持ち得なかった全てを持ってこの世に生まれた。
しかし女性であるといったそれだけのために最小院グループは継が

せてもらえなかった。それでも弟を愛して生きようと誓ったのだが……。

そして彼女はキザマロを導き、社会の影に追いやられた最小院グループを再び日の目を見させるため、打倒伊集院グループを目論む。

大勢の教徒をキザマロに提供して、彼を神に仕立て上げた。

・彩道　未来

＞ｉ３２４９３―１５６７＜

セツナの母親。優秀な科学者であったがリフレインと結婚した後、専業主婦となる。前向きで明るい性格であり、ウジウジしているセツナのことをいつも心配している。そんな優しくも芯の強い女性だった。

ある事件によって、六年前に死去。ミライが生まれるきっかけとなった人物でもある。

・キュー・出間崎

＞ｉ３３３３５―１５６７＜

通称デマキュー。

ヤラセや偽装、隠ぺい工作といった報道に関する数々の悪事を行っていた男。そしてドンブラー湖の一件が影響し、とうとうマスメディアの世界から追放された。その後、サテラポリスに捕まってしまった元番組ディレクターである。

しかし反省はしていないようで、日々牢獄の中で脱獄を企てている。

・ジャスティス仮面

＞ｉ３３３３７―１５６７＜

シドウと同じでスーパーヒーロー委員会に所属する駆け出しスーパーヒーロー。体格は筋肉質で大柄。
Ｊの証を持つ者として、シドウとはただならぬ関係のようである。

・光　来斗
＞ｉ３３３３４―１５６７＜
光熱斗の息子。
２００年前に活躍し、様々な戦果をあげた。
光熱斗に並ぶオペレーターとして伝説となっている。

・日比野　メモリ
＞ｉ３３３３６―１５６７＜
来斗の友達。
いつも来斗を心配している女の子。
数々の事件を乗り越え、来斗と結ばれた。

・フォルテ
＞ｉ３３３３８―１５６７＜
革命組織最強のウィザードで新政府の守護神。
電波社会に終止符を打つため、ウラ世界より呼び覚まされた電脳の破壊神である。打倒ブルーウルフを誓い、スバル達に牙を剥く。

・うっかり　シゲゾウ
＞ｉ３３５４４―１５６７＜
本領発揮したレジスタンスの司令官。
脳の手術の影響からか、あまりにも物忘れが激しいおじいさん。

なので、愛鳥のエストファルケンを頭部に移植して脳を連結してしまった。おかげで記憶が三秒は持つようになったらしい。そして副産物として、シゲゾウ独特のヘアースタイルである「ピヨピヨリーゼント」が生まれたのであった。

一見ふざけた老人にすぎないが、その正体はＷＡＸＡはおろかサテラポリスに語り継がれる生ける伝説である。

何を隠そう第三次世界大戦の英雄で、バミューダの悪夢の功労者。南半球連合軍からは【東洋の鋼鉄天使】と呼ばれて恐れられていた。その勇名を留まるところを知らず、伊集院魁炉とのコンビをして大戦下最強と謳われるほどの卓越した戦闘機乗りだった。

そして退役した後、ヘイジの師匠を務めＷＡＸＡで宇宙飛行士の育成に尽力した。そして後の英雄、きずなクルーを育て上げたのも彼で大吾の上官だった。そしてきずなプロジェクトの最高責任者の一人でもあるニホンに欠かせない重要人物だった。

そんな彼はデザインヒューマン技術にも精通しており、ゴッドチルドレン計画においてスティーブに生体データのサンプルも提供していたほどの恵まれた遺伝子の持ち主。

しかし華麗なシゲゾウの人生は急転する。デザインヒューマン技術の危険性ときずなプロジェクトの最悪な形での失敗、それを受けて彼は責任を背負い自分の脳に手術を施し全ての悲劇を闇に葬った。

そのため今までの彼は、孫に溺愛するただの老人にすぎなかったのだった……。

・フレームタイプ１３

＞ｉ３３９６２―１５６７＜

剣士として、破壊者として、救世主として、ただひたすら無限を超え続ける機械人形。

・セツナ

＞ｉ３８０２７―１５６７＜

スバルのライバル。そして友達。

・ジョーカー

＞ｉ３８０２９―１５６７＜

スバルにとって特別なウィザード。シドウにとってはアシッドの仇敵。

キーワード（10／5up date 170word）（前書き）

＞i13066―1567＜「うわあ……ここがFM星の王宮図書館か。いろんな本がたくさん並んでいるな」
＞i13069―1567＜「よ！　スバル」
＞i13066―1567＜「うわあ。いつの間に！」
＞i13069―1567＜「おいおい何言ってやがる。俺様はお前のハンターにいつもいるじゃねえか！」
＞i13066―1567＜「まあ、とにかく説明を始めてよ」
＞i13069―1567＜「おうよ！　まずここはFM星の王宮図書館だ。いろんな言葉が載っているぜ！　なお更新は発展編のみ一番下に追加されていくぜ！　覚えておけよ」
＞i13040―1567＜「……まあ、とにかくスバル君。いろんな言葉が載っているから、気になったら立ち寄ってみるのもありかもねー」
＞i13066―1567＜「うわあぁあ！！　ハープだ！！　いつの間に」
＞i13040―1567＜「んもう、失礼ね。まあとにかく『自分はこの世界の事を十分に把握した』と思ったら来てみるといいんじゃないかしら？」

キーワード（10／5up date 170word）

＊基本偏

・電波社会
２００年後の世界の２２ＸＸ年代の社会システムの呼称。
人類は電磁波の利用可能領域を広げることに成功した。そして高周波数の電磁波を利用し物質を生成し、生活を営むまでに至る。
この無公害かつ半永久的エネルギーを得ることによって人類は豊かな生活を実現した。
この社会体系システムは、主に次の３つの組織からなる。
一番の基礎となる研究や理論開発を行うＷＡＸＡ。
実験を兼ねた試作サンプルの運用を行うサテラポリス。
実験を重ねある程度汎用化したものを一般に流通させるＩ．Ｐ．Ｃ。

・電波（電磁波）
２００年後の世界ではほとんどの周波数帯の電磁波を自由に取り扱うことが出来る。
なので２００年前の世界でガンマ線と言われていた物まで電波とひとくくりに扱われる。

・ＷＡＸＡ
アメロッパに本部を置く宇宙開発機構。電波技術を用いて宇宙開発を進めている。
電波社会の一番の根幹を担う組織である。
最高責任者は宇宙工学とロボット工学の権威トニック・Ｗ・リフレイン博士。
サテラポリスと協力関係にある。電波社会における最高研究開発機関。

・サテラポリス
世界中に支部を持つ電波警察。電波に係るあらゆる犯罪を取り締まる。
警察とは言うが、規模は国家の軍事力と遜色はない。
名誉隊員は暁シドウ。市民栄誉隊員は星河スバル。
ＷＡＸＡと協力関係にある。電波社会における最大勢力の実働武力組織。

・Ｉ．Ｐ．Ｃ（Ｉｊｕｉｎ　Ｐｒｏｇｒｅｓｓ　Ｃｏｍｐａｎｙ）
ニホン発足のアメロッパに本社を置く有名優良企業。
現会長はスティーブ・ポート・伊集院。永世名誉会長は伊集院炎山。
人々の生活のインフラ設備を整えている会社。その高い技術力で耳かき生産から兵器運用まで幅広くこなす。
バトルカード製造会社として有名。

・ハンター
正式名称ハンターＶＧ（Ｖｉｒｕｓ　Ｇｕａｒｄ）。２００年後の世界の携帯端末である。
その内部には個人情報から、生活用品、武器（バトルカード）に及ぶ様々なものが入っている。
ナビゲーション電波であるウィザードもこの中で待機している。

・バトルカード
電波情報にデータ化されているカードデータ。市販用のものとサテラポリス用のものとで威力が違う。
電波人間が使うとその威力はケタ違いに跳ね上がる。ハンターと同じくバトルカードはＩ．Ｐ．Ｃが製造している。

・カードランク

カードの色である黄、青、赤にそれぞれスタンダード、メガ、ギガと区分分けされている。
右に行くほど強力だが、一度の処理データ量の多さから連続使用にかかる時間は増えていく。
例外として灰色のエクスクルーシブもある。

・電波体
電波で生成されているものを指す。電波生物を指す場合が多い。電波人間もこの括り。
中には周波数を自由に変換し、物質化や電波化を切り替える事が出来る個体がいる。

・周波数
電波体の持っているエネルギー。電波生物の場合の、生体反応でもある。人間で言う所の気配や鼓動、脈拍。

・戦闘周波数
強力な戦闘能力を持つ電波体に用いられる言葉。その持っているエネルギーを数値化したもの。単位は通常でＭＨｚ（メガヘルツ）。
電波人間の場合シンクロ率にも大きく左右される。

・戦闘周波数弐式
強力な電波体が増えてきたために変更された規格。単位がＧＨｚ（ギガヘルツ）となった。

・周波数変換
自分の体の周波数を変換する技術。大抵の電波体はこれを駆使して戦う。
用途は主に、空間の周波数に合わせた高速移動や、体の可視、不可視の切り替え、シンクロ率の操作である。

これには個人差があり、分野ごとに得手不得手がある。

・ウィザード
一人に一体のナビゲーション電波。人間と同じように感情もあれば命もある。実体を持つが、普段は電波となって電波空間にいる。ごく一部の人間はこれと電波変換することが可能。

・電波変換
人間が電波体と合体して、電波体となること。
電波変換した人物は戦闘力が劇的に飛躍する。

・電波人間
電波変換した元が人間の電波体。普通の電波体よりも強力な個体が多い。

・シンクロ率
電波変換した人間と電波体の融合率をパーセント表記したもの。主に完全分離状態の０％最低値として、シンクロの度合いが高ければ数値は増えていく。
基本１００％に到達すれば、電波変換としては完成である。
しかし、二人の信頼関係や、感情、体調、資質によって大きく左右される。

・プロジェクトＴＣ（トランスコードシステム）
ＷＡＸＡが開発した汎用電波変換の新体系。
電波変換処理を専用サーバーで経由する事により、人間の電波化に対する負担を軽減させる効果を生み出す。
欠点としては、電波変換に余計な処理を挟むので本来以上の力が出にくい事。
しかし安全に電波人間を量産できるという意味は大きい。

・リアルウェーブ
物質化した電波の事。食料から武器まで様々なものを形作る。
実体化したウィザードもこの区分である。

・マテリアライズ
電波を物質化すること。マテリアライズされた電波はリアルウェーブとなる。

・アンマテリアライズ
物質を電波化すること。物質を携帯して持ち歩くことに用いられる。

・ウィザード・オン
ウィザードをリアルウェーブにすること。マテリアライズと同義語。

・ウィザード・オフ
ウィザードを電波に戻すこと。アンマテリアライズと同義語。

・ウェーブロード
地球やその他の場所に張り巡らされた電波の通り道である電磁界。
データ処理の効率が良い整備されたそれは主に地球に走っている。
それ以外のものは宇宙にも走っている。宇宙に走っているウェーブロードは宇宙線や太陽風と同義。

・電波世界
世界中に張り巡らされた、電波の道であるウェーブロードが織りなす世界。
宇宙を含めた世界中が電波世界で満たされている。

・電脳世界

ウェーブロードからアクセスできる様々な電子機器（例：パソコン、炊飯器、エアコン）の中の世界。

・ノイズウェーブ
空間の歪んだ所を縫うようにして走るウェーブロードの別称。通称、宇宙の虫食い穴、ワームホールとも呼ばれる。
その独特な道の通り方から、宇宙空間をジャンプ航行するために用いられる。しかしその中は大変危険。

＊発展編

・デンパご飯
色々なシリーズがある。
デンパカレーを筆頭にちまたのウィザードに大人気！
ウォーロックのお気に入りはデンパシチュー。

・キズナ力
キズナの強さを数値化したもの。
本当のキズナは数値では測れないプライスレス。

・バトルウィザード
戦闘能力に特化したウィザード。電波変換するとその戦闘力は特に高い。
乱暴者が多いのが玉にキズ。

・デンパ君
とても可愛らしい電波世界のマスコット。
日々、皆の為にメールを運んだりと忙しくウェーブロードを駆け巡る。

・ノイズム
デンパ君の良きライバル。ノイズウェーブのマスコット。
しかし特に仕事はない……。

・ナビ
ウィザードの前身。ナビゲーションプログラム。
電波社会に移行した事で、ほぼその役目は終えてしまった。

・ミソラミンD
赤紫色の不思議な液体。飲むとたちまち元気になってしまう。
元気になりすぎて、後で疲れてしまうほどだ。

・うまい棒
うまいお菓子。何故か棒の形をしている辺りが怪しい……。
シドウの好物。

・うまい板
うまい棒のパチモン。しかしなかなかにうまい……。
これは安い５ゼニー。

・うまいバー
うまい棒の非常によくできたパチモン。ほとんど本物と見分けはつかない。
シドウが一度だけ間違ったほどである。１１ゼニー

・流星ペンダント
スバルの宝物。大吾から託された思い出の品。

・にがりソーダ

あんまりおいしくないことで大人気のソーダ。
まずいっ、もう一杯！

・あかねの写真
スバルがいつも持っている。あかねの若かりしときの写真。
何故持っているかは不明である……。

・ミソラのギター
カンナからもらった思い出深いギター。
黄色くて可愛らしい感じ。いつも肌身離さず持っている。
ハープのお家でもある

・スバル君の歌
ミソラが考えた歌。不思議と気分が高ぶる名ソング。

・ホワイトチョコバナナヤシの実
ルナがスバルに依頼してきた食材達。特に深い意味はないはずだ……。

・ミソラーメンＤＸ
ミソラがＣＭに出ている商品のラーメン。当たり前だが、味噌味。
しかし乙女の味で少し甘い。
『私はミソラ、これはミソラーメン！　どっちも売れてます！』

・青いポーチ
スバルが身につけているポーチ中には色々なものだ入っているのだ。
そう、色々と。

・一味と七味
ゴン太のハンターに入っている。牛丼のおいしさにキレを出す一工

夫。
玄人の味わい。

・月面都市
文字通り月の表面にある都市。主にＷＡＸＡ関係者の人間が住んでいる。
地球へのアクセスは軌道エレベーターか定期運航している連絡船。

・軌道エレベーター
地球の衛星軌道から月衛星軌道まで伸びる長い一本のエレベーター。
エレベーターはリアルウェーブでできている。連絡船よりも安価で地球と月を結ぶ。

・ＦＭ星人
宇宙人。体が電波の電波体。
かつて滅ぼしたＡＭプラネットの復興を手伝っている。

・ＡＭ星人
宇宙人。体が電波の電波体。
かつてＦＭ星人に母星を滅ぼされた。現在復興中。

・ＡＭの三賢者
ペガサス、ドラゴン、レオの事を指す。知恵と力に優れた猛者達。
現在はＡＭプラネットを復興しようと尽力している。

・デンパスクエア
ウェーブロードの途中にある休憩場所。
電波達の憩いの場。電波コーヒーが売っている。

・スターキャリアー

ハンターの一世代前の端末。普通に小さい。

・孤高拳法
ソロが編み出した拳法。
友達が少ないほど技のキレが増していく不思議な拳法だ！

・ルナの緑色のバッジ
クラス委員長の証。ルナの誇りの証。決して触ってはいけない。

・週刊コスモここから
スバルの愛読書。主に宇宙のことだけしか記されていない。
宇宙マニア必見の雑誌。

・週刊みんなと孤独
ソロの愛読書。主に孤高生活を続けていくための事しか記されていない。
無頼漢必見の雑誌。

・週刊ギガドリル
ルナの愛読書。主にドリル髪のきれいな作り方しか記されていない。
たまに削岩方法も乗っている。
全国の縦ローラー必見の雑誌。

・キング財団
ドクターキングが表の顔として運営していた孤児施設。
世界中の孤児を集めて暮らす場所を与えていた。

・ディーラー
キング財団の裏の一面。孤児を兵隊にして数々の犯罪行為を行ってきた。

孤児たちは義父を信じて犯罪を繰り返していた。
『パパのためなんだ……！』

・ガリガリさん
昔ながらのアイスキャンディー。ガリガリの少年が目印のパッケージだ。
６０ゼニー。

・ガリガリはん
ハンナリシティ限定のガリガリさん。舞妓姿のガリガリの少年が目印のパッケージだ。
４００ゼニー。

・ガリガリちゃん
ガリガリさんのパチモン。ガリガリの少年が目印のパッケージだ。
１０ゼニー。

・トランサー
ハンターの二世代前の端末。普通に大きい。

・ムーの味
あかねが作ったすごくおいしい卵焼き。
少し砂糖を入れて甘く作っているのがポイントだ。

・ルナの弁当
ルナが早起きして作った弁当。中身はオムライス。
ケチャップで描いたロックマン様の顔はぐちゃぐちゃだ……。

・ミソラの弁当
ミソラが早起きして作った弁当。中身は肉じゃが。

ロックマンの顔を真似たじゃがいもは煮崩れている……。

・ソロの弁当
ソロが早起きして作った弁当。中身はあっさり湯豆腐。
カッコよく豆腐でブライの顔を作ろうとしたみたいだ。
しかしバイザーの形で断念したようだ……。

・ゴン太の弁当
ゴン太が早起きして牛丼屋に行って買った弁当。中身は牛丼。
普通においしい。

・ムーメタル
ソロが集めているムーの遺産。
その正体はオーパーツの元とされる地球外金属。
ムーメタルの色や純度により生成されるオーパーツも変わってくるらしい。

・オーパーツ
超古代文明の遺産。超エネルギーを持つその物体はそれぞれに不思議な力を宿す。
どうやら、オーパーツは地球以外にもあるらしい。通称、知恵の実として宇宙に散らばっているそうだ。

・ムー大陸、帝国、文明
地球の遥か昔に栄えていたとされるオーバーテクノロジー擁する文明。
起源、成り立ちなどは一切不明。現在沈んだムー大陸の調査が行われている。

・ムー人

地球に住んでいたとされる電波を見る事に長けた人達。髪は白、褐色の肌が特徴。
しかし今はソロしかいない。孤高を貫く人種でもある。

・カリカリのウインナー
外はパリっと、中はジューシー。そんなラプラスの大好物。
コダマデパートで一袋４５０円で売っている。

・コダマデパート
安さと新鮮さを売りにしている。もちろん電化製品コーナーもある。
コダマ主婦の大きな味方だ。あかねのパート先でもある。

・ドリル（ツインドリル、ドリル巻き毛、エアロドリル、ドリルスペイザーｅｔｃ）
ルナの髪型の事。荒々しい攻撃的なドリルのようである。
だが、そこにはたくさんの乙女の技術が詰まっている。
セットに3時間は伊達ではない。

・ルナの挑戦状
ミソラにいつか渡そうと思って書きつづっている謎の挑戦状。
しかしなかなか渡せないようだ。

・オフィシャルウェーブバトラー
サテラポリスの正式な戦闘員の証。
ＧランクからＳＳＳランクまである。

・ルナのベッド
スバルのお気に入りのベッド。スバルいわくいい匂いがするらしい。
今日も特に異常はないようだ。

・ゴン太のヘッドギア
すごく……しょっぱいです……。

・ゴン太のふんどし
ゴン太の水着ということらしい。
サテラポリスが来てしまう程の最先端すぎたファッション。

・ミライの指輪
右手の指に大事そうにはめている。大切なものなのだろう。

・ミライの手袋
防弾製品らしいがとてもそうは見えない。
でも銃弾を受け止めるのだからそうなのだろう。

・ドッシーマウス
マスコットキャラとして君臨している。
見た目はすごく可愛くない。

・アストラル電波人間部隊
量産電波人間で編成された部隊。
プロジェクトＴＣの最終目標にして最高の成果。

・マズイ棒
うまい棒の酷いパチモン。
とにかくマズイ。しかも１００ゼニーだ。

・３モード
キザマロのメガネが取れた形態の事。
お約束らしい。

・マロ辞典
重さ5キロ。皮の表紙。角は当然立っている。
ちょっとした鈍器。

・ココウノヤミ
ブライの右腕から立ち上る紫色の炎のようなもの。
そこから様々な攻撃を繰り出す。

・ミスメットリオ
電波世界のどこかで行われているメットリオの中で一番美しいものを決めるコンテスト。
メットリオにとっては最高のステータス。

・ハイドの脚本
毎週金曜日になると、いつもルナ宅の前に落ちている謎の脚本。
最近のユリ子の悩みの種。

・ゴンターガ様
ゴン太と瓜二つのナンスカの神さま。
……というよりもゴン太である。

・タベルンスカ
ナンスカに伝わる伝説の破壊神。
災いの象徴として恐れられている。ウォーロックに似ている。
……というよりもウォーロックである。

・グリーンボンバー（ＧＲＥＥＮ　ＢＯＭＢＥＲ）
ナンスカに伝わる。必殺の一撃。
植木鉢で殴りつける剛胆かつ玄人好みの純粋な打撃技である。

・ナンスカ（ＮＡＮＳＵＫＡ）
南アメロッパに位置する国の地域。挨拶は『ナンスカ！』

・ナンスカナンナンスカ！？
ナンスカ人が驚いたり、困惑した時に使うナンスカ語。
ニホン語に和訳すると、何すか、何なんすか！？　と言う意味になる。

・情報屋
ウラセカイで情報を売る事を生業としている電波体。
見た目は蒸気機関車の車掌にそっくりである。たぶん中身は空っぽだ。

・レギオン（ＮＵＭＢＥＲＳ　ＬＥＧＩＯＮ）
全てが謎に包まれた電波体。ワイル粒子を内包している。
その電波を超えた、高周波数は高次電磁波生命体と称されるほど。
電波変還を使う。
現時点の宇宙終焉の一番の容疑者。

・ワイル粒子
宇宙で新たに確認された謎の物質。特性としては、物体の振る舞いに加減すること。
ダークマター説が有力か？

・フレンド（ＦＲＩＥＮＤ）
空間湾曲装置の名前。月で開発している夢のワープ装置。
ノイズウェーブに変わる移動手段として期待されている。

・ウラ世界
主にノイズウェーブからなる電波世界の事。

凶悪な住民がいる危険地帯。ＷＷＲが支配いている様子。

・ＷＷＲ（ＷＲＯＮＧ　ＷＡＶＥ　ＲＩＤＥＲＳ）
謎の武闘傭兵集団。読みはロング・ウェーブ・ライダーズ
レギオンにせまる一部の電波人間が属しているらしいようだ。真の意味で電波変換をものにした者達が君臨している。

・電波変還
電波変換とちがい、本来の自分の力を取り戻す手段である。
人間はレギオン毎によって必要であったりなかったりする。

・ルナっちの日記
ルナが毎日付けている日記。乙女の秘密が一杯だ。
見てはいけない。……いけないのだ。

・プラネットアリア
ヘラローズガーデンが支配していた無人惑星。地球以上に美しい環境を持っていた。
宇宙のどこかにあるらしいが、今となってはもう分からない。

・ココロメモリ
トラッシュや人工ウィザードに搭載されている。高性能な擬似人格を実現している。

・クリムゾンウェーブ
ノイズウェーブ第二階層の別称。赤いクリムゾンノイズが空間を飛び回っている。

・響け美少女探偵ソラミ！
響ミソラが主演を務めるサスペンスドラマ。

毎回、事件解決パートでミソラのニューシングルの熱唱が始まる事で有名。平均視聴率４５％の化け物。

・ブラックホールサーバー
ブラックホールの中にあるとされているサーバー。誰が何の目的で設置したのかは不明。
日々、宇宙の情報を蓄積していっている。

・ウェーブバトル
電波体同士の戦い。
始めの合図は『ウェーブバトル！　ライド・オン！！』

・ギャラクシーアドバンス
ある一定の組み合わせのバトルカードを連続使用することによって得られる。
色は緑色のカード。威力はギガクラスに匹敵する。

・ビジライザー
スバルがいつも身につけている緑色のお洒落メガネ。
実体化していない電波や、可視周波数に入っていない電波世界を見る事が出来る。

・スバルの手首の輪っか
特に意味はないがついている。
一見、邪魔そうに見えるが意味はない……。

・あかねレシピ
あかねが毎日の献立を記録した紙切れ。主婦にとって至高の一品。
スバルの嫌いなものはニンジンと強くメモされている……。

・コダマタウン七不思議
コダマタウンに伝わっている七つのとっても不思議な伝説。
ジョニー武勇伝が有名。

・牛丼（並盛り、中盛り、大盛り、特盛り、特大盛り、ゴン太スペシャル盛り）
ゴン太の大好物。ゴン太にとっての親友でもあり良き理解者でもある。そんな食べ物な牛丼。
このゴン太の熱い思いはいつ届くのだろうか……。

・パトラ人
惑星パトラに住む人々。元々のブラックママルの所有者達。

・ブラックママル
惑星パトラのムー大陸。地球のものと同様の形をしている。
現在はＷＷＲの本拠地として利用されている。

・銀河連邦
宇宙を取り仕切る組織。地球以上のテクノロジーを持つ。

・機械骨格（メカニカルバイオフレーム）
銀河連邦の加盟惑星に普及した技術。これにより人間は寿命に縛られることはなくなった。
電波変換においても多大な恩恵をもたらす。

・車いす
アトム少年が長年お世話になった車いす。どんな時もいつも一緒だったようだ。
手作りのお守りがボロボロになってぶら下がっている……。

・機械惑星リギア
星の人々のほとんどがサイボーグという星。
文明レベルは極めて高い。

・アンドロメダ宇宙軍
銀河連邦の中でも特にアンドロメダ銀河を任されている宇宙軍。
生粋のエリート集団が集まる。

・マイクロブラックホールカノン
高度な文明が可能にした歴史上類を見ない大量破壊用天体兵器。
反物質砲、素粒子爆弾と並んで銀河連邦の主力武装である。
異常なまでの威力を持ちながら、携帯性にも優れた優秀な汎用武器。

・ラディオ・ウェーブプロデクター
銀河連邦が採用している防具。見た目は銀色。
機械骨格を持つ人間との相性は抜群で、大抵の攻撃なら無傷で済ましてしまう。

・ガンマ変換
機械の体を駆使した電波変換。
体への負担が尋常ではないが、機械骨格がその問題を解消した。
驚異のシンクロ率を叩き出す離れ業。

・ウイルス電波人間
ウイルスウィザードと人間が電波変換した姿。
ほとんど電波人間と同じで電波人間と言ってしまっても問題ない。

・きずなクルー
大吾を筆頭に据えた屈強な宇宙飛行士。
長い間宇宙を漂っていた電波化させられた人達である。

・ジョニー伝説
南国が語るジョニーとの良き思い出。ほとんどが人間業ではない。
コダマタウン七不思議とはまた違ったジョニーの魅力を知る事が出来るのだ。

・オリジンシリーズ
おもにトレイスと人間が電波変換したらそうなるようだ。
現在数多くのオリジンシリーズが確認されている。

・カイザーナックル
ギガントオリジンが放った異常な攻撃技。技と言うより業である。
その威力はとてつもなく、半径数百キロを荒野に変える程だ。

・アカシックレコード
宇宙でも、世界でもない、どこでもないどこかにあるとされている場所。
人間が極限状態に陥った時にアクセススなんて事は有名な話だ。

・自分だけの物語の力
人間が生まれ落ちた時に持っている力。
アカシックレコードにアクセスした者のみ手にする事が出来る。
唯一無二の生きた証である。

・ライブラリ
アカシックレコードの膨大なデータの総称。
そこには全ての宇宙の記録が詰まっている。

・ラーニングレギオン
スバルが持っていた『自分だけの物語の力』。

今まで出会った人達の力を自分に取り込む事が可能になる。

・レベル１３
謎の称号。連綿とした系譜の全てを受け継ぐようだ。
最後まで進化の可能性を示した人間に与えられるらしい。

・ディメンション・ゴーレム
次元魔像。インフィニットが復活させようとしているらしい。

・鳳凰の間
ブラックママル内部にあるコントロールルームを改造したもの。
フェニックスの趣味でロウソクの火で燃えるように照らされている。

・ワタルの約束
四年前フェニックスと交わした約束。
全てをかなぐり捨て、カンナを生き返らせるというワタルの生きる理由である。

・リギアの孤児院
体の弱い、親を失った子供達が生活している場所。
そこでエメリオルは頻繁に読み書きを教えている。

・オーＰＧＭ
オリヒメとハートレスが協力して制作したノイズ制御用のプログラム。
汎用性に富んでおり、装着者を選ばない優れ物。
コレのおかげでノイズウェーブの出入りが可能になった。

・シンクロ・ド・オーパーツ
ムー人のみが可能なオーパーツの使用方法。オーパーツと肉体を同

一化する事により莫大なエネルギーを得る。
ソロいわく「ロックマンでも出来ない究極のオーパーツの使用方法」

・メルティング・ムーメタル
ムーメタルに高密度の周波数を当てて、オーパーツを生成する事。
ムーメタルの純度によって生成されるオーパーツも変わってくる。

・ユグノア
大陸型超長距離運航宇宙艦。何者かの手によって、定期的に宇宙に射出されている。
中には知的生命と電波生命体と言った、基本的なテクノロジーが内容されている。なぜ、宇宙にそのようなものが発射されるのかは不明。
地球にあるムー大陸もユグノアの一つとされる。

・人類抹殺プログラム
デューオ達ディメンションゴーレムに施された命令。その内容は定期的に人類を滅ぼすと言うものである。
そのおかげで二〇〇〇年前の地球は人類存亡の危機に陥った。

・デウス・エクス・マキナ
究極のオーパーツ。ユグノアの起動に必要なオーパーツである。
その無限エネルギーは、不可能を可能とする夢の物質である。

・マザー端末
ユグノアの全システムを管理している人型端末。オーパーツによる莫大なエネルギーにより起動する。
その正体は超高性能電波管理システム。

・スーパーヒーローポイント

スーパーヒーロー委員会によるスーパーヒーローのスーパーヒーローによるスーパーヒーローゆえのスーパーヒーローとスーパーヒーローから送るスーパーヒーローの為のスーパーヒーローに相応しいポイント。
実際のところ何のためにあるのか分からない。

・トランスウェーブＰＧＭ
熱斗がキズナ理論に基づいて開発したプログラム。
しかしそれは皮肉にも電波ウイルスを生み出す結果となってしまった。

・ウラウェーブエリア
アキンドシティのサテラポリスからいくことができる。
時代に忘れ去られた元ウラインターネットである。
その広大な土地は、犯罪者の幽閉施設の在り処となっている。

・ロストスクリーム
ウラウェーブエリアにある犯罪者幽閉施設。
主にトップシークレットの極悪人が収容されている。

・電波ウイルス
電波技術の発達によって発生した強力なウイルス。
地球と宇宙それぞれにルーツがある。

・トランスウェーブナビ
別称はキズナ理論採用第二世代ナビ。
第一世代を凌駕するスペックが特徴。
しかし強力な能力と引き換えに電波ウイルスとしての特性を得てしまった。

・青い狼（ブルーウルフ）
フォルテを倒した青い狼型の謎の生命体。
さらにロックマンやブルースを倒した後、宇宙空間に向かってしまった。

・メトロライナージャック犯
メトロライナーを暴走させた犯人。
その正体は暴走したトランスウェーブナビであった。
乗客やオフィシャルたちにデリートされた。

・レギオンシンジケート『ディーヴァ』
レギオンを信仰する犯罪組織。
高次元電磁波生命体の勢力が派生したもので、プルト・キグナスがリーダーだった。
流星抹殺計画を行い、地球人すべてを抹殺しようとした。

・ライブラリデッドエリア
アカシックレコードにある、死者のデータを扱う場所。
死した命が向かう最終地点。

・ゼロＰＧＭ
リフレインが主となって開発した戦闘能力向上プログラム。
オーＰＧＭではカバーできなかった対レギオン戦も考慮された優秀な効果を発揮する。

・ゼロフレーム
粒子機械骨格。レギオンに内蔵されていたオーバーテクノロジー。
どこかエクスフレームと、理念が似通っている。

・キズナゲート

トラッシュが命を失って初めて得た力。
この力で死の世界からスバルを救った。

・デザインヒューマン
宇宙開発によって生み出された新人類。様々な点で普通の人間を超越している。宇宙飛行士の大半がこれにあたる。

・イマジンヒューマン
メトリーのこと。夜太郎の願いの力によって生み出されてしまった偽りの人間。

・身長のびのびセミナー
キザマロが通っている謎のセミナー。その正体は謎に包まれている。

・スーパーヒーロー委員会
スーパーヒーローが所属している謎の委員会。やはり謎に包まれている。

・ホームレス団体
ホームレスが与している謎の団体。ひたすら謎に包まれている。

・裏の社交界
選ばれし者が参加できる紳士たちの集い。至って謎に包まれている。

・テンキュウ高校
キミドリ達が通っているエリート御用達の学校。デザインヒューマンを生み出しているメッカでもある。

カードライブラリ（8／24　up date　S138：M34：G8：EX

＞ｉ１３０５５―１５６７＜「いらっしゃーい的なニュアンスー？」
＞ｉ１３０６６―１５６７＜「あ、どうも。……あれ、南国さん何やってるんですか？」
＞ｉ１３０５３―１５６７＜「なんだか、おっきなディスプレイにバトルカードをたくさん並べているね」
＞ｉ１３０５５―１５６７＜「ああ、そうなんだよ。今日はデータライブラリを作ろうと思ってね」
＞ｉ１３０６６―１５６７＜「データライブラリですか」
＞ｉ１３０５５―１５６７＜「うん、そうそう。カードの情報とか見れた方がお客さんにも便利だろう？」
＞ｉ１３０６６―１５６７＜「確かに、ハンターの機能だけじゃ詳しいバトルカードの説明はありませんもんね」
＞ｉ１３０５５―１５６７＜「うん。だからこのデータライブラリは随時更新していく予定だよ。それで特に気をつけてほしいのは、『更新の時には各ランクの一番下にカードを追加していく形をとる』っていうことだよ。覚えておいてね」
＞ｉ１３０６６―１５６７＜「わかりました」
＞ｉ１３０５３―１５６７＜「へえ、便利になるねー」
＞ｉ１３０５５―１５６７＜「データライブラリはいつでも見れるようにしておくからさ、暇だったら見に来なよ」

カードライブラリ（8／24　up　date　S138：M34：G8：EX

バトルカード名（星印はアイディア作品）
レア度／ランク／攻撃力／属性
カード説明

【ＳＴＡＮＤＡＲＤ　ＲＡＮＫ】

・００１　キャノン
＞ｉ１５９９３―１５６７＜
１／ＳＴＤ／４０／無
基本的なバトルカードの一つ。目の前を攻撃する。

・００２　メガキャノン
＞ｉ１５９９０―１５６７＜
２／ＳＴＤ／８０／無
強力なキャノン。目の前を攻撃する。

・００３　ギガキャノン
＞ｉ１５９８９―１５６７＜
３／ＳＴＤ／１６０／無
非常に強力なキャノン。目の前を攻撃する。

・００４　テラキャノン
＞ｉ１５９９７―１５６７＜
５／ＳＴＤ／３２０／無・砕
異常に強力なキャノン。目の前を殲滅する！

・００５　バグキャノン

＞ｉ１５９８４―１５６７＜
４／ＳＴＤ／１１０／無
相手をバグらせるキャノン。

・００６　エアシュート
＞ｉ１５９８０―１５６７＜
１／ＳＴＤ／２０／無・風
基本的なバトルカードの一つ。目の前を突風攻撃。

・００７　ムゲンバルカン
＞ｉ１５９９６―１５６７＜
３／ＳＴＤ／５／無
２０連射のバルカン攻撃。

・００８　シューティングＢ
＞ｉ１５９８８―１５６７＜
５／ＳＴＤ／４０／無
伝説の破壊神のシューティングバスター攻撃！

・００９　メタルライフル
＞ｉ１５９９５―１５６７＜
３／ＳＴＤ／１００／無
ロックオンカーソルで狙った敵を攻撃する。

・０１０　マテリアルＳバスター
＞ｉ１５９９４―１５６７＜
３／ＳＴＤ／１０／無
超連射の攻撃。１２ヒットする。

・０１１　アシッドブラスター

＞ｉ１５９８１―１５６７＜
３／ＳＴＤ／２０／無
素早い射撃攻撃。５連続する。

・０１２　ハイドロチューブ
＞ｉ１５９９１―１５６７＜
２／ＳＴＤ／１００／水
前方に鉄砲水攻撃。

・０１３　ジャングルショット
＞ｉ１５９９２―１５６７＜
２／ＳＴＤ／１５０／木・乱
前方に木の槍や木の実を投げつける。

・０１４　アツアツゼンセン
＞ｉ１５９８３―１５６７＜
２／ＳＴＤ／２００／火・盲
ハート型に火柱が。相手は盲目に。

・０１５　ヤンマースプレッド
＞ｉ１５９９８―１５６７＜
３／ＳＴＤ／６０／火
トンボ型のキャノン。フィールド全体に誘爆する。

・０１６　ダイヤモンドボム
＞ｉ１５９８６―１５６７＜
４／ＳＴＤ／６０／水
耐久力の高い爆弾。全体に爆発が広がる。

・０１７　バンバンチョー

＞ｉ１５９８５―１５６７＜
３／ＳＴＤ／１２０／木・砕
ガード出来ないほどの番長の木刀叩き込み攻撃！

・０１８　ドラゴンオチュー
＞ｉ１５９８７―１５６７＜
３／ＳＴＤ／８０／水
勢いよく津波攻撃を繰り出す。地面を水に。

・０１９　ソード
＞ｉ１５９９９―１５６７＜
１／ＳＴＤ／８０／斬
基本的なバトルカードの一つ。目の前を攻撃する。

・０２０　ワイドソード
＞ｉ１８７１５―１５６７＜
２／ＳＴＤ／８０／斬
ソードの攻撃範囲が横方向に広くなり使いやすくなった。

・０２１　ロングソード
＞ｉ１８７１３―１５６７＜
２／ＳＴＤ／８０／斬
ソードの攻撃範囲のリーチが長くなり遠くまで攻撃できる。

・０２２　ツインソード
＞ｉ１８７１４―１５６７＜
３／ＳＴＤ／７０／斬
二回連続で目の前を切りつけるソード。

・０２３　ブレイクソード

＞ｉ１８７１２―１５６７＜
４／ＳＴＤ／２４０／斬・砕
ブレイク属性のソード。前方の斜めを斬りつける。

・０２４　ブレイクサーベル
＞ｉ１８７１１―１５６７＜
４／ＳＴＤ／２２０／斬・砕
ブレイク属性のサーベル。前方をＶ字に斬りつける。

・０２５　ブレイクブレード
＞ｉ１８７１０―１５６７＜
４／ＳＴＤ／２００／斬・砕
ブレイク属性のブレード。前方をＸ字に斬りつける。

・０２６　ファイアソード
＞ｉ１８７２５―１５６７＜
３／ＳＴＤ／２３０／斬・火
火属性のソード。目の前を斬る。

・０２７　ファイアサーベル
＞ｉ１８７２４―１５６７＜
３／ＳＴＤ／２２０／斬・火
火属性のサーベル。目の前を横に斬り払う。

・０２８　ファイアブレード
＞ｉ１８７２３―１５６７＜
３／ＳＴＤ／２１０／斬・火
火属性のブレード。広範囲を斬りつける。

・０２９　アクアソード

＞ｉ１８７１６―１５６７＜
３／ＳＴＤ／１９０／斬・水
水属性のソード。目の前を斬る。

・０３０　アクアサーベル
＞ｉ１８７０９―１５６７＜
３／ＳＴＤ／１８０／斬・水
水属性のサーベル。目の前を横に斬り払う。

・０３１　アクアブレード
＞ｉ１８７０８―１５６７＜
３／ＳＴＤ／１７０／斬・水
水属性のブレード。広範囲を斬りつける。

・０３２　エレキソード
＞ｉ１８７２２―１５６７＜
３／ＳＴＤ／１５０／斬・電
電気属性のソード。目の前を斬る。

・０３３　エレキサーベル
＞ｉ１８７２１―１５６７＜
３／ＳＴＤ／１２０／斬・電
電気属性のサーベル。目の前を横に斬り払う。

・０３４　エレキブレード
＞ｉ１８７２０―１５６７＜
３／ＳＴＤ／１００／斬・電
電気属性のブレード。広範囲を斬りつける。

・０３５　ウッドソード

＞ｉ１８７１９―１５６７＜
３／ＳＴＤ／２００／斬・木
木属性のソード。目の前を斬る。

・０３６　ウッドサーベル
＞ｉ１８７１８―１５６７＜
３／ＳＴＤ／１８０／斬・木
木属性のサーベル。目の前を横に斬り払う。

・０３７　ウッドブレード
＞ｉ１８７１７―１５６７＜
３／ＳＴＤ／１７０／斬・木
木属性のブレード。広範囲を斬りつける。

・０３８　ツジギリソード
＞ｉ１９８８４―１５６７＜
３／ＳＴＤ／６０／斬
ロングソードとワイドソードの連続攻撃。

・０３９　ジャイアントアックス
＞ｉ１９８８０―１５６７＜
３／ＳＴＤ／２５０／無・砕
若干隙が大きいが高威力、広範囲が魅力。

・０４０　オーガアックス
＞ｉ１９８８３―１５６７＜
３／ＳＴＤ／２２０／無・解
かなり隙が大きい斧。広範囲が魅力。

・０４１　コールドハンマー

＞ｉ１９８７９―１５６７＜
４／ＳＴＤ／２４０／水・砕・凍
相手を凍結させる強烈なハンマー！

・０４２　コムソーブレード
＞ｉ１９８８２―１５６７＜
２／ＳＴＤ／１００／斬
一定時間ソードを使い放題。

・０４３　アリガネサーベル
＞ｉ１９８７８―１５６７＜
４／ＳＴＤ／０／斬
ゼニーを消費して目の前を斬りつける！

・０４４　ココウケン
＞ｉ２１２８０―１５６７＜
４／ＳＴＤ／０／斬
大切なキズナを消費して目の前の広範囲を斬る！

・０４５　ゼータレイエッジ
＞ｉ２１２８２―１５６７＜
５／ＳＴＤ／１１０／斬
伝説の剣士の目にもとまらない剣術。最大４ヒット！

・０４６　アスパイアブレイク
＞ｉ２３５６１―１５６７＜
５／ＳＴＤ／３５０／斬
伝説の指揮官がマントをぶつけて斬りつける。

・０４７　パララオクトソク

＞ｉ２１２８１―１５６７＜
２／ＳＴＤ／５０／電
相手のエリアを中心に電撃が広がる。最大３ヒット！

・０４８　ミドルバハムー
＞ｉ２９５５７―１５６７＜
３／ＳＴＤ／１５０／水・召
目の前にバハムートを召喚。水ブレス攻撃。

・０４９　ピンクタッチ
＞ｉ２９５５８―１５６７＜
３／ＳＴＤ／２００／無・解
強烈な張り手攻撃。装備プログラムを解除する。

・０５０　アトミックマイン
＞ｉ２９５５４―１５６７＜
４／ＳＴＤ／３５０／火
破壊力抜群の地雷を設置する。

・０５１　キャンドルソード
＞ｉ２９５５６―１５６７＜
３／ＳＴＤ／１２０／火・盲・乱
横に切りつける。相手は少しの間動きが鈍くなる。

・０５２　ピンズビンズ
＞ｉ２９５５９―１５６７＜
４／ＳＴＤ／１００／水
フィールドの餌箱を召喚。小さなピラニアが群がる。

・０５３　☆カッターソード

＞ｉ２９５５５―１５６７＜
３／ＳＴＤ／５０＋１０／斬
研ぎ澄まされたソード。３連続攻撃。

・０５４　ダークソード
４／ＳＴＤ／２００／斬
広範囲を斬りつける黒いソード！

・０５５　カオスエッジ
４／ＳＴＤ／２００／斬・探
素早く横に切りつける黒い爪。

・０５６　マスタードソード
３／ＳＴＤ／２００／斬・盲
リーチのある伝説のカラシソード。相手は盲目に。

・０５７　アンプラーシェード
３／ＳＴＤ／３０／無・乱・盲
８体のコウモリの音波攻撃。

・０５８　タケヤブランス
３／ＳＴＤ／１４０／木
後ろからいきなり竹の槍が！

・０５９　アイアンバーナー
３／ＳＴＤ／１９０／火・砕
防御不可の火炎放射攻撃。

・０６０　ルナティックメテオ
５／ＳＴＤ／５０／無・凍

狂ったように月から隕石が落ちてくる！

・０６１　ハイスカイレイ
５／ＳＴＤ／１００／無・探
空から狙い澄ましたかのようなビーム攻撃！

・０６２　ストローフェイス
２／ＳＴＤ／－／木
火属性以外の相手の攻撃を吸収してはね返す。

・０６３　ボヤヤンキー
３／ＳＴＤ／６０／火
相手の火属性カードを無効化、自分に還元する。

・０６４　ハリュウエンゲツトウ
４／ＳＴＤ／１８０／木
広範囲を薙ぎ払う一撃！

・０６５　シデンクイナ
４／ＳＴＤ／１５０／電
美しい鳥の電を帯びた突進攻撃！

・０６６　クイネーラ
５／ＳＴＤ／２００／木
直前に選んだカードの属性を付与して攻撃する！

・０６７　モエブー
３／ＳＴＤ／１２０／火
フィールドを燃える豚が走り回る。

・０６８　トドパンチ
３／ＳＴＤ／２００／水・砕
破壊力のある正拳突き。相手を吹きとばす。

・０６９　サボガトリング
３／ＳＴＤ／３０／木
サボテン型の回転式機関銃。８ヒットする。

・０７０リングラン
３／ＳＴＤ／７０／無・砕
小さなコマが当たり構わずフィールドを疾走する。

・０７１　ギガクエイク
４／ＳＴＤ／１５０／無
遠いほど威力が増すフィールド全体に走る衝撃波！

・０７２　カゲムシャ
４／ＳＴＤ／－／無
召喚系カードの前に使うと、そのカードの効果を引き継ぐ。

・０７３　コテシラベ
４／ＳＴＤ／－／無
カードの前に選ぶと、そのカードの半分の力で攻撃する。

・０７４　サテラサーチング
５／ＳＴＤ／－／無
相手のバトルカードの順番をランダムで入れ替える。

・０７５　ジャミングウェーブＢ
４／ＳＴＤ／５５／無・探

ジャミンガーが現れて強化バスター攻撃。

・０７６　ＷＷＲウィザード
４／ＳＴＤ／１３０／電
改造されたウィザードの連続ソード攻撃。

・０７７　ビーストスイングΩ
４／ＳＴＤ／２４０／斬
強力になったビーストスイング。広範囲をひっかく！

・０７８　ビーストバスター
３／ＳＴＤ／－／無
しばらくバスターの威力とラピッドが限界を超える。

・０７９　バーンストライク
４／ＳＴＤ／１００／火
フィールドを貫通する波動攻撃。最大で３ヒット。

・０８０　ジャッジメントダイス
４／ＳＴＤ／１００／無
出目により性能が変わる不思議ダイス。

・０８１　ギリメメカラ
３／ＳＴＤ／２００／電
怪しい光線攻撃！　相手はマヒに。

・０８２　メトロタイガー
３／ＳＴＤ／－／無
敵の攻撃スピードが少しの間だけ遅くなる。

・０８３　ラブシャワーヘッド
２／ＳＴＤ／２０／木・砕
長い蛇がフィールドを蛇行して突進する。

・０８４　ファイアトード
３／ＳＴＤ／８０／火
カエルが炎の舌で巻きつける。最大３ヒット。

・０８５　ハードフラワー
３／ＳＴＤ／４０／木・乱・盲
花から出る怪しい成分で相手を異常にする。

・０８６　クレイジーボム
４／ＳＴＤ／４００／火
爆発すると両方にダメージが！

・０８７　クラスターボム
４／ＳＴＤ／０／無
爆発までの時間が長いほど威力がアップする。

・０８８　ネッサストーム
３／ＳＴＤ／３０／火・風
熱を帯びた砂嵐。６ヒットする。

・０８９　コガラシ
３／ＳＴＤ／２０／木・風
コガラシを発生させる。８ヒットする。

・０９０　ハリケーン
４／ＳＴＤ／３０／水・泡・風

目の前に台風を発生させる。５ヒットする。

・０９１　ジキアラシ
３／ＳＴＤ／１０／電・風
目の前に電気の嵐。１０ヒットする。

・０９２　クリムゾンストーム
４／ＳＴＤ／３０／無・風
相手をバグらせるノイズ攻撃。６ヒットする。

・０９３　メザメフック
４／ＳＴＤ／１００／電・解
横を殴りつける攻撃。

・０９４　シャドーステップ
３／ＳＴＤ／－／無
移動スピードとシールドの反応が良くなる。

・０９５　イナドラバード
３／ＳＴＤ／５０／電
可愛い鳥が雷を落としながらフィールドを横切る。

・０９６　カゲブンシン
３／ＳＴＤ／－／無
自分の姿を増やす。

・０９７　モノコング
３／ＳＴＤ／１００／木・砕
相手に悪臭のある緑の球を投げつける。

・０９８　モノウータン
３／ＳＴＤ／１００／電・探
相手に湿った黄色の球を投げつける。

・０９９　モノゴリラ
３／ＳＴＤ／１００／水・泡
相手に液状の赤い球を投げつける。

・１００　スパイダーネット
３／ＳＴＤ／１５０／無
相手の動きを縛る。強力ネットを吐きつける。

・１０１　キングルーツ
４／ＳＴＤ／３０／無・召
キングルーツを召喚する。デンパ君が大量発生。

・１０２　モモブレード
２／ＳＴＤ／１２０／斬・火
目の前をＭ字に斬りつける。フィールドを破壊！

・１０３　ゲソブラック
３／ＳＴＤ／１００／水・盲
イカみたいなタコが出てきてスミ攻撃！

・１０４　オジゾウサン
５／ＳＴＤ／２００／電・探・砕
ありがたいお地蔵様。攻撃してはいけない。

・１０５　ツルツラランス
４／ＳＴＤ／１００／水・凍

縦に一閃する。冷気の槍攻撃。

・１０６　エレメンタルメテオ
４／ＳＴＤ／５０／無
ランダム属性が変化する隕石を降らせる。

・１０７　ジェラシー
３／ＳＴＤ／－／無
女の嫉妬。相手のバトルカードを破壊する。

・１０８　バリア
１／ＳＴＤ／－／無
基本的なバトルカードの一つ。１回だけ攻撃を無力化する。

・１０９　スーパーバリア
２／ＳＴＤ／-／無
強力なバリア。２回だけ攻撃を無力化する。

・１１０　ハイパーバリア
３／ＳＴＤ／－／無
素晴らしいバリア。３回だけ攻撃を無力化する。

・１１１　オーラ
４／ＳＴＤ／－／無
攻撃力１００以下の攻撃を通さない。

・１１２　ドリームオーラ
５／ＳＴＤ／－／無
攻撃力２００以下の攻撃を通さない。

・１１３　リカバリー１０
１／ＳＴＤ／－／無
基本的なバトルカードの一つ。体力を１０回復する。

・１１４　リカバリー３００
４／ＳＴＤ／－／無
体力を３００回復する。

・１１５　ムーメタル
３／ＳＴＤ／－／無
前方にムーメタルを投げつける。何かが起こるかも？

・１１６　ムースライサー
４／ＳＴＤ／２２０／斬
素早い動作で広範囲を斬りつける。

・１１７　デンパショウヘキ
５／ＳＴＤ／－／無
心の壁が一定時間だけ自分を守り続ける。

・１１８　シグマコード
４／ＳＴＤ／－／無
一定時間脅威的なパワーアップが可能！

・１１９　ベルセルクプレート
５／ＳＴＤ／２００／電・斬
古代のオーパーツ。目の前に電撃を帯びた斬撃。

・１２０　フウマシュリケン
５／ＳＴＤ／１００／木・探

古代のオーパーツ。前方に手裏剣を３つ投げる。

・１２１　ダイノヘッド
５／ＳＴＤ／３００／火・砕・召
古代のオーパーツ。恐竜の灼熱の突進攻撃！

・１２２　エアトライデント
５／ＳＴＤ／２１０／水・風
古代のオーパーツ。３方向に突き攻撃。

・１２３　ポイズンボム
２／ＳＴＤ／５０／無
前方に毒の爆弾攻撃。地面を毒にする。

・１２４　リオガード
１／ＳＴＤ／－／無
基本的なバトルカードの一つ。相手の攻撃をはね返す。

・１２５　キングホウガン
３／ＳＴＤ／３２０／無・砕
超質量のホウガンを投げつける。地面を破壊する。

・１２６　ウラギリノススメ
２／ＳＴＤ／－／無
召喚系カードを寝返らせる。

・１２７　ココウステージ
５／ＳＴＤ／－／無・解
自分のダメージ分だけ相手のキズナ力を減らす。

・１２８　ドッグファイト
４／ＳＴＤ／－／無
床が破壊。しばらくお互いバスターしか使えなくなる！

・１２９　ゾクウラギリノススメ
３／ＳＴＤ／－／無
同じ種類の召喚系カードを全て無効にする。

・１３０　スーパーアーマー
４／ＳＴＤ／－／無
しばらくのけぞらなくなる。

・１３１　ステータスガード
４／ＳＴＤ／－／無
しばらく状態異常にならなくなる。

・１３２　アタック＋１０
１／ＳＴＤ／－／無
基本的なバトルカードの一つ。攻撃力を１０加える。

・１３３　アタック＋３０
４／ＳＴＤ／－／無
攻撃力を３０も加える。

・１３４　ダンドウホウガン
３／ＳＴＤ／２４０／火
床を砕く超質量のホウガン。

・１３５　ファイアーウイング
３／ＳＴＤ／２００／火

炎の翼を纏い突進攻撃を繰り出す。

・１３６　アクアウォール
３／ＳＴＤ／１５０／水
水の壁である巨大津波攻撃。辺りを水浸しに！

・１３７　ブンシンノジュツ
５／ＳＴＤ／－／無
自分にそっくりな分身を発生させる！

・１３８　ソニックフィスト
３／ＳＴＤ／１００／無
貫通して進む無音高速の空気の弾丸拳！

【ＭＥＧＡ　ＲＡＮＫ】

・００１　ＳＳロックマン
６／ＭＥＧＡ／１００／斬・召
強力なロックバスターにワイドソード攻撃。４連続攻撃！

・００２　ＳＤロックマン
５／ＭＥＧＡ／３５０／無・召
前方にチャージグレイバスター攻撃！

・００３　オックスファイア
４／ＭＥＧＡ／２５０／炎・召
目の前に広がるファイアブレス攻撃。

・００４　ハープノート
４／ＭＥＧＡ／２００／無・召
必殺のパルスソング攻撃。相手をマヒに。

・００５　ジェミニスパーク
５／ＭＥＧＡ／１５０／電・斬・砕・召
息の合った二人のコンビネーション攻撃。

・００６　ウルフフォレスト
５／ＭＥＧＡ／８０／木・砕・召
１３匹の狼を呼び攻撃する。

・００７　ジャックコーヴァス
５／ＭＥＧＡ／２００／炎・召
強力なペインヘルフレイム攻撃。当たらないことも。

・００８　クイーンヴァルゴ
５／ＭＥＧＡ／２０／水・凍・召
相手に１０ヒットするゴッドレイン攻撃。相手を凍結に。

・００９　アストラルエース
４／ＭＥＧＡ／１００／斬・探・召
アシッドブラスターの後にランダムでバトルカードの攻撃をする。

・０１０　ソウルレイダー
６／ＭＥＧＡ／１３０／斬・召
星形に斬りつけるブラッディアスタリスク。最大で３ヒット。

・０１１　サーフサーファー

５／ＭＥＧＡ／１８０／炎・水・木・召
圧倒的な３属性のトロピカルビッグウェーブ攻撃！

・０１２　ヘラローズガーデン
６／ＭＥＧＡ／２０／木・風・召
レギオンのカード。相手を吹きとばすグレーズローズタッチ。１３ヒット。

・０１３　ヘルスコルピオ
５／ＭＥＧＡ／２９０／無・召
レギオンのカード。広範囲を毒にするダークドゥラウン！

・０１４　プルトキグナス
６／ＭＥＧＡ／３００／無・風・砕・召
レギオンのカード。エリア広範囲にフルプレアワルツ！

・０１５　ブライ
６／ＭＥＧＡ／７０／無・召
前方にネオブライアーツを炸裂させる。最大７ヒットする。

・０１６　ブライＢＰ
６／ＭＥＧＡ／１１０／斬・電・召
目の前に電撃を帯びたライトニングボルトスマッシュ！

・０１７　ブライＦＳ
６／ＭＥＧＡ／１００／斬・探・召
フィールド全体に対インビジのコクウメッサツジン！

・０１８　ブライＤＨ
６／ＭＥＧＡ／３５０／無・砕・召

ブレイク性能を持ったジェノサイドメテオブレイクを叩きこむ！

・０１９　ブライＡＴ
６／ＭＥＧＡ／５０／水・風・召
疾風の連続突きであるマーマンエアストライクを放つ！

・０２０　シリウス
６／ＭＥＧＡ／３５０／無・砕・風・召
フィールドを破壊するサテライトブレイザー。逃げ場はない。

・０２１　スコープスナイパー
４／ＭＥＧＡ／１５０／無・探・解・召
対インビジのスクープスナイプ攻撃で狙い撃つ！

・０２２　ホロビノシハイシャ
６／ＭＥＧＡ／２１０／炎・砕・召
アポロンとオリガの連続攻撃。２ヒット。

・０２３　ハイバリアブル
５／ＭＥＧＡ／２６０／斬
進化したバリアブルソード。変幻自在の攻撃をする。

・０２４　メルトダウン
４／ＭＥＧＡ／－／無
乗ってしまったが最期。大ダメージの炉心パネルを発生させる。

・０２５　☆イリュージョントランプ
５／ＭＥＧＡ／－／無
トランプの役によって効果が変わる。テクニカルカード。

・０２６　☆ブーストパック
５／ＭＥＧＡ／－／無
最速の機動力を誇る武装バックパック。

・０２７　アシュラサン
６／ＭＥＧＡ／３００／無・探・砕
とてもありがたい仏像。決して壊してはならない。

・０２８　コスモステージ
５／ＭＥＧＡ／－／無
不思議な力が働くバトルフィールドを作り出す。

・０２９　グングニール
６／ＭＥＧＡ／３５０／電
上位のオーパーツ。圧倒的な破壊力の槍で攻撃！

・０３０　エメリオル
５／ＭＥＧＡ／４００／無・探・召
非常に強力なマイクロブラックホールカノンを放つ！

・０３１　ブライオリジン
６／ＭＥＧＡ／１００／炎・電・木・水・召
驚異の四属性攻撃！　最大４ヒット！

・０３２　アストラルホープ
４／ＭＥＧＡ／５０／無・召
前方にアストラルブラスターを連射する。

・０３３　グリットメトリー
５／ＭＥＧＡ／１７０／無・風・召

その場で一回転し、周囲をマトックデスサイズで薙ぎ払う。

・０３４　ミライノセント
６／ＭＥＧＡ／－／無・召
問答無用で体力の半分を奪うイノセントインパクト攻撃！

【ＧＩＧＡ　ＲＡＮＫ】

・００１　ビッグバンイーター
８／ＧＩＧＡ／５８０／無・砕
ＦＭ星の最終兵器。全体を喰らい尽くす。

・００２　ギガミサイル
８／ＧＩＧＡ／５００／無・探
ギガクラス級のミサイル。大爆発を起こす。

・００３　ムーノイカズチ
８／ＧＩＧＡ／２２０／無・探
電波神の必殺攻撃。巨大な雷光が轟く。

・００４　メテオオブクリムゾン
８／ＧＩＧＡ／２４０／無
脅威の３連続でデストロイブレスを放つ。

・００５　ラストデューオ
９／ＧＩＧＡ／２００／無・砕
ギガントフックの後に、メテオナックルを放つ。

・００６　カイザーナックル
１０／ＧＩＧＡ／７００／無・探・砕・風
自分の体力を限界まで消費して放つ究極の一撃。

・００７　☆ウェーブギロチン
７／ＧＩＧＡ／４００＋５０／斬・探
残り体力４００以下の敵を問答無用でデリート。それ以上には２５０ダメージ。

・００８　ゾディアックライン
７／ＧＩＧＡ／－／無
フィールド全体に２５０以下のダメージを無効化する格子を張る。

【ＥＸＣＬＵＳＩＶＥ　ＲＡＮＫ】

・００１　コスモバスター
－／ＥＸ／－／無
バスターの性能を極限にまで底上げする。

・００２　ＢＥギャラクシー
－／ＥＸ／５００／斬・探
漆黒の一閃。相手に強烈な一撃を与える。

・００３　ＲＧイレイザー
－／ＥＸ／２００／無・砕
煉獄の劫火。相手に熾烈な攻撃を加える。

・００４　バニシングＷ
－／ＥＸ／６００／無

破壊神が全てが無に帰る程の大爆発を起こす。

・００５　ランクオブデス
－／ＥＸ／－／無・解
強力な闇の波動！　相手の装備プログラムを複数解除する。

【ＧＡＬＡＸＹ　ＡＤＶＡＮＣＥ】

・００１　ダブルヒーロー
（ＭＥＭＯ：ソウルオブレイド・ソードファイター・コスモバスター）
－／ＧＡ／７０／斬・探
協力したヒーロー二人の魂の連続攻撃。

・００２　ドリームブレイク
（ＭＥＭＯ：ブレイクソード・ブレイクサーベル・ブレイクブレード）
－／ＧＡ／５４０／斬・砕
夢の破壊剣。目の前をＷ字に斬る。

・００３　エクサキャノン
（ＭＥＭＯ：キャノン・メガキャノン・ギガキャノン）
－／ＧＡ／５００／無
一撃必殺のキャノン。前方を吹きとばす。

・００４　ニュークリアキャノン
（ＭＥＭＯ：キャノン・メガキャノン・ギガキャノン・テラキャノン）
－／ＧＡ／６４０／無
一撃滅殺のキャノン。核融合反応で辺りを消し飛ばす！

・００５　ドリームエレキ
（ＭＥＭＯ：エレキソード・エレキサーベル・エレキブレード）
－／ＧＡ／４８０／斬・電
夢の電撃剣。目の前をＥ字に斬りつける。

・００６　テトラドリーム
（ＭＥＭＯ１：ファイアソード・アクアソード・ウッドソード・エレキソード）
（ＭＥＭＯ２：ファイアサーベル・アクアサーベル・ウッドサーベル・エレキサーベル）
（ＭＥＭＯ３：ファイアブレード・アクアブレード・ウッドブレード・エレキブレード）
－／ＧＡ／７０／斬・炎・水・木・電
夢の四属性剣。目の前をＷ字に四回も切りつける。

・００７　ムーノイカズチ
（ＭＥＭＯ：ベルセルクプレート・フウマシュリケン・ゼツメツメテオ）
－／ＧＡ／１５０／電
ムー大陸からの雷攻撃！　４ヒットする。

ルナダイアリー（4／25 up date To S．S．Rockman

＞i13060―1567＜「……ふう、行きますか！」
＞i13069―1567＜「ノリノリじゃねえか。スバル」
＞i13060―1567＜「そうだよ！　ノリノリだよ！　悪いかよ？　でもやっぱり、良い香りのする部屋だね！　委員長の部屋は最高だよ！」
＞i13069―1567＜「よっ、相変わらずの変態だねー。スバル君は！」
＞i13060―1567＜「う……くっ……！」
＞i13069―1567＜（否定しろよ……）
＞i13048―1567＜「おっとー、机の上に何か発見！　覗こう！」
＞i13060―1567＜「あ……！　キミドリさんが委員長の日記に気がついている！　というかなんでキミドリさんが？！」
＞i13069―1567＜「ほう……。なかなかやるじゃねえかあの女！」
＞i13060―1567＜「とにかく、僕達もキミドリさんの所に行こうか」
＞i13069―1567＜「おっと、その前に一つ言っておくことがあるぜ。スバル」
＞i13060―1567＜「何？」
＞i13069―1567＜「えーと、ルナっちの日記は『更新するとき一番下に追加していく形式をとる』ってことだ。覚えておけ」
＞i13060―1567＜「へえー。って、なんでロックがそんな事を知ってるの？」
＞i13069―1567＜「いや……。以前ちょっと覗いたことがあったからよ」
＞i13060―1567＜「うわぁ……」

＞ｉ１３０６９―１５６７＜「グワァアアッやめろォ！　俺をそんな目で見るな！」

ルナダイアリー（4／25　up date To S. S. Rockman）

不定期連載　ルナの日記

突然だけどね、私はルナっちのお家に招き入れられています。なんでって言うとね、さっき『話があります』って言う文面のメールを貰ったから、電波変換して速攻で駆けつけたってわけ。ルナっちは今、私の目の前で座っている。何なんだろう話って――ちょっとワクワクしてるかも。

でさでさルナっちったらさっきからモジモジしていて可愛いなぁ。うんうん、こういう子って嫌いじゃないな、私。

「あのちょっと、ノド渇きましたね……飲み物とか買ってきますね」

「イイよイイよーそんなの気にしなくて……って、行っちゃうのね！　何というかルナっちらしいわー」

ありがたいけど、ルナっちが人の話も聞かずに勝手に飲み物取りに行ってくれたわけだけど、……暇ですねーこの状況って。人の家で好き勝手にくつろぐわけにもいかないしね。だけど暇を持て余しまくっている私……、ホントはダメなんだけど、ルナっちの部屋を色々と眺めて物色を始めております。

わー、ピンクを基調としたお洒落ゴージャスって言うのかな？そんな感じの部屋です、ハイ。眺めるだけじゃ飽き足らず、ちょっと、ウロウロしてみる落ち着きのない私です。

「おっとー、机の上に何か発見！」

私は机の上に無造作に置かれている日記帳を発見してしまった。
いかん……！　見ちゃダメだ。乙女の秘密が一杯詰まっているのだから見ちゃいけない気がするんです。――でも……でも、『見たい！』何たって私、好奇心の塊ですからね。
仕方ない、ホントはいけないけど少しだけ……少しだけならいいよね？！　神様！　うん自分でも分かっているって……こういうときだけ都合良く神頼みです。
まぁ、しかし、とりあえず神様にお許しを得た（得たという事にして）という事でちょっと拝見……。

「ちょっと、お姉さんが見てしまうからねー、言っておくけどこれはあくまで点検だから。本当に日記帳かどうかの点検だから」

一人でブツブツ明らかに不審者な感じが漂ってますが、そんなの気にしません。

「えーとナニナニ……」

『4月7日

明日から、五年生だ。いいことルナ？　絶対にまた委員長になってみせるのよ！　時期生徒会長の座を私の物とするために……！

それと今日は、ピアノの演奏会があったんだったわ。上手く弾けてみんな私に拍手を送り続けていたの。なんていうか、すごくいい気分だった。
……でも、ママとパパはそんなの当然だって言って褒めてくれないのよね……。きっと私の腕がまだまだだからよ。うんきっとそうだわ！　もっと頑張らなくちゃダメよルナ、私はパパとママの娘な

んだから。エリートにならないといけないのっ。

でもその前に明日はゴン太とキザマロに、トロフィーを見せびらかさなくちゃね！　ウフフ、驚く二人等の顔が浮かぶわ。明日が楽しみ！

でも、その前に二人と同じクラスになれるのかしら……ちょっと心配だけど、まぁ大丈夫よね！』

「……か、ルナっちが五年生になる時ってだいぶ昔よね。でもすごくハングリーな子だったのね……ま、今もだけど。――おっと、続き続きっと」

おっ、ルナっちの小学五年生期の謎が今暴かれるぞ。フッフッフッ、結構楽しみなんだよな？なんたってスバルンと出会ったのってこの時期らしいしね。ここは私としては見逃せないところでありますよ――って言ってる私ったら、ちょっと興奮してるし自分でも気持ち悪いと思うんだよね。

もしかして実は私、覗くのが大好きな変態なんじゃ……。

「いやいやいや、そんな訳ナイッスヨ！　好奇心が強いだけなんだよきっと……！　きっと」

そう言って、自分自身を無理矢理正当化して『点検』開始！　ルナっちゴメンよ……、後でお姉さんがなんか奢ってあげるからね（うまい棒１０００本とか）

「はいペラララーっと。えーナニナニ……おうおう。！！　むむ……これは……！」

驚いたことに、今時珍しい紙媒体の日記のページには文字がぎっしり……！

しかもなかなかルナっちは達筆であるのだった。高校生の私より字がうまくて、ちょっと悔しい。

そんなジェラシーを感じながらも、私は非常に徹して、乙女の聖域に足を踏み入れるのだった！

日記はどうやら四月から始まっているようだ。

『4月8日

やった、無事ゴン太とキザマロと同じクラスになれた！　すごく安心した気分……って違う違う、安心したのはゴン太たちの方だわ。あいつら、わたしがいないと何にも出来ないものね！　フフンそうに決まってるわ……まぁ、でも一緒になれて嬉しかったのは嬉しかったわね……まぁ一応。

しかも、さらに嬉しかったのは見事クラス委員長になれたの事よね。いよっし、これで足場固めてクラスと先生を味方につけて体制を盤石の物とすれば……時期生徒会長は……私の物よ！！　フフ、上手くいきすぎてちょっと笑いが込み上げてくるわね。

あ、そうだそうだ今日は先生が不登校児の事について言ってたわね。確か名前は……星河って言ったかしらね……うーん星河って確か宇宙飛行士のお父さんがいらっしゃったご家庭だったかしら。同じクラスにはなったことないけど昔はずいぶん明るい子だったのは少し覚えているわね、……でも確か3年前の事故以来まったく学校に来なくなっちゃったみたい。

たまに、展望台の方へ出掛けるのを見るけど、すごく悲しそうな顔してたわ……。

どうしようかな、明日学校に誘ってみようかしら……ちゃんと声かけられるかな……？　分かんないけど、明日ゴン太とキザマロを引きつれて行ってみよう……！　クラス委員長としてやっぱりクラス全員揃わせないとね。

待ってなさい星河スバル！　コダマ小学校5年A組クラス委員長、白金ルナがアナタを絶対学校に引っ張り出してやるんだから！』

おおっと、スバルン、ルナっちに狙われちゃったよ……！　大丈夫だったのかな……色んな意味で。

よし続き続きっと。

私の勘が申している。ここから先スバルンとルナっちの長い付き合いが始まるのだと……！

そう、それが運命の出会い！　ロックマンの伝説の始まりを告げるのだー……！　ってまあ、そんなテンションです。

『4月9日

今日は放課後、ゴン太とキザマロを引きつれてスバル君を学校に誘ってみたわ。ちょっと緊張したけど、やっぱり展望台に向かって行くみたいだったからそこを取り押さえたわ！　……ゴン太が。

そして勇気を出して学校に誘ってみたけど、あいつったら何て言ったと思う？　『僕に構わないでくれないかな？』ですって！　なによせっかく人が良心で誘ってやってあげてるっていうのに一言で一蹴なんてあり得ないわ！　せっかく、勉強遅れちゃ大変だと思って、勉強ノート作ってあげてたっていうのに……！

まったく、もう知らないんだから！　知らないんだから……！

知らないんだから……でも、うーん……し、仕方ないわね明日、

もう一度だけ誘ってみようかしら。今度は最近の赤い物ばかりが壊される事件のパトロールといった名目で誘ってみようかな……？

よしそうしよう、そうと決まれば、明日ゴン太の知り合いのおじ様に頼んで見回り用のトラックを調達してもらわなきゃ！

フフフ、待ってなさい、星河スバル！　絶対にあなたの首を縦に振ってみさせるんだから。』

「なははは、ルナっちも懲りないなー、でもこれが二人の出会いだったんだよね。――ちょっと感動」

そう言ってるけど、私としてはに一つ気になることがあるんだよねー。赤い物ばかり破壊される事件って確かどっかの新聞で取り上げられてたような……気がするんだよねぇ。あの頃は確か私たちも特ダネとして一面を飾らせてもらったしなんとなく覚えてるんだよね。ちょっと、ルナっち達に危険なにおいがするよ……？

そんなこんな思っても、もう終わったことだから仕方ないしとりあえず私は日記を読むことにします。ページを捲るの楽しくてしょうがないです（相当だな私……）。

『４月１０日

今日もスバル君を誘いにいったわ。でも、すっごく驚いたことがあったの、彼の家の前でスバル君を見つけて声をかけたんだけど、やっぱり無愛想で、それに我慢ならなかったゴン太が彼の胸倉をつかんで、『ホウレンソウ野郎』だとか『もやしマン』だとか言いたい放題言ってたのよね。

でも突然スバル君がゴン太にアッパーをお見舞いしたのには正直驚いたわ（でもトランサーが勝手に動いたように見えたのは気のせ

い……よね？）。しかもゴン太気絶しちゃうし、体ばっかり大きいクセに情けないったらありゃしないわ！　だから公園に呼び出してきっちり叱ってやったわ……ちょっと言い過ぎたかも知れないけど。

今思えばゴン太ちょっと落ち込んでたかも……。それが原因だったのかな、その後とんでもない事が起こったの……。

あれは忘れたくても忘れれないわね』

「やっぱり、ルナっち達あの事件に巻き込まれてたのね……。あれ以来、確か電波体の起こす事件が活発化してきたんだよね。そりゃぁ、私の高校も大騒ぎになったなぁ」

私は過去の出来事に照らし合わせながら、ルナっちの日記を覗…点検するのを続けてしまいましたとさ。

私はページを捲る。ルナっちとロックマンの出会いに純粋な興味本位を持ったからだ。スバルンの事だ、クサイセリフでも吐いたに違いないな。

『４月１０日その２

私たちは見回りのつもりでコダマタウンをトラックで回ってたわ。でも、その前に相変わらず、展望台で一人寂しく星を見上げているスバル君を誘ってみたけど、やっぱり相手にされなかった……。

そんな事もあって、スバル君抜きで暫く町の中を見回ってたけど、特に異常は無かったの。

そしてスバル君の家の前を通りかかった時。そしたら、やっぱりスバル君がいたのよね。今度は展望台から帰る途中だったのかしら、でも相変わらず暗い顔だったわね……。まぁ、私としては少し驚か

すつもりでトラックで彼に近づいて、再度誘ってやったわ！　でもやっぱり断るのよね、彼は。まったく、人嫌いにも程があるっていうのよ。

それで、仕方なくトラックに戻ろうとしたら、ゴン太がいきなりうめき出して、何だろうって思って問いかけたんだけど……、まさか……まさか、ゴン太があんな牛の化け物になるなんて思いもしなかったわ！　真っ赤な炎を噴き出してるアイツは、スゴク怖かったわ。当然怖くなった、キザマロと私はトラックに逃げ込んで、走って逃げ去ろうとしたの。

でも！　あの牛の化け物は、トラックに向かって突っ込んできたわ。正直、あの時は死ぬかと思ったわ。でも牛の化け物は突っ込んでくるかと思いきや、いつの間にか消えてたのよね……不思議な事に。まぁ、安心した私たちは、トラックを走らせてその場を後にしようとしたの……。まさかあんなことが起きるなんてね……。

そう、エンジンを吹かした瞬間にトラックが暴走したのよ！　言う事を聞かなくなって訳が分からなかった。そしたらもっととんでもない事が起きたわ。信じられないけど対向車が突っ込んできたのよ。

そしたら私は、当然、気を失ってしまったわね……。でも暫く経って気付くと……今度は悪夢みたいな事が起きたの！　あり得ないわ！　あり得ない。

知らない変な世界に飛ばされてて、目の前にはさっきの牛の化け物が、そうよ！　ゴン太の奴がいたのよ。すると、ゴン太の中からまた牛の化け物が現れて私たちに変な光を浴びせて気をまた失ったわ……。

でも、うなされながらも気が付いたら……あの人が……愛しのあの方がいらっしゃったの！！　紅いバイザーに青いヘッドギア、とても凛々しい顔つきのあの人はこう言い残したわ

『ボクは……ロックマン！』

確かにそう聞いたわ。私たちを守るために戦って下さってたのね。感謝いたしますわ、ロックマン様。

それにしてもロックマン様、アナタはいずこへ……。あぁ、愛しのロックマン様』

「……て。スバルン、カッコ良すぎだよ。そして絶対、名前とか適当に決めてるよ！　……まあいいけど」

続きが気になる。ルナっちは外にまで買い出しに出かけたらしい帰ってくる気配はない。これはチャンスだ！　読破しちゃうぞ。

『４月２４日

今日は天地さんの研究所に行ったの。それは、何故かというとスバル君を学校に引き込むために！　これは私のプライドをかけた戦いでもあったの！　だから、こうしてストーカー……じゃなくって、尾行してきたってわけなんだ。

そこには擬似宇宙の体験コーナーがあったわ。もちろん、ゴン太とキザマロを連れて体験しに行ったわ！　もちろんスバル君もね！

ここで委員長として高感度をあげておかなくっちゃ、どこで上げるのよって言うのよ。

って張り切ってたんだけど、いきなり宇田海さんとかいう研究員の人が化け物になったのよ！　驚いたわ。はっきりいってここ最近事件に巻き込まれてばかり……。しかもその人、あろうことか私達を擬似宇宙の中に閉じ込めたのよ。信じられない。

でもそんな時、あのお方がさっそうと現れてくれたの。そう、愛しのロックマン様！　それで鳥の化け物何てコテンパンよ！　ああ、カッコよかったわ。ロックマン様。アナタは一体誰なの？』

「……か。スバルンはすっかりルナっちのヒーローなのね」

「フムフム」

『4月27日

うちの学校は学芸会が早くから始まる。私はもちろんクラス委員長として、早くから準備を進めてきた。やることは演劇！　題目は「愛しのロックマン様」これは私の趣味じゃないわ。クラスの意志よ。私はその意思を汲み取ったてわけ。だってクラス委員長ですもの。

ちなみに演劇のヒロインはもちろん私！　可憐な乙女を演じるのは私にしかできないわ。いいえ、演じなくても素で可憐な乙女だから、私しかいないってわけだったの。そしてヒーローこと主役は双葉ツカサ君で決まりだわ。ロックマン様は顔が絶対にカッコいいはずだから。クラスで一番マシな双葉君が適任だわ。スバル君は髪型が何となく似ていない気もしないこともないけど、全然パッとしないから却下。

フフ、楽しい演劇が始まるわ！　ワクワクしてきちゃうわ。だから、明日はスバル君を演劇に誘う訳。アイツ、未だに学校に来る気がないのよね。困った奴。

でもいいわ、私は優しいから、ちゃんと役を用意してあるの。『木の役』をね。アレならあいつでもできるでしょ。私って天才だわ。

それじゃ、明日のアタシ！　頑張ってよね。スバル君を学校に引っ張り出すのよ！』

「……スバルン、木の役ってヒドッ！　ルナっちこれはあんまりだとおもうんだよ」

「んじゃ続き続きと」

『4月30日

今日は学校から帰る途中でスバル君と会ったの。アイツったら、また学校を休んで展望台に行こうとしていたみたい。ほんとバッカじゃないの!?　私がいつも学校に誘ってあげているのにことごとく無視してくれちゃって……。もう、いやんなっちゃうわ。

だから私は学芸会を理由に無理やり学校に連れ出そうと思ったわけ。

スバル君は最初『僕は学校に行きたくないんだ。ほっといてくれよ！』と言って、逃げ出そうとしたけど今回はそうは問屋がおろしません！　いや、下ろさせません！

私は『体育館に学芸会のセットを用意してあるから、それを見るだけで良いから』と言って、何とかスバル君を説得しようとしたわ。とにかく学校に連れて来さえすれば、後はどうとでもなるもの！

ふふん。私って天才ね！　そうして言葉巧みに言ってやると、スバル君は体育館に行くだけなら……と言って、何とか了承したみたい。

……って、あれ？　あれれ？

あれ……おかしいわ？　なんか意外な返答だわ。案外素直に言うことを聞くのね……。それにスバル君、なんだか少しだけ表情が柔らかくなった気がする。なにか良いことあったのかな？　先日のミソラちゃんのライブのせいなのかな？　……ってスバル君はそんな柄じゃないか。

フフフ、でもこれで、第一関門はクリアーね。フフフ、後は何とか教室に顔を出させるだけね。

見てなさい！　星河スバル。あなたを絶対に学校に来させてみせるんだから！　アーハッハハ！』

「なるなる。いやはや、ルナっちは熱心ですなあ。私なら不登校児なんて放っておくけどなあ……。って次はリブラ・バランスの事件の所かな？」

てゆうか、ルナっち。不敵に笑いすぎだよ。日記にフフフとか書くって相当な感じですよ。

「次はいよいよリブラの事件かあ。あれ以来、学習電波の危険性が認識され始めたんだよねえ。

ほんと大変な事件だったらしいしね。

オホン……じゃあ続き行きまーす！！　ごめんよ、ルナっち。ホント、ゴメンよ。でも帰ってこないのが悪いんだからね。だから私は読むんだもん！！」

『5月1日

今日で学芸会まで一週間を切ったわ。みんな私の最高のシナリオを大いに演じるがいいわ！　……と張り切っていた私が恥ずかしいわ。

今日はとんでもない一日だったの……。でもまたロックマン様に会えたような気がするからそれはそれで良いと思うんだけどなあ……。はあ……ロックマン様はいずこへ……。恋する乙女は辛いわ。

……って、いけないいけない。本当の本当に今日は大変な事件が

起こったんだった！　大変すぎて頭がおかしくなりそうだったわ！
そして怖かった……。

今日の学校の事だったわ。いつも通りの授業。いつも通りの先生の楽しい授業……のはずだった。はずだったのに、今日の育田先生はどうにもおかしかった。

いつもなら遅刻したゴン太を笑って許してくれるのに、今日の先生はスゴイ怖い顔をして「早く座れ」だって……。あんな育田先生初めて見たかもしれない……。

でも、それだけなら……まあ……普通よ。だって先生だもんね。それに遅刻したゴン太が悪いんだもの。

でも、それは私の勘違いだった……。……ってまた思い出して怖くなっちゃった。はあ、日記なんて付けるのやめようかしら。

ああ、ダメダメ。一度始めたら、最後までやらないといけないわよルナ！　白金家の一員だったら途中で投げ出すなんてもっての他よ！！

おっと、話がずれてるわね。それにしても何だったのかしら、あの『学習電波』っていうものは。

アレのせいで、先生が段々おかしくなっちゃって、とうとう……とうとう……。

先生が化け物になっちゃったの！　最近の私の身の周りではこんなことばっかり！　そしたら化け物先生は「お前らは勉強だけしていれば良いんだ！！」と言ってさらに学習電波のボリュームを上げて……。

クラスのみんなは頭にものを無理やり突っ込まれたように苦しそうに悲鳴を上げていた。私も何とか我慢していたけど、それでももうダメだって思った。

だんだん意識が遠のいて……「私、このまま死んじゃうのかな？」とか思ったりしたワケ。

でもその時、誰かが教室を飛び出して行った。それは誰かは分からない。……でも、何だかスバル君の後ろ姿だったような……。いや、そんなワケないか。

あの時は意識も朦朧としていたしきっと見間違いのはず……。

そのあと、私は必死に願ったわ。「ロックマン様、助けて」って！！　あの人はいつだって私のヒーローだったのこういうピンチの時こそ助けてくれるんだって！

私はロックマン様を信じて助けを願った。そして意識を失った。

何時間かして気が付いたら、全てが終わった後だったわ。事件は無事に解決。駆けつけたサテラポリスのオジサンが言うには、「事故」だったらしいわ。

学習電波の暴走だったってさ……。

でも私は思うの、なぜかロックマン様が私達の為に戦ってくれたような……そんな気がするの。だってね、あの時見ていた夢の中で、ロックマン様は「君だけは絶対に守る」っていって変身してたんだ。そして先生の化け物を倒してくれたんだもん！

それが夢だとしても……ありがとう、ロックマン様。

学芸会も近いしそろそろ寝ようかな……。またロックマン様の夢、見れるといいなあ……。

でも、学芸会の演劇をがんばったら、またロックマン様に会えるのかしら……フフ、そんなワケない……っか』

「……ふう。うわわー、あっつい。冬なのにあっついわ。もうね、ホントにね。今回のルナっちも乙女全開だったわね……。

しかしまあ、それにしてもスバルンカッコよすぎだよね。

人知れず事件を解決するヒーロー……そりゃ惚れるわね」

と言うワケで私もスバルンに惚れそうになるのでしたとさ。

「まあ、ルナっちが帰ってくるまで読めるとこまで読んでおきましょうかね」

といって私はすっかり慣れた手つきで、人の日記を眺めるのでした。

『5月8

うそ、パパもママも……。そんなのありえない……。嘘よ……。嘘……きっとこれは夢……』

あれ？　紙が濡れた跡がある。……字がぼやけててよく読めないや。

ルナっち、泣いてたのかな……。何があったかよく知らないけど、ちゃんと目を通しておきましょう。お姉さん分としてね。

少しページを進めると、いつもの達筆がそこにはあった。でも日付が変わっている……。

『5月9日

決まってしまったことはしょうがない。くよくよしていても、気分がふさがるだけ。

そう思って、ゴン太やキザマロと遊ぶ約束を取り付けようと思ったんだ……。

でもゴン太はたこ焼き食べ放題（牛丼だったかしら）で留守。キ

ザマロは身長のびのびセミナー（ちっとも身長伸びてやしないのに、ほんとおバカ！）でやっぱり遊べない。

で、仕方ないからスバルくんを誘おうって思ったわけ。それで、電話をしようと思ったんだけど……なんか緊張しちゃって、ハァ、私ってダメね。しかもなぜかあの時の私は、直接彼の家に向かってしまったわけ。はあなんであんなことしたんだろう。今思い出しても恥ずかしい……。

あー。今、思い出しても、腹が立つわ……！　パパとママの取り決めで”転校”するっていうのに、それでせっかく遊んであげようと思ってたのに。あのバカ、他の女の子と……。それもよりによって、あの響ミソラと……。

スバルくんとミソラちゃん。どういう接点があるのか知らないけど、私はとにかく彼らを尾行することにした。べ、別に気になってるわけじゃないから……！　寂しかったわけじゃないから……っ。

でも……でも、転校する直前だっていうのに、影からこそこそ……やっぱりちょっと寂しかったな』

どうやらその当時のルナっちは、転校することが決まっていたようだ。

そしてなぜかスバルンとミッソーをストーカーすることになる、と……。なんというかまあ、ちょっと悲しい図式だこと。

「ウゥ……切ないね」

私はルナっちの心中を察しながら、覗きを続けた。

バトルアーカイブ（11／4 up date battle Lv. 7）（前

＞i13044―1567＜「ふう、こんな感じか……はあ」
＞i14471―1567＜「どうしたんですか？　ため息なんかついて」
＞i13044―1567＜「いや……ちょっとヨイリー博士に戦闘データの整理を頼まれてな……」
＞i14471―1567＜「大変そうですね！」
＞i13044―1567＜「ああ、そうだ。子供は見てはいけないデータだからな……。絶対に見ちゃいけないぞ？　絶対だぞ？」
＞i14471―1567＜「……ゴクリ」
＞i13044―1567＜「ぜ、絶対だぞ？！」

バトルアーカイブ（11／4　up date battle　Lv.7）

ＨＰ＝体力／ＳＴＲ＝攻撃力／ＤＥＦ＝防御力／ＳＫＬ＝テクニック／ＳＰＤ＝スピード／ＳＮＳ＝才能

【ＬＥＶＥＬ０】

０１：ＳＳロックマン（ＶＥＲ．１）
戦闘周波数　５００ＧＨｚ
シンクロ率　５０％
ＨＰ　５０／ＳＴＲ　５０／ＤＥＦ　５０／ＳＫＬ　８０／ＳＰＤ　６０／ＳＮＳ　Ａ＋
武装：ロックバスター／シールド／ハンターＶＧ
能力：スターフォース／ウォーロックアタック
必殺技：チャージショット
《総評》
星河スバルがウォーロックと電波変換して間もない時点のロックマン。
最初期の電波人間としてはバランスの取れた能力を持っている。近・中距離の戦いを得意とする。
《戦績》
オックス・ファイア－勝利
キグナス・ウイング－勝利
ハープ・ノート－勝利
ジェミニ・スパーク－勝利
アンドロメダ－勝利

０２：ＳＳロックマン（ＶＥＲ．２）

戦闘周波数　１２００ＧＨｚ
シンクロ率　７５％
ＨＰ　６０／ＳＴＲ　７０／ＤＥＦ　５０／ＳＫＬ　１００／ＳＰＤ　８５／ＳＮＳ　Ａ＋＋
武装：ロックバスター／シールド／ハンターＶＧ
能力：トライブチェンジ／ダブルトライブ／トリプルトライブ
必殺技：チャージショット
《総評》
星河スバルがウォーロックと電波変換して数ヶ月時点のロックマン。オーパーツの力を駆使して戦う。万能なタイプでどんな状況にも対応できる。
《戦績》
ブライ－引分
ラ・ムー－勝利

０３：ＳＳロックマン（ＶＥＲ．３）
戦闘周波数　１７５０ＧＨｚ
シンクロ率　１０５％
ＨＰ　８０／ＳＴＲ　１００／ＤＥＦ　７０／ＳＫＬ　１３０／ＳＰＤ　１４０／ＳＮＳ　Ｓ
武装：ロックバスター／シールド／ハンターＶＧ
能力：ノイズチェンジ／ファイナライズ
必殺技：チャージショット
《総評》
星河スバルがウォーロックと電波変換して数ヶ月時点のロックマン。ウォーロックとの息も合い、高レベルの電波人間となっている。
《戦績》
ジャック・コーヴァス一勝利
クイーン・ヴァルゴ－勝利

クリムゾン・ドラゴン - 勝利

【ＬＥＶＥＬ１】

０４：オックス・ファイア
戦闘周波数　４３０ＧＨｚ
シンクロ率　３０％
ＨＰ　２００／ＳＴＲ　１００／ＤＥＦ　２１０／ＳＫＬ　１０／ＳＰＤ　２５／ＳＮＳ　Ｇ
武装：ファイアノズル
能力：スーパーアーマー
必殺技：オックスタックル／超加速アンガー＝パンチ

《総評》

牛島ゴン太が変身した姿。
パートナーのオックスとの息が合っていないのかまだまだ課題が残る。

《戦績》

マスコミ - 敗北
レイダー - 引分
ジャミンガー（大群） - 敗北
ヘラ - 敗北
ヘラ・ローズガーデン - 敗北

０５：ハープ・ノート
戦闘周波数　１１００ＧＨｚ
シンクロ率　１００％
ＨＰ　５５／ＳＴＲ　８５／ＤＥＦ　８５／ＳＫＬ　１５０／ＳＰＤ　１８０／ＳＮＳ　Ｃ

武装：ハープギター
能力：ウェーブヴィジアライズ
必殺技：ショックノートフォルテッシモ
《総評》
響ミソラがハープと電波変換した姿。
全体としてバランスが良いが、やや体力不足。
《戦績》
ジャミンガー（浮浪者タッグ）－勝利
ヘラ－敗北

０６：ソウル・レイダー
戦闘周波数　３０００ＧＨｚ
シンクロ率　８５０％
ＨＰ　１９０／ＳＴＲ　２４０／ＤＥＦ　３５０／ＳＫＬ　２５０／ＳＰＤ　３８０／ＳＮＳ　Ａ＋＋
武装：サテラスライサーＬ／サテラスライサーＲ／ハンターＶＧ，
能力：バトルアナライズ／スーパーアーマー／アンダーシャツ
必殺技：ブラッディアスタリスク／アラウンドアスタリスク
《総評》
他の追随を許さぬシンクロ率にバランスの取れた能力が特徴。
剣術を駆使した接近戦を得意とする。
《戦績》
ジャミンガー（大群）－勝利
ヘラ・ローズガーデン－勝利

０７：ＳＤロックマン
戦闘周波数　２６００ＧＨｚ
シンクロ率　１８５％

ＨＰ　７０／ＳＴＲ　１５０／ＤＥＦ　９０／ＳＫＬ　２６０／ＳＰＤ　１４０／ＳＮＳ　Ａ＋
武装：グレイバスター／シールド／ハンターＶＧ
能力：バトルアナライズ
必殺技：チャージグレイバスター
《総評》
ほぼＳＳロックマンと同等の能力を持つ。トラッシュの影響でテクニックが優れている。
その代わりウォーロックのスピードが犠牲になっている。万能タイプ。
《戦績》
ヘラ・ローズガーデン－勝利

０８：ヘラ・ローズガーデン
戦闘周波数　３６００ＧＨｚ
シンクロ率　∞
ＨＰ　５８０／ＳＴＲ　３１０／ＤＥＦ　５８０／ＳＫＬ　２１０／ＳＰＤ　３０／ＳＮＳ　Ｓ＋
武装：レッドガーデン／ワイル粒子
能力：スーパーアーマー／ステータスガード
必殺技：グレースローズタッチ／ワイルバン
《総評》
謎の電磁波生命体レギオン。その圧倒的な力は恐怖である。
唯一の弱点と言えば素早さぐらいである。植物を操る悪姫。
《戦績》
オックス・ファイア－勝利
ハープ・ノート－勝利
サテラポリス（討伐隊）－勝利
ＳＤロックマン＆ソウル・レイダー＆サテラポリス（五陽田＆ジェ

ミニ・スパーク部隊）- 敗北

【ＬＥＶＥＬ２】

０９：ブライ
戦闘周波数　３１００ＧＨｚ
シンクロ率　０％
ＨＰ　１３０／ＳＴＲ　４５０／ＤＥＦ　１３５／ＳＫＬ　２１０／ＳＰＤ　３２０／ＳＮＳ　Ｓ
武装：ラプラスブレード／ベルセルクプレート
能力：電波障壁／覚醒オーパーツ
必殺技：ブライブレイク／ココウフォースビッグバン
《総評》
全体の能力としては攻撃特化型である。その影響か体力防御面が少し低くなっている。
それでも強力な必殺技を豊富に持つので戦闘力はかなり高い。
《戦績》
シリウス - 勝利

１０：シリウス
戦闘周波数　２８００ＧＨｚ
シンクロ率　－
ＨＰ　２３０／ＳＴＲ　２４０／ＤＥＦ　３４０／ＳＫＬ　３６０／ＳＰＤ　９５／ＳＮＳ　Ｄ
武装：シルバープレート／シューティングビット
能力：サーバーアクセス
必殺技：サテライトブレイザー
《総評》

堅固な防御と巧みな戦略を駆使する腕の立つ電波体。
様々な戦術で敵を翻弄する。
《戦績》
ブライ‐敗北

１１：ヘル・スコルピオ
戦闘周波数　４２００ＧＨｚ
シンクロ率　∞
ＨＰ　３５０／ＳＴＲ　４４０／ＤＥＦ　４４５／ＳＫＬ　３６０／ＳＰＤ　３４０／ＳＮＳ　Ｆ
武装：ポイズンピック／ワイル粒子
能力：ポイゾナー／超長距離通信
必殺技：ダークドゥラウン
《総評》
非情に狡猾なレギオンの一体。しかしその能力は凄まじくバランスが良い。
単純な戦闘力ならヘラ・ローズガーデンをも凌ぐ。
《戦績》
ＳＳロックマン‐勝利
フェニックス‐勝利
フェニックス・リボン‐敗北

１２：フェニックス・リボン
戦闘周波数　１１８００ＧＨｚ
シンクロ率　８５００％
ＨＰ　５０／ＳＴＲ　３６５０／ＤＥＦ　２００／ＳＫＬ　０／ＳＰＤ　１５５０／ＳＮＳ　ＳＳ＋
武装：シナジーブレード／シャイニングボウ

能力：ムゲンリカバリー／アンダーシャツ／エアシューズ
必殺技：フルシナジーブレード
《総評》
圧倒的な強さを持つ電波人間。フェニックスの能力で常に傷が回復し続けるのは脅威である。
四年前にもかかわらず圧倒的な戦闘力でヘル・スコルピオを瞬殺した。
《戦績》
ヘル・スコルピオ - 勝利
サジタリウス - 勝利

【ＬＥＶＥＬ３】

１３：ジャック・コーヴァス
戦闘周波数　１６００ＧＨｚ
シンクロ率　８０％
ＨＰ　１２０／ＳＴＲ　２１０／ＤＥＦ　８０／ＳＫＬ　５０／ＳＰＤ　１３０／ＳＮＳ　Ｂ＋
武装：フェザーシックル
能力：バグ無効化／エアシューズ
必殺技：ペインヘルフレイム
《総評》
基本的な戦闘力は越えているが、防御と技術面に未熟さが目立つ。
だが一撃必殺の威力を誇る必殺技は非常に強力。
《戦績》
ハープ・ノート - 敗北
ウラの住人 - 敗北

１４：ジェミニ・スパーク
戦闘周波数　１７５０ＧＨｚ
シンクロ率　２００％
ＨＰ　１５０／ＳＴＲ　１７０／ＤＥＦ　１００／ＳＫＬ　２４０／ＳＰＤ　１２０／ＳＮＳ　Ａ
武装：ロケットナックル
能力：コンビネーションアタック
必殺技：ジェミニサンダー
《総評》
二対一組の珍しい電波人間。しかし絶妙なコンビネーションから繰り出される攻撃は厄介である。
ジェミニサンダーは強力な雷攻撃。
《戦績》
ヘラ・ローズガーデン - 勝利
ウラの住人 - 敗北

１５：ウルフ・フォレスト
戦闘周波数　２２００ＧＨｚ
シンクロ率　１１０％
ＨＰ　１３０／ＳＴＲ　２１０／ＤＥＦ　１３０／ＳＫＬ　４０／ＳＰＤ　２２０／ＳＮＳ　Ｅ
武装：ワイルドクロー
能力：ルナティックブレイク
必殺技：ワイドクロー
《総評》
スピードと攻撃力を生かした白兵戦が得意。
月の満ち欠けによって、スピード・パワーが大幅に増減する性質を持つ。
《戦績》

ブライ‐敗北

16：サーフ・サーファー
戦闘周波数　1700GHz
シンクロ率　200％
HP　120／STR　140／DEF　120／SKL　700／SPD　590／SNS　S＋
武装：サーフブレード／ヤシボム
能力：ウェーブライダー
必殺技：トロピカルビッグウェーブ
《総評》
全体的に並の電波人間だが、スピードとテクニックは超一流である。そして有り余るセンスを駆使し、ウラの住人達をなぎ倒していく事が可能。
《戦績》
SDロックマン‐勝利
ハープ・ノート‐敗北
キリン・ライトニング‐敗北
ウラの住人‐勝利

17：クイーン・ヴァルゴ
戦闘周波数　1600GHz
シンクロ率　100％
HP　160／STR　120／DEF　230／SKL　210／SPD　100／SNS　C＋
武装：クイーンロッド
能力：‐
必殺技：ゴッドレイン

《総評》
防御力が高く、安定した戦いを見せる。雨を操り中距離からの戦いを得意とする。
ゴッドレインで牽制しつつ、大技の水竜で敵を呑みこむ。
《戦績》
無し

１８：スカッド・エース
戦闘周波数　３０００ＧＨｚ
シンクロ率　３００％
ＨＰ　２５０／ＳＴＲ　３５０／ＤＥＦ　２００／ＳＫＬ　３００／ＳＰＤ　３００／ＳＮＳ　Ａ＋＋
武装：アストラルブラスター／Ａブラスターブレード／Ａウイングカスタム／ハンターＶＧ’
能力：サテラサーチング／バトルアナライズ／フロートシューズ／アンダーシャツ
必殺技：ハイウイングブレード
《総評》
全体として非常に高いレベルで能力バランスが取れた電波人間。サテラポリスのエースに恥じぬ能力値である。
豊富な武装に確かな戦術で並の電波人間なら相手にもならない。弱点と言った弱点もないオールラウンダー。
《戦績》
無し

【ＬＥＶＥＬ４】

１９：エメリオル

戦闘周波数　２７００ＧＨｚ
シンクロ率　１０００％
ＨＰ　３１０／ＳＴＲ　３１０／ＤＥＦ　６２０／ＳＫＬ　２１０
／ＳＰＤ　３０／ＳＮＳ　Ｄ
武装：ＭＢＨカノン／素粒子爆弾／相転移砲／反物質砲／超電導ブレード／ラディオウェーブプロデクター
能力：ガンマ変換／スーパーアーマー
必殺技：ビッグバンストリームフルパワー
《総評》
スピード以外の全ての能力値が非常に強力である。特にディフェンス能力に関しては最強クラスと言える。
武装も揃い、宇宙に轟かす人間要塞の異名を体現している。
《戦績》
グリット・メトリー：敗北
ギガント・オリジン：敗北

２０：グリット・メトリー
戦闘周波数　２４００ＧＨｚ
シンクロ率　２３０％
ＨＰ　１２０／ＳＴＲ　２５０／ＤＥＦ　１５０／ＳＫＬ　１２０
／ＳＰＤ　２２０／ＳＮＳ　Ｂ
武装：マトックデスサイズ
能力：ハンターＶＧ
必殺技：ジェネレイトスイング
《総評》
高い攻撃力とスピードが特徴的である。基本的な戦略は鎌を使った接近戦だが、バトルカードを使った戦術を展開する事も可能。
正式には電波人間ではなく、ウイルス電波人間と言われている。
《戦績》

エメリオル - 勝利

２１：ギガント・オリジン
戦闘周波数　１６８００ＧＨｚ
シンクロ率　４５００％
ＨＰ　２０５０／ＳＴＲ　３４５０／ＤＥＦ　３５２０／ＳＫＬ　１２４０／ＳＰＤ　１８３０／ＳＮＳ　Ｓ
武装：ゴッドナックルＲ／ゴッドナックルＬ／プロトキャリアー
能力：フレクリア／フレクバースト／フレクレス／ステータスガード／オプションキャンセラー
必殺技：カイザーナックル／キャノン
《総評》
シュンランが大吾コピーと電波変換した姿。全てを超越した力を持ち、何物をも寄せ付けない。
神に近しい圧倒的な防御力と攻撃力の前では星も屍へと変わるしかない。
《戦績》
エメリオル - 勝利
オックス・ファイア - 勝利
ハープ・ノート - 勝利
スコープ・スナイパー - 勝利
ＳＤロックマン - 勝利
ソウル・レイダー - 勝利

２２：プルト・キグナス
戦闘周波数　６２００ＧＨｚ
シンクロ率　∞
ＨＰ　４１０／ＳＴＲ　７９５／ＤＥＦ　５２０／ＳＫＬ　６２０

／ＳＰＤ　１１９０／ＳＮＳ　Ｅ－
武装：ブラックフェザー／ワイル粒子
能力：タイムボム
必殺技：フルプレアワルツ
《総評》
レギオンの中でも特に力の強い一体。非常に残酷な性格の持ち主。圧倒的な戦闘力で敵をねじ伏せながら、相手の最も苦痛とする方法をもって抹殺する。
《戦績》
ＳＳロックマン（大吾）－勝利
ソウル・レイダー－勝利
ＳＤロックマン－勝利

２３：ブラッド・オリジン
戦闘周波数　５１２０ＧＨｚ
シンクロ率　２２００％
ＨＰ　８２０／ＳＴＲ　６２０／ＤＥＦ　７５０／ＳＫＬ　２１０／ＳＰＤ　６３０／ＳＮＳ　Ｇ－
武装：ブラッドナイフ
能力：－
必殺技：－
《総評》
きずなクルーが電波変換しているおかげで途方もない戦闘力を発揮している。
基本的な知能が低いのでテクニックに欠けているがそれ以外は怪物のような存在である。
《戦績》
ＳＤロックマン－勝利
ロックマン・スターノート－勝利

星河スバル&レベッカ・レッドリバー‐敗北

２４：ロックマン・スターノート
戦闘周波数　８２００ＧＨｚ
シンクロ率　∞
ＨＰ　１５０／ＳＴＲ　６４０／ＤＥＦ　２１０／ＳＫＬ　８９０／ＳＰＤ　９１０／ＳＮＳ　Ｓ＋＋
武装：シューティングギター／ハンターＶＧ
能力：ウェーブヴィジアライズ／ラーニング
必殺技：シューティングノート／ＡＦＢグラビトンパルス
《総評》
ロックマンがアカシックレコードにアクセスする事で変身した姿。
必殺技はアカシャフォースビッグバンで超重力音波を発生させる。
《戦績》
ブラッド・オリジン‐敗北

【ＬＥＶＥＬ５】

２６：ＳＤロックマンＶ２
戦闘周波数　３１００ＧＨｚ
シンクロ率　３３０％
ＨＰ　１００／ＳＴＲ　２２０／ＤＥＦ　１００／ＳＫＬ　５３０／ＳＰＤ　２４０／ＳＮＳ　ＳＳ＋＋
武装：グレイバスター／シールド／ハンターＶＧ／ラーニングレギオン
能力：バトルアナライズ
必殺技：シューティングＧバスター
《総評》

周波数変換を使いこなすようになった星屑のロックマンの最終段階。トラッシュとの息も合い、完璧なコンビネーションを実現する。

《戦績》

ソウル・レイダー - 引分

２７：ソウル・レイダーＸＦ６

戦闘周波数　４１００ＧＨｚ

シンクロ率　１９７０％

ＨＰ　３４０／ＳＴＲ　４５０／ＤＥＦ　６９０／ＳＫＬ　４００／ＳＰＤ　４５０／ＳＮＳ　Ｓ＋＋

武装：ネオＳスライサーＬ／ネオＳスライサーＲ

能力：バトルアナライズ／セブンＸフレーム

必殺技：デトネイトアスタリスク／アラウンドアスタリスク

《総評》

オーバーテクノロジーであるエクスフレームをさらに改良したタイプ。

圧倒的なシンクロ率が得る戦闘周波数は何物をも寄せ付けない。地球が生んだ最後のエース。

《戦績》

ＳＤロックマン - 引分

２８：ブライ・オリジン

戦闘周波数　９９００ＧＨｚ

シンクロ率　０％

ＨＰ　２５０／ＳＴＲ　９８０／ＤＥＦ　１８０／ＳＫＬ　５５０／ＳＰＤ　４５０／ＳＮＳ　Ｓ＋＋＋

武装：ヒエラティックブレード／カノンブレード

能力：電波無限障壁

必殺技：ココウフォースビッグバン
《総評》
オーパーツの力を得たブライ。戦闘能力は極めて高く、数々の必殺技を使う。
ムー人としての存在理由の為だけに戦う危険な存在。
《戦績》
キリン・ライトニング - 敗北

２９：キリン・ライトニング
戦闘周波数　１０５００ＧＨｚ
シンクロ率　３５００％
ＨＰ　５７０／ＳＴＲ　６５０／ＤＥＦ　３２０／ＳＫＬ　１２５０／ＳＰＤ　１６９０／ＳＮＳ　ＳＳ＋
武装：グングニール／オールトランス
能力：ライトニングインパルス／フレクリア／フレクバニッシュ／フレクレス
必殺技：キズナフォースビッグバン／ＬＤハール
《総評》
雷と正義を司る電波人間。その戦闘能力は宇宙最強と言っても過言ではない。
周波数変換術を極めているのでまるで隙がない。最強最速の電波人間。
《戦績》
ブライ・オリジン - 勝利

３０：デューオ
戦闘周波数　１５０００ＧＨｚ
シンクロ率　―

ＨＰ　９９９９／ＳＴＲ　４５００／ＤＥＦ　９９９９／ＳＫＬ　０／ＳＰＤ　０／ＳＮＳ　Ｇ－
武装：ジャスティアームＬ／ジャスティアームＲ
能力：次元解放
必殺技：リトルビッグバン／ギガンティックメテオスマッシュ
《総評》
惑星ウルマキナに安置されていた巨人像。パラスマキナのマザー端末の役割を果たす。
その目的と存在理由は一切不明。キリン・ライトニングにオーパーツを託した。
《戦績》
無し

３１：インフィニット
戦闘周波数　３００００ＧＨｚ
シンクロ率　∞
ＨＰ　？／ＳＴＲ　？／ＤＥＦ　？／ＳＫＬ　？／ＳＰＤ　？／ＳＮＳ　ＳＳＳ＋＋
武装：インフィニットセイバー／ＺＦ１２／ワイル粒子
能力：メシア
必殺技：ホウオウヨク／コウリュウゲキ／ムゲンザン／フラクタルゼロ
《総評》
レギオンのリーダー。フェニックス・リボンと対峙するも、まだまだ力の底を見せる気配はない。
高次元電磁波生命体としての最高傑作。
《戦績》
無し

３２：ロックマン・ジュニア
戦闘クロック　８０ＧＨｚ
ライフメモリ　１０Ｚｂｙｔｅ
ＨＰ　１０／ＳＴＲ　１５／ＤＥＦ　４／ＳＫＬ　１０／ＳＰＤ　１２／ＳＮＳ　-
武装：ロックバスター／Ｐトランスウェーブ ＰＧＭ
能力：アルティメットシンクロ
必殺技：アルティメットロックバスター
《総評》
光博士が開発した新時代プログラムを組み込んだ高性能ナビ。
キズナ理論に基づいている第二世代ナビ。
しかしプログラムの欠陥からか電波ウイルスとしての特性を見せる事がある。
《戦績》
ロックビースト - 勝利
フォルテ - 勝利

３３：フォルテ
戦闘クロック　４６ＧＨｚ
ライフメモリ　９５００Ｅｂｙｔｅ
ＨＰ　２／ＳＴＲ　３／ＤＥＦ　８／ＳＫＬ　５／ＳＰＤ　５／ＳＮＳ　-
武装：フォルテニウムｐａｃｋ／エアバスター
能力：ゲットアビリティプログラム
必殺技：アースブレイカー／バニシングワールド
《総評》
２００年前、科学省が生み出した自立型ナビ。
旧型の第一世代ナビとしては最強の能力を誇っていた。

しかし電波社会へと変わる時代の壁に阻まれて、存在を抹消された。
《戦績》
ブルーウルフ‐敗北
ロックマン・ジュニア‐敗北

３４：ブルーウルフ
戦闘クロック　１０００ＧＨｚ
ＰＧＭメモリ　１０００Ｚｂｙｔｅ
ＨＰ　８０／ＳＴＲ　１００／ＤＥＦ　８０／ＳＫＬ　５０／ＳＰＤ　８０／ＳＮＳ　‐
武装：ビーストクロウ
能力：ブーストアタック
必殺技：ビーストスイング
《総評》
２００年前ではありえない性能を誇る自立型生命体。
ロックビーストととてもよく似ているが別物。
《戦績》
フォルテ‐勝利
ロックマン・サイト‐勝利
ブルース‐勝利

３５：ＳＳロックマン（ＶＥＲ．４）
戦闘周波数　６９００ＧＨｚ
シンクロ率　６００％
ＨＰ　２２０／ＳＴＲ　４５０／ＤＥＦ　３９０／ＳＫＬ　１２０／ＳＰＤ　４８０／ＳＮＳ　ＳＳＳ
武装：ロックバスター／シールド／ハンターＶＧ／ゼロＰＧＭ
能力：ラーニングレギオン／Ｒデコード

必殺技：チャージショット
《総評》
星河スバルとウォーロックが電波変換した姿。
戦闘経験を積み重ねた技量は他の追随を許さない。
ゼロＰＧＭを組み込んだことにより、純粋な電波人間として最強レベルとなっている。
《戦績》
プルト・キグナス－勝利

【ＬＥＶＥＬ６】

３６：ブライＬＳ
戦闘周波数　１０００ＧＨｚ
シンクロ率　０％
ＨＰ　２５０／ＳＴＲ　５６０／ＤＥＦ　２００／ＳＫＬ　５０／ＳＰＤ　４２０／ＳＮＳ　Ｇ－
武装：ラプラスブレード
能力：－
必殺技：ブライアーツ
《総評》
オーパーツをキリン・ライトニングに奪われて、その力のほとんどを失ってしまったブライ。
ラプラスも言うことを聞かなくなり、万全の状態とは言えない。
《戦績》
ロックマン－敗北

３７：アリエス・デビル
戦闘周波数　９０００ＧＨｚ

シンクロ率　３４０％
ＨＰ　６２０／ＳＴＲ　９５０／ＤＥＦ　４２０／ＳＫＬ　３５０／ＳＰＤ　４９０／ＳＮＳ　Ｃ
武装：-
能力：フレクリア
必殺技：エアクリムゾン
《総評》
ＷＲ四天王の一人。悪魔を思わせる風貌でとても攻撃的な性格。灼熱の炎を操りスバル達を苦しめた。
《戦績》
ブラッド・ホープ-敗北

３８：アンドロメダ
戦闘周波数　１００１０ＧＨｚ
シンクロ率　-
ＨＰ　１５５０／ＳＴＲ　１５３０／ＤＥＦ　１３４０／ＳＫＬ　０／ＳＰＤ　２０／ＳＮＳ　Ｇ
武装：アンドロニウム装甲／ＲＥ変換機関
能力：変形
必殺技：ネビュラブレイカー／ビッグバンイーター
《総評》
ＦＭ星の最終兵器。しかし平和にかまけて整備不良を起こしてしまった。
《戦績》
ラ・マリア-敗北

３９：ラ・マリア
戦闘周波数　１６０００ＧＨｚ

シンクロ率　-
ＨＰ　６６００／ＳＴＲ　２１００／ＤＥＦ　４３００／ＳＫＬ
２０／ＳＰＤ　１０／ＳＮＳ　Ｇ
武装：アルバニウム装甲／生命機関
能力：超並列演算
必殺技：イカヅチ
《総評》
宇宙中のあらゆるところにばら撒かれたマザーシステムの中の一体。
惑星パトラにおける聖母のような存在で崇拝の対象であった。
《戦績》
アンドロメダ - 勝利
ブライ - 勝利
ハープ・ノート - 勝利
スカッド・エース - 勝利
ジェミニ・スパークＷ - 勝利
ジェミニ・スパークＢ - 勝利

４０：サイデスビースト
戦闘周波数　３１０００ＧＨｚ
シンクロ率　∞
ＨＰ　１２００／ＳＴＲ　３２００／ＤＥＦ　６９３０／ＳＫＬ
２０／ＳＰＤ　２３００／ＳＮＳ　ＳＳ＋＋
武装：デスマート装甲／過密素粒子高速変換射出機／ライル粒子
能力：レベル１３／零層干渉／Ｒレポート実行／質量のない物質のパージ
必殺技：ロックオンバスター
《総評》
アカシックレコードの第零層にアクセスしたために暴走状態になってしまったロックマン。

ラストナンバーであるウォーロックの真の力が溢れだした最強形態である。

《戦績》

フェニックス・リボン－敗北

――――――――――――――――

４１：フェニックス・リボンＲ

戦闘周波数　２９８００ＧＨｚ

シンクロ率　４２００％

ＨＰ　４４５０／ＳＴＲ　２６５０／ＤＥＦ　３４００／ＳＫＬ５４００／ＳＰＤ　１９５０／ＳＮＳ　Ｓ＋

武装：シナジーブレード／テトラシナジーウチハ

能力：ムゲンリカバリー／アンダーシャツ／エアシューズ／フリーデバイス

必殺技：ダブルシナジーブレード／全方位ギガキャノン

《総評》

四年の時を経て進化した不死身の電波人間。ＡＭ女王フェニックスの能力で傷が回復し続けるのは脅威的。そして恐ろしいことにその力を極めてしまい、もはや弱点はない。

全てを兼ね備えた電波人間であり、その力はロックマンさえもはるかに凌駕する。インフィニットを楽しませることのできる唯一の存在。

《戦績》

キリン・ライトニング－勝利

ロックマン－勝利

ハープ・ノート－勝利

ソウル・レイダー－勝利

ブライ－勝利

サイデスビースト－勝利

インフィニット－敗北

４２：インフィニット
戦闘周波数　４４５００ＧＨｚ
シンクロ率　∞
ＨＰ　？／ＳＴＲ　？／ＤＥＦ　？／ＳＫＬ　？／ＳＰＤ　？／ＳＮＳ　ＳＳＳ＋＋＋
武装：インフィニットセイバー／ＺＦ１３／赤いワイル粒子
能力：メシア
必殺技：コウホウゲキ／命の境界線／フラクタルゼロ
《総評》
レギオンズナンバー０。プルト・キグナスをレギオンに仕立て上げ、ワタルを利用し暗躍していた。存在理由と行動理念の全てはマスターの為であり、救世主としての役目からである。
カギを作り、楽園で人類最後の時を待っている。まだ力の全ては見せておらず、底は計り知れない。
《戦績》
フェニックス・リボン‐勝利
マキン・ヴァルキュリア‐勝利

４３：マキン・ヴァルキュリア
戦闘周波数　４９０７０ＧＨｚ
シンクロ率　‐
ＨＰ　１００００／ＳＴＲ　７８００／ＤＥＦ　７９００／ＳＫＬ　３４５０／ＳＰＤ　２５５０／ＳＮＳ　Ｇ
武装：機械仕掛けの神の心臓
能力：機械仕掛けの神の片鱗
必殺技：平手打ち
《総評》

生を受け、短い時を生きて儚く散っていった女性。インフィニットと対等に渡り合った唯一の存在。
ワタルの必死の覚悟を受けて、全ての集大成であるインフィニットと真っ向からぶつかった。その正体は人より少しからだが弱いだけの、どこにでもいる一人の母親だった。
《戦績》
インフィニット-敗北

【ＬＥＶＥＬ７】

４４：メトリー
戦闘周波数　５６０ＧＨｚ
シンクロ率　-
ＨＰ　１５０／ＳＴＲ　６０／ＤＥＦ　３００／ＳＫＬ　１５０／ＳＰＤ　１２０／ＳＮＳ　Ｆ－
武装：ミスメットツルハシ／あかねに買ってもらった服／土手で拾った安全メット
能力：超ノイズ耐性／クァッド
必殺技：ツルハシショック／水鉄砲
《総評》
ウイルスだけあってノイズ耐性は尋常ではない。それに戦闘能力も舐めてはいけない仕上がりになっている。女の子でもそこそこ戦えるようだ。
《戦績》
メットリオさん-勝利
ドリームビット-勝利

４５：パラス・アテナ

戦闘周波数　２５１２０ＧＨｚ
シンクロ率　∞
ＨＰ　１４５０／ＳＴＲ　５５０／ＤＥＦ　２８００／ＳＫＬ　３４００／ＳＰＤ　８５０／ＳＮＳ　Ｂ
武装：ウィリアムの水晶／ゼロフレーム／ワイル粒子
能力：未来の可視化／重力による空間転移
必殺技：置きグラビティ／アイアンコーディネイト／見切り
《総評》
レギオンズナンバー６。自称インフィニットの右腕で重力を操る占い師。占い師らしく先読み行動を得意としており、裏をかくのが難しい。戦闘能力自体もレギオンの中では、非常に高レベルにまとまっている。
普段は偉そうだが、興奮すると少し性格が変わる。
《戦績》
チームエクス－敗北

４６：真ブライ
戦闘周波数　１０９００ＧＨｚ
シンクロ率　０％
ＨＰ　６５０／ＳＴＲ　１９５０／ＤＥＦ　８３０／ＳＫＬ　１２２０／ＳＰＤ　１２５０／ＳＮＳ　Ｂ
武装：－
能力：血の記憶
必殺技：ブライアーツ／ネオブライアーツ／マスターブライアーツ
《総評》
ＷＷＲとの戦いと時の試練を経て、自分のあり方を見つけたブライ。精神的に成長し、不安定な部分も消えて、チームのリーダーにふさわしい実力を手に入れた。
《戦績》

パラス・アテナ－勝利

４７：ゴッドブレス・ドラゴン
戦闘周波数　５１０００ＧＨｚ
シンクロ率　∞
ＨＰ　２２４５０／ＳＴＲ　１０３５０／ＤＥＦ　１０８００／ＳＫＬ　１０２０／ＳＰＤ　４２５０／ＳＮＳ　Ｓ
武装：ゴッドブレスコーティング／ノイズアンテナ／アカシャニウム装甲
能力：太陽風の威／神の調べ／ノイズフォーメーション
必殺技：ブレスオブゴッド／イヂワルなゲーム
《総評》
サン・ゴッドに力を授かったキングの姿。おおよそ地球の生物だったとは思えないほどの神に近すぎる力を実現している。ノイズの影響なのか、性格は紳士の皮を被った悪魔に変貌しており、人間らしさはなくなってしまった。スバル達のチームを壊滅状態させた化け物。
《戦績》
オペラ・ファントム－引分

４８：キング・ステラ
戦闘周波数　計測不能
シンクロ率　－
ＨＰ　－／ＳＴＲ　－／ＤＥＦ　－／ＳＫＬ　－／ＳＰＤ　－／ＳＮＳ　－
武装：星の衣／核の密林
能力：暗黒太陽の顕現
必殺技：宇宙から水星が消える日

《総評》
執念が怨念へ、そして神意に触れたキングの成れの果て。ノイズそれそのもののノイズ天体とでもいえ、もはや常識は通じない。スバル達を水星もろとも道連れにしようとした。
《戦績》
クァッド‐敗北

４９：クァッド
戦闘周波数　７０７３０ＧＨｚ
シンクロ率　∞
ＨＰ　２１５０／ＳＴＲ　５５５０／ＤＥＦ　５２００／ＳＫＬ　６５２０／ＳＰＤ　３４２０／ＳＮＳ　ＳＳ
武装：ガンデスサイズ／クァドライブ／四重ヤフ装甲
能力：思い出を燃やして／四分リミット
必殺技：ドボクカルテット／無職のイカロス
《総評》
太陽と共に世界のために散った英雄。人間の持つ可能性の一つの究極解だった。
《戦績》
キング・ステラ‐勝利

５０：ジェイル
戦闘周波数　４４４３０ＧＨｚ
シンクロ率　‐
ＨＰ　２４５０／ＳＴＲ　９５５０／ＤＥＦ　４２００／ＳＫＬ　４４１０／ＳＰＤ　３２５０／ＳＮＳ　Ａ
武装：選ばれし右腕／選ばれし左腕
能力：エンペラー／ウラギリデメリット

必殺技：ダークネビュラ／事象障壁
《総評》
数十年前。何らかの手違いで地球上に生れてしまった人間の皮をかぶった悪魔。血の導きによる、殺人衝動に駆られるがまま、肉親を始め無関係な多くの人の命を食らいつくした。
しかしある事件がきっかけとなって、自首をした。そして電磁波監獄にてリベンジの日を誓う危険な男。
《戦績》
サン・ゴッド－？？？

５１：サン・ゴッド
戦闘周波数　５９５１０ＧＨｚ
シンクロ率　∞
ＨＰ　９５０／ＳＴＲ　９３５０／ＤＥＦ　２２８０／ＳＫＬ　１５４００／ＳＰＤ　２４１０／ＳＮＳ　Ｃ
武装：紳士的な杖／ゼロフレーム／橙色のワイル粒子／エンシェント装甲
能力：太陽操作／地球の恋人
必殺技：ジオーバル・サン／プロミネンスラッシュ／スパークチェイサー
《総評》
レギオンズナンバー２。レギオンの中でも最上位の立場でインフィニット同じく特別な任務に就いている。かなりの激情家で、感情的になりやすい。
《戦績》
ジェイル－？？？

５２：ソウル・レイダーＸＦ７

戦闘周波数　１００００ＧＨｚ
シンクロ率　３０００％
ＨＰ　１８４０／ＳＴＲ　１１５０／ＤＥＦ　３４９０／ＳＫＬ　３１００／ＳＰＤ　２２５０／ＳＮＳ　ＳＳ＋
武装：テオＳスライサーＬ／テオＳスライサーＲ
能力：バトルアナライズ／セブンＸフレーム
必殺技：レイン・ボウ・アスタリスク／ライトニング・アスタリスク
《総評》
ＷＲとの戦いで力不足を痛感したミライがリフレインに頼み込んで、さらに手術を受けた状態。
確かに強くなったが、ここより先の戦いでは力不足であると言わざるを得ない。
《戦績》
？？？－？？？

５３：インフィニット・？？？
戦闘周波数　？？？ＧＨｚ
シンクロ率　？？？％
ＨＰ　１０３４０／ＳＴＲ　１３４５０／ＤＥＦ　１９６９０／ＳＫＬ　２２４００／ＳＰＤ　１２４５０／ＳＮＳ　Ｓ
武装：エクスセイバー
能力：メシア
必殺技：トキノトウケツ
《総評》
メシアを超えていくもう一人のメシア。
《戦績》
？？？－？？？

prlog_00:プロローグ

「うあっ！」

青い姿の少年が斬り飛ばされて転がった。相手は金髪の剣士。飛び散る鮮血にも負けないくらいに、深い赤色で身を包んでいた。

強く吹きとばされ、地面に一回弾かれると、勢いの分だけ透明な部分を真っ赤な帯で塗っていく。透明すぎた床だけに少年は空を飛んでいるようだ。真下は真っ白であり、真っ黒で真っ赤である。真上も周りも同じ。ねじれた紐がそこに横切っている空間が広がって、めまいを誘う。紐からはブドウのように大小さまざまな球体がいくつも実っていた。

信じられないが、あの球体は宇宙である。小さな球が子宇宙だ。それより大きな球体が親宇宙でブドウのゲノム配列を思わせる。

そして今、少年が剣士と戦っているこの場所こそが宇宙の外であり、全ての宇宙の今際の際と接する特異空間だった。

途方もない旅の果ての末路。恐怖と戦いつつ何とか立ち上がろうとする少年。足は震えていた。

「くっ……もう力が入らない」

そのまま少年はバランスを崩すと仰向けになってしまった。腕を上げようとしても、もう体が反応しない。

首を僅かに動かし横を見ると、少年と同じくらいの背格好の人影が複数同じように倒れていた。彼らはもう息がないのだ。残ったの

はこの少年一人だけ。

「もう、みんなやられちゃったのか……」

最後にもう一度空を見上げてみた。地球の青空が恋しかったが、見えるのは宇宙の球だけだった。そこに幾億もの命があると思うだけで胸が詰まりそうになった。

そこに、平らな剣を持つ金髪の彼がぬっと現れた。しぶといこの少年に止めを刺す気だろう。

「意外だな。まだ息があったのか……。これは今後の実験に役立ちそうなデータだ」

威圧的に見下ろすその鋭い眼光が、かすかに燃える命を摘み取ろうとしているのが分かる。

「何で……こんな事をするんだ。宇宙を終わらせて何になる？」

「そんな事、俺が知った事ではない。下された命令を遂行するまでだ。それが俺達を作ったマスターが望んだ事なのだから……。神の意志は絶対だ」

「く……。僕には帰る家も、待っている家族、友達がいるのに……。こんなところで終わりたくない。終われない……！」

少年の頬を一筋の涙が伝った。唇を食いしばり、嗚咽を堪えている。

「命乞いか？　だが安心していい。もうじき全てが閉じる。そうすればまた最初から始まるだけだ。そうしたら、またあの頃が戻ってくる。

だが、今回はこれで終わりだ。これじゃダメなんだ」

少年は「もう駄目だ」と悟った。敵は同情の余地すら見せない。ただ命令を全うするだけであった。正義はあちら側にあるのだろう。

高く振り上げられた剣を見つめ、少年の脳裏に様々な記憶が蘇っていく。これが走馬燈なのだと少年は気がついた。思い出がとめどなく溢れ出てくる。

友人と笑い合ったあの日。父親との別れ。親友との別れ、そして再会。戦う事に恐怖した日。戦う事を決意した日。友と協力して戦った日々。宇宙を冒険した楽しい思い出。様々な人との出会い。いつもそばにいた女の子からの突然の告白。家族がやっと揃った後の幸せな日々。そして今、まさに迎えようとしている全てとの別れ。

当たり前のように皆と中学に上がって、高校に進学して、いつか大人になって夢を叶えると思っていた。

だが、そんな事は無かったようだ。目の前の現実は何もかも途中で終わらそうとしていたのだから。少年だけではなく、宇宙の全てが終わるのだ。

何も残らない。そう、何も――

「生きたかったよ……みんなと」

「許せ……お前達は、その資格を手に入れられるほどの進化を提示できなかったのだ」

緑の剣を振りかぶると金髪が揺れる。そして間も無く、鋭い切っ先が少年の喉を貫いた。少年は一度だけ目を見開き、体を反り返させるがすぐに絶命した。バイザーの奥に落ちる瞳は、光や輝き、未来への希望、それらを何もかも失い、停止した。

金髪の剣士は全てが終わったことを確認すると、何者かと連絡を取り始めた。この透明の空間には誰もいないはず。どこかで誰かがモニターしているのだろう。

「マスター。全てが終わりました。今回の実験も失敗です」

『そうか……。十二回目のこの実験も失敗となってしまったのじゃな。お前を強く作りすぎたか……』

「またリセットですか」

『そうじゃな。一からやり直しじゃ。それではこの宇宙との隣接を途切れさせる。時空が完全に分離する前に帰還しろ』

「了解……」

ｐｒｌｏｇ＿０１：変わり果てたスバル（前書き）

時は二二ＸＸ年。
人類は電波の物質化を実現し、そのテクノロジーを用いて豊かな暮らしを続けていた……。
そんな平和な世界の小さな田舎町から、星河スバルという少年の物語が始まる。

prlog_01：変わり果てたスバル

ベッドの上で一人の少年がむにゃむにゃと寝入っている。夢の中にいるには少し空が明るいようだ。

朝日が射す部屋で、少年がベッドの中からさぐるように、何度か枕元で手を這わしている。

どうやらこの部屋で、時計の目覚まし機能が活躍しているらしい。不動の筐体を響かせ、高い電子音が鳴り響く。宇宙のポスターや、星座についての分厚い本、そんなマニアックな部屋を景気付けようとにぎやかなものだった。

部屋の主は星河スバル、小学五年生。

「う、うーん……」

太陽系の配置図がリアルタイムで変動し続ける布団がくるりと丸まった。そうしながらトンガリ頭が特徴的な少年がうめく。亀のようにその髪だけを覗かせてくれている。

「もう、朝か……起きよう」

しばし目覚まし時計と格闘するが、観念したようでスバルは起き上がった。何度かあくびをすると、規則正しく包丁がリズムを刻んでいるキッチンへと降りていく。

スバルの母、あかねは料理が得意だ。そんな彼女が朝食を作っているのだから、スバルは良い匂いにつられて、足どりは快調になっ

てくる。そしてひんやりとした廊下に目を覚ますと、キッチンの椅子に腰をかけたのだった。

「母さん、おはよう」

「あら、おはようスバル。今日は早いのね、春休みは今日までじゃないの？」

あかねは、濡れた手をエプロンで拭いながら、スバルに問いかけた。

「うん、ちょっと暁さんに呼ばれててね……」

「大切な話なの？」

「分かんない」

そう言うと、スバルはフルーツバスケットに入っていたリンゴに手を伸ばす。

「多分、大した用事じゃないと思うよ。あ、母さん、このリンゴ美味しいね」

「そう……」

あかねは少し間を置く。そしてベランダの方を見つめ、手入れの行きとどいたガーデニングに浮かない表情を向ける。

今、スバルは普通に話しているが、スバルはずっと普通ではない。半年前からおかしい。そういう風にあかねは感じている。

「あなた、最近……星空を見に行かなくなったわね」

「そんな事ないよ。……あっ、最近忙しいからかな。――って、どうしてそんなこと聞くのさ？」

スバルは怪訝そうに、あかねの辛気臭い背中に疑問を呈する。しばらく返事を待ったようだが、うんともすんとも言わないので見切りをつけたらしく、ふたたび朝食をとり始めた。

「変な母さん……」

適当に焼いたパンを平らげ、スバルは二階の自室へ足を向ける。あかねはまだ外を眺めていた。どうやら空を見上げだしたらしい。負い目のようなものを感じさせられたのか、スバルは溜め息をつくと、手早く食後の挨拶を済ませてしまう。

「ごちそうさま」

そうやってキッチンを逃げるように後にする。

するとスバルがいなくなり、キッチンではあかねが一人になってしまう。空を見上げるのもいい加減に切り上げて皿洗いを始める。皿が悲しく小さな音を鳴らす。泣いているようだ。共に鳴いてくれる小鳥のさえずりが今日の始まりを告げる。いつも通りの朝、いつも通りの日常、ただ一つ違うのは――

「あら、あの子ったら、ハンター忘れてるじゃないの」

テーブルの端には、ポツンと忘れ去られたハンターがあった。そのハンターにはもう、かつての賑やかな住人はいない。寂しげに空っぽの機械の塊が横たわっているだけである。

それにスバルが笑い掛けることも全くなくなった。時間だけが悪戯に過ぎていく気さえする。

「……やだ。また思い出しちゃったわね。スバルが見てなくて良かったわ」

皿洗いの音がまた始まる。泣き声がまた始まる。洗い物の水が弾いたのか、あかねの頬に一滴の水滴が光を反射していた。彼女は一人の女としては、まだ過去を清算できずにいるらしい。だが母として、息子の前では気丈に振る舞わなければならないのである。

現実は甘くない。そしてあかねは頬の水滴を拭うと、顔を上げて自身を奮起させるかのように何度か頷いた。

「さ、今日もパートが始まるわね！　頑張りましょ！」

二階の子供部屋では、スバルがいつもの赤い上着と紺色のズボンを乱暴に着込んでいた。もちろん、流星型のペンダントも忘れていない。これは、父親から預かったとても大切なものである。

「よしっ！　準備……」

スバルが一息置くと、空気が流入していくような耳触りのよい音が鳴った。どうやら、拳に力を込めると手首に輪ができる仕掛けらしい。風船の要領だ。この輪は最近流行しているファッションらしい。

スバルは手首にお馴染みの輪ができたことを確認するとドアに向かって駆け出した。

「完了！！」

軽快に音を立てながら階段を降りていく。約束事があるのだ。スバル自身何の用事かは知らされていないが、とりあえず行ってみる

しかないだろう。

「母さん、行って来まーす！」
「車とかに気を付けていくのよ」
「もう、子供じゃないんだから、分かってるって！」
「ふふっ、そうだったわね」

共に顔を見合せて、意味ありげに笑い合う。確かにスバルは同年代の子供に比べてしっかりしている。しかし、それ以上の理由がある。例えば、世界を何度も救った、というような事が挙げられない訳ではない。

「それじゃね」
「ハイ、行ってらっしゃい。……あ、そうそう、母さん今日パートで五時まで家にいないから」
「分かった、時間が余ったら、ゴン太の家で時間潰してくよ」

そう言ってスバルは外に繰り出した。
見上げる空は快晴で、どこまでも続いているのでは？　そんな錯覚を覚えるほどにどこまでも青く、どこまでも高い。そして、やはりどこまでも遠かった。

「うーん、今日も地球はいい天気だよ。父さん……ロック……」

寂しそうにスバルは、自分の住むコダマタウンの空を見上げている。本当だったら、家族でピクニックにでも行きたいくらいに良い天気だ。
だが、今の星河家にそれは許されることではない。スバルもそれは十分に、痛いほどに分かっている。父との約束を心の支えに現実を受け止め、また会えるその日を夢見て、一生懸命生きるしかない。

何を思ったのか、彼は腰にぶら下げた丸っこいポシェットからハンター（一人に一台が当たり前の携帯端末）をモゾモゾと取り出した。そして真っ黒なディスプレイに伏し目がちに視線を落とす。

だが、ハンターは死んだように何も反応を返してくれなかった。当然、ハンターは沈黙を守ることしか出来ない。スバルも分かっているはずなのに、何度も何度も同じことを、ここ最近繰り返している。

頭では分かっているはずなのに、少し時間が経てば、もしかすると……とそう脳裏をよぎって離れないのだろう。

彼を悩ませる父の名は星河大吾、そしてロックと呼ばれる彼はウォーロックという名だ。両者ともに、スバルの大切な家族だ。しかし、今はいなかった。

すると沈んだ自分に呆れたのか、スバルは気持ちを切り替えて歩き始めた。

「何やってんだろ、僕……。そろそろ、急ぐかな」

駅の改札に向かって少し急ぐ。コダマ駅まで走ればすぐだ。スバルはかけっこには自信がないが、なかなか速い。そんな彼がコダマ駅の昇降口に辿りついたのは五分後の事であった。新記録である。

スバルは少し弾んだ息を整えようと、ゆっくり歩いて改札に向かう。すると背後に人の気配を感じたのだった。

「あっ、スバル君じゃないの！」

スバルがコダマ駅の改札を抜け、電波の線路を駆け抜ける乗り物、ウェーブライナーに乗り込もうとししていたところだ。

そんな急ぎの少年を後ろから誰かが呼び止めた。甲高い女の声だった。

「あっ……」

振り向いたスバルは不用心にも、間抜けな声を漏らしてしまう。
それを合図に声の主がツカツカと歩み寄ってくる。その足は縞々のタイツでキュッと引き締められている。一般的にはきれいな足と言っても良い。短いスカート、胸元にきらめく緑のバッチ。そして一番のチャームポイントである、大きな縦ロールを二本も携えている。
一本は予備だとしたら結構な心構えだ。
そんな印象的な彼女は、スバルのクラス委員長の白金ルナという。

「い、委員長……」
「奇遇ね。スバル君？」
「ははっ、そうだね。……それじゃ、僕はこれで」

スバルは、足早にここから立ち去ろうとする。スバルはルナと関わると疲れるのだ。決して嫌いではないが、多分好きではない。

「お待ちなさいっ！」

うるさい声だ。耳に響くし迷惑だから、これはスバルに嫌われる。

「うひっ……！」

ルナの高らかな制止に、またしても情けない声がスバルから漏れる。さっさと行けばいいものだが、彼は律儀に足を止めて縮こまる。

「あなた、どこに行く気？　教えなさいよ」
「ちょっとした用事だよ」
「どこに行くのか、聞・い・て・る・のっ」
「は……委員長には関係ない事だよ」

「あら、関係あるわよ。私は、五年Ａ組の学級委員長であり、明日からはコダマ小学校の生徒会長なんですからね。そこの生徒である、アナタの動向をチェックする義務があるのっ」

ルナはもっともらしい理由をまくし立てる。だが本当は、ふと外を見たらスバルが歩いてるのに気が付いて、追いかけてきただけ。しかしプライドだけは一丁前なので、彼女がそんなことを言えるはずもない。ストーカーはお高くとまってスバルに迫るだけだ。

「なんだよ、それじゃ、ストーカーじゃないか」

「バ、バカ……！　そんな訳ないでしょ。レディに向かって失礼じゃないの、アナタ！！」

「えぇっ！？　……ご、ごめんなさい」

あながち、的外れでもない発言のおかげでスバルは、しなくてもいい謝罪をさせられてしまう。この光景から察するに、彼らの力関係が手に取るように分かる。

スバルはルナに頭が上がらない。

「ま、まぁ。分かればいいのよ……？　ワタシは、優しい女の子だから許してあげる」

「は、はぁ……」

バツの悪そうに言うルナに、スバルはいまいち腑に落ちない感じで同意する。これは恐怖の末に生まれた、ルナとの約束事を守るだけ悲しいコミュニケーションでしかない。彼女に適当に同意するスバルの姿が教えてくれる。

しかしそれはスバルの都合だからルナには関係ない。

「……まぁ、優しいついでに……。――ス、スバル君がどうしても

って言うんなら、一緒に……行ってあげなくはないわよ？」

準備していたとってきおきの言葉を口に出すルナ。心なしか顔が赤くなっているのは、気のせいではないはず。

スバルとしてはどうでもいいし、むしろ一人で行きたいが口には出さない。

「（面倒なことになってきたなぁ……）あはは、気持ちだけもらってくよ。本当に急いでるから、僕はこれで」

世界を救った百戦錬磨のヒーローも、乙女心はまだまだブラックボックスらしい。愚かにもスバルは地雷を踏んでしまった。

「一緒に行ってあげなくはないって言ってるのに……」

ルナは少し抑え気味に言った。怒りではないが、手が少し震えている。顔はスバルに向いているが、目線は合わせられない。

彼女なりの精一杯のアプローチが華麗にスルーされてしまい、無理もない。

「い、委員長？　どうかした……？」

勉強は出来るが、スバルは少し馬鹿だった。

「……」

金切り声をあげたい衝動に駆られ眉間にしわを寄せるルナだが、必死に我慢している。生徒会長という肩書がそうさせたのか、彼女は少し大人になっていた。

「委員長……？」

不思議だったが。なにかスバルの脳裏に、ある一言がよぎった。

『幼女を泣かせちゃ、ダァメぇデース！』というＴＶでよく聞くあれだ。

（しょうがない……。でも、連れてっても問題ないの……か？）

スバルはルナに歩み寄る。理由は、何となくこのまま放っておくのに気が引けたから。

「一緒に来る？」

スバルは言った。だが、これが正解なのかどうかは彼には分からない。

「……しょうがないわね。アナタがどうしてもって言うんなら、一緒に行ってあげるわ。さっ、乗り遅れるわよ、急ぎましょう！」

「委員長が言うなよな」

これで良かったのかは二人にしか分からないが、二人の笑顔に偽りなど含まれていないのは、間違いなく分かる。

こうやって少年は少しずつだが、大人になっていく。

「ルナちゃん、やったね！」

ハンターからひょっこり物質化して現れたルナのウィザード（所有者のサポートをする電波体）のモードがわざとらしく言った。見た目はウサギで緑で色々とめまぐるしい。

「バ、バカ……！　聞こえちゃうでしょ……！」

ルナは精一杯の小声で返す。つまり精一杯の大声とも言えるかもしれない。

スバルは不思議に思い、振り返る。後ろで騒がれたら鬱陶しい。

「おーい、行くなら、さっさと行くよ」

ウェーブライナーに乗り数分、二人は目的地に着いた。それからしばらく歩くと、大きな建物が見え始める。ロケットのようなものが見え、少し物々しい施設だ。

そしてトンガリ頭の少年曰く、センスの良いロゴであしらわれた門をくぐった。

門を抜けたところだった。スバル達の目の前に、宇宙開発が生んだ芸術が顔を出す。遠くからも見えていたロケット、そして実際に衛星軌道上を回っていた人工衛星達が姿を現す。

堪らず少年は目を輝かせ、隣のルナを置き去りに自分の世界に浸ってしまう。女性にはただの金属の塊にしか見えない物体を間近に、彼は満足げだ。目的を忘れ、すっかり宇宙へのロマンに心を奪われてしまっていた。

「ちょっと、スバル君？」

「わー……。いつ来てもスゴイなぁ。おっ、こいつはスゴイや！」

「……まったくもう、この人は。んもうっ、よだれが垂れてるじゃないの。見っともないわねぇ」

『でも、これがスバル君の良い所でもあるんだよねっ。でしょっ、ルナちゃんっ』

ルナのウィザードは鬱陶しいのでこういう時に口をはさんでくる。ハンターからひょっこり顔を出してて愉快なものだ。

そんなペットにルナはあからさまに顔をしかめると、スバルの涎を高級ハンカチで拭ってやる。彼女も世話好きなのか、うつむいたかと思えばコクリと頷いた。

「ま、まあ否定はしないわ」

こういうところはお嬢様かもしれない。高級ハンカチを汚すだけはある。

『ふふっ、素直じゃないんだから』

「さぁ、スバル君っ。いつまでもボケっとしてるんじゃないわよ！ほら、早くなさい」

「あぁ、もうちょっとだけ……！」

スバルは衛星達との別れを嫌がる。だがそれを尻目に、ルナは乱暴に手を引いてさっさと研究所本館へと向かっていく。

スバルの抵抗が一段落を迎えたころにはすっかり本館前で、そこの人影を見つけることとなった。その人影は、スバルとルナにとっても馴染み深い人物の物だ。そんな二人組がスバル達に手を振ってみせたのだ。

「あっ、天地さんだ」

スバルが大きく手を振り返す。

「やぁ、よく来たね。スバル君」

小太りで人の良さそうな男性が、大きな口から白い歯を覗かせながら出迎えてくれる。

「……おや、ルナ君も来たのかい」

「えぇ、スバル君のお守り役で来ましたわ。……あ、それと天地さん、このたび白金ルナはコダマ小学校、生徒会長になりましてよっ。オホホホホッ！」

ルナはいかにも、な笑いを響かせる。他人に自慢したくて仕方ないらしく、悦に浸っている顔がそれを物語っている。高らかに笑うのは一向に構わないが、涎をたらすのでスバルを呆れさせるばかりだ。

しかし天地はルナのことなどどうでもいいらしく適当に流してくれる。

「へぇ、スゴイじゃないか。流石だな」

天地は大人の優しさを発揮してくれたのだ。これではスバルも申し訳ないだろう。やはり連れてきたのは失敗だ。

「あーもうさ、恥ずかしいから止めなって。それ以上醜態をさらすなら帰っていいよ」

『あー、ダメじゃないのルナちゃん、スバル君が見てる前でヨダレなんて、みっともないよ』

すると天地が口を開いた。そろそろ本題に取りかかりたかったのだろう。彼は研究所の正面玄関に向かって歩き出す。スバル達にも手招きしてついてくるように言った。

「まぁ、立ち話も何だし、そろそろ中に入ろうか。ついておいで」
「うん、分かった」
「承知しましたわ」

自動ドアが開くと、館内が露わになる。やはりというか、さらにスバルの興味を引くものが展示品として並べられていた。隕石とか宇宙人の死骸とかだ。

しかし意外なことに、彼の注意は展示品のさらに向こうで作業している、いかにもひ弱そうな人物に向けられていた。スバルの注意を引くとはその人物は人間ではないのかもしれない。

天地はその人物に呼びかける。

「おーい、宇田海！　こっちに来て挨拶しなさい」

宇田海と呼ばれる人物はびくりと背をこわばらせると、おずおずとスバル達の方へ歩いてくる。猫背だったので、無駄に頼りなさそうに見える。それがルナの第一印象だ。

宇田海はにやりと笑って挨拶をしてくれた。一見怖い表情だが、生まれ持ったものは仕方がないので誰も言及しない。

「やぁ、スバル君と確か……委員長さんでしたよね。いやぁ、遠い所からよく来ましたね。こんな所じゃ、何も用意できませんが、ゆっくりしていってください」
「わざわざ、ご丁寧にありがとうございます。ワタクシ、コダマ小学――」

ルナの恐ろしく長い自己紹介が始まる前に、スバルが割り込む。

「うっ、宇田海さん、こんにちはっ！　と、ところで、ずいぶん明るくなったね。僕、ビックリしちゃったよ、また無視されるんじゃ

ないかと思ってたからさ」
「ははははっ、スバル君に言われてしまいましたか。でもこれも、スバル君のおかげなんですよ？」
「僕は大したことしてないよ。宇田海さんが頑張ったからだと思うよ」
「そうですか、……うん、そうですね」

宇田海の顔にましな笑みが浮かぶ。まともに笑うと、顔の作りは悪く無いおかげか、普段の顔よりも映えて見えた。
次いで、宇田海が話を切り返した。

「ところで、スバル君、まだウィザードは持たないんですか？」

スバルの顔が一瞬だが硬直した。ルナの視線に気が付かなければ、しばらくの間固まっていたことだろう。

「う、うん。今はまだ、そんな気分になれないんだ……」
「そうですか……」

スバルの表情を見て、宇田海が残念そうに天地の方を見る。

「天地さん、ちょっと……こっちへ」

宇田海はそう言って、天地と共にスバル達から少し距離を置く。
そうやってフロアの奥の方へこそこそと向かうのだ。
そしてスバル達に聞きとられない距離まで離れると、宇田海が天地に耳打ちをする。

「別に今じゃなくてもいいんじゃ……」
「でも、暁君が『早い方がいい』って……。それに私も大方、その

意見に同意している」
「でも、天地さん。スバル君の様子を見る限り……」
「あぁ、おそらく、ダメだろうな。……まあ、その時は、時期じゃなかったってことさ」
「そういうものですか？」
「そういうものだ」

密談する二人は不審極まる。そのためなのか、スバルは先ほどの宇田海の言葉もあって、かつての相棒のウォーロックのことを考えていた。

（ロックだけなんだ、僕のパートナーは……だからウィザードはいらない……）
「す、スバル君……、大丈夫？」

彼の思いつめた様子に気付いたらしく、ルナが心配するように顔を覗きこむ。

「……ん、大丈夫。ちょっと、考え事してただけだよ」
「そう？　ならいいけど。もし気分が悪くなったら、遠慮せず言いなさい」

ルナは真面目に言ったのだが、スバルにはそう取られなかったようで、彼は明らかにバカにした様子で彼女を笑う。
同じクラスメイトに対する態度としても度が過ぎており、少し失礼でさえある。どうやらスバルはルナから向けられる優しさにはうまく対処できないらしい。

「……ぷっ、キミは僕の母さんかよっ！？」
「な、なによっ。せっかく人が心配してあげてるって言うのに……

！　スバル君、アナタって人は……！！」
「アハハ、ちょっと委員長……？」

スバルが今までの経験上から、この展開は危険だという判断をはじき出す。
すると渡りに船だ。

「はっはっはっ、喧嘩するほどなんとやらってね！」

密談を終えた天地だった。彼がスバルに救いの手を差し伸べてくれた。
さすがに天地の前で怒鳴る訳にいかないルナは仕方なくスイッチを切り替え、お得意の営業スマイルで完璧なお嬢様キャラを瞬時に作り上げたのだった。

「あらヤダっ、天地さんったらー。ワタシ達、そんな風に見えちゃいました？」

ルナは笑いながら天地の脇腹を肘で突いて見せるが、天地の腹はいくら突いてもただめり込むばかりである。

「まぁ、ルナ君と話している時のスバル君は楽しそうだなって思っただけさ。特に深い意味はないよ」
「ま、まぁっ……」
『ルナちゃん、よかったね！　天地さんのお墨付きだよ』
「モード、もうちょっとだけ静かに話してくれる？　スバル君に聞こえちゃうでしょ」

小声でモードに訴える。

『エッ！？　わざとスバル君に聞こえるように言ってたのに……』

天地の傍らでルナとモードは、やいのやいのと騒いでいる。それに見かねた天地はわざとルナ達に聞こえるように言って釘を刺す。次は何を刺してやろう、天地の心境はそんなものだ。

「そろそろ、行かないと暁君が待ちくたびれてるだろうなぁ……」
「あらやだ！　あらあらまあまあ私ったら、見苦しい所をお見せしちゃって……なんてお詫びしたら……っ」
「謝らなくていいから、早いとこ行こうか」

スバルはそのやり取りを見ていて「やっぱり連れてくるんじゃなかった」と思わずにはいられなかった。
後悔しつつも、彼らは暁の元に向かった。

それからスバル達はルナの生徒会長になるまでの軌跡を、アマケンのラボに着くまでに延々と聞かされていた。
主にその内容は、ネーミングセンス皆無の団体が繰り広げる、団員達の汗と涙のドキュメンタリーと言ったところである。しかし肝心な内容の大半は、大幅な脚色が加えられたルナ個人の活躍と、ルナよろしくロックマン様という電波人間の華々しい立ち回りで構成されていた。
しかしスバル、ゴン太、キザマロの話が出てこないのが残念である。彼らはルナの友達だったはずだが、一瞬も話に出てこない。

「というわけなんですよ！　どうですか、私のロックマン様は最高に素敵でしょう！？　ねっ！　ねっ！？」

ルナが全七部構成の内、第三部を話し終えた。話が長そうなので、スバルと天地の顔に疲弊の色が積もる。無理もないだろう。ラボに

はとっくに着いているが、ルナがドアの前に立って通してくれないのだ。

さらに性質が悪いことに宇田海が、彼女の信憑性に欠けるその話に聞き入ってしまっているのだ。廊下に座って行儀がいいのか悪いのか分からない宇田海だった。

「流石はロックマン様です！　感動しました！！　スバル君こんなこと本当に、言っちゃったんですか？！」

「はっははは……。さぁ？　覚えてないなぁ……ははは……委員長はお花畑だからね」

スバルは笑うことしか出来ない。彼はロックマンとしてルナを助けた事は何度もあるが、ただの一度も『愛してる』などといった恥ずかしい台詞は吐いた覚えはない。

すると宇田海の発言に、ルナが注意を促した。どうやら彼女の中ではロックマンとスバルは別物らしい。

スバルは今までロックマンとして何度も地球を救ってきたのに、これでは報われない。

「ちょっと、宇田海さん……！　なんで、そこでスバル君に聞いちゃうんですか？！」

「えっ？　なんでって……、それはだってスバル君は……ロックマン様じゃないんですか？」

宇田海はルナの珍妙な発言に意味を見い出せずに混乱している。

そんな馬鹿げたやり取りに面倒臭くなりつつも、スバルは補足してやる。これは今に始まったことではない。ルナが頑なに貫く彼女のルールだった。

「あっ……宇田海さん。いつもの事ですから気にしないで……。僕

はロックマン様の付添いって設定らしいですから」

スバルのおかれた状況に、宇田海がなんとも言えない微妙な表情を浮かべる。何か言いたげだが、口は開かない。そんな彼にスバルがなんとなく腹立たしく思っていると、ルナが話を再開しようと手をパンパンと叩いて注目を集めた。女教師のつもりだろうか。

スバルは自分でも気付かずに拳を握っていることに驚いていた。

「ハイっ、みんな注目っ！！　ココからがルナルナ団の活躍の神髄よっ」

「おおぉおっ、さっきまでの話は序章に過ぎないというんですね！？」

ルナが勝手に話を進める。それと同じくらいに宇田海が勝手に盛り上がる。もはやスバルと天地は置いてけぼりだ。

仕方がないので、廊下の端に追いやられるように座り込む。研究所の主が冷たい廊下に追いやられるのだ。これはゆゆしき事態だった。

「スバル君……これは、いつまで続くんだい？　僕の中の獣が呼び覚まされそうだよ」

「さぁ、分かんない……。委員長を甘く見てたようだよ」

「これは、参ったなぁ……」

「……連れてきたの、間違いだったよ。ああいうところがあるからかな。僕は委員長がなんか腹立たしいんだ」

「ははっ、そう言うな。いい子じゃないか！」

「どこがだよ」

スバルは天地の言葉を半ば流しながら答えた。ルナは面倒臭い奴、そう言いたげに顎を膝に埋める。

「あー、あれだ。何だか、あかねさんに似ていると思わないかい？　ほら、目のあたりとか……」

天地のあまりにも突拍子のない、夢見がちな発言にスバルは思わず吹いてしまう。

スバルにとってあかねは最愛の人物の一人。ルナとは似ても似つかない。整形しても可能性がないほどだ。それに顔に限らず、心の方でもルナとあかねは比べてはいけないほどだ。

「ブッ！！　何言ってんだよ天地さんっ。委員長が母さんに！？　ははっ、冗談はよしてよっ！　このままじゃ、命がいくつあっても足りないよ！」

「うん、冗談だよ」

「冗談なのかよ！？　って人が悪いよ、天地さん」

「似てるってのは、まぁ置いといて……あの子はいい子だよ。まあスバル君……大事にしろよ」

「えっ……？」

天地の冗談にしてはやけに真に迫る言葉に、スバルは思わず声をあげる。悲鳴と言っても良いくらい、自分の意思とは関係ないところで出た声だった。

驚くスバルをまじまじと見つめた後、天地が口を開く。彼はあかねから相談を受けていた。

「スバル君。……キミは最近ずっと元気がないそうじゃないか。理由は大体、想像付くが……。なっ？」

「ははははっ。何言ってんのさ。僕はずっと元気だよ。勘ぐりすぎだね。昨日だって調子良かったし。今日だって明日だって……」

「そうか？　あかねさんが心配してたんだぞ……『最近あの子、星

空を見に行かなくなっているみたいなの。それに、部屋の望遠鏡も埃を被ってるし……もしかして、スバルは宇宙のことが嫌いになったんじゃないか……』って。なあ、良ければ訳を教えてくれないか？」

「……だから僕はいつも通りだって。母さんの勘違いだよ。きっと……」

「嘘だな」

天地がいつも以上に低い声で呟いた。森のくまさんがグリズリーに変貌したのかと言えるくらいの冗談を許さない声色だった。

スバルは天地という存在を見誤っていたのかもしれない。決して甘いだけじゃなく、限りなく父親の代わりとして自分のことを思ってくれている。本当の父親にすら匹敵する親身さに、一瞬だけでも大吾が霞んだほどだった。

「あの日以来、スバル君……。心の底から笑ったことがあるかい？」

「ば、馬鹿にしないでよ、それぐらいあるに決まってるじゃないかっ」

言葉とは裏腹にスバルの視線はずっと地面に向けられている。

「いや、ない。だったら、僕の目を見て言ってみろ」

「笑ったことぐらい……それぐらい……」

スバルは天地の青い瞳を見つめ返す。

「……あ」

「どうした？　『あ』じゃ分からないぞ」

「くっ……」

スバルは目を瞑ってしまう。

「僕は……僕は……ゴメン」

天地に対して、頭を垂らしたスバル。天地はこれ以上言及してこなかった。

「……今は言いたくなんだな？」

「……うん」

スバルは本当に小さい声で言った。それこそ傍らでうるさいルナの声にかき消されるほどだった。

そしてその後、見つめてくる天地に、やはり小さく言う。

「でも、これだけは言える。僕は宇宙を……嫌いになった訳じゃないよ」

天地に背を向けながらも、しっかりと言って見せたスバルに、天地は言った。

「……そうか」

だけど、スバルからの返事はない。

「……あぁ、そうだ、話は戻るが、ルナちゃんをあまり心配させちゃいけないぞ。今日見ただけでも、結構、気をつかってたみたいだったからな」

「また冗談？　委員長じゃそんな気遣いできないよ。あの人は僕のことを手下かなんかだと思ってるんだよ。たまに女の子らしいことを言って僕をドキリとさせるけど、それはミソラちゃんだって同じ

だ」

「いやいや、これは冗談じゃなくてだな。もしかして彼女は、最近元気のない君を心配して半ば強引に僕と君を二人っきりにさせたのかもしれないぞ？」

「委員長は自分が大好きなんだ。ロックマンも大好きだけど、僕はロックマンじゃないし、もうロックマンにもなれない。天地さんは考えすぎだね」

「確かに、そうかもな。それに、だからって固い廊下に座らせられちゃ敵わないものなっ。ハッハッハッ！」

天地は口を大きく開けて笑う。しかしその声は結構うるさい。そのためなのか、スバルはそのまま嫌な気分も吹き飛ばしてほしくなったらしく、笑う彼にぽつりと呟いた。

「……僕もさっきの話で悪いけど。――友達は大事にするし、守るつもりだよ……。もう、戦うことが出来なくってもね」

スバルは背中越しに、大声で笑う天地に言った。だがその小さな声では天地の笑い声で消されてしまう。

いや、スバルは最初から天地に伝えるつもりはなかったのかもしれない、自分に聞こえればそれで良かったのだろう。

スバルが一人で満足していると、そこに突然の拍手喝采だった。宇田海とルナだけの世界の終わりを告げたらしく、宇田海が拍手を送っていたのだ。そして一仕事終えたという面持ちで佇んでいるルナも、なぜか誇らしげだった。

どうしようもないルナに、スバルは笑いすらこみあげてくる。

しかしルナには関係ない。彼女のペースは健在らしい。

「さぁ、用事はここで済ますんでしょう。早く行きましょうよ！ほらっスバル君も天地さんも、そんな隅っこにいないのっ！　こっ

ちにいらっしゃい」

ルナは自分が時間を浪費していたことなど、気にもかけない様子で手招きをしている。

思わずスバルは拳を二つも握っていた。天地はそれを尻目に彼の背中を叩いて笑い飛ばす。

「ハッハッハッ、やっぱり楽しい子だなぁ。さすがにスバル君の心の壁を打ち破っただけはあるよ。なぁ、スバル君？」

「天地さんは、分かってないな。慣れれば、疲れるだけだよ」

「慣れれば……か。ハハハッ、確かにそうかもな」

「なにが可笑しいのさ」

「いや、何でもないさ」

そう言い残して、天地はラボの方へと向かう。天地のおかしな言動に、終始戸惑い気味だがスバルも彼の後についていく。

スバルは気付いていない、ルナの話題が出る度に少し表情が柔らかくなっていることに。それが天地にとっては嬉しいことなのかもしれない。まるでスバル本人も気が付いていない心の傷が、治っていっているようだから。

「ほら、早くっ！」

ルナが背中に背負った金髪ロールを上に下に運動させながらピョンピョン跳ねて、スバル達を急かす。滑稽なことに、ルナの足元で緑兎もやはり跳ねている。これでは、握った拳も解きほぐさなければならないだろう。

「ふふっ、やっぱり、連れてくるんじゃなかったよ」

皮肉が笑みと一緒にこぼれ落ちたのだった。

「あぁーっ！　スバル君、何ニヤついてるの！？」

prlog_02：虚構の友

スバル達はラボの中へと足を踏み入れた。しかしその中は真っ暗で、所々に薄暗いディスプレイが点滅を繰り返しているだけだった。

ひと際目を引くのは、円柱状のマテリアルガラスで出来た設備だ。中は培養液で満たされていて、生きているか死んでいるか分からないウィザード達の存在が確認できた。

それが一つだけではなく大量に乱立されているのだから不気味さを醸し出す。言うなれば、ウィザードの墓場といったところか。

恐らくいるであろう暁を探してみる面々。だが培養電波から気泡が水をかきわける音が聞こえるのみで、ラボの中に人の気配は感じられなかった。

「なにココ、気味が悪いわね……（ちょっと怖いじゃない……）」

さっきまでの威勢はどこに行ってしまったのだろう、ルナは少し怖がっているようだ。自然と体はスバルの腕にしがみついている、その際にルナの貧相な胸がスバルの上腕にささやかながらではあるが、確実に当たっている。ルナもそれには気付いてはいる。

だが、気付いているだけだ。恐怖に打ち震えるよりかは、スバルに不可抗力ながら、ない胸を当て着けている方が生産的と判断したということなのだろう。

『行けー、ルナちゃんっ、もっとヤレー！』

小声で緑兎ことモードが、マテリアライズを駆使してデンパ扇子を両手で精いっぱい振っていた。そうやってルナとスバルの仲を取り持つ。だが、残念なことにその小さすぎる体躯では二人の視界には入らない。ましてや、この暗闇では存在にすら気付いてもらえない。それでもなお、主人の為にデンパ扇子を振り続けるモードだった。

「……？」

小バエがうるさいが、ようやくスバルが腕に違和感を覚えた。それが、ルナのものである事にはすぐ気付いたが、しかし嫌な違和感を覚える。

スバルがジワジワと脳髄に訴えかける痛みに顔を歪めていた。悲しいことに年相応と言えばそれまでだが、ルナの貧相すぎる胸の脂肪では、胸に付けていたバッジの圧力に勝てなかったらしい。ルナは気持ち悪いくらいに少年みたいな体型なのだ。

この現実には、モードではどうしようもない。スバルはルナの様子をうかがう。

「ちょっと、委員長……。胸のバッジが当たってて痛いんだけど。それに委員長の感触って男の子みたいだね」

「え……？　……あっ……うん、ゴ、ゴメンナサイ……！」

ルナもまさかこのような返答が返ってくるなんて思っていなかったようで、顔を真っ赤にしてスバルから離れる。一度拒まれた彼女にはもう、遠慮気味にスバルの服の裾を少しだけ持つという選択肢しか残されていなかった。

「そ、それにしても何で真っ暗なんでしょうね、スバル君？」

「そんな事、僕に聞かないでよ。あと裾も引っ張らないでくれるか

な？　ちょっと離れてくれよ」
「ぁう……」
自分のペースをつかもうとしたが、スバルに拒絶されて近寄るなと言われてしまう。ルナは少し泣きそうになる。暗闇の恐怖というよりかは、もはや違った意味での胸の痛みがそうさせているのだろう。
ルナが少し涙を拭うと、今度はラボの奥の方から奇怪な音が発せられてくる、それはラボに相応しくない音の種類だ。駄菓子をほおばる軽快なものと言えばそれらしい音色だった。
『サクッサクッ……、サクサクサクッ！！　サクサクサクサクサクッ！！　サクサクサクサクサクサクサクサクサクサクッ！！！！』
すごい量のサクサク音が聞こえてくる。この音の数から察するに、尋常ではない量の某型の駄菓子、うまい棒がサクサクされていることが想像できる。
それと同時に、これほどのうまい棒を一度にサクサクできる消費者の力量も常人のそれを遥かに上回っていることがうかがえた。
「な、何この音っ！！　ヤダっ、怖い！！」
これがうまい棒の音だと判断できないお嬢様なルナは、恐怖に慄きペタンと尻もちをついてしまう。過度な精神の負担の為か、はだけたスカートを直そうともしない。
これには流石のスバルも堪えたらしい。乙女の秘密を知ってしまった罪を償うかのように、雑念をごまかすために叫んだ。そんな彼の視線は泳いでいたのであった。

「い、委員長っ！　落ち着いて！　これはうまい棒の音だから、怖くないよ!!　いない、いない、バーア！」

スバルがルナに音の正体を教えてやるが、パニックを起こしたルナには言葉の音は届いても、意味までは届かない。

「エッ、ウマイボウ……!?　何よそれ、かなり危なそうな名前じゃないの！　スバル君、助けてっ」

あまりにも情けないルナの姿にスバルはさっきまでとは一転、笑いをこらえるのに必死になってしまった。そうでもしないと、スバルはルナに対して、ただじゃおかなくなってしまうのだろう。

「ぷっ……！」

スバルもまた、ルナ同様に理性と本能の狭間で戦わざるを得なくなっていたのだ。そしてルナの恐怖におののく姿をさらに楽しもうとしたのか、『サクサク音』第二波が間髪を入れずに鳴り響いた。

『サクッ……、サクサクサクサクサクサクサクサクサクサクッ！』

やはり、先ほどよりも『1サクサク』の持続時間が長い。恐らく、先のインターバルの間に相当量のうまい棒を解放したに違いない。そして問題なのは、ルナの精神の安全だ。この状況が長く続くようであれば彼女の乙女心に危険が迫るだろう。

そんな彼女の未来を奪おうとしたのか、うまい棒の奏でるデスコーラスは留まるところは知らなかった。勢いが加速して、やがて大変な事態を招いてしまう。

『サクサクサクッ！！　サクサクサクサク……ガリッ！！』

嫌な断裂音が鈍く響く。その音に対し、スバルは思わず目を瞑った。スバルの思考がある恐ろしい一つの答えに辿り着く。

恐ろしすぎて考えることすらおぞましいが、それしか考えられないはずだ。

「口を噛んだの……か！！」

次の瞬間、辺りにこの世のものとは思えない、あらゆる責め苦を与えられた囚人のみが発するだろう断末魔が轟いた。

「うっおおおおおおぉぉおおおぉっ、痛ってぇえぇぇぇぇぇっ！」

スバルはまたしても、目を閉じずにはいられなかった。なぜなら、あの口を貫く痛みが想像を絶することは、万人が承知の理であったからだ。

「天地さんっ！　証明のスイッチが見つかりました」

宇田海が天地にすぐさま報告する。

「報告はいいっ。早く点けろ！」

天地がもっともな命令を下す。

次の瞬間、ラボの照明が機能を取り戻して、辺りを本来の明るさに照らし出した。

そしてスバルは、ラボの奥の方でのた打ち回る人影を見て驚愕したのだった。

「暁さん……！」

暁と呼ばれる青年はのたうち回る。自らが発する絶叫でスバルの言葉など耳に入る筈もない。ひたすら彼は、食べカスと包装紙とが入り混じって成り立っている粉と銀の世界の上で、痛みが通り過ぎるのを待っている。

「あっ……」

スバルは、足元に一本のうまい棒が転がっているのに気が付いた。

「血がついている……。それに、明太子味だ」

スバルの表情は歪む。明太子味と言えば、刺激的な味が楽しめるうまい棒界の暴れん棒将軍なのだ。それが傷口と激しい小競り合いを繰り広げたとあらば、口内に広がる痛みは計り知れない。

「まったくなんだって、こんな真似を……」

天地は彼独特の大きな鼻の穴から溜め息を吐き出すと、暁シドウに呆れ顔で問いかける。シドウはヘラっと笑うと、責任者用のいすに腰掛けて言い訳を始めた。

「いや、いつまでたっても、天地さん達が来ないもんだから、つい……」

シドウはそう言うと、地面に無造作に転がっているうまい棒を見下ろした。

なんだか、楽しそうである。

「驚かそうかな？　なんて思っちゃって……それに今の自分の限界とか、リハビリの成果とか知っておきたくて……」

シドウは悪戯っぽく少し笑ってみせる。端整な顔立ちから繰り出すそれは並の女性なら、簡単に落としてしまうだろう。

だが天地は男だ。それに体型的にも、並なんて言ったら失礼なくらいである。

「君は子供か……」

天地は肩をがっくりと落として見せ、シドウに『馬鹿だなお前は』という意思表示を無言でする。

だがシドウはその意味を理解してるのかしてないのか、他人に悟らせないふるまいを続けた。おどけて言って、ルナを挑発するのだ。

「でも、誰かさんには効果あり……だったかな？」

シドウは口角を吊り上げ、ニヤッと笑う。その視線の先には、さっきまで一人で勝手に騒いでいた女の子がいる。彼女と自分を比べて少し自分の有利さを演出するのである。

そのためルナの顔は羞恥心から気持ち赤くなっている様子。その白い肌は、本人の意思とは関係なく赤色を強く主張し、シドウへの不満も主張した。

「暁さんのイジワルっ！」

頬を膨らませた少女はそう吐き捨て、本体だけはスバルの後ろに隠れてしまう。無論、巨大巻き髪まで隠れるわけはない。

シドウはそんなルナをもの欲しそうに見つめると、少し表情を曇らせた。

「アハハッ、嫌われちゃったよ！　おーいえ……イテッ」

笑った拍子に口から極少量の血が垂れる。

だが今の彼にとってそんなものは些細な傷だった。彼のうまい棒へのテクニックばかりに目が行きがちだが、本当の彼はそんなものではない。彼ほどの戦士はそういないのである。

そんな手負いのヒーローを、スバルは少し垂れ気味の目を細めて見つめていた。

「暁さん、無事だったんだね……」

スバルは今更すぎる形式ばった言葉をシドウに告げ渡す。

「オイオイ、これが無事って言えるのか？」

シドウは笑いながら、サテラポリスの制服の胸元から覗く、体中にやたらめったら巻かれている包帯を親指で差す。

当然、この布はファッションで巻いているのではない。仮にそうだとしたら奇抜すぎる。

スバルはシドウの皮肉たっぷりな笑みに苦笑した。

「でも、生きてるじゃないですか」

「そりゃ、そうだ」

「何で、今まで連絡をくれなかったんですか？　僕、てっきり……」

スバルが言葉を呑む。それもそのはず、シドウとスバルが今回顔を合わせたのは数か月ぶりである。その間彼は生死をさまよい入院していた。スバルとしてはこうやって普通にしているシドウが少し信じられないものなのだ。

シドウはスバルの心配を軽く流して、困り顔を浮かべる。
「無茶言うなって。ついこの間までお寝んねしてたんだぞ」
説明のつもりだろう。シドウがその場で腕枕をして眠っている真似をして見せる。ご丁寧にいびき付きだった。
どうやら心配はいらないようだ。
「あはっ、元気そうで何よりです」
「当然だろ、俺はヒーローだからな」
「僕もですよ」
いつにも増してスバルのノリがいい。でもそれを見せられると、ルナの気分は乗らない。
「いや、お前はスーパーヒーローだ」
「違う違う、ロックマン様はマイウルトラスーパーヒーローですっ」
ルナが口をはさむ。彼女的にはまだ遠慮した表現なのだろうが十分に恥ずかしい敬称だ。というより、おかしな単語が混じっている。だがそれは、あくまでロックマン用の言葉らしく、ルナはスバルに目で訴える『勘違いしないでよね。アナタの事じゃないんだからっ』と言いたげだった。
ルナから発せられる刺すような視線にスバルは気が付き、何も悪い事をしてない少年は少したじろぐ。
心なしか、トンガリに元気が見受けられない。
それでもスバルも男だ。黙って縮こまっているほど、自尊心がないわけでもない。
「マイって何だよ」

スバルがありったけの勇気を総動員して突っ込む。

「確かに……。ロックマンに失礼だな。お前じゃロックマンとつり合わん」

シドウも突っ込む。それには何気に毒が盛り込まれている。シドウの計らいなのだろう。

「えっ？　あらやだ。私ったらつい……。って暁さん、サラっとなにか酷い事言いませんでした？」

ルナは突っ込まれたので顔をまたも赤く染める。どうやら彼女は感情が顔に出やすいタイプのようだ。

普段の言動から十分に推測出来る。シドウはルナの疑りを適当に流した。

「さぁー、どうだったかな。ハハハッ！！」

「暁さんっ！　笑うと傷口がっ！！」

スバルの忠告空しく、シドウはその場にうずくまる。確かにシドウの顔は有体に言えば格好良い。

だが、それだけだ。

「……おーい、そろそろ切り上げてくれないか」

天地がうんざりとした表情を全面に出している。よく見ると、そのすぐそばで宇田海が何かの作業に取り組んでいた。どうやら例のウィザード入りガラスを弄っているみたいだ。

その豊かな体格より醸し出す空気から推理できる。おそらく天地

はシドウに『早く仕事をしろ』と言いたいようだ。
宇田海もさっきからシドウをチラチラと見て様子を伺っている。
一人で黙々と作業する彼は子供達と楽しそうにお喋りするシドウに、何も言わず背中で語っていた。
そんな気持ちは、シドウには少し伝わり、スバルにも伝わった。
だがルナには伝わらなかった。

「あぁー……あれですよ、あれ……。よく言うじゃないですか……ヒーローは遅れてやってくるってね！」
「暁くん……」
「……ハイ、すみません」

ようやくシドウも仕事を始めたところで、今日の本題だった。
まさかこんなことが……。スバルはその大きな瞳を見開いて、ある一点を捉えて離さなかった。先ほどまで、宇田海が手を施していたウィザード入りの『筒』に心奪われてしまったのだ。
そんな筒の中には、ある一体のウィザードが……。いや正確にいえば、その中には人工電波生命体がスリープモードで待機していたのだ。

「どうだ驚いたか、スバル！？」

シドウがやたら嬉しそうにスバルに感想を要求した。

「ロ、……ロック……なの……？」

スバルはシドウの問いかけに耳を貸さず、ただ目の前で眠ってい

る電波体に魅入っていた。彼の胸の鼓動はある一つの期待で高鳴り、自然と握った拳に力が入る。だが、天地の一言によってその組み上げられた期待は瓦解する。

「スバル君……残念だが、それはウォーロックではないんだ」

嘘だろ、とスバルが天地に向き直る。

「……ウソでしょ？　だって、こんなにも似ているじゃないか……！　……瓜二つじゃないか！！　こういうのは、大体同じって決まっているんだ！　父さんが言ってた」

「いや、違う。これはウォーロックじゃない。……ホントは君だって、とっくに気付いてるはずだろう？」

「……だったら、僕の目の前にいるこれは誰なんだよ！？」

先端に輪っかの付いた腕をいっぱいに伸ばして、筒の中のものを示して見せるが、スバルもこれがウォーロックでないことに、ほんの少しではあるが気が付いていた。なのにスバルはそれでも尚、天地に問いかけたのであった。

これはウォーロックかもしれない。

そう胸に思いを抱きながら。

「確かにこれは、見た目こそはウォーロックと似ているけどね……。中身は全くの別物だよ、スバル君」

天地は続ける。表情はスバルの知るなかでももっとも真面目で、もっとも厳しい。それが優しさだ。

「――君の知っている彼じゃない」

スバルは下唇を少しだけ噛んだ。そういう表情をしている。

「やっぱり、そう……だよね……」

スバルは少し残念そうに天地の顔を見る。既にその表情には、大きな声を出してしまった事への謝罪の意が込められている。

年齢不相応の聞き分けの良さに天地の胸は少し痛んだ。

誰のせいとも言えないが、ただでさえ達観した子供だったスバルは、少し前から余計に子供らしくなくなってしまっている。

「似すぎだよ……」

スバルは無機質なガラスに話し掛けた。そして黄色い液体電波の詰まったそれに手をひた当て、少し寂しそうに中で眠っている虚構の友に微笑みかける。天地はそんな彼のいつも以上に小さく感じる背中を、じっと見つめているしかなかった。

シドウは、まるで自分の子供を見守るかの様な面持ちで佇んでいる天地に、自分の要求を伝える。

「天地さん……、そろそろ話を進めてもいいですよね？」

「……あぁ、頼むよ」

天地の了解を貰い、彼はスバルと向かい合う形になる様、ガラスの向こう側へ歩を進めた。そして、向こう側で揺らめくとんがりに対し、シドウは話を切り出す。その声からはいつもの調子は見受けられない、至って真面目である。

「スバル、こいつを見て何を感じた？」
「少しだけ、ロックの面影を……」
「本当にそれだけか？」
「……なにが言いたいんですか？」
「本当にウォーロックの面影だけしか感じないのかってことだよ」
「……？」

スバルはシドウの真意を測りあぐねている。

「あぁ、こんなこと言われても解かんないよな」
「えぇ、わかりませんよ」

要領の得ない発言を続けるシドウにスバルは眉をひそめた。そんな彼にシドウは苦笑いをしながらも話を続ける。

「なぁ、スバル……ぶっちゃけ何でオレ生きてると思う？」
「な、なんでって、そりゃぁ……」

スバルは話の先が見えないのもそうだが、シドウの問いかけの不可解さに困惑してしまう。

きっと彼の頭の中には、今さらになってこの人は何を言っているんだ。そんなの運が良かったとしか言えないのではないか、というような事が巡っているに違いない。

「運が良かったんじゃないですか？」

あまり深くは考えずに妥当であろう答えを返す。すると、向こう側で人影が頭をポリポリと掻いている形になった。

「あの爆発だぞ？　運が良かったって本当に思ってるんだったら……スバル。お前にしちゃ、ちょっと浅はかなんじゃないのか？」
「だったら、一体……」

スバルが『確かにそうかも』と言った感じで、人差指と親指とで顎を軽く支える。伏し目がちに、視線は地面に向いて思考を巡らす。

「あと一言、ちなみに俺のハンターもお前と同じで、もぬけの殻なんだ」
「ま、まさか……」

スバルは勘付く。

「そうだ。お前の考えてるとおり……アイツはいっちまったよ」

あいつとは、シドウの相棒でウィザードのアシッドの事だ。彼はシドウと共に幾多の任務をこなしてきた。そして、いつしかサテラポリスのエースと呼ばれるにまで至った。シドウとアシッドはとにかく強かった。強すぎたから、アシッドはもういない。シドウは生きている。シドウは守るために守られた。

「そ、そんな……」
「……アイツな、あの爆発する最後の……ホントに最後の瞬間に、『コレは、ワタシとヤツのモンダイです。ニンゲンであるシドウを巻きこむワケにはいきません』って言って、強制的に電波変換を解除しちまったんだ。まったく……今まで一緒にやってきたってのに、勝手に決めて勝手に行くんだもんな。後味が悪くてかなわないよ」

スバルは堪らずシドウの元に駆け寄る。かくいうスバルもまた、シドウと同じ経験を味わった故に自然と足が、前へ前へと誘われる。

駆け寄るスバルの目には、何も映らない空っぽなハンターをひらひらと構えてみせるシドウが飛び込んだ。彼の表情には少しだけ作った笑みが浮かんでいる。

「本当に……いない……の？」

「残念だけどな、これが事実なんだ。おかげでオレもこうして……生きてる」

シドウはそう言うと、少しだけニヤついて見せる。それはいつもの調子に近いものの様だ。

「ていうことは、もしかして……」

シドウの言いたいことにやっと気が付いたスバルは、少し後ろのガラス筒につま先を向ける。その先には液体電波を考慮しても、少し色の薄いウォーロックの様な人工電波生命体が、ぷかぷかと浮かんでいる。

依然としてその目には光が宿っていない。

「これには、アシッドの……」

「そうだ、アシッドとウォーロックコピーのデータの破片をコンバートして一つの電波体を作るのに成功したんだ」

「えっ？　ウォーロックコピー……」

その単語を聞いた途端、スバルは少し眉をひそめた。というのも恐らく、以前の事件の影響からウォーロックコピーに対して多少なりとも良くない考えを持っているからだろう。

それに、それは彼らが猛威を振るった事実から導く自然な結論であると言える。

「スバル、勘違いしないでくれよ」
「……えぇ、まぁ」
「確かに、奴らはディーラーの兵隊として沢山の被害をだした。だが、それはあくまでディーラーが故意に破壊ルーチンを施した結果なんだ。だから、そもそもウォーロックコピーはウォーロックの残留電波から情報を取り出しているだけなんだから、決してお前の考えているものとは違うんだぞ？」

シドウはそう言って傍の天地に目配せをして弁護を促す。

「まぁ、なんと言うか。おそらくウォーロックに一番詳しい、一科学者に言わせてもらうとだな。今回、彼の制作における全ての課題はクリアーしてるし、さらにヨイリー博士からお墨付きも貰ったんだ。だから彼が危険な訳ないだろう？　スバル君」

天地の説明にスバルは受け答える。その表情にはもう、疑念は見られない。

「うん、彼はきっと優秀な電波体になる気がするよ」

スバルがそう言うと話が一段落を迎える。

「ねぇ天地さん、さっきから気になってたんですけど、この電波体の名前は何ていうんですか？」

ルナがさっきから続く女性には退屈な話に痺れを切らし、もっともな質問を投げかけた。その薄い金色の目からは単純な好奇心しか読み取ることが出来ない。

彼女はそういう子だ。

「あ……っ、そういえば全然決めてなかったなぁ」

天地が困ったように頭を手で軽く押さえる。するとシドウが見計らったかの様なタイミングで話に加わる。

「そうだな、ロックとアシッドだから……。あっ、これがいいな！『トラッシュ』ってのはどうだ？！」

「えー……、私は『ルナ一号』がイイと思うんだけどな」

全員がルナのネーミングセンスに脱帽した。当然、褒め言葉ではない。

そんな沈黙が覆う室内には、やはり気泡が水を掻き分ける空気の音のみが聞こえている。

「イヤ、僕はトラッシュがいいと思うな」

沈黙をを破ったのはスバルだ。

「私もそう思います」

「ルナ君には悪いが……」

その場の全員が異口同音にシドウに賛成した。当然と言えば当然である、ルナの類稀な感性についていける人間など、この場には居合わせていないのだから。

「ぇえっ？！　何で？　カッコいいじゃないの、『ルナ一号』」

「イヤイヤ、委員長。一号ってのがちょっと……ね」

「それに自分の名前を付けてしまうのも問題ですね。というより、有り得ません」

恐ろしく珍妙な名前を付けておいて、本気で共感を得られると思っていたのだから、ルナには驚きだ。そして、当然の流れで話がまとまりつつある事を認識したシドウは、ガラス筒に手を宛がって宣言する。

「決まりだな！　コイツの名前は『トラッシュ』だ！」

シドウはニッと笑って見せる、彼の白い歯が眩しい。

「まぁ、委員長のよりはマシだと思うけど……」

スバルはそう言いつつも、手の様子から、少しだけもじもじしているのが確認できる。そして、彼は何か言いたいことがあったらしく続ける。

「あの……『コスモロック』ってのはどうかな？」

「ハイ、ダメ却下。なんかカッコ悪い」

シドウはすぐさま手でバツ印を作って見せ、スバルの意見を受理しないという意思を示した。

「そんなぁ、宇宙的要素をさり気なく盛り込んだ、素敵な名前だと思ったのに……」

「ダメダメ、そんな事言っても。もう面倒くさいから『トラッシュ』で決まりだ」

シドウは喉をコホンと鳴らして続ける。

「えー、サテラポリス実行部隊隊員、暁シドウの権限に基づきプロジェクトＴ．Ｃ／ＮＯ．０２実験体を『トラッシュ』と名付ける。

……ハイ、これで正式に決まったから」
「うわ、職権乱用なんじゃ……」
スバルは露骨に軽蔑の眼差しをシドウにぶつけるが、彼はそんな事を気にする人間ではない。
「オイオイ、職権乱用とは酷い言い様だな。まぁ、うまい棒は乱用してるけどな！」
シドウはそう言うと、どこかに隠し持っていた駄菓子を取り出して、彼曰く『乱用』をして見せた。
口が上下運動をする都度、軽快な音と食べカスが辺りにまき散らされる。そう、他でもない天地の所有する研究所にゴミをせっせっと生産している。
どうやらシドウは、お掃除ウィザードの仕事を増やすのが大好きらしい。
困った人である。
「暁君……、そろそろ勘弁してくれ」
天地はついつい、口から衝いて出してしまった。だが、彼からしてみれば堪ったものじゃないのは明らかなので当然の行為だと思われる。
シドウは天地の訴えに気が付くと、快音を鳴らすのをやめた。そしてすぐに、うまい棒から口を離す。
「あっ、スイマセン。……そろそろ、話の本題に入らないといけないですよね」

シドウは、天地に軽く頭を下げると、机の上にうまい棒を丁寧に下ろした。だが地面にばら撒いたカスには目もくれない。足元でカスの粉砕音を発生させながら、スバルに歩み寄る。

「なぁ、スバル……色々と冗長になってしまったけど、単刀直入に聞くぞ？」

シドウは、少し息を吸い込んで間を置いた。その目線はトラッシュを示している。

「コイツを……トラッシュをお前の新しいウィザードとして、迎え入れる気はないか？」

スバルは目を剥いた。天地と宇田海の密談からまさかとは思っていたが、そのまさかだったからだ。

「暁さんのウィザードになるんじゃないんですか？　僕はそう思ってたんだけど……」

「いや、俺はいいんだ。この体じゃ、もう前線に立つこともないからな。スバルに持ってもらった方が有効に活用できるはずだ」

「僕は……ロック以外のウィザードを持つ気はありません……。それにもう……戦う気はないんです」

シドウが驚いた表情している、夢にも断られるなどと思っていなかったのだろう。対して、天地と宇田海はある程度予測していた事態なので黙って頷いていた。だが、その表情は晴れやかではない。

「どうしてだ？　ウィザードがいないと色々と不都合があるはずだろ？」

「大丈夫ですよ、いなくたってナビを使えば何とかなります」
「スバル……」

渦中の電波体、トラッシュが眠っている培養電波の中を空気は居場所を求めてひたすらに昇っていく。その繰り返しは時を刻み続ける限り止まることはないだろう。

沈黙が空間を覆う。

「……考えは変わらないのか？」

シドウは静寂を切り開き、スバルに改めて確認をした。

「えぇ、僕には必要のないモノです」
「そうか……。残念だが、本人が嫌なら仕方がないな」
「すみません……」
「まっ、気にするな！」

少し落ち込んで見えるスバルを心配してか、シドウはスバルの肩をポンッと軽く叩いてやる。

「ははっ……」
「でも一つだけ言わしてくれ」

するとシドウはスバルの肩を持ったまま、スバルと目線の高さが同じになる様に少し屈んだ。スバルの茶色い瞳とシドウの濃い青色の瞳とが同一線上に重なり合う。

「お前がもう戦いたくないなら、それでいい。……いや、本来はそ

うあるべきなんだろうな」

シドウは続ける。

「だけどな、そうしたからと言ってお前が過去にやってきた事実が変わることはない。自信を失くすなよ、スバル。お前がスーパーヒーローである事実に変わりはないんだ」

「うん、ありがとう暁さん……」

シドウの笑顔にスバルも同じ笑顔で返す。

「まぁ、二週間先までコイツも最終調整で目覚めないだろうから、気が変わったらいつでも言ってくれよ。トラッシュもお前を待っているはずだから」

「ははっ、あまり期待はしないで下さいね」

シドウはそう言うと、ハンターに何やら入力してＷＡＸＡの研究室のものである連絡コードをスバルのハンターに送った。

『……ピピピッ、テキストデータ、ジュシン　シマシタ』

ｐｒｌｏｇ：僕の夢

すっかり日の暮れた夜のオフィス街の中、大小様々な光に溶け込むようにウェーブライナーはビルとビルとの間を縫ってコダマタウンへと突き進む。そんなニホンの技術の集大成である、騒音の一切ない車両の中でスバルとルナは向かい合って座っていた。

「ずいぶん遅くなっちゃったね」

「スバル君がのんびりし過ぎだったからじゃない？」

ルナはそう言って、口の片端を少し吊り上げて見せる。スバルは少しムッとさせられた。

「委員長も人の事言えないけどね」

スバルも負けじと、ちょうど横手にある車窓を見つつ皮肉った。そのスバルの顔は外の街灯に断連続的に照らされているせいか少し大人びて見える。

「あら、言うじゃない」

「たまにはね」

スバルは胸のペンダントを手で弄りながら少し考え込んだ後に、ルナの顔をさり気なく観察してみた。

「な、何よ？」
「……委員長、今日はありがと。ちょっと、楽しかったよ」
「フ、フン……、私的には、疲れただけだけどね」
「ワガママだなぁ……。キミが強引についてきたクセに」
「ダメだったの？」
「別に」

そう言いながらスバルは思いっきり伸びをした。

「はぁー、委員長じゃないけど僕も疲れちゃったよ。……少し休憩しよ」

彼はそう言うと、壁にもたれ掛かって目を閉じた。揺れることはまずないので寝るのにさほど苦労はしないだろう。

「寝ちゃうの？」
「……後で起こして」

スバルはそう言付けると、夢の世界へ旅立とうとする。だがそうしてしまうと、二人が座っている空間がやけに静かになってしまう。

ルナは逆に落ち着かない。

「ねぇ」
「……何？」
「良かったの？　トラッシュ」
「……。そんなに僕の変身が見たいのかよ」
「ロックマン様を見たいの」
「……もう、いないよ」
「分かってるわよ」

暫く経つとウェーブライナーはスピカモールの前を通過する。流石にショッピングセンター兼、アミューズメントストアなだけあって結構な騒音がしてくる。

下手に列車が静かなものだから、その音が余計、耳に付く。

だがスバルはそんな状況でも一向に反応を示そうとはしない、どうやら寝てしまったようで、スヤスヤと寝息を立てている。ルナはその寝顔を見ると、やれやれと言った感じで少し溜めた息を漏らす。

「まったく何が『ロックマン様はもう、いないよ』なのよ」

自分では気付いてないだろうが、ルナの口元は少しほころんでいる。

「ロックマン様なら、私の目の前で寝ているじゃないのよ……」

『……ルナちゃん、スバル君に直接言ってあげたらいいのに』

「……恥ずかしいのよ」

ウェーブライナーは闇夜を駆けていく。

『次いはぁ、コダーマー、コダーマー』

いつの時代であっても、車掌のアナウンスは奇妙なものである。

さらに言っておけば、これは人間でなくウィザードが言っているのだから、妙な慣例としか言いようがない。

「スバル君、起きてっ。もうそろそろ着くわよ」

ルナはスバルの体を揺する。今のところは優しく揺ってあげている。

「うぅ……、父さん……ロック、待ってよ……行かないでよ……僕を……置いていかない……でよ」

どうやら、スバルは父親とウォーロックの夢を見ているようだ。だが、決していい夢ではないのだろう、スバルとルナの表情がそう物語っている。

「まったく、この人は……。わざわざ居眠りしてまで嫌な事を思い出さなくてもいいでしょうに……」

手を目一杯振りかぶって、ルナはスバルの背中を思い切り、引っぱたいた。いい音が車内に鳴り響く。

スバルの悲鳴も一緒に。

コダマタウンに着いたウェーブライナーはルナ達を降ろし、次の目的地に向かい闇の中へと消えていった。ホームに安全柵形のマテリアルウェーブが形成されるとスバルがこぼす。

「まったく、何なんだよー、いきなりさぁ」

「別に何でもないわよ？　蚊が飛んでたのよ」

どうやら、スバルは夢の内容を覚えていないようなので、ルナは敢えて理由は話さずに誤魔化しにかかる。だがそれにしてもルナは嘘が下手だ、四月に蚊はまず飛ばないと思われる。

「蚊？　そんなバカな」
「もういいでしょ、男の子なんだからちょっとぐらい我慢なさいよ」
「我慢って……なんか違う気が……」
「ハイハイ、もう行くわよ」

ルナはツカツカと自宅に向かって歩き出す。しばらく歩くと、彼女は振り返って後ろの方でぶつくさ言ってるスバルに言い張る。

「ちょっと、レディに夜道を一人歩きさせる気？」

ルナはそう言っているが、腰に手を当て仁王立ちしてる彼女は少なくとも、か弱くは見えない。

「ちょっ……、何、勝手言って……」
「早くー」
「はぁ……もうメンドクサイや」

スバルは半ば強制的にルナの付き添いをする羽目となった。でも傍目、二人は仲良く歩きだす。

「……ほら、しゃんとしなさい」
「わかってるよ。うるさいなぁ」
「うるさい……？」
「スミマセン」
「よろしい」

そんなこんな言いながらも、ビッグウェーブ近くの公園まで二人は辿り着いた。店頭の明かりも消されていて辺りは静まり返っている。

「もうそろそろ着くころだね」
「そうね。……あっ、見てスバル君っ」

ルナはそう言い夜空を見上げてスバルの手を引っ張る。ルナが指差す先には、一面に広がる夜空に星が所狭しと自己を主張し合っている。

それはまるで真っ黒な暗幕に白いペンキを滴らせたみたいであった。

「ねぇ、スバル君。あの星は何ていうの？」
「……」
「どうかした？　こういう時こそ、アナタの出番じゃないの？」

スバルはさっきからずっと、うつむいている。いくら星が出ているとはいえ、地面に向けられた顔は真っ黒に塗りつぶされていて表情が読み取れない。

「……スバル君、　どこか痛いの？」

スバルの小さな胸が痛がっている。

「い、いや何でもないよ……何でもない……」

スバルはそう言うが、どう見ても何でもなくはない。手が震えているのに何でもないという道理があるはずがない。

「……。スバル君、ちょっとこっちに来なさい」

ルナはスバルの手を引いて、公園に向かう。真っ暗だけど、隅っこのベンチの所にはひっそりと外灯が灯っている。ルナはそこに座

ると、スバルにも無理やり座らせる。

「……アナタ、最近おかしいわよ？　なにか無理してるんじゃないの？」

「……」

スバルは相変わらず押し黙っている。

「ちょっと黙っててもわかんないでしょっ、聞いてるの？！」

スバルが不意に口を開く。

「……いつもなんだ……いつも、見るんだ」

「なにを見るの？」

「父さんとロックが夢に出てくるんだ……」

「あっ……」

先の列車でスバルを苦しめていたものの事だ。スバルはいつも苦しんでいる。流星事件からいつも苦しんでいる。戦う事に疲れ切っていたのも正直なところだ。だから逃げる。だけど夢を見る。だから悪夢になる。

「追いかけても追いかけても手が届かないんだ、必死に呼びかけても、連れ戻そうとしても……二人は行っちゃうんだ……空の向こうに」

「ずっとそれを……？」

ルナの問いかけに、小さくスバルは頷いた。スバルは夜空が怖いのかもしれない。怖くなってしまったのかもしれない。スバルの父、大吾が愛した宇宙に恐怖を感じ取ったのかもしれない。だが、乗り

越えなければいけないのだ。スバルもそれは分かっている。

「僕だって、いつまでも引きずってちゃいけないって分かってるんだけど……」

スバルは歯を食いしばった。

「だ、だけど、頭の中に父さんとロックがちらついて離れないんだ。……もしかしたら僕は、父さんとロックを宇宙に置いてきた事をずっと後悔しているのかも知れない。――前に進まなきゃいけないのに」

スバルは終始、流星のペンダントを見つめながら話している。

「仕方なかったのよ。アナタは精一杯戦ったし……今も戦ってる」

「僕が……？」

「そうよ。　だって必死に足掻いてるじゃないの。それって諦めてないってことでしょ？」

「……ありがとう委員長、少し楽になった」

「どういたしまして……アナタの将来の夢は？」

「う、宇宙飛行士」

「いい夢じゃない」

ルナはスバルの顔を覗き込んで、にっと笑ってやる。励ましているのだ。

「だから、こんなにきれいな星空を嫌いになっちゃだめよ？　アナタは星河スバルなんでしょ？　私の知ってるスバル君なんでしょ？」

スバルもルナの顔を見返す。感謝の気持ちもあったが、単純に勇

気付けられたのだ。

「ホントにありがとう」

ルナとスバルは互いに笑い合えた。近所迷惑にならない程度にひっそりとだが、確かに笑っている。確かに夜空は綺麗で美しい。スバルが宇宙が好きになるわけである。

「それじゃ、また明日学校で」

「ええ、それじゃあね」

ルナのマンションの前でお互いに挨拶を済ますとスバルは自分の家に帰っていった。スバルの背中が見えなくなるのを確かめてから、ルナもマンションのセキュリティドアに向かう。

「ハァ、これから塾なのよねぇ……私」

どうやらルナは塾があるのにも拘らず、スバルとの時間を優先したようだ。とぼとぼとルナは高級マンションに向かって歩き出す。その足取りは少し重い。

ルナのマンションは高級で厳重なセキュリティを持つ。その風貌は高級で、庶民には手の届かないものだ。これは夜のコダマタウンで燦々と輝く光の塔だ。そんなルナの入居している部屋の前には認証システムがある。これをパスしなければ部屋内は入れない。ルナは適当にカメラのセンサーに手をかざす。すると赤い光線がルナの眼球を撫でまわす。

そして許可を下す。

『カクマク　イッチ　オール　コンプリート』

セキュリティをパスした。ルナはエレベーターから降りて、三部屋またいだ所の部屋に入ろうと、玄関のドアを開けた。

「ただいま」
「お帰りなさいルナ。今日はずいぶん遅かったのね？」
「うん、ちょっとね」
「スバル君？」
「う、うん」
「そう、まぁいいわ。早く支度なさい塾に遅れるわよ」

ルナは少し嫌そうな顔をする。

「ダメよ、そんな顔しても。アナタは明日から六年生なんだからしっかりしないと」
「うん、分かってる」

あまり塾の話はしたくない様でルナは話題を変えてみる。

「ねぇ、ママ。今日の夕食は何？」
「ええ、ちゃんと用意してるわよ。フードディスペンサーにあなたの好きそうなものを何種類か登録しておいたわ、帰ってきたら食べなさい」

フードディスペンサー、便利なものである。わざわざ労さなくても、勝手に好きな食べ物を作ってくれるのだから、誰だって使わない訳はないのだ。

ルナの母親だって例外ではない。しかしながら当然、人間の手が加わらない料理に子供達は愛情を感じることはない。技術の進歩した、今日の社会ではそうやって育ってきた人間はもう珍しくはなくなっている。ルナもその枠組みの中に入りつつある。

「ママ……私、思うの。いっぱい勉強してママみたいに立派になるのも、もちろん大切だけど……」

言葉の途中でルナは部屋を彩る様々な装飾品を見渡す。それらには高価な物が多々見られるが、家族との思い出と言えるものはほとんどない。あったとしても社交的な場で、堅苦しい服を着込んで映っている写真が数枚で壁の寂しさを紛らわしているぐらいで、それ以外にはルナが白金家たる所以の賞状や盾、トロフィー等がガラスケースに整然と収められているだけだ。

「でも、それだけじゃ……何か違う気がするの……」

そう言って、塾の支度もせずに自分の部屋へと行ってしまった。

「ルナ……」

strdst_00：流れゆく世界（前書き）

前編　スバルとトラッシュの物語

ｓｔｒｄｓｔ―００：流れゆく世界

新しい日々の始まりを告げるかのように、コダマタウンはピンク色の美しい色彩に包まれている。四月となり、新しい一年が始まる。それは始まりの予感を告げるのだった。

そして次第に短くなりつつある休憩を終えた太陽が、星河家に光を配りはじめて、二時間強。

小鳥の囀る音色が、今日の朝は気持ちがいいものだと教えてくれる。始業式日和な様で何よりである。

不意にカーテンが春風に撫でられると、キッチンの中の様子が確認できた。その中で、スバルは寝惚け眼を擦りつつテレビを見ながら朝食をとっている。手には焼きたてのパンと砂糖入りのコーヒーが一つ。

「スバル、今日から六年生ね」

テーブルの向かって反対側に座り、同じく朝食をとっていたあかねは、スバルと違い砂糖の入っていないものを口に含むと尋ねた。

「まぁね」

「心境の変化は？」

あかねは手に空気でつくられたマイクを持って笑みを含める。スバルはそれを見るとどうしても、あのうるさいマスコミ――スバル

がロックマンであることに気づいたのでインタビューしようとスバルの家の前で張っている人達――の事を思い出してしまう。とりあえず、彼は苦笑いを浮かべることにした。

「あはは……、特に変わったとこはないですね。ハイ」

とりあえずあかねの調子に併せて言ってはいるが、彼は別段おかしな事は言っていない。変わらない担任、変わらないクラスメートといった具合に、あくまで形式的なもので実態の変化は見込まれないからである。

「まぁ、それはそうよね」
「そうだよ」

彼がそう言った後、スバルのパンは皿から姿を消した。

「ふふっ、そうね」
「ごちそうさま」
「はい、おそまつさまでした」

スバルは自分の出した洗い物を洗い場へ運ぶと、二階に上がっていく。そして少し経つと上の階から、ドタドタと慌ただしい音が聞こえてきた。

本人の与り知らぬところで、前もって学校の準備をしていなかったのだと物音があかねに白状させた。

「ふふっ……スバルも、もう六年生なのね」

あかねは好き勝手に何か言っているテレビの向こう側を見ながら呟いた。

「ついこの間、小学校に入ったと思ってたのにもう最終学年……か」

コーヒーカップから淡々と吐き出されていた湯気が、だんだん申し訳程度になってきていた。

「あっという間に時間が過ぎるものね……」

あかねはそう言うと、何となしに壁に貼り付けられたテレビに目をやる。

《えー、ここ最近、頻発しているこの事件についてはどう思いますか？》

どうやら、何かの事件について考察しているみたいだ。相も変わらず、ある事ない事言っており不毛な情報が発信されている。

《……である観点からして、女性ばかり狙う犯人はかなり狡猾残忍な性格だと思われます》

あかねはリモコンのＯＦＦボタンを押す。

「また物騒になってきた様ね……」

そう言って引出しに乗せられている赤黒い石を見つめた。それはスバルがボロボロになりながらも手にしっかり握りしめて、持って帰ってきた隕石の破片である。

「本当に……時間がたつのは速いものね」

「母さん、それじゃ行ってくるよ！」

彼はそう言うと、テーブルに置いてあった緑色のメガネを駆け抜けざまに掴みとる。そして額少し上の定位置に乗せると慌ただしく玄関へと向かって急ぐ。どうしてだろうか、さっきからスバルは必要ないくらいに慌てている。

そのおかげで、手首の輪っかが萎んだままになっている。

「すごくお急ぎの様だけど、忘れものはないわね？」

「多分、大丈夫！」

「多分て……あっ、コラ」

スバルは母親を華麗に抜き去ると一言。

「命に関わるんだっ」

「そんな言い方は可哀そうよ――って、手首っ手首っ」

あかねは自分の手首を突っついて教えてやると、スバルは急ぎながらも、あかねににっこりと笑って見せた後、特徴的な輪っかを作ってサッサと外に出ていった。

息も絶え絶えなスバルは、玄関を出ると手を膝にやって呟く。

「よし、ぎりぎりセーフ……」

「――じゃないわよっ！」

胸をなでおろし安堵する間もなく、庭の向こうの方からスバルにとってお馴染みの声が意味を付け足し否定した。

「んもうっ、遅いっ、遅いじゃないの！」

「ようっ、スバル！　朝飯ちゃんと食ったか？」

「スバル君、お久しぶりです。元気にしてましたか？」

「……わぁ」

顔を恐る恐るあげると、お約束の三人組が真ん中で腕組みしている少女を中心にスバルを待ち構え、横に展開していた。向かって左から、全体的にでかいのと、髪型がでかいのと、全体的に小さいのが並んでいた。

大、中、小、から成るそれはまるで、美しい下降グラフを見ているようだ。スバルが左から三番目に立てば問題なく綺麗に出来る。

「……やぁ、みんな、おはよう」

スバルが挨拶をすると、ルナは星河家の敷地内に手下を率いて侵入してくる。

「えぇ、おそよう」
「おそよう……？　――ってちょっと、勝手に入ってくるなよ。僕んちだぞ」
とりあえず、抵抗の意思を示してみる。
とりあえず。
「アナタの家は私の家よ！」
「なっ……！」
ルナは使い古されて今じゃ誰も言えない、伝説の暴君の生き様を言い放つ。意味はまったく分からなかったが、その迫力にスバルは気圧されて思わず俯いた。
何のことはない、人間は身の危険を感じると縮こまってしまうものである。
「あのぉ、委員長、そのセリフは、俺が言った方がいいんじゃ……」
ゴン太がボケる。
「ゴン太君！　シッーー……」
前述の小さいのことキザマロが同じく大きいのことゴン太を自重させる。何故なら、キザマロは分かっているのだ　――今のルナは危険だと。いわゆる、触らぬ神に何とやら――それは、彼のバイブル『マロ辞典』とウィザードの『ペディア』が算出した、一番生産的な解だ。

「……」

スバルは心臓の高鳴る鼓動を耳で感じ取りながら、ルナの動向を探っていた。

ルナの細い足がスバルの視界に入ってきた。それらは左右交互に規則正しく前に出してスバルに近づき、目の前で止まる。意図的ではないにしろ、結果的にスバルがルナに頭を下げて謝っているような図になってしまった。

「ごめんなさいっ！」

スバルは何を謝ろうとと思ったのか知らないが、謝らなければと思ったのだろう、彼は目を瞑って嵐が通り過ぎるのを待つことを決め込む。

その次の瞬間。

「（スバル君、聞こえてる？）」

ルナが誰かに盗み聞きされまいと小声で耳打ちをする。その様子は明らかに周りを気にしていた。

「えっ？！」

「（声が大きいっ！）」

「（あっ、うん……聞こえてるよ）」

スバルは状況が飲み込めないまでも、とりあえず返事をする。

「（いいこと？　今日は大漁よ）」

「（大漁？　……ま、まさか）」

「（そう、そのまさかよ）」

スバルの顔が一気に面倒くさそうになった。恐らく、学校に行くのも面倒くさくなっていることだろう。

「（家の門の前の茂みに三人……、ビッグウェーブ前に五人、学校の正門前に十人よ）」

「（うわぁ……）」

「（あなたが早起きすれば避けられた事態よ）」

スバルはがっくり項垂れて

――こんな時、嫌でも思うよ。電波変換出来ればどれだけ良かったか――

とそんな風な表情を浮かべている。

ｓｔｒｄｓｔ＿０１：面倒な奴ら（後書き）

ｓｔｒｄｓｔ―０２：暗黒からの侵略者

地球から遠く離れた、木星付近地帯。

そこで遥か遠い所で輝く太陽の光に照らされ二つ影が薄らと揺らいでいた。片方は人型で、もう片方は獣のような形をしている。彼らの足取りから察するに、どうやら宇宙を散歩しているのではなくて、何か目的の場所に辿り着こうとしているのが窺える。

「へっ、もうちょっとだぜ。まったくエライとこまで飛ばされちまったな」

獣の姿をした影が言った。彼の金属質な装甲は太陽風の影響で劣化していて痛々しい。

「そう言うな。いくら子供の質量とは言え、あれだけの距離を運ばせたんだ。当然の釣り合いさ」

「俺は巻き添えだぜ？」

「ふっ、心にもない事を……」

屈強な肉体の電波体が少し息を吐き出し笑ってみせる。だがその表情はもう疲れきっていて、限界が近い事を皮肉にも示している。

「最後のふんばりだ。ヘタるなよ」

「お前こそな、地球に着くまでに泣き言言うんじゃないぞ」

「ＡＭ星人の俺様に言うセリフじゃないぜ、大吾」
「そうだったな、ウォーロック……よし、急ごう」
「当然だ、アイツの驚く顔が早く見たいぜ、へへへッ」
「あかねのもな」

そう確認し合うと、二人は手の加えられていない、宇宙の中心から発せられ続ける輻射で出来ている原始的なウェーブロードに乗り地球へと急ごうとする。

「よしっ、ひとっ飛びだぜ！」

すると、大吾は腕を横に突き出して、先走りそうになっているウォーロックを制止する。大吾は険しい目つきで前方に漂っている惑星になり損ねた岩の破片に注意を注いでいた。それは太陽の目の前に浮かんでいるせいで黒く塗りつぶされていて細かな状況まで判別できない。

「どうした？」
「何かいる……感じるだろ？　ウォーロック」
「！！　――チッ、コイツは相当な数だな……」

ウォーロックは舌打ちをすると臨戦態勢に入る。その紅い目は既に何百との戦闘状況をシュミレートしているようにさえ感じる。
流石はＦＭ星の誇り高き戦士と言われただけのことはある。

「いや待て、まだ俺たちに危害を加えるとは決まっていない。それにまだ奴らに気付かれてないハズだ。ここはやり過ごそう」
「何言ってやがる！　こんな所で集団ピクニックってか？！　へっ、ありえねーな。地球に何かする気に決まってやがる」

ウォーロックは大吾の制止を振り払って、星屑に突っ込んでいく。その様からは躊躇など微塵も感じられない。

「待てっ！　ウォーロック！！」

大吾が叫んだ次の瞬間、星屑が少し横に流れてそこから太陽の光が漏れだしてくる。そのあまりの眩しさにウォーロックと大吾は目を塞いでしまった。

そして、光を背負って中型の宇宙船のようなものがその姿をゆっくりと露わにする。真っ白なバックからシルエットのみ切り抜かれているが、その少ない情報だけでも十分にその宇宙船らしき物体が地球の物ではないと容易に認識できる。

――それほどにその黒い物体は異様な形相をしているのだ。それは――まるで違う世界から来た侵略者であるかのように不気味に浮かんでいる。

「コイツはとんでもねぇな……！」

ウォーロックは目を開けると、自分の体積の何万倍もあろうかという宇宙船を見上げた。そしてそれを注意深く観察すると、ウォーロックは見覚えのある紋章を見つけてしまった。

結果、先ほどのウォーロックの憶測は現実のものとなる。

「なっ……！　こ、これは……マジ……か……！？」

明らかに動揺するウォーロックに対し、さらに追い打ちをかけるように宇宙船の内部から何者かが信号を送ってくる。

『フフフ、大真面目だとも……ボクの憎っくき　――ウォーロック

よ……』

「この声は……お、お前……！！」

『覚えていてくれたのかい？　嬉しいよ。フフフ……』

ウォーロックは何かを確信すると、大吾に思いっ切り叫ぶ。

「大吾ーー！！」

彼の異常な焦り具合に大吾も何か感じ取ったようだ。

「どうしたんだ？　ウォーロック？！」

「コ……コイツ等だけは、地球にやっちゃいけねえ……！」

「なんだと……！！」

「説明は後だ！！　今は戦闘に集中するんだ！　力を貸せ大吾！！」

大吾はウォーロックの余裕のない態度から、とんでもない事態を連想させた。

そして、ほんの一瞬考え込んだ後、ウォーロックに伝える。

「……わかった！　やるぞウォーロック！！」

「死ぬんじゃねえぞ……大吾」

「俺は絶対に死なん！　スバルとの約束は絶対に守ってみせる！！」

「へっ、……その前に地球を守らなきゃな。――行くぜぇっ、大吾！！！」

ウォーロックが猛ると、大吾は右腕を頭上に掲げてウォーロックと同様にして叫ぶ。

「電波融合！　星河大吾！！」

眩い光を伴って大吾が流星の戦士に姿を変える。すると、同時に宇宙船から蜂の子を散らしたかのように謎の電波体が沸き出し、あっと言う間にロックマンを囲んだ。

『へっ、これくらいやってくれなきゃな！』

ウォーロックが強がって見せると、それを合図に戦闘が始まる。

その戦いは暗い宇宙を閃光が四方八方絶え間なく貫き賑やかせる。青い流星が光の線で入り乱れた宇宙を縫うようにして必死に食らいついている様子が見て取れる。

僅かにではあるが、だが確実に流星を取り巻く軍勢の密度が希薄になってきている。その事実は、ロックマンの勝利を予感させてくれる。

『大吾もう少しだっ！　踏ん張れ！！』

「あぁ……、これで止めといこうか。　――バトルカード、カイザーナックル！！」

ロックマンが素早くハンターにカード――これを使うことによって様々な武器や能力を使える――を読み込ませた。すると左腕が青白く光り出しデータの読み込みが完了したことを示す。

彼は周りを囲む謎の粗末な電波体群を一通り見渡し確認すると、ロックマンは輝く拳を目の前の何もない空間に打ち込んだ。そのあまりにも速い拳の弾丸は宇宙の薄すぎる微粒子さえも伝い震わせ、周りの空間を無音高速の衝撃波で一掃する。

その衝撃波は、ロックマンの周りで生きていた電波体の命をすべて摘み取った。

「ふぅ……」
『やるじゃねぇか……大吾！』
「まだ、肝心な奴が残っている」

そう言いロックマンは決意を固め、宇宙船を見据える。それに答えるかの様に宇宙船から一体の電波体が降りてきた。宇宙船の大きさに比べるとその電波体はあまりにも小さく思える。せいぜいロックマンと同じくらいのものであった。だが内に秘めているチカラはこの場にいる誰よりも強い。

――そう、ロックマンよりも。

「やるじゃないか……ウォーロック？」

その電波体は無機質な仮面から覗かせる、やはり無機質な瞳を怪しく光らせ言うと、さらに続ける。

「……いや、ロックマンと言っておいた方がいいかな？　フフッ……、にしても、ボクの知っている彼とは随分違うね……、スバル君じゃなきゃ、ボクのこの思いは鎮まらないのに……。――こんなオッサンじゃダメじゃないか」
『テメェこそ、しばらく見ねえ内に随分、変わっちまったじゃねぇか？』

嫌味を垂れるウォーロックに電波体は言い放った。

「そうっ！　僕は変わったんだ！！　全ては君から大切なモノを奪い取るために力を手に入れ、帰ってきた！」

『前からいけすかねぇ奴だったが、……もう生かしちゃおけねぇ！
今度は残留電波も残らないぐらいにギタギタにしてやるっ』
「こっちのセリフだよ。ボクは君から大切モノを奪ってみせよう。
……スバル君は後回しで、まずはその人間からだ……！」
『クソヤローが』
「スバルに手を出させやしない……！　行くぞ！！」
『オウよっ！！！』
「フフっ……ハハハッ！　ウォーロックに絶望を……！！」

次の瞬間、宇宙が明るく照らされた。その光は憎しみと守りたいという強い想いとが重なり、混じり合い、両者の思いが強ければ強いほど宇宙を燦々と輝かせていく。

ｓｔｒｄｓｔ―０３：小さな美女と大きな野獣

完璧に包囲された庭につっ立ちながら、スバルはルナに問いかける。もちろん周りに感づかれないようにひっそりと。

「（困ったなぁ……、どうしようか委員長？）」

「（決まってるじゃないのっ、強行突破よ！）」

ルナはそう言うと、ゴン太に目をやった。明らかにその目は何かを期待している。

「何だ委員長、俺の顔に牛丼でもついてるのか？」

「（違うわよバカ。あんた牛の化け物みたいなウィザード持ってたでしょ？　あれで変身なさい）」

「えぇー！？」

顔に牛丼の付いていないゴン太は訳も分からずにただ驚く、それに続けて牛の化け物みたいなウィザードことオックスが文句を垂れる。

「ブルルルロオォイッ！　聞き捨てならんぜ委員長ーー！！　オレ様にはオックスってイカした名前があるんだぜーー！？」

オックスは特別、印象的な声を馬鹿みたいに張りあげた。どうやら彼は音量を調節するということを知らないらしく。悲しいかな、ゴン太のウィザードだと思わずにはいられない。

主人同様、お頭が空っぽなのだから。

「アンタうっさいのよ、静かに喋れないの？！」
「ブロロゥ……」

オックスは思わずシュンとしてしまった。流石は委員長の子分であるゴン太のウィザードと言ったところか。もはや、ＦＭ星の特攻隊長と言われていた頃の面影は微塵も感じさせない。
ただのしがない電波体がそこに佇んでいるだけだ。

「ほらサッサと変身しちゃいなさい。奴らの注意を引いてくるのよ！」

ルナはそう言ってゴン太たちに、早くしろと目で伝える。ルナに逆らえないゴン太とオックスは渋々言うことを聞くしかなかった。

「行くぞ……。オックス」
『ブローイ』

ゴン太はオックスに合図を送ると、ポケットからゴソゴソと何かを取り出した。それは一見汚い電子カードの様ではあるが、牛丼のシミや食いカスで無様に装飾されており判断は非常に困難なものとなっている。そして彼は、精密機器に汚物を加える事に全く躊躇せず、それをハンターに読み込ませる。

「トランスコード００５ぉ……オックス・ファイアぁ……」

ゴン太は明らかにやる気なさげに変身の口上を唱える。しかしやる気はなくても変身は出来るらしく、ゴン太の周りに電波解放したオックスがゴン太を絡む様に包み込んで真っ赤なエネルギー球体を形成する。すると、その光の中からかなり大型の電波体が姿を現し

た。スバル達の五倍はあろうかという大きさだ。

「ふぅ、コレでいいのか？　委員長……」

デカブツが聞く。

「もちろん！」

ルナはそう言うと突然、息を大きく吸い込んで外の方に向かって勢いよく駆け出す。

「ブロ？　ちょっと委員長?!」

「キャーー、助けて!!　牛の化け物が出たわー!!」

ルナは真に迫る大声を出して、スバル目当ての客人たちに自らの危険をアピールする。すると、ルナの迫真の演技に騙されたのか、はたまたスクープの匂いを感じ取ったのか、物陰という物陰からカメラやらマイクやらを持った人達がぞろぞろと姿を現し出した。

ルナはそれを確認するとオックス・Ｆに向き直って、

――ほら、サッサと私を襲いなさい――

目でそういう合図を送って再び逃げ出す。

「ブロロ……、マジかよ。完璧、俺、悪役じゃん……」

「スバル君の為です。頑張ってください」

キザマロはシレっと言って学校に行く準備をする。他人事だからとはいえ、薄情なものだ。

「く、くそう……。もう、どうにでもなれっ。スバル！　俺の雄姿見とけよ?！」
「はは……、ご愁傷様です」

スバルが合掌するとオックス・ファイアは一瞬、微妙な顔をするも自慢の瞬発力を以って、スクープに飢えた記者共が待つ外の世界に突っ込んでいった。

「ブロローーー！！　悪い子はいねがーーー！！?」
「うわっ、マジで出たぞ！！　ほらカメラマン！　写真、写真！　スクープだ！！」

やはり当然、ゴン太はフラッシュの連射に襲われた。その図を見る限り、ゴン太は悪人以外の何者でもないと言わざるを得なかった。残念だが、それ以外の形容が見つからないのである。

もちろん貪欲な報道陣はそんなゴン太を一気に悪者に仕立て上げにかかった。その迅速な手際は流石としか言いようがない。

当のゴン太はとりあえず出てはみたものの、どうしようもないので形だけの威嚇をしている。その光景は、なんだか切ない。

「えー、皆さま。見ておりますでしょうか？　私たち、報道陣はロックマンが住んでいるという噂のコダマタウンまで来たわけですが……。――なんとっ、そこでは私たち目の前で、少女が奇抜なコスプレをした大男に襲われているではありませんか?！
――この絶体絶命のピンチにロックマンは駆けつけるのでしょうか！？　――真相はＣＭの後！！」

まったく、テレビというものは何事も面白おかしく伝えるものである。しかしながら、真実よりもエンターテインメントばかりを優

先するその分野ではそれは当然の事なのかもしれない。
なので、この状況から言えるのは彼が注目を集めてくれているその隙にスバルが学校に行ってしまうというのが最良の選択であろう。

「さ、スバル君、行きましょうか」
「う、うん。ゴメンよ……ゴン太。後で牛丼奢ってあげるからね」

スバルとキザマロは、野次馬と報道陣で一杯になった通学路をすっかり見世物となっている怪人とルナに感謝しながら歩いていき、その場を後にした。

ｓｔｒｄｓｔ―０４：生徒会長の初仕事

ワイワイガヤガヤと人間達の発する声が混じり合い、ある種不思議な音質の雑音が教室を埋めていた。そこでは子供達が各々それぞれ友人達と、春休みの思い出や、興味深かったイベントについて、お喋りという名の情報交換している。

スバルもそんな教室の窓際の後ろの方の席で、やはり例に洩れず親しい友人に囲まれて座っていた。

「今日は、大変だったね」

スバルは、一日が始まったばかりだというのに、既に金曜の六限目の算数の抜き打ちテストで惨敗したような面で、飼育している蛙を見つめているゴン太に話しかける。

「まったくだぜ。これも全部、お前が早起きしなかったせいなんだからなっ」

「あー、ゴン太には言われたくないよ」

そう言うとスバルは、ゴン太が作ってきたであろう、ひどい寝ぐせに視線を送る。この分だと顔も洗ったかどうか疑わしい。

「うるせえ！　お前今度、牛丼奢れよな！！」

「もちろん、そのつもりだよ」

「マジか？！　お前やっぱりイイやつだな～」

さっきまでの不満もどこ吹く風で、でかい図体を存分に駆使して歓喜の舞を見せてくれるゴン太は、牛丼さえ貰えれば、スバルの為に何でもすることだろう。
彼は牛丼に命を賭けているのだから問題ない。
「ゴン太君は単純ですねー。――ねぇ委員長？」
キザマロはルナに同意を求め、いつもの定位置に振り向くが、そこには誰もいなかった。
「あれ、委員長？」
「委員長なら、あっちだよ。キザマロ」
ゴン太がばら撒いた、近所の牛丼屋の広告データを眺めているスバルが指差した先には、机に座って何やら文書データと睨めっこしているルナの姿があった。その表情は真剣そのものである。
いまの彼女に近寄るのはよした方が賢明だろう。
「生徒代表で答辞を言うんじゃないかな？」
「大変ですね」
「流石は、生徒会長と言ったところだね」
「ですね」
「うん。――あっ、この牛丼屋さん安いなぁ。ここにしよう」
「……」
キザマロは切なそうにスバルを見つめていた。

スバル達が下らないが、それ故に大切な友との一時を過ごして早一五分強、時計の短い方の針が九数字に近づいて来ていた。
もうそろそろ、朝のホームルームが始まるころだろう。

キーンコーン、カーンコーン

予鈴がコダマ小中に鳴り響く。この魔法の音波は、どんなに煩雑な子供達の配置図も、たちまち碁盤目状に綺麗に並べてしまうのだから敬服せざるを得ない。

――だがその魔法が効かない少年が一人。

スバルが、いい加減にしろという視線を送るが時すでに遅し、教室前方のドアの前に特徴的なシルエットがもう浮かび上がっていた。その特徴的な記号は、人の頭に乗せるにはあまりにも巨大だった。なまじでも鳥の巣に使えば、十分な役目を果たしてくれるはずだとさえ思う。

「おはよう、みんな元気にしてたか！？」

戸が自働に開くと例のシルエットの本体が現れた。彼は横に広い体を教卓に置き、恒例の挨拶をすると、規律を乱している一人の生徒に気が付く。

「みんな元気にしてたか？　……って、オイっ！　牛島、教室で暴れるんじゃない」
「あっ……、スイマセン、牛丼で浮かれちゃいました」
「牛丼て、お前なぁ……」

教室がドッと湧いた。もうじき看板が変わるわけだが、このパターンは5年A組では珍しくない、見慣れた光景だ。

「まぁ、いい。　よし、みんな良く聞けよー？」

アフロが注目を集める。――アフロは確かに目立つが、ここでのアフロは人間の方のアフロのことである――

「今日はご存知の通り、始業式だ。これから、お前たちに新しい一年がやってくるってことだな。気分を新たに頑張れよ！」

「センセーイ、でも五年から六年てクラス替えは無いんですよね」

マルコメ見たいな風貌をした生徒の一人が質問を投げかける。

「まぁ、そう言う訳だが、まったく何もかもが一緒ってわけじゃないぞ？」

「それはどういう事ですか？　マジ、ありえないんですけど？」

随分と昔に絶滅したと思われる、古典風なしゃべり方をする少女が、前述の事柄をあり得ないと申し立てた。

「マジありえるんだなー、コレが。――まぁ、お喋りはここら辺にしといて、お前達は廊下に並ぶように。もちろん、出席番号順にだぞ」

「ハーイ！！」

教室の全員が元気よく返事をするのを確認した育田は一コマ置いてから、教室の中央で座っているルナに手をチョイチョイ、として呼び出す。それに対してルナは、急ぐでもなく、もたつくでもなく、落ち着き払って育田の元に赴く。

しかし、現時点でルナは極度の緊張から正常な思考が及ばなくなりつつあり、手と声の震えを押さえるので精一杯だった。でも負けず嫌いで、意地っ張りの普通の少女は、平静を装うことでしか現状を維持できないのである。

その行為が自分の心の余裕をすり減らしているとも知らずに。

「なんでしょうか、先生？」

「まぁ、特に何ってわけじゃないんだが、……お前が生徒会長になって初めての仕事だな。気負わず頑張れよ、白金」

「は、はい！　もちろんですわ！」

コダマ小学校児童二五〇〇人。

ルナは最後まで頑張れるのだろうか。

ｓｔｒｄｓｔ―０５：波乱の始業式

「私自身も色々ありましたが、何より皆様が無事進級できたことに感謝するとともに、激しく嬉しく思います。え～、私自身もこの休暇には色んな事をしてまして……。

……であるからして……今日という日を本当に嬉しく思うわけですな。更に言うなれば……ということからも……日々の生活を見直し……。

精進していってほしいと切に願う限りです。あぁそれと……」

ステージの上で、校長が長すぎて有難くない話をまだ続けている。ついこの間まで幼稚園児だった入りたての新一年生なんか堪ったものではないだろう。

しかも校長の演歌まで飛び出す始末で、正に文字通り、彼の独壇場だ。

「（長いわ……。私の出番を焦らそうって魂胆ね……そうよ、そうに違いないわ）」

生徒会長であるルナは一団から成る列の先頭で行儀良く座っている。だが内心、かなり混沌としている筈だ。握った拳からじっとりとした汗がにじみ出ており、彼女は気持ちが悪くて仕様がない。

「……というわけですので、皆さま頑張って勉学に励んでくださいね」

どうやら校長の話は終わったようだ。とりあえず形だけの拍手が適当に鳴る。

「えー、続きまして生徒代表から、校長への答辞の言葉」
「（来たっ）」

ルナは高鳴る心臓を自身で感じ取りながらも、じっと自分の名前を呼ばれるのを待つ。

「生徒代表、白金ルナ！」
「ハイっ！」

ルナはすぐさまに壇上に向かって足をひっかけない様、細心の注意を払いながら歩を進める。もちろん、自尊心の強い彼女はカンニングペーパーなど持たない。

そして、やっとの思いで辿り着いた階段をゆっくりと登っていく、その際に靴と階段との接触音が広い会場に鳴り響く。しんと静まり返った群衆は、まるでルナの一挙手一投足を丹念に監視し彼女の動向を追っているように感じる。

その、ある種冗談のような雰囲気にルナは呑まれそうになるが、彼女のプライドがそうはさせてくれない。

だから苦しい。

ルナはマイクを手に取る。火照った体に対して金属の冷たな感覚が、彼女を少しだけ落ち着かせた。

『みなさま、おはようございます。さて、緑の芽吹きと共に新たな春の兆しを感じる、今日このごろですが……』

最初の切り出しは上々なようで、ひとまず彼女も安心と言ったところか。これで調子をつかんだルナは、円滑に話を展開させた。小

六のする話とは思えないほどにそれは要領を得ており世の中の近況から話の出だしを掴み、そこから現代社会に生きている自身らの成長を応援してくれている周りの大人たちへの感謝の意を述べる。
ルナは堂々としたたち振る舞いで全児童を相手に、よくやっている。

『……以上を答辞とさせてもらいます』

ルナが一礼して、壇上から立ち去ろうと、一歩踏み出した瞬間――

≪ブ……ウン……ッ≫

空気を震わす鈍い音と共に会場の照明が全て落ちた。館内は真っ暗になり、そこに集まった群衆が突然のアクシデントと暗闇の不安とで、ざわめき始める。

「なんだろう……故障かな？」

スバルは額に掛けていた暗視機能を搭載しているビジライザーを用い、周りの様子を観察していた。
スバルが会場の天井を見上げて故障の原因を探っていると、不意にステージの方から大きな声が聞こえてくる。

――いや、悲鳴だ。

「キャー！！！」

声から分かる、これはルナのもので間違いない。それに対しスバルは反射的にステージを振り向いてみるが、そこにはもう彼女の姿

はなかった。
あったのは、さっきまで彼女が握っていたであろう、マイクが転がっているだけだった。

誰かが暗闇に乗じて彼女を連れ去ったのは言うまでもないだろう。だが、ただ一つ問題なのは、あの一瞬で人一人を運び出すなんて、とても人間業とは言えない事である。
会場を包んでいた不安が確かな恐怖になる中、冷静に事の状況を分析するスバルは、人間ではない数々の敵を相手にしてきた故の直感で、この事態が何を意味しているのかをすぐさまに理解した。

「委員長……！」

スバルの顔が青ざめた。冷汗が背中を伝う感触が、事態の現実味を伝える。すると、ある一つの電子音がスバルの腰付近から鳴った。

『ピピ　メール　ジュシン　シマシタ』

スバルがハンターに目をやる。その発信元不明のメールには

『シロガネ　ルナハ　アズカッタ　ホシカワ　スバル　ダイニ　ソウコマデ　コイ　サモナクバ……』

という、ふざけた内容のテキストデータが綴られていた。

「大変だ……、委員長が危ない……！！」

言い終える前に、スバルの足は既にルナの元に駆け出していた。
会場にひしめく群衆を掻き分けながら必死にルナの元へと進んでいく。

ｓｔｒｄｓｔ―０６：サイバー・イン

「なんでだよっ、開かない！」

スバルは必死に倉庫前のドアを開けようとするが、厳重に電子ロックがかけられている為びくともしない。スバルの華奢な腕じゃなおさらのことだ。更に当て付けのようにドアの向こうから、口を塞がれたらしい、ルナの呻き声が聞こえてくるので、スバルは余計焦らされた。

「ダメだ、びくともしない……。こうなったら、ここの管理をしている人を探すか？　イヤ……あのパニックだ。まともに取り合ってもらえないだろうな」

スバルは、一つの答えを導き出した。

「僕が……やらなきゃ……いや、やるんだ……！」

スバルはペンダントをギュッと握りしめると、決意を固め、おもむろにハンターを取り出す。

ウォーロックもいないのにどうするつもりなのだろうか。

「鈍っててくれるなよ、僕の勘。――ナビカード、オープンマン・ｅｘｅ！！　サイバー・イン！」

スバルはハンターから、ロック解除用プログラムを電子ロックに送り込む。

ワイヤレスでハンターが電子ロックの電脳と繋がれ、受信コンパネに向かってオープンマンのデータが流れていき、次第に電脳の中に茶色いプログラム体が構蓄されていく。

『オープンマン．ｅｘｅ　インストール　カンリョウ　シマシタ』

ハンターからインストール完了の合図が送られた。

「よしっ、聞こえるかい？　オープンマン」

スバルがハンターのエアディスプレイに向かって聞く。

「聞こえるプ～ン。今日は何の用なんなんだぞ～？」

オープンマンが電脳の中から、データ空間の中で浮いているオペレーターウィンドウに向かって返答する。

「いい？　よく聞いて、このドアの向こうに委員長が閉じ込められているんだ。……僕はどうしても彼女を助けたいんだ……お願いだよ、力を貸してオープンマン」

本来なら、スバル自身が電波変換してルナを助けるべきなんだろうが、今はそんな事など出来ない。しかしながら、幸い電脳世界で解決できる問題ではあるので、スーパーヒーローだったスバルはオープンマンに懇願するしかなかった。

「もちろんだプーン、俺も全力を尽くすんだぞ！　だから、しっか

りオペレートしてほしいんだぞ」
「ありがとう、オープンマン！　それじゃ中枢の制御プログラムまで突き進もう！　ファイヤウォールの突破、しっかり頼むよ」
「オープーン！！　了解なんだぞ」

そう言って、茶色いプログラムは電脳の世界を駆け抜けていく。市販のプログラムデータで、さらにダルマみたいな体型をしているが、オープンマンの処理速度は結構速い。
電脳のシステム回路に潜む、小さなウイルス程度では、彼の演算処理の前にして跡形もなくデリートされていく。

オープンマンは見事に電脳の第1階層を攻略した。

「ご主人さま、ここから先の電脳に中枢プログラムを守っているプロテクトがあるんだぞ。でも、ウイルスのデータ破壊がひどくて、俺のスペックだけじゃ、多分処理落ちしてくるかもしれないんだぞ。オペレート頼むんだぞ」

オープンマンが電子ロックの電脳、第2階層でつまずいた。ここから先のプログラムは、ノイズバグがひどくてオープンマンの実行作業を阻害する。
恐らくは、かなり力の強いウイルスがこの階層を狂わしていると思われる。

「確かに、ここからデータが壊れていてプログラムの解析が難しくなってるね……下手かもしれないけど、全力を尽くすよ」

すると突然、オープンマンの目の前に大型のウイルスが現れた。
その外見はモアイ像に少しだけ、西欧の雰囲気を混ぜたような顔をした胴体のない石膏像の様なものであった。体の周りには、オーラ

の様なモノを纏っており、守りの堅さが窺える。

「プーン、コイツはかなり上級のウイルスなんだぞっ！　多分、こいつがこの階層のノイズの原因なんだと思うんだプーン。ご主人さま、宜しくなんだぞ！」

「早速だねっ！　よしっ、行くぞ！　オープンマン．ｅｘｅ、バスティング・モード・オン」

オープンマンはスバルから送られた、チェンジモードコマンドの受け取り処理を終えると戦闘態勢に入った。そして間髪入れずに右手に変換処理された鍵形のバスターを、メガリアＤに狙いを定めて放つ。

「オープンバスター！！」

茶色の光弾は見事にウイルスの頭部に向かって飛んでいく、だがそれが着弾する、すんでの処でメガリアＤを覆う、オーラのエネルギーによって相殺されてしまう。結果、ウイルスの周りを粉塵が覆いオープンマンの視界から姿を消した。

「やったんだぞー」

「いや、まだだっ」

粉塵の中から突然、首が勢いよく飛んできた。その独特な攻撃方法は所見の敵を一瞬だけ驚かせ硬直させる。特に、油断していたオープンマンは回避行動に移るも、無駄に大きなその体半分がウイルスの射程圏に入ったままだ。

「マズいんだぞっ……！」

「バトルカード、クイックゲージ！」

スバルがカードデータをオープンマンに送ると、オープンマンの単位時間当たりの処理速度が一気に向上した。
間一髪で射程圏を抜けた茶色いダルマの横を石膏が空を切り、通り過ぎる。だが、メガリアDの頭部はオープンマンの遥か後方に飛んでいくと思いきや、すぐに方向転換しオープンマンの背後をとった。すると、反撃に移ったメガリアの口元にノイズの圧縮した塊がオープンマンに風穴を開けるべく、集束していく。

「あっ……！　なんだぞ」
「大丈夫っ」

オープンマンの背後を取っている、オーラを置き忘れてきた生首を確認するとスバルは言い切った。

「これは、攻撃のチャンスだよ！」

そして、カードデータをオープンマンに送り込んだ。

「分かったんだぞ！」

オープンマンは、右手のソード状に変化した物を振り向き様に、無防備な生首に向かって振り抜くと、メガリアDの顔面に大きな一文字の傷をつけた。
傷口からウイルスの情報が勢いよく流れだしているが、それだけではまだ、メガリアDをデリートまで追い込めない。

「結構タフな奴だな……！」
「ご主人さま！」

ウイルスをデリートし切れなかったオープンマンが焦りながら、スバルに手助けを求める。

「――！　僕にまかせて」

その時、オープンマンはメガリアに対して体が開き切ってしまっており、完全に無防備であった。メガリアDは当然、ダルマに向かってノイズの塊を吐き出す。だが、それがオープンマンに直撃する直前の処で、茶色いダルマの周りに先ほどまで生首を守っていた物と同じようなモノが包んだ。

「よしっ、オープンマン！　上に跳んで！」

攻撃を凌ぎ、態勢を整えたオープンマンはメガリアDの頭上に跳び上がる。メガリアDもそれを追って再び口元にノイズを集中させる。

「もう、遅いよ。バトルカード、ギカントスタンプ！」

スバルの勝利宣言とともに、オープンマンの両足が巨大な分銅に変わり、メガリアDに向かって急速に落下していく。だんだん巨大になっていくメガリアDを覆う丸い影に、そのウイルスは無表情な顔をただ硬直させるだけしか出来なかった。

『ドスンッ！！』という轟音は、電脳の地面に辿り着いた分銅がウイルスを完全にデリートしたという事を伝える。そして分銅と地面の隙間からは、ウイルスの残骸データが流れだしておりオープンマンはそれを見下ろした。

「ウイルスバスティング、完了なんだぞ！　ナイス、オペレートな

んだぞ！」
「ははっ、有難う。よしっオープンマン、中枢プログラムまで急ごう！」
「了解なんだぞ～」

茶色いプログラム体は中枢プログラムに向かって、電脳空間を駆け抜けていく。

ｓｔｒｄｓｔ―０７：レイダー

ウイルスを片づけたおかげで、安定しだした電脳空間をオープンマンが暫くの間、駆けていくと、とうとう目的の装置の前に辿り着いた。

そのドアの開閉を管理している装置は、ある特定の暗号を受け付けることによってドアを開けたり閉めたりするので、普通なら解除コードを知ってない限り、ドアが開くことはない。

だが、今はドアロック解除専門のナビがその装置の前に立っているので、解除コードを吸い出すのは不可能ではない。

「これが、電子ロックの制御システムか……。オープンマン、まずはプロテクトの無効化から始めよう」

「オープーン！　了解なんだぞー！」

そう言って、オープンマンが制御装置の前まで歩を進めていくと、彼と制御装置の間を挟む様に突然、真っ黒なオペレーターウィンドウが現れた。

そのウィンドウには『ＮＯ　ＩＭＡＧＥ』とだけ記されている。

「ご主人さま、これは？」

「イヤ、僕のじゃない……。多分、他の誰かがアクセスしてきたんだと思う」

スバルが正体不明の来客を不審に思っていると、黒いウィンドウからスバル達に情報を渡さないように加工された機械的な音声が聞こえてくる。

『ナカナカ　ハヤカッタナ、ホシカワ　スバル　クン。オペレーション　カラ　サッスルニ　ジョウキョウ　ハンダン　ノウリョク　イイモノヲ　モッテイル。
ダガ　サッキマデノハ　ホンノ　オアソビ　ダ。ハタシテ　ソノテイスペック　ナビデ　オレノ　レイダー　ヲ　タオスコトガデキルカナ？』

音声がそう告げると、オープンマンの目の前にアクセスブロックが表示される。始めは数個だった立方体が次第に分裂していき、やがて数え切れない程に増殖した立方体の集まりが、音声の主が言うところの『レイダー』を形成していく。

「何なんだぞ、コイツは……？」

オープンマンが謎の侵入者に対し、後退って十分な距離をとる。オープンマンが注意を向け続ける場所には既に、一体の電波体がサイバー・インしていた。しかし、その電波体はマントを被っているせいで、僅かな情報も知り得ることが出来ない。だが一つ解かるのは、この電波体と一緒に仲良くルナを助け出すことは不可能であるということだけである。

「どうするんだぞ、ご主人？」
「話の流れから見た感じ、どうやら協力はしてくれそうもないみたいだね。……でもだからって、退く訳にはいかない。コイツを倒さなきゃ、委員長は助けれないんだ。――戦おう！　オープンマン」
「分かったんだぞ。バトルは苦手だけど、頑張るんだぞ！」

オープンマンはレイダーに対し半身の構えをとり、戦闘の意思を示した。

『ソレデイイ。コテシラベダ　ヤレ　レイダー』
「了解……！　ターゲット、補足……。――斬る！」

レイダーが言葉を発し終わったと思った瞬間には、十分にあった間合いを詰められており、マントを被った電波体はオープンマンの腹部にピッタリと張り付いていた。

「コイツ……、速いんだぞ……！」
「お前が、遅い……！」

そう言い、マントから何かを抜いたと思ったら、オープンマンに無数の斬り跡が刻み込まれていた。

「え…？」

スバルは何が起きたのか分からなかった。無理もない、オープンマンも何をされたのか、すぐには理解できなかったのだから。

strdst_07：レイダー（後書き）

ｓｔｒｄｓｔ―０８：未熟な戦術

稲光からの時間差で雷鳴が轟くといった事象と同じ具合で、オープンマンが膝から崩れる様に倒れこむ。彼に刻まれた傷の数は八つ、つまり一瞬の間に八回もの斬撃をお見舞いしたということになる。

「他愛もない……」

そう言って勝利を確信した、レイダーはオープンマンに背を向けて、ゆっくりと立ち去ろうとする。

「オ、オープンマン？！」

スバルは、エアディスプレイの向こう側でうつ伏せになって倒れているオープンマンに呼びかけた。だが彼の多数の傷口からは、命とも言えるプログラム情報が止めどなく流れ出しており、それが無言の答えとしてスバルに事態の理解を促す。

「クッ、ダメか……！　……サイバー・アウトだ、オープンマン。これ以上は君の命がもたない……！」

するとエアディスプレイの向こう側から、絞り出すような声が聞こえてきた。

「ま、まだ……、まだ、やれるんだぞ……！」

オープンマンはデリート寸前にまで追い込まれた自身の体に鞭を打って無理やり起こし、両足でしっかりと立って見せる。

「まだ、戦えるんだぞ……！」
「でも、これ以上は……」
「俺たちナビの存在理由は……、人間の為に役立つことなんだぞ！　ここで逃げたら、死んでいるのも同然なんだぞ！」
「……分かった、キミを信じるよ。オープンマン！」
「頼ってくれて、アリガトウなんだぞ」

オープンマンがレイダーの背中に向かって走り出す。だが、ダメージを受けた体は正直に、彼の移動速度を落としていた。

「まだ、来るか……！」
『ヤレ、レイダー。ヨウシャノヒツヨウハナイ　ソレガ　カレラヘノ　レイギダ』
「了解」

レイダーが軽やかに身をひるがえし、オープンマンを迎撃せんと、腰の得物に右手をあてがって構える。その構えで、その場に張り付き自身の間合いの境界線をしっかりと作る。

「オープンマン、八時方向から奴の横に回り込んで！」
「了解なんだぞ！」

オープンマンは旋回して、レイダーの逆を取ろうとする。

「愚かな、私の間合いに入り込めば、一瞬の内に両断されるだけだぞ」
「それはどうかな？　バトルカード、スモークボム！」

オープンマンはレイダーの足もとに手榴弾を投げ込む。そして乾いた金属音を立てながら地面を転がるそれは白い煙を伴って炸裂し

た。
　レイダーの周りを濃い煙が包み込み、たちまち彼の視界からオープンマンは姿を消した。

「コシャクな……。だが、私にそんなモノは通用しないぞ！　心の目で貴様を捉えるまでだ……！」
「まだまだ！　バトルカード、ブンシンノジュツ！　ソニックフィスト！」
「……！　気配が増えた……。七、八……多いな」

　突然煙の中から、レイダーに向かって音速となった拳の弾幕が襲いかかる。全方位から繰り出されたそれに死角など微塵もない。

「――だが！」

　刹那の内に一閃、ニ閃どころではない数の太刀筋が、拳を全てバラバラにし攻撃を無効化する。その際レイダーは微動だにせず、自身の間合いに入ったものを全て切り落としたのであった。

「私にそんなものは効かない……！」
「そうだろうね。オープンマン、奴の懐に飛び込むんだ！」
「了解なんだぞ！」

　スバルのオペレートにオープンマンが従う、だがレイダーはそれを一笑に付す。

「笑止！」

　ブンシンノジュツで人数が増えたオープンマンが、一斉にレイダーに向かって飛びかかる。

「これでは、さっきと同じ轍を踏むだけだぞ？　……星河スバル、大したこと無し！」
「オープンバス……」

バスターを発射する前に、跳びかかった全てのオープンマンがデリートされた。

「バカめ……数でかかれば倒せるとでも思ったか」

そう言ってレイダーは得物から手を離した。

「よしっ、今だ」

スバルは、レイダーが得物から手を離す瞬間を狙っていたらしく、素早い反応でハンターに赤い――バトルカードにはランクがあり、赤、青、黄、と区分けされている。それぞれ、ギガ、メガ、スタンダートクラスと呼ばれ一般には左から順に強力とされている――バトルカードデータを入力する。

「僕のとっておきだ、喰らえ！」

煙が晴れると、レイダーに対し少し距離を置いたところでオープンマンが、巨大なミサイルを発射していた。その弾頭は等比級数的にスピードを上げ、レイダーに襲いかかる。

ギガミサイルの威力は普通のバトルカードの十倍以上、さらに広い攻撃範囲により、いかにレイダーであろうとも切り捨てることは出来ない。

「分身は陽動……」

『オモシロイ　サスガ　ニ　タタカイナレ　ヲ　シテイル』

「ですが、彼の誤算は……」

『ゼッタイテキナ　スペック　ノ　サ　ヲ　コウリョ　デキナカッタコトダナ。　ミセテヤレ　レイダー』

主の命令にレイダーは、ギガミサイルが直撃するコンマ百分の一以下の所で神速の移動術を披露して見せた。

恐らくは自身の周波数域を周りの周波数帯に同調させ、空間に流れる波に乗ったのだろう。しかしその技術は、電波体同士の戦闘における基本ではあるが、それと同時に極意でもある。ましてや、コンマ百分の一以下で繰り出す、高速空間移動術は必殺技の領域と言っても過言ではない。

「消えたんだぞ……！」

オープンマンは、爆発せずに電脳空間のはるか向こうに消えていくミサイルを見送ると、レイダーがさっきまでいた場所から姿を消している事に、遅すぎるが気が付いた。

「なかなかの戦法だ」

オープンマンの背後で声が聞こえてくる。振り向こうにも、オープンマンは背中に刃物の冷たい感触を感じているので、下手に動くことができなくなっていた。

そして少しだけ、スバル達に敬意を払った声がさらに続ける。

「私の視界を奪ってからの、全方位攻撃……。加えて分身に同じ類の攻撃を続けさせて、私の注意をそれに向けさせると同時に、本体

は煙幕に隠れて必殺の攻撃への準備……。フッ……、並の奴らでは、この戦法の前に屈するだろう。

だが、私にはそんな小手先の戦術など効かん。……第一に、煙幕を張った事に対し、少し考えれば自然と陽動攻撃の可能性は見出せる。それにあれだけ大ぶりな攻撃は、いくら隙をついたところで、この私には絶対に当てれはしない」

「やけに良く喋るんだぞ？」

「そういう気分なのさ……」

レイダーは、得物を握る手に力を込める。

「これで終わらそう」

「させないっ！　バトルカー……」

スバルはバトルカードをハンターに読み込ませようとするが、この状況から逆転する術は見つかりそうもない。

ところが突然、スバルの背中越しに誰かの威勢の良い声が聞こえてきた。

ハンターのエアディスプレイが後ろの人影を反射すると、そこにはスバルもよく知っている人物が映っている。

「トランスコード００５！　オックス・ファイア！！」

変身の口上が響くと、遥か上空の電脳空間から一体の電波人間がサイバー・インしてきた。かなりの巨漢である彼は、勢いよくレイダーめがけて降下していく。

「新手か……」

「喰らいやがれ！　超加速アンガーパンチ！！」

レイダーはオックス・ファイアが繰り出す、力任せな攻撃をなんなく避けると、落下の衝撃でデータの粉塵が舞い上がっているその場所を見据える。

レイダーが注意を向けている赤牛の落下地点には、圧倒的なパワーで巨大なクレーターが作られており、図らずともレイダーからオープンマンを引き離すことに成功していた。

「ゴン太!?　どうしてここに?」

スバルが、エアディスプレイの中で紅蓮の炎を放出し続ける電波人間に対して問いかける。

「お前が、大慌てでホール会場から出ていくのを見たんだよ。……ったく、相変わらず一人で突っ走りやがって。俺だってな、お前を手助け出来るだけの力は持ってるんだぜ?」

「ありがとう、ゴン太」

「礼は後だぜ!　委員長を助けるために……、まずはこのマント男をブッ倒さなきゃな!!」

赤牛は勢いよく、レイダーに向かって突っ込んでいく。

「オックスタックル喰らいやがれ!!」

「ふぅ……、どうしますか、マスター？」

レイダーはオックスタックルなど、眼中に無しと言った様子で主人と交信をとっている。

「舐めやがって！　痛い目にあわせてやるっ」

赤牛は突撃の勢いを強める。単純馬鹿なオックス・ファイアはスバルと違って戦術など駆使しない、駆使するのは己の力だけであった。

『ホシカワ　ノ　チカラ　ハ　ダイタイ　ワカッタ　モウ　ヒキアゲルンダ』

「了解」

レイダーは短い返事を主人に返すと、サイバー・インしてきた時とは逆の手順でサイバー・アウトしていく。

やがて最後のアクセスブロックがなくなると完全に、レイダーの持つ周波数はこの電脳空間から感じられなくなっていた。

だが、目標物がいなくなってしまっても赤牛は急に止まる事が出来ない。十分に破壊力を持たせた突進――オックスタックルとはそういうものだ。

「クソッ！　俺にビビって逃げやがった！　でも、止まれねー！　ブルルルオオォォォオ！！」

オックス・ファイアはギガミサイル同様、電脳の遥か彼方へ消えていく。『ブルルルルォォオオオオ』という雄叫びがどんどん小さくなっていった。

「ゴ、ゴン太？　どこ行くの！？」

スバルが呼びかけるエアディスプレイの中には、既にボロボロになった一体のナビが転がっているだけで、オックス・ファイアはどこか遠くへ行ってしまった様である。

「ま、まぁ、今はゴン太より制御プログラムだ。……オープンマン、大丈夫かい？」

傷だらけになってしまっているナビは答える。

「大丈夫じゃないけど……、何とか体は動くんだぞ」

「制御プログラムの解除はできそう？」

「なんとか……なんだぞ」

オープンマンは足を引き摺りながらも制御プログラムの方へ向って歩いていく。オープンマンの歩いた後には、漏れだしたデータの残骸が道知るべを作っていた。

「ゴメンね。僕の力不足でボロボロにしちゃって……」

「いいんだぞ。これが……俺の仕事なんだからだぞ」

制御プログラムまで辿り着いたオープンマンはそう言いながら、ゴチャゴチャとした機械の様な中枢プログラムの入力板に向かって手を伸ばした。

そして、最終プロテクト突破作業を始めたオープンマンはロック

解除モードに入る。驚いたことに、本領を発揮した彼の十本の指は、まるで何か別の生き物のように素早く、かつ絶え間なく動き続けていた。

「最終プロテクト、突破なんだぞ。後は解除コードを吸い出せば……」

彼はさらに数秒、作業を続ける。

「……よしっ、解除コードを割り出せたんだぞ！」

「本当かい？！」

「当然なんだぞ！　解除コードは、『ｋｏｄａｍａ０１０１１１００１ｍｇｚｎ』　なんだぞ」

「もうサイバー・アウトしていいよ！　ありがとう、オープンマン！」

「どう致しまして、なんだぞ！」

スバルはハンターにオープンマンが戻ってきたのを確かめると、ドアのロック解除コードを入力パネルに打ち込む。

「コダマ……０１０１１１００１ｍｇｚｎっと……」

打ち終わると、入力パネルの色が赤色から緑色に変わり音声アナウンスが流れた。

『コード……ニンショウ　オール　クリア』

「やった！」

嬉々として、スバルは勢いよく取っ手を回し、ドアを押し開けた。

第一声は決まっている。

「委員長！　助けにきたよ！！」

「ンンーーッ！！」

ヒーローの登場に、口を電波拘束帯で巻かれたルナは、うめき声をあげつつその視線を右斜め上方に向ける。それに促されスバルも、ルナの視線の先に目をやった。

「ん……君は？」

問いかけの言葉を送った場所には、スバルと同い年ぐらいの男の子が倉庫の少し奥の壁に寄り掛かっていた。

彼は手にハンターを握っていたが、それはスバル達が持っている市販の物とは違い特別な形状をしていることから、目の前の少年の特殊な背景が推測出来る。

「俺か……？　口で言うより、こうした方が分かりやすいかもな」

少年は、おもむろにハンターを倉庫の空いているスペースにかざした。

「ウィザード・オン」

電波体が形成される。

「あっ……！　お前は」

スバルは思わず声を漏らしてしまった。

しかし、全身を覆い隠すようにマントを纏った例のウィザードを

目の前にしてしまったのだから、彼の反応は当然の成り行きであると言える。

「レイダー、その鬱陶しいマントをいつまで着けているつもりだ？」

「申し訳ございません」

マントウィザードは直ぐ様、主人の意向に従う。すると、たなびくマントの下からスバルにとって馴染みあるエンブレムが顔を覗かせた。

「そう言うことだ、星河……。いや、元ロックマン」

少年が不敵に笑みを浮かべた。

strdst_09：マントの下（後書き）

後のコダマ小学校で『委員長誘拐事件』として語り継がれるちょっとしたハプニングが解決し、スバル達一行は新しいクラス教室で午後のホームルームをしていた。

その中では、子供達の前に立って育田が事務的な連絡や以後の予定などを話している。もちろん、今回の事件についても触れていた。

「えぇー、始業式もちょっとしたハプニングがあった訳だが、……まぁ、無事に終わって何よりだ」

「センセー、あれは一体何だったんですかー？　いきなり真っ暗になるし、白金さんが誘拐されるし、チョーあり得なかったんですけど」

ギャルミがふざけた言葉使いで、ふざけていない内容の質問をした。それも同様にして教室全員の児童の関心は、明日から始まるであろう授業の予定よりもさっきの事件について向けられている。

「あぁー、あれはコダマ小学校が実施した抜き打ちの緊急事態対策訓練なんだ」

「えぇー、その割には教員の人たちも、あり得ないぐらいパニクってた気が……」

「リアルさを追求したんだよ。まじうけはすっかり、先生方の演技に騙されちゃったみたいだなー。アッハハ」

育田はそう言って笑い飛ばす。そして話を連絡事項に戻した。

「あぁ、そうだ。今日はみんなに言っておかないといけないことがあったんだ。超重大発表だからよく聞けよー」

『超』という言葉に教室がざわめく。

「オーイ、みんな静かにー！　実はだなー、お前達の新しい仲間がこの教室の前に来ているんだ。――まぁ、ぶっちゃけ転校生だな」

教室のざわめきはピークに達した。ヒソヒソと隣の席の子どもと転校生の理想像を勝手に作っていく者もいれば、性別の種類を気にしだしてソワソワする男子や女子。

こういうときほど人間性が出る場面もなかろう、見ていて面白いものがある。

だが、面白くない顔をしている子供が二人、『我、関せず』といった様子で座っていた。彼らの特徴は、ツンツン頭でいて、なお且つ独特の赤い服で体の露出を極端に控えたファッションと、毎朝大量の時間を消費してきているであろうゴージャスクルクル巻きであった。

――そう、スバルとルナである。

なんのリアクションも示さない二人は、ざわめきが恒常化している教室という環境上、逆に目立っていた。

「よーし、もう、入っていいぞ。彩道」

教室の安静化を待つことなく、育田が入室の許可を出した。そし

て、招き入れられた転校生は教壇に上がって育田の横に並ぶ。
その少年の背丈はルナよりも少し高くて、キザマロの一・五倍はある。細見の体に黒い制服の様な出で立ちの服を纏っており、そのファッションはスバルと同じく肌の露出を極端に控えたもので左手には手袋という厳重ぶりである。腰にはフォルダアダプターらしき物を何個もぶら下げていた。
髪は漆黒と言う表現がふさわしい程に深く綺麗な黒色で、それをつむじの後ろ辺りでキュッと縛っている。これは、俗にポニーテールとして知られているものだが、彼は男子なのでチョンマゲと言ってしまった方がしっくりくるかもしれない。
瞳は、左目からオレンジと琥珀色のオッドアイで、それが彼の独特な雰囲気を演出するのに一役買っていた。

クラスの大半の女子が彩道と呼ばれる少年の方を、彼と視線が合う事を期待しながらチラチラと盗み見ていた。
理由は恐らく、彼の首から上に備え付けられた感覚器官の配置が一般的な見解から言えば整っており、多くの女性が好むとされているソレに近しいからなのであろう。

「それじゃあ、まあ。自己紹介をしてくれ」

育田は彩道の肩をポンと叩く。

「初めまして。アメロッパから来ました、彩道（さいどう）　ミライ　です」

礼儀正しく一礼。そして育田がより詳しい情報を付け加える。

「おいおい、偉くそっけない挨拶だな。しょうがない、先生が代わりに言ってやろう。みんなー注目。コイツはなー、只者じゃないんだぞ。

何てったって、今回の訓練を実行してくれた、現役のサテラポリスの隊員なんだからな！　これからはウイルスバスティングの授業はコイツに任せてもいいかもなっ。そんでもってだな、彩道はかの有名な……」

勝手に他人の事を話し出す育田を、ミライが手を少し上げて制止する。アフロを見上げるその瞳は、生徒が先生を見つめる物にしてはキツイものが入っていた。

「先生、これ以上は俺のプライバシーに介入し過ぎています。どうか、ご容赦を……」
「あー、ワルい。嫌なことだったか……」
「お気になさらないでください、誰だって初めはそこに興味が行きますから」

ミライは育田の方を向かなかった。前方の墨で書かれた書体の統一性皆無の文字群を見つめている。だが言葉だけは許しの意向を示している。

「おー、そうか。とりあえず空いている席に座っといてくれ。そうだなぁ、双葉が転校してちょうど一つ席が余ってから……」

育田は最後列真ん中の席を指差した。

「そこに座ってくれ」
「分かりました」

ミライが席に着こうと教壇から降りると、見計らっていたかのように図体のでかい少年がにじり寄ってきた。でかい体がミライの行く手を阻む。

ホームルーム中であるというのに、どういうつもりなのだろう。

「何か用か？」

「やっぱり納得できねぇんだよ……。やい、てめぇっ、澄ました面しやがって！　俺、全部知ってんだぞ？！」

ゴン太の鼻息がいつも以上に荒くなっていた。それこそ、暴れ牛の様である。

「先生」

ミライが「話が違うな。俺の邪魔をしているこのデカブツをどうにかしてくれないか」と言いたげに後ろの育田に鋭い眼光で見つめた。

「牛島っ、ホームルーム中だぞ。席に着きなさい！」

「なんで先生も、コイツの言うこと聞くんだよ！？　スバルも黙ってないで何か言えよ、なぁ！？」

ゴン太がスバルに参戦を求めるとクラスがざわめき始める。理由はロックマンことスバルが絡んでいるとなると、相当に大事だということからだろう。

「やめなよ、ゴン太。僕だって、納得はしてないけど……」

「だったら……！」

「でも理解はしてるんだ。……事情、その他諸々ね。　――だから、落ち着こう」

「わっかんねえな！　みんなコイツに騙されてんだぞ！？」

ゴン太はそう言い捨て、廊下に勢いよく出て行った。その際、ミライを突き飛ばすような形になりかけたが、ミライは華麗な身のこなしで暴走する牛をきっちり避けていた。

「まったくどうしようもない奴だなぁ」

そう言いつつ、アフロに手を突っ込み頭をポリポリと掻くその音がやけに教室に響いている気がしないでもない。その原因は、さっきまでとは一転して静まり返る教室の空気にあるのだろう。

ゴン太はとんだ置き土産を置いて行ってしまったものだ。

――疑念――

ミライは一身にそれを集めていた。そんな彼は辺りを見渡し一言。

「フッ……、とんでもない歓迎だな」

ｓｔｒｄｓｔ―１１：食べ物の恨み

とりあえず、勢いに任せて教室を飛び出したゴン太は、やることもなく廊下を徘徊していた。野に放たれた牛は野生化して、当てもなくうろつくことを余儀なくされるだけであった。

これは集団の規則を破った者に待つ当然の末路である。

だがしかし、コダマ小学校は何時からヒンディー教下となったのだろうか。残念だが、それは知ることは出来ないし、知る必要もない。

「くっそー、アイツが委員長をさらった犯人なんだっ。先生も先生だぜ……！　サテラポリスの隊員だがなんだが知らねえが、言いなりになってよう……」

ゴン太は言いようのない不満を抱きながら、ブツブツと独り言を言いながら歩いて行く。

「アイツはダメだっ。気にいらねぇ！」

結局はその結論に至った。分からなくはないが、ゴン太はミライが気にいらないだけである。

すると、ゴン太の腹が滑稽な音を伴って空腹であるという事を告げる。昼食を食べて、そう時間も経っていないのにどうしようもない奴だ。

「クソー、腹も減ってきたぜ！　……よしっ、食堂に行こう。腹が減っては……なんとかだぜ」

特に戦う予定のないゴン太は、間食に牛丼と洒落込む様で揚々として食堂にスキップで向かう。

ゴン太はもう、ミライのことなどほぼ忘れかけていた。

『ブルルゥオッ、牛丼食うのか！？　オレにも食わせやがれー！！』

オックスが場所と時間を選ばずに大声で欲求を吐き出す。

「分かったから、もうちょっと静かに喋れよ……。何気にホームルーム、サボってる状況なんだからよ」

『オレの、牛丼に対する猛る想いを鎮めてくれー！！』

そしてゴン太はオックスの猛りを鎮める為に、特盛り牛丼セット二人前の電波食券を購入した。そして食券を持って、オバちゃんウィザードにそれと牛丼を交換してもらおうと普段なら長蛇の列を成しているはずのカウンター前に向かう。

「オバチャーン、牛丼二人前！」

牛二人組は、食券をオバちゃんに渡した。

『へぇー、後ろの牛みたいな人も牛丼食べるのかい？」

「人じゃねえよ！　俺のウィザードで牡牛座の宇宙人だ」

『アラ、やだー！　それじゃ、共食いになっちゃうじゃないの！？』

『ブゥゥルルオオッ！　共食いじゃねえ、俺は牛丼とともに生きて行くんだ！　食った牛さんたちは俺の中でずっと生きてる！！』

そして、二人がオバちゃんと雑談すること数分。

『……そこまでの覚悟を持ってるとはね……！　いいわ、あなた達に牛丼を作ってあげるっ！　ちょっと待ってなさい』

そう言い残し、オバちゃんは厨房の奥へと消えていった。すると、奥のほうから牛丼のいい香りが漂ってくる。

「ふぃー、今回は短かったなぁ」

『あぁ、オバちゃん型のウィザードは料理は上手いが話が長い。ブルルォ、ＷＡＸＡに改良して貰ったほうがいいんじゃないか？』

ゴン太達が、オバちゃんウィザードの今後を考えて議論を重ねていると、カウンターに特盛りの牛丼が姿を現した。

『待たせちゃったわね～。今回は腕に縒りを掛けて作ったから、おいしいわよ！』

汁にまみれたそれは、食堂の天井に備えられたライトの光を反射させる。

さらに降り注ぐ光は、口に運ぶことへの許可証とでも言うべきタンパク質の凝固を示す変色をして、それが食という名の欲求をただひたすらに掻き立てる肉の妖艶さを彩っていた。

フードディスペンサーでは、このような色気のある牛丼を生み出すことなど不可能であろう。

「くっ、旨そうだぜ……！」

ゴン太の意識が持って行かれそうになる。

『ブロロッ、ゴン太っーしっかりしろ!!　ここでいっちまったら、何の為に牛丼を手に入れたのか分かんないだろう!?』

「へへッ、そうだな……！　危うく、昇天するところだったぜ。オックス！　テーブルにスタンバって戦闘開始だ！」

『当然だー!!』

二人は手近にあるテーブルに向かって慎重にかつ迅速に、特盛り故にバランスの危うさを生まれながらに孕んでいる牛丼の外観を損なわないように歩を進める。必死の思いでたどり着いたテーブルに、お亡くなりになった牛さんの残骸丼を優しく置き、その後に続くように生きている牛二人組は椅子に腰を下ろした。

「いただきまー……」

『ちょっと待ったー!!』

ゴン太が大口を開けて、口に牛丼を放り込む前にオックスが止めた。

「どうしたオックス？」

『真剣な話なんだが……、ここには一味が――ない……！』

「お、お前……。昔、ひどい目にあったはずだろ？　まさか忘れたわけじゃ……」

『ブルルォ!!　覚えているとも!!　だが、牛丼にはアレがなきゃ始まらないんだー!!』

オックスが叫ぶ。時間的な関係で人がまばらだから良いものだが、迷惑極まりない。

「しょうがねぇな。一味、出してやるよ」

ゴン太は溝という溝に、隙間という隙間に菓子や食べ物のカスが詰まって、ある意味ゴン太仕様になってしまっているハンターを取り出した。

「マテリアライズ！　一味！！」

ゴン太がカッコ良く叫ぶと、目の前にはビン詰めの一味が姿を現した。

『お、お前……なんで一味なんかをリストに登録してんだ……？』

オックスはゴン太のハンターの万能さに涙を浮かべている。ゴツイ宇宙人の涙などできれば見たくないものである。

「へへッ、俺のハンターには世界中の食い物がデータとして入っているんだぜ？　当然、調味料だって網羅してんだ。牛島ゴン太、舐めんなよ！」

恐るべきことにゴン太は、ハンターに食べ物のデータを全てインプットしていると言うではないか。だが、悲しいことに食べ物データがハンターのデータスペースをほぼ占領してしまっていることにより、ゴン太はバトルカードデータを扱うことが出来なくなってしまっていた。

『お前、天才だぜ！！』

オックスがそう言って、一味を牛丼に振りかけようとしたその時

――

けたたましい爆発音がなった。獣の雄たけびだ。衝撃に恐れをなしたのか、窓ガラスが割れた。それはシャボン玉のように割れたのだった。

とりあえず一味が爆発したわけでなく、食堂の隣の校庭から食堂の窓を突き破るほどの爆音が聞こえてきた。どうやら始業式である今日は来客の、電波化してハンターに格納できない古いタイプの車などが置いてあったらしく、それが爆発したようだ。

『ギャーーー、一味が……！』

オックスの一味は爆風の衝撃で、フタが吹き飛んで全て牛丼に降り注がれていた。

「オイッ、オックス。あいつ等は……！」

ゴン太は、校庭を見つめながらそこで暴れる人影を指差す。

『ブロロ！？　あいつ等は……ジャミンガー――ウイルスやヒールウィザードと電波変換した電波人間――！』

ジャミンガーと呼ばれるヒョロッとした、いかにも悪人という目つきをしている電波体は、どういうわけか実体化しており破壊活動を続けている。その証拠にさっき車を一台、御釈迦にして見せた。

「なんだか知らねえが、今回は今のスバルじゃどうしようもないぜ……。オックス！　ここは俺達が！！」

『オオよ！　食い物の恨みは恐ろしいぜーー！！』

ゴン太は先ほどのハンターを天に掲げ叫ぶ。

「トランスコード００５！　オックス・ファイア！！」

ｓｔｒｄｓｔ―１２：白騎士

突然、下の校庭で爆音が鳴り響くと教室は一瞬の内にしてパニックに陥った。炎上する車が転がっている現場では、おびただしい数のウイルス人間と赤い電波人間が一人。

「ロックマンがいなくなったとわかった途端、やりたい放題のクズ共め……！」

席から立ち、ミライは悪態をつくと白いハンターを取り出す。

『如何なさいましょう？　ミライ様』

「分かり切ったことを聞くな。あのクズ共を逮捕する……！」

『了解』

そうやりとりすると、ミライは教室の空いている窓に向かって駆け出す。

「オイッ、彩道！　何をするつもりだ！？」

育田は彩道の行動に一抹の不安と言うには物足りないものを覚えた。

「俺のことは放っておいて、先生は皆の非難を先導してください」

駆け抜けざまにそう伝えるとミライは五階にあるこの教室の窓を、まるで陸上のハードル競技でもこなすかの様に美しくさえある動作で跳び越えた。

「オ、オイっ……！　ここは5階だぞ」

育田が絶句するも、時既に遅しミライは空中遊泳中だ。

「と、飛び降りた?!」
「キャーーーー、転校生が落ちたわよ!!」
「マジか？　気でも触れたか」
「ヤバいよーーー！」
「あり得なーーーいっ」

転校生との突然の別れに生徒たちは、もう事態の冷静な判断などできるはずもなく、緊急事態においてこれほど愚かなことはない烏合の衆と化していた。

「そんな、なんて無茶を……！」

自分の後ろの窓から、本当に飛び降りてしまったミライに流石のスバルも驚きを隠せない。生身で高いところから飛び降りた経験はスバルもあったが途中で電波変換したので当然、高さなど関係なかった。言い変えればパラシュート付きのスカイダイビング。
だが信じられないことに、ミライは最後まで電波変換することなく生身で地面に着地したのだ。

サテラポリスの隊員は全員がこんな曲芸ができるのだろうか、だとしたら呆れるばかりである。

そんな教室でも騒ぎが起きている一方、スクラップが撒き散らかされて黒い煙を伴って燃えている校庭の中で、ジャミンガー達が校舎内に侵入することを一体の電波体が何とか食い止めていた。

「ブルルルォオオ！　喰らえ、ファイアブレス！！」

オックス・ファイアは口の火炎放射機から、ウイルスに取り憑かれてしまった不運な人を傷つけない程度の勢いで炎を吐き出す。

それでジャミンガーの一体をデリートすることに成功するが、如何せん数が多い。完全には電波変換を物にしていないオックス・ファイアはかなり消耗していた。

「ヒッヒッヒッ！　ロックマンがいなくなった今、電波世界はノイズ世界の住民である俺達のもんだぜ！」

オックス・ファイアを取り巻くジャミンガーの一人がヒステリックに笑った。

「ケッケッ！　電波世界だけじゃねえぜ……！　なんだか知らんが最近、実体化出来るようになったこの体で現実世界だって思いのままにしてやる！」

「それに……、ロックマンの代役がこんな図体だけの奴とあっちゃあ、チョロイもんだぜ！！　まずは、この学校を乗っ取って俺達のアジトにしてやるんだーー。ヒャッヒャヒャッ！！」

見ていて気分が悪いことに、オックス・ファイアの周りでジャミンガー達が好き勝手に言いたいことを下品な笑いを伴い吐露する。

「言いたい放題言いやがって……！」

「だったら言いたい放題言われないようにしてみやがれっ！」

ジャミンガーの大群がオックス・ファイア目掛けて一斉に跳びかかった。あらゆる手段を講じてでも、邪魔する敵は完全に抹殺することだけを考えるウイルス人間は容赦という言葉を知らない。

卑怯などというレッテルは彼らにとって、心地の良いステータスにすぎなかった。

その数三〇。

万全の状態のオックス・ファイアでもどうにかなる数ではなく、ましてや一日に二度も電波変換し消耗した状態では自慢の炎で焼き払っても、彼らのアーマーの錆を焦がす程度だろう。

「チクショー！　ファイア・ブレス！！」

炎を広げてみるも、やはり弱まった火力ではジャミンガーを怯ませることもできなかった。

オックス・ファイアが覚悟した時――

「やれ、レイダー……」

少年の声が狂気に満ちた笑いを切り裂いた。その合図とともにオックス・ファイアの周りを、光の閃光がジャミンガー達を撫でるよ

うに瞬く。
オックス・ファイアが事態を呑み込んだ時には、ジャミンガーだったものが既にオックス・ファイアの足もとに転がっていた。

「ス、スゲエ……」

目にも止まらぬ早業にオックス・ファイアは思わず息を飲み、そのでかい図体を戦闘フェーズを終えて剣の手入れをしているレイダーの方に向けて魅入っていた。そして、レイダーの主がジャミンガー達のあまりの歯ごたえのなさに起因するつまらなさ故の表情を浮かべながら歩いてくる。

「フッ……、ザコめ。弱すぎて、レイダーの剣の錆にもならないな」

ミライはジャミンガーを見下し吐き捨てた。そして視線の先をオックス・ファイアの方に変えると言い放つ。

「アマチュアは下がってろ。ここからは、プロの仕事だ」
「なんだと！　ふざけんな、俺だって遊撃隊の一員だ。まだやれるぜ！！」

聞き分けの悪いゴン太に、ミライは少し声を強めて言う。

「そういうのがアマチュアだって言うんだ。電波変換を維持するので精一杯のくせに俺の仕事に口を出すな。冷静に状況判断の出来ない奴は、邪魔なだけだ」

ミライがゴン太にその場から消えるように伝えると、そのやり取りを見ていたジャミンガーの残存部隊が空中に走るウェーブロードや黒煙の向こう側から次々と湧き出てきた。

「ブロッ……！　まだ、あんなに」

オックス・ファイアが堪らず怯む。ミライはそんな情けないオックス・ファイアに一つ教えてやった。

「ジャミンガーはな、行動を起こす前に自らの同志を集められるだけ集めておいて、個々の戦闘能力の低さをカバーする習性を持つ。――要するにお前じゃ手に負えないって事だ、分かったらサッサッと失せろ」

「でも、このまま逃げるなんて、俺には出来ねぇ！！」

ゴン太がしつこく食い下がる。

「しつこい奴だ……、仕方ない言い方を変えてやる。

……確か牛島って言ったか、お前の言う遊撃隊とやらが本当にサテラポリスの組織だというのなら、俺に纏わりついて仕事の邪魔をすること以外にやることがあるはずだろ？　よく考えるんだな」

ミライはゴン太が納得できるような言い方で自分の意見を伝えた。

「……わ、分かった、ここはお前に任せる」

「初めからそうしてくれ」

「でも、お前のことはまだ認めてねーからな！」

オックス・ファイアはそう言い残して、校庭を後にした。

そしてやっと解放されたミライは、さっきとは比べ物にならない量にまで湧き出し、校庭を埋め尽くすジャミンガー達を指差す。

「さぁ、サイコロにされたい奴は掛かって来い」

その挑発的な言葉に対し、ジャミンガーは下卑た笑いを含ませ言い返す。

「僕ちゃん～？　言葉は選んだ方が良いぜー！？　仲間に見捨てられて泣き出したい気持ちのくせに強がってんじゃねぇゾ！　コルゥア！？」

「フッ……、ウイルスレベルの脳味噌だな」

ミライは笑いを含ませた。

ジャミンガーは憤る。

「あンダト！？　コラァ！　裏の世界にぶち込まれてぇのか！？」

「バカめ、ぶち込まれるのは貴様達の方だ！　貴様らを器物損壊と不法占拠の現行犯で逮捕する！！」

ミライはサテラポリスのエンブレムが表示されたエアディスプレイをジャミンガー達の方に向け、一喝した。

「ゲェッ！　コイツ、サテラポリスか！？」

ジャミンガーの一人がうろたえる。集団もこれだけの数になれば、一人ぐらい甲斐性のない輩も出てくるのは当然だが、ウイルス人間にも当てはまるとは意外である。

それに対し、透かさずジャミンガーの一人が乱れた統制を修正する。

「バキャローー！！　たかが、ガキ一人だぜ？　チョロイ、チョロ

イ！」
「そうと決まりゃ……」
「人海戦術だー！！」

ジャミンガーは数で押し切る作戦を実行に移した。その様は、まるで津波のようである。

「やるぞ、レイダー」
『了解』
「トランスコード００１――」

ミライが掲げた白いハンターにサテライトからのコード情報が含まれた光が閃光の如く貫き、電波解放したレイダーが少年を包む。そして形成された光の球体からあまりのスピードで白い閃光となった電波人間が弾かれるように飛び出し、ジャミンガーの大群に向かって突っ込んでいく。

「フェーズ・コンバット。ミッションスタート」

電波人間は、ジャミンガーから成る塊を斬り飛ばす。まとまりのあった塊は、斬撃によりバラバラに引き裂かれてしまった。一部のジャミンガー達は崩れ地面に這いつくばる。

「ヤベェ……！　コイツ、とんでもなく速ーよ！」

白い閃光は、ジャミンガーを着実に減らしていった。

敵を薙ぎ払い駆け抜ける閃光は、あのロックマンを彷彿させる。
そんな彼の雄姿はクラスメート達にもしっかり伝わっていた。

「スゲェッ……！　スゲェよ、あの転校生！」

クラスメートの一人である、丸刈りはジャミンガーの大群を痛快に薙ぎ払うミライの姿に心打たれていた。

「やっぱり私……、彩道君はゴン太君が言ってたような悪い人に見えないよ」

「実は、俺も……」

「それに、カッコ良かったもんね、彼！」

「しかも強いし！」

「ロックマンと、どっちの方が強いのかなぁ」

もはや、ミライを疑う者などいなくなっていた。そこには純粋に彼の雄姿に魅せられ、ミライを応援している子供達の姿があるだけだ。

strdst―13：ロックマンはいない

「スバルっ！　ケガはなかった?!」

スバルは学校を終えて自宅に帰ると、心配のしすぎで少しやつれたものを浮かべているあかねが出迎えた。だが、奥のキッチンで放置され沸騰したやかんが五月蠅く鳴っているので、スバルはそっちの方が心配な様である。

「僕は大丈夫だよ。でも、まさかコダマ小学校が狙われるとは思わなかったけどね」

ブーツを脱ぐと、スバルはのんきに答えた。

「何言ってるの！　最近はまた物騒になってきたんだから他人事じゃないわよ?!」

我が子の性格を良く知っているが故にあかねはスバルが心配で仕方がなかった。それに対し、スバルはさっきから五月蠅いやかんを黙らせる為にキッチンへ向かいコンロの火を消すと、同じくさっきから五月蠅いあかねに振り向き言った。

「やっぱり、ロックマンがいなくなったせい?」

スバルはあかねを見つめた。

その表情には少しの罪悪感が見え隠れしている。そんなスバルをあかねも見つめ返す。

「……馬鹿ね、そんな事を言いたいんじゃないわよ。もうロック君もいないんだから、無茶だけはしないでちょうだいってこと」
「そこまで僕も馬鹿じゃないよっ」
ニヤつく息子に、あかねも少し笑みを含めるとスバルに言った。
「そうね、分かったわ。それじゃ、手洗ってらっしゃい」
「うん」
スバルは頷くと、キッチンの隣にあるリビングのソファにカバンを下ろし母親の言うとおりに手を洗いに行く。
そして、洗面所の方からパシャパシャと水の流れる音が聞こえてくる中、あかねは夕食の食器を並べつつ呟いた。
「そこまで馬鹿だから……心配なのよ」
『カチャンッ』揺う皿が蚊程の音で鳴る。
それから暫く経ち、時計の針が午後6時を回った頃、食卓を二人っきりの親子で囲み夕食を取り始める。主菜の皿には白濁色の液体が盛られていて、所々に赤や緑の繊維の塊が白色だけである所以の寂しさを紛らわせていた。
今の星河家を見ているようで、この食べ物を見ていると食欲と共に寂しさが込み上げてくる。

「ねぇ、母さん。今日、転校生が来たんだ」

シチューの人参をどけつつ、スバルが話を切り出した。

「どんな子なの？」

あかねはスバルのシチューに、スティックサラダにしていた人参を追加する。

「んー、顔はカッコ良くて……。後、背も高かったなぁ。それにチョンマゲが印象的だったよ」

人参をやはりどけながらミライの特徴を述べた。だが面倒な事になりそうだったので彼がサテラポリスである事は伏せておいた。

「フフッ、そのカッコいい子にルナちゃんを盗られないようにしなきゃねぇ、スバル？」

言いつつ、更に人参を追加した。このままではシチューが人参のシチュー漬けになってしまう。それはスバルの精神衛生上あまり好ましくないと言えるだろう。

「な、何言ってんだよ?!　ぼ、ぼ、僕には関係ない話さ！」

スバルは人参の除去作業を中断してまで否定にかかる。そんな顔を真っ赤にしている子供を見ていると、あかねは笑わずにはいられなかった。

「アッハハハ！！」

ｓｔｒｄｓｔ―１４：母親の味

食事を済ませあかねはキッチンで皿洗いをしていた。スバルは苦手とする人参を半ば無理やりあかねに食べさせられたので、ソファにぐったりと寝転がりながら壁に貼り付けられたテレビを眺めていた。

「ウップ……」

スバルは食道から這い上がろうとしてくる人参の存在を感じ、口を手で押さえた。その顔色は良くない。

「よく食べたわね、えらいわ」

「『食べさせた』の間違いじゃないの？」

どうしてもケチをつけたいスバルは、ソファの向こう側で背中を向けているあかねにゆっくりかつはっきりと言った。だが息子の皮肉をしかと聞き取ったあかねは何事もなかったかのように、汚れた食器を洗うことに専念する。

少しリアクションを待ってみたスバルも、些細な反応さえ無いと見るや再び発光する板に視線を向けた。

「ちぇっ……」

そう言ってつまらなさそうに、つまらないテレビを見ていたがやはり、つまらない。スバルはテレビを見限って電源を消そうとリモコンを探し出した。だが、これがなかなか見つからない。

「母さん、リモコンがないんだけど」

「そこにあったでしょう？」
「ない」
「だったら、自分で電源切りなさい」
「いや、リモコンで消したいんだ」

何か良く分からない特別なこだわりを見せたスバルは、再びリモコンの捜索活動を始める。もはや直接、電源を切った方が労力も時間も少なくて済むのだが、一度決めたら頑固なものでスバルはテーブルの裏やソファの下のスペースなど隈無く探していた。
そして何となく引出しを開けると中にはあかねの物であろう、ギッシリと書き込まれている料理のレシピがあった。それは今の御時世では珍しく紙媒体で記されていた。

「これ何？　母さん」
「あっ、そんな所にあったのね」

そう言って洗い物を済ませたあかねは、スリッパをパタパタと鳴らせながら、濡れた手をエプロンで拭いスバルの持っている紙切れに手を伸ばす。そのボロ紙をずっと探していたらしく、あかねは嬉しそうに紙を広げ、内容の確認をしていた。

スバルは、そんなあかねにリモコンを探しつつ聞く。彼のその手はソファの隙間に突っ込まれ、何かをまさぐる様に忙しなく動いていた。

「それ、大事なものなの？」
「そうねぇ、私が結婚する時にお義母さん――アナタのお婆ちゃんに頂いた物なのよ。それは母さんの料理の原点ともいえるわ」
「へぇー……、なんで探してたの？」

気になった様だ。

「実はねぇ……今日、ルナちゃんのお母さんに頼まれちゃってね」

あかねはそう言いながら、手を頬に添えた。その仕草は、年不相応な可愛らしさが残っている。そして少し嬉しそうな表情を浮かべて彼女は続けた。

その表情は同じ母親としての共感とも取れる。

「私に料理を教えてほしいんだって。フフっ、意外だったけど嬉しかったわ」

あかねは、笑みをこぼした。

「あの人がねぇ……」

スバルも少し驚いた表情を浮かべる。随分昔の事件で、家族仲は良好になりつつあると知ってはいたが、あの仕事に生きる女がまさかこれ程までに家庭的になっているとは思わなかったのだろう。

「なんでも、手料理をルナちゃんに作ってあげたいそうよ。今時、手料理を作りたいなんて良いお母さんね」

「だから、その紙を探してたんだね」

「そういうこと。これには料理の細かいコツとかちょっとした技とか書いてるからね」

誇らしげにあかねは、ボロ紙を提示して見せる。

「僕もおばさんを応援してるよ。母親の味って言うのは、フードデ

ィスペンサーじゃ作れないからね」

頷きながらスバルは語った。普段からあかねの手料理を食べている彼の言葉は、言葉以上の意味を持っている。

「流石、解かってるわね～」

「毎日、ありがたく頂いてますから」

スバルとあかねは、意味ありげに笑い合う。その笑い声は夜のコダマタウンの空へとささやかに響き渡った。

所変わって、コダマタウンで一番の豪華さを持ち、最も夜空を明るく照らしているマンションのとある一室。そこではルナとメガネをかけた美しい女性が食事を取っていた。

カチャカチャと広い部屋の空間に皿を鳴らすフォークとナイフの音が規則正しく響いている。その音は決して大きいとは言えないのだが、やけに耳に付く。おそらく、会話がない事に起因しているのだろう。

二人で囲むにしては広すぎるテーブルが、親子の距離感を暗示している気がしてならない。

一向に口を開こうとしないルナに対し、ユリ子はメガネを整えると堪らず口を開いた。

「ル、ルナ？　今日は学校どうだった？」

用具を持つ手を止めてユリ子はルナに今日の学校の様子を尋ねた。だが、仕事で忙しかったのでコダマ小学校で起きた事件についてユリ子は知る由もなかった。加えて言うならば、やはり仕事が忙しく料理を作ることも出来ずに、フードディスペンサーで不本意ながら今日の夕食の支度を済ませたのであった。

それがルナにとってはどうしようもなく気に食わなくて、更にそんな自分勝手な想いを溜め込んでいる自分も嫌だった。そんなルナは、食事を続けることにした。

「それに今日は、みんなの前で喋ったんでしょ？　上手くできた？緊張しなかった？」

昨日から、機嫌の悪いルナと何とかして会話をしたいユリ子は質問を必死に考えては吐き出す作業に専念していたが、効果は薄い。

「……（……）」

ルナはユリ子にではなく、食事に集中していた。

「えーと……。今日は、ほら……」

言葉が出てこなかった。仕事では部下に対しテキパキと指示を繰り出すその口は、娘との会話ではその真価を発揮することはなかった。

「上手くできたよ。私なりにはカンペキだったわ」

やっと口を開いた。

「えっ？　それは良かったわね、流石だわ」
「でもねママ、今日、学校がウイルス人間に襲われたのよ。知ってた？」
手に持った用具を止めずにルナは言った。
「……知らなかったわ。ルナ、ケガはないわよね？」
仕事が忙しかったユリ子は、そう言う他なかった。
「私は大丈夫。サテラポリスがすぐに追い払ってくれたから」
「良かった……」
「私としてはちっとも良くないんだけどね」
ルナが小さく呟いた。
「えっ？」
「ううん、何でもないの。ごちそうさま、今日も美味しかったよ」
何か言いたげなルナは、フードディスペンサーで作られた料理を食べ終え席を立とうとする。だが、このままではいけないと感じ取ったユリ子は部屋に戻ろうとするルナを呼び止めた。
娘との絆を再確認する意味も込めて、何よりも一人の母親として言わなければならなかったのだ。
ユリ子は母親になりたかった。
「ちょっと、待ってルナ！」
「？　何、ママ……（なんだろう、真剣な表情……）」

何時とは違うパターンにルナは不思議そうにユリ子を見つめていた。

「あのね、ママ仕事で忙しくて料理とか作ってあげられなかったでしょう」

「まさか、昨日の事を気にしてたの？　いいよ、あれは忘れて」

想いとは裏腹につい気遣いをしてしまった。

「違うのよ。私ね、あの事件以来、ルナとちゃんと付き合っていこうって思っていたけど……、実際は仕事ばかりであなたにあまり構ってあげられなかったわね」

「ママ……」

ユリ子は続ける。

「だから考えたの。せめて手料理だけでもアナタに作ってあげようって……、母親らしいことをしてあげたいのよ。――ルナ」

「ありがとう……、でもママ料理なんて出来たっけ。仕事も忙しいし……時間だって」

「うん……、一人で料理を学ぶのには限界があるわ。だから星河さんに料理を教えてもらう予定なの」

ユリ子は少し照れくさそうに言った。しかしルナを見つめるその目は少しだけ晴れやかになっており、母親のそれと言っても良いくらいであった。

「そこまで考えてくれてたの……」

嬉しくて、熱いものがルナに込み上げた。

「パパが出張から帰ってくる一週間後までには完璧に料理を習得して見せるわ。その時は、お友達を呼んでどこかにお出かけしない？」
「えっ？」

ユリ子からの意外な提案にルナはただただ驚くしか出来なかった。よもや、こんな言葉を聞けるとは思ってはいなかったのだろう。

「今度は、ただ純粋に家族として触れ合いたいの。写真があいうのだけじゃ寂しいでしょう？」

そう言って、少し向こうに掛けられている例の写真を見つめた。

「ママ、ありがとう……ありがとう。楽しみにしてるよ」

鼻を赤く染めたルナはそう言いながら、袖の色を濃くした。

「（ありがとうママ）」

ｓｔｒｄｓｔ―１５：スバルの毎朝

夜が明け、太陽が顔を出した頃の気持ちの良い朝。スバルは朝の日差しに照らされながら、今日も寝坊してしまった。

とりあえず彼は、ベッドの中でウゾウゾとモゾモゾしていた。

ウゾウゾを繰り返すこと数十分。

手始めにスバルは目を開けることにした。寝起きは目が乾燥しているので、ドライアイなスバルは目を開けたくなかった。

痛いらしい。

そこで目薬がどこかにあると思ったらしく、スバルは布団から出ることを選択肢に入れずに手当たり次第、都合良く目薬に指先でもかすることを期待しつつ手足をジタバタさせる。

すると、ベッドの横に備えてあった地球儀のヨロシーカ、スイカの座標にスバルの左足薬指が激突した。

地球儀がクルクルと回り出す。『カラカラカラー』と、その音は結構うるさい。ついでに、あまり手入れのされていなかったそれは、北極地帯に雪と言う訳じゃないが埃を被っていた。

いや、よく見ると地球全体が埃をかぶっている――否、凝らして見ると、埃は遠心力の作用も相まって周囲一帯にばら撒かれているではないか。

スバルはむせた。

そうしてやっと、目薬など部屋に置いてなかった事に気付いたスバルだが、目を開けなければ外の風景も分からなければ、生活にも支障をきたす。それだけは避けたかったので、スバルは太陽の洗礼を覚悟しつつ瞼の筋肉に力を入れた。

だが、スバルは思った以上に眩しかったので目を瞑った。

そうこうやっているうちに階段の方から、スリッパの階段をこする音が聞こえてくる。

それはだんだん大きくなって、スバルの部屋のドアの前でピタリと止まった。

「起きなさいっスバル。もうそろそろルナちゃん達が迎えに来るころじゃないの?!」

カンカンカンカン、あかねがドアを叩く。乾いた音から、お玉でドアを叩いている事が窺える。

眠いながらもスバルはドアが傷付かなければいいのだが、と余計な心配をせずにはいられなかった。

「もうちょっとだけ……」

呻きつつスバルは、布団に包まる。

「んもう、しょうがないわね」

あかねは部屋に侵入し階段をスタスタと登ってスバルの布団に手を掛ける。

白魚の様に美しい手に力を込めた。

「なっ……」

「おきなさいっ、秘技! 布団返し!!」

「な、なっ」

あくまであかねの技名のイメージに沿って大げさに言えば、スバルは空中を舞った。
その一瞬を写真に切り出して付けるタイトルは、さしずめ『空を舞う少年』と言ったところか。

普通に言えば、布団と共にスバルはベッドからボトリと転げ落ちた。

「かぁっ……！」

落下の衝撃で肺に貯まっていた空気と共に声が漏れた。

「おはよう、目は覚めた？」

にこやかに、あかねは笑みを浮かべてスバルを見下ろす。窓から太陽の光が差し込んで、手に持ったお玉がギラリと光を反射した。
あかねを見上げるスバルは何故かおののいた。

「強烈です。母さん……」
「そう、私は朝食の用意をするから早く着替えなさいね」

そう言付けるとあかねは、スタスタと部屋から出ていった。

ドアが閉まる。

「……」

落ちた布団をあるべき場所に戻すと、スバルはぬるりと起き上がった。

「ふあーぁ、今日も寝坊かぁ……。マスコミさんがいっぱいで大変だろうなぁ……。あっ、でも委員長の方が大変かもなぁ」

寝起きで頭の働かないスバルは、大きなあくびをしながらパジャマをダラリダラリと脱ぎ始める。

朝のスバルは動きが極端にのろい、まるで足を負傷して歩くこともままならない亀のようだ。

遅いながらも、いつもの服に着替えたスバルは机に置かれたハンターとビジライザーを手に取って朝の準備を大体完了させた。

「……よし」

一息つき、ふと、スバルは窓から空を見上げるとウェーブロードに小鳥型の電波がとまっているのに気が付いた。

小鳥型の電波は、同じ型番のデンパちゃんを連れており朝から見せつけてくれている。仲睦まじい二体の電波体を見ているスバルは呟いた。

「ははっ、平和だなぁ……。そう思うでしょ？　ロッ――」

いつもの癖でスバルは、もういない相棒に語りかけてしまった。

「……」

当然、返事はない。

『おうよ、そうだな！』

スバルはウォーロックの声真似をして自分で自分に返事をしてみ

る。
その声はお世辞にも似ているとは言えなかった。
「何やってるんだろ……僕」
「急ご」

ｓｔｒｄｓｔ―１６：ミライの思惑

それから暫く経ち、児童達の学校に向かって歩く姿がちらほら確認できるようになった頃。星河宅の玄関のドアがゆっくりとゆっくりと何かに恐れるように少し開いた。

開いたドアの隙間から、スバルは素早く出てきて辺りを見回す。

スバルはキョロキョロと、何かを探しだそうと目を凝らしていた。

ある程度チェックすると、さっきからずっと止めていた息を思いっきり吐き出す。

「ハーーッ、セーフ……」

「じゃないわよ！」

「？！」

例の如くあの声にスバルはひどく驚いて背筋をピンと伸ばした。

そして、改めて辺りを見回す。

「ど、どうしてだっ、さっき確認した時はいなかったハズ……！

一体この声はどこから……」

スバルは自分の頬を、冷たい汗が伝うのを肌で感じ取りながら言った。

「私たちはココよ！」

さっきから声のする方にスバルが向くと、スバルの家の裏からゾロゾロと人間が出てきた。見た所、悪気があるのか知らないが勝手に人の家の敷地に入り込んでルナ達は身を潜めていたようである。

「ちょっ、何勝手に入り込んで……」

言葉の途中でスバルは言葉を呑んだ。円盤をあしらった手がわなわなしている。ＵＦＯが墜落でもするのだろうか。

それは何故かと言うと、スバルが目を向ける先で最初にルナがひょっこり顔を出し、スバルにニッと笑ってみせる。

そしてゴン太が、人の家の裏で牛丼をがっついていたらしく、空っぽになった牛丼の容器を寂しげに見つめながら姿を現した。

続いて、ゴン太に隠れてしまっていて断定は出来ないが、これ程の小ささを持つ人間もそうはいないので恐らくキザマロであろう物体が遠慮がちに会釈をしているらしい。

そして、驚いたことに今日は三人組ではなかったようで、もう一人姿を見せていたのだ。

「なんで、キミが？」

スバルがそう問いかけた先には、綺麗な髪を風になびかせている少年がいた。スバルも、出てきた場所がもうちょっとマシだったら、さぞかし良い絵になったと思っただろう。

「知らん、星河に用があって来てみたら、コイツ等が先に来ていた」

「で、何で僕ん家の裏庭に隠れてたの？　えーと……」

スバルは困ったように、ミライの方を見つめた。なんて呼べばよいのか分からないのだろう。

「常識の範囲内で好きな様に呼ぶといい」

「じゃぁ……、彩……ミライ君で」

「……まぁ、いいだろう。では質問に答えようか。まぁ、何だ……

俺はそこにいる、色んな意味でスゴイ髪形をしているドリル女に無理矢理そこのお花畑に連れこまれたんだ。まったく、こんなにも常識のない奴は、アメロッパにもいなかったよ」

未来はそう言ってルナを睨んだ。

「アラ、あなただって私にヒドイ事をしたでしょ？　おあいこよ！」

「キサマ、あれは仕方がなかったと言ってるだろう。フッ、ニホンの学生は物分かりが悪くて敵わん」

「テメェ、委員長を馬鹿にしたな！」

ゴン太が切れた。

単純にミライが気に入らないのも理由に含まれていそうだが、とりあえず憤怒の表情は確認できる。

「馬鹿にしてはいない。現状から判断できる情報を基に一番妥当な結論を述べただけだ」

「てめぇっ、訳のわかんねぇ喋り方しやがって！」

ミライの言い方が癇に触ったらしく、ゴン太は大きな拳をグッと握りしめて見せる。

「暴力で訴えるのか？　哀しいな、動物と同じ術しか持たぬ者は……」

その言葉がゴン太の小さすぎて役に立たない堪忍袋の緒を切る決定打となった。

「黙ってきいてりゃ、言いたい放題言いやがって……！」

別に今まで黙っていなかったゴン太は怒りを露わにし今にもミライに殴りかかりそうな口調で少ないボキャブラリーから言葉を選んだ。
体格ではゴン太の方に分がある。
だが、肩書ではミライの方に分がある。

「そろそろ、止めにしようよ。ていうより僕の質問は無視の方向なの？」

スバルは一線を越えそうになっている二人をなだめた。
ついでに話を戻そうともしてみる。

「そうよ。暴力はいけないわよ、ゴン太」
「なんだよ！　委員長はアイツの肩持つってのかよ？」

もう一度ルナは言った。

「ゴン太っ」
「……う…、わ、分かったよ」

シュンとして、ゴン太は渋々拳を引っ込めた。
でかい体が妙に小さく見える。だがミライを睨むその目は、さっきまでの怒り露わにした表情のものと何ら変わりなかった。

「フッ……」

ミライは鼻で笑った。

「ちょっと、アンタだって悪いんだからね。そこんとこ分かってるの？！」

「俺が何かしたかな？」
『ミライ様は、間違いなど犯さない』
主にだけ付き従うようにプログラミングされたレイダーはミライの肩を持った。悪いのはレイダーではない、強いて言えば戦闘兵器に邪魔なプログラムを一切施さなかった大国の科学者達が悪かったのだ。
「ちょっと、アンタら！」
ルナは顔をピクピクプルプルさせていた。
彼らと相性が悪いのは見ていて分かる。
「委員長、委員長っ、なんだか同じ事が繰り返される気がするよ」
話がさっきから進まなくて面倒臭くなったスバルは、質問の答えなど置いといて早いとこ学校に行ってしまいたくなっていた。
「いいかげん、学校に行こうよ」
「そ、そうね……私としたことが熱くなりすぎた様ね」
ルナも落ち着いたようなのでスバルはホッと一息つけた。
「じゃあ、そろそろ行こうか」
言ってる途中でスバルは気が付いた。
「あっ……」
「どうしたんですか？　スバル君」

不思議に思ったキザマロがスバルを見上げて聞いた。

「マスコミさん達、今日はどれ位？」

毎朝スバルも大変なものである。

もはや小学生の抱える様な心配ではない。

ヒーローというのも考えものだ。

「何言ってるんですか、スバル君」

「え？」

ずっと続いてきた慣例を突き破られたスバルは、キザマロの言っている意味が分からなかった。

「マスコミなら彩道君が追っ払ってくれたんですよ」

「えぇっ！？」

キザマロの口から出た言葉に、スバルは大いに驚きミライの方に首をグルンと回した。スバルは何故か興奮している。

ミライは露骨に嫌な顔をしてスバルに言ってやった。

「そんな顔で俺を見るな。あいつ等はずいぶんとしつこかったのだろう？　プライバシーの侵害だと言って、隊員証をチラつかせてやれば造作もない事だ」

彼らの仕事を奪うとは、スバルの為と言っても酷い事をするものだ。

「ありがとう」
「フッ、星河の為と言うよりはお前の母親の為だ。――何より俺の任務の邪魔になるからな」

ミライは口角を少し上げた。スバルはミライを母親想いの良い奴に違いないと思ったことだろう。

「さぁ、学校に行くんだろう？」

ミライはそう言って、俺に付いて来いとでも言わんばかりに一人スタスタと歩いていった。彼の綺麗な後ろ髪が、歩を進める度に背中の所で振り子の針みたく左右に揺れている。

ミライではないがフッと笑いスバルは彼の後ろ姿を眺めていた。

「……思ったより良い子かもしれないね。そう思わない、オープンマン？」

ハンターに目を落としたスバルは、彼等の事をよく知っているであろうオープンマンを呼び出す。

『分からないんだぞ、だって俺ボコボコにされたんだぞ。でも……』
「ん？」
『デリートはされなかった……。あれほどの力を持っていたら、俺なんて何時でもやれたと思うんだぞ。でも、やらなかったんだぞ』

オープンマンの疑問を聞いたスバルは一言呟き、何か満足した様な表情を見せ学校に向かって歩き出す。

「そっか」

そして勝手に学校に向かって歩くスバルとミライに気付いたルナは慌てて一団の先頭に立とうとして走り出した。
彼女は自分が一番前でなければ気に入らないらしく、ミライの前に立とうとする。

「ちょっと一番前を歩くのは私よ！　アナタは私の後ろを歩いてなさい」

スバルはルナの強引さに苦笑いを浮かべて、ミライの事を気の毒に思った。

「なんだお前は？　俺はお前の言う事を聞く義理は無いと思うんだが……？」
「私はコダマ小学校の生徒会長なのよ。分かる？　生・徒・会・長！　なのよ！！」

スバルとキザマロは、ルナの強引な押し切りが成功すると信じて疑わなかった。

「フッ、それがどうした。そんな肩書が俺の行動を制限する枷になるとでも？　冗談が下手くそで笑えないな」

そう言って、一笑に付した。ミライの発言に、スバルとキザマロは思わずにはいられなかった。

強い――

彼等は初めての出来事に、思考回路を混乱させられていた。何故なら、スバル達にとってルナは逆らえない絶対の存在だったのだから、ミライの言動に耐性がなかった彼等のこの反応は仕方ないと言える。

「なんだと……！　ミライ君、委員長に対抗してるぞ」
「なんて恐ろしい人です……、命が惜しくないんですかね？」

スバル達がミライの身の安全を心配していたら、ルナがわめいた。どうやらミライは、ルナの堪忍袋の緒も切ってしまったらしい。

ミライは自由過ぎた。
仕方ない事だが、彼はルナ達との付き合い方というものを全く心得ていない。

「何だコイツは？　酷くうるさいな。こんなのでよく生徒会長になれたもんだ」
「もういいわっ。私だってね、アナタのしたこと許してあげようと思ってたのに、アナタを私たちのグループに〇．〇〇〇一％の確率で入れてあげなくもないと思っていたのに……」
「で？」

ミライが分かり切った言葉の先をルナの口から早く言わそうとする。

「あー、ムカつくわ。こういう態度がムカつくのよ！　もう知らないからね。勝手にしなさい」

「初めから勝手にしてたんだが？」
「キィーーー！　馬鹿にしないでよ？！　ちょっと顔が良いからって」
「自分でそんな事言った覚えはない。お前が勝手にそう思ってるんだろ？」
「話にならないわね！　まったく」

苛つく余り、道に転がっている石ころを蹴り飛ばすルナだが、形勢が悪すぎる。ジリジリと追い込まれて精神的に危険な状態だ。

『そこの金髪女！　ミライ様にこれ以上、盾突く様なら斬り捨てるぞ！』

レイダーが主の危険を察知した様で、仇為す敵を排除するプログラムが作動した。
その真紅のレーダーアイは本気だ。
何度も言うがレイダーはただ、組み込まれた命令に従っているだけなので悪気がある訳じゃない。

「な、何よ。やる気？　そんな事してみなさい……、アンタ只じゃおかないわよ？！　（ちょっと怖いわね、コイツ）」

明らかに怖がっているルナだが強がって見せた。

「いいのか？　そんな事言ってしまって……」

ミライは、ルナに対しハンターを構えた。

「ちょっ……何を」

ミライが躊躇することは無かった。

「ウィザード・オン。やれ、レイダー……」
「了解、ターゲット補足。――斬る！」
「ひぃっ……！　（スバル君っ）」
「ちょっと、ミラ……！」
「てめ……！」

スバルもどこまでが冗談か分からなくなり言いようのない不安に襲われたが、もう遅かった。
破壊兵器であるレイダーがルナに対し既に剣を抜いていた。
透かさずルナに向かって、数多の電波体を斬り伏してきた物を振りかざす。電波体でさえも紙屑の様に両断する切れ味なので、脆い人間は言うまでもないだろう。そして、構えられた破壊兵器の武器はルナの脳天から股まで綺麗に割って標本でも作る気らしく、全力で振り下ろされた。
ルナはともかくスバルでさえ剣の軌道を目で追えてない。
それほどのスピードである。
それは彼女が自分の人生の終わりの瞬間を確認する資格さえも剥奪されてしまっていることを意味していた。

「やめろ」

ミライが一言言うと、レイダーはピタリと動きを止めた。

「は……あっ……ぁ」

ルナは膝が砕け下半身から崩れ落ち、ペタンと尻もちをついた。

「フッ、良く見ろ刃は出していない。それに、レイダーに人は殺せ

ない様に設定されている」

ミライはハンターにレイダーを仕舞いつつ、種を明かす。

「でもやり過ぎなんじゃ……」

「良いじゃないか、静かになって……だろ？　それに、アメロパンジョークさ」

ジョークと言い張るミライだが、実際どこまで本気だったのかはスバル達の知る所ではない。

「委員長っ、大丈夫か?!」

ゴン太がルナを引っ張り起こすが、彼女の足はよろよろと場所を定めず体をしっかりと支える事が出来ていなかった。焦点が定まらず、視線はボーと遠くを見つめていた。

「あっ、お花畑が見えたわ……綺麗だったぁ」

「ダメです……。完全に正気を失っています」

医者の様にキザマロは残念そうに首を横に振ってスバルにルナの容態を伝えた。

「やっぱりやりすぎだよ、ミライ君」

スバルはそう言いつつミライの方を見るが、さっきまでいたであろう場所には姿は無く、すでに彼は学校に向かって再び歩き出していた。

ルナのことなどもう気にも留めていないことが彼の足取りや後ろ姿から容易に想像できる。

「って、もう行っちゃってるよ……」

スバルは、ミライとルナの間で視線を右に左に行ったり来たりさせながら逡巡するが、ミライにどうしても聞いておきたかった事があったのでミライの方に駆け出す。その際、ルナの方に振り返ってみたがゴン太たちが付いているので彼女の心配は無用だろう。

「ちょっと待ってミライ君！」

スバルは、腕を伸ばせば届きそうな距離まで詰めるとミライに声をかけた。すると、ミライは振り向いてスバルだと確認すると足を止めて聞く。

「友達は置いてきたのか？　意外だな」
「ちょっと聞きたいことがあって……」

スバルはそう言って、さっきミライが言っていた事を思い出しながら質問を投げかけた。

「僕に用事があって訪ねてきたんだよね？」
「あぁ、そうだ」
「何だったの、その用事って？」
「……教えてやらんでもないが、その前にそこの自販機で何か飲み物を買ってきてくれ」
「え？」
「あの生徒会長の相手をしていたら、喉が渇いたのさ」

ミライは目を自販機に配って、スバルに買いに行くように促す。

「わ、分かったよ……」

スバルは仕方なく自販機へとミライのお使いをする羽目になってしまった様である。

ミライは、ちゃんとスバルが自販機へ向かって行くのを確認したら、彼の帰りを待つことなく学校へと向かって歩き出し、一言置いていった。

「レイダーの剣の軌道さえも見切れない今のお前に、俺が伝える事はないよ……」

ｓｔｒｄｓｔ―１７：衛星女からの招待状

「それじゃあ、今日のホームルームを始めるぞ」

そう言って、育田はブラックボードに何か書きこんでいく。黒い板に文字が軽快な音と共にツラツラと記されていく度、生徒達の目が獲物を狙う者のそれへと変わっていった。

彼等は自分達が一番楽の出来る仕事を虎視眈々と狙っているのである。

この仕事選びの是非により、学校生活の過ごし方がおおよそ決められると言っても過言ではないので、彼らの並ならぬ意気込みには納得できるものがあった。

「みんなもう分かってるとは思うが、このクラスでやる仕事の分担を早いとこ決めてしまおうか」

育田は、黒板をコンコンと指で小突いた。

「それじゃ、まずは学級委員長からな。誰かやりたい人はいないかー？」

育田は児童の中から誰かが率先して挙手をすることを促す。大抵のクラスならここで、様々な心理戦が繰り広げられるわけであるが、あの少女が在籍しているこの六年Ａ組にはそんな事をする暇など与えられる筈もなかった。

「ハイハイハイ！　私がやります！　やって見せます！！　やらせて下さい！！」

何だかんだでいつの間にか元気を取り戻していたルナは、手を思いっきり挙げて私が委員長になるのよ、と言わんばかりに勢い良く席を立って周囲を見渡した。
そんなルナに対しクラスメート達は、別段驚く訳でもなく頷いている。

理由はルナだから――　それだけで十分だった。

「白金いいのか？　生徒会長と委員長の兼任は大変だと思うぞ」

育田は、頭をボリボリと掻きながらルナに確認する。確かに、育田の言うとおり生徒会長と委員長の兼任は大変な苦労が付き纏う事が予想される。
だがしかし、ルナにとってそれも含めて名誉であり、ある種の絶対的なステータスであった。

「心配は御無用ですわ！　私、白金ルナがこの学校も学級も責任を持って導いて見せます！」
「おぉ、頼もしいなぁ、お前がそこまで言うんなら先生は賛成するぞ。みんな、学級委員長は白金でいいか？」

育田は、皆に返答を求めた。
ルナは胸を張って当然の結果を待ちわびるようにして、どっしりと構えている。その様は、女王の品格さえも漂っている気がしないでもない。
それは、スバルには無い生れながらに持った、人の上に立てるという才覚なのであろう。

「私はいいと思いまーす」

「白金さんが適任だぜ」
「それ以外には考えられません」
「てか白金さん以外あり得ないしー」
「ルナ様～」
「そうだ、そうだー」

これは決まったと思い、ルナがフフンと笑い金髪ロールを手で撫でる。

「みんな不満はない様だな。よし、委員長は白金で決まりだ」

皆が『パチパチパチパチ』と拍手をする。

それを見たルナは突然、ここぞとばかりに演説を始めた。今が好機だと彼女は思ったのだろう。

「みんな、私に任せなさい。そうすれば素敵な学校生活を保証するわよ！　だから、これからも白金ルナを応援よろしく頼むわ。みなさんの手助けをさせてもらうために……！！」

拳を強く握りしめて、自分の確固たる信念を言い切ったルナに『わーーーー』という歓声が割れんばかりに教室という一種の閉鎖的空間を満たした。

流石はルナといった所か、一瞬にして名実ともにクラスのリーダーになってしまった。

クラスの注目を一身に浴びている彼女をスバルは苦笑いしながら眺めていたが、つい思った事が口を衝いて出る。

「さすがは委員長だなあ……」

スバルの小さな声で放つ一言など、この沸き上がる群衆の前では何の意味も為さない。そしてスバルは何となく三個隣の席を覗いてみるが、ミライは我関せずと言った面持ちで腕を組み目を閉じて座っていた。

とことんこういった事に興味はないらしい。

「よーし、白金！　委員長になったからにはここからの委員編成はお前に任せる。進行、頼んだぞ」
「任せてください！」

ルナは元気よく返事をし、きびきびとした足取りで教壇に上がり、そしてそれに手を突きながら、後ろ手に黒板をバンと叩いた。

「さぁ、ちゃっちゃっと決めちゃうわよ！　まずは掃除委員から。やりたい人は挙手！　あっ、そこのアンタやってみなさい」

そうやってルナは、上手に各仕事に人を割り当てていく。
中には嫌な仕事を無理矢理に押し付けられて、複雑な表情を浮かべている者もいれば、目当ての仕事に就けて満足げに笑っている者、安堵の表情や消沈の念、様々な顔が見てとれた。

その作業を続けること数十分。

「大体終わりましたわ。先生」
「早かったな、流石は白金」
「いえいえ」

育田の褒め言葉に、ルナは謙遜してみてはいるがその表情はそう

言ってはいなかった。

「やることも終わったことだし、これでホームルーム終わるぞー、起立っ」

ガタガタと椅子を鳴らしながら生徒達は立ち上がり、礼をした後再び席に着くと丁度良くチャイムが鳴った。

その合図と共に、子供達は各々のスタイルで休憩をとりだす。

特にすることもなかったスバルは、非常に暇そうにして座っているミライに話し掛けようと近づいてみる。

理由は大体想像つくが、スバルの言うであろう質問に肝心のミライが答えてくれるとはとてもじゃないが思えない。

「あのー、ミライ君」

「……なんだ？」

返事はする。

「明らかに……、今日の朝、逃げたよね」

「人聞きが悪いな」

そう言い、頬杖を突いた。

「だって君のせいで１２０ゼニーが無駄になったんだよ？」

「それぐらいで騒がないでくれないか」

「ニホンの小学生のお財布事情を甘く見ないでよね」

そんな事を気にしているスバルに対し、ミライは少し呆れ顔になって言った。

その際、頬杖をやめるようなことはしない。

「……ふっ、そんな事を言いに来たのか？」

「違うよ。朝の質問に答えてよ」

「無理だ」

即答、まさにそんな感じだった。

「やっぱり」

「俺の行動から容易に想像できただろう？」

「うん。言えないなら仕方ないね」

「お前次第だけどな」

「どういうこと？」

「馬鹿め」

ミライは同じ事を何度も言わそうとするスバルに苛立ちを覚えている様で、聞こえないくらいに小さく舌打ちをした。

スバルもミライの意図に気付いたらしく、そう言うことか、と思い後頭部を撫でながら話の焦点を変えることにする。

「わかった、質問を変えるよ。なんでこの学校に来たの？」

「なんでそんな事を聞く？」

「質問に質問で答えるのは無しだよ」

ささやかな反撃といった具合にスバルは悪戯っぽく笑ってみせる。

「ふっ、まぁいい。この質問には答えてやれる。率直に言うと、お前の監視の為で、それが上から課せられた俺の任務だ。……理由は分かるな？」

そう言って、初めてスバルの方に顔を向けた。そういう察しはスバルも悪く無く、大体理由は想像出来たので正直に言ってみる。

「大体はね」

「そうか。俺はお前を監視しなきゃいけないが、気分を悪くしないでくれ。それに俺はお前のお守りじゃないからな、何も２４時間ずっと貼り着く様な真似はしないさ」

「それを聞いて安心したよ。いっつも、誰かに見られるのはゴメンだからね」

「俺もだ」

そう言ってミライは席を立ち、何をしに行くのかは知らないが教室から出ていった。

すると、タイミングを見計らっていた様で女子がぞろぞろとスバルの周りに集まって来る。中には今まで、スバルと話した事もない様な顔ぶれも見受けられる。スバルは、女とは現金なものであるという事実を不本意ながらも再認識させられた。

せめてもの救いはその集いの中にルナがいないことだろうか。彼女は、ゴン太とキザマロと話している。

一つ語弊があるとすれば、救いになるという表現は微妙なとこだが、いたらいたでスバルもいい気はしないであろう事は確かだと思われる。

また、確定的なのはスバルを取り巻くこの集団の目的が、気になる少しお高い感じのする男子とさっきまで話していた手頃な男子がいたので、コイツから情報を絞り出してやろうという事だ。

その際、ターゲットとなるスバルの気持ちを考慮する筈もなく、彼女等は好き勝手に言いたいことを言い始める。

その内容は、主にミライの詳細についてであった。

「ねぇ、星河君。彼、どんな感じなの？」
「やっぱり、クールで素敵なナイスガイ？」
「ナイスガイって……」

スバルは的確に突っ込んだ。まだ、心に余裕があるということなのであろう。

「さっきまで話してたでしょ？　印象はどんな感じだった？　ねぇ、教えてよ」
「えーと、僕にジュースを無理やり奢らしたり、奢らさなかったり……」

スバルの言葉に女子の態度が急変した。

「えぇ？！　ウソでしょ！　そんな訳ないじゃない」
「うおっ、ちょっとゴメン僕、トイレ行ってくる。ハハハ……」

危険を察知したスバルはそそくさとその場を逃れた。
その様は、かつて世界を救ったヒーローとは思えないものであった。

だが残念なことに別に催してなどいなかったヒーロースバルは廊下に避難してもやることがなかったので、とりあえず空を見上げた。空いている窓のサッシに腕を乗せて、その上に顎を埋めるとスバルはつい愚痴をこぼした。

「今の流行は地球を救ったヒーローより、普通にイケメンの方ですか。……ちぇっ、地球守るって結構大変だったんだぞ」

内心では結構応えていたらしいスバルはブツブツと不満を口にし

ていた。
　別に彼はモテたい訳ではない。
ただ、何か切なかっただけであったのだ。それが、平和ということなのだろうが少年にはまだそんな事は分かる筈もなかった。
　大抵の若者は目先の出来事に振り回されて、その中に含まれているわずかな手がかりを掴み理解して世の中の本質というものを理解していくものだ。
　スバルはまだ振り回されているべき年代であるから、そう思ってしまうのも仕方が無い。

「ふう、何だかなぁ」
「えらく辛気臭いわね！　ミライ君の人気に嫉妬してるの？」

　嫉妬魔ルナの登場。

　スバルが振り返った先には例の如く、手を腰に当てた偉そうな事この上ないクルクル縦ロール。
　だが、彼女らしい事もこの上なかった。

「やぁ、委員長。もう大丈夫なの？」

　スバルは朝の出来事について言っているらしい。

「ええ、あんなの屁でもないわ！　ちょっとビックリしただけよ」
「嘘でしょ？　あの顔はビックリしたって言うにはちょっと……ね」

　思い出したように、スバルは笑いを堪えている。ルナ宜しく淑女に向ける態度にしては少々失礼なものがあった。

「ひどい言い様ねぇ、スバル君？　レディの顔で笑うなんて」

するとルナは、スバルの隣に来て彼と同じような格好を取る。
少し窮屈に感じたスバルは右に寄った。

「ありがと」

ルナは軽くぺこり。

「……平和になったね。色んな意味で」
「そうね。良い事じゃないの」
「だけどね、何だかなぁって……たまに思うんだ」

スバルは、溜息をつく。別に、文句を言っているわけじゃないのはルナも分かっていた。

「どうして？」
「だって、最近はいろんな事件も増えてきてるし。みんな、僕を助けてくれた、あの時の気持ちを忘れてるんじゃないかなぁ……なんて」
「自惚れちゃダメよ」

ルナが否定した。

「人間って忘れる生き物じゃない」
「ちょ、ちょっと、それを言っちゃ……」

スバルは困ったように隣のルナの方を向く。
だがルナの表情は至って真面目であった。

少なくともスバルはそう思ったことだろう。

「でも、忘れないように胸に刻み込むことが出来るのも人間だけなのよね。それにロックマン様と……ア、アナタの勇気はきっと多くの人に伝わってるはずよ。そんな簡単に忘れれる訳ないわ」

そう言うルナを、スバルはまじまじと見る。ルナもその視線に気が付いている様だが、気付かないふりしか出来なかった様だ。

スバルはそんなルナに言った。

「委員長……、さすがに生徒会長委員長は言うことが違うね！」

スバルがニヤつく。

「そこっ、空気を読みなさいっ」

ルナはスバルに肘鉄をお見舞いした。

「いてっ」

「生徒会長委員長って……、アナタふざけてるの？！」

「じゃあ、委員長で」

「……」

ルナが黙りこくった。

「どうかした？　委員長」

スバルが彼女の顔を覗き込むと際、自然と顔が極端に接近した。

ルナは恥ずかしいとも嬉しいとも思って、慌てて顔を背けるとスバルとは逆の方角にある校庭で遊ぶ子供達を眺めつつ小さな声でこぼした。

「そ、そろそろ、その委員長っての止めてくれないかしら、私には立派な名前があるのよ……？」

スバルはルナの表情が見えないからという事は関係無しに、彼女の意図が読めなかったらしい。さらに言えば何故、少し恥ずかしそうな声だったのかさえもわからなかった筈だ。

とりあえず、スバルは自分なりにノリを合わせ様としたらしく間違った返答をしてしまう。

「？　じゃあ、衛星女で」

よりによってそれを選ぶとは、とことん分かっていない。

「なっ、やっぱり、ふざけてるわね……！」
「えっ？　だってさっき空気読めって……」
「バカッ！」

ルナはそう言って、駆け足でどこかに行ってしまった。

「委員長……？」

何がルナをああさせているのかは、スバルの少ない経験では理解することは出来なかった。

『おっジャマしまーす！』

混乱しているスバルだったが、彼のハンターの元に誰かのウィザードが送信されてきた様である。

訳が分からないまでもスバルは、とりあえず突然の来訪者の正体を確認することにした。

エアディスプレイに目を落とすと、そこには緑兎を模したウィザードであるモードが映っている。彼女は短い腕を精一杯スバルに振っていた。

その姿はなかなかに愛らしいではないか、ルナのこういったセンスの良さは素直に認めるべきであろう。

「モード……」

『おジャマしてます、スバル君。ルナちゃんに内緒で来ちゃいました』

「うん。そうみたいだね」

『で、さっきのやり取り、拝見させていただきましたよ。……まったくもう！　ダメダメじゃないですか！？』

「な、何がダメなの？」

『あー、ダメですね。ダメダメです』

モードが腕を左右に開いて『私は呆れてますよ』というジェスチャーをしてくれる。

「ダメなやつです。ゴメンナサイ」

とりあえず、スバルは謝っておいた。

これをすると、特に何も考えずに状況という波を乗りこなせるという事を幼いながらにスバルは知っていたからだ。

『まぁ、この話は置いといてですね。……もう、ルナちゃんも仕方ないんだから！　あー、じれったいわ』

モードは一人で勝手に盛り上がったり盛り下がったり忙しかった。
ついでに耳もピョコピョコと動いていてやはり忙しない。

「どうしたのモード？」
『フフフー、さっきルナちゃん何しに来たと思います？』

モードは自身の口があるかもしれない所に手を宛がってクスクスと笑う。
何か意味ありげだ。

「さぁ？　委員長の考えてることって、本当に分からない時がたまにあるからね」
『そうですかぁ。だったらこのテキストデータ受け取っといてくださいっ。昨日の夜、ルナちゃん頑張って書いたんですからね！？ちゃんと読んでくださいよー？』

おもむろに手紙型のアイコンを取り出して、モードはスバルのハンターのテキストボックスにそれを突っ込んだ。その手紙のアイコンの色は、意味があるのかないのかは知らないがピンク色をしている。

「う、うん。わざわざどうも……」
『それじゃ、失礼しましたー』

仕事を終えたモードは行儀良くおじぎをすると、ルナのハンターに帰っていった。

そしてスバルはテキストボックスを開いてみる。そこには確かに新着メールが来ていた。

「委員長の書いた手紙……。早速、読んでみるか」

スバルが文字データを開こうとした時、ちょうど誰かが彼の肩を後ろからトントンと叩いている。

「誰？……って、まじうけさんか」

そう言い振り返ると、スバルのクラスメートの一人がいた。

「見てたわよ星河君。マジあり得ないぐらいやるわね！」

ぎゃるみがクックっと笑う。

「はぁ……、何がマジあり得ないの？」

「そのメールよ。メール！　あり得ないわ。ウケルー」

「？」

有り得ないし、受けるのは貴女の話し方だと心の中で突っ込みながら、スバルは首をかしげる。

「ダメねー、そんなにあり得ないくらい鈍感じゃあり得ないことになるわよ？」

「あり得ないことになる？　僕が？」

「そ、分からない？　それラブレターなのよ。そのピンク色のアイコンがあり得ないぐらいにそう物語ってるわ！」

ぎゃるみはそう言って、エアディスプレイに映っているピンク色のアイコンを指差した。

彼女の顔は本気だ。

「！！」

ギャルミの言い放った言葉に、スバルは全身に戦慄が走るのを覚えた。その際、足がぐらつき背中から倒れそうになるが、窓際の壁に寄り掛かって何とか堪える。

胸の鼓動が高鳴っているのにとっくに気付いていたが、スバルは平静を装いぎゃるみに言ってやった。

「はは、冗談キツイな。委員長が僕に？　あり得ないよっ」

「ま、開いて読めばあり得ないぐらいにわかるわよ。それじゃ、ごゆっくりー」

ぎゃるみはそう言い残し去っていた。スバルは、ぎゃるみの言葉を頭の端で巡らしながらも、まずはメールを読むことにする。

何だかんだで、スバルは少しだけ期待している様だ。

「どれどれ……。

『スバル君へ。

アナタに伝えたいことがあって、メールを送らせてもらったわ。実はね来週の日曜日にどこかへお出かけをしようと思ってるの。

スバル君も聞いてるとは思うけど、ママがね料理をあなたのお母様に習っているのよね。だから、ママ達が料理を作って、何処か素敵な場所でみんなと一緒にお食事しないかって事になったから、みんなにお誘いってワケ。

まぁ分かりやすく言えば、ピクニックって感じかしら。

どうかな、スバル君？

来る気があるなら、私にメールちょうだい。ちなみにゴン太とキ

ザマロは既に誘い済みよ。後はスバル君の方で誘いたい人を誘っといてもいいわよ。

――ルナ』って書いてる……。ま、そりゃそうだよね。アハハ、まじうけさんも人騒がせだなぁ。マジうけるよ」

残念ながらと言っていいのかは定かではないが、その内容はラブレターなどでは断じてなかった。当のスバルは安心したような、残念なような気持ちになったが、メールの内容自体は決して悪いものでは無いと言える。

恐らくあかねもその行事に参加する事が予想されるので、スバルも参加しない訳にはいかない。

何より断る理由も無い筈だ。そしてスバルは、ハンターのエアディスプレイに賛成の旨を記し始める。

「とりあえず早いとこ、送り返しとこう。それにしても、さっき直接言ってくれればいいのに……。えー……『喜んで、行かせてもらいます。楽しみにしています』……っと、こんな感じかな」

善は急げという事で、スバルはサッサとその何の面白みもない文面の電子メールを送信した。

「これで良しっと。後は……、誰かを誘わなきゃな」

そしてスバルは、誰か一緒に行ってくれそうな人を思い浮かべる。だが、なかなか見つからない。

「ウーン、思いつかないなぁ。ツカサ君も、もういないし。ジャックも今は更生中だし……。あ、そう言えば、僕ってそんなに友達い

るタイプじゃなかったけ。ハハハ……」

スバルは自分で言ってて、少し切なくなった。だがしかし、引きこもりだった過去に比べれば大分マシになったと思えるのだが、本人はそんな事には気付けない。

「ケフェウスはどうだろう……、って僕はバカか」

宇宙人の友達にすがっているようじゃ、これ以上の好転は望めないだろう。そうこうやっている内に、廊下に備え付けられたスピーカーからタイムリミットの合図が鳴った。

「おっと、いけない授業が始まっちゃう」

考え事は一旦中断してスバルは、小走りで教室の自席に着く。そして、机の横に掛けられたカバンをゴソゴソと漁り、初めてのウイルスバスティングという名の教科書を取り出した。

すると丁度いいタイミングで教室に入ってきた育田が、教壇に上がり授業を始める。

「みんな、いるなー？　今日の一限目はウイルスバスティングの授業だ」

育田の言うとおり、一限目はウイルスバスティングの授業らしく、ブラックボードがディスプレイモードになっておりそこには数匹のウイルスが映っていた。

「今日は、このウイルスを倒してもらおうと思う。何心配するな、大したウイルスじゃない」

育田はそう言って、メットを被った一目見る分には可愛らしいウイルスを指差す。

「誰かコイツを華麗に倒してみてくれ。それじゃ、お手本になってくれる人は挙手」

「ハイハイハイ！　俺がやるぜ！」

ゴン太は思いっきり腕を挙げて意思表示をした。

「おっ、牛島か。よし、こっちに来て皆に見せてやれ」

「わかったぜー。オイッ、ミライ！　俺の華麗なバスティング見てろよ?!」

「せいぜい恥をかかないようにな」

ミライは呟いた。

「へへん、咆え面かかせてやるぜ！」

ゴン太はそう言って、ノッシノッシと教壇に上がった。

「へへッ、こんなウイルス楽勝だぜ。行くぜオックス！」

「ちょっと、待った牛島」

育田が待ったをかける。

「何なんだよー、せっかくやる気になってんのに……」

「お前なぁ、授業で自分のウィザード使ってウイルスバスティングしてもしょうがないだろうが。授業でやる時はこれを使いなさい」

「ゲッ……！」

ゴン太は苦虫を噛み潰したような顔をする。それもその筈、育田がノーマルウィザードをウイルスボックスに送り込んだのだから、当然そういう表情をしてしまうのであった。

「せ、先生ー……」

「ハイ、始め！」

ゴン太の言い分など聞くはずもなく、育田がそれやれと言わんばかりにバスティングを始めさせた。

「しょ、しょうがねぇ。やるぞ、青いの」

『全力を尽くしてみます』

ボードディスプレイの中で、見た感じ頼りなさそうなウィザードがウイルスに向かって電脳空間を滑走する。

「へへ、こんな雑魚ウイルスなんか。バトルカード、キャノン！」

ある程度距離を詰めた所でゴン太がカードを切ると、青ウィザードの腕がキャノンの砲台となって、そこから発射されるエネルギーを前方のメットリオに打ち込んだ。

だがしかし、メットリオはすんでの所で頭に被った物でウィザードの攻撃をやり過ごす。

「何っ！　あのウイルスにあんな行動パターンってあったのかよ先生！？」

驚くゴン太に育田は一言付け加えてやった。

「ウイルスも日々進化しているんだぞ。その為の授業なんだ。おっと、よそ見をしている場合じゃないぞ牛島」

育田が言った時には既にメットリオ達はお馴染みのツルハシを地面に振りおろし、衝撃波を発生させて青ウィザードを迎撃していた。ゴン太もそれに気付くがバスティングに置いて一瞬はとても長い、青ウィザードは為す術もなく攻撃を受けて其れなりのダメージを受けてしまう。

『ちょっと、ちゃんとオペレートしてくださいよっ！　私の命かかってるんですから』

堪らず、青ウィザードも怒り心頭と言った様子でゴン太を叱咤する。

「うわ、しまった」
「ゴン太ダッセー」
「クスクス……」

ゴン太のあまりにもお粗末なオペレートから繰り出す醜態に、クラスメートは馬鹿にしたり失笑したりした。

「ウイルスの特性も見抜けないとは、冗談じゃなくどうしようもない奴だな……アイツ」

ミライは呆れかえったように、メットリオも倒せないゴン太を哀れんだ。そう言い彼は、程度の低いこの授業を早く終わらそうとボードディスプレイの中で苦戦している青ウィザードにバトルカードデータを入力してやる。

そうすると、ミライのハンターはデータをコールし、その処理結果を伝えた。

『ブレイクソード、ブレイクサーベル、ブレイクブレード、トリプルインストール、Ｇ・Ａ、Ｄｒｅａｍ　Ｂｒｅａｋ』

「フッ……」

ミライが鼻で笑うと、青ウィザードの腕が変形した。

腕に備え付けられたその荘厳な剣は薄い緑色をしており、刀身を溢れんばかりの電波エネルギーが螺旋状に包んでいる。

ギャラクシーアドバンス――それはバトルカードをある一定の組み合わせで一度にインストールすると、強力な一つのバトルカードとして使える機能の事である。

その威力はギガクラスのそれと遜色はない。

もちろん、スバルでさえその隠された機能に気付いてそう日は経っていないので、ゴン太がそのような高等テクニックを知っている訳もなかった。

「な、なんだこれぇ！　ス、スゲ」

ゴン太は一瞬驚くが、これはチャンスと思ったらしく青ウィザードに命令する。

もはやさっきまでの、あたふたとした様子は見受けられない。

「とりあえず、それでぶった斬れ！　青いのっ」

青ウィザードが剣を一振りするとメットのガードなど全く問題にせず、ウイルスを紙切れのように斬り飛ばした。

「ど、どうだ！　見たかみんな！」

異常なまでにに興奮したゴン太は、得意げにガッツポーズをして見せる。それを見ていたクラスメート達は、ゴン太が最後に見せた必殺の攻撃に沸き上がった。

「スゲーー、今の何だ？　初めて見た」
「スゴイ攻撃だなぁ」
「ゴン太君、やるー」
「やるなぁ、牛島。ブレイク性能を持った攻撃でデリートするとは、なかなか考えたな。それにしてもあのカードは見たことのないものだったが……どこで買ったんだ？」

手の平を返し盛り上がるクラスメートの中、スバルは口を手に当て一人さっきの攻撃について考察をしていた。

「……あれはギャラクシーアドバンスだ。ゴン太の奴……信じられないけど、スゴイ」

スバルの考えはあながち的外れなどではなかった、何故なら先の攻撃はミライのお膳立てによる所が殆どであったのだから。
残念ながら当のゴン太はそれに気が付かずに、はしゃいでいるわけである。

ｓｔｒｄｓｔ―１８：白黒

「それじゃあ、次のステップに移るぞー」

沸き上がる教室が一段落を迎えた頃、育田がボードディスプレイに何か手を加えながら次の課題を言った。

育田がいじるディスプレイの中には、ある程度の大きさがあるドーム状の境界が形成されつつある。

どうやら育田は特設の檻を用意しているらしい。

恐らくではあるが、その中に何かを閉じ込めて一種のショーをしてやろうという彼の意図が見え隠れしていた。

「次は誰か二人に、ウィザード同士でのウェーブバトルのお手本を見せて欲しいと思う。最近じゃ、何もウイルスだけが日常を脅かしているのではないしな。

悪いウィザードから身を守るといった意味でもこれは大切な勉強だと先生は思うぞ」

育田は教室を見渡し、誰か前に出てお手本を見せてくれないものかと視線を送った。この時、教師と視線が合った者に漏れなく指名が下るという訳である。

育田がそうこうしていると、児童の一人が手を挙げて提案をする。その子は目の端でミライのことを捉えており、ミライもまたその視線に気付いている様ではあったが特に気にする訳でもなく依然として行儀良く座っていた。

「彩道クンがイイと思いまーす」

「彩道か、お手本としては文句はないな。だがその相手を勤める奴がなぁ……」

困った様に育田はアフロに手を突っ込んで頭を掻く。

「星河クンだといい勝負になると思いますよ」

「たしかに」

「面白そうだねー」

ある児童を起点とした意見により、話がまとまりつつあった。

「星河か……、そう言えばそうだな。どうだ？　二人ともちょっと手本を見せてくれないか？」

「星河君さえいいなら、俺はかまいません」

ミライが答える。

そういうノリは悪くないようだ。

「わかった。どうだ？　星河やるか？」

育田がスバルに聞く。

「僕は……」

スバルは少し戸惑ったように言葉を濁す。人前に立って何かを見せるという行為は、スバルの苦手とする物の一つであったのだから仕方ない様な気もする。

何より、前日の惨敗の反省からそう易々と承諾出来るものでもなかった。

「やっちまえ、スバル！　あんな野郎！！」

ゴン太が口を挟む。ミライの手助けもあって見事、勝利を収めたゴン太は生意気なミライなど皆の前で恥をかかせてしまえと言いたげに、スバルをけしかける。

ゴン太はスバルが完敗を喫した時、その場に居合わせていた筈なのにどうしてそのような言葉が出てくるのかは理解に苦しむとしか言い様がなかった。

「勘弁してよ、ゴン……」

スバルは丁重に断ろうと育田に向かって顔を上げるが、その際クラスメートの期待溢れる眼差しが彼の視界に入ってくる。

恐らく誰に聞いても、ロックマンとサテラポリスの戦いに興味がないと答えればそれは嘘になるだろう。それ程のエンターテイメント性に富んだ見せ物であるから児童達の高まる期待には納得である。

そして何故だかスバル自身も解からなかったが、そんな彼らに気付いてしまうと、『そこっ、空気を読みなさいっ』『まったくもう！　ダメダメじゃないですか！？』といった何処かで聞いたような言葉が脳裏をよぎった。

そうするとスバルの口からこんな言葉が出てしまう。

「や、やります」

言ったというより、言わされた。

そんな表現が良く似合う一場面であった。

「おっ、そうかっ。なら早速、教壇に上がってくれ」

スバルは促されるまま教壇に上がり、ハンターのエアディスプレイに目を落とした。

「うわ、コイツかぁ……」

スバルのエアディスプレイにはヒールウィザードが一人。

対するミライのエアディスプレイには赤いノーマルウィザードが一人。

「仕方ないだろう。この戦闘のシチュエーションはウェーブロードを散歩中のノーマルウィザードが、そこらへんのゴロツキウィザードにからまれる所なんだから。それに彩道にヒールウィザードは使わせれないからな？」

「そんなこだわりが……」

育田の細かなこだわりに、スバルもこれ以上文句を言うのはやめた。

「こうも早く再戦の機会が設けられるとはな。フッ……、今回はスペックの差はない。存分にかかってくるがいい、星河」

「白黒つけようってことだね。僕もやるからには勝つつもりでいくよ、ミライ君」

二人が前置きを済ますと、ドームの中で双方のウィザードが構えた。

ジリジリと互いに距離を詰める。

二体のウィザードの間で、優しめに作られた物と如何にも悪者といった印象の物が繰り出す視線は交錯し互いの一挙手一投足を監視する。

育田が合図を掛けた。

「カツアゲ始めっ！」

すぐさま、悪ウィザードが速攻を仕掛ける。

「へぃへぃへぃ！　金出しなー」

「バトルカード、キャノン！」

スバルはヒールウィザードにエネルギー弾を撃たせた。エネルギーの塊は、電脳の地面を抉り取り、赤ウィザードめがけ突き進む。

「左に回避。次、当てれなくてもいい、バスターを連射」

ミライの命令を受けた赤ウィザードは、左方向にキャノンを避けた後、体勢を整えつつ基本装備のバスターを連射する。弾幕がヒールウィザードのおおよその位置を一掃し、スバルもそれに応じ命令を下す。

「後ろに逃げて距離を置くんだ」

「フッ……、インストール、タケヤブランス」

ミライはスバルの指示を読んでいたらしく、悪ウィザードの後方に濃い竹藪を発生させ、そこから勢いよく竹製の槍を突き立てる。

それに対しスバルも機転を利かせ、バトルカードを入力する。

「何の！　バトルカード、ネッサストームっ」

スバルがそう言うと、悪ウィザードの周りに熱を帯びた砂嵐を発

生させ、竹製の槍をボロボロの消し炭に変えた。
壊れた消し炭データが電脳の基本フォーマットに還ると、スバルが口を開く。

「すごいや、やっぱり」

スバルがミライに感服した。

「お喋りは後だ」

ミライはスバルの言葉に耳も貸さずに、ポップアップウィンドウをタッチしバトルカードを入力する。

「そうだね」

スバルもそれに倣う。

そして両者のウィザードが、腕を刃物状の武器に変換し、さらに同時のタイミングで二体のウィザードが互いに斬りかかる。

「ゴロツキ君！　上段を狙って」

距離を詰め切ったスバルが先手を取る。

「剣筋に合わせ、落ち着いて対処」

悪ウィザードが赤ウィザードの胴体を薙ごうと剣を振った。対し赤ウィザードは命令通りに、落ち着いて剣を受け止める。
『イィンッ！』と高い衝突音と共に剣は弾かれ、再度、悪ウィザードのそれが斬りつけにかかる。

「下だ！」
「俯角３０。、奴の剣を祓え」
「くっ……！」

赤ウィザードが足もとに剣を差し出し、相手の剣を薙ぎ払う。
その反動で悪ウィザードの体が開いた。

そこを赤ウィザードが剣を突き立てる。

「まだまだっ。バトルカード、シラハドリ！」

カードの補助もあって、悪ウィザードが間一髪で突き出された剣を両手の平で止めた。
だが、その切っ先は悪ウィザードの胸元の装甲にギリギリの所で達し、『チリチリ』と音をたてながら鉄粉を足元の地面に降らせる。

「ヒュイー、アブねーアブねー。胸にでっかい穴が開くとこだったぜぇ」

手に力を込めたまま、悪ウィザードはほっと一息つく。

「ノーマルウィザード、一旦距離をおけ」

今度はミライが距離を取る。赤ウィザードは剣を下げて後ろに後退した。

それに対しスバルは速攻を仕掛ける。

「休ませないよ！　バトルカード、マッドバルカン！」

余裕なくスバルは悪ウィザードの腕をバルカン砲に変換させて、赤ウィザードの脳天めがけて弾を発射する。
それに対しミライはエアディスプレイ上のポップアップをタッチし素早くカードを入力する。すると、赤ウィザードの前にお地蔵様が召喚された。

「忙しないな……。バスターを左右に連射しつつ旋回し、黒いウィザードの後ろを取れ」

ミライが言い終わるか否かの所で像にマッドバルカンの弾が被弾する。そして、バチアタリというポップアップメッセージと共に悪ウィザードの脳天に雷が降り落ちる。

「バトルカード、スーパーバリア！　回避してゴロツキ君」
「アイさー」

悪ウィザードは後ろに跳び退き、雷から逃れようとするが、そのスピードが早くて避け切れずに念の為に張っておいたスーパーバリアにかすった。

「甘い、ハイパーキタカゼZ。アクアウォール」

既に悪ウィザードの後ろに回っていた赤ウィザードはスーパーバリアを吹き飛ばし、巨大な津波を前方に出現させる。
悪ウィザードの回避は間に合いそうもない。

「ゲガバベロボ！」

黒ウィザードは水に押し流された。

ドームの端まで流されてしまった後、水浸しになった電脳空間に打ち上げられる。

「止めだ。エレキソード、エレキブレード、エレキサーベル。G・A、Ｄｒｅａｍ　ｅｌｅｃ」

赤ウィザードがドリームエレキを振り抜くと、帯電した衝撃波となって遥か前方の黒ウィザードに襲いかかる。

「ペッ、オエ！　水飲んじまったぜ。だけどなぁ、そんな遠くから攻撃しても当たらないってーの」

「止めと言ったハズだ。アイスステージ」

ミライの警告と共にフィールドは氷に覆われて、辺りを冷気で包んだ。悪ウィザードを濡らしていた水が凍りだし、たちまち冷気によって彼の足元の電波から凍らされてしまう。

身動きが取れなかった。

「しまっ……！」

スバルが対処しようとするが、身動きの取れないウィザードではどうしようもない。

全てがもう遅かった。

ウェーブバトルが終わり、スバルとミライは席に着くため壇上から降りようとする。

すると、割れんばかりの拍手が鳴り響いた。
ゴン太の時とは違い、純粋なレベルの高さに感動していたのであった。それは勝利を収めたミライは元より、敗北を喫し少し俯き気味のスバルにも贈られている。

「スゲーよ、今のバトル！　ゴン太の比じゃねぇっ」
「彩道クン、ステキー！」
「星河クンもスゴかったよ」
「あっ、ハハハ。ど、どうも……」

影の入った表情から一転、スバルは照れ笑いを浮かべながら席に着いた。

「悪くはない……。だが、これではまだ……」

同じく席に着いたミライは、スバルを横目に見ながら呟く。その表情は何かを憂いでいるようにも感じられた。

strdst_18：白黒（後書き）

ｓｔｒｄｓｔ―１９：キミはスバル

放課後を迎え、皆がそれぞれ帰り支度をしているとゴン太が大きな口から大きな声を出してわめいた。教室の後ろで展開されるその配置は五月蝿いゴン太を筆頭にスバルとルナとキザマロでミライの机を取り囲む様にしているものであった。

「バッカじゃねーのか！　スバル?!　何でこんな奴を誘うんだよ」

どうやらゴン太は、来週に企画されたイベントにスバルがミライを誘ったことに文句を垂れているらしい。

「何でダメなんだよ？　ゴン太」
「コイツは気にいらねー」
「だから何でだよ？」
「コイツは委員長にヒドイ事をしたんだぜ」

ゴン太がミライを指差し、不服を申し立てる。

「あれは仕方なかったと言っているだろう。いつまでもウルサイ奴だ」

ミライが吐き捨てる。

「どう仕方ねぇって言うんだよ」
「上から星河スバルの戦闘考察力及び状況判断能力を調査しろとい

う命令でな。不本意だがああいった形となってしまった」
「口ではどうとでも言えるぜっ！　第一なんだよその命令、訳わかんねーよ」
「命令の詳細は言えない」
「ほらなっ、嘘っぱちだから細かい事は言えねーんだろ?！」
ゴン太は珍しく論理的な解釈をした。そんな言い草にスバルは口を挟む。
「で、でも、ゴン太だって危ない所を助けてもらったじゃないか」
昨日のジャミンガー襲撃事件のことだろう。結果的にスバルはミライを庇う形となった。
それは恐らく、今の時世、あの様な事件も珍しくは無くなりつつあるとはいえ、酷い事件には変わりなかったそれを実際に解決したミライの薄らと見え隠れした本質をスバルは買ったのだろう。
「スバルはコイツをかばうってのか?！」
「そういうつもりじゃあ……」
不毛な言い争いにルナが見兼ねそれに加わる。
何時もの威厳という仮初めの面をあしらった威圧感はどこへやら、何か達観した様子でゴン太を諭すように言った。
「ゴン太の気持ちも分からなくはないけど、私たちはミライ君の事を知らなさすぎると思うの。これを機にお互いの距離を縮めようってスバル君の考えに、私は賛成したいわ。ゴン太だって今の考えが変わるかもしれないわよ」
ルナが言った言葉にはどこか思いやりが含まれている。

彼女のこの優しさに救われたことがあった故に、この言葉にスバルは何か感じるものがあった。

「で、でもよう……」

ゴン太が折れそうだ。そこでミライが空気を読まなかった。

「この生徒会長にしては、珍しく生産的な見解だな。だが、あいにくその日は仕事があってね。気持ちだけもらっとくよ」

ミライは話の腰をへし折り、席を立つ。その際、道を塞いでいたゴン太に目で『どけ』と言って教室を後にした。

「フラれちゃったね……。それにしても、日曜日も仕事なんて大変だなー」

「あんのヤロー、委員長の好意をムダにしやがってー！」

「仕方ないですよ。それに、ゴン太君は彩道君に来てほしくなかったんじゃないですか？」

的確にキザマロが突っ込む。

「気に入らねーものは、気に入らねーのっ！」

ゴン太はやりようのない怒りをキザマロにゲンコツとして見舞ってやった。真上から打ち込まれたそれによって懸念されるのはキザマロの身長だ。縮んでいないことを切に願うばかりである。

「さっ、遊んでないでそろそろ帰りましょ」

ルナがそう言うと、一行は頭を押さえるキザマロを連れ学校を後

にした。

そしてスバル達が校門をくぐると、後ろからの夕日により彼らの真っ黒な影が真っ直ぐに伸び、目の前の道を指し示してくれる。

「だんだん、日が長くなってきたね」

真っ赤な夕暮れを見上げつつスバルが呟いた。

所変わって、夕焼けの遥か西の向こう側。場所はアメロッパ一番の都会であるオーフーロシティ。

時刻はまだ午前3時ごろ、辺りには暗闇が出張っていた。そんな中、控え目に街灯が一つ二つ、黒を際立たせる為だけに弱々しい光を放つ。その程度の明るさでは、夜の女性の一人歩きは守れない。

せいぜい、虫にたかられてお終いである。

そこを見渡して確認できるのは、アメロッパ特有の、ゴミ箱に溜まった汚物さえもそこの住民にとっては糧になる世界。

華やかな町が輝くために、表の世界からは想像だに出来ない凄然なまでの格差が生み出した負け犬の世界。

昼も夜もなく、そこには人として生活をしていた者があの頃に執着する世界。

捨て去られたそんな世界がメインストリートの間を縫って連絡網となっているのもまた事実であった。

そういう場所を女性が一人歩いていた。
時間は3時を回り最も闇が濃い時間帯である。普通、こんな時間に出歩くのは大抵、社会からの爪弾き者だけだ。
だがその考えを反省させられる程に、女性は美しかった。それは、気品溢れる類のもので、濡れ汚れた者のそれではなかった。

女性はウェーブのかかった綺麗なブロンドを泳がせ、華奢な肩で風を切りつつ道端に転がる浮浪者など気にする素振りも見せずに赤いハイヒールをカッカと鳴らせ薄汚い壁に反響させる。それなりにうるさい音が鳴るが、浮浪者はピクリともしない。生きているのか死んでいるのかも分からないが、たとえ死んでいても問題ない。
彼等はそういう存在だ。
生きていれば、それはそれでどうでも良い事だった。
そうしながらも彼女は自身を縁取るしなやかな曲線を遊ばせながら歩いていく。

「スティーブがいなくなって、もう4年……。あの日もこんな夜空だったわね」

不意に女が口を開き、目に溜めていたものを零す。そして彼女の涙を隠すかの様に、月が雲の間に隠れ本当の意味での暗闇になった。
すると、ゴミを漁っていたドブネズミの群れが排水溝へそそくさと逃げ出す。

「何時になったら帰ってくるの……？　スティーブ」
『さぁ……？』

女に答えるかの様に、どこからともなく声が聞こえてきた。女は驚き、辺りを見回すが道の端を寝床にしている輩以外は見当たらない。

次第に女は気味が悪くなり、逃げるように駆けだす。
月が隠れたのは、どうやら涙を隠す為ではなかったようだ。

『逃げてもムダですわよ』

女に呼びかけるその声は意外にも女のものであった。
逃げ遅れたのか、はたまた姫を守るナイト気取りなのかは知らないが、先ほどのゴミを漁っていた内の一匹が彼女のハイヒールの所でキュイキュイと小さな鳴き声をたてている。
その薄汚れた体に反して綺麗であるとさえ感じさせる瞳は、真っ直ぐに目の前の闇を見据えていた。
人間には見えない何かが動物には見えているのかもしれない。

「だ、誰?!」

ブロンド女は声の聞こえてきたと思われる向かい側をネズミと共に睨み、恐怖で震える声を抑えながら聞いた。
強張ったのか、彼女の綺麗に彩られた爪の装飾品が握った手の平に食い込む。
しかしながら前方には誰もいない、そこには薄らと闇をぼかし街灯が不規則に点滅を繰り返しているだけであった。

だが確かに声は聞こえてくる。

『アナタのような美しい女性が、こんな夜道を一人歩いているなんて……危ないですわ。さらって下さいって言ってるようなものですわよ?』
「ま、まさか……、最近ニュースで取り上げられている連続誘拐犯……」

姿も見せずに言葉だけを届ける謎の女の声にブロンド女がまさかとは思いつつ言った。

『ご名答』

その単語を女が認識するのが先か、彼女が目の前の不可思議な現象におののくのが先か、とにかく彼女は後ずさる。

目の前に突如として現れた謎のアジーナ風の女からすぐさま離れるべきだと判断したらしい。その美しいアジーナ女性がどこから現われたのかは、ブロンド女性はしっかりと見ていたのだ。何もない空間から、いや、女性が何も無いと思っていた空間をゆらゆらと歪ませ、そこからさも当然かの様にこちら側にやってきたのである。

だから女は危険だと判断した。人間の皮を被った何かだと、直感で解かったのだ。

「ア、アナタは……何者？」

決して足を止めることなく、かつアジーナ女への注意を怠ることなくブロンド女は聞いた。

そう、逃走の機会をうかがいつつ。

「どう表現しましょうか……、まぁ、端的に言うなれば『創世主の使い』ですわね……」

そう言ったかと思えば突然、アジーナ女が崩れる様に倒れる。

「なっ……」

ブロンド女が驚きのあまり、腰を抜かしその場にへたり込んでし

まう。
　無理もない、彼女の目の前には人間の皮を脱ぎ捨て本当の姿を見せた異生物がいたのだから。

「アナタのその美しい容姿……気ニ入りましたワ。私ノ入れ物にして差シアゲマショウ。サァ、着替エノ時間デスコトヨ」

　一方的にそう伝え、ゆらゆらと揺らめく不定形の生命体はブロンド女ににじり寄る。
　次の瞬間、何を思ったのかドブネズミがその異生物に向かって跳びかかった。
　だが、異生物の足元からバラのツタの様なものが生えてきて、ドブネズミを締め上げる。
　最期に鳴き声を短くあげた後ネズミは事切れ、暖かさを失いつつある物を抱くツタの隙間からは尻尾が力なく垂れているだけであった。

「ばっ、化け物……！」

　女はハイヒールを脱ぎ捨て必死に逃げる。
　ドブネズミが注意を引いてくれていたお陰で、何とか逃げ切れそうだ。
　異生物の姿がどんどん小さくなる。
　しかし女がホッとするのも束の間、異生物の声が彼女のすぐ近くで囁いた。その声には、少しの不満と呆れ、悲しさが含まれていた。

『化け物なんて酷い言い様ですわ。……それに、逃げれはしないと言ったはずでしてよ？』

　信じられない事に、女の目の前の空間が歪みじわじわと異生物の

姿を表す。

逃げられない――

街灯がチカチカと点滅する。

不規則に照らされた薄汚い地面が、出来の悪いコマ送りの様に異生物の言う所の着替え行為をシルエットで映し出す。

その明かりは、女性を守るのには本当に足りなかった。

そして何より、女性は美しかった。

行為が終わり、ブロンド女性の方が立ち上がる。

少し横には、役目を終え捨てられたブロンド女性の次に美しかったアジーナ女性がゴミと一緒にぐったりと地面に身を任せていた。

「入れ替え完了ですわ。うふふ、そろそろお仕事を始めなきゃですわね……」

そう言いその美しい顔を少しの笑みで覆う。

足元には冷たくなった小さな命の入れ物を転がせて、同じく入れ物となった女はゆらゆらと電波の世界へと帰っていった。

アメロッパで何が起こっているかなど知る由もないスバルは、家に帰ってお風呂に入った後、ベッドに寝転がって一人暇な時間を持

て余している。
学校の宿題など俗に言う引きこもり時代、ティーチャーマンに鍛えられた頭脳があれば問題なく済ますことができた。
だから暇を持て余している。

「暇だな……」

持て余し過ぎたスバルはいきなり仰向けになり、左腕をあげて叫んだ。

「ロックバスターっ！！　バキュンバキュンッ」

スバルは突然、昔良く使っていた決め台詞を空中の見えない敵に言っている。
ご丁寧に、バスターの発射音付きだ。

「きゃー、ロックマン様～っ」

裏声がひどく耳に着く上に似てもいないがルナの真似のつもりだろう。
それにしても似ていない。

「ハッハハ……何がキミは絶対に守るよ、だ……ダメなんだ……こんなんじゃ」
「……こんなんじゃ」

一人芝居も程々に、スバルは枕に顔をうずめてぶつぶつと何かを言っている。ここまで来ると挙動不審もいいとこである。

「昨日も今日も、僕は何もできなかった……なんて弱っちいんだ…

…なんて無力なんだ」

「不安だよ……、母さんも、天地さんも、委員長も、ゴン太も、キザマロも、ミソラちゃんも……、みんな僕の周りにちゃんといるのに……、何なんだよこの気持ち。教えてよ……父さん」

この言葉から察するに、昨日レイダーに負けた事や、実体化したジャミンガーの襲撃に指を咥えて見ていることしか出来なかった事、さらに今日ミライに惨敗したこと、それらがスバルの無力感を煽り立てているのだろう。

これらはもう終わった事ばかりだが、スバルはいつ誰がいなくなっても不思議じゃないと、何時しかそう考えるようになってしまっていた。

世間の彼に対する評価は、良くやったというのが大半なのだが、どうにも最近の犯罪の増加やロックマンなど始めからヤラセだったのではという吹聴、これらは小学性が悩むべき問題で　はないのにも拘らず、彼は一身にそれらを抱えていた。

平和だからいいじゃないか、と普通はそう思うところだが、性質が悪い事にスバルは一人だと余計に思い悩む癖がある様で、さっきからぶつぶつと五月蠅い。

毎夜これだと精神の健康が疑われる。

そんなねちねちぶつぶつ五月蠅いスバルに見かねたハンターがピリリリリとオート電話を鳴らした、というのは言い様で実際にはスバルが先ほど誰かに来る日曜日のイベントに誘いの電話をしていたので、その返事というのが妥当なとこだろう。

『こんばんわー。スバル君、元気ー？　聞いて聞いて、オッケーオッケー大オッケーだよ！　日曜日はお仕事なしだってさ。スゴイ楽しみだなー』

エアディスプレイに、赤紫色のボブカットをしており、エメラルドグリーンの瞳を持つ可愛らしい女の子が小さく手を振りウインクのおまけ付きで映っていた。
スバルとは対照的に無駄にテンションが高い。
知る所ではないが、久しぶりにスバルから電話を貰ったのがそんなに嬉しかったのだろうか。

「やぁ、ミソラちゃん……」

スバルはうじうじと返事を返す。

『……あれ、元気ない……よね？』

ミソラがすぐさま気付く。

「ちょっと……ね」
『何かあったの？』
「……考え事をしてたんだ」
『昨日の皆既日食が見れなかった反省？』

ミソラが真顔で聞く。
真顔な分、余計に可笑しい。

「いやいや、確かにそれもあるけど……」
『じゃぁ、何なのよー。男の子ははっきりと言わなきゃね？！』
「えっとさ、じゃあ聞くけど……ロックマンになれなくなった僕のことをミソラちゃんはどう思ってる？」
『どうって……、スバル君はスバル君だよ！　何言ってんのよ変なスバル君ー』
「もう、みんなを守るだけの力がないんだよ？　それでもいいのっ

？！」

『だったらその時は、私がスバル君を守るもんっ』

「ま、真面目に答えてよ……」

ミソラの繰り出す言葉にスバルは少しうろたえていた。

『さっきから真面目だよ私は。あのねスバル君……、キミがこの平和を作ったんだよ？　みんなを守るとかそういうのはもう……』

「で、でも……」

『ずっとそんなこと考えてたの？　優しすぎるよ……』

「僕は……だって、みんなを守るヒーローであり続けなきゃ……」

スバルは半ば強制的にみんなをこれからも守らなければならないという観念に囚われていた。

『――いいんだよ……』

ディスプレイ越しでもミソラの優しい声は綺麗に通る。

若干距離を置いていたスバルの心にもそれは届いた。

「えっ？」

『もう、そんなこと気にしなくてもいいんだよ？　スバル君』

戸惑うスバルにミソラはゆっくりと続ける。

『確かにキミは地球を救ったヒーローだよ。それはスゴイ事だし、誇ることだと思う。でもね、その前にスバル君はスバル君なの。ロックマンである以前に普通の小学６年生の男の子なの。ロックマンであったことがキミの心を縛り続けるのならそんな肩書きなんて捨てちゃえっ』

ミソラは満面の笑みでスバルに言ってあげた。
スバルがスバルであると、それ以外の何者でもないと。

「僕は……ロックマンである以前に、星河スバル……」
『そう！　キミは星河スバル。無理して頑張らなくても普通の男の子でいいじゃない！』
「ミソラちゃん……」
『そしてキミは私の初めてのブラザー！　ロックマンであるスバル君のブラザーじゃなくて、その優しさを持ったありのままのスバル君のブラザーなんだよっ！　って、エヘヘ、ちょっぴりクサかったかな？』

少し照れくさそうに舌をちょっぴり出してみせるミソラに、スバルはただただ抱いた布団を強く抱き締めるしか出来なかった。
必死に気の利いた言葉を出そうとしても今のスバルにはこれ位しか思いつかない。

「ありがとう……ミソラちゃん」
『て、照れちゃうなー……って、スバル君ちょっとまった！　湿っぽいのは無しでお願いだよっ』

泣き出しそうなスバルに慌ててミソラが待ったをかける。それに透かさず、ミソラのウィザードで琴座のＦＭ星人であるハープがスバルの注意を別の所に逸らそうとする。

『スバル君、そんなに泣いてるとウォーロックの馬鹿に『ヘッヘッヘッ、俺様がいない間にずいぶん泣き虫になっちまったじゃねーかー』って馬鹿にされるわよー』

ハープが板っ切れみたいな体を目一杯使ってウォーロックのジェスチャーをする。
その滑稽な様に、スバルも思わず吹いてしまう。

「アハハ確かに、ロックだと言いかねないね。その事態だけは何としてでも避けたいよ」
『スバル君にはやっぱり笑顔が一番ね。ね～ミソラ？』
『ね～、ハープ』
「もう泣きません、ハイ」
『よし、これで一件落着だね。……あっ、そうそう日曜日の件だけど』
「うん、ちゃんと聞いてたよ。行けるんだってね嬉しいよ」
『私もすっごく嬉しいよー……っていけない、もうこんな時間』
「何か用事？」
『仕事ですよーだ』
「スイマセン、わざわざ御足労を……」

ミソラは頬を膨らませると、アングル調整して自身の衣装を披露してみせる。学園ドラマの撮影なのだろう、ミソラは制服の様な服を纏っており、その場で一回転すると、ヒラヒラと一般的に適度な長さのスカートが広がった。
自然と際どいラインまで達したスカート、これはいけないと咄嗟に思い、スバルは顔を両手で覆う。

『おーい、何で顔を隠してるのかな？　そんなに、私の晴れ姿が見たくないワケなの？』

ミソラが勘違いをしてご立腹。

「ち、違うよ。その……スカートの中身が……あの、見えそうだっ

たので……」

もじもじと恥ずかしそうにスバルは言った。

『ヤダースバル君ったらー。アクションシーン対策でスパッツを装着済みだよ』

「そ、そうだったの。アハハ……」

『そうだったのですよ。それじゃ、私そろそろ行くねー』

「うん、今日はありがとう。気持ちの整理が付いた気がするよ」

『うんうん、何か困ったことがあったら私に言ってね？　できればルナちゃんより先に……ねっ！？』

「なんで？」

『何でもっ』

ミソラは回線を切断した。

スバルはミソラの言葉の意を特に考えることもせず、そろそろ眠ろうと部屋の明かりを消した。

「委員長と言い……、ミソラちゃんと言い、女の子って分からないなぁ……」

スバルは、ゆっくりと眠りに落ちて行った。

『あんな遠回しな言い方じゃダメよ、ミソラ』

「あれが、私の精一杯なんですっ」

一方ミソラはテレビ局の廊下を、不満気に腕を組みながら歩いていた。

「大体スバル君は、鈍感なんだよね。ド・ン・カ・ン」
『ウフフ、委員長さんに先を越されないようにね』
「ハープったら、からかっちゃって、もう」

ミソラの足取りは自然と速くなった。

『それにしても、スバル君悩んでたわねぇ』
「色々あったからね。ロック君やお父さんがいれば、本当はそれが一番なんだけどなぁ」
『スバル君の夢って宇宙飛行士になって、パパさんを探すことなのよね？』
「うん……叶うといいね」

ミソラの言う通りで、大吾やウォーロックの存在はスバルにとって計り知れない。
だがそれと同時に、いつかは乗り越えなければいけない壁でもある。
どんな形であれ、決着をつけなければならない。
何十年先になろうとも決着を、スバルの夢はそういう夢だ。

『悩み多き少年……何かの作詞に使えそうじゃない？　きっと、現代の地球人の共感を得られると思うわ』

ハープが提案した。

「ハープってさあ、たまに宇宙人らしからぬこと言うよね？　なん

か妙に地球人的というか……」

ミソラは足を止め、ハンターとは別のハープの定位置であるアコースティックギターのディスプレイに目を落とした。

ハープは何故か、最新機種で居心地がいいはずのハンターよりも、古いギターの方を好む。

『さぁ……何でしょうねぇ。もしかしたら私はアナタのママさんの生まれ変わりだったりして……』

「あぁっ、その言葉が本当だったらどれだけ私は幸せだったでしょう！」

再び歩き出したミソラは大袈裟に言う。

『あっ、それ今日のドラマのセリフ』

「アッタリー」

そう言い、制服姿の少女はセットの裏に消えていった。

スバル達が進級してから早くも五日経ち、キッチンの壁に掛けられたカレンダーの表示パネルは土曜日を示していた。休日という事もあってスバルは、何時もより少し遅い朝食を取っていた。

そしていつもと違う光景がもう一つ。

トントントンと軽快に包丁を鳴らす音が聞こえていた。

本来ならば、あかねが包丁を持っているのだろうが、今回は違っ

た。ルナの母親であるユリ子が野菜を切っていたのである。
そんな状況にも関わらず、スバルは特に驚く訳でもなく何時通り朝食を取り続けている。
だが、その音はスバルがハムを一枚平らげた所で止まってしまう。
まな板には三分のニ程切られた赤い上にさらに赤い人参が転がっていた。

「イタッ……」

ユリ子は一瞬、顔を強張らせる。指にはさっき付いた傷以外にも沢山あるのだろう、絆創膏が漏れなく巻かれていた。

「大丈夫？」

あかねが心配する。

「大丈夫。……でも私ダメね」
「そんな事ないわよ。スゴイ上達の早さだわ。頑張りましょうユリ子さんっ」

少し落ち込み気味のユリ子をあかねが励ます。
別におかしなことではないが、スバルはあかねがユリ子の指を優しく介抱している姿を見ると不思議な気持ちになった。

「仲いいんだ……」

出された物を全て平らげたスバルは、洗い物をキッチリと洗い場に返す。

「美味しかったです。オバサン」

スバルは軽く頭を下げる。

「まぁ、偉いのねスバル君。自分の洗い物をちゃんと持って来て」

「当たり前ですよ」

「当たり前の事が当たり前に出来るのって実はスゴイ事なのよ」

誰かに言い聞かせるようにユリ子は言った。当たり前の事が当たり前に出来る、当然の概念だが口で言うほど楽なものではない。

どこかで妥協して落ち着くのが大抵である。

「そうなんですか？」

スバルは良く意味が分からなかった。

「あっ、もしかして、委員長――いや、ルナちゃんは洗い物をそのままにしちゃうタイプなんですか？」

「……分かる？　あの子ったらそうなのよね。ホント困っちゃうわ」

「家事が出来ない嫁タイプですねっ」

スバルは苦笑するが、相手がユリ子であることに気付いて慌ててしまう。

「あっ、スイマセン。そういう意味じゃ……」

「いいのよ、気にしないで。スバル君もあの子にたくさん苦労させられているんでしょう？　なんとなく分かるわ」

「そ、そんなこと……！」

心に切実な訴えをしまいながら、スバルは手を突き出しブンブンとフルフルした。

「ふふ、顔はそう言ってないわよ？」
「えっ……！？」

スバルは更に慌てた。

「ウソよ。意外とスバル君って感情を隠すのが下手なのね。てっきり、もっと落ち着いてる子とばかり思ってたわ」
「違うのよ～ユリ子さん。この子ったらルナちゃん関連だとスゴイ慌てちゃってねー。ねースバル？」
「まぁ……っ」
「ちょっと、何言ってんだよ母さん！　カ、カン違いしないでくださいよオバサン！」

スバルの口調がルナのそれっぽい。

「そんな事言っちゃだめよ、ユリ子さんにもっと自分をアピールっアピールっ」

あかねは悪ノリ中。
スバルにしてみれば堪ったものじゃないが、あかねはとても楽しそうなので何よりである。
あかねには憂い顔よりも笑顔が似合うと改めて思い直させられる。

「か、かりゃかわ……からかわないでよ！　もういいっ、ゴン太ん家行ってくるから！　それじゃ、オバサン料理の練習頑張って下さいっ！」

そう捲し立ててスバルはキッチンを後にし、ゴン太の家に遊びに行ってしまう。

その際、玄関の戸を痛めない程度で出来る限り乱暴に閉めた様だった。

「あの子ったら、礼儀正しいのか悪いのか分からないわね～。まったく、素直じゃないんだから」

「うちの娘もよ。それもかなりの重症なのよね」

ユリ子が明らかに作為的なタイミングでそう言うと、二人は顔を見合せてプッと一瞬溜めて堪えるが、堪えた分だけ余計に笑った。

二人の子持ち親にからかわれて――とは言ってもユリ子にそのつもりは無く、ただ驚いていただけである――どうにも居心地の悪くなったスバルはその場の勢いに身を任せて外に駆け出し、可視発光電波で目立つ看板の掲げられた、ＢＩＧ　ＷＡＶＥと言う名のバトルカードショップに寄ってみた。そのバトルカードショップはスバルの家から徒歩で数分の所にあるので、暇があればゴン太と一緒に互いのウィザードを戦わせて遊んだりしている憩いの場所だ。

因みに戦績は六九戦六八勝で現時点スバルに軍配が上がっている。

「こんにちはー、南国さん」

店内は南国を模した内装に反して、外より少し涼しい。

「あ、イラッシャイ。スバル君」

南国（なんごく）と呼ばれる男は、店の主を務めるにしては軽い感じの服装と雰囲気をしていた。浅黒い肌、耳には沢山のピアス、店内であるにもかかわらずサングラス、束ねたパイナップルヘアー、それは申し分ない南国スタイル。南国ケン――コダマタウン一のサーファーで気のいい男。

そして心の内で本当は何を考えているのかも他人には分からせない男。

そんな彼は店が空いていて暇だったのか、カウンター業務もそこそこに今来たばかりでバトルカードを物色しているスバルにお茶を出してあげた。

「今日は暖かい的なニュアンスみたいな感じだね～。はい、お茶」

丁寧にハイビスカスで飾った物をスバルに差し出す。

何かずれている気がしないでも無い。

「ありがとう」

それを受け取るとスバルは、店内のはいって奥の右角に備え付けられた休憩スペースの椅子に腰を下ろす。冷たい液体で喉を潤すとスバルは、なぜか隣に座って特別意味もなくニコニコしている南国に話し掛ける。南国はいつも陽気で話しやすい男だとスバルは知っていた。

「聞いてよ、南国さん。僕の母さんが何故かイジワルをするんだ」

「キミの母さんって、あの美人で有名な感じの？」

「知らないけど、多分そんな感じ。委員長とか女の子との交友関係について、やたら首を突っ込んでくるんだよ？」

母の意図が知れないといった具合なのだろう、手持無沙汰にスバルは頬杖を突いてハイビスカスの花をいじる。

「アレだよ。スバル君の友達関係について嬉しく思ってるんじゃないかなって感じかな」

南国はそう言って、浅黒い肌でより際立つ白い歯を見せて笑った。スバルはいつもこの笑顔のことを『ものすごい笑顔』と評している。確かにものすごい笑顔である。因みに南国の言う先の言葉の意味はあかねはスバルの他者との交わり合いを微笑ましく思っているのだ、ということであろう。

その理由は、コダマタウンの全員が知っている。

「イヤ、僕の反応を見て楽しんでるんだ。委員長のお母さんの前で信じられないよ」
「白金さん所のお母さんがキミの家に来てたのかい？　意外な組み合わせだなぁ。何かワケあり？」
南国は興味津々といった様子でただでさえ近い位置にいるスバルに体を寄せる。馴れ馴れしいとも、暑苦しいとも思えるのだがスバルは慣れたもので特別反応はせずに返事をする。
このスバルにとってユリ子の訪問は少し前からの習慣であり、明日のイベントの企画をしたのも彼女であった。
嬉しそうにスバルは皆との明日の楽しいひと時を想像して夢を膨らましていた。
「うん。ワケありなんだよ」
スバルは今日の朝の事を思い出している様子である。
「ナニナニ？　気になるんだけどー的な感じなんだけど。教えてくれよスバル君」
「だったら、バトルカード一枚で教えてあげる」
スバルはショーケースを横目にちゃっかり交渉に乗り出す。南国がどう思うかは置いといて、少しがめつい気がする。
「そりゃないよー」
何時もそうだが、困った感じが伝わらない口調と態度だ。
「今月のおこづかいがもうないんだ」

そう言うスバルは一昨日の放課後、ゴン太に（何故か電波体のオックスにも）近所のチェーン店で牛丼を奢ってやった。スバルの毎月のお小遣いは三〇〇〇ゼニー（ゼニーとは通貨単位の事である）と決して多くは無い残高でゴン太を連れて行ってしまい、案の定良く食べるゴン太はスバルの財布を空っぽにしてしまった。

一杯二三〇円換算だから遠慮も何もあったものではなく、ゴン太は牛丼のみならず友情まで食い散らかしてしまうところだったのである。

それ故にスバルの財布ことハンターの電子マネー表示は寂しく経済状況は苦しかった。

だが真面目なスバルは前借りなんて真似はしない。

「まだ月の上旬じゃないかー」

「ないんだ……」

しょんぼりとするスバル。何故か生唾を飲む南国。

「……分かった、一つ好きなカードをあげるよ」

しぶしぶと承諾する南国。

「って冗談だよ。僕はそこまで図々しくないって。お茶もごちそうになったし、ジョニーの話を聞かせてくれればそれでいいよ」

スバルは少し、悪びれて言った。しかしジョニーの話を要求する所がまたスバルらしいと言える。

「なんだよ～、驚かさないでくれよまったく、ジョニーの話ならお安いご用さ」

南国は景気良く親指を突き立てる。

そして次はスバルの番で、彼の言う『ワケあり』に南国が耳を傾ける。そしてスバルの口から次々と知らされる感動的な出来事に、南国は感極まった様子でサングラスを曇らした。外して拭えばいいものをアイデンティティ確保の為、それはしない。

だが一つ分かるのは他人の為に、泣けるとは南国は見た目に反していい人なのかもしれない。

「――と言う訳なんだよ」

「うんうん、いい話だな～。白金ママのこと血も涙もないキャリアウーマンだと思ってたけど、ちゃんと母親してるんだねえ。……なあそう思うだろ、サーフ？」

南国はカウンターに鎮座してはいるが、一見ただのマスコットかと思う位に愛らしい姿をした二頭身ウィザードに、こっちにおいでと手招きをする。カウンターの番ウィザードは主人の許しを得たことによりスバル達に向かって小さな体躯をいっぱいに使った感情表現を見せてくれる。

「マジいい話だねー。俺っちの感動のビッグウェーブに乗れた気がするんだぜー」

一人称が俺っちという何ともユニークな彼の見た目は小さく、そしてラジオ・ビーム・プレートという最新型のサーフボード型のオプションに乗り込み、燃え盛る太陽の様なでっかち頭に主人同様サングラスを掛けている。

因みに目つきは悪いがそれがいいのだというコダマレディ、マダ

ムも少なくは無い。

「母親の味は忘れないもんだぜー。なぁボーイ？」

「うん、僕もそう思うよ」

ボーイスバルはボーイと呼ばれたことには反応せずに、どちらかと言えばスバルよりボーイ臭い見た目のサーフボーイの言う事を肯定した。

南国も話に加わる。

「母親の味かー、僕のママは地球を抱く広大な母なる海だね、だからスゴクしょっぱいよ」

「ど、どこまで本気なの？」

スバルは南国の言っている言葉の真意が掴めなかった。

「ケンの言う事はあてにすんなよ、ボーイ。こいつ半分はノリで出来てるから」

「それは、まずくない？」

スバルは半分も有機物ですらない南国の体の心配をしてあげた。

「そうでもないぜー、おかげで俺っちもケンも毎日ノリノリなんだぜー？」

「キ、キミもなのっ？！」

ウィザードの体の構成にスバルは驚きを隠せずに突っ込みをしてしまった。

「ノリは大切だぜ？　モッチョーゾ」

「イタリア語?!」

これで4度目。

「マジか、良く分かったな。コイツめ」

「ていうより、良くそんな言葉知ってるね、僕のが驚きだよ」

南国は、スバルの不思議そうな顔に何故か清々しいものを感じているようである。

「いやー、スバル君には言ってなかったけど僕たちって、世界中の波に乗ってきたんだよねー。そこでは沢山の経験を積んだよ。……ウイルスのビッグウェーブを乗りこなしたりとか?」

「あれ、今さらっとスゴイ事言わなかった?」

スバルは苦笑。信じてないようだ。

「あっ、ゴメン、ゴメンこれはジョニーの話だった。アッハハハ!」

「もう、ノリノリじゃないか南国さん……。ってジョニーすご過ぎだよ、人間じゃないよ」

「ジョニーはスゴい奴だよ。これは本当だよ」

ジョニーがどれだけの者で、スバルの想像出来る範疇にあるのかどうかさえ定かではないが、南国の口振りからすると恐らく凄い人なのだろう。だが、半分ノリで出来ているような人間の言葉を当てにする必要もあるまい。

スバルもそれは重々承知の上のようだ。

そしてスバルの口から心無いものとなっていった言葉が衝いて出る。

「これは本当だよって。それ以外は嘘だったの？」

半分冗談でスバルがジョニーについて疑念を抱いた。ほとほとどうでもいい事だと思える気がするがスバルにとってはどうでもいい事ではないらしい。

けれどそもそもそれだと、南国の言う事を信じていたという事になるのだが、しかし彼は良くも悪くも純粋で素直な人間だから疑う事は今まであまりしなかった。でも今は何故か疑っている。

それは人が信じられない疑い魔こと宇田海並のものがある気がする。だが、先の言葉はそれこそ言葉の綾という可能性が高すぎる。

だが、南国は南国だった。

「ウソっていうのは、語弊があるんだけどなー」

はっきりしない言葉だ。こういう時にこそ両極端な発言をしないと面倒事が起きると知らないらしい。いや、わざと言っているという可能性も拭い切れないのもまた事実ではある。

そう、決めつけは良くない。

そしてスバルは出されたお茶を飲み干して南国をじっと見ていた。この目を見ていると、どうやら疑っていると言うよりも真実を知りたいというスバルらしい嫌いが出ているだけの様である。妙な切り出しだと思うがそもそも、このスバルの問いかけから始まった話自体が、既にジョニー武勇伝の一部なのかもしれない。

だがスバルの邪推の様な気もするので結局ははっきりしないまま落ち着いてしまう。

「ジョニーって架空の人物だったの？　結構、思い入れがあったのにさ」
「だからそれは本当だってー、ジョニーは僕の親友だよ。これは本当だよ」

相変わらずの軽いノリで弁解してはいるが、さっきから南国の吐くセリフの『それは本当、これは本当』という言葉を言い変えると『それ以外は嘘、これ以外は本当』という何とも偏屈な解釈も出来てしまう。先ほどスバルが素直だという見解を出していたが、偏屈者かもしれない。

「それ以外は嘘、これ以外は嘘ってことになるね」
「もう、スバル君たらイジワルなんじゃない？」
「真実を知るためならイジワルになるよ僕は」

スバルはハイビスカスの花を指先を用いてクルクルと回しながら言った。少々しつこ過ぎる気もする。

「あっちゃー、もうこんな時間だ。今日はこれからベイサイドシティでビッグウェーブに乗りに行く予定だったんだなーこれが、困った困った」
「波乗り……？　まだ四月なのに」

明らかに棒読み台詞を言う南国にスバルは疑問に思うが、これ以上付き合う義理もない南国は強引にとんがり坊主にお帰りしていただこうと閉店の準備を始めた。ある意味凄い事に、店が開店してからまだ2時間も経っていない。

こんな事が続くようではビッグウェーブの存続が危ぶまれるが、南国はあまり物事を深く考えない人な様でスバルを追い出そうと躍起になっている。サングラス越しにうっすらと見える目がそう物語

っているのだ。

「さぁ、行った行ったー」

スバルの背中を強く押し完全に店外へと押し出す。

「あっ、ちょっと、ジョニーはちゃんと生きてるの？　ウソじゃないなら今度会わせてよ南国さん？！」

「お楽しみは後に取っとくといいと思うよ！　それじゃねー」

あまりにも宇田海なスバルを排除した南国は、マテリアルウェーブ製の自動ドアを完全に開かないように唯の鉄の壁に変換した。

「何なんだよ、南国さんの嘘付き……、でもこれでまたジョニーに対する謎が一つ増えたな」

スバルは腑に落ちないまでも、気を取り直してゴン太の家に向かおうとＢＩＧ　ＷＡＶＥに背を向けて歩き出す。ちゃっかり南国と時間を潰していたので、もう牛島宅へ訪問しても失礼な時間ではなくなっていた。

スバルの楽しい休日が始まる。

店の窓という窓をシャッターで塞ぎ込んで、天井のライトだけが光源となったＢＩＧ　ＷＡＶＥ店内で、南国はやれやれと言いたげ

に溜息を吐きだし、さっきまでスバルと話していた左隅のスペースに備え付けられた椅子に座る。そして閉め切った空気を循環させるシーリングファンを見上げて呟く。

悪い事をしたと思ったのだろうか南国は意外にも、あの凄い笑顔からは想像できない様な表情していた。いや、これは新たな発見と表現した方が適切かもしれない。

「ふー、まさかスバル君てばあそこまでジョニーについて突っ掛かって来るなんてね。本当に油断ならない子だよ」

南国は見上げたファンのさらに遠くを見つめているかの様な――そんな遠い目をしていた。彼は何を見据えているのだろうか、現時点では彼だけが知る事なのだろう。

「おーい、ケン良かったのかよ？　あのボーイにウソついたままで」

南国の周りで浮遊していた電波体はそう言うと主人が手に持ったハンターに身を引っ込めた。

『ジョニーってよ、ホントは生きてるか死んでるかなんて分かんないんだろう？　それじゃあ、あのボーイに会わせることなんて出来ないんじゃねーの』

「まったくスバル君に本当のことなんて言えるワケないじゃないか。解かるよなサーフ？」

『でもチラつかせる事はするんだよな？』

サーフは南国の気持ちを知りつつ嫌味を言う。

「もしかしたら、生きてるかもしれないじゃないか。それにボク以上にアイツや先輩たちは優秀だったからな……ジョニー達はきっと

どこかで元気にやっているはずさ」
『ノリで言ってんじゃねーのかい？』
「まさかね」

南国は自分のハンターをテーブルの上に置くと、横にあるスバルがさっきまで使っていたグラスにエアディスプレイが反射した。グラスに映っている、持ちウィザードが南国に何かを言い出す。

『さすがのケンもこの件にはノれないってコトな。でもしかしムリがあると思うぜー？　四年も前に行方不明になった人間全員が生きてるなんてな。現実はそう甘くないぜ？』
「それでも僕は信じてるよ」
『まー、信じるのは人の勝手だしな』
「違うよサーフ。信じるのは人の特権だよ」
『俺っちにはねーのかい？』

ウィザードが聞く。

「さあね、キミ次第さ」

コダマタウンに自販機は数あれど、スバルはその中でもにがりソーダのある所を選んだ。それはゴン太の家に向かう途中にあり、ちょうど巷で噂のにがりソーダも飲んでみたい気分だった様なので、スバルは怖いもの見たさにハンターを受信パネルに宛がう。すると、コインが擦れ合う時のいい音声が自販機から鳴った。

次いで、自販機の横に備え付けられた鳥籠状のフードディスペンサーの中で冷えた缶が生成される。

「ふーん、これがにがりソーダか」

完全に生成された物を手に取り呟く。少し高揚する謂れのない気持ちを抑えつつ、それを飲んでみた。

「うん、マズイ。もう一杯！」

嬉しそうにスバルは一人で、道の端に備え付けられた自販機の前で缶を眼前に突き出し言っている。道行く人はいない様なので奇異の目で見られることは無かった。

すると、一人寂しく佇む少年の後ろにある塀の向こう側の家のアンテナから伸びる電波の道であるウェーブロード上から誰かがソプラノトーンの声で語りかける。

「私にもおひとつ下さいなっ」

童謡でも謡う子供の様な口調だ。

「ん、どちら様？」

どこかで聞いたような声に、にがりソーダを口に流し込みながらスバルは背中越しの音源に目を向ける。もちろんビジライザーを装着していた。

「……あれ、誰もいない」

見上げる先には誰もいなかった。そんなあさっての方向を向いて

いるスバルの背後に、女の子型の電波人間は周波数域を変換してコソ泥の様に回り込んだ。この技と言うほどのものでもない基本的な技術は、上手い下手は置いといて以前レイダーが見せた物と同じである。

そして勢いよく、自身固有の技名をわざとらしく叫ぶ。

「油断大敵！　ショックノート！」

「え？　ええ？！」

スバルは驚いて素早く後ろに振り向いたが、やはり誰の姿も見えなかった。さっきスバルが叫ばれた技は音符型の電波エネルギーの塊を、先程の彼女特製のアンプで増幅して相手にぶつけるものなのだが、その音符が飛んでくる気配は無い。スバルは狐に抓まれた様な顔をしながらもゴン太の家に向かおうと再び気を取り直した。

そしてスバルが再びにがりソーダを飲もうと口に飲み口を当てるとややこしい事に、後ろを向いたスバルのさらに背後から声が少しおどけた感じで話しかける。

「こっちこっち」

スバルはまたか、と思い今度は無視していい加減ゴン太の家に向かおうとするが、今度は彼の体に直接アプローチしてきた。

意外と大体な子らしい。

「わわっ」

戸惑うスバル。

それもその筈、スバルは何者かに背後から両目をぴたりと塞がれ

てしまったのだ。一気に視界が零になった驚きと、目元に覚えるひんやりとした柔らかい感触にのぼせ、口から盛大ににがりソーダを吹き出した。琥珀色の炭酸溶液が空を舞い、パタパタと舗装された地面に降り注ぐ。

地面にくっきりと残った跡が、なんとも言えない妙な気分にさせる。

「ちょっと、スバル君。驚きすぎだよ！」

「ショックノートだけにショックを受けましたから」

気の利いた言葉のつもりなのだろう、スバルはニッと口元が笑っている。

「ま、まあ……そんな事は置いといて私は誰でしょうか？」

スバルの目を頑張って塞ぐ、かわいい声の女の子が聞いた。スバルは当然声の主など分かっていたが、少し意地悪をしてみる。無駄になったにがりソーダのお返しという訳なのかも知れない。

「んー、ゴン太？　むかえに来てくれたんだね。ウレシイよ」

白々しく言うスバル。

「えー、それはないよ」

冗談ではないが、スバルは目に圧迫感を覚えた。一回ミスをする度に圧力を強めるという具合なのだろうか、だとしたら相当怖い。少し悲しくて、思わず力が入ってしまったという、せめてそういう可愛らしい理由であって欲しい。

スバルは迫る身の危険を感じすぐさま下らない計画を取り止める

ことにする。

「冗談だよ。ミソラちゃんでしょ？　ゴン太があんない声をしてる訳ないもんねっ。ハハ……」

これではゴン太に失礼だ。

「えへへ、アタリー」

満足気にミソラはスバルの前に回り込む。

「ふう……」

解放されたスバルは少し安心した。

「なんでため息ついてるの？」

「ポロロン、ガールフレンドとの再会なのに、そんな風にしちゃダメよスバル君？」

ミソラの隣にウィザード・オンしてひょっこり現れたハープはスバルの姉の様に注意をする。

因みにポロロンというのには深い意味は無いのだろう、恐らく琴座のＦＭ星人の口癖と思われる。

「いや、ちゃんと嬉しいよ」

「私も嬉しいよ。スバル君」

「うん、ありがとうっ」

スバルは嬉しそうに感謝の意を述べた。

「私もよ、スバル君」
「……うん、ありがとうございます」

スバルは申し訳なさそうに感謝の意を述べた。

「……と、ところでさ。ミソラちゃん、今日はどうしたの？　約束じゃ明日に会う予定だったよね」
「今日の仕事はもう終わらしてきちゃってさ。居ても立ってもいられなくなっちゃった」

ミソラは少し恥ずかしそうに笑みを遠慮がちに浮かべた。ルナとは違って素直なタイプである。

「そうよ、ミソラったらはしゃいじゃって、もう大変だったのよ～？　聞いてよスバル君、あのね……」
「わわー、ちょっとストップだよっ、ハープ」

どう見ても動揺しているミソラは慌ててハープを阻止した。よほどの事なのだろうと想像できる。

「あらコワいコワい……」

ハープはクスクスと笑い一人楽しそうにしている。

「？　まあ、立ち話もなんだし、これからゴン太の家に行こうと思うんだ。一緒に来る？」

スバルは二人のやり取りを不思議に思ったようだが、問い詰めるような真似をせずにこれから行く所にミソラを誘う。

「うん、もちろん！」
「ゴン太君の家ねぇ……、とっても久しぶりね。ねぇ、ミソラ？」
「うん、そうだね。あっ、でもさスバル君、何しに行くの？」
「実はね、委員長がゴン太の家に来いっていうんだ。明日のピクニックの予定を決めるらしいよ。そうそう、委員長のことだから遅れたら怖いと思うよ」
「さ、行こうか」

スバルは一頻り話すと、ミソラと共にゴン太の家に向かってやっと歩き出す。

「あのさ、スバル君はどこに行きたい？」

あれから暫く経ちゴン太の家に向かう途中、ミソラは隣を歩くスバルに問いかけた。今歩いている通りを左に曲がればゴン太の家はすぐそこである。早めに他の人の意見を聞いておいても損は無い。

スバルは少し考え込んだ後に答える。

「うーん、空気が綺麗な所がいいかな」
「んん？　星がきれいな所とかはいいの？」

スバルのほんの小さな異変にミソラは気付いた。

「いやいや、空気が綺麗な所って大抵星がきれいに見えるんだよ。

空気が澄んでるからね、特に森とかは」

スバルはそれっぽい事を言った。

「森林浴かー、結構渋いね」

「渋くはないよ。それじゃさ、ミソラちゃんはどこに行きたいの？」

「私は、スバル君と一緒ならどこでもいいよ――なんてねっ」

ミソラは思い切って言った。スバルにちゃんと伏せた意味までは届いたのか届かなかったのかは知らないが、スバルは少し間を開けて返す。

「遠慮しなくてもいいよ。その気持ちは嬉しいけど、それじゃ委員長に勝手に行く所を決められちゃうからね」

「……あはっ、確かにルナちゃんならあり得るかもね」

「いや、『かも』じゃなくて、『絶対』だと思う……！」

スバルはやけに真剣な表情をして絞り出すように言っていた。そして、ミソラの方を向いて続ける。

「そんな委員長に対抗できるのは……ミソラちゃん、君だけだ！」

「えへへ、照れるなー……って、ルナちゃんにどれだけ頭が上がらないのよスバル君達！」

「えーと……」

なにを思ったかスバルは、しゃがみ込んで手を地面ぎりぎりまで近付ける。だがしかし決してそれを地面につけるようなことはしない。それはスバル達に残された最後のプライドだからだ。だが、それはそれでとても低い所にあるものだと思われる。

ミソラは、少し切なそうな表情を浮かべざるを得なかった。

「これ位かな」
「スバル君……」
「いろいろと大変なのねー」
その光景はミソラとハープがスバルを見下ろしながら同情するという何とも言えない構図であった。

strdst_20：トップシークレット（後書き）

スバルがいつまでも地面にしゃがみ込んでいたので、ミソラはいい加減にして欲しいと思わせる様に片眉を吊り上げ息を吐く。そしてミソラはいち保護者の様に、優しくスバルの手を引いて起こしてやった。当たり前の様に柔らかく握ってくれる柔らかいその手にスバルも応え、しっかりと握り返す。

その様子を見ていたハープは、ひっそりとミソラの背負ったギターのヘッド部にある緑色のチューニングディスプレイに引っ込んだ。

「そんな所で油売ってる場合じゃないよっ」

「ありがとう」

仲良く二人は歩きだす。

それから少し歩き、ちょうど日が天球上の真上に来た頃、二人は牛島家の表札の前に割と早い時間に辿り着けた。何となく丸いポーチから取り出してみた青を基調としているハンターのエアディスプレイでも正午になろうとしていることをやはり表示していた。

次にスバルは、ごく普通に玄関先の所に設置された呼び鈴のボタンを押した。

何百年経っても変わらない馴染みの深い呼び鈴の電子音は唯一の

仕事である家に住人を呼び出す事をする。スバルが押したボタンから指先を離すとすぐに返事が返ってきた。
それは女性の声だったので、恐らくゴン太の母親で違いないだろう。

『あら、スバル君ね。こんにちは』

ボタン上部のカメラ付きスピーカ―が挨拶をする。

「はい、星河とミソラちゃんです。早速ですがお邪魔してもいいですか？」

心得ているスバルはさり気なくミソラの存在を牛島母に伝えた。

『もちろんよ、遠慮せずに上がってちょうだい』
「お邪魔させてもらいます」

言われた通りに二人は扉を開けて中に入る。

すると、出迎えてくれる一人の女性が爽やかな笑顔を浮かべながらスリッパを四足、二人が履きやすいようにつま先部を自身の方に向けて並べてくれていた。そして立ち上がった彼女は女性にしては背が高く、一七〇ｃｍはあろうかという程であり開いた胸元から覗く程よく日焼けした肌と短く切り揃えられた髪の毛からは年齢にそぐわない活発な印象を受ける。
オープンマンよろしくダルマみたいな体型のゴン太を産み落とした本人とは思えない容姿であった。
ゴン太には失礼ではあるが骨格からして違うので、血が繋がっている様には見えない。

きっとゴン太は父親似なのだろう。

「こんにちは、オバサン」

「こんにちは、かえでオバさん」

スバル、ミソラは丁寧にお辞儀をした。

「こんにちはスバル君。それにミソラちゃん、久しぶりね？」

「ご無沙汰してました」

ミソラはまたしてもお辞儀をする。

「そんなに改まらなくてもいいって。ゴン太達が待ってるわよ――さ、上がった上がった」

玄関先で突っ立っていた二人は、かえでに促されゴン太の部屋へと向かう。その途中には小奇麗に纏められたインテリアや、スカート女子要注意のフローリングが出迎えてくれていたが、ゴン太の部屋の前まで来ると周辺には食べ物のカスや脱ぎ捨てられた衣服が散乱していた。

これだけの情報でここはゴン太の部屋だと言うのには事欠かないのである。もっとも、ゴン太の部屋に何度も訪れたことのある二人はそんな事は既に承知していた。

その有り様を目の当たりにしたかえでは、来客に醜態を晒した息子への呆れからか、額に手を当て溜め息を吐いた。この母親の苦労が絶えないことは、普段のゴン太の様子を見ていると容易に想像できる。

「もう、あの子ったらまた洗濯物を溜め込んで……、しかもお菓子

の食べ散らかしもこんなに……！　まったく、掃除するこっちの身にもなってほしいわよ……」

かえではそう言いながらも廊下まで及ぶ、着用してから何日も経ったであろう酸味の利いた臭いのする物を拾い上げている。

「あはは、何というかゴン太君らしいね……」

ミソラは苦笑いを浮かべている。

「こんな『らしさ』は要らないんだけどね……」

「オバサン、ゴン太君には僕がよく言いきかせておきますから」

鼻を摘まみながらそう言うスバルは危険物を拾い上げるのを手伝う。

「あらら、スバル君はいい子ねー。ホント、あのバカ息子にも見習ってほしいわよ。……どう、この家の息子にならない？　ゴン太と交換で」

かえでの顔は笑っているが冗談には聞こえない。

「え……、いやそれは……ちょっと」

スバルは俯いて、目をキョロキョロ泳がせている。スバルは基本、真に受ける。

「もうスバル君ったら。……冗談よ――冗談！」

「あ……ですよね」

「当たり前でしょー？　それじゃ、私ちょっと洗濯物してくるから、

後はごゆっくりどうぞ」
「あーぁ、あかねさんが羨ましいなー」

わざとっぽくパタパタとスリッパを交互に鳴らしながら、両腕いっぱいに荷物を抱えたかえでが廊下を曲がったのを見送るとミソラが一言、スバルに耳打ちした。

「あれ絶対、本気だったよ」
「それは、困るね」

早速二人は、襖絵（ふすまえ）に闘牛があしらわれている、今時珍しい襖を出入り口としている戸を横に流してゴン太の巣に入ると、やはり整理の出来ていない部屋がスバル達を出迎えた。

野球道具やサッカーボール並びにゲームのコントローラー加えパソコンのコード類が同じガラクタ入れに当たり前といった様子で無秩序に詰め込まれている。これはゴン太なりに精一杯頭を使って編み出した収納術なのだろう。

だが、そのゴン太ブランドの収納術はあまり画期的ではないようだ。その証拠に、かえでに運ばれることなく発酵してしまった衣服が居場所も無くゴミ箱であったはずの筒状のオブジェクトに突っ込まれて、それが洋服ダンス代わりになっている。

これは酷いとしか言いようがないだろう。純和風の室内は畳のおかげで上品に仕上がっているはずなのに、肝心のそれがゴン太の生活した後に覆い尽くされて見えないのだからどうしようもない。

そろそろ落ち着きたい二人はとりあえず、ゴミ溜め場で食い入るようにパンフレットと睨めっこしながらそれを囲んで座っているゴン太とキザマロとルナに挨拶をする。

「こんにちは、みんなっ。久しぶりだね」

「あっ、ミソラちゃんっ、こんにちはです」

「あらー、よく来たわねミソラちゃん。汚い部屋だけど、ここに座って」

キザマロ、ルナはミソラ達の存在に気が付き、小さいメガネは頭にお団子付きのピンクフードを被っている女の子にお辞儀を深々と返す。一方ルナは部屋を占領しているゴミを縞々タイツ足で適当にどけてミソラが座れるだけのスペースを作ってやった。

「やあ、ゴン太。この部屋は相変わらず散らかってるね、キミの母さんがかなり困ってたよ?」

恐らく怒っている母親の影をちらつかせるスバルにゴン太は部屋に散らかった紙媒体のパンフレットに目を落としながら答える。

「おうよ、何故か部屋が汚くなるんだよな。……謎だぜ」

「謎って……そんなの、どう見ても君の怠慢が原因だろ? 部屋は綺麗にしないとダメだよ」

「まぁまぁ、スバル君? なにもゴン太君の部屋掃除しに来たわけじゃないんだから……」

スバルとてゴン太をどうこうするつもりなどないのだが、ルナの隣に既に座っているミソラが一応仲裁する。

「ミソラちゃんの言うとおりだぜ。俺の部屋はこれぐらいが落ち着くんだ。ほらお前もサッサと座れよ」

ゴン太はゴソゴソと、『これが座布団だ』と言わんばかりにポテトチップスという健康に悪そうな揚げスライスジャガイモ菓子の空袋を丁寧に切り開いて数少ない空きスペースに敷いてあげている。ゴン太自身は勿論、キザマロもルナもミソラもちゃんとした座布団に座っている。

それを考えると、酷い仕打ちである。

「これは……、なんの真似ですか？」

「座布団がもうなくてよ――代わりだ！」

「ありがとうございます」

スバルは足で座布団である訳がない燃えないゴミをを掃うとゴン太の横にどっかと座った。

strdst_21：ゴン太空間（後書き）

ｓｔｒｄｓｔ―２２：楽園へと続く地獄への階段

スバル含む、仲良し五人組は七畳半の部屋でパンフレットデータをエアディスプレイに出力させながら、ワイワイキャッキャッと明日の予定を決め込んでいる様子。そんな中、子供達だけで勝手に行く場所を決めてもいいのだろうかという疑問が常に付き纏っていたのだが、その問題はユリ子を筆頭にした母親達の計らいにより子供達に好きな所に行かせてやろうという事で落ち着いたらしい。そうと決まれば、ルナが大人しく黙っている訳がない。

嬉々として少女は立ち上がり、皆の注目を恣に集め、さらに同様にして自分の意見を一方的にぶつけようとしているらしく、自慢の金髪縦ロールを撫ぜていた。

そして一瞬だがルナの少しつり気味の目とスバルの目線が合ってしまう。スバルは慌てて視線を逸らす。ルナは首を傾げる。

現在のところ少し顔が強張っているスバルが危惧していた通り、ルナの独壇場となってしまうのか。だとしたらルナの取り巻きＡ・Ｂ・Ｃでは、残念ながらどうしようもないのである。そうなると今をときめく超人気シンガーソングライター兼スーパーアイドル『響ミソラ』その人でなければ太刀打ちできないという事になる。

「それじゃあ、明日のピクニックどこに行くのか決めちゃいましょう！　ちなみに私とモードが算出した超おしゃれスポットはモナカシャンボ島よ！」

『おしゃれスポットならワタシにお任せあれ！』

どこか誇らしげなモードは何故かゴン太の部屋の押し入れからひ

ょっこり現われて、短い腕でガッツポーズをする。

「あっ、モードちゃんだ。可愛いな～。ね、ハープ？」

『まーねぇ、私とは違った可愛さねー、私はお姉さん的魅力がたっぷりよ』

ハープを無視してスバルがぼやく。

「……って何処だよ、そこは」

「俺としてはモナカナントカ島より、牛丼屋がいっぱいある所がいいんだ」

ゴン太節炸裂――いや、唯の悪癖で、もはやピクニックに行く気すらない発言である。

「お黙り、ゴン太！」

待ってましたとルナは牛丼屋のチラシをゴン太の顔面に無理矢理貼り付ける。長年ゴン太と友達以上、ブラザー位な関係を続けてきたルナは、少しだけ人より立派な体型であるゴン太の持つ発汗能力二割増素肌には糊付けしなくても、薄っぺらい紙ぐらいなら貼り付けることが出来るという様な本当にどうでもいいことを知っていたのだった。

牛丼屋の広告をお洒落に顔面の所で貼りこなした事で、今までのファッション界の常識にアンチテーゼを投げかけるゴン太にスバルが食い付く。

「僕は、ナンスカが良いと思うよ。ね、ゴンターガ様？」

悪乗りとはこの事だ。

「確かにスバルの言うとおりで、あそこは飯が美味くてな～……って、俺はゴンターガじゃねぇー！」

「あはっ、ノリツッコミだね」

まずは簡潔にミソラ。

「ふむ、ごく自然な流れからゴン太君絡みだからこそネタにできる『ゴンターガ』という名の圧倒的なインパクトを持つフレーズをさり気なく盛り込んだスバル君の絶妙な振りに称賛を贈りたいです。そしてその絶妙なパスをまず一度乗っておいて後から料理する高等テクニック――空気を読み切れなければ自身への精神的大ダメージ受け合いの両刃の剣を、臆することなく使いこなしたゴン太君にもただただ賛辞を贈りたいと思います。まぁ……要するにノリツッコミですね」

そして丁寧な言い回しに定評のあるキザマロが締めくくる。

「おうよ、思わずノっちまったぜ」

何故か照れくさそうにポリポリと頭を掻く姿がゴリラのそれを彷彿させる為にルナは少し苛立ちを覚えた。

「――ってアンタ達、ふざけてるでしょ！」

『そうですよ！　ふざけすぎは良くないですよ。でないと、ワタシ怒っちゃいますよ！？』

怒ったモードも見てみたい衝動に駆られるルナを除く一同――特にミソラ――だったが、その中でも比較的堅実なタイプであるスバ

ルが、話し合いの方針を提案する。スバルはエアディスプレイを指して現実的な意見を展開し始める。

「あのちょっといいかな、やたらめったら好きな所を言ったってしょうがないんだしさ、ここは国内に絞っとこうよ。予算的な問題も踏まえるとそれが一番だと思うんだ」

　すると現実主義者スバルに対し、ミソラとルナが眉を顰めて明らかに不満を押し殺している。自称心優しいルナの方は極端にキャパシティが不足していること必至なのでこれはこれで怖いものをスバルは感じずにはいられないのであった。

「な、何かな……？　特に委員長……」

　ルナ個人を特定する台詞は小さく呟くも、スバルは何が不満なんだろうかと二人に問いかけた。

　スバルとしては、良いことを言ったつもりなのだ。

「分かってないよね……ルナちゃん？」
「ええ、分かってないわね、スバル君は……」
「何が……？」
「こういうのはねー、夢いっぱいでちょっと背伸びして考えるのが楽しいのよ！　ねぇ、ミソラちゃん？」
「ホントだよねー。スバル君さー、予算的な問題とかお堅い事言わないでよ……。深くは考えないで予定を決めることを純粋に楽しも？」

　女子二人はそう言って仲良く顔を見合わせているのである。それを見ているスバルにはどうしても理解しがたいものがあった。

「だって、予定はちゃんと決めとかなくちゃ……後が大変だよ？」
「分かってるって。それは後でするから……ねっ」
「なんだか、僕が間違っているみたいだ……」

スバルの呟きをミソラとルナが聞くはずもなく二人は楽しそうにお喋り中だ。その二人の表情はとても活き活きしていて夢一杯な乙女達にスバルもこれ以上口を挟むのには気が引けた。

「ちょっと見てールナちゃん。ここ素敵だよねー」
「あら、ホントねっ。でもここだっていいと思うわよ？」
「あ、ホントだー」
「でしょー？」
「あははっ」
「うふふっ」

次はエヘヘでしょ、と乙女的電波空間に当てられたスバルは堪らず、大口を開けて欠伸をする。甘ったるいそれは見ている者の眠気を誘ってしょうがないのだ。

「完全に遠足気分だよ……いや、確かに遠足なんだけどさ……」

そんな精神的な所から来る疲れで参っているスバルに、ゴン太は珍しい事に優しく声をかける。

「女って分かんないよな……、そんな事より、スバルこの牛丼屋、今度連れてけよ」
「ゴン太……、キミは一体どこへ向かっているんだい……？」
「牛丼屋」

何なんだろうこの人は、と毎度ながら思うべき場面である。

「いやいやいや！　確かにそう言うと思ったけどさ。そう聞いた僕も悪いんだけどさ――せめて、もうちょっと捻ってよ」

「並盛」

「？　って、もしかしてそれ捻ったつもり？　一瞬、訳が分からなかったんだけど……」

スバルはゴン太の頭の悪さを気遣いながらゴン太を傷付けない様に聞いた。

「えへへ……」

目も当てられないが、クラス一の快男子ゴン太は可愛く笑っているつもりである。

「おえ……」

ゴン太が垣間見せた新たな一面に、キザマロはとてつもない嫌悪感を伴った生理反応を起こした。先程キザマロが感じたであろう、長年連れ添った友が一瞬見せた気持ちの悪い笑い方を不意に見させられた故の不快感、足場から崩されるかの様な不安感――その心中を察すると気の毒だと言わざるを得ない。

透かさずスバルは、マテリアライズをしたマロ辞典を枕にして安静にしているキザマロの上に優しく、布団の可能性もあるがあのゴン太の部屋にある以上そうでもないかもしれない可能性もある謎の布切れを被せてやった。

そしてスバルは、ゴン太を説き伏せる様に言う。

「ゴン太、ダメじゃないか。キミがそんな笑い方すると冗談じゃなく周りの人に迷惑をかけるんだから。……君は――ミソラちゃんじゃないんだ」

「いいんですよ……スバル君。僕だって、まさかあんなにも気持ちの悪くなるものだとは思っていなかったので……長い間、ゴン太君の友達をしていたというのに一生の不覚です」

心優しいちびっ子なキザマロは虚ろな目で『ゴン太は悪くないのだ、悪いのは友達のありのままの姿を受け止められなかった自分だ』と必死にフォローを入れる。

「て言うか、さっきからちょっと酷くないか？」

ゴン太が一言。

「ですね」

「だね」

キザマロ、スバルが笑う。そしてグループその2の笑い声がさざ盛り上がっているのだろうと教えてくれる。

「あはははは～」

「うふふふ～」

乙女二人が様々の思惑を広げて楽しそうに笑っている様子が眩しい。

五人それぞれ笑ってはいるが、先程から随分と時間だけが経っているにも関わらず、肝心のピクニックにはどこに行くのかという項目が未だに成されていない、と言う以前に話し合いすらされていな

い。ミソラとルナは現実的な議論を交わしていると言うよりかは、楽しくお話といった感じである。
キザマロはグロッキー、ゴン太の頭は牛丼で一杯一杯、唯一まともなのはスバルだけであった。

「……ダメだ、こりゃ」

あれから暫く経って太陽もすっかり傾き、血の様に真っ赤な夕焼けに抱かれる牛島家の屋根は橙色の空から光を受けて、それを返していた。そしてその家の玄関の扉が開いたかと思うと、中から赤尽くめツンツン頭メガネと、ピンクお団子ホットパンツガールと、ダブル金髪くるくるドリルロールと、マイクロメガネがぞろぞろと出てきた。

「それじゃ、気を付けて帰ってよ。変なおじさんに着いていかないように……あんた達は可愛いからねー。ホント、ゴン太と交換したいぐらいだよ」
「母ちゃん、ヒデーよ」

無駄にゴン太を悲しませつつ、かえでは玄関先でルナとミソラに注意を促す。

「大丈夫ですわオバさま。ミソラちゃんが付いてるんですから！」
「こう見えても私、結構その分野に覚えがあるんですよ」

戦うシンガーソングライターミソラは腕捲りの仕草をしてみせた。

「わお、頼もしいわね。まぁ、スバル君が付いてるんだから大丈夫よね」

「大丈夫じゃないと思いますね」

かえでの根拠のない期待にスバルはやんわりと否定をするしかなかった。

「謙遜するなスバル、お前なら二人を守れるぜ！　ミソラちゃんを頼んだ！」

「あら、私はどうなってもいいのかしら」

ルナの眼光は相変わらず鋭かった。

「あっ、もちろん委員長も含まれてますよ……げへげへへ」

色々と突っ込み所がある訳だが、スバルは丁寧に一つ一つ分けて突っ込む。

「なんだよその笑い……ってそもそも謙遜してないし勝手に決めるなよ――ていうか何から守るんだよ？！　」

「さあ？」

ゴン太は真面目に惚ける。

「さあ……って」

「いよっ、スーパーヒーロー！　頼りにしてるよスバル君っ」

ミソラは調子良くスバルを肘で小突く。

「ミソラちゃんまで……。僕は弱っちい、ただの小学生ですって」
「分かってるって、冗談だよ冗談！」
「えーコホン、そろそろお喋りは止めにして帰りましょ」
ルナが延々と続くやり取りを中断させる。
「それもそうだね、帰ろう」
「心配だから最期に一応言っておくけど。いいこと、ゴン太？　明日はウェーブライナーの前で待ち合わせだからね。遅れたら承知しないわよ！？」
ルナはすっかりお馴染みとなった腰に手を当てのポーズで前に少し屈みゴン太の顔を覗き込んで釘を刺す。
「解かってるって、肝に銘じておくぜ」
「大丈夫よ、ルナちゃん。私が遅刻なんてさせないから――引きずってでも連れてくるわね」
かえでが胸をドンと突く。
「え？　母ちゃん明日来るの？」
「何、ダメなの？」
「え、そんな事はないけど……」
「あぁー、コイツめ母親を除け者にしようとしてたわねぇ……あっ、それじゃあね、みんな気を付けて帰りなさないよ」
「ぐああ、母ちゃんイテーよ！」
かえではゴン太の首根っこを掴んで、スバル達に助けを求める表情を浮かべるゴン太を明日を待つまでもなく引きずっていき玄関の

扉を閉めた。

「バイバイ、ゴン太。――さ、帰ろう」
「うん、そうだね」
「あの様子じゃ遅刻はしなさそうね」
「ですね」

四人組はゴン太の家を後にし、自分達の家に向かって帰路につく。

だがしかし、そんな彼らを見つめる怪しい影が二つ、コダマタウンの空を走るウェーブロード上に並んで立っており、一目で挙動不審だと分かる落ち着きのない仕草や口調でブツブツと何か言っている。そんな二人は何に脅えているのだろうかと思わせるぐらいに震えていて二体の電波体は恐怖に支配される前に、相手に恐怖を与えようとスバル達に向かって接近していく。

今スバル達に襲いかかっている二人が立っていたのは電波の道、ウェーブロード。そこは電波体が通ることを目的としたもので決して人間が介入することなど出来ない。だが不思議な事に先の二人は、電波体と表現するには、あまりにも人に近い姿をしていたのだった。その姿は、普通に道を歩いていて、すれ違っても気が付かない程である。

その特異な例に当てはまるのは、四年前にウォーロックによって電波化された人間達の集団、宇宙ステーション『キズナ』のクルーだけである。はたまたそれに当てはまらない何かがあるのかは、スバル達にも誰にも、今は知る由もなかった。

そして、とうとう謎の人影がスバル達の目の前に降り立った。

「あはは、あの時のゴン太ったら笑えたわよねー」

ルナは呑気にスバル達の方を見ながら話している。

「……」

黙り込む三人。その視線の先には豊かな体格で肌の白い外国人風の男が公園の近くの狭い路地を塞ぐように二人して立っていた、その内の一人は杖を突いている。そして隣には二体のウィザードを従えていた。

「あれ？　どうかした。ここは笑うトコよ」

「委員長……、前を見て。何なんだあの人達、一体どこから……」

スバルがルナに彼らの存在を教えてやる。

「あれ、いつの間に……でも、アメロッパ人の方ね。ハロー、マイネームイズ……」

アメロッパ人たちの方へ向い、ルナはまたしても呑気に英語で挨拶と洒落込む。

『イヤな、周波数ね……ミソラ』

「委員長、近寄っちゃダメだ！」

「え？」

スバルがルナに叫んだ時には既に二人は、ヒールウィザードと一つになることの意味を示している眩い光を放っており、それは想像

したくもないが恐らく電波変換――いや電波融合による発光反応であった。

「きゃっ、眩しっ」

ルナは堪らず腕で顔を覆う。

「おジョーチャン達に恨みはナイケド……」

「ミー達の命が懸かってるんダヨー。ロックマンをダセヨー」

光の中から現れたのはミライが解決した先の事件の主犯と同じモデルのジャミンガーであった。一人はルナに拳を振り上げている。もう一人は手に杖を持っている事から原因不明の電波体の実体化現象が起きていることを示していた。さらに酷い事に、その杖には、かつての怪紳士同様隠し刃が仕込まれていたのだった。

目を見開くスバルは考えるよりも先に手が反射的に取り出したハンターのエアディスプレイからバトルカードを入力していた。

「間に合え……！」

バトルカードを読み込まさせるが、入力したカード発生までの一瞬がスバルの反応が遅れたことも相まって、この状況ではとてつもなく長く感じる。バトルカード製造会社Ｉ．Ｐ．Ｃへの落胆と共にスバルの顔が恐怖で塗り潰されていく――スバルの脳裏にルナの笑顔がよぎる――それにより否が応でもスバルは自分の無力さを痛感した――その時――白いスカーフをはためかせ、金色の髪を風に任せながら、凛とした瞳を青いバイザーに宿す少女はギターの弦を弾いていた。カードを入力し終え徐々に迫る絶望を味わっているスバルの横を正に音速の音波が駆け抜けていく。

「ショックノート！」
「ぐぅっ！」
「ちっ、ロックマンの仲間カヨ！」

音波は直撃。強烈な一撃を貰ったジャミンガー達はよろめきその場に尻もちをつく。だがもう一体はなんとか持ちこたえ、目標をキザマロに移す。

「ひいっ！　カ、カミサマー」

道の端っこの電柱の陰に隠れて、キザマロはマロ辞典で頭を守りしゃがみ込む。恐怖に震えていて見ていられない。

「キザマロ君が！　スバル君、ルナちゃんの方を……！」
「わ、わかったよ……！　ミソラちゃん」

そうコンタクトを取ると、スバルはルナの方へ駆け寄るが、既に彼の頭の中にはハープ・ノートの助太刀がなかったら、とそればかりがこびり付くかの様に残っていたので生きた心地がしていなかった。そして自分は無力だ――というスバルの罪悪感が沸々と、母親にルナやミソラ、周りの人達の支えによって固く蓋のされた小さな『心』という容器から溢れだそうとしていたのだった。

一方ハープ・ノートはキザマロの方に向かって地面をしっかり噛んだ後に蹴って跳んだ。そして跳びのったウェーブロードから、キザマロに襲いかかる杖持ちジャミンガーを、唯一の武器である青ギターで狙いを定めて杖持ちに向かって弦を飛ばす。

「アナタは私と一緒にこっちへ来なさい！　マシンガンストリング！」

ハープ・ノートが飛ばした弦の束をジャミンガーに巻きつかせると、宛ら一本釣りの要領でジャミンガーを空中に放り投げた。そうすると、彼女の狙い通りにジャミンガーはハープ・ノートが立っているのと同じ一本のウェーブロード上に着地してきた。

「ユー！　ミーの邪魔をするんかヨ！」

ジャミンガーはギターの弦を軽く引き千切りながら聞いた。

「私の友達を傷つけるって言うんなら容赦しないよ！」

「チッ、俺たちの立場も知らないで……シット！　あのツンツン頭め、フレンドがピンチだってのに変身しようともしネー。オー、ノー、ワッツァ、ホリブルボーイ！　――ホリブルロックマンめ！」

ジャミンガーは言いたい放題言っていた。そんな心無い言葉を聞いて、ハープ・ノートは響ミソラとして許せないのか、手をわなわなと震わせている。

「……に言……な」

「ワッツ？」

ジャミンガーは大袈裟に手を耳に当てハープ・ノートを馬鹿にする。

「スバル君をそんな風に言うな！」

凄い剣幕でハープ・ノートはジャミンガーに感情を露わにする。

「ワッツ？！」

「許せないよ……！　スバル君の気持ちも知らないで……」
「話が通じないトンでもガールだぜ……。あのなぁ、俺だって、退く訳にはイカナイってイッテンダヨー！」
『ミソラ、このどうしようもない人をやっつけるのよ』
「分かってる」

その優しさ故に、夕焼けの注ぐ光を一層授受する瞳の少女は口を真一文字にして何かを堪える様に、赤い空の背景を背負いその小さな体を赤に溶けこましながらギターをジャミンガーに向けて構える。その様子をジャミンガーは首を回しながら準備運動と言った具合に、杖で肩をぽんぽんと軽く叩いてブツブツと不気味に何か言っている。

上空でジャミンガーと戦うハープ・ノートにルナを任されたスバルは、ルナに肩を貸し申し訳なさそうに怪我をしてないか聞く。その表情はルナを安心させようと笑ってはいるが、悔しさと情けなさが滲み出ていた。

「大丈夫？　委員長」
「え、ええ……」
「ゴメン……ゴメンよ」
「……（何で……謝るのよ？　スバル君……）」

次にスバルはジャミンガーの方を振り向き、怒りを抑えようともせずに前方の電波人間を睨みつけた。ジャミンガーと自分自身に対する怒りから、自然とルナの体に回したスバルの腕に力が入り、ル

ナはその怒りを体で感じ取ってしまざるを得なかった。

「（スバル君……）」

「何で、僕達を狙うんだ！　お前達はいつもいつも……僕はもう、疲れたのに……！！　これ以上どうしろって言うんだよ！？」

スバルは今までずっと溜めてきた思いの丈を吐き出す。

ジャミンガーは特有の下卑た声でスバルを追い詰める。

「黙れ！　そんなもんお前がロックマンに決まってるからだろーが！　何が『疲れた』だ。ケッ、天下のロックマン様も地球は救えても、友達一人救えないとは笑わせるぜ！　テメェのせいで……テメェがヒーロー風を吹かせてくれていたおかげで俺たちもこんな事になっちまったんだ……！」

「う、うるさい……うるさい！」

スバルはルナに肩を貸すことすら忘れて自分の耳を塞ぐのに必死になっていた。

「だったら、変身してみやがれ！　友達を守ってみせるんだろー！？　ロックマン様よ～？　それとも何か、まさか逃げ出すのか？　あのロックマンが？　英雄が？」

「う、ううぅ、僕は……僕は……！　ただの普通の……」

ジャミンガーの精神攻撃にスバルはその場にしゃがみ込んでしまう。ルナは今の様に落ち込むスバルを何度も見てきたはずなのに、心の奥が抉られるような感覚に苛まられていた。

この感覚には慣れることはできないのだ。

そんな中、何が正解かも分からないルナだったが、思った事をジャミンガーに怒鳴りつけることにした。これが間違いなわけがない。

「ふざけないでっ！　ロックマン様はもういないのよ！　ただの小学生いじめて何が楽しいっていうの？！　ここには心優しい、どこにでもいるような男の子しかいないのよ！　アンタ、サイテーよ！！」

ルナは言いたいだけジャミンガーに言ってやった。しかし、ジャミンガーにとってして見れば、小娘の鳴き声など耳に入らずロックマンがもうこの世界にいないという現実のみを重く受け止めた。

「ロ、ロックマンがもういない……だと。マジかよ……あのウワサは本当だったってのか……どうしたらいいんだ俺は……」

訳が分からないまでも、ジャミンガーが途方に暮れているのをいいことにルナはスバルとキザマロに声をかける。

「二人とも、今の内に逃げるわよ！　ほら、スバル君落ち込んでないでシャキッとしなさい！　男の子でしょ？！　それに、逃げることは恥ずかしい事じゃないわ！」

「う、うん。わかったよ……」

スバルは力無く立ち上がり、ルナと一緒に逃げ出す。途中、電柱の陰で震えているキザマロを捕まえて全力疾走だ。

「くっそー、仕方ねー。ロックマンがいないなら、せめてあのとんがりガキだけでも……連れ帰る！」

ジャミンガーは空間に走る電波の道に乗りスバル達を追跡する。
当然人間が走って逃げ切れるような速さではなかった。

「ヒャハハハッ！　逃げれると思うなよ。元ロックマン！」
「私が逃がさせて見せる！」
「なっ……！」

ウェーブロードを走るジャミンガーの見上げた先には、赤い夕焼けに染まる一人の電波人間がジャミンガーのはるか上のウェーブロードからバタバタと白スカーフたなびかせ、そしてスカートを抑えながら飛び降りて来ていた。それに対しウェーブロード上を走り続けるジャミンガーは制動することもせずに、ジャミングバルカンと言う武器データをロードして上空のハープ・ノートに向けて構える。
だが、空中を自在に周波数変換で乗りこなす敵を自分自身が動いている状態で狙いを定めるのは困難でジャミンガーの照準が定まらない。

「ちぃっ……！　チョロチョロと……！」
『そこの目つき悪いの！　ミソラのスカートの中覗いたら承知しないわよ！』

ギターモード――ハープはハープ・ノート状態だとギターを模した姿になる――のハープが注意してあげる。

「フザケンナ！　クソガキに興味はねーよ」
「あっ、そ」

ご機嫌斜めになったハープ・ノートはギターの弦に手を掛け、思いっきり弾く。

「ショックノート、フォルテッシモ！」
「！！」

ジャミンガーは身構えるが、何も飛んでくる様子はない。

空撃ちだ。

「なっ……！」
「こっちだよ、ジャミンガーさん」

ハープ・ノートはジャミンガーの行く道を先回りして、通せん坊していた。無論、ギターヘッドをジャミンガーの方へ向けている。

「それじゃ、今度こそ、ショックノート・フォルテッシモ！」
「ジャ、ジャミングバルカン！！」

ハープ・ノートの放つ音符は通常の5倍以上あったので、ジャミングバルカンの豆鉄砲ではいくら打ち込んでも、どうこうなるものではなかった。これは不味いと覚ったジャミンガーは一気に制動を掛けて、逃げようとするが、それでも尚、その体は巨大音符に突っ込んでいってしまう。

「ちっくしょ……！」

音波にジャミンガーの吐き捨てる毒はかき消され、圧倒されて後方へ紙飛行機の様に吹っ飛ばされた。

「あだだだだっ」

ショックノートによって与えられた運動エネルギーがウェーブロ

ードとの摩擦力と釣り合うまで『あだだだだ』と言う寸法か。だとしたら五月蝿い。

そしてジャミンガーがようやく止まると、背中を擦りながら立ち上がって悪態を吐く。

「くっそ……！」

『まだ、立てるのね。手加減したの？』

「全然」

ハープノートはプイっとジャミンガーから視線を逸らす。金髪女に振られたジャミンガーは掠れてしまった例の笑い声をたてながら、負け台詞を吐く。

「へッへへ、まぁいい。ロックマンがいないのなら別にそれはそれでいいのかもな……、トンズラするぜ」

ジャミンガーはそう言うと、後ろの空間を次第に歪ませて悪人がはびこる裏の電波世界に帰っていった。

『よっし』

「ふー、疲れた」

なんとか謎のジャミンガー二人組の強襲を退けた四人は、何故かその後駆けつけてきた――恐らく、近所の住民が騒ぎを聞きつけて通報したのだろう――五陽田ヘイジという昔気質な刑事にこっぴど

く事情聴取されてしまい、それが終わるとやっとＢＩＧ　ＷＡＶＥ前の公園のベンチに座って、少し疲れた体を休ませることが出来たのだった。

一つ気になるのは、今のスバルの顔から良い情報は得られない事である。

「僕は……ダメだな」

前に屈みながら俯いてベンチに座ってるスバルは、またしょんぼりモードであった。とりあえず、今回はどの程度のしょんぼり具合なのか知りたいところではある。

「そーんな、ことないってっ。スバル君だってルナちゃんを守ろうとしてたじゃない」

ミソラは多少テンション上げ気味にスバルを元気付けようとするが、スバルのテンションは上がらない。

「全然だったよ。女の子に戦わしといて逃げるし、さらにフォローまでしてもらう僕は一体、何なんだろうね」

スバルの背中を丸めて頭を抱え込むその姿は、リストラされたサラリーマンが家族に何も言えずに一人悩んでいるそれと大差なかった。

「ちょっと、何であいつが言う事を真に受けてるのよ？　バカバカしいわ！　そうでしょ、スバル君？」

「いや、アイツの言う事は、真意はどうあれ本当の事なんだよ。友達一人も守れないロックマン……傑作だね」

スバルが不気味に笑っている。
これは重症だ。

そんな時、キザマロが口を開いた。

「スバル君、自慢じゃないですが、僕はずっと逃げ回ってましたよ。挙げ句の果てには電柱の裏に隠れて震えていました」
「キザマロ……？」

スバルは不思議そうにキザマロを見つめてはいるが、キザマロの意図はどこかにある筈だ。彼は無意味に自分の事を貶めて紹介するような人間ではないのだから。

「こんな情けない僕でも胸を張って言えますよ。スバル君の友達だって――ブラザーだって！　自信を持って言えます。スバル君が僕の自信です」
「僕が君の自信だって？」
「だから、自分の事をそんなに悪く思わないでください。ジャミンガーや世間がスバル君の人間性を決めるんじゃないと思いますよ。自分自身が自分を決めるといいんです。僕は電柱で隠れて震えてることしか出来なくても、自分を否定してまで塞ぎ込むことはしません。

僕には僕に出来るだけの精一杯の事をやればいいんだと思っていますから。これは、スバル君が教えてくれた事ですよ」
「そうそう、キザマロ君の言うとおりだね。友だち一人守れないって塞ぎ込む事より、友達を守りたいってそう思えるその優しさの方がずっとずっと大切だと思うよ。

前にも言ったけど、キミはキミなんだから、キミが出来る事だけをすればいいんだよ？　ロックマンが出来たことをキミがする必要はないと思うな。ね、ルナちゃん」

「え？　ええそうね（わ、私も何かスバル君を励ますことを言わなくちゃ……）」

一人慌てるルナを尻目にスバルはベンチから立ち上がって、電波を見ることのできるメガネであるビジライザーを掛けてあかね色の空を見上げながら言う。

「……わかったよ、みんな。多分、また落ち込む事があるかもしれないけど……その時はヨロシク！」

振り向いたスバルの浮かべているものはにっこりとした表情だった。

「って、スバル君。それは、またこの先、落ち込む事があるかもってことよね？」

「うん、僕はいつまで経っても僕だからね。その時はヨロシクね委員長！」

「！！　（な、何よ。甘えちゃって……ま、いっか）ま、まぁ、そんな事ないことを祈ってるけど、その時はヨロシク頼まれてあげるわ」

ルナは悪態の一つでも吐いてやろうとでも思ったが、スバルの笑顔を見ているとそんな気は失せてしまったようだ。

そんな彼女はあかね色の夕焼けに頬色を誤魔化して少し捻くれた答えを返すだけしか出来なかった。

「あれ、何か赤くない？」

「確かにきれいな夕焼けね」

「顔だよ、顔」

「きれいな夕焼けね」

「？　顔だよ、顔」
「き・れ・い・な・夕・焼・け・ね っ？」
「……き、きれいな夕焼けです、ハイ」

あかね空についてやいのやいの言っていると、あかねがスバルの家の方角の公園の出入り口からトコトコと歩いてやってきた。

「おーい、スバルー、何やってるの？　夕ご飯にするわよー」
「ホントだ、もうこんな時間だった」

スバルは慌ててあかねの方へ向かおうとするがあかねに待ったをかけられる。そしてあかねの方がスバル達の所へ自ら赴くとスバルの後ろに立っている子供達に提案した。

「あらー、みんなお揃いね」
「ゴン太がいないよ」
「あら、ホント。それじゃ、仕方ないからここにいる子達だけでも家に来て夕飯一緒にしない？　ユリ子さんの料理すっごいのよ。もちろんいい意味でね」

あかねの言った事にまっ先にルナが反応する。アニメやそういったメディアではこういった時に背中に背負った縦ロールが生き物の様に跳ねるのだろうが、そんな事はまずない。

「ママの料理！？」

「ええ、ユリ子さん陰で相当努力したんだと思うわ。私、顔負けかもね」
「母さんが負けるほどとは……」
「どう、ご一緒しない？」
「もちろん行かせて頂きますわ！」

ルナはいの一番に挙手をして星河家へお邪魔することを表明する。
ここ最近で一番の笑顔かもしれない。

『ミソラ、家に帰っても大した物ないんだし……』
「当然だよ！　何なら、お泊まりもしちゃおっかな……？」

ミソラはスバルの方を横目に見ながら、上目使いで強請った。

「ぼ、僕に聞かないでよ」
「あら良いんじゃない。ミソラちゃんも夜遅くに帰るのは大変でしょう？」
「電波変換したらすぐだけど、甘えちゃおっかな」
「か、母さん……」

ミソラは両手を合わせて、笑顔を崩さない。
そんなミソラの笑顔を壊す訳にもいかないのでスバルは観念したようにうなだれる。

「（わ、私も……！）お泊まり――」
「僕も参加させてもらいまっす！」

ルナの言葉を遮る様にキザマロは無駄に大きな声で言った。当然、ルナが何を言おうとしていたかなどキザマロが知る由もない。

「なら、決まりね。それじゃ、行きましょうか」
「うん」
「しょ、承知しましたわ」
「わかりました」
「です」

スバル達が皆と楽しく夕食を食べている頃。

所変わってバミューダ諸島海域にある一つのとある島に、先程ハープ・ノートに追い返されていたジャミンガー達二人組が裏の電波空間から抜け出て、荒廃した島の地面をしっかりと踏みしめる様に降り立った。二人が歩く度に砂利が足に揉まれて小さく音が鳴る、だがこの静寂が腰を下ろして霧が覆うこの島では唯一その音が電波人間の五感を刺激するものであった。

十分程歩いた頃だろうか、二人の電波体の前に黒い物体が姿を現した。それは霧の所為か霞で被せられており、判別は困難だが僅かに見える、両翼に装着された推進機構や至る所に設置された砲門がこの物体が船であるという事を示していた。

そして二人の電波人間は顔を見合せて互いに頷くと、唐突に何かの暗号を唱えた。

「Ｌｅｇｉｏｎ　ｎｏ　Ｘ１３５　Ｈｅｒａ」

すると不思議な現象が二人の目の前で起きた。それは空間が捻じ

れるように歪んで、暫くするとそこにはかなり大きめで大型車両が一つ入るくらいの穴がぽっかりと口を開いて浮いていた。穴は薄暗く一見何もないように思えるが、よく目を凝らして見てみると、中は階段になっているらしく、それは上へ上へと続いていた。その先には何があるのか分からない、もしかするとあの船の中へと続いているのかもしれないが、どこか知らない世界へと繋がっているのかもしれないのである。

そんな不思議な穴は、三次元空間に確かに存在している筈なのだが、視線の先に例の穴がないと目視することが出来ない。それは当り前だが、おかしな事に穴の裏に回って見てみたとしてもそこには何もないのである。そんなだまし絵の様な穴に入るのは流石に気が進まないらしく、ジャミンガー二人組は尻込みをしていた。

「相変わらず、不気味なもんだぜ……」
「ディスイズ、オーバーテクノロジーだね」
「ああ、物理現象を無視してやがる。まるでブラックホールだ」
「でも、ミー達の体を取り戻さないとイケないモンネー」
「ああ、俺たちは人間だ。こんなバケモンじゃない」

覚悟を決めたらしい二人は暗い穴の中へと慎重を期しつつ入っていく。だが、階段自体はそんなに長いものではなく、二人はすぐに穴が繋いでいた向こう側に出てこれた。薄汚いジャミンガー達を出迎えるのは、辺り一面に広がる美しい花畑であった。極彩色のカーペットは地平線の向こう側にまで及んでいて、限りある自然などと言う地球ではすっかり定着してしまったその表現はこの世界では意味を為さないのだろう。

そう、この世界では。

少なくともここは地球ではないと言える。何故ならこの様に花が

一面に、それこそ見渡す限り地平線の向こうまで咲き誇っているのは今の地球ではすっかり見られなくなったものであるからだ。そんな夢の様な景色は百数十年前もの昔にとっくに滅んでいた。

故にここは地球ではない。

地球ではない何処かなのだ。

しかし一つ大きな問題があり、それはジャミンガー達は確かに地球のとある島にいたのにも関わらずあの穴を通っただけで、仮にここが虚構空間ではなく別の惑星の何処かだとすれば、あり得ない距離を通り抜けたことになる。この様な技術は今の地球でも実用化もされていないのものであった。

あの穴がこれを意図的に発生させる事の出来る機能を持っていると仮定すれば、とてつもなく高い水準にある恐るべき技術なのである。地球人など足元にも及ばない事は目に見えていた。

そんな地球人の理解の範疇を超えた世界の中でジャミンガー達は、花畑の中を突き進んでいく。そして彼らの向かうその先には一人の美しいブロンドヘアーの女性が玉座を模した椅子に、長く綺麗な足を組んで座っていた。ジャミンガー達を見下す彼女の周りには色とりどりのバラの花が咲き誇っており、地球の物に比べて明らかに巨大なバラの木には花だけでなく人間も咲いているかのように蔓(つる)に巻き付けられて捕らわれていた。アジーナ人、アメロッパ人、アッフリク人様々な人種の顔が見て取れる。

恐らく偶然ではないだろう、捕らわれている全員が美しい女性であった。

そうやって楽園の中の地獄絵図を体現してみせるバラの木が至る所に、彼女の気まぐれの数だけ点在していたのである。不条理なその光景を見せられたジャミンガー達は気分が悪くなりながらも、女王気取りのブロンド女性に今日の報告をしなければならなかった。

「あの、ロックマンの件なんですが……」
「頭が高くいらっしゃいましてよ……」
「はい？」

意味が分からずに立ち尽くすジャミンガーに向かって、ブロンド女性は指を鳴らす。すると花で覆い尽くされた地面から薔薇の蔓の様なものが生えてきてジャミンガーの一人を捕えた。きつく締めあげているそれの棘が刺さる激痛と窒息するのに十分な圧迫感で苦しむジャミンガーを蔓が天高く掲げ、そしてその先も容赦をすることはなかった。

「な、なにを……！　イ、イテーよ。助けてくれ……！」
「頭が高いと言ったのです。それをあなたは改めることをしませんでしたね……？」
「そ、それ……だけで？」

蔓の隙間から、ジャミンガーの発する悲鳴と共に体の方も悲鳴を上げていた。嫌な音が鳴っている。

「た、頼む……！　助けてくれ……お願いだ」
「何の為に、あなた達を二人遣わせたんでしょうか？」
「そ、そんな……！」

察したジャミンガーの黒いバイザーから覗くアメロッパ人特有の青い瞳が絶望と恐怖と滲み出る涙で一杯になった。

「薄汚いアナタは私のコレクションには相応しくないですわね。それでは仕方ないので私の美しさを保つ糧となってもらいますわね？」

ジャミンガーもといアメロッパのスラムで寂しく暮らしていた男の最後に見た物は妖艶な笑みを浮かべる美しい女性の姿だった。薄れゆく意識の中で彼はぼやける人影を逃げられた妻と息子たちに見たてながら最期の時を迎える。

「ぐっ、あああぁっぁぁっぁぁあー！」

男の絞り出す悲痛な叫びに、残された方のジャミンガーはいても立ってもいられなくなってブロンド女に懇願する。

「ちょっと、ユー。これ以上しちゃうと彼、ダイしてゴートゥヘブンしちゃうよー。もう、そのへんにシテクダサイヨ」

「……どうせあなた達は社会からの爪弾き者……、この世界にいてもいなくても一緒なのですわよ。……それとも、あんなボロボロで廃れた光りの射し込まないスラムでの生活がお望みでして？」

「こんな、電波の体にしといてよく言ったモンダヨネー！　ミー達は人間に戻りたいんだヨ！　ヤクソクしたでしょー？」

「そうですわね……。でも、そのロックマンの姿が見当たりませんけど？」

ジャミンガーとブロンド女が心の通わない言葉を交わしている間も、男の悲鳴が背景音楽の如く鳴り響いている。ただ、その音楽がフィナーレを迎えるのにさほど時間はかからないのだろう。掠れて空気になりつつある悲鳴から想像出来てしまうのである。

花が所狭しと咲く美しい世界で鳴り響く悲鳴と捕らわれた美しい女性達――まるで悪い夢でも見ているかの様な光景だ。

「ロックマンはもういないんだヨー。だから……もうイイだろう？」

「何がもういいんでしょうか？　私はロックマンを連れてきてほしいと頼んだ筈でしてよ」

「そ……、ソレは」

ジャミンガーが俯く。

「大方、察しが付きますわ。誰かに……邪魔されて返り討ちにされたんでしょう？　ボロボロですものねぇ」

「し、仕方ないじゃないかヨ……！」

ブロンド女がジャミンガーに宣告する。

「安心して下さい。始めから、期待していませんでしたわ……、それにしても人間の時も誰からも必要とされなくて、暗い路地裏でゴミの様に生きていた人だと思ってましたが、電波人間になってもそれは変わりなかったようですわね……。もう生きるのに疲れたでしょう？　ちょうど、さっきの人も私と一つになったようですし……」

ブロンド女の言うとおり、先ほどまで悲鳴をあげていた蔓にはもう誰もいなくなっていた。

「ま、まってヨ……！　死にたくないよ！　いやだ、いやだ……！」

ジャミンガーは後ずさってブロンド女から逃げようとするが、足に蔓が絡みついて動けなくなってしまった。それに、この世界にはウェーブロードが走っていないので逃げ道もない。

どうしようもなくなったジャミンガーの足から伝ってきた蔓はとうとう体全体を覆い尽くして、他人より少し不幸な人生を歩んできた一人の人間をきつく抱いた。それは、揺り籠の様に優しく眠りに誘う事もなければ、母親の腕の様に暖かい愛情を注いでくれることもなく、棘と征服する圧力によって眠りとは違った手段で永遠の無へと誘うのみであった。

その過程には少しの苦痛が付き纏うのは先程のジャミンガーから嫌でも分かる。

「あ……っ！」

「例え人間に戻って生きてたって、死んだような人生しか待ってないのでしょう？　だったら私と一つになった方が有意義でしてよ？　ウフフ、さっきの人とどっちが長く持つのかしら」

「イヤだ……。逝きたくない、もしかしたらミーだって幸せになれたかもしれないのに……！　こんな事になるなんて、オーマイゴッド！」

「神様は私でしてよ……。さようなら、そしてようこそ――」

「寂しい人」

真紅の花弁と共に、ずっと幸せに飢えていた飢餓感が散った。

ｓｔｒｄｓｔ―２３：ルナより愛を込めて

ピクニックがメインイベントに据えられた日曜日の朝、皆が唯一懸念していた天候も、太陽が主役で申し分なくピクニック日和であった。何時かの天候を今日に持って来たと錯覚する位に青天井である。

そして、いつもより人の多い賑やかな食卓に囲まれて、『賑やか』と、あかねが呟いた。口元を少し緩ませてそう言う、女性のルナに似ている少し吊った目は遠慮気味に瞼に隠されて、今の時間を楽しんでいる様であった。

加えてその場には、あかねと同じ挙動を見せる少年がもう一人向かい側に座っていた。

それもその筈――およそ一四〇〇日。

その数字は、たった二人の親子が、昇ったり沈んだりを繰り返す、明るく晴れやかな太陽や、寂しさを悪戯に掻き立てる月を迎え入れた数であった。そうした経験から二人は今の時間を、淡くなりつつある大吾と共に過ごした思い出の場所にそっと仕舞い、広く暗い世界を彷徨う家族へのささやかな幸せの贈り物としているように見える。

二人に少し大袈裟とも言える感情を湧き立たせる程に、テーブルを所狭しと囲み団欒出来る今の時間が大切で愛しかったのだろう。大吾がいなくなった時には夢の中でさえも、この様な事が出来なかったので余計に感じるものがあるのかもしれない。

「何、ボケっとしてるのよ。寝ぼけてるんじゃないの？」

スバルの向かい側かつあかねの隣側で座るルナは、昨日の夕食時

と同様、夢心地なスバルへ自分が寝惚けながら問いかけた。そう言ってスバルの注意を引く、色白の女の子は、ヒラヒラとした半透明な装飾がこれでもかという位に縫いつけられた白い寝巻きに身を包んで、頻繁に目を擦ることを除けば行儀良く朝食を食べている。さすがコダマタウンのお嬢様と言ったところか。さらに加えると、密かにこの状況を楽しんでいた乙女は寝惚けを装いつつスバルとの会話を切り出したのかもしれない。

そしてルナに対してスバルは意味あり気に、にっこりと笑顔を作るだけで特に何も語らず、それがどうにも腑に落ちないルナは、さっきから続けている食事に戻るくらいしか見い出せなかったので少し肩を落とし、丸くて小さな赤い野菜を口に運んだ。

その時ほっぺが小さく膨らんだのは先程の小さな野菜のせいなのか、小さくはない不満のせいなのかどうなのかは、ルナの浮かべるつんけんとした表情が物語っている。

ついでながら補足すると、縦ロールなし状態のルナの座る様子を後ろから見ると驚き呆れることを万人に強制させる事請け合いだ。何故なら細い金髪が小さな背中だけでは満足せずに星河家のキッチンのフローリングを侵食し、ぐったりとその無駄に長いものを寝かせていたのだからそう言い切ってしまっても全く問題なかった。髪型が違うというだけでルナは計らずとも自身後ろの通路の通行を邪魔しているのである。

因みに、あかねはそんなルナの寝かせた髪に新聞紙を敷いてあげるという良心を布いていた。

そうした状況に戸惑う様子など曖にも出さず、さっきから何気によく食べるミソラは軽快にルナが展開する不可侵領域を飛び越えて、お目当ての熱々ご飯のお代わりと勤しむ。どうやら、ミソラの着ているピンク色で兎型の寝巻きに軽快なフットワークを可能とさせる秘密が何かあるのかもしれない、と余計な詮索をせずにはいられないほどに何度も何度もルナの後ろを行ったり来たりしていた。

恐ろしい事に、只今記録更新中で、これを済ますと五往復目になる。

「スゴイ食べているね……ミソラちゃん、尊敬するよ」

あまり食事に頓着しないスバルが尊敬の念を抱きつつ、ミソラの新たな一面にどう接してやればいいのか分からないらしく手探りで問う。

「うん！　あかねオバサンの炊くご飯、すっごく美味しんだもん」

「そんなの誰が炊いたって一緒だと思うよ」

何気ないスバルの一言をユリ子が聞き逃すわけがなかった。スバルもまさかこれから展開される出来事を予想出来る筈もなかった。

得てして不幸というのは条件をきっちりと、そして綿密に用意してくれているものであった。そうと言うのもスバルの隣は、右にキザマロ、そして、もう一方は――何かが切れたユリ子その人であったからだ。

「スバル君、聞き捨てならないわね。ご飯は誰が炊いても一緒ですって!?　笑わしちゃダメよ。米研ぎの段階から、出来上がりの味を殺すか生かすかの重大な選択肢を迫られているのを知らないの!?　いいえ、知らないとは言わせないわよっ」

「えっ？　えぇ!?」

是非、聞き捨てて欲しかった、という思いを顔に出さないようにスバルは驚き、困惑する。冷や汗が滲み出ていた。

「良いこと？　今あなた達が食べているご飯の味は誰にでも作れる

ものではないのよっ。長年の経験から為せる技なの……手が皹入るまで研いでやっとスタート地点に立てるのよ！？」

「……っ」

スバルが具体的に表現してはいけない程危険な状態に追い込まれてしまっている。ユリ子の皹入った手を見せられると申し訳なく感じてしまうのかもしれない。

「ユ、ユリ子さん……。もういい……もういいわ！　これ以上は大切なモノを失うわよ」

母親を思わせるあかねはルナの頭を優しく抱きながら、純粋な分、狂気を感じさせる程興奮しているユリ子を宥める。しかしここは、星河家であって白金家ではなく、それ以前にあかねの子供はスバルだけである事実からこの光景は些かでなくおかしいと言わざるを得ない。

「こ、これが……ママな……の……？」

戸惑いを隠せない。

「ゴ、ゴメンナサイ。何にも知らないのに調子乗っちゃって……で、でも委員――ルナちゃんが怖がってます……」

スバルはちゃんとルナの異変に気付いており、ルナを脅えさせないでという口実を使ってユリ子の興奮を抑えようする。そんな果敢に見えたスバルにルナは困惑することよりも優先順位の高い事に気付いてしまった。

「（今……『ルナちゃん』って……）」

水々しい乙女モード全開になったルナは染めるものは染めるし、染まるものは染まる、高ぶる気持ちに潤った乙女心にはスバルの差し込ます一言が一瞬にして女性という培養液を介して一気に広がり充足する。そして何時かの願望がそれでも少し満たされたルナにはもう困惑する必要などなかったのである。

だが、スバルとしては実の母親の前で、その人の娘をあだ名で呼ぶ事に気後れしただけなのは確かであろうし、実際呼ぶことは適切でない。しかし、それにルナが気付くかどうかは別の話である。

「た、確かにそうね……私ったらちょっと熱く語りすぎちゃったかしら？」

ユリ子がやっと落ち着いた。

「それはもう、周りの子たちが火傷するぐらいにね」

既にルナの頭を抱えることはしていなかった。

「確かに、ちょっと怖かったです……僕の精神力では耐え切れそうもありませんでした……」

キザマロはメガネを外し、スバル以上に掻いた汗を拭う。その際覗いた『3』の字型の目にはとりあえず触れないでおきたい。目が悪いという事なのだろう。この現実空間では、それ以上もそれ以下もある筈がなかった。いや、あってはいけない。

「うん、ちょっと驚いたよね、ルナちゃん？」

ミソラが六杯目のご飯を平らげあかねの向こう側にいるルナに聞

いた。その際、彼女の異変に気付いた様だがそれに触れずにまた席を立つ。
だがスバルは聞く訳である。
「あれ、ルナちゃん顔が赤くない？」
スバルが気になった事を口に出す。
「あれ、確かにルナさん顔が赤いですね」
ルナの腰巾着のキザマロも乗る。『さん』付けなのはキザマロの普段の立場から推測出来る。
「そ、そんな訳ないでしょ？　ケチャップが顔にかかったのよっ。あー困った困った」
そう言ってルナはケチャップを顔にかけて無理矢理笑う。まさか、下の名前で呼ばれたのが嬉しかった等と言える筈もなかった。だが、その言い訳にはセンスが感じられない。
「ケチャップを顔にかけてる？　ルナちゃんがそんなのあり得ないよ」
「またまたー、です。ルナさんとあろう人があり得ないです」
スバル、キザマロがまだ下の名前で呼ぶので、それがルナにとってこそばゆくて仕様がなかったが、悪い気もしていなかった。寧ろ悦びを覚えていた。両手を頬に宛がって実に乙女らしい。
だがルナの母は違和感を覚えた様に首を傾げると、ぎこちなく喋る二人に言う。

「あら、二人とも私の前だからって無理してルナの事を呼び変えなくてもいいのよ」

すっかり何時もの調子に戻ったユリ子が気を遣う。さっきから少し窮屈そうに喋っていた男子二人に気を遣ったのであって娘の事は考えられてもいない。そして節操もなく二人は直ぐに靡(なび)いた。

意志もなく、ユリ子の許しに綻(ほころ)ぶ顔を隠そうともせず安堵に着く二人を目の端で捉えると、ルナは同じく緩んでいたそれに力と激情を込めた。例によって、きつい目である。

「なんで安心してるのよ!?」

「何でって、それは……委員長って呼ぶ方がしっくりくるじゃないか」

スバルの言い訳にキザマロも続く。言っていることは大差なく、委員長の方がしっくり来ると言っていた。

「ふんっ、そうだったわね!」

ルナは熱(いき)り立ちながらも、席を立つ前に行儀良く手を合わせて、ごちそうさま、と言った。そして未だ白飯を喰らっているミソラのお箸(はし)を持つ手を引っ張ってキッチンから連れ出そうとする。その時のルナは長い髪の毛を肩に掛けると言うよりも、担ぐと表現した方が適切な様子であり余った手でミソラを引っ張る。それ程に長い物を生やしているのだ。ミソラとは対照的であった。

「着替えに行きましょう! ミソラちゃん」

「あっ、ちょっとまだ……」

ルナは、いいからいいから、と言いながら白飯を最後まで召し上

がっていないミソラを強引に引っ張っていってしまう。去り際に、ごちそうさま、という言葉をミソラが残して二人は二階の空き部屋へと消えていった。スバルは少しだけルナの心情の変化の経緯を考えてみた様だが、答えは見つからなかったらしい。意味もなく、ルナの髪型の製法の謎について首を傾げる事くらいしか出来なかった。

ただ言えるのは、スバルがそんな事をする訳ないが着替えを覗く様な真似はしない方が良いという事だ。ルナだけでなく、ミソラの鉄拳が飛ぶ事請け合いだ。仮に電波変換する事が出来れば一人分の鉄拳は回避できそうだがそんな出来もしない仮定に意味はない。

とりあえずスバルも身支度をするべきであろう。

「ごちそうさま」

手を合わせてスバルも、ルナ、ミソラに続く。だが二人と違い、ちゃんと食器を洗い場に運ぶ事は忘れない。当然、女子二人の残したそれも例外ではなかった。二人の後始末をさせられるが、皿を運ぶスバルの背中はどこか嬉しそうだった。これから始まる楽しい休日に比べれば、これ位何て事はないのだろう。

ルナのとんでもなく長い身支度を最後に、星河宅から一行はコダマタウンにあるウェーブライナーの駅に向かう。そして、その途中の、駅と白金宅のある高級マンションを繋ぐとある路地で白髪交じりの薄い色素の髪を基本として、強面の顔面に威厳を装飾する口髭を蓄えた常人より比較的がっしりとした体格の中年の男性に出くわ

した。出会った場所もそうだが、スバルとしては良く覚えている人物でユリ子とルナの家族に当たる人である。名前は白金ナルオと言い、以前スバルの関わった『毒ヘビ事件』の被害者で加害者でもある。だが、そんな事は昔の話で、今は一緒にピクニックを楽しむ連れの一人であった。

その証拠に、ビジネスマンである彼は普段、上流階級を思わせる、皺一つないシャツにブランド物のネクタイ、そして高級ベストを羽織るというフォーマルな服装なのだが、今回はジーンズにチェック柄のシャツといった軽いものであった。

同じく、ミソラ、ルナもあかね、ユリ子もピクニック仕様の服装に着替えていたのであった。歌って踊れるアイドルなミソラは赤紫の髪に、小さく濃い緑色のつばの短いゆったりとした帽子を乗せて、シックに纏め、薄いピンク色の長袖の上から薄黄色のタンクトップを被って、薄いピンクと黄色の縞々柄の短いスカートの下に履いた膝上くらいのズボンから健康的な脚線美を見せつけてくれていた。流石トップアイドル。

対抗馬のルナは袖口からスカートの際までひらひらとした装飾品が目を引き付ける、少し大人の背伸びをした印象のある白いワンピースに身を包んで、そこからすらっとした白い四肢を伸ばしている。胸下辺りの黄色いリボンと少し大きめで輪状のバックルを持つベルトがポイントなのだろう。大きなつばの白い帽子を被るともっと様になるのだが、ルナの髪型では帽子は被れなかった。ツインドリルロールの存在が大きすぎたのが悔やまれる。だが、正にダークホース。

それにしても、二人ともお洒落すぎる。この年頃の女子は同じ年頃の男子よりも成長が早い、思考が大人志向と言われるが、これではもはや確執だった。格差だった。男子代表スバルは何時も身に付

けている父親との約束の品である流星型のペンダントを念入りに手入れしたぐらいだった。ちゃんと歯は磨いた。だが、他には何もしていない。それ故に、二人が眩しい。春風に流されるたんぽぽの綿毛の様に軽やかで、加えて儚さを演出しているのか、普段より大人しくしているルナから見てとれる。抱いたら壊れてしまいそうな女性らしさを主張させているが、スバルは気にも留めない。只今、男性のナルオに注目中である。

だが、めかし込んで女性を際立たせた二人に何かの死角はなかった。

そして忘れてはならないのは、あかね、ユリ子で、例に洩れず変身済みであり大人の魅力を溢れんばかりに漏れ出させている。正統派美人のあかねに対しユリ子は知的な印象のメガネ美人でそれぞれの良さを引き出す服装であった。流石に場数を踏んでいるだけあって、自分自身を良く知っている。

そしてそれぞれバスケットを肘に掛けていて、その中には、ムーよりの使いゴンターガ――ナンスカと呼ばれる土地でのゴン太の別名――を昇天させるほどの料理が眠っているのだ。間違いない。

残念なことにやはりスバル、キザマロの服装は何時も通りで何ら変わりはない。強いて言えば、キザマロの普段背負っている学生鞄の姿が今日は見られないという事だろうか。機動性を重視した結果なのだろうが、ほとほとどうでもいい。

しかしながらナルオの服装から思わせるのは、幸い彼はこの企画に乗り気な様である事であった。そして彼は、あかねに目を付けると丁寧に深々とお辞儀をする。斜め四十五度、ニ秒間静止。完璧だ。そして、続ける挨拶の内容は主にスバルへの感謝の意を含ませているものであった。あかねも丁寧に応対する。

その温和な様子を見る限り、以前の経歴主義の殺伐とした人間であった彼――以前にルナをエリート学校に無理矢理転向させようと

画策した――の姿はないように見える。そこに見えるのは一人の父親だった。

ナルオはあかねに一頻りして挨拶を済ますとスバルの方に向き直った。ナルオはスバルの目をしっかりと見る。

「スバル君だね。久しぶりだ」

強面の顔を優しくして微笑む。

「おじさん、元気そうでなによりです」

スバルもにっこりと笑みを返す。それでナルオは少し安心したように頷くと、隣のミソラに目をやった。だが、何を言おうか迷っているらしく頬をポリポリと掻くだけで視線を泳がせていた。目を見ていない。以前起きた事件について申し訳なく思っているのだろう。それが原因でミソラが危険な目にあったのは事実であった。何より渦中の出来事であったが酷い事を言ったのもまた事実であった。

しかしミソラは、ナルオににっこりと笑いかける。過去の事など忘れたかのようにすっきりとした笑顔だった。普段テレビで見せる可愛いもののそれ以前に、心に訴えるものがある。

ナルオはそれに救われてやっと視線を合わせた。

「全然、気にしてないよ。私」

「……ありがとう……」

そんな様子を見ていたルナは一言。

「ね？　私の友達はとてもステキでしょ？」

ナルオは頷いて、いい友達を持ったな、と顔にそぐわない声質で

発した。その時の笑顔をルナは心に留めるべきだと思ったし思えた。
そしてにっこりと笑う。

既に楽しそうなルナを擁する一行は、ナルオを迎え入れて歩くと、ウェーブライナーの駅に程無くして到着した。まず子供達は少し休憩するために、入ってすぐにある丸い形状の館内スペースの中心に備え付けられたベンチに座ることにする。一方、到着してすぐさま大人組みはチケットの手配に追われる。昇降口より最奥の改札広場のカウンターの駅員に問い合わせる為にそこへ向かっていく。早ければ数分で終わる作業だろう。

しかし、例によってあの人がまだ来ていないので待つ事になるのかもしれない。只今、九時五分。

先程まではスキップを連発して分かりやすく機嫌の良さを知らしめてくれていたルナなのだが、スバルのハンターの時計が五分経過したことを示す頃にはすっかり、堪え性もなく委員長モード対ゴン太仕様になっていた。それにしても、あの立ち方は基本スタイルなのだろうか。

「あ、仁王立ちだ」

スバルが小さく溢(こぼ)す。

「まだ腰に手を当てていませんね。レベル1です」

洞察力にも定評のあるキザマロが付け加えた。スバルは、なるほど、といった具合に顎を人差指と親指とで挟み込んで、探偵っぽく頷く。そうして三人に観察されているルナは駅の昇降口付近に向か

って行き、何時ゴン太が来てもいいように待ち構えていたのであった。これはゴン太の身が危ぶまれる状況だが、彼自身が蒔いた種なので、スバル達はベンチに座ってナルオに買ってもらったジュースを飲みながら、とりあえず様子を見守っているのが今の現状だ。

大人達は目的地までの切符を手配しているので、それが終わるまでにゴン太が来れば時間的ロスは少なくて済む。だが、ルナの怒りはどうやっても少なくならないのは、委員長モード対ゴン太仕様の仕様なのでご冥福祈るばかりであった。

「あっ、レベル2だ」

ミソラはルナが次の段階へ移行したことを指を差して示す。ゴン太の身の安全に赤信号が点(とも)った。

「ゴン太……」

悲しみに満ち満ちてスバルが首を横に振ると、キザマロは手に持った『ソフトトロピカル』と言う南国気分をソフトに味わえるジュースの缶を指の先で弾いた。悲しくおりんみたいな音が鳴ると思ったらしいが実際は木魚みたいな音が鳴った。どちらにしても、キザマロのこの下らない応用力には頭が下がる。

しかし、不思議な事にルナはゴン太を待たずしてスバル達の元に歩み寄ってきた。十分以上遅刻しているのにルナがゴン太を見逃す筈がないので、これ如何に、といった面持ちで三人は顔を見合わせる。

そしてルナは十分に近付くと大きく息を吸って肩を落としながら息を吐き出す。大袈裟に呆れている様子。

「全くゴン太の奴どうしようもないわね……」

とんがり、メガネ、アイドルは真相を知りたがる。ルナはベンチに腰を掛け昇降口の方を指す。

スバルは目を剥いた。キザマロはメガネを整えること三回。ミソラは意外と図太いので――特に異常はないようだ。

「ゴン太、キミはなんて……」

「ゴ、ゴン太君……」

「わあ、スゴイ」

目をやる先には、沢山の人が行き来しているが、その中に見覚えのある人影が二つ浮かんでいた。

そう、ゴン太親子の登場である。

だがゴン太はかえでに引き摺られていたので、颯爽と登場とはいかなかった。どういった経緯でここまで引き摺られるにまで至ったのか知る由もないのだが、確かに引き摺られている事は事実だった。しかしながら、この距離を――この巨漢のゴン太を引き摺るとは、体力的にも、最後まで決行するという性格的にも、かえでは恐ろしい女性である。

だが何よりも、この状況で全く起きないゴン太には、感服せざるを得ない。さすがムー大陸の使い『ゴンターガ様』と称えられただけはある。それにどうやら昨日は、愛しの牛丼を抱いて寝ていたのだろう、パジャマだったと思われる、引き摺られてボロボロになった布に、携帯パックから解放された牛丼達が所狭しと、俺達はここにいるぞ！　と自己意義を主張し合っていた。主張してくれるのは結構だが、実に汚い、汚な過ぎる。当然、ゴン太サイドもそれは承知な様で、ゴン太のウィザードのオックスがせっせっと、腹にぶちまけられた牛丼を携帯パックに戻す作業に勤しんでいた。もはや戦士の面影など鳴りを潜めている。冷たい駅の床に眠る主人の抱く牛

丼の残骸をちまちまと取り除く作業には哀愁すら漂っていた。

「ブロロ、俺はＦＭ星の特攻隊長オックス……」

オックスは、牛肉をパックに詰め直しながらぼやいた。

「そこ！　ちゃんと作業をしなさい。まったく、アンタまで一緒に寝てたんじゃ、目覚ましウィザードの意味ないでしょうがっ」

かえでが一喝。オックス、形無し。

「ハイ！　スイマセン！」

オックスは、かえでにこき使われている様で何よりであった。家族の一員としてやっていけている様で何よりである。

だが特に注目する点が先程のやり取りにあるのだ。戦うために生まれ、戦いに生き、数々の異星の戦士達と渡り合ってきたオックスは、どうやら牛島家では『目覚ましウィザード』の称号を恣にしているらしい。仕事は出来ないらしいが立派なものである。オックスの牛丼をひた見つめる、涙を浮かべる赤い目がそう物語っていた。

オックスを叱り飛ばしたかえでは、スバル達の方へやって来て、にっこりと笑う。空いた方の手を振ってさえもいた。しかし残念ながら、片手に牛丼塗れになった息子を従えている状態では、その素敵な笑顔も違う何かに見えてしまう。そしてルナも当然それを感じていた。なのでさっき引き下がったのだ。

「みんな、おはよう！　家のバカ息子が待たせちゃったわね」

「ほほほ、ご機嫌麗しいようでなによりですわ。少しも待っていませんわ！　（それにしてもゴン太……引きずられてボロボロね……大丈夫かしら。ていうか、『牛丼を抱いて寝るな』って、あれだけ

言ったのに直ってないみたいね。バカなやつだわ）」

さっきまでとても苛々している様に見えたルナはゴン太の心配をしつつも、牛丼塗れになった、この人と一緒に出歩くことになるのかと思うと、内心、気が滅入っていた。茶色い牛丼の染みを見ていると、昨日の夕食後、女性四人で服を買いに行って、嬉々としていた自分が馬鹿みたい思えるからであったからだ。純粋な乙女心に茶色い汁が染み入る様でルナは、少し気分を害していた。

ルナの反応から察するに、いくら二二〇X年になったと言えど、ツインドリルロールや、ツンツンモヒカンヘッドとは違って、牛丼の染み付きボロ布シャツでは当然ながらファッションにはなれないという事が分かる。牛丼を抱いて寝るという悪癖さえどうにかしたら幾何か見れたものになったかもしれない。

一方のスバル達も立ち上がって、軽くゴン太に注目していた。興味深そうに、安らかに眠る汚いものを覗いている。

「ホントに引きずってくるとは……」
「それにしても、服がボロボロです」
「牛丼まみれだね」

三人はかえでの引き摺ってきたものを見つめながらそれぞれの感想を述べた。

「だってこの子、抱えるのには重すぎるのよねー。起こしても起こしても起きないし。困ったもんだわっ」
「あははっ、確かに」

ミソラは笑っているが、実際のところあまり笑ってはいられない

状況である。グループの中でニ番目に切れ者であるキザマロが、事態の緊急性に気付き苦言を呈する。

「かえでオバさん、この状況は非常にマズイと思われます。ゴン太君の服装を見てみてください……」

キザマロがゴン太を指差す。

「こ、これは……！」

何かに気付いたスバルが目を皿の様に丸くして、らしくもなく驚きふためく。それは、思わずベンチに倒れる様に座り込んでしまう程であった。ベンチに倒れこんできたスバルから、ルナもこれは事だと思わずにはいられなかった。

「どうしたのスバル君！？」

「見てはいけないものを見てしまったよ……グッ……！」

「な、何を……？」

スバルが恐る恐るゴン太の下腹部を指差す。

「なっ……！　キャー！　サイテー、不潔だわ！」

ルナが悲鳴をあげる。お嬢様にそれは辛いものがある。

「ヤダー！　ゴン太君！　ソレはないよー」

ミソラが手で顔を覆う。指の隙間もがっちりと閉じて完璧に外界との情報のやり取りをシャットアウト。

「ゴン太……それは水着だったんじゃあ」

スバルは、ゴン太の生き様に愕然とした。

ゴン太は、ボロボロになった布切れの中から謎の物体をちらちらと覗かせていたのである。そう、伝説の白い着衣を身に纏っていたのである。五〇〇年以上前からニホン人に愛されていた強い男子の象徴、その名も『ふんどし』。因みにアメロッパでは『Ｇ－ｓｔｒｉｎｇ』というお洒落な二つ名も持っている。そして当のゴン太は何故か、遥か昔に、時代に置き去られ、適合性もなくただ存在理由を求め彷徨う子羊の様な、幻の衣類を現代ニホンで着用していたのであった。しかし際どすぎるラインは、ふんどし故になせる技。女子の歓喜ならぬ狂気の悲鳴ものであった。

意識を失っても尚、ゴン太の止まる所を知らない旺盛なサービス精神にルナもミソラもすっかりグロッキーである。

「あちゃあー、この子ったらまた、ふんどし着けちゃって。まあ、父親の背中を見て育つって言うけど……」

かえでは失敗したと思ったらしく額に手を当てる。しかし文脈から聞き捨てならないのは、どうやら、ゴン太の父親には常習性があるらしいという事だ。牛島家の教育方針に疑問を呈したい。自由と混沌は似て非なる物、対極の存在。それこそ整然とした宇宙とそれに抱えられる不均一な銀河団及び暗黒の世界――ヴォイド宜しく矛盾が蔓延（はびこ）っている。

ゴン太の無言の暴力に辺りは騒然とした。道行く人の視線が痛い。

「いやいや」

キザマロが、話の流れがあさっての方向に向っている事態に気付

き。手をぶんぶんと振るジェスチャーと共に軌道修正を試みる。
だが小さな少年の言う事など、錯乱したルナ、ミソラには届かない。ついでにスバルはそれどころではなかった。

「スバル君！　なんてもの見せるのよ！」
「ごめんなさい」
「いやいやいや」
「そうだよ、あれはないよ！」
「ごめんなさい」
「いやいやいやいや」
『危険物感知！　デリートしましょう！』
「ごめ……、それは止めてあげようよ」
「いやいやいやいやいや」
『ポロロン、ウフフフフ。ポロロン』
「なんだか、怖いです。ていうか、何故二回言ったんですか！？」
「いやいやいや！！」
『久しぶりの登場！　ボク、ペディア！』
「ありがとう」
「なっ……！」
「ブロロロロ。やっと終わったぜー。牛丼詰め！」
「ご苦労さま」
「ご苦労さまです」

丁寧にスバルは一つずつ処理を済ませると一息つく。負けじとキザマロも必死に食らい付いていた。

「ふー。ロックがいなくて鈍ってるかと思ってたけど、まだまだ捨てたものじゃないな、僕も」

スバルの満足げな顔が無駄に凛々しい。ロックマンの顔だった。

「いやいやいやいや！！　スバル君、自分の突っ込みのセンスに確かな手応えを感じている場合じゃないですよ！？」
「何だよ、さっきから。『２０いや』はやりすぎだよ？　キザマロ」
半ばゲシュタルト崩壊を起こさせつつもキザマロはやっと注目を得ることが出来た。間髪入れずに続ける。
「スバル君ちゃんと聞いて下さいよ。このままでは我々は楽しいピクニックを送れなくなります！」
「な、なんだって！？」
「何でなのよ？」
「何でなのかな？」
「どうしてなのかしら？　……はっ、まさかバカ息子のせいで……？」
「な、何でなんだよ……、牛丼は超大盛りぃー、ツユだくぅ～、って言ったはずだろ店長……」
「どうかゴン太君は超黙っていてください」
そう言いつつもキザマロは優しく、ゴン太にマロ辞典を枕代わりに貸してやる。キザマロはゴン太とブラザーだったので当然の行為であった。
「おほんっ。どうやら、みなさんには緊張感が足りないようなので話の核心をいきなり突きましょう」
一同が生唾を飲む。
「ズバリ、ゴン太君はこのままだと捕まってしまいます！」
「な、なんだってー」

一同唖然。キザマロはメガネのポジショニングを二回程修正する。

「ゴン太君の今の服装……って言っていいのか分かりませんが、とにかくこの格好に問題があります。たとえばですよ？　委員長とミソラちゃんはこんな格好をした人に出会ったらどうしますか？　知り合いとかは置いといて、です」

キザマロの問いに異口同音にルナとミソラは答える。

「通報するわ」
「通報するよ」

二人は言っている途中で真実に気付いた。このままではゴン太が通報されてしまう、と。いや、正に今のこの状況が危険なのではないだろうかと思われる。道行く人がゴン太及びスバル達に向けて奇異の眼差しを向けている。それは当然の反応だろう、半裸の見た目がやたらごつい、変質者と思しき、小学生が駅の改札広場付近で寝ているのだ。牛丼塗れなのだ。オックスの頑張りが及ばなかったのだ。

それ故にこの光景は常軌を逸している以外に他ならない。

「そう！　ゴン太君はパッと見ただの変質者なんです！　牛丼まみれなんです！　誰がいつ通報しても何らおかしくありません。逮捕までとはいかないでしょうが、最低でも今日この日を共に過ごすことはなくなるでしょう」
「それは、いけない！　ゴン太を人目の付かない場所に移動させなきゃ」

スバルはゴン太の足を持って、果敢にも引っ張っていこうとする。

今のスバルの目はロックマンの目であることから相当に本気である事が分かる。何としても友達を守らなきゃ、という使命感に燃えていた。

「ダメです！」

キザマロが待ったをかける。

「これ以上ゴン太君の衣類に負担をかけると……ゴン太君は変質者どころではなくなってしまいます」

キザマロの押し殺すかの様な発声方法に、スバルは得体の知れない不安感を覚えた様で、ゴン太の足を持つ手の力をゆっくりと抜いた。そして力無くゴン太の何も履いていない足は、反射性の良い素材の駅床に無抵抗を決め込んで落ちていく。踵（かかと）がひんやりとしたものと出会い、変化を敏感に感じ取った体の持ち主が驚き一瞬、強張ったかと思うと何事もなかったかの様に、尻の側面を丁寧に念入りに掻き始めた。そして満足するまで作業を続け、仕事を終えると安らかな寝顔を漏れなくスバル達に見せてくれた。別に誰も頼んでいない。ゴン太はミソラ程のアイドルではなかったのが悔やまれる。

しかし、どうしてだろう、完全にゴン太は自室感覚である。尻の掻き方など熟練し成熟した酸いも甘いも噛み分けた中年である。中間管理職特有の悲哀も漂っていた。どうしようもないのか。

しかしながら依然として状況は、思わしくない。先程スバルが無理に力を加えたおかげで、かろうじで服の形状を保っているボロ布が四散しかけていた。数世紀前の帯刀していた人達の忘れ形見程度ではこれ以上は摩擦により擦り切れてしまう可能性が大いにあった。それだけは何としても避けなければならない。ゴン太の為にも、何より皆の為にも。

「一体どうすれば……」

スバルはベンチに座り込み何故か落ち込んだ様に頭を抱える。以前どこかで見た様な光景である気がしないでもない。そんな悩み倦ねるスバルを気の毒そうに見つめながらも、かえではある一つの考えを思い付いたらしく、頼もしく目に力を宿した。そして、売店の牛丼弁当を物欲しそうに見つめて、店員であるおばちゃんウィザードを困らせているオックスに、主人でもないかえでは命令を下す。勿論、牛丼弁当など買ってやる気はないのだろう。

「オックス！　弁当なんて見てないで、ちょっとこっち来なさい」
「ブロッ！？　はい、アネゴ！」

食い入る様に背中を丸めて牛丼弁当との対話を楽しんでいたつもりのオックスは、怒られる様に呼び出されると透かさず背筋をピンと伸ばしかえでの元に向かう。何ともスゴイ反応速度だ。オックス・ファイアの時のそれ以上かもしれない。

「悪いけど、この子の服を取って来てちょうだい。分かるでしょ？いつも着ている、フォークとナイフの柄のついた……」
「ブロロロ、お安いご用だぜ！　だけど……」

オックスは、人差し指を左右に振ってみせ『ブッロッロッ』と締まらない声を出す。にやついた目が何とも憎たらしい。

「なんか言いたそうね」
「オレ様が見事任務を果たした暁には！　牛丼弁当を……買ってもらうぜー！！」

オックスはどこで覚えてきたのかは知らないが、交渉というものを知ったらしい。考えることを知って、少し頭が良くなった様で微笑ましいと言える。

「はいはい、わかったわかった」
「よっしゃ、決まりだー！　ちょっと、待ってろよ！　ゴン太ー。とびっきりキマッてるやつ持ってきてやるからなー！！　ブロロロ！！」

危険な匂いを漂わせながらオックスは大はしゃぎで電波に乗っていってしまった。牛丼弁当がよほど嬉しかったらしい。

「おーい、別にキマッテなくてもいつものやつでいいからねーって……ちゃんと話を聞いてたんだか」

かえでは一抹の不安を覚えながらも、とりあえずオックスに託すしかなかった。

「でもこれで、服装の事は心配なくなったね」

ミソラはオックスを信じている様子で屈託なく笑う。

「でも肝心のゴン太がこれじゃあ……」
「ですね……」
「この子ったら、人目もはばからず爆睡してちょっとあり得ないわね……」
「牛丼クエストをやってたんじゃないかな」
「いいえ！　豚丼ファンタジーよ！」
「はいはい、二人ともそんなのどっちでもいいからこの子を起こさなきゃね」

かえではどうでもいい議論を展開するミソラとルナの間に入って、ゴン太を起こそう、と言い聞かす。

とりあえずの所、彼女はゴン太を揺する。だが、引きずっても起きないゴン太の事だ、恐らく何の意味もないだろう。

暫く揺すっても効果はやはりなかった。

「ダメですね……」

「ダメだね……どうするスバル君？」

ミソラはスバルに振る。振られてしまったスバルは、思考をちゃんと巡らしてますよと言わんばかりに腕を組んで目を閉じ、煩雑な思考や煩悩を取り払ってるかのように集中しているような素振りを見せて誤魔化す。

しかし、ちゃんと考えは言ってみる。

「……そうだ！　このパターン前にもあったぞ。委員長、キミの出番だと思う……！」

スバルは座っているルナに振り向き真剣な目で、これでもかと見つめて乙女心を焼き焦がす。当の本人にそのつもりは全くない。ただ、ルナに対し特化し過ぎたその瞳は意思の有る無しに関係なくルナを制圧する。

「ちょっと……何よ、そんなに見つめて……（あっ……もしかして、ステキな服装も相まって、私の魅力に見とれているのね！　フフン、でも少し気付くのが遅すぎじゃなくって？　スバル君）」

「……あのさ、ダンスを見せてくれないかな？」

「ダンス……？　（何を言ってるのかしらこの人は……まったくも

う、褒めるならちゃんと褒めなさいよねっ）」

勘違いしているルナはスバルの言葉の真意を図ろうとしない。その時、キザマロが勘付いた様で眉をぴくんと反応させる。ミソラは何の事だか全く以って分からないらしく、スバルとルナの間をきょろきょろしている。

「スバル君……それはまさか……あの、アレですね？」
「そう、あのアレだよ」
「ま、まさか……（ア、アレなのかしら……まさか……ね）」
「その、まさかだよ！」
「あの、ゴンターガ様の封印を解除したアレですね！」
「ゴン太を救った、幻の……」
「ちょっと……！（なんか飛躍してない？）」

ここまで来ると、嫌な汗が背中を伝う感触にルナは身を強張らせた。頬が吊り、手に噴いたじっとりとしたものを膝の辺りで忙(せわ)しなく拭(ぬぐ)い続ける。新品の晴れ着に皺を付かせる事など構わずに、一心不乱にそうしている様から余裕など感じられない。余裕などルナも感じていなかった。

「委員長の魅力で……」

スバルは本気だ。そういう目だった。無邪気、純粋、暴力。

「是非とも、お色気ダンスを見せていただきたい！」

遂に言い切ってしまった。スバルとしては、過去の彼女の実績からすると当然の判断なのか。

「いただきたいですっ」

キザマロの便乗にどす黒いものを感じてしまっているのにもかかわらず、ルナは下手に平静を装おうとして、返って、舌が回らなくなった状態で辺りを指差して異議申し立てる。

白い服に白い肌、薄い金に添えられて、受けた恥辱を内包する淡い赤が乾いた唇同様に良く際立つ。震える差し指の先端は崩れた体裁だ。

「ふざ、ふざ……ふざけないでよ……！　ひ、人がいっぱいいるじゃない！　恥ずかしいでしょ！？　（あんな、恥ずかしい踊りをまたやれっての！？　冗談じゃない）」

「ゴン太の為なんだ。お願いだよ委員長！　王子様（ゴン太）の眠りをといてあげて」

スバルの気の利いた言い回しに突っ込んではいけない。何故なら、スバルは突っ込みにおける実戦経験はウォーロックと共に磨き合った過去を持つので豊富だが、可笑しな語りを展開するセンスは皆無であったのだからだ。こういった事態にウォーロック不在なのが酷く悔やまれる。

しかしスバルのやり切った顔には後悔など含まれていない。この挑戦する姿勢を見せてくれた一人の少年に称賛を送りたい。

「ゴンターガ様の為です！」

「何だかよく分からないけど……、頑張ってルナちゃん！」

ミソラの無知故の期待がルナに重くのしかかる。

「ミ、ミソラちゃん……？」

「アタシもなんだか良く分からないけど……面白そうじゃない！

頑張りなさいな」

かえでは何かがずれていた。やはりゴン太の母だと思わせる。

「面白そうって……（完全に見せ物だと思ってるわ……この人）」

「頼むよ！　委員長、君にしか出来ないんだ」

真に迫る。

「ちょっと……本気なの？　ミソラちゃんでも……」

「――君じゃなきゃダメなんだ！」

「！！　（スバル君……！）」

ロックマンにもならずにスバルは、ルナの心をギガクラスバトルカード『バスターマックス』併用の、言葉のロックバスターで射抜いた。その瞬間、吊り気味な目を可能な限り丸くして、先の言葉を愛の告白と錯覚でもしたらしく愚かなルナは、スバルの言葉の余韻を楽しんでいた。既に十回程リピートしていた。

「委員長……？　大丈夫？　顔が大変な事になってるよ」

「……やるわっ！」

いきなりベンチから立ち上がるものだから、スバル達も一瞬ぎょっとした。

「え？」

「やるって言ったのよ！　お色気ダンス！」

「さ、流石！　生徒会長委員長！」

スバル一人で拍手喝采。

「ありがとう、ちゃんと目に焼き付けときなさい」
「あっ晴れです！　生徒会長委員長！」
「……」
「良く分からないけど……、スゴイよ！　生徒会長ルナちゃん！」
「ありがとう、私、頑張るわ」
「流石！　ゴン太も悦ぶよ。お色気ウーマンさん」
「ありが……、……え？」

何だかんだ言っても、ルナはやる時はしっかりやる人間なので、皆からの声援と思われる声を一身に受け入れ、スバル曰く、眠れる王子ことゴン太の前に陣取って、若干十二歳の小学生は色気で訴える踊りの準備をする。その際、ゴン太がめかし込んだ汚いふんどしが、お嬢様である故に今まで上品で美しい、気品溢れる物しか見たことのない目に間違っても入らない様に細心の注意を払う。

そしてルナの足元で、モードがマテリアル扇子を取り出して応援している。

しかし日曜日の朝といえども駅の改札広場には様々な人間が通行していた。道行く人も次第にルナのあられもない格好に興味をそそられたらしく、立ち止まって休日返上の企業戦士達は戦場へ旅立つ前のささやかな娯楽といった具合に野次馬と化す。

失敗は許されない。

ルナが長いスカートを巻くし上げようとしたその時、スバルが手を肩程まで上げて制止する。

「ちょっと、待って」
「どうしたの？」

「まだ、肝心なものが用意できていなかったんだ」

スバルは慎重に辺りを見渡すと、先程オックスが物欲しそうに見つめていた売店の牛丼弁当に目配せをする。一瞬の隙を見せずにここから売店まで向かって無事に牛丼弁当を購入するのは至難の技だった。隙を見せたら問題があるのかは知らないが、口を手で覆うスバルは必死に策を巡らしているかの様に見える。親友の為に必死に足掻く姿が眩しい。

「牛丼弁当を購入しなければ……アレがないとゴン太を起こすのには不十分だ……一体どうやって、あそこまで向かえば……。しかも、この人だかりだ……隙を見せたら危険だ」

真面目過ぎるが故にスバルが自身の前頭葉の苦渋担当監察官に捕まりそうになったその時。

「はい、牛丼弁当っ」

ミソラがあっけらかんと、この状況では黒い重厚な光を反射する宝石をも彷彿させる、プラスチック製の容器に納められた牛丼という名の、ゴン太の文化的活動を司る部分の点火装置をスバルに手渡す。

「ミソラちゃんどうやって……？」

一瞬の出来事でスバルは何が起きたのか解からなかった。

「こっそり電波変換して、この人ゴミの中を潜り抜けてきたんだよ。おまけに少しまけてもらっちゃったっ」

何という事だろうか、ミソラは電波変換という特別な能力を、牛丼弁当を買う、という、ただそれだけの事の為に使ったというのだ。とても平和な使い方で拍子抜けだ。しかし、本来なら電波変換は争いに使うのではなく、こういった日常の生活に花を添える程度に役立てるべきなのだと考えさせられる。

ミソラの、舌を少しだけ出した照れくさそうな笑顔がそう思わせて仕方がないのだ。

「ミソラちゃん……ありがとう恩に着るよっ」

スバルは、すぐさま牛丼弁当をゴン太の顔の辺りに置いてやる。ルナの魅力と牛丼の香りが合わさらば、ゴン太が起きない理由などどこにもなかった。

「今だ！　委員長！」

スバルがルナに魅惑の踊り開始の合図を親指を突き立てて送る。すると、周りの野次馬のボルテージも最高潮に達した。

ルナも、既に臨戦態勢に入っており、際どいラインまで巻くし上げたスカートと、どこかから持って来たらしい口紅を塗りたくって、グロスの照り返しが半端ではなかった。さらに何故か裸足になっていて、普段は縞々のタイツに身を潜めて決してお目にかかれない、神秘のベールに包まれた生足が姿を現していた。

色々とあり得ない光景がコダマ駅で繰り広げられていた。

正にルナの独壇場だった。

「やっちゃってくださーい！　委員長おー！！」

「が、頑張れー！」

「女で魅せてみなー！　ルナー」

野次馬も指笛を鳴らしたりと乗りに乗っていた。
そしてさっきからずっと駅員さんが困っている。

ルナは意を決してゴン太を攻め立てる。

「うっふーん。ゴ・ン・太……っ。起・き・てぇーん（は、恥ずかしー）」

ルナは人差し指を異常なまでに照っている唇に当てながら、艶めかしい声を必死に作り出して発している様だ。しかし残念な事に、あまり色っぽくない。あまりにも扁平な胴体から絞り出すのは、色気に及ばない喜劇的な滑稽さだけであった。生々しく、舐めるかの様に四肢をくねらしても、恥ずかしそうにウインクを繰り出しても、甘い吐息を吹きかけても、ただ滑稽であった。可愛らしい顔が茹でだこになるのに、そう時間は掛からなかった。

そんな火を噴きそうな顔のルナを見て野次馬達は満足気に笑いを堪えている。彼らが集まったのは、恐らく、色気など最初から求めてなく、ただこの俗事を楽しむ為だった様だ。

過ちに気付いたスバル達はどうしようもない罪悪感をルナに覚えた様子で、何も出来ずにその場に居合わせるしか出来なかった。

しかし、牛丼弁当の匂いがルナとは違って、ゴン太にしっかりと働きかけていた。ゴン太は、何かぶつぶつと呻（うめ）きながらこちら側の世界にやって来ようとする。体がびくびくと脈打って、傍から見ると危ない人に見える状態だ。ルナの踊りのせいなのだろうか、だとしたら相当だ。

「（もう少し！）……あはん……っ。もう、朝ごはんのジ・カ・ン・だ・ぞっ。ねえ～ん、ゴン太クンたら～、焦らしちゃってぇ……！

イ・ケ・ズー」

「うわ……」

キザマロが思わず小さく悲鳴を漏らす。生理反応なので仕方がない。友達のあんな姿を見せられたら、思う所があって当然だった。

「バカ……！　委員長に聞こえたら殺されちゃうぞ」

スバルはひそひそと命の大切さを教えてやる。

そして少しするとゴン太は、ニ、三痙攣したかと思うと突然、上半身を起き上がらせた。そして牛丼弁当を視野に捉えると、それに飛びかかり仕留める。服が衝撃で散りぢりになりながらも、一心不乱に何かに取り憑かれたかの様に牛丼弁当に食らい付く、貪り尽くす。ふんどし一丁でがっつく貪欲な雄牛の姿がそこにはあった。無論、ルナには目もくれない。ルナが馬鹿みたいである。そして実際、馬鹿にされていた。だが、本人は知る由もない。

「ああ……んっ。……って、起きてる！」

すっかり役に徹していたルナはゴン太が起きている事にやっと気付いた。そしてゴン太は弁当を食べ終わるとルナに向き直って一言。彼は胡坐をかいていて更にふんどし一丁という出で立ちなので、とてつもなく男らしい。

「おはよう、委員長！　……って、なんでこんな格好してんだ、俺。ていうかなんて格好してんだよ委員長。捕まるぜ？」

「あんたに言われたくないわよ！　ったく、アンタのせいで私、大恥かいちゃったんだから！」

服装を整えながら、普段の日常に戻っていく野次馬達を目の端で確認しながら愚痴る。

「だって、俺はあの後……電波変換の練習をしてて……」

「言いワケは聞きたくないわ！」

口紅を思いっきり手の甲で男らしく拭ってゴン太を睨みつける。クラスのガキ大将として、力を誇示し続けてきたゴン太はあっさりと気圧される。ちゃんと正座に切り替えて、身に及ぶ危険因子を潰しにかかっているのが在り在りとその女々しい姿に出ていた。ふんどしさえ着けていれば、男らしくなれる何て事はなかった様だ。

「ハ、ハイ……！　スイマセンでした！」

「まあまあ、落ち着いてよ委員長」

スバルは危険など物ともせず、縮こまっているゴン太と威圧的に立ちはだかるルナとの間に入って仲裁する。

「あら、スバル君は口出ししないでくれるかしら？」

「いやいや、ゴン太だってちょっとアレな服装してるけど、反省してるからさ、ね？　それに委員長、スゴかったよさっきは」

スバルはゴン太に助け船を出しつつ、ルナを褒めてこの険悪な空気を打開しようとする。しかし、ルナのどこがどう凄かったのかは決して言わない。いや、言えないと思われる。

「ありがとう、委員長！　……それと、ゴメン」

「何で謝るのよ！？」

「ごめんなさい」

「何でちゃんと言い直すのよ！？」

「すみませんでした」
「何で、丁寧語にするのよ！？」

スバルはにこにこしながら、変な汗を多量に流している。残りの語彙も少なくなって来て、いよいよ危機を迎えていた。そんな風にどうしようもない状況だったが、やっとスバルの方にも助け船がやって来た。

「スバルー、みんなー！　やっとチケット用意できたから、そんなとこで遊んでないで、こっちにいらっしゃい」

遠くで呼びかける人達の姿が見える。スバルはさっさっとその場から逃げることにした。

「それじゃ、行こうか！　ゴン太、キザマロ、ミソラちゃん！　……それと、委員長さん」

陽気なピクニックが始まる。

「だから、何で敬語なのよ！」

ｓｔｒｄｓｔ：星屑の軌跡

最大営業速度、時速六四〇キロメートルのウェーブライナーで一時間足らず、そして、そこからリニアバス――車道にリアルウェーブで生成された、ナビゲートラインを伝い運行するバス――で数十分程の場所をスバル達は自然を楽しみながら歩いていた。

程なくして、背の高い木々が並ぶ林道の途中に、『デンヤ丘陵』と書かれた木製で濃い茶色の看板の存在が確認できる。ちょうどその看板を通り過ぎたスバル達は、林道に入って十分位になるが、始まってたった十分にも関わらず、早々に歩くという作業に辟易した少年が一人、悲鳴をあげていた。ゴリラの鳴き声ではない、悲鳴だ。

「まだ、歩くのかよー？」

先程のウェーブライナー内でオックスの持ってきた服装に着替えを済ませたゴン太が、なだらかながらも勾配のある道に飽き飽きしたらしく、早々に音をあげている。例のふんどしを失ったせいで、根性がなくなってしまったのだろうか。彼は列の最後尾から少し離れて歩き、一団の足を引っ張る。

そんな腑抜けたゴン太にルナが鼻で息を吐いてみせると、歩を進めながら首だけを横に回して、置いていくわよ、と一言。そう言い残し巻いた髪の毛を掻きあげ、さっさと歩いて行く。当然、十分程度歩いただけで音をあげる輩を待つ者などいる筈もなく、ゴン太を除く一行は先へ先へと行ってしまう。これじゃゴン太は寂しい。孤独の周波数を発してしまうのではないかと危惧してしまう。

そしてゴン太を気遣ったアイドルの中のアイドルであるミソラが、

いいの？　と聞くがルナは、にこにこと木漏れ日で装飾した何時もの笑顔を向けるだけであった。落ちた黒点が恐怖を演出するのか、恐ろしい子だ。生まれながらの支配者だ。

何だかんだで一塊となっている一団の後方を歩く子供集団に対して、前方の大人集団の一人のかえでが、ミソラに言ってやる。

「いいのよ、放っておいて。甘やかすとろくでもないからね、あの子は」

「そうなんですか？」

ミソラは驚いたように卵にした口を手で隠す。

「そうなのよ」

そうやって、愛ゆえに非情な母に先導されて、置いていかれそうになると、ゴン太は短い脚を必死に前後させて皆に追いすがる。しかし草木生い茂る道の脇に、きのこと思しき謎の物体に目が行くと、それを引っこ抜いてスバル達に見せびらかしに来るものであった。ゴン太は無邪気だった。

「オイ、これすごくないか！？　食えんのか、コレ！？」

ゴン太が、明らかに毒のあるそれをこれ見よがしに突き出してくる。妙にテンションの高い彼に対し、スバルは一抹の不安を覚えた様に苦笑って答える。

「なんだよ、それ。食べられる訳ないだろ……。委員長に怒られる前に捨ててきなよ」

スバルは地の色である紫に黄色とピンクの斑点がやけに規則的に

並んでいる、危険物を捨てて来いという賢明な判断を下した。これを食べられると一瞬でも期待するゴン太の脳みそは、どうやらキノコの特産地になっているらしい。

「チエッ……つまんねえの」

ゴン太はキノコを雑木林の方へ向かって放り投げた。きのこは枝葉が織りなす自然のカーテンの向こうへと消えていった。

道端で草を食っている、二人に対しルナは急かした。ゴン太の方はあながち冗談ではなく食べているので非常に始末に悪い。

「アナタ達、道草食ってないで、ちゃきちゃき歩きなさい！　ほらっ」

慌ててスバル達は、駆け足でルナの意向に従う。

先程捨てたキノコが発する怪しい光を残したままに――そう、ゴン太は世界中に張り巡らされた、彼らの仕掛けたパンドラの箱をとうとう開けてしまった、もとい抜いてしまったのである。植物を操る創造主が使える薔薇の化身に自身の正確な居場所を教えてしまったのである。

この事が何を意味するのかはすぐに分かる事になるだろう。雑草の向こうから機械的な音声が回される。

『セイタイコード認証……、ピピッ……オールコンプリート、管理ワクセイ番号、１０１０１１１１００１０００１０１０１１１００１１０００１０００１０１０１１……チキュウ。ピピッ……コダマタウン……ピピッ、ウシジマゴンタ……六年Ａ組……データ参照……最小院、……白金……星河……ピピピッ、ロックマン、ホシノ……ウチュウノキョウイ……『ロックマン』……』

始まった時に決まっていたことだが、若すぎるスバルを中心として早過ぎた運命の輪廻が再び回り始める。
幸せな時間は長くは続かないのか。

未来を勝ち取る力が彼にあるのか。
戦う事に、また意味を見出せるのか。

父と親友はもういない。

ロックマンであり続けること――。
短すぎる猶予を残し過酷な運命が始まろうとしていた。

更に歩いて数十分の所に、短く小奇麗な芝の緑色と、菜の花の黄色で彩るカーペットさながらの拓けた場所に一行は辿り着いた。そのカーペットを真っ二つに割る今珍しい澄んだ水質の小川が高く昇った太陽の光を反射して綺麗な宝石を渡してくれる。宝石から群を成す魚影がくぐったり潜ったりを繰り返して姿を現していた。澄みきった水質を楽しむかの様に全身を使って伸びと伸びと泳いでいるのが見ていて分かる。そして小川にかかった、緩いアーチ状の桟橋にはつがいの小鳥がいて、歌を雌に送っていた。

「わあ、綺麗なとこね！」
「ホント！　こんな所だったら、ステキな詩が思いつきそう」

二人は、両手を絡まして感動を現し、お互いに笑顔の交換と勤(いそ)し

む。ゴン太は問答無用で嫌がるキザマロを連れまわし、菜の花畑へ特攻していく。油虫を装備してくる事請け合いであろう。

三人の母は手頃な場所で、リアルウェーブのシートに腰を下ろし談笑を始めた。しかし、しっかりと昼食の準備はしながらで抜かりはない。そして、ナルオはマテリアライズした竿で釣りの準備を始めていた、その小慣れた手つきからはそれなりの経験があるのだろうと思われる。

それぞれのペースで今を楽しんでいる中、ビジライザーを掛けたスバルは抜けるような青空を見上げている。

小さく微笑んではいるが何かを考えているようだ。

「……」

「……だよね！　スバル君もそう思うよね？」

「うわっと、ミ、ミソラちゃん！？」

せっかくの自然もそこそこに空ばかり見上げているスバルに、ミソラが後ろから驚かせようとして背中を押したようだ。芝生に突っ込むまいとスバルは前につんのめりつつ踏み止まり、体勢を立て直しミソラに向き直る。少し怪訝な表情を浮かべてミソラに対し首を傾げる。

ミソラはそんなスバルに呆れたようで、腰に手を当てて顔を覗き込むように上半身を突き出す。

「せっかくこんな綺麗な場所なんだから、空ばかり見てるともったいないよ？」

「え？　う、うん、ゴメン。でもすごく空もキレイだったし……空にウェーブロードがほんの数本しか通ってないのは凄く珍しかったからつい……」

困り顔のスバル。

「謝っちゃダメ！　今日は楽しいピクニックなんだから、笑顔で…ねっ？」

するとスバルのそれなりに整った顔が、笑いをこらえるのが耐えられかねるほどに、口元から大きく変形した。ミソラが、スバルの頬を引っ張り上げたのであった。無論、無理矢理、強引に。

「はに、ふるんらお！？」

何するんだよ、と言えなかったスバルは聞き取りにくい発音で意思の伝わること期待薄に声を発するしかなかった。それがミソラには可笑しくて堪らなかった様子で、離したそれがスバルの顔を正常に戻すと、今度は腹を抱きかかえるように持って行き、小さくすぼめた口を溜めに溜めこんだ笑い声入りの空気で、ダムさながらに決壊させた。そうなると頬をつね上げられた挙句、笑いの種にされたスバルは眉をひそめて、出来る限り不満の意を表明するしかない。頬が赤くなっているのは照れたせいではないだろう。

「酷くない？　ていうか、ミソラちゃんのが笑顔だし……」

ビジライザーを外して、呆れる。ミソラの笑い声に耳を塞ぎたくなる事は無かったようだが、溜め息をついてしまう。

「あははっ！　だってさっきのスバル君の顔ったら、おかしくって、おかしくって！」

「そうねっ！　仮にもロックマン様であろうお方の顔じゃなかったわ！　ガッカリだわ」

ルナがどこからか沸いて出て来ていた。スバルは驚き意を決し怒

る。

「い、委員長！　いつの間に。……って、その台詞は聞き捨てならないなあ、僕は空を眺めていただけなのに……ヒドイ、ヒドイよ！」

「確かにさっきの顔は酷いぜ」

酷い顔のゴン太はどこからか沸いて出て来ていた。スバルは怒る。

「ゴン太、いつの間に……って、悪いけど君には言われたくないよ。ゴメンね、ホントに」

スバルは本当に申し訳なさそうにして会釈をする。

「な、なんだとー。てめえ……」

顔が酷いわけではなく、ただ人よりほんの少しだけ特徴的な部品を貼り付けているにすぎないゴン太はあからさまに腕をまくる仕草をして雄牛の如く鼻息を荒げる。本日のデンヤ丘陵の気温、摂氏二〇度。薄らと霞みがかった鼻息が目視できてしまっている現状には少しばかり気温が高いが、それはコダマ小学校一の熱血漢ゴン太たる所以である。問題ではない。

「止しなさいゴン太。アナタも人の事は言えないわ（残念だけどアナタは……スバル君よりかは……）」

「言えないです」

「言えないよ」

「言えない……よね」

「！？　委員長、キザマロ、スバルに……ミソラちゃんまで……おおうおお……」

ゴン太危うし。

『泣くなよ……ゴン太。ブロロ』

「う、うるせえ……！　別に悔しいってわけじゃねえんだからな！　勘違いするなよな……！」

「委員長の真似はよしてよ……ゴン太」

吐き気がする。

「だよね……、ルナちゃんの真似は……」

当然だ。

「き、キツイです」

そうなると、いても立ってもいられなくなったゴン太は何も言わず、青くした顔を隠すようにそそくさと緑豊かな森へと帰っていった。相変わらず画になる男である。

「行っちゃった」

ミソラはとくに気にする様子もなく言った。悪気はない。

「ほっとけばいいのよ。お腹が減ったらすぐにこっちに来るだろうから」

「それはそうだね」

「それはそうよ」

ゴン太には悪いが一同は意味もなく笑う。だがそれはそうそう長くは続かないのである。ルナの父ナルオ接近。名前がとてもよく似

ている。
　ナルオは油断していたスバルの肩を射止めた。
「やあ、スバル君、少し……いいかな」
　そして不意にかつ狙ったかの様なタイミングでスバルに野太い声が贈られる。それはゴン太の離脱を見計らっていたかにさえ思われる。いや、突然の出来事という訳ではないのかもしれない、彼はそれなりの準備を進めていたのだから、その方向へ一考するのまた有りだ。ナルオの思惑は計り知れない、ましてや若きスバルの及ぶところではない。
「なにか用？　……あっ、立派な吊り竿だね。それ」
　指差す先には黒く鈍く光る棒状の物体が、ナルオに担がれていた。それを二本も、であった。準備万端、用意周到、知的な立ち回りでタイムテーブルを支配する男――ナルオ。出来る男――ナルオ。
「一緒に釣りでもしないかい？　のんびりと、な？」
　ナルオからのお誘い。深い意味もなく、ゆったりとした時間を楽しみたいという欲求が、口角の上がった髭付きの口から見てとれる。しかしそこは流石にルナの父親だ、断るという選択肢は用意されていない。
「僕が？　でも釣りなんてやったこともないや。……」
　スバルはそう言って、ルナに目をやる。無言で助けてくれ、と伝えているのだ。しかしルナは何を思ったか、視線をほんの少し宙に泳がせると小さく笑い、キザマロとミソラを連れてあかね達の方へ

行ってしまった。
そして少し離れた所で一言。

「ごゆっくり」
「……」

スバルはナルオと二人きりになってしまった。

「やろうか」
「……やります」

小さく返事をして、スバルはナルオの差しだした小さいほうの竿を手に取り、小川に向かって歩を進める。ナルオは自信なさげなスバルに対し、出来る限り優しい顔をして肩を叩いてやった。

「簡単さ、おじさんがちゃんと教えてあげるよ」
「ははっ……、よろしくお願いします」

浮きが水を弾き、その波紋を伴うゆるりとした音響に魚影は滑るように川底を移動した。

「ちぇ、俺様の事を馬鹿にして。だがいいぜ！　男一匹餓鬼大将、牛島ゴン太様は森の爽やかな息吹に身を任せて、小鳥たちとの静かなるハーモニーを楽しむだけだぜ」

ゴン太は、林道で格好いいセリフを道端のリスに吐いている。

『大丈夫か？　ゴン太。頭がおかしいぜ？』
「オックスよ、お前まで馬鹿にするのかよ！」
『イヤ、そんな事はないが、牛丼が食いたいんだよ！　俺様は』
「フッ……オックス！　俺も……食いたいぜ」
『おおう！　友よ』
「よっしゃ、相棒！」

なにが「よっしゃ」なのか分からないが、とりあえず二人は馬鹿だ。すごく微笑ましい。事情を知らない人が見たら、涙を流すこと必至だ。

「！　まて！　感じ取ったぞ今、俺は！」
『そうか！　ブラザーお前も感じ取ったか！』

二人はさらに林道の奥に突き進んで行く。ゴン太のテンションは天井知らずに駆け昇り、一人怪しい舞を連発している。幸い観客はいないので、最悪の事態は免れていた。もし、良識ある人物が見ていたとしたらそれは失笑ものでまず間違いない。

「牛丼の匂いだぜ！」
『ヒャッホーイ！』

二人は突き抜けていた。だが、それで良い如何にもらしくていい事だ。

そして、とうとう二人は牛丼の匂いが発生している目標ポイントに到達した。二人の口の中は唾液が充満していて喋ることもままならない。だが、ゴン太は目の前の光景を目の当たりにすると口に含んでいたもの全てを吐き出してしまった。

足元に多量の水分が岩に砕かれる音をたてて、ゴン太の靴に跳ね返り濡らす。目の前に広がるのはスバル達がいるのと変わりはない

キャンプ場、ただ明らかに違っていた事があった。異常だった。

「牛ど……え？」

『ブロロロ……コレは……！』

スバルとナルオが数匹の魚を釣り上げて喜び合っている頃、ゴン太は走っていた。それも息も切れ切れに、何かから逃げるように走っていたのだった。元来た道を一目散になぞり返す彼は、皆の元に向かっていた。

何をするのかは決まっていた。伝えることは決まっていた。一刻を争うのだ。ウェーブロードが数本しかないこの場所は、電波環境が悪く通常の端末では連絡をとる手段がなかった。それが彼にとって酷くもどかしく余計に焦らせる。

「ちくしょう、なんだってんだ、あれはよ……！」

『ブロロロッ……！！　いいから今は逃げろ！　あいつの言っていた言葉がホントなら、ヤバすぎる。今は逃げろ……！』

オックスの表情は珍しく真剣そのものであった。先ほどまで、昼時には牛丼を食べにはしゃぎ暴れ回って相談し合っていた彼からは想像に容易ではない。

そしてオックスはゴン太同様、焦っていた。しかし同時に冷静でもあった。ゴン太の目の前で繰り広げられた惨劇の一部始終――ゴン太たち同様にピクニックへと出かけていた行楽客が目の前で異形の物へと変えられる過程――を目の当たりにしていたのだが冷静に、ここは逃げるべきだと判断出来たのであった。

仮にあの時、勇敢に立ち向かっていたとしたら彼とゴン太の身体

に安全の保証はできなかったであろう。まだ小学生のゴン太は震える足を懸命に前へ運びながら家族、友人に危機を知らせようと奔走する。

恐怖でゴン太の目の前は涙でくすんでいるはずだが、拭おうともせずに走り続ける。

「大変な事になっちまったぜ……！　何なんだよ、何なんだよ……！」

ゴン太は逃げてきた道の方へ視線を運ぶ。そして、より一層の畏怖の念を込めて口を開く。

「『レギオン』って何なんだよ……！」

「やったー、釣れた釣れた！」

「おっ、スゴイじゃないか、スバル君」

スバルは陽射しに照らされて青白く輝くそれを手に掲げて自慢げに笑みを浮かべた。それに対しナルオは品定めする様子で訝(いぶか)しげに口髭を撫でる。その後に感心した様子で彼の肩を、掴んだ獲物をスバルが逃がしてしまわない程度に叩いてやるのであった。

「コイツは大物だな」

「おじさんのよりね」

「ハハ、確かに」

意味もなく笑い合う。

そして意味のない笑いの後には、突然に必然にやってくるものがあった。

「……」

沈黙だ。

釣りをしつつナルオはさっきからずっと、話を持ちかけようと機を窺っていたのだった。ナルオがこの機に乗らない手はない筈だ。キザマロでも無く、誘う事は不可能であったがゴン太でも無くスバルを釣りに誘ったのには目的があった。無論、娘と楽しいひと時を過ごすという側面が多分であったが、ナルオにとってはこちらも小さい割合ではなかった。

「スバル君」

当然、ナルオが先に沈黙を破る。先ほどよりも落ち着いた表情を顔に浮かべつつ彼は続けた。

「今が楽しいかい？」

「？　うん、楽しいよ？」

スバルは返事を返し、魚を逃がす。自由を得た魚影は我先にと素早く光の中に消えていった。それを見届けて、魚影とは対照的にナルオが続ける。

「私もだ。こんな気分は久しぶりだよ」

「……」

スバルは答えない。答えなくてもいいと思ったのだろう、ナルオが語り出すのを待っている。その表情は、別段に楽しい話を期待し

ている訳でもなく、真面目な話を覚悟している訳でもなく、自然体であった。

スバルは待つ事には慣れっ子だった。ナルオはそんなスバルを見て、何かを払拭したかのように小さく頷いて語り出す。

「スバル君も知っていると思うが、私はきびしい親であってね。ルナにはいつも我慢させてしまっていたんだよな……」

頬を指先で掻く。

「今もなの？」

「甘やかすつもりはないが、あの子にはあの子の人生がある。出来る限り、あの子の信じた道を進ませてやろうとしているんだ」

ナルオは見つめるスバルに対し、にっと笑みを返した。甘やかすつもりがないという所はいかにもナルオらしい。

「それじゃ、委員長とも仲良くやれているんだね。嬉しいよ」

父親と仲良くやれるルナを思うと、スバルは嬉しいとは言葉で言っても、羨ましいと顔には浮かべてしまっていた。

「まぁ、そうなんだが。如何せん私は、やれ出張だ、やれプレゼンだ、で忙しくてね……。実のところルナにはあまり構ってやれてないんだ」

ナルオはため息を漏らす。

「でも、委員長はオジサンのこと大好きだと思いますよ。僕は身をもって体験しましたから……あ、それと。おじさんも、ね」

「はて何の事かな？」

本当に分からないらしく、スバルに少し身を乗り出させてしまう。

スバルは種明かしと言ったところか、人差し指を立ててナルオに教えてやる。

「オヒュ……委員長と戦った時、僕は感じたんだ。委員長の悲しさや、空しさ……、お父さんやお母さんに認めてもらいたい、愛情を注いでほしい……って言う強くて強すぎる思いをね」

スバルは続ける。

「あの鬼気迫る委員長と相対した時、もしかしたら僕は委員長に勝てなかったのかもしれない。委員長のあの思いに押し切られてたのかもしれないんだ」

そしてニヤッと笑う。

「あのスーパーヒーロー、ロックマンを追い詰めるほどの強い思いなんだよ！　オジサンの事なんかどうでも良かったら、あんな力は出せないと思うよ」

「確かに、アイツの締め付けは強烈だったな」

スバルに向き直り、新たな発見に驚いた様子でナルオは続けた。

「それにしてもスバル君は、冗談も言えるんだね。驚きだ」

「か、からかわないでよっ」

幾分、真面目に語った分、恥ずかしかったのか、やけにむきになり早口で応対に追われる。

「こちらこそ冗談だよ。ありがとうスバル君、少しほっとしたよ」
「あっ、どういたしまして」

気を取り直してスバルがちゃんと照れているところだったが、川面に映る人影にナルオが気が付く。スバルから見て、あさっての方を向くナルオにスバルが気が付くと、いましがた来た彼の姿を見つける。

そして対面の砂利の上に立つ少年ことゴン太が、息を荒げている事に二人はすぐに気が付いた。それも尋常ではない様子にも言うに及ばず気が付く。

「あの子はスバル君の友達の……」
「ゴン太だ……、お昼時まではもう少しあるのに……急ぎすぎだよね、おじさん？」

スバルがナルオに同意を求めるが、ナルオは期待には応えてやれなかった。

「いや……、どうも様子がおかしいな」
「え……？　確かに、急いできた感はあるけど……」

ゴン太がスバルの一言を待つことはなかった。一刻を争うと判断した故に待ってる道理などなかった。ゴン太のこの美しい自然に囲まれた場所にそぐわない大声で一時の静けさに引導を渡した。

「おいっ、スバル大変だ！！　みんなと一緒に早くここから逃げろ！」

必死さは伝わってくるが、要領を得ない。

「？　どうしたんだよ、何をそんなに慌ててるのさ？」

何とか事を理解しようとスバルは宥めるように聞く。だがゴン太はスバルの問いかけるのを待つ事もなく、小川に掛けられた桟橋を使う事もなく、一番の近道である川を一直線に横断して二人の方へ走ってきた。

川底に至る所に点在する苔で覆われた岩で足を掬われるものの一目散にスバル達と合流しようとする。

「ちょっ、落ち着きなよゴン太……！」

いよいよスバルにも、事の重大さが伝わってきたようだ。

そして先程から、大声をばら撒きながら慌てふためくゴン太に気が付かないわけがなくルナ達がやってきた。事情は知らない。

「あ、あんた、何やってるのよ！？　ビショビショじゃないのよ！」
「あの子ったら、はしゃぎすぎじゃないの！？」

やっとの思いで岸にたどり着いたゴン太は、息継ぎに必死で聞き取りにくい調子で訴えかけてくる。

「た、た、た、大変だ……！　人が……！　人が！！」
「人がどうしたのさ？」

スバルは落ち着いてゴン太から情報を聞き出そうとする。

「しょ、しょ、しょ、植物に食われちまった……！」
「はっ……？」

スバルは驚きを隠せない。ただ、それはこの場にいる全員に言えることだった。普段からゴン太の冗談はお世辞にも上手いものではなかったが、今回のはそれに値しないほどに笑えなかったのだ。しかし、その様は否が応にも真に迫るので、ゴン太の言っている事を笑い飛ばせなかった。

だが簡単に信じれる訳でもなかった。

「な、何言ってるのよ？　ゴン太、ちょっと漫画の読みすぎじゃないの。あ、ははは……」

顔は笑っていない。

「信じてくれなくていいから。委員長……早く、逃げるんだ。みんなも……あいつが来る前に」

「ゴ、ゴン太君どこまで本気なんですか？」

不安そうにキザマロも加わる。

「い、いいから！　早くしろよ！　あいつが来る！」

『ブロロ！　今はゴン太の言うとおりにするんだ！　かなり危険な状況なんだよ！　ブロロロ！」

オックスもハンターから出て皆に早くこの場から立ち去るよう訴える。

『ポロロン。ちょっと、二人とも落ち着きなさいよ。誰なのよアイツっていうのは？』

『ブロロ……『レギオン』だ』

オックスが絞り出すように、重くのしかかる口調で吐き捨てた。

ハープの顔も青ざめる。

『な、なんですって!?　だってここは地球よ?　あり得ないわ。それにそんな周波数どこにだって感じないわよ』

『ブロロロ……、いや確かにアイツはそう言ってたんだ。それに自分を周囲の周波数に同調するぐらい訳もないだろう……』

オックスは焦りを隠しきれない様子。

『だってここは……地球よ。何だってこんな辺境の星に……。それにアイツらってただの伝承の上の存在じゃ……』

ハープは理解できないというよりかは理解したくない様子でオックスに向かって細い目で見つめている。

『ブロロ、分かんない奴だな!　いいから、逃げるっていってるんだよ!　現に人がやられているんだ!』

『何言っているのよ。あんなの実際に存在している訳ないでしょ!　あんたこそ、何ビビって逃げてきてんのよ』

『う、うるせえ。俺の戦士としての本能がこいつは危険すぎるって言ったんだ』

『なんだかんだ言って、結局の所は勘なんじゃないのかしら?』

オックスとハープは平行線をたどる一方だ。これではらちが明かないと思ったのかスバルは、オックスに改めて聞く。

「ねえ、オックス。人が食べられたって言うのは……ほ、本当なの?」

『ブロロ、本当だ。そんなウソ吐いたって仕方がねえよ』

冷静さを取り戻したスバルは小さく頷いて皆逃げるように提案した。そして、ナルオとユリ子にも同意を求める。

「オジサン、オバサン。どうやら近くにとんでもない奴がいるみたい。レギオンって奴が何なのか分からないけど、早い所、此処から離れた方がいいと思うんだ」

「もしこの牛君の言う事が本当だとしたら、ピクニックどころの話ではないな。それが、良いだろう」

「ちょっと、アナタ。警察を呼んだ方がいいんじゃ……」

ユリ子が不安そうにナルオに寄り添う。それにスバルが答える。

「オバサン……こんな事言うのも気が引けるけど。植物を操って、人間を食べるなんて人間業じゃないよ。ここはサテラポリスに任せた方がいいと思う……けど、電波が繋がらないんだ」

「……仕方がない、みんな早く避難するぞ。怖くなんてないからな？　ルナ」

ナルオ自身も相当な恐怖を感じているであろうにもかかわらずルナの心配をする。すぐ近くの場所で人が亡くなっているのかもしれないのだから、そののしかかる不安は計り知れない。だが、ナルオは子供達に要らぬ心配は掛けまいと平静を装わなければならなかった。

「う、うん。平気よパパ……」

父の思いを汲み取った娘も笑顔を返す。そして一行は荷物もまとめずに来た道を戻るように走り出した。

だが、その時。

一行の後ろを走るスバルの後ろから声が聞こえてきた。それも女のものだ。スバルはピンと背筋を伸ばした。悪寒が走ったのだ。

『ウフフフ……電波の道がないも同然ですものね。可哀そうに……走って逃げるしかないですわね。ウフフ……、まさに自然の檻と言ったところでしょうね？』

「……え？」

スバルは振り向いた。だが、声の主は見当たらない。

「誰もいない……」

スバルは狐につままれたように感じたが、直ぐに前を向いて走りだそうとする。しかしすぐ前を走っていた筈のゴン太にぶつかってしまう。

ゴン太は酷く怯えていた。寒くもないのに体を震わせる理由は今のゴン太にとって恐怖以外にはないのだ。

「ゴン太？　どうしたの！？」

「ス、スバル……！　今、聞こえたろ！！　アイツだ！！」

ゴン太は暗闇の中、梟に狙われたネズミの様に辺りを見渡している。

そして、先程の声が再び聞こえてくる。今度はスバルのすこし前の方からであった。そう、ナルオのいる方向だ。

『感じますわ……電波人間の周波数を……！　それも何人も！！　ウフフフ……！　さて誰なのかしらねえ！！　ウフフ！』

女の笑い声が聞こえたと思うと、矢継ぎ早に男性の悲鳴が空間を走った。スバルは耳を疑った。

「ぐあああああ！！」
「パパ！！」
「アナタ！！」

悲鳴はナルオのものと加えて妻と娘のものだった。信じられないことに、ナルオは植物の蔓と思しき物体に激しく叩かれた模様で宙を放物線の軌道を描き舞い、スバルの前に落ちてきた――いや、弾き飛ばされてきた。そして植物の蔓でナルオを弾いた張本人がわざとらしく笑みを浮かべていた。ウェーブのかかったブロンドヘアーが特徴的である。

「オ、オジサン！！　しっかり」

スバルは面前に横たわるナルオに呼びかけるが返事がない。受け身も取れなかったので完全に気を失っている。ブロンド女性が足元から生やした蔓で空気を裂く音を鳴らしながら質問を投げかけてきた。最も今となっては誰も聞いていない。目の前で起こった事に目を疑い、理解が追い付いていなかった。

『ウフフフ、この中に電波人間がいますわね……』

ブロンド女は一人一人品定めするかのように見つめて、またも大きく笑みを作って見せた。

『あら、その前に私のお眼鏡に適う人間が……ウフフ、その体……美貌、欲しいですわ』
「え？」

指名する女の指はあろうことかスバルの母、あかねを無情にも指していた。ブロンド女の意のままに動く蔓があかねを捕えようと気味悪くうごめきながら迫っている。ナルオに気を取られていてもスバルは反射的にハンターへバトルカードのデータを入力していた。

目を見開く彼は母が危ないと、一瞬もないうちに感じ取ったのであった。

「バトルカード、ソード！」

薄い電波空間から生成された斬撃では蔓を斬るともではいかずとも、何とかそれをあかねからそらすことが出来た。そうなると、ブロンド女の注意がスバルの方へと向いてしまう。

『邪魔……しましたわね』

「か、母さんに何しようとした……！？」

『私の入れ物にしようかと』

「ふ、ふざけるなよ……！　お前は一体……」

スバルは珍しく怒りを露わにしていた。ハンターを握る手が震えていた。女を睨む目にふつふつと込み上げる怒気が溢れていた。

『うるさい子……少し落ち着きなさいな』

女の特にこだわりのない暴力がスバルを襲う。

「スバルー！！」

あかねの叫びも空しく、ナルオの時同様スバルの足元に蔓が生えてきた。冷静さを失っていたスバルは気が付くもエアディスプレイ

に手を伸ばすが間に合わない。

「！！　バトルカー……」

やはり間に合わず、肌を厳しく責め立てる音が響いたと思うと、強い衝撃で宙に投げられたスバルは背中から地面にたたきつけられてしまった。

「うっ……！」

「いやー！　スバル君っ」

スバルが最後に見た光景は、恐怖と悲しみに打ちひしがれる親娘の姿だった。より一層スバルは苦痛に顔を歪める。

「母さ……い、委員……ゴメ……こ……な、事……に……」

スバルは意識を失った。

「いやっ、スバル君！　起きてよ」

ミソラは立て続けに起こる信じたくもないような出来事に直面し混乱しきっていた。キザマロは腰を抜かして動けない。かえではあかねを庇うようにして背中で隠していた。ゴン太は震えていた。

『おかしいですわ……。この中に確かにロックマンと近しい周波数の痕跡があるのに、何故姿を見せないのでしょうか。この中にいるはずなのに』

例の笑みだ。

『出て来ないのなら……いっその事ここにいる全員を……』

ブロンド女性の悪意溢れる言葉にミソラとゴン太は戦慄した。それ以前の問題だがスバルが気絶した以上、この場に戦える人間は二人しかいなかった。守らなければいけなかった。友達を、家族を。怖くても震えてはいられなかった。

二人は、意を決す。

「私がロックマンよ！」

「お、俺もだ！」

スバルを庇うように名乗りをあげる。ハンターに認証カードを送り、地球の周りを飛ぶサテライトサーバーに電波変換の許可を申請する。

「トランスコード！」

二人は体を電波に変換する際の反応で輝くと皆を守るようにブロンド女性の目の前に立ちふさがった。

『あらあら……』

ブロンド女性は電波人間となった二人をまじまじと観察し続けた。

『ロックマンが二人も？　ウフフ、どっちが嘘をついてるんだか？　それとも……』

女はスバルの方をちらりと見る。冷めきった目に二人は背筋から昇る悪寒を本能から感じ取った。

『ウフフフ、楽しませていただきたいものですわね。地球人さん？』

「コイツ……！　ハ、ハープ、やるよ！」

「ブロロオオオ、みんなに手を出させやしねえ！！」

まずオックス・ファイアがブロンド女性に向かって炎を撒く。ブロンド女性は避けようともせずに炎に呑み込まれた。そしてハープ・ノートは燃え盛る人間の影に向かって容赦なく、増幅した音波を飛ばす。

会心の当たりを証明する快音が炎から響いた。しかし油断ならないこの状況下なのでハープ・ノートは青いバイザー越しに見える目を厳しいままに、燃える影に注意を向け続ける。

「これで……！」

少しの期待を持ちつつハープ・ノートは口からこぼした。だがそのささやかな期待はすぐに裏切られる。

確かにハープ・ノートは手加減したつもりはなかった、しているわけはなかった。だが、彼女は自身の目を疑う。オックス・ファイアも同様に感じているのは言うまでもないだろう。

攻撃を浴びたはずなのに女は無傷だったのだから、二人は半ば白昼夢でも見ているかのようであったのだ。

仮にも女は人間の姿をしているから、手加減してしまったのだろうか。残念ながら恐らくそれはないだろう。オックスの放った炎は、確かに草木を滅ぼす灼熱であったし、ハープの放った音波も常人相手なら耳を劈く、当に手に余るほどのエネルギーを持っていたのだから。

しかしそれが効いていない。表現を改めるとしたら、届いてすら

いないように見える。女の体は、それ程に何事もなかったかのように二人の前に君臨していた。

『効きませんわ。そんな微弱な力ではね……。生物としての位が違いすぎましてよ?』

「ブロロ……やっぱり、効きやがらねえか。ＦＭ星の特攻隊長と言われた俺の攻撃を蚊程も思わねえ……！」

「ちょっとコイツ、マジでレギオンなの？　だったら私たちの手に負える相手なんかじゃ……」

オックスにハープは弱音を吐く。どうやらこの女がレギオンであることは間違いないと悟った様だ。

「だったら逃げるって言うのか？　今は、スバルやオッサンがノビちまっているのに出来る訳ねえだろ！」

『フフ……、仲間割れ？　人間って面白いのね。いや、ＦＭ星人だったかしら?』

女がにじり寄ってくる。形こそは人間のそれだが、内に秘めた強すぎる力と冷酷さは人間のそれではなかった。悪魔だった。

「ハープ！　逃げちゃダメだよ！　今はみんなを守らなきゃ」

「そうだぜ、オックス。さっきはビビっちまったけど。友達を見捨てるほど俺は腰ぬけでもねえぜ。戦うんだぜ！」

『美しき友情ね……、人間って醜くも美しいわ。ああ、だから壊したい……！！　征服したい！！　全て手に入れたい！！　……フフ、失礼。そうね、少しだけ私もお熱になろうかしら』

女の目つきが先の愚者をたしなめる者の目から、略奪者の非情かつ贅に飢えた貪欲な目になる。そして女の体から何か邪悪なものが

わき出して来ていた。女の周りの空間が、漏れだす波長によって歪められているのだ。空間に干渉するとは恐ろしいほどの周波数である。

刺すほどのプレッシャーが二人を襲う。木々がざわめき、水面が荒れ、動物たちは命惜しさにその場を立ち去る。

この色調は電波体の発するものではない。女の言うとおり、生物の次元が違うのだとハープとオックスは戦いの経験が豊富だったために感じ取らざるを得なかった。

だが、ミソラとゴン太の目は死んでいなかった。無知ゆえの勇気なのだろうか。友を守るための決意なのか。戦意をたぎらせていた。

『ブロロロ！　何て周波数だ！！　でも、ゴン太が踏ん張ってるんだ俺様もビビっている訳にはいかねえぜ……！』

『そうね、ミソラ達に負けていられないわ！』

『賢い選択ですわ。私から逃げることなど不可能なのですからね……！』

女の台詞など真に受ける訳もなく、ハープ・ノートは抱えているギターの弦に手を掛ける。オックス・ファイアは目標に向かって突進を繰り出す。だがやはり女は避けようとはしない、だが先刻のようにむざむざ喰らってやるつもりもないようだ。おもむろに細く綺麗な爪をあしらった指を鳴らす。するとすぐさま乾いた音と共に、足元から生えうごめいていた蔓に薔薇の花が咲き誇った。刹那のうちに薔薇の花は散り、オックスとハープに向かって飛散する。神速の花弁は空気を裂き進み、とうとうオックスの突進をもろともせずにオックス・ファイアの分厚い装甲を切り刻み始める。痛々しく切られた所から電波情報が漏れだしオックス・ファイアは膝を着く。

さらに高音の悲鳴と共に、ハープ・ノートの純白のマフラーが赤い体電波情報に染め上げられる。ミソラは許容範囲を超えた激痛により意識を失ってしまったのだ。散り散りになった繊維電波に身を

包み、儚さを彷彿させるよう、弱々しく地面に身をゆだねている。
真紅の花弁はより一層に赤を誇張し、不運にもまだ意識を保っているオックス・ファイアに襲いかかる。

「グアア！！　くっそ……！　ミソ……ラちゃんまで。俺が……何とかしないと、何とか……ウグッ……！」
『この状況で何とかなるとでもお思い？』

女は責め手を緩めない。
もはやオックス・ファイアの装甲はボロ雑巾のようにただ体に張り付いているにすぎなかった。徐々にゴン太が舞い踊る花弁の導きにより、生への執着を諦めそうになる。体の悲鳴に精神が逃げ出そうとする。ルナは見ていられなかった。しかし、腫れあがった目は地獄絵図の上映を逸らさせてはくれない。どこを見ても、何を見ても最悪だったのだ。目を閉じて暗闇に身を任せる勇気もない。どうしようもない。
出来ることは懇願するだけだ。

「ゴ、ゴン太……！　お願い！　もうやめて……、やめてよ！！　このままじゃ、ゴン太が……、ゴン太が……」
『間違いなく……お亡くなりになりますわねえ。でもだからって、やめる理由はなくてよ？』

ルナは睨み返すことも出来なかった。構わず女は言葉を続ける。

『もっとも……』

女はルナの隣で寄り添う女性を指差し、親娘に目印を付けるようにして小さく空中に弧を描く。

「え……？」

ユリ子は何をされるのか分からないまでも、ルナを抱き寄せた。ユリ子の腕の中でルナは震え泣いていた。すぐにユリ子の袖が冷たくなる。だが、それに気付くことは多分ない、何故ならユリ子自身もまた抱えれば間違いなく押し潰されるドス黒い恐怖に震えていたのであったからだ。

ブロンド女はその様子を楽しむかのようにじっとりと舐めるように眺める。女の傍らで、ゴン太がぼろきれのようになっているが、もう目にも入っていないだろう。

『アナタの『体』を私にくれるのであれば……話が違いますけどね』

見下ろしながら言う。

「なっ……！？」

「ママ！　アイツの言う事なんか聞いちゃダメ」

『良いのかしら？　大切なお友達が……ウフフ』

刻み襲う薔薇の刃が奏でるのは擦れる金属の音ではなく、弱った少年の肌を虐げる、聞く者全てを不快にさせるものであった。ゴン太はまだかろうじで意識を保っていた。オックス・ファイアが屈すれば皆を守る者はもういない。なけなしの根性を振りしぼり持ちこたえていた。

もう悲鳴すら出せないゴン太の代わりにルナが打ちひしがれる。

「いや！　いや……！！　助けて……、誰か助けてよ……、……ロックマン……様。スバル……君……！」

「ルナ……」

胸元の娘を悲しそうに見つめているユリ子は、娘の泣いている顔をもう二度と見たくはなかったに違いない。だが、娘はまた泣いている。

人として、母として何をすべきかユリ子は選択を迫られている。あかねもかえでも言葉をかけられない。選択の代償として、どちらを切り捨てるのにも重すぎるのだ。ゴン太を助けようとも、ユリ子が犠牲になろうとも選べるわけはなかった。

選べるのは、ユリ子自身であった。

間もなくユリ子はルナをそっと手放し立ちあがった。恐怖を気取られないように一生懸命の強い瞳を携え言い切る。

「ゴン太君を解放しなさい」

『それでは……？』

「アナタの言うとおりにするから……だから、ルナをもう泣かせないで、悲しませないで」

心からの訴えだった。自分の身よりもルナの笑顔が大切だった。

『フフ、賢明な判断でしてよ……。美しき愛ね。それでこそ、高貴なる私にふさわしいわ』

女は自分に酔いしれているかのような台詞を甘ったるく吐くと、女の殻を脱いだ。先程から暴虐の限りをつくしていたブロンドの女が力無く倒れこむ。偽りの美を脱ぎ捨て、美を欲する貪欲な侵略者はユリ子へと獲物を変えたのだ。淡く緑色に揺らめきながら迫る悪妃に対し、ユリ子は覚悟を決めたようにゆっくりと目を瞑った。

ユリ子の横で、立ち上がる事も出来ないまでに精神を痛めつけられたルナが、言葉にならない声で何か言っている。ユリ子にはもはや声は届いていない。その光景を繰り広げながら悪妃は容赦せずに構わずユリ子の中へと入っていく。

次第に悪妃はユリ子とルナとの思い出を踏みにじっていく、壊された思い出の後にどす黒い薔薇の花を咲かす。ユリ子がユリ子でなくなろうとしていた。
誰も助けられない。

「マ、ママ……！　ダメだよ！　行っちゃダメだよ！　……居なく……ならないでよ……！！」

ルナが必死に、精神を奪われつつあるユリ子の足元にすがる。泣き叫ぶ。訴える。体が小刻みに震えて、まるで感電しているかのような状態のユリ子にすがる事をやめない。

「行かないで……！！」

いよいよ、ユリ子がルナの母親ではなくなろうとしていた最後の瞬間。ユリ子はルナの訴えに答えるかのように、残された僅かな自我を振りしぼりルナの方へ顔を向けた。
苦痛に歪んだユリ子の表情と涙で普段のルナから想像できぬものとなった顔がほんの一瞬向かい合う。
ほんの一瞬だった。

「ルナ……、ゴメン……ね」

そう言って、吹いたら消えてしまいそうな小さな笑顔と途切れ途切れの謝罪の言葉を残しユリ子はルナの元からいなくなった。
ルナは目を見開いて、期待を胸にユリ子だった女を見続けていた。
だが、ユリ子はいなくなった。そこにいるのは、ユリ子の皮を被った悪魔だけであった。

「ママ……？」

茫然と立ち尽くす女にルナは問いかける。すると女は天を仰ぎ、息をゆっくりと長く吐き出しルナの方へ再び顔を向ける。浮かんでいたのは笑顔とはとても言えないルナも見たことのない表情であった。腐った目がルナを侵す。

「えっ……？　キャッ！」

突然、息も吐かせずに女は、乱暴にルナの胸倉を掴み上げた。そして悠々と女は片腕でルナをぶら下げる。苦しそうにルナは足をばたつかせる。空しく足が虚空を掻く。

あり得ない光景に驚いたあかね達が、ルナを助けようとユリ子から引き離そうと試みるがびくともしない。以前のユリ子にこのような力は持ち得ないはずだった。

「く、苦しいよ。な、何でこんなこ……とするの？　ママ？」

「ウフフ、可愛い顔ですわね……。残念だけど、アナタの愛しい親愛なるお母様はここにはいなくってよ」

「何やってるの、ユリ子さん！　ルナちゃんを離しなさいっ」

あかねの介入など意に介さない。女にとって目の前を飛ぶ蚊の事など至ってどうでもいいことだった。そして一方通行な言葉を続ける。

「あらあら。アナタも良く見れば素質があるわ。まだ幼いけど、成熟すれば光るものがありますわね」

女はルナを見定める。

「マ……マ？　どう……しちゃったの？　ねえ、ママぁ……っ！」

ルナは必死に呼びかけるが声にならない。もうユリ子には届かないのだ。証拠はルナの目の前で怪しく笑んでいる女で十分だった。

「アナタ言ってましたわね？　『ママ……行かないで』……って、でしたらその願いかなえてあげますわ。アナタを楽園へ連れて行ってさしあげますわ」

「ユリ子さん……っ、ルナちゃんを離して。アナタはそんな事をする人じゃなかったはずよ！　目を覚まして」

女はあかねの方へやっと注意を向ける。まだいたのか、と言いたげにわがままな子供を見下ろすような親の顔をしてあかね達を蔓の鞭で軽く弾いた。為す術もなくあかね達は草花を掻き分けながら吹き飛ばされる。掻き乱された菜の花の向こうから小さいながらうめく声が聞こえてくるので、どうやらあかね達は無事なようだ。もっともそれだけではルナを助けられる可能性へは到底、結び付けることなど出来ない。

「まだいらしたんですね……、うるさいハエがいると思いましてよ」

再び、ルナの方へ向き直る。

「さ、行きましょう。美しき楽園へ」

「いや……。こ……んなの、ママじゃ……な……い」

ルナは憔悴しきった目でユリ子を見下ろした後、ゆっくりと眠る様に落ちた。女を止める事が出来る者はとうとういなくなってしまった。ルナを守れる者はもういない。

「フフ、気絶してしまいましたか……。ああ、それにしても、こん

なに美しい体が手に入って素晴らしく気分がいいですわ。そう、ロックマンの事などどうでもいいくらいに。ハア……、楽しみですわ……たっぷりと可愛がって私好みに染め上げて……フフ……アハッ、アハハハハハ！！」

女は高らかに笑いをあげると、やはり高らかに悪魔が本来の姿を見せる呪文を言い放った。

「電波変還！！　ヘラ・ローズガーデン！」

そう言い放つと、暗い紫色の輝きに身を包ませる。やがてそこから現れ出でたる女は正真正銘の化け物に身を変貌させていた。その姿はもはや人間の物ではなく、足元から幾千もの薔薇の蔓が密集、集結し一つの大樹を形成していた。さらに大樹の冠からは、過ぎた大きさの黒くさえある赤の薔薇が盛大に咲いている。そして、より異質なのは花弁の渦の中心に上半身だけの人間型の女が、眠る姫を抱えその存在を鼓舞するかのように生えていたのであった。

異形の物と化した、かつての母はルナを腕に抱き抱え、上空に走る一本のウェーブロードへと昇り、『楽園』と称する、自身の巣へと帰っていった。ただ一人を除いて、見送る者などいない旅立ちだった。

その一人とは、地面に這いつくばっているゴン太であった。ぼろぼろになりながらもまだオックス・ファイアの形態を保っている。女からしてみればゴン太の存在などさして問題でもなく、ロックマンとさえも思われていなかった。ただの気まぐれで、命を危険にさらされて、気まぐれで親友を奪われたのであった。ゴン太は相手にもされていなかった。女にしてみれば、ほんの挨拶に過ぎない顔見せ程度だったのであろう。それが、ゴン太の心に突き刺さった。悔しかった。悲しかった。諦められなかった。

「い、委員……長……！」

ゴン太はふらつく体を起こす。

「オックス……、まだやれる……な？」

『当たり前だ……！』

「俺がやらなきゃいけないんだ。待ってろ……委員長……！！」

ゴン太はヘラ・ローズガーデンと名乗る強すぎる悪魔を追っていった。

だが、非情な現実では女を止める事ができる者はいなくなり、ルナを守れる者もいない。だが、女を止めようと足掻く者や、ルナを守ろうと諦めない友達はまだいたのであった。決死のオックス・ファイアは女の通ったウェーブロードへと昇り、走り出した。

ゴン太がルナを追い、その場を去ってから数十分が経過した。一時騒然としていた場所は何事もなかったかのように平静さを取り戻しているように思える。ただそれは表面的なもので、実際は見慣れない装甲ヘリが二機デンヤ丘陵に着陸していた。その周りには、制服姿の人影が見れる。

そして、女に叩き伏せられたスバルはいまだ眠っていた。だが眠っている場所は先の地面とは違い、簡易的ではあるが緩衝作用のあるマットの上であった。そのマットには『ＳＡＴＥＬＬＡ　ＰＯＬＩＣＥ』と記されたロゴが入っている。恐らく、強大な異質電波の反応を受け取ってしまったサテラポリスが駆けつけてきたのだろう。

スバルの周りと言えば、刑事風の男や研究員風の男たちが周囲の状況を調べたり、スバル達以外の他の負傷者の確認に追われていた。そんな中、あかね達だけがスバルを心配そうに看ていた。その中でも、ミソラとナルオの表情は特に暗い。

「スバル君……私、何も出来なかった……。オバサンもルナちゃんも守れなかったよ」

自身もぼろぼろになりながらもミソラは下唇を噛む。そこには少しだけ血が滲んでいた。

「君は悪くない……。今はユリ子とルナの無事を信じよう……。ここはサテラポリスの方々に任せて……信じるんだ……信じるんだ……」

ナルオが次第に小さくなる声で呟いた。ミソラの耳にちゃんと入っているか分からないぐらいに小さな声である。

「そ、そうね。白金さんの言う通りよ。ユリ子さんやルナちゃんの帰りを信じましょうっ。私たちまで諦めてちゃダメよ」

あかねが気丈に振る舞っていると、五陽田という刑事と天地がやってきた。刑事風の男は長い背広を羽織っており、ネクタイはルーズに巻かれていた。曲がった背筋から伸びる初老の顔には犯人確保の情熱をたぎらせている。それに整えられていない、男らしくもある無骨な眉から覗かせる目つきは、粗野な人柄を浮き彫りにしている。

「今回は大変でしたな」

五陽田が、スバルの様子を気にしつつ口を開く。五陽田の傍らでスバルの姿を見る天地の顔は暗い。

「あ、刑事さん。はっきり言って私には何が何だか……、悪い夢のようです」

ナルオは顔を手で覆った。

「明日の朝起きれば、ルナが笑顔をまた見せてくれる……そんな気がしてならないんです」

声が震えている。手で顔を隠したのはそのせいだろう。

「……」

神妙な面持ちで天地は言葉を選んでいた。何を言っても彼には響かないだろうという、半ば諦めた感じがする。そんな天地を見かねて五陽田が話を切り出す。現状の確認とこれからの方針を決めるつもりなのだ。

「非常に残念で、誠に申し上げ辛いのですが……、お嬢さんは例の連続誘拐犯と思しき人物に連れ去られてしまったとこちらでは判断しております」

「ルナが誘拐……？　だって、話じゃユリ子が急におかしくなって……」

「ええ、そうです。どうも、調べによれば『犯人』は人間と人間の精神を渡り歩くとかで……」

「それじゃ、犯人は……人間じゃ……」

ナルオは驚きを隠せない。無理もない、娘を連れ去った犯人が人

間の外の者であると確定してしまったのだ。ここで冷静でいられる方がどうかしている。

「ええ、電波生命体に近しい性質を持っていると思って間違いないでしょう。私たちの持っているデータでは、過去に似たような件例がありましてね」

五陽田は天地の方に目配せをする。

「はい、恐らく白金さんも聞いたことがおありだと思います。『FM星人』って言えば、分かりますか？」

天地は今は友好条約を結んでいる異星人の事を話題に出した。

「なっ、まさか……？　また奴らが……！」

興奮するナルオに五陽田が待ったをかける。

「いえいえ、違いますよ。私が言いたい事はですね。犯人の質が似ているって事なんですよ。でもしかしです。あの犯人のZ波……いや、周波数はですね、奴らのそれとは似ても似つかない。純粋に強大なんですよ……周波数から逆算された保有し得るエネルギーがFM星人のそれとはね」

「それじゃあ、状況は芳しくないって事なのでは……？」

五陽田の台詞からは、人類など到底及ばない格差を思い知らされるのだ。だから、ナルオは五陽田に偽りのない事実を要求する。

「ええ、はっきり言いますと、奴の予想される力は人智を超えたものです。それは、そこにいるFM星人がよく分かっているんじゃな

いですかな？」

五陽田の視線はミソラの傍らにいるハープに向けられる。

「刑事さん……。アナタの見解は正しいわ。ＦＭ星の伝承によると奴はレギオンって呼ばれてるわ」

「ほう……呼ばれている？」

五陽田は興味深そうにして顎に指を添える。

「詳しい事は私にも分からないわ。ただ、昔から私たちの住んでいる恒星系列に言い伝えられているのよ。強大な力を持った、謎の高次電波生命体が存在しているってね……。ただ今日ので分かったわ、奴らの周波数は電波のより、超エネルギーを持つ電磁波に近いわ。言うなれば質量をもたない物質に近いのよ……あり得ないけどね」

ハープの言っていることから、ルナを連れ去ったと思われる犯人の正体は世界の秩序に反するものに近いらしい。そんな危険な存在に妻と娘を奪われたのだ、と今さらにナルオは痛感した。

「なんてことだ……そんな化け物にユリ子とルナが……」

「質量を持たない物質……そんな物が……」

天地はハープの言っている事が信じられない様子だ。だが、科学者としてそれなりの理解や知識を持っているが故にそのことの非現実的な力を理解してしまっていた。

「でも、方法がないわけじゃない。ですな……天地君？　それを伝えに我々は来たわけですからな」

「え、ええ。ですが……ハープ君の言う話が本当だとすると、諸手

をあげて賛成はできません。それどころか、むしろ……」

天地はスバルの方向を向いて辛そうな顔をしていた。

「私もこんな子供に託すしかない現実に賛成はしていないよ。だが、上が決定したことだ」

「ですが、やはり……」

何やら、天地と五陽田は込み入った話をしているようだ。言いようのない不安に駆られたあかねが五陽田に問いかける。

「な、何の話をしているんですか……？」

傍から見ても分かる程に天地はばつの悪そうな表情を浮かべあかねから視線をそらす。

「プロジェクトＴＣ　奥様はこれをご存知ですかな？」

五陽田が答えてやる。

「プロジェクト……？　分かりません。一体何の事かも……」

「無理もありませんな。一般人には知られていない極秘のプロジェクトですから。……もっとも、このプロジェクトの正体は、以前、突如として起きた異星人からの侵略を教訓としていましてね」

五陽田はハープに視線を流す。そして続ける。

「そこからの理念で、外界からの侵略者に何とか対処しようと考案されたんです。そう――人間と電波体の合体によって生まれる新たな力で地球を守るに足る基本体系を得ようとしていたんです。リフ

レイン博士とヨイリー博士を筆頭として……ね」
「それって……」
ミソラが伏していた顔をあげた。
「そうだ、電波変換のことだよ。これが残された最後の希望だ。恐らくわれわれに残された手段で、最も可能性のある方法だと思う。だから……」
あかねは五陽田に最後まで言わせない。スバルと五陽田の間に割って入る。
「待って下さい！　それって、息子を……スバルをまた戦わせるって事なんですか!?」
「残念ながら……否定はできませんな。もっとも、可能性のある方法がこれしかないんです。われわれとて本当は……」
「あ、天地君……！！」
あかねは天地に否定を求める。
「……」
天地は答える事が出来ない。幼いころから顔見知っていた家族のように接していた少年にまた辛い現実を突き付ける事は出来ない。しかし、だからと言って今までに失踪した人達の事を考えると簡単に否定できることでもなかった。
「か、母さん……」
あかねの大きな声に気付いたのか、ようやくスバルが意識を取り

戻した。ゆっくりと体を起こす。

「ス、スバル……！」

「スバル君……！」

ミソラとあかねはスバルに身を寄せる。二人とも目に涙を浮かべていた。

「母さん、それにミソラちゃん……。僕はどれくらい寝てた？　みんな無事なの？」

「いいのよ。スバルそんなこと気にしなくて……！」

あかねはしっかりと息子を抱き締めた。母からの突然の愛情の表現にスバルはうっすらと事態の深刻さに気付いていたのかもしれない。

自分が寝ている間に何が起きたのか、なぜユリ子やルナやゴン太がいないのか、なぜミソラがボロボロになっているのか、なぜ五陽田や天地がいるのか、その全ての事情が目の前で服を濡らしてくる母親から伝わってきたはずだろうから。

「苦しいよ……母さん。苦しいよ……」

スバルの心は酷く苦しかった。情けなかった。

「スバル君……。ゴメン、私じゃ何も出来なかった。友だち一人も守れなかったよ……」

「ミソラちゃん……」

スバルからは不思議と涙は出なかった。何が悲しいのか分からなかったのだろう、心にぽっかりと穴が開いたような力のない顔をし

ている。あかねにただの棒きれのように抱えられている。
今の状況で遠慮しても仕方がないので、五陽田はスバルに用件を伝える。とても大事な使命を小さな戦士に託す。

「スバル君、起きたな。そのままでいいから聞いてくれ。先刻の正午弱、デンヤ丘陵、北東広場にて強大な電波反応の確認。その後、電波体は女性一名、女子一名を連れ去ったと思われ、バミューダ海域上空で反応の消滅を確認。その際、コードＮＯ　００５が電波体を追跡、同じくバミューダ海域特定ポイントで消滅。……辛いとは思うがこれが君が気絶している間に起きた真相だ」
「やっぱり……そうだったのか。何やってんだ……僕は！」
「感傷に浸るのは後にしてくれ。いいか、ここから話す事は、サテラポリスの一隊員として言わせてもらう。これより、サテラポリスは本日の同刻を以って、星河スバルをサテラポリス特別戦闘要員として任命する。……以上だ」

それは、戦いへの召集だった。

「え……？」

スバルはあかねに抱き締めらているにもかかわらず、五陽田の方へ向いた。目を丸くしていた。

「君の力が必要なんだ。今、ゴン太君を追って暁君率いる第一部隊が犯人の制圧に向かっているが……正直、相手にならないだろう」
「だから……僕が」
「そうだ。君はロックマンなのだから……だが」

五陽田は申し訳なさそうな顔をしてスバルに深く頭を下げた。五陽田が人に頭を下げる事などめったにない、それはスバルも知って

いた。

「ここからは、一人の人間として言わせてくれ。……君はまだ子供だ。本当は子供を戦わせることなんてあってはならないんだ。そんな君に頼るしか術を持たない、わがままな大人を許してほしい。決めるのは君だ。君の意志に従ってくれ。誰も君を責めはしない」

五陽田の本当の気持ちだった。

「五陽田さん……」

小さく震える五陽田を少し見つめると、何かを決めたように口を結ぶとスバルはゆっくりと母から離れた。そして立ち上がる。

「スバル……あなた……。ダメよ……ダメ」

あかねは弱々しくスバルを見上げる。声が震えて力のないものとなっていた。

「委員長が泣いてたんだ」

スバルは言った。ルナを守る——随分と昔にした約束だったがスバルはまだ覚えていた。ルナも覚えていることだろう。

「サ、サテラポリスの方が何とかして下さるわよ……だから、お願い。私と一緒に待ってましょう。一緒にいて……スバル」

「待ち続けるのはもうイヤなんだ。僕が行かなきゃ……大切な人が手の届かない所に行くのはもう耐えられないんだ」

スバルは待つ事の辛さを知っている。だから後悔もした。辛くな

いように心に壁を作った。だが、大切な人達がスバルの閉め切った心に手を伸ばしてくれた。スバルが今行かなければ、ルナ達はもう手の届かない所に行ってしまうかもしれないのだ。

今度はスバルから手を伸ばす番だった。

「スバル君……君はやっぱり」

包帯で痛々しく四肢を隠しているミソラはただスバルを見つめていた。なにか遠いものを見つめるような眼差しでスバルとロックマンを重ねていた。

「ミソラちゃん……ゴメンね。やっぱり普通の小学生に戻るの、もうちょっと後にするよ。だから……行ってきます」

「何も言えないよ……私」

「いいんだ。何も言わなくても」

「だったら……」

ミソラは懸命に笑みを作ろうとしている。それでやっと出来上がった笑顔はお世辞にも綺麗とは言えないが、どんなにアイドルとしての見栄えの良い笑顔よりも、その優しい気持ちが美しくて、スバルの心に確かに届いた。

「スバルっ、本当にいいの!?　戦うのよ?　辛いことしか待ってないわ。それに……死んじゃうかも知れないのよっ。もし、そうなったら……母さん……どうしたら」

あかねは必死だった。スバルまでも失いたくなかった。あの時、大吾が宇宙に旅立った時とまるで一緒だった。誰かがやらなければならないのは分かっているが、受け入れられない。

「僕にとって、戦うよりも失う辛さの方がもっと辛いんだ。それに……、『どんなに小さくてもそこに希望があるなら命をかける価値はある』……僕の尊敬する人の言葉だよ」

スバルは歯を見せて笑った。そして、あかねに背中を向けて歩きだした。スバルはもう振り返らない。

「あの人の……言葉……」

それは無限の宇宙に皆の希望を見出して旅立った、ある宇宙飛行士の言葉だった。そして今その息子が皆を守るために旅立とうとしていた。

「いいのかい？　本当に」

不安げに天地はスバルを心配している。

「決めたんです。全てを守るんだって」

「そうか……。強いな、スバル君は」

帽子を深くかぶり直し天地はスバルに灰色のアクセス認証カードを手渡した。鈍く光るそれには、『Ｃｏｄｅ　Ｎｏ　０３０』と記されている。さらに天地は、白色のウィザードアダプターを手渡す。

「君の新しい力だ。トランスコードは０３０。相棒のウィザードはトラッシュだ」

スバルは空っぽになったハンターにウィザードアダプターを差し込む。だが、ハンターのエアディスプレイには何も表示されてはいない。画面には『Ｄａｔａ　Ｃｏｎｖｅｒｔ』とだけ記されていた。

「これは……」

「前にも言ったはずだが、本来トラッシュは二週間後に目を覚ます予定だったんだ。だが、急にこんな事件が起きてしまってね。解凍作業に追われてたんだ。目を覚ますまでにもう少しかかるはずだ。でも大丈夫、君の力になってくれるよ彼は」

「わかったよ。ありがとう天地さん」

「ああ、それじゃ、僕と五陽田さんはこの後もここの被害状況を調べなきゃいけないから、ここでひとまずお別れだ。そしたら、スバル君はあそこの川の所で止まっている、右側のヘリを使って現場へ急行してくれ」

天地が指差す先には、明らかに平和的運用は望めない黒い装甲で覆われたヘリコプターが止まっていた。いよいよ始まるという実感がスバルの胸の奥の方からふつふつ沸き上がっていた。それを闘志に変えてスバルは頷く。

「うん、それじゃ、行ってきます」

スバルはヘリに向かって駆け出した。

「――スバル君」

天地が言う。スバルは止まらない。

「何？」

「勝てよ」

「うんっ」

天地にも勇気をもらい、スバルはいよいよヘリのハッチに手をかける。ずっしりと重い鉄の感触が指きり手袋越しにも伝わってきたはずだ。ひんやりとした感触がスバルの背筋を伝わって身を引き締めた。そして、力を込めてノブを引く。

「ほ、星河スバルです。今回の任務に参加させてもらいます」

スバルは中に入るなり早々、挨拶をした。軽く一礼する。中には屈強なサテラポリスの隊員達が自分の得物の手入れに勤しんでいた。もうすぐ苛烈な戦闘が始まるのだ、中の空気はピリピリしている。スバルは一瞬、気圧されそうになるがその中には見知った顔が一つあった。

「あっ、ミライ君」

黒髪の少年が教室の半分くらいの広さの細長い円柱状の空間の側面に腰を掛けている。落ち着いた様子でエアディスプレイの作戦カードに目を通していた。

「ん、星河か……、お前なら来ると思っていたよ。……覚悟は決めたんだな」

「うん、戦わなきゃいいけない時なんだ」

「フッ、お前の覚悟、戦場でしかと見せてもらうぞ――ロックマン」

そう言い、ミライは立ち上がって皆の前で士気を高める。

「総員に告ぐ。これから我が第２戦闘部隊は、新しく星河スバルを戦力に向かえ。作戦を決行する。場所はバミューダ諸島のＸ２３０

N５０ポイントだ。そこで、牛島少年と犯人の反応が消えている。恐らくそこには何かがある筈だ。市民の安全と行方不明者救助の為にも全力を尽くすぞっ！　以上だ」

ミライがそう言い告げると、その場にいた全ての隊員達が敬礼した。スバルも慌てて、敬礼して皆に合わせる。そしてそんなスバルに隊員の一人がスバルに話しかけてきた。

「緊張してるのか？」

「は、はい。こんな風に作戦とか慣れてなくて……」

「何言ってんだ。君は俺たちなんかよりよっぽど修羅場をくぐってるだろ。……ここだけの話、『青き流星』って通り名でこっちの世界では有名なんだぜ？」

「はは……。恐縮です」

「ドンと構えとけよ！　頼りにしてるんだからな。ロックマン！」

スバルの背中を大きな手で勢い良く張る。

「ぜ、善処します」

隊員に喝を入れてもらうと、ヘリは上空へ向って浮上し始めた。特に準備することもないスバルはとりあえずミライの隣に座ることにした。ヘリの中の椅子はパイプなどの配線保護が背中に当たって決して座り心地は良くない。そして珍しくもミライからスバルに話しかけてくる。

「大丈夫か？」

「う、うん。それにしてもスゴイね。大人に向かって、作戦開始の宣言をするなんて」

「？　俺はこの部隊の隊長だ。それぐらいして当然だ」

「そうなんだ。ホントにすごいんだね」
「ＳＳランクホルダーにもなると一部隊を任されるのは普通だ。それに、暁さんはＳＳＳランクホルダーだ」
「暁さんって意外とすごいんだね」
「自称スーパーヒーローらしいからな」
「『自称』、ね」

スバルは堪えつつ笑う。

「フッ、リラックスしとけよ。久しぶりの実戦なんだろ？　緊張は体を固めるからな」
「あ、ありがとう」

珍しいミライの気遣いにスバルは礼を言うと、すぐにミライはエアディスプレイを展開した。

「よし、お前には、まだ作戦の概要を説明してなかったな。これを見ろ」

ミライはエアディスプレイを示す。

「ここに映っている地図データはバミューダ諸島付近を参照している。反応の消えた牛島は白金を助けるために例のポイントで消息を絶ったのは知ってるな」
「うん……。ゴン太……なんて無茶を……」

スバルは拳を強く握り込んだ。

「ああ、確かに無茶だ。事情を聞くと奴は既に相当な手傷を負っているらしい。だが、アイツのおかげで犯人の逃走ルートが割り出せ

た」

ミライは小さく笑ってみせる。

「奴のトランスコード情報から、犯人と最後に接触したポイントを割り出せたんだが……、どうやら犯人はとんでもない奴らしいな」

「なんで？」

「そのポイントで大量のエネルギーのやり取りがあった。恐らく犯人は、三次元空間に干渉したんだろう。磁場の揺らぎが半端じゃない」

スバルはただ驚いている。そして少し興味を持っているようだ。

「それ、何かの本で読んだことある。空間と空間を繋げるんだよね？　ちょうど紙に書いた点と点を重ねるように紙を曲げる事なんでしょ」

「博識だな。だいたいそんなとこだ。恐らくそのせいで奴等の反応は消えてしまったんだろう。フッ、今度の犯人は一筋縄ではいきそうもないな。しかし、手掛かりはつかんでいる、行方不明者の捜索と犯人の確保を優先して作戦を行う予定だ。星河には犯人の確保を担当してもらうつもりだ」

ミライはエアディスプレイを閉じた。

「そんな相手に勝てるのかな。いや、勝たなきゃいけないんだ」

「フッ、心配ない様だな。……そろそろバミューダ海域に着くな。準備、しとけよ」

ミライがそう言うと、ものの数分としないうちヘリはバミューダ諸島のとある島の上空に着いた。デンヤ丘陵を発ち既に十五分が経

過していた。ゴン太がルナを追ってからもうすぐ一時間は経とうかとしていた。スバルは内心焦っていた。早くしなければ、ルナ達の命の保証は出来ないからだ。

やがて装甲ヘリが小さな島の荒れた大地に着陸すると同時に中から二十名余りの隊員達が、ぞろぞろと出てくる。その中にスバルはいた。そしてすぐに隊員達は辺りを調べて回るが、如何せん霧が濃くて作業は捗らない。

「スゴイ霧だ。視界が悪すぎるよ……」

「確かにこれでは埒が明かないな。これ以上時間をとっても、暁さんや牛島に負担がかかるだけだな」

ミライはおもむろにハンターを取り出す。そして前方に掲げる。

「レイダー、サテラサーチングだ」

「了解しました。……サテラサーチング！」

レイダーは目のライトを緑色に光らせて辺りを見渡す。まるで岬に立つ灯台の明かりのようだった。

「……！　僅かな残留電波を補足。対象は此処より数ポイント東にあります」

「良くやった。みんな、ターゲットはもう少し東に行ったところにある。急げ」

数分も走らないうちに、スバル達が辿り着いたのはやはり霧の濃い島の平原地帯だった。だが異常なのは、そこには似つかわしくない黒い物体が安置されているのだ。かすんでいるが、それは宇宙船のような形をしている。そして宇宙船の下部には空間が歪んだように景色が陽炎のようになっていた。

「ここ……か」

ミライは宇宙船を見上げる。大きさは乗ってきたヘリの数倍以上ある。小型の戦艦と言った方がしっくり来るくらいだ。

「……でも、やっぱり誰もいないね」

「やはり、どこかに跳んだな……。レイダー、ここに連結端末があるはずだ。わずかな地球外物質を重点において探索してくれ」

「了解」

レイダーはまたも目を光らせて、辺りの調査を開始する。すると今度はすぐに見つかった。

「宇宙船の下部から、大量の宇宙線が漂っています。宇宙船の停留用脚部のコントロールパネルにクラックを開始します」

「頼む」

レイダーがコントロールパネルにサイバーインすると陽炎のようになっていた部分が、紙に描いた風景画をぐしゃぐしゃにしたように縮んでいく。ゆっくりと小さく丸まっていき、やがて景色の一部がぽっかりと抜け落ちてしまった。そして黒い穴が姿を現した。

「これは、驚いたな……。ヨイリー博士が見たら泣いて喜んだだろうな」

流石のミライも驚いている。空間に穴が開く現象は地球に住んでいる限りは滅多に見られないだろうから当然だ。

「地球人の技術じゃないよ。コレ……」

スバルも宇宙のロマンを通り越して、気味の悪い穴に恐怖していた。すると、スバルの後ろの隊員の一人がやはり驚いたようにして、新しい情報が入ったことを告げる。

「これは……！　謎の穴の出現に伴い、オックスファイアの電波反応をキャッチしました。それと、とてつもない数の生体反応です。恐らく行方不明となっていた人達のものでしょう。……！　それに、高周波数を持つ高エネルギー生体反応を確認」

隊員の一人は忙しなく、キーボードを叩いている。

「場所は？」

「……分かりません。ここはバミューダ海域に属していますが。穴の向こうにあるはずの座標からは反応がありません。なのに受信した反応は南西のアンドロメダ星雲付近の空から降って来ています。これは物理的にあり得ません。光の速さでも百年はかかる距離です。一体何が起きているんだ」

スバルは、何が何だか分からなくなって来ていた。それなりに宇宙の本や物理の本をかじってきたつもりであったが、目の前で起きている出来の悪い冗談のような現象に頭がついていってなかった。

「フッ、恐らく、穴は目の前にあるが穴の繋がる先の場所は空の向こう、つまりは宇宙の向こうにあるという訳か。ふざけた話だが、そうは言っていられない。早急に作戦を決行する。レイダー！　まずは連結先の自然環境を調べてくれ」

「了解！　連結先ポイントからは、元素物質の流出入及び、熱、酸素圧の増減も確認されません。極めて地球に近い大気環境を維持しているかと思われます」

覚悟を決め総員は穴に向かって未知なる世界へと突入していった。

黒い穴をくぐると、まずスバル達の目の前に飛び込んできた光景は、一面にわたる極彩色の花の絨毯（じゅうたん）であった。地平線の果てまで花で埋め尽くされていた。言うなれば、地球の海が全て花畑になったようなものである。木のように見える物体でさえも、薔薇の花という徹底ぶりであった。

「うわっ、何だここ……！」

スバルは流石にこのような景色を見た事がなかった。小さい頃に家族で有名なチューリップ畑に行った事があったが、規模はこれの一万分の一にも満たないだろう。そして空を見上げると、青ではなくて薄い緑色が支配していた。月も大きなものと小さなものが並んで二つ浮かんでいる。大きさは地球のそれの十倍以上ある。太陽がないこの空でも十分に明るかった。

「フッ。緑の波長がちょうど空で散乱しているのか。それに伴星を持つ月……。面白い。よし、作戦を開始する。トランスコード　００１！　ソウル・レイダー！！」

白い騎士のような姿になり、ミライはそう言って、前方を見据えた。凝らして見ると大勢の人影が交錯している。花弁が嵐のように舞っている。そう、ゴン太と暁が捕らわれた人達の救助の為に戦っていたのだ。だが二人とももうほとんど動いていない。ほぼ棒立ち状態で、他の隊員達も次々と薙ぎ伏せられていた。

「全隊員に通達！　第一部隊を援護せよ！」

スバル含む隊員達はすぐに、味方の元へ向って走り出した。皆一斉にバトルウィザードを繰り出す。その援護に気付いた暁達は傷だらけの顔で笑って見せた。その暁が指示を出していたウィザードはもう腕をもがれ、機能停止寸前だった。オックス・ファイアはスバル達の姿を確認すると、何かをやり遂げたように花の中へと沈みこんだ。ゴン太だけではない、ウィザードも隊員ももう既にほとんどが花をベッドにしていたのであった。

「ゴン太！　暁さん！」

スバルは二人のもとへ駆け寄ろうとしたが暁に制止された。

「こっちは危険だ。それにスバル……何故来た……？　お前は、もう……」

シドウは肩で息をしながら、スバルに問う。それに対しスバルはハンターを掲げるとシドウは一瞬驚いた顔を見せたがすぐにいつもの笑顔で笑ってみせる。

「お前、決めたんだな……？」

「うん……。見ててよ暁さん、……それにゴン太。僕の決意を……！」

スバルはポーチから認証カードを抜き取ると、ハンターのカードリーダーに噛ませる。するとハンターから電子音が聞こえてきた。

『トランスコード、ニンショウ。プレヤブルウィザード、トラッシ

ュ。コード　０３０　……オールコンプリート！　アクセス、スターダスト・ロックマン！！』

電子音のセキュリティ突破のコールが鳴り響くと、スバルの目の前に一体の白いウィザードが次第に構築されてきた。その姿はまさに白いウォーロックだった。スバルはその姿を見て込み上げてくるものを抑えつつ、形成されきったトラッシュに呼びかける。

「準備はいいかい？　――トラッシュ」

「……ハイ、スバル……サマ……」

起きてすぐのせいか言葉少なめにトラッシュはそう言いスバルの方へ向く。そして朱色の眼光を輝かした。小さく笑ってスバルは頷く。

「トランスコード　０３０！　スターダスト・ロックマン！！」

トラッシュとスバルが混ざり合う白い光りの中から現れたのは、青い流星の戦士のシルエットだった。花弁が舞い上がり、スバルの新しい力が姿を見せた。それは灰色のロックマンだった。星屑のように闇に溶けてしまいそうな灰色のアーマーとスーツに身を包み、フェイスマスクで顔のほとんどを隠すが青色のバイザーからは、ロックマンの持つ強い意志と優しさ、勇気が共存する瞳が覗いていた。

そしてロックマンはゆっくりとゴン太の方へ向って歩いて行き、変身も解除されてしまったゴン太を抱き起こす。

「ありがとう、ゴン太。君の勇気ちゃんと受け取ったよ」

そうゴン太に語りかけると、シドウにゴン太を預ける。そしてロックマンは全ての元凶へと駆け出す。そのロックマンが見上げる先

には、隊員とソウル・レイダーが交戦していた。ソウル・レイダーはなんとか攻撃をかわして薔薇の化け物に食らいついていたが隊員達は次々となぎ倒されている。

「ミライ君！」

「その姿……ロックマンか。すまないが、コイツを頼む。こいつが全ての誘拐事件の元凶だ」

ソウル・レイダーはそう言い薔薇の蔓を真っ二つに分断した。鮮血のように噴き出す電波情報をかいくぐり、何十本もの薔薇の蔓を沈めている。

「俺たちは、ここにいる負傷者を助け出さなければならない」

ソウル・レイダーの示す先にある薔薇には人間が絡め取られて咲いているようであった。死なないぎりぎりの所でこの化け物に栄養を奪われ続けているのだ。どうやらこれが薔薇の化け物に連れ去られた行方不明者の末路のようである。それが至る所に咲いてあるのだから始末に悪い。

そして少し奥の方にある花の階段の頂上から生える特大の薔薇の城に咲いていたのは、あろうことかルナであった。ルナは特別らしく、他の人たちよりも数倍高い所で厳重に捕らわれていた。ルナの顔色は血の気を感じさせないほど真っ白である。さらにルナの捕らわれている場所はウェーブロードがなく途中で切断されていた。いかに電波体であろうともアクセスする手段がない。

まずは、助けられるだけの人を早めに助け出すに越したことはないとミライは判断したらしい。ルナには悪いが手こずりそうな分、救出が遅れると思われる。

とにかく、ロックマンが薔薇の化け物の注意を引きつけておかなければ話にならない。

「わ、わかった。なんとかしてみる」
「頼む、奴の注意を引きつけておいてくれるだけでいいんだ。きついと思うが持ちこたえてくれ……！」

ソウル・レイダー達はその場をロックマンに託し、行方不明だった者の救助へと向かう。ロックマンは灰色の銃口を敵に向けて構える。注意を引きつけた。ミライ達が救出作業に専念できるように出来るだけ長く時間を稼がなければならなかった。

「僕が相手だ！」

薔薇の化け物がロックマンを見下ろす。赤い薔薇の花弁中心から女性のような姿の上半身が生えている。その女性はどこかユリ子の面影を落としていた。だがユリ子ではない声で化け物と化した物体が何か言っている。

「ウフフ……、アナタは？　ずいぶん小さな戦士さんね」
「僕は……ロックマンだ。スターダスト・ロックマンだ」

構えた銃口を下ろさずに言う。女の周りでうごめく鋭利な棘を有した蔓にも注意を傾け続けながら時間を稼ぐ。ロックマン自身もまともに戦ったのであれば、先のように一瞬で戦闘不能に追い込まれてしまう心配があったのだ。それだけは何としてでも避けねばならなかった。また屈すれば、もうルナやユリ子を助ける術はなくなる。
今はロックマンとして出来る事をしなければならない。

「あら、あなたが本当のロックマンでして？　あの牛の坊やじゃないとは思っていましたが……フフ、思ってたよりずいぶん可愛らしいのね」

女はまるで貴婦人のような笑い方をして、笑みで歪んだ口を隠す。

「委員長やおばさんを解放するんだ……！」

「……アナタは、大切なコレクションを赤の他人に捨てろと言われたら、捨てるのですか？　あり得ませんわね。美しきものを愛する美しい私には理解できません事よ」

ロックマンの言葉は届かない。

「人間は……モノなんかじゃ……モノなんかじゃないんだ！！　何でそれが分からないんだよ」

フェイスマスクのスターダスト・ロックマンの状態でもスバルの怒りの表情が見て取れる。

「ハァ……、こんなのが地球で最も腕の立つ戦士の正体とは……ね。興ざめですわ。ならば言わせてもらいましょう、貴方達人間だって集めたりするでしょう？　美しいものや興味を引き付けるもの……それらは、宝石であったり、もしかしたら生き物かもしれません。要するに、人間の生物の次元として集める事の許される者は低次元の物でしょうが、私達のような究極の恩恵を受けた神に等しき存在の前ではですね。人間など……興味と欲求の赴くがままに、私を満たすために存在しているのです」

ロックマンは確信した、言葉など通じる相手などではない、と。

ましてや、理解し合えることなどない。人間が蟻を意に介さないのと同じように、女は人間を意に介していなかった。悪という認識すらないのだ。生物としての隔たりが大きすぎる。

「何なんだ……コイツは。……許せない」
『スバルサマ……あの生命体とはアイいれるコトはないでしょう。任務の遂行を提案します』
バスターの手甲部分のトラッシュはやや感情のこもらない声で言った。
「分かってる。助けなきゃね……」
「助ける？　あのお嬢様の事かしら？　それとも……」
陰鬱な笑みと共に、女は豊満な胸に手を宛がう。すると胸の谷間の底が裂けて縦真一文字の裂傷のようなものが出来た。裂傷の周りはうっすらと赤らんでいるのが酷く嫌悪の増を促す。そして、水泡が割れるような音が鳴り始めるのだ。裂傷の間から、何かが捻り出される。造作もなく裂傷から垂れ下がっているのは大人の女だった。
ユリ子だ。
「なっ、オバサン……。こんな事って……」
ロックマンは思わず後ずさる。ロックマンの足に撫でられた花が小さく揺れる。同じようにロックマンも揺れていた――動揺を隠せない。自然と銃口が下を向く。
「信じられなくて？　私はこの人と一つになったのですわ。どうかしら美しいでしょ？」
女は自分の胸元から垂れ下がるユリ子を見下ろし怪しい笑顔を作る。当然だが、ロックマンはあの姿を美しいとは思えなかったようだ。軽い吐き気が襲い小さな悲鳴が漏れる。
依然ユリ子はぐったりとしている。意識があるのかは定かではな

いが、裸の上半身にねっとりとした液体が絡みついているので、それがさらに吐き気を誘う。

「うっ……」

「フフ、ちょっと子供には刺激が強すぎたかしら。御免なさいね？」

女が心にもないことを口から吐き出した。さらに女が何か言おうとしたのだが、それを誰かの声が遮ったのであった。それはユリ子だった。病的な姿になりながらも顔を上げロックマンをしっかりと見ていた。

「スバル君……よね。ゴメンなさい……私のせいでこんな事に……」

「オバサンっ！　今、助けるからねっ」

「いいの、私の事なんかほっといて、ルナを助けて……。あの子が……無事なら後は……」

ユリ子は笑っているのか泣いているのか分からない表情でスバルに語りかける。恐らく、彼女の覚悟は決まっていたのだろう。体は目も当てられない状態であったが、瞳だけはロックマンに強く語りかけている。

「分かりました……ルナちゃんは絶対に助けます。……そして、ルナちゃんからお母さんを奪わせやしません」

「スバル君……ありが……くっ……！」

ユリ子は苦痛の表情を浮かべる。女が礼も言わせないままユリ子の髪の毛を掴み上げた、はだけた髪が女の細い指に絡まる。

「あらあら、勝手に盛り上がってますわね……。ダメじゃない、勝手に喋っちゃ」

女が語尾に柔らかい怒気をはらませて言うと、ユリ子はやがて女の中へと再び招き入れられる。繊維の切れるような音が乱雑に鳴り響いたと思うと、ユリ子は姿を消してしまった。女は一段落と言った様子で再びロックマンに視線を送る。それに含まれているのは憐みの視線だった。含意するは、待たざる者への憐憫の情。

「アナタはまだ何も知らない子供ね。欲張って両方とも助けれるとでも？　地球にはこんな言葉があって『二兎を追うもの一兎をも得ず』……まるで今のアナタを言っているようですわ」

ロックマンは無言で再び銃口を敵に向ける。

「あぁ、悲しいですわ。私は若い命を摘み取らなければならないのね……。あぁ、アナタは子供だから現実を知らない、どうしようもない現実ってものを……淡い期待を砕かせてもらいますわ」

「僕は……、どうしようもない現実を知っている……だから戦うんだ……！　失わないために」

ロックマンはその為にここに立っている。それだけの為に。

「フフ、美しい精神ね。でもすぐに後悔することになるでしょう……アナタがロックマンであった事にね。――そう、この惑星『アリア』を支配するレギオンが一人『ヘラ・ローズガーデン』の手によって……！」

女が戦闘の意思を初めて見せた。辺りを薔薇の蔓が凶器となって暴れのたうつ。薔薇を従えるヘラ・ローズガーデンは女帝としての本性を現した。

『スバルサマ……、来ます！』
「行くよ、トラッシュ」

迫りくる自身の数倍はあろうかという体躯を誇る相手を目の前にしても、スバルは不思議と落ち着いていた。その隙のない構えは戦闘を離れて半年以上も経つ少年のものではない。いくら平和を願おうとも、少年は生まれながらに戦いの才を授かっていた。体に染みついて離れない、ロックマンであった部分が自分の命を守るために本能的に目を覚ましているのだ。足も震えず、頭もいつも以上に冴え渡る。左腕の武器が新たな相棒を宿し熱く脈打っているのをその身に感じているだろう。

ロックマンは左腕からエアディスプレイを展開する。戦闘の合図だ。

「スターダスト・ロックマン、ウェーブバトル、ライドオン！」

ロックマンはエアディスプレイからバトルカードを入力しつつ、軽いフットワークで一見かいくぐる隙間のない薔薇の鞭を危なげなく避ける。ロックマンはこの時、これならやれる、と思ったことだろう。

「メガクラスカード、ハイバリアブル！」

鞭の包囲網を抜けたロックマンは左腕を液体金属のような刀身の剣に変換して、鞭の壁へ切り込む。ロックマンが力を込めて地面を蹴るとピンクの花が弾かれたように舞い上がった。そして既に空中には剣を半身の胴体の影に隠し力を集中させているロックマンの姿

が映し出されている。

「レインソニック！」

振り抜かれた液体金属は一瞬、当てもなく秩序ない形を取るが、すぐに三日月を真似てヘラ・ローズガーデンに降りかかる。雨の様に細分化した刃は薔薇の蔓を数十本単位で切り落とした。だが切り落とした所から、景気良く新たな鞭が生成される。

それは、女帝を守るかのように傍らで絶え間なくうごめいていた。

「何て再生速度だ……」

「フフ……、私の薔薇を切り落とすだけの力はおありなのね……。生憎、切り花は趣味じゃなくってよ」

ヘラ・ローズガーデンは、腰元から伸びる巨大な花弁を蕾のようにして自分を包み込んだ。見た目はまるで、蕾を実らす巨大薔薇そのものである。そして嘘のように、乱暴だった鞭の群れは大人しくなる。

『……ナニヤラよく分かりませんが好機です。一気に畳みかけましょう』

「大丈夫なの？　だってあれはオバサンでもあるんじゃ」

『大丈夫です。分析した結果、むしろアノ電波体に支配され続けることの方が負担は大きいです。早急に奴とのリンクを切るべきと提案します』

トラッシュの顔を模した手甲は遠慮など無用だと伝えた。トラッシュの優秀な解析機能はじょじょに弱まるユリ子の生命反応を拾い上げたらしい。

「わかったよ。……グレイバスター！」

ロックマンはハイバリアブルから戻った灰色の武装『グレイバスター』より、エネルギー弾を撃ちだした。それも一発ではなく、何発もの弾を撃ち込む。途切れのない球体の群れが織りなす弾幕は蕾に、地震のような地面を揺らす轟音をたてながら真正面から被さる。すると衝撃で薔薇の蕾が小さく振れる。うっすらだが花弁の表面には衝撃の痕跡が黒く残っていた。微々たる損傷だが、ロックマンの攻撃がやっと届いた瞬間である。

「届いた！　けど……なんて固いんだ」

ロックマンはさらにバトルカードを追加入力する。今度は赤色のデータだ。

「ギガクラスカード、ビッグバンイーター！」

薔薇の蕾の上空に、巨大で邪悪な顔立ちをした重厚な兵器が電波の情報を物質へと変換しながら形成される。蕾の中からくぐもった声が聞こえる。

「アラ、随分と乱暴ですのね。少し本気を出しましょうか……『ワイル粒子』解放」

蕾の周囲に粉雪のようなものが舞い始める。薔薇を彩るイルミネーションな訳がなく、その粒子がやがてロックマンの脅威となって牙をむく。トラッシュは真っ先に異変に気付いたようだ。

『敵エネルギー反応が急激に跳ねあがりマシタ。信じられません、周波数域が異常です！』

トラッシュは危険を告げる。そしてちょうど形成されきった孤独な電波兵器は、常軌を逸脱した蕾に歯をむき出して急降下。目標を被り食らおうとする。だが電波兵器は蕾に触れる前に、一定の距離の所で分解されるように消滅してしまった。いくらバトルカードの擬似電波情報といっても、ＦＭ星が誇る最強最悪の電波兵器が歯どころか手も足も出せずに消え失せるこの事実は酷く深刻である。これでは文字通り歯が立たない。

「なんだ、さっきのは。バトルカードが打ち消された……」

ロックマンは目の前で、忙しく情報が錯綜しているバイザー越しに映る光景に息を呑んだ。

『どうやら、先程放出された粒子に原因があるようです。任意の物質に働きかけていると思ワレマス。恐らくは、運動法則に対する加減作用かと……』

「フフ、賢いですわね。大体そんな所ですわ。もっとも、この神の息吹に演繹的な証明を出来る訳はないでしょうけどね」

蕾が花開き、ヘラ・ローズガーデンが再び姿を現す。粉塵のようなものが、空間を充足させていった。すると次第にヘラ・ローズガーデンの体の縁が揺らぎだし幻影のような錯覚をもたらす。嫌な気配を一身に感じながらもロックマンは周波数変換をしウェーブロードに飛び乗る。上空からヘラ・ローズガーデンにグレイバスターを細かい狙いなど構わず乱射する。

「グレイバスター！」

何の音も轟かず弾という弾は虚空へと消えた。弾の辿り着くべき

はずの場所では女が悠然と構えているだけであった。

「くっ……！」

「フフ、素敵な力でしょう。日にそう何度も見れるものじゃないんですのよ？　流石に気付きますでしょ。あなた達より高位な存在である私に勝つ見込みなんて無いことに」

『私は情報分析にテッシマス。攻撃を続けてください』

ロックマンは様々な周波数での攻撃を再三加えるが、全てのバトルカードはヘラ・ローズガーデンに届かない。彼女からある一定の距離の所で無に帰ってしまう。まるでそこには見えない灼熱の鉄板があるかのようにロックマンからの干渉はすべて蒸気のように分解されてしまう。

「くっ、バトルカードもバスターも効かない……。飛び道具が届かないんじゃ、直接……」

『まって下さい。やはり、あのターゲットの近くには、電波に対する減衰作用が働いています。近づくのは危険です』

「クッ、どうすれば……」

ロックマンはバイザーの奥に落ちている二眼を細くしかめた。そして謎の粒子により本来以上の調子を取り戻した薔薇の鞭は、鋭敏に空気を裂く音を従えながら襲ってくる。顔を上げロックマンは後ろに跳び退き、地面にまで深く抉り返された花畑だった所を見送る。

「なっ……！　あんなに威力がっ」

『やはり、あの粒子は、運動の加減に関係すると思って間違いないでしょう』

「それは分かったけど、これじゃ手も足も出ないよ」

『分かってます。それならば、あの粒子の同調域にまで周波数の底

を上げれば……』

トラッシュの妙案か、手甲のライトが赤くぼやける。

「残念ながら、それは出来なくてよ？　その粒子は私達が定めた範囲の周波数にしか作用しませんの。まさか、その粒子の加算可能性をあなた達ごときが手の届く所に設定してるとお思い？　だとしたら……それは、愚かなことですわ」

ヘラ・ローズガーデンは傍らの蔓を手で撫であげながら、口を引きつらせて笑う。まさに余るほどの余裕がその体全体からワイル粒子のように溢れ返っていた。だがトラッシュはその余裕を感じ取ったこと承知の上で続けた。

『私は出来ないことは言わない主義デシテ。つまり可能性ならあります。スバルサマ、力添えを』

「えっ？」

『電磁換装をします。有体に言えばシンクロ率を上げるのです』

「で、出来るのそんな事が？」

『アナタなら出来ます。……シンクロ率を上げれば高周波数域を維持できるようになって、敵同様に高エネルギーを持つ電波体となる事が出来るのです。……もっとも、簡単な事ではアリマセンガ』

「君とならやれるさ、周波数変換と同じ要領だよね」

ロックマンは後ろに跳び退き、ヘラ・ローズガーデンから距離を取る。そして上空のウェーブロードに跳び上がり、ゆっくりと胸の流星のオブジェクトに手を宛がって意識を集中させた。ロックマンを縁取る輪郭が陽炎のように揺う。

「なにをごちゃごちゃやっているのかしら？　私の棘の雨を差し上

げますわよ」

蔓から鋭利な棘が勢いよく弾き飛ばされる。それは上空のロックマンへ軍隊のように数にものを言わせ畳みかける。

「バトルカード、バリア！」

ロックマンは自身の半径一メートルの所に包み込むようにして薄い膜を展開させた。棘は漏れる事なく、薄い膜に衝突するたびに粒子となって虚空へと消える。ヘラ・ローズガーデンにされたことを今度はロックマンがしてのけた。透かさず口元を小さく縛りロックマンはバスターを下に構え乾いた音を弾けさせる。ヘラ・ローズガーデンはこれといった表情を浮かべずに、蔓で迫りくる灰色の弾丸との間に壁を作る。

だが、蔓の繊維を千切り取るような音をたてて突き進む灰色の球体は止まらなく、かき消されもしない。とうとう太い大木を思わす緑の中に、目立つぽっかりとした穴が空いた。その穴の奥にはグレイバスターによって傷つけられたヘラ・ローズガーデンの顔が覗いていた。穴の縁から垂れる緑色の液体から切れ切れに挟むその表情は明らかな驚きを示していた。切れ長の目をこれでもかと言わんばかりに皿のようにする。整った並びの白色が半開きになった口から確認できる。

「よし、当たる……」

ロックマンは確かな手ごたえを感じ手を握り締める。しかし、すぐに片膝をついてしまった。ロックマンが苦しそうにウェーブロードに顔を落とすと手甲を模したトラッシュは言った。

『シンクロ率１７２パーセント――あの粒子の助けがあるといって

も、あれほどの敵と同じだけの周波数を保つのは負担が大きいデスネ。早目に決着をつけましょう、スバルサマ』

「う、うん……。守らなきゃいけないんだ、このくらいの苦しさ……」

ロックマンは立ち上がりヘラ・ローズガーデンに対し再び臨戦体勢をとる。ヘラ・ローズガーデンは傷ついた右頬をしきりにさすっている。

「私の顔に傷が……？　あの虫けらのような存在に触れられるなんて、私と同じ次元にあれがいるとでもいうの……？」

一人でぶつぶつと呟く彼女をロックマンが待つわけがなかった。

「バトルカード、キャノン、ハイキャノン、メガキャノン……」

ロックマンの入力したカードデータが左腕のエアディスプレイ上で一つのカードに変換される。

『ギャラクシーアドバンス「エクサキャノン」』

トラッシュがそう言うと、左腕は全ての色を反射する真っ白な砲台へと変化した。ロックマンは安定を期待して、しゃがみ込み両の足でしっかりと長い砲身を固定する。まるでスナイパーのような体勢を取りウェーブロードから狙いを定める。青いバイザー内を忙しなく動き回るカーソルが女を捉えた。

「許さなくてよ……、この美しい顔に傷を……」

わなわなとするもヘラ・ローズガーデンはようやくロックマンに

冷たい目線を送った。

「これでも喰らえっ！」

覚めるような白の一閃。だが、直撃する寸での所でヘラ・ローズガーデンは薙ぎ払うかのように手を大きく横に振る。閃光は女帝に恐れを生したように大きく横にそれて後方の一帯を消し炭にした。元花畑の特大のクレーターがロックマンの墓穴だと言わんとする。そして、相変わらずの目つきをロックマンに浴びせ、追い打つ言葉を浴びせる。

「許しませんわよ……！　アナタは地獄の苦しみを味わう事になるでしょうね……！」

怒気を帯びたヘラ・ローズガーデンは従える全ての蔓をヒステリックに地面へ叩きつけ花弁を空高く舞わせる。ロックマンを含めそこここに花弁が間欠泉のように沸いては舞い落ちる。視界は皆無。どこを見渡せど、赤や黄、青の原色達が挨拶をするだけで、地面が乱暴に慣らされているであろう轟音以外に他の情報を得ることはできなくなっていた。

「これじゃ、何も見えないよ」

ロックマンはキョロキョロと辺りを見渡す。

『敵の反応が消え……。！！　スバルサマ、右後方から来ます』

息もつかせぬ速さで、太さを除けば有刺鉄線と変わらない極太の蔓が花弁の壁から突き出す。マジックショーの如く、多数の蔓は花の棺桶に閉じ込められたロックマンを貫こうと襲いかかる。ロック

マンは身を翻しウェーブロードから落ちないようにしつつも、器用に致命傷を避け続けていた。

「おっと……！　わっ、と。ととっ……」

突き立てる蔓から後ろに高く跳び退いた瞬間、何物かがロックマンに影を落とす。

「えっ？」

そして突如として現れた蔓にロックマンは強烈に上から叩き斬られる。無邪気な子供がゴールテープを破るかのようにウェーブロードは為す術なく千切られロックマンは地面へと落下する。

「え……あっぁ……あっ！　う……くっ」

地面に叩きつけられ苦しむロックマンに蔓がのしかかる。鋭利な棘がロックマンの体を責め立てる、灰色のスーツを破りそこから鮮血のような情報が漏れだす。灰が黒に変わる。

『スバルサマ！　さらに来ます！』

「くっ……！　バトルカード……スーパーバリア」

スーパーバリアで遮断された矢の如き棘は、あっという間にのしかかる蔓とバリアをぼろぼろに痛めつけた。砕けた蔓をどけ、辛くもロックマンは立ち上がり辺りを見渡す。しかし相変わらず極彩色の壁がそそり立っているだけだ。

「はぁっ……はぁっ……、バトルカード、ハイパーキタカゼZ」

豪雨の如く降り叩く花弁を、団扇状になった左腕で煽ったところで焼け石に水である。そこに蔓がロックマンの脇腹めがけ突っ込んでくるが、団扇を剣に変換しそれを切り落とす。当然、切断面から勢いよく緑色の液体が吹き出しロックマンのバイザーにニ、三、水滴が付着する。

ロックマンは水滴を拭う、すると彼の目に入ったのは切断面から溢れ出る翡翠のような液体が次第に粘度を増し凝固。泥人形のような物が形作っている信じるに値しない光景であった。ロックマンはすぐさまグレイバスターを目の前の物体に叩きこむ。バスターは泥水を撥ねるような音を立てるが、人を形作る作業は止まらない。紅を乗せた口元が形成され、落ち着き払った声でロックマンに問いかける。

「フフ、もう限界かしら？」

「……」

グレイバスターが女の胸を撃ち砕く。すると女の半身は枯れたように茶色を帯び、崩れ粉塵となる。地響きが鳴るたびに粉塵は花弁の舞ずる場所へと誘われるように揺れ揺れて消えていく。

「偽物……」

囮を掴まされたロックマンは眉をしかめる、すると花の壁の向こうから女の声が聞こえてきた。素早くロックマンは首をその方向へ回す。

「フフ、哀れですわね……、そろそろ遊びを終わりにしましょうか。ロックマン、アナタはここで死ななきゃいけない運命でしてよ？さぁ、終焉へ」

不吉な言葉を述べると、ヘラ・ローズガーデンは地面を叩き起こすのを止めたのか、地響きは鳴りやんだ。先程まで乱雑に舞散らかっていた花弁は嘘のようにある一点に集中していく。ロックマンは拓けた視界の先にいるヘラ・ローズガーデンをようやく見つけた。

彼女の上空には竜巻が渦巻いている。その色は強欲にも全てを網羅し、惑星の緑色の空へ高く伸びている。

まるで惑星の悲鳴のような、大気を乱暴にかき混ぜる音がロックマンのヘッドギア越しにも届いただろう。

荒れた花畑の真ん中に君臨するヘラ・ローズガーデン。否、この惑星アリアに君臨する上位電波生命体ヘラ・ローズガーデン。暴力の塊となった植物の嵐を従え、ロックマンにその圧倒的な力を、在り平然と言った程度に示す。

巨人のかすかな挙動が意に介さず、蟻を踏み潰すのは良くあることだ。

「なんだ……あれ、空の雲が巻き込まれている……いや、食い破られたように千切れている……」

『スバルサマ……！　超超密度のエネルギーがアレに……！』

ロックマンは下唇を噛む。恐怖に怯えてもロックマンは引き下がれない。弱虫や心の弱さを言い訳にロックマンであるスバルは引き下がるわけにはいかなかった。小さなその背中に背負ったものは絶対に投げ出せない。投げ出さない。

「やれる……、ボクならやれる……！　やるんだ」

意志を嘲笑うように震えるスバルの右腕をトラッシュを宿す左腕がしっかりと抑え込む。そしてトラッシュは言った。

『うっ……くっ、……コ、コのくらいで……ヘコタレテンじゃ……

ねえぞ、スバル！　ガツンとやってヤロウゼ……！』
「えっ……？　今……」
ロックマンはトラッシュを見下ろす。
『……イ、今。私にプログラミングされていない何かが……正体のわからない何かが……スミマセン、こんな時に』
「……ありがとう、二人とも」
顔を上げロックマンはエアディスプレイからカードを読み込む。意志の強い眼が見据える先にいるのはヘラ・ローズガーデンだった。
「あら……向かって来るようですわね……。この力の象徴が見えないわけはないでしょうに……。不憫ね……、美しい花達に抱かれてお逝きなさい」
「バトルカード、ブレイクサーベル。……トラッシュ、今のシンクロ率は？」
『相手の周波数域に干渉できるギリギリの１３６パーセントです。ですが、大丈夫デス、きっと勝てマス』
「分かった。……よし、行くよっ」
ロックマンは周波数変換をし、上空のウェーブロードに飛び乗る。ヘラ・ローズガーデンに続くウェーブロードをスケーターの如く滑るように駆け抜ける。そうはさせぬと女の蔓の群れが行く手を阻むが、たちまちロックマンのブレイクサーベルで叩き伏せられる。拠り所を無くした宙を舞う蔓の棘がロックマンの頬を撫で、スバルの肌を綺麗に裂く。飛行機雲よろしく血の線を後方に置いてけぼりにし星屑は懸命に駆けていく。
ヘラ・ローズガーデンは迫りくるロックマンを確認すると、小さく頷き上空へ目をやった。そして手を天に掲げると、渦巻く嵐が巨

大な薔薇のオブジェクトを作った。

「貰ってくれて？　グレースローズタッチ」

ヘラ・ローズガーデンがそう言うと、オブジェクトはゆらりと均整を失い、その頂点に座す豪勢な色合いの薔薇の房がロックマンに向かってきた。その図は大蛇が獲物を捕食するかのようである。

「大きい……！　でも……、バトルカード！　スーパーアーマー、リュウエンザン！」

ロックマンは不退転のコーティングを自身のアーマーに施し、さらにブレイクサーベルの他に右腕に炎の剣を生成して嵐の中に突っ込む。

大蛇の中もとい、花弁が子細な刃となる嵐の中は、視界はおろか聴覚すらも役に立たない。意味不明の爆音がロックマンの心のわずかな隙から恐怖で満たそうとするだけである。ロックマンは恐怖に襲われる事はなかったが、嵐の中を狂ったように飛びまわる、惑星アリア特有なのか、女の仕組んだ気配りが原因なのか、綺麗な刃に徹し切った花弁に襲われていた。

ロックマンのアーマーが甲高い音をたて削られていく、ボディスーツに小さな赤い線が入っていく。しかし、スーパーアーマー効果でロックマンは怯みもせず、両の剣で道を切り開きつつ、前へ、ひたすら前へ進む。

「くっ、感覚がない」

『至近距離に敵がいます。もう少しデス』

ヘラ・ローズガーデンの前方にはただひたすらに花弁の嵐が舞っている。彼女にしてみれば、花畑でじゃれあうロックマンという少年を見届けるといった心境だろうか。その証拠にまじまじと死の嵐を観察し、ロックマンが花の寝床を受け入れるのを待っているように見える。女が微笑、それは不適だ。

「あら、もう死んじゃいまして？　まぁ、ロックマンはここで死ぬべきだから当然ですわね」

女の目の前の嵐の境界壁から花弁が勢いよく弾き飛ばされる。その花弁の運動は嵐の気流に反するものだった。ヘラ・ローズガーデンの視界にひらひらと舞う赤、黄やピンクの紙吹雪そして――人影。花弁を纏うその全体像からひと際目立つ銃口が、重く鈍く月明かりに照らされ、それを見つめる女の赤い瞳に灰色のエネルギーが集束していく様子が映し出される。

「喰らえ！　チャージショット！」

バスケットボールほどの球体が撃ち出される。しかし女は無尽蔵に生えてくる薔薇の蔓でそれを薙ぎ払い、自身の腰元にある巨大な薔薇の花弁を手裏剣の要領でロックマンに飛ばす。たちまちロックマンの中心を通り過ぎた薔薇の刃は、彼を上半分と下半分として綺麗に分けた。

「奇襲のつもりでして？　つまらないですわ」

「バトルカード、リュウエンザン！」

鼻で笑っていたヘラ・ローズガーデンの頭上に炎の刀身が振り下ろされる。彼女の目の前のロックマンは白煙を帯び、葉っぱを乗せ

た狸のぬいぐるみへと姿を変えていた。そして、反射的に蔓が主人を守ろうと炎刃との間に割って入るが焼き切られ、身を捩るも女は肩からわき腹にまで及ぶ一本の裂傷を負った。

ヘラ・ローズガーデンは傷口を凝視し、滴る緑の液体電波で手を染めている。

「あっ、くっ……！　な、なな……んて、こと……！」

ロックマンは渾身の一撃を叩きこむと地面に着地し、膝から砕け四つん這いになる。ロックマンのアーマーはぼろぼろになって光沢を失い、ボディスーツは赤茶色の楕円で一杯になっていた。当に肉を切らせて、骨を断つと言った所か。

「はぁ……！　はぁ……！　よし、これは効いたはず」

息も絶え絶え、ロックマンは頭上で苦しむヘラ・ローズガーデンを見上げる。

ロックマンの目の前にある女の上半身へと続く薔薇の蔓の束は忙しなくうごめき安定しない。女はふらつく土台に右へ左へと奔走していた。そして、落ち着きなく病的に揺らぐ体の女は憎悪をたぎらせ充血しきった目でロックマンを睨みつける。

「く……あっああ、アナタは危険ですわ……！　宇宙に蔓延る癌だけでなく、この私の美をことごとく汚すのね！！　ロックマン……！！　もう一度言うわ！　アナタは危険だわ！　さっさと死ね！」

先の手裏剣がロックマンに再び降りかかる。今度はその数にして五枚。疲労困憊、満身創痍、地面に這いつくばるロックマンに成す術はない。

『シンクロ率３０パーセントを下回……！　いけマセン！　スバルサマ！』
「動けよ……僕」
もう、動けないのか。ロックマンはゆっくりと地面に突っ伏した。
「ハハハ！　終わりよ、ロックマン！　星屑らしく刻んであげるわよ！　アハハハハッハハハハハッハ！！」
何かが吹っ切れたようにヘラ・ローズガーデンはヒステリックに笑いあげる。その高音特大の奇声は美しいこの星にはそぐわない。ましてや自らを美の象徴だと言わんとする女から発せられているのだから皮肉を絵に描いたようなものだ。
惑星アリア一帯が高笑いに通過された気さえする。
しかし、そんな絶望的な状況にもかかわらずロックマンはまだ諦めずに、視線の遠い先にいる捕らわれたルナを助けようと手を伸ばしていた。だが、その傷だらけになった手につかむのは、乾いた惑星の空気と幻想的な景色だけで、ルナ本人を掴むことは決してない。
「委員長……！　く……そう」
異常な回転数の、薔薇の様相を成した切断機はロックマンを今度こそは、と分断にかかる。スバルはまだ、ルナに手をさし伸ばしている。一点を定めない、今にも壊れそうな指先を少しでもルナに近づけようと、醜く情けなくとも這いずり進む。
だが、もうそれさえも許されないのだろう。彼にも空気を切り裂き、次に自分を切り裂くその異音が聞こえているはずだ。
そして、粘っこい水が弾け飛ぶような生理的な嫌悪を誘う音が鳴り響く。

「ブラッディ・アスタリスク！」

聞き覚えのある声と共に白い影が一閃、二閃と瞬く。張り巡らされたピアノ線のような残像がロックマンの周りに浮き上がる。そして、残影が消えると手裏剣はアスタリスクをなぞったように八方向に分断された。

それは一瞬の出来事だった。

「え……？」

ロックマンは顔に落ちてきた薔薇の破片を手にとっても何が起きたのか分からずに茫然としている。だがすぐに、目の前で佇む電波人間が誰なのか分かったようで顔に生気が戻る。

「良く時間を稼いでくれたな、星河」

「ミライ君……」

「行方不明者全員の安全を確保した。……お前のおかげだ、ロックマン」

「はは……、良かった……ホントに良かった」

ロックマンはほっとしたように胸をなでおろした。膝下で弱々しく安堵の表情を浮かべているロックマンを見てソウル・レイダーはヘラ・ローズガーデンを指差して言う。

「ずいぶんやられたな。後は俺に任せろ」

そう言い残してソウル・レイダーは一瞬にしてロックマンの目の前から消えて、ヘラ・ローズガーデンの懐に潜り込んだ。ヘラ・ローズガーデンは引きつって美しさに欠けるその顔を、至近距離で剣

を突き立てるソウル・レイダーに向けて悪態を吐く。

「アナタは何者かしら？　ほんとに腹立たしいわ！　小蠅の分際で……！　消し去ってあげるわ！」

「俺は貴様を連続無差別誘拐犯としてデリートする者だ」

「寝言を……！　地球の規範で私達を律するとでも？」

「そう言っているのさ！」

ソウル・レイダーは得意の高速移動術でヘラ・ローズガーデンの後ろに回り込む。

「速いけど……甘いわ！」

ヘラ・ローズガーデンの蔓が剣を振りかぶるソウル・レイダーを薙ぎ払った。だが、そのソウル・レイダーは突如として爆発し、爆心点から多量の小剣を四散させ女に奇襲を加える。しかし、それでもなお、薔薇の蔓は、自動的に小剣を全て払い落して主を守る。

「フッ、なるほどな……、ロックマンに大分消耗させられているな？　傷を庇う余剰動作が見られるよ」

「なっ……！」

小剣へ注意を注いだ所の女の隙を突いたのだろう、ヘラ・ローズガーデンの周りのウェーブロードにはソウル・レイダーの残像が数十体、女を取り囲むようにして並んでいた。全員が全員、彼の特徴である二刀流の構えを見せている。三六〇度どこをとっても隙がない。

「喰らえ、アラウンド・アスタリスク！」

ヘラ・ローズガーデンに向かってまるで星印を描く残像が目標に残したのはおびただしい数の斬撃の跡であった。ヘラ・ローズガーデンは堪らず悲鳴をあげる。

「ギャアアア！　こ、このガキィ……！」

「……異常に固いな。この散開している粒子が原因か。レイダー分かるか？」

『詳細な特性まではわかりかねますが、恐らく電波体に作用してあの敵のただでさえ高いエネルギーの増幅を担っていると思います』

「フッ、まさに夢の物質という訳か……。どうりで体が軽いわけだ。……決めるぞ、レイダー！」

『了解』

ソウル・レイダーは怯むヘラ・ローズガーデンに斬りかかる。その圧倒的な手数で見る見るうちに女の従える蔓の数を減らしていく。この状況を見るにソウル・レイダーが終始ペースを掴んでいるように見えた。

「スゴイや、ミライ君」

スバルが感嘆するも、自身で高位な生物だと名乗るヘラ・ローズガーデンの底が知れるわけではなく、くしくもソウル・レイダーは侵略者の怒りを買ってしまった。

「この……！　舐めやがってクソガキがぁっ！！　ワイル粒子最大開放！」

吹雪のように白い暴風雨と化した粉塵がソウル・レイダーの周りを取り囲む。そして、さっきまで機敏に剣術を披露していたソウル・レイダーの動き鈍くなる。さらに、ヘラ・ローズガーデンが顎を上

に軽くしゃくると、ウェーブロードからソウル・レイダーが宙高く吊り上げられた。

「くっ……！　何だ、体の自由が利かない」

『周りに張り付いた、超過荷電粒子より電波人間への強力なジャミングを受けています』

まるでミイラのように白いものに覆い隠されたソウル・レイダーは為す術なく空中に浮かべさせられている。

「アハっ！　かなり調子に乗り過ぎた様ね！！　食らいなさいっ、ワイル・バン！」

次の瞬間、ソウル・レイダーを包んでいた白い粒子の拘束具が大爆発を起こした。爆発は凄まじく緑色の空を一瞬にして白く照らし出した。ロックマンはおろか、行方不明者を地球へと運び出す作業に専念していたはずの隊員達の二眼さえも奪った。誰もかしも、信じられないと言った表情を浮かべている。

花火にしては、色合いに趣が感じられずやたらと破壊的な轟音がソウル・レイダーの身の安全を保証するのに警鐘を鳴らすのだ。

「かはっ……！」

ミライが肺に溜まった空気を吐き出す。

『電波情ジジッ……報損害！　生体電……ジジッ波情報破壊率イエローゾーン！　危険です、ミ……ライ様』

砕けた白いアーマーが示すとおり、ダメージが深刻である。レイダーの内部警報装置も停止寸前である事が窺えた。

だが、それはヘラ・ローズガーデンとて例外ではなかったようだ。胸元を抑えて激しく、肩を上下させている。

「くっ……ワイル粒子の散布量が限界値を変えたみたいね……。地球の虫にこんなに手間をかけさせられるなんて……」

ヘラ・ローズガーデンは先程から常に散布し続けていた白い粒子の発生を中断し、前方の荒地となったところでぐったりとしているソウル・レイダーと彼に寄り添うロックマンを見下ろして呟いた。

「フ……、もうワイル粒子がなくてもいいようね。後は虫の息の低次元電波人間が二人。それにのこる雑魚など問題ではないわ……。また、美しい人間を集めて私の美を……フフフ」

ヘラ・ローズガーデンが苦戦しながらも確実に勝利への実感を感じているのとは対照的に、雑巾のようになったソウル・レイダーの横で必死に呼びかける、また同じ位ぼろぼろのロックマンの姿があった。

さらに慌ただしく、サテラポリスの救護班も集まりだし、事態の雲行きが地球人側に対して怪しくなってきた。

「大丈夫!?　ミライ君?」

ロックマンはミライに呼びかける。

「……うっ、問題……ない。フフ、とんでもないものを敵も隠し持ってたな……。レイダー損傷率は?」

『軽くはないですが……、任務続行に問題はありません』

「よし、ならいい。行くぞ」

ソウル・レイダーはゆっくりと立ち上がる。そんなミライに対しロックマンは心配する以上に驚きを隠せない。

「ミライ君、大丈夫なの？　体は……」

「……ああ、俺は体が丈夫でね……自分の心配でもしてるんだな」

ソウル・レイダーは腰に掛けた剣に手を伸ばす。すると、ロックマンも立ちあがる。

「僕も戦うよ」

ソウル・レイダーの隣に並んでロックマンは赤いバイザーの奥にあるミライの瞳を見つめて言った。ソウル・レイダーはヘラ・ローズガーデンに向き直るとロックマンに返す。

「フッ……行くぞ」

未だなお食らいついてくる二人の電波人間にヘラ・ローズガーデンは、いい加減嫌気がさしたように片目をしかめ、溜め息を吐く。

「全く地球人は愚かだわ！　身の丈も知らないで強なる欲望に身を任せて……そして滅びるのよ……自身らの愚かしさにね。もう、いい加減にお死になさい。ニードルシャワー！」

ヘラ・ローズガーデンの残り少なくなった蔓から鋭利な棘がさながらミサイルポッドのようになってロックマン達に襲いかかる。

「！！　しまった……！　後ろには、救護班の人達が……！」

「チッ！　星河、撃ち落とすぞ」

バトルウィザードをデリートされた隊員達に身を守る手段はない。ロックマンとソウル・レイダーは降りかかる弾幕を撃ち落とし、斬り崩し凌ぎ切る他はなかった。だが、非情にも今回の弾丸の雨は弾切れというものを知らないらしく、一向に収まる気配がない。

「クッ……！　ここにきて数が多い。暁さん！　残った隊員達と行方不明者を連れて此処から離れるように命令してください！　俺たちが何とか持ちこたえている間に……早く！」

ソウルレイダーは後方のシドウに乱暴にそう言い伝える。

「くっ、スマン。総員退避！　ロックマンとソウル・レイダーの邪魔にならない所まで退避だ」

残った隊員達はすぐさま例の黒い穴の場所まで退避しだした。

「あらあら！　上手くあのゴミどもを逃がしたみたいね！　でも安心していいわ。あなた達のすぐ後にあのゴミどもをあなた達の所に送ってあげるわね！　ま、せいぜいそうならないように必死に耐えて御覧なさい！」

さらに勢いを増した弾丸の雨が容赦なく降り続ける。ヘラ・ローズガーデンは既に虫の息の二人が息絶えるまで攻撃をやめる気はないだろう。この女の本性を垣間見せた残虐なる情熱がそう思わせてならないのである。

「うっ、このままじゃ埒が明かないよ」

「チッ、体のダメージがなければ……！」

いつその内の一撃を貰ってもおかしくない状況の中で、その弾丸

の雨を何とか二人は掻い潜っている。そんな場面にして、ロックマンのヘッドギアに内蔵された通信マイクがある男の声を受信した。

『スバ……聞こ……、……バル君……聞こえるかい？』

「天地……さん!?　どうして通信が……！」

『良かった！　繋がった。僕たちもこの星に潜入したんだ。今助けが来るからそれまで何とか耐えてくれ』

「助けが？　有難うございます！」

『それ……と最後にス……ル君専用のバ……カードを送っ……』

聴き取ること困難な量のノイズがマイクに入る。

「……通信が切れたか……」

何とか耐えしのんでいるロックマンの左腕にあるハンターには、ある一枚のギガクラスカードが天地よりインストールされていた。

「ミライ君！　助けが来るって」

「どうやらそのようだな」

ロックマンの朗報に対しソウル・レイダーは渾身の力を込めた巨大な斬撃を繰り出して弾丸を蹴散らす。そう、たった今来た助っ人に道を拓くためにやったのだ。

「前座は整えたぞ……」

いつの間にかロックマンとソウル・レイダーの後ろには大量の武装集団が待機していた。その中の一人の緑色の髪の少年がハンターを取り出しカードを切る。

「行きます！　トランスコード０２３　ジェミニ・スパーク！」
「なんなのあれ！　ゾロゾロと鬱陶しい！」

ヘラ・ローズガーデンは二体一組の電波人間に弾丸を浴びせる。

「今回は言う事聞いてよ、ジェミニ！」
「分かってるよ」

そう確認し合うと二人は背中合わせに重なり合い、肥大化した黄金の腕を前方の敵に突きつける。

『ジェミニ・サンダー！！』

双子の雷神の双手から雷鳴轟き、疾風迅雷の猛き雷が棘の弾丸を焦がし落としその先のヘラ・ローズガーデンに直撃する。ヘラ・ローズガーデンはエビのように体を反りかえらせて体を弛緩させる。

「あっあああ、体が痺れ……」
「今です皆さん！」

白い方のジェミニ・スパークが後ろの隊員達に合図を送る。薔薇の木の上で苦しみもがく女に、総員はマテリアルショットバスターを構える。

総員の指揮を執る五陽田が腕を前に差し出し目標を示し、空気はち切れんばかりの一喝と共に銃撃の合図を送る。

「撃ち方始めー！！」

サテラポリスの放つ電波エネルギーの弾丸が何千発とヘラ・ローズガーデンの全身へ叩きこまれる。ヘラ・ローズガーデンに対し、

扇状に展開した隊員達の提げる銃口は超満員のライブ会場のカメラフラッシュの如く常に爆発し閃光している。

「クッ……！　む、虫けらどもが……！　あああぁぁっ！！」

ついに発狂しだしたヘラ・ローズガーデンに五陽田が最終電波兵器を取り出す。

「人間を舐めるなよ。マテリアライズ！　Ｚイレイザー！」

五陽田の前には固定型砲台の紫色の金属の塊が生成された。重厚無骨なそれは圧倒的な存在感を辺りに知らしめている。その極太の銃口に見る見るうちに紫色の反電波エネルギーが溜まっていく。辺りの空間が不安定になって歪んだ重力線に沿って電子の尾が光を発する。

「エネルギー充填１２０パーセント！　御用だー！！」

Ｚイレイザーの放った小さなプラズマ天体がヘラ・ローズガーデンに接触すると大きく苦しみだし美とは対極の醜悪な表情を浮かべる。口元から粘液を垂れ流し、体が白と紫を交互に繰り返しながら発光している。

「電波を拒絶する、サテラポリス究極の兵器だ。思い知ったか！　さっさと、憑りついた人間の体を返すんだ！」

「グァッ！　苦しい！　あぐあ！」

反電波物質に当てられたヘラ・ローズガーデンの体は次第にぼやけて行き、輪郭がぶれだしやがて電波体と人間に分解され出す。

そして、ずるりとヘラから解放された人間の女はウェーブロード

に引っ掛かるわけもなく地面に向かって落ちていく。白いジェミニ・スパークはその女性が地面に激突する前に彼女を腕に納めると、ロックマンとソウル・レイダーに叫んだ。

「今だ！　スバル君！　彩道君！　今がチャンスだよ。アイツをデリートするんだ！！」

五陽田も続く。

「ロックマン！　さっき天地君からバトルカードを貰ったはずだ。それで決めるんだ！」

サテラポリス全隊員が口々にロックマンとソウル・レイダーに全てを託す意志を示した。

「やれ！　ロックマン！」
「見せつけてください隊長！！」
「ありがとう！　ロックマン、最後に決めてくれ！」
「うちの娘を助けてくれて感謝している！！　思いっきりやってくれ！　二人とも！」
「行け！　二人の英雄！！」

全員の思いを乗せロックマンとソウル・レイダーは向かい合う。

「やれるな？」
「うん！　委員長を助けて帰ろう！」
「フッ、あの口うるさいクラス委員長か……、よし！　行くぞ！」

二人はほぼ浮遊霊と見た目は変わらなくなったヘラの浮かぶウェーブロードに昇る。ヘラは不規則に体の周りに電磁波を発生させな

がら無機質な目を二人に向ける。もはや美など何もない。

『ちっっくしょおぉおおがぁぁー！！　こんな糞みたいな民族に、最高の生命体である私がこんな事にぃ……！！　クッソ、クソクソクソガキがー！！』

全ての力を削ぎ落とされた、醜なる電波体に対し二人はバトルカードをハンターに読み込ませる。

「インストール、ソウル・オブ・レイド、ソードファイター」
「バトルカード、コスモバスター」

レイダーとトラッシュがカードデータを読み上げる。

『バトルカード、ソウル・オブ・レイド、ソードファイター、コスモバスター……ギャラクシーアドバンス、「Ｄｏｕｂｌｅ　Ｈｅｒｏ、」』

ロックマンの左腕とソウル・レイダーの右腕に薄緑と淡い赤の混じった光が煌々と集まっていく。その輝きは辺りを強く照らし出す。

『ダブルヒーロー！！』

そう二人は声を合せると、溜めたエネルギーを一気に爆発させた。目の前の電波体に有りっ丈の全てを流し込む、撃ちこむ、斬り刻む。ロックマンの限界を超えたラピッドと威力を誇るチャージショットを途切れることなく撃ちこみ続ける。ソウル・レイダーの強く鋭すぎる斬撃は目標のありとあらゆる領域に深く侵入していく。

魂の爆発を一身に受けるヘラは断末魔をあげた。

『グアアアッァアアア！！　この私が地球人などにぃぃぃぃ！　あり得ない、あり得ない！！　フファファハハハ、でも、でも！　この私を倒したって、ロックマン！　お前がこの運命を乗り越えたって……第二第三の……オンが地……を宇……を審……す……』

ヘラに引導を渡す。

「これで終わりだ！！」

天高くにまで及ぶ電波エネルギーを最後の一撃に込め、それを貰ったヘラは眩い光を発しながら惑星の空へと消えていく。

『クッソオォオォオ！　ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……』

ヘラが消えた事により、辺りに点在していた薔薇の木は粒子となって主人同様に空へと消えていった。

勿論ルナの薔薇の木も例外ではなかった。

「おわったな。……おっと星河、最後の仕事だ」

「うん」

彼女を締めあげていた薔薇の木は無に回帰し支えを失ったルナは地面に誘われるように落ちていく。点々と白い粒子に絡まれたワンピースを纏う少女を、ウェーブロードから跳んでロックマンはしっかりと抱きかかえた。重力に身を任せつつもロックマンはルナの顔を覗き込む。

「良かった、どこも傷がついていない」

ロックマンはルナの綺麗な白い肌に傷がなく安心したようで全身

の緊張を解く。するとルナはゆっくりと目を覚ました。はっきりとしない意識の中でスバルにルナは再び問いかける。

「う、うーん……アナタは？」
「僕は……ロックマン」

ルナは何かを思い出したかのように小さく笑う。

「フフ、確か前にも同じ事聞いたわよね？」
「そうだったけ？」
「うん、そうよ。ありがとうロックマン様」

ルナは少し照れたようにして、目を閉じてこう続けた。

「信じてたよ。スバル君」

ｗｗｒ—００：新しい家族

激しい戦闘を終え、ようやくスバル達は地球の大地に降り立った。少しの間だけしか離れていないのにもかかわらず、とても懐かしいもの感じ、生還した全員がそれを噛み締めていたことは想像にたやすい。たとえそこが、この殺風景な諸島においても例外ではないのである。

疲れ果てた人が安堵するその場所には、黒い穴の外で不安そうに待っていた男性が一人いた。その男性こととナルオは、ユリ子とルナを見つけると、駆け寄って抱きしめた。もう二度と離さない、といった風にその男からは愛情が溢れ出ている。この家族の未来は明るいことだろう。心配することはもう何もない。

スバルはその様子を確かめると、優しい笑顔を浮かべる。ロックマンの持つ勇敢な表情とはまた違ったものだ。この少年の本当の姿は、恐らく優しい雰囲気を持つこちらの方だろうと思わせる。

スバルは空を見上げた。その視線の先には、バミューダ諸島にしては珍しく、抜けるような青空が出迎えてくれている。

「やったよ、僕。父さん、ロック」

眼前に広がる空の向こう、遠く広大な宇宙を彷徨う父と親友にスバルは報告した。その表情は負の要素が立ち入ることさえ気後れす

る程の清々しいものである。そしてスバルの元にも大切な人達が駆け寄ってくる。その姿を確認し、安心した表情を見せるスバル。そんな彼は、体中を傷だらけにしながらも、最後まで諦めず戦い抜き、そうして勝ちとった。

そして母親の胸に抱かれ、もう力の入らなくなった全身を任せると深い眠りに就く。傍らのミソラは大粒の宝石を零しながら、その母子を祝福するように崩れた笑顔を浮かべて眺めていた。ミソラもスバルを抱きしめて、彼を感じていたい筈だが、それだけの欲求でこの親子の邪魔をする理由にはならない。そして、その口からは自然と、彼に対する感謝、そして安らかな休息を願う言葉が出てくる。

「ありがとう、スバル君。そして、おかえりなさい」

空もスバル達を祝福するかのように、その場にいる人々を暖かな日差しで優しく包み込む。

これからテレビを賑やかせることになるであろうこの事件は、勇気あるサテラポリスの隊員達と一人の少年が解決に導いた。しかし、世の人々はロックマンが事件を解決した事には恐らくまだ気が付かないだろう。だが、確かにロックマンはここにいる。数は少なくても勇気を貰った人がいる。彼のやったことの意味はそこにある。

帰ってきた星屑の戦士スターダスト・ロックマン。千切られるも、再び決意を固めた少年の心とそのウィザードが成す戦士に近い将来、また新たなる試練が来るであろう。今は眠るスバルは気が付かなくとも、試練という名の運命はまたやってくる。その小休止と言いたげに高い空は、全てを出し切ったスバルを見守る。

太陽が暖かい。

同刻。とある場所で、また一つの物語が産声をあげていた。

そこはスバル達が安寧の一時を過ごす空の向こう側の、さらに気が遠くなるほどの外宇宙。辺りに何もない、真っ黒なその世界で、さらにそれが顕著なブラックホールの中。裏の電波世界であるノイズウェーブが繋ぐのは、深淵の世界。だれも足を踏み入れたことのない世界。吸い込まれた物質が情報として蓄えられているこの空間は言わばサーバーのようになっている。改めると、ブラックホールサーバーという名が相応しいだろう。そのブラックホールサーバーは、どこもかしこも真っ暗で真っ黒だ。殆どノイズウェーブと変わらないほどの損傷、劣化を受けたウェーブロードがブラックホールの中を走っているのみである。殺伐とした世界が広がる。背景や景色を楽しむ余地はない。

そこでは物質はおろか電波でさえ、その本来の性質を保つのが困難であるのだ。分解された情報が錯綜するその空間で、ある二体の電波体が向かい合っていた。その内の一体は電波人間である。

黒い電波人間と、白く輝くような眩しさを放つ、ブラックホールとは対照的な電波体が何か言葉を交わし出した。狐目で青い肌をした電波体が口を開く。彼の背中には四枚の、羽と思しき神々しい光を放つ板が浮かんでいた。装甲服のような衣装の白色も相まって、まさしく彼は新星のようであった。宇宙で非常に明るく、ひと際目を引く存在のそれである。

その電波体の口調は穏やかそのものであった。そしてこう言う。

「おや？　あなたがここにたどり着いてしまいましたか。フム、予感では他の電波人間が来ると思っていたのに」

白い電波体は一考する。他の電波人間とは誰を指すのかは知る余地がない。それこそ知りえるのは、神とこの電波体だけであろう。

「お前がこのブラックホールサーバーの管理人、シリウスだな」

白髪を逆立てた髪型の、スバルと同い年位の容姿を持つ電波人間はシリウスを睨みつける。その電波人間は、ブラックホールサーバーの空間と同じ黒で全身を包んでいた。内面に秘めた、他者を拒む孤高の精神を象徴したかのような色である。そして四肢に施された赤い突起物はまるで近づく者を拒むかのように余るほど鋭利であった。

睨みつける、紫のバイザーに落ちている真紅の瞳は冷たく、そして冷めきっている。慣れ合いを嫌悪する孤高の者だけが持つ目だ。

構わずシリウスは言葉を続ける。

「まあ、いいでしょう。アナタでも我慢しますよ。フフ、コレクションにするには少し黒すぎますけどね」

シリウスは狐目をより細くして笑う。

「俺の話を聞け」

「安心してください。コレクションにするんですから、傷は付けませんよ」

「……馬鹿にしているのか？」

「フフ、楽しみですね。どこの領域を確保するか。頭を悩ませますよ」

シリウスは黒い電波人間の言うことなど耳に入っていない様子だ。自分の思うがままに存在している。傍若無人。

「コイツ……」

苛立ちを覚えた黒い電波人間は、手を黒一色が座す天に伸ばす。

手の平に青い稲妻のような反応線が走って、儀式に使う儀礼用型の剣が構成されていく。刀身はそこらじゅうに派生させた刃がさざ波のように反り返っていた。それが作る刀身を横から見るとまるで人の顔をしているかのようであった。

「来い！　ラプラス！」

『ウ……ア……』

どうやら剣は電波生命体のようで、言葉とは到底言えない、うめき声に似た音を返す。そして黒い電波人間の手に収まった。それをシリウスに突き出す。ごつい剣を突き付けられたシリウスは不思議そうに首を傾げた。黒い電波人間はシリウスの心臓部を剣の切っ先で捉えて、最終警告をする。

「どうやら、頭が悪いようだな。だが、貴様の持っている『ムーメタル』を渡せば命だけは見逃してやる」

「そうだ。あそこのエリアにはスペースが空いていましたね。これで領域の問題はなくなりました」

黒い電波人間は舌打ちをした。シリウスは我が儘だった。

「チッ、本物の馬鹿だったか……！　いいだろう、力尽くで聞きだしてやる」

黒い電波人間はノイズで荒れ放題のブラックホールサーバーの黒く変色したウェーブロードを蹴り、シリウスに斬りかかった。ぼろぼろのウェーブロードは、黒い電波人間の踏み込みに耐えきれず砕け散った。足の面積分の穴が空いた。

そして大きく剣を振り上げ、必殺の一撃を繰り出す。ただの単純な思いっきり剣を振り下ろす攻撃だ。単純な分、破壊力も単純に高

い。

「ブライブレイク！！」

衝撃とともにシリウスのいた黒い電波の足場は抉り返される。その足場のなくなった空間に落ちてしまうと二度と帰っては来れないだろう。落ちてしまったが最期、ブラックホールサーバーの情報の一つとなってしまうのだ。それを底知れぬ暗黒が意味している。そして、抉り返された所からシリウスは消えてしまった。

「チッ、ブラックホールの底に呑みこまれたか」

また舌打ちだ。しかし、下の方向からシリウスの声が黒い電波人間に語りかけてきた。それは、やっと黒い電波人間の存在に気付いた証拠でもある。

「驚きましたよ。いきなり斬りかかってくるんですから。フフ、礼儀の知らない人だ。あなた、名前は？」

シリウスは下の空間で、自分で作ったらしい銀色の足場に乗っていた。どうやら彼はブラックホールサーバー内でも足場には困らないようだ。流石はこのサーバーの管理人と言ったところである。

「貴様に名乗る気はない」

黒い電波人間はそう言い捨てると、紫色をした炎を思わせる右腕の暗黒闘気から拳型の弾丸を発生させる。弾丸の大群は孤島にいるシリウスを強襲する。

「仕方ないですね……。じゃあ、検索しますか」

シリウスは、前面に銀色のタッチボードみたいなものを扇形に生成して、ブラックホールサーバー内を検索し始めた。彼は意識してないようだが、ぬかりなく背中の発光板は主人から分離された。そして板は小型戦闘機のようになって拳を迎撃する。小型戦闘機の先端からは白いレーザーが照射される。板は自立型の兵器なのだ。

シリウスの小型戦闘機が、紫色のエネルギーの拳を全て迎撃し終わると、戦闘機の主人はにっこりと笑い黒い電波体を見上げる。

「見つけましょ。なるほど、ムー人の末裔でソロと言い、変身したその姿はブライと言うんですね」

「……伊達にブラックホールサーバーの管理人ではないか」

シリウスの狐目から覗く小さな瞳に興味の念が湧き起った。

「フフ、アナタはムー人ですか。ムー人と言えば……フッフッフッ」

怪しげに笑い出す。

「何が可笑しい……？」

下に向かって、ブライはまたも剣を突き付ける。

「失礼……。少し思う所がありましてね。しかしどちらにしてもムーメタルと情報が欲しければ私を討ち倒して見ることですね」

「いいだろう。すぐに負けを認めさせてやる」

シリウスはブライの返答に満足したように頷くと、ブライブレイクによって抉り取られた電波空間を修復し始めた。銀のタッチボードの上を、指がリズム良く跳ねまわる。すると損傷部分にブラック

ホールサーバー内から取り寄せた、代替情報が組み込まれていく。

「フフ、何千年ぶりのお客さんでしょうか。久しぶりの来客に少し、楽しくなってきましたよ。まずは汚れた私の部屋を直さなければ……」

ブライは修復され始めた電波空間の異変にすぐに気が付いた。修復以上の事が起こっているのだ。まさに異常事態だ。

「！！　何だこれは……！」

驚いたことにブラックホールサーバー内の風景が様変わりしていくのだ。先程まで、味気なさすぎる黒で塗り潰されていた空間は三六〇度、何処をとっても映画館のスクリーンの如く何かの映像を映し出していた。距離感を掴めない地平線の向こうにある、それぞれのスクリーンが映し出すのは、激しく爆発し炎が揺らめく画や、恐竜のような生物が闊歩していく画、謎の宇宙人の画が映し出されれば、地球人のような人間の進化の過程まで映し出されていた。それぞれのスクリーンが、それぞれのドラマを上映している。ブラックホールサーバーが今までに溜めてきた情報がこの空間に溢れ返っているのだ。宇宙の歴史を辿っている。

「どうです？　面白いでしょう？　これまでの歴史や出来事がここには記録されているんですよ。せっかくのお客様を飽きさせたら悪いですからね」

当然の如くブライのいた電波の床も書き換えられる。書き換えられ、鏡のように磨きあげられた地面を持つ、半径一〇〇メートル程のフロアにシリウスは降り立った。そして、その中心に作られた椅子に腰をかける。ブライとシリウスは向かい合う形となった。だが

シリウスは座っている。
そしてシリウスはにっこりと笑いブライに言った。
「さあ、準備は整いました。かかってきなさい」
「……舐めているのか？」
ブライは、王のように玉座に深く腰をかけているシリウスに言う。
鏡となったシリウスの足元には、にっこりとやはり笑みを浮かべる表情が写っている。
「確認してみるといいでしょう」
「後悔しろ。喰らえ、ブライバースト！」
ブライがアンダースローのようにして、下手に素早く腕を振り抜くと、地面から暗黒闘気の波が横三列に並んで発生する。まるで鮫の背びれのように突き進むそれは、ゆったりと深く座すシリウスに向かって速度を増幅させる。紫の背びれが迫る。
シリウスは頬杖を突きながら手を前に掲げる。
「シルバープレート」
シリウスの前方に銀色の盾が作られる。それが暗黒闘気を相殺してシリウスの身を守る。まだ終わらない。
「シューティングビット」
先程の小型戦闘機が四枚、ブライを取り囲むようにして旋回する。
シリウスは椅子から一歩も動かない。これが彼の戦闘スタイルなのであろう。
戦闘機の一枚がブライに向けて熱線を照射する。そして立て続け

に、他の三枚もレーザーを照射し始めた。四枚の戦闘機が織りなすコンビネーション攻撃がブライを執拗に攻め立てる。

ブライは白色のステージを舞うようにして、熱戦の隙間を縫って攻撃を回避していた。見ていて胆が冷えるほどの、ぎりぎりの駆け引きが繰り広げられている。ブライが少しでも退路を誤れば、その体に風穴を空けることは自明の理だ。側転にバック転、宙返り、そうした華麗さに見とれるほどの体操を駆使して、ブライは苛烈な攻撃の中をまるで遊んでいるかのように攻撃を全て空振りに終わらせている。

「流石に、ここまで来るだけのことはありますね。ならこれではどうでしょう？　シルバープレート」

戦闘機に加え、銀色の板が不規則にブライの周りを飛び始めた。極限にまで研ぎ澄まされた板は熱線を反射して、その熱線の軌道をさらに複雑なものへと昇華させる。ブライの頬を熱線が撫でる。頬から焦げ臭いものを感じつつもブライは、避け切れないものを剣で弾く。だがその手数に手が回らない。今度は端の尖ったバイザーの先端を砕かれた。紫の破片が宙を舞う。破片にブライの苦戦する姿が映し出される。

「チッ！　鬱陶しい」

ブライは砕けた破片が地面へ落ちる前にそれを置き去りにした。体の周波数を空間のものに合わせ、流れに乗り、そしてシリウスへ一気に距離を詰める。

「お前の近くじゃ、あの攻撃はできないはずだ」

「ご名答」

シリウスは頬杖をやめて両手をかざす。前面に半球状のシルバープレートが生成された。ブライは真正面からそれを砕きにかかる。

「ブライブレイク！！」

全エネルギーを込めシリウスに叩き込む。シリウスの防護壁は何とか耐えるが、油を注いだように衝撃面から暗黒闘気が炎のように噴き上がった。すると防護壁は堪らず砕け散る。

「おお……！」

シリウスが細い眼を見開いた。ブライは畳みかける。

「ブライアーツ！」

突きと蹴りの研ぎ澄まされた連続攻撃がシリウスの体の内部にダメージを与える。ブライの拳と足がシリウスの体に深くめり込む。堪らずシリウスは椅子に座るのを諦めて後ろの空間に逃げた。王を失った玉座はブライのサマーソルトに砕かれて、意味のない破片群へと瓦解した。

退いたシリウスの青い肌を、口から流れる血が縦断する。シリウスはそれを拭って初めて見る自分の血を興味深そうに眺めていた。今まで傷を付けられたことのないシリウスは、一瞬驚くがすぐに嬉しそうに笑う。

「血を見るのは初めてですよ」

「俺は見飽きた」

「そうですか……」

シリウスは残念そうにうなだれると、四枚の羽板を自身の目の前

に集結させた。羽の切っ先が綺麗に一点を指す所に、その羽以上の輝きを放つエネルギーが溜まり始めた。直視することすら危険な輝きだ。

「私とて、簡単にやられるわけにはいかないのでね。少し派手に行きますよ」

温和な口調とはちぐはぐな、激しい光が一点に集束していく。これがシリウスの持つ最大の奥の手であるのは確実だ。

「いいだろう」

ブライは、望むところだ、と不敵に笑って前方に、ある物質をマテリアライズする。それは太古のムー人が残した超文明からの贈り物だ。

「ラプラス！　前に回収した、あのオーパーツを使え」

太古よりの贈り物とされるオーパーツ。そう呼ばれる構築された化石のような剣を、ブライは手に持っている剣と融合させる。するとブライの剣に雷が落ち、融合して一つとなった大剣が帯電するのであった。ブライはその電撃が迸る大剣を、血振りの型で空気を斬り裂く。すると、空間に雷鳴が駆け抜ける。独特の空気を震わせる音が鳴り響くと大剣の帯びる電気の活動がより活発になった。

「このムーの遺産、ベルセルクプレートの餌食にしてやる」

ブライの剣は、最強の得物となった。最強の輝きと相対する。

「それは非常に面白い武器ですね。さて、力比べといきましょうか」

シリウスの、輝きを極限にまで増幅させた小さな新星を思わせる程のエネルギーの塊がブライめがけ放出された。

「サテライトブレイザー！」

爆発したエネルギーは傘のように前方の一帯を吹き飛ばす。ブライは逃げ場のないエネルギーの塊の中を、その大剣で裂きながら進む。破竹の勢いで超新星爆発のような、熱放射性の核融解を左右に割る。少しでもブライが怯めば、あっという間にエネルギーの塊に擦り潰されてしまうであろう。

しかしブライとシリウスの純粋な力のぶつけ合いに幕が下りた。決着がつく。

シリウスは嬉しそうに笑った。

「この私の力を受けても屈しませんか。フフ、私はあなたのような強い挑戦者を待っていたのかもしれないですね」

シリウスは両手を広げた。前方には巨大爆発を真っ二つに割ったブライが大剣を後ろに引いて構え、最後の一撃の力を込めていた。

「負けましたよ」

納得した表情をシリウスは浮かべている。

「ライトニングボルトスマッシュ！！」

ブライの雷を帯びた一閃はシリウスの命を絶ち切った。シリウスは苦しむことなく膝から崩れる。床に映った血と重力に引き寄せられた血は互いを求めるように近づき、そして潰れる。それを繰り返

すと、そう長くしないうちに、シリウスの足元には赤い水たまりが出来上がるのであった。
ブライはもう先の長くないシリウスに告げた。
「俺の勝ちだ。死ぬ前にムーメタルを渡せ」
「率直ですね。フフ、いいでしょう約束は守るものですからね。このムーメタルを持っていくといいでしょう」
シリウスは、ブライがしたようにムーメタルをブライの手元にマテリアライズする。そしてブライの手に小さな暗い緑色の金属が落ちた。
「それがあなたの欲していた物です。アナタはそれを使って何をするんでしょうかね？　新たなオーパーツを精錬するのか。それとも……」
掠れる声で問いかけるシリウスは、この先のブライに興味を持ったようだ。ブライは冷たく返す。
「オレはムーの遺産を回収して回るだけだ。それでどうこうするつもりはない」
「フフ、そうですか。……あ、そうだ忘れてました。ムー人について私が知ったことを教えてあげないと」
「何？」
シリウスは続けた。
「ブラックホールサーバーによると、ムー人は一万二千年前に栄えていたそうですね……。ですが、おかしいとは思いませんか？　一万二千年もの前に突如として現れた超科学を持つ文明だなんて……」

「何が言いたい……！？」

語尾が自然と強まる。

「私はブラックホールサーバーを介して様々な現象を見てきました。その中でもムーの文明は異常です。宇宙創世のビッグバンのように因果関係が成り立たな……まるでどこからか……」

シリウスの言葉が途切れ始める。最期の時が近づいてきていた。

「残念……ですが……どうやら……もう、体がもたないようです。フフ……、楽しかったですよ。久しぶりに他……者と触れ……合い心躍りました。あり……がとう……ムーの……いや、世……の送り……」

シリウスは礼を言うと、倒れ込みぐったりとして動かなくなった。やがて、シリウスの亡骸は輝く粉塵となって歴史を辿る劇場の空へと消えていった。

あの最期の瞬間、シリウスは自身の命を奪ったブライに対して礼を言った。ブライにはそれが酷く気に入らなかった。恨まれることはあれど感謝されるものとは対極の行為をしたつもりであったからだ。理解が出来なかった。

ただ、もしかしたらシリウスは寂しかったのかもしれない。数え切れない時を独りで過ごしてきたのだ。それに自分の元にやってくるものは殆どがブラックホールに分解された意味のないものであった。他者との触れ合いを知らないのだ。そんなシリウスは、やってくる情報を集めて、寂しさを紛らわしていたのかもしれない。

そこにやってきたブライは、シリウスが飢えていた意味のある生命なのであった。戦うことでしか触れ合えなくとも、たとえ結果として命を奪われてしまっても、その瞬間だけは生きている事を実感

できたのだろう。
シリウスは、孤独を運命付けられたブラックホールの管理人、という運命を背負わされた被害者なのかもしれない。
そうすると孤独を拠り所にするブライは最期のシリウスの態度のせいで、目標を達成しても気分が少しも晴れなかった。殆どの領域が吹き飛ばされたブラックホールのフロアの中で、ブライはぶつけ所のない衝動を抑えるのに苦労しているようだ。
ふと、サーバー内に映し出される映像にブライの目が留まった。神の悪戯だろうか、そこには幼い双子を抱きかかえた幸せそうな夫婦の姿が映し出されていた。それはブライの最も嫌う人間の表情だ。それが映っている。幸福と信頼、未来への希望、そして約束された愛情。過去にのみ執着する孤高のブライはそれを異常なまでに嫌っているのだ。拒んでいるのだ。

「チッ、居心地が悪くてかなわないな……」

一人佇み、そう呟くことでムー人の少年は小さな悲鳴をあげたのであった。
シリウスの理解できない心情と、ムー人としてのソロに示唆するムーへの疑問の言葉を気にしつつも、ブライは主を失ったブラックホールサーバーを後にした。

謎の生命体による連続誘拐事件より二週間経った二二ＸＸ年五月一日火曜日。本日は、その事件解決の際に大きな傷を負ったスバルとゴン太の退院日であった。

二人が入院しているのはデンサン病院という病院である。その名はここ一帯の、総合病院としての地位を堅固なものとしていた。そしてスバルとゴン太はそんな病院の最上階の角部屋に入院しているのである。同じ部屋のスバルとゴン太は既に退院の準備を済ませており、ベッドに腰をかけて談笑していた。病室はサテラポリスの特別待遇で二人の貸し切り状態であった。だから、いくら話しても迷惑にならない。

「やっと退院だぜ！　あの味気ない病院食から解放されるかと思うとテンション上がりまくりだぜ。なっ、スバル！」

ゴン太のテンションは確かにウナギ登りだ。あの事件の直後には、一番重症だったはずなのに今は一番元気がある。返ってうるさいくらいだ。そんなゴン太にスバルはとりあえず突っ込む。

「って、いやいや、君は隠れて牛丼とか食べてたじゃないか！　正直なところ僕にも食べさせろって言うんだよ」

「わりい、わりい。だったら、今度奢ってくれよな」

なんていうゴン太だろうか。スバルはうずうずして堪らない。

『オレもオレも！』

オックスが勝手にハンターから出てきて名乗りを上げる。スバルはうずうずして堪らない。

「って、会話の流れ的に君が奢れよな！　あとオックス、便乗したらダメだよ」

スバルは入院のブランクを感じさせない。

確かな手ごたえを感じているスバルに、ゴン太がいきなりマウントポジションをとった。意味がわからない。とりあえず病室では暴れてはいけないのだ。

「フッ、油断したなスバル！　これが実戦だったら、お前は三回デリートされてたぞ」

スバルの上にのしかかりゴン太が粋がる。

「そうかな？　どっちかっていうと君の方こそ現実的にデリートされそうになってたじゃないか。でしょ、オックス？」

『ブロロ。ノーコメントだ』

「わ、賢い」

スバルはオックスの知的な立ち回りに感動を覚えたようで、軽く拍手をする。

「それは聞き捨てならないな。ロックマン、貴様もデリート寸前だったではないか！　だろ、トラッシュ？」

『……』

無造作にベッドの端に置かれているハンターの中のトラッシュは答えない。

「無視かよ！」

「隙あり！」

トラッシュに気をとられたゴン太の隙を突き、スバルは体を思いっきり反らせマウントポジション返しをする。ゴン太はトラッシュのいるハンターに被さるようにして体を倒された。トラッシュが悲

鳴をあげる。デリート寸前まで追い込まれている。

『クッ、ゴン太様。非常に汗臭いです』

どうやらトラッシュはここ三週間でユーモアというものを覚えたらしい。

「へっ、言うじゃねえか……。ちょっと傷付いたぜ」

『スミマセン。ただ、お風呂に入れない環境上、かなり臭くても仕方がないと思われます。気にしないでください』

優しいフォローが入った。ゴン太は泣いた。

「うっうう、スバル……？　俺、そんなに臭いますか？」

スバルは、何で敬語なんだよ、と突っ込みたくなる衝動を抑えるので精一杯であった。声を噛み殺す。

「くっ……」

「え？　何その噛み殺したような呻き声」

実はナイーブなゴン太の心にひびが入った。男が泣いていい時は、三パターンの状況下でしか許されないのはガキ大将のゴン太が知らないわけがなかった。しかし知っている事が堪えられる理由になるとは言えないのである。

オックスがトラッシュに文句を言う。

『やい！　新入り、友達を泣かしたらダメなんだぞ！　どっかのオッサンに言いつけてやるからな。覚悟しとけよ』

トラッシュは相も変わらずハンターの中に引っ込んでいる。しかしオックスを無視することはなかった。

『確かに、悪意がなかったとはいえゴン太様に多大な精神的ストレスを与えてしまったのには反省の必要があります。しかしオックスさんの言うような報復の仕方では私に同じだけの精神的プレッシャーを与えることへの期待は薄いです。なぜなら、多数いる中の、対象に値する歳を召した男性を選出すると、私にとって関係性の濃い人物がオックスさんの手によって選ばれる可能性は、希望的観測をもってしても実現に値しないと思われるからです。そうなると、その報復に意味はありません』

やたら長い。

『お前、スゲエな！　長すぎて何言ってるかさっぱりだぜ！　ブロロロ』

オックスの小さすぎるメモリ領域では一度に二百文字以上の文字列をインプットすると途端にエラーを起こしてしまうのだ。ウィザードとしては問題ありだが、ここは彼の個性を尊重したい。トラッシュもすかさずフォローを加える。

『スミマセン。オックスさんの矮小な記憶装置を考慮できませんでした。これは私のミスです』

トラッシュにオックスも沈められた。

「ふう、これで静かになったな」

沈黙する二人をしり目に、スバルはやっと落ち着くことが出来た。

そして病室の脇に施された、お茶ディスペンサーから煎茶を取り出しゆっくりとすする。スバルは落ち着いた子供だ。時の流れを楽しむ術を知っている。

そしてスバルがまったりとしていると奥の入り口のドアが小気味良く鳴らされる。ノックをしたナースの声が聞こえた。当然女の声だ。

「星河さん、牛島さん。お迎えですよ」

ドアの磨りガラスに映る人影が四体。一つはナース、もう一つはあかねで固い。後はクルクルヘアーとお団子だ。影の面積から割り出すスバルにとってこれは、あらゆる算数の問題をとっても赤子の手を捻る他ならない。もちろん算数であって数学でないのはご愛敬だ。しかし、スバルなら数学をも網羅していてもおかしくないとすら思わせるのだから末恐ろしい子供である。

「スバル、早く開けなさい。入るわよー」

「あ、うん」

あかねの声だ。すぐにスバルは窓際に放置されていた開閉ボタン付きのリモコンでドアを開けた。静かにドアが自動で開く。

ドアが開き切るとあかねが入ってきた。母親が来るのはごく当たり前。

それとルナもだ。学校が終わった後にわざわざ来てくれたらしい。彼女は事ある毎に病室に顔を出す。今回はキザマロを引き連れてはいない。スバルが入院した当初は心配したり、感謝感激の意識からか、乙女らしさを見せていたのだが今はもうそんなことはない。

さらにミソラもだ。仕事と学校が終わった後にわざわざ来てくれたらしい。それも遠方から。一足先に退院した彼女は、時間を作っては見舞いに来てくれていた。怪我が回復してすぐに仕事と学校を

両立しなければならない上に、見舞いにも来るのだから大したものだ。

そしてその中で、ミソラが笑顔で手を振っている。なのでスバルは愛想良く手を振り返す。そして、その様子を見たルナはとりあえず、スバルへ意味もなしに黄金色の眼球で牽制を送る。スバルはこれにめっぽう弱いのだ。そそくさとスバルは、荷物をハンターにアンマテリアライズしてまとめることにする。これで本当に準備完了。

しかしゴン太とオックスがガラスのメンタルに、トラッシュの悪意のないブレイク攻撃を貰ってしまっていたので動かない。スバルは、動けよ、と思ったことだろう。だが、動かないのだ。

「ほらスバル。こんなかわいいお嬢様方が来てくれたんだから、待たせちゃ悪いわよ」

あかねだ。そしてスバルはゴン太に困る。

「ゴン太、行くよ」

「……どうせ俺は牛丼臭がしますよ」

ゴン太はねちねちしていた。これではガキ大将の名が泣く。

「オックス、君からも言ってよ」

『……どうせ俺の頭は牛丼並だよ』

オックスはねちねちしていた。これではＦＭ星の攻撃部隊特攻隊長の名が泣く。

しかしスバルはオックスからのメッセージを聞き逃さなかった。

「牛丼並の程度を表す頭脳と、牛丼の並というボリュームを掛けてみたんだね。流石」

解説に意味はない。
スバルは感嘆。ルナが急かす。

「レディを待たせるものじゃありませんよ。スバル君」

ルナはそう言うが、淑女はどこにいるのか。それはあかねだ。それと隣の綺麗なナースだ。しかしルナがそう言うのだ。ミソラは言わないのに、ルナはそう言うのだ。

「レディ……？」

スバルが疑問を呈する。トラッシュとの真面目な談議が始まる。
トラッシュはだんまり。

「何か……？　問題でも」

ルナは激昂。昴に激昂。月の月光、固まる牡牛座の流星に降り注ぐ。気持ちのこもらない笑顔が恐ろしく、組んだ腕の紺色の袖は目一杯のしわを作る。細い指が食い込んでいる。

「あっ、スイマセン……」

スバルは平謝り。ロックマンを超える生命体の登場だ。電波的美少女、ルナ。自称クラスのアイドル、ルナ。しかし本当のアイドルはミソラだ。
ミソラはそんなルナを宥める。両手で軽くルナを抑えるようにして制止する。あかねはそれを堪える。笑いを堪える。スバルは堪ったものではない。

「母さん！　息子の危機を楽しまないでよ」
「あは、面白いわよ。ルナちゃんとの夫婦漫才かしら？　それもかなり辛口のね」
「あ、おばさま。それは酷いですわ」
ルナの注意がスバルからあかねに渡ったその瞬間をミソラは見逃さなかった。優しい声でゴン太に呼びかける。
「ゴン太くーん。そんな所で引っ込んでないで一緒に帰ろうよー」
アイドルの呼び掛けにゴン太はすぐさま立ち上がる。ガキ大将の復活だ。現金な奴。いや、素直と言った方がいいだろう。
スバルはその時、人類の身代わりの速さを思い知ったのは言うまでもない。ミソラがすべて持っていった。ロックマンでさえ、アイドルには敵わないということか。
「素直すぎるよ、ゴン太」
遠い目のスバルの肩をゴン太は思いっきり叩く。その衝撃はスバルをもう一度病院送りにする程のものであったのだから冗談ではない。ゴン他の活力がみるみるみなぎる。彼は止められない。
「ったー……」
「行くぜスバル！　俺様を必要としているミソラちゃんの元に！　そして一緒に帰るんだ」
ミソラは困ったような笑いを浮かべる。ゴン太は気持ち悪いくらいにやけている。事実、気持ち悪い。
「何て言うか、君がミソラちゃんを必要としてるんじゃ……」

そう言いつつ、スバルとゴン太は三人の元に歩み寄る。その時、スバルはゴン太にちくりとした一言を言ってやるのだった。

「それは言わない約束だぜ」
「ハハ……そうだったね」

補足としてルナが言ってやる。

「ま、ゴン太が本当に必要なのは、学校を休んでた時にたまった大量の宿題の片付けだけどね」

にやりとする。アンタの分の宿題はやってあげてないわよ、とその悪戯な笑みが図らずとも意味していた。ゴン太は真っ青になる。スバルはちゃんとコツコツとやっていた。問題はない。

明日から始まる学校は、ゴン太にとって地獄となるだろう。ゴン太はルナに懇願する。

「委員長！　頼む！　たまっていた分の宿題見せて。この通り！」

ゴン太は祈るようにして手を合わせ、目を瞑る。だが、ルナは甘くない。

「おばさま、行きましょう。ほら、ミソラちゃんもスバル君もぼさっとしない」
「う、うん」
「行こっか、スバル君。（ゴン太君、ゴメンね）」

そしてゴン太は一人病室に取り残された。出された宿題はきちんとやるべきだ、と言うことを今回の灸据えで分かって欲しい限りで

ある。

程なくして、五人は病院のロビーまで降りると、退院の続きを済ました。そして昇降口に向かって、清潔感あふれる埃一つないフロアを歩いていく。

老若男女いとわず、だが老人の割合が比較的高い、そのフロアから人影が動く。待合に呼び出されたわけではない。目標はあかね達だ。

「あの、スミマセン」

そうなるとスバル達は、後ろの方から誰かに呼び止められた。女性の声だ。五人は、何気なしに振り返ると結果として驚く。ゴン太の顔は、血の気が濃くなるのが見て取れる。

「あっ……」

スバルが一息漏らす。

「お、お前は！」

ゴン太は敵意を露わにした。険しい視線の先には、アメロッパ人とニホン人との混血風の女が車椅子に腰を掛けていた。その異国の風貌から察するに、さっきの呼び掛けの言葉は翻訳されたものだ。大気中に散布されている世界標準仕様の翻訳電波により翻訳されたものなのだ。これがあればわざわざハンターの翻訳システムを介さなくても異国の人間と意思の疎通を図ることが出来る。

そんな女の細い腕には数本の管を繋ぎ止められている。その管は傍らの縦に置かれた鉄棒に伸びていた。それにぶら下げられた袋から栄養を貰っているようだ。そしてブロンドの女は小さくお辞儀す

る。どうやら日本の風習を知ってはいるらしい。

「お前は！　あの時の！　どの面さげてやってきたんだ！」

「やめなよ、ゴン太」

スバルがゴン太の前に立って制止する。目の前のこの女性は連続誘拐事件の際、ヘラの宿主となっていた人だ。あの時、酷く痛めつけられたゴン太は興奮を隠し得ない。しかし彼女もまた被害者なのである。スバルはそれを分かっていたのでゴン太を止めるのだ。

「スバル君の言う通りだよ、ゴン太君」

「ま、そういうことね」

「ミソラちゃん、委員長……」

ゴン太と同じ思いをしたはずのミソラとルナにも止められたら流石に引くしかなかった。ゴン太はようやく落ち着きを取り戻す。

「ありがとうございます」

女は深く頭を下げた。しかし流暢なニホン語だ。翻訳電波を使う必要のない程なので彼女はバイリンガルに違いないだろう。

「どうかしたんですか？　突然呼び止めたりして」

あかねは、申し訳なさそうにしている女に言う。すると女の美しい麗容な造りの顔は、自責の念で歪んだ。

「あの私、謝りたくて……。とんでもない事をしでかしたみたいで……、何と言ってお詫びしたら……」

女は顔を覆って下を向く。償いきれない罪の意識に囚われている様子だ。あかねは事情を悟ったようで、体の緊張を解いた。そして相手の緊張もほぐしてやる。あかねは朗らかそのものだった。嫌みのない口調がそれを物語る。

「顔をあげてください。ここにいる子たちは、誰もあなたを責めたりはしませんよ。あれは不幸な事故だったんですから」

スバルも加わる。

「そうですよ。みんな、無事でよかった。それだけです」

ルナ、ミソラも。

「まあ、ショックは受けましたけど。誰が悪いと責められるものではないですわ。ママもパパも無事だったし、私は大丈夫ですよ」

「そうそう。事件は解決！　それでこの話は終わりだから。気に病むことは何もないよね」

「だよね、ゴン太？」

確認の意味を込めてスバルに振られたゴン太は、小さく頷いた。何処かばつの悪そうな態度だが、女の事情を理解はしているはずだ。

「ありがとうございます。このご恩一生忘れません」

ブロンドの女は、さらに一礼した。

「そんなにかしこまらなくてもいいですよ。えっと……」

あかねは優しく言った。すると女は慌てて服のポケットから名刺

を差し出した。あかねは少し屈み、それを両手で受け取る。

「スミマセン。名乗り遅れてしまって、私はリカ・ポート・伊集院（いじゅういん）と言います」

「……伊集院ってあの有名なＩ．Ｐ．Ｃの……」

「はい、お恥ずかしい話、私はそこの社長代理ということになります」

あかねはまじまじとリカを見つめた。驚くこと、それは当然だ。Ｉ．Ｐ．Ｃと言えば世界有数の大企業である。五陽田の所持していたＺイレイザーがそうだったように、様々な電波戦略兵器の開発。そしてインフラ技術の開発、そして馴染み深いバトルカードの開発も担当しているのだ。

ちなみにその企業はあるプロジェクトに参加している事でも有名であった。そのプロジェクトでＩ．Ｐ．Ｃは、ＦＭ星との友好の架け橋となりうる設備の開発に着手しているのだ。

車椅子に可憐に身を任せている美しい女性は、その企業の現トップであった。恥ずかしいことなど何もない。

「お姉さんって、すごい人だったんだ」

同じく驚嘆、スバルは言う。しかし、リカのことをお姉さんと言った事が、リカにとって酷く可笑しかったようだ。さっきまでとは一転、口を隠し上品な笑いを浮かべていた。

「ウフフ、いやですね。私にはスバル君と同じ年位の娘がいるんですよ？　ホント、いいオバサンなんだから」

「え？　母さんより若く見えましたから、つい……」

若過ぎる容姿で、子持ちの母には見えないリカに驚きを隠せない。

そんなスバルの横から、ゴン太が割って入る。さっきまでの硬派な態度からは一転、何か取り入ろうとしているものだ。お目当てはもちろんバトルカード。ゴン太は現金である。いや、素直である

「あの、もしかしたら、レアカードとか持ってたりするのか！？さっきの態度は反省しているから、レアカードくれよ。おばさん。いや、お姉さん！」

「……ゴン太やめなって。病人にたかるなよ。って、それよりも何て変わり身が早いんだ、君は。……驚きだよ」

その様子を見ていたリカはクスクスと笑っている。しかし、これ以上立ち話をしているわけにはいかないので、あかねはリカに別れのあいさつを告げる。

「それじゃ、私たちはこのあたりで。お大事に」

「はい、この度は本当に申し訳ございませんでした。そして、ありがとうございました」

社長代理は、しとやかに手を小さく振る。そして最後にリカはスバルに青い瞳を送る。不思議に思って、スバルは引き込まれそうなその青を見る。

「スバル君。君には本当に感謝してるわ。ありがとう」

「え……、なんで僕」

スバルは自分の正体がばれていないと信じていたので、返答に困る。どう返すのが適当なのか分からない。そこにルナが出すぎた真似をとった。

「この人、まさかロック……」

「ンローラーッとルナちゃんストップ！」

ミソラが慌ててルナの口を塞ぐ。スバルはほっと一息吐く。

その楽しげな掛け合いにリカは、またクスクスと笑う。

「いいんですよ。隠さなくたって。ヨイリーさんとシドウ君から事情は聞いてます。だから、本当にありがとう。小さな戦士さん」

「……何だ知ってたんですか。ハハ、焦って損しちゃったな……」

スバルは照れ隠しに後頭部を撫でる。

「それじゃ、ごきげんよう。いつかまた、どこかで会えるといいですね」

リカは上品だが嫌みのない、むしろ儚くて心配をしてしまう程の、敵を作らない笑顔でスバル達にまた一礼する。五人は、それぞれ返事を返すと病院を後にした。

暫くして、スバルはゴン太とルナとミソラと別れて自宅に着いた。時刻は夕刻の深いところで、コダマタウンより伸びる建物の間に陽は落ちていってるところだ。

あかねは自宅に上がると早々、忙しそうにキッチンへと向かう。スバルはとりあえずキッチンの隣のリビングでソファに座り、テレビを点けてみる。

ニュース番組だ。画面の中では、スバル達が見つけた黒い宇宙船が取り上げられていた。スバルは特に驚かない。入院中に何度も、この手の番組を見ていたので、もう飽きていた。予定では、この後

にソウル・レイダーの雄姿が取り上げられるのだ。当然ロックマンは一瞬たりとも出てこない。

スバルとしてはそれでよかった。目立つのは彼の主義に反する。そして、予定通り画面にはソウル・レイダーの映像が流れた。どうやら、サテラポリス内での訓練風景を撮影していたらしい。なので、テレビの中でソウル・レイダーがウイルスを華麗にデリートしていた。

巷では、そんなソウル・レイダーは大人気だ。女性の憧れる男性のランキングで一位の座を総なめにしている。小学生の将来なりたい職業ナンバー1はもちろんソウル・レイダーだ。理解が及ばない。

そんな現状だが、以前はかっこいい電波人間と言えばアシッド・エースとロックマンがその座を二分していたのだ。だが、今はソウル・レイダーの独壇場だ。ちなみにオックス・ファイアは巷のおば様に大人気。ゴン太大泣き。

結局のところ民衆はミーハーなのだ。

そして番組はコマーシャルを挟もうとしていた。

《快適な電波環境をアナタの生活にＩ．Ｐ．Ｃグループの提供でお送りしました》

「……何て言うか。ミライ君も大変だな」

スバルが呟く。そして、ハンターの中のトラッシュが暇そうなスバルに告げる。

『メールを受信しました。スバル様』

「うん、わかった。えっと、ゴン太からだ」

ゴン太から届いたメールの内容はこうだ。なんとリカから、バトルカードを貰ったというものであったのだ。それも市場に出回ることのない、非常に珍しいメガクラスカードだと書かれている。

「すごいな、ゴン太。僕も、あの時頼めばよかったかな」

スバルは少し後悔した。スバルもそこは子供、レアカードが欲しくないわけではないのだ。子供がトレーディングカードを集める感覚に似ているのかもしれない。もっともそのカードは兵器として十分に信用に足る性能を誇っているのだが、そこはやはり子供で思慮が及ばない。

『物乞いはよくありません』

トラッシュだ。ウォーロックだとまず言わない台詞である。ウォーロックだとこう言うはずだ、貰えるものは貰っとけ、と。さらに戦闘に有利なレアカードだと生唾ものであるに違いない。

「冗談だよ。……あっ」

そう言いながらスバルは文章に目線を走らす。そして最後に書かれていたのは、彼のハンターにそのバトルカードの要領が大きすぎるというものであったのだ。だからそれをスバルに譲るという旨が記されていた。そうなると、メールの添付ファイルはもちろん、バトルカードである。無論、データの拡張子は圧縮形式のものだ。スバルは早速、トラッシュに解凍を頼む。

トラッシュの仕事は速い。

『……データ、解凍完了』

「ありがとう。あっ、文書データだ」

スバルは添付ファイル内の文書に気が付いた。バトルカードの取扱説明書か何かだろう。真面目なスバルは目を通す。

しかし、文書データはＷＡＸＡの誇る天才科学者ヨイリー博士からのものであった。意外な差出人だ。

ゴン太宛てに記したのだろう、その内容はリカからの突然の依頼――バトルカードをねだったゴン太に対し、お詫びの意味を込めたもの――に急遽バトルカードを作成した事や、事件の際に採取した残留電波を元に作った特注品であること、などが記されている。それと、がめつい男は嫌われるわよ、という老婆からの戒めの言葉付きだ。

「まあ、それはそうなるよね」

そして最後のヨイリーの言葉は、近いうちにミライかシドウ辺りから呼び出しが来るだろうというものだった。誘拐事件について聞かれると思っていいだろう。それを気に留めておけということだった。

「そうなんだ。ゴン太とミソラちゃんにも伝えてあげなきゃね。トラッシュ、後でメール送っといて」

『わかりました』

それを読み終えると、ようやくスバルはバトルカードを確認した。バトルカードのイメージウィンドウにはあの女が描かれていた。そう、ヘラ・ローズガーデンだ。

「これは……」

『アイツですね。少し不気味な感じはしますが、強力なバトルカードに違いはありません。バトルフォルダに入れておきます』

「うん、よろしく」

スバルは、バトルカード『ヘラ・ローズガーデン』を手に入れた。

カードデータは、一番の大技であったグレースローズタッチの擬似再現アルゴリズムが入っていると思って違いはないだろう。
　すると夕食の支度を終えたあかねがスバルを呼び出す。キッチンからはいい匂いが運ばれてきている。時刻は一八時。妥当な時間。

「スバル、夕ご飯よ」
「うん。……って、うわっ」

　テーブルを見るスバルは息を呑む。
　そのダイニングのテーブルに並べられた皿は絢爛豪華、どれもこれも伊達ではなく伊達に料理されていた。
　垢ぬけない田舎娘のような、大したことのない星河家の食材達は、眉目秀麗な形相へと様変わりしていた。一見すると、鬼も十八番茶も出花とはよく言ったものだが、これではあかねに失礼だ。前言撤回、踵を返す。淵源として、あかねの神の業にも見紛う超絶なものが原因である。絶句をもたらす料理の練熟した技術が、この芋娘に巧妙な光明を見出させたのだ。
　何を隠そう、美しい料理達だと言い切れるのだ。
　美しさを保たせも、栄養のバランスにも抜かりなし。流石はあかね。外面、内面ともに完璧な、その母親の性質をこの料理は受け継いだみたいである。
　そこには細かく切って目立たなくした、橙色の根っこがサラダとして添えられている。スバルはこれが大嫌い。
　そして肉という名のメインウェポンの隣には、緑の弾丸がつやつやとしている。照り返す茶色の隣で緑が平和に寄り添うのだ。
　一方の平たい皿には、赤い液体が満たされていた。それがごつごつとした野菜に腰を下ろさせている。まぶされた緑色の薬味に付き従うように、油分それ自体の円が浮いていた。
　スバルはトマトスープに覗き込む、浮いた油が鏡のようにスバルの顔を映す。今、彼は人参の姿があるのか確認中だ。あの橙色の、

所詮は根っこの存在が脅威なのだ。それこそロックマンを追い詰める程の、である。奴はそのひょろ長い体躯にして、ロックマンことスバルに対しては前戦全勝の負けなしであった。その圧倒的さ故に、スバルからは卓上の赤い悪魔として密かに恐れられている。当然人参はそのことを知らない。知るわけがない。だが、あかねは知っている。

人参を確認してしまったスバルは、顔を崩した。何かを感じ取ったのか、ごつごつとしたジャガイモが北極の氷山の如く崩れる。しかし規模は最小クラス。しかし、油に映ったスバルの顔を砕くには十分だった。

しかし、スバルの好き嫌いを差し引いても、これだけの料理を賞味できるのだからスバルは幸せものだ。だが、味気ない病院食に慣れ親しんだ、今のスバルの舌にはいささか刺激が強いかもしれない。

あかねはこの料理を生み出した達成感からなのか、大きく頷いている。会心の出来に違いないのだろう。

「どうスゴイでしょ？」

「やけに豪華だね」

「当たり前じゃない。今日はスバルの退院記念日なんだから」

「大袈裟すぎだよ。ちょっとの間、入院してただけなのに」

そう言いつつ椅子に座る。あかねが付け加える。

「それだけじゃないわ。だって家に新しい家族が出来たんですもの」

あかねは嬉しそうに手を合わせている。

「……！　そういうことか」

スバルは察したので、ハンターからトラッシュを出す。するとテ

ーブルの横に、ごつくて白いウィザードが呼び出される。一見すると、その組み合わせは家庭風景として言うなれば、ちぐはぐである。

「星河家へようこそ、トラちゃん」

首を斜めにして茶目っ気のあるあかねがトラッシュに笑顔を向ける。あだ名は『トラちゃん』で決まりのようだ。酷く可笑しい。

「トラちゃんって……」

スバルは絶句。

『あだ名や家族というものは解り兼ねますが、母上様にお礼申し上げます』

トラッシュは太い首を倒し感謝の意を表す。

「うん、スバルをよろしく頼むわね」

『私、トラちゃんにお任せあれ』

トラッシュはすんなりそのあだ名を受け入れた。

星河家に新たな家族を迎え、コダマタウンの夜は更けていく。

ｗｗｒ―０１：翡翠色の思い出

あれから、いつもと何変わらない平和な日常を許されること三日。二二ＸＸ年五月四日金曜日。天気の良い青空の下でコダマ小学校のチャイムが、いつも通り、いつもの時間に鳴った。学び舎の今日の仕事が終わりを告げたのである。時刻は三時過ぎの四時前、放課後になろうとしていた。

その一角の六年Ａ組の教壇に立つ、アフロの男がまだホームルームをしていた。それはフラスコを首からぶら下げた、子供好きな理科教師、育田道徳その人だ。白衣にジャージという時代を先取りしすぎたファッションも健在である。

そしてこう言う。

「おっ、もうこんな時間か。それじゃ今日はここまで」

お決まりの台詞だった。そして悲しいかな、すでにそこここに帰宅の準備を始めている生徒がちらほらと目立っている。そして我先に、と席を立とうとしていた。何がそんなに急がせるのだろうか。子供とは無意味な事で競争したがるものだ。例えそれが、保つのにも一苦労な教師の威厳に石を投げる結果になっても、彼らは止まらないのである。

そしてゴン太も勿論その例に漏れない。大急ぎで空っぽの鞄を用意していた。残念ながら、その鞄に教科書が入る予定は永遠に来ない。水分を吸い取られて、ミイラ化したコッペパンがスペースを占領しているので、それは無理な相談というものである。

しかし、それはいつもの事なので育田はあえて何も言わない。大

人しいゴン太などゴン太ではないのだ。彼が学校に復帰して、間違いなくクラスは以前より活気に満ち溢れている。流石はガキ大将と言ったところか。しかし、ゴン太はそんな事を知る由はない。そう、混じり気のない天然だから。だから自然と好かれるのだ。

育田とて例外ではなかった。だから、懐に忍ばせていたチョークをゴン太に向かって投げる。次は二つ跨ぎの右側に、次はその後ろだ。誰もかれも後ろに引っ込んでいるが、教鞭を執って一〇年の育田の問題ではない。

聖職者として、子供達をしつける為ならチョークに螺旋回転をかけるなど造作もないことだ。育田の魔法がかった指の技巧が生み出す微妙な回転の色付けでチョークの軌道は変化する。その弾道は複雑怪奇。そして悪ガキどもの額に吸い込まれる。

けたたましいのは、悪ガキ達の奏でる悲鳴の重唱。しかし軽傷だ。

「い」
「て」
「えぇー！」

締めはゴン太である。見事だ。

そして育田は何事もなかったかのように続ける。

「と、まあ、勝手に帰ろうとしている奴もいるけど、今日のホームルームは終わりだ。みんな気を付けて帰れよー」

育田がそう言うと、生徒たちは小学生らしく元気良く返事を返す。そして放課後を迎える。

そんな中、ホームルームを終えたスバルは窓際の席で、帰り支度を進めていた。当然、鞄の中は教科書で一杯だ。宇宙の本でも一杯だ。それこそ勤勉な証拠だ。頭の中が花畑で一杯のゴン太とは大きく違う。

スバルは鞄を背負った。帰るつもりだ。寄り道もせず真っすぐ帰路につく優等生。

そこにミライがやってきた。スバルを呼び止めるつもりだ。さらにルナがやってきた。ミライよりも先にスバルに声をかけるつもりだ。ゴン太は牛丼屋に向かった。大盛りを注文するつもりだ。

「星河」

ミライの勝利。

「スバル君」

後れを取ったルナ。

「大盛り」

意味不明だ。

しかしスバルはゴン太の方に振り向く。ミライとルナは、あえてその選択を選んだスバルに苛立ちを覚えた。皮肉にも、長い入院生活を経たゴン太とスバルは、阿吽の呼吸でボケと突っ込みの応酬が反射的に出来てしまうのであった。スバルにとってウォーロックに取って代わる大切な相棒であった。それにしてもでかい女房役である。しかしゴン太としては勝手にスバルが突っ込んでくるとしか認識していない。

「大盛りとは……！　やるね！」

「星河……」

呆けるスバルにミライが呟く。横でレイダーが鞘に手をかけていた。危険だ。ウィザード・オンしたレイダーはただの危ない兵器に

違いない。だからスバルは危ないのだ。自慢のとんがりヘアーが落されてしまう。そうなるとスバルの自己同一性のおよそ九割が失われる。それは危ない。

「どさくさに紛れて、意味不明の一言を放つ……、油断できないね、まったく」

やれやれと言った様子でスバルは頷いている。満足気だ。ミライの気が長い方だといいが、そうもいかないだろう。アメロッパ製の最強の戦術兵器がその真価を発揮する間近であったのだ。手元に鋭く光る銀がそう物語っている。放課後の教室で帯刀するとは流石アメロッパ帰りの帰国子女。今のニホンの法律を知らないらしい。

ミライの隣のルナが息を大きく吸った。もう堪らない。

「スバル君！　ゴン太に突っ込んでるんじゃないわよ」

痺れを切らしたのはルナだ。渦中のゴン太はすでに牛丼屋へと姿を消していた。反射的にスバルは電撃が走ったかのように体を強張らせるとルナの方に向く。満面の営業スマイル付きだ。しかし今はロックマンではないので効果はない。どの道、ミライは置いてけぼりだ。

「な、なに？　委員長、えへへへ……」

にこやかなスバル。ルナの乗りこなし方を知っている。しかし下手くそな乗り方だ。年頃の女児は上辺の笑顔を見抜くのである。

「何よ、その笑い！　気持ち悪い！　……けど、まあいいわ」

ここで一息。遠巻きに様子を見ていたキザマロに手招きする。

「さ、一緒に帰るわよ！　キザマロもこっちへ来なさい」

ルナがスバルを連れ出そうとする。スバル擁するルナのグループは毎日一緒に帰っていたのだ。ゴン太はいないが、今日もそういう事だった。そしてルナがミライに目配せをする。私の勝ちね、と言いたげだ。委員長から格上げされて生徒会長となった今のルナに付け入る隙はない。

「う、うん」

スバルはルナに付いていく。しかしミライも誘う。スバルは空気を読める男子だ。

「ミライ君も一緒に帰る？」

ミライは首を横に振る。そしてオッドアイがスバルを見据えた。スバルは分からないので首を傾げる。

「残念だが一緒には帰れない」

何だかんだと、今までミライはスバル達と一緒に帰ることはなかった。今回もそういう事らしい。そして続ける。オッドアイがスバルを映していた。

「それにお前も、だ」

「どういうこと？」

「そのクラス委員長とは一緒に帰れないということだ。……まったく、話を切り出すのも骨だな」

ミライは溜め息を吐きながらルナの方を見る。お前は迷惑だった、と言いたげだ。そうなるとルナがミライを責め立てる。

「ちょっと、どういうこと！　一緒に帰りたいなら素直にそう言えばいいんじゃない？　ミ・ラ・イ君？」

挑発だ。だがミライには効かない。呆れたようにルナを無視して、スバルに話を続ける。

「牛島から言伝で話は通っていると思ってたが、違うのか？」

「ちょっと、無視しないでよ！」

横がうるさいが、スバルは気付いた。三日前に読んだあのメールの事だ。ヨイリー博士からの伝言の事を、ミライは言っているのだろう。とりあえずスバルは確かめる。

「君の任務……？」

そう言ってスバルは聞き返す。

「察しがいいな。助かるよ」

ミライは小さく笑った。

スバルはルナに申し訳なさそうに事の次第を説明する。この場面にルナはどうやらお呼びではないという事だった。ミライの態度がそう示している。

「あのね、委員長。ちょっと、ミライ君との用事が出来たから、先に帰ってて。ゴメンね」

ルナは面白くない。

「何よそれ。どんな用事か教えなさいよ」

そこにミライが答える。

「言えないな」

結果、答えとなっていない。

「言いなさいよ」

ルナが食ってかかる。キザマロがルナを宥める。何となくスバルとミライの邪魔をしている気分になったのだろう。

「やめましょうよ、委員長」

「お黙り、キザマロ」

このままでは埒が明かないのでミライはさっさと教室を後にした。最後にスバルに念を押す。

「俺はＢＩＧＷＡＶＥ前の公園で待っている。そいつらを黙らせたら、こっちに来い。それと、あのバカも連れてな」

ミライはそう言い残し待ち合わせ場所へ向かった。しかしどうだろうか、ルナを説得させる機会をスバルに与えたのだから、これはミライの気遣いなのかもしれない。自分がいてはまとまる話もまとまらないと自分でよく分かっているようだ。悲しいほどに賢い少年である。そしてあの馬鹿とはゴン太の事であった。

「あの、委員長。多分この前の事件の事だと思うんだ。だから行ってくるね」

連続誘拐事件の事だ。当事者のスバルが呼び出しを喰らわないわけはない。

「えっ……」

頓狂な声が、白で目立ち淡く濡れる赤から漏れる。だが、すぐに気を取り直す。

「う、うん、そうね。分かったから、行ってらっしゃい。うん、ミライ君を待たせちゃ悪いものね」

ミライが姿を消した途端、急に大人しくなったルナは早く行くようにとスバルの背中を押してやる。

「うん、分かった。委員長を頼んだよキザマロ」

「分かりました」

キザマロの小さな体での大きな決意表明だ。スバルはふふと笑い、二人を教室に残しＢＩＧＷＡＶＥ前の公園に向かおうとする。

「スバル君っ」

そこにルナだ。

「？」

「私じゃよく分からないけど。とりあえず……そ、その頑張ってね」

どうやら、彼女なりに心配してくれているようだ。健気だった。

「うん、ありがとう。心配してくれて」

悪戯にスバルは笑い。必死に弁明しているルナを尻目に待ち合わせ場所に向かった。

程なくしてスバルは公園に到着した。その公園はどこにでもある公園だ。名前はコダマ公園と言う。実に普通だ。像型の滑り台や、雨に打たれて禿げあがったリスのオブジェクト。どこにでもあるものがごく当たり前にあるだけだ。唯一珍しいのは、公園の敷地内にバトルカードショップがある事だ。名前はＢＩＧＷＡＶＥと言う。そんな公園の中には人影が三体。

ミライとミソラとゴン太だ。ゴン太はテイクアウトした牛丼を片手に持っていた。ミライは特に反応を示さない。ミソラは元気よく手を振る。

「あっ、スバル君だ！　おーい」

彼女も誘拐事件に深く関わっている。だからここにいる。そして手を振っているのだ。愛想が良い。

「来たな」

ミライは短く簡潔に口を使った。その彼は公園の木に寄りかかっていた。決して格好付けているわけではない。うるさいゴン太からできるだけ距離を置きたかっただけなのだ。結果、木の下で腕を組

んで洒落こんでいるようになってしまう。そこにゴン太が小さくうめく。ずっと牛丼の事を呟いている。牛丼の容器に優しく語りかけている。すこぶるうるさい。ミライが堪らないわけである。

「くそう、俺の牛丼……って、スバルか」

頭の中は食べそびれた牛丼の事で一杯一杯。

「お前、いい加減にしとけ」

とうとうミライはそんなゴン太に我慢できなくなった。本当に我慢の限界だった。

「何だと！　てめえ」
「……うるさいんだよ」

喧嘩が始まった。今のゴン太は口が悪い。しかしゴン太は誘拐事件以来、ミライの事を内心では認めているのだ。スバル同様、ミライは事件解決にもっとも尽力したと言っても過言ではない。彼がいなかったら被害はさらに広がって、ゴン太は大切な人を失っていたかもしれない。だから感謝さえしていた。

でも悪態を吐く。ガキ大将だから。そして、ロックマンことスバル同様、ソウル・レイダーであるミライは越えるべき壁なのだ。対抗意識や少しの憧れがゴン太自身が気付かないうちに反発的な態度を取らせる。二人が友達と呼べるに相当する関係になるのはまだ先の事なのだろう。

ミソラはとりあえず、喧嘩する二人を止める。

「やめなよ、二人とも」
「分かった！　やめる」

ゴン太は素直。アイドルであるミソラに嫌われたくはないのだ。奔放なゴン太に、ミライは確かに頭に来るものがあったが、これ以上ゴン太とやりあっても仕方がない。時間の無駄だ。

「……まあいい」

結局、ゴン太の態度に不満を抱きつつもミライは気を取り直す。そしてスバルも交えた集まりに具体的な要件を説明する。ミライは本当に要件しか言わない。効率絶対至上主義だ。余計な前置きも愛想良く話を砕いたりもしない。簡潔、簡素、簡単。ここまでくれば感嘆ものだ

「よく聞け。今からサテラポリスとＷＡＸＡニホン支部のあるフジ山火口に向かう。そこでお前たちの今後の進退を決める――電波人間としてお前たちの在り方をな」

流石はサテラポリスのエースだ。何だかんだと任務の匂いを漂わせてくるのだから大したものだ。自然と緊張が高まる。こういう訳ではルナを呼べないわけである。いても混乱しか生まないからだ。元よりミライは面倒事とは御免だったのだ。

しかし、ゴン太はある事実に気が付いた。あさっての方向を見ている。

「ん、今日はＢＩＧＷＡＶＥ閉まってんのか？　シャッターが下りてるぜ」

実にどうでもいい。今、言うことではない。こうやってゴン太はミライを苛立たせる。話を止めてまで、ＢＩＧＷＡＶＥの心配をするのだ。どうしようもない。

「ゴン太。それ今どうでもいいんじゃ……。て言うか、ここ最近いつも閉まってるしね」
「え？　そうなんだ。知らなかった」
ミソラも加わる。話が進まない。
「おい、牛島。いい加減にしとけ。遊びに行くんじゃないんだぞ……！」
語尾につい力がこもってしまう。これは一度や二度でなかった。いい加減にしてもらいたかった。
「何だと！　てめえ」
「……」
返し言葉にしても語彙の少なすぎるゴン太に、ミライは呆れた。ミソラが止める。
「やめなよ、ゴン太君」
「分かった！　やめる」
ゴン太は素直だ。だが、あまり賢くはない。本人は気づいていない。いつか宝くじが当たるかのように、学問の神様が降って湧いてくると思っている。本当に思っている。賢くない。
「……ふう。時間が惜しい、電波変換するぞ。話はそこに着いてからにしよう」
ここで何を言ってもゴン太に邪魔をされてしまう。仕方がないの

で、ミライは腰のホルダーからハンターを取り出した。電波変換するつもりだ。電波人間になればフジ山まで一瞬で行ける。そしてミソラとスバルは確認し合うよう互いに頷き、ミライに続いてハンターを取り出した。ゴン太も菓子の屑まみれになったハンターを取り出す。その時、小汚い菓子の包装紙で一杯になったポケットから出すものだから盛大にごみを辺りにばら撒いた。仕方がないのでスバルがそれを拾ってやる。なかなかやることなすことが綺麗に決まらない。

ゴミを拾い終えると、やっと気を取り直し、皆が揃って口上する。

「トランスコード」

四人がハンターに認証カードを読ませる。決まった形の変身への手続きだ。これはまさに特撮ヒーローの変身シーンのそれである。

「００１　ソウル・レイダー」
「００４！　ハープ・ノート」
「００５！！　オックス・ファイア！」
「０３０　スターダスト・ロックマン！」

電波人間となった四人は上方を確認する。そしてＢＩＧＷＡＶＥのアンテナから発生して、空間に走るウェーブロードに飛び乗る。目的地はフジ山だ。

茜がかってきた空の下、黄色い電波の道を四本の光の線が駆けていく。行く先行く先の風景を置き去りにしていく。空の飛行機雲をなぞっていく。風を破って、音を超え、光速となって駆け抜ける。するとすぐに大きな山が見えてきた。フジ山だ。日本で一番高いとされるその山は遠くからでもよく見える。そして近づくと、山は段々と大きくなる。凝らして見ると、そこの火口付近には、ＷＡＸＡとサテラポリスが同居している建物が建っていた。その立派な高層

建築物が、ごつごつとした岩肌にそびえているわけだ。異色な組み合わせが、その景観をより印象深いものにする。

四人は白い建物の周りの、綺麗に舗装された敷地内に降り立った。少し行った先には門の前でシドウとヨイリーが待っている。元サテラポリスのエースと世界屈指の天才科学者じきじきのお出迎えだ。頭が下がる。

「どうも、遅くなってスミマセン」

電波変換を解除したミライは、シドウとヨイリーに歩み寄りながら軽く謝罪する。一応、ゴン太のせいにはしない。

スバル達も挨拶をする。すると、白衣をまとっている事以外は背丈の短い眼鏡をかけた、ただの老婆であるヨイリーが手を振り返す。彼女がヨイリーだ。一見ただの老婆であるヨイリーだが、外見にそぐわない活き活きとした様子で出迎えてくれたのだ。慣れているとは言えシドウも流石に一歩退いている。ヨイリーはミライ達に握手をして回り丁寧に挨拶を返してくれる。親しみやすい人間性からか、とても偉大な科学者には見えないと錯覚してしまう。

ミソラのところに行くとヨイリーは底抜けの笑顔を彼女に贈る。

「あら、お久しぶりね。ミソラちゃん！」

「えへへ、お久しぶりですっ」

やけに親しげだ。スバル達の知るミソラはヨイリーとはあまり面識はないはずだった。しかし親しげだ。それを言うと、ヨイリーはミライとも親しげだった。なんとヨイリーはあの鉄壁を誇るミライに抱きついていたのだ。ヨイリー達の秘め事にスバルとゴン太は少し疑問に思うが気にしたところで仕方がない。

暫くもしないうちにシドウがいい加減、話の長いヨイリーにそろそろ中に入るように促す。

「博士そろそろ、話し込むのはやめてくれませんか？　早く中に入ってうまい棒が食べたいんですから」

仕事が一割、私情が九割。

「シドウちゃんったら、急かさないでよ。でも、そろそろ中に入らないとね。ね、みんな？」

「俺達をどこに連れてく予定なんだ、バアちゃん？」

ゴン太が聞く。

「フフッ、それはお楽しみ」

小悪魔な老婆だ。人差し指を干からびた唇にあてがう姿は少女そのもの。心までは老いてないという事なのだろう。何となくゴン太は一歩下がる。そこにシドウが付け足す。彼はどこからか取り出した菓子を口に加えさせていた。うまい棒だ。

「ほへはひっへひへははははふは！」

ニホン語ではなかった。口に棒を咥えてたらニホン語も暗号に変わる。

「……」

「……」

「……」

「……」

「さあ、おバカさんはほっといて行きましょうか？」

沈黙漂うその場はヨイリーが締めた。

スバル達はヨイリーとシドウに引き連れられて、白い建物内へ向かう。入口には二つの大仰な門があり、それぞれサテラポリスとＷＡＸＡへと繋がっている。しかし入口が別々だからと言って、どちらから入ろうが、中で二つの組織は連結している。とどのつまり遠回りか近回りかという違いでしかない。そして向かって左側の、橋上式の長い滑走路とヘリポートを擁するのがサテラポリスだ。警務組織らしく辺りは有刺電波で作られたフェンスで囲われている。それも必要以上の装飾を施さず、機能性だけを追求していた。だから見た目は殺伐としている。ここが地球の平穏を常に守っている。

対して右側の、観測用の巨大な簀巻きのような電波望遠鏡と、これはそれでまた巨大なパラボラアンテナを擁するのがＷＡＸＡだ。ここは、はるか彼方の宇宙を観測したり、電波環境の保全に尽力している。地球の科学がここに集結しているといっても過言ではない。

当然、遠回りする意味はないのでスバル達は、用事のあるＷＡＸＡの入り口に入っていった。

そして出迎えるＷＡＸＡの内装は固い金属の壁で覆われていて、冷たい印象を与える。天井には、連絡用の通信媒体が張り巡らされているらしく、緑色の光がうっすらと発光しながら流れていた。全体として、綺麗な研究施設と言える。埃などはなく、廊下を歩いている人間を地面に映し出す。

そして、一角を担うガラス張りの壁の向こうは吹き抜けになっていた。巨大な空間が下に広がっていて、そこでは巨大な試験管に保管された人工の電波生命体が並んでいる。それも軍隊の如く些細な乱れも許さずに整列させられている。彼らが次世代のウィザードになる日はそう遠くないのだろう。

そして、その上の階層では、実験的にウェーブロードの新規格を展開していた。その上を小さな電波の情報が繰り返しやり取りされ

ている。恐らくあのウェーブロードは、情報伝達速度が飛躍的に上がっているのだろう。これが実装可能な水準にまで達し、採用されれば人類の生活はさらに便利なものになるに違いない。

ＷＡＸＡは日々、研鑽していた。そして、そこで落ち着けない少年が一人。

「わあ、すごいや！」

スバルは施設内に入るとすぐに目を輝かせて嬉々とする。ＷＡＸＡは科学技術の片鱗を惜しげもなく覗かせてくれる。その祭典にスバルは胸が躍って仕方がないのだ。ゴン太の目の前に牛丼を置いたような状態だ。スバルは知的好奇心をくすぐられると、年相応の少年らしさを垣間見せる。スバルにとってそれは、憧れ以外の何物でもない。

スバルの父、大吾は屈強な宇宙飛行士であった。そして優秀な科学者でもあった。その優秀さ故、若くして宇宙ステーション『キズナ』乗組員のチーフを任されたのであった。スバルはそんな父が誇りだった。そして父同様に宇宙に夢を見出していた。いつか父と同じ舞台に立ちたいと思っていた。だから、科学や宇宙と言った、憧れの父を象徴するものには心奪われるのだ。

ミソラは辺りをきょろきょろして落ち着きを取り戻す気配のないスバルに注意してやる。スバルは前を見ていないのだ。歩きながらよそ見をしていると言うより、よそ見をしながら歩いている。

「ちょっとスバル君、ちゃんと前を見ないと危ない……」

「あたっ」

何かに躓いた。無様にこける。

「何たってこんなところに……」

スバルが言いたいのは、何故にこんなところにうまい棒の入った段ボール箱が転がっているんだ、と言う事だった。足で蹴ってしまったらしく、支柱の根元でうまい棒が散乱していた。

シドウは目の前の惨劇を凝視していた。心がここにない。放心中。そして我に返る。

「あーっ、俺のうまいボックスが！」

暁は散らかったうまい棒をすぐさま母艦へと格納する。シドウはうまい棒が大切だった。一心不乱だ。彼はサテラポリスの元エース。

「暁さん、なんでこんな所にうまい棒なんか……。それにうまいボックスって、何なんですか」

「フフっ、よくぞ聞いてくれたなスバル！　これはヨイリー博士への差し入れだ！　研究室の前に置き忘れてしまっていたらしいな。ちなみにうまいボックスとはその名の通り、うまい棒がいっぱい入っている夢の業務用段ボールなのだっ」

そういうことらしい。少し奥にある扉はヨイリーの研究室だ。確かにその扉だけ一回り厳重にロックされているように見える。流石は世界屈指の科学者の研究室と言う訳だ。

「ちょっと、シドウちゃんそんなのいらないって言ってるでしょ？　自分が食べたいからって」

ヨイリーは段ボール箱を大事そうに抱えているシドウに溜め息を吐く。

「いいじゃないですか！　よし、スバル達。ヨイリー博士の研究室

でうまい棒と洒落こもうじゃないか」

差し入れのはずが、シドウは食べる気満々だ。しかし洒落こむには安価過ぎる駄菓子だ。

「いいのか！？　暁さん！」

ゴン太の乗りの良さは折り紙つきだ。彼に関してはＷＡＸＡにうまい棒を食べに来たと言っても言い過ぎではない。

「……ヨイリー博士、早く済ませましょう。頭が痛いです」

ミライの悲痛の叫びだ。ふざけて回るゴン太に嫌気がさしていた。シドウも仕事では優秀だが、うまい棒が関わるとゴン太になる。とにかくミライは真面目だ。彼はサテラポリスのエース。

扉の奥に広がる、ヨイリーの研究室は広かった。だが、研究の為の実験器具や、地面に無造作に横たわる配線類などにより、実際には狭く感じる。研究室の端にはこじんまりとヨイリーの机がある。その卓上には研究結果と報告書、論文などが混じり合った紙の海が広がっていた。机の横の本棚には学会を盛り上げた彼女の論文が並んでいる。ヨイリーの研究者としての地位がその論文の多さと、飾ることなく飾られた賞状や盾が物語っている。そして奥の壁には巨大エアディスプレイが浮いていた。それには幾何学的模様が散りばめられていた。それを説明した数式も一緒にあったが、小学生の頭脳では太刀打ちできない。ゴン太は直視してはいけないほどだ。

「ぐわっ、ここの研究室は俺の存在を否定しているかのようだ……！」

低学力保持者、ゴン太は腕で目をふさぐ。研究室の雰囲気がゴン太に、お前はここにいるべきではない、と語りかけているのだ。

「牛島、ふざけるのもそのぐらいにしろ」

そう言うと、ミライは博士に目配せする。もうゴン太の相手をするのも疲れていた。

「ヨイリー博士、お願いします」

ヨイリーが、分かったわ、と言うと、先程まで幾何学的模様を映し出していたエアディスプレイの表示画面が変わった。シドウがハンターの遠隔操作機能を用いて変えたらしい。

変わった画面には、細い緑色の線が格子状となって連なり、それが仮想三次元空間となって表現される。まだ特には何も表示されていない。

「それじゃ、今日はあなた達にある決断をしてもらうわね」

ヨイリーがにこやかに言う。だが、表情を真剣なものに変えると、世界屈指の科学者は続けた。流石のシドウもうまい棒はもう食べていない。もうすでに仕事なのだ。

「これは重大で重要な決断です。でも、あなた達が決めなくちゃいけない事なの。他の誰でもない、あなた達がね。そういう訳だから、まずはこの映像を見てちょうだい」

すると画面に映像が映し出される。画面の中で花が舞っている。人も舞っていた。蔓に足を取られて振り回されているのだ。悲鳴が聞こえる。女の高笑いが聞こえる。強者が弱者を虐げる、この世の

業を濃縮にした図が繰り広げられていた。映像の中でオックスファイアが唯一、戦うという形にはなっている。形だけで、実際には手も足も出ていなかった。

映像は、惑星アリアでのヘラ・ローズガーデン討伐の時のものだ。

「これは……あいつだ」

スバルの表情は険しくなる。ミソラとゴン太もだ。

「クソッ、全然ダメじゃないかよ。俺、なにも出来てねえじゃねえか……！」

映像の中のオックス・ファイアを見てゴン太は悔しそうに拳を強く握りこむ。

地球における電波人間はあらゆる物理、電波兵器よりも有能で、他の追随を許さない。数こそは汎用兵器に劣るものの、電波人間は地球の戦力としては、まさに最強だ。地球史上最強なのだ。人間の進化と言ってもいいくらいだ。しかし、その電波人間であるゴン太は全く手も足も出ていない。サテラポリスの隊員は当然として、地球最強の電波人間もごみ同然だった。

改めて目の当たりにするヘラ・ローズガーデンの力は化け物だったのだ。人智を超えている。地球最強の電波人間以上に最強であった。これは地球人の及ぶところではない。ヘラ・ローズガーデンと戦うと、一人ではまず助からない。一小隊を用いても歯が立たない。最強の電波人間が束になってようやく、と言う所である。ヘラ・ローズガーデンはそれほどに最強なのだ。だから最悪なのだ。最強の中の最強であるスターダスト・ロックマンと、ソウル・レイダーが目一杯のお膳立てをしてもらって、ようやく倒せるというくらいに最悪だった。

「こんな化け物、スバル君よく倒せたよね」

ミソラは信じられない、と言った面持ちで呟く。信じられないくらいに化け物だから、事実スバルは一人では倒せていない。

「僕だけじゃ全然だったよ。ミライ君や、ツカサ君、五陽田さん…みんながいたから倒せたんだ」

そこにヨイリーが加わる。ディスプレイは切り替わり、今度はヘラ・ローズガーデンの立体モデルが表示されている。その横にはスターダスト・ロックマンのモデルも表示されていた。

「そこが問題なのよね。このモデルを見てちょうだい」

スターダスト・ロックマンのモデルの横に数値が表示される。数値はある一定の範囲内で常に揺らいでいる。それにグラフが合わせて波を小刻みに刻んで視覚情報にしてくれていた。

「このグラフと数値は、電波体のエネルギー反応を示しているの。いわゆる、周波数よ。全てではないけど電波体のおおよその強さを測るのに、周波数は便利だわ。スバルちゃんは電波体の中でもかなり優れた力を持っているから、平均周波数は大体８５万メガヘルツよ。ちなみにゴン太ちゃんは４０万メガヘルツね」

「スバルの半分以下かよ！」

ゴン太は泣いた。

「そしてこれがヘラ・ローズガーデンよ」

グラフも数値もスバルのものより、数段高いところを示している。

最強を超えた、化け物たる証拠だ。

「信じられないことに、あの電波体は平均して３６２万メガヘルツの周波数を持っているわ。この数値は大昔の基準だと電波とは言えないほどの周波数ね……。まさにヘラ・ローズガーデンが、自ら言っていた通りの高次電波生命体ね」

ヨイリーの口振りから、ヘラ・ローズガーデンの周波数は本質的には電波体とは言えないようだ。あまりにも内に宿すエネルギーが電波体のそれを超えている。なので昔の定義で行くならば、電波とは言えないという。超高周期電磁波と言うのだろう。しかし、この時代の、二二ＸＸ年の定義では全ての電磁波を電波と括ってしまう。だから、高次電波生命体と呼んでいるのだ。それも電波に頼り切っているこの時代の流れだ。

そしてヨイリーはさらに続ける。

「これでも、十分に化け物なのに、あのワイル粒子とかいう謎の粒子であいつは数段強くなったわね。でも、それは数値に出来ないほどだったわ。残留電波から推測した値だけど、ヘラ・ローズガーデンはまさに化け物だったのよ。でも……」

ヨイリーはスバル達を見る。表情は険しくない。

「でも、よく倒したわね。えらいわ、みんな！　すごいわ！」

「当たり前だぜ！　俺様が負けるわけないだろ！」

ゴン他の調子はよろしい事だ。だが、ゴン太はふと疑問が浮かんだ。

「でもよ、婆ちゃん。こんなものを見せて何が言いたいんだ？　こ

いつが十分にやばいのは身をもって体験してんだぜ？」
「そう。これから言う事が今日、あなた達を呼びつけた本当の目的よ。心して聞いて」

ヨイリーは一息吸った。研究室に沈黙が降りる。シドウもミライもヨイリーが何を言うのかは知っていた。スバル達は沈黙に覚えのない緊張を感じていた。そしてヨイリーが重大で重要な事を質問する。その言葉はとても重い。そして大事なことなのだ。

「スバルちゃん、ミソラちゃん、ゴン太ちゃん。私達にその力を貸してくれないかしら？　遊撃隊としてではなく、正式に協力をお願いするわ」

スバル達は今まで遊撃隊としてＷＡＸＡやサテラポリスに協力してきた。しかし今度は正式な隊員として力を貸せというのだ。何か重大な訳が隠されているに違いない。

「あの、そのなんで協力してほしいんですか？」

スバルが抱いたのは当然の疑問だ。シドウが答える。

「詳しい事は言えない。だけど、さっきも見ただろう。ヘラ・ローズガーデンの化け物じみた強さを。そんな相手にまた戦える勇気があるんなら、協力してくれると助かる。これは強制じゃない。お前たちの意志で決めるんだ」

詳しい理由を言わないが、シドウの口振りから察するに、ヘラ・ローズガーデンのような化け物とまた相対することを覚悟しなければならないらしい。あの映像見せた理由は、実際に圧倒的な化け物を見せることによりその覚悟をより真実のものにするためだろう。

了承した瞬間、スバル達は誘拐事件の時のように、命を危険に晒さなくてはならなくなる。

「俺……、俺は協力するぜ！　ミライのヤローがやるんだ。俺にも協力できないわけがないぜ！」

ゴン太は即断だ。ただの考えなしなのか、本当に強い勇気を持っているのかはゴン太にしか分からない。恐らくどちらも混じった上での判断だろう。少なくとも、ゴン太はやられっぱなしで黙っていられる人間ではない。ましてや臆病者でもない。得てしてゴン太は馬鹿だが、時にそれが勇敢と言う事になる。

「私もやります！　私にはもう守る家族はいないけど。けど、守りたいと思える人はたくさんいるから……！　だから協力します！　もし戦うことになってしまっても、守りたいから！」

ミソラもゴン太に続く。ミソラが言うように、ミソラには家族はもういない。唯一の家族であった母親は病気で一年以上前に亡くなってしまった。父親は母親が病気になるとすぐに姿を消した。だからミソラにはもう守るべき家族はいない。しかし、守りたい人達なら沢山いた。ミソラは、家族がいないからと投げやりになって戦いの道へと挑んでいるわけではないのだ。母親を失った時の孤独を、不安を、もう味わいたくはなかった。何よりも大切な人達を守りたい、ただそれだけだ。

「ゴン太、ミソラちゃん……」

弱々しくスバルはミソラとゴン太を眺めている。眩しすぎる光を見るように、その目ははっきりと二人を捉えられない。スバルは二人のようにすぐに答えが出せない。

そうやって悩むスバルは苦しんでいるのだ。つい前に見せられた映像が原因で委縮していたのもそうだが、それ以上に戦うかもしれないという事が不安で仕方がなかった。自分が傷付くのは我慢が出来る。しかしそれで母親が傷付けてしまう結果になるのが、どうしても我慢できなかった。死んでしまうという事は、スバルにとっては自分の命がなくなるという事ではなかった。あかねを殺すという事だった。

そんなスバルはずっと母に黙って、人知れず戦ってきたのだ。戦いが終わるたびに、自分の身が無事な事に安心し、母親への罪悪感に苛まれていたのだ。母親にはスバルしか家族は残されていない。自分は死ぬわけにいかなかった。

そんなスバルが初めて戦ったのは、母親の住むコダマタウンが襲われた時だった。その時は母を守るためにスバルは戦った。その時は母親以外に守りたい、と思える人間がスバルにはまだいなかった。だからそれで良かった。しかし、次第に守りたいと思える人が増えていった。そのたびにスバルは戦った。守る為に戦う回数も自然と増えていったのだ。そして気が付いた頃にはもう、スバルは地球で最強の存在になってしまっていた。大切な人達も母だけではなくなっていた。

母親を守りたいと思い戦い始めたスバルはいつしか、地球の人達の希望や信頼を背負っていたのであった。繋がりが増えすぎてしまった。スバルには地球は重すぎる。ロックマンも重すぎた。しかし引き返せない。

そんな苦悩と葛藤を続けるうちに、スバルはとうとう戦う事が出来なくなってしまった。相棒であるウォーロックを失ってしまったのだ。スバルはウォーロックを失った事を酷く悲しんだ。今もその悲しみを引きずっていないと言えば嘘になる。しかし、同時にもう戦わなくてもよいという安心や安堵を感じていたのもまた事実だ。

そんな、スバルはゴン太程、馬鹿になれない。ゴン太ほど勇敢でもなければ度胸もない。それにミソラほど自己犠牲の精神も持ち合

わせていない。スバルはそこまで人が良くないのだ、と自分で思っているのだ。人が褒めたたえる程の人間ではないと思っているのだ。色々考えてしまうと、何もできなくなる。自分が卑怯だとさえ思ってしまう。思いたくなる。思った。

だから簡単に戦うという判断が下せない。母親を悲しませないだけの絶対的な強さを持っていない。最強ではあるが、化け物には及ばないと感じ取ってしまった。かと言って、他の人間を見捨てるほどの非情さも持ち合わせていない。割り切らないのではない、割り切れないのだ。

戦い始めたきっかけは小さな感情だったはずなのだ。母親を守りたいというごく当たり前の感情だったのだ。皮肉にも今となって、その気持ちが戦う事を邪魔をしている。どちらかを取るなんてできない。

大吾だったらどうしたのだろうか、そんなことばかりがスバルの頭を巡っているのだ。

その大吾なら、間違いなく挑戦の道を選ぶだろう。戦っても絶対に死なない、と彼なら言うのだ。死んでも死なないと言うのだ。死ぬわけにはいかない理由があるのだ。大吾もスバルも死ねないのだ。だから大吾は心にだけは死ねないと決めていたのだ。気持ちだけは死んではいけないと大吾は知っていたのだ。それが戦う勇気にもなれば、覚悟にもなる。しかしスバルと大吾は違う。性格も考え方も大きく違う。大吾ほど自分を強く保てないのだ。その考え方が出来るほどスバルは強くなかった。臆病だった。

「僕は……戦わなきゃいけない。でも、母さんを傷つけるのは絶対にイヤだ。だから戦うのはやっぱり怖い。この前、戦ってみて良くわかったよ」

「スバル君……」

ミソラは悲しそうな目をした。仕方ないと言えば仕方がない。ゴ

ン太もこころなしか落胆してるように見える。ミライは目を瞑った。シドウは、責めるな、分かってやれ、と言いたげにミソラとゴン太を目で諭す。しかし、彼が一番スバルを責めているのかもしれない。シドウはもう戦える体ではない。出来るものなら、代わって戦ってやりたかった。だが、そんなことはできない。だから期待してしまう。その期待がスバルを責め立てる。期待を裏切ろうものなら、シドウはスバルを庇う。スバルにとってそれは酷く悲しい事なのだ。

庇われるような事をしたと実感させられるからだ。

「でも……」

スバルと大吾は違う。違うから、親子なのだ。だから伝えるべき事を教えられる。子供にないものを意志として子供に託せる。そうやって子は親を超える。スバルは心まで死んでない。気持ちまで死んではいけないと知っているのだ。越えていくのだ。それが何になるのかは大吾から感じ取っている。確かに受け継いでいる。

「何も守れないのはもうイヤだ。母さんを悲しませる結果になるのもいやだ。どっちもイヤだから、死なないために戦う！　どっちも捨てられないからどっちも取りたい。僕は臆病だからどっちかを捨てるなんてできないんだ。どっちも守らないといけないんだ！　それが僕なりの勇気だと思う」

スバルはどちらかを取るのではなくて、どちらも取る選択をした。この選択はある意味では一番、愚かともいえる。何もかもを失う。そんな可能性を秘めている。以前のスバルならそれに怯えて何もしなかった。母を傷付けない為だと言い、戦う事は絶対にしなかった。しかし今のスバルは違う。確かに大吾ほど強くはなかった。しかし、スバルなりに強くなったのだ。トラッシュと共にロックマンである事を、受け入れるのではなく、自分で選んだのだ。そんなスバルが

弱いわけがなかった。仲間との繋がりからスバルは強くなれた。だからスバルなのだ。

そうなるとミソラとゴン太の顔に自然と活力が戻る。選択は自由のはずだったが、スバルがいるのといないのとでは戦力としては大きく違う。戦艦から折り紙の船になるくらいの振れ幅がある。スバルはそれほどに最強の中の最強なのだ。ただの最強であるゴン太とは違う。

「……これで許してね……母さん。これがいいんだよね、父さん」

スバルは両手で、首からぶら下げた流星型のペンダントを包み込む。母への許しと、大吾へ自分の意志を示すかのように胸の流星に語りかけた。

スバルは臆病者だ。何ものも切り捨てる事が出来ない。だから愚かなのだ。だから最善なのだ。度を過ぎた臆病は最強でありつつも最善を選択し続けることの可能性を見出させる。スバルは、だから何よりも強い。最強の中の最強よりも強い、最悪の化け物よりも、臆病なスバルの方が強いのだ。

力では越えられないものを人間は持っている。スバルはその何かを戦いの中でさえ持って来られる。誰も持って来られないその何かを持って来られるのだ。大吾でさえ持ちこむことの出来ないその何かを、だ。

「へへっ、何が『僕は臆病だ』だ！　偉そうに言うんじゃねーよ」

ゴン太は鼻を擦りながら言った。馬鹿にしているわけではない。もちろん褒めているわけでもない。安心しているのだ。ミソラも同じだ。

「やめなって、ゴン太君。でも、やっぱりスバル君はスバル君だね

！　なんだかホッとしたよ」
「ありがとう、ミソラちゃん。……ちなみにゴン太、君よりかは僕の方が強い自信があるからねっ」
「うっせー」

ゴン太は数値的にはスバルの半分以下だ。とても可哀そうである。せめて半分は行ってほしかったところだ。しかし、電波人間の強さはこれが全てではないので、それほど気にするところではない。

「フフ、決まりみたいね。だったら、あなた達の真価を測らせてもらうわ……！」

ヨイリーがしわで深く刻み込まれた顔面をより笑みで刻み込む。科学者の目だ。渇望しているのだ、まだ知らぬ事実とやらに、スバル達の真価とやらにを欲しているのだ。

「世界で通用するだけの力があるのか。地球を守れるだけの力があるのか見せてもらうわよ。シドウちゃんをアレをやるわよ！」
「分かりましたよ！　博士」

シドウがハンターのエアディスプレイを叩いて何かを発信している。ミライは呟く。

「アレか……」

ミライは微笑とも言えない、かすかに表情の傾向を変えたのみだった。その微妙な作り変えが何を意味しているのかは分からない。恐らくミライも分かっていない。
　すると机横の本棚が自動ドアのようにスライドした。これは隠し通路と言うやつだろう。何故隠す必要があるのかは、実験の反道徳

性に起因するのか、それとももっと別のやましさに原因があるのか、のどちらかだろう。それとも隠すという事にロマンを感じているだけなのかもしれない。科学者は終わることのない実験や研究を繰り返す。その結果、頭は良いのだが、頭がおかしくなってしまうものである。ヨイリーはどうだろう、年召した人なのでおかしい可能性は大いにある。しかし、これからやることによって自然と結果は分かるだろう。

「さあ、さっき明らかに道を開けたあの怪しい本棚の裏に行ってくれ」

シドウは水先案内人だ。その先に何が待っているのか分からない、その場所へと案内してくれる。シドウの流した手先は秘密の道を示している。早く行くんだ、と言っているようなものだ。

「ささ、まずはゴン太ちゃんからねー。私と一緒にあの奥にある部屋に行きましょう」

ゴン太は直々に指名されてしまった。ヨイリーは早々に隠し部屋へと続く道に消えていった。ゴン太も行かないわけにはいかない。どことなく怪しげな隠し通路の入り口は、ゴン太には紛れもなく過度な演出がかかっているはずだ。ロダン作ならぬ、ゴン太作、腐敗牛丼の門と言ったところか。

覚悟も決めずにゴン太は喉を鳴らすと、ヨイリーに付いていく。

「ちょっくら行ってくるぜ！　俺の真価を試しに行ってくるぜ……！」

ゴン太にしては格好付けたものだ。その真価とやらが存在してくれれば、と願うばかりである。

「いってらっしゃい」

ミソラとスバルはちゃんと手を振って見送ってやった。ゴン太が穴に消えて見えなくなると、よほど中は何もない通路なのだろう、足音が反響して聞こえてくる。その道は長いのだ。つまり繋がる先は隔離されている。

やがて足音は聞こえなくなった。

「おいおい、お前たちも行けよ」

シドウは水先案内人だ。無理やりに導く。促されるままスバル達も消えていった。

当然ミライが行くことはない。そんな所に用事はないのだ。すでに真価とやらを測り終わっていた。世界に通用するだけの力もあるし、地球を守るだけの強さもある。それどころか、群を抜いている。ソウル・レイダーという存在は、特別なのだ。何よりも特別なのだ。ある一面ではロックマン以上の存在であった。

「星河は問題ないとして、あとの二人はどうかな……」

ミライはお手並み拝見といった様子で、左手の手袋をはめ直した。その二眼は通路を示している。そしてすぐにその二眼はまぶたに隠される。

スバルとミソラは薄暗い通路を歩いていた。やたらと長い。少し先に行ったはずのゴン太の姿はもう見えない。見えるのは上方の薄緑の蛍光灯が作る二人の影だけだ。気を利かせて何か装飾でも施せば良いものだがこの場所には本当に何もない。掃除をしている雰囲気の場所でもないのに、埃一つない。それが返って嫌なものなのだ。

何もない場所を二人して歩いていると、妙に寂しくなった。二人は何か話したくなった。

あの、と二人は同時に話を切り出す。本当に同時に切り出すものだから、どっちから話していいものかわからない。

「スバル君から、どうぞ」

「えっ、良いの？」

スバルはレディファーストを失念した。いや、ミソラを淑女と呼ぶには気が引ける。スバルはそこまで考えたうえでの判断と言う訳だ。しかし、どちらにしても、レディファーストは失念している。そして喋る。

「今日はいい天気だったね！」

別に天気は悪くはなかった。しかし良くもなかった。それにここでは天気が分からない。天井が低過ぎる。結果、どうでもいい情報としてミソラに処理された。スバルは掴み損ねた。幾度となく勝利を掴んできたスバルは、幾度となく電波体を圧倒してきたスバルは、女友達一人を相手にできない。

「ハハっ……。天気……良いよね。私の心の天気は悪いけど……」

ミソラの呟き。

「えっ……？」

スバルはどう言っていいのか分からなかった。突っ込んでいいのか、悪いのか分からなかった。今思えばスバルはミソラに突っ込んだ事はなかった。ゴン太に慣れ切ってしまっていた。今のスバルは

無力だ。
　沈黙が漂う。足音だけは止まない。だから余計に沈黙していると思ってしまう。

「……（わー、沈黙だー。これが噂に聞く沈黙ってやつね。いや、突っ込んでスバル君！　キミってそういうの得意だったじゃないっ。これじゃ私が恥ずかしいよっ）」
「あー……、あ、そう言えばさ。ミソラちゃんって、やけにヨイリー博士と仲良くなかった？　って、なんか博士ってミライ君とも親しげだったよね。……一方的にだけど」

　突っ込み師スバルはあえて突っ込まなかった。まずは話題を探っていく。とりあえずの所は気になった事をあげていくだけだ。これで意外と沈黙はなくなるはずだった。突っ込み師は突っ込むときに最善の状況を作るものなのだ。

「って、あれ。突っ込んでくれないの？　ゴン太君には突っ込んでるのに、私には突っ込んでくれないんだね……。私じゃ、突っ込むに値しないって言いたいのね。ゴン太君とかスゴイもんね」

　ミソラが悲しそうに俯く。照明が上にしかないのだから、表情など真っ黒に塗り潰されてしまって分かるものも分からない。それでも口調は少し寂しそうではあった。ミソラのそれは、不慣れなのかゴン太の天然的な、とても突っ込みやすいお惚けではなかった。とは言っても突っ込んでやらなかったのは、悪かったのだな、とスバルは少し反省した。真面目だからとても反省した。
　なので心機一転頑張ってみるのだ。

「……そ、そんなことないよ……！　な、なんだよ。心の天気ってー。そんなの悪いことなんてないはずでしょー？」

頑張ってはみたものの、とりあえずここまでは棒読み。ゴン太相手でなければ調子が出ない。苦戦中だ。昔に起きた三つの大事件の大トリを務めた、アンドロメダよりもラ・ムーよりもクリムゾン・ドラゴンよりも、何よりも苦戦を強いらせる。しかし言葉を途切れさせたらそこで終わりなのだ。終了なのだ。

「クッ……、アッ、うう、だ、だってだってさ。あ、あのだってさ。き、君の心の天気はいつもきれいで美しいじゃないかっ」

どもりまくりだ。しゃべっている途中にどもっているのではない。どもりながら、その一瞬のすきを突いて最善のルートを割り出しているのだ。そして思いついた。

「……ミソラだけに……」

とても小さな声だ。恥ずかしさと馬鹿馬鹿しさで声を大にして言えるわけがなかった。そこら辺に転がっている小汚い親父でも思いつくというものだ。スバルは小汚い親父に成り下がった。流星の親父になった。

「クッ……ダメか……。助けてくれよ、ロック……っ」

『私では助けれそうもありません』

かき消されてしまいそうな声だ。そしてウォーロックはいない。トラッシュが解決できることでもない。どうしようもない。ミソラの判断待ちだ。

「プッ……」

ミソラは立ち止った。何かを堪えてくれている。それは笑いだ。

「アハハハハ！　全然面白くない！　すごく恥ずかしいよ。下らないよ」

「下らないこと言いました。ハイ」

スバルは何とか、その場を打開した気分になった。ミソラがつまらないと言いつつも笑ってくれているのだ。ホッとしてしまうわけだ。

もうそれなりに歩いていたのだろう。そうすると、薄明かりの中に扉と思しきものが見えてくる。二人はさらに歩み寄ると、扉の前に脚の短い椅子が置いてあった。壁に沿って置いてあるので、病院の待合室みたいになっている。そして扉の上の方には、手術中、と示しているかのように蛍光板が赤く光っている。文字は『Ｎｏｗ ｏｐｅｒａｔｉｎｇ』と記されている。ぼやけた光だが、薄暗いこの中では十分に明るい。ゴン太はこの中だろう。

二人は椅子に座ってゴン太の帰りを待つ事にする。二人の間には三〇センチメートルの隔たりがある。スバルが作ったのだ。密着などするわけにはいかない。二人っきりなのだ。少し離れて座るのが礼儀だと思っていた。スバルなりの、だ。ミソラも密着しようとは思わない。だから三〇センチメートルという距離が出来ているのだ。これでいい。

しかしゴン太はいくら待っても帰ってこない。中で何が繰り広げられているのかは想像できない。一向に終わる気配がないのだ。とにかく帰ってこない。

「ゴン太君。遅いね」

ミソラだ。とにかく何かを言ってしまいたかった。そして言った。

当たり障りのない事をスバルに言うのだ。スバルの中でも、この台詞は何百何千と試行してきたが、結局は言わなかった。言ったところで、だから何？　で終わってしまう恐れがあったからだ。しかしミソラは言った。そうなるとスバルの腕の見せ所だ。どうかわしいなし、相手を満足させるのか、それだけが問題なのだ。先の選択の誤りで、またミソラを不機嫌にさせるわけにはいかない。これはミソラがわがままなのではない。スバルが、お人好しすぎるのだ。

「中で、何か楽しい事でもしてるんじゃないかな？」
「例えば？」

スバルは考えない。考えている間の沈黙はまずいのだ。

「牛丼パーティー」
「あはっ。それって、本気？」
「本気」

掴みは上々。ミソラも笑っている。スバルも気を遣っているようにしか見えないが、存外楽しそうだ。基本二人の仲は良い。楽しくないわけはないのだろう。しかし、つい先程、もしかしたらまたヘラ・ローズガーデンのような化け物と戦うかもしれない、という選択をしたのだ。それで落ち着けなかったのだろう。何となく気まずかったのだろう。

「ゴン太君って、ホントに牛丼が好きだね」
「ちがうよ。二人は相思相愛なんだよっ」

下らない会話が、待合室で座る二人の間で展開される。

「二人って、牛丼とゴン太君？」

「そうだよ。おかしいかな？」
「おかしいよ」
「おかしいね」
「ついでに相思相愛っていうのも、おかしいよ」
「ミソラちゃんっ、牛丼にだって意思はあると思うんだ！　今の人類の科学ではそこまでの領域にまで及ばないけど、絶対にあると思うんだ。だってね……」

スバルのオタク魂に火が付いた。ちなみにオタク魂と言うのは、ルナがスバルに勝手に付けたものだ。スバルは本当にどうでもいい事に熱くなれる。熱く語る。

「わわーっと、ストップ、ストップ！　分かったから、牛丼の事はもういいから」
「ゴメンゴメン。どうやら少し、ゴン太になりすぎたようだね」
「（ゴン太君になりすぎるってどういう意味……？）……ハハ、そうだね」

ミソラは笑った。スバルが意味不明だからだ。

「今、馬鹿にしたでしょ？」
「してないよ」
「したよ」
「してません」
「しました」
「し・て・ま・せ・ん」
「し・ま・し・た」
「してないっ」
「したっ」
「しーてーなーい」

「しーたー」

やはり仲が良いのだろう。下らないことをこう長々と出来るのは容易なことではない。

「アハハっ、バカみたい。私たちって、なんでこんなことしてるんだろうね？」

「確かに、僕も少しムキになりすぎました！　でも実際なんでこんなことしてるんだろうね？」

二人は笑った。意味もなく笑い合えた。そして、いつの間にか隔てる距離は一五センチメートルになっていた。二人は気付かない。笑いが止まると、スバルがふとさっきから気になっていた事を質問した。気になっていたと言っても、そんなに気にしてもいない。ただ聞いておこうかな、というものだった。

「……そういえば。さっきの質問だけどさ。ミソラちゃんってやけにヨイリー博士と親しげだったね？　ついでにミライ君も、まあ、あれは一方的な感じだったけどさ」

「ミライ君？　そうだね、私が知っているのは……」

スバルは一瞬、何故、ついでって言ったミライの方から話すのだろう、と思ったが特に気にはしなかった。どっちから話そうが、ミソラの自由だと思ったからだ。むしろ話さないという選択肢もあると思ったからだ。

「でも、ミライ君ってこういう事、勝手に言われるのってなんか嫌いそうでしょ？　だから二人の内緒ね？」

ミソラは人差し指で口を可愛く真っ二つに割って、スバルの同意

を求める。スバル自身、こういう話には興味ない。しかしミライとなれば、話は別だ。ミライは自分の事は語らない。語ろうとしない。だからスバルはミライの事をほとんど何も知らない。ソウル・レイダーになれて、異常に頼れるサテラポリスの若きエースという事ぐらいしか知らないのだ。ミソラはスバルの知らないなにかを知っているというのだ。

だから自然とスバルは興味を惹かれた。少しドキドキとしてさえもいるのだ。

「うん、内緒にする」

「わかった。よろしい！」

ミソラが本題を切り出す。

「ミライ君ってね。実は……」

「実は……？」

「実はアメロッパ人とニホン人とのハーフなのよ！　知ってた？」

衝撃の事実だ。だがスバルにしてはそれは衝撃でも何物でもない。ただの真実だ。驚けない。

「知らないよ。アメロッパからやってきてたのは知ってたけどさ。でも彩道ミライってニホン人の名前だよ？」

「だから、何か事情があるんだと思うよ？　私たちが知っちゃいけないことがあるんだと思うんだ」

「ふーん、他には？」

「他？　あと一つあるよ。ヨイリー博士ってやたらとミライ君のこと知ってるんだよね」

スバルは、なんでヨイリーの知っている事をミソラが知っている

のだ、と疑問に思った。だが気にした所で始まらない。次の話を探るだけだ。するとミソラは、次の事を話しだす。

「でね、最後に言っておくけど、ヨイリー博士とミライ君は親せき同士らしいよ」

「ふーん、って親せき同士!?　それはすごい事なんじゃないの?」

「うん、私も驚いちゃった」

　ミソラは可愛く惚ける。舌を小さく覗かせるのだ。だが、ウインクのおまけはないのだ。そこは流石にアイドルだ。しかしスバルはアイドルだのなんだのとそういった浮ついたものには興味がない。硬派な男子なのだ。効かないのだ。

「で、続き柄は?」

「えっと、続柄は確かミライ君のお父さんのお父さんのお姉さんがヨイリー博士だったと思うよ」

「……て言う事は、大伯母さんか。それにしてもすごいな、ミライ君は大科学者の家系なんだ」

「うん、そうだよ。たしか、ミライ君のお父さんはトニック・W・リフレインっていうアメロッパの大科学者なんだって、ヨイリー博士がそう言ってたよ」

　ミソラはあっさりと言った。だがリフレインと言えば、ＷＡＸＡ最高機関アメロッパ総本部の長官である。言わば、地球で最高の地位を持つ科学者なのである。ヨイリーはニホンで最高の地位と実力を持つ科学者だ。しかしリフレインは世界で最高の地位と実力を持つのだ。ミライは、その彼の息子だ、とミソラが言う。ミソラの言う事が本当なら、ミライは最高の科学者の血を引いて、最高の科学者の家系を持ち、最強の電波人間の中でも最強の存在であるのだ。そしてサテラポリスのエースである。

スバルはとても自分達と同じ小学六年生とは思えなかった。

「スゴイよ……、とても、同じ小学生には思えない……」

スバルは驚きを隠せない。何か圧倒的な差を見せつけられてしまった気がしたのだ。しかしスバルは気が付いていない。

スバルこそ、最高の父を持ち、母を持ち、自身は地球の命運を何度も背負って戦ったのだ。スバルこそ、自信を持つべきだと思われる。しかしスバルは自分を誇るすべなど知らない。自分を大きく見せる術など知らないのだ。だから、今までやって来られたという節もある。だから、他人の信頼を表も裏もなく貰う事が出来る。スバルのような人間に他人は惹かれていくのだ。そうして他人ではなくなっていく。

ミソラもそんな人間の一人だ。

「スバル君だって、十分にすごいと思うよ！　気にするなよっ、星河スバル！」

ミソラはスバルの肩をポンポンと叩いてやる。笑顔は屈託のない真っすぐなものだ。スバルだけを見ている。もう二人を隔てる距離は殆どなかった。

「ありがとうミソラちゃん。そんなに気にしてないから大丈夫だよ。って、思ったんだけど、ミソラちゃんの中の僕はそんなにすぐに落ち込む人なの？」

ミソラは指で輪を作る。どうやら当たってしまったらしい。

「ピンポーン！　当たり！」

「って、ちょっとそれはショックだよ」

今度は本当に落ち込む。不安げに流星のペンダントを弄るその姿は何とも女々しい。しかしミソラはそんなスバルが嫌いではなかった。勇敢なヒーローだと思わせれば、今のように弱気な少年の姿を見せる。そんな、ちぐはぐな組み合わせが不思議と尊敬にも値する。不思議と格好良くも見えてくるのだ。

「嘘だって。冗談冗談！　まったくスバル君ったら、冗談が通じないんだからー」

そう言いながら、ミソラはスバルにすり寄ろうとする。当然スバルは横にずれて逃げる。

「逃げるなー」
「そりゃ、逃げるよ。なんなんだよいきなりっ」
「いきなりでなにがわるいー」

だが、その逃走劇はすぐに幕を閉じた。スバルが扉のある壁に追いやられたのだ。もう逃げられない。

二人は完全に密着した。ミソラは満足。スバルは堪ったものではない。ミソラが嫌いだからではない。嫌いではないから堪ったものではないのだ。ミソラの息遣いが聞こえてくるから堪ったものではないのだ。ミソラの体温が服の上からでも伝わってくるから堪ったものではないのだ。自分の鼓動がミソラに聞かれているのではないだろうかと不安になるから堪ったものではないのだ。平静を装わなければならなくなるから堪ったものではないのだ。

二人っきりだから堪ったものではないのだ。

ゴン太よ、早く帰ってこい、そんなことばかりスバルは考えていた。ミソラが、どれだけ性格が醜くて、自分の嫌いとする人間であれば良かっただろう。そんなことばかり考えていた。とにかくスバ

ルは恥ずかしい。逃げたいけど逃げたくない。矛盾している。賢いからスバルは馬鹿だ。

座っているはずなのに、体力を消耗しているとスバルは錯覚した。ミソラはそれほどの存在と言う事になる。

「な、な、何いきなりミソラちゃん？」

「なんか寒かったんだー。スバル君って、あったかいね。さすが男の子っ」

ミソラは楽しそうだ。スバルは大変そうだ。

「な、何いきなりミソラちゃん？」

「フフ、今何時なんだろうねー？　だいぶ時間たったよね？」

「何いきなりミソラちゃん？」

スバルは狂っていた。平静を装いながら、装えず狂っていないように狂っていた。やはりスバルは天才だ。

しかし、ミソラは息を詰まらせた。彼女の中で何かが一転したのだ。スバルを見ていると、不安になったのだ。スバルはミソラの事で一杯一杯になっている。それが不安なのだ。

「……お母さんに連絡取らなくてよかったの？　心配してるかもよ？　勝手に戦う事決めてきっと心配してる……」

ミソラの口調が変わった。明らかに変わった。ふざけていない。真剣だ。スバルも狂うのはやめた。綺麗な翡翠がスバルを見つめてくる。その目を見つめ返さないと悪い気がした。そこに誠意があると思ったから、スバルも誠意で返さないといけないと思った。だからミソラはスバルが嫌いじゃないのだ。

「ねえ……？」

今のミソラの出す空気は儚い。音付きなのでより儚い。

「……連絡はメールでしたよ」

そう言い、スバルは無言でハンター中のトラッシュに問いかける。ハンターは腰のポーチに入っていて様子は分からないが、おそらくトラッシュも頷いているはずだ。

メールとは冷たい手段だとスバルは自分でも分かっていた。あかねの泣き声など聞きたくはないのだ。仕方がない。

スバルは続ける。

「いままで、母さんに相談しなかったわけじゃないんだ。入院中に何度もやってきて、僕に『もう戦わないわよね？』って何度も聞くんだ……」

入院とは誘拐事件の事だ。

スバルはあかねからそれを聞かれるたびに押し黙った。何も答えられないと、自分で決めていたからだ。あかねも答えを待つが、スバルが答えを返してくれないのだと次第に悟っていったのであった。

「僕は何も答えられなかった。それでいつも母さんは、僕が何も言えなくなると『自分のしたいようにしなさい』って言ってくれるんだ。でも……」

「でも？」

「今回だけは、何も言ってくれなかった。戦うなとも、戦えとも。始めは戦うなって言ってたのに、退院する頃になったらもう何も言ってくれなくなったんだ」

おそらく、あかねはスバルの意志を尊重したかった。だが、スバルを戦いに出す決心など付く訳もなかった。小学生に戦わせるなど母親としてあり得ないと思っていたのだ。例えスバルが自分の知らない所で、地球で最も優秀な戦士になっていたとしてもだ。

悩んだ結果が、その件については何も言わなくなる事だったのだろう。あかねにしてみれば、もう、何も起きなければそれで良かったからだ。何も起きなければ、スバルもあかねもその事を忘れられる。その為に、世界がスバルを必要としないことを祈り続けていた。だが結果は無情だった。

世界はスバルを必要としたのだ。スバルはそれを選んだのだ。戦いを選んだのだ。今頃、メールを受け取ったあかねは泣いているのだろう。

泣かせた事はスバルも分かっていた。だから、泣かせてしまった事を後悔して、あかねを絶望の淵に落さないように死なないことを覚悟するしかなかった。それがどれだけ矛盾していても、スバルにはそれしかできないのだ。

ミソラもスバルの思いを汲み取ったようだ。

「だから、それで戦う事を選んだの？　キミは？」

「……うん」

「そう……か。やっぱりスバル君は強いよ。私のママがもし生きていたら絶対離れたくないもん」

ミソラの母はもう死んだ。もういないのだ。

「だからスバル君は強いよ。強すぎるよ」

ミソラは小さく笑った。母親の事を思い出してしまったのだろう。目が一層に輝いているように見える。そんな彼女の心に影が差している事もスバルは気付いたはずだ。

「ミソラちゃん……」

するとミソラが改まる。

「スバル君。それで、私、決めたんだ」

するとミソラはスバルの手を取った。スバルは一瞬驚くが、ミソラを拒む真似はしたくはなかった。だから、遠慮しながらも弱々しくも握り返すことにした。

「何を決めたの？」

「私、実はスバル君に内緒にしてた事があったんだ……」

「内緒に……？」

「うん、だからいまここで全部言っておきたいんだ。それを決めたの。だって私たちブラザーだもんね。それにヨイリー博士と関係が出来たのもこれに理由があるんだ」

ミソラとスバルはブラザーだ。ブラザーとは親友とも恋人とも言えない、もっと別の繋がりの事だ。二人の間には、その特別な絆があるのだ。だからミソラは隠し事がしたくなかったのだろう。ブラザーバンドを結んだ時、ミソラはそのことをずっと決心していたのかもしれない。

ミソラがスバルに質問された時、ミライの事を先に話したのもこれに原因があるのだろう。ミソラがスバルにすり寄ってきたのもこれに原因があるのだろう。

ミソラは今まで隠し続けてきた事実を語りだす。

「私はママとずっと二人で過ごしてきたって言ったよね。でも本当

は違うんだ。四年前までのある日まで、私にはパパがいたんだ。そうあの日まではね」

スバルは、ミソラの水浸しになって今にも悲しみの宝石がこぼれだしそうな翡翠を見つめることしかできない。これが最善だと思っている。ミソラも耐えている。

スバルは彼女の瞳の奥に宿る思い出を見透かそうとも思えないが、彼女の想いが溢れ出てそれを感じ取ってしまう。

ミソラの幼少の頃よりの思い出がその翡翠の中に一杯に詰まっている。嬉しいことも、楽しいことも、悲しいことも、何もかもだ。

スバルは彼女を見ているとその思い出の世界に連れて行かれそうな錯覚を覚えた。それほどにここは静かで、薄暗く、一層彼女の言葉が耳を奪う。スバルも聞き入る。誘われる。

ミソラのあの時が始まった。

ｗｗｒ―０２：眩しかった記憶

二二ＸＸ年より四年前の二二〇Ｘ年。

ニホンにはベイサイドシティという大きな町がある。そこは海のそばにあって、透き通るような海と砂浜が美しい町だ。四年前でもそれは変わらない。

そんなベイサイドシティに一組の家族が暮らしている。その家族は決して裕福とは言えないが、確かな幸せを感じて日々を過ごしていた。家族の中には、かけがえのない絆で結ばれているのだ。

そんな家族の一員の少女が、真っすぐで曇りのない笑顔でそう物語っているのだ。未来への希望に目を輝かせている。家族とのかけがえのない時間に充足を感じている。少女は今を精一杯楽しんで生きている。だから、その少女の翡翠色の瞳には、何もかもが素晴らしく見えている事だろう。

そんな無垢な少女の父親は、ＷＡＸＡの科学研究員だ。ただＷＡＸＡと言っても、極普通の社員で給料も決して高くはない。贅沢が出来るほどの額ではないのだ。だがその父親、響ワタルは若いながらも、科学者として確かな実力を持っていた。その光る原石のような才能は、あのヨイリー博士でさえ認めている所だ。順調にいけば、偉大な科学者となる日はそう遠くないのだろう。

そのワタルは今の給料に満足はしていない。なぜなら、妻の響カンナが病弱であったからだ。妻に苦労をかけさせるわけにはいかなかったのだ。ワタルには金が必要なのだ。妻の弱い体を治療し続けていくのには金が必要なのだ。

そんな状況では、給料から治療費を差し引けばほとんど何も残ら

ない。だから贅沢はできない。しかし一人娘の響ミソラはそんな事で一度も文句は言わなかった。小さいながらも家庭の事情を理解して、それでもなお、幸せを感じているのだった。

「ゴメンね、ミソラ。ママの体が弱いばっかりに迷惑かけて……」

小さな家の狭い部屋に敷かれた布団に伏しながらも、カンナはミソラに申し訳なさそうにしている。彼女は薄幸な人間を示すようにその顔色は良くなかった。顔は少しやつれているが、美人と言ってもいい位に整っている。女性としての魅力をまだまだ持ち合わせているのだ。

そんな母にミソラはある作業に没頭しながら言う。手を忙しなく動かせながらも母を元気付ける。

「ママ。そういうのって言わない約束だよ？　ワタシ、今のままが良いんだもん。あ、でも、ママの病気が治ればもっと嬉しいよ」

カンナを気遣って言ってるのか、言っていないのか、幼いミソラはそう言うのだ。

ミソラの優しさに、カンナがほほ笑みかける。しかしカンナを苦しめる病気は『Ｕｎｓｔａｂｌｅ　Ｈｅｍｏｇｌｏｂｉｎ　Ｄｉｓｅａｓｅ』という血液の難病だ。世間一般には、通称Ｈ．Ｂ．Ｄとして知られている。症状を抑える治療法は遠く昔に確立されていたが、カンナの場合、血液中のヘモグロビンの寿命が異常に短い。一般的なＨ．Ｂ．Ｄ患者に比べて十分の一とないのだ。なので少し運動しただけですぐに溶血性ショック反応を起こし、十分に血液が行かなくなった心臓に激しい痛みが襲う。それは想像を絶するほどだ。そんな現状から、二二〇Ｘ年の現在となってもカンナの病気を根本から治す手段は見当たらなかった。

そしてミソラは先程から、ある作業をしていた。ミソラはカンナの布団の横で折り紙を折っていたのだ。

いや、折り紙ではない。新聞紙を折っていたのだ。ミソラは鮮やかでも何でもない新聞紙で器用に熊を折っていた。出来上がったものは、綺麗に親子連れの熊の形をしていた。新聞紙だが、確かに折り紙だった。

「見て見て、ママ！　これクマさん。こっちの小さいのが小グマさん。とっても幸せな家族なんだよ」

「あらあら、ミソラはとても優しいのね。ほんと、ミソラはいい子ね」

すると、カンナは愛おしそうに我が娘を抱きかかえる。寝巻きの裾から覗く、痩せて細くなった腕は精一杯にミソラを抱く。

そう、カンナは知っていたのだ。もう自分の寿命がそんなには長くないことを。まだ幼い、このミソラと過ごす時間が、もう、そう長くないことを知っていたのだ。だからカンナは、出来るだけ娘をこの身に感じていたかった。出来るだけ愛情を注いでやりたかった。もっと一緒にいたかった。

しかし、最愛の母に抱かれるミソラは、このことを知らない。ワタルとカンナの秘密だった。ミソラの何も知らないが故の笑顔が愛おしいと共に、カンナの心に酷く暗い影を落とす。

「キャハッ、どうしたのママ？　明日パパがお仕事から帰ってくるから嬉しくて仕方がないのかなー？」

ワタルは仕事が終わる明日に帰ってくる。明日は『きずな』計画が実行される日だ。その宇宙ステーションきずなプロジェクトに、ワタルは若いながらも召集されていたのだ。しかし当然だが、ワタルに重要な役割など与えられるわけではなく、召集の理由は人材育

成の一環だった。若手のワタルは明日行われる、人類初の謎の地球外生命体との接触計画の研修に行っていたのだ。

「そうね。確かにそれも嬉しいけど、やっぱり家族みんなで、久しぶりにお出かけが出来るのがうれしいわ。ミソラも楽しみだよね？」

「うん！」

ワタルが帰ってくるとカンナは病院に、病気の状態を検査しに行く予定だった。もし体調が良好ならば、家族揃って遊園地に遊びに行けると言う訳だ。

もっともその為には、カンナの病気の良し悪しによる。少しでも発作の危険があれば、外に出向くなど出来ないのだからだ。

今ミソラと一緒に暮らせている事が十分に奇跡なのだ。ワタルが必死に治療費を稼いでくれているおかげで、今の生活があると言える。

だからカンナは、明日の検査結果が良好であることを祈っている。家族揃って外出などめったにないのだ。どうしてもミソラとの思い出を作りたかった。

このこじんまりとした響家には特に娯楽がない。ミソラが新聞紙を折っているくらいなのだから、想像に容易い。ミソラは折り紙にも飽きてしまった様子。するとミソラは古ぼけたテレビの電源を入れた。

ニュース番組だ。明日行われる宇宙ステーションきずな打ち上げのニュース一色だ。どこの局も精鋭揃いの屈強な宇宙飛行士たちや、最新鋭の超長距離航行可能な人類の夢の体現者である宇宙ステーションきずなを取り上げていた。

しかしミソラは事の事情が分からないようで、どこも同じような映像を流すテレビ画面を不思議そうに眺めている。近い将来、今度はミソラ自身がテレビの画面を独占する事になるとは、当然この時

はまだ知る由もない。

「ママー、全部同じチャンネルになってるよ？」

「それはね、ミソラ。明日はみんながとってもすごいことをする日なのよ。遠い宇宙のお友達に会いに行く日なのよ」

「パパもいくの？」

「ううん、パパはいかないよ。出発のその日まで、お手伝いをするだけだよ」

「なーんだ」

ミソラはつまらなさそうに口をつぐんだ。自分の父親が仲間外れになった気分なのだろう。

「パパのお仕事は、宇宙に行くことじゃないわ。みんなの生活を豊かにする事がお仕事なの。これもスゴイことだと思わない？　それともミソラはパパが遠い所に行っちゃってもいいのかな？」

ミソラは先程とは一転して、嫌だ、と大きな声で言った。どうやら、宇宙に行くということがどういうことかまだ分かっていなかったらしい。

すると、テレビではある人物が紹介された。ニュースでも話題の人物は、星河大吾だ。画面には屈強な宇宙飛行士の中でも、ひと際晴れやかな表情を浮かべている人物がいた。若いながらも宇宙ステーションのクルーリーダーを務めている。船員の統率者に、ニホン人が抜擢されるなど異例中の異例の事だった。テレビは大吾を取り上げていた。

『いよいよ明日に迫ってまいりました！　人類の夢！　そして希望！　その世界中すべての思いを宇宙へと運ぶ宇宙飛行士の方達を取り上げていきたいと思います！

まずは何と言っても、宇宙飛行士たちのチームの要である星河大吾さんでしょう！　３０歳という若さにもかかわらず、船員たちのリーダーを務め、それどころか宇宙人たちとの交流を図るのも彼なのです！

ニホン人が宇宙飛行士になるだけでも大変なことなのに、ここまで重要な役割を任せられるなんて同じニホン人として誇りに思いますね！　では次は、南国育ちの陽気な……』

「ママっ。このツンツン頭の、笑っているおっきな人、スゴイ筋肉だよ！パパよりもずっとおっきいね」

「ほんとね。パパとそんなに歳も変わらないのに本当にすごい人ね……。きっとすごい努力家なんだね」

「違うよ、ママー。パパもすごい努力家だよー！」

ミソラは自分の父親もすごいのだと言い張る。

「フフ、知ってるよ。パパもすごい努力家だよね」

「そうね。私たちのパパは本当にガンバリ屋さんだよね」

「うんっ」

ｗｗｒ―０３：奇跡は当然

数時間後、午後一〇時。ＷＡＸＡ、研修員用談話室。

ワタルは、誰もいなくなった室内で、今回の研修の内容を振り返っていた。部屋には静かにひっそりと、キーボードを叩く音が鳴っている。そしてワタルは思わずこぼす。

「それにしても、スゴイ計画だな。うまくいってブラザーバンド、結べるといいな……」

ワタルは物思いにふけり、作業が止まってしまう。

「おっと、いけないな。今回得た経験は絶対に物にしないと……。もっと実力をつけて、金を稼いでミソラとカンナに楽をさせるんだ」

ワタルは勤勉で努力を惜しまない。その才能を研鑽し、家族のためにひたすら前に、前に科学の道を進むのみであった。明るい将来を築いていくために、家族で出来るだけ長く一緒に過ごす、ただそれだけのために。ワタルは必死なのだ。だから、他の研修員が帰ってしまっても、黙々と研究をしている。

数分が経っただろうか、そんな中、研修員室に一人の男が入ってきた。ヨロシッカ人の男だ。高い鼻に、色素の薄い青い瞳が特徴である。髪の毛は、白に限りなく近い金色だった。ブラザーバンドを示す、光の線で形を作るシンボルマークが胸元で輝いている。彼は、きずなのクルーなのだ。年齢は二十八歳でワタルと同じで、クルー

の中では二番目に若かった。
彼は快活それ当然といった様子でワタルに話しかける。
「ヨッ！　ワタル、お前また頑張ってんのな。スゴイな」
ヨロシッカ人の男性はワタルを心配しているようだ。それもそのはず、彼とワタルは親友同士なのだ。理由は、歳が同じもそうだが、それ以上にワタルの努力を惜しまないその姿に彼自身が惹かれているのだった。当然、家庭の事情も知っている。妻が治り得ない難病を持っている事も知っているのだ。だから、彼はありきたりな「すごい」という言葉をワタルに惜しげもなく言えるのだ。
「ジョニーか。どうしたんだ？　明日はきずなの打ち上げだろ、早く帰って休めよ」
「分かってるって。今、ミーティングが終わって帰るところだったんだ。ハハ、明日は宇宙だぜ？　信じられるか？」
想像もつかないと言いたげにワタルは首を傾げた。
それに対しジョニーは明日の船出が楽しみといった様子で、自慢の腕っぷしをワタルに掲げて見せる。太さはワタルよりも一回り太い。流石は宇宙飛行士だ。
そしてジョニーは、キーボードを叩いているワタルに歩み寄る。物理演算をしているワタルのデスクトップ型のエアディスプレイを覗き込むのだ。
「これは何をしているんだ？」
「物理演算で、明日、きずなが通る航路の状態をシミュレートしているのさ」
緻密な物理演算が作る仮想空間をきずなが飛んでいる。その宇宙

の旅は順調なようだ。

「お！　俺達のことを心配しているのか？　憎いね！」

「まあね」

「はは！　そうか」

ジョニーは声をあげて笑う。そして一考。

「おっと、こんなことしてる場合じゃなかったんだ」

「当たり前だろ。お前、明日宇宙に行くんだろうが」

「ちがうって、人を待たせてるんだ」

「誰をだ？」

「星河大吾さんだ」

ワタルは固まった。

「え？」

一音発するので精一杯。

星河大吾はＷＡＸＡ職員が憧れてやまない存在なのだ。屈強な宇宙飛行士であり、優秀な科学者でもあるのだから当然だ。ワタルも大吾に憧れていた。年は二つ上なだけだが、二人の間には惨然たる差があった。若くして宇宙飛行士になったジョニーとも水をあけられている感は否めないが、大吾とはそれ以上に離れている。遠すぎる。

ワタルは大吾に憧れると同時に羨ましかった。大吾はワタルの持っていないものを全て持っていたのだからだ。

そしてジョニーは呆けるワタルの肩を叩く。渇を入れたのだ。

「お前と話がしたいんだってさ。よっ、期待の星！」

ワタルは驚きから帰ってこない。ワタルの中の時間が止まったままだ。

「おいおい、大丈夫かよ。まあいいや、大吾さーん。入ってきていいぜ！」

すると部屋に大吾が入ってきた。わざわざ外で待っていたらしい。タイミングを見計らったように出てくればいいものを、そうはしない所が大吾らしい。

「おいおい、いつまで話し込んでんだ。先輩を冷たい廊下で待たせるなよ！」

「スミマセーン。じゃ、ワタル、俺、帰るわ。明日に備えて、な！」

ジョニーは帰ってしまった。大吾はワタルの隣の机の空いている椅子に座った。ワタルは否が応にも大吾の存在を感じた。

「よお。響君……だよな？　こうやって面と向かって話すのは初めてだよな」

ワタルは頷いた。そして大吾に疑問を呈する。

「あの、俺に何か用ですか？　星河さんともあろう方が俺なんかに……、明日は宇宙に出発するんでしょう？」

「ま、そうなるわけだ。しかしな、ちょっと君のことが気になったんだ。まあ何となくと言っちゃ何となくだよな！」

豪快に笑う大吾は、生やし始めた顎鬚を撫でる。そして続ける。

「研修中の響君、スゴイ熱心にやってたからさ。これはスゴイ科学者になるぞ、って思っちまったんだよな。ヨイリー博士もワタルちゃんはいつか私を超えていくだろう、ってよ」
「ハハ、褒めてもしょうがないですよ」
ワタルは謙遜する。大吾はワタルの様子を見ていた。そしてずいぶんと強引に話を引きだす。
「なあ、響君。たまに、研究室とかで見かけるけど、お前いっつも必死だよな？　何か訳があるんだろう？」
「……っ」
ワタルは一瞬だけ間をおいてしまった。慌てて否定する。
「そんなことないですよ。そういう性質なんですよ、俺」
「嘘つくなよ。……悪いと思ったが、事情はジョニーから聞いてるんだ」
「ジョニー……」
この時ばかりは口の軽いジョニーを恨めしく思った。しかしジョニーには悪気はない。ワタルには良き理解者が必要だとジョニーは常日頃から思っていたのだ。ワタルは一人で抱え込みすぎているのだった。
「おっと、ジョニーを悪く思うなよ。俺が半ば無理やり聞き出したんだからな。先輩権限ってヤツだ」
大吾は白い歯を惜しげもなく見せて笑う。ワタルはそんな大吾を見ていると、密かな懐疑心など馬鹿馬鹿しくなった。

「ハハ、星河さんには敵いませんね」

するとワタルはエアディスプレイを閉じて大吾と向き合う。

向かい合う先の大吾は真っすぐな人間だった。響ワタルという人間に、一人の仲間として向かい合っていた。大吾ほどの男であれば、特に大した役職を待たない人間にい構っている余裕はないはずなのだ。だが、こうやって、ワタルの真実を知ろうとしているのだ。

職場の仲間でもない、何か特別な関連性を、大吾は彼から感じ取っていたのだろう。ワタルもそうであった。大吾になら、と思わせるのだ。

「俺……、俺は必死に働いてお金を稼がなきゃならないんです」

大吾はワタルの伏している顔を見ていた。その表情を詮索する気もないのだろう。

「俺、ずっと星河さんに憧れてました。こんな人になれたら、家族にだって迷惑苦労させないですむし……」

「俺もお前を尊敬してるぞ」

大吾はにこりと笑う。ワタルもその笑顔に返す。

「いや、俺はまだまだです。もっと、立派にならなければ。カンナやミソラを幸せにしてやりたいんです。だからもっと……カンナが笑ってくれている、この間に」

ワタルの握った拳は小さく震えていた。強すぎる意志が彼の後姿を弱く見せてしまう。

「……奥さん、病気なんだってな。俺が言っても仕方ないかもしれ

ないが、絶対治る。だから、頑張れよ」

大吾の言葉は残酷だ。知らないということは凶悪なナイフとなる。悪意がなければないほど、優しければ優しいほど鋭利な刃となる。それが何度も突き刺してきた、ワタルの恐怖の部分に深く突き立てるのだ。ワタルはそのことを数え切れないほど繰り返し考えていた。奇跡の中に奇跡が起こることを期待している。期待していた。カンナの余命はもう、殆どない。

「そうなら、ホントに良かったですね」

大吾は表情を苦くする。然しもの大吾もワタルの触れてはいけない所を触れてしまったのだと悟った。

「カンナは、後一年、生きれるかどうかなんです。いや、むしろ今こうやって生きてくれている事が十分に奇跡なんですよ……！」

「悪い……」

大吾は頭を下げた。家族を失うという事を漠然と考えただけでも、それは、大吾にとっても十分な絶望だった。あらゆる困難でも希望を見出す大吾でさえも絶望を感じるのだ。どん底の暗闇なのだ。

「いや、いいですよ。俺だって、そう思ってましたから」

「諦めるなよ」

大吾はワタルの声色に危機を感じた。しかしそれは杞憂だ。

「ええ、諦めませんよ。もしかしたら治るかもしれない。そう思うのはやめたってことです」

ワタルは強い人間だ。家族を思えば人間はどこまでも強くいられるという事なのだろう。ワタルの迷いのないエメラルドグリーンの瞳がそう物語っている。

「俺がその病気を治す方法を何としてでも探しだしてみせますから」

期待はやめたのだ。挑戦をするのだ。奇跡を待つのではなく、起こす側にまわろうと言うのだ。それは並大抵のことではない。

大吾は度肝を抜かれた。

「お前……、スゴイな。よし！　俺も決めたぞ！　宇宙に行ったら、病気の特効薬を探してきてやる。何、宇宙はでかいんだ何でもあるさ」

「ハハ。いいんですかそんなこと言って。どうしても期待しちゃうじゃないですか」

「これは本気だ。だってこれを言いに来たようなものだからな！　俺もお前の気持ちがよく分かる。子供から母親を奪うなんて、俺も耐えられん」

大吾にもワタルと同じくらいの年の子供がいた。星河スバルという名の元気な少年だ。

「星河さんにも、お子さんがいらしたんですね」

「ああ、スバルって言うんだ。ちょっとやんちゃだがとってもいい子だ。自慢の息子だよ！　俺たちの宝だ」

「スバル君……良い名前ですね」

「ああ、宇宙のようにでっかい男になれってな！」

「星河さんらしいですね」

大吾は手を差し出した。それにはいつもの満面の笑顔ではなく、

内に強い意志を秘めた、大人の男の笑顔を添えていた。ワタルもそれに応える。

「これは男と男の約束だ」

「ええ、約束、ですね」

固く握手を交わす。大吾はまっすぐな瞳でワタルを見つめて、さらに、こう言うのだ。

「明日、俺は宇宙に行って、奇跡ってやつを起こしてくる。……いいか、ワタル。お前の、その家族を守りたい、という気持ちを誇りに思え。諦めた人間に奇跡は起きてくれないぞ。最後まで頑張った人間に訪れる当然の結果が奇跡って呼ばれてるんだからな」

「……ありがとうございます。星河さん」

少し申し訳なさそうにしている。そんなワタルに、大吾は眉を片方吊り上げる。その表情は少年の気持ちを忘れていないものだった。裏表なく、ひたすらに気持ちが良い。

「ハハ、大吾でいいよ。二つしか違わないだろ。な、ワタル」

「ありがとうございます。大吾さん」

ワタルはもう一度、礼を言った。

「よし、俺もそろそろ帰るよ。家族との時間を大切にしなきゃってな。あかねの作る飯も、しばらくはお預けだ。これぱっかりは心残りだよ」

そう言うと、残念そうに大吾は立ち上がった。

「スミマセン。わざわざ時間を取らせてしまって」
「おいおい、気にするなよ。俺たち、もう友達だろ？」

馴れ馴れしく肩に腕を回してくる大吾に、ワタルは思わず笑った。不思議と嫌な気分とならなかったのだ。

「ワタルも早く帰って家族に顔見せてやれよ。研修でずいぶん帰っていないんだろう？　家族との触れ合い、それが何よりの薬だと思うぞ」

大吾はワタルに問いかけるように、首を少し傾げてみせると部屋を後にした。ワタルの返答を待つまでもないと思ったのだろう。

一人になって、ワタルは、大吾の言った言葉を考えていた。

「触れ合いが何よりの薬……か。今までないがしろにしてたかもな……」

ワタルは、今まで忘れていた大切なことを思い出したようだ。そして誰に示すともなく小さく頷いた。

「よし、俺も早く切り上げて帰ろう」

そしてワタルは、ハンターの旧世代端末のトランサーの画面に目を落とした。そこには家族の写真が映っている。ワタルは自然と笑みを浮かべた。優しい表情だ。

「カンナの体調、良くなっているといいな。そしたら家族で遊園地だ。ミソラの喜ぶ顔が目に浮かぶよ」

ｗｗｒ―０４：それは涙のようで

数時間後。自分の家にワタルは帰ってきた。夜も深く、辺りは闇で一杯になっている。響家の窓も、ある一つを除いて冷たく沈黙していた。一つだけ光っている窓から、カンナが起きている事がうかがえる。もしかしたらミソラも起きているのかもしれない。

ワタルは玄関の扉を開けて、中に入る。カンナがスリッパを鳴らしながらワタルの帰りを迎える。

「ただいま」

「お帰りなさい」

ワタルはカンナにため息をついた。疲れているからではないようだ。

「カンナ、夜は冷えるから、わざわざ出迎えなくてもいいって言ってるだろ」

「大丈夫よ。最近、体の調子もいいみたいだし。それに誰も出迎えてくれなかったら寂しいでしょう。ね、ワタルさん？」

「そういう問題じゃ……」

ワタルがカンナを諭そうとすると、カンナはワタルの唇に人差し指を当てた。ワタルは少しだけ驚いた。カンナの指が冷たかったのだ。ずっと自分の帰りを待っていたのだろう、とワタルの方が悟らざるを得なかった。

「静かに……。ミソラが起きちゃうでしょ」

カンナは眉をひそめる。ワタルも悪かったと言いたげに、二回だけ小さく頷いた。

「ミソラ、寝ちゃったのか……」

「ええ、さっきまでアナタの帰りを待ってたけど流石に眠くなっちゃったみたい」

「悪いことしたな」

リビングでスーツを脱ぎながらワタルは呟いた。

「どうせまた、残って仕事でもしてたんでしょ？」

「少し、あの星河大吾さんと話してたんだよ」

「まあ」

カンナはテーブルに着くワタルにお茶を渡すと手で口を隠し驚いた。端々の仕草が丁寧で上品だ。

「みんなの言う通り、とても素晴らしい人だったよ。なぜあの人が宇宙飛行士のリーダーに選ばれたのか分かった気がするよ」

「良かったね、ワタルさん」

「ああ。おかげで、あの人が憧れから目標に変わったよ」

「ホントにワタルさんはガンバリ屋さんね」

「カンナには負けるよ」

ワタルの言った事にカンナは首を傾げる。言っている事の意味がよく分からなかったのだ。カンナは家族のお荷物だと思っているのだから。

しかし、そのカンナは必死に命に食らいついているのだ。これに勝る努力はそうはない。カンナが生きてくれているから、ワタルも精一杯の努力が出来るのだろう。そういった意味で、ワタルはカン

ナに感謝している。

「イヤ、気にしないでくれ」
「ヘンなワタルさん」
「ヘンで結構さ」

ワタルはお茶に浮かぶ自分の顔を見つめながら言っている。薄い緑色の液体に、ワタルの少しやつれた顔が揺らいでいた。そしてカンナに言う。

「カンナ、もう寝るんだ。疲れは明日に残さない方が良い」
「うん……」

明日の検査に支障が出てはいけないのだ。ここは体を休めるべきだろう。

「久しぶりに家族で出かけたいんだ。そこにお前がいなきゃ始まらないだろ?」
「そうね。もう何回も一緒に出かけるなんてできないもんね」
「お前……」

カンナは切なげに自分の胸に手を当てている。ワタルも沸き上がる切なさを噛み殺すしかできない。根拠のない威勢を張るしかできなかった。それぐらいしか見つからないのだ。

「そんなこと言うなよ。俺が絶対に何とかしてやる」
「ありがとう、ワタルさん」

カンナは笑っているのにもかかわらず、顔に一筋の光を伝わらしていた。そしてカンナは思いの丈を絞り出すように言う。

「私だってね、もっとミソラのいろんな顔を見ていたいの。成長していくあの子と、もっと生きていたいの……。でも、でも私の体は……」

「分かった。もういい」

「分かってるのよ、分かってる。ワタルさんなら何とかしてくれる……って信じられる。だから前向きに生きていこうって思える。……でも、時々どうしても怖いの。ミソラとアナタと生きていけなくなる日が来るのだと思うと怖くて仕方がないの。弱音を吐きたくなるの……」

カンナは冷たい床に、崩れるように膝から床に落ちた。驚きの表情とは違ったものを浮かべ、ワタルはすぐにカンナに寄り添って抱きしめる。カンナの体を冷やさないためでもあるが、何よりワタルも不安で仕方がなかったのだ。寂しくて、恐ろしくて、潰れてしまいそうだった。抱きしめていないと、どうにかなってしまいそうだった。

このような姿をミソラには絶対に見せられない。

「俺が何とかする。何とかするから、そんなこと言わないでくれ……」

その声は震えていた。酷く情けないものだった。それでもワタルは何とかしなければならない。残された時間は長くて一年。どうにもならない現実にも、ワタルは何とかしなければならないのだ。

ｗｗｒ―０５：本物の贈り物

翌日の朝。青空の下、星河家は騒がしかった。スバルがはしゃいでいるのだ。この時のスバルは小学二年生。今よりいささか活発である。

「スゴイよ、父さん！　僕も宇宙に行きたいよ！　父さんはいいなあ、宇宙に行けてさ。絶対面白いに違いないんだから。この目玉焼きみたいな太陽のすぐ傍を通るんでしょ！？　あーあ、僕も行きたいなあ」

朝食の目玉焼きをじっと見つめながら言っている。スバルはとことん宇宙が好きな様子だ。これは大吾の影響だと言ってほぼ間違いない。

「バカだな、スバルは。実際に太陽のすぐ傍を通れば丸焼きになっちまうよ。この目玉焼きみたいにな。ちっこいお前なんか、一瞬で真っ黒けだ！」

大吾はそう言いながら、スバルの目玉焼きをひょいと取り上げ丸ごと口に放り込んだ。少年のような人である。

「あー、僕の目玉焼き！　最後に取っておいたのに」

スバルは好きなものを最後に取っておくタイプのようだ。大吾は満足そうに腹を叩いている。とても平和だ。あかねは呆れている様

子だ。

「ちょっと、大吾さんっ。そんな子供みたいなことしてる場合じゃないでしょ？　何が待ってるか分からない宇宙にこれから行くっていうのに、この人は……」

「おいおい、あかねその言い方は心外だな。宇宙は男のロマンだ！　な、スバル？」

「そうだ、男のマロンだ。母さんは何もわかっちゃいないね」

スバルはまだ小学二年生だ。仕方がない。

「コラ、バカ。マロンじゃ格好つかないだろう！　仕方がない、このウインナーもいただくとするかな」

「ダメだよ！　これも楽しみに取っておいたんだ」

スバルはウインナーを死守する。どうやらスバルは好きなものを最後に取っておくタイプのようだ。

「ハハハ！　冗談だよ、冗談。もうそろそろ、俺も行かなくちゃいけないし、仲間も待ってるだろうしな！」

大吾は椅子にかけられた、きずなクルー専用ジャケットを手に取り立ち上がった。

「父さんは宇宙飛行士のリーダーだもんね！　良いなー僕も宇宙飛行士になりたいよ」

「ハッハハ、お前にゃまだまだ早いよ！　後二十年は修業が必要だな！　ところでスバル、お前宇宙のみやげ物は何が良い？　何でも言ってみろ宇宙にない物なんてないからな！」

スバルは一生懸命考えている様子だ。色々な想像を働かせているに違いない。そして思いついた一つを言う。

「じゃあさ、じゃあさ。宇宙人のお友達を連れて帰ってきてよ。僕もその人と友達になりたいんだ！」

「お前、なかなかの難題だな。まあ、大丈夫だろう！　宇宙人のとってもハンサムな友達を地球に連れてきてやる。父さんにかかれば軽いもんだ！」

スバルは宇宙人の友達が欲しいらしい。とても奇抜な発想だが、三年後にその約束は本来とは違った形で守られるのだ。ハンサムかどうかは置いといて、ウォーロックという宇宙人がスバルの元にやってくるのだ。しかし、今のスバルはそんなことを知る由もない。

「ホントに！？　約束だからね！」

「ああ、約束だ！」

スバルと大吾は小指を固く結んだ。男と男の約束だ。そして大吾はあかねにも聞く。

「じゃあ、あかね。お前は何が良い？」

「私はいいわ。大吾さん、アナタが無事に帰ってきてくれさえすればそれでいいの」

あかねは不安そうな表情だ。スバルでは分からないことが分かってしまうのだ。宇宙がどういう場所なのかという事を考えれば当然の反応だった。

「心配するなよ。俺は大丈夫だ。あかねの作ったうまい飯を食うために絶対帰ってくる」

「やだ、こんなときに冗談言わないでよ。……でも、ホントに行っちゃうの？　今からでも、やめるのは遅くはないんじゃない？　もし失敗したらとんでもないことよ」

「お前こそ冗談言うなよな。　宇宙は俺の小さいころからの夢で、やっとそれが叶うんだ。

それに失敗したっていいじゃないか。宇宙に挑戦するという勇気を示すことに意味があるんだ。その勇気が他の誰かを勇気付けられたら、それは素晴らしいことだろ？」

大吾はひたすらに真っすぐで、ひたすらに大きな器の人間だった。大吾にとって、宇宙に行くことは夢でもあり、決意の証でもあった。あかねがどうこう言ったところで変わることのない思いなのだろう。

スバルは目を輝かせて大吾を見上げていた。

「父さん、カッコいいよ！　僕も父さんみたいに勇気のある男になる！」

「ほら見ろ、あかね。スバルにも俺の勇気が伝わったぞ」

にっと笑っている大吾とスバルを見ていると、あかねはやれやれといった様子で溜め息をついた。

「ホントに宇宙バカね。私が何を言っても無駄なんでしょ？　それじゃ、宇宙の人達に失礼のないようにしてよ。それと絶対に無事で帰ってくること！　守らなかったら夕飯抜きだからね」

「父さん！　これで絶対に帰らなくちゃならなくなったね！」

あかねとスバルは笑顔だ。これで大吾も気持ち良く旅立てるというものであった。

「だな！　これはもう死んでも帰らなきゃな！」

大吾の宇宙への挑戦が始まる。スバルは父のそのたくましい背中を目に焼き付けたことだろう。あかねもこの瞬間のことを一生忘れないことだろう。忘れたくとも忘れない分岐点となるのだ。

玄関先で大吾は、最後の最後まで来て、いよいよ寂しくなっているスバルに目をやる。

「どうした、スバル。父さんがいなくなるのが寂しいのか？」

「そ、そんなことないよ。父さんがいない間は僕がこの家を守るよ！　だから心配しないでよ」

「おっ、頼もしいな！　よし、そんなスバルにコイツをやろう」

大吾はおもむろにスバルと面と向かい合うようにして屈む。大吾は首からぶら下げていた流星のシンボルの形をしているペンダントをスバルの首にかけてやったのだ。父からの贈り物だった。

「わあ、いいのコレ！？　大切なものだったんじゃないの？」

「お前のお守りだ。何があっても俺はお前に付いてるってことだ。だから、地球にそれを取りに帰るその日まで、この家のことを頼んだぞ、スバル」

スバルは大きく頷いた。大吾からペンダントを貰って、今なら出来ないことがないという気分だったのだ。だから、ついつい大きく出てしまった。

「分かった！　地球ごとお家を守ってあげるよ！」

「言ったな、コイツめ！」

「アハハ、父さんくすぐったいよ！」

大吾はスバルの頭をくしゃくしゃにする。これが父と子の最後のスキンシップだった。スバルの表情は幸せそうだ。

親子の触れ合いを終え、大吾は扉の取っ手に手をかける。いよいよだ。

「じゃ、ちょっと行ってくる」

「私がいないからって無理しちゃダメよ。いってらっしゃい」

「父さん！　行ってらっしゃい！」

あかねとスバルは笑顔で大吾を見送った。二人はその時、すぐに帰ってくると信じていた。大吾もそのつもりだった。

そして始まる。

「ああ、行ってきます！」

同刻。青空の下、響家は騒がしかった。ミソラがはしゃいでいるのだ。この時のミソラは小学二年生。今と変わらず活発である。

「やったーパパが帰ってきた。一週間ぶりかな、二週間ぶりかな。わー分かんないよ。でもお帰りなさい！　パパ！」

椅子に腰かけ、リビングで新聞を読んでいるワタルにミソラは抱きついた。新聞紙が滅茶苦茶にぐしゃぐしゃに潰れた。

「ハハ、久しぶりだな、ミソラ。パパの顔を忘れちゃったのかと思って心配してたんだぞ？　おっ、しばらく見ないうちにお前またちょっと大きくなったんじゃないか？」

ワタルはミソラの脇の下を抱えて、両の腕で持ち上げる。ワタルは父親の力強さをアピールしているのだ。しかしワタルはこれで結構無理をしている。腕が震えているのだ。デスクワーク派のワタルでは大吾のようにはいかないらしい。

「ちょっと、ワタルさん無理をしちゃダメですよ」
「ハハッ、何のこれしき！　まだまだ大丈夫だ」
「パパもう下ろしてよ。ママの作った朝ごはんが冷めちゃうよ」
「ああ、悪い悪い」

ワタルは腕の限界を迎える前に、何とか事なきを得たようだ。ミ

ソラをゆっくりと下ろす。
　ミソラは席に着くと、ワタルに質問した。ミソラは、ゆで卵にフォークを刺そうと奮闘中だ。ミソラの下手くそなフォークさばきに、ゆで卵はつるりとその攻撃をいなしていた。皿の上を華麗に滑っている。

「ねえ、パパ。今日はママの病気の検査の日だよね？」
「うん、そうだな」
「治ってるといいね。ううん、絶対に治ってるよ！　だってパパもママもいっつも頑張ってるんだもん。神さまも、これ以上イジワルしないよね？」

　ミソラはカンナの病気が完治している事を確信していた。その笑顔に疑いの色など微塵もないのだ。

「そうだな。きっと、神さまだって俺たちの努力を見ているはずさ。大丈夫だ。
　そしたら、みんなで遊園地だな！」

　ワタルもミソラと同様にして、にっこりと笑っている。しかしワタルは嘘つきだった。にっこりと笑っていないと、表情から嘘がばれてしまうのだ。だから笑う事で誤魔化している。
　そんな事など知らないミソラは、遊園地へ行くことにすっかりお熱だった。

「やったー！　みんなでお出かけだ！！」
「ハハハ！　良かったな、ミソラ」
「あらあら、これじゃ、私の病気も治らないわけにはいかないわね」

　食の細いカンナは、サラダをつついていた。体調も悪くはない様

子で顔色もほんのりと血の気がある。

「大丈夫！　治ってるよ、ママ！」

ミソラの底抜けの笑顔にカンナも勇気を貰った。少しだけ体が楽になった気もしたのだった。祈ることなら、もう数え切れないほどした。最善の治療も尽くしてきた。後は神の裁量次第だ。もはや医師の言葉は神の代弁であるのだ。

数時間後。時刻は十六時過ぎ、夕方になろうとしていた。特に準備をすることのないミソラはテレビを見ている。その背中越しでは、カンナとワタルは病院に向かう支度をしていた。

カンナはわずかな日にも焼かれないように、つばの広い帽子をクローゼットから取り出す。体への負担はないに越したことはないのだ。自家用車があればこのような負担はなくてすむが響家にそのような物はない。よって体への負担の少ない、夕刻の外出となったのだ。

そしてワタルは、毎日取っていたカンナの病気の記録データをトランサーに収める。このデータは、カンナの血中のヘモグロビン濃度を計っているものだった。

ワタルは最後の確認の意味を込めてトランサーの画面に目を通している。

「大丈夫。これなら大丈夫……」

数値データに目を通しながら呟く。

「ワタルさん準備はいい？」

「ん？　ああ、俺はいいぞ」

そこにミソラが二人に呼びかける。声は大きい。

「見て、パパ、ママっ。おっきなロケット！」

ミソラはテレビの画面を指差している。画面には、宇宙ステーションきずなのシグナル転送モジュールが映っていた。このモジュールは宇宙空間より、友好の証であるブラザーバンドを放出するのだ。巨大な打ち上げロケットにそのモジュールが積まれているのだった。打ち上げに成功したモジュールは、既に宇宙空間に待機している、居住モジュール、実験モジュールなどの連結ターミナルとドッキングする寸法だ。そして、遥かな宇宙に旅立つのだ。

当然のように、ワタルも画面に見入る。この計画に関わっていた人間として見届けなければいけなかった。するとカンナも、リビングのテーブルに帽子を置いた。

「もうすぐ始まるんだな。きずな計画が……」

「パパー、きずな計画って何？」

「宇宙の友達に会いに行くんだ」

「うわー、すごいね」

「ああ、スゴイことさ。俺たちも祈ろう、この計画の成功を」

「うん、私も祈るっ」

するとテレビのレポーターと思しき人物が、いよいよ始まる世紀の瞬間を視聴者に報道する。流石に興奮を隠し得ないようだ。人類の大きな一歩になるのだから無理もない。

ワタルはその様子を見て思い出したことだろう。テレビの向こうにいる、大吾と交わした約束のことを。『宇宙には何でもある』という言葉は夢を夢でなくす言葉なのだ。そこには奇跡でさえもあるのかもしれない。

レポーターの高まる期待の声色をした音声が流れる。

『皆さま、見ていますでしょうか!?　この世紀の瞬間を!
私たち報道陣のいるこの場所から、防護シールドを挟んだ向こう側にロケットが見えます。そう、宇宙ステーションきずなの最終打ち上げモジュールです!　あの中に宇宙飛行士の方々が乗っているのです。さあ、もうすぐです皆さま!　人類の新たなる歴史の幕あけです。祈りましょう、きずなクルーの成功を!　誇りましょう!
きずなクルーの勇気を!』

この瞬間、世界中の人達がきずなの打ち上げ成功を願っていた。そして未知なる地球外生命との接触に人類の新たなる一歩を見出していた。
その宇宙飛行士達の勇気に感銘を受けた子供達が、この日、世界中に生まれた。大吾の言った通りだった。勇気は伝染していくのだ。

そして、ＷＡＸＡに来ていたあかねは祈っていた。胸の所で両手をしっかりと握りこんでいる。スバルは目を輝かせて、モニターに映る父の勇姿を目に焼き付けていた。父は英雄になるのだ、とスバルはそう信じているのだった。
するとスバルは天地の袖を引っ張る。当時の天地はまだ、天地研究所の所長ではなく、ＷＡＸＡの研究職員だった。若さの残るその顔をスバルに向ける。

「どうしたんだい。スバル君?」

スバルは満面の笑みを浮かべた。とびっきりの最上級だ。

「父さんはヒーローになるんだよ!　僕のヒーローから、みんなのヒーローになるんだ!」
「ああ、大吾さんは英雄だ。僕たちのヒーローを信じような」

スバルは大きく頷いた。

そして、夢を背負う宇宙への挑戦者である、きずなモジュールの中。主な照明が全て落されて、予備電源のみが淡く緑色に光っていた。耐衝撃用の送電管理だ。そんなモジュールの中のコックピットに大吾達は座っていたのだ。クルー達は狭いコックピットの中で地面と垂直になって待機している。ＷＡＸＡ管制局から発射の許可を待っているのだ。

大吾は先頭の座席に座っていた。きずなの他のモジュールに接続するまでの宇宙空間航行を任せれているのだ。そして彼は他の乗組員にこう言う。元気付けるのだ。

「おい、みんな！　大丈夫か？　ビビってないよな！？」

大吾は目の前に広がる空を見つめながら言った。

「ダーイジョウブですよ！　こんなの訓練で慣れ過ぎですから！にしてもこの体勢はキッツイですね。背中がかけねーや」

ジョニーだ。後ろの座席で調子良く言っていた。冗談が言えるだけまだ余裕だ。そこに最年長の乗組員であるスティーブがジョニーをたしなめる。

「ジョニー、訓練と本番は違うからな。あんまり笑っていると、加重で内臓を痛めるぞ」

スティーブの言う通りだ。流石に最年長だけあって、言うことも違ってくる。

「そうだ、ジョニー。スティーブさんの言う通りだぞ。宇宙を楽しめ、でも舐めるな。これを肝に銘じておけよ」
「へいへい」

ジョニーは不満気に口を閉じた。

「ハッハ、宇宙を楽しめか。大吾らしいセリフだな。でもそれでこそ俺たちの船長だ」

スティーブは白いものが混じり始めた髭を撫でる。そこにチョイナ人風の宇宙飛行士がスティーブに問いかける。

「でも、スティーブさん。本当に大丈夫だったんですか？　会社に残らなくて」
「シャオには関係ないだろ。こっちが俺の本職だから、いいんだ。経営ならリカに任せておけば大丈夫だ」
「なら、いいですけど。宇宙で会社が惜しくなっても困りますもんね」

そしておもむろにチョイナ人の男は辺りを見渡した。

「そういえば、ケンの奴が見当たらないな……。大吾、アイツはどうしたんだ？」
「ケンか……。確か、サテラポリスから急に仕事が入ったとかで、オスアニキに行ったそうだ。そうだろ、ジョニー？」
「そうですね。しかしまあ、ＷＡＸＡの宇宙飛行士にあの若さでなったってのに信じられないですよー。ダチの俺でも理解に苦しみます。あり得なーいって感じです。宇宙を棒に振るなんてね！」

ジョニーは首を横に振って見せる。すると管制局から通信が入っ

てきた。中年の男の声だ。

『聞こえるか？　こちら管制局。きずな、応答せよ』

「こちらきずな、準備は完了しています。いつでも行けます」

大吾が受け答えをする。他のクルーもいよいよ本番だと悟り、静かにその時を待つ。

『そうか。なら出発の前に、嬉しい知らせだ。クルーメンバー全員のご家族の方にお越しいただいている。最後に話しておきたいこともあるだろう？　話しておきたまえ』

管制局からの粋な計らいだった。

「ありがとうございます。リフレイン博士」

そしてクルーメンバーは順番に、それぞれの家族と最後の会話をする。誰しもが、その一言一言を胸に刻んでいたことだろう。

『お父しゃま！　宇宙で一番美しい星を買収してくださいまし！それがエリアの望みですわ！』

「ハハ、無茶言うな」

『アナタ。後のことは私に任せて、アナタはアナタの仕事に専念してくださいね』

「ああ、後は任せた」

スティーブの番が終わると、次は大吾の番だ。コックピットにスバルの声が鳴り響く。

『父さん、聞こえる！？』

「おっ、スバルか？　わざわざアメロッパまで来たのか？」
『うん、家に迎えが来たんだ。ビップ待遇ってヤツらしいよ』
「難しい言葉を覚えたなコイツめ」

大吾は思わず笑ってしまう。

『良かったー。やっぱり父さんは楽しそうだね。コクピットが暗くて狭いからてっきり怖がってるのかと思っちゃったよ』
「ああ、楽しいさ。目の前に空が広がってるんだ。ワクワクするさ。おっと、スバルそろそろ母さんに代わってくれ」

スバルが分かった、と言うと、今度はあかねの声が聞こえてきた。

『大吾さん、大丈夫？』
「ああ、大丈夫だとも。むしろ、楽しいくらいさ」
『分かった。アナタの帰り待ってるからね……。ずっと』
「何、すぐ帰ってくるさ。じゃあな」

この言葉を最後に、通信の回線が切り替わった。時間が来たのだ。管制局から再び通信が届く。天地の声だ。

『こちら管制局、後一二〇秒後にきずなロケットの打ちあげを開始します。ステージ1。燃焼機関、動力系のストッパーを開放。システム、オールグリーン。少し揺れます、注意してください』
「天地か。しっかり頼むぞ」
『大吾さん、お気をつけて』

大吾は、心配するな、と自信満々で答えた。するとコックピット内は小さく揺れ始めた。ロケットエンジンに燃料が回り始めたのだ。ロケットの目覚めを示すかのようにその揺れは確かな鼓動となって

いく。
きずなクルー全員の表情が真剣な男のものへと変わる。目の前に広がる空を見据える。
「いよいよだな……」
大吾は小さく呟いた。口角を少し上げている。心地の良い緊張感を楽しんでいるのだ。
いよいよコックピット内の、揺れがピークを迎えた。
『ステージ2。船員の皆さんは衝撃に備えて、生命維持装置を起動してください』
打ち上げの際に重力が自身の体重の何倍とかかるのだ。生命維持装置は必須の代物だ。船員たちのしぼんでいた宇宙服が少し膨れあがる。
『ステージ、ファイナル。ハッチ解放。エンジン点火します』
すると大吾達の背中の方から、空気が爆発するように低く唸る獣の雄叫びが聞こえてきた。後方からは眩い光が燦々と輝く。まるで花火大会だ。
コックピット内は一瞬、強い衝撃を受けて上に突き上げられる。しかし大吾達はそんな事では動揺しない。
そして管制局から音声が流れてきた。リフレイン博士のものだ。
『皆、幸運を祈る。打ち上げ、三秒前……』
船員たちは椅子の手すりを握りこむ。

『二秒前……』

スティーブは、その時を待つように目を閉じた。対照的に、ジョニーは大きく目を見開く

『一秒前……』

大吾は力強く、親指を突き立てた。

『……発射！！』

その言葉と同時に、光は大きく膨れ上がりロケットを空に押し上げる。そして高く、高く宇宙に向かって登っていく。世界中の人達がその光景を目に焼き付けた。

その時、船内の大吾達は強い重力を感じていただろう。腹に目一杯の力を込めて、血液を体中に巡らさないと意識が飛んでしまう。それほどに極限状態であったのだ。コックピット内の配線や機器類がやたらめったらと躍っているのだ。これは、不安を煽って仕方がないだろう。

しかし大吾は、段々近づいてくる空を目の前にしてその状況さえも楽しんでいるのだった。

管制局でスバルは、モニターに映るきずなロケットを見つめていた。そのロケットは段々小さくなり、空の茜色に混ざっていく。そして、見えなくなった。スバルはあかねの手を握る。あかねも握り返す。

「頑張れ。父さん」

胸元に小さな流星を輝かせて、少年は言うのだった。

ベイサイドシティの響家も、事の次第を見守っていた。テレビを見つめていたミソラはワタルに言った。

「行っちゃったね。ロケット」

「ああ……。頑張れ……っ、大吾さん」

ワタルはテレビ画面に映る茜色の空に呟いた。そしてテレビを消した。

「さあ、今度は俺たちの頑張る番だな」

ワタルはテーブルの帽子を取ってやり、カンナに手渡す。

「ええ」

カンナが帽子を受け取る。するとミソラは玄関の方へ走っていった。

「ねえ、早く行こうよっ」

ミソラは二人を急かす。

ワタル達は、病院へと向かった。

ウェーブライナーで数分の所に、ベイサイドシティで一番の設備を持つ病院がある。カンナは普段からそこに通っていた。名前はワンガン病院。ベイサイドシティのビーチストリートにある病院だ。

三人は受付を済ませると、診察室へと向かった。入った部屋の中は白く清潔な印象である。やはり純白であるカーテンの向こう側に

は、先端技術が盛り込まれた医療機器があるのだろう。そんなシルエットがぼんやりと浮かび上がっているのだ。
そして、カルテがぎっしりと積まれた机の横に、強面の医師が座っていた。

「では、響さん座ってください」

カンナは医師の促されるままに、背の低い椅子に座った。医師と対面だ。ワタルとミソラは後ろの方で看護師と一緒にその様子を見守る。ミソラは少し不安そうだ。
医師の問診が始まった。

「響さん、最近体の調子はどうですかな?」
「ええ、特に大きな発作も起こることなく過ごしています。体の方も調子は良さそうです」

医師はエアディスプレイに何かを打ち込んだ。カンナも慣れたもので特に気にする様子もない。

「……確かに、ワタルさんのデータを見る限り、発作はここ数カ月間、起こしていないようですね。容体は良好でしょう」

ミソラの表情が明るくなる。隣の看護師を見上げて、嬉しそうにしているのだ。白衣の天使もほほ笑みを返す。

「では……。少しくらい外出しても……」
「ああ、その話ですか」

どうやら、外出の件はずいぶんと前から医師に相談していたらしい。医師も少し考えているようで、エアディスプレイのH・B・D

のデータに目を通している。

「随分と待ちました……。そろそろ、いいんじゃないですか？」

カンナも言いたいことは山ほどあるが、ミソラがいる手前、込み入った話も出来ない。それは医師の方とて同じ事だった。なので片手を少し上げて看護師に合図を送る。ミソラを部屋から出せというものだった。

「ミソラちゃん？　ちょっと部屋の外で待ってましょうねー？」

看護師が優しくミソラに語りかける。ミソラは不満そうだ。

「えー、またー？　また内緒の話なの？」

「とっても大事な話なの。ミソラちゃんにはちょっと難しいから、お姉さんと一緒に、お外で待ってましょうね」

ワタルは看護師に、お願いします、と頭を下げた。ミソラは頬を膨らませて、ワタルに抗議するがワタルは首を横に振るだけだ。

ミソラは看護師と共に、しぶしぶと部屋から出ていった。

ミソラの気配を感じなくなると、医師がワタルにも座るように促す。

「では、率直な意見を言いましょう。体調は良好ですが、病気は着実に進行しています」

脅かすつもりはないのだろうが、医師の眼光は鋭い。ワタルは肩を落とした。愕然とした。そして、二人の目の前に、医師が医療データの記述されたエアディスプレイを数枚展開させる。

「分かりますか？　これが、H．B．D患者のヘモグロビンの寿命データです」

エアディスプレイには『Ｈｂ　Ｌｉｆｅ』と記載された項目が映っている。H．B．D患者はそこに記載された数値が少ない。

「そしてこれがカンナさんのデータです」

カンナの数値は酷く少ないものだった。それほどにヘモグロビンの寿命が少なかった。血液が壊れやすいという事だった。

ワタルは頷いた。何度も見たデータだったのだ。

「これは分かっています。でもさっきは良好だと……」

「表面的に見える体調は、確かに良好です。それはワタルさんの献身的な努力の結果とも言えます。

しかし彼女の場合、この病気は進行を遅らせることが出来ても、止めることはできないのです」

「そんな……」

ワタルはうなだれた。しかしカンナはそんな彼に、大丈夫、と言ってやった。カンナは自分の体の事などとっくに知っていたのだ。だから出来るだけ、ミソラと思い出を作っていたかった。

「普通のH．B．Dの場合、ヘモグロビンが死ぬ前に新たな血液を輸血し、それを繰り返すと、何とか回復にまでこじつけることが出来るのですが……。

カンナさんの場合、それを繰り返してもヘモグロビンの寿命が短すぎて、徐々に血液の機能が下がっていくのです」

「だったら、それ以上のペースで輸血を繰り返せば……」

医師は手でさえぎる。

「それはできません。血液量の少ない子供なら出来たかもしれませんが、大人の大きな体でそれをやるとなると……。カンナさんの体がもたないでしょう……。ましてやカンナさんの体はもうボロボロです。そんな事はとても……」

ワタルは言葉が出なかった。しかし、カンナの方はそんなに落胆している様子はなかった。

「我々とて、全力を尽くしますが、今の医療では進行を遅らせることで精いっぱいなのです」

「だったら、カンナはあと何年生きられるんですか？」

ワタルはカンナと、あと何年間過ごせるのか不安で仕方がなかった。治らないのであれば、何年間、幸せな時間を引き延ばせるのかを知っておきたかった。知っておかなければ努力する目標を失ってしまう。足掻く気力すら無くなってしまう。

医師は表情を苦くした。ワタルから目を逸らす。

「非常に言いにくいのですが……。もって半年、あるいは……」

「え……？」

ワタルの予想を大きく裏切っていた。もう何年も残されていなかった。半年だった。

「ど、どういうことですか？　だって、前は一年……、治療を続ければもっと、もっと長く……そ、そんなワケ」

「残念ですが、最善を尽くしたとしても、半年が限界でしょう……」

医師は白衣を纏った漆黒の裁判官だった。ワタルとカンナに死刑宣告を渡したのだ。しかし医師は続けるのだ。

「カンナさん。先程、大きな発作はなくなったと言っていましたが、小さな発作の間隔は段々短くなっていったのではないですか？」

カンナは小さく頷いた。カンナの体はもうボロボロだった。限界だった。

「やはりそうですか。おかしいと思ったんですよ。血中のヘモグロビン濃度が低下しているのに体調が良くなるわけがない……、そんなわけないんです。ホントなら、体全体の臓器が不全を起こしてもおかしくない値なのですから。その短くなっている発作の間隔が証拠でしょう」

言いかえれば、次に発作が起これば命の保証が出来ないと言う事だった。

「ゴメンね、ワタルさん。一緒には思い出作り、できないみたい……」

カンナは残り少ない命の中でも、ミソラとの思い出を築きあげることなど出来なかった。カンナはもう諦めた。ミソラと、もう思い出が作れないこの体が恨めしくて仕方がなかったはずだ。

「先生！　何とかならないんですか。いや！　何とかしてくださいよ！　何でもしますから！　俺、何でもしますから……！　半年なんてあんまりじゃないですか……っ」

「……ワタルさん。それこそ奇跡でも起こらない限り、寿命を延ばすことはもう無理です。……後は、残された半年間をどう生きるの

か……、それだけです」

彼は残酷だと分かっていても、こう言うしかないのだ。希望を持たせても仕方がない。医師としては、こう言うしかなかったのだろう。

カンナは重い口を開いた。

「私、分かってました。もうそんなに長くないって。だからこの残された命を、ミソラとの思い出作りに使いたいです……っ。あの子の中に、私の生きた証を残したいんです……」

「……遊園地の件ですが、はっきり言って医師としては今、外出することは、許可を出せません。今すぐに入院しなければいけない状況なのです」

「何とかしてください。頼みます！」

カンナは珍しく語尾を荒げた。そこに医師は指を三本立てた。

「三か月です。三か月間、集中治療をしたら一日位の外出なら耐えられるように体の調子を調節できます」

「じゃあ……っ！」

カンナは表情を明るくした。しかし医師は続ける。あまり勧められた提案ではないらしい。

「しかし、集中治療には莫大なお金がかかります。それに治療には苦痛も伴うでしょう。それでアナタの苦しむ姿を娘さんに見せることになるハズです。そんな事はアナタだって望んではいないでしょう？」

カンナは言った。笑顔だった。

「治療、受けさせてください。私なら大丈夫です。苦しむ顔なんてあの子に見せません。いつも笑顔で、生きていくって決めてますから」

ワタルも続く。

「俺がその治療費を払います。それぐらいで済むなら安いものです！」

医師も折れたようだ。目を瞑り、小さく笑っている。

「そうですか。なら、幸運を祈りましょう。アナタ達家族の明るい未来を」

それから三カ月間、カンナは集中治療に専念した。ミソラも、これで病気が治るのだと思ったらしく、カンナの事を応援していた。実際には、最後の思い出作りの準備をしていたことなど知らなかった。知ってはならないのだ。だからカンナはミソラの前では常に笑顔でいることを心がけた。治療がどんなに辛くとも娘の前では絶対に笑顔を絶やさなかった。

嘘をつく罪悪感よりも、ミソラの笑顔を壊すことを恐れたのだ。

ワタルはより一層、働いた。そして金を稼いで、稼いで、稼げるだけ稼いだ。そして、暫くが経ったある日、ヨイリー博士により、研究室の一つを任されることになった。研究職員から、研究室長にワタルは昇格した。努力が認められたのだ。

そして月日は流れ、三ヶ月後の二二〇X年八月二日。約束の日が来た。

「うむ、検査結果は良好です。これなら一日位の外出なら許可できますね」

三か月前と同じ医師は、あの時に比べ、ずいぶんと表情を柔らかくしていた。

「ありがとうございますっ」

カンナは医師に頭を下げた。

「ありがとうございますっ」

ミソラもカンナを真似て、お辞儀をする。

「いいんだよ。お礼なんて、ミソラちゃんもよく三ヵ月間、我慢したな。えらいぞ」

「当然だよ！　ママとパパが頑張ってるのに、私がわがまま言うのは違うもんっ」

「そうかそうか、そうだったね。響さん、とても出来た娘さんですね」

医師に褒められて、ミソラは照れ臭そうにしている。

「ええ、ホント私にはもったいない子です。じゃ、行ってきます」

カンナはそう言って、診察室を後にした。ミソラは部屋を出るとき医師に、人懐っこく手を振っていた。

「じゃ、俺も行きます」

ワタルは席を立とうとする。

「響さん」

医師が呼びとめる。

「なんです？」

「くれぐれも無理をさせないでください。治療の結果、今日一日は大丈夫なハズですが、油断はならない状態ですから」

「わかってます」

医師はふっ、と笑った。

「残された三ヵ月間をどうか幸せに。我々も非力ながら力添えしますので」

「三ヵ月じゃありません。もっと長く、続けさせてみせます。カンナと俺なら出来る気がします。……じゃ、行ってきます」

ワタルはこの三ヶ月間で精神的により強くなったようだ。表情が晴れやかなものとなっている。

響家の最後の思い出作りが始まった。

ｗｗｒ―07：デウス・エクス・マキナ

ミソラ達の訪れた場所はコダマタウンにある、エリアパークだ。それは、コダマタウンと言う辺境の田舎にあるにも関わらず、連日満員の名レジャースポットだった。ミソラも噂のエリアパークに胸を躍らせている。事実、踊っている。流石に、歌って踊れるアイドルになることが決まっているだけあった。

ミソラは早く中に入りたくて堪らないらしい。ワタルの袖を引っ張っている。チケットを早く買って欲しいのだ。

しかし、ワタルはチケット売り場に向かわなかった。そのまま改札に向かっていってしまった。なので、ミソラはワタルに注意してやる。ワタルが遊園地の入り方を知らないと思ったからだ。

「パパ！　順番が違うよ！」

大声で呼びかける。それほどに先に行ってしまっている。

「いいから。早くついて来いって」

ワタルは改札の手前で、手招きをしている。そして、カンナはミソラの手を引いてやる。

「ミソラ、行こうか？　パパに何か考えがあるみたいよ」

素直なミソラは大きく頷く。

「分かったー」

そして三人は改札を通ろうとする。でも通れない。柵状の格子で道は塞がれてしまっているのだ。

そんな改札には受付の女性がいた。彼女は満面の笑みをサービスする。窓越しにだが、営業スマイル全開だ。ミソラも負けじとスマイルを返す。そして受付嬢は言うのだ。

「ようこそ、いらっしゃいました。夢の国、エリアパークへ！　本日は何名様のご来場ですか？」

ミソラは指を三本突き立てる。自信満々だ。これほど不敵な少女もいないだろう。カンナは慌ててミソラを自分の後ろに隠す。すみません、うちの娘が、と、ただ苦笑を浮かべていた。

「？　三名様で宜しいですか？　でしたら大人二人、子ども一人の入場券を頂戴いたします」

ワタルは、ああ、悪い、と言い、上着の内ポケットからＷＡＸＡの職員ＩＤを提示する。薄い緑色の光沢を帯びたカードが日光を反射させる。女性を一閃した。

「予約されていた、響さまでしたか。ＩＤも本物のようですね。大変失礼しました。

では、約束のスペシャルコースをご用意しているので、今日一日、楽しんでいってください」

ワタルは特別コースの手配をしていたらしい。ＷＡＸＡと、エリアパークを経営しているＩ．Ｐ．Ｃグループは提携を結んでいる。恐らく素敵な特別待遇が待っているのだろう。ヨイリーの計らいでＶＩＰ待遇と言う訳だ。

そうして受付嬢が深く一礼すると、エリアパークへの道が開かれた。リアルウェーブの格子が、空間に溶けた。そしてミソラは開かれた道に向かって、一目散に駆け出す。

嬉々としてミソラが見渡す。そのエリアパークは、賑やかに彩られている。

原色の塊があちらこちらに建設されて目を楽しませる。細いレールのジェットコースターは空への架け橋だ。巨大観覧車は数多の果実を実らす大樹のようである。そして、おとぎの国からやってきた、羽を捨てた天馬が、子供の夢を乗せて転輪をなぞっている。お菓子の家に、回転する食器、現実から隔離された、エリアパークは夢の国だ。

夢を忘れた大人から、夢を探している子供まで、夢を求めてエリアパークに集まっていく。人気を得るわけだ。ミソラも例外ではなく、その夢の国に魅せられるのだった。きょろきょろと目が行ったり来たりしている事から、興味の尽きるところがないのだろう。

「コラコラ、前を見てないと転んじゃうぞ」

しかし、ワタルの注意も空しくミソラは躓(つまづ)いてしまう。顔面から地面にダイブする。これはいけない。

しかし、そこに夢の国からやってきた愉快な精霊がミソラを柔らかく受け止める。彼はエリアパークの看板キャラクターである。風船の配達中であったのだ。

「ふあっ……！？」

ミソラはぬいぐるみの腹に突っ込んだ。どうやら、エリアパークのマスコットキャラクターのおかげで事なきを得たようだ。

そして、ぬいぐるみが優しくミソラの肩に手を置く。大丈夫？

と聞きたげに首を傾げているのだ。そんな彼は、訳があって声が出せない。声を出すと子供の夢が全壊してしまうのだった。これは夢の国のキャラクターの禁忌だった。悲しい掟なのだ。

そしてミソラはぬいぐるみを指差す。驚きと一緒に興奮が込み上げている様子。そう、彼は有名人。

「あーっ！　ドッシーマウスだ！！　ありがとう！」

ミソラを助けたそのぬいぐるみは、ドッシーマウスと言う名前だ。アメロッパに本社を置く、実にＩ．Ｐ．Ｃグループらしいネーミングだ。もちろんドッシーと言うのは、アメロッパにあるとされるドンブラー湖の未確認生物から取った名前だ。マウスと言うのは単なる語呂合わせだ。

しかし、ドッシーマウスの見た目は、なかなかどうして凄まじい。頭は首長竜の見た目を模した、橙色の被り物で、首より下は真っ黒なぬいぐるみに真っ赤な短パン一丁という出で立ちだ。ドッシーマウスと言う名前からなのか、竜なのにネズミの尾が生えている。これはいけない事だ。

しかし、そんなちぐはぐなドッシーマウスは世界中の子供から愛されている。愛すべきキャラクターとして親しまれているのだった。恐竜の逞しさと、ネズミの切なさが同居するその瞳に、心揺り動かされるのだ。

そしてドッシーマウスは、白い手袋をはめた手で観覧車の方を指差す。ミソラに観覧車を見ろ、と促すのだ。ミソラはドッシーを見上げる。

「どうしたの、ドッシーマウスさん？　観覧車を見ればいいの？」

ドッシーマウスは、首を暴れさせながら頷いた。なのでミソラは不思議に思いつつも、観覧車の方を眺めた。

そして、ミソラは口をぽかんと開け放った。

「……あっ」

ミソラの先にある、エリアパーク名物の巨大観覧車は、数多の電飾を実らせている。それが一斉に輝きだすのだ。昼間だから電光の輝きが確認出来ない、なんて事は決してない。そのような、けち臭い発色ではない。太陽の光にさえ打ち勝つ愛情表現であったのだ。

八月二日、季節は夏。快晴の青空に咲き誇るのは、電気と言う名の花を咲かせた真昼の花火といったところだ。電飾の束が織りなす芸術品は『誕生日おめでとう』と作り出し、記していた。

そう、今日はミソラの誕生日なのだ。八歳になる。これは、ワタルとカンナからのささやかな贈り物だった。ささやかながらもさすがは特別という訳だ。子ドッシーマウスもスタンバイしていたらしく、物陰からわらわらと溢れ出てくる。花火を背景に披露するのは、祝福の舞だ。

それにしても、一匹見かけたら何とやらだった。

「わあー、キレイっ」

ミソラは目を輝かせた。電飾の光に照らされたせいもあるが、親子の美しき愛を受け取ったのだからだろう。その愛は輝かしいほどに眩いのだ。

そこにドッシーマウスは風船を一つ、ミソラに手渡す。ドッシーマウスからも誕生日プレゼントだった。

「これをくれるの？」

ドッシーマウスは首を暴れさせた。

ミソラの受け取った風船には、やはり、誕生日おめでとう、と書

かれていた。なのでミソラは、ドッシーマウスを見上げて、ありがとう、と言った。するとドッシーマウスは、ワタルとカンナの方を指差し、パパとママの所にお行き、と背中を優しく押してやる。ミソラは笑顔を返す。両親の元へと駆けだす。

ドッシーマウスは、ミソラの後姿を見つめながら呟いた。妖精界の禁忌を破ったのだ。しかし、夢を与えるべきの子供がいないことは、十分な免罪符になる。

「楽しんでおいで、プリティガール……的なニュアンスかな？」

そうやって、妖精に送り出されたミソラは思い切り、今、と言う時間を楽しんだ。

遊園地内を両親と共に巡るミソラの笑顔ははじけていた。ワタルもミソラの笑顔を見て笑っている。カンナも、この夢のような時間が一生続けばどれだけ幸せだろうか、と思った事だろう。幸せであればあるほど口惜しいのかもしれない。しかしだ。今はそのようなことを考えるのは馬鹿馬鹿しいだろう。新たな刺激に、新しい表情を見せてくれる、ミソラとの思い出を摘むので精一杯であったのだからだ。いくら摘んでも摘みきれないのだ。無限の可能性と未来を秘めた、カンナの娘は枯れることのない永遠の花畑だった。

家族の間に新しい花が確かに咲いていく。

しかし夢のような時間には終わりがある。夢には終わりが必ず付いて回るのだ。その家族がどれだけ幸せそうにしていても、夢である以上、覚めなければならない。夢を作るとはそういうことだ。

三ヵ月――いや、何年も戦い築いてきた夢の上映は、もうすぐ終わりを迎える。そして新しい物語が始まる。

その物語に一番深く飲み込まれていくワタルは、そのようなことに気づいてもいない。楽しそうに、ミソラと共に天馬に乗っているのだった。ミソラと共に、ましてや、カンナと共に生きていけなく

なることなど微塵も知るはずがないのだ。

家族との最後の時間。悲しい運命を約束された響家は、まるでピエロのように、夢の世界、エリアパークで予定調和でごく当たり前な結末へと歩を進める。主演男優は響ワタル。生贄は響カンナ。被害者は響ミソラと言うキャストである。

そんな悲しみと、幸せが入り混じる渾沌とした響家の周波数に、ある電波生命体が引き寄せられていたのだった。ある意味で、当然の結末なのかもしれない。皮肉にも彼女は生命の象徴である。カンナが欲していた命の象徴であった。彼女は空に浮かぶ、まだ整備のあまり行き届いていないウェーブロードから響家を見守っていた。

『ホホホ、幸せそうね。……でもあの女性、もう長くないわ。いくらアタシが手助けしていると言っても、もうそろそろ限界かしらね……』

彼女はひとしきり響家の様子を見届けると、その場を後にした。彼女の通った奇跡には、七色の虹がかけられる。

数時間後。ジェットコースターを乗り終わったミソラ達は、休憩を取ろうとしてエリアパーク内のオープンカフェに訪れていた。カンナは少し疲れている様子。ハンカチで額を拭っている。

「ママ、大丈夫?」

ミソラはパフェを突(つつ)くのを中断してカンナの心配をする。カンナ

はひとしきり汗を拭うと、心配無用と言いたげに小さくガッツポーズを作る。ミソラに心配をかける必要は皆無なのだ。

「大丈夫よ。ちょっと暑かっただけだからね？　それにしても、こんな素敵な遊園地、初めてだわ。とてもいい思い出になりそう」

「そうだろ？　この日の為に、ＷＡＸＡとＩ．Ｐ．Ｃに頼んで特別な扱いしてもらってるんだからな！　どれもこれも、ぜーんぶ特別だ！　どうだ？　スゴイだろっ」

どうりでドッシーマウスがやたらと風船を渡しに来るわけだ。他の家族連れなど眼中にもないらしく、ミソラにばかり何かと素敵なプレゼントをよこしていたのだった。

そんな訳で、ワタルは誇らしげだ。偉大な父親という感じを演出したいのだろう。

「スゴーイ！　ビップ待遇って言うのかな？」

ミソラは言葉の意味をよく知らずに言ってみる。

「まあ、そんな所だな。いっぱしのＮＡＸＡ職員にはもったいない待遇だよ」

「パパ、ＮＡＸＡじゃなくてＷＡＸＡでしょ？」

「おっと、悪い悪い。ニホンだとついつい……な？」

笑ってごまかすワタル。そうなると、もはやミソラの興味は溶け始めたパフェだ。それをスプーンで口に運ぶ。

そんな様子をカンナは、愛おしそうに眺めていた。何故かその表情は、母親と言うよりも、全てを悟った女神のようであった。そして唇を小さく躍らせた。

「素敵な思い出をありがとう。ミソラ、ワタルさん」

唐突に、突然だった。ミソラとワタルが首を傾げる。

「どうしたんだ、お前？　いきなり……」

「どうしたの？　ママ」

「ううん、何でもない。ちょっと言ってみたかっただけ」

「変なママー」

ミソラがそう言うと、ワタルはあることに気づいたようだ。カンナの頭を見ていた。

「あれ……、お前、さっきまで被っていた帽子はどこにやったんだ？」

「本当だ。ママの帽子がない」

カンナは日除けの帽子をどこかに忘れてしまったらしい。ジェットコースターに乗る際、どこかに置き忘れてきたのだと思われる。どうりで、先程から暑そうにしているわけだ。

しかし、これは良くない。今は夏なので日差しが強い。病人のカンナにしてみたら、それこそ灼熱の抱擁だ。

「多分、さっき座っていたベンチに忘れちゃったのかも……」

当然、ワタルは立ち上がって、カンナの忘れものを探しに行こうとする。そしてミソラも付いていこうとする。ワタルは手のひらを突きだし、ミソラを制止する。

「ミソラは待ってろ。ちょっと探してくるだけだから」

「ううん、トイレに行きたいの」

「うっ、そうか。……カンナ、ちょっと行ってくる。いいか？　このパラソルからは出るなよ？」
「うん、わかった」

幸いカンナの座っているオープンカフェのテーブルには、日除けのパラソルが立っている。ここから出なければ、身を日に焼かれる心配はない。そう言付けるとワタルとミソラは、その場を後にした。

そして先程まで、青ばかりを主張していた空に雲が出張ってきていた。夏の風物詩の入道雲なのかもしれない。

しかし入道雲の割には、酷く色が毒々しい。紫がかっていたのだ。よほど極悪な坊主なのだろう。しかしどうだろうか、青に紫とは少々いびつである。そんな空が、エリアパークを訪れていた人達を抱えていたのであった。

そして数分が経過した。ワタルとミソラはまだ帰ってこない。カンナの手元にあったアイスコーヒーも底を突いた。手持無沙汰にグラスのスプーンを回している。

「まだかな……二人とも」

すると、カンナの目線の先で、ワタルとミソラがようやく姿を現した。ワタルの手はもちろん帽子を持っている。遠い所でミソラが手を振っていた。

「あっ、帰ってきた」

カンナが席を立とうとする。するとカンナの着いていたテーブルからグラスが落ちた。高い悲鳴が足元で鳴る。無論、カンナが落とした訳ではない。

地面が揺れていたのだ。紙相撲の要領でグラスが落ちたのであった。これは地震だった。ミソラが揺れる地面に堪りかねて、ペタンと尻もちをつく。

これは何事だと、オープンカフェにいた人達も、室内施設にいた人達も広い通りに出てくる。カンナはテーブルに身を預けていた。立っていられないのだ。

辺りは騒然としていた。赤ん坊の泣き声と、男性の怒号、女性の悲鳴が混じった雑音。これは阿鼻叫喚。

この状況を、カンナはパラソルの下で何とかやり過ごそうとしている。

「じ、地震？　大きい……っ」

すると空が薄暗くなった。段々空の明度が下がっていき、夜みたいになってしまった。時刻は三時過ぎであるはずだ。だが、現実の世界は深淵に覆われている。辺りの動揺や不安を煽るのには十分だ。拍車がかかる。

そして、カンナはパラソルの下から真っ黒に塗り潰された表情を抱えて、真っ黒な世界に向かって呼びかける。

「ミソラっ、ワタルさん！　大丈夫！？」

カンナの呼び掛けはミソラ達には届かなかった。辺りの客達がカンナの声を遮っていた。一人の母親のメッセージを遮るのには、何百の人が混乱するだけで十分だったのだ。

すると、深淵の世界を激しく焼き照らす閃光が走った。上空で何かが光っているのだ。その場にいた全員は一瞬、雷か、と空を見上げたが、その考えはすぐに棄却される。カンナも光で白く照らされた表情を不安なものにさせる。白と黒のコントラストが強いその表情は、確かな不安を浮き彫りにさせる。

そう、上空では何かが輝いていたのではなかったのだ。暗い世界の天井に摩訶不思議な穴が開いていたのだった。その穴から漏れる光で、空が輝いている錯覚を覚えているにすぎなかった。

そして、その穴が映し出すのは、コダマタウンの風景だ。恐らく展望台だろう。望遠鏡のある場所を映しているのだった。不思議なことに、空を見上げて覗けるその風景は、展望台を見下ろしていたのだ。まるでカンナ達が空から、コダマタウンの展望台を見下ろしているような錯覚を覚える。見上げて見下ろすことは滅多にない。

そしてとうとう、その穴より外界からの客がやってくる。恐らくエリアパークに遊びに来た訳ではないだろう。そして、その客達に言えることはただ一つ。ついに、やってきてしまった、ということだ。

彼らはエリアパークの作業員でもなければ、客でもない。暗黒からの侵略者達だ。そして、青き流星の戦士だった。空からその三人はやってきたのだ。

外界からの客人を招き入れた穴は、役目を終えると、ゆっくりと閉じていった。だが依然として辺りは暗い。これは異物を取りこんだ世界の拒絶反応なのかもしれない。

そして、ただその場にいた人達は、その三人の様子を見ていた。油断ならないものを見るかのように監視していたのだ。カンナも目が慣れた様子で、暗闇の世界のウェーブロードで舞う三人の電波体を見上げていた。そして呟く。

「一体、何が起きているの？」

カンナをよそに、黒い鳥のような電波体が、青い電波人間に攻撃を仕掛ける。上空のウェーブロードで激しく戦っているようだ。

「フフ！　いい加減にしつこいよ、ロックマン！　喰らえ、フェザーシュート！」

黒い電波体が、黒い羽をロックマンに飛ばす。ロックマンは、すぐさま屈んでやり過ごす。そしてウォーロックが暴言を吐く。

『うっせえ！　お前は、今、倒しておかなきゃならないんだ！　スバルさっさと仕留めるぞ！』

「うん、分かった。父さんの居場所も聞きださないといけないしね！　バトルカード、ブレイクソード！」

ロックマンが残像を残すほどの速さで斬りかかる。しかし、そこにもう一体の電波人間が間に割って入る。紫色の粘膜をロックマンに飛ばしつけて牽制したのだ。

そんな彼はサソリのような尾を持っている。どうやらロックマンの味方ではないらしい。

『てめえ、このスコルピオ！　何でこんな奴の味方なんかするんだ！？』

「キシシ、知るかよ！　俺は平和なんか求めちゃいねえんだよ！　確かにコイツはいけすかねえがな。強いから従ってるだけよ！　ウォーロック、お前も一回負けてんだろう？」

『チッ、ＦＭ星人の中にもお前みたいなどうしようもない野郎がまだいやがるのか。ＦＭ星人達が変わった本当の理由を知ろうともしやがらねえ……！』

「キシシシ！　友情なんて知ったことかっ。このスバルとか言うやつにＦＭ星は腑抜けにされたんだよ！　ＦＭ星の新しい王の器はプルト・キグナスにあるぜ。そして俺は新ＦＭ王の右腕になるんだ！　このヘル・スコルピオ様がなあ！」

ロックマンは何を言っても無駄だと悟ったようで、ヘル・スコルピオにロックバスターを撃ちこむ。ヘル・スコルピオは腰から生える毒針から、毒液を飛ばしロックバスターを相殺する。ウェーブロードに落ちた毒液が、ウェーブロードを紫色に侵食する。これは猛毒に違いない。

「キシシ！　久しぶりのウォーロックとの電波変換で調子がつかめないか？　噂より弱いんじゃねーのか！？」

『確かにブランクはあるが、お前を倒すのには十分すぎるぜ！　分かったら、そこをどけ！　俺たちはあのヤローに用があるんだ』

「キシシ！　俺様だってレギオンの一人なんだぜ？　雑魚扱いするんじゃねえよ。てめえなんて、キグナスが手を下すまでもないぜ」

確かにプルト・キグナスは圧倒的に強かった。今より四年後の世界で大吾とウォーロックが電波変換したロックマンを圧倒したのだ。ウォーロックはキグナスに敗れていたのだ。

「フフ、そう言うことだよ、ウォーロック。まずはスコルピオを相手にするんだね。僕はまた別の世界に渡る準備でもするとするよ」

プルト・キグナスとヘル・スコルピオはレギオンの一人だ。その強さはヘラ・ローズガーデンと同等かそれ以上と言う事になる。もっともウォーロックから言わせれば、レギオンは魂を売った操り人形にすぎないらしい。操り人形にロックマンが負けないということなのだ。

そしてプルト・キグナスは、ロックマンの相手をヘル・スコルピオに任せて、新しい世界への道を作ろうと、さらに上空のウェーブロードに飛び立つ。それに対し、ロックマンが追おうとするも、ヘル・スコルピオが邪魔をする。この紫色の電波人間は底意地の悪い笑みを浮かべているのだ。

「スコルピオ……、キミにはケフェウスの思いが分からないんだね……」

「ああ、そうだ。ケフェウス王はお前に洗脳されたんだ。おかげで俺の仕事もありゃしねえ。暗殺のない世界なんてまっぴらごめんだぜ！　まずはこっちの世界から地球を滅茶苦茶にしてやる！」

「……危険な奴」

落胆した様子で、ロックマンは三枚のカードを読み込ませた。ギャラクシーアドバンスを発動したのだ。それはドリームブレイクである。ソウル・レイダー直伝の究極技である。究極の破壊剣を左手に構えてヘル・スコルピオの懐に入り込む。ドリームブレイクをヘルスコルピオの胴体に振り抜く。

「キシシ、速いじゃねーか！　だが、遅い！」

ヘル・スコルピオは、すぐさま尻尾でドリームブレイクを受け止める。しかし、その衝撃でヘル・スコルピオの自慢の尾にひびが入る。

「キシ？　おっと、これはまずい」

予想以上にロックマンの一撃が重くてヘル・スコルピオは驚きを隠せない様子。

ウォーロックはプルト・キグナスとの戦いよりも進化していた。スバルも、かつてトラッシュと様々な試練を乗り越えていき着実に強くなっていた。自身がレギオンであると言う、ヘル・スコルピオの自信を撃ち砕いて見せたのだった。堪らずヘル・スコルピオは後ろに飛び退く。

そして、その戦いが繰り広げられる下では大勢の人達が逃げまどっていた。無理もない、謎の物体が上空で暴れているようにしか見えないのだ。上空を訓練中の戦闘機が飛んでいる事よりも不安であるに違いない。

しかしカンナは、逃げまどう群衆の中でも、パラソルの下でじっとしていた。カンナには走り回る体力がないのだ。そしてそれ以上に、下手に動きまわるよりか、じっとしていた方がワタル達に合流しやすいと思ったからだろう。パラソルの下にいれば、ワタルが来てくれるはずだと思っていたのだ。もっともワタルが逃げていなかったらの話だ。

上空のヘル・スコルピオは少し分が悪いと見るや否や、下の人間達を見下ろす。すると嫌な笑みを浮かべた。そしてロックマンに問いかける。

「おい、ロックマン。お前、スーパーヒーロー何だってな？　ＦＭ星でもそりゃあもう有名だったぜ」

『黙りやがれ！　クソヤロー』

ウォーロックの暴言に耳も貸さずにヘル・スコルピオはにやりとする。ウェーブロードを離れて、下の人間の群れに向かって急降下しだした。これは襲撃だ。

「俺様は、今からここにいる人間達を手当たり次第に、攻撃してみるが、どれだけ救えるかな!?　ロックマン様よー!!」

「なっ……！」

青ざめたスバルはすぐに後を追った。しかし、ヘル・スコルピオは既に毒針の先端におびただしい量の毒液を集めていた。汚水の巨大な塊が作られている。それを一気に、ひと思いに下の人間どもに

浴びせるのだ。当然、容赦はしない。

「キシァハハハ！　プレゼントだ地球人っ、ダークドゥラウン！」

上空から落ちてくる、おぞましく巨大すぎる死の水滴にその場の全員が戦いた。しかし、その時カンナは再び、パラソルの下に戻っていたので、上空の様子が分からなかった。それにカンナは、周りの人間がいくら騒ぎ戦いても、それは先程から繰り返されている半ば常識化したものであると錯覚していた。非常識な異常事態を非常識ながらに認識出来なかったのだ。

そんな時に限って、大衆の中からワタルとミソラを見つけてしまう。カンナはパラソルから出てしまった。空からは毒の塊が落下している。雨粒にしては大きすぎる。カンナはアレが何かは一瞬では判別付かなかった。ワタルが叫んだ。

「逃げろ！　カンナ」

どこに逃げろと言うのだろうか。逃げ場などはない。ワタルもそれは重々承知だ。だからミソラを覆い隠すように抱きかかえていた。ミソラに何が起きているのかを悟らせないために、そして何より、毒の塊から娘を守るために。

そんな危機的状況でもヒーローは諦めてはならない。ロックマンは、バトルカードをハンターに読み込ませる。赤いバトルカードデータだ。

「バトルカード！　ゾディアック・エリア！！」

すると、星座のように格子状のラインを走らせたドームが形成される。ロックマンはその絶対領域を一番人間の集まっている場所に

展開させた。しかしこれだけでは覆い被せそこなった人間がまだまだいるのだった。ワタルとカンナもロックマンに救われなかった。

「ダメだ！　まだ、人が……！」

『チッ、ギガクラスカードを読み込んだせいで次のカードの読み込みが出来ねえ！』

「キヒャハハ！！　スーパーヒーローでも守れないものはあるんだな！」

ヘル・スコルピオの勝利宣言だった。甲高い笑い声が響きわたる。

だが、そこにもう一人のヒーローが現れる。いや妖精が現れた。ドッシーマウスだ。ある事情で宇宙に行きそびれたその妖精は、自分探しの旅と、そのついでにバトルカードショップ建設のための費用を稼ぎに夢の国を訪れていた。偶然にも、その妖精は戦いのスペシャリストだったのだ。

「まったく、とんでもないことになっちゃったなあ！　試作品の新しい武器で役に立つか分からないけど、バトルカード！　バリアっ！」

この世界ではまだ、バトルカードと言う形式の武器は実用段階ではないらしい。しかし、元サテラポリスに所属していたドッシーマウスはバトルカードを携帯していた。それに、うまく機能したようだ。ワタルと、その他の人たちを覆うようにバリアが数十個展開される。

しかし、まだ人間は溢れていた。健闘も空しく救済されなかった人達はまだいるのだ。カンナもその中の一人だった。

さすがに万策は尽きた。

「キシシシ！　ちょっと少ないけど人間どもがゴミのように飲み込

まれていくぜ！」

毒の水滴が地面との邂逅を果たす。水滴は、弾けて毒の波となってエリアパークを紫色に塗り潰す。助けきれなかった人達が毒に飲み込まれる。その光景をバリアの薄皮一枚先で、ワタルは目の当たりにした。カンナは飲み込まれた。あっけなかった。

激流の流れる音がワタルの耳を責める。バリアの向こう側で流された人間がぶつかるたびにバリアの中は、低いうめき声のような音が鳴った。救いを受けられなかった人達の断末魔に聞こえるのだ。

ミソラはワタルの胸の中で泣いていた。震えていた。ただただ怖かったのだ。何が起こっているのか分からないが、それが逆に恐怖をかきたてているのかもしれない。

「パ、パパ……怖いよ」

「だ、大丈夫だ……っ」

「ママは？　ママは、大丈夫なの？」

ワタルはミソラをきつく抱きしめた。

「大丈夫……大丈夫だ」

ワタルはまた嘘をついた。

「パパ……苦しいよ」

ｗｗｒ―０８：穿ち穿たれる者

下の世界で繰り広げられる惨劇に、ロックマンは自身の力のなさを悔んだ。歯を強く食いしばる。そして、ヘル・スコルピオに怒りのままに突っ込む。

ウェーブロードの上をまっすぐに突っ込んでいく。冷静でいられなかったのだ。

「キシシ！　まあ、そう怒るなよ。あの毒じゃ即死はしないぜ？　まあ、ゆっくりと苦しみながら、極上の表情を浮かべながら、結局は死ぬんだけどな！　キシハハハハ」

「許せない！」

突きだしたロックマンの拳は空を切る。するとヘル・スコルピオはニヤリとしてロックマンに勝利宣言をする。ロックマンは背中越しにヘル・スコルピオを睨みつけた。

「キシシ。ロックマン、お前の負けだ。ヒーローは弱き者を、俺みたいなやつから助けなきゃいけないんだよなあ！　だが、それが出来ないんじゃヒーロー失格だわな。じゃ、俺は勝ち逃げとさせてもらうぜ！　アバヨ。

まあ、追ってきてもいいが、キグナスの方を放ってはおけないよな？　まあ、俺様はこっちの世界から地球を滅茶苦茶にしてやるけどねっ！」

ヘル・スコルピオは不敵な笑みを浮かべて、ウェーブロードを使い、その場を離れていった。ロックマンはヘル・スコルピオを追おうとするがウォーロックに制止される。ウォーロックの意志で左腕がびくともしないのだ。

そして、ヘル・スコルピオにまんまと逃げられた。彼の、ヒステリックで嫌味な毒のある笑い声は小さくなっていく。やがて空気にかき消された。

ウォーロックはスバルに敵を追う事を許さない。

『追うな！　どうやらあの鳥ヤローがまた別の世界に続く穴をあけやがった！　いい加減に鬼ごっこも飽き飽きだぜ！』

ウォーロックの言う通り、辺りがまた輝きを取り戻している。あの穴が開いたと言う事だ。

どうやらプルト・キグナスの能力は次元渡りらしい。まさに渡り鳥と言ったところだ。なので、そのような危険な能力を持った、悪意ある存在を野放しにしておくわけにはいかないだろう。

プルト・キグナスをどうにかしない限り、今回のような惨劇が繰り返される。

「でも……！」

スバルが食い下がる。

『いいかスバル、よく聞け！　アイツの開けた穴を逃すと、俺たちはこの世界に閉じ込められる。だから追うしかないんだよ！』

「でも、スコルピオを放っておけない」

『あの野郎は、自らこちら側の世界の住民になることを宣言したんだ。その瞬間、アイツはもう俺たちの住むあっち側の住民じゃねえ。俺たちが干渉する事じゃねえんだよ。

……地球人のお前に、こんなこと言っても分からないだろうがな』

ウォーロックの言うあちらの世界と、こちらの世界とは、おそらく過去と未来、並行世界を交えた話の事だろう。

ヘル・スコルピオは、こちらの世界を滅茶苦茶にすると宣言しているのだ。その時点でヘル・スコルピオは、こちらの世界に定着した一生命体と言う事になったのだ。ヘル・スコルピオの存在は、こちらの世界の歴史に刻まれると言うことだ。

もはや外界からの侵入者でも何でもない。ロックマンもこちら側の世界の住民になると宣言しない以上、こちらの世界の事に干渉してはいけないと言う事だ。

もっとも、スバルには帰るべき世界があるので、こちら側の世界の住民になるわけにはいかない。だからキグナスを追うしかないのだ。

しかし宇宙人であるウォーロックの持つ概念は、地球人の理解できる所ではないのかもしれない。

「なんだよそれ……、訳わかんないよ」

『今は訳がわかんなくていい。とにかく、こっちの世界の事はこっちの世界の奴らに任せろって言ってんだよ！　いいからさっさと行くぞ』

「でも……」

『いい加減にしろスバル！　キグナスの野郎を止めない限りはこんな事ばかりが繰り返されるんだぞ！？　元から解決しないと意味ねえだろうが。それに、ここは大丈夫だ。断言してやる！』

「何で言いきれるんだよ！」

『俺を信じろ！　それが理由だ！』

理由なしに、ウォーロックは自信満々と言った様子で言いきった。このウォーロックを言い負かすことはできないだろう。それほどに頑固だ。やむなくスバルは折れた。

「わかったよ……。状況が判断できないほど馬鹿じゃないしね。それにアイツはトラッシュの仇だ……！　親友の仇なんだっ」
『へへ、やーっと、分かったか！　ならアイツの開けた穴に飛び込むぜ！』

ロックマンは上空にぽっかりと空いた穴に向かって跳躍した。そしてウェーブロードを伝って一目散だ。
現状、ロックマンのこの判断は正しかったと言える。ヘル・スコルピオはこの四年前の世界で地球を滅茶苦茶にすると宣言していた。だが、それは達成されていないのだ。四年後の世界でそれは起きていないのだから当然だ。そもそも、レギオンと言う存在さえ知られていない。
これが意味しているのは、ヘル・スコルピオはロックマン以外の何者かに倒されると言うことだ。それが誰なのかは、誰も知らない。しかし、ウォーロックはそれに気が付いていたのかもしれない。

ｗｗｒ―０９：ママいかないで

ロックマンとプルトキグナスを異次元へと送り出した穴は、次第に閉じていく。そして閉じ切った。この世界に、ヘル・スコルピオという存在を残して。

だが事態は、この過去の世界の住民達にとっては深刻だ。ロックマンのおかげで被害が最小になったとはいえ、数多くの人間が毒に飲み込まれたのだ。エリアパークは惨劇の舞台となってしまったのだった。

そんな状態でも、ミソラは誰がどうなったのかを知らない。母の安否さえも知らないのだ。それは残酷だろう。なぜなら、ヘル・スコルピオの言っている事が本当ならば、毒に飲み込まれた人の運命は決まっている。即死はしないまでも、絶対的な死を約束されているのだ。それも、極上の苦しみと言うおまけつきだった。ミソラは母とそんな形で対面しなければならなかったのだ。だから残酷だ。

この事実を、まだ幼い少女の、まだ幼い心で受け止められる保証はどこにもない。泣ければまだ良い方だろう。

そんな大量無差別襲撃事件が起こったエリアパーク。この期を境にして、エリアパークの人気は嘘のように地に落ちた。そして、そこに医療用の車両やヘリコプターがやってくるのに時間はそうかからなかった。

サイレンの音が聞こえてくる。薄れゆく命からの警告音だ。その警告音は決して鳴りやまなかった。

数分後。救急救命用のヘリコプターに乗せられて、カンナはビーチストリートにあるワンガン病院に搬送されていた。被害者の数があまりに多すぎて、コダマタウンの病院だけでは受け入れられなか

ったのだ。
そして、カンナは集中治療室のベッドに運び込まれた。カンナは猛毒に置かされていて一刻の猶予も許さない状態だ。そんな人達があちらこちらにいるのだ。未曾有の事態だ。

白いライトが真っ白に照らす場所では、カンナは優秀な医師達に囲まれていた。清潔なその場所には、体中に紫色の斑点が浮き出ているカンナが寝ていたのだ。カンナの息づかいは荒い。速くて浅いのだ。
医師の一人が、手術用のモニターを見ながら悲鳴をあげた。酷い慌てようだ。

「こ、これは……、こんな有毒物質は見たこともありません！　一体何なんだ！？」

他の医師も堰(せき)を切ったかのように続く。無理もない。宇宙からの最先端技術で構成された有毒物質なのだ。地球の医療でどうにかなるものではなかった。

「こんなの、手の施しようがない……」
「他の患者達も全く同じ症状です！」

まさに八方塞がりだ。そして、その治療室の中で最も経験豊富で、最も腕の立つ医師が言う。彼の言葉は諦めの言葉だった。

「クソッ！どうしようもない、何て無力なんだ。治療どころか、延命処置も何もかもが通用しない……。仕方がない……この患者をご家族の方と最期を迎えさせろ」

医師の判断は、もっとも最善であろうと思われるものだった。助

けられない命なら、手術室の中ではなく、最愛の家族達に囲まれながら、終わらせてやろうと言うものだった。美しい考えであるが、それは医師として完膚なきまでの敗北だった。

地球の医療の元に集う医師は、ＦＭ星の暗殺者であり、レギオンとしての力を手に入れたヘル・スコルピオに屈したのだった。百数十人の尊い命が奪われようとしている。地球人の力量では指を咥えて見ていることしかできない。

そしてカンナは手術室から出てきた。すぐにミソラが、カンナの搬送用のベッドに駆け寄る。眼には一杯の涙を溜めていた。しかし決して泣かない。カンナを不安にさせないために、頑張っていたのだ。ミソラはそういう子だ。苦しそうに喘ぐ母を目の当たりにしても、ミソラはカンナを応援している。ワタルはその様子をどうしても見ていられない。しかし、どうしても打開など出来ない。

そしてミソラが医師に問いかける。あえて決めつけにかかった問い方だった。これは問いかけではない、懇願だ。

「ママは！　ママは大丈夫なんだよね！？　これから元気になるんだよね？」

ミソラは止まれない。

「手術は成功したんでしょ。悪いものみんな、ママから出て行ったんだよね！？　ねえ？」

小さな手で白衣をくしゃくしゃにする。

「ねえ……。うん、って言ってようっ！」

医師は何も答えられない。カンナのベッドを病室に搬送している

ナースは思わず、大丈夫だよ、と言いそうになった。しかし言えなかった。言えるわけがない。死が数十分後に迫っている人の娘に、そのようなことが言えるわけがなかった。

そしてベッドに付き添いながら医師はワタルに目配せをする。ワタルも小さく頷いた。

「……響さん。話があります……」

「……分かりました」

悲しみの連鎖と負の周波数が溢れだす。その渦中となっているワンガン病院は泣いている。

ミソラと同じような状況に陥っている人達が、悲しみや打ちひしがれた思いを、涙や嗚咽として吐き出していたのだ。それはまるで病院が泣いているかのようだった。

ｗｗｒ―１０：破滅

医師に呼び出されたワタルは、ミソラの目の届かない個室にいた。今頃ミソラは隔離された病室で、カンナに付き添い必死に呼びかけている頃だろう。大丈夫、きっと元気になるよ、と励ましているはずだ。

しかし、ミソラの励ましを全否定するかのように医師の表情は深刻だ。そして言う。

「現状、この病院は愚か、至る所の病院でカンナさんと同じ症状の患者が大量に搬送されています。全員が猛毒に侵されているのです。それも原因不明、対処不能の、です」

「カンナは……、病気なんです。ただでさえ体が弱いのに……猛毒なんて、そんなのあんまりですよ。……あんまりだ」

ワタルは目を血走らせていた。拳が震えている。やり場のない怒りが彼の中でくすぶっている。どうしようもない事は彼自身が知っている。化け物の狂気をその身に感じたのだからだ。

「はっきり言って、カンナさんはおろか、毒に侵された人たち全員の命はないでしょう。もって数時間の命ですが、カンナさんの場合はそんなには……」

カンナは、もういつ死んでもおかしくはなかった。正しく言えば、もう体は死んでいる。生きたい、というただそれだけの精神力が、カンナをミソラと共にあり続けさせていた。しかし、もう長くはないだろう。

すると、ワタルは手で顔を覆った。そして天を仰ぐ。嗚咽が漏れ

る。

「うっ、ううう……。ミソラになんて言えばいいんだよ……。どの面さげて、ミソラに会えばいいんだ。……クソ！　神さまはいないのか……！　俺たち家族を引き離そうとする悪魔しかこの世にはいないのか……！！

うっ……、ゴメン……ゴメンな、カンナ……、ミソラ。こんな父親で……こんな無力でちっぽけで……」

ワタルの頬に一筋の涙が伝った。手のひらから溢れだしてきて止まるところを知らない。

医師が、早くご家族の元に、と言おうとする。

すると突然、個室の窓が光った。いや、空が光ったのだ。夕方の茜色の空が真っ二つに割れたのだ。恐ろしい事に、向こうの世界からの忘れものがやってきたのだ。そう、ヘル・スコルピオだ。

しかし、その紫色の電波人間は、上空で何者かと戦っているようである。その相手は虹色の尾を持つ炎の鳥の姿をした電波体だ。その美しい電波体にヘル・スコルピオが攻撃を仕掛ける。

「キッシシシシ！　なんてこった！　俺はツイテルゼ！　毒に侵された奴らの断末魔を聞きに来たら、超大物がいるじゃねえか！！

お前をぶっ殺せば、やっと本当の意味でＡＭ星を滅ぼしたことになるってもんだぜ！　なあ！？　ＡＭ女王、フェニックス様よー？」

ヘル・スコルピオの尾から機関銃の如く毒針が発射される。フェニックスは、毒針を空中で旋回しながら避ける。

『なんてツイてないのかしら！　アナタ一体何者！？　命を狙われる覚えはなくってよ！』

「キシシ！　そりゃアンタがＡＭ女王だからだよ！　それに俺の事

はよーく覚えてるハズだぜ？　ＡＭ星掃討作戦の時、大量にＡＭ星人を毒殺したスコルピオ様だからな！！」

スコルピオが再度毒針を飛ばす。空を飛びまわりながら、フェニックスはそれをかわす。

『アナタがスコルピオ……！？　あり得ないわ、スコルピオはそんな姿をしてなかった……！　それにＦＭ星人は地球のありかを知らないはず』

確かにＦＭ星人は地球の在り処を知らないはずだ。なぜなら、フェニックスは、地球に逃げ着いて来た時にある命令をしていたのだ。それは、フェニックスの部下であるＡＭの三賢者、ペガサス、レオ、ドラゴンに、地球の場所を特定されないようにアンチフィールドを展開させると言うものだ。なので、ＦＭ星から地球の場所が割れるわけがなかった。

しかし、未来からの訪問者であるヘル・スコルピオに、その理屈は通じない。それに、三年後にはＦＭ星人が襲来してくる。オックスを皮切りに、次々に地球へとやってくるのだ。それもそのはずで、偶然に地球の場所を知った、このヘル・スコルピオが地球の場所をＦＭ星人達に教えていたのだ。ヘル・スコルピオがＦＭ星人襲来の、きっかけだった。

きずなクルーが、死守した秘密を彼が、いとも簡単に暴露していたのだ。そして皮肉にも、きずなクルーがＦＭ星人達に捕まったのはちょうど今頃だ。

そのヘル・スコルピオは高らかに笑う。一足先に地球を侵略できるので心地が良いのかもしれない。

「キシハハハ！！　確かに俺たちＦＭ星人は、地球の場所を知らねえ。だが、俺様は現に地球に降り立っているぜ？　ま、未来からや

ってきたから当然か？　キシシシ！　あれ、もしかして、こういうのって言っちゃマズイもんなのか！？　ま、どうでもいいか！」

ヘル・スコルピオはすっかり悦に入っている。そのせいか、未来からやってきた事までも話してしまっている。

しかし彼としては、今ここでＡＭ女王であるフェニックスを倒してしまえば、関係すらないと考えていたのだろう。そういう魂胆なのだ。

それに、未来の世界ではＡＭ星の復興に、フェニックスは参加していない。女王が自分の惑星の復興に、参加しない理由がない。あるとすれば、それは彼女の死だけだ。

だから、ここでフェニックスを殺せるとヘル・スコルピオは考えていた。運命がそう決まっているのだから絶対的な理由なのだ。

しかし、彼には彼女を殺す前に仕事がある。それはＦＭ星に、地球の場所を教える事だ。本当は教えても教えなくても、どちらでもよかったが、争いが好きなヘル・スコルピオは教える事にした。それも、三年という猶予もなしに、今すぐに襲来して来いという、と言うおまけ付きだ。

それが叶えば、ものの数日で地球にＦＭ星人達がやってくる。その襲撃に、ロックマンのまだいない地球は滅ぼされるだろう。

それは破滅を意味していた。とんでもないことが始まろうとしている。ヘル・スコルピオが過去に介入したせいで、未来が破滅してしまうかもしれない。

「キシシ！　じゃあ、俺様は早速、ＦＭ星の仲間達に地球の場所でも教えてやるとするか！」

ヘル・スコルピオは自慢の尾をアンテナ代わりに、ＦＭ星との通信を計る。それは、絶対に阻止しなければならない。すかさずフェ

ニックスは炎の矢を、羽から飛ばす。
しかし、ヘル・スコルピオの指の先で弾かれてしまった。レギオンと、戦闘経験のない女王の力量の差は歴然としたものだった。

「キシシ！　まあ、待てって。後でめいっぱい可愛がってやるからよ。その後は、三賢者どもだ。その後に、地球をＦＭ星団と一緒になって滅ぼしてやる。あのＡＭ星のようにな」

ヘル・スコルピオは完全に地球を、破滅へといざなう気だ。フェニックスは炎の矢を飛ばすが、レギオンには全く効かない。
すると、ヘル・スコルピオはＦＭ星との通信を開始してしまった。破滅へのカウントダウン開始だ。

「おっ、繋がった！　キシシ、こちらスコルピオ。応答願う」
『こちら、ジェミニ。お前、スコルピオか？　一体どうしたんだ。お前は確か、アンドロメダ銀河系列の要人暗殺に出かけていたはずじゃ……。お前の通信元の座標、見たこともない場所だぞ？
まさか、任務を放り出したのか！？』

通信に出たのはジェミニだった。彼は雷神のジェミニとしてＦＭ王の右腕を任されている。そして、攻撃的で懐疑的なスコルピオと似た性格だった。

「キシシ！　まあ細かいことは気にすんな！　それより朗報だ。お前ら今頃、地球人とかいうやつらを捕獲してねえか？」

スコルピオは未来からやってきたＦＭ星人だ。だから、そのことはあらかじめ知っている。ジェミニも少し驚いたようだ。

『ああ、良く分かったな。つい先日、捕獲したばかりでＦＭ本星に

も連絡は、まだだと思っていたんだが……』
「キシシ、そうかそうか。面白くなってきた。その地球人たちの母星の場所教えてやろうか？」

ジェミニは明らかに面喰っている。

『なんだと！　何故、お前がそんな場所を知っている？』
「俺様は暗殺で宇宙中を駆け巡ってるんだ。たまたま見つけたのさ」
『そうか、ならいい。……実を言うと、ウォーロック隊長が地球人どもに、どこからやってきたのか尋問しているんだが、一向に口を割らなくてな。かなり、困っていたんだ。
特に地球人どものリーダーと思しき奴は頑固で仕方がねえ。俺のジェミニサンダーを喰らっても気絶しやがらねえとは、いかれた精神力だぜ』

その地球人とは恐らく大吾のことだろう。地球の秘密を死守しているようだ。しかし、それも意味のない努力へと変わる。

「キシシ、そんなの気にスンナ。じゃあ地球の場所を言うぜ……」
『やめなさい！！』

フェニックスが炎の矢を、これでもかと言うくらいに飛ばす。しかし、焼け石に水もいいとこだった。
ヘル・スコルピオは手首の運動だけで、全て弾いてしまった。ついでに尾から毒針を、フェニックス以上に連射してフェニックスを牽制する。
すると、流れ弾が不運にも、病院の外壁に被弾した。そこはワタルのいる個室の辺りだった。外壁が岩石のようになって崩れ落ちる。ワタルと医師が、二階の砕けた壁から投げ出される。不幸中の幸いで、二人とも下の植え込みがクッションとなって助かったようだ。

しかし、医師は気を失ってしまった。ワタルもがれきに頭を打ったようで顔半分を真っ赤に染めている。

しかし、そのような事を気にするヘル・スコルピオではない。とうとう、地球の場所を教えてしまった。

「……１０４８２Ｙポイントだ。分かったら、数日中のうちに侵略部隊を送ってくれ。俺は一足先に地球侵略を楽しむとするからよ」

『了解。俺たちの母星に、おかしな光線を撃とうとしていた地球人どもを根絶やしにしてやる。早速、侵略部隊を編成しておくぜ。とりあえず、サジタリウス達を候補に挙げておく』

「キシシ、頼むぜ……。参謀長さん」

満足げに、悪事を企てた笑みを浮かべると、ヘル・スコルピオは通信を切った。ジェミニが侵略部隊の編成に手間取らなければ、ものの数日で地球は破滅する。カンナと、その他の大勢の毒に侵された人達は、今日死ぬ。だが、数日後には地球人全員の命を奪われるのだ。ミソラも、だ。

ヘル・スコルピオは使命を果たし、フェニックスに向き直る。

「キシシ、地球の破滅決定！」

『何てこと……』

「キシシ！　ＡＭ女王、アンタの破滅も決定だ！」

言うが早いか、ヘル・スコルピオはフェニックスに襲いかかった。その戦闘力の差は圧倒的だ。電波変換さえしていない、フェニックス。戦闘周波数、４１８万メガヘルツのレギオンであるヘル・スコルピオ。勝負は決まっている。だからと言って、逃げ切れる相手でもない。詰みだ。

ｗｗｒ―11：目覚めの時、心の意味

「クッ……、何が起きた？　たしか空が光ったと思ったら……」

ワタルはふらつく足取りで立ち上がる。朦朧とする意識の中で、カンナの元に向かおうと、ずるずると歩を進める。

「カンナ……！」

数メートル進んだ所で、空から何かが降ってきた。フェニックスだ。ワタルの足元でフェニックスはうずくまっている。ワタルは思わず身を引いた。化け物が目の前にいるのだ。死にかけのフェニックスは可視周波数に入っているようだ。

そして、上空からヘル・スコルピオが下りてきた。恐らく、圧倒的に完膚なきまでにフェニックスに止めを刺しに来たのだろう。ワタルは、ヘル・スコルピオの姿を見ると怒りを露わにした。真っ赤な顔に怒気が加わり、鬼のようでさえある。

「キッシシシ！　全然話にならねー！　弱過ぎてちょっと小突いただけでこれか。フェニックスさんよー」

「お前っ！！」

フェニックスに止めを刺そうとしているヘル・スコルピオに、ワタルが向かっていく。無謀だ。これは死ぬ。

「なんだ？　お前……？」

「よくもカンナをっ！！」

一瞬だ。ワタルはヘル・スコルピオの尻尾に軽く薙ぎ払われた。木の枝を折るような軽い音が、リズミカルに鳴る。あばら骨と胸骨が完全に粉砕された。内臓も殆どが駄目になった。地面を三十メートルほど派手に転がった。海と陸を隔てる柵に、体を止めてもらうまで転がり続けたのだ。これは、ヘル・スコルピオが本気で払っていたら、灰塵に帰していたことだろう。

そして酷い事に、ワタルの右腕と左足が関節のない所で曲がっている。血だるまで出来の悪い人形のようになってしまった。そんな人形が柵にもたれている。

慌ててフェニックスは、ワタルの元に飛んでいく。フェニックスは、自分の羽をむしり取ってその生命力を自身に還元することはおろか、他人にまで与えることが出来る。故に不死鳥。

「面倒くせ。不死鳥だか何だか知らねえけど、ちょこちょこ復活されちゃ困るわな」

ヘル・スコルピオは不満そうだ。

フェニックスは、羽をワタルにあてがう。ワタルの顔に少し生気が戻った。

『バカな真似を、何やってるの……！？』

「アイツを許せな……かった。カンナを……あんなふうに」

ワタルは折れた腕を病院へと向ける。命に食らい付き続けるカンナへと向ける。カンナは命と、自分自身と戦っていた。

ワタルは泣いている。激痛で泣いていた。肺に骨が刺さったからでもない。内臓が破裂したからでも、心臓が押し潰されたからでもない。もっと別の何かがワタルを痛めつけ苦しめているのだ。

フェニックスはそんなワタルに見かねて、現状を説明する。

しかし、フェニックスの背後からは、ゆっくりと着実に二人のや

り取りを楽しみながら、ヘル・スコルピオが距離を詰めてくる。

『良い？　よく聞きなさい地球人！　これから地球は大変な事になるの！！　アナタがいくら頑張ったってどうしようもないのよ？　早く逃げなさい』

フェニックスは地球人であるワタルの心配をしている。なぜなら、フェニックスはずいぶんと前から、響家の事を見守っていたのだ。カンナの病気が極力進行しないようにしてやってもいた。だからカンナは、ここまで生きていられたのだ。本当だったらとっくに死んでいる。

フェニックスは、響家の幸せの周波数と、悲しみ、孤独の周波数におびき寄せられてやってきた。そして、見守っていくうちに、情が移ったのだ。ワタルがどれだけ、ミソラとカンナを愛しているのかを思い知らされたのだから。　そのワタルは、今は虚ろな目をしている。体中の骨が砕けているのだ無理もない。

「イヤ……だ。カンナとミソラが……、妻と娘が戦って……るんだ。男の俺が逃げ……られるわけない。アイツを許せ……ないんだ」

『……』

フェニックスは覚悟を決めた。ここでワタルと死んでみようと思ったのだ。そして意を決し言う。

『電波変換よ……』

「何だ……それは……？」

『戦う……ことよ。だって、ここで死んだら、娘さんと奥さんに会えないわよ？　それに私の力を使えば、みんなにかかっているスコルピオの毒を治せるわ』

ワタルの目に生気が宿る。

「ほ……ホントか？」

『ええ、本当よ。でもアナタの奥さんは完全には治せないわ。アナタの奥さんの体は、もう完全に死んでいるから。それも数年以上前に……。私も生命力を貸してあげていたけど、生きていられたのは、奥さんの家族への思いが全てだったわ。だから私の力でも、数年間しか寿命は延ばせない』

ワタルの目にさらに活力が宿る。つい最近まで半年の余命だったのだ。それどころか数十分の余命だったのだ。数年は十分に長すぎると思えた。

「あり……がとう……」

『お礼は後よ。そもそも、あのスコルピオをどうにかしないと意味がないわ。だから、戦うのよ……！』

「分かっ……た。電波変換だ……な……！」

ワタルは柵に寄りかかりながら、ゆっくりと立ち上がった。数メートル先のヘル・スコルピオを睨みつける。真紅から覗くエメラルドグリーンの瞳は、強くたぎっていた。カンナを助けたい、その一心で。

娘の笑顔の為に、家族が家族であり続ける為に、ワタルは最強最悪の高位電波生命体のヘル・スコルピオに立ち向かう。

カンナとミソラが戦っている。今度はワタルの番だ。

ヘル・スコルピオはいやらしく笑ってみせる。

「キシシ！！　何、お前。まさか戦う気なの！？　やめとけって、死ぬぜ？　まあもっとも、あと数日の命だから一緒か！　キシシシ！！」

フェニックスは、オレンジ色の炎の塊のようになって、ワタルを覆う。

『いくわよ……！』

炎の中のエメラルドグリーンが、輝いた。

「電波変換……！！」

ワタルの魂をかけた言霊に炎が反応する。ワタルの周りの炎が輝きだす。炎がアーマーを作り出す。オレンジ色の鋭いアーマーだ。背中には翼を四枚神々しく輝かせている。まるで虹のようだ。

ハープ・ノートと同じ色のバイザーからは、堅固な意志を示す瞳が揺らいでいる。炎の中から、不死鳥を模した電波人間が現れたのだ。

ワタルは地球上で初めて電波変換した。そう、スバルより三年も早く。

しかし、フェニックス自身は覚悟を決めていた。ここで死ぬ覚悟を決めていたのだ。それもそうだろう、相手はレギオンで、実力で言えばヘラ・ローズガーデンよりも上だ。しかしフェニックス側は、死にかけだった人間と、戦いの経験がないＡＭ女王だけだ。勝てる見込みがないと踏んでいた。それにワタルも戦闘などした事がなかった。ましてや人を殴ったこともなかった。

だがワタルは言ってのける。

「負ける気がしない……！　お前を倒し……、そして家族を救う」

ワタルは電波変換したと同時に、体中の傷が全快していた。それ

がこの電波人間の能力だろう。
そして、ヘル・スコルピオを指差し、言ってのけたのだ。しかし、ワタルは冷静だ。狂うほどの怒りを、ヘル・スコルピオに抱いているはずなのに、その怒りを抑え込んでいる。戦った事のない人間ではないように見える。まるで闘神。

「キシシシ！　何言ってんだコイツ！？　俺様はレギオンだぞ。お前なんかが勝てるかっての。残念だが家族と一緒にあの世行きだぜ。このヘル・スコルピオ様によってな！」
『アナタ……レギオンになったの？　伝承上の存在だったんじゃ……』

フェニックスは驚く。
すると、ワタルの羽が輝きを増した。後ろの海が激しく波立つ。周波数の爆発に水面が抉られているのだ。神の怒りを演出している。ワタルはヘル・スコルピオを倒さなければならない。

「そんな事はどうでもいい。俺は、フェニックス……、復活と命の象徴。フェニックス・リボンだ……！！　お前を倒す存在だ」

ヘル・スコルピオが、大笑いしながら尻尾から毒針を発射する。

「なーにが、リボンだ！　かわいい名前じゃねえか！！　喰らえよ、ポイズンピック！」

ヘル・スコルピオとフェニックスは勘違いをしていた。
ヘル・スコルピオの目の前からフェニックス・リボンは消えた。いや、消えたように見えるほどの神速の移動を見せたのだ。そのスピードはソウル・レイダーと同等かそれ以上だ。
ヘル・スコルピオの背後に回ったフェニックス・リボンは単純に、

純粋な力の塊の拳を打ち込んだ。ヘル・スコルピオの、紫色のアーマーが粉々に砕かれた。

「は？　速……！」

ヘル・スコルピオは成す術もなく海へ吹きとばされた。派手に水面を荒立てながら、十倍返しの三〇〇メートルほど吹きとばされる。フェニックス・リボンは追撃を開始する。虹色の翼で海を割りながら、ヘル・スコルピオに向かっていく。

「フェニックス、何か武器はないのか？」

ワタルは聞く。

『背中の羽を抜いてみなさい。多分、剣になるわ』

フェニックスリボンの四枚の羽のうち、一枚を抜く。すると、羽は高周波数のエネルギーを放出する剣へと様変わりした。

「よし、これは使えるな」

それに対しヘル・スコルピオは、水面のウェーブロードに立って、待ち伏せをしていた。尻尾にはおびただしい量の毒液が集中している。黒いシャボン玉だ。

「キシシ！　ちょっと、油断しちまったぜ。ダークドゥラウン！！」

「シナジーブレード！！」

フェニックス・リボンの剣は、刀身数十メートルの大刀に変化した。電波エネルギーである刀身は、変幻現在と言う訳である。軽々

と黒球を両断する。

そう、ヘル・スコルピオとフェニックスは勘違いしていたのだ。死を覚悟するのは、フェニックスの方ではなくヘル・スコルピオの方であった。

なぜなら、彼は戦いの神なのだから。電波人間として戦わさせたら右に出る者などいない。ワタルは、電波人間として戦うために生まれたと言っても過言ではないのだ。

愛こそは強さ、何よりも勝る心の意味だ。だからワタルは闘神になれた。電波変換は心の強さや、シンクロ率で大幅に上下される。ワタルは何年もの間、最愛の家族を守るために戦い続けてきた。精神の戦いを、だ。いつ終わるかも分からない戦いをしてきたのだ。そしてその精神力は、電波変換における最大の武器となっていた。

だからワタルは強い。大切な物の為ならどこまででも強くなれる。だから、ヘル・スコルピオを圧倒している。

「キシ！　お前、なんだその周波数……！！　聞いてないぞ、そんなの……！！」

ヘル・スコルピオの感じ取った戦闘周波数は、自身の数字をはるかに上回っていた。

『スゴイ……！　なんてシンクロ率！　まるで戦いの申し子……』

フェニックスはワタルの才能に魅せられていた。これほどに圧倒的に強い人間は見た事がなかったのだ。まさにフェニックス・リボンは空前絶後の存在だ。

「時間が惜しい、終わりだっ」

シナジーブレードで、豆腐でも切るかのようにヘル・スコルピオを真っ二つに両断した。二つになったヘル・スコルピオは断末魔をあげる。真っ二つになったというのに何と言う生命力だろうか。

「ギャアアアア！！　お、お前……！！　反則だろ、その強さ……！！　クソ……、こうなるんだったら、大人しく未来……に帰ってるんだったぜ。キシシ……、もしかしてこうなるのは決まっていたのか？

……まあいい、俺が死んでも、ＦＭ星人の大軍が地球に向かってやってくるぜ！？　数日後だ！　サジタリウス達が侵略に来る……！！　それがお前らの命日だっ！！」

ヘル・スコルピオは、そう言い残してベイサイドシティの海に沈んでいった。そして水中で爆発を起こし、大きな水柱を作った。フェニックス・リボンは降り注ぐ雨に打たれる。背中の光と、雨により、その場には虹がかかっていた。

『まさか、本当に勝っちゃうなんてね。それもあんなに圧倒的に』

「無我夢中だったんだ。家族を助けたい、って。ただ、それだけだったんだ」

ワタルは青いバイザーを輝かせて笑った。

そしてフェニックスは、そのワタルに何か言いたげにしている。

その声色は、なぜか薄暗い。

フェニックス・リボンは最強の戦士だ。現時点では地球で最強の生命である。

それ故に、過酷な運命が付きまとうのだった。

『……その事についてだけど、……話があるの』

「……？　どうしたんだ？」

ｗｗｒ―１２：暗い世界で

一人の人間が病院のベッドに横たわっている。それはカンナだ。彼女は苦しんでいた。カンナは声にもならない声を出しているのであった。

猛毒の苦しみで、とてもではないが意識を保っていられない。しかしカンナは本能的に気が付いていた。ここで苦しみから解放されるという事は、それ即ち死を意味しているのだ、と。

ミソラが必死に呼びかける。カンナはそれだけを頼りに命を取り留めていた。ミソラを残してはいけないと強く思ったはずだ。しかし、カンナの血肉は確実に死へと歩み寄っていた。血の流れは穏やかに、穏やかに。肉体は固く、冷たくなっていく。冷やかにカンナを終わらせるのだ。カンナにとって生とはもはや不自然なものであった。死に親しみを覚えた体が

、カンナがミソラといる事を許さない。

「うっ……、はぁっ。あっ、く……ッう」

息をするたびに、彼女の体を激痛が走る。そんな死に体のカンナの目は焦点を定めずに、宙を仰いでいた。

もう、目が見えていないのだ。

「ミ……ソラ……？　い……るの？」

カンナのか細い手はあてもなく、頼りなく、ミソラを探して宙を危なっかしく彷徨う。

ミソラがそれを手に取った。握りしめあう手と手をミソラの涙が

差す。

「ママ！　ここにいるよ！　私……、ここにいるよ……！」

「ありが……とう。ミソラ……」

カンナは精一杯を振り絞っている。一言一言に残りの命を込めていた。

そこに、医師がこれ以上体に負担を掛けるな、と言おうとする。

「カンナさん、もう喋らな……」

だが医師は口をつぐんだ。医師は気付いたのだ。喋らなくても助からないという事に、だったらせめて残りの時間を――、と。

「ママ！　私、ここにいるからっ。ママを一人にしないから……っ。だから、私を置いていかないで……」

ミソラはカンナの胸に顔をうずめた。ワタルを呼ぶ。父親を呼ぶ。

「パパ……ぁ。何で戻ってこないの!?　ママを助けてよ、約束したじゃない……っ」

ミソラの頭をカンナは撫でて、そっと言い聞かす。

「大丈夫……、パパは戻ってくるわ……。ワタルさんは約束を守る人。信じてあげて、ね？　ミソラ……？」

「うん……」

カンナはそう言い残して、ミソラの小さな背中に腕を回す。ミソラも少し落ち着きを取り戻したようだ。

しかしだった。ミソラはその時、確かに聞いていた。カンナの命の音を、鼓動を。徐々にゆっくりと役割を終えようとするその音を聞いていた。

そして、止まった。

心電図を示していた機械が直線を描く。そして高い電子音を鳴らした。その音以外は何もない。静寂だ。カンナはもうここにはいない。

「えっ……？」

医師が時計を見て、仕事を始める。

「残念ですが……」

ミソラは目を丸くしている。それがすぐに涙で一杯になるのにそう時間はかからなかった。そして、恐る恐るミソラはカンナの頬を撫でた。まだ温かかった。

おそらく信じられなかったのだろう。無理もない、これがミソラが初めて体感する死なのだから。圧倒的なその存在感を感じ取れずにいた。推し量れずにいた。

「マ……マ……？」

カンナからの返事はない。

医師はやりきれない表情を浮かべていた。

「ママ……、嘘だよね？　ずっと一緒だって……」

ミソラは段々と実感してきた。母親はもう、死んだのだと。

「パパ……の嘘つき……」

ミソラの目は以前の輝きを失っていた。

「なんで、ママを助けてくれなかったの……」

「ここでいいんだな!?」

フェニックス・リボンに電波変換したワタルは、自分の体と一つになったフェニックスに呼び掛ける。その調子は、焦っているようだった。

フェニックス・リボンは、コダマタウンとベイサイドシティ一帯を一望できる高度まで上昇していた。およそ数ｋｍ上空のウェーブロードから地上を見下ろす。

「ええ、そうよ」

「だったら早いところ……！」

「ちょっと待って」

フェニックスが、フェニックス・リボンの体から抜け出て、遮る。

「取引は……分かってるのよね？」

「……」

ワタルはしばしの間、沈黙した。

「ああ、分かってる」

そう答えたワタルは少し寂しそうだった。フェニックスが頷く。

そして、ワタルは両手を天に掲げた。フェニックス・リボンだけの奇跡の能力を発揮するつもりだ。

ワタルの相棒を務めるのは、ＡＭ女王のフェニックス。命をつかさどる生命の象徴のＡＭ星人である。彼女なら、毒に苦しんでいる人達を助けられる。彼女となら、もちろんカンナも助けることだって出来る。

ワタルは約束を破らない。破れない。父親なのだ。

「シャイニング・ボウ！！」

分離していたフェニックスが、ワタルの両手に吸い込まれていく。その姿は朱色のエネルギー体に変化していた。フェニックス・リボンの両手に朱色のエネルギーの塊が形成された。それは生命の種だ。

これは攻撃技ではない。回復技だ。

命の種が弾け飛ぶ。その描く軌道、それは流れ星。赤い流れ星。苦しんでいる人達に送りこまれる。

これは、ワタルからのプレゼントだった。ミソラにとっては最後のプレゼントだった。

「カンナ……ミソラ」

虹色の羽を持つ電波人間は、最愛の家族の名前をぽつりと呟いた。その表情は穏やかで、儚い。

ワタルはもうすでに覚悟を決めていた。ある覚悟を、決めていたのだった。

音程のない、ただ真っすぐなコーラスを披露していた機械が本来の仕事をし始めた。電子音が一定の間隔で鳴りだしたのだ。それは、カンナの鼓動に合わせてゆっくりと鳴り始めた。やがてそれは確かなものへと変わる。

医師は思わず走らせていたペンを落とした。

「信じられない……、奇跡だ」

カンナは、目を開いた。ミソラは一時の間、我を忘れる。そして、一気に先程までの負の感情を顔面から取り払った。

「ママ！」

「私……。真っ暗の所で……」

「ママぁ！　良かった……。良かったよ……」

ミソラが安堵する。母親に抱きついて、確かに母親の命を感じるのだった。医師も、患者に抱きつくなとは注意出来なかった。奇跡を目の当たりにして、呆けているのみだ。何せ、スコルピオの猛毒で苦しんでいた人達全員が助かったのだから。

奇跡としか言いようがなかったのだ。

カンナはまだ意識もはっきりしていない様子だった。しかし、呼吸はさっきまでとは打って変わって穏やかそのものである。そして、ポツリポツリと何かを言っている。

「……ワタルさんも真っ暗な世界にいた」

「？　どうしたの、ママ？」

ミソラはきょとんとする。

「その暗い世界から私を連れ出してくれた……。でも、ワタルさんは……」
「どうしたの……？　ママ」
「ううん……何でもない」

カンナはこれ以上口を開くのは止めた。酷く憔悴していたのもあるが、いやな予感がしたのだ。口に出してはいけないような、そんな感じがしたのであった。

暗い世界から出ようとせずに、ワタルは泣いていたのだった。カンナを導いた後、役目を終えたかのように暗い世界へと消えていった。ミソラとカンナを明るい世界へと残して、行ってしまうのだった。カンナはそんな夢か現かも分からないものを死の狭間で感じていた。

「ホントにもう、パパったら、ママがこんなに大変だったっていうのに、どこに行っちゃったのかな？」

ミソラはすっかりいつもの調子を取り戻しつつあるようで、ワタルに少し呆れ気味である。母親が帰ってきたのだからミソラは自然といつものように戻れるのである。
そう、いつものように戻れると信じていた。

それはカンナも同様で、カンナは小さく頬を綻ばせた。

「フフ、ワタルさんにお礼を言わなくちゃね……」
「なんで？」
「……何となく、でも確かに……一緒に戦ってくれたような気がするの……」

「？　そう……なのかなあ」
「お母さん……もう……眠くなっちゃった。……おやすみ」
「うん、おやすみ」

「……良かった、無事のようだな」

ワタルはカンナの眠る病室へ来ていた。遠巻きに二人を見つめている。だが、医師は当然として、ミソラもカンナもワタルには気が付かない。

それもそのはず、電波の体となった彼を見つけるのは不可能なのだ。そんなフェニックス・リボンはミソラとカンナを見守っていた。

その目に二人の姿を焼き付けようとしているのだろう。

「当分、お別れ……か」

ワタルは誰に言うともなく呟いた。もしかしたらその声を誰かに聞きとってほしかったのかもしれない。俺はここにいるんだ、と言いたかったのかもしれない。だが、それは叶わない事だ。

『いいの？　家族に会わなくても』

「……いい」

会ってしまっては、覚悟が揺らいでしまうとワタルは思ったのだ。そうなっては、フェニックスとの契約を果たせない。ミソラとカンナを守れない。ワタルは約束したのだ。

カンナの病気を治すと、母親の完治を信じて疑わない一人の少女としていたのだった。

「それがいいんだ」
『そう……なのね』

フェニックスは申し訳なさそうに続けた。

『ゴメンナサイ、私の力じゃ、アナタの奥様の体の性質までは変えられなくて』
「いや、毒を取り払ってくれただけでも、感謝している」

フェニックス・リボンはそう言ってミソラの元に歩み寄る。ミソラはカンナの方ばかりを心配していた。カンナの寝顔をずっと見ていた。フェニックス・リボンはそれが少し寂しく感じたようだ。屈強で美しい電波人間の背中が少し、色あせて見える。

フェニックス・リボンも歩み寄ってミソラと同じようにする。カンナの顔をしっかりと記憶に刻み込む。

「カンナ……、ゴメンな。こんな思いさせてしまって……」

フェニックス・リボンは少し間を置く。この期に及んで、言葉は次々と衝いては出ないということだろう。

「でも……、絶対助けるから。お前もミソラもこの星も……」
『ワタル、そろそろ急がないと』

フェニックスがワタルに告げる。別れの時は近い。

先刻、フェニックスは提案していた。地球にやってくるＦＭ星人達の脅威を、それ以外の異星人達が豊かな地球を狙っている事を、ワタルに宣告していたのだ。

「わかっている」
『気の毒だけど、ＦＭ星人達は待ってはくれないわ。ＡＭ　星を滅ぼしたときだってそうだったもの。サジタリウスは恐らく数日中に地球にやってくるわよ。
　でもアナタだったらきっと、地球に奴がたどり着く前に宇宙空間であいつらを迎撃できるはず。
　そしてその後は……』
「わかってる。契約はちゃんと守る。でもカンナは確かに暫くは大丈夫なんだろうな？」
『ええ、私の能力で命を分けてあげておいたわ。でも、もって二、三年ってところよ』
「そうか。うん、残念だがこれが今の俺が渡せる精一杯の誕生日プレゼントかな。今度は、ちゃんと元気な母さんをプレゼントしなきゃな」

　ワタルは自分の中のフェニックスに対して頷いた。ワタルからの精一杯の誕生日プレゼントは、カンナだった。そして今度は元気になったカンナをミソラに届けるのだ、と誓った。

　そんなワタルは類まれな才能を持っていた。それは電波変換における電波体との異常なシンクロ率である。これは戦闘においてすさまじい恩恵をもたらす。
　だからフェニックスはそれに目を付けて、ある提案しワタルとある契約を交わした。ワタルもそれを呑んだ。

　ワタルはいよいよその時が迫ってきていたので、最後にミソラの方に向き直った。ミソラの頭を撫でようと手を伸ばすが、その電波の手は虚しく空を切るだけであった。
　それでもワタルはミソラに語りかける。

「パパな……、これから宇宙に行ってくるよ。大吾さん達と同じ所に行くんだぞ。スゴイだろう？」

ミソラの返事を少し待ってみるが、帰ってくる訳がなかった。ワタルは続ける。

「その宇宙からは沢山のお友達がやってくる。多分、彼らは良くないお友達だ。だから俺は、お前たちを守るためにちょっと行ってくるよ。だからママと一緒に待っててくれな」

『アナタとアタシなら、出来るはずよ』

ワタルはまた頷いて、ミソラを愛おしそうに抱いた。電波人間では触れられなくても、物質的には繋がれなくても、せめて心の絆だけでも繋げておきたいと思っての行動だろう。

「もう、行ってくるよ、ミソラ。悪い宇宙人はみんな、俺が追い払ってやる。

でも、もし、ミソラの元に宇宙人が来たのだとしたら……、それはお前の友達だ。

……だから、だから、いつまでも笑顔でいてくれ。

それだけで、暗い宇宙で独りぼっちになっても、俺の世界は明るく輝いていけるから」

フェニックス・リボンは、立ち上がった。周波数を変換して、コスモウェーブに乗ろうとする。羽を虹色に輝かせて、異星の侵略者から地球を守ろうとしていた。

「カンナの病気を治す。絶対だ。宇宙には何だってあるんだから」

『ええ、そうね。宇宙には何だってあるわ。夢も、希望も、奇跡も』

ワタルは大吾の受け売りの言葉を噛みしめ、宇宙へと旅立った。

コスモウェーブへと続く黄昏の空には珍しく虹が掛かっていた。

フェニックス・リボンの通った軌跡は空高く昇っていた。

「ん……パパ？」

ワタルのいなくなった病室で、ミソラは何かを感じ取った様子でワタルのいた場所を振り返る。当然、そこには何もない。すると、ミソラは窓の向こう側にある虹に気が付いたようだ。

「キレイ……」

ミソラは微笑んだ。

――誕生日おめでとう――

ミソラは目を丸くした。ワタルの声がしたと思ったからだ。そして、ありがとう、と呟いた。

ミソラは誕生日を迎えた。ワタルも誕生日を迎えた。そう、フェニックス・リボンの誕生の日なのだ。

最強の戦士が誕生したのだった。最も優しくて、そして最も危うい、そんな戦士だった。

彼はまた帰ってくるだろう。

数日後。太陽系のとある宇宙空間。
そこでフェニックス・リボンは、ある軍団と対峙していた。その軍団は宇宙船を数機従えている。その中から屈強なＦＭ星人達が現れてくる。その数、百数十体。
そして、一番大きな宇宙船から、司令官と思しき男性の声が聞こえてきた。敵意をフェニックス・リボンに向ける。

『俺は、地球侵略作戦指揮官、サジタリウス。貴様……見ない顔だな。
分かっていると思うが、ご覧の通り我々は貴様に敵意を向けている。そこにいてもらっては邪魔になるのでな。すぐに失せよ！　さすれば命をどうこうはしない』

フェニックス・リボンは羽の一枚を抜いて、例の巨大な剣を作り出した。それで半径数ｋｍを薙ぎ払う。取り囲んでいた軍団の、半数以上は壊滅した。

『貴様ッ……！！』

激昂するサジタリウス。その彼が搭乗する宇宙船に向かって、フェニックス・リボンは不敵に笑った。

「生憎、邪魔をするのが目的だ。お前らの方こそ俺の邪魔をしなければ命は助かるぞ？」

フェニックス・リボンは宇宙船に向かっていった。

それから、少しの時間が経った。サジタリウスの亡骸を見下ろすワタルの目は冷たい。

「バカ野郎……。俺を人殺しにさせやがって。ＦＭ星人の奴ら、攻めることばかり考えて、自分の身の心配なんて、これっぽちもだ。だから、争いはなくならないんだよ。だから、俺はこんな所でこんな事を」

『分かったでしょう？　これがＦＭ　星人の本性よ』

ワタルはその日を境に、戦いに明け暮れていった。最初は、地球にやってくる危険因子の排除をしていたが、その行動範囲はやがて徐々に広がっていった。ワタルは地球にやってくるＦＭ星人達を全て返り討ちにし、まだ知り得ぬ未知の生命からも地球を守っていたのだ。偶然にもロックマンが地球で誕生するまで、地球を人知れず守っていたのだった。フェニックス・リボンがいなければ地球は滅んでいただろう。

彼は何度も戦い、何度も戦った。そうして数年が経った頃には、空間と空間を虫食い穴のように不安定に繋ぐノイズウェーブを利用して宇宙全域を駆けまわっていた。その理由はカンナの病気を治すためだろう。

しかし、その理由もカンナの死を境に変わっていくのだった。

そしてワタルは、フェニックスとのある契約を遂行するために着実に力を付けていった。その力は確かなものだった。いつしかその力は圧倒的な脅威となっていった。それはノイズウェーブが張り巡らされている、過酷な裏の世界でさえ知らぬ者のいない程にだった。

そうやって、戦いを友にしてしまったワタルは裏の世界で修羅となっていった。

「まだだ。まだ力がいる。……なあ、フェニックス？」

『フフ、そうね。私の願いとアナタの願いを叶えるために』

一方、ベイサイドシティ。

ワタルがミソラ達の前から姿を消してからも、ミソラはワタルを待ち続けていた。ベイサイドシティの小さな家でワタルの帰りを待ち続けた。

最初の内はミソラも毎晩の夕食を三人分用意していた。自分とカンナとワタルの分だった。しかし、待っても、待ってもワタルは帰ってこなかった。

次第にミソラは、カンナの前でワタルの話をしなくなった。発作に苦しむ母親の前でワタルの話をする気にはなれなかったのだ。

カンナもその事については言及しなかった。

数年が経った頃にはもう、食卓の皿の数は二人分が当たり前になっていた。カンナもこの頃になると、体の方も思わしくなくミソラの前で父親の話をする気力もなくなっていった。

ミソラもカンナもワタルを忘れてしまったわけではなかった。ただ、忘れてしまいたかっただけだ。

ワタルとの約束がある限り、諦める事が出来なかったからだ。だから、言い様のない不安に襲われる事も多々あったのだ。だから忘れたかった。でも二人とも忘れることは出来なかった。

いつからか、ミソラはやがてワタルに捨てられたのだ、と思うようになった。小さな頃は考えられなくても、小学五年にもなれば分かることもたくさんある。それが知りたくないことであっても、だ。

そんな時に、ワタルが帰らぬままカンナは息を引き取った。今回

は奇跡は起きなかった。命の幕切れは呆気ないほどに当たり前のようにやってきた。

そして、その時のカンナの最期の言葉はミソラの耳に焼き付いて離れなかった。

「ワタルさんは約束を守る人。だから、嫌いにならないで……。ミソラがあの人を信じなくなったら、本当の意味で家族はバラバラになっちゃう」

この時、ミソラは小学五年生。他の子供より少し大人で、そして少し寂しがり屋だった。この少女が母親を失うにはまだ幼い。

「パパとママはいつまでもあなたを愛している」

カンナは最期まで、ミソラを愛していた。そして最期までワタルを待っていた。

ワタルがその事実を知るのはそれから少し先の事である。そこから、ワタルは本当の意味で変わっていく。

もはやミソラには、ワタルが自分をどう思っているのかさえ分からなかった。捨てられたのか。違うのか。生きているのか。死んでいるのか。

ミソラはワタルが分からなくなった。

そうして、時は流れていき、ミソラはそれに流されて歌姫になり、歌い、悲しみ、泣き、逃げて、そしてスバルと出会った。やがて、親友になり、そしてそれ以上の関係になって、初めて本当の事を打ち明けようと思えたのだった。

そして、過去からの時間の流れは現在にたどり着いた。この時間。

この今。
　ミソラはスバルに本当の事を打ち明けている。スバルは黙って聞いていた。ＷＡＸＡの廊下は薄暗くとも、ミソラが泣いているのに気が付いていたはずだ。だが、それでも黙って聞いていた。

「ご、ゴメンね。何勝手に話して勝手に泣いてるんだろうって、私、バカみたいだね……」
「ううん、そんなことないよ」

　スバルは、ミソラに寄り添られていることなど忘れて真剣にミソラの事を考えていた。

「でも、私……最期の最期まであの人の心配をして死んでいった、ママの事がかわいそうで……」

　ミソラは涙を指で拭った。

「ママが死んじゃったら約束も何もないのに……。それなのに……」
「ミソラちゃん……」

　スバルはどう声をかけていいのか分からなかった。彼も父親はいないが捨てられた、という考えは絶対にありえなかったのだ。だから、ミソラに気易く同情する資格はないとスバルは思っていた。
　スバルのハンターの中のトラッシュも何も言わない。彼の思考ライブラリには、このようなパターンは組み込まれていなかった。よって、スバルは自分で状況を打開しなければならない。

「ミソラちゃん……。僕、思うんだ。キミのお父さんは、きっと……キミの事をまだ思っているよ。
家族ってそんなに簡単にはバラバラにはならないと思う」

スバルは素直な感情を言葉にした。大吾も今はいないが、スバルは帰ってくると信じていたし、帰ってこないならば自分が探しに行こうと思っていた。あかねも大吾の事を今も思っている。だから家族はまだ繋がっていると思っていた。

ミソラの家族も例外ではないはずだ、とスバルは信じていたかった。

しかしミソラはスバルの言葉を簡単には受け入れてはくれなかった。

「だって、ママの病気が悪化して以来、一度も私たちの前に現れなかったんだよ？　きっと、あの人は私が八歳になったらママと私を捨てるつもりだったんだよ。

小さい子どもと病気の女の人を抱えて苦しい生活なんて、ＷＡＸＡの職員にしてみればバカらしいものね……。ま、そのＷＡＸＡにも今はいないようだし、生きているのかどうかも分からないけどね」

「そ、そんな事……」

スバルはミソラが不憫でならなかった。もしかしたら生きているかもしれない、唯一の肉親を信じてあげられないミソラは可哀そうだったのだ。しかし、信じてやれというのも酷だった。そして、父親の話をしている時のミソラは鬱屈とした表情を浮かべていたのだった。スバルにはその表情が理解できるようで、理解出来なかった。

だが、そんな表情を浮かべているミソラを、スバルはあまり見ていたくはなかったのは事実だった。そしてミソラは、スバルに淡々と言う。もう泣いていなかった。

「そんな事ない、って私は最初は思ってたよ。でも、私だって限界はあるの……。あの人はもう、過去の人。小さな頃の私のパパ。

でも、今の私には、守りたい人がいるから。守れなかったママの

分まで守りたい人がたくさんいるから。
……だから今はキミ達と一緒に生きていくの」

その守りたい人の中にミソラの父親は恐らく入っていないのだろう。守りたいとミソラに思われているスバルは、なにか釈然としない。

「……その気持ちは嬉しいけど、あのさ――」
「うっ、うう。大変だったんだなあ。ミソラちゃん」

スバルが言葉を選んでいると、上の方向から言葉が降りかかってきた。スバルの目の前にゴン太が立っていた。ゴン太は元からの赤っ鼻をそれはもう赤々とさせて、すすり泣いていた。
スバルは驚いて、待合の椅子から立ち上がった。ミソラもゴン太の存在に気が付いた。

「あ、ゴン太君！　あれ、もう終わったの……って、いつからいたの？」
「つい先刻からだぜ。うっううおおうぉ、それにしてもミソラちゃん、水臭いぜ。俺に相談してくれたら……」
「って、本当に何時からいたの？」

ミソラは怪訝さを浮かびあがらせている。濃い赤紫の前髪から覗いているゴン太を見上げるその瞳は、上目遣いを通り越して睨んでいた。

「大丈夫。これは俺とミソラちゃんだけの秘密だぜ？」
「って、僕は……」

スバルは寂しくなった。ミソラは溜め息を吐いた。

「はぁ……。でも、ま、いっか。ゴン太君も一応はブラザーだもんね」
「一応!?　俺は本気でブラザーだぞ!?　俺の事は遊びだったのか!?　ミソラちゃんよお?」
「ハハ！　冗談だよ!!」

ミソラは立ちあがって、悪戯っぽくゴン太に笑いかけると、スバルの方に向き直った。スバルの手をしっかりと握る。これはいつものミソラだ。

「行こうっ」
「え……?　でも」
「さっきのお話はもうおしまい！　早く博士の所に行こう！」

スバルが返事をする間もなく、ミソラはスバルを引っ張ってヨイリーの元へ向かっていってしまう。
ゴン太は一人で寂しい。

「チクショウ。羨ましい奴」
『ブロロ。良いじゃないか、お熱い事でよ！』
「オックス……」
『まるで俺達のようだな！　ブロロっ！』

ゴン太は気分が悪くなった。

「ぎゃあっ」

スバルとミソラは、ヨイリーの待つ部屋へと入っていった。その中では、ヨイリーが待っていた。ヨイリーは空中に浮かぶエアディスプレイを見つめて何かを考え込んでいた。

「うん、ゴン太ちゃんのデータは……、うん。まあ、大丈夫……でしょうね。これなら、なんとか……。

あらっ、スバルちゃん、ミソラちゃん、二人で一緒に来たのね」

ヨイリーは二人に気が付くと、しわくちゃの顔をしわくちゃにしてにっこりと笑みを作る。すると、ヨイリーはエアディスプレイを閉じて、円柱状の装置の前に歩を進めていった。

その装置は人一人が入るぐらいの大きさである。そこへコードがやたらめったら張り巡らされていた。それは様々な情報を処理するのに役立つのだろう。この装置の存在が、やはりここも実験施設であると感じさせた。

「こっちへいらっしゃい、二人とも」

ヨイリーは両手を広げた。右手と左手はそれぞれの装置を指し示していた。

「右がスバルちゃんで、左がミソラちゃんね」

二人は言われたとおりにその装置の前まで歩み寄る。

「これは一体？」

スバルは知的好奇心と警戒心を含ませつつヨイリーに尋ねた。

「何の事はない、ただの実験装置よ。大丈夫、身の危険はないから」
「あったら、困ります」
『ですね』

楽しみそうにヨイリーは笑っている。スバルも冗談混じりで苦笑した。スバルのポーチの中で、トラッシュは真面目に頷いているのだろう。

「フフ。じゃあ早速、二人ともその中にはいってちょうだい」

スバルとミソラは言われるがままに円柱の中に入っていった。その様子は、掛け値なしにモルモット同然だった。実験されるのだからある意味当然である。

そしてヨイリーは二人が装置の中に入ったのを確認すると、研究室の壁一杯に広がる大型モニターを起動させた。そして二人に尋ねる。

「二人とも調子はどう？」
「悪くはないです」
「私はいつでも元気ですよ。ね？　スバル君」
「ハハ……」
「あらあら。良い実験結果がとれそうで何よりだわ」

笑顔もそこそこにヨイリーは咳払いをして改まった。

「じゃあ、これから実験を始めるわ。実験と言っても、これはアナタ達の力を計る事を目的としています。
……ある意味、これは試練よ。アナタ達が本当にこの世界を守れるだけの力があるのかを計る、超えるべき壁なの。その壁を越えてみなさい。

そしたら、新しい仲間たちと共にＷＡＸＡ、サテラポリスを背負って歩んでいく事になるでしょう」

スバルとミソラは緊張した面持ちになった。それを察した、ヨイリーはガッツポーズを作る。

「リラックス！　大丈夫、あのゴン太ちゃんだってギリギリでパスしたんだから。他にも懐かしい面々が君達を待っているはずよ」

「なんだ。あのゴン太がパスしたんだから、大丈夫だね」

「うんうん、あのゴン太君でも大丈夫だったんだから、私たちでも楽勝だね！」

『ポロロン、ゴン太君カワイソー』

「うん、リラックスしたわね。じゃ、電波変換してちょうだい。アナタ達の力を見せて！」

スバルとミソラは頷いた。それぞれのハンターを手にとって、トランスコードを認証させる。

「行くよ、トラッシュ」

『もちろんです。スバル様』

「準備はいい？　ハープ」

『いつでもオッケーよ。ミソラ！』

それぞれの相棒は準備万端だ。二人は掛け声をそろえて電波変換する。

『トランスコード！！』

するとたちまち、円柱状の装置は眩く輝き始めた。

そして輝きが穏やかになるにつれ、光の中から二体の電波人間が

姿を現した。灰色と朱色の二体である。バイザーは、濃い青と淡い青。スターダスト・ロックマンとハープノートである。

「あの電波変換しましたが、どうすればいいんですか？」

手持無沙汰にロックマンがヨイリーに訪ねた。円柱の中で格好良く決めても仕方がなかったのだ。

「何もしなくてもいいわ。ただ、アナタ達はアナタ達のパートナーと息を合わせた電波変換をすることに集中してちょうだい。それだけよ」

「はい、分かりました」

「頑張ります」

それから数分が経った頃だろうか。ヨイリーはモニターのデータを見ながら、驚愕していた。そのデータはロックマンのものである。

「スバルちゃん、電波変換はいつもと変わりない感じ？」

「ええ、まあ、そうです。でも強いて言えば、ロックと電波変換している時の方が体はちょっと楽かな」

『スミマセン、スバル様』

「いいよ、気にしなくても。ロックはロックで、我がままだから、そっちの方で疲れるからさ」

ヨイリーは驚きを隠せない。スバルは何気ない感じで電波変換しているが、そのシンクロ率は二〇〇％に迫ろうかという程であった。人工の電波生命体との電波変換で一〇〇％を超えるのは奇跡的であ

る。
　かの暁シドウでさえ、シンクロ率一〇〇パーセントに到達するのは滅多になかった。それでも、シドウは天賦の才に恵まれていたのだから、スバルは異常であると言える。さすがは、何度も世界を救った、といったところか。
　スバルはこの実験の体を装った試練をなんなく乗り越えるだろう。ミソラもスバルには及ばないものの、ゴン太よりも確かな結果を残したようだ。

「もう結構よ。電波変換を解除していいわよ」

　ヨイリーは満足した様子で、試練の終了を告げる。結果は予想以上の収穫であったのだろう。ヨイリーはスバルに確かな可能性を感じ取っているのだった。
　そこにスバルだ。

「あの実験の結果は？」
「うん、私もすごく気になる」

　不安げなスバルとミソラにヨイリーが答えようとする。

「フフ、それはね……」

　するとヨイリーの言葉を遮られた。
　ＷＡＸＡ館内の警報装置がけたたましく鳴り響いたのであった。耳を劈く高音に二人は驚き、辺りを見渡す。この部屋も、どの部屋も恐らく全ての部屋が赤く照らされて警告されている。
　そして、この研究室の緊急連絡回線が機能した。急いで早口になってしまっている男性の声がリリースされた。男性はヨイリー博士に状況を説明し始めた。

『ヨイリー博士！　何者かが、突然このＷＡＸＡニホン支部に攻撃を仕掛けてきました。しかも相手は正体不明の電波人間だと思われます。その数は三体ですが、その電波人間に対処できるだけの設備も人員もここにはありません。ど、どうしたらいいでしょうか！？』
「電波人間……、ミライちゃんは？」
『何故か、連絡がつきません……！』
「うーん、困ったわね。シドウちゃんに電波人間の相手は厳しいだろうし……」

ヨイリーは腕を抱え込んでしまう。悠長に何か考え込んでいる様子だ。

「ホントに困ったわ。このままじゃ私たち……」

そこにミソラが、声高らかにヨイリーに言い張る。自分の胸を拳で叩いている。

「何を言ってるんですか！？　ここに電波人間が二人もいるじゃないですか？」
「あら、確かにそうだったわね。焦って失念していたわ」

スバルも名乗りを挙げた。ここで引っ込んでいては男が廃るというものである。

「あの、僕たちでよければ、何とかしてみますよ」
「あら、スーパーヒーローであるロックマンに相手をしてもらえるなら、安心ね」
「スーパーヒーローと私が何とかやってみますよ」

ミソラとスバルは再度電波変換した。ヨイリーは現場を伝えると、彼らは当に光速でそこへ直行した。

そしてヨイリーは二人がいなくなると、研究室の椅子に腰をかけ一息吐いた。腰かけに身を任せ物思いにふけっているようだ。

「……フウ、彼らは手強いわよ。でもスバルちゃんたちなら乗り越えられるはず……。頑張ってね」

スバル達は途中でゴン太を引きいれ、現場にすぐさま到着した。その場所であるＷＡＸＡの防護バリケードの所に、電波人間が三体並んで立っていた。どうやら、スバル達を待っていたらしい。三体の内の二体が、体を覆い隠すマントのウェーブデータを纏っていた。残りの一体は、サーフボードの上に乗って空中を浮遊している。そのボーダー電波人間がスバル達に口を開いた。調子の良い口調だ。

「やあ、早い到着だったね！　何というかだけど、君達に恨みはないけどねえ、訳ありでＷＡＸＡを襲わせてもらうよ！　邪魔をするっていうんなら、……わかるね？」

好き勝手言うボーダー電波人間に対し、ハープ・ノートに聞く耳はなかった。

「そんなの邪魔するに決まってんでしょ！」

「ははー。そいつはそうだって感じだよねー」

調子のいい感じでボーダー電波人間は頷いている。そこにマント

の電波人間がボーダーに促す。

「早く始めましょう……」

加わってもう一人のマントが言う。

「さっさと始めて、さっさと終わらそうぜ！」

「じゃあ、ま、周りもうるさいんで始めますか。ウェーブバトル……」

そう言うと、ボーダー電波人間のサーフボードから勢いよく高密度の電波エネルギーが溢れだす。それが生み出すのは圧倒的な機動力だ。

「ファイド・オンン！」

ロックマンは灰色に鈍く光を返すグレイバスターを構えた。

「望むところだ！」

ｗｗｒ―１４：三人の電波人間

ウェーブバトルが始まると、真っ先に攻撃に移ったのはロックマン。グレイバスターの薄暗い光弾がサーファーへと容赦なく直線的に襲いかかる。

しかしサーファーはそれを曲線的に軽やかに、難なく避ける。その百戦錬磨の体裁きから、この電波人間の場慣れしている様がありありと伝わってくるのだった。彼のサーフボードと思しき電波物体からは、さながら列車のレールのようにウェーブロードが伸びていく。

そうやって彼はウェーブロードを自分で作り出して、縦横無尽に空間を疾走していくのだ。

「なんてでたらめなっ！」

でたらめなそんな動きにロックマンは、呆れ驚いたのであった。羽でもない限り、電波人間は足場をウェーブロードに依存して戦うのだが、このサーファーはそんな常識を覆した。

ないなら作ってしまうのであった。

『この回避パターン……』

三次元空間を滑らかに動きまわる敵の挙動は、スバルことロックマンを戸惑わせる。手甲を光らせトラッシュは戦闘をより自身のものとするために、相手の電波人間を分析する。

そこに例のサーファーは歯を見せて笑う。それは爽やかなもので、サーフボードから放出されている輝きを弾く水しぶきのようだ。

「当然さ。僕はノリに乗っているからね！　このサーフ・サーファーに乗れないバトルの波はないのさ！」

黄色いアーマーに、太陽のようなヘルメットを装備したその電波人間はどうやら、サーフ・サーファーというらしい。彼からは南国トロピカルな雰囲気にそぐわない、確かな実力者の風格さえ感じさせる。陽気さと調和したその闘志は、殺伐とした戦いの場ではひと際目を引く真夏の太陽のようである。

そんなサーフ・サーファーは空間を縦横無尽に駆け抜けていく。ロックマンはそれを目の端でとらえるも、彼は一瞬でそこから消えていく。かなりの使い手であると言えるだろう。ロックマンを苦しめるのには十分すぎるほどであった。ロックマンはとりあえず撃ち続ける。

「グレイバスター！！」

しかしやはりどうだ。灰色の光弾はサーフサーファーにかすりもしない。それどころか、サーフ・サーファーはロックマンの横を颯爽と通り過ぎ、彼の肩アーマーをサーフボードのエッジで切りつける。ロックマンは思わず顔をしかめ、「くっ」と小さく息を吐いた。

しかしロックマンは肩を気にする素振りを見せずに、サーフ・サーファーへ、バスターの照準をすぐさま合わせる。

そこに、だ。

この場を黙って、傍観してくれるはずがないのが二人いたのだ。当然だ。

それらはマントでその正体を隠す、秘密主義者な電波人間だ。確実に敵であるロックマンを見逃すことはないのだ。

そうなると、すぐにこうなる。恥も外聞もなく、きっちりと二手に分かれて、正確無比にロックマンの死角から殺しにかかる。

二体の内の一体が気味良く笑う。

「ヒャは！　ペイン・ヘル……」

マントを覆った一体の一撃が決まろうとしたかにみえた。だが、長高周波数で威力さえを含有する音波にそれを阻まれた。それはハープノートだ。

「アナタの相手は私よ！」

「ちっ、邪魔しやがって。まあいいぜ、スバルの前に、お前の相手をしてやるよ！　ペイン・ザ・シックル！！」

紫炎の鎌を取り出しマントの電波人間はハープ・ノートとの交戦に臨む。すると漆黒の鎌に紫色の炎が宿った。それを見たハープ・ノートも望むところといった様子で自慢の武器のギターを構える。うまくロックマンから引き離したようだ。

その一部始終を観察していた残ったもう一体は、勘が鋭くロックマンを攻撃対象から外し、オックス・ファイアの方へ方向転換していった。オックス・ファイアは既に伝家の宝刀であるオックスタックルを繰り出していた。まずはこの雄牛の処理を優先したようだ。臭いものには蓋をしたいものである。

「ブロロ！！　俺の魂のオックスタックル喰らいやがれ！」

その方のマント人間は、腰元から剣を取り出し、バトルカードを読み込む。その動作は、単純なものであるが縷々（るる）としていてかつ無駄のない動きであった。オックスの渾身の一撃を意に介さずに気にもしない。度胸が据わっているのではなく、いままでの経験則から余裕なのだろう。

「目的を達成するには、まず周りの小石からどけていかないと倒すべき敵は見えてこない……。つまり、お前には冷静さが足りないよ」
「何だと!?　ブロロ！　俺様は燃えまくるほど冷静クレバー」
「バカだ」
『バカですね』

剣士とその剣士の相方が呆れた様子で呟く。すると、それはもう、オックスタックルの勢いは増す。景気良く口のノズルから炎を噴射している。

「フン……。インストール、メガクラスカード??フミコミデルタ??」

剣士はオックスタックルに向かって跳躍した。そしてすぐにオックスの胸に三角形の斬撃が刻まれた。剣士は既にオックスの後ろに着地していた。

「なんの！　これくらい!!　進化した俺様のスーパーアーマーの前じゃ無意味だぜ！　ファイアノズル！」

傷が浅かったようで、オックスはすぐに振り返り、後ろの剣士に向かって、火を吐きだす。剣士のマントに火が付いた。着火点から勢いよく燃えだす。
どうやらオックスはヘラ・ローズガーデンとの戦いで、そのスーパーアーマーにさらなる磨きをかけたようだ。

「やるねー！　あの赤い牛君」

事の顛末にサーフ・サーファーは感心している様子。そんな彼にロックマンは感心しない。きっちりとその隙をつくのだ。

「隙あり！」

よそ見をしているサーフ・サーファーに強烈なバトルカードをお見舞いしてやる。それもギガクラスカードを、だ。赤いバトルカードをトラッシュが処理すると、ロックマンの左腕が獅子のようになった。その獅子は漆黒のバグ集合体だ。

「ギガクラスカード！　ブレス・オブ・ゴスペル！！」

スバルは、コダマタウンのフリーマーケットで見つけた、ブレス・オブ・ゴスペルという超レアカードを繰り出した。ちなみにこれはレプリカ版なので、オリジナル程の威力はない。しかし、十二分な威力だ。並のバトルカードを凌駕している。それがギガクラスカードたる所以だ。

当然ながら炎属性の炎は、サーフサーファーを呑みこもうと強大な攻撃範囲を持ってして実行に移る。これでは、サーフ・サーファーの小粋なライディングなど意味をなさない。

「コイツはまず過ぎるね！　へいサーフ！」

サーフ・サーファーは相方のサーフに呼び掛ける。そして息を合わせる。大技には大技をという古典的概念を以って迎撃するのだ。

『おうよ！　ケン！』

サーフ・サーファーのサーフボードに圧倒的なエネルギーが集まっていく。何やらどうやら、一発大きな物を繰り出す様子。

「これがボク達の……」

サーフ・サーファーの作ったウェーブロードからトロピカルな木々が意気揚々と生い茂ってきた。ロックマンの足元にヤシの実が転がりだした。太陽が輝きだした。常夏は感じになってきた。

これは凄まじい感じだ。

「トロピカルビッグウェーブだ!!」

赤、黄、緑色の巨大な津波が何もないはずの地面からせり上がってきた。高さは、十数メートルだ。ブレス・オブ・ゴスペルが焚き火に見えるのだから凄い凄まじい。炎属性の炎を、水属性と木属性と火属性とが合わさったなんとも欲張りな波で喰らい尽くす。

スターダスト・ロックマンはそれを見上げて呟いた。

「鮮やか……」

鮮やかでない彼はそう言った。

ｗｗｒ―15：ロックマンVSサーフ・サーファー

「ぐわっ、なんて鮮やかなんだ！！」

なす術なくロックマンは鮮やかな津波に流されてしまった。無力にもロックマンは、フジ山の裾野を波に揉まれて、小石のように流されていく。

「鮮やかこそがボクのトロピカル！！　ロックマン、灰色になったキミにはもう勝ちの目は出ないよ」

「ぐっ。このくらいのことで。バトルカード、ブーストパック！」

ロックマンは津波から脱出し、空高く舞い上がった。そのロックマンは背中に、大きなロケットバックパックを背負っていた。そしてさらに続ける。さらに苛烈に仕掛けるのだった。

「チャージショット！」

ロックマンお得意の射撃芸。辺りは夕焼けも過ぎ、夕闇となっていた。先程の真夏の太陽は、トロピカルビッグウェーブの演出だったのだろう。代わりにチャージグレイバスターが太陽を買って出る。

鈍く闇を返すその銃口から、貯水タンク大の球体が放出された。これはバスケットボール大のチャージショットほど一点の威力には優れないが、広い範囲を攻撃できる。

その広い範囲攻撃用の貯水タンクが、爆発して花火になるのだか

ら、サーフ・サーファーも舌を巻くのだった。そしてお礼を言うのだ。

「夏っぽい演出ありがとう！　しかし、今はまだ春だ！！　バトルカード、ハイパーバリア！！」

サーフ・サーファーの言う通り、いまはまだ五月である。

「波乗りっぽいアナタがそう言うの！？」

なんともロックマンの突っ込み虚しく、バスターは全てバリアにかき消された。

悠々、攻撃を防いだサーフ・サーファーはおもむろに地面に降り立つ。すると転がっていたヤシの実を手に取りロックマンに投げつけてきた。これは爆弾だ。ロックマンの立っていたウェーブロードが跡形もなく消し飛んだ。威力は申し分ない。さらに辺りには、ヤシの実の芳醇な匂いが漂ってきた。

格調高いロックマンはその匂いに戦意を削がれたが、すぐに気を取り直す。

「くそう！　あの敵、相当場数を踏んでいるな。――トラッシュ、分析の結果は出たかい？」

『出ました。戦闘周波数は７３万メガヘルツです。私達に倒せない敵ではないです』

「そうか。それなら、なんとか……」

そんなロックマンに、そんなサーフ・サーファーはヤシの実爆弾を投げながら言うのだった。こころなしか、爆弾の威力が上がっている気がする。今度は山の岩肌が抉り取られた。

小石がロックマンのヘッドギアを叩く。ついでにサーフ・サーフ

ァーの自論もロックマンの耳を叩いた。

「ロックマン！　電波人間の強さは、周波数の高さじゃないんだよ！　大切なのは、大事なパートナーとどれだけ息を合わせられるかってことなんだよ！」

ヘイ、サーフ！　波に乗るよ！」

『イイゼー！　ケン。シンクロ率をフィーバーさせるぜ！』

サーフ・サーファーはそれは勢いよく上空のウェーブロードに飛び乗る。そして、新たなウェーブロードをロックマンを取り囲むように発生させて、その周りをぐるぐると回りだした。それはもう、立派な大道芸。

何か素敵に不敵な事を考えている様子である。

『相手のシンクロ率が急激に上昇中！！　３００％に迫ろうかという勢いです！』

トラッシュは驚嘆した。ここまで素晴らしい、電波変換は滅多に見られない。

「この場所にいたらまずい。上に逃げるよ、トラッシュ」

「ヘイ！　ロックマン！！　何でも絶対、その場所にいてもらうよ。僕の圧倒的な超必殺技を喰らわせてあげるからね！！」

相も変わらず、サーフ・サーファーはものすごい勢いでロックマンの周りを景気良く回っている。ロックマンは次第にサーフ・サーファーを目視するのが困難になった。

「そんなお人好しな僕じゃない」

お人好しなトラッシュは、スバルに耳打ちをする。そのときロックマンは上空を見て、何かを確認。小さく頷く。そして上に逃げようとする。ジャンプするのだ。

「そりゃ逃げるよね！　でもダメダメ。バトルカード！　スパイダーネット！！」

サーフ・サーファーは、ロックマンを蜘蛛の糸でがんじがらめにしてしまった。粘っこい紐がきつく巻きつく。

呆気なさ過ぎて、溜め息が出るほどにあっさりと結末してしまう。

「あっ……、しまった」

そこに、サーフ・サーファーの超必殺技が決まるのだった。ロックマンの周りのウェーブロードから、渦のように電波の綻びが漏れ出していく。それは次第に巨大な渦潮に姿を変えた。鋼鉄の蜘蛛の巣でロックマンは動けない。

サーフ・サーファーがここぞとばかりに、気持ち良く叫ぶ。

「スパイラルビッグウェーブ！！」

ロックマンは渦に飲み込まれる。それは凄まじすぎるもので、急激な回転エネルギーを与えられて渦の中心にたどり着くと、地面へもの凄い勢いで弾き出された。

この様子は、駒の回転軸からコロニーレーザーを発射するようなものだ。

ライフルの弾丸と化したロックマンは、フジ山の固い岩盤を貫いた。地面の深く至るまでに強いエネルギーと衝撃で地面に叩きつけられたのだった。

「あぐっ！」

スバルは悲鳴を上げた。

『スバル様！！』

トラッシュも悲鳴だ。

「ロックマン、敗れたり！」

サーフ・サーファーは上機嫌は上機嫌で、下で惨めに埋まっているロックマンに勝利宣言をする。

そして悲しいかな、ロックマンは命からがらの命乞いをした。殺されるにはまだ若いと自分自身でも思っていたのだった。後七十年弱は生きたいのだ。

「ぐっ、もう駄目か。助けてください。お願いします。家には大切なお母さんが待っているんです」

「……」

サーフ・サーファーは無言でロックマンを見下ろしていた。サングラスのようなバイザーには、それぞれ二つに命乞いをするロックマンの姿が映っていた。ロックマンは少年そのものだ。ロックマンはロックマンの無垢な命を奪うのに、躊躇を期待した。

「お願いします。僕のお母さんには、もう僕しかいないんです」

「……」

「ああ、お母さんの作った温かいカレーもう一度食べたかったな……」

「……グス」

サーフ・サーファーの目元から心の汗がこぼれた。心の汗を拭おうと、サーフ・サーファーは周囲への警戒を解いた。すると、したたかな頭脳派なロックマンはそうは問屋がおろさない。ただで、涙を拭わせるわけがないのだ。

「今だ！　ミソラちゃん！！」

こんなそんなでロックマンが打って変わって、大声で上空のウェーブロードへ合図を送る。そのウェーブロードには、サーフ・サーファーと、もう一人。

ハープ・ノートだ。

「マシンガンストリングス！！」

サーフ・サーファーの背後から弦鉄線が飛び出し、今度はサーフ・サーファーががんじがらめになってしまった。

「な、なんと！！」

サーフ・サーファーは、ボードから落ちて芋虫のようにその場に倒れこむ。脱出を試みるが、鉄線がギシギシとその体を締め付けるだけであった。

仕方なくハープ・ノートを見上げて問いかける。ロックマンの真似とする。

「ぐっ、もうジ・エンドか。助けてください。お願いします。家には大切なビッグウェーブが待ってるんです」

「ショックノート！」

炸裂した。

「ボクのニュアンスが伝わらないなんて……」

今度は真面目にハープ・ノートを見上げた。するとスカートの中が丸見えになりそうだったので、ハープ・ノートは「きゃっ！　エッチ」と言いつつサーフ・サーファーの頭を脳味噌を揺らす確実なポイントを狙って優しく蹴った。金属タライのように乾いた音が優しさのハーモニーを奏でる。

「ぐっ、ハープ・ノートだね。キミは僕の仲間と戦っていたはずじゃ」

「そうですけど。私に正体がばれると電波変換を解いて、それは一目散にＷＡＸＡ　の方へ行っちゃいましたよ？」

「なんだとっ」

サーフ・サーファーは驚きを隠せない。

「驚きましたよ。あの電波人間、ジャック君だったんだもん。ペイン・ヘルなんとか、っていうまともに当たらない技を使ってきたから、まさかとは思っていたけど。そのまさかだったんだからね。ね、南国さん？」

ジャックというのは、元スバルのクラスメイトである。なおかつ犯罪者でスバルの敵だった。それでも大切なスバルの友達だ。一緒に伝説のパンツ破りにも挑戦してくれた。

そんな彼は、今は故郷の『ロイヤルフラッシュ王国』を復興する事により姉と共に罪を償っているはずだった。

しかし、どうしたものか。そんなことの背景はいざ知らず、響ミソラその人にサーフ・サーファーの正体がばれてしまっているのだから大変だ。

「なんだとっ」

サーフ・サーファーは驚きを隠せない。

「驚きましたよ。もう一人のあの電波人間、ミライ君だったんだもん。そのミライ君が、あのサーファーみたいな電波人間は南国さんだ、ってね」

ミライはゴン太にマントを燃やされていた。それで正体がばれてしまったのだろう。

「なんだとっ」

今度はロックマンだ。ロックマンは驚きを隠せない。

「まさか、あの電波人間達がミライ君、ジャック、南国さんだったなんて……」

『私はほぼ特定していました』

「でも、一体どうして？　どうしてか疑問だけど、その前にミソラちゃん。僕をこの場所から引っ張り出してくれないかな」

ロックマンはハープ・ノートに地面から引っ張り出されると、上空のウェーブロードで行儀よく正座して波乗り男と向かい合い対談する。ちなみに波乗り男は行儀がよろしくないので芋虫のままだ。代わりに横でサーフが行儀よく愛らしく正座している。

ロックマンが口火を切った。

「でも一体？　どうして南国さんが……」

「意外だろう？　キミの前で、いつでもボクは軟派な、どうしようもないバトルカードショップの人間だったからね。一時も疑わなかったろう？　スバル君」

南国は、自分はこんなにアグレッシブな男だと思わなかっただろう？　と言いたげなのである。

「そうだよ。あの南国さんが、一体どうして!?　あの情けない姿の南国さんはどうしたんですか!?　何で、真面目にカッコ良く戦っているんですか？　ボクの世界観が滅茶苦茶だ!!」

「アハハ、スバル君やられてたもんね？」

ミソラにこれを言われてはスーパーヒーローなロックマンもお終いだ。南国は続けた。

「そうさ。ボクはとっても強くて素敵な電波人間になれるんだ。ま

あ、それは最近の話なんだけどね」
「その割には強かったですね。あのロックマンをやっつけるんだもの」

今日のミソラは意地悪だ。

「まあ、基本的な戦い方は熟知してた的なニュアンスだからさ」
「わあ、素敵だね南国さん！　ロックマンより格好いいよっ」

今日のミソラは意地悪だ。

「だったら、この凄く厳重に巻かれた縄を解いておくれ」

今日のミソラは意地悪なので解かない。
とりあえずロックマンは気に留まった事を口に出す。

「あの。南国さんは、どうしてＷＡＸＡを襲撃しに来たんですか？　なにか事情があったんですよね？」
「……ふふ、ボクたちが本気でそんな事をするわけないじゃない。言わば……キミたちの実力を推し量るための試験みたいなものかな？」

ミソラが首を傾げた。

「試験？」
「そうだよ。さっきキミたちはヨイリー博士と一緒にいたんじゃないのかな。実は全部、そのヨイリー博士の考えなんだ」

スバルは合点がいった様子で頷いていた、

「そうか。おかしいと思ったんだよね。ミライ君も急にいなくなってるしで」
「でも私、いまいち分からないんだよね。なんだってそんな事をいまさら……」
「それはだって……」

その時、南国の言葉を遮るようにして無線通信が彼の元に入った。彼の間の前にエアディスプレイが展開される。映っているのはヨイリーだ。

「どうやら、時間が来ちゃったみたいなカンジだね」
『ケンちゃん。そっちはどう？　ミライちゃんとジャックちゃんはもう終わったみたいだけど』

ヨイリーがそう言うと、エアディスプレイは研究室にいるであろうミライとジャックを映し出した。ゴン太は後ろの端の方で牛丼をがっついていた。いつでもどこでもゴン太は一生懸命だ。
サーフ・サーファーはにっこりとしてヨイリーに報告してやるのだった。

「いやー、ハハハ。流石にやりますよ彼ら。いくらこっちがプロだって言っても、電波人間させちゃ分が悪かった感じですね」
『あら、ケンちゃんやられちゃったの？　ジャックちゃんといい、ミライちゃんを見習ってほしいわね』

どうやらゴン太はボコボコにのやられてしまったらしい。ヨイリーは続ける。

『まあでも、終わったんなら私の研究室まで来てちょうだい。とっても大切なものを渡さないといけないから』

「ああ、アレですか。すぐに行きます」

了解したサーフサーファーはエアディスプレイを閉じて、スバル達に言ってやる。

「さ、行こうか」

南国達がヨイリーの研究室に着くと、ヨイリーが出迎えてくれた。

「やっと来たわね、ケンちゃん。さあさ、スバルちゃん、ミソラちゃんも早くこっちにいらっしゃい」

ヨイリーは手招きをして、ジャック達の方へ促す。スバルは久しぶりに会う友の元へすぐに駆け寄った。お目当てはジャックだ。

「ジャック！」

「おう、スバルか……」

ジャックは研究室の壁に寄りかかっていた。

そんなジャックの容姿を特徴付けるのは、ウニのようなトゲトゲ頭である。スバルとはまた違ったトゲトゲである。目付きはかなり悪く、ひたすらに柄が悪い。しかしそれでも某小国の王子様なのだから、分からないものである。身長はスバルよりも少し低い。服装は主に紫色で、赤い紫のインナーに攻撃的なデザインの暗い紫のコートを羽織っている。

そんなお洒落さんなジャックはスバルと久しぶりに会ったにもかかわらず、照れ臭さから無愛想を貫く。

「ジャック、久しぶり！　今日はミソラちゃんにやられちゃったの？」
「う、うるさい！　ちょっと、ペインヘルフレイムの当たりが今日は特別悪かっただけだ！！　それに本気を出していればあんなヤツ……」
『クケケケ！　一発も当たんなかったもんな！』

ジャックのハンターからこれまた柄の悪い、それまた黒いウィザードがウィザード・オンしてきた。そんな彼は、極悪に悪い目つきを歪まして、極悪な笑みを浮かべている。
名前はコーヴァスといい、烏座のＦＭ星人である。ちなみに、とてつもない犯罪者として名が通っていて、気分転換に惑星を滅ぼしたりするのが趣味である。
しかし今は少しは丸くなったようで、ジャックのウィザードとして落ち着いてしまっている。

「クケケケ！！　ジャァーック！　ペインヘルフレイムの練習はちゃんとしとかないとな！　実戦で外れてばかりじゃ命がいくらあっても足りやしねえ！」
「うっせえ」

ペインヘルフレイムとはジャック達の技の事で、ウェーブバトラーの間では、命中率の悪さで有名だった。主にコーヴァスの性格がいい加減すぎるのが原因なのだった。
しかし全弾当たったとすればその火力の右に出る者はいない。そんな夢のような技である。

するとコーヴァスは何かを思い出したようだ。スバルににじり寄り、鋭利な爪をちらつかせる。

「そうだ！　おいウォーロックの所のクソガキ！　アイツはまだ帰ってきてないのか？」
「ウォーロックの事？　うん、帰ってきてないよ」
「クァーー！！　マジか？　そいつは残念だぜ。こっちは早くウォーロックを俺様の手で八つ裂きにしてやりたいってのによ！」

コーヴァスは危険人物である。しかし腕は確かに立つ。サテラポリスに協力するという条件で臭い飯を食わずに済んでいるのであった。

盛り上がっているそんな所に、ヨイリー博士が話に入る。その笑顔はコーヴァスとは対照的だ。

「なんだか、楽しそうねスバルちゃん。それじゃ、例の物を渡そうかしら。ミソラちゃん、ゴン太ちゃん、こっちへ」

ミソラとゴン太がそこに集まる。
そして、ヨイリーはシドウに目配せをする。

「アレを用意してちょうだい」
「アレ――ですね」

シドウは喉を一つ鳴らすと、例の物を取りに研究室を出ていった。
スバルはとても気になって仕方がない。

「アレって何なんです？」
「ま、それは後のお楽しみ」

ヨイリーは悪戯っぽく笑う。そして続ける。今度は南国達に言う

のだった。

「さあ、ケンちゃん達。さっきスバルちゃん達と戦ってみてどうだった？　アレを渡しちゃってもいい感じなのかしら？」

それには、ミライがまず答えた。手に持っていたコーヒーを机に置くと言うのだった。

「問題はないでしょう。牛島自身、電波変換を少しずつではあるがモノにしてきている、と思います。

それに、彼のタフさには目を見張るものがあります。戦場の最前線で敵の攻撃から味方を守る要になるかと」

「あら意外。結構、褒め倒しちゃうのね。でもそれなら問題ないわね」

ヨイリーは、次よ、と言った。今度はジャックだ。ジャックはバツの悪そうに後ろ頭を掻いている。

「まあ良いんじゃねーのか。ばっちゃん的にも、見方は多い方が良いんだろう？　ま、俺が本気出してたら瞬殺だったけどな」

「クケケケ！！　俺様としては、あんなションベン臭えクソガキいてもいなくても一緒だと思うけどなァ！！」

流石はコーヴァス、歌って踊れる今をときめくスーパーアイドルを、ションベン臭いクソガキ、と評するのである。

こうなると乙女としてミソラは黙ってられない。

「ちょっと！　どう言うことかな、カラス君！？　女の子に向かってその物言いは聞き捨てならないよっ」

怒り心頭。ハープもギターの中から参戦だ。

『コーヴァス、アナタちょっとデリカシーなさすぎるわ』

「黙れ！　俺様が何を言おうが、お前らに文句は言わせねえ！　口答えするんなら……酷いぜ？」

コーヴァスは、幾度となく敵の命を切り裂いてきた鋭利な爪をちらつかせる。流石は犯罪者、とどまる所を知らない。

事態の収集を計り、ヨイリーが待ったをかける。

「コヴァちゃん？　あんまり度が過ぎると、電磁場監獄に入ってもらう事になるけどいいかしら？」

電磁場監獄に入ってしまえば、いくらコーヴァスとは言えど二度とは帰ってこれない。それほどに危険地帯なのである。

「ケッ。ヨイリーのババアが言うんだったら仕方がねえ。勝手にしやがれってんだ。まあ、敵にブチ殺されても、俺は知ったこっちゃねえがな」

「わかったんならよろしい。次はケンちゃんね？」

ヨイリーも流石にスバルについては聞くまでもないだろうと思っているらしい。それほどにロックマンは強いのだ。先程サーフ・サーファーにやられたのは恐らく偶然だ。

南国もそう思った様子で答える。

「スバル君なら問題ないと思います。ちょっとさっきは僕の方が優勢だった感じだけど。まあ、勝負は時の運とも言うしね！」

「ハハ……そうですね（イヤ……南国さん。普通に強かったです）」

スバルの苦笑もよそにヨイリーは、確認も取れたところに研究室に戻ってきたシドウに告げる。

「さあ、シドウちゃん。この三人にアレを渡しちゃって！」

シドウはスバル達の前まで向かう。そして三人それぞれに目を配ると、何か確信したように頷いた。

「これがお前達に託すものだ」

シドウは三枚のカードを差し出した。それは、戦士の証だ。

「これは……」

スバルはそれをじっと見据える。

「サテラポリス隊員のライセンスカードだ」

ｗｗｒ―17：オフィシャルウェーブバトラー

スバルはその差し出された銀色のカードに見入る。三枚のうち、一枚にスバルの名前が烙印されていた。

「これが僕たちのライセンスカードか」

そうだ、大事に扱えよ、とシドウはそれぞれを彼らに渡してやる。ゴン太は大はしゃぎである。

そんなゴン太を尻目にシドウは言う。

「いいか、お前達。コイツがあれば、サテラポリスの戦闘員としての権限でいろんな所に行けるようになる」

「例えば？」

ミソラだ。

「それはもういろいろだ。危険なノイズウェーブやコスモウェーブの立ち入り禁止区域、トップレベルの国際重要施設、そしてノイズウェーブのどこかにあるとされている……。

――おっとこれは子供には言えないな。まあ、とりあえずそんなところにまで許可を得なくても行けるようになる。スゴイだろう？」

「スゲー！！　マジかよ」

「ああ、マジだ。うまい棒に誓って嘘はない」

ゴン太は歓喜の舞を披露していた。それほどにゴン太はサテラポリスに憧れていたのだ。ミライにアマチュアとバカにされて悔しかったのだ。常日頃から、陰ながら電波変換の練習をしていた甲斐が

あると言うものだった。
そこにスバルがシドウに質問する。気になる所があったようだ。
「あの、暁さん。このカードに大きく刻まれているアルファベットは何ですか？」
スバルが指差す。それは名前の横に大きく烙印されていた。
「ああ、これはランクだよ。サテラポリスの戦闘員のカードにだけ刻まれているんだ。スバルはＡランクホルダーのオフィシャルウェーブバトラーだな」
「オフィシャルウェーブバトラーかあ……」
そんな響きにスバルはこそばゆそうにしている。公式的に肩書を貰ったのは初めてだったのだ。いくら地球を何度でも、何度でも救っても今までのロックマンは、ゲリラ戦闘員にすぎなかったという訳だ。
そこにミソラだった。
「Ａランクだと何かいい事があるんですか？　私はＣランクなんですけど」
「Ｃランク以上だと、外国のウェーブロードにパスポートなしで行けるようになる。さらにＡランク以上は地球以外の惑星に自由に行き来する事が可能になる。例えば――ＦＭ星とかな」
「よかったじゃん、スバル君！　ロック君の育った星をいつでも見物に行けるよ！！
でもスバル君がＡで私はＣかぁ……ちょっと悔しいかも」
ミソラは少しだけ対抗意識を燃やしていた。だが相手がロックマンともなればそうは勝てないだろう。そこにシドウが言ってやる。

「おいおい、ミソラ。始めからCランク以上は実はかなりすごいんだぞ。大抵のオフィシャルはEランクから始まるからな」

そうなるとゴン太は気になって仕方がない。ゴン太はゴン太で絶妙な立ち位置に晒されているのだ。絶妙すぎて微妙だと思ってしまう。

「なあ、暁さん。おれ……そのFランクなんだけど……これは普通以下の評価ってことなんだよな……？」

ゴン太はしょんぼりしていた。大きな背中が小さく見える。シドウは言葉を選んで励ましてやる。

お前は要らない子じゃない、とりあえず捨てるのはもったいない子なんだ、と言ってやる。

「まあ……そうなるな。でも気にするな！　電波人間に変身できる貴重な人材にも関わらず最初からFランクなんて逆にスゴいぞ！！」

「暁さん……それ励ましてんのか？　でもFランクでも何かあるんだろ？　な？」

「え……？　それは、まあ、あれだ（ヤバい……なにもない）」

シドウは困ってしまう。Fランクなどという駆け出しバトラーに特権などなかった。しかし優しいお兄さんであるシドウはそんな愚鈍な戦士を救ってやる。

「強いて言えば、隊員食堂の牛丼がタダになる……ぞ？　ほ、他のランカーにはない唯一無二の特権だ！！　ハハ、喜べよ」

スバルとミソラはゴン太を憐れんだ。可哀そうで仕方がない。命

がけで牛丼を無料にしてもらういわれなどどこにもないのだから。
しかしそこはゴン太だ。牛丼に命より大切な何かを見いだせるのだ。それがゴン太なのだ。

「すげえ……！！　そうだったら、俺はずっとFランクでいいぜ。いやFランクがいいぜ！」
『ブロロ！！　良くやったゴン太』

二人は嬉しそうだ。本人達がそれで良いならば、それはそれでよろしい事なのだろう。

そこにジャックが自分のライセンスカードをゴン太に見せつける。圧倒な格の差をその愚かなゴリラに見せつけてやるのだ。

「ハハ！　牛丼で釣られるなんて馬鹿すぎだろ。俺はスバルと一緒でAランクだぜ？」
「クケケケ！　FM星の特攻隊長と恐れられたお前も堕ちちまったな！　ざまぁねぇー、さっさと戦場でくたばっちまいな。いや、くたばれ！！　ケケッ」

意外や意外、ジャックもAランクホルダーだとのたまう。王子様と犯罪者の意外な組み合わせ故にそうなるのだろうと思わせる。見えない力が働くのだ。
しかしオックスとて元FM星軍の特攻隊長としてのプライドはある。FM星史上最強最悪の犯罪者に言われっぱなしではいけないのだ。

『ブロロ！　言ってくれるじゃねえかコーヴァス！！　おいゴン太、俺をウィザード・オンしやがれ。ボコボコにしてやる』
「ケッ！　ちょうど、殺しがしたい気分だったんだ！　お前でクソ

マズイ牛丼でも作って、そこのデブガキに無理やり食わさせてやる！」

「こらっ」

これ以上はまずいので、ヨイリーが優しくたしなめる。流石のコーヴァスもヨイリーには逆らえない。

か弱い老人を気持ち良く殺してしまうほど性根が腐りきってはいるが、命の恩人に手を上げるほどプライドがないわけではない。そんなわけでどこまでも非道なコーヴァスはいつまでもヨイリーには逆らえない。

「チッ、命拾いしたなクソ牛」

「ケンカは良くないわよ、コヴァちゃん？　オックスちゃんともみんなとも仲良くしなさい。アナタはやればできる子なんだから」

「ケッ！　バカか、クソババア？　俺は仕方なく協力してやってるんだ。勘違いするなよ」

「フフ、素直じゃないんだから」

「チッ、キメぇババアだ。さっさと寿命でくたばりやがれ」

コーヴァスは照れ隠しで、老婆に死んで欲しかったり、かつての同じ星の仲間を殺したがるのだ。素直になれないだけなのだ。

そんな不器用なコーヴァスをトラッシュが見逃さない。トラッシュは糞がへばりつくぐらいに真面目なのだ

『イケマセン。老人にそんな事を言っては。ましてや私の生みの親に酷い言葉は許せマセン』

「おっ、なんだぁ、おまえ!?　殺されてえのか。俺は幾多の星を滅ぼしてきたコーヴァス様だぞ！　しかも、てめえの顔はなんだかウォーロック似てやがる。その顔を俺の爪で引き裂いてやろうか？」

コーヴァスは恥ずかしがり屋なので、初対面のトラッシュとの距離感を測りあぐねている。コーヴァス的にはまず相手を殺してみないと始まらないのだ。挨拶はちゃんとしておかないと律儀なコーヴァスは落ち着けない。

当然そんなことではいけないのでヨイリーが止める。

「ダメよ、コヴァちゃん。挨拶はちゃんとしなさい。殺しは挨拶とちがうわよ？」

「殺しが挨拶と違うとは、にわかには信じがたいぜ。お前らだって朝を起きたら歯を磨くだろう？　俺は朝起きたらとりあえず誰かの命を終わらせたいんだ」

「まぁまぁ、この子ったら。ゴメンナサイね、トラッシュ。コヴァちゃんもホントはアナタと仲良くしたいんだけど恥ずかしがり屋だから……」

『私の心は海より広いデス。問題ありません』

トラッシュは優しい。しかし優しいスバルは、それはもうコーヴァスが怖い。

「てゆうか、改めてコーヴァスは色々怖いね。ジャックもちゃんとしつけしなよ」

「俺の言うことなんて聞きゃしねえよ。コイツは何にも悪いと思ってねえんだ。息をするように殺したがるほど恥ずかしがりだからな」

「すごい恥ずかしがり屋だ……。僕なんて、まだまだ甘いんだなぁ」

負けたと思ったスバルは物思いにふけった。

そこにヨイリーとシドウがいよいよ本題を切り出す。時刻は九時を回ろうかとしていた。研究室の窓から見える外界はすっかりと闇が全てを覆っている。

「さあ、いい加減にコーヴァスの相手は疲れちゃったわね。さて…
…と、シドウちゃん？」

ヨイリーはシドウに目線をを送る。

「それじゃあ、みんな。早速で悪いが、この施設の屋上にあるヘリポートに行こう。急げよ」

いきなりなシドウに、スバルは異議申し立てる。

「あの、またどこかに行くんですか？」

「そうだとも」

シドウはうまい棒を食べながら答えた。その味は、ペパーミント味だ。スバルはあえてそこは無視して言う。

「もう帰らないと母さんが心配しちゃいます。さすがにこれ以上好き勝手やっていたら、母さんに悪くて」

スバルは優しい子だ。優しくて地球を守りたがるが、それ以上に母親が大事だ。

すると、シドウはうまい棒を食い散らかす。ヨイリーの研究所が汚くなった。

「おいおい！　いくらお前が母さんが大事だって言ってもな。今はここにそれどころか、それ以上に大切な事があるんだよ」

シドウは孤児なので、母親の事を持ち出してくるスバルの気持ちがいまいちよくわからない。目の前にある任務を優先した。

「……スミマセン。わがまま言って」

諦めてスバルは頭を下げた。そこにヨイリーがシドウに言ってやる。しみじみとした表情で二人の若者を考慮していた。

「シドウちゃんの気持ちも分かるけど。スバルちゃんの気持ちもわかるわ。ミライちゃん？」

今度の目配せはミライにだった。ミライはまたコーヒーを置いて、研究所の出入り口の方へ歩いて行った。

ミライは開閉用のＩＤカードで読み込み口の所を切る。そしてドアに向かって何か言いだす。

「やはり、スバル君はアナタの心配をしていましたよ」

ミライがそう言うとドアが開いた。スバルが驚く。あかねがいたのだ。

「スバル……」

「母さん！！」

スバルは驚きを隠せずミライの方を見た。

「どうして？　ミライ君？」

「ヨイリー博士に頼まれたんだ。お前らを呼び出した後にご家族の方に知らせろとな。すると、お前の母上がお前の心配をしだしてな……」

「で、仕方なくなって私の許可をとって連れてきたんだものね。ミライちゃん？」

そのような言い方をされてしまうとミライはヨイリーにプイと背を向けた。そしてぼそりと言う。

「女の人に泣かれるのは苦手なので……」

スバルはこの時、ミライの事を母親思いのいい奴だと思った事だろう。まさか二回もそんな事を思うなんてスバルも予想していなかった。それほど突然の驚きだ。

「どうりでおかしいと思ったんだ。ミライ君が途中でいなくなっちゃって……」

「でも、お前が母上のことを言い出さないと会わす気はなかった。それをあかねさんも承諾してくれた」

ミライは小さく続けた。

「いい家族だな」

しかし、ゴン太は疑問に思う。ゴン太にもいい家族がいたのだ。

「俺の母ちゃんは？」

ミライは即答。

「いない。家が静かになってせいせいするとさ」

ゴン太は泣いた。

そうなるとシドウはさっさと行きたがる。

「ほらスバルお前の心配していたお母様もそこにいるじゃないか！
それじゃ、さっさと行くぞ」

ミライも付け加える。

「じゃあ星河、ヘリにいくぞ。そこに着くまでに母上への言い訳を考えておくんだな」

勝手に戦う事を決めたスバルの言い訳を考える時間はヘリポートまでの数分だった。あかねを泣かせずに済ますには難易度が高い。
そこでゴン太は疑問に思う。

「あのさ、暁さん。どこに行くんだ？」
「アメロッパのＷＡＸＡ本部さ。世界中から仲間が集まっている」
「スゲエな！　もちろんアメロッパにも牛丼屋はあるんだろ？」
「あるわけないだろう！　うまい棒屋さんも無いんだぞ！！」

ゴン太はさっきよりも泣いた。スバルはぼそりと呟いた。

「うまい棒屋さんなんてそもそもニホンにもないんじゃ……」

ｗｗｒ―１８：ＷＡＸＡ本部へ

ＷＡＸＡ棟からサテラポリスの棟に移って、しばらく歩いた頃。先頭を歩くシドウが、後ろの方へ振り返った。

シドウの背中側で鋼鉄のドアがゆっくりと重々しく全自動で開いていく。

「さ、着いたぞ」

スバル達はヘリポートにたどり着いたのだった。確かにそこはコンクリートの開けた場所が広がっている。

サテラポリス管轄のヘリポートが三個並んでいたのだった。真ん中のそれにヘリが一機とまっている。

スバルが以前の任務の時に乗った機体よりも一回り大きく、装甲は薄い。色は白に黒。ヘッドライトが赤でパトカー。

ふとスバルは隣を歩くあかねを見上げた。

あかねは目の前のヘリコプターを見ていた。珍しそうにその鋼鉄の塊を見ていた。スバルはそんな物見遊山な母親を見ていると、やはり違和感を抱いた。あかねには似合わない。

武骨なヘリを鑑賞する姿が似合わないのだ。スバルはガーデニングでもしていてほしかった。

「母さん、やっぱり帰りなよ……」

「あら、どうして？」

「だって、朝、洗濯物とかしないといけないだろう？　朝食だって

作らないといけないし。パートだってあるじゃないか……」

あかねはにっこりと笑う。スバルの母親の笑顔。

「スバルが心配なの。帰るならアナタと一緒じゃないと」

「ああ……。えっと……」

そう言われてしまってはスバルとしては閉口するしかない。そこにミソラが入ってくる。

「心配してもらえるなんて、羨ましいぞっ」

「ミソラちゃん……。まぁ、それは、そうなんだけど……」

ミソラにもそう言われてしまうと、スバルは先の件を思い出して口が重くなる。そしてあかねはこうも続けてみる。

「それに夜中に子供が外に出るときは、保護者同伴じゃないとね」

「なるほど。その発想はなかったよ」

今さらなようで、あかねの言っている事は至極当然だ。スバルは小学六年生。いくらロックマンに変身出来て、いくら強くてもそこは忘れてはいけないのだ。

あかねはゴン太とミソラの付き添いも兼ねてやっている。スバルがこれ以上言っても無粋なだけだ。

「まあ、確かに言われてみたらそうだけど……。

でもさ、確かにさっきはまでは家に帰りたかったんだ。でも、母さんに会ってみると、やっぱりこれ以上母さんに電波人間とか戦いとか、そう言ったものに関わってほしくないや。

僕の母さんは、家を守ってるだけでいいと思うから……」

「言うじゃない、スバル。
でも、母さんとしては……、やっぱりアナタみたいな子供に戦わせようとする人達の顔を見ておきたくて……。大吾さんの時にすごく後悔してるから。
それに、アナタにはやっぱり戦ってほしくないのが本音だしね。アメロッパのお偉いさん方にガツンと言ってやるんだから！」

あかねは拳を握ってみせる。あながち冗談にも聞こえない。スバルは笑うしかない。
ミソラが小さくスバルに耳打ちした。

「何を言ってもダメみたいだよ？」

スバルはがっくりと肩を落とす。スバルとしては、出来るだけ母親の前では、普通の小学生でいたかった。
だが、これ以上一緒にいると、ロックマンとしての一面を母親に突きつけることになるだろう。

「母さん、ついてきてもいいけどさ。でも、それでも僕は戦うんだと思う……」

数十分後。アメロッパ、ヒュースポンの上空にスバル達を乗せたヘリが現れた。時差の関係から、アメロッパは朝の七時だ。
ヘリは速いもので、目的のＷＡＸＡにはすぐに着いた。ヒュースポンの宇宙開発施設が立ち並ぶ中、ひと際大きくて、ひと際高い施設が目を引く。その圧倒的な施設は天に高く高く伸びている。摩天楼を通り越して、地球の取っ手だ。

当然、宇宙が大好きでたまらないスバルはそれに好奇心をくすぐられる。

「わあ、あんな大きな電波望遠鏡初めてみたよ！」

ヘリの窓にべったりなスバル。その目は輝いている。そこにシドウが言うのだった。

「あれが、ＷＡＸＡの中のＷＡＸＡ！　総本山ＷＡＸＡ本部だ。ニホンのＷＡＸＡがうまい棒チーズ味だとすると、ＷＡＸＡ本部はマカロニ味だ！　スゴイだろう？」

「……はあ、まあ……はい」

「懐かしい感じだねー。僕の懐かしい感じニュアンスが漂ってきてるのがわかるかい？　ボクの心のビッグウェーブがハイテンションになってきたよ！！」

南国は懐かしがっている。彼はサテラポリス兼務で元々はここで働いていたのだった。ゴン太がそのニュアンスに反応した。

「南国さん……俺の心の牛丼は冷めちまった。俺はもう眠いんだぜ。子供は寝る時間だぜ」

『ゴン太……ブロロ。オレも眠いぜ』

「オイオイ、君たち。まだ朝だろ？」

「ケンちゃん。時差よ、時差。少しの間だけ寝かせてやりましょう」

さらに数十分後。ゴン太はジャックに尻を蹴りとばされる。もう全員ヘリを下りてしまっていた。ジャックは起きないゴン太を起こ

そうと必死だ。

「おい、起きろ！　さっさと起きろよ」

『クケケ！　ケツを燃やしちまおうぜ』

コーヴァスの妙案。しかしそれは可哀そうなのでジャックはそれなりに賢い頭を使ってみる。

「マテリアライズ、牛丼！　マテリアライズ、委員長！！」

ジャックのハンターから、牛丼とルナのリアルウェーブがマテリアライズされた。

「おい、ドリル女。ゴン太を起こせ」

「かしこまりました」

擬似ルナの、いつかのおかしな踊りと声と牛丼の香りとでゴン太に訴えかける。

「ウ……。委員長……？　この匂い……、牛丼……？　……牛……丼。……ハッ！！」

ゴン太は飛び起きた。そして牛丼を仕留めた。これでジャックも一息つける。

「やっと、起きたか。みんな外で待ってんぞ」

「フガッ、ゴフゴファ！　ブホホホホ。ブホホホホ！」

ゴン太は牛丼を食べている。変な生き物がジャックの前にいるわけではない。

「おい、聞いてんのか？」

聞いてない。

「……チッ」

『やっちまおうぜ』

ジャック達はやってしまう。

「トランスコード００２！　ジャック・コーヴァス！！
喰らえ！　ペインリトルフレイム」

ゴン太の尻に直撃だ。

「アチ！」

ｗｗｒ―１９：フォースナンバー

ゴン太をようやく迎えたスバル達はＷＡＸＡ本部の前の生体認証ゲートの前まで来ていた。生体認証ゲートは強力な電磁波で来訪者を固く拒む。いくら、重要な客人とて、不用意には通さない。

そこでヨイリーが施設内の人間と連絡をとる。

「リフちゃん？　門を開けてくれるかしら？　ええ、うん、そうよ。大丈夫、全員来ているから。ならよろしくね」

シドウが不満を漏らす。

「まったく不便ですね。ここのＷＡＸＡだけ、許可がないとライセンスカードもただの板っきれだから」

「まあ、そういうこと言わないの。あの子、用心深いから。だから、確認と施設防御の為にこっちのＷＡＸＡで用意した戦闘部隊を送ってくるって」

シドウの言うボス――リフレインは用心深い人物のようだ。なので客人の迎えに精鋭の戦闘部隊を送ってくるのである。

これは手堅い歓迎だ。

「手荒い歓迎ですね。まったく……」

シドウがうまい棒を力一杯に噛み砕いた。彼のこの行動は何か不

満がある時に見せるものだ。そうするたびに床に食べカスをこぼす。ついでに愚痴もこぼす。
そんなもうすぐ二十歳のシドウに誰かが口を挟む。女性の声でそれも若い。

「手荒い歓迎でゴメンなさい。でも相変わらず貧乏くさいモノ食べてんのね、シドウ？」

続いて少年の声。スバルにとって耳慣れたものだった。

「みなさん久しぶり。懐かしいな。特にスバル君」

スバルにとっては思わずの出会いだった。

ゲートの向こうには長い黒髪を結った憂い顔の美女と、スバルと同じくらいの歳で緑色の髪をした女顔の少年がいた。

「お出迎えはティアか。思ったより元気そうで何よりだ」
「アナタも元気そうね」
「何気にボロボロだけどな」

シドウにティアと呼ばれた女性は、クインティアという名前だ。以前はスバルの学校の先生をしていた。そしてジャックと同じくディーラーの幹部にして、やはり犯罪者だ。しかし今は祖国の復興に尽力して罪を償っている。
そんな彼女は久しぶりにシドウに会えた事で、清楚に微笑んでいた。犯罪者だが、一国の姫だけはある。

「じゃあシドウ、一応聞くけど。そこにいる人達に危険人物はいないわよね？」

「いるわけないだろ？　危険どころか、一般の主婦までいるぞ！　ＳＳＳライセンスカードに誓って全員の身元を保証する」

うまい棒に誓わない辺りはシドウとて流石に心得ていた。

「わかったわ。それじゃ、ゲートを開けるわね」

クインティアがリフレインに報告するとゲートの一部が無効化されてスバル達はようやくＷＡＸＡ本部に立ち入る事が出来た。

そして次はスバルの番だ。もう一人の少年に話しかける。これはスバルの昔の友人だ。

「久しぶり！　何も言わずに転校しちゃうし心配してたんだよ？　でも、ツカサ君元気そうだね」

ツカサと呼ばれる少年の名前は双葉ツカサ。一見すると物腰の柔らかい少年だが、彼は二重人格者だった。「ヒカル」という名のもう一人の人格を宿している。その性格は残忍そのもの。

スバルもそれは知っていた。今はツカサが表に出ている。

「そんなに久しぶり？　ついこの前の事件の時に会ったばかりじゃないか」

「そうだったかな。あの時はほとんど意識がなくて、よく覚えてないんだ」

「そうだったね。あの時のスバル君はボロボロだったもの」

ツカサは思い返した様子。ついでに他の事も思い返していたようだ。ツカサは続けた。

「あのね、スバル君」
「なに？　ツカサ君」
「……ずいぶんと前から僕は色々と考えてみたんだ。君には色々と酷い事をしてしまった……。ゴメンね、僕とヒカルを許してほしい」
「え、ヒカルも？」

ツカサは小さく頷いた。彼はスバルに悪びれている。思う所があるのだろう。

「うん。旅を通じて、僕はヒカルと和解したんだ。ヒカルも僕で僕もヒカルなんだって、二人で一人なんだって」

ツカサは自分に話しかける。もう一人の自分に語りかけるのだ。

「ヒカル、出てきなよ。スバル君に謝るんだろう？　……そうか。わかったよ」
「どうしたの？」
「照れ臭いから出てこないだってさ、でも「悪かった」って言ってるよ」
「そう……。ツカサ君たちの事は僕は最初から怒っていないよ。そりゃ、落ち込んだりはしたけどね」

スバルは笑ってみせた。ツカサも同じようにした。

「ありがとう。少しずつ元のようになれるといいね。そしていつか……ブラザーに」
「うん！」

その様子を見ていたヨイリーはスバルとツカサに言うのだった。

「さ、わだかまりはなくなったようね。早くみんなが集まっている場所に行きましょう！」

ヨイリーの案内でスバル達はリフレインの待つ研究室に着いた。そこはやはりＷＡＸＡ本部、最新鋭の機器がずらりと並んでいる。その機器類は常に宇宙のデータを測定し続けていた。忙しく点滅を繰り返す表示パネルが色々な数値を表示しているのだ。

その研究室はヨイリーのものより何倍も大きくて、床は鏡のように磨かれている。一番奥に大きな横長のモニターがある。機械類しかないその部屋はやや殺風景だ。

例の横長のモニターの前に中年の男性がいた。彼は様々な入力機器が設置されている、ピアノを百倍複雑にしたような机に肘をついて考え事をしているように見える。そうやって椅子に腰をかけているのであった。

彼こそがこのＷＡＸＡ本部の長である。

その場所にはリフレイン以外に、地球の最高戦力である電波人間に変身できるであろう者達が複数人確認できる。その数は決して少なくない。

スバルは、こんなにも電波人間がいたのか、と驚いた。そんな彼らのほとんどは軍隊のようにリフレインの前に並んでいた。

そこでヨイリーがリフレインに声をかける。

「リフちゃん。スバルちゃん達を連れてきたわよ」

モノクルの男性は髭を撫でながら不敵に笑って見せる。

「待っていましたよ、ヨイリー博士。あのロックマンが仲間になってくれるとは百人力ですな。強い電波人間は多いに越した事はないでからね」

リフレインはクックと笑う。ヨイリーは先程から気になっていた謎の部隊に目をやる。

「ねえ、リフちゃん。この大勢並んでいる子たちは誰かしら。前に編成したチームには、こんなに人数いなかったわよね？」

ヨイリーは後ろの方を見やる。リフレインはまたも不敵な笑みを浮かべた。

「ええ。喜んで下さいヨイリー博士。
彼らは世界中から集められた軍人たちです。電波体との戦闘以外ならサテラポリス以上の戦闘のエキスパートですよ」
「軍人がたくさんいてもねえ……。今回の敵はあくまでも電波人間でしょ？」

リフレインは机のボタンの一つを押した。するとエアディスプレイが表示される。そこにはある三体のウィザードが表示されていた。型の古い順から、レイダーとアシッドとトラッシュだ。

「そうです。電波人間相手には電波人間が相手をしないと話にもならない。そこでプロジェクトＴＣの理論が挙がってきます……」

ヨイリーはハッと息をのんだ。リフレインは続ける。

「まさか、リフちゃん……」
「そうです、博士の考えている通りですよ。――プロジェクトＴＣ

は完成しました。
その答えである、究極のウィザードを開発しました。戦闘用人工電波変換ウィザードのプロトタイプである、『レイダー』『アシッド』『トラッシュ』の機体を参考にしてやっと開発に成功したのです」

リフレインの後ろのモニターに一体のウィザードが表示された。
漆黒の人工ウィザードだ。

「これが、プロジェクトＴＣの究極の答え――汎用人工電波変換ウィザード『アストラル』」

「私の理論は正しかったのです。これで、地球は戦える星となったのです」

リフレインは電波人間の量産を成功させた。アストラルを用いる事によって、特別に選ばれた人間でなくとも電波変換が可能となる。平均戦闘周波数は二〇万メガヘルツ。

それは地球の戦力がＦＭ星の軍事力と遜色ないものへと底上げされた事を意味していた。

ヨイリーに究極の研究成果を見せつけ、リフレインは満足した様子であった。

そしてすぐにリフレインは席を立ちスバル達の元へ歩を進める。地球の命運を任された身として、彼はその子供達に期待していたのだ。

まずは挨拶からだ。

「やあ、勇敢な少年たち。私の名前はトニック・Ｗ・リフレイン。君たちをここへ招き入れた者だ」

笑顔を作ってみせ、リフレインは軽く頭を下げる。それに対しすぐにシドウがスバル達を紹介する。流石のシドウもうまい棒をしまい、少し緊張した様子だった。

「リフレイン博士、この子たちが新しくサテラポリスに入った電波人間です。それぞれオックス・ファイアとハープ・ノート、それとロックマンです」

スバル達は頭を下げた。リフレインは常に毅然とした態度をとってシドウに接する。

「ふむ、よく連れてきてくれた。
――ところでシドウ君、この子たちに任務の詳しい内容を既に話しているのかな？」

「いえ」

「よろしい。ではすぐにでも部隊全員に任務の内容を説明しよう。FM星との関係上非常に重要な任務を」

リフレインはどんどんと話を進めていく。それであかねは、とうとういてもたってもいられなくなって動いた。リフレインに詰め寄る。

「あの、スミマセンがリフレイン博士。重要な任務がおありのようですが、その前に少しよろしいでしょうか？」

「アナタは？　はて、どこかでお会いしましたかな」

リフレインはそう言いつつ、いぶかしげにシドウに目をやる。説明を要求していた。

「星河スバルの母親です。あの星河大吾の妻の……」

リフレインは思い出した様子で胸に手を当て、あかねに礼をした。

「これはこれは、大吾君の奥様でしたか。あの時以来ですな……」

リフレインの瞳に影が覗く。

「実に惜しい人材を我々は失った……。彼は素晴らしかった、胸が痛みます」
「あれは不幸な事故だったんです。その事はもういいです」
「そうですか……。では、私に何が用なんですかな？」
「その事は確かにもういいです。終わった事に何を言っても仕方がありません。大吾さんが帰ってくる訳じゃありません。でも――」
あかねは自分の後ろにいる子供達に手をやって示した。スバルにゴン太、ミソラ、ツカサ、ジャック、それにミライも含まれていた。
「なぜ、この子たちなんですか？　なぜ子供達が戦わなければいけないのですか？」
あかねは必死になってリフレインに訴えかける。この人間の一存で、スバルは戦わなくても済むかもしれない。小さな子供達に命をかけさせなくても済むかもしれない。
そんなあかねの気持ちを察した様子でリフレインは少し言葉を選ぶ。しかし決意は揺るがない。地球の命運を任された責任が彼にはある。母の子を守らなければならない責任よりもはるかに重大だ、とリフレイン自身が強く自覚していた。
「正直に話しましょう。電波人間は貴重な戦力です。そこに大人も子供もありません。その力を使わなければいけない時が来てしまった……。それだけのことです」
「それだけのことって……。スバルはそれだけのことで命をかけなければならないのですか！？」
あかねの目にはもう溢れんばかりのものが溜まっていた。スバルはうつむいた。そして言葉を絞り出す。

「やめなよ、母さん。おねがいだからやめてくれよ……」

仕方がなくなってリフレインはあかねの肩に手を置く。諭すように言ってやるのだった。

「言い方が悪かったですね。スミマセン、ニホン人のようにオブラートに包むのが苦手でして……。

しかし、スバル君達には戦ってもらわなければなりません。実を言えば、我々のプロジェクトＴＣは完成したと言っても、その個々の電波人間達はまだまだ強くはありません。

だから戦力は集められるだけ集めておきたいのです。とくにロックマンのような人材は是が非でも我々に必要なのです。分かってください」

「そんな……。あんまりです。私の息子なんです」

リフレインはこれは困ったとあかねの耳元で本音を囁く。リフレインとて非情ではない、あかねの立場に立ってものを考えられる。

「大きな声で言えませんが、私にも息子がいましてね。後ろを見てください……。分かりますか？

黒髪の男の子です。名前はセツナ。スバル君と年は変わりませんが、地球の為に戦ってくれています。だからアナタの気持ちは分かっているつもりです。

ただアナタとちがって息子は私の事を父親だとは思っていないのですけどね……」

リフレインは苦笑した。そして最後に言うのだった。

「確かに、アナタの言う通りですよ。子供にはすくすくと育ってほしい。

ですが、今は地球が危ぶまれる時なのです。ただこれだけは誤解しないでいただきたい。

全世界の人達を守るために、私たちの子供が犠牲になるのではない。全ての人達が笑顔で生きていける世界を作るために希望をつないでいくのだ。

その子供達に希望を託してみるのです。スバル君達は、生きる為に戦うのです。当然、私たちも私たちなりのやり方で一緒に戦います。

あかねさんもスバル君達と一緒に、気持ちだけでも一緒になって戦っていただきたい。アナタが悲しんでいては、スバル君が戦えないのです」

リフレインはそうとだけ告げると研究室に集まっている全員を招集し始める。スバル達も当然その中に含まれていた。

「部隊全員に告ぐ。これから、最重要任務の説明を行う！　皆の者は軍事演習室に集まれ」

その言葉に従うようにして研究室にいた全員はその場を後にした。しかしスバルはとうとう最後までその場に残っていた。ただ広い空間にあかねとスバルだけがいる。背中を向けているあかねにスバルは言う。

「僕、行くよ。あの……母さんありがとう」

「……」

「ありがとう……心配してくれて。嬉しかった」

「……行きなさい」

「え？」

「もう、アナタを止めないわ。……でも、ちょっと待って。渡さないといけないものがあるの」

あかねは一通り涙を堪えるとスバルの方へ振り返った。あかねは何とか笑顔だ。

そしてスバルにあるカセットテープを渡す。

「これは大吾さんの残したメッセージよ。メテオGの事件の時に宇宙空間に漂っていたらしいわ。

本当はまだ渡すつもりはなかったんだけど……、こんな状況になったらね」

あかねは笑顔を絶やさない。しかしほとんど泣き顔にしかスバルは見えていなかった。でも、スバルはそれを笑顔と思うことにした。

「ありがとう」

「アナタを応援するメッセージが入っていたわ……。挫けそうになったら聴いてみなさい」

「父さんのメッセージ……。うん、わかった、挫けそうになったら聴いてみるよ。じゃ、いってきます」

「いってらっしゃい」

スバルは精鋭部隊の集まるその場所へ駆けていった。スバルは一度も振り返らなかった。

「大吾さん。あの子を守ってやって……」

ｗｗｒ―２１：閉じゆく世界、エースの帰還

スバルはずらりと席が並んだ部屋に入る。だだっ広い空間には、それと大型モニターがあるのみだ。

そうしてスバルは軍事演習室に入ると開口一番謝る。急いで入ってきたので息も切れ切れだった。

スバルとしては他人に迷惑をかける事が耐えがたく苦痛なのだ。それほどに気真面目である。

「あの、遅れてすみません！」

「やーい、スバル！　俺に遅刻すんなってもう言えねえな！！」

「やめてよ、ゴン太」

リフレインは二人のやり取りに割り入って、スバルに着席を促す。そのリフレインは大型モニターの前に立って、皆の指揮をとっていた。

「さあ、席に着きたまえ。だが、しかし良い顔になったなスバル君。お母様と決着がついたようでなによりだ」

スバルは少し照れ臭そうにして、一番後ろの空いていた席に着いた。隣は女子高校生と思しき女性だ。早速なれなれしくスバルに話しかけてくる。

当然スバルはこの女性とは初対面。その女性は緊張した空気を気にせずにただただ傍若無人だった。おっとりとした箱入り娘のような風貌とのギャップには凄まじいものがある。

「あっ！　星河スバル君だー！」
「はい？　あのうるさいですよ……？　皆さん真面目な感じですから空気を読んだ方が……」
「いいじゃん！　それにしてもこんな有名人にこんな所で会えるなんて、ラッキー！　私は六角キミドリっての。ヨロシクねっスバルン！」
「はあ、よろしくお願いします（声が大きいよ……。しかもスバルンって……）」

スバルはペコリとした。そこにはがっくりとうなだれたいという意味合いもある。

「にしても、スクープの匂いがしまくるわね！　とりあえずスバルン笑ってー！　スーパーヒーローに特別インタビュぅー！」

キミドリは自慢の一眼レフを取り出し笑顔を要求しだした。スバルは周りの刺すような視線に気が付いてしまっている。主に軍人の方々が鋭い眼光を光らせている。
スバルとしては厳しすぎる状況だ。穴があったら入りたい。小声でキミドリに取り計らう。

「ちょっと、みんな見てますって」
「いいじゃん！　見せつけてやろうぜー？」
「うわぁ……」
『このタイプの人間は初めてです。記憶メモリに保存しておきましょう』
「やめなよ、トラッシュ。無駄な事にメモリを使わないでいいよ」
「あっ、ヒドイ！」

しかし当然ながら、リフレインが黙ってはいなかった。その威厳を見せつけてくれる。奇しくもキミドリとスバルは見せつけられてしまう。

スバル達は事の重大さをまだ理解していない。それを微笑ましいと思えるほどリフレインにも余裕がない。

「もう、いいかね。話を始めても？　私だってあまり怒りたくはないんだ。君たちだって嫌だろう？　お互い有意義に時間を使おうか」

「ス、スミマセン……（なんで、僕まで……）」

「ゴメンチョ」

こうして軍事会議が始まった。参加しているのは主にサテラポリスや軍人だったが、少数の子供たちの姿も確認できる。皮肉な事に純粋な戦闘力でいえばその子供達が圧倒的なのが悲しい限りであった。電波人間としての実情がそうなのである。

リフレインが示すモニターにはＦＭ星が映っていた。地球とＦＭ星との交流は主にノイズウェーブを介し行われる。普通のウェーブロードだと距離が離れすぎているので都合が悪いのだ。その点ノイズウェーブだと危険があるものの、膨大な距離を短縮して交信できたのであった。ノイズウェーブは宇宙に出来たワームホールのようなものなのだ。

それを先程からリフレインがその要点を押さえつつ、今回の任務について話す。

「我々はＦＭ星との交流をとっているのは知っているだろう。だが、最近になってノイズウェーブがある組織に占拠されてしまったため

にＦＭ星との交流が取れなくなってしまった。
　この事態はＷＡＸＡとしては重く受け止めている。ＦＭ星の技術がなければ空間湾曲装置『フレンド』が完成しないのであるからな」
「フレンドって何だ？」
　ゴン太がリフレインに疑問を投げかける。その態度は科学の権威に対するものとは思えない。
「おいゴン太、口に注意しろ」
　シドウが苦言を呈するが、リフレインは「構わない」と言って続けた。
「良い質問だ。フレンドとは、ＦＭ星と地球をつなぐ架け橋のようなものだ。
　あれが完成するとＦＭ星との時間距離は一瞬のものとなるまでに縮まるのだよ。
　もはや、危険なノイズウェーブに頼る必要もなくなるわけだ。何より、ノイズウェーブを出入りできる電波人間が限られている上に一度に交信できる情報も人員も少なすぎる。それを踏まえると、なおさらフレンドの開発を急がないといけないんだ。
　どうだ分かったかな、牛島ゴン太君？」
「なんだかよく分からないけど、それがないと困るんだな」
　ゴン太はない知恵を絞って必死に理解しようとしているようだ。だが理解はできていないだろう。
「しかし、さっきも言った通り。ノイズウェーブがある組織に占拠されてしまった。このままじゃＦＭ星と連絡も取れない。それが我々に突きつけられた重大な問題のその一つだ。

これの対策に、複数の小隊を組んでその敵組織をせん滅したいと思う」

リフレインはそう言ってさらに続ける。すると、このタイミングでリフレインの強面の顔がさらに険しいものとなる。

ここから先に話す事の事態は深刻なのだろうとうかがえる。彼の顔に深く刻まれたしわがそう物語っていた。

「そして、一番で重大な問題なのが、『レギオン』の存在だ……。最初に得たＦＭ星人の情報によれば、彼らはただの伝承上の存在にすぎないらしい。

恥ずかしい事に事実、私を含めＷＡＸＡとしても事態を重く受け入れてなかった。

しかしだ。みんなも知っているようにヘラ・ローズガーデンが地球にやってきていたんだ」

ゴン太とミソラは表情をこわばらせた。二人はヘラ・ローズガーデンに精神的にも肉体的にも追い詰められた過去があったからだ。シドウがそれを察したようで二人を気遣う。

「大丈夫か」

「おうよ」

ミソラも頷いた。そしてリフレインがいよいよ根幹となる部分を話す。

「その時われわれも驚いたよ。その光景を疑いさえもした。もちろんその敵の圧倒的な周波数もそうだが、もっとも恐れるべきは宇宙にある決定的な異変が起きた事なんだ。

確かに以前から微弱な異変は察知していた。その為に対策本部設

置国を決めようと会議を開いたりもした。だが、まさかここまでの事態になるとは思わなかった……。

あらかじめ言っておく。この異変は地球の命運がかかっていると言ってもいい事態だ。いや、宇宙の命運がかかっているとさえも言える」

そしてあらゆる無念を一緒くたにしたように、リフレインが大きく首を横に振った。その表情はやりきれないものだった。地球で最も博識な人物をもってしても解き得ない難問が突きつけられていたのだ。

リフレインが畏怖の念を込め言った。落胆した心情からか、その歯切れは悪い。

「宇宙が急速に縮み始めていた」

「えっ？」

スバルは耳を疑った。なまじ宇宙に詳しいとそれが何を意味しているのか予想できてしまう。

キミドリは茶化そうとしたが、スバルの手が震えているのが分かった。キミドリも深刻なものを感じ取ってしまったようだった。

そして恐る恐るスバルはリフレインに聞くのだった。聞かなければ良かったと思う事を聞いてしまうのだった。

「は、博士。その縮む速度は……？」

「信じられないだろうが。光の速度など優に超えている。我々人類に残された時間はあまり多くはないかもしれない……」

「そ、そんな……嘘だ……」

「嘘じゃない……。嘘じゃないんだ。私も嘘であればどれだけ良か

ったと思ったか」

『ポロロン、伝承どおりになってきたわね……。「宇宙の終わりに、神の使いであるレギオン達が星の民を選別する……」何となくだけど筋書き通りって感じ……』

その場にいた全員は戦慄していた。ゴン太でさえ事の重大さだけは何とか理解している程である。しかし以前からその事態を知っていたサテラポリスや軍人は恐怖を感じながらも、冷静だった。いや、絶望に慣れてしまっただけだろう。それは決して喜ばしいことではない。

そのせいか主に子供達が酷く絶望しているのであった。無理もない、いくら力が強くてもまだ子供なのだから。

そんな沈痛な空気の中でリフレインはまだ続ける。追い打ちと何ら変わりはない。

「そしてその時だろうか。宇宙の中心からとてつもない強力な電磁波が検知された。その電磁波の波長はレギオンと非常に似通っていた。

流石にＷＡＸＡも何か関連性があるとみて調査してはみたものの……。分かったのは、レギオンの散布する超荷電粒子である『ワイル粒子』と呼ばれていた物が宇宙空間のほぼ全域で確認されたことぐらいだ。

現時点で分かっているのは、宇宙中心から発せられる電磁波とレギオンの出す『ワイル粒子』が宇宙収束の原因だろうと言うことぐらいだ。情けない話、それ以外は何も分かっていない。

今はどうにかして情報が欲しい。ノイズウェーブが占拠されて、手をこまねいている場合ではないのだ」

リフレインの言葉を聞いて希望を抱く事は困難だ。それは大人と

て例外ではない。そんな軍人の一人が必死に冷静を装いリフレインに確認をとる。

「じゃあ、我々はどうしたら……」

「我々とて、このまま終わるわけにはいかない。まずはＦＭ星との連絡路を確保する。伝承とはいえ、あらかじめその存在を知っていた彼らならレギオンについて何か知っているはずだ……。ＦＭ王室へ早急に連絡を取らないといけない」

その話を聞くと、シドウはにっと笑ってみせた。光明を見出したのだ。彼なりの希望を見出したというわけだ。

「そうと決まれば、やる事は一つですね！　ノイズウェーブを占拠した敵組織を討伐してノイズウェーブの解放。そしてフレンドを使いＦＭ星人と強力して、情報を集める。そしてどうにかして宇宙を救う！　こんな感じでしょうか、博士？」

リフレインもシドウに勇気付けられたようだ。自分のふがいなさを恥じるようにして笑っていた。

「フフ、シドウ君に元気付けられたよ。私がしっかりとしないといけないのにな。さすがは電波人間のエースと言われただけはある」

「それじゃ、任務について我々に支持をください」

シドウは立ち上がった。皆も一体となって立ち上がる。地球の危機に立ち向かおうとその心が一体となっていた。その心が死なない限り、彼らは戦っていくことが出来るだろう。

リフレインも気の入った声でこれからの任務を命令する。

「まずは、ノイズウェーブの解放だ！　それぞれ私が考えた小隊で

チームを組んでもらう！
　その小隊にはそれぞれ地域別に、ニホン、アメロッパ、ヨロシッカ、チョイナ、オスアニキ、アッフリク、シャーロを担当してもらう」

　リフレインにある一人の軍人が不満を漏らす。担当地域に不満があるようだ。

「博士！　なぜ小国のニホンが含まれているのですか？　人員も多くはありません。これは無駄かと」
「いや、ニホンは重要な拠点だ。三月に開いた会議でニホンが対策本部設置国に決まった」
「なぜです？　ここはアメロッパが中心となってやるべきでは！？」

　アメロッパの軍人はなかなかにしぶとい。アメロッパ人としてのメンツも大いにあるのだろう。地球はおろか宇宙の命運をニホンに任せられないと言うのだ。

「いや、ニホンじゃないとダメなんだ。地球の英雄ロックマンの祖国と言えばそれもそうだが、何よりニホンにはノイズウェーブの出入り口が多い。
　そこを拠点にする方が都合が良いのだ。それに何といっても強い電波人間の人数はニホンがダントツで多い。優秀な人材をホームグラウンドで活躍させるのに何が不満かね？」
「ぐっ……分かりました」
「よろしい。では、チームを振り分ける！」

　リフレインはモニターにチームの割り当てを表示していく。画面から分かるのは一つのチームで十人前後という事だった。

「では、まず。比較的ノイズウェーブの占拠率が低いチョイナとオスアニキからだ。そこにはアストラルの電波人間部隊にチーム『アルファ』、『ベータ』を任せる」

屈強な軍人たちが首尾一貫とした隊列を組んで返事を返した。男達の気合には流石の迫力がある。

「イエッサー！」

「次にシャーロだ！　チーム『ガンマ』はリーダーを尾上十郎君に任せ、アストラル電波人間部隊を率いてくれ」

尾上十郎は顔に一文字の大きな傷を負った野性味あふれる男だ。ちなみに植木職人でもあり、刃物を使わせたら芸術性でも戦闘力でも並のものではない。

尾上は鋭い犬歯を見せながら豪快に笑う。

「ハッハ！　俺に任せな！　おい、軍人ども！　気合いれていくぜ！！」

「尾上さん、久しぶりです！」

「おう、スバルか！　俺達で頑張って地球を守ろうな！！」

「ハイ！」

次に大型モニターはアッフリクの地域を差した。

「次はアッフリクだ！　チーム『デルタ』のリーダーを双葉ツカサ君に任せ、アストラル電波人間部隊を率いて任務を全うしてくれ！」

「分かりました。皆さんよろしくお願いしますね」

ツカサは軍人たちに行儀よくお辞儀をした。ツカサは女の子のような顔つきなので、それはそれは舐められる。

「なんでガキがリーダーなんだよ」
「いやいや、何でもＦＭ星人と電波変換が出来るらしいぜ？」
「はっ、この男女が？」

言いたい放題言われるのでツカサの中のもう一人の人格が姿を現した。ヒカルだ。
ヒカルは目付きが悪く、睨んだかと思うといきなり軍人の胸倉につかみかかる。軍人は筋骨隆々で体重は一〇〇キロは越そうかという者ばかり。それを軽々と片手でぶら下げる。ヒカルは相変わらず無茶苦茶だ。

「俺様がリーダーだ！　嫌ならこのまま地球最後の日を待たずに一生の眠りに着く事になるぜ？」
「ひっ……！！」

これで、どうやらチームデルタはまとまったようだ。

「よし、次はヨロシッカだ。チーム『イプシロン』のリーダーはジャック君に努めてもらう。アストラル電波人間部隊をうまく使って任務にあたってくれ」
「了解！！」
『クケっ！　面白くなってきたぜ』

次は重要なポイントであるアメロッパだ。

「次はアメロッパだ。アメロッパはかなり重要な拠点になるだろう。強力な電波人間にここを担当してもらう。
チーム『ゼータ』のリーダーは南国ケン君に任せる。サブリーダーはクインティア君だ。戦闘員はアストラル電波人間部隊だ。それ

にアストラルを使ってシドウ君にも戦ってもらう……」

リフレインの言葉にクインティアが目を見開いた。驚きと、病人への配慮のなさに普段細い目が皿のように丸くなる。

「なぜですか、博士？　シドウはもう電波変換できる体じゃ……。シドウは指揮系統に回すべきです」

「良いんだ、ティア……。これは俺が博士に頼み込んだことだ」

「なんで？　アナタはもう、無茶をしちゃダメでしょ？」

シドウは包帯だらけの自分の体をみながら言う。この体で戦うと言うのだ。

シドウはヘラ・ローズガーデンと戦った時に自分の無力さを痛感したのだ。ただただ悔しかった。

「もともとプロジェクトＴＣは非現実的な計画だったんだ。俺のようなサンプルがなかったら今こうやってプロジェクトＴＣは完成していなかっただろう……」

「シドウ……どういう」

「何も不思議な事じゃない。昔、俺はサテラポリスとＷＡＸＡに自首した時に自分の体を好きに実験に使ってもいいって約束してたんだ。

それがもとディーラーの犯罪者がこうやってサテラポリスのエースを張ってる理由であり、これからも戦う理由だ。

なに大丈夫さ、アストラルはアシッドやトラッシュ以上に電波変換の負担が少ない、きっと平気さ」

シドウはニッコリと笑い、クインティアを安心させる。シドウは電波人間としてついに帰ってきた。サテラポリスのエース復活の瞬間である。

「ハハ、ヒーローは遅れて登場するってね！　アストラル・エースの誕生だ！」

そしていよいよだ。次はニホンから任務を実行するチームを決める番であった。ニホンはどこよりもノイズウェーブの出入り口が多く、どこよりもノイズウェーブが占拠されてしまっていた。ここを取り返さないと、始まらないのである。

リフレインがそんな重要な場所を担当するメンバーを指名する。その中に当然スバルは含まれていた。その理由付けのようにスバルへリフレインの信頼の眼差しが向けられていた。

「最後になったが、おそらく今回の任務で一番、重要となるニホンを拠点に動いてもらうチーム『オメガ』のメンバーを指名する。そのチームリーダーを……」

リフレインは少しためらう。何か後ろ髪を引かれるような面持ちだった。らしくなかった。

そして、すこし逡巡するとようやく口を開いた。

「……ミライに任せる」

ミライは返事を返さなかった。いつも通りレイダーはその様子を見ても何も言わないのであった。リフレインも気にしたが、続けるしかない。

「次に副リーダーをスバル君、戦闘員をミソラ君にゴン太君とキミ

ドリ君に任せる。このチームは現時点で考えられる最高の戦力を集結している。
少数精鋭で、この極秘任務にあたってくれ。
そして、このチームには特別にオペレーターも用意する。ハートレス君とオリヒメ博士だ」

リフレインがスバルと少し離れた所にいる女性二人を示した。
二人とも背が高い美人だった。黒髪で白衣の方がオリヒメで、薄いピンク色の髪でスーツの方がハートレスだ。

「彼女達には任務の時に君たちのオペレートをしてもらう。ニホンのノイズウェーブは特に状態が悪い。万全を期さなければならないからな。
それに子供ばかりのチームだ。二人とも、よろしく頼むよ。
以上でチームの編成は終わりだ」

リフレインは二人にそう言って、モニターの画面を消した。チームを決めて、この会議も終わりということなのだろう。

そこに紹介にあずかったオリヒメがスバルの元へ赴き、まずは挨拶とする。

「久しぶりね、スバル君」
「オリヒメさん。おはようございます」
「これもまた運命なのかしら……。不思議なものね。まさか、アナタと一緒に戦う日が来るなんて。ムーの力を使って世界を治めようとしていた時には考えられなかったわ。
でもこれが贖罪になるのなら喜んでアナタ達に協力するわね」

オリヒメは肌の白い手を差し出した。握手を求める。

「こちらこそ、よろしくお願いします」

二人はしっかりと握手を交わした。かつての敵であったオリヒメとスバルは仲間になったのだった。

そうしてまで守るべきものが彼らにはあるのだから。

そしてリフレインが最後に告げる。集まってくれた戦士達に激励するのだ。

「いいか、みんな。私たちにはまだ希望が残されている。その希望を君たちなら掴み取れると私は信じている。

しかしだ。刻一刻と今もこうして、宇宙は終焉を迎えようとしている。だが、そんな過酷な現実を世界中の人は知らない。きっとまた明日がやってくると信じているだろう。

だから日々の日常を過ごす中で、これは決して口外してはならない。私たちは何事もなかったかのように、地球を救わなければならない。世界中の人達が信じて疑わない未来を取り返すのだ。この極秘任務を全うしてくれ。

そして、その為には、まずはノイズウェーブの解放だ！　『電波人間傭兵組織　Ｗｒｏｎｇ　Ｗａｖｅ　Ｒｉｄｅｒｓ』に勝つんだ！！　相手は謎に包まれているが、君たちならきっとやってくれるだろう。

今、この時より『オペレーションアポカリプス』を開始する！　では、これからはチームリーダーに今後の行動を命令していく。各自、チーム一丸となって任務に取り組むように。

諸君らの健闘を祈る！」

リフレインが言い終えると、皆の士気は高まった。今回の敵はＷｒｏｎｇ　Ｗａｖｅ　Ｒｉｄｅｓである。スバル達に立ちふさがる

この敵に勝たなければ未来はない。必ず勝たなければならない。
戦士たちの血気盛んな沸き上がりの中、スバルは噛みしめるように呟く。流星のペンダントを握りしめて、まだ見ぬ敵に覚悟を決めるのであった。

「Ｗｒｏｎｇ　Ｗａｖｅ　Ｒｉｄｅｒｓ……」

ex：モウヒトツノミライ

コダマタウンのある一角。伊集院家が保有する広大な敷地。広さはコダマドーム七九五個分、要するにでかいのだ。でかすぎるのだ。しかしエリア・ポート・伊集院は金持ちだからそれでいい。

そんな所に建っているのは、Ｉ．Ｐ．Ｃグループが誇る巨大レジャー施設、伊集院アイランドなのだ。アイランドと銘打っているが、別に孤島でも何でもない。ただの遊び場だ。

二二ＸＸ年一月一日、火曜日。つまりは元旦。そんな日に、愉快で楽しい仲間たちが集まってきているのだ。

そこでアイランドの仲良し集まり広場と言う施設を見てみると、人という人が腐るほど湧きかえっているではないか。一種の蒸し風呂だ。

そんな中で、どこぞの誰かが、元旦を楽しく過ごそうと何かを提案してくれたと言うわけだ。

取り合えず施設内で、やたらめったら楽しそうにはしゃぎまわっている人間がいる。いや暴れまわっているのだ。とても自由だ。ゴン太だ。牛島さんの所のゴン太君だ。

「牛丼だ牛丼だ～！　俺様は牛丼だ！」

ゴン太は狂っていた。仲良し広場、流星の間の中で暴れまわっている。ふんどし姿が勇ましい。そこに集まっている数えるのも面倒な数の人間が呆れかえっている。故にゴン太。

ちなみにこの場所は、仲良し広場だ。だが、とても親しみやすい名前ではあるが、事実の所はとても高級な旅館なのである。食べ物の席に、箸がなんて当たり前で、金剛石、言うなればダイアの箸置きが存在を許されている。豪華絢爛、絢爛豪華。目の前の鯛のお刺身に、きれいなジョーカーさんと言う黒人も有頂天だ。

「ムッ……！　これは鯛のサシミと言うやつだな。ディーラーにいた頃は食った事もなかった。旨い旨すぎるぞ！　なあ、大吾さん？」

ごつい黒人は、隣のごつい大吾さんに酒をよそってやる。スバルはお礼を言った。

「あ、わざわざスミマセン。きれいなジョーカーさん」

「良いのだ。私は生まれ変わったのだから。きょうは無礼講と言う訳だ！　なあ大吾さん」

「あぁ、そうだとも！　今日は無事、二二ＸＸ年をのりきった日だからな」

大吾と呼ばれるごつい男性は快活にもきれいなジョーカーの肩に手を回す。きれいなジョーカーもまんざらではない様子。男の友情が芽生えていた。スバルが立ち入ってはいけないのだ。

「ちょっとちょっと、お二人とも勝手に盛り上がらないでください！」

ミソラがきれいなジョーカーと大吾を叱りつける。ちなみにミソラは可愛くきれいに美しく、アイドルの名に恥じない完ぺき装備で着物を着飾っていた。豪華だ。ちなみにエリアとルナだって負けていない。アイドルでも何でもなくても、張り合えるだけの素質はあると言う事だ。

そして大吾パパは言うのだ。

「おっと、悪いなミソラちゃん！　きれいなジョーカーさんと話し込み過ぎちまったな！」

「そうですよ！　それじゃ、始めますね？　やっぱりこういう集まりって最初が肝心じゃないですか？」

「だな」

大吾だ。

「うむ」

きれいなジョーカーさんだ。

しっとりとした口調ながらもミソラへの礼儀も忘れない。何という紳士なのだろうか。近年稀にみる快男子だ。とてもルナをバラバラ分解電波ティウンティウンした野郎には見えない。流石にきれいなジョーカーさんだと言わなければならないだろう。きれいだ。ジョーカーさんはきれいなのだ。きれいではないのに、グレイブメテオレーザーなど撃てようか、いいや撃てない。

「うん」

スバルも言った。主人公なのに台詞が少ない。このままでは危険だ。流星のジョーカーさんになってしまう。

するとミソラ達はみんなが座って居る席の上座に立ってみんなの注目を集める。ミソラとルナとエリアは端っこの方でシドウとおせち料理を食べているクインティアを呼びつける。

流星のヒロインである、クインティア先生がいないと始まらないのだ。

そして三人は、手招き全開フルスロットルだ。そんなことをされ

るのでクインティアは恥じらう。年頃のクインティア先生はスゴク恥じらいのある乙女なのだ。頬を染めるが、戦慄の乙女なのだ。きれいなジョーカーさんとは似ても似つかない。いや、似ては困るのだ。

「やだ……、私、恥ずかしいわ……。シドウ、ちょっと何とかしてよ」

クインティア先生の煮豆をはさみだした箸が止まらない。止まるところを知ってはくれない。

「良いじゃないか、ティア。そんな所でおせち料理突っついてても始まらないそ？」

クインティア先生の隣に座るシドウさん。そんなクールでうまい棒なシドウはそう言いながら、おせち料理の一万倍安い、うまい棒を食べだす。しかし一万倍うまいわけではないのだ。なのにうまい棒なのだ。

だからシドウは最強にうまい棒が好きなのだ。おせち料理、などよりよっぽど好きなのだ。しかし最低限の礼儀として、シドウは袴でビシッと決め込んでいる。

そんなうまい棒なイケメンのシドウに、クインティアは内心改めて見惚れている。シドウは是が非ともなるイケメンなのだ。ロイヤルフラッシュ王国の姫様を落とす威力だ。クインティアたじたじ。ちなみにうまい棒は、数の子味だ。抜かりなし。

「ああっ、シドウったら。またうまい棒を食べて……私の着物にカスでもかかったらどうするの？　でもこの煮豆おいしいわね……」

クインティアは着物を気にしつつ煮豆を食べる。食べる。食べま

くる。これはクインティアだ。クインティアだった人だ。

「ティア！　何をそんなに煮豆を食べるんだ？　のどを詰まらせるぞ！」

「良いの……！　私は煮豆になりたい……人前に出て何かやるくらいなら煮豆になるわ……」

クインティアは煮豆になった。先生でも何でもない、煮豆なのだ。ジャックが泣いた。

「姉ちゃんやめてくれよ！　煮豆になるなよ。だったら俺が、昆布巻きになるぜ！」

クインティアは聞き捨てならなかった。優しいお姉さんだ。やさしい煮豆女だ。

「ダメよ！　ジャック。……ふう、良いわ……！　ワタシ、ミソラちゃん達と頑張る！」

「頑張れティア！」

シドウが励ます。その時、口から飛んだカスがクインティアの着物にかかった。うまい棒的にはこれはないだろう。

クインティアは華麗に無視をした。そして戦慄の乙女は立ち上がる。しかし、しかしだった。

「良いわ、見てなさいシドウ……！　ワタシ頑張るからねっ。かっこはーと」

クインティアが緊張で壊れた。ぶっ壊れた。良心がデリート。ガラスのハートにストライクだった。これはいけない。シドウ的にこ

んなクインティアはまあ、ありと言えばありだったが、ジャック的にはないのだ。ちなみにきれいなジョーカーさん的にはありだった。大吾的にはノーコメントだ。

なので大吾はヒいた。あかねは笑った。クインティアが可愛らしい一面を見せたからだ。戦慄の乙女じゃなくなったからだ。大吾は戦慄したかった。

そんなこんなで流石にシドウがフォローする。これは仕方がない。戦慄の乙女であり続けなければいけないのだ。

「ティア！　かっこはーとは口で言っちゃダメなんだ！　口調のアレで、におわさないとだめだろう？　この天然さんめっ」

シドウは優しい。クインティアには、うまい棒の次くらいに優しいのだ

「テメェ！　姉ちゃんをおかしくしたな！　なんだよ、かっこはーとって、こんなの俺の知っている姉ちゃんジャねえ！」

「やめろジャック。お味噌汁を投げるんじゃない！　うまい棒がビシャビシャのグチャグチャになるだろう！　俺のうまい棒がうまい棒じゃなくなるだろう！」

シドウは優しい。いつもうまい棒の事を第一に考えている。考えているのだ。クインティア的にはそれは悲しい。

「ダメよ、ジャック！　食べ物を粗末にしたらきれいなジョーカーさんと、きれいなドクターキングが怒っちゃうわ！」

「きれいなドクターキングなんてどこにいるんだよ？」

ジャックは味噌汁を投げた。

液体が空中で、美しくエキゾチックな記号を作る。孤独の闇から

解放されたし少年の深層心理を再現している気がしてならない。それは味噌汁の芸術だ。アーティスティックで、今までの常識に味噌汁を投げかけることで、それをアンチテーゼとしているのだ。

なんとしかし、そこに、そこにあの人の声が聞こえてくるのだ。そう、きれいなドクターキングその人の声が。噂をすれば何とやら、だ。味噌汁を投げれば何とやら、だ。

ex：モウヒトツノミライ2

「ここにいるとも、ジャックや。私はここに居るとも」

何と、きれいなドクターキングは、仲良し広場と言う名の宴会の席に姿を現したではないか。さすがきれいなドクターキングだ。神出鬼没である。さすがきれいなドクターキングだ。味噌汁まみれである。

そして口髭に着いた味噌汁をなめるのである。何という紳士だろうか。この点ではきれいなドクターキングはきれいなジョーカーさんを上回っている。

「ふむ、この味……旨い！　旨すぎるぞ！」

「ビーストスイング！」

突然乱入してきたウォーロックがきれいなドクターキングに向かって熱々のおしぼりを投げつけた。これは彼の優しさだ。優しさのビーストスイングだ。半分は優しさでできているのだ。

かつておしぼりを投げる為にビーストスイングを使った野郎がどれだけいただろうか。そう、ウォーロックが初めてなのだ。空前絶後、まさに革命。

そんな優しさに溺れた狂戦士、ウォーロックは手をきれいにしないと食べものは食べてはいけないと知っている。そのように、いつも口を酸っぱくして言われていたのだ。あかねと大吾にいつも叱られていたのだ。だからきれいなドクターキングには優しくしてやれるのだ。

ウォーロックは家族と触れ合う事によって、優しさと友情を知ったのだった。きれいなドクターキングにもその優しさの絆をつなぎ止めたという訳だ。

そしてクサイ台詞を吐く。しかし、ウォーロックの口は臭くない。カン違いしてはいけない。

「それで手を拭きな。大吾の鉄拳で制裁が下るぜ？　あかねママンに口をきいてもらえなくなるぜ？　これは悲しいぜ？」

「ううむ、それは恐ろしいことだ。かたじけないなウォーロック……。いや、ウォーロックン」

きれいなドクターキングはウォーロックにお礼を言った。ちなみにきれいなドクターキング的にウォーロックはウォーロックンとなるらしい。実にどうでもいい。実に微笑ましい。友情が実った。

しかしだ。いよいよミソラ達が痺れを切らしたのだ。少しばかりは、きれいなドクターキングの出現に驚いたが、それ以上にクインティアがこちらに来ないことがどうしようもなかったのだ。四人そろってこそ、クワドラプルヒロインシステムが作動するのだ。

「クインティア先生！　そんな味噌汁まみれのきれいなドクターキングなんてほっといてこっちに来てください！」

確かに味噌汁まみれではきれいなドクターキングは、ただの汚いオッサンになってしまう。味噌汁まみれの汚いきれいなオッサン紳士になってしまう。クリムゾンドラゴンになれないキングなどただの味噌汁おやじ紳士だった。

「ゴメンナサイ……。つい味噌汁を不憫に思って」

あのスバルが反応した。このスバルが反応した。そう、自分の右腕が疼いて仕方がないのだ。あいつに突っ込めと轟き叫ぶのだ。スバルは最強の戦士だ。突っ込みにおけるプロフェッショナルなのだ。

故に星河スバル。故にシューティングスターロックマンさん。

「く、クインティア先……生。早く行ってください！　このままじゃいつまでたっても、あけおめことよろが言えません」

とにかくスバルはあけおめことよろが言いたかった。なぜなら、これはイニシエーションなのだから。

「そ、そうね……！　スバル君に余計な負担をかけてしまったようね。シドウの事をよろしく頼むわ！」

スバルの深刻な表情を察知したクインティアはすぐにミソラ達と合流する。宴会の席を駆け抜ける、そんな可憐なクインティアにきれいなハイドが見とれていた。

見とれていないと言えばうそになる。きれいなハイドでさえ魅了するクインティア先生は流石だった。

ちなみにハイドは端っこの席で、ムーの電波体たちと仲良く楽しくお食事をしている。とても幸せそうだ。これが彼の求めていた繋がりなのだろう。絆なのだろう。

「ンフフ……。お美しい。いやしかし、私には白金ルナと言うヒロインがいて……ううむ悩ましい。それにしても、何故私はここにいるのだろう。いいやこの脚本も悪くないな。ンフフ。にしても味噌汁がうまい」

邪なきれいなハイドはモードにハリセンで叩かれた。笑顔のモードが眩しい。

きれいになってもハイドはハイドだったようだ。彼の中のヒロインは白金ルナただ一人。伊達に何度もさらっていないという訳である。これは、愛なのではない、自分自身の脚本に対する愛なのだ。

故にハイド、Z国の最強紳士。紳士的な意味でいえば、綺麗なドクターキングときれいなハイドは被ってしまっている。神の悪戯だ。

そして皆の前に立つ、ミソラとルナとエリアとクインティアはマイクを持っている。クインティアは持たされていた。

儀式の始まりだ。お正月的なムードが高まってきた。スバル達は高揚したものを感じているのだ。表記の都合でややこしいが、二二XX年が終わり、二二XXが始まったのだった。曜日から推測してくださいとしか言えないのだ。

そしてミソラがアイドルとしての本領を発揮する。アイドルにとって、大勢の人間の前で事物をするなど簡単楽勝だ。その中でもミソラは特に最強最愛だ。しかしロイヤルフラッシュ王国の姫であるクインティアにはこれが楽ではない。生徒会長ルナにとってもこれは楽ではある。I．P．C社長令嬢であるエリアにもこれは至極簡単である。

クインティア先生は、ダメダメだ。しかし勝手に始まるものは始まる。ソプラノトーンが流星の間を割る。

「皆さま！　お集まりいただきありがとーございます！　ではでは、新年明けましておめでとうございますっ！

司会担当、歌って踊れて戦えて、笑顔も可愛いみんなの世界的国民的地域的、美少女スーパーアイドル響ミソラでーす！」

キャピキャピなミソラだ。流石に慣れている。深々とお辞儀を繰り出し、元気いっぱい愛敬満載。

当然そんな天使の歌姫に、皆様があけおめことよろを返す。そして、不覚にも、きれいなハイドはミソラにも見惚れてしまっていた。つくづくな野郎である。きれいなハイドは紳士としてのベクトルがきれいなドクターキングとは違うのだ。イケメン担当紳士がきれいなドクターキングだとしたら、若い女の子担当紳士がきれいなハイ

ドなのだ。
　ミソラにとりあえずルナも続く。
「な、な、な、なーんと、今日は、沢山の人に集まってもらいました！　それでは私達が皆さんを紹介させていただきます！
　同じく司会担当、歌って踊れないけど笑顔は可愛い過ぎ！　しかもツンデレ装備の最強生徒会長委員長っ、ロックマン様の追っかけ美少女、白金ルナでした！　ワー、パチパチパチ！」

　ルナが元気よく手を鳴らす。きれいなジョーカーさんを筆頭にして皆が続く。皆さまの乗りが大変よろしい。きれいなジョーカーさんをはじめ、穏やかで優しい上に楽しい雰囲気が会場を席巻しまくっているのだ。

「では、チームごとに紹介していきましょう！　おっと、ちなみにチームって言うのはこちらが勝手に決めたチームですのであしからず！　では、とても豪華な賞品をかけて争え野郎ども！
　文句があるなら私が叩き潰して差し上げるけど？　上に同じく司会担当！　金は正義で絶対だ！　超絶スーパープリティガールっ、銀河的セレブリティセレブ！　エリア・ポート・伊集院よ！」

　卵の殻をかぶったような白髪メッシュプラス黒髪の、自称美少女、自他ともに認める美少女のエリア・ポート・伊集院は言った。彼女は暴君、生まれながらの暴君だ。女の子なのに暴君だ。

「はい、続いてクインティア先生！　この流れに乗ってよ！」

　エリアがサッサと喋れと促すのだ。ターゲットはもちろん、皆の前で、小さく丸まって、縮こまって、恥ずかしがって、ガクブルガクブルしている超絶な緊張しいだった事が判明しているクインティ

ア先生その人だ。
そんな事を気にすることもないエリアは最強お嬢様。尊敬する人は伊集院炎山ただ一人。そう言う訳で、最強プリティゴージャスガールなのだ。
クインティア先生が酷く重厚にも感じているだろう、冷や汗でグトグトになったマイクに唇を添える。潤い百パーセントの淡いピンクが実らせる、マイクとの邂逅。要するに、使い方がおかしいのだ。
だが突っ込んではいけないことにしておく。マイクはうまい棒ではないのだ。
辱めのクインティア先生は開口一番、緊張突破となるのだろうか。スバルはなぜだか、初めてのお使いを見ている気分になった。多分、時期のせいだろう。

「え、えっと。そ、その、あけましておめでとうございます……。キャッ、恥ずかしい、もうお家に帰って一人でババ抜きでもしたい気分だわ。
い、以上、同じく司会担当。亡国の悲劇のダークヒロイン、クインティアでした……」

辺りがどんよりとした。無理もない、馬鹿騒ぎしていた自分たちが恥ずかしくなってしまったからだ。『クインティア先生、可哀そう』そんな空気が辺りに根付く。それを払拭せんとエリアが打開するために開口する。従えるは少しの強がりとお嬢様の気丈さ。

「ま、まあいいわ！？　じゃあ、まずはチーム流れ星から！　ジャジャーン！」

エリアはジャジャーンと言ったが、誰も返事を返してくれない。沈黙は大嫌いなので、エリアブチ切れ。

「ちょっとノリが悪いすぎだっての！　ちょっと、そこの黒でかジョーカーっ、私に続きなさい！　じゃあ、まずはチーム『ＦＭ星団ズ』から！　ジャジャーン！」

ここはきれいなジョーカーの腕の見せ所。ノイズまみれの世界で孤高の狼を貫いたきれいなジョーカーさんに果たしてジャジャーンと言えるだけの気力があるのだろうか。

「ジャジャーン！　ドンドン！パフパフ！」

やってしまった。きれいなジョーカーさんはやってしまわれた。流石のスバルもヒいた。スバル的にはこんなジョーカーを見たくはなかった。

彼にはいつまでも、委員長を木っ端みじんにした最悪最強の極悪非道ウィザードでいてほしかった。スバルの中でジョーカーは死んだ。いるのはきれいなジョーカーさんだ。もちろんヨイリー博士にダンディズムとユーモアセンスとリズミカルポエムをインストールされているという完璧ぶりだ。きれいなジョーカーさんは完璧なのだ。

「よろしい！　良くやった！　きれいなジョーカー。では気を取り直して、チームＦＭ星団ズリーダーを務めるのは……」

エリアは咳払い。

「ご存じあの人！
アナタは何物！？　何処からやってきてどこへ行く！　お前の青いアーマーは強さの証！　何座か分からないＦＭ星の最強の誇り高き侵略部隊隊長！　ＦＭ星人ウォーロック！」

最強で最高にこぎみの良い、耳触りと人聞きの悪さで、ウォーロックは一気に一揆だ。さすが侵略隊長、馬鹿にも出来ない。

「って、オイオイ！　勝手にリーダーにするんじゃねえよ！　そして俺はＡＭ星人だっつの！」

「ハイハイ分かった分かった。黙れ青イヌ！　ではでは、そのほかのメンバー紹介！　いっちゃうよー！」

ウォーロックでは歯が立たない。立派な牙も飾りの様子。

「副リーダーは、そうあの人！
黄色い姿にＦＭ星のマダムもメロメロ！　その二つのお面はどっちが本物！？　ＦＭ星の長極悪参謀、雷神のジェミニ（非道）！」

「おう、小娘！　俺は極悪でも（非道）でもねえ！　ちょっとＡＭ星を滅ぼしただけだ！」

ちょっとで惑星は滅ばない。ジェミニに構うと負けなのでエリアは続ける。

「男ばかりではやる気がでないっ！
そんなチームの紅一点！　ポロロンとはこれいかに！？　アンタの体は生物として終わってる！　青い板でも可憐な美女戦士！　そう言い張るポロロンのハープ！」

「ポロロン。あたしの口癖なのよ。ほっといてくれる！？」

席で煮豆をつっついていたハープもたまらず反抗。隣のオヒュカス姉さんがやさしく宥める。そんなオヒュカス姉さんは、今はモードの良き姉気分だ。

まあしかし、しかしながら、そんなことはエリアに関係ない。

「変わった口癖ですこと!?　手術して治してください」

完治優先。ハープのプライドはここになし。

「では、次のメンバー。ただのチーム員その1はアンタだ！
アンタは赤いものに興奮するけど、牛は赤を判別できません！
あんたは何座のＦＭ星人なんだ!?　自称牡牛座の長馬鹿テンポラリ、牛丼のオックス！」
「異議なし！　俺は牛丼座だ！　ブロロロ。だから牛丼よこせ！」

ゴン太と一緒になって牛丼を食い荒らしていたオックスは異議なしと言った。だから馬鹿なのだ。しかしＦＭ星の特攻隊長でもある彼は油断ならない。

「だからあんたは馬鹿なのよ！　まあいいわ！　じゃ、ＦＭ星団ズのメンバー紹介おしまいね！　その他大勢は紹介するの面倒だから以下略でよろしくっ」

その他大勢がブチ切れた。
オヒュカスさんとキグナスさんと、その他大勢の中のその他大勢が切れたという事だ。
その中でもケフェウスの怒りは群を抜いて怒り心頭なのだ。アンドロメダのカギをちらつかせるのだ。こいつは子供でわがままな、どうしようもない幼き王様。

「余は？　ねえ、余は!?　余はその他大勢なの!?」
「あ……っ、悪い悪い。えっと名前、なにかな？　ボク？」

エリアはお嬢様だ。優しいお嬢様だ。ケフェウスなど眼中にない。

「ばっ、馬鹿にするなよ。余はＦＭ星の王様だーっ！　これでも喰らえ！」

「あっ、コラ！　ケフェウス、勝手に席をたったらダメだろ！？」

ケフェウスはウォーロックのひざ元から飛び出し、エリアに殴りかかる。しかしそこは幼き王様。そんな短いリーチじゃエリアに届かない。頭を押さえつけられて可愛くポカポカとその二つの拳が空を切る。

「アッハハハ！　無様ね！　ＦＭ王様！　アナタじゃ私に届かないのよ！　このチビ助！」

「チビって言ったな……！　余は怒ったぞ！　アンドロ――」

ＦＭ王様が、アンドロメダのカギを天に掲げる。これは危険だ。かんしゃくで地球を壊されたら、堪ったものではない。堪ったものではないのだ。

「ビーストスイング！」

その時、ウォーロックが卓膳の熱々のおしぼりを投げた。そして、熱々のおしぼりが見事アンドロメダのカギにクリーンヒット。幼き王は熱さにたまりかねアンドロメダのカギを足元の味噌汁の中に落した。　ただのカギに見えるアレだが精密機械なのでアンドロメダのカギは壊れたのであった。おしぼりが地球を救った。

しかし、かつておしぼりで地球を救った野郎がいただろうか、いいやいない。まさに空前絶後。

「あぁっ、アンドロメダのカギが！」

「ダメじゃないかケフェウス。アレぐらいの事でアンドロメダを呼んだら！」

悲しく味噌汁を眺めるケフェウスに、ウォーロックが優しく怒りをぶちまける。ついでに味噌汁がぶちまけられた。ケフェウスがビビる。だから、可愛くエリアの後ろに隠れてしまわれるのだ。つぶらな瞳でこちらの様子を見てくるのだ。

こいつは幼い。ホントに幼い。ＡＭ星が滅ぶわけだ。

「お前は余の味方じゃないのか！？　ウォーロック。あの卵の殻をかぶったような白と黒のコントラストが半端のない、女の味方なのか！？」

「お前の味方だから言ってんだ。それにあの卵の殻野郎にはどうにもおさまらねえ。顔面にたまごポケット作ってやる！」

「よしっ、俺も手伝ってやる！　ジェミニサンダーお見舞いしてやるぜ！」

ケフェウスとウォーロックとジェミニの間に、熱き友情が芽生えた。これは心強い。最強の戦士達と最若の王様の間に友情が芽生えたのだ。銀河系の友情なのだ。これは最強だ。

そんなこんなで続いて、ルナが話を進める。彼女も進行司会を務める美少女なのだ。ウォーロック達に構っていられない。

「ではでは、ウォーロック達なんかほっといて、対するチームのその２番目を紹介します！　ふっふっふっ、皆さんは覚えていますか？　あの人たちの存在を！？　その名もチーム『ムーの民』！　略して『ムーミン』！」

ルナが怪しく笑っている。宴会の席でムーミンと言うのだ。彼女は危険極まりない。その怪しいネーミングセンスは白金ルナそのもの。彼女の彼女たる所以をまざまざと見せつけているのだ。

無論、ムーの民を略した結果であって、某所とは何の関係もない。
あってはいけない。

ex：モウヒトツノミライ3

そんなルナは置いとくとしよう。そして、場所は変わる。そして少しの時間を巻き戻し、三十分前。

その場所とは、コダマタウンで最もな勢力と品ぞろえを誇るヒグレデパート。そのデパートの品ぞろえは、そのデパートの中で一生を過ごしてもほぼ困ることのないほどだと言うほどなのだ。端的にすご過ぎてやばいという事だ。

そんなデパートで一人のムー人の少年、略してムーミンの少年が買い物をしていた。

そう、アイツだ。星河スバルの永遠のライバルにして、永遠の孤高マスター、ソロその人だ。

ちなみに今日、彼はデパートの初売りで大安売りが実地されると言う電波を受信していた。なのでこうして、生活必需品とか、孤高であり続けるのに必要なバイブルを買出しに来ていたのであった。

買い物カゴを片手に店内を物色する孤高の戦士ソロはまさにその姿で孤高を再現していた。決して家庭的でも、母親の味が恋しいことなんてはない。

「チッ、元旦とだけあって人が多いな……。イライラが止まらないぜ」

ソロは文句をぶつぶつとたれながら、食料品コーナーで鶏肉の新鮮さを吟味していた。その真紅の瞳は数々の食中毒と言う名の歴戦を経て、神の選別眼と化している。孤高であるが故に救急車を呼べなかったのだ。

そこに、ソロの下僕のラプラスがうめくように欲求する。ソロの袖を引っ張ってソロに迷惑をかけるのだ。ソロはイライラする。

「ええいっ、ラプラス！　俺の袖を引っ張るんじゃない！」
「ア……ウウゥ……アア」
何を言っているのかさっぱりなラプラスだ。しかし、その細くて長い鋭い指は食料品コーナーを指している。そこには一人の女性がウインナーの試食コーナーを開いているのだ。ラプラスは寂しそうに物欲しそうに、その何を考えているのか分からないはずの目を潤ませている。
「ラプラス！！　お前、ウインナーを食べてみたいのか……！？」
ラプラスは小さく頷いた。
その何を考えているのか分からないはずなのに、とても愛らしく見えてしまう不思議なラプラスがとてもしおらしい。しおらしいではないか。
「ち……、しょうがないな。お前にはいつもノイズの塊しかやってなかったからな。
今日は元旦だ。試食ぐらいは許してやろう」
「ア……ウウ……ウゥウオ……オオウア」
「黙れ、礼はいらん」
どうやらソロは何を言っているのか分からない、ラプラスの言葉が分かってしまうらしい。絆のない二人の間には、何か別のつながりがあるのだろう。
そしてソロは、試食コーナーの前で立ち止り、ウインナーを爪楊枝で突き刺した。
ウインナーの薄い皮がはじける軽快発破な音が鳴る。空いた穴から肉汁がとめどなく溢れかえり、輝く宝石の滝線となる。ウインナ

ーとはそういう食べ物だ。とても高尚な食料と言える。ラプラスが欲しがるのも頷ける。
それをラプラスにやる。

「そこの女、このウインナーとか言う食料を貰う。文句はないな……？」

無駄にソロは偉そうだ。この場面、ウインナーを試食する身分をわきまえるべきなのだろうが、ソロは孤高故に対人戦でへまをやらかす。

「ええ結構よ。ん……？」

試食品コーナーの女性が眉をひそめる。ソロの顔を凝視して眺めて観察する。顔見知りなのか。

「アナタ！　まさか」

女性は目を剥き、驚いている様子だ。ソロは冷静に対処する。女性の扱い方などお手の物だ。

「何だ貴様、俺は別に何もしていないぞ。確かに、新鮮な鶏肉を確保するために、家事に特化した謎の中年女性とやりあったが、正当な勝負だった。
文句は言わせない」
「いや、違うわ。そう言う事言っているんじゃなくて……」

女性はそう言うと化粧をめかしこんだ。ソロは目を疑った。女性の顔がみるみる内に見覚えのあるものに変わっていくではないか。
ソロとて忘れるはずがなかったのだ。その女性同様に忘れるわけ

がなかったのだ。

「な、何だと……！　貴様は」

ソロは驚愕の裏に隠された、驚きを露わにした。二度と関わることもないだろうとずっと思っていたからだ。目の前にいる女性の顔を見知っているどころではなかった。見限っていた。

「フフ、やっと分かったようね。ソロ」

「ああ、また会うとはな……オリヒメ」

ソロはオリヒメを睨めつけつつも、一心不乱にウインナーを捕食し続けるラプラスを小突いた。今はそういう時ではないと言いたいのだ。

「お前、何をしている。こんなところで」

「それはこっちの台詞よ」

「俺は買い物だ！」

「私はこれよ」

オリヒメはにっこりと笑って、ウインナーを口に含んだ。

「ずっと捕まっていると思ってたが、ずいぶん早く出たんだな」

「えぇ、以前、少しある事件を手伝ってね。……あなたも知っているでしょう？」

オリヒメは美人だ。含み笑いがそれをより際立たせる。

「ああ、アレか」

ソロはウインナーを口に含む。ラプラスが物欲しそうな目で見つめる。ソロとラプラスは貧乏なのだ。どこで暮らしているのかも分からない。どうやって収入を得ているのかも分からない。二人は貧乏なのだ。その日暮らしなのだ。ラプラスが可哀そうなのだ。

「ところで、ソロ」

オリヒメが甘美なる肉汁と歯ごたえのある皮が破壊衝動を満たしてくれる、そんなウインナーを堪能しているソロに呼び掛ける。提案する。持ちかける。

「何だ？　俺はウインナーと言う食材に、俺と同じ孤高の匂いを感じ取っているんだ」

「それは置いといて聞きなさい」

「指図は受けん」

ソロとラプラスは止まらない。ウインナーを欲していたムーミンが止まるわけがない。どこぞの谷からやってきたわけでもないムーミンはウインナーが大好物だ。

「ムーの遺産が絡んでいる事でも？」

ソロの爪楊枝が硬直した。ソロが硬直した。ムーの遺産が関係していると聞いて、ムーミンことムーの民であるソロが聞き逃し、放っておくわけがないのだ。

「良いだろう。詳しく話せ」

ex：モウヒトツノミライ4

時間は巻きに巻き巻いて、伊集院アイランド、仲良し広場、流星の間。
ルナが司会を進めているのだ。

「では、まずはチーム『ムーミン』の参謀役から紹介します！
アナタの笑い方は紳士の証！　ンフフと笑いに私が戦慄！　何から何まで謎の怪紳士！！　自称Z国出身の絆に飢えた金髪変態紳士！　きれいなハイド、アナタに決まりよ！」

ルナの紹介にきれいなハイド感激。自分のヒロインが自分の事を説明してくれるのだ。変態でも何でもかんでもだろうと嬉しいのだ。変態でもロリータコンプレックスでも何でも来いという心境だった。

「ンフフ、お褒めにあずかり光栄です」
「いや、褒めてないからっ」

ルナの突っ込みに呼応した、次世代型兎さん型ウィザード、モードがハリセンでハイドの頭を叩いた。主人にとっての危険は自分の危険なので、防衛反応を起こしたのだ。

「ルナちゃんをいじめてはいけません！」
「ンフフ、いじめたつもりはないのですが。これは失礼しました、可愛いうさぎさん」
「褒めても何も出ませんよ！？」

モードはブチ切れ。

「いいえ、出ました。アナタのハリセンがね」
「上手いっ。って、そういう意味じゃないだろ！」

堪りかねたスバルから飛び出すのは、伝家の宝刀、流星の左だ。
流れるような一連の動作から繰り出される、流星のような突っ込みはボケた者をたちまち笑いの的へと昇華させるのだ。まさに天性のボケアシスタント。
伊達にウォーロックと共に戦ってきていないとされる。
だが、ルナはこの場をまとめなければならないのである。大変だ。きれいなジョーカーさんときれいなドクターキングンもルナの事を心配している。ドキドキしていた。

「と言うように少し渾沌としてきましたが、心配ご無用！　絶大なリーダーシップを発揮してくれる人がここにいます！
アナタの鼻はまさにコンドル！　鷲鼻も鷲鼻の立派な持ち主だ！
それがチャームポイントで、村人の憧れかも！？　その名もナンスカ・オサ・アガメさんです！　ナンスカ！！」

密かに席に着き、黙々とニホン料理を堪能しているアガメさんはルナに紹介と一緒に挨拶をされた。『ナンスカ』と言う言葉は、ナンスカー地方にあるとある村、ナンスカ村の独特のあいさつなのだ。こんにちはや、おはようからお休みまでどうたらこうたらなどの意味がこの短い言葉に込められている。

「ナンスカ！！　よろしく頼むぞ、参謀役のきれいなハイド殿」

アガメが発するのはルナとは比べ物にならない、威厳に満ち満ちた挨拶だった。
当然、皆さまがナンスカと返す。礼儀を重んじる事が出来る人で

一杯だ。そんな人がたくさんいて何よりだった。
そしてルナからチームムーミンの最強のメンバーが言い渡される。

「そして、そしてー！　あの人の存在を忘れてはムーの事は語られぬ！　真打ちは少し遅れてやってくるものです。お電話一つでご予約オーケー！
支配が絆とのたまう、危険で甘い誘惑はもう忘れられない！　そんな天の川王国の美しき科学者、そして新生ムー帝国の元女王様！
ドクターオリヒメその人だー！」

ルナがそう言うと、待っていましたかと言わんばかりに、流星の間の襖が横にスライドした。入ってきたのは長身和風美女で着物がよく似合うドクターオリヒメだった。めかしこんだその姿はまさに織姫だ。元旦に織姫とはこれ如何に、野暮で酔狂な登場だ。
そして続いて入ってくる少年もいるのだ。アイツを忘れたら本当にムーの事は語れない。ムーミンの少年だ。
ルナも失念せずにアイツの紹介だ。

「そしてなんとなんと！　信じられないことに、ムーミンことムーの民である。あの少年が急遽やってきわよ！　目を疑ってはいけません。いるのは本物、隣にいるのは何物!?
白すぎるその髪の色は何かワケありか!?　それともただのお洒落なの!?　今日はおいしい鶏肉買えたかな?　孤高をうたう、シャイで寂しいロンリーボーイ！　ソロとはお前の事だ！　横の不気味な奴はラプラスだ！」
「なんだその言い回しは!?」

ソロが怒った。ルナは困った。オリヒメ助太刀。ラプラス傍観。

「うるさいわっ！　アナタは貴重なツンデレ要員の私と被っている

のよ！　自重なさい！」
「黙れ、ドリル衛星女……！　今日は買い物のついでに来ただけだ。勘違いするな」
「キーッ、それがツンデレだっていうのよ！　私の真似をしないでちょうだい」
ルナは止まらない。ソロは退かない。
「まあまあ、ルナちゃん。この子を許してあげて、孤高をしすぎてこんなんになっちゃっただけなのよ」
オリヒメは優しい。
「まあいいですわ！　じゃ、チームムーミンのリーダーはオリヒメさんにお願いしますね？」
「わかったわ」
話がまとまりチームムーミンの紹介は終了。
次はクインティア先生が、第三のチーム紹介をしてくれる。
「で、では。第三のチームを紹介したいと思います。こんなクインティアですが、ちゃんと紹介するのであまり変な眼で見ないでほしいです……」
「頑張れティア！」
「頑張れ姉ちゃん！」
奥の席からシドウとジャックの声援だ。黄色くはないが十分に元気を貰える。
恥ずかしながらも、クインティアはピースをしてシドウ達に返す。
ピースをしたのでクインティアの手からマイクが落ちた。マイクが

たまたま下にあった味噌汁にダイブして、アンドロメダのカギ同様にお釈迦さまになった。南無。

「あっ、私ったら。もう馬鹿！　私の馬鹿！」

ポカポカと自分の頭を叩く。きれいなハイドが惚れた。

「やめるんだ、ティア！　自分の頭を叩いたら本当にアホになるぞ！」

ごもっとも。現にクインティアの頭が少し悪くなった。

「うん、分かった……。少し落ち着くわね、シドウ」

深呼吸。

「よし、では改めて第三のチームを……、その名もチーム『プリンス・ジャック』。何でそんな名前かって？　フフ、いいわ教えてあげる」

クインティアが勝手にしゃべりだした。これは大変だ。人前で長々と独り言とは意外に度胸がある女だ。困った女だ。きれいなハイドはさらに惚れた。

「クインティア先生。さっさと進めてください」

ミソラに小脇を肘で突っつかれた。クインティア先生はくすぐったそうにしている。まさに、歯止めが利かないというやつだろう。クインティア先生はずっと浮き足立って地に足が付かない。精神的に行ったり来たりでお疲れ気味だ。

「クインティア先生。くすぐったそうにするのは時間の無駄です」
「あっ、いけない私ったら、自分の世界に入りすぎたようね……」
軽く咳払い。今までの恥ずかしい自分を払拭したのだ。水には流せないが、けむに巻いた。
「では、チームのリーダーを務めますのはあの彼です……。
イケメンなのに、うまい棒。うまい棒なのにイケメン。連戦連勝の無敗のうまい棒。元祖人工電波人間、そして、おはようからお休みまでずっとサテラポリスのエース、暁シドウ。キャッ。カッコいい」
チームババ抜きのリーダーは暁シドウだ。確かにイケメンでうまい棒だ。確かにうまい棒でイケメンである。そんな彼はずっと、サテラポリスのエースなのだ。以前、きれいになる前のジョーカーさんに、瀕死の重傷を負わされたが、去年の四月に何とか復帰した。それほどにエースなのだ。アシッド・エースは現役電波人間の中でも最強クラスだ。
「続きまして。副リーダーとチーム員その一です。
でかくて真っ黒い、そして極悪非道なウィザード男性。でも、そんな過去は忘れて今を正しく生きる紳士の中の紳士。心のきれいさではだれにも負けない。そんな優しさであふれかえった、黒人ビッグマン。きれいなジョーカーさんです。
そして、意外や意外、なにが意外かと言うと、何と弟は王子様。ロイヤルフラッシュ王国の悲劇の王子様。ちょっと、わがままで素直じゃないけど、根は本当に優しいんです。そんな私の自慢の弟、ジャックをよろしくお願いいたします」
「って、姉ちゃん。最後の方なんかちがくね？　何でヨロシクして

んだよ」

ジャックにはスバルと同じ癖がある。『ツッコマナイトシンジャウヨー症候群』だ。これは死んでも治らない。だから死んではいけない。

それを踏まえたクインティアの優しさなのだ。だからジャックをヨロシクしたのだ。

「違くないわ……」

しゅんとしたクインティア。女の涙は核兵器。ニホンにそれを持ちこませたジャックの罪は重い。

「ちょっ、しゅんってなるなよ姉ちゃん。分かったから、早く進めろって」

「ありがとうジャック。……では、チームの参謀役を……。あのマスクは何でできてるの？　それは秘密さ。そんな謎めいた、紳士の中の紳士です。きれいさではジョーカーさんに負けるけど、それなりに心優しくなって再登場。孤児兵隊の統率者ではなく、孤児院の良きお父さんになりました。不幸な子供達に本当の幸せを、きれいなドクターキングです」

きれいなドクターキングの生きざまを涙なしでは語られない。孤児達に安息の地を提供し続ける、弱きを助け強きをくじく、現代によみがえったイエス様だ。もちろん、メテオGの件に目をつぶればの話だ。

「ハッハッハ！　言ってくれるではないかクインティア。確かに私はきれいになって再登場だ。もう悪魔だの鬼だの言わせないぞ？　クインティア……、もう一度、私の事をパパと呼んでくれるかい？」

「……無理」

断固拒否。

「では最後にチームの紅一点、美しきバラのような女性の紹介です。アナタの服装はややこしい。ドレスに見せかけたただのＹシャツただの布。全国の青少年の夢をブレイクサーベル。そんな、小悪魔的美貌と性格を持ち備えた、大吾パパの知り合いだ。謎が謎を呼びやがてどうでも良くなる、アナタの本名は一体？　そんな女性なハートレスさんです」

あかねの隣で、黒地でバラの赤が妙に鮮明な着物を着て大吾と楽しくおしゃべりをしている女性がハートレスだ。

その美貌から、隣のあかねも気が気でないはず。親友とはいえ油断のならない美貌なのだ。しかしあかねだって負けてはいない。大吾だってそう思っている。

「以上でチームババ抜きの紹介は終わりです。お疲れ様、私」

クインティアは自分で自分をねぎらう。

いよいよ最後のチーム紹介だ。残った奴らはうずうずドキドキ。どうにかなってしまった様子。主人公的なポジションをキープしているのにスバルはとうとう呼ばれなかった。

ミソラが最後のチームを紹介する。

「ではでは、ご存知スーパーアイドルの響ミソラが最後のチームを紹介します！　その名もチーム『流れ星』。どうかな？　今までのよりまともだと思うよね？」

「ちょっと、それは聞き捨てならないな！　チームＦＭ星団ズの方がかっこよくて分かりやすいに決まってるって言うの！」

エリアご立腹。

「そうそう、私のチームムーミンより上のネーミングセンスなんてあるわけないわ！　私のがまともだと思うわ！」

ルナご立腹。

「イヤイヤ、流石にルナちゃんのはないと思うな……」

「確かに、ルナのはないわ……。って言うよりかは、完全にアウト何じゃない？」

ルナはアウトだ。

「ま、ルナちゃんはアウトと言う事でこの話は終わり！　じゃあ、チーム流れ星の晴れあるリーダを務めるのは……。

約三年も宇宙を漂いました。気が付けばメテオGを単身制御！　アナタって実は最強なんじゃ！？　長かったけど、メテオGの事件後にロック君と無事地球に帰還！　最強で最高な豪快パパさん星河大吾さんです！」

「あっ、大吾さん呼ばれたわよ」

あかねが大吾に振る。ハートレスと話しこんでいた大吾は、立ち上がって挨拶をする。

「いやあ、皆さま、お久しぶりです！　地球に帰ってきて一年以上経ちますが、まだ実感がわいていません。そんな宇宙人的な父親である俺ですが、よろしくお願いします。では、楽しく行きましょう！」

「いやあ、さすがはスバル君のパパ！　言う事が違いますね！　自

分を宇宙人と評するなんて、なかなか出来ませんよー。ね、ルナちゃん？」

ミソラのムチャ振り。

「え、ええ。そうね。大吾さんは最強だわ」

「ではでは、チームの副リーダーを務めるのはご存じあの人！　牛丼なしでは語れない！　年がら年中、牛丼一色！　頭の中はつゆだく状態！　トボケたキャラだけどやるときゃやるぜ、二二ＸＸ年に生きるガキ大将！　牛島ゴン太だ！」

「あ、どうも。あけましておめでとうだぜ！　よし、俺と一緒に牛丼を食おう！」

やはりやはりなゴン太だった。ふんどし姿が男の証、華麗にたなびく白い布、それが男だ、ゴン太なのだ。

「はい！　ゴン太君のとっても彼らしい、コメントでしたね！　では次いきましょう！　忘れちゃいけないチームの参謀役と、ただのチーム員を紹介するよ！」

スバルドキドキ、参謀役をついつい期待してしまう。

「ではではー。

見た目はパッと見イケメンだ！　だけど良く見ると可愛らしい！　そんな素敵で背反な、二つの属性を持つ不思議系多重人格保持者！　双葉ツカサ君だ！　そしてそして、狙った獲物は逃さない！　凶暴最悪、すぐにナックルかまします！　もう一人の僕こと双葉ヒカル！

続きましては、アメロッパからやってきた！　サテラポリスのエースの座を虎視眈々と狙うぜ、漆黒のポニーテーラー！　父は偉大

な科学者でママは素敵で美人過ぎ！　ああ、羨ましいな！　そんなアナタはオッドアイ！　彩道ミライ君だ！

で、大トリを務めますのは、あの人だ！　彼を忘れて何が始まる!?　とんがり頭は心の刃！　ロック君と共に数々の事件を解決中！　最強にして最愛の稀代の宇宙マニア！　もう引きこもりとは言わせません！　流星の申し子！　星河スバル君だよ！」

スバルが大トリを飾った。しかし立場上ただのチーム構成員だ。リーダーでも何でもないのが悔やまれる。でもスバルは嬉しい。検挙な子だ。

「ぼく、やったよ！　……やったよ父さん！」

「ああ、すごいぞスバル！　ほら数の子だ。　食えスバル！」

大吾から数の子を貰う。とても美味しいのだ。

「うん美味しい！」

「……と言うように、とても仲良し親子でしたね！　ではでは四つのチームが出そろいました！　じゃ、エリアちゃんお願いしますっ」

「オッホン！　今、出そろったチームは、戦ってもらいます！　エリア様ことエリア・ポート・伊集院のパパとママが経営している大企業、Ｉ．Ｐ．Ｃグループの賞品をかけて争ってもらいます！　その商品ってのは、もう本当にスゴすぎてやばい代物だから、アンタ達一般ピーじゃ一生ものにできない物ばっかりよ！」

さすがは超絶壮絶大企業。懐がでかすぎる。きれいなジョーカーさんが黙っていない！　きれいなドクターキングが黙っていない。きれいなハイドが黙っていない。

「な、何だってー！」

「はい、そこうるさい！」
「な、何だというのだ……」
「はい、そこうるさい！」
「ンフフ、ンフフ」
モードがハリセンでハイドを叩いた。二人の笑顔が眩しい。
「じゃじゃ、もうさっそく始めちゃうね！　エリアちゃん！　アレを出してね」
ミソラからの可愛くて愛らしいキュートでホップなおねだりだ。小指を頬にあてがって破壊力増大中。ルナも負けじと、ツンデレ発揮。
エリアは取りも合えずに、ミソラの言うアレをマテリアライズした。
「じゃ、さっそく！　マテリアライズ！　『ナンカゴッツイキカイ』」
すると流星の間の上座に巨大な、なんだかごつい機械が現れた。ものは言いよう、すなわちクイズマシーン的なものがマテリアライズされたのだ。
赤いボタンに、派手な装飾。ピンポンマシーンことクイズマシーン。神速の反射神経が要求される、早押しクイズの開幕だ。
「これは……一体！」
ワクワクドキドキ、ハラハラ全開スバル。
「これから、早押しクイズをやってもらうわ！　ポイント制でやっ

てもらうってわけよ。分かったか？　スバル？」
「うん分かった！」

そして、四チームの皆さまが揃い踏みでクイズマシーンの席に着く。

青いコーナーがチームＦＭ星団ズ。ウォーロックを始め、ジェミニ、ハープ、オックス、ケフェウスで構成される。超弩級の銀河級の集団だ。内に秘めたるポテンシャルはまさに無限大。超絶なＦＭ星人達の力が猛威をふるうだろう。幼き王様、ケフェウスの動向に目が離せない。

緑のコーナーがチームムーミン。オリヒメを始め、ソロ、きれいなハイド、アガメさん、ラプラスで構成される。その一見何のチームワークもクソもないチームだ。だが、この個性的で自由奔放な集団はまさに何をしでかすか分からない。ゼロが無限大ともなる可能性を秘めた、まさにダークホース。

赤いコーナーがチームプリンス・ジャック。シドウを始め、きれいなジョーカーさん、きれいなドクターキング、ジャック、ハートレスさんで構成される。そのきれい所が一挙に集まったこのチームは華やかさでは誰にも負けない。そして確かで堅実な実力も秘めているのだから手がつけられないとう訳だ。

黄色いコーナーがチーム流れ星。大吾を始め、ゴン太、ツカサ、ミライ、スバルで構成される。大吾は元より、その主役級のキャラで構成されるチームの全体的なバランスは随一である。副リーダーを務めるゴン太がどういった立ち回りを見せるのかが見ものだ。スバルのツッコミが冴えわたること請け合いだ。

「よし、準備は言いようね！？　じゃ、エリア様からの第１問！　ジャジャン！　２２０Ｘ年は現実的に数字に直すと、２０００年から２０１０年の間でのどのカレンダーに当てはまるでしょうかっ？　ヒントは、２２０Ｘ年の次は二二ＸＸ年になりまっす！」

その時、快音で神速にピンポンと鳴る。この速さでピンポンダッシュをされたらまさに神の悪戯だ。

「意外ね……！　速すぎだわ……ソロ！」
「フン……舐めるな。ムーの遺産はいただきだ……！　答えは、ムー歴、１２５５４年だ！」
「はい、バカ！　お手付き！」
「ちょっと、ソロ何やってるの！？　問題をちゃんと聞きなさい」
「アアア……ウウウウア」

オリヒメとラプラスはソロをきつく叱りつける。
そんなソロに続くのは、頼りになるスーパーお父さん大吾その人だ。

「こんな問題、簡単だ。答えは２００６年！　これで決まりだ」
「ピンポン正解アナタ最高ね！　２２０Ｘ年は２２０９年の事だから、当てはまるのは２００６年しかないわね。
では第二問！　ルナの身長体重、スリーサイズは？　ほら言ってみなさいよ」

ルナ真っ赤。白いお肌が真っ赤な太陽。エリアはなんてやつだろう。ルナを辱めるなんて、とんでもない小悪魔ガールだ。
だがしかし、回答の嵐だ。ピンポンピンポンと、これはうるさい。

「ひゃっは、ドリルが重いから１００キロだな！」

「うるさいわよダブルお面。」
「意外や意外、ドリルが浮力になって、１０キロ」
「おだまり！　ジャック！」
「うまい棒を食え！　そうするとスタイルがよくなるぞ！」
「有難迷惑でもないですね。迷惑です！」
「牛丼的に言うなれば委員長は並盛だ！」
「どう言う意味かしら！？」

ゴン太はボコボコになった。危うくスバルも突っ込んでしまう所だった。九死に一生とはこのことだ。

「ちなみに委員長は僕よりも背が高いんだよ、多分１４７ｃｍなんだと思う」

スバルの会心の一撃これは正解。残るは三寸法。

「ンフフ、我がヒロインのスリーサイズなど測り終えている決まっているでしょう？」

きれいなハイドが言うと冗談ではない。犯罪の匂いが漂ってくる。とりあえずモードにハリセンで叩かれた。答える権利はない様子。

「ふう、ソロに出鼻をくじかれたけど……、私の出番のようね。マテリアライズ！　測りノ助！」

オリヒメさんはとんでもない化け物をマテリアライズした。測りノ助、それはとんでもなく危険なマテリアルウェーブなのだ。乙女の大敵、少年の類友。

『測るぞー』

おっとりとした口調だが確かな仕事人である測りノ助がルナに襲いかかる。

着物で完全装備のルナをもろともしないのだ。それほどに高性能で高圧力な測りの助はすぐに製造禁止となったいわくつき。ルナがかわいそうだ。

「キャッ、ちょっとやめなさい！　チョッ、ちょ……どこ測って……」

『測るぞー』

モンスターここに現る。

ハイドを始めとした、ほぼ全員がことの一部始終を観察している。あのきれいなジョーカーさんでさえ魂の芸術に魅せられている。これは酷い。

「委員長……」

スバルは顔を覆った。こんなルナを見てはいけないと本能が悟ったのだ。しかしベッドの匂いはかぎにかぎまくる、そんなお茶目な少年スバル。

「ギャッハッハ！　こいつはおもしれえぜ！　なあ、ハープ？」

ウォーロックは大爆笑。ハープはウォーロックに大爆掌。ウォーロック沈黙。

「ナンスカ！　ナ、ナナナンナンスカ!?　これは一体ナンナンスカ？　ドクターオリヒメこれはやり過ぎではないんスカ？」

極太の精神の持ち主であるはずアガメさんまですっかり引いてしまっている。ナンスカ語を織り交ぜたナンスカ人のナンスカ・オサ・アガメはナンスカナンスカとウルサインスカ。

「いいのっ！　勝つためにはこれくらい、必要なのよ！　これは支配と言う名のキズナよ！」

どうやらオリヒメさんは壊れてしまったようだ。あの時のスイッチが全開でプッツンしてしまっている。

『測り終わったぞー』

ルナ沈黙。乙女座りが痛々しい。

仕事を終えた、稀代のモンスターこと測りノ助はオリヒメに耳打ちをする。

「……わかったわ。って、あら!?　な、なんですって！　あなたそんな所まで……、ちょっと、これは……」

オリヒメさんは声を大にして言えないので、席を立ちエリアに耳打ちをする。

「フムフム……」

エリアは頷いている。確かな手ごたえを感じているのだ。

「あちゃー、オリヒメさん！　そういう情報はいいですから……！　まったくもう、やんちゃなんだから」

エリア驚愕。測りノ助の鬼畜さに全エリアが泣いた。

しかしだ。この決まりの悪くなった場を何とかしなければいけない。ミソラは最強の人気アイドル。ちょっとやそっとのトラブルではへこたれない。芸能界と言う魔窟にはこれしきの悲劇などありふれた日常なのだ。朝のコーヒーブレイクなのだ。

「とにもかくにも、ルナちゃんのアレがアレなことになったので、スゴクアレな感じだけどクイズはおしまい！　みんなも悪ノリはしちゃダメだよ？　言い子のみんなは分かったよね。だったら次のイベント行ってみよー！

そんなわけでルナちゃん、挫けちゃだめだよ！　ただの身体測定みたいなもんだよ！」

「ロックマン様に見られた……」

ミソラの華麗なるフォロー。これで幾度となく芸能界で潰れた娘たちを救っていた。そしていつしかついたあだ名は芸能界のリトルビッグママ。

「見てない見てない！　ガン見していたのは、スバル君だからさ！」

「ちょっと、ちょっとー！　ぼ、僕は何も見てないよ！　プール授業で女子の更衣室を除いている感じになんて全然なってないから！

だ、だから、元気出してね委員長」

「えらいぞスバルよく言った！」

大吾とスバルは心優しい。広大な宇宙のような優しさだ。ルナの身の事など宇宙に比べたらちっぽけな惨劇にすぎないのだ。

「と言う訳で、大吾さんとスバル君は本当のおバカさんであるという事が判明してしまいました！　宇宙マニアも考えものですね！

大変でしょうがあかねさん頑張ってください！

あと、スバル君。覗きはしちゃダメだぞ！」

ミソラのエメラルドグリーンの瞳がスバルを捉えた。頬を膨らませて不満を一杯に、可愛さを一杯にしてスバルを責める。キュートで弾ける愛らしさの新鮮果実な笑顔に、その怒りさえも可愛いと思ってしまうのだからスバルは本物だ。

クインティアはこのままでは、せっかくのお正月がめちゃくちゃになってしまうと感じた。そして珍しく、クインティア先生が、進行係に名乗り出る。

「ではでは……。宴もたけなわ、お外の伊集院アイランドのレジャースポットに向かいましょう。ちなみに今の点数はチームＦＭ星団ズが－１０００点、チームムーミンが－１５５００点、チームプリンス・ジャックが０点、チーム流れ星が１３００点です。ほぼ絶望的な状況となっておりますが、チームムーミンは頑張ってください……」

「な、何だと……！　俺のムーの遺産が……！」

「アアアウ……ウアウウアウア……ウアウウウア……ア！！」

ラプラスがソロと同じく発狂。感情を露わにしたラプラスはただの危険生物だ。

「ダマれラプラス！　ちっ、なんだって、こんな事になるなら、試食品コーナーでずっとウインナーが食べていたかっただと……！？　そんな貧乏くさい真似が出来るか！　俺は孤高のムー人だ。ふざけるな」

「ちょっと、ソロ早く行かないと置いて行くわよ！」

オリヒメさん始め、既に他の方たちは流星の間から出ていた。そして、いまだ一人で部屋でブツブツと言っているソロに呼びかけた

のだ。

「フン……、言われなくても、俺は俺のペースがあるんだ。ほっとくんだな、オリヒメ！」

「ならいいわ。後でちゃんと来るのよ？」

ソロは流星の間で一人になった。やっと孤高になれた。そんな時、傍らのラプラスがソロの袖を小さく引っ張るのだ。そしてこう言う。

「アア……アウウゥ……ゥゥウァア……アァ」

「なんだと、さっきの態度は謝るから、この場にいっぱい余っている食べ物を食べてもいいかだって！？

フザケルな！　そんなみっともない真似が出来るか！」

「アアウウ……ウアアウ……」

「な、何……！　この食べ物からはムーの匂いがぷんぷんするだと！？　それは本当か……？」

ソロはラプラスの言う事が信じられず、手近にあったおせち料理に手を伸ばす。これは、スバルが食べ残したものだ。

「こ、これは……、ムー大陸の味だ……！」

ソロはスバルの食べ残した、卵巻き昆布を口に含むとそう小さくつぶやいた。そして頬には一筋の液体が伝う。

久しぶりに、まともな食事をしたのだ。無理もない。あかねの手作りの味は、孤高の少年ソロの閉ざしきった心にやっと届いた。

「アァウ……？」

「う、うるさい！　勘違いするな。泣いてなどいない！　これはアレだ……！　その……アレだ……」

「アァウ……？」

ex：モウヒトツノミライ5

一行は伊集院アイランドでほとんどのスペースを占めているというレジャースポット、エリアパークに到着した。当然その時のソロは、常日頃から空かしに空かしている腹の飢餓感を満たしている最中だ。

その広大で、豪華最新設備の置き場所となっているエリアパークは、遊びという遊びを娯楽という娯楽を追求した結果、世界最先端の遊園地となっているのだ。立地条件がコダマタウンと悪いせいで、導入観客人員はスゴク少ない。入場料もタダみたいなものだが、それでも少ないのだ。隠れた名デートスポットとして、モードのデータベースにもインプットされている。

「これはスゴイな……」

「ああ、こんな所、俺の国にもなかったぜ」

ミライとジャックは驚きを隠せない。こんなにでかい遊園地でほぼ無駄な経費としているＩ．Ｐ．Ｃグループが信じられなかったのだ。

「アっハっハ！　どう？　驚いた!?　驚きなさい!!　これが我がグループが誇る最先端レジャースポット！　エリアパークよ！」

「うん驚いた！　ここで何かするんだよね？」

スバルは遊園地のアトラクションと言うアトラクションが何らかの改造を施されていると感じ質問した。明らかに、アトラクションがただのアトラクションではなくなっているのだ。何かの訓練施設みたいになっている。

「よくぞ聞いたぞ！　スバル！　これから、チームで競い合ってもらうわ！　この超難関アスレチックを攻略していってポイントを稼ぐのよ！」
「超難関アスレチック……？」
スバルがビックリこいた。当然だ。こんな軍用施設みたいになった所で、楽しくアスレチックといかないと思えてならないからだ。
「アスレチックって何だ？　食えるのか？」
「ンフフ、それは食べられませんよ。少年」
きれいなハイドが優しく、ゴン太に言って聞かせる。モードがハリセンできれいなハイドの頭を叩いた。
「ンフフ、これは手厳しい……」
「まあ、アンタ達は黙ってアタシの話を聞きなさい！　このアスレチックの名前はその名も『ＭＩＹＡＢＩ』」
きれいなジョーカーさんあたりの集まりがざわざわする。そのネーミングに疑問を抱いたのだ。
「ハイ。そこ、ざわざわしない！　ＭＩＹＡＢＩって言う一見ややこしいアレな感じの名前ってのはこっちも分かってんのよ！　ちなみにこのネーミングは、偉大なご先祖様である、伊集院炎山名誉会長と共に戦ったとされる謎の人物に由来してるのっ！　その名も、ダークミヤビ！　彼はこれみたいに厳しい修行の場で日々鍛錬していたとデータに残っているわ！」
エリアが言うには、ダークミヤビはすごい人だそうだ。

「僕はダークミヤビになりたくないよ……」

スバルが文句を垂れる。

「俺もダークミヤビになりたくないぜ」

「俺も」

「俺もだ」

「ダークうまい棒だったら分からなかったな」

「だったら、チョコ味のうまい棒でも食べててください！」

一応これはスバルだ。

「私も」

「僕もかな……」

「遠慮しとく」

「ダークミヤビってナンナンスカ？」

ダークミヤビの人気のなさは折り紙つきだ。これは酷いを通り越して可哀そうだ。

「ハイハイ分かった！　ミヤビさんの人気のなさは折り紙つきね！　でも賞品は欲しいでしょ？」

皆が一斉に頷く。物欲の虜だ。

「だったら、私を楽しませるために、頑張りなさい！　なら行って来い」

と言う訳ですんなり話がまとまり、ＭＩＹＡＢＩ第一ステージ。

挑戦者はウォーロック。
そして観客席の最上段に設置された実況報道席から、拡大されたミソラの声が流れてくる。

『あーあー、マイクのテスト中。……さあさ！　いよいよ、お正月メインイベントが始まりました！　その名もＭＩＹＡＢＩ！　挑戦者は最強のロックマンの肩割れ！　その名もウォーロック！』

そう、軍用修練施設みたいになっているアスレチックＭＩＹＡＢＩの実況だ。大いに盛り上がっている。

『そして実況担当は、お馴染み響ミソラと』
『エリア・ポート・伊集院と』
『傷心の白金ルナと』
『クインティアのクワドラプルヒロインたちでお送りします……』

そして、そのアスレチックＭＩＹＡＢＩの周りには観客席が囲むように並んでいる。普段はガラガラの開店休業状態なのに、今は臨時で呼び寄せたコダマタウンの住民たちで観客席は大いに盛り上がっている。溢れかえっている。
その中でも、同じ電波星人として、オヒュカスとキグナスとが盛り上がっていた。白熱ヒートアップ。

「頑張りなさいウォーロック！　速攻で終わったら承知しないよ！　オヒュカススイッチ入っちゃうからね」
「フフ、ウォーロック。生まれ変わった僕にさえも勝った君の事だ。心配はいらないな！」
『よーし、準備はいいかな!?　ロック君?』

ミソラの呼び掛けにウォーロックはガッツポーズでこたえる。

そんな彼は、とても危険で楽しい天国のような地獄の入り口の前に立っているのだ。

「へへッ！　任せな！　いつでもこいってんだ」
『よしっ、じゃあ始めー！』

ウォーロックの目の前の入り口が口を開けた。
そして目の前にはノイズの沼が広がる。これは飛び石渡りだ。空中を飛んで移動できるＡＭ　星人の彼ならとんでもなく簡単奇天烈な事だ。

「へっへっ！　楽勝！」

ウォーロックが勢い良くノイズの沼に繰り出す。すると、残念なことが起きた。

『Ｚキャンセラー起動！』

エリアがＺキャンセラーのスイッチをポチった。ウォーロック達特有の電波人間ゆえの浮遊能力が皆無となってしまった。
当然ウォーロックはノイズで溢れかえった沼に呑みこまれる。

「グワー！　ノイズで体が、グワワワ！　ファイナライズしてしまうぜー！」
『エリアちゃんこれは一体……？　ロック君がいきなり落ちていったように思いましたが？』
『よくぞ聞いたわね！　このＺキャンセラーを使う事により、人間も電波体も公平に渡り合えるってワケ！　提供はもちろん五陽田のオジサンだ！』

観客席でお茶をすすっていた、五陽田刑事は一礼する。

『でも、とにかく。ウォーロックを早く助けないと、アレってまずいんじゃない！？』

ルナはウォーロックを心配してあげている。

『確かに……、このままじゃノイズ度ウィザードになってしまう……。救出班、ウォーロックを助けて……』

クインティア先生の賢明な判断により、ノイズの沼でもがいているウォーロックの元に、四体の警務ウィザードが駆け付けた。

そして、助けようとして足を滑らした警務ウィザードが、ウォーロックと同じくノイズの沼に呑みこまれた。それを四回繰り返すと事態が悪化するのだった。

『って、悪化してるじゃない！　エリアちゃん、どうにかしなさいよ』

『あーあ、まずったなこれは。ノイズの沼にウィザードをやれば、当然ああなるってワケなんだよねーってね』

『「ってね」じゃなーい！』

『少々報道席の方が混乱してますが、心配いりませんよ！　多分大丈夫です』

『多分じゃ駄目だと思うわ……。ドキドキ』

クインティア先生はそう言うが、実際の所、何とかなったようだ。しかし、ノイズまみれになってしまったウォーロックはずっとうなされている。もうこれ以上は限界なので、スバルのハンターに帰ってきた。

「お帰り、ウォーロック」
「スバル……、アレは一筋縄じゃいかねえ。そんな袴姿じゃ駄目だ！　いつもの服に着替えとけ！」
「う、うん、分かったよ」

そして、ＭＩＹＡＢＩ第一ステージを一通りの組が終了した。ちなみにチームＦＭ星団ズは全滅だ。
ケフェウスが途中アンドロメダを召喚したが、ウォーロックに怒られるのでやめた。

『な、ななんと！　ＭＩＹＡＢＩ第一ステージは波乱の展開となってしまいました！　チームＦＭ星団ズは全滅です！　壊滅です！　原因は何でしょうか、解説のクインティア先生？』
『おそらく、浮遊能力を失ったあいつ等は、亀同然の身体能力だったといわけね……。恐れるに足らず……ね。ざまあ、みろだわ』
『と言う訳で、チームＦＭ星団ズは、賞品をゲットする資格がなくなりましたー！　はい、残念でした！　また来なさい！』
『ではでは、段々気持ちの切り替えも済んだ私が、第一ステージクリアーしたつわものを紹介していきます！』

すると、会場の選手待機所に座っている者達にスポットライトが当たる。

『クリアーしたタイムは何と４０秒！　脅威の最速タイムで他を圧倒中！　ウィザードなのに、すごいよアナタ！　きれいなジョーカーさんだ！』

きれいなジョーカーさんはウィザードでありながら脅威の身体能力を発揮したのだ。その鬼気迫るファイトスタイルに、観客席のコダママダム達もメロメロだ。小さい子供たちの将来の夢は、きれい

なジョーカーさんと言う超絶な人気ぶりだ。
ちなみにチームプリンス・ジャックのリーダー、シドウは途中のうまい棒の迷路で時間負切れとなってしまった。

『そして、第二のクリアータイム保持者！　誰がこんな展開を予想した！　脅威の木のぼりテクニック！　ナンスカ村の超村長！　ナンスカ・オサ・アガメさんよー！』

アガメさんが立ち上がり、観客席に向かって手を振り始める。彼はまさにヒーローとなっていた。ご老体に鞭をうち、難攻不落の城を攻略していく姿に、コダマタウンの年配者たちが感銘を受けたのだ。
アガメさんは、壮年の星となった。

『そしてそしての突破者は！　棍棒で殴られようと、上から鉄骨が落ちてこようとなんのその、平気な顔してやってくる。ミスターサテラポリス！　彩道ミライ君だ！』

ミライは、アスレチックの罠をさいさんにわたり喰らい続けたが、脅威的なまでのタフさを見せつけ危なげなくクリアしたのだ。

『そして、盤石はやはり動かず！　人間を超越した超人類！　敏捷、体力、筋力、観察力、全てがハイスペックなムーミンことムーの民！　ソロだ！』

ソロは、その圧倒的な戦闘センスで、数々のトラップを力尽くで沈めてきたのだ。立ちはだかる壁をことごとく壊す彼は、まさに天性のクラッシャーだ。孤高拳法が火を吹くのだ。
そして会場はそこまで沸き上がらなかった。

『そしてなんと、なんとの大番狂わせ！　第一ステージを、女性が突破よ！　スゴすぎる。実はどこぞの国のスパイなんじゃ？　そんな事が頭をよぎってはなれません！　ハートレスさんよ！』

ハートレスさんは、全身真っ黒なキャットスーツに身を包んで、コダマタウンの男性を虜にしていた。まさに、魔性の女だ。

『そして、今回のＭＩＹＡＢＩ最優秀選手と呼び声の高いこの選手がやってきた！　第一ステージ？　そんなの戯れさ！　そんな余裕と男の美学が漂ってきます！　最強の人類！　星河大吾さんその人だ！』

大吾はすっかり人類を超越しきっていたので、このアスレチックはただの遊びでしかなかった。過酷な宇宙環境に比べれば、ただのぬるま湯なのだ。圧倒的な存在感が、ソロさえも一目置かせるそんな究極生命体、星河大吾だ。

『最後の突破者は、何とあの少年だ！　普段は冴えない小学生。だけど、実は愛しのロックマン様！　そんなアナタがここで終わるわけがない！　神に溺愛された内気で頼りないのない少年！　星河スバル君だー！』

スバルは神に愛されている。理由はこれで十分だ。

超絶有名となった銀河級の親善大使スバルはちょっとした仕草をしても、観客たちは馬鹿みたいに食い入るのだ。スバルの胃には穴が開きそうだ。

『以上が、ＭＩＹＡＢＩ第一ステージ突破者です！　ではでは、息も吐かせず次に行きましょう！』

『アタシの出番ね！　ＭＩＹＡＢＩ　アトラクション、モードセカ

ンド！　セットアップ！　大いに驚きなさい一般ピーポーども！
アッハッハッハッ！！』

軍隊修練施設だった、ＭＩＹＡＢＩ第一ステージはリアルウェーブの書き換えによって徐々に姿を変えていく。
第一ステージが地獄なら、第二ステージは異次元なのだ。
常軌を逸した高さにまで組み上げられる謎の塔が姿を現すのだ。
それを見上げるスバルは冷や汗が止まらない。
観客席の観客たちも、その神聖化さえもはなはだしい塔の姿に固唾をのんで見守っていた。
エンターテインメントは度を過ぎると、非現実的な夢の世界となるのだ。

「おい、スバル。ビビってんのか？」
「うん……。第一ステージで終わっとけばよかったよ」

ex：ゴールドレコード

青天井な空に突き立てるのは、銀鏡の摩天楼。それが三本そそり立っているのだ。Ｉ．Ｐ．Ｃグループの鋭意が盛り込まれている。

その塔の中は異次元空間が展開されているに違いない。

『アハハハ！　これが第二ステージよ！　名付けてボスラッシュタワー！』

「ボ、ボ、ボ、ボスラッシュだってー！　そんなの生身でやれるわけないじゃないか！」

「確かにスバルの言う通りだ。俺は別に何ともないが、これじゃスバルが死んでしまう」

大吾パパは最強の生命体だ。ＦＭ星、最強最悪極悪非道の犯罪者ヴァルゴと、コーヴァスをその圧倒的生命感で全く寄せ付けないのだ。

故に人間としては既に高いレベルで仕上がっているという事になる。

『そう！　そうなると思って、あの塔の中で待ち構えるボス共は人間でも何とかギリギリ、ブチ倒せるくらいの強さに設定しているってわけ！　参ったか？』

「参った」

大吾は参った。

「参らないでよ父さん！　ギリギリって、結構ヤバいってことだよ」

「よせ、星河。あの星河大吾さんが参ったんだから。俺たちもあの塔に参ろう」

ミライはアメロッパから来た。そんな知的な帰国子女なのでニホン語が少し不便だ。

「ミライ君！　それはニホン語がおかしいって……！」
「何だ？　大吾さんの意志を継げないのか？　仕方ない……、やれトラッシュ！」

今日のミライは攻撃的だ。

「了解しました。ミライサマ」

ミライのウィザードであるトラッシュはスバルに爪を立てる。これは危ない。
しかし、ウォーロックがその間に割って入るのだ。

「ビーストスイング！」
「ムッ！　ブライトスイング！」

音程の高い、響きの良い音が鳴った。トラッシュの爪とウォーロックの爪が仲良く交差する。
これはとても危ない事なので、大吾パパがきつく叱りつける。

「コラコラ。危ない事したらダメだろうっ。トラッシュ、ウォーロック！」
「スミマセン……。大吾様」
「ケッ、俺は悪くねーぜ。その白イヌが手を出してきたんだ」
「青イヌがよく言いますね。この青イヌデカクマ野郎！」

トラッシュのささやかな悪態。トラッシュにとってささやかな悪

態。

「もういいトラッシュ。下がれ」
「了解」

トラッシュは引き下がる。
すると放送席のスーパーヒロイン達が、それぞれの生き残ったメンバーに通告する。ミソラの声がよく通る。

『みなさーん。準備はいいですか？　うん、良いようですね！　でしたら塔の中に入ってくださーい』
『チーム毎で、それぞれ別の塔に入ってくださいよ』

続けてルナが注意してやった。ここからは別々の塔で、それぞれのチームが、中で待ち構え得いる屈強なボスとの戦いを繰り広げるのだ。もちろん生身で、だ。
しかし人間でもギリギリ倒せるように、強さを調整してあるらしい。大怪我をして、大変なことになるかもしれないが、命までは奪われないという事だ。ひとまず安心である。

『ちなみに、塔の中の様子はこの超大型、超美麗、超カッコいい、エアディスプレイで中継されるわ……。存分に戦ってちょうだい……』

クインティア先生の言っている、超がいっぱい付いた、とにかくすごいエアディスプレイは、沢山浮いていた。観客席からでも分かりやすいように死角のないように浮いている。コダマタウンの老人の目でもクッキリハッキリと見えるのだ。

『このステージを生き残る事が出来たら、いよいよ最終ステージよ

！　存分に戦いなさい！　最高の栄光と賞品が欲しかったら、とにかく死に物狂いでやってみる事だよ！』

　エリアの言葉に全観客が沸いた。なぜなら観客はチーム毎にキズナ力を賭けているのだ。キズナ力と言うのはとても大切な数字の事である。それはまさにプライスレス。キズナを数字にしてはいけないと、野暮なことは言いっこなしだ。

　要するに、優勝チームを当てれば、倍率によりけりの現金を生で貰えるという寸法である。よって、生活のかかったコダマギャンブラーの腕が鳴る。

　もうただのボランティアキズナ力募金箱となったチームＦＭ星団ズのオッズは０．５３の１．８９倍とかなり期待されていた。だがもう賭けられたそのキズナ力は廃塵と帰している。

　対する、チームムーミンのオッズは０．０５の２０倍と馬鹿にされている。しかし物好きなギャンブラーは、今や興奮のるつぼだ。ソロ様仏様だ。

　チームプリンス・ジャックのオッズは０．２４の４．１７倍と、まあまあである。まあまあな結果を期待するべきだろう。

　チーム流れ星のオッズは大吾と言う中年の最強生命体のお陰で、０．１８の５．５６倍と持ちこたえている。大吾がいないと、ゴミクズのようなオッズが出たこと請け合いだ。しかし残ったメンバーは最多なので今一番のもうけ株。

　そして、沸き上がる会場の中、三チームはそれぞれの塔に、命を放り投げに行った。ほぼ、助かる見込みのない危険で楽しいアスレチックの始まりだ。スバルは電波望遠鏡が欲しいので命を賭ける価値がある。ミライは分からない。大吾も分からない。ソロはムーの遺産が欲しい。アガメさんは散歩に来た。ハートレスさんは暇つぶしだ。きれいなジョーカーさんは身寄りのない子供達に、おもちゃ

をプレゼントしたいのだ。
それぞれの思惑を乗せて今、始まる。

『さあ！　始まってまいりました！　会場のエアディスプレイをご覧ください！　それぞれのチームを待ち構える、電波体たちの登場だよ！』

ミソラの言う通り、ボスラッシュタワーの第一階層にはそれぞれのボスが待ち構えている。
どれもこれもかしこも、強敵だらけだ。生身で勝てるのか疑わしい。
特にチームムーミンを出迎えた電波体は、白くて美しい見た目のくせに強そうだ。

『ささ、解説のクインティア先生！　チームムーミンの相手の電波体は一体何なんでしょうか！？　見たこともないタイプですね！？　でも、白くてきれいですねー』
『あれは……、どこぞのブラックホールを管理しているという、番人みたいなものよ……。名前は、確か、シリウス……。彼は強敵よ。戦闘周波数は約１３６万メガヘルツ……』

ちなみにスバルが変身した電波人間シューティングスター・ロックマンの戦闘周波数は１４７万メガヘルツだ。シリウスはロックマンと同等の強さを持っているのだ。
しかし今のシリウスは偽物の弱体版だ。ソロの孤高拳法を駆使すれば何とかなるかもしれない。アガメさんは逃げ回るしかないだろう。

『シリウスですか……。なんだか強そうな名前ですね！　でもあれは、弱体化した擬似電波体なので、もしかしたら、もしかするかも

ですね！』

『ええ、あのムー人の少年なら何とかするかもしれないわね。でも油断はできないわ……』

チームムーミンの塔の中はマンションのロビーのようだ。観賞植物と受付カウンターとシンプルな構成だ。

その塔の中でソロに相対するシリウスがゆったりとした口調で話しかける。

自分の事を語り出すのだ。

「おやおや、久しぶりのお客さんですね……。確か私は、何十億年もブラックホールサーバーの管理をしていたはずです。

ですが、そこにある日やってきた、青い電波人間のロックマンと言う人にやられてしまったようです。もう少しで、ＦＭ　星をコレクションに出来たと言うのに……残念です。おかげで私のリビルド達も全滅してしまいました……。ああ、ダイヤ・アイスバーンリビルドちゃん……」

ソロはシリウスの、意味が不明の言動に眉をしかめる。

ソロはシリウスと会ったこともなければ、話したこともないのだ。故にシリウスが何を言っているのかさっぱり分からない。

「何を言っている……？　お前」

「いや、こちらの話です。要は気が付いたら、力も何もかも奪われて、ここにいたと言うだけの話ですよ。フフフ……」

「だったら、そのロックマンって奴を恨むんだな！」

そう言い終わる前に、ソロはシリウスに殴りかかった。自慢の孤高拳法を炸裂させるのだ。様子見などしない。真っ向勝負だ。シリウスも迎え撃つ。肉弾戦だ。

そしてソロは後ろの方であたふたしているアガメに言う。

「アガメ！　そこの観賞植物をシリウスに向かって投げろ！」

「な、ナンスカ！」

シリウスの背後から、アガメさんは、緑緑とした観賞植物をシリウスの背中に向かって力の限り投げつける。

『おーっと！　アガメさんの観賞植物攻撃だ！』

実況席のミソラ、ヒートアップ。

『これは、ソロ君が擬似シリウスの気を引きつけている間に、アガメさんが後ろからドン！　って言う、最強の作戦だね。いかがでしょう？　解説のクインティア先生？』

『ええ、名づけるなら……、グリーンボンバー……』

『……だそうです！　チームムーミン、グリーンボンバーを駆使して擬似シリウス相手によく戦っています！　これは面白くなってきました』

観客は大いに沸いている。なぜならソロがやはり強いからだ。電波変換せずとも、擬似シリウスとその独特の拳法で渡り合っている。いや、圧倒している。

シリウスの顔面にソロのスペシャルコークスクリューが決まった。

「アガメ！　今だ畳みかけろ！」

アガメが観賞植物の幹の所を持って、擬似シリウスにフルスイング。石膏製の受け鉢がシリウスの胴体にクリーンヒット。受け鉢が砕けて、中の土が爆発したようにはじけ飛ぶ。

擬似シリウスは吹きとばされて、受付カウンターの角に後頭部を強打した。これは悶絶ものだ。

擬似シリウスは頭を押さえて、声にならない声を発しながら右に左に転がっている。タンスの角に小指をぶつけたよなものだ。

『決まったー！　会心のグリーンボンバー！　これはシリウスも立ち上がれないかー！？』

『待って、ミソラちゃん……！』

クインティア先生がミソラを制止する。

擬似シリウスは立ち上がったのだ。後頭部を抑えているが、立ち上がったのだ。だが、もう戦えないだろう。

「ふふ……、今の私にはもう戦える力は残っていません……。よくやりましたね。ソロ君、アガメさん」

擬似シリウスはゲートパスキーをアガメさんに渡した。これは彼らの勝利を意味している。

擬似シリウスは立ち上がったものの、もう立っているだけで精いっぱいだったのだ。後頭部を強打したのだから無理もない。

「ナンスカ！　ナンナンスカ！」

チームムーミンの勝利に会場が大いに沸き上がっている。倍率二〇倍の大番狂わせが見えてきたのだ。

『なんと、なんと！　チームムーミン！　最初の難関、擬似シリウスステージを突破しました！』

ミソラの興奮に、さらに輪をかけて興奮するルナが実況する。そ

れもそのはず、チームプリンス・ジャックとチーム流れ星の様子を映し出す、エアディスプレイがとんでもない事態を放映しているのだ。

『ちょっと、ミソラちゃん！　こっちの二つの塔も大変なことになってるわ！』

『わー！　これは、スゴイよ！　ルナちゃん、エリアちゃん！』

ミソラはルナとエリアの肩をゆすって、事態の凄さと異常性を伝えようとしている。それほどに超絶展開なのだ。

『コラコラ、ミソラ、ゆするんじゃない。でもでも、ワオって感じ！？　こいつは驚いたわ！　あの大吾とかいうオジサンときれいなジョーカー最強すぎ！』

さすがのエリアも驚いている。

そして事態の展開をルナが実況をする。

『これは、信じられません！　二つの塔でチームプリンス・ジャックと流れ星を待ち構えていた二体の擬似高次電波生命体！　通称、レギオン！　その二体である、第一のレギオンの擬似ヘラ・ローズガーデンと第二のレギオンが一瞬でデリートされました！』

第一のレギオン、ヘラ・ローズガーデンとは、半年以上前に起きた、連続誘拐事件の犯人の事だ。その時は、地球のサラハラ砂漠より、スバルが変身したシューティングスター・ロックマンとミライが変身したトラスト・レイダーの二人によって倒されている。その戦闘周波数は３６２万メガヘルツである。まさに化け物。

第二のレギオンとは、ヘラ・ローズガーデンの後に地球にやってきた高次電波生命体である。その戦闘周波数は５４７万メガヘルツ

でヘラ・ローズガーデン以上の化け物と言える。
その二体を擬似的な再現データであるとはいえ、一瞬で沈めたのだ。大吾ときれいなジョーカーさんは、まさに化け物以上だ。

『大吾さんのカイザーナックルが擬似第二のレギオンを一撃で沈めました！　きれいなジョーカーさんのグレイブメテオレーザーが擬似ヘラ・ローズガーデンを消し炭にしました！　この二人は一体何者だ！？』
「父さんスゴいよ！　何だよ、今のパンチ！」

父の凄まじさを改めて実感中。

「さすがです大吾さん。どうやら、俺の出番はなかったようですね」

ミライは、第二のレギオンからゲートパスキーを抜きとりつつ言った。

「やるわね、きれいなジョーカー」

別の塔のキャットスーツハートレスさんが言う。体のラインは滑らかであり柔らかくもある曲線で一杯だ。

「私のグレイブメテオレーザーはどんな悪党も分子レベルまで分解するのだ！」

きれいなジョーカーさんは腕を組みながら言っている。
グレイブメテオレーザーとは、きれいなジョーカーさんの両腕の内臓ノイズ制御システム、ジョーカーＰＧＭに極限までの最高純度ノイズを貯め込みそれを一気に放射すると言う荒技だ。威力はカイザーナックルの十分の一程度だが、その広大な範囲攻撃で、戦略級

なシステマティックパフォーマンスを可能としている。

『ボスラッシュタワー第一の階層！　全チームがクリアしました！　これは素晴らしい展開になりましたね。解説のクインティア先生！？』

ルナがクインティア先生に振る。

『ええ確かに……、でも次の最終階層には、とんでもない輩が待っているわ！　その戦闘周波数は脅威の１８２４万メガヘルツ……！　以前に倒してきた、第五までのレギオンやＷ．Ｗ．Ｒの電波人間も待ち構えているハズよ……！』

『なんと、解説のクインティア先生によると第二階層にはさらに強力なモンスターたちが待っていると言うのです！　これは目が離せません！

それでは今企画の発案者！　エリアちゃんに質問したいと思います。ズバリ、エリアちゃんが予想する優勝チームは？』

『うーん、迷うなあ……。グリーンボンバーのチームムーミンか……。カイザーナックルのチーム流れ星か、グレイブメテオレーザーのチームプリンス・ジャックか……。

……うん、決められないわ！　まあ、全員病院送りかもしれないし、全員優勝するかもしれないし、私が面白ければそれでよし！』

『……だ、そうです！　要するに目が離せないってことですね！』

『ルナちゃん、ルナちゃん！　あのエアディスプレイ見て！　これはやばい事になってるよ！』

ルナの隣で、ミソラがチームプリンスジャックのエアディスプレイを指差している。大騒ぎだ。クワドラプルヒロイン達がやいのやいのとやっているうちに、チームプリンス・ジャックが第二階層にたどり着いたのだ。

そして、きれいなジョーカーさんはボロボロの滅茶苦茶にされている。肉弾戦できれいなジョーカーさんを圧倒するとは何て言う高次電波生命体なのだろうか。

『ああーっと！　チームプリンス・ジャックのジョーカー選手がボロボロにやられているー！　私たちが目を離した間に一体何が……！　ではでは観客席のうっかりシゲゾウさん、状況の説明をお願いします！』

シゲゾウは観客席で孫と白熱していた。それはともかくとして、うっかりシゲゾウという人物は、昔、ＷＡＸＡ　で働いていた人の事だ。それも、それなりのお偉いさまで、何を隠そう、宇宙ステーション『きずな』プロジェクトに携わっているほどの人物なのだ。

そんなシゲゾウさんは、今は隠居して孫達と平和に暮らしている。因みにシゲゾウはＦＭ星人襲来事件の時にスバルに力を貸してくれた人物でもある。シゲゾウは、それなりに重要な人物なのだ。

そして、ボケているシゲゾウは少しの時間をおいて語りだす。時間差攻撃だ。

ちなみに、お年を召したシゲゾウさんにマイクをあてがうのは、報道が命の真実を追い求める美少女。テンキュウ高校三年生、新聞部所属、五人目のヒロインこと六角（ろっかく）キミドリさんだ。

彼女は肩から一眼レフをぶら下げたとても可愛らしい人物である。とても子供っぽい人物である。老人にも優しいのである。

「ささ、シゲゾウさん！　マイク準備しましたよ。ルナっち達に今、何が起きたのか教えてあげてよね」

「ふぁ？　ふぁふぃふぁ、ファファフィファファフィファファフファホ」

シゲゾウさんは入れ歯を忘れてしまっている。これは一大事だ。

『これはいけません！　なんと、シゲゾウさんが入れ歯を忘れてしまっているぞー！　キミドリさん、入れ歯をマテリアライズしてください！』

ルナはしなくてもいい実況をしている。天然でツンデレとは、何気に最強だ。

「よし、分かったよ、ルナっち。マテリアライズ、入れ歯！」

すると、シゲゾウさんの口の中が黄金に輝きだし、金色の入れ歯がマテリアライズされてきた。シゲゾウさんの口の中は真夜中のディスコクラブの如く燦然と輝いている。孫がビビっている。

「ファファファフフィファ！」

そして入れ歯が完成しきった。

「オオ！　忘れておった入れ歯が復活じゃ！　ありがとう、謎の少女よ！」

「いえいえ。ところで今、ジョーカーさんがボコボコのぐちゃぐちゃにやられていますが、いったいどうしたんでしょうか？」

「奴は、知っておるぞ。第四のレギオンでずっと前にシューティングスター・ロックマンにやられたハズじゃった……」

どうやら、第四のレギオンがジョーカーを圧倒しているらしい。第四と言うだけあって、ヘラ・ローズガーデンより、ずっとずっと凶悪に強いのだ。その戦闘周波数は１８２４万メガヘルツ。きれいなジョーカーさんで、どうにかなる相手ではない。

「シューティングスター……、ってことは、ずっと前にスバルンにやられたハズなのに、復活したんですね！　ではでは、ジョーカーさんは一体どうして、ああなってしまったのでしょうか？」
「純粋な殴り合いじゃよ。じゃが、きれいなジョーカー殿のパンチはアイツにとっては、そよ風が撫でるようなものじゃ！　効くわけがない！　ゲームオーバーじゃな」
「そ、そうなんですか……！　何て恐ろしい高次電波生命体なのでしょう！　以上、うっかりシゲゾウさんと六角キミドリでした！」

元気よくキミドリは手を振っている。シゲゾウさんも振っている。仲良しだ。

『な、何と言う事でしょうか！　チームプリンス・ジャック！　最強で最悪の敵に当たってしまったー！　擬似電波体とはいえ、今、調べたところによるとオリジナルの戦闘周波数が銀河級の１８２４万メガヘルツとあっては手も足も出ないでしょう！　これは大変な事になりましたっ』
『ちょっと、待ちなルナ！　チーム流れ星も大変なことになっているって！　あの最強の大吾さんが手も足も出せずに、一方的にやられているぞ！』

エリアの言う通り、エアディスプレイの中の大吾はいつの間にか瀕死になっている。きれいなジョーカーさん同様、死に体だ。
それもそのはずだ。チーム流れ星の敵は、大吾の妻でスバルの母親である星河あかねの姿をしているのだ。
これは手が出せない。中身は違うと分かっていても、手が出せないのだ。

「グ……、まさかこんな敵に当たるとはな……」

「ヒャッヒャッ！　こいつは最高だぜ！　あの星河大吾をなぶり殺しに出来るんだからな！　おっと、間違った、出来るんですから、オホホホホ」

あかねさんの姿をした、精神的に真っ黒なあかねさんは、とてもお下品な笑いを響かせる。

「くっ、こんな母さんの姿をされてたんじゃ……！　手が出せないよ」

スバルも悲鳴を上げた。第二階層は鏡面迷路となっていて、どこもかしこも真っ黒なあかねさんで一杯だ。

母親が大好きなスバルもこれでは参ってしまう。

「こいつは、以前ノイズウェーブで戦った事のある奴だな……」

ミライはずっと前にスバル達と一緒になって、この真っ黒なあかねさんと戦った事があった。

その時の奴の名前は、アルゴル・ミラーと言う名の電波人間だった。アルゴル・ミラーの当時の戦闘周波数は６６万メガヘルツと、高次電波生命体に比べて大して強くはないのだが、その卑怯極まる戦法でミライ達を苦しめたのだ。

「大吾さん！　こいつの中身は極悪非道なただのＡＭ星人の生き残りです！　アナタのカイザーナックルなら一撃で仕留められるはずですよ」

ミライの冷静な分析の結果だ。

しかし大吾とてそんな事は分かっている。分かっていてもどうしようもないこともあるのだ。スバルとて同じだ。

ここはミライがどうにかするしかないのだろう。

「仕方ない……。ここは俺が何とかするしかないな」

するとミライは壁の鏡を、手袋をしている左手で力の限り、叩き割った。

鏡の破片が完全に砕かれた金管音と、破片が地面に落下した時の同じく金管音とがハーモニーとなって鏡面迷路に鳴り響く。そしてミライはその破片群の中でも十分鋭利で大きさのある鏡の破片を手に取る。

鏡で作った即席の短刀だ。ミライは取っ手も切っ先も刀身も全部が全部、鋭利な刃物となっている短刀を強く握りこむ。手袋をしているおかげか、ミライの左手からは血が流れてこない。

「大吾さん、スバル！　悪いな……！」

軽く頭を下げて謝ると、ミライは真っ黒なあかねさんことアルゴル・ミラーに突っ込む。一見、馬鹿正直だが、ただ真っすぐ突っ込むだけで十分だ。

ミライはアルゴル・ミラーの行動パターンを熟知している。

「ミライ君！？　私にそんな鏡の破片を向けて何をするつもりなの？　おばさんに、それをかざしてどうしようって言うの！？」

「突き刺すのさ……！　思いっきりな！」

ミライの決め台詞だ。カッコ付けたつもりはない。自然とこうなるのだ。

会場が沸きに沸き上がる。ミライの動向に目が離せないのだ。

「ちょっ、アナタ本気？　止まりなさいったら」

「終われよ……！　お前」

ミライの鏡の短刀がアルゴルミラーの腹部に深々と突き刺さった。流石に、普段からトラスト・レイダーとして剣をさばいているだけあって見事な突き刺し方だ。

アルゴル・ミラーの腹部から電波情報がとめどなく噴き出す。

『決まったー！　彩道ミライ選手、擬似アルゴル・ミラーをデリィート！』

ルナがアルゴル・ミラーの最後をコールすると、会場はミライコールで一色だ。

鏡面迷路の中で、ミライに貫かれたアルゴル・ミラーは、うるさい外野をよそにミライを睨みつける。その姿はあかねから徐々に姿を変えていくのだ。

そして、ある一人の男性に変わる。

「ミライ……！　まだ私の事を許してはくれないのか？」

アルゴル・ミラーはモノクルを付けた中年男性に姿を変えた。ミライはその姿を見るとすぐに後ろに逃げた。恐ろしくて逃げたのだ。あのミライが恐ろしくて逃げたのだ。

「ミライ君……？」

スバルも不思議に思う。ミライのあのような姿は初めて見たのだ。

「やめろ……。その姿で俺を見るな……！」

ミライはアルゴル・ミラーをにらみ返す。するとアルゴル・ミラーはにっと笑って、また別の姿に変わる。今度は女性だ。見た目は二十代の後半と言ったところか、美しい姿が目を奪う。

「ミライ……、あの時の事を忘れないわよ……。アナタだけ、アナタだけ……」

女性は恨めしそうに、ミライの事を見つめてくる。いや、ミライにとっては睨み殺されるような心境なのだろう。

「うっ、クッ……。やめろ、やめてくれ！　そんな目で見るな……！　ボクをそんな目で見ないでくれ……よ」

ミライはうずくまってしまった。いつものミライではない。スバル以上に弱々しい少年の姿しか見られないのだ。

『なぜか分かりませんが、ミライ君はうずくまってしまいました。ですが、チーム流れ星！　最終ステージ進出！　塔の頂上まで登ってください』

チーム流れ星はミライのお陰で何とか最終ステージまで残ったのだ。

チームプリンス・ジャックは第四のレギオンに手も足も出せずにリタイアしてしまった。

チームムーミンは、第三のレギオンをグリーンボンバーを駆使して何とか倒した。しかし、その際、残念ながらアガメさんはグリーンボンバーを連発しすぎたためにぎっくり腰を引き起こしてしまった。リタイアだ。

「な、なんとか勝ち上がったみたいだね。……ミライ君、大丈夫？」

スバルは優しい。うずくまっているミライに手を差し出している。

「いい……、俺はリタイアだ。吐き気が止まらない」

「スバル悪いが、俺もリタイアだ。あかねに手酷くやられちまってもう立ち上がる事が出来ない」

「ミライ君、父さん。そんな……、僕一人なの？」

「そうだ、頑張れよ。スバル」

「手を抜いたら許さないぞ、星河……」

どうやら、スバルは最終ステージを一人で臨まなければならないらしい。残ったチームは流れ星とムーミンだ。

スバルとソロはそれぞれの塔の最上階に向かう。

『どうやら、最終ステージに進出する選手が決まったようですね。この結果、どう見ますか、エリアさん？』

放送席のミソラがエリアにマイクを差し出す。

ex：ゴールドレコード2

『フフ、あの大吾さんときれいなジョーカーさんがリタイアしたのは正直驚いたわね。でも、面白い結果になってきたと思わないか？　ムー人でロックマンの永遠のライバルである孤高のブライと、それとは対照的な世界のヒーローでキズナを大切にするロックマンの一騎打ちが見れるなんて、ワクワクしない？　するよね？　私はするわ！』

『ちょっとちょっと、ロックマン様とブライの一騎打ちってどういう事よ？』

ルナがエリアに向かって身を乗り出す。クインティア先生が、優しくルナを席に戻す。

『フッフッフッ、ルナ！　アンタの考えてる通りだよ！　最終ステージは残った選手のサバイバルバトル！　だけど残ったのがスバルとソロだけとなっちゃ、一騎打ちってことになるわけよ！　もちろん電波変換オーケーの真剣勝負よ！　さあ、会場の野郎も淑女も紳士も、お手元のボタンでどっちが勝つか予想して、キズナ力を賭けなさい！　アッハッハッハ！』

エリアがそう言うと会場の観客が不平を申し立てる。今まで、チームムーミンと流れ星に賭けていた観客が怒ってしまうのだ。ブーイングの嵐だ。

特にチームムーミンサイドの怒りは凄まじい。数は少ないくせに暴動騒ぎを引き起こす。

ラプラスがブチ切れたのだ。

「アウウアウァァアッゥゥゥウァアア！！」

ラプラスはウインナー一年分の夢を諦められないのだ。孤高の引っ付き電波生命体のくせに、大量のキズナ力をどこかしらから賭けているらしい。

『あー、うるさい。分かったから、分かったから！　元からその二チームに賭けていた観客達は賞金一〇倍にしてあげるからそれで黙りな』

観客は黙った。ミソラが最終ステージの実況に移る。

『何とか、観客の方々も落ち着いたようですね！　では、塔の頂上の様子を映し出している特設エアディスプレイをご覧ください！』

エアディスプレイに映っているのは、超高層建造物の頂上だ。そして二つの塔の頂上の出口から、ソロとスバルが出てきた。頂上は円形状の狭いスペースとなっている。地上一〇〇〇メートルに浮かぶ孤島のようなものだ。

そして、円形状の足場のほかには電波の道ウェーブロードが流れており、迷路のように入り組んだ足場となっている。三次元空間に展開される複雑な蜘蛛の巣のようなものだ。

スバルとソロはまるで空中に浮かぶ孤島に立って向かい合っている。

その二人の周りを、蚊みたいな見た目の高性能ライブ中継ウィザードの『ゲキシャサン』が飛び回っている。そうやって、エアディスプレイに映像電波を送っているのだ。

「フン……、やはり、最後にお前が俺に立ちふさがるんだな……、ロックマン」

ソロは言った。とてもライバルらしい台詞だ。

『何と！　ソロ選手！　いきなりのライバル的発言だー！　かなりカッコいいぞ！』

地上一〇〇〇メートルを飛んでいるゲキシャサンから、ミソラの声が流れてくる。どうやらゲキシャサンは入出力対応のウィザードのようだ。

「だまれ……」

ソロは怒りを吐きだした。

「ソロ……。今、僕は思い出しているよ……。一年以上前にＦＭ星のウェーブロードで戦った時の事を」

スバルが言っているのは、メテオＧの事件の直後に、ＦＭ星を襲ったブラックホール事件の事を言っているのだ。

その時、ソロの変身した姿であるブライはシューティングスター・ロックマンに立ちふさがったのだ。場所はブラックホールサーバー手前のＦＭ星のウェーブロードだった。

そのブライは、ムーの遺産であるムーメタルをシリウスから奪おうとしていたのだ。しかし、ロックマンはＦＭ星を守らなければいけなかった。二人は相容れなかったのだ。

そして、二人は戦った。結果はシューティングスター・ロックマンの勝利で終わったのだ。だからブライはムーメタルをシリウスから回収できずにいた。

「……、俺も思い出してたところだ。あの時はお前に負けてムーメタルを回収できずにいたが、今回はそうはいかない……！」

「僕だって、超高性能電波望遠鏡が欲しいんだ。それに父さんや、ゴン太や、ツカサ君、ミライ君の分まで戦わなきゃいけないんだ。退く訳にはいかないよ」

スバルは額のビジライザーを装着した。本気であることがうかがえる。ソロとて本気だ。そろそろ、白黒ハッキリさせなければいけない頃なのかもしれない。

「いいだろう。戦いはいつでも勝った方が正義だ。俺とお前、孤高とキズナ……、どっちが正義かはっきりさせるか……！」

ソロも構えた。いつでも戦えるという事だ。塔の頂上で向かい合う二人の間には緊迫した空気が立ち込めている。

『準備は良いようですね……！　では、最終ステージ、スカイタワーより……ラスト・ウェーブバトル始め！』

ミソラの合図とともに、二人は電波変換の構えを取る。

スバルはトランスコード００３認証データをハンターに流し込む。

ソロは孤独な周波数を持つ、孤高の闇を自分の体に集めていく。

エアディスプレイを見守る観客も静かに見守っている。爆発の前の静けさだ。

「トランスコード００３！　シューティングスター・ロックマン！」

「電波変換　ブライ……！」

スバルは緑色の光に、ソロは赤紫色の闇に包まれていく。そして、光の球体と、闇の暗黒が徐々に膨らみ、一気に炸裂した。

その中から現れたのは、流星の戦士、シューティングスター・ロックマンと孤高の戦士、ブライだ。

青と黒の電波人間が姿を現すと、会場は静けさの分だけ余計に爆発した。伊集院アイランドが揺れている。ものすごいエネルギーだ。

『とうとう姿を現しました！　我らが英雄、シューティングスター・ロックマンです。その圧倒的な戦闘センスで数々の危機を救ってきました。最強でいて心優しい戦士の登場です！　その戦闘周波数は１４７万メガヘルツ！　まさに地球最強だ』

ミソラの実況をはさむと会場に割れんばかりの声援が鳴り響く、炸裂する爆発する。ロックマンの人気はとどまる所を知らない。世界の英雄の姿に、興奮し勇気を貰っているのだ。

『そして、ロックマンと相対するのは、謎の電波人間ブライです！　敵か味方か分からないけど、その冷たい感情と、それに相反する熱き闘志を持つロックマンの永遠のライバルです！　その戦闘周波数は脅威の５１６万メガヘルツだ！　孤高の力ここに極まる！」

ブライの実況に対しても、会場は意外なほどに沸いている。それもそのはず、二二ＸＸ年一月一日現在では、ブライはロックマン同様の英雄的扱いを受けているのだ。孤高ながらも、皮肉にも英雄になっているのだ。

そして天空でにらみ合う二人だったが、スバルが先に仕掛ける。左腕にはソードをインストールしていた。

「行くよ、ブライ！」

「いいだろう。……来い、ラプラス……！」

ロックマンが巨大エアディスプレイから消えた。ラプラスを手にしたブライも消える。

そして画面では金属が身を削り合う音だけがけたたましく鳴りだした。ものすごい速さのテンポだ。聞くだけで疲れるその音のテンポは、二人の超人的な戦いの効果音にはふさわしい。

『なんとロックマンがとブライが画面上から消えました！　これは一体何が起きているんでしょうか！？』

ミソラのマイクがクインティアに向かう。

『これは電波人間の戦いよ……。これぐらいのスピードなんて当たり前だわ。彼らはもっと速くなるはずよ。良く聞いて、剣同士が弾きあう金属の音を……』

『これは……。スゴイです！　音が一つになってしまいました。観客の皆さまお分かりでしょうか！？　このパイプオルガンのような音を……！』

アイドルであり、アーティストでもあるミソラは興奮を通り越して絶叫している。

会場を、高い音程の涼しげな音が鳴り響いているのだ。途切れることもないのだ。二体の電波人間のあまりに速い剣術合戦に音が追いついていない。

「クッ、やっぱりブライは強い……！」

ブライとロックマンは円形の孤島から離れて、縦方向に走るウェーブロードに張り付きながら、剣での切り合いを繰り広げている。しかも、その二人の体勢は地面に対して並行だ。足の裏が地面に対して垂直だ。重力に逆らって、電波人間独特の芸当を繰り広げているのだ。

壁に張り付いたような格好になっている。蜘蛛のような電波人間

だ。そしてブライが上に立って有利に戦闘を進めている。
二人は相手の剣をかいくぐり、抜け出し、出し抜く。そして、右にあったと思ったら、いつの間にか左にあるというような神出鬼没な神速の剣を交わし合い、突き刺し合い、交戦する。
そうやって、蜘蛛の巣のように張り巡らされたウェーブロードを縦横無尽に駆け巡る。人間の目に見えるないわけだ。

『へへッ、やっぱバトルはそうこなくっちゃな！　シャキッとしやがれ、スバル！』

スバルとは対照的に、ウォーロックは楽しそうだ。ウォーロックは戦いの中に喜びを覚える。

「わ、分かってるよ……！」

ロックマンも、ブライに食らいつく。ブライの剣術の腕はロックマンより上だ。ここは堪え所なのだ。
スバルでさえも、ブライの腕と剣が何本にも増えて、同時に襲いかかっているように見えるのだ。

「どうした！　ロックマン、お前はこんなものだったか？　一年の間、お前は遊んでいたのか？」

ブライは止めと言った様子で、ラプラスプレートをロックマンに叩き落す。必殺技だ。

「ブライブレイク！」
『おおーっと！　姿を見せたかと思うと、ブライの強烈な一撃がウェーブロードをちぎって破ったー！　ロックマンは無事なのでしょうか！？』

ミソラの言う通りの光景が繰り広げられる。
ロックマンのソードを叩き折り、上空に吹きとばされたロックマンごと、辺りのウェーブロードが引きちぎられた。爆音が天空に鳴り響く。こだまする。
二体の電波体は足場を失い空中遊泳中だ。
観客はじっと見入っている。

「……ふん」

ブライは空中で落下し続けるロックマンに目を落とす。ロックマンの胴体には一文字の大きな傷が付いている。傷口から電波情報がとめどなく流れている。しかし、何とか致命傷は避けているようだ。傷口は心臓情報のある位置より少し右にそれていた。ウォーロックアタックの勢いで少しだけロックマンが右に逃げたのだ。

「こんなものじゃないだろ。ロックマン……」
「当然……！」

まだ、やられていなかったロックマンは、空中で落下し続け、身動きの取れないブライに向かって、ロックバスターを連射する。
ブライはラプラスプレートで、ロックバスターを弾く。そう簡単には当たってはくれない。
すると、下を行っていたブライが先に足場に着地した。ロックマンが圧倒的に不利になった。
空中を自在に走っているように見える電波人間も所詮は空中に浮かぶウェーブロードを走っているだけなのだ。言わば、蜘蛛みたいなものだ。
故に今のロックマンは身動きが取れない。

「ロックマン……、これで終わりだ！　オーパーツ、ベルセルクプレート！」

『なんとなんと、ブライ選手！　必殺の一撃の準備を始めたぞ！　ロックマン、絶体絶命！』

ブライのラプラスプレートが電撃を帯びた大剣、ベルセルクプレートに変化した。超高圧電流が、ベルセルクプレートに集まっていく。

「さすが、ブライ。一年前とは比べ物にならないや……。でも僕も、それは同じだよ」

ロックマンが空中で頭を押さえる。何かをするつもりだ。

「フン、戯言だ。俺の方が強い！　ただそれだけだ。喰らえ、ライトニングボルトスマッシュ！」

ロックマンに高圧電流の塊が襲いかかる。

「確かに君は強い！　でも、孤独なその力はすごく弱いんだ！」

ロックマンの目が赤く光り輝く。

「ラーニングレギオン！　プラントロード！！」

目覚ましく輝くロックマンの周りに薔薇の幹のようなものが生えてきた。それがロックマンを電撃から守る。

「何だ……？　それは？」

ブライは、異質な姿へと変わったロックマンを見上げる。ブライはこんなロックマンを見たことがなかった。世界はこんなロックマンを見たことがなかった。

その姿は、半年以上前に戦ったヘラ・ローズガーデンのような姿をしている。紫色の体でバラの花を従えているのだ。ロックマンも一年間遊んでいたわけじゃない。

「僕は、ロックマン・プラントロード」

「そうか……！　面白くなってきたな……！」

ブライは満足げに笑みを浮かべる。絶対強者との命の語りあいによって、ブライの背筋に心地の良い戦慄が走ったのだ。

ミソラ達も観客もロックマンの新しい姿に魅せられていた。その神聖でさえもある姿に、不思議と宇宙の神秘を感じていたのだ。

『なんと、ロックマンが新たなる力を解放しました！　あんなロックマンは見たことがありません！　何なんでしょうか！？　ラーニングレギオンというのは？　急遽放送席にやってきてもらったヨイリー博士に解説してもらいたいと思います！』

『よくぞ聞いてくれました！　『Ｌｅａｒｎｉｎｇ　Ｒｅｇｉｏｎ』……見た所、これは恐らく、以前戦った事のある電波人間から電波情報を受け取り、それを自身に順応させてその力を自分のものにするって言う事かしらね？　まさに学習領域って感じかしら。そして今、ロックマンはヘラ・ローズガーデンの担当領域を解放しているはずよ。その戦闘周波数は……約４２９万メガヘルツよ。……これは、とんでもないわ。

ロックマンは私たちの知らない、宇宙についての何かを得たのかもしれないわね』

ヨイリーの言っている事にミソラ達は首を傾げる。

『で、でもそんなことできるのでしょうか？　だったら私も……』
『答えはノーよ。出来るわけないじゃない、あんな事したら電波の情報が壊れて大変なことになるわ！』
『ま、まあ良く分からないけど。ロックマンは確かに、スゴイ力を隠し持っていました！　この勝負、まだまだ分かりません！！』

そしてエアディスプレイに移る二人は、激しい格闘戦を展開していた。ブライは純粋な力のみの拳で訴えてくる。対するロックマンは、ヘラ・ローズガーデンの力を継承した姿、ロックマン・プラントロードとなって、圧倒的なエネルギーを薔薇の剣に変えてブライにぶつけていく。今のロックマンはまごうことなき、高次電波人間だ。対するブライも単体として高次電波人間たる周波数を誇っている。この勝負は長引きそうだ。

「久しぶりに本気の戦いが出来そうだ……！」

ブライは、この極限を楽しんでいるように見える。根っこの所ではウォーロックとソロは似ているのかもしれない。
次の瞬間、ブライはロックマンの懐に飛び込んだ。凄まじい瞬発力だ。そして、ロックマンのローズソードに貫かれるかもしれないと言うのに、何という度胸と勝負勘だろうか。
ロックマンのローズソードは懐に張り付かれては威力を発揮できない。

『後ろに逃げろスバル！』
「間に合わ――」
「ネオブライアーツ！」

右ストレート、流れる動作から後ろ回し蹴り、逆足でさらにかか

と落とし、この時ロックマンの意識が揺れた。うなだれた頭に飛び膝蹴り、さらにアッパーカット、するとロックマンの体が宙に浮いた。ロックマンの口からは赤い架け橋が放物線を描いていく。最後にその上から、ブライブレイクを叩きこむ。放物線の架け橋とロックマンを叩き潰すのだ。

ウェーブロードは成す術なく、紙のようにちぎられた。ロックマンはロケットの如く地面に向かって落下していく。ブライも地上までロックマンのお供と言いたげに追撃を開始する。

『へっ、重い一撃持ってるじゃねえか！！』

左腕のウォーロックが言った。その声色は相手への賛辞の色合いだ。

当のスバルは何とかして落下を止めようと、塔の外壁に張り付いて勢いを殺す。当然、上空から迫ってくるブライに、ロックバスターを乱射するのも忘れない。

ブライは器用にバスターをベルセルクプレートで弾く。もうこのブライにロックバスターは効かないのだろう。

「ブライ……！」

ロックマンは厳しい表情でブライを見上げる。

「こうなったら、奥の手だ！」

ロックマンはブライに手をかざす。

「ちょっと時間がかかるけど……これしかないな」

ロックマンの手のひらから、薔薇の電波情報がとめどなく流れだ

し花弁となって、辺りを真っ赤に染める。

「何だこれは？　気の利いた挨拶だな」

ブライもベルセルクプレートに電撃を溜めこむ。辺りの上空に雷雲を発生させて、真っ赤でどす黒い世界を二人して作るのだ。

『何でしょうか!?　これは一体！　辺りが雷雲で薄暗くなってきました！　しかもタワーの上空では赤い霧のようなものがかかっています。ここからでも肉眼で確認できます！　アレは一体何でしょうか？　謎が謎を呼んでいます！』

ミソラにクインティア先生が続く。

『あそこの辺りから、スゴイ電波エネルギーを感じるわ。何となくだけど……』

『なんと、クインティア先生が何となく危険を感じています。これは危険です！』

ミソラが言い終わるとすぐにブライが仕掛ける。

「ライトニングボルトスマッシュ！」

ブライの大剣が超弩級の雷を降らした。これを貰うと、真っ黒で新鮮な黒炭になってしまう。

「コスモフォースビッグバン！　ブラッドカーテン！！」

ロックマンの赤い花弁が、竜巻となってブライに襲いかかる。赤いカーテンのようになった花弁の竜巻がブライを覆い隠してしまっ

た。
そして、ブライの雷がロックマンをのみ込む。
『ロックマンとブライ、どちらも必殺技を真正面から食らってしまったー！』
赤い薔薇の花と一緒に、ロックマンとブライは地面にたたきつけられた。こうなったら、どちらが負けてもおかしくない。
『さあ、どちらが先に立つのでしょうか。先に立った方が、これはもう勝ちと言ってもいいでしょう！』
数時間後。激闘は終わり、スバルはいつもの服装から着替えて、また袴姿になっていた。ソロも空気を読んだらしく袴姿だ。
流星の間に戻った一行は、再び楽しそうに新年宴会を行っている。きれいなジョーカーさんと大吾が男の美学を語り合っている。きれいなハイドは、ムーの電波体たちと楽しく可笑しく、次の脚本を練っている。
ハートレスさんとあかねは、昔の思い出を、アガメさんとゴン太は今は亡きゴンターガ様のことを語っている。
ウォーロックもＦＭ星人の仲間たちと昔の思い出に浸っている。
まるでさっきの激闘が嘘のように、穏やかな時間だ。
様々な仲間たちが、スバルの周りにいる。スバルが小学六年生になって、もう九ヶ月は経つ。スバルもあと少しで中学生だ。ここにいる仲間たちといつまで一緒にいられるのか分からない。でもスバル達は大人になっていく。

だからスバルは、今の時間を大切に思えるのだ。もっと強くあろうと思えるのだ。輝かしい未来を築いていくために、今を精いっぱい生きていけるのだ。

「大丈夫？　スバル君」

皆の様子を見守っていたスバルにルナが話しかけてきた。

「大丈夫だよ。僕より、ソロの方が強かったってだけのことだから」

「ちがう、ちがう！」

ルナはスバルの頬をプニプニと突っついてくる。そのスバルの頬には大きくてワイルドな傷が出来上がってしまっていた。これは一生ものの思い出になるだろう。

「や、やめろって……！」

「何でほっぺに、こんな大きな傷付けてるのよ！！」

ルナはムスッとしている。

「私のロックマン様の顔をキズものにして……、バッカじゃないの！？」

「仕方ないだろう。気が付いたらこんなの……って、僕の方がいい迷惑だよ」

スバルはご立腹。無理もない、ただ電波望遠鏡が欲しかっただけなのに、こんなにでかい傷をつけられてしまっては割に合わないのだ。

そこに、ミソラがスバルを呼びつける。

「スバルくーん。ちょっと、こっちに来てー」
「うん、分かった！」

スバルはルナから逃れるようにしてミソラの方に出向く。

「スバル君、そろそろこの新年会もお開きなんだ……」

ミソラは残念そうに言う。

「そうなんだ。……あっという間だったね」
「うん、今度はまた来年ね！」
「うん！　今年が良い年になるといいね」
「その為には、私がもっと素敵な歌を考えて、みんなを幸せにしなくちゃ！」
「スゴイよ、ミソラちゃん」
「エヘヘー」
「そこ何、楽しそうにしてるの！？」
「わ、委員長だ！！」
「ヤーい、スバル。モテモテだな！」
「からかわないでよ！　ジャック」
「ダメよ、ジャックからかっちゃ」
「そうだ！　ティアの言う通りだ。ほらうまい棒でも食え！　弟よ」
「誰が弟だー！」
「ハハハ！　楽しい家族になりそうだな！　シドウ君」
「大吾さんたら、シドウ君に失礼じゃないの？」
「ハハ、大丈夫ですよ、あかねさん。でもきっと大吾さんのような家族を作ってみますよ！　な、ティア？」
「もう……、よしてよシドウのバカ！」
「ヒューヒューお熱いねー、見せつけてくれるねー！　息子達よ！」
「ぐわー、ドクターキングが酔って人がおかしくなったぞー。裸で

踊るなよ、牛丼が不味くなるだろ」
「ヒューヒュー、ゴン太君、キミもいい体してるね」
「やめろードクターキング！　俺様は牛丼しか愛さないって決めてんだ！」
「え？　そうなの。私のことは牛丼以下だったんだね」
「ゲッ、アイちゃん。いつの間に」
「始めっからずっといたよ。出番はなかったけどね。でもこの振り袖、可愛いでしょ？」
「オオ最高だぜ！　牛丼の次くらいに可愛いと思うぜ！」
「もう、ゴン太君の牛丼馬鹿！」
「アハハハ！　ゴン太がアイちゃんにぶたれて、ノビたわよっ」
「委員長、笑い事じゃありません。急性の脳震とうを起こしたのかも……」
「そんなわけないでしょー！」
「あー、ルナちゃんがキザマロ君の頭をはたいたっ。ダメだってルナちゃんそんな事したら。キザマロ君のメガネが落ちちゃったじゃない」
「メガネ、メガネー、メガネはどこですかー！？」
「ギャッハッハッハ！　オイ、キザマロ目が3になってんぞー！」
「ポロロン、バカねウォーロック、アレはお約束ってヤツよ」
「ンフフ……ンフフ、私もあの輪の中に入りたい……」
「だったら、入ってみたらいいじゃない？　ハイド」
「ア、アナタはオリヒメ様！　どど、どうしたんですか！？」
「フフ、アナタとブラザーを結ぼうと思ってね……昔、ヒドいことしちゃったでしょ？　そのお詫びの意味も込めてよ」
「ああ！　何と言う奇跡！　私は今なら死んでもいい！」
「オイ、ツカサ。あのハイドとか言うやつなんで棺桶に入って行くんだ？」
「それはね、ジェミニ。ああやって外国の人は眠るんだよ。本当に面白い人だね、ハイドさんは」

「バッカ、何言ってんだよ、ツカサ！！　アレは棺桶に入っている間に火を点けてくれって言ってるようなもんなんだよ！！　ヒャハハ、ありゃ、ぜってえよく燃えるぜ！！」
「ＡＭ星を滅ぼしといて言うのもなんだけど、ヒカルそれはちょっとひどくないか？」
「そうですね！　ヒドイです！　私の愛のハリセンで更生させてあげますよ」
「グッ……ありがとう、モード。また僕はヒカルになってしまったようだね」
「気にしない、気にしない」
「久しぶりの登場！　ボク、ペディア！」
「ん？　今、何かの気配が……」
「ブロロ、どうしたんだ？　オヒュカス？」
「イヤ何でもない。晩酌でも注ごうか？」
「ブロロ、悪いな」
「アアウウアア……」
「何だい、キミは？　見ない電波体だね」
「アアウアゥアアウァァウウア」
「へえ、ラプラスと言うのかい。なに？　そこのウインナーが食べたいだって？」
「やめろ、ラプラス……・。他人に頼るんじゃない。俺をこれ以上イライラさせるな」
「アアウアァアァゥウア……」
「シュンとしてもダメなものはダメだ！　俺は甘やかさないからな」
「ちょっと、待った。皆の衆！　あそこの麗しき美少女が何か言いたそうにしているぞ！？」
「みんな、静かに！　ジョーカーさんが何か言ってるぞ！」
「さあ、みんなが静かになったぞ。言いたいことを言いたまえ。ミソラ嬢」
「ありがとう、ジョーカーさん。……じゃあ、みんな、残念だけど、

この新年会もここで終わりだよ。だったら、最後はやっぱりあの人にきっちり締めてもらいましょう！」
「誰だよ、あの人ってミソラちゃん？　やっぱり牛丼マスター、牛タローのことか？」
「そんな人物はいませんよ。ゴン太君」
「それは、決まってるでしょ。スバル君以外にだれがいるって言うのかな？　じゃ、スバル君こっちに来て」
「え？　みんなの前で……、恥ずかしいなあ」
「ヨッ、スバル君。顔におっきな傷つけて男らしさに磨きがかかったんじゃないか？」
「ハハ、やめてよ、天地さん。では、コホン」
「ちゃんと、しっかりやりなさいよ。スバル君！」
「分かってるよ、委員長。うるさいなー。……よし、え、えーと、本日は集まっていただき、ありがとうございました。
いつも見ている顔もあれば、久しぶりに見る顔もあって懐かしい気分になったりもしました。この一年はホントいろんなことがあったけど、みんながいたから乗り切れたと思います。
謎の宇宙人レギオンの襲来……、ＷＷＲの復活……、本当に困難な壁が僕達に立ちはだかりました。でもみんなの力を合わせたことによって、地球の平和を守り抜くことが出来ました。
僕一人じゃ、何もできなかったけど。みんながいつでも支えてくれたから……、グス……あの絶望的な状況から、地球を守り抜くことが……グス、出来たんだと思います。みんなのおかげで平和を勝ち取ることが出来ました。
ありがとう、みんな。本当にありがとう……。
あれ、僕は何を言っているんだろう。あはは、ゴメンナサイ……」
「頑張れスバル君！」
「オイオイ、二年弱ずっと一緒にいたが、お前、いつも以上に泣き虫になってねえか？」
「やだな、ウォーロック。泣いてなんかいないよ。でも君にはすご

く感謝しているよ。
　初めて出会ったあの日から、ずっと僕と一緒に戦ってきてくれて、挫けた時には僕の背中を押してくれて、僕は感謝しているんだ。僕がここまで強く生きてこれたのもキミのおかげだよ」
「へっ、よせやい。おれは戦いが好きなだけだぜ？　お前のことなんて、これーぽっちも考えてなかったぜ」
「ポロロン、ゴメンなさいねスバル君。ウォーロックてガサツで照れ屋だから、恥ずかしがってるだけなのよ？」
「テメェ、何言ってやがるハープ！」
「いいよ、ハープ。それくらい僕にも分かってるからさ。
　ウォーロック、みんな、ありがとう！　そして明けましておめでとう！　ここから僕達の未来が始まるんだ！」
「ヘンッ！　スバルのくせに仕切ってんじゃねえよ。まあ、地球の習慣も悪くはねえな！　明けましておめでとうだな！」
「ま、そういうことね。明けましておめでとう！　スバル君」
「へへ！　俺達の未来か、良い感じだな。明けましておめでとうだぜ、スバル！」
「僕のマロ辞典に、新たにスバル君という項目が出来ましたよ。明けましておめでとうございます、スバル君」
「私たちの未来をより良くするために、頑張っていこうね！　明けましておめでとう、スバル君！」

　そして集まってくれた皆がスバルに、『明けましておめでとう』と言った。
　スバル達は、この一年で大きく成長した。もう地球に危機が訪れることもないだろう。明るい未来に向かって突き進むだけだ。なぜなら、スバル達の未来を脅かす脅威などもう、どこにもないのだから。

　新年会も終り、スバルは心地の良い余韻を楽しんでいた。そんな

時、スバルはあるものに気がついた。流星の間の端っこにひっそりと古ぼけたビデオテープが置かれているではないか。
スバルはこのタイプのビデオテープを見たことはなかった。不思議に思って、スバルはそれに近づいてみる。

「何してんだ？　スバル」

ウォーロックはふらふらと、どこかに行くスバルを不思議に思った。

「ちょっと、そこにおかしなビデオテープがあるんだ」
「は？　何言ってんだ、お前？　そんなもん、どこにもねえじゃねえか」

ウォーロックには、そのビデオテープが見えていないのだ。ルナもゴン太もキザマロもミソラも見えていない。
スバルにだけ見えているのだ。そんな不思議なビデオテープに、スバルは近づいて覗き込んでみた。

「へっ、付き合ってられねえぜ。ブライの野郎にやられて頭でもやっちまったか」
「もういいよ、うるさいな。……うーん、これは、ホントに見たこともないタイプだな。しかも何か文字が彫られているし」

スバルは古ぼけたビデオテープを手にとって、掘られた文字を読んでみる。

「ア、ハッピー……ニューイヤー……２０１０、って彫られてるのかな。２０１０年て言ったら２００年前だ。今時タイムカプセル？
って、これ動いてる！」

スバルは少し驚いたようだが、好奇心の方が勝り、ビデオに自分を映してみる。ビデオの画面にはスバルの笑顔が映った。少年の抜けるような笑顔だ。

スバルは二〇〇年前の人達に送る気持ちで言った。

「明けましておめでとう！　２００年前のみんな！」

すると、不思議なビデオテープは黄色い薄っすらとした光に包まれて消えてしまった。その代わりなのか、スバルの手には一枚のバトルカードとメッセージカードが落ちていた。

「メッセージカードだ。『２００年後の人達へ。未来はどうなっていますか？』か……。

それじゃ、２００年前の人達へ。２００年後の地球はとってもいい所のままです。これは、ご先祖様たちのおかげだと思います。ありがとうございます……って、何言ってるんだろ、僕」

その時、ルナとミソラ達がスバルを呼んだ。もう、皆とお別れの時間なのだ。

「スバルくーん！　何一人でブツブツ言ってるの？　早く帰ろー」

「なんか変なことでもしてたんじゃないでしょうね？」

「し、してないよ！　何言ってるんだよ。まったく、もう。でも、まあいいや、みんな、帰ろう」

スバルは仲間達の元に向かう。ゆっくりと歩んでいく。帰るべき場所に帰るのだ。

不意にスバルが振り向いた。何もない方向に向かって一言だけ言

う。

「じゃあね。２００年前のみんなっ」

choswld―00：ウラ世界

アメロッパ、ヒュースポンのＷＡＸＡ本部をスバル達が訪れた日から一週間。二二ＸＸ年五月一一日金曜日。

スバル達は、オペレーションアポカリプスの任務でＴＫシティのノイズウェーブへ潜入していた。スバル擁するチームオメガは、ミライを除き今日が初めての任務の日だった。キミドリとゴン太は息巻いている。それはもう雄牛のごとくだ。しかし言うまでもなくキミドリは女だ。

「よっしゃー！　あれから一週間。記念すべき初任務だぜ！」

「よっしゃ、やってやるわよ！」

「ブロロ！　それにしても、ノイズウェーブってこんなところだったのか……」

オックス・ファイアとなっているゴン太は辺りを見回して見る。ノイズウェーブは当然のように辺りはのノイズだらけで視界は悪い。空間に走るウェーブロードも劣化してしまって足元が危ない。

ひたすらに暗い紫の闇空間が広がっていた。そんな場所なだけにキミドリが不安げにしている。

「ゴリラ君、私ってノイズウェーブに来るの初めてなんだよね……。ちょっと怖いかも……」

「ゴリラって言うな！　でも、高校生のくせにビビってんなよ。スバルとミライ以外は全員初めてなんだからよ」

「だって、コワいもんはコワいし」
「大丈夫ですよ。僕やみんなが付いてますから。ミソラちゃんや、ミライ君がいれば百人力です」
「俺は？　何気にこの中でも頼りになる男を自負してるんだけど……。ミスターパーフェクトのゴン太様を忘れてもらっちゃ困るんだぜ」
「ああ、ゴン太もたまには頼りになるよ！　でもそれよりも今日の宿題ちゃんとやったかい？　任務のある日だからって、サボっちゃダメだよ。ミスターパーフェクトさん」
「う、うるせえ！　今は関係ないだろうがっ」
「ハハ、スバルン面白い！」
「ブロロ！！　黙りやがれ、ビビり女！」
「やだ、二人ともケンカしちゃだめだよ？　ね」

ゴン太ごときに悪口を言われ、不満気にキミドリは頬を膨らます。キミドリが電波変換した姿はスコープ・スナイパーという電波人間だ。大型のライフル銃を携帯しているのが特徴的である。キミドリはＦＭ星人であるスコープと電波変換することによりこの姿になる。

しかし普段キミドリはスクープを撮るためにしか電波変換していなかったために、ノイズウェーブに来ることはおろか戦闘経験もあまりない。よって、なノイズウェーブに居心地を悪いものを感じる。

ゴン太とキミドリがそろそろケンカしそうになると、チームの先頭を行くソウル・レイダーが立ち止まる。さっきからずっと会話にも入らずに任務を遂行中だった。流石にチームリーダーだけはある。

「ここが例のポイントだな……」

ソウル・レイダーはエアディスプレイの地図に目を落としながら言った。ロックマンは、今回の任務について何か聞こうとソウル・

レイダーの地図を覗いてみた。

「ねえ、ミライ君。この場所で何かあるの？」

「ここのノイズウェーブで、ウラの情報屋と会う約束をしているんだ。ノイズウェーブを俺がＷｒｏｎｇ　Ｗａｖｅ　Ｒｉｄｅｒｓについて単独で調べている時にコンタクトした」

スバルは驚いた。本格的だなあ、と感心していた。他人ごとのようだがスバル自身、重大な任務を言い渡され、宇宙が危機にひんしていると知らされていた。

だが、ここ一週間は特に任務の要請もなく普通に学校に行っていたので実感に乏しかったのだろう。

「へえ、なんか怖そうな人だね」

「ああ、実際のところ犯罪者だ」

「うわ、やっぱりノイズウェーブって怖い所なんだね。さすがにウラの世界ってだんだん実感してきたよ」

ソウル・レイダーは呆れたようだ。

「何を言っている。こんな奴らはウラのまだ浅い方にいる連中だ。こんなものウラの世界ではまだまだ序の口だ。

おそらくＷｒｏｎｇ　Ｗａｖｅ　Ｒｉｄｅｒｓはもっと深い場所に潜伏しているはずだ。こんな程度で弱腰にならｒては俺が困る」

「そうだね。僕達がしっかりしないと……！」

ゴン太がそこで話に割り込む。ミソラとキミドリがガールズトークをし始めたので寂しくなったらしい。ノイズウェーブという場所がゴン太をすごく余計に寂しがり屋にしたのだ。

「なあ、なあ俺も話に混ぜてくれよ。ミソラちゃん達、ガールズトークしちゃって……」
「何というか、お前ら緊張感がないんじゃないか？　それになんでわざわざノイズウェーブでガールズトークを……」
「まあまあ、ミライ君。怒らないでよ」
「……ふう、こんなことではＷｒｏｎｇ　Ｗａｖｅ　Ｒｉｄｅｒｓに逆に倒されるんじゃないのか？」

　ミライはなぜか遠足気分のゴン太を見ていると頭が痛くなったようだ。しかし、ゴン太はまだまだ止まらない。

「なあなんでお前らさ。さっきからＷｒｏｎｇ　Ｗａｖｅ　Ｒｉｄｅｒｓってやたら長い名前で呼んでんだ？　普通にＷＷＲで良くねーか？」
「牛島……そんな事は別にどっちでもいいだろう？」
「いや、だって長いし。俺って英語苦手だから、何言ってんのか分からなくて、嫌なんだよ」

　ゴン太は、体は大きいが脳味噌は小さい。オックス・ファイアの状態ならそれはなおさらだ。
　しかしロックマンはそうでもないのに加勢する。

「たしかに長いかも……。僕はＷＷＲって呼んだ方が良い気がするな」
「そうか。お前までそんな事を言うのか……。俺がウラの奥地まで行ってやっと命がけで聞き出してきた思い入れの深い情報だったんだがな……」
「あっ、ミライ君。別に悪気があった訳じゃないんだよ？　ごめんよ」

今度はミソラとキミドリだ。長いのは良くないとゴン太に加勢する。

「ダメだって、リーダー。長いと連絡する時に無駄に時間をとっちゃうじゃん」

「わあ、たしかにキミドリさんの言う通りだ。ね、ミライ君もそう思うでしょ？」

「たしかに、それはそうかもしれないな……。これからはＷＷＲで統一しよう。うんそれがいい」

「うーん、リーダーって意外と話が分かるー！」

キミドリが馴れ馴れしくスキンシップをとりたがる。ミライはスキンシップが大嫌いなのでこれはもう大事だ。

「バカ。や、やめっ。俺に触るな！　ちょっと、やめろ。どこを触っているんだ、キサマ！」

『マスター……、なぜだか私は嬉しいです……。これが友人というものなんでしょうね』

レイダーは感無量といった心情なのだろう。しみじみと言っていた。

ｃｈｏｓｗｌｄ＿０１：ウラトーナメント

しかし、これ以上はさすがに許されない。しかもここはノイズウェーブ。おふざけは厳禁だ。

ソウル・レイダーはいち早くウラの情報屋の周波数に気が付いた。ロックマンもすぐに気が付く。ミソラも遅れて緊張する。後の二人は気が付かない。

「おい、六角やめろ。アイツが来た」

「ミライ君……、情報屋って……」

ロックマンは戦闘体勢をとる。

「まあ、予想はしていたが、流石に素直には情報を渡してはくれないらしいな」

目の前にはジャミンガーがいた。残りの一体の黒いコートの電波体を合わせると二人連れだ。しかしそのジャミンガーはなかなかどうして普通ではない。真っ黒で異常に強い周波数を持っているのだった。

「よう、ソウル・レイダー。約束通り来てやったぜ」

「そのジャミンガーは何だ？　ジャミンガーにしてはずいぶんと強いじゃないか」

キミドリを力づくでどかせたソウル・レイダーは剣の鞘に手をかける。ソウル・レイダーの戦闘体勢の型だ。

しかし、すぐに電波体は弁解する。

「おっと、待ってくれよ。おれはアンタとやり合うつもりはねーって。流石に俺じゃサテラポリスの白い刃には敵わないからな！」
「そうか、ウラでは俺はそう呼ばれているのか……。しかし、そんな事はどうでもいい。そいつをどけないと敵意があるとみなすぞ。敵意がないならお前だけでまた来てからＷＷＲの情報をよこすんだ」
ソウル・レイダーは剣をしっかりと握り込む。あくまでも脅しではないことを強調している。
「まあ、待てって。情報はくれてやるよ。しかし、そのまえに警告しておくぜＷＷＲって言葉はあまりウラじゃ使わない方が良い……。ノイズウェーブのどこで奴らの仲間が聞いているか分からないからな」
「フッ、警告には及ばないさ。奴らの方がこちらから接近するなら好都合、切り捨てるだけだ」
「なるほどね。やっぱりＷＷＲを倒すつもりかい……。近頃。ノイズウェーブをサテラポリスが嗅ぎまわってるって噂になってるからな。
でも、だったらなおさらこのジャミンガーを引っ込めるわけにはいかないな」
「それはどういうことだ？」
ソウル・レイダーはふに落ちない様子で問い詰める。
「何、俺の掴んだ情報によると、近々このウラ世界のどこかで大規模なトーナメント戦があるらしい……。
何でも噂によると、ＷＷＲが優秀な人材を集めて回っているらしいんだ。俺の予想だが、近いうちに奴らがとんでもない事をしでかすと思うぜ？」

「そんなトーナメントに興味はない……。それにそのジャミンガーが何の関係がある？」

クックと電波体が笑う。

「アンタ達、ＷＷＲを倒すんだろう？　はっきり言うが、あいつらウラじゃ知らない奴らがいないほどの過激な武闘集団だ。なんでも宇宙中駆けずりまわって、戦力を蓄えているらしい。だが、そんな有名なあいつらのアジトを見つけた奴は誰もいない。だってそうだろう？　宇宙全域のどこでもアイツらは活動しているからな。宇宙中を探し回らなきゃ見つかりっこないのさ。まあ、そんな命知らずな奴いないだろうがね」

「なるほど……な。しかしそんなことで諦めるわけにはいかないな……」

電波体がまた笑う。

「だが、さっきも言ったようにＷＷＲは何故か戦力を集めている。そして、このトーナメントを介して優秀な人材を探す気らしいぜ。そして上位組に残った者はＷＷＲのボスが直々に戦ってその強さの是非によりＷＷＲの幹部になれるかもしれないらしい。ここまで言うと分かるよな？　賢いソウル・レイダーならもう分かるはずだ」

「そのトーナメントに出て勝ち抜いていけば、ＷＷＲのボスを叩ける……っ。そういうことか」

「そうだ！　そっちの方が無暗に探すよりも確率は高いはずだ……」

電波体の情報の真偽は定かではないが、トーナメントに出ればＷＷＲのボスに会えるかもしれないという事だった。

しかしロックマンはそこで疑問が浮かんだ。

「あの、ちょっと良いですか？」
「なんだ、お前は？　みない電波人間だな。まあいい、話せ」
「なんでわざわざボスが出向いて戦うの？　普通の組織のボスっていうのは奥の本拠地で構えているものじゃないんですか？　そんな危険なことしないんじゃ……」
「ボウズ、なかなかに鋭い意見だ……。しかしそんな事を心配してやる必要はない。去年にも同じようなトーナメントがあったんだ。運良くそのトーナメント生きて帰ってきた奴が言うにはこうだ。優勝したチームが最強の傭兵集団のＷＷＲの幹部を狙ってＷＷＲのボスと戦ったらしい。幹部には、夢のような特典がつくからな。だが、優勝チームは一瞬でデリートされてしまった……。ＷＷＲのボスは自分が負けるわけはないと確信してんだろうな……。理由としては簡単だろう？」

その情報を鵜呑みいしたオックスが景気良く口のノズルから炎を吐きだして興奮する。

「ブロロ！　なんだ簡単な事じゃねえかっ。そのトーナメントに出て、勝ちまくればいいんだろう？　楽勝、楽勝！　それに面白そうだぜ！！」
「でかい兄ちゃん……。それはそうなんだが、そんなに簡単にはいかないよ？　ＷＷＲは犯罪組織でこそはないが、ウラの社会を支配している軍事組織みたいなものだ。当然、サテラポリスと言ったオフィシャルな者を拒む。
ソウル・レイダーがいる所をみると、あんたらサテラポリスのオフィシャルウェーブバトラーだろ？　残念だが、トーナメントには参加させてもらえないぜ？」

そこで賢いミソラの出番だ。無難な意見を出してみる。

「あの、普通に正体を隠して戦えばいいんじゃないですか」
「お前らはそうすればいいかもしれないが、ソウル・レイダーはそうもいかない。ウラの世界で名が売れちまっている。登録する前に気づかれてお終いだぜ。
いくら無秩序なウラの奴らでもそれぐらいの警戒心はある。なんなら、ソウル・レイダーなしで出場してもいいが、周波数の強さからみるに灰色のガキ以外死ぬだけだな」

そうなるとゴン太がブチ切れた。ご託は大嫌いな事この上なかったのだ。

「じゃあ、どうすればいいんだよ！　ブロロ！！」
「さすがにミライ君なしでノイズウェーブをうろつくのは危ないかも……」

電波体はジャミンガーを一歩前に出した。電波体はいい感じに悪そうに笑っている。

「そこでだ。このジャミンガーの出番だ。コイツは今回のトーナメントの関係者だ。うまくやればトーナメントに潜り込めるぜ」

ソウル・レイダーは感心したように言った。

「ふっ、なかなか気が利いているじゃないか？」
「そりゃ、アンタに命狙われるよりかは、ちょっと危険を犯してトーナメントをいじくるくらいした方がましだからね……。もういいだろう？　情報は十分だよな？」

ソウル・レイダーは剣を握る手を緩めた。この電波体を見逃してやるつもりだ。

「いいだろう。今後、犯罪行為をしないと言うのなら見逃してやる……。俺たちの任務の前じゃお前の命なんてどうでもいい」
「へへ、ありがてえ！　さっさとずら狩るぜ！！　ＷＷＲの連中にどこで聴き耳たてられているかわかったもんじゃねえからな！！実はずっと生きた心地がしてなかったんだ」

そう言いながら電波体は、嬉しそうにノイズウェーブの奥深くへと帰っていった。

とりあえずスバル達は残されたジャミンガーに挨拶をする。極悪な顔をしているがスバル達に協力してくれる以上、挨拶はしておくべきなのだ。

「こんにちは。ジャミンガーさん。私、響ミソラ、ヨロシクね？」
「あっ、ミソラちゃんなの？　感激だー！　私、ウラ世界で十年以上ジャミンガーをやっている『さすらいのジャミ太郎』という者です！」

ジャミンガーは礼儀正しく一礼した。

「よろしく！　ジャミ太郎！」
「ブロロ！　ジャミ太郎ヨロシクだぜ」
「ヨロシクね！　ジャミリン」
「まあ、なんだ……。俺もトーナメントに出れるようもよろしく頼む……。ジャミ太郎」
「私、久しぶりに人間と話して嬉しいです」

こうしてスバル達の仲間にジャミ太郎が加わった。

ｃｈｏｓｗｌｄ―０２：ジャミ太郎

こうしてウラの情報屋よりジャミ太郎を仲間に引き入れたスバル達一行であった。そしてすぐに今後の任務について確認し合う。

そこはリーダーとして主にソウル・レイダーが中心となってやる。

「まず、今後の確認だ。このジャミンガーを使ってウラトーナメントに参加する」

重要な人物であるジャミ太郎が軽く頭を下げる。なかなか顔に似合わず律儀な奴であった。裏の住民のくせに腰が低い。それはもう礼儀が行き届いている。

「はは、ジャミ太郎って礼儀正しいんだね」

「いえいえ、そんな事は御座いません。皆さまのお役にたてるように頑張ります」

「頑張ってね。えっと、僕はスターダスト・ロックマンで星河スバルって言う名前だよ。ヨロシクね」

「俺はゴン太だぜ！　ガキ大将と言えば真っ先に俺の名前が挙がるくらいのガキ大将だぜ！　ヨロシクなんだぜ」

「じゃ、私。今はハープ・ノートっていう名前なんだけど、普段は響ミソラっていうの！　ミソラって呼んでね？」

ミソラは可愛らしくウインクをした。ジャミンガーにとって数年ぶりの人生への潤いであった。疲れた体によく効く。

「いえいえ、トップアイドルのミソラ様にそんなこと……。恐れ多くてとてもとても……。せめて、ミソラ様とお呼びさせてください」
「じゃ、次は私の番ね。私は六角キミドリ。テンキュウ高校の新聞部の部長だよ。ミドリンって呼んでね」
「フ、では俺も自己紹介といこうか……。
俺の名前は彩道ミライ。この姿の時はソウル・レイダーだ。言っておくが、おかしな行動を見せた時はすぐに切り捨てる。まあ、今は仲間として歓迎しているがな」

ミライは少し脅して見せるが、基本は歓迎していた。顔はマスクで分からないがきっといい笑顔のはず。

「ああ、こんなにも沢山の仲間が出来て私は何て幸せ者なのでしょう……。あの殺伐とした生活が嘘のようです。
麗しい美女と愛らしい少女に出会えてジャミ太郎は感激の至りでございます」

ジャミ太郎は涙を浮かべて感激している。それはもう心の優しさがにじみ出ていた。ジャミ太郎はいい奴だ。

次にソウル・レイダーはジャミ太郎にトーナメントの参加について確認する。どうしても聞いておかなくてはいけない事があった。
それは、この任務において必ず聞いておかなければならない。チームリーダーとしてそこは外しておけないのだった。任務成功の是非にかかわってくるのだから。

「一つジャミ太郎に確認したい事がある。俺たちの他にも仲間がいるんだが、彼らのチームも参加できるようにしてもらえないだろうか？　仲間は多い方が良い」

ジャミンガーは一つ間をおいた。安請け合いはしたくないのだろう。

「そうですね……。なんとか、頑張ってみます」

「頼んだぞ」

ひと段落すると、ソウル・レイダーは辺りを見回す。辺りに敵がいないことを確認しているのだ。

ウェーブアウトする時に裏の住民に見られていると後をつけられてしまう可能性があり、非常にまずい。特にソウル・レイダーは裏の世界ではかなりの高額の賞金首になっている。良からぬ輩がわんさか群がってくる危険性があったのだ。

しかし辺りは、深淵の闇ばかりで敵の気配はない。殺風景なノイズウェーブなので隠れる所もないだろう。

「レイダー、付近に敵の周波数は感じられないな?」

『はい。半径数キロの範囲に敵の反応は感じられません』

「ではウェーブアウトだ。今回の任務はこれで終了する。各自家に帰って休息するように」

それを聞いてゴン太が嬉しそうにはしゃぎまわる。オックス・フアイアは体重二百キロ超の超巨漢。かなり危ない。

「よっしゃー、明日は学校が休みだぜ。何して遊ぼうかな。おい、スバル明日牛丼食いに行こうぜ?」

「え、また? もう、三十四週連続で牛丼屋じゃないか。君と遊ぶとその記録ばかりが更新されるよ!」

ロックマンはご立腹だった。そんな彼に配慮してか恐る恐るジャ

ミ太郎がもの申す。くたびれた企業戦士の哀愁が漂っている。

「非常に申し上げにくいのですが。あの……私、長い間ノイズウェーブに住んでいたもので、ウェーブアウトが出来ないんですよ……。恥ずかしい話、十年前に会社をリストラされて、可愛い妻と娘にも逃げられて……心もすさみきってしまい自殺しようかと思っていたんです。でも、その時たまたま私の負の周波数に釣られた電波ウイルスと合体してしまいジャミンガーになってしまいました。

最初こそ驚きましたが、既に人生に見切りをつけていた身……。流れ流され、気が付いた時にはノイズウェーブで日々を暮らしていました。ノイズウェーブで涙を流し、時には勇気付けられ、酸いも甘いもとにかく多くの思い出をノイズウェーブと共にしてきました。とにかくジャミンガー生活が長い故にこの合体を解くこともできませんし、ウェーブアウトして現実世界に戻ることもできません。こんな哀れな私はどうしたらよろしいでしょうか？」

「ジャミリンって案外ハードな人生送ってんだね……」

ジャミ太郎は元人間のサラリーマンだ。偶然とは恐ろしいものでいつの間にか裏トーンナメントを運営するにまで至った。

しかしそれが祟ってウェーブアウトが出来ない。これは困る。

「仕方がない……。誰か、ジャミ太郎をハンターに入れてやれ。そうすれば合体を解除しなくても、現実世界に帰れるだろう。

……いや待てよ？　最近、電波体の実体化現象が起きていたな……。いやしかし、コイツを現実世界に出すのはやはりまずいか……」

「実体化現象というのは良く分かりませんが……。ミライ殿それは名案です！　しかし申し上げにくい話、ウラトーナメントの運営を任されるにあたりＷＷＲから非常に強力な電波情報の書き換えをされてしまい、戦闘能力は向上されましたが、普通のジャミンガーより私自身の情報量が大きくなってしまったのです」

「つまり、普通のハンターじゃ容量不足ってことか……」
「申し訳ございません……」

ソウル・レイダーは腕を組み考えてみる。

「俺のハンターにジャミンガーを入れるのは職業柄マズイ……。牛島のハンターは食糧データで残り容量が少ない、響のハンターはどうだ？」
「えと、ハープ？　私のハンターって容量空いている？」

ミソラはハープに聞いてみる。しかし可憐な乙女である彼女の機嫌は非常にすぐれない。野蛮な野郎と一緒に住むなんて考えられないらしい。

『空いてても、ジャミンガーと一緒なんて私はゴメンよ！　お肌に悪いに決まってるもの』

ミソラはジャミ太郎に申し訳なさそうにして謝った。

「ごめんね。ハープったら、ちょっとアナタの事が大嫌いみたい」
「と、当然です……。しかし胸が痛むのもまた事実です」

ジャミ太郎は暗黒な瞳を濡らしてさめざめと泣いた。

「仕方がない、なら星河しかいないな。六角にジャミンガーは任せられないしな」
「ちょっとリーダーそれはどゆこと？」
「いや、お前は普通にダメだろう。ジャミンガーにもしもの事があって任務に支障が出れば、俺の責任だけでは取り返しがつかなくなる」

ミライの言い分はいいとしても、スバルとしては自分のハンターがそれほど高級なものだとは思えなかった。コダマデパートの家電コーナーで二万強で買った物だから。

イリーガルカスタムなジャミンガーを入れられるほどの容量がないと思っていた。

「でも、ミライ君。僕のハンターって大したものじゃないよ？」

「いや、トラッシュをインストールした時にお前のハンターの性能は飛躍的に上昇しているはずだ。そうでなければトラッシュが入るはずがない」

『私の情報量は半端なものではありません。今、調べてみたところこのハンターは飛躍的に改良されているようです。ジャミ太郎さんを受け入れても問題ありません』

「なるほど、だったら僕がジャミ太郎を持って帰るよ」

そうしてスバルがジャミ太郎を自分のハンターに入れて持ち帰ることになった。各々は仕事も終わった事でノイズウェーブからウェーブアウトする。

こうしてチームオメガの初任務は終わったのだった。手に入れた情報としては裏のトーナメントの存在だ。参加してみるだけの価値はあるだろう。

choswld―03：クリムゾンウェーブ

所変わって、ジャミ太郎をよこした先程の情報屋が走るノイズウェーブ。ここくらいの深さまで来ると、ノイズウェーブは赤みを帯びてくる。空間は相変わらず暗黒だが、少しだけ血管のように赤いノイズであるクリムゾンが確認できる。

そんな場所であるこのノイズウェーブはノイズウェーブの第二階層と言われている。名前はクリムゾンウェーブ。第一階層のノイズウェーブが地球の周りを走っているとしたら、クリムゾンウェーブは太陽系の周りをつないで走っている。クリムゾンウェーブ程のノイズ密度の空間になれば並の電波体なら身動きが取れずにデリートされる。それでもノイズウェーブの階層としてはまだまだ浅い方だ。

クリムゾンウェーブで情報屋がにやにやと笑いながら呟いている。巣に帰ったら、仲間に自慢できる事ができたのだ。

「ハハハ！　ソウル・レイダーに出くわして生還したとなりゃ、かなりの武勇伝だぜ！　いい土産話が出来たし、これで情報屋としての格も上がったかな」

上機嫌の情報屋。

しかし幸せとは続かないものである。幸運な分だけ不幸がやってくる。そんなことが情報屋にもやってくる。

情報屋の走っているクリムゾンウェーブは一本道である。そしてたまにスクエアという電波体の憩いの場として愛されている溜まり

場もある。とどのつまり高速道路のパーキングエリアみたいなものだ。

それで今は一本道を通っている途中。その先に電波体が通せん坊していた。情報屋はとりあえず前に進む。近づいてみると周波数の特徴から目の前の者がただの電波体ではなく、電波人間である事に情報屋が気が付いた。

「こんな所に電波人間？　おいっ、アンタ！　道の邪魔だ。どきな」

「……」

電波人間はピクリとも動かない。情報屋は仕方がないので電波人間の脇をかわして通ろうとする。

しようとしたが、阻まれた。電波人間が情報屋の首根っこを掴んで無理やり制止したのであった。

「あぴゃ！」

情報屋は怒り、電波人間に罵声を飛ばす。

しかし、電波人間の力は圧倒的に凄まじい。情報屋の首を折ってしまいかねないほどである。現に首のアーマーはヒビ入っている。ミシミシと悲鳴をあげていた。

「おい！　てめえ何しやがる!!　離さないと、仲間を呼ぶぞ!!」

「俺は見ていたぜ」

「あ？」

「俺は見ていたぜ。ソウル・レイダー、スターダスト・ロックマン、オックス・ファイア、スコープ・スナイパー……そしてハープ・ノート。

最近ノイズウェーブを嗅ぎまわっている連中の仲間だろ」

「お、お前？　見ていたのか？　周波数なんて感じなかったぜ」

電波人間は握力にものを言わせさらに締め付ける。情報屋は堪らず悲鳴をあげた。

「周波数を隠すくらい、電波変換を真の意味で体得したものならば誰でもできる。レギオンとかいう奴らも同じ事をしているしな」

「レギオン……？　謎の宇宙最強の電波生命体って言われている？　お前らがそうなのか？　最近、宇宙や世界がおかしいってのもお前らのせいなのか？」

畳みかけるように言う情報屋に対し、電波人間は乾いた笑いを浮かべた。

しかしその声は比較的若いものがある。三十歳かそこらのものであった。

「レギオン？　あんなものと一緒にするなよ。俺はただの地球人だ。俺はきずなのクルーだったんだぜ？

それにレギオンが最強とは聞き捨てならないね。あんな奴ら、俺だけでも三体倒したんだからな。強いって言っても、所詮は操り人形さ。

まあ、ボスが倒したレギオンは俺でも勝てないかもだったけど……」

「アンタが地球人だと……？　確かに電波変換に適した種族だとは知っているが……。その周波数は……い、異常だろ！？」

情報屋が驚くのに無理はない。目の前の電波人間の周波数は軽く五百万メガヘルツを超えていた。レギオンのそれよりも圧倒的だった。

「地球人舐めるなよ？　と言いたいところだけど。俺達がウォーロ

ックとかいう奴に電波化されて宇宙を彷徨っていたせいか妙に電波変換が普通じゃなく凄まじい出来になっている。
恐らく、電波化されて宇宙を彷徨ってた事が原因なんだろうな。普通の体質じゃなくなってる。
言っとくが今のロックマンなんて比じゃねえぜ？」
「へへ……、アンタが十分強いのは分かったけどよ。なんだってこんな事しやがる。俺はアンタに会ったのも初めてで恨みを買うような覚えもない」
「ああ、これはお仕置きだよ。だって、お前さ。サテラポリスを俺らのトーナメントに参加させようとしただろ？　悪さはいけないだろ」

この台詞から情報屋の顔は真っ青に冷め上がる。情報屋はガタガタと震えだして止まらない。体が強張っているのが手に取るように分かる。

「アンタ、まさかＷＷＲなのか？」
「当たりだ。俺はＷｒｏｎｇ　Ｗａｖｅ　Ｒｉｄｅｒｓの幹部キリン・ライトニングだ。ボスの右腕ってことになる」
「か、幹部……！？　なんでだ？　アンタ程の人物が地球周辺のノイズウェーブにいるんだ。しかもこんな浅い階層のクリムゾンウェーブにいるなんて……」
「まあ、安心しろって。命まではとらないよ。だが、ボスだったら多分アンタの命はなかったぜ？　まあ、これぐらいで勘弁してやるよ。もう、悪さすんなよ」

にやりと笑いキリン・ライトニングは手を放してやった。情報屋はすぐに逃げ出す。その勢いは脱兎のごとくだった。
その姿を見送るとキリン・ライトニングは呟いた。その表情はワクワクとした好奇心旺盛な少年そのもの。

「サテラポリスか……。ボスに言いつけられて、出来る限り見張っていたつもりなんだが……」

キリン・ライトニングは苦笑した。

「スバル君と出会ってから、どんどん一人で大人になっていくなあ……。まさかこうやって俺たちの前に立ちふさがるなんてな……」

一人懐かしそうにしているキリン・ライトニングに彼のパートナーである。キリンが苦言を呈する。

『ジョニー、いい加減にアジトに戻らないか。今回の事をボス達に報告しないといけないと私は思う……。

サテラポリスをトーナメントに進出させるわけにはいかないだろう。それに彼奴(きゃつ)ら、トーナメントの運営員を使ってまで潜入しようとしているみたいだ。下手な小細工を……』

「確かに、報告はしないとな……。でもボス、いやアイツの事だからきっとサテラポリスの連中を出場させるな」

『なぜ分かる？』

「理由はアイツがアイツのままであるからだ。命がけで会いに来てくれるんだ。歓迎しないとな」

『なるほど……。しかし、ウラトーナメントである以上、命の保証はできんぞ。我々とて、悲願達成の為に手を抜いてやる気もない』

「たしかに……、アイツは逃げ続けてるからな。命がけで会いに来てくれるところ悪いが、俺達も命がけで全力を以って迎え入れる！

それをあの子に乗り越えさせないと、アイツはまた逃げるだろう」

『フッ……。人間とは分からない生き物だ』

「さあ、その話はもういいだろう。

まずはボス達の願いを叶えさせてやろうか。アイツには宇宙空間

で漂っていた俺を助けてもらった恩があるからな。その為にまずはムーメタルを集めるぞ！」

『了解……』

キリン・ライトニングは最後に意味ありげに笑みを浮かべると、ノイズウェーブの深淵の闇のなかへ消えていった。

ｃｈｏｓｗｌｄ―０４：現実逃避

翌日の朝。二二ＸＸ年、五月一二日土曜日。スバルはいつも通り朝食を食べていた。同じくいつも通り食器を洗っているあかね。

そんなあかねはすっかり落ち着いた様子である。既にスバルの任務の事に理解を示していたのであった。もう、あまり深くは口出ししなくなった。ただ「頑張りなさい」「無茶をしちゃダメよ」「体には気をつけて」の三つだけは良く言っている。

そんな訳で普段とあまり様子は変わらない星河家。ただ変わった事と言えば、今日は朝からスバルの家に来客が来ていた。天地だ。トラッシュの調子の点検に来ていたのだ。メンテナンスはしっかりとしなければならない。トラッシュは繊細な試作機であるのだから。

天地はリビングでトラッシュの具合を点検中だ。エアディスプレイを扇状にたくさん広げて格闘していた。

「トラッシュ、中々調子がよさそうだね」

『ええ、特に異常は感じられません』

「君のココロメモリもだいぶ充実してきたようだ」

『ココロですか……。天地さんには悪いですが、私にはまだよく分かりません』

トラッシュはいつも通りだ。しかし少しずつではあるが心が育っていっている。

スバルと一緒に過ごし、共に戦っていく時間がトラッシュの心の

糧となる。それはトラッシュにとって大切な何ものにも代えられないものだ。

そこにあかねは食器洗いも済んだので、天地に冷たい飲み物を出してやった。天地は、ありがとうございます、と言った。

「お疲れ様、天地君。トラちゃんの様子はどうかな？」

「順調そのものです。昨日、ノイズウェーブに潜入したから、少し心配だったのですがどうやら杞憂だったようですね」

天地は大きな口で笑顔を作る。杞憂だったとはいえ、ノイズウェーブが電波体に与える影響は大きい。それは大抵は良くないものだ。なので大きな異常もなくあかねも安心した様子だ。

「良かったわね。トラちゃん」

『心配してくださってありがとうございます。ママ様。ですが私はスバル様をお守りするのが使命』

エアディスプレイの中でもトラッシュは相変わらず堅苦しい。あかねも呆れる。

「なに言ってんの、トラちゃんも自分を大切にしなさい。アナタ達二人が無事じゃないと意味がないでしょ」

「あかねさんの言う通りだ。君も生きているっていう事を忘れるなよ」

『そうですか……。天地さんとママ様の言う通りかもしれませんね。人間の心は複雑ですね』

トラッシュは物憂げにうつむいた。やれやれと天地が、気にするな、とフォローした。

そんなやり取りをしていると、トラッシュのメンテナンスはすぐに終わった。そしてスバルは朝食を片付けて天地の隣に座る。ジャミ太郎について訊ねたいことがあったのだ。

「天地さん、見てほしい人がいるんだ」

「ああ、昨日言っていたね」

スバルは青いハンターを差し出す。画面には黒いジャミンガーが隅っこで正座していた。天地と目が合うと深々と頭を下げる。天地は苦笑した。ジャミンガーにそんな事は期待していなかったのだから当然だ。それに普通に面喰らい実際にやってのけられると、ただただ顔をゆがめるだけしかできない。

「確かにおかしなジャミンガーだね……。ある意味不気味だよ」

『スミマセン。こんな容姿なので良く誤解されるのですが、私は犯罪行為に手を染めた事はありませんよ』

「あのね、天地さん。ジャミ太郎はサラリーマンで普通のオジサンと変わらないよ」

スバルは真面目にジャミ太郎の味方だ。あかねも味方だ。彼女は昨日、ジャミ太郎を快く受け入れたのだ。嫌な顔一つせずに。

「ジャミ太郎は普通のサラリーマンよ。天地君よりも一五歳年上で人生の先輩ね」

「はは……。まあ、とりあえずジャミ太郎の何を見てほしいのかな？」

「えっと、ジャミ太郎はさ。ＷＷＲっていう組織に改造されてるんだ。それでジャミ太郎の体を調べたら、ＷＷＲについて何か分かるんじゃないかなって思って……」

天地は腕を組んで頷いていた。

「なるほどね。では、まずジャミ太郎をウィザード・オンしてくれないか？　どんな周波数をしているのか実際に計ってみたいんだ」

「あ……、ゴメンよ天地さん。ジャミ太郎ってウェーブアウトもウィザード・オンも出来ないって言うんだ。だからずっと僕のハンターにいるんだ」

スバルは申し訳なさそうに言う。ジャミ太郎も申し訳なさそうにしていた。スバルのハンターもジャミ太郎を受け入れてから、心なしか申し訳ないほどにどす黒くなっていた。

天地は首を傾げる。

「うーむ、おかしいな。最近は宇宙空間にワイル粒子が充満しているから、ウィザードや電波人間でなくても電波体の実体化が可能なはずなんだが……。

スバル君の学校を襲ってきたジャミンガー達も実体化していたというじゃないか」

「あっ、確かに……」

天地の言う通り、原因不明だが電波体も実体化できるようになっていた。電磁波に作用するワイル粒子が原因なのかもしれない。

あかねはジャミ太郎に聞いてみる。ジャミ太郎がなぜウェーブアウトできないのか気になってしまったのだ。

「ジャミ太郎さん、なんでウェーブアウトできないんですか？　現実世界に出てこれない理由でも？」

ジャミ太郎はスバルのハンターの奥に逃げてしまう。そして小さな声で弁解する。

『あの……、私ってノイズウェーブ生活が長いものでウェーブアウトが出来ないと言いましたが……実はウェーブアウト自体は多分出来るんです』

「多分？」

スバルだ。ジャミ太郎は続ける。

「はい……。実は私、以前も申しあげたように会社をリストラになり家族に逃げられ……。つまりは現実世界にいい思い出がないのです。

酷くトラウマばかりが呼び起こされて、いざウェーブアウトしようにも体が緊張してしまい……」

ジャミ太郎はさめざめと泣いている。つらい過去があったのだろう。現実世界にはつらい思い出しかないから電波の世界に引きこもっていると言うのだった。

スバルもその気持ちは痛いほど分かってしまう。

「ジャミ太郎……。辛かったんだね……。でも逃げちゃダメだよ！頑張って現実世界に出てくるんだ！！　引きこもって殻に閉じこもっていたって何も変わらないよ。僕もそうだったからね」

「スバル……」

スバルはあえて辛く当たった。あかねはその一言一言がスバルにとっても重い言葉だと知っている。

『ですが、私のトラウマは、尋常なものじゃありません！　一瞬にして何もかも失う恐怖が現実にはあるんですよ。そういった意味ではノイズウェーブは楽園でしたよ。始めっから失うものがないんだ

から』

「ジャミ太郎！　逃げちゃだめだ。君はきっと変わりたいと思ってるはずだろ？　だって僕達に協力してくれようとしているじゃないか。それってきっと変わろうってしてるんじゃないかな？」

「ジャミ太郎さん、さっき失うものはないって言ってましたけど。本当はあるんじゃないですか？　守りたい人が……」

スバルとあかねはジャミ太郎が現実世界に帰ってこれるように説得してみる。その言葉はジャミ太郎に届いたみたいだ。泣きやんだ四三歳は静かに決意を固めた。

『私……、現実世界は確かに怖いです。でも、あかねさんやスバルさんの言う通りかもしれませんね……』

ｃｈｏｓｗｌｄ―０５：新しすぎる家族

ようやくジャミ太郎は画面に戻ってきた。しっかりと二本の足で立っている。若干色が邪悪ではなくなっているようにさえ見えた。
そして続ける。
そこには一人の男が立っていた。

『これは言ってませんでしたが、実はウラの世界では宇宙はもう長くはないという噂が広がっています。私自身このまま終わるのもいいかと思っていました。
ですが、ある日サテラポリスの人達が地球や宇宙を救おうと必死に戦おうとしているという噂も流れてくるじゃないですか。私も興味がわきました。ＷＷＲに歯向かおうとしている人間達の顔を見たくなりましてね。
実際会ってみて驚きましたよ。そのサテラポリスのメンバーは殆ど子供だったではないですか。そう、スバルさん達の事ですよ。
でも驚きと同時に自分が情けなく思いましたよ。こんな子供達が戦っているのに私は何もしないのかって。
そして、それが半分冗談のつもりで打倒ＷＷＲに協力しようと思っていたのが確かな覚悟に変わった時です。
そうです！　たしかに私には守らなければならないものがありました。もう会うことはないでしょうが、せめてアナタ達と一緒に戦って、最愛の家族が住む地球だけは守ってみようと……！
だから、私は逃げません。変わります！　現実世界に出てくる事でスバルさん達の助けになるのなら……！！』

「そうだ！！　来るんだ！　ジャミ太郎！」
「来なさい！　ジャミ太郎さん！」
「なんだかよく分からないが、来るんだジャミ太郎君！」

よく状況が理解できないが天地だってジャミ太郎に呼び掛ける。

「行くぞ！　ジャミ太郎！！　ウィザードオン！！」
『ウオオオオ！！』

スバルのハンターの画面が光った。
そして、スバルのハンターの画面は空っぽになった。代わりにリビングにもう一人と一体が増えた。天地は驚きを隠せない。スバルもあかねもそうだった。

「コイツは驚いたなあ……」
「ジャミ太郎さんなの……？」
「ジャミ太郎ともう一体は……？」

リビングにウィザード・オンされたのはスーツ姿の四十過ぎの男性と、見た事のないタイプのウイルスだった。見た目はウイルスというよりもウィザードと言った方が良い。それも人型だ。
ようやくと言った感じでスーツ姿の男は大きく息を吸う。数十年ぶりの現実世界の空気を堪能する。

「現実世界に出てくるのは十数年ぶりですね。あ、こちらでは初めまして。人間の時の名前は裏霞夜太郎（うらがすみやたろう）です」
「あ、こちらこそ……」

ジャミ太郎もとい夜太郎は相変わらず礼儀が正しい。正座をして深々と頭を下げる。つられて、あかねも深々とお辞儀する。

スバルとしては、言いたい事が一つある。夜太郎の隣のウイルスかウィザードか分からないそれについて言及したいのだ。

「あの……。夜太郎さんの隣のアレは何ですか？」

夜太郎も首を傾げる。

「さあ、何でしょうね？　私と合体したのは確かメットリオだったかと」

そこに天地だ。

「恐らく長い間、夜太郎さんと合体していたためにウイルスの情報が書き変わってしまったんでしょう。それにＷＷＲの改造を受けたとなると、今は知能面でも性能的にもウィザードに近いはずです。君、名前は？」

謎のウイルスウィザードは天地の言葉を理解したようだ。人間の言葉を使って応答するのである。スバルも驚きを隠せない。

「私はメットリオで名前はありません。そうですね……名前は何にしましょう？」

「……って決まってないの！？」

スバルは思わずツッコんでしまう。これはいけない。

「だって、メットリオに名前があるわけないし、気が付いたら知能も人間並になってるし、こんな姿になってるし、今日が初めて合体解除した日だし」

「じゃあ、普通にメットリオ君でいいんじゃない」

ウイルスウィザードはスバルの意見を却下した。

「嫌です。私は女の子です。ウイルスの時代では、ミスメットリオに選ばれました」

「え!?　ミスメットリオ!?　なにそれ」

「スバル君……確かに興味深いが今は落ち着こう」

天地はスバルを落ち着かせる。しかし今度はあかねが落ち着かない。

「やだー！　女の子なんだ！　確かに女の子っぽいかも。私は星河あかねっていうのヨロシクね。メトリーちゃん」

「何だよ母さん、メトリーって」

「だって、メットリオで女の子だから……メトリー……きゃっ、恥ずかしい」

「その名前、気に入りました」

メトリーは頬を染めた。その様子は確かに女の子だ。

「私もいいと思いますよ。しかし驚きです、私と合体していたウイルスがまさかメスだったなんて」

「夜太郎。メスって呼ばれるのは嬉しくない。私は女の子だから」

なにはともあれ、無事に夜太郎とメトリーを現実世界に連れ出す事が出来たのであった。

「じゃあ、さっそく夜太郎さん達の体を調べようか」

天地がそう言うが夜太郎が申し訳なさそうにして挙手をする。

「あの、非常に申し訳ありませんが……長い間、現実世界から失踪していた身としてはこれからの住む場所に困ってしまいます。アパートを借りようにも、私は既に社会的には死亡している身……」
「それ、私も気になっていた」
「まあ、確かにそれは困るな。アマケンは研究施設だから無理だし……」

天地は困ってしまう。そこに心の広いあかねの出番だ。

「それじゃ、私の家に住むといいわ」
「わあ、本当？　嬉しい。ありがとう、あかね」

メトリーは小さくジャンプして喜びを表現する。

「良いんですか？　こんなオッサンを居候させて……」
「いいのいいの！　この家にスバルと二人だけって寂しいと思ってたし！　ね？　スバル」
「ハハ……」

スバルは苦笑していた。

常日頃からスバルの密かに抱いていた妄想としては、ある日ひょんなことからミソラが自分の家に住む事になってしまう、そんなものだった。そうこうしてスバルはミソラと一緒にお風呂に入ったり寝たりして絆を深めていくのだ。ミソラにお兄ちゃんと言わせれば大成功だ。ミソラが恥ずかしそうにあかねの事をお母さんと呼ぶ感動のシチュエーションも用意していた。

しかしだ。決して現実は甘くない。星河スバル小学六年生の夢いっぱいな甘い妄想は瓦解して崩れ去った。

現実はひょんなことからオッサンが自分の家に住む事になってし

まう。スバルとしては少し切ない。オッサンと一緒にお風呂に入ったり、一緒に寝たりして絆を深めると思うと反吐が出るのだった。

「よかったな。スバル君！」
「ええ、はあ……」

そんなスバルをよそにあかねは一人ワクワクしていた。

「トラちゃんに、メトリーちゃんに夜太郎さん……だんだん賑やかになってきたわね！」
「よろしく。スバル」
「ああ、よろしくメトリー」

スバルは微妙に笑ってみせた。

ｃｈｏｓｗｌｄ＿０６：ヘンなオジサン！

そんなこんなでスバルはがっくりとうなだれていた。うなだれついでにハンターの時計に目を落として見る。時計を見るとすでにゴン太と遊ぶ約束をしていた時間だった。

「あ、もうこんな時間だ！　牛丼屋で待ち合わせだった！」

スバルが急いで玄関へのドアを開けようとする。だがスバルがドアノブに手をかける前にドアが勝手に開いた。ドアのガラスにはゴン太らしいシルエットが映っていた。

「おじゃましまーす！　おっ、スバルいるじゃん。呼び鈴、何十回も鳴らしたんだぞ？」

「って、ゴン太。勝手に家に入ってくるなよ！？」

「だって、トラッシュが入ってもいいって言うから……」

『スミマセン。皆さまお取り込み中でしたし、お友達方を外で待たせるのに気が引けましたが故……、いけませんでしたか？』

「ああ、いいよいいよ。ゴン太が勝手にいつも家に冷蔵庫を漁りに入ってくるから、またか、と思っただけだよ。早とちりだったみたい」

ゴン太はいつも星河家の冷蔵庫のお世話になっている。

あかねがスーパーに買い物に行く日も把握していた。冷蔵庫のどこに何があって、どれくらいの量が残っているのかだって朝飯前だ。そこから、あかねが買い物に行く日を逆算して効率よく冷蔵庫を漁る。そんなゴン太はスバルの親友。あかねにとっては、逆にゴン太

が冷蔵庫を漁りに来ないと不安になる程である。

「こらー！　ゴン太！　人さまの家の冷蔵庫を勝手に漁っちゃダメって言ってたでしょ！！」

どうやら、ルナも来ていたらしい。相変わらずとげとげしい言葉をゴン太に浴びせる。

「やあ、委員長も来てたんだね」

「そうよ！　私もスバル君と遊んであげようと思って来てあげたんだからね！　感謝なさい」

「そうか。ありがとう委員長。でもキザマロの姿が見えないね……」

「キザマロなら、身長のびのびセミナーに行ったわよ？」

「今度会う時のキザマロはビッグになって帰ってくるぜ！」

「ゴン太、その台詞、キザマロがセミナーに行くたびに聞いてるよ」

キザマロは週末に必ずと言っていいほど身長のびのびウェ皆―という怪しいセミナーに通っていた。しかし当然のように身長は伸びない。

そしてある程度話し込むとスバル達はひと段落といった感じで落ち着く。

スバルとしては準備万端だ。気持ちの整理はついている。先程からルナがちらちらと夜太郎とメトリーを盗み見ていた。スバルもいよいよかと緊張した。

「ふう……そろそろいいかしらスバル君？」

「いいよ。君の思った感想を言い放ってよ」

ルナは大きく息を吸って呼吸を整える。慎重に慎重を期して万全

とする。期は熟した。

「じゃあ、一言。って、変なおじさまがいるじゃないの！！」

ルナは失礼な事に夜太郎を指で差す。

ゴン太も冷蔵庫を漁っていたがルナの叫び声に気が付いた。

「何だよ委員長ー。って、へんなオッサンがいる！！　あと、変なウィザードも」

そこにミソラも追撃だ。ちなみに最初からずっといた。

「わー、へんなオジサン発見！！」

「って、ミソラちゃんいたの！？」

「いたよ！」

「ゴメン」

ミソラはルナばかりに構っていたスバルにご立腹。

「見知らぬ男性がいるな……」

「あっ、ミライ君もいたの。おはよう」

「ああ、おはよう」

ちなみにミライも最初からいたようだ。しかしルナやゴン太ばかりに構っていたからと言って怒ったりはしない。

ただ不法侵入者である、夜太郎に手錠をかける。スムーズな一連な動作にスバルは見とれていた。プロの仕事にツッコミさえもわすれてしまう。

「住居不法侵入で逮捕する……」

「えっ！？　私、何かしましたでしょうか？」
「ちょっと、ミライ君！　なにをやってるの！　夜太郎さんを捕まえちゃダメだって！！」
「ふっ、冗談だ。アメロパンジョークさ」

ミライは微笑した。

「やっぱり、現実世界怖い……」
「夜太郎、元気出して……」

choswld_07:ルナルナ団のリーダー

スバル達は夜太郎とメトリーの身体調査を天地に任せて外に繰り出した。スバルとルナ、ゴン太にミソラに加えてさらに今日はミライもいた。このメンバーで遊ぼうということなのだ。青空も広がって絶好のお遊び日和。戦士達の休日の始まりだ。

しかしいつものメンバーに、なかなかどうしてミライが加わるのは大変珍しい事だ。珍しいを通り越して初めてだった。

そこに早速ルナがミライに声をかける。新参者のミライにルナのグループもといルナルナ団としてのルールを叩きこむ。最初が肝心と言いたげに、ルナはミライに鉄の掟をふっかける。ミライ的には困ったもの。

「では、ミライ君? ごきげんうるわしゅう」

まずは挨拶。

「ああ、おはよう」

「まず、アナタに最初に言っておかなければならない事があります」

「何だ?」

「このグループは私がリーダーのルナルナ団です。スローガンは私がリーダーの軍団で仲良く、面白おかしく過ごす事!!」

「まあ、何を目標にしようが自分の勝手だから良いんじゃないか?」

ここでルナがミライに詰め寄る。ここぞとばかりに強調する。私

がリーダーよ、と猿山のボスみたいにきっちりと分からせる。

「いいこと!?　私がリーダーなので私がみんなを引っ張って楽しい時をクリエイトしていきます！」

「……」

ミライとしてはここらで帰りたい。ルナは何故か誇らしげ。

「だからアナタはルナルナ団の足並みを乱す行為をしてはいけないの！　勝手にどっかに行ったり、勝手に帰ったりしたらダメなんだからね!?

私が、終わりって言うまでアナタはルナルナ団の一員として楽しく過ごしてもらいます!!　分かった？」

「ああ、分かったよ」

「よろしい」

ルナは満足気に頷くと、すぐにリーダー的ポジションに移動した。ルナは四人の前に立って早速仕切る。まるでルナが教師の青空教室だ。

「さて、何をして遊びましょうか？　さあ、意見がある人は挙手！」

ルナはリーダーなので率先して嬉しそうに指示を出す。みんなの意見を聞いて回る。

そしてそこは切り込み隊長ゴン太の出番だ。もう誰が何と言おうが青空に向かって勢いよく手を上げる。

「はい！　俺の意見を聞いてくれ！」

「ダメ！　却下!!」

「なんでだ!?　なんでだ委員長!!」

ゴン太は絶叫している。ルナとしてはゴン太の思考パターンなどお見通しだ。ルナは呆れたようにため息をつく。

「どうせ、牛丼屋とかいうんでしょ？」

「な、なぜ、分かったんだ？　委員長がエスパーになったぞ！！」

ゴン太は目を丸くして驚きのあまり腰を抜かす。ゴン太は尻もちをついてわなわなとしていた。これはこれはである。

『ブロロ！！　まさか、委員長がここにきて人間の能力の限界を超えてきたなんて……！　末恐ろしいぜ』

オックスも驚きふためいて、あたふたとコダマタウンの綺麗な川に飛び込んで身を隠す。オックスはこれでもＦＭ星の特攻隊長である。慣れとは恐ろしいものだ。平和とはすばらしいものだ。とても宇宙が終わろうとしているとは思えない。

とりあえず何かの流れを取り戻そうと、スバルが落ち着き払って手を上げる。ここはインテリなスバルの出番。

「まあ、あの二人は放っておいて。僕に考えがあります。委員長さん！」

「言ってみるがいいわ」

すっかりルナは王様気分。数分後には神さま気分だ。

「デンサンシティにあるプラネタリウムがみたいです！　あと電気屋さんに寄って、望遠鏡をウィンドウショッピングしたいです。それに、バトルカードを見て回るのもいいかもしれないなあ。あと図書館に行って星とか宇宙の本がみたいです。あと夜まで待って天体

観測もしたいです。あとは……」

スバルは止まらない。とめれない。やめられないし、我慢しない。ルナとしてはもう我慢ならない。

「ちょっと、待ちなさい！　ほとんどインドアなことじゃない。しかも夜まで待って天体観測とか……寝不足はお肌に悪いわ。とりあえず、天気が良いんだからお外で遊びましょう」

「ちえー」

『残念でしたねスバル様』

スバルも脱落だ。そしていよいよである。満を持してミライの出番。ミライはただ手ぶらで漫然と遊ぶほど野暮ではない。昨日の夜シドウからあるものを託されていた。ミライは気の利くいい奴なのだ。

ミライはハンターを取り出す。そして前に構える。

「ウィザード・オン！　行けレイダー！！」

たちまちレイダーが現実世界に呼び出されて、あっというまにルナたちの周りを一瞬で通り過ぎていく。

スバルが息をのんだ。

「この軌跡は！　ブラッディアスタリスク……！！」

『速い……！！』

そんな驚きの隠せないスバルの頭に一枚の紙切れがゆらゆらと落ちてきた。ルナ達にも同じように落ちてくる。

「これは……？」

スバルは紙切れを手に取る。紙切れはチケットらしいものであった。ミライはレイダーをハンターに戻す。そして、くるりと回り、スバル達に背中を向けて語り出す。別にカッコをつけているわけではない。ただ格好が付いているだけだ。

「俺は昨日の任務の結果を報告する時に暁さんからそれを貰った。暁さんは「お前もたまには子供らしく遊んでこいよ。明日は久しぶりのオフなんだろ？」と言ってそれを俺に渡したんだ」

『ミライ様……、お友達に上手く渡せてよかったですね』

レイダーがぼそぼそと耳打ちする。ミライは少し照れたようにして続ける。

「しかし、たくさんあるチケット。捨ててしまうには惜しい……。仕方ないから、お前達にくれてやる。サテラポリス専用の遊園地の優待券をな！！」

ミライはそう言って振り返る。スバルとゴン太はミライの元に駆け寄る。

「やるじゃねえか！！　ミライ！」

「さすがはサテラポリスのエースだね！！」

そしてミライはルナルナ団の先頭をきって歩き出す。

「さあ、行くぞ。俺について来るんだ」

ミライにほいほいとスバルとゴン太はついていってしまう。そうなるとルナが悔しい。自前の高級シルクのハンカチを取り出し、悔

しそうにひと思いに噛み引きちぎる。

「く、悔しい！　ミライ君ったら、あんなにリーダーシップなんかとっちゃって……！！

でも、まあいいわ！　遊園地には行ってやろうじゃないの！！

ほらミソラちゃんもボーっと突っ立ってないで行くわよ！」

「あっ……、うん」

ルナは何としても先頭に立ちたいがために、大急ぎでミライ達を追いかけていった。

ミソラはポツンと一人残される。そしてポツリと一言呟いた。チケットを見つめながら複雑な表情をしていた。

「エリアパーク……」

『どうかした？　ミソラ？』

「いや、何でもないよ……何でもない」

choswld―08：空に消えて

そしてリニアバスに揺られること数分。バスの中でルナが、リーダーは誰かと巡って一人うるさかった。だが何とか無事に辿り着いた様子。ミライの耳にはいらないタコが出来た事だろう。

今日の目的地である遊園地、エリアパークはコダマタウンの郊外に位置する。昔は繁盛していたようだが今はそんな事はなかった。客もいる事にはいるが大繁盛というには少しばかり少ない。目をやれば、視界に数人の人影が確認される程度。その様子から、とかく一面に広がるメルヘンチックな石畳の床は寂しそうに広がっていた。

そんなエリアパークは設備だけは最新でハイテクである。それほどに素晴らしいものがまったくもって詰まっているのだった。加えて安全面にも問題はない。楽しさも申し分ない。

では、なぜ人気がないのか。

それは、その理由だけはミソラだけが知っている。ミソラの小さな胸にひっそりとしまいこんだ忘れられない辛い思い出だ。小さな胸に抑え込むには少々大きすぎた事件だった。

そんな訳かミソラはあまり楽しそうな表情をしていなかった。ゴン太は狂ったようにはしゃいで楽しんでいるのだからミソラの心情が並々ならぬほどにおかしいことは明白であった。ゴン太が普通なのだ。ミソラがおかしい。ミソラの足取りは自然と重くなる。

そんな事に気づけないルナは軍団の先頭を切り、さっさと入場ゲートを突破してしまう。

「さあ、遊ぶわよ！！」

ルナがおいそれとさっきまでとは裏腹に上機嫌になっているのだった。とにかくスキップだ。短い群青のスカートから細い脚を交互にして跳ねていく。まあ、幸せそうな事である。

それもそのはず、さっきまでのリーダーを巡っての議論で、ミライを論破したのだからだ。ミライとしてはどうでもいい役をくれてやったにすぎない。ルナは幸せ者。それはおめでたい。

「さあ、星河に牛島、俺達も行くか。久しぶりにこういうのも悪くはない」

ミライもこの日ばかりは任務の事は忘れるつもりらしい。慣れないのか、どことなくぎこちない一人の男の子がそこにいる。

スバルとしてもそれは嬉しい。もしかしなくても少しだけ分かりあえた気がするので、自然と調子も良くなる。気持ちも高揚する。

「そうだね。まさかミライ君と一緒に遊ぶ日が来るなんて、僕は嬉しい！　これを機に友達になろうよ」

「フッ、友達か……」

今日のスバルは積極的だ。少年スバルは普段から、落ち着いた子供だったはず。だが遊園地という場所柄、少しだけちょっとだけ活発になる。

そうなるとゴン太の、もうそれは酷いこと。目も当てられないほどにバカな野郎だ。

「ミライって、いけすかない野郎だが、意外といい奴だったな！　ウヘヘ、今日だけはお前が俺よりカッコよく見えるぜ。今日だけは

な！」

キリッとしたゴン太の良い表情にスバルは思わず顔をそむけた。
ミライは始めから見ていないし眼中にない。

『ブロロ！　チケット貰ったもんな。素直だなお前。良かったな』
「イイ表情すぎだよゴン太……」
「俺はいつでもお前に勝ち続けていたつもりだったんだが……。
まあ、とにかくそのチケットがあれば並ばずに施設を利用できる。
気の短い牛島にはぴったりの待遇だろう？」

ミライは少し皮肉を織り交ぜて、チケットを取り出す。サテラポリスに許された魔法の紙だ。

「うっせ！　でも、並ばずにオーケーなのはありがたいぜ」
「じゃ、行こっか。おーいミソラちゃんもこっちに来なよ！」

スバルはミソラも忘れてはいない。足取りの重く、少し離れた位置に残されたミソラに大きく手を振り呼び掛けるのだ。当然、いつものミソラなら手を振り返して駆けよってくる。
しかしいつものミソラじゃないので、そんな事はない。
ただただ薄笑い。

「あっ……、今から行くね……」

こんなにも淀んでキレのない笑顔のミソラは異常。キレ者ハープがすぐに気が付いた。パートナーとして心配してやる。背負ったギターヘッドのディスプレイから優しく声をかけてやるのだった。良きお姉さん分としてはばっちりだ。

『大丈夫？　なんか浮かない顔しているけど。体調がすぐれないの？　悩み事？』
「ううん！　何でもないって、私は元気も元気だよ！」

ガッツポーズだったが、どことなく形だけなのでハープとしては疑問がわく。結局それも払拭されないままにミソラはエリアパークの中に入っていってしまうのだった。

ちょうどミソラ達がスバルと合流する頃だろうか。そんな様子を物陰からみている者達が姿を見せた。どうやら保護者というわけではなさそうだ。あかねはきっとパートで忙しいはず。

そのエリアパークの石壁に背中を預ける人影の数は三人。とてつもなく怪しい人達がスバル達の動向を見張っていたのだ。三人のうちの一人がニヤリと悪い笑みを浮かべる。その手には、重厚な大口径の拳銃が鈍く光を返し睨みを利かせていた。

「あれが、ターゲットのサテラポリス……」
「ちょろいな、ガキどもばっかだぜ」
「ちょろいちょろい」

「ようこそー、エリアパークへー。僕はこの夢の国も住人さー。よろしくー。これはプレゼントの風船ー」

エリアパークに入るや否や、素っ頓狂な声の着ぐるみが風船を差し出す。素っ頓狂なのは声だけではなく姿も、である。

圧倒的な存在感を示す首長竜ドッシーの上半身に、哀愁漂うくたびれた黒いネズミの下半身。その名はドッシーマウス。メルヘンチ

ックなキメラとはコイツの事で間違いないだろう。新しい方向性を模索して自分の信じるメルヘンを地でいっていた。

エリアパークでそんなおかしな怪物が風船のプレゼントという訳だ。斬新だ。

そんな斬新さに気後れしがちなスバル。しかしそこは英雄ロックマンとして快くその風船を受け取りたい。

ゴン太は一つで満足せずに十個も奪う。さすがにガキ大将。遠慮という概念はどこかに捨ててきたという訳だ。社会人になる前にぜひとも探してきてほしいものだ。

そして、ドッシーマウスは二人の可愛い女の子達ににじり寄る。首があり得ない方向に行ったり来たりして、あまり可愛くないマスコットだ。そういう光景はシュールで危険な香りがする。

「やー可愛い二人のガール。僕からの風船のプレゼント的なニュアンスだよー。もらってあげてねー」

ドッシーマウスは素っ頓狂な裏声を巧みに操る。

聞いていて耳が痛いものを口走りながら、風船をルナとミソラに渡してやる。ルナはいつもお高くとまっているが、実はこういったマスコットには目がない。ドッシーマウスも一応マスコットということだ。ルナも一応女の子ということだ。

「ありがとう！　それにしても、このきぐるみ可愛いわね。ミソラちゃんもそう思うでしょ？　ね？」

ルナは満面の笑みをミソラにプレゼントする。しかしミソラは気にも留めていないので空振りだった。ルナとしては少し悲しい。

儚げなミソラはただ一言。

「あの時と同じ……」

ミソラの心はここにはなかった。過去に思いをはせていた。ぼうっと風船を眺めている。

「ミソラちゃん、聞いてる？」

ルナが呼び掛けること数回。スバル達も、どうかしたのかとその様子を見ていた。ミソラもやっと気が付き、我に帰る。

「えっと、な、何かな？　可愛いって……、それは可愛いよ！　うん、可愛い、ルナちゃん可愛いよ。圧倒的だよ！！」

『ミソラ、違う違う』

ハープの耳打ち。ミソラは慌てて心配している友人達の前であたふたと弁明する。慌てついでに間違って風船を手放してしまう。

「あっ……」

ルナが見上げる。風船はみるみる高く空に昇っていく。だんだん小さくなって、遠く離れていく。

「あら、風船行っちゃったわね」

すかさず気を利かしルナがドッシーマウスに、もう一つよこせとせがむ。

そんな様子を尻目に、ミソラは上一杯に広がる青い空を見上げて徐々にきつく唇をかみしめていく。太陽がまぶしいのか眉をひそめて、その表情はすこしやりきれないものだった。

手を伸ばしてもきっと届かないのだ。ミソラは徐々に実感してい

った。

「いっちゃったんだよね……本当に」

ｃｈｏｓｗｌｄ―０９：二人っきり

それから暫くの間、スバル達はエリアパークを仲良く元気良く遊び回っている。しかしゴン太は、お昼の牛丼の食べ過ぎでお腹を壊してしまった。今は微妙に大人しい。

絶叫マシーンの後の休憩も兼ねて、スバルとミソラは仲良く大観覧車の中にいた。ゆったりとした時の流れを楽しんでいるのだ。外に広がる景色からコダマタウンが一望できる。スバルの家の青い屋根は小さく謙虚に、高いビルたちの間に混ざって確認できた。

しかし、なかなかスバル達がこの状況に持ち込むのには骨が折れた事だろう。ルナが必死にミソラとスバルを二人っきりにさせたがらなかっただろうから。嫉妬や微妙な乙女心がそうさせる。

残念ながら、彼女の健闘に結果は奮わなかった。そんなルナは腹の緩いゴン太と仲良く観覧車。密室で腹の緩い人といるのはさぞかし落ち着かないだろう。ルナとしては早く地上に帰りたいはずだ。

『しかし、良い天気で景色がきれいに見えます。あっ、アレはスバル様の家ですね』

トラッシュは窓際に置かれたハンターから感心していた。初めて見る景色に感動するものだあったのだろう。そこにハープがトラッシュを叱りつける。人生の先輩として教えてやるのだ。

『こらトラッシュ君、引っ込んでなさいって』

『はい？』
『スバル君とミソラを二人っきりにさせてあげましょーよ。空気を読みなさい。出来るでしょ？』
『なるほど。空気は吸うものじゃなく読むものでもあるんですね。メモリに記憶しておきましょう。ありがとうございます。しかし大気中に文字などは見当たりませんね』

トラッシュは実体化してキョロキョロとしてみる。真に受けた結果がこれだ。

『ちょっとー、何やってるのよ。二人っきりの空気が台無しじゃないのー。トラッシュ君て、ある意味ウォーロックに似てるわね。もう信じられない』
『私の半分はウォーロックさんで出来ていますから』
『もうー、どこ解熱鎮痛薬よー』

ハープはやれやれだった。
二人のおかしなやり取りにミソラは思わず吹き出した。

「いいよ、二人ともそんなこと気にしなくても。トラ君も外を見ていたかったら見ていていいよ？」
『ありがたいです』
「あはは、素直だね」

トラッシュのひたまっすぐさにミソラもすっかり和んでいた。スバルはそんなミソラを見て少し安心した様子だ。さっきからずっとミソラはあまり楽しそうじゃなかったのだ。そのせいかスバルもあまり楽しくなかった。
しかし彼女の等身大の笑顔を見ているとやっと心を一所に落ち着かせる事が出来た。そして一つ聞いてみる。もちろんスバルの笑顔

付きで。

「やっと笑ったね。さっきからずっと浮かない顔していたから心配していたんだよ？」

「えっ……？　そんな顔していたの私？」

「うん。ずっとね」

ミソラは自分の顔に手をあてがい少し唖然とする。ミソラは自分でも演技には自信があると思っていたのだった。スバルは続けた。

「理由も何となくわかってたよ。一週間前に聞いてたからさ……。無理して来なくてもよかったのに。……ゴメンよ、気がきかなくて」

スバルはニホンのＷＡＸＡでミソラの事の事情は聞いていた。恐らくミソラの言っていた遊園地もエリアパークの事だったんだろうと気が付いたのだ。

ただミソラは手を振って否定し、気遣って笑っていた。

「ううん、気にしないで。なるべくスバル君達とは一緒にいたいんだ。

こっちこそゴメンね。ちゃんと、楽しめなくて」

「いいよ……。辛かったら泣けばいいさ」

スバルは昨日の地上波映画で見た格好いい台詞を言ってみた。キリッとした顔もしてみる。

「スバル君……」

優しいスバルに少しうっとりとし、ミソラが艶っぽい女の声で返

すのだった。柔らかく染めたピンクの頬は本気だ。これは演技ではない。

そして自然とスバルとミソラは互いを見つめ合っていく。お互いが真剣に、友情以上になりかけた情熱を注ぎ合う。

しかし内心でスバルは、「え？　何この空気!?　ミソラちゃんのほっぺが赤いんですけど。何なんだこれは？　しかし、ミソラちゃんは可愛いなあ……」とエンドレスで繰り返していた。

だが、そんな事は差し引いても、それはそれはなかなかに良い空気。放っておけばそれなりの展開は期待できるはずだ。ただし放っておけば、だ。

トラッシュがぼそりと呟く。新しいデータを入手したのだ。いやらしいほど素直だった。

「ふむ……身体が熱を帯びだしましたね。特に肉体的な興奮はスバル様の方ですね。

ミソラ様の方は、心拍数的に精神的興奮をしておられる様子。人間の心理とは面白いです」

トラッシュはまじまじと二人を観察していた。それはもうまじまじとだった。満足げに一度だけしっかりと大きく頷いてハンターに戻る。そしてほざく。

『さあ、続けてください』

『って、続けてください、じゃないでしょ!!　バカ!!』

ハープが怒る。実体化してトラッシュの入っているハンターを床に叩きつけた。それは容赦がないだけに、破壊的ないい音が鳴る。

ハンターはジャイロ回転しながら固い床と激烈な出会いを果たしたのだった。衝撃的すぎてハンターもトラッシュも壊れてしまいそ

うだ。
　トラッシュは口から血みたいな電波情報を吐きだす。だんだんとノリが良くなってきているではないか。ココロメモリが成長していると言う証だ。

『グッ、ハンター内にダメージ確認！　右側部に痛烈なダメージ。な、なんて言うことでしょうか！？　スバル様の『ぼくの天体観測日記』のパート１４５から１３０２までが消失されました……。残念です』
「ちょ、ちょ、ちょっと、ハープもトラッシュも何やってるんだよ！　うわわ、僕の展開観測日記がー！！」

　涙目になりスバルは無様に床で転がっているハンターを慌てて取り上げる。どこか壊れてないかを必死に点検していた。大切な大切なハンターが心配で堪らない。その姿は少し滑稽だ。
　ちなみに『僕の天体観測日記』とはスバルが物心ついたときから毎日つけているものだ。内容は非常にマニアックでアブノーマルな星や宇宙について延々と書きつづられた変態的日記である。

　面白おかしくなったミソラは口に手を当てて、クスクスと笑ってその様子を見ている。スバルが可哀そうながらも少し可愛く見えたのだった。甘い空気はどこへやらだった。

『ふう、台無しね。ポロロン』

　ハープはやれやれだった。

少しばかり痛めつけられたハンターを大事そうに抱えながら、スバルは観覧車から出てきた。その表情は残念で一杯だった。
そこに突然、カメラのフラッシュがミソラとスバルを襲う。それはすごくまぶしい。二人は思わず腕で顔を覆った。
観覧車の前の通路には、うっそうと茂った植え込みの物陰がある。そこにマスコミでも隠れていたのだろうか。

「スクープ！！　ロックマンと大人気少女シンガーソングライターがドキドキデート！？
このネタは使えるわ！　使えるわよ！！」

女性の声だ。一眼レフ型のカメラを構えて、連続フラッシュ攻撃だ。いきなりの出来事に驚く二人。

「ちょっと、何なんですか！？　マスコミさんですか？」
「私がスバル君とデートなんて……。ちょっと、まあその……エヘヘ」

スバルとしてはマスコミはいい迷惑。ミソラとしてはまんざらでもない。
カメラのフィルムが切れた所で突然フラッシュ攻撃はやんだ。ふとスバルは犯人に目をやった。
スバルの前で一人の可愛らしくて大人しそうな見た目の女子高生

がキョトンとしているのであった。
自分のほっぺたをツンツンと突いていた。

「あれー、私の事忘れちゃったの？　こんなかわいい女子高生を忘れるなんて……。スバルンったらー、罪なオ・ト・コ・ね」

この女はスバルの前でいやらしい声を出すのだった。下唇に人差し指を当ててどこぞのモンローだ。
スバルは手をぶんぶんと勢いよく振っていた。シェイプアップにはちょうど良い運動だ。だが彼としては必死の否定である。

「ちょっと、なんか変な誤解を生むような言い方は止めてください。えっと確か、キミドリさんでしたよね？」

キミドリはぴょんと跳ねてスバルの鼻っ面を突っつく。スバルはたまげて尻もちをついた。完全に押されている。

「アッタリ！　なんだ、覚えててくれたんじゃん。あ、ミッソーもこんにちは」

キミドリはペコリ。ミソラもペコリ。
スバルは何とか気を取り直しキミドリに訊ねてやる。

「あの、なんでキミドリさんが……？」
「え？　だって、私も『チームダブルプリティー』のメンバーじゃん？　もうっ、私だけ誘ってくれなくてさびしかったんだからー。ほら、シドウさんにチケットも貰っちゃってるんだぞ？
それになんか面白そうじゃん！」

キミドリの横にいる謎の物体も加勢する。

「そうだよ！　私たち寂しかったんだからね！　それにミライ君が一人で観覧車に乗るなんて可哀そうで可哀そうで……」
「いや、有難迷惑だった。お前らはうるさくてかなわん」

とりあえず言いたい事は山ほどあるスバル。まずは落ち着いて、挨拶代わりにスバルは質問を投げかけてみる。

「あのチーム『ダブルプリティー』って……？　終始、嫌な予感しかしません」
「なにって、決まってるじゃん！　チームオメガとか、名前からしてつまらなさすぎ！　ここはかわいい女の子である、ミッソーと私がいるチームって事でダブルプリティーが最適でしょ？」

キミドリは楽しそう。スバルはげんなりした。

「なにが最適か分かりません……。こんな変な名前で良いのミライ君？　士気に係るよ？」
「しらん、好きにしろ。ただ相手の油断を誘うのにはいいかもしれんな」
「さっすが！　リーダー話が分かるぅー！」

とりあえずキミドリはミライとスキンシップをとりたがる。ミライはスキンシップが大嫌い。

「うわ、やめろ俺に触るな！　頼むから離れてくれ。ちょっとまて、どこを触っている貴様！！」
「なんだかなー。なんだかなー」

スバルは段々疲れてきた。しかしまだまだ言いたい事はある。何

と言っても、キミドリの横に何か宇宙人みたいなものが浮いていたのだ。とりあえず気にはなる。
ほっといたら今日の寝つきが悪くなる。

「あと、その横に浮いてるのは何ですか？　見た感じ、聞くまでもない感じですけど……」

緑色をしていて立派な望遠鏡を抱えた小さな電波体に、キミドリは手をやって紹介してやる。

「ああ、この子？　この子は私のウィザードでスコープっての。聞いたこともないような何とか座のＦＭ星人だって」

キミドリのウィザードが怒る。

「ちょっと、キミドリ！　私は望遠鏡座のＦＭ星人のスコープっていつも言ってるでしょ？
あ、えっと、どうも、初めましてスバル君、よろしくね？」
「うん、よろしく。それにしても望遠鏡座のＦＭ星人とかもいるんだね……」

スコープは少し寂しげに笑っている。自分がマイナーだと重々承知なのだ。悲しい現実なのだ。

「やっぱり、そう思う？　でも、私たちの一族って代々、天体観測とかしていたんだよ？　すごいでしょ？
精密な角度にアングル、対象までの距離、緻密な構図、色々な事を求められる大変な仕事なんだから！　要求された画を撮るのが私の仕事なんだ」

スコープはエッヘンと自信満々気だった。どうやらスコープは女の子の様子。

「へえ、なんかすごいんだね。僕も趣味が天体観測なんだ。いつかご教示を願うね」

スコープに友好的なスバル。キミドリはそんなスバルの肩を叩いて無駄に自分をアピールする。相当な目立ちたがり屋だ。

「でねでね。そんなカメラマン根性丸出しのスコープと私の息はピッタリ！　電波変換したらどんな敵もどこからでも狙い撃ちしちゃうんだからね！

君のウブなハートも狙い撃ちだ！！　バンッ」

「うへぇ……」

さらにげんなりとしてスバルは、満足げにカメラを構えているキミドリと距離をとった。長く関わりたくないタイプの人間だと察知したのだ。

そしてだ。ついにルナがそんなただただ自由で奔放なキミドリを律する。キミドリも支配下に入れるつもりだ。ルナとしてはここが力の見せ所。

「ちょっと、そこのお姉さん！！」

「はーい。何かな？」

「私たちルナルナ団の輪を乱す行為は止めてください！　スバル君に変なアプローチを仕掛けないでいただきたいですわ！」

ルナはいたって真面目。キミドリは爆笑。ルナはすぐに赤面。

「ぷっ、アハハ！！　ルナルナ団って！」
「ちょっ……！！　何なんですか、いきなり笑うなんて失礼すぎます！！　ルナルナ団という高貴なる名前に何かおかしなところでも？」

キミドリは腹を抱えて笑いだす。ルナは真面目にバカだと思ったのだ。ちなみにスバル達も例にもれず笑いをこらえている。しかし後が怖いので表立っては笑えない。
しかしクールなミライだけは付き合っていられないようで、レイダーに飲み物を買いに行かせた。冷たいものを飲んで落ち着きたいのだ。

「高貴なるって……！！　アナタの名前絶対にルナって言うんでしょ？」
「な……、何故！　私の名前を……。アナタと私は初対面のはず！！」
「図星かー！　なんか、賢そうでいい感じにバカみたいに抜けてるね！　なんか気に入ったよ、ルナっち！　私もルナルナ団に入れてよ！」
「ルナっちて……」

キミドリはルナに馴れ馴れしく肩に手を回す。ついでに自慢のドリル巻き毛に顔を埋めてもみる。

「マフマフー。ルナっちぃ、良いシャンプー使ってんじゃん？」
「キャー、変態がいるわ！」
『ルナちゃん！！』

危険を察知したルナが酷く喚く。同じく察知したモードのハリセンを炸裂した。

「ぐっはー」

後ろにのけぞるだけで、大袈裟なリアクションだ。キミドリに演技派女優の将来が期待される。

ミライはお使いから帰ってきたレイダーよりコーヒーを受け取りそれを開ける。それをを飲みつつその様子を眺めていた。溜め息をつき苦笑。

ミライ自身、まんざらこの平和なひと時が嫌いではないらしい。確かにそれはそうだろう。サテラポリスは平和の為に戦っているのだから。

「ふっ、バカだな」

「お前がな」

突然のいきなり。心の準備もさせずに聞いたこともない声だ。さらに邪な演出でミライの微笑みに影が差す。人影だった。

ミライは油断していたところを突かれたのだ。ミライは声の方に顔を向けようとする。しかしすぐに威圧的な声に制止させられる。

硬いものがミライの背中に突きつけられる。結果としてミライの立ち位置が悪かった。スバル達の輪から少し離れて一人でいた所を狙われたのである。

「動くな」

ミライの背中にごつごつとした感触の鉄の塊があてがわれたいる。ミライはサテラポリス。この感触は知っていた。銃口だ。冷たい鉄のひんやりとした殺意に、ミライは小さく笑った。その声色は少しだけ敵の隠伏術に敬意を表していた。もちろんそんな場合ではない。

ただ、そう思ってしまうほどに敵の仕事が圧倒的なほどに華麗だ

ったのだ。ミライは出し抜かれた。

「お前ら……一体何者だ？　この俺のスキを突くなんてな。しかも電波人間じゃないな……生身の人間。プロの殺し屋か？」

しかしミライも油断していたのは一瞬で、任務のくせで常に当たりに気を配っていた。観覧車の前は見通しも悪くはないのでミライの警戒網をかいくぐるのは至難の業じゃない。

だが、それをやってのけられてしまった。完全な失策だ。

「そうさ、お前らの暗殺を頼まれた殺し屋さ。俺達はな」

自分の失態に顔を険しく歪ませながらもミライは右と左に目をやる。やはり当然か。しっかりとスバルとゴン太にも銃口が突きつけられていた。スバル達は殺されないために、ホールドアップしていた。

犯人は三人。ミライを無力化したら、そうする手はずだったようだ。残りの子供たちはてんで素人なので、プロの殺し屋からすれば一瞬の仕事。手際の良さには頭が下がる。

当然、ミソラとルナとキミドリもしっかりと銃で牽制している。女の子は恐怖で泣いてしまいそうだ。ルナはもう崩壊寸前。意外な事にキミドリはまだ冷静だ。

そんな状況でミライ担当の殺し屋が圧倒的優位な立場から言った。ミライ同様、敵に賛辞を送る。

「お前のスキを突くのにはかなり苦労したぜ……。ジャミンガーを使おうにも周波数を気取られるしな。

だが、いくらサテラポリスのエースといってもまだまだ子供だな。お友達の前じゃ、一瞬だけ気が緩んだんだろ？　お前と同じプロの

俺の目はごまかされなかったぜ。
だが、お前は良くやった方だよ。俺達相手に四時間粘ったんだからな」
「チッ……、以前の俺なら、こんなヘマを絶対に犯さなかった」
ミライは少しとはいえ、友達というものに現をぬかした事を後悔した。
殺し屋は続ける。未来の冷たく耳元で呟いてやるのだった。
「これが、お前達が足を踏み入れようとしていたウラの世界だ」

choswld―11：命より大切なもの

現在の状況は最悪。どこをとっても活路は見いだせない。一般の数人は気がついていたようだが、なにぶん素人なので、手出しが出来ない。警察を呼ぼうにも、到着したその頃には全てが片付いているはずだろう。

ドッシーマウスも流石に殺し屋には風船を渡しに行けない。

ミライは口を開く。慎重に慎重を期し、活路を探している。しかしどこを見ても、活路は見いだせない。

ドッシーマウスが慌てている様子が酷く可笑しいだけだ。

「お前らのクライアントは誰だ？　やはりＷＷＲか？　しかし、何故俺たちの存在がウラの方にばれている……？」

「まあ、冥土の土産に教えてやる。俺達にお前達の始末を依頼したのは、ＷＷＲじゃあない……。

ウラトーナメントに参加する他のチームに、どれだけサテラポリスを快く思っていない連中がいると思う？　お前らの敵はＷＷＲだけじゃないってことだよ」

「くっ……。」

「それに、情報屋を使っているのがお前達だけだとは思うなよ？ウラの住民は狡猾で、陰湿でどこまでも自分達が一番でないと気が済まないんだ。

トーナメントを勝ち残るためならなんだってするさ」

最後に殺し屋は呆れたように呟いた。呆気ない幕切れに期待外れもいいところだったのだ。

「ウラじゃ名の通ったソウル・レイダーも電波変換が出来ないんじゃ手も足も出ない……か」

「……」

「だってそうだろ？　現に銃口を突き付けてるだけで、お前達は無力化できるのだから。お前達はいくら電波変換できるとはいっても、まだまだ子供だ。

逆に電波変換させなければただのクソガキだ。

ウラの世界に来るのにはまだまだ早すぎだったんだよ。

……アバヨ」

ミライの背中に押しつけられた銃口は、ミライの心臓をきっちりとその射線で捉えていた。プロの殺し屋が狙いを外すことはまずないだろう。

ミライ達は裏の世界を甘く見過ぎていたのかもしれない。それがこうして最悪の事態を生みだすのだから。

背中に、命を摘み取る力が強く押しあてられる。殺し屋が引き金を引こうとしたその時だ。ミライが終わるその時だ。

思わず、堪らずだった。

「や、やめてよ!!　ミライ君を殺すな」

スバルだ。必死の形相で殺し屋に訴える。自分の立場を忘れて、一心不乱にミライを助けようとする。

「あ？」

「ミライ君を殺してみろ!!　僕が絶対に許さない」

そんな威勢の良すぎるスバルに、スバル担当の殺し屋が銃を思いっきりこめかみに突きつける。これ以上は危険だ。

「立場分かってんのかクソガキ？」

「う、うるさい……！！　僕の目の前で友達がいなくなるのはもう嫌なんだ！！」

「あ？　何言ってんだ。ならお前から先に死ぬか？」

その時ミライは少しだけ後悔した。さっき友達に現を抜かした事に後悔した事を後悔したのだ。

だからミライは、この気持ちを大切にしなければと思った。こんな自分を友達だと言ってくれるスバルのために。

スバルを死なせるわけにはいかない。今のミライはそれだけだった。

スバルに礼を言い、ミライは殺し屋達に立ち向かう。自分の今までの全てを賭けて。

「星河、ありがとう。だが、もういい。後は俺に任せろ」

「でも……」

ミライはそのまま続けた。

「おい、犯人ども。その子どもたちから離れろ。そうしたら、死刑だけは見逃してやる」

ミライはまず自分に犯人達の注意を集めようとする。

「お前、立場は分かってるのか？」

「分かってて言っている。その子たちを見逃すことが出来たのならば、お前達も見逃してやると言っているんだ」

流石にここまで舐められると殺し屋も腹が立ってしまう。しかしミライの目は本気だった。
銃口を突き付けられている少年の目ではない。鬼気迫るものを感じてしまう。

「このガキ、舐めやがって……！！」
「舐めちゃいない。公平な交渉だ。なぜなら俺はそんなものじゃ殺せないからな」

ミライは殺し屋を睨みつける。

「ふざけるなよ」
「では、俺を撃ってみろ。死ぬと思ってるんだろう？　撃ってみたら分かる事だ。
ただし、その場合でも、この子たちを見逃してもらう。サテラポリスのエースが死ぬんだお安い御用だろう？」

ミライは挑発するためにわざと笑みを作って見せる。

「だったら、死ね！」

殺し屋の捨て台詞は本気の殺意を込めて言い放たれる。すぐに乾いた爆発音がエリアパーク一帯に一気に広がった。
ミライの背中に鉛の塊が撃ち込まれたのだ。ミライは背中から吹っ飛ばされた。一回、二回とルナの目の前で木偶人形が転がる。

「キャー！」

ルナは膝が砕けて、悲鳴をあげた。ミライの背中には大きな穴が

開いていたのだ。これは助からない、と理解したはず。
殺し屋は、笑っている。約束も守る気はない。理由は殺し屋であるということだけで十分だ。

「バカな奴……。
それにお前が死んでもこのガキどもを見逃す理由にはならねーだろ！！　交渉もひったくれもねーぜ。バカヤローが」

殺し屋の言い分も最もだ。スバルに銃口を押しつける。スバルは目を瞑った。ミライが撃たれて、戦意が喪失してしまったのだ。

「まったく。ウラの住民はクズばかりだな。約束も守らないとは……」

ミライはゆっくりと立ち上がった。背中には確かに銃弾は撃ち込まれたはず。
しかし、生きていた。流石の殺し屋も驚きを隠せない。心臓を確かに狙ったのだ。生きているはずがない。

「お、お前。なんで生きてやがる！」
「防弾チョッキだ」

ミライはそう言い背中を払う。
殺し屋はそんな言葉は嘘だとすぐに見抜いた。防弾チョッキ越しに心臓を狙うなんてミスを犯すはずはないのだから。

「嘘つけ！　そんな感触なかったぜ！！　この化け物が」
「だったら、お前の勘違いだったんだろう。二流半の殺し屋が」

冷静さを欠いた殺し屋は、ミライをすぐに殺そうとする。全員が

全員、ミライに銃口を向けるのだった。
この化け物を早く始末しないと、と思ったのだろう。

しかし殺し屋はミスを犯した。プロらしからぬミスをだ。銃口がミライに向いた事で、スバル達の安全が確保されたのだ。
同じプロであるミライがその一瞬を見逃すはずはない。

「マテリアライズ……！」

ミライは拳銃を生成し、迎え撃つ。発砲音が数発だけ鳴った。

ミライは正確に拳銃を狙い撃った。スバルとゴン太担当の殺し屋の拳銃をはじきとばしていたのだ。
背後のもう一人の銃弾は、いつも身につけている手袋で受け止める。ミライの手のひらには潰れた鉛玉が転がっていた。これも防弾製品なのだろうか。

殺し屋達も呆気にとられている様子。こんな結末は予想にしていなかった。ミライはすぐにスバル達に向き直る。

「いまだ！　みんな、逃げろ！」

ミライの指示で、スバル達はすぐに安全な場所まで逃げ出す。これでひとまず安心か。

「させるか……！」

しかし、そうは問屋は下ろさない。残った一人の殺し屋がまだあきらめていない。せめて、一人だけでもと拳銃を逃げるスバル達に向ける。

しかし、悪あがきもそこまでだった。

「へーい、周りもよく見ようね」

ドッシーマウスの着ぐるみを脱ぎ捨てた人物が助っ人に来たようだ。残ったこの殺し屋を羽交い締めにするのだった。

その人物は南国ケンだった。

殺し屋は悔しそうにつばを吐いた。

「くそ……！！」

「南国さん……」

「いやー、良く頑張って隙を作ってくれたね。ミライ君！」

南国は白い歯を見せて清々しく笑った。

「ハイハイ。このくらいのぐるぐる巻きでいいかな」

南国はすぐにテキパキと殺し屋達をお縄に頂戴した。そして南国は素晴らしいまでの勝利の笑顔を作り出す。思わずミライも釣られて笑う。

ミライも流石に肝を冷やしたのだろう。裏の世界の凶悪さを改めて認識したのだった。そして疲れがミライを一気に襲う。

無理をしすぎたのだ。銃弾を受けるなんて、無理以外の何物でもない。

そうなると流石に肩で息をしているミライ。そんな彼に南国は手をさし延ばす。

「さて……。この殺し屋君達をどうしようか？　ミライ君にいい考えはある感じかい？」

ミライは南国の手をとるとすぐに答えた。さも当然と言った口調だ。悪に容赦は要らない。

「尋問しかないでしょう」

「なるほど……ねえ。まあそれしかないかあ。あんまり好きじゃないけどねえ」

「ウラの連中の事です。恐らく有益な情報は出てこないでしょう。ですが、今はどんな情報でも欲しい」

ミライの言葉に、犯人の内の一人が咳を詰まらせたかのように笑

う。縛られて身動きが取れないはずだが尊大な態度で迫ってくるのだった。

「……バカめ。俺達だって腐ってもプロだ。この程度の状況を想定していないわけはないだろう？」

「なんだと？」

ミライは犯人を見下ろす。その表情は冷たい。

犯人も負けじとミライを見上げて睨みつけてやる。

そして犯人は舌をだらりと垂らした。その舌の上には何か乗っていた。浅黒い球体のようなものだ。球体は不安定にノイズ混じりにゆらゆらと振るまっている。

ミライは飴か？　と一瞬不思議に思う。だが、すぐに却下して取り上げようとした。だが、さすがに犯人の方が動作は速い。

飴のようなものを飲みこんでしまった。

「まさか、口に何かを含んでいるとはな……。さっきのは、何だ？」

ミライの問いかけに、犯人は背中を丸めてさも可笑しそうに笑う。笑うたびに背中が小刻みに起伏する。危険な人間だ。

「クックックッ……。お前らはやっぱりウラの事を何も分かっちゃいないなあ。

さっきのはウラで出回ってるクスリだよ。あんまり使いたいものじゃないんだけどな」

「……なんのクスリだ？」

背中を丸め顔を伏せていた犯人だったが突然、勢いよく顔を上げた。ミライは面喰らった。あまりのものに少し硬直してしまう。

「なっ……！」

犯人の顔は半分電波化していたのだ。その部分はジャミンガーのものだった。ジャミンガーは酷く歪んでいる表情をミライに向けたまま続ける。

変換途中で声がふらついている。いかにも怪しい感じだ。喋りながらも徐々に確かにジャミンガーになっていく。

「へへ、ウラの世界はいろんなもんが出回ってる。地球以外のどっかの惑星で開発された、それはもうヤバいモンがわんさかだ。例えば……強制的に電波化させる新薬とかな！」

たちまち犯人達は完全に電波化して縄をすり抜けてしまった。ジャミンガー三人は真っ先にターゲットに標的を絞る。目標はスバル達だ。

スバル達が必死に逃げた百メートル程の距離などジャミンガーにとっては無いに等しい。逃げ隠れたスバル達の周波数を探しだしたら一瞬だ。

ミライと南国もすぐに電波変換する。しかし、そんな事をしている間にジャミンガーはあっという間にスバル達の場所を見つけ出した。

「見つけたぜぇー。南に１２０メートル行ったところいやがるな……。オープンカフェの近くか。

行くぜ！　野郎ども！」

ジャミンガーの一人が残りの二人に合図を送る。だが、そんな事を黙って見逃すサテラポリスの二人じゃない。

ジャミンガーの背後をまず白い電波人間が取った。一瞬だった。

「ブラッディアスタリスク！」

速攻のソウル・レイダー。目にもとまらない剣術がジャミンガーを襲う。しかしジャミンガーの方もなかなかの手練だった。

ジャミンガーの一人がソウル・レイダーの太刀筋を見抜く。そして同じく武器化した左の剣で受け止める。そのスピードは負けてない。

実体化した電波体同士の激しい打ち付け合いに空気が一気に炸裂した。ジャミンガーの方の剣が少し刃こぼれした。

こぼれた鉄くずが地面に落ちる前にソウル・レイダーは三度斬りかかる。しかしジャミンガーは全ての太刀筋に対応して処理する。

ソウル・レイダー相手に全然後れをとっていなかった。

思わずソウル・レイダーは息を呑む。裏の世界で任務をした事は数あったが、こんな経験は初めてだった。

自分のスピードと剣術に背を並べてくる者がいる事自体考えた事がなかった。

『ミライ様、この敵……』

「ああ、……できる」

「舐めるなよ。俺達はウラの住民で、さらにそこの殺し屋だ！　そこらのチンピラとはわけが違うぜ！」

「ふん……久しぶりに骨のある敵だ……！！」

気合を入れ直し、ソウル・レイダーは洗練された剣術でジャミンガーを責め立てる。しかしジャミンガーだって、何とかいなしている。

ソウル・レイダーが一気に決めようと剣を振り被る。しかしそこに敵の助っ人だ。

ソウル・レイダーとジャミンガーの一瞬の攻防にさらに一体のジ

ャミンガーが割りこんできたのだ。これで二対一だ。
同じようなジャミンガーを二体も相手取れば流石に余裕はない。
さしものソウル・レイダーも流石にこれではスバル達の方まで手が回らなくなった。予想以上にジャミンガー達が強すぎる。
ジャミンガーの太刀筋は一々ソウル・レイダーの急所を正確にとらえてくる。息もつかせない。

この状況を望んでいたらしく最後のリーダー格のジャミンガーがいやらしく頷く。すぐにスバル達の元へ動き出すのだった。

「ソウル・レイダーさえ足止めしてればこっちのもんだ。お前ら、時間を稼いどけよ！」
「僕の存在を忘れないでくれよ！！」

そう言われると、忘れてはならない者がもう一体。南国ケンことサーフ・サーファーだ。
勢い任せにジャミンガーへ波乗りの要領で突進する。勢いだけは凄まじいものがある。
だがあっさりとジャミンガーはサーフ・サーファーの攻撃を軽くいなす。流石リーダーだ。余裕が溢れている。
まるで何事も無かったかのようだ。普通にすぐにスバル達の元へ行こうとするのだ。最後にサーフ・サーファーを挑発するのも忘れない。

「はっ、お前なんて眼中にねえよ！　波乗りヤローが！」

言うが早いかジャミンガーはすぐにその場を去った。サーフ・サーファーも言われたままじゃいられない。

『へい、ケン！　コイツはムカつくぜ』

「はやく、追いかけるよ！　ミライ君、ここは君に任せて行くね」

ソウル・レイダーはジャミンガー二体を相手にしながら返す。

徐々にだが、ソウル・レイダーが地力の差で二人を圧倒し始めてきた。

ジャミンガーの薄暗い装甲に切り傷が増えてくる。それもだんだん深くなってくる。勝負はそう長くはないだろう。

「ええ、この二体は俺が倒しておきます。南国さんはすぐに残りの一体をお願いします。

俺もすぐに後を追います」

「了解！」

ｃｈｏｓｗｌｄ―１３：最終手段

数分が経過した頃だろうか。オープンカフェの前の広場で四体の電波体が舞っていた。スバル達はジャミンガーを迎え討っていたのだ。

この場所はキミドリの先導で、一般の客人達は避難してしまっていた。なので、その場は電波体だけの戦いの舞台となっている。

今、ジャミンガーの剣が折れて弾け飛んだ。次は、足のアーマーが吹きとばされた。

先刻からジャミンガーのリーダーは、ロックマンとサーフ・サーファーとハープ・ノートを相手取り戦っている。三対一はジャミンガーにとってはもう負け戦だった。

仕事を遂行しようとしたばかりに、思わぬしっぺ返しだったのだ。冷静さに欠いた判断だった。殺しの手段を電波人間に変えれば、スバル達の方に分がある。

その証拠に暗黒のバイザーは砕かれて、焦りと疲弊からその目はうっそりと光を失っていく。殺し屋達は銃器で始末をつけるべきだったが後の祭り。

こんなはずではない。データとは違う。ロックマン達がここまで戦えるはずはない。俺は裏世界の殺し屋だ。今さらになって色々な情報が頭の中を駆け巡るのだった。

「まさか、ロックマンがここまでやるなんて計算外だったぜ。流石に三対一はきつかったか……？」

ロックマンが、ソードをジャミンガーののど元に突き立てる。
ジャミンガーはそれを手でわしづかみにする。細かい戦術などもうない。手に力を込め、それを思いっきり叩き折る。俺はまだやれるぞ、と示すのだ。

「はあ……。どうだ!?」
「しぶとい奴……」
「三人まとめて掛かってきやがれ……!!　返り討ちにしてやる」

ジャミンガーの粗暴さに拍車がかかる。ジャミンガーに逃げる気はないのだろう。それだけプライドは高いようだ。
立っているだけでもはや精一杯のはず。強がるには命を賭けなければならない状況だ。ジャミンガーはだから強がった。
だが、強がりもそこまでだった。

「なら四人まとめてはどうだ?」

ジャミンガーの背後から気の利いた台詞が送られる。ソウル・レイダーだった。
ソウル・レイダーがジャミンガーの心臓部を背中越しに捉えている。鋭い切っ先をジャミンガーは確かに感じていた。早々にリベンジされてしまったのだ。
ジャミンガーは観念したように両手を上げる。

「ちっ……。アイツ等はやられちまったか」
「なかなか強かった。殺し屋でなくサテラポリスになっていたら、素晴らしい隊員になれていたはずだ」
「……クソが」
「道を誤ったな。お前を殺人未遂および器物損壊の現行犯で逮捕す

る」

ソウル・レイダーがサーフ・サーファーに犯人の身柄の拘束を頼んだ。よしきた、とサーフ・サーファーが電磁気を帯びた拘束具をマテリアライズする。

しかし再三にわたりジャミンガーはまだ仕事を遂行しようとしていたのだ。凄まじいまでのプロの執念だ。

とっておきの最後の花火。人生で一度だけの最終手段に手を染める。ジャミンガーがきっぱりと言い切った。

「ここで捕まるなら死んだ方がマシだ。サテラポリスに捕まって今までウラで生きてきた誇りを失うならここで全てを終わらせる。負け犬になるくらいなら、殺し屋としてお前らをきっちり葬ってやる。

あまりスマートな手段じゃないが、もうどうでもいい……」

「往生際の悪い奴め……。もう、さっきみたいに好きには……」

ソウル・レイダーの言葉をジャミンガーが遮った。

「いや、もう終わりだぜ……。

最悪のケースを想定して俺の体内に埋め込んでおいた爆弾を今、起動させた。この手段は俺も死んじまうからスマートじゃないし、一回しか使えない最終手段だ。

……この俺をここまで追い込んだのはお前達が初めてだ。喜べよ」

予想外だった。命がけもいいとこだ。ここまで狂った相手だとはとても思えなかった。ソウル・レイダーはまたも後手に回ってしまう。

ミライは戦いにこそ勝ちはした。だが、執念も相まって殺し屋の経験値が一枚も二枚も上回っていた。良いように事を運ばれてしま

う。

「自分を爆弾にだと……！！　まさか、ここまでするとは……。仕方ない、お前の息の根を止める！」

ソウル・レイダーがジャミンガーの首をはらおうとする。

「おっと、やめときな。今は俺自身が爆弾だ。ちょっとでも衝撃を与えてみろ。半径数キロが吹き飛ぶぜ？

それにオレを殺しても爆弾は止まらない」

「なら、光速で宇宙空間にお前を連れていく」

「それも、やめとけ。俺が大人しく連れて行かれるわけないだろう。下手に動いてみろ。今すぐ爆発させるぞ？

まあ悪い事は言わないから大人しくしとけ。そうすれば数分の間は生きてられる」

万事休すだった。決定権がジャミンガーにある以上、迂闊にはもう動けない。スバル達は命がけで向かってくる敵の前に成す術がなかった。

何もかもかなぐり捨て、がむしゃらになった敵はどこまでも驚異的だ。ただひたすらにその敵は爆弾としてここに存在している。止められないし、動かせない。

どうしろというのだ。ジャミンガーは死ねと言うのだった。

「クソ……」

ソウル・レイダーはただ呆然と立ち尽くすしかできなかった。力で解決できないこともあると知った。ソウル・レイダーの持っている力では及ばない。

ただ、そんな様子を上空のウェーブロードから見下ろしている電波人間が一人いた。その姿形はクリムゾンウェーブにいたキリン・ライトニングのものと同じだ。

大きな特徴として、頭から大きな一本の角を生やしている。そして淡い青のボディーの表面を青い電気がうねり走っていた。

彼が以前言っていたことは本当らしい。ミソラを見張っていたのだろう。そこにこの状況だった。

ミソラがこれを乗り越える様を見届けるのもまた大切なのだろう。だが一つさじ加減を間違えれば大変な事になる。

「なんだか大変な事になっているな……。ウラに首を突っ込むからこういうことになるんだよ」

キリン・ライトニングは少し肩を落とす。倦怠感に苛まれたのだ。見張り役としてはトラブルは御免こうむりたい。

『まだ見張っているつもりか？　恐らく彼奴らではもうどうしようもないだろう。

ジャミンガーの体内のエネルギーが一点に集まり増大していってる。爆発も時間の問題か』

「はあ、ミソラに死なれたら俺が殺されるな。もう、そろそろ頃合いかもな」

『まごついている暇はないぞ、ジョニー』

「任務のついでに、ちょっと助太刀してやるか」

キリン・ライトニングはミソラ達を助ける事にした。ウェーブロードを滑空し、スバル達の元に降り立つ。

スバルはキリン・ライトニングにすぐ気がついた。
その圧倒的な戦闘周波数に気がつかないわけがない。
ソウル・レイダーは戦慄した。油断してもいないのに、すぐ近くに来るまで気配すら感じ取れなかったのだから。その電波人間の力量を思い知らされた。

「誰……？」
「俺達の警戒網の中をこうすんなりと入ってくるとは……」

キリン・ライトニングは少し手を上げ軽く挨拶する。通りすがりのただの一般市民を装うのだ。

「んん。まあ、通りすがりのただの電波人間だ」

ｃｈｏｓｗｌｄ―１４：親友との再会

そして挨拶もそこそこにすぐにジャミンガーに手をかざす。ジャミンガーは吠える。人間爆弾と化したその体は既に薄橙色に光り輝いていた。

大量のエネルギーが集束していっているのだろう。

「てめえ、何しようとしてやがる。下手な事すると爆発させるぞ！？」

キリン・ライトニングは口元を吊り上げる。

「うーん、やってみろよ。てか、もう動けないだろ？　俺の周波数を当ててるんだ。動けたら大したもんだよ」

ジャミンガーは爆発しようと体に力を入れてみるが、力が入らなかった。キリン・ライトニングの言うように、金縛りにあったみたいに体が動かない。

キリン・ライトニングはただ手をかざしているだけだ。そうやってジャミンガーに超高濃度の周波数を当てていた。ジャミンガーはそれだけで動けなくなってしまう。

「てめえ……！！」

「じゃあな。文句は、宇宙のかなたで言ってな」

キリン・ライトニングは仕上げに戦闘周波数を最大出力にまで引き上げる。すると、エリアパークの上空の雲が引きちぎられたように粉々に混ぜ繰り返される。

ロックマン達は、その超エネルギーに踏ん張っていないと、吹きとばされてしまいそうだった。木々がざわめき、石畳の床が抉り返される。

それほどの戦闘周波数がキリン・ライトニングから発生している。

その高エネルギーに空間が耐えられなくなった。突然ジャミンガーの周りの空間に小規模のブラックホールが出来た。小さな黒い穴だ。

そのソフトボール大のマイクロブラックホールの吸引力は殺人的だ。あっという間にジャミンガーを呑みこんでしまう。ジャミンガーは成す術なく宇宙空間のどこかに飛ばされてしまったのだった。

そしてマイクロブラックホールはゆっくりと閉じていく。

「ふう……。一丁上がり、っと」

キリン・ライトニングは膝に手を置いて疲れたように、深く溜め息を吐いた。ロックマン達はその一部始終に驚きを隠せない。

「ス、スゴイ……。空間を裂くなんて……！！」

ロックマンは呆然とし、キリン・ライトニングを見やっていた。その眼差しには少しの憧れも含意されていた。

キリン・ライトニングは少し照れ臭そうにして、謙遜してみせる。なかなかに親しみやすい人物のようだ。

「へへ、よせよ。ブラックホール作るのって、かなり本気にならないと無理なんだぜ。おかげで、もうクタクタだよ」

キリン・ライトニングはそう言って、肩を大袈裟に落としてみせた。ユーモアにあふれた行動だ。
ロックマンは笑みを浮かべながら、キリンライトニングに頭を下げた。

「あ、あの。ありがとうございます。危ないところを助けてもらって……」
「いやー、いいよいいよ。困った時はお互いさまって言うだろう？」

そこにハープ・ノートもお礼だ。

「ありがとうございました。とっても強いんですね！　とてもカッコよかったです」
「……ん、ミソラか？　ありがとう。すっかり美人さんになっちまってよ。写真で見たときはこんな……」

キリンが小声で耳打ちをする。

『ジョニー……』
「ん、ああ」

すこし、沈黙するとキリン・ライトニングは背筋を整えて改まった。ハープ・ノートは首を傾げた。

「なんで、私の名前を？」
「さあ、なんでだろうか？　力づくでお兄さんから聞きだしてみるといいよ」

意味深にニヤリと笑う。そしてゆっくりとキリン・ライトニング

が腰を落して構える。さっきまでの陽気な雰囲気から一転して強戦士の風格を漂わせるのだ。

圧倒的な周波数が織りなす力の湖が空間一杯に広がっていく。隙など微塵もない。一つ眼光を光らせれば、ハープノートを緊張させてその場に釘付けにすることは容易に叶う。

これがキリン・ライトニングという電波人間の神髄だ。

「まずは宣言してやる。

俺はボスの命令でミソラを連れ去る事にする。四人全員でかかって、オレを食い止めてみな」

「え？　なんで……。さっき助けてくれたじゃないか」

ロックマンは気の抜けた声を漏らす。てっきり味方とばかり思っていたのだ。正義のヒーローが都合よく助けてくれたと思ったのだ。

だが、そんな事はなかった。キリン・ライトニングの頭にあるのはミソラを連れ去ろうという任務だけだ。そこに甘い情が入る余地はない。

キリン・ライトニングは最後の警告とスバル達の取るべき行動を指示してやる。敵としてはこれでも甘い方だ。

「たしかに俺は、お前達の敵のつもりはない。でも多分、分かりあえないと思う。だってミソラを連れ去る事に理解を示さないだろう？

悪い事は言わない。本気でオレを殺すつもりで戦っておけ。それが、お前達のできる最善のあがきだ」

『いっておくが、これは冗談じゃない。さっき助けたのもミソラ嬢に死なれては困るからだ……』

キリン・ライトニングは本気だ。しかし、まだ非情に徹しきれていない。

キリン・ライトニング程の強者になれば、ミソラを奪い去るなど

容易な事なのだ。一瞬で何事もなかったかのように終わらせることなんて簡単にできる。
しかしそこは親心だ。両方共に納得のできる形でミソラと友達を引き裂いてやることにした。

ソウル・レイダーはその意思を汲み取り、キリン・ライトニングに剣を向ける。もちろん今の自分では今一歩、力が及ばないのは把握していた。

「助けてもらった事に感謝はする。だが、俺の仲間を奪おうとするのならば……斬る！！」
「いい目だ。君は俺に負ける事でもっと強くなれるぞ。良かったな」
「確かに、俺じゃアナタに勝てる気はしない……。だが、勝ちたいと思える勝負だ！」

ソウル・レイダーは完全に戦うその気だ。
しかし、サーフ・サーファーが黙っていなかった。一歩前に出る。普段の陽気な様を潜ませて、ただ真剣さに訴えた瞳がキリン・ライトニングを見つめていた。

「ミライ君。ここはちょっと、僕に任せてもらえないかな。この相手から感じるウェーブは僕のウェーブにしっかりと働きかけるんだ……」
「南国さん、何を？　この敵は、四人でかからないと……」
「いや……、まずはこの相手とは僕が戦わないといけない。そんな気がするんだ。一対一で力と力をぶつけて語りあいたいんだ！」

今、相対している敵に不思議と感じるものがあったのだ。サーフ・サーファーはソウル・レイダーの前に立ち、キリン・ライトニングに語りかける。

まるで古い友人と対話するかのように。

「やあ、君の正体はその周波数で何となくわかるよ……。僕のこの周波数を分かってくれるかい？」

「皆まで言うなよ。俺もお前の周波数で、お前の正体は何となくわかる。俺のソウルメイトよ」

サーフ・サーファーはにやりと笑う。

「フフフ、生きてたんだね。他のクルーも無事なのかい？」

「さあな、分からない。助かったのは俺だけかもしれないし、今もあの人達は宇宙空間を漂ってるかもしれない」

「そうか……。でも君が僕の目の前で立って向かい合っているのは事実。

そして事情は分からないけど、君が僕の敵として立っているのもまた紛れもない現実だ！」

キリン・ライトニングは変わらぬ友に安心した様子だ。気持ち良さに手を広げる。

「ああ、そうだ。俺はお前の敵として立っている。出来れば敵としてではなく、仲間として向かい合いたかったよ。

だが、こればっかりは運命だ。どうにもならないさ」

いよいよ勝負の時だ。四年間溜めてきた思いを乗せて語り合う時が来た。サーフ・サーファーもサーフボードに乗り込み戦闘体勢をとる。

力の差は圧倒的だが、力と力をぶつけ合うことに意味がある。男同士の不器用な友情表現の仕方なのだ。

「さあ、始めようか――ケン！！」
「望むところだ――ジョニー！！」

ｃｈｏｓｗｌｄ―１５：神秘なる星の海

ただ勝負は一瞬で着いた。だが、互いの意志を確かめ合うには十分だった。

まずは南国がウェーブロードを伝い、ジョニーに攻撃を仕掛けた。ジョニーは何なく避ける。

最小限の動きで身を翻し、そのまま南国の背後をバトルカードのキャノンで射撃した。体勢を立て直した南国はトロピカルビッグウェーブでジョニーを呑みこもうとする。

しかし、ジョニーは周波数を爆発的に引き上げる事によって周りの空間を歪める。レギオンの見せた技と同じものだ。

その結果、ジョニーの周りだけ津波がかき消されてしまった。まだジョニーはその場から一歩も動いていない。まるで石畳の床にぴったりとその足がくっついているみたいだ。

ジョニーは勝負をつける為に、少し自分の力を開放した。人差し指を天空に向かって突き立てる。すると青い雷が指先に落ちて、帯電し始めた。

すぐにジョニーが一気に南国の元まで距離を詰める。そして指先の雷で南国をひと思いに射抜いた。肩を射抜かれた南国は体が弛緩して思うように動けない。

そこにジョニーがボディーブローをお見舞いして勝負ありだ。

南国がやられたその後。すぐにロックマン達が三人まとめて、キリン・ライトニングに攻撃を仕掛ける。だがことごとくかわされる。

キリン・ライトニングの卓越した身のこなしに誰一人決定打を生み出せない。
　ロックマンの放つグレイバスターはキリン・ライトニングの圧倒的な周波数にかき消されてしまう。ソウル・レイダーの太刀筋も見切られて避けられてしまう。
　ついにハープ・ノートはキリン・ライトニングの手刀を首に貰い墜ちた。

「あっ……！」

　ハープ・ノートは小さく声を上げると気絶した。

「ミソラちゃん！」

　ロックマンはミソラの方に目をやる。だが、それがいけなかった。背後をキリン・ライトニングが一瞬でとったのだ。
　ロックマンは常に背後をとられないように立ちまわっていたが一瞬の隙をつかれた訳だ。背後をとられたと気がついただけでもロックマンを褒めるべきだ。

「勝負中によそ見はいけないだろ？」
「しまっ……！」

　ロックマンの首に衝撃が走った。ロックマンは強い酩酊感に襲われてそのまま墜ちた。力なく地面に身を委ねるのみだ。
　残るはソウル・レイダーだけだ。キリン・ライトニングが「次は、お前だ」と言わんばかりに、ソウル・レイダーを指差す。
　その指先には高圧の電流がほとばしっている。これを貰えばすぐに昇天してしまうだろう。

「クッ……。化け物め……」
「化け物呼ばわりは酷いぜ。しかし、君も十分強い。相手が俺じゃなかったら、ウラの世界でも十分やっていける強さだよ」
「お前は一体何者だ？」
「俺はＷＷＲの幹部。キリン・ライトニングだ。悪いが、いい加減に勝負をつけさせてもおうかな。
――キリンショウライ！！」

キリン・ライトニングが手を斜め下に掲げると、電撃の塊である麒麟の形をしたものが七匹だけ召喚された。
ソウル・レイダーはしっかりと構える。居合の型だ。

「まさかここまで、幹部と力の差があるとはな……。絶対ここを生き残りお前にリベンジしてやる。
ＷＷＲの幹部、キリン・ライトニングのその名前をしっかりと覚えておくよ……！！」
「大丈夫。俺は殺しはしない方針だ。今度会うとしたら、お前達がトーナメントを勝ち進んできた後だな」
「ふっ……、全てお見通しと言う訳か……」
「ああ、ボスもお前らを歓迎してくれるだろう。じゃあ、これでお終いだ。」

ソウル・レイダーに麒麟の形をした電気の塊が襲いかかる。ソウル・レイダーは三匹まで斬り払うことに成功したが、残りの数匹に襲いかかられると膝から崩れてしまう。
そして、とうとう倒れてしまった。

とりあえず、ひと段落した所で、キリン・ライトニングは気絶しているハープ・ノートを抱え上げる。キリン・ライトニングは上空のウェーブロードへ昇りながら、ハープノートに目を落とす。

その目はどこか優しいものを感じさせた。

「お前と話がしたい人がいるんだ。ミソラ……」

すると太陽の光がハープノートに差す。二人はコスモウェーブまで上がってきたのだ。明るい太陽が二人を照らし出すのだった。暗い空間に灼熱の球がぽっかりと浮かんでいた。

その揺らめく太陽をバックに、キリンは宇宙混迷の果てにある大地へとミソラを導こうとする。

その為に、まずキリン・ライトニングはノイズウェーブの入り口を作り出す。彼にしてみれば造作もないことだ。宇宙空間に手をかざすだけで、ノイズウェーブの入り口が出来た。

「さて、と。これでアジトまでの道のりはできたか……」

ジョニーにキリンが精彩に欠ける口調で言った。

『ジョニー。このミソラ嬢をボスに会わせていいのか？　私は一抹の不安ぬぐえぬのだが……』

「大丈夫。アイツはミソラに会ったところで決意は変えないさ……。きっとな」

『だと、いいが……』

キリンは漠然と何かを危惧していた。だがすぐに、キリン・ライトニングはノイズウェーブに身を投じる。そんな事に心配していても仕方がないのだ。

ノイズウェーブが繋ぐ先は渾沌とした世界だ。辺りは灰褐色のノイズが飛び回っていた。ノイズ密度は凄まじいが、ウェーブロードは存外整備されている模様。綺麗にキリン・ライトニングが映り込

んでいた。
ここはノイズウェーブの第七階層セピアウェーブ。宇宙の所在で言えば地球よりもさらに辺境の位置にある。終末部分に当たる宇宙空間だ。
ここまで深い階層に来ると、地球人の文明圏を逸脱していた。他惑星の電波体が数体だけ確認できる。
キリン・ライトニングと目が会うと一人の電波体はお辞儀をしてくれた。キリン・ライトニングもお辞儀を返す。挨拶のマナーは地球と大差ない。
しかしどうだ。セピアウェーブは、ノイズウェーブの深層部分にあるにもかかわらず穏やかだ。それも意外なほどに。
これはこの惑星圏にいる電波体が温厚な証拠だと言える。むしろ地球ほど荒れ狂った電波体こそが珍しいのだろう。

この事から不思議ながらも電波技術が発達している惑星は地球だけではない事が言える。他惑星の電波体も地球のそれとあまり見た目は変わらない。
これも何かの偶然か。はたまた何かの意思か。
アーマー部分に電波情報部分、基本はどれも同じだ。キリン・ライトニングは灰褐色の空間を突き進んでいく。

まずジョニーは、ウラスクエアに立ち寄るつもりだ。セピアウェーブを少し進むとウラスクエアが見えてきた。
まずはミソラの身の安全を確保しなければならない。ウラスクエアに居を構える灰色の店にキリン・ライトニングが入っていった。
店内は、たまにセピアノイズが飛んでいる以外は普通だ。地球産ではない商品が小奇麗に並んでディスプレイされている。
とりあえず、カウンターの電波体にキリン・ライトニングが要望を言いつける。電波体はいたって朗らか。手を揉んで、客人を歓迎していた。

「いらっしゃいませ。ウラスクエア、プラネットパトラ店にようこそ！」
「オーナー。電波体の情報を維持する商品を売ってくれ。この子の電波変換が解けそうになっているんだ。
地球人と似た種族の住んでいる惑星のものを売ってくれ」
電波体はエアディスプレイに映る在庫を確認し始める。どうやら、キリン・ライトニングの要望に叶うものを見つけたようだ。
「地球人とにた種族……。あ、見つかりました。では、これが電波情報維持薬になります」
「ありがとう」
「地球人の方ですか？　こんな辺境の宇宙までご苦労様です」
「ああ、ありがとう」
キリン・ライトニングは店を出て、ウラスクエアの広場に出た。辺りを何気なく見渡してみる。ベンチにノイズの噴水。一組の電波体が楽しそうに談笑していた。
空も地面も地平線も灰褐色という事以外は至ってのどかな公園と変わらない。夜の公園とでも表現できよう。
「ここは、平和なもんだ。ノイズウェーブなのに、争いの気配がない」
『ボスのお気に入りと言う訳だ。そうだ、ジョニー、ミソラ嬢にさっきの薬を』
ミソラにスプレー型の薬を吹きつける。これで当面はノイズ空間でも問題はないだろう。

「よし、もうちょっと行ったら、惑星パトラのコスモウェーブだ。
そこまでいけば、ＷＷＲのアジトもすぐそこだな」

ｃｈｏｓｗｌｄ―１６：神の浮遊要塞

それからしばらくの間、キリン・ライトニングはセピアウェーブを滑走していた。そして十分程走っただろうか。

徐々にだがはっきりと空間のノイズ密度が低くなってきた。それは辺りを飛び回っているセピアノイズで判断できる事だ。灰褐色の塵は徐々に申し訳程度になってきているのだった。

するとすぐにノイズウェーブとコスモウェーブをつなぐ空間の歪みは見えてくる。歪んだ所は熱せられたアスファルトの陽炎のよう。ゆらゆらと外の光をねじり遊んでいた。

慣れたものでキリン・ライトニングは迷わずコスモウェーブへと抜け出した。外から青い恒星の光が出迎えてくれる。

出てきた先は惑星パトラのコスモウェーブ。ふと辺りを見渡すと一望できる。キリン・ライトニングの眼前に終末宇宙の生きざまが広がっていた。

星々は成熟し、様々な色に輝いている。それはまるで夜空に花開く星の花火だった。

銀河の躍動が寂しげな宇宙に色を差す。

そんな暗黒の祭典の中、一つの惑星がひと際のその美しさを誇らしていた。地球を琥珀色にしたような宝石が浮いていたのだ。かけがえのない命の方舟だ。そこへ向かってコスモウェーブはただただ伸びていく。

その先は寥々（りょうりょう）とした宇宙の数少ない楽園へと続いているのだ。緑の大気にその矛先は霞む。

「やっと着いたか……」

『早いところ行ってしまおう。ボス達もお待ちかねだろう』

そしてキリン・ライトニングは惑星パトラの大地に向かい行く。青い雷が惑星に落ちて行った。

キリン・ライトニングが酸素と窒素がなす豊かな奔流に揉まれながら、地上に向かって滑り降りていく。

惑星パトラの地上は地球と同じようである。上空二千メートルから小さな町が数個だけ確認できた。その形態は人間文化のそのものである。この惑星にも人間が住んでいるのだろう。

地上が近づくにつれ、大地の様相が事細かに視覚情報となってくる。民家は石で造られたものが多い。中世の欧州のようだ。地面は、円弧状に曲がりくねる拡散型の通路設置をとっていた。

馬車のような箱車に、川のほとりにある水車。さらに畜舎と畑も確認出来る。農耕に畜産も盛んなことなのだろう。どうやら文明レベルは、地球の西暦一八世紀程のものであろうか。

だがしかしだ。おかしな光景が目に付くのだった。町の外れの上空に浮遊要塞のようなものが一つ浮いていたのだ。黒くて超巨大な物体。重力に逆らい、静かに空中で佇んでいた。

それはスバル達が以前どこかで見たような形をしている。なぜなら、地球にもそれと同じものがあったのだから。その空中の孤島は孤高の少年にとっての故郷。

それはムー大陸だ。地球でスバルが墜としたそれだ。オリヒメが利用したそれだ。

それは地球のものと瓜二つ。黒い段々畑の側面を持った上下共の円錐体だ。側面からは重々しい砲門と、電波受信用のアンテナがおびただしいまでに乱立していた。

この要塞は明らかにしてこの惑星の文明レベルに似合わない代物だった。

そしてさらに地上に降りていくと、新たな事に気がつく。町の外れに広がる荒涼とした平野には、人工的に作られたであろうクレーターがいくつも穿っていたのだ。

地面がクッパリと割れている様子も確認できる。

墜落して、黒く焦げた戦闘機の慣れの果ても風化していた。それも一つや二つではない。

クレーターの底にはいくつもの不発弾が転がっている。大きさから、その破壊力は絶望的なものを誇っているはず。

その光景は異常だ。

自然溢れる町の景観とは対照的に、そこには不毛地帯が広がっていたのだった。生物を拒絶するかのようにただひたすらの虚無が広がる。どこまでも限りない空虚さだ。

それからは、その場所で恐ろしい何かが行われていたのだろうと思わせる。

事実、この場所でかつて大きな愚行が繰り広げられていた。それを悲劇とも言う。

そうだ、パトラの人々が暮らすこの牧歌的な町は限られた楽園だったのだ。

「大分、この星の傷も癒えてきたな……」

『以前は、町も崩壊していたのに、今はちゃんと人々が生活できる環境が形勢されているな。

いい傾向であると言える』

「良い星だ。そしてきれいだ。ここに住む人々も争いを知らない……。いつだって争いを見てきた俺たちの心を癒してくれる」

『あまり入れ込むなよ。この惑星は私達にとって母星でも何でもない。ただの根城だ……。

私たちには果たすべき悲願がある。そうだろ？　ジョニー』

「ああ、そうだ」

キリン・ライトニングはウェーブロードを伝い地上に降りている。そうしながら、このパトラの様子を眺めていた。のどかな風景に戦いに明け暮れた日々を忘れてしまう。ジョニーはこの惑星が好きだった。

ジョニー達のボスもこの惑星が好きだった。この星の人々に、儚い夢を感じていたのだ。戦いに明け暮れる事で失ってしまった夢をだ。ただ平穏なあの夢のような一時を感じてしまうのだった。

そしてキリン・ライトニングは、かつてこの平和な星で何があったのか知っているのだった。そして、それでこの星の叫喚たる一面を知ってしまっていた。

程なくしてキリン・ライトニングは地上に降り立った。先程の町の噴水広場だ。ついさっきまでいたウラスクエアの光景と重なる。

噴水広場のベンチの前で座っていた老夫婦がキリン・ライトニングの存在に気がついたようだ。談笑を止めて立ち上がる。

電波人間である彼を見ても驚いた様子はない。むしろ敬い慕っているかのように寵愛の眼差しを向ける。そしてキリン・ライトニングに歩み寄ってくるではないか。

「よく、おかえりなさりました。神さま！」

老婆が開口一番そう言うのだ。神さまとはキリン・ライトニング

の事だ。
　これではジョニーが神という事になる。南国も大きく水をあけられたものだ。カードショップの店長と神とでは比べるまでもない。
　そしてキリン・ライトニングは慣れた様子で老夫婦と言葉を交わし始めた。

「やあ、元気そうですね。この街もずいぶんと元に戻りつつあるようで何よりですよ」
「これも全部、神さまのおかげですじゃ。ありがたや。ありがたや」

　パトラ人の老夫婦は髪を崇めたてまつるように合掌していた。どうやらキリン・ライトニングは本当に神様な様子。

「ハハハ……、神さまなんてよしてください」
「いやいや、ご謙遜を。わしらパトラ人にとって、あなた方は空から現れてこの星を救ってくださった神さまに他なりません」

　キリン・ライトニングもといジョニーは苦笑した。ジョニーとしてはただの地球人のつもりだった。神さまと呼ばれる筋合いはないのだ。
　だが、老夫婦はそんなジョニーを敬愛していた。
　ジョニーは話題を変える。農作物についてだ。この老夫婦は農家だ。今の惑星パトラは主に濃厚と牧畜から生活がなっていた。

「とまあ、なんですか。最近は天候も良いようだし、今月の収穫は大変そうですね」
「嬉しい悲鳴ですじゃ。今年は豊作になりそうです。ぜひとも収穫した作物は神さまに献上しますので」
「ありがとうございます」

そして老婆の方がミソラの存在が気になっていた様子。ジョニーに問いかけるのだった。

「おや、この女の子は何でしょう……？　我々パトラ人とは違うようですが……」

「あっ、この子は……」

老夫婦との話は長くなりそうだ。流石にこれではいけない、とキリンがジョニーをせきたてる。

『ジョニー……もうそろそろ、その位くらいにしとけ。ここの人達も元気そうで何よりじゃないか。心配には及ばないだろう』

ジョニーは話を切り上げＷＷＲのアジトに行く事にする。

「まあ、その話はまたの機会と言う事で。では、おじいさんたちも頑張ってください。野菜、楽しみにしていますね」

笑顔でジョニーはそう言って、ウェーブロードに上る。老夫婦は手を振って神様のお見送りだ。

この星の人間であるパトラ人はＷＷＲを神として崇めている。そんなパトラ人の特徴は赤い瞳に褐色の肌、老若男女問わずに白い髪を持っていることだ。

そう、彼らはこの星の先住民。

ジョニーはパトラ人に見送られて、そのままＷＷＲのアジトである空中要塞に向かっていった。そのＷＷＲのアジトはパトラ人から提供されたものだ。

それは救済への感謝と神の根城としてＷＷＲにささげられた。

パトラ人が呼称するその空中要塞の名前は『ブラックママル』。

地球ではムー大陸と呼ばれていたものである。
ミソラはムー大陸もといブラックママルへと誘われるのであった。

ｃｈｏｓｗｌｄ―１７：牙城での出会い

高い天井からはシャンデリアが多数ぶら下がっていた。風鈴のように綺麗にカットされたガラス玉がそよ風に揺れている。

大理石の床には古代文字らしきものがレリーフとして隙間なく敷き詰められていた。

金の側壁には古代の兵士エランドが、ずらりと宝物剣を携えて整然と安置されている。

電波の柵で作られた大通りの先には大仰な祭壇がある。そこには電波神であるラ・ムーと瓜二つの彫像がまつられていた。

そして見た事もないオーパーツが数十個にも及んでラ・ムーに供えられているのだった。

そんな大聖堂のような神聖な空間でミソラは目が覚めた。高い窓から光のベールが垂れている。まどろんだ瞳にステンドグラスから色とりどりの柔らかい光が贈られる。ようやく目が冴えてきた。

何時間眠っていたのだろう？　とミソラは思った。そして体を預けている床が柔らかい事に気づく。どうやら金細工で華やかなに彩られたソファで横になっていたようだ。

ミソラは寝起きで重い体を起こす。手を見ると電波変換は解けていた。まず体に異常はないか確認してみる。軽い運動をし、一通り体を馴らしてみた。幸い異常はない様子。

ミソラは辺りを見渡す。少なくとも訪れた事もない場所だ。それに窓からのぞく空が黄色だ。ミソラは薄ら寒い孤立感を覚えた。広い場所にミソラが一人。

「ふう……。ここはどこかな？　たしか、スバル君達と一緒に遊園地に行ってそれから……」

そこから後が思い出せない。ミソラに取ってはそれほど一瞬の出来事だったのだ。いろんな事が一度に起こりすぎた。ミソラは思い出そうと額に手を当てて考え込む。

そんなミソラに、横で寝ているギターからハープが声をかけてきた。ハープもついさっき起きたようだ

『ポロロン……。ミソラ、大丈夫？　まったく、大変な目にあったわよね』

「え？」

『何言ってんのよ。変な電波人間にやられちゃったんでしょ？　パパーっと一瞬で』

「あっ、そうだった。確か、私は皆と戦ってたんだ……」

ミソラは首に鈍痛を感じて思い出した。自分が何をしてたのか思い出すと、すぐに気になる事が出来た。

「そうだ。みんなは!?」

『うーん。スバル君達の周波数は感じないわね……。てゆか、なんか地球人のものじゃない周波数が下の方にうじゃうじゃ感じるわ……』

「どんな、周波数？」

ハープは困った様子で、どう言い現わしていいものか考えていた。そして何か引っかかるものがあったようだ。

『なんだか、前にも似たような周波数を感じたような……』

「前にも……？」

ミソラは首を傾げてみる。ハープと一緒になって思案してみる。

『あっ！　思い出した』

ミソラが食い入るようにハープに詰め寄る。

「何を思い出したの？」

『ブライよ！

アイツの周波数に似てるのよ。何かそんな感じの周波数をたくさん感じる』

「ブライ……。でもそれじゃスバル君達はどうなったか分からないね」

また最初に逆戻りだ。ミソラはスバル達が心配でならないようだ。悩める少女はまた頭を抱え出す。

そこに状況を一転させる何者かが聖堂に入ってきた。電波人間だ。

「少女よ。お友達の心配はいらない……」

「誰！？」

その声質は三〇歳前後だろうか。

ミソラはすぐに声のした方に振り向く。ミソラの視線の先には一体の電波人間がこちら側に歩を進めてきていた。足音はしない。気配も感じさせない。だがなにか圧倒的な力を感じさせる。

ミソラはもちろんだが、ハープも虚をつかれた。その電波人間から周波数をまったく感じなかったのだ。

『ウソ……。全然気がつかなかった』

その電波体は夕焼けのように焦がすような朱色の装甲に身を包ませていた。

それと対照的に冷めたような青いバイザーからは翡翠色の瞳が覗いている。その目はどこか冷めたいものを感じさせる。

翼は四枚背中についている。だが、今は輝きを失っており、歩くたびに揺られるだけだ。

まるで不死鳥のような見た目をしている電波人間だ。ただ歩いているだけなのに、その身のこなしからは一切の隙は感じられない。

そして空間を侵略しながらミソラに向かってくる。前に進むたびに、空間が悲鳴をあげる。その電波人間の存在を拒むかのようにして、空間が小さく綻びノイズを生み出す。

ミソラはその電波人間に注視していた。絶対に目をそらしてはいけないと、勘が言っていた。コイツは何かヤバい、と生物レベルの本能が警鐘を鳴らすのだった。

「こ、来ないで……！」

「……もう一度言う。君のお友達の心配はいらない。ここにいるのは君だけだ」

電波人間の言葉にハープが掘り下げにかかる。

『し、下にたくさんの周波数を感じたわ！　あれは何なの！？』

「それは恐らくパトラ人の事だろう。この惑星に住むものだ」

電波人間はそう言うと、ミソラの前から消えた。いや、消えたように見えるほど高速で移動したのだ。

電波人間の通った跡は空間が裂けて、異次元の空が見え隠れしている。だがその不条理さゆえにその魔窟への扉はすぐに閉じてしまう。

慌ててミソラはキョロキョロと周りを見渡す。あの電波人間を見失うのは心持ちが酷く悪い事だ。

「後ろだ。少女よ」

ミソラの後ろで電波人間が玉座に座っていた。ラ・ムーを後ろに従えて、悠然とその電波人間は構えていた。電波神を超えた裏の王だった。

『速い……。まったく見えなかった』

ミソラは不安だった。ここは地球でない事をうっすらと理解し始めていたのだ。手にじっとりとした汗が吹き出しているのだ分かった。喉が渇いて、息が詰まる。

号哭（ごうこく）に足る状況だ。どこか分からない場所で、化け物と対峙している。この命があの電波人間の賽の一振りで決まると直感している。

そんな張りつめたミソラに電波人間はミソラが寝ていたソファを指差す。その指先はピクリとも動かない。その指先でさえも絶対的存在であると思い知らされる。

「座れ。少女よ」

「……」

『……』

電波人間はピクリとも動かないミソラに再度促す。

「座れ。俺はお前に何かしようという気はない」

「ア、アナタは一体何者？」

「……。俺はＷＷＲを統轄しているフェニックス・リボン。ウラ世

界では不死鳥と呼ばれて恐れられている者だ」

「WWRのリーダー……」

ミソラは恐怖を感じていた。敵があまりにも強大すぎて何を考えているのか分からなかった。

泣き叫びながらここから逃げ出したい。だが、敵に背中を向けて走り出す度胸がない。

ただ目を光らせて目の前の電波人間と対峙するしかない。

『ミソラ……戦う？』

ハープの自殺の誘いだった。しかしフェニックス・リボンはそれを引きとめてやる。

「やめておけ、ここはWWRのアジトだ。それに俺の相棒はFM星人が酷く嫌いでな……。もし戦ったら、手加減してやれない。悪い事は言わない。お願いだから、大人しく座ってくれ。俺はお前と話がしたいだけなんだ……」

フェニックス・リボンは頭を下げた。

フェニックス・リボンが見せた優しさとも取れない不可解な言動だ。これにミソラは少し気にかかるものがあった。ミソラは何かが引っ掛かっていた。何か忘れているようなそんな気がしていた。

ミソラの恐怖はこの得体のしれない電波人間が原因であるのは間

違いない。だが、向かい合っているこの電波人間から畏怖とは別の、何か別の恐怖を感じていた。ミソラはそれが何か分からず恐れていた。

だが、ミソラは逃げるわけにはいかない。サテラポリスの一員として、何か出来る事を考えた。

そして決断した。

結果として、フェニックス・リボンの言う通りソファに座る事になる。

ただ緊張感は拭えない。嫌に体が強張って筋肉が縮こまる。動揺を隠す事が出来ているのかも分からない。ただ、手に持った汗を包み隠すことはできた。

「変に身構えなくてもいい……。すぐに皆の所に返してやるから」

フェニックス・リボンは自分の正体をミソラに気取られないようにしていた。出来るだけ声のトーンを落として話している。

ただフェニックス・リボンとしても予想外だったのだ。ミソラがサテラポリスに入ってＷＷＲに盾突く事は考えてもみなかった。

あんな小さくて無邪気だった子供が自分の前に立ちはだかるなんて考えたくもなかった。

だからこうして、牙城までわざわざ連れてくるのだった。

ミソラが自分達の元にやってこないように。ウラの世界に首を突っ込まないように説き伏せる為だ。

「楽にしろ。少女よ」

「わ、私と話がしたいって……何を？」

フェニックス・リボンはすぐに答えた。

「俺から提案がある。君たちにとっても悪くない提案だと思う」

「提案？」

ミソラは訝しげにフェニックス・リボンを見やる。

「ああ、。俺たちＷＷＲに宇宙の未来の事を任せてみないか？　もちろん必要とあればサテラポリスとも協力しよう」

意外な提案だ。ＷＷＲのボスが宇宙を救うというのだ。しかもサテラポリスとも協力するとも言うのだ。

『ポロロン……。意外ね』

「言っておくが、俺達は別に悪の組織ではない。物事を訴えるには力が確実で絶対だったというだけだ」

「だったら、なんでノイズウェーブを占拠しているの？　ＷＷＲがノイズウェーブを占拠しているおかげでＷＡＸＡの人達がＦＭ星と交流が取れなくなっているんだよ？

それで宇宙が危なくなってるんだよ」

残念そうにフェニックス・リボンが首を振った。彼にも譲れないものがある。

「ふう、そうだったな。まず一つ断っておかないと……。

まず俺達が君達に協力する条件がある。それは地球がＦＭ星との交流を断つことだ。そして、俺のウラトーナメントに余計な口出しをしないことだ。これは絶対条件だ。

そしたら、終わりゆく宇宙を君たちと共に救おう。俺たちの条件を呑まないのならやはりＷＷＲと君たちは相容れない事になる」

フェニックス・リボンの突き出した条件はサテラポリスにとってはそれこそが問題の根源だ。流石にこれは納得が出来ない。

「なんで？　そんな条件に意味なんて感じられないよ。皆が一緒に協力すればいいじゃない！」

フェニックス・リボンは溜め息をついた。ＷＷＲがいればＦＭ星人の力などなくても宇宙を救えると思っていたのだ。

「では、俺達がなんでノイズウェーブを占拠していると思う？　それはこれ以上、地球人とＦＭ星人を関わらせないためだ」

『解せないわね……。なんでそんな事をする必要があるのかしら？』

フェニックス・リボンは堪えるようにして肩を上下させている。片腹痛いのだ。特にＦＭ星人であるハープが言うのだから笑うに笑えない。むしろ怒りがこみ上げてくる。

「そんなの……決まっている！　お前たちＦＭ星人が危険だからだ」

フェニックス・リボンの言葉の端々にやり場のない怒気が込められる。戦う事でしか、自分を表現できなくなった彼の怒りだった。自分をそうさせた何かへの怒りだった。

「俺は知っているんだ。ただ俺は俺の相棒と大切なものを守るために戦い続けてきた。

そして、いつだってお前らＦＭ星人は地球を侵略しようとしてた。何年も俺は一人で戦い続けた。そしておれはある結論を出した。

……そう、お前らは危険な生物だとな」

『ポロロン……そんな事』

フェニックス・リボンは知っていたのだ。宇宙を駆けずりまわり、いろんな惑星を巡ってきた。ＦＭ星人の悪評は途切れる事がなかっ

たのだった。

「そんな事あるさ……。お前らＦＭ星人がどれだけの人の人生を狂わせてきた？　一年程前に地球と友好の印を結んだそうだが……、お前達はいつ裏切るか分からない。

そんな奴らを地球を関わらせるわけにはいかないんだよ」

『そんな事ない。ＦＭ星人は改心したのよ！　過去の過ちをもう犯さないって誓ったのよ』

ハープの言葉は意味をなさない。そんな物よりも確かな意味で、フェニックス・リボンはＦＭ星人の本質を見抜いていた。少なくとも彼らの負の一面に誰よりも近くで、誰よりも多く晒されてきた。

そうすることによって得た圧倒的なまでの悲しい力が今のフェニックス・リボンを形作る。

フェニックス・リボンは惑星パトラの空を見上げた。高い天井の吹き抜けから黄色い空が広がる。

「何を言っても無駄のようだな。

なあ、ＦＭ星人。どうしようもない事実を教えてやるよ」

フェニックス・リボンはエアディスプレイを二人の間に出した。豊かな緑が茂る温かい雰囲気の街並みが映っている。

「この惑星パトラは豊かな星だった。地球と変わらない豊かな星だった……。広大な宇宙に浮かぶ楽園だ。

だが、去年の六月頃だっただろうか。この星にＦＭ星人の残党が侵略しに来た。時期的にもＦＭ星がちょうど地球と友好条約を結んだ頃だ。言いたい事は分かるだろう？」

『侵略政治を行わなくなった事に不満を抱いた、ジェミニ派の残党の仕業ね……。でもそれは……！』

「まあ、聞けよ。
俺は戦いに明け暮れる中、何度かこの惑星の人々の世話になってたよ。
俺はただ怯えてた。後ろめたさもあった。いつ終わるかも分からない孤独な戦い。そんなある日、俺は唯一の心の支えを失ったんだ。失ったと同時に俺は奪ったんだ。
どうしようもなく孤独と自責の念に怯えている日に暖かい寝床と食べ物を俺に分けてくれた。そんな人達に俺は助けてもらってた。
何もかも失った俺はパトラの人達に地球を守る勇気を貰ってた」

フェニックス・リボンは拳を固く握りしめる。ノイズが雷のように拳から弾け飛ぶ。

「だが、どうだ!!　そんな人々をＦＭ星人は蹂躙し始めた。
この惑星はまだ開発途上の文明だ。いくら宇宙からの古代遺産や文明の知恵の実を持っていようとＦＭ星人達に敵う訳がなかった」

ミソラはフェニックス・リボンの言う事を何故か少しだけ他人の事のように思えなかった。
恐怖も和らぎ、そのどこか懐かしくもある声に耳を傾けるだけだった。それほどに彼の宿す強すぎる思いがミソラに重くのしかかり訴えてくる。

「そして俺もパトラ人々を助けようと必死に戦ったが、敵の数が多すぎた。一人じゃ勝てないと踏んだ。
そして、必死に宇宙中から仲間を探しまわり俺の第二の地球を救おうと奔走した。そして武力組織を作った。それがＷＷＲだ」
『……』
「そして力を手に入れた俺は、この星からＦＭ星人を駆逐した。
するとパトラの人々は泣いて喜んでくれたよ。暴力に訴えること

しかできないこんな俺たちを尊敬してくれた。
だが、被害は甚大だった。俺がＷＷＲを組織している間にこの惑星のほとんどが不毛地帯になってしまったんだ。
お前たちＦＭ星人が地球に同じ事をしない保証はないだろう？第一、お前達は一度地球を侵略しようとしてたんだ！　これは紛れもない事実だ」

フェニックス・リボンはハープに言いつけてやるのだった。

「たまたま侵略に失敗したからといって、手のひらを返したように友達面しても無駄だ。地球人は騙されても、俺たちＷＷＲは騙されない！」

choswld―19：またいつかこの場所で

フェニックス・リボンがミソラの目の前に立つ。そして手を広げ選択肢を与える。

「さあ少女よ、選べ。ＦＭ星を捨てて俺達と共に宇宙を救うか。俺達と敵対してＦＭ星と共に宇宙を救うか。どちらか一つだ。俺達ＷＷＲは決してＦＭ星人達と交わる事はない」

ミソラはフェニックス・リボンに選択を迫られていた。ミソラはどちらかを取らなければならない。

だが、答えは決まっているようなものだ。ミソラにはハープとのかけがえのない思い出がたくさんあった。

辛い事や悲しい事、楽しい事、嬉しい事。いろんな事を共有してきた。

カンナがいなくなってからハープが一緒になってミソラと生きてきてくれた。答えなど決まっているのだ。

ハープとは違った別の道を選んだフェニックス・リボンに付け入る隙など微塵もない。

ミソラはフェニックスリボンの目をまっすぐと見据えはっきりと言い切る。

「そんなの決まってるよ！　私はハープと一緒に宇宙を救うんだ！だから何が何でもノイズウェーブを開放してＦＭ星と一緒に戦う

！！」

『い、いいのミソラ？　この人の言っている事は全部本当よ。ＦＭ星人達の犯した罪はとても償い切れるような事じゃないかもしれないのよ！？』

ミソラは首を振った。だが、ミソラはすぐにハープに笑いかける。

「ううん。たしかにそれは良くないよ。

でも私たち地球人は知っているんだ。ＦＭ星人達が犯した罪も。それを償おうと侵略した惑星を復興支援していることも。地球の為にいろんな技術を教えてくれることも。

確かにＦＭ星人の悪い所や怖いところも知っているけど、それ以上に良い所や優しい所も知っているんだ。

だから私はそれを信じたい！」

『ミソラ……』

フェニックス・リボンは浅く頷いた。

「そうか、それが君の下した決断か……。いいだろう。

だが少女。俺達は強いぞ……。そして君たち以上にＦＭ星人の負の一面を知っている。手加減してやるつもりもない。

過酷な選択をしたんだぞ……」

感情を押し殺した声でフェニックス・リボンは続ける。

「だが、少女よ。俺は出来る事なら君に戦ってほしくはない……。ウラの世界に来ても後悔するだけだぞ？　戦う事に意味があるのか？　よく考えろ。その場の勢いで命を危険にさらす必要があるのか？　トーナメントとは名ばかりのただの暴力のぶつけ合いだ」

「……でもそれでも私は戦う。みんなが手を取り合って協力して宇

宙を救えるように……！　そのためにトーナメントを勝ち抜いてまたアナタの前に来るよ……！！」

「ハハ……。俺の忠告を聞き入れてはくれないのか。どうやら俺の知っているあの子はもうここにはいないようだ。こんなにも時間の流れが切ないとはな。

フフ……だが、俺には君の決断を否定する資格はない。ただ君の決断を尊重する義務はある……」

一人満足げなフェニックス・リボンにミソラは眉をひそめる。

「何を……言ってるの？」

「いや、何でもない。だが、コレで俺も唯一のわだかまりがなくなった。いよいよ契約を果たす時が来たようだ……」

フェニックス・リボンはハープの方に向き直る。そろそろ別れの時だ。

「ハープ」

『？　何で私の名前を？』

フェニックス・リボンは構わず続ける。

「さっきはあんな言い方をしたが。本当は感謝しているんだ。ありがとう、俺の大切なものを守り続けてくれて……。

そして謝っておく、俺は俺の為にお前の大切なものを破壊することになる。どうか許してくれよ」

『？　……どういうことよ』

次はミソラだ。フェニックス・リボンは愛おしそうにその名前を呼ぶ。思わず普段の声に戻っていた。

貧しくても幸せだったあの頃。優しかったあの頃の父親の声だ。

「ミソラ」

「……え？」

「友達と一緒に戦う事がお前の決めた道なら、思うようにその道を生きればいい。だが、命がけだぞ？　俺の仲間もウラの住民も手加減を知らないからな。

そしてお前に出来た大切な者達と一緒に俺の元へ来い。それで皆と一緒に俺と相棒の計画を止めてみろ。そしたらお前にずっと渡せなかったプレゼントをやろう」

そして最後の仕上げだ。フェニックス・リボンは祭壇からオーパーツの一つを取り出した。パッと見はただの石のリングだ。

「あの……！　もしかして……」

ミソラがフェニックス・リボンに駆け寄る。ミソラは何か気がついたのかもしれない。

「もうサヨナラだ。――オーパーツ『ヒュプノスリング』」

石のリングが黄色く輝き、光り輝く古代文字の電波を纏った鋼鉄の円輪となった。そしてミソラとハープに催眠誘導の電磁波が当てられる。

たちまちミソラとハープは深い眠りについてしまった。ソファに倒れ込み安らかに寝息をたて始める。

「大きくなったな、ミソラ。またお前と向かい合う事が出来て幸せだった。ありがとう」

それから数分。フェニックス・リボンがミソラの寝顔を見守っている。ただそれだけの時間。

そこに見計らったかのようにジョニーが聖堂に入ってきた。電波変換はしたままのキリン・ライトニングの状態だ。

「もう終わったのか？　ワタル」

「ああ、俺の中で一つの決着がついたよ。ミソラを地球に返してやれ」

ワタルはミソラを抱きかかえジョニーに渡す。

「いいのか？　ブラックママルに閉じ込めておけば、この子は少なくとも安全だぜ？　そうすれば戦わなくてもいいんじゃないのか？」

「そんな事を決める権利は俺にはない。この子はハーフと一緒に戦うと言ったんだ。今のこの子にとっての家族はハーフだ。俺はこの子の意志を尊重するしかできない」

「そうか？　じゃ、おれはこの子を地球に返してくるぜ？　良いんだな？　本当に？　お前、無理してないよな？」

ジョニーは馴れ馴れしい。しつこいし鬱陶しい。だがそれが優しさか。友達思いの人間らしい。ワタルもそれは承知している。

「しつこいぞ、ジョニー！　もういいから、さっさと行け」

ジョニーは、「おおコワい」と言ってミソラを抱えて大聖堂を出ていった。

ジョニーの足音が廊下に消えていくとワタルの前に、鳳凰のよう

な外見の電波体が出てきた。フェニックスだ。ワタルに釘をさすのであった。

「ちょっと、ワタル。ハープに甘いんじゃなくって？　あの子はＦＭ星人よ？　それにべらべらとミソラちゃんに喋っちゃってたけど、アレって良いのかしらねー」

「別に俺はお前ほどＦＭ星人を憎んじゃいないよ。それに全部が全部のＦＭ星人が嫌いという訳じゃない。ハープは良い奴だ」

「まだまだ甘いわねワタル。だから娘に余計な事までしゃべっちゃうのよ」

「別に大した事を喋ってない。あんな情報あったところでこのアジトの場所なんてわかりゃしない。あの子達は結局トーナメントを勝ち進むしかないんだよ」

「フン……。まあいいわ、でもちゃんと私との契約覚えてんでしょうね？　最近のアナタ見てると何か不安になってくるのよ」

「ああ、覚えてるよ。例の計画だろ？　気が進まないけどやるしかないようだな。でもその時は俺の願いも叶えれくれよ？」

「オホホホ！　もちろんよ！　その為にはワタル、アナタがしっかりしなさいよ！」

「ああ、分かってるよ」

ｃｈｏｓｗｌｄ―２０：殲滅宰相

ミソラがワタルと邂逅した日から二日後、二二ＸＸ年五月一四日月曜日。

「作戦会議室」と表示された電光プレートが廊下を淡く照らしていた。そして、その室内から話し声が聞こえてくる。大人に子供、区別もなくあるのは万別だ。

鏡のように磨かれた灰壁に、作物の種のように列居した丸い照明が広がる。円形の室内、さらにその内輪を務める机。それにもれなく軍人やスバル達が座っている。

金属質で冷たい印象の厳かな会議室だった。

そんなＷＡＸＡニホン支部に全てのチーム員が集まっている。もちろんミソラもだ。

ミソラは事の顛末を皆に伝えていた。

「――と、以上が私の得た情報です。重要な事はあまり分からないけど、これでも役に立ちますか？」

ミソラが頬をポリポリと掻いて、皆を見渡す。何らかの反応を求めている様子。

大きなワイドディスプレイの前で鎮座しているリフレインがすぐに情報を再考する。

「どうしても解せんな……。ミソラ君は本当にＷＷＲのアジトに連れて行かれたのかね？」

「はい。ＷＷＲのボスと名乗る本人がそう言ってました」

ミソラは大きめの声で返答する。リフレインは一番奥の上座に座していたからだ。

ただ疑っているリフレインに少しムッとしたのもまた事実。そこはまだまだ子供と言うことだ。

「だがしかし、こちら側の情報の攪乱を狙っているかもしれんな。そう言う考えが妥当だろう」

「でも。嘘をついているようには……」

「いや。信用ならない。そもそも我々との協力をするにしてもだ。末端の構成員であるミソラ君に交渉をつける理由が分からない。そしてＦＭ星との交流を断てとも言ってくる。

そしてノイズウェーブの占拠……。

言っている事とやっている事がバラバラだ。まったくもって信用できない組織の言葉だな。恐らく末端の方から情報を狂わせてこちらの行動を牽制しようという腹の内なのだろう」

ミソラはぐうの音も出ない。しかしミソラとて信念に近い思いは確かにあった。

「そう言われたら、そうかも知れません。でも、私はあの人が嘘を言っているようには……」

「嘘か本当かは私が判断する。今回の情報の真偽は疑わしいが一応私の方で調べておく事にしよう。ミソラ君、ただの直感で情報を鵜呑みにしてはいけないのだよ」

リフレインの軽い叱責に、ミソラはしょんぼりと肩を落とす。リフレインの言うとおりだった。その場に居合わせたほとんどもリフレインと同感のはずだ。

そんな具合で「ＷＷＲは敵」と言いたげな軍人が後を絶たなかった。そうして懐疑的な瞳をミソラに向けるのである。

だが、リフレインはフォローした。ミソラの頑張りや味わった恐怖を無駄にはしない。労うことを疎かにはしない。信頼を失っては意味がないのだ。人の心を留める事。

それは人の上に立つ人間の責務であり必要とされる才覚でもある。

「だが、しかしだ。ミソラ君が危険な地で敵と向かい合って情報を手に入れてきてくれたのは事実だ。そこは感謝しなければいけないな。

ありがとう。よく無事に帰ってきてくれた」

「あっ、そんな……。みなさんをお騒がせして申し訳ないです」

ミソラは照れ隠しだ。いつものピンクフードを深くかぶり顔を隠す。ゴン太はあまりもの可愛さに胸を撃たれた。これこそが恋と勘違いした。

だが、甘くはないジャックがここぞとばかりに追撃する。別にミソラを責めるつもりはないだろう。すこし悪党ぶりたいだけだ。そういう調子が刺々しい紫のファッションからにじみ出ている。

「ああ、まったくだ。俺らは任務があったってのに、天下のチームオメガ様のミソラがいなくなったとありゃ緊急捜索だ。とても良い迷惑だったね。ウヒャヒャヒャ！」

言われたまま、ただミソラはジャックに弱く顔を笑わせる。ただ申し訳ないのだ。

「ごめんね。ジャック君。でも笑いかたおかしいよ？」

「バッカ！　俺に謝るなよ。スバル達に謝っとけ。って、笑い方につっこむなよ。俺なりのカッコイイ悪を演じたんだからよ。あーあ、

調子狂うヤツ！」

ジャックはついとそっぽを向いた。アイドルに笑顔を向けられたらジャックとて形無しだ。横の軍人がリーダーの情けない姿に「ＯＨ　ＮＯ……」と肩をすぼめる。ジャックは余計なお世話だと言ってやった。

ミソラはその様子を見届けるとス、ミライを挟んだ隣のスバルに向き直る。

「心配させちゃったよね？　ゴメンねスバル君」

スバルは表情を曇らせた。間にミライがいて邪魔だったからではない。ただ真面目に反省していた。

「いや全部、僕たちの力が及ばなかったのが原因だよ。敵がすぐにミソラちゃんを返してくれたから良かったものの……」

ミライも今回ばかりは敵に塩を送られた形となった。これは彼のプライドと今までの自信を軽く嘲笑われたに等しい。

「まったくだ。あの時の俺に油断や慢心は無かった。だが、あの幹部はそんな俺の力を完膚なきまでに叩きのめした。このままでは先が思いやられるな……」

「ああ、そうだった。ミライ君でも歯が立たなかったんだよね……。いよいよ敵が恐ろしいよ」

そこにリフレインだ。現在の戦況から今後の作戦展開を導き出す。手元のキーボードを叩くと全員分のエアディスプレイが表示された。

内容はノイズウェーブの解放状況だろう。赤い所でほとんど画面を埋め尽くしていた。

「終わった事を悔いていても仕方がない。今後の展開を指示する。まず画面を見てくれ。赤い所がＷＷＲの占拠している場所だ」

ゴン太が悲鳴を上げる。

「うわ！　ほとんど真っ赤じゃんか。牛丼に一味をぶちまけた悪夢が再来だぜ！」

『ブロロ、それ俺も分かるぜ』

二人の事は置いとく。とにかくだ。画面は真っ赤の警告色で一杯だった。ゴン太と同じくツカサもそれを眺めていた。ただゴン太と違い深く考察している様子。長い緑の襟足を弄びながら情報に目を走らせる。

「あの、リフレイン博士。この　ｕｎＫｎｏｗｎ　て何ですか。地球の場所とは離れているみたいですが」

『ｕｎｋｎｏｗｎ』と表示されている場所ももれなく真っ赤だった。これが大半の赤を占めているのだ。リフレインは答えた。

「これは太陽系外の外宇宙のノイズウェーブの予想状況だ。ＦＭ星への連絡途絶状況の程度を加味して、ＷＷＲの行動範囲を適合すると見ての通りとなる」

「なるほど……まさに宇宙全土がＷＷＲに裏から支配されているというワケですね」

するとツカサはハンターを取り出す。ジェミニに問いかけるのだ。紫のハンターの中には、電撃の塊に二つの仮面を浮かばせる電波体が確認できた。

「ねえ、ジェミニ。君は宇宙の裏事情に詳しいよね」
『まあ、な。でも俺は残留電波から再構築されたバージョンだから。昔の記憶は所々損失してるぜ？』
「分かる所だけで良いよ。ＷＷＲってなんでＦＭ星と地球を分断したがるのかな？　君は我関せずを貫いてるけど、ＦＭ王室に所属していた君なら何か知っているんじゃない？」
『ヘッ、流石はツカサ。抜け目がねえ。俺と同じで悪党の才能があるぜ』

するとジェミニはウィザード・オンしてきた。リフレインに向かって電気の化け物が語り出す。

「おい、リフレインの博士よ。ＷＷＲの事情について教えてやろうか？　元ＦＭ星の実質トップの俺が言うんだ、聴く価値はあると思うぜ」
「ふむ。作戦指揮の途中だが、聞くだけ聞こうか。ＦＭ星の鉄血宰相よ」

リフレインはどうぞ、とジェミニに手をやる。

「とりあえずＷＷＲのリーダーのフェニックス・リボンについてだ。そこのミソラとかいうガキが言っている事は正しいぜ。アイツは間違いなくＷＷＲのリーダーだ。断言できる」
「ほう、それはどうしてかな？」
「一年ほど前だったか。地球とＦＭ星が友好条約を結んだよな？」
「確かに。ロックマンに打ち倒されたＦＭ王が君の推し進めていた侵略政治を取り下げたんだったな。そして地球と平和条約の証としてブラザーバンドを結び今に至る」

そこでジェミニは笑った。とげとげしく嫌味な笑いだ。ジェミニらしいがとにかくいやらしい。

「ククッ。それは違うぜ、博士？」

ｃｈｏｓｗｌｄ―２１：パラドックスの悪魔

ジェミニの発言にリフレインは眉をひそめる。いかんとし難い困惑が浮き彫りになる。

「何が言いたいのかね？」

「うん？　まあ、そんな怖い顔するなよ」

ジェミニは四つの眼光を光らせる。

「確かに、ＦＭ星は条約を結び地球への侵略をやめた。だが、侵略政治自体は止めてなかったんだよ。

――いや正確には俺の派閥が勝手に侵略政治を掲げて他惑星に進行したといった方が良いか」

軍人達がどよめく。中にはジェミニに罵声を浴びせる者もいた。しかし恐怖政治家として、罵声を浴びせられ慣れていたジェミニは構わず続ける。ジェミニ取って悪評は、箔をつける一手段に過ぎない。

「たしか、どこかの惑星に侵略したと言っていたなあ……。しかし、その時ある組織にＦＭ星軍は全滅させられたという訳よ。それがＷＲだ。

そしてその時のリーダーがフェニックス・リボンだったらしい。

ただ、驚くべきなのはあのＦＭ星の軍事力を制圧するとか並の組

織じゃねえ事よ。離反した残党だとか抜きにしても恐ろしいぜ。
そして、俺の勘が正しければフェニックス・リボンは恐らく……」

何かを言いかけ、すぐにジェミニはハッとして口をつぐんだ。これ以上は出過ぎた真似だと判断したのだ。これ以上は協力にならないと思ったらしい。

「まあ、とにかく急がないとWWRはヤバい事をしでかすかもな」

ジェミニはフェニックス・リボンに思う所があったようだ。意味深に警告する。ジェミニは何か漠然とした運命の歯車を感じていた。だが、口に出すほど確かな事ではない様子。

ジェミニは過去の出来事に考えを巡らしていた。言い様のない奇妙さだけが印象的な、四年前の出来事を思い返す。

（フェニックス……か。やはり四年前のアイツの情報が正しいとすれば……。いや、わからない。そもそも四年前のあの案件には、説明しようがない漠然とした矛盾が多すぎる……。

アイツがなぜ地球の在り処を知っていたのか？　それに後になって分かった事だが、あの時のアイツはやはりアンドロメダ系列の要人暗殺に出向いていた……。

だったらあの時のアイツは一体？　俺が話していたアイツは一体？

……まあ、この事は話すべきではないな。事態が余計に混乱する）

リフレインは一人考え込むジェミニに明言を求めた。モノクルの底が鷹のように鋭く差す。

「もっと詳しく話してもらおうか」

だがジェミニはあえて答える事をしない。四年前の出来事には憶

測で説明できない不測の事態が多すぎた。だがフェニックス・リボンの正体はおおよそ察しはついていた。

しかし情報源であるあのスコルピオが、未だに何者か分からず困惑していた。気味が悪くも感じてしまう。これを言ってしまえば何か取り返しがつかなくなるという言い様のない不安に支配される。

目に見えない圧倒的な世界の束縛に、どす黒い悪魔を感じてしまう。

そしてとうとうジェミニは首を横に振った。奇妙な二つの仮面がリフレインの前で揺れる。

この判断は結果として、同じ悲劇を生みだすものだった。だが、それでも、だからこそジェミニはそう動くしかなかった。操られると形容するにはあまりにも乏しい感情の機微だった。

「俺も話してやりたいのは山々だが、あいにく無理な相談だな。なぜならその当時、俺はそこのロックマンにデリートされて宇宙空間を残留電波となって彷徨っていたんだからなあ。詳しい内容はＦＭ王室に行かなきゃ流石の俺でもわかりゃしない。まったくロックマンのおかげで残念だよ。ヒャハハ！」

ジェミニはスバルの方を向いてわざわざ嫌味を垂れる。ご苦労な事だった。だがツカサはすぐに出過ぎたジェミニをハンターに引っ込める。そしてただ申し訳なさそうに悪びれていた。

そうしてジェミニの話も終わり、リフレインは作戦指揮を続ける。

「ふむ、敵が強大なのは十分にわかった。ただ、どちらにしてもＦＭ星との交信の再開は避けては通れん訳だ」

リフレインは手でマスクを作り考え込む。現在の情報から一番有効な作戦を考えているのだ。そして最善と思われる策を練る。

「みんな良く聞け！　チームがノイズウェーブを開放して回っているとはいえ、やはり肝心のＷＷＲの本拠地を叩かないといけないのだ。その為には……」

次いでシドウが緊張した面持ちで言う。チームオメガからの情報で大体の予想はつくのだった。

そしてそれが一番手っ取り早い事も了解していた。

「ウラトーナメントですね？」

「うむ、そうだ。全チーム員に集まってもらったのもそのためだ」

リフレインは息を一つ吸い、そして一つ吐いた。物憂げにぼんやりとディスプレイを見透かす。

「しかし事態は芳しくない。相手に我々の存在が知られてしまっているからな。

潜入任務の予定を大幅に変更しなければならない。そもそも、裏の情報屋の言う事が正しいとすれば参戦自体が困難だとも言える……か。

だが、そんな事で諦めるわけにはいかない」

そこに夜太郎だ。彼もこの会議に参加していた。彼はウラトーナメントと裏世界に精通している。この作戦において白眉の重要人物としてそこにいた。座っている場所はスバルの近く。つまりはチームオメガの一員だ。

申し訳なさそうにへりくだりながらリフレインに追加する。

「あの、私のようなものが意見するのは恐縮ですが、おそらく参加自体は可能だと思います。あ、スミマセン」

リフレインは首をひねる。情報と事情が違うではないか、と顔に書いていた。軍人達も憮然とたしなめる様にひ弱なサラリーマンを眺めていた。

夜太郎は居心地悪そうに縮こまった。リフレインは夜太郎に説明を要求した。

「どういう……？」

「昨日、ウラの実行委員から連絡がありました」

気を取り直し、夜太郎が裏世界からの通達を読み上げる。恐らくＷＷＲからのメッセージ。

「ええっと『今回のトーナメントは、いつもと違うチーム達が参戦してくるだろう。その一団の中に響ミソラという少女がいたら参加を許可しろ』という旨の連絡が出回っています」

「なぜ、響ミソラ……？　交渉の件と言い、どうも解せんな……。しかし、今はそうも言ってられない状況か」

リフレインは敵の意図が読めていない様子。しかしそれは仕方のない事。

ミライがリフレインに目をやり意見を申し立てる。ツカサ同様、冷静に彼も事態を分析していた。

そして、キリン・ライトニングにリベンジを果たそうと静かな闘志もたぎらしていた。

「博士。その情報が信用に足るものか判断し兼ねるのは分かります。ですが、宇宙収束の危機に瀕している今、ぐずぐずしている暇はありません。

時には危険をかえりみず一歩を踏み出すことが重要な場面もある

はずと考えます」
「……」
リフレインから目を外し、ミライは判断を仰ぐ。結局、最後に決断を下すのはリフレインと言う訳だ。
「博士、ご決断を」
「そうだな……。もとより決めていたことだ」
リフレインはふっと笑う。我が息子に心配されることを少しだけ可笑しく思えたらしい。
そして席を立ち全員に命令する。張りのある威厳が会議室に伝播（でんぱ）した。
「全員に告ぐ！　予定だった潜入任務を変更し、今からウラトーナメント開催地に赴いてもらう。真正面から敵を殲滅しつつ、ＷＷＲのアジトを見つけ出しそこの破壊だ。そしてノイズウェーブの解放を目標としてくれ。
では夜太郎君に付き従い、任務地に向かってもらう！」
『了解！』と軍人達が綺麗に、一斉に、同時に敬礼をリフレインに向ける。流石に軍人だ。思わずスバルを始めとした子供達もそれに習う。

数分後のＷＡＸＡヘリポート。整備された鋼鉄地帯。木槌で鉄板を叩く音を鳴らしながらぞろぞろと人間が流入してくる。大きな足音は軍人、小さな足音が子供だ。

たちまちチーム員がノイズウェーブに向かう為に、電波変換し始める。すぐに鋼鉄地帯は電波人間で溢れかえった。

その大半を占めるアストラル電波人間部隊だ。彼らが電波変換した姿は黒い姿だった。黒のスマートなボディラインに稲光のごとく黄色いラインが走っている。バイザーは赤銅。その汎用電波人間の名前を『アストラル・ホープ』と言う。その名前には、星の願いと言う意味が込められていた。宇宙を救おうという願いが込められている。

「こんなにも電波人間がいたら何とかなりそうな気がするよ」

スバルが黒い数十体の人影を眺めながら感慨深いものを感じている。沢山の仲間が出来た事を素直に頼もしく感じていた。スバルは今までどこか寂しかったのだろう。

そこにミソラが便乗する。スバルの腕に絡まり恋人気分。連れ去られた事がよほど寂しかったのだろうか。

「だね。今まで、電波人間って言ったら私たちだけだったもんね。よし！　頑張るぞ！」

ただ彼女は先程からスバルにくっついて離れない。スバルとしてはあまりくっつかれると任務に集中できない。

だがスバルは一昨日の反省からこれを黙認していた。連れ去られたミソラに何もできなかった自分の事を考えると、無下に突き放す真似は出来ないのだった。しかしそれでも限度がある。

「ミソラちゃん、もうちょっと離れてよ。僕のか細い腕を掴んでも虚しいだけでしょ？　それにこれから任務なんだ。緊張感持とうよ……」

「良いじゃん！　私が精一杯のスキンシップをとってるんだぞ？　冷静ぶるなよっ。このう、憎いねえ。コイツめ、このー」

ミソラはスバルの頬を突いてくる。スバルはだんだんイライラしてきた。ウォーロックと離れ離れになっているせいで、こういったストレスに対する耐性が低くなっている。

ウォーロックがいた頃のスバルなら、芝刈り機で望遠鏡を破壊されても、芝刈り機で地球儀を破壊されても、芝刈り機で宇宙図鑑をズタズタに引き裂かれても、やんわりと受け入れる事が出来たのだ。しかし、今はそんな事はない。

（なんだかちょっと、うっとおしいな……）

「このこのー。アイドルの私がこんなに構ってるんだぞ？　もっと喜んでよー。どう？　良い匂いする？　柔らかい？　ええ？　どうなんだい、スバル君よう？」

調子に乗ったミソラが艶やかな髪を掻きあげる。確かにスバルの鼻腔を楽しませた。

だが、やはりミソラが鬱陶しい。

仕方がないのでスバルは大人の男を演出しながら溜め息をついた。もちろんビジライザーを装着済みだ。溜め息の中に様々な情緒をは

らませる。
今、スバルは頭の中で大吾をイメージしている。スバルの中で一番素敵な男と言えばそうなのだ。顎ひげが欲しい所だった。

「ふう……。ミソラちゃん。いい加減に離れてくれないかな。さっきから生まれたてのハツカネズミのような奥ゆかしい小さな君の胸が僕に当たっているんだよ」
「あ、当ててるんだもん！　どう良い気持ち？」

ミソラも負けじと上目づかいで迫る。力一杯に自分をアピールだ。スバルはロックマンだ。そんな所で負けるわけにはいかない。僕は呆れていますよ、と演出する。そして至高の変態を演出する。今度は頭の中でハイドをイメージした。スバルの中で一番素敵な変態と言えばそうなのだ。紳士的な杖が欲しい所だった。

「まったく。やれやれだね。僕がそんなものに屈するとでも？　ましてや小学生の胸に興奮するとでも？
いいかい、ミソラちゃん。僕はね、委員長のような張りのあるお尻や太ももに心惹かれるんだよ……」
「え？　そうなの？　確かにルナちゃんの胸はペッタンコだけど、スタイルいいもんね。でも私だって……！」

ミソラは自分のホットパンツの双丘を撫でてみる。そしてスバルに問う。わりと真面目に。何気に自身はあったはず。

「私、ルナちゃんに負けてる？」
（く、くそう、僕は宇宙が危機に瀕しているこんな時に何をお尻お尻やっているんだ……？　そもそもミソラちゃん。こんな変態じみた事を言う僕からすぐに離れるべきだよ。危険だと感じてくれよ）

スバルは頭が重い。だがまだまだ負けるわけにはいかない。ここで屈すればロックマンの名に泥を塗る事になる。

「さあ、どうだろう？　でも答えを焦る必要はないんじゃないかな？　まだまだ将来の可能性があるんだから。きっとミソラちゃんは化けるよ。

それにだって、僕はメロンが腐る寸前の熟れ時まで待つんだ。そしてそうやって育てたメロンをガブリと食べるタイプなんだ。まだまだ、分からないよミソラちゃん？　君はもっと熟れると思う」

「スバル君……」

ミソラはうっとりとした。スバルはげんなりとした。

（ミソラちゃん。ここはうっとりする所じゃないだろう？　気持ち悪がってくれよ。昨日の映画で見た変態ストーカーオジサンの台詞なんだからさ……）

スバルは巡る巡るツッコミ所をここは我慢、と堪えていた。しかしこれは、しかしだ。そこにミソラだ。どうやら連れ去られた時よほど心細かったらしい。

「ね？　触ってみる？」

「え？　何を？」

スバルはミソラを舐めていた。少し変態じみた事を言えば、気味悪がって離れてくれると思ったのだ。だが、ミソラはそんな事でスバルを否定しない。ミソラはそうやってスバルの目の前で頬を染めている。うっとりとした目は何故か涙ぐんでいた。

スバルは「助けて、父さん」と十回ぐらい心の中で復唱した。でも大吾は助けてくれないのだった。

「え？　ミソラちゃん……？　僕、今まさに父さんに助けを求めているんだけど……。何を触るのかな？」
「もう、言わせないでよ！　スバル君のエッチぃっ！」
「ぐほっ！」

ミソラはそう言い捨て、とことことクインティアとシドウの方に走っていってしまった。そして逃げるように電波変換をした。小悪魔ハープ・ノートは舌を出し悪戯っぽくスバルに笑っていた。
どうやら敵に連れ去られた影響は無いようだ。至っていつも通りで元気だった。

「負けたよ……。ミソラちゃん」
『敵が悪かったですね』

がっくりと膝をついてうなだれる。スバルは普通にからかわれていたようだ。涙が出てくる。しかし清々しい清涼感たっぷりの風に涙はかすめ取られた。

そして、お次はゴン太がのっしのっしと歩み寄ってくる。両脇にはジャックとツカサがいた。ただミソラと違い、ゴン太の太い腕に二人が抱きつくという事はなかった。

「おい、スバル！　何やってんだ。そんな所で考える人の真似なんかして」

ゴン太は腕をぐるんぐるんと回しに回していた。元気いっぱいだ。スバルも立ち上がる。たださっきの事は忘れることにした。

「しかしよう。やっと始まるんだな！　俺、ワクワクしてきたぜ」

「はは、ワクワクって……。まあ、ゴン太も頑張ってよ。期待してるんだから」
「アッタリ前よ！　今日は学校を特別に早退出来たんだ！　へへっ、なんだかちょっと大人気分？」

どうやらゴン太は平日の昼間から学校の外に出られる事が嬉しいようだ。今一つ事の重大さを理解していないようでもある。スキップを踏んでご機嫌な鼻歌から嫌でも分かる。
スバルはただ苦笑していた。ゴン太と違い、学校さえまともに通えない今の状況に辟易としたものを感じていた。

「まあ、任務だから仕方ないよね。でも勉強が遅れたら嫌だなあ……」
「勉強なら俺が教えてやろうか？」

ジャックだ。彼は何気に賢い。

「たしかジャックって見た目は不良少年だけど意外と頭が良いんだったね」
「意外とは何だ！　意外とは。意外にも俺は王室育ちで、帝王学から家庭の医学まで幅広く網羅してんだぞ！」
「家庭の医学って……。しかも自分で意外って言ってるし」

とりあえずスバルはジャックをスルーしてツカサと談笑し始める。ツカサはスバルと話が合う。お互いが落ち着き合っているせいか不思議と波長も合う。

「こんにちはツカサ君」
「こんにちはスバル君。今日もいい天気だね」

ツカサはおっとりとした様子で空を眺めた。

「本当にきれいな空だね。まるで君の心を映し出したかのようだよ」

「もう、スバル君ったら、お上手なんだから」

「いやいや、君に負けるよ」

スバルとツカサ、お互いクスクスと笑い合っている。

「んもうー。スバル君たらー」

ツカサはスバルの肩を指先でちょんと軽く突っつく。言っておくがツカサは男だ。

「あはは」

「うふふ」

「あはは」

「うふふふ」

「ぎゃはは」

「あっ、ジャック君も入ってきたね。はい一緒に笑おう」

ゴン太はその様子をただ眺めていることしかできなかった。

「俺も仲間に入れてほしいんだぜ」

ゴン太は指をしゃぶることしかできない。

「おいおい！　お前たち何を和やかに笑い合っているんだ！　みんなもうノイズウェーブに行ってるぞ！　ぐずぐずしてないで、さっさと電波変換しろ。さもないと全国のうまい棒を敵に回すぞ」

スバル達にシドウがつかつかと歩み寄りながら、うまい棒をがつがつと食い荒らしている。そんなシドウの食べ散らかしを後ろの方でクインティアが箒で掃除していた。これは良い主婦になる。

「あっ、暁さんだ！　こんにちは」
「あぁ！　てめえ、なに俺の姉ちゃんにうまい棒の掃除させてやがる」
「我が弟よ。そんな事を気にしていてはうまい棒がおいしく食べれないだろう？」
「そうよ。シドウはこれくらいでちょうどいいんだから」
「流石はティア！　話が分かる！」
「姉ちゃん……」

シドウはキリリと笑い、ジャックにうまい棒を渡してやる。プレミアの棒だ。

「カキフライ味だ。うまいぞ！　うまい棒だけにな。ハッハッハッ！」
「ばかやろ！」

うまい棒が宙をダイナミックに舞った。
二人のやり取りにうまい棒は欠かせないようだ。しかし、そろそろスバルは真面目モードにならなければならない。そういう風にシドウにも言ってやる。

「暁さん、そろそろ真面目になりましょう」
「そうだな！　いつまでもうまい棒じゃいられないってな！」

意味の分からない事を口走りながらシドウは元気いっぱい。いそいそとシドウはポケットからハンターを探す。うまい棒がたくさん入ったポケットからようやくそれを取り出した。そして構える。

「ウィザード・オン！」

するとその場所にアストラルが構築された。しかしどうやらシドウ専用にカスタマイズされている様子。黒いながらもそのアストラルにはアシッドの面影が見え隠れしていた。

「コイツが俺の新しい相棒のカスタムアストラルで名前は『スカッド』だ！　コイツを迎え入れてからずっと考えてたとっておきの名前だ。どうだ、カッコいいだろう？」
「うおおお！　カッコいい！　なんかお洒落だぜ。スポーツカーみてえだ。牛丼で例えれば、卵の黄身だ！」

ゴン太が心奪われる。確かにスカッドの見た目は風を切るような切り込み深いシルエット。近づくと切れるぜ？　と言わんほどだ。

「フッフッフッ、ゴン太よ。お前とは旨いうまい棒が食えそうだよ。だが、しかし！　これで驚いてもらっちゃあ困るに困るぜ！」

そこでシドウが凄んだ。思わずスバルも生唾を飲む。

「俺の元祖人工電波変換とくと見ておけ！　スバル、サテラポリスの真のエースの勇姿を目に焼き付けとけよ！　滅多に見れないぞ」

「はい、暁さん！　ばっちり見ときます」

シドウは電波変換を披露するつもりだ。後ろの方でクインティアが心配そうに見ている。気が気でない様子。確かにシドウの体はあまり思わしくなかった。

だがシドウはお構いなしだ。ノリノリである。この男、止まらないのである。シドウはキレのある動きでハンターを天高く掲げる。足をきっちりと肩幅に開いて、お手本のような変身ポーズ。

きっと、シドウは小さい頃から特撮が大好きだったに違いない。シドウはきらきらと瞳を輝かせて少年のように溌剌（はつらつ）と変身する。

「うぅおおお！　トゥラァァンンスゥコゥォォードォ　ＯＯＯ！　スカッド・エース！！」

「ス、スゴイ、気迫だ……！」

スバルが思わず一歩後ずさる。シドウはたちまち白色球体に包まれた。その中でスカッド・エースが胎動していく様がありありと見せつけられる。

そして球体が弾けて中からアシッド・エースと瓜二つの電波人間が出てきた。色も白が主でほとんどアシッド・エースだ。しかしアシッド・エースが上半身にその機能を集約した体型だったとすれば、スカッド・エースは全身にバランスよく装甲を纏っている。

バイザーの色は赤で白色のボディに黄色と赤、黒のラインが走っている。そして機械的な羽が背中で畳まれていた。広げたらさぞイカロスだろう。

「どうだ！　コレが！　俺のスーパーヒーローモードであるスカッド・エースだ！」
「暁さん……帰ってきたんですね！　僕、感動しました」
「ヒーローは遅れてやってくるもんだろ？　って、ちょっと遅すぎたか？」

そこにスカッドがつつく。

『フフ、シドウも相変わらずですね。遅れて任務に失敗したら元も子も無いでしょうに』

温和な落ち着いた口調だった。そのスカッド・エースから聞こえてくるもう一つの声には聞きおぼえがあった。スバルが忘れもしないアシッドの声だ。真面目な紳士的な口調でいつかのようにシドウをたしなめていた。間違いなくアシッドのそれだ。スカッドでアシッド、アシッドでスカッドなのだ。一度で二度おいしい。

「暁さん。この声って……」
「ああ、そうだよ。カスタムする時に、人格データが空っぽのアストラルに新しく擬似人格プログラムを入れてもらったんだ。もちろんアシッドの人格データを入れてもらったよ」

スバルはいよいよシドウが帰ってきたのだと実感した。そして自分もやってやろうという気持ちになった。ハンターを構える。戦意が煌煌と昂ぶり弾ける。

「暁さん、本当に帰ってきたんですね。よーし、僕も変身だ！　ゴン太、ツカサ君、ジャック、電波変換だ！」
「おうよ！　牛丼の為に宇宙を救う！！」
「うん、頑張ろうね」

「やっと、俺達の出番だぜ」

四人は「トランスコード」と声を合わせ変身した。スターダスト・ロックマン以下、三名の電波人間が姿を現した。これで役者がそろったという訳だ。

スバル達も出発しようといよいよ意気込んでいる。ただその前にオリヒメとハートレスがスバル達の元にやってきた。大人の女性がスバル達に接近中。

彼女達はオペレーターなので直接現場に足を運ぶ事はない。ここで留守番を余儀なくされる。

その前に彼女達は餞別(せんべつ)をスバル達にも渡さなければならなかった。既に他の隊員には配布済みだ。

「アナタ達、そろそろ行くのね」

白衣の方のオリヒメがスバルに言う。口調は柔らかく、かつての気狂いは感じられない。

「はい、夜太郎さん達がノイズウェーブで待っているはずですから」

「そう。じゃあ出発の前に、これをアナタ達に渡すわ」

オリヒメが差し出した掌には電子カードが乗っていた。一見ただの板っきれ。だが、ただの板ではない。

「これは？」

「私が沈没したムー大陸を、そしてハートレスさんが消滅したメテオGの残骸を調査して、最近になって完成したノイズ制御プログラムの『オーPGM』よ」

オリヒメはそう言って、申し訳なさそうに苦笑した。笑えば普通に優しい顔も出来るらしい。オリヒメはすっかり丸くなった。

「本当はヘラ・ローズガーデンの残留電波と、あの宇宙船も解析したかったんだけどね。それらの情報をオーＰＧＭ組み込んで、レギオンとの戦闘も有利にさせてあげたかったんだけど……。ちょっと、解析が間に合わなくて……ゴメンナサイ」

「いえ。これだけでも十分ありがたいです」

宇宙船とはヘラ・ローズガーデンが所有していたであろうアレだ。未知の科学力で、ほとんどブラックボックスのアレの解析は骨が折れる事請け合い。科学技術の水準でいえばムー大陸のそれを超えているのだから。

そして次はハートレスの番。黒スーツの狐目女がスバルに言う。以前からのスバルの戦闘データを照合して問うのだった。

「スバル君は確かムー大陸とメテオＧがなくなってから、トライブチェンジもファイナライズもノイズチェンジもできなくなってたわよね？」

「ええ、そうです。今思えばあの力って、すごかったんだなあと感じています。いざ無くなるとこんなに困るとは……」

スバルは今までの戦いを思い返した。やはりトライブチェンジもノイズチェンジも使えなかったのは痛かった。もしそれらが使えたらヘラ・ローズガーデンにあそこまで後れを取らなかったかもしれないのだ。

「そうでしょうね。あれらは大きな力だったもの。そしてアナタ達はこれからノイズウェーブに向かう……。

今のままでは心もとないでしょう？　気休め程度だけど、そのプログラムはアナタ達電波体の保有エネルギーを底上げしてくれるわ。そして過酷なノイズ空間にもある程度適応してくれるはずよ」

そこにシドウだ。粗品としてうまい棒を差し出してからハートレスに問う。

「ハートレスさん。これを使ってノイズチェンジは出来ないのですか？　ファイナライズ出来れば戦力の大幅アップにつながると思うのですが」

ハートレスは首を横に振った。

「それは無理ね。メテオGがなくなった今、そんな事は出来ないわ。それにムー大陸も沈んでしまっている以上、トライブチェンジも無理よ。これはあくまで基本戦闘能力をあげる道具なの。スバル君とシドウ君なら良く分かっているはずよ」

スバルには心当たりがあった。

「確かに、ファイナライズする時はリュウセイサーバーにアクセスしていたな……。アレがメテオGだったとすると……やっぱりそうなるのか」

少し落胆し気味のスバル達。これはいけないとオリヒメがスバル達を勇気付ける。優しく鼓舞してやるのだ

「そのオーPGM単体じゃ、確かに少ししか力は上がらない。でも他の隊員さん達にも渡しておいたわ。みんなが協力して助け合えば小さな力がきっと大きな力になるはずよ。大丈夫よ。きっと」

「オリヒメさん……。ありがとう！　でも、オリヒメさんがそんな事言うのはなんか似合わないね」

スバルは可笑しげにくつくつと笑う。

「一言だけ余計ね。支配と言うキズナが欲しいのかしら？」

オリヒメはじっとりとした目線をスバルに送る。スバルはゾッと寒気を感じた。

「け、結構です！」

「フフ、冗談よ。頑張りなさい」

「はい、頑張ります！」

スバル達はそのオーＰＧＭをハンターに読み込ませる。そして目的の場所へと向かう。まずコスモウェーブへと昇っていった。

スバル達もその場を離れた事でＷＡＸＡのヘリポートには、ミライを除いて誰もいなくなった。

何故かミライはまだそこにいた。それはある人物を待っていたからだ。その場所の鋼鉄の地面は冷たく研磨され、ミライの鬱屈とした表情を映していた。

ミライは後ろ髪をビル風に任せながら、ただ佇んでいる。

数分待った頃だろうか。ミライは後ろに人の気配を感じた。出入口の分厚いドアの方へ呼び掛ける。ただ体はそちらへ向けずに青空を仰ぎながらだった。

「……来ましたか――博士」

ミライの後ろにはリフレインがいた。リフレインは辺りを見渡す。

「他の隊員達は？」

「もうすでにノイズウェーブへ向かいました。ハートレスさんとオリヒメ博士もオペレーションルームにいます」

「そうか……じゃあ、ここには誰もいないな」

「そうです。ここにはアナタと俺しかいません」

ミライは出入り口とは逆の方に歩き出す。そして縁にある手すりに身を預けぼんやりと空を眺め出した。まだ昼だ。太陽は高い。そ

してリフレインに語る。
　リフレインもミライの方に歩み寄りながら聞いてやる。しかし、親子水入らずの割には双方ともに表情が暗い。特にミライは酷かった。

「俺は負けましたよ。ＷＷＲの幹部に歯が立ちませんでした。博士、アナタはあの時俺に言いましたよね？」
「ああ、言ったとも。お前が最強だ。お前はだれにも負けない人類を救う存在だとな」
「……ですが、勝てませんでした。宇宙は広い。アナタの予想をはるかに超える敵がいたんですよ。俺は最強じゃなかった……」
　リフレインはあと数歩のところまでミライに歩み寄るとそこで足をとめた。
「それは違うぞ、セツナ」
「俺はそんな名前じゃない」
　ミライは語尾を強めた。ミライは珍しく苛立っていた。だがリフレインもこの反応は当然だと割り切って続ける。
「良いから聞け。あの時のお前の体はもう限界だったんだ。レイダーと何度も電波変換したあげく、レギオンとかいう化け物と交戦して既にボロボロだった」
「それは、分かります。今のバージョンじゃ、ＷＷＲの幹部にさえ勝てないとね……！　ましてや宇宙を救う事なんか……」
「大丈夫だ、安心しろ。新しく取り換えた今度のフレームは前のフレームよりも強度を上げて電波変換の時のシンクロ率も大幅に向上している！　今度は負けない！！」

リフレインは景気づいたようにまくし立てる。科学者としての性か。

「お前も昨日の実験で自ら体感しただろう？　シンクロ率が１５００％を超えていたじゃないか。今度のお前は間違いなく宇宙最強だ！　私の最強の息子だ！　そう、お前は！！」

リフレインの言うシンクロ率はとてもではないが人間の数値ではない。

そしてミライは気だるそうにくるりと身を回した。苦しそうにミライは、上機嫌とさえも見えるリフレインを病んだ瞳で睨む。

「勘違いするな、アンタの息子は死んだ。今アンタの目の前にいるのはアンタの最高傑作だろう！？　違うか？　トニック・Ｗ・リフレインよ！？」

「ち、違うぞ！　セツナ。お前を決してそんな風には……」

リフレインは慌てて弁明する。だがミライは聞く耳もたずにリフレインへ言い捨てる。吐き捨てるようにしてこの場の決着をつける。

「もういい。俺は彩道ミライだ。母さんの息子だ。アンタは俺に戦う力を無理やり押し付けた人間に過ぎない」

ミライは感情を込めずに言った。しかし、表情が歪んでいる。リフレインもミライと同じく辛そうにしていた。

「っ……、私の事をもう父親としてはみてくれないのか？」

「俺だって見たい。だが、どうしてもそうは見れないんだよ……！」

「セツナ……何度でも言うが、あの時は仕方なかったんだ。未来（みき）が望んだ事なんだ。私はああする事でしかお前を救えなかった……！」

「うるさい。アンタは母さんを見殺しにした。どう考えても母さんの方が助かる見込みがあっただろう？
何で俺だったんだ？　アンタは自分の理論と技術を世界に証明したかっただけだ！」

突然ミライはヒステリックに笑う。リフレインをあざ笑う。漆黒の指がリフレインをしっかりと指差す。スバル達の前で決して見せられない姿だった。

「アンタは狂人だ！　流石に最悪の犯罪者の血を引いてるだけはあるよ！　本当はその犯罪者の理論を証明したかったんじゃないのか？　そして、こんな非人道的な事を実行する点ではアンタは犯罪者以上の悪魔だ」

リフレインは諦めたように、頷いていた。そしてもう父親ではなく一人の科学者としてミライと接する事にした。
セツナという息子はここにはいないと割り切ったその声色は震えていた。悪魔呼ばわりされた事が悲しかったのだろうか。いいや違う、あんなに打ちひしがれても涙さえ流せないミライに絶望したのだ。
自分はとんでもない事をしてしまったのだ、と思ってしまう。

「……わかった。もう何も言うまい……。ミライよ、行け」
「……言われなくても行くさ」
「最後に言っておく。今のフレームは強力だが、無理をし過ぎればお前の精神に多大な負荷がかかる。気をつけろ。お前がお前でいられるのは、体と精神が絶妙な所で融和しているからだ。
これはロボット工学者としての意見だ素直に聞き入れろ」

ミライはすぐに落ち着き払う。いつもの調子にすっかり戻った。

この感情の入れ替えの速さは素直に異様だ。

「俺はそう言った意見が聞きたかったのです。了解しました。これからは考慮しておきましょう」

ミライは電波変換しようとハンターを構えた。そこにリフレインは付け足す。本当にこれが最後。ミライは聞く気もない。

「言っておくがな、ミライ……。お前は勘違いしている。さっきお前は、私が私の先祖の理論を証明しようとしているといったな？」

「……レイダー出て来い、電波変換だ」

「……私はそんなつもりはなかった。私は純粋に昔の情報化社会や今の電波社会が好きだ。そしていつかロボット工学と電波社会の調和を私は夢見ている。私はただそれだけなんだ」

『ミライ様……いいのですか？』

ミライは耳を貸さない。

「トランスコード　００１　ソウル・レイダー」

ミライは電波変換してコスモウェーブへと昇っていった。

リフレインはその姿を見つめつつ空に消えていくのを見守っていた。そしてソウル・レイダーは完全に消えてなくなった。

「セツナ、お前の言う通りだ。私は罪深い……。ホントは私の顔なんか見たくないだろうことは容易に想像がつく」

リフレインはミライがさっきまでいた場所に寄って、空を眺めた。リフレインが手を置いた手すりはただただ冷たかった。その冷たさが自分の犯した過ちだと思ってしまう。

「でもセツナ。こんな私の為に力を貸してくれるのは、お前の優しさなんだよな？　嫌な顔一つせず、こんな運命を受け入れてくれたお前に感謝するよ」

リフレインが空を見つめていると、ヨイリーがその場に現れた。どうやら事の一部始終を聞いていたらしい。リフレインの隣まで来ると、ポツリポツリと空に向かって語り出す。リフレインはうそ寂しげに耳を傾けた。

「ねえ、リフちゃん。
セツナちゃんもきっと頭では理解しているのよ。アナタが命を救ってくれたって。だから、宇宙を救うためにリフちゃんに協力してくれる……。
でも、未来さんの命まで救えなかったアナタを責めずにはいられない……。なぜ自分が生きているのか疑問に思うんでしょうね……」
「あの時、未来はセツナの為に命を投げ出したんです……」

ヨイリーはリフレインへ顔を向けた。しわの谷に埋もれた瞳は、この老婆がただただ静慮している事を思わせた。

「ねえ、セツナちゃんが何で自分をミライって名乗るか分かる？」
「……生まれ変わって、過去の自分を捨てたから。だからミライかと」

ヨイリーは首を振った。

「お母さんの分まで生きようとしているから」

ヨイリーはミライの本心を知っていた。一昨日、ボロボロになっ

てＷＡＸＡの病院に搬送された時、真っ先に仲間の心配をしていたミライが印象的だったのだ。
もう大切なものを失わないためにフレーム交換手術をヨイリーに申し出た必死の表情も鮮明に蘇る。そんな事を思い出しながらリフレインに語る。

「大好きだった未来さんの分まで生きようとしているのよ……セツナちゃんは。だから未来を繋いでいくために戦ってくれるのよ」
「……うっ……くっ」

リフレインはこめかみを押さえた。
表現の仕方は違うとはいえ、ミライはスバルとどこか似ていたのだった。だからミライは命がけで友達を守ろうとしたのだった。ミライはいつだって、守ろうとしていた。
クラスメイトの為に学校を守った事や、臆することなく凶弾に立ち向かった姿だけでその証明は十分だった。
ヨイリーはまた振り返る。

「敵にボロボロにされて急遽行ったフレーム交換手術だって、想像を絶する苦痛だったと思うわ。でもミライちゃんはアナタが生きる世界を守るために必死に頑張ったのよ。だから体と心がバラバラに引き裂きかれるような痛みにも耐えられる。
きっとそうよ。優しい子よ、あの子は……」

リフレインは涙した。雨でもないのに後悔と感謝の数だけ、手すりに濃い染みを作った。

「そうでした。私はあの子の優しさに、いつも助けられていたんです」

ｃｈｏｓｗｌｄ―２５：開幕

それからコスモウェーブを抜け、暗黒世界を突き進んでいくこと数分。スバル達はノイズウェーブの第二階層に到着していた。そこはクリムゾンノイズが立ち込め血帯び、ただ漫然と拓けた場所だった。

まず夜太郎が皆に説明する。夜太郎は裏の地理に明るいからだ。だてにノイズウェーブに十年以上いた訳ではない。

「ここは、ノイズウェーブの第二階層のクリムゾンウェーブです。場所的には冥王星付近となりますね。第三階層とのギリギリの狭間です」

スバルが息を呑んだ。ある種の感動を覚えていた。青いバイザー奥の瞳がキラキラ。

「冥王星……。ってことは太陽系の一番外側か……。すごい遠くまで来たんだなあ」

『ポロロン。流石にここまで来るとノイズ密度も半端じゃないわね……。オーＰＧＭがなければマイっちゃってたかも』

「ははっ！　ハープはだらしがないな。ここはまだまだノイズウェーブの浅い場所だ。俺はもっと深い場所に任務で行った事もあるぞ？　ま、スーパーヒーローな俺には楽勝だったがな！」

誇らしげに笑うシドウ。

夜太郎はコホンと一つ咳払いした。

「皆様、準備はいいでしょうか？　では、これからウラトーナメントことノイズウェーブトーナメントの参加登録をしてもらいます」

夜太郎は手をやり赤い空間の奥を示す。そこにはいくつかの施設がでこぼこと立ち並んでいる。裏の憩い場ことウラスクエアだ。そこでは様々な物資が行き交う。ブラックな一面に秀でた交易場だ。

「では早速、あのウラスクエアに向かってもらいます。あそこで参加登録が出来ますからね」

ゴン太は興味深そうにウラスクエアを観察していた。手で額に屋根を作り、まじまじと見ている。

「へえ、ノイズウェーブにあんな場所があったのか。たくさん建物があるぜ。牛丼屋もあるのかな？」

「ゴン太さん、残念ながら牛丼屋はありませんよ。大抵の所がイリーガルな品物を売っている闇市的な場所ですから。フッフッフッ……」

夜太郎は怪しげに笑う。ゴン太は「ちえ」と舌打ちし、ぶつくさと文句を言う。

そんなゴン太に構わず、スバルはウラスクエアに向かった。ただ少し緊張しているのか、その足取りは少しだけぎこちなかった。

少し進んだ所だろうか。ウラスクエアの奥にどんと構えている建

物が確認できる。規模はそれなりに大きく、サーカス小屋のようにテントが張ってあるタイプだった。真っ黒な三角形の中身はやはり真っ黒。暗幕で閉ざされているようだ。

スバルは少し入る事を躊躇う。だが軍人たちは動じずにすたすたとテントの中に入っていた。そこはやはり軍律にのっとった行動だ。勇ましい。

夜太郎はスバルの肩をぽんと叩く。

「大丈夫ですよ」

「はは。いけない、いけない。ちょっと緊張しちゃって……」

まずスバルは息を大きく吸う。そして暗闇へ向け大きく一歩を踏み出した。これでもう後には退けない。

「ウヘヘ、ようこそ……。ノイズウェーブトーナメント受付会場へ」

スバル達を待ち構えていたのは、一体の紫色の電波体だ。もしかしたら電波人間かもしれない。とにかく見た事もないタイプだった。

そんな彼がロウソクの薄明かりに照らされる席に座っていた。そして血色に富んだ色のカウンターに肘を突いて、指をからめる。そんな調子でにやにやと笑っている。手元には髑髏の水晶を置いて明らかな外れ者を演出している。

受付は、そういった怪しげな雰囲気を醸し出しながら言葉を続けた。

「へっへっへっ……。ここまで来るとはアンタら。ノイズウェーブトーナメントの参加希望者か？　こんな辺境の宇宙にある受付会場

の場所がよく分かったな……」

太陽系は宇宙から見たら田舎だ。

夜太郎が応える。

「私もトーナメント運営委員ですから受付会場の場所は知っていました。そして要望は、ここにいる四〇名余りの人達をトーナメントに参加させていただきたい」

「へへ……、そうかいそうかい。しかし、なんだあ。サテラポリスの顔ぶれがちらほら確認出来るなあ……。

へへへ、ソウル・レイダーやサーフ・サーファーがいるじゃないか……。こりゃまた大物が現れたもんだ」

受付はミライ達の方を舐めるように観察していた。ミライはそんな視線を気にする素振りも見せない。ただいつものように落ち着き払っている。

ただ南国は大物扱いされて少し嬉しそうにしていた。明らかに陽気なステップを踏む。そこはやはり南国だったようだ。

だが、そうやすやすと事は運ばない。南国のステップが止まった。

「……悪いが。ウラトーナメントは堅気の人間が参加しちゃいけねえ事になってるのよ……。悪い事は言わねえから引き帰りな」

受付はペッペッと手で払った。帰れと言うのだ。だが引き下がれない。ミソラの出番。

「しかし、ここに響ミソラと言う少女がいます」

夜太郎の一言に受付はピクリと反応した。どうやらただ事ではない様子。

照れ臭そうにハープノートこと響ミソラは遠慮がちに手をあげる。
「私はここです」と主張していた。すぐに受付がアイドルであるミソラを舐めるように吟味しようと試みる。これは世のミソラファンが憤慨する。

「なんだって？　ちょっとお嬢ちゃん、その愛らしいお顔を見せな」

ミソラは一歩前に出た。受付がエアディスプレイを展開する。そこにはハープノートが映っていた。その画像とミソラを見比べる。
一通り確認すると受付は納得したように頷いた。荒は見つからなかった様子。

「ふーむ、これは間違いないなあ……。確かに響ミソラだ」
「じゃ、トーナメントに参加できるんだね！？」

ミソラは嬉しそうに受付に接近する。

「まあ、そうなるねえ……。そんじゃ、まあ。ＷＷＲからの言伝を預かっているから、そこのゴツイ奴らやガキどももよく聞いておけよ。そういう風に言われてるからねえ」

受付はそう言いつけると、もう一つエアディスプレイを展開した。今度はテキストデータだ。それをつらつらと読みだす。

「えーと、なになに……。
『この言葉を聞いていると言う事は、トーナメントに参加するということだな？　そうか……、やはり来てしまったか……。
言っておくが、俺達は手加減をしない。トーナメントに参加するという事はお前もそれなりの覚悟があるということだろう。だから俺はＷＷＲのリーダーとして、お前に立ちふさがる。

いいか？　お前はそういう選択をしたんだ。そして俺とお前が次に会うときは、最後の決戦場だ。お前にとっての大切な繋がりとやらを俺に見せつけに俺の前に来い。

俺はそうする事でしか今まで守ってきたものの価値を計る事が出来ない。俺の今までは本当に意味があったのか俺に教えてくれ……。

お前たちの仲間が価値あるものである事を願っている。……待ってるぞ』

……ということだな。俺にはさっぱり意味が分からんが、まあ言付けたからな」

スバル達にとっては良く意味の分からない言葉に過ぎなかった。しかしミソラは違う。

ミソラはその言葉を聞くと先日の事を思い返す。そして、ある一つの可能性が脳裏をよぎった。ミソラはその可能性に考えを巡らす。

「……もしかして、やっぱりあの時の人は……。いや違う……、きっと違う……。違っていて欲しい……」

スバルが心配したようだ。ミソラに恐る恐る問いかける。

「どうしたの、ミソラちゃん？　さっきの言葉に何か引っかかる事でも？　僕たちにはよく意味が分からなかったんだけど……」

「ん？　あ、いや、何でもないよ。きっと私の思い過ごしだから」

「そう？　なら、良いけど……」

大急ぎでミソラは作り笑いを浮かべた。しかしミソラが確かな疑問を抱き始めていたのもまた事実。だがそれはスバル達には決して言えないものだった。

しばらく経ち、チーム毎のトーナメント参加申請が完了した頃。
受付がいやらしくからめた指を解き、おもむろに人差し指を立てた。不敵な笑みを浮かべてスバル達をしっかりと指差す。軍人達は緊迫した空気を感じ取り、すぐに引き締まった。
ミソラもスバルも、相対する受付に注視した。尖った紫の指先がロウソクに照らされギラリと怪しく光る。

「じゃあ、登録も済んだことだ……。早速ウラトーナメントのルールの説明をしようか……。良く聞いとく事だあ。一度しか言わないからなあ……」

そう念を押して、受付は言葉を続ける。ここからが受付の本当の仕事と言う訳だ。怪しくも、厳かに裏の掟を並べ立て始める。
ロウソクの灯火がぬるい風に揺られた。湿気帯びた室内の空気にじっとりとした口調がじとじととこぼれ落ちる。

「まずは、勝敗の決め方だ」

例の如くゴン太が口を挟む。勝手にはりきっていた。

「そんなの決まってるぜ！　敵を全員ぶっ倒してしまえばいいんだろ？」

受付はひくついたように笑った。髑髏の水晶を優しく撫でながら

ゴン太に教えてやる。

「赤いあんちゃん、それは違うなあ。本当のノイズウェーブトーナメントのルールはこうだ……。

一つのチームから一人だけ選出して、一対一で戦ってもらう……。なお組み合わせの選出はこちら側が決定する」

受付は淡々と続けていく。だが不可解なそのルールの内容だけに、シドウが受付に苦言を呈した。他の隊員も同じ様子だ。

「どういう意味があって一対一の勝負なんだ？　それじゃ、チームを組む意味がないんじゃないか？」

「いいや。意味はあるとも」

受付は手を広げてなだめる。慣れたものらしく落ち着いて説明を再開した。

「なぜなら、このトーナメントの目的は強い力を持った戦士達を探すことにある。ＷＷＲは強い武力を欲しているからな。

そうなると効率的なのがチーム毎にまとめて兵力を選出することだ。ＷＷＲも一人一人トーナメントをしている時間はないってだろうよ。砕いて言えば、強いチームが生き残る……。

それだけだ」

「つまり効率を優先するためにチームからの一対一と言うことか？」

「そう言うことだ」

「だが、それではチームを組まなくても単独でも参加できるってことになるな……。要は一対一の勝負さえ出来ればいいんだから……」

受付が小馬鹿にしたようにシドウを嘲笑の的にした。

「ヒヒヒ……。バカかお前？　一人でトーナメントに参加してみろ。連戦を強いられて、徐々に嬲り殺されにいくようなもんだ。
……もっとも、おのれの身一つでウラの猛者どもを蹴散らす事が出来るなら話は別だがな……。まあお勧めはしないよ。
ＷＷＲもバカじゃない。結局は頭数の多いチームが有利なようにトーナメントを組んでいるのさ」

シドウは、してやられたという面持ちで受付にささっと手をやる。

「なるほど、わかったよ。ルールの説明を続けてくれ」
「わかりゃいいんだよ。
じゃあ、次に対戦が行われる場所についてだな。
まず原則として、お前らには次の対戦場所以外の情報を明かす事はしない。これは上位進出者以外の雑魚にＷＷＲのアジトを知られないためだ。
つまり勝ったチームにだけ次の対戦場所が知らされると言う事だよ」

その事から、シドウに一つの結論が与えられた。ニヤリと小粋な笑みを浮かべる。うまい棒があれば完璧だろう。

「つまり、勝ち進んでいけばＷＷＲのアジトが分かるってことか」
「そうだ。そして最終決戦場でＷＷＲのリーダーに力を示す。認められれば晴れてＷＷＲの幹部入りだ。幹部になればＷＷＲがどんな願いでも一つ叶えてくれるらしいぞ？」
「……それはいいね。うまい棒の詰め合わせを所望しようかな。ほら３００円で売っているヤツ」

シドウが冗談を飛ばすが、ミライは合点がいった様子だ。涼しげな表情をしつつ鋭い眼光を光らす。

「なるほど……。その願い目当てでウラの連中が集まっているというワケか。どうせロクでもない欲望だろうな……」
「へへ……まあ、そうだろうねえ。
……じゃあ最後の説明だ。トーナメントの試合間隔について言うと……完全にランダムだ。一週間も日が空くこともあれば、一週間連続で試合し続ける事になるかもしれない。これは他の試合の進行によって左右されることだからな。運としか言いようがない。
まあ、無事に勝ち抜けば第二トーナメントに進出できるさ。……無事だったらの話だがなあ」

スバルは仰天した。まさに天を仰いでしまう。

「一週間って……。学校に行けなくなるじゃないか。勉強が遅れちゃうし委員長に怒られちゃうよ……」

だがゴン太は違う。スバルほど柔なメンタルでは無い。

「え？　まじで！？　一週間も学校を休めるのか。ウヒョー、最高じゃんか」
「ゴン太……。君はなんて幸せ者なんだ……」
「え？　なんか言ったか」
「いや、何でもないよ」

スバルはやれやれと頭を抱える。ミソラがスバルの青いヘッドギアを撫でて、よしよしと慰める。
そして受付がゆらりと立ちあがる。髑髏の水晶に手をあてがうと髑髏がぽうっと青く光った。髑髏の中で文字らしきものがゆらゆらと泳いでいる。受付はその文字らしきものを目で追っていた。

「じゃあ、説明はこれで終わりだなあ。ちょうど、試合場所も運営本部から届いたようだ。
　では、これからトーナメント初戦の場所を伝えるとするよ……。以上で俺の仕事は終わりだ……。まあ、頑張れよ」

　そこで最後の最後にスバルが受付に問いかける。その様子から敵意は向けていない事が分かる。むしろその逆。

「あの、オジサン……でいいのかな？」
「ああん？　何だボウズ。俺はまあ、立派なオジサンだよ」

　オジサンはスバルに顎をしゃくった。

「えっと、色々と教えてくれてありがとう」

　受付は一瞬だけ訝しげに間を置いた。スバルがどういうつもりなのか測りあぐねていたのだ。礼は言われ慣れていないらしい。
　ただスバルとしては何の事はないただのお礼だった。そういう事なので受付は面倒臭そうに応えてやる。

「……まあ、仕事だからなあ。でも得体のしれない奴なんかに馴れ馴れしくするもんじゃないだろうよ？　お前みたいなアマちゃんが真っ先にやられるんだぜ。ウラの世界はそういう所だ」
「そうかもしれないけど、でもなんかお礼は言っておきたくて……。ウラの世界でもそういう事は大切にしたいんだ」
「……とんだ、バカ野郎だなあ」

　受付は呆れたようにうなだれるが、少しだけ彼なりに考えたようだ。ぶっきらぼうに今度は問いかける。

「おいボウズ、名前は？　死んじまうだろうから俺が覚えておいてやる」
「えっと星河スバルっていう名前だけど、今の姿はロックマンって言うんだ」
「ロックマンか……聞いたこともない名前だなあ……」
地球での英雄を彼は知らないようだ。コイツはもぐりで違いない。
「ってことは、やっぱりオジサンは地球の人じゃないんだね」
「そりゃそうだ。数ある受付会場の中、たまたま太陽系の会場を俺が任されただけなんだからな」
「じゃあオジサンはどこの星の人なの？　どんな所？　遠いところ？　キレイ？　熱い？　寒い？」
この手の話題になるとスバルは水を得た何とかだ。ペラペラと口が回る回る。
それに対し受付はきっぱりと言い切った。
「……今はもうないよ。宇宙の外に放り出されて消滅したからなあ……」
受付は物憂げに水晶を見下ろした。どうやら彼の母星は消えてなくなってしまったようだ。絶対不可侵領域である宇宙の外に投げ出されると言う事は、ただ純粋な無への帰還を意味していた。始まりへの終着を意味しているのだ。
「もしかして、宇宙の収束が原因……なの？」
「そうだ。だからこそ、お前らの目的は何となく分かるよ。何とかして宇宙の収束を止めようとしてるんだろう？
なら、急いだ方が良い。ここの宙域もいずれ宇宙の端に食われる。

そうして外に投げ出される。
そうなったら何もかもがゼロだ……」

スバルは『ゼロ』と言う言葉に、薄ら寒いものを感じた。だがそれ以上の使命を感じたのも確かだった。

「ありがとう、オジサン。僕たち頑張るよ」

しばらくしてスバル達が受付会場から出てきた。わらわらとウラスクエアの中央広場に繰り出てくる。そんな電波人間の団塊に、ウラスクエアのゴロツキ達はそそくさと場所を明け渡すしかなかった。

そしてスバル達は有翼悪魔のモニュメントがあしらわれた噴水の前に集まる。赤いクリムゾンノイズが勢いよく噴き出し、さんさんと血だまりに降り注ぐ。そうして血の雨が辺りに冷涼な空気を作り出すのだった。そこでチーム毎に分かれて作戦会議という訳だ。

スバル達一行は、既に初戦会場を知らされていたのだ。そのせいか、皆がそれぞれの物思いに多種多様な表情を浮かべている。熱く闘志をたぎらせている者もいれば、未知の不安に青ざめている者、学校が休めるとワクワクしている者と様々だ。

「しかしまあ、チームゼータは辺境の宇宙が会場らしい。ガイドデータによると、そこは隕石が降り注ぐ、成分のほとんどが溶岩、溶鉄の原始惑星だそうだ。

ハハハ！　なんかファンタジーだな」

笑ってはいるが、シドウのエアディスプレイには地獄の釜湯が煮えたぎる溶岩地獄が広がっていた。雨粒の代わりに隕石が所狭しと降り続けている。

余りにも酷いその環境が返って可笑しく、不思議と笑いを誘うのだろう。

「こら、シドウ……。笑い事じゃないでしょ」
「まあ、確かに笑い事じゃないかもな。これはかなりヤバいぞ」

クイーン・ヴァルゴことクインティアも深刻なだけの表情を浮かべている。シドウの隣で憂鬱になっていた。

「ウェーブロードもただの原始的な電磁界みたいで、まともに戦うのも大変そう……。それに相手は見たこともないタイプの電波体だわ……。毒々しい色をして、いかにも凶悪って感じね……」

こうなってくるとリーダーである南国の出番だ。彼はいつだってポジティブでハイテンションで愛すべき人間なのだ。こんな地獄、南国にとってはバカンスの一環に過ぎないはず。

「へい！　二人とも!!　そんなに気を落とすなよ。僕が溶岩でも隕石でも華麗に乗りこなしてみせるからさ。君たちは大船に乗ったつもりでいればいいんだよ。
て言っても僕はサーフボードに乗ってるけどね！」

南国がサーフボードを乗りこなし、その場でクールにクルクルと華麗に回りだす。これでは大船に乗ったつもりにはなれないだろう。ただサーフボードに乗ったつもりにはなれる。

「ねえ、シドウ……。リーダーがこれじゃ、余計に不安だわ」
「まあ、南国さんはやるときはやる人だから……」

そんな具合に、悩みながら四〇余りの電波人間がこれから起こるであろう事事を勘案していた。シドウ達と同じく、十郎もツカサも

ジャックも甚だ過酷な試合を強いられる事だろう。

ちょうどその時だ。辺りを取り巻いていたウラスクエアのゴロツキ達がざわめき出した。「マジかよ。アレって……」「何でこんな所に？」と言いつつ、ひそひそと密談している。その注目の先には、銀色が印象的な軍隊らしき隊列があった。足並みは寸分違わず一致している。二人三脚の世界一も狙えることだろう。そんな具合に進軍中だ。

その軍団の到達目標はスバル達だった。スバル達の数倍以上の数を誇る彼らが歩を連ね近づいてくるではないか。

石を模したノイズデータの床を足裏が叩く。耳触りの良い金管音がリズムよく鳴り、それは乱れる事がなく大きくなるのである。

スバル達の前まで来ると、その軍列は立ち止まった。立ち止まる挙動までまったくの同一という徹底ぶりだ。そして隊長らしき人物が前に出てきて、スバル達の電波人間部隊に接触してきた。

「チームダブルプリティ―の者はおりませんか！？」

彼は惜しげもなく清々しいまでにスバルのチームを呼んだ。その人物の見た目は、銀色の分厚い装甲で全身を固めたサイボーグのような風貌だ。シグナルのように所々がチカチカと光り輝いてハイテクかつ遠い未来的な印象を突きつける。そして光の刀身を持つサーベルを腰に携えていた。電波人間のように見えるが、そうとも言い切れない異様な雰囲気がある。

「チームダブルプリティ―の者はおりませんか！？」

スバルはひそひそとキミドリの小脇を突く。

「あの……知らない人が呼んでますよ。しかも何でチームダブルプリティーなんて名前で登録してるんですか!?　正気の沙汰じゃないですよ」

ひそひそとキミドリがスバルに答える。

「え？　だって、遊園地の時に言ってたじゃん。んもう、忘れたとは言わさないぞっ？」

「あれって、本気で言ってたんですか？」

「本気も本気。超本気だよ」

「うわあ……」

「とにかく、スバルン。あのゴツイ銀色のオッサンは何者なのよ？」

「え？　キミドリさんの付けたチーム名を呼んでるからキミドリさんの知り合いじゃないんですか？　僕はあんな人知りませんよ」

キミドリはスバルの小脇をくすぐる。

「もうー、何言ってんのよスバルンたら。可愛くて可憐で清楚で一途、その上、か弱くて守りたくなるような女の子である私にあんなゴツイオッサンが知り合いにいるわけないでしょ？　ほれ、こちょこちょこちょー。どうだ、参ったかー？」

「うひっ。ちょっと、くすぐらないでくださいよ。ひひっ……、ちょっと、やめ……」

ごついオッサンからの三度目の呼びかけだ。少し苛立ちを見せ始めた。

「チームダブルプリティーの者はおりませんか!?」

スバルはひそひそとキミドリに反撃する。

「キミドリさん、まだ呼んでますよ!?　行ってあげてくださいよ。あんなに恥ずかしいチーム名を何度も呼ばせるのはカワイソすぎです。それ、こちょちょのちょー」

「あひひ……っ。ん・・・・・っ、スバルン言ったなコイツゥー。私の考えたチーム名をバカにしてー。あっでも、ちょっと、こそばしすぎ……！　ちょっと、やめ……あんっ……」

ロックマンから分離してトラッシュが堪らず出てきた。これはいけないのだ。

『スバル様とキミドリ様、少し遊び過ぎですよ。特にスバル様はもっと真面目で聡明なお子さんだったのに……。くすぐりあいっこなんてあんまりです。私は今まさに失望しております』

トラッシュは悲しんだ。今のスバルにかつてのスバルは投影出来ない。これは酷く悲しい事である。スコープがよしよしとトラッシュの額を撫でてやった。トラッシュはありがとうと言った。

『ゴメンね、トラッシュクン。ウチのキミドリのせいで、スバル君があんな事に……。帰ったらちゃんと、メッて言っとくからね』

『いえいえ……。子供は風の子、元気の子とも言いますし……』

そうこうしているうちに、ごついオッサンからのラストコンタクト。

「チームダブルプリティーはいないのですか!?　いないようですねえ!?　いないのなら、私は帰りますぞ?　本当に帰りますぞ?　いいのですね?」

ミライもその呼びかけに気がついていた。だが恥ずかしいチーム名のせいで見て見ぬふりしかできない。ミライのプライドが許さないのだ。ミライにプリティーはいただけない事だ。

だが、そこに一筋の光明だ。赤と白との縞々がクリムゾンノイズの空に突き立つ。ミソラだ。きびきびとした動作で手を高々と上げていた。彼女は乙女。そんなチーム名なぞいつだって卓膳に並んできたスイーツに比べたら、安っぽい飴ちゃんだ。

ミソラはそういう女の子だ。素晴らしいのだ。

「はい！　私がチームダブルプリティーです！」

銀色のハイテク戦士はミソラを見つけパッと表情を明るくした。探しものを見つけた渋めなオジサンは屈託のない天使のような少年を彷彿させる。

ようやく危機を脱し、ただただミライはホッと胸を撫で下ろした。銀色のオジサンはミソラにどすどすと向かっていく。甲斐甲斐しく大きなオジサンだ。二メートルに迫るその体躯は動く高級冷蔵庫だ。

「おお、こんなにも可愛らしいお嬢さんがチームダブルプリティーでしたか！　まさにプリティーですな！　胸を撃たれましたよっ」

「あはは、それほどでもありますけど。ところでなんのご用件でしょうか？」

「ンン、ゴホン！　いや、失敬」

銀色のオジサンは野太く喉を一つ鳴らしキリリと改まる。キリリとした眉からキリリとした瞳、何もかもがキレている。ただ者ではない雰囲気。彼は相当なキレ者だ。

堪らずミソラも身構える。少しだけ鋭い周波数を銀色のオジサンから感じたのだ。銀色のフォークぐらい鋭かったのだ。

しかしまばたきもしないうちに、ミソラと銀色オジサンとの間にミライがすぐに割って入った。ものすごいスピードだ。その証拠に、彼が移動した後を追って、烈風が巻き起こった。噴水の水が断ち切れる。以前のソウル・レイダーとは比べ物にならなかった。パワーアップというには生温い、圧倒的なまでの力の躍進が見て取れる。

驚いたように銀色オジサンは立派なメタル顎ヒゲを指先で揉んだ。

（凄まじく速いな……。地球人が電波変換に優れた種族というのはどうやら間違いではないらしい）

銀色オジサンはソウル・レイダーを見定めていた。ミライは腰の剣に手を掛けて問いかける。問いかけのようで尋問でもある。拷問に至るかは銀色オジサン次第だ。

「俺がこのチームのリーダーだ。いったい俺達に何の用だ？　貴様の後ろには穏やかじゃない連中がたくさんいるようだが……？」

「まあ、そう睨まないでいただきたい。それにしてもプリティーというチーム名に似合わぬ、とんだ狼ですな。アナタの腰元で銀色の牙が輝いてますぞ？」

銀色の牙がチリチリとさらにその全貌を露わにした。

「俺は冗談が嫌いだ。用がないならさっさと立ち去れ。さもなくば……斬る！」

ミライは剣を握る手にじりじりと力を込める。圧倒的なまでに進化したその力を試したい部分もあるのだろう。キリン・ライトニングにどれだけ近付けたのか知っておきたかったはず。

だが銀色オジサンはそれにも動じず笑い飛ばす。

「ハハハ！　いやいや、私はただ挨拶に来ただけですよ。アナタ達と初戦を交える相手としてね……。ただ争いは好まない性分なのでね。その刃をしまっていただきたい」

流石は銀色でいて、かつオジサンというわけだ。剛胆で痛快だ。それくらいの揺さぶりなどハンモックですやすや眠れるくらいの安心居住空間だろう。オール電化なのだ。

「なんだと……？　初戦の相手」
「おや？　ガイドデータを見てないのですかな？」
「星河、確認してくれ」

首だけ回してロックマンに言いつける。
スバルはすぐにエアディスプレイのガイドデータを開いた。

「えっとね。会場は機械惑星『リギア』……対戦チームは『アンドリュード』だって」
「ふん、なるほどな。貴様らはチーム『アンドリュード』という訳か……。わざわざ挨拶とはご苦労な事だ。良いだろう、俺も挨拶だ。俺はチームオメ――」

ミライも名乗りを上げようとするが、キミドリが邪魔をする。辺りに浮いているクリムゾンノイズを掴み、確かな狙いで投げ付けてくるのだった。
流石にスコープ・スナイパーなだけはある。無駄に正確無比だ。

「こら、リーダー違うでしょ！　ちゃんと登録チーム名を言いなさい！」

バシバシと気持ち良いくらいにクリムゾンノイズが命中している。

ミライはボコボコだ。

「……お、俺はチームオメ――」

「コラー！　リーダー！！」

「くっ……、何なんだアイツは！　クソ、もうダメだ。響、代わってくれ」

いそいそとミライはミソラの後ろに回った。仕方がないのでミライに代わり一歩前へ、高らかとミソラが名乗りを上げる。流石に歌手だ。良い感じに声が通る。

「いい？　銀色のオジサン！　何を隠そう、私たちがチームダブルプリティーだよ！　リーダーはソウル・レイダー！　なんて言ったってサテラポリスのエースなんだからね！　本当はすごく強いんだからね！」

「まて！　サテラポリスのエースは俺だ！！」

「シドウ……。今は、そういうのいいから……」

「そうなのか？　そういうことなのか、ティアっ？」

「……ふう」

とりあえず銀色オジサンも自己紹介だ。

「では、私も」

太い腕を後ろに流し、軍隊へ手をやる。すると後ろの百名以上の隊員が一斉に敬礼した。まるで銀鏡の壁がうねっているようだ。機械のように一々の動作がシンクロしているのである。ただ者ではない。統率されきった軍隊ほど恐ろし物も無い事だ。

「ご覧になられた後ろの部隊がチームアンドリュードこと銀河連邦

アンドロメダ宇宙軍です。言わば宇宙規模の軍隊です。精鋭中の精鋭を選りすぐってますぞ？」

銀色オジサンはサテラポリスのエースを暗に見下していた。ミライは鼻で笑う。

そして銀色オジサンが自分の胸に手を添えて軽く一礼する。物腰は柔らかいが、彼こそが宇宙軍の頭である。打って変わって剛健なのである。

「そして私が、銀河連邦アンドロメダ宇宙軍大佐エメリオル――チームアンドリュードのリーダーです」

エメリオルは自身の圧勝を占うかのように、威光に満ちた笑みでにやりとした。

choswld_28：エクスフレーム

エメリオルの言葉にスバルは目を輝かせた。ウキウキとドキドキが同時にやってきて頭が天国状態だ。

「ぎ、ぎ、ぎ、銀河連邦だって！　なんだよそれ！　すごく……すごく素敵な響きじゃないか！　す、すごい。ＳＦでしか見た事のない人達が目の前に……！

僕は今まさに伝説の瞬間に立ち会っている……！！　これはもしかして夢……！　ほっぺをつねるぞ。あうっ痛い！　これは夢じゃないのか！　だったら何だっていうんだ！　……そうか、これが現実――！！」

どうにもスバルのこういった所が玉に傷であった。しかし彼らしいと言えばそうらしい。

宇宙オタクにとって銀河連邦という響きにロマンを感じてならないようである。ゴン太にとってみれば牛丼のプールで泳ぐくらいのロマンと、格調高い魅惑の匂いを醸し出しているのと同じ。それこそ最高のステータスと言うに値する誉れ高い言の葉なのだ。

銀河連邦という言葉はそういう言葉だ。ただトラッシュとしては、いつもの落ち着いたスバルでいてほしいもの。

『スバル様、落ち着いて下さい。非常に見苦しいです』

ミソラは戦（おのの）いた。相変わらずなスバルだが今回は中々に酷いのだ。

見ていられないほどであった。両手で顔を隠してしまいたいのだった。しかし本当のところはどうだろうか。

「スバル君が壊れたよ……！！　でも、これはこれで……」

『ポロロン……まあ、元々その気はあったけどねえ』

ただミライの方は、シリアスにエメリオルを疑っている。スバルほどおめでたくはなれない。銀河連邦などあり得ないと言いたげに、刺々しい態度でエメリオルを見上げる。辛辣を極めた口調である。

「銀河連邦？　そんな組織、名前すら聞いたこともないな……。絵空事にしか思えないよ」

エメリオルは柔和な物腰でミライを見下ろす。剛健さに加え質実さも見え始めた。

「それはそうでしょう。アナタたち地球人は我々の基準に沿った文明レベルで言えばＤ－程しかありませんから。アナタ達が私たちの存在を知っている事はあり得ないのですよ。

だって太陽系の中をうろつくのがやっとの種族なのでしょう？私たちは宇宙の３％は自由に行き来できますよ？　そして私たちは数千万年も前からアナタたち地球人の存在を知っていました。アナタ達の事は銀河連邦としても高く評価して見守っていたんですよ？

後、数百年たったら我々の銀河連邦に加盟出来ることでしょうね」

頑なな親のようにエメリオルが接するので、ミライは滅裂で仕舞いようのない嫌悪感を抱いた。冷徹に凍りついた精神を溶かすには程良い激情だ。

「何を言っている……そんな昔には人間はいない。何を言ってるん

だお前は？」

「フフフ……、アナタ達は真実を知らないのですよ。この宇宙にはびこる見えない意志。そして無から有を生む知恵の実であるオーパーツ……。その見えない意志に文明の指先をかすめたのは我々だけでしょう。そして気がついたのも我々以外には恐らくいない……。

とにかく、アナタ達は何も知らない。だから見守っていたのですとも」

それが事実だとすると、ミライにとってやはり不快でしかなかった。

「気持ちの悪い連中だ……。そもそも、そんな奴らがノイズウェーブトーナメントに何の用だ？　どうやってトーナメントに潜入した？」

エメリオルはミライの問いの意味が分からなかったようだ。その問いかけに何の意味もなければ、答えた所で何かを得る訳ではない。はて、これはどうしたものかと首を傾げる。

「何を言っています？　それは、アナタ達と同じですよ。宇宙を消滅の危機から救うことです。

そして運営委員会に銀河連邦の力を少しちらつかせれば、トーナメント潜入なんて簡単な事です。銀河連邦が本気を出せばＷＷＲなど恐れるに足りませんからね。奴らなどしょせん野蛮な馬の骨の寄せ集めにすぎませんから」

「ますます気持ちの悪い連中だ……。それほどの科学力と力があるなら、トーナメントに参加しなくてももっと直接的な解決方法があるはずだろう。それこそ地球人に出来ない方法でな」

ミライは銀河連邦の胡散臭さに嫌気が差してきていた。これでは

不明瞭な情報しか吐き出さない裏の住民と何ら変わりはない。ミライにとってそんな存在に成り下がっている。

「確かにそう思われるのはそうでしょう……。ただ、我々とて宇宙の全てを把握している訳ではない……。全ての理を究明した訳ではない。

しかし、調査結果によればＷＷＲが多数所持しているオーパーツを使えば何とか打開策が編み出せそうなのです。どういう訳かＷＷＲは我々でさえ数個しか見つけられなかったオーパーツを山のように所持していますからね。

その為には、ＷＷＲのアジトを見つけ出さなければならないのです。だから……後は言わなくても分かりますね？」

「フン……結局の所、偉そうな事を言ってはいるが俺達と状況は何ら変わりないじゃないか。言っておくが、俺達は負けてやるつもりはないぞ……」

「それはこちらの台詞です。もっともアナタ達も我々とは違った形の圧倒的な力をお持ちなようですが……」

エメリオルは、鋭く研磨された堅強な周波数を感じ取った。そうして恵まれた才能と力を持つミライを羨むのだった。エメリオルの執拗なまでの選別と羨望の眼差しにミライはやはり不快さが募るばかりだ。

「銀河連邦といったか？　よもやと思って周波数を探ってみたが、やはりだ。ずいぶんな口の割りにお前達は大した戦闘能力を持ってはいないようだよ。

戦闘周波数で分かる。誰もかれも、牛島かそこらの力しか持っていないんじゃないのか？」

ゴン太はどぎまぎした。エメリオルはハッとしたように声のトー

ンを上げた。

「そうです。そこです。銀河連邦がアナタ達を高く評価している点がそこなのです！」

ミライは一歩距離をとる。

「どういうことだ？」

「アナタたち地球人は電波変換するにあたってはとても素晴らしい民族です。はっきり言って電波体同士の純粋な肉弾戦では私たちアンドリュード人では及ばないでしょう……」

エメリオルは肩をすくめた。

「だったら、すぐに棄権することだな」

「フフ、ですが銀河連邦には地球人に無い武器があるんですよ。アナタ達が電波人間として類まれな資質を持っているとすれば、私たちには純然たる圧倒的なまでの科学の力がある」

「……フン、それは楽しみだな」

ミライはくるりと回り、スバル達の方に戻った。

「では挨拶はこれで終わりです。次は三日後の機械惑星でお会いしましょう。良い試合になると良いですね」

一つ頭を下げて、エメリオルも軍隊の方へ戻っていく。そしてやってきた時と同じ調子でウラスクエアを後にした。

それから一時間ほど経過した頃。スバル達はノイズウェーブから帰還して、それぞれの場所へ帰っていった。スバル達は思いのほか早く家路に着く事が出来たのだった。

しかしチームアルファとベータ、ガンマはすぐに試合があった為、ノイズウェーブの奥深くへさらに潜入していった。その隊員によれば、宇宙の端にある小惑星が会場らしい。対戦相手はやはり見たこともない、未確認生命物体だそうだ。

ついにノイズウェーブトーナメントが始まりを告げた。スバル達はそこで様々な敵と相対する事になるだろう。

所変わってＷＡＸＡニホン支部。時刻は午後の八時を回った頃だ。ぼやけた白色ライトが大人の空気を作り出す空間で三人分の背中が並んでいた。シーリングファンにクラシック音楽が程良く撹拌（かくはん）されて気持ちのいい落ち着いた雰囲気を演出する。ただ木目調のカウンターにはうまい棒の食べカスが散らばりそれを台無しにしていた。

そう、長官とシドウとミライが職員専用のバーで飲んでいるのだった。もちろんミライは酒を飲まない。ついでにシドウもまだ飲めない。長官だけが良い飲みっぷりだ。

ミライはゆったりと流れるクラシックに耳を傾けていた。シドウはバーでうまい棒を食べている。「これこそ、うまいバー」とご満悦だ。そして、さり気なくうまい棒の一つをミライに渡すと今日の出来事を振り返り始めた。

「で、ミライ。アイツらは本当のところどうなんだよ？　銀河連邦って本当だと思うか？　俺はいまいち信用ならない」

「さあ、それは俺にも分かりません。ただ邪魔する敵は叩き潰すのみです。暁さんも自分の敵の心配をしたらどうですか？」

シドウは不敵に笑っている。確かな自信があるようだ。うまい棒にたくさん囲まれているシドウはほんの少し強気になる。

「スーパーヒーローかつサテラポリスのエースである俺に心配事は無い！　へい、マスターうまい棒、もう一本！」

シドウはカウンター奥のマスターにうまい棒を追加要求する。お髭がナイスなマスターが、ワイングラスで一杯の棚の下を開ける。当たり前のように、そこにはうまい棒がぎっしり詰まっていた。徐々に、このバーがシドウ色に染め上げられていくだろう事がうかがえる。

ミライは、何なんだここは？　と思いながらもシドウに言ってやる。

「暁さん。余り油断はしない方が良いですよ。確かにアナタはサテラポリスのエースだけど、まだ体が完全に治ってません。身長に万全を期すべきです。無茶が出来ないんですから」

シドウはやたら真面目に切り返す。うまい棒さえなければ完璧にシリアスだ。

「お前こそ、無茶しすぎだろ。これでフレーム交換は何回目だ？正直、俺はアレが好きじゃない」

「そうですね。ですが、力を手にするためには仕方がないのです。非人道的だろうと世界が救えれば、それがいいんです……」

「そういうもんか？」

「ええ」

「でも、スバル達にはまだ言ってないんだろう？　本当の事をさ」

「……そうですね。いつかは言わないといけませんね」

ミライは少し悲しそうに表情を曇らせた。普段からあまり表情は明るくないので、本当に僅かな差異だった。長官もミライの事情は知っている。
酒を止めて気遣ってみる。

「なあ、ミライ君よ」
「何ですか、長官？」
「何というか、あんまり気に病むなよ。
まあ、安全な所から命令しか出さないオッサンに言われてもアレだろうが……」
「そんな事は無いですよ。ありがとうございます」
「しかしフレーム交換手術というのは本当に大変なんだな。危険性がないのなら元気な体を私の息子にやってやりたいものだが……」
「……手術自体も大変ですが、問題はその後です。
自分の精神を、このエクスフレームに同調させるのにはかなり骨が折れます。気を抜けば俺が俺じゃなくなる……。特にこのバージョン6はそれが顕著です」

ミライは長官に改めて向き直る。

「アトム君にそんな危険を冒させる必要はないと思います。きっといつか治るはずですから」

長官はグラスを手に取った。氷がグラスを転がり、涼しげな音をたてる。

「まあ、とにかくだ。トーナメント初戦を無事に切り抜けてほしい。君たちチームオメガには期待しているのだからね」

ミライは思い出した様子で苦笑した。クリムゾンノイズをぶつけ

られた頭を押さえる。

「いえ、チームオメガじゃないんですよ」

シドウは腹を押さえてもだえる。

「ハハハ、確かに！　アレは無い！」

「？　どういう事かね？」

長官はひたすらに謎だった。仲間外れみたいで少しだけ寂しかった。なので酒を浴びた。

ｃｈｏｓｗｌｄ―２９：イノセントモンスター

ＷＡＸＡでのささやかな酒宴から丸一日が経った。今宵は二二ＸＸ年五月一五日火曜日。

太陽が没落し、宵闇が一層の盛りを見せ始めた。辺りはいつものように、ゆっくりと暗い色に落ち着いて行く。

そうして徐々に冷めゆくＴＫシティは、摩天楼が天に迫る鋼鉄密林地帯である。そんなビルの谷間を押し分けるようにし、ＷＡＸＡ御用達の総合病院がその巨躯を据えていた。

四角い窓が規則正しく並んだ病院の外壁に、そよそよと春風が撫でる。すると飄々とカーテンが揺れ、その隙間に落陽の帯が差し込んだ。

光が差し込むその病室には幼い少年がいる。上半身だけ起こしたベッドで蹐跼（せぐくま）っている。そうやって備えられたテーブルへ向かい合っているのだ。手には鉛筆を握りこんで何かを綴っているようだ。音読しながら一生懸命である。

「えっと……、ぼくの名前は守丘アトムです。七歳です。ぼくのかぞくはおかーさんとおとーさんとぼくの３人かぞくです」

どうやら作文を書いているようだ。学校の宿題なのだろう。表題は『ぼくのかぞく』といったところだろうか。

ただ間違った鉛筆の握りから繰り出される文字は不格好だ。クラスに一人は居る、不細工で醜悪かつ意地汚くて悪臭を放つ、鈍器でぐちゃぐちゃに殺してやりたいオタク女を彷彿させる。まるで死にかけのミミズがのたうち回って絶命し、夏の道路の端で干からびている光景そのもの。

だが若干七歳の守丘（かみおか）アトム君にそんな事は関係ない。「読めればいいのだ」と、そんな調子で続きを書いていく。

「おとーさんの名前は守丘デン助、おかーさんの名前は守丘チョウ子です。おかーさんはせんぎょー主婦です。おりょうりが上手で、やさしくてぼくはだいすきです。

おとーさんはワクサってところではたらいています。ちょーかんって呼ばれてる一番えらい人です。ぼくはそんなおとーさんをカッコイイと思っています。

でも、さいきんお仕事がいそがしくてお家にあまり帰ってきません。どんなお仕事をしてるのかを聞いても、ぜんぜん教えてくれません。おとーさんは笑っていつもごまかします。

でもおとーさんもやさしいのでぼくはだいすきです。そしてオトーサンは歩けないぼくの事をいつも心配してくれています。一生けん命、ちりょう法を探してくれています。

おとーさんとおかーさんは、いつもぼくの味方です。ときどき、お胸が痛くなって泣きたくなっても、おとーさんとおかーさんがいるから頑張れます。ちゅーしゃだってもうコワくありません。

そしていつか歩けるようになったら、ぼくはクラスのみんなと一緒にかけっこやオニゴッコをして遊びたいです。それがぼくの夢です。おしまい」

アトムは筆を止めた。「やった、完成だ」と言い、突っ伏していた顔を勢い良く上げる。そして座っている付き添いのナースにとびっきりの笑顔をプレゼントした。黄土色の癖っ毛が印象的な少年は、屈託のない笑顔だ。ナースも同じようにして笑顔を返してやる。

そしてアトムが突きだしてきた作文の紙を手にとって、通覧する。

「うん、上手に書けていると思うよ」

「ホントっ？」

「ホントホント。きっと歩けるようになるから、これからも頑張ろうね」

若いナースはまだ幼さの残る、あどけない顔を柔らかく綻ばす。
アトムは大きく頷いた。

「うん！」

そしてアトムは一仕事終えたという感じで伸びをする。ベッドに体を沈めて横になった。

そんなアトムのベッドの傍らには、一台の車いすが置かれている。それは年季が入っていて、長年連れ添った相棒であると分かる。フレームの塗料は所々禿げており、タイヤの溝はすり減ってつるつるだ。くたびれたお守りが背もたれの所でぶら下がっている。それらは、この車いすがいつだってアトムと共にいた証拠なのだった。

ナースは花瓶の水を入れ変えつつ、アトムにぽつりと言う。

「この車いす、もうボロボロ……。買い替え時かもね」
「ダメだよ。まだまだ乗れるよ！」

アトムはこの車いすに並々ならぬ思い入れがあるようだ。血相を変えて飛び起き、車いすを自分の方に寄せる。

「でも、これ以上乗ると、今度はアトム君が怪我しちゃうかもしれないでしょ？　その車いすもそんな事にはなってほしくないと思ってると思うな」
「でも……、この子を捨てるなんて僕にはできないよう」

ナースは悩める少女のように、小脇に腕を抱え眉をひそめる。

「うーん、困ったなあ」

コンコン……。

すると個室のドアが鳴った。すりガラスには人影が映っている。しかし面会時間はちょうど過ぎたころだ。ナースは脈絡のない客人に今度は強く不審に思った。

コンコン。

指の骨でドアを叩く音だ。二人しかいない静かな個室によく響く。ナースは三脚椅子から立ち上がり、ドアの方に向かう。

「おかしいな。今日の面会時間は終わったはずなのに……」

ドアを開けると見慣れた女性が立っていた。アトムの母親だ。艶やかな黒髪がちょうど肩に掛かるか掛からないかの所で切り揃えられている。ルビーの鉱物らしいネックレスが首元を彩っていた。

「あっ、お母様でしたか。でも、どうしたんですか？　もう、面会時間は終わってますよ」

「……」

チョウ子は無言で、つかつかと踵の高い靴で床を叩き、アトムに歩んでいく。アトムのベッドの周りには仕切りのカーテンが張っていた。窓から吹き込む風に揺られている。

太陽がもうそろそろ沈み、空は藍色がほとんどになっている。僅かに地平線の縁が赤いばかりなだけである。そろそろビル群の明かりが目立ち始めた。

「あの、用事なら私に申しつけてくだされば結構ですよ？」

ナースがチョウ子の肩を二三叩いた。チョウ子はナースに振り返る。チョウ子は何を語る訳でもなく、愛敬のあるナースの顔をまじまじと見つめている。どうにもおかしい。

「どうしました？」

にっこりと首を傾げるナース。

「こうしました……」

不意にチョウ子が、ナースの胸をとんと押す。最初はナースの胸の脂肪に指を埋めるだけだったが、力が乗るとナースは豆鉄砲のように吹きとばされた。成す術もなく、悲鳴さえ上げる事も叶わず、先程の出入り口の扉に激突する。当然そのままガラスを突き破り、向かいのナースステーションにゴールインだ。

確かにチョウ子の馬鹿力には目を見張るものがある。だが、どうにも感心できない。なぜならば、破壊されたガラス片には血肉が引っかかっており、ナースの絶命をありありと示していたからだ。もちろん向かいのナースステーションには婦長を始めとした死体が所狭しと転がっている。仲良く手を取り合って永眠している死体も確認できる。

さらに廊下には、道しるべとして致死量相当の血だまりが続いている。新鮮な血が作るレッドカーペットの床には、ハリウッドの女優や男優が闊歩するでもなく、複数体の死体がぐったりと冷たくなって転がっていただけだ。

その中にアトムの母、チョウ子の姿もしっかりとある。どうやら既に死んでいるようだ。はだけた首元から垂れる真っ赤なルビーのネックレスは、より一層の血色を帯びて血だまりに浮いていた。

そうなると一つ気がかりな事がある。それは、あのナースの輝か

しい将来に、華麗かつ手際よく引導を渡したこのチョウ子が、ただのチョウ子ではないという事だ。恐らくこのチョウ子は危険な存在だろう。

そんな危険人物の前にアトムが現れた。大きな物音が気にならないわけがない。車いすに乗ったアトムが偽チョウ子の前にぬけぬけと姿を見せたのだ。何も知らないが故に偽チョウ子に事情を聞く。

「おかーさん。さっきのおねーちゃんは?」

偽チョウ子は後ろを指差した。割れた窓ガラスの向こうから、血飛沫が大体にあしらわれた芸術的な壁が覗いている。

アトムは車いすを転がして、現場へ向かう。まだアトムは事の事態を把握していない。せいぜい「窓ガラスが割れているなあ」ぐらいの認識だった。偽チョウ子の脇を抜け、冒険の始まりだ。

「うわあっ！　何だこれ!!」

アトムは悲鳴を上げた。廊下に転がる本物のチョウ子を見つけてしまったのだ。その声を聞くと、偽チョウ子はじくじくと湿り気たっぷりの笑みを零した。なんと男の声で喋るのだ。

「そうだ……。その周波数を待っていたんだ。無邪気な子供故の純粋さを一気に覆う、どす黒く粘っこい絶望。

そうやってお前の幼さ、純真さを汚した時、俺はお前という存在を手に入れる事が出来る……。俺はずっと待っていたウラトーナメントが始まるこの時まで」

偽チョウ子はアトムの元に足早に向かっていった。

廊下に出ると、大粒の涙を零しているアトムの姿があった。母親の持っている手提げにはアトムの為に持ってきたのであろう着替え

が詰まっていた。しかし、血で真っ赤に染め上がってしまっている。もう使い物にならないだろう。アトムはそれを、しわくちゃにして抱えていた。

「おかーさんは僕の為に着替えを持ってきてくれてたんだね……。でも真っ赤になっちゃってる……。びしょびしょだよ」

そしてアトムは手ぶらの偽チョウ子に向き直る。

「ねえ、君はおかーさんじゃないんでしょ？　元に戻してよ。こんな悪戯しても誰も喜ばないよ」

つまらない事をいう悪ガキに偽チョウ子はお仕置きを決め込む。とりあえず床に広がる血だまりを蹴りあげた。つま先ですくわれた数滴の血がアトムの頬を引っ掻いた。

「うわっ」

そして女性らしからぬ低い声が、偽チョウ子の紅を差した口から発せられる。獣の放つ音に近い。

「もうそいつらは元には戻らんぜ？　お前は俺の相棒になるんだ」

「え……？　何を言ってるの」

「俺は突然変異の化け物で鯨座のＡＭ星人のミラ。当たり前だがお前に決定権はまったく無い」

ｃｈｏｓｗｌｄ―３０：ブライｖｓウルフ・フォレスト

ＴＫシティ総合病院での悲劇と同刻。場所は宇宙末端で、惑星パトラ以上の終末極宇宙。至る所で若い星々が煌煌と瞬いている。そこはトーナメント初戦が繰り広げられている場所である。

その星雲の中の一つの小惑星。切り立った岩場に二体の人影が見える。一体のアストラル・ホープと地球外電波生命体が相対しているのだ。アストラル・ホープは左肩のアーマーが砕けていた。痛々しくもあるが、幸い致命傷は負っていないようだ。

しかしもう一方の電波体は、片腕が消し飛んでおり、頭蓋が割れてその中から濃霧のごとく電波情報が漏れ出ている。これは間違いなく致命傷だ。

その予想は正しかったようで、電波体は限界まで痩せこけた積み木のように倒れて消滅した。綺麗な命の滴が宇宙の空へ昇って混ざる。

「はあ……はあ、俺の勝ちだ……。アメロッパ軍人魂を舐めるなよ」

アストラル・ホープは口から垂れる血を手で拭う。周りにいたチームアルファの隊員達は歓喜した。

審判の電波体がチームアルファの勝利を告げる。アストラル・ホープの方へ手を差し出すのだ。

「勝者、アストラル・ホープ！　二回戦進出チームはチームアルファ」

「よっしゃあ！　へへ、この調子だと俺達が二回戦に一番乗りだな。ロックマンやソウル・レイダーがいなくたって、俺達がいれば楽勝だぜ！」

アストラル・ホープは息巻いた様子でチームの方へ帰っていく。チーム員も勇敢なこの勝者を労う。

「よく１０時間以上を戦い抜いたな！」
「ひやひやさせやがって……」
「先輩カッコよかったですう！」
「惚れました！」

大盛り上がりだ。しかし、いい加減鬱陶しいので審判の電波体がチームアルファに言ってやるのだった。もちろんその内容は次の試合会場についてだ。

「おめでとうございます。では次の会場をお伝えします。場所はノイズウェーブ第四階層であるアンバーウェーブ、ウラスクエアコロシアムです。詳しくはガイドデータを参考にしてください。
では、私はお先に失礼します」

審判は傍にあった空間の歪みである、ノイズウェーブの入り口に向かっていく。
そして、ノイズウェーブの中に入る前に一度だけ立ち止まる。そしてチームアルファに向かって一言だけ忠告した。

「アナタ達も急いだ方が良いですよ。早く帰りのノイズウェーブの所まで向かうことです。そうしないと……、二度と帰れなくなりますからね。ここは、……そういう場所です」

意味深に言いつけ、審判はノイズウェーブへと姿を消した。

アストラル・ホープの一人が首を傾げてみるが、気にしても仕方がない。

「まあ、よく分からんが、俺達も帰るか」

「そうだな」

チームアルファも地球へと続くノイズウェーブの入り口に向かい始めた。審判の入った入口とは別で、少し遠い所にある。

しかし、ここのウェーブロードは劣悪で使い物にならない。なので弱い重力と、崩れやすい岩場に注意しながら徒歩で進んでいく。

しばらく歩けば、僅かな空気の震えから気味悪く呻き声をあげている崖が現れた。ひたすら深い溝だ。覗けば、崖の底には氷の結晶が剣山のようになっている。見る分には美しいが、落ちたら命は無い。

ちょうどこの場所で目的まで半分のところだ。

「なんかさっきから、おかしくない？」

不意に、女のアストラル・ホープが口を開いた。面持ち悪く、間の前に広がる宇宙空間を見やっていた。

「そうかあ？」

「なんか、景色が妙にぼやけてきてる気が……」

「まあ、へんぴな宇宙だから、何が起きても驚きはしないさ」

女は頷いた。

「……そうね。じゃ、急ぎましょうか」

だが、チームアルファの消息はこれを最後に断たれた。もうＷＡＸＡからの呼び掛けは通じない。

二度と地球には帰ってこれないのだ。

さっき女が気がついたのは宇宙の壁だった。空間と特異面の隔たりが、宇宙の外と中の関係性を不安定にしていたためにぼやけたように見えたのだ。つまり、宇宙の外が近づいていたがために感じた視覚的な違和感である。

しかし、出来事は一瞬だ。外の世界に、光の速度以上で飲み込まれたのだから、恐怖や苦痛を感じるまでもなかっただろう。何が起きたのかさえ分からない。そして、飲み込まれた彼らがどうなったのかさえ分からない。

そうやって数多の命を呑みこみつつ、宇宙は閉じていくのだ。

そして、同じくトーナメント初戦を迎えているチームがあった。それはチームガンマだ。場所はノイズウェーブ第一階層の、ウラスクエア闘技場。辺りは野蛮な観客達による、怒号に近い歓声が飛び交っていた。

そして対戦相手は、なんとチームではなく個人だった。いつかの受付が言うところの、一人で戦える自信を持っている輩である。

ウルフ・フォレストはその輩に一方的にやられていた。相手は漆黒の電波人間だ。バイザーは紅い紫色。鋭い瞳。そう、彼はブライだ。

ブライは、より鋭く攻撃的になった全身刃物のラプラスブレード

で、ウルフ・フォレストを指し示す。ウルフ・フォレストは自慢の爪も牙もことごとく折られていた。

「さっさと負けを認めろ……。これ以上やっても時間の無駄だ」

白髪の少年は冷たく言い捨てた。彼なりの温情だろうか。

「クソ……。こんなガキに……」

ウルフ・フォレストは立っているのも限界で、とうとう方ひざを突いた。狼のように充血しきった眼球は、悔しそうにブライを睨んでいた。敗者の情けない眼差しに、強者であるブライはまったくもって興味が沸かない。

「ガキ……か。

なら、なぜお前はそんな人間の前に情けなく屈している？

笑わせるなよ。俺には覚悟がある。俺の存在理由を示す故郷の遺産……。それを、奴等から奪い返さなければならないという使命がある」

ブライの覚悟は本物だ。冷たくも、確かな意志がその赤い瞳には宿っていた。冷たすぎる物は、逆に灼熱のように熱く感じさせる事があるのだ。

「そして俺の覚悟が、お前の覚悟を上回っていただけの事だ。だから今は、勝者である俺の言葉が正しい。分かるだろ……？　大人しく負けを認めておけ」

だが、ウルフ・フォレストは立ち上がる。まだ勝負を諦めていないようだ。尾上十郎という男は、最後の最後まで諦める事がない。

そもそも、そんな考えが浮かぶ事さえない。

「勝手に、勝負が終わったように語るんじゃねえ。俺はまだまだ戦えるぜ……！」

「減らず口を……」

ブライは、退屈な勝負を終わらせようとする。戦利品として新しく手に入れた力をほんの少し開放するのであった。

「まったく馬鹿な奴だ。今まで手加減してやったというのに……。手に入れたオーパーツ達を使って止めを刺してやる……！」

ブライは語尾を強めて言い切った。するとブライの周りに、閃光が飛び散る。弾けた光が集まり、オーパーツを形作る。どうやら今回は数が多い。それだけブライも強くなったということだろう。

「さあ、出て来い。ベルセルクプレート、フウマシュリケン、ダイノヘッド、エアトライデントよ！」

すると四つのオーパーツがブライの周りに召喚された。ふらふらとブライの周りを飛び回っている。一見ただの石の作り物だが、人魂のように燃えている。

ウルフ・フォレストは何とか立ってはいるが、ブライとオーパーツが放つ圧倒的な周波数に目が回っていた。ブライは口角を僅かに吊り上げた。

「お前にオーパーツの本当の使い方を見せてやろう。ロックマンに真似できない、ムー人である俺だけが可能な真の力の解放だ……！」

すると飛び回るオーパーツがブライの中に吸収された。ブライの

体が脈打つかのように一定の規則で輝き始める。
そしてブライが徐々に変貌し始めた。ウルフ・フォレストは近づく事さえ敵わない。本能で危険から遠ざかろうとしている。

「……これが、同じ電波人間」

ウルフ・フォレストは、思わず閉口した。そして、装い新たに真のムー人としてのブライが現れた。

「この形態が『ブライ・オリジン』だ。いくらお前でも流石に気がついただろう？　圧倒的な力の差をな」

そのブライは、特徴であるシンプルさはそのままだ。ただ防具にはムー文字が刻まれてオーパーツの意匠が見られる。そしてソロの時にあった目のタトゥーが、ブライ時であるにもかかわらず現れていた。
一番特徴的なのが、右手の暗黒闘気から延びる儀礼用の宝物剣だ。ラプラスブレードとは対照的であるしなやかな刀身が美しい。やはり刀身にもムー文字が刻まれている。

「確かに圧倒的だ。だが、それでも俺は負けるわけにはいかねえんだ！」

ウルフ・フォレストは右腕に力を込めた。折れた爪が生え代わり、立派なものが出来上がる。それを素早く横に薙ぎ払う。真空の衝撃波がブライに向かって、勢いよく飛ぶ。

「俺の渾身のワイドクローだ！」
「ふん……」

ブライは指を弾いた。するとウルフ・フォレストと同じように真空の衝撃波が飛び出す。些細な動作から生まれた物だが、皮肉にも威力はウルフ・フォレストの数倍はある。
ウルフ・フォレストは潔く笑い捨てた。

「ち……、完敗だな」

ウルフ・フォレストは一瞬にして、闘技場の外壁まで吹きとばされた。もうもうと土煙が立ち込める。これは無事では済まない。
砕けた外壁の瓦礫の中で、予想通りウルフ・フォレストは力なく頭を垂れていた。意識を失ったのだ。
ウルフ・フォレストの様子を確認した審判はブライの方に手をやる。

「勝者、ブライ！」

そして、チームベータの方だ。こちらの方はすぐに勝負が着いた様子。審判が銀色の戦士に手を向けていた。

「勝者、チームメトロス！」

銀色の戦士はコロシアムの大歓声の中、手を広げて歓声を一身に受ける。
しかし、この銀色の戦士の格好はどこかで見た事がある。そう、エメリオルの物だ。どうやらこれは銀河連邦の制服のようである。
しかし地球人側にとってはこの状況は思わしくない。チームベー

タは、彼らに成す術もなくやられたのだ。まず、相手が悪かった。事実、銀河連邦は強い。アストラル・ホープを一切寄せ付けない戦いを、終始展開し勝利を収めた。

しかしアストラル・ホープも地球で名の通った軍人が電波変換している訳だ。戦闘のプロフェッショナルである。だが、結果は明快だ。銀河連邦の方が上だと告げていた。

「フフン。地球人の電波人間だから、どんなものかと思ったけど。……全然大した事ないね。力押しじゃ、僕たちにはまず勝てないよ。この程度なら、同じ地球人と戦うエメリオル様達の心配もいらないね」

銀色の戦士はくつくつと笑っていた。

ｃｈｏｓｗｌｄ―３１：繋がりと孤独

チームオメガことダブルプリティーの初戦が目の前に迫っていた二二ＸＸ年五月十六日火曜日。

またもや学校を早退させられたスバル達が、ＷＡＸＡに集まっていたのだった。

もちろん昼間からフジ登山という訳ではない。明日の試合に向けての練習なのである。ＷＡＸＡの訓練施設で、ソウル・レイダーがゴン太達を鍛え上げていたのだ。

それは昨日の三チームの悲惨なる結果を知ればこその対応だった。そこでソウル・レイダーは、ゴン太達に模擬戦闘をさせるに至った。ゴン太はキミドリと、ミソラは夜太郎とだ。

二組に分かれて、殺風景なドームの中で汗を流す。

しかしそこは、ただ広いだけの場所ではない。シンクロ率を保ち易いように、辺りには補助電波が漂っている。キラキラと舞っている粉雪のようなものだ。訓練の効率を考慮した配慮だ。

とことん出来る限り、最後まで足掻こうという魂胆であった。それほどに昨日の結果は重い事実。

肝心なロックマンはというと、ソウル・レイダーと一緒になって訓練の監督をしていた。戦闘力に不安の残るミソラ達に戦いのイロハを教えてやる。ソウル・レイダーがゴン太組、ロックマンがミソラ組を担当という訳だ。

「私、もーダメになっちゃう」

「俺もだぜー」

キミドリことスコープ・スナイパーと、オックス・ファイアはもう音を上げた。スコープ・スナイパーは舌を犬のように出し、四つん這いになって乱れた息を整える。オックス・ファイアの自慢の炎も鎮火していた。

しかしソウル・レイダーは厳しく接する。トーナメントのルール上甘やかす訳にはいかない。二人の前に歩み寄り、手に持った剣で床を叩く。無論、鞘から剣は抜いていない。

「立て。これぐらいでへばるな」

スコープ・スナイパーはムスッとしてソウル・レイダーを見上げる。不満が満載だ。

「まあまあ、リーダー。女の子の扱い方が荒いって。いまさら、こんなことしたって……」

「試合は明日なんだぞ？　それにお前も昨日の結果を聞いただろう？　正直俺は焦っているんだ」

ソウル・レイダーは剣を杖のように突いて物憂げに俯いた。

「それはそうだけど……さ。でも、あのごついサイボーグオジサンも言ってたじゃん。私たちの方が強いって！　ね？」

スコープ・スナイパーはにっこりとしていた。喜色満面で気色悪い。ソウル・レイダーは呆れた。

「お前、バカだろう？」

「何をう！」

「ふう……、チームベータはその銀河連邦に負けたんだよ。油断はできない」

スコープ・スナイパーは両掌を合わせて天を仰ぐ。都合よく神頼みだ。

「だったら、もう私が試合に選ばれないように願おう！」

「おい……、俺と星河ばかりが選ばれる訳ないだろ……」

スコープ・スナイパーは、もう完全にその気だ。選ばれたらトンズラをかますその気だ。

「ね、ゴリラ君もそう思うでしょ？」

「ウホッ、そうだな！　って、俺はゴン太だ！！　百歩譲って、牛だとしてもゴリラなんかじゃない！」

『ブロロ。俺はナチュラルに牛だぜ！』

ソウル・レイダーは額に手を押しあてて、やれやれと首を振った。

「頼むから、ちゃんとしてくれ」

一方、ロックマン組の方。ハープ・ノートと夜太郎ことジャミンガーは真面目に戦っていた。確認の意味を込めて、動きを互いに探り合い戦っている。ロックマンも、ハープ・ノート達の動きを注視している。するとジャミンガーのバルカン攻撃を、ハープノートがバトルカードのソードを用いて防いだ。ハープ・ノートは一瞬だけ体勢を崩す。

そこにロックマンは気が付いた事があったようで、口を挟んだ。すると二人は戦闘を打ち切りロックマンへ向き直る。

「あのさ、ちょっといいかな」
「何でしょうか？　ロックマン先生」

ハープノートは背筋をぴんと伸ばし、ロックマンに教えを請う。ハープ・ノートの中ではそういう設定らしい。体も温まった様子でほんのり息を切らしながら、頬を赤くしていた。

「あの……ミソラちゃん。その呼び方はやめてよ」
「いえいえ！　さあ、続けてください」
「……まあ、いいか。
あのね、ミソラちゃん」

ロックマンは左手をソードに変えた。そしてジャミンガーに言う。

「夜太郎さん。僕に向かってバルカンを撃ってください」
「はい。分かりました」

ジャミンガーは素直にロックマンへと攻撃を加える。弾幕がロックマンを覆う。しかし、ロックマンは華麗に攻撃をいなしていた。ハープ・ノートのように体勢を崩すことはない。

「わあ、スゴイ」
「夜太郎さん、もういいですよ」

ロックマンはハープ・ノートに「どう？」と言いたげに小首を傾げてみせる。

「ミソラちゃんと、僕の違いに気が付いた？」
「うん。スバル君は全然体勢を崩さなかった……」

「何でかわかるかな？」
「えっと……。スバル君の方が強い……から？」
恐る恐る上目づかいで答えてくるハープ・ノートに、ロックマンは苦笑した。
「はは……。それじゃ、元も子もないじゃないか。
……えっとね。まずミソラちゃんは、弾をソードの面で垂直に受けているんだよ。だから反動が、直接体に乗ってしまうんだ。
僕みたいにソードの面を少し斜めにして、弾く方が良いと思うよ。衝撃が少なく済んで、まず体勢は崩さないから。体勢が崩れると戦闘を有利に運べないからね。
些細な事だけど、こういう所を大事にしたいよね？」
ミソラはパッと表情を明るくした。
「流石に頼りになるねスバル君は！　いつもと大違いだよ」
「それは、いつもは頼りにならないモヤシだと思ってるってこと？
ミソラちゃん……、僕をそんな目で見てたんだね」
「ちょっと、スバル君！　被害妄想激しすぎ」
少しブルーなスバルだった。しかしジャミンガーは、うんうんと感心している。
「しかし、スバルさんは教えるのがお上手ですね。ミライさんでさえ、苦戦している様子なのにスゴイです」
ジャミンガーはそう言って、オックス・ファイアとスコープ・スナイパーが不貞寝している様を見つめていた。ロックマンはソウル・レイダーがただただ気の毒だった。

「あの二人にものを教えるのは、僕でも勘弁願いたいですよね……ハハハ」

一通り笑うと、思いなおったように、改めてジャミンガーに目をやった。

「どうしました？」

「僕、思ったんです。

昨日の事を聞くと、僕もちゃんとしなきゃ……って。ブライがまさか出場してるなんて思わなかったし、何より敵は強大ですからね……」

ジャミンガーは、物思いにふけるロックマンのその表情を見つめる。

「そうですね」

ジャミンガーはふと続けた。

「あの、一つよろしいですか。ブライって方は一体何者なのでしょうか？」

「ブライが何者ですか……」

ロックマンはいったん目線を思考に泳がさせ、言葉を選ぶ。彼にとってブライの存在は、自分自身でも明確に分かっていないのだろう。

「そう……ですね。言葉にすると正しいのか分かりませんが、僕自身を映し出し顧みさせる存在でしょうか。僕でもよく分かりません

けど。

……でも、なぜか放っておけないんです」

「そうですか。スバルさんはブライさんと分かり合いたいのですね」

ロックマンはくすりと笑った。

「そうかも知れません。僕はブライと分かり合いたいのかもしれませんね」

笑ってはいるが、ロックマンは気が付いていた。ブライと分かり合うことなど現実にはほぼ不可能だと。どちらかの信念を挫かない限り、二人は決して交わらないと気が付いていた。

繋がりと孤独は、いつまでたっても決して交わらない平行線だ。

そして、ブライの信念を挫くことなどスバルには到底できない事なのだ。スバルもブライの気持ちがよく分かるから。

choswld：ティアマット

数時間が経過した頃。訓練の途中だったが、そこに長官が入ってきた。そう、守丘デン助だ。

ドームに靴の音を反響させながら、まっすぐソウル・レイダーの方へ歩み寄ってくる。

「やあ、ミライ君。調子はどうかね？」

ソウル・レイダーはばつが悪そうに肩を落とした。

「まあ、戦闘経験不足な六角キミドリと、電波変換がまだまだおぼつかない牛島ゴン太に、俺の教えられる事は出来るだけたたき込みましたが……」

「ダメなのかね？」

「敵の前情報を参照すると、雲行きは良くないですね。特に六角キミドリの方が……。しかし当日の対戦カードを見るまでは、何とも言えません」

「そうか……。だが、諦める訳にはいかない。本部のリフレイン博士だって、君たちの活躍を期待しているのだからな」

デン助は思わしくない顔色を隠すようにくるりと反転した。普段より小さく見える背中が、とぼとぼとＷＡＸＡ本棟の方へ消えていった。

スコープ・スナイパーはソウル・レイダーに耳打ちをする。

「ねえ。長官さん顔色悪くなかった？　そんなに私が信じられないっていうのー？　もう、イヤんなっちゃうわ」

ミライは病院での出来事を知らされていた。デン助は妻を何者かに殺傷され、息子が突然として姿を消したのだ。

だがミライは、キミドリ達には黙っておいた。士気にかかわるし、任務に関係ないところで蹲く訳にはいかないのだから。

「……まあ、そうだろうな。だが、お前もよく頑張ったよ。最初の方はふざけていたがな」

「むむ！　最初の方は、アレよ。アレ！　みんながちょこっと落ち込んでたからさ。場の雰囲気を和ませようかと思って……さ」

「……そうか、それはご苦労」

鼻で笑った。

「アッ！　ムカつくー。私の方が歳上なんだぞー。おねいさんをバカにしちゃダメだからね！」

訓練を終えたので、ミライは長官室に赴く。長官室はＷＡＸＡ本棟の最上階に位置する。一番奥の廊下で大仰に設置されているのがそれだ。嗜好に凝らしたデザインの扉だ。

ミライは重々しいその扉の前に立つ。おもむろにカードリーダーにカードキーをかますと中に入った。

本棚がたくさんある部屋だ。奥に観賞用の水槽があり、綺麗な魚

が泳いでいる。その隣に重量感のある幅広い机があった。その上には書類が所狭しと積まれている。そこにデン助は肘をつき、組み合った手を額に当て考え事をしていた。

やっと、ミライに気が付いたようだ。

「おや、ミライ君か」
「長官、報告に参りました」
「御苦労。しかし、さっきは邪魔して悪かったね」
「いえ……。それより、今回の訓練でチーム員の平均シンクロ率が5%上昇しました」
「それは、喜んでいい数字かい？」
「さあ、どうでしょうか。明日の試合に勝てば喜べばいいし、負ければ悲しむ。……そんな数値でしょうか」
「なるほど……」

手持ち無沙汰にデン助は水槽の中に餌を少量だけ放る。魚がパクパクと口を広げ水面に顔を出す。デン助はその様子を眺めていた。そしてそのままの調子でミライに話しかける。

「いよいよ明日か」
「そうですね。俺達の運命を占う大事な一戦です」
「そうだな」

長官はふと思い出したように、書類の一部を取り出した。それに目を落とす。

「……あと昨日は言ってなかったんだが、チームアルファの事についてだ」
「と言いますと？」

「彼らは昨日……勝利していたそうだ。記録班に送られた最後の音声データがそうだったらしい……。
『俺達は勝ったぜ。ロックマン達も、早く俺達に追いつきな。一緒に宇宙を救おうぜ』と言っていたそうだ」

皮肉にも彼らはその宇宙に呑み込まれたのであった。ミライは小さく頷いた。

「そうだったのですか……。そう思うと、余計に彼らの冥福を祈らずにはいられませんね。俺達が彼らの分まで戦ってきます」
「そうだな……。チームアルファだけじゃなく、チームベータとガンマの分まで頼む」
「ええ」
「頼んだぞ。……では、もう行っていい」

ミライは立ち去ろうとするが、ふと立ち止まった。

「長官。ひとつよろしいでしょうか？」
「なにかね？」
「五陽田さんが、昨日発生した病院での事件についての調査結果を報告してくれました。長官もご存知ですよね？」
「ああ……」
「病院内にいた職員、患者含めて全ての人が惨殺されるという、極めて凄惨な事件です」
「ああ……そうだな」

デン助は目を瞑り、やりきれない表情を浮かべている。ミライは続けた。

「しかし、そこにアトム君の姿は見当たらなかった……。アトム君

はその場から、消えてしまったかのようにいなくなっていた」
「……アトムは歩けない。自分でどこかに行くという事は無いはずだ」
「そうです。それの裏付けかのように五陽田さんは、病院内で電波体特有のZ波を検出したそうです。つまり……」
「……やめてくれないか。私は宇宙の命運を救うために動かなければならないんだ。私情で命令する訳にはいかない」

デン助は狭間で揺れていた。

「いいのですか、長官？　俺達に捜索命令を出さなくても。アトム君は誘拐された可能性が極めて高いです。そして、生きている可能性だって……」

デン助は頬を引くつかせ笑おうとし、しきりに弱々しく頷く。何かを自分に言い聞かせて納得させようとしているようだ。

「ミライ君、ありがとう。君の気持ちは嬉しいが、人類の存亡がかかっているんだ。
任務に集中してくれ。今は我々に出来る事をしなくちゃいけない……」
「そうですか……。出過ぎた真似をして、すみませんでした」

少しだけ落胆の気配をみせ、ミライは長官室を後にした。

同刻。場所はノイズウェーブの第七階層セピアウェーブ。そこで本当の意味で異常なまでの怪物（ティアマト）が凄まじい力を奮っていた。類を見

ない勢いで、一人の電波人間がノイズウェーブの裏世界を席巻していたのである。
　既に第一トーナメントの最終戦を終えていたのだ。その電波人間に、審判は勝利を告げる。

「しょ、勝者！　ミラ・イノセント……！！」

　対戦相手であったはずの電波体は、無残にも引き裂かれミラ・イノセントの前でもの悲しい亡骸となっていた。
　ミラ・イノセントの容姿は化け物のまさにそれだ。獅子のような巨大な頭部。腫れあがった大きな口から不格好な赤ん坊の顔が覗く。赤ん坊の目玉は、びっしりと格子状に敷き詰められた複眼の様相を取っている。鬣の代わりにメディーサよろしく蛇がうねっている。
　カモノハシのような立派なひれが着いた腕がわらわらとサンショウウオのような胴体から生えていた。背中からはニワトリの羽が生えている。尻尾は雄々しく巨大なクジラの物だ。、巨大な頭部に似合わず、足は短くて華奢な子供のようだ。しかし、しっかりとその二本の足で立っている。これがアトムの夢であり、力であり、そしてミラ・イノセントを形作る純粋で無邪気な魂の根源だ。
　アトムのひたすらで無垢な思いが、ミラ・イノセントを強くあり続けさせる。

「グシュルル！　俺は最強だ……ぜ。このガキの周波数は俺にぴったり……だ。子供の夢は際限なく俺に力をくれる。その夢が純粋なものである程に……！」

　怪しくうごめくミラ・イノセントだ。恐る恐る審判が、そんな化け物ミラに次の対戦相手を告げる。

「あの……申し訳ないのですが、二次トーナメント進出には、ＷＷ

Ｒの戦士を倒してもらわないとなりません」
「グジュルルル。いい……ぜ。俺はどんな奴にも負けやしないからな」
するとミラ・イノセントの前に一人のＷＷＲの戦士がノイズの穴から現れた。戦闘周波数で言えば、ミラ・イノセントより少し強い。だが、ミラ・イノセントは特別だ。
ＷＷＲの戦士は悲しそうに、ミラ・イノセントを見つめる。
「哀れな奴だ。化け物になり果ててしまったか……」

ex：次元魔像

何時間が経ったのだろうか？　いや、それは分からない事だ。ただ倒壊したエリアパークの施設が、星明かりに優しく照らされているだけだ。しかし状況は優しくは無い。

スバル達がいた部屋は瓦礫だらけになっていた。すると瓦礫の中から、一人の少年がむくりと体を起こした。気だるそうに、うなだれている。ツンツン頭の少年だ。

「つっ……」

スバルはブライに付けられた傷を撫でた。ぱっくりと一文字に割れた大きな傷。あかねに貼ってもらったガーゼは無くなり、生傷が晒されている。血が止まっている所を見ると、ブライとロックマンの勝負から、それなりの時間は経っているはずだ。

ただ不幸中の幸いか。それ以外には目立った傷は無い。せいぜいかすり傷がちらほら見られる程度。

とにかくスバルはのしかかっている瓦礫をどかす。重い鉄骨のアスファルトだ。流石のリアルウェーブだ。重さまで本物のアスファルトだった。

そしてスバルは「何が起きた？」と緊張した面持ちで辺りを見渡す。そんなスバルの額には冷や汗が噴き出していた。スバルは一つ汗を拭う。　そして、状況整理だ。

「何が起きたんだ……。空が光ったと思ったら……」

状況を理解できていない様子。とりあえずスバルは立ち上がり、付着した埃を払った。一張羅の袴は景気良く煙をもうもうと立ち上らせる。

「ごほ……ごほ」

スバルがむせていると、瓦礫の中から声が聞こえた。覆い塞がれてこもった声だ。スバルに呼び掛けているように聞こえてくる。

『おーい。スバル、俺はここだ。早くここから出してくれ』

「ん……。この声は？」

スバルは声のする方に向かう。当然、足場が悪く瓦礫が音を立てて崩れるが気にせずスバルは進んだ。

『俺はここだ。瓦礫をどけてくれ。自力じゃ出られない』

スバルは瓦礫をどかそうとしてみる。しかし中々重い。スバルでは持ち上げる事が出来ない。無理に頑張れば肩から腕が抜けてしまいそうだった。

しかし、そこにスバルのハンターから助っ人の参上だ。ウォーロックがウィザード・オンしてきたのだ。ひょいと瓦礫を持ち上げて、乱暴に廊下の方に投げ捨てる。

「あっ。ロック」

「へへ。なんか知らねえが大変な事になっちまったな。とんでもねえ爆風でハンターがいかれちまって外に出れなくなっちまってたが、ちょうど今直ったみてえだな」

ウォーロックはそう言いつつ作業を繰り返す。そうすると、すぐに瓦礫の下の人物を助け出す事に成功した。
群青色の髪の青年はゆっくりと立ち上がった。青年はとりあえず、うまい棒を取り出し食べ始める。

「埋もれてたのは、暁さんだったんですね」
「ああ、とんだ災難だったよ。ＷＡＸＡにはリアルウェーブの改善案を出しとかないといけないな。
……しかし、状況は良くないぞ？」
「そうですね。新年会が終わったと思ったら……。いきなり空が光って……」

スバルは並々ならぬ事態の深刻さを実感してきている様子。そこにウォーロックが、乱暴に瓦礫を除去しながらスバルに言ってやる。

「おい、スバルとシドウ。詮索は後にして、さっさと瓦礫をどけちまおーぜ。委員長やミソラ達が埋まってるかもしんねえからな」

スバルはハッとしたように、ウォーロックの元に駆け寄る。救出作業に移るのだ。

「そうだ！　みんなを早く助けないと……！」

シドウもうまい棒をしまい、瓦礫の除去作業に専念する。しかし、そこにシドウのハンターからアシッドが出てきた。アシッドは深刻な表情だ。表情豊かではないが、雰囲気がそう言っている。

「お。アシッドも手伝ってくれ」
「……それもそうなのですが」

「どうしたんだ？」
「……ええ、それが」
アシッドは物怖じしたように、一つ間を開けると続けた。
「ＷＡＸＡ本部から先程、連絡がありました。それも、良くない連絡です。」
「何……、ヒュースポンからだと？」
「ええ。ＷＡＸＡ本部が言うには、地球に何者かが攻撃を仕掛けてきたそうです」
「それは……！」
シドウは自然と表情が引き締まった。精悍な目付きである。いつもの気のいい青年のものではない。一人のサテラポリスの隊員のものだった。作業を続けるスバルも不穏な空気を察したようだ。
「いったい誰が……。レギオンやＷＷＲはもう倒したはず……」
「さあ、何者かは分かりません。いまＷＡＸＡやＦＭ星が総力を挙げて、原因究明に乗り出しています」
ふに落ちない様子で、シドウは破壊されつくした部屋を見渡す。吹き飛んだ天井から、夜空が覗いている。
静寂を取り戻した宇宙が黒々と広がっていた。星々が輝いており、とても今のような痛ましい出来事が起きたとは思えない。シドウ自身、平和を勝ちとっていたと思っていた。
しかし現実を直視すれば、その考えも幻想だったと気付かされる。
「そうか……。それで、どこが攻撃されたんだ？」
アシッドは、口をつぐんだ。口から出すにしても、それなりの覚

悟がいるということだろうか。
しかし、シドウの無言の訴えにより、アシッドは重い口を開いた。
「……ニホンのＴＫシティを始めとした、各国の主要都市が攻撃されたようです。被害半径は、数十キロにも及びました。犠牲者の数も、見積りで数千万単位の途方もない数であると推測されています。何ゆえ一都市が、丸々吹き飛んで消滅したそうです。管理衛星のドラゴンは、地表面に複数の超巨大クレーター確認しました。
とにかく、各国の都市は機能を失い、混乱の渦に呑みこまれているようです。
ヒュースポンは緊急対策本部を設置して対策を練っている最中です」
シドウは愕然とした。聞く限りでは、最悪の展開というものだと言ってしまいたい程だ。
「まさかそんな事が起こっていたとはな……。なら、さっき空が光ったと思ったのは、ＴＫシティへの攻撃だったのか」
シドウはＴＫシティの方角を望んだ。確かにＴＫシティの空は灼熱に燃えているように地平線の底を赤く焦がしていた。シドウは、改めて地球を襲った攻撃の恐ろしさを痛感した。
「空が燃えている……。何ていう威力だ」
「シドウ……。攻撃は宇宙空間の時空の歪みからです。超荷電反粒子が作る集束エネルギー波によるものだったそうです。ありていに言えば、直径にして数キロに及ぶビーム攻撃です。
なお地球に展開していた、ペガサス、レオ、ドラゴンの衛星による防護フィールドをいとも簡単に突き破ったそうです。……信じられません」

「ここから、ＴＫシティまで距離はあるのに、爆風だけでこの有り様か……。今回、地球を襲った敵はとんでもないな……」

シドウは絶望を感じながらも、自分達がすべき次の手を考える。しかし、その前に瓦礫の下に埋もれた人の救出が先だろう。すぐにシドウは、スバルとウォーロックを手伝おうと歩み寄る。

その先には、袴の裾をまくり作業に勤しむスバルの姿があった。シドウが声をかけようとする。だが、その前にスバルの背中がぴたりと止まった。今までと一転して凍ったように動かない。数歩のところまで歩み寄ると、スバルが打ち震えているのが分かった。

隣のウォーロックも唖然とした様子だった。彼らしくも無く、押し黙って目をつぶる。スバルの横で、ウォーロックは立ちつくしているだけ。ＦＭ星の誇り高き戦士が、閉口するに足る状況がスバルの目の前で起きている。

「委員長……」

スバルは儚く散りそうな声量でルナを呼んだ。ルナは返事を返さない。スバルの目の前にはルナが眠るように倒れていた。

瓦礫の中から助け出そうとしていた所の出来事だった。ルナの手を引っ張った時だ。スバルに目が覚めるような、ひんやりとした感覚が伝わった。ルナの手が冷たかったのだ。本当に氷のようだ。刺すような悪寒だった。

スバルは慌てて、ルナを抱きかかえるようにして、助け出す。しかし、それがいけなかった。

ルナの綺麗な振袖の、白い花柄は、なぜか薔薇の花になっていた。スバルは悪い予感を一瞬で理解して、腹部を優しく撫でる。払拭し

たい可能性だったが、皮肉にもべっとりとした冷たい液体が指に絡みついた。指先は真っ赤に染まる。
ルナの腹部には鉄骨が突き刺さっていたのだ。そこを中心として、じわじわと赤い領域が勢力を拡大していく。

「そんな……。なんだよ、これ」

スバルは改めて、花の柄を見てみる。しかし何度見ても、薔薇の花だ。何度見ても、白くはなってくれない。それどころかみるみる赤くなる。赤黒く変色した薔薇は殺人的な意味を匂わしてくる。
スバルは口を歪ませて、ルナに微笑みかけた。

「委員長……？　そろそろ起きてよ？　みんなを探すの手伝ってよ。ほら……早く」

ウォーロックはやりきれない表情を浮かべた。どう見てもこれは……、とウォーロックの冷徹な部分が勘定していたのだ。そしてスバルに言う。いつも通りの雰囲気を仄めかしながらで。

「おい、スバル。委員長は放っておいて、早く他の奴らを探すぞ。急がねえと、どうにもやばい。どうやら、俺達は数時間も寝てたらしい」

ウォーロックはそう言って空を見上げた。深い闇だ。日が沈んでだいぶ経つ。

「うん。でもその前に……病院だよ。ロック、救急車を呼ばなきゃ」

ウォーロックは、スバルの言葉に胸を抉られた。戦士として、似たような状況に立ち会った事も多々あったが、慣れるものではない。

いつだって、被害者は暴力的なまでに切ないものだ。目の前で泣き喚いてくれれば、気も楽だが、スバルは泣いてくれない。始末に悪かった。

（チッ……おそらく、もう……。委員長のヤツからはもう生体反応は感じられない……。それにアシッドのヤローが言うには……）

ウォーロックはルナの状態を理解していたが、スバルに言ってやる事は出来ない。突きつける事は出来ない。

シドウの方に目をやることしかできなかった。シドウも事を理解した。病院もこの状況だと、倒壊していて使い物にならないだろう。そしてシドウはスバルに勇気付けるように言ってやる。

「安心しろ、スバル。今、救急車を呼んだからな。きっと、大丈夫だ」

それは嘘で、いくら待っても、救急車は来ない。しかしそう言うしかない。スバルもそれは承知していた。

ウォーロックは、スバルに掛けてやる言葉が見つからないままに、瓦礫の除去を始めた。シドウもアシッドもそうする他ない。

「スバル。とっとと委員長をそこに寝かせて、早く他の連中を探すのを手伝え」

ウォーロックは、あえて普段どおりに接するしかなかった。スバルは弱々しく返した。

「うん……。

でも、少しだけ待ってよ。委員長が寂しくないように、もうちょっとだけ一緒にいたいんだ……」

スバルは冷たいルナの手を握ってやった。それでもスバルは不思議と涙が出てこなかった。

もしも宇宙がまた収束を始めて、ルナの命が助かるというのならば、喜んで宇宙を終わらせるだろう。今のスバルは、そんな愚かな条件でさえ呑んでしまいそうなぐらいだ。それほど気が動転していたのだ。

だが、スバルはそれ以上に状況を理解していた。ルナと同じ事にミソラ達がなっていないとも言い切れないのだ。ここは大人しくウォーロック達を手伝う他ない。

そしてそれ以上に、こんな事を起こした犯人が許せなかった。泣いている暇は無いのだ。

とうとうスバルはルナに別れを告げると、立ち上がって作業に戻った。

そんな四人を、儚げに輝く月明かりが照らしていた。ルナはもう帰ってこない。

そして、その月明かりが淡く照らすウェーブロード。金髪の戦士が、スバル達の様子を見下ろしていた。風に流される金色の髪は、月に照らされ怪しくも美しく輝く。

「……許せ少女、この世界では犠牲になってしまったのか。しかし、これも神の為……

次元魔像（ディメンション・ゴーレム）を倒した事により、お前達は選ばれた。……ロックマンよ。お前は憎しみをもって俺達の前に来るだろう……。

そう、神の最高傑作である俺達の前に……」

ｂｏｎｄｓ―００：人間要塞ｖｓ窓際係長

スバル達のノイズウェーブトーナメント初戦日。二二ＸＸ年五月十七日水曜日。地球は快晴。対してノイズウェーブは、湧き上がるような鬱乎（うっこ）たるものがある。まるで陰鬱とした森林に迷い込んだかのようだ。

スバル達は、そんな第三階層のジェイドウェーブ奥深くまで侵入していたのだった。辺りは緑色のノイズであるジェイドが飛び回って、視界を悪くさせている。そしてジェイドウェーブの至るところには、何者かが投棄したであろう、未知の鉄くずが漂っている。地球の技術ではない、変わった機構の機械の残骸。素材までブラックボックスだ。

ジェイドがそれら鉄くずに寄生し、繁殖しているのがこの裏世界である。おかげで緑でいっぱいだ。不健康な森林浴にはもってこいだ。

しばらくそんな世界を進んでいく。

すると建物が立ち並ぶ場所が見え始めた。ウラスクエアだ。建物はジェイドに寄生されてしまい苔が生えたようだ。スバル達は、特に用事も無いのでそこを素通りしていく。そうしてウラスクエアの大広場をかわす。

そしてすぐに建物の合間から出口が見えてきた。蜘蛛の巣のような淀んだ緑の苔ネットから、恒星の光が射し込んでいる。

先頭を行くソウル・レイダーは道を滑走しつつ振り返り、皆に確認をとる。

「もうすぐ出口だ。出る先は、機械惑星リギアのコスモウェーブだろう。気を引き締めろよ」
「はあ、はあ……。やっと着いたのか」
オックス・ファイアはしきりに額を拭いながら滑走している。よほど堪えたのか、声色も若干大人しめだ。
「ブロロ……、結構遠くまで来た感じだな。もう走りつかれたぜ。なあミソラちゃん、ガイドデータ的にはどんな感じだ?」
「うん、ちょっと待ってて」
ハープ・ノートはエアディスプレイを前方に表示させた。たちまちエアディスプレイに、ジェイドが纏わり付き始めた。ハープ・ノートは気にするそぶりも見せずに、子蠅を払うようにした。
そしてガイドデータの地図に目を落とす。
「結構、入り組んだ道を来たみたいだね。実際、ノイズウェーブを移動した距離はそんなに大したことないけど、地球からの実測距離にして二三〇万光年ほどだってさ!
ガイドデータが無いと絶対にたどり着けなかったね」
ハープ・ノートは元気よく答えてやった。
しかしハープ・ノートのすぐ後ろを行く、スコープ・スナイパーはそれを聞くと呻いた。女の子なのに低くオッサンみたいな声だ。これはいけない事。
「うひゃあ……。二三〇万って……どんだけ遠いのよ。ここはスバルンの知的な解説を要求するわね」
使命にあずかったロックマンは得意げに語りだす。わざわざ最後

尾から、スコープ・スナイパーの隣にまで来て優しくエスコートだ。宇宙が絡むとロックマン的にはどこまでも紳士になる。

「えっと。光の速さで二三〇万年かかるほどの距離です。とてもじゃないけど普通の手段じゃ、まず来れないですね」

「なるほど、まさにノイズウェーブさまさまってワケね。ＷＷＲが占拠したがるのもうなづけるわー。無料の超高速道路じゃんね？」

ロックマンは頬をポリポリと掻いて苦笑した。その例えが妙にマッチしていて、かつ平和的な響きなので可笑しいのだった。

「ハハ……、まあ確かに超高速ですね。でも、その分だけ超危険ですけど」

すると出口はもう目の前。

「おい、いい加減おしゃべりはやめろ。ノイズウェーブから出るぞ」

そう注意し、ソウル・レイダーが出口の蜘蛛の巣に突入した。すると光の中に彼は混ざり、やがて見えなくなった。ソウル・レイダーは空間の歪みから吐き出されて、正常空間であるコスモウェーブへと繰り出したことだろう。

「よし、私も！」

二番手はミソラだ。意を決して、コスモウェーブに繰り出す。後に続く、オックス・ファイアとジャミンガー。そしてスコープ・スナイパーと来て、最後はロックマンの番だ。

ロックマンは少し胸の高鳴りを覚えていた。スバル少年の、好奇心をくすぐられたのだ。鼻面（はなづら）を指で擦り、凛とした笑みを浮かべる。

「外宇宙のコスモウェーブか……。一体どんな所なんだろう。きっと父さんが見ていた世界が広がってるんだろうなあ……。
……よし、僕も行くぞ！」

ロックマンは勢いそのままに、光の渦へと一歩踏み出した。

ロックマンを送りだしたジェイドウェーブは、いつもと変わらない静けさとともに、悠久とした時を刻み続ける。まるで、少年達が命がけの戦いを、銀河連邦と繰り広げるなんて無い事のようにだ。
そして、見計らったようにある人影がするりと姿を見せた。気配を消して建物の物陰から覗いていたのだろうか。その一本角が特徴的な電波人間は光の渦を見つめながら呟いた。

「行ったか。……頑張れよ、負けるな」

保護者のような語り口からは、心配している様が容易に理解できた。彼はワタルに言い付けれてもいないのに、ミソラ達の後を追い見張っていたのだ。いや、見守っていたのだ。
そして雷を帯びる電波人間は続けた。

「絶対に油断するなよ。銀河連邦の連中はどいつもこいつも、ただ者じゃないからな。ＷＷＲでさえ銀河連邦とまともにやり合う気は起きない。
でも今回はトーナメント戦だ。組織としての銀河連邦が宇宙一でも、個々の力でならお前たちにも勝機はきっとあるはず。
勝ち残れ。そして俺達の前に来い、ミソラ。ワタルもそれを望んでいるはずだ」

そんな言い草に電波人間の片割れが不満の意を示した。厳粛な口調が慣れた様子で言いつける。

『感心せんなジョニーよ。彼女達は敵なのだ。そんな事を言うのは適切じゃなかろう』

「相変わらず硬いなあ、キリンは。

確かにミソラ達は敵だぜ？　でも、それ以上にアイツ等は親友の娘とその仲間達なんだ。心配になるのが人情ってものだろう？」

『ふん。ＷＷＲの幹部のくせに人情か……。ＡＭ星の潔癖なる断罪者だった私には到底理解できん……』

そしてキリンは、キリン・ライトニングと分離して目の前に現れた。静かな情動に揺れるキリンの瞳は、見る者を畏怖させる。まるで楔（くさび）を念入りに、ジョニーの優しさという主軸に打ち込むかのようだった。そうやってキリンは一層凄みを以ってキリン・ライトニングに認識させる。

「ジョニーよ、甘さは捨てておけ。いざ計画を実行する時に足を引っ張りかねんからな。フェニックス様を始めとした我らＡＭ星人の悲願を叶えるためだ……分かるな？」

キリン・ライトニングは肩を大袈裟に上下させ、キリンを宥める。飄々としていて掴みどころがない男だ。しかし、演技の残り香には少しだけ後悔の色調が込められていた。

「ああ、わかっている。これが、ワタルの本当に望んだ事ならば、俺は何も言わずに手伝うだけさ……」

弾き出されるように、ロックマンはコスモウェーブに出てきた。宇宙を無重力遊泳と行きたいところだったが、そうもいかない。ソウル・レイダー達が、コスモウェーブの拓けた場所で待っていたのだった。待たせては悪い。

その中でハープ・ノートをは大きく手を振ってロックマンを呼んでいた。

「おーい。スバル君こっちこっち！　ここから、惑星リギアに直通しているコスモウェーブがあるよ」

「うん、分かった」

ロックマンが皆と合流すると、ガイドデータを確認した。眼下に広がる、魅惑的な惑星を調べる為だ。

ロックマンのエアディスプレイには、情報が錯綜している。その中から情報を取捨選択し、必要なものだけを取り出す。すると文字データ、画像データがポップアップされた。

「なるほど。このコスモウェーブの先にある錆色の惑星は鉄が主成分なんだね。寿命は地球より少し長い程度か……」

そこにソウル・レイダーが付け加えた。

「ここは、俺達が属する天の川銀河団から、一番近い銀河のアンドロメダ銀河に属する宙域だ。

当然、この惑星は銀河連邦の支配下にある。文明レベルは地球の百年先を行っているらしいな……」

「なるほど。アウェーってわけだね。」

ロックマンは高揚としたものを感じる。だがそれを咎めるように

戦士としての部分が、下腹をキュンと強く締めていた。

「フン……。いい顔だ。おそらく厳しい戦いになるだろう。
……それじゃ勝ちに行くぞ、みんな！」

ソウル・レイダーは檄を飛ばし、機械惑星リギアへと滑り降りて行った。一直線の道はどこまでも鉄の惑星に伸びてその先は霞んでいる。

そしてソウル・レイダーは、すぐに大気との壁にぶつかり輝く。その様はまるで隕石のようだ。ロックマン達も続いた。

一方、惑星リギアの国政首都。

そこは高度な文明を誇るかのように、天を穿つ高層建造物が乱立している。人工太陽に照らされるビルの鏡面が眩しい。これと比べれば、地球のビル群など、ささやかなジオラマ遊びに見えてしまう。

その中でも、特にビルの合間を縫うようにして走るホースが目に付いた。その中を赤血球のように空飛ぶ車が走っている。確かに文明レベルは高いようだ。

そして鉄の大地を歩く人々は、半分機械化したかのような重々しい足音を鳴らしている。この星の人々は寿命と言う制約から解放されたサイボーグだ。

その星に純粋な生物の気配は無い。ありとあらゆる物質が機械と融合していた。まさにサイボーグの星と言う訳だ。

そんな国政首都の真ん中には、大きな真珠を思わせる施設がある。様相としては、ビルという剣山の中に転がる宝石と言ったところか。そんな宝石のような施設こそ、ノイズウェーブトーナメントの会場

だ。普段はサイボーグと機械獣を戦わせている娯楽施設である。
そして何より、本日の観客動員数は凄まじい。百万席用意されたシートは人々でごった返す。それでも余った場所には、立ち見客が制圧していた。
さらに至る所に立体映像が表示され、死角なく闘技場を映し出す。そんな興奮と、血気に溢れかえる会場の中に、銀河連邦の姿があった。闘技リングの端にある、カウンター形式の待機場で陣を張っていた。エメリオルは一番奥に座って、どっしりと構える。

「フム、まさか初戦会場が惑星リギアだったとはね……。幸先が良い事です」

エメリオルは髭を撫でながら、爽やかに笑う。完璧にコーティングされた歯が眩しい。

「確かに、ここは銀河連邦に加盟している惑星ですからね。ここにいる観客全員が我々の味方と言ってもいいでしょう」

部下の言葉にエメリオルは、軽く諭してやる。

「何を言っているのです。私達は正々堂々戦うだけです。観客など関係ないのですよ？　勝った方が勝ちなのですから」
「はっ……。すみませんでした」
「分かれば良いのです」

エメリオルは剛胆ながら優しさの含まれる笑みを浮かべた。部下もその様子を見ると安心したように一歩下がった。

そしてエメリオルが会場向かいの入場ゲートにふと目をやる。するとゆらゆらと六人の人影がこちらに向かってくる事が確認できた。

会場が割れんばかりに湧き上がる。ボルテージが最高潮にまで達した。まるで惑星全体が揺れているかのようだ。

「フフ、やってきましたか。地球人の皆さま」

エメリオルが立ち上がる。部下を従え待機場からロックマン達を迎える。ゆらゆらと空中に浮かぶホログラム映像にエメリオルとロックマン達が映った。

映しだされるロックマン達は程良く緊張した面持ちだった。だが対するエメリオル達はどこか余裕を感じさせた。同じ場所にいるにもかかわらず、二つの組の間には違う空気が流れているようだ。

『さあ！　いよいよです。我らが銀河連邦率いるチームアンドリュード！　それに対抗するのは地球という田舎星からやってきたチームダブルプリティー！
彼らの一戦が今ここに始まろうとしています！』

ロックマン達がいよいよリングのところまで迫ると、あつらえたかのように実況が送られる。恐らく声の主はノイズウェーブ実行委員会の者だろう。しかし、声色は裏の住民特有の陰湿が似合う、じめじめとしたものは無い。はきはきとした女のものだった。しかもその語り口から、この戦いは上辺の体は娯楽イベントの一環となっている事がうかがえた。

ＷＷＲの人事には頭が下がる。これで正真正銘惑星を揺るがす一大娯楽イベントと成り上がってしまった。これでは裏ではびこる様々な思惑に気づく観客はいないだろう。

ついにいよいよロックマンとエメリオル達は闘技リングの中央に並んで向かい合った。並ぶとよく分かるが、エメリオルの体躯は巨大という一言に尽きる。一歩前に出たソウル・レイダーはエメリオ

ルを見上げる。

「また会ったな。銀河連邦の大佐……だったか？」

「これはこれは、地球の戦士さん。私はエメリオルです。フフ、今日という日を良い勝負で飾りましょう」

エメリオルは敵を作らない笑顔を浮かべ、鋼鉄で固めた掌を差し出す。ソウル・レイダーは一瞬躊躇するが、会場の雰囲気を汲み取り、握手を返した。その時、ソウル・レイダーは一瞬体を強張らせた。

（こ、こいつ……）

エメリオルも一瞬驚くが、すぐに気を取り直す。不敵かつ大胆ににやりと笑った。

「驚きましたね。この周波数の色調……。アナタも……」

「チッ……」

ソウル・レイダーはばつが悪そうに、エメリオルから顔を逸らした。

その一連のドラマを見届けた観衆はさらに盛り上がる。止まる所を知らず会場から空気のうねりかのような、音の爆撃が投下される。

「くっ……。うるさい連中だな。完全にアウェーじゃないか」

ソウル・レイダーは至る所に張り付けられた広告データに目をやると呟いた。どこを見ても銀河連邦の事ばかりを宣伝している。

「しょうがありませんよ。この惑星は我々銀河連邦が文明発展に協

力しているのですから」
「ふん……。そんな事は勝負に関係ない」
「ですとも。勝負には一切関係ありません。お互いフェアな戦いをしましょう」

ソウル・レイダーは不躾に鼻で笑う。そして二人は一歩下がりお互いの列に戻った。会場は少し落ち着きを取り戻した。それでも並の騒音ではない。

次が肝心な所だ。実況が対戦カードを決めるのだった。

『では、早速対戦カードを決めてしまいましょう！』

実況のその言葉を合図に、ホログラムディスプレイは全て暗転した。爆発の前の静けさが漂う。

ロックマンは息を呑む。

「一体、誰が選ばれるんだろう……」
「私になるなー。私になるなー」

スコープ・スナイパーは神に祈っていた。膝を付きどこぞのイエスに懇願する。普段クリスマス時にしか思い出さない彼に、ただただだすがっている。今だけは立派にプロテスタント。

「ブロロ……。俺が選ばれたら……もしかしてチームのピンチ？」

オックス・ファイアは柄にも無く緊張して縮こまっていた。大きな彼も小さく見える。そこにロックマンが肩をぽんと叩いてやる。

「良く分かってるじゃないか。ゴン太？」

「てめえ。スバルー」
「ハハ、元気になったね」

ハープ・ノートはロックマン達の愉快な掛け合いに目もくれず、胸に手を当てていた。呼吸は深く長い。どんな運命も享受するかのように、儚げな天使がそこにいる。

（私……頑張るよ。ここから始まるんだ。宇宙を終わらせないために……。ママと過ごしたこの世界を守るために）

そしていよいよだ。粛々と実況が読み連ねる。

『運営本部からの通達が来ました。
……注目のノイズウェーブトーナメント、チームアンドリュード対チームダブルプリティー。
初戦カードは……』

一同は喉を鳴らした。手に汗が噴き出る。視界が狭まる。

『銀河連邦アンドロメダ宇宙軍大佐！　人間要塞エメリオル！　そして……地球中小企業サラリーマン！　裏霞夜太郎こと裏の住民ジャミンガー！』

堂々とホログラムディスプレイに、エメリオルと夜太郎の名前が映し出された。お洒落なレイアウトに加え丁寧に二つ名付きだ。
スコープ・スナイパーはパッと表情を明るくした。しかしミライは赤いバイザーの奥に落ちる瞳を目一杯広げて大皿のようにしていた。

「なに……！　まさか夜太郎さんが選ばれるとは」

「うわあ……！　何てことだ。まさか私が選ばれるなんて。実戦経験なんてほとんどないのに……！　上司に怒られることしか得意な事が無いのに。いつも窓際係長ってバカにされてたのに！」

ジャミンガーこと夜太郎は慌てふためいて、とりあえずお家に帰ろうとする。しかしメトリーが出張って引きとめる。とりあえずロックマンの方は色々と突っ込みたかったが堪えた。

『落ち着いて夜太郎！　逃げちゃ……ダメ！　私も一緒に戦うから』

流石ミスメットリオだ。心が名川百選に選ばれるほど澄んでいて美しい。

しぶしぶとジャミンガーこと夜太郎が前に出てくる。対しエメリオルはのっしのっしと夜太郎と向かい合うようにした。もの凄まじい対格差だ。これは不安になってしまう。

その様子を見ていたスコープ・スナイパーはぼそぼそとロックマンに耳打ちをする。

「ねえ。今気づいたんだけど。これってピンチじゃない？」

「いや……。夜太郎さんはやるときはやる人ですって」

「でも。その……肩書きが、ねえ。銀河連邦大佐で人間要塞と、中小企業リーマンのゴロツキじゃあ、色々と悪意を感じるまでの差を見せつけられるわー」

「キミドリさん……。それを言っちゃダメです」

『はい！　そこのお二人様ボソボソ言ってないで。選手以外の人はリング外に出てくださいねー！』

そうして、闘技リングにはエメリオルと夜太郎が取り残された。半径三百メートル程のリングにドーム状のバリアが施される。とても頑丈そうだ。この状況、見る限りデスマッチだ。

実況は嬉々としてそのバリアの素敵さを説明し始める。

『このバリアは、ものスゴイ耐久力を誇っています！　核爆弾の一発や二発じゃびくともしない超性能ですので、思いっきり暴れてくださいね！』

エメリオルは剛胆に笑う。目の錯覚では無ければ、彼からオーラのようなものが見えてしまう。

「フフ！　ハハハハ！！　さあ、始めましょう地球のサラリーマンさん。私、エメリオルの軍人として研鑽し尽くした戦略と武力の極みをとくとご覧にいれましょう！！」

その覇気は核爆弾でも破れないバリアを突き破ってしまうほどだ。夜太郎はビク付きながら、何とかエメリオルと相対していた。しかし、一歩でも気を抜けば気絶してしまいかねない。

「ひいぃっ！」

決戦場と化した逃げ場のない巨大ドームは、エメリオルの圧倒的なプレッシャーで満たされていた。夜太郎は戦う前からすでに虫の息だ。息遣いが荒く、酷く不安定な印象を受ける。　しかし夜太郎だって逃げるわけにはいかない。彼は必死に震える手を抑えようと努力していた。しかし言う事を聞いてくれなかった。彼はどこにでもいるか弱いサラリーマン。宇宙をまたに掛けた戦いに出るには、いささか無力だ。だが、それでもやらないといけない。

「震えるな！　戦わないといけないんです！！　頼むから震えないで、私の体……！」

ロックマン達は、夜太郎に駆け寄って励ましてやりたかった。透明な薄皮一枚向こうで夜太郎は酷く孤独なことだろう。

しかしリングの周りには、百数十メートルに及ぶ安全柵が設けられていて近づくことすら叶わない。ただ声を掛けるしかできないのだ。

「頑張れ！　夜太郎さん、僕たちはもうアナタを信じていますよ！」

しかし夜太郎にロックマンの声は届かなかった。音としては、巨大ディスプレイを通して届いているはずだ。だが、夜太郎はそれどころではないのだ。周りの事に目を向ける余裕なんてない。

「言う事を聞いてくれ……私の体……言う事を……」

憑りつかれたようにブツブツと危険信号を発していた。対してエメリオルは試合開始の合図を待っている。

そして始まる。夜太郎にとっては泣きっ面に蜂だ。

『えーでは、リングと安全柵の準備も出来たようですので、選手の方は向かい合って準備をして下さい』

エメリオルは、ゆったりとした川の流れを思わせる動作で構えた。隙のない構えで、まさに人間要塞。空間に、圧倒的な存在感で根を下ろしていた。

「さあ、いよいよです」

「くう……っ」

夜太郎もジャミングバルカンを構える。しかし照準がぶれて定まっていない。これでは一発たりともエメリオルには当たらないだろう。

「夜太郎！」

そこにメトリーが夜太郎の横に出てきて優しく寄り添ってやる。一目には、親子の画に見える。そしてメトリーは夜太郎の震える兵器に手を添えてやった。冷たい兵器に優しさが注がれる。

「夜太郎……。私が付いているから大丈夫。スバル達と一緒に宇宙を救おう。……ね？」

「メトリー……」

ジャミングバルカンの銃口はしっかりとエメリオルを捉えた。エメリオルは感慨深そうに一つ大きく頷いた。

「……よろしい。では、実況の方、開始の合図を」

エメリオルは手のひらを泳がせる。

『準備万端ですね！　では、ノイズウェーブトーナメント初戦。エメリオル対ジャミンガー……ウェーブバトル・ライドオン！』

観衆は狙っていたかのように爆発した。その怒号に夜太郎は音に重さがあるのか、と初めて知った。

そしてエメリオルは真っすぐ突っ込んでくる。巨体な彼が大地を踏みしめるたびに、武骨な金属音を轟き響かせる。夜太郎はジャミングバルカンを連発した。銃口がルーレットのように回転し、火花がバラバラと明滅する。

しかしエメリオルは、乾いた音を立てながら節分の鬼の役に徹していた。銃弾が全く効いていないのだ。オックス・ファイア顔負けの力任せのパワーファイターだ。やはりただの電波人間ではない。

「バルカンが効いてない！？」

「そんな攻撃効きませんよ！　人間要塞の異名を舐めないでいただきたい！！」

『なんとー！　エメリオル選手にバルカンがまったく効いていません！　流石は宇宙軍大佐です。人間要塞の異名は伊達じゃありません！！』

「くっ……！」

期待薄にバルカンを撃ちこむが、本当に効いていない。どうやっても効いてはくれない。鉄の塊である人造人間には物足りない火遊

びなのか。

「夜太郎……逃げて！」

メトリーがそう言って、夜太郎の背中を押して逃がした。そして迎え撃つメトリーはエメリオルにツルハシを振りおろす。ただツルハシは砕けて、ぱらぱらと鉄の破片が舞う。エメリオルの銀の装甲には傷一つ付かなかった。

たちまちエメリオルは巨大な手のひらを傘のように広げてメトリーを鷲掴みにした。メトリーのか細い首はガラスが割れるような音を立て悲鳴を上げる。

「あうっ……！」

「メトリー！」

夜太郎はすぐさま助けようとする。

「バトルカード、ブレイクソード！」

さっきとまったく同じ光景が繰り返された。

『ああっと！　ジャミンガー選手のバトルカードはまったく効いていない！　エメリオル選手恐るべし！』

成す術なくブレイクソードは折れてしまった。エメリオルには清々しく効かなかった。

「無駄です。これは銀河連邦仕様のラディオ・ウェーブプロデクターですからね。生半可な攻撃は全て無効化します」

エメリオルは得意げに笑い、大きく振りかぶった。メトリーをバリアに向かって投げつける。

「きゃあっ！」

エメリオルの肩の良さはピカイチだ。百メートル先にあるバリアの壁にメトリー厳しく叩きつけた。メトリーは小さく声を漏らすと、ずるりと地面に落下していく。

するとロックマン側とは対照的に観客は油を注いだかのように湧き上がっていた。

そして息もつかせず、エメリオルは畳みかける。周囲にエアディスプレイを十個展開させ。画面内のオペレーションシステムに音声認識をさせる。

夜太郎はそれを阻止しようと、ギャラクシーアドバンスの『エクサキャノン』を見舞ってやった。だが、銀色のアーマーを丁寧に磨いただけだった。

「ギャ、ギャラクシーアドバンスでもダメなんて……！！」

エメリオルは脇目も振らずに、エアディスプレイに語りかけていた。

「ラディオ・ビームフィールド展開。軍用兵器アルファ、ベータ、ガンマの転送を要求する」

『ピピッ。音声一致。了解しました。陽電子砲、素粒子爆弾、マイクロブラックホールカノンをそちらに譲渡します』

エアディスプレイが閉じると、エメリオルの周りに破壊兵器が構築されていく。積み木のように段々と形作る。

夜太郎のあがきなどまったくもって何にもならなかった。

その様子を見ていたロックマン達は、息を呑んだ。エメリオル達が言っていた事と、現状が合致しないのだ。

夜太郎が弱過ぎると言えばそれまでだが、エメリオルは十分強すぎた。どう考えても地球人が電波変換したものと遜色ない。むしろそれ以上だろうか。

「なんだよ。あのエメリオルって人。全然圧倒的に強いじゃないか……！」

ソウル・レイダーは黙考していた。握手を交わした時の違和感は、彼の脳裏に大きな影を落としていたのだ。そして、ある結論にたどり着いた。

「さっきの妙な感じ……。俺の予想が正しいとすると……」

ソウル・レイダーは柄にもなく、大声で夜太郎に呼び掛ける。

「夜太郎さん！　そいつに力任せの攻撃は効かない！　ヤツの体電波情報に干渉する方法をとってください！」

その声を聞いた夜太郎は驚いたように上空に映るエアディスプレイを見上げた。そこには自分を信じろと言いたげな、ソウル・レイダーが大きく映っていた。

同様にエメリオルも目を見開いた。まさか、自分の体の弱点を当てられるとは思ってもいなかったのだ。

（驚きましたね。あのソウル・レイダーという方。やはり私と同じ……。ですが、こちらの準備も万端です）

『き、来ました！　これが人間要塞エメリオルの真髄！！　ここか

らが宇宙にその名を轟かす男の本領発揮かー！？』

そう、エメリオルの周りに大量破壊兵器が構築されきってしまった。エメリオルを中心とした領域は、まさに小さな要塞のようだ。エメリオルはオペレーションポッドに乗り込んで照準に目を凝らしていた。

不気味にも重々しく、兵器が腰を据えている。命を摘み取る事だけを考えられたそれは怪しく光を反射している。

非情にまで効率の良い殺傷能力を持つ、意志のない殺人鬼である。ただ破壊を――それだけの為に生み出された鉄の塊が放つ威圧感は、悲しいまでに冷たいものだ。

「これが人間要塞たる所以です。こうやって、数多の戦場で宇宙戦艦を撃墜してきたのですよ。そして人々は私を恐れ『人間要塞』と呼んだ……」

おもむろにエメリオルはバリアの外に手をやり示し部下に命令する。

「皆さん、観客の皆さまを安全な場所までテレポートさせてあげるのです」

「了解しました。総員、転移フィールドを展開しろ！」

「フム、頼みましたよ」

エメリオルはニヤリと笑った。

「そうしないと、この会場が吹き飛んでしまいますからね」

「くっ。ならこれでどうだ！」

夜太郎は薄ら寒いものを感じ、エアディスプレイのポップアップ

をタッチした。

「バトルカード、ジキアラシ！」

今度の攻撃はソウル・レイダーの言う通りにしてだった。エメリオルの要塞に電磁波を帯びたつむじ風が発生する。

そしてエメリオルに施された、余裕と言う名の仮面が初めて剥された。エメリオルは苦痛に顔を歪める。しかし要塞を崩すにはまだ物足りない。

「くっ……！　流石に、電磁波はキツイものがありますね……！機械骨格と電波のシンクロが乱されましたか……。

ですが、アンドリュード人一のタフさを持つ私を止めるには少々力不足です」

エメリオルは弱点の電磁波攻撃を食らいながらも、メトリーにロックオンカーソルを合わせた。

そして場外から部下の声だ。

「大佐！　観客のテレポート完了しました！」

流石は銀河連邦のエリートか。観客達は一人残らず別の場所に飛ばされていた。銀河連邦の科学力をもってすれば造作もない事だろう。

「では、心おきなく……」

エメリオルは地面でうずくまるメトリーに照準を合わせた。細長い砲身三つがメトリーを狙う。異なる射線がちょうどメトリーの所で交わっていた。

「や、やらせませんよ。バトルカード！！　ネッサストーム、コガラシ、ハリケーン、ジキアラシ」

ピアノを弾くかのように、夜太郎はリズム良く四枚のバトルカードのポップアップをタッチした。だが、エメリオルも待ってくれるほどお人好しでない。

ほぼ同時だった。

「問答無用です。全砲門、発射――」

「ギャラクシーアドバンス『テンペンチイ』」

ほぼ光速でエメリオルに雷が落ちた。そしてブリザードが吹き彼の電波情報を狂わせる。止めに太陽風が吹きつけ、エメリオルの体内情報を乱暴にかき混ぜた。

「くっ……！」

衝撃で砲門が大きく上方にずれた。そのまま、そこからエネルギーの塊が放射された。小さな黒い球と、チカチカと光る爆弾と、大木のような太さを持つビームが天井のバリアに直撃した。

バリアは薄いガラス窓のように粉々に砕け散り、闘技場の天井を突き破った。凄まじいまでのエネルギーが一気に炸裂し、上空の空間が不安定になる。黒い染みが広がる。破れた空間からノイズウェーブが顔を覗かせた。

『何ということだー！　核爆弾でもびくともしないバリアをぶち破ってしまったぞ。恐るべし！　銀河連邦！』

どうやら、実況の方はまだ居残っているようだ。熱い実況魂が彼

女をそこに残していた。
　無表情にエメリオルは天を仰ぐ。そこのノイズウェーブから人影がちらほら見られた。ウラスクエアの辺りを反転空間を抉りだしてしまったのだろう。下界の様子を、裏の住民が「何だ何だ?」と覗いているのだ。

「中々やりますね。地球のサラリーマンさん。私の鉄壁の要塞を少しだけとはいえ揺らがせるとは……」

　キミドリはここぞとばかりに声を張り上げる。

「行けー。夜太郎さん！　このままとっちめてしまえー」

　エメリオルはオペレーションポッドから立ち上がる。まだまだ余裕の風格だ。

「フム。私もずいぶん舐められたものですね」

　眉を吊り上げエメリオルは、髭に着いたすすを落とす。思いついたように武装要塞から、M・B・H・Cを乱暴に引っ張り出す。ごつごつとしたシルエットが夜太郎の前にそそり立った。

「ですが、私もアナタを少しだけ過小評価していたようです。油断ならない地球人として私も本気で戦いましょう」

　身の丈ほどもあるM・B・H・Cを軽々と片手で取り回し、長い砲門を夜太郎に向ける。夜太郎は緊張を保ちつつメトリーに呼びかける。視線はエメリオルからとてもじゃないが外せない。

「メトリー。立てますか?」

「う、うん……。大丈夫」
「だったら、手伝ってください。いよいよ相手も本気を出してきますから……！」

無言でメトリーは頷いた。ボロボロになったスカートをひらひらと遊ばせながら、夜太郎の元に駆け出す。
すぐにエメリオルは、夜太郎にマイクロブラックホールを撃ちこむ。黒い球体が破壊的な引力を伴い夜太郎に接近するが、スピード自体はそこまでではない。
夜太郎はそれを避けて、メトリーと合流した。

「やるよ。夜太郎……！」
「ええ、メトリー！」

「いっけー！　夜太郎さん！！」

スコープ・スナイパーが自慢の大口径スナイパーライフルを投げ捨てて、甲高い声を送る。それほどまで応援に必死になっているようだ。

そんな夜太郎は軽いフットワークで闘技場を駆け巡っている。そうだサラリーマンと言っても、やはり裏の住民だ。生半可なただ者ではないという事だ。

何だかんだと、電波機械人間と勝負らしい勝負を繰り広げている。対するエメリオルは巨体にものを言わせ、どっしりと腰を据えて応戦している。夜太郎に何千発ものマイクロブラックホールを弾幕の壁として撃ちこむのだ。徐々に、徐々にと、リング内が小さな黒球で場所を占拠し始めた。この暗黒球体は危険極まりない。触れたら一瞬で、その部位を千切り食い取られてしまうこと請け合いだ。ブラックホールとはそういうものなのだ。

エメリオルは、人工太陽に照らされた煌びやかな歯を見せて笑った。大きな少年だ。

「やはり、地球人……。電波変換のバランスが取れていますね！ここまで戦える事に驚きですよ」

「何を……！　アナタこそ反則気味な防御力に、これまた反則級の大量破壊兵器を使っているくせに！」

夜太郎は紳士的に悪態を吐き、バトルカードを自分の体電波情報に読み込ませた。それは素晴らしき、とっておきの必殺技だ。かのソウル・レイダーに教えてもらった究極剣技の一つである。

「行きます！　バトルカード『ファイアブレード』『アクアブレード』『ウッドブレード』『エレキブレード』」

そこには試合開始当初とは打って変わり、したたかな夜太郎の姿が見られた。彼は素早い動きで、エメリオルの背後をとった。そしてギャラクシーアドバンス『テトラドリーム』で斬りつける。速さでは夜太郎に分があるようだ。大柄なエメリオルの素早さはそれほどではなかったらしい。

しかし有り余る防御力がそれを補う。エメリオルは鋼鉄の手でそれを鷲掴みにするとテトラドリームを握り砕いた。粉々になった金属の花が咲く。

壊れた電磁波が四散する。エメリオルの手は真夏の夜空のように賑やかに輝いた。赤、水色と来て緑に黄色。十分美しい花になる。

「何のこれしき！」

エメリオルは一瞬だけ、高圧の電流に体を弛緩させる。だが、陰りのない笑顔を浮かべて余裕だ。一点の曇りもなく、どこまでもタフでナイスガイである。ソウル・レイダーは唖然とし舌を巻いた。

そしてエメリオルはもう片方の空いた腕を振るいＭ．Ｂ．Ｈ．Ｃで殴りつける。夜太郎は重量級の破壊兵器に弾き飛ばされた。土煙の尾を引き、ゴロゴロと壮絶に転がる。まさに人間大砲だ。

「くう……！」

するとすかさず夜太郎からメトリーが分離した。夜太郎の逆ベク

トル方向に猪突猛進だ。そして大きく振りかぶり、土方の乙女がお得意のショックウェーブを飛ばす。

「えいっ！　ショックウェーブ！　アーンド、バトルカード『マヒプラス』」

小粋な計らいだ。元ウイルスのくせにメトリーは賢くバトルカードとの応用技をお披露目だ。可憐な土方娘（どかたむすめ）は中々に技巧派だった。言い方を変えればテクニシャン。

「私のエレキウェーブ！　当たれ」

「少しは頭を使ったようですが……速度、威力共に恐るるに足らず！」

エメリオルは上空に飛び退こうと、ふくらはぎにエネルギーを込めた。ふくらはぎの推進機構がガスバーナーのように青く燃える。全身機械である彼には呆れるばかりだ。

だが、しかしだ。夜太郎にこそ呆れるべきなのだ。

「そうはいかない！　バトルカード『ゼツメツメテオ』『フウマシュリケン』『ベルセルクプレート』……とっておきです！　ギャラクシーアドバンス『ムーノイカズチ！』」

夜太郎がバトルカードを、遥か遠方より寝転がりながら読みこませた。

たちまち雷雲立ち込め、エメリオルの上空にムー大陸が現れた。もちろん本物ではないが、偽物と一蹴するには余りにも痛烈な周波数だ。

だがエメリオルは動揺と言った感動はおくびにも見せない。

「縦が無理なら……ならば、横に避けるだけ」

そこにメトリーだ。

「も一つオマケ。バトルカード『キャノン』『メガキャノン』『ギガキャノン』『テラキャノン』……ギャラクシーアドバンス『ニュークリアキャノン！』」

このギャラクシーアドバンスは比較的安価なバトルカードで使用できる『エクサキャノン』の上位互換だ。安心簡単、お財布にとって良心的な友達であり、敵を根絶やしにする最高クラスのキャノンだ。

最高クラスなだけあって、凄まじく異常なまでに極太の熱線だ。周りには核反応の熱エネルギーが、剥離電磁界となって暴露し伝播していく。

「フム、強力なキャノンだ。しかし電撃の衝撃波と軌道は同じ……」

しかしメトリーはくすりと笑った。くるりと一回転すると、スカートがふんわりとした花のつぼみを作り出す。甘い香りでも漂って来そうだ。

「ねえオジサン。アナタが撃ちこんだマイクロブラックホールが辺りに沢山浮いている……よ。

で、どこに逃げるの？」

エメリオルはニヤリと笑った。メトリーと夜太郎に称賛の言葉を贈る。中年男性の見事な貫禄だ。天晴れである。

上空からは、ムーノイカズチ。周りにはマイクロブラックホールが浮いている。そして急きたてるようにエレキウェーブとニューク

リアキャノンが迫る。これはとても愉快で笑うしかない。

「なるほど、ただ逃げていたのではなかったのですね。この布陣になるように私にブラックホールを撃たせていたのですか。

……お見事」

「アナタがお山のように動かないから意外と楽だった。私と夜太郎の力を舐めないでよね……。夜太郎は頭だけは良いんだから……！」

ムーノイカズチが地面に激突し、エレキウェーブ、ニュークリアキャノンが突き刺さり、エメリオルのいた場所はけばけばしく爆発した。衝撃で、ひび割れた闘技リングのバリアも完全に消し飛んだ。

外野のロックマン達は、慌てて飛んできたガラス片を避ける。

そして爆風に強烈な電磁波が感じられる。体電波情報をかき乱すには十分すぎておつりがくる。

それに極太のムーノイカズチだ。圧倒的な破壊力だろう。これでは流石のエメリオルもタダでは済まないはず。エメリオルのいた場所は巨大クレーターが出来あがった。隕石でも落ちたのではないか？　と感じてしまう。

『なーんと！　メトリーとジャミンガー選手が強烈な一撃をお見舞いしたぞ！！　ムー大陸の最強の攻撃技だー！　これは決まったかー！？』

実況も興奮している様子だ。増長した音波に空気がびりびりと震える。

スコープ・スナイパーもガッツポーズを作った。傭兵みたいな恰好をしてはいるが女の子らしい仕草にギャップが凄まじく眩しい。

「やるー！　夜太郎さんにメトリー！」

「スゴイ！　夜太郎さん、普通にカッコイイじゃないですか！」

ロックマンも手放しで喜んでいた。酔いしれていた。だが、ソウル・レイダーはだんまりだ。スコープ・スナイパーはソウル・レイダーの背中を思い切り叩いた。

「ほら、リーダーもブスッとしないの！　アレを喰らったら流石にもうダメでしょ？　ね？」

「いや……、まだだ。アイツの周波数はまだ生きている……！」

雷がほとばしる粉塵の中、巨大な人影が姿を見せた。ゆらりと黒いシルエットは死を象徴するかのようだ。怪しく眼光だけが鮮明に光り輝いている。得物を狙う梟のようであり不気味とだけ言いたい。

ソウル・レイダーは分かっていた。あの程度で倒れる人間ではない、と。握手を交わした時に、悪寒に近い戦慄が大波となって伝わっていたのだから。

『こ、これは！　人影の正体は、エメリオル選手だー！！　生きていた！　信じられない、タフガイだ』

だがエメリオルでも、ムーのイカヅチを喰らってしまった事は大きな意味を持つ。かすり傷では済まない相当なダメージのようだ。憐れにも自慢の銀色が、少しくすんだ色になってしまっていた。

だが、下手に避けてマイクロブラックホールに触れてしまう訳にはいかなかったのだ。よって、これが最小限のダメージだろう。エメリオルは血の混じった唾を吐いた。紳士的ではない。余裕がないのか。

ゆっくりとエメリオルはクレーターの底から這い上がり、夜太郎の目の前に現れた。不遜な笑顔を送る。無様なりにも、戦うには事欠かない健勝そのものの姿を突きつけた。

しかしその笑顔には余裕が感じられない。エメリオルの部下達も

ざわめきだした。温和で知られる人間要塞の絶対態勢が崩れようとしていたのだ。

エメリオルは夜太郎に一つ礼をする。ここでようやくエメリオルは余裕を一つだけ取り戻した。しかし失ったものも大きいはず。大佐としての揺るぎない自信を傷つけられたのは言うまでもないだろう。

「なるほど……。流石は地球人。やはり普通の電波変換ではアンドリュード人である私では歯が立ちませんな……。ますます、その体が羨ましいです……」

夜太郎はただただ驚いていた。開いた口を閉ざすのも忘れてしまう。これはタフなんてものじゃない。

「あれほどの攻撃を受けて立ってられるなんて……」

「流石にあの雷は効きましたよ。相手が私でなければ、勝負は着いていたでしょう……」

エメリオルはくつくつと笑いながら、肩を回している。その様子を見て夜太郎は不安になった。まるでエメリオルがウォーミングアップでもしているように見えるのだ。

今までの戦いは何だったのだ。そう感じて、くらくらと混迷し気を失ってしまいそうになる。

そしてエメリオルは夜太郎を厳しく見据えた。先程までの柔らかさはもう微塵もない。数多の戦争で血を血で洗い、さらに血を浴びる。そんな戦争屋の男の顔だ。強く厳しくそして冷酷に変貌した、この男の二眼を見て生きて帰ったものは少ないだろう。そう、とにかく丁寧に分かりやすく教えてくれる。

「私の本気でも電波人間としては今一歩及びませんでしたね……。ではここから、私は人間の限界を破るとしましょう……もう、本気とかそういうものじゃ言い表せません。言うなれば純粋な野生本能……！　それが、人間を捨てた、私の『本質』です！」

エメリオルはニヤリとした。すると蜂の子を散らしたように部下の銀河連邦軍人が慌てふためき出す。

「た、大佐！　アレは使ってはマズイです！」
「お止めになってください！」

しかしエメリオルは聞く耳をもたない。行くところまで行ってしまったし、行くのならとことん行ってしまう。

「では、行きますよ……！」

エメリオルが全身のエネルギーを一気に爆発させた。どうやら試合開始当初に見えていたエメリオルのオーラは錯覚ではなかったらしい。今度は確実に確認できるし視認も容易だ。

薄緑の炎がエメリオルを包んでいた。エメリオルは胸に手を当てた。機械人間として与えられた、作為的で脅威的な電波変換が始まる。

「メカニカルバイオフレーム、リミッター解除。電磁波との境界線をゼロに……。ガンマ変換！！」

人工太陽は空を照らすが、エメリオルは大地を照らす。辺りの色という色を弾き飛ばし。真っ白な世界を作り出す。

そして少し経ち、辺りが落ち着いてくると金色の人影が。

エメリオルはとうとう人間を捨ててしまった。今までは機械の体でありながら、どこか電波とのシンクロ率を調節していた。しかし機械骨格を完全に電波と同調させたのだ。そう、今の彼は質量をもった高周波数電磁波そのもの。

エメリオルは圧倒的なエネルギーを従えて、夜太郎に歩み寄る。もはや夜太郎は動けなかった。動いたら殺される、と人間が動物だった頃の本能を揺さぶれたのだった。動かなくても殺されるのに、革命にも似た決意を、その両の足に強いらされた。

「今、私の機械骨格を完全に電波と同調させました。アナタ達のような生身の地球人には絶対に出来ない究極の電波変換です！　そう、今、私は最強にして唯一無二の高次電磁波生命体となったのです！」

その様子を見ていたトラッシュは息を呑んだ。ハープもオックスも化け物を見るかのような目でエメリオルを見ていた。

『信じられません。あの銀河連邦大佐。現在のシンクロ率が優に１００％を超えています……！』

『ブロロ……。自分の機械の体を無理やり電波と同調させているんだ。あのゴールデンオヤジ、なんて無茶苦茶やりやがる！』

『ポロロン……。生身の人間があんな事したら、バラバラになって死んじゃうわ……！！　なんて奴らなの銀河連邦って！』

ロックマンは思わず呟いた。

「化け物……」

「……くっ」

ソウル・レイダーは小さく呟いた。かすれて、事切れたその声は自己の中で完結していた。

ソウル・レイダーは歯を食いしばっていた。マスクに隠れてしまって分からないが、目を見開き、拳は硬く握られ震えている。エメリオルに、非情な現実という名の魔物を覚えてしまう。だが、あの圧倒的な力に、少なからずの甘くて危険な魅力も感じてしまっていた。

金色となったエメリオルは夜太郎に襲いかかった。今までのどこか愚鈍だった素振りはまったくない。今のエメリオルは高機動殲滅要塞だ。人間要塞など生易しすぎる。

真っ白で美しかった歯まで金色になって凄まじい。

「さあ、終わらせましょう！」

強烈な金色の笑顔だ。

確かにエメリオルの放つ常識外れなシンクロ率は人間の物ではない。それから生み出される戦闘周波数は凄まじいものだ。異常な格差に排他的な心理が掻き起こされる。ヒステリックなだけの情緒に、対面を取り繕った理性など何の意味を持たないのだ。悪戯にロックマン達も、それは感じていたはず。

ソウル・レイダーは涙を怒りに変えた。「どうして、あの場で俺が戦っていない……」と連綿とした負の連鎖に支配された。

（なるほど、俺も化け物。高度な知恵を得た人類の考える事は皆同じ……ということか。

これからも俺は、自分とその周りを酷く恨む。そして……それでも俺は人間として生きていかなくてはならない。人間の真似事をするたびに……。アイツらの眩しさに泣きたくなっても、だ。

涙さえ流せない、いくらいびつな存在でも……。誓ったんだ。母さんの為に）

それから一分。たったの一分。夜太郎は軽くひねられていた。エメリオルの成すがままに、いいように扱われている。

夜太郎は地面に崩れ落ちるたびに、立ち上がる。そしてエメリオルに痛めつけられる。それの繰り返しだ。

夜太郎の番が終われば次はメトリーの番だろう。

『こ、これは……！　エメリオル選手が夜太郎選手を圧倒しております。力の差が圧倒的すぎるぞっ！！』

「夜太郎！」

メトリーの悲鳴に応えるかのように、エメリオルは夜太郎を蹴りとばした。夜太郎はまるでゴム毬のように軽々と一〇〇メートル程飛ばされた。優しさの欠片もないシュートだ。足に残る生温かい余韻に浸り、エメリオルはメトリーを睨んだ。

「安心してください。次はアナタの番です」

いやらしくねっとりと、エメリオルがメトリーの方に向き直る。

「マ、マズイよ……！　このままじゃ二人とも」

ロックマンは今にも二人を助けに行こうと身をリングの方へと乗り出していた。だがソウル・レイダーはそれを制止した。ロックマンの目の前に白い刃が、遮断機のように下りる。

「待て、星河。まだ勝負は着いていない」
「でも……。放っておいたら！」
「今はあの人を信じるんだ。それでも……」
ソウル・レイダーは剣をしまい、静かな情熱を燃やした。
「それでも、本当にもう駄目だと思ったら、俺がアイツをデリートしてやる」
ソウル・レイダーとてロックマンと同じ気持ちだ。だがここで出ていっては本当に終わってしまう。今はまだ夜太郎に残された可能性を信じるしかない。
「ミライ君……」
ロックマンが何も言えずに口をつぐむ。
『強い、強い！　エメリオル選手！　強いという言葉以外に、どう形容していいのか分かりません！！　それほどまでに絶対的だー！！』
実況も白熱しているが、エメリオルに恐怖しているだろう。そんな矛盾をソウル・レイダーは感じていた。
するとソウル・レイダーに通信が入った。見当はつく。このチームにはオペレーターがいたのだ。ピンチの時のヒーローならぬ、ヒロインか。
「通信か……」

ソウル・レイダーはエアディスプレイを表示させた。女が映っている。やはりオリヒメだ。オペレーターとして何かしらの助力を与えてくれるのかもしれない。

「ドクターオリヒメですか」

『良かった。やっと繋がったわ。ノイズウェーブ経由だと感度が悪くて骨が折れるわね』

オリヒメはホッと胸をなでおろした。しかしすぐに表情を引き締めて凛とした。和風美人の魅力に興味ないソウル・レイダーは無愛想な態度だ。

「一体何のようです？」

『シドウ君やジャック君とツカサ君の試合もだけど、アナタ達の試合の様子も確認しようと思ってね。もしかして思わしくない状況なのかしら？』

オリヒメは察知して、雲行きの怪しい顔をした。

オックス・ファイアが割って入って言ってやる。慌てている様子からオリヒメも状況を理解した事だろう。

「ブロロ！　今、ピンチなんだよ！　敵の銀河連邦が強すぎるんだ。それに変な電波変換を使うしよ。夜太郎さんがまったく手も足も出ないんだ」

『何ですって？　夜太郎さんが今戦っているっていうの？　まさか、あの人が……』

「ええ、夜太郎さんが選ばれちゃって……。しかも敵は普通の電波人間じゃないし……」

ハープ・ノートも覗きこんできたので、ソウル・レイダーはエア

ディスプレイを拡大表示させた。オリヒメは思考を巡らす。

『相手は一体何者なのかしら？』

そこはソウル・レイダーだ。

「恐らく、自分の体を機械化したサイボーグだと思います。それによって信じられないシンクロ率を実現しています。そうやって、電波変換における我々との不利を覆しているのかと」

『……なるほど。事情は分かりました。そして今まで、夜太郎さんはどういった風に戦っていたのかしら？　ちょっと気になる事があるから、教えてもらえるとありがたいわ』

オリヒメは心当たりがあった様子で問いかける。スコープ・スナイパーが答える。

「そんなの必死に戦っていますよ！　さっきまで良い勝負してたのに……」

しゅんとした後、キミドリはやけくそ気味に叫んだ。

「やっぱりジャミンガーじゃ勝てないっていうのー！？」

オリヒメはやっぱりと言いたげに、何やらキーボードを叩きだした。どうやらオリヒメはオペレーションルームにいるようだ。忙しくオリヒメの後ろに人が行き来している。ハートレスも様子を気にしているようだ。

『夜太郎さんはジャミンガーのままで戦っていたのね。無茶するわね。……ちょっと、例の天地君のデータを調べてみるわ』

ソウル・レイダーはオリヒメの意味深な言葉に反応した。

「それはどういう？」

『おおーと！　エメリオル選手！　とうとう夜太郎選手たちを完全に叩き伏せてしまったぞ！　これは勝負有りかー！？』

もう時間がないようだ。

『やっぱりそうだわ……』

オリヒメは、口に手を当てハッとしたように息を呑んだ。

『判明した天地君の解析データによると、夜太郎さんがただのジャミンガーではない事が分かったわ』

オリヒメは早口で続けた。

『とにかく時間がないようね。電波変換用の修正プログラムはオーＰＧＭに組み込んであるから夜太郎さんに、再電波変換するように言って！』

ソウル・レイダーもすぐに事の概要を察知したようで頷いた。

「そうでしたか。了解しました。それでトランスコードは？」

『空きポートのトランスコードである０２５よ。アクセス権限は、もう夜太郎さん譲渡してあるから』

ソウル・レイダーは夜太郎に向かって叫んだ。

「夜太郎さん！　もう一度、電波変換して電波人間になってください！　トランスコードは０２５です！」

地面に転がる夜太郎はよろよろと立ち上がり、エメリオルを迎え撃とうとしていた。しかし、どう見ても勝ち目はない。

ただソウル・レイダーの言葉に驚いたよう様子で、口をぽかんと開け放った。面白いように血糊が地面に落ちていく。

「電波人間ですって……？　私は、しがないウイルス人間のジャミンガー……そんな事」

すると夜太郎の目の前にエアディスプレイが展開した。オリヒメが夜太郎にアクセスしたのだろう。

『あなただって心当たりがあるはずよ？　メトリーがただのウイルスでない事や、ＷＷＲの改造について……ね。

とにかく今度は電波人間になれるようにサーバーを調整しておいたから。――早く！！　急いで』

夜太郎は以前、天地にＷＷＲの事についてデータ解析をされていた。そうして得られた結論がある。

それはメトリーがウイルスではなく限りなくウィザードに近いウイルスウィザードに変異してる事。そしてジャミンガーにしては高い戦闘能力を持っている夜太郎の事。そして何より、メトリーと夜太郎の間には十年以上もの時間を共にした絆がある事。

ただの普通のジャミンガーなら、エメリオル相手に大立ち回りなど演じられるはずがない。現実は魅力的なのだ。

夜太郎はゆっくりと頷いた。そばで横たわるメトリーに手を差し延ばす。

「立てますか、メトリー？」
「うん……。ありがと」
エメリオルはその温かな光景を見ると笑った。
「フフ。まだ立ちますか。今の私の力量を測れない訳ではないでしょうに。いい加減負けを認めないと死んでしまいますよ？」
そして百メートルスプリンターの如く凄まじい勢いで突っ込んでくる。その動作は無駄がなくすばやくて、そしてその巨体に似合わず、不気味に格好いい。
ジャミンガーはエアディスプレイをもう一つ展開させた。そしてサテライトサーバーにアクセスする。そこには『Ｔｒａｎｃｅ　ｃｏｄｅ　０２５　Ｇｒｉｔ　Ｍｅｔｒｙ』と記されていた。
「私はまだ諦めません。メトリー電波変換だ！」
メトリーはコクンと頷いた。
「本当の強さは、そんな冷たい機械の体じゃ手に入れられません。私とメトリーの絆でアナタを倒す！」
「うん！　夜太郎！」
「トランスコード！　０２５！！　グリット・メトリー！！」
メトリーが炎のように揺らめくとジャミンガーを覆い包んだ。そして、優しくも温かい抱擁の中、一人の電波人間が形を作り始める。淡い緑の抱擁が弾け飛ぶと、死神の電波人間が姿を現した。
透明のヘルメットの中に緑の脳内信号が目まぐるしく行き来している。

バイザーの奥には夜太郎の凛々しい瞳が映っている。体色はクリーム色でスマートだ。男らしくもありどこか乙女のようなしなやかさも感じさせる。

防具類は無駄なアーマーを排除して背中にマントの一つだけだ。そしてツルハシが変化したようで真っ白な大鎌を携えている。それがクリーム色との調和的な色合いで、鮮明な印象を受ける。乙女と男の危険な融合。まさにこの電波人間は死神のようだ。

エメリオルは勢いのままグリット・メトリーを殴りつける。しかし軽い身のこなしで危なげなく避けた。

エメリオルは感嘆した。立ち止り、そして肩を上下させてこもった笑いを上げる。エメリオルはやはり紳士の上っ面を被った戦闘狂なのだ。

「地球のサラリーマンさん。そんな力を残していたとは……驚きです！　さあ、楽しくなりますぞ！！」

「今の私はサラリーマンではありません。ウイルス電波人間のグリット・メトリーだ！」

グリット・メトリーは大鎌を振り抜いた。鮮烈な突風がリング場を駆け巡った。

グリット・メトリーが大鎌を振るう。エメリオルが片腕を盾にして受け止める。金色の鎧に僅かな傷が付いた。エメリオルは驚いたように目を見開いた。しかしすぐにそれを悦びに変えた。

嬉々としてエメリオルが殴りつけると、グリット・メトリーは一瞬で背後に周波数変換して華麗にかわす。グリットメトリーが、大きな背中に大鎌を叩きつけた。

「ぬうっ……！」

意外にもエメリオルは体勢を崩した。これは意外すぎる。どんな攻撃にも微動だにしないのがエメリオルだ。だからこれには何かあるのかもしれない。

「硬い！　でも、さっきまでと違って効くぞ！」

グリット・メトリーもこれには、確かな手ごたえを感じていた。だが、同時に体の違和感も一緒にせり上がってきていたのだった。痺れた手元より、忍びよる魔の手のようだ。

だが、さっきまでと違い戦えている。この事実は大きいはずだ。

『さあ！　殲滅要塞対ウイルス電波人間の戦いもいよいよ大詰めです！！』

エメリオルはいったん後ろに下がり、距離を取った。
そして具合を確認するかのように二、三回だけ指を屈伸運動させた。関節の隙間から、武骨な内部機構が顔をのぞかせる。

「ふむ。では……、行きますよっ！！」

そう一喝すると、大気は縮みあがったかのように小刻みに震えた。まさに空間を従えている。

「せえいっ！」

何を思ったか、エメリオルは闘技場の床である鉄板を、シールでもはがすかのようにひっぺ返し出したのだ。そしてその巨大板をグリット・メトリー目がけ投げつけてくる。五メートル四方の特大手裏剣だ。
小石を投げているかのようだが、その殺傷能力は石つぶての比ではない。

『おーと！　エメリオル選手！　床の鉄板を手裏剣のように軽々と投げ始めたぞ！　何と言うワイルド！！　名付けて『ワイルドシュリケン』だー！』

当のグリット・メトリーは、目も覚めるような小粋なネーミングに目もくれない。
ツルハシが変化した専用武器である『マトックデスサイズ』をただただ強く握りこむのだった。
周波数の脈動が、確かな鼓動として力強く流れ込む。すると、息を吹き返したかのように、湾曲した部分が緑色に輝き始めた。

「ジェネレイトスイング！」

ついに工事現場の死神がその本領を発揮するのだった。上腕二頭筋の伸縮に気持ち良く力を乗せると、空気が悲鳴をあげながら割れる。

恐れをなしたかのように手裏剣が不安定に振る舞う。そう思った途端、爽快な空気の暴力が鉄の板を全て細かく切り刻んだのだった。図らずともやはり工事現場の死神だけあった。ほんの一瞬にして砂利道が出来あがってしまう。

『す、素晴らしいです！　グリット・メトリー選手もゴールデン・エメリオル選手に負けてはいません！』

エメリオルは指先を揉みながら、付着した汚れを落としている。ぱらぱらと落ちる砂が、まるで砂時計のように占なって見える。そう、グリット・メトリーの敗北への秒読みだ。

「中々やりますね……」

エメリオルの賛辞の言葉にグリット・メトリーは頭を下げた。しかしもちろんお礼を言っている訳ではない。伏し目がちに、三日月のように変形した目が痛苦な印象を与えた。

「……クッ」

『夜太郎……苦しいの？』

「いや……何でもありません」

グリット・メトリーは胸を押さえている。苦しそうにも、強がりのから元気を強いられているのである。

（やはり……、さっきまでのダメージが……。メトリーもきっと、

苦しいはず……）

グリット・メトリーが淀んだ思考の海の中、光明を見出そうと泳ぐ。しかし、どうにもこうにも分が悪い。どう考えても体が限界に近いのだった。

確かに電波人間になった事により、身体能力の飛躍的な向上は果たされた。だが、基本的な肉体の悲鳴は都合よく消えてはくれなかった。

ましてや電波人間状態での初戦闘だ。つま先から徐々にせり上がって来る清濁入り混じった体の違和感が、ひっそりとじっとりとにじり寄って来るのである。

それが確かな諦めとなってグリット・メトリーの脳内に侵入してくるはず。それに親しみを覚えた時、試合が終わる。

もう時間がない。

グリット・メトリーは体に鞭を打ち、大鎌の柄に十本の指をきつく巻きつけた。

エメリオルは、肩を落とした。目の前の電波人間のシンクロ率が急激に低下しているのが見て取れたのだ。それに杖代わりにした大鎌で、体を支えている光景のおまけ付きだ。嫌でも見て分かる。

確かに指をきつく巻きつけていないと、嫌でも倒れてしまうのだろう。

「なるほど。そうだったのですか……。アナタの体は限界だったのですね。残念です」

どこか白々しいその態度は、強者より送られる憐れみだ。

結末を迎えようとエメリオルは、例の超常現象を発生させるフィールドを展開した。エメリオルの影が潰れた餅のように広がり一定域ある不可思議な場が出来る。

そうなると、たちまち技術力の塊である大量破壊兵器が、彼の体を守り固めるように構築される。
ごつごつとした彼のシルエットはもはや人間ではない。左腕にM・B・H・C。右腕には相転移砲が五門。さらに両肩からは陽電子砲と反粒子砲の四門が長い砲台を伸ばしていた。獲物を探すかのように砲身は新月のように真っ黒な砲口を左右に振らせる。
エメリオルはグリット・メトリーを獲物として捕らえた。

「万全の状態で今のアナタと戦いたかった」

いよいよ後がない。堪らずメトリーはグリット・メトリーから分離して、子供のように必死に呼びかける。
ただ、ここで逃げれば間違いなくメトリーは助かる。だが、それは出来なかった。グリット・メトリーはまだ諦めていないのだ。

『苦しいんだね夜太郎!?　でも私も頑張るから……!　諦めちゃダメだよ?　辛くても私も一緒だから!』
「大丈夫です。メトリーが付いている私に怖いものはありません。銀河の大佐だろうと何だろうと……」

強がるグリット・メトリーは、優しくメトリーを落ち着かせる。
だがエメリオルが、真円で真っ黒で吸い込まれそうになる、新月をグリット・メトリーに突きつけた。その数は十個。素晴らしく具体的な絶望に、事実グリット・メトリーは逃げてしまいたかった。
正直なところ「諦めていいんだよ」と誰でもいいから言ってほしかった。だが、誰もそんな事は言ってくれない。しかしエメリオルだけが絶望の上にさらに刺激的な言葉を送ってくれる。

「私は銀河連邦アンドロメダ宇宙軍大佐エメリオル!　アナタを三一一億二三三四万三四七六番目の戦士として、連邦の慰霊碑に刻み

込ませてもらいますぞ！！」

目も覚めてしまいそうな、響き渡る迫力だ。だけれども、グリット・メトリーはもう眠ってしまいたかった。

辺りにはびこる空気に、虫の知らせのような漠然としたものを受信した。それはロックマンだ。

「夜太郎さん！」

ロックマンが闘技リングに入ってこようとしてくる。しかしグリット・メトリーは、思いとは裏腹に、気持ちとかけ離れて馬鹿馬鹿しい行動を起こす。手をかざして待ったをかけたのだ。

ロックマンはなりふり構わず叫んだ。実利と道徳の間で揺れている。グリット・メトリーがひとたび助けを請えばすぐに駆けつけてやりたい。だが、グリット・メトリーは頑なに拒んだ。

「夜太郎さん！　強がっている場合じゃないって！」

「私は戦います！　終わってもいない勝負を終わらせるのはダメです。可能性は残っているんです。ほんの少しだけどまだ可能性が残っているんです！」

何故か拒んでしまう。本当の心は恐れをなしているのに。もっと奥底に潜む心情はこれとはまた違った答えを見出しているのだろうか。

「何でですか夜太郎さん！？」
「私を信じてください！」
「でも！」

ロックマンが勝負に入ってしまえば、もちろん反則だろう。それで試合は終了だ。そんな自分の情けなさの為に全てを終わらせたくはなかった。行き過ぎた責任感にグリット・メトリーは命を懸けていたのだ。もとより、裏の世界で意味も無くたゆたっていた命。少年達の未来の為に懸けられる価値だけは、せめて見出しておきたかった。

「私の命で、ほんの僅かな可能性だけでも繋ぎ止めておけるなら、私はそれで十分です。そこに僅かな可能性があるなら、どうしようもないこの命を懸けてみたいんです！」
「……なんで、そんな事言うんだよ！」

ロックマンはもう我慢できない。走り出そうと身を乗り出す。防護フェンスをグレイバスターで破壊した。
だがスコープ・スナイパーがロックマンを制止した。どうやって着色したのか、その声色は凄まじく落ち着いている。

「やめな、スバル。夜太郎さんの気持ちを汲みとりなさい」
「キミドリ……さん？」

「私たちに出来るのはあの人を信じること……！」
「でも、それじゃ間違いなく……」

スコープ・スナイパーは首を振った。そして突然の満面の笑顔だ。
なぜそこまで笑っていられるのだ。なぜそこまで信じられるのだ。

「ううん、夜太郎さんは勝ってくれる！　だって、あの人は強いもん！　ダーイジョウブだって、スバルン！　心配するなってー」

肩を大きく叩いた。叩かれたら体勢を崩す。

「ちょっ……」

スコープ・スナイパーは困惑するロックマンに構わず、グリット・メトリーに言ってやる。

「夜太郎さん、頑張ってー！　私、絶対勝てるって信じてるから！」

ふふと笑いグリット・メトリーは小さく呟いた。

「ありがとう……」

その時グリット・メトリーは、何故か家族の事を思い出していた。
何故だろう。そんな余裕はどこにもないはず。

十年以上昔だ。綺麗だった妻。可愛い小さな娘。まったく夜太郎に似ておらず本当に可愛かった娘だ。夜太郎にはもったいないくらいだった。
だがある日、会社をリストラになって妻に逃げられた。
そして別れの日だったか。女の子は泣いていた。『どうして離れ

離れになっちゃうの？　パパは何にも悪いことしてないのに』と言って、最後まで夜太郎の元を離れようとしなかった。

女の子は知らなかった。社会という名の見えない斥力が、体面や小汚いプライド、子供には縁のない下らない思惑などを増長して家族を引き離しているのだと。だから女の子は泣いていた。必死にしがみついていた。

純粋で可愛くて、底抜けの明るさを持っていた女の子。あの時は幼かったが、きっと今は成長して、妻に似て美しい女性になっている事だろう。

そんな女の子は夜太郎の事を最後まで信じていたのだ。『私、パパの事信じているから……！　大スキだから！！』その言葉だけが今も夜太郎の胸に残っている。

夜太郎は戦う。もう会えなくても、地球には家族が生きているのだから。

だから夜太郎は戦う。たとえ感謝されなくても、どこかで生きていて欲しいからだ。

「さあ、メトリー。やりますよ」

向かい合う先はただただ眩しい。エメリオルの武装が煌煌と輝いているのだ。まるで蛍でも集まっているかのようだ。見ようによっては、美しいとさえも、儚いとさえも思える。グリット・メトリーは安堵した。最後に大きな献花を添えてもらえるような気がしたから。

「地球人さん。どうやら素晴らしい仲間をお持ちのようで……」

「私にはもったいない人達ですよ。でも、……最高の仲間です」

「フフフ。ですが、負けてあげる訳にはいきません。そして、アナタのその意思を尊重して手を抜いてあげる気もありません」

「私だって、勝つつもりで行きます！」

エメリオルの、輝きがより一層のものとなった。七色に輝く、未知の素粒子の明滅に目を奪われる。だが、皮肉にもこれは殺人に特化している輝きだ。まるで恥じらいの乙女のように、驚嘆たる殺意を輝く美しさの化粧で隠している。可笑しくて、可愛くて、うっとりとした笑みがこぼれてくるではないか。

だが、しかしだ。その中心で輝いているのが、逞しく脂汗に彩られた、乙女とは言い難いエメリオルだから笑うに笑えない。しかしエメリオルが金色の歯を見せて笑った。彼の色を見る限りどこを見ても落ち着ける場所はなさそうだ。

『夜太郎』

夜太郎も鎌を持ちあげて構えた。バトルカードを入力しながら、エメリオルの背後に回り込もうとする。伴って大きく迂回しながら闘技リングの縁をなぞるように旋回するのである。

「うおおおー！！　バトルカード、ムゲンバルカン！」

走りながら、バルカンを撃ち続ける。そして体は悲鳴を上げる。だがエメリオルの方からさらに大きな悲鳴が鳴り響く。

「全砲門一斉解放！！　ビッグバンストリーム！」

極太の熱線だ。いや、絶対不可侵領域とでも言えようか。それほどまでに広大な、破壊力それそのものの帯だ。

そんな化け物の前に、バルカンの弾は一瞬にして蒸発した。超絶に理解の範疇を超えた力の奔流の中に呑みこまれたのだ。

熱線を開放したままエメリオルは体の向きをゆっくりと徐々に変

える。鬼ごっこの要領でグリット・メトリーを呑みこもうとするつもりだろう。だが装備が重いのか、疲れが見え始めたのか、精彩に欠けた動きである。まるで固定砲台のようだ。

恐らくは、エネルギーの解放に対する反作用のせいだろう。後ろに吹っ飛ばされないようにするだけで精一杯らしい。そこからさらに方角を変えてくるのだから、それだけエメリオルは恐ろしい。

『なんだ、これはー！　まるで、オニゴッコのようだ！　捕まったら、グリット・メトリー選手の命が消し飛んでしまうことでしょう！』

しかし、ゴールデン・エメリオル選手の熱線が徐々に詰め寄ってくるぞー！』

「流石に、全エネルギー解放中では動きが鈍りますね……」

そうは言うが、グリット・メトリーを背後から徐々に追い詰めていく。光の熱線が追いすがっていく。たなびくグリット・メトリーのマントの端が消滅した。まるで何事もなかったかのように、消しゴムで消されたマントは本来の形を喪失した。

『これは、まずいぞー！　グリット・メトリー選手のピンチ！』

『夜太郎！』

灼熱の壁を背にしてエアディスプレイをタッチする。

「くっ。バトルカード、クイックゲージ！」

するとグリット・メトリーの走る速度が途端に上がった。そのままの勢いで、螺旋模様をなぞりながらエメリオルに近づいていく。

回転半径が狭まるにつれエメリオルが辛そうに、苦虫を噛み潰したかのように、眉間にしわを目一杯作り出す。荘厳なその渓谷に噴き出した汗が居場所を求めてなだれ込んでいく。エメリオルもかな

りの集中力だ。

「やりますね！　では、こちらも……。うおおおお！　エネルギー１２０％全開！　ビッグバンストリーム・ザ・ワールド！！」

さらにエメリオルの絶対不可侵領域が数倍もの太さになった。もう帯というよりも、一つの世界が出来あがる。

グリット・メトリーも残された全てを出し尽くして、決死の覚悟でかいくぐる。エメリオルこそグリット・メトリーを消滅させようと必死になってエネルギーを開放し続ける。

しかし、エメリオルの武装が耐えきれなくなったのか、砲身が徐々に溶け始めた。さらにエメリオルの体の色も金色ではなく、段々灰色に移ろっていく。間違いなく異常事態が彼にも起きているのだった。

ｂｏｎｄｓ―０５：熱い鋼鉄ハート

（うぐっ……。マズイですな……あの地球人の方がここまで粘るとは……。

やはり無理な電波変換に機械骨格の方が悲鳴を上げ始めましたか……。勝負を急がなければ）

どうやら、エメリオルの体も限界が近づいてきているらしい。無茶苦茶にシンクロ率を引き上げたために、いくら機械骨格であろうとも徐々に無理が生じてきているのだ。エメリオルが地球人に憧れる所以が露呈し始めたのであった。所詮は紛い物の電波変換ということか。

そして、ついにグリット・メトリーはエメリオルの背後をとった。弾け飛んだ円の中心で叫ぶ。

「うおおお！　バトルカード『キャノン』『メガキャノン』『ギガキャノン』ギャラクシーアドバンス『エクサキャノン』」

白い閃光が、エメリオルの背中を激しく砕いた。そう、砕いたのだ。エメリオルの灰色になってしまったアーマーが陶器のように大雑把に崩れていく。彼の発生させていた、絶対不可侵領域も鎮火してしまった。

「ぐおあっ！」

エメリオルはとうとう、勢いのまま地面に手を突いて四つん這いになってしまった。エメリオルは肩で息をしている。やはり疲弊しているのだ。
それ以上に限界を超えているであろう、グリット・メトリーは地面に鎌を突き刺した。

「はあ……はあ……どうです？　負けを認めるのはそちらのようですよ？」

グリット・メトリーは地面に突き刺した鎌に身を任せ、ずるずると崩れ落ちる。もう立つ事も出来ないのだろう。
しかし、エメリオルも倒れたのだ。この試合でやっとエメリオルに地面の冷たさを味あわせる事が出来た。
その事実にロックマンとオックス・ファイアは手を取り合って喜んでいる。男同士で、脇目も振らずに純粋な感情を丸出しにしている。

「す、すげえ！　夜太郎さんが押してるぜ」
「なんか知らないけど。敵が弱っているよ！」

ハープ・ノートはそこで疑問に思った。当然と言えば当然である。

「あのオジサン。いきなり防御力が弱くなったような気が……」

ソウル・レイダーはだんまりだ。見当はついていたが言わない。ついていたからこそ言えない事もあるのだ。

（おそらく……。アイツの機械骨格が限界を迎えたんだ……。無理もない、あんな電波変換が成り立つ事自体が常識はずれなのだから

な）

そこに優しいお姉さんであるスコープ・スナイパーが言ってやる。

「そんなの決まっているじゃない！　諦めない私たちに夜太郎さんが奇跡を起こしたんだよ！」

オックス・ファイアは納得した。

「なるほど……！」

ロックマンも今回ばかりは鵜呑みにした。

「奇跡か……。確かにそうかも！」

実況もいよいよ熱狂している。

『なんと！　エメリオル選手が地面に突っ伏したー！　誰が予想したでしょうか？　こんな事態を！』

だが、アンドリュード人一のタフさと正義感を持つエメリオルはまだ終われない。生粋のエリートである銀河連邦の中でもさらにエリートなのだ。彼にも、数多くの背負っているものがある。

エメリオルこそ負けられないのだ。

「私は負けられない……！」

するとどうだろうか。信じられない事が起きた。

「がんばって！　エメリオル」

エメリオルに誰かが応援を送ったようだ。小さな男の子の声だった。そんな心優しい彼が会場の客席にひょっこりと現れたのだ。

エメリオルは不思議そうに観客席を見上げた。

すると、見せつけてくれる。ぞろぞろと観客が戻ってきたのだ。

エメリオルを応援しに舞い戻ってきたのだ。

男の子が呼び掛ける。まだあまり機械化されていない可愛い男の子だ。エメリオルをヒーローだと信じているのだ。言ってしまえば星の数だけ正義がある。しかし、幼い子供のヒーローはいつだって同じだ。強くてかっこよくて優しくて――

エメリオルもヒーローたる資格はある。誰だって、いつだって、どこかの誰かのドラマの主人公になれるのである。

「がんばれーエメリオル！　地球人の悪い人をやっつけてよ。だって銀河連邦は正義の味方なんだもん！」

男の子に続き、女の子が。すると男の人が、女の人が、となだれ込むように次々とエメリオルに力を分け与える。ロックマン達は驚いたように辺りを見渡す。アウェーだとは確かに言っていた。

だが、どうだ。そう言った意味じゃなかった。この惑星には信じるべき英雄がいたのだった。今まさに相対している敵がそうなのだ。敵であるはずの存在が、守るべき者たちの絶対の指標であり、正義であり、目標であり、子供の夢であり、たった一つのヒーローの形を作っているのだ。

ロックマンは特にそうだが、グリット・メトリーにも相当に堪える。何とも言えない漠然とした良心の呵責に、幼い子供の声が鈍器となって叩きのめす。あらゆるブーイングよりも涙を誘い、力を削がせる。形のない優しすぎる悪意に目が回る。

「がんばれー！」

「負けるな！」
「エメリオルはヒーローじゃ！」
「宇宙を救ってくださーい！」

銀河連邦の隊員の一人は嬉しそうに皮肉った。この星の人々は確かに冷たい機械だ。だが心までは効率化できなかったようだ。

「危険だから、立ち入ってはいけないと言ったのに……。まったく最高に熱いハートを持った人達だな」

エメリオルはゆっくりと立ち上がった。灰色になって出がらしとなってもなお、そびえ続ける。まだ、エメリオルの熱い心は死んでいない。

「私にも譲れないものがあるんです……。ここまでして私を応援してくれる人たちの為に私は負けられない！！」

エメリオルは腰にぶら下げていた銀色の剣を抜いた。覚めるような煌めきと閃光を放つ美しい刀身に、エメリオルの熱くたぎる瞳が映っている。

「なんですって……！？　まだ立ち上がれるなんて……」
「さあ、アナタも渾身の力をぶつけてください！　私を英雄だと言ってくれるこの星の人達の前で、正々堂々と素晴らしい幕引きとしましょう……！」
『がんばって夜太郎……！　私だって夜太郎の事をヒーローだと思っているから！』
「くっ……！　でも力が入らないんです……！」

会場の雰囲気に呑みこまれてしまった。辺りはエメリオルに対す

る声援で一杯だ。まるで本当に自分が悪者ではないのかと思ってしまう。

名実ともに英雄である、エメリオルに刃を立てて良いのか、と疑問に思ってしまった。

「負けるな、夜太郎さん！」

思いやりの温もり溢れる絶望の中、ロックマンが呼び掛けた。

「夜太郎さん！　頑張って！」

ハープノートもだ。とにかくロックマンは訴え続けた。

「夜太郎さん！　地球を守るんでしょう！？　この惑星の正義は銀河連邦にあるのかもしれないけど……。

でも、夜太郎さんの正義は夜太郎さんの中にあるはずですよね！？」

ソウル・レイダーは会場を見渡して、呆れたように呟いた。しかし、清々しいものを感じたはずだろう。

「フ……。正義とは色々あるものだな……。後は夜太郎さん次第だ……」

グリット・メトリーはチームの声援を受け何とか立ち上がった。だが、それは上っ面だ。弱々しく、エメリオル一色に染まった空間で所在なさげに佇んでいる。鎌を構えてみせるが、どうにも頼りない。

「私の正義……。それは、何か分かりませんが……。で、でも私も負けられないのは確かです……」
「ようやく、立ち上がりましたね。フフ、お互いボロボロだ……。これが最後の一撃となりますね」
会場は沸き上がった。だが、グリット・メトリーはその興奮の渦が巨大なものになるにつれて、言い様のない孤独感に襲われた。
「どうしました？　手が震えていますぞ？」
エメリオルは対照的に美しい動作で乱れない構えを見せてくれた。これをお手本に出来ればいいが、出来はしない。
「う……くっ」
『夜太郎……大丈夫だよ？』
そこにメトリーが姿を現してくれた。試合開始の時のように優しく、鎌を持つ手に柔らかいその手を重ねてくれた。
その手は柔らかかった。温かくて夜太郎はその感覚に安心したようだ。ゆっくりとメトリーの方に目線を下ろす。するとどうだろうか。あの時の小さな女の子がいたではないか。髪の色こそ違うが、思い出と重なる可愛らしい女の子だった。
「メトリー……。その姿は？」
「分かんない……。夜太郎と電波変換した時にちょっとおかしな感覚になったけど、その時にこうなっちゃったのかな？」
困ったように頭を抱える。すると不意にメトリーは、にかっと笑った。考えなしの屈託のない笑顔だ。幼いが故の純粋な無垢さに、

夜太郎は心が洗われるような気がした。こんな笑顔の前だと、正義だの、覚悟だの、少しの体面と自己意識に装飾されたエゴイズムなどは甚だ馬鹿馬鹿しくなった。

この笑顔を守りたいから戦う。それだけだ。その為にその大鎌を持てる力の全てで振るう。それだけだ。

夜太郎はもう色々考えるのは止めた。メトリーを見ているとそう思えたのだ。

メトリーがキュッと夜太郎の手を握り締めた。小さいながらも力強く、彼女という個を夜太郎はしっかりと感じた。

「私ね、十年以上も夜太郎と一緒にいて分かった事があるんだ。それはね……夜太郎がいっつも家族の事を想っているっていう事だよ！夜太郎は思い出の中の、あの女の人と女の子を今でも大好きなんでしょ？」

夜太郎を見上げて送られるのはメトリーの笑顔だ。夜太郎の娘の笑顔だ。夜太郎に勇気が溢れてくる。

メトリーはギュッと夜太郎にしがみついて言ってやる。まるで本当の親子のようだ。

「だからね。私はそんな優しい夜太郎の事が、とーっても大スキなんだよ！」

今までの一番の笑顔だ。戦いという場に置いておくには罪の意識を感じさせる。それほどに、平和的で、普遍的な優しさが込められていた。

夜太郎はメトリーと真っすぐ向かい合うように屈んだ。メトリーの大きな瞳に吹っ切れた様子のグリット・メトリーが映っている。

メトリーの頭を撫でてやった。綺麗なウェーブのかかった髪の間で表情をくすぐったそうにメトリーが喜ぶ。

「ありがとうな。メトリー」

そう言うとメトリーが夜太郎に抱きつく。すると二人はまた一つになった。

グリット・メトリーは立ち上がって、エメリオルと向かい合う。もう気圧される事もない。

「待たせましたね」

そして何もかも払拭したグリット・メトリーはマトックデスサイズを構えた。ボロボロながらも最後を飾るにふさわしい、満ち満ちた気概に溢れている。

「ふふ。さっきのお嬢さんに力を貰ったようですな。ですが私も、この星の人々から力を貰いましたよ」

「ええ、行きましょうか。エメリオルさん」

「ですな。夜太郎さん」

会場に沈黙が走った。どこをとっても二人の男の行く末を見守っている。

『さあ……いよいよです』

そして灰色の足と、クリーム色の足が同時に地面を弾いた。地面に、跳躍した電波人間の影が二つ落とされる。二つは互いを求めるかのように、影から伸びる鋭い得物を突きだし合う。

まず鎌の刀身が、剣の刀身と混じり合った。その影絵は目を飽きさせずに、何度か形を変えて互いを打ちつけ合う。けたたましい音

が鳴り響く。そして一拍だけ置くと小さなうめきにも似た鈍い音が鳴り響いた。交差した刀身の影絵から一つの影が分離し始める。それがやがて大きくなり、金属の破片が影ではなく色を伴った実物として地面に転がった。その破片が役目を終えたかのように、二、三回だけ手を振って見せるとやがてぴたりと動かなくなった。

　すると砕かれたそれは、その磨かれた刃で上空の二人の様子を映し出してくれる。映っていた光景は砕かれなかった方の刃がもう一方の影を一閃した瞬間であった。すると赤い飛沫が飛び、地面を赤い水玉で装飾した。

　二人は同時に着陸した。

　グリット・メトリーは着陸すると同時に崩れ落ちた。地面に身をゆだねて、微動だにしない。呼吸が荒い。うまく息が出来ていないのだろうか。メトリーがグリット・メトリーをゆすって呼び掛けている。目には涙が溜まっていた。それが溢れて、グリットメトリーの黒いバイザーに吸い込まれていくのだった。

　その様子をひとしきり見て、エメリオルは手に持った銀色の剣を改めて確認する。そして、落ち着き払った口調で言ってやるのだった。

「素晴らしかったですぞ」

　エメリオルは、砕けてしまった自分の刃を見ると、薄く笑みを浮かべた。地面には煌めく銀色の刃が転がっていた。

「お見事」

　称賛の言葉を送る。エメリオルは、芯が抜けた人形のように倒れてしまった。ピクリとも動かない。赤い電波情報が砕かれた装甲の間から止めどなく溢れている。じわじわと赤い領域が広がっていき、

それが赤信号となって観客と実況に知らしめたのだった。

メトリーはいまだなお夜太郎に呼び掛ける。

「夜太郎！　夜太郎！」

「はあっ……！　はあっ……！」

「夜太郎！　大丈夫！？」

グリット・メトリーはにっこりと笑い、メトリーを安心させてやる。

「わあ、よかったあ。夜太郎、立てる？　肩を貸してあげようか？」

「いやいや、メトリーの肩じゃ貸せてもらえないよ」

そう言いつつ、体の節々を労わる老人のようにグリットメトリーは鎌を杖代わりに立ち上がった。その鎌は所々刃こぼれしているが砕けずに堂々とした姿を見せてくれている。夜太郎の純粋な思いがエメリオルの正義を砕いたのだ。

「えっと？　これは……？」

グリット・メトリーは良く分からない様子らしく辺りをキョロキョロしている。

メトリーが夜太郎に抱きついた。それが合図だ。

『これは……決まりですね。

勝者！　地球のサラリーマンことウイルス電波人間グリット・メトリー！！』

ｂｏｎｄｓ―０７：試合の果てに

試合の結果を聞くや否や、ロックマンを筆頭にして夜太郎の元にチームの皆が駆け寄った。勝利を祝うのだ。

「すごいです！　夜太郎さん！」

「本当に勝っちゃうなんて！　グス……私、心配したんだから……！」

「ブロロ！　アンタは男の中の男だぜ」

「良くやってくれました。夜太郎さん」

「スッゴーイ！　さっすがの夜太郎さんだったね！」

疲れきっていた夜太郎は一度だけ微笑むと眠るように倒れてしまった。返す言葉もなかったのだろう。

しかし、その結果を思わしくなく受け止めている輩がいた。ロックマン達の陣営とは対照的に、酷くどんよりとした重い空気が流れている。

「くそ！　我々、銀河連邦が敗北するなど……！」

チームアンドリュードの一人が地団太を踏んでいた。

「こうなったら、力づくでも……」

一人の異端分子が発生するとガンのように増殖していく。

「そうだ。こっちの方が数が多いんだ！」

「地球の田舎人に負けておめおめと帰ってられるか」

するとたちまち得物を片手に、銀河連邦の軍人達が戦闘意欲を見せ始めた。

『ちょっと！　銀河連邦の皆さん。もう試合は終わってますよ？』

「試合など関係ない！　不慮の事故がこれから起きるので、我々が第二試合に進ませてもらう」

ものは言いようだ。不慮の事故を予言してみせるジョークに肩腹が痛い。

ただ観客席もざわつき始める。明らかに異様なそれに気が付かない訳は無かったのだ。

だが実況もそこは裏の住人で深くは咎めなかった。

『まあ、試合と関係ない所でやるなら私は止めませんよ？　好きにして下さい』

ロックマン達も慌ただしく武器を構えた。こんな悪い意味でドラマティックな展開はお呼びでないのだ。

「なんでこんな事になっちゃうんだ」

冷静にもソウル・レイダーは剣を二本抜いて二刀流の型をとった。静かな闘志を燃やしている。喜んで迎え討つ気だ。

「銀河連邦相手にどこまで戦えるのか知っておくには良い機会だな」

そう言い、ソウル・レイダーは敵チームの陣営に斬り込んでいった。凄まじい速さだ。ロックマンは一瞬でソウル・レイダーが消えてしまったと思ったはずだ。

「新しい俺の力を見せてやる！」

もうソウル・レイダーは、敵陣中央に斬りこんでいた。とても絵に描いたような切り込み隊長だ。周りにいた二〇名あまりの銀河連邦軍人を攻撃半径に捉えている。

「コイツ！　いつの間に！！」
「はやい！」

剣にソウル・レイダーの周波数を流し込むと剣は力強く輝く。

「デトネイト……」

そこを野太い声が一閃する。ソウル・レイダーは何事かと思い、いったん敵の陣内から抜け出し距離をとる。

「やめなさい！　皆さん！！」

エメリオルだ。いつの間にか意識を取り戻したらしい。地面に這いつくばりながら訴えている。割れた装甲から、どくどくと血がとめどないがそこはタフすぎる彼の事だ。問題は無いだろう。
隊員の一人がばつが悪そうに弁明する。

「ですが……！　このままおめおめと帰る訳には……」
「良いのです。私が負けたのですから。完敗でした。これ以上は野

暮な真似というものです」
「では、我々はこれからどうしたら……？」
「我々にしかできないやり方で宇宙を救う他ありません。ＷＷＲについては地球人に任せるとしましょう」
隊員は反抗心を必死に宥めつつ何とか治まり所を見つけたようだ。渋々と了承した。
「分かりました。大佐がそう言うのなら、私もこれ以上は言いません」
「よろしい。それでは、素晴らしい試合を見せてくれた地球の皆さまに拍手を」
皆に促しながらエメリオルは手を叩き始めた。最初は寂しい単音が鳴り響く。するとロックマンがそれに続く。次は銀河連邦の軍人達だ。そうして最後には観客も続きだし、盛大な拍手へと成長した。
ロックマンは安心したように、夜太郎に肩を貸してやる。
「一時はどうなるかと思ったけど。夜太郎さん、たくさんの人がアナタの勝利を称えてくれてますよ」
ノイズウェーブトーナメント第一回戦、チームアンドリュード対チームダブルプリティーはチームダブルプリティーの勝利で幕を閉じた。
試合から数時間後。スバル達は電波変換を解いて機械惑星の高級ホテルで体を休めていた。この惑星は地球と環境が似ているようで

ある。もっとも周りは機械だらけではあるのだが。
　この高級ホテルはエメリオルの計らいでスバル達に提供されたものだ。どうやらエメリオルは良い人の様子だ。
　対して夜太郎はベッドで眠っている。致命的な傷は無いが疲労が凄まじいそうだ。しかし病院に行く必要があるかと言えば、それは無い。エメリオルが言うには、この惑星の技術力の結晶であるベッドで少しの間だけ寝ていれば全快らしい。素晴らしき科学力に頭が下がる。

　そして、チームの女性陣はメトリーと遊んでいた。パッと見が七歳かそこらの女の子なので可愛い盛りに見えてしまうのだ。ミソラの母性本能や、キミドリの純粋な好奇心がくすぐられるという訳だ。

「ほら、メトリーちゃん。私が持ってきたお菓子食べる？」
「うん！　ありがとう、ミソラ！」
「あう……。可愛い！」

　ミソラはすっかりメトリーの事が気に入ったようだ。ただキミドリは興味深そうにメトリーを見ていた。本当に興味しんしんと言った様子で、メトリーに穴を空けるほどの勢いだ。

「しっかし、まあ。夜太郎オジサンはけしからんですな。こんな可愛い娘と電波変換とは……。うーむけしからん。まったく何と言うオッサンだ。
　試合に勝ったからいいようなものの、負けていたらロリコン認定してやってやる所だったわ！」

　キミドリはオッサンのように低く呻きながら、良からぬ妄想に耽（ふけ）っている。

「まあ、確かにメトリーってこんなんじゃなかったよね。今は本当、人間にしか見えないよ。前はさ、もっと電波生命体っぽかったのに」

スバルは自宅で初めて出会った時のメトリーと比べていた。比べれば比べるほど劇的な変化だった。まず第一に足が付いているのが大きい。これが確定的に明らかな差異だ。

「でもさ、今の方が可愛いからいいもんね！　ねー、メトリーちゃん？」

「ねーミソラ？」

「やれやれ、ミソラちゃんはメトリーに夢中だな……」

とりあえずメトリーの事は女性陣に任せる事にしたスバル。ふと何となしにゴン太の方を見てみる。彼は備え付けられたテーブルに座って何かしているようだ。横には牛丼の空箱が積まれていた。

「ゴン太のヤツも相変わらずだな……。まあ、彼らしいと言えばそうだけど……」

暇そうにスバルは辺りを見渡す。そう言えば、ミライの姿がない事に気が付いた。

「あれ？　そう言えばミライ君はどこに行ったんだろう……？」

同ホテルの最上階の一室。ミライはエメリオルの部屋を訪れていた。電波化と武装を解除したエメリオルは、いかついだけのでかいオッサンだ。そんなエメリオルは。ある意味で夜太郎以上の大けがをしたはずなのだが平然としている。とりあえず胸に包帯を巻いているだけである。

そうして、普通に客人をもてなす。淹れたてのコーヒーをミライに出してやるのだった。

「ブラック派ですかな？」

「そんな事はどうでもいい。俺はアンタに聞きたい事があるんだ……」

ミライは無愛想に言いながらも、カップの中に砂糖の塊を一つ投下した。彼はエメリオルにどうしても聞いておかなければならない事があるのだった。

エメリオルは傷を労わるようにソファに腰を下ろした。

bonds―08：メカニカルバイオフレーム

見渡すまでも無く、エメリオルの部屋は大きくて広い。エメリオルが大きいのだから当然だ。ここでは、流石のミライもマスコットになってしまう。

おもむろにエメリオルはコーヒーに手を伸ばした。彼の指はとてもとても硬いので割れ物のカップを心配してしまう。

「そーれ」

どうしてだろうか。エメリオルはコーヒーを飲むのに邪魔な顎鬚を脱出させた。どうやらアタッチメント形式らしい。理非曲直とした彼の姿勢が見て取れる。アンドリュード人のファッションだろうが、地球人からしてみれば間違いなく非道な事だ。

分離した顎鬚はミライの前に置かれた。だがミライは気にするそぶりも見せない。コーヒーをすすっている。エメリオルのささやかなお茶目さは華麗にスルーされた。

「ぬう……」

エメリオルは肩を落として、鋼鉄の顎鬚をくっ付けた。まったくもって便利なものだ。

「いいかげん……本題に入ろうか」

ミライはコーヒーに映る自分を見つめている。真っ黒な彼だ。基本真っ黒な彼にはちょうどいい。

「では、聞きたい事とは一体？」

「お前の体についてだ」

「ふむ……。私の体に興味がおありですと……？　フウム……」

エメリオルは頬を染めた。厳ついながらも、なかなかの純情っぷりだ。彼は良い人に違いない。見た目が可愛くて、小柄で、オッサンじゃなくて、声もソプラノで、柔らかくて、男でなかったら歓迎できる。

つまりエメリオルは駄目という事になる。

コーヒーの表面に映るミライは、小刻みに揺れていた。彼の手が震えているのだ。当然、中に映る彼も歪んだものとなる。

「ですが、私は男の身……」

「や、やめろ……！」

エメリオルはいやらしく笑った。大きな口から綺麗な歯が整列して挨拶する。

「冗談ですよ！　……夜の帝王と呼ばれた、この私ですからご安心ください」

「と、とにかくだ！　お前の機械骨格について教えてくれ！」

ミライは危険を察知して、上ずり気味に話を切り返す。今はかろうじで太陽が昇っている。まだ、大丈夫のはず。夜の帝王はまだここにはいないはず。

するとエメリオルはとても立派な腕を交差させて、顎を引き、ミライを観察し始めた。

表情から分かる。幸い夜の帝王ではなく、銀河連邦の大佐としてのものを浮かべている。真面目に徹していた。
そして彼はただ者ではない。一瞬にして察知した。

「分かりますよ。アナタも限りなく私達に近い人種だ。だから、私達の事が気になる……。
そうでしょう？」
「ふっ……。良く分かっている」

ミライも調子を取り戻したようで安堵している。

「結論から言わせてもらいましょう。私達が採用しているメカニカルバイオフレームには二種類あります」

エメリオルは人差し指を立てる。

「まず一つ目は、戦闘用です。これは電波と人体の共有を極限までに高めるのが目的です。おもに銀河連邦の軍人が採用しています」

エメリオルは悪戯に笑みを作る。そして、肩が凝っていたの肩を二回ほど回した。すると呆気なく腕が肩から外れた。本当に爽やかに外すものだから、目の前でバラバラ事件が起きたとは認識させない。
躊躇せずに断面をミライに見せる。ミライは一瞬だけリアルな想像を巡らすが、中は思ったより綺麗だった。金属質な骨がオイルに照らされ健康的に輝いている。その周りを青白く光る綺麗な糸こんにゃくが覆っていた。

「ほら……スゴイでしょう？　この骨は電波との融和性の高い金属で作っているんですよ。地球にはない鉱石です。そして、この青い

人工筋肉は生身の肉体よりも運動能力に優れています」

少しだけもったいぶってエメリオルは凄んだ。ミライに大きな顔を寄せる。ミライは少し背筋を伸ばして逃げる。

「そして機械骨格の凄い所はシンクロ率にあります。これに深く関係するのが、生身の体で電波変換した時に、元の体の情報をどこかに残しておかなければならない事です」

「そうしないと、元の体に戻れないからな……」

物分かりの良いミライにエメリオルも饒舌になる。お髭の先生の登場だ。

「そうです。そしてそれが問題なのです。生身の肉体の炭素を主にした有機配列は非情に複雑ですからね。その情報を残しておくのには莫大な情報量が必要とされます。

すると、それが電波変換におけるマイナス要因となるのですよ。無意識的にそれらに気を配らないといけないのでシンクロ率はある程度の所で頭打ちとなってしまうのです」

確かに炭素原子からなる、結合の振る舞いは様々なものを形作る。その無限とも思える人体の構造を記録しておくだけでも大変な事だ。

ただ自然物の生命体同士の電波変換なら、その負荷はいくらか軽減される。電波生命体の膨大な体電波情報に肉体記録が保管されるのだ。それも相まって、人体の負担も少なくなる。あのがさつなウォーロックやオックスでさえも、無意識的にも行っているのだ。

しかし人工電波生命体との電波変換の場合そう言う訳にもいかない。全ての要因を意識的に自力で実現しなければならないのだ。

その人体構造を残すのと、電波化を両立させる互いに背反な行為こそが人工電波変換だ。プロジェクトT．Cの最大の困難がそこにあった。

だから人工電波変換を初めて成功させたシドウは、唯一無二のSSSランクホルダーなのだ。

そしてミライも例外ではない。彼のウィザードのレイダーは、プロトタイプの人工電波生命体だ。軍用兵器の側面が強い拠点制圧と破壊活動を主とした設計上、電波変換に対する構想がなされていなかった。つまり、圧倒的な戦闘能力を誇りながらも、普通の人間では電波変換できなかったのだ。あのシドウでさえも無理だった。

そしてエメリオルは物思いに耽(ふけ)るミライに言ってやった。出来るだけゆっくりと噛みしめるように言葉を落としていく。

「ただ機械骨格であれば、そんな心配はありません。金属の自由電子は電磁気との相性が抜群です。肉体のような細かな記録情報の配慮も無用です。要は、設計上の機構さえつかめてればいいのですから。そこに命がないのだから当然ですね」

エメリオルは少し興奮しているようだ。初心な乙女のように頬が紅潮している。いつぞやの博士みたいだ。

もしかしたらエメリオルも科学者の系譜なのかもしれない。

「そして、それらの要素が実現するのは圧倒的なシンクロ率！　アナタも見たでしょう？」

ミライは、コーヒーを口に含んだ。そしてカップに口を隠しながらエメリオルの肩を見つめる。確かに圧倒的なシンクロ率だ。だが、ミライはそんな事で驚きたくなかった。

とにかく、淀んだ気持ちを取り払おうと、質問を投げかける。試合中からずっと気になっていた。

「……銀河連邦の支配下にある惑星の人は全てこの体なのか？」

あの時の試合会場に来ていた人達の事を、頭の端に浮かべる。子供の額には、普通の人間にはない宝石のようなパーツが付いていたのが印象的だった。

「いいえ」

エメリオルは首を振った。太い首の上に乗った、厳粛にして荘厳な彫刻を思わせる彫りの深い顔は、無表情である。表情豊かな渓谷が作る無表情だ。

「もちろん体を機械化されている星もあります。しかし、生身の体を大切にしている星もたくさんあります」

エメリオルは腕をくるりと回し、玩具でも直すようにして肩をはめ込んだ。そして、接続した腕を動かし、武骨な自分の手を見下ろす。血は通っていないのでひんやりとしている。

「そして二つ目の話になりますが、これはあまり夢のない話です」

「……」

ミライはエメリオルに暗い影を感じた。彼なりに思う所があるのだろう。

「機械骨格には戦闘の為と……。あと、もう一つの目的があります。それは誰しもが抱いた人間の欲望です」

「確かに夢のない話だな」

エメリオルは素っ頓狂な声を上げた。ごついゴリラのような顔をしているくせに、豆鉄砲を食らった鳩のようだ。

「おや、分かるのですか？」

「おおかたの予想はつく。不老不死といったところだろう？」

エメリオルは恥ずかしそうに口角を上げた。

「アタリです。やはり知恵を持った人間とは傲慢なもので、いつまでも生きたくなるものなのです」

「それがサイボーグという訳か……理解に苦しむな。限りある命だからこそ意味があるというのに」

エメリオルは頷いた。

「そうかもしれませんね。だから、その事を大切にしている星の人達もいるのです」

エメリオルがコーヒーをすする。

切りが良いと判断したミライは立ち上がった。話が済んでここにもう用がないのだ。

「礼を言う。良い情報を貰った。では俺はここで失礼させてもらう」

ミライは手も振らずに、部屋から立ち去ろうとする。しかしエメリオルの方が満足していない。両者ともに満足しなければコミュニケーションは終わらない。面倒臭くも人間臭い、そんな場面である。

「待ってください」

エメリオルも立ち上がりミライを引きとめる。ミライは振り返らずに足だけは止めてやった。

「何だ？」

「私からも質問です」

エメリオルはミライの背中に鋭い眼光を突き刺していた。口調こそは物腰柔らかく取り繕っているが、目はそう言っていない。ミライもプレッシャーを肌で感じているはずだ。

「あの時の試合直後にアナタは私達の部下に斬りかかりましたよね？」

「ああ……。少し早計だったとは思う。すまなかった」

ミライは立ち去ろうとする。貴重な情報は欲しかったが、こちらから情報をくれてやるつもりはないのだ。ミライは自分の事を語りたくは無い。出来れば何事も無く帰りたかった。

「待ってください。その事を言っているのではありません。私もアナタと同じように、どうしても聞いておきたい事があるのです」

その言葉に、ミライは呆れたように振り返った。このまま帰れば逃げたようになってしまうと思ったのだ。無言でエメリオルを見据える。目付きは鋭いが、咎めるような情報は含まれていない。

エメリオルも承知したようで続けた。

「あの時のアナタのシンクロ率は異常でした。およそ１５００％は下らないかと」

「１６５０％だ」

ミライは吐き捨てるように地面に向かって言った。エメリオルは驚愕した。でかいくせに肝っ玉の小さな野郎である。

「なんと……！　見たところガンマ変換を使っているようには見えませんでしたが……。まさか我々以上の機械骨格を……？」

「知らん。機械骨格と似てはいるが、名前は『エクスフレーム』というらしい。博士が言っていただけだけどな。

……もう良いだろう？　俺は帰る」

ミライは出入り口のドアに手を掛けた。さっさと出てしまいたいのだ。しかしエメリオルは最後に聞いた。これが本当に最後であってほしいとミライは願ったに違いない。

「なぜですか？　体の構造が電波変換に適している地球人のアナタにはそんなものは必要ないはずです！」

「知らん」

「いえ、知っているはずです。アナタは私に何かを隠しています」

エメリオルはミライの口を割ろうと急きたてる。ミライは思った。秘密を暴露する前提であるエメリオルと自分とのそりは合わないと。

しかし、そういう見識であるエメリオルだからこそ情報を得られたのもまた事実。ミライはそうも思った。

エメリオルはまだ言っている。ミライの耳の端に音だけはかすっていく。

「そもそも、銀河連邦よりも性能の良い機械骨格が地球の科学力で作られた事自体がおかしいです。技術的にありえません！　アナタは一体何者なのですか！？」

「知らん。俺は博士から何も知らされていないんだ。博士は俺に何も教えちゃくれない。気が付いたらこうなっていた。俺だってこんな体を望んでいなかったんだ」
「待ってください！」
「じゃあな。もう二度と会う事は無いだろう」

ミライはとうとう逃げ出すように部屋を後にした。ドアの向こうでエメリオルの声が聞こえる。出来れば本当にもう会いたくない事だろう。しかし、エメリオルは元気であった。
そしてミライは一人ホテルの廊下を歩く。思わずとも図らずとも溜め息と一緒に呟いてしまった。磨かれた廊下の床に映るミライも同じように呟いた。

「俺が何者かなど、こっちが聞きたいくらいだよ……」

ミライの左右の目は色こそ違うが、それぞれ同じ感情を映し出していた。

それは「不安」だ。
本当にただそれだけだ。

「ブロロロ。ほーら！　牛さんでありながらカッコイイお兄さんがお馬になってやるぞ！　牛さんなのにお馬だぞ！　ブロロ」
「キャハハ！　いけーオックス号ー！」

優しいオックスはウィザード・オンしてわざわざメトリーを背負って、奴隷のように部屋をハイハイしている。一方厳しいメトリーは、オックスの尻をびしばしと叩きに叩く。これでは何かを心得ていると邪推してしまう。ただオックスは「おうっ」だの「うほ」だのと、馬っぽくない鳴き声を出していた。どちらかと言うと変な態だ。

「オックスのヤツ。メトリーに完全に気に入られたな」

ゴン太は、牛丼をお預けになったオックスを憐れんでいた。しかし箸は止まらない。

「ポロロン。元ＦＭ星の特攻隊長も形無しね」

それに堪らずスバルは突っ込んだ。ハープの肩をスバルの裏手がびしりとスパイスのきいた一撃で花開かせる。

「ハープ！　オックスは結構前から形無しだよ」
「ブロロ！　何だとスバル！　この野郎！」

「止まるなー！　オックス号！」
「おふうっ」

オックスの燃えるようなお尻は、本当に真っ赤になっていた。比喩とかではなくもう赤々として、可哀そうなくらいだ。

「やっぱり、形無しじゃないか……」
「オックスはお嫁さんに尻に敷かれるタイプだね！」

付け加えるように、しれっと嫌な事を言うミソラ。自然な振る舞いを装いつつ、スバルの隣に座ってきたのである。
まったりとしていたスバルはベッドに腰を掛けていた。ただ、そこにミソラが勢いよくベッドインしてくるものだから、スバルは跳ねるようにして宙に浮いた。するとダルマのように後ろに倒れこむ。これは服従を表明する負け犬の体勢だ。

「うわ、やめてよ。ミソラちゃん！」
「やめなーい」

ふざけながらミソラは寝転がっているスバルの上に乗っかってきた。スバルは苦しくて、腹に詰まっている物を全て出してしまいそうになってしまう。口から出れば良いが、そういう訳にもいかない。一歩間違えれば、あだ名がブラウンになってしまう。
そうなるようにしてかスバルの柔らかい腹部に、ミソラの膝蹴りが入ったのだ。スバルの腹はベッドのように良い感じにめり込む。もうこれはミソラからの攻撃だ。

「ポロロン。仲がよろしくてね、二人とも」

ハープはにっこりと笑みを作った。表情を彩るのは色香に焦がれ

たお節介焼きな部分だ。
まあ、傍目スバルとミソラがベッドの上でじゃれ合っているのだから、そうはなる。ただスバルの方は必死に腹を押さえているだけだ。ミソラがスバルにマウントポジションを取っているだけだ。
これがベッドではなくリングだったらスバルの負けだ。
ミソラは状況を楽しむかのようにスバルと密着してはなれない。ハープはクスクスと笑っている。トラッシュは助けに入らない。ただハープの横で紳士的に観察しているのだ。

「ちょっと、トラッシュ。傍観してないで助けに入ってよ！　ミソラちゃんはやる気だよ！」
「なんと……！　これは大変ですね。電波変換して戦いますか？！」

目をチカチカさせながらトラッシュは唖然としていた。生真面目なトラッシュはすぐに事を大事に持って行きたがる。困ったものだ。

「いや。そういう深刻な意味じゃないから……」
「そうそう、スバル君と私は仲が良いんだもん！」
「それは一体どれほどの……でしょうか？」

トラッシュは小首を傾げた。今の状況はあまり仲良しこよしには見えない。ミソラからの一方的な好意の表れがスバルを痛めつけていたのだった。

「えっとねー。んっとね……」

人差し指を唇に当てながらミソラは思考を巡らしている。良くない事を考えているのだ。

（なんだか、嫌な予感……）

とりあえず、ミソラから脱出しなければいけない。スバルは腹に力を入れて、ミソラを弾き飛ばそうと画策する。スバルは男の子である事を証明する時が来たのだ。今までの戦いで培った運動神経を大いに見せつけられるはず。

しかし、ミソラが笑顔を作った。太陽が真上で輝いているのではないか、という馬鹿な妄覚にスバルは囚われた。

「よしトラッシュ君、私達の事見ててね。じゃ、行くよ……スバル君。そ、その……優しく受け止めてよね？」

トラッシュに親指を立てて、決意を表明する。すると頬を赤らめて何かと本気になっているミソラがいた。スバルは「風邪をひいちゃったのかな？」と思う事にした。

しかし、大胆極まりないミソラはスバルに抱きつこうとしているのだ。地球以外の惑星では、少しだけ大胆になれるという変わった性質の持ち主と言う訳だ。ただただスバルは行き過ぎたスキンシップに戦慄した。

「ちょっ……！」

とりあえずスバルは、明日の宿題の事を考える事にした。算数の問題を解く自分を想像する。しかし、少しおつむが賢くなっただけで現状の変わりは無かった。

「くっ、やっぱり駄目か！」

「フフ、やるようになってきたわね、ミソラ……」

ハープはうんうんと頷いている。トラッシュはその様子を見てうんうんと真似て頷く事にした。スバルはうんうんと頭が痛い。一瞬

あかねが頭をよぎった。これが走馬燈なのだろうか。多分、違う。

（母さん……！）

しかし、そこに救世主だ。もとい天使の降臨だ。地上に舞い降りた、紅く神々しい牛を引き連れたメトリーの姿である。しかし脚色なしに表現すればオックスはボロ雑巾のようにメトリーに引きずりまわされていたのだ。角を掴まれて、ものさびしいぬいぐるみのようにあっちへこっちへとモップ代わりに床を磨かされていた。

そして、メトリーは満面の笑顔だ。気持ちの良い笑顔でミソラとスバルを指差す。

「あースバルとミソラがイチャイチャしてるー！」

楽しそうにメトリーは笑い転げる。するともう彼女の中では、オックスの存在などなかった事にされた。オックスを放りだし、ミソラとスバルの方へダイビングだ。

「私も混ぜてーっ」

「ちょっと、メトリー！　私達の邪魔をしないで……！」

「なんか引っかかる言い方だな、ミソラちゃん」

「問答無用だーい！」

メトリーの参戦により、何とかスバルは事なきを得た。やれやれと、スバルはくたびれた企業戦士のように外の空気を吸う為ベランダへと向かう。ベッドから腰を上げた。そしてベランダの戸を開け放つ。カーテンが風に撫でられ優雅に舞う。

そこから惑星の鉄の大地を一望できる。スバルは息を呑んだ。

「わあ、きれい……」

景色に見入るスバルだったが、タイミングが良くも悪くも玄関のチャイムが鳴った。手が空いてそうな者がいないか、と後ろを振り返る。だが、キミドリはメトリーと遊ぶミソラを撮るので一杯一杯だ。恐らくキミドリは、その手のファンにその写真を売りつける腹なのだろう。強かにも、世渡り上手な彼女らしい。

一方ゴン太の方はと言うと、瀕死のオックスに飲むタイプの牛丼を飲ませてやっている。味の程は想像できないが、多分不味いだろう。

そういうことらしいので、スバルは新鮮な空気を後回しにして、小走りで玄関に向かう。

「ミライ君が帰ってきたのかな」

スバルは玄関の取っ手を掴み、下に降ろす。するとやはりミライがいた。

しかしスバルは、まだ悲しい現実に気が付いていない。

「おかえり、ミライ君」

ミライは疲れたように溜め息を一つ吐いた。一応の返事はする。

「ああ、ただいま」

「疲れているみたいだけど、何をしていたの？」

「いや、大したことじゃない。……そんなことより、夜太郎さんが目を覚まし次第、地球に帰るぞ」

「うん」

ミライはそう言い付け、スバルの横をかわす。そして賑やかな部屋の中で一人静かにテーブルに座る。エアディスプレイを展開して、

地球と交信を取っているようだ。しかし、ノイズウェーブ経由でさらに、ＷＷＲに占拠されてしまっている通信路なので、なかなかはかどっていない様子。

スバルも夜太郎が起きるまでは暇だと思い、テレビの前に座った。

「やる事もないし、テレビでも見て時間を潰すかな……」

スバルは機械惑星の番組を少し期待しながら、リモコンを手に取った。

しかしスバルはまだ気が付いていない。そう、悲しい現実に。

それが本当の試練の始まりだと、不幸にも気が付けないのだ。惑星の空がより一層暗くなり始めた。暗黒に染まりつつある空は、決して純白とは縁遠い黒である。しかしそれが悪意ある白色ともとれる事はスバルはまだ気が付いていなかった。

同刻、機械惑星のウェーブロード。時空を歪ませて、ある黒い宇宙船が姿を現した。明らかな物理法則を捻じ曲げた暴挙だ。それを許されるとは如何なることだろうか。しかし現実にそれは起こっている。

幸い辺りは暗かったので、例の暗黒化現象に気が付く者はいない。その船はヘラ・ローズガーデンの物と酷似している。それはどこまでも黒く、そうやって内包する純白の恨みを包み隠しているのだ。

そう、惑星リギアに暗黒からの侵略者が来てしまった。

宇宙船の内部には沢山の兵隊がいる。そして、後方の空間には透明なカプセルが十体ほど並んでいた。培養液で満たされていて、中からは何か懐かしい気配を感じさせる。

そんな宇宙船の中で、玉座と呼ぶに相応しい席に黒い電波人間が座っていた。その横にはＦＭ星人が一人。紫色で毒々しい色だ。名前はスコルピオと言う。

そして王であるかのような黒い彼はプルト・キグナスと言う。頬杖を突き、全てを悟ったかのように眼下に広がる惑星を見渡す。

「フフ……。この辺りに詳しいスコルピオの情報でアンドロメダ銀河系列まで探しに来てしまったけど……。

偶然、懐かしい周波数の残り香を感じて過去に飛んでみたら大当たりだったね」

プルト・キグナスはニヤリと笑った。鋭い眼光はより鋭敏な三日月を形作る。

「この宙域できずなクルーの一人も見つかるし、僕はやはり神に愛されているね……！」

そしてプルト・キグナスは後ろに整然と並べられた、例のカプセルを横目に覗いた。

「君もそう思うだろう、大吾君？　これから君の息子に甘美なる絶望を味合わせに行くんだ……！　そうさ！！　この僕をコケにしてくれたロックマンに復讐してやるんだ！」

目を疑うばかりだ。しかしプルト・キグナスの瞳が、それを現実だと言っていた。

目線の先のカプセルの中には大吾が眠っていたのだ。まるでホルマリン漬けのようにぷかぷかと無気力に浮いている。

もちろん他のカプセルも同じだ。黄緑色の液体に浮いているのは屈強な人間達である。それも見知った顔がちらほら確認できる。

アメロッパ人に、シャーロ人、アジーナ人、様々な人達。

悲しい事に彼らはきずなクルーだった。どうやら、プルト・キグナスは何らかの理由できずなクルーを集めて回っているようだ。

刻一刻とスバルに優しくて懐かしい、だからこそ切ない絶望が忍び寄る。

スコルピオは嫌味な笑いを上げた。

「キシシ！　ホントにお前はいやらしい事を思いつく野郎だな！」

「フフ……僕は頭脳派なのさ。君もレギオンになったら分かるよ。今の僕の気持ちがね」

ｂｏｎｄｓ―１０：レギオン襲来

高級ホテルの一室。相変わらず中は騒がしい。ゴン太はまだ食べているし、キミドリはまだ撮っている。ミソラもメトリーも遊んでいる。ミライは真面目に仕事をしていた。

一方スバルは、テレビを見ていた。画面に映っているのはサイボーグの方々だ。オイルたっぷりのこってりラーメンを食べているらしい。奇妙なそれは、地球でいう所のグルメ番組だ。スバルは胸焼けしそうになった。だが、サイボーグの方々はおいしそうにそれを食べている。信じられないのだ。

ただただ美人で正統派な感じのレポーターは不当な様を見せつけてくれる。

「うわ……まずそう」

スバルはチャンネルを回した。画面が切り替わり、真面目な口調をしたサイボーグの方がすらすらとニュースを伝えている。生気を感じさせない程に仕事熱心な彼の言動は精密機械だ。絶対に噛む事は無いのだろう。

「へえ。この惑星のニュースか……。一体どんな事を報じてるのかな」

『……では、今年の銀河連邦の活動報告についてです。前年比とは上方修正で５％の探査可能領域が増えたとのことです。

そして、かねてから期待されていた、新しい空間転位の理論が確

立されたそうです。それについては、専門家の見解によると……』
「ふーん。なんだか、銀河連邦ってすごいんだな……。確かにあの人達の使う武器は変なものばっかりだったけど……。ふう」

スバルは、何となしに天井を仰いだ。まるで夢物語のような今日の出来事を振り返り始めたのだ。中央に浮かぶ光源、淡く白い光。それに頭の映像を重ねていく。

まずは機械の惑星だ。生命と相反する機械との関係を両立させている星である。これは、珍しいとしか言いようがない。

ただ地球でもかつて二人の科学者が、ロボット工学と情報工学を巡って覇権を争っていた事がある。社会科の授業で習ったそんな事をスバルは思い出した。

（ワイリー博士が勝っていたら、地球もこんな感じの星になっていたのかな……？）

犯罪者の事を考えても仕方がない。スバルは、頭を切り替えた。

次は今回戦った銀河連邦という組織だ。初めこそは敵だと思っていたが、その一方で彼らの背負う者達を見せつけられた。スバルはそれを良い経験だったと思う事にしていた。いろんな場所にいろんな価値観がある。それだけの事だ。

そう思うと、地球での小さないざこざなど馬鹿馬鹿しく思えたのだった。

そして、夜太郎とメトリーだ。まさか電波人間になるとは思ってもいなかった。なによりメトリーが小さな女の子になるとは思わなかった。夜太郎とメトリーの間には何か秘密があるのだろう。だが、スバルはそれを問いただす気にはなれない。スバルにも触れられた

くない部分がある。だから、きっとその二人もそうに違いないと思っての事だった。

ふとスバルは時計を見た。見かたは地球の物と変わらない。

「もう、九時か……。時差がどれほどか分からないけど。地球のみんなは何をしているのかな？」

スバルは遠く離れた地球の事を考えた。

「何だか、不思議な気持ちだ。本当なら、絶対に行く事のなかった未知の惑星でまったりとテレビを見ているなんて、ね。

よく考えれば、今のこの経験って奇跡なんだよなあ」

そこにトラッシュが割って入る。どうやら、ミソラとキミドリ、メトリーの相手は終わったらしい。ただ本当のところは、スバルのハンターに逃げ帰ったというのが妥当だろう。

『フフ、そうですね。遠く離れた地で、私達とはまた違った人間との出会い。奇跡の賜物と言えるでしょう。

スバル様の気持ちも今なら分かるような気がします』

「……ハハ。僕にとっては君との出会いも十分に奇跡だと思えるけどね」

スバルは良い台詞を吐く。トラッシュが女の子だったら、もう勘弁ならない。

『それはどうしてでしょうか？』

ハンターが作るエアディスプレイの中、トラッシュは首を傾げる。

まるでトラッシュはまだ幼い赤子のようだ。

「だってさ。君は世界でたった一人の存在だし、僕もきっと世界の一人の存在だ。そんな二人が巡り会うなんて奇跡としか言いようがないでしょう？」

『なるほど、そう思えばそうかも知れません』

「まだ出会ってからそんなに日は経っていないけど、君と過ごした日々は僕にとっては大切な思い出なんだよ？」

『……ありがとうございます。でも照れ臭いですね。しかし、そうやって女友達をヤキモキさせていくスバル様を垣間見た気がします。まったくとんでもないお方だ』

「ちょっと、締まらない事言わないでよ！」

スバルは恥ずかしそうに顔を染めた。

でも、トラッシュもどこか申し訳なさそうだ。そうして改まられると、思わずスバルは苦笑した。そして、ふと思い立ち、今まで言っていなかった事をトラッシュに教えてやる。

最初の戦いが終わった事で緊張の糸が切れたからか、少し饒舌になる。

「実はね。君の事はロックの代わりにならないと思っていたんだ。僕にとっての相棒はロックだけだってね」

『……そうですね』

「でもね。その考えは違ったようだよ。

君は君だ。そんな君はロックじゃなくて、トラッシュとして僕の友達なんだ」

『なんだか、胸の奥が少し温かい気持ちがします。言葉には出来ませんが……』

「うん、本当に成長したね」

スバルは、トラッシュと初めて出会ったアマケンの事を思い返す。
あの時のスバルはまだ、父とウォーロックの幻影に囚われていた。
そして時が経ち、ルナの為に戦う事を決意した。悩み悩んだ末の決意だった。
そこにはウォーロックからの後押しは無かった。幻影に打ち勝ち、自分の意志で決めたのだ。
その大きな一歩で掴んだ勝利。そこにはウォーロックがいなくても、隣にはトラッシュがいた。今まで空っぽだったハンターに大切な宝物が一つ増えた。そしてトラッシュと一緒に過ごし、戦ってきた。
トラッシュは友達だ。家族だ。それがスバルの今の気持ち。

「ポロロン。良い話ね……。その言葉、ミソラにも言ってあげたらどうなのスバル君？」

いつの間にか話に入っていたハープがいた。油断も隙もないとはこの事だ。お節介焼きでどうしようもないお姉さんだ。

「なんで、そこにミソラちゃんが出てくるのさ」
「ウフフ、もうスバル君ったら。ドンカンさんねえ、イヤになっちゃうわ」
『ハープさんの気持ちは分かりません。でも言葉とは裏腹に楽しんでいるようです……』
「いや、良いんだトラッシュ。いつもの事だから」

スバルは苦笑。まったくもって、ハープの意味不明な言動はスバルを悩ませる。スバルは伸びをした。

「さて……と」

ハープが入った事により、ひとまずこの話は終わりを迎えた。
しかし、忍び寄る影は、スバルから大切なものを奪おうと、終わらそうと、迫ってくる。
その魔手（ましゅ）は、まずテレビから姿を覗かせる。ニュースに緊急速報が入ってきたのだ。レポーターが早口に話を進める。さっきまでの冷静沈着な様を潜ましてしまった。

『緊急速報が入りました。この惑星が何者かから攻撃を受けている模様です！　場所は惑星リギアの国政首都です。住民の方は、銀河連邦の指示に従って速やかに避難してください！』
「なんだ？　これは……」

スバルは立ち上がり、テレビの画面に見入る。そこには、いつしか見た黒い宇宙船があった。しかし今回はその本来の姿を見せつけてくれる。その圧倒的な科学力を駆使した兵器を用い、街という街を、瓦礫という瓦礫に変えていく。まるで無邪気な子供が通り過ぎたように、綺麗なジオラマは無意味な荒廃とした物になっていく。もちろん後片付けなどしないつもりだ。
ただ、そうはさせまいと銀河連邦が応戦しているようだ。しかし、銀河連邦の武装をもってしても、黒い宇宙船に決定打を与えられてはいない。今、マイクロブラックホールカノンが宇宙船の主砲にかき消された。
さらに主砲が激しく惑星の空を照らす。闇を真っ白な悪意で一閃する。白い帯をかすった銀河連邦の戦闘機が、帯にブドウの実を実らした。そしてその実は、綺麗な花を咲かせる。皮肉にもその中心ではパイロットが命の花を散らしている。
まるで、空想の世界の戦争だ。ゲーム画面でしか見た事のない光景が、スバルの目の前で繰り広げられている。もちろん、これはゲーム画面ではない。

「大変だ……！　助けに行かなきゃ」
「ポロロン……。助けに行くって言ってもここは地球じゃないんでしょう？　ここの人達に任せておけばいいんじゃないの？」
「でも……」
「首を突っ込まない方が良い事もあると思うわよ？」

確かにハープの言う事はもっともである。事実、地球も三回ほど危機に瀕していた。その度に、地球は何とかして自分たちだけで対処していたのだ。どこかの惑星が、都合よく助けに入るなんて事は無かった。
今回もそういう事だ、とハープは言いたいらしい。

しかし、そうも言っていられない人もいる。スバル達の部屋にエメリオルが入ってきたのだ。どうやら、玄関の戸をそのまま破壊してきて侵入してきたようだ。豪快な人である。完全な犯罪だが、今は緊急事態だ。エメリオルは、ぞろぞろと部下を引き連れて部屋を占領した。

「夜分に申し訳ない！　しかし、この惑星に侵入者が入ってしまった！　助けを乞いたい」

驚いたスバルは目を見開いた。ミライも二度と会う事は無いと思っていたが、早い再会だった。ミソラ達も遊ぶのをやめて、さっきまで敵だった大きな男達を不思議そうに見ていた。
そこにミライだ。冷たく言い放つ。

「俺達はこれから地球に帰る予定だ。この惑星がどうなろうと知った事ではない」
「うむ……。そちらの言い分はもっともです。しかし、相手はレギオンとかいうもので……銀河連邦でも対処が……。

だから地球人であるアナタ達の力を貸していただきたいのです！」

焦燥しているエメリオル。対してミライはレギオンという言葉に反応した。

「レギオンだと？　お前達、そいつらの事を知っているのか？」

着実に絶望という名の運命が回り始めていた。

レギオンの圧倒的な強さの前に、スバル達は無力さに苛まれ、厳しい現実に目を合わさなくてはならなくなる。

ミライの態度の変わりようを疑問に思いつつもエメリオルは頷いた。
ただ思わしくは無いようで彼の頬を冷たい汗が這っていく。沈痛な面持ちから、彼の中のレギオンも相当な脅威であろうことがうかがえる。

「ええ、レギオンの正体までは分かりませんが……。何度か奴らは、私達の管理する宙域まで侵入した事がありまして。
その時、銀河連邦の艦隊を迎撃に向かわせたのですが、その艦隊は壊滅的なダメージを受けました」
「ち……っ」

ミライは舌打ちした。銀河連邦の情けなさにではない、レギオンの圧倒的さにだ。

「しかし、それでも何とかレギオンの一人を捕らえる事に成功しました。生け捕りは無理だったので、ほぼ残骸となった奴らを調べたところ……。
奴らの科学力は銀河連邦のそれを上回っていたのです」
「つまり……お前たちでもまともに相手取れないということか……」
「いや……、普通のレギオンなら何とか追い返す事は出来るのです。
ですが、今回のレギオンは今まで交戦したどのレギオンよりも強い！　たったの一小隊に銀河連邦で歯が立たないなんて信じられま

せん！」

エメリオルは悔しそうに拳を握りこむ。思いとは強いもので、彼の拳が自壊してしまうのではないかと心配してしまう。

するとテレビ画面の方から、大きな爆発音が轟いた。それはテレビが壊れてしまったような振る舞いだったので、不意打ちに遭ったような気分だ。しばらく経っても、まだテレビのスピーカーが残響している。

「もう時間がありませんね。アナタ達の力を借りられたら、と思いましたが仕方ありません……」

エメリオルが後ろの方に振り返る。部下が残念そうな顔をして待っていた。エメリオルも同じ顔を向ける。

「行きましょう。皆さん」

「ですが……大佐」

「良いんです。私達の増援を待っている仲間の所に向かいましょう」

さらに続けてエメリオルを問いただす。上司にも口出し出来る職場らしい。エメリオルの人徳のなせるところだろう。

「お言葉ですが大佐。先程の戦闘でアナタの体はもう限界に近いはずでは？」

「この星の数億の人の命に比べれば私の身など心配している場合ではありません。アナタ達もレギオンの恐ろしさを知っているはずです」

「惑星を滅ぼしていくレギオン……」

そう呟き、部下の一人は身震いした。

「この惑星をそうさせる訳にはいきません。行きますよ！」

たぎる決意に瞳を燃やす。まったくもって正義感の塊と言う訳だ。普通の中年男性なら家で新聞でも読んでいたいところだろう。だが、エメリオルは違う。

再び切り返し、エメリオルがスバルの開け放っていたベランダに出ようとする。行儀は悪いが、そこからウェーブロードに飛び乗る気なのだ。

「ラディオ・ビーム・フィールド展開！」

この言葉はスバル達にとって『電波変換』と同じ意味を持つのだ。たちまち屈強な銀河連邦の軍人は、銀色の装備に身を包み始める。

一瞬で、エメリオルはただのオジサンではなくなった。夜太郎を苦しめた姿に変わる。

「では、総員突撃です！　目標は国政首都！」

隊員達は勢いよく、ウェーブロードに飛び乗っていく。光の帯となって目標までまっしぐらだ。

エメリオルも派手にウェーブロードに飛び乗ろうとする。ふくらはぎのブースターが青色に灯る。

しかしそこにだ。オックスだ。

「……おい、アンタ。一つ聞いてもいいか？」

「何でしょうか？　手短にお願いします」

「ブロロ、その敵の名前を教えてくれ……。どうにも嫌な周波数を感じるんだよ……」

オックスは目標地点から、不穏な周波数を感じていた。それはどこか語りかけてくるようで懐かしくもある、身に覚えのあるものだ。ただ、色調が同じなだけであって、エネルギーそのものは段違いだ。

エメリオルは不思議そうにオックスを目の端でとらえている。オックスはただ黙りこくって、その周波数の正体を探っている。

「ふむ……現場からの通信によると……、プルト・キグナスとかいう名前のようです。

なんでも、複数の電波人間と電波生命体を引き連れているとかで苦戦を強いられています」

オックスは戦慄した。予想していた答えと一致していたのだ。出来れば合っていてほしくなかったのだ。

「ブロロ、なるほどな！」

「ちょっと、どういうことよオックス！」

「いや、お前もこの周波数の色調で分かるだろう？　アイツはキグナスだ！！」

「まさか。確かに、波長の感じは似ているけど……エネルギーが桁外れだわ！」

ハープは息を呑んだ。

しかしハープは気が付いていたのかもしれない。だから早々にこの星から立ち去りたがっていたのだ。無言で震える口が、奇しくもそう語っていたのだ。言葉などいらない。

「そして、そばにいる複数の電波人間の正体も俺は知っている……！」

エメリオルの発言から、オックスの疑問は確証に代わっていた。

キグナスが絡んでいるとなるともはやそう考えざるを得ない。
形無しとは言われていたが、オックスはＦＭ星の特攻隊長である。もちろん、四年前に宇宙ステーション「きずな」を占拠した日もオックスが一番乗りだった。その後に、ウォーロック総隊長とジェミニ宰相、キグナス参謀長、オヒュカス一等書記官、リブラ二等書記官が続いてくるのだった。
オックスは忘れもしない。きずなクルーの放っていた強い意志に彩られた堅固なる周波数を。いくら拷問しても口を割らなかった英雄達の姿を。特に星河大吾という男はジェミニのジェミニサンダーを喰らっても口を割らなかった。「俺の口には地球の命運がかかってんだ。人間なめるなよ！」と言って、大吾は笑い飛ばしていた。ボロボロになった彼の顔は何故か太陽のようだった。消し炭になっても、彼の真ん中を貫く魂は決して折れずに輝いていた。
だからオックスは忘れたくても忘れられなかった。今思えば、ウォーロックはそんな大吾に感化されたのかもしれない。

「ブロロ、俺はあいつらの事を……忘れたくても、忘れたくても、今でも夢に出てくる」
「何を言っているの、オックス？」

不安げに疑問を呈するハープ。対してオックスは真面目だ。さっきまで馬車馬のように奴隷に徹していた彼の姿はどこにもない。雄々しく光る炎の彼は、ＦＭ星の特攻隊長だ。
そんな本性を垣間見せたオックスはハープを見据える。昔の事を思い出しながら続けた。ハープもただ事ではない予感を彼から感じたはずだ。

「そうか、ハープは宇宙ステーション占拠の時にはいなかったんだったな」
「ステーション占拠……。それって四年前のブラザーシグナル受信

の時の事かしら？　今思えばきずなクルーの人達に悪い事をしたわね……」

オックスはこくりと頷いた。拳が震えている。

言うなれば、それがＦＭ星人が犯した最大の罪であるのだ。

目的を果たしたＦＭ星人達による処刑が目の前に迫ったある日のことだ。用済みとなったきずなクルーは命を繋ぐためにある決意をした。それはウォーロックの手を借りて電波化し、宇宙に逃げ延びる事だった。そこが全ての始まりといっても過言ではない。

暗くて、どうしようもなく無の極致である宇宙。そんな場所を死も許される事なく彷徨い続けるのだ。地獄と言う他ないだろう。

ＦＭ星人達に殺されてしまうのなら、現世の無間地獄に挑戦していったのである。そう仕向けたＦＭ星人に罪がない訳がない。そしてその彼らが敵となって帰ってきたのだとしたら、その罪は計り知れないものとなる。

オックスはその罪の意識に苛まれる。

「なあ、ハープ。俺達の罪は予想以上に重いものかもしれない……」

オックスは天を仰いだ。神に祈るかのように儚げなオックスだ。らしくないが、それほどの重みを彼は受け止めているのだろう。

「まさか……その電波人間たちって……！」

ハープも流石に気が付いた。

「ああ！　あの電波人間達はきずなクルーだ！」

「え……！？」

スバルは素っ頓狂な声を上げた。運命のいたずらと言えばそれまでだが、作為的なものを感じてしまう。

とうとう、ミソラもスバルも知ってしまったのだ。特にスバルは、わなわなと体を震わせることしかできない。探し求めていた人が近くにいる。そう考えるだけで体が沸騰したように熱くなる。

大吾がいる――

ただ、それだけだ。スバルの頭の中では「父さんが、生きてるんだ！」や「でも、何でキグナスの言う事を聞いてるんだろう？」や「今、僕が助けに行くからね！」と言う前向きな感情が働いていた。

でも。でも、それでも、涙が止まらなかった。嗚咽が漏れて、情けないものを晒してしまう。ミソラはスバルの手を握ってやることしかできなかった。そうされるとスバルは、余計涙が止まらない。

「ブロロ、すまねえスバル。俺達のせいでお前の父ちゃんが……」

オックスは死人の様な面をして、肩を落としている。今の彼ならスバルに死ねと言われれば、喜んで首を吊って笑顔いっぱいでののしられながら死んでいくだろう。

でも、スバルはそんな子ではない。

「ウウ……。いや、違うんだよ」
「ブロ？」
「生きてるんだ！　父さんが！！　だから……グス……ッ」
「フフ。スバル君も強くなったわね」

ハープは気持ちよさそうにスバルの成長を喜んでいた。
オックスは困惑する。

「怒ってないのか？　父ちゃんをあんなふうにした俺らを」
「生きてるだけで十分嬉しいんだよ！　後は父さんを助けて、ロックを助けたら全て元通りだ！！」
「って、スバル君。泣いてたじゃない？」

ミソラからの珍しい突っ込みだ。スバルは頬を伝っていく川をせき止め笑顔になる。

「イヤ、うれし泣きだよ！」

ミソラは一瞬あっけに取られた。でも、クスリと笑う。スバルの両手を取る。

「……そっか！　そうだよね！！　お父さんが生きてたんだもの。嬉しい事だよね！」

ミソラも嬉しくなって笑顔になった。でも頬から一粒の宝石がこぼれた。
トラッシュも嬉しくなり、ハンターから出てきてオックスに言ってやる。

「フフ、スバル様はアナタを責めるようなお人ではなかったようで

すね。きっとウォーロックさんも一緒でしょうし、助けに行きましょう！　きずなクルーの人達を！」

人が良すぎるなんてものじゃない。信じられない。馬鹿馬鹿しい。しかしだ。オックスも嬉しくなったのもまた事実だ。意味のない笑顔ではない、勇気の貰える笑顔だったのだ。

「ありがてえ。恩に着るぜ」

オックスはらしくもなく、潤んだ目を指でこすって隠した。

エメリオルはその光景を見ていて微笑んでいた。人種は違えども、熱くなるものは一緒の所にあるらしい。

中年の涙は見せ物ではない。エメリオルは惑星の空を見上げて、背中で語る。

「どうやら、話はまとまったようですね。行きましょう、大切なものを救いに！」

「はい！」

スバルは勢いよく返事を返した。それは地球人と銀河連邦が手を結んだ瞬間だった。不思議なつながりである。だがこの繋がりは、きっと大きな力になるだろう。奇跡的な出会いを経たスバルはもしかしたらどの世界のスバルよりも幸せになれるのかもしれない。かつてはウォーロックや大吾を失うという運命をたどった可哀そうなスバルだった。でも今は違う。そう思わせてならないスバルは、はつらつとした表情を浮かべている。

意気込みを新たに、しっかりとした動作でハンターを構えた。希望への一歩を踏み出すのだ。

「トランスコード０３０！　スターダスト・ロックマン！」

まず星屑の戦士が現れた。次に音の戦士、炎の戦士、カメラの戦士ときた。

残るは剣の戦士だけだ。

観念したようにミライは、ふっと笑った。そこで乗らなければ人間ではないというものだ。

「さっさと地球に帰るつもりだったが……まあ、今回だけは話は別だな」

『では！』

レイダーも嬉々としている。どうやらレイダーだって血も涙もあるという事が判明した。

「ああ、助けに行こうじゃないか。彼らと、彼らの帰りを待っている家族を……！」

ミライはソウル・レイダーになった。やっと全員の登場と言う訳だ。

出発の前にロックマンは、ベッドで眠る夜太郎に留守番を頼むと言っておく。

「じゃ、夜太郎さん。すぐに帰ってくるから待ってて下さいね」

夜太郎はすやすやと、眠っているので返事は無い。けれども代わりにメトリーが返事をした。それはもう元気いっぱいだ。ロックマンの足にタックルを炸裂させてくる。そうやってしがみついて離れない。

「私も行くー！　スバルのパパを助けに行くー！！」

「いや、メトリーは待っててよ。夜太郎さんが一人じゃ寂しいでしょ？」

「でも、やっぱりメトリーもお手伝いしたいもん。あかねの喜ぶ顔が見たいし！　それにもう一人家族が増えるんだよね！？　私も大吾の顔を見ておきたいんだっ」

ロックマンは苦笑した。メトリーが言う程、和やかな展開は到底望めない見通しだったのだ。いくら大吾が生きていても、それが嬉しくてもだ。事実キグナスの手下となって一緒に惑星を攻撃している以上、すんなりと仲良くお帰りになれるとは思えない。

だが、メトリーの思考回路は幸せ回路なのでそんなことは考えるはずもない。

「私も大吾を助けるー！」

エメリオルは笑ってその光景を見ていた。大きく口を空けて気品がない。しかも緊張感もない。プルト・キグナスを舐めてはいけない。しかし、エメリオルはキレ者だ。心配は無い。

「ハッハッハッ！　お嬢さんは私と戦っていた子ですね？　元気なようでなによりだ」

「あっ！　銀色オジサンだ！　悪者だー！　あっちいけー！」

メトリーはエメリオルの脛（すね）を蹴った。馬鹿なものでメトリーはつま先を抑えて辺りをダルマのように転がる。そうだ。エメリオルの脛は硬いのだ。

「ちょっと、エメリオルさん。遊んでないで……」

ロックマンはげんなりとした表情をエメリオルに送る。だが、エ

メリオルはロックマンにウインクした。私に任せて下さいという合図なのだ。変な意味は無い。

ただ、ロックマンは目線を逸らしただけだった。変な意味に捉えたからだ。しかしエメリオルはキレ者だ。まるで手品のように、可愛らしいお人形さんと、メルヘンチックな家の模型を繰り出した。

銀河連邦アンドロメダ宇宙軍大佐にしては中々に愛らしい趣味を持っているらしい。さしずめ、ごつい体に乙女のハートを備え付けた究極の生命体と言ったところか。どういう訳か、スバルはエメリオルから母性を感じ取っていた。

優しいエメリオルはメトリーに猫なで声でアプローチする。スコープ・スナイパーはエメリオルの事を変態だと思った。

「ほーら、メトリー殿。お人形さんセットですよー？　お着替えなんかもできる優れモノですよー？」

キレ者エメリオルにメトリーは瞳をキラキラと輝かせた。エメリオルの小粋さに酔いしれているのだ。今度はお人形にダイビングだ。

「うわー。お人形さんだ！　可愛いなー。どんな服に着せかえよっかなー」

メトリーは呑気に品定めしている。

その時、エメリオルの眼光がキラリと辺りを射抜いた。まさに夜太郎の命を狙っていた時の目だ。

「よし！　今です！」

「……わ、スゴイ策士だ！」

スバルは感心しつつもメトリーから脱出した。六人は逃げるようにウェーブロードに駆け上った。メトリーは一人取り残されて寂し

い。

「あー！　行っちゃった。でも、良いもん。私はお人形さんで遊ぶんだからね！」

メトリーは、ふとエメリオルから貰った人形に目を落とした。とりあえず、身ぐるみを剥いでしまおうというのだ。

しかし残念な事実に気が付いてしまう。

「あーっ！」

悲しい事に、エメリオルから貰った人形の顔は全部が全部エメリオルにそっくりだったのだ。眉毛がないし、頬骨が張っているしで、おまけに顎まで割れている。これはどうしたのだ、と思い、メトリーは他の人形を見て回る。

しかしだった。やはりだった。可愛いお嬢さんの人形から、紳士的なタキシードの人形まで素晴らしいまでのエメリオルだ。どうしたらこうなるのだ。嫌がらせにしては悪質すぎる。

メトリーは思い知った。地球人と宇宙人の価値観の違いに絶望したのだった。

「ううっ」

メトリーは泣いた。

ｂｏｎｄｓ―１３：変わり果てた英雄

ウェーブロードを進んで行くと、黒い宇宙船が見え始めた。あれは侵略者だ。宇宙船の下に広がる街並みは、足並みを揃えて荒野へと変貌していた。
明らかな異質。禁忌を犯し、平然と居座る略奪者は星を滅ぼし、空気を汚す。

「ヒドイ……」

惑星リギアには何の思い入れのないロックマンだったが、思わず息を呑んだ。表情は不快気に眉をしかめさせた。

「私達も残存部隊の救援に急ぎましょう！」

エメリオルはすかさず、派手に光の明滅を繰り返す空中庭園に突っ込んでいく。歓迎するのは、美しい花ではなく、火薬の匂いにまみれた血の花と、鉄の咆哮だ。
ソウル・レイダーもロックマン達の前に立ち、指示をテキパキと出す。

「これより、俺達はレギオン殲滅に作戦を移行する！　ノイズウェーブトーナメント任務と並行してしまったが、きずなクルー救出の為に全力を尽くすぞ！」

ロックマンは頷いた。緊張と期待と不安とが入り混じっている。

「うん……。父さんとその仲間の人達を助けるんだ！」

オックス・ファイアも続いた。口のノズルから勢いよく炎を吐き出す。彼の炎の決意を体現しているのだ。

燃える男オックス・ファイアは闇夜を望んだ。

「ブロロ！　長い夜になりそうだぜ！」

銀河連邦の集団に続き、五人も暗黒からの侵略者に立ち向かっていった。その先にいるのは時空間渡り鳥『タイム・ボマー』ことプルト・キグナスである。そして、宇宙の殺し屋でＦＭ星人のスコルピオ。さらに大吾を始めとした、きずなクルーの電波人間達だ。

過酷な戦いが息を吐かせずに始まる。

灰色の星屑は父に逢うために惑星の空を駆けていく。

「僕の四年間を取り戻す……！」

たどり着いた戦場は予想以上に酷い有り様だった。心優しい子供たちの目には、刺激的な光景だ。オイルの匂いと、男達の怒号に悲鳴が五感に働きかける。百人以上からなる、阿鼻叫喚だ。

電波体と銀河連邦の亡骸が、目の前より伸びるウェーブロードに転がっている。戦闘機の破片がチョコ板のようになってウェーブロードに突き刺さっている。戦闘機の割れた窓から、男の人の腕がだらんと垂れている。腕はオイルに濡れ、人工皮膚は焦げて、銀色の骨が覗いていた。ロックマンは目を逸らした。

そんな死体置き場で銀河連邦の隊員達は、電波体と交戦している。深青色で不気味な黄色い眼窩を持った電波体。意志の宿らない人形のようだ。それは、どこかで見た事のある電波体だった。特にロックマンはその強烈な印象に目を瞬かせた。

「あれは……、ソロの……！」

ソウル・レイダーはロックマンとは対照的だ。落ち着いた様子で目の前の電波体達を分析している。

「驚いたな。多少の違いはあれど、アレはまさしく……」

「ラプラスだね……。でも一体どうして？　ラプラスは一体だけじゃなかったの？」

ラプラスに瓜二つの電波体は、銀河連邦と熾烈を極めた戦いを繰り広げている。力は互角のようだ。そこに混ざろうと、ソウル・レイダーは剣を抜いた。集中した剣士から研ぎ澄ました周波数が漏れ出してくる。その背中で困惑するロックマン達にも促す。

「相手が何者であろうと関係ない。……俺が斬り込んで道を作る。お前達は俺の後に続け！」

言葉を置いてけぼりにし、ソウル・レイダーはラプラスに似た電波体に突っ込んでいく。音を置き去りにする速さは凄まじく、目にも留まらぬ早技でラプラスをデリートした。ラプラスは何が起きたかもわからないようで、首を傾げている。首から下はコマ切れになっていた。そして首がやっと理解したようだ。納得した表情で、瓦礫の荒野に落下していく。

同じように銀河連邦の隊員は何が起きたかもわからず、ソウル・

レイダーをただ見つめていた。当たり前のように、その隊員の腕は無くなっていた。しかし、ソウル・レイダーに礼も言わずに他のラプラスを狩りに行ってしまう。　ソウル・レイダーもさらに奥に進んでいく。痛快にラプラスをデリートしていく。ソウル・レイダーの通った所は確かに道になっていった。有言実行だ。

　ロックマンも続かなければならない。

「よし、ミソラちゃん、ゴン太、キミドリさん！　ミライ君に続こう！」

「うん、スバル君！　おとうさんを助けに行こう」

「ブロロ、みなぎってきたぜ！」

「そうだね！　スバルンのパパさんに挨拶だ！」

　勢い付いたロックマンは三人を引き連れて、黒い宇宙船の所まで行こうとウェーブロードを駆け出す。ロックマンは心に父親を思い浮かべた。

（父さん……今、行くよ）

　しかし、その決意を挫く。そうするかのように目の前のウェーブロードに一体の電波人間が転がってきたのだった。ロックマンは一瞬、鉄の塊が飛んできたと思った。だが違う。これは生き物だ。

「なんだ？　……あっ！」

　目の前に倒れていたのはエメリオルであった。少し先に行っていたはずの彼がロックマンの前で倒れているのだ。一体、何が起きたというのか。夜太郎に付けられた傷とは別の場所から、大量に赤いオイルを流している。彼の右半身は吹き飛んでいた。傷というよりも欠損だ。ハープ・ノート達は口を押さえて、腹から込み上げる生

理反応と戦っている。
　エメリオルが小さく呻いた。まだ息はあるようだ。ロックマンは慌ててエメリオルを抱き起こす。エメリオルの体重は半分になっていたのでロックマンでも抱える事が出来た。すぐにロックマンの腕は血に染まった。

「エメリオルさん！　大丈夫ですか？　一体誰に……？」
「……電波人間が……」

　エメリオルは口から血を吐いた。オイルがぽたぽたとウェーブロードに垂れていく。ロックマンはそれを拭ってやりながら問いかけた。

「それは、プルト・キグナスですか……？」
「いや……違います……彼は人間です。電波人間……。でもあんな強さ……。圧倒的で……。恐らくきずなクルーの……だと思います」

　ロックマンは目を見開いた。茶色い瞳に、圧倒的な力に完膚なきまでに叩きのめされたエメリオルが映る。いくら傷を負っていたとはいえ、あのエメリオルを瞬殺したのだ。敵の電波人間は強い。ただただ強い。

「ロックマンさん……。恐らくあの人間は、地球人の中でも……最強の……。私の本能がそう感じ取りました」

　エメリオルは残った左腕であさっての方向を指差す。指先は震えていて一点を定めない。

「気を付けてください……。その電波人間はすぐそこまで……。恐らく、プルト・キグナスにも劣らない……力を」

「何ですって……？」

ロックマンはエメリオルが指差した方を見た。嫌な感覚にロックマンは襲われていた。その場所からは温かくて冷たくて、懐かしくて恐ろしい周波数が溢れ出ていたのだから。

そこで大柄な人影が確認できた。あの体格は間違いない。スバルの憧れた逞しい体。

「まさか……あの人が？」

ロックマンの中の時間が止まった。

「嘘でしょ……？」

ロックマンは硬直して動けなくなった。ロックマンの頬を涙が伝う。確かにその可能性は考慮していたはずだ。頭では理解していた。しかし実際に目の当たりにすると、涙しか出てこなかった。これは嬉しさではない。深い悲しみだ。

エメリオルはロックマンに消え入りそうな声で語りかける。

「ロックマンさん。いいえ、スバル君……。あの人がそうなのですね……？」

ロックマンが釘付けになっている先のウェーブロードは凄惨だ。大量の銀河連邦の隊員が叩き伏せられていたのだ。そして、その死体の山の頂点に君臨するのが、例の電波人間だ。彼は冷たい瞳でロックマンを見下ろしている。ロックマンは目を逸らしてしまいたかった。だが、逸らせない。どんな変わり果てた姿でも、あの笑顔を期待してしまう。

でも、笑顔が向けられる気配はない。その電波人間はひたすらに

冷酷に徹していた。死体の一つを蹴りとばし、スバル達のウェーブロードに飛び移ってきた。大きな体格、逞しい筋肉、優しかったはずの瞳。ウェーブロードは揺れた。スバル達も揺れている。

ハープ・ノートは不安そうに目の前の電波人間を見つめる。そうしながらロックマンに聞く。

「スバル君。あの人が……？」

「……嘘だよ。何であんな風になっちゃたんだ……」

ロックマンは頭の隅では期待していたのだ。優しい彼を。しかし現実は非情だった。

エメリオルは打ちひしがれるロックマンを見上げた。もう話すのも辛いはずだ。だが、ロックマンに勇気を分け与える。エメリオルも言葉の重さを知っていたのだ。それによって、どれだけの力が湧いてくるのか身を以って体験していた。

「スバル君。私の事は気にしなくても良いです。私の体は機械ですから、この程度の傷では死にはしません……」

エメリオルは言葉とは裏腹に血を吐きながら続けた。

「しかし、アナタの傷はもっと深いようですな……。ですが、後ろを見てください……。アナタには仲間がいる。心配する事はありません。取り戻しなさい……、アナタの大切なものを！　その仲間達と一緒に……」

ロックマンはエメリオルに言われるまま、恐る恐る後ろを振り返った。そこには、不安ながらもロックマンに笑いかける三人の姿があった。ハープ・ノートはロックマンに手を差し出す。

「さあ行こう、スバル君。私も君のそばに付いてるからさ」
「スバル！　あのおっさんの目を覚まさせてやろうぜ！」
「スバルン。今は戦おう。そして後で、思いっきり甘えてやりな！」

ロックマンは笑った。そしてロックマンはエメリオルに向き直り、一度だけ大きく頷いた。エメリオルも頷いた。ロックマンは立ちあがった。

「みんな……ありがとう！」

そして、四人は電波人間の方に向き直り相対する。その先から強大な周波数が重圧となってのしかかる。しかしその周波数は、ロックマンが一日たりとも忘れもしなかったものだ。

深い闇のような青色をした電波人間は感情のこもらない声を発する。獲物を認識したのだ。声色は冷徹で抑揚もなく、しかしどこか麗容のものだった。あまりもの切なさに、ロックマンは泣きそうになった。だが、背中を支えてくれる仲間達のおかげで、何とか現実を受け止める事が出来た。

闇の電波人間がロックマンを指差す。

「最優先ターゲットのロックマンを補足……。私は全ての始祖……。そして、この人間と電波変換した姿こそが『ギガント・オリジン』です。

この圧倒的な人間の力を手に入れたワタシの前に、アナタ達の勝機は無い……！」
「くっ……！　本当にもう、正気じゃないんだね……」
『大丈夫です、スバル様。あの人を取り戻しましょう！』

トラッシュの言葉に勇気を貰う。溢れ返りそうな思いの丈を全てしまい込み、ロックマンはグレイバスターを構えた。トラッシュも

珍しく、感情が昂ぶっている。スバルも彼の思いを左腕から感じ取った。トラッシュの優しさに感謝しつつ、スバルはあかねの笑顔を思い浮かべた。

楽しい食卓。隣にはウォーロック。そしてトラッシュ。目の前には大吾とあかね。家族が楽しそうに笑っている。もうすぐそこまでやって来ている。

ロックマンは頷いた。

「うん、ありがとう。トラッシュ！」

ロックマンはギガント・オリジンに向かって駆け出し始めた。その目はギガント・オリジンの中に眠るその先を見据えている。その先にいるのはもちろん――

「目を覚まして！　父さん！！」

bonds―14：目を覚ましてよ！

ギガント・オリジンに向かって、ロックマンが攻撃を仕掛ける。軽やかにエアディスプレイをタッチした。左腕が剣に変わる。

「バトルカード！　ワイドソード！」

ロックマンの後に三人が続く。仲間が一緒になって戦ってくれる。これは心強い。

「ショックノート！」

ハープ・ノートがギターを構えた。指が弦を弾きあげると、音波の塊が威力を伴って飛ぶ。

「うおお！　ファイアブレス！！」

オックス・ファイアが口の火炎放射気から熱の塊をばらまく。ギガント・オリジンを灼熱の劫火で焼き尽くす。

「レールスナイプ！」

スコープ・スナイパーもライフル銃を構えた。スコープから除く瞳は敵の急所を狙い撃つ。螺旋回転の弾が発射される。

しかし敵は、その様子にもまったく動じない。ただ、ギガント・オリジンは笑ってその波乗攻撃を眺めていた。焦りは無い。あるのは冷徹な殺意だけだ。

「えやっ！」

ロックマンは灼熱に呑みこまれた人影に斬りかかった。

しかし硬い感触。肉体はここまで硬かったのか、とロックマンは頭の端で思考した。

「愚かです……」

攻撃を受けてもギガント・オリジンは不敵に佇んでいる。いや、君臨している。ギガント・オリジンは四人の攻撃を全て無効化したのだ。

無効化と言っても何の事は無い。攻撃の全てを、その身を以って受け止めただけの事だった。単純明快な強さにロックマンは唖然とした。慌てて後ろに退こうとするが、剣はびくとも動かない。

ロックマンの剣はギガント・オリジンの人差し指と中指のたったの二本で受け止められていたのだ。これではロックマンの剣が玩具のようだ。

「なんで動かないんだ！？」

「うそ……」

渾身の一撃を受けられたハープ・ノートも口をぽかんと開け放つ。スコープ・スナイパーも同じだ。しかし、オックス・ファイアはギガント・オリジンに突っ込んで行った。

その速攻は素晴らしい。素早い判断だ。

「うおおお！　オックス・タックル！」

叫ぶと同時に、何故かオックスファイアは崩れるように倒れ込んだ。オックス・ファイアは白目をむいて仰向けになっていた。しかもハープ・ノートとスコープ・スナイパーも倒れて動かない。何が起きたか分からない。

「え……！？」

ロックマンは夢でも見ているかのようだ。ギガント・オリジンの方に向き直る。

驚いた事に、ギガント・オリジンの暇だった片腕は、いつの間にかキャノンになっていた。ロックマンは、彼がいつバトルカードを入力していたのかまったく気付けなかった。それよりもキャノンの威力に驚いていた。さらに言えば、何という早撃ちだ。

ギガント・オリジンはキャノンを元の腕に戻すと呟いた。暗黒のマスクの下の、目が歪む。ロックマンは大吾のそんな瞳を見たくはなかった。

「これで三人リタイアです……」

「そんな……」

ロックマンは二本指だけで動きを封じられてしまい動けない。しかしロックマンも馬鹿じゃない。バトルカードを空いた方の手で入力していく。

「ギャラクシーアドバンス！　ニュークリアキャノン！！」

ロックマンは余った右腕をキャノンに変化させた。ただのキャノンとは違い威力はケタ違いだ。

「ちょっと、痛いかもしれないけどゴメンよ」

ロックマンの右腕から超新星爆発が起きた。零距離でギガント・オリジンは胴体の真正面からそれを喰らってしまう。ギガント・オリジンの後ろで戦いを繰り広げるラプラスと銀河連邦の隊員達は後ろに吹っ飛んでいく。それほどの爆風のはずだ。ましてや真正面から受ければただじゃ済まないはずだ。

そう、そのはずだ。しかし常識は通じない。そうだ、相手は最強の父親だ。どうやってもギガント・オリジンは後ろに吹っ飛ばない。その両足はピクリとも動かない。父親は圧倒的なまでの強さを以ってロックマンの前にそそり立っている。

「な……！？」

ロックマンは思わず息を漏らした。

ギガント・オリジンの腹は少しも焦げていない。割れた腹筋はいつも以上に逞しいだけだ。ギガント・オリジンは冷めた目でロックマンを見下す。事実、興醒めしていた。

「ワタシを舐めない方が良いでしょう。この男に気を使っていては、ワタシは倒せません。それに、アナタはまだ、本当の力を開放していませんね？

ロックマン……アナタはワタシ達の知る限り、最強の存在であらなければならないはず……。なのに、アナタはなぜ本気で戦わないのです？　アナタという存在にどれだけの命がかかっていると思うのです？

本気で戦いなさい！　ロックマン！！」

ロックマンはギガント・オリジンに真っすぐな瞳を向けた。一点

の曇りもなく、家族を取り戻そうと戦う少年の目だ。それにどれだけの思いが詰まっているのかは言うまでもない。

「僕は本気だよ！　本気で父さんを連れ戻したいんだ！」

ギガント・オリジンはくつくつと笑った。大吾はそんな笑い方をしない。

「バカですね。アナタの父親はここにはいない！　いるのはギガント・オリジンという戦士だけです！」

「父さんの顔をしてそんな事言うなよ！　頼むから、そんな事言うなよっ！」

ギガント・オリジンはキャノンをロックマンに向けた。面白くは無い。だがロックマンは笑った。父親から自分だけに注がれた明確な殺意に笑うしかできない。これはどう考えても、愛情ではない。ぽっかりと穿った砲口の奥が熱を帯びて燃えていく。

「ハハ……何やってるんだよ？　父さん……」

「敵に武器をかざしているのです。……それだけです」

キャノンの砲口がロックマンを終わらそうと、温まってくる。銃口は穏やかに、輝き始めた。ロックマンは絶望した。心に黒い雨が降り注ぎ、スバルの精神は汚く彩られた。だが、スバルはまだ大吾を信じていたかった。

足掻くしかない。大吾を信じて訴えるしかない。命の危険はあるが、もう大吾に背中は見せたくない。自分の今までに嘘を吐きたくない。

「父さん！　僕だよ！！　スバルだよ！　ねえ、起きてよ！　帰ろ

うよ、僕と一緒に！　約束しただろう！？」
「なるほど……。星河大吾の姿でさえあれば、ただ砲門を向けるだけで全てが終わる……。プルト・キグナスの言っていた事は、どうやら本当だったようですね」
ロックマンの頬を涙が伝っていた。
「そんな……、父さん。頼むよ……そんな事言うなよ……今まで僕は何のために……生きてきたのか……これじゃ……」
ロックマンは叫んだ。目は死んだ魚のようだ。
「分からなくなるじゃないか！」
ロックマンはギガント・オリジンの足元に崩れ落ちた。ギガント・オリジンはキャノンを下に向けた。完全にエネルギーをチャージしたようだ。温かい太陽のように輝いている。しかしその本性はどこまでも凍てついている。
ロックマンは戦意を失った。父親からたっぷり注がれるはずの愛情を期待した容れ物は、真っ黒な腐敗した感情で一杯になっていた。
「うっ、ううぅぅ。父さん……父さん」
ロックマンは地面に涙を落していく。握った拳はウェーブロードを叩いていた。
「期待外れだったわ……。ロックマン」
そこに二人の声だ。息も絶え絶えで、苦痛に喘ぎが混じっている。でも力強い。

「や、やめて下さい！　どうしてそんな事をするんですか？　家族なのに……こんなのってあんまりだよ！」
「うんうん、シツケにしてはやりすぎだよね」
「二人とも……？」

ロックマンが振り返る。
そこにハープ・ノートとスコープ・スナイパーが割って入ってきたのだ。ボロボロになっていても、まだ戦おうとしている。ロックマンが死んで良い訳がないのだ。
ロックマンは少しだけ自分が恥ずかしくなった。
そしてショックノートとレールスナイプがギガント・オリジンの頭を直撃した。ギガント・オリジンは首を回して鳴らす。やはり効いていない。

「まだ、戦えたのですか？　女だからと優しくしすぎたのかもしれませんね……」

その反省からか、二人にキャノンを向けた。威力は十分。

「言っておきますが、ワタシのフルチャージしたキャノンの威力は、ニュークリアキャノンをも凌ぎます。電波人間の強さの分だけ、バトルカードの威力も上がるという事です……」

スコープ・スナイパーは慌てて物陰を探すが、上空に浮かぶウェーブロードにそんな素敵なものは無い。

「ちょっと、やばくない？」
「でも、スバル君を放っておけない！　お父さんにあんな事されたんだもの！　放っておける訳ないよ！」

「……そ、そうね。ちょっと大吾さんにゲンコツを喰らわせないとね！」

ハープ・ノートとスコープ・スナイパーはロックマンの元へ駆けだした。とにかく今は、ギガント・オリジンのそばにいてはいけないと思ったのだ。特にロックマンの場合は、だ。

「まったく、馬鹿な娘達です」

ギガント・オリジンはハープ・ノートとスコープ・スナイパーに改めて照準を合わした。頭を吹き飛ばすつもりだ。

「友達の前で醜悪な姿をさらすが良いでしょう」

「や、やめてよ、父さん。これ以上自分を汚さないで！！」

そこまでやられたら、ロックマンも黙ってはいられない。咄嗟にギガント・オリジンの腕に飛びかかった。しかし子供一人をぶら下げてるのにもかかわらず、ビクともしない。

ハープ・ノート達も迎え討つ。

「ショックノート！」

「レールスナイプ！」

「消えてしまいなさい……！」

ニュークリアキャノンの数倍はあろうかという、巨大な力の流動が繰り出された。ただその流れは殺人的で、同情の余地は無い。ましてやその本体が同情するはずもない。ショックノートもレールスナイプも一瞬でかき消された。次は二人の番。

二人は流石にこれはマズイと思った。明らかに目の前の世界が暴れては蒸発していく。

スコープ・スナイパーは尻込みした。
ハープ・ノートはバトルカードのバリアを纏って、ロックマンの元へさらに力強く駆け出した。
すると少年の声がハープ・ノートを窘める。
「まったく無茶をする」
白い影が二人の前に颯爽と現れたのだ。その速さに二人は彼を認識出来ない。ただ彼は一瞬で剣を二本構えてキャノンに突っ込んでいく。二人は残像の存在で、やっと助けに気が付いた。
ソウル・レイダーだ。
「デトネイト・アスタリスク！！」
ソウル・レイダーの華麗な剣技の前にキャノンは六十四方向に分断された。キャノンは弾道ミサイルのように地面に逸れて落ちていく。
ソウル・レイダーは二人の方に振り返った。地面は大きく爆発して揺れた。
「俺がいなかったらお前ら死んでたぞ？　ちゃんと考えて行動をしろ！」
「でも、私はリーダーが来てくれるって何となく信じてたし！　ニャハハ」
スコープ・スナイパーは九死に一生を得て喜んでいた。そこにハープ・ノートが続ける。
「でも、友達を助けるのに理由は要らないよ」

ハープ・ノートの瞳はどこまでもまっすぐだった。ソウル・レイダーはふっと笑った。

「ああ、そうかもな。俺について来い、二人とも！」

「了解！」

「イエッサー！」

ソウル・レイダーはギガント・オリジンに切り込んだ。速いなんてものじゃない。

ギガント・オリジンは防戦一方だ。ソウル・レイダーの目にも留まらぬ剣技に成す術がなかった。ロックマン達は見守ることしかできない。この二人の電波人間の戦いにはついていけないのだ。ましてや、戦う事を放棄したロックマンに手が出せるわけがなかった。手負いの状態の女子二人もそうだ。それに細いウェーブロードの上だ。下手に手を出せば、逆に巻き込まれる。

「すごい、リーダー！　これなら私達いらないじゃん！　じゃあ、他のラプラスもどきを倒しに行きますかね！」

スコープ・スナイパーは他の敵を倒そうとしてみる。だが、ハープ・ノートに止められた。

「ちょっと、待ってください。ミライ君の様子がおかしい……」

見つめる先のソウル・レイダーは圧倒的な手数で次々とギガント・オリジンの防御をかいくぐり斬りつけている。でもそれだけだ。ソウル・レイダーは苦しくなってくる。

「くっ……！」

残念な事だ。実際に体力を失っていくのはソウル・レイダーの方であったのだ。いくら斬っても敵は斬れない。終わりは見えない。

それが疲労となっていく。
それにミライは長期戦が苦手だ。どんどん分が悪くなって来る。

「なんて硬さだ……！」

ギガント・オリジンは感嘆していた。しかし余裕だから呑気に驚けるのだ。

「アナタは……かなり強いですね。でも、相手が悪かった」
「まさか……星河大吾と電波変換するだけでここまでとは……」
「フフ……」

どうやら、ギガント・オリジンは今まで遊んでいたようだ。ソウル・レイダーの剣の一つを鷲掴みにして握り砕いた。こんな事をされるとソウル・レイダーはもう後の事を考えられない。今、全力を出さなければやられると思ったからだ。

「ちぃっ！　レイダーシンクロ率を上げるぞ！！　レベルPだ！」
『ですが、レベルPは……ミライ様が……！』
「このままじゃ、俺達がやられる！」

残った剣も斬りつけるたびに悲鳴を上げる。

『りょ、了解！　エクスフレーム解放！　レベルP！！』

ソウル・レイダーの戦闘周波数が一気に上昇した。ソウル・レイダーは紫色に輝いている。純白から一転、紫電のような一撃をお見舞いする。あまりもの抜刀速度に太刀筋が爆発した。

「まあ……。シンクロ率２０００％越えですか……！」

ギガント・オリジンの背中には切り傷が付いていた。一瞬にして背後を取られたのだ。首筋から背中を横断する大きな傷だ。だが、それだけではギガント・オリジンを倒すのには及ばない。

「なるほど。アナタは本当に強い。でも、アナタにはロックマンと違って、未来がないのです。それは本当に残念なこと……」

ギガント・オリジンはバトルカードをエアディスプレイから入力した。赤色のカードだ。止めという事だ。

「終わらせましょう……。バトルカード、カイザーナックル！」

一瞬の出来事。理解はできないし、してはいけない。

「なにっ！？」

目に見えない衝撃波が辺りを一網打尽にする。ギガント・オリジンを中心とした波紋は全てを破壊する。地上の街は吹き飛ぶ。その荒野を十倍までもの勢力に拡大させた。

ソウル・レイダーは成す術もなく吹きとばされた。他の銀河連邦の隊員達も、偽ラプラスことトレイス達も何もかもだ。それほどまでの圧倒的さだ。ギガント・オリジンを中心とした半径数百ｋｍは黒い宇宙船以外、何もかもが無くなってしまった。

犠牲となった街の住民の数は計り知れないだろう。

ギガント・オリジンは圧倒的すぎた。相手が悪すぎた。

一人ウェーブロードに佇むギガント・オリジンは見渡す限りの原始風景を眺めていた。

「おいおい。キミ、殺すつもりだったろう？」

そして、その背後から誰かが声をかけてきた。黒い鳥のような電波体だ。空間に穴を開けてそこから出てくる。隣にはスコルピオ。他にもギガント・オリジンと似た電波人間が五体いた。恐らく彼らがきずなクルーだろう。

ギガント・オリジンは笑った。

「ご冗談を」

ギガント・オリジンは敬語でキグナスに接する。やはり上司の手前では、という事なのだろうか。

「ふん。まあいいよ」

プルト・キグナスはウェーブロードに降り立つと、同様にして空間に穴を開けた。真っ黒な反転世界から、ロックマン達が放り出されて来る。プルト・キグナスがとっさの判断で回収していたのだろう。

ウェーブロードに気を失った電波人間達が転がった。しかしロックマンとソウル・レイダーだけは何とか意識を保っていた。しかし、大量の死骸や電波人間に埋もれてしまってプルト・キグナスからは確認できない。

それもそのはずだ。ロックマンとは関係ない銀河連邦の隊員や、トレイス達も放り出されてきたのだから。

プルト・キグナスはそれらを余分な物として扱う。さも当然かのように地上に蹴り落していく。その中にエメリオルも含まれていた。

「ああ、メンドクサイな。咄嗟の空間指定のせいでゴミも一緒に回収しちゃってるよ……」

そう言いながら、いやらしく笑う。ギガント・オリジンに嫌味を言っているのだ。ギガント・オリジンは何も言わない。そして、粗大ゴミの山から、ロックマンとソウル・レイダーが出てくる。

「おっ、発見。隣の白い彼は友達かい？」

「くっ……」

プルト・キグナスはロックマンを見つけるとニヤつく。ロックマンはもう体が動かない。黙って、プルト・キグナスを睨むしかなかった。

ソウル・レイダーは何とか立ち上がってキグナスに剣を構えてみせる。しかし彼も満身創痍だ。

「まさか……次元の狭間に隠れていたとはな……。どうりで見つからないわけだ」

「おいおい、やめときなよ。もう電波変換を維持しているのもやっとなんだろう？　フフ、次元の狭間から君たちの茶番を見せてもらってたよ。特にスバル君の表情は笑えたねえ。ハハ！　コピーの父親に本気になっているんだもの！　可笑しくってねえ」

「キサマ……！」

「父さんが……コピーだって？」

ロックマンはプルト・キグナスを出来るだけ軽蔑した眼差しで睨んだ。キグナスはにやにやとして受けて立つ。ロックマンの今まで

の必死の形相を思い出しているのだ。それだけ笑えるという事だ。

「気付かなかったのかい？　君の父さんは他のきずなクルーとは違って特別でね。それはもう、神のお眼鏡に適う個体らしいよ？　だから今回はそのコピー体で戦闘実験と言うわけさ。本物は大切に扱わないとね。傷でも付いたら大変だ。

まあ結局は、君と偽物の父との家族ごっこは最高だったって事だね。ありがとう」

プルト・キグナスは最低という言葉が良く似合った。少なくとも、FM星人であった時の誇りはもう微塵もない。レギオンになった事で強さを得た代わりに、何かを失っている。

「とにかくだ。君の絶望する表情は最高に間抜けだったよ。よかったねえ、あの父さんが本物じゃなくてさ。

ほら、笑えよ。スバル！」

ソウル・レイダーは堪らず斬りかかった。

「クズめ！」

「ふん、ボロボロの分際で！　ブラックフェザー！」

「ミライ君！」

黒い羽が矢継ぎ早にソウル・レイダーに突き刺さった。ソウル・レイダーは苦痛に顔を歪めた。そして倒れ込んだ。黒い羽がひらひらと不吉に舞う。

「雑魚は大人しく寝ているんだね！」

そしてプルト・キグナスは面倒事を済ました様子で、やれやれと

ギガント・オリジンに聞く。

「さて、と……どうだった？　ロックマンは？　一年前より成長してたかい？」

「どうでしょうか？　一年前のロックマンは知らないので。ですが、どうしようもない甘ったれだと言う印象です」

「ふふ、アマちゃんか。スバル君らしくて、いい事だね」

そこでプルト・キグナスはギガント・オリジンに苦言を呈する。先程のギガント・オリジンの行動は明らかな命令違反だったのだ。スバルにはもっと、もっと苦しんでいて欲しかった。

「でもさ。君、なんでいきなりカイザーナックルなんて使っちゃうのさ？　スバル君はもっと苦しめてから殺さないといけないだろう？」

ギガント・オリジンは切り返した。言葉の端には棘がある。本性を表したのだ。

「ワタシにアナタの指図を受ける義理はありません。それに私は、どうしてもロックマンの力を見定めておく必要があったのです」

それはプルト・キグナスに反旗を翻す意思表示だ。その言葉に周りの電波人間達は驚くしかない。しかし彼らには言葉は無いので、ラプラスのように呻くことしかできない。トレイスは言葉を持たないのだ。だがギガント・オリジンは違う。

プルト・キグナスはギガント・オリジンを睨みつけた。

「君……！　誰にものを言っているのか分かっているのかい？　たかがトレイスの分際で……。大吾君と電波変換しているからと言っ

て調子に乗るなよ？　言っておくがそれはコピーにすぎないんだ！」
「ふふ。馬鹿な人……。こちらこそ言っておきますが、私はトレイスではありません」

プルト・キグナスはその言葉の真意を測りあぐねている。苛立ちの募った顔だ。普段の澄ました顔はどこへ行ったのか、憎悪が見え隠れしている。

「知っていますよね？　トレイスに本来、言語能力はありません」
「そんなの知っている。アイツらは戦闘人形だ。でも人間と電波変換したら知能を得るんじゃないのかい？」

ギガント・オリジンは顎をしゃくった。その先にはきずなクルーである電波人間がいた。五人ともさっきから呻いている。確かに人形のようだ。

「アナタは彼らが喋っているのを見たのですか？　まさか、星河大吾が取ってつけたように特別だとでも？　アナタは自分でもさっき言ったはずです。これはコピーだと」

プルト・キグナスは目の前の存在が何なのか分からなくなった。少なくとも、自分が命令を下した時は従順なトレイスであったはずだ。こんなにも尊大な態度で迫ってくるはずはなかった。

「じゃあ、君は一体？」

おもむろにギガント・オリジンは電波変換を解除した。そして分離した中から人影が二人。一人は大吾コピーだ。彼は倒れると粉塵に帰した。そして、もう一人も人間だった。これはおかしい。もう一人はトレイスのはず。ラプラスのような電波体のはずだ。亡霊が

いなくてはおかしい。可笑しな話だがそういう事なのだ。
だが目の前にいるのは人間だ。ありえないとプルト・キグナスも思った事だろう。
その人間は長い白髪で、赤い瞳に浅黒い肌の女だった。体のしなやかなラインを強調する黒い服に身を包んでいる。彼女は生身の人間でありながら、ウェーブロードに立っている。これはただ者ではない。
そして、艶っぽい唇から淑やかながらも、厳かである声で言った。

「私はシュンラン……全ての始まりの母です……」
「あ、あなたは……！」

プルト・キグナスは戦いて、後ろに退いた。あのプライドの高いキグナスが怖気づいているのだ。彼女は血のように紅い瞳でプルト・キグナスを凛とした眼差しで突き刺す。それは悪戯の過ぎた子供を咎めるようなものだった。

「なぜ、アナタがここに？」

プルト・キグナスは恐る恐る問いかけた。彼女の逆鱗に触れないようにしたのか慎重な口調だ。

「プルト・キグナス……。アナタは少し悪戯が過ぎたようですね。創世主が命令した事はきずなクルーの回収だけだったハズです」

「分かっていますとも！　ですから、もう六人も集めているではありませんか！？」

シュンランは首を振った。

「そういう事を言っているのではないのです……」

「それは、惑星を攻撃したからですか？　でもそれは……！」

「いいえ」

「では……？」

「創世主の命令は、きずなクルーの回収のみ。こんな惑星で時間を潰している余裕は無いはずです。彼らは最高の実験体のなのです。早く創世主に渡してあげるのです。それがアナタの使命」

プルト・キグナスは返す言葉もなかった。私情でロックマンを絶望に叩き落そうとしたのだから。

「くっ……。アナタはいつから、僕を監視していた？」

シュンランは笑った。

「いつから……？　それはいつも、です。私は始まりの存在。そして私の子供であるトレイスとオリジン……。その中でもトレイスの方には、私がいつでもアクセスできるように作られているのです。それがトレイスに人格のない理由。そしてアナタの部隊に配備している理由ですよ」

「だれの命令で僕の監視を？」

「創世主です」

プルト・キグナスは思わずシュンランの顔を見つめる。その紅い二眼に釘付けになってしまう。信じられないと顔に書いていた。

「神が？　そんな！　僕は信用されてないというのか？　僕は神に愛されているはず！！　だから、この能力だって！」

「見苦しいですよ。プルト・キグナス。アナタはどうにも自分の欲求を優先させる悪い癖があります。創世主はそれを嘆いていました。そもそも、その力は多用していいものではありません……」

「くそ……！」

「まずすべきは、即刻元いた時間に帰って創世主の元へ急ぐ事です。幸い、あの方はまだアナタの事を見限っていないはず」

「……そういう事なら仕方ないですね」

プルト・キグナスは黒い宇宙船の方に向かおうとする。ロックマンに背中を向けた。ロックマンは掠れる声で叫んだ。

「待て、キグナス……！！　逃げるな！　父さんを返せ！　ロックを返せよ……！」

「うるさいな」

キグナスは鬱陶しそうにロックマンを見下ろす。

「……なんだ、ウォーロックはまだ帰っていないのか。まあ、ここは過去の世界だからね……。

とにかく、僕はウォーロックについては何も知らないよ」

しかし、喋っている最中に思い出したようだ。木星付近の宇宙での出来事だ。相手はロックマンでとても強かったとプルト・キグナスは認識していた。しかし、それでもプルト・キグナスの方が上回っていた。

プルト・キグナスは思い出して笑った。ロックマンの耳には不快さだけを印象に残す。

「あ、でも僕がコテンパンにしてやったんだっけ。そうだそうだ。今頃は宇宙のどこかを死にかけで漂っているんじゃないかな？　もしかしたら、もう死んでいるかもね。ハハハ！」

ロックマンは歯を噛みしめ、目を見開き、怒りを露わにした。目は乾いて、もう涙も出ない。

「おまえっ……！　絶対に……許せない！」

そこにスコルピオが言ってやった。毒のある言葉を吐いていく。

「キシシ！　お前のオヤジを返す訳ねーだろ馬鹿が！　それにウォーロックだってもう死んじまっているよ。キシハハハ！　さあ、キグナス行こうぜ？　さっさと俺をレギオンにしてくれや！」

ロックマンはなおも叫ぶ。

「返せ……よ！　父さんを……！　ロックを！　頼……むよ！　お願いだよ！！」

「そうだねえ……」

プルト・キグナスは考えた。悪い笑みを浮かべる。

プルト・キグナスは何を思ったのか空間を捻じ曲げて、大吾の入ったカプセルを時空の穴から呼び出した。中では大吾が、いかにも実験体といった様子で浮かんでいた。髭面に拍車がかかり、少しやつれている。

「……じゃあ、顔だけでも見せてあげるよ。僕も鬼じゃない」

プルト・キグナスはカプセルを小突いた。

「おい、大吾君。起きなよ。君の最愛の息子が、わざわざ百万光年以上の遠くから君に会いに来てくれたよ？」

「父さん！」

『くっ……俺は一体。ウォーロックと一緒に戦ってその後……。う……思い出せない……。それに何だ……ここは？　力が全く入らない……』

大吾はゆっくりと目を開けた。ぼんやりとしているが、命に別条はないようだ。ロックマンはカプセルの所まで這いずって近づいていく。プルト・キグナスはその様子を楽しそうに見ていた。必死に笑いをこらえているのが見ていて分かる。プルト・キグナスにとっては極上の喜劇と言うわけだ。

「父さん、僕だよ。スバルだよ！　分かる？　ほら、そんなとこに

いないで一緒に帰ろうよ」
『スバル……なのか？』
「うん。そうだよ！　父さんを助けに来たんだ！　それに、ロックは宇宙を迷子になっているみたいなんだ。一緒に探しに行こうよ」
『そうか……。少し、見ない間に大きくなったな……。それにどうした。ボロボロじゃないか？』
「ううん。こんなの平気だよ」

ロックマンはやっとの思いでカプセルの所までたどり着いた。彼の這った跡は真っ赤に染まっていた。傷は浅くは無いらしい。ロックマンはにっこりと大吾に微笑む。大吾もしゃがんでカプセルの壁に手を当てた。ロックマンも手を当てた。透明な壁を隔てても温もりは伝わる。ただ温かかった。

「温かいよ。父さんの手」
『そうか……』
「待ってて、今この壁を壊すからね」

ロックマンは力なくカプセルの壁を叩く。ロックマンは必死に叩くがビクともしない。ロックマンは残された全ての力を奮った。しかし、その残された力はあまりにもか弱かった。
大吾は目を逸らした。

「あれ？　おかしいな。全然壊れないや。ちょっと待っててね、父さん。もうちょっとだから……」

いくら頑張っても、ロックマンはカプセルの壁に、血の拳の跡を作るだけだった。大吾は目をつぶってやりきれない思いを噛みしめていた。息子がこんなにもボロボロになっているのに自分は助けて

やれない。ここまでたどり着くのにスバルが味わった、悲しさと、苦しさを思えば一入（ひとしお）強く大吾の胸を叩いた。悲しい音が寂しく鳴り響く。段々小さくなっていく。そして、聞こえなくなった。

『もういい、スバル。もういいんだ……！』

「まって。もうちょっと……なんだよ……。きっと多分、あと一回で……！　あれ……、おかしい……な。体が……、頑張ら……なきゃ……いけ……ないのに……ね」

『スバル……！　チクショウ！　チクショウ……！』

大吾は顔を覆った。目の前にいるのは地面に倒れて、もう動けないスバルだった。手首だけが必死にカプセルを叩いている。もうスバルは限界だった。切ないなんてものではない。スバルが頑張れば頑張るほど、大吾は辛い。

「とうさ……ん。ぼく……」

『もういい！　スバル、逃げろ！』

プルト・キグナスがロックマンの傍らに立って親子の様子を観察していた。顔は満面の笑みで歪んでいた。

「ハハハ！　やっぱり、傑作だ！　これは楽しい！　アハハ！！　なあ、スバル。君も父親と会えて幸せだろう？　なあ！」

プルト・キグナスはロックマンの背中を思い切り踏みつぶした。ロックマンの背中のバックパックは粉々に砕けた。ロックマンは口から胃液を吐いた。ウェーブロードに吐瀉物が広がっていく。ロックマンは頭を踏まれて、顔面を汚くした。

「ぐあ……！」

『スバル！』
「そら！　幸せだろ？　なあ、スバル？！　泣いて笑いなよ！　ほらっ！！」
「うっ、ぐ。まってて、とうさ……ん。今、助け……」
ロックマンはまだ諦めていない。バイザーは粉々に砕かれ、ヘッドギアもヒビだらけだ。それでも、ロックマンは諦めない。四年間耐えてきたから、まだ諦められないのだ。いろんな後悔を味わってきた。
そんな、今までの辛さに比べたら、体を踏まれても、顔を押し潰されても、平気だった。大吾が目の前にいるだけで全て帳消しだった。ロックマンは、自分の限界を超えていける。
プルト・キグナスは大いに笑った。
「ハハハ！　とんだ茶番だ！　こんなのがロックマンだなんてね。笑わせてくれるよ。ハハ、もういいよ。十分だ！　感動の親子の再開はもうおしまいだ」
笑い疲れたのか、プルト・キグナスは時空を操作し始める。空間が歪んでいく。大吾をまた元の場所に飛ばすのだ。カプセルは狭間に飲み込まれていく。大吾は壁に張り付いて、最後までロックマンに呼び掛ける。しかし大吾とスバルは徐々に離れていく。
『スバル……！』
「と……うさ……ん、待って……よ。行かないで……よ。もう……いやだよ。ぼく……いっぱい、がんばったんだ……よ。あのね、友達もたくさんできたん……だよ。背も……伸びたよ。いっぱい、話したい事が……あるんだよ。母さんにも、会って安心させてあげてよ……。もう、泣いている家族はイヤ……だよ。普通の家族になり……たいよ」

スバルは指先を大吾の元へ延ばそうと必死に這っていく。もう体は思うように動かない。

『スバル！　俺はお前の事をいつも想っているぞ！　だから、強く生きろ……！　諦めるな！　仲間を頼れ！　いつも笑え！　お前なら……出来るから』

もう少しで手が届く。

「僕……も……大すきだよ……」

大吾もカプセルに手を当てて待っている。もう少しで届く。届く。もうひと頑張りだ。

しかし指先が、かするかかすらないかの所だった。スバルの手をプルト・キグナスが踏みにじった。スバルは、手の激痛に耐えながら最後だけは、と笑顔を送った。大吾が闇に呑まれていく。

「父さん……、待ってて……ね。また会いに行くよ……。大好きだよ……父さん。絶対、ぼく頑張るから……！」

『スバル……俺もお前を――』

空間が閉じて、大吾は消えてなくなった。ロックマンは肩を震わして、嗚咽を堪えている。ちっぽけな背中は痛々しく、打撲の跡で滅茶苦茶に傷だらけだ。小さな胸も一杯だ。詰まって胸が苦しいはずだ。

「うっ……うぅ。ううう……」

「まったく、ダメじゃないかスバル君。せっかく会わせてあげたのに。感謝の言葉もなしかい？　うるさいから、泣くのをやめなよ」

プルト・キグナスは面倒くさそうにロックマンを見下ろした。うるさいロックマンを黙らせようと、攻撃を加えるために羽を広げる。だが、勝手な判断は自分の身を滅ぼすとプルト・キグナスは考えた。シュンランに判断を仰ぐ。

「ロックマンはどうしますか？　僕は、スバル君の目の前で、この新しい相棒をデリートしたい気分なのですが」

「やめなさい。私は今、酷く不快です……」

軽蔑する眼差しだ。

「では、放っておくんですか？」

「いえ。私達は元いた場所に帰ることとします。ですから、きずなクルーの電波人間にこの場の始末を任すこととしましょう」

「ふっ。アナタも存外酷い人だ……」

「アナタ程の外道ではありません……」

「ですが、いいのですか？　電波人間をこの時間に置いて行っても？」

シュンランは全て悟ったような口調で言う。

「アナタはこの時間の、この宙域できずなクルーの一人を見つけたのでしょう？　だったら問題ありません」

プルト・キグナスは頷いた。

「よく知っていますね。僕の友達にスコルピオがいるんですが、彼はこの場所の地理に開けてましてね。お陰さまで、レベッカ・レッドリバーを見つける事が出来ました」

「キシシ！　確かに、俺は銀河連邦の要人暗殺とかで、アンドロメダ銀河には良く来てたからな。キシシ！」
「なら、問題は無いでしょう。彼女にこの場の始末を任せます。彼女の回収は未来の世界で行えば事足りるでしょう。そうすれば、何の矛盾もありません」
　キグナスは不敵に笑った。
「でも、万が一ロックマンにやられたら、ブラッド・オリジンはどうなるのでしょうね」
　プルト・キグナスはブラッド・オリジンを横目に見ながら示唆した。ブラッド・オリジンとは、きずなクルーの紅一点、レベッカ・レッドリバーとトレイスが合体した姿だ。
　ただシュンランは怪しく笑うだけだった。
「フフ……どうかしら？」
　キグナスはブラッド・オリジンに命令を下す。ブラッド・オリジンは小さく頷いた。
「まったく、今回は大変でしたよ。手下のトレイスの大半を失ったんですから」
「トレイスとオリジンはまたいくらでも作る事が出来るわ。私がいる限りね。さあ、行くわよ」
「じゃあね、スバル君。また会おう。今度もまた、君から大切なものを奪ってあげるからね」
　プルト・キグナスは羽を伸ばして笑った。黒い翼がヒステリックな笑いを彩る。そうやって宇宙船に向かう。

「……」

シュンランはふとロックマンに振り返った。

ロックマンはボロボロで突っ伏している。もう戦う力は残ってはいない。そこに、きずなクルーの電波人間が襲えば、そこで終了だ。ロックマンはもちろん、ミソラ達もただでは済まない。

しかし、シュンランはもうそろそろだと思っていた。今までの事を参照するとそう考えるべきだと思っていたのだ。ロックマンが意味のある存在に変わる時が近づいていると、彼の変わりつつある周波数から判断していた。

その力は誰しもが持つ、その人だけの物語の力。

（ロックマン。アナタは本当の力を出していない。今までの全てのアナタが、培ってきた記録と記憶を……。そして、これからのアナタだけの物語を……。

アナタは最強でなければならないのよ、ロックマン。生き残りなさい……）

そしてプルト・キグナス達は元の時間に帰って行った。彼らは惑星リギアの国政首都を一つ消滅させてしまったのだ。これを重いと取るか、軽いと取るかは人それぞれだ。だが、失われた命は計り知れない。たとえ彼らが、異星人であっても、機械の体であったとしてもだ。人間には変わりは無い。

リギアの空はどこまでの闇だ。そして、その闇は血の海へと変わる。

「ああ、うあ。ろっくま……ん……。デリ……と」

死の気配と共にブラッド・オリジンがロックマンににじり寄る。

紅い電波人間は瞳をぎらつかせた。

ｂｏｎｄｓ―１７：君だけの物語の始まり

とある宇宙空間。真っ黒な下地に、白いペンキのしぶきが星屑として僅かに輝いているだけ。

そこにはプルト・キグナス達を乗せた宇宙船が飛んでいた。静寂の闇に溶けるように、広いだけの世界を突き進む。黒い上に黒さだけが際立つ光景である。

スバル達がいた世界より未来の時間に戻り、彼の崇拝する『神』の元に向かっているのだ。

宇宙船内の指令室に例の玉座がある。そこに主（あるじ）はいない。その周りをトレイス達が雑用として、亡霊のように行ったり来たりしているだけだ。

奥で大吾達五人のきずなクルーは、カプセル内で安置されている。船内の廊下からプルト・キグナスの話し声が聞こえてきた。くぐもった声が廊下に響く。

「どうしてでしょうか？　アナタはロックマンに僕以上に特別な感情を抱いているようですね。僕は理由が知りたい」

シュンランとプルト・キグナスは大広間で向かい合っていた。その装飾は白金で贅沢にあしらわれている。白鳥の彫像が壁に沿って列挙している。対照的な黒鳥は黒い肘を突いて、白金の机に黒い影を落としている。目線の先にはシュンランが背筋よく座っていた。片手には白金のワイングラス。中に入っている血のような液体が紅い唇をさらに染めていく。澄まし顔のシュンランはプルト・キグナ

スの問いかけを聞いているのか分からない。
プルト・キグナスは眉をひそめた。するとシュンランは白金のグラスから唇を離した。貴金属の輝きを失った唇は、それでも負けず劣らずの歯をちらりと覗かした。

「……なんの事はありません。理由は、そうですね……あの子はレベル１３であるから、とだけ言っておきましょう」

プルト・キグナスの目はさらに細くなった。切れ込みのような鋭さに、疑念を添えていく。シュンランはその様子を見ても、落ち着き払っていた。まるで無知なプルト・キグナスを小馬鹿にしているようだ。
プルト・キグナスは面白くない。

「レベル１３……？　なんですか、それは？」
「アナタは知らなくても当然でしょう。つい最近レギオンになったばかりなのですから……。１００億年以上の歴史からみればほんの一瞬の事ですものね」

シュンランはワイングラスを片手に遊ばせる。目を瞑り、液体の香りを楽しんでいるかのようだ。
そして同様に赤い片眼がキグナスを刺した。シュンランは話を続けた。

「彼は、最後の最後まで創世主の最高傑作と戦い抜いた異常個体――それゆえに進化の兆しを見せた生命。あの子はそのデータを全て記録してこの世界に生まれたのよ」
「あの神の最高傑作と最後まで渡り合った……ですって？　信じられない……」

プルト・キグナスは心当たりがあった様子だ。思い直ったようにシュンランをうかがっていた。

「正確には彼と渡り合えたが、今は渡り合えない、とでも言うべきでしょうね。

その彼は今、インフィニットと呼ばれてるわ……。ナンバーズレギオンを従えているアナタ達の統率者と言ったところかしら。

彼はレギオンズナンバー：ゼロ。創世主の最も愛した最終兵器……そして最強の破壊者」

「初めて会った時、僕は戦慄しました。まるで力を手に入れて嬉々としていた子ネズミの横を、獅子が悠然と通り過ぎていく感覚でしたね……」

シュンランはグラスに目を落とした。回されていた中の血は輪廻のように巡り巡っていく。

「フフ、確かにそうね。インフィニットは正真正銘の世界の救済者であり破壊者ですからね。でも星河スバルは、そんな彼の前でレベル１２よりも優秀な個体としてレベル１３に選ばれたわ。

そしてさっきのあの子こそが、アカシックレコード・レベル１３の最初のアクセス権限者となりうる者よ」

プルト・キグナスは合点がいった様子だった。広間の小窓から覗く宇宙を眺め始めた。

「なるほど……。だから、アナタはロックマンに力の解放を要求していたのですね」

「ええ、ロックマンは最強でなくちゃいけないの……。最強の存在だからこそロックマンなのよ。それは創世主が望んだ事でもある」

「まったく神の考える事は分からないですね……」

「フフ……。とにかく、あの子がアカシックレコード・レベル１３にアクセスできるかどうかによって今後の実験の結果は左右されるわね」

プルト・キグナスはシュンランに向き直った。

「もし……スバル君が、ブラッド・オリジンにデリートされたら……？」

「その時は……。またどこかの誰かが、レベル１４として選ばれるだけよ」

シュンランは、プルト・キグナスに紅い瞳を送りつけると微笑した。その意味合いはどこか切なさに訴えるものだった。

そして席を外す。プルト・キグナスを灼熱の燃える氷で見下ろす。

「話はもうおしまいよ。そろそろ空間転位の準備を始めなさい……プルト・キグナス。創世主の元へ向かうのよ」

プルト・キグナスは渋った。

「ですが、神の星は普通の宇宙とは違う特異空間……。言わば、外の世界。いくら僕の次元渡りの能力があっても、宇宙の外へは干渉できません」

「いいえ。今は実験の最終段階よ。創世主の星も、今は全宇宙の再外部と接地しているわ。そうでなければ、神と私達の流れる時間軸がずれて実験に支障をきたしますからね」

「そうでしたか……。いよいよ実験も最終段階っていうことですね」

「そう。今はインフィニットがディメンション・ゴーレムの解除キーを何とか生成しようとしているところよ。あの解除キーは相当のエネルギーを必要とするから、彼も大変だわ」

キグナスは笑みを浮かべた。なんとスバル達の心配をしているのだ。これから起きる事を考えたら、どこまでも地に堕ちた下衆も優しく他者を気遣えるということだ。

「フフ、そうですか。スバル君達にとっては長い一年になりそうですね」

そしてキグナスも立ち上がった。そして白金の世界から覗く、どこまでもの闇を見据える。シュンランも同じように宇宙を望んだ。そして呟く。

「ロックマン……。アナタのアカシック・レコードを開放してみせなさい。

そこにはアナタだけの物語があるはずだから……」

一方、二二ＸＸ年五月一七日水曜日。もう少しで一八日になろうかという時間だ。夜空にはミルキーウェイが走ると言うが、母性溢れる乳濁色はどこにも無い。何故か赤い天の川が浮かんでいる。

そんな血塗られたウェーブロードは、砂鉄にまみれた風に撫ぜられる。だがその血はどこまでも深く一向に乾く気配は無い。

ロックマンはそんなウェーブロードで、力なく倒れていた。浅く息をするたびに砕かれた背中の青き氷山が隆起する。息も絶え絶えとは読んで字のごとくロックマンそのものを指す。か弱いガラス細工のような人形がヒビだらけで横たわっているのだ。

ブラッド・オリジンは命令を遂行しようとロックマンに歩み寄る。血だまりを、まるで生肉にかぶりつくかのような咀嚼音を鳴らしな

がらで近づいてくる。
ロックマンは立ち上がろうとする。しかし動かない。動けない。
「クッ……体が……動か……ない……」
ロックマンはカイザーナックルの爆裂する疾風に当てられていた。一瞬かすっただけでもう動けないのだ。それだけの力がカイザーナックルは有していた。
ロックマンはミソラ達が転がるウェーブロードの広場へ何とか首を倒す。
数は数十体だ。トレイスと銀河連邦の隊員の中、スコープ・スナイパーとハープ・ノートが埋もれていた。だがオックス・ファイアの姿は無い。どうやら彼はエメリオルと一緒に地上に棄てられてしまったようだ。オーPGMの電波変換補助システムがなかったら、電波変換が解けて、命は無かっただろう。
ロックマンは、ぼんやりと霞む景色に何とか仲間を捉えている。そうやって少しだけ心を落ち着かせている。
（なんとか……ミソラちゃん達の安全だけは確保しないと……）
思考を巡らせ目の前の注意が散漫になる。しかし、その視界を真っ赤な柱が遮った。ブラッド・オリジンの足だ。とにかくロックマンは目が覚めた。そして風を切る音。金属バットを振るうまさにそれと同じだ。
その紅い柱はロックマンの顔面を強打した。声にならない声を絞り出させるには十分な暴行だ。
「っ……！」
「あ……うあ？」

ブラッド・オリジンは首を傾げた。不思議そうにロックマンを見下ろしている。今度は腹だ。

「……っ！」

「でり……と」

ブラッド・オリジンは落し物を拾うかのようにしてロックマンの首を掴み上げた。ブラッド・オリジンはロックマンの苦しむ顔を不思議そうに眺める。そのまま首を締めあげると、ロックマンの顔は赤黒く変色していく。つま先はぷらぷらと宛先もない。

ブラッド・オリジンが疑問を解決しようとするたびに不思議な事が起き続ける。次はロックマンの鼻が折れた。次は前歯が折れた。次はまぶたが切れた。次はどうだろう。

ロックマンは笑った。真っ赤なでこぼこ笑顔が何故か優しく光る。ロックマンの中でレベッカは大吾の仲間だった。まだ彼女を信じているのだ。

「あの、あいつらの話は……聞いてましたよ……。レベッカ……さんですよね……？　初め……まして……、星河スバ……ルです。いつも……父さんが……お世話に……なってます」

ロックマンは大吾の同僚に笑いかけた。どこまでボロボロにされてもレベッカに笑顔を送る。ブラッド・オリジンは理解が出来ない。もっと首を絞めた。もっとだ。ただ、もっとロックマンは笑った。

「父さん……は、宇宙ステーションの中で……はどんな風に過ごしてま……したか？　宇宙を……楽しんで……ましたか？」

その答えの返事は強烈なものだった。ブラッド・オリジンは殺人

拳をロックマンの柔肌に叩きこんだのだ。あばらがメシメシと悲鳴を上げる。腹の中で胃が完全に捩れているはずだ。しかし笑える類のものではない。しかし、なおもロックマンはレベッカに笑顔を送る。笑えたものじゃない笑顔がブラッド・オリジンを襲う。

「父さん……の、いびきは大きかった……でしょう？　迷惑かけて……たかもしれません……よね。ハ……ハハ」

「うあ？　お！？」

ロックマンは、ブラッド・オリジンの濁った湖のような瞳をまっすぐに見つめた。レベッカに訴えかける。目を覚ませ、と心に直接届く事を願った。とにかく残った力を何とかして声に変換する。

きずなクルーの底力を信じていた。

スバルはいつだって信じていたのだ。

「ねえ、レベッカ……さん。目を覚ましてくだ……さい……っ。僕にきずなクルーのお話を聞かせて下さいよ……。僕の知らない……父さんの事を話してよ……。宇宙の事を……。みんなの事を……」

不意にロックマンの首を絞める握力が緩んだ。ロックマンのつま先が地面に届いた。ブラッド・オリジンはうつむいて困惑している。

「う……あうあ……？」

「僕の……中じゃ、きずなクルーは英雄なんだ……よ？　だから……っ。キグナスなんかの言いなりにならないで……っ。目を覚ましてよっ。レベッカさん……！　僕の憧れたきずなクルーは……そんなものに屈しないはずなんだ……！」

「……う、うあ……！」

錯乱したブラッド・オリジンはロックマンを地面に叩きつけた。

あの真っすぐな瞳は、ブラッド・オリジンにとっての毒だったのだ。いつまでも相対していると意識を取り戻してしまいかねないのだ。

トレイスの

濛々（もうもう）とした意識でもそれだけは認識できたのだろう。

ロックマンを叩きつけられたウェーブロードは、衝撃で一瞬だけ弛んだ。それほどの勢いでロックマンは頭から叩きつけられたのだ。ロックマンは混迷した。体の末端がまるで他人事のように反応しない。神経でも切れてしまったのだろうか？　とロックマンはぼんやりとした脳内で千切れた四肢を思い描いた。

「う、うあああ！！」

ブラッド・オリジンはロックマンを捨てて、ハープ・ノート達の方へ駆け出していく。ロックマンは衝撃からか、頭に脳味噌をかき混ぜる酷い痛みを感じた。頭痛にしてはあまりにも変則的な痛みの周期だ。目に映る世界が、混ざるコーヒーに差すミルクのようにぐにゃりと歪む。

ブラッド・オリジンはまずトレイスの一人をデリートした。ブラッド・オリジンが思い切り踏みつぶしたら、卵のように呆気がなかった。次はハープ・ノート達の番かもしれない。ロックマンは口を大きく開けて叫ぼうとした。だが、口どころか眼球の一つさえ動かせない。もはやロックマンはダメージの限界を通り過ぎて半死体であったのだ。

つまり、極限状態だ。目の前で大切な友人が屠（ほふ）られようとしている。ロックマンは心の中で叫んだ。立ち上がってブラッド・オリジンに殴りかかっているイメージだ。

（やめろ！　やめてくれよ！　もう僕から大切なものを奪わないでくれよ！！）

ロックマンのピクリとも動かない眼球の奥は小さな炎がくすぶっている。眼球の奥はブラッド・オリジンを映す。ハープ・ノートを探している。

もう駄目かもしれない。大人しく地球に帰っていれば良かったかもしれない。そんな事ばかりを考える。スバルの頭は真夜中の高速道路のようにチカチカと情報が走っていく。

（父さんと、ロックだけじゃまだダメって言うの!?　ミソラちゃんまで奪おうとするなんて酷過ぎるよ……!!）

ミソラがとうとうブラッド・オリジンのターゲットになってしまった。頬を鷲掴みにされハープ・ノートの口から血がトマトジュースのように垂れていく。ブラッド・オリジンの腕は漏斗の役目を果たしてウェーブロードに血を送る。

ハープ・ノートの手は力なく垂れている。ブラッド・オリジンは片腕をソードに変形させた。鋭い切っ先だ。華麗な歌声を生み出す喉笛を狙っている。

ロックマンは無力だった。自分の眼球を通しての視覚情報は十分だ。だが体は動かない。どこか他人事を決め込んだ肉体が恨めしい。意識だけがぼんやりと漫然と、動かない体に腰を下ろしているだけだった。

（やめて！　やめてよ!!　やめ……）

ロックマンはとうとう心の中で叫ぶのも叶わなくなってきた。次はどこでなら叫べるのだろうか。多分あの世だろう。ロックマンの体は冷たくなっていく。意識が遠のく。もう疲れた。

ロックマンは意識を失った。

（……ミソラちゃ……んを助け……な……きゃ……）

ロックマンが気を失うと、ハープ・ノートは頬から伝わる強烈な圧迫感に、皮肉にも目を覚ました。しかし目を覚ましたところで、すぐに目を閉じる事になるだろう。いや、目を見開いて死ぬ事になるかもしれない。

その時ハープ・ノートは、道路で轢死体（れきしたい）となって転がる子猫のようなロックマンを捉えた。ロックマンは動いてはくれなかった。ハープ・ノートはこれからの事態を悟った。

「スバル君……」

ハープ・ノートは諦めたように目を閉じた。

「私がいなくなっても泣いちゃダメだよ……？　だって、泣いてるとスバル君がルナちゃんに怒られちゃうもの……」

ブラッド・オリジンがソードを後ろに引いた。思い切りよく、気持ちよくハープノートの喉を裂くつもりなのだ。これで終わる。

ｂｏｎｄｓ―１８：自分だけの物語の力

その時スバルは精神の奔流の中を漂っていた。夢の中かは分からない。ただこれだけは言える。決まっていた運命なのか、掴み取った真理なのか、スバルは自分だけの世界にやっと踏み込める権利を得たのだった。この世界に生まれ落ちたスバルは新しい力を手に入れる。

今、スバルは胸の奥が熱くなるのを死の淵で感じている。心臓を鷲掴みにする感覚だ。握り潰そうとするその手は自分のものだった。スバルの脳味噌を大きな二眼が覗き込んでいるそれも自分自身のものだった。

ふいに、スバルの頭の中で宇宙が広がり始めた。その宇宙が暴れ馬のように乱暴に膨れていく。さっそく頭をクルミのように破りスバルを呑みこんでバラバラに砕いた。その宇宙が自分だけの世界を作る。様々な記憶が濁流となって押し寄せてくる。順番はバラバラだ。それがさらにスバルの世界を作っていく。それらは人の形を成していく。

最初に生まれたてのスバル。次に高校生くらいのスバル。そして大人のスバル。老人のスバル。最後は少年のスバルだ。彼らがスバルの宇宙に現れた。彼らが円を作りある一点に向かって手を差し出した。手を伸ばした先には、何もない。

だがその点に粉雪が集まる。それがこの世界のスバルを形作る。スバルは不思議そうに周りにいる十二人の自分を見渡した。スバル達は微笑んでキョトンとしているスバルの手を握った。

そしてスバル達が語りかける。まるで人生の先輩のように、赤ん

坊から、老人までの十二人スバルが見守っている。

「君も来たんだね……。言っておくけど、この宇宙は君だけの物語の宇宙だ。父さんや、母さん、ロック、ミソラちゃんや、委員長、ゴン太、キザマロの誰の世界でもない。

ここは君だけの物語の世界……。僕たちが今まで作り上げてきた世界だよ。君は、アカシックレコードにアクセスしたんだ。

今の君なら出来る！　君の世界を守れ！　僕たちが守れなかった世界を今度は君が守る番だ！！」

「え……？　誰……君たち？　僕は……どうしたんだ。父さんを奪われて……今度はミソラちゃんが……。あれ、僕、死んじゃったのか」

少年のスバルは困惑するスバルの肩を叩いた。このスバルは少し目元が凛々しくて戦士の風格が漂っている。

「しっかりするんだ君は僕で僕は君だ！　いいかい？　戦うんだ、スバル！」

少年のスバルは力強く訴えかけた。それがスバルの胸を強く打つ。

「君の生きている世界は大切なものが生きているはずだ！　いつだって君に勇気を与えてくれたはずだ！　思い出せ、スバル！」

スバルは胸に手を当てた。そしてスバルは自分の宇宙を見上げた。ミソラの笑顔が空に映し出された。次はルナの小言が宇宙に流される。今度は大吾だ。宇宙を包む大きな手が背中を押してくれた。

そしてウォーロックが目の前に現れた。いつもの調子で下品に笑っている。スバルは堪らなかった。

「よう、スバル！　お前もここに来ちまったか！」
「ロ、ロック！！」

スバルは涙を流しそうになった。だがウォーロックは鼻っ面を赤くしているスバルの耳を引っ張る。

これはウォーロックで間違いない。不器用で乱暴な態度。青く逞しい体。オオカミのような鬣。そしていつも隣でスバルを支えてくれた強気な笑顔。いつも隣で戦ってくれた親友だ。

そんな赤い瞳がスバルを見つめた。ウォーロックも感慨深そうにする。

「おい、スバル泣くのはちっとばかし早いぜ。俺は俺だが、お前の知っている俺とは別の俺だ。お前の探している俺はまだ宇宙を彷徨っているんだからな」
「え……じゃあ、君は？」
「俺か？　俺はここにいる十二人のスバルと同じでアカシックレコードのライブラリに記録されている俺だ」
「言っている意味が……」

ウォーロックは大口を開けて気品なく笑った。スバルはその笑顔を見ると安心した。

「ハハ！　まあ、今はまだ分からなくて当たり前だ。ただ、こうやってお前と話が出来るのもアカシックレコードの記録ライブラリにお前がアクセスしているおかげなんだけどな」
「な、なにを言っているの？　ロック？」

ウォーロックは困惑するスバルに真顔を寄せた。真剣な戦士の顔だ。スバルも口を閉じた。ウォーロックは人差し指を立てる。

「良いか？　スバル良く聞け。お前が思っている以上にこの世界は大変な事になっている」
「宇宙が収束して言っているって話？」
「そうだ。だが、奴らはもっと恐ろしい事を……俺らはそれの犠牲になったと言ってもいい」
「そんな……やっぱり良く分からないよ……」
「まあいいさ。今はそれでも。
まあとにかくだ。ミソラの野郎がブラッド・オリジンにやられちまいそうになっている。今はそっちを優先しないとな！」

スバルはハッとしたようにもう一度空を望んだ。映し出されるのはブラッド・オリジンがミソラに殺意を向けているその瞬間だった。スバルはわき腹から心臓を抉り取られるような感触に襲われた。

「た、大変だ！　そうだ、ミソラちゃんを助けないと……！！　で、でも、もう僕には力が残っていないんだ……」

スバルは肩を落とした。ウォーロックは喉の奥で息を殺して笑った。

「良く分かっているじゃねえか！　だが、がっくり肩を落とすのはまだ早いぜ、スバル君？
まあ、とにかく落ち着け。ここに精神世界からアクセスしている間は時間の心配はいらねーぜ」

ウォーロックは意味深にニヤリとする。とりあえずスバルは落ち着いた。慌てても仕方がない。事実、さっきまでどうしようもなく無力だったのだから。

「な、何かあるんだね。やっぱりこの世界には……」

流石にスバルとてこの世界の不思議さに気が付かないわけではなかった。普通の世界では、まずあり得ない現象が多々起きている。目の前にいる老人スバルなどが良い例だ。

その不思議な例の代表としてウォーロックが話し出した。

「何度も言っているが、ここはアカシックレコードっていう巨大データライブラリだ。そして今のバージョンはレベル１３だ。

ここにはそれぞれの宇宙のデータの今までや、これからが記録されている」

「そ、そんな場所があるんだね……」

「まあな。だが、どこにあるのかまでは詳しく言えねえんだ……。アイツに俺達の発言権をブロックされているからな。とにかくアカシックレコードは宇宙の外にあるとしか言えねえ」

スバルはウォーロックから度々聞かされる『アイツ』の正体を探る。

「ねえ、さっきから言っているアイツって誰なの？」

ウォーロックは即答だった。

「言えない。言いたいのは山々だが、アイツの事に関しても、当然俺達の発言権がブロックされている。とにかくここはアカシックレコードって場所としか言いようがない。そして特に言えば、俺達がいる今の場所を、記録ライブラリと言うぜ」

ウォーロックは続けた。

「記録ライブラリには普段、アイツしかアクセスできないようだが

……スバル、お前はどうやらレベル１３として特別なアクセス権限が与えられているらしいな」
「なんだよ。レベル１３って……」
「さあな。とりあえずはスゲー強かったヤツとしか言いようがないな」
スバルは納得しないまでも頷いてはみせた。
「うん……分かったよ。どうせ今聞いても理解できなさそうだしね……」
「へへッ！　そう言うこった。そして、ここからの話が重要だ」
おもむろにウォーロックはスバルの宇宙空間に手をかざした。すると空間が滝つぼのように脱落していく。そして一つの扉が現れた。ウォーロックがあしらったにしては上品な造りだ。ローマ建築風の円弧を基調としたレリーフだ。それが目に颯爽とした印象を与える。
スバルは不思議そうにその大仰な作りの扉を眺めた。
「なに……これ」
ウォーロックは胸をドンと突いた。
「良く聞けスバル。まあ、元の世界に戻ると忘れてしまうだろうが、この世界でだけは覚えておけ」
「な、何を……？」
ウォーロックは黄金のドアノブに手を掛けた。
扉が開く。白い光が、カーテンのようになだらかに伸びていく。
眩しくても、それがスバルの世界を照らしていく。
そしてスバルに言ってやるのだった。

「ラーニング・レギオンについてだ」

スバルは扉の向こうを注視しながらウォーロックに無言の問いを投げかけた。不可解そうに眉で八の字を作る。

「へへッ。まあいきなりじゃ分からないよな」

「うん。まったくだよ」

「かいつまんで言えばだ。ラーニングレギオンってのは、お前がアクセス出来るアカシックレコードの担当領域の名前だ。ありていに言えば、お前だけの特殊能力だ。もちろん他の奴らにもアカシックレコードの担当領域がある。

それらの領域を俺達は『自分だけの物語の力』って呼ぶようにしている」

ウォーロックの言葉にスバルは目を伏した。胸の流星ペンダントを握り締める。そしてウォーロックを見上げた。

「自分だけの物語の力……か。僕の場合、それがラーニングレギオンっていうモノなんだね」

「そうだぜ。ラーニングレギオンはお前の新しい力だ。今は使いこなせないかもしれないがお前なら出来る。いや……出来てたんだぜ？」

「ん……？　どういう事？」

「気にすんなって。……よっしゃ、スバル肩貸せよ！」

おもむろにウォーロックはスバルの肩に手を回した。そして扉の向こうを指差した。その先は白い。宇宙の黒さに反抗するかのようにどこまでも白い。ウォーロックはスバルの耳元で、扉の先を見つめながら言う。

スバルの肩にウォーロックの力強い気持ちが乗ってくる。スバルはそれを感じて、安心し、勇気を貰った。

「あの先にお前の力……ラーニングレギオン担当領域がある。そして、ラーニングレギオンを使えばお前が今まで出会ってきたヤツらの力を自分のモノにして戦う事が出来る！」

ウォーロックは鼻先を擦った。

「チクショウ！　俺も一緒に戦ってやりたいけどな……。名残惜しいが、俺の案内はここまでだ」

少し寂しそうにしているウォーロックをスバルは見つめた。ウォーロックの腕はスバルの肩を解いていく。

ほんの一瞬だったが、確かに出会えた。そろそろ別れの時間だ。

「……うん。ありがとうね、ロック」

「へへッ……。やっぱ、お前は変わらねえな。……って、懐かしんでる場合じゃねえか。

よし、行って来いスバル！　お前の世界を守ってみせろ！　悔しいけど俺達には出来なかった。だが、お前なら出来る！　がんばれよ！　相棒！」

ウォーロックはスバルの肩を離した。スバルは一度ウォーロックを見上げると、お互い頷き合った。

「よし、行ってくる！」

スバルは扉の世界に向かって駆け出した。そのまま白い世界からスバルの宇宙空間が見え隠れするギリギリのところまで走る。その

場所でスバルは後ろを振り返った。
そこには十二のスバル達が手を振っていた。ウォーロックは腕を組んでスバルを見守っていた。スバルは大きな声でウォーロック達に確認した。

「また、会えるかな」
「さあな。ここは本来アクセス可能領域じゃないんだ。だが、もしかしたらまた会えるかもな」
「このアカシックレコードの世界から出ちゃうと君たちの事を忘れちゃうの？」

ウォーロックは薄く笑った。

「多分……な。だがよ、お前がアクセス権限者として力を付ければアカシックレコードの記憶を持って帰る事が可能かもな！」

ウォーロックは今度は大きく口元を綻ばせた。

「ほら、早く行けよ！　スバル」
「じゃあね、みんな！」

スバルは奥に向かって駆けていく。白い光に背中を浸食させて、とうとう消えてしまった。ウォーロックはその様子を見届けると、扉を閉めた。
光のカーテンは無くなりスバルの宇宙は閉じていく。ウォーロック達も粉雪となって徐々に消えていく。

「じゃあな、スバル。お前たちの生きるその世界を守ってみせろ……。悲劇はもう十分だ……。アイツを止めてみせろ……。
犠牲……なる……は……俺達が最後……いい……」

最後にウォーロックは微笑んだ。戦士としてではなくスバルの友人としてのものだ。親友の旅立ちへの花向けだ。白い桜が閉じゆく空を彩る。

「信じてるぜ。親友」

いよいよだ。ロックマンの胸の流星が輝き始めた。確かな鼓動だ。ロックマンが息づく度にウェーブロードを強烈な周波数が伝播していく。徐々にボロボロの人形だったロックマンに力が戻っていく。

彼は薄い緑色の光に身を包み、穏やかに輝いているのだ。その色はミソラの瞳の色にそっくりだ。

まるでミソラに優しく抱き締められているかのようだった。

とうとうロックマンは立ち上がった。その二本の足がウェーブロードをしっかりと踏みしめる。

「うあ……？」

ブラッド・オリジンはロックマンに釘付けだ。それほどまでにロックマンという一つの存在が大きく感じられた。ブラッド・オリジンは本能的にロックマンに注意を向けさせられていた。

ただブラット・オリジンも分かっている。ロックマンなど放っておいてミソラに止めを刺してしまえばいいだけの話だと。しかし、たったそれだけの事もさせてもらえない。ソードを強く握り込んでも、その切っ先はロックマンを最優先で捉えてしまう。本能とは合理的なのだ。

穏やかな大河を彷彿させるロックマンの周波数は、激流の兆候を醸し出す。それがブラッド・オリジンを恐怖させた。

トラッシュもただただ驚くばかりだ。スバルに恐る恐る問いかけ

る。まるで化け物に触れるかのような声色だ。

『ス、スバル様……。この周波数は一体……？』

トラッシュの問いかけにスバルは反応しない。スバルはブツブツと呟いている。意識がないのだ。無意識的にブラッド・オリジンに相対している。

「アクセス……アカシックレコード……レベル１３。担当領域のアクセス権限を使用する……。

領域名ラーニングレギオン……。……認証完了」

ロックマンは額に手をかざした。ブラッド・オリジンを緑色に燃える瞳が捉えた。

「守るんだ……僕の世界を……みんなの世界を……」

ロックマンの頭がぼうっと強く輝いた。暗い空、赤く染まるウェーブロード。そこに一つの優しい光が埋め尽くす。その中心はロックマンだ。

ロックマンは叫んだ。光が閃光爆弾のように弾けた。

「ラーニングレギオン！　ロックマン・スターノート！！」

「う、あ……！？」

ブラッド・オリジンは堪らず一歩退いた。あり得ないほどの戦闘周波数だ。それも半死体だったロックマンから漏れ出している。信じられない。あり得ない、夜なのに昼のようだ。なぜウェーブロードに太陽が輝いているのだろう。なぜロックマンの姿が変わっていくのだろうか。ブラッド・オリジンは足りない脳味噌をフル回転さ

せた。しかし答えは出ない。
とうとうブラッド・オリジンは思わずハープ・ノートから手を離した。
ハープ・ノートが地面に落ちる。
ブラッド・オリジンはロックマンを視界にとらえて離さない。いや、離さなかった。

「おあ……？」

ブラッド・オリジンの視界からロックマンは消えた。いない。
足りない脳味噌が揺れた。震源地は延髄（えんずい）だ。赤色の手刀が脳と体の新経路を断つ。

「あ……ぱ！！」

後ろだったのだ。ロックマンは後ろだったのだ。ブラッド・オリジンはウェーブロードを一〇〇メートルも派手に転がった。

「お？！　おあ！？」

ブラッド・オリジンは首元を押さえながら何とか立ち上がった。はるか遠くにロックマンがいた。ハープ・ノートを抱きかかえていた。ロックマンはハープ・ノートを優しく地面に下ろす。
そしてブラッド・オリジンを指差した。そして言い切る。スバルは強く言葉に魂を乗せた。

「僕は誰も死なせやしない！　そして、アナタも助ける！！」

スバルの瞳はエメラルドグリーンに輝いている。少年の優しくて勇敢な意志に燃えている。友達を守ろうと優しい戦士が帰ってきた

のだ。

『ス、スバル様……！』

トラッシュは歓喜した。スバルは意識を取り戻したのだった。強くやさしいスバルをその緑色の瞳が語る。

そしてロックマンはハープ・ノートの安否を確認する。すやすやと眠っている。ロックマンは安心した。

「ゴメンねミソラちゃん。今度は僕が……命がけで君を守るから」

そう言い、ロックマンはトラッシュにも頭を下げる。

「トラッシュもゴメンよ。心配掛けたよね……？」

『いいえ、いいのです。しかし、スバル様。恐れ多いのですがその姿は……？』

ロックマンは自分の手のひらを不思議そうに観察している。赤い色をしているのだ。もちろん青くは無いし、所々にハープ・ノートの意匠が見て取れる。赤と白の縞々模様で、髪まで赤い。

「僕にも分からないんだ。無我夢中だった。でも、嫌な感じはしない……。不思議と落ち着けるんだ。懐かしいんだ」

ロックマンはブラッド・オリジンを見据えた。強気に口角を上げている。

「それに、ミソラちゃんが一緒に戦ってくれている感じがするんだ。負ける気がしないよ！」

『……そうですね。はい、そうですとも！』

「よし！　行くよトラッシュ！」
『ハイ！』

ロックマンは新しい装備のシューティングギターを構えた。ハープ・ノートのギターとは対照的に流星のシンボルを参考にしていた。黄色でギザギザで攻撃的だ。まるで稲妻のようだ。

「これが僕の新しい力だ！　食らえシューティングノート！！」

流星の形をした音波が空間を裂きながらブラッド・オリジンを襲う。ブラッド・オリジンはそれを片手で弾き飛ばすと、ウェーブロードを抉り返すほどの速度で突進してきた。
ミソラの次はレベッカを賭けた勝負の始まりである。ロックマンも迎え撃った。

あれから、しばらくの時間が経った頃だろうか。国政首都の荒廃とした瓦礫群の中でロックマンとブラッド・オリジンが向かい合っていた。お互いにもうボロボロである。両者共に肩で息をしている。

「はあ……はあ……！　やっぱり、きずなクルーだ。強い……！」
「う……あ」
「はは……。レベッカさんも同じみたいだね……」

ロックマンは呑気に笑った。だが状況としてはあまり笑えない。笑っている人間は血を吐かないものだからだ。

『血が……！　大丈夫ですかスバル様？』

ロックマンは膝を突いた。ブラッド・オリジンも相当なダメージだがロックマン程ではない。ロックマンは手の甲で血を拭った。ギターを杖代わりに立ち上がろうとする。しかし膝が言う事を聞かない。がくがくと座る事を強く要求していた。

「うくっ……。ヤッパリ、ボロボロの状態でさらに戦うなんてムチャだったのかも……」

ロックマンの言うとおりだった。ラーニングレギオンで力を手に入れても体は限界に違い無い。むしろ今まで良く戦えた方だ。夜太郎の時と同じであった。だが、ロックマンの場合相手が正気じゃない辺りがいただけない。

「あ……うお……！」

ブラッド・オリジンが瓦礫を踏み崩しながら、ロックマンににじり寄る。

「クッ……」
「う……お」

そしてとうとう目の前までやってきた。ロックマンにブラッド・オリジンの影が覆いかぶさる。ロックマンも何とか反撃しようとギターを構えた。しかし体のダメージは予想以上だったようだ。支えをなくした体は面白いように可愛く尻もちを突いた。
そして泣きっ面に蜂だ。変身も解けてしまう。

「しまった……」

普通のロックマンの状態に戻るのかと思えば、それ以上のサービスで人間状態に戻ってしまう。少年スバルは笑うしかなかった。

「こ、これは、まずい……ね」

スバルは座るのも限界になって大の字になって倒れた。

「あれ……、体が動かない？　ハハ……冗談きついよ」

限界の限界を通り超えたスバルはもう成す術がない。

「あ……あう。あおおおぉぉぉオオオ！」

ブラッド・オリジンが大きく叫んで片腕をソードに変えた。これは勝利の雄叫びだろうか。発狂した獣のようで恐ろしい。

「さ、させません……！」

果敢にトラッシュがスバルのハンターから飛び出してきた。スバルの前に立ち塞がる。絵に描いたような命がけだ。

「オオオオオゥゥゥゥうううう！　ウァア！！」

「ぐあっ！」

トラッシュはブラッド・オリジンに蹴り飛ばされた。無力なもので、トラッシュは宙を舞う。そして数メートル後方の場所で土煙を

上げた。

「クッ……トラッシュ……！」

ブラッド・オリジンが剣を振りかぶった。生身のスバルは切りがいがあるはず。サイコロステーキにするにはちょうど良い肉の柔らかさだろう。

「あああ……ァアアアア！！」

「うっ……」

スバルは肩をすぼめて目を瞑った。恐怖に耐えながら一秒待った。敵は残酷な性格の持ち主だ。恐怖をかき混ぜ立てる。

そして二秒待った。もったいぶってくれるものだ。

三秒待ってみた。だが、何も起こらない。これは、おかしい。今度は思い切って五秒も待ってみた。

しかし何ともない。スバルはゆっくりと目を開けた。体はバラバラになっていない。擦り傷や切り傷や打撲や酷い筋肉痛はあるがバラバラではない。生きるのには事欠かない。

「え……？」

驚いた。スバルの顔に雨粒が落ちてきた。それは凄まじく局所的な豪雨で、スバルの顔面だけに落ちてくる。それは固まって動かないブラッド・オリジンから零れ落ちている涙だ。

今、ブラッド・オリジンの中で戦いが起きている。きずなクルーのレベッカとプルト・キグナスの手下のトレイスが戦っているのだ。

さっきの発狂したような叫びはブラッド・オリジンが苦しんでいたからだった。

そしてレベッカがスバルに言う。顔は鬼のように恐ろしい電波人間だが、声は女の人のものだ。

「ス……スバル君ね……。早く……そこから逃げな……！　アタシが何とかこの化け物を抑えているうちに……！」

「え……レ、レベッカさんなの……？」

ブラッド・オリジンがさらに苦しそうに涙を流す。

「そ……そうよ。アナタがこの化け物を弱らせてくれたから……何とか表に出てこれたの……。ほら……早く逃げなさい。コイツ……かなりのバカ力で……！　ほら、早く！！」

「でも、体は……もう動かないんだ……感覚がないんだよ……さっきからずっと」

スバルはレベッカの言う通り逃げようとする。だがどうしても体はもう動いてくれない。一度動かなくなった体で、ブラッド・オリジンと戦ったのだから無理は無い。

レベッカは思い出したかのように笑った。

「まったく……！　親子揃って、ムチャ言うねっ……！　大吾も無茶な命令ばかりしてきたけど……息子も然りだわ」

「ス……スミマセン……」

「謝らなくていいわ……。こうなったらアタシの中の化け物を打ち破れば良いだけの話よ！」

レベッカは力強い女性だ。逞しくもある。スバルは応援するしかない。

「が……、がんばれ！　レベッカさん……！！」

「四年間宇宙を彷徨っていたアタシを舐めないでよ。この化け物が！！」

レベッカの一喝。ブラッド・オリジンはがくんと体勢を崩した。ブラッド・オリジンの中でレベッカがトレイスに強烈な一撃を決めたのだろう。

ついにブラッド・オリジンはスバルの隣に倒れてきた。

「ハハ。スゴイや……。レベッカさん」

「よし……。このまま！　……うっアァッ！！」

レベッカが甲高い悲鳴を上げた。ブラッドオリジンがムクリと置き上がった。獣の叫び声だ。これはマズイ。

そしてブラッド・オリジンがスバルに馬乗りになる。スバルの首を締めだしたのだ。スバルは苦しい。

「ウウ……アアアアガアアアア！！」

スバルは苦痛に顔を歪めた。意識が遠のく。もうレベッカを信じるしかない。

「が……がんばれ！　レベッカさん……！！　うぐ……！」

「アアア！　ガアアア！！」

ブラッド・オリジンが苦しみ出した。スバルの首を絞める力が強まったり弱まったりを繰り返す。一進一退の攻防だ。精神の戦い。レベッカはまだ諦めていない。きずなクルーの底力はこんなものじゃない。

スバルは大吾を通して良く知っていた。

「レベッカさん……！！　グッ……僕は……アナタの事を……し、信じます」

スバルの脳味噌に血は回らない。頸動脈を圧迫されて視界が狭くなる。レベッカはまだ戦っている。

「きずなクルーは……地球の英雄です！　僕はその背中を誰よりも近くで見てきました……！　だから……信じられるんだ。だって……英雄は……負けないんだから！！」

「グ……グアアァァァ！！」

「負けるないで……！」

「ウ……ウウグアアアア！！」

「父……さん。きずなクルーのみんな……レベッカさんに……ち、力を……」

スバルも限界だ。まぶたが重くなってくる。ブラッド・オリジンも限界だ。

「ウガァァァアアアアアアアア！！」

ブラッド・オリジンは発狂してスバルの首を絞めるのをやめた。レベッカの勝利か。

「レ……、レベッカさん……」

スバルは青ざめた。瞳に鋭い銀色が煌めいた。刃物だ。

ブラッド・オリジンは片手をソードに変えた。それを振りかぶる。

「ゲブゲゴガアガアア！！」

スバルの喉元を狙ってそれは無情に振り下ろされた。

「……うっ」

スバルの首筋に痛覚が走った。

「はぁ！　はぁ……！」

地面に血が垂れる。ソードは突き刺さっている。スバルは目を見開いている。釘付けだ。

「……ハハ。心配いらないぜ？　ヒーローは遅れて登場するってね。それがアタシの信条だってね……！」

ソードは瓦礫に突き刺さっていた。あと数ミリ横にずれていたらスバルの頸動脈はきれいさっぱり分断されていただろう。

ただレベッカの精神力がトレイスの力を上回った。薄皮一枚を裂いただけだ。

スバルは安堵して息を吐いた。ブラッド・オリジンの電波変換はすっかり解除されていた。ただ未だに腹に圧迫感はある。

女が乗っていた。

得意げにスバルの真上で笑顔を浮かべている赤い短髪の女だ。切れ長の目が印象的である。彼女はきずなクルーの紅一点、レベッカ・レッドリバーだ。彼女こそが初めてのきずなクルー生還者だ。彼女は傷だらけになりながらも笑顔だった。緊迫した空気も解（ほぐ）される。

スバルは今更おかしくなって笑った。

「ハハ……！　僕の知り合いにも似たような事言う人がいます」

「あら……気が合いそうね！」

「ハハ……そうですね……」

スバルは緊張の糸がすっかり切れてしまった。意識を保つのはもういい加減にやめてしまいたい。それが素直なスバルの体が出した結論だった。

「あぁ……もう、疲れちゃったよ……。あとで……父さんの話を聞……かせ……て。そうだ……早く……地球に……帰ろう……」

「おいおい、せっかちだね。アタシも、もう限界だっての……。とりあえず寝かせてよ……」

レベッカもスバルの隣りに倒れるように寝転がった。スバルは空を見上げながらレベッカに聞いた。真っ黒な空だ。まぶたも落ちてきて完全な黒一色になる。

「ねえ……宇宙はどんな……ところでした？」

「もう、コリゴリ……ね……帰ってシャワーでも浴びたい気分……よ」

「はは……。それは……そうですね」

「ほら……もうお休み……坊や」

レベッカは母親のようにスバルの頭を撫でてやる。普通なら恥ずかしくて仕方がないが、今のスバルは不思議と安心した。何となく大切なものを取り返したと実感できたのだ。

スバルはもう眠たい。

「父さんの……夢……見れるといいなあ」

「きっと……いい夢が見れるさ」

スバルはゆっくりと息を吐いて、目を閉じ切った。呼吸は穏やかに、すやすやと寝息に変わっていく。

「父さんは……僕のヒーローなんだ……」
「知ってる。アタシだって君と同じくらい近くで見てきたもの……」
スバルの返事は無い。もう寝てしまったようだ。
「うん、よく眠りなよ」
レベッカもそろそろ限界だ。黒い空に向かって呟いた。
「アンタの息子はまっすぐ育っているよ……。アタシはアンタより少し先にこの子を見守っておくよ……。じゃあね、おやすみ……大吾……」
空は相変わらず黒い。しかし空にミルキーウェイが走るというが、それは本当だったようだ。アンドロメダ銀河からは天の川銀河がよく見えたのだ。本当に暗黒の空を駆ける天の川のようだった。
帰るべき地球はそこにある。

ｔｒａｓｈ―００：最低の父親

二二ＸＸ年五月二〇日金曜日。場所は惑星パトラ。辺境の宇宙に浮かぶもう一つの地球である。

村の中は至ってのどかな風景だ。牧歌的な雰囲気に平穏な空気が漂っている。羊飼いが白い行軍を引き連れている。角笛の音に、桟橋の小鳥が鳴き声を合わせている。それがささやかな楽劇となるのだった。近くで回る水車も、水が跳ねる小気味良い音を添えている。ゆったりとした時間が流れる。

天気も良く、今日もこの惑星は平和だった。

そんな中、いつかの老夫婦は段々畑で作物を収穫していた。疲れたのか、老父は首に掛けたタオルで汗を拭う。すると、おもむろに手を地面にかざした。年老いた老父の手はパチパチと電波が弾ける。弾ける老父は、しわがれた口をモゴモゴとさせ老婆に呼び掛ける。

「バアさん。そろそろ休憩にしよう」

老父はまた汗を拭った。そんなどこにでもいる老父だ。だがその弾ける手は摩訶不思議なパワーを持っていた。

それは、ままある土にまみれたしわくちゃの手だ。しかし、静電気にしては少々やんちゃなものが見て取れる。どこででも見かける年季の入っただけのものであるはずだ。しかしパトラ人は中々のパフォーマーであった。老父は腰を入れた。

「せいやっ」

良い感じに老父が気合を込めたら何かが出来た。ちょうどかざした先に電波障壁が円盤のように展開した。そんな怪しい物体が作られ浮いている。

それは古代文字の入った、何とも厳かでどこか妖麗なものである。しかし使い道はただの腰かけと言うわけだ。老父はそれに座り込んで一息吐いた。

「ふう。疲れたわい」

「おジイさん。ワタシにもおひとつ下さいな」

老婆がよたよたと柔らかいチェルノーゼムに足跡を作りながら歩み寄る。そうやってしわくちゃのおっとりとした笑顔を添えての催促だ。

老父は軽くもう一つ電波障壁の椅子を生成する。

老婆も腰を掛けた。談笑が始まる。

「ふう、今日は天気が良くて、良い汗をかきますねえ」

「じゃのう。でも、がんばって神さまに野菜を献上しないといけないのじゃ」

「そうですねえ。それに今日はあのお方が、いらっしゃっている日ですからねえ」

「インフィニット様じゃろう？　あの方は、とても神々しい周波数をお持ちの方じゃ……。ワシは嬉しいよ。この星は神の加護と共にあるんじゃもん」

老父はガッツポーズを作った。筋張った細い筋肉が隆起した。

「あらあら。おじいさんったら。もう、少年なんだから」

穏やかに笑い合う老夫婦だった。彼らは空に浮かぶブラックママルを見上げていた。

そこに二人の闘神がいる。

場所は変わってブラックママル内部。ブラックママルの中は未知の技術が駆使された異質な空間だ。辺りを立体交差のようにして透明な道が走っている。その上をパトラ人が行き来しているのだ。人間も乗れるウェーブロードと言ったところだ。

そしてその道はブラックママルの居住区画や、大陸中枢区画に繋がっている。加えて、ムー大陸と同じであるブラックママルはひたすらに広い。その為ブラックママルと地上間では、二分されたイデオロギーが出来あがっている。

ブラックママルの居住区画には、主にパトラ人の神官が住んでいる。彼らはパトラ人の先導者である。今はＷＷＲと共に惑星パトラの平穏を守っているのだ。

そして地上で暮らしている人々が神民である。先の老夫婦がそれである。彼らは農村で野菜を肥やし惑星パトラの基盤を支えている。惑星パトラはそうやって成り立っているのだった。

そんなブラックママルの透明な通路を、ある一人の生命体が歩いていく。全身赤の彼はおおいに目立つ。パトラの神官達は、彼に気が付くと立ち止り深々と頭を下げた。被っている長い帽子を取り払い、敬意を表していた。彼らも忙しいはずなのに律儀なものであった。

若い神官も立ち止った。

「良くいらっしゃいました。インフィニット様」

この若い神官は大陸中枢区画に向かうインフィニットと鉢合わせになったのだ。当然のように神官は例の如く頭を下げた。

対してインフィニットは苦笑した。お前もか、と言いたげに溜め息を吐いた。

「おい、むやみに頭を下げるものではない。俺は剣士だ。それは首を差し出しているのと同義だろう」

「は、はあ……」

「ふっ、まあいいさ。……所で一つ聞くが、フェニックス・リボンがいるのはこの先の鳳凰の間だったかな？」

「ええ、フェニックス・リボン様は鳳凰の間でアナタ様の到着を待っておいでです」

「ありがとう。やれやれ、ここは何度来ても道が複雑でいけない」

インフィニットは手を仰いでみせると、目的地に歩先を向けた。その時、長い金髪が円弧を描いて高名な織物のように揺れた。目指す先はブラックママル大陸中枢区画、鳳凰の間だ。

インフィニットは一人呟いた。

「さて……。これで最後のオーパーツだろう。もう、この星に足を運ぶ事もない……な。

まったく、生成の度に、アレをこの世界の形式に合わせないといけないのも考えものだな……」

間もなくインフィニットは鳳凰の間に続く通路に到着した。上下

左右を古代の文字で刻まれた息のつまる場所だ。ただその一辺を赤い扉が担っていた。その扉からは熱気が伝ってくる。熱の壁がインフィニットを押し返そうとしてくる。だがインフィニットはたじろがない。そこが鳳凰の間だ。

「ここか……。アイツめ、相当荒れているようだな」

インフィニットは熱を持った扉を押して開け放つ。完全に開くと、その出入り口からの蒸気圧が凄まじい。インフィニットを突きとばしてくる。大気の壁が先程より厚くなって迫ってくる。それでもインフィニットは構わず進んだ。

「フェニックス・リボン。俺だ……」

紅蓮の側壁には燭台がレールのように設置されている。それに炎のような電波エネルギーが灯っているのであった。

フェニックス・リボンは奥のラ・ムー神像の前の玉座に座っていた。いつしかのミソラとの会合のようである。だが、この部屋の熱源は彼である。彼は荒ぶっていた。

「お前か……。何の用だ？」

フェニックス・リボンはゆらりと立ち上がった。インフィニットを熱風が襲う。フェニックスリボンの眼光は陽炎に揺れる人魂のようだ。鋭くインフィニットを射抜いた。

「ずいぶんな言いようだな。とにかく落ちつけ……」

インフィニットは構わずフェニックス・リボンに歩を進めた。

「うるさい……。お前に俺の気持ちが分かるか……？」
「さあ……な」
「ときどき、こうやって思い出すんだよ。俺の選択は本当に正しかったのかどうか……」
「俺にお前の事情など知った事ではない」

インフィニットは腕を組んで一息吐いた。歩も止めて、数メートル手前のフェニックス・リボンを見据えた。そして言い放つ。

「ただ、これだけは言える。お前は父親としては最低だ。恐らく、俺が地球人だったらそう判断していただろう……」

その言葉は紛れもない事実だった。ワタルとしてもその答えは当然のもので、だからこそ切なかった。

ｔｒａｓｈ―０１：全てを見通す者

「そうか、やはりな……。俺は最低の父親か」

フェニックス・リボンは肩を落とした。インフィニットは続けた。落胆していたフェニックス・リボンはピクリと顔を上げた。

「だが、お前の判断は間違ったモノではなかったのかもしれない。お前が四年間、地球への脅威を打ち破っていたのは紛れもない事実……」

フェニックス・リボンはくたびれたらしく、また玉座に腰下ろした。昏倒したように額に手を当ててうなされる。

「それでも……俺はカンナを守れなかった。宇宙には奇跡があると信じていた……。でもそれは違ったようだ。

あるのは慾（よく）にまみれた醜い生命と、混沌とした戦いだけだったよ……。そのせいで俺はとうとうミソラとの約束も守れずにカンナを死なせてしまった……」

インフィニットは怪しげに微笑した。そして指を鳴らす。彼の手の平にエアディスプレイのようなものが現れた。ただそれは、縁取りが不安定でノイズのように振舞っている。

「ふん……。だが、お前はまだ諦めていない。そうだろう？　響ワタルよ」

フェニックス・リボンは指の間から覗く鋭い目で、インフィニットを見上げた。

「……そうだ。その目的だけが生きる気力であり、フェニックスと共にどこまでも冷酷になれる俺の存在理由だ」

「立派な志だな……。では最後の情報提供だ。場所は宇宙の辺境の惑星だ」

インフィニットは例のエアディスプレイに映像を投射させた。そこにはオーパーツが映っていた。綺麗な虹色の輝きを放っている。形はいびつだがどこか心臓のようにも見える。

フェニックス・リボンは溢れ出る激情を抑え込み、肩を上下させる。狂った笑いを堪えているのだ。

「ハハハ。やっとだな。これで揃った。俺の願いを叶える事が可能と言うわけだ……」

フェニックス・リボンは天井を仰いだ。どこか安堵したような彼だった。今までの思い出を空虚な空間と照らし合わせているようだ。

そこにワタルの相棒のフェニックスが現れた。ゆらゆらとした火の玉が不死鳥を形作る。それが心ここにあらずのワタルを苛(さいな)めた。

「ちょっとワタル……。ようやく千個目のオーパーツだからって気を抜かないでよね。アナタの願いは生命の象徴たる私がいなきゃ叶わないのよ」

フェニックス・リボンはそのままで答えた。

「わかってるさ。お前の願いも叶えてやる……。それが当初の契約

だったしな。それに俺は言ったはずだ。俺の大切なものの為なら俺はどこまででもお前と共に冷酷に徹するとな……。ウラトーナメントが最たる例さ……」

フェニックスはワタルの言葉にどこか釈然としないまでも頷いた。フェニックスは四年間ワタルと共に過ごしてきた。そのおかげか、ミソラと会って以来変わりつつあるワタルの内情を察知していた。それが彼女の不安だった。

「まあ、いいわ。アナタがそれを分かっているのならね。でも、もう一つ忠告しておくわ」

フェニックスはもう一つの懸念材料を睨みつけた。その先にいたのはインフィニットだ。

「そしてこの赤いヤツ……。油断できないわ……。オーパーツが集まった以上、何をしでかすか分かったものじゃないもの！」

インフィニットは呆れたように頬を引きつらせた。

「何を……いまさらだな。俺はお前達にオーパーツの在り処を教える。そしてお前達はその情報をもとにオーパーツを集める。お前達が千個ものオーパーツを集められたのは俺のおかげだろう。感謝はされども、敵対される覚えは無い」

フェニックスは毒づいた。

「だからこそよ！　その私達の関係にアナタのメリットは何もない！　何で私達にオーパーツの在り処を教えてくれたのかしら？　それもカンナさんが亡くなった時期と重なる。怪しすぎるわ！」

荒ぶるＡＭ女王にフェニックス・リボンが宥めにかかる。

「まあ、落ちつけよフェニックス。コイツの目的なんてどうでもいいじゃないか」

「何を言ってるの？　ワタル？」

「コイツが俺達の目的を邪魔しようってするなら、俺がコイツをデリートしてやるだけってことだよ！　……だが、お前には感謝しているんだ、インフィニットよ。お前の言う通り、お前がいなければオーパーツは集まらなかっただろうからな。だが、それとこれとは話が別ってことだ」

インフィニットは目を閉じて噛みしめるように笑った。鳳凰の間の熱気がさらなる昇華を遂げた事を感じとったからだ。それを戦意と捉える事は容易だった。

「ふん、響ワタルよ。全てお見通しと言う訳か……。いいさ。お互い利用し合おうじゃないか。私もお前に感謝しているのだぞ？　フェニックス・リボンよ」

ワタルはインフィニットの思惑に察しがついていた。漠然とだが、彼にはそれを知る権利が与えられていたのだからだ。スバルに続いて彼は二人目であった。

「俺も馬鹿じゃない。お前は、宇宙の未来や過去、全ての事を見通すことができるんだろう？　違うか、インフィニット？」

インフィニットは舌を巻いた。

「お前まさか……。アクセス権限者に？」

「ああ、そうだとも。数年前から、決して開かない扉は見えていた。だが、昨日やっと入る事が出来たよ。きっと誰かがあの硬い扉を解除してくれたんだな……」
「そうか。お前が二人目か……。果たしてお前にはどこまで見えたのかな？」
「さあな。ほとんど見えなかったが、ミソラが笑顔だったのは分かったよ！」

笑顔だった。そうやってフェニックス・リボンは嬉々として立ち上がったのだ。
戦闘体勢を取っている。あまりもの周波数に空間がノイズまみれに暴れ狂う。インフィニットはその様子をもの惜しげに観察していた。

「フッ、俺もいつかお前を殺して、フェニックスだけ頂戴しようと思っていたんだ。だが……」

インフィニットはくるりと回って踵を返した。長い金髪を左右に揺らしながら鳳凰の間を後にする。

「アクセス権限者の場合、話は別だ。俺の独断でお前を殺しては、我が父の怒りに触れる。
それにお前と俺が戦えば、お互いタダじゃ済まないだろう。戦いはまたの機会だ」
「インフィニット。お前が何をしようと俺は願いを叶える！」

インフィニットはちょうど出入り口をくぐった。

「そうしてくれないと俺が困る」

ワタルはフェニックスと共に、去り行く金の背中に宣言した。この四年間で出したワタルの尊い答えだった。

「俺は、フェニックスと共にカンナを生き返らせる。それがミソラとした約束だ！　あの子に元気な母親を送ってやるんだ！！　絶対に！！」

ｔｒａｓｈ―０２：きずなクルー帰還

二二ＸＸ年五月二一日土曜日。場所はコダマタウン。小川のせせらぎと小鳥の囀り（さえずり）が気持ちよく響き、展望台からの見通しが良い小さな町である。星河家は、そんな場所に立地している。スバルは今朝、この家に帰ってきた。

ただ、意識は無かった。今日で四日目だ。

「まったく。この子ったら、いつまで寝てるのかしら」

スバルの部屋で、あかねは濡らしたタオルで眠る少年の額を拭う。面持ちはどこか冴えなく、スバルを不安そうに見守っていた。その両脇には毎日、見舞いに来ているルナとミソラもいる。ベッドへ身を乗り出し、スバルを覗き込んでいる。表情はあかねと一緒だ。

ルナが口を小さく開いた。出るのは溜め息ばかりで、小言も言ってやりたいが本人が寝ているのでは仕方がない。

「外傷はほとんどないのに、目を覚まさないなんて……。スバル君ったら私達に心配かけてばっかり……」

ミソラはうなだれた。少なくない責任を感じたようだ。

「ゴメンね、ルナちゃん。私がもっとしっかりしてれば……」

ミソラは俯いてやりきれない様子だ。肩を落として目は虚ろにス

バルだけをか弱く見ていた。
そこにドアノブが回る音。不意の出来事にルナは後ろを見下ろした。スバルのベッドはロフトの形式を取っていた。一段下の扉はノックをして返事を催促している。あかねが「どうぞ」と返事を返した。
スバルの部屋に誰かが入ってきた。二人だ。

「みなさん、お茶を淹れましたよ」
「こんにちは！　ルナ、ミソラ！！」

夜太郎がお盆に五つの湯飲みを乗せて立っていた。ちょこんと隣にメトリーがいる。ルナはメトリーに小さく手を振り返した。

丸いガラステーブルをあかね達五人が囲んだ。本来このテーブルはスバルの物だ。だが本人は現在、病床に臥(ふ)している。スバルは目覚めない。地球に帰ってからで、かれこれ三日にもなる。
彼女らは手元に湯飲みを置きながら、沈痛な面持ちでこれからの事を話し合い始めた。特にあかねはスバルの身に起きた事を全て知っておきたい。

「ねえ、夜太郎さん。スバルの身に何が起きたのかしら？」
「あの……スミマセン。私達の至らなさでスバルさんがこうなってしまったとしか……」

夜太郎は押し黙った。極秘任務で起きた事は言えないのだ。メトリーはむずむずとする。堪らず口を開いた。

「あのね！　あかね！！　スバルったら、ワタシに留守番を頼んでね！　そして帰ってきたら血だらけ――フゴモゴガ！」

夜太郎はメトリーの口を押さえた。申し訳なさそうにあかねにペコリとした。あかねは怪訝そうに夜太郎を見つめた。

「ス、スミマセン。本当に申し訳ない……」

平謝りを繰り返すばかりだ。夜太郎は知っていた。だから謝っている。

それは、夜太郎としては忘れもしない五月十八日の真夜中の事だった。目を覚ましたら、ホテルには誰もいなかった。メトリーを問いただしたところ、銀河連邦と一緒になって戦っているとのことだった。

夜太郎はすぐに現場に駆けつけた。だが、時すでに遅しであった。真っ赤なウェーブロードに、ミソラ達が倒れていた。地上では、エメリオルとオックス・ファイアがぐったりと意識を失っていた。

そして少し離れた所で、スバルと見知らぬ女が眠っていたのだった。

とにかく夜太郎は、数百キロにも及ぶ破壊しつくされた荒野を引き返した。幸い機能している病院を見つけ、助けを求める事が出来た。その病院は、三百キロメートル離れた場所にあった。夜太郎が寝ていたホテルのある町である。シュンランの使うカイザーナックルの威力は計り知れなかったのだ。

すぐに負傷したスバル達を惑星リギアの病院に入れて一日の間、集中治療を行った。そして今に至る。

しかし、そんな些細な情報でさえも夜太郎は言えなかった。あかねはそれでも問うた。夜太郎は辛いばかりだ。

「夜太郎さん、私に本当の事を教えてもらえないかしら？」

あかねは夜太郎に真に迫る表情を向けた。夜太郎は顔を逸らすしかできない。

「スミマセン……としか言いようが……」

「そう……」

「ごめんなさい、オバサン……」

ミソラは夜太郎に続いた。

「本当の事は言っちゃいけない事になってるんだ……。

でも、スバル君は私達を守るために必死に戦ってくれた。これだけは間違いないよ……」

ミソラはより一層、肩を落とした。テレビで見てとれるハツラツとしたものは一切なかった。

そして沈黙が流れた。ルナは居心地悪そうに部屋を眺めて時間を潰す。いつも通りのスバルの部屋だ。スバルがいつ起きてきてもおかしくないと思わせる。そんな光景だ。

そこにトラッシュが静寂を打ち破る。星河家に客人が来たのだ。

「あの……お客様がおいでになってます。シドウ様とミライ様、それとレベッカ様です」

「失礼するよ」

間もなく、スバルの部屋に三人が入って来た。あかねは三人の方に目をやる。そして、三十年以上も付き合ってきたその目を疑った。忘れもしない女の姿があったのだ。レベッカである。

「レベッカさん！　う、嘘でしょ！？」

レベッカはにっこりと笑った。包帯でぐるぐる巻きであるが、健康そのものといった様子だった。手を振ってあかねに四年ぶりの挨拶をする。

「ハロー、あかね。四年ぶりくらいかな。ちょっと長い宇宙旅行から帰ってきたよ！」

「ど、どうしてアナタがここに……」

「うーん。話すと色々長くなるし、極秘任務に関わるらしいしねえ」

レベッカは困ったように眉を吊り上げて赤髪をポリポリと掻いた。目線はシドウとミライに行っている。彼らの判断を仰いでいるのだ。事の顛末を暴露しても良いかどうかを聞いている。

シドウが答えた。

「まあ、今回の件については色々と話しておいた方が良いでしょう。特に親族のあかねさんには言っておいた方が良いですね」

「あら、極秘任務なのに喋っちゃって良いの？」

案外そっけないシドウにレベッカは呆気にとられた。シドウは真面目にレベッカに事情を説明した。

「まあ、そうなのですが。極秘任務にしたのは市民の混乱を防止するためですしね。まあ、スバルの事もあるし、黙ってるわけにはいかないでしょう」

おもむろにシドウはあかねにウインクをした。今度は砕けた調子でシドウらしい。

「あかねさん。これから話す事は色々重要ですから、パートのおばちゃんとかに言っちゃダメですよ？」

シドウはうまい棒を取り出すとあかねに渡した。そうやって釘を刺したのだった。

そこにルナだ。

「なんだか重大発表らしいので、キザマロとゴン太も呼んできますね！　ルナルナ団も集まらないと！」

当然ミライはルナに待ったをかける。悪い子は怒らないといけない。

「やめろ！　これは遊びじゃないんだ！　何がルナルナ団だ！」

そこにシドウだ。彼は優しいのだ。

「まあ、いいじゃないか。彼女らはスバルの友達だ。知っておいた方が良いだろうさ。リフレイン博士の許可も取ってある」

「あ、暁さん……、甘すぎです」

「それは褒め言葉か？」

trash―03：私だって……！

惑星リギアでの出来事から四日後、スバルはようやく目を覚ました。

スバルはふと横に目線を流した。隣の窓の向こうに広がる空は青かった。スバルは「ああ、地球に帰ってきたんだな」と思った。そこにレベッカとあかねの話し声が聞こえてきた。ひそひそとスバルの耳をつんざく。

「うっ……。大吾さんが……そんな事に……うっうぅ……」
「泣きやみな……あかね」
「でも……うっ……うう……」

スバルの耳に女の泣き声が聞こえてきたのだ。声量は抑えられているが、スバルの目を覚まさせるには十分だった。あかねの泣き声だ。もう聞き飽きたものだ。スバルは少し自責の念に駆られた。

「スバル君は必死に戦った。大吾は無理だったけど、私を地球に連れて戻してきてくれた。アイツは限界の限界を越えてきた。私はそれを感謝してるんだ。
ありがとう、アンタの息子はとっても強かったよ」
「ありがとう……ございます……。でも……それでも、大吾さんは……」
「心配するなって、アイツは絶対に生きてる！　ちょっとやそっとじゃ死にゃしないよ！　あの船長はね！！」

「そ……そうですね。ありがとうございます……」

スバルはその話をこれ以上聞いていたくなかった。おぼろげだった記憶が蘇ってきたのだ。大吾が連れ去られた事を鮮明に思い出した。スバルは耳を塞ぐように布団に潜り込んだ。

布団の擦れる音にあかねが気が付いた。ミソラやルナ達も、気が付いたらしい。針でも刺されたかのように鋭敏に反応した。

「スバル！？　起きたの？」

あかねはすぐにスバルのベットまで駆け上がって来た。そしてスバルの布団を取り去ろうとする。

「やめて！」

スバルは叫んだ。

そして懇願した。

「お願い。やめてよ……」

あかねは布団をそのままに、引っ込んだままのスバルに問いかけた。口調は恐る恐るといった感じだった。布団が震えている。

「ど、どうしたの……？　スバル……？　やっぱり、どこか具合でも悪いの？」

「レベッカさんから全部聞いたんだろ？！　父さんを連れ戻せなかったって……」

「そんな事気にしてたの……？　いいのよ。アナタは必死に取り戻そうとしてくれたのよね。ありがとうスバル」

スバルはそれが堪らなかった。なぜ感謝されるのだろうと思った。ののしられる覚悟だった。スバルにとって大吾を連れ戻せなかった事は大きすぎた過ちだった。スバルは布団を掴み丸くなった。

「なんで、責めないんだよ？　め、目の前にいたんだよ？！　目の前にいたんだ……。目の前に……。あんなに近くに……。僕は無力だ……」

「もう、この子ったら……」

あかねは溜め息を吐いた。スバルの布団を乱暴に取り払う。スバルはビクッとして逃げ出そうとするが、逃がさない。そして容赦なく抱きしめてやった。スバルは固まって動けない。あかねはもっと強く抱きしめた。すると観念したようにスバルは泣き始めた。

顔はぐしゃぐしゃだ。

「ウゥ……！！　ゴメンよ……！　母さん。本当だったら今頃……ごめ……んなさい。ウワアアア……！」

「分かってるわ。そんな事……。アナタが一番つらかったのよね。……今は思いっきり泣きなさい。お父さんの代わりにはなれないけど、アナタの家族はここにもいるんだからね……」

ミライはその様子を見上げて、微笑みを零した。

「いつでも母親というのは偉大だな……」

「あら。小学生のくせに分かった事言うじゃない」

隣に座っているルナはミライに突っかかった。ミライは湯飲みを取りやんわりと流す。

「ふん……。お前こそ、涙を拭いた方が良いんじゃないのか？　情

に脆いくせに強がるものじゃない」

言いつつミライは、ルナにハンカチを差し出した。ルナはそれを奪うように取り上げると強がった。

「うるさいわね……！　だって、スバル君がウラの世界で戦ってきた事や、大吾さんの話を聞いちゃうと……たまらないもの。スバル君ったら、私に黙って……いつも一人で抱え込んで……グス」

ミソラはルナの頭を撫でてやった。ミソラも目がうるんでいる。

「よしよし……ルナちゃん。私も分かるよ、その気持ち。同じ女の子だもん……辛いもんね……」

「……ふん」

ミライは居場所を失ったようで、気まり悪く立ち上がった。するとゴン太が赤い鼻をさらに赤らめていた。立ちながら感傷に浸っている。スバルの部屋に押し掛けた大人数のおかげで座るスペースがないらしい。

ミライはルナとは違ってハンカチも渡さずに憎まれ口を叩いた。醜い豚には優しさは要らない。

「お前もか……。うるさいから大声を出すなよ」

「でもよう……。俺達が眠っている間の出来事を聞かされちゃあなあ……。スバルの野郎がいたたまれなくてよ」

「確かにな……。俺がもっと強ければ、大吾さんや、きずなクルーを全員助けられたのかもしれない……」

「でもよ。よく俺達も無事に地球に帰れたな。あの絶望的な状況でよ。まったく神さまはよく分からん事をするよな」

ゴン太の何気ない一言だ。しかし本質を捉えていた。ミライもここ数日それを疑問に抱いていたのだ。あの状況から生きて帰られる術は無いはずだった。

いくら考えても、納得のいく答えは出なかった。

「そんな事を俺に聞くな」

「だよな。もしかしたら夜太郎さんがあの敵全員をやっつけてくれたのかも」

何も知らないゴン太は笑って一人で勝手に納得していた。

（あのギガント・オリジンとかいう電波人間を倒せたとはとても思えないが……）

ミライはまた思考の渦に囚われた。その答えはスバルでしか知り得ないし、スバルでも知り得ないのだ。

そしてスバルとベッドから降りてひょこりと皆の前に現れた。もう泣いていない。

ただ、あまりもの大人数に驚いていた。見舞い役のミソラとルナ、ゴン太、キザマロはもちろんだったが、他にもミライやシドウ、レベッカに天地と言った見慣れない面子が確認できたのだ。スバルの部屋は超満員だった。

「やあ、みんな。……って、スゴイ人の数だね……」

『スバル様もう泣かなくて良いのですか？』

「やめてよ、トラッシュ。は、恥ずかしいだろう！？」

どこからともなくトラッシュの声だ。スバルは顔を真っ赤にして

ハンターを探す。パジャマ姿だから携帯していないのだ。ルナとミソラが座っているテーブルにそれは置いてあった。スバルは慌ててハンターを取ろうとする。その動きは病み上がりにしては軽快だった。

ミソラがハンターを取って、スバルに手渡ししてやった。そのついでにスバルの身を案じた。

「スバル君。もう動いても大丈夫なの？」

「うん、何だか体も軽いし、むしろ元気な方だよ」

スバルはにこやかに肩をぐるぐると回す。どうやら本当に元気が良いようだ。

そうなるとルナの出番だった。ハンカチをミライに投げつけて戦闘体勢だ。やれやれとミライは、ハンカチを綺麗に折りたたんでポケットにしまった。

「さすが、惑星リギアの医療レベルって言ったところかしらね！」

ルナは立ち上がってスバルの目の前に立った。威圧的でスバルは声も出ない。スバルが元気ならルナも遠慮がいらないようだ。

スバルは怯えた。背中のドリルで貫かれると直感してしまうほどだ。

「ひ、委員長？！　え？　て言うか、何で惑星リギアの事を知ってるの？！　極秘任務のはずなのに……！」

「夜太郎さんとレベッカさんがぜーんぶ、話してくれたわよ！」

スバルは夜太郎を探しだして睨んだ。しかし夜太郎は湯飲みの片付けに追われてて、気付きもしない。すっかり星河家の主夫である。

スバルは肩を落として諦めた。ルナの小言が始まると予感してい

た。小言を大声で吐き捨てるから堪ったものではない。
とりあえずスバルはトラッシュに耳栓をマテリアライズするように頼もうとした。しかしトラッシュはメトリーと遊んでいた。
ルナの口撃が始まった。

「あのねえ！　なんで私に黙って、危ない事をするのよ！　アナタはルナルナ団のメンバーでしょ」
「だって、極秘任務だったし……」
「何？　私じゃ相談相手にならないっていうの？！」
「いや、極秘任務……」
「ブラザーでしょ私達！　秘密なんてやめてよ。何でも相談してよっ。私だけ何も知らないってバカみたいじゃない！！」

ルナはくるりと回って背中を見せた。図らずともスバルはルナのドリルビンタを喰らった。遠心力は素晴らしい。
スバルは頬を抑えつつ謝った。ルナの震える小さな背中を見せつけられると、謝りたくなったのだ。
今思えば、スバルのベッドのそばに活けられた高級な花は瑞々しかった。ルナが毎日見舞いに来ていてくれたおかげだろう。

「ごめんよ委員長。でも今回の任務は危険なものなんだ。君に危険があるといけないからさ……」
「ふん……。私だけのけ者よ。足手まといよ。口うるさい、イヤな女ですよ」

ルナの機嫌はまだ悪い。

「委員長、毎日お見舞いに来てくれてたんだよね。ありがとう」
「違うの！　私はそんな事で怒ってるんじゃない！」
「え？」

「私はミソラちゃんやゴン太と違って一緒に戦えないから……！」
「委員長……？」

ルナは振り向いた。スバルは驚いた。ルナは怒ってなどいなかったのだ。むしろ弱気に不安そうにしていた。今にも壊れてしまいそうな少女だ。スバルは胸を粉々に砕かれたような気がした。いまさらになって罪悪感に襲われたのだ。

ルナは思いの丈を一気にまき散らした。

「戦えないからさ！　せめて……『行ってらっしゃい』と『お帰りなさい』くらいは言わせてよね……！　それくらいは、友達として言わせてよぅ……」

ルナはまたそっぽを向いた。

スバルは肩を落とした。やってしまったという後悔だ。ただシドウはスバルの肩をぽんと叩いた。シドウは空気の読める男だ。ただ、言葉は選べない。

「ニホンの学生スバルよ。ニホンにはこういうコトワザがあるらしいぞ。

『ヒーローは遅れて登場する』っていうね！」

スバルは苦笑した。少なくとも学校で習った事のないことわざだったのだ。

「ハハ……。素敵なことわざですね」
「まあ、いまからでも遅くは無い。ほら、言っとけ言っとけ」

スバルはルナの傍まで歩み寄る。そして恐る恐る言った。

「ただいま」

ルナは振り返った。やっぱり怒っていなかった。素直でない分、面倒くさいだけであった。スバルはそんなルナが嫌いじゃない。

「うん。おかえり」

ルナの笑顔にスバルも笑顔になった。

それからスバル達は一階に場所を移し、リビングにいた。食卓を囲むようにしてあかね達は座っている。家庭的だが、話している内容は中々にハードだった。シドウが南国に残りの弾薬の数や、敵地制圧情報などの連絡を取り合っていた。中々に火薬臭い話である。

おもむろにスバルはミライにひそひそと問いかけた。あかね達には聞かれないようにだ。

「ねえ、母さん達にはどこまで話したの？」

ミライは小声で返す。

「きずなクルー関連の話と、俺達の行っているトーナメント任務についてだ。後、お前の怪我の原因とかな」

「宇宙終息については？」

ミライは当たり前と言った様子で答えた。当たり前と言えば当たり前だ。

「さすがにそこまで言えないさ。ノイズウェーブの解放任務としか言ってない」

「そ、そうだよね」

スバルは安堵した様子だった。そこにルナだ。何故か仕切る。

「さてと！　アナタ達はこれから一体どんな任務をするのかしら？！　ほら、アタシに教えなさいよ！」
「うわ……委員長が面倒くさい……」
「まあ、白金は放っておいて俺達で話を進めよう……」
「うん、そうだねミライ君」
「ちょっと、そこ無視しない！」
「ねえスバル君」

ルナを無視してミソラがスバルに問いかけた。
ゴン太はテーブルの茶菓子を頬張っている。シドウはうまい棒で、天地はトラッシュのメンテナンスをしていた。夜太郎は昼食の支度をしていた。メトリーはテレビを見ていた。
ミソラはあの時、薄れいく意識の中でスバルを捉えていた。死を覚悟した時を思い出していた。

「あのさ、不思議に思ったんだけど。あの時、誰が私達を助けてくれたんだろうね……？　戦える人は全滅してたし……」
「ああ、その話はアタシがするよ」

そこはあかねの隣に座るレベッカの出番だった。スバルの目覚ましい活躍は十分に知っていた。トレイスに支配された精神の狭間から覗いていたのだから。

「アタシの正気を取り戻してくれたのはスバル君だよ。だよね？　スバル君？」

スバルは釈然としない様子で肩をすぼめた。自信がない様子だった。

「多分、そうだと思いますけど……。あの時の記憶はよく覚えてなくて……。無我夢中だったんだ。ミソラちゃんが危なくなって、助けなきゃって」
「まあ、無理もないか……。あの時点で既にスバル君はもう体の限界だったものね。それだけに、なぜ君が私と戦えたのか腑に落ちないんだよね。もちろん感謝はしてるんだけどさ」

スバルはコクリと頷いた。

「僕も何が何だかわかりません……。何かを忘れているような気がするんですけど……」
「そうそう、君が『ラーニングレギオン』とか言った後、すっごい戦闘周波数でさ」

スバルは首を傾げた。聞いた事もない言葉だったのだ。

「ラーニングレギオンってなんですか？　初めて聞いた言葉です……」
「あれ？　君が言ってたんだよ？　そうでしょトラ君？」
「はい。スバル様はそう言ってました。間違いないです」

テレビを見つめるメトリーの隣でトラッシュは同意した。トラッシュは天地に体を弄られているが平然と言ってのけた。

「だってさ」
「おかしいな……。よく覚えてないや……」
「まあ、色々あったから記憶があいまいになっているのかもね。落ち着いたら色々思い出すよ」

レベッカはスバルを気遣って話を打ち切った。

するとレベッカはルナの方に向き直って小首を傾げた。先程から奇異の目線を向けられている事にレベッカは気が付いていたのだ。ルナはレベッカを、もの珍しそうに観察している。レベッカはタンクトップにジーパンという格好で別段おかしくは無い。若干ラフだというだけだ。

「アタシの顔に何かついてるのかなお嬢さん？」

レベッカは愛想よく笑った。健康美と言う言葉が似合う。

「アナタの顔、どこかで見たような気が……」

ミソラもルナと同じようにしていた。

「私もこの人どこかで見たような気が……、ずいぶんと昔な記憶だけど」

「ウソ。二人ともレベッカさんを知らないの？　レベッカ・レッドリバーと言えば有名人だよ」

スバルは驚いた。無知な少女二人が信じられないのだ。宇宙マニアなら誰でも知っている人物というものだ。

レベッカは髪を掻き上げて、自己アピールをした。確かにエキゾチックな赤髪は印象的だ。

「あら、ちょっとは有名人だと思ってたんだけどな。この世代の子達には浸透してないのかな？」

「このオバサマ、そんなに有名なのかしら？」

「ちょっと、委員長失礼だよ。相手はきずなクルーだぞ？」

ルナは驚いた様子で口に手を当てた。ミソラもぽかんと口を開け

放つ。

「うそ。この人が?!　あの有名なきずなクルー!?」
「あ、思い出した!　私、家のテレビで見てたんだった。スゴーイ、サイン下さい!」

レベッカは鼻も高々といった様子で踏ん反り返る。
あかねはレベッカをルナ達に紹介した。

「そうよ。この人がきずなクルーのレベッカ・レッドリバーさんよ。歳は大吾さんより一つ上ね。そして私達の大学時代の先輩でもあるの」
「と、あかねの紹介にあずかった通りだよ。ヨロシクねみんな!」

何故かスバルも驚いていた。あかねの大学というフレーズは初耳だった。

「あれ、母さん大学に行ってたの?」

あかねはにっこりとする。

「当然。このご時世、女性でも勉強はしとかないとね」

そして頬を染めた。

「そして大吾さんと出会ったのも、大学時代だったのよ?　あとハートレスともね」

レベッカも過去を振り返り懐かしそうにしている。そしてクスリと笑った。

「そうそう、あかねとハートレスで大吾の奪い合いとかねー。とってもスリリングだったねえ」
「あら、レベッカさんったら……。もう昔のことですよ」

どうやら怪しい運びになって来た様子。女の子なルナとミソラは興味津々だ。対して男性陣は押し黙っていた。ルナの作戦会議を仕切ろうという企てもどこへやらだった。

「え？　その話、詳しく聞かせて下さい。今後の作戦の参考にぜひぜひ！」
「わ、私も！　なんだか勉強になりそうな気がします！　恋愛系の作詞に」
「あら、アナタ達もそう言う話に興味あるクチ？　まったく最近の子はマセちゃってるね」

レベッカも心なしか上機嫌だ。

「話せば長くなるけどね。大吾とあかねとハートレスはそれはもう……」

どうやら話は長くなりそうだ。

スバルは生唾を飲んでいた。驚愕している様子だ。ミライは、そんなスバルの鬼気迫る表情に気が気でない。

「お、お前。大丈夫か……？　やっぱり、もう少し休んだ方が良いんじゃ……」
「僕の知らない新たな一面だ。ハートレスさんと母さんと父さんのトライアングル……。クッ……、頭が……」

「おい、お前。本当に大丈夫か……」

ガールズトークのおかげで作戦会議は始まらない。シドウはうまい棒を食べている。ゴン太は言わずもがなだ。

これがスバルが帰ってきた星河家の平穏だろうか。だとしてもミライは頭が痛くなってきた。

ｔｒａｓｈ―０５：銀河からの贈り物

女性陣の話も終り、ミライが今後の作戦を話していた。ノイズウエーブトーナメントについてだ。

「次の試合は今日から数えて、三日後です」

「へえ、なるほどね。案外近いんだね」

レベッカにミライが答える。

「ええ、そうです。試合終了時は一週間後でしたが、もう四日経ちましたからね。でも、まだ三日はあります」

スバルはホッとした。ミライの隣で力が抜けたように一息吐いた。先程から気になっていたのだ。

「よかった……。僕が寝ている間にトーナメントが進んでいたらどうしようかと思っちゃったよ……」

ミライは鼻ですかした笑いだ。

「確かにな。お前がいない状態でトーナメントが始まれば、このチームに不利益が生じただろう」

「うん、そうだね。よし、頑張らないと！」

スバルは席から立ち上がって、拳を握った。やる気に満ちている。ミソラはそんなスバルが心配で仕方がなかった。病み上がりの人には大人しくしていて欲しいものだ。

「ス、スバル君？　すごくやる気あるみたいだけど、やっぱりもうちょっと休んだ方が良いんじゃないかな」

ルナも続く。

「そうよ、スバル君。もう少し安静にしてなさい。おばさまに心配を掛けちゃダメだわ」

ルナは横に目を振った。

スバルはドキリとした。あかねは心配そうにスバルを見ていたのだ。無言で訴えた方が、よりスバルの罪悪感を詰った。スバルは一瞬、気後れしたがあかねに言い張った。今度こそは負けられないのだ。

「でも、母さん。もう、僕は負けられないんだ。心配してくれるのは嬉しいけど、今は少しでも訓練して力をつけなくちゃいけないんだ」

あかねは困ったように眉を吊り上げた。ここで言いたい事を言ってしまえばスバルを束縛する。それはとても簡単な事だった。

しかしあかねはスバルを尊重した。

「……うん、分かってるわ。私が止めても無駄なんでしょ……。アナタのやりたいようにすればいいわ」

スバルは驚いた。今までの事を踏まえると、妙にあっさりとして

いた。逆に気にかかる。

「いいの、母さん？　自分で言っといてなんだけどさ……」

「良くは無いけど、きっと大吾さんなら笑って見送るんじゃないかと思って。それに……」

一瞬、あかねは考えたようだ。

そうしてあかねは笑った。スバルを見上げる。スバルはハッとした。

「それにね。スバルはレベッカさんを連れ戻してきてくれた。もしかしたら……って、思えるの。フフ、すこし現金かしらね？」

「あはは、確かに！」

スバルも笑った。現金な事この上ないが、泣かれるより億倍は良い。それにスバルとて、大吾は絶対に連れ戻すつもりだ。

早速と言いたげに、スバルはミライに向き直った。

「ミライ君。もう任務の会議は終わり？」

ミライは手元にあったコーヒーを手にとって答えた。

「ああ、大体の事を話し終えた」

「じゃあさ。サテラポリスに行って特訓をしようよ！　三日間で出来る事はやろう」

スバルは着替えを済ませようと、二階に足を向けた。だがミライは早足のスバルを呼び止めた。「まて」とスバルを牽制する。

ミライは腰からぶら下げたアダプターからハンターを取り出した。

「まて星河。任務についての話は終わったが、まだ話す事はある」
「何？　話す事って……」
スバルは勢いを削がれて、怪訝そうにミライへ問いかけた。
「まず席に着け」
おもむろにミライはエアディスプレイを各人の目の前に展開させた。それぞれに映像データを転送し始めたのである。ミソラ、ゴン太、シドウ、ルナ、あかねはそれに注視する。スバルの席にも展開されていたのでスバルは仕方なく席に着いた。
ミライが話し始める。
「とりあえず事情を話そう。俺達が惑星リギアから帰った時の事だ。夜太郎さんがサテラポリスに渡したいものがあると言ってきた」
「渡したいもの？」
ミソラが怪しげなそれに食いついた。ミライはハンターを納めて答えた。
「夜太郎さんは俺達が惑星リギアで集中治療を受けている時に、それを受け取ったらしい。それはエメリオル大佐から送られた映像データだ」
あかねは神妙な面持ちで相槌を打った。先程まで話していた作戦会議で耳にしていたのだ。
「エメリオル大佐……さっきの話に出てきた人ね」
「そうです」

ルナも話は捉えている。

「なるほど、聞いた限りじゃ悪い人じゃなさそうだったわね」

「そういう事だ。とにかく映像データを見てみよう。長官達は既に拝見されたそうだが、ここにいる俺達は初めて見る」

シドウはうまい棒を咥えながら頷いていた。

「そうだろうな。お前らは一回戦後でドタバタしていたからな。まあ、こっちのチームゼータもドタバタしてたけどね」

「そう言えば、暁さんも試合だったんだよな？」

ゴン太だ。彼の周りは食い物のカスが飛び散って芸術的だ。あかねは気が気でない。同類であるシドウは気にせず答えた。笑顔だ。

「ああ、俺達は勝ったよ。南国さんが敵を華麗に仕留めてくれた。あと、ジャックとツカサも試合だったらしいがあのチームは負けてしまったよ……」

ゴン太はシュンとした。口元はモゴモゴと切ない。

「そうか……。残ったチームはとうとうチームゼータとオメガだけか……」

「まあ、気にするな！　尾上さんや、ジャックやツカサ達には地球圏のノイズウェーブを解放してもらう任務が残っている！　俺達は宇宙のノイズウェーブを解放する任務が残っている！　頑張ろうぜ！」

「おう！」

ゴン太の元気の良い返事を合図に、映像データの転送が完了した。

ミライは六人を見渡した。準備の次第を問うている。

「では、映像データを見てみましょう。銀河からの贈り物です」

trash―06：ギャラクシースーパーヒーロー

映し出された画面の中にはエメリオルがいた。ベッドで横になっている。破壊された体はスペアのボディで代用しているらしい。無理もない。右半身が消し飛ぶ程の重傷だったのだから。

そして病院で撮影したのだろう。彼は入院服を纏っていた。一拍置くと、百万光年離れたスバル達に話し始める。

『こんにちは、地球人の皆さま。ワレワレハウチュウジンダ』

『大佐。ここはふざけるべきではないかと……』

エメリオルは部下に怒られた。エメリオルは少しふざけていた。元気な事だ。

ルナはクスクスと笑った。

「思ってたより、ユーモアにあふれている方ね」

『では、気を取り直して。私はアンドロメダ宇宙軍大佐エメリオルです』

エメリオルは礼儀正しく頭を下げた。そしてエメリオルは腰を上げて、病院の廊下に繰り出していく。カメラも付いていく。エメリオルは松葉杖を突きながら語る。

『この映像を見ているという事は、スバル君達も目を覚ましたのでしょう。だとしたら、本当に喜ばしい事です。

そして今の我々の気持ちは、アナタ達には感謝してもしきれない……そんなものです』

エメリオルの歩く病院の廊下は老若男女いとわずのサイボーグがいた。彼らはエメリオルとすれ違うと駆け寄って感謝していた。皮肉なものだ。

「ははは。エメリオルさんも相変わらずの人気だね。でも、僕たちに感謝って……なんでたろう」

エメリオルは老婆に握手を返しながら画面に向かって語りかける。

『地球人の方の助けがなければこの惑星は間違いなく滅んでいたでしょう……。国政首都の壊滅だけで済んだのは奇跡的でした……』

スバルは表情を曇らせた。

「……そんな事」

ミソラ達も同じ表情だ。

「私達は沢山の命を救えなかった……。感謝なんて……」

しかしエメリオルはスバル達の反応を予期していたようだ。笑い飛ばしながら言葉を続けた。スバル達を責めてやろうという声色では決してなかった。

『ハハハ！　こんな事を言うと、アナタ達は謙遜してしまうでしょう！　ですが、アナタ達はこの星を救ったのです。アナタ達の戦いは決して無駄ではなかった』

笑いながら歩くエメリオルを、以前カメラが捉える。スバルは少しだけ嬉しい気持ちになった。気遣いだとしても嬉しかった。

そして歩きながらは速いものだ。エメリオルは、目的地の部屋の前まで辿り着いたようだ。立ち止って画面の方に向き直った。

『確かに、昨日の戦いで多くの命が失われました。ですが、アナタ達が救っていたものもあるのです。それは何物にも代えがたいもの』

エメリオルは部屋の扉を開け放った。中は教室ほどの大きさ。清潔な雰囲気の部屋だった。

その中には大勢の子供がいた。年端のいかない子供達がエメリオルに駆け寄る。気の強そうな男の子や、可愛い女の子、大人しそうな子と様々だった。

『あっ、おじちゃん！　今日も読み書きを教えてくれにきたのか？』

『あ、エメリオルさんだ。おじさーん、昨日の戦い怖かったよう……』

『でも、エメリオルが敵をブッ倒してくれたんだろ？！　てゆうかそのカメラなんだ？』

『ニュースでもすごかったけど、銀河連邦が助けてくれるって信じてたよ！』

『僕も怖かったけど。オジサンが負ける訳ないもんね！』

それぞれの子供達は思い思いの事をエメリオルに話し出す。しかし見ていて分かる。この子供達は同じ感情をエメリオルに抱いているようだ。それは信頼という他ないだろう。安心しきった子供達の表情から容易に理解できる。

ミソラはその様子を楽しそうに見ていた。母性本能でも擽（くすぐ）られたのだろうか。

「可愛い子達だね」

ゴン太は舌を巻いた。

「スゲー数だな。子だくさんだぜ！　育田先生も真っ青だ！」

ルナが軽くゴン太の頭を叩いた。手首のスナップが利いており見ていて安心する心のやり取りだ。

「バカ！　そんなワケないでしょうがっ」

『ここは、この病院が運営している孤児院です。私は任務でこの惑星に来た時に、この子たちに文字の読み書きなどを教えてあげているのです。みんな素直で可愛い子達なのですよ』

するとエメリオルは小さな男の子を画面の前に差し出した。見覚えのある男の子だ。

『どうです？　この子は夜太郎さんと私の戦いの時、真っ先に応援してくれた子ですよ？』

スバルは驚いた様子で声を上げた。忘れもしないあの大歓声を作り上げた少年だ。夜太郎を追い込んだ少年だ。スバルは飛び上がり指差した。失礼だ。

「あっ、あの時の！」

ミライは何とも言い難いようで喉を鳴らした。本当にどう表現していいのか本人も困ったようだ。否定せずとも甘受もせずと言った様子だ。どうにも決まりが悪いばかり。

また鼻で不満を飛ばした。

「ふん。俺達にとっては、あまり良い印象がないな……」

ミソラが不機嫌そうに頬を含まらせた。可愛いは正義だと言いたいらしい。だとしたらゴン太が可哀そうだ。

「んむう、ヒドイ言い方だねっ」

「それはそうだろう。この子の応援の後、エメリオル大佐が持ちこたえたんだからな。結果、勝ったからいいようなものの……」

スバルは二人を宥める。温和なスバルだった。

「まあまあ、お互い気持ちは分かるけどさ。今は映像データを見ようよ」

スバル達は再びエアディスプレイに目を向けた。エメリオルは楽しそうに子供達と触れ合っている。まるで本物の親子のようだ。エメリオルにとっての宝物なのだろう。

父親の背中が語る。

『もしあなた方がいなかったら、被害は広がっていたはずです。そしてこの病院まで壊滅していた事でしょう……。そうなっていたら、この子たちは……おそらく』

エメリオルは画面の方に振り向いた。子供達も不思議そうにカメラを見つめた。

スバルは不思議な気持ちになった。遠く離れた人達と触れ合っている気がしたのだから。

エメリオルは続けた。頭を下げた。それも深々と、大佐を語らな

い姿勢だった。

『ありがとうございます。アナタ達は英雄だ。悔むのではなく、どうか自分を誇りに思ってください。アナタ達に救われた命がここにはある。その事だけは心に留めておいてください』

カメラに向かって話すエメリオルに女の子が問いかけた。エメリオルの服の裾を小さく引っ張る。

『ねえ、オジサン。誰と話してるの?』

『それはですね。オジサンと君たちを助けてくれた人達ですよ?』

エメリオルは屈んで女の子に言ってやる。エメリオルは女の子の細い髪の毛を撫でていた。女の子は擽ったそうに笑顔になった。笑顔の女の子はエメリオルに純粋な感情を言い放った。飾り気のない素直な表現だ。

『じゃあ、その人達もオジサンと同じくらいのヒーローだねっ』

『ええ、そうですね。彼らは星を越えたお友達です』

スバルはくすぐったくなった。しかし悪い気はしなかった。次の女の子の言葉を聞くとそれは嬉しさに変わった。

『お友達かー。私もお友達になりたいなっ』

エメリオルは女の子に一度だけ頷くと立ち上がる。そして子供達に言い聞かせる。子供達はエメリオルに注目した。目はキラキラを眩しいばかりだ。

『皆さん。お友達は欲しいですか?』

子供達は一寸も迷わず「うん！」と返事を返した。

『では、カメラの向こうのヒーロー達にお礼を言いましょう。そうすれば地球の人とお友達になれるはずです』

エメリオルがカメラの方に向き直ると、子供達もそれに続いた。エメリオルが小さく頷くと子供は大きく頭を下げてお礼した。声が重なり大合唱だ。

『せーのっ！　地球の皆さん、ありがとうございました！』

スバル達はやっと救われたような気になった。どこか後ろめたかった。星を荒した異星人と思われていないだろうかと不安だった。しかしその言葉に救われた。嬉しくてありがたかった。

スバルは思わず画面の向こうに返事を返した。聞こえるわけは無いが、それでもきっと思いは届くと感じたのだ。

「こちらこそ『ありがとう』だよ」

シドウはうまい棒を食べるのも止めてスバル達を祝福した。

「良くやったな、お前ら。同じ地球人として俺は猛烈に嬉しいぞ」

そしてうまい棒を食べながら言い加えた。シドウはいつだってヒーロでありたい。

「でも……宇宙を越えたヒーローか。……くそ！　一歩出遅れた感はあるな。仕方がない俺も宇宙規模のスーパーヒーローになってやるぜ！　負けないからな、スバル！」

「僕も負けませんよ。……って、そこ張り合う所ですか？」

そしてエメリオルからの最後の言葉だ。画面に真摯な瞳を送り続けていた。

『……では私からの最後の言葉です。どうか聞いてください』

エメリオルは咳払いをして続けた。真剣そのものの声色だ。スバル達を心配してくれているのが分かった。

『これからノイズウェーブトーナメントも熾烈を極めていくでしょう。……ですが、アナタたちなら、きっと勝ち抜いていけるはずです。

そしてＷＷＲの目論見を阻止してください。彼らはオーパーツを集めています。オーパーツは究極の物質です。扱う者によっては、宇宙をも狂わせてしまいかねません。それも大量ともなると……、その危険は推し量れません。

……気を付けて下さい。彼らは純粋だ。それゆえに強い。私が戦ってきたＷＷＲの戦闘員達は皆そうでした。純粋ゆえに危険なのです……彼らは』

ミライは頷いた。言われるまでもなかった。

「純粋……か。確かにそうかもな」

エメリオルは何かを決心したかのように重い口を開いた。本当にこれが最後だろう。

『残念ながら、我々は今、一緒には戦う事が出来ません。ですが、共に宇宙を救う仲間として心は一緒です。

そして叶う事なら、共に手を取り合って戦っていきたいと思います』

エメリオルは笑顔になった。強面でも優しさに溢れているものだ。

『時間はかかるでしょうが、銀河連邦提督を説得し、いつかアナタ達を助けたいと思います。

では、いつか会いましょう。地球の英雄たち』

エメリオルが敬礼を送ると、画面は暗転した。それは映像データの終了を意味していた。

この宇宙からのビデオレターによって、スバル達は、より決意を固めたのであった。

「……ふう」

スバルはチーム員達を見渡し言った。余韻に勢いを任せたままだ。立ち上がった。

「さあ、行こう！」

ミソラもスバルに続く。

「うん！　今できる精一杯をしないとね！」

スバル達は次の試合に向けて、士気を高めていった。そんな熱い様子にレベッカも負けてはいられない。彼女も精一杯の力添えをしたかった。

「フフ！　みんな、やる気になってるね。よーし、頑張るぞ！　アタシも君たちに協力するよ！」

「えっ？」

スバルは驚いた。まさか、きずなクルーの助けが借りられるとは思わなかった。しかし、気持ちだけありがたいとしか言えない。

「嬉しいですけど、協力といっても、レベッカさんはウィザードも

持ってないし……」
「心配無用！　ねえシドウ君？　アタシに余りのアストラル渡してくれないかな？」
「はあ、アストラルの余りはありますが、一体どうされるつもりで？」
レベッカはニヤリとした。親指で自分を指差す。自信が溢れている女だ。
「電波変換してこの子たちをビシバシと鍛えてあげるのよ！」
ゴン太は悲鳴を上げた。
「マジかよ？！　ってオバサン電波変換できるのかよ？！」
「フフ。きずなクルーを舐めないでほしいな！」
不敵な笑みだ。ゴン太の言葉を受けて、レベッカは難なく電波化した。それもすんなりで、着替えでも済ますかのようなごく自然さだ。
彼女は半透明で、どこかしら幽霊臭い。しかしウィザードも無しで電波化とは驚嘆に値する。ムー人も真っ青である。そんな彼女が落ち着き払って、テーブルのお茶を啜っているのだからとんでもない。
ゴン太は情けなく腰を抜かした。椅子がうるさくフローリングを叩いた。
「ウエエ！　オバサンが幽霊になった！」
「アハハ！　きずなクルーだったらこれくらいお安い御用さ！」
ミソラも呆然として眺めていた。レベッカは一歩間違えば化け物

だ。そうは言えないが、そうとしか言えない。

「す、スゴイですね……」

ただ笑うばかりだ。

「あらミソラちゃん、もしかしてヒいちゃってる？」

「そ、そんな事……！　あ、でも。気持ちとは裏腹に体はレベッカさんから遠ざかろうとしてるよ……」

「うん、ヒいてるね」

「あ、あのゴメンナサイ。きずなクルーが、こんなにもスゴイなんて思いもしなくて……！」

「まあ、そりゃそうなんだけど。アタシの力って言うより、ウォーロックのせいとも、おかげとも言えるんだよね」

ウォーロック。その言葉にスバルが話に入る。思えば一年前のアンドロメダとの最終決戦の出来事だった。今となっては思い出に過ぎない懐かしい胸の上澄みだ。

「あ、それ知ってます。確かウォーロックにはそういう力があったんですよね？　ウォーロックから聞きました」

「そそ、そゆこと。おかげで宇宙空間で四年も彷徨っても死ななかったしねえ」

次はゴン太の出番だ。

「で、でもよう。単体でも電波化できるのに電波人間になったらどれくらい強いんだ？」

「うーん、そうだねえ。ここにいる誰よりも強いかな？　なんてね！」

レベッカは舌を小さく出して笑った。ふざけた様子だが、目の睨みは利いている。ピリリとした戦慄を辺りに送った。
とんでもない女だ。シドウは聞き捨てならない。

「な、な、なんですって！　スーパーヒーローであるこの俺よりも強いというんですか？」

レベッカは甘ったるく溜め息を吐いた。シドウは腹を打たれたように息を呑んだ。

「まあ、アタシもスーパーヒロインだし？　スーパーヒーローに負けない自信はあるよ」
「くっ……！」

何となく、スーパーヒーローとして負けられないシドウはハンターを構えた。一戦交えようというのだろうか。あかねとしては大迷惑だ。家庭的に作られた星河家はバトル向きではない。
だがシドウハは留まる所を知らない。

「俺は負けられない！　トランスコード！　０００！！　スカッド――」
「だめよ！」

あかねはシドウの口にうまい棒を突っ込んで阻止した。シドウはうまい棒に夢中になり、変身を中断した。サクサクと良い音が鳴る。
あかねは呆れた。シドウのハンターを取り上げた。それでも手が寂しくないように、うまい棒を待たせて保険を掛けた。抜かりは無い。そして言う。

「ちょ、ちょっと、シドウ君。家の中で暴れないで……！　それにレベッカさんもシドウ君を煽らないでくださいっ」

幽霊なレベッカはふわふわと謝った。

「ごめんよ、あかね。でもシドウ君はスーパーヒーローポイントマイナスだね！　民家で暴れるのはマイナス六五点だ！！」

「ぐあ！　ろ、六五点もだと……？！　これでは俺がスーパーヒーローから普通のヒーローになってしまう……！」

楽しそうだな、と思いつつスバルはとりあえず突っ込んでおいた。

「スーパーヒーローポイントってなんですか？　どこかの怪しい組織のポイントですか？」

「うむ！　なかなか鋭いんじゃないのかスバル？　なにを隠そう！　スーパーヒーローポイントとは、どこかの国で秘密裏に組織されているスーパーヒーロー委員会によるスーパーヒーローとしてスーパーヒーローによるスーパーヒーローのためのスーパーヒーローなポイントなんだぞ！　すごいんだぞ！　ちなみに俺は三百点持ってるぞ」

「ちなみにアタシは五六〇点ね！」

ゴン太は気になって仕方がない。

「なあ、俺は俺は？」

シドウはとりあえずゴン太の方をポンと叩いた。やりきれない思いに、切なげに表情が移ろう。

「二点だ。ママのお使い良く頑張ったと俺は思う」

「え。それだけ……？　俺も何気に遊撃隊とかで……」

シドウはうまい棒で耳を塞いで、聞こえないつもりを演じている。ゴン太は切ない。シドウはうるさい。

「さあ！　スバル君はと言うと！！」

「俺、何気に巷じゃコダマタウンのスーパー野生児って呼ばれて……」

シドウのうまい棒、野菜スティック味は完璧な防音性能だ。大声でうるさい。

「さーあ！　スバル君はと言うと！！」

スバルはもう我慢ならない。湯飲みをテーブルに叩きつけた。ダイナミックに緑茶がアメーバのように空中で弾けた。

「ああ、もう！　うるさいなシドウさん。人の家の中で、叫ばないでください！　近所迷惑です！」

あかねは憂慮（ゆうりょ）した。おばさんネットワークは伝達速度で言えば光ネットワークにも引けを取らないのだ。噂になるとあかねが恥ずかしいのだ。

「困ったわねえ。パート先でうまい棒好きの変質者が現れたなんて噂になっちゃうわ」

シドウはがくんと方膝を突いた。精神的ダメージによるものだろう。そこにテレビを見終わったメトリーがシドウのうまい棒にコークスクリューを炸裂した。シドウのうまい棒は粉々に砕け散った。

シドウは両膝を突いた。

「くっ！　と、とにかくだ。星河スバル君のスーパーヒーローポイントは七百点だ！　……クッ、喜べスバル！　お前はまごうことなきスーパーヒーローだ！」

「わあスゴイ。……って、地球を三回も救って七百点って微妙ですね！」

「まあ、地球を一回救うのはスーパーヒーローポイント百点だからな」

「つまり、地球を救っても民家で二回暴れたら、それはもうスーパーヒーローではないってことですね」

シドウは痛いところを突かれて顔を歪めた。そしてメトリーに髪の毛をブチブチと抜かれている。段々と床屋さんみたいな床が出来あがる。メトリーにイケメンは効かない。あかねはとりあえず掃除機を取りに席を立った。

ただそんな環境に不満は無い様子だ。シドウはうまい棒に被りつくと言い切った。その何事にも立ち向かう姿勢はまさにスーパーヒーローだ。

「だが、スバル！！　お前はそう言うが?！　いくら地球を救っても、民家で二度も暴れるようなヤツを本当にスーパーヒーローというのかな?！」

その言葉にスーパーヒーローなスバルは崩れ落ちた。的確に的を射ている。返す言葉もない。これは真理だ。

「た、たしかに……。民家で二度も暴れる人はスーパーヒーローなんかじゃない……！

ぐっ……こんなことにも気づけないなんて……！　僕はなんてバ

カなんだ！」
「分かってくれたかスバルよ」
「ハイ暁さん……」
「ほら。うまい棒だ。遠慮せずに食え」
「うぅ……。ありがとうございます……っ」

大切な事に気が付いたスバルだった。だがミソラとルナは呆れていた。

「本当におバカさんだね」
「ったく。スーパーヒーロー言いすぎ！」

トラッシュは微笑んだ。

「やれやれですね」

話は落ち着いたようだ。
ようやく気を取り直し、レベッカはシドウに問いかけた。彼女はすでに電波化は解除している。真面目な雰囲気を醸し出すのでシドウもそれに合わせた。

「でさ、シドウ君。敵にアタシと同じきずなクルーがいるっていうのは確かな情報なの？」

シドウは顎に指を添えて、視線を泳がした。記憶が南国を捉えた。

「南国さんが言うには、ＷＷＲの幹部の中にジョニーさんがいたとかいないとか……」

レベッカは呆れた様子だ。腰に手を当てて首を傾げる。

「えらくはっきりしないのね」

それにはスバルが答えた。遊園地での戦いだ。最初は気の良い仲間かと思った。だが、ミソラを連れ去ったとんでもない輩だった。それも圧倒的な強さを持った敵だ。

「南国さんはソウルメイトの周波数を感じたとか言ってたんだ。それにしても、あの伝説のジョニーがＷＷＲの幹部だったなんて……

信じられないよ。
　コダマタウンの七不思議では、世界中の子供達に夢と勇気を与える妖精だって言ってたのに……。南国さんは嘘つきだよ……」
「なるほど……ね。コダマタウン七不思議は置いといて……。
　実際には、はっきりしてないけど、限りなくキリン・ライトニングは元きずなクルーのジョニーに違いないってワケか……」
　シドウはレベッカに付け加えた。
「信じたくはありませんが、恐らく彼はジョニーさんだと。そうなると、事態は思わしくありませんね……」
　そこにゴン太が疑問を呈した。いつの間にか台所からリンゴを頂戴してきたようだ。くちゃくちゃと口を鳴らしながらだ。あかねとしては良い迷惑だが微笑んだ。
「なあ、オバサン。あのキリン・ライトニングとかいうやつとんでもない化け物だったぜ？　ミライでも敵わないくらいだったんだからな。
　そのジョニーって何者なんだ？」
　レベッカは考え事のようで再び椅子に腰を掛けた。ぼんやりと過去の事を振り返る。ジョニーについて思い返せば、良くも悪くも思い出が沢山だった。レベッカは少し笑った。
「ジョニーはね。アタシ達と同じきずなクルーの一員だったの。クルーの中じゃ、搭乗を見送った南国君の次に若かったわ。それに元サテラポリスの隊員で屈強な戦士でもあった……。
　とても明るくて、素直な男だったわ」

レベッカはどこか懐かしそうに語った。それに耳を傾けるシドウ。彼もジョニーの伝説はサテラポリス内でよく耳にしていた。南国が語るどこかふざけた武勇伝ではなく、正真正銘の英雄譚である。

「ジョニーさんと言えば、サテラポリスの二枚看板として南国さんとダブルエースを張っていた歴代の英雄だ……。裏世界では『ジャッジメント・サン』として恐れられていたよ。

その後、ＷＡＸＡに配属し、きずなクルーに若くして抜擢された。……あの人は本当の意味での天才だ」

ゴン太は驚嘆した。ジョニーの凄まじさは南国の言っていた七不思議とはかけ離れ過ぎていたのだ。

「すげえ……。だから、あんなに強かったのかよ」

「いや、違うわ。確かにジョニーは天才だけど……。聞く限り、アイツの強さには明確な理由があるわ。きずなクルーであるアタシには分かる……」

スバルはレベッカの言い分から察した。ブラッド・オリジンやギガント・オリジンとの戦いを思い返せば至極簡単な共通点だ。スバルはレベッカに聡明さを披露した。

「ジョニーさんは宇宙の過酷な環境を過ごしてきたから……ですね」

レベッカは頷いた。

「そうよ。アイツはきずなクルー。恐らく四年近く宇宙を彷徨ったはず。

そうして過酷な環境を、長らく電波体として過ごしてきた肉体はある特殊性を得た。それは常軌を逸した電波変換を可能にさせる事。

電波化による肉体情報の改変。
そこから実現される圧倒的なシンクロ率に戦闘周波数……。
……惑星リギアでサイボーグ達の脅威を目の当たりにした貴方たちなら理解は出来るわよね？」

スバルは唖然として、勝てる気がしなくなった。

「まさか、それほどまでなんて……」

スバルはうなだれた。レベッカはスバルの肩を大きく叩いた。驚き、スバルは背筋を伸ばす。

「確かにそうよ。きずなクルーは強い！　でも、大丈夫！　同じきずなクルーのアタシが特訓を付けてあげるんだから！！　アナタ達だって負けやしない。いいえ、絶対に勝てる！」

そうだ。レベッカもきずなクルーだ。そう思うと、ゴン太達の士気は高まった。

「うおおお！　カッコいいぜオバサン！！　なんだか勝てる気がしてきたぜ！」
「はは……ゴン太のヤツは単純だな……」

スバルは苦笑い。そこにミソラだ。

「でも、ゴン太君の気持ち分かるな！　私も勝てる気がしてきたっ」

スバルも今度は同意した。

「うん。確かに……！　今、僕たちに出来る事をやるんだ。ジョニ

ーさんにだって負けない力を付けなくちゃね！」
「よし！　そうと決まれば、サテラポリスに行くわよ！　アタシがビシバシ鍛えてあげるからね！！
シドウ君！　全てのチーム員を呼びつけなさい！！」

レベッカはシドウに言いつけた。シドウはハンターを取り出し連絡を付ける。尾上やジャック、ツカサも特訓に参加させられるという事だ。戦力は万全でなければならない。

「あらあら、やる気になっているわね」
「私も頑張らなくては、ですね」

そんな中、あかねと夜太郎が現れた。配膳をしている最中だった。時刻はもう昼になろうとしていた。

「みんな！　特訓も良いけど、その前にお昼にしましょう」

あかねは豪勢な料理をテーブルに並べ始めた。夜太郎も配膳を手伝いつつスバルに言う。

「今日はスバルさんが地球に帰って、ようやく目を覚ました記念日ですからね。それにきずなクルーが帰ってきたお祝いもです！　私とあかねさんが腕によりをかけて作りましたよ」

テーブルを彩る料理はもくもくと湯気をたてている。照りかえった鶏肉が食欲をそそる。
ゴン太はよだれを辺りにばら撒いた。

「うほあ！　うまそうな料理ばかりだぜ！　特訓の前に腹ごしらえだ。腹が減っては何とかだぜ！」

レベッカも頷いた。あかねの料理のレベルの高さは大学時代から知っている。それに腹が減っては戦は出来ない。

「うん、そうだね。ご厚意は受け取っておきましょう。特訓はお昼の後ね！」

ミソラも腕が鳴るし腹が鳴る。ルナも楽しそうにしていた。

「わーい。お昼だ！　おいしそうっ。沢山食べるぞっ！」
「ミソラちゃん。あんまり食べ過ぎて太らないようにね！」
「うん、そうだねルナちゃん！」
「ふふ……。そう言えばこうやって、パーティーをするのもスバル君がメテオGを破壊した時以来かしら」

今日の星河家は賑やかだ。スバルはそんな幸せを噛みしめている。戦いの前のほんの安らかな一時だ。太陽は高く空はひたすら青い。コダマタウンは温かい。

皆の笑い声がこだましていた。

今日は二二ＸＸ年五月二一日ノイズウェーブトーナメント二回戦まで後三日である。

そして同刻。

ある男とある少年の物語が始まろうとしていた。そこは、とある宇宙のとある惑星。その惑星の名前はウルマキナ。惑星パトラ同様、ムー人が住む星である。

ただ一つ違うのは彼らは、究極にして純粋な始祖生命という事だ

った。地球のムー人やパトラの人達とは違い、純血の血統を守っていた。

惑星ウルマキナ。そう、眠れる神を祀る星である。

そんな場所で一人の天才が惑星の天空神殿に侵入していた。キリン・ライトニングだ。

侵入した天空神殿は空中に浮かぶ要塞のようだ。色は白いが、その様式美ともとれるシンメトリーなシルエットが特徴だ。それは例の大陸と同一の特徴である。

そう、またしてもムー大陸である。この星でのそれは『パラスマキナ』と呼ばれている。

キリン・ライトニングはパラスマキナの中を疾走していく。馬蹄の音が反響して耳に残る。辺りは古代文字が浮き上がっている。標識のように道の要点を抑えていた。意味はあるのだろうが、可読なものではない。ただ苦笑いを浮かべた。

「くっ。ワタルに最後のオーパーツの回収を頼まれたが、今回は骨が折れそうだな」

キリン・ライトニングは頬に程良い緊張の汗を伝わらせた。しかし汗は風に削がれ後ろに飛沫を飛ばす。彼は電波信号が忙しく行きかう神殿を駆け抜けていく。馬蹄（ばてい）の猛々しい音が静寂の神殿を切り裂いていく。キリン・ライトニングは実体化したキリンに騎乗しているのだ。西洋の騎士のようである。

キリンは長い脚で地面の上を跳ね走りながら言った。余裕のない口調だ。しかしその走る様は、間違いのない名馬だった。

「ジョニー！　追ってはかなり多い！」

キリン・ライトニングは今度は良い笑みを浮かべた。

「ハッ！　良いスリルだぜ」

乗馬しながら器用に鼻先を擦る。

「ここの種族はパトラやムー人と同じ種族だ。エランドやトレイスと電波変換したヤツらに捕まったら無事じゃ済まないだろうなあっ！」

キリン・ライトニングは呑気に笑っていた。追われているのに焦りは無いようだ。キリンが叱る。

「ジョニー！　笑っている場合ではない！　ここの神殿はヤツらの方に地の利がある！」

しかしキリン・ライトニングはこの惑星の隠された神秘に心躍らせた。

「心配はいらない。むしろ楽しくなってきたぜ！　この惑星のオーパーツはとんでもない代物のようだからな！」

ｔｒａｓｈ―０９：ソロの本質

キリン・ライトニングは目をしかめた。目は悪くは無い。むしろ良い方だ。だからしかめた。目の前に敵がいた。黒い。

行く先の前方二百メートル先に敵を捉えたのだ。相手も同じ様子だ。敵意に満ちていた。武器を構えて威勢が良い。黒い影は大声で叫んだ。仲間と連携を取っているらしい。キリン・ライトニングはより目を細くした。

「侵入者補足！　迎撃に向かう！」

「くそ！　もう見つかったか！！」

通路の交差点でキリン・ライトニングはレム・オリジンと遭遇してしまったのだ。ブライによく似た漆黒の電波人間は鉄板状のソードを構えた。しかしキリン・ライトニングはそのままの勢いだ。一方通行だというのにこれはどういうことか。ただキリン・ライトニングはやる気だった。

「やっこさん、やる気だな！　スピードを緩めるなよ、キリン！　そのまま突っ込むぞ！」

「大丈夫なのか！　ジョニー？！　あの物陰に、隠れている敵の反応が十数体確認できるぞ」

「ああ、心配いらない！」

ジョニーは名騎手だ。

キリンは納得した様子でスピードをさらに上げた。しかし、このままでは交通事故は必至だ。黒い電波人間ことレム・オリジンは愚かなキリン・ライトニングをあざ笑った。やはり数は多い。男の笑い声が壁に反響して耳に付く。

「バカめ！　こっちはまだまだ人数がいるんだ！」

残りのレム・オリジンが通路に繰り出し、キリン・ライトニングの行く道を阻んだ。十分に広い通路もレム・オリジンのおかげで完璧に敷き詰められて逃げ場がない。それでもキリン・ライトニングはさらにスピードを上げて突っ込む。

「考えなしに突っ込むとは愚かなり！　電波障壁で奴の道を塞げ！」

「おう！」

息の合った動作でレム・オリジンは電波障壁でさらに壁を作った。完璧なパリゲートだ。水分の一滴でさえも通さないだろう。これでは硬い壁に正面衝突だ。キリン・ライトニングはそれでも突き進んだ。

そして手を天に掲げた。雷がほとばしる。

「ムーの皆さんには馴染み深いかもしれないが！　とくと見とけ」

「バカめ！　電波障壁の壁は何人も通さない」

「それはどうかな！　オーパーツ『オールトランス』！！」

キリン・ライトニングの構えた手の平にある一つのオーパーツが生成された。長い柄を持った万能槍だ。得物を得たキリン・ライトニングは正真正銘の騎馬兵となった。

レム・オリジンは驚きを隠せない。何せオーパーツは彼らの至宝

だからだ。レム・オリジンの一人は思わず一歩退いた。神の供物に腰が引けたのだ。

「お、お前……！　何でオーパーツを?!」

「ハッ！　企業秘密だよっ。食らいやがれ！　シューティング・オールト・メテオ!!」

オールトランスが強く輝く。暗い緑色で見ていて犯されそうな汚さだ。

キリン・ライトニングがオールトランスを突きだした。するとレム・オリジンに対して暗緑色の隕石群が降り注ぐ。それが紙きれのように電波障壁を打ち破る。

「コ、コイツ……！　ここより先には……！」

その言葉とは裏腹に、レム・オリジンは一網打尽にされた。隕石に打ちのめされて地面に崩れる他ない。一人残らず鈍器で叩きのめされると、道は大きく開いた。小さな呻き声が地面から昇っていくばかり。

「悪いな！　俺にもやらなきゃいけない理由があるんだ!!」

キリン・ライトニングはそのままレム・オリジンを置き去りにしていく。神殿の深い所まで突き進んでいく。高らかな蹄の音が神殿の空気と混じり落ち着いてく。辺りも落ち着いていく。やがて静寂となった。

そこに呻き声だ。控え目な声でも良く響いた。

レム・オリジンの一人は地面にぐったりとしながら、キリン・ライトニングの方に呟いた。その言葉はパラスマキナのどこか重苦しい空気に押し潰される。

「やめろ……。お前の探しているモノは……世界を終わらせる……究極のオーパーツ……だ。」

レム・オリジンは声を振り絞った。

「『デウス・エクス・マキナ』には触れてはならない……」

レム・オリジンは意識が揺れた。朦朧とする。そしてもう一度揺れた。今度は強い。目が回った。

安らかな眠りを妨げるものが現れたのだ。神殿の壁を透過して、ある一人の電波人間が現れたのである。容姿はレム・オリジンとそっくりだ。その電波人間はレム・オリジンを見つけると乱暴に胸倉を掴み上げたのだった。

「おい、お前。この神殿にあるオーパーツの場所を教えろ……！」

少年の声だ。背丈からだとスバルと年は変わらないはず。だが、その冷たく洗練された声色は歴戦の戦士たるものだった。

彼はブライだ。ムー人の最後の生き残りである。

遠慮のない要求にレム・オリジンは憔悴しきっていた。だが、ブライの容姿を見ると、敵意を向ける事は出来なかった。あまりにも似ていたのだ。

覚めるような白髪に、血が煮えたような赤い瞳、そして神秘的でさえある褐色の肌。いちいち特徴をとらえてきていた。

下らない質問が口から次々と出てくる。

「お前……は？　見ない顔だな……？　この神殿の番兵か……？　いや……違うな。ここの星の者ではないな……。どこから来た？　なぜ来た？」

ブライは無愛想だ。些細な受け答えさえ煩わしかった。だが、ブライもレム・オリジンと同じ感情を抱いていた。その僅かな機微が口を開かせる。

「俺はムー人の最後の末裔……ブライだ。俺の目的はムーの遺産であるオーパーツの回収だ。

あのＷＷＲとかいうヤツらはオーパーツを好き勝手に集めている。俺はそいつらを付けてきた……。そしてここのオーパーツも俺が回収させてもらう。

アイツらにオーパーツを好きにさせない。

ムーの遺産を守る事が俺の存在理由だからな……」

言っている最中で、ブライは舌打ちをした。省みたのだ。

「チッ……！　そんな事はどうでもいい。さっさとオーパーツの場所を教えろ」

レム・オリジンは頬を引きつらせた。

笑っている。

「フッフフ……。そうだったのか。お前はそうか……。フフ、会えて嬉しいよ……少年。いや、我が同胞よ」

ブライはひくついた。握力にものを言わせレム・オリジンを責め立てた。

「キサマ……ふざけるなよ。俺はムー人だ。俺は常に独りだ！　仲間などいない！」

構わずレム・オリジンは上体を起こして座った。だるそうにしてはいるが、ブライの事を懐かしそうに眺めていた。ブライは苛立った。

「いや……お前は俺達の仲間だよ。お前も薄々気が付いているはずだ……。それに……いるんだろう？　『トレイス』がさ」

我慢ならないブライは胸倉を掴むのをやめて、レム・オリジンを壁に叩きつけた。レム・オリジンは咳き込んだ。だが黙らない。ブライは高圧的に、意識して責め立てた。それでもレム・オリジンは黙らなかった。

「ふざけるのもいい加減にしろよ。俺はトレイスなど知らん！」

「いいや。お前は良く知っているはずだ……。出て来いよ、周波数で分かるんだぜ？」

差し出した指先はブライの隣を捉えていた。そこには何もないはずだ。

ブライはうるさいレム・オリジンを黙らそうと拳を握った。振りかざそうとする。

だが制止された。ラプラスが出てきたのだ。ブライの握った拳を手に取り、彼は首を振っていた。

ラプラスは初めて、ブライに反抗したのだった。

「あ……うあ……」

「ラプラス……お前っ……！　離せ！！　これは命令だ！！」

レム・オリジンはニヤリとした。

「やっぱりいるじゃないか。トレイスがさ」

「違う。お前……いい加減にしろ。コイツはラプラスだ！」
「そうか……。ラプラスって名前を付けてるんだな……。大切してやれ……。それは、お前の家族だ……。トレイスとオリジン……お前らは共にいなければならないんだからな。
それが俺達の母に教えられた血族の掟だ」
「コイツ……！」

ブライは立ち上がり、レム・オリジンを蹴り飛ばした。レムオリジンは腹を押さえて俯いた。それでブライは安心した。
しかしすぐにブライを見上げた。赤い瞳がブライを見つめる。ブライは堪らない。

「だまれ！　これ以上お前の妄言に付き合ってられない！　さっさとオーパーツの場所を言え」
「……そうか、お前ともっと話がしたかったんだがな……。まあ、嫌なら仕方がない……」

ブライはその言葉に、心のどこかで安堵した。しかし本人は気付かない程度の僅かな綻びだった。
レム・オリジンは溜め息を吐くと教えてやる。キリン・ライトニングが走っていった方へ指を差す。

「ここから先をずっと進め。そうすれば、審判の間にたどり着く。……なに大丈夫、俺達と同じ血が流れているお前なら、ここの内部構造も分かるはずだ。
この母なる大陸『パラスマキナ』はお前らを乗せた船『ユグノア』とほぼ同じ構造だからな。まず迷う事はないさ……」
「ユグノア……？　なんだそれは？」
「なんだ、知らないのか？　お前の星にもあったはずだ。漆黒の超巨大大陸型宇宙船がな……」

「大陸型宇宙船……？　まさかムー大陸……。アレが宇宙船だと？　ふざけるな！！」
「フフ……どうだろうな……。それに俺の話は聞きたくないんだろう？　ムーの少年よ」
「チッ……！」
「さあ、もう行けよ。ブライ……いや、ソロ……」
「お前、なぜ俺の名前を？！」
「そのラプラスが教えてくれたんだ。それにラプラスは女の子だ……それくらい知っておいてやれ」
「ふざけるな！　馬鹿にするのも大概にしろ」
「そうか……。まだ上手く意志の疎通が図れないんだな……。フフ……大変だな」

話にならない。ブライはそう思った。

「チッ！　行くぞ、ラプラス！」

ブライは吐き捨てるようにラプラスに言った。ラプラスはただブライに付いていくだけだ。二人は審判の間に向かって消えていった。
レム・オリジンは神秘的な神殿の奥に消えていくブライをただ黙って見送る。そして小さく溜め息を吐くように呟いた。ブライには聞こえていないだろう。それに聞こえていたとしても、ブライは振り返らないはずだ。

「良いか……ソロ。お前は独りじゃない。お前の後ろには家族がいるんだ。……それを忘れるな。お前の本質は孤独なんかじゃない。それが分かる日がいつか来る・……。
デウス・エクス・マキナの封印を解いたら世界が終わる……。俺達と同じ血が流れているお前なら分かるはずだ……」

ブライの姿は通路の闇に揉まれて完全に消えてなくなった。レム・オリジンはいよいよ意識が遠のく。ブライにも強烈な一撃を貰っていたのだから。

「お前には、繋がり始めたものがあるはずだ。拒絶する事を止めて、お前の世界を見渡せ。そうすればお前は……」

レム・オリジンはようやく眠った。

trash―10：デューオ

それからしばらくの時間が経った。キリン・ライトニングは立ちふさがるレム・オリジン達を薙ぎ払い、そして薙ぎ払う。それを繰り返すと、ようやくにして辿りついたのだった。そしてキリン・ライトニングは高すぎる天井を見上げた。その先は空気に霞んでいた。暗いばかりで何も見えない。

「やっと、着いたか。キリンよ、オーパーツを探すぞ」

『了解した。いよいよ最後の一つだな』

「ああ、そうだな」

キリン・ライトニングは首を回した。すると軽快な音が二、三回鳴った。よほど疲れたのだろう。溜め息を吐いた。

一息吐くと、キリン・ライトニングは審判の間の奥に向かって歩き始めた。地面を打ちつける足裏は虚しい音を立てる。反響もなく音は寂しく空洞を泳いでいく。それほどに広い場所のようだ。審判の間と言うわりには自然のままの洞穴のようである。コウモリがいても驚きは無いくらいだ。だが、それさえもいなく、武骨な土色の岩肌がせり上がってるだけだった。

キリン・ライトニングはぼやいた。

「ふう疲れた。……ここの番兵達は中々の強さだったな。流石に疲れたよ」

『確かにな……』

「それにしても、ここは不気味だなー。ジュニアハイスクールの時

のお化け屋敷を思い出すね。……て、うおっ？！」

おもむろに横を振り向けば、巨大な彫像が立ち並んでいた。キリン・ライトニングは腰を抜かした。高さは十数メートルはあろうかという人型のものだ。キリンは実体化してキリン・ライトニングの横に出てきた。彼も舌を巻いている様子だ。その彫像の数は一つや二つではない、何百とまでにも及ぶ。いや、何億という規模だった。

「驚いたな。この一帯には巨大な像が多数体も並べられているのか。……圧巻だな」

「ずっと見られているみたいで気味が悪いけどな……」

「何を馬鹿な。ただの石にすぎんだろうに」

「まあ、そりゃそうだけれど」

キリン・ライトニングは苦笑した。キリンはやれやれと言いたそうに首を振った。そして緊迫したように硬直した。振った首は横を向いたまま動かない。背中越しにキリン・ライトニングに呼びかけた。

より一層、普段より低いトーンの声だった。

「おい、ジョニー」

キリンの言葉にキリン・ライトニングは立ち止った。多くは要らない。その毅然と留まったキリンの声色だけで十分だった。

ニヤリと笑う。戦意が見え隠れしている。だが、体は正直なものでキリン・ライトニングの体は紫電をほとばしらせていた。恐ろしいまでの戦闘周波数だ。細かい電撃が、空間を針のように枝を伸ばしていく。

「ああ、どうやらお客さんのようだな……！」

『ジョニー、疲れは大丈夫か？』
「まあ疲れちゃいるが、多分大丈夫だ。今のシンクロ率は？」
『１６４５％だ！』

キリン・ライトニングは歯を見せて笑った。

「戦闘周波数にして、８００万メガヘルツってところか……。なら、大丈夫だな！！」

キリン・ライトニングは後ろを振り返った。人影がキリン・ライトニングの表情を隠していた。その視線の先には、既に一体の電波人間が飛びかかってきていたのだ。電撃みなぎる大剣が洞穴の薄暗さを嘘のものとしている。その明かりで電波人間の正体は容易に割れた。ブライだ。
彼はすぐにベルセルクプレートをキリン・ライトニングに叩き付けた。鈍い音で空気を裂いていく。次はキリン・ライトニングを裂くつもりだ。

「食らえ！　ライトニング・ボルト・スマッシュ！！」

動じないキリン・ライトニングは手をかざした。電撃が白く輝く。それが凝縮し、小さな球体になった。しかしその中身は超密度の雷で満たされている。
キリン・ライトニングはブライに言ってやった。

「良い電撃だ！　だが、それくらいじゃ俺は倒せないぜ。
そら！　カミナリダイコ！」

するとキリン・ライトニングの手のひらが猛烈な輝きを放った。稲光だ。雷鳴が轟く。空気が振幅、増長し一気に炸裂した。

ブライは爆風にも違わぬ雷鳴を真正面から食らった。がくがくと空気の震えに同調していく。すると限界に達して爆発した。ライフル弾のように洞穴の奥に吹き飛んでいってしまう。

キリン・ライトニングは肩を回してウォーミングアップ完了と言いたげだ。陽気なジョニーはブライにけしかける。遊びは面白いから楽しめるのだ。

「おい、黒い少年。もう終わりか？　俺はピンピンしてるぜ？」

闇の中へ向かって問いかけるが返事は無い。キリン・ライトニングは当てを外し首を傾げた。

「あれ、もしかして気絶しちゃったのかな？　思いっきり手加減したんだけどなあ……」

『バカ、油断するなジョニー！』

キリン・ライトニングは上空を見上げた。驚いた。ブライが八体に分身している。手には黒光りが美しい巨大手裏剣。キリン・ライトニングは感動した。カメラを探そうとするが見つからない。

「うおお！　ジャパニーズシノビじゃねえか！」

『バカ、油断するなって言ってるだろ。ジョニー！』

ブライは大型の手裏剣を五月雨のように浴びせた。手裏剣は息つく暇もなくキリン・ライトニングに襲いかかる。漆黒の雨だ。

「バカめ、油断しすぎだ！　コクウメッサツジン！！」

「いや、油断はしてない。フリーダムこそ俺のスタイルだぜ」

キリン・ライトニングは親指を立てた。そこに手裏剣が突き立った。

「バカは死ね……！」

捉えたと思ってブライはニヤリとした。だが、すぐに表情を強張らせた。手裏剣を投げる手が止まる。首筋に悪寒が走る。

キリン・ライトニングはブライの目の前から消えていた。ブライは手裏剣に完璧に切り刻まれたのだろうかと思ったが、そうではない。ブライの耳元でキリン・ライトニングがささやく。一瞬で背後を取られたのだ。ブライは信じられなかった。油断もしていないし、細心の注意を払っていた。だが、油断している敵に背後を取られている。

何という周波数変換の速さだ。やはりキリン・ライトニングはただ者ではない。それでも彼は朗らかに笑った。

「よう黒い少年。お前、名前はなんて言うんだ？　ほら、自己紹介まだだったじゃないか。ちなみに俺はキリン・ライトニングっていうんだ。陽気な裏世界の支配者さ！！」

キリン・ライトニングはブライの肩にポンと手を置いた。ブライはその何とも穏やかな挨拶に圧倒的な力の差を見せつけられた。それほどキリン・ライトニングは常軌を逸している。

お散歩気分のキリン・ライトニングは、闇の世界で力を研ぎ澄ましてきたブライをあざ笑っているに等しい。

「な……っ？！」

「なあ、知ってるか？　油断してる方が強くなる人種もいるんだぜ」

そのままキリン・ライトニングがブライの肩をトン、と押すと地

面にクレーターが出来あがった。ブライが地面に激突した衝撃だ。そして爆音が轟く。チリチリと審判の間の石像達も共振していた。

ブライはクレーターのど真ん中でうずくまっている。動かない。

「ちょっと、やりすぎたか？」

キリン・ライトニングはブライの目の前に着地する。砂ぼこりに、咳き込みながらブライを見下ろした。口調は穏やかだったが、態度は厳しい。

「なあ、力の差は分かっただろう？　大人しく帰っとけ。俺はこの先に用事があるんだ」

ブライは動かない。

「俺は子供相手に本気は出さないぜ？　何が目的か知らないが、ここから先は大人の世界ってヤツだ」

その言葉にブライはやっと動いた。小刻みに肩を震わしている。

「クッ……ククク……」

「あれ、俺のジョーク伝わった？」

キリン・ライトニングは小さくガッツポーズを作った。

「笑わせるな……！」

ブライはゆらりと立ち上がった。紫色のバイザーは粉々に砕かれている。これでは良く前が見えないだろう。ブライはそれでも赤い瞳で睨みを利かせる。これではキリン・ライトニングは良い気がし

ない。

「ふざけるなよ！　俺は……！　ムーの遺産を取り戻すために戦っている！　それが俺の生きる理由であり！　俺が何者であるか証明出来る唯一の手段だ！」

「……なんだか、必死だな……。だが、お前はもうボロボロだ。弱った体で叫んでも、それは鳴き声にしか聞こえないぜ？」

「馬鹿に出来るのも今のうちだ！　ラプラス！！　本気でコイツを叩きのめすぞ！！」

『ああう……あ！！』

ブライは腕を広げて構えた。キリン・ライトニングは眉をひそめた。ブライは暗黒の光に呑み込まれていく。

「オーパーツ！！　ベルセルクプレート！　フウマシュリケン！　エアトライデント！　ダイノヘッド！　ムー人である俺に力を寄こせ！！」

「なっ……！」

キリン・ライトニングは思わず固まった。ブライの周りでオーパーツが回り始めて吸い込まれていく。ブライの戦闘周波数が爆発していくのが分かる。そして何よりオーパーツを一度に四つも自分の体に取り込んで使用するなんて聞いた事もなかった。信じられないしただ驚愕しかできない。それでもキリン・ライトニングは電撃をブライに飛ばした。だが闇にかき消された。これは相当だ。

そしてブライの戦闘周波数がキリン・ライトニングを上回った。キリン・ライトニングは焦りを覚えた。そしてブライが口を開く。キリン・ライトニングは思わず一歩下がった。気持ちは前に向かっていたはずだ。だが、何故か両足は後ろに下がっていた。キリン・ライトニングはスリルを楽しんだ。笑みが零れる。ブライも負けな

い笑みを零した。目元が引きつっている分、こちらの方が印象に残る。キリン・ライトニングはもう一歩下がった。

目の前の電波人間は焦げたように消し炭を地面に垂らしていく。消し炭は地面に落ちると蒸発していく。そこには闇の中より生まれた暗黒戦士が、キリン・ライトニングの前に現れたのだった。その戦闘周波数九十〇万メガヘルツ。キリン・ライトニングを百万メガヘルツも上回っている。

「お前……何ていうオーパーツの使い方をするんだ。流石に驚くぜ」

『ジョニー、この戦闘周波数は……！』

「ああ、ちっとばかしヤバいかもな……！！」

ブライ・オリジンはキリン・ライトニングを睨みつけた。お返ししてやるのだった。

「さっき、お前は俺の名前を聞いたよな？　いいだろう、答えてやる。俺はブライ。そして今の姿をブライ・オリジンという。宣言してやる、お前は俺に無残にやられる！！」

「へ……最近のガキは発育が良いって言うけど、もうそれどころじゃないな……！」

『ジョニー油断するなよ。アイツ、今まで本気じゃなかったようだ……！』

ブライは宝物剣を構えた。すらりと延びた刀身がキリン・ライトニングの首を映す。

「お前達にオーパーツを好きにはさせない！　行くぞ！　キリン・ライトニング！！」

キリン・ライトニングも本気といった様子で、オーパーツの槍を

生成して構えた。

「なーに！　俺にも譲れないものがあるのさ！　ワタルの夢は俺が絶対に叶えさせる！　家族は一緒じゃなきゃいけないんだ！！」

『ジョニー、お前……！　気づいて……』

「ああ、俺はバカだけど。そこまでアホじゃない。

アイツに家族が必要なら……俺は笑って戦う！　ミソラに母さんが必要なら……喜んで戦う！

それが涙を呑んで出した答えなんだからな！！」

キリン・ライトニングとブライ・オリジンはお互いの全てを掛けて交わった。捨てられない信念を掛けた戦いだ。

審判の間で、壮絶なエネルギーのぶつかり合いが繰り広げられる。それはもう地震のようだ。

石像達は武者ぶるいのように共鳴し、二人の戦士に影響されて土埃を削いでいく。

その石像はやがて本来の姿を取り戻していく。二人が戦えば戦う程に、仮初めの土化粧を落としていく。

石像の正体がやっと判然とした。

その石像の正体は二百年前に地球を終わらせようとした者だ。

そして、人類の強さに魅せられ宇宙の果てに帰って行ったものだ。

それと瓜二つだった。

そう、彼らは正義の代行者で、人類をより良い方向へ導く者『ディーオ』。

この審判の間は幾憶ものデューオを安置している場所だったのだ。

二人の強大な力のぶつけ合いに共鳴したように、オーパーツ『デウス・エクス・マキナ』は審判の間の最深部で赤黒く光り輝いていた。

そろそろ決着だ。二人の戦士による物語の終焉と、始まりが行われる。

物語を無理やり終わらせる機械仕掛けの神は、宇宙の心臓として今はひっそりと輝くばかり。だが、それを握った人間の是非により、賽は振られるのだ。

孤独な自分に意味を見出そうともがく少年。温かい家族を取り戻そうと修羅になった男。

彼らは世界の爆弾だ。

洞穴の武骨な地面は抉り返されて、さらに鋭利なものとなっていた。触れれば切り立った岩肌に肌を裂かれるだろう。傷つかずに残ったのは巨大な石像達だけだ。周波数の奔流に磨かれたその顔は、荘厳にして、思慮深い表情で彫られていた。それは二人を見守っているようでもある。ただ意味などなく、土化粧をはがした巨人は毅然と君臨するだけだった。

そんな土埃が鬱陶しい中、二体の電波人間の人影が確認できた。二人とも崩れたようにうなだれている。キリン・ライトニングの方が顔をあげた。

「どうやら……勝負ありのようだ……な」

言うや否や、キリン・ライトニングは吐血した。砕かれたフェイスガードから血が滴り落ちていく。岩肌は新鮮な血液を存分に楽しんだ。じゅくじゅくと湿ったものが広がっていく。

明瞭な光景だ。キリン・ライトニングは地面に手を突いて屈していたのだ。肩で息をしている。呼吸に合わせて弱々しく紫電が体から蒸発していった。パチパチと、死にかけの小鳥の鳴き声が聞こえる。

だが、目は死んでいなかった。そんな目で、キリン・ライトニングはブライを見下ろした。ブライは顔だけ起こしてキリン・ライトニングを見上げた。ブライは這いつくばっていた。

キリン・ライトニングは足を引きずりながらブライに歩み寄った。ブライは腕を立てて起き上がろうとする。だが、腕は砕けて、顎を強く打った。苦渋の表情をキリン・ライトニングに向けるしかなかった。

「クッ……キサマ……！！」

「どうやら、俺の方がほんの少し強かったようだな……」

『ジョニー油断するなよ……』

「ああ、分かっている」

ブライはどこで見誤ったのか分からなかった。単純な力では上回っていたはず。それなのに、なぜ屈しているのは自分なのだ？　そんな事ばかりが酩酊（めいてい）した頭の中を渦巻く。

「俺の方が……力は上だったはずだ……。お前……何をした？」

キリン・ライトニングは肩をすぼめた。

「さてなあ？　俺は全力を出して戦っただけだしな……。俺のポリシーを打ち砕いたお前は十分にスゴイよ」

「バカにするなよ……」

キリン・ライトニングはブライを見下ろした。小さく息を吐いた。口元は笑っている。

「強いて言えばだ。俺には守るものがあった……。それが『強さ』になったんじゃないのか？　どこまで突きつめても俺達は人間だ。心の通わない力に、勝利は伴わないものさ」

ブライは怒りに打ち震えた。自分自身への怒りだ。こんな甘った

れた人間に後れを取ったと思うだけで、血が沸騰しそうになった。右腕の暗黒闘気がさらに燃えた。腕に力を込めた。すると簡単に立ち上がれた。ブライはキリン・ライトニングを睨んだ。今までで一番の鋭さだ。そして力強さだ。

キリン・ライトニングはただ残念そうだった。これではもう落とし所が見つからない。

「まだ立てるのか……タフだな」

「甘ったれるなよ……」

「あん？　なんだって？」

ブライは目一杯に口を開いた。貧血に襲われたように意識が揺らいだ。だがそれでも叫んだ。

「甘ったれた事を言うな！！　人間の本質は孤独だ！！　他者を守る事によって得る強さなど何もない！！　そんなものタダの自己満足に過ぎない！！　そんなもの偽りだ！！」

ブライは手を前方にかざした。暗黒闘気が弾け、暗緑色の金属が現れた。シリウスから奪ったムーメタルだ。

キリン・ライトニングはその金属を勘定した。

「ムーメタル……。純度Ｂランクと言った所か……良いものを持ってるな」

ブライは呑気なキリン・ライトニングに言った。どこか得意げだ。

「知ってるか？　ムーメタルに高密度の周波数を当てるとオーパーツが出来るってことを……！」

ムーメタルが暗黒闘気に当てられ、ボコボコと沸騰し始めた。溶岩のように液状となって空中を漂う。
キリン・ライトニングは目をしかめた。
「なるほど……。まだ、諦めてくれないのか。仕方がない……」
キリン・ライトニングは首を振ってうなだれた。額に手を当て悩ましく溜め息を吐く。余った方の手をかざすと、反応線を伴いムーメタルを繰り出した。ブライの物より輝きが強い。
そしてブライと同じようにする。雷のような周波数を当てていく。オーパーツが形作る。
「もうやめておけ。こっちのムーメタルは純度Aランクだ。お前に勝ち目は無いよ」
ブライは目を疑った。
「お前……！　それ程のムーメタルをどこで手に入れた……？」
「まあ、企業秘密だ。だが、言っておくが俺達は九九九個のオーパーツと九九個のムーメタルを持っている。どれもこれも純度Aランク以上だ。
もう一度言う。お前に勝ち目は無い……！！」
ブライはそれでもたじろがない。後ろに退いてしまう事は簡単だ。だがそれでは、今までの自分を否定してしまう事になる。そんな事は死んでも許せない行為だった。
意地と言ってはそうだが、馬鹿と言うにはあまりにもブライは覚悟を固めていた。
「九〇〇個以上のオーパーツだと……!?　舐めた事を……！　そ

れだったら全部俺が奪い返すまでだ！！」

ブライのオーパーツが完全に生成された。大きな槌だ。ブライが持つには少々大きすぎる。それは青い雷を帯びていた。ブライは、自分だけの正義をその鉄鎚に打ち込むだけだろう。

「オーパーツ！　トールハンマー！！」

ブライがそれを一回、二回と振り回すと、軌跡に沿って雷の壁がブライを包んだ。

「なるほど、俺のと同じ雷のオーパーツか……。だが、それじゃ俺には勝てないぜ」

ブライはキリン・ライトニングの番を待たずに殴りかかった。巨大な雷の槌を振りかぶる。十字を切るように雷が槌に集まりキリン・ライトニングを威圧した。

「食らえ！　ギガ・ボルト・クエイク！！」

凄まじい稲光だ。視界が青一色で染まる。空気が恐れ戦き、辺りが地震のように揺れる。だがキリン・ライトニングは依然、落ち着いていた。
そして言う。

「オーパーツ！　グングニール！！」

キリン・ライトニングは赤い雷を纏った槍で一閃した。青一色が裂かれる。それが赤一色に変わる。ブライは吹き飛んだ。空高く打ち上げられた。

「ぐあ！　バカな！」
「言っただろ？　お前は俺に勝てないって」

キリン・ライトニングは上空を見上げた。ブライは空中遊泳中だ。それでもブライは諦めなかった。キリン・ライトニングは呆れた。ブライは身を翻し、トールハンマーを両手で構えた。巨大な雷が洞穴の天井を破ってトールハンマーに落ちた。凄まじいものを帯電し始めた。砕かれた岩の雪崩を帯電した波動で打ち砕いていく。ブライは砕いた岩の足場を蹴りはね、キリン・ライトニングへと敏速（びんそく）に接近する。

だが、残影に惑わされず、キリン・ライトニングは強（したた）かにブライ本体を見抜いていた。ブライは、よりスピードを上げた。

「俺は負けない！　絶対にだ！　特にお前みたいな虫唾の走る人間には！！
俺は知っている……。人間は自分のことしか考えられない生き物だ！　それが本質だ！　お前の言っている事は、耳触りの良い自己満足に過ぎない！　お前も結局は、自分だけが幸せになりたいだけなんだ！！」

キリン・ライトニングもグングニールを構えた。長い棒は大きな弧を描いてブライを捉えた。通った跡は飛行機雲のように雷がなぞった。

槍は冷めるような白色だ。それに赤い雷が伴い、劇的なエネルギーを生み出す。キリン・ライトニングの周辺は小さな岩が浮き上がり、ある種の電磁界が出来あがる。バチバチと弾けポップコーンのようだ。

「ハッ！　自己満足で結構だよ！　俺が幸せになったら、きっとみ

んなを幸せにしたくなる！　そういう気持ちが大切だっていうんだ！！」

二人のオーパーツが眩く輝いた。洞穴の中は光で一杯になる。それが溢れて惑星の空に広がった。二人は光の中で交わった。

「チッ！　話にならん！　食らえ！！　ココウ・フォース・ビックバン――！！」

「こっちからもいくぜ！　キズナ・フォース・ビックバン――！！」

ジョニーは審判の間の洞穴を突き進んでいた。ずいぶん歩いたようで、目に見える光景もすっかり元の岩肌ばかりとなっていた。生物の気配は無いが、未だに石像達は両脇に陣取っていた。重苦しい空気を作ってはいるが、両脇にいるおかげで自然と進むべき道を示してくれていた。

キリン・ライトニングの横を歩くキリンは面白くないようだ。口には出さずとも、口調で言っていた。キリン・ライトニングは荷物を背負っている。無駄な体力を使っている。キリンはそう言いたい。

「おい、ジョニー」

「なんだ？」

「なんでコイツを連れてきた？」

「あのまま放っておくわけにはいかないだろ。いくら目付きが悪くて、俺を殺そうとしてきたといってもまだ子供だからな」

良い笑顔だ。キリンはどうにも責め立てる気が起きなくなった。こんな調整で毒気を抜かれる。いつものパターンだ。

「甘いな……」

「心配するな。地球の適当な町に放りこむだけだよ。別に世話を焼く訳じゃない。成り行きってヤツだよ」

「なら良いが……」

キリンとキリン・ライトニングはそれ以上言葉を交わす事なく歩いていった。

さらにしばらく歩いていくと、洞穴は露を持ってきたようだ。岩のくぼみに水たまりが頻繁に確認できた。段々と低くなってきた天井からは、槍のような鋭い岩が垂れていた。それは湿り気に富んで、水たまりに逐次、水を送っていく。

キリン・ライトニングも例外ではなく、アーマーの至る所に露が浮かんできていた。キリン・ライトニングは不快そうに眉をひそめた。

「やけに湿ってるな……。電波人間の状態とは言え、気持ちが悪いな……。それに蒸し暑い」

「この神殿は巨大な大陸だからな。エネルギーが集まる動力炉の近くなのかもしれんな……」

キリン・ライトニングはウンザリした様子だった。戦っていなければ、どこまでもダメな人間を演じてくれる。

「オーパーツはまだかよ？　もう家に帰りてえな」

「わがままはよせ……。それに高密度のエネルギー反応に段々近づいている。もう少しだ」

「さっきから何回も聞いたよ……」

「じゃあ、何度も言わすな」

「……面白くない奴」

これ以上歩けば、キリン・ライトニングの不満は爆発しそうだ。

だが、今は我慢して歩いている。だが、あまり我慢強くは無かったようだ。もう数十歩だけ歩いたところでキリン・ライトニングは立ち止った。

キリンは呆れかえった。

「おい、いい加減に……」

「いや、違う……」

キリン・ライトニングは手の平を立てキリンの小言を遮った。そうやって辺りを探るように見渡していた。神経を研ぎ澄ましている。キリンもそれには気付いたようで押し黙った。

「何かの声が聞こえる……」

キリン・ライトニングは何かを探している。その声の正体を掴もうとしていた。

そしてキリンにもそれは聞こえたようだ。耳をピクリと反応させた。

『強大な力を持つ者よ……。よくここまでたどり着いた……』

「ジョニー……！」

キリンはキリン・ライトニングへ目配せした。緊張しているようだ。歴戦の戦士でさえも冷や汗が止まらなかった。いくらこの場所が暑いといっても普通のありさまではなかった。なぜならキリンは悪寒を覚えているようだったのだから。

キリン・ライトニングはどこへ呼び掛けるともなく大声で叫んだ。相手の場所がつかめない以上、そうする他ない。だが、相手はこちらの様子が手に取るように分かっているようだ。腹立たしいまでに、見透かしたような態度で迫ってくる。それが余計に二人の平静を大

いに揺さぶった。

「おい！　お前は何者だ?!　出て来い！」

ただ、どこを見渡せど何もなかった。虚空の向こうでは湿気に帯びた岩塊（がんかい）が垂下（すいか）しているだけだ。あまりの静けさだ。それは、小さな生き物さえも大きな存在感を生み出すほどだ。

声の主は見当たらない。だが姿は無くとも、幻影は執拗に二人の脳内で膨らんでいった。そして音声がまた洞穴を埋めた。

力強い声だ。無機質だがどこか清麗さも感じられる。

『焦るな……地球人よ。私はお前の敵ではないのだから』

「そうか。

だが、なぜ俺が地球人だと分かる?!」

『……簡単な事だ。私は以前、地球人の少年と手合わせした事があるのだからな……。地球人の持つ命の息吹は印象に残っている。

……もっとも、二〇〇年も前の事だし、その少年は厳密には人間ではなかったがな……』

「ずいぶんと年寄りなんだな！」

『ハハ……。年寄りも何も私は機械人形だ。そんな概念は無い』

「お前は何者だ?!」

『何をいまさら……お前がさっきからずっと見ている者だ。

さっきの石像達と同じだよ。私は宇宙の始まりより、ここでディメンション・ゴーレムの管理をしている者だ。そして同じくディメンション・ゴーレムの一体、コード『デューオ』だ』

ディーオの言葉にキリン・ライトニングは緊張したように体を強張らせた。力のこもったこめかみから電撃がわずかに伸びていった。

「デューオだと……?　まさか、お前は……」

『話は後だ……。来るが良い……。宇宙の心臓への道は用意しておいた。さあ奥へ進め』

キリン・ライトニングはキリンに向き直った。

「行くぞ！　キリン！！　立ちどまっている場合じゃない」

「ああ……！　さて、鬼が出るか蛇が出るか……」

キリン・ライトニングはデューオに言われるがまま、審判の間の奥へと突き進んでいった。今は先に進むしかないのだ。

「ここか……」

キリン・ライトニングは審判の間の最深部まで辿りついた。湿り気は無くなったが空気の淀みが酷い。それは目に見えて、息苦しさを助長した。窮屈な場所だ。岩肌に岩肌。古く年季の入った地質なのか、気が付くたびに小石を零していた。

「大きいな……」

キリンが、ふと見上げた。

自然の中に人工物が確認できる。その目の前には赤い門がそびえ立っていた。高さは十数メートルはあろうかと言う大きなものだ。自力で開くのは難しいだろう。かと言って、すり抜けようとしても、ここの施設は普通の電波人間では干渉できないように造られていた。ムーのものと良く似た技術が使われているのだろう。

そこにデューオがどこからともなくキリン・ライトニングに向か

って語りかけた。

『辿りついたな。そこからは審判の間のコントロールルームに通じている』

「通じているって言ったってな。開かないんじゃ、通りようがないだろう……？」

ディーオはひとつ間を置いた。キリン・ライトニングは自然と身構えた。ブライを下ろし、万全を期した。

そしてデューオが語りだした。

『貴様にひとつ選択の余地をやろう。ここより先は、禁断の間だ。この大陸のコントルームルームに入ってしまえば知りたくない事を知ってしまう事になるかもしれない。

そして、恐ろしい魔物を呼び起こす事になるのかもしれない……』

デューオは問いかけた。

『それでも貴様はここより先に進むのか？　生半可な覚悟でこの先に進む事は勧めない……』

「心配無用だ。覚悟ならとっくに決まっているし、生半可なものでもない。

俺は進む」

『……良かろう。了解した。ではこの先に進むが良いだろう』

一息置きデューオが了承の意を示した。すると大きな門はまるで意志を持っているかのように自動で開いていった。その向こうからは小さな小部屋が顔を覗かした。

中は微小な微粒子が蛍のように舞っている。レリーフはやはり古代文字だった。神経質に隙間なく敷き詰められている。そんな小部

屋の上空は無限に続いている。どうやらエレベーターのようだ。

「なるほど……。中はエレベーターになっていたんだな」

「ここからコントロールルームに繋がっているようだ。オーパーツの気配は真上に感じる。ジョニー、油断はするなよ」

「ああ、分かっているさ」

キリン・ライトニングはコントロールルームへと続くエレベーターに入った。二人を受け入れた部屋は一度、小さく沈む。そしてものすごい速さで急上昇していった。

透明なパイプの中をエレベーターは突き進んでいく。星の大地が一望できた。緑豊かな大地だ。だが、村は無い。その代わりに数多くのムー大陸が空中に浮かびあがっている。その黒い中で村が展開されているのだろう。奇妙な光景に黒い魅力が詰まっている。

急ぎの用で訪れていたキリン・ライトニングもようやく星の全容に感動した。

「良い眺めだな」

「ああ、星の息づく様が見てとれるようだ」

「そうだな。こうやって見ると、この星も綺麗なもんだ」

キリンは釘を刺した。キリン・ライトニングに緊張を促す。

「観光気分は程々にしておけ。今はこの大陸のメインアンテナの中を通っているところだろう……。じきに着くぞ」

「ああ、あの真ん中に立っていた一番長いアレか……。だとしたらコントロールルームは相当高い所にあるんだな……」

キリン・ライトニングは拳を作った。力強く指を巻き込んでいく。

「最後のオーパーツ……。絶対に手に入れてやる……。待ってろよワタル……ミソラ……」

trash―13：ノアの方舟

「よう、お前がデューオか」

コントロールルームに入るや否や、キリン・ライトニングはその部屋の主を不敵に見上げた。ブライを下ろし、万全の態勢をとる。いつでも迎え討てるようにしていた。

前方には巨人が仁王立ちしている。いつかのラ・ムー神像のように、コントロールルーム最奥の祭壇でオーパーツを守っている。空に穿つ祭壇は、電波が作る光のベールに包まれている。どうやら怪しげな美しさを秘匿したいようだ。そんな場所で、心臓のようなオーパーツは虹色に輝き、巨人の胸元でたゆたっていた。巨人の心臓と言うにはあまりにも小さい。それが木漏れ日のように、巨人の胸へと命の滴を振りまいている。

これがワタル達が欲してた究極のオーパーツにして宇宙の心臓『デウス・エクス・マキナ』だ。

それを守る彼は、ここに来るまでに見られた大量の石像達と瓜二つだ。だが石造りではなく鋼鉄の装甲に身を包んでいる。鈍い輝きが、その巨躯を尊大に強調した。恐らく石像達の真の姿がこれなのだろう。デューオは無表情な造りの顔をキリン・ライトニングに向けた。彫りの深い顔だ。目は無機質で表情が読み取れず、声も重厚でのしかかるようだ。

「そうだ。私がディメンション・ゴーレムの一体。コード：デュー

オだ」

キリン・ライトニングはプレッシャーを感じた。今まで戦ってきたどんな強者のそれより、気持ちが良いまでの圧倒的さだったのだ。

デューオはひたすらに巨大で威圧的で、神聖なのだ。鋼の体は白く圧倒的なボリュームで、青いラインをいくつか走らせ、それが流星を彷彿させる。そこから伸びる巨大で雄々しい太い腕は、デューオの一番の特徴であった。星をあしらったその巨碗は、隕石のような神の鉄鎚を繰り出すに相応しいだろう。

「なるほど、思った通りのデカブツだな。それにとんでもない化け物だ」

キリン・ライトニングは薄ら笑みを浮かべながらも、冷や汗を流している。無意識的に戦慄していた。自分が臨戦体勢を取っている事にも気が付いていないだろう。

「よせ……。お前とは戦うつもりはない……。お前の目的もそれとは違うはずだ」

デューオは腕を組み、首を振るだけだった。デューオはそれっきり押し黙って、敵意を向けてはこない。

沈黙に便乗し、無言でキリン・ライトニングは目をしかめた。辺りはチカチカと眩しい。至る所でモニターが明滅していた。キリン・ライトニングのすぐそばも例外ではなかった。

ここはコントロールルーム。床を除く全面がガラス張りなのか、宇宙が近くに感じられる。床は岩石とは打って変わり、悪戯に磨かれ銀鏡に酷く輝く。その輝く光を被せて潰すように、むやみに大量の情報が行き来していく。

キリン・ライトニングはそれをうざったく感じた。どれもこれも

訳の分からない人体図や、ムー大陸の設計図などであったのだから。
空に浮かぶ、ここは管制塔のようだ。空中の孤島だ。空の住民の鳥さえもここには来られない。空と言うにはあまりにも宇宙に近かった。さしずめデューオは宇宙と言う広大な空を監視する管制官と言ったところか。
管制官はキリン・ライトニングに諮問(しもん)した。
「……強き者よ。お前は何を求めてここに来た?」
「お前の持っている、そのオーパーツをよこしてもらいたい」
キリン・ライトニングはデューオに二、三歩み寄りながら手の平を差し出した。
「デウス・エクス・マキナか……。なぜこれを欲する?」
「友達を救いたいんだ。そのオーパーツがあれば願いが叶う。ワタルは救われる……」
「確かに……このオーパーツは最も崇高なモノだ。これがあれば、お前の願いも満たされるのだろう……」
「だったら早いところ俺に渡してもらおうか」
「まあ、待て。その前に話しておかなければならない事がある……。これを手にするのなら知っておくべきだ」
デューオは胸に浮かぶオーパーツを手に取った。そして、もう片方の手を胸に当てた。自己紹介だ。
「私はデューオ。この母なるパラスマキナの管理者である。そしてこのオーパーツの管理をしている者でもある」
「それは大層な役柄だな」
デューオはキリン・ライトニングの茶々入れなど無視して続けた。

「私はここから宇宙を監視し、一定周期で人類の削除を行ってきた。人類を放っておけば宇宙の害になるからな」

キリン・ライトニングは眉をひそめた。

「そして削除方法は簡単だ。人類の母星に、小惑星をぶつけるというものだ。その際、私の実行プログラム『デューオ・ＥＸＥ』を小惑星に組み込み、確定進路を随時計算させれば目標を逃す事もない……」

「二〇〇年前に地球に来たのはやっぱりお前だったのか……。歴史の授業で習ったぜ」

「そうだ。地球は私が滅ぼそうとした三万四二六四番目の星だった……」

キリン・ライトニングは溜め息を吐いた。

「で、何が言いたい？　俺はそんな昔話を聞きに来たんじゃない」

「いや、このオーパーツがどういったものか知っておかなければならない」

「……大層な理屈を並べ立ててもな。俺からすりゃお前は大量殺人マシーンと変わらないぜ？」

「なるほど、大量殺人人形か……フフフ、言い得て妙だな。しかし私は、ある一つの命令に従い存在しているだけにすぎない……」

「言い訳か？」

「そう聞こえるなら、そう取ればいい。ワタシはより良い宇宙環境を作るという命令を全うしているだけなのだ。これは私の主の命令だ……。絶対のな」

「だから人間を滅ぼす……か」

「いや……『間違った進化をした』人間を滅ぼすのだ。そして、滅

ぼした分はちゃんと補わなければならない……」

キリン・ライトニングは首を傾げた。デューオはその態度に、実を以って応えた。

「よく見てろ。これがこの世界の理だ」

デューオがオーパーツを天に掲げた。デューオの言霊が、空気を唸らし響く。

「オーパーツ『デウス・エクス・マキナ』起動」

その時、オーパーツの輝きがおびただしい色彩で放たれた。それが一つに紡がれ虹を作る。コントロールルームを突き抜けて星の大地に落ちていく。

キリン・ライトニングは虹の槍が落ちていった方へ振り向いた。だが特に変わった様子は無い。一瞬の沈黙にキリン・ライトニングが息をひそめる。

キリン・ライトニングが固唾を呑んで様子をうかがっていると、不意に静寂を打ち破った。遅くて太い、魔物の息使い。星の大気が揺れ始めたのだ。さらに困惑したキリン・ライトニングは、コントロールルームのガラス窓まで誘われるように駆け寄った。

「何だ……？　あれは……ムー大陸……？」

キリン・ライトニングの見下ろす先からは、黒い大陸の先端部が顔を覗かせていた。大気の揺れの正体は間違いなくその黒い物体だ。

黒く高いアンテナの針葉樹林が、薄い雲の層を突き破る。徐々に浮かび上がり、大気の層を抜けようとしていた。宇宙と星の境界面に存在するこちら側まで、確かな足取りで侵入してくる。

デューオは言った。

「あれは大陸型宇宙船『ユグノア』。中には数種の知恵の実『オーパーツ』と、一万の素人間『オリジン』に素電波生命『トレイス』、生命環境を整える、数億の動植物が格納されている。

ユグノアはこれからマザー端末のオートパイロットに従い、長い宇宙の旅に向かう。目標の原始惑星に知的生命と進化の可能性を与える為に」

キリン・ライトニングは唖然として笑った。変な笑みが零れてくる。笑ってごまかすしかない。目の前にまでせり上がったムー大陸こと『ユグノア』から、彼は数々の命の周波数を感じたからだ。偽りではなく、血の通った命の息吹。信じられなかった。それが宇宙に向かっているのだ。とても容受できない。

「ノアの方舟かよ……！」

「これは……」

キリン・ライトニング同様、さしものキリンも驚愕した。巨大な物体に目を奪われる。

「これはコントロールルームに上がる時に見たムー大陸群の一つ。まさか……こんな事が、信じられない」

「あぁ、俺達のアジト、ブラックママルと同型だ……」

デューオは呆ける二人に言った。

ユグノアは宇宙へと昇って行き、もうずいぶんとコントロールルームの上空に行ってしまっている。もうすぐに宇宙の星の一つに紛れてしまうだろう。

「分かったかな。私の役目は、より良い宇宙環境の実現だ。その為、さっきのようにユグノアを射出している。
その時に必要なのが、このオーパーツ、デウス・エクス・マキナなのだ……。これがユグノアのマザー端末起動に要するエネルギー供給を担う。さっきの虹のようなものがそれだ」

おおよそのデューオの言いたい事は理解した。そして知りたくもない現実とやらも理解した。確かにデューオの言う事が本当なら、オーパーツ、デウス・エクス・マキナは宇宙の心臓とも言える。宇宙の生命連鎖を形作っている重要な鍵だ。それを奪うという事はどんなエゴイズムを意味しているのかは、火を見るより明らかだ。
キリン・ライトニングはそれでも覚悟を決めていた。自分でも気が付いている。これを美しい友情と取るのが、地球人の優しさで醜さだと。
地球人を滅ぼそうとしたデューオは正しかったのだ。ゆっくりとキリン・ライトニングはデューオの方に向き直った。

「……つまり簡単には渡せないってわけか？」

キリンも続いた。

「力づくもやむなし……か」

デューオは二人を遮った。

「やめておけ。さっきも言ったはずだ。戦うつもりはない、と」
「どういう意味だ？」
「もう、このオーパーツの必要がなくなったという事だ……」
「……なに？」
「知っているはずだ。もうこの世界も終末に近づいている事を……。

つまり星に命を送り込む必要がなくなったという事だ」

デューオがキリン・ライトニングの方へ巨大な手の平を差し出してきた。鋼鉄の五指が集まる中心でオーパーツは輝いている。彼は最初からこのつもりだったのだろう。

「さあ、選べ地球人よ。このオーパーツを受け取るのも受け取らないのもお前の自由だ。私に、必要の無くなったオーパーツの保守はプログラムされていない」

キリン・ライトニングはデューオの方へ歩み寄っていく。オーパーツを頂戴するつもりだ。そんなキリン・ライトニングにデューオは続けた。覚悟を引きずり出す。

「だが、このオーパーツをこの場所から持ち出すという事は、宇宙の連鎖を乱す事とほぼ同義……。決して良い結果を生まないだろう」
「……どうせ、宇宙は終りに近づいているんだ。それに、その時は俺達がオーパーツを使って、宇宙を取り戻すまでだ」
「やはり、地球人は危険な生き物だった……。二〇〇〇年前に滅ぼしておくべきだったか」

キリン・ライトニングはデューオの手の平の前まで来ると立ち止った。オーパーツを手に取る事を躊躇しているのだろうか。

「でも、そんな地球人に可能性を見出したのもアンダだ。俺はそう習ったよ」
「……ふむ」

デューオが押し黙ると、キリン・ライトニングはオーパーツに手を伸ばした。いちるの迷いもないのだろう。

「俺達はお前からみれば絶対悪なのかもしれない。だが、俺達は目の前が光り輝いていればそれでいい。世界を救うために目の前の笑顔を見捨てることなんてできないんだ」

ｔｒａｓｈ―１４：隠密戦闘術「ｆｒｅｑ　ｃｌｅａｒ」

某日、ＷＡＸＡ訓練場。そこには十人以上の電波人間が集まり、レベッカの持つ電波変換術を体得しようと奮闘していた。それを始めて、もう三日にもなる。

「はあっ……はあっ……」

ロックマン達は手を膝に突いて、大口を開けて欠乏した酸素を求めていた。例外の電波人間は一人もいない。百戦錬磨のソウル・レイダーやスカッド・エースさえも同じく苦しんでいた。ハードな訓練なのだろう。息遣いが荒く、施設の広場は犬のふれあい広場かと言いたいぐらいだ。

レベッカは、そんなスバル達の様子を眺め、納得したように頷いている。

「うん。アタシの電波変換術をおおよそ身に付けたようね」

教官のように佇むレベッカだ。今のレベッカはアストラルと電波変換したブラッド・ホープという電波人間だ。アストラル・ホープを赤くした電波人間と言える。

その言葉に烏人間が反応した。

「てことは。こ、これで、ちっとはきずなクルーのおっさん達に近付けたのか？」

息も絶え絶えな烏のような電波人間は、ブラッド・ホープを見上げた。ジャック・コーヴァスは苦しそうだが嬉しそうでもあった。そこに野蛮なコーヴァスが付け加える。黒光りする爪を舐めずってさぞかし悪い事だ。

『クケケケ！　これでウラのヤツらをボッコボコに出来るぜ！　なあ、ジャック?！　負けた試合の腹いせに、ジャミンガーどもをデリートしに行こうぜ』

コーヴァスはいけない宇宙人だったが、ジャック・コーヴァスの方は幾分かは常識はあるようだ。コーヴァスを刺激しないように宥める。

「おいおい、コーヴァス。調子に乗りすぎてると、試合の時みたいに痛い目を見るぜ……」

ブラッド・ホープは溜め息を吐いた。コーヴァスのどうしようもない破壊衝動には呆れたはずだ。

「ジャック君の言う通りよ。今まで教えた事は、きずなクルーの真似事に過ぎない事を忘れちゃダメ。付け焼刃程度に思っておいた方が間違いはないわ」

『はっ、それでも強くなった事には変わりはねえ！　なんなら試してみるか？　きずなクルーのオ・バ・サ・ン？』

挑発的なコーヴァスだ。ブラッド・ホープは頬を引きつらせた。笑ってない笑顔と言うやつだ。その表情で拳を握り、コーヴァスの顔面に叩きこめばスムーズに喧嘩に移行する。

「フフ。良い感じにバカねアンタ。ブラッド・オリジンの時より力は劣っているけど、それでもアンタには負けないわよ？」

そこをロックマンが割って入って宥めた。すっかりやる気のレベッカの肩を叩く。血なまぐさい事は勘弁してほしかった。

「止めて下さいよ。レベッカさん」

ハープ・ノートも割って入る。

「そうですよ。これじゃ大人げないですよ」

ここまで言われて、喧嘩を起こせばきずなクルーの名が廃る。ブラッド・ホープは観念した。コーヴァスが大笑いを上げる。だがアイドルが一睨みするとドキリとして口を閉ざした。

ブラッド・ホープは愛想良く笑った。良い笑顔だ。

「あら。冗談よ冗談！　喧嘩なんてするはずないじゃない」

「そうですよね！　きずなクルーが喧嘩なんてするわけないです！」

「もう、スバル君ったら、きずなクルーに甘いよ！　レベッカさん完全にやる気だったよ？！」

コーヴァスも付けくわえた。

「ケケッ！　ああ、研ぎ澄まされた殺意を感じたぜ！」

「宇宙規模の犯罪者に殺意を感じさせるなんて……流石ですレベッカさん！　宇宙飛行士ってスゴイんですねっ」

「そりゃ、スゴイよ。四年間も宇宙漂流してれば、基本地球人じゃなくなるしね！」

「流石です！」

「アハハ」
「ウフフ」

笑い合う二人。ハープ・ノートはもう駄目だと思った。そこで溜め息を吐き、ふと後ろを振り返る。すると巨体が近寄ってくるではないか。オックス・ファイアが申し訳なさそうにでかい図体を揺らしながら歩み寄ってきた。レベッカに挙手をして助けを乞うていた。

「ブロロ……レベッカさんー」
「なに？　ゴン太君？　また牛丼屋に行きたくなったの？　ダメだよ。特訓中はガマンしな！」
「いや……違うんだよ。たしかに牛丼はすごく食べたくて、我慢できなくなってさっき食ってきたところなんだけどさ……」
「……って、食べてるんじゃないか！」

的確にロックマンだ。しかしオックス・ファイアは心を痛めながらも続けた。

「えっと、きずなクルー直伝の電波変換テクニックってヤツをもう一度、教えてほしいんだよ。ほら、俺ってモノ覚え最悪だろ？」
「って、自覚あったのゴン太？！」
「ちょっと、やめろよスバル。俺の心にちょくちょくボディーブロー打ちこんでくるなよな」
「ホントだ！　ゴン太君にそんな自覚があったなんて……！　てっきり私、ゴン太君の頭の中には食欲しかないんじゃないかと……」
「ミソラちゃんまでかよ……。てかミソラちゃんの中の俺って人としてヤバいじゃん……。動物じゃないか。俺……人間だぜ……」
「ごめんなさい……」
「おい、やめてくれよ。敬語で謝らないでくれよ……。なんか余計に落ち込むじゃないか……」

オックス・ファイアがしんみりし始めた。相棒がピンチだとばかりにオックスは慌てふためいた。とりあえず簡易牛丼セットを取り出し、ゴン太を救おうとする。しかしゴン太はもう駄目だった。

新商品の『飲む牛丼』さえも受け付けない体となってしまっていた。きずなクルーに助けを求めるしかない。

「レベッカのアネゴぉう！　た、大変だ！　ゴン太のヤツが……クッ……大変なんだよぉぉおう！」

「とりあえず落ち着きなさいオックス。とりあえず、飲む牛丼はしまいなさい。あと、いちいちドラマティックな演技を盛り込まない。あと……」

「ブロロ、止めてくれ！　恥ずかしい話だが、今度は俺の心が折れてしまうぜっ！」

「わかったわかった。とりあえず、ここに正座してし座りなさい。もう一度電波変換テクニックについて教えてあげるから……」

「アネゴ……」

「ほら、泣かないのオックス。あとスバル君達も座りなさい。明日の本番に備えて良く聞いておきな」

こうして、トーナメント二回戦前の訓練はこなされていった。

二二ＸＸ年五月二四日金曜日。ノイズウェーブトーナメント二回戦、当日。

「クソがあ！！　なんで俺サマが！　こんな赤牛ごときにィっ！！　あり得ねえ！」

場所はノイズウェーブ第二階層クリムゾンウェーブ。そこは怒号が鳴り響くウラスクエア闘技場。野蛮で、下品な客が集まり、監獄のようでもある。礼儀知らずの猛々しい轟音だけが響きわたる。赤いノイズまみれの空に獣の雄叫びだけが混ざっていく。

「ブロロ！　きずなクルー直伝の戦い方だぁあ！　ウオオ、バーニングメテオアンガーパンチ！！」

小さな地震。地質が潰されて、きしんだ音を立て悲鳴を上げる。オックス・ファイアは地面に拳を叩きつけ地面を砕いた。衝撃が広がり、堪りかねた石材が土煙やノイズ片が立ち上らせる。それに乗じてオックス・ファイアは姿をくらました。姿もそうだが、体から漏れ出る周波数は、周りの環境に同調させる。カメレオンのようにだ。

「くそ！　また周波数が消えやがった！！」

巨体を見逃した黒い電波体は地団太を踏んだ。見逃すのは良いとしても、周波数まで見失うのは致命的だ。辺りを見渡すが捉えられない。

『さあ！　ノイズウェーブトーナメント二回戦！　『ガキ大将ファイター』ことオックス・ファイアと『子殺し』ことグロパピーの試合も大詰めです！』

実況が送られるそこで、オックス・ファイアと地球外電波生命体が命をぶつけ合っているのだ。

敵は裏世界で名の通った殺人鬼だ。特に子供の生肉が好物のけだものだ。試合開始当初はゴン太の肉付きの良い生肉に涎を垂らして

いた。だが今は、悪態を吐きながら、次第に焦りに表情を埋められていく。息遣いも荒く、ガードも下がっていき、戦意も衰退していく。憔悴しきった瞳に野望と悪意が霞んでいった。
オックス・ファイアがグロパピーの背後を取った。この試合ではもう見慣れた光景だった。
「ちくしょうっ！　また後ろか！！」
グロパピーが気付くがもう遅い、オックス・ファイアの大きな拳は敵の顔面を捉えていた。紫のバイザーが砕かれる。
「食らえ！　奥義！　バーニングブレイクナックル！！」
「グギャぁパッ！」
右頬を貫いた衝撃は、左頬に伝わり敵は吹きとばされた。闘技リングの鉄柵に激突し、大きく悲鳴を上げれば観客も声を合わせて爆音が轟く。とにかくグロパピーは悪夢を覚まそうと首をしきりに振り刻んだ。そして諦め悪くよろよろと鉄柵に手を掛け立ち上がった。
「てめえ……、周波数を消したり、付けたり……ちょこまかしやがって……」
「レベッカさん直伝の隠密戦闘術『フレクリア』だ！　お前じゃあ見切れないぜ！」
「フレ何とか……だとぉ？　知ったこっちゃねえ！　俺はウラのエリート殺人鬼だ！　こんなクソガキに負けてたまるか！」
「分かってねえな！　俺のが強いってんだ！　なぜなら俺はコダマ小のガキ大将だからだ！」
「ガキが……ふざけやがって……！」
「信じられねえのか？　だったら見せてやるよ！　レベッカさんから習った、最強の電波変換術を！」

オックス・ファイアが片手を地面に突いて構えた。力士のつもりだろうか。ただ、ごっこにしては力強く、肘先から伸びる火炎放射器の炎が盛りを見せ始める。オックス・ファイアの周りを取り巻く周波数が可視帯に入っている。戦闘周波数が飛躍的に爆発していった。

オックス・ファイアの眼光がグロパピーを貫いた。グロパピーは一瞬怯んだが、オックス・ファイアに向かって攻撃を繰り出した。ゆったりとした袖口から熊手のような爪を光らせている。流石の殺人鬼だ。

オックス・ファイアは叫んだ。

「ブロロロロ!!　行くぜえオックス!　『フレクバースト』だ!!」

『オウヨ!　ゴン太!!』

「ハッ!　隙だらけだぜ!」

距離を詰め切ったグロパピーは、十本もの爪でオックス・ファイアを仕留めようと大きく振りかぶった。

乾いた音が響く。金属の小枝を全て打ち砕く、小気味の良い音だ。防御の為に突きだしたオックス・ファイアの腕に、成す術もなくへし折られたのだ。分厚い紅蓮の装甲には傷はなかった。

グロパピーは後ずさった。

「な、なに?!　なんて硬さだ!　そ、それにそのシンクロ率１８５%……データにはない数値だと……?」

「俺のフィジカルなめんなよ!　この取り柄でチームダブルプリティーに抜擢されたんだからな!」

オックス・ファイアの戦闘能力は劇的に向上している。以前のどうしようもなく無力だった周波数とは別物だ。１００％の壁さえも越せなかった彼が敵を圧倒している。

ロックマンはゴン太の成長を頼もしく思った。その大きな背中がいつも以上に大きく見える。鉄柵越しでも、その存在感は絶大だ。

「ス、スゴイや！　ゴン太が見違えたよ！」

「本当だね。ゴン太君が二割増しくらい男前に見えるよ！」

「フッ……、以前はシンクロ率３０％程度だった男がやるようになったな……」

さしものソウル・レイダーも本領を発揮したゴン太を認めているようだ。そこにスコープ・スナイパーが割って入った。彼女もしっかりと、きずなクルーの電波変換術を物にしていた。

「でも、リーダー？　『フレクリア』と『フレクバースト』ってさ。きずなクルーが使う本物と違ってリスクもあるんだよね？」

ソウル・レイダーは頷いた。視線はオックス・ファイアの方に傾けながら話し始めた。闘技場からは高低に富んだ破壊音が逐一もたらされている。

「ああ、俺達の使える『フレクリア』は、完璧に周波数を隠す事は出来ていない……。ただ今回の敵は大した実力者でなかったから通用したが、おそらくＷＷＲの幹部クラスには通用するか分からない」

「レベッカさんが言うには、電波変換を完璧にマスターしないと無理らしいからね」

「そうだ。しかし特に気を付けないといけないのは『フレクバースト』の方だ。あれは使いどころを間違えば自らの危険を招く」

「シンクロ率を一時的に底上げするテクニックだものね。もちろん

長い時間は出来ないし、体への負担は大きい……ってね」
「僕がヘラ・ローズガーデンの時に使ったテクニックに似ているね……」
「でも、スバルンが使ったものよりかはフレクバーストの方がまだ安定しているんだよね。流石きずなクルーって感じかな？」
「ハハ、そうですね」
「とにかくだ。この二つのテクニックは使いどころが重要だな」

そこにハープ・ノートとグリット・メトリーが三人に呼び掛けた。闘技場の方へ指を差している。

「みんな！　もう決着がつくみたいだよ！」

ハープ・ノートに合わせたように実況も続いた。

『おおっと！　グロパピー選手、もう立ち上がる事も出来ないのかー？！』

グロパピーは悲鳴を上げた。

「クッ……！　チクショオうめえぇ」

グロパピーは立ち上がろうとするが、もう膝が砕けて立ち上がれない。オックス・ファイアが拳を握った。大きくて金属で出来た鈍器だ。グロパピーにはさぞかし脅威に映った事だろう。

「もう、終わりだぜ！　食らいやがれ！！　バーニングスペシャルゴールデンアンガーパンチデラックスセカンド！！」

オックス・ファイアが拳を振り抜いた。風邪をきり、敵を砕く拳

が迫る。グロパピーは、もう堪らなかった。

「わわ！　まいった、まいったー！」

グロパピーは腰を抜かした。しかしオックス・ファイアは最初から当てるつもりはなかったようだ。グロパピーの頬を拳が横切っただけだった。鋭い風圧に撫でられると、グロパピーは失神した。

会場は割れた。実況も明らかな結果を伝える。

『これは勝負ありですね！　勝者オックス・ファイア！！　チームダブルプリティーは三回戦に進出です！』

この吉報にハープ・ノートとスコープスナイパーは手を取り合って歓喜した。

「やったあ！」

「やるー！　ガキ大将！！」

ここからスバル達のチームの快進撃が始まったのだった。

ｔｒａｓｈ―１５：セツナの思い出

藍色の海に浮かぶ月明かりが美しい。そんなある日の晩。そこはサテラポリス隊員寮。シドウを始め、多くの隊員が利用している施設である。

ミライも例外ではない。五階の角部屋が彼の場所だ。

時刻は二時。夜が最も盛りを見せるときであった。少しだけ開けた窓から涼しい風が入り、カーテンがそよりと揺れている。月明かりもその隙を突いてミライの部屋に侵入していく。衣擦れの音。そのお返しと言わんばかりに部屋から少年の声が聞こえてきた。ただそれは、喉で押し殺した、こもって辛い声色だった。

そう、ミライはベッドでうなされている。月明かりに照らされた表情は苦痛に歪んでいた。額に汗の玉が数個ほど浮き上がって、より辛さを訴えてくる。

「ううっ……はぁっ」

寝返り打って額の汗を脇に流す。シーツがはだける。

「ううっ……」

ミライは夢を見ている。表情から察するにそれは悪夢だろう。ミライの小さな小さな思い出だ。愚かで純粋な過去の記憶。忘れようとしても、いつまでも脳裏に焼き付いて離れない。心の傷。なぜか忘れたくなかったものばかり忘れてしまう。のこった思い出だけが悪夢を作る。辛いものばかりが呼び起こされるのだ。

いつだってミライは語らなかった。どんな時も、誰にだってだ。
そうスバルにも、仲間にも。
おかげで友達などいない。ミライはそんなもの必要としていなかった。必要だと思いたくなかったのだ。
いつだってミライは語れなかった。

今より七年前。ミライはいじめられっ子だった。あざ笑う青い瞳に囲まれる黒髪の少年は縮こまるばかり。黒い二つの瞳は涙で一杯だった。嗚咽を堪える事で、崩れ去った自尊心を取り戻そうとするしかなかった。ミライの机は落書きで沢山だった。誹謗中傷とやりたい放題で仕方がない。残念極まる光景だ。ただ、そのもっともらしい原因は明確だった。

「やーい、女みたいな格好したオカマ野郎！　この余所者ジャップめ」

それは転校だ。
ガタイの良いガキ大将の言葉に、ミライはうんともすんとも言わず、うつむくしかなかった。白人バージョンのゴン太はさらに続けた。どうにもこうにも、ミライの父親も原因であったようだ。

「お前の親父もさ、この時代にバカみたいにロボット研究なんかしてよ！　ふざけんなよ！！　うちの父ちゃんこそＷＡＸＡの長官になるはずだったのに！！　お人形遊びしている奴に負けるはずねえんだ！！」

最愛の父親を侮辱されミライは堪らなかった。

ミライの父は、アメロッパで研究をしていた。ロボット工学と電波科学の権威である。その父、トニック・W・リフレインはある日、晴れてアメロッパのＷＡＸＡ長官となる事ができた。一番の有力株であったゴンタレスの父親を差し置いての抜擢だった。

そうして手に入れた世界で一番の科学者の称号。当然、彼はアメロッパを離れる事が出来なくなった。

そしてニホンで暮らしている妻子を呼び寄せたのであった。「パパな、世界一の研究者になったぞ。お前達もアメロッパに来て一緒に暮らそう」このリフレインの台詞に断る理由はどこにもなかった。成功を収めた父親。その父と同じ所で暮らす。至ってよくある転校パターンの一つだった。

ミライもその時、喜んで頷いた。父親と一緒に暮らせると胸を膨らませたりもした。

しかし、アメロッパの学校に来て早々、ミライはいじめの対象に認定された。

ミライの風貌と背景が問題だった。気弱で、女の子のような顔をして、髪も長く、いつもどこでも女々しい少年だったミライ。名前もセツナとなんとも女の子臭くしかたがない。さらにニホン人という事もあり、アメロッパの子供達のコミュニティーに見えない壁が施された。

もちろん、そんな少年に烙印されるのは、無邪気な子供たちの遊び道具という不名誉極まりないものだった。珍しい異物としてクラスの人間から認識されていた。調度良い嘲笑の的で、いじめの対象と言えばしっくりくる。

まさに今がいじめの真っ最中だ。白ゴン太は机の横に掛けられているセツナのリュックを取りあげた。

「イエローモンキーが一丁前にリュックサックなんて持ち込みやが

って……」

白ゴン太はご自慢も太い腕を大きく振って、軽々とそのリュックを窓から投げ捨てた。ここは五階だ。中身に割れ物がない事を祈るしかない。

「う……うっうう……。もうやめてよう……」

ミライはとうとう泣きだしてしまった。

「何で僕をいじめるの……？　ゴンタレス君」

するとゴンタレスはかんしゃくを起こした。ミライの机を蹴りとばす。ミライは驚いて腰を抜かして教室の隅っこでうずくまった。その様子を見てゴンタレスは言い張った。

「セツナちゃんよう。ああ！　そうだよ！！　てめえーのそういう所がむかつくんだよ！　このオカマヤローが！！　根性無し！！」

「ヒィッ……」

ミライはもうダメだと思った。ゴンタレスがいる限り、自分は救われないと確信した。そして涙も止まらない。怖いので足も震える。自分でもどうしようもない情けなさだと分かっている。しかし怖いものは怖かった。

ゴンタレスは震えるミライをつまらなそうに見下すと席へ戻っていった。そして吐き捨てるように言ってやった。

「チッ……それでも男かよ」

取り巻きも席へと退散していった。こうやってミライの一日は始

まるのだった。

辛い学校を終えるとミライはようやく安心できる。そして大好きな母親の元へ直行するのだった。友達のいないミライは寄り道もせずに自宅にすぐに帰る事が出来る。

「ママ！　ただいまー！！」
「あら、セツナ。おかえりなさい」

廊下から出てきたのはすらりとした女性だった。ポニーテールが特徴の美人だ。そしてミライはその母に抱きついた。もう小学六年生になのにどうしようもない。

純和風のニホン人であるミライの母、未来（みき）・W・リフレインはよしよしとミライの頭を撫でてやった。こうやってミライが甘えてくる時の理由はいつも同じだった。ボロボロのリュックを背負ってるあたり間違いはない。

「どうしたのセツナ？　またいじめられたの」
「……うん。ゴンタレスって子がいっつも僕を目の敵にして……」

未来はぼんやりと、ＷＡＸＡ本部の人事事情を思い浮かべた。

（ゴンタレスって言えば……。たしか、あの人の上司だった方の息子さんだったかしら……）

そんな事が子供社会においても影響力があると考えると未来はうんざりした。

しかし心を鬼にしてミライに接する。それがミライの為であると信じていたからだ。ミライの肩に手を乗せてミライをしっかりと見つめた。ミライはキョトンとした。ほんのりと紅が差したミライの柔らかい頬に唇。長いまつげに大きくて印象的な瞳。初見では女の子にしか見えない少年だ。

未来はそんなお人形のように可愛らしいミライを見ると、溜め息を吐きたくなった。これでは、男の子にバカにされるのも理解はできると思ったからだ。

「ねえセツナ。もっと男らしくしないといけないと思うわ……」

「え？　でも……だって……。僕……僕……」

ミライは俯いて、焦ったように言い訳を考えている。まさに男らしくない。未来はミライを女の子に生んでやれなかった事を本当に申し訳なく思った。

しかし悔やんでも仕方はない。ミライは男だ。

「だめよセツナ。すぐにそうやって言い訳しようとする。男の子ならシャキッとしないと」

「え……う、うん」

ミライは良く分かっていないようだ。未来は呆れた。とにかく形から入ってみようと考えた。

「あのねセツナ、まずその髪の毛を何とかした方が良いと思うわ。それじゃまるで女の子だもの」

肩まで垂れ下がった黒い髪はご丁寧にウェーブがかかって良い感じにお嬢様たらしめている。

「短くしたらどうかしら？」

ミライはここぞとばかりに首を振った。

「ダメだよ！　今、頑張って伸ばしているところなんだもん」

「なんで？　そんなに伸ばすの？」

未来の問いかけにミライは少し恥ずかしそうに言った。もじもじと指先をいじりながら、目をしばたたかせて忙しない。

「だ、だって……ママと同じポニーテールにしたいんだもの……！」

「ポニーテールってあなた……」

「だ、ダメ……？」

「ダメじゃないけど……ってダメよ！　ダメ！！」

「ええー？！」

ミライはがっくりとうなだれて、悲しそうに目を潤ませた。未来は「ほらまたそうやってすぐ泣く……」と呆れてしまう。

ミライは恐る恐る食い下がった。何かを恐れるような子犬のようで情けがない。

「ママと、おそろいが良かったのに……」

「はあ……アナタねえ、もう小学六年でしょう？　ママとお揃いじゃなきゃイヤだって……典型的すぎてママ悲しいわ」

「ゴメンナサイ……」

「なんだかなあ……」

未来はミライの行く末を本当に心配してしまう。我が子ながら、大丈夫なのか？　という疑問が絶え間ない。現にいじめられている。絵に描いたような、弱虫だ。

そこで思いついた。

「じゃあ、こうしましょうか。ママとある約束をしましょう」

「約束？」

「ママと同じ髪型にしたいなら、もういじめられても泣かないこと！　そして、いじめられたらきっちりやり返す事！　そして友達を作る事！　男ならね、喧嘩くらいしてみなさい」

「ええ？！　無理だよ。泣かない事もやり返す事も友達を作ることだって……。みんな、僕の事嫌いなんだもん……。それに僕、とても弱っちいし」

ミライは今までの経験則からもうすでに諦めている。喧嘩する事も知らないし、拳なんて涙を堪える事にしか握った事がなかった。ましてや友達なんて夢のまた夢だ。

ミライは父親と母親がいればもうそれで十分なのだ。

未来はそれがとても悲しい。とてもとても小さな世界で満足している自分の子供にもっと世界の素晴らしさを知って欲しかった。

「あのねセツナ……。やる前から諦めてちゃダメよ。アナタは自分が思っているより、本当はもっともっとスゴイのよ？」

「僕が……？　嘘だよ。運動もできないし、勉強も出来ないし、度胸もないし……」

未来は首を振った。

「いいえ、アナタはすごいのよ。だって、すごく優しいじゃない。アナタが小さい時、私が風邪で寝込んでもアナタは私のそばでずっと励ましてくれたわよね。パパが仕事で辛い時も、一生懸命、字を覚えて手紙を送ってあげたじゃない」

「そんなこと誰だって……」

「セツナ。勇気を出して一歩を踏み出しなさい。そうしたらきっと、クラスのみんなだってアナタを受け入れてくれるはずよ」
「う……でも」
「大丈夫。アナタを嫌う人なんていないはずだから。ゴンタレス君だってアナタの本当の事を知らないから誤解しているだけ」
ミライは押し黙った。
「大丈夫。アナタはパパと私の子供でしょ？　自信を持ちなさい」
「う……ん」
ミライは弱々しく頷いた。未来は、少し困ったように微笑んだ。焦っても仕方がない。少しずつ成長してくれればそれでいい。
「まあ……。今はそんなに深く悩まなくてもいいわ。まだまだ時間は沢山あるもの。少しずつで良いから前に進んでいってくれればそれでいいわ。ママがいつでもアナタのそばにいるからね」
にっこりとし、未来はくるりと台所の方へ向かっていった。
「ちょっと早いけど、夕ご飯にしましょう。今日はパパも早く帰ってくるそうよ？」
ミライはぱっと表情を明るくした。もう嘘のようにはっきりとした笑顔だった。
「え？　ホントに？！」
「フフ、そうよ。なんでも私達にスゴイお話があるみたいよ？」
「わあ！　楽しみ！！」

ミライと未来は楽しそうに良い匂いの漂う方へ消えていった。薄暗く、整理されていない奔流の中に親子は消えて揉まれて失っていく。

そこでミライの夢は終わった。

汗が染みわたったシーツの上でミライは額に手を当てていた。目をしかめて、ぼんやりと月明かりにぼんやりと霞む天井に母親を思い描く。

「はあっ……はあっ……。またあの夢か……。いつもここで記憶が途切れている……」

ミライは歯を食いしばった。

「母さん……俺は……強くなれたのかな。でも、守りたいと思える仲間は出来たよ……」

ｔｒａｓｈ―１６：黄昏の挑戦状

スバル達のチームが順調に勝ち進んだ十日後の、二二ＸＸ年六月三日月曜日。チームは一次トーナメントを勝ち抜けていた。主にレベッカの訓練によるところが大きい。戦術の幅が広がったスバル達を止めるのは裏の住民でも中々いなかったようだ。二試合目以降、スバル達のチームはそれほど苦戦する事はなかったのだった。むしろ一回戦の銀河連邦が異常に強かったのだろう。

そんなスバル達はコダマ小学校に元気良く登校していた。今日は任務もなく小学生の本来の仕事に戻れるというわけだ。だが廊下の片隅でゴン太と話題に上がるのは裏世界のトーナメントの事ばかりだ。もちろん生徒に聞かれないように最新の注意を払っていた。人込みを避けるようにしてゴン太とスバルは相談中だ。

ただ聞こえていたとしても、他の生徒からしたら何の話かは分からないだろう。

「いよいよだなスバル……」
「いよいよだねゴン太……」

お互いにゴクリと喉を鳴らした。ゴン太が大きな顔をスバルに寄せる。スバルは少し逃げた。

「俺達、一次トーナメントを勝ち抜いたんだよな」
「うん。てゆか、二次トーナメントなんてあったんだね。大変だね、

ホントに……」

スバルは溜め息をついて廊下の外の校庭を見つめた。元気良く子供が遊んでいる。スバルは羨ましかった。

だがゴン太はここ最近調子が良いので、やる気に満ちている。一次トーナメントはゴン太が大活躍だったのだ。調子に乗ったゴン太はスバルの背中を叩いた。スバルはよろけた。

「ばかやろ！　他人事みたいに言いやがって！　こっからが大変なんだぞ?!　分かってんのかスバル?!」

「痛いなあ……。まあ、ゴン太がいれば百人力だよ。頑張ってね」

スバルはにっこりとした。ゴン太は調子に乗る。

「だろ?　俺様がいればもう、どこまでだって行けちまうぜ！」

「ハハ……。じゃあ、お互い頑張ろうね」

スバルはゴン太との話を打ち切り、教室の方に足早に向かっていく。

「そろそろ一時間目が始まるから行こう」

「じゃあ、今日の授業を始めるぞー。まずはウイルスバスティングの授業だ」

教壇の上のアフロで小太りの男性が言った。アフロに手を突っ込んで眠そうに教壇を行ったり来たりしている。そして黒板の端末を

いじりだした。
　黒板のチョークを並べるレールの端には、キーボードが備えられているのだ。それを使い器用に命令を打ち込んでいく。

「んんーと、そうだな。そんじゃ、前みたいに誰かにウイルスバスティングの実演をしてもらおうかな」

　育田が入力し終えると、黒板はモニターに早変わりした。中には可愛らしいメットリオが映っている。「メトメトー」と鳴いていた。
　ここはゴン太の出番だろう。もちろんゴン太は既に挙手をしていた。行動が早い。

「ハイ！　俺がやるぜ！」
「お、ゴン太か。なんだ今日は学校に来てたんだな。もう、牛丼アレルギーは治ったのか？」

　ゴン太は首を傾げた。

「なんだ？　牛丼アレルギーって？」
「いや、なんか暁とかいう人が連絡をくれてな……。なんでもお前が牛丼アレルギーにかかって学校を休むかもしれないとか、その人もうまい棒アレルギーで大変だったとか……」

　スバルは理解した。育田の言っている事は極秘任務の言い訳だと。スバルは冷や汗を流した。シドウの言ったあまり上手くない嘘に、育田が気が付いているかもしれないのだ。そう思えば、自然と深刻にもなる。勝手にスバルは悩んでいる。

（まずいぞ。暁さんは何故か育田先生に変な嘘を吐いている……。これはマズイ）

しかし、ゴン太はあまり考えていなかった。考えなしで同意した。

「まあ、良く分からないけど暁さんがそう言うんなら多分そうなんだと思うぜ？」

「そうなのか？　牛丼アレルギーとか聞いた事もないから、先生心配しちゃったじゃないか」

「心配に及ばないぜ。先生！」

ゴン太の逞しいガッツポーズだ。それに惚れこんだ育田は安心したように笑った。事なきを得た。

「ハッハッハ。なんだ元気だなゴン太は。じゃあ実演、頼んだぞ」

スバルもホッと一安心した。

（よかった。先生が人を疑う事も知らない良い人で……）

「行くぜ！！　バトルカード！　ブレイクソード！」

青いノーマルウィザードのブレイクソードが土方作業員用のヘルメットを粉々に切り刻んだ。可愛らしいウイルスは涙を浮かべながら小さく断末魔を上げた。苦痛に添えられた鳴き声と共に、ウイルスの魂は電脳空間に蒸発していった。

『メ、メットォー……ッ！』

クラスメイト達はゴン太の圧倒的なバスティングテクニックに沸いた。四月とは比べ物にならない上達ぶりだ。いつかの汚名返上は完了した。女子生徒はゴン太一色に染まった。

「おお！　すげえ！！　ゴン太！」
「ほんとよー。ゴン太君ステキすぎる」
「この前より全然、危なげねえ！！」
「素敵よ！　ゴン太君」

ゴン太は鼻を擦りながら、渋く格好付けていた。中々のガキ大将だ。ゴン太は黄色い精鋭を受けてスター気取りだ。

「へへ。よせよ当然の事をしたまでだぜ？」
「きゃーゴン太様が喋ったわ！」
「すげー喋っている！」
「ダンディだわ！」
「へへ。よせよ……」

スバルはくつくつと笑っていた。

「ゴン太のヤツ、ノりにノってるなあ」

スバルは声援を浴びているゴン太をどこか微笑ましく眺めていた。

「でも、それはそうだよね……」

スバルは分かっていた。ゴン太含めて全員が強くなっている事に。それは順調と言える。何も遮るものがなくて怖いくらいだ。

スバルは今は平和に学校を楽しむしかない。

「……ふん」

ミライはそんなスバルとゴン太の様子を見ても仏頂面を崩す事はなかった。特にスバルを見つめる瞳はいつも以上に厳しいものだった。

ミライはつい小言を言ってしまう。声量は抑えられて、自分の口腔内で完結していた。

「このまま順調に行くといいがな……」

ミライはどことなく薄気味悪かった。この順調とも言える出来の悪いシナリオに恐怖していた。スバルの感じている怖さとは違い、それはどこまでもどす黒い。

ミライはゴン太が少し羨ましかった。

それからしばらく経ち、学校の一日も終わり放課後を迎えた。もう六月になるので日はまだまだ高い。スバルは、閑散とし始めた教室で帰り支度を始めていた。

「久しぶりの学校、楽しかったな……」

スバルは愛おしそうに算数の教科書に目を落とした。戦いに明け暮れて勉学から離れていたのだ。この感情は当然のものだろう。

当たり前の事を幸せに感じられる。そういう環境に身を置いているのだ。くしくもスバルは、学校に来てみて改めてそれを実感した。

「さて、帰るか」

スバルは全ての教科書を詰め終えると、廊下に向かった。だがすぐに立ち止まる。スバルは小さく口を開け放った。

「あ、委員長」

ルナは出入り口の所で立っていた。スバルを待っていたのだろうか。ルナはうかがうように首を傾げてスバルに話しかけてきた。クラス委員長として、やけに世話を焼いてくる。

慣れた様子でスバルはルナの元に歩んでいった。

「どう？　久しぶりの学校は？　困った事はなかった？」

「ううん、大丈夫。学校は色々と充実してたよ」

「勉強は大丈夫？　ついてこれる？」

「大丈夫だよ。小学校のうちの勉強はもう完ぺきさ」

「あら、言うわね」

「だって、宇宙飛行士になるんだもん」

廊下に出た二人は歩きながら談笑だ。学生生活の醍醐味だ。

話の最中ルナは、ふとスバルの横顔を観察した。スバルは厳しい戦いに晒されている友達だ。どこか怪我をしていないか心配だった。だが、いつも通りの少年の姿しかない。とても危険な場所で戦っているとは思えなかった。

スバルは怪訝そうにルナに振り向いた。ルナはぎょっとした。女は突然には弱い。

「なんだよ？　委員長じろじろみないでよ。なんか言いたい事でもあるの？」

「あ、いや。べ、別に……！　ただ、ちょっと……」

ルナはどもった。

「ふーん。まあいいや。早く帰ろっか」

スバルはすたすたと歩いて行ってしまう。ルナは走って追いかけた。

「ちょっと、待ちなさいよ。……あんっ」

するとルナは盛大にこけた。クラス委員長が廊下を走るとこうなる。もちろん生徒会長が廊下を走ってもこうなる。お嬢様の顔面が汚い廊下と愛し合うのだ。

スバルはクスクスと笑った。

「はは、ドジだなー」

「ヤダ、バカにしないでよ?!　んもう、だれよ！　廊下にバナナの皮を捨てたのは！」

「ハハハ！　ゴン太だね。だって、いつもバナナを食べているもの」

スバルが笑うと、そろそろルナは顔を赤くし始めた。スバルは「あれ？　ヤバい」と泣きそうになった。とりあえず逃げようと、電波変換しようとハンターを取り出す。

だが、ちょうど良く渡りに船だった。ハンターから電子音が鳴ったのだ。スバルは突然のインターバルにホッと安堵した。

『ピロピロリン！　スバル様、メールを受信しました』

スバルは苦笑した。今日のトラッシュは愉快だった。

「ハハハ、トラッシュ。学校の中はマナーモードだろう?」

『あ、スミマセン……！』

すると、トラッシュが小刻みに震えだす。これはマナーモードだ。確かにハンターは小刻みに震えだした。面白い機能だ。

「トラッシュ、頑張ってくれるのはありがたいけど……そろそろメールを開いてほしいな」

スバルはにっこりとした。

トラッシュは頬を染めて、大急ぎでメールボックスを漁り始めた。エアディスプレイの中のトラッシュは働き者だ。そしてメールの文面が姿を表した。

「あ……これは」

スバルは表情を一変させた。トラッシュのように震えはせずとも、表情は深刻なものに様変わりしていた。

きょとんとルナは首を傾げていた。

『星河、お前に緊急命令だ。

どうしても確かめたい事がある。至急、アキンドシティのミナワストリートにあるサテラポリスまで来てくれ。

そこで、俺とお前の任務だ。念の為言っておくが、お前だけで来い』

その文面と文体、臭わせてくるもの。それはミライからの挑戦状だ。

「任務か……よし、急ぐか！」

『行きましょう、スバル様！』

「あっ、ちょっとスバル君。どこに行くの？！」
「ちょっと、急用が入ったんだ。じゃあね、委員長！」
「あっ、ちょっと……。んもう、またこのパターンか」
『ヒーローは忙しいんだよ。ね？　ルナちゃん』
「ふふ……そうね、モード。ホントにすっかりロックマン様だわ……」

ルナはその小さな戦士の背中を見送るしかできなかった。

ｔｒａｓｈ―１７：ナビの墓『ウラウェーブエリア』

茜空に彩られた時刻。スバルはロックマンに変身して、数分間ウェーブロードを走っていた。すると赤一色でつまらなかった空がようやく違った様相を見せた。硬く突き伸びる鉄の森林地帯が姿を現したのだ。どうやらアキンドシティに辿りついたようだ。そこに広がるのは、大きな繁華街であると言える。日も高いのにビルの灯りや、看板の点滅がまるで生き物の胎動のように感じられる。そしてモールス信号で話しかけてくれているようにも感じられる。

元気にあふれて気持ちが良いさまだ。また同じくらい活力あふれる人達が住む街でもある。アキンドシティはＴＫシティにも負けずとも劣らない規模だった。

そしてロックマンは、ビル群を縫うようにして落ちていくウェーブロードに乗り換える。彼は、脇を切っていく目に楽しい風景を流しながら、ふと先のメールの事を考えた。

そうなると、まず相談だろう。腕時計を見る時のようにして左腕へ語りかけた。手甲を模したトラッシュに問い合わせる。

「ねえトラッシュ、ミナワストリートまで後どのくらい？　そこでミライ君が任務で待ってくれているんだ」

『あと、もう少しです。そこでソウル・レイダーの周波数を感じます』

「そっか。それにしても任務って何だろう……？　チームじゃなくて、僕にだけの連絡だったから、ウラトーナメントとは違うと思うけど……」

『本人に聞いて確かめる他ないでしょう』

ミナワストリートはアキンドシティの中心にある場所だった。主に金融や、行政地区が一緒になった特区だ。そこにサテラポリスアキンド支部があるという訳である。その厳重に警備されて逆に危険な匂いを漂わせる武器庫の前にソウル・レイダーが立っていた。くすんだ緑の鉄の魔宮の前では白い彼は良く目立った。

「あ、ミライ君だ」

ロックマンは火薬臭さに今日習った授業内容を奪い取られながらも、ソウル・レイダーの元に向かった。

「やっと、来たか……」

「突然のメールだったけど、任務って何をするの？」

ロックマンの問いにソウル・レイダーは無言で返した。そのまま、武器庫のシャッターを開け中に入っていった。

ロックマンは首を傾げた。

「……ミライ君？」

「いいから黙ってついて来い」

ソウル・レイダーは簡潔に言いつけると、コンテナだらけの薄暗い中に消えていった。どこかいつもの調子でないソウル・レイダーだった。

ロックマンは不信に思いながらもついていった。

少し歩くと、行き止まりだった。ただ、コンテナが除かれるように置かれたそこは少し開けたようになっていた。そのおかげか、火薬の臭いが集まってしまい、ある種の瘴気のようなものが溜まっている。淀んだその場所にロックマンは顔を歪めた。

ソウル・レイダーは特に気にする素振りは見せない。薄暗く表情は読み取れないが、おそらく無表情だろう。

「ねえ、ここは……？」

「アキンド支部の武器庫だ……。ここから、あるノイズウェーブに繋がっている」

「ある……ノイズウェーブ……？」

「ああ、お前は知らないのか」

ソウル・レイダーはロックマンの方にようやく振り向いた。

「ここは、アキンドシティのノイズウェーブにつながる入口。それを、先日ジャックと尾上さんと双葉のチームがこの場所を開放してくれたという訳だ……」

ソウル・レイダーは再び行き止まりの壁に振り向いた。手をかざす。

「話は後だ。行くぞ……」

「え？　うん」

ソウル・レイダーは手を光らせて周波数を壁に当てていく。ノイ

ズが黒い炎のように、バチバチと鉄壁のさびれた所から弾けては消えていく。

「ウェーブ解放……」

「うわ……！」

ロックマンは目をまん丸にした。今思えばノイズウェーブの入り口の作り方を初めて見たのだ。改めてみると不気味な穴だ。黒いブラックホールのようなものに、ロックマンは口を閉ざし喉を鳴らした。

「行くぞ『ウラウェーブエリア』に」

ソウル・レイダーは躊躇せずに飛び込んでいった。

ロックマンもソウル・レイダーに続き、穴に飛び込んだ。その先に広がっていたのは、ボロボロのノイズウェーブだった。しかし良く見るとノイズウェーブとは違うようだ。紫がかったノイズウェーブとは違い、このウェーブロードは真っ黒だった。背景もノイズではなく壊れたナビの残骸やプログラム君の亡骸が漂っている。

そして、ウェーブロードの型もずいぶんと古いタイプのようだ。電波送受信効率が悪い。ロックマンは少し体が重くなったように感じた。

このウェーブロードは恐ろしく昔からあるもののようだ。

「ねえ、ここノイズウェーブ……じゃないよね」

「良く気が付いたな。ここは二〇〇年前のある事件から生み出され

た場所だ」
「ある事件……？」
「今はそんなことどうでもいいさ。とにかく、ここはウラインターネットの広大な土地を利用した『ウラウェーブエリア』だ。厳密に言えば、ウェーブロードではなくウラインターネットに近い」
「ウラインターネット……」
ソウル・レイダーはウラウェーブを走り始めた。白い光線となって奥に突き進んでいく。ロックマンも後に続いた。
「ねえ、なんでこんな場所がサテラポリスから行けるようになっているの？」
ロックマンはウラウェーブを疾走しながら問いかけた。
「ここは、サテラポリスが管理を任された場所だからだ。お前にオフィシャルウェーブバトラーのライセンスを渡した時、暁さんが言ってただろう？」
スバルは一瞬思考を巡らす。過去の出来事を思い返せば確かにシドウは思わせぶりな事を言っていた。
「もしかして。暁さんが言っていた『どこかにあるとされる場所』ってここの事？」
「良く覚えていたな……。そう、ここがその場所だ。この場所は広大な土地を持っている。だから犯罪者の収容施設にはもってこいなんだ」
「収容施設？」
「ヨイリー博士が言っていた『電磁波監獄ロストスクリーム』へと

繋がっている」
「こ、怖そうな施設だね……」
「ああ、実際、凶悪な犯罪者が電波空間に閉じ込められているからな。特にアメロッパのアイツは……」
「アイツ……？」
ソウル・レイダーは口を閉ざして渋った。
「いや、何でもないさ」
「そう？　ならいいけど……」
ロックマンはまたも不信に思った。今日のソウル・レイダーはどうにも様子がおかしい。
「ほら、もうすぐ目的地だぞ」
「うん……」
ロックマンが着いた場所は何もないデータ空間だった。本当に何もない。ロックマンは言い様のない不安に駆られた。ソウル・レイダーの意図が読み取れない。
ウラインターネットだとされた場所にソウル・レイダーと二人っきり。命の気配はどこにもなく、ソウル・レイダーの周波数がより印象に残った。本当に二人だけだ。
「なにもない場所だね……」
「ああ、当然だ。そういう場所を選んでこのウラウェーブエリアにお前を呼んだんだからな」

「え？　てっきり、電磁波監獄に行くものだと思っていたんだけど……」
「バカめ、あんな場所に用はない……。俺が用のあるのは……お前だ」
ソウル・レイダーはロックマンを指差した。ロックマンは驚いて一歩下がった。
「え、僕？　……なんで？」
ソウル・レイダーは腰の二本の鞘に手を掛けた。
「ふん。今日の朝、夜太郎さんから連絡が入った……。次のトーナメント対戦相手が決まったらしい」
「次の対戦対戦……、それって二次トーナメントの？」
ソウル・レイダーは剣を抜いた。黒い世界で鮮やかな白がロックマンの世界を切り裂いた。目に覚めるような、周波数にロックマンはもう一歩下がった。
ロックマンの言葉に、ソウル・レイダーは首を振った。
「いや、違う。二次トーナメントに進むにはＷＷＲの戦士を倒さなければならないらしい」
「ＷＷＲの戦士。それが次の対戦相手なんだね……？」
ロックマンは嫌な予感に口を縛った。
「キリン・ライトニングだ」
「……え？」

ロックマンは突然の言葉に呆けた。

「次の対戦相手はＷＷＲの幹部にして、きずなクルーのジョニーが電波変換した姿『キリン・ライトニング』なんだ！」

「それ、本当なの？」

「ああ、本当だ……。言っておく、今までの中で一番厳しい戦いになるだろう……」

ロックマンは緊張したようにソウル・レイダーを見つめた。目の前にいるのは圧倒的な戦士だった。

次の敵はそれを超えた戦士ということか。戦慄が走るには十分な状況と立場だ。

「牛島のヤツが最近調子にのっているが、そんな楽観視できる状態ではない」

「うん……そうだね」

「そして今日、俺は思ったんだ。自分はどれだけ強くなったか……ってな」

「うん……」

「牛島も確かに強くなっている……」

ロックマンはゴン太の華麗なオペレートを思い出した。

「だがキリン・ライトニングはもっと強い。俺の知る限り最強の電波人間だ」

ソウル・レイダーはついに抜いた剣を構えた。刺さるように研ぎ澄まされた周波数だ。ロックマンは肌に直接に感じた。痛いくらいの戦意だ。

「さあ、俺の力を確かめさせてくれ。キリン・ライトニングに通用するだけの力が、今の俺にあるのかどうか……。
相手はお前しかいない……」
「ミライ君……」
「ここならいくら暴れても誰の迷惑にもならない」

ウラウェーブエリアは確かに広大だ。ソウル・レイダーの言うとおりだろう。力一杯、力と力の語り合いが出来そうだ。
ロックマンもグレイバスターを構えた。

「そうだね……。僕も自分の力を確かめたくなったよ。
四月の本当の決着を……電波人間として白黒つけよう！」
「ふっ……そうだな。……行くぞ！」
「うん！　来い、ミライ君！！」

ソウル・レイダーが凄まじい勢いで切り込んできた。
ウラウェーブエリアでの語り合いの始まりだ。
白い閃光と灰色の閃光が真正面からぶつかる。白い二本の剣がロックマンを襲う。

「――斬る！！」

trash―18：真のヒーロー

広大で荒廃した荒野に、剣の打ちつけ合う音が鳴る。ロックマンの剣は悲鳴を上げている。高くはち切れそうな金切り声だ。ウラウェーブの電波世界をソウル。レイダーに押し切られて、奥へ奥へ後退していく。闇へ浸っていき、敗北への現実味を感じさせる。ソウル・レイダーの剣技は凄まじかった。白騎士の目にも留まらぬ太刀筋に、ロックマンは不格好な踊りを披露させられる。無理に体をよじり、慌てたステップ。息を吐く暇がない。ロックマンの体をかすめる、鋭い太刀風にいちいち肝を冷やす。

ロックマンもバトルカードのソードで応戦するが、剣術では敵いそうもない。ロックマンは表情を曇らせた、頤（おとがい）を食いしばれば絞った苦痛と苦悩が滲み出る。戦いを通して植えつけられるのだ。洗練された剣術と、まだまだ未熟な剣術を比較させられて、嘲笑されているかのような敗北感だ。

ロックマンは「くっ……！」とだけうめくと、ポップアップに指を走らせバトルカードを入力した。バリアだ。まともな剣術では敵わないと判断したのだ。バリアに身を守らせ、行ったん距離を取る。見る見るうちにバリアは切り刻まれる。ロックマンは慌てた。とにかく闇を立体的に走る、下方のウラウェーブに飛び降りた。

着地をすると、衝撃と共にバリアは完全に砕け散った。たったあれだけの一瞬の防御で、もう限界だったようだ。ロックマンはソウル・レイダーの手数にゾッとした。しかし感動している暇はない。ロックマンはウラウェーブの下へ下へと降りて行き、絶対の安全が確信できる所まで落ち延びていく。

あたりが真っ黒くなっていき、気持ちも落ち込んでいくような気

配だ。だが、それでも切り刻まれるより、全然ましだった。

「はあ……はあ……」

息をするのでやっとのようだ。

「ミライ君はやっぱり強いや……」

ロックマンはウラウェーブの深層で張りつめた緊張を少し解いた。左腕を上げてトラッシュに問いかける。

「ねえ、トラッシュ。さっきのやり取りで戦闘データはとれたかい？」

『はい。おおよその戦闘データを算出しました』

トラッシュは早口で言い連ねる。ソウル・レイダーが、いつ襲ってくるかも分からないからだ。

『平均シンクロ率、ミライ様１７８０％スバル様３９０％です。平均戦闘周波数ミライ様、六四〇万メガヘルツ。スバル様三三〇万メガヘルツ。

データ上ではミライ様に圧倒的なアドバンテージがあります』

ロックマンは息を呑んだ。

「すごいシンクロ率……どうやら、純粋な力比べじゃ敵いそうもないみたいだね」

『ですが、バトルセンスではスバル様も劣ってはいません。電波人間の戦いを左右するのは、目に見えるデータだけじゃありません』

「そうかな？　さっきのやり取りで分かった事があるけど……。ミ

ライ君は手加減してくれていたよ」

ソウル・レイダーの剣はロックマンの急所を狙う事はなかった。それくらいは流石に気が付くというものだ。

だがトラッシュは首を縦には振らない。

『いや、それは違うと思います。確かに急所こそは狙ってきませんでしたが、彼は本気ですよ。恐らくミライ様は一度、本気で戦っておきたかったのでしょう』

「うん……そうだね」

『では、行きましょうか』

ロックマンは頷き、左腕のハンターからバトルカードを選択した。ポップアップをタッチすると銃身の長いライフル銃が生成された。スコープ・スナイパーが持っているものを小ぶりにしたようなものだ。

ロックマンはライフルを上空に構えた。狙いは白い影だ。高速で落下してくるので、中々の腕前が要求されるだろう。ロックマンは唇を縛り、目を絞り、歯を食い締め研ぎ澄ませた。集中に集中を重ねかけ、バイザーに映るロックオンカーソルと白い鮮鋭を積み重ねる。

「バトルカード、メタルライフル！」

銃口が鉄の球を吐きだした。凄まじいスピードだ。敵をカーソルは捉えたのだ。ロックマンの銃の腕前は剣術よりは優れている。しかし優れているのはロックマンだけではない、凄まじいスピード以上恐ろしいスピードで白い影は揺れた。そうだ、それでもソウル・レイダーには当たってはくれないのだ。ソウル・レイダーはウラウエーブの環境周波数に乗って軽々とロックマンに向かって落ちてく

る。
　落ちる木の葉のように飄々として、スキーのように滑らかで危なげない滑空だった。ソウル・レイダーの周波数が白く弾け、その印象を強く焼き付けた。
　二本の剣が白く燃えている。ソウル・レイダーは構えた。スキー選手から剣士になった瞬間だ。

「そんなもの当たらない。では、こちらから行くぞ……！　ロックマン！！」

　トラッシュが叫んだ。

『あの二本の剣に高エネルギーが集まっています！　来ます！！』
「ブラッディ・アスタリスク！！」

　ロックマンの視界で星型の斬撃が形作られる。下腹から込み上げる冷たい血ロックマンは鋭敏に反応した。

「クッ……シールド！！」

　ロックマンは背中を丸めて、左腕のハンターから電磁波のような皿を展開させた。ソウル・レイダーの十八番の前では、この保険あまりにも頼りない。
　だが腰を落としてしっかりと構えるしかない。白い斬撃は鞭のようにしなやかで、星の軌跡は花のように美しい。そしてなにより激しい。それゆえ美しさの感動もそこそこに、命を惜しむしかない。

「うっ……くあっ……！！」

　鋭い衝撃が三回。ロックマンのシールドが砕け、ロックマンも砕

けそうになるが何とか持ちこたえた。ロックマンは背中越しにソウル・レイダーを見つめた。いつの間にかソウル・レイダーはロックマンの横を通り過ぎていたようだ。ロックマンはひんやりとしたものを覚えた。だが白い歯を見せてはいる。「ミライはすごいヤツ」その感激の方が大きかったようだ。

「やっぱり、スゴイねミライ君は……」
「お前こそな。俺のブラッディ・アスタリスクを受け止めるのは簡単じゃない……」
「キミの得意技だもんね。強烈だったよ」
「……フン」

ソウル・レイダーはくるりと身をひるがえした。長い銀髪が流星のように振舞う。そして速い。近い。どこか鼻にかかった溜め息を置き去りにして、ロックマンに鼻を突き合わせているのだ。ソウル・レイダーは肩をピクンと跳ねさせた。ひじから先は凶器に変わる。鋭い太刀筋をロックマンは目の端で捉えた。かかとでウラウェーブを小突き、最小限の動きで避ける。至近距離からトラッシュの咆哮だ。

「グレイバスター！！」

ソウル・レイダーは星屑の爆発を目の前にして、脇を絞った。腕を畳んで小さく剣を振る。力はいらない。必要なのは、攻撃の息巻いた勢いに呼吸を合わせるだけ。ソウル・レイダーの撫でるような剣捌きは敵意を削ぐだけだ。グレイバスターのエネルギー弾は沈黙した。ロウソクの火が儚げにソウル・レイダーの足元に落ちた。

トラッシュは静かに驚愕した。

『グレイバスターの周波数を打ち消す周波数を纏った太刀筋……な

んて丁寧な技』
「これでもダメか……やっぱり、スゴイね」

ロックマンを息を呑んだ。だが不思議と、体を巡る血液がとてつもなく温かくて、親しくて、戦友のように感じた。お互いの戦闘周波数がみなぎり、集中しているのが良く分かる。二人も感じているはずだ。

ソウル・レイダーは剣を鞘に収めた。肩の力を抜いてロックマンに話しかける。おしゃべりも悪くは感じないだろう。何も暴力や乱暴な行いだけが戦いじゃない。その程度のものは動物にでも任せていればいい。

「ロックマンよ、覚えておけ。周波数を操る事は戦闘面において絶大な力を発揮する。さっきのように攻撃を無効化することも可能なんだ……」
「確かに、半周期ずらした周波数をぶつければエネルギーの総和はゼロ……だね。理屈だけなら簡単だよ」

ロックマンはクスリと笑った。

「……そうは言うがな。周波数を操る事が出来れば、絶対的な力量差を埋めることだって不可能じゃないんだ。『フレクリア』や『フレクバースト』だってそう言う事だろう？」

ロックマンは少し納得した。

「僕たちはまだまだ強くなれるってこと？」
「そうだ」

ロックマンはニヤリとした。

「僕たちはまだまだ諦めるには早いってこと！」
「フン、そうだな」
「キミと戦ってみて、色々と勉強になったよ。ありがとう」
「俺からも礼を言わせてもらおう。ありがとう。俺達はまだまだ強くなれる。」

ロックマン達はレベッカから新しい戦い方を学んだ。それが進化の第一歩だ。こうして拳を交える事によって、チームの仲間としてお互いに高め合っていける。
彼らはまだまだ若い。無限の可能性を秘めている。最強である大人たちにはない、絶対の宝物だ。それが最強にはできない奇跡を呼ぶ事が出来るのかもしれない。
ロックマンは頷いた。まだまだ戦いは始まったばかりだ。そして終わるときは笑顔でありたい。ロックマンはそう思った。

「周波数を操る……か。それが完ぺきに出来ればジョニーさんやレギオンにも負けなくなるのかな？」
「ああ、そうだな。俺達にはまだまだ先がある」

そこでソウル・レイダーは改まった。チームのリーダーではなく、一人の少年としてスバルに歩み寄る。

「……なあ、星河。どちらが先に夢に近づくか競争しないか？」
「夢？　競争？」

ソウル・レイダーは無邪気に笑った。どこか張りつめていた空気を、以外にもソウル・レイダーの方が取り壊してきたのだ。少し砕けた態度にロックマンは呆気に取られた。

「ハハハ。具体的な事はいいんだ。お前が辿りつきたいと思うところが……多分そこだ」
「それを僕がミライ君と競争……？　自信ないよ」
ソウル・レイダーは首を振った。
「いや、星河。お前は十分にスゴイよ。地球を三度も救った小学生のどこがスゴクない？」
「そ、そんな事……」
ロックマンは照れた。しかしソウル・レイダーはそれ以上のようだ。
「そうか？　なら、本当の事を言おうか。お、俺はな……実は、そんなお前に憧れていたんだ」
ロックマンは驚いて、凄まじい勢いで三〇歩も後ずさった。しかしそれでは失礼なので、元の位置に戻ってちゃんと驚いた。
「ええ？！　ミライ君が僕に？！　嘘だよ！　だって、キミは僕なんかより全然……」
「いや、俺はスゴクないんだ。お前みたいに地球を救った事なんかない……。ましてや地球の危機に、一度たりとも一緒に戦ってやる事が出来なかった……。
サテラポリスのエースなんて言われているが、笑えるだろ？」
「ううん！　違うよ、違うって……！！　キミはいつだって、僕たちを引っ張って来てくれたじゃないか。いつだって僕たちのリーダーだったじゃないか！」
「いや……それこそ違う。白金や牛島、最小院、響……アイツらでさえお前と一緒に、負けたら全てが終わりの戦いをしていたんだ。

だが、俺は……違う。まともに戦った事もなかったんだ。命がけの本当の勝負と言うものもした事がなかった。

気が付いたら、最強と言われ、もてはやされていた。お前と違って、俺は偽りのヒーローなんだ」

ソウル・レイダーはうなだれた。こんな恥辱にまみれたソウル・レイダーは初めてだった。そして続けて言う。ロックマンは、なぜそこまでして言わなくていい事を……？　と思った。

「実はリーダーって言うのも、すごく俺にとっては負担だったんだ……。どうしようもなく怖くて逃げたしたくなった……。本当に怖かった……。お前達の命をあずかる責任……何度、逃げ出そうと思った事か……」

「ミライ君……違う、違うよ！！　キミは立派だったじゃないか。僕は知ってるよ。

ピクニックの時や、遊園地の時、機械惑星の時……いつだって僕を助けてくれた……。口では言わなくても、その強さと優しさを感じていたんだ。

だからキミが言うような事は絶対に違うっ」

ロックマンは一生懸命に首を振った。ソウル・レイダーのそんな姿を見せられると弱ってしまう。

しかし、卑怯な事だ。スバルはそれでも頭の隅っこでは思っていたのだ。ずっと疑問だった。「なんでミライ君はこんなに強いのに、アンドロメダの時も、ラ・ムーの時も、クリムゾン・ドラゴンの時も一緒に戦ってくれなかったんだろう」と。ほんの些細なことだが、ディーラーにいたシドウと違って、ミライはそんな事はなかった。少しだけ、どこかで引っかかっていた。

ソウル・レイダーはロックマンと違い、弱く首を振るだけだった。

「いや、いい。それが俺の弱さだ。お前には知っていて欲しかっただけだ」

それはちいさな一歩だった。だが、その告白はミライにとっては大きな一歩だ。

「ミライ君……」

同情して歩み寄ってくるロックマンをソウル・レイダーはあえて跳ねのけた。それ以上は野暮だと判断したのだろう。

「さて、と話はお終いだ。それにこの戦いにも決着をつけよう。……俺の真の力を見せておこうか」

ソウル・レイダーは戦闘体勢をとった。

「行くぞ、レイダー。今の俺の出せる全てを星河に見せてやろう。レベルⅠだ」

『了解！　エクスフレーム解放！　レベルⅠ！！』

みるみるうちにソウル・レイダーの周波数が跳ねあがっていく。ソウル・レイダーは藍色に染め上がっていく。白い彼は何色にも染まれるという事だろうか。

それにしても強すぎる周波数だ。ロックマンの魂を揺さぶる。ロックマンに直接訴えかけてくるのだ。

ソウル・レイダーはそれほどに強い。リフレインに最強を背負わされるだけはある。

ロックマンは改めて認識した。

「やっぱり、ミライ君はスゴイや……」

「フン……行くぞ！　星河！！」

それから少しの間、ソウル・レイダーとロックマンは拳で語り合った。迫りくるキリン・ライトニングの脅威。遠い存在のジョニーについて。きずなクルーの強さについて。スバルとミライのこれから。宇宙を救おうという約束。地球を救おうという覚悟。友達を守りたいという勇気。

そして二人の中で決着はついたようだ。

二人ともウラウェーブで大の字になって転がっていた。まるで真っ黒な死の世界が、青春の青臭い河川敷のように飛び込んでくる。

「はあ……はあ……」

「ふふ……。いいファイトだ」

「ミライ君……。本気だしてなかったでしょ？」

ソウル・レイダーは笑った。

「いや、本気だったよ。流石に剣を使わずに殴り合いじゃ、お前と互角か……」

「フフ……良いパンチだったよ。ミライ君」

「お前もな……」

ソウル・レイダーはそう言うと疲れたように大きく息を吐いた。色々なわだかまりが晴れたのだろう。振り払ったような表情をしていた。

ロックマンも同じだった。そしてミライと語り合った事である事に気が付いた。

「ねえ、ミライ君」
「なんだ？」
「僕達……友達になれたのかな」
「友達……か。今まで考えた事もなかったな……でも悪い気はしない」
「友達だよ。きっと！　そしてライバルだ！」
「ライバル……そちらの方が俺の性分に合ってそうだ。競争するにはそっちの方がその気になるしな」
「じゃあさ、今日から僕とミライ君はライバルだ！」
「ああ、望むところだ」

ロックマンはこそばゆそうに笑った。なんとも言えがたい高揚感に満ちていたのだ。

「フフ……、何だか不思議な気分だよ」
「そうか？　俺は特に変わりはないが」
「だって、ライバルだよ？　なんだか物語の主人公になったみたいで……。僕、こういうのにずっと憧れてたのかもしれないなぁ」
「フン、地球を救ったヒーローが何を言っている。まったく、おかしなヤツだ」

スバルも可笑しくなってきた。
二人はお互いに笑いあった。思いっきりだ。こういう時に備えて、ウラウェーブに来た判断は間違っていない。友情を語り合うには殺伐としているが、近所迷惑にならない点は素晴らしい。
しばらく笑うと疲れたようだ。

「はあ、疲れた。そろそろ帰ろうか？」

ロックマンは重い腰を上げた。ソウル・レイダーも立ち上がる。
ロックマンに手を差し出してきた。

「今日は、ありがとう。色々不安だったものが振り払えたよ」
「ううん。こっちこそ」

ロックマンも握り返した。強く握手を交わし決意を固める。

「勝とうね！　ジョニーさんに！」
「当然だ。もうキリン・ライトニングには負けない！」

スバルとミライ、今日から二人は共に戦う仲間であり友達であり、
ライバルとなった。

ｔｒａｓｈ―１９：電波変換を極めし者

某日。場所は惑星パトラ、ブラックママル内部。
ロウソクに照らされた壁が、彫られた古代レリーフを浮かびあがらせる。フェニックス・リボンのバイザー奥に彫られた瞳も、ロウソクを受け取り、燃えているようだった。
キリン・ライトニングは鳳凰の間でフェニックス・リボンに呼びだされていた。玉座に腰を掛けた彼は、オーパーツを手に取り、それに夢中のようだ。心臓のようなオーパーツ。脈動が手のひらから伝わり、フェニックス・リボンはそれを楽しんだ。夢が叶う、そう実感するだけで笑みが漏れてくるのだ。決意に燃えた、約束の炎を睨ませていた。
キリン・ライトニングは黙ってその様子を眺めていた。自分は正しかった、と確信したいようでもある。
フェニックス・リボンがキリン・ライトニングに顔を向けた。

「よくやった……ジョニー」
「へえ、ありがとよ」
「フフ。流石だよお前は」

フェニックス・リボンはひじ掛けにオーパーツを置くと、頬杖を突いた。

「……では次の命令だ。トーナメントを勝ち抜いてきたチームの相手をしてもらおうじゃないか……いいか、殺すなよ？」

キリン・ライトニングは僅かに身構えた。自然と顎を引いて、虎視眈々とフェニックス・リボンを捉えた。

フェニックス・リボンはキリン・ライトニングを人差し指で突き差す。ピクリとも動かず、キリン・ライトニングのど真ん中を捉えて離さない。キリン・ライトニングは「ああ、ワタルは最強だ」とまざまざと理解した。

フェニックス・リボンは絶対だ。逆らえるわけもない。キリン・ライトニングでさえ友情とは別にして、素直に分をわきまえる事が出来た。親しみとは別の強い力のおかげだった。

そして数日後の六月十三日木曜日。

場所はノイズウェーブ第四階層、アンバーウェーブ。そこは上に伸びたかと思えば、いきなり横に突きだす、樹木の枝葉のようなウェーブロードの世界。琥珀色（アンバー）が美しくも危うい、入り組んだ迷宮の世界である。

そのような所で、鳥の巣の卵に擬態したコロシアムは大切に抱えられていた。ウラスクエアは熱狂の渦に巻き込まれている。びりびりと惑うアンバーノイズが観客の凶器を再現して、儚く砕かれる。

『さあ始まります！　二次トーナメントへの進出資格を取るべく、ＷＷＲの戦士に挑む試合の始まりです！！』

トーナメント管理委員会の女性職員の艶やかな声だ。聞きいってしまいそうな、はるばる響く澄んだ音色だ。とても犯罪者の口から発せられた音とは思えない。

しかし野郎の声の方は中々に堂に入っていた。

「ぶっ殺せ！」「ヤッちまえ」と、のたまい叫び、閉じた空間に汚い色が射し込んだようだ。それでもこれは裏世界にとっての常識化した格調高いフレーズだ。流石の犯罪者で模範的な汚らしさ。純粋無垢を粉々に砕く。

「やれやれ、こまったものだ。でも実感に沸くよ」肩をすとんと落とす。何だかんだでロックマン達は、すっかり慣れたものだった。耳触りの悪い音色に辟易した。ヘルメットをコツコツと大人しく小奇麗に小突けば、幾分か耳の保養になるほどだ。

それほど耳に悪い、今の環境だ。だが、かと言って見渡せば見渡せど、犯罪者が会場を埋めている。細胞の生体活動のように内壁を這って、うごめく。まるで腸内のようで気味が悪い。臭くて女性にはきつい。

しかし純白の彼は、集中していた。ハープ・ノートは自分の潔癖さを省みた。鋭い剣の眩さが銀面をなぞって貫いた。鞘から伸びる、研鑽の賜物に言葉と導きを乗せる。

「油断するなよ。俺達は間違いなく最難関と向き合っている。だが、俺達はそれに挑戦するだけの力を手に入れた。

……勝ちに行くぞ！」

ソウル・レイダーだった。凛とした姿勢でロックマン達にしっかりとした筋を通させた。彼の先には紫電がちらちらと手を振っていた。青いボディに纏われば、それはカオスだ。

「ようやく……来たか」

キリン・ライトニングは六人を眺めて、宝石を見繕うように悩ましげだった。少し前のロックマン達と目の前の戦士を重ねる。

「ふうむ。なるほど、なるほど……。多少の電波変換術を身に付け

たようだな」

キリン・ライトニングはそう言い周波数を消した。目の前にいるのに見えない。周りの観客たちは垂涎(すいぜん)して恐怖した。アナウンサーは静かに悲鳴を上げた。

『キリン・ライトニング選手が見えません！　見えるようでまるで見えない。認識が出来ない！　ア、アナタは何者だ?!』

「俺はＷＷＲの幹部！　伝説のジョニー！　神に愛された天使だ！　キミの隣にいつでもいるぜ？」

『す、素晴らしいです！　胸がキュンとします』

実況のお姉さんをたらしこんだキリン・ライトニングだった。

ロックマンは唖然とした。

「す、スゴイ……。あんなにふざけているのに。存在感を感じ取れない……！」

「だが……」

ロックマンの強い表情を受けて、ソウル・レイダーは剣を突き出した。

「今なら！　捉えている！　見える！」

「ほほう！　さすが……だ！　俺のフレクリアを見えているのか。良い成長だと思うよ」

キリン・ライトニングは料理の前の奥さんのように手を揉んだ。よく揉みほぐし、筋を伸ばし最高のパフォーマンスの準備をする。

「さてさて。君たちの努力を認めて俺が直々に相手をしてやろうか

な？　さあ、かかってこいよ？」
『ちょっと！　キリン・ライトニングさん！　お話を勝手に勧めないでください！　私が試合を進行司会しますーっ！』
「あ、悪いね。んじゃあ、頼むよ」

キリン・ライトニングは雷でハート型を作って詫びを入れた。それに悪い気はしなかったお姉さんは、艶やかに試合の説明を始める。会場はブーイングの嵐だった。

ロックマン達は、試合の流れを完全に持っていかれている。ソウル・レイダーは不快気に目を白ませた。この事実にゴン太が気が付いていない事こそ、キリン・ライトニングの巧妙さだった。

『では……キリン・ライトニングさんのご要望に沿って試合形式を説明しますねっ！』
「おうおう姉ちゃん！」「色っぺえな！」「ケツ、ドロドロかよ！」
そのような野次がうるさい。非常に集中できない状況だ。ロックマン達はゆっくりと堕落したい。
『んもう！　うるさいですよ！　じゃあ、チームダブルプリティの皆さんよく聞いて下さいね？』
「はーい！　お姉さん！」
『うん！　良い返事！』
「ゴン太君……！　もうちょっと、緊張感をだね……」
「牛島……！　敵のペースに乗せられてるんじゃない！」
「ちぇ……分かってるよ！　うっせんだってんだ！　ミライのバカ野郎。あ、ミソラちゃんには言ってないよ？」
『おやおや？　どうしたのかな？　仲間割れかな？　そんなんじゃ、お姉さん悲しいぞー？』
《ぼけー！　さっさと進めやがれー！　血を見せろ！　血をー！》
『おっと、野次が凄まじくなってまいりました。
では、今回の試合ルールを……。な、ななぁんと！　ルール無

用のデスマッチィ！　生きるか死ぬかの命のやり取りだぁあぁあ！　女の子もいるけど、コホン……野郎どもヤっちまえやぁあァァ！！』

良い感じだった乙女モードから、いきなり司会のお姉さんが、ドスの利いた声を発するのだ。ロックマンはあかねに怒られたようにビクッとした。ハープ・ノートはきっと眉を吊り上げて緊張した。

観客は血なまぐささを予感して、大盛り上がりだ。会場から、食べ物、飲み物、ミソラのブロマイド等のアイテム類が投げ込まれる。無法地帯だ。

『そして勝敗は単純明快！　相手が参ったって言っちゃうか！　デリートされたらの簡単ルールだよ！』

「そりゃいいや！」

キリン・ライトニングは頭を使う事が苦手なので、悦び顔の少年になった。

『そして今回は一対一のタイマンじゃなくてもいいよ！　数で嬲り殺すのもオーケー！　一対一で男らしく友情を語り合うのもオーケーだよ！　とにかく気持ちよく戦ってね！』

「じゃあ、俺は気持ちよく……右手の人差し指一本で戦おうかな」

『流石！　キリン・ライトニングさん！　太っ腹ですぅー！』

「はは……よせよ」

にこやかなキリン・ライトニングだ。司会のお姉さんの黄色い声に悪い気がしないらしい。ニヤニヤして人差し指宣言だ。

そしてロックマン達に向き直った。わりと真剣な顔つきで人差し指をちょいちょいとさせ挑発する。

「じゃ、これでやる事にするから。かかってこいよ？　少年少女たち」
「ブロロロロロ？　ひ、人差し指一本でだとう……？」
　これはいけない、単純明快なゴン太のプライドに火が付いた。ゴン太のプライドは灯油まみれなので燃えやすい。よって挑発に乗りやすい。これはいけない。それに最近のオックス・ファイアは調子に乗りに乗っている。もう自分に酔いしれているゴン太だ。という訳で単身で突っ込むのだった。
「舐めやがって！　強くなったオックス・ファイア様の力ァ見せてやらぁ！
　人差し指どころか！　全身を使って！　ゴメンナサイさせてやる！！　食らいやがれ！　ヴァーニングメトゥオスゥウパイラァルオックスタァアックルゥウウ！！」
『ブロロォオオオ、俺様とゴン太の力見せてやるよ！』
　その二人組は凄まじい気合だ。気合だけでやってしまいそうな予感だ。ただキリンはそのオックスの滑稽さに思わず感心した。
『フン……ＦＭ星の畜生めが……。ジョニー、返り討ちにしてやるぞ！』
「おいおい、殺しちゃダメだぜ？」
　やれやれなキリン・ライトニングに、オックス・ファイアは肩を突き出し、ラグビー選手のように突っ込んでいく。中々の型にはまった美しさだ。
　ロックマンは絶叫した。このままでは目に見えている。
「ダメだゴン太！　一人で突っ込んじゃ！」

「あの、バカ……！」

ソウル・レイダーはすぐに助太刀をしようと切り込んだ。
いよいよキリン・ライトニングとの戦いの始まりだ。
かつての圧倒的だった実力差はどこまで埋められたのだろうか。
それは試合の結果が簡潔に語ってくれるだろう。

キリン・ライトニングにオックス・ファイアが迫る。そんな時キリン・ライトニングは閃いた。ちょうど人差し指宣言をしていたので、人差し指を立てていた。

「なるほど！　人の墓と書いて、儚い……これいかに！！」

『バカ！　ジョニー！　油断するな！　それに！　人の！　夢と書いて！　儚いんだ！！』

「ああ、そうだった！」

大忙しの二人だった。しかし抜かりはない。くるりと身を翻しスター気取りのステップを披露する。オックス・　ファイアは肩透かしを食らった。そして優しくオックス・ファイアの動きを律する。以前の名騎手は、とんでもなく闘牛士としての資質も持っていた。

キリン・ライトニングはオックス・ファイアの後頭部を捉えている。あてがった人差し指から僅かな電流を脳味噌に流し込むのだ。

オックス・ファイアはキリン・ライトニングに忠誠を誓うように膝を突いて痙攣し始めた。太い四肢がキュッと脇をしめ、股間を閉じ、筋肉を縮こませる。その幼子（おさなご）のように小刻みに悶（もだ）えているさまは、いささか滑稽だった。

しかしキリン・ライトニングは真剣な表情でオックス・ファイアと向かい合っていた。

「あ、ゴ……ガアア」

『ブロ……シビレルぅう』
「ああ、コイツは思った通りの考えなしだったな……」
キリン・ライトニングはオックス・ファイアを殺してしまわないように細心の注意を払っている。脳へのダメージはデリケートな気配りが必要なのだから。
言わんこっちゃなかった。
「ゴン太ぁああ！」
ロックマンは叫んだ。力を込めた踏み込みで、一気に距離を詰める。友情に熱いロックマンは一瞬でキリン・ライトニングの懐に入った。
するとソウル・レイダーと同時に斬りかかる事が可能となる。二人はソードを振りかぶった。
「星河！」
「うん！！」
「クロス・レイ・アスタリスク！」高低混ざった、耳触りが良い重なった声だ。交差する星の軌跡がキリン・ライトニングを引き裂く。息の合った完ぺきなコンビネーションだった。
『な、なんとー！　キリン・ライトニングさんがバラバラ殺人事件だ！　これはすごく大変な事態だぞぉー？！』
実況のお姉さんは悲鳴を上げた。観客は歓喜を上げた。しかしキリン・ライトニングは一つ相手を騙していたのだ。
よって引き裂かれたキリン・ライトニングはそのまま霧散してしまう。ロックマン達は囮を掴まされたのだ。

電気のお仕置きを免れ、調子に乗りすぎたオックス・ファイアはがっくりと倒れ込んだ。

そうなると、ロックマンの背後にキリン・ライトニングがいたのだ。これは早すぎる。背中がチリチリと眩しく点滅する。指先が灯っているはずだ。

「甘いぜ！　周波数変換を応用すれば可視周波数を残して幻影も見せることが可能だぜ？！」

ロックマンは驚いて感動した。

「それはスゴイ！」

「だが！」

その時キリン・ライトニングは背後から気配を感じたし、声も聞こえたと思った。なので「だが！」という、その一言は印象に残った。どうやら、少年たちは素晴らしくなったらしいようだ。

ソウル・レイダーはさらにキリン・ライトニングの背後を取っていたのだ。

「それを見切れない俺たちじゃない！」

「おお？！」

「レベッカさんに叩きこまれた俺達は、以前のようにはいかない！　喰らえデトネイト・アスタリスク！」

『ジョニー！！』

ソウル・レイダーは完ぺきに裏をかいた。それは揺るぎない。その体勢から剣を振れば相手に強烈な一撃をお見舞いできる。

キリン・ライトニングもそれは感じた。しかし体を走る電気信号を操り、無意識的に指先を反射させた。脊髄反射をさらに単純化し

て、高速化させたもので指先に電気の剣を作った。
ただキリン・ライトニングのプライドの手前、人差し指のみに剣が作られた。それでソウル・レイダーを迎え撃つ。

「ライトニング・フィンガーソード！！」

ソウル・レイダーは電撃の剣に爆発する剣術をお見舞いした。あろうことか痺れが伝わる。
これはソウル・レイダーの弱点だ。体が光り輝けば、当然悲鳴も盛りを見せる。

「ぐあ！　ぁあああああ！！」
「ミライ君！　くそお！　グレイバスター！！」

キリン・ライトニングは鋭敏な反応をもって軽く光弾の攻撃を交わした。その調子でショックノートも、レールスナイプも、ジェネレイトスイングも無効化したのだった。
キリン・ライトニングは凄まじいスピードを持っている。ハープ・ノートは驚倒した。スコープ・スナイパーもへたり込む。

「は、早い！」
「ありゃ、反則だわ」

キリン・ライトニングは人差し指をクルクルと回しながら上機嫌だ。ソウル・レイダーは片膝を突いて再認識した。体へのダメージも本物だ。相手は本物だ。

「さすがに強い……！」

キリン・ライトニングはニコニコして、ソウル・レイダーに手を

差し延ばした。「立てるか？」という優しさだ。塩を送るくせに甘過ぎる。

舌打ちをして、ソウル・レイダーは後ろに下がって身を引いた。

「ハハハ。お前らスゴイな！　ちょっと見ない間に強くなりすぎだろ？」

『だが、ジョニー。赤い牛は瞬殺だったぞ……』

「まあな。しかし、だが。俺に攻撃を当てるのは至難の業じゃあない！　スピードだけなら、俺は誰にも負けない自信があるんだ」

キリン・ライトニングはそう言いながら胸を張った。緊張している様子でロックマン達はキリン・ライトニングから注意を怠らない。ふざけているようで、とんでもなく絶対的な存在だと、彼を認識しているからだ。

キリン・ライトニングの口は良く回った。

「俺はな、キリンと電波変換する事によって、電撃を操れる！」

『おい、ジョニー。ベラベラと……』

「まあまあ……」

キリン・ライトニングは余裕の態度でキリンを宥めて、聞く耳をもたない。その匂わせる気配は壮絶だ。ロックマン達は息を呑んだ。本当にキリン・ライトニングは人差し指しか使わない。それを突き立て強調するのだ。

「俺の能力は『ライトニング・インパルス』だ！　つまり、電撃の反射神経ということになる」

『ら、ライトニングインパルスぅ？　それは何なんでしょうかキリン・ライトニングさん？』

司会実況のお姉さんは興味しんしんだ。キリン・ライトニングは会場の放送席を見上げて、イケているスマイルを送った。

「ううーん。ベッピンさんに求められちゃ断るわけにはいかないなあ！」

『おい、ジョニー！』

「人間の反射速度は脳味噌からの電気信号の伝達だ！　つまり体の末端に行くほど遅いってことだ！　俺はそれを全身の電気信号を操ることで克服した。　考える前に体が最善の選択を選ぶ電気信号を常に流している！」

キリン・ライトニングはお姉さんを指差した。お姉さんはドキッとした。

「つまり！　俺は最速の電波人間という事だ！」

『おい！　ジョニー油断するな！！』

キリンは叫んだ。お姉さんに夢中のキリン・ライトニングの背後をソウル・レイダーが捉えている。

「デトネイト……」

「うん！　普通に素晴らしい判断だ！」

キリン・ライトニングは大きく頷いた。しかし、攻撃はきちんと避ける。ソウル・レイダーは空振りして闘技場のリングを砕いただけだった。

そんな最速なキリン・ライトニングはいつの間にかチームの女性陣の背後に張り付いていた。その肩をぽんと優しく叩いて、ちょいワル親父を気取る。キリン・ライトニングが本気だったら、その時点で勝負ありだ。

グリット・メトリーは肝を冷やした。まるで人質を取られている構図なのだ。迂闊に動いたら、ベタな展開が予想された。

「ああ……！　二人とも」

『うわあ！　ミソラにキミドリが大ピンチだよ！！　どうしよう夜太郎ぅ……』

「ひえええぇ」

スコープ・スナイパーはぞっとした。痴漢も羨むベストポジションを取られている。痴漢も真っ青な早技だった。

「おうおう、可愛いお嬢さん達だ。いい肉付きしてやがる」

そう言いながら、肩を揉んだ。電撃がピリピリとちょうど心地よい感じだった。しかしそこで、受け入れては勝負事にはならない。ハープ・ノートは刺すような目でキリン・ライトニングを睨んだ。乙女を背後から、撫でまわすなんて許せないのだ。しかしスコープ・スナイパーは、その百戦錬磨の電気マッサージに少しうっとりしていた。

「ヒドイ！　お父さんでもないのに、女の子の肩を揉むなんて！」

『おい、ジョニー！　いい加減にしろ！』

「いいじゃねえか！　ケツを触っている訳じゃあるまいし！」

『ジョニーめ、タダのスケベ親父だぞ！』

「う、うるせえ！」

キリン・ライトニングは少ししゅんと肩を落とした。だがすぐに気を取り直し、二人にそっとささやくように呼び掛ける。

「なあ、お嬢ちゃん達。ちょっとゲームをしねえか？」

「ゲ、ゲーム？」
「言っとくけどねオジサン？　私達、今日はソロでプレイするって決めてるのよ！　お呼びじゃないってことなんです！」
「おいおい、つれないこと言うなよ。このままやっても勝負は見えている面白くないだろう？」

ハープ・ノートは不快感を露わにした。キリン・ライトニングはくすりとした。ちっぽけで可愛らしい強がりと捉えているのだ。

「な、舐めないでよ！」
「ハハハ。いやいや、俺達には勝てない勝てない！　だって、ＡＭ星の三大勢力『王宮』『研究賢者』『懲罰司法』の一つを司る、その『懲罰司法』のリーダーが相手なんだぞ？」

ＡＭ星には三大権力がある。
科学研究を推し進める研究分野。その代表的存在である『ＡＭ星の三賢者』
そして星の象徴であり人々を導く王族。その唯一にして最も貴い（たっと）存在『ＡＭ女王』
最後に、罪を取り締まる正義の司法機関。その長にして断罪者『ＡＭ星の裁判長』

ジョニーの相棒であるキリンは、その『ＡＭ星の裁判長』であった。

「ＡＭ星の『断罪者キリン』と聞けば、知っている奴もいるんじゃないのか？」

ハープはその言葉に恐れ戦いた。ＦＭ星人である彼女にとって、その名は有名だったのだ。絶望を植え付けるには、ほど良い名声だ

った。

『何てこと……！　アナタがあの三賢者に並び評される、紫電の断罪者ですって……？！』

『お前は……確かＦＭ星のハーフか……』

キリンはハーフの耳元で殺意を露わにした。星の仇を目の前に、いきり立っているキリンだ。キリン・ライトニングが殺伐とした空気を何とか宥める。キリンは舌打ちをして何とか思いとどまった。

『フン……にっくきＦＭ星人。今すぐ殺してやりたいが、ここはジョニーの意志を尊重してやろう……』

「ああ、悪いな。キリン……」

『で、でも。なんでアナタ程の人がＷＷＲなんかに……』

『答える義務はないな……』

「は、ハーフ。どうしたの？　このオジサン、もしかしてとんでもないの？」

『……ええ』

ハーフは押し黙った。そこにスコープが血の気が引いたように答えた。生きている心地はしていないようだ。普段お姉さん的役割のスコープもキミドリにすがってしまう。

『ま、マズいよう。相手があのキリンなんて勝ち目がないじゃない……！　キミドリィ……どうしよう？』

「そ、そんな事言われましても……。私は常に、スコープ任せだったしねえ。

あは！　どうしようもないと思うぜ！」

スコープ・スナイパーはにっこりとVサインを作った。しかしこのままでは勝利はないだろう。

キリン・ライトニングはアットホームな雰囲気に和んだ。しかしロックマンとソウル・レイダー、グリット・メトリーは気が気でない。

「ハハハハッ！　お前ら面白いな。

まあ、ようやく俺達の最強さ加減に気が付いたようだな。ではゲームをしようか？　なあに、ルールは簡単さ」

スコープ・スナイパーは、なんとか戦闘を免れそうな流れにホッと胸を撫でおろした。

しかしその安息に便乗して、キリン・ライトニングは彼女たち二人の背後から俊敏に消えた。気配はなく、電撃の香りだけが漂っていた。

「え？」

ハープ・ノートが呆けた。それとほぼ同時にロックマンも「え？」と呆けた。キリン・ライトニングは「大丈夫……」と小さくささやいた。ロックマンのか細い首には例の人差しの剣が。

「ルールは簡単。俺の質問に答えるだけだ！

答える事が出来たら、俺は甘んじて君たちの攻撃を受けてあげよう。しかし答える事が出来なかったら、このロックマンはどうなるか分かるかな？」

『おい、ジョニー！』

「まあまあ……気長にいこうぜ」

そう言い、あてがうのは、鋭く瞬く雷の短剣だ。しかし切っ先はロックマンの喉笛を切り取るに不便はしない。キリン・ライトニングが人差し指を添えるだけでそういう展開になる。

スコープ・スナイパーは不満だった。ライフルを構えて、キリン・ライトニングの頭を照準に入れた。しかしキリン・ライトニングがロックマンの顎に腕を食いこませ、持ち上げて自身の頭を隠した。

「あ、汚ね！」

スコープ・スナイパーは下唇を噛みしめた。「スバルーん泣かないでー」と手を振ってみる。だが、ロックマンは何とも言えない表情で強張っていた。キリン・ライトニングが目を細めてしめじめと威圧してきた。

「汚くなくとも何ともないぜ。勝負はデスマッチって言ってたろ？お前達は俺の気まぐれで存在しているんだ……！」

「くそ……！　みんな、僕に構わず、攻撃してくれ！」

ロックマンはとにかくそれっぽい台詞を吐いた。たまに読む漫画雑誌を思い返せば、それくらいしか言えない。間違っても「僕の命を助ける為に、みんなは敵の言う事を聞いてください」とは言えなかった。

どちらが本心かと言われれば、どちらも本心だった。

「やめとけ……」

キリン・ライトニングは人差し指をちょちょいと上下に振らせた。振り切られて零れた雷が少し地面に落ちる。するとそれが、麒麟となって分裂増殖した。数は四体。余ることなくソウル・レイダー達

を見張っている。
何としてでもキリン・ライトニングはわがままを貫くつもりだ。

「さあ、始めよう！」
『おおーと！　キリン・ライトニングさんが勝手にゲームを始めてしまったぞ！　これは何たる気まぐれかー！』

お姉さんの野次にキリン・ライトニングは耳も貸さずにロックマンにささやいた。ロックマンは「ああ、命を掴まれている」と感じた。耳に付く強者の声に喉を乾かせ、背中に君臨する高い壁に、分厚い隔たりを実感した。
キリン・ライトニングはロックマンを捕縛して離さない。

「さあ、星河スバル君。楽しくお話しをしようじゃないか……！！」

ロックマンは喉をゴクリと鳴らして、それを返事とした。そうやって、胃からむせび上がってくる悪寒と、胸から突き上げる号哭（ごうこく）の衝動を閉じ込めたのだ。

ゲームを始めるにあたり、キリン・ライトニングは数日前の事を思い返していた。
場所は鳳凰の間。あの時キリン・ライトニングは言いつけられていたのだ。絶対の命令を、フェニックス・リボンの口は言い放っていた。キリン・ライトニングは耳を澄ませて聞いていたが、耳を疑った。

「フフ。流石だよお前は。

……では次の命令だ。トーナメントを勝ち抜いてきたチームの相手をしてもらおうじゃないか……いいか、殺すなよ？」

「殺すな……？　それは象さんにアリを踏みつぶすなって言ってるって事だ！　つまりバーゲンセールのおばちゃんにもみくちゃにされて興奮し、歓喜を上げろという事だ！」

「ジョニーよ真面目に聞け。お前には、ミソラ達を相手にしてもらう」

「何……それはお前の娘で大好きな家族の？！　あのミソラか？！」

『ジョニー……、ウルサイ』

キリンは怒った。

『ホホホ。大変ねキリンも。こんな変人とパートナー同士になって……』

『ハッ、ありがたきお言葉！』

キリンはＡＭ女王に頭が上がらない。

『ホホホ。アナタもそんなに変わらないわね……』

『ははーっ。勿体なき、お言葉』

頭も回らないようだ。フェニックス・リボンはうんざりして続けた。咳払いで、たゆんだ場を調整する。

「コホン。

いいか、ジョニー。試合の時、ミソラ達から出来るだけ情報を奪って来い。レギオンやきずなクルーについてだ。俺達は地球の現状を把握しなければならない」

キリン・ライトニングは呆れた様子だ。面倒で回りくどくて下ら

ないと思った様子。

「ああ？　なんで俺が……。
それにそんな回りくどいことしなくても、直接ＷＡＸＡに乗り込めばいいじゃねえか？　お前なら楽勝だろ？」

しかしフェニックス・リボンの方こそ呆れかえっている。

「分かってないな。部下の情報によれば、地球にレベッカさんが帰ってきているそうだ」

フェニックス・リボンの言葉に、キリン・ライトニングは我が身のように喜んだ。心が優しいのだろう。

「なんだって？　そいつは良かった！　俺を含めて二人は生きているってことかっ」
「おい、喜ぶのは良いがジョニー。お前なら分かるだろう？　その意味が」

フェニックス・リボンは知っている。レベッカはきずなクルーという事を。
つまりジョニーと同じ能力が備わっている。それを考慮した彼は、ジョニーによくよく考えさせた。キリン・ライトニングは大真面目にそれを受けた。

「……なるほど。たしかに、きずなクルー相手取るのは得策じゃないな。
探知されて面倒なことになる。俺がそうだからな。……それにレベッカさんは怖いからな」
「まあ、そういう事だ。俺の過去を知る人とは出来るだけ会いたく

ない」
「だな」

フェニックス・リボンは玉座に深く掛け込んで何かを憂慮していた。彼の顔をロウソクがぼんやりと照らした。薄暗い中で憂い顔が出てくる。

「……どうやらレギオン達が暗躍しているようだ。惑星リギアで戦闘があったらしい。
今は少しでも情報が欲しいな……。それにカンナを生き返らせる邪魔をされたらかなわないからな」
「インフィニットか……？」

キリン・ライトニングは、インフィニットの事をよく思っていない。正体不明で、何故かオーパーツの情報を提供するいけ好かない人物という認識だった。
フェニックス・リボンにとっても、似たようなものなのだろう。

「ああ。アイツは俺たちを泳がせて何か企んでいる……イヤな予感がするんだ」

するとキリン・ライトニングはようやく折れた。どうやら、上司の命令を遂行しなければならないという認識はあるようだ。
鳳凰の間を立ち去ろうと、くるりと返った。

「ふう。わかった、わかったよ。俺が試合のついでにミソラ達とお喋りしてきてやるよ！」
「頼んだ。情報を手に入れたら、あとはお前の好きにしていい」
「じゃあ、ちょっと稽古でもつけてやるかな！」
「おい、ジョニー。ふざけるな……！　さっさと負かせて俺達の邪

魔をさせないようにしろ！
　ミソラの意志を尊重したとはいえ、俺としては今の状況を良くは思っていないのだから」
「はあ、なんだかな。なあ……ワタル……お前、ホントにそれでいいのか？　まあ、お互いの契約があるのは分かるが……」
　キリン・ライトニングはフェニックスとワタルに目をやった。何とも言えないまどろっこしさと、自分の微妙な立場を考えて溜め息を吐く。
「……いいんだ。俺の目的はただ一つしかない。
……ミソラ達に俺の周りをうろつかれたくないんだ。引導を渡してやれ」
「……分かった。俺の好きなようにするぜ。全力でアイツらと向かい合ってやる。俺とお前にとって最善の選択をするよ」
「ああ、そうしてくれ……信じているぞ、ジョニー」
「へっ。お前が綺麗なお姉さんだったら、もっとやる気が出るんだけどな」
『ジョニー……ウルサイ』

『コレは一体どういう事だー？！　キリン・ライトニングさんがボロボロの雑巾だー！！』

司会のお姉さんが絶叫してしまっている。キリン・ライトニングはロックマンにもたれかかるようにして、やっと立っていた。

質問攻めというやつだ。

「じゃあ……最後の質問だ」

『おい、ジョニー。お前いい加減に……』

キリンを無視してキリン・ライトニングは質問を続けた。

「惑星リギアで何があった……？」

キリン・ライトニングの鬼気迫る形相に切迫し、ハープ・ノートは真っ青になった。キリン・ライトニングはバカ正直に攻撃を受けている。

「もう……やめようよ。こんなの全然、普通じゃないよ」

「じゃあ、スバル君はどうなってもいいのか……？」

キリン・ライトニングは指先を煌めかせた。弱っていてもまだまだ、そこは譲れないようだ。

「いいから答えろ。これも戦いだ……！」

全員が押し黙るので、それにはグリット・メトリーが答えた。表情は胸糞が悪そうで、周りの見守っているかのような空気に恐る恐る一歩前に出た。

「それは、星の輝く夜のことでした……」

そしてしばらく経って、キリン・ライトニングはひざから崩れ落ちた。アーマーは砕かれて小さな青い破片が散々（さんざん）していた。キリン・ライトニングの傷跡には迷った跡が大いに見られた。小さく引っ掻いたような傷跡の上から、覚悟を決めた大きな十字架。彼はやっとの思いで手を付いて、背中を隆起させている。呼吸を深くし、ボロボロの体を何とか整えようとしている。しかしその背中は笑っていた。

「はあ……はあ……。ナルホドな。お前達は必死に戦ってここまで来たってワケか……」

ロックマンは、すぐにキリン・ライトニングから脱出した。キリン・ライトニングはもう追ってはこない。ロックマンは後味が悪かった。このゲームに乗った自分にも嫌気がさしている。

「何で……こんな真似を？」

ロックマンはキリン・ライトニングに問いかけた。警戒はしてい

るが、もう緊張はしていなかった。キリン・ライトニングは顔を上げて笑った。

「いや……俺ってバカだからさ、こうやってお前達と語り合うしかなかったんだ……」

『ふざけるな、ジョニー！　お前はバカか？　バカだ！　他にやりようがあったろう？　このクソたわけが！！』

キリン・ライトニングは耳が痛いながらも、よたよたと立ち上がった。膝が笑っている様子が分かる。そのおかげか表情も清々しい。うやむやだったものが晴れたようだ。

「ありがとうよ。お前たちのおかげで知りたい事が知れた。そうか大吾さん達は生きているんだな……。良かった。それにお前たちもよくここまで生き残った。危険な所なのによく頑張ったな……」

そしてキリン・ライトニングは呼吸を整えた。穏やかに清流のような、周波数を身にまとっていく。それは激しい電撃には違いないが、洗練されている。明々として、煌めく閃光の挙動一つ一つに意味が感じられた。それは見守る、優しさ暖かい言葉だ。

キリン・ライトニングはオーパーツを二つ生成させた。オールトランスとグングニールだ。体を纏っていた電撃が、槍にも伸びてそれは光り輝く人型の切り絵となった。そのシルエットは西洋の騎士だ。

「じゃあ、こっからが本番だ。言っておくが、今の俺は試合開始当初より強い……！　迷いがない分、厄介だぜ？」

『ジョニー。キサマ……！　最初っからこの子たちを育てるつもりだったな……？』

キリンは苛立ちを通り越して、怒りも忘れ去って、ただただジョニーに気後れしていた。口を挟むだけ無駄で、それを相棒に選んだ自分も大概だと思った。

司会のお姉さんも驚いたように呆気に取られていた。

『な、なんと！　キリン・ライトニングさんがいまさら本気になりました！　ボロボロにされてから本気とはスロースターターここに極まれりです！！　おじいちゃんビックリ！』

「さあ、かかってこい！　いいぜ、全員でも？　電波人間の戦いってヤツを教えてやるからよ！」

そこにスコープ・スナイパーが恐る恐る前に出た。しっかりとライフルは構えて物怖じはしていないようだ。

「じゃあ、お言葉に甘えて……」

『今なら、私達でも何とかなるかもだね！』

「フフフ、おぬしも悪よのう……。スコープ……」

『えへ！　そうかもね！』

「なるほど……、女子高校生くらいのお嬢ちゃんが相手か……まあ第一回戦にはちょうどいいな。こいよ、可愛がってやるぜ？」

『ジョニーめ……』

「じゃあ！　スコープ・スナイパー行きまーす！」

スコープ・スナイパーはライフルを構えて発射した。弾丸は螺旋回転し、一直線で敵を射止める。しかし、敵の残影を貫いただけだった。

「あれ、オジサン薄くない？」

『いや、アレ残像だからね！！』

「マジ？」
『マジ！！』

キリン・ライトニングは一瞬でスコープ・スナイパーの背後を取った。弱っているのに、これは驚いた。
軌跡として、血の飛沫が滴っていたので、キリン・ライトニングの侵入経路は判然としたものだった。弧を描いて、後ろに着けたようだ。「まあ、早すぎて気が付いても後の祭りか！」と思い直し、スコープ・スナイパーは悪戯に舌を出した。キリン・ライトニングはささやいた。

「これは、可視周波数をその場に落とし込む事によって見せる幻覚だ。周波数を一気に爆発させ、密度のある周波数をその場に残す。そして自身は超スピードでその場を脱出する。
子供だましだが相手を欺くには十分な技だ。フレクリアの応用技だよ」
「なるほど。勉強になりました！」
「じゃあ、そういう事で！」

キリン・ライトニングは槍でスコープ・スナイパーの頭を小突いた。体に電気が流れてすぐに意識を失ってしまう。
キリン・ライトニングは痺れる笑顔を見せてくれた。

「美容、健康に血流促進に効果のあるツボに電気を流した！　起き上がったキミはさらにかわいいのだ！」

スコープ・スナイパーは寝言でありがとう、と言った。
どういたしまして、と言ったキリン・ライトニングはロックマン達に向き直った。

「ほらかかってこい！　遠慮はいらねえ！　俺もお前たちの胸を借りるつもりだからな」
「この人……！　全然まだまだ強すぎる！」
ロックマンは、その強烈な印象に反吐が出そうだ。ソウル・レイダーも認識を改めて、キリン・ライトニングの危険度を上方修正した。
「ふん……舐めてくれたものだが、さすがの強さだ」
「なるほど！　アナタは……なるほどね！　加齢による、筋肉の収縮が動きを妨げていますね！　そして少し漂う加齢臭に、相手の居場所を教えてしまっている！
んん！　これはいけません！」
『ジョニー……、楽しそうだな……』
キリン・ライトニングはグリット・メトリーを地面に叩き伏せると槍で突きまわしている。グリット・メトリーは下手に動けず成されるがままだ。
そして同じチームメイトの、ロックマンとソウル・レイダー、ハープ・ノートはキリン・ライトニングの麒麟の相手で精一杯だった。グリット・メトリーは涙が出そうだ。
司会のお姉さんもキリン・ライトニングの凄まじさに感激していた。
『す、スゴイです！　キリン・ライトニングさんは重傷をものともしません！　少年のような颯爽とした姿です！　彼にとっては複雑

骨折も絆創膏で直してしまうのでしょう！』
「いや、それは流石にない！」
『マジですか？』
「ああ、マジでマジだ！」

キリン・ライトニングは司会のお姉さんといちゃつきながらも、しっかりとグリット・メトリーの自由を奪っていた。喉元を突き立てられれば怖くて動けない。

「くっ……、南国さんが言っていた通りだ。何だかんだと、この人は凄まじい高みから相手を呑みこんでいく……！」

しかしキリン・ライトニングはその評価を受けながらも、外野からの野次に胸を痛めていた。「死ねボケー！」「真面目に戦え！」「お姉さんといちゃつくなあ！」キリン・ライトニングの少年の心には酷く傷つく言葉だった。

「くっ、言いたい放題言いやがって……！」
『ジョニー……』

どこか悲しそうなキリンに、キリン・ライトニングは肩を持ち上げて、すとんと落として見せる。

「ああ、分かっている」

キリン・ライトニングはグリット・メトリーを見下ろした。

「とにかくだ。アナタは、年齢からか、体の反射神経が鈍っている。それに加齢臭はいただけません。『お父さんのパンツとワタシの下着を一緒に洗わないでよ！』と言われて泣きを見ますからね……！」

「以前、妻に指摘されました」
『夜太郎、泣かないで！』
「そんな、アナタには俺が電気の刺激を流して、脳を活性化させてあげましょう。反射神経はもとより、アナタの体にたまった老廃物を根こそぎ電気分解できますから！」
「お、おお……！」
『夜太郎、良かったね！』

キリン・ライトニングはくすりと笑った。

「アナタには、少年少女たちを導く保護者的な役割があります。頑張ってください。
そして今までよく導いてくれましたね。感謝しています……！
アナタに戦う力を与えて本当に良かった。ありがとう」

そして夜太郎を片付けたキリン・ライトニングは残った三人を望んだ。どうやらまだ麒麟の餌にはなっていないらしい。特にロックマンと、ソウル・レイダーの成長は目覚ましかった。
司会のお姉さんもクライマックスにテンションを底上げした。観客たちも艶やかな声に乗せられて発狂した。

『の、残ったのは……。

「歌って踊れて戦えて！　そして可愛くにこやかにぃ！　今日もアナタのハートをわしづかみぃ！　ハープ・ノート！」
「地球？　そんなの救うためにあるんだよ！　僕はヒーロー！　僕のおかげで地球は回ってるゥウ！　ロックマン！」

「サテラポリスから捕まえに行きます。罪を憎んで人を憎まず！　アナタの心に包囲網！　ソウル・レイダー！」

……の三人です！　これは分からなくなりました！　キリン・ライトニングさん、いかがなさいましょうか？』

お姉さんの熱くて胸やけが起きそうな問いかけに、キリン・ライトニングは親指を立てて快活に答えた。

「当然！　全力で！　戦うだけだ！　こぉい！　少年少女たち！」

『ジョニー……いい加減にしろ！　相手は敵だ！　おふざけが過ぎる！　こんな試合内容をボス達が知ったら失望する……！』

「うるさい！　最初に言ったろ！　俺達はあの子たちと敵対するつもりはないと！　俺は俺の全身全霊をもってあの子たちに立ちふさがる！　乗り越えるべき壁として！」

『……まったく、なんてパートナーだ！！　ふん、勝手にするがいいさ・・・・！！』

「ありがとう！」

そしてロックマン達は麒麟を何とか返り討ちにし、キリン・ライトニングに相対した。

凛として、すらりと延びたギターを携える。ハープ・ノートは生唾を飲んだ。

「まったく、熱い試合相手だね！」

『行くわよミソラ！　スバルくん！　ミライ君！！』

「了解！」

「……いいだろう」

ｔｒａｓｈ―２３：進化する才能

ソウル・レイダーは、すぐに二人に命令を下す。三人ともキリン・ライトニングを視界から外さずにそれぞれの意向を確認し合った。

「相手は、高速で動き、電撃を操る！　絶対に背後を取られるな！　三人で死角をカバーし合って攻めるぞ！」

「それに周波数変換の技術も、相手は僕たちの数倍はレベルが上だ！」

「ってことは、力を合わせないと、勝負にならない感じだね！」

キリン・ライトニングはその様子を見て、思考した。目線を横に流して、実質の戦力を計算する。三対一でも焦りはないようだ。今までの立ち振る舞いから、そうとしか言えない。

（俺は……ダメージを受けているとはいえ、シンクロ率を３０００％以上維持している。戦闘周波数も一〇〇〇万メガヘルツを越えている……。

対して、ヤツらは……、ミソラは……ダメだな。話にならない……。スバル君もシンクロ率はまあまあだが、戦闘周波数がうまく引き出せていない……。

気をつけなければいけないのは、ソウル・レイダーだけか……。アイツは俺に近い戦闘レベルだな……）

『ジョニー！　よそ見をするな！』

キリンの言葉にジョニーは顔を上げた。するとどうだろう。顔面にロックマンが張りつくくらいの、程ないところにいたではないか。

「仰天だな！　良い瞬発力だ！」

「バトルカード、ソード！」

ロックマンが左腕で払う。キリン・ライトニングは右腕で受け止める。血飛沫のような電撃と、青く冷涼なものが弾ける。キリン・ライトニングはやれやれと、ロックマンの忙しい左腕を観察していた。

右、右、左……と、ある一定の癖があるようだ。

「次は左！」

キリン・ライトニングは暗緑色の槍を突き出し、ロックマンの剣をへし折った。ロックマンは堪らず一歩後退。「くっ……！　なんて戦闘センス！」そう簡単に表敬する。腰を曲げて、中折れるロックマンの背後から人影が素早く飛び出した。松の葉のように俊敏で、鋭敏で尖った印象だ。

「へえへえ。すごいねえ」

キリン・ライトニングは槍から電撃を飛ばした。手加減か、水鉄砲のようにちょろちょろと弱い光が向かう。人影はそれを軽くかわし、キリン・ライトニングに切り込む。キリン・ライトニングはバックステップでかわす。何でもない奇襲だ。戦い慣れれば、ただのルーチンワークでしかない。

トンッと、かかとが地面を弾きあげた時だった。

「マシンガンストリング！」

首筋にツンとした圧迫感だ。血が上って、そのまま下がらないようでぼんやりとしたのぼせが襲う。
首に鉄線が巻きついていた。キリン・ライトニングは後ろに目をやる。ハープ・ノートがしたり顔でギターを構えていた。硬く張りつめた弦が、竿から首へと伝わっている。ハープ・ノートがクイッとギターを引っ張るとキリン・ライトニングの視界は血圧で狭くなった。

「なるほど。レベッカさん直伝ってワケね……」
『ジョニー！　だから油断するなと……』
「周波数を消す！　それくらいワタシでも出来ます！」
「クソ！　まったくシュールな画だぜ！」
『ジョニー！』
「問題はないさ……」

キリン・ライトニングはさらにバックステップをした。張った弦がたゆんだ。すると慌ててハープ・ノートが音波を飛ばした。

「ショックノート！」
「いやいや……。あらよ！　そらよっと！」

キリン・ライトニングは腰の入った声を張り上げた。すると背中に電気の膜が張ったように広がった。
程なくして音波と衝突すると、それが眩しく煌めく。音が雷鳴の如く凄まじい。爆心地は白く、色を弾き飛ばし視界を奪い、音の壁が聴覚を奪う。

「ミソラちゃん！」
「頭と耳が！」

「え？　なに？！」
「スタンショックか？」

会場のゴロツキ達も、普段暗い所にいるせいで目を潰されていた。涙を流して、嗚咽の大合唱だ。鼻水を付け加えれば、卒業式のようだ。

『ぐわああ！　なんて事でしょう！　ピカッとしたらグワっときました！　お姉さんも大ピンチ！』
「雷と言えば！　ピカッと来てゴロっと来るのが印象的だよな！　俺の得意技！　イナビカリだ！」

キリン・ライトニングは得意げにしてくるりと身を回した。そのついでに、ランスを使って首のリードを引きちぎる。
そのままハープ・ノートのそばに付き添い、延髄を叩いた。

「あっ……！」
『ああ、ミソラ……！　またこのパターン？！　もうヤんなっちゃう！！』
「悪いね！」

しかしだ。キリン・ライトニングの予想以上のスピードで成長している二人がいる。周波数を探ること、レベッカに口を酸っぱくして言われてたことだ。

「眼つぶしは効かん！」
「ボクも！」
（そうか……！　コイツら……前よりも、電波変換をマスターしてきている……！）

キリン・ライトニングはゆっくりとハープ・ノートを地面にお姫様抱っこで下ろすと、肩をピクリと動かした。反射的に、転がっていた槍を足で蹴り上げ、敵の気配へ飛ばす。気配は消えて、背後に二つの気配だ。その刹那「やっぱりだ……！」とキリン・ライトニングは確信した。

キリン・ライトニングはレベッカにうんざりした。そして感動した。流石は鬼の上司だけある。あれだけか弱かった少年たちをここまで導いたのだ。

「クロス・レイ・アスタリスク！！」ロックマンとソウル・レイダーのコンビネーション技だ。

それでも注意は怠らない。しかしキリン・ライトニングの警戒網と戦闘経験を若いセンスが上回った。

キリン・ライトニングは神速の反射神経で、何とか背中の傷をわき腹に逸らす事にした。しかし確定的な失態を誤魔化すには至らない。あの質問攻めのせいで反応が鈍っていたのだ。アバラのいくつかを鋭く切り込まれた。

キリン・ライトニングはミソラを丁重に扱った事で油断したのではない。それを見越した上で、少年二人を取り扱う事ができると思っていた。しかし出来なかったというだけの事だ。

「ク……！　効くなあ……っ」

『ジョニー！　お前は何をやっている！』

「いや……まあ、そうだよ！　ゴメンよ」

キリン・ライトニングはバランスを崩したように、膝から倒れ込むとそのままの勢いで転がった。体を丸太のようにして受け身を取りながら、何とか距離を取る。その時、得物の槍を手元から離してしまう。

「ははは……やるね。……お前ら！」

アバラに響いたのか、笑顔の伴わない、キリン・ライトニングのお褒めの言葉だった。

しかし、つれないロックマンとソウル・レイダーは剣を突き出した。キリン・ライトニングは頼もしい二人に面白おかしくてたまらない。「このまま、やられるのも良いかもな」と思ったのも事実だ。

しかし立ち上がって、最後まで子供たちの壁であろうとする。

「遊びすぎたな……キリン・ライトニング！」

「ジョニーさん！　このまま勝たせてもらいます！」

二人の息の合いようがここに極まったようだ。

それに対し、キリン・ライトニングは強がるわけでもなく、言い切った。

「いいや。限界のちょうどスレスレのところで、お前達と向かい合わなきゃ意味がないと思っていたんだ。だが、お前たちのその目……イイゼ」

キリン・ライトニングは腕を八の字に伸ばして、咳き込みながらオーパーツを再度、生成した。

「この前とは逆で俺を倒して強くなってみろ！　お前達は俺を乗り越える事でさらに強くなる」

「ふん……いいだろう。サテラポリスの天才と呼ばれたアナタを越えてみせる！」

「ボクもアナタをきずなクルーとして……立ちふさがる父さんへの壁として乗り越えてみせる！」

「行くぞ！　星河！」
「うん！！」

そして二人はキリン・ライトニングに切り込んだ。彼らの下に落ちる影が伸びきってしまうような、そのスピードだ。
キリン・ライトニングは視線を左右に振る。そうして両側からバラけて接近する二人を視界に入れて、対策を練る。どうやら左手から来るソウル・レイダーの方がスピードが早いようだ。

（まったく、どうにもマズイな……。下半身から下が思うように動きゃしない……）

キリン・ライトニングは肩を少し回してみた。鈍痛が首筋からわき腹辺りを殴打した。
苦痛に顔を歪めれば、目の前にソウル・レイダーが現れる。節操無く、攻撃の準備に入っている。

（左手からのイナビカリで牽制……）
「デトネイト・アスタリスク！」
「イナビカリ！」

素早くキリン・ライトニングは左腕を上げた。槍の切っ先に雷の小ドームが出来あがる。
しかしそこに、勢いのあるスバルの声だった。ロックマンは足を止めていた。左腕のハンターを持ち上げている。二人同時はただのポーズだったようだ。

「バトルカード、ジキアラシ！」

さらに素早く反応したキリン・ライトニングだ。彼はもう片方の

槍をロックマンに投げた。左のイナビカリは、ジキアラシによって滅茶苦茶にかきまぜられて使い物にならない。

「避けろ！　星河！！」ソウル・レイダーは叫んだ。そのように、よそ見をしながらだったが、強(したた)かに敵を捉えていた。キリン・ライトニングも百も承知だが、もう仕方がない。左腕に力を込めて迎え入れた。

「捉えた！」

その時、ソウル・レイダーはキリン・ライトニングの左腕を切りつけた。ざりっとした筋子の食感に筋肉を感じ、ソウル・レイダーはそのまま振り抜いた。

得意技の前に、キリン・ライトニングの左腕は爆発してしまう。これで目に見えた手傷を負ってしまった。

ただし、それでもキリン・ライトニングは落ち着いていた。ブランコのように左腕を遊ばせながら、空高く跳び上がった。とんだ食わせ者だ。

ロックマンは追撃だ。

「ジョニーさん！　周波数を操るのもいいけど、基本はやっぱりバトルカードだよ！」

ロックマンはバトルカードを読み込ませた。今が正念場と感じている。キリン・ライトニングもロックマンと同じ事を想到(そうとう)していた。

「バトルカード、メテオ・オブ・クリムゾン！！」

キリン・ライトニングは下から突き上げる揚力に、鬣(たてがみ)を逆立たせた。眼下に紅い海が広がる。グレイバスターから毒々しい色の炎の塊が放射されていた。熱風が会場の空気を持ち上げる。

灼熱がキリン・ライトニングのオーパーツを焼き食らった。

「たしかに……基本はバトルカードだな……」

キリン・ライトニングは右手で顎を揉んだ。確かに華やかで、如何にもな強者を騙るより堅実かもしれない。

キリンはさっきからブラブラやるせない左腕に気が散らされている。

『おい、お前。左腕が折れてるじゃないか……！』

「はん。そりゃあな。あんな剣技を受けたら、さすがに折れる。くっついてるだけマシだろうよ」

キリン・ライトニングは鼻で笑い飛ばし、雷雲を作り出して孫悟空の真似事を始める。

「さてとぉっ！　クライマックスな感じかな！」

『誰が予想したでしょうか？　チームダブルプリティの少年二人組がキリン・ライトニングさんを押してます！　押して押しておしまくっています！

キリン・ライトニングさんはもう右腕しか満足に使えないぞ！』

「はは、お姉さんの手前ちょっとカッコ悪いし恥ずかしいな！」

『ジョニー！　今は、はにかんでいる場合じゃない！』

「そうだなキリン！　ちょっと、はにかんでみただけだ！」

キリン・ライトニングは雷雲に乗りながら次の手を考えた。左腕は折れている。下半身はもうまともに動かない。質問攻めのおかげで体全体が重苦しい。コンディションで言えば、普段の一割程度だ。明らかなパフォーマンスの低下が予測できた。

しかしキリン・ライトニングは、それでも最善の手を模索できる。この程度の状況は、宇宙飛行士をしていればいくらでも経験できた。だから、彼は考える。

ジョニーは天才だ。天才は勝敗にこだわらない。勝負の内容にこだわる。大局を見据えているからだ。

キリン・ライトニングは、その恵まれた才の全てを使って、少年たちに進むべく道を示すだけだった。

キリン・ライトニングは雲から身を乗り出してロックマン達に語りかけた。

「おい、少年二人組！　正直、俺はもう限界だ……！」

『何を言っているジョニー！』
「まあまあ」
おかんむりの相棒を宥めて、キリン・ライトニングは続けた。
「ここらでお前らが質問に答えてくれた、お礼をしたい」
そこに司会のお姉さんが口を挟んだ。
『なんだ、なんだ！　キリン・ライトニングさんがまた変な事を言い始めたぞ。さんざんボコボコにされておいてお礼がしたいと言っているぞ！
きっと違う意味でのお礼参りなんでしょう！』
その言葉に柄の悪い観客たちは盛り上がった。観客席から、食べ物の電波や飲み物の電波が投げ込まれる。
キリン・ライトニングは行儀の悪い観客達に雷の矢を投げ込むと、お姉さんにビシリと言った。
「いーや。そういう意味じゃない。美しいお姉さんにはそういう発想は似合わねえなあ」
『あ、ありがとうです……』
『おい、ジョニー！　シャキッとしろ！』
「ああ、悪い悪い。さて、と。
おーい少年たち！　さっき言った通りお礼をさせてくれ」
ロックマンは雷雲を見上げた。上空がゴロゴロと鳴っていて、いかんとし難い危険な匂いが漂っている。ソウル・レイダーは何とかキリン・ライトニングを撃ち落とす算段を踏んでいた。

「お礼……ですか？」
「ふん、いまさらお礼も何もないだろう……」
「イヤイヤ。結構耳よりな情報だぜ？　で何だと言うと……、もし俺に勝ったらお前達に一つ、素敵な秘密を教えてやる」

ソウル・レイダーは訝しげにキリン・ライトニングを見上げた。

「何か企んでいる……？」
「いや、何も企んじゃいない……。強いて言えば、俺はお前たちの敵じゃないと言う事だ」
「前にも聞いたよ……」
「でもミライ君。どっちにしてもジョニーさんは倒さないと！」
「ああ、そうだとも」

キリン・ライトニングは唯一まともな右腕を天に掲げた。すると呼応するかのようにキリン・ライトニングに雷が落ちてくるのだ。突き破られた天井からは、ノイズがなだれ込み、青い雷にまとわりついていく。
それが色彩に富んだ雷の竜を作った。キリン・ライトニングは右腕に化け物を宿らせたのだ。

「じゃあ、そういう事だ！　今から、俺の全身全霊の必殺技をぶちかます！　その中を生き残ってみせな！」

そしてキリン・ライトニングはおもむろにキリンに呼び掛けた。

「という事でキリン。お前は下でおねんねしているミソラ達を安全な所に運べ！」

堅物のキリンは、露骨に不満を表した。しかしキリン・ライトニ

ングが、ミソラを無言で指差す。可愛い寝顔だ。それを殺すような人間は人でなしだ。

『ちっ……仕方がないな……。あんな小娘、私は興味がないが……』

「何だかんだ言うけど優しいって信じてるぜ、キリン！」

『か、勘違いするなよ……！　私はなあ……！』

キリン・ライトニングはそのまま右腕の竜に集中し始めた。雷の走りが葉脈のように伸び、それが竜の鬣となる。これはただの雷ではない。秀麗さに身を包んだ雷神の使いである。

それを仰いだキリンは渋々と少年少女のお守りに回るしかなかった。

「さあ、終わらせよう！　少年たち！」

伏し目にキリン・ライトニングは大音声（だいおんじょう）を上げた。雷が瞬けば、その表情は神の気配だ。

『ミライ様……敵の右腕に凄まじい周波数が……！』

「言われなくても分かっている」

「きずなクルーここに極まれり……って感じだね」

『なんとぅぉお！　キリン・ライトニングさんが雷の竜を召喚したぞ！　何だあれは！　キリンなのに竜！　これいかに！

しかしとにかく危険です！　観客の皆さまはお逃げになってください！！』

「お姉さんよ！　俺はキリンはキリンでも伝説上の生き物の麒麟だ！　麒麟は竜の一種だぜ！　これは動物園じゃ収まらないよ！」

ソウル・レイダーは上空で暴れる竜を見て敵ながら感銘を受けた。天才とはよく言ったものだ。麒麟とはよく言ったものだ。

「天才とは聞いていたが、いよいよまさに麒麟児と言ったところか……！」

「さあ、サテラポリスのエースと大吾船長の息子よ！　俺が見せた周波数変換術と、お前達が今までの戦いで得た全てを出し、俺の全霊を乗り越えろ！！」

「ミライ君！　来る！」

「ああ、生き残るぞ！　ラストコンタクトだ！」

「さあ、乗り越えろ！　少年たち！！

俺の編み出した究極技だ！　ライトニング・ドラゴン・ハール！！」

雷の竜がうねり、その宝玉のような瞳でロックマンとソウル・レイダーを捉えた。

雷雲の上のキリン・ライトニングは手を振りおろした。指先から投擲されたように、麒麟の竜が襲いかかる。雷鳴のごとく鳴き声が空気を震わせる。空間一杯までに伸びた雷電は闘技会場を埋め尽くす、これでは逃げ場がない。

だがそれでも諦める前に足掻いておきたい。必死になれば、神の喉笛に噛みつくことだって出来るかもしれない。それを可能にするだけの戦いを越えてきた。

ソウル・レイダーはロックマンに叫び声を上げた。

「星河、フレクバーストだ！」

「わかった！」

ソウル・レイダーは上空を見上げた。渦巻いているのが恐らく雷だろう、巨大過ぎてオーロラが降って来ているようにしか見えない。ソウル・レイダーは周波数を爆発させた。限界を越えるまでだ。

「レイダー！　レベルBだ！」
『了解！　レベルB！！』

ソウル　・レイダーは青色に輝いてロックマンに呼び掛けた。

「俺が先陣を切って飛び上がる。俺に続け！」
「でも、それじゃミライ君があの雷の塊に……！」
「ああ、俺が壁になる……！　大丈夫だ。俺は人一倍丈夫だからな！」

雷竜が目の前まで迫ってきた。目と鼻の先、牙が届きそうだ。ソウル・レイダーは飛び上がった。雷の壁を突き破り、ロックマンの道を開けてやる。

「とべ！　星河！！」
「……分かった！！」

ロックマンもソウル・レイダーの後に続いた。目の前に広がる雷の中は眩しかった。しかしソウル・レイダーが雷を切り裂きながら先陣を切ってくれたので、体へのダメージはそれほどでもない。
しかしソウル・レイダーは大層な悲鳴を上げていた。しかしそれでも勢いのまま上空に跳び上がる。

「ぐあ……ぁあああ！！」
『ミライ様！　フレームの機構へ凄まじい負荷が……！　レッドゾーン越えます！』
「越えてもやるしかない！　俺達の辿りつく先は限界の向うにある！　俺は星河に道を作る！」

ソウル・レイダーは体を引き裂かれ、脳味噌を素手で解かされ、

味噌汁にされる感覚に襲われる。だが、それでもロックマンの道を作るため、切り裂き進んだ。
それでいてかつ、キリン・ライトニングが見せた周波数変換術を思いだしながら集中を途切れさせない。

（雷でもコレは電磁気の塊……周波数の流れを読むんだ……）

ソウル・レイダーは戦いの中で見せられた、キリン・ライトニングの周波数の捌き方を脳内で反復再生させた。それを自分の秘められた才能に重ねる。

「星河！　雷の周波数に自分の周波数をひっかけろ！」
「わ、わかってる。ロッククライミングの感覚だね……。雷の僅かな取っ手を探す……」

二人は極限状態の中、すり減らした感覚をさらに薄皮一枚に留めて、雷と自分を近しくする。周波数の僅かな綻びに、自分の周波数をひっかけて体を上空に持ち上げる。
理屈は簡単だが、体現は難関だ。周波数の相違幅が大き過ぎれば弾かれ、小さ過ぎれば雷に飲み込まれる。ギリギリを見定める必要がある。キリン・ライトニングのようにだ。彼が戦いを通じて教えようとした事を、実現させなければ先はない。

「うおおおお！」
「わあああああ！」

そして二人は見つけた。僅かな周波数のささくれを、雷に親しみを込めて自分の周波数を寄り添わせた。
その手ごたえに任せ、力一杯に竜の食道を蹴りあげる。背骨を貫き、勇猛な尾びれを叩いた。ソウル・レイダーは全身全霊を欠けて

剣を抜き去った。二本の青い剣は、目覚めの夜空のように青白く瞬く。

「デトネイト・ブルー・アスタリスク！！」

青い星が竜の末尾で爆発した。うねりざわめく電気の茨道の向こうに、キリンライトニングの雷雲が覗いているのがやっと確認できた。

「ミライ君！」

「ああ、行け！　星河！！　突きぬけろ！！」

力を使い果たしたソウル・レイダーは魂の残りをロックマンにさささげた。落下していくソウル・レイダー。そしてロックマンとすれ違い、交わった。

空に続く道は作った。これで最後の仕上げだ。ソウル・レイダーはその時、二本の剣をロックマンの方に差し出した。

「お前を勝利の高みに送り届ける」

ロックマンの足裏を剣の腹が支えた。ソウル・レイダーは残った気持ちとシンクロ率、そして友情を送り込む。ロックマンを明るく穿った空へと打ち上げる。

ソウル・レイダーはそのまま役目を終えて落ちていった。煌めく青い星をロックマンに託して。

「う……あ……！」

ソウル・レイダーから友情と魂を貰ったロックマンは、目をノイズの空に目一杯さらした。口は半びらきで、微小なアンバーノイズ

が入り込む。
体の底から、熱波に突き上げられる感覚に囚われていくのだった。
ソウル・レイダーの周波数がロックマンの下腹部から込み上げて、心臓を包み、喉を焼いて、頭に広がる感覚だ。
この懐かしくて温かい感覚には覚えがあった。スバルの頭の中で宇宙が広がった。
（こ、この感覚は……！）

ロックマンは、キリン・ライトニングの竜を突き破りノイズウェーブの空へ舞い上がった。いや、正確にはロックマンだった何者かだ。彼は宇宙とスバルの記録の戦士だ。長い黒髪をたなびかせ、鋭い眼力だ。白い装甲に身を包ませ、ソウル・レイダーと同じ白騎士となる。

それが現実によみがえり、キリン・ライトニングの目の前に現れたのだ。

「な……！　何だあれは！！」

『ジョ、ジョニー！　あの戦闘周波数は……！』

キリン・ライトニングは目を疑った。戦っていた相手にはいなかったはずの電波人間が、はるか高みから見下ろしていたからだ。琥珀色のさざ波を背景に、オッドアイが燃えて揺れる。まるでその目には二つの人間が息づいているようだ。

そしてその力は、神の一振りのように圧倒的だった。

「アクセス、ラーニングレギオン……！　ロックマン・エクスレイド……！！」

「せ、戦闘周波数……１５００万メガヘルツだと……？」

『ジョニー！　シンクロ率計測不能だ！』

「へへ、俺はとんだ化け物を呼び起こしちまったみたいだな。予想以上だ……！」

ロックマンはキリン・ライトニングに向かって、手をかざした。見下ろす瞳は冷たく正気の沙汰ではないと感じさせた。その白い手の平には、圧倒的な周波数が集まっていく。キリン・ライトニングが呼び出した竜を吸い尽くし、一つの光剣を作り出した。煌めくサザンクロスだ。キリン・ライトニングは戦慄した。

あの戦闘周波数は、キリン・ライトニングが万全の状態であっても油断できないものだ。ましてや今のダメージを受け過ぎた状態では、命の保証はできなかった。

『ジョニーくるぞ！　ヤツは正気じゃない！！』

「くそ！　大吾さんの息子だと聞いてたが、コイツはとんでもないな！　死んじまうぜこりゃあ……！」

ロックマンは小さく口を開いた。まるで言霊のような言葉の重みだ。その一音一音がキリン・ライトニングという存在にのしかかる。そしてさらに見透かして、ジョニーという一存在までをも脅かした。

「ＡＦＢ（アカフォビヌグバン）……」

キリンは、危機感を覚えて、ジョニーを助けようと躍起になる。

『ジョニー！　オーパーツだ！！　有りっ丈だ』

「へ！　コイツはヤベエ！　オーパーツ生成！！

ベルセルクプレート！

ダイノヘッド！

フウマシュリケン！

エアトライデント！

グングニール！

オールトランス！

トールハンマー！」

キリン・ライトニングは持てる全てのオーパーツを繰り出して生成した。しかしこれでも命に吹きすさぶ寒風を止められない。

まるでキリン・ライトニングはネズミにでもなった気分だ。生きているうちに、このような感覚に陥るとは夢にも思わなかった。憧れた強者ゆえの酔い痴れだったが、いざ直面すると愚かだったと反省しなければならなかった。

「ＫＦＢ（キズヲォビヌグバン）……！」

先に仕掛けたのはキリン・ライトニングだった。

「セブン・ゴッド・ブレイク！！」

七色の光線がロックマンに襲いかかる。しかしロックマンはそれを貧相なものとしか認識していない。

「……サザン・クロス・カリバー」

一閃した。キリン・ライトニングの視界をサザンクロスで切り裂かれた。胸を十字で切らされ神への祈りを強要させられる。

キリン・ライトニングの雷雲がこと切れ、キリン・ライトニングは地面に落ちて行った。

司会のお姉さんは何が起きたか、分からない。

『え？　こ、これは……？　一体……。あのキリン・ライトニングさんが地面を転がっています。何故か動きません。ロックマンのような彼が空中を浮いています。

これはどういう状況なのでしょうか……？』

キリン・ライトニングは胸に手を当てて浅く呼吸をしている。まだ息はあるようだ。観客たちも固唾を呑んで見守っていた。あのキリン・ライトニングが終わる、と予期しての沈黙だろう。

ロックマンは先の司会の女性の言葉で、宙を浮いていると表現されていた。しかしそれは違う。ロックマンは今、微細な電磁波の余波に乗っているだけなのだ。ウェーブロードというには、電磁波の密度が小さすぎるが、今のロックマンにはそれを捉える事が容易だった。先のキリンドラゴンを攻略した時と同じ手はずである。

それを軽々と息をするようにしているのだから恐ろしい。

ロックマンはキリン・ライトニングに止めを刺そうと地上に向かって歩き始める。空中をしっかりと踏みしめていく。今の彼には虚空でさえも、しっかりとした踏みごたえを感じていることだろう。

「殺すのか……？　いいぜ、好きにしろ。それをされて文句を言える立場と状況じゃない……」

キリン・ライトニングはロックマンに言ってやった。命乞いをするほど野暮でもない。

『ジョニー……？　立て！　立つんだ！　お前……！　こんなところで終わっていいはずがないだろう？』

「キリン……逃げろ。馬鹿な俺に、最後まで付き合う義理はねえぜ……」

『悲劇のヒロインを気取るな！　立て！　立ち上がれ！　この子を

人殺しにする気か？　そんな事はワタシが許さないぞ？！』
「ちっ……。そう言われたらこのまま死ぬのがかっこ悪く思うじゃねえか……！」

キリン・ライトニングはゴロンと一回転して何とか逃げる事を試みる。しかしロックマンが一歩前に出ればその差は無くなった。

「まあ、そりゃそうか……」
『ジョニー立て！　立つんだ！』
「うるせえな。立てりゃ、とっくに立ってるってんだよ……」
「アカシャフォースビッグバン……！」

ロックマンがクロスカリバーを再び作り出した。キリン・ライトニングはいよいよか、と思った。

「いいぜ。派手に決めてくれよ……。どうせ俺には帰る場所もない……。もうきずなクルーなんて過去の栄光に囚われなくて済むんだ」

キリン・ライトニングはすっかりその気だった。
ロックマンがクロスカリバーを振りかぶった。ロックマンの目は冷たい。しかし命を大切にしたい心優しい相棒がロックマンを止めた。左腕からの必死の抵抗だ。

『いけません、スバル様！　もう動けない敵に止めを加えては！アナタは命を奪う側になってはいけない！！』
「ト、トラ……？」
「そういうこと……だぜ？」

背中をトンと叩く手の平。柔らかくて女のものだ。

「キミ……ド」
「中年からもアドバイスです。罪を憎んで人を憎まず！」
「夜太……」
「俺は何にも活躍してないけど言わせてくれ。えっとお前……誰だ？！」

スコープ・スナイパーがオックス・ファイアの頭をスパパンと叩いた。空っぽのいい音が鳴る。

「あぁ……」
「スバル君……。もういいの。もう……いいんだよ？」
「ミソ……」
「星河、もうやめろ。俺達は勝った。その後に血を流す道理はない……」
「ミラ……イくん」

ロックマンはとうとう動けなくなった。オックス・ファイアを除いて全員がロックマンを繋ぎ止め始めたからだ。ロックマンは手を握られただけで動けなくなった。ミソラがキュッと握りしめてくる。それだけでロックマンの最強を通り超えた武力の塊はまったく機能しなくなった。

その友情と恋心が、殺伐としたアカシックレコードの宇宙から、スバルを取り戻すきっかけになる。

「スバル君！　目を覚ましてよぅ……！」

ハープ・ノートはロックマンの背中に抱きついた。

「あ……」

ハープ・ノートの柔らかい頬が首筋に、ひたりとくっついて離れずに人肌の温かさを伝える。健気な指先が冷めた胸を取り押さえた。とくんとくん、とした乙女の鼓動を背中で受け止めた。とても勇気が要ったのだろう、背中越しでも、それは胸に響いた。

「ミソラちゃん……」

ロックマンは次第に思いだして、スバル自身を取り戻し始めた。領域を支配されていたスバルの宇宙を、ミソラの甘酸っぱさで支配した。するとスバルは徐々に正気を取り戻したのだった。

ついでに心のやましさも取り戻してしまった。アイドルにぴったりとくっつかれた状態だ。柔らかくていい匂いがして、ドキドキして、もう興奮していた。「あれ、僕。これって変態の思考だぞ」そう思ってしまうと、ロックマンは普通の少年に逆戻りした。

どうやら丸く治まったようだ。そして自覚を取り戻したロックマンは飛び上がった。

「うわぁああ！　ミ、ミソラちゃあん！　うわあああん！　僕はサイテーだぁあ！」

ロックマンは腰を抜かして、芋虫のように辺りを転がりまわった。そしてキリン・ライトニングの隣で落ち着きを取り戻した様子。

「よお。スバル君、なかなかどうして感動的じゃないか。まあ最後のはいただけないけどな」

キリン・ライトニングはニヤリとした。ロックマンは顔を真っ赤にしてそっぽを向いた。布団があれば初々しい新婚夫婦の微妙な春の気配を演出できるだろう。

「あ、すみませんジョニーさん。お見苦しいところを……」

そんな様子からは一件落着が臭ってきた。なので司会のお姉さんの出番だ。

『まあ、良く分からない感じですが。キリン・ライトニングさんの、俺はやりきったぞー！　という表情から勝手に判断しますね！　勝者！　チームダブルプリティー！　おめでとう！　二次トーナメント進出です！！』

「へえ、なるほどな。おまえらやっぱり面白いわ」

キリン・ライトニングはスパゲッティをすすりながら笑っていた。骨折していて、足も不自由なのになぜかスパゲッティを召しあがっている元きずなクルーだった。ロックマンは、何とも言えない気分になった。

なぜかキリン・ライトニングとロックマン達は、ウラスクエアのレストランで食事を取っていたのだ。ゴン太はろくに活躍していないのに人一倍がっついていた。

ただロックマンはなぜこのような状況になったのか、良く分からなかった。

しかし嫌なもので、悪意を見せないキリン・ライトニングに、不安と親しみを覚え始めていたのも嘘ではなかった。

不安というのは、敵との慣れ合いによる、意識の低下だ。これでは他の皆に示しが付かない。

そして親しみを覚えるというのは、ジョニーの気さくな人柄が原因だった。さんざん格好つけて最強ぶっていたのに、親戚のおじさんのようにご飯を奢(おご)ってくれるという体たらくだったのだ。なのでゴン太は心を許してしまったのである。

ロックマンの考えていた展開と少し違っていた。理想としては、試合終了後に「今度会うときは、宇宙の命運を賭けてだ！」「いい試合でした。こんな形で会っていなければ、きっと素敵なお友達に……」とか何とか言って、格好良く別れたかった。

「で、なぜ俺がお前達と楽しくランチタイムをしているかというと……」

キリン・ライトニングはフォークをくるりと回した。

「まったく、迷惑だ……」

ソウル・レイダーはムスッとして、窓からノイズだらけの風景を眺めていた。汚い景観に心は塞がれる。キリン・ライトニングは苦笑した。

「つれないねえ」

「ジョニーさん！　おかわり頼んでもいいか？」

ゴン太はなかなかに自由だ。

「ああ、食え食え！」懐の広いキリン・ライトニングは、ウェイトレスの美人ウィザードを呼びつけた。ヒッチハイクでもするのかというくらいの大袈裟なアクションだ。

何だかんだで大判振る舞いのキリン・ライトニングであった。しかしゴン太のがめつさは目についた。

「……たださあ、キミは試合開始と同時にノックアウトだったのに、スゴイ食べるねえ」

『まったくだ……。そもそもなんで私がこんな奴らと一緒に、コーヒーブレイクをしなければならないのだ……！』

「まあそんなにカリカリするなってキリンよ。何だかんだで、お前のノリの良さは俺が知ってるんだからさ」

『ふざけるな！　私は誇り高き裁判長だ！　断罪者だ！　バカ者！』

「でた！　断罪者！！」

『く……！　キサマは、まったくなんて無礼な奴だ！』

とにかく話が進んでいないようだ。ロックマンは遠慮気味に挙手した。なにも意味も無くランチを共にするはずがない。

「あの……結局、話って言うのは……？」

キリン・ライトニングはフォークを、ロックマンに対してくるくると回し、思いだした様子。ロックマンは「行儀が悪いな……」と思ったが黙っておいた。

「そうそう。約束してただろう。お前らが俺に勝ったら、秘密を一つ教えてやるって」

「え？　スバルン？　なにその約束？　ワタシを差し置いてヒミツごとなんて……」

スコープ・スナイパーはなぜか嫉妬し始めた。相方のスコープはよしよしと頭を撫でてやった。

「まあ、キミドリさんはほっといて……。

とにかくその約束は本気だったって事ですね」

「まあな。おれだって嘘突くほど、人間が腐っちゃいないよ」

「なるほど……では、なんでも答えてくれるってことですね」

「何でもかー。あんまり言うと、ボスに怒られちゃうしな。それにキリンもうるさいし……」

『当たり前だ。そもそも一緒に食事って言う事があり得ん。気がたるんどるわ！』

「じゃあ、適当に質問してみよーよ。スバル君」

ハープ・ノートの笑顔にスバルは苦笑いを浮かべた。ハープ・ノ

ートの卓膳には空っぽのどんぶりが五つも。ロックマンは「まったく、食いしん坊だなあ。ミソラちゃんは」という感想を持ってしまった。

「まあ質問してみないと始まりませんしね」

『じゃあ聞いてみようか夜太郎！　レッツ質問タイム！』

そこにオックス・ファイアだ。ドリンクバーから帰って来て、そうそう空気を読めない。

「じゃあさ！　ジョニーさんって本当にコダマタウン七不思議のひとつに入っているのか？」

「ちょっと！　ゴン太君！　どうでもいい質問はしないでよう」

温厚なミソラも怒ってしまう。しかしキリン・ライトニングは快く答えた。

「ああ、それはケンが言っていた事だな。もちろん俺はコダマタウン七不思議のひとつに入っているとも。

しかも外伝であるジョニー英雄伝説っていうケンが作ったお話もあるんだぜ？」

「なるほどなー。やっぱりジョニーさんはすごいんだー！」

ゴン太は、胸のつっかえが取れたようで上機嫌だ。しかしロックマンはその逆だった。

「おい、ゴン太！　なんでどうでもいい質問しちゃうんだよ！　ジョニーさんも答えちゃうし……。

確か質問って一回きりでしたよね？」

「ああ、そうだ。だが、ただのどうでもいい情報なら、回数フリー

だぜ！」
『おいジョニー！　サービスが過ぎるぞ！！』
ゴン太は大喜びだ。
「じゃあさじゃあさ！　ジョニーさんって、マジでアキンドシティの歩行者天国で素っ裸になって、そこら辺のオッサンと大立ち回りを演じたのか？」
「ああ、もちろんだ。あの時は酒に酔っていて、気が付いたら裸でオッサンと揉みくちゃになっていた！」
「うわ、スゲーなソレ」
『ジョニー……』
そうして、しばし下らない雑談がゴン太とジョニーの間で交わされた。
数十分後。テーブルに並んだ空っぽの食器の量は、倍以上になっていた。
「はあ……はあ……さすがにさすがだぜ。ジョニーさん」
「君だってなかなかの探究心を持っているようだ。ゴン太少年」
『おい、ジョニー。もう、そろそろ帰らないとボスに怒られるぞ？』
「あのージョニーさん。そろそろ真面目に質問に答えてもらえませんか？」
ロックマンはもう疲れた。

「ああ、悪い。つい昔話に夢中になってなあ」

ジョニーは若かりし頃を思い出してどこか物憂げだった。ゴン太には格好良く映ったことだろう。

ミソラはひそひそとスバルに耳打ちした。

（スバル君……ほとんど下らない話だったよね？）

（それは言っちゃいけないよ。ミソラちゃん……）

「では、本題に入りましょうか……」

「あ、夜太郎さん。流石にまとめに来ましたね」

「ええ、スバル君。なにぶん歳をとると、座ってるだけでも結構辛いんですよ……。それに家に帰って家事の手伝いもしないといけないし」

「そうですね。母さんもいつも助かるって喜んでますよ」

「ハハハ、居候の身ですのでね。掃除、洗濯、炊事、買い物、ゴミ出し、ご近所とのおばさんとの情報交換くらいはしないとです……」

その辺でジョニーの堪忍袋の緒が切れた。

「おい！　何を楽しそうに話している！　俺を差し置くな！」

「あ、ジョニーさんが怒っている！」

「うるさいぞミソラ。置いてけぼりを食らうとやっぱり寂しいだろうっ」

『ジョニー……威張って言う事じゃないぞ……』

「ああ、そうだな。よし真面目モードになろう」

ジョニーはスパゲッティの皿を脇にどけると真剣な表情を浮かべた。手を組んで、口元を隠せば良い男だ。

「お前らと戦って一つ分かった事がある……」

いきなり意味深だ。ロックマンは顔を強張らせた。そういう真面目な雰囲気に何とか持っていきたい。

「それは……？」

キリン・ライトニングはおもむろに、フォークでテーブルにガリガリと何かを彫り始めた。ロックマンは「ああ……またそんな事を……」と思ったが黙っておいた。

どうやら戦闘周波数をグラフにしているようだ。

「スバル君とソウル・レイダーの彼は、まあ問題はないだろう。だがしかし、残りのメンバーが弱過ぎる。

いや……弱くはないんだろうが、ウラ世界を生き残るには少々心もとない」

ゴン太はしょんぼりとしてしまった。

「俺だって、一次トーナメントは大活躍で、ウラスクエアの一角ではファンクラブが出来るほどだったんだぜ」

スバルは怪しいフレーズに喉を鳴らした。

「ウラスクエアでファンクラブか……胸がドキドキするね」

「まあ、それは置いとけよ。とにかくだ。お前達は生き残るために、死ぬ気で特訓しなければならない」

ジョニーは凄んでみせたが、口元のケチャップで台無しだった。

しかしスバルはそれには突っ込まずに、真剣に受け取った。

「特訓ですか……。それは十分やったつもりなんですけどね。レベッカさんに電波変換術を教えてもらったり……」
「ああ、それでいいよ。だが、もっともっと自分の事を理解して特訓に取り組むことだな。例えば、自分の周波数の特徴を知っておくとかな」
「周波数の特徴を捉えるですって？」
ジョニーは頷いた。そして具体的な内容を話し出す。
「例えばだ。俺の場合は周波数を素早くいじくりまわすのは得意だが、フレクバーストのように爆発させるのは苦手だ。人間誰でも得手不得手がある。手先が器用だったり、足が速かったり、心が優しかったり、と色々だ。
……ま、そんな風に自分の特徴を捉えていけばいいってことだよ」
「なるほど……」
「そうすれば、非力な奴が殴り合いで巨漢を倒そうとする……なんて馬鹿な真似はしなくなる。
特訓にしても効率は段違いだ。
俺からのアドバイスだ。苦手なものをカバーするより得意なものを伸ばせ」
「じゃあ、ワタシの得意なことって何か分かります？」
ミソラだ。自分は役立たずの、足を引っ張るチームのお荷物という評価だったのでなんとかしたいはず。
ジョニーは何となくでミソラの周波数を見繕う。
「何となくだが、お前は戦闘に向いてないよ……」
ミソラは泣きそうになった。他に言いようはないのか、と言ってやりたかった。

「ひ、ひどい！　わ、私だって、がんばってたのに……！」
「まあ、そう悲観するな。お前の場合、何かこう……口では言えないホンワカした良く分からない特徴がある！」
「つ、つまり！　ようするに特徴がないってことですね……はあ……ふう……」
「ああ、ミソラちゃんが露骨に落ち込んでいる……！」

ミソラはプンプンしてご飯がよく進んだ。スバルは「スゴイなーミソラちゃんは」と感心した。

「まあまあ、ミソラ。あんまり怒るなよ。頑張れば報われる！
という訳で、俺帰るわ。そろそろボスが怒る頃だし」

なんとなくこの場に居合わせることに戸惑ったキリン・ライトニングだった。とりあえずもう逃げる。
ロックマンも別に引きとめたりしない。早く家に帰りたいのだ。
今日はあかねと一緒に買い物に行く予定だから。卵が安売りらしい。

「へえ、そうですか。気を付けて帰ってください」
「ああ、レベッカさんにヨロシク言っといてくれよ」

そしてジョニー達は会計を済ませると、ウラスクエアの広場に繰り出した。
そして最後の最後で、保護者的に注意事項をいって奮起させた。
本当に敵なのか？　と言いたいくらいだった。もっともジョニーにはそのつもりはないようだ。最初からそうだった。

「まあ、トーナメントについては色々あると思うが頑張れよ。俺みたいに、気まぐれ起こしたような戦いする奴もいるけど、ウラの住

民は基本凶暴だ。命がいくつあっても足りないと思え。
それに、俺に勝ったからと言って油断するなよ。状況次第じゃ、俺よりヤバい奴なんてウラの世界に五万といるからな」
「うええ！　キリン・ライトニングより強い電波人間なんているの？」
キミドリだ。これにはジョニーもすぐに頷いた。
「単純な戦闘能力なら俺以上の電波人間はそうはいないさ。しかしな、俺より勝利にどん欲で、欲望に忠実なヤツは沢山いる。そういうヤツこそ俺は恐れるべきだと思う」
「確かに。ジョニーさんが、最初から全力で僕たちを潰しにかかってたら絶対に勝てなかったよね！」
キミドリは納得したように頷いた。ジョニーは手を振ってその場を立ち去ろうとする。
「じゃあな。まあ頑張ってトーナメントを生き残れ」
そこにソウル・レイダーだ。キリン・ライトニングに剣を突き出して、待ったを掛ける。ご飯を奢ってもらってする挨拶の類ではない。
「おい、まて」
「なんだ。サテラポリスのエース君？」
両手を上げて降参したふりをする。
「肝心な質問をしていなかった……。答えてもらおうか？」
「ああ、まあ……いいぜ？　そういう約束だったもんな」

ソウル・レイダーは剣を収めた。そして鋭い質問を投げかける。赤いバイザーをくりぬいた眼光が、隠された真相を射ぬこうとしていた。

「お前達は、一体何者だ?」

キリン・ライトニングは息を呑んだ。単純明快で情報の核心を探れる質問だった。

少年とはいえ、こそばゆいような感覚。予想以上に、なかなか抜かりない人物だったようだ。キリン・ライトニングは吐息を流して沈黙した場をもたした。

「うーん。いい質問だ。俺達の正体か……ＷＷＲの正体……ねえ」

『おい、ジョニー。あまり滅多な事を言うなよ』

「ああ、分かってるよ。嘘にならない程度で、少年たちには考えてもらおう」

キリン・ライトニングはロックマン達に嘘偽りなく語った。

「俺達はお前達から見たらただの敵対組織に過ぎないだろうなあ……」

「まったくその通りだ。地球ではＷＷＲは最重要犯罪組織として認定されている」

「はは。そいつは光栄だ。だがな俺達はある目的を持って行動している。

ヒントをやろう……」

キリン・ライトニングは緊張を誘うかのような口調で言った。

「ＷＷＲの上級戦士はある一つの宇宙人達で構成されている。ヤツらはある一つの目的の為に何年もの間、宇宙のかなたで息をひそめ機会をうかがっていた。

……そして現れた戦いの女神。ヤツらは歓喜した。自分たちの星の誇り、象徴の復活……。そして俺達は集まった。蹂躙され、迫害され、追いやられた悔しさと憎しみを力に変えてな……。

このトーナメントだってな、兵力と、そして星の同志を集めるためにあると言ってもいい……」

「いったいどういう……」

ハープ・ノートは首を傾げた。

「俺から言えるのはここまでだ。

多分、もう手遅れだろう……。だが、お前たちなら、もしかするともしかするかもな……」

『ジョニー、それ以上はもういいだろう……』

「ああ、そうだな。もう俺達は止まらないんだから」

キリン・ライトニングはコクリと頷いた。

「じゃあ、俺はそろそろ帰るぜ。

いい試合だった。またな」

キリン・ライトニングはヒントをほのめかして、その場を立ち去った。飄々とした姿に、確かな意志と、揺らめく力を隠し通して。

そしてキリン・ライトニングとの激闘が終わったのだった。

もしかしたらキリン・ライトニングは気付いてほしかったのかもしれない。そして心のほんの小さな迷いから、ワタルを止めて欲しかったのかもしれない。

だが、そうであってもキリン・ライトニングは、ワタルと共に外れた道を進むしかない。

スバル達の、裏世界での戦いもいよいよ佳境を迎える。

ウォーロックは親友である。

それがスバルのウォーロックに対する評価である。そしてそれが、ウォーロックがスバルの心のより所である事の所以（ゆえん）である。

別れ際に確認し合った友情だ。時は経っても、それがある限り美しい間柄であると思っている。

しかしウォーロックはあまり自分の事を、スバルには話していなかった。ＦＭ星で育ったＡＭ星人である、と言うことしか告げていないのだ。スバルはそれ以外の、ウォーロックという存在の成り立ちを知らない。

ただスバルとしては、共に戦った数ヶ月。共に笑い合い、汗を流し、時にはふざけ合った、数百日。信頼を築いた数千時間。それだけで十分だった。

しかしウォーロックは、あらゆる意味で謎に包まれている。スバルを含め、ＦＭ星の同志たちにも自身の出生、成り立ち、自我形成の因（よ）りを語らなかった。いや、そうというよりも語れなかったのだ。

ウォーロックは自分の両親の顔さえも知らない。なぜ自分が『ウォーロック』という名前なのかも知らない。気付いたらＡＭ星人で、気付いたらＦＭ星人だった。

自分と言うものが分からないまま、勝手に自意識を形成し、それを『俺さま』とした。それが自分に対する人称だ。そして認識だ。

そんな可哀そうでもあるウォーロックは今、夢を見ている。命か

らがらのところで浮かんだ走馬燈のようなものだ。ウォーロックは無残に負けてしまっていたのだ。時空を駆ける黒鳥のような電波体に、滅茶苦茶にされていた。

そして、その夢はというと四年前のことだ。きずなクルーを逃がした時の出来事であった。ウォーロックの裏切りを受けたオックス達の追撃。その猛攻から、やっとのところで逃げ切り、死に掛けの彼が見た不思議な記録であった。

あの時のウォーロックも、今と同じように半死半生（はんしはんしょう）の状態であった。冷たい謎の空間で意識がたゆたっている。老人の声が耳に届いた。

《ロックや……ロックや……》

《なん……だ……お前？》

《時は満ちた。世界を救う時が来たのだ。ウォーロックよ》

《何言って……やがる？　なぜ俺の名前を……？》

《お前は自分の名前以外に、自分を知らないじゃろう……？》

《……お前……誰だ？》

《ワシの事はいい。お前は……ロックマンにならないといけない。戦いを司る最後のロックマン『ウォーロック』よ！》

《ロックマン……？》

《そうじゃ。おまえはロックマンじゃ。お前は大切な親友と共にロックマンになるのじゃ。ワ……シの……の……

戦え……そしてア……イツを止めろ……ロックマン！！》

そこからウォーロックの記憶はなくなった。気が付いたら三年の月日が経っており、傷も癒えていた。そんな不思議な体験だった。だからウォーロックは自分の事を極力話さなかった。

そうして程なく、地球に降り立った彼は、スバルと出会い、そして始まるのだった。

この夢の記録は曖昧でウォーロック自身、気にも留めていなかった。しかしこれがウォーロックにとっての、初めてのアクセスであった。極限状態からの偶発的な出来事だったのだ。

某日、宇宙空間。

黒い穴となったノイズウェーブの出口が繋ぐ、地球からほど近い宇宙のとある場所。月の明かりが、わずかに照らすほどの距離だ。小さな宇宙塵の輪郭がほんのりと浮かび上がる程度の光量。

そこにある黒いノイズの穴から一体のＡＭ星人の電波体が吐き出された。

その電波体の青かった装甲には、注目を辞させない。深い海溝の如く、いくつもの彫り刻まれた傷跡が生々しく穿(うが)っていた。彼の赤い瞳には生気が宿っていない。緑色の電波状のエネルギーが消えかけたロウソクのように揺らめいていた。

その惨状から青い電波体――そう、ウォーロックはデリート寸前までに痛めつけられている事が嫌でも分かった。このままでは命の危険があるだろう。

ウォーロックは先の戦いで敗れてしまったのだ。だからこうして宇宙を漂っている。プルト・キグナスの強さに歯が立たなかった。大吾を奪われた。命がけで戦っても、レギオンには届かなかった。

それほどの激しい戦いだったのだ。そしてその際、電波体同士の衝突による電波の綻び、すなわちノイズが発生した。それが突如、ノイズウェーブとなって宇宙を穿(うが)ち、彼をここまで運んできたのだろう。

そうなると、今この瞬間、宇宙空間へと放たれた彼、は長い間をノイズウェーブで漂っていたことになる。

ノイズウェーブはブラックホールサーバー程ではないにしても、電波体には過酷な環境だ。デリート寸前の傷を負っていたとなると、なおさらである。彼の身にいよいよ危機が訪れる。

「う……ぐあ……」

ウォーロックはうめいた。しかし動く事は出来なかった。限界も通り超えて、息をするので骨が折れた。

それからウォーロックはしばらく宇宙に身を任せて、なるがままに流されていた。

すると宇宙を流木のごとく漂うウォーロックに一筋の光が刺さる。細い光の線はウォーロックを捉えると一瞬、何事もなかったかのようにあさっての方向に逸れた。

だが、またすぐに光は彼を捉えた。光の発信者は宇宙で漂う彼を見つけたのだった。「ん？　あれは？」乗組員が彼を認識した。

ウォーロックを発見したのはＷＡＸＡの宇宙探査船だった。その宇宙探査船は月の衛星軌道上を定期巡回していたのだ。そして、そこに放たれたウォーロックが発見されたというわけだ。白い探査船はすぐに月面都市のＷＡＸＡ管制塔に連絡を取る。

『こちら、テロンボ。宇宙を探査中、負傷した電波体を発見しました。ＦＭ星人のようです』

《こちら管制塔。それは月で作業中のＦＭ星人かもしれんな。……少し待ってろ判断を仰ぐ》

返答を待ち、しばらくウォーロックの様子を見ていた宇宙探査船。

しばらくすると、どうやら管制室から回収の許可を貰ったらしく、ウォーロックにロボットアームを伸ばし始めた。そして、彼を回収した。

傷付いたウォーロックは月面都市にあるＷＡＸＡの施設で治療を受けることになるはずだ。ひとまず彼は助かったのだ。

しかし、そこに大吾の姿はなかった。ウォーロックと一緒に戦っていたはずの彼は、その場所にはいなかったのだ。

それから間もなく。

ウォーロックは緊急オペを受ける事になった。

「これは驚いたな……」

ＷＡＸＡの手術室で執刀医が息を飲んだ。

「彼はウォーロックではないか」

「す、スゴイですね……あの有名な……。で、でも一体どうして、こんなことに」

助手も、目を瞬かせた。ウォーロックと言えば有名だ。地球を救った英雄とされている。

「まあ、今はそんな事より……彼の命をとりとめよう」

「わかりました」

そして場所を移し、ウラウェーブエリア。暗黒の廃退したような

世界である。そこに設置されている犯罪者収容施設『ロストスクリーム』
そこは今、緊急事態だった。謎の電波体二体の襲撃を受けていたのだ。

「な、なんだ！　キサマらはぁ！」

銃声が鳴り響く。回転灯が赤く燃えている。侵入者だ。廊下のハッチから、目まぐるしくアストラル・ホープが繰り出してきた。どうやらアストラル・ホープの大量生産の体制も出来あがりつつあるようだ。
しかし敵の強さは彼らの数百倍以上だった。勝てる見込みは無い。高次元電磁波生命レギオンに勝てるわけがない。それが二体ともなると、なおさらだ。

「おい？　これって、シュンラン様の命令違反にならねえだろうな」
「大丈夫さ！　きずなクルーは約束通り届けたのだから。今は僕の因縁の始末を優先するよ！」

黒い鳥のような電波体は、アストラル・ホープをばっさばっさと薙ぎ払っていく。彼らの勢いが留まる気配は無い。。

「ま、今はそんなこと気にしてもしょうがねえか！」
「そういうことさ！」
「じゃあ楽しむかぁアー！」
「はっははあ！　まったく地球でもっとも凶悪な犯罪者を詰め込む犯罪施設と聞いたけど大したことないねえ！！」
「キシシ！　まったくだ」
「あまり殺し過ぎるなよ？」
「そいつは、ほとほと無理な相談だぜ？　なんたって俺様もレギオ

ンになっちまったんだからなあ！　スゲエ力だ！　笑いが止まらねエ！　キッシャッシャッシャ！！」

「やれやれ……だね！」

アストラル・ホープは時間を稼ぐことも出来なかった。犠牲者が増えるばかりだった。

そして犯罪者幽閉区画。じっとりとした空気。ここには稀代の犯罪者が集まる地球のゴミ溜め場である。ただのゴミではない、畜生以下の鬼畜と卑劣をハイブリットさせた異端者だ。ゴミはゴミでも危害のあるゴミだ。

侵入者二人は、そんな彼らに歩み寄る。電磁波で隔絶された檻は一見頑丈だ。だがレギオンの前では子供の玩具でしかない。

「やあ、会いに来たよ」

「キシシ……コイツが、ドクターキングの言う変態紳士とゴリラ野郎か……」

もっともな言い草に、紳士的な男性は帽子のツバから瞳を覗かせた。余裕気に独特の笑みを浮かべている。

「ンフフ、アナタ達は一体……？　ここに来るなんて物好きですね」

「お前ら誰だ！　舐めた口きいてんじゃねえぞ！　俺はモンジーカンパニーの社長様だぞ！」

体格の良い成り金風の男性は紳士とは対照的だった。挑戦的な態度で二人を威嚇した。まるで本物のゴリラのようだ。ゴン太のお父

さんと言ったところか。
次元の破壊者は小馬鹿にした態度だった。

「モンジー……？　何それ？　あいにく興味ないね」
「キシシ……まあつべこべ言わずに付いてきやがれ。俺達レギオンに協力しやがれ！」
「フフフ。イヤだとは……言わせないよ？」
「ヘエ、じゃあイヤだ！　と言ったら？」

五里はひきつった笑みを浮かべて、探りを入れた。五里とて、尋常ではない血の臭いを二人の電波体から感じ取ったはずだ。頬に冷や汗が伝う。現状、言いなりにならないと、命がいくつあっても足りないようだ。
そんな五里の生意気さに、リーダー格の電波体は黒い羽を広げ威嚇した。

「イヤだなんてつれない事は言わせない。ま、今すぐ死にたいなら、話は別だよ？　だが、悪い話じゃないとは思うけどなあ。僕たちにかかれば地球を乗っ取るなんて楽勝なんだからさ」
「へっ……夢のあるビジネスじゃねえか」
「ンフフ……ちょうど、この場所にも嫌気がさしていたところです……」
「キシシ……なら決まりだな」

その日、ロストスクリームから凶悪犯罪者が脱獄したのであった。
だがその失態は、ニュースにされず極秘事項として処理された。
スバル達に不穏な気配が差し迫っていく。

ｔｒａｓｈ―２８：掴み取った唯一の勝利

そして時は流れ、四日後の六月十七日月曜日。
スバルは二次トーナメント進出を決めていた。キリン・ライトニングとの激闘を乗り越えた。スバルはいまさらながらに実感していた。相手は雷の化身である最強の電波人間。よく勝てたな、というものが素直な感想だった。
そして本番の二次トーナメントは二週間後にある。いよいよ戦いも佳境に差しかかる。そうなれば学校が恋しくなるというわけだ。
ただ幸い、今日は学校に登校できる日だった。スバルは、ルナ達と久しぶりに一緒に学校へ登校していた。

「へえ、二次トーナメント進出したんだ！　おめでとうスバル君！」

ルナはスバルの手をとって祝福した。思い切って両手づかみの挑戦だ。ルナとしては、こういう時にアプローチしておかないと、ミソラに差をつけられると思っていた。ミソラは、危険をスバルと共にしている。それは圧倒的なアドバンテージだ。
おかげで髪の毛のセットに深夜から準備している始末だ。おかげで寝不足だ。頭がくらくらして、うららかな太陽が憎たらしい。

「ちょっと、委員長。今日はやけに素直だね……」

そんなルナの乙女心も虚しく、スバルは不信感を抱いてしまった。足取りも重くなる。ルナは「しまった！」と思った。

「え？　なんで？　私はいつも素直じゃない？　カワイイじゃない？」
「委員長！　自分で可愛いっていう女はたいてい可愛くないんだぜ！」
「おだまりゴン太！」
「うわあ、ゴン太君が！！」

キザマロは大慌てでゴン太に駆け寄った。ガキ大将は自販機のゴミ箱に頭を突っ込み、気絶してしまっている。本当に太陽がうららかだ。夏の先がけのように、暖かく照らしてくれる。ルナのちょっとした愛情表現でさえ、微笑ましく思えた。ゴン太は、がくがくと震えていた。

いつもの光景に、スバルは「平和だなあ……」と思った。

そして午前の授業を終えたころ。お昼の時間だ。ルナは興奮した様子で、スバルにまくし立てていた。

「ええ……ハイドが？　嘘でしょ？　誰かの悪戯だよそれは……。だってハイドは刑務所にいるんだもの」

ハイドというのは紳士的な悪人の事だ。過去に二度もルナをさらった、いわくつきの紳士である。そのおかげか、ルナは気味悪がっていた。必死にもなる訳だ。

「嘘じゃない！！　これは本当なの！！　ワタシの家の前にハイドの脚本っぽいものが落ちていたのよ！　かれこれ十回以上！」
『それは大変ですね。ね？　ですよね？　スバル様？』

「うん、大変だね……」

スバルは特に気にも留めていなかった。「ハイドが？　そんなバカな」という考えだ。しかしルナは面白くない。

「ちょっとぉ！　信じてないでしょ？　本当よ？　だって『ンフフ』って単語が百回以上も連なっていたもの！　ちょっと気味悪くない？」

『それは大変です！　ね？　ですよね？　スバル様？』

「さすがトラッシュは話が分かる！」

『私はレディには優しいのです！　紳士です！』

トラッシュはンフフと笑った。思いのほかハイドの顔に似ている。イケメンだ。ルナは眩しいイケメンに怯えた。にやけ顔が何ともいやらしい。

「ぞぞっ！　やめてよ！　ハイドの真似しないでよ！」

（二人ともうるさいな……。ゆっくり昼食くらい食べさせてよ……）

その時間、スバル達は昼食を取っているようだ。机をくっつけ合いっこして食事を楽しむ姿が見られる。ただルナは差し迫る危機に眉間にしわを寄せて、不安を浮かべていた。

ただゴン太は構わずに牛丼弁当を平らげる。当然、ルナのお叱りを受けた。

そこに突如だ。

「へえ。それは大変だねえ」

相槌を打ってくる少年の美声がスバルの耳をそっと撫でた。緑髪の女の子で通用する男の子が声の持ち主。

そして下品な笑いが後を追う。ツンツン頭で犯罪者で通用する凶悪な少年が割って入った。

「ギャハハ！　大変すぎだぜ！」

どうやら、机を囲むのは、ルナとスバル達だけではなかったようだ。大笑いを浮かべて宮廷料理を並べるジャックと、コンビニのおにぎりをぱくつくツカサがいたのだ。彼らはそれぞれルナの身を案じていた。

スバルはとうとう驚きを隠せない。何気なくスバル達のグループに入り込んでいた抜け目のなさに驚愕したのだ。

「うわ！　ジャックにツカサ君!!　いつの間に！　うわあ、今まで気付かなかった！」

「あ、スバル君。
実はね。いつの間にか転校してきたんだよ。ヨロシクね」

ツカサの乙女の笑顔にスバルは胸を打たれた。すぐにトラッシュに「ダメです！　スバル様」と怒られた。次はジャック。

「ま、俺も同じだ。三日前からツカサ達と一緒に転校してきたぜ。任務を共にする仲間としてヨロシクなスバル！」

ジャックの少しだけ凶悪な笑顔にスバルはドキリとした。隣でコーヴァスと言う犯罪者がニヤニヤして伊勢エビを頬張っていた。するとトラッシュが「このっ、キサマ！」と気でも触れたように叫びあげ、コーヴァスと喧嘩し始めた。コーヴァスは蛮声を返し、仲良く取っ組み合いだ。

スバルは、二人を置いといて状況を整理した。とりあえずいつの間にか転校生が来ていたのは驚いた。しかしこれは、一大イベント

を取りこぼす失態でもある。スバルは嘆いた。

「ごめんね。気付いてあげられなくて……。いつも通りのノリで昼食まで引っ張っちゃってゴメンね」

スバルはぺこりとした。

ツカサはくすりとして、牛乳パックを開いた。

「いえいえ。スバル君だって任務で忙しかったんだから、仕方がないよ。でも、このまま気付かれないんじゃないかと、ヒヤっとしたけどね」

「ハハハ、ツカサ。いくらスバルが鈍感だからってそりゃねえよ！　まあ、お昼時までスルーとは恐れ入ったけどな」

「フフフ。そうだね。ジャック君」

「いやー、二人が転校してきて嬉しいよ！　あまりにも、あっさり僕たちのグループに入り込んでいるから、気付くのが遅れてしまう程だったよ！」

スバルは満面の笑顔を浮かべた。ツカサとジャックも同じ表情を返した。スバルのクラスメイトがいつの間にか二人増えたのであった。

そしてさらに驚いたことが。そうだ。忘れてはいけない。鮮やかで果実のような、髪留めが印象的な黒髪美人が、視界の端っこでチラついていたのだ。しかしスバルは認識していなかった。普段の習慣とは怖いものだ。どうやら顔を赤くして辱めの様子。

「あの……ワタシも一緒にランチしてるんだけど……」

「う、うわあ！！」

スバルは驚いて席をひっくり返した。ゴン太の顔面が卵焼きと昆

布、ウインナーで鮮やかになった。驚いた事に、そこにはジャックとツカサに加えて、クインティアがいたのだ。律儀に机をくっつけ合いっこしてお弁当を食べていた。スバルはいつもの調子でランチを食べていたので気付かなかった。いつの間にかクインティアが存在していた。スバルはわなわなとクインティアを指差した。これではクインティアに失礼だ。

「く、クインティア先生！　い、い、いつの間に！！」

「ランチを食べ始めた時からずっといたわ。ついでに二限目の算数を教えちゃったり……」

クインティアは思いだして恥ずかしくなったのか、頬を染めた。スバルは「これはとんでもないことになった……！」と心底震えあがった。

「教えちゃったりって……クインティア先生……。いつの間にコダマ小学校に……」

「先週からいたわ……！」

「せ、先週から？！」

「そう！　先週から……！！」

クインティアは語気を強め、タコさんウインナーをパクリと口に放り込んだ。気付いてもらえなくて少し、怒っている。

スバルは驚愕した。ツカサとジャックはおろか、クインティアまでコダマ小学校に来ているとは予想外だった。しかし誰もかれも、なんともあっさりクラスに溶け込んでいることか。スバルはそれが信じられなかった。スバルがクラスに溶け込む苦労は計り知れなかったというのに、これでは辛い。

スバルはそんな思いをそっとしまいこんで、クインティアに謝った。

「ゴメンナサイ。クインティア先生。あまりにもあっさり赴任してきているものだから、いつものノリでランチタイムまで引っ張ってしまいました」
「もう、まったく……！　ちょっと寂しかったわ」

クインティアはお姫様らしくおしとやかにプンプンした。
しかし、こういう流れになるとスバルはもう油断できない。次に何が起こるか分からないのだ。そして期待通り、クインティアの隣には見慣れた人影が。サクサクうるさい。

「ああ、うまい棒がうまい。ランチの時もサクサク！　夕食の時もサクサクサク！　年がら年中サクサクだ！
と言う訳で、なぜか俺もランチを一緒にしているぞ！」
「うわあ！　やっぱり暁さんだ！！」

スバルは驚き過ぎてバク転してしまいたい。シドウはなぜか学校に来ていた。事と事情によっては、サテラポリスのエースがお縄になる事態だ。だが、シドウは完全にコダマ小学校の六年Ａ組の生徒のつもりだ。のんびりと食事を楽しんでいる。

「しかし、うまい棒がうまいなあ」
「暁さん……一体どうして？　なぜ机をくっつけ合いっこして、うまい棒を食べているんですか？　うまい棒はランチには不適です！」

スバルは白昼夢でも見ている気分だった。なぜシドウがわざわざ机をくっつけ合いっこして、一緒にランチタイムをしているのか。
そんな神出鬼没のシドウにジャックでさえも、驚きを隠せない。
つい口調が乱暴になってしまう。

「な、なんでテメエがいやがる！」
「俺はヒーローだ！　いつだってお前たちのそばにいる！」
シドウはうまい棒を片手に凛とした顔つきになった。しかしクインティアにうまい棒の食べカスを掃除させている。これでは格好つかない。
ジャックは憤った。
「あ、また姉ちゃんに、うまい棒の掃除をさせて！」
「よしなさい、ジャック。シドウだって悪気がある訳じゃないの……！」
スバルはこのやり取りを見て、恐怖した。これではマズイと思った。ルナが自分の話を進ませて貰えないのでいらついているのだ。
スバルは良く分からない状況に陥った。これは何とかしなければ、と決心した。
「と、とにかく！　話をまとめましょう！！
ジャックとツカサ君は小学校にいても大丈夫。
クインティア先生は頑張って教員免許を取得して、先生になったから問題ありません……。
しかしだ！　なぜ！　暁さんが！　コダマ小学校六年Ａ組で仲良くランチタイムなんですか？　それと、なぜにうまい棒？」
シドウは即答だ。
「うまい棒はうまいからだ！」
「そ、そうですけど！　そうだけど！　そういう事を聞いているんじゃありません」
「シドウ……、なんで小学校に来ちゃったの？　アナタはもう七年

前に卒業したはず……ここにアナタの居場所はないわ」
「そういうなよ。ティア……」
「ああ、シドウ……」
「ちょっと二人とも。何勝手にいい雰囲気になってるんですか？！」
「いいわね……。相思相愛って……」
「委員長も見惚れないで！」
「あ、しまった！」
『スバル様……輝いてます！』

このような感じでスバルのランチタイムは過ぎて行くのだった。
結局、なぜシドウが来てしまったのかは分からずじまいだった。
ミライは少し席を離してその様子を見て、ウンザリしていた。一緒にいたら恥ずかしくて死んでしまう。

「レイダー、切り捨てたいんだが……」
『ダメです！』

楽しげな雰囲気に、スバル達はすっかり『ハイド』について忘れてしまっていた。それが何を意味するか知らずに。

そして放課後。
シドウは、まだコダマ小学校にいた。スバル達は鞄に教科書を詰め込んでいく。ゴン太のカバンには、カビたパンが詰まっている。
スバルはシドウに問いかけた。さすがに最後までいられたら感服してしまう。

「とうとう最後までいましたね……暁さん」

スバルは苦笑した。わりと真面目に授業を受けていたシドウが微笑ましかったのだ。二桁の掛け算を瞬殺したシドウには、何とも言えない格好良さがあった。

「ああ、最後まで学校生活を楽しましてもらったよ。しかし最近の小学生って難しい勉強してるのな」

キザマロはシドウの姿を思い出すとやはり吹き出した。

「しかしシュールな光景でしたね」

「ふふ、その通りだわ。育田先生ったら、終始不信がっていたもの」

「はは！　あの先生は俺のスーパーヒーローオーラにビビってたんだろうな」

「コラ！　シドウ！　ふざけちゃダメ！」

「ああ、ワルイ」

そしてスバルは改めてシドウに問いかけた。流石に小学校にうまい棒を食べにだけ来るなんてことはないだろう。流石のシドウもそこまで暇じゃないだろう。

「で？　結局、何をしに来たんですか……？　算数のお勉強って歳でもないでしょう？」

スバルにゴン太も続いた。

「だよなー。まさか遊びに来たわけじゃないんだろう？」

「……まあな。じ、実はスバルにすごく伝えたい事があって、直接ここに登場したってわけさ」

スバル、ルナ、ゴン太、キザマロ、ツカサ、ジャック、クインティアの注目が集まる。

そしてシドウの目的が明かされる。シドウは思い直したように、うまい棒をポケットにしまった。そしてスバルに目線を合わせる。

「あ……」

シドウは真面目な瞳をスバルの瞳に重ねていた。スバルも、そのただ事ではない雰囲気を感じ取った。シドウがうまい棒をしまうときは、真面目なお話がある時だからだ。

空は赤らみ、血の気を帯びて行く。その有り様は、まるで息づいた生き物のように感じられた。始まりの予感だった。

「喜べスバル」

シドウは笑った。

「ウォーロックが帰ってきた」

スバルは一瞬、理解できなかった。「ウォーロック、ガ、カエッテキタ」それを意味のある情報に組み替えていく。そして、次第に体が緊張してきた。想定外の出来事にようやく実感を帯びたのだ。鼓膜に血流の音が聞こえるくらい、スバルは取り残されたような感覚に陥った。

豪快な笑顔が印象的な相棒。それがスバルの頭で一杯になった。

「親友が帰ってきた」それがようやく理解した内容だった。

ルナ達は大盛り上がりで、スバルの背中や肩を叩いて祝福する。だが本人は、まるで固まったように動けなかった。もちろん嬉しく

てたまらないからだ。

ｔｒａｓｈ―２９：ミソラちゃんお泊まり大作戦！

突然の吉報にスバルは一週間の間、意気揚々と学校に通った。火、水、木、金と曜日を重ねるごとに期待に胸を膨らませてしまう。そして今日は土曜日。

スバルは、シドウとヨイリー達の計らいで明日、月面都市に向かう事が決まっていた。月への旅行も、もちろん嬉しいものだ。だが、それ以上にウォーロックとの再会がとてもたまらないものだった。

そんな訳でスバルは今、明日の手発に向けて荷物の整理に追われている。もっとも荷物の大半はハンター内に電波化して収納される。なので見た目の旅行臭は大した事はない。

「ふふふふ」と、トラッシュはそんな遠足前のスバルを見て微笑んだ。噂のウォーロックに、トラッシュ自身も興味が尽きない。ついついスバルにちょっかいを出してみたくなる。

『スバル様、やけにニヤニヤしてますね。なにかいい事でもあったんですか？』

「知ってるくせにー！」

『フフフ、いやいや、嬉しそうで何よりです。ワタシも嬉しいですね。ウォーロックさんに早く会ってみたいです』

「当たり前だけど、トラッシュはウォーロックに会った事ないんだものね」

『当たり前ですよ。フフフ』

「アハハ、そうだったね。そういうワケだ！」

『ウフフフ。スバル様ったら』

二人はとても愉快だった。それは無理もないのだろう。スバルにとっては、ある意味でウォーロックは人生の目的であったのだから。ウォーロックを忘れたことなど一度もなかったはず。トラッシュが隣にいてくるようになっても、ウォーロックの存在が色あせる事はなかったのだ。

そしてその色あせなかったウォーロックが、現実のものとなったのである。スバルにとっては、何よりも替え難いほどの、欣快（きんかい）の至りだろう。

そういう訳で取り込み中な二人に、あかねが呼び掛けた。一階から、階段を見上げながらの呼び掛けは母親の王道だ。

「スバルー、お友達よ」

『スバル様。お友達らしいですよ』

トラッシュは廊下から、あかねの様子を見てきたようだ。ふわふわとしながらスバルに告げた。

「うん分かった。ちょっと待っててトラッシュ」

スバルは自室のドアを開けようとする。しかし勝手にドアノブが回る。スバルは「またか……」と思った。ゴン太は勝手に部屋に侵入してくる手癖の悪さである。スバルは友達として呆れた。そして勝手にドアが開く。

「うわあ、わわ！」

スバルはバランスを崩して転げた。

ドアが勢い良く開く。期待通り、お友達が勝手に入ってきたのだ。

スバルはゴン太の、ごく当たり前に勝手に上がり込む症候群には、改めて呆れる事が出来た。スバルは飛び上がって激昂した。ガツンと言ってやらないと、ゴン太はヒドイ馬鹿なので理解しない。

「またかよ！　ゴン太！　勝手に家に入るなって何百回言えば……！」

「ヒドイ！　私、ゴン太君じゃないのに……！」

ゴン太にしては、響わたる透き通った声質だ。歌手にすれば適材適所だろう。だが、ゴン太の一人称は、私、ではない。俺、というアグレッシブな印象を植え付けるそれだ。ゴン太に女装願望があったとは信じたくない。ゴン太は絶滅危惧種に認定されたガキ大将だ。ずれたビジライザーを頭の定位置に微調整しつつ再度、推察した。

「ふむ？　この良い香りは……！」

『ヒドイです！　スバル様！』

するとトラッシュは怒った。

『ポロロン。ヒドイとしか言えないわ！』

ポロロンと言う人も怒った。スバルの目の前には愛らしい女の子が。それはもうご立腹だ。スバルには何かとゴン太と間違えられて、乙女心が抉りほじくりこねくり返される気分だろうから。

「んもう！　私はミソラだよ！　ゴン太君ほど、ふくよかじゃないもん。そりゃ、たくさんご飯は食べるけどさ……」

「あっ、ミソラちゃん」

スバルは「ああ、そうだ。僕にはゴン太とは似ても似つかない可

愛くて素敵なお友達がいたんだ」と理解した。
　頬をプックリとさせてもミソラはすぐに、にっこりとしてスバルの胸をちょこちょこ突つきまわした。どこで覚えたのか？　と聞きたいくらいの指使いだ。こそばゆくてスバルは苦笑いだ。
　まったくもってのお茶目な少女だ。スバルはとりあえず挨拶をする。挨拶は大切だ。

「ああ、なるほど……こんにちは」
「うんっ。そうそう、こんにちはー！」

　ミソラはペロンとフードを取っ払った。そして部屋の丸机に着けて、茶菓子を真剣に見つめ始めた。スバルは「食いしん坊め」と思い「どうぞ」と言った。
　ついでにミソラに聞いてみた。ミソラは世の中を席巻して、もう尋常じゃない人気者だ。星河家の民家に訪れるほど、庶民的ではない。スバルは、安物せんべいを食べているミソラを見て思った。

「仕事は？　土曜日と言えば、芸能人にとっては休みじゃないはず」
「何？　私と会いたくなかったっていうの？　でもこのお菓子、美味しい！」
「いやいや！　会いたくなくないよ。とりあえず委員長みたいな口振りは止めてよ。あとお茶菓子は美味しいよね。もっと食べてね」
「うん。そうだねゴメンゴメン。お茶菓子なのにお茶は無いのかな？」
「うん。笑っている方が素敵だね。トラッシュ！　お茶！」
『了解！　マテリアライズ！　おいしいお茶！』
「ありがとー。それに、トラ君もありがとー」
「どういたしまして。……で、何の用かな？　あ、お茶菓子の包みはゴミ箱にね」
「何の用って、そりゃー、アレだよキミ。何を隠そう、お泊まり交

渉だよ！」

　ミソラはキリッとした表情でゴミ箱にちゃんと包みを捨てた。スバルは「しまった！　番組の企画だったのかっ！！」とボディーブローのキツイ一撃をもらった。

「ミソラちゃん……コダマタウンは確かに田舎だけど……うちはそういうのお断りだから！！」

「うん、そうだね。空気は美味しくて……、おじいちゃんおばあちゃんがのんびり暮らしていて……ふう、落ち着くなあ」

『まったりねえ……』

『まったりです』

　ミソラはまったりとしてお茶をすすった。そしてお茶を吹いた。スバルは「あああー。掃除するの僕なのに……」と涙した。

「……って、違うからね！　番組の企画とかじゃないからね！　本物のお泊まり交渉だよ！　何を隠そう。これはプライベートなんだもの！」

　プライベート。その言葉にスバルは強い衝撃を受けた。ミソラのプライベートだ。出るところに出ればもの恐ろしい価値がある。スバルは緊張した。

「プ、プライベート？　芸能人のプライベートって言うと、何だかクリーンな気配を感じないなあ……！　ミソラちゃん、それはマズイよ」

「いやいや、スバル君。私は清純派アイドルで通してるからね！　そこは心配無用だよ！」

スバルは合点がいく。芸能界については、ことスバルも蒙昧（もうまい）であるのは否めない様子だ。

ミソラはクスクスと可愛らしいスバルを愛でている。

「スバル君もバカよのう……。こんな無垢な少女のどこかクリーンじゃないっていうのかな！」

「あ、そうか！　そりゃそうだ！」

「そりゃ、そうだよ！　スバル君ー、キミー分かってないよー？」

『今日は二人ともノリが良いですねえ』

『ポロロン。まあ、そういう日もあるわよ』

スバルとミソラがはしゃぎ合っている頃、白金宅は不穏な空気に包まれていた。やはりだった。ユリ子の不安は的中した。ルナの言っていた事は本当だったのだ。もう何回目だろう。

「やっぱりだわ……。また落ちている」

「どうかしたのかユリ子？」

ユリ子は玄関先で奇妙な紙切れを拾い上げていた。ナルオはそれを横から取り上げた。

「なんだ？　これは？」

内容はこうだ。

『歌姫の脚本その４。

ンフフ……月の満ち欠けは美しい。それはまるで命の振る舞いの

ようで。

力強い月、儚く美しい月。星屑にとっては、どちらも大切な月である。

星屑とは月の輝きがあってこそ初めてその存在が認識されるのだから。

そこには、どちらも長年連れ添った美しい友情が灯っているのだから。

だが星屑自身はどうだろう？　月達の輝きに比べれば、星屑など霞んで見えるだろう。ゴミのようだろう？

なら、歌姫の怪人と天使の両翼によって、星屑は灰塵（かいじん）へ帰すしかない。

なぜなら天使は星屑などに興味は無いのだから。天使は月を見上げて流星に願うだけだ。

燃え尽きてくれ、と……』

ナルオは胸糞悪そうに眉をひそめた。ここ最近この悪戯が続いていたのだ。

「下らんな……悪戯にしては程度が低い」

ふん、と不快気に鼻を鳴らす。ナルオはゴミ箱に、その紙切れを投げ捨てた。

「ルナには言うなよ」

ナルオはそのまま書斎にこもってしまった。

そして再び星河家。玄関先で今度は、あかねとミソラとメトリーが靴を履いていた。どうやらお出かけするようだ。

「ちょっと、スバルー。私、ミソラちゃんとメトリーちゃんとでお買い物に行ってくるから」

今スバルは、リビングでテレビを見ている。お笑いの番組だ。ミソラが出ている辺り、録画放送だ。スバルは欠伸をしながらいってらっしゃいをした。

「ふあーあ。行ってらっしゃーい」

『行ってらっしゃいませ。ママさま』

あかねはウキウキとした様子で買い物に出かけてしまった。娘が二人出来た気分で舞い上がっているのだろう。あかねもまだまだ若いものだ。

そんな有頂天なあかねのデータから、トラッシュは近い未来を算出した。そしてスバルに耳打ちをする。

『ごにょごにょ……スバル様。今日の夕飯のシュミレーションをしてみましたよ』

「ハハハ、変なシュミレーションだね……。あと、ごにょごにょって口で言うものじゃないよ」

『まあ、そこは置いといて……。ワタシ、徹底分析しました！　あかねママさんの声質、心拍数、今日の運勢、ラッキーカラー、ミソラさんによる何だかよく分からないプラス要素……これらのデータより今日の夕飯はチキン！　丸焼き！』

トラッシュは真面目な様子。スバルは半ば聞き流していた。テレビの方に集中したい。

「へえ、スゴイや……」
『スバル様！　上の空ですね！　チキン！　丸焼き！』
スバルはノッてあげた。
「うん、スゴイ。チキン！　丸焼き！」
『そうです！　チキン！　丸焼き！』
「ハハ！　丸焼きだー！」
《お前ら、なんやねん！　アホちゃうかっ？！》
《ポロロン！　ワタシ頭悪いさかいに》
《って、ハープさん。どこからどこが頭やー！》

スバルはビクッとした。テレビの中でミソラは漫才をしている、ハープに突っ込みを浴びせている様は果敢で素敵だ。
スバルはミソラの仕事に対する真摯さを垣間見た。出来れば可愛く歌っていて欲しいのは、心の奥底にそっとしまっておくことにした。

「うわ！　ミソラちゃんか！　……ビックリしたぁー。これはハンパないね」
『ミソラさんのアキンド弁は心にしみ入りますねー。このガチンコの姿勢、胸がドキドキします』
「トラッシュはおかしいね」
『いえいえ』

スバルとトラッシュはまったりと時間を過ごしていた。たまの戦いがない日くらいはこれくらいが丁度良い。

ｔｒａｓｈ―３０：ルナちゃんプレゼント大作戦！

その頃、白金宅。ルナは、スバルの家に行こうか迷っていた。時刻は正午ちょうどくらいだった。ルナは暇を持て余していたのだ。ナルオパパと沢山お喋りして甘えてやりたいが、ナルオは不機嫌なようで書斎にこもっている。ルナは困った。

今日はゴン太が、タコ焼き大食いツアーに行っていて一緒に遊べない。キザマロは身長のびのびセミナーに行っており、やはり遊べない。となると、お次はスバルに白羽の矢が立ったのである。

モードは、中々行動を起こさないルナの髪の毛を引っ張って遊んでいた。ドリルの髪の毛は夢が一杯なのだ。

『ルナちゃーん。スバル君にお電話しないんですか？　スバル君は明日には月に行っちゃうんですよ？　月って言ったらルナちゃんですよ？！　ってことは、ここはルナちゃんの出番じゃないんですか？』

「ああん！　うるっさーい！　ちょっと、黙っててよモード！」

ベッドから飛び跳ね起きたルナは、兎さんクッションをモードに投げつけた。モードは兎さんクッションをルナに投げ返すと、質問も一緒に投げかけた。

「どうしたの、ルナちゃん？　またンフフーな人の事を考えてるの？　ンフフ。ンフフフってね！　それはもう、一晩中うなされてたもんね！　ンフフンフフって！」

モードはルナをからかっているが、モードは知らないのだ。あのハイドと言う紳士の恐ろしさを、しつこさを。

ルナはベッドに顔を埋めた。頭の中がンフフフの大コーラスである。

「マズイわ！　モード！　頭の中でンフフが連呼されている！」

「え？　どうするのルナちゃん！　それはマズイですねー！　スバル君に電話しちゃえ！　ホラホラ、しちゃってくださいよー」

「うるっさい！　ちょっと待っててよ！　いくら最高級のお嬢様であるワタシでもね心の準備がね……！」

ルナは深呼吸を繰り返している。修行でも始める勢いだ。

「わわー！」

「ど、どうしたの？！」

モードはすっとんきょうな声を上げた。ひっくり返って絨毯の床を転々とする。

「あ、あかねママさんを発見！　メトリーちゃんと、ミソラちゃんも一緒ですー！　デパートにお買いものかな？」

モードはぴょこんと窓の棚に乗り上げると、三人仲良く歩いている様子を発見してしまったのだ。モードは焦った。ミソラが外堀を埋めていると実感したのだ。あかねの笑顔が圧倒的な現実感だ。

ルナも気が気じゃない。窓ガラスにべったりと張り付いて、頭の中のハイドはすっかり消滅している様子。息もあらぶって窓は白く曇る。ルナのお嬢様たるオーラはどこにもない。いつかのストーカーのようだ。

モードはルナの肩を突いた。ルナの闘争心を焚きつける。

「あーあミソラちゃん、本気ですね……。ああ、これはマズイです！　ミソラちゃんとスバル君は、普段任務を一緒にする仲！　危険を共有する仲！　ルナちゃん！　この意味分かります？」

「モ、モード？」

ルナはごくりと生唾を飲んだ。モードは得意げに声高々で言った。

「吊り橋何とかかんとか心理効果です！」

ルナもハッとした。どこかの雑誌で読んだ事があるのだ。

「それ……聞いた事ある！　つり橋の上でイチャイチャしていたら、いつの間にかお互いが恋人同士になっていたという伝説！」

「……えっと、か、かなり違うけど、まあ多分そんな感じです！　つまりミソラちゃんは圧倒的優位からスバル君を攻略しているのです！　ルナちゃん、絶体絶命！　あー、もうヤバい！　コンチクショー」

「モード……！　私ったら、ハイドを気にするあまり……大局を見失いかけていたわ！」

「ルナちゃん！」

「モード！」

モードはハンターを投げつけた。ルナはハンターをしっかり受け取った。このまま電波変換してしまうのではないか、と言う気合いだ。気迫だ。

「電波変換！　白金ルナ！　オン・エア！」

「オンエアー……って、違う違う！　しっかりルナちゃん！　パニ

ック過ぎるよー！　んもー！　バカっ」
「あ、しまった！　私ったら……！　ついつい」

ルナは気を取り直した。何をどうやっても電波変換は出来ない。
それは当たり前のことだ。

「じゃ、ピロパポペ……っと！」
「ドキドキ」
「モード、黙ってて」
《ハイこちらトラッシュです》
「ガクッ」

ルナはベッドから二回転して転げた。モードはトラッシュの元に
殴りこみに行った。

《アレ、もしかして空気読めてません？　ワタシ》
《モードパンチ！》
《ぐわあああ！　スバル様ー、お電話です！　あと顔面がへこみま
した！》
《わわっ、トラッシュ何やってるんだよ！　あ、モードだ。こんに
ちは》
《こんにちはー！》
《ところでモード。トラッシュの顔面へこませた？》
《ハイ！》
《いい返事！　でもダメだよ、へこませちゃ》
《ワタシ、いま心身ともにへこんでいます》
（長いわね……）

ルナは電話の向こうの三人の掛け合いをひたすら聞かされていた。

《あ、いけない。ルナちゃんの存在を忘れてた。スバル君にルナちゃんがご用があるんですって！》
《え？　僕に？　委員長が？　僕は委員長に用事はないんだけどなー》
《モードパンチ！》
《ぐはあ！　良いパンチ！》
《スバル様ァー！！》
（モードたち楽しそうね……）

ルナはもう数十分三人の掛け合いを聞かされた。

そして数十分後。ようやくルナは約束を取り付けて、スバルの家に向かっていた。

「ルンルンルン。フンフンフフン」
「ヒヤッフー！」

ルナとモードはノリノリだ。ルナはスキップ。モードなんてバック転宙返りに、三回も捻りを入れ出す始末だ。モードが五輪に出られないのが悔やまれるほどの鮮やかさだ。モードはもううなぎ登りだ。

「テンション上がっている？　ルナちゃん？」
「もちろん！」
「いいですねー！　そのノリ！　最高ですねー！」

ルナはご機嫌だった。スバルいわく、今日はチキン！　丸焼き！

だそうなので、ディナーの誘いがあった。ルナはツンツンしつつも、何とか承諾して今に至る。

ツンツンしながら、物事を受け入れるのは中々骨が折れるのだ。

ルナが色々な妄想をしたためていると、モードがドリル巻き髪を引っ張った。

「ルナちゃん！」

「なに！　モード？！」

「少し！　テンションを！　戻しましょう！　疲れました！」

「実は！　私も！！　疲れてました！！」

「ふう……」

「はあ……」

モードはトボトボと浮遊しながら提案した。ルナの足取りは気だるい。

「よくよく考えましたワタシ……。何かお土産を買っていった方が良いと思います……」

「そうね……。何を買おうかしら……」

「スバル君の大好きなもの……」

「それは？」

「それは……ルナちゃん」

「やだ……照れる……」

「んもー……。テンション低いぞ！　ルナちゃん！！」

「うわ！　モード！　回復が早い！」

「まあ、冗談はさておき、ここは一つバトルカードでいかがでしょうか？」

「あ、冗談なのね。でもバトルカードか。それいいかもね！」

そういう事の運びなので、ルナ達はＢＩＧ　ＷＡＶＥに向かって

いった。

「いらっしゃーい的なーニュアンス的なー何かー？」

南国がやる気なさそうにルナを迎えた。その無気力さが伝染したのか、店内は閑散としている。数人の客が、バトルカードを物色しているばかり。

やれやれと、カウンターに飾られているバトルカードにルナは目をやった。ルナにとってはどれも同じように見えた。

「ねえ、モード。ワタシ良く考えたら、バトルカードってほとんど良く知らないんだったわ」

「うーん困りました。私もおしゃれスポットしか知りませんし……」

「なんかお困りかい委員長さん？」

「あ、南国さん」

ルナはペコリとお辞儀した。南国はルナに用件を聞いた。

「今日は何が欲しい感じ？」

「ズバリ！　バトルカードが欲しいです！」

「へえ、へええ！　委員長さんがねえー。意外だねえ……」

「いいえ南国さん。ルナちゃんが使うんじゃなくて、スバル君が使うんです！」

「なるほど！　で、どんなものが欲しいんだい？　うちは品ぞろえだけはマトモだよ！」

モードがお調子に乗って答えた。大は小を兼ねるを実践してみる。

「じゃあ、この店で一番強いバトルカードを下さい！」
「あ、なるほどね！　賢い、モード！」
「えへ！」

だが南国は少し困った様子。

「一番強いバトルカードかあ……じゃあギガクラスになるねえ」
「ギガクラス？　なんですかそれ？」

ルナはキョトンとしていた。首を傾げて完全な無知な女の子になる。南国はサーフを呼び寄せた。

「サーフ！」
「ヘイ！　ケン！」
「この委員長さんにギガクラスの何たるかを説明してあげてよ」
「マジかよ！　このガール！　ギガクラスも知らねえのか！」
「ええ。まったくもって」

ルナはツンとした。

「まあ、おバカなガールには俺っちが教えてやろう。まず始めにだ！」
（長くなりそうですね……）

モードは暇を潰すために、トラッシュの元に向かった。

それからしばらく経ったころ。サーフの魂がこもった説明も一段落したようだ。

「……という訳でギガクラスは赤くて太陽のようなスーパーグレイトバトルカードってことだぜ！！」

「じゃあ、そのスーパーグレイトなバトルカードを頂戴な」

南国がニヤリとした。儲け時だと思ったようだ。鋭い眼力。サングラスの奥の瞳は名刀の一振りのようだった。

「でも委員長さん。ギガクラスは高いよー？」

「へえ、いくらなのかしら？」

ルナこそニヤリとした。彼女はコダマタウン一のお嬢様だ。多少の金額には動揺しない。

南国は手の平を開いた。五本指がピンと伸びていた。

ルナは鼻で笑った。

「たったの五〇〇〇ゼニー？　笑わせないで！」

「いや……五万ゼニーだよ！」

ルナは仰天した。おおよそ小学生がどうこうできる額ではない。五万ゼニーで縮こまる辺り、そこは小学生だ。お嬢様である前に小学生。そういう事だ。

「ご、五万ゼニー……！」

「どうしましょう……ルナちゃん！」

モードはそんな板っきれに五万も馬鹿げていると思った。ルナはぐるぐると迷いに迷って、決めた。

「……か、買うわ！」
「まいどありー」

南国は意気揚々と、在庫から赤いバトルカードを引っ張り出してきた。それをルナに渡す。

「じゃあ、これがギガクラスカード『ゾディアックライン』ね」

ルナは首をひん曲げた。実感に沸いてこない様子。ただの板っきれのデータにおしゃれな名前だと思ったらしい。

「ぞでぃあっく、らいん？　これは一体どんなバトルカードなんですか？」
「うーんと……ね。まあ、ありていに言えば防御カードだよ。ただ性能は約束するよ！　キミの大切なものを守ってくれる素敵なカードさ！
まあ、委員長さんもこれを渡せばスバル君と、一緒に戦ってあげられるかもね！　これを渡した女の子はきっと恋が叶うよ」

何となくロマンティックな響きにルナはのぼせたように、歓喜した。

「まあ、ステキ……」
「まあ、いま思いついた設定なんだけどね！」
「ガクッ」
「で、でも。これでスバル君のピンチも救ってあげられますね！
良かったですねルナちゃん！」

バトルカードを手に入れ意気揚々とルナは、スバルの家に向かっていく。足取りは羽のように軽い様子。だがお財布は重い一撃で大打撃だ。

だが、ルナはお嬢様だから大した出費ではないのかもしれない。それよりも、スバルに良い印象さえ与えればそれでいい。いつまでたっても「委員長」ではいられない。

ミソラが真心で攻めるなら、ルナはお金で攻める、そんな感じだ。

「さ、お土産も買ったことだし、急ぎましょ！」

ルナは少し駆け足になった。するとモードだ。

「あ、ルナちゃん！」

モードはぴょんと飛び上がりルナの袖を引っ張った。ルナは、何事か？　と空を仰いだ。

「どしたの？」

「ロックマンさんがいます！」

モードが指のない手で空を指差した。ルナは目を細めて見る。確かにそこにはロックマンらしき人影が、上空でキョロキョロしていた。何かを探しているようだ。

ルナは飛び跳ねた。憧れのロックマンだ。星河スバルではあるが別腹である。

「きゃー！　ロックマン様！！」

ルナは大きく手を振った。だが何事もなかったかのように、ロックマンは気付きもしない。そのまま不可視周波数になって空に消えてしまった。

コンタクトを取ることが叶わず、ルナはがっくりと肩を窄めた。背中の巻き髪も気持ちくたびれている様子。

「あー……行っちゃった」

「でも、何をしてたんでしょうね？」

「さあ？　もしかしたら、ワタシの事を探してたのかも？！」

「もう、ルナちゃんったら！」

「えへへ」

ルナは舌をペロリと出し、お茶らけながら、そのまま星河家に向かっていった。

だがルナは気付いていなかった。先程のロックマンが少し未来のロックマンである事に。

「わあ、ありがとう！」

スバルは玄関先で、嬉々とした表情を浮かべた。さすがにギガクラスは嬉しいようだ。スバルの小遣いで買えるものではないのだから当たり前だ。

しかしルナは緊張のあまり、突っぱねた態度を取ってしまう。モードはがっくりした。

「ふん！　アナタの為じゃないんだからね！　勘違いしないでよね！」

ルナはつんとした態度でそっぽを向いた。スバルはそれを特に気にせず、早速ハンターを操作してフォルダを編集した。スバルは「ゾディアックライン」を手に入れた。

少し悲しくなったルナは、そのままの勢いでお家に帰ろうとする。

「じゃ、そういう事だから！」

ルナはくるりと背中を向けた。スバルはくすりと笑った。ルナの顔は真っ赤だ。

「あれ、帰るの？　なにしに来たのさ」

「冗談！　お邪魔するわ！」

場所はリビング。スバルはさっきまでと同じ体勢でまったりとテレビを見ていた。ルナはお茶をすすって、先の事を話題に出す。

「ねえ、スバル君。さっきロックマン様に変身して何してたの？探しものをしているようだったけど」

「はい？　いや、僕はさっきからずっとここでテレビを見ていたよ。ミソラちゃんが出ていたから釘付けだよ。それはもうね！」

スバルは訝しげにルナに目をやった。
これはおかしい。ルナは首を傾げる。だがスバルはまたテレビを見始めた。何も知らないようだ。
スバルはこのリビングてずっとテレビを見ていた。ルナは信じられない。ロックマンを見間違うはずはない。

「嘘だわ！　アナタはさっきロックマン様だった！」
「何なんだよ！　僕はテレビを見ていたんだ！」
『まあまあ喧嘩は良くありません。……しかし、委員長さん。スバル様はこちらでまったりしていたのは私を含めた周知の事実ですよ』
「ワタシもずっと見てましたよ。スバル君の様子。まったりしていました」

キッチンでお菓子作りしている夜太郎も答えた。夜太郎は暇な時にお菓子を作る、お茶目な四二歳だ。

「ほらね！　僕は余計な事で変身はしないよ」

スバルは不満そうにチャンネルを回した。

「お笑いを見ていた僕にロックマンになる余裕はなかったんだ。委員長の見間違いだよ。ロックマン様で頭がいっぱいなんだ。困った委員長だ！」
「まさか！　ワタシが普段、どれだけ頭の中でロックマン様をシュミレートしていると思っているの？　そんなワタシが見間違うはずない！」
『まあまあ、ルナちゃん。抑えて抑えて』
「そうそう、落ち着いて。怒ってばかりだと、不細工になるよ？
そんなの嫌だろう？」

スバルはそう言って、ルナにせんべいを投げつけた。ルナは湯飲みを手にとってとりあえず落ち着く。

「まあ……少し落ち着くわ。それに不細工にはなりたくないもの」
「そうそう！　まだ大丈夫だけど、油断は出来ないよ委員長は」
「まだ……？！」

ルナはせんべい手裏剣を投げつけた。スバルはそれを口で器用に受け取った。犬のフリスビー競技かと言いたい。

「ゴメン言い間違えた。まだまだ大丈夫だよ委員長は」
「そうそう、私はまだまだ可愛いの！」
『でもルナちゃん。さっきのロックマンさん少し青かったような……』
「青いって、それはあり得ないわ」

ルナはそんなワケないと思った。しかしルナは目が悪い。核心は持てない。そんなモードの言葉が、スバルの耳に付いた。

「青い……？」
『そう青い……。ウォーロックさんはまだ月にいるんですよね？おかしいですねー』
「ふーん。これで確信したよ。やっぱり委員長の見間違いだよ。あり得ないもの」
『ですね。私と変身しても灰色になるだけです。まあへこんだ私の心は少しブルーですけど……』
「トラッシュ……面白くない」
『す、スバル様ぁ……！』

結局ルナが見たロックマンは、見間違いという事になった。ルナ

は納得しないまでも、それ以上は言及しなかった。

そして数十分後。あかね達が帰ってきたようだ。

「ただいまー。ふう、買いすぎちゃったわ」
「ただいまー。スバル君！」
「スバルー。夜太郎ー。帰ったよー！」

玄関のドアが開いて、買い物袋がガサゴソとなる音が聞こえる。
大量の買い物をしてきたのだろうと、スバルは推理した。

「母さん達が帰ってきたみたいだな」
「まあ、おばさまが！」

ルナは素早く玄関に向かった。パタパタと、荷物を運ぶのを手伝う。そうやって気のきく女の子を演出するのだ。スバルは苦笑した。まあ手伝う辺り、悪いものではない。

「まったく委員長は、調子いいな……」

そこにトラッシュだ。チキンチキンとうるさかった。

『フム、あかねママさんの買ってきた買い物データから今晩をシュミレートしてみますね』
「いいよ、そんなものシュミレートしなくても……」

スバルは溜め息を吐いた。

「ねえ見て見てースバル！　新しい服を買ってもらったんだ！！」

メトリーはワンピースを買ってもらった様子。クルクル回ってヒラヒラがたくさんついて服を見せびらかす。スバルは「わあ、スゴイ」と思って、またテレビを見始めた。

「スゴイね。とっても似合う」

「こっち見てよー！」

スバルは面倒くさそうに、チラっと見る。だが、すぐにテレビに集中してしまう。するとスバルは延髄切りを喰らった。

「ぐわっ！」

「無視するな！　バカ！　いいもん、夜太郎に見てもらうしっ」

メトリーの怒りを買ってしまった様子。ウイルスウィザードのくせに一丁前の自意識はあるようだった。

「イテテ……」とスバルはフローリングに転げ落ち、突っ伏したまま涙目になった。すると今度はミソラの出番だ。延髄切りを貰わないように注意したい場面だ。

「ねえねえ、スバル君。私も買ってもらっちゃった！」

嬉しそうな調子の声だ。

見覚えのある生足がスバルの視界に入ってきた。スバルは「ミソラちゃんも服を買ってもらったのか……」と思い、顔を上げた。

「どう？」
「うわあ……」
「何？　変？」
「いや、とりあえず。今、何でそれを……？」

ほとんど裸だ。ピンク色で愛らしい。まあ、それはいい事だろう。だが、スバルとしてはあまり良くない。

スバルは思った。「ミソラちゃんは、まったく少しバカになった」スバルはそう思って、落ち着いた振りをして言ってやった。

「なぜ。今、水着を……？」
「だって夏が近いじゃないですか？」
「まあ……そうだけどさ……。まあこのアングルだと色々と感想も違ってくるからさ……。とりあえず服を着なよ」
『ですね……。さすがの私も、なかなかどうしてな感情を抱かずにはいられません』

トラッシュはニヤニヤしていた。まったくトラッシュも丸くなってしまった。変な方向に進化しているようだ。初めて目を覚ました時の格好良さが消え入りかけていた。ゴン太とシドウのせいでココロメモリが変なデータで一杯になってしまった。

ミソラは新作の水着を披露しているのだ。スバルとしては甚（はなは）だどうでも良かった。だが、寝転びながら、半裸の女の子を見上げるのはいささか気後れするのも事実だった。スバルはとりあえず「綺麗な足だなー」と思うだけにとどめた。それ以上でも、それ以下でもない感想だ。

だが素直なスバルの好奇心旺盛な視線に、ミソラはしゃがみこんで赤面した。まるで痴漢に遭ったような臨場感だ。スバルはあかねの視線に殺されそうだ。

「あわわ！　スバル君の変態！」
「うわ。超展開だ！」
『スバル様。とりあえず謝っておきましょう』
「うん。そうだね。ごめんなさい！」
『しかしスバル様。なかなかどうしてこれは……』

トラッシュはニヤニヤしていた。

「わわ！　トラ君も変態だー！」
『ポロロン。これはいけないわね……！　ハープパンチ！』
『ぐわあああ！』

そんな様子をあかねはニコニコして見つめていた。料理をするにしても腕が鳴ると言うものだ。
へこみが増えたトラッシュはどことなく幸せそうだ。賑やかな事はいい事だ。ミソラにルナがお客さんで、今日は楽しい一日だ。あかねは満足だった。

「フフ、なんだか楽しそうね……。さーて、夜太郎君！　腕によりをかけて夕食の準備をしましょう！」
「了解！」

ｔｒａｓｈ―３２：星河家大パニック！

そして午後六時。夕飯時になったのでキッチンからは芳(かぐわ)しい香りが漂ってきた。

「うほお！　うめえ！　コイツは最高だあ！！」

ゴン太はあかねと夜太郎のごちそうを、飛びかかる勢いで召しあがっていた。スバル達が落ち着いて食べているのとは好対照だ。

そしてスバルはなぜか登場しているゴン太に問いかけた。ゴン太は一心不乱だ。見ていて清々しいが、いつの間に沸いて出たのか不思議でたまらない。

「ねえゴン太。いつの間に家に来たの？」

「ついさっきだぜ！　良い匂いがコダマタウンの方からしたんだ！」

『ブロロ！　良い匂いの周波数を感知したぜ！』

「へえ、スゴイ嗅覚。しかし、よく食べるね」

「ああ、そうだぜ！！　さすがの旨さだぜ！」

あかねはそんなゴン太を微笑みながら眺めていた。あかねには、ゴン太が眩しく映っているに違いない。これほどまでに美味しそうに食べる人間は滅多にいない。多少、行儀が悪くても帳消しになるほどだ。

「ウフフ。遠慮なく食べてね、ゴン太君」
「ああ、お言葉に甘えるぜ！」

トラッシュは、ゴン太とは逆で箸が進まない。

「しかしスバル様。チキンが丸焼きじゃなかったですね……」
「トラッシュ……そんなこと気にしてたの？」
「ええ。チキンの丸焼きを見てみたかったのです」
「そんなに落ち込んじゃ駄目だよ」
「あら、トラちゃん。チキンの丸焼きが食べたかったの？」

あかねが心持ち悪そうなトラッシュを心配した。よほどチキンの丸焼きに憧れていたのだろう。あかねは酷く気の毒に思った。

「ごめんなさいね。チキンの丸焼きが出せなくて……」
「いえ、あかねママさん。私は十分幸せです。チキン丸焼きが無くても私は大丈夫です」

言葉とは裏腹にトラッシュは落ち込んでいるようだ。勝手にシュミレートして、一人で盛り上がっていたトラッシュ。その心境を推し量ることはできない。

しかし、そこに救世主の登場だった。スバルの友達は今いる全員ではないのだ。サクサクと、耳に心地よい音が玄関先で鳴っている。ヒーローは遅れてやってくる。

「こんばんはー！」
「こ、この声は……！」

スバルは立ち上がった。まさに神出鬼没、ヒーローとはもう関係

ないくらいの出現率になっている。

「この声は暁さんだね！」

ミソラも続いた。

「え？　暁さん……？」

ルナは続けない。大した面識はないので仕方はない。

「暁さんがやってきたんだ！　でもなぜ僕の家に……？」

スバルは、相変わらず神出鬼没なスーパーヒーローに頭を悩ませた。しかし、ご飯が冷めてはいけない。シドウと夕食を一緒にするのは良いことだ。

スバルは玄関に迎えに赴いた。

「おじゃましまーす」

シドウ達がぞろぞろとリビングにやってきた。いよいよ部屋が狭くなってきてしまう。

「まあ、いらっしゃい。それにしても、たくさんきたわねー」

「あかねさん。これは料理を作る腕が鳴りますねー！」

「ふふ。そうね。夜太郎君！　頑張るわよ！」

これは久しぶりの大所帯だ。あかねはキッチンに赴き、夜太郎と

料理の追加作業に追われた。
スバルは予想外だった。思っていたより数が多い。これは溜め息が出るほどだ。
とにかくスバルは挨拶をした。挨拶は相変わらず大切だ。

「こんばんは。暁さん、それにキザマロにクインティア先生に、ツカサ君にジャック……あとヨイリー博士とミライ君……。いくらなんでも多すぎ……。
今日は一体どういう日だよ」
「まあまあスバル様。賑やかであかねママさんも輝いているじゃないですか」
「まあ、そうだけどさ」

スバルはどうしたものかと考えていると、ミソラとゴン太が熱い友情のようなものを語り合っていた。スバルはもう一度、どうしたものかと考え直した。

「くのー。ミソラちゃんには負けないぜ！」
「やるね！　ゴン太君！　でもワタシのお腹はまだまだぺこぺこだよ！」
「くそ！　このままじゃ！　うおおお！！」

ミソラはゴン太と戦っていた。いつかの勝負の続きらしい。コダマ小のガキ大将と渡り合うとは末恐ろしいアイドルだ。
ミソラはどんぶりの五杯目に突入する。そして、いったん落ち着いて驚いていた。「わあ、人がたくさん！」
スバルはミソラの胃袋にも驚いていた。

「ミソラちゃん……食べすぎだよ。太るよ？」
「スバル君、心配しないで。歌を歌えばこれくらいのカロリーは一

瞬で消費するから！」
「へえ、歌ってそんなにエネルギー使うんだ」
感心してしまうスバルだった。そこにジャックとクインティアが近くに寄ってきた。二人から良い匂いが。
「おい、スバル！」
「なに！　いきなり？」
スバルはビックリして二人に振り向いた。クインティアとジャックは大きな箱を持っていた。そこから食欲をかき立てる臭いが漂っている。
「お土産があるんだ！」
「これ、つまらないものだけど……」
二人はテーブルに、チキンの丸焼きをどんと置いた。トラッシュは歓喜した。チキンの丸焼きだ。お昼からずっと思い描いたそれだ。
「こ、これは……！」
「チキンの丸焼きよ……。パーティーと言えば必需品だから」
その様子を見ていたシドウは、うまい棒を食べながら補足した。
「喜べよトラッシュ。これはジャックとティアの王国から産地直送してきた、とてもおいしいチキンの丸焼きだ！」
「やはり！　チキンの丸焼きですか！」
トラッシュは初めて見るチキンの丸焼きに興味しんしんだ。
スバルは微笑んだ。子供のようなトラッシュが可笑しかったのだ。

「アハハ、よかったね。夢が叶って！」
「ええ、スバル様！！　もう私、死んでも後悔はありません！」
「それは、さすがに大袈裟すぎだよ！」

スバルは冗談を飛ばすトラッシュの肩を叩いた。するとシドウに肩を突かれた。

「おい、スバルよ！」
「なんでしょうか？」

シドウがスバルの肩をうまい棒で突っついている。スバルは「チーズ味か」と思いシドウを仰ぐ。用件を催促した。
シドウは少し照れ臭そうにもじもじした後、思いきって言ってきた。

「今日はお前の家でお泊まりするぞ！」

シドウはここ一番のスマイルだ。端正な顔立ちなので性質（たち）が悪い。
スバルはぎょっとした。シドウのお泊まり交渉だ。これは、おふざけだと思いたい。ミソラのように可愛らしくもなんともない。反吐が出た。

「え？　暁さんがですか？！　何でですか？　出来ればすぐに帰ってください！」
「ヒドいぞ！　俺は今日お前の家にお泊まりしたい！　無論、今ならティアとジャックの特典付きだ！」
「今なら、ってなんですか？！　しかもクインティア先生とジャックも泊まるんですか？」
「お得な感じだろ？」

「いや、その逆だと思います！」

スバルは少しずつ疲れてきた。思えばゴン太が来た辺りからスバルは突っ込みばかりしている。そろそろ処理しきれない。

汗だくになりながら、なんとかシドウの相手をしているスバル。疲労困憊だ。そして追い打ちだ。

「あ、ボクもお泊まりするよ。今日はね、お泊まりセットも持ってきたんだよ。すごいでしょスバル君？」

今度はツカサが攻撃を仕掛けてきたのだった。スバルはもう限界だ。めまいがする、よたよたとテーブルにもたれかかった。

シドウに続いて、ツカサもとは恐れ入る。スバルはとんでもない事態になってきたと驚いて、恐怖した。

「ツ、ツカサ君までとは……！」

その様子に、ミソラはがつがつ食べながらスバルに言ってやった。ミソラはどんぶりを積み重ねていく。疲れていたスバルは「わんこそばじゃないんだから……」と心の中で突っ込んでおいた。

「わあ、すごいね！　お泊まりのバーゲンセールだよ！」

「いやいや、ミソラちゃん。いつから僕の家は民宿になったんだよ！」

シドウはスバルの肩をポンと叩いた。なぜか悟ったような表情だ。

「……と言うワケだ、スバルよ。とにかくこれはサテラポリスとＷＡＸＡの意向なんだ！　お前に決定権はない！　さあ、ティア！　ジャック！　お泊まりの準備はしてきたか？」

「暁さん！　勝手に話を進めないでください！　って、うわ！　クインティア先生！　パジャマの用意をしないでください！　ジャックも、お風呂を勝手にためない！　お湯は４５度だよ分かった？」

スバルはもうダメだと思った。突っ込みの量が多すぎて、とてもではないが捌き切れない。相手が多すぎる。ツカサに至っては、歯磨きセットまで用意している始末だ。

スバルは笑うしかない。ただいま星河家の人数一五人。もう少しで野球で試合が出来る。

夜も更け、パーティーも中々盛り上がってきた頃。

食事を取っていると、スバルはヨイリー達の動向がふと気になった。どういった経緯でＷＡＸＡのお偉い様が、この星河家と言うただの民家に用事があるのか知りたかった。まさかシドウと同じく気まぐれで来たという訳は無いのだろうから。

スバルは試験管のように細ばったビンを混ぜっ返している老婆に仕掛けた。その隣にはミライがいる。つまらなさそうにしている。楽しんでいるようには見えない。無表情で、野菜ばかり食べている、無愛想で変わり者だ。まるでヨイリーと正反対。笑顔を絶やさない年寄りと、まったくもって仏頂面の若者の組み合わせだ。

「こんばんは」

「あら、スバルちゃん。お邪魔しているわね」

スバルは頬を掻いて、ヨイリーに聞いてみた。

「あの、ヨイリー博士が来るなんて珍しいですね。一体どういうご

用件なのでしょうか？」
「あら、スバルちゃん。いやだわ、そんな事を聞かないでちょうだいよ。今はお食事を楽しみましょうよ」
「でも、さすがにボクもただ事じゃないと思って。暁さんがお泊まりしたいなんておかしなことを言いだすし……ミソラちゃんだけでお腹一杯だったのに」
「まあ、シドウちゃんはお泊まり好きだしね」
「そんな話、初めて聞きました」

そしてスバルはある可能性に気が付いた。恐らく、多分に絶対もしかするだろう。とりあえず聞いてみる。

「あの、もしかしてヨイリー博士もお泊まりしちゃうんですか？」

ヨイリーはにっこりした。スバルは「ああ……」と思った。

「もちろんよ！　今日はスバルちゃんと一つ屋根の下で……ドキドキするわ」

ヨイリーは頬に手を当てて六十年以上前に向かってしまった様子。スバルは吐き気を堪えた。

「ぐふ……。あの、冗談は止めて下さい。食欲が失せてしまいます」

ヨイリーの恥じらいに、スバルは不整脈を起こしそうにもなった。あまりの破壊力だ。アイドルのミソラでもこうはいかないだろう。
そこに隣で黙々と食事をしていたミライが付け足す。

「そうなると俺もお世話にならないといけないな……」
「……って、やっぱりミライ君も泊まるの？」

「ああ。俺はヨイリー博士と、週末には一緒に過ごすって決めているからな」

これでミライのお泊まりも決定した。スバルはやれやれと思った。

結局、事の成り行きで訪れた全員が星河家に泊まる事になってしまった。

ｔｒａｓｈ―３３：スーパーお風呂ウォーズ

そしてお食事も終わった頃。スバル達はなぜか銭湯に訪れていた。銭湯というのは男湯と女湯が分かれていて、必ずと言っていいほど覗きをする男子が続出する場所だ。しかし大抵は覗けずに終わって、心と体に深い傷を負う。

シドウはタオルでバシバシ背中を叩いてオッサンのようだ。

「と言うワケで銭湯に来てみたぞ！　ふむ、中々に味があっていい所だ」

シドウは張り切ってクルクルと洗面器を回している。ゴン太は勝手に冷蔵庫を開けて、牛乳を飲みだした。もちろん会計のおばちゃんウィザードに怒られた。

スバルはとりあえずシドウに聞いてみた。

「あの……どういう訳で銭湯なんですか？」

「銭湯ってお前。それはそうだろう！　おまえん家の風呂じゃ狭くて入ってられないだろうが！」

「そうだ！　そうだ！　バカバカー」ジャック達がブーイングしてきた。スバルは洗面器を投げつけたい衝動にかられたが、ここで短気はいけない。とりあえず笑って流した。

「まあ、確かにそうですね。じゃあ、早速入りに行きましょうか」

スバルは男湯の方に足を向けた。するとルナがスバルを呼びとめた。スバルは「委員長の事だから、ワケ分からない事を何だかんだまくし立てて、勝手にパニックになるんだろうな……」と思った。

「お持ちなさいスバル君！」

「何だよ、委員長？」

スバルは洗面器を盾にして、乾いたタオルをソードにして構えた。気分だけはロックマンだ。しかしさすがのルナも、お手軽仕様なロックマンには反応しなかった。

勝手に頬を染めて勝手に言ってくる。スバルはタオルソードで切りつけてやろうかと思った。

「の、覗きはいけないわよ！　ダメ！　ゼッタイ！」

ルナはビシっと言ってきた。スバルは指を差されていい気がしない。せせら笑って言い返す。

「大丈夫！　すごく興味ないからっ」

ルナは紅潮した。怒っているようだ。あかねに、スバルのデリカシーのなさを訴えた。やはりパニックに陥った。さすが百戦錬磨のスバルの読みだ。

「ヒ、ヒドイですわ、おばさま！　とてもおばさまの息子とは思えない！」

「あらあら大丈夫よ、委員長さん。スバルああ見えて、なかなかのものだから」

あかねはニヤニヤしている。スバルはイライラした。
ルナは顔をさらに赤らめて黙り込んでしまう。これほど気分が悪い事はそうそうない。追い討ちで隣のミソラも、スバルを敬遠している様子。スバルは何とも言えない居心地の悪さを覚えた。

「ちょっと、母さん！　今、僕はスゴク心に傷を受けているよ！もう立ち直れなくなるかもしれないっ！」
「おい、落ちつけスバル。俺のうまい棒を食え。きっと……落ちつくから。……な？」

シドウは優しかった。

「そ、そうですね……。チーズ味をください」

「ほらよ」シドウは、スバルにチーズ味を託すと男湯に向かっていった。そして『男』と書かれたのれんのところでくるりと振り向いた。

「よし！　行くぞ。野郎ども！！　スーパーお風呂タイムだ！　もう一度言う！　Ｓｕｐｅｒ　Ｏｆｕｒｏ　Ｔｉｍｅだ！　略してＳＯＴ！！」

どうやらシドウなりに士気を高めてくれようとしているらしい。
スバルは「また……ツッコ混ざらない事を……」と泣きそうになった。しかしウォーロック不在でも手を休めるわけにはいかないのだ。

「暁さん！　無駄に発音が良いですね！！　それに略す意味が分かりません！」

しかしスバルは少数派だったようだ。

「ＳＯＴ！！」という掛け声が銭湯の待合所で響き渡った。ツカサ、ジャック、ゴン太、キザマロは、ノリ良く叫んで、シドウに続いていったのだった。
そしてトラッシュも気に入った様子だった。
『ＳＯＴですよ！！　スバル様！　ＳＯＴ！！』
「ハハ……ＳＯＴ、ＳＯＴ」
その様子をあかねは微笑んで眺めていた。
「フフ、男の子グループは楽しそうね。じゃあ、こっちはハイパー……」
「おばさん……、さすがにそれは恥ずかしいよ……」
「まったく男の子って馬鹿すぎ……！」
「シドウ……ステキ」
「って、クインティアさん！　惚れないで！！」
とりあえずスバル達のＳＯＴとあかね達のＨＯＴが始まった。
「ふう、良いお湯だわ」
「……ふう」
「あら、どうしたの？」
『フフ……そうよ！、背中洗いっこしましょう』
「きゃっ……！　もうヤダー！」
『ウフフフ、シドウったらカワイイー』
「って何やってるんですか！」

スバルは隣でうるさい二人にお湯を浴びせてやった。あまりにも気味が悪い。シドウはもうやりたい放題だ。スバルはもう休みたい。勘弁してほしかった。

「あの……もう……ホントに、もう……何やってるんですか暁さん？！　なんで女言葉で、紛らわしい雰囲気を演出してるんですか！！」

シドウはスカッドとガールズトークをしていたのだ。シドウは悪びれずに言い捨てた。

「だってよ。男湯って思いのほか男くさくて、少しでも女湯の華やかな雰囲気を演出したかったんだ」

「はあ……男湯が男しかいないのは当たり前でしょう。変な気づかいは結構ですから、大人しくお風呂に入っていてください！　あとスカッドもイヤならイヤって言うの！」

『イヤ……何となくノリというか……何というか……』

スバルは額に手を押しあって嘆息した。銭湯にまで来て、下手な芝居を見せられたらかなわない。

しかし今日のシドウは自由奔放で抑えが効かない。今度は湯船にうまい棒を泳がせ始めた。

「ふうむ……、これはいけないな……。こう湯気が多いと、うまい棒が湿気てしまうな」

「暁さん。お風呂で、飲食はダメだと思います！　もう、何やってるんですか！　いい加減にしないと、クインティア先生に言いつけますよ！！」

怒り心頭でスバルは、シドウからうまい棒を取り上げた。スバル

は呆れていると今度はジャックが風呂で泳ぎ出した。これはいけない。ニホンでの常識が薄いとはいえ頭が下がる。
体が休まらない。

「ジャック！　銭湯で泳いじゃ駄目だよ！」
「嘘だ！　じゃあ、なんでこんなに無駄に広いんだよ?!」
「そりゃ、公共施設だもの」

スバルは嘆息が止まらない。銭湯にまで来て、突っ込みツ疲れるのはいただけない。しかしこの場面でゴン太が黙っている訳がなかった。
ゴン太はなぜか銭湯の壁をよじ登っている。壁の向こうは女湯だ。壁の高さは二・五メートル。頑張ればどうにかなる高さだ。
スバルは血の気が引いた。良い湯でも、肌寒いほどの恐怖だった。ゴン太ほどの命知らずは見た事がない。

「ご、ゴン太！　何をやってるの？　それだけはやっちゃいけないだろう！！」

スバルは湯船から、弾かれたように立ち上がった。シドウも身を乗り出す。ツカサはゴン太の元に駆けだした。ジャックは泳いでいる。キザマロは普通に体を洗っていた。
ゴン太はゴリラのように木登りをする要領でどんどん昇っていく。スバルの焦っている様子に、グッと親指を立てて、いい笑顔で答えた。

「何してるってお前。銭湯に来てすることと言えば、これだろ！」
「いや、ゴン太。銭湯に来てする事は体を洗う事だよ！」
「違う！　スバル！　俺はこの壁を乗り越えなければいけないんだ！！　そうだろうスバル！　俺達はいつだって困難を乗り越えてき

た！　だったらこの壁も乗り越える事が出来る！」

ゴン太は熱く語った。久しぶりにまともな台詞を吐いたかと思えばこれだ。それでもスバルは勢いのまま共感しそうになってしまう。

「くっ……」

「どうした、スバル？　お前はそこで諦めてしまうのか？」

「暁さん……」

スバルは、シドウへすがるように見つめた。シドウは何も言わずに大きく一度だけ頷いた。スバルの頭をわしわしと混ぜかえした。シドウがやっとまともになってくれたのかと、スバルは胸をなでおろした。最年長としてビシリと言ってもらいたかった。

「暁さん……僕……」

「みなまで言うな。俺もお前と同じ気持ちだ！」

シドウはゴン太の元に駆けだした。その背中は頼りがいがある。スバルは認識を改めた。

「暁さん……やっぱり、アナタがサテラポリスのエースです！」

「ああ、俺はスーパーヒーローだからな！」

そう言ってシドウはゴン太に続く。壁を登り始めた。スバルは愕然とした。そして認識を改めた。シドウはあまりスーパーヒーローじゃない、と。

しかしシドウはすっかりその気だ。熱い情熱と、正義感に瞳を燃やしていた。

「俺はスーパーヒーローとして立ちふさがるこの壁を乗り越えなけ

ればならない！　恥ずかしい話、ゴン太に言われて初めて気が付いたよ！　俺は諦めない！！」
「暁さん！　それは多分、間違ってます！！」

スバルが悲鳴を上げた。するとツカサが立ち上がった。ゴン太の元に駆け寄る。ツカサは紳士的な男の子だ。ゴン太とシドウの卑劣漢を止めてくれるに違いない。スバルは感激して胸をときめかせた。

「ツカサ君！」
「ひゃっはー！」
「ヒカル君っ？！」

ツカサは、いつの間にかヒカルになってしまっていたようだ。ヒカルは紳士ではない、卑劣漢だ。よってゴン太とシドウに続く。スバルは絶望した。

この三人を止めなければ、という使命感に囚われて三人に呼び掛ける。

「やめるんだ三人とも！　命がいくつあっても足りない！」
「スバル、俺達の後に続け！　お前もヒーローになれ！」
「そんなヒーローはゴメンです！」
「暁さん！　そろそろてっぺんだぜ！」
「ギャハハ！　ミソラの裸の写真をファンに売りつければ高値になるぜー！」
「ヒカル君！　堅実だけど卑劣だよ！」
「ブロォォオオオ！」
「ギャハハハハ！」
「サクサクサク！」
「ダメだ！　もう止まらない！！」

スバルはもう、どうしようもなかった。三人を説得しつつも時折、突っ込みを織り交ぜないといけない。それではスバルの手が回らない。残ったのは、頭を洗っているキザマロと、泳ぎに夢中のジャックだけだ。万事休すだ。

そして考えるのは止めた。スバルはそっと諦めたのだ。知らんぷりを決め込む事にした。あらゆる無念を振りきって、三人に背を向ける。体を洗おうとキザマロの隣に向かう。そうだ、銭湯は体を綺麗にするところなのだ。

しかしスバルの肩を、大きな爪が掴んだ。トラッシュだ。

「スバル様！　諦めてはイケマセン！」

「トラッシュ！　一体どこから?!」

「ウィザード用のお風呂からやってきました！」

「そんなものあるの？」

「あります！　しかし、そんな事はどうでもいいのです！　とにかく今は、あの三人を止めなければ！」

「む、無理だ！　ゴン太も暁さんもヒカル君も、尋常じゃない気合いだよ！　僕じゃどうしようもない」

スバルは打ちひしがれた。しかし、このままではゴン太たちが打ちひしがれてしまう。友達としては見過ごすことは出来ない。トラッシュはそれが良く分かっていた。

「確かにスバル様一人じゃ状況を打開するのは難しいでしょう！ですが！　私がいます！！　アナタの隣には私が付いています！！」

「トラッシュ……！」

スバルは胸を打たれた。友情が染みわたる。

「さあ、行きましょう！　一人で無理なら……二人で！！」

「うん、トラッシュ！！　行くよ」
「はい！」
「電波変換！　星河スバル！　オン・エア！！」

スバルはロックマンとなり、悪しき三人を止めにかかる。トラッシュが作戦を提案した。

『スバル様！　まず女湯に行って先回りしましょう。そこでゴン太さん達を迎え撃つ！！』
「いいアイデア！　でもそれだと、僕たちが女湯に入ってしまう事になるよ？」

スバルは少し罪悪感に囚われた。いくら、ミソラとルナを守るためだと言っても、それでは結局の所ゴン太たちと同じ卑劣漢ではないのだろうか。そんな事を考えてしまう。
しかしトラッシュは言い切った。

『大丈夫です！　スバル様にやましい心がなければ、バれる事はありません！　電波人間は透明人間です！　やりたい放題です！！シンクロ率さえ維持すれば大丈夫です！』
「いや……トラッシュ。そういう事を言ってるんじゃ……」
『バレなきゃいいのです！』
「えー……」
『さあ、行きますよ！』
「う、うん……」

ロックマンはトラッシュの言うがまま女湯に潜入任務を開始した。

「くっ……湯気で何も見えない」

ロックマンは女湯で目を細めた。湯気が盛りだくさんで視界はほぼゼロだ。そんな中で人影が複数分、ぼんやりと確認できた。恐らくルナとミソラが体を洗っているのだろう。スバルは少しやましさに囚われた。仲良く洗いっこを見せられたらシンクロ率も落ちてしまう。

トラッシュは怒った。

『スバル様！　シンクロ率が急激に低下しています！　今５％です。お気を確かに！』

「……くっ！　僕とした事が！」

『スバル様！　彼らがそろそろ上りつめます！』

「うん、分かったよ！　そりゃ！」

ロックマンは女湯と男湯を分かつ壁に沿って飛び上がった。そして、てっぺんに掴みかかる。

よじ登ると、そこにはゴン太とシドウとヒカルがいた。女湯を覗いてご満悦の様子。しかし情けない顔だ。ロックマンは変わり果てた三人に引導を渡す事を決意した。

「くそ！　なんてひどい顔だ。ゴン太は元々だけど、シドウさんとヒカル君なんて見てられない！！」

『これも、女湯という魔窟が生み出した悲劇……』

「そうだね！　彼らを助けよう！　バトルカード！　ハイパーキタカゼ！」

ロックマンはゴンタ達に向かってうちわを振り抜いた。突風には堪えられない。

「な、なんだ?!　とてつもない突風だー!」
「ぐわあああー!」
「ちっきしょおおぉぉオー!」

三人は湯船に向かって吹き飛んだ。素っ裸で、宙を舞う変態達は頭から落ちて盛大に水柱を作った。
ロックマンはほっと胸をなでおろした。任務完了だ。良い事をした後は心がすこぶる晴れやかだ。

「ふう……母さんの身を守ったぞ!」
『スバル様!　そこは嘘でも、ミソラさんと委員長さんの名前を上げた方がいいのでは……?』
「そ、そうだね。とりあえず。女湯を出よう。ここにいたら、僕も正気でいられなくなる……!」

するといきなりトラッシュが絶叫した。その悲鳴と痛がりようは尋常ではなかった。

『ぐ、ぐわあああ!　もう一度、ぐわあああああ!』
「ト、トラッシュ?!」
『ググ……お、女湯全体に恐ろしい周波数がたちこめています!』
「なんだって?　それは一体?」
『乙女の周波数です!　くっ……!　ジャミングを受けて、シンクロ率が維持できません!　ダメです!　電波変換が解けてしまいます!!』
「トラッシュ。それは困るよ!　それじゃ、まるで僕が電波変換をしてまで女湯を覗こうとした、スゴク計画的な変態になるじゃないか!」
『し、しかし……!　ぐ、ぐわあああああ!　ぐぐわあああアア

ア！』
「トラッシュー！」
そうしてスバルの脱出任務が開始したのだった。

ｔｒａｓｈ―３４：スバルギア―柔らかい衝撃―

とうとう事件が起きた。突如トラッシュが謎の発作を起こし、スバルは女湯に取り残されてしまったのである。

状況は最悪だ。取り残された場所は、出口からもっとも遠い場所だった。

さらにこの女湯は、それぞれタイプの違う湯船を用意してあり、そこをとり囲むように狭い通路が展開しているだけだった。まるで家の廊下のような狭さ。見通しは湯気で悪いが、ひとたび鉢合わせになれば逃げ場はない。

まず出口に向かうには、ルナとミソラが洗いっこしている、シャワーのある場所をくぐりぬけるしかない。その際には、ルナ達の背中の後ろ数十センチのところほふく前進して敏速に進む他ない。勇気とスピードが要求される最初の難関だ。その時、ガールズトークの耳を奪われない事が勝利の近道だ。

そして、次にクインティアが入っている水風呂の一角を通り抜ける必要がある。円形の湯船をとり囲むような通路はまるでサーキットのよう、上手くクインティアの死角を突くしかない。だが、非常に恐ろしい事がある。水風呂は当然冷たく湯気を発していないのだ。視界は良好である。ひとたびクインティアが姿勢を変えたりしたら「あら、スバル君。こんばんは」となってしまう。そのときスバルが終わる。

最後に、子供用のお風呂で遊んでいるメトリーとあかねを華麗に

かわさないといけない。だが、一番の難関はここだろう。出口のすぐそばにあるその場所は、人の出入りをすぐに気取られてしまう。ここを何とかしないと女湯を脱出できない。現状、人の出入りに紛れて、人影に隠れてやり過ごすしかないだろう。大丈夫だ。この銭湯は貸し切りではない。誰かが入ったり出たりはするはず。

スバルはそのような事を一瞬でシュミレートして、この脱出任務の成功率を算出した。発生するだろう数々の不測事態と、自分自身が今まで培ってきた、戦闘テクニックと勝負勘を織り交ぜて見積もる。

そして自分の装備を確認する。

「僕の装備は手に持っていた石鹸とビジライザーだけ……。マズイな。どう考えてもバれずに、脱出できる可能性は０％だ……！」

スバルはごくりと唾を呑んで改めて自分の状態に絶望した。

「そして僕は素っ裸だ。見つかれば、委員長たちにボコボコにされる可能性は高い……！　でも、僕は諦めない！　父さんがこの状況になっても絶対に諦めないだろうから！」

スバルの孤独な戦いが始まった。

大吾なら絶対に乗り越える。そう考えて、自分を奮起させた。

そしてスバルは、任務の成功確率を高めるために、全身に石鹸を塗りたくっていた。そうして体をぬるぬるのすべすべにしていたのだ。全身を石鹸でコーティングするとスバルは、ルナ達の方を望ん

だ。

どうやら、こちらには気が付いていない様子。距離は三メートルほど。湯気でお互いにシルエット程度しか判別できない。湯気は良い仕事をするのだ。

スバルはいよいよ行動に移す。

「よし……石鹸を塗った事により、全身がぬるぬるだ。これでほふく前進した時の床との摩擦を減らせる……！

なるほどなるほど、委員長はミソラちゃんとのガールズトークに夢中だな！　そしてミソラちゃんは目をつぶって頭を洗っている……。よし今がチャンスだ！　行ける！」

スバルはほふく前進を開始した。思ったより、床との摩擦が軽減できている。これなら素早く後ろを通り抜けられそうだ。

「いける……！　いけるぞ！」

ルナとミソラまで一メートルまで差し迫った。

「いける！！」スバルは精一杯の小声で叫んだ。

しかしスバルの予想が甘かった。スバルのほふく前進は止まってしまう。

「なっ……！」

スバルは目を疑った。

ルナの長い髪が、スバルの行く道を阻むように通路に広がっていたのだ。スバルは絶望した。かつての朝食の時のようだ。あかねあ新聞紙を敷いてあげたのも頷ける。圧倒的な物量だ。スバルは固まってしまった。

「くそ……！」

髪の上を通れば流石にばれてしまうだろう。スバルは打開策を考えた。

「どうする？　どうすればいい？　父さん……僕に力を……」

『そういう時は、仲間を頼ればいい。スバル……お前は一人じゃないんだ！』

驚いた事に声が聞こえてきた。スバルはキョロキョロを素っ裸で辺りを見渡した。もちろんルナとミソラを視界に入れないようにしている。

「と、父さんなの？　どこ？」

『いやいや、違いますよ！　私ですよトラッシュです！』

湯煙から、ぬっとトラッシュが誇らしげに出張ってきた。スバルはムッとした。

「トラッシュ……！　キミのおかげで大変だよ！　変態とヒーローの狭間に立たされているところだよ」

スバルは怒り心頭だが、あまり大きな声は出せない。トラッシュは口に人差し指を当てて、お母さんのように注意した。

『しーっ……。あまり大きな声を出されるとばれてしまいます。ここは私が助太刀してあげましょう！』

「いや……普通に電波変換して逃げようよ……」

スバルはさっさとここから出てしまいたい。ミソラとルナに興味

がないと言えば嘘になるが、裸の付き合いをするには性別が違い過ぎると感じていた。

しかしトラッシュは首を振っていた。どうやら、深刻な様子だ。

『ダメです。実はシステムの故障で……ゴホゴホ……だから電波変換は無理です』

「じゃあ、どうしてくれるのさ？」

『ふふ。見ててください。スバル様、少し離れて隠れててください』

「う、うん」

スバルはとりあえずトラッシュに任せた。

トラッシュは咳払いをして、おもむろにルナに語りかけた。スバルはぎょっとした。

『きゃー、ルナちゃん、髪の毛キレイだねー。ちょっと見せてー』

「トラッシュ・コエガワリー」トラッシュはミソラの声を完璧にトレースしてみせた。スバルがトラッシュの声を大吾のものと間違う訳だ。伊達に高性能という訳ではないらしい。

意気揚々と、ルナは髪の毛を抱えてミソラに差しだす。トラッシュがスバルに合図を送った。野球の走塁コーチャー見たいに腕をぐるぐる回している。

『スバル様！　今です！』

「よし来た！」

スバルは凄まじいスピードでほふく前進を開始した。ルナはミソラの方へ向いている。湯気が濃厚で恐らく大丈夫。ミソラは洗髪で視界はゼロだ。今しかない。スバルは、一気に駆け抜けた。

「うおおおお！」

しかしだ。ミソラの背後を通っている時、事件が起きた。ミソラが立ち上がった。これはいけない。

「あれ？　さっきワタシの声がしたような？」

ミソラはどこからともなく聞こえてきた自分の声を不思議に思った。喋った覚えはない。さらに、その様子をルナは不信に思ったらしい。

「どうしたのミソラちゃん」

スバルはこれはマズイと思った。見つかると思った。ルナとミソラはキョロキョロし出す。そしてスバルの人影を見つけた。

「あれ、そこに人が倒れている」
「やばい……！」
『スバル様！　これはピンチです』
「トラッシュ！　何とかしてくれ！」
『わ、分かりました！』

「トラッシュ・バブル光線！」トラッシュはスバルに目一杯、備え付けのバブルソープをぶっかけた。スバルは泡につつまれて外からはただの白い塊にしか見えない。

しかしこれは、ただの応急処置だ。

「何これ？」
「何だろうね？」
「中を確かめてみましょう」

「そうだね」

ルナとミソラは泡の塊に詰め寄った。おもむろに泡のなかに手を突っ込んでくる。「く、くすぐったい！」スバルはどうしたものかと焦った。これは危険な状況なのだ。

そしてミソラが足を滑らせて、豪快に転んだ。トラッシュ・バブル光線によって床がぬるぬるしとしとだったのだ。スバルに柔らかい衝撃が走った。甘酸っぱい、春のようなそれだ。

「きゃっ」

「ミソラちゃん！」

「ぐわ！」

くんずほぐれつだ。もう、どうにでもなれと思った。ぬるぬるで理性もぬるぬると滑らかにとろけそうだ。しかし、スバルはヨイリー博士の恥ずかしそうな顔を思い出す。何とか冷静になった。

ただ、ルナはスバルの声に驚いた様子。事態は危険を通り越して至福だ。

「え、ミソラちゃん？！」

「きゃんっ、くすぐったいよう！」

「ぐわあ！」

「ふええ……」

「ど、どうしたのミソラちゃん！　って……きゃっ！」

すると次はルナが転んだ。スバルは「なんていうベタな……！」と思ったが何とか堪えた。

そしてトラッシュに助けを求めるしかない。

「トラァッシュ！！」

小声で叫んだ。変な所に触られてしまう前に何とかしないと、お互いが不幸だ。スバルは見をよじり、決定打を与えない。
トラッシュの真価が問われる事だろう。

『スバル様！！　うおおお！！』

「トラッシュ・トランスフォーム！」トラッシュはあかねの姿に変身した。まるで本物のようだ。伊達に高性能ではないらしい。そして泡の中から二人を引っ張り出す。
トラッシュの変身はほぼ完璧だが、幽霊のように脚はない。そこは泡で誤魔化した。

「あ、おばさんっ」
「おばさま！　大変です。この中に人が」

ルナが泡の塊を指差す。
スバルはマズイと思った。しかしトラッシュは賢明だ。

『だいじょうぶよ。それはお風呂の妖精だから。害はないから放っておくのよ』
「へえ、なるほど……」
「すごいすごい」

トラッシュの巧妙な話術で、なんとか二人を信用させることが出来た。
トラッシュは今が好機と思い、スバルに合図を送った。

『今です！　スバル様！』
「よし来た！」

スバルは泡に乗じて、その場をやり過ごした。何とか第一の難関を突破したのだった。

ｔｒａｓｈ―３５：スバルギア２―腐った肉体―

次はいよいよ、冷気が立ち込める水風呂だ。クインティアは鼻歌を歌っていた。ノリノリである。スバルは泡に身を隠してそのままやり過ごそうとした。

クインティアはこちらに気が付いていない様子。スバルは慎重にかつ大胆に進んでいった。

「ここは、何とかなりそうだね……」

『そうですね』

そしていきなりのトラッシュだ。何とかミソラとルナを上手くあしらったようだ。

スバルは頼もしい相棒の登場に歓喜した。

「あ、トラッシュ。さっきは助かったよ！」

『いやはや。私も良い経験をさせてもらいました。二人のお嬢さんと裸一貫で語り合えた事は夢のようでした……』

「トラッシュ……まさか、変な目で二人を見ていないだろうね？」

『見ていないと言えば嘘になりますが、極力保護者のような目線を努めました。

しかし中々どうしてミソラさんは流石アイドル。小学生ながら、上々のものでしたよ。小柄ながらもそこは女の子といった印象でしたね。肉付きも程良く、包容力を感じました。』

そして委員長さん。女の子としてはミソラさんに一歩劣るものの、

脚線美と白い肌が印象的でした。光る原石といった点ではミソラさんにも優らずとも劣らない、そんな伸びしろを感じましたね』
「トラッシュ……ガッツリ評価じゃないか」
『フフフ。……では気を取り直してミッションを進めて行きましょう』
「う、うん。今までで一番のミッションだものね」
『ですが二人なら何とか乗り越える事が出来るでしょう！』
「うん、二人なら越えられない壁は無い！！」

二人はクインティアの鼻歌をバックに友情を再確認しあった。

「ふんふにょふーん。ふにょにょんにょんにょ」

相変わらずクインティアはノリノリだ。スバルには恐らく気付かないだろう。スバルはそのまま突き進む。

「よし、このままいけば、出口はもうすぐだ」

しかしそこにまたハプニングだ。トラッシュが悲鳴を上げた。もちろん小声で。

『ぐわあああ！』
「トラッシュ？　今度はどうしたの？！」
『ぐわああ！　ぐわお！　ス、スバル様……！　どうやらワタシはスーパー能力を使いすぎたようです！』
「さっきの声マネと母さんに変身した影響？！」
『そ、そうです！　無理をし過ぎたおかげで、ものスゴイ発熱です！　これを抑えないとワタシは……ワタシは……ううぅ』

トラッシュはしめじめと泣きだした。スバルは心配で堪らない。

「トラッシュ！　死ぬな！　ぼ、僕は一体どうすれば……」

トラッシュは命からがらで言った。クインティアの方を指差す。

『水風呂です……』

「え？」

『水風呂に入れてくれたら、熱は治まります……。私は助かるでしょう……』

トラッシュは今にもデリートされてしまいそうだ。しかしスバルはクインティアに見つかることを恐れてしまう。

「でも、クインティア先生が……」

『ぐわあああ！　ぐわああ！』

「トラッシュー！！」

どうやら選択肢はない様子。

「どう、治まった？」

『ううん、もう少しです……』

スバルは今、トラッシュを水風呂に浸けている。身を隠していた泡もすっかり綺麗に流れてしまい、そして湯気もない。

焦りが募る中、クインティアの死角を突き、トラッシュの熱が下がるのをスバルはひたすら待っていた。幸いクインティアは鼻歌に夢中だ。

「ふんふにょんふにょーん」

スバルは内心焦っていた。いつ見つかってもおかしくない状況だ。すぐ目の前でクインティアがいる。身を隠すものは何もない。クインティアが振り返れば、一瞬でお終いだ。

精神を摘む戦いだ。終わりが見えないほど、ゴールが小さく見える。真っ暗な世界で取り残されたような絶望感だ。

「トラッシュ……まだかい？」

『まだです』

「くっ……クインティア先生の下手な鼻歌が耳に触るよ……」

『我慢してください』

「ふんふううふふっふんふふふー。……よしっと、おしまい。ちゃんちゃん」

「なにっ？！」

スバルは戦慄した。クインティアが鼻歌を終えたのだ。これで何の保証もなくなった。スバルは震えが止まらない。

「まずい！　まずいぞ！！」

「よし、次は電気風呂にでも入りましょう……」

「なっ！」

クインティアが立ち上がった。綺麗な細身にスバルは見惚れそうになるが、何とか思いとどまった。冷静にならないといけない。上手く立ち回らないと、即刻で終わる。

「あ、でも……その前にシャワーを浴びようかな……」

そしてクインティアがスバルの方に振り向いた。時が止まったようだ。鉢合わせだ。滑らかな流線。ほんのり赤い丘陵。スバルの目は釘付けだ。「肌色……！」

そしてハッと我を取り戻す。するとクインティアと目があった。とりあえずスバルは固まった。だが、クインティアも突然の出来事に事態を呑みこめていない様子。

スバルはなりふり構わない。今はトラッシュにすがるしかない。頭をフル回転させてもそれしか思いつかなかった。

「トラッシュ！　ヤバいよ！　何とかしてよ！」

『ぐ……これ以上は、無理をするとワタシの身を保証できませんが……。だけど、それでも……ワタシは！　スバル様のピンチなら命を懸けることが出来る！』

「トラッシュー！！」

するとトラッシュはスバルとクインティアの間に割って入った。覆い隠すように壁の役割を果たす。しかしこれではあまりにもお粗末だ。スバルは涙を流した。「終わった……」という諦めと安堵が込み上げる。しかしトラッシュは、怯えるスバルの頭をよしよしと撫でると「大丈夫です」と優しく言ったのだった。トラッシュが目を光らせた。

「トラッシュ・イリュージョン！」すると、トラッシュの体はカメレオンのように周囲と同化した。もちろん背後のスバルもクインティアからは見えなくなる。これはまるで光学迷彩だ。トラッシュは素晴らしく高性能だった。

クインティアは突然消えてしまったスバルに首を傾げた。腑に落ちない様子だ。

それはスバルとて同じだ。目の前にいるクインティアがこちら認識していないのだ。

「ト、トラッシュ？　何をしたの？」
『はあ……はあ……。周波数を変えて、周囲との風景と同化しました。今のワタシは見えない壁！　つまり今なら逃げられるのです！』
「ス、スゴイ！　でも、これがあれば楽勝だ！」
トラッシュの決死の助けにより、スバルはそのまま水風呂を脱出した。
クインティアは一瞬スバルのような男の子に裸を見られた気がした様子。だが、そのままシャワーを浴びに行った。
「さっき、スバル君がいたような……。もろに見られた気がするけど気のせいかしらね……」

「よし、このまま脱出だ！」
スバルはトラッシュの光学迷彩のおかげで出口の付近まで辿りついた。もうすぐでこの戦いも終わる。スバルは感無量だった。
「トラッシュ。このまま突っ切るよ！」
『ダメです！　スバル様！』
突然のトラッシュの制止だ。思わずスバルは足を止めた。
「どうしたの？！」
『このままでは絶対にばれてしまいます！』
「何で？　キミが僕を隠してくれれば、万事解決じゃないか？」
『いや……そういう訳ではありません！』

トラッシュはやりきれない表情を浮かべて前方を指差す。子供用のお風呂だ。あかねがいた。そしてその隣にはメトリーが。無邪気に遊んでいるが、その姿は今に限って悪魔に見えたことだろう。

トラッシュは緊張した様子で言った。

『メトリーさんの前ではワタシの光学迷彩も役に立ちません。彼女には電波が見えているのだから！！』

「な、なんだってー！？」

スバルは戦慄した。今思えば、メトリーはウイルスウィザードだ。トラッシュの小手先の欺きなど、一瞬で見破ってしまうだろう。メトリーの目からすれば、スバルは文字通り丸裸だ。

メトリーは全ての元凶だった。

『ちなみにスバル様の電波変換を妨害する乙女の周波数を発しているのもメトリーさんです。可愛い振りして、彼女も元ジャミンガーです。あのジャミング作用は半端じゃありません！』

スバルはがっくりと膝を突いた。

「な、何てことだ……！　ここに来てメトリーが最大の壁になるなんて……」

『いかがなさいましょう、スバル様？』

「仕方がない。最初の予定通り、人の出入りに紛れるしかない……！」

『そうですね。それしかないようですね……』

「よし。じゃあ、トラッシュはメトリーと母さんを見張ってて、僕は出入り口を見張るから」

そして数分後。スバルとトラッシュは機会をうかがっていた。スバルはスモークガラスのドアを、トラッシュはメトリーとあかねを注視している。

ここまで来たのだ。ここで諦めるわけにはいかない。

だが、流石のスバルの今回ばかりは焦っているようだ。命がけの戦いを繰り返した歴戦の戦士も、女湯という特殊な環境では、浮足立っている様子。

「まだか……？　まだなのか？！」

『焦りは禁物です……。急がば回れです』

「フフ、ホントにクルクル回って踊りたい気分だよ……」

『お気を確かに……』

そして待つことさらに数分。ついに時は来た。スモークガラスの向こうに人影が現れた。そしてその人影は小さい。恐らく子供だろう。

「トラッシュ！　来たよ！　しかも子供のようだ！　これなら不信がられずに女湯から出られるかもしれない！」

スバルにとっては最高のお膳立てだ。

しかしトラッシュの方が、良くない形成のようだ。

『スミマセンがメトリーさん達が出入り口の方を向いている状況で

す！　今行けば、バれます！』
「くそ……やっぱり無理なのか……？」

スバルは拳を床に打ち付けた。悔しくて、悔しくてだった。
全身を石鹸でぬるぬるにした事。トラッシュにボディーソープをぶっかけられたこと。ミソラとルナとくんずほぐれつになった事。トラッシュ、突然の発熱。クインティアの下手くそな鼻歌。衝撃の裸体。そして立ちはだかるメトリー。
様々な出来事が、走馬燈のように脳裏を駆け廻っていく。スバルは打ちひしがれた。「僕じゃ、ここで限界だったか……父さん、ゴメンよ……」

『あきらめるな。スバル……お前は一人じゃない』
「と、父さん？」
『いや、ワタシですトラッシュです』

トラッシュの声マネだ。スバルは呆れた。

「……って、また?!　トラッシュ！　いいかげんいしてよ！　ふざけている場合じゃ……」

しかしスバルの文句をトラッシュが遮った。優しく頭を撫でる。そして、その鋭い爪が徐々に逞しい手の平に変わる。その覚めるような白い閃光の体が肌色の筋肉の鎧に変わる。

『もう一度言います。スバル様は一人じゃない……』
「と、父さん……！」
『いや、トラッシュです』
「でも、その体！　肉体！　筋肉！　顎のお髭！　父さんそのものだよ！　どこからどう見ても、星河大吾だ！」

『フフ、そうですか。ありがとうございます。では行ってきます』
「行くって？　どこに……？」

大吾の見た目になったトラッシュは何も言わずに笑うだけだった。
トラッシュは犠牲になるつもりだ。
トラッシュはあかねの方に向かっていく。裸一貫で、たった一人の友達の為に道を作ってやるのだ。
スバルは涙を目に溜めこんだ。

「と、トラッシュ！　ダメだ！　それじゃトラッシュが……！」
『これしか方法はありません。この姿なら、あかねさんの注意を存分に惹きつけられます。その間にスバル様だけでも……！』
「トラッシュ……！　僕……！　僕……！」
『行ってください！　スバル様！　アナタはここで終わっていい人じゃない！！』
「くっ、分かったよ！　ありがとう！」

スバルは出入り口に向かって駆け出した。トラッシュはあかねの方に駆けだす。
「ありがとう。トラッシュ……」スバルは涙を呑んで、ドアに手をかけた。
スバルの背後では悲鳴が。「だ、大吾さん？！　なんて格好をっ！！」「筋肉の中の大吾！」さまざまなものを切り裂かんとする女の金切り声。トラッシュはやりきったのだ。スバルの為に道を作りきった。
スバルはトラッシュに感謝しつつ、外の世界に大きく一歩踏み出した。

「きゃっ……！」

スバルはドアを勢いよく、開けてしまったためにドア向かいの小さな人影を押し倒してしまったようだ。スバルは「しまった……！」と思い、すぐにその子供と思しき人影に駆け寄った。

今思えば、頭の中はトラッシュへの負い目と感謝で一杯だったのかもしれない。なので、目の前の惨状を見誤る。

「だ、大丈夫で……」

スバルは固まった。ここは女湯だ。確かに女湯だ。だが、女という生き物は、腐りかけても女だ。男が女と思わなくても、女という性別ではある。それはそういう悲劇を生む事なのだ。

「ス、スバルちゃんたら……！」

目の前には老婆が倒れていた。スバルは何が悲しくて、老婆を押し倒したのだろうか。スバルはすごく悲しくなった。食事の時の、ヨイリーの表情を思いだした。

スバルはもう訳が分からない。思考が止まった。手はわなわなと震えていた。

「なっ……え……？」

皺、皺、皺、皺。垂れ下がった皮膚に刻まれたそれは、人間の生きた証。皺、皺、皺、皺。ミソラ、ルナ、クインティアとは比べようもない。比べるのもおこがましい。目の前いるコレは時の残酷さが作った生ける屍だ。死んだ肉体に、魂だけが執拗に食らい付いている図式だ。それがスバルの率直な感想だった。

ヨイリー博士とスバルは目があった。

スバルは失神した。そうやって身を守るしかなかった。

家に帰ると、もちろんスバルとトラッシュはさんざん怒られたそうだ。

trash―36：デス・リベリオン

銭湯での悲しい事件から数時間後。

暁星（ぎょうせい）が瞬きだす今日未明。その早い時間に、ＷＡＸＡとサテラポリスのメンバーが薄暗い中で顔を合わせている。そうやってリビングで腰を据え、重苦しい空気を作っているのだった。彼らは密やかに話しあっている。参加者はミライとヨイリーにシドウだった。気配として、青く冷たい印象を植え付けた。

スバルの家に泊まり込んだのは、何も遊びが用だった訳ではないようだ。

目に熊を作った青年が、額に手を当てた。

「はあ。結局、現れませんでしたね」

落胆したシドウがぼそりと言ったのだ。そんな彼の手元には、広がるように紙切れが並べられていた。ナルオがくしゃくしゃにしたそれと同じものだ。

ミライはそれに視線を落としこんだ。

「ハイドのものと思われる犯行声明のような手紙……」

ミライは、その紙の一つを取り上げた。これはルナの家に届けられたものの一つである。どうやらユリ子はサテラポリスに相談していたようだ。

「私達の予想ではルナちゃんが狙われるはずだったんだけどね」

ヨイリーは当てを外したようだ。

「俺達を騙したっていうのか？　せっかくうまい棒を我慢して張り込んでたっていうのに……」

シドウは一晩中、うまい棒を我慢して頑張っていた。銭湯で、はしゃぎまわっていた原因はこのせいだろう。任務中はおふざけ厳禁だ。だから、銭湯では羽を伸ばしたかったのだろう。ついつい女湯を覗いてしまうワケだ。

「しかし……妙ですね」

銭湯には行かなかったミライが腑に落ちない様子だった。口元に手を添えて、警察らしく推理してみる。

「白金家に送られた手紙によると白金ルナとスターダスト・ロックマンを狙っているようにしか読めなかったのですが……」

「だからこうして、スバルとルナが一緒になる時に見張ってたって言うのにな」

「まあ、何もなかったのならそれが一番じゃない？」

ヨイリーはもっともな事を言ってニッコリとした。徹夜で見張りをしていた二人に「ご苦労さま」と笑顔を送る。

シドウもうまい棒を取り出して、すっかり仕事モードから脱力し始め出した。

「何もないなら、それが一番ですね。……なんだかなあ、久しぶりにスーパーヒーローらしく活躍できそうだったのになあ」

「……何かがおかしい」

ミライは不安気に眉をひそめるばかりだった。再三にわたり送られた、この脅迫状が嘘だとはとても思えなかったのだ。

しかしヨイリーとシドウはもう、任務の事をしまい込んでいた。ハイドの事を頭から払拭してしまったようだ。

そして数時間後、日曜日の朝が訪れる。空はスバルの旅立ちを祝福するかのように雲一つない。宇宙まで遮るもの一つない青天井（あおてんじょう）だった。

今日はスバルが月に行く事が予定されていたのだ。スバルがウォーロックと久しぶりに会いに行ける日である。スバルは胸を膨らませた。トラッシュもワクワクしている。

そう、今日という日は、スバルとトラッシュ、そしてウォーロックにとっては忘れられない一日になる。

とうとう六月二三日が始まるのだった。

そして今、スバル達は朝食をとっている。シドウもミライも、任務の事を伏せていた。シドウはいつもの調子でうまい棒を食べている。任務の事を匂わせない辺りは、本当に感服してしまう。これでルナに心配は掛ける事は無いだろう。

ごく楽しい朝の食事風景だった。

「ねえ、スバル君。いつ出発するの？」

ミソラが男用のどんぶりを片手に聞いてきた。彼女の口元にはお弁当がくっついていた。「ああ……んもう」隣のあかねが、愛くる

しい我が子のようなミソラから、そのお弁当を取り上げた。
スバルは苦笑をもらしながら答える。ミソラ見たいにどんぶり片手ではない、お茶碗でお上品にまとめてくるのだ。

「たしか、出発はお昼辺りだね」

スバルは確認の意味を込めてヨイリーの方に目をやった。だがヨイリーは昨日の一件からスバルを意識しているようだ。微妙な関係に気まずい様子。頬を染めて腐った乙女を演じる。残念ながらスバルは八十代の老婆に興味はなかった。それくらいの年齢になると、女というよりも、印象派の芸術作品にしか見えない。
そうしてスバルは食欲を失ったが、昨日の一件には自分の非しかない。黙って、屈辱を味わう事にした。
恥じらいのヨイリーはスバルに目線を合わせずに答えた。

「ス、スバルちゃん……。アナタの言う通りよ。今日は昼からＴＫシティにある軌道エレベーターから月に行ってもらいます。んもうスバルちゃんったら……！」
「ぐう……耐えろ僕。耐えるんだ……僕！」

スバルは箸を握りしめた。涙をこらえている。都合よく昨日の記憶だけ消去したい。
しかしそんな事を露（つゆ）とも知らないゴン太は、いつもの調子で問いかけた。

「軌道……エレベーター……？」

ゴン太は馬鹿っぽく首を傾げていた。だが、今回ばかりはゴン太だけが馬鹿なのではない。スバル以外の大半がゴン太のように頭を悩ませていたのだ。

スバルのオタク魂に火が付いた。宇宙を語らせたら、スバルのしつこさの右に出る者はいない。気分転換にスバルは椅子から立ち上がり熱く語った。

「ゴン太……！　キミは本当に馬鹿だね！」
「あのースバル君。実は私も分かりません！」

ミソラも挙手をした。するとルナも「軌道エレベーター……？　バッカじゃないの？！」と言いたげに鼻先で笑い飛ばした。キザマロは不安げにメガネをしきりに上げ下げしている。ジャックは興味がないようで、卵焼きに惚れこんでいた。ヒカルはストリートファイトをしに、どこかへ行ってしまっている。スバルはやれやれと、肩を竦めた。

「フフ。みんな本当にダメダメだね。軌道エレベーターって言ったら、宇宙開発にはなくてはならない素晴らしい代物さ。その仕組みはというとね……。人工衛星と同じでね……」

とうとう語りだしたようだ。スバルの話は長い様子。ミソラ達は食事に集中した。それでもスバルは熱中していてまだまだ語る。

「静止軌道上を起点にして……そうしてケーブルを両端へ伸ばしていく……その際……うんたらかんたら……ほにゃららほにゃらら……」
「コラコラ！　うるさいよ、スバル君ー！」

耳について離れないスバルの熱意と鬱陶しさ。堪りかねたミソラは、箸でスバルの太ももを突いた。スバルは悲鳴を上げるが「僕は諦めない！」と言い、まだまだ止まらない。ミソラは絶句した。

「ごにょりぼそぼそ……で、アンカーを設けて静止軌道に丁度、重心が来るようにしなければならない。しかも、垂直的な設置を可能にするために、赤道から南北緯度差±３５度が理想なんだ。
と言う訳で……起動エレベーターで宇宙に脱出した後は、定期連絡船で月に行く事になるんだよ！　……ってね！　ですよね、暁さん？」

スバルは満足気だ。シドウに良い笑顔を送る。

「ああ、流石だ。しかし、良く俺には良く分からなかったぞ！　まあ多分、合っているんじゃなかろうか？」

シドウはうまい棒で頭が一杯だ。スバルの小難しいオタク話は理解できないし、したくもなかった。
するとミソラだ。

「でも、いいなあ。スバル君だけ月に行けてさ」

ミソラはどんぶりを空っぽにすると頬をふくらまして羨ましがった。きっとミソラのお腹も同じくらい膨らんでいるのだろう。
スバルはミソラのどんぶりにご飯をよそってやり、それを詫びとした。

「ゴメンよ。でも今回は旅行じゃなくて、ウォーロックに会いに行くという使命があるからね」
「そっかー。なら仕方がないね」

素直で心優しいミソラは納得したようだ。しかし今度は心優しいが、素直でも何でもないルナが反応した。なぜかお怒りのようだ。

「ふん！　何が使命なのかしらね！　ちょっと、ウォーロックに会いに行くだけでしょ？　月の観光とかしちゃうわけでしょ？　言っておくけど羨ましくないんだからね！　勘違いしないでよ？！」

ルナは箸をスバルに突き立てて宣言した。スバルは「人に箸を向けるなんてお行儀が悪い委員長だ。こんなことじゃ生徒会長委員長でもない、ただの委員長だ」と思って、溜め息を吐いた。

「委員長、うるさいよ」

スバルに軽くあしらわれた。ルナは魚の小骨を取り除きながらイライラしていた。

「はあ。スバル君ったら……もう！　……ふんだ！　もう、いいですわ！　ワタシの気持ちも知らないでね……！　ああん、もう！！」

「ど、どうしたのさ？！　変な委員長だ！　黙ってご飯を食べれば人一倍素敵なのにね。今の委員長はゴン太にも劣る！！」

「う、うるさいわよ！　はあ……イライラするわー！　んもう、イライラしてもう……なんだか……！　うわああわっしゃー！」

「い、委員長？！」

これにはビックリだろう。スバルはルナが非常に鬱陶しく感じた。食事時くらい落ち着いてお嬢様らしくして欲しかった。これではただの気狂い女だ。ミソラの方が何倍も可愛くて素敵で素晴らしく見えた。どんぶり六杯なんてお茶目すぎて溜め息がうっとり出るくらいだった。

スバルはルナに突き放つように言ってやった。

「うるさいぞ！　使命を全うしに行くくらいで騒がないでよ！　僕の使命はロックと会う事なんだ！」

「ふんだ！　もういいですよーだ！」

ルナは面白くない様子。ただ友達に会いに行く事を、使命だ、なんて大義名分を作られてしまっては苛立ちが募るばかり。とどのつまり、ルナは嫉妬していた。嫉妬魔で見ていて非常に気分が悪いことだ。

それにルナと言う名前をしていて、月に行った事さえもなかったらハッタリもいいとこだ。それに冗談の程度も面白くないだろう。ルナはそんな事も危惧しているのかもしれない。

そしてルナはあっかんべーを綺麗に決めて、ツンツンとして二階に行ってしまった。これではスバルこそ面白くない。これでは気持ちよく月旅行に出れない。

なので、とりあえず味噌汁をすすって心を落ち着けた。

「どうしたんだろう？　委員長のヤツ……ごはんちゃんと食べないと、大きくなれないと思うのに……」

「フフフ……バカねえスバル」

『フフフ。おバカさんですねスバル様は』

あかねは余裕の母親ぶりでうんうんと頷いていた。腕組みながらでさぞかし納得している様子。トラッシュも加わりスバルは一段と馬鹿にされた気分を味わった。

あかねはそんなスバルをじっとりと見下ろす。スバルは頬を引きつらせた。

「まあ、委員長さんも年頃の女の子なのよねえ」

「どういうことさ！」

スバルは魚の小骨を取り除きながらイライラした。

「まったくもう。スバル君ったら、大はしゃぎしちゃって……何が軌道エレベーターよ。何がウォーロックよ……！　バッカじゃないの！　オタク魂を燃やしてる場合じゃないってのよ！　バカだわアイツ！　んもうバカバカバカー！」

ルナはスバルのベッドに寝転がりながら言いたい放題だ。

実はルナは不安だったのだ。ハイドの事がとても心の奥底で疼いていた。それなのに、スバルは楽しそうにしていた。言おうとしても言おうとしても、スバルは冗談か何かだと思い、取り合わなかった。それが寂しくて許せなかった。そのあげく、軌道エレベーターのワケ分からない解説を始めるのである。女の子としては黙ってられなかったのだ。

だが、自己中心的で、高圧的な態度で、高飛車で、お高くとまっているルナだって分かってはいた。今の自分がわがままである事はきちんと受け止めていたのだ。だから落ち込む。

「はあ……何やってるんだろう。私……私こそバカだわ」

がっくりと肩を落として、ルナは自分の頭をポカリと小突いた。そしてぼんやりと窓を覗いてみた。

窓に映るルナの目元には、うっすらとクマが出来あがっていた。ハイドのお陰で昨日は眠れなかったのだ。それゆえに苛立ちを覚えたところもある。

しかし昨日の晩、「どうせ眠れないなら……」とルナは思い立ったのだ。そしてスバルの為に、はりきって一晩中、あるプレゼントを作ってやったりもした。だからスバルがウォーロックにうっとりしているのを見るのはやりきれなかった。祝福するのが常だろうが、

それでも我慢できないものがあったのだ。
ルナはふてくされたようにベッドに顔を埋めて、煩雑した脳内を空っぽにした。

そして少し前のある時間、某所。とあるアジトで、しめやかに悪意が燃えあがろうとしていた。
怪しげなネオンライトが、亡霊のような印象を与える場所である。カジノのような所でスロットマシーンに、赤黒のコントラストが鮮やかなルーレット盤が整然と設置されている。
ここに犯罪者どもが根付いているのだ。その一人のハイドはいよいよ行動を計画に移そうとしていた。

「ンフフ……。そろそろ、計画を始めましょうか……。こちらの兵力はトレイスが数万体。そして私達に加えて、プルト・キグナス様たち二人のレギオン……申し分ないでしょう」

ハイドはニヤニヤして分析していた。
そして黒鳥の電波体プルト・キグナスはハイド達に命令する。

「いいかい？　僕の言う事を聞いてれば、間違いはないんだ。レギオンの力を使えば、地球は思いのままだよ。君たちに悪い思いはさせやしない……。
僕の復讐が終われば地球を好きにしていい」
「フム……。それはステキな事ですな。私もプルト・キグナス様の意見に賛同しますぞ」

ハイドに似た紳士的な礼装に身を包む老人は、髭を揉みながら含

み笑いだ。青い鉄仮面で、表情をやんわりと隠しながらの悪い笑みだ。杖を突いて怪しげな魅力のある眼光を光らせているあたり、彼もただ者ではないのだろう。

彼の名前はミスターキング。かつてスバルを苦しめた者だ。いつか地球を支配しようと、虎視眈眈と機会をうかがっていたらしい。今はプルト・キグナスの下に付いているようだ。

そのプルト・キグナスがリーダーのこの犯罪組織は現在、ハイド、五里門次郎、ミスターキング、ヘル・スコルピオが主要メンバーである。

どうやらプルト・キグナスは地球を拠点にして、自分の王国を作るつもりらしい。かつてのＦＭ星人としてのプライドは微塵もないのだ。もちろんインフィニットや、シュンランからすれば命令違反である。だがプルト・キグナスは、どうしてもロックマンを絶望的な状況で葬りたかった。憎しみの炎が理性を溶かしきったのだ。

そして怨嗟の声が鈍く響く。ネオンライトに照らされた、黒鳥の負のオーラが浮き彫りになった。

「では僕の命令通りに事を運ぼうか……！　『流星抹殺計画』を始めよう！　僕の今までの憎しみと渇きに決着を……！！」

プルト・キグナスの合図と同時に、ハイドと五里はイリーガルカスタムなハンターを取り出した。そして同じくイリーガルカスタムされた、電波変換認証コードを読み上げる。この認証コードは、レギオン達が支配している、アカシックレコード内の領域にあるものだ。

続いてハイドと五里は、ある電波体をウィザード・オンした。彼らは、オリジナル・ファントムとオリジナル・イエティという電波生命体だ。古代文字が全身くまなくあしらわれた、意志持たぬ生命である。

――オリジナル・ファントム。オリジナル・イエティ――
――遥か昔、宇宙より飛来したユグノアに内容されていた始祖電波生命の一つである――
――トレイス、オリジンと同じく、シュンランの生み出した子供の一体だが、惑星に知恵を与えて導くという使命上、その能力は段違いだ――
――そうして長い時間が経ち、彼らは汎用化されてムーの電波生命体として分化したのだ。そう、それらがスバル達を苦しめた、後のファントムとイエティである――
――つまりだ。彼らはただの電波体ではない。崇高でラ・ムーに近い存在である――

プルト・キグナスがそれを用意したと言う事は、明らかな殺意を燃やしている証拠だった。
ハイド達は電波変換を始める。

「ンフフ。では、始まりですね……！　アカシックレコード……アクセス。レギオニカル・コードＯＣＡ！　オペラ・ファントム」
「いっちょ、暴れてやるか！　アカシックレコード……アクセス！　レギオニカル・コードＯＣＢ！　グランド・イエティ」
「フフフ。再び世界征服の始まりですな……！」
「キシシ！　面白くなってきやがったぜ！！」

復讐者たちの集まりが、スバル達に再び牙を剥く。

ルナがご立腹してから数分後。ご機嫌とりの為、スバルはルナの元に訪れていた。よくよく考えれば、スバルにとって、ルナを怒らせたまま月に向かうのは気分が良くなかったのだ。美しい月の景色もルナのせいでくすんでしまっては笑えないのだ。

しかし自分の部屋をノックして入るという行為は、スバルの自尊心（プライド）を傷つけた。そうやってスバルはもう少し傷ついていくのだ。

「あの……委員長」

スバルは恐る恐る呼び掛けた。ルナはスバルのベッドで不貞寝をしている。返事がないので「あの……委員長さん」と丁寧に呼び掛けてみた。だが反応の意志を示さない。どうやらスバルは無視をされたようだ。スバルは少し悔しい。

『完全黙秘ってヤツですね』

トラッシュは納得したようで、大きく頷いていた。

勝手にベッドで寝られて勝手に怒られて、スバルは散々だ。怒りが込み上げたので、机の上に置いてあったせんべいを投げてやった。

「バトルカード。フウマシュリケン！」

「あたっ」

見事命中。
頭をさすりながらルナは上体を起こした。やはり起きていたようだ。それなのに無視を決め込むとはなかなかどうしての根性の据わりよう。
スバルは不満をあらわにして言ってやった。
「無視しないでよ。おかげでせんべいを投げちゃったじゃないか！」
「なんで来たのよ？」
「いや……ここ、僕の部屋だし。用もなく来るのは普通だよ！　トラッシュ、お茶！」
『了解！』
スバルは、息巻いた様子でお茶を出してやった。ルナは一瞬、眉をひそめるがテーブルに着いた。「しょうがないわね」と言いたげに、あくまでルナが譲歩した形を取っている。
スバルはのんびりと呆れた。
「素直じゃないなあ……」
その頃、ＴＫシティを始めとしたニホンの各都市で、異常事態が起きていた。
謎の電波生命体、トレイス達による襲撃だ。意志を持たぬ兵隊の攻撃には情けなど含まれてはいない。
迎え撃つのは、本日が最初の実戦任務となるアストラル・ホープ電波人間部隊である。
しかしトレイスの力は驚異的だった。電波変換に慣れていない軍人や、サテラポリスの手には有り余る。

「隊長！　敵の数が多すぎます！」

アストラル・ホープの一体は弱音を吐いた。敵の数が多すぎる。異常な戦力差だった。一体倒せば二体が現れ、味方を二人失う、そんな戦況だ。

そこには建物が半壊し、温泉街よろしく、もうもうと煙を昇らせている光景が広がっていた。トレイスはアストラル・ホープ部隊に、市街戦を挑んでいたのだ。

市民は命惜しさに我先にと逃げだす。アストラル・ホープの先導を意に介さない烏合の集と化していた。

人々は恐怖していた。目に見える化け物の侵略風景だ。映画でしか見た事のなかったものが公開されている。オフィスの窓から張り付いてその様子を眺めているサラリーマンも少なくはない。だがあまりもの臨場感に呆気を取られているようだった。

幹線道路では、割れたアスファルトに足を取られた親子連れが、恐怖に震えて惨然たる光景を仰いでいた。

誰もがドラマティックなマジックショーに、恐ろしくも現実的な、威圧的な緊張を感じている。

ここ数カ月で、発生していた電波体の物質化現象による弊害が表れていたのだ。一般市民は誰もが目を疑った。だが疑った所で平凡が戻ってくる事はなかった。ニホンは今初めての本土侵略を受けていた。

「総員に告ぐ！　市民の避難を優先させろ！　敵を絶対に我々の後ろに通すな！！　諦めるな！　増援が来るまで堪えろ！！」

「りょ、了解しました！」

「ぐわぁぁ！」

「おい、大丈夫か？　グギャぱ！」

決意をあざ笑うかのように、同僚の悲鳴だ。助けに行った隊員も消えて、徐々に理性が壊されていく。パニックになる。アストラル・ホープ達の士気は急降下だ。

「くそ……。こんな時に……ロックマンがいれば……！　流星のロックマンがいれば！！」

「じゃあ、そろそろスバルちゃんをエレベーターの駅に送り届けましょうか」

午前十時も回った頃、ヨイリーはリビングのソファから立ち上がった。

あかねは気を利かし、子供部屋に上る階段へ向かった。

「じゃあ、スバルを呼び付けますね」

その様子に、シドウも外出の準備を始めた。

うまい棒を数百本を電波化して、ハンターに落とし込む。シドウはうまい棒を常時携帯していないと、禁断症状のようなものがでるらしい。手が震えだして、視界がぼんやりして、動悸が激しくなる。原因はうまい棒しか食べていないための栄養失調だろう。

カーペットの上で正座して読書と洒落こむ、大人しくお上品で清楚で可憐なクインティアも流石に怒った。

「コラ、シドウ。またうまい棒の準備して……」

「いや。これがないと不安で死にたくなるんだ」

「まあ……可哀そう」

ジャックは寝転がりながらテレビを見ていたが、後ろでシドウとクインティアがうるさいので苛立った。

「うるせえよ！」
「おお、ジャック。うまい棒食うか？　うまいぞ？」
「黙れ！　うまい棒バカ！」
「コラ。バカっていう方がバカなのよ。分かるわねジャック？」
「姉ちゃん……。小学生みたいな事言うなよ……」

ジャックは呆れた。
だが隣の部屋の少年も呆れていた。

「うるさいな……」

ミライはその騒々しさに呆れているようだ。ミライは畳の和室で座禅を組んでめい想している最中だ。ミライは暇があれば、精神統一をしている変わった小学生だ。
なので隣の居間で騒ぎ当てる彼らが邪魔くさい。

「レイダー。斬ってこい」

レイダーは震えるハムスターのように首をプルプル振った。流石にそれくらいの良識はある。

『いやです。無理です』
「フフ、冗談だ」
『で、ですよね……』

レイダーがほっと、ひと安心した時だった。
シドウが悲鳴を上げた。「な、なんだと！　被害状況は?!」その声に、ミライは眉にしわをよせて、居間の方に視線を流す。
シドウはうまい棒をしまいハンターのエアディスプレイに食い入るようだった。クインティアとジャックもただ事ではない様子で見守っている。

「何かあったのか……?」

ミライは瞑想を切り上げて、シドウの方に向かう。

「どうかしましたか?」
「ミライか……。ニホン各所のサテラポリスから連絡が入った。ニホンの主要都市が何者かから攻撃を受けている」
「まさか……ハイドの仕業でしょうか?」

シドウは煮え切らない返事を返すばかりだった。

「わからないな……。だが、俺達が星河家を見張っているスキを狙ったのだとしたら可能性は高いかもな……」

このやり取りにジャックは、じれったそうにしていた。ジャックは考えるよりも行動が先だと感じていたのだ。
シドウに乱暴に言いつける。

「おい！　ここでグダグダ言っている場合じゃないと思うぜ?!さっさとその場所に行って敵をボコればすむ話だろ！」
「たしかに、ジャックの言う通りか……」

シドウはもの分かり良く溜め息を吐いた。

ミライは事態を分析するためにシドウに問いかけた。

「それで、現場は？」

「ああ、そうだな。被害場所は
シーサーアイランド。
ナインラップシティ。
ウズマキシティ。
アキンドシティ。
ハンナリシティ。
エンドシティ。
デンサンシティ。
ＴＫシティ。
ドサンコシティ……と数が多い」

クインティアは呆れていた。ほぼニホン全国どこでも状態だ。

「本当にすごく多いわね……」

「でも、敵は待ってくれないわよティアちゃん？」

「あ、博士……」

するとヨイリー博士が話し合いに参加してきた。さっそく彼女は作戦を練り始める。老人のものとは思えない機転の速さに、シドウは恐れ入った様子。

ヨイリーは的確な老人だ。伊達にニホン一の科学者をやっていない。

「じゃあ、ミライちゃんはデンサンシティ、シドウちゃんはＴＫシティ、ティアちゃんはアキンドシティ、ジャックちゃんはハンナリシティ、ゴン太ちゃんはシーサーアイランドを頼むわね。

それぞれの都市にはヘイジちゃんとケンちゃん達にバックアップ

を要請しといたから。
　アナタ達は、ニホン軍と各都市のサテラポリスと連携して敵を殲滅！　戦況は思わしくないようだから、急ぎなさい！」

　ヨイリーのスパイスの聞いた喝入れに緊張感が高まった。
　そしてすぐに一転、ヨイリーはにっこりして「大丈夫、アナタたちなら問題ない！」と励ました。だが、隣には食事中のゴン太がいつの間にか湧いて出ていたから締らない。ジャックは驚いた。

「って、ゴン太。お前いたのか！」
「ああ、いたぜ！　牛丼を食ってるところだったが参上したぜ！」
「あら、ゴン太ちゃんだってサテラポリスのオフィシャルウェーブバトラーでしょ？」
「ま、まあ。そうだけどよ……」

　牛丼を食べながら格好つけているゴン太を見ていると、ジャックは少し不安だ。だがヨイリーが大丈夫と、言いはるので口をつぐむしかない。
　しかしミライはそれこそ不安だった。ゴン太抜きにしても、少し憂慮した。

「博士……お言葉ですが。俺達全員が迎撃に向かうと、それこそ敵の陽動に乗せられると言う事なのでは……？　俺の予想では、コレは囮かと……」
「大丈夫よ。コダマタウンは子供部屋で楽しくお話し中の、ミソラちゃんとツカサちゃん達に任せるから」
「ですが……、やはり俺は残った方が……。アイツらだけに任せるわけには」

　ミライは言いようのない不安に駆られていた。虫の知らせだ。も

しかしたらミソラ達ではどうしようもない事態が起こるのではないのか？　という考えが巡っていた。
リーダーとしての責任からか、そう感じたのだろう。
しかしヨイリーこそ最善の選択のつもりだ。コダマタウンは田舎で、先の列挙された都市は人が多い。優先順位からして違うのだ。なので諭すように説いた。

「でも、ミライちゃん。デンサンシティの被害が大きくてニホン支部の皆だけじゃ手が回ってないそうよ。アナタの力が必要なはず。それこそ他の都市だって同じ。ここはお互いに仲間を信じて戦い抜く場面よ。信じる事も戦い……ってね」
「りょ、了解しました……」

この時、ミライ達は選択を誤ったのである。
この選択一つで、スバルは救われ、ミソラも、ワタルも救われたのかもしれない。

ミライの睨み通り、各都市を攻めたトレイス達は囮だ。
ハイド達、プルト・キグナスの目的はロックマンの抹殺である。
星屑の物語はとうとう終わろうとしていた。
月明かりに照らされる小さな星屑は、最後の輝きを見せる時が来たのだ。過去を壊す悪魔から世界を守る時が来た。
そう、命を懸けて。

「あ、あのスバル君！」

ひっくり返った声でルナは、スバルを呼びつけた。席を立ち、スバルの袖を引っ張って部屋の隅に誘い込んで、勇気の限りだ。

ミソラとツカサはその様子にくすりと笑った。

ルナの顔を真っ赤だった。そうあるだけで、何かと想像が付く。

スバルは体を逃がしながら、やや怪訝な態度でルナに臨んだ。

「なに？　委員長。コーナーに追い込むなんて、僕がボクサーだったら許せない状況だよ」

『モードパンチ！』

『ぐはああー！！』

「え？　トラッシュ？！　何でトラッシュを……！！」

スバルがふざけたおかげで、トラッシュのへこみがまた増えた。

そうすることにより、モードは何とか場を取り持つことに成功したのだ。

ごにょごにょとルナにエールを送る。もちろんスバルの耳にも聞こえる、秘密のエールだった。

『頑張って。ルナちゃん！』

「いや……ダダもれだよモード……」

『モードパンチ！』

『ぐわはああー！！』
「ト、トラッシュッ？！　……わ、わかったよ。ちゃんと聞くから。トラッシュをへこまさないで」
『ワタシ、心身共にへこんでおります』
「よしよし、痛かったねえートラッシュ。よしよしー」
『モゥォードゥオ……』
「わわっ！　ごめんなさい、ごめんなさい。もうしません」

傍から見ていたツカサは、徐々にトラッシュがデコボコになっていく光景に笑顔がもれた。それはそうだ。なぜかトラッシュは幸せそうだったのだから。
スキンシップここに極まれりと言った所か、トラッシュはもう動けない。

「幸せそうなトラッシュ君だね」
「うんうん。初めて会ったときは、あんなボコボコじゃなかったのにね」

ミソラはお茶をすすってまったりとその様子を見ていた。スバルが大慌てなのが余計に可笑しかった。

ルナは、モード達に流れを奪われそうになるが、なんとが踏みとどまった。そして意を決した。勢いに任せて腕を突き出す。その手には甲斐甲斐しい努力の結晶を持っている。

「ス、スバル君！　これ！」
「なに？　コレ？」

スバルは不思議そうに、ルナが差しだした包みに目を落とした。
ルナは、いざ勇気を振り絞ると、つんけんとした様子でプイッと

顔を逸らした。頬は赤らんで、耳までそうだ。強気な態度で何とかごまかしている様子。彼女は苦労性なので、スバルの反応が気が気でない。

突っ返されたくないルナは、半ば強引にスバルにその包みを押しつけていく。押し売りだ。

「何って、決まっているでしょ！　プ、プレゼントよ！　私が徹夜して作ったんだからありがたく受け取っておくがいいわ！」

「はあ。あ、ありがとう……。でも、中身はなんだろう？」

スバルが興味本位で高級和紙で無駄に取り繕った、箱を取り払おうとする。なんともデリカシーのない指使いなので、ルナは堪ったものではない。

ルナは大慌てで、スバルにまくし立てた。何が何でも中は見られたくない様子。目の前で自分の素直さをひけらかされれば、恥ずかしいなんてものではないのだろう。

そうだとしたら、とんでもないプレゼントだろう。

ルナは、プレゼントをアンマテリアライズして、包みを強制的に電波化させてしまった。

「な、中身って……！　そんなのどうだっていいじゃない？！　さっさとソレ、ハンターにしまいなさいよ！」

「……う、うん。分かったよ」

「ゴメンナサイは？」

「ごめんなさい。スミマセン、僕がわるうございました」

「ふ……ふふん。よ、よろしいわよ」

ルナの追い詰められた笑顔だった。ルナは一人でに焦っている光景だ。スバルはその盛り上がりを見ていて「少し、落ち着きなよ」と呆れた。

ルナは上気した頬に手を当てて、その場を犬のようにクルクル回っていた。そして思い立ち、外の空気に当たりに行く事にした。頭を冷やさないと見苦しい醜態をさらし続ける事になる。それはプライドが高い手前、黙認出来ない。

すぐにルナはミソラを連れて勢いよく玄関まで下りていく。

「あー、なんか落ち着かない！　ちょっと、外の風に当たってくるわ！　ミソラちゃん、行きましょ」

「え？　なんで私？」

「いいから！　来て！」

「う、うん……」

ルナは困惑するミソラを強引に引っ張っていった。

そしてルナは、ミソラを無理やり引きつれて、落ち着ける場所を探した。

しばらくすれば少女二人は、コダマタウンの憩いの場で落ち着くのだった。そこはＢＩＧ　ＷＡＶＥ前公園。目の前にあるトロピカルな店は、シャッターが閉まっており閉店状態だった。南国は今、出かけているようだ。

そんな静かな公園だった。だがルナは、そわそわしており浮いてしまっている。静かなその空気を、ルナが取り壊してしまっている。ミソラは苦笑して、ルナを見守ることにした。

「今日は忙しいね」

「はあ……なんだか落ち着かないの……」

「どうしたのかなルナちゃん？　いつも以上にプンプンしちゃって

さ……。スバル君、困ってたよ？」
「うん……そうね」

ルナは、ふと落ち着きを見せたかと思うと、すぐに落ち込んだ。忙しい女の子だ。

ベンチに腰を落として、がっくりうなだれれば、哀愁漂うサラリーマンのようだ。リストラを家族に打ち明けられないように、ルナも感情を素直に吐露できない。

ミソラは見かねた様子で、ルナの背中をさすってやる。しかし別にルナは船酔いでも何でもないのかった。だが、ルナはそれを拒む気配はなかった。さまざまな出来事に錯綜した情緒が生まれ、酔いに似た感覚を覚えていたからだ。

「ルナちゃん……今日、なんだか変だよ？」
「分かってる。うん、分かっているの」
「うーん……」

ミソラは困ったように指をくわえた。

ルナに悩みがある事は違いない。ミソラは何となくそう感じた。だが、それをほじくり返して友達面するほど、浅はかでもなかった。ルナの意気消沈した様子は、それほど付け入る隙を与えないのだ。

ミソラは、そわそわと視線を泳がせて、何とかルナを元気付ける方法を模索した。

頭をぐるぐるとアイデアでこねている。すると「うん、決めた！」と、突然ルナが飛び上がったのだ。目覚ましでも鳴ったのかというくらいの、いきなりの出来事だ。当然、ミソラも驚いて飛び上がった。喉から内臓が呼び出そうだったので、息を呑んでルナを凝視した。

「ど、どうしたの？！」

「あの！　ミソラちゃん！」
「は、はいっ。な、何かな?!」
「スバル君って、普段どうなの?」

ルナは背中を向けて、なんとも決まり悪そうだった。胸元で指をちょんちょんと突っつき合っている事が、容易に捉えられる。もじもじとした態度がそうだ。

ミソラは質問の意味が分からず、ルナの方に回り込む。ルナは逃げるように独楽（こま）のように回った。どうしてもみっともない顔は見られたくないようだ。

「ど、どういうこと?」
「そのままの意味よ。スバル君は普段、どんな感じなのかなぁ……って」

それは奇妙な質問だ。それこそ、ミソラがルナから聞きたい質問だったから。ミソラは少し不満げに口を尖らせた。ブーツで地面を掘り返せば、ルナへの嫉妬があらわになるのだ。

そのせいか、ミソラは意地悪くルナに返した。

「えー……でもルナちゃんは学校のクラス同じだよね。そっちの方がスバル君と普段一緒じゃないの?」
「違うのっ」
「何が違うの?」
「だって！　ミソラちゃんは任務でスバル君と同じじゃない！　クラスが同じだって言ったって、スバル君は、あんまり学校に来なくなっちゃうし……！」
「あっ……」

なるほど、といった具合に、ミソラは合点がいった。ルナこそ不

満だらけで、ガチガチに凝り固まった体で言ってのけたのだ。
スバルはオペレーションアポカリプスの一員として全宇宙を駆け廻る、スーパー小学生だ。いつでも、どこでも、ミソラと共に死地へ乗り込み、窮地を乗り越え、順調に絆を深めた。ミソラにとっては当たり前のものとなった展開だった。無意識に、ミソラはスバルを一人占めにしていた。
ルナはそれが寂しくてしようがない。ミソラは少し意地悪をした自分の器の小ささを反省した。だがルナの方の器は小さいなんてものではない。小さ過ぎて失くさないようにミソラが気づかわなければならない。

「ルナちゃん……。そんなことを気にしてたんだね」
「か、勘違いしないでよ?!　そんなんじゃないんだからね」

相変わらずのルナにミソラは微笑んだ。

「わかったよ。わかった、わかった」

ミソラはルナの事を少し分かったような気がしたのだった。すると、可愛らしくも見えてくる。ルナの器は小さいが、それゆえに美しく繊細な器量なのだろう。まさにルナそのものだった。
ルナは赤面を禁じえない。
とにかく、ベンチに腰をかけて話でもしたい気分だった。

そうして、しばらく経ったころ。ベンチで、スバルについて話しこんでいる少女二人が、まだまだ盛り上がる。男子禁制の雰囲気が公園に立ち込めていた。

ミソラとルナは、それはもう楽しそうだ。二人はさらに仲良くなったに違いない。

そうして歩み寄り合い、絆を確かめ合った二人だった。

そして、いよいよ試練が始まる。

二人の笑顔が、皮肉を演出する。涙を誘う友情劇の始まりだ。命がけのオープニングとエンディングだ。世界中の全ての人の記憶を刻む、時空を超えた戦いが始まる。

全てはこうなることが決まっていたのかもしれない。スバルは世界から、見えない意志から、ただ強く、さらに強くある事を強制されている。トラッシュを、友達にしたものその一環だった。

スバルにとって二ヶ月前は運命の転機だった。

あの時スバルは、シドウにトラッシュを託された。だが、スバルはウォーロックと大吾の幻影に囚われて前に進めなかった。スバルの親友は、ウォーロックただ一人。トラッシュの付け入る隙間は無い。

しかし、ルナが命の危機に晒された時だった。スバルは幾度となく味わった自分の無力さを悔やんだ。自分を支えてくれた人を助ける事も出来ない、その力の無さに涙した。

ウォーロックはもういない。それも理解した。

そして決心した。

戦おう――

その時、トラッシュが隣にいた。スバルは新しい戦友を手に入れた。そしてトラッシュはスバルにとってかけがえのない友達となった。

スバルは感謝していたのだ。ありがたかった。
そして終わる。
トラッシュは役目を終えたのだ。短い命だったが、それでもこの二ヶ月は、スバルという存在が『宇宙（せかい）の意志』と戦えるまでに押し上げた。それは、永遠に刻まれるかけがえのない記録だった。
それはまぎれもない、スバルとトラッシュの物語だったのだ。

【星屑のロックマン完結編：流星抹殺計画】

次元の破壊者と、悪意と憎悪にまみれた天使が牙を剥く。平穏を忌み嫌い、憎しみの炎で世界を燃やしつくすのだ。

とうとう、その男子禁制の空気を、不躾に取り壊す輩が現れた。
少女をつけ狙う、悪漢の二人組だった。ウェーブロードから、卑劣な笑みが落とされる。穏やかさな狂気を孕む怪人の瞳は、ルナを捉えていた。
そうやって、甘酸っぱかった空気を緊張と戦慄を強要するものへと、どっぷりと塗りつぶしていく。悪意と欲望とエゴの塊だ。少女二人の、幸せではとても足りない。それほどに根の深い、黒い感情だ。
手始めにウェーブロードから飛び降り、二人は体を可視周波数へと移した。「え……？！」突如として現れた、怪人と猿人の電波人間に二人は目を奪われた。
マントに身を包み、仮面に真実を隠したシルクハットの怪人と、大きな足、そして巨碗、肩までかかる荒々しい頭髪の原始人（げんしびと）だった。

ルナの悪夢が現実のものとなったのだ。

挨拶を重んじ、オペラ・ファントムは丁寧にお辞儀をした。冷汗(れいか)三斗(んさんと)のルナに気をつかったのか、形だけは完璧な卑屈で異様な体裁だった。それが余計ルナには気味悪く、震えが止まらない。過去に二度も誘拐された恐怖がよみがえる。柔らかい物腰、優しい表情、少女の体への紳士的な取り扱い、その全てが舐めまわすような執拗さで許容できない。ルナは彼が怖い。怖いだけだ。

しかし、それはオペラ・ファントムには関係のない事でもある。舌舐めずりで、ルナの恐怖をさらに煽(あお)り立てる。

「ンフフ……。可愛らしい少女諸君、楽しい日曜日をいかがお過ごしかな？」

思ったより長い舌で、唇を執拗に潤わす。その奇妙な几帳面さに、理解できない隔たりを感じさせられた。懇意的な笑顔が不釣り合いだ。

「こ、コイツは……！」

ミソラは咄嗟にハンターを構えた。

ルナを守る。友達を守る。気持ちはそれで一杯で、覚悟を決められる動機にもなる。

ハープもミソラの隣に現れた。しかし面持ちは悪く、青い体が一層青ざめた。背筋を冷たく、そして広く、さらに遅く、丁寧に撫でられたような悪寒だった。

目の前の二人は、とんでもない力を身に付けたようだ。「ミ、ミソラ……っ」と弱々しく弱音を吐く。気後れしたハープはミソラの袖をキュッと掴み、戦意を何とか維持させる他ない。

『ポロロン。なんて禍々しい周波数なの……』

怖くて怖くてどうにかなりそうだが、ルナは目の前の二人を指差した。強気と高圧的な演技を織り込み、何とか逃げる機会をうかがう。今こそが窮地だった。ここで踏ん張らないと幸せになれる気がしない。

「わ、私達に何の用だっての？！　ハイドとそこのゴリラ！」
「ゴリラ？　てめえ、俺様の事をゴリラって言いやがったな」

その言葉がグランド・イエティの気に障ったらしい。大きな岩石とも何とも言える拳を作り始めた。一歩踏み込み、土の地面を沈める。地面は虐殺されたように、不格好にひっくり返された。その巨大な足跡は力強い。威圧感は半端ではなく、確かな一歩づつで、ルナを壊そうとにじり寄る。

しかし紳士を自称するオペラ・ファントムは、それを制止した。可愛いハイドのヒロインが、グチャグチャなってしまったのでは悔やみきれないのだ。オペラ・ファントム自身、幼くて血の気のある愛玩人形がお目当てだった。ルナの価値をそんな事に見出している。

「ンフフフ。まあ落ちつきなさい……五里。プルト・キグナス様の命令通りにしなければなりません」
「チィッ！」
「さてさて……ルナお嬢さんにはワタシの脚本のヒロインになってもらいましょう！　ああ、麗しのヒロイン！　アナタはワタシのイメージにぴったりなのだ！　アナタはワタシのヴィーナスだ！！」

紳士とは言えない笑顔だった。卑劣で想像だにしえない妄想を繰り広げた、気色悪い悪党でしかない。

「や、やっぱり、コイツ、気持ち悪い……！」

目まいがしつつも、ルナはミソラを連れて逃げようとする。もう一秒でも、この場にいたくないのだ。ロックマンに助けを求めたい。

しかしグランド・イエティは山のような体躯に似合わない俊敏さで、ルナの向かう先に回った。グラント・イエティの、口が裂けたような笑顔にルナは薄ら笑みを浮かべた。目から大粒の水滴が零れれば絶望と何ら変わりない。これは笑えない。

「逃げよーたって、無駄だぜ？　俺たちゃ、世界真理の力を手に入れたあ！　諦めて、大人しく俺達と来るんだ！」

「ンフフ。ダメですよ、五里。乱暴な真似をしちゃあ……」

「へっ！　ガキにゃ興味ねえよ」

『コイツら……！　なんてとんでもない連中なの』

ハープはこれ以上メソメソするわけにはいかない。何とかルナだけでも逃がすしかない。ロックマンなら何とかしてくれる。それだけが望みで希望だ。

気持ちを切り替え、女戦士となったハープはミソラに呼びかける。覇気をまとって心強い。穏やかになっても、やはりハープもＦＭ星人の戦士だった。

『ミソラ！　やるわよ！！』

「うん！　ルナちゃんに手出しはさせない！　トランスコード００４！！　ハープ・ノート！！」

ミソラはルナをかばうように立ち塞がって、電波変換を繰り出す。グランド・イエティは暴力の予感に胸をときめかせた。目の前で輝いて変身している少女に、なぶりがいを見出した。柔らかい肉塊とハープ・ノートを同一視した。

「ハッハア！　コイツはぁ！　いい度胸の小娘だぜ！！」

輝く勇気の少女に、グランド・イエティは眩しそうに大口を開けて、肩を回し、意気揚々だ。
オペラ・ファントムも勘違いした少女を、こらしめようと、ステッキの仕込み刃をきらめかす。狂気に凶器、常軌を逸している。

「ンフフ……！　残念ながらアナタはワタシのヒロイン像には程遠いのですよ！」
『来るわよ！　ミソラ！！』

ハープの掛け声。弾かれたように飛びかかる犯罪者たち。
ハープ・ノートに二人が襲いかかった。二対一、戦闘周波数はハープ・ノートの数倍はある。勝ち目なんてある訳がない。助けなんて来るわけがない。
それでもミソラは、戦うしかない。背中の友達一人を守りたいから。

「ウェーブバトル！　ライド・オン！」

「まったく、委員長を相手にしていると疲れるよ。だよね、ツカサ君」
「うん、そうだね。……でも、僕はそんな委員長が素敵だと思うな」
「うわあ。ツカサ君って変わってるね」
「そうかなあ」
「そうだよ。普通の男子だったら、ミソラちゃんみたいな素直な子が良いと思うよ？」
「ふーん。じゃあ、スバル君は委員長が嫌いなんだね？　だったら、僕が仲良くなっちゃおうかな」
「いや、嫌いではないよ？　ただ、たまにめんどくさいなあ……って思う事があるってだけ」

スバルは自室でルナの性分について愚痴を漏らしていた。ツカサは聞き上手な分、スバルの口は止まらない。

しかし、その時だった。天使が訪れた。耳を塞ぎたいような呪文を刻まれた可哀そうな女の子。それは神の言伝であり、傲慢であり、自分本位で聞くに堪えない内容だった。
必死の思いで星河家の門をミソラが叩いたのだ。あかねは悲鳴を上げることしかできなかった。

『きゃーミソラちゃん！　どうしたの？』

スバルは尋常は無い、母親の差し迫った声色にすぐに階下に向かった。ツカサも珍しく緊張した面持ちで、スバルと共に向かう。

「母さんの声だ！」

「ただ事じゃない様子だね」

玄関でスバルが目にしたのは、怯えたあかねだった。痛めつけられたミソラを抱いて混乱している。

おおよそ普通の事態ではないと推察できたはずが、所詮は専業主婦だ。救急車を呼ぶ事以外には何も出来なかったのだろう。

それでも無我夢中となって、あかねは忙しくミソラに手当てをするが、本業ではないので頼りない。切羽詰まったようで、すがるようにスバルを仰いだ。だがスバルはミソラに目を奪われた。赤いミソラなんて見たくもない、だがそれが現状だ。

ミソラは酷いありさまだ。すすけた髪は艶が無く、ほんのり桃色だった頬は、赤黒く腐りかけ腫れあがる。おそらくにして、そういった果実が体中に実っているはず。あかねが優しく手当てをしても何の意味もない。巻かれていく包帯に、赤い水玉模様がジワリと出来あがっていくばかり。

「ス、スバル。ミソラちゃんが……」

「ひ、酷いケガ……！」

「何があったんですか？！」

ツカサが質問を投げかけるが、あかねはそれどころではなかった。ミソラの手当てでいっぱいいっぱいだ。包帯がいくらあっても足りない様子。その状況に口をつぐみ、ツカサは何も言わず救急箱を取

りに台所に向かった。崩壊した平和のリズムに廊下を叩く足音、落ち着きなく不穏な気配を足早で伝えた。

スバルも「何かできないか？」とおろおろするが、慌てたところで何もできない。友達としてミソラの元に向かい、手を握ってやるくらいしか思いつかなかった。するとミソラが、そのささやかな頑張りに応えてくれた。口の中が切れているのか、滑絶の悪い美声はかすれていた。

スバルはそっとミソラの口元に耳を当てた。気息奄奄（きそくえんえん）とした小さな声に乗せられて、ルナの危機が伝わる。

「ス、スバル君……」

「ミ、ミソラちゃん……！　こんなヒドイ事、誰にやられたの？」

「ス……バル君。ル……ナちゃんが……！　ルナちゃんが……！！」

「委員長が？　委員長がどうしたの？！」

「ハイド達に……連れ去られちゃったよ……！」

「ハ、ハイドに……？」

「う、うん。ごめんなさいスバル君……っ」

ミソラは涙を浮かべて自責の念を訴えた。無力で何もできなかった自分が、ルナを救えなかったと責めている。体をボロボロにしてまで戦い抜いた少女は、友達一人も守れずに泣いていた。「ごめんなさい……」その言葉がスバルにのしかかった。スバルはその謝罪を受け取れない。相手を責めた事により、罪の意識がより明確に浮き彫りになるからだ。

スバルは血の気が引いたように、口を震わせた。ずっとルナは信号を送っていたのだ。「助けて！」その言葉はスバルを頼りにしており、愛しいロックマンにすがっていた必死の合図だった。スバルはそれに気が付けなかった。先週の昼食、今朝のルナの態度、思い当たる節はいくらでもあった。しかしスバルはウォーロックの帰還に浮かれて、そんな信号さえも逃していたのだ。廊下に手を突いて、

情けなさに唇を噛み込んだ。

「ぼ、僕のせいだ……。委員長のＳＯＳに気が付いていれば……」

愚かしい自分自身が憎くて、すっかり塞ぎこんだスバル。しかしミソラが彼に手を伸ばす。朦朧とした意識の中、力なくスバルに訴えた。だが、その強い意志に、優しい言葉がスバルの胸を打った。

「今は後悔している場合じゃない。ルナちゃんが、助けを求めているの……。ロックマンを信じているの……！　助けてくれるって」

「ミソラちゃん……ゴメンよ。僕のせいで」

「ワタシのことはいいから。ルナちゃんを……」

「うん、分かったよ……ありがとう、ミソラちゃん」

「ルナちゃんを助けてあげて……ロックマン！」

「かあさん、ミソラちゃんを頼むね」そう言い、ビジライザーをかけスバルは立ち上がった。玄関を飛び出し、ツカサと共にルナの元に向かう。ミソラが命がけで伝えたその場所は、『コダマタウンの展望台』だ。そこはスバルがロックマンとして始まりを迎えた場所だった。そしてロックマンとして終わる場所でもある。そこで全てが終わり全てが始まる。

今回、ミライ達サテラポリスの隊員は巡り合わせ悪く緊急任務に向かっていた。その事からスバルはうっすらと、今回の事件は罠であると気が付いていた。だが今こそ、ルナの為に戦うしか道はない。どんな運命が待っていたとしてもだ。

「ツカサ君！　電波変換だ。委員長を助けに行こう！」

全力疾走でコダマタウンの街中を走りながら、スバルはツカサに

促した。言われずともツカサはハンターを取り出す。

「分かってる！　トランスコード０２３！　ジェミニ・スパーク！」

『スバル様。ワタシ達も！』

「トランスコード０３０！　スターダスト・ロックマン！」

二本の閃光が空に放たれて、目的地へと伸びていく。

コダマタウンの展望台で、スバルとトラッシュのラストバトルが始まる。

そしてトラッシュとスバルの物語の最終舞台であるコダマタウン展望台。

一年前と変わらないそこは、スバルがウォーロックが初めて出会った場所だった。飲み込まれそうな星空から流星が降ってきた出会いの場所。だが、今は別れの場所でしかない。なぜなら今はまだ日が高く、出会いの気配などは微塵も匂わせないのだから。日曜日の平和な昼間、青葉が広がる小高い丘のうららかな日差し。そこに悪意は実っていた。

ロックマンは、ルナの元に駆けつけた。目の前には、ハイドに後ろ手に縛られたルナの姿が。「ロックマン様！」ルナは悲喜交々（ひきこもごも）叫んだ。後ろのハイド――オペラ・ファントムがいやらしい笑みを浮かべている。

敵は総勢三体だ。望遠鏡が備え付けられた広場には、スバルの見たことのない電波体がいたのである。オペラ・ファントムに、グランド・イエティそしてヘル・スコルピオ。「ゴクリ……」その一体一体の戦闘能力の高さに、ロックマンは唾液を嚥下（えんか）した。口の中は

乾いて緊張を強いられる。隣のジェミニ・スパークもロックマンと同じだ。戦闘周波数からして、勝ち目がないだろう。ロックマンとジェミニ・スパークは戦わずして理解してしまった。

特にヘル・スコルピオは絶望的な強さだ。キリン・ライトニングを同じ所に強さの次元を置いているのだから。単純な戦闘能力ならヘラ・ローズガーデンすら凌いでいるだろう。

しかしルナを助けるためには命がけの無茶を通さなければならない。道理がなくとも、そこに友情があるはずだから。

「ツカサ君、ヒカル君……」

ロックマンは敵を見据えながら、二人に緊張を促す。ツカサことジェミニ・スパークWも思わしくない事態に切迫した。しかしヒカルことジェミニ・スパークBはその限りではなかった。

「分かっているよ。普通じゃどうやっても勝てそうにないね……」

「ヒャハハ！　中々面白そうな展開じゃねえか！　だが、こんな事ならレベッカバアにちゃんと訓練付けてもらうべきだったかもな！」

「とにかく、今は協力して戦おう。相手はハイドと……多分、五里だ。そして後の一人は見た事もない。油断はできない」

ロックマンはグレイバスターを構えた。すると五里門次郎――グランド・イエティは豪快に笑い飛ばした。それはロックマンの知っている彼のプレッシャーではなかった。まるで生い茂った草原が荒原へと変わるほどだ。以前戦ったイエティ・ブリザードのそれではない。恐れ戦くには十分すぎる。

「グワハッハッハ！！　よく来たなァー、ロックマン！」

「……お前は五里だな。刑務所にいたはずだろう？　どうしてこん

な真似を！」
「ハッハ！　俺達はレギオンに選ばれた天使だ！　今から俺達は地球の支配者になる！！」

妄言それ相応の下卑た野望にロックマンは辟易した。犯罪者の言葉に価値はない。

「バカな事を……！」
「ロックマン様！　こんな奴ら、早くやっつけちゃってください！」
「待ってて委員長！」

ロックマンは、何とかルナを救う算段を付けていた。しかし、戦力差が大きすぎる。ミライ始めサテラポリスの隊員がいてくれたら、と言うのが本音だった。
そこにオペラ・ファントムだ。ルナをこれ見よがしに抱き寄せて、頬笑みを投げかける。紳士的な表層部分を作っているだけでその実、凶悪犯罪者と変わりはない。少女を誘拐し、世界を壊そうとした人間だ。そんな危険人物が再び地球に手をかけようとしている。
ルナは悪の紳士を拒絶するが、力任せでは電波人間には敵わない。

「ンフフ、ロックマン。ワタシは再び舞い戻ってきましたよ。今度はアカシックレコードの力を身につけてね……！　ワタシはアナタを倒すためなら何度でも蘇る！！」
「ハイド！　委員長はお前の好きにはさせない！　行くぞ！　ウェーブバトル……」

戦闘をしかけようと、ロックマンがグレイバスターに煌々（こうこう）としたエネルギーを溜めた時だった。「ポイズンピック！」
ロックマンの足元に毒針が突き立ち、地面を腐り落とさせる。
ロックマンは蠍のような敵の挙動をまるで捉えられなかった。相

手は強いなんてものじゃない。

「なっ……！」

「大丈夫？！　スバル君！！」

「う、うん……でも相手の動きが全然見えなかった。油断していた訳じゃないのに……」

「ヒャヒャ。どうやら、あの三体の中で一番強いのはあのサソリ野郎だな！」

ジェミニ・スパークBは舌舐めずりをしてヘル・スコルピオを望んだ。このふたご座の片割れは狂気じみているが、ロックマンのように怯えないだけ頼りになる。「行くぞ野郎ども！」スバルとツカサに心を起こさせた。

「俺はサソリ野郎をやる！　スバルは変態紳士、ツカサはゴリラ野郎だ！　怖気づくんじゃねえぞ、正義は絶対に勝つんだからなあ！」

「そうだね、ヒカル！　行くよスバル君！」

「うん、ありがとうヒカル君！　僕たちは勝つ！　ウェーブバトル！　ライド・オン！！」

ソード、エレキソードを携えロックマン達は、ヘル・スコルピオ達に向かっていった。

オペラ・ファントムはルナの首を叩き大人しくさせる。ステッキの仕込み刃を覗かせ戦闘に意欲を見せた。グランド・イエティはドラミングを、ヘル・スコルピオはワイル粒子を拡散させ始める。始まりの宇宙の粉雪が舞台を整わせた。

「ンフフ！　さあ、私たちの真の力を見せてあげましょうか！」

「グワッハ！　天使となった五里門次郎さまの初陣だぜ！」

「キシシ、キグナスの野郎が楽しむ前の下準備と行くか！」

星屑のような粉雪の中、スバルとトラッシュの最後の物語が始まった。

ｔｒａｓｈ―４０：時の破壊者

太陽は高く初夏のコダマタウンは、面妖な雪景色となって、万緑に白いものを注いでいく。緑に薫風が穏やかなはずの小高い丘は、ある種、異様な世界が出来あがっていたのだ。そこで、電波人間たちの戦いが繰り広げられていた。

血が混じれば、それは白と赤の修羅場となる。

そして数分後に悲劇は起きた。それは起こるべく起きた当然の事態で、それは簡単に予見できた事でもある。しかし捨てられない友情に、予測と自力を見誤ったのもまた、隠しようのない事実だった。

現実は直接に物事を描き出すので残酷だ。世界のルールで事象は絶対で、オブラートなど一切を、邪魔なものとして扱うのだから。

スバルは正義の味方として、友達を救おうと奮起した。友情に燃えあがったロックマンの力は、確かに電波人間として最高峰の力を手に入れていた。

しかし力と力のぶつかり合いで勝者を決めるのは善も悪もなく、ただただ純粋な強者のみである。

さきほどから少年の悲鳴が鳴り響いて、それこそが常態化している。

ロックマンの薄い体表が裂かれ、小さな電波の欠片が空を舞った。それは一時ワイル粒子の中に調和するが、すぐに血飛沫へとデータを変貌させ、青空の雪景色を赤く彩った。「キシシ！　弱い弱過ぎる！！」レギオンの雄叫びが轟いた。天使たちの血走った眼球が恐ろしく、簡潔な暴力の前に何もかもが通用しない。

よもや正義を掲げたところで、世界の秩序が屈服する訳もない。創世主である神の使い、レギオン。それは天使でもあり、悪魔でもある。圧倒的な力を振るえば、それが神の意志となり、世界の意志表示となる。そこには脅威しか内容されていない。スバル達はそこに悪魔を見せられた。

ロックマン達は手も足も出なかった。ただの電波人間と高次元電波生命体レギオン、それとアカシックレコードの力を手に入れた者たちの前に、勝てる道理などなかった。

「うわあぁ！」ツカサの悲鳴が轟いた。グランド・イエティに決定打を与える間もなく、力の限り叩きのめされてしまったのだ。ジェミニ・スパークWは膝から崩れ落ち、冷たい床に身をゆだねて気絶した。ポツリポツリとワイル粒子が落ちては溶け、涙とするには簡単だった。

「チィ！　なんて化け物だ！」

ジェミニ・スパークBは血の混ざった唾を吐き捨てて、口を乱暴に拭った。自慢の黄金の左腕は砕かれてしまい、頭の一本角も不格好に折られている。

ヒカルの目の端では、ロックマンは何とかオペラ・ファントムに食らいついていた。戦況は思わしくないようだ。

しかしジェミニ・スパークBの相手はもっとも悪い。相手は無傷で、こちらは全身を刺傷（ししょう）でくまなく紅蓮に塗られている。ご丁寧な事に、毒入りなので体の自由も効かないだろう。意識がそろそろ、体に愛想を尽くころだろう。落胆したのか、絶望したのか、彼の瞳はまどろんでいるかのようだった。

「キシシ。やっぱ、レギオンの力を手に入れてからの俺は最強だ！」

「チッ……ツカサの野郎も、スバルのヘタレもボコボコにされやが

って……！」

ジェミニ・スパークBが自分の現状を見て皮肉たっぷりに、薄ら笑みを浮かべている。彼自身、敵の強大さに今一真実味を受け取ることが出来ない。これは悪い夢のようで、なかなか楽しめなかった。

対して相棒のジェミニはこの事態を彼ほど甘く見ていない。きりきりと迫る、身の毛のよだつレギオンの周波数に、命の危険を感じ取っていた。そして命を尊重して意を決す。

とうとうジェミニは命惜しさに、ジェミニ・スパークBから分離して逃亡を図った。手近なウェーブロードに一目散だ。その負け犬の背中を、ヒカルは呆気に取られたように見つめるしかない。

「クソ！　委員長とかいうガキの為に死んでたまるか！！」

捨て台詞を吐くジェミニだったが、ヘル・スコルピオは厳しく当たった。鯱鉾のようにそりかえった尾をしなり良くうねらせる。小さな円光が瞬き、突き刺さるかのような先端から力の乗った毒針が射出された。

「おっと、逃がさないぜ！　ポイズンピック！」

弱ったＦＭ星人を撃ち落とすことは至極簡単なことだ。「うがっ」醜態をさらしたジェミニは力尽き、夏の終わりの蝉のように転がるしかなかった。

相棒を失ったツカサとヒカルは電波変換が解けてしまう。当然これが卑怯者の末路で、ＦＭ星の政権を握ってきたジェミニも惨めに這いつくばる。

ゆうゆうと歩み寄り、ヘル・スコルピオはかつての上司を踏み付けた。地位を乗り越えた力の差を見せつける。ジェミニにとっては屈辱以外の何物でもない。

「キシシ。おお、これはこれはジェミニどのではありませんか？　まさかアナタほどの方が敵前逃亡ですか？」

ジェミニは、足裏から伝わるひんやりとしたヘル・スコルピオの存在そのものを感じ取った。とても冷たい印象の周波数だ。冷徹で、容赦のないそれはスコルピオのものであると確信した。

「その笑い方……周波数。てめえ、スコルピオだな？　俺を誰だか分かってこんな事をやっているのか？！」

「分かってる気に決まってるだろ？　このザコが！！」

ヘル・スコルピオはジェミニを蹴りつける。軽い一撃でも、根本的な力量差からジェミニは悶絶した。ヘル・スコルピオは楽しそうにそれを眺める。社会の縮図が逆転している様子が展開されている。心地の良い征服感に酔い痴れるには都合がよいのだろう。

厳しい眼差しで、ジェミニはかつての部下だったはずの、反逆者ヘル・スコルピオを見上げた。

「て、てめえ。どんな魔法を使いやがった！　昔のお前はこんな強くはなかった……っ。この四年間で何があった？」

ヘル・スコルピオは、その厳しさに冷たさを内容した瞳を返してジェミニを威圧する。天高くから降り注ぐ氷のような二眼は、まさに天刑を予感させる。

「俺は、レギオンになったんだ。それはそれは素晴らしい力さ！！」

「レギオンだと？　ふざけるな！　それは伝承上でしか……」

ジェミニは言葉を呑んだ。

レギオンとは、ＦＭ星や数々の惑星に伝わる伝承上の存在である。それは恐怖の存在として伝えられていたのだ。

かつての敵、エメリオルもその存在と危険性は認知していた。それほどの危険性である。

しかし不運にも地球にはレギオンにまつわる文献や遺跡などはまるで残されていない。しかしおおよその宇宙ではその存在は伝説となっていた。

なのでジェミニは驚きを隠せない。ＦＭ王室の最重要秘密事項である代々の王族が引き継ぐ伝説。ジェミニは王の右腕として、伝説の端々を聞きかじっていた。

まさにその終焉の悪魔が目の前にいる。その破壊的な水準に達した周波数の説明を付けるには、もはやそれしか考えられないのである。

「スコルピオ、てめえは何をするつもりだ！　世界を終わらせるつもりなのか？！」

「キシャハッハッハ！　そんなの知るかよ。今はキグナスの命令に従って、過去から世界をブッ潰すだけだァ！　それが俺達の『流星抹殺計画』なんだからな！！」

ちりばめられたピースを手繰り寄せ、ジェミニは恐ろしい事態を予期した。それは信じられないが、信じたくもない僅かな疑問を射抜く情報であったのだ。彼は昔から胸のそこで危惧していた。恐ろしかった。

「か、過去だと……？　まさかお前は、あの時のスコルピオなの……か。四年前のアイツがお前なのか」

「は？　なんの事だぁ？　四年前とか知るかよ！　ただアンドロメダ系列の要人暗殺に出向いてたかもなあ」

「やっぱり……」

『現在のヘル・スコルピオは四年前、スコルピオとして要人暗殺に出向いていた』その言葉はジェミニにとっては脅威的だった。そしてその一言で全てを理解したのだ。その任務こそジェミニが下していたのだから。

運命の悪戯が世界を滅ぼすかもしれない。

いま目の前にいるヘル・スコルピオは、これから何らかの手段を用いて過去に飛ぶ。そして四年前のジェミニとコンタクトをとり、地球を侵略するために襲わせる。それは悲劇を生みだす事だ。過去を壊すことだ。誰も救われない、無意味なミライを作るという事である。

ジェミニは四年前の不思議な出来事のつじつまを全て合わせると、ただただ恐怖した。ここでヘル・スコルピオを取り逃せば過去が改変されて、最悪地球が滅亡してしまうかもしれない。そうなるとジェミニはもちろん、スバル達地球人の全ての存在が抹消される。悪魔は悪魔だが、ジェミニは次元の破壊者を目の前にしている。

流星抹殺計画とは、地球人を全て抹殺してプルト・キグナスが、新ＦＭ王として君臨するための野望の事だったのだ。

そしてヘル・スコルピオのそれら口ぶりより、次元の割れ目からキグナスが覗いているのは確かだろう。

その事を受けてジェミニは叫んだ。それは大声で叫び声で助けを求める悲鳴に近い。

ジェミニは確かに、性根が腐った悪者だ。しかしそれでも過去を壊されて自分が消えてしまうのは堪らなかった。それなら、かつての敵のロックマンに頼るのもやむなしだ。

今、地球の命運がロックマン一人に託されているのだ。歴史改変による、地球人抹殺。それは許されることではない。悪者でも何でもいい、地球は消えてはならない。

卑劣なジェミニだが、ハープやウォーロック達と同じく心のどこかでほんの少しだけ、地球が好きになっていたのだから。それを理由にジェミニはメッセージを送る。

「ロックマン！　コイツらをなんとしてでも倒せ！　レギオンは過去から世界を潰すつもりだ！！」

「うるせえよ！　ポイズンピック！！」

ジェミニの余計な口を塞ぐために、毒針を突き立った。雷神はもうその異名の欠片もなく、毒のショックで痙攣を打つ。

ロックマンに、ジェミニのメッセージが届いたかどうかは分からない。ロックマンは、オペラ・ファントムと、グランド・イエティの二人を相手取っているのだから。ジェミニの叫びに耳を傾ける余裕はないだろう。

ジェミニは二つの仮面から覗く、四つの目を笑わせた。もうロックマンに託すしかない。何もかもを。かつての敵に抱いた親近感と、愛憎入り混じった感情がジェミニを笑わせた。

「ヒヒ……頼んだぞ……ロックマン……」

ロックマンはジェミニに世界を託された。「キシシ。バカなヤツ」レギオンは世界を終わらそうとロックマンに攻撃を仕掛ける。ロックマンはさらにヘル・スコルピオを敵に迎えて孤軍奮闘となる。状況は好転しない。ニホン本土の侵略によりサテラポリスからの助けは望めないだろう。

星屑のロックマンの最後が刻一刻と迫る。

ｔｒａｓｈ―４１：哀しいゲーム

「クッ……！　ギャラクシーアドバンス！！　ドリームソード！」
「ポイズンピックァー！！」
「グランドスタンプー！」
「クロスファントム！！」

ロックマンのドリームソードを三体の電波人間がやすやす叩き割った。光り輝く破片が飛び散り、目には美しいものだが、ロックマンは曇った表情で後退を余儀なくされる。醜美的観点から、事態を静観する余裕はないのだ。

ロックマンは苛立ちが募っていた。敵の事は放っておいてルナだけを助け出してしまいたいが、それは許されない。敵の隙のなさに、そのような華麗な救出劇は見込めなかったのだから。

現状、三対一でもうロックマンは立っているのもやっとだ。ルナを救い出すことは夢のまた夢のように感じられた。トラッシュがスバルを励ますが、それを真に受けるほどスバルも馬鹿ではない。戦士としての勘が、結果として友の激励をはねのける。

『スバル様、まだまだやれます！　がんばりましょう』
「ハハ……ハ」

ロックマンの左腕はもう上がらない。なのでトラッシュの言葉が耳に届いたかどうかすら疑わしい。

満身創痍のロックマンにヘル・スコルピオ達が歓喜し、それぞれ

がじりじりと歩み寄ってくる。息の合った歩幅に合わせて、ロックマンの青い足も一歩一歩、後退していく。まさに逃げるようにロックマンは展望台の鉄柵へと追いやられていく。ルナに言っていたボクサーうんぬんの冗談が現実のものになり、とてもではないが笑えなかった。ワイル粒子が視界をチラつき、そんな瑣末な苛立ちさえも積もり募り、自棄を起こし爆発してしまいたいはずだ。そのようにロックマンは渋ったように目を細め、光明を見出そうと探るような迷いばかり目立つ視線だった。敵の足元ばかりを見ていては未来を切り開くことはできない。

「キシシ！　そろそろ料理完了かあ」

「ンフフフ。今回のワタシの脚本は完璧だった……！」

「グワハハハ！　これで世界制服にまた近づいたぜ！！」

「クッ……！」いまロックマンは、圧倒的な戦う力が欲しいと感じている。どうしようもないこの状況を打破できる力を手にしたいのだ。しかしアカシックレコードのアクセス権限者となって間もないスバルは、ラーニングレギオンを完全に会得していなかった。自分の意志で、アクセスする事はまだできないのである。そうなると、この状況はどうやっても打破できないものとなってしまう。

ロックマンはとうとうコーナーに追いやられてしまった。グランド・イエティが一歩前に出て、ロックマンの目の前に立ち塞がった。ロックマンとの対格差が激しく、見上げるほどの巨大な岩石そのもので、推し量れない重厚さには目まいが起きただろう。ロックマンを見下ろす猿人はグッと拳を握った。「いたぶらせてもらうぜ」その石つぶてとも変わらない、硬い拳を少年の腹に叩きこむ。胃が肺の辺りまでせり上がり吐き気が襲う。「うえ……っ」小さな悲鳴が情けなく漏れた。

必死にロックマンは、いったんウェーブロードへ逃げようとする

も、ワイル粒子の力によって周波数変換がうまくできない。ワイル粒子は現象の振る舞いに加減作用があり、今回はロックマンの周波数を減衰させているのである。これでは逃げ場がない。助けてほしい。だが、助けはもはや来ない。ハイドの脚本によってその可能性を潰されている。ミライ達は今、必死にトレイス達からニホンを守っている。

ツカサも気絶した今、孤独な戦いが強いられるだけだ。

スバルはルナを助けなければならなかったが、その見通しはとうとう立たなかったのである。

そして決着は簡単で、やがて必ずやってくるのだ。展望台の安全柵に力なくもたれかかり、ロックマンはもう動けない。そんな無力な少年に遠慮のない攻撃が襲う。

「バニシング・スラッシュ！」

「ゼツメツダイコ！」

「ブロアドゥラウン！」

ロックマンの視界は悪夢で一杯で、戦闘狂には狂わしい愛情が見え隠れする。達人たちの狂気乱舞に、計り知れない絶望が赤黒い印象を突きつけてくれる。幻影の一振りは、まどろんでしまうような斬撃の妙技で、さらに連なる命を吸う毒針が降りかかる。極めつけは環境周波数をあやつった高等技で、ワイル粒子が小隕石へと物質波を変容させたのだった。

「うわぁああ！！」

それは、ルナを救おうと決心したわずか数分後の事であった。そして愚かな勘違いにより生み出された、たった数百の時の刻みがロックマンにとっては長く辛い道程であった。彼はとうとう電波変換を解除されてしまったのである。シンクロ率は０％となり限界を通り越えて、少年は意識を失った。辿りついた結果は完膚なきまでの敗北だった。

頬を殴りつける、走り書きの赤の飛沫。頭部、双肩、丁寧なまでに全てが乱暴に鬱血している。スバルが口を開けば、赤い液体が血液の匂いを伴って流れ出てくる。鼻腔を埋める鉄の香りがツンと刺激的であろう。

野望に溢れた、執拗な攻撃の嵐に耐えられる道理がなかったのだ。

ヘル・スコルピオはつまらなさそうに、ロックマンだったスバルを見下ろした。取り巻きの二人も同様の感情だろう。さんざん復讐を誓ったハイドに至っては、欠伸をしてしまう始末だった。

「もう、終わりか……。俺達の神が気にする男だとはとても思えねえ」

「ンフフ。ワタシの知る彼はこんな、ちっぽけな男だったのでしょうか……」

「グワハハ！　どうだったかな、まあ俺達が強くなりすぎたんだろうよ！！」

オペラ・ファントムは満更でもない顔つきになって、口元を歪ませた。それを受けてヘル・スコルピオは粉雪が舞う、原っぱの向こうに不意に語りかけ始める。そこには何もないが、何者かはいるのだ。

「おい、キグナス。ロックマンの偽物を倒したぜ」

その言葉に反応するかのように、何もない草原は変容を始めた。まるでかき混ぜた液体の世界のようで、背の低い草木を螺旋を描くように奇怪に引き伸ばし始める。その渦の中心は黒い暗黒で、そこから一体の黒鳥が現れた。ヘル・スコルピオは「ようやくお出ましか……」と、呆れたように呟いた。

とうとうプルト・キグナスがこちらの世界にやってきたようだ。小賢しい笑みを浮かべて、意識のないスバルの元に歩み寄る。プルト・キグナスは僅かに揺らぐ環境周波数を捉えて、その様子は空を歩くかのような優美さだった。いつかのロックマンと同じ技術である。強さという、濁りのない真実が翼を用いない空の支配を可能にする。

「フフ……。どうだったかな？　コイツはロックマンの偽物だったろう？」

フワリと着地したプルト・キグナスは、ヘル・スコルピオに問いかけた。その態度と口調はまるで、彼の期待する答えを催促しているようだった。ヘル・スコルピオは次期ＦＭ王としてプルト・キグナスの顔色をうかがった。

「お前の言うとおりだったよ。ロックマンのくせに弱すぎだ！」

「だろう？　ボクも惑星リギアでのコイツの戦闘データを分析してみて怪しいと思っていたんだ」

「原因はコイツか？」

「ああ、そうだろうね」

プルト・キグナスはスターダスト・ロックマンの事を『偽物』と表現して、トラッシュを睨みつけた。その視線の先にはトラッシュがおり、彼はスバルを、家族をかばおうとボロボロの体を必死に起こしていた。それでいて目の輝きは衰える事なく、時の破壊者と相

対している。トラッシュの瞳には、初めて感情と呼ぶにふさわしい命の意味が燃え盛っていたのである。
プルト・キグナスはそれがとても気に入らない。

「キミ、名前は？」
「……スバル様に手を出すな……！」

『かすれた声に精一杯の抵抗。無知な偽物の努力』その状況にプルト・キグナスはクスリと含み笑いを禁じえない。それどころかトラッシュの間抜けさには、爆笑もやぶさかではないのだった。なぜならプルト・キグナスは時を渡る力を持っているのだから。その考えられる中で最強の能力の前では、トラッシュの名前を知ることなど造作もない。ましてやトラッシュのこれからの命運も手に取るように分かるのである。

「フフ……トラッシュ！　威勢が良いじゃないか。もっともキミの命はここまでなのだけどね」

意味深な台詞を吐き、プルト・キグナスはスバルの方に一歩踏み出した。鋭い足の爪に掴まれればスバルの柔肌などひとたまりもないだろう。それが何よりも恐ろしいトラッシュはよろよろと立ち上がり、プルト・キグナスに立ち向かう。

「僕はロックマンの偽物に興味はないんだよ。そしてウォーロックの偽物である君にもね……！」
「お、お前にスバル様……には手を出させないぞ……。ワタシはスバル様を守らなければならない義務がある！！」
「ゴミの寄せ集めでしかないくせに言うじゃないか。やれやれ……」

プルト・キグナスは威勢だけは良いトラッシュにあきれた様子で、

顎をしゃくって命令を出す。「ハイド！　五里！」その言葉に電波人間二体が素早く反応する。まるで疾風のようにトラッシュのそばを瞬くまに通り過ぎ、スバルを人質に取ったのだった。あまりにもあっけがないがこれは当然だろう。すでに満身創痍のトラッシュでは、口でいくら理想を述べたところでどうにかなるものではなかったのだから。

「スバル様！！」

トラッシュは振り返り、ハイド達を捉えると絶望した。スバルはおろか、ツカサとルナまでも完全に敵の懐で沈黙しているのだ。この事態を乗り越えるには何かを犠牲にしなければならないと、トラッシュは漠然と悟った。それはプルト・キグナスも理解しているようだ。

完全に敵に人質を取られた三人の少年たち、戦えるものは一人もいない。それでいてプルト・キグナスを始めとしたレギオンが二体、さらにアカシックレコードの力を利用した電波人間が二体。

この状況ではプルト・キグナスの一言一言が絶望的で、そして甘く魅惑的な幻惑を含んでいた。

「慌てるなよトラッシュ。キミに一つ朗報だ。この絶望的な状況の中、スバル君たちを助けに、あるＡＭ星人が駆け付けるんだからね」

その言葉にトラッシュは無言を守る。緊張を維持したままで、まず口を開くことはなさそうである。プルト・キグナスはその様子を、小馬鹿にしたように言ってのけた。トラッシュは驚愕する。

「フフ、驚くよ？　そのＡＭ星人の名前は『ウォーロック』だ！　中々感動的な事じゃないか？」

「なぜだ？　そんな事がお前に分かる訳が……」

「フフフ、僕の能力は『時空渡り』だからさ。少し未来の様子を覗かせてもらっただけさ」
「ふざけるな……！　そんなワケが！！」

頑なトラッシュに、怒りを覚えたプルト・キグナスはトラッシュの首を掴み、力づくで地面に叩きつけた。無理やり屈服させて、腹を踏み付け言葉を浴びせかける。

「忘れたとは言わさないよ！　惑星リギアで誰が君たちを助けてあげたと思っているんだ！！」

シュンラン扮するギガント・オリジンのカイザーナックルからスバル達を救ったのは皮肉にもプルト・キグナスである。トラッシュも、プルト・キグナスの時空間操作の真髄を身を以って味わっていた。

「クッ……」
「いい加減に聞き分けなよ、トラッシュ。ウォーロックは今から三十六分後にこの展望台に駆けつける！　これは決まっている未来なんだ！！
そして、僕はあの忌々しいウォーロックを倒す！！　僕はアイツを倒して一番になるんだ！　僕がＦＭ星人の王になるんだ！！」
「クッ……なんて危険なヤツなんだ」

トラッシュは危険な匂いをプルト・キグナスから感じ取った。ジェラシーにまみれた屈折した情熱である。それゆえに興奮した様子でトラッシュにまくし立てた。

「僕はウォーロックを絶望させたいんだ！　それには何が一番だと思う？　ウォーロックのなりそこないのキミでも分かるんじゃない

かな」
「お前……まさか！」
プルト・キグナスの視線はスバルを捉えていた。目元が歪んでそれは笑っているようにも、狂っているようにも感じ取れる。トラッシュは彼から押し殺した狂喜を感じた。理性的に振舞っている反面、内包している根深い素質はとんでもなく醜悪だったのだ。
プルト・キグナスはスバルに熱い視線を注ぎながら語った。殺意に溢れた口述は全てを駆逐する宣言だった。
「ウォーロックの親友は彼一人！　アイツには大切なものは無いけど、スバル君は例外だ！　彼一人が宝物なのさ！！　彼を失う事は何物にも代えがたいはずだろうよ！！」
プルト・キグナスはトラッシュを踏み付ける足に一層力を込めて、くすぶる悪意のやり場とした。そしてハイド達に命令を下すのである。
「スコルピオ！　ワイル粒子でスバル君達を縛りあげろ！！」
「やめろ！！」
トラッシュは叫びあげるが、どう力を込めてもキグナスの足はビクともしない。
そしてしんしんと降り注いでいた粉雪が、吹雪のように表情を一変させてスバル達を包み込み始めた。
「キシシ、ワイル粒子散布！」
ヘル・スコルピオはワイル粒子を巧みに操り、雪像を作る要領で十字架を模したオブジェクトを作り出した。草原にそびえ立つ戒め

の十字架だ。それにはイエスのように、スバル、ルナ、ツカサが、神の叡智（えいち）の結晶である十字架に張り付けられていた。かつてヘラ・ローズガーデンはソウル・レイダーに行った攻撃を応用すれば可能となるのだった。

展望台は公開処刑場へと体を変えたのである。

「やめろ！　何をする気だ、お前達！」

その何とも野暮な質問にプルト・キグナスは簡単に答えた。

「そんな事聞かなくても分かるだろう？　ウォーロックが来るまでの暇つぶしさ。月から感じる彼の周波数はまだ寝ているみたいだからねえ」

プルト・キグナスは鋼鉄の刃と何変わらない羽を広げて、トラッシュに見せつける。射的のように遊ぶつもりなのだろうか。もっともこの場合、的であるスバル達は無事では済まない。

トラッシュは懇願した。情けなくてもそれでも良いのだろう。プライドをかなぐり捨てたトラッシュを見て、プルト・キグナスはゾクゾクとした快感を感じているのだろう。征服欲に満たされた、恍惚の笑みだ。

「やめろ！　や、やめてください！！　スバル様を……助けてください！！」

「うーん……、ボクも鬼じゃないよ。ウォーロックが来るまでの暇つぶしが出来ればいいんだから」

プルト・キグナスはニヤリとして、トラッシュをスバル達の方へ蹴り飛ばした。トラッシュは展望台の鉄の床を「カンカン」と鳴らしながら転がった。そして悶絶するトラッシュのすぐそばに、鋼鉄

の刃の羽が突き立った。黒い羽は、硬い床を貫いているのでその威力は本物だろう。トラッシュは目が覚めたように凍りついた。トラッシュが恐る恐る顔を上げた先には、悪魔のような黒い電波体が節々からほとばしる凶悪な周波数を煌めかせていた。

「さあ、立ちなよトラッシュ。ちょっとしたゲームをしようじゃないか」

「キシシ、ひでえ野郎だ……」ヘル・スコルピオは自分を暗殺者だと言う事を差し引いてもプルト・キグナスを貶した。プルト・キグナスは未来が見えている。それはゲームでさえないのだから。

何とかトラッシュが立ち上がる。プルト・キグナスが続けた。

「ウォーロックが来るまでの三十六分間、僕はスバル君達に攻撃を仕掛け続ける。その間、キミは体を張って彼らを守ってみせて欲しい。さらにその間、僕の部下には一切手出しをさせない。なに、心配はないさこのワイル粒子で満たされた空間だ。僕たち以外の邪魔は絶対にはいらない。

どうだい悪くは無いルールだろう？　この状況ではおつりがくるぐらいの好条件だ」

ワイル粒子で満たされた空間は、電波信号を拒絶する。それは救難シグナルさえ発信できないという事だ。以前ヘラと相対したデンヤ丘陵の状態と同じである。

まさに密室を意味しており、このゲームにトラッシュの勝ちの目はほとんどなく、さらに命を懸けて挑む他ない。

しかしトラッシュの即答だった。

「いいでしょう……。ワタシの体一つで守りとおせるなら、喜んで受けて立ちます！」

その命がけの返事に、悪意をみなぎらせ、プルト・キグナスは羽を広げて戦闘体勢を取った。トラッシュもスバル達をかばうように十字架を背にして立ちふさがる。

トラッシュは命がけでスバル達を守る覚悟なのだ。それだけの価値は見出していた。この二ヶ月間の幸せはトラッシュにとって何物にも代えがたかったのだ。長いようで短かった日々は、大切な『家族』と『親友』というものを与えてくれた。トラッシュにとって、日々が刺激的であり、新しい発見の毎日だった。

『ココロ』を育てる日々は、これからもずっと続くと思っていた。これからもスバルと一緒に生きていけると思っていた。だが、それは叶わない夢のようだ。それだけが少しだけ心残りだったが、今は戦わなければならない。

親友の命の十字架を背負い、トラッシュは時空間渡り鳥に相対する。

「フフフ……！　いい目だ！　アーハハハハッ！！　さあ、血のたぎるような素敵なドラマを見せてくれよ！！

キミの命が消えるのが先か、ウォーロックが来るのが先か！！ゾクゾクするじゃないか！」

「ワタシは、ワタシはスバル様を守る……！　こんなワタシに素敵な日々を下さった方だから！！」

「せいぜい、ウォーロックに死体を見せないように頑張れよ！！」

もの惜しげにトラッシュは、最期にスバルの方をちらりと見て、微笑んだ。

「良かったですねスバル様……。ウォーロックさんがあと少しで逢いにきてくれますよ。

……では、ワタクシ、トラちゃん行ってきますね！」

トラッシュのたった一人の最期の戦いが始まったのだ。

ｔｒａｓｈ―４２：目覚める流星

暗黒の宇宙で浮かび上がる、その月明かりは希望の光である。
場所は月面都市ルナプラント。その場所から青き流星、ウォーロックの物語が始まる。くすんだ銀色の建造物の一つから、誇り高きＦＭ星の戦士の周波数が力帯びていくのであった。
トラッシュが命懸けのゲームを始めてから三十分ほどが経過したころ、ようやくウォーロックは目覚めたのである。
無機質の部屋の一角のカプセルの中、彼は治療用の液体電波に浮いており、目の前には科学者が数人がコンピュータに向かって作業をしている。おそらくウォーロックの回復の経過を記録しているのだろう。ウォーロックはその様子をぼんやりと眺めて、鋭い爪をピクリと動かした。動かなかった体の状態は、ずいぶんと回復している。
そしてその時ウォーロックは、何かに気付いたようで顔を強張らせた。次第にはっきりとしていく意識から、明確な周波数を肌に感じ取っていたのだ。放心したのか、ゆるんだ口の端から気体が群をなして昇っていく。
その刺すように洗練された周波数は忘れもしないもので、圧倒的な悪意と憎しみが深く、どろりとした濃い印象を与える。その周波数は地球から漏れ出している。どの生命の息吹よりも強大な存在感にウォーロックは、ようやくプルト・キグナスの片鱗を重ねる事が出来た。次第に浮き彫りになる記憶に、重ねた印象が確信に変わる。
『ウォーロックに絶望を……！！　スバル君に絶望を……！！』その言葉が脳裏をよぎった。

「スバルが危ねえ……！」

ゾッとして、臆面もなくウォーロックは、カプセルを乱暴に殴った。薄いガラスは太い腕に叩かれてはひとたまりもなく、ヒビの間から液体が細い放物線を大量に描いて流れていく。

突然の物音に、ウォーロックを観察していた研究員は呆気に取られていた。「もう、目を覚ましたのか……！」その中の一人は、責任者を呼びに慌てて、部屋を出て行く。

ウォーロックはガラスを突き破り、身震いして液体電波を研究員に浴びせてやった。そしてぶっきらぼうな態度で問いかけるのだった。青い狼のように体の大きなウォーロックがにじり寄れば、デスクワーク派の男はひとたまりもなく、すくみあがった。

「おい、そこのお前。ここはどこで今日は何日だ？　言え！！」

「ひ！　ここは月のフレンド建造施設です。Ｉ．Ｐ．Ｃ管轄の電波生命体用の療養施設です。そして、きょ、今日は六月二三日です！　お願いです、命だけは！」

「六月二三日……。キグナスの野郎とやり合ってから、もう二ヶ月も経っているのか」

ウォーロックは目を細めて事の状況を危惧した。再び乱暴に研究員に問いかける。一緒にいた大吾の行方が気がかりだったのだ。

「おい、お前。星河大吾というオッサンは一緒に発見されたのか？」

「い、いえ……」

「チッ、やっぱりか！」

「ひい、ですがチームオメガの情報によるときずなクルーは、レギオンとかいう者に連れ去られたとかなんとか……」

「そうか……あの時だな」

ウォーロックはプルト・キグナスと戦った時の事を思い出して今回の件と符合させた。あの時のプルト・キグナスは、ウォーロックとスバルから大切な物を奪おうと躍起になっていた。その大切なものというのは大吾で間違いないだろう。

大吾を始めとしたきずなクルーは連れ去られたというものが、見解である。そしてコダマタウンの方から感じる周波数から、スバルの身を案じた。ウォーロックに取って唯一の大切なものはスバルだったのだから。プルト・キグナスが何もしない理由がない。

「あの野郎。今度はスバルの番ってワケか」

ウォーロックは怒りを浮かべて口を強く食いしばった。意を決し、地球に向かおうと、部屋の窓から覗く青く美しい星を望んだ。

「今から俺はダチのピンチを助けに行く。ヘッ、今まで世話になったな」

研究員の一人にニヤリと笑みを浮かべると、ウォーロックは体にまとわりついたコード類を引きちぎりながら、窓の方へ向かっていく。千切れたコードが放つ電撃が鋭く叫び、ウォーロックのプルト・キグナスに対する怒りを暗に示しているようだった。

だがその時、部屋のドアが開く音がして、女性の声がウォーロックを制止した。突然の出来事にウォーロックは首を回してその声の方を睨んだ。

「待ちなさい。ウォーロック！」

ウォーロックが振り返ると、部屋のドアのそばで息を切らした研究員がおり、その横に美しい女性が立っていた。赤いスーツが印象

的である。彼女はウェーブのかかった金髪から覗く凛とした顔立ちに、険しい表情を浮かべていた。呼びだされた責任者とはリカ・ポート・伊集院だったのだ。

ウォーロックは急ぎのところを邪魔されて怪訝そうな表情を浮かべた。

「何だ、てめえ……？　俺は急いでるんだ。アバヨ」

ウォーロックはそのままリカを無視して、地球に向かおうとする。しかしリカはそれを許さなかった。このまま行っても、ウォーロックが演じるであろう無駄死には目に見えていたのだ。レギオンは圧倒的に強い事を、リカは身をもって体験していた。ヘラ・ローズガーデンの悪夢を思い返せば、思わず口調も厳しくなる。それがウォーロックを刺激するのも、ごく自然だった。

「始めましてと言いたいところだけどね……！　ウォーロック、このままの状態で行っちゃダメよ！」

「うっせえ！　お前、状況を分かってるのか？」

ウォーロックは地球から感じる恐ろしいまでの周波数の正体を知っているのだ。リカに向かって、彼は赤い瞳で睨みを利かせる。

しかしリカは引きさがらなかった。リカとて状況は分かっている。神妙な面持ちで、唇を僅かに躍らせ言葉を発した。

「『レギオン』が来ている……そうでしょ？」

「テメエ、知ってるのか……。なら、なぜスバルのところに助けが行ってねえんだ！　このままじゃ、アイツがやられちまうだろうが」

「ごめんなさい。ワイル粒子のせいで、レギオンの周波数を捉えるのが遅れたの……。それに、今ニホン各地が大量の電波生命体に襲われていて、人手が足りてないのよ……」

アストラル・ホープが大量に配備できるようになったと言っても、電波人間そのものが貴重であるのには変わりない。それがウォーロックを苛立たせるこの事態が意味していた恒常的な原因である。

無力さから、リカは悔しそうに眉をひそめたが、ウォーロックはそんな言葉などどうでも良かった。彼はとっくにニホンの各地で暴れている周波数を感じていたのだから。その数が圧倒的であるとも理解している。

その上でスバルを助けようと無茶をしようとしているのだから。その謝罪には何の意味もなかった。なぜなら無茶を常識で咎められる状況ではなく、呑気に頭を下げる暇があるほど悠長な展開でもない。ましてやそれに一喜一憂している余裕がある訳がないのだから。

ウォーロックはこの場を後にして早急にスバルの元に駆けつけたいのだ。

「詫びなんかいるかってんだ！　俺はお前の相手をしている暇はねえんだよ」

「そうね、アナタが行く事こと自体は止めはしない。だけど、ムダ死には許さない。……これを受け取りなさい」

リカはそう言うと、ハイヒールを鳴らしながらウォーロックの方へ歩んでいく。そしてウォーロックに対して、あるデータカードを差し出す。かつてのオーＰＧＭとそっくりな赤い板きれである。

ウォーロックが目覚めたと聞いて慌ててこしらえたのか、それは外装などなく回路部分などが剥き出しであった。

「何だこれは……」

「これは最新型のバトル補助バッジ『ゼロＰＧＭ』よ。オーＰＧＭの改良版で、レギオンの生体と戦闘データを組み込んでおいたわ。これで少しでもまともにレギオンと渡り合えるはず……」

リカの渡したそれは、ヘラ・ローズガーデンを徹底的に解析して、以前では対応できなかった対レギオン用の処理が含まれている。主にワイル粒子や、高周期電磁波に対する耐性である。これはリフレインを始め、オリヒメとハートレス、リカが協力して、ようやく完成させたのだった。

レギオンに対しては、もはや気休めでしかないかもしれないが、それに込められた人々の勝利への思いは尊重できる事だった。

ウォーロックはそれを受け取ると、初めてリカに対して顔を柔らかくした。ゼロＰＧＭをひょいと口の中に放りこんで準備万端だ。

「へへッ、役に立つなら、ありがたくうけとっておくぜ」

ウォーロックが見せた、少しの笑みにリカも頬笑みを返す。リカもウォーロックと同じ気持ちである。スバルは彼女にとって恩人であり、ロックマンはヒーローだったのだ。

「フフ、ウォーロック。噂には聞いていたけど、アナタは立派な戦士のようね。臆することなく危険に身を放るなんて尊敬するわ……」

「へッ、そう言う事はスバルに言ってやりな。俺に『守る戦い』ってヤツを教えたのはアイツだからな」

「そうね、知ってるわ。スバル君はワタシの恩人だもの。そしてロックマンは世界の英雄……。

……行ってきなさいウォーロック。私たちもなるべく早く増援を送るから！」

「へッ、ありがとうよ。じゃ、行ってくる！　キグナスの野郎に本当のロックマンの力を見せてやるぜ！」

「頑張りなさい。流星のロックマン！」

リカの笑顔を背にして、ウォーロックは駆け出した。窓をすり抜

けて、体を電波化させて光速に持っていく。
そしてウォーロックは青い流星となって、暗黒の空に飛びだした。目的の場所はコダマタウンの展望台。そこは出会いの場所で始まりの場所。流星のロックマンの、地球の全てを懸けた最初の戦いが始まる。
ウォーロックは星屑の輝きの一つとなって宇宙の中を突き進んでいく。

プルト・キグナスが宣言した三十六分間が満たされつつあり、トラッシュの孤独な戦いがもうすぐ終わる。スバルを助けようと、ウォーロックは光の緒となって地球に落ちて行くのだった。
スバルの二人の親友が出会う時は近い。

ｔｒａｓｈ―４３：スバルくん

「うわあぁあ！　トラッシュが！！　トラッシュがし、死んじゃう……」

場所はコダマタウン展望台。トラッシュの悲鳴からか、プルト・キグナスの歓喜の声からか、スバルは目を覚ましていた。そして、草原の上に立つ十字架から声にならない悲鳴を上げていたのだった。その光景全てに目が拒絶して、血の匂いと残酷な音色が五感を障っていった。

「もういいんだ。もうこれ以上頑張るな！」そう言ってトラッシュを楽にしたい。駆け寄ってトラッシュを抱きしめてやりたい。しかしワイル粒子の束縛は厳しく、体どころか指先一つも動かせない。自由のきく首から上だけが、負の感情を精一杯に表現するだけだった。

たった数十分の事が、永遠のようであると錯覚するほどの苦行だった。すでにトラッシュは元の形ではなくなって、スバル達を守るためにプルト・キグナスの攻撃を一身に受けていた。もう片腕がなくなり片目が吹きとばされて久しい。砕かれた頭部から止めどなく溢れだす、トラッシュの命の電波情報がおどろおどろしい。ぽっかりと穴のあいた穴からは、血のように家族が築いた思い出の電波が溢れ出ていた。それは限りがなく、たった二ヶ月を凝縮したかけがえのないトラッシュの宝物だった。トラッシュはそれでも立ち続けた。意識はほとんどなく、本能でスバル達の命を狂気の電波体から守っていた。

しかしトラッシュが頑張れば頑張るほど、スバルの命を守ろうとするほどに『死』が甘い言葉をもって誘惑してくるのだ。

「もう、楽になりたいです」「これ以上、頑張って何になる」「ウォーロックさんなんて来ないじゃないか……」「この苦しみはいつまでも続くんでしょう……」「ああ……何のために生まれてきたんでしょう」

トラッシュの脳裏をそのような事が永遠と繰り返されている。可能ならば、死んで楽になるのも悪くはないのだろう。今のトラッシュの状態は生きている事が不自然であるのだから。欠損という欠損を重ねたトラッシュはもはやスバルの見知った彼ではない。剥き出しになった電波物質の骨格が生々しく覗いている。トラッシュの骨格は折れてしまい、装甲を突き破り、あり得ないところから血の混じった旗を立てていた。

スバルがトラッシュをトラッシュと同一視できるのは、命がけで立ち向かうその美しい優しさを見せられていたからだ。しかしスバルはもうトラッシュを見ていられなかった。

「もういいトラッシュ！　これ以上やったら、死んじゃうよ!!　もう逃げろよ。逃げてしまえよお!」

涙の混じった、スバルの叫び声だ。トラッシュが生きる事をやめようとした時、スバルが呼び掛けるのだった。トラッシュはこれだけで常識を覆し、プルト・キグナスの前に立ちふさがる事ができるのだ。

「スバル様を守りたい……」「ワタシのたった一人の友達……家族……だから」「生まれてきた理由は分からない。だけど生まれてきてよかったと思える！」トラッシュが戦う理由は明確である。命は全然、惜しくなかった。犠牲をいとわない愛情――それこそがトラッシュが最期の最後で見つけた心の意味だった。その素晴らしさにトラッシュは命を懸けられる。

しかしプルト・キグナスはその様子に、必死に笑いをこらえているのだった。もう、そろそろ三十六分が経過する。打ちこまれた漆黒の羽は数百を超えてトラッシュの体を刻みこんでいた。体は嘘を吐けない。トラッシュはどう見ても限界だったのだ。立ち上がっているその勇姿でさえ、その有りえなさから滑稽なピエロを演出する。

「ククク……。ウォーロックの偽物のクセに思った以上に頑張るじゃないか……トラッシュ！　良い感じに無様だね！！」

「スバル様を守り通すまでは死ねません……からね」

「そうか……。なら死ぬまで攻撃を続けようかな！　ブラックフェザー！！」

鋼鉄の羽がトラッシュを襲う。空気を裂く鋭い音。とうとうトラッシュは両腕を失った。

スバルは舞い上がったトラッシュの腕を見上げると、頬を涙が伝った。「あの血まみれの手の平は、スバルの背中をいつも支えてくれていたものだ」そう思うと、スバルは受け入れられない現実を感じてしまった。これが現実だと信じてはいけない強迫観念に囚われた。

トラッシュが展望台の床を転々として、草原と高台を分かつ安全柵に激突した。もう立ち上がれないだろう。体を支える腕もないトラッシュは芋虫のように転がるしか道は残されていないはずなのだ。

プルト・キグナスは憐れなトラッシュを嘲笑した。見事なまでの負け犬を見せつけてくれるのだから、卑劣な彼にとっては笑いの種だった。

「ハハハハ！　素晴らしい情けなさだ！　そのままそこでじっとしておくといいよ」

「まだまだ……ワタシは生きてますよ……！」

「口だけは達者だね……」

トラッシュは安全柵のパイプを咥えこんで、何とか立ち上がって見せたのだ。その執念にプルト・キグナスは、汚物でも見るかのように目を細めて、呆れたように溜め息を吐いた。

「ハハハ……。笑えないねえ、キミ。そこまで頑張ったところで運命は何も変わらないっていうのに……」

「いえ、運命は変わります……！　スバル様とワタシが乗り越えてきた困難は……だって私たちの力で変えた運命なんですから……！」

「バカめ……。僕は未来が見えているんだよ？　キミは次の僕の攻撃で死ぬ！　自分でも分かるだろう？　命の残りくらいはさあ」

「分かりますよ。そんなの……そんな限界とっくに通り越えていますよ……！」

プルト・キグナスは腕を組んでがっくりとうなだれた。半分も吹き飛んでしまっている顔で作る不気味な笑顔のトラッシュを、もう見飽きてしまったのだ。それはもうただの不細工とはかけ離れてしまい、ただただ癇に障る偽善者の顔面だ。

「ムカつくなあーキミ。模造品だけあって、ウォーロックと似ているところはあるようだね」

そしてプルト・キグナスは漆黒の翼を広げて、凄みを利かせた声でトラッシュを威圧した。背中から伸びる巨大な羽の一枚一枚が鋭利に輝いている。威嚇ではないという脅しを語っていた。

「いい加減に……虫唾が走るんだよ！　オマエはよォ！」

しかしそれでもトラッシュはスバル達をかばうように、立ち塞がった。腕はなくなっても、その体はどこまでも大きく感じられ、ス

バル達を優しく包み込む。ウェーブロードに飛び上がると、トラッシュの周波数は白い翼を作ってスバル達をしっかりと抱擁したのだ。まさに天使を彷彿させる姿であった。

プルト・キグナスは、そのあまりにも徹底的なトラッシュに引くついた笑みを浮かべて見上げた。トラッシュは優しい笑みを浮かべて、命の限り戦闘周波数を引きだした。

スバルはその温かく感じるトラッシュの温もりを肌で感じたような気がした。周波数を感じるなんて馬鹿馬鹿しいが、スバルは確かにそう感じたのである。眼前のトラッシュの背中から感じるそれは、まさに彼らの今までが完成させたものだったのだから。もっともトラッシュの近くにいたスバルはそれを錯覚するわけがないのだ。それが友情と愛情だと錯覚する訳がなかった。

「トラッシュ……！　頑張れ……！！　僕も諦めないから……だから絶対に生きて帰ろうね！　もう一度、チキンの丸焼き食べるんだから！！」

「はいスバル様、頑張りますとも！　もう一度あかねママさん達が待っている家族の元に帰るんですから！」

トラッシュがスバルに笑顔を送る。プルト・キグナスはその寸劇に苛立ちを隠さない。

「まったく、どこまでも僕を苛立たせる連中だ！！　良いだろう、本気で潰してやる！！」

「トラッシュ……！！」

「大丈夫です。安心してください……何に変えても……守ります！」

そのときプルト・キグナスが羽の弾幕を繰り出した。一つ一つでも圧倒的のそれを惜しげもなく浴びせかける。狙いはスバル一人。

トラッシュは全てを振り絞った。

「食らえ！　フルプレアフェザー！！」
「周波数解放！　フレクバースト！！」

トラッシュはその羽の全てを迎え受けた。爪で払い飛ばす事も叶わず、全てをその身で受け止める。スバルが受けるはずだった漆黒の刃を胸に刻み込んでいく。その数は凄まじく、途切れることは無かった。トラッシュの装甲を徐々に切り込んでいき、トラッシュの命に突きささっていく。トラッシュの胸を一杯に満たしていた、家族との思い出がなければもうとっくに突き破られていただろう。

それゆえに、トラッシュはまだまだ諦める事はなく、高密度の周波数を用いて抵抗を見せたのだった。しかしレギオンの力は圧倒的で、その力の次元が遠すぎる。電波変換さえしていない、トラッシュが敵う訳がなかった。しかしトラッシュは勝利したのだ。

その刃を全て受け切り、トラッシュはスバルを守ったのである。身を貫通し、トラッシュの背中から突き出した、おびただしい数の漆黒の羽をスバルは忘れないだろう。その諦めない強さと、純粋で強大な命のあり方を、スバルもまた胸に刻まれた。

トラッシュは全てをやり遂げたような晴れやかな表情を残して、草原のベッドに落ちて行った。悲しみもなく、悲鳴もなくしっかりとスバルに頷いてみせたのだ。

『さあ、繋ぎましたよ。バトンタッチです……』

その言葉を残し、トラッシュはそよ風に揺れる草原で安らかに寝転がった。

もうすでに、トラッシュの意識は閉じて行き少しずつ、しっかりと死へと向かっていた。寄り添う仲間もいない、孤独への旅立ちである。そうして徐々に頭の中を真っ暗な世界へと任せて行くのだった。

しかしトラッシュは最後の最後で笑った。暗くなっていくトラッシュの世界の中、最後に思い出せた景色は、スバル達の笑顔だったのだから。それは、あかねと夜太郎、メトリー、そして顔の知らない大吾とウォーロックで囲んだ平穏な食卓だった。

プルト・キグナスはトラッシュの周波数が完全に消えてなくなった事を確認すると、得意の持論を展開させた。プルト・キグナスが言った通り、三十六分でトラッシュは命を失ったのだから。

それを運命と再認識してプルト・キグナスはどこか安堵していたのだ。

「はぁ……はぁ。どうだ！　そらみろ、運命なんて変わらないだろう！　僕の絶対の力の前に運命ごときが変わる訳がないんだ！！」

しかしスバルはプルト・キグナスの言葉など耳に入らない。トラッシュは草原の上で寝転がって、もう動く事はなかったのだから。それが信じられない。

「そんな……トラッシュ……嘘だろ？」

「もう、死んだよ。彼の周波数が完全に消えてるからねえ……」

プルト・キグナスは残酷までに冷淡に言ってのけた。展望台から見下ろせる原っぱのトラッシュはもう死んでいる。安らかな表情は、死んでいるのが嘘のようで、ピクニックでも楽しんでいるようだった。

スバルは叫んだ。力一杯、命の限り。トラッシュを奪ったプルト・キグナスが許せなかった。

「お前は許さない！！　許さないぞ！！　絶対に許せない！！」

「ハハハ、バカだなあ。許すも許さないもないだろう、スバル君？」

プルト・キグナスはゲームが終わった事で、ハイド達にようやく命令を下した。

プルト・キグナスは徹底的に冷酷だ。それがスバルを追い込んで、絶望を植え付ける事が出来るなら、どんな事でも躊躇しないほどである。

「スコルピオ！　ハイド！　五里！　そこに転がっているウォーロックの偽物の死体を完全にデリートしてしまえ！　醜くってありゃしないからね！」

オペラ・ファントム達はそれを受けると、展望台から原っぱに降り立ち、トラッシュの方に歩んでいった。死者に向かってさらに手を加えるとは恐ろしい集団であろう。

「ンフフ、ようやく出番ですか……」

「グワハハハ！　ゴミクズのクセによく粘ったもんだ！」

「キシシ！　中々、面白い見せ物だったぜ」

スバルは十字架の中で思いっきり暴れながら叫んだ。この卑劣な集団をどうにかしてやりたかった。

「やめろ！　もうそれ以上トラッシュをいじめるな！！」

「いじめなんてとんでもない。これはキミへの試練なのさ！」

レギオンであるプルト・キグナスは、ロックマンに与えるべき試練だったと言いのけた。しかしそれは建前でしかない、プルト・キグナスの歪んだ表情が、笑顔を作っているのだから。

「これも運命……受け入れるべきだよスバル君」

プルト・キグナスは勝利の余韻に浸りながら、完全に悦に入っていた。

ハイド達がトラッシュの器を完全に消してしまおうと、じりじりとにじり寄る。スバルにとっては悪夢でしかなかった。

しかし運命は変わるものだ。命がけで友達を守ろうとした一つの命が世界の秩序を覆すのである。生命の素晴らしさが実現した、尊いながらも力強い秩序の極致であった。

プルト・キグナスの持論は砕かれる事になる。運命は変える事が可能で、切り開いて未来も掴み取る事が可能なのだから。

驚いた事に、トラッシュは口を開いたのである。しかし意識はないのだろう、がくがくと口が震えていた。トラッシュが言葉を絞り出すたびに、彼の体が崩れていくのだ。崩れた体は、星屑のようになって空高く昇って行った。ハイド達も、もはや手出し無用と言いたげにその様子を固唾を呑んで見守っていた。

もちろんプルト・キグナスが一番ショックを受け、愕然として言葉も出なかった。運命を変えられたという覆しようのない敗北感を覚えたのだ。プルト・キグナスが見ていた未来が変わりつつある。

スバルは口を必死に食いしばって、涙をこらえながらトラッシュの最期の言葉に頷いていた。

「安心してください。もうすぐ……来ますから。流星の……アナタの親友……が」

「うん……う……ん……！」

その時、青空が一筋の流星で輝き始めた。トラッシュは体の半分が空に溶けてしまったが、新しい物語の予感に笑って祝福した。スバルが待ち望んだ時がもうすぐ訪れる。トラッシュはそれで胸が詰

まりそうだったのだ。
　しかし、その間もトラッシュは星屑となって空に溶けて行く。トラッシュとスバルの別れの時が近いようだ。別れの時が近づくほど、出会いの時が近づき、空から青くて力強い流星が落ちてくる。

「スバル様……残念ですがワタシの物語はここでおしまいのようです……」
「トラッシュ、そんな事言うなよ……！　おしまいなんて悲しいこと言わないでよ！」
「泣かないでください……。ワタシは今、とても……嬉しいのですから。スゴク満たされた気持ちです……。ありがとう、スバル様」
「うん……僕こそ、ありがとう……！」
「スバル様……一つだけ……ワタシの最後の願いを聞いてもらえますか？」
「なに？　遠慮なく言ってよ……！　友達だろう？」
「じゃあ、遠慮なく……。最後に笑ってワタシを見送ってください……スバルくん」

　スバルは驚いた。トラッシュが初めてスバルの事を「スバルくん」と呼んだのであった。胸が張り裂けそうだった。

「え……？　今、スバルくんって……」
「じ、実は……ずっとそう呼んでみたかったんです……スミマセン」
「そんな、スゴク嬉しいよ。僕！　嬉しいよ！！」

　二人はお互い胸が張り裂けそうだったが、最後の最後で歩み寄れたような気がした。スバルは笑顔を浮かべる事が出来たのだ。決して綺麗な笑顔とは言えないが、トラッシュにとっては、それが最高の笑顔だった。

「フフフ……ありがとうございます。さあ、もうそろそろウォーロックさんが来ますよ……」
「うん、ありがとう！　トラッシュ……！」
「じゃ、ワタクシ、トラちゃん行ってきますね……。これからはウォーロックさんと、スバルくんの物語の始まりです……」
「トラッシュ……」

トラッシュの体はもうほとんどが星屑の光となって、空に溶けていってしまっていた。そして青い流星は、もうすぐそこまで来ていた。

そして、流星と星屑の光が混じり合った時、トラッシュは完全にこの世界から消えてなくなった。
その時、スバルはトラッシュの最後の言葉が、空から聞こえたような気がしたのであった。

『スバルくん、今までありがとう……ワタシはとても楽しかったです』
「……トラッシュ。キミの事は忘れないよ」

スバルが星屑と流星が混じり合った空を見上げると、悲しみが込み上げてきたらしい。しかし悲しんでいる暇はない。流星が目の前までやって来ていたのだ。その流星の中にはウォーロックが見える。スバルの元へ落ちていく。
トラッシュはようやく二人を繋ぎ止めたのだった。

青い緒を引きながら、ウォーロックはそのままスバルに大声で叫びあげた。スバルの耳には懐かしくも、親しくもある友の声だった。

「スバル！　俺は帰ってきたぜ！！」

ｔｒａｓｈ―４４：流星のロックマン

「歯ぁ食いしばれ！！　スバル！」

ウォーロックは流星だ。ウェーブロードを凄まじい勢いで滑空しながら、大声で一方的に言いつけてくる。その逞しい爪を覗かしているところ、どうやら考えがウォーロックにあるらしい。しかしスバルは気が気でなかった。ウォーロックは無茶ばかりをする傾向があるのだ。

「何をするつもりだよロック？！」
「そのデカイ十字架をブチ壊す！」
「無茶だ！」
「無茶じゃねえ！！　オラァ、スーパービーストスイング！！」

ウォーロックは爪を、輝く緑の円輪で囲み、周波数を研ぎ澄ます。そのままの勢いで大きく横に振りかぶったのだ。

そしてウォーロックの鋭い爪は、ワイル粒子でできた十字架を大雑把にへし折った。どうやらゼロＰＧＭの効果が出ているようだ。

ウォーロックはそのままスバルとルナ、ツカサを助け出すと、トラッシュがいた原っぱに飛び降りた。大味だが、粉雪が舞う中での簡潔な救出劇だった。

「よっしゃ！　一丁上がりだぜ！！」

ウォーロックは満足げにへへンと笑って見せたが、スバルはガサツなウォーロックにうんざりした。脇に抱えられながらウォーロックに文句を立てる。しかしそれは嬉しさの表現でもある。

「おい、ロック！　危ないだろう!!　委員長やツカサ君だっていたのに」

「うるせえ！　うまく救出できたんだからいいだろうが！」

「まったく……キミってヤツは……！」

スバルは溜め息を吐き、ウォーロックの脇からすり抜けると手を差し出した。握手を求めているのだ。今まで語り合えなかった、長い時間をその手のひらに込めている。今はまだ多くは語れないが、まっすぐに見つめ合えば、自然と分かり合えた気がしてきたはずだ。

「おかえり……ロック！」

「ああ、スバル!!」

ニッと笑い、ウォーロックはがっしりとスバルの手を握り返す。そして、オペラ・ファントムやプルト・キグナスの方を睨んだ。そのままでスバルに問いかけるその表情は、険しい作りになって、鋭い目つきをより映えさせた。

「お前、泣いてたろ？　また泣き虫に戻っちまったのか？」

「違うよ……でも……泣いても泣いてもこの悲しさは治まらないと思う」

スバルは再び目に涙を溜めた。トラッシュの最後の笑顔を忘れられないのだ。ほんの少し前までは目の前にいて、昨日は馬鹿をやったりもした。そんな真面目で優しかった友の事が頭から離れなかった。

「そうか……」ウォーロックは、スバルの肩をガッシリと掴んだ。スバルの悲しみを受け取ってやり、敵の方を望みながら言葉を選んでいる。青い狼のような外見で、一見恐ろしい宇宙人だが、ウォーロックは事細かにスバルの気持ちを汲んでいたのだ。

「空でアイツの周波数を感じた時、何となくアイツの思いが流れ込んできた。

アイツは命を懸けて俺が来るまでの間、お前を守ってくれてたんだな？」

「うん、そうだよロック」

「……俺はアイツのことをなにも知らねえが、俺はいま猛烈にヒートアップしている。

スバル、お前はどうなんだ？」

「トラッシュは、僕の親友だよ。だから、アイツらは許せない……！」

スバルはプルト・キグナス達を睨みつけると、ウォーロックは大きく頷いた。戦う理由ができたのだ。

「オーケー！　いっちょ大暴れしてやるか！　スバル、鈍ってないよな？」

そんな馬鹿な、とスバルは無言で、ウォーロックを見上げた。スバルは数々の戦いを乗り越えており、その心配には及ばない。

ウォーロックはニヤリとして、小さな球体に電波化するとスバルのハンターに収まった。

『へへ心配いらねえようだな！　やるぞスバル。俺はいつでもいける』

「うん、行こう！」

勢いよく、スバルはハンターを天に掲げた。スバルの胸は大きく鼓動を打ち、体中が波うつ感覚にとらわれていく。手のひらからウォーロックという大きな存在を感じる。

スバルは最高のパートナーとなら、どこまでも戦い抜いていけるような気がした。そしてそれは間違いのない確信であった。

「トランスコード００３！！　シューティングスター・ロックマン！」

『うぉおおお！！』

スバルは青く輝き、流星の復活を象徴する。

しかしプルト・キグナスは余裕気に、その様子を黙って見守っていた。ようやく現れた越えるべき敵を目の前にして、彼はゾクゾクとした興奮を覚えていたのだ。現れた憎々しい敵は、待ち焦がれた真のロックマン――流星のロックマンである。

「ようやく、現れたね……ロックマン！！」

プルト・キグナスが笑みを浮かべた先には、一体の電波人間がいた。それは伝説の戦士である。

青い流星のような流れるボディーに、赤いバイザーが印象的に輝き、強い瞳を突きつける。ほのかに立ち上る洗練された戦闘周波数に、本来のシンクロ率を取り戻している事がうかがえた。

ロックマンは左腕を持ち上げて、手甲に宿るウォーロックに問いかけた。ウォーロックの瞳は輝き、ロックマンに応じた。

「ロック、調子はどうだい？」

『俺は上々だ。だがスバルお前、万全じゃないな？』

「かなり派手にやられたからね……。そんな事より、今のシンクロ

率は？」
『なんだそれは？　うまいのか』
　ロックマンは思わず苦笑いを浮かべた。よくよく思い返せば、ウォーロックとスバルが電波変換をする時には、シンクロ率などを気にした事はなかったのである。
　それほど息が合っていたのだから無用な事であったのだ。しかし今回の敵は、そうやすやすとはいかないだろう。才能だけで乗り切れる壁ではない。
「オイオイ、そんな事で大丈夫なのかい？　ロックマン」
　プルト・キグナスは肩をすくめて、呆れかえる。手始めに手下を使ってお手並み拝見だ。
「まあいいさ。とりあえず挨拶だ。やれ、ハイド、五里！　人質を奪い返すんだ！」
「ンフフ、了解！」
「チョロイゼ！！」
　ロックマンは迫りくる二体の電波人間を迎え討とうと、バトルカードをハンターに入力した。その体捌きは慣れたもので、左腕はすぐに鋭い剣へと変わった。
「バトルカード、ソード！！」
『久しぶりの実戦だぜ！』
　ロックマンは原っぱを爆ぜさせるような跳躍を見せて、二人との距離を一気に詰めた。スターダスト・ロックマンとは比べ物にならないスピードである。彼の青い体がそのスピードについてこれずに、

長い光の緒を伸ばす。それは流星のようで、まさにこれこそが流星のロックマンと呼ばれる所以であった。

すぐさまロックマンは、ソードでグランド・イエティの足を払いバランスを崩させると、そのままオペラ・ファントムの方に蹴り飛ばした。力の流れをうまく利用した、天性のバトルセンスは輝くばかりだ。巨体のグランド・イエティに潰されるようにオペラファントムは草原に身を埋めた。

「ンフ！　さっきまでとは段違いです……！」
「グワハッ！　ちょこざいな」
『ヘッ、思ったよりチョロイじゃねえか！』

思った以上の出来栄えに、ロックマンは自分の手の平を不思議そうに眺めて、湧き上がる力を確認した。

「体が軽い……これなら行けるぞ！」
「は！　そう簡単にはいかない。ブラックフェザー！」

その隙を逃さず、プルト・キグナスは羽を飛ばしてロックマンを狙い撃つ。しかしロックマンの力は本物で、軽くかわしてしまう。草原に生える柳のようで、それは無駄のない動きであった。

プルト・キグナスは思わず、笑みを浮かべた。

「流石は本物のロックマン……これは楽しめそうだね！」
『こっちは楽しむ気はねえ！　お前には聞かなきゃならねえ事があるからな。速攻で終わらすぞ！』

ロックマンはロックバスターを構えて、正確にキグナスの方を狙い討つ。しかしキグナスのスピードの方こそ凄まじく、残像を残しながらロックマンを翻弄した。

『相変わらず、チョロチョロうっとうしい野郎だ！』
「あまりレギオンを舐めない方が良い！　スコルピオやれ！」
「キシシ！　了解だ。ダークドゥラウン！！」

暗雲がたちこめたようにぽっかりと視界が暗くなる。
「何だ？！」ロックマンが上空を見上げると、ヘル・スコルピオが毒の球体を作りだしていた。その巨大な液状の塊に、ロックマンはすかさず攻撃の特性を分析する。ありありと注がれた毒々しい周波数は、範囲攻撃のそれであった。

「あの攻撃は危険だな」
『スバル、委員長たちを守れ！』
「うん。バトルカード、バリア！！」

ロックマンのはるか後方で眠っているルナとツカサにドーム状のバリアを張ってやり、敵の攻撃の対策とする。
それが幸いし、ダークドゥラウンにより紫の原っぱとなっても、ルナとツカサを守る事が出来たのだった。ロックマンはそのまま上空のウェーブロードに飛び上がり、ヘル・スコルピオに斬りかかる。
ヘル・スコルピオも戦闘に意欲を見せた。

「キシシ！　テメエが噂のロックマンか。俺達の神から要注意人物だって聞いてるぜ？」
『そんなの知るかよ！』
「キシシ！　そうかい。おらよポイズンピックー！」

足元に毒針を突きたてられ、ロックマンは思わず後退した。ウェーブロードが見る見るうちに腐り落ちていく。化学反応が激しく煙を立ち昇らせて、いびつな穴が出来あがった。

「クッ！　なんて毒だ」
「おいおーいキシシ、いいのかーい？　俺の相手なんかしていても、ちゃんと人質を守らないとなー」
「くっ……！」

その言葉にロックマンは慌てて、眼下のルナ達を見下ろした。しかしバリアの防御に守られており、問題はなさそうだ。そう、一見は問題がないのだ。しかし敵は時空を操る能力を持つプルト・キグナスだ。
プルト・キグナスは人差し指をルナの方へ指して、焦点を定める。時空がルナを抱くように脱落していく。

「ダメじゃないか。人質から離れちゃ……」
『まずいぞスバル！　急いで戻れ！！』
「う、うん！」

しかしプルト・キグナスの動作の方が早く、ロックマンがバリアのドームに辿りついた時には異常現象が完結しようとしていた。それはルナを覆うように時空が歪み、まるで空間が少女を丸のみにしてしまう様子である。

「ハハハ！　僕のディメンションゲートから逃げられるわけがないだろう！」
『何だこりゃ！　おい、スバル何とかしやがれ！』
「クッ……とにかく委員長を引っ張り出さないと……！」

ロックマンがバリアを解除したところ、敵の奇襲が襲う。四対一という事は終始念頭に置いていたが、それでも対処が追いつかなかった。まんまと背後を奪われている。

オペラ・ファントムは諦めが悪く、ロックマンの背後からステッキの仕込み刃を振りかざしていたのである。

「ンフフ！　ワタシのヒロインは渡しませんよ！」

「こんな時に……！　バトルカード、ロングソード！」

ロックマンはステッキソードを払い飛ばすと、オペラ・ファントムの胴体をそのままロックバスターで打ち込む。それでもオペラ・ファントムは不敵に口元を歪ませて笑った。そう、それは時間稼ぎとしては十分だったのである。

プルト・キグナスはパチンと指を鳴らし作業を完了させた。きずなクルーを捕獲した手はずも、これと同様なのだろう。

「良い仕事だよ、ハイド。人質を奪還だ」

プルト・キグナスはロックマンに向かって、示すように宙で円を描いた。ルナのいた場所をマークしている。

「ロックマン、キミのお友達はどうやら次元の彼方に飛ばされてしまったようだね」

「そ、そんな……！」

ロックマンはルナがいた場所を振り返るが、そこには人影すらなく、くぼんだように草地が抉り返されていた。乱暴な肉食獣がその場所を食いちぎったようであった。

ロックマンは再三にわたるプルト・キグナスの凶行に、怒りをあらわにした。

「お前……！　委員長をどこにやった？」

「さあ、ね。僕を倒して聞いてみるのも面白いんじゃないかな」

『キグナス。てめえはとんでもないクソ野郎に成り下がっちまったな……』

「フン。えてして超越した存在というのは、凡人には理解してもらえないものさ……」

プルト・キグナスはクスリと笑って、片手を後ろにやって例の次空の穴を作り始めた。空間を切り取ったように干渉していく様は、ヘラの乗ってきた宇宙船が持っていた機能によく似ていた。

プルト・キグナスはもう片方の手でロックマンを指差して、挑発する。鋭い爪の指先は、ロックマンの胸の真ん中を捉えており離さない。不吉な予感にロックマンは胸騒ぎを覚えた。

プルト・キグナスは冷徹な瞳を静かに燃やしながら告げた。

「さあ、キミを流星抹殺計画の最終章に招待しよう」

『なんだありゃ……？』

ウォーロックはその光景に愕然とした。空間に穴があいて、別の風景が切り取られたように浮いていたのだ。まさに異質である。そのような能力を持ちえたプルト・キグナスの脅威を具体的に示されたのである。

そしてプルト・キグナスはその転移座標に乗り込み、人差し指をクイっとくねらせて挑発する。ヘル・スコルピオも隣でニヤニヤと笑みを浮かべていた。

ここより向こう側は一切の常識が通用しない世界である。

「来いよ……ロックマン。あの女の子を助けたいんだろう？」

『コイツは罠だ……！』

「そうさ。いかにも罠だよ！　だが、キミの大切なお友達の命を見捨てることは出来ない……そうだろう？　優しい君たちに選択権はないのさ」

「……行くよ！　ロック……委員長を助けないと」

『チッ、バカ野郎！　どうなっても知らねえぞ』

ロックマンはのどかな原っぱに浮かぶ、恐ろしい未知の世界への冒険を決心した。

「いい子だ。さあ、時空を股にかけた鬼ごっこの始まりだよ」

プルト・キグナスはくつくつと笑うと、ハイド達に最終命令を下す。彼は月から流れてくる微弱な戦闘周波数の部隊を感じていた。どうやらリカがロックマンに助けを送りだし始めたようだ。

プルト・キグナスは眉をひそめた。

「月からチョロチョロ増援部隊のヤツらが来ているようだね。ハイド、五里そいつらを返り討ちにしてしまえ……。

レギオンによる神の組織『ディーヴァ』の恐ろしさ見せてやれ！」

「ンフフ、了解しました」

「ここらでいったんお別れのようだな！」

「楽しみにしているといいよ。気が付いたら、君たちは地球の支配者になるんだからね……そして僕はこの新ＦＭ星で王となる！」

「ンフフ、それは楽しみだ」

オペラ・ファントムとグランド・イエティは地球の支配者となるべく、コスモウェーブへと昇り宇宙へと消えていった。

ロックマンは空を見上げて、アストラル・ホープ達の安否を憂慮した。

「アイツら……」

『スバル、今はキグナスを優先だ。あの小悪党どもは月のサテラポリスに任せておけ』

「うん……そうだね」

ロックマンは、プルト・キグナスのディメンションゲートに飛びこんでいった。

二人のレギオンと流星のロックマンが運命を突き動かしていく。

そしてロックマンはプルト・キグナス達に翻弄されるように、時空を渡り戦った。その時代、場所は千差万別で、数日前のコダマタウンから、数億年前の未知の惑星に及び、宇宙中の時代を制覇するほどの勢いであった。

そして最後にプルト・キグナスが流星抹殺計画に選んだ時間と場所は、ごくごく平凡な条件の元に存在していた。

『てめえ！　いい加減にしやがれ！　鬼ごっこをして遊んでいるんじゃねえんだぞ？！』

ウォーロックは時空渡りを終えると早々、プルト・キグナス達に罵声を浴びせた。様々な悪条件下での戦いを強いられて、体力を消耗させられていたのだ。

それらを経てディメンションゲートから飛び出てきたロックマンは、とある遊園地の上空のウェーブロードに着地したのである。

場所はコダマタウンからほどないエリアパークである。そしてその時間は四年前に位置している。

くしくもその日は八月二日で、ミソラの誕生日を祝って響家が訪れていたその瞬間である。当然ロックマンは彼女たちの存在を知る由はなかった。

プルト・キグナスとヘル・スコルピオは流星抹殺計画の保険を、この時代に張っておく事を企てていたのだ。レギオンであるヘル・スコルピオをこの時代において、予備的に地球の秩序を完全に破壊するつもりなのだ。プルト・キグナス自身が行う最終計画との二段構えという訳である。

二人のレギオンはお互いに確認し合うとロックマンの方を望んだ。

「ここの時間なら丁度いいね……。手はず通り頼んだよスコルピオ……」

「キシシ。了解だ」

「僕はアカシックレコードへのディメンションゲートを開く。だからその間、ロックマンの注意を引いておいてくれよ」

「ああ、お安い御用だぜ。キシシシ、地球を滅茶苦茶にできるなんて楽しみだぜ……！」

そうしてヘル・スコルピオがロックマンの方へ歩んでいく。それを見届け、プルト・キグナスはさらに上空のウェーブロードに飛び上がった。ロックマンもそれに追いすがろうとする。

『てめえ、逃がさねえ！　委員長と大吾の居場所を吐きやがれ！！』

「フフ！　いい加減にしつこいねえ、ロックマン！　食らえブラックフェザー！」

プルト・キグナスは黒い羽を飛ばしてロックマンを迎撃する。その間にヘル・スコルピオはロックマンとの距離を詰めていく。

ロックマンは後ろの方へ飛び退いて羽をやり過ごすが、プルト・キグナスを上空に逃がしてしまったようだ。昼間なのに暗黒の世界は視界が悪く、プルト・キグナスを見失ってしまう。

『チッ！　あの野郎、チョコマカしやがって……！　スバル、アイツをさっさととっちめるぞ！！』

「うん、分かってるよ。委員長の居場所を聞きださないといけないしね！　バトルカード、ソード！」

ロックマンは左腕をソードに変換させて、上空に飛び上がろうと力を込める。しかし、そこにとうとう距離を詰め切ったヘル・スコ

ルピオが現れたのだ。紫色の毒針を、ロックマンに鋭く飛ばしつけて牽制したのである。

「くっ……コイツ」表情を渋らせ、ロックマンはヘル・スコルピオにも嫌気がさしていたのである。プルト・キグナスとの戦いを横から邪魔してくる狡猾な印象だった。自然とウォーロックの口調がより荒くなっていく。

『てめえ、スコルピオ！　何でキグナスの味方なんかしてるんだ！？』

「キシシ、知ったことか！　俺はな！　平和なんか要らねえんだ！　確かにアイツはいけすかねえがな。強いから従ってるだけよ！　ウォーロック、お前も一回負けてんだろう？」

『チッ、ＦＭ星人の中にも、テメエみたいなクソ野郎がまだいやがるのか。ＦＭ星人達が変わった本当の理由を知ろうともしやがらねえ……！』

「キシシシ！　友情なんて嘘っぱちさ。そこのスバルとか言うやつにＦＭ星は牙を抜かれたんだ！　ＦＭ星人の新しい王こそプルト・キグナスが相応しいぜ。そして俺が新ＦＭ王の右腕になるんだ！　このヘル・スコルピオ様がなァ！」

ロックマンは悲しそうにヘル・スコルピオを見つめた。憐れなこのレギオンには、何を言っても無駄だと悟ったのである。

ロックマンは感情を殺して、ヘル・スコルピオにロックバスターを撃ちこんでいく。しかしレギオンである彼もむざむざやられはしない。ヘル・スコルピオは腰から伸びる尾から毒針を飛ばして、ロックバスターを相殺する。飛沫となってウェーブロードに落ちた毒液が、ウェーブロードを紫色に腐敗させた。これは猛毒に違いない。

「キシシ！　久しぶりのウォーロックとの電波変換で本調子じゃないのか？　思ったより弱いなあ！！」

『スバルが手負いだが、お前を倒すのには十分すぎるぜ！　いい加減にそこをどけってんだ！　オメエには用はない』
「キシシ！　俺様だってレギオンの一人なんだぜ？　ザコ扱いするんじゃねえよ。てめえごときな、キグナスの相手にはならないんだよ」

確かにプルト・キグナスは圧倒的に強く、壮絶な能力を所有している。元の時間の世界で、大吾とウォーロックが共に戦うも無残にもやられてしまっていたのは事実である。ウォーロックはプルト・キグナスの脅威を身をもって体験していた。
そしてヘル・スコルピオはプルト・キグナスと同じレギオンの一人である。その力は正真正銘の本物だ。
ヘル・スコルピオは誇らしげに自分の胸を叩き、尊大な自己を演出した。

「キシシ！　俺はレギオンの一人ヘル・スコルピオ様だ！　ロックマンごとき屁じゃねえんだよ！！」

確かに彼の強さはヘラ・ローズガーデンと同等かそれ以上である。まさに彼の戦闘周波数は圧倒的なのだ。
しかしその力は悲しいもので、強大な戦闘能力と引き換えに、生物としての生きる意味や、誇りなどというものを廃絶していた。かつてのＦＭ星人としての誇りがあったスコルピオの姿はどこにもない。力に酔い溺れた紫色の電波体は、底意地の悪い笑みを浮かべているのだった。
ロックマンはそれに虚しさを覚えたようだ。

「スコルピオ……、キミにはケフェウスやＦＭ星人の思いが分からなかったんだね……」
「ああ、残念だ。だが俺は間違っちゃいない。ケフェウスはお前に

騙されたんだ。おかげで俺の仕事もなくなっちまった。争いのない平和な世界なんてまっぴらごめんなんだよォ！

とにかくこの時間から地球を滅茶苦茶にしてやる！」

「……危険な奴」

恐ろしいまでのヘルス・コルピオの卑劣さだった。さしものロックマンもがっくりと肩を落とし、少しでもヘル・スコルピオの良心に期待した自身を呪った。そして素早くハンターに三枚のカードを読み込ませ、ギャラクシーアドバンスを発動したのである。

赤い螺旋の周波数を装飾しているそれはドリームブレイクだ。夢の破壊剣に左腕を変換して、ヘル・スコルピオの懐に一気に潜り込んだ。ドリームブレイクを、ヘル・スコルピオの胴体を分かつように振り抜いた。

「キシシ、速いじゃねえか！　だが、甘い！」

ヘル・スコルピオは、機敏な動きで尻尾を回りこませて、ドリームブレイクを受け止める。しかし、その重い衝撃でヘル・スコルピオの強固な尾にヒビが入ってしまった。

「キシ？　マジか！」

予想を越えてきたロックマンの一撃は強力であり、ヘル・スコルピオは驚きを隠せない様子。

ウォーロックは死の淵より蘇ったことにより、戦士としての勘を研ぎ澄ませていた。スバルも生前のトラッシュと数多の試練を乗り越えて、その戦闘センスを抜群のものへと成長させていた。

自分がレギオンであると言う、ヘル・スコルピオの自信を撃ち砕

いて見せたのだった。そのためヘル・スコルピオは後ろに飛び退いていったん距離を置いた。眼下の状況に策を練っている。そしてヘル・スコルピオは、ニヤリと悪質な笑みを浮かべたのである。

ウェーブロードの下では、化け物たちの戦いに恐れをなした人々が我先にと逃げだしていた。秩序なくうごめく群衆は、ヘル・スコルピオには取るに足らないゴミに映った事だろう。

「なあロックマン。お前、英雄らしいじゃねえか？　そのお手並み見せてもらおうか」

「何をするつもりだ……？」

ロックマンは背筋に冷たいものを感じた。悲鳴が鳴り響くエリアパークに不穏な空気が根を下ろすと、ヘル・スコルピオはニヤリとした。ウェーブロードを飛び降りて、下の群衆に向かって急降下しだしたのだ。これは襲撃だ。

「キシシ！　俺はコイツら全員を毒の海でぶっ殺してやるが、これをどうやって救い出す？！　ロックマンよォー？！」

「アイツ……！」

最悪のシナリオを描くヘル・スコルピオだ。過去の改変以上に人命を救うために、ロックマンはすぐに後を追った。しかし、ヘル・スコルピオは既に毒針の先端におびただしい量の毒液を集めている。展望台で見せた物より数倍も大きな汚水の塊が作られていた。それを一気に、躊躇もなく群衆の中に浴びせかけるのであった。死の星のようなそれは、徐々に降下速度を上げていく。

「キシャハ一ハハハ！！　プレゼントだぜ地球人っ、ダークドゥラウン！！」

ヘル・スコルピオの毒性は、戦いを通じて推測でき、それは猛毒である。無機物を一瞬で腐敗させるものである以上、人間にはひとたまりもない。そして有効範囲の広い攻撃であり事態は最悪に近い。

しかし危機的状況でも英雄は諦める事は許されない。ロックマンは、バトルカードをハンターに読み込ませる。ルナから貰った赤いバトルカードデータだ。それは結果として、まだ幼いスバルの初めてのブラザーを守るものだ。偶然が生んだ、時を越えた少女の加護であった。

「バトルカード！　ゾディアック・ライン！！」

すると、星座のように格子状のラインを走らせたドームが大規模に形成された。ロックマンはその聖なる領域を、人の一番集まっている場所に展開させた。しかしこれだけでは覆い被せそこなった人間がまだまだいるのであった。

「ダメだ！　まだ、人が……！」

『ダメだ、ギガクラスカードを読み込んだせいで次のカードの読み込みが出来ねえ！』

「キヒャハハ！！　ロックマンでも守れないものはあるんだなァ！」

ヘル・スコルピオの勝利宣言だった。甲高い笑い声が響きわたり、人々の悲鳴をより際立つものとしたのだ。

だが、ロックマンとは別の誰かが、バトルカードのバリアらしきものを展開させて救いそこなった人々を救済したのである。大きなゾディアック・ラインのドームのそばに、小さなドームが複数展開された。ロックマンはそれが何者かは分からなかったが心から感謝した。

しかしそれでも救われなかった人は、毒の津波に押し流されて悲

鳴を上げ、やがてそれさえも飲みこまれていく。

「キシシシ！　ちょっと少ないけど人間どもがゴミのように飲み込まれていくぜ！」

下の世界で繰り広げられる防げたであろう地獄絵図に、ロックマンは唖然として見つめるしかなかった。そして我に帰って、血をにじませるまでに唇を強く食いしばる。

そしてヘル・スコルピオに向かって怒りのままに突っ込むのだった。ウェーブロードの上を突き進み、真正面から向かっていくその姿は冷静な判断ではない。

「なんでこんな事をするんだ！！」

「キシシ！　まあ、そう怒るなよ。あの毒じゃ即死はしないぜ？まあ、ゆっくりと苦しみながら、極上の表情を浮かべながら、結局は死ぬんだけどな！　キシハハハハ」

『この野郎が！！』

勢いのまま突きだしたロックマンの拳は空を切る。足をもつれさせてロックマンはウェーブロードの上を無様に転がっていく。

ヘル・スコルピオはその様子に、ニヤリとしてロックマンに勝利宣言を送ったのだ。ムクリと起き上がり、ロックマンは背中越しにヘル・スコルピオを睨みつける。

「キシシ！　ロックマン、お前の負けだよ。英雄は弱者を助けなきゃいけないんだよなあ！　だが、それが出来ないんじゃヒーロー失格だぜ！」

ヘル・スコルピオは言いたいだけ言うと、流星抹殺計画をより確かなものへとするべく、ロックマンに対して背を向けた。あさって

の方へ向かうつもりらしい。手をひらひらとさせ、挑発的な態度を崩すつもりはないらしい。

「じゃ、俺は勝ち逃げとさせてもらうぜ！　アバヨ。まあ、追ってきてもいいが、キグナスの方を放ってはおけないよな？　まあ、俺様はこっちの世界から地球を滅茶苦茶にしてやるけどねっ！」

ヘル・スコルピオは不敵な笑みを浮かべて、ウェーブロードを伝い、その場をどんどん離れていく。

これ以上犠牲を増やすまいとロックマンは、ヘル・スコルピオを追おうとする。だがウォーロックに制止されたのであった。ウォーロックは頑なな態度で、ロックマンに深追いを許さなかった。

そして無言の押し問答の結果、ヘル・スコルピオにまんまと逃げられてしまう。彼の、ヒステリックで毒のある笑い声は、やがて小さくなっていく。そして空気にかき消されてしまった。

ウォーロックはロックマンに敵を追う事を許さず、ロックマンはそれが理解できなかった。

『追うんじゃねえ！　どうやらキグナスがまた別の世界に続く穴をあけやがった！　空がまた明るくなってやがる』

ウォーロックの言う通り、辺りがまた輝きを取り戻していた。時空の穴が開いたという事だ。光源の位置からキグナスの位置もおおよそ把握可能である。コスモウェーブとスカイウェーブが分岐する広場の辺りにキグナスはいる。とても高い位置にあるので、その輝きは太陽と錯覚してしまう程だった。

そしてウォーロックは感じていた。プルト・キグナスをどうにかしない限り、今回のような惨劇が繰り返されるのである。全ての元凶はプルト・キグナスであると、ウォーロックは説いた。

「でも……！」

スバルが食い下がる。

『いいかスバル、よく聞け！　今、アイツの開けた穴を逃すとこの世界に閉じ込められちまうんだ。俺達にはキグナスを倒すしか道はない』

「でも、だからってあんな危険なヤツ放っておいたら……」

『あの野郎は、自らこちら側の世界の住民になることを宣言したんだ。その瞬間、アイツはもう俺たちの住むあっち側の住民じゃねえ。俺たちが干渉できる範囲を超えてるんだよ。

……まあ、地球人のお前には理解しにくいんだろうけどな』

ウォーロックの言うあちらの世界と、こちらの世界とは、過去と未来、並行世界を交えた話の事である。

ヘル・スコルピオは、こちらの世界を破壊すると宣言しているのだ。その時点でヘル・スコルピオは、こちらの世界に定着した一つの生命体と言う事になったのだ。もはやヘル・スコルピオの存在はロックマンではどうにかなるものではなくなっていた。

それが意味するのは、ロックマンもこちら側の世界の住民にならないと、ヘル・スコルピオに干渉してはいけないという事だった。

もっとも、スバルには帰るべき世界があり、こちら側の世界の住民になるわけにはいかない。だからキグナスを追うしか方法は残されていなかった。

ただ、宇宙人であるウォーロックの持つ概念は、地球人の理解できる所ではないのかもしれない。

ロックマンは納得できずに、やり場のない怒りの矛先を探していた。

「なんだよそれ……、訳わかんないよ」
『訳がわかんなくていい。こっちの世界の事はこっちの世界の奴らに任せるしかねえんだ！　いいからさっさと行くぞ』
「でも……やっぱり」
『テメ！　加減にしろよスバル！　キグナスの野郎を止めない限りは、同じ事が繰り返されるんだぞ！？　根本から解決しないと意味ねえんだよ。それに、ここは大丈夫だ。断言してやる！」
「やっぱり意味が分からないよロック！　そんな事何で言いきれるんだよ！」
『俺を信じろ！　それが理由だ！』

理由なしに、ウォーロックは自信満々と言った様子で言いきったのだ。清々しい滅茶苦茶さである。
ロックマンは理屈を求めていた事が馬鹿らしくなった。もはや、このウォーロックを言い負かすことはできないだろう。それほどに頑固だった。やむなくロックマンは頷いた。

「わかったよ……。状況が判断できないほど馬鹿じゃないしね。それにアイツはトラッシュの仇だ……！　親友の仇なんだっ」
『へへ、やーっと、分かったか！　ならアイツの開けた穴に飛び込むぜ！　いよいよラストって感じだな！！』
「うん……行こう！！」

ロックマンは上空にぽっかりと空いた輝かしい穴に向かって跳躍し、ウェーブロードを伝ってキグナスのところへ向かっていく。

そして辿りついたウェーブロードの踊り場には、プルト・キグナスが待ち構えていた。まるで後光が差しいるのでキグナス本来の色である白が際立っていた。その背後の大きな穴は輝く白色で、中の状況はまったく分からない。ロックマンは緊張からか、自然と身構

えた。
　しかしそれでも不気味な笑みを浮かべているプルト・キグナスからうかがえる事がある。そのディメンションゲートが繋がる先の場所は、絶対的な特殊空間である事だった。

「やっぱり、僕と戦う運命を選んだねロックマン……」
「キグナス……。悪いけど、僕はキミをデリートさせてもらうよ」
「そうかい。でもここから先の世界では、さすがの僕でも未来は読めないよ」
『ヘッ、どこに繋がってようが関係ねえ！』

　プルト・キグナスは怪しげに笑みを浮かべると、渦巻く巨大な穴へと侵入していった。

「フフフ、さあ来いよロックマン。ここから先は、僕でもアクセスするのが困難を極める場所アカシックレコードだ。
　キミのお友達の女の子もそこに幽閉してやったのさ」

　プルト・キグナスは時空渡りを繰り返して、アカシックレコードにアクセスしやすい時間と場所を探していたのだ。何もロックマンと鬼ごっこをしていた訳ではなかった。
　そしてその繋がる先こそ、全ての宇宙の記録が内容されている外の世界『アカシックレコード』である。そこがプルト・キグナスの流星抹殺計画の最終舞台であった。
　ロックマンも最後の舞台、そして始まりの舞台に飛びこんでいった。

「行くよ、ロック！　委員長を助けよう！！」
『おうよ、スバル！』

ｔｒａｓｈ―４７：繋がる物語の力

ディメンションゲート内のウェーブロードが薄い黄色から、濃い緑へと変わっていく。それに伴い、渦巻く電磁波の揺れが激しくなっていくのだった。それは乱気流のようで、まるで何者かの意志による抵抗のようでもある。おそらく秩序として、矮小な生命ごときが記録の宇宙へ向かう事を嫌っているのだろう。

アカシックレコードへのアクセスは、容易にできるものではないのだ。

それでもロックマンはプルト・キグナスの後を追っていくと、徐々にとりまく世界の質感が移り変わっていく。肌に優しかった、慣れ親しんだ地球の電波世界が、肌に覚えるざわつく違和感で、くまなく刺激した。

そして飛び込んだ先で広がる光景は、眩い星々の瞬きであり、ロックマンは思わず目を細めてしまった。

そこは全ての宇宙の記録が内蔵された記録宇宙または管理宇宙、広がるのは仰々しい無限の輝きだ。

そして星に溶け込むように至る所で、鼓動のような周波数が脈打っている事が感じられる。それを発するのは淡いピンクの果物の実りのようなものである。ふわふわとそれが風船のようにが浮かんでおり、輝きに混ざって自己を誇張した。そんな大小さまざまな果物が緑色のウェーブロードという枝に繋がる。その経路は、無限に分裂していき、歴史という無限の樹形図を作っていくのである。

「ここは……？」ロックマンはディメンションゲートから飛び出すと、ウェーブロードの開けた足場へと降り立った。空を仰ぐと、そ

の薄い緑色の液体で満たされたような宇宙の天井は、どこまでもはてしなかった。

「この場所は……前に来た覚えが」

『俺もこの場所は初めてじゃない気がするぜ……』

ロックマンは頭に覚えた鈍い痛みを感じながら、何とかこの世界の事を思い出そうとしていた。するとロックマンに語りかけるようにプルト・キグナスが答えを明かした。語りながらプルト・キグナスはロックマンの数メートル先で小さなディメンションゲートを作りだす。

「ここは、アカシックレコードの世界。そしてここは地球のライブラリ空間だよ」

「アカシック……レコード？　クッ……なんだ、僕は何か忘れている……」

「そうさ、キミは何度かここにアクセスしている。だが肉体ごと、こっちに来たのは初めてで混乱しているみたいだね」

『キグナス！　テメエ、こんなところに俺達を呼びだしてどういうつもりだ！』

ウォーロックが哮（たけ）ると、キグナスは首を傾げた。するとディメンションゲートから少女が放り出されてくるのだった。

「ハハ。そう怒るなよ、ウォーロック。そらよ、キミたちが助けたかった女の子だ。もう、人質はいらないからね」

プルト・キグナスはルナをロックマンの方へ乱暴に投げ飛ばすと、ルナの金髪がはだけたように空を舞った。ロックマンは慌ててルナを受け止めるとキャッチボールは完了し、一安心したようにホッと

一息吐いた。

「い、委員長……。ふう、良かった……」

ロックマンはルナの安らかな顔を見ると胸をなでおろす。しかしウォーロックはそうもいかない。

『おい、ヤベエぞスバル。ここはどうやら宇宙のようだぜ。宇宙マニアのお前なら、生身の人間がここにいるってことは……』

「うわ……ホントだ！　ど、どうしよう？！」

電波人間でないルナは、生身で宇宙空間に晒されている事になる。それが意味している事を考えればルナの身の安全は保障できない。ロックマンは青ざめてしまう。

しかしプルト・キグナスは笑って、慌てふためくロックマンを楽しんでいた。

「おいおい、そんなに慌てるなよ。ここは宇宙といっても、普通の世界じゃない。この世界では、全ての生物が本質をさらけ出して存在できる。大丈夫、死にはしないよ」

「そんなワケ……」

「いや、そうだよ。ほら見ろ、キミがうるさいから目を覚ましちゃったようだね」

プルト・キグナスが指差すと、ロックマンの腕の中でルナが目を覚ました。平然と朝の目覚めのようで、特にルナからは異変は感じ取れなかった。アカシックレコード内では、空気という概念はなくとも命は維持できるようだ。常識が通用する世界ではないのだろう。

「う、うーん。ここは……？」

ルナは目を擦りながら欠伸をすると、ロックマンと目が合った。
もちろんすぐに抱きついて、歓喜の悲鳴を上げている。どうやらルナは本当に大丈夫のようである。

「まあ、ロックマン様！　ワタシを助けに来て下さったのね！！」
「う、うん。それよりも委員長、具合は悪くないの？　ここ、宇宙のようなんだけどさ」
「ええ！　ロックマン様がいて下さるなら元気百倍ですわ！　宇宙空間だろうが、何だろうが何でも来いですわ！」
「あはは……。それは良かった」
『へへ！　相変わらずうるせえ女だな』

ウォーロックが笑い声を混じらせながら、呆れてみせる。するとルナの方は驚いた。しかし少し不満気に頬を膨らませてもいる。

「え？　ウォーロック、何でいるの？　ロックマン様と二人きりだと思ったのに……」
『おい、テメエ！　いたらワリイのかよ！』
「フフ、冗談！　おかえり、ウォーロック！」
『へっ、今はそんな呑気なこと言ってる場合じゃねえ。スバル！気を引き締めろ！！』

ウォーロックの呼びかけに、ロックマンはプルト・キグナスの方を望んだ。相手はレギオンで何を考えているのか理解できない。人質を返してくれたと言っても、倒すべき敵である事には変わりない。
ロックマンのキッと引きしまった目付きは精悍で、ルナは見惚れてしまった。
プルト・キグナスは腕を組み、羽を大きく広げて漆黒の翼を宇宙で羽ばたかせた。黒い羽が舞い、不吉な兆候を占う。

「ハハハ！　良かったね。可愛いお友達が帰って来てさ」
『キグナス……！　てめえが人質を返すってことは何か考えてるな？』
「まあ、ここにおびき出した以上、その子には用はないからね……」
プルト・キグナスは言葉尻を空気に霞むほど甘ったるく溶かすと、アカシックレコードの空に舞い上がった。そして輝く星々と命の果実を背後に従えて、ロックマンを見下ろし宣告する。
「さあ、ここから流星抹殺計画の始まりだ！　全てを懸けて、僕はキミを越えてみせる！！」
『おい、テメエ！　流星抹殺計画ってのは何なんだ?!』
「フフ……いいだろう。どうせここで死ぬんだ。全て教えてやるよ」
プルト・キグナスの高圧的な態度に、ロックマンはただただ仰いでその言葉を耳に刻んだ。プルト・キグナスの野望が語られる。それはＦＭ星人キグナスとしての根強い願望が見え隠れし、ウォーロックに対するコンプレックスにまみれたものだった。
「ここはライブラリ、アースエリア。地球のこれまでと、これからを全て記録している場所さ。
君たちを含めた地球の全ての命をデータ化し、保存されている。ここは言わば命のサーバーのようなものさ」
『どういう意味だ……?!』
プルト・キグナスは、空を埋め尽くす血の気を帯びた例の果実たちを指差して言った。
「分からないかい？　キミもあの淡いピンクの球から周波数を感じ

ているはずだ。……そう、命の周波数をね！」
『まさか……！　アレがデータ化された命だってのか？』
「ロック！　この世界から、母さんにミソラちゃんやゴン太、キザマロの周波数を感じるよ……！
　このエリアに、地球のみんなが生きてる！」

　淡いピンク色の果実のようなものが命のデータである。
　この世界を照らすのは命の果実であり、それは甘い汁を多分に含んだ生命の滴を地球人の記録としている。ロックマンもそれは感じた事だろう。
　それゆえにプルト・キグナスの考えている事が恐ろしい事この上ないはずだ。

「そう！　この世界を埋め尽くす、おびただしい数の光一つ一つに地球の命が記録されている！　そして、僕にはそれを自由に操作する権限が与えられている！　ナンバーズレギオンとしてね！！」
『テメエ……！！』
「フフフ……ハハハハ！！　ここまで言えば、もう分かるはずだァ！！」

　プルト・キグナスの放つキーワードがロックマンの脳裏をひっかいていく。スバルはもう少しのところで記憶を思い出そうとしていた。

「アカシックレコード……アクセス権限者……」

　自分だけの物語の力。
　スバルがラーニングレギオンを駆使するように、プルト・キグナスもまた生まれついての力を持っていたのだ。それはとても凶悪で、とても計り知れない強大な力の塊であった。

絆を大切にするスバルの命の力とは対照的な、命をもてあそぶプルト・キグナスに許された異常な力。

「そうさ！　それこそが僕だけの物語の力ァ！！　『レコードブレイカー』だ！　この力によって地球人は全て記録上から抹殺される！　そうなれば地球を新ＦＭ星として僕が王となり君臨する！　ウォーロック、僕は君を越えて一番になるんだ！！」

「ロック！　コイツ危険すぎるよ！」

『ああ、どうやら俺達は地球の命を、ぜんぶ背負いこまなければならないらしい……！

ここが正念場だぜ、スバル！』

「踏ん張ってくれてもいいけど……無駄だと思うよ！　さあ、見せてやるよ、僕だけの物語の力を！

アクセス……アカシックレコードレベル１３！　レコードブレイカー――！！」

プルト・キグナスの魂の雄たけびに呼応するかのように、黒いその体から赤くてくすんだ周波数が触手のように伸びていく。向かう先は、命の果実の方である。

プルト・キグナスは、レコードブレイカーを駆使して、その赤黒く禍々しい戦闘周波数を命の果実へと伸ばして締めあげていったのだ。命の滴が絞り上げられ、人々の悲鳴がアカシックレコードの中でこだましていく。それはロックマンに救いを乞う願いのようにも聞こえた。

悲痛の中、ロックマンは迫りくる終わりの瞬間を刻一刻と感じていった。しかし諦めたらそこで終わりだ。ロックマンを信じて、必死に腕にしがみついているルナがいる以上、敗北は許されない。勇気の限り、命の限り、その命を燃やす時が来た。

それは流星のように、星屑のように。トラッシュが生きた地球の記録を消させる訳にはいかない。人々の「生きたい」という願いが

こだまして宇宙が共鳴する。ロックマンはその人々の未来への願いを叶えなければならない。

なぜならスバルとウォーロックは流星のロックマンなのだから。

ロックマンは精神を統一するかのように、深く息を吸い込み、穏やかに吐き出して覚悟を決める。ロックマンの戦闘周波数は青く輝き、静かな大河を彷彿させた。

そしてプルト・キグナスは邪悪さを象徴する声色で、低く唸る声で叫びあげた。ロックマンはそれを静かに、それでいて力強い瞳で睨み返す。

「さあ、来るがいいロックマン！　この世界で君をデリートして、その存在を、過去から未来永劫、宇宙の記録上から抹殺してやる！　必死にあがけよ、僕のレコードブレイカーは一時間以内に全てを終わらせる！　君も消えておしまいになるんだ！！」

『へっ！　終わるのはお前の方だ！！』

「委員長、下がってて……！　君を絶対に守るから！」

「ロックマン様……！」

その時、ルナはロックマンの手をぎゅっと握りしめた。その小さな少年の背中に全てを背負いこませるのは、あまりにも儚いと感じさせられたのだ。

そしてルナ自身も感じていたのだ。この世界で響くルナの叫びを、データ化された命の声を。プルト・キグナスのレコードブレイカーに抗うように「生きたい……！」「戦いたい……！」「スバルくんと一緒に……！」その言葉を必死に絞りあげていた。それこそがルナの命の本質を、具現化した言葉だった。

ここはアカシックレコードの世界。命が本質をさらけ出す場所である。言い換えれば、その生命が奇跡を起こすことができる場所だ。なぜなら人間の本質は、奇跡に向かって生きる事にあるのだから。

だからここでルナはヒロインを演じるわけにはいかない。悲劇を生みだすよりも、今はヒーローとして希望を見出したかった。ルナはロックマンの瞳を見つめて、言葉を絞り出した。ずっと言いたくて、たまらなかった言葉だ。それを素直に言葉にしたのは、これが初めてだ。

「ロックマン様……ワタシも力になりたい！　一緒に戦いたい！」

「委員長……でも」

「ロックマン様……いいえ、スバルくん！　ワタシも守られる側じゃなくて守る側に回りたいの！　だって、私も地球に生きている一人なんだもの！」

ロックマンは感じた。手のひらから温かくもしっかりと脈打つ、熱くたぎるルナの周波数が流れ込んでくる。

流れてくる周波数、熱く燃える血の押し寄せてくる感覚、心に広がる少女の決意。

その時だ。スバルは全てを思い出したのだ。アカシックレコード内における自分だけの物語の力。そして、それの使い方。

そして今のスバルを形作り、繋ぎ止めてくれた今までの出会い。ウォーロックから始まり、トラッシュで繋いだスバルだけの物語の繋がりだ。

それがラーニングレギオンでスバルだけの物語の力だ。それがルナとスバルをリンクさせる奇跡を生む。

ロックマンはルナに笑顔を返して、しっかりと手を握り返した。

「僕は委員長にいつも力を貰ってきた……！」それが初心で、いつだってスバルが感じていた思いだった。

「委員長、ありがとう。分かった、僕に力を貸して……！　一緒に戦うよ！！」

「うん！　スバル君！」

ロックマンはルナと共にプルト・キグナスを見上げて、額に手をかざした。ロックマンの脳内で力が溢れて、それがロックマンを包む輝きへと変わる。

「アクセス……アカシックレコードレベル１３……」

「ん……っスバル君……なんだか熱いよ」

「大丈夫……僕が付いてる」

ロックマンは目を見開き、その輝きを青い流星から黄金の月光へと変えた。周波数が満ちていき、ロックマンの姿が変わっていく。

「ラーニングレギオン！　ロックマン・ルナハート」

プルト・キグナスはその様子に、高揚感に似た感覚を覚えていた。絶望と変わらない状況の中、さらには親友を奪った仇を目の前にしてもなお、未来を諦めない少年の黄金の瞳が美しいのだから。

ルナとロックマンはひとつになり、月明かりに眩い黄金のロックマンは星屑と流星の意志に輝いていく。女神の加護のように、エネルギーの塊の月輪が、ロックマンを包んで身を固く守っていく。

それを圧倒的に完膚なきまでに、打倒した時、ウォーロックの影で甘んじていたキグナスの願いは果たされる。プルト・キグナスは甘い吐息を吐いた。

「そうか。それがスバル君の力なんだね。ああ、面白いよ！　僕はそれを乗り越えてみせよう！！」

ロックマンは周波数の揺らぎを捉えて、空に飛び上がった。プルト・キグナスを視線を真っすぐに合わして戦いの意志を静かに燃や

した。

「委員長……ロック、僕は今……！　とても満たされているよ！」
『ええ、行きましょう。スバルくん！』
『ヘッ。ちょっと世界を救いに行くか！』

ロックマンは光を反射して輝くルナティックバスターをプルト・キグナスに構えた。プルト・キグナスは羽を羽ばたかせ、お互いに機をうかがう。

「さあ、全地球人の命を懸けた戦いの始まりだよ！　そして僕は勝って王になる！」
『ヘッ言ってろ！　スバル、委員長！　準備は良いな！！』
「うん、トラッシュが生きた地球を終わらせはしない！」

ロックマンは腰を落として、戦闘体勢を取った。そして静かに、トラッシュに世界を救う事を誓ったのだった。
今までの全てと、これからの全てを繋ぐ戦いが始まる。

「スターダスト・ロックマン、ラストウェーブバトル……」
『シューティングスター・ロックマン、ファーストウェーブバトル……』
《ライド・オン！！》

三人は声を合わせて宇宙を駆ける閃光となり、プルト・キグナスに飛びかかった。
黄金の流星は駆け抜け、暗黒の悪意に、力の限り殴りつけるのは友情である。

アカシックレコードは宇宙の今までとこれからの記録を刻んでいく。もちろんアカシックレコードという場所で起きた出来事は、そのライブラリ内の命のデータに、新しく刻み込まれていくのだ。それは地球人の記憶に刻まれていく、流星のロックマンとプルト・キグナスの死闘である。レコードブレイカーの魔手によって、絡めあげられた命の光はアカシックレコード内と通常宇宙との相互干渉をより根深いものへとしていたのだから。

それゆえに星河スバルとウォーロック、白金ルナが戦っている事は、地球人の一人である星河あかねもぼんやりと理解していたのだった。同じく、響ミソラも、牛島ゴン太も、最小院キザマロも、彩道ミライ、天地マモル、五陽田ヘイジ、暁シドウ、その他の地球に生きる全てが理解したのである。

ロックマンが戦っている――と。

「スバル……？」

「あかねー。頭の中にスバルと青いワンちゃんが浮かんでくるよー？」

あかねは目を見開いた。突然にやってきたスバルとウォーロックの戦いの情景に、胸をかき立てられていたのだから。「何かが起きている……」平和に身を置いていたはずのあかねでさえ、そう感じ取ったのだ。

その時あかねはメトリーと、テレビ中継でニホン侵略風景を見守

っていたのだが、思わず隣に座っていたメトリーを抱き寄せる。メトリーもキョトンとした様子であかねを見上げた。それは不安なのか、希望なのかあかね自身も分からない。ただメトリーはそっとあかねの胸に身を預けた。

「あかねー。何が起こっているの……？」
「わからないわ……。だから少し一緒にいてメトリーちゃん」
「うん……」

そして時を同じくして彩道ミライことソウル・レイダーも戦っていた。彼はニホンを守るために、アストラル・ホープ達の先陣を切ってトレイス達を相手取っている最中だ。

市街での戦闘は苛烈を極め、いたるところでビルの造形がクレーターで不格好に芸術たらしめていた。そんな中、ソウル・レイダー達は市民をかばうように身を呈して、戦闘を続けていたのである。

体に刻んだ傷の数は、助けた命の数で、それが多くなるほどに状況は辛くなる。

ソウル・レイダーは目を糸のように細めて、消耗してしまったその状態を無言で表現していた。その背後には、足を負傷して身動きが取れない親子連れの姿が。

「クッ……なんて数だ……！」

ソウル・レイダーはビジネス街の通信用のウェーブロードを見上げて、苦しそうに呟いた。そこにはおびただしい数のトレイスがうごめいていたのだ。そしてその下の地面には、ぐったりとして動かないアストラル・ホープも大量に寝転がっていた。そういう説明に

ソウル・レイダーの集中力は焦がされていく。
その時、ソウル・レイダーの背後からアストラル・ホープの一人が戦況を伝えてきた。焦りの為か、息継ぐ暇もなしに立て続けに言い放つ。

「隊長！　日本各地で劣勢が強いられています！　月のプラントからの増援でも状況は好転しません！」
「それでも戦うしかない！　市民を守りながら最後まで戦い抜くんだ……！　サテラポリスの誇りに懸けて！！」

ソウル・レイダーはアストラル・ホープ達に檄を飛ばす。だが数による純粋かつ目に見える絶望感から、心の折れたアストラル・ホープ達が思わず零した。小さな一言だが、状況に対する本音をうまく表現してあり、ソウル・レイダーの耳に強くこだました。

「こんな時、流星のロックマンがいてくれたら……」
「地球を救った英雄がいてくれたら……」
「なんで流星のロックマンはいないんだ……」

ソウル・レイダーはその言葉を聞いた時、がっくりと肩を落とした。すぐそばのアスファルトの地面がトレイスの攻撃により、地雷のように爆発する。だが麻薬のような流星の戦士の影によって、その過激な脅しはささやかな挨拶とされた。
ミライにとっては、掛け値なしに流星のロックマンは憧れの戦士である。皮肉屋で無愛想なミライが唯一、言葉に起こしてスバルに自分の底を晒したほどの存在だった。
ミライこそ流星のロックマンに頼りたい。

「そんな戦士はもういないんだ……。流星のロックマンはもういない！！」

ソウル・レイダーは言葉を振り絞った。しかし背後にいた小さな親子連れの女の子が大きな声で叫んだ。

その女の子は見ていた。必死に戦うスバル達、流星の戦士の姿を。レコードブレイカーによる命のタイムリミットが近づくにつれ、その勇姿は鮮明に映った事だろう。

「違うよ、白いお兄ちゃん！　流星のロックマンはちゃんといるよ！　だって、ワタシの中で必死に戦っているんだもん！　今も黒い鳥さんと戦っているよ！！

頑張れー！　ロックマン！」

「ほ、本当だわ……。何かしら、頭の中に景色が流れ込んでくる……。青い流星……いや黄金の流星……？」

女の子の母親も驚いた様子で、口をぽかんと開け放っていた。

ソウル・レイダーは「何を馬鹿な……！」と一瞬思ったが、それは違ったようだ。次の瞬間、アストラル・ホープ達も闘志に燃え、武器を手にとりウェーブロードに飛び上がったのだから。それは紛れもない勝利と希望への意思表示だった。

ソウル・レイダーも落ち着きを取り戻す。すると、確かに頭の中で広がる景色の中に、流星のロックマンの勇姿を、その命に刻みつけたのだった。

「星河……お前なのか……？！」

ソウル・レイダーは様々な思考を巡らすが、それを一笑にふし、剣を抜くとウェーブロードに飛び上がった。

流星のロックマンは帰ってきた。それを信じることにしたのだ。

「流星のロックマンは今、必死に戦っている!!　俺たちもやるぞ!」

安らかな緑の水晶を溶かした中に燃える温かい血液の世界、そこはアカシックコード。

ロックマンはアカシックレコードの空を駆け抜けていく。彼を取り巻く月輪は、黄金にしてさらさらとした美しい粒子を振りまいていく。黒いだけの空に、金色の雲が作られていったのだ。

ロックマンは左腕のバスターを、プルト・キグナスに向かって構えた。

女神の武具と化したルナティックバスターの威力は、グレイバスターの数倍だ。その金色の光弾は、宇宙を照らし敵を貫いていく。その様子は、やわらかい肉壁をもろともせずに、まさにエネルギーそのものといった具合に、傲慢で素直だと言えよう。ロックマンはプルト・キグナスの背後に回り込んでバスターを可能な限り乱射していく。黄金のフラッシュの嵐は休まる事なく明滅していった。

しかしロックマンのその精一杯の行動は、敵の残影をハチの巣にしただけであった。精一杯であってもなくても、相対する敵の力量が凄まじい事をごまかすことは叶わない。

ロックマンのそばを歩くように高速で伝播した黒鳥は、くるりと踵を返し、ロックマンに向かって羽を発射した。黒鳥の姿でオウム返しをする皮肉とジョークを演出したのだ。

真空なのにもかかわらず、空気を裂かんばかりの鋭い迫力。ロックマンの死角から無数の刃が襲っていく。どうやら単純なスピードでは、プルト・キグナスの方に分があるようだ。

すぐにロックマンは背後に感じた殺意をかわそうと身をよじって腕を構えた。肘から手の甲に欠けて硬く堅牢な光の皿が広がる。

『スバル！！　後ろだ』
「ハハハ、遅い遅い！　ブラックフェザー！」
「くっ速い！！　シールド！」

数本の矢がシールドに突き刺さっていく。それでもプルト・キグナスの攻め手は途切れない。

「ハハハ！　まだまだ！　フルプレアフェザー！！」
『チッ、この野郎！　調子に乗りやがって！！』
「弱い！　弱いなあ！　その変身は見かけ倒しなのかい？！　ロックマン！！」

プルト・キグナスの弾幕は留まる所を知らず、ロックマンはただ耐え忍ぶしかなかった。展開していたシールドが悲鳴を上げる。ちりじりになった電磁波の破片が、砂利を噛んだような音を上げていくのだ。よもやこうなったらどうしようもないだろう。

「クッ！　なんて攻撃だ！！」
『おい、シールドが破られるぞスバル！！』
「そんな事言われたって……！」

その時ルナが意を決して声を上げた。ロックマンを取り巻いていた月輪のようなものが高速回転していき、丸い防御空間を作ったのだ。

『私に任せて！　クレッセントバリア！！』
『ウオ……コイツは！』
「スゴイよ委員長！」

高速回転するその黄金のバリアは、プルト・キグナスの羽を一つ残らず叩き落したのである。その結果に「チッ……！」と、プルト・キグナスは舌打ちすると、ワルツのように回転運動を始めた。完膚なきまでにロックマンを乗り越えたいプルト・キグナスは真正面から望むつもりだ。

目には目を歯には歯を、そして高速回転にはそれ以上の高速回転をだ。

プルト・キグナスは漆黒の巨大な竜巻となってロックマンに襲いかかる。辺りに伸びていたウェーブロードも巻き込まれていき、その威力を証明しているかのようだ。

「食らえ！　フルプレアワルツ！！」

『ヘッ！　おもしれえ！　真正面からか！』

『スバル君！　防御は私に任せて』

「分かった！　周波数開放フレクバースト！！」

ロックマンは戦闘周波数を一時的に引き上げると、そのまま竜巻の中に突っ込んでいく。その技の攻略の要領はキリン・ライトニングから心得ていたのだ。

周囲を取り巻く、宇宙や大気、雷や竜巻といった、環境周波数を乗りこなす周波数変換術の応用テクニック『フレクラン』である。それは簡単なものは空の歩行、難しいものは雷の中の通行を可能にする。

フルプレアワルツとライトニングドラゴンハールと同種の、グレースローズタッチの時には完全に攻略できなかった技だが、ロックマンは常に進化している。周波数変換術を身につけた今は、プルト・キグナスの技でさえ無傷で乗り越えられるのだ。

ロックマンは周波数を周りの環境周波数に合わせて竜巻の中を、流れるように突き進んでいく。その姿は、激流の中に身を置きなが

らにして異様なほどに穏やかである。
そして竜巻の中でプルト・キグナスを見つけるとロックマンはバトルカードを入力した。

「バトルカード！　キャノン、メガキャノン、ギガキャノン、テラキャノン、バグキャノン！　ギャラクシーアドバンス『マイクロブラックホールカノン』」
「なっ……！　無傷だと！！」
『食らいやがれ！　鳥ヤロー！』

ロックマンは巨大な漆黒砲台をプルト・キグナスに向かって撃ち放った。いくらレギオンといえども天体兵器には、無傷では済まされないだろう。
一回、二回と細胞を電波へと蒸発させる、気泡の弾けるような高周波の音がけたたましく鳴り響く。プルト・キグナスは小さなブラックホールを羽と腕に貰うと、回転を失いアカシックレコードの中を落ち葉のように落ちていく。

「グアアア！　こんなバカな……！！」
『スバル！　今がチャンスだ！　攻め切れ！！』
『スバル君！！　一気にやっちゃって！！』
「分かった！」

ロックマンは自分を守っていた月輪を手に掴むと、ありったけの戦闘周波数を流し込む。一〇〇万メガヘルツ、五〇〇万メガヘルツ、一〇〇〇万メガヘルツ、そしてフレクバーストを駆使して黄金の環に一五〇〇万メガヘルツもの周波数を流し込んだ。ドクンと脈打つと、周波数が目を潰さんばかりの輝きを放ちだした。
手に持った月輪は圧倒的な周波数に輝き、小さな衛星へと様変わりしたのだ。それはまるで月そのものである。ロックマンはその高

密度の周波数の塊である衛星兵器を、プルト・キグナスに投げつける。

それはロックマンの全身全霊を以って、命の限りを以って。地球の全ての命を懸けて。プルト・キグナスという悪の受け皿に叩きつける。悪意という漆塗りの漆黒加工を施した、堅牢な陶器の器にヒビが入る。プルト・キグナスという存在を砕こうと、衛星が世界を震わして落ちていく。

アカシックレコード内のデータに溢れた環境周波数を喰らい尽くし、膨張する。その成長を踏み、ゆらゆらと落ちていくプルト・キグナスを追っていく。プルト・キグナスは混迷した脳内で必死に対処を考えるが、翼が動かなければ、四肢も言う事も聞かなかった。手も足も出ずにプルト・キグナスはニヤリと笑った。

ロックマンはその様子を見下ろし叫んだ。

「アカシャフォースビッグバン!!　メテオ・オブ・ルナ!!」

「クッ……クソォオオオオ!!」

プルト・キグナスは体の中心から、衛星の質量を受け止めて黒いシルエットをより黒くして、断末魔と共に空間へと溶けて行ったのだった。

次の瞬間、小さな月は盛大に爆発し、黄金の輝きで宇宙を照らしたのである。

ｔｒａｓｈ―４９：キグナスのプライド

体が消滅し消えていく中、衛星の爆発の中、プルト・キグナスは昔の事を思い出していた。

それは王宮の戦士として、まだケフェウスの母であるカシオペア王妃に仕えていた時の事だった。キグナスはまだその時、ＦＭ星の戦士として忠誠深い聡明な人柄であった。

記憶の中でキグナスは、ＦＭ王宮の謁見の間で、静粛に王妃の言葉を待っていた時の事。先の戦闘で上げた戦果による勲章を頂戴しているところだったのだろう。

カシオペアがキグナスに向かって口を開いた。

「キグナス。顔を上げなさい」

「ハッ……！」

「そなたは先のＡＭプラネット掃討作戦の時、多大な戦果を上げてくれましたね。褒めてつかわしましょう」

「ありがたき、お言葉……」

「では、そなたの階級を上げてつかわしましょう」

その時、キグナスは内心期待していたのだ。ＦＭ王妃の右腕であるジェミニ宰相には及ばなくとも、実質ナンバー３である戦闘部隊総隊長の座を貰える事に。

しかし王妃からの言葉は意外なものだった。

「そなたは戦闘部隊の参謀長として任命しましょう。総隊長であるウォーロックの元で任務に励みなさい」

キグナスは耳を疑った。総隊長の座は自分が確定的だと確信していた。それがウォーロックなどと言う、どこの馬の骨とも知れない輩に奪われてしまったのだから。

「お、お言葉ですが。そのウォーロックとは何者なのですか？　なぜ私が総隊長ではないのです？！」

「そなたは黙って、私の言う事を聞いておけばいいのです。ウォーロックが総隊長は決まった事です……聞き分けなさい、キグナス」

「そ、そんな……」

そして後日、キグナスは知る事となる。ウォーロックは貴族の出身ではないただのＦＭ星人である事。そしてそれどころが身分すらはっきりしない、流浪の民であった事。

キグナスのプライドは大いに傷つけられた。名家の出身である貴族のキグナスが、最下級の平民の出身であるウォーロックに付き従わなければならない事には納得できなかったのだ。なぜ王妃がウォーロックにそのような重要な役割を与えたのか、理解したくもなかった。

そして何より、自由奔放で我がままな性格であるウォーロックの事が気に入らなかった。キグナスは心の奥底で、その恨み辛み、情念の炎を燃やしていたのだ。

辛酸を舐めること数年後。ウォーロックがアンドロメダのカギを盗んだのだ。彼がＦＭ星に敵対行動を起こした時に、キグナスは確信したのだ。「やはりあのような下賤な輩に地位を与えたのが間違いだったんだ」

それと同時に、ウォーロックの失墜と共に自分のプライドを持ち

直したりもした。
「ウォーロックよりも僕の方が上だ」
キグナスはそれを胸に秘めて、地球へと裏切り者を抹殺しに向かったのだった。

しかし現実は残酷だった。擬似宇宙と宇宙ステーションにわたる、ウォーロックことロックマンとの二度の戦闘。そのいずれもウォーロックに敵わずに敗北した。
キグナスは悔しくて堪らなかった。
キグナスは自分自身に誇りを持って生きており、日々努力も怠らなかった。ウォーロックが隊長になった後の日々でさえ、彼を越えようとがむしゃらに成果を上げてきた。しかしウォーロックは、キグナス以上の成果を上げてキグナスに付け入る隙を与えなかった。常にウォーロックはキグナスの一枚も二枚も上手を行っていたのだ。
それが悔しくて悔しくて、やがて憎しみに変わった。その対象はロックマンで、星河スバルとウォーロックだった。

『スバル君に絶望を！　ウォーロックに絶望を！！』

そうした私怨を燃やしながら、ロックマンに敗れたキグナスは残留電波となり、宇宙空間を彷徨っていたのだ。
だが、その時に運命の転機が訪れた。シュンランと名乗る女性にキグナスの残留電波が拾われたのだ。

そしてキグナスはある場所に連れていかれ『粒子機械骨格ゼロフレーム』と『時空渡り』を得たのだった。
そう、キグナスはプルト・キグナスとなりレギオンの力を手に入れたのだ。

そして時は流れて、プルト・キグナスは巡り巡って再びロックマンに敗北した。アカシックレコードの空に千切れては舞っていく黒い翼。「このままでは消えてなくなってしまうだろう」と、そんな風にプルト・キグナスはぼんやりと考えた。

そしてフッと笑みを浮かべた。

「結局、スバル君とウォーロックには勝てなかったか……」

プルト・キグナスが全てを諦めようと、全身の力を抜いたその時だった。フレームに刻み込まれた神の声が、電流のように流れたのだ。

《勝て!!　ロックマンに勝て!　お前はワシの作品である以上、負けることは許されない!!》

プルト・キグナスのゼロフレームから響くような音声だ。その支配力のある声にプルト・キグナスは再び拳を握りしめた。ゼロフレームから、正体不明の謎の力がほとばしりプルト・キグナスを奮い立たせる。

「僕はウォーロックに勝って一番になる!!」その思いを胸にディメンションゲートを再び開けたのだ。

「はあ……はあ。やった、倒したぞ。トラッシュの仇を取った……!」

ロックマンはプルト・キグナスの周波数が完全に消えてなくなった事を確認すると、ラーニングレギオンを解いた。だがラーニングレギオンは体への負担が大きいのだろう。ロックマンは電波変換さえ解けてしまい、ウォーロックとスバルとルナの三人に分かれてしまった。

「へっ、あの野郎。完全に消えちまったな。残留電波さえ残ってねえ……！」

「ホントね！　レコードブレイカーとかいう触手も消えてなくなってるわ！」

「良かった……。これで全て終わったんだね。地球の人達は助かったんだ」

スバルはウェーブロードに腰を下ろすとそのまま寝転がって大の字になった。ウォーロックはその様子に腕を組んで笑みを送った。グッと親指を立てて勝利を分かち合う。

「やったな、スバル！！」

「うん、ありがとうロック」

だがその勝利の余韻に浸る間もなく、声がスバル達に語りかけた。

『まだ……終わりじゃないよ！　ロックマン……！！』

その声はディメンションゲートから発せられているようだ。スバル達のすぐそばの空間が歪んで、プルト・キグナスが浮かび上がってくる。

プルト・キグナスはおそらく、自分が完全にデリートされる少し前の時間に戻って、危機をやり過ごしていたのだろう。だがあのダ

メージでは遠い過去には戻れなかったようで、プルト・キグナスの羽はもげて、四肢も半分失ったままだった。
それでもその執念にウォーロックは仰天した。ウォーロックはすぐにビーストスイングを繰り出そうと、プルト・キグナスに襲いかかる。だが片翼のブラックフェザーで牽制されてしまう。
プルト・キグナスだけではない。スバル達も満身創痍なのだ。
ウォーロックはプルト・キグナスを睨みつけた。

「てめえ。いい加減にしつこいぞ……！」
「ハハ。僕も同じ感想だ。だが、お互いもう長くないようだね」

プルト・キグナスはクスリと笑うがスバル達は厳しい表情を崩さない。

「死ぬのはテメエだけだ！」
「それは……どうかな？　これを見てみなよ」

プルト・キグナスは含み笑いを浮かべると、命のデータのようなそれを見せつけた。ただ、それは赤黒く輝いており地球人のものとは違うデータだと言う事が判別できる。
プルト・キグナスはいやらしく笑みを浮かべると言ってのけた。

「これはシュンランから預かり、僕が所有していたトレイス達の命のデータだ……！　分かるだろう？　膨大なデータ量を凝縮している事がさ」

プルト・キグナスはシュンランからある数量のトレイスの所有権利を預かっていた。それを流星抹殺計画の駒としていたのだ。
そして今、プルト・キグナスは最後の手段をさらけ出したのだ。
トレイス達の膨大な戦闘周波数が詰まった命のデータをジョーカ

ーとしている。
　ウォーロックは嫌な予感を覚えたようで頬に冷や汗を這わせていた。

「テメエ、何をするつもりだ……？」
「フフフ、ディメンションゲートを作るのは結構大変でねえ。かなり膨大な周波数を必要とするんだ……」
「質問に答えやがれ！！」
「僕も命の限界が近いからね……一番手っ取り早く、簡単な方法を取る事にしたよ……。地球人を葬れなくなるのは残念だけど、仕方ない」
「ふざけるのも、いい加減にしろよ！」
「安心していい。君たちは地球を救った英雄として地球人に記憶されるだろう……」

　プルト・キグナスはクスリと笑いだし、やがて笑い声は叫び声に変わり発狂した。

「フフフ、ハハハハァーハアハハッハハハハッハ！！　君たちを死人のライブラリ空間へと案内してあげるよ！」
「コイツ……！」

　ウォーロックはプルト・キグナスの意図を掴み、スバルとルナを脇に抱えて逃げ始めた。

「さあ、アカシックレコード最深部の死後の世界に閉じ込めてやるよ！」
「ロック！　アイツ何をするつもりなの？」
「多分、俺達をどっか別の空間に閉じ込めるつもりなんだろうよ！」
「そんな！　それじゃ地球に帰れなくなっちゃうじゃない！」

「だから、逃げるんだよ！」
「そんな事言うけど、ロック。どこに逃げるっていうんだよ。父さんの居場所だって聞いていないのに！！」
「うるせえ！　とにかくアイツから離れるしかねえ！」

ウォーロックはウェーブロードを高速で駆け抜けてプルト・キグナスから距離を取る。しかしウォーロックは背後から、圧倒的な深度で圧倒的な密度の黒い周波数を感じていた。その魔の手のような周波数がジリジリと伸びて、ウォーロック達を闇の世界へと飲み込もうとしているのだ。

その慌てて無様なウォーロックを見届けると、プルト・キグナスは命のデータをオーバーロードさせる。空間に干渉するまでに周波数を爆発的に高めて、最期にして最悪なディメンションゲートを作りだすのだった。その規模は最大規模でウォーロックを射程圏に捉えて離さない。

地球のライブラリ空間が、徐々に歪んでいきワイル粒子に溢れていく。

「ハハハーハハハッハッハッハアーハッハッハ！！　ゼロフレーム最大開放！　ワイル粒子最大散布！　ディメンション・デッド・ゲート開放！」

プルト・キグナスはウォーロックの背中を指差すと高らかに宣言した。

「僕は神に選ばれたレギオンなんだ。ヘラやスコルピオなんかと比べ物にならない上位のレギオンだ！
僕はレギオンズナンバー９！　プルト・キグナス様だ！　アーハッハハハッハッハ！」

そしてプルト・キグナスは自分の周波数を最高密度まで高めてディメンションゲートを開放しようとする。そのきっかけとなる超エネルギーはプルト・キグナスの自爆によって生み出される。

「終わりだロックマン。終わりだウォーロック！　僕は王になれなかったけど、この勝負、僕の勝ちだー！！」

「ワイル・バン！！」その声が響き渡る。プルト・キグナスを中心として圧倒的なエネルギーが伝播していく。彼はトレイス達の命のデータを糧にして、空間を破壊しつくすほどのディメンションゲートを作りだしたのであった。

ｔｒａｓｈ―５０：死への送迎

プルト・キグナスの命を懸けた反撃は凄まじいものであった。ウォーロックの周りの景色は真っ白に弾け飛んでしまい、何が起きているのかもさえ理解できないのである。

徐々にウォーロックの周りの空間が不安定になっていき、ディメンションゲート特有の引きのばされ、混ぜ返される感覚に囚われていく。

ウォーロックはそれでもスバルとルナを守る為に、前後左右が分からなくても走り続けた。

しかし時が経つほどに、走っているのか歩いているのか、はたまた止まっているのかさえも分からなくなってくる。感覚という感覚と、概念という概念が死んでいく。常識などはもうとっくに殺されただろう。

「チクショウ……！　どうなってやがるんだこれは」

「ロック！　僕たちどうなるの？！」

「ち、地球に帰れなくなっちゃうなんてイヤよ！」

そして三人はとうとう意識さえも持ち続けることが困難になって、混沌とした世界へと堕ちて行った。

スバルとウォーロックとルナはプルト・キグナスの手によって、死後の記録世界へと幽閉されてしまったのだ。

そして三日後の二二ＸＸ年六月二六日水曜日。一見の平和を地球は取り戻していた。

トレイスの命のデータを用いたプルト・キグナスの自爆行為によって、ニホンへの侵略行為は寸でのところで阻止されていたのだ。

しかしその代償として、スバル達は地球に帰ってこれなくなってしまっていた。彼らは死後のライブラリ、デッドエリアに幽閉されてしまったのだから。

そして現在スバル達の関係者は、捜索の為にＷＡＸＡのアメロッパ本部に招かれていた。あかねやシドウにミライといった人達が一堂に会している。そしてその表情は、全員が同じものを浮かべていた。

スバル達と連絡が取れなくなって三日目ともなり、あかね達の顔色は思わしくないものへと変わっていたのだ。

計器類が忙しく働く指令室でスバル達の捜索は連日続いていたが、彼らの生体反応は決して見つかる事はなかった。アカシックレコード内に幽閉されているのだから当然だろう。地球の技術を総出で上げたところで、別次元の空間までは探せはしない。ましてや死後の世界など言うに及ばない。スバル達は精神としては生きているが、宇宙の法則や記録上として死んでいる状態なのだ。簡単に見つかる訳がないのだった。

しかし時が経てば経つほどに、ロックマンを取り上げたニュースが山のように報じられていく。それはアカシックレコード内で戦ったロックマンの勇姿に起因しているのだろう。

その姿は地球人にしっかりと刻み込まれていたのだ。皮肉にも本当の意味でロックマンがいなくなってしまった後に、人々はロックマンの勇姿を思い出したらしい。

当然として、ロックマン人気が再熱したところでスバル達が帰っ

てくる訳ではない。あかねは溜め息を吐いてハンターのエアディスプレイを閉じた。うるさいテレビに嫌気がさしたようで、目をきつく閉じ、念じ事でもしているかのように表情が硬くなる。

「スバル達、一体どこに行っちゃったのかしら……」

その時、ゴン太が横から割って入った。ゴン太の座った椅子は軽く沈み、あかねを見上げるような形となる。

「スバルのカーチャンよ。俺さ、あの時よ任務で戦ってたんだけど、ロックマンはどこか知らないところで戦ってたんだよな。アレなんだったんだろう？
でも、心配ないぜ！　きっとスバル達は帰ってくるって！　委員長が一緒なんだからな！　ちゃんとエスコートしないと大変だからな！」

ゴン太の真っすぐな笑みに、あかねは少し心が晴れたようで頬笑みを返した。

「ありがとう、ゴン太君。スバル達はきっと帰るわよね……。うん、そうよ委員長さんや、ロック君、トラちゃんも一緒なんだもの」
「しかし、この事態は良くないですな……。こんなに探しても見つからないとは、この世界にいるのかどうかさえも疑わしい……」

無意識にあかねの希望的観測を挫くのはリフレインだ。彼は室内の大型ディスプレイを見上げながら、物憂げに呟いた。大仰な装置が示す出力は、どれもこれも空振りに終わっていたのだ。無駄に電気ばかりを消費しているという訳である。それを見つめる世界一の科学者の背中は寂しいものがあった。
そんな重苦しい空気の中、シドウも流石にうまい棒に手を出せな

いようだ。皆が囲む机でじっとして考え事をしているらしい。

「しかし、ハイドや五里……レギオンシンジケート『ディーヴァ』やれやれキナ臭くなってきましたね。アイツらはきっとレギオンと繋がっているはずだ」

シドウの言葉にミライは無言で頷いた。ミライもその事については後悔していたようだ。虚ろな雰囲気を漂わせながら口元をわずかに強張らせていたのである。

「アイツらをうまく捕まえていたら、レギオンとの関連も割り出せたでしょうし。何より星河の捜索の手がかりになっていた。アストラル・ホープが束になっても逃げられるとは情けない限りです」

「まったくだ。レギオンと絡んでいそうなあの二人は放っておけなかった。しかし、こっちはＷＲの対応で手いっぱいだってのにな……頭が痛いな」

「我々も何とかしたいところだが、手詰まりだ。ミソラ君と一緒に入院しているツカサ君によると敵は時空を操るらしい……。非常識な……。

うーむ、困ったな」

「まったくです」

リフレインに同調してシドウは頭を抱えるようにして、事態を憂慮し始める。そして気が滅入り、ふとキミドリの方に目をやった。なんとなしに見つめた先で彼女はエアディスプレイを熱心に見つめていたのだった。

「何をやってるんだキミドリ？」

キミドリはエアディスプレイを覗きながら答えた。

「何だか、うちのクラスのみんなが『ロックマンを助けよう』っていうレゾン……まあ、スローガンを掲げて活動しているようなんですよ」

「お前のクラスってテンキュウ高校のか？」

「はい。何でもクラスのみんなが町の人に呼び掛けて情報を募っているようで」

「へえ、あのテンキュウ高校がね。嬉しい事だな」

シドウはテンキュウ高校の校風を踏まえて意外そうに感心していた。それに対し、キミドリはニッコリとして頷いてみせる。

キミドリが通う高校であるテンキュウ高校は、ニホンにおける優秀な高等教育機関である。その活動は普通の高校の枠に収まらずに、ＷＡＸＡのおひざ元として若く優秀な人材を輩出している場所でもある。特に宇宙開発分野に対する活動は抜きんでており、卒業生の多くは宇宙飛行士やＷＡＸＡの科学者を志すコースを歩むのである。

だが、電波社会が発展していくにつれて、ＷＡＸＡの研究用モニターの場としての側面が表れ始めている嫌いもあった。特にプロジェクトＴＣのモニター実験は極秘内容としており、ＷＡＸＡとテンキュウ高校の黒い側面であった。

良く言えばエリート集団で、悪く言えば研究モルモットである。キミドリもその中の一人だった。彼女も色々な事情を持っており、その中でスバルと共に戦っているのだった。

そんな良くも悪くもエリート集団であるテンキュウ高校の学生のイメージと、その甲斐甲斐しい活動が符合せずシドウは意外だったのだ。

だがシドウはそれさえも、徒労に終わるだろうと見越していた。

口から出るのは、暗い印象の言葉ばかりであった。テレビのニュースとは間逆である。

「しかし、高校生が呼び掛けても仕方がないかもな。世界一のＷＡＸＡが探しても見つからないんだから」

しかしリフレインはシドウに同調せずに、キミドリに話を振った。地球を救った英雄に対して、ありとあらゆる手段を用いない事。それは侮辱と同義と感じたのだろう。

「いや、キミドリクンの話は面白いかもしれない。やれる事はやるべきだ。一般市民の助力を乞うのも無駄じゃないだろう。キミドリ君は確か高校の新聞部の部長だったね。色々と呼び掛けてみると良い。こちらもマスコミに呼び掛けてみるとしよう。なに大丈夫さ。今のマスコミはロックマンフィーバーだからな。喜んで食いつくだろう」

リフレインは顔に似合わずに悪戯っぽく笑う。

そんなリフレインから彼なりの本気を感じたキミドリは、席を立って拳を握ってありありとやる気を示したのだった。

「了解！　うちの新聞部のコネクションでやってやりますよ！」

「よし、ミライ！　俺達もルナルナ団としてコダマ小学校のみんなに呼び掛けてみようぜ！」

「ふっ、良いだろう！」

ゴン太がキミドリに続いて立ち上がると、ミライを無理やり巻き込んでスバルを探そうとし始める。各々がありとあらゆる繋がりを用いてスバルを探そうと目標（レゾン）を一つにしていくのだった。

あかねはその様子にメテオＧの事件を重ねていた。あの時のレゾ

ンは『スバルを地球に』であった。まさにあの時を呼び起こされ、あかねは胸が詰まりそうだった。

「え？　アタシですか？！」

ＷＡＸＡでの方針決定から数十分後の事。

ミソラが病院の一室で大きな声を上げている光景が繰り広げられていた。そこには見舞いに訪れていたメトリーと夜太郎がベッドの横で座っているのだった。

今、夜太郎はＷＡＸＡから入った連絡をミソラに告げたところである。

「はい、そうです。ミソラちゃんがテレビに出て、みなさんに言葉を伝えてほしいとの事です。

も、もちろんミソラちゃんはケガをしている身ですので、無理は強いません」

「でもミソラが出るとみんなやる気出すと思うなー！」

「こら、メトリー！」

夜太郎がメトリーの頭を小突く。その和やかな光景に、ミソラはクスリと笑みを浮かべた。

だがいつまでも笑っている訳には行かず、ミソラは表情を一転させ、凛とした顔つきで夜太郎を見据えた。

「たしかスバル君がいなくなってもう三日目になるんですよね」

「そうですね。委員長さんを助けに行ったきり帰ってきていません」

「そうですね。そうだけど、だけど、私は信じています。スバル君

は無事だって、勝ったんだって、ルナちゃんを助けたんだって！」

ミソラは、あの不思議だが信じられる、ロックマンの勇姿を思い返して一息置いた。そしてニッコリとして、夜太郎とメトリーにはっきり言ってみせた。

「だって私は見たんだもの。ロックマンが必死に戦っている姿を！　それにみんなが戦う勇気を貰ったんだもの！」

「私も見てたよー！　ワンちゃんとスバルがカッコ良かったー！！　ね、夜太郎？」

「そうですね私達はしっかり記憶に刻んでいます。……と言う事はミソラちゃんよろしいのですね？」

ミソラはおぼつかない足取りに似合わない、決意に燃える瞳で言い切った。するりとベッドのシーツが滑り落ちると、ミソラは立ち上がったのだ。

「今度はスバル君を私達が助ける番です！　メッセージどころか、百曲メドレーでも何でもこいですよ！」

「スバル君、お腹すいたわ」
「さっきマテリアライズしたチョコが最後だよ」
「おい、スバル腹減ったぞ！」
「うるさいなー。さっきのチョコが最後だって言ってるだろう？！」
「スバル君！　私もお腹すいちゃいました！」
「やめてよ、モードまで！　僕もお腹ぺこぺこなんだからさ！」

スバルは思わず声を荒げてしまった。これはスバルらしくない態度だったが、無理もないだろう。彼らがアカシックレコード内の、どことも分からない空間に閉じ込められて三日にもなるのだから。

スバルたち四人は、不気味な十字架が立つ、荒野のような場所で過ごしていたのだ。岩肌が冷たく硬く、安らかに眠る事も出来ない。わずかにも助かる見込みはなく、絶望感だけが頻繁に心を去来していく。

空は茶色く染まって、雲は刃物のように鋭利に漂っている。まるで色あせて忘れ去られてしまったような世界に、輝かしい未来など期待できない。その墓場のような場所に心は荒み、体は衰弱していく。

しかしウォーロックは無駄に元気を装い、スバルは疲れが増す。

「スバル！　やっぱり、出口を探して歩き回った方がいいと思うぜ？」
「私もウォーロックに賛成するわ！」

ルナとウォーロックは、この墓場のような場所をうろついて、体力を消耗しようと提案してきたのだ。だがスバルは遭難時のセオリーを守って、そこからじっと動かない。

ウォーロックとルナは苛立ちを隠せない。このままでは飢え死にが待っているのだ。だが、スバルはもう動く気力さえなかった。目の前に捨てて掃くほどある十字架の下に、骨まで埋める覚悟もでき始めていたのだ。

「だめだよ。こういう時は動かずにじっとしてるのがセオリーだ」

「ふざけるなスバル、テメエ！　俺は腹が減って減って狂いそうなんだよ！　おふくろの料理が食いてえんだ！」

「そうよ！　もう三日も頭洗ってないから気持ち悪くったらないわ！」

「うるさいぞ！　黙ってジッとしとくのが一番なんだ！　テレビでやってたんだから間違いないんだ！」

「バカヤロー！　何もせずに死んじまったら、それこそ死にきれねーだろ！　足掻けるだけ足掻くんだよ、バカ！」

「ロックこそバカだ！　大声出してエネルギーを消耗するなよ！　大バカ！」

「うっせー！　この引きこもりヤローが！」

「な、何だとー！！」

「コラコラ、二人ともケンカは止めて下さい。とりあえず何とかして脱出する作戦を考えましょう！」

モードは二人をなだめると、おもむろにエアディスプレイを展開させた。作戦会議でも開くつもりらしい。椅子も机もないがモードだけは乗り気であった。

だがウォーロックは馬鹿馬鹿しくなってその場に寝転がって、日曜日のお父さんに徹する。ルナはへたり込んで、ハンターからロッ

クマン様コレクションを観賞し始めた。スバルはウォーロックに引きこもりと言われたショックで、ブツブツと独り事を言い始めたのだ。

モードはいよいよ四人の気持ちがバラバラになっていると感じてしまった。精神的に限界に近いのだろう。モードは三人に何とか生きる希望を見出してもらおうと、言葉の限り頑張ってみる。

「諦めちゃ終わりですよ！」

「ったくよ。本当は今頃、うまい飯食ってるころなのによ……」

「ああ、愛しのロックマン様……」

「どうせ僕は引きこもりですよ……」

「クッ……！　これは、いけませんね！」

モードは思考錯誤して、地面に転がる大きめの石を手に取る。そして容赦せずウォーロックに思いっきり投げつけた。

金属質な体のウォーロックは打楽器の才能がある。ガンッという心地いい音が鳴り響きウォーロックは頭を抱えながら飛び上がったのだ。

「イテエな！　何しやがる！！」

「みんなが協力してここから出るんです！　寝てたらダメです！」

「だがよ、もうどうしようもないだろう……。キグナスじゃあるまいし、空間に穴なんて開けられねーよ」

「イヤ、できます！」

「ハァ？　無理だろう？」

その時、モードはまん丸の手の平を突き出して、力強く言い切った。

「周波数変換術を使いましょう！！」

モードの提案でスバルは再びロックマンに電波変換して、さらにラーニングレギオンを重ねがけてロックマン・ルナハートに変身していた。しかし体力が底突いた状態での二重変身は、肉体への鞭打ちでしかない。ロックマンは手を膝にやって、すでに肩で息をしている。

『準備は良いですか？』

「はあ……はあ……変身はしたけどもう体力が……」

『気合です！』

『気合なら得意だぜ！　ウォオオオオオ！！』

『うるさいわよウォーロック。でも、とりあえずシンクロ率って言うのを維持したらいいのよね！』

『とりあえず、今はシンクロ率５０％ですね。頑張ってくださいウォーロックさん！』

『頑張っちゃいるけど、流石に限界だぜ！』

「どうでもいいけど、これからどうやって脱出するつもりなのさ？」

『キグナスさんと同じくディメンションゲートを作るんです！！』

ロックマンは開いた口が塞がらなかった。そんな夢みたいな事できる訳がないという素直な感覚だ。

「何言ってるんだよ、モード！　そんなＳＦ映画みたいな事できる訳が……」

『いや、面白いかもしれねえ……』

「って、ロックまで何言ってるんだよ？」

『いや、結構マジで言ってるぜ。キグナスの野郎はおそらく、周波

数変換術を何重にも応用させて作ったエネルギーで時空干渉を行っていたんだろう。
だから弱ったアイツは、完全なディメンションゲートが作れず、トレイスの命を数万個も使って巨大ディメンションゲートを作った……って所だろう？』
『わあ！　さすがＦＭ星の誇り高き戦士ですね！』
『で？　スバルよお前はどれくらい周波数変換術が出来るんだ？
俺の見立てでは、空間に作用するパワーと、空間を裂く鋭い周波数密度、時間軸にピッタリ相互干渉する単位時間ごとの周波数の関連性がいると思う』
「何言ってるんだよロック？　意味分かんないよ」
『うるせえ！　細けえ事はいいから、何ができて、何ができないか言いやがれ！』
「えっと、周波数増大術のフレクバースト、隠ぺい術フレクリア、消去術フレクレス、適合術フレクランくらいしかレベッカさんに習ってないよ……」
『なるほどな。増やして、隠して、消して、合わせる……ってことが出来るのか』
「こんなんじゃ、とても次元に穴を開けるなんて無理だよ。それにこの技って体力と集中力を使うから苦手だし……」
『うるせえ！　やれるだけやるぞ！！』

そうしてロックマンによるセルフディメンションゲート計画が始まったのだった。

『ホラ！　そこで周波数を引きあげろ！　何とかバーストだよ！』
「こう？　フレクバースト！」

ロックマンはウォーロック指導の元、何とかディメンションゲートを作ろうと奮起していた。身を粉にして、ありとあらゆる周波数の使い方を実践する。

そしてロックマンの戦闘周波数が跳ね上がった所で、空間が悲鳴を上げ始めたのだ。もしかすると空間に穴が空く予兆かもしれない。かのフェニックス・リボンは無意識のうちに、空間干渉をしているのだから存外ハードルは低いのかもしれないだろう。キリン・ライトニングでさえ小さなブラックホールを周波数だけで作るのだから、不可能ではないのだろう。

ウォーロックは期待しつつ言い被せた。

『よし！　そこで何とか何とかだ！』

「うりゃ！　フレク何とか！」

しかしロックマンの戦闘周波数は急にしぼみ始めて、空間は静けさを取り戻した。荒野を吹きすさぶ乾いた風が余計にロックマンを惨めにさせた。

ウォーロックは実体化してロックマンの頭を殴ってしまう。

『バカ！　何やってんだ！』

「痛いなー。だって、何をどう組み合わせたって無理なモノは無理だよ！」

『キグナスに出来て俺達に出来ないわけはない！』

「そんな事言われたって。もう変身を維持するのも難しいのに……」

『あっバカ！　集中力を切らすな！！』

すると言葉を追うようにロックマンの変身は解けてしまったのだった。もう本当にスバルは動けなくなってしまった。

ウォーロックとルナも文句を言う元気はなくなってしまった。

正真正銘打つ手はなくなってしまったのである。

ｔｒａｓｈ：：それはずっと決まってたことで

無茶な試みを繰り返したあげく、スバルは衰弱しきってしまっていた。そんな薄れていく意識の中考えていたのだ。

「ロックが帰ってきたけど、このまま終わりか……」「トラッシュと父さん、ロック……みんなでもう一度過ごしたかったな……」

スバルもルナも、もう限界で、唇を乾かす程度に呼吸をしているだけだった。流石にモードとウォーロックは、二人の危機を感じて呼び掛ける。

「おい、しっかりしろ！　寝るんじゃねえ！」

「うるさいな……。もう疲れたんだよ。でしょ、委員長？」

「うん……。もう、眠い……わ」

「ルナちゃん！　わあ、マズイですよウォーロックさん！！」

「チ、チクショー！！」

ウォーロックはどうする事も出来ずに、空を仰ぎ叫ぶしかなかった。するとその時、こだました訳でもないのに空から声が降り注いできたのである。それは聞き覚えのある女の子の声であった。

《皆さん、聞いてください。今、私の大切な人が助けを求めてどこか遠い世界を彷徨っています》

「なんだ……この声は？」

「聞いた事のある声ですね」

《みなさん！　どうか、ロックマンを見つけるのに協力してください！　どんな小さな情報でも構いません。ロックマンを探してくだ

さい！　地球のみんなだけがロックマンを救えるんです！≫

この声に反応するかのように、スバルが小さく口を開いた。心なしか目に生気が戻っているようでもある。

「ミソラちゃんだ……」

≪皆さんレゾンを一つに！　ロックマンを地球に！！≫

ミソラはその時、全世界同時中継の番組で人々に呼び掛けていたのだ。アメロッパを始めアッフリクに至るまでの世界各地に向けて、ロックマンを捜索するように願い出ていたのである。

それに反応するかのように世界中の人々の声が流れ込んでくる。

ここはアカシックレコード、奇跡が現実になる場所だ。

≪ロックマンを地球に！≫

≪英雄を地球に！≫

≪流星のロックマンを助けたい！≫

≪みんなレゾンを一つに！　心を一つに！≫

その様子にウォーロックは鼻っ面を抑えて強がってみせた。ウォーロックが見上げた暗黒の空は、なぜか希望に輝いて見えたことだろう。

「ヘッ！　泣かせるじゃねえか……」

「スゴイですね。世界の声が届いてくるなんて……でも一体どうして？」

「理由はどうでもいいさ！　でも、これで俺は絶対に地球に帰りたくなったぜ！　だろう、スバル？」

ウォーロックはスバルに活力を分け与えようと元気良く言ってや

る。
　しかしその時、ウォーロックはスバルの方を見ると目を見開いて、口を開け放ってしまう。鋭い爪を震わせて、スバルの方を指差すと、原因であるハンターを指摘した。

「スバルお前、そのハンターどうしたんだ？」
「何って……？」

　スバルは危なっかしい手取りでハンターを取り出す。すると小さく声をもらした。ハンターが輝いていたのだ。不思議に思い、エアディスプレイを展開させるとルナから貰った包みのアイコンが光っているようだ。
　スバルは力尽きそうになりながらもその光に魅了された。

「なんだ……これ」

　呆然とするスバルにまた空から声が優しく落ちてきた。今度は女の子のものではなく、聞きなれた相棒のものだった。

《スバルくん……ハンターの中から、光っているそれを取り出してください……。きっと勇気が貰えますから》
「え……？　ト、トラッシュなの」
《さあ、早く……スバルくん》

　スバルは驚きを隠せないが、トラッシュの声のままに従う。

「う、うん……分かったよ」

　スバルはハンターから、ルナからのプレゼントをマテリアライズした。すると地面に、厚手の表紙の本が一冊だけ落ちる。そのプレ

ゼントとはアルバムだったのだ。みんなとの思い出を刻んでいこうと、ルナが考えた贈り物だったのだろう。

ルナはその純白のアルバムを見ると少しだけ頬を染めた。息も絶え絶えなのに強がりは忘れずに、どこまでも委員長であろうと頑張っている。しかし徐々に感情がこみあげてきたのだった。

「そうよ……アルバム。あの時、トラッシュとウォーロックが揃うって聞いてから……。だから……思い出をたくさん……だから……だから……」

「委員長……」

「だって、こんなことになるなんて……悲しいじゃない……悲しいわよ、悪い？　うぅ……」

ルナは頑張りきれずに涙した。トラッシュはもう死んでしまったと知り、そのアルバムには辛い意味合いしかないと感じたからだ。輝くアルバムに照らされたルナの涙は、大粒の宝石を思わせた。

しかしトラッシュの声は優しくて、ルナの涙をすくい取るかのように語りかけたのだった。

《ありがとうございます。大丈夫ですよ、委員長さんの優しさはムダなんかじゃありませんよ。

スバルくんページをめくってください》

「う、うん……」

一枚ページをめくるとスバルは息を呑んだ。そこにはまっさらで何もない純白ではなく、色とりどりであったからだ。そこにはロックマンを探しだそうという人々が飾り、心動かすシーンが写真として一面を飾っていたのだ。まさに、一つの目的に向かって、人それぞれの個性が花開いた、どんな芸術にも負けない色鮮やかなアルバムとなっていたのだ。

ゴン太がクラスの皆に呼び掛けているシーン。テレビのスタジオで涙ながらに訴えかけるミソラの一枚。祖国に協力を要請するジャックとクインティア。捜索部隊を率いコスモウェーブを駆け抜けていくシドウにミライ。黒も白もなく協力し合うアメロッパ人。雪の平原を足跡で一杯にしたシャーロの人達。

そのアルバムには優しさで溢れていたのだ。

スバルはその眩しくて、輝かしいアルバムを見ると、どこにいるのかも分からないトラッシュに語りかけた。瞳は輝きを増し、希望と言う光が宿り始めていた。スバルは力を振り絞って体を起こし、トラッシュを探した。

「すごい……すごいよ！　本当に勇気が出てきたよトラッシュ！　ねえ、トラッシュどこにいるの？　隠れてないで出てきてよ」

《フフ……良かったですねスバルくん。そのアルバムは地球とアナタを繋ぎ、そして私を呼び起こした素晴らしいモノです。委員長さんの優しさが起こした奇跡なんですよ》

「ト、トラッシュったら……」

ルナもスバルに肩を借りる形で起き上がり、思わず照れてしまう。そして勇気の出たスバルは、もう一度この世界から出ようと、頑張れる気がしたのだ。もちろんトラッシュと一緒にだ。

「トラッシュ！　帰ろうよ地球に！！　だから、早く出ておいで、僕の親友を紹介するからさ！　ウォーロックって言うんだよ！　ホラ、この青くてデカくて偉そうなのがそうだよ！　だから早く出てきてよ」

すっかりトラッシュが生きていると思っているスバルは、嬉々として言葉をまくし立てた。

しかしスバルは気付いていない。ここはアカシックレコードの、死者のデータを扱うライブラリ空間であることに。トラッシュが生き返った訳ではないことに気が付いていない。トラッシュが生きていたんだ、という希望あふれる虚構のみに目を向けていた。

そんなスバルに、トラッシュは胸に突き刺さる罪悪感を感じさせられた。それが一時の沈黙を生み出す。

「トラッシュ……？　どうしたのさ？　黙ってないで、早く出てきてよ。家に帰ってまた、一緒に暮らそうよ。ロックが帰ってきたから次は父さんだ！　家族全員揃うんだよ！　でしょトラッシュ？」

何も言わないトラッシュの事情に、ウォーロックは薄々と感づいたようで、スバルの頭を何も言わずに殴った。優しさを鉄拳制裁でごまかしたが、ウォーロックの予想はおそらく正しい。

「やめろ、スバル。俺達だけで帰るぜ」

「痛いなロック！　何するんだよ。もうちょっと待ってよ、トラッシュを置いていけるわけないだろ？」

「バカ野郎！　アイツの気持ちを考えろ！　アイツがどんな気持ちでお前を見ているのか考えろ！　キグナスがなんて言っていたのか考えろ！　なんでまたお前の元に現れたのか考えろ！

考えろ！　考えれば分かる事だろうが！！　バカな俺でも分かるんだ！　お前が分からないわけがないだろ！」

ハッとしたルナは、ウォーロックのその言葉に、手で口を覆って声を殺した。ここは死後の世界である。それが意味していることは一つしかない。

しかしスバルは笑みを浮かべ、涙を押し殺しているルナの肩をゆすり、トラッシュの存在を訴える。しかしルナは固まったように動かない。ウォーロックの瞳が辛く突き刺さる。スバルはそれでも笑

って、トラッシュの帰りを待った。笑って、笑って、それが約束だから笑い続けなければならない。

「い、委員長までどうしたのさ？　そんな顔するなよ！」

「スバル、いい加減にしろ！」

「ハ……ハハハ！　委員長もロックもなんでそんな顔するんだよ！　なんでトラッシュを仲間外れにしたがるんだよ……！」

スバルは笑顔で二人に言うが、口元が引きつり、頬が引くつく。ウォーロックはもうスバルを見ていられない。

「スバル！！」

「嘘だ！！　嘘だ！！　アレは夢だったんだ！！　だって、トラッシュの声が聞こえるんだよ？　聞こえるんだ……すぐ近くに！　それって……それって生きてるってことだろう？！」

ウォーロックは乱暴にスバルの肩を掴む。

「お前はアイツの頑張りを夢で終わらすのか？！　命を懸けてお前を守ったんだろう？　それを本当に夢だったって言っちまうのか？！　スバル！！」

「ト、トラッシュは……トラッシュは……」

スバルはそれだけ言うと、ウォーロックにすがるように目で訴えた。しかしウォーロックの表情は変わらず、いつまでも憐れみのものでしかなかった。

諦めたように、スバルは大きく息と吸って、嬉しさや期待を飲み込んで肩を落とす。そして思い返したように、目を強く細め唇を噛みしめた。一転して、ぽつりぽつりと調子の落ちた口調で言葉を絞り出したのだった。

「……そうだね。……ゴメンよ。ホントは最初から分かってたんだ。目の前で見ていたんだもの……僕が一番分かっているんだ」

スバルの小さな背中は余計にか弱く映った事だろう。トラッシュはようやく重い口を開いた。

《スミマセン……。私はスバルくんと一緒には帰れません。ですが、その代わりにみんなを大切な人達の元へ帰すことは……できます》

「トラッシュ……ゴメンね」

《いえ、スバルくん。私は死して初めて、生まれてきた事の意味を知る事が出来ました。そして自分の物語だけの意味を見つけました……。

私は後悔などしていません。みなさんとの思い出だけで私はもう十分ですからね》

おそらく死ぬ事でトラッシュは、アカシックレコードのライブラリ領域に取りこまれたのだろう。それゆえにトラッシュは、自分だけの物語の力を見つける事ができたのだ。

ウォーロックはトラッシュに語りかけた。

「トラッシュって言ったか？　本当にここは死後の世界ってヤツなのか？」

《ええ、そうです。命をなくした生命は、そのデータをアカシックレコードのライブラリ、デッドエリアに刻み込まれます……。

残念ですが私はもう完全に取り込まれてしまい、もう地球に帰る事は出来ないのです》

「そうなのか、悪かったな。つまらない事を聞いて……」

《気にしないでください。それにアナタ達はまだ完全に取り込まれていません。ご安心を、私だけの物語の力で元の世界に送り届ける

ことが出来ますから》

死んでしまった生命はそのデータをアカシックレコードのライブラリ、デッドエリアに刻まれる。そしてそこで徐々に生きる事への希望を削がれていき、完全に心が折れた時にアカシックレコードの一部として吸収されるのだ。ついさっきまでのスバルがそうである。あのまま心を挫かれてしまっていたら、スバルも名実ともに死亡したと言う事になっていた。

その事からトラッシュも生きようと必死に足掻いたであろう背景が想像できる。だが、その結果は無情なものとなして、スバルとを分つ絶対の壁となっていた。

それでもトラッシュは、スバル達を自分のようにさせない為に助けに来たのだ。死ぬ事でようやく見つけた、自分だけの物語の力を用いる事で。

《さあ、スバルくん、委員長さん。立ち上がってください……》

言われるがままスバルは、ルナを支えるようにして二人で立ち上がる。だがスバルは空を見上げ、気丈にも笑顔を浮かべていたのだ。それは約束だから破る訳にはいかないのだろう。

「ありがとう、トラッシュ。キミは笑顔が良いって言ってたもんね」

《フフ。良くおわかりで。では、早速、元の世界に繋がる道を繋ぎましょうか……》

トラッシュの言葉に反応したようで、輝くアルバムが宙に浮かび徐々に光の粒子を集めていく。それはプルト・キグナスのディメンションゲートに似通っていたが、発生する周波数の温かさはまったく別のものであった。

ルナは徐々に出来あがる世界と世界を繋ぐ扉を見ると涙をため始

めた。扉が大きくなるにつれて、その向こうから人々の声が聞こえてくるのである。「ロックマン！　帰って来て」「ロックマン！　帰ってこい！」それが嬉しくもあるが、トラッシュとの別れを示唆されているようで辛くもある。

「スバル君……こんなのってあんまりだわ……」

「仕方ないよ……。心残りがないと言えば嘘になるけどね」

スバルは薄くルナに笑ってみせた。泣いてしまいたいが、その感情を素直に出せば取り返しがつかなくなると、スバルは感じていたのだ。

そして、もう出会う事も、共に歩んでいく事もないだろう、たった一人の親友であるスバルに、トラッシュは名残惜しそうに語りかけた。

《スバルくん、私は最後の最後で、なぜ私が生まれてきたのか分かりましたよ……それも全てはスバルくんのおかげです。ありがとうございます》

「……僕はね理由なんてなくてもトラッシュといるだけで幸せだった。僕こそ感謝しているよ。君がいなかったら、委員長やミソラちゃんを守る事も、ロックと出会う事もなかったのかもしれないんだから」

スバルはプルト・キグナスの事件の事も、全て踏まえて思い直していた。そう考えると、これらの出来事は全て、決まっていた事ではないのかと思ったのだ。運命はもしかしたらあるのかもしれない。

様々な過去の出来事が重なり合う事で、スバルという今があるのだから。

それは、

それは星屑のロックマンが生まれ、
トラッシュが命を賭してバトンを繋ぎ、
流星のロックマンが舞い戻り、
ワタルが戦う事を決意し、
ＦＭ星人が侵略を始め、
ウォーロックと出会い、
ムーと戦い、
メテオＧから地球を救い、
ウォーロックを失い、
そしてトラッシュと巡り合う。

その巡る巡る連鎖こそが宇宙を作っているかのようだったのだから。

《私は思うのです。私はスバルくんとウォーロックさんを巡り合わすために生まれたのではないのかと……。私はスバルくんの世界を繋ぐキズナではないのかと……》

「そうかもね。僕もトラッシュと出会った事が偶然じゃない気がするんだ。運命じゃないけど、偶然じゃない……。なんていうのかな、僕たちの友情って」

《フフ、何でしょうね。でも、これだけは言えます。私にとっての友情は絶対的なものです》

「絶対的な友情……か」

《……では、そろそろですね》

「そうだね……」

アルバムの思い出が繋ぐ扉が、やがて完成に近づく。トラッシュの見つけた自分だけの物語の力は、スバルと世界を繋ぐキズナの道だ。それは輝かしい友情の掛け橋だ。

《アクセス……アカシックレコードレベル１３。キズナゲート……》

トラッシュが作りだした、元の世界へと通じる扉が開く。その先には見慣れた星河家の玄関扉が映っていた。トラッシュも出来る事なら帰りたいだろうが、宇宙の法則が許さない。

トラッシュは思いの丈を押し殺して、スバルに言ってやる。

《名残惜しいですが、お別れの時間です。さあ、行きなさい、スバルくん》

スバルはコクリと頷くと、振り返らずに扉の方に足早に歩んでいく。

「ありがとう、トラッシュ。さようなら、トラッシュ」

《スバルくんの物語は始まったばかりです。どうか、末永くお元気で……。

ウォーロックさん、委員長さん、スバルくんの事をよろしく頼みますね》

「へヘン！　俺様に任せとけってんだ！」

「委員長である私が、ちゃんと導くわ！」

《フフ、本当にありがとうございます……》

トラッシュは安心したように、全ての役目を終えたように笑った。

スバルは元の世界へと続く道を、涙を堪えながら歩いていく。泣き顔は見せられない。スバルは振り返らずに、ただ突き進む。

「っううう……くっ。トラッシュ……うう……」

しかしその様子は、見ている側には悪影響だ。そんな訳で後ろからウォーロックとルナが追いかけて、スバルに言ってやる。

「おい、スバル、無理すんじゃねー！」
「スバル君！　そんなに急ぐ事ないわ！」
「いいよ、気づかわなくても。これはトラッシュとした約束だから！」

ウォーロックはやれやれと言いたげに、小首を傾げる。すると勢いに任せて必殺のビーストソフトナックルを繰り出す。

「ぐわ！　手が滑っちまった！」
「イタッ！」

ウォーロックは頑固なスバルの後ろから、頭を小突いたのだ。ウォーロックなりの下手くそな気遣いである。
ムスッとしてスバルは頭を撫でつつ、後ろを振り向いて文句を言おうとする。だが狙ったようにウォーロックはサッと道を開けて、後ろの光景を見せてやるのだった。

「何するんだ……」

それ以上、文句は出なかった。
スバルが見たのは、トラッシュがニッコリと笑って、アカシックレコードの世界から手を振っているものだったのだから。白い光の中で白い彼は解けてしまいそうだが、あれは間違いなくトラッシュである。
その時、スバルは今までの出来事を、溢れだすように一気に思い出してしまう。喉の奥が熱くなり、視界がぼやける。親友が笑顔で見送ってくれている。いつだってトラッシュが一緒に戦ってくれた。スバルの今を、一緒に作ってくれた。たったの二ヶ月だが、スバルにとってはそれほどの二ヶ月だった。

スバルは堪らず涙を零してしまうが、それでも強気に、慣れないガッツポーズを作った。そうやって心配をかけないように最期は取り繕う。

トラッシュも似合わないガッツポーズを作って、スバルの気持ちに応えている。

お互いに最後は笑顔という約束だ。

「お元気で、スバルくん！」

「うん！　行ってくるよトラッシュ！」

ｔｒａｓｈ：それはずっと決まってたことで（後書き）

星屑のロックマン　おしまい

ｉｎ：ロックマンのドキドキＣＭ大作戦！（前書き）

＞ｉ１９８４４―１５６７＜

どうも、この章は前編と後編を繋ぐものです。平和な日常を描いております。全二話です。では、始まり。

in：ロックマンのドキドキCM大作戦！

地球が一時の平穏を取り戻したころ。
アカシックレコードによる記録操作から、ロックマンは世界中の人々に英雄として再認識されたのであった。

ロックマンが世界を救ってからというもの、テレビの出演依頼が彼に殺到して、コダマタウンは未曾有の事態に陥っていた。その片田舎には、話題性に飢えたマスメディアの影がはびこっていたのだった。
物陰という物陰に対して、いつもスバルは何かの気配を感じている。
スバルは、プルト・キグナスから世界を救って以降、心休まる時はなかったのである。
スバルがひとたび道を歩けば「おはようございます、英雄ロックマンさん！　今日のご気分は？」「うちのテレビで、あの時の戦いを語ってくれませんか？」「ぜひ新しく始まるドラマに出て下さい！」などと言ってくる。マイク片手に彼らも必死なもので、言葉巧みに迫ってくる。女性は笑顔を浮かべマイクを差し出し、男性はフラッシュの嵐を浴びせてくるのであった。
そのたびにスバルは、乗り気なウォーロックを必死に抑えつつ丁重に断っていた。
それでもロックマンフィーバーの収まる気配は一向になく、スバルを現在なお困らせている。スバルは「あはは、ゴメンナサイ。今、色々と忙しいので……」と言いながら、作り笑顔を浮かべる作業を

強いられるばかりだった。

そんな面倒な事が続いた三日後の、土曜日の事であった。二次トーナメントの試合日が、すぐそこまで迫った日の事である。

家のリビングではあかねが一人、深刻な面持ちで家計簿とにらめっこをしていた。その実、夜太郎とメトリーを迎え入れてからずっと、家計は火の車だったらしい。

「まずいわね……今月も赤字だわ」

今日は六月の二九日。家計簿を確認したところあかねは、二人分も増えた出費に悩まされていたようだ。稼ぎ頭の大吾がいない以上、家計は苦しいばかりなのだ。

それに大吾が生存していると信じているあかねは、ＷＡＸＡからの慰謝料さえ断っていた。なので家計は、女手一人で家族五人分も支えている状態だった。すでにパートでどうにかなる問題ではなくなっているのだ。

特に最近帰ってきたウォーロックは良く食べ、良く壊すので家計に大ダメージである。昨日も窓ガラスを割ったところだ。

そんな自由奔放なウォーロックは現在、テレビの前でさきほどから爆笑しているばかり。あかねがふと横を見やると、そんな彼が目に付いたのだった。尻をポリポリ掻いて、だらしがない。

そしてスバルはそのそばで、すっかり疲れた様子らしくソファでぐったりうなだれていた。マスコミの対応で彼もてんやわんやなのだろう。

「ガハハハハ！　スバル、このテレビおもしれーぞ！」

「うるさいな……。僕はもうテレビが嫌いだよ。テレビの人の対応ですっかり疲れてるんだから。

まったく、もうすぐ二次トーナメントが始まるっていうのに。ホ

ント、最悪だよ……」

あかねはその様子を見ると、溜め息がついつい出てしまう。スバルは元気がなく、ウォーロックはひたすらうるさい。スバルに至っては、トラッシュを失ったショックを流石に引きずっているらしく、いまだ落ち込んだままだった。それに対しウォーロックは、気を使ってなのか、ただ鈍感なだけなのか、スバルに構わずにいつも通り好き勝手にやっているだけだった。

そこであかねは二人に提案してみることにした。トラッシュと家計の事も含めて、スバルには気分転換を、ウォーロックには家計の手助けを、と思いついたのだ。

「ねえ、二人とも。ちょっといいかしら？」

「何だーおふくろ？」

「……何か用事？」

そしてあかねはニッコリと、二人に願い出る。手をパンと叩いて陽気なものへと、軽い印象操作を行う。

「実はね、ミソラちゃんにどうしても！　って頼まれてた事があるのよねー……」

その時、ウォーロックは面白そうなイベントの匂いをかぎ取ってニヤリとした。スバルは面倒くさそうな用事を押しつけられると確信したようだ。そそくさと自室に逃げようとする。だが、ウォーロックに首根っこを掴まれた。

その様子を見届けあかねは言ってのけた。悪戯っぽい笑みを浮かべているあたり、スバルの予想は的中だ。

「フフ、やる気はあるみたいね。じゃ、決まり！　二人にはミソラ

ちゃんと一緒にテレビコマーシャルの出演をしてもらうわ！」
「うおお、面白そうだぜ！　いっちょ暴れてやるか！！」
「ええー？　何で僕が？！　目立つのはイヤだよ！！」
「ダメよスバル。だってミソラちゃん病み上がりだから、ぜひロックマンに協力してほしいって言ってたんだもの」
「おふくろの言うとおりだぜ！　ミソラのヤツを放っておくわけにはいかねえ。友達は大事にしないとな！！」
「よ、よく言うよ……ロック」

そうして休日返上のロックマンとミソラの仕事が始まった。嫌がるスバルを無理やり引っ張って、ウォーロックは星河家の玄関を飛び出したのだった。

それからほどなくして、電波変換をしたロックマンはオクダマスタジオという、撮影場所に赴いていた。
しかし辿りついたは良いが、ロックマンは所在なさげにしている。どうしていいのか分からずに、舞台裏からスタジオの様子をおずおずとうかがっているばかり。
非日常的なまでにカラフルで、それだけに毒々しいリアルウェーブの装飾。限度なく照明器具が眩しくて、まるで監視するかのように設置されたカメラ群。そんな場所に、ロックマンは気後れしてしまったのだ。それに肝心のミソラが見当たらず、ロックマンは慣れない場所の中、心細くなっていくのであった。
ステージこそ、ミソラのイメージを表したピンクと黄色基調の、明るく賑やかな印象だが、ロックマンの心はブルーになっていく。
そしてステージの上では、ＣＭ撮影の段取りを決めているのだろう、中年のプロデューサーがみられた。成り金風のその彼は、スタ

ッフと何やら話しこんでいるらしい。業界用語が飛び交っていて、テレビ局の雰囲気作りに一役買っている。ロックマンにとって、それが恐ろしく高尚なものに見えて、自分は場違いだとさえ感じたはずだ。

ロックマンは不安で一杯になり、ウォーロックに相談をする。

「ねえ、ロック……来てみたはいいけど。これから僕はどうしたらいいんだろう？　ミソラちゃんもいないし」

『とりあえず。あのステージで話しているオッサン連中に聞いてみたらいいんじゃねえか？』

「だ、ダメだよ！　なんかお仕事の話をしている最中のようだし……邪魔しちゃ悪いよ」

『バカお前！　こんな隅っこで引っ込んでる場合じゃねえだろ』

「はあ、やっぱり断っとくんだったよ。僕なんか場違いも良いとこさ。地味な僕がテレビ出演なんて……」

『コラ！　ウジウジすんな！！』

「だってさ……。あっ、あそこに良いものが」

しょんぼりとロックマンはうつむいていると、薄暗い中、ちょうど身を隠すものを見つけたのである。

どうしようもなくなったロックマンはとうとう、舞台裏に転がっていた段ボールに身を隠そうと決めたのだった。穴があったら入りたい状況だが、段ボール箱しかなかったのだから仕方がない。

「ロック、僕は撮影が終わるまで段ボールの中でやり過ごすことにするよ」

『段ボールってスバル、お前！　何しにテレビ局まで来たんだよ！』

「仕方ないだろう！　だって僕はもうこの空気に耐えられないんだ！！」

ロックマンが体を丸めて、段ボールの中に入ろうと頑張っている様子が繰り広げられる。彼は世界を、地球人全てを守った英雄だ。それは間違いないが、まさに丸まっている小さなロックマンも間違いない本人である。

するとその体たらく極まった様子に、呆れた声が。ため息混じりで、パンパンな段ボールに浴びせられた。ツカツカと乾いた足音に、ソプラノ調の少女の声が合わさっている。ヒラヒラドレスの、お姫様の衣装が良く似合う。ミソラだ。

「な、何やってるのかな……スバル君？」

「ポロロン……久しぶりに会うけど。ウォーロック、アナタって相変わらずのバカね」

ミソラの声に、段ボールは大きく跳ね上がり歓喜を表す。

「あ、ミソラちゃん！　もう、どこに行ってたんだよ！　不安だったんだぞ！」

『おい、ミソラにハープ！　コイツをどうにかしてくれ、段ボールから出られなくなっちまった！』

意外と段ボールが丈夫で、一度入ったら出られないらしく、段ボールがその場をゴロゴロ転がるだけだ。

ミソラは呆れるしかできない。せっかく一張羅に身を包み、準備万端で臨んでも、肝心のロックマンがこれでは台無しだ。

「はあ、先が思いやられるね……」

「ええ、まったくね」

「はあ、スバル君は仕方ないなー。……ん、よいしょ」

仕方なくミソラは段ボールを抱えながら、ステージに向かってい

ったのだった。

「スミマセーン！　響ミソラ、ロックマン入りましたー！」

「困るよーロックマン君ー！　アンダースタンー？　そんな事じゃあ、ノットグッドねー？

シースーでビーサー抜き、上等！　コレ大事よ？　オーライ？」

「お、おーらい……」

『おい、スバル、このオッサン何を言ってるんだ？　ニホン語じゃねえぞ。コレ』

「わ、分からない。シーズー犬がビーフジャーキー大好きって事くらいしか……」

「コラ……二人とも、反省しないと」

ロックマンはその時、プロディーサーの偉いおじさんに怒られていたのだ。

しかしヒソヒソと二人は、偉いおじさんの使用言語に疑問を覚えているようだ。なので、ミソラがロックマンの脇を突っついて注意しているところであった。

すると隣から「はあ……」という溜め息が聞こえてくる。大人の男の声だ。

それはそのはずで、その緊張感のない態度を、良く思わない他の出演者がいたのである。キツイ女の口調で、棘を刺してきた。

「もう小言はいいじゃないのプロデューサー！　はあ、まったく！　地球の英雄だが何だが知らないけど、お子様に芸能界のルールなんてわかりゃしないんだから！」

予想を上回るロックマンのふがいなさに、今回のCMの共演者である『コンバット越後（えちご）』が呆れた様子であったのだ。苛立ちを隠さずに、ヒステリックに頭をかきむしっている。

彼は背が高く、筋肉質、彫りの深い顔で、さらに口紅とアイシャドーでメイクした、麗容なブロンドウェーブヘアーのオカマである。そしてロックマンを刺すような目付きで見下ろし、凄んでくるのである。

ウォーロックは、その奇抜なモンスター風のコンバット越後をウイルスと認識した事だろう。

「いいことロックマン？　調子に乗ってたら、潰すわよ？！」

「ひぃ！　ゴ、ゴメンナサイ！」

「ス、スミマセン。越後さん！　スバルくんも悪気があって段ボールに入っていた訳じゃないんです！」

スバルとミソラは平謝りだ。何を隠そう、コンバット越後は芸能界の、重鎮にして大御所であるのだから。

そして運の悪い事に、人気抜群の若手のミソラを、コンバット越後は目の敵にしていた。まったくもって彼は性質の悪い全身タイツのオカマなのである。

しかし自由奔放で、オレ様気質のウォーロックにそれは関係のない事だ。ロックマンから分離して、コンバット越後を指差した。

「おいスバル！　この化け物は何なんだ？！　ま、まさか電波ウイルスなのか……？」

「わわ！　ロック君！　失礼なこと言っちゃダメだよ！！」

ミソラが慌ててウォーロックを引っ込ませるが、ロックマンはもう冷静さを欠いていた。コンバット越後という化け物をデリートし

ようとする。

「うん、分かったよロック！　バトルカード……」
「コラ！　スバル君もパニくらない！」

しかしコンバット越後は中々のやり手だった。だてに芸能界を生き残ってはいない。ロックマンがバトルカードを入力する前に、一瞬にして背後に回り込んでロックマンに言ってのけたのだ。
驚いた事に、ロックマンは左腕を取り上げられて身動きが取れなかった。

「オイタはそこまでよ。さあ、撮影を始めましょうか」
「は、速い……！　コンバット越後、恐るべし……！」
「マ、マジか！　あの、電波ウイルス……やりやがる！！」

in：ロックマンのドキドキCM大作戦2！

そしてロックマン、ミソラ、コンバット越後による新商品『ミソラミンSS』のCM撮影が始まった。

撮影は、ファンタジーなお菓子の国をイメージしたセットの中で行われる。そこでお姫様ルックのミソラが、森の熊さんに扮したウォーロックと仲良く朝のお散歩をするというものである。

カメラが回り始め、照明がミソラとウォーロックを捉えて本番が始まった。

「はーい！　クマさん。なかよくお出かけしましょうね」

ミソラはとびっきりの笑顔でウォーロックに手を差し伸ばす。しかしウォーロックは首を振って、ビーストスイングを炸裂させたのであった。

「イヤだ！　俺はFM星の誇り高き戦士だ！　女と手なんか繋がねえ！」

セットは綺麗に裂かれて、リアルウェーブの森は伐採されてしまう。プロデューサーは堪らず声を上げた。ディレクターにメガホンを投げさせて、ウォーロックを叱責した。

「ちょっと、ユー！　何やってるの?！　セット壊しちゃメーダーじゃないの！」

「俺は俺のやりたいようにやる！　最近、暴れたりなくてな！」
「ユー！　ＣＭをなんだとシンキングしてるの？」
「知らねえ！　食えるのか、それ？」
「オー！　私のゴッド！」

頭を抱える偉いおじさんだった。
好き勝手に暴れる素人のウォーロックであった。始末が悪いことに、彼自身に悪気がある訳ではなく、ただただ暴れたかっただけらしい。調子の良い自慢の爪に、フッと息を吹きかけ上機嫌だった。
コンバット越後は、そんなロックマン達に苛立ちながらも次に進めるように要求した。いちいち失敗に構っていたら、日が暮れても終わらないと考えたのだろう。

「プロデューサー、ここは後回しにして！　次のシーンを始めましょう」

次のシーンは、森の変質者であるコンバット越後に、ミソラが襲われてしまうというシーンから始まる。すると、その場面を目撃していたスバルこと、お菓子の国の王子様が森の熊さんと電波変換をする。そして姫様を救い出すという単純明快なものである。俗に言うボーイミーツガールだ。
さらに変身の際、これ見よがしにミソラミンＳＳをスバルに飲みほさせ「この飲料にはスーパーヒーロー効果があります」という印象操作をおこなう。そこから生まれる人々の錯覚を利用する、非常に巧妙なＣＭであった。

撮影が進んでいくこと数分。
コンバット越後がミソラに飛びかかり、いよいよロックマンの出番だ。ＣＭ撮影も一番の盛り上がりを見せる。
プロとしてのミソラと、コンバット越後の演技が光る。まるで本

物の出来事のように森の中を必死に逃げるミソラと、鼻息を荒立てるオカマの化け物。森という密室が人々に暗示させるのは、臨場感に迫った恐怖と、興味本位から来る情欲だった。

ミソラは完璧のタイミングで、涙を作りだして助けを求める。

「きゃー変質者！　森の中なのに、オカマがいるわ！　助けてロックマン！」

「ウフフ！　ロックマンは来ないわよ！　だって彼は今、彼はベッドでぐっすりよ！　朝のこの時間は眠気がすごいんだからね！」

「うそよ！　お布団でぐっすりなんてある訳が！」

「いいえ、そうよ！　仮に起きられたとしても、低血圧のロックマンは頭がボーっとして戦えません！」

徐々にお互いの台詞がかみ合い、撮影もスムーズに進行していく。ウォーロックが度々足を引っ張るが、ロックマンが意外にも名演技を見せてそこをカバーしていく。

ミソラと共に行った初めてのテレビ共演は、成功に収まったのだった。

家計も助かり、ミソラと共に過ごす事で少し気持ちが晴れたスバルなのであった。

そして翌日。

星河家では、ウォーロックが家に帰ってきた事を祝ったパーティーが行われていた。その食卓を囲むテーブルには、アカシックレコードから持ち帰ったアルバムも開かれていた。そこにはトラッシュの笑顔が映し出されている。

そんな皆が食卓を囲む楽しい空気の中、例のＣＭが試験的に流れ出す。ルナは早速、それに気が付いたようだ。

「あ、見て見て！　ミソラちゃんとスバル君が出てるヤツよ」

ＣＭは、ちょうど変質者が森から現れたシーンであった。ミソラは森の中を走って逃げて、やがて追い詰められる。

《いいえ、そうよ！　仮に起きられたとしても、低血圧のロックマンは頭がボーっとして戦えません！》
《そ、そんな事はないぞ！》
《な、何奴だぁ？！》
《わあっ、王子様だわ！！》
《僕はプリンセス・オブ・スイーツ！　そう！　人呼んでロックマンなのさ！！》
《そして隣にいる俺様は、ウォー……いや違った。森のクマさんだぜ！》
《ば、馬鹿な起きれたというのか？　しかしモーニングタイムじゃ頭も回らないだろう？！　戦えまい！》
《たしかに頭は回らないよ。でも、僕にはこれがある！》
《あ、なにかしら！　王子様の持っているあの素敵な新商品は！！
きっとお手頃価格だよね！》
《うわー！　スゲエぜ！　アレは新商品の『ミソラミンＳＳ』だぜー。

あれにはミソラミンＤＸの十倍のフレッシュ感とエネルギーが含まれてるんだぜー！　だから朝の通勤ラッシュや、時間のない時の朝食の代わりにもなるんだぜー！》
《な、なんだと。これはマズイ！　まさに言うなれば！　飲める朝ごはん！　おのれーロックマン！　それでたったの２００ゼニーとは反則だぞ！》

《よーし覚悟しろ、変質者め。僕がミソラミンＳＳの力で戦うぞ！　準備はいいかい、クマさん？》
《おうよ！　スバ……じゃなくて王子様！！》
《行くぞ！　ゴクゴク……プハァ！　電波変換！　お菓子の国の王子様！　オン・エア》
《ああ！　あの目の覚めるような青いお姿は！　あれほどのカッコいい姿は他にいないわ！》
《ぐぬぬ、ロ、ロックマンだと？！　ミソラミンＳＳには、それほどの効果があると言うのか！！》
《そうだ！　頭スッキリ！　ノド越し爽やか！　仕事もはかどるぞ！　喰らえー！　ロックバスター！！》
《ぐわー！　恐るべし！　ロックマン……いや、ミソラミンＳＳ！！》
《ありがとう！　ロックマン！》
《どういたしまして！》
《……というわけで、ミソラミンＳＳ！　大人気発売中だぜ！！》

というような運びで、最後にウォーロックが、手のひら大のビンを大きく画面に見せつける。楽しげな音楽と共に、ＣＭは幕が閉じたのだった。

当の本人であるウォーロックは、自信満々の様子で胸を張っていた。得意になって、スバル達に言ってくるのだ。だが、ルナ始め、彼を見つめる視線はどこか生温かいものがあった。

「どうだ？　俺様の名演技は？」
「いや、下手くそだと思うよ」
「テメッ！　スバルお前！」

明らかに馬鹿にした態度で、肩をすくめるスバルだった。その冷やかな目線に、ウォーロックが耐えられるわけがなく、すぐ掴みか

かる。短気なもので、唾と一緒に食べカスが、盛大にスバルの顔面に吹っかけられる。

だが、祝いの席の喧嘩は野暮なものなので、あかねが仲裁したのだった。ウォーロックの頭をペシリと叩く。

「コラ、ロック君。喧嘩はやめなさい。みんな、アナタが帰ってきたお祝いをしているんだからね？」

確かに、大きな声を出すウォーロックをルナ達はじっと見つめていた。ウォーロックは決まり悪そうに、背中を丸めてテーブルのチキン丸焼きにがっついた。

「わ、分かってるよ！　おふくろの飯をマズくする訳にはいかねえもんな！」

「ハハ……本当に調子がいいヤツだ」

スバルは呆れたままだが、ハンカチで拭いつつ少し笑顔を浮かべていた。

ウォーロックの料理を頬張る姿は、行儀が悪過ぎて、トラッシュとは似ても似つかわない。だが、それでも不思議なもので、どこか同じ匂いを感じられたのだった。

その視線が気になったのか、ウォーロックはふいにスバルの方を向いて言う。食べ方が汚いので、色々と汚い。

「なんか言ったか、スバル？」

「いや、なにも？　ていうかさ、顔ふきなよ」

「お、やっと笑ったな！　さあ、お前も食え！」

「なんだよ、いきなり。食べながら喋るなよ」

スバルは憎まれ口を叩きながらも、ウォーロック、ルナ、ゴン太、

キザマロ、ミソラの輪に入っていくのだった。
それを見ていたあかねも、もう心配事はないようだった。

「フフ、よかったわね、スバル。素敵なお友達に囲まれて。きっとトラちゃんも天国で喜んでるはずよ」
「……うん、そうだね！」

祝い事も終わり、友人たちも帰った数時間後の事。
スバルとウォーロックは、コダマタウンの展望台に訪れていた。
すっかり日も暮れて、あたりも暗くなっている。その代わり、星が運河のように、空を横切るように広がっていた。
そんな中、スバルはふと、様々な星を駆けて戦った今までを思い出したのだ。それらの星には、神秘的な光景が広がり、多種多様な生命が生きていた。レギオンもその一つだ。スバルは今までの出会いを通じて、宇宙の広さを再認識したのである。すると、ウォーロックと出会えた奇跡が尊くて、これからも大切していこうと思ったはず。星を見上げると、自然とそう思えたのだ。
空を仰ぎながらスバルは、隣のウォーロックに語るのだった。

「ねえ、ロック」
「チッ用事って言うから何かと思えば。天体観測デートなら、ミソラとか委員長とか誘えよな」
「でも、たまにはいいだろう？　それにしても君と僕はここで出会ったんだよね……懐かしいなあ」
「ああん、そうだったか？　あいにく、そんなのいちいち覚えてねーよ」
「僕はよく覚えているよ。ここで僕は、君と二回も出会えたんだよ。

そしてトラッシュはここで死んだ。だから忘れるわけがないのさ」
「湿っぽいのはやめろよ。そんなことを聞かされるくらいなら、俺は帰ってクソして寝る」

面倒くさそうにウォーロックは頭をポリポリとかいている。
そんな彼にスバルはふっと笑う。ビジライザーを掛けると静かに勇んで、強い言葉を作った。その表情は穏やかだが燃えている、過去を振り払い、しっかりと明日を見据えている。

「いや、それはないよ。もちろん、トラッシュの事を忘れるつもりはない。……だけど、過去に縛られるつもりはないよ。
ミソラちゃんと一緒に仕事をしてみて、色々教えてもらったんだ。人に勇気を与える事の大切さ。そしてロックマンを信じてくれている人達の多さ。だから僕は立ちどまらない」
「そうか？　なら、いいけどよ」
「うん、だから僕いろいろ考えたんだ。これから待ちうけているだろう、色々な試練をね……。
ＷＷＲに、もう少しで始まる二次トーナメント。
それにレギオン……ハイド達……」

スバルは一人では戦い抜くことはできないだろうと思っていた。いつも支えられ、勇気を貰ってきたのだから。
そしてウォーロックは、スバル達の事情はまだよく理解していない。なのでスバルは、ウォーロックにレギオンやＷＷＲとの戦いに協力して欲しかったのだ。
この展望台で、お互い最初からまた一歩ずつ歩んでいきたかったのだ。その意思を改めて示しておきたかったのだろう。

スバルはウォーロックを見つめて、力強く言い切った。はっきりと言葉にして、正直に気持ちを伝えた。

「だからロック！　これからも僕と一緒に戦ってほしい！」

その時ウォーロックは、スバルの成長を頼もしく思ったことだろう。少し離れていただけなのに、いつの間にかスバルは戦う勇気を見つけていたのだから。

ウォーロックは大きな手で、スバルの髪の毛をくしゃくしゃにして押さえ込んだ。

「言うようになったじゃねえか！　俺は言われなくても、そのつもりだぜ！」

「そっか！　これからもよろしくね、ロック！」

「ああ！　俺達の邪魔をするヤツは全員ブッ倒す！」

「ハハ！　じゃあ、行こう。電波変換！　星河スバル、オン・エア！！」

流星は、空を照らし、空を切り、青い緒を引いていく。

スバルとウォーロックの、宇宙を懸けた戦いの最終部が始まりを告げたのだ。

ｉｎ：ロックマンのドキドキＣＭ大作戦２！（後書き）

＞ｉ１９８４３―１５６７＜

いかがでしたか？　やっと、この小説のお話の半分が終わりました。
さて！　次の話からは最終部分の始まりです。流星のロックマンが帰ってきたから、ここからが本番です。ウォーロックを仲間に迎えて、より原作に近い雰囲気になると思います。
後はいつもの流星を書くだけです。
…で、ここでお願いがあります。
これからはぜひとも、読んでみた感想や意見、評価をこの作品にください。例えば、ここが良かった。ここはこうしたほうが良かった。面白かった、そうじゃなかった。とにかく何でもいいです！それらを取り入れて良い作品をを作りたいですから。今までの作風は変化球だったけど、やっぱり直球勝負したいので。
では、長々と書きましたがこのへんで。

……あ、ちなみにこういう場合、少し充電期間を置くのが常かもしれませんが、以降もいつも通りの更新予定です。

ｉｇｎｉｔ―００：レギオンに秘められた謎（前書き）

後編　スバルとウォーロックの物語

ｉｇｎｉｔ―００：レギオンに秘められた謎

スバルとウォーロックの休日から、時は少しさかのぼり六月二七日。場所はＷＡＸＡ本部。

午前三時を回った深夜。

リフレインは自分の研究室で一人、打ち震えていた。デスクトップのモニターが冷たく灯って、彼のより青ざめた印象の顔をいぶりだしていた。カタカタとキーボードを叩く指は、少しおぼつかないものである。

手元のコーヒーが冷めて久しく、魅了とも唖然ともとれる彼の胸中がうかがえた。

事の経緯は、流星抹殺計画に及ぶ。あの時のニホン侵略を反省して、レギオンのデータを再解析していた時の事だった。

彼はゼロＰＧＭをさらに改良して、電波人間部隊に供給しようと試みていた。ウォーロックに施したプロトタイプが上々の結果を残し、汎用化に踏み込んだのである。

しかしその行為がいけなかった。リフレインはレギオンについて、ある恐ろしい秘密を発見してしまったのだ。

キグナス、スコルピオといったレギオンの戦闘データと、ヘラの残留電波を解析した結果、それは見つかった。モニターには、解析データが表示され『ＺＥＲＯ－ｆｒａｍｅ』と不気味に浮かんでいた。

恐ろしい技術の塊に息を呑む。

「これは……。ゼロフレームだと？　まるでセツナのエクスフレームと……」

ゼロフレーム。ヘラの残留電波からサルベージされたものである。それは電波変換における、究極の戦闘特化、シンクロ率特化、膨大なパワーを生み出す機構だ。その構想はエクスフレームと酷似している。

しかしながら、ワイル粒子化されたナノマシン電磁波骨格のゼロフレームと、機械を電波対応させた骨格のエクスフレームとでは厳密には多少の差異もある。しかし、それでも、それはミライのエクスフレームと性質が似通っており、不気味な印象だった。

さらに恐ろしい事があり、それはゼロフレームの性能だ。

「この出力、安定性、反応性、エクスフレームを全て凌駕している。しかし、このロボットフレーム形式がなぜ、レギオンに……？」

現状のエクスフレームでさえ、銀河連邦の技術を凌ぐ、地球の技術を越えたオーバーテクノロジーである。しかしゼロフレームは、それを遥かに上回る性能だった。

リフレインは額に手を押しやって、考えを巡らせた。「なぜ。セツナと似たタイプのフレーム形式をレギオンが採用しているのか？」

リフレインが考えを巡らせた結果、数年前のある出来事に行きついた。それは、セツナがミライとなるきっかけの事件である。

リフレインはあの時、未来の遺志を継ぎ、セツナを救おうとあらゆる手段を探していた。だが、その時のセツナの体は、５０％以上が欠損した状態で、頭部部分だけがかろうじで無事なだけだった。セツナが助かる見込みはほとんどなかったのだ。

しかしリフレインは諦められなかった。悪魔と呼ばれようとも、狂人と呼ばれようとも、助けなくてはならなかった。そして、とうとう禁断の所業を犯す。

リフレインは最終手段として、ある凍結されていた研究施設に向かったのだ。そこはヨイリー始めリフレインの一族が代々管理しており、隔離していた場所。

それは電波社会の風下に立たされていた施設だったが、秘密裏に培われていた技術は圧倒的なものであった。

そう、そこに禁断の種が眠っていたのだ。地球の最高の知能が生み出したもの――エクスフレームである。その技術レベルは、地球の数百年先を行っていた。しかし倫理に反するとされ、その研究は凍結されていたのだ。

リフレインはそこで、エクスフレームの基礎部分となる設計図を見つけ利用したのである。

そうしてセツナは、ミライとして生まれ変わった。

だが、リフレインはその施設で、ある気になるものを同時に発見していたのだ。

それこそが『ゼロプロジェクト』なるものだった。当時のリフレインはそれをも利用しようと考えていたのだが、その内容はとても理解できるものではなく、基礎構想があろうとも実現不可能であった。

そして今回発見されたゼロフレーム。そこにはいくつかの、ゼロプロジェクトとの類似点が確認されたのである。

しかし容易には信じられない。これらを結びつけるのは早計だ。

そもそもリフレインの予想が正しいとすれば、レギオンは地球のどこかで作られているという事になる。だが、地球の表面全てをウェーブロードが張り巡らされて管理されている現在、それはあり得ない。

それでもリフレインの頬を、冷や汗が伝っていく。寒気を覚えた

のか、彼は部屋の窓を全てしめ切って、密室の中で一人呆然と佇んでいた。

リフレインは自分の犯した所業と、見えない悪魔の影を感じて、恐ろしいものを感じていた。「何かが起きている……何が起きている……」彼はきっと、そう感じたのだろう。

「レギオンが地球で生まれている……？　いや、まさか。過去二百年、そんなデータどこにも確認されていない……。それにＦＭ星間に伝わるらしい伝承とも矛盾する……。

いや、いかん。今はＷＷＲの方を優先だ……チームゼータ、オメガの二次トーナメントのサポートをしなくてはな」

これから始まる戦いに頭を切り替えるが、最後にふとモニターに目を落とす。リフレインは胸騒ぎを覚えながら、畏怖の念を込めて小さく呟いたのだった。

「レギオン……お前達は一体……」

レギオンの意志なのか、それとも他の強大な力なのか、それでも宇宙は今も収縮を続けている。

はびこる怪しげな影。疑問を感じつつもスバル達は戦うしかない。

ｉｇｎｉｔ―０１：呪われた星の子

そして月日は流れ七月三日。チームオメガ、チームゼータは順調に試合を勝ち上がっていた。その中、今回チームゼータは、二次トーナメント第三試合に臨んでいた。

場所はノイズウェーブ第八階層ルストウェーブ。そこはノイズウェーブの中でもかなり深い階層だ。繋がる先の宇宙は太陽系はおろか、天の川銀河すら離脱するほどである。

そこは錆びついた赤褐色のノイズが飛び回り、まるで地獄のような光景が広がる世界である。建造物は錆びつき、そこの住民の心も、錆びついたような荒んだ悪性を見せている。そんなルストウェーブのウラスクエアバトルコロシアムで、チームゼータの戦いが始まる。

いつもの司会のお姉さんの実況ぶりも二次トーナメントだけあって拍車がかかっていた。彼女はスバル達のブロックの担当で、すっかりおなじみの明るい音色であった。裏の世界ではファンクラブが出来るほどのお姉さんっぷりである。殺伐とした世界に咲く一輪の花を思わせる。

《さあ、いよいよ、始まります！　ＷＷＲの戦士と野望の切符を懸けた最後の関門！！　それを叶える二次トーナメント！！

実況司会は、おなじみのこのブロック担当のワタクシ！　司会のお姉さんが務めます！》

お姉さんの通る声に、裏世界のゴロツキ共も白熱した様子だ。汚

い言葉を、スカッド・エース達に浴びせかける。高貴なるクイーン・ヴァルゴには堪ったものではない歓迎である。しかし、サーフ・サーファーはマイペースを一貫して陽気に、笑顔は忘れないようだ。汚くても何のその、彼の鼓膜を通せば声援に早変わりだった。

個性的な面子のチームゼータは、群衆と雑音の中、戦いの時を待っている。

《さてさて今回の試合の組み合わせは、地球人の実力派！　チームゼータ！！　それに対するは、ＡＭ星人という種族から成るチームＡＭ！！

うーん、これは結果が分かりませんね！》

スカッドエース達に相対する、今回の敵はＡＭ星人のチームであった。鋼鉄の柵で囲まれた円形のリングの中、それらしき四体の電波体が見受けられる。特にその中でも、鯨の化け物と、悪魔の化け物の周波数は、それは凄まじいものがあった。強さというよりも、その異質さが恐ろしい。それは粘着質な、怨念の周波数である。

一体は通称【ティアマット】鯨座の突然変異の、ミラ・イノセント。一体は通称【メデューサ】ペルセウス座の突然変異の、アルゴル・ミラー。彼らは特に強大な負の周波数に覆われているのだ。

ＦＭ星人であるヴァルゴは、すぐに彼らの異質さに気が付いたようだ。静かに佇むクイーン・ヴァルゴの隣に現れて、金切り声の笑いを交えつつ注意を促した。ふざけているようで彼女なりに、緊張している。まくし立てるように喋り、自分のペースを維持しようと必死なのだ。

『アイツらＡＭ星人のようだけど。あの周波数の質、ミューテートね。キャハハ　これは手こずるかもー！』

「ミューテート、それは何かしら？」

『あら、ティアは知らないんだったわね！　ミューテートっていう

のは平たく言えば出来損ないって事よ』

そこにスカッド・エースは疑問を呈する。出来損ないに苦戦は符合しないからだ。まともに生まれる事ができずに、まともに戦う事は適わない。

ヴァルゴは、ツインテールを弄びながらスカッド・エースに口を尖らせる。

「いや出来損ないなら、楽勝だろう？」

『ウーン、そうね！　でも違う！　おバカさんなシドウね！　でもイケメンだから教えちゃう！

私たち電波生命体は周波数ってものを持ってるでしょ？　これって何か分かる？』

「波の単位振動数だろう？」

『そう！　だけどちょっと違う！　これはね、私達が生まれる時に授かった星座のエネルギーと関連しているのよ。

星座のエネルギーってのはアレよ？　宇宙から伝わってくる、星の光量とか公転、自転周期とかが作る電磁波の複合要素ね。それが私達の電波の体に干渉するってワケ！

で、私の場合、おとめ座の星のエネルギーを周波数の特徴としているわ！』

「意味が分からん！」

『バカね！　じゃあどうやって、私達が周波数で、遠くの仲間や敵を識別してると思ってんのよ?!　周波数の色調がそれぞれ違うからでしょーよ！』

「……ああ、なるほどね。で、ミューテートはどう違うんだよ？」

『ヤツらの周波数には、一定の決まりがないのよ。常にぐにゃぐにゃ周波数のタイプが変わっている！　生まれた時ヤツらは、安定しない特別な星のエネルギーを授かったのよ。

ヤツらの場合はミラ星とアルゴル星ね。本来なら鯨座とペルセウ

ス座からの、まともなエネルギーを授かるはずだったのよ。
でもヤツらは違う。だから、心と体が安定せずに異質な存在として忌み嫌われる。突然変異の出来損ないは、一族からは除け者にされている可哀そうなヤツらなのよ！』
「へえ、なるほどね」
『ホントに分かってる？　周波数がぐにゃぐにゃで定まらないって事はね！　アイツら、特別な能力を持ってるってことよ？！　アタシ達ができる周波数変換術をベーシックタイプだとしたら、ヤツらは一定の型にはまらないイリーガルなタイプ！　常軌を逸した能力を使ってくるわよ！　かなり厄介よ！！　ホントに分かってる？！』
「ははは相変わらず、良く喋ってうるさいヤツだ！」
『シードーウー！！』

おそらく理解していないスカッドエースの頭を、ヴァルゴは杖で突っつくが取り合ってもらえない。するとお姉さんが話を進めてしまう。観客の罵倒の具合から、そろそろ会場が温まったと判断したのだろう。

《なるほど、勉強になりました！　では、そろそろ戦ってもらいましょうかね！　二次トーナメンは、試合ごとでルールは変わりますが、今回は簡単ルールです！！
一対一のタイマン勝負！　勝ち抜き形式で全滅したら終わりルールです！　チームの底力が試されますね！！》
「確かに簡単だ。よし、先鋒は俺がいこう！」

スカッド・エースは指をパキポキと鳴らしながら、やる気満々である。残りのチーム員を下がらせてリングの中央に歩んでいく。
対するチームＡＭから出てくるのは、ミラ・イノセントである。彼は奇妙な容姿の電波体である。ひび割れた肌に、虚ろな目がギョロギョロと頭部でフジツボのようにうごめいている。頭部が大きく

その割に脚が細く短く、手も短い。キメラのように様々な、生物を混ぜたような外見だった。

ゴクリと唾を飲み、スカッド・エースは、腰から一丁のブラスター銃を取り出す。そうやって、司会のお姉さんにいつでも戦える事を示した。

「お前が一番手か？　ガイドデータじゃミラ・イノセントって記されてたな」

「いかにもそうだ、スカッド・エースよ。ゲシュペペペ！　そうだ、お前に一つお話を聞かせてやろう。まず、どうして俺の脚が、こんなにも細く短いと思う？」

「さあな。生まれつきだろう？」

「これは足の動かない少年の面影なんだ」

「は？」

「その少年はずっと憧れてたんだよ……。歩きたい、走りたい……と。それは健気に輝く、希望の周波数だ。ゲシュシュ……」

ミラ・イノセントは薄気味悪く笑いを上げる。笑うたびに体から、乾いた蛇の亡骸がカサカサと落ちていく。

不潔なその様から、スカッド・エースは少し身を引き、不快さを露わにした。

「なんだ……コイツ」

「だがある時、少年は絶望に突き落とされる。ママが真っ赤に染まったのだから。ママー助けて。でも助けは来ない。優しかった看護師のお姉さんも同じ……。お姉さんはもう笑わない。

少年の足を支えた人達は脆くも息絶えた……。少年は俺から逃げた……車イスで血の海をかきわけて、死体を乗り越えて……」

「お前なんなんだ？　どうしたっていうんだ？」

スカッド・エースは、この気味悪いミラ・イノセントの話はもう勘弁願いたかった。司会のお姉さんに、試合の合図を頼むが、ミラ・イノセントの話は止まらない。どんよりとした声のトーンに、時折笑みが含まれ、異様な演説のようになる。

しかしその話を聞き、スカッドは一つの可能性が頭をよぎった。病院に残された周波数の残骸と、ミラ・イノセントの周波数との関連。そして見え隠れする少年の泣き叫ぶ周波数の調子。

「しかし、少年はもうこれ以上逃げられない……。車イスでは階段は降りられない。少年は歩けない。逃げられない……」

『シドウ！　怪しいと思い、ＷＡＸＡのデータに問い合わせたところ、コイツの周波数がアトム君の生体パターンと一致しました。

コイツはアトム君と電波変換しています！』

「う、うそだろ」

「ゲシュペペペペ！　もうバレチマッタカ。そうさ、俺はアトムと一つになった！　コイツの純粋で、絶望した混沌の周波数は最高だ！！

分かるだろう？　ＡＭ星人やＦＭ星人が負の周波数を好むって事ヲ！！　さあ、お前達の怒り！　絶望！　偽善！　それらの周波数を俺にくれよぉう！」

「何言ってるんだ！　ＦＭ星人はもうそんな陰気な周波数に興味ねーよ！　熱い友情に燃えてるからな！！」

『シドウ！　コイツは許せません。こんな小さな子を、こんな過酷な戦いに巻き込むなんて……！』

「ううおおおう……。俺達の復讐劇が始まるぞお……！！」

ミラ・イノセントはヒタヒタと歩み寄り、血走った沢山の目で睨みつけてくる。それに対し、スカッド・エースも臨戦態勢を取った。

《では、準備も良いようですので！　試合開始！！》

「ゲシュペペペ！！　さあ、俺の恐怖を思い知らしてやるよ！」
「思い知るのはお前だよ！　正義は勝つ！！」

スカッド・エースは俊敏な動きでミラ・イノセントを翻弄していく。アシッドブラスターがミラ・イノセントの肩を捉えて、無様に地面を二、三転がる。
それに対比的なミラ・イノセントの動きは緩慢で、スカッド・エースを目でも捉えられていない。体は絶対に付いていかないだろう。ムクリとかったるそうに体を起して、また倒される。
どうやら戦闘能力自体はさほど高くないらしい。見積もりで１００ギガヘルツ前後といったところか。ゼロＰＧＭを取りこんだスカッド・エースの、４０００ギガヘルツには遠く及ばない。

「ゲシュペペペ！　速いなあ、さすがにエースっていうだけはあるなー」

アシッド・ブラスターの嵐を受けながら、ミラ・イノセントは成す術がない。

『シドウ、ゼロＰＧＭが良い感じに働いています！！』
「ああ、一気に畳みかけるぜ！　ハイ・ウイングブレード！！」

スカッド・エースがミラ・イノセントの後ろを取り、電波エネルギーの美しい羽を羽ばたかせる。それが鋭利な刃物となり、ミラ・イノセントに引導を渡そうとする。
しかしミラ・イノセントは、あさっての方向をむきながらも叫びあげた。何も状況は変わっていないが、手は大袈裟に広げている。

「イノセント・インパクト！！」

その時、ミラ・イノセントを中心として、実体のない、空間を湾曲させたような衝撃波が広がる。それに飲み込まれたスカッド・エースは、力が抜けたように崩れ落ちてしまった。酩酊したような頭と、疲労が溜まった四肢がひたすら重い。

「く……！　なにが、起きたんだ？！」

『シドウ！　シンクロ率５０％に低減！！　戦闘周波数１００万を切ります！！』

「コレは俺の呪われた能力さ。乱雑な周波数を浴びせて、相手の戦闘周波数を根こそぎ削ぎ落す技だ！」

ミラ・イノセントが、膝をついて息を荒げているスカッド・エースを見つけるとニヤリと笑みを浮かべるのであった。後は料理をするだけである。

ボロボロなのはミラ・イノセントの方だ。だが、追い込まれて体が動かなくなったのはスカッド・エースの方である。

イノセントインパクト――おそらく敵の波長の逆波長を浴びせることによって、総合エネルギーをゼロにする技であろう。だが、複雑な人体の周波数全てを削ぐのは、ほとんど不可能な芸当である。あのソウル・レイダーでさえごく単純なエネルギーの塊（グレイバスター）でしか相殺できていなかったのだから。

その偉業を可能にするのは、生まれ持った異常な周波数によるところが大きいだろう。様々な周波数を振る舞う呪われた力が、あらゆる角度から力を無理やり削いでいくのだ。

「くっ……フレクバースト！」

「無駄だ！！　イノセント・インパクト！！」

抗おうとするも、見えない力の波でスカッド・エースは立ち上が

ることすら許してもらえない。
ミラ・イノセントの技は、異常にして、特別な周波数変換術である。時空操作とはまた違ったベクトルの威力を誇っていた。
基本的な周波数変換術しか知らないスカッド・エースでは、まるで手も足も出ない。体中の筋繊維を根こそぎ奪われたように、体に力が入らないのだ。

『マズイです！　シドウ！！　さらに低下しています。シンクロ率２５％！！』
「ゲシュペペペ！　やめとけ、俺のは生まれついての呪いみたいなもんだ。小手先の技じゃ防げねえぜ？」

それから結局ミラ・イノセントは、終始試合を掌握してチームゼータに付け入る隙を与えなかった。
とうとうスカッド・エースの力及ばず、この試合はチームＡＭが勝利したのであった。

「ゲシュシュシュ！！　やっぱり、俺は強い！！」

残るチームはスバル達のみ。オペレーションアポカリプスの成功の是非は、ロックマン達に託されたのであった。

ｉｇｎｉｔ―０２：小手先の威力

某日。

ミラ・イノセントに完膚なきまでにやられたシドウは、病院のベッドで静養していた。チームゼータは敗北し、試合は南国の判断で棄権してしていたのだった。シドウが勝てなければ、南国とクインティアも言うに及ばないのだから。

その判断が功を奏して、彼らがシドウほどの怪我を負わずに済んだ事は、不幸中の幸いであった。

そんなシドウは、カーテンの隙間から入るそよ風に髪を遊ばせ、無気力にうなだれていた。そして見舞いに訪れていたデン助に、さらに深く頭を下げた。

「すみません、長官。俺の力不足で、アトム君を助けられなくて……」

「気にするな。君たちは全力で戦ったのだから」

「ミラ・イノセント……手も足も出なかった……。純粋な戦闘周波数なら勝っていたのに……クソ！！」

シドウはベッドに握った拳を埋めると、痛嘆（つうたん）しているようだった。拳を悔しそうに見下ろし、小さく震える背中には、エースの面影は感じられなかった。

電波体同士の戦いは奥が深い。力だけでは勝てない事もあるのだ。シドウは今回の事でそれを強く実感した。

「テクニック……やはり、きずなクルーの助けは必要かもしれないな……。ほんとうならジョニー君や大吾君にも力を貸してほしいところだったのだが」
「ジョニーさんはＷＷＲの幹部です。それに、いない人達を当てにしても仕方がありませんよ」
「だがな、スバル君たちの話ぶりだと、何か事情がありそうな感じなのだ……」
「わかりませんね。でも、あのジョニーさんが力を貸している以上、何かあるんでしょうか？　俺達は何か重大な事を見落としているのかもしれません」
「そうだな。だが、終わった事を考えても仕方がない。……ああ、そうだ暁君。今日はお見舞いが来ているんだった」
「見舞いですか……？」
「スバル君達が来ている。彼らにアドバイスをしてやってくれないか？」

長官が入口に呼び掛けると、ドアが自動で開き、子供達が入ってくる。
部屋に入ってきたたはのはチームオメガの面々だった。すたすた歩み寄り、リーダーのミライは早速、シドウにエアディスプレイを見せる。

「こんにちは、暁さん。俺達は順調に勝ち進んでいます。ですが次の対戦相手は、どうやら一筋縄ではいきそうもありません」
「このチームは……」

チームＡＭ。エアディスプレイには、その文字がありありと表示されていた。ガイドデータにはあの恐ろしい、ミラ・イノセントの姿が。

シドウは戦いの記憶を呼び起されて、堪らず苦い表情を浮かべてしまう。無垢なアトムとの、その不釣り合いな組み合わせが作りだす、混沌とした印象だったようだ。

ミライはその様子に言及するまでもなく、簡潔に告げた。

「二次トーナメントにもなり、俺達のブロックのチームも残り少ないのでしょう。不思議なことじゃありません。

暁さん、力を貸していただきたい」

ぴしゃりと言いのけるミライに、スバルが付け加えた。

「あの、暁さん。僕たちにチームＡＭについて教えてもらえませんか？」

「お前たち……」

なにぶんシドウは彼らが心配だ。ミラ・イノセントの恐ろしさを痛感していた。力押しではどうにもならない敵である。特に力を自信にもち、エースを自負していたシドウに与えたショックは大きかったのだ。

冴えない面持ちでシドウは、スバル達のその姿を改めて見回した。確認の意味を込めて、彼らの心情を探ってみたのである。しかし意外な事に、誰一人諦めてはいなかった。

ゴン太を始め、闘志をみなぎらせている。スバルに至っては、頼もしささえ感じさせた。

例にもれず意志の固いミソラも、シドウに強く言い切った。キミドリとゴン太も訴えかける。

「私達は負けるわけにはいかないんです。世界を救う手がかりを繋ぐために！」

「そうそう！　アトム君も助けないとだしね！」

「暁さん！　俺達の心配をするなら、勝てる方法を教えてくれ！」

少し誇らしげにミライも笑みを浮かべて続けた。

「俺達のチームは、誰一人諦めていません。それに俺達は勝ちに行くつもりです」

「そうか……。心配はいらないようだな」

シドウは観念したように、息を吐いて見せると、小さく頷いたのだった。

「分かった。勝ちに行こう」

「へえ、なるほどね。それで、アタシに周波数操作を習いに来たってワケなのね」

「聞く限り、どうもミラ・イノセントの技は、フレクレスの発展応用系のようです」

「でもアナタ達。流石のアタシでも、粒子レベルの周波数操作は教えてあげられないわ。だって普通の電波体は、体単位でしか周波数変換はできないんだから」

「やはり、ミラ・イノセントはかなりの強敵という事になりますか……」

その時、スバル達はレベッカの研究室に訪れていた。彼女は現在、ＷＡＸＡに住み込みで宇宙収縮の原因を調べている。メガネをかけてイスに腰掛ければ、それなりに知的な雰囲気は出すことはできるらしい。

シドウからミラ・イノセントの特徴を教えてもらったスバル達は、ＷＡＸＡに戻り、レベッカに教えを乞うているところだったのだ。
しかしながら、きずなクルーで周波数変換の達人であるレベッカでも、難易度が高いようだった。腕を組み、難しい表情を浮かべているばかり。
ミライも相談してみたものの、好転は見込めないようで、浮かない表情が目立った。

例のフレクレスは、波長に対して逆波長を合わせて敵の攻撃を防ぐ技である。基本的な技だが、単純なエネルギーの塊であるロックバスターくらいにしか効果はない。だが、ミラ・イノセントの場合、相手の体電波情報までにも逆波長をぶつけてくるのだ。それは人体の複雑な構造一つ一つに、フレクレスを仕掛けているという事。結果として、単純な戦闘周波数では語れない、恐ろしくも味わい深いものを引き出していた。
器用では済まされない、周波数変換の奥義である。

そのためか、レベッカもお手上げのようであった。指先でペンをくるくる回しながら頬杖を突く。
そしてスバルたちを尻目に言う。

「まあ、ゼロＰＧＭがあるんだし……。何とかなるんじゃない？」

あくまでもレベッカは楽観的に言ってのけた。しかし同条件のシドウが負けた以上、楽観視はできない。
スバルは遠慮がちにもの申した。

「でも、やっぱりなにか対策しとかないと……」
「そうかな？　シドウ君から貰った戦闘データを見る限り、戦闘周波数自体は大したことないじゃない。

それにスバル君にはラーニングレギオン……だっけ？　それもあるんだしね。
シドウ君が負けたのは出会いがしらの一発ってヤツよ。だけど、アナタ達はもう知っている。……そうでしょ？」

確かにレベッカの言う通り、ようやくコントロール可能にしたラーニングレギオンはかなり強力な技である。それのおかげで、二次トーナメントを勝ち抜いてこれたと言っても、過言ではなかった。
しかし心配症のスバルは、嫌な予想ばかりが頭に浮かぶ。あれほど元気だったシドウの、あの落ち込んだ様子を見たのだからなおさらだった。

「でも……やっぱり」

呆れたようにレベッカは、メガネを外した。椅子にもたれ掛かり伸びをする。

「あー、分かったわよ。少しでも周波数変換がうまくなるよう、訓練付けてあげるから」
「あ、ありがとうございます」

そのやり取りにウォーロックはつまらなそうに言う。ポケットのハンターから、文句がうるさかった。

『おいおい、俺様の力があれば、そんなコスい真似しなくても良いだろう？』
『ポロロン。バカね、やれることやっといて損はないでしょう？』
「はいはい、二人とも喧嘩しない」

ミソラになだめられつつ、スバル達はレベッカと共に訓練場に向

かっていくのだった。念には念を押して、戦いに臨む。

そして数日が経ち、七夕の日となった。場所は、同じくノイズウェーブ第八階層。チームオメガは、とうとう二次トーナメント第五回戦を迎えていた。ここから先を勝ち抜いたチームは、ＷＷＲの一員になれる可能性が出てくる。むろん優勝すれば、アジトに招待され、フェニックス・リボンと対面する事が可能となる。そうなれば、地球の全戦力を以ってＷＷＲを叩く事ができ、長い道のりの作戦が終わる。

ロックマン達は決意を固め、ウラコロシアムへと入っていく。レベッカとの訓練を通して、やれることはやったという自負はある。後は戦うだけだ。

《さあ、チームダブルプリティーが入場してきました！！　迎えるのは圧倒的な強さで勝ち上がってきたチームＡＭです！》

「ヤツらがそうか」

闘技リングの向かい側で立ち並ぶ四体の人影を、ソウル・レイダーは見つめている。その中に、ミラ・イノセントがいたのだ。不気味にロックマンたちを見つめている。瞳がギョロギョロうごめいて気味が悪い。

そしてもう一人、同じような負の周波数を垂れ流す者がいる。彼はアルゴル・ミラー。ガラスのような透き通った電波体である。しかし瞳は燃えるように真紅で、口は裂けており見るからの悪党面であった。

そんな彼らは、他の二体とは比べ物にならない能力を持っているのだ。

そのためロックマンたちは集中を高め、緊張した様子で、敵の方を注視していた。するとお姉さんが事を運びだした。

《では、今回のルール説明といきましょう。大丈夫、ご安心を。ルールは簡単！　今回はタッグマッチです！

二人一組で、勝負をしてもらっていく勝ち抜け方式です！　それで全滅したチームの負けという事になります！》

「なるほど。……星河、俺と出るぞ！」

「うん！」

「ブロロオ！　おい、ミライ！　ここは俺にやらせてくれ！　最近の俺の活躍見てただろう？！」

またもや調子に乗っているオックス・ファイアが、ソウル・レイダーに訴える。キリン・ライトニングの時と同じ轍を踏みそうな流れであった。そのためか取り合ってもらえずに、ミソラ達に引っ張られて、リング外に連れさらわれてしまう。「ロックマンとソウル・レイダーのタッグが一番だ」というのがチームの意向だ。

「このチームで一番強い形で行く。出だしが肝心だからな」

そう言って、ソウル・レイダーとロックマンだけがリングに残って、敵を待ち構える。

それを見ていたチームＡＭからも二人の電波体が一歩、前に出てくる。

「ゲシュペペペ。なら、俺達はもっと強い形で行こうかねえ。なあ、アルゴル？」

「ガシャシャシャ！　ああ、そうだな。ミラ！」

ロックマン達に受けて立ち、チームＡＭも一番強い形で応戦してきたのだった。ミラ・イノセントとアルゴル・ミラーが、リングの中心に向かって歩んでいく。

「へえ、面白え」迫りくる呪われし二体に、同じＡＭ星人としてウォーロックも感じるところがあったようだ。彼はそっとスバルに教えてやった。

『おいスバル。アイツらは、ミラとアルゴルっていう電波生命体の中の外れモンだ。故郷じゃずいぶんと嫌われてたヤツらさ』

「うん、そうみたいだね」

「おお、その周波数……お前、ウォーロックだな？」

そのやり取り、声色から、アルゴル・ミラーも同郷の彼に気が付いたようだ。細長い指先を出して、ロックマンの左腕を示した。「出て来いよ」とでも言わんばかりに、禍々しい周波数を指先から伸ばしていく。

ウォーロックは受けて立ち、ロックマンから分離し実体化すると、アルゴル・ミラーに問いかけるのだった。

「おい、お前。何でこのトーナメントに参加してやがる？」

「ガシャシャ……。まあ、同じＡＭ星人であるお前には教えといてやるかな。いいよな、ミラ？」

ミラ・イノセントはウォーロックを見つめながらも、静かに頷いた。

アルゴル・ミラーは語る。

「一言で言えば、復讐だよ。ＷＲに入れば、それが容易に叶うんだ。ヤツらと俺の利害は一致している！！」

「どういう事だ？　何に復讐するっていうんだ？」

「何って決まってるだろう……Ｆｍプラネットをぶっ壊すんだよ！！　まあ、建前上ＡＭ星人の復讐って事になるか？」

どうやらミラ・イノセントとアルゴル・ミラーは、ＷＲの目的を利用するつもりのようだ。

しかしウォーロックは、彼らの出生から、その言葉の真意が理解できない。

「解せねえな。お前達は自分たちを迫害したＡＭ星人を嫌っているんじゃないのか？　かたき討ちのつもりってわけじゃないだろう？」

「ああ、大嫌いさ！！　周波数なんて下らねえもんで差別する電波生命体がな！！　全部消えてなくなればいい！！」

「ヘッ、良く分かった。俺にはお前が理解できねえよ！」
「それは残念だ……。ウォーロック、お前は俺たち側だと思ってたが。残念残念。なあ、一緒にＦＭプラネットをぶっ壊そうぜ！！ぶってんじゃねえぞ、ＡＭ星人のクセに偽善者が！！」
「偽善とか関係ねえ、俺は俺だ。誰の側でもねえ！　俺はウォーロックだ！　ＦＭ星とか知った事か。お前が気に入らねえからブッ倒す！！　それだけだ！！」
「ガシャシャ！　やれるかな？！　いや、やれないよ、お前らじゃ！！」

発狂するアルゴル・ミラー。
そのやり取りにソウル・レイダーはある事に気が付いたらしく、沈んだ口調に事の重大さを匂わせ、ロックマンに告げる。
キリン・ライトニングが言っていた事と、重なり合う点は十分だった。星を滅ぼされたＡＭ星人達による、ＦＭ星への復讐が見え隠れしていたのだ。
ある種族とはＡＭ星人。そして戦いの女神、象徴とは、ＡＭ女王といったところだろう。
ソウル・レイダーとロックマンは、戦う理由をより明確にしたのである。

「なるほどな……。星河、どうやらこの話が本当だとすると……ＷＷＲはＦＭ星に復讐をするという事になる……」
「わかってるよ。いよいよこの試合、負けられなくなった！」
『今はそんな事より、目の前の敵だ！』

ウォーロックが再びロックマンと同化すると、彼はスバル達を奮起させた。

『やるぞ、スバルにチョンマゲ！　コイツらＷＷＲについて色々知

ってそうだ！
　とっちめて吐かせるぞ！！』

「うん！」「チョンマゲ……まあ、いいだろう！！」士気を高めたロックマン達、盛り上がりを見せる会場。お姉さんの合図が響いた。

《じゃあ、あったまってきたようですので……ロックマン＆ａｍｐ；ソウル・レイダー対ミラ・イノセント＆アルゴル・ミラー！　試合開始！！》

「ガシャシャシャ！　さあ、お前らのココロの声を聞かせてくれよー！！」
「ゲシュペペペ！　俺達の呪いを味わわせてやる！」
「速攻で仕掛ける、コンビネーションだ！　星河！！」

　開始と同時に、ロックマンとソウル・レイダーは、まずミラ・イノセントを潰しにかかる。リングの上を高速の緒が走り出した。危険因子を速攻で摘むつもりだ。
　目にも留まらないスピードでソウル・レイダーが背後に回り、ロックマンとの挟撃を加える。振りかぶった二人の腕から、鋭利なソードが覗いていた。

「クロス・ダブル・アスタリスク！！」

　二重の十字架の残影に烈風が生み出され、鼓膜を叩く破裂音が響きわたる。その強烈な斬撃が、ミラ・イノセントを捉えた。
　だが、アルゴル・ミラーの方から、不吉な声が二人に浴びせられるのだった。彼は負の周波数を操り、幻影を作りだす能力がある。そしてそれは究極に突き詰まっている。相手の脳波から、大切な人の幻影や、トラウマを見せることも可能なのだ。その大仰な神がか

りが、アルゴル・ミラーが念じるだけで実現するのである。
チームＡＭはただ純粋な力ではなく、マニアックな技量から勝機を切り開いていく。

「ガシャシャ！　俺を無視とは余裕だな！　デビルミラージュ！！」
「何……？！」

ソウル・レイダーは絶句した。確かに切り裂いたはずのミラ・イノセントは、幻覚のようにゆらゆら溶けてしまったのだから。
敵に対してあさっての方向を向き、見つめ合うロックマンとソウル・レイダー。そんな間抜けな彼らに、傷一つないミラ・イノセントが告げたのである。彼はアルゴル・ミラーの隣に位置どっている。
ロックマン達は蜃気楼のような、錯覚を植え付けられていたようだ。

「あまり油断しない方がいい。だが、もう遅い。ティアマットとメデューサである俺達を、敵に回した事を後悔してくれよ」
「幻覚だと……？」
「ゲシュシュ……。まあ、ゆっくり楽しもうか。だが、そのまえに足の動かない少年の話を聞かせてやろう……どうして俺の脚が……」

チームゼータに対したものと、同じ語り口を広げるミラ・イノセントだったが、ウォーロックが遮る。

『うるせえ、とっくに知ってんだよ！　おおかた俺達の怒りや憎しみの周波数を、力に還元しようって腹なんだろう？　やる事がせこいんだよ！！』
「なんだ……。バレテタノカァ……じゃあ……」

ゆっくりとミラ・イノセントが二人に対し両手のひらをかざして、

周波数の揺らめきを作りだす。
「来た……」ロックマンとソウル・レイダーは、敵の恐ろしい技に対して身構え、周波数を研ぎ進ます。そして、二人はロックバスターとソウル・レイダーの剣――サテラスライサーにエネルギーを溜めていく。それぞれの武器に、煌々と緑と赤の実りが膨(ふく)れ上がる。

イノセント・インパクトに対するレベッカの助言と対応策は簡単だった。
「体電波周波数を細胞レベルで操るのは困難……ならば、放たれる周波数を破壊すればいい」
「言ってしまえば、イノセント・インパクトは見えない周波数の衝撃波……。それ以上の周波数をぶつけて突破しな！！」

答えは単純明快だ。力をテクニックでねじ伏せられてしまうなら、それ以上の力でねじ伏せ返せばいいのだから。ロックマンとソウル・レイダーはバトルカードを読み込み、持てる最強のカードを切った。
それはダブルヒーローだ。
ミラ・イノセントが力を削ぐ衝撃波を飛ばす。

「イノセントインパクト！！」

空間が波打つような衝撃波が迫る。砂漠の炎天下に取り残されたように、辺りの景色が歪む。
二人は息を合わして、それに対抗した。ソウル・レイダーの流れるような太刀筋は、絶える事なく繰り出され、ロックバスターの銃口が激しく明滅する。

『うおおお！　ダブルヒーロー！！』

伸びるように飛ぶ斬撃と銃撃が波にぶつかり、お互いが鎬(しのぎ)を削る。

しかしイノセントインパクトの周波数はかなりの密度を誇っており、個々の斬撃と銃撃はたちまち消滅してしまう。そこはダブルヒーローの手数で補うしかなかった。力の限り、太刀筋の衝撃波とロックバスターのエネルギーを飛ばし続ける。ミラ・イノセントとの我慢比べである。

密室であるコロシアムは、逃げ場のない爆音が響き渡り、観客の怒声はかき消されてしまっているほどだ。

「ゲシュペペペ！　なるほどなるほど、バカ正直に俺の呪いを突破するつもりか？！」

「星河！　こらえるんだ！！」

「分かっている！！　ロック、レイダー！　頑張るよ！！」

『上等だ！』

『了解です！』

《……み、見えない衝撃波と斬撃と銃撃の応酬！！　勝利の女神はどちらの手にー！！》

勝利の女神はほほ笑みを浮かべるが、彼女は強者のみを愛する。そこに善も悪もない、あるのはひたすら強さのみ。それは戦いの鉄則だ。

確かにソウル・レイダーは強い。だが、彼にはどうしようもない致命的な弱点があったのだ。クールに振る舞うほど、完璧のリーダーを務めようとするほど、心を冷たく塞ぐほど、脆弱な部分が膨れる。それは心に抱えた、乗り越えられない影。いわゆるトラウマである。

ミラ・イノセントとの攻撃の鎬（しのぎ）を削り合っている中、悲劇は起きた。本当に恐れるべきは、ミラ・イノセントの攻撃ではなく、アルゴル・ミラーの方であったのだ。

通称メデューサ。彼は心を映す鏡を作りだす。彼はミラ・イノセントとは違い、体ではなく心に攻撃を加える事ができる。

「はあっ……はあっ……！　ああ……！　うっ。あ、あ、あぁぁああ、う……が……あぁあああああ！！」

気でも触れたのか、叫び声を上げて、ソウル・レイダーは崩れ落ちた。ロックバスターを乱射していたロックマンは、いきなり倒れた彼に驚きを隠せない。その時、攻撃の手が緩んでしまったのである。たちまちイノセントインパクトが二人を押し切った。

「ゲシュペペペ！　隙アリだ！！」
「し、しまった！　うわああ！」

ソウル・レイダーと同じくロックマンは、イノセント・インパクトの周波数に、力を根こそぎ奪われてしまい崩れ落ちる。シンクロ率と戦闘周波数を、一気に半分近く削り取られてしまったのだ。
ソウル・レイダーの崩壊から、一気に形勢が悪くなってしまう。ロックマンはその現状に理解が追いつかないようだった。頼りにしていたリーダーの、あり得ない醜態が信じられないのだろう。

「な、何が起きたんだ……？！　体の力が一気に……それにミライ君……？」
『バカ野郎！　なにやってやがる、チョンマゲ野郎！』

ウォーロックが突如倒れたソウル・レイダーを怒鳴りつけた。あのまま順調に行けば、押し切れたかもしれない攻防を台無しにされたのだから当然だ。
ソウル・レイダーは弱々しく頼りない声を漏らした。ウォーロックなど眼中にないようで、怯え震えている。

「や、やめろ……！　うわあ！　うグ……！　グアア！！」
「ミ、ミライ君！　どうしたんだよ！！」

ソウル・レイダーは頭を抱えてその場を転がりまわる。震えて恐怖に泣きじゃくるその姿は、普段のミライからは想像できない。まるでか弱い女の子のようである。普段からクールに装っているミライだけに、そのギャップは恐ろしく気持ちが悪い。仮初めの仮面が剥された人間が、ここまで醜いのだと痛感させられたことだろう。
ロックマンは慌ててソウル・レイダーを抱き起こすが、ソウル・レイダーはパニックを起こしてしまって話にならなかった。

「……うわあ！　やめろ！　やめてくれ！　やめてくれ、母さん！　ママ！　父さん！　パパ！！　こんなの止めてくれよぉ！　いやだ。い、イヤだよ！　や、止めてよー！！」

ロックマンの腕の中で暴れるソウル・レイダーだ。何をここまでさせるのだろうか。ロックマンは分からない。ソウル・レイダーが抱えている大きな影を、推し量る事は出来なかった。

「こんなミライ君……初めて見る」

『おいおい……一体どうなってやがる。ホントにコイツが、あの偉そうにしていたチョンマゲなのか？』

「ガシャシャシャ！！」情けない彼に、アルゴル・ミラーが高笑いを上げる。情けなく泣きじゃくるソウル・レイダーを指差して、腹を抱えていた。

「ガシャ、ガーシャシャシャ！　いや！　予想以上にうまくいった！！　コイツは普段カッコつけているくせに、本当はただの弱虫で甘えん坊のクズだったんだよっ。よっぽど普段から抱え込んでたんだなァ！」

散々な言いようにロックマンがきつく睨み返す。しかし立場の弱さから、それは負け犬の遠吠えに等しい。しかしロックマンにも心当たりがないと言えば、嘘になる。ウラウェーブエリアでのミライの告白が嘘でないとしたら、おそらく……。

だが、ロックマンはそれでも聞こえの良い言葉を吐いた。アルゴル・ミラーの言葉は、間違っても正しくない。それは絶対だからだ。

「お、お前にミライ君の何が分かる！」

「いやいや。俺にはお前以上に、そのガキの事が分かる。俺は相手の脳波から、ソイツの心を作る全てと、思い出やトラウマが手に取るように分かるんだよ？」

「そ、そんなバカな能力が……！」

「ガシャシャ！　それが、あるんだよ。現にちょっと相手の脳味噌に、幻覚の周波数を送ったらそのザマじゃないか？」

アルゴル・ミラーが指差したソウル・レイダーは精神的に憔悴してしまっている。一体、何を見せられたらここまで可哀そうになれるのだろうか。

それはとても見ていられるものではなく、ロックマンは顔をそむけてしまう。

「ミライ君……」

「信じられないか？　じゃあ、コレならどうだ？」

するとロックマンは目を開いて、ソウル・レイダーを乱暴に地面に落としてしまった。腰が抜ければ、自分も地面に落ちる。

「う……うわああ！」

ロックマンは堪らず悲鳴を上げた。

アルゴル・ミラーはスバルの父、大吾に姿を変化させたのだから。

アルゴル・ミラーはくつくつと笑みをを浮かべている。

「どうだ？　今、脳に直接、幻覚を見せている。きっとお前には俺が大吾とかいうオッサンに見えてることだろうよ！」

「そんな……。嘘だ……」

「油断したな。俺の力は強くねえが、この力があれば負ける気がしねえ！　相手の心の弱さに浸けこんだら、生き物なら誰しもが俺に

屈服するんだからな！！　ガシャシャシャ！」
「ゲシュゲシュゲシュ！　そう言うワケだ、俺とアルゴルが組み合わされば負けることはない！　戦いは力じゃない……頭で戦うんだ！！」
『……流石は突然変異ってワケか。チッ！　なんて気持ち悪い組み合わせだ！』

デビルミラージュ、呪われた負の周波数、イノセントインパクト。それは心技体。それらの要素をまんべんなく満たすＡＭ星の呪われし者たち。さしものウォーロックも、緊張の糸をピンと張り合わせているようだ。

「だけど……負けるわけにはいかない……アトム君や、ＦＭ星を……宇宙を救うんだから！！」

それでもロックマンは、絶望を植え付けられてもなお、心を強く持ち、立ち上がる事ができた。

スバルにもトラウマと呼べるものは、沢山持ってはいたが、ミライのように心の奥底に追いやる事はしていなかった。常に受け止め向かい合い、乗り越えた。それゆえに苦しむ事も多々あったが、だからこそミライ程のダメージを受けずに済んだのである。それは普段から落ち込み、考え込んだりする性分が生んだ、スバルゆえの強さなのかもしれない。

大吾と交わした約束がある。トラッシュの死を乗り越えた。そんなスバルに心の弱さはどこにもない。大吾の幻影を見せつけられても、ロックマンは戦う意思を持ち続ける事が出来るのだ。

「ガシャシャ！　まだ立てるのか、見かけによらず精神力はあるんだな」

「ゲシュシュシュ……。なら、体に訴えるまでだァ！」

ミラ・イノセントが出番とばかりに、アルゴルを背後に回らせて前線に立つ。

ロックマンは対照的に手のひらを額にかざして、完成した切り札を使うのであった。お互いの、清濁入り混じった周波数が、会場を埋めていく。

《おおーと！！　またもやミラ・イノセント選手が攻撃を仕掛けるつもりだぞ！　それに対するロックマン選手！！　出るか？！　奥義、ラーニングレギオン！！》

「アクセス……ラーニングレギオン！！　ロックマン・プラントロード！！」

バラの赤い守りと共にロックマンは、姿を変えて降臨した。高貴なる女王のような、気高く強いロックマンだ。彼を守るように赤い花弁がオーラのように取り巻き、その姿は優雅である。ロックマンは、ソウル・レイダーをその花弁で優しく包むと、そのまま仲間の元へ送り届けるのであった。「伸びろ、ウィップブレード！」すると手首から鋭利な棘の入ったツタの剣を伸ばし、戦いに臨んだのだ。

「よくも、ミライ君を酷い目に合わせたな……トラッシュが完成させてくれたこの力で……僕は勝つ！」

『俺達の全力でぶちのめすぞ。出し惜しみは無しだ！！』

「知るかよ！　イノセントショット！！」

小さな空間湾曲波を放つが、ウィップブレードに切り裂かれてしまう。ミラ・イノセントは少し後退してしまった。彼はラーニングレギオンの恐ろしさを上方修正した。

「ゲシュシュ……！　ちょっとはやるようだが、姿を変えて何が変わる。小細工をしようと無駄なんだよ！　くらえイノセント・インパクト！！」

ミラ・イノセントはやはり頼みの綱のこの技である。巨大な呪いの波だ。

ロックマンは、襲いかかる負の周波数を確認すると、その場でくるりと回転してバラの花弁で身を包んでいく。それが竜巻のような壁となり、ロックマンを完全に守るのであった。

イノセントインパクトを、赤い壁がことごとく相殺していく。ジリジリと見えない壁を突き破ってゆっくりと進んでいく。

ロックマンはようやくレベッカの真意を理解した。心配はいらない、それはスバルが乗り越えてきた壁の大きさを知っているから出た言葉だったのだ。彼女が一番初めにラーニングレギオンを目の当たりにしていた。それが何を越えてくるかを、分かっていたのである。

心配症のスバルはようやく意味を理解した。それが心の弱さであり、打たれ強さを作っていたのだ。

ミラ・イノセントはここに来て、重心を落としこんで踏ん張りの姿勢をみせた。

「この野郎……！　イノセントインパクト、出力最大だ！！」

『スバル、明日の筋肉痛に備えとけよ！　無理やりシンクロ率を上げる！　フレクバーストォオッ！！』

赤い竜巻がより巨大になると、コロシアムの天井を突き破る。赤錆びたノイズを取りこんで、より重厚な赤さを孕んだ竜巻へと成長した。そしてロックマンの戦闘周波数を、最大開放した大技を繰り出すのである。ロックマンはヘラ・ローズガーデンの領域の、さら

に深いところにアクセスした。
　体力を消費するラーニングレギオン状態でさらに、体力を消費するＡＦＢである。イノセントインパクトを一度貰っている状態でそれは危険な賭けだ。だが、無茶苦茶をしなければ、化け物と悪魔は突破できない。小さな少年の助けが待っている以上、無茶苦茶をがむしゃらで覆い隠してごまかす他ない。

「アカシャフォースビッグバン！　スカーレッド・ハリケーン！！」
「ま、まさか、このまま俺の呪いを押しのけるつもりか……？　そう簡単に行くかよ！　アルゴル、ヤツの心を砕いちまえ！！」

　ミラ・イノセントは両足を地面で抉り返すほどの勢いで踏ん張る。衝撃波と竜巻が一進一退の攻防を繰り広げる中、悪魔の相棒に助けを求めたのだ。
　心を砕く内部破壊を狙う。あくまでも心と体を責め立てる戦略を崩すつもりはないのだろう。

「言われるまでもねえ！　デビル……」
「ショックノート！！」
「ガハッ？！　何だ！」
「これはタッグ戦よ！　油断したわね！」

　ハープ・ノートがソウル・レイダーの離脱と同時にリングに入っていたようだ。そのままの勢いで音波を浴びせかけ、アルゴル・ミラーの行動を制限している。アルゴル・ミラーは確かに恐ろしいが、ハープ・ノートにも劣る戦闘周波数がここに来て仇となった。手も足も出ず、音波の攻撃を浴びるしかない。

「ガシャ？！　くそ、このクソガキィー！　邪魔するんじゃねえ」
「ダメ。邪魔しまくるよ！　ほらスバル君、この鏡マンを止めてい

るうちに一気に終わらせて！！」

赤い竜巻がより力強くうねり、勝利への最終舞曲を踊るのであった。

ｉｇｎｉｔ―０５：悪知恵と浅知恵

「ありがとう、ミソラちゃん！！　うおおぉおー！！」
『食らいやがれ！　化け物ヤロウが！！』

赤い竜巻がとうとうイノセントインパクトの壁を突破し、ミラ・イノセントを鋭利な花弁でめった切りにした。風と刃に揉まれ、宙に持ち上げられる。

花弁が血を吸い、ミラ・イノセントのダメージを物語る。ボロボロとなった彼は、竜巻で掘り返された床の上に落ち、ぐったりと転がった。ごつごつとした床には蛇の死骸と、紫の血が烏が食い散らかしたみたいに広がっていた。

ミラ・イノセントはもう動けないだろう。

ハープ・ノートもちょうどギターの弦でアルゴル・ミラーをがんじがらめにしたところだった。

ミラ・イノセントは悔しそうに言葉を絞り出した。紫色の血が、喋るたびに口から泡を立たせる。

「クソ……なんだ。その力は……ＷＲに教えてもらったデータにはなかった……」
「ラーニングレギオンっていうんだ。体力とか、脳に負担がかかるから、出来れば使いたくないんだけどね……。
君たちの強さの前には、そうも言ってられなかった」

ロックマンは少し冷めた口調で言った。そろそろアトムを返してもらわないといけない。

「チクショウ……。チクショウ！　バカにしやがって！！　でも、俺達は、まだ負けてねえ！」

『なに言ってやがる。もう動けないクセに強がってんじゃねえぞ』

「いや、そうでもねえ。やっぱり戦いは頭で戦うんだよ。この脳筋野郎！」

そう、ミラ・イノセントは勝利にどん欲で、諦めない。口から出てくるのは卑怯を形にしたような言葉だった。自分の胸を指差して、口元を引きつらせながら語りかけてくる。

「たしか、お前ら。このアトムとかいうガキを救いたかったんだよな……」

『だったら、なんだ。とっとと解放しやがれ！』

「ああ、解放してやるとも……。だが、いいのかい？　ここはノイズウェーブ……ここで電波変換を解除したらどうなる事やら。ゲシュシュシュ……！」

「ロック！　マズイよ。ノイズウェーブで電波変換が解除されたらアトム君は……」

ノイズウェーブは危険な場所。アカシックレコードは、命の管理をしている場所である以上、ルナの身に何も起こらなかったがノイズウェーブは違う。ノイズの密度が高く、人体にかかる負担は計り知れない。そして宇宙の歪みに位置している以上、無事では済まない。

ウォーロックも気が付いたようで慌てて撤回する。

『おい、やっぱり電波変換は解除するな！』

「バカか、お前？　交渉だよ！　交渉！！　アトムの命の代わりにお前らは負けを宣言しろ！　ビジネスで解決しような。命を買い取らせてやるんだからよ」

『この野郎……いよいよ、なりふり構わずにきやがった！』

焦るウォーロックとハープ・ノート。

「どうしよう……スバル君」

「ガシャシャ！　最後に笑うのは俺達のようだな！！」

ギターの弦で引きずられながらも、アルゴル・ミラーは勝利を確信しているようだ。

両者の間で奇妙な構図が出来あがるが、非情な裏世界である以上、お姉さんも口を出しては来ない。かつて銀河連邦の試合外乱闘を黙認した実績があるのだから、不思議ではないと言えば不思議ではなかった。

「君たちは卑劣なヤツらだな……まるで、キグナスのようだ」

ロックマンは小さく呟いた。静かな怒りを込めた口調は抑揚がなく、舌先で放り投げただけの心通わない冷淡さである。

「今からでも負けを認めて、アトム君の身を保証するんだ。そうしたら、これ以上は何もしない」

ロックマンの癇に障る言い方にミラ・イノセントが逆上した。挑発的な態度でロックマンを逆なでるのだった。

「てめえ！　立場、分かってるのか？！　こっちは人質っていう圧倒的なアドバンテージを持ってるんだよ！　それとも何か？　この

子供を見捨てるってのか?!」
「や、やめなよスバル君。変に刺激するのは」
「いや、黙っててミソラちゃん。……ミラ、コレは最後の忠告なんだよ」
「お前、俺が冗談で言ってると思ってるな? わかったよ、電波変換解除してやろうじゃないか!!」
「そうか……残念だよ」

するとロックマンは悲しそうに頷いた。そしてまたラーニングレギオン領域にアクセスするのだった。

「ラーニングレギオン……! ロックマン・ディープワンダー」

ロックマンは黒い鳥のような姿に変身した。指先を振りながら、ゆっくりとだが空間を操り始める。それはプルト・キグナスのようで、空間を操る姿はまるで彼そのもの。
そして小さな絶対領域を作りだすと、その黒いボールの中にミラ・イノセントを閉じ込めてしまったのだった。
ミラがボールの内壁を叩いた。「出せ、何をしてる?! マジで、このガキをぶっ殺すぞ!!」その汚い言葉は、ロックマンにしてみれば、自分勝手極まりない。

「コイツ……舐めやがって! 後悔しやがれ、電波変換解除!!」

怒りにまかせたミラ・イノセントは、とうとう電波変換を解いてアトムを無防備な肉体のまま解き放ってしまった。しかしアトムはボールの中でぷかぷかと浮かぶばかりで、体に異変は起きていないようだ。それどころか、寝息を安らかに立てていた。
ミラはそれが信じられない。

「ど、どうなっている?!　なぜガキが死なない！」
「もう手遅れだよ、ミラ。僕に、この大っ嫌いな力を使わせるなんてね。もう許さない」
「どういう事だ、な、何したお前?!」
「コレはプルト・キグナスの力さ。もっとも僕じゃ、これくらいの小さな球しか作れないし、君みたいな弱ったヤツしか閉じ込められない。
だけど、それでも球体の中は、アカシックレコードと繋がってるんだ。だから、アトム君は無事なのさ。そしてキミをあの場所に幽閉する……」

この球は小さなディメンションゲートだ。プルト・キグナスの担当領域にアクセスしたラーニングレギオンらしい技である。
そしてプルト・キグナスと同じく、スバル達を閉じ込めたあの場所へ、ミラを送り込もうとする。スバルが絶望した、あの悲しい命の終着点へ。

「その中じゃ、満足に動けないだろう?」
「やめろ……！　何をする?!」
「キミをアカシックレコードのデッドエリアに閉じ込める！」
「デッドエリア……?　な、なんだそりゃ?」

疑問を呈するミラだったが、徐々に黒い粒子がミラを捕縛していく。そのまとわりつく黒いものを気持ち悪く感じたのだろうか。ミラは恐怖にまみれたものへと表情を変えていくのだった。さっきまでの威勢はどこへやら、ロックマンに訴えるのは、助けを乞う情けない態度に変わっていた。

「ヒッ……や、やめろ……」
「デッドエリア。それは死後の世界……。何もなくて、やがて絶望

の中で、永遠に閉じ込められてしまう世界さ」

スバルは、ルナ達四人で過ごした三日間を思い出しながら、突き離すように言いきった。

ミラは黒いボールを必死に叩く。

「やめろ！　何だこりゃ、動けねえ！　やめてくれえぇえ……死にたくないいぃいぃひいぃいい」

「命をもてあそぼうとした罰だよ！　死後の世界で反省することだ」

「た、助けてくれ！　何でも言うこと聞くから……ＷＷＲの情報も教える！　だから……ヒィイイイ！」

ミラはほとんどが闇に飲み込まれて、ほとんどの部分が死後の世界に足をつけている事だろう。

「じゃあね。ミラ……」

「ぎゃあああぁあああ！！」

ミラは完全に闇に呑まれて、黒い球体の中は何事もなかったようにアトムだけが浮かんでいた。

実況のお姉さんも、恐ろしい出来事から息を呑んで、どう表現したものかと言葉を探しているようである。そのロックマンの背中は、黒い悪魔を占ったように、漆黒の翼が印象的だった。

《こ、これは……ミラ・イノセント選手。完全にロストしてしまいました……。周波数の欠片も感じません……》

現状が雄弁に語っているが、ウォーロックはあえてスバルに確認した。ハープ・ノートも少し、ロックマンから身を引いていた。

『おい、スバル。マジで殺しちまったのか？』

少し呆気に取られるウォーロックに、ロックマンは小声で答えた。間違っても、恐怖に震えるアルゴル・ミラーに聞こえないようにしているのだろう。

「いや、そんなことはないよ。僕の力じゃデッドエリアにアクセスはできない。それに殺したら、それこそキグナスと一緒になっちゃう。

今頃、ノイズウェーブが繋がる先の宇宙空間を漂っているはずさ……」

『ハッタリかましたってワケか……』

「いや十分さ。あっちのチームはもう戦意を失ったようだからね」

ロックマンはちらりとアルゴルや、残りの二体に目をやる。頼りの綱だったミラを失い、さらにはアルゴルも戦意喪失した今、スバル達の勝利は約束されたのだった。

そしてロックマンは、アルゴル・ミラーに確認の意味を込めて止めを刺す。

「さあ、アルゴル。キミと残り二体だけど、まだ戦うかい？」

動けないアルゴルは首を横に振るしかなかった。後の残り二体もアルゴルとミラに比べたら、微々たる力なのでスバル達の勝利は決まった。

「いえ……棄権します。だから、命だけは……」

その降参宣言を受けて、お姉さんが高らかにアナウンスした。押し黙って見守っていた観客も一斉に沸く。

《勝者！　チームダブルプリティー！》

そのアナウンスと同時にロックマンは、膝が砕けてしまったようでその場から動けなくなってしまった。

どうやらロックマンも、かなりの無茶を連続して行っていただけに、体力が限界だったらしい。

そのためすぐに勝負を決めようとした。だから目の前でミラを惨殺したかのような、スバルらしくない作戦を取ったのだ。

戦意を喪失させる為に、彼なりに頭を使ったのであった。戦いは頭で勝つ――彼らに対する、スバルなりの答えだった。

そしてスバル達は次の戦いへ駒を進めたのであった。

ミライの異変。

ＷＷＲの目的。

様々な不安を残しながらも、着実に彼らは前に進んでいく。

ｉｇｎｉｔ―０６：死してなお悪魔

数日後のある日。
スバル達は縮みあがったアルゴル・ミラーから、ＷＷＲの情報について聞きだす事に成功していた。ＷＷＲの詳細な事項が得られ、今回の戦いはかなりの収穫となったのである。それらの内容はこうだ。

ＷＷＲはＡＭ星人が核となっている、傭兵組織であるという事。
彼らのリーダーはＡＭ女王。
目的はＦＭプラネットへの復讐。
オーパーツを集めて、何かを画策している。
トーナメントを通して、同志を集めている。
幹部たちは電波変換をマスターしている。
特にフェニックス・リボンの力は上位レギオン（番号付きのレギオン）すら上回る。
そしてなぜかレギオンと同じく、トレイス達を部下として電波人間を作っている。

アトムを電波変換の材料としていたミラを除き、アルゴル・ミラーを始めとした彼らは、トレイスを媒介にしていたようだ。そしてそのうちの一体は、ＷＡＸＡ本部に送られてデータ解析を受けている。
そのことからチームＡＭとＷＷＲが接触していた可能性が高いとうかがえる。何よりこれだけＷＷＲの情報を持っていた彼らだ。や

はりＷＷＲにとって、ＡＭ星人は特別であることに違いないだろう。
トーナメントにおけるチームＡＭの待遇が異質な以上、確証となるのである。

今回スバル達は、それらの情報を元に作戦会議をする為、ＷＡＸＡニホン支部に訪れていた。そして彼らと共にアトムも同行していたのだった。この少年は被害者とは言え、チームＡＭであった。当然、ＷＷＲの情報を持っているかもしれないから。

「ミラ・イノセントの時の事を、何か覚えていないかい？」会議室でシドウは優しくアトムに問いかけるのだった。シドウはすっかり回復したようで、うまい棒を手にとっていつも通りの様子である。

対してアトムは指先をいじくって、過去の出来事を必死に思い出そうとしているらしい。だが、軍人やサテラポリスの隊員たちに囲まれ、ちょこんと座る彼はおどおどと落ち着きがなかった。ミソラ達が優しく見守っているだけがせめてもの救いか。アトムは何とか、思い出した事を言葉に置き換えていく。支離滅裂だが、幼さゆえに免責だろう。

「えっとね。なんだか……暗い場所をずっと彷徨ってたんだ。アイツら……」

詳細な背景が掴めず、デン助は、息子に対し掘り下げにかかる。

「もう少し、詳しく思い出せないか？」
「ちょっと待ってて、お父さん……」

アトムは黙考する。それは彼にとって、つらい記憶を呼び起こさせるものだ。
デン助は、内心息子に謝罪しながら、長官職に徹していた。
するとアトムが短く声を上げる。何かを思い出したらしい。

「あ……フェニックス・リボンとかいう人。その人が僕たちに会いに来た気がする……」

リーダーの登場に、一同がアトムに注目する。

ミソラはハッとしたようで、思いつめた表情をアトムに注いだ。憂慮したようにアトムをじっと見つめている。ミソラもうすうす感づいていたのだ。だがアトムの言い方次第で、父の潔白は証明できる。それを期待した。

デン助はアトムに続けるように促した。

「えっとね、なんか。僕たちが有利になるように、不気味な幽霊みたいなものをくれたんだ……」

幽霊。その言葉に軍人たちが反応する。流星抹殺計画の時にずいぶん苦しめられ、印象に強いのだろう。

「トレイスか……？」

「おそらく……」

軍人たちはニホン侵略の時を思い出し、眉をひそめる。

強面が作る険しくした表情に、アトムが少し怯える。視線を手元に逃がして、まばたきが忙しない。

そんなアトムの言葉から、シドウはやっぱりと言いたげに、一息吐いた。

「ＷＷＲにとってＡＭ星人は特別なんだ……」

そこに同席していたクインティアが疑問を投げかけた。ＷＷＲの行動に疑問を持ったらしい。合理的な彼女の思考と、合致しなかっ

たところがあるのだ。

「でも、それならトーナメントなんて回りくどいことしないで、直接仲間に入れるんじゃないかしら？」

「イヤ……。ヤツらは星を滅ぼすつもりだ。強くて従順な、選ばれた戦士を欲しているんじゃないか？」

過酷なトーナメントを勝ち抜いてこれるだけの強さと、ＷＷＲに対する執心を欲している。シドウの見解だ。

宇宙中から選りすぐった戦力で、ＦＭ星を滅ぼそうというのだ。足手まといはいらないのだろう。

宇宙から効率よく戦力を増強。それがノイズウェーブを制圧した理由なのかもしれない。宇宙規模からの少数精鋭は大軍隊を作るからだ。

クインティアは首を傾げた。

「そう言うものかしら……？」

「ああ。スバルが言うには、ミラとアルゴルは電波生命体そのものを恨んでいたそうじゃないか。俺だったらそんなヤツはいらん。ＷＷＲのヤツら良く考えてるよ」

その推理にスバルは付け加えた。心配症ゆえか、すでに良くない方向に考えが及んでいた。

戦力を増強していくＷＷＲ。その中にはキリン・ライトニングの影がちらつき、それが増えていく。

「もしかしたら別のブロックや、他のＡＭ星人はすでにＷＷＲの仲間になっているのかも……。ロックはどう思う？」

「ああ、違えねえだろう。ミラとアルゴルはイレギュラーだったからな」

『ポロロン……。だとしたら、かなり恐ろしいわね。キリンみたいなのが沢山沸いてこられたら困っちゃう』
『ブロロォ！　呑気なこと言ってる場合か？！　俺達の星がヤベえんだぞ！！　じっとしてられるかってんだ』
「よせよ、オックス。ＦＭ星に行こうにも、ノイズウェーブが使えねえんじゃ話にならねーだろ？」

オックスを咎めるウォーロック。「チッ……」その姿に、ジェミニは思うところがあったらしい。久しぶりに会うウォーロックに対して、疑問をぶつける。ツカサのハンターから実体化して、睨みを利かせているあたり、ジェミニにとっては大きな問題なのだろう。
ジェミニは最近思い悩む節が多々あったのだ。この辺りで疑問を解決しておきたかった。過去に飛んだウォーロックなら、何か知っているのかもしれないのだ。

「おいウォーロック、テメエ。スコルピオとやり合ったそうじゃないか？」
「あん？　今は関係ないだろう？　ＷＷＲについて、こっちは話してるんだ」

ウォーロックは、ジェミニに対して鬱陶しそうに軽くあしらう。ここは地球で、ジェミニに権力はないのだ。
しかしジェミニはやはり、胸に引っかかる事がある。それがＷＷＲと無関係とは、とても思えなかった。胸騒ぎと言えばそれまでだが、それ以上に何かが矛盾していると感じている。

「いいから答えろ、ウォーロック。……何か重大な事の気がする」
「偉そうにしやがって。スコルピオにボコボコにされたのが悔しかったのか？」

展望台での戦いを掘り起こして、嫌みを垂れるウォーロック。しかしジェミニは怯まずに、ウォーロックへ厳しく目で訴え続けた。

我慢比べをしても仕方がない。ウォーロックは毒づき簡潔に吐き捨てる。

「わかったよ、言やいいんだろう。確かに過去に飛んだが、スコルピオは取り逃がした。ヤツがどうなったか知らん。……悪いか？」

「お前……！　ちゃんと始末してなかったのか？！」

ジェミニは絶句して、ウォーロックの言葉の意味を反芻した。しかしその言葉は、それだけの意味しか持っていない。当のウォーロックは、欠伸をして悪びれる様子もない。

周りの隊員たちも、その事実は初耳だったようで、言葉を失っていた。

簡潔に言えば、危険人物を過去に野放しにしてきたと自白しているのだ。ウォーロックは溜め息を吐いて、スバルのハンターに引っ込んだ。

『だから言うの嫌だったんだよ。でも仕方なかったんだぜ？　なあ、スバル』

「う、うん……。アレしか方法はなかったんだ、ゴメンナサイ」

それに対して、ジェミニは声を荒げる。硬く冷たいテーブルを叩いて、さぞかし大変だ。ウォーロックがスコルピオを取り逃がしたおかげで、地球は危機に瀕していたのだ。もっともジェミニもその怒りの矛盾には気が付いている。だが、恐ろしくてウォーロックに八つ当たりをしてしまっている。

「ウォーロック、テメエ！　アイツが何をしたか分かってるのか？」

『あ？　何をしたんだ？　今が平和だから良いじゃねえか』

ウォーロックは事情を知らない。経緯をしらない。

しかしジェミニもそこまで言えるわけもない。「俺が地球を滅ぼそうとした。お前がそのきっかけを作ったんだ」こんな事をこの場で言えるはずはなかった。　ジェミニは怒りを抑え、喉まで来ていた言葉を飲み込む。

「いや……いい。だがウォーロック、テメエ正気じゃねえぞ！」

『うるせえテメエ！　他人事だと思いやがって！！』

会議を中断して喧嘩まで始める電波星人。堪らずヨイリーが仲裁に入った。エアディスプレイを畳み、澄まし顔だが威光はある。

「はい、ケンカはよしなさい。……でも、その過去に残してきたレギオンも気になるわね？　ロックちゃん、ホントにどうなったか知らないの？」

『知らねーよ。いねえんだから、いいんじゃねえか』

「そう……。でも、そうなると誰が、スコルピオを倒したのかしら？」

奇妙な出来事にジェミニ同様、ヨイリーも引っかかりができてしまった。

仕方がなくデン助は、会議を再開した。現状、ＷＷＲについて対策しなくてはならないのだから。

「ヨイリー博士。今はＷＷＲについて考えましょう。アトム、そのフェニックス・リボンとかいうヤツは何か言ってなかったか？」

「うーん。なんか良く分からないこと言ってたよ。俺達の願いがどうとか……契約が何だのとか……。でも、ちゃんとは思い出せない

や」

これがアトムの精一杯だろう。これ以上は酷と言うもの。デン助はひとつ息を吐いて、肩の力を抜いた。

「いや……ありがとう。悪かったな、嫌な事を思い出させて」

するとアトムが最後に何か思い出したようだ。慌てたように付け加えて、おかしなことを口走る。

「あ、その人ね。すっごく冷たくて悲しい雰囲気だった。でも、何故か悪い人じゃないような……うーん、良く分かんない」

「そうかアトム。よっぽど、怖かったんだな……」

アトムの頭を優しく撫でると、デン助は隊員たちに目を向け、これからの目的を再確認させる。

「みんな！　ＷＲの目的が明確となった今、私たちは負けることが許されなくなった。友好を結んだＦＭ星を救うんだ！！」

ｉｇｎｉｔ―０７：それぞれが抱く思い

会議から数時間がたち夜になったころ。スバルは自室で今日の出来事を振り返っていた。スバルは、重責に少し頭が痛く、先行きが不安であった。

実質スバル達のチームに、作戦の命運が懸かっている。

わずかに取りとめたＷＷＲとの繋がりは、ノイズウェーブトーナメントしかない。恐らくワタルは、負けてしまったミソラ達には非情に徹するだろう。勝つ事でしか、言葉に意味を持たせられない。裏の掟に忠実な彼らにはそれが絶対のルールだから。

スバルはベッドで仰向けに寝転がると、ぼうっと天井を眺めた。すると耳に「うらあ！」「食らいやがれ！」という近所迷惑な大声が聞こえてくる。どうやらウォーロックは、ビーストスイングの練習をしているらしい。スバルは、ベランダの彼に話し相手をしてもらう事にした。

「ねえロック。いよいよ責任重大になっちゃったね、僕たち。まさかＷＷＲがＦＭ星を狙ってたなんて」

「ハハハッ！　燃えてきたじゃねえか！　上等上等ォ」

「呑気だね。仮にも育った場所でしょ？」

「まあ、何とかなるだろ！　俺様が本気を出せば楽勝だぜ」

ウォーロックは、故郷に特に思い入れもないのか、ビーストスイングの練習に熱心だ。ブンブンと腕を振って、風呂上がりの運動に勤しんでいる。

スバルは話にならないと思い、寝返りを打ち一考した。
ＦＭ星と言えばケフェウスが気がかりだった。偉そうだが幼い友人に、少しお兄さんなスバルは、そっと心配してしまうのである。目を閉じると瞼には、緑の少年が映し出される。背伸びをしたのか、大人用のマントを羽織る小さな男の子。星の王たるには心もとない姿だ。

「大丈夫かな……ケフェウス」

スバルはそのままウトウトし始め、眠りについてしまった。

スバルが眠ったころの、ベイサイドシティのとある一室。それなりの高層マンションの部屋に住んでいるミソラは、街の夜景を見下ろしながら夜風に髪を遊ばせていた。虚ろ気な表情から、彼女も今日の会議を振り返っているようだ。
バスタオル一枚で黄昏れた空気を匂わすミソラ。ハープは心配したのか、パジャマを運んだついでに相談に乗ってあげようとする。

「どうしたのミソラ？　風邪ひくわよ」
「ありがと」
「さっきから浮かない顔。なにか心配ごとがあるの？」
「なんでもないよ……。いよいよ、最後が近いと思うと……ちょっとね」

ミソラはフェニックス・リボンの正体を薄々感じていた。レベッカから教わった周波数変換術。研ぎ澄ませた感覚は、嘘を吐いてはくれないだろう。今度相対した時は、最強の敵に忘れかけた父親を

重ねる事が起こるもしれない。ミソラは勝ち進むことに、そんな恐怖を感じていた。

そしてそのような大事な事を誰にも打ち明けられない、利己的な自分に嫌悪した。それがワタルだとしたら、戦う事が恐ろしい。敵の正体を、スバルや仲間に悟られた時の反応が怖い。怖くて、誰にも話せない。

世界が懸かっているというのに。吸い込まれそうな暗闇の宝石の中に、ミソラは飛び込んでしまいたかった。

ミソラは小さく溜め息を吐いて、ハープからパジャマを頂戴する。

ハープは、ミソラの真意を聞きだすことは叶わず、話を合わせるだけしかできない。

「最後……そうね。トーナメントもそろそろ終わりね。司会のお姉さんが言うには、残すところ、数試合ってところかしら？」

「そうだね……頑張ろう」

そしてミライはというと。

彼はアルゴル・ミラーによる精神攻撃を受けてしまい、情けないものを仲間に晒してしまった。スバル達には見られたくなかった一面だ。

彼は無心に徹しようと躍起になっていた。

サテラポリスの訓練施設で一人、ウイルスデータ相手に実戦訓練に励んでいる。精神力の弱さから、崩れた自分が許せない。リーダーは絶対の指標でなければならないからだ。

ミライは払拭するように剣を振り、対象を裂く。鋭く研ぎ澄ます戦闘周波数。どこまでも鋭く、どこまでも冷静に。剣士の基本を再度なぞり辿っていく。

その太刀筋で何もかもを切り離し、自分の弱ささえも切り捨ててしまいたい。

ミライは百体ほどウイルスを破壊したところで、剣を鞘に収めた。ウイルスの残骸が転がる何もない部屋。静かな窓一つない密室。部屋の白い壁に、自分の見た悪夢を投影してしまう。

涙を流す母親。涙も流せない自分。情けない弱虫。父の影。

ミライは苦痛に顔が強張り、体も固くいつもの調子さえ出ていなかった。転がるウイルスの傷は浅く、悲鳴が細々と耳を触る。目を落とし、腰の剣を確認する。だが剣はいつもと変わらずに切れ味よくギラついている。道具のせいにしていては、どう足掻こうと無駄だろう。

肩を落として、細く途切れそうに呟いた。

「チッ……なんてザマだ」

『ミライ様、前回の事は仕方ありません……予想外の攻撃でしたから』

「分かってる。だが、仕方ないではすまされないんだ。特に俺は……」

『あまりに気に病まないでください』

「黙れ、レイダー」

『申し訳ございません……』

「いや、こっちこそ悪かった」

ミライはそのまま同じ作業に戻る。自分を強く持とうと躍起になるしかない。

そして最後にソロだ。彼はスバル達の道を阻む、最後の壁となる

のである。そんな彼は一人考えていた。

自分は何者なのか。孤独とは何か。孤高とは何か。絆とは何か。

キリン・ライトニングと交えた信念と信念。ソロの信じてきた、自分だけの強さ。何者にも頼らない事で初めて完成した、自己の拠り所。孤独と孤高こそソロの原点にして真理。しかしそれが通じずにソロはキリン・ライトニングに敗北した。それどころか、地球までの道のりの間、介抱してもらうという失態まで犯した。

ソロは負けて力を失った。オーパーツを奪いに行ったつもりが、逆に奪われてブライ・オリジンの力を失ってしまう。それでもトーナメントを勝ち抜き、這い上がる。彼はもう一度、自分の信念の正しさを示す舞台まで上り詰めていく。

裏の世界の強敵を薙ぎ払い、がむしゃらに戦いソロは、孤高の正しさを、強さという普遍の理論で固めていくしかなかった。

その時、ブライは敵の電波体の胴体を、鮮烈にラプラスブレードで切り裂いた。「ギャアア！！」敵が悲鳴を上げてリングの上をごろごろ転がる。その裏の住民の腹から、ノイズデータが血液のように噴出し、地面に赤黒い道を残した。ブライはそれに何の関心も示さずに、立ち上がれない敵に止めを刺すため走りだす。

今、ブライはトーナメントの試合を戦っている最中である。オーパーツは失い、手にする道具はラプラスのただ一つ。

試合の最中にも関わらず、ブライは目の前の敵に集中せず、先の事をずっと繰り返し考えていたのだった。

「この程度ではダメだ。俺はもっと強くならないといけない。どうしたら強くなれる。どうしたら……」

頭を悩ませながら、ブライは敵にまたがるように仁王立ちし、ラプラスブレードを振りかぶる。鋭い切っ先がいくつもコロシアムの照明を反射し、敵の電波体を威圧した。

ブライの瞳は、どんよりと冷たい印象だ。これでは強がる事もせずに命乞いが最良かもしれない。黒い電波体は、腹を抑えつつ命からがら訴えた。

「た、助けてくれえ！　俺の負けだ！！」

しかしブライは止まらない。ブライは強さを欲している。絆をのたまう輩に負けないだけの、圧倒的な強さが必要なのだ。まずは冷酷に徹しないと、その強さは近づいてはくれない。

宣言されるブライの勝利にブライは耳を貸さない。駆け寄る審判をはね飛ばし、敵を葬りにかかる。

「強さに近づくために……」

ブライは敵の頭部に力の限り剣を振りおろした。するとブライの手に残るふわりとした違和感。剣は突然、敵の脳味噌を披露する前に形を失ってしまった。鋭利だった刃の塊が霧散して、ラプラスに姿を戻したのである。

ラプラスの無言の反抗にブライは、右腕の暗黒闘気の炎を燃えあがらせた。

「キサマ……道具の分際で逆らうのか」

何かを訴えるような目で、ラプラスは見つめてくるがブライは燃え盛る拳で殴りつける。その光景は仲間割れでしかない。

しかしブライにとってはラプラスの行動は、非情に大きな意味を持った革命に近い出来事である。デューオの神殿での、謎の同胞とのやり取りから、ラプラスはただの道具ではない事をブライは悟り始めていた。それが気にかかり、焦りを覚えてしまっていたのだ。

それからか、ラプラスはたびたびブライに反抗の意志を示すので

ある。意志のない人形だったはずのラプラスに現れた自我に、ブライは混乱を禁じえない。孤高を貫くブライにとっては、ラプラスはただの道具でなくてはならない。

どうして行動を共にしているかなど、考えた事もなく考える必要もない。握った拳に残ったラプラスの存在を覚えながらも、ブライは考えを改めない。

するとラプラスは腫れた頬を押さえる事もせずにムクリと起き上がった。再びブライを見つめて、不気味な幽霊は何かを訴える。ブライにとってはラプラスは道具でしかない。だが、ラプラスにとってはブライは違う。

「ウ……ウアア……」

「黙れ。チッ……興ざめだ」

相変わらずの亡者の呻き声でしかないラプラスの言葉。毒気を削がれたブライは敵に背を向けて、会場を立ち去ろうとする。ラプラスはその場に立ちつくす。

相変わらず冷めた様子の孤高の少年に、ラプラスはとうとう重い口を開いたのだ。ラプラスにとってはブライは確かに特別だった。

「も……もう、戦いなんてヤメようよ。お兄ちゃん……」

ラプラスから発せられた初めての言葉。

鋭い切れ長の目を嘘のように丸くさせ、ブライはラプラスに振り向いた。勝者であるはずのブライは、敗者のように呆然と立ちつくす。

「お、お前……」

ソロとラプラス。オリジンとトレイス。デューオの神殿での言葉から、始まった異変。それはソロの本質が芽生え始める事を意味していた。

ソロの存在理由と己の正体を探す旅が終着へと向かい始める。

そして月日は流れ、二次トーナメントの決勝戦へとソロは駒を進める事となった。この試合が終われば、ＷＷＲとの最終局面を迎える。

その決勝戦の対戦相手はスバル達だった。エアディスプレイのガイドデータには、ロックマンの姿が映っている。

薄暗い隠れ家の中、ソロは口元を歪ませて、笑みというには邪悪な物を浮かべた。

ソロは変わり始めたラプラスに困惑しながらも、絆と孤高との決着に闘志を燃やしたのである。

「星河スバル……ロックマンか。面白い……」

ignit—08：裏取引

チームＡＭを撃破してから一週間以上が経った、二二ＸＸ年七月一六日火曜日。

スバルのチーム六人は、正真正銘の黒く深い闇の中を進んでいた。ウェーブロードの脇に少しの灯火が申し訳程度に設置されているだけで、辛気臭い場所だ。ブライと決着をつけるため、そんなトーナメントの最終舞台、ノイズウェーブ第九階層ブラックウェーブの中をスバル達は歩いていたのだった。万感の思いからか、その足取りは重い。

だがメトリーはその重い空気を気にする素振りすら見せず、真っ黒いノイズでお団子を作って遊んでいた。ハープ・ノートに連れられるその様子は、黒い海の中をお散歩でもしているかのような、平和で混沌とした印象だった。

グリット・メトリーは不謹慎なメトリーを目の端で捉えているが、叱る様子はない。スバルと以前を話した、ブライについて考えているらしい。

つまらなく思ったメトリーは、その悩める頭に団子をぶつける。砕けた団子から、黒い霧がもやもや広がり、グリット・メトリーは咳き込んだ。

「ゲホゴホ！　何をするんです、メトリー？！」

「だってー、みんな黙っててつまらないからー」

「それはそうですよ。今回の相手はブライですから。特にスバル君には思うところがあるんでしょう」

「キャハ！　ブライだってー変な名前ー」

メトリーは、とてとてとブラックウェーブの中をはしゃぎまわって、蝶々に似たブラックノイズを追いかけ始めた。

ロックマンはクスリと笑って、グリット・メトリーを気づかう。

「元気だね。メトリーは」

「昨日の夕飯は、あかねさん手作りのから揚げでしたからね」

「ハハハ。そういえばロックもやる気満々だったよ」

「いや、スミマセン。あの……ブライさんに勝てるといいですね」

するとロックマンは思いつめたように、グリット・メトリーを見上げた。ブライはロックマンと対を成す存在だ。絆と孤高は交わらない。

それでもロックマンは、矛盾した感情を抱いていた。

「いや。ただ勝つだけじゃダメだと思うんだ。ソロには、絆の大切さを知って欲しい。

戦いを通して、それを分かって欲しいんだ」

ロックマンは微笑んで続けた。

「確かに独りで困難を乗り越える強さも必要だけど、それだけじゃ乗り越えられないものもある。

ソロには僕たちと一緒に戦ってほしいんだ。同じ地球に生きる一員として」

夢見がちな妄想を繰り広げるロックマンに、スコープ・スナイパーが文句を垂れる。頬を膨らませて、さぞ不満が溜まっている様子。

「いやスバルン。それは無理でしょう！　サテラポリスから、何度も作戦の協力お願いしてるのに全無視だからねアイツ！」
「フフ、ソロらしいですね」
「いや、笑っている場合じゃなくてですね！」

するとソウル・レイダーがスコープ・スナイパーを無理やりどかして、ロックマンの気持ちを確認する。戦いに甘さはいらない。

「星河、甘ったるい情を捨てておけ。相手は倒すべき敵で、俺達はそれに勝つ。それだけで良いんだ」

厳しいソウル・レイダーの言葉だ。それを聞いていたオックス・ファイアが茶化しにかかる。チームＡＭとの試合で見せたミライの恥ずかしい姿を、彼はここ最近よく蒸し返していた。普段からミライに厳しく接せられている仕返しのつもりだろう。ニヤニヤと画に描いた悪ガキの態度だ。

「偉そうに言ってるけどよ。また泣きだしたりなんかするなよ、リーダー？　ワハハ！」
「牛島！　キサマ……！！」
「や、やめなよ。二人とも」

ロックマンは慌てて、仲裁するがソウル・レイダーは剣を抜いていた。オックス・ファイアは素早くメトリーの陰に隠れて情けなかった。何も隠せていない辺りが頭の良し悪しを語っているよう。
今思えば、ミライとゴン太はいつも仲が良くない。するとハープ・ノートが、図らずとも、その険悪な空気に待ったをかける。
「あ、着いたよ」その言葉から、目的地に着いた事を教えてくれる。指差した先には、暗黒街が広がっていた。背の高いビル群の間を、黒い霧が立ち込める怪しい街並み。試合会場であるウラスクエアだ。

「さあ、みんな。気合入れて頑張ろうね！」

グッとガッツポーズを作るハープ・ノートに、調子よくオックス・ファイアとスコープ・スナイパーも続いた。

「ブロロ！　燃えてきたぜー！！」

「よーし、やったろうじゃないの！」

張り切るオックス・ファイアを先頭にした一行は、ついにウラスクエアの中に足を踏み入れた。

黒いノイズで荒れた広場には、異星の電波体で溢れかえっており、コロシアムへと続く長い行列を作っていた。今日は決勝戦なので観戦をしようと訪れたのだろう。

しかし誰もかれも堅気の輩ではないらしく、鋭い目つきに、一つや二つではない傷で辺りに睨みを利かせている。それでも列を作っている以上は、裏の世界ではまだマトモな人種なのだろう。問答無用で暗殺に来る人種もいたのだから。

ロックマンは「裏世界でも結構賑やかなものだなあ」とごった返す広場を見て思った。オックス・ファイアはさっそく、手近の露店にフラフラと足を運ぶ。メトリーも付いていこうとするが、怪し気なオーラを漂わしている玩具が並んでいる上、店員がうわ言を垂れている。なのでハープ・ノートに待ったを掛けられてしまう。

ソウル・レイダーはグリット・メトリーと共に決勝戦の手続きをしに、黒い卵みたいなコロシアムに向かう事にした。その時、残りのチーム員にこれからの予定を告げた。

「俺は夜太郎さんと、運営委員会にエントリー申請をしてくる。試合開始まで、お前らはウラスクエアで休憩でもしていろ」

「メトリーの面倒をお願いしますね」

「一応言っとく。一見、賑やかな雰囲気だが裏の世界である以上くれぐれも油断するな。フラついてる牛島にも探して言っとけ」

ハープ・ノートはビシっと敬礼して、メトリーの手を繋ぐ。気晴らしには少し黒過ぎる場所だが、じっとしているよりはマシだ。

「了解！　じゃあ、ちょっと遊んでこよっか」
「うん！　行こう、ミソラ！」

ミソラはメトリーと遊び、ロックマンとスコープ・スナイパーは人ごみに消えたオックス・ファイアを探すことになった。

「じゃあ、僕とキミドリさんはゴン太を探すから」
「わーい。スバルンと二人きりだー！」
「ちょっと、近づかないでください」
「ひ、ヒドい……」

ロックマンは無視して続ける。

「じゃあ、ミソラちゃんはメトリーをよろしく。お昼頃にまたこの広場で落ち合おう」
「うん、分かった」
「ミソラ、速くー」

メトリーがハープ・ノートの手を引っ張る。ロックマン達は人ごみの中に消えていった。

ハープ・ノートは、メトリーとウラスクエア観光をすることになったようだ。ロックマンとスコープ・スナイパーを見送ると、二人はウィンドウショッピングをするらしく、ロックマンとは別の方向に歩み始めた。

しかしソウル・レイダーの睨みは的中しており、二人の様子を、店の並ぶ物陰から人影が見張っていた。ハープ・ノートとメトリーは気が付かずにそのまま、愉快に歩いていく。

「へえ、なるほどね。コイツらが、例の決勝進出者か」

「女の二人、楽勝」

黒く怪しい人影は二人の後をつけていく。普段なら、いかにも不審な彼らは大いに目立つだろうが、ここはウラスクエアだ。似たような怪しい者しかここにはいなく、上手く溶け込んでいたのだ。

「わあ！　ミソラ、見てよ。すっごい綺麗なノイズの宝石だよ！」

「へえ、ノイズでも固まったら石みたいだね」

それからしばらく経ち、落ち合う時間が近づいたころ。女の子な二人は闇市の宝石商の元に訪れていた。露店形式で、適当に地面へとばら撒かれたノイズの結晶。それを眺め、女の子二人は惚れ惚れしている。濃い赤いものが比較的安価なクリムゾンノイズの宝石で、深い黒が貴重なブラックノイズの宝石だ。ここのウラスクエアは一帯はブラックノイズが豊富らしく、比較的安価な値段でそれは売っていた。見た目もメトリーが作ったお団子と大差はなくお手軽だ。

それでも手が出るわけはなく、二人は見て楽しむ他ない。

「わーホントにキレイだね」

「こういうのプレゼントして欲しいんだよね。女の子って」

「そうだね。スバル君からもらえたらどれだけ嬉しいことか……」

「へえー、そうなんだ！」

ニヤリとするメトリー。ハープ・ノートは頬を染めてしまう。

「ちょっとーやめてよ。メトリーちゃん！」

ハープ・ノートは頬を抑えてくねくねする。メトリーはそれが面白くて、さらに追い討ちをする。

その時、背後から例の二人組が少女に声を掛けた。機会をうかがっていたのか、宝石を話題にして興味を引こうとする。

「おやおや、お嬢さん達。その宝石が欲しいのかな？」

それはニヤニヤして、歩み寄ってくる中年くらいの電波体だった。金は持っているのか、やたらめったら金色のパーツで体を装飾している嫌味な成り金の宇宙人だ。隣には筋骨隆々な、ボディガードらしき電波体を引き連れている。見たところ、電波状の無定形の部分が炎に燃えており、ＡＭ星人かＦＭ星人のどちらかだと思われる。角の生えた人間といった容姿だ。

怪しさという言葉を三次元に起こしたような二人組に、ハープ・ノートは訝しげに眉をひそめた。

「ど、どちらさま……？」

「私は、裏世界で活躍するギャンブラーです」

金歯の映える笑顔で彼は言う。

「フッフッフッ。決勝進出おめでとうございます。その活躍は裏世界でも中々の評判で……」

「あの……何かご用ですか？」

「ミソラーコイツ変だよー」

メトリーはハープ・ノートの陰に隠れて、ギャンブラーを警戒しているようだ。

ギャンブラーは笑顔を崩すことはしない。

「用ですか……。そうですね。それを語るにはまず、ノイズウェーブトーナメントの裏の顔を言っておきましょうか」

「裏の顔……」

「そう。このトーナメントは、チームの勝敗にお金を賭けているのですよ。もちろん宇宙で、通貨は違うのでそのノイズの宝石を賭けるのです。いわば、賭博ですよ賭博。

なぜ観客の罵声が、あれほど熱心なものか分かってくださいましたか？」

ギャンブラーは地面にばら撒かれたブラックノイズの結晶を指差

すと、ニッコリと笑った。ハープ・ノート達に取り入ろうとしているのか、親しみやすさを演出する。

「じゃあ、これをアナタに贈らせてもらいましょう」

ギャンブラーは拾い上げた黒曜石のようなそれをハープ・ノートに差し出す。すると簡単に目論見を打ち明けた。

「私からの要求です。次の試合負けてもらえませんかね……？　ソウル・レイダーにロックマン……中々面白い倍率なんです。私に人山当てさせてくださいよ」

ブライに賭けているのであろうギャンブラーは眼光を光らせ、ハープ・ノートに訴える。単騎のブライと、裏で有名なソウル・レイダーとロックマン。銀河連邦を退けたスバル達。前評判はチームオメガよりなのだろう。

しかしハープ・ノートは首を振った。八百長もそうだが、負ける事は許されない。ミライやスバルの、今までの努力や戦いの数を思い返せば、首は縦には動かなかった。

「い、いやです。私たちは全力で戦います」

「ふぅー、これは残念……」

ギャンブラーは肩を落とすと笑みをやめ、本来の冷酷さを垣間見せた。そのまま隣の付き人である屈強な電波体を見上げると命令を口にする。

「なら、力づくで訴えましょうか……。やってしまえ、ボーティス」

「了解……」

筋骨隆々な彼は、牛飼座のＡＭ星人である。さらに付け加えれば、別のブロックでの優勝チームのリーダーである実力者。巨躯に任せた威圧感で、ハープ・ノートを怖じ気させる。

それでも抵抗の意思から、ハープ・ノートはギターを構えてみる。だが、隣にロックマンもソウル・レイダーもいなく、小さなメトリーしかいない現状では厳しいばかりだ。

「や、やるっていうの？！」

「今からでも、私の言う事を聞いておくべきだ。ボーティスはかなり強いぞ？」

その言葉を受けてボーティスはハープ・ノートをしっかりと指差す。確かに力強い印象だ。筋肉の鎧に隠された強い戦闘周波数がにじんでいる。

「オレ、ＷＷＲのメンバー入りが決定……。戦闘周波数４１００ギガヘルツ。お前、たったの２６００ギガヘルツ。勝ち目ない」

「ミソラー逃げようよー」

メトリーがハープ・ノートの手を引っ張る。彼女の言う通りだ。この場で無駄な戦いを行う事は定石ではない。

くるりと背中を見せて、逃亡を図る。行儀悪く露店の敷居を飛び越えた時だった。

「パチン」ギャンブラーが指を鳴らす。するとそれが合図なのか、露店を取り囲むようにボーティスと似たような電波体が、闇市の物陰から現れ始める。

場所は闇市、裏世界。喧嘩が始まろうと、戦闘が始まろうと、店の店主や柄の悪い客は見向きもしない。それどころか見物を始める始末。ハープ・ノートは逃げ場を失ってしまった。

ギャンブラーの計算のうちなのか完璧な包囲網が出来あがった。

流石に計算高い対応に、ハープ・ノートはゴクリと唾を飲んだ。

「準備万端ってワケね……」

「こっちも、賭け師なんでね。不測の事態は見越してるのだよ」

得意げに語りギャンブラーとボーティス達はハープ・ノートに詰め寄る。

「抵抗はやめとけ、降参が正しいビジネススタイルだ」

「周りのコイツらはオレのチームメイト。力はオレとほぼ同等……。絶体絶命」

「ミソラー。どうするのー？」

「ど、どうしよう……」

辺りを見回そうと、死角はない。どこからでも敵はハープ・ノートを弄ぶ事が出来る。それでも敵は賢明で、実力者のハープ・ノートを警戒してか、不用意に近寄っては来ない。

一定の距離を取って、銃器で威嚇をしてくるのである。

メトリーがいる以上、無茶はできずにハープ・ノートは身じろぎ一つ許されない。

「さあ、どうするお嬢さん？」

「くっ……」

「ミソラぁー」

「五つ数えるうちに答えを。ただでさえ辛気臭い場所だ。葬式なんてやってられないだろう？」

「どうすれば……」

ギャンブラーはその間も握りこぶしから指を一つずつ立てていく。手のひらが出来あがった時、一斉射撃の合図とするのだろう。

ハープ・ノートはもうどうしようもなくなり、バトルカードのバリアで身を囲う。それで乗り越えられるかどうかは分からない。

「それが答え……」

ハープ・ノートの抵抗の意思を見届けると、ギャンブラーの手は大きく開かれた。

「やれ……！　ブライの不戦勝だ」

冷たく言い放つギャンブラー。だがそれに応えたのは、ボーティスの野太い声ではなく、少女の透き通る声だった。もちろんハープ・ノートは歯を食いしばっていたので、声の主ではない。

それは見知らぬ者からの助けの音色である。

「……ソレは……させないわ」

その声はハープ・ノートの足元から響く。するとハープ・ノートの影が盛り上がるように山なりに起伏して、人の形を作っていく。

「良く分からねえが、やれ！」ギャンブラーの嘲笑の混じった声が響く。ボーティス達は事態が飲み込めないまでも、銃器をハープ・ノートめがけて撃ち込んでいく。ガンガンと固い金属の砕ける音が、少女の耳をつんざいた。

しかしその音の反響は耳に厳しくても、体に傷一つ及ばせる事はなかった。ハープ・ノートは呆気に取られた。目の前には少女がいた。長い銀髪に隠れた小さくて可愛らしい背中。そんな彼女が二人を守るように、電波の障壁をいくつも展開して弾丸を全て受け切っていたのだから。

くるりと甘い香りの銀髪が舞うと、少女はハープ・ノートにささやかな笑顔を送った。その目は紅い宝石のようで、綺麗に揃った銀

色の髪の間で輝いている。肌はどこまでも白く、ハープ・ノートは思わず目を奪われた。アイドルとしてそれなりに、顔の分別は付く方だが、そんな中でもひときわ整っていたのだから。

そして不思議な少女だ。長いスカートに紫のドレスのような服装で、裏の世界にとにかく馴染まない。何より生身で電波世界にいる事が普通ではない。裸足で、軽装を極めたような格好だ。どこから来て、どこに行くのかまるで予想をさせてくれない。

そんな少女はいくつも謎を作りつつも、ハープ・ノートへ端的に問いかけた。

「ケガ……ない？」

「う、うん。でもアナタは一体……？」

ハープ・ノートは戸惑うしかない。

しかしメトリーはその少女を不思議そうに見上げていた。メトリーは自分と、この少女が近しい存在であると感じ取っていた。

「ミソラ、この子普通じゃない。周波数の感じが人間じゃないよ」

「そうね……ワタシとアナタ……似てるかも」

銀髪少女は、メトリーに薄い笑みを浮かべると、ギャンブラーの方に向き直った。

ギャンブラーは呆気に取られている。電波の障壁を操って攻撃を凌いだからではない。その彼女の戦闘周波数が凄まじいからだ。

優勝チームのボーティスもその力に気が付いた様子。決して彼女から注意を怠らなかった。

「戦闘周波数、オレより上……コレはマズイ」

「くそ！　何だあのガキ。あのチームにあんなのいなかった……！」

地団太を踏むギャンブラーだった。そうやって尻込みしているうちに、騒ぎを聞きつけたチームオメガの一員が駆けつけてくる。ロックマンの呼びかける大声がミソラの名前を探していた。大慌てで来たのだろう、息が切れている様子が分かる。

「ミソラちゃん、そこにいるんだね！」

「スバル君！　ワタシはここだよ」

ハープ・ノートが飛ばしていた救難シグナルが届いたらしく、ロックマンは遅い登場を果たす。オックス・ファイアとソウル・レイダーを始め、闇市の場にチームが揃った。野次馬は噂のチームの登場におずおずと道を明けわたすしかなかった。

ギャンブラーは、思わぬ邪魔から一気に形勢が悪くなってしまったのだ。

言いつけを守らなかった事を気にしてか、ソウル・レイダーの一喝がハープ・ノートに浴びせられた。

「響！　油断するなといっただろう」

「ご、ごめんなさい」

「くそ……！　手間取ってる間に全員登場か……」

ギャンブラーは苛立ちながらも、ボーティスに目をやって何とかしろと命令する。

ボーティスも瞬時に敵の戦力を測ってはいたが、こちらは思わしくない様子。ソウル・レイダーを筆頭にして、とてもではないが生易しい数値ではなかったらしい。

「二体に加え、増援７６００、６９００、３５００、３４００、３３００ギガヘルツ……こちら４１００、３５００ギガヘルツが六体。戦闘の続行、危険……」

ボーティス達は武器をしまい、結果としてハープ・ノートと立ち代るように逃亡を図った。野次馬の中に紛れるように、背中を見せて足早で逃げていく

しかし血の気が多いウォーロックが、逃げるその集団の方へロックバスターを無理やり照準させた。ロックマンは左腕の相棒が勝手に暴れて戸惑う。

「ちょっと、ロック！」

『逃がすかバカヤロー！』

しかしソウル・レイダーは、ロックバスターの銃口を剣で遮り止めにかかった。

「やめろ」

『なんでだよ！　明らかに敵だろうが！』

「もうすぐ試合だ。アイツらに構っている暇はない」

『しるかよ。どけ！』

ウォーロックは無理やりロックバスターで追撃しようとする。だがすでに敵の姿はなく、野次馬がざわついているだけだった。

『チッ、逃がしたか！』

「もう、ロックも勝手に暴れるなよ」

ロックマンは左手の甲を叩いて、好戦的すぎるウォーロックを叱りつける。

それに対しウォーロックがかんしゃくを起こすが、ロックマンは無視してハープ・ノートの方に歩いていく。

「もうー、待ち合わせの時間になっても来ないから心配したんだよ？」
「エへへ。ごめんなさい」
「でも、良かったよ。無事なようで」
するとロックマンは隣の銀髪少女に目が留まった。「えっと、この子は？」ハープ・ノートに目配せして、説明を求める。
「ワタシを助けてくれた子だよ！」
「……よろしく」
少女はハープ・ノートの紹介を受けると、ぺこりと頭を下げた。口数が少ない子なのか、必要以上に喋らず愛想がない。
するとウォーロックが柄の悪い様子で突っかかる。
『なんだコイツは?!　電波体か知らねえが、変な格好しやがって。ここはお家じゃねえんだよ』
「ちょっと、やめなよロック。失礼だろう」
申し訳なさそうに頭を下げるロックマンに、銀髪少女はクスリと笑みを浮かべる。
ハープ・ノートはいい加減に名前を尋ねようと思ったらしく、少女に聞いてみる。
「あの、お名前は……？」
「ワタシ……カノン」
カノンという少女はそれだけ告げると、やはり必要以上に口を開かない。「それじゃ……」と短く言うと、そのまま駆け足でロックマン達の元から立ち去ってしまう。

ハープ・ノートは、もやもやとした様子でその子の後ろ姿を見送った。人ごみの中に消えると、ついつい口に出てしまう。

「なんていうか、不思議な子だったね」
「でも、可愛い子だったね」
『おっ、スバル。ほの字か？』

ここぞとばかりに隣に現れ、からかいだすウォーロックだ。ニヤニヤしていて楽しそう。
悪乗りしたハープ・ノートの視線がじっとりとしていてロックマンは我慢ならない。

「ちょっと、やめてよ。別にそう言う意味じゃないから」

そこにソウル・レイダー達も話に加わる。メトリーはグリット・メトリーに抱きつくと、そのまま電波化して同化する。

「しかし響。さっきのカノンとか言う少女……」
「うん、ただ者じゃないね」

するとウォーロックは腕を組んで難しい表情を作る。どうやらカノンに対して良くない気持ちを抱いているらしい。先の暴言も、不信感からの結果だったのだろう。すっかりカノンに見惚れてしまっているオックス・ファイアとは対照的だ。

「それにしてもアイツの周波数。イヤな感じだったぜ」

ウォーロックは、カノンが残した周波数の独特の色（とくちょう）を感じて口に出したのだった。

1963

ｉｇｎｉｔ―１０：最後の壁は孤高

そのころ八百長交渉に失敗したギャンブラー達は、上手く逃げ切っていた。彼らは、ウラスクエアの建物の群れが作る、路地裏で身を潜めている。

「チクショウ！　とんだ邪魔が入った！」

ギャンブラーは大金を手にするチャンスを潰されて、憤慨していた。設置されていたゴミ箱を蹴り飛ばして、大荒れである。ゴミが弾けて、ネズミ型の小さなウイルスがわらわらと逃げだす。ギャンブラーはそれに唾を吐きつけた。

余計に汚くなった路地裏の景観を眺めながら、依頼主にボーティスが言い訳をする。

「ヤツら、強い。仕方なかった。アレが最善の判断だった」

「言い訳は聞いてない！　さて、チームダブルプリティーにはどう、報復してやろう」

ギャンブラーはしつこくスバル達を付け狙うつもりらしい。彼は裏の住民でも、暗殺者と似たような人種である。どこまでも狡猾で、しつこく絡みついてくる性質の悪さである。

ギャンブラーは次なる非道な命令をボーティスに告げようと、彼に向き直る。しかしボーティスはギャンブラーからそっぽを向いて、大通りに面した方を望んでいた。

そこから街頭の光が差し込んでおり、チョロチョロと動き回るネズミの影が剣のように伸びていた。

「おい、何をボケっとしている。これからの手はずを聞け」

「敵、新たな……」

ボーティスはそれだけ告げる。ギャンブラーは怪しく思い、大通りの方を覗きこむ。明かりの眩しさに目を細めてしまうが、そこには人影が確認できた。それは、こちらに向かって来ているようだ。

小さな影の短剣の中、大きくて長い剣がジリジリと付き迫っており、プレッシャーを感じさせる。

「なんだ……誰だ、アイツ？」

逆光で正体までは確認できないが、手には刃物という刃物を無理やり付け足したような凶暴な形の武器を握っている。その事から、向かってくる黒い人影が敵意を示している事が分かる。

そして黒い人影が、身長の割に低い声で淡々と冷たく言ってきた。

「お前らだな？　俺とロックマンの戦いに下らない茶々入れをしようとしたのは……」

スッと剣を構える人影。すると刃の表面で光が反射され、その正体が割れた。ギャンブラー達ににじり寄ってくるのはブライであった。不快気に、目付きを鋭く尖らせてギャンブラー達を睨んでいる。

ブライの刺々しい周波数から逃げるように、ネズミは路地裏の脇に逃げる。ギャンブラーは一歩退いて、上ずった声でブライに言葉を返す。

「な……だ、だったら、どうした？」

命の危険を感じたギャンブラーは、ブライを指差しボーティスに命令を下す。

「賭け金は惜しいが、やってしまえボーティス！」

しかしボーティスは動かない。いや、動けなかった。ブライは手をかざして、ボーティスの周りに柵状の電波障壁をいくつも発生させ即席の檻を作りだしていたのだ。

ブライは今までの戦いから、電波障壁の新しい使い方を身につけていたようだ。ボーティスは身動きが取れずにゾッとした。

「ふん、電波障壁の牢に動けないか？　なら、もっとだ」

ブライはそう言うと、残りのボーティスの仲間に対しても電波障壁の牢獄に閉じ込めてしまう。ギャンブラーは縮みあがって、尻もちをついてしまった。

完全に戦意を失ったギャンブラーを、ブライは見下ろす。

「これ以上、俺の邪魔をするというなら容赦はしない……」

「ひい……！」

「俺の前から消えろ」

静かなブライの怒りをまともに向けられたギャンブラーは慌てて逃げ出す。何度かばら撒いたゴミに躓いて転び、さぞ情けない様（さま）だ。

「フン……情けないヤツだ」ブライは剣を肩で担ぐと、鼻で笑いその場を後にした。向かう先はロックマン達との決戦の場だ。

「孤高と絆……どちらが正しいのか決着をつける」

『……』

ラプラスブレードはラプラスに姿を戻すが、ブライの言葉に返事を返さなかった。

「ラプラス……お前は感情のない俺の道具だ。いいな？」

そして決勝の舞台であり、ＷＷＲとの最終局面を懸けたウラコロシアム。そこは最終戦とだけあって、観客の入りは超満員だ。そして大型エアディスプレイによる実況設備も申し分ない。いつもの実況のお姉さんも感慨深そうに、アナウンスを流していた。観客たちも相変わらずの怒号や罵声の嵐で、裏世界での戦いにおける馴染み深い空気を作り出す。

そんな熱狂した渦のど真ん中に闘技リングがあり、そこで戦いが行われる。それに面した選手控え用のベンチでは、ロックマン達が最後のミーティングをしていた。

ソウル・レイダーは五人の顔を見つめ、今までの戦いを語り士気を高める。

「俺達はとうとうここまで来た。俺達はそのたびに強くなった」

ロックマンを始め戦いの記憶を辿る。そのたびに彼らは強くなった。

「懐かしいな銀河連邦との戦い……」

「そして周波数変換術を身につけたんだよね」

「ブロロ……キリン・ライトニングとの勝負もあったな」

「ニホンが侵略されそうになったりもしましたね」

「そしてチームＡＭを倒して今に至るってワケ！」

それぞれの出来事。言葉で語るにはあまりにも多くの出来事が巡り巡ってきた。それを乗り越えて、今のチームが出来あがったのだ。
ＷＡＸＡ本部で出会った元気なお姉さんのキミドリ。
裏の世界で出会った腰の低い夜太郎と無邪気なメトリー。
過去と現在を繋ぐ、ミソラを取り巻くＷＷＲの不穏な影。
成長するスバルとミライに、必死に食らいついたゴン太。
最強を背負わされ、そして誰よりもか弱かったミライ。
ロックマンとして、ウォーロックと共に戦っていくスバル。

何が欠けても、この場所で、このメンバーで、この気持ちでここにはいなかっただろう。
ソウル・レイダーは拳を握り、思いの丈を言葉に起こす。

「このチームで今まで戦ってこれた事を俺は誇りに思う。今までよく俺に付いてきてくれた。ありがとう」
「リーダーったら、柄にもないこと言っちゃってさ」
「でも、僕たちの戦いはまだ終わりじゃないよね？」
「そうだ。スバルの言う通り、あと一試合残ってるぜ！」
「地球を救うため、宇宙を救うため、ＦＭ星を救うため、だよ！！」
「では絆の強さ、見せに行きましょうか」

「そうですね」ソウル・レイダーは笑みを浮かべて、拳を突き出す。
ロックマン達も続き、拳を突き合わせた。互いに頷きあい、気持ちを一つにする。

「さあ、いくぞ！」

ソウル・レイダーがベンチから、飛び出すとロックマン達も続く。

実況のお姉さんの出番だ。

《さあ、いよいよ出てきました！　数々の名試合を生み出してきたチームダブルプリティーの登場です！
戦いのたびに強くなる、奇跡を起こすスーパーチームだー！！》

実況のお姉さんは相変わらず元気の良い語り口だ。しかし意外なことに、今回は観客席の方からも、声援がちらほらと聞こえてくるのだ。おそらくスバル達が今まで見せた、一生懸命な戦いぶりに心動かされた人達なのだろう。「死ぬつもりで頑張れよー！」「期待してるぜ、バカヤロー！」「ミソラちゃーん。応援してるぜー」言葉は綺麗ではないが、それでも確かに応援に違いない。
ロックマンはくすぐったくもあり、今までの戦いは本物だったんだと感慨深かった。

「はは……。応援なんて、初めてかも」
『スバル！！　笑う前にシャキッと気合入れとけよ！』
「分かってるよ。ロックこそ、あまり力み過ぎないように」

するとハープ・ノートがリングの向かいを示した

「スバル君。ブライが来たよ」

ロックマンの向かい側のベンチからはブライがとうとう出てきたようだ。
チームでの出場が通常のこのトーナメント。そんな中での彼は異端であろう。そして何よりも、その自分だけを信じた戦いで決勝の舞台まで上り詰める事が脅威的だ。
それらの要素から、少なくない観客がブライに対して一目置いていた。ブライはロックマンとは違った戦いざまで人の心を動かして

いた。もっともブライにとってはそれは副産物以外のなにものでもない。彼に映っているのはロックマンただ一人。

周りの雑音に耳すらかさずに、一歩一歩リングに上がってくる。そんな不敵な様子にお姉さんがはつらつと言い表す。

《さあ、対するはたった一人の力でここまで勝ち抜いてきた脅威の少年、ブライ！！　手にする武器だけで、裏世界の強敵を打ち破ってきました。

まさに対照的な両チームの戦いが始まろうとしています！！》

ignit―11：ロックマンVSブライ

ロックマン達とブライがリングの上で向かい合うと、お姉さんが今回のルール説明を始める。

《では、今回のルール説明を始めたいと思います。何を隠そう、スーパーシンプルな一対一のデスマッチの勝ち抜け方式です！　しかし、ブライ選手は一人なのでかなり不利ですね！！》

「フン、関係ない……」

ルールなど最初から眼中にないようで、ブライはラプラスを呼びだして隣に従えさせた。戦いの準備は万端なようだ。

ロックマンはブライの静かな闘志を受け取ると、ソウル・レイダーに願い出た。

「ミライ君、ここは僕にやらせてもらえないかな」

ロックマンは口では確認してはいるものの、すでに完全にブライしか目に入っていなかった。集中している様子が、ひしひしと伝わってくる。ソウル・レイダーは息を吐いてみせると、ロックマンの意志を尊重した。

「その様子だと、止めても無駄みたいだな。全力でぶつかってこい」

「ありがとう」

『ポロロン、頑張りなさいな』

「後に私たちがついてるからね」

ハープ・ノートがロックマンの肩をポンとたたいてウインクした。ウォーロックはそれに対して、自信満々といった様子で返した。

『いや、俺達で終わらせるから、その心配は無用だぜ！』

「そうだね。勝つよ、ブライに！」

意気込んだ様子のロックマンは、しっかりとした足取りでブライの方に歩んでいく。その様子を見届けると、残りのチーム員はリングの外に退散した。大きなリング上には、ブライとロックマンの二人だけとなる。

ブライは多くは語らずに、向かい合うやいなや一言だけ口にした。

「お前は……何を手に入れた？」

「絆や友達、家族だよ……。僕はたくさんの繋がりを見つけたんだ」

ブライの肩からわずかに綻びた周波数が、火の粉のようにチリチリと揺らいだ。ロックマンの口から出た言葉に嫌悪したのか、目付きはより鋭くなっていく。目の前にいるロックマンはブライと正反対の存在である。ブライはたった一言の質問で認識した。

そんなブライの様子にロックマンは安心したように微笑んだ。

「キミは相変わらずのようだね。だから……戦いがいがある！　キミに絆の大切さを教えてあげるよ！」

「ぬかせ……！」

語気を荒げ、ブライがラプラスを剣に変化させると、ロックマンは後ろに飛び退きバスターを構える。

緊迫した空気の中、お姉さんの声が響いた。いよいよ始まる、決

勝戦の対戦カードをアナウンスする。

《さて、両選手、準備が整っているようですね。では始めるとしましょう！

流星のロックマンＶＳ孤高の戦士、ブライ！　ノイズトーナメント決勝戦、ウェーブバトル、ライド・オン！！》

ブライはお姉さんの合図と同時にロックマンに切り込む。周波数変換術を駆使した、高速移動術である。環境周波数との斥力を利用した瞬発力はソウル・レイダーにも引けを取らない。一歩一歩が大きくて、ロックマンにぐんぐん詰め寄る。ロックマンも後ろに逃げながら、ロックバスターを連射する。しかしブライは、剣を小さく動かし、無駄のない動きで球を弾いていく。キンキンと高い音を鳴らしながら、観客席へロックバスターの球を全て配っていく。

そしてブライは距離を詰め切るとロックマンに飛びかかる。全体重を乗せた、ブライの得意技ブライブレイクを繰り出すつもりだ。

「喰らえ、ブライブレイク！！」

『スバル！』

「うん！」

阿吽の呼吸でウォーロックアタックがお得意の猛加速でロックマンの左腕を引っ張る。ロックマンはその勢いに合わせて、横に大きく転がった。ロックマンのつま先のところでリングの石板は砕かれてひっくり返される。もうもうと土煙が立ち込めて、その威力を示している。ロックマンは寝転がった体勢のまますぐに、揺れる人影へとロックバスターを撃ち込んだ。数発が土煙を破くが、輝く青緑の皿が発生してブライの身を守った。電波障壁は健在で、古代文字を周りに浮かばせるムー人の守りは固い。

『メンドくせえ、板っきれだな』
「直接切り込むか、変身を使うか……」
ロックマンは体勢を整えつつ、ブライへの対策を考える。
対してブライは、剣に被った埃を掃っている。だが、ロックマンへの注意は怠っておらず、機をうかがっているようだ。先のようにただ突っ込むだけでは無意味と考えたのだろう。
するとウォーロックが、ロックマンに対して不服の意を表した。ロックマンが口した内容が気に入らなかったようだ。彼はラーニングレギオンが好きではなかった。
『おい、スバル。俺はあの変身がどうにも好かん。俺は自分の力で戦いてえ』
「そんな事言ってる場合じゃ……」
『いや、ミラの時と状況が違うぜ。あの時は後がなかったが今は違う。消耗の激しいアレは最終手段だ』
「キミがそういうなら、分かったよ」
ウォーロックはＦＭ星では優秀な戦士だった。ラーニングレギオンで倒しきれなかった時の事を考えている。そんなＦＭ星の誇り高き戦士と呼ばれたＡＭ星人が言うのだから、ロックマンは頷くしかない。
だが実のところ、ウォーロックはどうしてもブライに負けたくないだけで、ソウル・レイダーに順番を回したくないのが本音なのだ。良くも悪くも好戦的な彼は、いつもの調子で自信ありげに言ってのけた。
『早い話が、あの一人ぼっちマンは、ガチンコでブッ潰すって事だな！』
「急がば回れ、か」

するとブライだ。黙って見ている訳がない。

「何をごちゃごちゃ言っている」

不快気にブライが言うと、身を守っていた電波障壁を解除する。そして解除した分で、ロックマンの周りに例の牢屋を作り始める。逃げられるのなら、逃げられなくしたら良いという簡単な結論だった。

捕えられてしまえば、さすがのロックマンといえどもただでは済まない。

「これは……？！」

『ヤツも進歩してるってことか』

「囲まれたらマズイ……ッ」

慌ててロックマンは、取り囲むように出来あがる柵から逃れようと走り出す。しかしそれこそブライの想定内だった。逃げられるのなら、逃げさせるというブライなりの勝負勘が導いた真の結論だった。牢を作ると同時に、彼は動き出す。

ロックマンの飛びだした先には、ブライがさらに先回りして剣を振りかぶっていた。不意の出来事にロックマンの反応が遅れる、咄嗟のガードにシールドが追いつかない。

「うっ！」

血がボタボタと落ちて地面に染みわたる。ロックマンはよろめきながらも、ブライの攻撃圏内から逃げる。やはり血がボタボタと垂れ、紅い蛇を作った。

ブライはラプラスブレードで風を切り、刃にこびり付いた血を飛

ばせる。パタパタと小さな赤い斑点が円を描いた。
ブライはそれでも不満そうな表情のままだった。

「チッ、浅いか……」

ロックマンの右腕は確かに血で真っ赤だ。だがブライが舌打ちする通り、大事には至っていないようだ。
ウォーロックが咄嗟のウォーロックアタックで、何とか攻撃から身を逸らしていたようだ。その判断がなければ、今頃ロックマンは、隻腕で戦いを強いられていたはず。
ロックマンは激痛に表情を歪めるが、ウォーロックの怒号にハッと我に返る。
休ませまいと、ブライが追撃を開始していたのだ。薄く血の膜を張ったラプラスブレードが、不気味にロックマンの視界に飛び込んだ。

『来るぞ！　シャンとしやがれ！！』
「バトルカード、ソード！」

ロックマンも剣でブライの剣術に応戦する。だが、一太刀一太刀を受け止めるごとに、ロックマンの体はじりじりと後ろに押しやられる。一撃がとんでもなく重く、ロックマンは防戦一方だ。

「ク……ッ、重い……」
『チッ！　この野郎！！』

ウォーロックが素早く分離し、隣に現れ、ブライにビーストスイングを繰り出す。確かにウォーロックの爪は強力で鋭い。だがそれ以上に電波障壁は優秀であり、ウォーロックの爪をボロボロにした。
そしてウォーロックの判断が裏目に出てしまう。ロックマンと分

離した事によって、戦闘周波数が一気に落ちてしまったのだ。よってロックマンのソードが、ブライの一撃によって、粉々に砕かれてしまう。

ブライが一気に畳みかける。

「ブライブレイク！」

「バ、バトルカード……バリア！」

それでもロックマンは、容量の軽い防御カードを何とか入力する。しかし苦肉の策では限界がある。黄色いカードデータの転送速度は最も早いが、最も脆くもあるのだ。全てを砕くブライブレイクの前では、先のリングの石板のように、呆気なく粉砕されてしまう。割れた石の破片の中に混じってロックマンが弾かれる。

ロックマンは肩のアーマーを砕かれて、そのまま腹に大きな傷を付けられてしまっていた。それでもバリアがなければ、ロックマンの身長は半分になっていたことだろう。

ロックマンは吹きとばされた勢いに任せたまま、ブライとの位置関係を確認する。そのまま距離を置き、何とか遠距離戦に持ちこもうとバスターを構える。しかし撃ち込んだロックバスターは、やはり電波障壁に遮断された。

電波障壁を攻略しないと、勝ち目はない。だがもう長くは持たないのだろう。ロックマンは腹を押さえながら、肩で息をしている。やはりブライはまた血の吸った剣を振り抜いて、血を飛ばす。この作業をブライは何度か繰り返している。以前ではあまり見られなかった、几帳面な対応だ。

ロックマンは手のひらをベトベトにして血を揉むと、ロックバスターに手を添える。現状はブライ優勢で試合は進んでいた。試合開始からの一瞬の攻防劇が終了し、会場は音でいっぱいに満たされる。それは畏敬、感動といった情念から生まれる音である。

司会のお姉さんもようやく口を挟む隙を見つけてまくし立てる。

《お姉さんも思わず、見入ってしまいました！　ロックマンも素晴らしいですが、何より恐ろしいのは孤高の戦士!!　お互い、何という戦いをするんでしょう!!》

「うるさい司会だ……」

ブライは舌打ちをして、三度切り込む。

ｉｇｎｉｔ―１２：手に入れ始めた矛盾

間髪いれず、ブライはロックマンに接近戦を挑む。ラプラスブレードの乱暴な刃の数々が、ロックマンのソードを削る。ガリガリとガリガリと。

現状ブライはロックマンを圧倒している。ブライはロックマンに息つく暇も与えずに、執拗に攻め立てていた。

そんな中、ロックマンを攻める中、ブライは焦り、危惧していた。それゆえか苛烈な攻め手を緩めることは決してなく、どこか勝負を急いでいるように感じられた。常に剣を振るい、ロックマンを休ませない。

危惧、それはブライが感じていた予見というには明確な事情である。当面、彼はオーパーツを失い、前ほどの戦闘能力は有していなかった。単純な力ではロックマンにも劣っているだろう。それでもブライはロックマンを押している。そこには受け入れがたい理由があったのだ。

その理由はブライ自身が誰よりも分かっている。だが、その原因に頼るのはブライの生き方に反する事。しかし、絆を大々的に掲げるロックマンに、決して負けられない事も変えられない事実。ブライはそんなポリシーとポリシー、信念と信念がぶつかり合う矛盾の中、葛藤していた。

今のブライは、とてもではないがベストコンディションとは言えない。精神面に関しては最悪に近い。

その原因の全てがラプラスにあった。デューオの神殿での出来事

から、ラプラスはソロに反抗の意思を見せ始めていた。そう、ラプラスには心がある。それも飛び抜けた優しさに満ちた乙女のものだ。

もちろんそれはそれで恐ろしくて堪らないはず。しかしソロにとって、何よりも恐ろしい事が別にある。それは、ラプラスが傍にいなければ、本来の力すら出せないという自分自身の変化である。いつからそうなったのかは不明だが、少なくともラプラスが来る前のブライは独りで戦えていた。

そのおかげで何者にも頼らないからこそ無頼――ゆえにブライ。そんな根底が覆されてしまったのだ。

その一方、ラプラスと一緒にいればいるほどにブライの強さは増していく。ラプラスと共に過ごす時間が長くなるほどに、ブライは強くなっていった。今なら、キリン・ライトニングに勝てるのかもしれない。

それはまるで孤高とは正反対の力の在りようだった。それはブライがブライである正反対の力で、ソロがムー人として存在した事を、全て台無しにするものだった。

独りで生きてきたという自信と誇り。独りで戦っていけるという確信。それが無くなりつつある。

「ラプラスは家族……」レム・オリジンの言葉が脳裏をかすめる。

ブライはラプラスブレードを強く握り込み、ロックマンをさらに攻めた。迷いとざわつく可能性を払しょくするかのように、一心不乱である。

「倒れろ！　ロックマン！！」

「まだまだ僕はやれる！　僕は戦える！！　仲間が信じてくれるから！！」

「ふ、ふざけるな……！」

ロックマンの聞こえの良い言葉がブライの耳に残る。ブライはさらに攻め立てる。

何が何でも、ロックマンをひれ伏せさせる。ブライは躍起になっていた。

しかしブライが絆を否定しようと執拗に固執するほどに、ロックマンは食らいついてくる。

「ラプラスは道具でしかない。ましてや繋がりであるはずなどない！」ブライはそれを信じて戦うしかない。しかしそれでも、矛盾が晴れない。

幼少よりの境遇から、ソロは自身の本質を見つけたのである。天涯孤独な環境が、独りでも生きていけるよう自分を強くさせた。特異な容姿と能力から人々に忌み嫌われ、出会う人間が全て敵であった。ゆえにソロは人々との繋がり、絆を拒絶した。

その今までのソロを作ってきた全てが、真実ではないのだとしたら。それだとしたら。ソロはとてもではないが受け入れられない。否定したい。それを胸にロックマンを攻める。攻める。より強く、より激しく。

しかしロックマンは、燃える瞳でブライに食らいつく。そこに得体の知れない力を感じたブライ。ただただ信じられなかった。

「何が絆だ！　何が仲間だ！　人間は自分だけが大切で！　自分だけしか信じられない！　孤高で孤独こそが本来の姿なんだ！」

「ソロ！　キミは間違っている！！　確かに、一人で頑張れる強さと心は大切だ。でも、それだけの為にいろんな可能性を切り捨てる事は絶対に間違っている！」

『ヘッ！　相変わらずクセエ台詞吐きやがって！　ま、たしかに独りじゃ手に入れられないものも沢山あるがな！』

「コイツら……！　コイツら！！」

ブライにとってラプラスは道具だ。それ以外の答えなどある訳がない。便利な道具だから利用した。だから行動を共にしていた。他

に理由などない。ある訳がない。
ラプラスがなぜソロの元にやってきたのか。なぜ冷たく接するソロに、ラプラスが付き従うのか、そんなことはどうでもいい。
気にかけることは何もなく、ソロを縛る理由にはなり得ない。それに今さら、変わることはできないのだから。

「俺はブライだ！　だからここまで来れた！　繋がりなど、下らない逃げ道でしかない！」
「違う！　逃げ道があるなら逃げればいい！　そしたら、もう一度立ち上がればいいんだ！」
「逃げてしまったら、立ち上がれるものか！　敗北した者に待っているのは死のみだ！　甘ったれた事を言うな！」

ブライは叫ぶ。ブライはロックマンの言葉の意味が理解できない。気付いた時には、一人ぼっちだったソロ。両親がいたのかどうかすら分からない。
野ざらしにされた寝床で、空腹と孤独に耐えた日々。ゴミを漁って歯を食いしばり涙を飲み、生き延びた。最初は寂しかった。人々の視線が冷たくて、それも辛かった。友達の輪にも入れない。電波が見える――たったそれだけの事で、人間として扱ってもらえなかった。
諦めた瞬間、待っているのは死だけだった。逃げた瞬間待っているのは死だけだった。逃げ道も拠り所もなく、常にギリギリのところで生き抜いてきたソロ。そんな彼が、生きていこうと思えたのはムー人であるという誇りがあったからだ。唯一にして、ただ一人の生き残り。それが孤独にも耐えられ、孤独を孤高に変えられた理由となった。それがソロにとっての真実だった。
それが間違いな訳がない。
ブライは渾身の力を以ってラプラスブレードを振り下ろした。
しかし今度の一撃はロックマンにしっかりと受け止められてしま

う。ブライは全力だった。衝撃で、ロックマンの腕と腹から血液が体を伝い、滴り落ちる。そんな状態でも、ブライの一撃を受け止めたのだ。

「何……？」

驚いた様子に目を丸めるブライ。手を抜いたつもりもない、あるとしたらロックマンの方に原因があるのだろう。

ロックマンはブライに向かって、少しだけ歯を見せて笑みを浮かべる。冷や汗がお互いの頬を流れる。

「さっきより勢いがないんじゃない？」

苦しいはずなのに、笑顔を向けてくるロックマンに、ブライは遠い距離を感じた。それが寂しいと感じたのは何年ぶりだろうか。

「俺は絆を信じない。慣れ合いは信じられない」

「……僕たちは分かりあえないのかな。今は争っている場合じゃないのに、キミが仲間になってくれたらどれだけ心強いか……」

「俺は俺だけを信じる。お前が俺をどう思おうが、俺はお前を信じられないし、手を取り合わない。……俺が俺である以上、あり得ない事だ」

ブライはそのまま体重を乗せて、ロックマンを押し切ろうとする。分かり合うつもりなど毛頭ないのだろう。もしその可能性が少しでもあれば、二人が剣を交えていることはないのだから。

しかし勝負を長引かせすぎたようだ。ロックマンの言葉からか、ソロの迷いからか、ブライが必死に抑えつけていたラプラスが、表層部分に出てきてしまった。ラプラスブレードがぼんやりと光って、ラプラスの言葉を浮かばせる。

『モウ、やめようよ。こんなの……イヤだよ』

血を流すロックマンを見ていられなかったのか、ラプラスは訴えたのだ。その言葉にブライは思わずロックマンから飛び退いて、忌まわしい剣を手放してしまった。ブライが恐れていた事態なのか、剣を取りに行こうともせずに、呆然と立ち尽くしていた。

ウォーロックは今が好機だ、といわんばかりにロックマンにけしかけた。

『あの幽霊ヤローが喋るとは意外だったが、今がチャンスだ！』

「う、うん！」

銃口が激しく明滅し、ロックバスターは弾を勢いよく吐き出す。一発、二発が電波障壁にさえぎられるが、三発目以降には電波障壁が作られず、ブライに直撃した。

「グッ……！」

ブライが崩れ落ちる。肩を撃たれ、ブライは仰向けに倒れ込んだ。完全にペースを手にしたロックマンは、そのまま止めにかかる。

ブライも素早く跳ね起きると、ラプラスに訴えた。俺が俺である――その冷徹とさえ言える生きざまをラプラスに何一つ隠すことはしなかった。それが自分だということは、長い日々を通して背中で語ってきた。

だか、彼は気づいていない。その行為こそ他者に認めてもらいたいという、感情の表れということに。

「ラプラス！　お前は俺の道具だ！！　戦いに感情をさらけ出すな！　黙って俺の言う事を聞いていればいいんだ！！」

しかしその飾り気のない言葉はラプラスに届くことはなかった。ブライは丸腰のままでロックマンを迎えうつしかなくなった。しかし、それはそれで原点かもしれない。

「何を血迷った……もとより、俺はブライ」

自省したのかフッと笑い、ブライは地面を蹴る。ロックマンに対して勢いよく飛びだした。

ブライは右腕の暗黒闘気を燃えあがらせて、四肢に力を込めていく。燃えあがった炎が後ろに伸びて巨大な暗黒彗星となる。

「ブライアーツ！」

それに対し、ロックマンは最後の手段を用いた。輝きに身を包んでブライに引導を渡す。

「アクセス……ラーニングレギオン！！」

ブライごとリングを破壊しつくすほどの光で、アカシャ・フォース・ビッグバンが会場を一杯にした。

ｉｇｎｉｔ―１３：司会のお姉さん

決勝戦が終わり、数時間後。医務室のベッドで眠るソロを、ロックマンは見守っていた。彼はムー人、電波変換が解けてしまっても穏やかな顔で眠っている。

部屋の前の廊下から、そんな様子を眺め、オックス・ファイアは文句を垂れた。彼にしてみたら、ロックマンがお人好し過ぎて面白くないのだろう。

「スバルのヤツ。なんであんなヤツの面倒なんか見てるんだ？」

ハープ・ノートが簡単に答える。オックス・ファイアがブツブツうるさく、もう三回目の説明であった。

「だからさ。ソロ君がオペレーション・アポカリプスに参加してくれるように頼むつもりなんだって」

そんな二人のやりとりを横目に見ながら、スコープ・スナイパーはベンチに座り込み悲観する。

「多分、無理だと思うけどなー」

口を尖らせて、缶ジュースを飲む彼女は、ひょこっと医務室を覗きこんだ。

ウォーロックの方がどうやら痺れを切らしたらしく、ロックマン

に突っかかっている光景が展開されていた。ただ、ボロボロになった爪に包帯を巻いている辺り、医務室らしい光景ではあった。もちろんロックマンも包帯を巻いており、大声でうるさい事以外は完璧だった。

「おい、スバル！　テメエ、敵の看病とかどうかしてるぜ！」
「うるさいな。ソロにはやっぱり協力してもらいたいんだよ」
「バカ！　どうせ、『慣れ合いは排除する！』とかなんとか言って断るに決まってるだろうよ！」

あまり似ていないソロの真似事を始めて、ウォーロックはロックマンを挑発する。だが、ロックマンは取り合おうとせずにソロの方に目をやった。

「もう、黙っててよ。ちゃんと言ってみないと分からないだろう？」
「はあー、もう知らねえよ。勝手にしろ」

ウォーロックはロックマンのハンターに収まって、左腕からぶつくさ言い始める。
するとウォーロックの声が流石に響いたのか、ソロが目を覚ました。寝起きなのに意識ははっきりしているようで、すぐにロックマンを睨みつける。
ロックマンは何とか友好的に笑顔を作った。

「やあ、おはよう」
「お前は……っ。チッ……そうか、俺は負けたのか……」

それだけ言うと、ソロはベッドから立ち上がり、医務室を後にしようとする。「今度は負けない」背中越しに伝えると、ソロは廊下へと、少しふらついた足取りで向かう。

ロックマンは忙しいソロに驚きながらも、呼びとめた。

「ソロ！　僕たちに協力してよ！！　ＦＭ星や宇宙を救おうよ！」

「……無理だ」

『ほらな……！』

ロックマンは左腕をベッドのシーツでぐるぐる巻きにすると、ソロを説得しにかかる。

「なんで、無理なの？　孤高とか絆とかそういう事を言ってるんじゃなくて……」

「俺はお前に負けた。だから絆を否定しはしないさ。だが、俺はお前達とは協力できない」

ソロは再び、立ち去ろうとする。するとロックマンは最後に、決勝の舞台で感じた事を伝えてみた。それを伝えてソロが動かないなら、諦めるしかないだろう。

「決勝戦の最後の時、感じたんだ……！　キミの周波数は、いつもと違った」

「……チッ」

「あの時、キミは電波障壁が出なかった。キミのアレは心の壁だ。あの時もしかしたら、キミは……」

「黙れ。それはお前の勘違いだ」

「キミは……」

「変わろうとしていたんだ」その言葉がロックマンの喉元まで出てきていた。だが、それを言おうとしたところで、とうとう言葉としては出て来なかった。ソロの背中から感じる冷たい気配に、その言葉は相応しくないと思ったのだろう。

ロックマンが口をつぐんでいると、廊下の方から、オックス・ファイアやスコープ・スナイパーの声が飛び込んでくる。それは突然の来訪者に対する、戸惑いが含まれた声調だ。それが医務室に流れてくる。

苛立ったソロがまだこの場にいる以上、それとは別の何者かなのだろう。

そしてその何者かが医務室に入ってきた。ミソラとはまた違った聞き慣れた、よく通る声だった。

「こんにちはーっ」

「あの、どちら様ですか？」

ロックマンは入口に現れた女性に問いかける。その女の人は、パッと見が普通の人間だ。しかしノイズウェーブで普通の人間である以上、それは普通の人間ではない事を意味している。

そしてソロはその女に覚えがあるらしい。出口を塞ぐ女を、相変わらず攻撃的に、それでいて鬱陶しそうに見つめていた。

女は茶目っ気のある笑顔をロックマン達に向ける。きっちりとしたラインを強調する格好からして、テレビのアナウンサーを彷彿させた。

その女は言う。

「アレ、この声で分かってくれると思ったんだけどな。コホン」

女はロックマンに詰め寄った。手品のようにどこからともなく手にマイクを作りだした。アナウンサーのようでマジシャンのような人だ。

そしてはきはき言うのだった。

「優勝はチームダブルプリティーです！　おめでとー。では今日のヒーロー、ロックマンにインタビューという訳でやってきました！　……ってな感じのお姉さんだよー」

「あっ！　この声は！！」

『へえ、意外な素顔ってヤツか』

「やっと気が付きましたね。ワタシはＷＷＲのトーナメント運営委員！　何を隠そう、司会のお姉さんこと、ノズミですよー！」

ノズミはベレー帽を深くかぶりなおして一礼した。

「優勝チームには、お偉いさんの話が残っていますので」というノズミの言伝だった。なのでロックマンはノズミと共に、ウラスクエアの運営委員会の本部に向かっていた。ウラスクエアの中でもひと際目を引く、高い建物がそれだ。

そして、何故かソロも同行させられていた。ノズミいわく、準優勝者にも用があるらしい。

そして本部に向かう途中、なかなかお喋りなノズミは、ロックマン達に色々と話して聞かせてくれた。彼女は夜太郎と同じく、裏世界で生きてきた住人であったそうだ。そんな裏世界の働き者であるノイズムを、改造して生まれたものがノズミだった。元ジャミンガーであり、改造された夜太郎と境遇が似ているのだ。

ノズミの話から、ノイズムを改造して運営委員会を構成しているという、ＷＷＲの台所事情がうかがえた。

「さあ、着きましたよ」

ノズミは大きなビルを見上げて、ロックマン達に告げた。くびれた腰に手を当てて、神妙な面持ちを浮かべると中に入っていく。

「この場所で、大事なお知らせがあります」

ノズミはエントランスの中を歩きながら続ける。

「WWRの幹部さんとの謁見をですね、ご用意してます」

その言葉にソウル・レイダーは、願ってもない好機を感じ、拳を握って静かな情動を表した。

するとソロが舌打ちをして、やはり苛立ったような表情だ。常に何かに怒りを感じているのか、眉間には数本のしわが刻まれる。

「チッ。WWRの幹部か……」

「あれ、何かご不満でも？」

ノズミの問いかけに、ソロは目線を少し逸らして、愛想なく言う。

「少し借りがある。それに……」

ソロは頭にキリン・ライトニングを浮かべていた。オーパーツを自分から奪った張本人だ。さらに危険なオーパーツを、デューオの惑星から奪ったのも彼だった。

ソロは少なからずの因縁を感じている。

それはスバル達も同様だ。倒すべき敵の城に乗り込んでいることで、オックス・ファイアが俄然意気込んでいた。

「ブロロ！　いよいよって感じだなあ！」

彼が調子に乗ると、たいてい悪い方に事態が転がる。なのでロックマンはオックス・ファイアを落ち着かせた。

「まあ顔合わせみたいなものだから、そんな物騒なものじゃないと思うよ」

するとウォーロックだ。彼も血の気が多いものだ。

『そんなの知るかよ！　これはチャンスだぜ。やっちまおう！』

そんなケンカっ早いウォーロックに、ハープが棘を刺す。

『バカね。さっき、ブライと戦ったばかりでしょう？　ヘロヘロなのに何言ってんのよ』

『なんだと？！』

『なによ？』

敵の拠点であってもケンカを始めるウォーロックとハープ。ハープ・ノートは苦笑してしまう。笑いながらでも、注意はしっかりと促す。

「ケンカはよしなよ。でもハープの言う通りかもね……」

ロックマンがブライとの戦いで疲労したという事を考えれば、無茶はできないだろう。ラーニングレギオンは強力だが、体力を根こそぎ奪うからだ。疲弊しきって、電波変換ごと解除されてしまう事も珍しくない。

そんなハープ・ノートの心配を汲み取って、グリット・メトリーはロックマンに言ってやるのだった。

「まあ、私たちが付いているから何とかなるでしょう。くれぐれもスバル君は無茶をなさいませんように」

ロックマンはコクリと頷いて返事をする。そして歩を進めて、エレベーターガールノズミが待つエレベーターに乗り込んだ。

「では、ここから最上階まで直行ですねー」

一同を乗せた、エレベーターは幹部たちが待つ屋上へと昇っていった。

ignit―14：宣戦布告

ロックマン達が辿りついたのは、大きな広間だった。外壁は金色で、掛けられた燭台の炎に照らされ、光沢がギラギラと映えていた。真紅の絨毯が、部屋の真ん中を縦断して、一段高いところにある王座に伸びている。そこにWWRのボスと、幹部がいたのだ。

ロックマン達を迎えたのは、フェニックス・リボンとキリン・ライトニングだった。大股開きで頬杖を突き、どっしりと腰を据える不死鳥と、その横に付き従う麒麟の電波人間だ。

ロックマン達は思わず、緊張を強いられた。束になって勝てるかどうか、さきほどのソウル・レイダーの当てが外れた。

フェニックス・リボンがその静寂を破る。

「……よく勝ち抜いてきた。おめでとう……とでも言っておこうか」

フェニックス・リボンがハープ・ノートの方を見つめて言う。こうなる事を予見していたのか、その態度は涼しげで、ろうろうと言葉を並べ立てる。その振る舞いは、炎のように燃える不死鳥の見た目とは正反対であった。

「では、ハープ・ノートよ。念の為、今一度聞いておこう。お前は俺と共に宇宙を救うか？　それとも俺と敵対するか？」

その声質、威圧に隠した語り口、何より彼から流れる周波数が、ミソラの父親と一致した。「やっぱりだった……」ハープ・ノート

は目を伏して、口をつぐんだ。
　ハープ・ノートが押し黙っていると、真紅の絨毯の上をソウル・レイダーが進み前に出る。フェニックス・リボンの胸中を知らない彼から取れば、ここはリーダーの仕事と思ったのだろう。

「響に聞くより、俺に聞いたらどうなんだ。俺がこのチームのリーダーだ」
「……俺はハープ・ノートに聞いている。黙っていろ」

　フェニックス・リボンは少し呆れ、威圧的にソウル・レイダーを見据える。すると戦闘周波数を分かりやすく増幅させて、無言で言い聞かせたのだ。ノイズが彼の背後を暴れて、空間が少しだけ揺らめく。力は何よりも雄弁にものを語る。それがフェニックス・リボンの四年間で得た結論だった。
　ソウル・レイダーは思わず一歩退いた。無意識のうちに、剣の柄に手が伸び、刃を覗かせる。
　フェニックス・リボンの力は凄まじく、あわよくば戦闘に持ち込もうとしていた浅はかさが露呈しただけだった。
　殺伐とした空気が作られる。それを感じ、キリン・ライトニングが、彼の危険性を示唆し、軽く注意をしてやった。

「コイツ相手にあまり勝手な行動はしない方がいい。悪いことは言わない、コイツの言う通りにしておけ」
「そういう事だ。さあ、ハープ・ノート、返答を」

　どうしてもフェニックス・リボンは、逃がしてはくれないらしい。ハープ・ノートは出来れば父親と戦いたくはなかった。
　しかし、その前にどうしても確認しておかなければならない。ハープがそばにいる以上、無視できなかった。

「その前に……ＦＭ星を攻撃するっていうのは本当なの？」

簡潔な質問だ。フェニックス・リボンは一考すると、相棒のＡＭ女王を呼びつける。王座のそばに火の玉が出来あがると、尾の長い鳥の形が作られる。

「フェニックス」

「あら、何かしら？」

「……聞いてただろ」

「ホホ、ごめんなさい……。ま、もう準備万端だし。教えてあげるのも優しさかもね。アナタの望むようにしてみたら？」

「ああ、そうだな」

フェニックス・リボンは頬杖を突くのをやめて、包み隠さずに言った。最初にミソラと交わした約束と、自分の決意を思えば、隠しごとに意味はないのだ。

「その質問が出るという事は、もう全て知っているのと同じ。なら隠さずに言おう。

俺はフェニックス・リボン。相棒の電波体はＡＭ女王のフェニックス。言うまでもなく、ＦＭプラネットに憎悪を抱いている。……復讐、それが俺と彼女の結んだ契約」

「そ、そんな……やっぱり……」

フェニックス・リボンも本気なのだろう。娘の前でこれを語れば、タダでは済まない。

ハープ・ノートはわなわなと震える。

「残念だよ。もしかしたら……って、思ってたのに……残念だよ。ワタシは……ワタシはアナタと戦うしかなくなった」

口を結び、ハープ・ノートは、ハープが宿ったギターをギュッと抱きしめた。

『ミソラ……ありがとう』

ハープ・ノートの決意に、ハープは感謝した。そして彼女の答えは、皆の意志と同じだった。

その言葉に勢いづいたのか、ウォーロックはＡＭ女王に宣戦布告する。ＡＭ星人の身ではあるが、彼にとってＡＭ女王が敵であろうが、まるで関係ないらしい。

「おい、アンタ！　ＦＭ星をブッ潰すっていうんなら、俺達が相手をしてやる！　なんなら今、ブッ潰してやろうか？！」

「あらあら、お前はウォーロックね。ホホ……敵であるＦＭ星に毒された可哀そうな子。それどころかＦＭ星人どもに与する逆賊へと成り下がってしまったのね」

「お前が俺を決めるな！　ＡＭ女王だか何だか知らねえが、俺からすりゃ復讐に燃えた迷惑なババアでしかねえ！！」

「……その様子じゃ、ＡＭ星人であるクセに、星を滅ぼされた恨みも、誇りも、牙も抜かれてしまったのね……可哀そうに」

フェニックスはウォーロックに憐れみの情を抱いたらしい。怒り以上に、ウォーロックが不憫なのだろう。そんな気配を漂わせて、そっとフェニックス・リボンに同化する。

しかし彼女の抱く感情は真っ当なものであり、ＷＷＲがＦＭ星に復讐するのもまた筋が通っていた。彼女の行動理念は、星の頂点に君臨する者として、当然の責務であるのだから。

ウォーロック自身ももちろん気が付いている。彼自身もアンドロメダのカギを用いて、ＦＭ星に復讐しようとしていたのだから。Ａ

M女王の気持ちはよく理解していた。だからこそ、復讐から生まれるものは何もないと分かっていた。

強いて言えば、この状況はウォーロックとフェニックス、それぞれのパートナーから生じた価値観の差異である。かたや星をこよなく愛した心優しい少年と、かたや家族を守るため絶望に身を投げた男。

ウォーロックはそれら全て踏まえて「ブッ潰す」とひとまとめにしたのだ。負の連鎖を断ち切るには、聞こえの良い理論で固める前に、憎悪を挫くしかないから。

そんなウォーロックの啖呵に、フェニックス・リボンは、堪えるように笑った。小刻みに肩を震わせる彼に、キリン・ライトニングは少し気が抜けた。

「ハハハ、面白い。そうか、これがお前の得た友人たち……。そうか何を言っても、もう無駄……か。なら俺も覚悟を決めるしかない」

ハープ・ノートの方に目をやると、フェニックス・リボンは王座から立ち上がる。充足した表情を浮かべ、ロックマン達を見据えた。

ロックマン達は目を逸らさず、しっかりと視線を返す。

「いいだろう。俺の四年間の意味を教えてくれるのに不便はしないようだ」

「じゃあ、いいんだな？」

キリン・ライトニングの問いに、フェニックス・リボンはこくりと頷いた。

「ジョニー、ここまで来た彼らに敬意を表しようじゃないか」

すると王座の後ろに備え付けられた、大型スクリーンに映像が投影された。そこには辺境の宇宙に浮かぶ、美しい惑星の姿が映っていた。それは惑星パトラだ。

フェニックス・リボンは言葉を続けた。

「優勝チームには本来、幹部の地位が与えられる。俺達のアジトで、君たちに地位を与える予定だった」

「ヘッ、心にもない事を」

ウォーロックの言葉をさらりと受け流す。

「そう、君たちには関係のない事。形式的に招きはするが、それに穏やかな意味合いはない」

キリン・ライトニングが補足する。

「残念だが、コイツとは交じり合わない。なら戦うしかないって事さ。止めたきゃ、戦ってコイツを倒せ。ここまで勝ち抜いてきたんだ。足掻いてみな」

「俺に、お前たちが手に入れた力を見せに来い。場所は、第七階層セピアウェーブから繋がる先の星だ。俺達の惑星パトラ……そこにアジトがある。

決戦の日は八月二日。俺の待ち望んだ運命の日だ……！」

フェニックス・リボンはそれだけ伝えると、エアディスプレイを展開させる。画面を二、三回叩くとガイドデータがロックマン達に送られた。

エアディスプレイを開く面々。そこに記されたデータにロックマンは息を呑んだ。ムー大陸と同様のそれそのものが、敵のアジトとされている。ソロもエアディスプレイを開けたっきり、目を奪われ

たままだった。どうやらソロの戦いも終わりではないようだ。

「これが、ＷＷＲのアジト……」

「やはり、コイツらはムーの……」

ソロは一瞬だけフェニックス・リボンに敵意を向けるが、現状を察すると、踵を返す。謁見の間を後にしつつ、決意の満ちる言葉を残して立ち去っていく。

「お前達と……戦う理由が出来た」

多くは語らずにソロは退室した。彼は気付き始めていた。デューオの星で見た数々のムー大陸と、ＷＷＲの持つムー大陸。そしてムー人であるソロ。レム・オリジンの言葉が脳裏をひっかく。自分が何者なのか、ラプラスが何者なのか、戦いの場で真実に近付けると感じていた。

ソロがいなくなると、ウォーロック達はいよいよ短気を起こす。オックス・ファイアと一緒になって、一番手っ取り早い解決策を実行する。

ロックマン達から飛び出し、フェニックス・リボンに襲いかかったのだ。

「八月二日ねえ……。オックス！　待ってられるか?!」

「いいや。目の前に幹部とリーダーがいる以上。何を待つ必要がある！　ブロロォオ!!」

ロックマンは二人を止めようとするが、彼らは止まらない。余裕気なＷＷＲの二人に一直線だ。

「オラア！　ビーストスイング!!」

「オックスフレイム！！」

ウォーロックがフェニックス・リボンへ、オックスがキリン・ライトニングへ、それぞれの得意技を放つ。

絨毯が燃えて王座がバラバラになるが、相手は無傷だった。それどころか一瞬にして、彼らの隣に陣取っている。そしてそっと語りかける。

「ここは俺達の拠点だ。これ以上はお互いに不幸になる」

「ま、暴れちゃダメって事だよな」

「ブロロ……これがＡＭ星人の強さか。知っておいてよかった」

「なるほど……偉そうにしてるからどんなものかと思ったが、こりゃ面白くなってきたぜ」

ウォーロックは納得したように爪をしまう。オックスも一転して落ち着いていた。

ウォーロック達はどうやら二人の実力を肌で確認したかったようだ。実際にやり合うほど馬鹿ではなかったらしい。彼らとしては決戦の前に、明確な見積もりを立てたかったようだ。戦士としての計画性から、ある種の凶行を生んだのだ。

お互いに落とし所を見つけたＷＷＲとロックマン達は、決戦の日が訪れるのを待つこととなった。

そしてロックマン達が立ち去った後、広間でキリン・ライトニングはしみじみと言った。

「まさか、本当に勝ち上がってくるとはねえ。ワタルよ、どいつもこいつも強くなってるぜアレはよ」

「そうだな。俺の夢を叶える日に、ミソラがその場にいる事を嬉しく思う。同時に敵である事を悲しくも思うよ」

2002

ｉｇｎｉｔ―１５：星河スバルと響ミソラ

数日後の七月二十日土曜日。スバルはミソラと共に、アマケン（天地研究所）を訪れていた。ＷＷＲとの最終決戦が近い事もあって、ウォーロックとハープのメンテナンスをしてもらうためである。天地は優秀な技術者で、トラッシュを生み出すほどの腕前である。ゼロＰＧＭとの調整の事を考えれば、彼ほど身近に頼れる人はいなかった。

スバルは慣れたもので、迷うことなく、アマケンの中を進んでいく。途中の展示スペースで、宇田海が作業していたので、挨拶をして天地の元を目指した。

そしてスバルは、ミソラの手を引いて、天地のいる研究室に入っていった。「所長室」と記された、そんなプレートが点灯しているドアをくぐる。

「こんにちは」

「やあ、こんにちはスバル君」

スバルが入るやいなや、天地が出迎えてくれる。散らかった研究室には似合わない、爽やかな笑顔だった。スバルはコード類を踏まないように歩み寄り、早速、本題を切りだした。

「あの、ロックやハープのメンテナンスをお願いしたいんだけど」

「もちろん。お安い御用さ」

「あの……」

するとミソラだ。心配ごとがあるのか、天地を上目づかいで見つめる。

スバルもスバルで、ミソラの元気のなさに、先ほどから気をつかっていたのだ。しかし何が悪いという事は見受けられない。なので、何となく違和感だけを感じている状態が続いている。

ミソラは浮かない様子で口を開いた。

「天地さん、あの……ちょっと、相談が」

ミソラの様子から天地は、彼女の背景を察したようだ。ニッと笑顔を作ると、スバルに言ってやる。

「僕に相談する前に、スバル君に相談してみたらどうだい？」

「え……？　でも……」

「ウォーロックとハープのメンテナンスが終わるまで、少し時間がかかりそうなんだ。悪いけど、ちょっと手一杯だ。その間、二人で外を散歩でもしてきなさい」

諭すように言う天地に、ミソラは困り顔だ。もじもじと目を泳がせていると、スバルが少し頑張ってミソラに気を配る。

「僕でよければ話を聞くよ？　なんか元気ないみたいだしさ」

「スバル君もこう言ってるんだし。友達同士、話でもすればいいさ」

天地は眉をクッと上げて、ミソラの返答をうかがう。

いつまでも気さくな態度で迫る天地に、どうにも根負けしたミソラは、少し顔を落として頷くと話は終わる。ギターからハンターにハープを移すと、天地にピンクのそれを渡した。

「分かりました。ハープをお願いしますね」
「じゃ、僕も」

スバルも天地にハンターを渡す。するとウォーロックが、実体化してスバルに肩を回し、冷やかしだす。スバルは手で払うが、ウォーロックは大きいし、しつこい。

「おっ、オマエー。ミソラとデートか？　ウヘヘ、しっかりやれよ」
「ちょっ……！　変な笑いは止めてよ」
「ウヘヘヘ……」
「コラ、バカ！！　ポロローン、ゴメンあそばせスバル君。ごゆっくりー」

見かねたハープが、ウォーロックの頭にげんこつを食らわし、天地の研究室の奥に引きずっていく。天地は苦笑しながら、ハープの後に続いた。

「じゃ、スバル君。ミソラちゃんを頼んだよ。夕方あたりには、こっちも終わるからさ」

スバルにミソラの相手を頼み、天地はすたすたと機械と機械の間に消えてしまった。
スバルはミソラの手を握って、彼女の顔を覗き込んだ。

「じゃ、ちょっと外に行こうか」
「……うん」

ミソラも申し訳程度に、手を握り返す。そして研究室を後にした。

「へえ、アマケンの近くに公園があるんだね」

アマケンの正面玄関から門を抜け、適当に空だけが青い方に歩いていった二人。すると、のどかな緑が広がる公園に行き着いたのであった。ただ、大した公園ではなく、遊具がちらほら歯抜けに置かれて少し寂しい。強いて何かあるとすれば、公園には珍しく小川が流れているということ。水は綺麗で、メダカを泳がすので精一杯な慎ましさだった。

「ちょっと休憩しよう」

「うん。そうだね」

スバルは、手近にあった、椅子のような丸太に座る。隣の丸太に乗っていた葉を手早く払い、紳士的な対応も忘れない。ミソラは礼を言うとそれに座った。

するとスバルははっきり言う。

「ミソラちゃんはおかしい！」

「え？　あ、ありがとう」

スバルは、ミソラにタンポポの花を差しだしていた。公園に来た時に摘んだものだ。ミソラは驚きながらも、それを受け取る。

そしてスバルはもっとはっきり言う。

「ミソラちゃんはよくよくおかしい！！」

「え？　え？　あ、ありがとうっ」

2006

スバルは今度、ミソラのフードを取っ払い、お手製のお花のティアラを被せてやった。公園に来た時、作っていたものだ。ミソラは頬を染めて礼を言った。

ついにスバルはちゃんと、聞いてやる。

「じゃ、相談してよ」

「……ヘン。プッ……ヘンなの！　アハハッ、ヘンだよ！　もう、スバル君ったら！！」

キリッとした良い表情だったが、スバルは腹を抱えて笑われた。公園に入ってずっと何をしているかと思えば、花を摘み、ずっと花の冠を作っていた。スバルは頑張り過ぎだった。

「ミソラちゃん。どうしたの？　お腹痛いの？　やっぱり、おかしいよミソラちゃんは！」

「いや、ゴメン。私の為にこんな事してくれて。嬉しくて、笑いたくなっただけ」

ミソラは笑いを堪えつつ、少し落ち着くと、思い立ったようにスバルの手を取った。不意の出来事にスバルは腰を抜かすが、ミソラは逃がさない。スバルは、女の子の手の柔らかさに、改めて驚かされた。

ミソラはまじまじとスバルの手を見つめていた。指先から手のひらのどこからどこまで、じっくりと観察している。

「器用なんだね、スバル君は。私じゃお花の冠は作れない」

感動しているのか、ミソラはそっと、スバルの手のひらから指先に、指を這わせていく。少し火照ったのか、ミソラの耳は赤らんでいた。とてもスバルの器用さに感心しているようだ。

しかしスバルは、くすぐったくて仕方がない。

「ミソラちゃん。くすぐったいです」
「そうかな？　私は気持ちいいんだけどな」
「僕は気が気じゃない」
「でも、ホントすごいと思う。スバル君のこの手は、いろんな事ができちゃうんだもん」
「そんなことはないよ」
「いや、スゴイスゴイ。だって、いま感動してるもの。この手で色々戦ってきたんだなあ……って」
「ハハ、それはまあ言えてるよ」

少し照れるスバル。
ミソラは、愛おしそうにスバルの指先をちょんと叩いた。その指先は何度も何度も、バトルカードを素早くタッチしていたため、角質化――タコができていた。

「ほら、指先が少し固くなってる。バトルカードの入力しすぎかな？」
「確かにバトル中、ギャラクシーアドバンスを入力するのは大変で……」

スバルは何気ない苦労をしみじみ語る。
するとミソラがいたずらしてくる。

「それ！」
「うわっ」

ギュッとスバルの指に、自分の指をからませて握ってきたのだ。

「握り返して」

じっとスバルを見つめて、ミソラは真剣に催促した。震えが悟られないようスバルは恐る恐る、ミソラの手を握り返した。

「こ、これでいい？」

「うん、ピッタリ！　私とスバル君の大きさ、ちょうどいい感じだね」

「そうかな？」

「ルナちゃんじゃ、こうはいかないのだ！」

「そ、そうかも……っ」

「そうだよ。じゃ、ちょっと来て」

ミソラは立ち上がり、スバルの手を引っ張る。そしてミソラは空だけが青い方を望んだ。何もなくて、地平線まで青さが降りている。その地平線に細い小川が伸びていた。

ミソラはスバルの頭からビジライザーを取り上げて、それを掛けてみる。ウェーブロードには、サーフィンから帰ってきたデンパ君が進んでいた。何気にデンパちゃんを口説いていたりするおまけ付きだ。隣には嫉妬に燃えたノイズムちゃんもいる。やはり夏なので暑いばかり。海を楽しむには申し分ない天候だ。

「この川、海まで続いてると思うんだ」

「そうだろうね。でも、遠いよ？」

「どこまで続いてるんだろう」

「ずっと続いていると思う」

「行ってみたい」

「え？」

「行くの！」

ミソラはスバルの手を引いて川沿いを歩き始めた。スバルは疲れる事は御免だったが、ミソラがその気なので付き合うしかなかった。青い空の方へひたすら歩いていく。

そして川が河のようになり始めてきたころ。地平線が水平線と変わり、道のそばにはテトラポッドがちらほら置かれ始めた。スバルは少し疲れ始めたが、ミソラが手を放してくれないのでやはり付き合うしかない。スバルがミソラのペースを、何とか落とそうと試み、話を振ってみた。

「けっこう歩いたね。もう海が見えているよ」
「そうだね。波の音が聞こえてきそう」

するとミソラはふと思い立ち、スバルの横に並んだ。腰を曲げて、スバルの顔を覗き込む。
ミソラの元気の良い笑顔に、スバルも何とか元気をアピールした。

「大丈夫、疲れてない？　私は疲れてないけど」
「女の子に後れをとる星河スバルじゃないさ！」

スバルは少し無理をして強がった。ウォーロックがいたら間違いなく、ちょっかいを出される状況だ。
ウォーロックはそうだが、ミソラは素直なので、安心したようだ。

「そっか、じゃあさ私の話を聞いてよ」
「いいよ。何でも言ってよ」

やっと相談が来たかと思い、スバルは内心、ガッツポーズを作っていた。
ミソラは長い道の先を見つめながら、ぽつりぽつりと口を開いた。
「あのね、なんていうのかな。こういうずっと続く道を歩いてると、無性に不安になるんだ。そういう事ない、スバル君？」
「うーん、どうだろう？　ウェーブロードを走ってるときと同じ感覚だからさ、そういうのはないかもしれない」
「ふーん、スバル君はなかなか精神が堂に入っているね」
「そうでもないよ」
「そうかなあ……」
それからしばらく歩いたところ。
ミソラは思いつめたように、溜め息を吐いた。
「やっぱり私はダメなんだよね。先が見えないと、不安ばっかりが募るの。ゴールが見えないと怖いんだよね」
「ゴールか。なら、もうすぐじゃないかな」
スバルは海の方を指差した。もうずいぶん歩いた。日も一番高くなろうとしていた。波の音が聞こえる。
「もうすぐ着くよ。海に」

ｉｇｎｉｔ―１６：覚悟を掴む勇気

「それ、ミソラちゃん！」
「やったなースバル君！！」

浅瀬の海にて、二人は水の掛けあいっこをしていた。ちょうど海開きも終わったところで、水温も気持ちが良いくらいだった。なのでスバルは容赦なくなっており、ミソラの服をびしょびしょにしてしまおうと本気になっていた。

ウォーロックがいたら、笑いの種にされ、からかわれるだろう。だが今はいない。やりたい放題なのだ。

しかしスバルはことごとくびしょびしょにされた。体力的には、海に着いた時にすでに限界だったらしい。ミソラに強烈な水鉄砲を貰うと、スバルは砂浜に打ち上げられた。

「ス、スバル君、大丈夫？！」
「ふう……三年間引きこもっていた僕に隙はなかったか。ハハハ……」

スバルは砂浜で寝転がりながら、情けなくも怪しくも、薄ら笑みを浮かべていた。唇は真っ青だ。とても無理していたらしい。これで服が冷えてくると、風邪をひいてしまうのは確実だ。

ミソラは呆れていた。

「頑張りすぎだよ。スバル君」

「ゴメン。自分を過信していたようだよ」
「そんなことは良いからさ、服脱ぎなよ。冷えるよ？」
「イヤだ！　恥ずかしい！」

スバルは立ち上がって逃げる。しかしすぐに捕まる。

「逃がさないよー！」

ミソラはスバルに襲いかかった。

「言っとくけどね、勘違いしないでよ。風邪引くとスバル君の為にならないからなんだから！」
「やめて、ミソラちゃん！　委員長みたいな台詞を吐かないで！」
「やめない！」

ミソラにあれよあれよと脱がされる。
とうとうスバルはパンツ一丁にされ、三角座りを駆使してできるだけ小さくならざるをえなくなった。ハンターがあれば、新しい服をいくらでも実体化させられるが今はない。心細くて、スバルは顔を膝に埋め、子犬のようにミソラの方を眺めた。
海ではミソラが、砂まみれになったスバルの服を、洗濯してくれていた。中々にできる女の子だ。スバルは気を取り直して、ミソラの後ろ姿を凝視する事にした。

「ミソラちゃんは、良いお嫁さんになるよ」

いそいそと働く、ミソラの背中のラインを見ているスバル。すると大切な事をふと思い出した。ミソラのペースに飲み込まれてはいけないのだ。

「あ、そういえば」

スバルは「おーい」とミソラに呼びかける。するとミソラは、テトラポッドにスバルの服をひっかけ、すぐに走り寄ってきた。健康的な足のラインに見とれていれば、彼女はもう目の前だ。

「なにか用？」

「アマケンで、ミソラちゃんが天地さんに何を相談しようとしてたのかなーって。結局、聞きそびれちゃってたから」

「そう。でも、そんな事より、今度、海に来るときには、みんなで来たいね」

「う、うん……？」

「うん！」

「え、まあ、そうだけど……」

「水着を着て泳ぎたいじゃない。やっぱり」

「確かに、僕だけパンツ一丁じゃ、雰囲気でないしね」

ミソラはスバルの格好を見てクスリと笑った。

「フフ、確かに！」

「アイドルの威力に期待しておくよ」

「いやスバル君？　私の一番は歌なんですけど」

ブスっとしてミソラは、頬を膨らませたかと思うと、素足で波打ち際まで歩いていく。そしてスバルの方にくるりと振り向くと、大声で話しかけてくる。

大きな海を背景に、悪戯っぽく笑っているのが魅力的だ。そんな艶っぽいミソラは、やっと本題に触れるようだった。

「どう、スバル君。綺麗な海でしょ？　私の住んでいる街も、海が

きれいなんだよ」
「へえー。確かベイサイドシティだっけ」
「そう海岸沿いにある、港町なのだ。私はそこで生まれたのさ！」
「うん、一度行ってみたいね。ミソラちゃんの育った家にさ」
「そうだね！　ＷＷＲを倒したら、招待してあげるよ」
「じゃ、頑張らないとね！　打倒ＷＷＲだ！！」

スバルは張り切ったように、腕まくりの仕草をしてみる。すると、ミソラは悲しそうに口を閉じた。太陽は背にあるが、スバルを眩しそうに見つめていた。
敵組織を討伐することは確かに正しい。それは間違いない。しかしミソラにとっては、意味合いが少し違ってくる。
敵は父親。それは間違いのない事実。彼が何を思い、何を求めて、ＦＭ星を滅ぼそうとしているのかは、ミソラにはよく分からない。
「フェニックスに操られている？」「違う……」
ミソラは分からない。だからミソラは、天地に相談しようとした。元々職場が同じであったはずの彼なら、何か知っていたのかもしれないから。
だが、いま目の前にいるのはスバルだ。
天地は確かに、ミソラの詳しい事情を知らなかったのだろう。だがあの時、ミソラに何が足りていないかは察知していたのだった。彼にしてみれば、ミソラの表情は、父を失ったスバルとまったく同じに映っていたのだから。
同じ悲しみを背負ったスバルなら、ミソラを導いてやれる。天地の考えはそんなところだった。
そんな彼の思惑を知ってか知らずか、ミソラは観念したように硬めの笑みを浮かべると、スバルを呼びつけた。肩は落ちているが、表情は沈んでいない。せつに笑顔、そんなとこだ。

「スバル君、こっちに来てよ」

「ん？」
「いいから。なんだか、大変なことになっているみたい」
あまり大きな声は出さない。胸に手を当て、真に迫る表情でミソラは訴える。歯がゆくて、足で砂を揉みながら、スバルがここに来てくれるのを待っている。
「ど、どうしたのさ」
スバルもじっとしていては埒があかない。そしてミソラが浮かべる胸を打つ表情。恐る恐るでも、スバルはミソラの元に向かうしかないだろう。覚悟して、途方もない一歩を踏み出した。
「ありがとう」
今度はなぜか澄まし顔のミソラ。おもむろに握手を求めて、スバルの予想を軽く裏切った。
じっと見つめられれば受け入れるしかない。スバルはそれに戸惑いながらも応えてやる。
「ごめんね。スバル君」
「え？」
ミソラが小さく頭を下げる。スバルは意味が分からない。すると柔らかい感触が。
彼に考える暇も与えず、ミソラがスバルに抱きついたのだ。温かい吐息が首筋にかかり、スバルは膝が砕けそうになる。
さらにはパンツ一丁なので、本能的にスバルはミソラが怖くなった。両手を上げて降参する。しかしミソラは離してくれない。

「な……！　ミソラちゃん」
「ダメ！　動かないで……。このままで」
「いきなり……なにがどうしたの」
「スバル君にはちゃんと話しておく。だから、だれにも言わないで」
「え、泣いてるの……？」

面食らうもスバルは、肩を濡らす温かい液体をしっかり感じた。
腕を伝い指に残る冷たさは、スバルが何度も拭った涙と同じ感触だ。
ミソラは泣いているのだろう。だがミソラは、それを気取らせず、ぴしゃりと遮った。嗚咽は挟まず、いつも以上に語気が強い。
スバルは興奮する事なく、ただただ肝を冷やしてミソラに抱きつかれていた。

「聞いて……！　お願い」
「わ、わかったよ」

頷きながらも、スバルは眉をひそめた。ミソラの爪が、スバルの背中に少しの痛みを伴わせて突き立っていた。痛いが、それ以上にミソラが不気味で、スバルはどうしようもなくなり、怯えたまま彼女の背中に腕を回す。そうしてスバルはミソラの背中をさするが、恐怖が先立ち、自分が何をしているのか分からない。
ミソラは礼を言うと、話を続けた。

「優しいね。ありがとう」
「あの……」
「前に話したよね。私のパパの事」
「お、覚えている……」
「何が怖いって、何が悲しいって、自分でも分かっている。我慢はしているけど、やっぱり怖いの。今だって、頬を涙が伝ってる。スバル君がいないと私は崩れちゃってる」

「で、でもゴールは……見えているんだ」

ある可能性がぼんやりとだが浮かぶと、それが稲妻となってスバルを貫いていたのだ。気がつけば彼の口は震えながらも、ミソラが怖がっていたことを指摘していた。

「うん、スバル君は賢いね……そう、その通り。だから気付いちゃったの。見つけてしまったの……」

スバルはミソラが何を言おうとしているか、必死に考えていた。そしてそれは多分、分かっている。

「本当はね、負けちゃいたかった。そんな私が私でイヤだった。チームのみんなに申し訳ないよ……」

「キ、キミのお父さんは……」

「でも、もう引き返せないところまで来ちゃってる……。ねえ、私はどうしたらいいの？」

「気付いてあげられなかった。ゴメンよ、ミソラちゃん……ゴメン……っ」

「……た、助けて、スバル君！　私……怖いんだ。助けてよ！！　パパを！　私を！　助けてよぉ……」

ミソラの父がＷＷＲのリーダー。決勝戦のあの日、眼前にした圧倒的な電波人間がそれだ。

スバルは、ミソラを助ける事が、どれだけ難しいか分かってしまっていた。敵に回った父親の恐怖。そして何より恐ろしいのは、フェニックス・リボン自身が、明確な意志を持っているという事。ミソラを目の前にして、それでも倒すべき敵として存在している事。

どこか幸せで、信頼しあった大吾とスバルとは訳が違う。大吾さえ救えなかったスバルが、フェニックス・リボンとミソラを救える

保証はどこにもない。ましてや地球全体が、ＷＷＲを潰しにかかろうとしている現状だ。軍隊、サテラポリス、兵器、電波人間、地球の持てるありとあらゆる力をぶつける総力戦。

ミソラの願いは、地球とＦＭ星を敵に回すことを意味していた。

ミソラだってそれくらいは分かっていた。だから辛い。

「ふぇ……私、悪い子だよ。悪い子だよお……」

腕を解き、ミソラは砂に手を突いて崩れ落ちた。堪えていた感情が、溢れて嗚咽が止まらない。

スバルは手を差し伸ばす事も出来ずに、まるで見放してるかのように立ちつくす。スバルは何もできない自分の手のひらに、目を落とした。

めくるめく考えに、理想と現実が、スバルの中で葛藤していた。

「父さんさえ救えなかった僕が、ミソラちゃんのお父さんを助ける事が出来るのか？」「ミソラちゃんが泣いている！　救ってやればいい！！」「そんな事してＦＭ星はどうなる？」「ミソラちゃんのたった一人の家族、助けないと」「でも……チームを裏切る事になるんじゃ？」「ＷＷＲは敵だ」「親子が戦うなんて悲しすぎる」「でも地球を敵に回すのは怖い……」

スバルは自分の手では何も成す事が出来ない。スバルは目を瞑り悔やんだ。励ましの言葉さえ掛けられない、情けない自分を呪った。ミソラの嗚咽が耳に残る。スバルは歯を食いしばった。拳を握る。すると握った拳の内側にミソラの柔らかな手の感触と、ミソラの言葉がよみがえった。

『スバル君のこの手は、いろんな事が出来ちゃうんだもん』

スバルは、ハッとして自分の手を見つめた。この手で何をしてきたか、何を掴んで、何を失ったか。そこにあるのは震えている手の

ひら。今まで沢山のものを失って、助け損なった。だが沢山のものも掴み取ってきた。

まずはしっかりと手を差し伸ばす。そうすれば守りたいものに、少しでも手が届くかも知れない。届きさえすれば可能性がある。諦めたら何もない。

今はミソラに手を差し伸ばすしかない。それくらいしかできないが、それだけでミソラに勇気を与える事はできるはず。

スバルはミソラに、自分の正直な気持ちを吐露した。

「ミソラちゃん。キミが抱えてきた思いを僕にも分けて欲しい。そして僕は君のお父さんを救うために、全力で戦う。もちろんＦＭ星だって滅ぼさせやしない。

僕は全て守りたいから、諦めなたくないから。だから、泣かないで」

「でも、パパの力は……分かってるはずだよ、スバル君も」

「分かってる。全て分かって、キミとキミのお父さんを助けるんだ！　僕には仲間がいる！　ミソラちゃんがいる！」

スバルは覚悟を決めて手を差し伸ばした。ミソラには涙は似合わないし、一人ではとてもではないが立ち向かえない。

「だから僕と一緒に行こう！」

ミソラはこくりと頷くと、しっかりとスバルの手を取った。

ｉｇｎｉｔ―１７：地球連合軍

最終決戦が近くなったある日。

惑星パトラでは、フェニックス・リボンによる「ＦＭプラネット掃討作戦」の演説が行われていた。ブラックママル内にある数キロ四方の区画に、全ての部隊が集まっている。彼らはＡＭ星人を主にした、宇宙の戦士たちだ。それぞれの思惑を胸に、フェニックス・リボンにじっと目を向け、耳を傾けていた。

「俺達はＦＭプラネットを滅ぼすことによって、初めて自由を手に入れる！」

フェニックス・リボンの言葉は続いていき、兵の士気が上がっていく。ＡＭ星人にしてみれば、悲願の達成が近いのだ。星を滅ぼされた恨みと辛み、それを晴らす時が来た。そのために、決して負けないだけの力を手に入れたのである。宇宙中から戦士を選りすぐり、その軍事力は銀河連邦にすら匹敵する。何年もかけて集めた力。ワタルの四年が導いた結論こそが、辺り一面を埋める数という数、圧倒的な物量、純粋な力であった。何かを訴える時には、力が必要だ。力は、言葉に恐怖と圧力を植え付ける。それが自分自身の願いを、押し通す事が出来る唯一の手段であった。そう、かつてのＦＭ星がそうしたように。

ＷＷＲは容赦なく、非情に徹しひたすらに戦うだけだ。ＡＭ星人は母星の仇を討つために、その他の戦士はそれぞれの願いを叶えるために、力を振るうのだ。

フェニックス・リボンは最後に、言葉を奮わせ、組織としての意志を一丸にさせた。

「忘れるな！　今までの辛さを！　惨めさを！
掴み取れ！　自由を！　希望を！」

演説が終わると、すぐにフェニックス・リボンは鳳凰の間に戻り、そこで作戦の指揮を執り始める。それは兵士たちを、ノイズウェーブに点在するウラスクエアに配備することであった。今回は地球付近のノイズウェーブへと、戦力が重点的に置かれていく。ＷＷＲの支配していたノイズウェーブの戦力分布が、第一階層バイオレットウェーブから第七階層セピアウェーブに集中させていくのだ。

さきほどからフェニックス・リボンは、それらの要点を踏まえて、エアディスプレイを忙しく操作している。すると、玉座の隣に炎の鳥が現れて、労をねぎらってくれた。

「お疲れワタル。さっきの演説といい、どうやら心配なさそうね」
「そうだな。俺も全力でＦＭ星を潰しにかかるつもりだ。だから、お前も分かってるな？」
「ホホホ。もちろん、それが私とアナタの契約ですもの」

フェニックス・リボンは、それを聞くと再び作業に集中する。惑星パトラへの道を、厚い軍勢で固める段取りを行う。彼はミソラが相手でも、決して手を抜くつもりはないのだ。いや、むしろ手を抜く事ができない。

ワタルとフェニックスの間には、ごく簡単な契約が交わされてい

たからだ。フェニックスはＡＭの女王として、ＦＭ星に復讐を。ワタルはフェニックスの命を司る力を使い、カンナを生き返らせる。その為にはフェニックスの力と、莫大な量のオーパーツが必要だった。そのためなら、ＷＲを巨大化させ、ＦＭプラネットを滅ぼす事もいとわなかったのだ。それゆえか、ワタルとフェニックスの間における、微妙な利害関係が垣間見えた。

そんなフェニックス・リボンは、エアディスプレイに照らされて揺らめくその眼光を、ふとフェニックスに送った。その光は青く消え入りそうに燃えて、少し疲れている印象だ。

「フェニックス……。長かったな、今まで。ようやく、命の実が出来あがるんだ」

「ホホホ。そうね、それに私の命の力を加えれば、彼女は蘇る……」

フェニックスは、女王ゆえの妖艶な笑みを浮かべた。

彼らの背後には、ラ・ムーと思しき巨人像が鎮座しており、その腹部にはゆらゆらと輝く人魂のようなものが浮いていた。あれは膨大な数のオーパーツ全てを終結したエネルギーの塊。それはアカシックレコードにあった、命の果実と瓜二つだった。

そして地球。

そこでも、大がかりな殲滅作戦が、最終段階を迎えようとしていた。月日は七月二七日。エックスデーまで五日と迫った日の事である。

リフレインを始めとしたスバル達は、アメロッパにある地球連合のセンタービルに訪れていた。そこでオペレーションアポカリプスの会議が行われるのだ。場所がＷＡＸＡではなく、地球連合本部で

ある事から、地球の面子をかけた重要な会議である事が分かる。ＦＭ星の存亡を懸けた、地球にとっても初めての、惑星間任務となるのだ。失敗は許されない。

そのためか、会議室に座している各国の首脳は、厳粛な態度を一貫していた。瞬きするすることさえもためらわれる、重い緊張が充満していた。

そこは広くて、冷房も効いているはずなのに、各人の首筋に冷たいものを這わせるほどだ。会議の雰囲気から緊張を余儀なくされて、スバル達はテーブルの下で手汗にまみれたものを握りしめている。

お互いがお互いを見張っているかのような、良い知れぬ緊迫にスバルは居心地が悪い。

会議中、各国の代表とＷＡＸＡの代表が向かい合うように座り、スバル達はリフレインの後ろに並んで腰を下ろしている。その中でも、さすがのウォーロックは、ハンターからいびきをかいていた。目の前で難しい話をしている年寄りに、まるで興味がないようだ。スバルは、ポケット深くにハンターを追いやって、しっかりと会議に臨む事にする。

会の進行は、アメロッパの首脳が、きびきびとした口調で進めていく。老齢ながらも、張りのある声は、よく耳に響いてくる。

「ＷＡＸＡとサテラポリスが主体となり行っていたオペレーションアポカリプスだが、事態が急変した。敵はＦＭプラネットへの攻撃を予定しているらしい」

ニホンの首脳が続く。

「よって、地球連合軍の部隊を大幅に、この任務に追加する事が決まった。アメロッパを始めとした、軍隊と電波兵器の運用をＷＡＸＡ本部長官のリフレインに譲渡する」

歳を召しても衰える事のない達眼（たつがん）を、リフレインに向ける。リフレインは手元の資料をめくりながら応えた。

「ありがたいです。ちょうどアストラル・ホープが不足していたので助かります。懇意的な部隊の贈与に感謝します」

資料をパラパラとめくり、これからの方針を見積もっているようだ。

プルト・キグナスの、流星抹殺計画による傷跡は大きかった。リフレインの資料には軍事力を示すデータがあり、それは大きく真っ赤に塗りつぶされているのだ。

よって、ここにきての軍人の確保は、渡りに船であった。各国も軍事の分散は手痛いところだったが、ＦＭ星を滅ぼされることによる不利益を重く見ていたらしい。電波社会の発展には、彼らの助けが不可欠なのだ。

リフレインは資料を閉じて、頭を下げた。

「軍隊２００万と兵器の運用権、確かに頂戴しました」

するとシャーロの首脳がリフレインに檄を飛ばす。

「頼むぞ。我が地球の威信に懸けて、ＦＭ星を救ってくれ。現状はそれだけを第一に考えてくれ」

「分かりました。最高の結果を残せるように努力します」

一息置くと、アメロッパの首脳が次の議題を述べる。どうやら会議はまだ続くようだ。

「では、ＷＷＲへの最終対策を決めたいと思う。解放チームによれ

ば、敵の軍勢が地球圏に近づくほど厚くなっているらしい」

ＷＷＲのノイズウェーブにおける、戦力配置に話が変わる。彼らの話はまだまだ続く。

その後も数時間ほど会議は続き、その結果、ＷＡＸＡ本部長官のリフレインに全軍指揮権が譲渡されたのだった。

現状の戦力としては、ＷＷＲが６０万で地球連合軍が２００万である。

しかし苦戦が強いられることは必至だ。なぜなら戦闘周波数の合計は、ＷＷＲが地球連合軍の十倍以上にも及ぶのだから。

センタービルを後にしたスバル達は、黄昏れた赤い空を見上げて、静かに戦いの決意をしたのであった。

2026

ｉｇｎｉｔ―１８：少し早いおめでとう

八月一日。

星河家では、ミソラを招いて、少しだけ早い彼女の誕生日パーティーを行っていた。明日はＷＷＲとの最終決戦があり、とても祝ってられないための処置だった。

一階のリビングは、ルナの頑張りのおかげで華やかに彩られている。こういう時のルナは非常に役に立ち、スバルも頭が上がらない。壁紙から電飾まで何から何までルナの手配によるもの。暗い夜の中でも、スバルの家はさぞ賑やかに輝いている事だろう。

「じゃあ、準備はいいかしら？」

そんな楽しげな雰囲気の中、ルナはクラッカーを手に取り、スバル達に目をやって促す。スバルもクラッカーの紐をつまんで準備万端だ。フライングで食事にがっついているゴン太を、ルナが小突けば、本当に準備万端。テーブルクロスの上に、ゴン太の食い散らかした跡と、吹き出したものが汚くしたが、些細な問題だ。

気を取り直し、友達がミソラを囲み、息を合わせる。斜め四十五度の角度にクラッカー。完璧な包囲網に祝福の態勢が整う。

「せーの……」

パンパンと音が弾け、綺麗なテープがミソラの頭を飾り立てる。

「お誕生日おめでとうー！」

スバル達はパチパチと手を叩いて、ミソラの十二歳の誕生日を祝った。ミソラは満面の笑みを浮かべて、祝福を一人占めにする。

するとルナがミソラの元に歩み寄り、綺麗な箱を渡してやる。誕生日と言えば、プレゼントを渡してやるのが世の定めなのだ。

ミソラは、パッと晴れやかな表情になり、それを受け取った。ルナからのプレゼントだから、気の利いたもので間違いないだろう。

「ありがとう。ルナちゃん！　わ、スゴーイ！　可愛い髪留め！大事に使わせてもらうよ」

次はツカサにジャック、キザマロ、シドウ。それぞれ必死に考えて、考え抜いたプレゼントを渡す。

「ありがとう、みんな！　わあ、スピリチュアルな本に、カラスの本に、マロ辞典改訂版！　それにうまい棒三〇本入りお買い得セットまで！　私って、幸せ者だよー」

「期間限定！　夏の風物詩、スイカ味だ！！」

「スゴーイ。ありがとうございます！」

とりあえずミソラが喜んでいるので、今のところは完璧だ。次はゴン太の番。ゴン太の番は危ない気配だ。ルナと何度も何度も、思考錯誤して選んだが、ゴン太はやっぱり危険だった。

「ほら、ミソラちゃん！　牛丼の食い放題券だ！！」

「あ、バカ！」

予定と違う。とてもリアルなプレゼントにルナは短く声を上げた。

デパートで選んだ物とまるで違うのだ。予定では、最高級ボストンバッグを持たせたはず。しかしゴン太の誠実な判断から、牛丼こそ至高のプレゼントとしてしまったらしい。バッグは母親にやった。

ルナは肩を落とすが、それでもミソラは手で口を隠して驚きながら、溢れる感激を表していた。今のミソラは何が来ても嬉しいようだ。それは素晴らしい事だ。ゴン太は照れてしまう。

「ミソラちゃん。コレ……俺の気持ちさ……。受け取ってくれ」
「ありがとう、ゴン太君。これで食べ放題だね！！　今度一緒に食べに行こう」
「牛丼デートってヤツか？！　うおお、俺は幸せ者だ！」
『ブロロ。良かったなあ、ゴン太！　俺も嬉しいぜ！！』

ゴン太は狂喜乱舞して、そのままテーブルの食事を仕留めに掛かる。

すると次は夜太郎とあかね、ミライの番だ。それぞれ、料理の本、洋服、ピンクのハンカチという常識的な素敵さだった。

ミソラの幸せが絶頂を迎えようとし、最後はいよいよスバルの番である。彼はかなりの自信があるのか、堂々とミソラと向かい合った。スバルらしくないが男らしい。

「ミソラちゃん、これを」
「こ、これは……！」

スバルの手には、黒光りの宝石が乗っていた。輝きは玩具のそれではなく、我が物顔で光の粒が浮かび上がる、その攻撃的な照り返しが美しい。それはブラックノイズの結晶で、どうやらどさくさに紛れて闇市で買ってきたようだ。

ミソラはその美しさに、参ってしまいそうだった。

「キレイ……。でも、どうしてこれを？」
「フフ、僕にはミソラちゃんの事がお見通しなのさ」
「もう、スバル君ったら……」
スバルが格好つければミソラは上気し、いいムードとなる。するとウォーロックだ。
『こっそり、チビっこに聞いていたものな』
「ロック……！」
せっかく気が利く男を演出していたスバルだったが、ウォーロックに鼻っ柱を折られてしまう。
スバルはそそくさとミソラに宝石を持たせて、ぼそぼそ呟いた。
「メ、メトリーに聞いたんだ。いや、でもさっきのは嘘じゃないよ。ホ、ホントだよっ」
「うんうん。分かってる、分かってる！」
ミソラはスバルの肩を叩いて、励ましてあげる。スバルは救われたようで、胸をなでおろし、申し訳なさそうな笑顔を浮かべた。
ルナはその様子を見ていて、やれやれと溜め息混じりに肩をすくめた。締まらない男だという印象なのだろう。
「ま、プレゼントも渡した事だし、楽しく始めましょうか」
「うほほーい。飯だ飯だー」
それからしばしの間、ミソラの誕生日を祝い、楽しく過ごしたのだった。
笑い声や、ゴン太の雄叫びが聞こえるリビングは、お祭り騒ぎだ。

ミライがテーブルクロス引きをやってみたり、対抗意識を燃やしたゴン太が挑んで失敗したりで大変だった。

ただ、その談笑の輪に混ざらなかったウォーロックは、賑やかなスバル達を尻目に、ふいにハンターから飛び出すと、オックス達を呼びつけた。ウォーロックの呼び掛けの周波数に、オックス達も応じて、ハンターから出てくる。

ウォーロックは、オックス達の訝しげな表情に応えて、ベランダの窓から見えるコダマタウンの夜景を指差した。ちょうど展望台の方角だ。

「ちょっと、外に出るぞ。付き合え」
「ブロロ。分かった」
「ポロロン、なにか話？」
「チッ、偉そうなヤロウだ」
「クケケ！　さっさと行こうぜ」

それから数分後。ウォーロックたちＦＭ星人グループ五人は、コダマタウンの展望台に訪れていた。ウォーロックはまず、闇が深い草原の方に手を合わせ、目を閉じると数秒だけ黙する。

コーヴァスはウォーロックの奇行を不思議に思ったようだ。

「おい、テメエ何やってんだ？」
「……ちょっとしたまじないだ。明日は命懸けの決戦の日だからな」

軽く質問を流し、ウォーロックはくるりと体を返して草原に背を向けると、本題を切りだした。

「明日がいよいよ大一番だ。スバル達は面白おかしくミソラの誕生日で浮かれてるが、そんな場合じゃねえ」
「ポロロン、本当は明日なんだけどね」
「細けえ事はいいんだ」
ハープの訂正に、ウォーロックは小首を傾げてうなり、確認の意味を込めて五人の顔を見回した。
「正直なところお前らはどうなんだ。ＡＭ星人を敵に回して戦えんのか？」
ウォーロックは一つ憂いでいた。彼らはＦＭ星人だ。星を追いやり滅亡寸前まで蹂躙したＡＭ星人に対して、後ろめたい部分があるはずだから。彼らが、いざＡＭ女王やキリンを目の前にした時、全力を振るえる保証がなかった。情けや、自傷の気持ちから、作戦が頓挫するかも知れなかった。
なのでウォーロックは改めて、彼らＦＭ星人にその気持ちを問いかけたのだ。その問いにＡＭ星を滅ぼした張本人であるジェミニが答えた。
「確かに、後ろめたい部分はねえ事もねえ。だが、俺達の星が滅んでも良い事にはならねーな」
オックス、コーヴァスも続く。
「ブロロ！！　虫がいいかも知れないが、その事は後回しだ！　俺達は戦う！　全力で！！」
「クケケ！　ウォーロック、テメエ何言ってんだ？　俺は凶悪な犯罪者、そんな気持ちあるワケねえだろが！」

息巻く二人にウォーロックは少し拍子抜けだ。
ハープが嘆息し、彼に言ってやる。

「大丈夫よ、ウォーロック。私たちが何をやらなきゃならないか、良く分かっているから。むしろＡＭ星人であるアナタの方が心配だわ」

意地の悪い笑みを含んだハープの言葉。ウォーロックはまたオックス達の表情を見回してみたが、いよいよ馬鹿らしくなったようだ。大口を開けて、笑い上げる。
彼らは誰一人、戦う事を恐れていなかったのだ。
ウォーロックは四人に対して、拳を突き出し、共に決意を固めようと名乗りを上げる。

「俺はウォーロックだ！　確かにＡＭ星人だが、故郷に思い入れはねえ！　邪魔する奴はブッ潰すだけだ！！」

大小さまざま、個性的な拳が突き合わさり、星空の下で誓いを立てたのであった。ここにいる五人の経緯は様々だが、今は全員地球人の一員として過ごしている。ならば、何も迷う事はない。
今は地球人として、戦う。それだけで十分である。

明日、ＷＷＲと地球の戦いが始まる。その戦いの果てに何が待っているのか、今は誰も知る由はない。

ｉｇｎｉｔ―１９：煉獄のＡＭ星人アリエス・デビル

八月二日金曜日。オペレーションアポカリプス最終ステージ、ＷＲ掃討。

この作戦は、ＷＷＲからＦＭ星を守り、ノイズウェーブを解放するというものである。現在、電波人間部隊の総勢二〇〇万もの大軍勢が、地球圏のあらゆる場所からノイズウェーブに侵入して、ＷＷＲと戦闘を行っていた。そうやって、なんとかロックマン達の進む、突破口を開こうとしているのである。

そんな戦況の中、ロックマン達は衛星軌道上のコスモウェーブから、作戦開始の時を待っていた。

緊迫した中で、チームオメガのリーダーである、ソウル・レイダーが各員に任務内容を告げる。この場にいるのは、チームガンマ、デルタ、イプシロン、ゼータの面々である。この布陣には、チームオメガを必ず敵の最終拠点まで護衛するという、リフレインの計らいが込められていた。

「総員に告ぐ！　俺達の標的は敵アジト、ブラックママルにいるフェニックス・リボンだ！！　現在、アストラル・ホープ部隊が敵の注意を引いてくれている。各人、集中してその時を待て！」

「俺からも言わせてくれ。いいか、お前達。今日は特別だ。今、俺達は一つのチームだ」

ソウル・レイダーの言葉にスカッド・エースが付け加え、真に迫

る声色を皆に通し始めたのだった。
　このチームは地球の最高戦力を結集させ、敵本陣を叩くため、名実ともの最強部隊となっていた。
　ロックマン７７００ギガヘルツ。
　ソウル・レイダー８２００ギガヘルツ。
　ハープ・ノート３０００ギガヘルツ。
　オックス・ファイア３２００ギガヘルツ。
　スコープ・スナイパー３１００ギガヘルツ。
　グリット・メトリー３６００ギガヘルツ。
　スカッド・エース４８００ギガヘルツ。
　サーフ・サーファー３７００ギガヘルツ。
　クイーン・ヴァルゴ３８００ギガヘルツ。
　ジャック・コーヴァス４０００ギガヘルツ。
　ジェミニ・スパークＷ３９００ギガヘルツ。
　ジェミニ・スパークＢ３９００ギガヘルツ。
　ウルフ・フォレスト４１００ギガヘルツ。
　彼ら総勢十三人からなる、少数精鋭の機動部隊である。
　アストラル・ホープの戦闘周波数が２０００ギガヘルツほどである以上、その力は言うに及ばない。
　スカッド・エースは拳を突き上げて、そのチーム名を掲げた。
「その名も地球連合軍スペシャルチーム『スターダスト』だ！！」
　その気の利いたネーミングに、ロックマンは思わず、在りし日の親友を思い浮かべた。
「スターダスト……か」
『へっ……やってくれるぜ』
　胸に温かいものを感じながら、スカッド・エースは思いを馳せる

ロックマンに、事の背景を教えてやる。
アカシックレコードでの出来事は、地球の人々にちゃんと伝わっていたこと。トラッシュとスターダスト・ロックマンという戦士が、未来を繋いだこと。その事実を、連合の首脳陣が、誇りに掲げたこと。
それがチームスターダストであると。
その事実に、ロックマンは力強く頷いた。

「分かってます。僕たちは、命を懸けて守らないといけない。ＦＭ星を……友達を」

ロックマンがより決意を固める。彼はミソラとした約束から、フェニックス・リボンさえも救おうと心に誓っていた。それがどんな困難な事でも、やり抜かなければならない。それは奇跡に間違いないが、その奇跡を見せてくれた友達がいたから、ロックマンは諦めずに前に進む事ができるのだ。
奇跡は起こせるという事を、地球人は知っているのだ。

そして数分後。ソウル・レイダーに、オペレーターであるハートレスから連絡が入った。彼のハンターが電子音を高く鳴らすと、エアディスプレイが平べったく出来あがる。

「来たか……」
《ミライ君ね。さっそく現状を伝えます。アストラル・ホープ部隊が、第一階層から第七階層までのＷＷＲ部隊との戦闘を開始。足止めに成功しました》
「なら……！」

《はい。チームスターダストはノイズウェーブに侵入して、敵の拠点に向かってください。敵との戦闘は控えて、迅速にお願いします》

「了解」

ソウル・レイダーはエアディスプレイを閉じると、すぐ先にある裏世界への入り口を指差し、ロックマン達に合図を送った。いよいよ始まりだ。

チーム全員が、このポイントにあるノイズウェーブの入り口へ向かって、並々ならぬ意気込みを見せた。

ソウル・レイダーが先頭を切った。

「無事に敵の足止めに成功した。いま俺達の道を邪魔する敵は手薄だ。行くぞ、みんな！」

「了解！！」

その場の全員が声を合わせて威勢よく返事を返す。そしてすぐに、ノイズウェーブに繋がる、空間の歪みに身を投げ入れたのだった。

ロックマン達が抜け出した場所は、ノイズウェーブ第一階層バイオレットウェーブ。確かにアストラル・ホープがＷＷＲの軍勢を相手取っているだけあり、辺りには静寂が漂っていた。黒ずんだ紫のノイズが砂塵のように舞っているだけである。ノイズウェーブトーナメントを勝ち抜いたロックマンにしてみれば、何の変哲もない光景だ。

そしてソウル・レイダーが先を行き、慎重にノイズウェーブを進んでいく。数メートル先で辺りを見回し、何もない事を確認すると、後方のロックマン達に安全を伝えた。

「みんな、先に進むぞ。次は第二階層だ」

警戒を少し解いて、ロックマン達がソウル・レイダーの元に歩いていく。

するとジャック・コーヴァスは、ソウル・レイダーの背後に違和感を感じたようで立ち止まった。空間が歪んでいくような錯覚だ。しかし歪みが大きくなり、人型を作る。それが錯覚ではない事に気が付くと、すぐに声を上げた。

間違いなくあれは伏兵。

「おい、後ろ!!」

ソウル・レイダーの背後から、狂気じみた声が上がった。

「食らえ、スカーレッドジャベリン!!」

すでに後ろの歪みは、完全な人型になっていた。それがソウル・レイダーに襲いかかる。赤い炎が鋭く伸びて、ノイズウェーブの世界を照らし上げた。

ソウル・レイダーは振り向きざまに、剣を横一閃に払う。赤い炎が上下に切り分かれて、ソウル・レイダーは後ろに飛び退きながらロックマン達と合流する。

炎に焼かれたウェーブロードは灼熱にやられ、ドロドロに溶け落ちていた。

「クッ、敵が潜んでいたのか!?」

ソウル・レイダーは焦げた毛先を尻目に見て、敵の力量を推し量った。

向かい合う先にいるのは、羊のような角を持った紅い電波体だ。コウモリの羽を背中から雄々しく伸ばして、まるで空想上の悪魔そのもの。

悪魔は不思議そうに首を傾げて、小馬鹿にした様子でソウル・レイダーに質問を投げる。

「おいおい、周波数と姿を消すのは基礎中の基礎だろう。違うか？」

ソウル・レイダーは柄に手を添えて、構えをとる。油断はしていなかっただけに、その警戒網をかいくぐった敵が恐ろしく映ったはず。

「ちゃんと探っていたはず……お前、何者だ？」

「そうかそうか。まあ、気にするな……。俺は強くて強くて最強だからな。周波数変換もお前らの数倍は上手いのさ」

「コイツ……できる」

悪魔の電波体は、一歩一歩にじり寄ってくる。ソウル・レイダーの方は、十三人から成る電波人間の部隊である。対する敵は一体。それでも、敵は余裕気に近寄ってくる。多数を苦にしない、圧倒的な力と自信が、その淀みない足取りからうかがえた。単騎で伏兵を務めるだけあり、敵は強い。それもかなりのものだ。

すると悪魔は、ソウル・レイダー達に自分の事を懇切丁寧に教えてやる。度の過ぎた余裕なのか、その態度はソウル・レイダー達を侮辱しているのと同じだ。

「俺の名前はアリエス・デビル。牡羊座のＡＭ星人さ。言っとくが、俺もお前たちと同じ優勝チーム。まあ、幹部なんでかなり強い。いや、幹部の中でもかなり強いっ！」

よほど自信家のＡＭ星人だ。尊大な態度で迫り見下してくる視線から、いちるの迷い、情けは感じられない。ロックマン達をここで終わらそうと、彼なりの正義や情熱に燃え、その黄金の瞳が物語っていた。

敵のありありとした自信の目立つ言葉を受け、スコープ・スナイパーとクイーン・ヴァルゴが、エアディスプレイで分析する。そうすると、堪らず声を上げた。相手は口だけではなく、実力も本物であったのだ。甘い気持ちで、戦闘周波数なんて探るものではなかったようだ。

「げえっ、戦闘周波数９０００ギガヘルツ!?　キリン・ライトニングとほとんど同じ!」

「シンクロ率も、１５００％を越えている。信じられない」

「ようやく分かったか。女王様に頼まれて、待ち伏せてたんだが…お前らにとってはとんだ災難だったな!」

強気な笑みに、笑っていない瞳が恐ろしい。

ジェミニ・スパークＢは、運の悪さを嘆き、毒を吐く。

「初っ端からこれじゃ、やってられねー!」

その弱音を合図に、アリエス・デビルは勢いよく襲いかかってきた。ロックマン達の中で一番強い、ソウル・レイダーでも１０００ギガヘルツほど及ばない強敵だ。

赤い炎が暗黒を血染めに照らした。

「ハッハッハッ！　逃げてばかりかー？　おらよ、デビルブレア！！」

アリエス・デビルの両の手から赤い炎の弾丸が飛び、ロックマン達を襲う。「ほら、もういっちょ、デビルブレア！」横殴りの炎の雨が降り注ぎ、それをロックマン達はかいくぐってやり過ごす。立ち止まったら、すぐ後ろのウェーブロード同様に溶かされてしまうだろう。

現在ロックマン達は、アリエス・デビルから逃げながら、敵アジトに向かって進んでいた。しかしこの現状はあまりにも、危険でお粗末だ。アリエス・デビルは付かずとも離れずのところで、ロックマンの後を追っている。それはまるで、どこかに誘い込もうとしているかのよう。もしさらなる敵と鉢合わせになれば、挟み打ちを受けてしまう良くない状況だ。

しかしアリエス・デビルとまともにやり合えば、タダでは済まない。リスクを考えても、今は逃げるしかなかった。

「ミライ君！　どうするの？」

ロックマンは背後の様子を確認しながら、湧き上がる不安な気持ちを押し殺し、問いかけた。

それに対しソウル・レイダーは第二階層を目指して、振り向かずにノイズウェーブを駆け抜けるだけだった。申し訳程度に、当たり

前の事を捻りだすので精一杯なのだった。これからの事態を目算しなければならない以上、彼にも余裕はない。

「今は、逃げるしかない。出来る限り戦闘は避けて、体力を残して敵のアジトに着かなければならないんだ……！」

ソウル・レイダーが、よしなしと苦し紛れに言った時だった。彼の視界の端で、赤い炎が大きく爆発し炎上、背後を噴煙ですっかり覆ってしまう。焦げ臭い異臭が鼻に付くが、すぐに少女の声が耳に飛び込んだ。

「きゃっ」と小さな悲鳴が後ろで上がるのだ。どうやらハープ・ノートが、敵の炎に足をすくわれてしまったらしい。

ロックマン達は急停止して、振り返った。

アリエス・デビルが、座りこんでいるハープ・ノートににじり寄っている。煙から上半身を浮かせて、巨躯の電波体が少女を覆うような光景。

「やっと、捕まえたぜ。まったくチョロチョロ逃げてくれて……」

アリエス・デビルはハープ・ノートのヘルメットを鷲掴みにして、ひょいと持ち上げる。すぐさま抵抗されて、少女の四肢が逃げ出そうと暴れるが、それは空を切るばかりだった。それほどの対格差で、ハープ・ノートのリーチと、彼のそれではまるで比べ物にならなかった。

しゃにむにハープ・ノートは、ギターでアリエス・デビルを殴るが、簡単に受け止められてしまった。少女は堪らず悲鳴を上げた。

「はなして！」

「ダメだろ。分かりきった事だな」

その様子にロックマン達は、それぞれの武器を構えた。仲間を放っておくわけにはいかず、何とかハープ・ノートを救い出そうと考えたらしい。ソウル・レイダーは苦い表情を浮かべるも、戦闘もやむなしと、静かに剣を抜いた。

「こうなっては、四の五の言ってられないな……」

「ミソラちゃんを助けよう……！」

意気込むロックマンだったが、サーフ・サーファーがロックバスターにそっと手を乗せて制止する。何も言わず、彼は首を横に振ってみせると、ボードに乗り、戦闘態勢をとった。ボードからは並々でない粒子が漏れ出し、それが電波の道を作り始めていた。

「ひゃっほうー！」その声はノリ良く響く。彼は、アリエス・デビルの方へ伸ばしたレールに乗って、単身で仕掛けたのだ。

「キミ達は先に進みな！　この悪魔くんは僕が食い止める！」

奇襲をしかけサーフ・サーファーは、颯爽とハープ・ノートを奪い取り、アリエス・デビルを相手取った。赤い悪魔は彼の奇妙な体捌きに小さく唸る。

救われたハープ・ノートは、サーフ・サーファーが作りだした道に乗って、ロックマン達の元に逃れる。

アリエス・デビルは、寂しくなった手をぶらぶらさせ、ニヤリとサーフ・サーファーに対して笑みを浮かべた。トリッキーながらも研ぎ澄ました周波数に、闘争心をくすぐられたようだ。

「ああん。やろうってのか？　波乗り野郎！」

「もちろん！　ここから先は通さないっていうね！！　そういうニュアンスさ！」

サーフ・サーファーが、決して譲らない姿勢を見せると、アリエス・デビルは炎を飛ばして、邪魔者を排除しようとする。サーフ・サーファーはボードを素早く切り返して、レールをなぞって宙を舞う。空中で身をひるがえしつつ、ロックマン達に余裕なく促がした。敵は強く、さすがの陽気者も切羽詰まった様子である。

「はやく行くんだ！」

ロックマン達はサーフ・サーファーの身を案じ、その場に一瞬だけ張り付けになる。だがソウル・レイダーが、すぐにその意思を汲み、深部に向かって走り始めた。背中を向けるその姿は、サーフ・サーファーに全てを託したのだと語っている。

ロックマン達も続き、迷いを振り切るかのように振り返る事もせず、ノイズウェーブの奥に消えて行った。

サーフ・サーファーがフッと笑いそれを見送ると、アリエス・デビルの方に向き直る。

アリエス・デビルは、威圧的にまくし立てた。

「命がけか?！　ああ?　お前は残念なヤツだ！　力の差が分からんらしいなぁ」

「まあ、ここは一つ格好つけさせてくれよ！」

サーフ・サーファーの身を呈した活躍によって、チーム一同は何とか、アリエス・デビルの手から逃れる事ができたのだった。

それからロックマン達は、しばらくノイズウェーブを突き進み、

とうとう第七階層のセピアウェーブを脱出することに成功した。いの一番の伏兵には度肝を抜かれたが、サーフ・サーファー以外は、何とか全員無事だった。

そして暗黒世界から、外宇宙に飛び出し、惑星パトラのコスモウェーブに降り立ったのだ。そこで迎える小さな星の輝きは穏やかな印象で、ノイズウェーブで血で血を洗う戦いが起きているなど感じさせなかった。

ふとロックマンは、その中でもひと際大きく眩しい惑星パトラを見下ろした。コスモウェーブの一本が、厚い大気の層へ伸び、緑色の大地に続いているはず。それは地球のような惑星で、思わず息を呑む美しさだった。

「ここが、ＷＷＲのアジトがある星か……」

ハープ・ノートも、戦いの中に似合わない平和な気配に胸をなでおろしている。

「キレイだね」

しかし安心している場合ではなく、ソウル・レイダーが、チームの皆に決起を促す。剣を抜いて、その切っ先で惑星を示した。

ここから先は、より過酷だ。ガイドデータに綴（つづ）られた惑星パトラとブラックママルである。要注意と睨めば、表情も厳しくなっていく。油断を許さないムー人と同列のパトラ人。そしてムー大陸と同列のブラックママルは、地球人にとっては未知の領域だ。

一筋縄ではいかないだろうと感じた各員は、ピンと緊張の糸を張らせたのであった。

チームの士気が高まった事を確認すると、ソウル・レイダーは改めて眼下の星を見つめる。地球とも似通う、儚げな惑星パトラがそこにはあった。ぼうっと浮き上がるような不思議な感覚を、腹の底

からふつふつと沸きあがらせる。彼は穏やかな口調だったが、言い知れぬ奇妙な戦慄を覚えていた事だろう。

「惑星パトラ。どうやら、間に合ったようだな……。みんな敵アジトを叩くぞ！」

ソウル・レイダーを先頭にしてパトラに落ちて行き、それにロックマンも続いた。

大きな試練を目の前に果敢に挑んでいく。ロックマン達の差し迫った表情からは、この惑星で待ちうける恐怖の渦を予感させた。

ロックマンに対するＷＷＲも、最終決戦に臨む以上、パトラに布いている軍勢は並のものではないだろう。

緑色の大地に待ち受けるのは、平和とはかけ離れた真っ赤な海であるのだから。

ｉｇｎｉｔ―２１：流麗のＡＭ星人レイン・アクエリア

炎に焼かれた空には、黒い大陸が浮いている。
そのＷＷＲの要塞アジトが浮遊する、この場所こそが惑星パトラである。宇宙から見れば、平穏だったが、踏みしめた大地は違った。
水車は破壊され、渓流に民家の残骸が流されている。畜舎は粉々に砕かれて、家畜が身を焼かれて絶命していた。作物は消し炭となり、死の大地を延々と広がらせる。
そんな農村地区では、ノイズウェーブを先に脱出していたアストラル・ホープ部隊が、ＷＷＲの戦闘部隊と交戦していた。大地を揺るがす爆音に挟まれる、男の悲鳴。
化学兵器と電波兵器が爆発と黒煙を生み出し、のどかな村を包み込んでいたのである。逃げ遅れた人々が悲鳴を上げる。家の焼け焦げた匂いに、赤ん坊が泣き叫び、老人は逃げ場なくその場で天を仰ぐ。青空に炎が立ち上れば、終末の気配を匂わせるだけだ。そう、赤く空が燃え、その惨状を物語る。
これは戦争。ぶつかる地球人の正義とＷＷＲの正義の狭間で、罪のない人々が虐げられている図がのさばっていた。

ロックマンは凄惨たる光景に唖然とするばかりだ。だが空には敵の本拠地が浮いており、それを打倒するため俯いている場合ではないだろう。
ロックマンは空に浮かぶ黒い大陸を見上げて、その壮大さに思わず度肝を抜かれる。

「アレがブラックママルか……本当にムー大陸そっくりだ」

ロックマンはかつてのオリヒメとの激闘を思い出し、決意を固め、そして恐れた。

するとソウル・レイダーは、戦場を見渡し始めた。

「行くぞ、星河。早くこの戦いを終わらせるんだ」

戦場の真ん中でソウル・レイダーが、その悲惨さに罪悪感を覚えつつも、ロックマンに呼び掛ける。ロックマンはそれに応じて、ブラックママルに続くウェーブロードを探し始める。

そのようにそれぞれが道を探して空を仰いでいると、突然、鼓膜を押す圧迫感が辺りを埋めた。すると彼らの頭上を、民家の屋根が、激しくきりもみ飛んでいく。そして大きな爆発音が鳴り響いた瞬間、瓦礫片が彼らを襲ったのであった。音の大きさや、瓦礫の勢いからして敵の距離は近いだろう。

そして間髪いれず、上空のウェーブロードから次々と敵の軍勢が降り立ち、ロックマンの行く手を阻んだのであった。ここは戦場で、いつだって敵の包囲網の中にあるのだ。さらには、今回の敵は多勢であり、ＡＭ星人の幹部らしき者が、数百の敵を引きつれていた。ロックマン達は十二人の部隊でしかなく、良くない展開だった。

最も強い周波数を放つ幹部は女性型だ。その電波体がロックマン達の道を塞ぎ、ブラックママルへは行かせてはくれないらしい。彼女は水瓶を手にし、美しくも凛とした態度で迫ってくる。

「あらあら、ここにも地球の方が。まったく迷惑な方たちです。平和に暮らしていたパトラの人達を脅かして……」

頬に手を添えて、あくまで上品に相手を見下す。まるでヘラ・ローズガーデンのようだった。そんなあまりの言いように、ウォーロ

ックが実体化して、女に怒鳴りつけた。

「お前らこそ、ＦＭ星をブッ潰そうとしているんだろう？！　人の事言えねーぜ。だろうアクエリアよ！！」

ウォーロックは目付き鋭く言い放った。

馴染みがあるらしく、微笑を伴わせアクエリアはかつての友人に自己紹介を始める。悠長な様子だが、常に余裕があるゆえだろう。

「あら、ウォーロック。久しぶりね、いかにも私は水がめ座のＡＭ星人アクエリア。もっとも……今は、ＷＷＲの幹部レイン・アクエリアですけどね」

レイン・アクエリアは礼儀正しく頭を下げると、憂い顔で燃え盛る村の全容を見据えた。そして嘆息混じりにウォーロック達に訴えてくる。美しい顔を少し曇らせて作るのは、切実な態度だった。

「ここの人達は、優しくて素晴らしい方なのに。ブラックママルに逃げ遅れただけでこんな事に……ああ、不憫ね」

彼女の視界には逃げ惑う人々だけが、鮮明に映っているのだろう。そして視界の隅で戦うアストラル・ホープとＷＷＲの戦士とを見比べて、悲しそうに透き通った涙を流す。

「なぜ戦うのです？　今の事態をＡＭ女王様は悲しんでおいでです……。なぜ私たちの邪魔をするのです？」

「決まってる。ＦＭ星を守るためだ……！　パトラ人には悪いが、お前らを野放しにするわけにはいかない。ここを見過ごせば、何億という命が失われる！」

「残念ね、ウォーロック。アナタもすっかりＦＭ星人の考えだわ。

まったく自分勝手、今の状況がそれを物語っている。昔のアナタはワイルドで素敵だったのに……」

語尾をかすめて悲しみに浸るレイン・アクエリアだったが切り替えは早く、部下の戦士にすぐに撃退命令を出す。敵は敵と割り切って容赦はないのだ。

「く、来る！」ロックマンは数百の軍勢に対し、身構え応戦しようとする。しかしソウル・レイダーの方はまだ戦う時ではないと感じ、戦闘を回避しようとする。ロックマン達を引きつれウェーブロードを迂回し、ブラックママルに回り込む事に決めたのだ。

しかし、レイン・アクエリアは逃がしてくれない。水瓶から高圧水流を射出して回り、ソウル・レイダー達の周囲にあるウェーブロードをことごとく断ち切ってしまった。ウェーブロードはぐったりと地面に垂れて崩れ落ちる。

「ウォーターブレード、です。ノイズウェーブから頑張って来てくれたところ悪いですが、逃がしはしませんよ」

レイン・アクエリアに逃げ道を分断され、戦う事を余儀なくされたロックマン達だった。いよいよ覚悟を決めなければならず、各々の背中に悪寒が走る。レイン・アクエリアもやはり強く、戦闘周波数８８００ギガヘルツを有していた。まともに戦えば無事では済まないだろう。

しかしそこに、奇跡的な生還を果たした彼が助けに入ってくる。空が虹色に輝き始めたのだ。「トロピカルビッグウェーブ！！」その叫び声が、ロックマン達の頭上から響き、色とりどりの波が敵を一掃したのである。

レイン・アクエリアは周波数変換を駆使して敵の攻撃を無効化したが、大量の部下が後方に流されてしまった。ところどころにヤシの実が転がっており、南国の気配が漂う。

レイン・アクエリアは少し眉間にしわを寄せて、頭上を仰ぐ。そこにはロックマンを逃がすために、第一階層で、単身アリエス・デビルに挑んだサーフ・サーファーがいたのだ。彼は地面に続くウェーブロードを作りだし、ジェットコースターのように降りてくる。そうやって颯爽とロックマン達の前に、再び現れたのである。ボロボロだが、サーフ・サーファーは確かに生きていた。アリエス・デビルを相手にしての奇跡的な生還だった。

助けてもらったものの、正直なものでハープ・ノートは、命の恩人に絶句してしまう。

「な、南国さん、無事だったんですか？」

「まあね、でも僕一人だけじゃ間違いなくやられてたけどね！」

「一人……？」

不思議そうに首を傾げるハープ・ノートだったが、サーフ・サーファーは笑みを含ませ上空を指差した。サーフ・サーファーが作りだしたウェーブロードから、大量の電波人間が降りてきていたのだ。髪についたすすを払い、サーフ・サーファーは白い歯を見せる。

「とっても強力な助っ人の登場さ！」

呼応するかのように、勇猛な女の声が上空から降り注いだ。

「総員、攻撃用意！」

するとレイン・アクエリアに対し、上空から波乗攻撃が仕掛けられた。血のように赤いナイフの雨と、電波エネルギーの弾丸の嵐が降り注ぐ。たまりかね、レイン・アクエリアは水のバリアを傘のように張って、その場に釘づけになる。たちまち辺りの地面はレイン・アクエリアを残して削り取られていった。

「クッ……！　増援ですか！」

そしてロックマンは、女の正体にようやく気が付くと歓喜の悲鳴を上げた。ＡＭ星人の幹部に対抗しうるだけの、最強の戦士の登場だったのだ。

「レ、レベッカさん！」

ブラッド・ホープとアストラル・ホープの部隊が、ロックマン達の援護に到着したのであった。おそらくノイズウェーブでサーフ・サーファーと合流し、エリアス・デビルを倒して、そのままここに訪れたのだろう。

研究職であろうと、彼女はきずなクルーである以上、その力は本物だ。

ブラッド・ホープは威風堂々とした姿勢で、レイン・アクエリアに相対すると、力強く頼りがいのある笑みを浮かべた。

「さあ、ここからが地球連合軍の反撃開始よ！」

ignit―22：母なる電波神ラ・マリア

ブラッド・ホープの合流により、すぐに反撃が開始される。

現在、ブラッド・ホープとレイン・アクエリアは、畑の上で何度か攻撃のやり取りを交わしていた。収穫前の作物は、引っ掻いたように抉り返され、無残なものだ。

空気を裂きながら、血染めのナイフがレイン・アクエリアを襲う。だが、水のバリアが花開き、それを弾き飛ばす。するとナイフはクルクルと四方に散らばって土を掘り返し、いくらか野菜をカットさせた。

水瓶から無尽蔵の水を垂れ流すレイン・アクエリアは、まだまだ余裕の表情だった。おもむろに円弧を描くように、水を宙に吐き出させると鋭い形を作り、それを握りこんで曲剣とする。ヒュッヒュッと剣で空気を切れば、飛沫が涼しげに舞い、そこらじゅうで燃える炎に照り返され、ダイヤモンドの輝きであった。

ブラッド・ホープもナイフを手に取り、鋭い周波数のエネルギーを刃に纏わせ、赤い日本刀を作りだす。こちらは血飛沫を情熱的に舞わせ、見る者の戦闘意欲をかき立てさせる。

レイン・アクエリアは澄ました態度ながらも、ブラッド・ホープの力を認めたようだ。その声色は穏やかながらも、どこか冷徹に徹しているらしく、端々の音調が尖っていた。

「アナタ、中々の力をお持ちのようで……」

「アタシはジョニーの先輩だからね。言っとくけど、強いわよ？」

油断を完全にどかし、レイン・アクエリアはブラッド・ホープの戦闘周波数を気取る。すると、もう迂闊には手を出してこなくなる。両陣営は、お互いの隙をうかがうように、互いに睨み合い膠着状態となった。

そしてブラッド・ホープは、様子を見守るロックマン達を尻目に見つつ、作戦の続行を言いつけた。

「敵は食いとめるから、アナタ達はブラックママルに行きなさい！」

「切り崩されたウェーブロードなら、僕が作りだすから、みんな行ってくれ！」

言うが早いか、サーフボードから放出される光の粒子が集まり、長く続くウェーブロードが姿を現した。それはブラックママルへと一本の道をまっすぐに延ばしていた。

サーフ・サーファーが作りだした電波の道を仰ぐと、ロックマン達はすぐに駆けのぼる。レベッカ達への礼をそこそこにブラックママルへと走り始めた。

「行こう！　みんな！！」

ロックマンの呼び掛けに、それぞれが返事を返すと、十二の電波人間は閃光となりウェーブロードを駆けていく。

空に浮かぶ漆黒の大陸は、近づくほどに威圧的で、その黒々とした外観は、見る者を呑みこんでしまいそうだ。槍のように天高く伸びる電波塔からは、波乗の電波が広がっており、今もなお生きている大陸の息づかいが見受けられた。

そしてさらに寄れば、表層部分にはおびただしい数の建築物が毛羽立っており、そこに生活圏があるとうかがえる。そこでは、逃げ延びたパトラの人々が、建物の間を縫うように歩いていた。そこま

でくれば大陸とは目と鼻の先だ。
　ロックマン達は、ウェーブロードが途切れたところで飛び降りると、その居住区画に降り立った。いくらかのパトラ人と目が合うが、彼らはすぐに逃げ出してしまう。ロックマン達は内心で頭を下げて、古代神殿への入り口を探すため奔走を開始した。

　ロックマン達が必死の思いで向かってくる中。鳳凰の間ではフェニックス・リボンとフェニックスの計画が、実を結ぼうとしていた。
　フェニックス・リボンは祭壇のラ・ムーの像を見上げ、来るべくその時を待っていた。彼の眼中には、像の腹部で輝く命の輝きだけが、一杯に広がっている。今までの全てが、この光り輝く命の果実に宿っている。ワタルが全てを捨てて、手にしようとしたのはカンナの命だった。ラ・ムーの腹の中で、それがゆらゆらと神秘的に燃えているのだ。命の実は徐々に膨れ、完成に近づいていった。
　それが手に入るまで、もう少しのところまで来ている。フェニックス・リボンは拳を握り込み、とめどない想いに目頭を熱くさせた。

「大量のオーパーツを媒体にした、アカシックレコードへのアクセス……。そのエネルギーを駆使して、デッドエリアからカンナを現実へと救い出す……ようやくだ」

　長く息を吐くフェニックス・リボン。カンナの笑顔が頭に浮かぶと、郷愁（きょうしゅう）に駆られる。そんな彼の隣にフェニックスが現れ、しみじみと彼の言葉を継いだ。

「そして私が、このオーパーツの塊から作られた肉体に、命のデータを定着させる……」

「ああ、頼む……」
「でも、それはＦＭ星を滅ぼしてからよ。それが私との契約だから」
「……分かっている」

フェニックス・リボンは返事を返すと、手のひらを広げ、おもむろにエアディスプレイに目を落とす。彼の手のひらの上では、ロックマン達が遺跡の通路を駆けずりまわっていた。その他の各通路でも、アストラル・ホープの姿が確認できた。だが、アジトに辿りついた者は少ないようで、遺跡の警備に当たっていた神官や、戦闘部隊に苦戦しているようだった。

それにブラックママル内のガイドデータは、彼らに配布していなかった。なので右も左も分からないのだろう彼らは、徐々に疲労し体力を失っているようである。

フェニックス・リボンはその様子を確認すると、次の段階に計画を移行させる。ラ・ムーの祭壇に上っていき、台座のコントロールパネルを操作し始めたのだ。石造りのそれの中に、異様な組み合わせで電子パネルがあり、数字と文字を浮かび上がらせていた。

フェニックス・リボンは、それを素早く叩いて指を走らせる。あるシステムに認証するコードを打ちこんでいるのだ。

「ここには辿りついたものの、内部構造までは分からないのだろう。果たしてどれだけ鳳凰の間まで辿りつける事か……。今のところは順調だな」

フェニックス・リボンはパネルを操作しながら、ふと続けた。彼はパトラ人の事を憂いでいたのだ。

「しかし、地球人との戦闘に逃げ遅れた彼らが巻き込まれたのは俺のミスか……」

フェニックス・リボンはうなだれ、もっと早く避難勧告を出しておけばよかったと後悔した。結果として、逃げ遅れた人々には辛い思いをさせてしまったのだ。パトラの人々に感謝しているフェニックス・リボンは、胸を痛めているらしい。

しかし、予想以上に早く、地球人にノイズウェーブを攻略されたのもまた事実だった。彼らの戦闘能力が、ゼロＰＧＭのおかげで跳ね上がっている事を、知らないゆえのミスだったのだ。

終わった事を悔いても仕方がない、と言いたげに、フェニックスがブラックママルの状態を教えてやる。

「でも、ワタル。もう少しでブラックママルに、パトラの方の非難は完了するわよ。居住区画もまだ収容の余裕もあるみたいだし、心配する必要はないわ」

「そうか……では避難完了次第、ブラックママルをＦＭ星にジャンプさせる」

フェニックス・リボンはラ・ムーを見上げると一息吐き、パネルの操作を終える。するとラ・ムー像の瞳が怪しく輝き、抑揚のない機械音声を流し始めた。口はないので、一音ごとに目が明滅しており、それは不気味な姿と言える。

まずラ・ムーとは地球におけるムー人にとっての呼称に過ぎず、本来の名称は【Ｎ１３ＺＰ輸送型環境ライブラリ・ユグノア】の自動航行を管理する【マザーシステム】というもの。地球ではラ・ムー復活にオーパーツが必要とされていたが、実際のところ、宇宙航行をオペレートするためのエネルギー源という意味合いでしかなかった。今まさに、腹部で漂っているそれが、そのエネルギーである。

それゆえラ・ムーに神としての威厳などあるはずがなく、不気味に言葉を並べ立てているだけだった。

《大陸型宇宙艦ユグノアへのアクセスヲ確認シマシタ。コチラ、マ

ザーシステム。認証……メインシステム起動ニ必要なエネルギーを確認。システムを起動シマス》

大量のオーパーツのエネルギー供給を受けて、ラ・ムーことマザーシステムが、本来の力を取り戻したのであった。

オリヒメが復活させたラ・ムーではオーパーツの数が足りなく、星間航行はできなかったが、このラ・ムーは違う。ＷＷＲが宇宙中からエネルギーを集めていたので言うに及ばない。

どうやらＦＭ星の崩壊の時は近いようだ。

ｉｇｎｉｔ―２３：死地！

フェニックス・リボンが不穏な動きを見せる中、ロックマン達は何とかブラックママル神殿に潜入し、鳳凰の間を目指していた。しかし中々苦戦しているようで、かれこれ六時間以上が経っている。

言うまでもなく狭い神殿の通路では、たびたび神官とＷＷＲの戦士と鉢合わせになる。神官が電波変換した姿――レム・オリジンはかなりの戦闘周波数で、迂闊には手が出せない。かと言って、ＷＷＲの幹部クラスは言うに及ばず。戦闘を行うリスクが少ない相手は、弱く力のない戦士だが、流石にトーナメントを勝ち抜いてきた猛者だけあり、そんな輩は露ほどもいなかった。

このチームは、敵の総大将フェニックス・リボンを叩く役目があるために、無駄な体力を使ってはいられない。それでなくとも彼は強い。十二人でかかって勝てるかどうか。敵との交戦はアストラル・ホープに任せて、出来るだけ戦闘は回避しなければならないのである。

よってロックマン達は、逃げ回る事を強いられ、進路の方向さえもままならなかったのだった。そのおかげか、なかなかコントロールルーム（鳳凰の間）に辿りつく事は出来なかった。

さらに内部構造も複雑な迷路と化しており、先がまるで見えない。かつてオリヒメとの決戦で、ムー大陸に侵入したことがあるロックマンでさえも、どこに敵がいるのか分からない状況下では、迂闊に進めず、手も足も出なかった。

そうなると結局、チーム全体に疲労が募っていく。疲れからか足取りが重く、今度敵に見つかれば、戦闘を回避する事は出来ないだ

ろう。

首尾は良くなくも、一団はしばらく内部を彷徨っていると、少し開けた場所に出てこれた。十二人が広がってもまだまだ余裕のある、この神殿では貴重な場所である。ただ、そこには棺が点々と転がっており、壁の石板にはミミズがのたくったような文字や、王冠をかぶった人の絵が刻まれている。おそらく王族か何かの、墓なのだろう。

そんな辛気臭い場所でも、落ち着く事には不便はない。着くやいなや、オックス・ファイアは腰を下ろして、手をパタパタとうちわのようにして扇ぎ始める。ここは大陸中枢区画で、大陸を浮遊させるエネルギーの変換処理を常に行っている。そのため熱量も多く、体力を奪う蒸し風呂のようであった。

ソウル・レイダーは、休憩を始める仲間の様子から、重苦しく黙考する。彼自身は、環境による寒暖の影響は受けないが、なにぶん子供の多い部隊だ。体力的、精神的にきついものがあるのだろう。任務を開始してから、六時間以上も緊張の糸を張りっぱなしだったのだから。

そのため彼も壁にもたれかかって一息吐く。気苦労から、少しぼんやりしていた。

「まずいな……。チームの疲れが見え始めているか」

しかしこの状況下では、気の休まる猶予は一時もない。この広場は、通路に続く出入口が二つしかなく、挟み撃ちになる危険性が高い。もちろん複雑な迷路でもないので、挟まれたら逃げ場はなかった。ここは古代の神殿であるので、かつてブライが見せた壁の透過はできない。ここの環境周波数は、あまりにも特殊で、ムー人でしか干渉ができないのだから。

ソウル・レイダーはガイドデータに記された『ＮＯ　ＤＡＴＡ』

という文字を認めて、短く溜め息を吐く。

「もたもたしてられない……か」

苦心したすえソウル・レイダーは、スカッド・エースを呼びつけて、次の行動を伝えた。

「暁さん。ここに長居は危険です」

「ああ。……だが、子供達の方の体力がきついぞ？　それにアストラル・ホープも苦戦しているそうだ……」

「だから、五分だけ休憩です。そしたらすぐに、敵本陣のところに向かいます」

「……分かった。お前も休んどけ」

「いや、出入り口の所を見張っておきます」

「そうか。じゃ、俺もそうするか」

二人は出入り口のところに張り、チームの体力回復を見守る。

そして三分後。ソウル・レイダーは、ピクリと小さく肩を反応させた。敵の周波数をわずかに感じたのだ。ロックマン達がこの広場で姿をくらましたために、敵は少し油断したのだろうか。周波数を消す技、フレクリアがおざなりになっていたのだ。その周波数は少しずつ、ロックマン達の方に近づいていた。

ソウル・レイダーは、座り込んでいる仲間に呼び掛けた。

「ここは危険だ。休憩を切り上げて、早く出るぞ！」

ソウル・レイダーの方の出入り口は敵が近づいてきて危険だ。なのでスカッド・エースの方に、チームは走り始める。

しかしスカッド・エースは、その出入り口のそばから動こうとし

なかった。なぜか出入り口に向かって、何発もブラスターを撃ち込んでいるのだ。ロックマン達は彼のそばによると、絶望した。

「クソ！　ハメられた！」

弾丸と一緒に、スカッド・エースは吐き捨てた。

出入り口には電波障壁が張られていたのだ。それが彼らの逃げ道を、水一滴も通さないほどに阻んでいる。彼の銃撃にもビクともせずに、水面のように波紋が広がるばかりだ。

「なぜ……？」

理不尽な電波障壁に、クイーン・ヴァルゴは眉間にしわを寄せる。水竜を打ち込んでも、それはビクともしない。生半可の攻撃では、ヒビすら入れられない。

「と、とにかくあっちの方に逃げましょう！」

グリット・メトリーが、残った方の出入り口を指差す。しかし、そこにはもう、ソウル・レイダーの感じた周波数が、すぐ近くまで来ていた。

観念してソウル・レイダーは剣を抜くと、迫りくる敵の方に戦闘態勢をとる。スカッド・エースも覚悟を決めて、ブラスターを構えた。

近づいてくる周波数の距離から逃げられない事を悟ると、ロックマン達も仕方なく武器を構える。

ハープ・ノートは頭のアンプを用い、漂ってくる周波数を増幅、分析して敵の数と強さを割り出す。すぐに唇が震えて、サーと血の気が頭から引き、蒼白した表情が出来あがった。

「く、来る。千……いや……さ、三千?!　しかも戦闘周波数、８０００ギガヘルツ越えが十体も……っ」

その数と戦力からして、これは完全に計画された罠といえる。ロックマン達は、この広場に誘いこまれていたのだ。

未だかつてない、絶望と計り知れない恐怖に、スコープ・スナイパーはへたり込んでしまった。ここは敵の本拠地。いつでもこのような展開は見こめたが、いざ直面すると立ち上がる事はできない。

「マズイじゃん……！　幹部クラスが十体も。それじゃ私達の戦力でどう頑張ったって……」

「立て！　このままじゃ、本当に死ぬぞ！」

ソウル・レイダーがスコープ・スナイパーの尻を乱暴に蹴りとばす。彼も余裕がないのだ。

対してジェミニ・スパークWは落ち着いて、状況を分析していた。口に手を当て冷静に熟考を重ね、この地形から最良の対策を導く。

「大丈夫、幸い通路は狭いんだ。敵の流れを食い止めるように戦えば、何とかなるかも……」

ジェミニ・スパークWの予見は正しい。確かにこの神殿の通路は狭く、三千もの人間が行き来するのは大変な事。しかしそれは敵側も、良く分かっている事である。

ロックマン達を全滅させるのに、何も三千体もの戦力は必要ないのだから。

そして敵の軍勢が出入り口のところに到着してしまう。すると不気味に静寂を守っていた出入り口から、一体の残影が恐ろしいスピードで、弾かれたように向かってきた。それは弾丸のようで、一瞬

でグリット・メトリーに激突し、軽く吹きとばす。隣にいたジャック・コーヴァスは、何が起きたのかまったくわからなかったはず。気が付いたら彼は、瓦礫と化した石壁の中に、埋もれていたのだから。

そして立ち上る土煙の中、瓦礫をかき分け、グリット・メトリーの首根っこを掴む人影の姿がゆらりと起き上がる。瓦礫をひょいと飛び越え、弾丸のような電波体が、ロックマン達の前に現れた。肩にグリット・メトリーを担いで、踏みしめるようにロックマンの方に近づいてくる。

グリット・メトリーは内臓をやられたのか、割れたフェイスガードから血をボタボタと垂れ流していた。

そして弾丸の電波体は、小さく呻く彼をロックマンの方へ軽々投げ捨てると、威圧するかのように眉を吊り上げた。直情的な性格なのだろうか、らんらんとした真っすぐな瞳を向けてくる。グッと親指を立てつつ大口を開けて喋り、暑苦しい熱血漢だ。何もかも真っすぐで、まさに弾丸だ。

「よう！　どうだ、これから袋叩きにされる気分は？　俺はＷＷＲの幹部、トビウオ座のＡＭ星人。フライング・バレッドだ！」

フライング・バレッドの名乗りと同時に、次々と幹部クラスのＡＭ星人が広場に流れて込んでくる。とうとうフライング・バレッドと挟み撃ちにされるように陣取られてしまった。

チームスターダストを殲滅させるのには幹部十人で十二分と言う事らしい。

「さあて、この十人の幹部相手にどこまでやれるかな？！」

ｉｇｎｉｔ―２４：追復少女

この状況から、絶望が繰り広げられるのに、そう時間はかからなかった。

十人の幹部を相手取るのは、ソウル・レイダーであった。ちらちらと彼の腕に血が伝っている。彼は身を削り、命の限り、ロックマン達の壁に徹していた。しかし、もはやどうにもならない状況だ。残ったＷＲの戦士やレム・オリジンがなだれ込み、ロックマン達を襲い始めていたのだ。彼の両腕は、自分の血で真っ赤に染まっていく。白い彼には良く目立つ、戦いの勲章だ。

敵の周波数変換術は本物だ。直接手を触れなくても、密度のある周波数を飛ばせば、ソウル・レイダーの脳を十分に揺らす。だが彼はそれでも意識を保つ。強烈な攻撃の嵐を一身に受けても、かろうじで持っている。しかし、好転はしない。袋のねずみとはまさにこの事だろう。

もう終わりだ。オペレーションアポカリプスは失敗に終わるだろう。一番の戦力であるチームスターダストが潰れればお終いだ。一番の戦闘周波数は持つソウル・レイダーがやられれば、総崩れとなり、破滅に拍車がかかるだろう。そんな彼の戦闘周波数は８０００ギガヘルツ前後。広場を埋める敵は、３５００ギガヘルツが二〇〇体。それが後二八〇〇体も控えている。そして８５００ギガヘルツクラスが十体もいる。これでは、どう転んでも、勝ちの目は出ないだろう。流石に四年間も掛けて、宇宙中から強者を集めていただけあった。地球連合軍程度では、まるで歯が立たなかった。

皮肉にも、この場所が、王族だけでなくロックマン達の墓場とな

ろうとしていた。

そんな渦巻く攻撃の嵐の中、フライング・バレッドが隙を突き、ハープ・ノートを拘束した。彼の素早さを持ってすれば、少女を背後から締めあげるのに苦労しない。

がっしりと首に腕を巻かれたハープ・ノートは、一人安全な場所に引きずられていく。必死に抵抗するも、まるで抵抗にならない。

ハープ・ノートは息が苦しくても、しっかり目の前の惨状を見ていた。目に見える速さで、ロックマン達が追い詰められていく。ソウル・レイダーはもうボロボロで、二本の剣はことごとく刃こぼれし切れ味はすでに皆無だろう。彼らの心はもう、折れているのかもしれない。見ていられないが、目を逸らす事もできない。

壁際にボスの娘を追いやると、フライング・バレッドがハープ・ノートに耳打ちする。

「分かったか？　ＷＷＲの邪魔をするからこうなるんだ。まあ、お前はボスの娘だから逃がしてやるよ」

「や、やめて……！　みんなが死んじゃう！」

「そうだな、間違いなく死ぬ。だが、それも全部ヤツらが望んだ事。俺達のボスは最後まで、協力の姿勢を見せていた。だのに、それをはねのけた結果がこれだ」

その時、ソウル・レイダーが崩れた。頭を垂らしたところを、敵の硬いつま先が彼のバイザーを粉々に砕いた。しかし簡単には倒れない、それどころかよろよろと立ち上がり、刀身の折れた剣を構えて見せた。ソウル・レイダーの欠けたバイザーからは、ミライのオッドアイが死なずに燃えている。鼻筋に血を這わすもまだまだ、諦めてはいなかった。

「へえ、ガッツのある野郎だ」

倒れないソウル・レイダーに、思わずフライング・バレッドは称賛した。

ソウル・レイダーは、これでもかというくらいに、幹部から攻撃を浴びている。だが、異常なほどの強靭さで堪えて、急所にだけは攻撃を貰わなかった。それでも堪りかねて、大きく後ろに後退すると剣を杖に、ずるずると膝を突く。

ロックマンは敵を数体だけ倒すと、すぐにソウル・レイダーに駆け寄って肩を貸してやった。何重にもバリアで身を覆わせると、辺りを確認する。どこもかしこも敵だらけだ。逃げ道もなく、バリアもすぐに破られていく。ロックマンはすぐにバトルカードを読み込ませ、再び何重にもバリアを張る。するとハンターからウォーロックが悲鳴を上げた。何度も何度も、連続でバトルカードを読み込ませるのは、流石に無理があるらしい。ちょうど五十枚ほどバリアを入力したところだった。

『処理が追いつかねえ！　これ以上は容量オーバーだ！』

「でも、どうしたら……！」

「くそ……俺が不甲斐ないばかりに」

ボロボロにされても戦う仲間を見つめて、ソウル・レイダーは目に涙を溜めている。ミライの本当の部分は、そんなに強くない。この状況下では、取り繕った仮面がまた剥されかけていた。

幹部たちが繰り出す猛攻。バリアの割れる音を耳にしながら、ロックマンはソウル・レイダーを励ました。しかし、言ってて可笑しくなったのか、笑いが込み上げてきたようだ。もう、本当に駄目かもしれない。

それでもロックマンは落ち着きを取り戻すと居直り、ウォーロックに後の事を全て託そうとする。

「ロック……。君だけでも逃げてよ、もうダメだよ」

ウォーロックは唖然とした。ロックマンはもう、物事の分別が付かなくなっていたのだ。

『お前……落ちつけバカヤロウ！　逃げ場はねえ、だったらどうやってここを生き残るか考えろ！』

「無理だ……こんなの、どうしろっていうんだよ！」

ロックマンはぽたぽたと涙をこぼした。本当は怖くて怖くて、どうしようもなかったのだ。ポロポロと、それはとめどない。

涙が落ちては地面に砕かれて、落ちては地面に混ざる。小さな染みを石の床に作っていく。バリアがもうすぐで全て砕かれる。何ができる事もなく、涙で床を濡らすだけだった。

そしてバリアが全て、完全に砕かれて、敵がニヤリとした笑みを覗かせた。何が恐ろしいとは、敵が恐ろしい。その図抜けた強さが恐怖をかき立てる。

ロックマンは最後に、大粒の涙をこぼした。

《ピチョン……》

するとそれが地面に落ちて、大きな波紋が広がった。それは広がる、どこまでも。あり得ない事に、不思議な事に波紋は留まるところを知らずに広がっていく。「え……？」ロックマンは思わず自分の目を疑った。広がる波紋の中心から地面が薄く輝き始める。そしてそれが徐々にせり上がり、人の形を作っていくのだった。バチバチと、激しい印象と共に細い閃光が、視界を縦横無尽に走って踊る。

その様子を見ていたハープ・ノートは体を小さく震わせ、姿を現したあの少女に釘づけになっていた。その光景は闇市で見たものと

まったく一緒だった。

「あ、あの子は……っ」

銀髪の少女ことカノンが、またしてもどこからともなく現れたのだ。

だが敵も黙ってはいない。瞬目（しゅんぼく）だけ気後れするも、幹部はすぐにロックマン達を始末しようと、周波数の塊を指先から射出する。彼らの周波数変換術を持ってすれば、擬似的なイノセント・インパクトを作ることも可能なのだ。

それに対しカノンは、眠そうでも真に迫る瞳でキッと敵を睨みつける。それだけで、相手の周波数の弾を完全に弾き飛ばしたのであった。敵幹部は完璧にカウンターを貰い、意識がぐらつき、尻もちをついた。しかしそれでも、残り九体の幹部と二七九〇体の戦士が控えている。だがカノンは慌てる様子はない。

おもむろにカノンは手のひらを広げて、腕を左右に伸ばす。襲いかかる敵も何のその、落ち着き払った態度は崩さない。するとぼそりと小さく口を開いた。

「電波光壁……」

手のひらには銀色に輝く小さな箱状のものが。それが一気に膨張して、広場を光の箱でいっぱいに埋めた。箱に追いやられるようにして、その場の敵全員が箱の外に押し出されてしまう。しかしロックマン達が押しやられる事はなく、箱の中に守られる形となった。まるで結界のようだ。敵が何とか破ろうとするも、電波障壁以上に堅固なそれは傷一つ付かなかった。

もちろんハープ・ノートも、その結界のおかげで、フライング・バレッドから逃れる事ができており、嬉々とした表情を浮かべていた。すぐに駆け寄って、カノンの手を取って感謝感激だった。

「あ、ありがとーカノンちゃん。でも、どうしてこんなところに？」
「……ないしょ」

ふるふると首を振り、カノンは困ったようにハープ・ノートから目線を外す。そして、ロックマン達の方をじっと見つめ始めた。ロックマン達はもう疲れ切っており、その場に倒れ込んでいた。特にソウル・レイダーは酷く、立つこともままならない状態だ。
カノンは彼らの手傷に責任を感じたのか頭を下げた。

「ごめんなさい……」

助けてもらって、謝られてしまうと流石に困ってしまう。とりあえずロックマンは、謎の少女に笑顔をあげる事にした。

「い、いや。ありがとう。助かったよ……」
「チッ、コイツ……不気味だぜ。礼は言わねーぞ」

ウォーロックは相変わらず、カノンを毛嫌いしている。わざわざ実体化してまで、あからさまな悪態を吐いてみせるのだ。ロックマンは慌てて頭を下げる。

「ご、ごめんね。失礼なやつで」
「……ヘンなの」

可笑しな二人組に、カノンはくすりと笑う。すると独特なドレスをひらひらさせて、思い立ったように広場の中心に歩いていく。

「ちょっと、待ってて……」

そこでカノンはしゃがみこむと、地面に手を当てて、何かを始めるようだ。そして間もなく、その何かが起き、地面がノイズのようにぎざぎざと小刻みに震え出す。その時のカノンの手は、淡く光ってぼやけていた。どこかで見たような古代文字が、血管のように指先から地面に伸びている。少女の可愛らしい手にしては、少々ハッタリが効いている。

そして血管がそのまま亀裂となり、ヒビ入った石の床ががらがらと崩れ落ちた。すると粉塵の中から階段が現れたのだった。

「か、隠し通路……！」

呆気に取られロックマンが口をぽかんと開く。

カノンはこくりと頷き階段の奥に目を落とした。

「ここから先は審判の間……」

ignit—25：ムーの審判

相変わらずの蒸し風呂の中、カノンの導くままにロックマン達は、隠し通路内を通っていた。しかしカノンは不思議な女の子である。絶望的だった状況のおかげで、酷く混乱していても、さすがに彼女の特異さには気付く。

なぜブラックママルのような危険地帯にいるのか。

なぜブラックママルの隠し通路の場所を知っていたのか。

そもそも彼女はいったい何者なのか。

知っている事と言えば、名前くらいなもので、敵か味方かは判然としない。だが他の頼りもない上、助けてくれた以上、黙って彼女に付いていくしか方法はなかった。

そして歩くこと数十分。突如カノンが壁に手を突いて、ずるずると倒れこんでしまった。彼女は通路の途中でへたり込み、肩を上下させている。かなりの疲労だろう。それに彼女はドレスを身につけてはいるのに、ずっと裸足だったので、足を痛めてしまったのかもしれない。

ハープ・ノートが心配して駆け寄る。手を差し伸ばすが、カノンはそれを取らずに、壁伝いに体を起こした。

「カノンちゃん大丈夫？」

「少し力を使いすぎたかも……でも平気」

カノンはすぐに立ち上がって、再び先頭を歩きだす。だが心なし

か足元はおぼつかなく、何度か壁に手を突いて危なっかしい。確かに万全ではないようだ。

カノンにどういった力があるにせよ、あれほどの大軍勢を制圧する力を使ったのだ。凡人には計り知れないほどの、消耗をしている事がうかがえる。

それでもぺたぺたと歩いていき、ロックマン達の道案内を務めてくれるのだった。

ロックマンはその背中を、不思議そうにじっと眺めていた。肩を貸しているソウル・レイダーに問いかける調子で、それとなく語尾を上げて呟く。

「なんだか良く分からない子だけど、悪い子じゃないみたいだね」

「……とにかく、助けてもらったんだ。ありがたく付いていく事にしよう」

ソウル・レイダーにしては珍しく、他人を認めたような言い草だった。それは弱音とも取れ、やはり彼の傷が深い事がうかがえた。仮にフェニックス・リボンの元に辿りつけても、満足に戦う事ができるチーム員は少ないのかもしれない。

だが彼が、体を張って皆を守っていなかったら、今ごろ全員でこの道を歩いてはいなかったはず。現状は良くないが、最悪でもない。今は悲観を捨てて、前に進むしかないだろう。

そして隠し通路内をさらに進むと、十字路に辿りついた。ロックマン達だけだと道に迷ってしまうが、カノンは迷わず、向かって右側を指差す。

「ここから先が審判の間……あと、ちょっと」

「まだ歩くのか……」

ウルフ・フォレストが、鋭い牙の間からだらんと舌を垂らす。彼は気絶したグリット・メトリーを背負っていたので、人一倍体力を消耗していた。なのでくたびれた表情をカノンに送ってみるが、彼女はうんともすんとも言わない。曲がり角の方を指差して、何度も目で訴えてくるだけであった。

熱い視線のやり取りをしていても仕方がない。ウルフ・フォレスト達は、ずるずると重い足を運び、その方向に歩いてく。

そして全員がカノンの方に向かってくるのを確認すると、彼女はいきなり曲がり角に向かって走り始めた。さっきまでの、のんびりとした様子はどこ吹く風で、そのまま角の向こうに消えてしまった。

カノンの考えが良く理解できず、クイーン・ヴァルゴは首を傾げた。頬を伝う滴は何本もの川を作り、疲弊がうかがえる。

「どうしたのかしら、いきなり急いで……それにしても、先が見えないわね」

「とにかく、ついて来いって言ってるのかも」

何となくカノンの思惑を察知したスコープ・スナイパー。立ち止まっていても仕方がないので、カノンの消えた方に駆け足で向かっていく。

そして数分後。

カノンの向かった先のさらに奥の場所。目的地はもうすぐだった。カノンは奇跡的なナビゲートで、ロックマン達を導いていたのだ。

このブラックママルの構造は、複雑な迷路である。その中でもコントロールルームには、大陸中枢区画の審判の間からでしかアクセスできない。つまりキリン・ライトニングが以前、通った道のりと

同じである。
　ブラックママル全体には、ある種族のみにしか干渉できない電磁波でコーティングされており、攻略にはそれ相応の実力が必要となる。それでいて厳重なセキリュティが施されており、先のロックマン達を追い詰めた電波障壁もその一つであった。
　ブラックママルことユグノア。その全ての内部構造を記録されているのはある種族のみ。そのため審判の間へと続く道は、部外者であるロックマン達にとっては茨の道だった。

　そんな審判の間へ続く途中の場所。そこには広場があった。ロックマンを閉じ込めた、王族の墓とほとんど同じ場所である。しかし棺の代わりに、巨大な石像が立ち並んでおり、それはディメンションゴーレムを彷彿させた。デューオの神殿の事を踏まえると、審判の間は近いのだろう。
　そんな場所に少年が一人。近づいてくるロックマン達の足音を、通路の方から耳にすると、舌打ちをしてさぞかし不満そうである。

「よけいな真似を……」

　少年ことブライは、その広場で休憩をとっていたのだ。石像の台座に腰をかけて、飲み物を飲んでいる。もちろん彼の目的地は、フェニックス・リボンの待つコントロールルームであった。オーパーツを取り戻すという、基本的な目的は何も変わりはしない。それにムー大陸を所有しているＷＷＲには、聞きたい事が余るほどあるはずだから。
　しかし不思議な事がある。ブライはロックマン達よりも先に、ここまでたどり着いていたというのに、戦いの傷はほとんど見受けられなかったのだ。水を飲んで一服しているほど余裕がある。道に迷った様子もなく、呼吸も整っている。以前、レム・オリジンが言っていた通り、どうやら彼はこの神殿の構造を把握しているらしい。

最小限の消耗でここまで来たのだろう。

そんなブライは、飲み物を飲み干すと、出入り口の方に向き、のろまなロックマン達を目視した。ちょうど彼らがこの広場に入ってくるところだった。

すぐに彼らも、ブライに気が付いたようだ。ロックマンが驚いたように声を上げる。彼らにしてみれば、カノンについて行った先に、ブライがいたのだから当然だ。

「ソロ！　やっぱり来ていたんだね！」

早速ロックマン達はブライの方に歩いていく。彼は決して仲間ではないが、これほど危険な場所での顔見知りとの遭遇ともなれば、気分も高まるばかりだろう。ここに来てから、命の危機を感じたのは一度や二度ではない。ようやく落ち着ける場所を見つけたのだ。

しかしブライは相変わらず冷たく言い放つ。

「フン……無様だな」

すっかり疲労の蓄積したチーム一同を見て一笑する。気絶しているグリット・メトリーに、もはや一人で歩けないソウル・レイダー。他のメンバーも万全ではない。

すると比較的ダメージの少ないハープ・ノートが、不思議そうに首を傾げた。ここまで導いてくれたカノンが、見当たらなかったのだ。この広場の直前の曲がり角を最後に、彼女を見失っていた。

「あれ、あの子は……？　確かにここに来ているはずなんだけど」

ブライの方に目線を送るハープ・ノート。彼は審判の間の方角をちらりと眺めて答えてやる。

「さあ……な。そんな女は見ていない」

ブライは簡単に答え、手早く審判の間に向かおうと、奥の通路に足を運んだ。だが、ここでブライを失っては手痛いので、ロックマンは慌てて引きとめにかかった。ソウル・レイダーを優しく床に下ろすと、ブライの元へ石畳の上を駆けていく。

「待ってよ。どこに行くの？」
「決まっているだろう。ヤツらを潰す」
「もしかして、道が分かるの？」
「フン……バカにするな。ここはムー大陸と同じだ」
「じゃ、じゃあ。僕たちも一緒に……」

ブライは振り返り、呆れた様子でロックマン達を見つめた。さきほど一笑にふしたが、ずうずうしい申し出には苛立ちを隠せないようだ。ブライの目に映る彼らは、もはや足手まといでしかないのだから。

「足手まといのお守りをするつもりはない。あんな簡単なトラップに引っかかって……」
「え？　なんでその事を……」
ロックマンは首を傾げる。するとブライは馬鹿にしたような態度を表し、手のひらに電波障壁を作って見せた。青く不気味に揺らめく、まるで古代の皿みたいなものが浮かんでいる。これはムー人だけの異能だ。
「俺はムー人で、ここはムー大陸。セキュリティの動作を感知できるんだよ。レム・オリジンが、お前らをしつこく追ってこれた理由も同じだ」
確かに、王族の墓場での敵の対応は、迅速で完璧だった。カノンがいなければ、全員の命がなかったのは言うまでもないのだから。
ここは敵の本拠地で、ロックマン達には圧倒的に不利である。ロックマンは肝を冷やし、改めてこの場所の危険性を認識した。それと同時にブライの頼もしさと、少しの優しさも感じ取ったのだ。
ロックマンは再度、ブライに申し出た。
「君の言い分ももっともだ。でも、一緒に戦ってよ……お願いだ」
「チッ……」

深く頭を下げるロックマンに、ブライはむしゃくしゃする。それでいて先を急いで焦っているようでもあった。思えば、ロックマンがこの場に着いた瞬間、逃げるように立ち去ろうとしていた。彼は最近、どうにも迷走している。先日の決勝の舞台でも、勝負を急ぎ、結果として敗北していたのだから。ブライはとにかく、この場を後にしたいらしい。そうしないと、また邪魔が入るのだから。彼はずっとそれを心配していた。

しかし時すでに遅し。ブライは声を荒げて、あさっての方を怒鳴りつけた。ロックマンはびくりとして頭を上げた。

「いい加減にしろ！！」

ブライの目先にはラプラスが実体化しており、何かを訴えるように呻き声を上げている。ブライにはそれが伝わっているのだろう、怒り心頭の様子だ。だがロックマンには、さっぱりそのやり取りが分からない。

「あ……うあ……オ？」
「お前……ふざけるな」
「……オ……ウガグ」
「チッ！！」

ラプラスの言葉とも言えない呻きを聞きとると、ブライは舌打ちをして地面を蹴る。「どけ！」するとロックマンをはねのけ、休息をとっているチーム員の方にずかずかと歩み寄っていく。少し距離を置き立ち止ると、彼らを包むように、電波障壁の牢を作りだしたのだ。それは牢獄と言うには、彼らを守る結界のようである。使い方を変えれば、電波障壁の応用はかなり効くらしい。ただブライとしては、このような使い方は本望ではないらしく、食いしばった苛立ちが表情ににじんでいた。

ブライは結界を完成させると、その箱に一か所だけ穴を開ける。
矢継ぎ早にその中のスカッド・エース達に、刺々しく言いつけた。

「白いヤツと白黒の二人、ギターの女だけ出て来い。残りはそこでじっとしておけ」

ブライの見立てで、呼び付けられた者以外は、足手まといと判断されたのだ。

ブライの言葉を受け、スカッド・エースが最初に穴を抜け、ジェミニ・スパークW、ジェミニ・スパークB、ハープ・ノートが続いて結界から出てくる。他のメンバーはそこに居残りとなるようだ。

もっとも、残されたソウル・レイダー達は起き上がろうにも、すでにそのような体力はなく、結果としてブライの言葉を守る他ない。

そしてスカッド・エース達が結界から出ると、ブライの元に歩み寄り、小さく礼を言う。ブライはそれに返事を返さず、すぐに結界を操作して、開けた穴を閉じる。ソウル・レイダー達は結界の中に残され、事実上ここで任務から外れる事となった。ソウル・レイダーはもう戦えない事を悟ると、悔しそうに拳を握り小さく震わした。

「ここまで……か」

うなだれたソウル・レイダーは小さく呟き、ロックマン達に後を託そうと言葉をかける。

「星河……後は任せた。お前がこのチームのリーダーだ」
「ミライ君……うん、わかったよ」

ロックマンは何度か頷いてソウル・レイダーの思いを汲んだ。
するとブライが、いよいよ目的地に向かい始めた。彼はロックマンの横をすれ違いざまに「ついてくるなら、勝手にしろ」と愛想な

く言い放ち、足早に通路の方に向かっていく。頷くと、ロックマン達はその後に続いていった。

その際、ロックマン達は心配したのか、置き去りにする格好になったソウル・レイダー達の方を、何度か振り返る。それを鬱陶しく感じたブライは、背中越しながらも、ロックマン達に告げた。

「安心しろ。あの障壁はそうそう壊れはしない。そんな事よりも自分の心配でもしておくんだな」

それだけ言うと、ブライは通路の奥へ奥へ進んでいった。

さらに歩くこと数分。ロックマン達は、審判の間の中を進んでいた。もう少し奥に進めば、フェニックス・リボンが待つ鳳凰の間に辿りつくだろう。

今のこの場所は、通路が広がり洞窟の様相を成していた。その洞窟の脇を固める巨大像は、不気味にもそそり立って侵入者を睨んでいるようである。

そんな中でブライは天井を仰ぎ、かつての記憶を辿る。上は真っ暗で限りない闇が広がり、その深淵から鍾乳石が鋭く垂れ下がっている。デューオの神殿で言う所のこの場所は、ブライがキリン・ライトニングを奇襲した場所だった。ブライはそんな事を思い出しながら呟いた。

「そろそろ……だな」

ブライは、はるか上空におびただしい量のオーパーツを感じ、覚悟を固めた。

しかし気持ちを引き締めたものの、彼のすぐ後ろでは、ハープ・ノートが震えており、たびたび吐かれる弱音に苛立たされる。巨人像を警戒してかキョロキョロ忙しなかった。そして何気にロックマンの腕にしがみついている彼女。不気味なこの場所に、すっかり気が滅入っているようだった。「こわいよースバル君」そんな情けない声に、ブライは舌打ちをしてハープ・ノートを睨みつけた。

「おい、俺の後ろで慣れ合うな。気が散る」
「だ、だって……」
「チッ……だから嫌だったんだよ」

ブライは憤慨して、転がっていた石を蹴り飛ばした。するとラプラスが隣に現れ、ブライは堪らず文句を垂れる。

「お前……どういうつもりだ？」
『アウ……？』
「……チッ。とぼけるんじゃない」

ブライはラプラスの意図など読めるわけもなく、頭に血が上る。そしてまた石を蹴り飛ばしたところ、何かにぶつかった。「カンカン」と乾いた音がなり、洞窟内をこだまする。

暗くてよく見えないが、そこには扉らしきものがあり、審判の間の道が終わった事を意味していた。

ロックマン達はすぐにその扉を開けて、審判の間から脱出した。出てきた先では神々しい場所が広がる。純白の柱が四方を支えて、黄金の装飾が側壁をこだわり深く飾っていた。床には古代文字が敷き詰められて、薄く輝いて温かな印象だ。輝きから光の玉が蛍のように上っていき、辺りを幻想的に照らしていた。

そんな場所の奥には、鳳凰の間へと続く、エレベーターの扉が存

在感を示している。あれに乗り込めば、メインアンテナを貫通しながら上空に昇り、フェニックス・リボンの待つ場所に辿りつける。ゴールはもうすぐだ。ロックマン達はそこに向かって駆けだした。

しかし、その前にかなりの困難が伴う事となる。ただ真っすぐエレベーターに向かうだけではあるが、その途中で、一体の電波人間が最後の壁として立ちふさがったのだ。突如として、上空から雷が落ち、エレベーターの前に、雷の電波人間が降りてきたのである。ロックマン達は足を止め、その雷を注視する。

それは雷神の化身で、ＡＭ星の断罪者。そしてきずなクルーの一人。

そう、キリン・ライトニングだ。

彼は立ち上がると、ロックマン達に陽気な笑顔を浮かべる。笑ってはいるが、研ぎ澄ませた戦闘周波数を冗談の類ではなかった。光が溢れるこの場所でも、彼の鋭い電撃は凄まじく、激しく辺りを威圧している。しかし彼の笑顔は優しくて、ロックマン達を称賛した。

「よくここまで辿りついたな。スバル君達にブライ、それにミソラも。本当にスゴイよ、お前ら……」

「ジョ、ジョニーさん……！」

『最後の最後でなんて化け物だ……』

彼の戦闘周波数は１１０００ギガヘルツ。ウォーロックはもちろんその場の全員が恐怖した。

堪らず尻込みするロックマン。それとは対照的に、リベンジを誓って、鬼気迫る笑みを浮かべるブライ。

「ふん、キサマか……面白い。ここであの時の借りを返す……！」

ブライはラプラスを剣状に変化させて戦闘態勢をとる。
しかし戦闘に意欲を見せるブライをよそに、キリン・ライトニングは、ハープ・ノートに顔を向けた。ブライは構わず斬りかかるが、ブライの目の前で突如雷が爆発し、ブライを一蹴する。その圧倒的さにその場の全員が凍りついた。やはり彼は凄まじい。だが、その強さばかりに目が行くが、彼はあくまでも穏やかだった。キリン・ライトニングは、ハープ・ノートだけを見ていたのだ。
彼は敵意を見せず、ハープ・ノートの目の前まで歩む。
たった一人で待ち伏せていたところから、フェニックス・リボンの命令とは別に、彼はロックマン達を待っていたのかもしれない。
彼は口を開いた。

「さてミソラ、少し話をしないか?」

そんなキリン・ライトニングに、ハープ・ノート達は警戒心を見せるが、彼は座り込んで敵意がない事を示した。あくまでも話をするつもりらしい。今思えば、キリン・ライトニングがスバル達に、本気で敵意を向けた事など一度もなかった。今回も例外ではないのだろう。
するとハープ・ノートは今までの彼の言動を踏まえて、武器を構えるのをやめる。そしてキリン・ライトニングは話し始めた。

「ここまでたどり着くのは長かったろう。思えば遊園地での接触が最初だったな。それから、お前達は強くなった。身に纏っている周波数がまるで違う。
……ミソラ。今のお前なら、もう気付いているはずだ。俺達のボス……いや、アイツの正体を……」

何を思ったのか、キリン・ライトニングはハープ・ノートの心内

を掘り返してくる。

ハープ・ノートは一度押し黙るが、周りを見渡すと覚悟を決めたようで、表情を引き締めた。敵の首領は、おそらく父親。それは恐ろしいが、今ならその感情に打ち勝てる。なぜならスバルにたくさんの勇気を貰ったのだから。周りにはスカッド・エース達がいるが、それでも良かった。その確信を真実に変えるために、正直に口に出したのだ。

「気付いている。あの人は私のパパ……」

ハープ・ノートの言葉に、スカッド・エース達は驚きを隠せなかった。すぐにハープ・ノートを問い詰めようとするが、キリン・ライトニングに制止された。小さな雷を彼らの足元に飛ばして、首を振る。

衝撃の事実だが、星の命が懸かっている現状では、それは些細な事らしい。周りの様子を気にせず、キリン・ライトニングは言葉を続けた。

「そうだ。フェニックス・リボンは響ワタルだ。それを知って、よく今まで頑張ってこれたな。辛かったな……ミソラ」

「ジョニーさん。私……」

ハープ・ノートはキリン・ライトニングを見つめた。キリン・ライトニングは見つめ返して問いかける。

「最後にお前の気持ちを聞かせてくれ。ミソラ……お前はワタルをどうしたいんだ？　恨んでいるのか？　それとも……」

キリン・ライトニングはどうしても聞いておきたかった。彼は常に迷っていたのだ。何が正しくて、何が間違っているのか。そして

その答えは、ミソラが持っている。そう感じている。
ここまで命がけでやってきたミソラの思いに、キリン・ライトニングは真実を見出している。
そしてハープ・ノートは、今までの全てを吐露した。目は潤みながらも、キリン・ライトニングに精一杯訴える。

「ジョニーさん！　私は……私はパパを助けたい！　確かに、パパの事を恨んだりもしたよ。でも……それでも、私のたったひとりの家族だから！！　また……一緒に暮らしたいよ」

その言葉がミソラの正直な気持ちだった。生きているか死んでいるかも分からなかった父親。でも生きている事が分かった。その事から色々な想いが錯綜して悩み苦しんだ。そして出た結論は結局、幸せだったあの頃と同じだった。
家族とまた一緒に暮らしたい。……それだけだ。

「そうか、よく言ってくれたな」

そんなハープ・ノートの涙ながらの訴えに、キリン・ライトニングは大きく頷いた。彼の中の正義の向かう先が、ようやく真実を取り戻したのである。そしてその場の全員に振り返ると、事の事情を話し始める。
ジョニーが何を思ってＷＷＲに協力してきたのか。ワタルの今までと、彼が何を成そうとしているのか。悲しい運命が、複雑に絡み合ってできた今を、全て語る。

「本当のミソラの気持ちが分かった今。俺も全てを話そう」

ｉｇｎｉｔ―２７：全てを繋ぎ美しい空へ

コントロールルームに続く最後の広間では、スカッド・エース達が、複雑な心境で立ちつくしていた。彼らが浮かべる表情は明るくない。なぜなら、この事件は思ってた以上に根深く、そして悲しいものであったのだから。だれが悪いという訳ではなく、だれが正しいともとても言えなかった。

そんなスカッド・エース達に対して、キリン・ライトニングは、自分の知る全てを話したのだ。

ヘル・スコルピオから家族を守るために、ワタルがフェニックス・リボンとなったこと。

迫りくるＦＭ星人から地球を守るために、宇宙へ行き、ミソラから姿をくらませたこと。

惑星パトラを守り、カンナを救うため、そしてＦＭ星人に復讐するためにＷＷＲを組織したこと。

自分が宇宙空間を彷徨っているところを、ワタルに助けられたこと。

ジョニーは、自分を助けてくれた親友の願いを叶えるためにＷＷＲとなったこと。

そしてワタルは家族を取り戻そうとして、カンナを生き返らせようとしていること。

そして今、まさにオーパーツが集まり、カンナが生き返ろうとしていること。

現在ブラックママルが、星間航行状態となり、これからＦＭ星に

向かおうとしていること。
そしてミソラの本当の気持ちを知り、ワタルとミソラがあの頃に戻れるよう決意したこと。

それら全てのピースが重なり、真実が浮き彫りになる。だが、それは残酷な事実を突きつける事ともなる。
特にロックマンとジェミニはそうである。流星抹殺計画の時、その全てが決まる瞬間に立ち会っていたのだから。もしかしたら、運命を変えられたのかもしれないのだ。しかし彼らは責められない、彼らが全力を尽くした結果が今という、運命の上なのだから。
しかしロックマンはそれでも罪深く感じ、顔を青ざめさせた。

「そんな……。これじゃ、まるで」
『ああ、あの時の遊園地で間違いない。結果的に俺らが、ミソラの母ちゃんを……』

ロックマンはキリン・ライトニングの話から絶望したのだ。その話が事実とするならば、カンナを襲ったヘル・スコルピオこそが、あの時ロックマンが見逃したレギオンだったのだから。
何と言えば分からずにロックマンは、ハープ・ノートに頭を下げた。ハープ・ノートの顔は、自分が自分で恐ろしくて、とても見られない。

「ミソラちゃん……ゴメンよ。あの時、僕がヘル・スコルピオをちゃんと倒さなかったばっかりに……」

するとジェミニもジェミニ・スパークから分離してきて、言葉を濁した。彼も地球への侵略命令を出していたのだから。それがなければ、ＷＷＲが結成されることもなかったのかもしれない。

「俺もそうだ……。あの時、スコルピオの口車に乗らなきゃ、お前らの家族はバラバラになる事はなかった……悪かった」

沈痛な面持ちを浮かべるロックマンとジェミニ。

しかしハープ・ノートは二人を責めることはしなかった。なぜなら彼女は、とっくに気が付いていたし、理解していたから。皆がそれぞれ全力を尽くして、一生懸命作ってきた未来こそが、今のこの瞬間であると。

何が欠けても、今という瞬間はなかったのだ。

ミソラがスバルやハープと出会う事も。

たくさんの仲間と出会う事も。

色々な思い出を作る事も。

共に笑いあい、悲しんだりする事も。

そしてスバルを好きになる事も――。

ミソラはこの世界が大好きで、この世界で生きている事が幸せだった。確かにカンナや、ワタルがいなくて寂しいけれども、それ以上に素敵な出会いをもたらしてくれたのだから。

だからハープ・ノートは笑顔でロックマン達に言ってあげた。

この世界を作ってくれて『ありがとう』と。

「スバル君、ロック君、ジェミニ君……。悲しい顔をしないで。私は全然辛くないよ。それよりも、感謝しているんだ。

だって、私は今まで生きてきた世界が、この世界で良かったと思ってるから！　どんな運命でもなく、この運命を辿れて私は幸せなんだもん！

だから……ありがとう……！」

堪らずロックマンとジェミニは目頭を熱くさせた。この運命を幸

せだったと言ってくれるミソラに感謝しかできない。

「ミソラちゃん……ありがとう」

『へッ、これで後腐れはねえ……か』

「俺とした事が、ちょっと心動いちまったな」

三人はずっと気付けなくて、だからこそ悲しかった運命の悪戯に決着を着けたのだった。キリン・ライトニングの言葉がなかったら、お互いが過ちに気付けずに、その罪を背負い生きていったのかもしれない。最後の決戦の前に、過去の運命を払しょくした。後は未来を切り開くだけだ。

しかし、さきほどからのキリン・ライトニングの献身的な態度には、スカッド・エースが疑問を呈さずにはいられなかった。

当のキリン・ライトニングは初心に帰っただけらしく、小さく笑って返した。

「だが、ジョニーさん。なんでいまさらそんな事を……」

「いや。ミソラの気持ちを聞いて、やっと決心が着いたのさ」

するとキリン・ライトニングは自分の胸をドンと突いて高らかに宣言したのだ。

「俺もワタルを助けるつもりだ。お前らと共に戦わせてもらう！！」

驚いた事にキリン・ライトニングが、チームスターダストに入ると言うのだ。彼が仲間になれば、まさに鬼に金棒である。

しかし彼の相棒が黙っている訳がなかった。弾かれるように実体化して、怒り心頭の様子で鼻息を荒げている。彼はＡＭ星人なので無理はない。

「ジョニー！　気でも触れたか?!　ここに来てＷＷＲを抜けるなど!!」

「あいにく正気だ。いや、目が覚めたとでも言うべきかな。……それに、キリン。お前だってとっくに気が付いているはずだ」

キリン・ライトニングの見つめるそれは、キリンの心の奥底を見通すような瞳だった。

「な、何を言う！　ＦＭ星を滅ぼす事が我らＡＭ星人の悲願だ!!　それ以外に何もない!!」

「キリンよ。お前も罪を裁く者なら分かるはずだ。復讐に何の意味もない事に……。ＦＭ星人は確かに過ちを犯した。それは決して許されることじゃないだろう。

だが、ＦＭ星人は罪を償って、ＡＭ星を復興しようとしているんだ。ここでＦＭ星に復讐しても、何も生まれやしない。そんなことしたら全てぶち壊しで、また元の懐疑的な宇宙人に逆戻りだ!

お互いに歩み寄るべきなんだ！　分かるだろう、キリン?!」

キリン・ライトニングは、キリンの本当の部分を知っている。彼は誇り高くて、そして何よりも正義を重んじる存在だと。彼は正義を司るＡＭ星人なのだから。彼の正義は復讐ではなく、お互いが歩み寄る絆にこそ、価値を見出すと信じていたのだ。

しかしキリンも、今までの想いがあり、それは決して軽いものではない。星を滅ぼされた、その辛酸の味は決して忘れられないのだから。キリンは声を荒げた。

「違う！　それは違うぞジョニー!!　ＡＭ星人がどれだけ辛い思いをしてきたか……!　どれだけ悔しい思いをしてきたか!」

「それは分かる。だが、思い出せキリン……!　お前の正義は復讐にあるのか?!」

キリン・ライトニングの訴えに、ハープ、ジェミニ、ウォーロックが加わる。卑しいタイミングだが、彼らに打算的な意味合いはなく、変わりつつあるＦＭ星人の心の有りようを、キリンに理解してほしかっただけだ。

それでも罪の意識からか、ハープとジェミニは、キリンに対して深く頭を下げていた。地面に目を落とし、必要なら命をささげる覚悟だろう。

「キリンさん。私達の事が許せないのは分かります。ですがＦＭ星人は罪を償っています。少しずつではありますが、お互いにかつての友好を取り戻そうとしています。虫がいいのは分かってますが、同じ悲劇を繰り返しても何も生まれはしません」

「キリンよ。星を滅ぼした張本人の俺に言われても、腹が立つだろうが言わせてくれ。ＦＭ星人をいま救えるのは、お前達ＡＭ星人しかいない。……もう遅いかもしれないが、あの時はすまなかった……」

そしてウォーロックが、キリンに語りかける。彼もＡＭ星人だが、今はこうしてＦＭ星人と一緒になって戦っている。キリンにその理由を教えてやるのだ。

ウォーロックは復讐に燃える憎悪に打ち勝っただけの経験を経ており、同時にキリンもそれを乗り越えていたと思ったからだ。

「ＡＭ星の断罪者、キリン。俺がガキの頃から、アンタは有名だったな。そしてＦＭ星人が俺達の星に攻め込んだ時も、最後まで命がけで戦ってくれた。俺は忘れてないぜ？　アンタの勇姿を」

「……あの時、ＡＭ星には逃げ遅れた民たちが残っていた。小さい子供達が泣きながら、私を頼ってくれた。でも焼きつかされたんだ……私はそれが忘れられないんだ」

「アンタの気持ちは分かる。……だがＦＭ星にも、何も知らない子供たちが生きている。ＡＭ星人を友達だって思っているガキだっている。

アンタはＡＭ星人の英雄だ。何を子供達に見せるかは、お前自身が良く分かっているはずだ。それは地獄の業火なのか、助け合う友情なのか……！」

「私は……忘れられない。未来を奪われた人達の悲鳴が……」

正義を重んじるからこそ、譲れない事もある。子供達の悲鳴がキリンの脳裏を焼いて離れない。彼は失われた多くの命を思い出して、閉口した。

「でも、キリンさん……」

するとハープ・ノートが、キリンに訴えかけた。彼女はキリンの優しさに気が付いていたのだ。

かつてキリン・ライトニングと戦った時、キリンはハープ・ノート達を安全な場所まで運んでくれた。そして、「寝ている場合ではないぞ、君たちを守るため少年達が必死に戦っている……その勇姿を見届けてあげなさい」と優しく語りかけてくれたのだった。そんな彼に復讐なんて似合うはずがなかった。

「アナタは本当は優しい人なんでしょ？　ずっと私を見守ってくれてたんだもの。試合の時、敵であるスバル君の心配もしてくれていた！　そんなアナタがＦＭ星人を助ける事ができないわけがない！　キリンさん！　お願いだよ、一緒にパパを助けてよ……！　ＡＭ女王様の目を覚まさせてあげて！　だって、アナタは正義の味方なんだから！！」

今までキリン・ライトニングとキリンから感じていたハープ・ノ

ートの気持ち。両者は互いの想いを乗せて視線を交わすが、キリンは苦し紛れに小さく呻くと、目を逸らした。

そしてハープ・ノートから逃げるように、キリンは電波化して、キリン・ライトニングと同化した。そして心の中で直接ジョニーに話しているのだろう、キリン・ライトニングが何度か頷く。するとキリン・ライトニングが小さく笑った。何かが決着したようだ。

キリンは咳払いをして、おもむろに重い口を開くと、自嘲気味に今の気持ちを語りだしたのであった。

『フッ……私もヤキが回ったようだ。ジョニーの馬鹿にＦＭ星人やミソラ嬢に諭されるとはな……』

「ずっと、言ってたろキリン？　俺達はこの子たちの敵じゃないって」

『ああ、そうだったなジョニー。まさか本当にそうなるとは思わなかったがな。……だが、復讐に正義がないのも事実だ。

私達はこの子たちに協力させてもらおう。フェニックス様の正義……私の正義で正して見せよう。地獄を味わうのは一度だけでいいのだから！』

どうやらキリンは、ＡＭ女王に与えられるでもなく、ＡＭ星人としての立場としてでもなく、今まで自分で作ってきた正義を見つけたようだ。その語気には、自らの王にすら届く力強さがあった。

キリン・ライトニングも、ようやく巡り合えた相棒の素晴らしさに、表情を明るくした。

「んじゃ、決まりだな！」

わだかまりを全て払拭し、ロックマン達のチームのレゾン（目的）が一つに定まった。それは『フェニックス・リボンとＦＭ星を救い出す！』であった。

それを胸にキリン・ライトニングが一歩前に出て振り返り、ロックマン達に、ニッと笑ってみせた。
彼は宇宙を愛し、そして誰よりも自由な男だ。

「今からきずなクルーの俺と、麒麟座のＡＭ星人キリンは、ＷＷＲを抜けて、同じチームの一員だ！　このキリン・ライトニングの力でワタルを取り戻す！！」

チームスターダストは、新たにキリン・ライトニングを仲間にして、最後の戦いに臨むのであった。

ignit―28：憎愛の序章

キリン・ライトニングを仲間にした一同は、コントロールルームに上るエレベーターの中で、最後の決戦場を目指していた。数々の死線を乗り越えて、ここにたどり着いた訳だが、幸いここは安全だ。なので、上空に上っていく室内では、ロックマンとジェミニ・スパーク二人が、透明の壁に張り付いて、惑星パトラの景観を眺めて心を癒していた。今はメインアンテナの中を通っており、まるで空を飛んでいるようだった。

しかしそこから少し距離を置いて、ブライは壁にもたれかかり、一人腕を組んでだんまりだ。彼にしてみれば、キリン・ライトニングが仲間になってしまって、毒気が削がれてしまったらしい。

そんな中で、キリン・ライトニングはハープ・ノートに、改めて確認していた。作戦会議とは言わないまでも、スカッド・エースも話に加えて、これから起こるであろう展開を話している。

それはそのはず、ワタルを助けるとは意気込んではいたものの、彼の願いはカンナを生き返らせることだ。ハープ・ノートにとって、それの意味している事は計り知れない問題である。

「だが、ミソラ……。ワタルを止めるという事は、カンナさんは……」

キリン・ライトニングの、複雑そうな表情は、どちらかを捨てなければならない事を物語る。

ハープ・ノートは眼下に広がる惑星パトラの大地を眺め、かつて

の思い出を振り返ると答えた。

「ママは言ってたの。パパは約束を守る人だって……。きっと、パパはママを助けようと必死だったんだよね……。私はママに元気になって欲しいって、いつも言ってたから。

でもね、ＦＭ星人の人達を犠牲にして、ママを生き返らせてもママは喜ばないと思うの……」

「そうか、お前は強いな。ワタルよりも……」

ハープ・ノートの悲しい結論に、スカッド・エースが口を挟んできた。ワタルとフェニックスの契約から考えられる可能性は、決して一つではないのだから。

「いや、ミソラ。ジョニーさんの話を聞く限り、ＡＭ女王を説得すれば、全て丸く収まるかもしれないぞ」

「え……？」

「ＡＭ女王とワタルさんの契約には、ＦＭ星人の抹殺が関わっている。そこをなんとかすれば、死のライブラリからお前の母さんを助け出し、かつＦＭ星人も助ける事ができるかもしれん。そうすれば、ハッピーエンドだ」

「つまりだシドウ君。ＡＭ女王にカンナさんを救わせて、さらにＦＭ星人の事も許させる……ってワケかい？」

キリン・ライトニングは、スカッド・エースの考えを確認する。スカッド・エースが頷くと、彼は表情を暗くした。キリン・ライトニングは一番近くで、あの女王を見てきたのだ。何が通って、何が通らないかは良く分かる。

するとキリンが出てきて、スカッド・エースが言うような、そんな甘い展開を望めない事を告げた。

「いや……おそらく、それは無理だろう。あの人は星の頂点に君臨するお方だ。我らＡＭ星人の、全ての負の感情を背負って、復讐に臨んでいる。私でも推し量る事ができない、憎悪の炎を抱えてらっしゃるのだ……」

フェニックスはおそらく折れない。それだけ告げると、キリンはぼんやりと溜め息を吐いて、外の風景に目線を逃がした。

しかしそれを聞いても、ハープ・ノートは、気丈に振る舞った。落胆を隠して、スカッド・エース、キリン・ライトニング、キリンにガッツポーズを作って見せたのである。

「と、とにかくだよ！　パパと女王様のやろうとしている事は間違ってるのは確か。だから、説得してダメなら、戦おう。それで、ママが生き返らなくても……ＦＭ星が助かれば一番なんだよ！　きっと……！」

『ポロロン……ミソラ……アナタって子は』

何が一番大切かを、自分を押し殺して、理解している可哀そうな少女。そんなハープ・ノートに、ハープはあまりの切なさを感じて涙した。

カンナが生き返れば、それが一番だ。だが、それを叶える為の犠牲はあまりにも大きすぎる。優しいハープ・ノートは、涙を呑んで結論を出したのだ。だから代わりにハープが泣いてやるしかない。

そんな切なさから、キリン・ライトニングもいたたまれなくなって、ハープ・ノートに声をかけようとする。そうして、ハープ・ノートの肩に手を乗せようとした時だった。

すぐそばで、ロックマンの悲鳴が飛び込んできたのだ。

地響きのような不穏な音がどこからともなく、辺りを埋めていた。とうとう、その時が来たらしい。

その原因はすぐに全員が理解でき、エレベーターがガクンと大き

く揺れたのであった。ハープ・ノートがバランスを崩して床に座り込んでしまった。そのように大きく揺れながらも、依然上昇していくものだから、異様な緊迫に室内が覆われていく。ロックマンは尻もちをついて、ジェミニ・スパーク達は壁に寄りかかる。そしてブライは、この揺れの正体に心当たりがあるらしく、眉をひそめて外の景色を凝視していた。ブライの心当たりはおそらく、もうほとんど確信に近いものへと変わっているはず。

もちろんキリン・ライトニングも、揺れの正体には気が付いている。透明の壁に駆け寄り、外の景色を眺めれば息を呑まざるえない。雲が凄まじい速さで、横に流れていく。惑星の大地からどんどん離れて、大気を突き破りながら、宇宙に突き進んでいく。

ブラックママルが、ジャンプ航行モードに入っていたのだ。

キリン・ライトニングは、コントロールルームのある上空を見上げて、恐れを成したように震えた声を上げた。

「マザーシステムが起動したのか……！」

「おい、キサマ！」

するとブライがキリン・ライトニングの方に駆け寄り、いきなり胸倉を掴んで、乱暴に問い詰め始めた。彼にしては珍しく、浮足立ったような、不安に急きたてられた表情を作っていた。

「これは一体どうなっている？！　ムー大陸が移動を始めているぞ……！」

強い語気で言葉を浴びせかけるブライ。デューオの神殿での事が、彼の頭の中を巡り巡っていた。

ムー大陸の正体。

ムー人の正体。

そして今起きている、それらを肯定するかのような異常事態。

キリン・ライトニングは、取り乱すブライを突っぱねると、外の景色を見つつ説明してやった。キリン・ライトニングも余裕がないのか、口調が尖っている。それほど後のない状況なのだろう。

「落ちつけブライ！　おそらくワタルが、マザーシステムを起動させたんだ。これから、ブラックママルはＦＭ星にワープジャンプする！」

「マザーシステムだと……？　なんだソレは？！」

「ムー大陸……いやユグノアの全システムを管理する端末の事だ。ムー人であるお前なら、知っているはずだろ？」

その言葉に、ブライは息を押し殺して、目を見開く。どうやらは気が付いたようだ。ムー人であるがゆえに、地球に伝わるムー大陸の伝承は全て頭に入っているのだから。

ムー大陸には神が存在する。それは電波神と呼ばれて、全ての電波生命体の始祖とされていた。それこそがラ・ムー。そしてそれは、ムー大陸の中枢を担い、ムー大陸と共にどこからともなく現れて、地上に電波生命体とオーパーツを送りだす。時代を凌駕した電波の生命と、オーパーツの存在。それらが紡ぎ合わされ、ムーの圧倒的な文明が築かれたのであった。それがムー文明である。

仮にそれらの全てプロセスが、『システム』だとすれば、マザーシステムの正体はラ・ムー他ならない。それはキリン・ライトニングの言葉から、仮説ではない真実と判断できる。

ムー大陸は、地球だけのものではなかった。ブライの中ではもはや、ムー人としての存在理由と、自分の正体は全く分からなくなっていた。その事実から、ブライの口は震えていた。

「マザーシステム……まさか……それはラ・ムーなのか？」

「ああ、地球じゃそう呼ばれてる……。だが、ブラックママルにある端末名は、『ラ・マリア』と呼ばれている。言わば惑星パトラのラ・ムーと言ったところか」

かくいうキリン・ライトニングも、いよいよ焦りが見え始めており、しきりに額を拭う。ブラックママルがＦＭ星に着くとなれば、おそらく被害は甚大となるからだ。残された時間はいよいよ少ない。

その一方でロックマンも、今の事態に困惑していた。キリン・ライトニングが明かす真実には、彼も無関心ではいられなかったのだ。このブラックママルは不思議な場所だったが、ここまで来ると気のせいでは済まない。多くの疑問が、次から次へと湧いてくるのであった。

ロックマンは恐る恐るキリン・ライトニングに問いかける。しかし彼は首を振った。もう、時間がないのだ。エレベーターの上昇速度は、緩やかな下降を辿る。

「ジョニーさん。何が起きようとしているの？　ラ・マリアって……それがラ・ムーって事？　ムー大陸って一体何なの？」

「答えてやりたいが、今は状況を整理している場合じゃない……！　鳳凰の間に、もうすぐたどり着く。今はそっちに集中しろ！」

「あっ……」

ロックマンは声を短く漏らした。一度大きく揺れると、室内は静寂に包まれ、小さな物音が余計に耳に付く。その場所はもうすでに惑星パトラから遠く離れて、どことも分からない宇宙が広がっていた。エレベーターの室内からどこからともなく、電子音が鳴り、それが到着の合図のようだ。

とうとうエレベーターは頂上にたどり着き、その重い扉を開けたのだった。すると凄まじい戦闘周波数が、扉の隙間から流れ込んでくる。

場所は鳳凰の間、またの名を、大陸型宇宙艦ブラックママル最深部コントロールルーム。

そこにはフェニックス・リボンが待ち構えており、普段のその場所の様相とは打って変わって、壁という壁は全て透明に変化していた。まるでデューオがいた場所と同じである。おそらく、ジャンプ航行モードになった事が原因なのだろう。そのおかげか、鳳凰の間は、まるで宇宙に浮かぶ闘技リングのようになっていた。

そしてその場所で一番目立つのは何と言っても、マザーシステムこと、ラ・マリアだろう。舞台の奥で、電波の炎がゆらゆらと燃え、その神々しい姿が目に眩しい。そんな数メートルにも及ぶ武骨な彼女は、腹に命の炎を燃やして、まさに母と呼ぶに値する。そしてシステムの命令をパターンを、機械的に読み上げ始めた。いよいよ、未曾有の危機が迫ろうとしていたのだ。

《システムの全ての準備がトトノイマシタ。コレヨリ、ユグノアは指定座標へのジャンプ航行を開始シマス。指定ポイントはＦＭプラネット……。空間湾曲、出力を開始シマス》

ラ・マリアの作用で、ブラックママルの周りに強い重力場が発生して空間が歪む。ワープの準備ができ始めているらしく、周りの宇宙空間が、蜃気楼のように真実味なく振る舞っていた。

そんな場所に、ロックマン達はやっとの思いでたどり着き、今、フェニックス・リボンと向かいあっている。

すると、あくまで穏やかな口調で、フェニックス・リボンは、ロックマン達に話しかけてきた。漏れ出している戦闘周波数は、それとはまた違う意味で威圧を重ねてはいるが、上辺はまだ攻撃的ではない。そのおかげで、キリン・ライトニングを見つめる彼の表情は、余計に不気味な気配を漂わせていた。それは怒りではなく、むしろ友の旅立ちを嬉しく思っているようだ。それがただただ不穏な印象だったのだ。

「たどり着いたか、少年たち。……そしてジョニー、その様子だとお前の見つめる未来はそちら側にあるらしいな。……フフ、お前はいつだって自由だったものな」

「まあ、こっちも色々考えてたんだ」

キリン・ライトニングは結果として、裏切りという形をもってフェニックス・リボンと相対している。

しかしフェニックス・リボンも予見していた事のようで、咎めるようなことはしなかった。彼自身もいつかはこうなる事を分かっていたのかもしれない。

キリン・ライトニングは、自分の感じてきた思いをフェニックス・リボンに言ってやる。親友として、間違った道を正そうとしてやる。

「悪いが……お前に協力するのはここまでだ。俺は気付いた。何がお前らにとって、一番幸せなのか……！

親友だから、あえて言わせてもらうぜ。お前達のやろうとしている事は間違っている！！　ＦＭ星人を滅ぼして、家族を手に入れても、そんなの誰が幸せになるっていうんだ？！　目を覚ませ！　このままじゃ本当に後戻りできなくなるぞ！！」

キリン・ライトニングの訴えに、フェニックス・リボンは黙って首を振るばかりだった。彼の中には、命を懸けて守り通したい約束があったのだ。この場所を覆う宇宙に、可能性を見出して、修羅と化した。そんな彼の中には、一つの想いだけしか生きていない。

いつだって忘れなかったカンナの笑顔と苦しみ。最後まで病気と戦って、未来を掴もうとしていたその姿。彼は手に入れなければならない。ミソラが望んだ、ごく当たり前な幸せいっぱいの家庭を。それを手に入れるためだけに、今まで生きてきたのだから。

キリン・ライトニングもフェニックス・リボンの想いを理解できるがゆえに、悲しくて堪らなかった。親友としての声さえも届かない今の状況に、力ではどうしようもない人間の意志の強さと、恐ろしさを感じていた。

「もう、俺の言葉は届かないのか……？」

「ジョニー……分かってくれ。幸せを手にする為には、犠牲が必要なのだ！　立ちふさがるというのなら、お前でも容赦はしない！！」

それだけ言うと、フェニックス・リボンがとうとう、キリン・ライトニングを排除する為、背中の羽から光の剣を作りだした。かつ

てヘル・スコルピオを一刀両断した武器、シナジーブレードである。そしてさらに恐ろしい事に、あれから四年の月日が経っているために、その戦闘周波数はさらなる高みへと洗練されていた。いくらキリン・ライトニングといえども、これを貰えば、一たまりもないだろう。

キリン・ライトニングもオーパーツの槍を生成して、親友との悲しい結末に臨んだ。彼らの戦闘周波数は、１００００ギガヘルツを優に超えており、レベルが違いすぎてロックマン達では割って入れない。

見守ることしかできないのかと誰もが思った時、キリン・ライトニングとフェニックス・リボンの間にハープ・ノートが割って入った。

目の前の、恐ろしいほどに強大な父親に向かって、お家に帰ろうと訴えかけたのだ。

「もうやめてよパパ！！　元気なママはもういらないから……！　もう、わがままは言わないから……！　だから、お家に帰ろうよ……」

真実の全て知ったハープ・ノートは、約束の呪縛からワタルを解放してやろうとする。「もう、約束の為に頑張らなくてもいいんだよ！」その言葉を、一生懸命言葉に起こして伝えた。フェニックス・リボンの強すぎる愛が生んだ、真っ暗な心の闇に届く事を信じて。

やはり娘の訴えには、さしものフェニックス・リボンも困惑を隠せないようだった。握った剣が地面にだらんと垂れて、一歩二歩と後ろによろめく。表情は驚きと、少しの恐怖に覆われていた。

『パパ』という言葉。いざ耳にすると、嬉しくて恐ろしい。自分にその資格などないと思っていたからだ。震えた声が、思わず口からこぼれてくる。

「お、お前……俺の事が……」
「ずっと、分かってたよ。だって、家族だもん。分からないわけがないよ！」

ハープ・ノートはもう一歩フェニックス・リボンに歩み寄った。フェニックス・リボンは逃げるように、よろよろと後退する。
それでもフェニックス・リボンは、カンナの事が諦められない。絞り出すように、これから起きる素晴らしさを教えようとハープ・ノートに呼び掛けた。娘が、笑顔で見送ってくれたら、どれだけ心強いか。彼の心境はそんなものだ。肯定が欲しいのだ。

「くっ……ミ、ミソラ。だったら、分かってくれるはずだ！　家族なら、母さんがどれだけ大切か！　お前の大好きだった母さんが、家族にとってどれだけ大きな存在だったか！！　分かるはずだ！　もうすぐ元通りになるんだ！！　なあ、分かるだろう、ミソラ？！」
「分かる……。分かるよ！　でも、そんな事しても誰も幸せになれない！　ママだって悲しむ！！　パパ、お願い、私を見てよ……私は目の前で生きてるんだよ。だから、私と一緒に帰ろうよ」
「……なぜだ。違うだろう……ミソラ？」

フェニックス・リボンはハープ・ノートの切実な気持ちに、呆然と立ち尽くすしかなかった。目の前の少女の涙を見て、心が揺さぶられている。頭を抱えて、呆然自失だった。
しかしそこにフェニックスが口を挟み、揺れるフェニックス・リボンに、今までの辛い日々を思い出させる。そうやって。今一度決意を固めさせるのだ。フェニックスも必死であり、ワタルを冷徹に徹しさせようとする。今までワタルと歩んできた日々が間違っていたなんて、彼女はまるで思っていないのだ。

『だめよ、ワタル！　ここで諦めたら、カンナさんがどうなるか分

かってるの?!　ミソラちゃんの幸せを考えたら、ＦＭ星人は必要ないの！　必要なのは温かい家庭だけ!!　それを与えてあげるのが父親の役目でしょ?!

忘れたとは言わさない。アナタの家族を引き裂いたのは、紛れもないＦＭ星人！　悩む必要なんてどこにもないのよ！　ワタル!!』

このフェニックスの言う事に嘘偽りはない。この場所に渦巻く、お互いの意志と生き方、信念は決して交わらなかったというだけなのだ。この両者に善悪を分ける物差しは、まったくもって意味を成さない。この場に対立している両者は、どちらも正義でどちらも悪であるのだから。

フェニックス・リボンは苦し紛れに呻いた。

「く……」

フェニックス・リボンの息は荒い。ギリギリのところで迷っているのだろう。フェニックスが畳みかける。

『ワタル！　アナタは何のために生きてきたの?!　今まで、宇宙で何を見てきたの?!』

フェニックスの言葉に、今までの辛く長い日々が蘇る。

突如として崩れ去った平穏。毒に侵され、この世のものとは思えない苦しみにのたうつカンナ。初めて手にした戦う力。宇宙からやってきたＦＭ星人達。戦うたびに心が荒み、生きる気力さえ失った。そんな中、惑星パトラの人が助けてくれた。そして再び襲いかかるＦＭ星人達。ＷＷＲを作り、フェニックスと共に、圧倒的な力を手に入れた。そして今こうしてここに立って、娘と向かい合っている。

全てはカンナを生き返らせるために。家族を取り戻すために。

フェニックス・リボンは迷いを振り払った。

「そ……そうだったな。そうだ！　何を迷う必要がある。俺はカンナを生き返らせる。その為なら……なんだってするんだ！」

フェニックス・リボンは、ミソラ達とは違う正義の道を選んだのだ。ギュッとシナジーブレードを握り込み、迷いのない姿勢を貫く。フェニックスも上ずった声を発して、お互いの結束を再確認した。

『そう……そうよ！　それでいいのよ。それがいいのよ！　今、ミソラちゃんは、動揺して正常な判断ができないだけ。アナタのやろうとしている事は正しいのよ！』

「うぅ……パパ……」

ハープ・ノートは肩から力が抜け虚脱し、目から涙が止まらなかった。あんなに幸せだった家族とこうやって対立するしかない現実に、自分の無力さを酷く痛感した。そして敵として存在する父親はいまだ優しくて、それが余計に胸をえぐる。

「パパぁ……！！　目を覚ましてよ！！」

ハープ・ノートは声を振り絞るが、もう届かない。

ワタルを懐柔したフェニックスが、いよいよ邪魔ものを排除しようと、ロックマン達に敵意を向ける。

『ワタル！　この可哀そうな子達を少し黙らせましょう』

「ああ……！　少しの間、眠っててもらう」

ハープ・ノートの涙ながらの訴えは、フェニックス・リボンに、

ほんの少しのところでとうとう届かなかった。最愛の娘の言葉よりも、今までも四年間と、パートナーの言葉が勝ってしまった。

フェニックスの言葉とは逆で、正常な判断ができていないのは、フェニックス・リボンの方なのかもしれない。それほどカンナという存在が大きいのだろう。この結論が彼なりの正義で、ミソラ以上にカンナを欲している、彼の深層心理の表れだった。なので彼は吹っ切れた様子で君臨し、響ワタルとしてではなく、ＷＷＲ首領フェニックス・リボンとして存在していた。

もはやフェニックス・リボンを説得できないと悟ったウォーロックは、ロックマンにそろそろ覚悟を決めろと、張りつめた様子で促す。

『スバル！　どうやら、口で言っても聞かねえようだ。このバカヤロウには力づくで、意見を通すしかねえ！！』

「残念だけど、そのようだね……。ミソラちゃん後ろに下がってて、ここから先は……僕がやる……！」

ロックマンはハープ・ノートを後ろに下がらせて、キリン・ライトニングの隣に並んだ。そして覚悟を決めて、フェニックス・リボンを見据える。

ずっと一人ぼっちで暮らしてきた響ミソラ。そんな可哀そうな少女を今日で最後にするために、ロックバスターをゆっくりと構えたのだ。

いよいよブラックママルがワープ航行を開始し、空間がＦＭ星近辺の宇宙と混ざり始める。ラ・マリアによって、一点と一点が隣接しようとしているのだ。それを成すのは、重力場を歪ます彼女の力ゆえだ。いつかのレギオンの宇宙船と、ワープの原理は同じである。

そんな混沌と渦巻く宇宙を見上げて、フェニックス・リボンは、いよいよ時が満ちる事を感じたようだ。そして躍動の宇宙から目線を落とし、目の前の少年ことロックマンに、かつての記憶を重ね始める。ずいぶんと昔に大吾と交わした、男と男の約束。それは確か、カンナを救う――そのようなものだった。

しかし皮肉にもその息子が、それを食い止めようとして、立ち塞がっているのだ。フェニックス・リボンは少し、その状況に面白さを感じた。

「フフ……そうか、キミが大吾さんの息子……スバル君か」

意味深な言葉に、ロックマンは驚きと疑問以上の魅力を感じて、表情を押し殺す。わずかに下がった銃口から、彼の隠せない心内が推し量れる。

「父さんを知っているの……？」

「ああ……そうだよ。そんな君だからこそ、ミソラの一番の友達で良かった……。さあ、もう休むといい」

フェニックス・リボンは儚げに微笑んでみせ、背後のラ・マリアに命令を下す。彼女は、フェニックス・リボンを主と認めて、眼光を鋭くロックマン達に突き刺した。

「ラ・マリアよ！　ロックマン達の動きを止めてしまえ！」

《了解……シマシタ。敵を捕縛シマス》

フェニックス・リボンの言葉に反応して、ラ・マリアは台座ごと祭壇から浮かび上がり、ロックマンの方に襲いかかってくる。彼女は巨大な手のひらを広げて、そのまま包み込むように彼らを捕まえるつもりのようだ。ロックマンはロックバスターで迎撃するが、さすがにそこは電波神だけあり、ものともしない。

クッ……とロックマンが表情を曇らせる。すると、彼の背後から、アシッドブラスターの弾幕とジェミニサンダーの太い稲光、さらにハープ・ノートの音波がけたたましく響きわたり、ラ・マリアの手のひらに被弾した。最後の仕上げには、黒い人影が素早く飛びかかり、ラ・マリアの手のひらをブライブレイクで押し返したのであった。

ラ・マリアはバランスを崩して空中で、ぐらぐらとコマのように揺れる。

その様子を確認すると、ブライはいったん地面に着地し、ロックマンに呼び掛けた。彼の元にジェミニ・スパークの二人とスカッド・エース、ハープ・ノートが駆け寄っていく。

「ロックマン！　このデカブツは俺が仕留める。お前は、その電波人間を何とかしろ！」

図らずともこの状況下では、共同戦線を強いられる。もちろんブライにはそのつもりはないだろう。だがロックマンはそれでも感謝した。

「ソロ……っ。分かったよ、ありがとう！」
「勘違いするな。こいつはラ・ムーである以上、俺の獲物というだけだ！」

ブライは毒づく。
しかしブライの元では、スカッド・エース達がブライをサポートするように左右に展開してラ・マリアを迎え討とうとする。どうやら一人で戦うつもりなのは、ブライだけのようだ。

「おいおいブライ。連れない事を言うなよ！　ラ・ムーだかラ・マリアだか知らないが、ジョニーさんとロックマンの邪魔はさせないさ！」
「そういうこと。だよね、ヒカル？」
「まあ、俺の相手に不足はねえようだしな！」
「チッ……、どいつもこいつも。俺の邪魔だけはするなよ」

すっかりやる気のスカッド・エース達に、ブライはチッと舌打ちをして、剣を構えた。
その状況としてはブライ達がラ・マリアを、ロックマン達がフェニックス・リボンを相手取る事になる。タイムリミットは、ワープが完全に終了するまでの少しの間。ブラックママルがＦＭ星に到着してしまえば、ＦＭ星人の無事は保証できない。それは電波神と不死鳥、そして時間との戦いの始まりを意味していた。じりじりとした緊張感が、ロックマン達に襲いかかる。

そして、そんな状況下で、ハープ・ノートも黙って見ている訳にはいかなかったらしく、ブライの陣に入って戦いに臨む。そしてロックマンに、希望溢れる未来を約束させる。ハープ・ノートの目の覚める笑顔はその未来を予言しているかのようだった。

「スバル君！　みんな揃って笑顔で帰ろうね！」
「うん、そうだね……！」

ロックマンが大きく頷くと、ハープ・ノート達はラ・マリアの方に飛びかかった。さしものラ・マリアも、ブライ達を相手にすれば、さすがにロックマンの方には気が回らないらしい。上手く注意をひきつけたようだ。これでロックマン達は、フェニックス・リボンとの戦いに集中できる。

それだけ確認すると、キリン・ライトニングが、ロックマンに檄を飛ばした。かつての敵も、今回ばかりは頼もしい仲間である。今のキリン・ライトニングは、きずなクルーとして、大吾の生きざまを引き継いでここにいる。今の彼に多くの理由は必要ない。意志を継いで、彼の息子と共に、星を救うだけである。

フェニックス・リボンの目を覚まさせてやろうと気持ちを一つにして、星を懸けた、後にも引けない最終決戦に臨むのであった。

「ワタルを止めるぞ！　スバル君！！」
「はい！　ジョニーさん！！」
「よし、いい返事だ」

ロックマンの返事に対し、キリン・ライトニングはフェニックス・リボンの方を注視しながら、これからの大まかな方針を告げる。残された時間はおそらく短い。なので最も勝算のある方法は一つしかない。

「ワタルの戦闘パターンは俺が一番よく知っている。俺がヤツの隙を作る。スバル君はそこを突いてくれ！」
「了解！」
『へっ、燃えてきたぜ！！』

ウォーロックが奮いたち、キリン・ライトニングも本気を出して、神経を研ぎ澄ます。

彼らの殊勝な姿勢に、フェニックス・リボンは頷くと、シナジーブレードを小さく横に振る。そうやって簡単に、空間を超密度のエネルギーで切り裂いたのであった。空間に干渉する周波数は今までのレギオンと同じだが、彼のそれは圧倒的ではるかにそれらを上回る。

時空間渡りこそ持っていないが、こと戦闘においてはプルト・キグナスでは彼にはまるで及ばない。彼が相手では、ロックマンの苦戦は必至だろう。

それでも苦戦で済めば幸せなのだ。彼は闘神。彼は裏世界の王として君臨してきた絶対の存在。そんなフェニックス・リボンは、背中の羽を大きく広げて、虹色に輝く光の翼を作りだす。素晴らしく艶やかな翼はまさに鳳凰で、その羽が意味するところは、派手な献花のようである。ロックマンはその恐ろしい戦闘周波数に、冗談ではなく、そんな気の利いた錯覚をしたはず。

後光を従えた鳳凰の化身は、まるで神のように一言一言が、ロックマンに畏敬を覚えさせ、絶望を孕ませる。

「あくまで、徹底抗戦か。いいだろう、俺も君たちを迎えうつ。仮にラ・マリアを止められたとしても、俺は絶対に止まらない。――鳳凰座のＡＭ星人にして、ＷＷＲ首領フェニックス・リボンの力を思い知れ！！」

歩き、歩き、飛びかかるフェニックス・リボン。

『来るぞ！　スバル！！』

「ウェーブバトル、ライド・オン！！」

ignit—31：最強の力

オペレーションアポカリプス開始から約七時間後。地球の世界時にして、午前八時。

鳳凰の間では、キリン・ライトニングとフェニックス・リボンが、互いに互いの命を狙い合っていた。神業に見まがう、彼らの神速の格闘術に槍と剣が鎬（しのぎ）を削る。超エネルギーの火花は激しくて、広い鳳凰の間を盛大に飾り立てた。

ロックマンは少し距離を置いて、機会をうかがっている。だが仮にその戦いに入っても、一瞬でデリートされてしまうだろう。それほどに二人は圧倒的だった。これではブライの方に加勢して、ラ・マリアを迎撃した方がまだ効率的というもの。それでもロックマンは、ミソラと交わした約束を心に留めて、じっとその時を待っていた。

皆が戦っている。ロックマンも、待つ、という戦いを続ける。ミソラの幸せを取り戻すために。『必ずフェニックス・リボンを助けて、地球に帰る』

きっと今ならそれが可能なはずだ。なぜならロックマンは一人ではなく、キリン・ライトニングが共に戦っているから。彼はスバルの憧れたきずなクルーで、事実、強い。今まで戦ったどの電波人間よりも強かった。だからキリン・ライトニングなら——彼なら何とかしてくれる。きずなクルーとなら——。大きな背中は嘘を吐かない。英雄はいつだってヒーローであったから。ロックマンはハンターを構えて、息を呑んだ。

そしてその時が来た。

一瞬の攻防で、キリン・ライトニングがフェニックス・リボンのわずか上を行った。

キリン・ライトニングのオールトランスが、シナジーブレードを弾き飛ばす。小さなエネルギー片を、刀身に纏わせながら、宇宙の空で剣が舞い踊る。彼は、その一瞬の隙を見逃さなかった。剣を弾かれ、体が開いたフェニックス・リボン。その肩に、グングニールの一突きが会心の当たりを見せたのだ。雷を槍に這わせ、そのままフェニックス・リボンに流し込む。「グッ」小さく唸って、痺れ上がった不死鳥の化身は、片膝を突いた。

キリン・ライトニングがロックマンに向かって叫びあげた。

「いまだ！　スバル君！！」

『ブチ込むぞ！　スバル！！』

ウォーロックの奮起させる呼び掛けに、ロックマンがバトルカードを次々に入力していく。

「分かっている、バトルカード！　エリアイーター、ダブルイーター、トリプルイーター、ビッグバンイーター――ギャラクシーアドバンス『リトル・ビッグバン！！』」

華麗なバトルカードの連携に、一枚のバトルカードが生まれる。ギャラクシーアドバンスの発動と共に、ロックマンの左の掌に、白く燃える火の玉が出来あがった。彼はそれを強く握りこむと、フェニックス・リボンの方に力いっぱい投げつける。

フェニックス・リボンへの直線を辿るにつれ、火の玉は大きくなり、くすぶった火柱がゆらゆら見え隠れする。

「ジョニーさん！　逃げて！」

ロックマンがキリン・ライトニングに、危機回避を促す。それを受けて、グングニールを敵の肩に突き刺させたまま、キリン・ライトニングは大きく後ろに飛びのいた。

そのまま白い球体は、フェニックス・リボンに直撃し、大きく燃えあがる。白い炎が徐々に赤く熱帯びていき、限界点を越えると爆発。鳳凰の間の透明の壁を、一部吹き飛ばしてしまった。室内から真空へと向かう空気の流れにより、透明の壁は宇宙へと投げ出されていく。フェニックス・リボンもその流れに乗ってしまい、火だるまのまま、宇宙に投げ出された。しかしすぐに燃焼不全を起こし、焼け焦げてしまった人形がぽかぽかと宇宙空間に浮かぶ光景が露となった。その宇宙も、ＦＭ星宙域へと完全に移り変わる前での幕引きであった。

どうやら間にあったようである。

ウォーロックはその様子を見つめ一息吐く。

『案外、呆気なく終わったな……』

「そんな事より。早くワタルさんに手当てしないと」

ロックマンはフェニックス・リボンの手当てをしようと、捻じれた宇宙空間に向かって走り出す。フェニックス・リボンは見た目にも分かるダメージである。全身が焼け焦げたその姿が物語っていた。それに早く助け出さないと、捻じれ歪んだ重力場の断層にいつ飲み込まれるか分からない。焦ったように、歩を進めるロックマン。

しかしロックマンの耳当ての通信機に声が贈られる。「待て！　スバル君」その声がロックマンの足を止めさせた。キリン・ライトニングだ。

「だめだ！　アイツがこの程度で終わる訳がない」

「で、でも、ジョニーさん」

キリン・ライトニングの方へ振り返って、ロックマンは難色を示す。

しかしウォーロックは気が付いた。ＡＭ女王ことフェニックス。彼女は生命を司るＡＭ星人、それが意味している事は明瞭だ。同じＡＭ星人であるウォーロックは、その事実を思い出し、ロックマンにさらなる攻撃を要求する。しかしそれは非道な事。

『スバル！　フェニックスに追い討ちをかけろ！』

「え？　何を言ってるのさ……。もうあんなになってるのに」

その非道さゆえに、心優しいロックマンは首を縦には振らなかった。

『バカヤロウ！』

ウォーロックのどなり声。宇宙から湧き上がる、恐ろしい周波数。とうとう垣間見せたフェニックス・リボンの本領に、キリン・ライトニングが持てる一番の技を繰り出す。雷の竜が、宇宙空間を照らしながら伸びていく。

「クッ……！　ライトニング・ドラゴンハール！！」

「ジョニーさん！！」

ロックマンが素っ頓狂な声を上げる。

お構いなしに雷竜の牙が、大きな杭としてフェニックス・リボンに突き刺さろうとした時だった。フェニックス・リボンの羽が大きく輝きを見せて、雷竜の口腔を虹色で埋め尽くす。キリン・ライトニングは焦りを見せて、さらに二匹の雷竜を両手のひらから放った。

「ダブル・ドラゴンハール！！」

より盛大となった雷が宇宙を明るく照らし上げる。しかしそれ以上に、大きくて眩しい虹色の光が宇宙と雷竜を飲み込んでしまう。雷竜は虹に飲み込まれると、ただの電波の破片として宇宙に霧散していった。

ちりぢりとなった雷がほとばしる霧の中から、虹色の羽が大きく広がる。その光りの中にフェニックス・リボンは浮かんでいた。もはや暗黒ではない宇宙空間の中、ゆっくりとロックマン達に歩み寄ってくる。

彼の焦げてしまったアーマーや体表は、見る見るうちに剥がれおちて、その下から傷一つないものが現れる。肩に大きく開いていた穴も、渦を巻きながら小さく小さくなっていく。そんな異質なフェニックス・リボンは何度か首を回してみると、笑みを含ませた。

「さすがにきずなクルー相手に、格闘術じゃ一歩劣るか……」

「よく言うぜ、ワタル。十分デスクワーク派の動きじゃねえよ」

体中から、嫌な汗を噴き出させるキリン・ライトニング。そんな彼を尻目に、フェニックス・リボンはロックマンを見つめた。

「しかし、君には驚かされたよ。バトルカードの威力は戦闘周波数もといシンクロ率に大きく左右される。この俺を丸焼きにするとは……素晴らしい結束力だね」

『ホホホ。ウォーロック、とっても素敵なパートナーを持ったようね』

フェニックスがやや羨ましそうに、ウォーロックに声を掛ける。その声は、羨望の色をわずかに含んでいる一方で、彼女はウォーロックをせせら笑っていた。

何を言わんとしたのか、すぐにフェニックス・リボンが右腕を構

えた。一瞬で右腕が砲台に変化したのだ。

「バトルカード、エアシュート」

フェニックス・リボンはおもむろにバトルカードを読み込ませ、右腕から空気の玉を発射させる。それがキリン・ライトニングのオールトランスを粉々に砕いたのだ。もちろんキリン・ライトニングは油断していない。だが、あまりにもその空気砲が速過ぎて反応ができなかっただけ。しかしエアシュートはバトルカードの中でも、下位のランクだ。それでオーパーツを破壊して見せるのだから、フェニックス・リボンのシンクロ率は恐ろしいと体感できる。そう、最速の電波人間を反応させないほどなのだから。

その為か、満足気にフェニックスは、ウォーロックに吹っかけた。

『見た？　ウォーロック。ご覧の通り、ワタルはスバル君以上に最高のパートナーなのよ！　ホホホホッ！』

一連の出来事にロックマン同様、キリン・ライトニングは絶句した。

「お前……手を抜いてやがったな」

「何を言っているジョニー？　俺は全力を出した。もっとも、お前のスタイルでだがな。だが、ここからは俺のスタイルでやらせてもらう。

お前が『最速』の電波人間なら、俺は『最強』の電波人間……！

お前自身俺の恐ろしさがよく分かっているはず」

「クソ……！」

キリン・ライトニングはフェニックス・リボンに圧倒されている。何とかオーパーツを再度生成させて、戦いに臨むも、その表情は不

安で一杯だった。
　フェニックス・リボンは、完全に塞がった肩の穴に目を落とすと言い放った。
「俺の能力は、いくらダメージを負おうとも、際限なく回復する不死鳥の力……さしずめ戦いにおいての最強の力『ムゲンリカバリー』だ」
　フェニックス・リボンの能力は最強のそれだ。誰しもが思いつく、一番の理想をその身で実現している。それは最速の力、ライトニングインパルスが遠く霞むほどであった。
　キリン・ライトニングはそれを自覚しており、ゆえに焦燥する。フェニックス・リボンは手を抜いていないと言っていたが、ムゲンリカバリーを使わずの先ほどの攻防だ。大きな隔たりを感じさせられるのだ。彼は両手の槍を構えて、ロックマンに呼び掛けた。
「スバル君、もう小細工は通用しない。全力でワタルを止めるぞ！　あの時の力を引きだすんだ！」
「は、はい！」
　あの時の力、それはラーニングレギオンだ。最速の力をライトニングインパルス、破滅の力をディメンションゲート、最強の力をムゲンリカバリーとするなら、繋がりの力がラーニングレギオンだ。
　ウォーロックは瞳を燃やし、全力で敵に向かいあう意志を示す。ロックマンも額に手をかざして応える。
『行くぞ！　スバル！！』
「アクセス、アカシックレコード……レベル１３！」

ｉｇｎｉｔ―３２：やってきた最後の時

ロックマン・スターノート、戦闘周波数９５００ギガヘルツ、シンクロ率∞。

キリン・ライトニング、戦闘周波数１１０００ギガヘルツ、シンクロ率３８００％。

彼らは地球どころか宇宙でも最強クラスの電波人間達である。

しかしそれでもフェニックス・リボンには敵わなかった。

キリン・ライトニングの槍がフェニックス・リボンを貫いても、たちまち傷が塞がってしまう。何をしても彼の前では意味を成さなかった。戦えば戦うほどに、時間の経過とともに、フェニックス・リボンの回復スピードが上がっていく。おそらく時間と共に、シンクロ率が常に上がり続けている事が原因だろう。もはや彼にダメージを与えることは、至難の業である。

それゆえフェニックス・リボンは、ダメージを気にせず攻める事が可能となり、圧倒的なアドバンテージが彼にもたらされる。「避ける」という動作を必要としないのだ。ただでさえ互角だったキリン・ライトニングとの格闘に、はっきりとした差が現れ始める。

息が切れ始めるキリン・ライトニング。彼がそうなのだから、ロックマンはついていくのでやっとの状態であった。

攻め手をあぐねているロックマンとキリンライトニング。するとシナジーブレードが、キリン・ライトニングの胴を縦に割った。鮮血が噴きだし、ガクンと手を床に突いた。

「ジョニーさん！」驚くが手は止められない。ロックマンはいったん飛びのいて流星の音波の弾幕を張る。

全弾直撃するが、焦げ臭い煙の中から、傷一つないフェニックス・リボンはぬっと現れる。足元には、倒れて動けないキリン・ライトニングが。フェニックス・リボンは眼光を鋭く覗かせ、さらにシナジーブレードを手にして二刀流の構えだ。

「うわああ！」ロックマンは叫び声を上げて、がむしゃらに音波を放ち続けた。それをフェニックス・リボンは、ことごとく受け止めては、回復していく。何百の攻撃を加えようとも、それ以上の治癒力で、フェニックス・リボンは絶対の存在であり続ける。とうとうロックマンの攻撃は、フェニックス・リボンの脇をかわしていくばかりとなった。彼は震えあがってしまい、もはや照準が定まらないのだ。

情けない相棒にウォーロックが叫んだ。

『しっかりしやがれ！』

「クソ！　何なんだよ、アレは！！」

自棄を起こしたのか、ロックマンは声を荒げた。

フェニックス・リボンは、向かってくるシューティングノートの一つを軽々と斬りとばし、フッと嘆息してロックマンを見据える。

「君は十分頑張ったよ。もう大人しくしてくれないか、スバル君？」

二本の剣をチラつかせながら、ロックマンを丸め込もうとしてくる。彼はキリン・ライトニングでさえ、敵わない存在だ。もはや戦うだけ無駄と言いたいのだろう。

ロックマンはそれでも、ギターから音波を発射し続ける。だがフェニックス・リボンは動じる事はなく、言葉巧みにロックマンを惑わしていく。

「スバル君。よく考えてみるんだ。何を手に入れ、何を捨てるべきか？」
「……シューティングノート！！」

フェニックス・リボンは首を横に倒して、軽く攻撃をかわす。おそらく目も瞑っている事だろう。そしてロックマンの攻撃から迷いを感じたようで、饒舌な様子に拍車がかかる。

「君もうすうす感じているはずだ。ミソラの母親を取り戻す事が真の幸せだと。そしてそれを邪魔している今の状況こそ……ミソラから家族を奪おうとしている事だと……！」
『耳を貸すな！　コイツらは星を滅ぼそうとしているんだ！』
「……わ、わかってるよ！　そんなのわかってる！」

口では強く言うが、ロックマンの胸の中では、ミソラの打ち明けてくれた過去がよみがえっていた。ミソラは母親が大好きだったこと。いつでも一緒にいたかったこと。

いつも気丈に振る舞っていたが、ミソラはずっと寂しかったはずだ。まだ小学生の女の子なのに、家では一人ぼっち。寂しくないわけがない。

本当にこれでいいのか。

これが最善なのか。

だが、答えは出ない。

『しっかりしやがれ！　スバル！！』

ウォーロックが呼び掛ける。しかしロックマンのギターは手からするりと落ちて、地面を小さく鳴らした。

『あ、おまえ！　何やってやがる』

呆気に取られるウォーロック。

それとは正反対に、ロックマンは意を決してフェニックス・リボンに呼び掛けた。必至の形相で、彼の中のフェニックスに訴えかける。

今、ロックマンの頭の中はミソラで一杯だった。彼女にはいつだって笑顔でいて欲しい。きっと母親が帰ってきたら、嬉しいに違いない。そしたらスバルの知らない、また新しいミソラと出会えるかもしれない。スバルは、ミソラには一番の幸せでいて欲しかった。また家族と暮らせる事ができれば、それ以上の素晴らしい事はないだろう。

そして、それを叶える事ができるのはフェニックスだけなのだ。

「ＡＭ女王！　ミソラちゃんを助けてあげてよ！　アナタが手を差し伸べるだけで、みんなが救われるんだ！　だから、ＦＭ星人を許してあげてよ……！！」

『ホホホ……。確かに私はミソラちゃんの事は好きよ。カンナさんもワタルも好き。この家族を救ってあげたい気持ちはだれにも負けないはずよ』

「だったら……！」

『でも……』

一息置くと、フェニックスは口調に怒気を含ませて続けた。

『……でもね。それ以上に、許せないの！　あのＦＭ星人達が！！　ヤツらは星を滅ぼしたのよ！　それなのに私には許せ？！　そんなのまかり通らないわ！

スバル君には、この気持ちが分からないのよ……。アナタ、家族

を失う気持ちってわかるの？』
「わかるよ……痛いぐらいに」
そこには大吾の背中が霞んで見える。しかしフェニックスには見えていない。
『……そう。じゃあ、大人しくして見守っててね』
「そんな……」
『ワタル』
フェニックスが短く呼び掛けると、フェニックス・リボンは一瞬のうちにロックマンの背後に回った。恐ろしく速い周波数変換の移動術だ。後ろからそっと言葉を掛けられて、ようやくロックマンは、フェニックス・リボンの存在に気が付いた。
そうして口を開いたフェニックス・リボンの声色は、どこか悲しいものだった。きっと彼も分かってはいるのだ。それでも彼はやり遂げなければならない。
「スバル君。ずっとミソラの友達でいてくれよ……。恨むのは俺一人でいい。悪いのは俺一人。全てが終わったら罪も償うつもりだ。だから、今は眠っててくれ。ありがとう」
「ワタル……さん」
フェニックス・リボンは悲壮な決意を最後に見せただけ。
ロックマンは悲痛と憤怒、嫌悪に打ち震えるしかなかった。手刀を貫い、トンっと首に軽い衝撃が走ると、ロックマンの意識は飛んだ。
フェニックス・リボンはロックマンとキリン・ライトニングを安全な所まで運ぶと、ラ・マリアの方を望んだ。彼女の後ろの宇宙は

もう安定を見せている。そして美しい惑星が確認でき、それがＦＭ星だった。

「とうとう、か……」

フェニックス・リボンは覚悟を決めると、ラ・マリアの足元に視線を落として、状況を確認する。ラ・マリアの方は無傷に等しく、彼らの無駄なあがきが予想された。それでも意外な事に、ラ・マリアを相手にして、まだ立っている者がいたのだ。

最後に残っている者はブライで、彼は身を挺して、ラ・マリアを相手取っていた。その背中には動けないハープ・ノート達が。あのブライが守りながら戦っている。しかし戦況は思わしくないようだ。彼のラプラスブレードは、刃こぼれして淀んだ光を反射している。柄の部分から血が滲んで、一滴ずつ落ちていく。「チッ、足手まといが……」ブライは毒づくが、語尾の方はかすれてしまい、聞き取れない。

その様子を見届けると、フェニックス・リボンはラ・マリアへ戦闘中止命令を出した。これ以上は無駄と判断したのだろう。

「やめろ。命令は中止だ」

《了解シマシタ……。戦闘を終了シマス》

目の光を潜ませて、ラ・マリアは急に大人しくなる。不意の出来事に、ブライはフェニックス・リボンの方へ振り向いた。口元には血が滲んでいるが、闘争心を剥き出しにした瞳はまだまだ鋭い。

「何のつもりだ……？」

「いや、もう終わったんだ」

「何……？」

フェニックス・リボンはブライにも分かるように、宇宙空間を指差す。そこにはＦＭ星が浮かんでおり、ブラックママルがそこに向かって、勢いよく落ちていく。ＦＭ星が見る見るうちに接近して視界を埋めていく。大気の壁にぶつかると、空気が鳳凰の間で暴れ回り、乱気流の中に突入したようである。

フェニックス・リボンは激しい気流の中でも静かに佇み、もう一度だけ言い放つ。

「もう、終わりなんだ」

「舐めるな……！」

その場の光景全てが証拠であり、簡単に状況は理解できる。もちろんブライにとってＦＭ星人は関係ない。しかし残ったのは自分だけ。後にも引けない、背中を見せるわけにはいかない。そして彼は、フェニックス・リボンに敵わない事を十分承知したうえで、斬りかかったのだ。

そしてＦＭ星の歴史上類を見ない、恐怖の始まりを告げたのであった。

チームスターダストは全滅し、ブラックママルからおびただしい数の電波体がＦＭ星へと溢れだしていった。

フェニックス・リボンの邪魔者が全ていなくなってから、数十分後のこと。

ＦＭ星の透き通った空にブラックママルは現れていた。その黒々とした、大きな影は不吉な印象だ。そんな暗黒大陸から、ＷＷＲの電波体が切れ目なく繰り出していき、ＦＭ星の空を埋めるのには、そう時間はかからなかった。ＷＷＲの掃討部隊がＦＭ星の大地に降り立ったのだろう、早々爆発音が鳴り響く。

無防備だったＦＭ星はあっという間に、戦場となってしまった。ちらほらと空に、白い蛇が上り始める。

景色が壊れていく。そんな中、フェニックス・リボンは鳳凰の間から、破壊されていくＦＭ星の町並みを見下ろしていた。苦労して集めた、裏世界の精鋭達の働きは申し分ないようだ。ＦＭ星は揺れ、低い地鳴りが悲鳴のようである。

ＦＭ星の景観は、金属が眩く照り返す先鋭な建物と、緑が目立つ歴史ある石造りの建物を混ぜたような、自然と文化が協和したものだった。しかし次第に、爆発による噴煙と、倒壊していく瓦礫が目立ち始めていく。湖のような空は、黄昏でもないのに燃えるように赤い。

「これで、いいんだ……」

『そうよ。これがいいのよ』

「……」

フェニックス・リボンは小さく頷くと、ラ・マリアの方へ歩んでいく。もう、邪魔する者はいない。

「ＦＭ星の中枢を叩く」

『そうね。目標地点は王宮。あのおバカな坊ちゃんに……裁きを』

「ああ」

フェニックス・リボンはラ・マリアの祭壇に足を乗せ、彼女の岩肌のような装甲のくぼみに手を掛けて体を支えた。移動の準備が整ったところで、すぐに命令を送る。すると彼女の瞳に再び生気が戻り、怪しく輝き始める。

「ラ・マリアよ。ＦＭ王宮に向かえ。そこを陥落させる」

《了解シマシタ。命令を受理シマス。目標地点……ＦＭ王宮》

ラ・マリアは抑揚のない機械のような音声を発して、宙に浮かびあがる。そして鳳凰の間から勢いよく飛び出して、ＦＭ王宮の方へと向かい始めた。

狙いは、幼きＦＭ王ケフェウスの命だけだ。

それからしばらくした頃。

鳳凰の間の隅に備えられたベッドの上で、ハープ・ノートは目覚めた。ステンドグラスのような相変わらず高い天井が、視界に飛び込んでくる。しかし、その先にはもう宇宙は広がっていなかった。そのような状況に、いつかの既視感を覚えながらも、体を起こし辺りに目をやる。すると一緒に戦っていたはずのスバル達が見つかった。もう体力の限界だったのだろう。電波変換も解けてしまって、

無力に眠っている。
そして何よりも悲しいのは、フェニックス・リボンの姿が見当たらなかった事だった。
ハープ・ノートは肩を落とした。

「……そんな」

フェニックス・リボンを止められなかったという事を、その状況が語っている。爆発音が遠くの方から聞こえてくる。とうとう間に合わなかったのだと実感した。
どうすればいい？　これから何をするべきか？　ハープ・ノートは頭を抱えて思考を巡らす。
しかし落胆しても何も見つからず、苦し紛れに目線をふと上げる。するとベッドのそばに人影が。「あ……」ハープ・ノートは思わず声を上げた。その人影もハープ・ノートが起きた事に気が付いたようで、歩み寄って話しかけてきた。

「響か……よかった、無事だったんだな」
「ミライ君……」

そこにいたのはソウル・レイダーだった。立ち上がる事も困難だったはずなのに、彼は鳳凰の間にいたのである。傷は相変わらずだが、足取りも息づかいもしっかりしていた。しかし彼の白かった体は、緑がかった色に変色しており、普段とは違うものとなっている。これは、何度かソウル・レイダーが見せてくれた、力の拠り所である。詳細は不明だが、ミライだけに許された力なのだろう。
それでもハープ・ノートには、どうにも事の背景が鮮明に映らなかった。彼女はキョトンとして、ソウル・レイダーを見つめて問う。そんな少女の目線から逃げるように、ソウル・レイダーは息を凝らして、顔をそむけた。

「どうしてここに……？」

ソウル・レイダーは困ったように、何度か目線を泳がせ、一息を吐くと答えた。

「金髪の……赤い剣士が俺を自由にしてくれた」

「え……？」

「いや、悪い。俺も良く分からないんだ……。アイツはブライの檻から俺だけ出すと、どこかに消えていった」

ソウル・レイダーの記憶では、圧倒的な力を持つ彼が印象的に落ち込んでいた。そして記憶の中の彼は、ソウル・レイダーを見据え、こう告げたのだ。「救世主（メシア）の半身、エクスフレームを持つ者よ。見届けるがいい……」そのように意味深な台詞を残して、ソウル・レイダーを自由にさせたのであった。

だが、彼が何者で、なぜ自分を自由にしたのか、ソウル・レイダーでもよく分からない。ただあまりにも異様で計り知れない存在であり、おそらく味方ではない。そして悪い予感がするのだ。ＦＭ星どころではない、何かが破滅する予感。そんな何とも言えない予言めいたものを、あの赤い剣士から感じ取っていた。

その事から、陰の入った表情を作り出させ、ハープ・ノートの心配を誘ってしまう。不安そうに見つめられると、罪悪感からソウル・レイダーはなじられた気分になった。

「大丈夫……？」

「ん。ああ、心配ない」

慌ててソウル・レイダーは微笑して見せ「立てるか？」と、手を差し伸ばす。そうしてハープ・ノートをベッドから立ち上がらせ、

これからの方針を語り始めたのだ。
外の風景を見下ろせば、二人は恐怖を覚えただろう。

「見たらわかると思うが。俺達はＦＭ星を完全に守ることはできなかった」
「……うん、そうだね。間に合わなかった……」
「だが、まだ終わった訳じゃない。通信によると、アストラル・ホープの部隊が、ＦＭ軍と協力して星間連合を急遽作ったらしい」
「じゃあ……っ」
「そう、ＦＭ星人も生き残ろうとＷＷＲに必死の抵抗を見せている。そして、フェニックス・リボンはＦＭ王宮に向かっている。そこを落とされたら、ＦＭ星は実質的に敵の手に移る事と同義。
だからヤツを止めるために、行くぞ……！」

ソウル・レイダーは言葉尻を強く言い放ち、少女を奮起させる。ハープ・ノートも力強く頷いて、拳を握りしめた。まだ諦める時ではない。それがいまだ生き残ろうとしている人達から感じた気持ちだった。
そんな決意を固めた二人の背後で、ベッドから一人、ムクリと起き上がる。「待て……！　俺も行く」寝起きとは思えない鋭い語気が二人に向けられた。
ソウル・レイダーは立ち上がった彼を見ると、あえて確認する。その表情は穏やかだ。これまでの経緯から、もう敵意は必要ないのだろう。

「どうした。ここから先は、ＦＭ星人を救う戦いになる。お前には関係ないだろう、ブライ？」
「黙れ……！　ラ・ムーが関わっている以上、これは俺の戦いだ。それにフェニックス・リボン……舐めた真似を。俺をこんな場所で、コイツらと一緒に寝かせて……後悔させてやる」

ブライは敵に情けを掛けられて、ベッドで寝かされていた事に酷く腹を立てていたようだ。彼のプライドゆえに黙っている訳にはいかない。鋭い目がリベンジに燃えており、それが彼の感情を映す鏡となっていた。

それでもブライとは、利害の一致が見受けられ、方針がまとまりつつあるようだ。なのでハープ・ノートはブライに手を差し伸ばし、友好を示そうとする。これから一緒に戦うのだから、大切にしたい意思表示だ。

「頑張ろうね！」

「……チッ」

ブライはそっぽを向き、ソウル・レイダーの方に言葉を投げる。ハープ・ノートがムスッとするがお構いなしだ。

「ラ・マリアの相手をするのは俺だ。お前らは邪魔をするな」

無愛想な命令口調で言ったかと思うと、鳳凰の間の割れた外壁に向かって、静かにブライは歩き始める。目付きは相変わらず鋭い。そして空の向こうの何かを見据えている。おそらく神経を集中させて、オーパーツの反応から、フェニックス・リボンの居場所を探っているのだ。

そしてラ・マリアの放つ膨大なオーパーツの反応はすぐに見つかり、口元を引きつらせ笑みを作った。

ターゲットを確認すると、走り始めたのだ。

「あそこか。オーパーツの反応を感じる。……ついてくるなら勝手にするんだな」

そう言い捨て、ブライはＦＭ星の空を貫くウェーブロードに飛び降りた。「行くぞ……レイダー」ソウル・レイダーも後に続いた。

そんな中、ハープ・ノートも続こうとする。だがその前に、いったんスバルの方に向き直り、ニッコリと笑顔を作って別れとする。

作ってきた思い出と、スバルとかわした約束。それが胸を打ち、彼女の勇気となっていた。きっとスバルは一生懸命戦ってくれたはず。ボロボロのその姿が十分、物語っていた。それでも一歩及ばなかったのだろう。それならば、今度は自分の番だ。ハープ・ノートは覚悟を固めた。

今までの全てがミソラを形作り、力となるのだ。「どんな運命を辿るでもなく、スバルくん達と出会えて幸せなんだ」この言葉は嘘ではない。

母を失い、歌を失い、沢山の大切を失い失望の中だったミソラ。そんな中、スバルと出会った。不安で一杯の中の、助けを求めるシグナル。それを彼は受け取ってくれた。それから沢山の時間を共に過ごし、スバル達に様々な大切を貰った。だから、ミソラは頑張れる。

今度は自分で、最後の大切を取り戻すだけ。

「取り戻してくるよ、スバル君。心の底からの笑顔を、君に贈りたいから……」

ｉｇｎｉｔ―３４：ケフェウスの覚悟

ブライ、ハープ・ノート、ソウル・レイダーがフェニックス・リボンの追撃を始めたころ。それと時を同じくして、ＦＭ王宮ではあらゆる情報が錯綜していた。

敵の数、進軍状況。
被害の状況。
民の避難経過。
ＦＭ軍の戦況。

ＷＷＲの突然の来訪に、ＦＭ王宮も事態の飲みこみに時間がかかっていたのだ。

そんな中、玉座に座る小柄な少年王は焦りを見せて、手すりを神経質に叩いている。目の前の赤い絨毯の上を、近衛兵が忙しく行ったり来たりしているのだ。苛立ちは募るばかり。

ケフェウスは、声を荒げた。

「ええいっ。状況はどうなっておる？！」

彼は堪りかねて、玉座から立ち上がり、宙に浮かぶモニターを見上げる。ＦＭ星の全体図は真っ赤に危険信号をともしており、冷や汗が噴き出て止まらない。

「何という数だ……。これだけの数を一体どこから……」

数ヶ月前から、地球との連絡が途絶えてはいたが、まさかこのような事態になるとは考え付かなかった。そのおかげで全てが後手に回っていた。

ケフェウスがわなわなと震え、やり場のない不安と焦りをくすぶらせている。すると、近衛兵の一人が大慌てで王の間に入ってきて、現場の状況を伝えて来た。

「ケフェウス様！　どうやら、敵はＡＭ星人の軍団のようです！　現在、ＦＭと地球の軍が応戦していますが、て、手に負えません！！」

「な、何?！　ＡＭ星人だと？　それに地球人……スバル達か！」

「状況は最悪です。敵の兵はいずれもＦＭ軍の力を上回っています！　我が星を誇る王宮騎士団でも歯が立ちません！　どうしましょう」

「……ど、どうするって」

とつぜん指示を振られて、ケフェウスは必死に対策を考えようとするが口は塞がって開かない。結局、幼い彼には、このような事態にはどう対処すれば良いのか分からないのだ。今はジェミニの助言も期待できない。側近たちも戦場に駆けだしてしまった。

立派な王であろうとするが、やはり経験が足りず、的確な命令が下す事はできなかった。逃げるように玉座に腰を落として、頭を抱えてしまう。

「よ、余は……どうすれば」

頼りない王の姿に、辺りの兵士も動揺を隠せない。王がこれでは、悪い印象しか与えられず、戦いへの士気が下がってしまうというもの。

やはり泣き虫王が変わるのは簡単ではないようで、どうしようもなくなってしまったケフェウス。しかしそんな彼の元に、頼りがいのある右腕が現れたのである。

石造りの回廊から、大柄な電波体がずかずかと室内に入ってくる。彼こそがジェミニに変わるケフェウスの宰相だ。入るや否や、すぐに助け船を渡してくれた。

「王宮騎士団の精鋭で、何とか敵の足止めをするように伝えろ。各拠点に待機している部隊は、逐次出撃して敵を迎撃！　まともにやり合うのではなく、敵の進軍を食い止めるように心がけよ！　そして地球人の方には、民の避難の手助けを頼め！　民の安全が第一だ！」

「了解！」

彼は状況を瞬時に飲み込み、てきぱきと命令を下した。筋骨隆々、味のあるシワを刻んだ、見るからに年季の入った老兵だ。幼い子供のケフェウスとはまるで正反対。彼は現在のＦＭ星の二番手で、オリオンという名だ。

彼はケフェウスの元に歩み寄ると、孫に話しかけるような口振りで言い聞かせる。

「ケフェウス様。もっと自分に自信を持ちなさい。ぼっちゃまはこの星の王なのです。皆に不安を与える姿勢は見せてはなりませんぞ？」

「わ、分かっておる……。だけど、怖いのだ。きっと、ＡＭ星人は余の事を恨んでおる……。あの時の事を恨んでおるに違いない……」

ケフェウスはＡＭ星掃討作戦の時を思い出して、打ち震えた。抵抗する意思を見せることすら、罪深い。いくら幼くても良心の呵責を感じ、苦しむには十分すぎる過ちなのだから。

そのケフェウスのごく当たり前の気持ちを、オリオンはぴしゃりとはねつけた。

「その気持ちは当たり前です。ですが坊ちゃま。アナタは王です！この星に生きる民を守らなければならない。贖罪に民を見捨てる事は、王としては絶対にしてはいけないこと。罪を背負って、ＡＭ星人と向きあいなさい。今の坊ちゃまなら、それが可能です……！」

オリオンは、王としての姿勢を伝えると、部下達を引きつれて再び戦場に足を向ける。

「坊ちゃま。アナタはスバル少年に教えてもらったはずです」

オリオンはそれだけ言い残して、王の間を後にした。ケフェウスの返事を待たない辺り、やはり事態は窮しているようだ。

数十の部下の背中を見送ると、ケフェウスはより悩み頭を抱え込んでしまう。王としての器、力量も経験もなく、何を自信に持ち、何を信じればよいのか。ましてや、ＡＭ星人と向かい合う事など、出来はしない。

この背中に羽織ったマントも虚勢を張るために過ぎない。はりぼての王たらしめるだけだ。オリオンの言葉に、ケフェウスは自嘲気味に笑った。

そして数分後。また近衛兵が王の間に入ってきた。しかし今度は大変な状態だ。その近衛兵は大きなダメージを負ってしまい、デリート寸前だったのだ。その場にいた兵はすぐに駆け寄るが、近衛兵はケフェウスに血走った目を向けて、命を振り絞り伝言する。彼のいた場所の赤い絨毯は、ただ赤いのではなく黒ずんでいく。

目の前の惨状にケフェウスは目を見開き、思わず腰を抜かしそう

になる。だが何とか堪えて、玉座から立ち上がり駆け寄った。

「ど、どうしたのだ?!　何が起きた」

ケフェウスや仲間の呼びかけはすでに聞こえていないようで、必死の形相で言葉を絞りだす。口からは大量の血が。彼はもう助からないだろう。

「ケ、ケフェウス様……！　も……うすぐ……この王宮に、恐ろしい巨人と……電波体が向かって……。圧倒的な力の前に、我が部隊は全滅……」

「おい、誰かこの者の手当てを！」

「ケフェウス様……お逃げ……ください！　もうすぐ、ヤツが来ます……」

そして近衛兵は息を引き取った。取り囲む部下たちは「バカヤロウ……！」と涙した。ケフェウスは彼の遺志を引き継ぎ、なんとかその敵の迎撃部隊の編成を行おうとする。

悲しみに打ち震える兵に、情を殺して言いつけた。

「逃げるわけにはいかない！　て、敵の迎撃を行うぞ！　ここを落とさせる訳にはいかない」

意気込んではみても、やはり恐怖が先立つ。目の前で人に死なれれば、その実感は絶望的なものだから。

そしてさらに追い打ちが。兵の一人が、声を張り上げた。

「現状、さきほどの出撃でこの王宮には残存戦力はもうほとんどない状態です！　抵抗しようがありません。王はもうお逃げになってください！」

「そ、そんな……！」

ケフェウスは今にも泣き出しそうな、不安で一杯の表情を浮かべる。

「王！　もうお逃げに……！　逃げ道は私たちが何とか確保します！！」

兵たちは仲間の死を振り払い、王の為に命を懸けると言い張る。もうすぐ来る敵の陰に怯えながらも、その忠誠心はどこまでも真っすぐで素晴らしい。

一瞬、気後れするが、ケフェウスもこくりと頷いて、王宮から逃げようと回廊の方に歩き始める。しかしオリオンの言葉がよみがえった。

この王宮を見捨てて、この星はどうなる。

この王宮に避難している民はどうなる。

自分だけが逃げる事は本当に正しいのか。

ケフェウスの歩みは止まった。頭の中を巡る王としての姿勢と役目。そしてスバルとウォーロックが教えてくれた事。それは立ち向かい、信じるという勇気。

自分を信じて、ＡＭ星人に立ち向かう事こそが、王としてケフェウスに求められている。

震える手は嘘を吐かない。だが、心にも嘘は吐けない。「君と僕は、信じあえる友達だ」そう、かつて自分の事を友達だと言ってくれたスバルの言葉を信じたかった。

するとケフェウスの足は、逃げ道とは逆方向にある最終兵器アンドロメダの格納庫に向かって走り始めていたのだった。

「王！　何を?!」
「アンドロメダを出す！！」

ケフェウスの決意から数分後、フェニックス・リボンとラ・マリアは王宮の上空に到着した。フェニックス・リボンはそれを見下ろし、冷たく言い放つ。

「ここが……ＦＭ星の象徴か」
『そうよワタル。ここを破壊し、王を亡きものにすれば、ＦＭ星は終わったも同然。そうなれば戦意を失ったＦＭ星人を駆逐するのみよ』
「なら、すぐに終わらせよう。……ラ・マリアよ、下方にイカズチだ」
《了解シマシタ。エネルギーを充填シマス》

ラ・マリアが頭から伸びる電波塔を王宮に向け、雷のような電波エネルギーをまとわせていく。それは正真正銘のムーノイカズチだ。バトルカードではない本物の威力を誇っており、いくら堅牢な王宮といえども一たまりはない。

《エネルギー充填率……３０％……５０％……８０％》

雷が大きくなり、尖ったアンテナ部の先端に集まっていく。そして完全にエネルギーが溜まり、イカズチを放とうとした時だ。『ネビュラブレイカー！！』ケフェウスの声と共に、王宮の真上から巨大な熱線が襲いかかってきたのだ。イカズチとはまた別の超エネル

ギーである。フェニックス・リボンは直ちにシナジーブレードを振り抜き、その熱線を両断して危機を脱した。しかしイカズチは不意の攻撃により上空に大きく逸れてしまい、王宮に上手く被弾しなかった。

「邪魔が入ったな……」

フェニックス・リボンは熱線のやってきた方向を望んだ。するそこには巨大な機械人形が浮いていたのだ。大きな手のひらから煙が上っており、そこから攻撃してきた事がうかがえた。

ケフェウスは巨大機械人形アンドロメダのコクピット内から、フェニックス・リボンに声を浴びせた。

《これ以上は、好きにさせないぞ！！　余が相手になる！》

『ホホホ。アレは最終兵器アンドロメダ。流石に簡単にはやらせてくれそうもないわね。……いいでしょう。ワタル、幼き王に思い知らせてあげなさい』

「ああ」

フェニックス・リボンはフェニックスの言葉を受け、ラ・マリアの腹部にある命の炎に身を投じた。そこはカンナの命の場所であると同時に、ラ・マリアのコクピットである。

命のスープの中、カンナの存在を肌に感じながら、フェニックス・リボンはラ・マリアを操縦する。

《さあ、カンナ。俺達の邪魔をするヤツを排除しよう》

重厚な鉄と石のぶつかり合いは、空気を震わせる。

アンドロメダとラ・マリアの戦いが始まりを告げた。

ｉｇｎｉｔ―３５：アンドロメダｖｓラ・マリア

鉄の拳が石の体を砕くが、石の拳が鉄を割る。ケフェウスは全神経を集中させた。頭で輝く冠は決して飾りではない。

薄い緑色の蛍光の中、ケフェウスは操縦桿を握り込みと、アンドロメダで果敢に攻め込んだ。手のひらから、ガタガタと硬い振動が伝わる。操縦桿の下を渦巻く、機械の躍動。回る歯車、爆発する燃料、コックピットから駆動系に伝わる電波の信号。それらの働きが急ピッチで巨大な運動エネルギーを作りだす。肩から肘、肘から手のひら、武骨な五指が大きく広がりラ・マリアを襲う。

アンドロメダとラ・マリアの巨体が、がっぷり四つを組めば、重い衝撃に大気がびりびりと震えあがった。現状の力は互角といったところか。

するとケフェウスはここぞとばかりに、コックピット内のレバーを大きく押し倒す。コックピットがガクンと大きく揺れると、アンドロメダの手のひらがグンと力強く伸び、ラ・マリアを押し返し始めた。そうやってラ・マリアをＦＭ王宮から、遠ざけようとしている。

機械人形の端正な顔立ちは涼しげだが、背中のブースターが緑色の炎を荒々しく噴出させている。

ケフェウスは緊張の糸を張ったまま、室内のメインモニターに大きく映るラ・マリアに訴えた。無表情な石造りの顔の向こうに、ＡＭ女王の周波数を感じており、温和だったはずの彼女を見つめている。

「そこにいるのはＡＭ女王ですね！　なぜ、アナタがこのような非道な事を……！」

その言葉に、メインモニターは一時、沈黙を決め込むが、すぐにケフェウスの耳を貫いた。

《どの口が言うか！！》

怒声と共に、ケフェウスの操縦桿が、凄まじい力で後ろに引き戻される。ケフェウスは力一杯、押し返そうとするが、徐々に押し切られてしまう。ラ・マリアがアンドロメダの手のひらを取り、力押しでＦＭ王宮の方に詰める。

ラ・マリアもフェニックスも、その瞳は憎悪に燃えているのだ。

《卑しいわよ、ケフェウス。身の程をわきまえなさい！！　残虐なＦＭ星人が平穏に暮らす事自体が罪なのよ！》

「クッ、やはり余の事を……」

《愚かな坊やを私が裁いてあげるわ！！》

このままでは、とケフェウスは感じ、咄嗟にエネルギー管理用のサブトリガーに手を掛ける。手汗と一緒に、横から伸びるそれを握り込んだ。ゴクリと唾液を嚥下して、親指のところのスイッチを沈める。するとそれに合わせて、勢いよくサイドモニターのグラフが赤く上った。ラ・マリアと組み合うアンドロメダの手のひらに、緑色のエネルギーが溜まり始めたのだ。緑の粒子が手のひら中央の、小さな宇宙に吸い込まれていく。

そしてケフェウスは、鍵盤のように並ぶボタン群の上で指を走らせた。そうやってアンドロメダの胸部の装甲が開き、そこからギガミサイルを射出させたのだ。空が赤く燃えた。ラ・マリアの外部装甲がパラパラと空を舞う。

この期に及んで、まだ燃え盛る抵抗の意志を見せられると、フェニックスは声を荒げた。

《……この、往生際が悪いわよ！》

「確かにそうかもしれぬ。……でも、でも！　余は、民を傷つけさせるわけにはいかないんだァッッ！」

《コ、コイツ……！》

「うおおお！　ネビュラブレイカ―！！」

ケフェウスの雄叫びと共に、アンドロメダの手のひらから、太い光線が瞬き空を貫いた。雲を破きどこまでも伸びていく。すると音の割れた爆発音とともに、たちまちラ・マリアの五指が弾け飛んだ。そのままラ・マリアはバランスを崩してしまうと、ふらふらと空中を泳ぐ。そこをアンドロメダが殴りかかり、ラ・マリアの顔面には縦に分断する大きな亀裂が入った。

落下したラ・マリアは、王都を砕いて瓦礫の中でアンドロメダを仰ぐ体勢となる。

衝撃から、ラ・マリアのコックピット内では、ゴポゴポと気泡が上っていく。フェニックスは堪らず悲鳴を上げた。

『ワタル！』

「分かってる……！」

命のスープの中、フェニックス・リボンは戦闘周波数を引き上げる。アンドロメダが機械的な操縦を要するなら、ラ・マリアは、アナログ的な周波数のやりとりだけを要する。

ラ・マリアは再び空に舞いあがり、アンドロメダに相対する。そして彼女へのオーパーツのエネルギー供給が膨大であり、付けられた傷はみるみる回復していく。こちらでもムゲンリカバリーという訳だ。

対してアンドロメダは、ネビュラブレイカ―を連発したおかげか、オーバーヒートを起こしているようだ。装甲の隙間という隙間から、立ち上る煙がとめどなかった。

「どうやら、ロクに準備ができていなかったようだな」

『温いわね』

平和ボケしていた事を暗に責めているのだろう。ケフェウスは恐る恐る言葉を発した。

《頼む。もう、これ以上は……余の命なら捧げる……だから》

『虫のいい事を……』

フェニックスは毒のある口調と共に嘆息した。

ラ・マリアは指先から電波障壁の槍を飛ばして、ＦＭ王宮の方に攻撃を加える。アンドロメダは弾道を遮るように巨躯を旋回させた。最初はギガミサイルで迎撃するが、なにぶん総エネルギー量が違い過ぎた。長い時をかけて準備し、脈々と胎動するオーパーツの数々と、平和にかまけて整備不足のアンドロメダ。アンドロメダは雨あられのごとく飛び込んでくる槍の前に、身を刻んでいくしかなかった。

ケフェウスは言葉を絞り出した。

《ごめんなさい……》

『いまさら遅いわ！』

《ご……めん……なさい》

『逃げるなら、今のうちよ！　ケフェウス！！』

フェニックスは無抵抗のアンドロメダに攻撃を続ける。そして情けなく逃げ出した背中に、特大のイカズチをお見舞いしてやるつも

りだった。
しかしアンドロメダは壁に徹して、王宮を守る。ケフェウスはいつ死んでもおかしくない恐怖の中、ひたすら耐えて、民を思い、フェニックスを想い、謝り続けた。

《うぅ……ご、ごめんなさ……い》

いくら痛めつけても謝るばかり。フェニックスの知っているＦＭ星人なら、自分だけが助かろうとして逃げ出すはず。そこに止めを刺すという、自分の正義を振りかざしてこそフェニックスが救われるはずだった。
確かにケフェウスは情けなかったが、それだけに純粋な勇気を振り絞る。それが頑なで、健気で、幼いゆえの真っすぐな気持ちとして伝わる。それを受け取ってしまいそうで、この積もった怨念をふいにされそうで、堪らずフェニックスは舌打ちして震えた。自分も相手も恐ろしくなって、荒々しくフェニックス・リボンに言いつける。いい加減引導を渡してやろうと、最大出力のイカヅチを見舞ってやるつもりだった。
立ち向かって償うという、偽りの美徳にこれ以上付き合ってはいられないのだから。

『ワタル！　いい加減もう終わらせるわよ』

しかしフェニックス・リボンは首を振った。

「いや、これ以上のエネルギー消費は、アカシックレコードへのアクセスに影響が出る」

オーパーツ由来の無限エネルギーでも、やはりカンナ蘇生の事を考えれば、無駄使いはできないらしい。ワタルはそれを危惧して、

これ以上の追い討ちを加えようとはしなかった。
しかしそれでは治まりが効かず、狭いスープの中フェニックスが実体化する。不平たらたらとフェニックスは、アンドロメダへの止めを強行しようと、周波数を乱暴に操作する。だが、フェニックス・リボンが続けざまに言葉で遮って、やはり引き下がらなかった。
アンドロメダの方を指差すと、もう一度首を振ってみせる。

「やめろフェニックス。もう勝負ありだ」

執拗な攻撃の嵐に、アンドロメダはすでに機能停止していた。目の灯火はもはや失い、だらんと肩と首を垂れていた。そして王宮を避けるように大地へと落下し、完全に沈黙してしまったのである。
王の最後としては格好が付かないが、フェニックス・リボンは馬鹿にするでもなく、称賛するでもなく黙って見つめるだけ。
少し思いにふけると、ようやくフェニックス・リボンは口を開き、息の荒いフェニックスに問いかけた。多少なりの理解を仄めかせているので、フェニックスはますます苛立ちを見せた。

「結局、逃げなかったな……アイツ」
『だ、だから、どうしたというの？！』
「……いや」

フェニックス・リボンは言葉を濁して、ラ・マリアの操縦に専念する。そしてアンドロメダからケフェウスを引っ張り出して、これ以上ない人質とする。そのままＦＭ王宮の外壁を乱暴に突き破り、王宮制圧に乗り出したのであった。

ｉｇｎｉｔ―３６：愛か正義か、破滅か平穏か

八月二日、日もずいぶんと高くなったころ。

王が人質となっては迂闊に手が出せないらしく、軍の防衛網は機能しない。そうしてフェニックス・リボンは簡単に王の間まで、侵入してしまう。とうとうＦＭ星の象徴であり、軍隊の司令塔である王宮を制圧されてしまった。

半壊した王の間では、震える近衛兵たちが床にひれ伏して無力化しているだけだ。ラ・マリアとフェニックス・リボンの前では、抵抗さえ許されない。

フェニックス・リボンは瓦礫をまたぎながら玉座まで歩み、フッと笑みを浮かべると、深く腰かけた。そして脇にラ・マリアを従え、電波障壁の檻を作らせる。そこにケフェウスとその部下達、避難民を閉じ込めて完璧に無力化してしまう。敵の本拠地と王を人質に取り、絶対の態勢を敷いたのだった。ここからはゆっくりと腰を据えて、ＦＭ星を滅ぼしていくこととなる。

まるで心得たかのように、すぐに仕上げにかかるフェニックス・リボン。彼は王宮の指揮系統能力を完全にシャットアウトさせた。部屋中のモニターというモニターにノイズの嵐が舞う。かつてＷＡＸＡ職員として鳴らしたハッキング術を持ってすれば、地球と同列の電波技術のクラックは簡単だった。技術の提供をしていた弊害がここに出たのだ。

そしてラ・マリアの通信機能を通して、ＷＷＲの殲滅活動を過激化させる。首脳部分が麻痺したＦＭ軍はもう手も足も出ず、パニックに陥るはずだ。そうやって実力差以上の絶望を植え付けることに

成功したのだった。

これがフェニックスが望んだ事。そして、もうすぐ訪れる最悪の結末を予感させる。それらの罪を、フェニックス・リボンは何もかも承知して、フェニックスにいよいよ最後の確認をした。

「さて、フェニックス。ＦＭ星はもう終わったも同然だ。軍の司令塔を凍結させ、王も人質に取り……後は俺達の部下が全てを破壊するのを待つだけだ。だから……もういいだろう？」

『そうね。感謝するわワタル。私の復讐劇に、ここまで付き合ってくれて』

フェニックスは実体化すると、穏やかに笑顔を浮かべた。とても星を滅ぼそうとしている者の表情ではなかった。

フェニックス・リボンはそれに何とも悲しいものを感じながらも、フェニックスの言葉を待った。何も後悔することはない、と何度も自分に言い聞かせ、待ちわびた言葉に耳を澄ませる。今まで良くも悪くもさまざまな事があった。だからこそ「長かった……」という、たったそれだけの感想に、可笑しな笑みが込み上がる。

今でこそ彼は玉座に腰かけ、他の追随を許さぬ裏世界の王として君臨している。だが、始まった場所は小さな小さな少女の願いから。

それだけを守るために生きてきた。泣かれて、心が折れそうになっても、絶対の幸せが霞むことはなかった。「自分は正しい」「後悔することはない」それだけだ。

そしてフェニックスがようやく口を開いて、今までの長い旅が終着に向かう。

「ありがとうワタル。今まで、色々な事がありましたね……。結果的にアナタを巻きこんでしまったけど、私はアナタと一緒で楽しか

った。アナタの事……好きよ」

フェニックスはラ・マリアの方に羽ばたいていくと、一度振り向いてフェニックス・リボンに笑みを送った。そして彼女の腹部にあるオーパーツが作る炎から、カンナの命の果実を取り出す。もう十分に時間が経っており、それは熟している。これを媒介にして、デッドエリアにいるカンナへとアクセスする事が可能となるのだ。フェニックスの生命を司る力と、フェニックス・リボンのアクセス権限者としての力を合わせると、カンナを取り戻す事ができる。

フェニックスはゆっくりと頷いた。

「これからはミソラちゃんとカンナさんを愛してあげなさい。……さあ、儀式を始めるわよ」

フェニックス・リボンは涙をためて静かに立ち上がった。そして自分だけの物語の力を使おうと、フェニックスの元に歩んでいく。

もう終わるんだ、という安堵に涙が止まらない。

「カンナ……寂しかったよな、今……迎えに行くよ。ミソラとお前、幸せになれよ……。アクセス、アカシックレコードレベル１３……」

フェニックス・リボンが溢れる感情を全て手のひらに乗せて、命の果実にかざす。そして命の果実が呼応するかのように輝いた時、少女の声がフェニックス・リボンの背中に浴びせられた。

「パパ！　もうやめて！！」その悲しみに押し潰されそうな声に、フェニックス・リボンはハッとして後ろに振り向いた。

そこにはハープ・ノートにソウル・レイダー、ブライの姿が。

ハープ・ノートはここに来るまでの間、数々の悲劇を目の当たりにしていた。ＷＷＲに平穏を滅茶苦茶にされた人々の絶叫に、家を失い泣く子供達、引き裂かれた家族。それらが悲しくてやるせなく

て、口元が震えて、涙が赤くなった鼻の脇を伝う。「こんなの……絶対に間違っている！」ハープ・ノートはフェニックス・リボンに叫んだ。ソウル・レイダーも剣を抜き、ブライもラプラスを変形させる。

「お前ら……まだ……」

「もう少し、きつく痛めつけておくべきだったかしら」

驚きを隠せない二人。まだ立ち向かってくるなんて、予想外だった。何がここまでさせるのか理解ができない。

ハープ・ノートはギターを構えてフェニックス・リボンに敵意を向ける。

「パパ！　おかしいよ！！　なんでこんなことしちゃうの？！　FM星の人が……このままじゃ……！！」

ハープ・ノートは信じられない形相でフェニックス・リボンを睨みつける。それに酷く胸が締め付けられたが、ここまで来たからにはもう引き下がれない。

心を鬼にして、フェニックス・リボンもシナジーブレードを抜いた。

「やめろ……！　お前らじゃ、俺を止められない。大人しくしておけ、それが一番だ」

するとソウル・レイダーが、珍しく震えた口調で、言葉を投げかけた。

ここまで来る途中、ハープ・ノートの事情は聞いており、母親を大切に思う彼の胸に突き刺さっていた。これではあまりにも残酷すぎる。だれも救われない。

「ワタルさん……！　目を覚ましてください！　カンナさんはこんな事を望んでいません！」
「……違う！　ズタズタにされた家族を、もう一度はじめからやり直さなければならない！　そこにはカンナがいないといけないんだ！！　俺の家族はまだ始まってすらいないんだ……！」
「そんなこと……！　そんなことじゃ……！！　母親っていうのはそんな存在じゃないでしょう？！」

スッと目を閉じて、フェニックス・リボンはソウル・レイダーを黙らそうと、シナジーブレードに周波数を流し込んだ。凶悪なノイズの嵐が凄まじく、空間に悲鳴を上げさせている。
対してブライも戦闘態勢を取り、二人に覚悟を決めさせた。ずっと一人だった彼は、冷静に対処できる。そしてムーの血が、これから始まるであろう恐ろしい出来事を予感させていた。自然とラプラスブレードを握る手に力がこもる。
ここでフェニックス・リボンを止められるかどうかが、世界の運命を左右する。

「もう、コイツに何を言っても無駄だ！　死んだ人間は生き返らない……そんな事すらも分からないんだ。だったら教えてやるしかない！　命が一度だけの理由を！！」

ブライが駆けだして、ハープ・ノートとソウル・レイダーも左右から続く。
フェニックスは儀式を中断して、フェニックス・リボンと一体となった。長年目指してきたゴールは、もう目の前にある。ここは物分かりの悪い子供達を黙らせるしかない。
フェニックス・リボンも、それは辞さない覚悟だった。目覚めたらきっと分かってくれる。そしたらまた元通りだと信じている。

『ワタル……とんだ邪魔が入ったけど。……やるわよ！！』
「ああ……。ここで諦めるわけにはいかないからな」
『限りある命は確かに美しい。だけど、永遠の命は決して色あせないのよ……！』

愛か正義か、破滅か平穏か。
絡み合った運命がついに、この宇宙が持つ最大の分岐点に差し掛かった。

ｉｇｎｉｔ―３７：《アクセスレベル０》究極零層変身！！

ハープ・ノート達が、フェニックス・リボンを止めようと王宮で戦っているころ。

一方鳳凰の間では敗北という形でスバルとウォーロックはいまだ眠っていた。彼らはベッドの上で脂汗をかき、低く呻いている。乱暴にシーツを握り込み、純白のあぜ道を作った。

息が詰まる表情のスバルとウォーロック……特にウォーロックの方は混迷した意識の中、ある不思議な夢を見ているようである。そのベッドではない世界をうわごとのように、口から落としていく。

夢、それはウォーロックがなぜ生まれてきたのかという、謎に包まれていた所を解きほぐすもの。

それは、ある制限されたアカシックレコード内から送られてくる。この現象は、極限状態のアクセス権限者による偶発的なアクセスが原因だろうか。

彼が見ている世界のアクセスした区域は研究室のような場所で、セピア調がどこか古臭ささを感じさせる。床に散らばっている書類の色は飛び、年代物のアルバムのような空間を演出する。

そんな場所にウォーロック以外に一人だけ人物がいた。それは靄（もや）のかかった、老人の姿。ふくよかで優しい雰囲気を漂わせている。彼は椅子から立ち上がると、ウォーロックに正対した。そして白いもので覆われた口元をモゴモゴと挙動させて語りかけてきたのだった。

「ロックや……」

「……なんだ、お前」

柔和な印象でもウォーロックにとっては不審なだけで、目を鋭く細めて睨みつける。爪をぎらつかせて敵意を示し、ある一定の距離を置き、歩み寄ろうとはしない。

老人は少し困ったように頬をかくと、やれやれと本題に入った。

「今は無駄話をする気はないよ。そうじゃな……そろそろ、最終分岐に差しかかろうとしている。だから単刀直入に言おう。ロックや……お前に施したリミッターを解除する」

「何言ってやがるテメエ……ッ」

とうてい意味の分からない事を言い吐く老人に、ウォーロックは不快感をあらわにして研究室から立ち去ろうとする。しかし研究室のドアは、いくら力を加えてもビクともしなかった。ウォーロックの馬鹿力をもってしてもだ。結果的に研究室に閉じ込められている。その間に、老人はウォーロックに詰め寄っていく。

「逃げようとしても無駄じゃ。ここはワシを閉じ込める為に、アイツに厳重なプロテクトが張られておる」

「クソ……！　どうなってやがる。これは悪い夢か……！」

「いいや、夢ではない。現実に起きていることじゃ。さあ、宇宙を救えロック……！」

老人が完全に詰め切った。ウォーロックはビーストスイングで、老人を払おうとするが彼はデータ体らしく、のれんに腕押しでしかなかった。そんな突飛な老人に、さすがの彼も開いた口がふさがらない。

そんな一瞬の動揺に便乗し、老人が「そう、怖がるな」とだけ言うと、突然ウォーロックの中に腕を突っ込んでしまった。すぐに彼

のデータが流れ込んでいき、ひしひしと感じていく老人の存在感が気味悪いだろう。堪らずウォーロックが悲鳴を上げた。だが、嫌な顔も耳を塞ぐ事もせず、老人は穏やかなままで言葉を続けた。それがある種の恐ろしさを生み出している。穏やかな狂気とでも言えるかもしれない。

ウォーロックは握りしめていた拳が自分の意思とは関係なく、小さく痙攣しているのを感じている。視界は閉じたり開いたりで、とても落ち着けはしない。

「グアァァッ！」

老人は苦しむ彼をまっすぐ見つめて語りかける。一見穏やかな口調に騙されそうになるが、彼はウォーロックの事を何も考慮していないようだ。苦しむ姿も仕方なしと言わんばかりに穏やかな姿勢は崩れない。

「この宇宙は十二層の時の流れから生み出された十三番目の宇宙じゃ……。そして、その時の流れを記録した場所こそが、アカシックレコード。

お前だけの物語の力……。お前に組み込んでおいた最後の力を解放する……！」

「ヤ……ヤメロ！　テメエ！！　ふざけ……」

「心配するな。お前はワシのラストナンバー……お前なら、間違った方向に進みつつあるこの宇宙を救える……。『零層解除（Rデコード）』の力で……！！」

老人はニッコリと笑みを作る。だがウォーロックは笑えず、だらだらとおかしな汗を流していた。体の中に、酷い違和感、そしてそれ以上に熱い何かを感じているのだろう。彼はその何かを老人に、解放されてしまった。

そしてウォーロックの体から、毛むくじゃらの腕がずるりと抜け出ていく。すぐに彼は逃げ出すように壁に張り付いて、老人から距離を置いた。余裕なく、息が短くて浅く、胸元から痛みが執拗に上っていく。頭はひたすら鈍器で殴られているよう。

老人はさらに言い加える。ウォーロックはその言葉の一つ一つに頭がくらくらしたが、何とか壁に体重を任せて体を支える。老人の口元の髭が、あいかわらず白い茂みのようだった。

「ロックや。お前は宇宙を救わないといけない……アイツを止めるために。

……なにお前さんは、最後にして最も理想的なロックマンじゃから大丈夫。人との融合を可能にしたロックマン……。機械の体ではとうてい及ばないヒトとの協和。ワシが長年の追い求めていたものじゃ。……だがしかしじゃ。アイツも、ワシとは違う形で、最後にして最も理想的な完成形を作ろうとしている……。恐ろしい事にアイツは異常な執着に囚われておる……。そして残念じゃが、ワシはもうこの世にはいない。だから全てをお前に託す……。戦え……ロック……。最後にして最愛のワシの……ウォーロック……よ」

敵意の視線さえも愛おしく感じているようで、老人は感慨深く何度か頷いている。彼がウォーロックに使命を託すと、それを待っていたかのように、セピア調だった世界がモノクロへと変わり始めていく。そうやってその場所は崩壊への結末を歩んでいく。

不穏な気配に口をつぐみ、ウォーロックは辺りの状況を見渡す。研究室の空間を作っていたデータが壊れ始めていた。天井がブロックのように崩れていき、そこから黒い空が見えている。夜空ではない、ただ真っ暗で不気味な世界が広がっていく。

老人もデータが足元から分解されていき、名実ともに本物の幽霊のようになっている。

「ロック……。お前さんには辛い境遇を与えてしまったな……。父もなく母もなく……時間がなかったとはいえ、そこだけは心残りじゃった。お前だけでワシは力尽きてしまい、すまなかったな……。

だが、今までお前が作ってきた存在意義は失われはしない。お前はまごうことなきＡＭ星人でありＦＭ星人じゃ。その事実に何の変わりはないんじゃ……」

「さっきから何言って――」

「しかし、それでもワシの予想以上に、真っすぐな人格を形成していってくれたな……。それもこれもあの少年のおかげか……。あの子は、そうじゃなワシの最初の息子に似ておる……。フフ、懐かしいのう」

そろそろ終わりの時は近い。老人の笑顔は辺りに広がる暗黒に混じってしまった。

「フム、残念じゃが、どうやら時間がもうない。いいか、ロック……！　アイツの馬鹿げた理想を止めるんじゃ……！！　ワタル君とフェニックスは、アイツの手のひらで踊らされている……！！」

「テメエ！　調子のいいことばっかり言いやがって！！」

ウォーロックが掴みかかるが、すでに老人はバラバラになってしまっており、目の前には人魂のようなものが浮いているだけである。そして世界も、いよいよ残りがないところまで閉じていく。

ウォーロックは誰もいない研究室で、万感の思いを抱き、立ち尽くすしかなかった。

「ふざけるな……！　それじゃあ、まるで……！！」

「大丈夫……ワシの言っている意味が分かる時が必ず来る。そして、お前なら宇宙の未来を掴み取れる。それだけワシはお前に全てを託し、そして今その全てを解き放った」

老人の力強い言葉を最後に、ウォーロックの意識はガクンと膝をついた。ウォーロックは上下左右が分からない感覚に囚われていく。かつてのディメンション・デッド・ゲートの時と同じ感覚だ。

そんな薄れゆく意識の中で、老人の声がウォーロックの背中を押したのだった。ウォーロックにとっては迷惑な話だが、不思議と耳を傾けられた。

「分岐点はもうすぐそこにある。何が正しくて、何が間違っているかは自分で見つけるのじゃ。

……人類の未来を掴め、ロック――」

そうして意識が遠のいていくと老人は消え、世界は消え、ウォーロックはまた深い闇に意識を溶かしていく。

そして彼は、薄々気が付いてしまっていた。

きっと俺はただのＡＭ星人でもＦＭ星人でも――。

心当たりならいくらでもあった。生まれた時より両親は知らない。気が付いたら一人で生きていた。ＡＭ星が滅ぼされた時も、自分だけ運よく逃げ伸びる事ができた。ＦＭ星でも都合よく、戦士としての地位を与えられた。そしてなぜ自分が『ウォーロック』なのか。今まで深くは考えなかったが、ようやく気が付いた、と心が理解した。

ウォーロックは黒い世界に身を任せて、そこに飲み込まれていった。

そして着実に終わりへと歩み寄るＦＭ王宮。

老人の言う、最後の審判の時が迫っていたのだ。

石の壁を模した、そのじつ頑強なリアルウェーブのＦＭ王宮防壁は、ノイズ混じりにゆらゆらと陽炎のように振る舞っていた。何かが起きようとしているのが見て取れる。太陽も雲に隠れて不穏な気配が漂い始めた。傾き始めた日が、宇宙の命運をなぞっているようでもある。

玉座のある広間では、王が拘束されて、ブライ達も同様に身動きが取れずに閉じ込められている。「クソ！！」猛った声が響く。ラ・マリアの電波障壁の檻の中で、ブライは拳を叩きつけた。石畳が小さく割れ、じわりとヒビに血が落ち込んでいく。

そしてソウル・レイダーも絶望を浮かべて、檻の中からフェニックス・リボンを見上げていた。彼の隣には少女が一人。やはり勝てなかった。それだけの現状が彼の目に飛び込んでいる。

「響……」

弱々しく呼び掛けると、フェニックス・リボンにハープ・ノートが抱き寄せられる。少女は不安と恐怖に怯えながらも、優しい温かさを感じており、矛盾にまみれた表情で目を伏せている。

フェニックス・リボンがラ・マリアの方に歩み寄りながら、ハープ・ノートにそっと言い聞かせた。

「お前達はよく頑張った……。誰も責められはしない。悪いのは……俺とこの運命だけだ」

フェニックス・リボンは清濁入り混じった微笑みを見せると、命の果実に手をかざす。そうやって今一度儀式を始めようとしたのだ。

「泣くなよ、ミソラ……お前との約束を果たす時が来たんだから」
「パパ……」

『この人を止めることはできない……』ハープ・ノートはそれを感じて、頬を撫で涙をすくう。彼女の背中にまわされた逞しい腕は小さく震えており、それが余計に心の整理をつけさせなかった。

フェニックス・リボンの手に小さな優しい光が灯って、辺りの空間が変化していく。ラ・マリアの祭壇から徐々に、石畳の床が荒廃した大地へと変わっていく。女神ともいえる彼女から、『あの世界』が広がっていく。そこはスバルが一度訪れていた場所。王宮がまどろんだ空に覆われていく。

「アクセス……アカシックレコードレベル１３。……『デカールマ』」

かつてインフィニットが感じたアクセス権限者としてのフェニックス・リボンの力。それは死の世界を現世に呼び出してしまうという、恐ろしいものだ。もちろんそれには多大な代償を払わなければならない。今回の場合、数多にも及ぶオーパーツのエネルギーがそれである。事実その代償を集めるのに長い時間を要した。それでも困難を乗り越えたフェニックス・リボン。彼はたった一つの約束を守るために、生死の壁を突破して見せたのだ。

低い地鳴りと共に、アカシックレコードのデッドエリアが姿を現し始める。その薄ら恐ろしい、空気の震えは死者の怨念のようだ。

だがその中にカンナがいると思うと、フェニックス・リボンは感極まる。彼は肩を震わして、涙を堪えていた。その姿にハープ・ノートは何とも言えない、罪悪感を植え付けられた。

なぜこのようなことに。父親が完全な悪であれば、どれだけ気が楽だっただろうか。何に代えても母親を取り戻そうとしてくれてい

る。手段は間違っている。でも――。

「うっ……うぅ……」

とうとうハープ・ノートは嗚咽を我慢できなくなってしまった。

「うぇ……っ。なっ……んで……なんで、ここまで……っ」

「お前の事が大切だった」

フェニックス・リボンがハープ・ノートを抱きしめる。ハープ・ノートはへたり込んでしまう。

そんな様子を見せられソウル・レイダーは、もしかしたらこれで良かったのかもしれない、と感じてしまった。その考えは完全な敗北を意味しているが、それでも嘘偽りない親子の姿に感じるところは大いにある。

しかしそれは間違いである。生と死の境を取り壊す行為、それは決して許されるものではない。たとえそれが家族を引き裂く結果となっても、その愛が宇宙の終わりを導く。それがあの老人が感じていた予感だ。

そして老人の最期の遺志が、ワタルの想いに牙を剥くことになる。

『待ちヤ……がれ……！！』

老人の遺志。強すぎ、乱暴な使命の塊。それを流し込まれたウォーロックは、フェニックス・リボンに声を浴びせたのである。フェニックス・リボンは、ハープ・ノートから腕を解くと声の方を睨む。そこにはロックマンの姿が。だが必至になってここに駆けつけたようで、息が荒い。

それにウォーロックは大量の情報から、頭の中が滅茶苦茶になって混乱しているようだ。そのためかロックマンの足取りはぎこちな

い。どうやら無理やりここまで引っ張ってきたらしい。
さらにスバルも意識を失ったままで、万全からは程遠い。フェニックス・リボンを止めるには心もとない。
しかしそれでもフェニックス・リボンを驚かすのには十分だった。

「なぜだ？　数日は起きられないようにしたはず……」
『ハァ……ハァ。どうやら俺は……普通じゃなかったようだぜ。オイ……！　お前……もうやめろ……これ以上やると取り返しが……付かなくなるぞ』
「どうやら、俺の言葉が伝わっていなかったようだな……。ミソラ下がってろ」

フェニックス・リボンはシナジーブレードを抜き、しつこく食らい下がるロックマンに相対した。
たまらずハープ・ノートは声を張り上げた。

「スバル君、逃げて！！　もうダメ！　止められないよ……」
『あいにく……スバルはオネンネだ。お前は……下がってろ』
「だったら、なおさら……！」
『イヤ……逃げるわけにはいかねえ。ここを見逃すと全てが終わる……！！　見えちまうんだよ、見たくない世界がよッ！』

ウォーロックは破滅の未来を予知して、ロックマンを無理やり操って戦闘周波数を引き上げる。しかしシンクロ率はほぼ０％だ。ハープ・ノートには自殺行為と等しく映ったことだろう。
そしてフェニックス・リボンは容赦せずに切りかかった。

「ボロボロなクセに何を言う！　眠ってろ！！」

しかしロックマンは慌てず迫りくるフェニックス・リボンに対し、

手のひらを広げて見せる。彼は満身創痍なことに変わりはない。だがそれ以上に、彼の積み上げてきた幾層もの物語が力を与えてくれるのだ。すると自分を囲むように光の壁を作り出し、悠長に構えを取った。光の壁は、シナジーブレードを相手にしても堅固な防御を見せてくれる。ロックマンは衝撃から、一度よろけるが、徐々に体の周波数の密度があがっていく。

時計――そうこの世界は時計なのだ。そして時計の針は周り切り、この世界は本来ならあり得ない夢のようなものである。そうやってこの奇跡の世界から、原点にして特異点のある層に足を踏み入れる。それは恐ろしいルールを作りだす。それは盗み出されたルール。彼は電波体から、質量のない物質へと様相を変えていく。そう、レギオンのように。淡い青の粒子が広がっていき青空が地上に広がった。

『ライル粒子解放……！　アクセスアカシックレコード、レベル０……零層解除（Ｒデコード）！！』

シナジーブレードが光の壁を砕く。だがロックマンは重厚な変身を遂げ、硬い腕の防具で受け止めて見せたのだった。ずっしりとした鋼鉄の足が地面を割り、力強い印象だ。ライトブルーに輝く彗星のようである。

驚愕し目を見開くフェニックス・リボンに、光り輝くロックマンは言ってのけた。今の彼は重火力にして重装甲、そんな真の姿をまざまざと見せつける。

『これがアイツが組み込んだ、ロックマンのもう一つの姿……《サイデスビート》だ！！』

サイデスビート――それは老人がウォーロックに与えた、真の力である。名前の通り、凶悪な名前の通り、体中いたるところから砲門が覗く、破壊の化身。

そんな最初にして最後の力を振るい、フェニックス・リボンに宇宙の命運を懸けた戦いを挑むのであった。ロックマンの両肩、両腕、腰元から伸びる重厚な鉄の獣が咆哮し、結末へと加速する。

ロックマンは、大地を踏みならしながら、敵に詰め寄る。フェニックス・リボンはシナジーブレードを振るうが、ライル粒子の守りが固い。すると装甲に覆われた太い指がフェニックス・リボンの腕を掴み、青い悪魔が零距離総射をしかけた。

『ウグアアァッラアア！　ロックオンバーストォーッ！！』

ウォーロックの雄叫びと同時に、フェニックス・リボンの腹部へ、圧倒的熱量の帯の束が浴びせられる。彼は何とか腹部に周波数を集中させるとムゲンリカバリーを駆使して堪える。しかし予想以上のエネルギーの流入に彼の周波数変換でも対応しきれないと判断したらしく、シナジーブレードでロックマンの腕を払うと、後ろに飛びのいて逃げるように距離を置いた。腹は溶けてしまったが、ムゲンリカバリーのおかげでダメージが瞬く間に消えていく。しかしあのまま真正面からぶつかり合っていたとしたら、腹に大きな風穴ができていたのかもしれない。今のロックマンのパワーには、正直肝が冷えていることだろう。

対してロックマンは、シナジーブレードを貰った腕を何度か左右に振って調子を確かめる。そしてニヤリと口元で笑みを作った。どうやらシナジーブレードの一撃でも、サイデスビートの装甲の前では大事には至らないようだ。その笑みはもはやスバルが浮かべるものではなく、ウォーロックの闘争本能だけが表れているようである。

そんな急激なロックマンの真価の発揮に、フェニックス・リボン

は喉を鳴らして戦況を分析する。久しぶりに感じた戦慄を認識しつつ腹を撫で、荒廃した死の大地に立つ青い悪魔を観察する。万全とはいえない状態のはずなのに、ウォーロックが奮起するだけでこのパワーである。

フェニックス・リボンは呆れかえった。流石に大吾の息子、そしてその相棒というわけだ。

「なるほど、ジョニーが言っていた恐ろしさとはこの事か……」

『……ワタル、そんな事は置いときなさい。今はそんなことより』

「ああ、そうだな」

フェニックス・リボンはロックマンの油断ならない強さを認めると、くるりと後ろに体を回す。そしてエネルギー状の羽を広げると、デッドエリアの奥に飛んでいってしまった。美しい羽が、曇天のはるか彼方へ消えていく。ロックマンは叫ぶが振り向きもしない。

どうやらロックマンの相手をするのは得策ではないと判断して、カンナのデータが保管されている場所に向かったようだ。

ロックマンも、ハープ・ノートにその場でじっとしておく事を告げると、荒廃した大地を駆けだした。翼はないが背中の大型スラスターの機構が噴射して、凄まじいスピードでフェニックス・リボンに追いすがる。

フェニックス・リボンは、流し目にロックマンの方に目をやると呟く。

「やはり来るか……」

『放っておきましょう。今はカンナさんを探す事に専念よ』

ロックマンから目線を外すと、十字架の乱立する大地を見下ろす。おそらくその中の一つにカンナが眠っているはずだ。フェニックス・

リボンは、相棒に事の状態を尋ねた。フェニックスは体に取りこんだ命の果実から、次第に共鳴していくカンナのライブラリデータを強く感じているのだ。

『ええ、もう少し奥の方向よ』

そしてフェニックス・リボンは溢れかえる十字架の世界の中からようやく、目当ての十字架の元に辿り着いた。そこからカンナのライブラリデータが感じられる。ぼんやりとした生温かい風が吹く中でも、彼女の命の鼓動は澄んでいたので、比較的容易な発見だった。

しかし背後からはロックマンの小さな影が見え、恐ろしいスピードで近づいてくる。その様子にフェニックス・リボンは急ぎ、足早に十字架に歩み寄ると、フェニックスが持つ命の果実にカンナのライブラリデータを手早く吸収させようとする。フェニックスが分離して十字架に命の果実を掲げると、命の炎が燃え上がり、十字架からカンナのデータを吸い出し始めた。

「よし……！　やっと、やっとだ」

『良かったわねワタル……。カンナさんをデッドエリアから救いだせるわよ』

ようやくワタルの長い戦いが終わろうとしていた。カンナを助けようとして、今まで生きてきた。それは終わりの見えない戦い。宇宙を股にかけた、全てへの反逆を意味する孤独な戦い。しかしそのような背徳感に悩まされる事もあと少しだけだ。もうすぐ夢が叶い、約束を果たせるから。

しかしそれは悲願の達成と同時に、ワタルの圧倒的だった力の終

焉を意味していた。
　カンナをフェニックスに任せて、迫り来るロックマンを撃退しようと、彼が荒野に一歩足を踏み出した時だった。「……グッ！」小さな呻き声と共に、フェニックス・リボンが膝をついた。ロックマンがもうすぐそこまで来ている。もたもたしていられない。彼は胸に刺すような痛みを感じながらも、何とか立ち上がった。しかし体が重くて足がふらつく。彼の異変にフェニックスが視線をやってみると、驚愕し目を見開いた。
　なんとフェニックス・リボンの燃えるような朱色だった体は、燃え尽きたように徐々に灰色へと移ろっていたのだ。それはかつてのエメリオルのようである。
　理由は明確だった。無茶な電波変換を四年間も続けていた事によって、もう彼の体は限界だったのである。フェニックス・リボンの圧倒的な力は、決して神に与えられてものではなかったのだ。
　こと電波変換における、最大の力の根源はシンクロ率である。それが掛け算とも累乗ともなり戦闘周波数を作り出す。
　かつてフェニックス・リボンは圧倒的な力を以ってして、ヘル・スコルピオを一撃で仕留めてみせた。ワタルは人を殴った事もなかったが、レギオンを圧倒できたのは、ひとえに彼だけが持ちえた強靭な心が生む、信じられないシンクロ率があったからこそ。
　シンクロ率――それは心が作る意味から生まれる、人間だから生み出せる尊いもの。ワタルの場合、それは家族を助けたいという愛情だった。誰よりも苦しみ、誰よりも悩み、そして誰よりも強くあり続けた結果、偶然得られた唯一無二の彼だけの武器であった。
　しかし、ワタルはただの研究員。ジョニーのように、きずなクルーとしての強靭な肉体を持っていなければ、レベッカのように何年も電波化して肉体の最適化も行っていない。もちろんスバルや大吾のように選ばれた人間でもない。凡人の肉体に釣り合わない、超人的な精神力にもう体が付いていかなかった。
　ミソラに涙を流され、ジョニーに否定され、地球を敵に回し、限

界の限界を迎えたのだ。ワタルという器は、もうとっくに崩壊しきっていたのだろう。彼はすでにフェニックス・リボンとしては満足に存在できない体のはず。それでも今まで、裏世界の王として君臨できた事は奇跡としか言いようがない。今こうして、死と生の壁を乗り越えたこの現状も、ワタルの精神力が生み出した奇跡なのだ。

しかしロックマンが見せた究極の力がきっかけとなって、その綻びがとうとう全面に出てしまった。あるいはようやくカンナを救い出せたという安堵から、一気に崩れ落ちたのかもしれない。

フェニックス・リボンは肩を上下させながら息を整えようと必死だが、体の悲鳴は酷くなるばかり。それでもワタル自身は自分の状態に、ずいぶん前から気が付いていたようで、特に驚いた様子は見せてはいなかった。小さく諦めの笑みを浮かべると、シナジーブレードを抜き去りロックマンに向かっていく。しかし光り輝く刃は先細り、かつての迫力は陰っていた。それでも家族を取り戻すために、自分を奮い立たせた。

「フェニックス！　お前はカンナを死の世界から助けることに集中しろ！　ロックマンは俺が食い止める！　俺達の今までを……その命の炎を絶対に守り切れ！！」

『ワ、ワタル……。アナタ……もうとっくに限界なのに』

彼女はワタルの悲壮さに胸が打たれた。

フェニックスは彼の変わり果てた姿を悲しそうに見つめる。だがすぐに首を振って、十字架の呪縛からカンナを救い出すことに専念する。するとロックマンが射程距離にまで詰め寄ったようで、フェニックスのそばを数本の熱線が抜けていった。

フェニックスは振り返らずにカンナの救出に集中した。ワタルを信じているからだ。

ウォーロックの叫び声が死の世界で響き渡る。彼自身も宇宙の事を思って戦っているが、フェニックスとワタルには本当に悪魔にし

か見えていないだろう。事実、彼は正気を失いかけて、老人の遺志を半ば人形のように実行し始めている。乱暴に頭をかきまぜられ、憔悴していく精神と意識。ウォーロックも限界なのだ。ロックマンもフェニックス・リボンも限界で、限界と限界がぶつかり合う。

フェニックス・リボンは家族のあるべき姿に未来を重ねて瞳を暑くたぎらせ、力の限り大地を駆け抜けた。翼を何度も撃ち抜かれるが、何度でも立ち上がれる。そしてロックマンの砲撃の驚異を半減させるため、距離を詰めようとする。しかしロックマンの重装甲に似合わない機敏な動きに翻弄されて、上手く距離を詰められない。十以上もの砲門が、距離を取りつつ何度も咆哮して、フェニックス・リボンを痛めつける。ムゲンリカバリーで何度でも彼は立ち上がってはいるが、回復が段々追いつかなくなってきたらしい。堪らず大声でフェニックスを急かしてしまう。

「ま、まだか！　フェニックス？！」

フェニックス・リボンは余裕がないようで、息も切れ切れだ。

『も、もう少し……！』

遠いところでフェニックスがあくせくしている。命の果実が炎のように燃え盛り、ライブラリのデータをまだ吸い出しているようだ。さすがに人間の魂とも言えるデータの量は膨大らしい。

自分の耳を荒い息遣いでいっぱいにしながら、フェニックス・リボンは目をしかめ、ロックマンに顔を向ける。狂った獣になり果てても、彼も体に鞭を打って、必死にフェニックス・リボンの夢を砕こうとしているのが分かる。小さな破壊兵器となった少年は、涙を流しながら砲門を向けていた。お互いがもう辛いだけだ。フェニックス・リボンも目頭が熱くなった。

だがどんな思いを抱こうとも、カンナのデータを守りながら、こ

の究極のロックマンを相手にするのはさすがに身が持たない。それは事実で回復が追いつかなくて、剣がだらんと力なく地面に垂れる。それでもフェニックス・リボンは歯を食いしばって、何とか剣を構えたが切っ先はふらふらとして定まってはいない。

ミソラの大切な友人に剣を向けなければならない事が、酷く悲しいが諦められない、逃げられない。それはロックマンも同じだ。

「スバル君……キミは本当に優しい子だ……。それにウォーロック、キミはとても強い。今まで戦ってきた誰よりも……」

『グゥッ……！　お前、なぜ諦メネエ。コンナニマデなってよォ』

「それは、お互いさまだ……」

『バカ……ヤロウが……！』

ウォーロックが悔しそうに、言葉を噛み殺した。もっと他に言うべきものがあるだろうが、この混沌した脳内では上手く言葉が出てこない。彼の根幹に老人の声が響き、頭がそれで一杯だ。

そしてとうとうウォーロックは、老人に植え付けられた絶対計画【Rレポート】に支配された。ウォーロックの脳内ではある二人の人物の会話が、断片的に浮かび上がる。それは二人の老人のやり取りのようだった。

《Rレポート……そんなものじゃ、ワシを……ない》

《なぜじゃ！　お前ほどのものが……》

《かつて……ロボッ……ワシは……その……なら何度でも》

《お前……！　そんな事をしても、それに……ロプロジェクトなど……》

《うるさい！！　このままでは……全て……見た。だから……進化せね……人に……未》

《なにを言っても……》

《偽善者め。ワシだって知っておる。お前だって……ロックを……

それに、あの世界に……ックビーストを漏……》
《……新しい……希望の……じゃ。それにまだ試作……》
《デュー……れたのか？》
《違……》
《もういい、話にならん……やれ……ニット》
《……リョウカイ》
《なっ……！！》

会話はそこで途切れ、事切れたようにロックマンは崩れ落ちた。
ゆらりと倒れ込んだかと思うと、すぐにムクリと起き上がる不気味なロックマン。訳の分からない獣の呻きが、不穏な世界に響きわたった。

『オボォオアアアア！！　アイツは間違ってイルゥゥウ！　ワシがウォーロックに託したミライを、人々のセカイをモウオワラセハシナイィイイッヒイイイイィギイイヤアァア！！』

戦闘周波数が物質化し、廃棄物のようなそれがロックマンから弾丸のように飛んでくる。フェニックス・リボンは頬に汗を這わせ、狂い変貌したロックマンを見据えると、ありったけの戦闘周波数をシナジーブレードに流し込んだ。

「行くぞ、スバルくん。キミの気持ち、全て受け止める……！！」

『アウラギャウラしこ！！』
「グッ……！」

奇声を発しながらロックマンは、フェニックス・リボンの胸倉を掴んで、力任せに投げ飛ばした。大の大人を片手で取りまわすとは、凄まじい力だ。ロックマンはそのまま四つん這いになり『ウグルル……』と低い声をもらす。口元からポタポタと涎を垂らしながら、目玉を血走らせている様子はまるで野性そのもの。フェニックス・リボンはシナジーブレードで地面を引っ掻くと、慣性の勢いを殺し踏ん張る。

一度地面に弾かれるも、虹色の羽をはばたかせて態勢を立て直し、顔を上げる。するとロックマンが目の前に。

脳味噌がぐしゃりと頭蓋骨に叩きつけられる。瞬目のうちに、それほどのイメージを彷彿、堪えがたい衝撃が頬から頬を貫いた。揺れる意識と視界の中、鉄の塊となったロックマンの拳が、弧状に振り抜かれていた。赤いモノが指と指の間に溜まりこんでいる。フェイスガードを割られたフェニックス・リボンは、あさっての方向に首を持っていかされ、口に溜まった血を流す。この時ロックマンの両腕は周波数変換をしており、鉄の塊である火器類が有りっ丈両腕に注がれ、体躯に合わない肥大したものを肩からぶら下げたような姿となっていた。野獣に違わない彼が雄叫び、そのまま背中の大型ブースターを燃えあがらせる。勢いに任せて、フェニックス・リボンを荒れた岩肌の上で引きずりながら、拳を叩きこむ。肘先のブースターが加速器となっており、その拳はとても重い。

フェニックス・リボンはムゲンリカバリーで何とか耐え忍ぶと、一度ぐしゃぐしゃになった口元が治癒し、また肉塊に変わる。それを繰り返すと徐々に血が顔に広がっていくのだった。

するとワタルはふと笑った。もし仮に息子がいた場合、このような殴り合いの親子喧嘩を夢見ていたのか。しかしこれは喧嘩ではない。負けたら終わりの、男と男の勝負である。彼にも譲れないものがある。フェニックス・リボンは歯を食いしばって、隕石のようなロックマンの両拳を掴んだ。手のひらから指先に至るまで粉砕骨折してしまったが、ムゲンリカバリーで激痛だけのダメージに留める。痛みには慣れたものだから、問題はない。そのため怯まずに、背中の虹色の羽を命の限り輝かせ、反撃に転じる。「ウオオオォオオーッ!!」フェニックス・リボンの雄叫びが死の世界で響く。『ギグァアアアッッ!!』ロックマンも対抗して背中を大きく燃焼させ、逆立ったような獣の毛並みが溢れだす。

筋繊維と精神を極限まですり減らすフェニックス・リボン。ふつふつとバイザー奥の額に汗が噴き出す。口元にはロックマンの涎と涙が注し入っている。

どうやらロックマンも戦っているようだ。見えない意志に向かって、ウォーロックとスバルも抗っていたのだ。

このような理性なき姿ではなく、本当の気持ちで真っ向からワタルと向かい合いたい。そんな気持ちが、言葉となって獣の口からにじみ出てくる。『ボクだって……ミ……ソラ……チャンを助けたいん……だ……!』その気持ちが、フェニックス・リボンに大きな力を与えた。彼は一度だけ歯を見せて笑うと大きく頷いた。

もうワタルは難しい事を考えるのはやめたのだ。ロックマンの太い腕が、燃え尽きた出がらしの腕を上から押さえこむ。パキポキと骨格が悲鳴を上げる。それに耳を傾け、ワタルは初心に帰ったのだ。今思えば、あの時と状況が似ている。あの時のワタルは、まごうことなき最強だった。

もはや裏世界で培った、自分を殺す正義の理論など役には立たな

い。がむしゃらだった初めての戦いを思い出す。《思い出せ……！！》《思い出せ！！》そうだ、あの時。涙を堪えるミソラが、苦しむカンナにしがみついていた。《ママは助かるんだよね。だよね、パパ？！》怯えたミソラにワタルは嘘を吐いた。《ママは絶対に良くなる。パパが病気を治してあげるよ》――嘘はもう吐きたくない。だから体がバラバラになっても戦った。骨が折れて内臓が駄目になっても戦った。理屈じゃなかった。もう一度、家族で楽しく過ごしたかっただけだ。

ワタルは表情を引き締めて、背中の羽を大きく燃えあがらせた。今までで一番の輝きと、周波数の密度だ。腕に力を込め、背中の揚力に任せて体を起こし、ロックマンを投げ上げる。

ロックマンはフェニックス・リボンに押し返される形で、死の世界の空に突き上げられた。ふわりとした感覚にロックマンは呆気に取られる。混乱した頭では環境周波数を掴むこともままならない。四肢を暴れさせ、宙を泳ぐだけ。

フェニックス・リボンが手元にエネルギー状の弓矢を作り出して、ロックマンに撃ち込んでいく。一回二回とロックマンの胸の装甲を打つが、ヒビすら入らない。それでも矢に弾かれるようにして、ロックマンは空高く打ち上げられていく。

宙高く逃げ場のないロックマンを見上げ、フェニックス・リボンは空気を踏み、空へ駆けあがった。ロックマンの元まで駆けあがると、背中の羽を全て抜き取り、それを組み合わせて一つの扇を作り出す。

そしてフェニックス・リボンは暴れるロックマンに礼を言った。

「ありがとう。ここまで俺を止めようとしてくれて」

気持ちを固めると、扇を振り抜く。すると虹色の突風が辺りの空気を巻きこんでいき、うねりだす。空気の渦がロックマンを飲みこんでいき、周りの全ての大気を以ってして押し潰すように地面に叩

きつけた。『ガァ……ッ！！』短い声を上げ、一度体をピクリとのけぞらせると、そのまま気を失ってしまった。
決着をつけるとフェニックス・リボンは、ふらふらと落ち葉のように地面に落ちていく。ロックマンの究極の力の前に、持てる全てを出しきってしまったようだ。自動でムゲンリカバリーが機能して体を修復するが、気持ちがもう参っていた。
フェニックス・リボンはロックマンの隣でゴロンと寝転がる。くすんだ空を見上げながら、呟いた。

「は、ははは……。なんで……なんで、こんなに悲しいんだろうな」

振り払ったはずなのに、後ろめたさが胸に染み入る。焦点も合わさずに、瞳はどこか遠い場所を見つめていた。すると視界の端から、輝く鳥が。

「その悲しさ。それはアナタがまだ……優しさを持っている証」

ぼんやりと空を眺めていると、彼の頭上にフェニックスが現れ、知ったような口を利く。どうやらカンナのデータを救出したようだ。これでフェニックスが肉体と魂の融合を行えば儀式が終わる。

「そうか。俺はまだ非情に徹し切れてなかったのか……」

フェニックス・リボンは体を起して、ロックマンを抱き上げると、ラ・マリアがいる王宮の方へ向かって歩きだす。ずるずると足を引きずりながらだが、フェニックス・リボンが勝利を収め、この戦いは終わりを告げた。
力も使い果たしたことにより、死のエリアが徐々に元のＦＭ星の景観を取り戻していく。
だが、ワタルの罪は深く、死の世界が閉じようとも、また新しい

死の世界が飛び込んでくる。
フェニックス・リボンはそんな世界の中を歩いていく。

それからフェニックス・リボンは戦場の陰に隠れるようにして、ＦＭ王宮へと向かっていた。そうだったのだが、道すがらの光景に目を疑ってしまう。

「な、なぜ……？！」

そこではＦＭ星の戦士と地球の戦士がＷＷＲを相手にして戦っていた。そこまではいい。そう仕向けたのは彼自身だからだ。だがその戦いの中には、パトラの人達が混ざっていたのだ。それも地球人やＦＭ星人の方に味方しているようだ。

瓦礫と化した街の中、パトラの人達はレム・オリジンとなって戦っていた。おそらくブラックママルに避難していた人達が、騒ぎを察知しトレイスを持ちだした結果なのだろう。しかし神官たちを相手にするその姿は反逆と同意であった。パトラに住む同士で戦っている。それどころか逃げ遅れたＦＭ星の民を電波障壁で囲んで、戦場を飛び交う弾丸や爆風の中から守っていた。

フェニックス・リボンは信じれらないといったように、わなわなと震えた。

「なぜだ……？　なぜ、ＦＭ星人を助ける……」

『ワタル……！　王宮に急ぐわよ』

胸騒ぎを覚えたフェニックスはワタルを急きたてる。フェニック

ス・リボンはＦＭ王宮に向かって走り出した。
何かが狂い始めている――。それが思いすごしである事を願うだけだった。

「なっ……！」
『さ、三賢者……』

王の間に辿りつくと、フェニックス・リボンは愕然とした。ＡＭ星の三賢者であるペガサス、レオ、ドラゴンを筆頭に、目の前では地球軍とＦＭ王宮の一団が、武器を構えて待ちかまえていたのだから。ケフェウスが一団の真ん中に陣取っている。そしてラ・マリアの檻は解除されており、すぐそばにはパトラの人達の姿が。フェニックス・リボンは察知したはず。ユグドラのシステム内にある彼らなら、ラ・マリアの檻は容易に解除できるだろう。そのためブライもソウル・レイダー達も、檻から出ており武器を構えていた。
それら光景に対し、おかしなことに、フェニックス・リボンは固まったように動けなかった。
いくら弱っていても彼なら、この一団の殲滅は不可能ではない。だがパトラの人達に立ちふさがられると、手に武器を取る事も出来ず、呆然と立ち尽くすしかできない。
パトラの人達は恩人だ。手に掛ける事は出来ない。
そしてパトラ人の一人が、フェニックス・リボンに疑問を投げかけた。しわの深い彼の顔は、落胆しているようだった。惑星パトラを救ってくれた、神と崇めていたフェニックス・リボン。そんな存在が突如、大量破壊行為を行ったのだ。おそらく印象は良くないだろう。
打ち震えた声が浴びせられ、フェニックス・リボンは頭がくらく

らしてしまう。

「アナタの事を神だと思っていたのに……なぜ、こんな事を……」

「……こ、これは復讐なのです」

目も合わせられず、フェニックス・リボンは答えた。

「そんな……あまりにも惨い」

「アナタ達の星を責めたのも彼らです。なにも気に病むことはありません……。これはアナタ達の為でもあるんです」

「神様……残念ですが、それには同意できません」

老人は続けた。

「私達は誰よりも平和を愛していた。それなのに復讐なんて……間違っている！　私達は、いつも通りの日常があれば幸せなのです！　作物を耕し、神にそれを届ける。そしてアナタが笑顔でお礼を言ってくれる……！　それだけで十分だったのです！！」

彼らの純粋さにフェニックス・リボンは崩れそうになる。自分の気持ちを押し殺して、決行したこの重罪を真っ向から否定されては、気丈に立ち続けることなど困難を極める。

そして、そのように咎めてくる彼らの気持ちが本心であるとよく分かっているだけに辛かった。彼らは心の底からＦＭ星人をの事を助けようとしており、恨みの感情など持ってはいない。彼らは純粋で優しいのだ。それは異常とも言えるほどに、システムといえるほどに。見ず知らずの地球人に食料と温かい寝床を与えてやるほどなのだから。フェニックス・リボンはやりきれなかった。

「な、なぜそういう事が言えるのです?！　ＦＭ星人はアナタ達に

とっても敵のはず！　忘れたのですか？　ＦＭ星人の恐ろしさを……！！」

フェニックス・リボンは取り乱し、弁明した。だがパトラの人々の心には届かない。老人は首を振るだけだった。その他の男性も女性も皆、同じ気持ちらしい。

「もうこんなことはやめて下さい。争いは悲しいモノです……」

「……っ」

フェニックス・リボンは俯いた。するとケフェウスと三賢者たちまでも彼らを諭し始めた。ケフェウスはパトラの人達に目をやる。

「なぜ彼らが、私達と共に戦ってくれると思いますか？」

「彼らは人が良すぎるんだ……！　そんなの、おかしいだろう……俺がどれだけ……どんな気持ちで……」

フェニックス・リボンは言葉を濁し、握りしめた拳を震わしていた。

ケフェウスは続けた。

「おかしくありません。だって彼らはアナタ達の事を信じているから。アナタを間違った道から、連れ戻そうとしてくれているのです」

その言葉にフェニックスが憤った。

「何を言う！　キサマが分かったような口を聞くな……！！」

「……いや、分かりますよ。そしてアナタにも分かってほしい」

ケフェウスが気の落ちた表情を浮かべたところで三賢者の番であ

った。巨体を持つ彼らはよく目立つ。その中の青い天馬が一歩前に出てフェニックスに説き伏せにかかった。知性的な口振りや振る舞いから、フェニックスの怒りはやんわりと抑え込もうとしているのが分かる。

「もういいでしょう、フェニックス様……。彼らも十分に反省している。争いが生み出すものは貴方ならよく分かるはずです」

すると三賢者の一人の赤い獅子も告げる。

「これ以上ＡＭ星人とＦＭ星人を争わしても無意味です。それに着実にＡＭ星は復興しています。だから今アナタがしなければならない事はただ一つ……」

最後に緑の竜がフェニックスに訴える。女王としての責務は復讐になどない。四年間の空白を埋めるのにはまだ遅くはない、その事実を認識させる必要がある。

「……我らと共にＡＭ星に帰りましょう。アナタが先導して復興作業を行えば、きっとＡＭの民も勇気づくはずでしょう。アナタにはまだやるべき事があるのです」

三賢者の言葉に、フェニックスが追い詰められたようで、ヒステリックに悲鳴を上げた。彼らに言われるもなく彼女は分かっているのだ。本来なら、復讐ではなくＡＭ女王として母星の復興を導かなければならないと。それが人々の上に立つ者の責務であると、そんな常識は心得ており、同時に捨て置いてもいる。

「黙りなさい！　いくら三賢者といえども私に指図することは許しません……！！　ワ、ワタル！！　コイツらを全て黙らしなさい！

！」

フェニックスはワタルに邪魔者を排除するよう命令した。彼なら、軽くひねる事ができるだろう。

しかしフェニックス・リボンはさすがにその命令は受けられないと、首を振ろうとした。だが、思いとどまった。ここでフェニックスに逆らって契約を反故にすれば恐ろしい。彼女には絶対のカードがある。それもジョーカーだ。それはカンナ――。

何度か身震いした後、覚悟を固めたようだ。フェニックス・リボンはシナジーブレードを抜いた。

「……ゆ、許してください……！！」

フェニックス・リボンはケフェウスや、地球軍、ＦＭ軍、パトラ人に歩み始める。目は本気だった。

ケフェウスは彼が放つ殺気に怯えるが、三賢者達に支えられ何とか気を持ち直す。フェニックス・リボンに訴えた。諦めるな！　まだやり直せる！　フェニックス・リボンがここで終わるはずがない。それだけを信じているのだろう。ＦＭ王としてそれだけを信じなければならないのだろう。

「め、目を覚ますのだ！」

「……無理だ」

「なぜだ！　なぜ分かりあえない！」

「分かり合いたい！！　だが、無理なんだ……！」

フェニックス・リボンはどうしても手に持った刃を下げはしなかった。これ以上は言っても聞かないだろう。とうとうケフェウスも覚悟を決めた。

「クッ……！　なぜだ、なぜなんだ！　ぜ、全員一斉攻撃だァッ！！」

その言葉を合図にフェニックス・リボンへと攻撃の嵐が浴びせられる。弾丸や熱線が飛び交う王宮は、修羅場と化した。だがフェニックス・リボンは立ち止まらない。穴だらけになっても体がへし折れてもその場で、たちまち治癒していく。やはり彼は化け物であり、究極のロックマンくらいでしか相手にならないのだ。

王宮の壁がハチの巣にされて崩れ落ち、辺り一帯が瓦礫の山と化す。だがフェニックス・リボンは、不気味に硝煙臭い煙をまといながら、睨みを利かせていた。頬には光り輝く筋が伝っている。

フェニックス・リボンは涙ながら訴えた。

「逃げてくれ……！　俺もこんな事はしたくない！！」

「む……無理だ！　ＷＷＲに攻撃を止めさせるまでは、逃げるわけにはいかない！」

『ワタル……！！　ここで諦めたら――分かってるわね？！』

星の命が懸かっており、ケフェウスも引き下がれない。フェニックス・リボンにもカンナが懸かっている。もうどうしようもなかった。

「ち……ちくしょぉおぉお！！」

フェニックス・リボンが駆け出し、ケフェウスの首を狙う。そのスピードは鈍ってはいても、ケフェウスが反応できる類のものではなかった。

彼はもう疲れた。王を仕留めれば、もう終わりだ。こんな辛いことは早く、終わらしてしまいたかった。何もかもが終わればいいとさえ思っているだろう。

すると電波障壁がフェニックス・リボンの道を遮った。シナジーブレードで真っ二つにする。するとまただ。パトラ人が神を死神にさせまいと必死に抵抗していた。何度も何度も、彼を助けようとともがいている。

フェニックス・リボンは物理的にも精神的にも勢いを殺された。すると三賢者までケフェウスの盾になろうとフェニックス・リボンに立ちふさがる。

『お、お前ら……！！』

フェニックスは、語気を荒げてシナジーブレードで三賢者を排除しろと命令する。ワタルも従うしかない。電波障壁をもろともせずに、三賢者の元に瓦礫を飛び越えながら駆け出す。ＡＭ星人の復讐が三賢者を仕留めることになろうとは皮肉以外の何物でもない。

しかしその時、フェニックス・リボンの足元の瓦礫が吹き飛んだ。そして彼はバランスを崩された。何度も入る邪魔に、ワタルは安堵を感じながらも、フェニックスの溜まる怒りに恐怖した。「グズグズするな！」叫ぶフェニックス。すると空から、それ以上の大きな声が王宮をびりびりと震わせた。たちまちフェニックス・リボンに何発もの弾丸が撃ち込まれ、彼の動きを制限し始めた。的確に関節を狙っており、素人の仕業ではないだろう。

『いい加減にして下さい。ＡＭ女王！！』それは叱責で、ＦＭ王宮の上空から届いている。崩れ落ちた天井からは、ウェーブロードが覗いており、背後の恒星が真っ赤だった。フェニックス・リボンは目を細めウェーブロードを見上げる。夕暮れの赤い空には、大多数の人や獣の影が浮かんでおり、王宮を取り囲んでいた。何百何千という凄まじい数だった。

そう、この場に三賢者がいたのは偶然ではない。ＦＭ星とＡＭ星はフェニックスが思っていた以上に、信頼を取り戻していたのだ。

ペガサスが待ちわびたように、溜め息を吐いた。

「フッ……ようやく来たか」
『な、何アレ……ウ、ウソ……』
フェニックスは抜けた口調で、おろおろとし始める。すると赤い獅子ことレオが事の事情を、動揺している王女に語りだした。それと同時に彼女に現実を突きつけたのだ。
「アレは……あの時の悲劇を生き残った者を集めて組織したＡＭ星軍です。わかると思いますが、彼らはＦＭ星人を助けに来たのです。ＡＭ星人がＦＭ星人を助けようとしているのです……！」
『そんな……嘘よ！　これは悪い冗談よ！！』
「……アナタは誤解しているのです。アナタの世界は過去からずっと止まったままだ。復讐に囚われず、いま目の前にいる彼らに目を向けなさい……女王！」
フェニックスは実体化し恐る恐る、やってきた増援の方を見上げる。たしかに周波数の特徴から、彼らがＡＭ星人であることは間違いない。そしてＦＭ星を救うために、彼らが戦場に向かい始めているのも間違いのない光景だった。フェニックスはその出来事が悪夢のようで信じられなかった。
フェニックスは今、自分を否定されたようで茫然と彼らの姿を見上げるしかない。すぐに追い打ちをかけるようと、ドラゴンが混乱するフェニックスの元に向かった。彼女にＦＭ星とＡＭ星のあるべき姿を思い出させる。憎しみと復讐に駆られた負の感情が、今まで彼女の世界の時間を止めていた。今まで過去から抜け出せずにいた彼女に、見つめるべき今を訴える。
「ＡＭ星人は今、かつてのようにＦＭ星人との友好を取り戻そうとしています。フェニックス様！　今、アナタが見ている光景こそ、

アナタが救うべき世界なのです……！！」

「そ、そんなワケ……！　ＡＭ星人が受けた傷を忘れたの?！　な、なんで助けようなんて思えるの……？　い、意味が分からない……また裏切られるに決まってる！！　間違っているのはアナタ達なのよ！！」

必死の形相となって、地球人、ＦＭ星人、ＡＭ星人、パトラ人に訴える。今まで何もかも捨てて戦ってきた。それも全てはＡＭ星人の為だった。それなのにそのＡＭ星人が、星の仇であるＦＭ星人に手を差し伸ばしているのだ。彼女はもう、何が正しくて、何が間違っているのかまるで分からなくなった。

それにたとえＦＭ星人を許したとしても、またいつ裏切られるのか分からない。その恐怖。それはかつてケフェウスが抱いていた感情とまったく同じものだ。それゆえケフェウスは、彼女に共感したことだろう。

だからこそ再び信頼を築いていきたく思い、ケフェウスが彼女に歩み寄ろうとした時だった。

フェニックスはワタルに命令した。破壊と混沌をもたらすのだ。それだけのために自暴自棄さながらで、最後までなりふり構わない。もはや彼女は弱り切っていた。全てが消えれば、誰も自分を否定しないという考えなのだ。そんな敗北者の思考に支配されている。

「ワ、ワタル！！　コイツら全員ＦＭ星人に洗脳されているわ！地球人もＡＭ星人もパトラ人も……そう、全て！　だから全て！！全てを破壊しなさい！！」

分別のつかなくなった哀れなフェニックスがそこにはいた。さまざまなところで無理が来ていたのだ。最初から復讐に意味はなかった。

そうやって弱りきり心を枯らすまでずっと一緒に戦ってきた相棒

を見つめると、フェニックス・リボンは首を横に振った。
そう、二人は最初から間違った道を歩んでいたのだ。見つめるべきものを見誤っていた。ワタルはミソラを、フェニックスはＡＭ星人を見つめなければならなかった。それらを犠牲にして亡き者や仇敵を追いかけるのは間違いだった。
それがずっと地球人やパトラ人が訴えていたことなのだろう。シナジーブレードは手から力なくすり落ちて乾いた音を立てた。

「もう、やめよう……。この人たちに刃を向ける事なんて出来ない。俺たちの負けだよ、フェニックス」
「なんで……？　なんで、アナタまでそんな事を……。いままで辛い事ばかりだったけど、アナタだけは私の事を分かってくれてると思ったのに……！！　今までが嘘だったとでも言うの？」

フェニックスは目に涙を溜めて訴えた。ワタルは小さく首を振ると、フェニックスの頬を撫でる。

「嘘じゃないからだ。俺たちの今まで……俺達はあまりにも周りの世界から目を背けすぎた。……そろそろ立ち止まって、ゆっくりと世界を見てみたいんだ。……今までありがとう、フェニックス」

思えば久しぶりに彼女に向けられたワタルの優しさ。そしてそれはあの時の遊園地で感じられた父親の部分だった。彼女はずっと彼から大切なものを奪ってしまっていたことに気がついた。そうすると、ぽろぽろとフェニックスから大粒の涙が流れ始めたのだった。復讐だけに囚われていたフェニックス。彼女の世界はいつも真っ暗で、希望など何もなかった。そんな中でもワタルがいたから頑張れたのだった。
そして今になって、ワタルと本心を分かち合えたと思い、むせび泣いた。

「うッ……うぅ……私達……やり直せる……のかしら」
「ああ大丈夫だよ。だから、もう終わりにしよう」
顔をくしゃくしゃにしながらも、フェニックスはこくりと頷いた。

ｉｇｎｉｔ―４１：渡り鳥を操り…

ワタルと分かり合い、過去から抜け出したフェニックスは、各地の戦場で戦っているＷＷＲの戦士たちに王宮から戦闘の終了を呼び掛けた。そうしてようやく、戦火は表面上では終息を見せたのだった。そして嬉しい事に、パトラ人や、地球軍、ＡＭ軍の活躍によって、奇跡的に一般市民からの死者は発生しなかったようだ。不幸中の幸いにフェニックスとワタルは、有り余る罪悪感を少し軽くすることができた。

そして戦いが終わり数時間後。

王の間はもちろんＦＭ星の街も破壊されてしまったが、それでも早速、各地では復興作業が始まっていた。さまざまな星の人々が協力しあっている光景が、王宮の崩れた壁の間からでも確認できる。近衛兵たちも王宮の修繕作業の為、せっせと瓦礫の除去に勤しんでいる。ケフェウスも彼らの頑張りに勇気を貰い、思い切ってフェニックスの方に歩んでいった。向かう先の彼女は、三賢者にこっぴどく怒られているらしい。四年間も失踪して、ＦＭ星を滅ぼそうとしていたのだから無理はないだろう。だがケフェウスが来るやいなや、彼らは気を利かせて小言を中断して女王を明け渡す。

三賢者に軽く頭を下げると、ケフェウスはフェニックスに握手を求めて手を差し出す。

「あの……これからは、余と共に歩んでいきましょう……」

「ホホ……それ、プロポーズみたいよ？」

フェニックスは初心なケフェウスを茶化すと、くすりと笑った。ついさっきまでの張り詰めた様子は微塵も感じさせないあたり、元々の彼女は悪戯っぽい性格なのか。

「そ……そんな事では……！」

「ホホホ、冗談よ。お互い手を取り合っていきましょう」

これからより良いを関係を築こうと、改めて小さな手を差し出すケフェウスに対し、フェニックスも少しやつれた羽を出し握手を交わしたのであった。

こうしてＡＭ星とＦＭ星の長かった因縁がようやく解決したのだった。

そしていよいよ、最後の仕上げだ。フェニックスがＦＭ星人と分かり合おうという姿勢を見せた事により、全ての問題が解決したのである。後はカンナを生き返らせるだけ。約束の時が来たということだ。

フェニックスはケフェウスに含み笑いを送ると、急遽備えられたベッドに向かう。そこではジョニーの手当てをしているフェニックス・リボンがいた。余裕がなかったとはいえ、友人に怪我を負わせてしまった彼は、ジョニーに頭が上がらないようである。

フェニックスは溜め息混じりに呼びかけた。

「ワタル」

「悪い……今、ちょっと手が離せない。それにＷＡＸＡやサテラポリスの方にも謝罪しないと……」

するとジョニーがフェニックス・リボンの尻を蹴りとばす。トランクス一丁で、かつ袈裟がけに大きく包帯を巻いているのに元気な事だ。

「俺の事はいいから。女王さんを待たせるもんじゃないぜ！」
「ああ、悪いなジョニー。今まで、バカな事に付き合わせてしまって……ゴメンよ」
「うるせー。さっさと行けって」

すっかりＷＷＲのボスとしてのフェニックス・リボンの威厳は陰ってしまったようだ。いや、元々こちら側が本当の姿かもしれない。エリートの代名詞きずなクルーとただの研究員、それを踏まえれば健全なやり取りといえる。
そしてフェニックスはそのやりとりに安心したようだった。

「アナタ達の友情にヒビは入ってないようね」
「ジョニーがバカみたいにいいヤツで助かったよ」

悪戯っぽく笑うフェニックス・リボン。どうやら心配は本当にいらないようだ。
するとフェニックスは改まり、頭を下げた。彼女もまた謝罪しなければならない。今までの二人の関係は、良くも悪くも殺伐としすぎていた。無駄がないと言えばそうだが、非情な部分も多々あった。そこをフェニックスは反省していたのだ。

「今までごめんなさい。カンナさんを人質に取るような真似をして……だから、せめて約束は守らせて」

今思えば酷い事をしたとフェニックスはワタルに対してけじめをつける。そしてカンナの復活の儀式を始めるため、彼女はラ・マリアの元に向かった。その途中ふと振り返ると、ハープ・ノートの方に目をやって、フェニックス・リボンに無言で訴える。「連れて来い」と言いたいようだ。

フェニックス・リボンは、おそるおそるハープ・ノートの方に目を向けた。彼女はというとロックマンに付きっきりで看病していた。その様子に、ワタルはずいぶん酷い事をしたと再認識させられた。

それらの要素が気を重くしたが頑張って声をかけることにする。

やはり上手い言葉は出てこなかった。最強を背負っていても、この辺りはどこにでもいる一人の父親だった。相手は年頃の女の子なので、迂闊な手は打てないのでワタルには少々厳しい。

「あの……ミソラ」

戸惑った様子の彼に同じくハープ・ノートも戸惑い、スカッド・エースやソウル・レイダーの陰に隠れてしまった。やはり警戒しているらしい。父親としては、とても虚しいものを感じるが、今までの行いから思えば当然の報いだった。

それでも言う事は言っておきたいものだ。

「ミ、ミソラ、誕生日おめ――」

「ゆ、許せないよ」

ハープ・ノートは下唇を噛み、首を振った。

「……そ、そうだよな……」

ハープ・ノートが小さく零した言葉にフェニックス・リボンは絶望した。だが、それは当たり前だと思い、寂し気な背中を向け、ラ・マリアの方に向かっていく。最後まで娘の誕生日をまともに祝ってやれないのが心残りだったが、元気なカンナをミソラに届けられればそれで十分だ。後はミソラの笑顔を見て、二人の前から姿を消すのが美しい幕引きと言える。今度はカンナがいなくなることもないだろう。母と娘で幸せに暮らせればそれが一番だ。ワタルはもう、

それで十分すぎた。
　そんな思いを感じたのか、ハープ・ノートは、その寂しそうな彼の背中を遠慮がちに見つめていた。そして痛めつけられて、ベッドで眠っているロックマンとを見比べる。凄まじい死闘を繰り広げたのだろう。ロックマンはボロボロだ。大切な人をここまでされて、喜ぶほど馬鹿ではなかった。

「やっぱり……許せないよ……」

　ハープ・ノートは葛藤しつつも、その場で立ち尽くす。するとスカッド・エースが複雑な彼女を心配する。彼には親がいないが、それでもミソラの不遇さを考えれば、我慢する必要はないと感じていた。

「おい、ミソラ。俺達に気遣う必要はないんだぞ？　なんなら、うまい棒食うか？　うまいこと事が運ぶかもな」

　何とも締まらないスカッド・エースに、クイーン・ヴァルゴは杖で叩く。

「アナタは黙ってた方がいい」
「ちょっ、ティーアー。これからビシっと決めるとこだったのにぃー」

　相変わらずな彼に、パッパッと手で煙たそうに払う。
　そしてクイーン・ヴァルゴは、ハープ・ノートの背中を押してやった。お姉さんとしてここは、黙って見ていられないのだろう。

「行ってあげなさい……。ミソラちゃん」
「でも……」

「確かにワタルさんがやったことは間違っていたわ。でも、あの人の気持ちは間違ったものじゃない……」
「え……？」
クイーン・ヴァルゴは淑やかに笑顔だ。シドウには真似できない高い水準でまとめにきている。
「親が子を想うのはおかしいかしら？　私はミソラちゃんのこと羨ましいわ……」
「ううん……」
ハープ・ノートは俯いた。すると今度はソウル・レイダーだ。
「行け、響。星河の事は俺が見ておく……」
「ミライ君……」
「リーダー命令だ！」
ハープ・ノートは尻込みするが、クイーン・ヴァルゴとソウル・レイダーに礼を言うと、父の元に向かった。何を父に言えば正しいのかは分からないが、とにかく文句だけは言おうと決めていることだろう。
そんな慣れ合いがここに極まったようなやり取りに、離れたところで一人ブライは舌打ちした。胸糞悪そうに相変わらず鋭い目つきだ。彼もロックマンに負けないほどの怪我を負っているが、人が沢山いる方を避けて一人で壁に寄り掛かっている。本当はベッドで眠るのが正しい姿だが、ブライはプライドを優先しているらしい。
とりあえず目の保養をしようと思ったのか、ブライは空を見上げた。するとピクリと顔を強張らせる。壁にかけていた剣を思わず手に取ってしまい、その様子はただ事ではない。
このとき彼は、なにか尋常ではない者の気配を感じたのであった。

取り立てて空に異変はないが、それでもブライは胸騒ぎを覚えた。

「何か……来る……」

漠然とした違和感に、ブライは眉をひそめた。そしてブライの予感は的中していると言える。

人知れず暗躍していた黒幕が、ワタル達の元に向かっていたのだ。それは究極にして最強の、神の最高芸術作品。

この一連の出来事は全て仕組まれたものだった。ＷＷＲが結成されたことも、ワタルがここまで辿り着いたことも。プルト・キグナスに時空間渡りの能力を授けて、ウォーロックへのコンプレックスを悪戯に刺激したこともだ。それは全て上質なカギを作るための布石と言える。

それに、ただの地球人が数多のオーパーツを集められたのは不自然であるだろう。ワタルは決められたレールの上をなぞっていただけにすぎない。

そしてその仕組まれた展開こそ、宇宙が破滅へと向かう原因となっている。

しかしまだ間に合う。まだあの老人の言う分岐点を通り越えてはいない。まだ取り返しがつくところに彼らは生きているのだ。

そう、カンナさえ生き返らなければ――。

少しの不安要素を残しながらも、王宮ではラ・マリアを取り巻くように、一同の視線が注がれている。そんな中、儀式の大詰めが始まった。王宮の近衛兵たちも作業を中断して、フェニックス・リボンとハープ・ノートの行く末を見守る。

フェニックス・リボンはラ・マリアが鎮座する台座まで寄ると、そこに設置されたコントロールパネルの操作を始める。手慣れたもので軽快な指づかいでパネルを叩いていく。

ハープ・ノートにはまるで分からない難しい文字列を入力しているようだ。どうやらそれは地球の言語ではない。それでもフェニックス・リボンは熱心に、浮き上がるディスプレイに目を落とし、作業を続ける。

数分もしないうちに指が止まる。フェニックス・リボンは一息吐くと、ラ・マリアから少し離れたところのフェニックスへ振り返った。

「入力完了。フェニックス、準備ができたぞ」

フェニックス・リボンの声に反応したように、ラ・マリアの無機質な二眼がぼうっと灯る。するといつかのカノンのように、台座から血管のようなものが伸び始めた。それが砕けた石畳を這っていき、フェニックスを囲むようにして、幾何学的な模様を作りだす。パッと見は、魔法陣のようなものだ。恐らくこれもマザーシステムの機能の一つなのだろう。

「いよいよね」

フェニックスはその様子を確認し息を呑むと、神妙な面持ちとなる。ゴクリと喉を鳴らし、カンナの精神記録が入ったライブラリデータと、数多のオーパーツが作る肉体情報が混ざった人魂のようなものを取り出した。それを魔法陣の真ん中に置く。

するとラ・マリアが抑揚なく、受け取った命令を音声に変えた。

《十分なエネルギー源を確認シマシタ。エネルギー変換システムを実行シマス》

彼女が命令を受理すると、魔法陣が薄く輝く。するとオーパーツとライブラリデータが混ざった人魂が、浮かび上がった。それがバチバチと稲妻のようなものを纏い始める。

現在ラ・マリアが作りだしている現象は、大陸航行用のエネルギーを物質に変換する為のシステムの表れである。長い宇宙の旅を想定されたユグノアの、船内の物資を確保する補助システムという訳だ。通常なら、オーパーツのエネルギーから、水や食料などを作り出す訳だが、今回フェニックス達はそれを利用し人体を生み出そうとしている。詰めて言えば、人体も食料も同じ有機物だ。ラ・マリアのシステムを使えば、”肉”を生成する事ができる。

ラ・マリアからの血管がドクンと脈打つ。魔法陣の真ん中の人魂がボコボコと膨れ上がり、奇妙な血まみれの肉の塊が生成されていく。それを見つめ、フェニックス・リボンとハープ・ノートは息を呑んだ。まだ人の形とは言えない。グロテスクな潰れた芋虫が浮かんでいるだけである。

それもそのはず、ラ・マリアのシステムはあくまで食料を作り出すものだ。人体生成は想定されていない。今の段階ではただの肉の塊でしかない。人体の複雑な構造を作り出すのは容易ではないのだ。

そこでオーパーツの出番ということになる。何百というオーパーツが作るエネルギーが、ラ・マリアのシステム処理の精度を無理やり引き上げる。かつてオリヒメが復活させたラ・ムーでさえ、たった一つのオーパーツのエネルギー源から、擬似生命であるエランド達を作り出して見せたのだ。数百のエネルギー源を持つラ・マリアなら、肉ではなく肉体を作り出す事も可能となる。

そんなオーパーツの助けもあり、肉の塊が徐々に人の形を作り始めた。フェニックス・リボンは、ハープ・ノートの肩を抱きよせ、その光景を見守る。

骨が伸び、そこに赤々とした肉が薄く張っていく。筋肉の繊維が一本一本紡がれて、束を成す。すると魔法陣の輝きがより一層凄みを見せた。バチバチと激しい閃光が肉体にまとわり、人の入れ物を作っていく。

しかしこのままでは肉体は作れても今度は人間が作れない。この ままではカンナという人間は生まれない。彼女の精神を形作る情報を、作られていく肉体と上手く融合させないといけないのだ。そうしなければただ精巧な肉のマネキンが出来上がるだけ。

ただそれはこの儀式で最も難しいところである。ワタルが研究者として、何年も血眼となって解決しようとしていた問題だった。

しかし結局答えが見つからず、その結果がアカシックレコードから彼女の精神――ライブラリデータを救い出すという突飛なものであった。オーパーツで肉体を作り、アカシックレコードから命を作る。それが最終的にワタルが出した結論。

もちろん始めは夢物語でしかなかった。死んだ人間を生き返らせるという無謀の前では、どんな理論もオカルトである。しかしワタルはアクセス権限者であり、彼にはフェニックスがいた。

命を司るＡＭ星人の彼女なら、生命に干渉する事が可能となる。

そしてワタルとの約束を果たす時が来たのだ。

「今だ、フェニックス！」

「ええ……！！」

フェニックス・リボンは、フェニックスに向かって大声で呼び掛けた。フェニックスは頷き、己が持つ特異な周波数を、まだ男とも女とも分からない肉体に浴びせ始める。

フェニックスの力は肉体の治癒と共に、わずかな電磁波の流れが作る、心というデータを肉体に定着させるもの。

ライブラリデータが、肉体と結合し始める。男とも女とも分からない肉体だったものがカンナのデータをなぞり、徐々に女性を作っていった。柔らかな皮下脂肪が、肉体を丸み帯びさせ、頭皮にミソラと同じ色の髪の毛を生えさせる。瞳もミソラが見知った色で、かつての優しい母親のものであった。

いよいよ最後の仕上げだろう。もう、ほとんどカンナは出来あがっていた。

ハープ・ノートは、その光景が信じられない。目の前にあの時の母親がいるのだ。まったく瓜二つの彼女がそこにいる。血色もよく、健康そのものだ。夢にまで見た人とようやく出会えたのであった。

ハープ・ノートは母親に見入ってしまい、思わず電波変換が解けてしまう。フェニックス・リボンに支えられるようにして、何とか立っている状態だ。

「マ、ママ……ぁ」

フェニックス・リボンはミソラの頭を撫でて、そっと言ってやる。

「誕生日、おめでとう……ミソラ」

ミソラは目に涙を溜めて、それでもまだ我慢しているようだ。フェニックス・リボンの手を握り、こくりと頷いた。

ソウル・レイダー始め、固唾を呑んで見守っていた一同も、儀式

が無事に終わったようで一安心した。
これで全て、終わった。最高の結末を迎えたのだった。
ラ・マリアがシステムの終了を告げた。

《エネルギー変換完了しました。次の命令まで待機モードに移行シマス》

それだけ言い、ラ・マリアから伸びていた血管が縮んでいき魔法陣も退いて、仕事を終えた彼女は眠りについた。
そして一同は、魔法陣のあった場所に注目を注いだ。しかし男性陣は女性陣に頭を殴られ、後ろに追いやられてしまう。
そこには、一人の裸の女性がペタンと座っており、キョトンとした様子で辺りを見渡していた。彼女こそカンナである。しかし、状況がよく理解できていないようで、ただただ目を瞬かせている。赤紫の髪もしっとりとしていて生まれたてそのものと言える。

「あれ……ここは……？　たしか私は、お家のベッドで……アレ……？」
「おかえり、カンナ」

微笑み、フェニックス・リボンは適当な服を電波から実体化させ、カンナに着せてやった。ついでに髪止めも付けてやった。
ミソラは目からぽろぽろと大粒の涙を零して、大口を開けてカンナを呼んだ。顔は普段整ったものとは程遠く、涙と鼻水で、とても同じ少女のものとは思えない。それはミソラが見せた子供の表情だった。

「ママァ……ッ。会いたかったよぅ……！！」
「ミ、ミソラ……っ」

カンナもミソラの姿に気が付いて、驚いたように手で口を覆った。立ち上がろうとするが上手く立ち上がれない。ミソラも上手く歩けなくて、よたよたとカンナの元に歩み寄る。

フェニックス・リボンはミソラの背中を支えて、一緒に歩いていく。ようやく元通りだ。

これが一番の結末だ。これで良かった。そんな感動と共に、誰もがミソラとその家族を祝福した時だった。しかしそれは祝う事ではない。死した命はよみがえらない、それが秩序である。それがあるべき姿である。それが世界の意志で絶対のルール。彼らの罪を許されはしない。それを犯した時、取り返しのつかない事が起こる。「ァガアアアァア！！」狂った獣のような怒号が、王の間に響きわたった。たちまちベッドの方から人影が飛び上がり、凄まじいスピードでカンナの方に向かっていく。フェニックス・リボンが咄嗟の反応を見せて、その人影を食い止める。がっぷり四つを組むが、恐ろしいほどの力でフェニックス・リボンを追いやっていく。その強襲者はカンナを血走った目で睨みつけており、口元からぽたぽたと血の混じった涎を垂らしている。これは正気の沙汰ではない。

動揺を隠せず、フェニックス・リボンは向かい合う少年に絶句した。ミソラも怯えたようにその様子を見守っていた。

ソウル・レイダー達もカンナを守ろうと飛びかかるが、彼の前では成す術もない。まるで生きているかのように体中から伸びた砲門が、飛びかかる全てを一掃したのだ。

彼は狂った口調で呻いた。大きく横に裂けた口から、蒸気のような吐息が長ったらしく漏れている。

「ウグルウル……。破滅……をもたらす……宇宙を終わらせる……分岐点……そのカギを……破壊スルウウゥウ！！」

「ス、スバル君……！！」

ミソラは叫んだ。彼の元に向かおうとするが、決死の形相のフェ

ニックス・リボンに制止される。

「来るな！　ミソラ！！」

「破滅からウチュウを救わなければナラナイ……！」

ロックマンは徐々に体に分厚い装甲をまとっていき、フェニックス・リボンを追い詰める。ロックマンはサイデスビートに形態を変化させつつある。このままでは地力の差から、フェニックス・リボンは倒されてしまうだろう。そうなってはこのロックマンの前では、カンナの安全を保証できない。

踏ん張るフェニックス・リボンの両足が、土埃を削ぎながら押しやられていく。もの恐ろしい力に、フェニックス・リボンは顔を歪めた。

「ス、スバル君……！　目を覚ませ……っ」

老人の遺志に支配されたロックマンに声は届かない。

「カギをハカイ……ヤツが来る……全てが終ワル……その前にィイイい――――！！」

ロックマンの叫び。

結末は不穏な方向へ向かおうとしていた。

ロックマンは、フェニックス・リボンの骨を砕く。それでもムゲンリカバリーでなんとか堪える。するとフェニックス・リボンは吐血した。骨が肺に刺さったのだろう。どうやらムゲンリカバリーが、その効力を失いつつあるらしい。この世に永久機関はないという事である。それ以前に彼は連戦に連戦を重ねすぎていることも大きな要因だ。ロックマンやジョニー、そしてアンドロメダ、その後にブライ達を相手にして最後にサイデスビート。そしてここに来てのサイデスビート。

しかし、ここで引き下がる訳にはいかなくて、彼は体の悲鳴を押さえこみながら踏みとどまる。

「よ、ようやく。夢を叶えたんだ……！　もうカンナを手放しはしない！！」

確かにその言葉は命に替えても守りたいのだろう。ここまで来て、ロックマンに全てを台無しにされては、スバルもワタルも救われない。

しかしロックマンは狂気に任せて、彼だけに見えている未来を救おうとする。しかしお互いの意志がすれ違うだけだった。

「ハ、ハカイ……！　は、破滅をもたらす……カ、カギを破壊――！！」

「しっかりしろスバル君！！　もう全て終わったんだ！　ＦＭ星人

もＡＭ星人も分かりあえたんだ！　ＷＷＲはもうなくなったんだ……！！」

フェニックス・リボンが必死に訴えるが、その言葉はやはり届かなかった。肩や腰から伸びた銃身が、フェニックス・リボン目がけて、不気味に照準を合わせた。

細い閃光が砲門から伸びたかと思うと、熱を帯び着弾点が爆発する。砲口がチカチカと瞬き、至近距離から集中砲火が加えられる。フェニックス・リボンは踏ん張り切れず吹きとばされ、瓦礫の中に埋もれてしまった。ロックマンはギロリとカンナの方を睨みつける。

「ウゥウガアァ、オ……ワリ……にする」

瓦礫を踏みならし、一歩一歩歩み寄る。カンナはミソラを抱き寄せ、ロックマンを見つめていた。ロックマンの足に弾かれた小石がころころ転がり、カンナに当たる。

ミソラは背後から感じる距離感に怯え、カンナの胸に顔をうずめる。

「マ……ママ……」

ロックマンはミソラとカンナに複数の鉄の塊を伸ばす。射線を親子の胸にぴたりと収めて、鋼鉄の武装の真っ黒な穴は心臓を狙っている。ロックマンは本気でカンナを亡き者にしようとしているらしい。そしてこのままでは、ミソラも巻き添えだ。カンナは口を震わせると、覚悟を決めミソラを突きとばした。

ミソラは驚いたようにカンナの方に向かって目を見開いた。ロックマンが一歩ずつ歩み寄る。彼の自重につぶされジャリッと瓦礫を噛んだ音が耳触りだ。

ミソラはロックマンに飛びかかろうとしたが、ライル粒子の光の

壁がミソラを閉じ込めた。彼女は壁を必死に叩き、大声で訴えるが、声は遮断され届かない。カンナはフッと笑った。ロックマンは首を傾げた。

カンナはよろよろと立ち上がる。そして強い母親の表情をミソラに向けた。

「私は大丈夫、大きくなったね……ミソラ。本当に……」

口を目一杯まで開き、何かを訴えながらミソラは、拳が壊れる勢いで壁を叩いた。しかし壁は壊れず、声も届かず、何を言っているのか分からず決して届かない。それでもカンナは頷き、そしてロックマンに正対した。彼の血走った瞳を見据えて、「ありがとう」、と感謝を述べた。漠然とだが、確信的に、彼の事をミソラの大切な友人と認めたのだろう。ロックマンにミソラのこれからを託したのだ。

歩み寄ってくるカンナ。ロックマンは首を傾げた。理解不能の行動だったのだ。カンナはロックマンの頬を撫でると、愛おしそうに、我が子を見つめるかのように優しく微笑む。

そのおおよそ理解できない彼女の行動が、ロックマンの膝をがくりと砕き、跪かせた。サイデスビートの武装が解け始める。老人の精神が虚をつかれ、脆弱な部分を露呈させたのである。所詮、老人も人の子である。正義を掲げようとも嘘にできない、そんなためらいが生まれたのだ。

ロックマンは叫びあげる。王宮の天井がびりびり震われ、土埃を落とす。ウォーロックとスバルの精神が、老人の精神を奥深いところに押し込もうとしていた。ロックマンはよろめくと、瓦礫に手をついて這いつくばる。ロックマンの姿は、いつもの姿へと帰っていく。老人の遺志を追いやっていく程に、元の姿に戻っていく。あともう少しで、スバルとウォーロックが競り勝てるだろう。

そしてカンナがロックマンを抱き寄せる。すると、ロックマンの

強張った体から力が抜けていく、どうやらそれが決め手となったようだ。

「今までありがとう……スバル君」

張りつめた糸が切れ、ロックマンは涙をこぼし始めた。

「……こ、怖かったよ」

胸の内を吐露すると、ロックマンの電波変換は解けてしまい、疲れ切ったスバルは目を固く瞑った。そして震えた声で言う。

「……で、でも、良かった。本当に良かったね……ミソラちゃん……」

ロックマンは涙ながらに、ミソラに無理して笑って見せる。ミソラは光の粒が舞う中で、顔を手で覆って座り込んでしまう。小さな肩は嗚咽のたびに震え、指の間から、不安で堪らなかったものが堰を切り溢れ出す。膝が震えて立ちあがれず天を仰ぎ、大口を開けて泣きわめいた。

「うえぇえ……あぐっ……ひっく。うわあああぁ！」

カンナとスバルは、赤ん坊のように泣くミソラの元に行くと抱き寄せて、お互いの無事を確認したのだった。

その様子を見つめフェニックス・リボンもその中に入りたいと思ったはずだが、首を振って自分に言い聞かせた。少し離れたところで身を引き、一人で熱くなった目を手で押さえたのだった。

そうしてホッと胸をなでおろす、スバルとその仲間たち。ミソラの長い戦いが終わりを告げたのであった。カンナに甘えるミソラか

らは、彼女にとっての幸せな日々の始まりを予感させてくれた。

しかしフェニックスは、大団円で終わろうとしているこの状況に、少し憂慮するところがあった。ワタルも承知のようで、崩れた壁の間からＦＭ星の市街の方を見つめる。倒壊した建物が目立ち、これ以上の被害は願うところではない。だが、そうもいかないだろう。

ＷＷＲはなくなったといったが、本当はそんな簡単にすむものではないのだ。一枚岩ではないＷＷＲという組織には、いまだ不安な要素があったのだから。

それは、フェニックスの作戦終了の命令を、快く思っていないこの辈による報復。その辈は裏の住人たちでまず間違いないだろう。破壊と混沌を好む彼らは、心変わりしたフェニックス達に牙を向ける事が予想された。もっとも、それらの要素を利用したフェニックス達に、責任がないと言えば嘘になる。

そしてＷＷＲの新しいボスの座を狙ってくる辈も出てくるだろう。まだ争いの火種がくすぶっているようだ。

そんな考えからフェニックスがワタルに、注意を呼びかけようとした時、近衛兵の一人が慌てて、王の間に入ってきた。息を切らしながら、切羽詰まった様子でまくし立てる。

どうやらフェニックスの予想は的中したようだ。

混乱した様子で要領得ない近衛兵を、ケフェウスは宥める。

「落ちつけ、何があった？」

「た、大変です！　ＷＷＲの残党が、この王宮に向かって来ています！」

表情を曇らせスバル達から離れると、ケフェウスは近衛兵に詳しく問い詰める。

「どういう事だ？　なぜいまさらになって……で、その敵の数は？」

「詳しくは分かりません……！　それでも数千人規模である事は確実です！」

ケフェウスは口に手を添えて一考する。そして王宮に残っている戦力を考えると、冷や汗を流した。スバル始め誰もが疲弊しきっている。さらに最悪な事に、その迫りくる敵の全てが選りすぐりのつわものである事だった。

「ま、マズイな……。こちらには戦える戦力がほとんどいない」

「……申し訳ないわ。こうなる事は予想できたのに……本当に愚かな事をしたわ」

今だ続く争いの連鎖に、フェニックスは深々と頭を下げケフェウスに謝罪した。

そんな張りつめた空気の中、フェニックス・リボンは辺りを見渡す。どうやら本当に戦える者はもう残っていないようだ。王の間でさえもベッドで処置を受けている者がたくさんいる。階下にある医務室など言うに及ばないだろう。

やるべき事は一つ。フェニックス・リボンは覚悟を決めて、砕けた壁から覗くウェーブロードに歩いていく。身を呈して、カンナとミソラ達を守るつもりらしい。いくら邪魔が入ろうとも、命が燃え尽きるその時まで、戦い続けるしかない。それがワタルが足を踏み入れた世界で、選んだ道だ。そう簡単に、幸せと平穏を手に入れる事は出来ないと感じていた。

「悔やんでいても仕方がない……。自分たちでまいた種だ。行くぞフェニックス……！！」

フェニックス・リボンはボロボロになった姿で、戦いに身を投げようとしていた。そんな彼の傷の治癒速度は、著しく低下している。

もう、彼は限界だろう。戦いに戦いを重ねて、体を酷使し過ぎており、このまま行けば無事は保証できない。

ケフェウスはかつての敵であろうとも、死に急ぐワタルを止めた。

「ま、待つのだ！　一人で行っても、死ぬだけだぞ……！！」

フェニックス・リボンは首を振り、剣を抜く。自分が犯した罪を考えれば、命をいくつ賭けても足りないと感じているのだろう。

「……やらせてくれませんか。これは俺のけじめですから」

ケフェウスはフェニックス・リボンから発せられる圧力に、気後れして黙り込んでしまう。そして地球もパトラもＦＭもＡＭもその中から誰一人として、彼を止める者はいなくなった。

しかしそんな中、ミソラは立ち上がった。隣のカンナは、思い詰めた表情だった。ようやく手に入れた家族が、またいなくなったのでは救われない。ここまで来ては、意地を張る事もできないだろう。ミソラは、ワタルに胸の内を明かした。

「パ……パパ！　だ、駄目だよ。行っちゃダメ……！」

ミソラの悲痛な叫びに、フェニックス・リボンは思わず足が止まった。だが振り向こうとはせずに、剣を強く握って手を震わせていた。

ミソラは続けた。

「なんで……？　なんで、すぐいなくなっちゃおうとするんだよぉ……。私がどれだけ寂しかったか……一人ぼっちで……ずっと、一人で……」

ミソラは目を潤ませている。カンナはそんなミソラの頭を撫でて、ワタルの背中を見つめていた。バラバラだった家族がようやく揃ったのに、まともに言葉をかわす事なく、お別れなんて悲し過ぎるのだ。

カンナは打ち震える背中に訴える。

「ワタルさん……。君が私の為にどれだけの犠牲を払い、どれだけの罪を犯したのかは分からないわ……。でもね、それでも君は響ワタル。ミソラのお父さんなんだよ？　せめて、こっちを見て私達と向き合ってください……」

「パパ……！　死んじゃイヤだよ……っ！！　一緒に……帰ろうよ……っ。パパの事、大好きなんだからぁ……！」

その言葉に心が揺れて、命がとても惜しくなる。だが、それ以上にミソラ達の命が大切だったようだ。

フェニックス・リボンは背中越しにミソラの誕生日を改めて祝った。

「ミソラ、誕生日おめでとう。これからはママと幸せに暮らすんだぞ」

最後に顔を向けて、ミソラとカンナに笑顔を送る。そのバイザーの奥は光が反射されたのか、小さな滴が照っていた。

「その言葉だけで俺は救われた。ありがとう――カンナ、ミソラ」

フェニックス・リボンがウェーブロードに飛び移ろうと羽を羽を広げ、大きく輝かせる。すると驚いた事に、フェニックス・リボンの灰色だった体が鮮やかな朱色に染まっていった。どうやら二人の言葉に救われて、限界――というよりも、電波変換をする者として

の壁を突破したのだろう。そこは、きずなクルーでもスバルでさえ、いまだ到達できない領域だ。彼は今、殻を破りロックマンを超えた、唯一にして無二の、この宇宙で生きる最強の存在に進化したのだ。

電波変換という力は、人間に与えられた進化の手がかりだ。ワタルは一番最初にそれを掴んだというだけである。

「負ける気が、しない……！」

覚悟を決めたフェニックス・リボンは、達観した様子でウェーブロードを見下ろす。するとどうだ。ずるずる足を引きずりながら、こちらに向かってくるウェーブロード上の人影を見つけたのであった。体が大きく裂けている。おそらく敗戦兵だろう。体のダメージから、生きている事が不思議だった。

フェニックス・リボンは出鼻をくじかれたが、それでも放っておくわけにはいかない。彼を王の間に搬送して、傷の手当てを頼む。どうやら彼は、ＷＷＲの残党を相手にしていたＡＭ星人の兵士のようだ。

そして狂ったようにずっとうわ言を呻いている。よほどの恐怖を植え付けられたらしく、目の焦点が定まっていない。口からよだれを垂らしながら、何かを伝えようとしていた。

「来る……恐ろしいアイツが、……信じられない」

一同はそのＡＭの戦士に注目するが、ブライは不穏な気配を感じ、フェニックス・リボンと共にさきほどのウェーブロードの方に向かう。

向かったところ、ウェーブロード上には何かがいた。フェニックス・リボンとブライは、ＡＭ星人の彼を見つけた時にはいなかった怪しい二人組を見つけたのである。一人は男で一人は女だ。どちらも髪が長いが、体格からして違い、判別は容易だ。

そんな二人組を不審に思い、注意を向ける。するとブライは強張

ったように口をガチガチと震わせる。そして女の方を見るやいなや、頭を押さえしゃがみこんでしまった。酷い頭痛らしく、脂汗が顔に浮き上がっている。そんな中でも二人組は歩みを止めず向かってくる。ブライの表情がより苦しみを浮かべた。

フェニックス・リボンは彼を心配して、しゃがみこむがブライは手で突っ張って拒む。すると頭を押さえながら立ち上がって、襲いかかる体の異変に堪えながらも、その二人組に目を向けた。

「何だ……アイツらは。ただ者じゃない」

ブライは荒い息を呑み、小さく震えた。どうやら体に受けた今までのダメージ以上の衝撃を受けているらしい。

事態が思わしくないようだ。フェニックス・リボンは、こちら側に歩み寄る二人組の周波数を探った。すると愕然とした。

「ア、アイツは……！」

間違いなかった。あの赤い人影は忘れられるわけがない。彼はフェニックス・リボンが今まで出会った誰よりも、恐ろしい存在だったから。彼は何よりも強大で底が知れないのである。今となっては遠い昔の事だが、鳳凰の間で彼と相対した衝撃は忘れもしないはず。もしあの時、刃を交えていたら、フェニックス・リボンがここにいる事もなかっただろう。

そんな赤い人影は、すっと腕を天に伸ばす。そしてフェニックス・リボンに目線を送った。その目付きは不敵で、不思議な魔力を持っている。まだ百メートル以上距離があるのに、フェニックス・リボンは張り付けられたように動けなかった。

全てが手のうちだと言わんばかりに、含みのある表情を浮かべる。彼は、伸ばした腕の先で指をパチンと鳴らした。何かの合図だろうか。油断ならない相手に、フェニックス・リボンが警戒を強める。

するとフェニックス・リボンの後方で、クイーン・ヴァルゴら女性陣の悲鳴が耳に飛び込んだ。

彼女達が手当てしていたＡＭ星人のそばに、何かが転がっていた。ちょうどボウリング玉のような――

クイーン・ヴァルゴとＡＭの彼との間に、慌ててスカッド・エースが立ち塞ぎ、彼女たちの視界を遮っている。クイーン・ヴァルゴは顔色悪く、吐き気を催しているようだ。スコープ・スナイパーは彼女ほどではないが、やはり苦い表情だ。ミソラに至っては、カンナに抱きついて怯えていた。

血の臭いが、ツンと彼女たちの吐き気を増長する。鮮血が彼の首から上に広がっていった。床に染み込むそれは赤黒く、地獄の釜湯のようで不気味な印象だ。

どんよりとした気配が伝わってくる。フェニックス・リボンの肝は冷えた。転がっていたボウリング玉と目が合ったのだ。血走った目は乾き始めて、もう死んでいるのは明白だった。

ブライは舌打ちして、剣を握り二人組の方を睨みつける。彼らの悠然とした振る舞いは相変わらずだった。どこか余裕を持っている様子が、よけいに彼を苛立たせた。

そんな赤い人影は後ろに女を従えて、もうすぐそこの所まで辿りついていた。そして立ち止ると、フェニックス・リボンとブライに話し始めたのである。特に騙る様子はなく、事務的に口述していく。

「”切断”という行為は知っているな？」

指先で首筋を横に払って見せる。

「俺という作品は、それに特化させられている。俺はそれゆえに”切断”という行為にこだわりを持つ。切断とは細胞と細胞を切り離す事。俺はな、細胞を傷つけずモノを切断する事に、美しさを感じるんだ。研ぎ澄ませば研ぎ澄ますほどに、それは美しい。お前も見

ていただろう？　さっきまで生きていた哀れな一つの命の姿を……」

彼はどうやら凄まじい太刀筋で、あらかじめＡＭの兵士の首を分断していたようだ。しかしあまりもの抜刀速度と、あまりにも鋭い切断行為が、生命活動に支障をきたさなかったと言うのである。ついさっきまで彼は確かに生きていた。首が切断されているなど誰も予想できなかった。

だがフェニックス・リボンは信じられないと言いたげに、眉をひそめる。彼もそれなりに腕に覚えがあるが、物を切れば必ず切れ目ができる。物なら壊れ、生き物なら絶命する事は必至である。

すると金髪を左右に揺らしながら、真紅の彼は首を振る。いつの間にか、彼の手には薄い緑の剣が握られていた。見逃していた訳ではない、ずっと注視していたはず。フェニックス・リボンはゾッとした。

「信じられないか？　なら、辺りの周波数を探ってみるといい」

静寂が訪れた。世界に散らばっていた、数え切れない命の鼓動はもう感じ取れなくなっていた。フェニックス・リボンはわなわなと震えた。あれほど、こちらに向かって来ていた裏の住人達の周波数が、一人残らず消えていた。その周りにいた仲間の周波数も同様である。

一体いつから？　フェニックス・リボンは、おそらく正しい可能性に考えを及ばせる。

「さっき指を鳴らした時か……？」

「ああ、そうだ」

「何人殺した？」

「数えてないな。……いや数え切れないとでも言っておこう。だが、大丈夫。罪なきものは殺してはいない……。マスターにそう言われ

ているからな」

とくに悪びれた様子のない彼だった。するとフェニックス・リボンの隣で炎が燃え上がる。それが鳳凰を作り出していき、すぐに怒りに燃えたフェニックスが現れた。彼女は同胞の絶命から、普段見せない憤怒の表情を浮かべている。彼らもおそらく、反逆した裏の住人を止めようと必死に戦っていたはず。そこを金髪の彼に切り捨てられたのだろう。

フェニックスは女王の気品を捨てた怒気をまとわせた。

「あ、あの中にＡＭ星人だっていたのに……。せっかく改心したのに……！」

「改心……か。都合がいい話だな。ヤツらも一度道を外れ、星を滅ぼそうとした事は事実。マスターは争いを憂いでおられる。残念だが、死は当然の報いだ」

金髪の赤い剣士は、剣に目を落として溜め息をついていた。

フェニックスは憤った。

「お前にそれを決める権利はない！」

「俺の意志ではない。我が父であるマスター――いや神の意志だよ」

「こ、こいつ……！」

いくら怒ろうとも気持ちが伝わらず、話が通じるわけもなく、死した仲間が生き返る事もない。フェニックスはワタルと一つになり、フェニックス・リボンは戦闘態勢を取った。

すると赤い彼はおもむろに人差し指を突き出して、ふいに注意を向けさせる。彼の挙動から目が離せるわけがなく、フェニックス・リボンが身構えた。そんな様子に彼は言う。

「さっき、お前が俺の指先を見ていた時。俺は何回、それを斬ったと思う？」

彼は半壊している王宮を示しながら、剣を持ち上げる。「それ」とは王宮の事。そしてまたパチンと指を鳴らした。

地鳴りと共に、フェニックス・リボンが見る景色が、横に大きくずれた。いや、建物がずれている。外壁がサイコロのように、細かく崩れていく。床も同様だ。天井も落ちていく。スバルもミソラも誰もかれも、崩れていく建物の中で、逃げ場を探す。しかし全てが切り刻まれていて、逃げ場はどこにもない。このままでは崩れてきた瓦礫の中に飲み込まれるだろう。

ブライは咄嗟に電波障壁を作り出して、スバル達を囲むように包んだ。しかしまだ取り残された人がいる。「急げっ！！」フェニックス・リボンに怒鳴る。彼もすでにバトルカードを入力していた。

「バトルカード！　ゾディアックライン！！」

大きなドームがその場にいた全員を守るように包み込んだ。それと同時に、王宮は完全に倒壊したのであった。王の間にいた人は助かっただろうが、その下の階にいた人達はおそらく助からないだろう。

上空には青空が広がり、完全に瓦礫の山と化したＦＭ王宮。そこに建物があったとはとても思えない。そんな土煙がもうもうと立ち込める中、電波障壁の檻と、ゾディアックラインの結界が確認できた。その中にはミソラ達がおり、怪我もなくどうやら無事のようだ。王の間が王宮の最上階にあった為、瓦礫に埋められる事がなかったらしい。それだけが不幸中の幸いである。しかし逆を言えば、下の階の人は絶望的だった。丁寧に細切れにされた石の海から、生き埋めになった人を救いだすのは困難を極める。

絶望を禁じえないが、敵はすぐ目の前にいる。ひきずるわけにも

いかず、フェニックス・リボンは上空のウェーブロードを見上げた。そこから剣士の彼と女が飛び降り、フェニックス・リボンとブライの目の前に着地した。

赤いアーマーに身を包んだ金髪に青い瞳が印象的な剣士がそこにいる。彼は、久しぶりに再会したフェニックス・リボンへ小首を傾げてみせた。彼の隣には浅黒い肌と、体のラインを強調する漆黒の服装をまとった、赤い瞳に白銀の長髪の女がいた。どちらもただ者ではない。ブライは女を睨みつける。女はブライに何か言おうと、彼の元に足を運ぼうとする。しかし赤い剣士に止められた。

「シュンラン……。アナタは見ていているだけでいい」

「……分かったわ」

剣士はシュンランに言いつけると、一歩フェニックス・リボンに寄る。

鳳凰の間での出来事から、お互いに心内は理解していた。

「さて、とりあえず礼を言っとこうか。フェニックス・リボン……いや、響ワタル」

「……インフィニット。このタイミングで来るという事は……やはり俺達を利用していたのか？」

「それはお互いさまだ。そしてここからが本番だ……。『デウス・エクス・マキナのカギ』を貰う」

「カギ……？　なんだそれは？」

フェニックス・リボンの質問に、インフィニットは剣を握りこむ。緑の剣に、恐ろしい周波数が集まっていき、雷のような反応が彼の周りで巻き起こった。フェニックス・リボンも堪らずシナジーブレードを構えた。

インフィニットは、あの時のお預けになった勝負をしにここに来

たのだろう。今回の彼はフェニックス・リボンを相手にして、突き刺すような戦意を見せていた。

そして彼は最後の花向けに全てを教えてやった。それは今まで、お互いに利用し合った宿敵に対する、彼なりの礼儀である。

「カギか……。良いだろう。今まで働いてくれた礼に教えてやる……。

お前にオーパーツを集めさせていたのも、全てはそのデウス・エクス・マキナのカギを作りだすため。そのカギを使い、人類の生存を懸けた実験の仕上げを行うのだよ」

「実験……。カギ……」

フェニックス・リボンは思考を巡らすが、答えが見つからない。だがインフィニットの目的が達成されようとしているのは事実である。

インフィニットは悩みあぐねる彼に言ってやった。

「分からないか？　デウス・エクス・マキナというオーパーツがどのようなものであったか考えてみろ……」

彼の言うそのオーパーツは、デューオから手に入れた究極のエネルギーの塊。その用途は、各惑星へと生物と知恵を送る事である。

しかしデューオは言っていた。「これを手にするという事は、宇宙の破滅への一歩を意味する」と。おそらくデウス・エクス・マキナもといそのカギが、これから起こる過酷な運命に深く絡んでいるのだろう。

「まさか、ジョニーが言っていた……」

「分かったようだな。そう、ディメンションゴーレムの復活に必要なもの……それがデウス・エクス・マキナのカギだ。この日より、

神の審判が始まる！
機械仕掛けの神が、世界を選別する……！　お前は俺の為に、よく最後までやり遂げてくれた。なあ、フェニックス・リボンよ！」

高らかに告げると、インフィニットはカンナの方を望み、さらにフェニックス・リボンへ宣告した。それは彼にしてみれば、耳を疑うものだった。
やっと手にいれた、つかの間の幸せが終わろうとしていた。
インフィニットはカンナに剣を向けて、わざとフェニックス・リボンの闘争心を煽りたてる。

「お前には悪いが、あの女性の心臓を頂く。あれこそがカギなのだからな」
「ふ、ふざけるな……！！　カンナの心臓がカギ……？　バカな！！」

取り乱すフェニックス・リボンに、インフィニットが現実というものを教えてやる。フェニックス・リボンの怒りを最大限まで高めて、それを叩き潰そうとしているのだ。
インフィニットは人差し指を立てて言い切ってやる。その表情は微笑によって柔らかい印象だが、その笑みが意味するところは恐ろしい。

「一つ教えてやる。一度死んだ人間が、マトモな存在だと想わない事だ。あれは……化け物だよ」

化け物。その言葉にフェニックス・リボンは我慢ならなかった。怒りに任せて、インフィニットに向かって斬りかかる。
凄まじいスピードと戦闘周波数だ。すぐそばにいたブライは元より、その場にいた誰も彼の動きを、目でも捉えられていない。これ

ではインフィニットもただでは済まないだろう。
そして次の瞬間、悲鳴が鳴り響いた。ただ、それはワタルのものだった。
振り抜かれたシナジーブレードを、赤い剣士の武器――インフィニットセイバーが叩き割ったのである。空に一本の腕が弾き上げられ、激しく回転しながら血を辺りに振りまく。
ミソラを始め、そのやり取りを見守っていた全員が目を疑った。一瞬の攻防で、フェニックス・リボンは一本の腕を失ってしまったのだ。誰もが戦慄して、インフィニットを恐れた。彼は強い。何よりも強いと。今まで圧倒的な強さで、スバル達を苦しめていたフェニックス・リボンがまるで子供扱いだ。

「ウグッ……！」
『う、うそ……！　ワ、ワタル！』
「だ、大丈夫だ……！　カンナをやらせはしない！！」

フェニックス・リボンは気丈に振る舞うがその傷は深刻だった。彼は顔面蒼白となり、きれいさっぱり削がれた肩の断面を押さえ膝をついた。流石にこれはムゲンリカバリーでも治らないだろう。せいぜい血が止まるだけというものだ。
そしてインフィニットは、地面に転がったフェニックス・リボンの腕を蹴りとばすと、内にうごめく闘争心を垣間見せた。その目は青く燃える炎そのもの。
この戦いの続きを彼は欲していた。

「立て、フェニックス・リボン！！　カギもそうだが、お前は俺を楽しませる事ができる強い存在だ！　さあ俺を楽しませてくれ！！
お前の命を以ってして、家族を守って見せろ！！」

それは戦いの始まりだ。そして絶望の始まりだ。逃げ場はない。

ワタルが敗北すれば、カンナの命はないのだから。
レギオンズナンバー：ゼロ『インフィニット』による、響ワタルへの最後の試練が始まりを告げた。

「みんな、ワタルさんを助けるぞ！」

フェニックス・リボンとインフィニット、その両者の緊張が限界まで張りつめた時だった。声高々にスカッド・エースが名乗りを上げたのだ。フェニックス・リボンはかつての敵ではある。だが、ミソラの父でもある。何より、カンナを守る義務がある事は、シドウ達も同じであった。傷を押してでも戦わなければならない。サテラポリスは正義の味方である。それが十分な理由でそれ以上は必要ない。

そしてその気持ちは、どうやら地球人だけのものではないようだ。ＦＭ星やその他の戦士たちも、武器を取りフェニックス・リボンに助太刀の姿勢を見せ始めた。ＡＭ星とＦＭ星の友好を取り戻すために、神と崇めた者の為に、ここで立ち上がらないわけにはいかない。フェニックス・リボンは初めて、仲間というものを手に入れたのだ。

しかし、そんな美しい結束にシュンランが邪魔立てする。もっとも、インフィニットなら、この場の全員を問題なく倒してしまうだろうが、念には念を入れるべきである。神の命令は絶対なのだから。

「電波光壁……！」

シュンランは両腕を前方に伸ばして、手のひらをスカッド・エース達にかざす。すると巨大な建物にも見まがうような、巨大な牢獄

が焼け野原に姿を現した。その牢獄が完全にスカッド・エース達の行く手を阻んだ。そんなシュンランの真似にインフィニットは面白くなく、憮然とした顔を浮かべた。しかしシュンランは澄まし顔を崩しはしない。インフィニットも流石に文句は出てこなかった。

「よけいな真似だったかしら？」

「いや、命令に忠実なのは良い事だ。だが、フェニックス・リボン……響ワタルは俺にやらせてくれ」

「アナタがそれほど執心するなんて……よっぽどなのね」

観念したようにシュンランは溜め息を吐く。滅多に見せないインフィニットの執着に内心驚いており、興味が湧いたところもあるのだろう。そのため彼女はこれ以上、フェニックス・リボンとインフィニットとの戦いに、余計な手を出してはこなかった。そして先程から自分の事を睨みつける少年に向かって、彼女は歩み出したのだった。ブライとシュンランにも、インフィニットと同じ因縁があるのだろうとうかがえる。

それを尻目にインフィニットはいよいよ剣を構えてみせた。これまで育ててきた響ワタルという存在を、食らう時が来た。もう邪魔ものはいない。

「さて、ここまで追い詰めたら……死に物狂いで向かってくるしかないだろう」

インフィニットはフェニックス・リボンに集中し、周波数を剣に纏わせ研ぎ澄ませる。

「お前がカンナの命を奪うというのなら……俺がお前をデリートする！！」

「そうだ。その目だ。行くぞ……！！」

グッと腰を落としたかと思うと、インフィニットがフェニックス・リボンに斬りかかった。その一歩が大きく、目にも止まらない絶望的なスピードである。踏み込んだ大地に、彼の足跡がくっきりと形を残していた。フェニックス・リボンはシナジーブレードを構えた。

「コウホウゲキ！！」

インフィニットの覇気があふれる掛け声とともに、耳を劈く衝撃が空気を埋めた。

辺りの瓦礫が弾け飛び、二人を中心に小さなクレーターが出来あがる。フェニックス・リボンは片腕で、何とかインフィニットの一太刀を受け止めた。しかし途方もなく重い一撃で、フェニックス・リボンの骨格が悲鳴を上げる。すると大地の方が耐えきれず、大きな縦に伸びる亀裂が生じた。

ロックマンを始め、ワタルの仲間たちはその戦いを見守るしかできない。

フェニックス・リボンはインフィニットとの競り合いの中、彼の青い瞳を苦しげに睨みつけた。そしてキッとした表情のまま「バトルカード、ギガキャノン！」と、口頭でバトルカードのデータを入力する。電波人間として一つ上のレベルに到達した彼は、ハンターへのアクセスなしに意識するだけでバトルカードを使用できるようだ。そして驚く事に、彼はバトルカードに無限の可能性を与えたのであった。

自分の腕を変換せずに、環境周波数を操り、彼は自然を味方にする。空気中にある電磁波を操り、バトルカードの情報を連動させる。小さな太陽が宙にいくつか現れ、そこから熱線が放射された。三六〇度、あらゆる角度からインフィニットに襲いかかる。これは周波数変換術とバトルカードの応用技であった。

スバルは彼の神業に目を奪われる。フェニックス・リボンこそが、

ロックマンの到達するべき目標であろう。
しかしインフィニットはそれ以上に神がかりであった。さっと後ろに飛び退くと、軽い身のこなしで、ギガキャノンの集中砲火をかわす。それでもよけきれない砲撃は、インフィニットセイバーで軽く叩き切ってしまう。まるでフェニックス・リボンの攻撃を苦にしていなかった。呼吸一つ乱す様子はない。そしてフェニックス・リボンの小賢しい真似に、呆れを感じているようでもある。
溜め息を吐くと、怒涛の攻撃を加えるフェニックス・リボンを睨みつけた。攻撃の嵐の中、インフィニットは悠然と不動の構えを見せる。まるで彼を恐れるように、ギガキャノンのエネルギーの帯が逃げていったのである。
思わずフェニックス・リボンは自分の目を疑った。そして自分の目が信用ならないと、確信してしまう。バトルカードをさらに入力し、攻撃を苛烈にしても彼には攻撃が当たらないのだ。もはや避ける必要さえないと、その圧倒的な振る舞いと存在感で表現していた。
目の前のインフィニットの体から、ふつふつと赤い光の粒子が溢れだしてくる。色こそ違うが、それはまるで、ヘラ、スコルピオ、キグナスの発するそれと同じく、現象の行動を制限しているようだ。
しかしその出力は桁違いで、フェニックス・リボンが作り出す超高エネルギーの嵐でさえ、無効化して受け流していた。ヘラ達ではこうはいかないだろう。
インフィニットが攻撃の雨の中、向かって来る。

「俺に小細工は効かない。このワイル粒子がある限り……！」
「な、なぜだ……？！　ワイル粒子は高周波数で攻撃すれば攻略できたはず……っ」
「俺は高次元電磁波生命体の中でも最高の作品……。俺はあらゆる電波を超越した、高純度の電磁波エネルギーの塊。言わば、質量のない物質。そのエネルギーを制御する俺のワイル粒子を、下位レギオンのものと一緒にしない方がいい」

インフィニットが静かに凄むと、死の気配が辺りに漂った。雲が早く、空が赤い。

フェニックス・リボンが目の前の光景が信じられなくて、一歩二歩と後退する。無意識的にインフィニットを恐れているのかもしれない。今までの経験則から、ワイル粒子は攻略してきたと自負していた。しかしヘル・スコルピオやその他のレギオンに当てはまった事が、インフィニットにはまるで当てはまらない。

もはやインフィニットという存在が推し量れなかった。彼は同じレギオンでもまるで異質で抜けているのだ。

インフィニットはワイル粒子を操り、フェニックス・リボンの攻撃を完全に無力化してしまう。ワイル粒子の加減作用によって、エネルギーの総量を完全にゼロにされてしまった。

一瞬の沈黙と静寂に乗じて、インフィニットがフェニックス・リボンの懐に飛び込んだ。風が後からついてきて、フェニックス・リボンの頬を冷たく撫でる。

そしてインフィニットはそっとささやく。

「お前の戦闘周波数では、おれのワイル粒子は攻略できない……！小細工なしで命を懸けてみろ！！」

強い語気と共に、緑の剣が素早く振り抜かれた。フェニックス・リボンの胴体が縦に大きく切り裂かれる。その傷はとても深く、生命活動に支障をきたすほどだ。裂かれた腹からボロボロと内容物が溢れ出て、心臓の太い血管から噴水のように赤いものが鼓動に乗って放出される。フェニックス・リボンは一瞬、何が起きたかは分からなかったが、地面に転がるピンクの生き生きとしたそれを見つけ理解した。

それと同時に空っぽになった腹を押さえもだえ苦しんだ。

シュンランの檻の中で、ミソラが悲鳴を上げて顔を手で覆ってし

ゃがみこんだ。スバルもウォーロックと電波変換して、ロックバスターを壁に向かって乱射した。助けに行こうと必死だが、弱ったロックマンでは、どうにもならない。

唯一自由の利くブライも、シュンランの相手をしており、もはや手がなかった。

フェニックス・リボンが吐血して、倒れ込んだ。腹からも口からもそれは止まらない。

「ごふ……う……ウグゥ……！」

フェニックス・リボンは傷を押さえて塞ごうとようとしたが、それは手でふさがるようなものではなかった。意識が遠のく。

インフィニットが苦しむ彼を見下ろして、言い捨てる。しかし、荒ぶる脈の音や荒い呼吸と遠のく耳から、その言葉がはもはやよく聞き取れなかった。

「立ち上がってみせろ。お前はこの程度の存在だったのか……？」

無茶な要求をするインフィニット。フェニックス・リボンは体を小刻みに震わして立ち上がろうとする。ムゲンリカバリーで何とか傷を回復させようとするが、とてもではないが追いつかない。

インフィニットは興醒めしたようで、カンナの元に向かい始めた。

「やはり、俺を楽しませてくれる存在はいないのか……。カギを貰う……」

「ま、待て……！」

ずるずるとフェニックス・リボンが、這いずりながらもインフィニットに追いすがろうとする。

しかしフェニックス・リボンはもはや興味の対象ではなかった。

インフィニットは、彼がこの程度で終わってしまって、気の抜けた表情を浮かべているばかり。そしてそんな失望の中で、カンナを仕留めにかかろうとしていた。

だが、その足取りが急に立ち止まった。インフィニットは怪訝な表情を浮かべて、シュンランの檻の中を確認する。しかしカンナはどこにもいなかったのだ。檻には人一人が通れる、小さな穴が空いていた。しかし穴はすぐに閉じてしまう。

隣にいたミソラは、唖然としてフェニックス・リボンの方を見つめていた。

「カギがいない……。どこに行った……？」

インフィニットがカンナを探そうと、さらに檻に詰め寄った。するとインフィニットの背後の方で柔らかい光が差し込んできた。インフィニットが振り向くと、そこにはフェニックス・リボンに手を当てて治療するカンナの姿があった。彼女の手のひらは柔らかくて優しい光を発しており、フェニックス・リボンの失った生体機能を復元している。これはおそらく、デウス・エクス・マキナの力なのだろう。恐ろしい事にカンナはインフィニットに気付かれずに、ワタルの元に駆け寄っていたのだ。インフィニットが言っていた事は間違いではなかった。彼女はもはや――

インフィニットはそんなカンナに少しだけ呆気に取られるが、事情を理解して笑みを浮かべた。もう完全に機は熟したのだ。

「なるほど……もうカギが覚醒し始めたのか」

カンナは、もはや以前の姿ではなくなっていた。一度死んだ人間がこの世に再び生を受けるということ。そんな法則を捻じ曲げた存在が、普通の個体であるわけがなかったのだ。彼女の髪の毛は長く伸び切って、発光している。体もほのかに光をまとい、ムー大陸やブラックママル、電波障壁に刻まれていた刻印が浮き上がる。それが神聖な印象を与えていたが、人間との離別を意味していた。

しかしいくら変わろうとも、カンナはカンナである。ワタルの傷を塞ごうと必死に奮起していた。

「しっかりして、ワタルさん！」

不安そうな面持ちで、カンナはフェニックス・リボンに呼びかけた。フェニックス・リボンは息をするのもやっとで、とうとう電波変換が解けてしまう。そこに姿を現したのは、どこにでもいるスーツ姿の男性だった。長年の戦いで顔がこけてはいるが、カンナにとっては愛しい人のものに変わりはなかった。カンナはホッとして胸をなでおろした。

しかし安堵できない状況はいまだ続く。

ワタルは朦朧とした意識の中、背後から迫りくるインフィニットの姿を視界の端に確認した。ぐるぐると彼の世界が回って歪んでいるが、そのプレッシャーは本物で間違いないだろう。かすれた声でカンナに逃げるよう促した。

「何してる……。逃げろ、アイツはお前の命を狙ってるんだ……」
「ダメ……あと少しで傷が塞がるから……」

首を振って言う事を聞かないカンナ。このままではいけないと、ワタルは体を起こそうと、カンナの方に目を向ける。
するとワタルはカンナの異変に気が付いた。インフィニットばかりに気を取られていたが、驚きからワタルはまじまじとカンナを見つめた。カンナは変わってしまった。「なんだ、これは？」ワタルの脳裏に一瞬の不安がよぎる。儀式は成功したはずなのに、なぜこのような事に？　しかし、その不思議な力のおかげで、ワタルは助かったのだ。胸から腹部にかけた傷はほとんど塞がってしまっていた。
ワタルは一抹の不安を覚えた。何かがおかしくなっている。

「カンナ、どうしたんだその姿は……？」
「分からない……。けど、私の胸がとっても熱くて……すごく不思議な気持ち」
（まさか、カギ――）

どうしてこんな事に……。ワタルは困惑して、狂い始めた運命を感じた。そしてインフィニットがすぐそこまで来ている。
狂い始めた運命が訪れる。老人の言う、運命の分岐点はもう通り越してしまっていた。
それに気が付いているのはインフィニットのただ一人。
そんな事はつゆとも知らずにカンナは一息ついた。そしてワタルに切ない笑顔を残し、別れの時をほのかに伝えたのであった。

「もう大丈夫だよ。ワタルさん」

彼女の目は穏やかながら、何か覚悟を決めたようなそれであった。

一抹の不安が確信に変わろうとしていた。ワタルは何とかカンナを守ろうと、電波変換を試みる。しかしフェニックスからの応答がない。手に持ったトランサーは沈黙していた。

「フェニックス？　どうした、返事をしろ？！」

「ダメ……。ワタルさん。女王様は気を失ってるわ」

残念そうに肩を落とすカンナであった。ワタルもそれは承知していた。あのような一撃を貰って意識がある方がどうかしているのだから。しかし、それでもワタルは戦わないといけない。

なので体を起こそうとするが、もう体はワタルの意志には応えてはくれなかった。四年間、酷使し続けた体は、もう動いてはくれない。

そしてインフィニットがとうとうカンナの背後に立つ。「逃げろっ！！」ワタルは叫ぶが、カンナは首を振る。さらにはインフィニットの表情に絶望する。さきほどまでワタルに向けていた、闘志に燃えた青い炎をカンナに向けていたのだから。

「動け……！　なんでこんな時に限って、俺はいつも無力なんだ！！」

顔を青ざめさせたワタルは、なりふり構わず叫びあげた。インフィニットとカンナを引き離さなければ、恐ろしい事が起きる。しかし戦おうとしても、もう体は動かない。

カンナはそっとワタルの頭を撫で、優しく微笑んだ。今までずっと戦ってきたワタルには、もう休んで欲しかった。そしてここから先は、母親の出番。

「いいんだよ、もう。キミはもう頑張らなくていいんだよ……。おやすみ。キミとミソラ、そしてみんなは私が守るから……！」

「や、やめろ！！　バカな事を考えるな！！」

必死になって引きとめるワタルに対して、カンナは背を向ける。そして母は立ち上がって、インフィニットと相対した。スカートと袖をまくり、華奢な体を見せる彼女は、とても戦えるような姿には見えない。しかしその実、デウス・エクス・マキナのカギによって、人智を超えた存在となった彼女は唯一、インフィニットに抗う事ができる存在となっていた。

自分がなぜ生き返ったのか。そしてここで何をするべきなのか。二回目の人生に、”今”を全て懸けたのだ。カンナは光のベールをまとい、女神のような衣をまとっていく。

ここで戦えるのはカンナ自身しかいない。大切な家族と、地球人、パトラ人、ＦＭ星人、ＡＭ星人の全てを守ると彼女は決意したのだ。

「私の大切な家族を傷つけさせはしない……！！」

「フフ……ハハハハッ！　ここまでの強者と巡り合えるとは……っ。デウス・エクス・マキナのカギを奪う前に、愉しませてもらおうか……！！」

インフィニットがワイル粒子を最大解放させて本気を見せる。大気が赤い渦を巻きながら、インフィニットに吸い込まれていく。

インフィニットは辺りの空間を少しずつ蒸発させながらその場に君臨し、高らかに名乗りを上げる。

「レギオンズナンバー：ゼロ！　インフィニットの力とくと見よ！！」

人智を超えた生命のぶつかり合いが始まって数時間。スバルたちは認識した。運命とは残酷なものだと。

誰しもが、幸せなミソラたち家族のこれからを予想したはずだった。

雨が降りしきる中、その場の全員は唇を噛みしめて、情けなさ、不甲斐なさに拳を握りこんだ。たった二人の前に手を出す事も、出来なかった。

そんな中、ソウル・レイダーはインフィニットが言っていた事の意味を恐ろしく感じた。「全てを見届けろ……」この意味が今さらになって分かったのだ。彼が何をミライに求めたのか定かではないが、これらの事は全て決まっていた事のようだ。それが余計に虚しくて、切なさを生んだ。

そしてロックマンも、例外ではなく無力にも何もできない。それが悲しくて、情けない。隣で泣き崩れるミソラを、何も言わずに抱きしめる事くらいしかできなかった。ロックマン自身も酷く切なくて、何かにすがりたかったのだ。

ウォーロックは絞り出すように、自分の無力さを呪った言葉を吐きだす。

「何で……俺達は見ている事しかできないんだ……！」

ウォーロックはスバルとミソラ、そしてインフィニットとカンナを見比べた。なんど見ても、どうやっても後悔しか出てこなかった。

シュンランの光の壁は無情にも、彼らを分かつ。向こうでワタルが放心して、インフィニットの方を見つめていた。ずるずると這いずって、インフィニットにしがみつく。弱者というものが、これほどまで残酷な画を作り出すのだ。その姿がウォーロックの胸を打った。インフィニットがカンナの胸に手を伸ばした。

もうこれ以上は駄目だ。ロックマンはそう思い、ミソラを強く抱きしめた。もうこれ以上は、とても少女には耐えられない。

「ミソラちゃんっ……！！」
「ダメ！　ママぁーっ！！」

ミソラはロックマンの肩を涙でいっぱいに濡らした。そして今から起きようとしている事を、目に焼き付けた。ワタルがインフィニットの足にしがみついていた。顔を涙でいっぱいにしながら、目は赤くなっている。ボロボロになったスーツ姿が痛々しく、声を枯らし必死に叫んでいるのが分かる。

少しずつ積み上げて、ようやく実を結んだ奇跡とそれらを成す物語、その全てが終わろうとしていた。

ミソラは今までの全てを忘れない。

ワタルがカンナをこの世界に生き返らせてくれたこと。

たった一瞬だったが、それでも感じた確かな母の温もり。そして現れたインフィニット。

ワタルが命がけで戦った。しかしそれでもインフィニットは強くてどこまでも圧倒的だった。ワタルは追い詰められていく。

そんな時、カンナに異変が起きたのだ。苦しむワタルを目の前にして、カンナが胸を押さえて、うずくまってしまったのだ。そして髪の毛は急速に伸びて、体中におかしな記号が浮かんでくる。

ミソラはヘル・スコルピオの毒とその現象を重ね合わせて、酷く動揺した。しかしカンナはすぐに立ち上がった。

「ミソラ、パパと仲よく暮らすんだよ？　アナタとアナタの友達……アナタを共にここまで歩んできた全ての人を守るから……」

とても惜しく残念で、そしてこれからの未来をとても喜ばしく思っていたカンナ。そんなカンナは最後にミソラを抱きしめて、頬にキスをしてくれた。その表情は悲しいものを浮かべていたが、ミソラにはよく理解できなかった。ワタルなら勝利してくれると思っていたのだ。しかしインフィニットには敵わなかった。ワタルが切り裂かれて、ミソラはようやく気が付いた。そして光の壁を突破してインフィニットに立ち向かう母の姿を見てようやく、その表情の真

意に気が付いた。
いつも気が付いた時には手遅れで、手が届かない。そしてそれらはどうしても取り返しのつかない事ばかりだったと、ミソラは涙した。

戦いは苛烈を極めた。ワイル粒子とゼロフレームの力を完全に開放したインフィニットが、この世のものとは思えない力を振るう。それにカンナが立ち向かう。ただカンナは主婦だ。どうやっても戦闘などできるわけがなかった。身のこなしも、経験も、何もかもがインフィニットの方が上だ。
しかしそれでもカギの力は絶大で、圧倒的な電波光壁の守りと、無限のエネルギーを以ってしてインフィニットに食らいついていく事が出来た。圧倒的エネルギーをまとった彼女の平手が大地を砕き、インフィニットの装甲を破るのだ。おそらく単純な戦闘周波数と、エネルギーの総量で言えばインフィニットすら上回っていただろう。
そしてその事がインフィニットにとっては嬉しくてたまらなかったらしい。彼の喜びに満ちた表情が戦いの中に浮かび上がったのだ。そんな狂気ともとれる彼の闘争本能が恐ろしくて、ミソラは目に焼き付けられ忘れられなかった。
そして一進一退の攻防を広げられる。シュンランはその様子を黙って見つめ、ブライも黙り込む。ブライはもちろん誰も、手出しが出来ない戦いのレベルであった。音が戦いに付いていかなくて、残った建物が一瞬で瓦礫に変わる。まるで二人の間だけ世界が違っていた。
しかしカンナは徐々に血に染まっていく。だがインフィニットとて、カンナという化け物をまともに真っ向から相手取っていたためにアーマーや剣にひびが入っていく。他にいくらでも戦いようがあるだろうが、インフィニットは正面突破にこだわっていた。素人ながらも、カンナもそこに勝機を見出していたはずだ。
ミソラは必死にカンナを応援した。ロックマンもソウル・レイダ

ーもスカッド・エースも誰もが、カンナの勝利を信じた。傷だらけで、立っているのも辛いが、カンナの決死の姿を見せられたら、寝てはいられない。

何度倒されても、何度でも立ち上がる母親の姿が、彼らの胸を打つ。服を土埃でいっぱいにして、切り傷と擦りキズで体をいっぱいにしても、カンナの瞳は決して輝きを失わない。赤いワイル粒子が霧のように立ち込め、地獄の荒野と化したＦＭ星の市街で、お互いゆっくりと消耗していった。インフィニットはアーマー類が粉々に砕かれながらも、満足げに剣を振るう。カンナは電波光壁でそれを受け止める。

しかし戦いは終わる。予兆もなくて結末はとつぜん訪れる。インフィニットの振り抜いた剣が、大地を消し飛ばし、瓦礫の弾丸を弾きだした時、偶然その一つがワタルに向かった。カンナはワタルを守るように立ち回っていたが、疲れから来た一瞬の油断が生んだ出来事だった。もちろんワタルはもう避ける気力もない。カンナが瓦礫の弾丸からワタルをかばった時、インフィニットの一撃がカンナの胴を裂いた。胸がぱっくり避けて、心臓が見え隠れする。

ただ、その心臓は人間のものではなく、怪しげに輝く宝石のようなものだった。その脈を打っている様子はオーパーツのデウス・エクス・マキナそっくりだ。しかしその形態は異なっており、小さな球体の核を守るようにして、幾何学的な紋様が衛星のごとく回っていた。儀式の過程を経て、デウス・エクス・マキナがカギとしての能力を手に入れた状態がこれなのだ。

インフィニットは勝負ありとみて、カンナの首を鷲掴む。ちょうど心臓の所に目線が来るようにカンナを持ち上げる。カンナは吐血して、ショックを起こし体を痙攣させた。

「ハァ……ハァ……。これがカギだな……。今までで一番の素晴らしい出来だ。毎回苦労させてくれる……」

「カ、カンナ……！！」
「ダメ……。ワタルさん来ちゃ、ダメ……」
戦いが終わり、そして今――全てが終わろうとしていた。
ミソラは壁の向こうで叫んでいた。ロックマンに抱きしめられながらも、カンナに必死に呼びかける。空が闇に覆われて、ぽつりぽつりと雨が降り始めた。
金髪を雨に濡らしながら、インフィニットはカンナに問う。
「なぜ、さっき俺の攻撃を避けなかった？　その力があれば出来たはず……」
「わ、ワタルさんがいたから……」
「なぜだ？　生物として、お前の方が進化した存在のはず。なぜ弱者をかばう。人間の進化に反する行為だ」
「大切なものを守りたい……。それが人間ってもの……」
「それがお前にとっての人間の姿か。残念だ……もっと戦いに身を置いておきたかったが。これ以上は時間の無駄だな」
インフィニットがカンナの胸に手を伸ばす。
「デウス・エクス・マキナのカギ――お前の心臓を頂く……」
「や、やめろ！　やめてくれ！！」
ワタルがインフィニットの足にしがみついて、必死に懇願する。
彼の指の爪は剥がれてしまい、血がにじむ。たった一本の腕で必死に這いずってきた事を物語っていた。
インフィニットは冷めた目でワタルを見下ろし首を振ると簡単に言い切った。
「お前では家族を守れなかった。それがこの結末だ……」

インフィニットに足蹴にされて、ワタルは瓦礫の上を何度か転がった。背中を小さく震わせ地面にうずくまるワタルに、インフィニットは付け加えた。

「お前が俺を利用して、俺がお前を利用する。……その時点からこの結末は、〝ほぼ〟決まっていた。

この世界には、神でもどうしようもない運命というものがある。お前たち人間はその運命を乗り越え、切り開き明日へ未来へ、命を繋いでいかなければならない。それが進化だ。

だが、この程度の運命を切り開けないお前には、これ以上進化の可能性がなかったと言うだけ。もしやとは思ったが、これもまた運命」

インフィニットはワタルから目線を外す。

「俺はお前達と違って、運命を受け入れることしかできない。だから今は、カギを手にするだけだ。運命を神が切り開くために。今一度、礼を言おう。マスターの実験の協力に感謝する」

「あっ……アァあっァァァァぁああーッ！！！！！！」

インフィニットは礼を言うと、カンナの胸に手を突きいれた。体を弛緩させてカンナは胸を逸らし、声にならない悲鳴を上げる。ワタルは目をいっぱいに開いて、一瞬だけ固まってしまう。だがカンナを助けようとトランサーを取り出した。

「カ、カンナ！　このヤロォー！！」

ワタルはバトルカードをインフィニットに浴びせてやろうとするが、ワイル粒子によってデータは霧散してしまう。

「無駄なあがきだな」

インフィニットは肩に力を入れて、カンナの胸に手をさらに突き刺しを心臓を鷲掴みにする。カンナの胸から、凄まじいエネルギーの波が漏れ出してきた。インフィニットは自らの右腕をかばうように、ワイル粒子をまとわせて、デウス・エクス・マキナのカギを引き抜こうとする。赤い霧が暴れるカギを、抑制し始めた。

彼らレギオン達が持つワイル粒子の本来の役目は、敵の攻撃の無力化ではない。超高周波数を制御するためのコントロール装置であるのだ。粒子機械骨格ゼロフレームと連動させる事によって、最高密度の電磁波を制御可能にしている。それは質量のないような物質――そうデウス・エクス・マキナのカギでも例外ではない。それこそが神が生み出した夢の物質である。

「フッ……相変わらず、凄まじいエネルギーだ」

「あ――」

インフィニットは溜め息を吐くと、一気に力を込めてカンナからデウス・エクス・マキナのカギを引きぬいた。カンナの胸はぽっかりと空っぽになる。

インフィニットの血まみれになった手には、輝く星のようなものがくるくる回っていた。脈を打つかのように定期的にそれは明滅している。

「任務……完了」

目を細めインフィニットは血まみれになった右手を見つめる。そして彼はせめてもの敬意を払い、カンナをワタルに添い寝させるようにそっと下ろしてやった。

唖然とするワタルをよそにインフィニットは、シュンランの方に向き直り、その場を後にしようとする。

その時、インフィニットは振り向きざまに、ちらりとソウル・レイダーに視線を送った。これらの出来事を、インフィニットはどうしてもミライに見せておきたかったのだ。

「セツナよ。この結末にお前は何を思った……？」

ソウル・レイダーを尻目に、誰にも聞こえないように小さく呟くインフィニット。

そしてシュンランに目を移し、帰路につく。

「シュンラン。任務は終了した。帰還するぞ」

「そう……。ちょうど、私もこの子に全てを託したところだから。そうね、帰りましょう」

シュンランはブライに向かって、妖艶な笑みを浮かべる。ブライは先程からシュンランのおかげで、もはや動けなくなっていた。物理的にではなく精神的に、拘束されていたのだ。

シュンランの投げかける言葉一つ一つが、ソロに深刻なダメージを与えていた。自分が何者で、何のために生まれてきたのか。そして、シュンランとソロの関係。

「今まで伝えた事が、アナタの存在理由でアナタの全てよ。ソロ……あなたがレベル１３を導いてあげなさい。終わりと始まりが同居する、あの場所まで……」

シュンランは硬直するブライの額に、人差し指を当てる。すると憔悴しきっていたブライは発狂したように悲鳴を上げ、ぐらりとよろけてそのまま気絶してしまった。

インフィニットの元に向かおうとした振り向きざまに、シュンランはブライの方に言伝をする。そこには心配そうに、ブライに寄りそうラプラスの姿があった。シュンランはニッと目を細める。

「この子のこと、後は頼むわね。カノン」

二人は合流すると、インフィニットは最後にワタルに向き直った。やつれた印象のワタルは、とうぜんインフィニットを睨みつける。インフィニットは特に反応を見せず、淡々とした態度はそのままで、鼻先で笑っていた。

「そう睨むな」

カンナの方へ視線を流して続ける。

「俺の周波数を少しだけ分けておいた。ほんの短い間だろうが、別れの挨拶はしてやれるだろう……。だが覚悟しておけ、死と生の壁を取り払ったお前の行為は、必ずお前達に牙を向く」

インフィニットは忠告とこれからの命運を匂わせながら背を向けた。そして別れの挨拶だった。

「最後に言っておこう。お前の事は嫌いじゃなかったよ。またいつか、どこかで会おうじゃないか」

「インフィニット……アナタがそんなこと言うなんて」

「行くぞシュンラン……」

「……そうね。そうしましょう」

インフィニットは剣をしまうと、ウェーブロードに飛び上がり、シュンランも光の壁を解除して続く。彼らは目的を果たすとすぐに、

雨が降る暗闇の中に消えていってしまった。
無情な景色が広がり、今までの戦いは全て仕組まれたものだった事実が、虚無感に拍車をかける。

ワタルはどうしたものか分からず、一心不乱に拳を地面に叩きつけた。頭を飛び交う余計な思考と今までの想いを、激痛で忘れてしまいたかったのだろう。
だがワタルの頭の中では今までの努力と、血のにじむ想いが巡り巡っていく。そしてそれら全てが水泡に帰したことも理解した。
ＷＷＲを作った事も、カンナを生き返らしたことも全てインフィニットの手のひらで踊らされていただけだった。
それがとても虚しくて、ワタルはぼんやりとカンナの顔を覗き込んだ。そして頬を撫でる。温かい。もうこれから死んでしまう人間とは思えなかった。

失意のワタルの元にミソラ達が歩み寄る。ミソラはロックマンに肩を借りながら、ワタルとカンナの元に歩み寄った。その表情は、不安でいっぱいだったが、ほんの少しだけの母の無事を信じていた。
その姿に、ワタルはあの時の、四年前の繰り返しを想起させられ言葉を呑み、ゾッとした。カンナの無事を信じて医者に問いかけた、涙を堪えた可哀そうな幼いミソラ。そんな瞳が今、ワタルに向けられていた。

「ママは……ママは大丈夫なんだよね……？！　ねえ、パパ」

ワタルは俯いて、目に涙を溜めた。とても本当の事は言えない。ミソラも本当は気が付いているが、ワタルには残酷な仕打ちをしてしまう。

「パパ……返事をしてよぉ」

ミソラはワタルにしがみついて訴える。

「パパがこんなになって、ママがこんなになって。なんで……なんで……救われないの？　私たちが、なにか悪い事をしたの？！」

ワタルは首を振るが、何も言えない。雨が冷たくて痛い。心もズキズキと痛むばかりだ。

するとワタルとミソラのやり取りに、カンナがすっと目を覚ました。心臓はないが、インフィニットの言っていた事はどうやら本当だったらしい。

カンナは胸の傷に手を当てると、少し口を閉じて沈黙した。そうして、もう長くない自分の事を悟って、カンナは二人を見つめ、あえて微笑んだ。

「ミソラ、ワタルさん。私のお願い……最期に聞いてくれるかな……」

ｉｇｎｉｔ：アナタが守るべきもの

「私と、少しの間だけ一緒にいて……」

暗い空、何もない大地、しめじめと雨が降る。ポツリポツリと、それは彼らの涙を隠してしまうかのようだった。雨粒が地面に混ざる音と共に、すすり泣く声を潜ませる。一同はミソラ達を見守っているだけ。何が出来ると言うわけはなく、達す尽くすのみ。スバルもかける言葉が見つからず、ここは傍観者に徹するしかなかった。

最期の時はせめて家族だけで。それくらいしか、ここにいる彼らにはしてやれなかったのだ。

ワタルがカンナを抱き起こす。夫婦は寄り添うように互いを支えて、最期の時を感じていた。ミソラも両親に挟まれて、消えゆく母を感じている。

カンナの体は次第に透明になっていき、この世から姿を消そうとしていた。彼女は元々、この世に生きていてはいけない存在であった。まるでそんな事を告げるかのように、無に帰っていく。

インフィニットが与えた周波数が全てなくなった時、ミソラとワタルとの別れをカンナにもたらす。

カンナは手を伸ばして、ミソラの頬を撫でた。愛娘の頬は涙で冷たいが、その奥に生きている命の温かさを感じられて、カンナは安心した。ミソラを抱きかかえ髪を梳いてやる。何か少しでも、母親らしい事をしてやろうと思ったのだろう。もう時間はない。しかしカンナは幸せそうに、笑顔だけは浮かべ続けていた。また同じ空のもとで、同じ場所で、同じ世界で、娘の成長を感じられただけで、

それだけでカンナは十分だったのだ。

「ミソラ……ちょっと見ない間に、少し大人になったんじゃない？」
「ううん……そんな事ない。私はあの時のまま、なにも変わってないんだよ」

ミソラは恐る恐る血まみれになったカンナの胸を見つめた。そうした現実に何度か感情が高ぶるが、必死に抑えて目を固く閉じた。
そうやって諦めをつけて、ポツリポツリと夢見ていた事を語り始めた。

「ほんとうはね。ママともっと一緒に過ごしたかったの……。話したい事だっていっぱいあったのに、一緒にお料理したり、買い物に行ったり、いろんな事をたくさんしたかったのに……」
「ゴメンねミソラ……。でも、私は一度死んだ人間なの。アナタともう一度、生きていくことはできないみたい。でも、アナタともう一度同じ場所で向かいあえて、胸が詰まりそうだった。とても、とても嬉しかった……」
「うぅ……ママ……っ」
「ごめんよカンナ。俺がもっと強ければ……こんな事には」

必死に涙を堪えるミソラ。消えていくカンナ。ワタルは自分の無力さからうなだれて、雨に頭を濡らしていく。地面を濡らす水滴には、少なくない涙が含まれているはず。
そんな自責の念に駆られるワタルにカンナは首を振った。ワタルの血だらけになって、爪の剥がれた手を取る。この一本の腕が最後の最後までインフィニットに立ち向かったのだ。

「……違うよ。君は強い。だから私達はこうしてまた、一緒にいる事が出来るんだから。君は奇跡を起こしてくれた。私はもうそれで

十分。今ね、私はスゴク満たされた気持ちなんだ」
「カンナ……」
ワタルは顔を上げて、不安そうにカンナを見つめる。するとカンナは、ワタルに今まで感じてきた思い、胸の内を吐露した。
「今までずっと私はね、君の足手まといだと思ってた。いつも助けられて、君には苦労ばかりかけていた……」
「そんなこと……」
カンナは首を振ると続けた。ミソラに目を向ける。
「ミソラにもいろんな事を我慢させてきたね。今思えば、母親らしい事はあまりしてあげられなかったなぁ……ゴメンね、ミソラ」
「ママ……」
カンナはミソラの頭を撫でると、愛おしそうに娘を見つめる。そうやって、少し期待していた幸せ溢れる未来を、そっと胸の内にしまいこんだのだ。気丈に振る舞っているが、カンナだって悔しいはず。ミソラの言う通り、病気の体では出来なかったいろんな事をしてみたかったのだろう。普通の親子らしい事を、カンナはベッドの上でずっと夢見ていたのだから。そんな憧れに期待して、ついさきほどまで胸を弾ませていたのも事実であった。しかしそれはもう叶わない。だが、カンナはそれで良かったとも思っていた。
それら心残りと後悔、全てを理解して、カンナは一息吐く。そして納得したように、陰りのない表情でニッコリと笑った。冷たくなってきた手で、ミソラとワタルの手をギュッと握る。
「ありがとう。私は幸せだった。もう、心残りはないよ」

今までずっと言いたくても、相手がいなくて言えなかった言葉。ワタルとミソラに伝えたかった気持ち。そんなカンナの感謝の気持ちが贈られた。するとミソラは、ふわりとした感覚と共に地面に手を着いた。ワタルはミソラを抱き起こす。ミソラは怯えたように顔を上げて、カンナを見上げた。カンナの体はもはやほとんどが無に帰っている。彼女は二回目の死を迎える。そんな彼女が、これからどこに行くのかは誰にもわからない。アカシックレコードに帰るのか、それとも――一度死んだ人間が再び死する事によって、どのような結末を迎えるのかは誰も知る由もない。

だがカンナは、これから待ち受けている、無への恐怖と恐れはないようだった。一点の曇りのない表情で消えていく。

ミソラはカンナを何者かに連れていかれるような、そんな気がした。彼女の体を掴もうとするが、宙を虚しくかくだけだった。ワタルは何もできずに、カンナを見つめた。カンナの背後には闇が混ざり、星々が輝いている。もう、その時が訪れていたのだ。

しかしやはりカンナは満足気な表情だった。少し照れ臭そうにもしている。

「実はね。最後の最後でワタルさんや、ミソラ、そのお友達、いろんな人を守るために戦えて嬉しかったんだ」

カンナは自分の手のひらに目を落とすと続けた。

「こんな結果になっちゃったけど、あの時、私は生きているって感じてた……！」

今まで助けられ、守られ続けられていた病弱なカンナの素直な気持ちだった。インフィニットとの戦いは彼女にとって、何物にも代えがたい意味があったのだ。

そしてカンナは最後の時を感じてしめじめと言う。

「じゃあねミソラ、ワタルさん。私はもういなくなる。けどアナタ達二人は、幸せに過ごすのよ」
「ママ……分かったよ……！！」
「……くっ」

気丈に笑顔を浮かべてカンナを安心させようとするミソラ。それに対してワタルの表情は暗いものだった。
カンナはワタルの気持ちを察したようだ。困ったように、首を傾げてワタルにこれからの進むべき道を提示してやる。

「ワタルさん。もう、私の事は追いかけなくていいわ。アナタはミソラと一緒に生きていって」
「お、俺は結局お前を死なせ、約束は守れなかった……それに俺は取り返しのつかない事を……。そんな俺に、ミソラと会わす顔なんて……」

地面に目を落としてワタルは歯を食いしばる。ミソラも不安そうにワタルの様子をうかがっていた。もうミソラにはワタルしかいない。しかしワタルがこんな態度を取っていれば、心細くて仕方がないだろう。それがカンナには酷く悲しくて、思わず声を荒げてしまう。滅多に見せないカンナの怒りに、ワタルは面食らった。

「バカッ！　死んだ私を追いかけるよりも、いま目の前に生きている娘を見つめてあげなさい！　アナタがいなくなって、ミソラがどれだけ寂しがっていたか……！　私に囚われちゃダメ！　ミソラを見てあげて……！！　お願い、ワタルさん。キミにはまだ、目の前に守るべき家族がいるでしょう……？」

ワタルはカンナの言葉にハッとする。それは今までずっと気付い

ていたが、ずっと目を背けていた事実である。ワタルの中で様々な想いが、湧き上がりとめどない。

ミソラが危険をものともせずに、父親の元に向かおうとしたこと。あえて非情に接して、戦いから遠ざけようとしたこと。それでも向かってきたミソラのこと。そしてフェニックス・リボンの正体に気付いてもなお、父を助けようとしたミソラ。

そんなミソラから、ひたすら逃げ続けたワタル。ワタルはただただ怖かったのだ。何も守る事が出来なかった、そんな自分に向けられるミソラの眼差しが。

ワタルはミソラから逃げるように、尻もちをついて頭を抱える。するとワタルの中で、大吾の言葉がよみがえった。『触れ合いこそ、何よりの薬』今さらになってこんな言葉が蘇る。ワタルは歯を食いしばった。余計に自分の愚かさに責め立てられた。

あの時のワタルは焦るあまり、そんな簡単なことにも気付けなかったのである。そして気付いた時には、もう全てが遅かったのだ。カンナは死んでおり、自分は裏世界の王となっていた。

ヘル・スコルピオを倒した後、宇宙に行かず、平穏に身を任せていたら——ワタルは過去のあの日から違ったであろう未来の可能性をなぞる。もしあの時、フェニックスと契約も交わさずに家に帰っていれば。そうなれば、カンナの病気が治ることも、生き返ることもなかっただろう。だが、それでも家族は最後のその日まで幸せだったのかもしれない。しかしどれもこれも、今となってはどうしようもないことばかりだ。

それは全て過去の事。そんな風にワタルが後悔に駆られる。もうやり直すことはできないのだと、ワタルは諦めていた。

するとミソラが小さく震えた手を、ワタルに差し伸ばした。ミソラはありったけの勇気を振り絞っている。この手を拒まれれば、ミソラの待ち続けた人はもうここにはいない事になる。そんな事実が判明する事が恐ろしいだろう。

だが、それでもミソラはずっと待っていたのだ。四年前から、ず

っと。そして今でも待っている。ワタルが帰ってくる事を。
ワタルを苦しめているものから解き放ち、また一緒に過ごしたかった。

「……パ、パパ！　確かに、私は元気なお母さんが欲しいって言ったよ。でもね、私は……パパがいなくなってずっと寂しかった。ママが大変な時、ママがいなくなった後……。ずっと私は、パパにそばにいて欲しかったんだよ……！！」
「ミ、ミソラ……」

答えは明確だが、ワタルは今までの所業のせいで素直な気持ちを表には出せない。するとハープとフェニックスが、ワタルの背中を押した。
まだ意識がはっきりとしないだろうフェニックス。それでも無理をして、ワタルの罪を一緒に償っていこうという姿勢を見せたのだ。ハープもミソラとワタルのかけ橋をなる事を約束する。

「ホ、ホホホ、ワタル……。なにも迷う事はないわ。犯してしまった罪なら、私達と償っていきましょう。大丈夫、アナタと私なら心配はいらない。それに私に言ったわよね。周りから目を背けるなって……。目の前にいるその子に目を向けてあげなさい……」
「ポロロン。アナタとミソラならきっと上手くやれるはずよ。空白の時間は少しずつ埋めていけばいい。ね、ワタルさん？」
「お、お前ら……」

ワタルの心に突き刺さっていた、ミソラとの約束と、カンナの幻影、そして罪の十字架が少しずつ解けていく。
そしてミソラが、ワタルの胸に飛び込んで訴える。

「もう、いなくならないでパパ……！　もう、一人はいやだよぉ…

…！！」

泣きつくミソラの心からの声により、とうとうワタルの呪縛は解かれた。

ミソラを抱きしめて大きく頷いたのだった。

「俺は、俺はずっと間違っていたんだな……。俺がするべき事は、死んだカンナを追いかける事じゃなかった……。俺には大切な家族がずっといたんだ。守るべき大切な人が……ずっと俺を待ってたんだ。

今までお前から逃げ続けて、ゴメンなミソラ……」

「うん……うん……」

ワタルからやっと聞けた言葉に、ミソラの心はようやく満たされたのだった。

ワタルの心がようやく現実を受け止めて、ミソラの事を正面から向かいあい始めた。もうこの親子に心配はいらないだろう。

カンナはその様子を見届けるとようやく、安心したようだ。暗闇の空を照らしながら空に昇って、消えていく。

「一番大切な事にやっと気付いたみたいね、ワタルさん」

「ああ、心配かけてゴメン。俺はもう大丈夫だ」

カンナは不安だった部分を解消し、やっと休めると、穏やかな表情を浮かべる。そして空からミソラ達に語りかける。

いつの間にか雨は止み、儚げな光の粉が降り注ぐ。ミソラ、ワタル、スバル達は天を仰いだ。

《ミソラ、ワタルさん、そしてみんな。私はこれから天国で、アナタ達を見守る事にします。そしてワタルさんを、どうか許してあげ

て下さい》

一同はしっかりと頷き、これからは互いに助け合って未来を作っていく事を約束した。ワタルの犯した罪は大きいが、友情を誓ったＡＭ星とＦＭ星ならば乗り越えていけるはず。

そしてカンナは、インフィニットの語った恐るべき未来に晒される、ミソラ達を心配する。だがカンナは信じているのだろう。その声色は穏やかで、そのまま静寂に消えていく。

《これから迫りくる運命はとても辛く厳しいものでしょう。でもアナタ達なら大丈夫。きっと乗り越えられる……。私は祈ることしかできませんが、アナタ達の輝かしい未来を信じています……》

ミソラは最後にカンナに笑顔を送った。今の気持ちを素直に表したら、それが笑顔だったのだ。少し腫れた目で、しっかりと母との最後に向かい合う。しかし見つめる先のカンナは、もう星の一つとなっていて、目で見る事は出来なかった。だが、それでも心は繋がっていると、絆だけはこれからもずっと繋がり続けていると感じていた。

ミソラとワタルの元に仲間たちが集まり、一緒になってカンナの旅立ちを見送った。

ミソラは宇宙が広がる空を見上げて、お別れを言う。永遠の別れだが、ミソラはもう悲しくなかった。

「さようなら、お母さん……。私はもう、大丈夫だよ。こんなにもたくさんの人たちが私にはついてるから」

《フフ、本当にたくさん……。うん、もう心配はいらないね。元気でね……ミソラ》

ミソラは口元を食い締めて、溢れる想いを込めこくりと頷く。す

るとカンナは安心したようで、ゆっくりとゆっくりと夜空から彼女の気配は消えていった。そして、とうとう彼女はこの世からいなくなってしまった。夜空は星だけが輝き、静寂に包まれる。そんな中、心地よい爽やかな風がそよより、ミソラの頬を優しく撫でた。

そんな母親の余韻を感じながら、ミソラはワタルの手をギュッと握りしめたのだった。ワタルもそれを握り返して、また始めからやり直す事を自分自身に約束したのだった。

八月二日。十二歳となったミソラの誕生日は、忘れられない彼女にとって一生の思い出となった。

ほんの一瞬だったが、確かに感じた母親の温もりを胸に、ミソラは父と共に歩んでいく。

ＷＷＲ、インフィニットとの戦い。そしてカンナとの別れ。激しい戦いの末、スバル達は一時の平穏を見事勝ち取ったのであった。

あれからオペレーションアポカリプスは、数々の苦難とそれ以上の助けを受け、ＷＷＲを無力化する事に成功した。

フェニックスの命令で、ノイズウェーブにはびこっていたＷＷＲの残党を排除。ＦＭ軍とＡＭ軍が協力して、完全にノイズウェーブを解放にこぎつけたのである。

もちろん抵抗する裏の住民であるＷＷＲ残党もいたが、ＦＭ星でのインフィニットの件があり、その数はごく少数。そんな彼らを沈黙させるのには、そう時間はかからなかった。結果としてインフィニットに助けられる形となったようだ。

そしてノイズウェーブは殺伐としながらも、いつもの静けさを取り戻したのであった。

そうやって問題を解決していき、とうとう地球とＦＭ星間の交流も回復に至る。技術提供や情報提供も再開され、地球とＦＭ星間はより活発に活動を始めだす。

まず停滞していたフレンドの建造を再開し、新たなかけ橋を作ろうと急ピッチで作業が進められる。

そしてレギオンや宇宙収縮について協力して調査を始める。インフィニットが匂わせる部分は、決して無視できないのである。

そんな慌ただしい中ではあったが、一番の立役者であるスバル達

はごく普通の小学生へと戻っていた。
オペレーションアポカリプスの終了と共に、今までの全てのチームが解散したのである。そうやってスバル達は、しばらく任務も何もない状態となった。
学校に通い友達と遊ぶといった、ごく普通の日常を送る事となったのだ。
スバルは読書にふけり、あかねに頼まれウォーロックとお使いに行く。
ゴン太は牛丼屋に足しげく通う。
ミライはジョニーの元でさらなる強さを求め、訓練に励む。
そしてミソラはというと。彼女はベイサイドシティの小さな家で、ワタルと新しい生活を始めているようだ。もちろんワタルは罪を償うために、近々ＦＭ星の復興作業に赴く予定である。彼の相棒のフェニックスも、今はＡＭ女王として三賢者と共に惑星の復興へと尽力していた。
まるでレギオンやＷＷＲとの戦いが嘘であったかのような、そんな平穏な日々がしばらく続いたのであった。
しかし着実に、世界を終わらせる影は歩み寄っていた。今は、そのための小休止と言うだけだ。
ＷＷＲを倒したスバル達に、ナンバーズ（上位レギオン）との戦いが始まろうとしていたのだ。
そして場所は変わり、レギオンシンジケート『ディーヴァ』のアジト。
そこは相変わらず薄暗くて、キングの趣味でカジノのような様相

を取っている。ネオンライトが怪しく発光して、数人の人影が浮かび上がっている。

そんな組織は現在、プルト・キグナスとヘル・スコルピオを失っており、指導者の席にキングを据えていた。さらにトレイス達もプルト・キグナスの最後の自爆行為によって、ほぼ全て失っていた。

極めつけには、最近サテラポリスが彼らの身柄を拘束しようと、躍起になって探しまわっているというおまけ付きである。サテラポリスが、レギオンについてようやく本格的に捜査に乗り出したのだ。

つまりＷＷＲを倒した今、その標的がレギオンとその関係者に向いている。現状、ディーヴァは弱体化の一途をたどっていたのである。

そんな彼らの目的は、レギオンの力を使った地球征服である。しかし肝心のレギオンがいないのであればどうしようもない。大きな目的を掲げてはいるが、アジトの一室では、どこか廃退的な空気が漂っていた。

どんよりとした空気の中、大柄な男が、喚き散らす。

流星抹殺計画がすんでのところで失敗に終わってしまって、メンバーの一人である五里はすっかり自棄になっていたのだ。どかっとソファーに腰掛けて机を蹴り倒してチップを地面にバラバラにまき散らす。

その様子をハイドは遠巻きに見やると、再びオリジナルファントムのメンテナンスを再開した。こうなった五里には関わらない方がいいのだ。オリヒメと共にかつては罪を重ねた仲ゆえの判断である。

五里は手に持った酒を浴びるように飲んで、喚く事をやめない。自慢の高級スーツに唾と酒が飛び、見ていて汚らしい。

「チクショー、キグナスのヤロォ！　偉そうにするだけしておいて、結局失敗してんじゃねえか！！　地球征服するって約束だったのによ！　クソ、酒がまずい！！」

すると五里は散らばったチップを踏みならしながら、キングに突っかかる。キングは浮遊する車いすに乗っており、フワフワと揺られながら五里の方に振り向く。車いすがぐらりと揺れる。車いすへ酒瓶が叩きつけられていた。ハイドはやはり遠巻きから迷惑そうにしているだけだ。

五里は酒癖が悪い。

「テメエ！　キングじじい！　これからどうするつもりなんだ?！

ああ、えぇおぉ？」

「落ちつけ」

キングは左半分を鉄仮面で覆った独特な風貌であり、自然と睨みを利かせている。やけどの跡から覗く瞳で見据えて、荒れる五里を軽くあしらう。溜め息混じりに五里を諭してみるが、五里はかんしゃくを起こしてしまい、どうしようもない。

キングは少し距離を置いて、彼に接することにしたようだ。車いすを五里から逃がして、アジトの薄い闇に溶け込ませると、懐柔するかのように言葉を投げかける。

「どうしたと言うのかね。慌てる必要などないよ。こちらには五里とハイド、擬似的とはいえ二人のアクセス権限者がいるではないか？」

すると五里は酒瓶を床に叩きつけた。キングの言う事は確かにそうだが、自分たちの置かれた状況を考えれば、そう楽観視もできない。五里は割れた瓶に鋭い瞳を映し込ませながら、キングを睨みつけた。

キングはやれやれと椅子のレバーを引き、少し高いところに逃げる。五里が暴れた跡を見下ろし嘆息した。

「まったく、アジトを滅茶苦茶にして……」
「悠長なこと言ってる場合じゃねえんだよ！　何でもサテラポリスが俺達を探そうと、嗅ぎまわっているそうじゃねえか？！　しかも何だ。聞くところによれば、元ＷＷＲの幹部とボスがサテラポリスやＷＡＸＡに協力的だとー？！」
「落ちつけ」
「これが落ちついてられるか！」

五里の心配はもっともだろう。元ＷＷＲであるＡＭの戦士達は、基本的に地球と友好的な関係にある。彼らは現在ＦＭ星とＡＭ星で復興活動をしてはいるが、サテラポリスが協力を要請すれば、駆けつけてくることは想像に難くない。
オペレーションアポカリプスの名残からか、ＦＭ星、ＡＭ星、地球の間では連合した軍事力が実質的に出来あがっていたのだ。その戦力はかなりのものである。
例えば、アリエス・デビルやレイン・アクエリア、その他幹部達にキリン・ライトニングとボスのフェニックス・リボン。サテラポリスがその気になれば、彼らを戦力に迎えることはそう難しくないのだ。
そして彼らは、インフィニットの言う『機械仕掛けの神による選別の時』に備えて、日々力を蓄えて磨きをかけている。
それはディーヴァの現状では、とても太刀打ちできないほどの戦力だった。彼らの戦力と言えば、五里とハイドを筆頭に、キングがハッキングして盗んだ、イリーガルなアストラル達だけ。
そんな背景から、五里は身の危険を感じて苛立ちを覚えていたのだ。
ただそれでもキングは、モノクルを指で整えて余裕たっぷりな様子だ。紳士的な風体を崩すことは決してない。怖気づくどころか、かつての学友に闘志を燃やしていた。

「大丈夫、心配はない。だが……リフレインには困ったものだな……。なかなかどうして、うまく立ち回ったものだ」

どこか他人事のようなキングの態度に、五里は眉をひそめる。キングは戦闘要員ではないので、これほどまでに悠長なのだ。五里はそう思っていた。実際に戦う彼にしてみれば、そう映っても仕方はないだろう。

五里はキングに釘を刺しておく。嫌な事に寒気が差して酔いも醒めるというものだ。

「言っておくが俺は、１００００ギガヘルツ越えのヤツらとやり合う気はねえからな?!　またあんな牢獄にブチ込まれるのは勘弁だ。チッ、サテラポリスがこんなにも恐ろしいと思ったのは生まれて初めてだよ！」

五里はロストスクリームの事を思い返して、おぞけて身震いした。それでもやはりキングは自身ありありと、情けない五里に言ってみせる。

「大丈夫さ五里。何も心配はいらない。このアジトは決して見つかりはせんよ」

それでもなお心配無用とキングはニヤリと笑った。そしてフワフワと壁際に寄っていくと、一つの扉に手をかけた。真っ黒な紫色の扉である。見た目は怪しげで、薄暗い中でも異質さだけは際立っていた。

キングはかつての指導者の事を思い返しながら、甘ったるくそして情熱的に言い放つ。

「プルト・キグナスが施したこのディメンションドアのおかげで、アジトとあっちの世界は隔離されている。絶対に見つからない！こちら側から、あちら側に向かう事が出来ても、その逆は不可能！」

どうやらこのアジトには、いまだプルト・キグナスの息がかかっているようだ。キングの言う通り、プルト・キグナスの残した力によって、このアジトは異次元に隔離されている。

しかし五里は流星抹殺計画の一件から、プルト・キグナスの事をあまり信用してはいないようだった。再びソファーに腰掛けると、転がっていた酒を手に取りまた浴び始める。

「まったくじじいは良い気なもんだ！」

「いやいや、私もそれなりに考えを及ばせているよ」

疑った五里をたしなめるように、キングは鋭い眼光を薄い闇の中でぎらつかせる。彼の表情がネオンライトにいぶりだされて、不敵なものとなって浮かび上がった。

「まあ、見てなさい」それだけ言い、ディメンションドアを開け放ったのだ。謀略を張り巡らした策士の姿がそこにはあった。どうやら五里は、キングに対する認識を誤っていたようだ。

確かにキングは一度、スバルことロックマンに世界征服の野望を断たれている。しかしこの男は、目的の為ならばどこまでも悪に染まれるのだ。それがたとえ宇宙を滅ぼすことになってもだ。キングは一瞬でもいいから、地球上で一番の権力を握る人間になってみたいだけなのだ。結果がどうなろうと構わないのである。自分を満たす事実が欲しいだけ。

キングは浮遊する椅子を得意げに操り、高いところから五里を見下す。口元を引きつり、それが笑顔を作り、精彩な瞳を向けてくる。

「五ぉーぅろ里ぃー。私が考えなしの年寄りだとでも？　流星抹殺

計画の時に、私は全てを用意したのだよ……？　そう、君たちが必死に戦ってる間にね。ＷＡＸＡの注意がプルト・キグナスや、君たちに向いていて実に動きやすかった！」

キングは高らかにまくし立てる。その言葉、表情、多分な酔い痴れと興奮が入り混じっており、恍惚とも自惚れとも取れる。そしてふと落ち着きを見せると、キングは開け放ったディメンションドアの方に目をやった。どうやら繋がる先は、学校の廊下であるようだ。廊下の窓から満月が覗き込み、うっすらとした光が差し込んでくる。しかし夜の学校というのは不気味なもので、静けさと寂しさがアジトに入り込み辛気臭い。

しかしキングはそのような空気さえも、楽しんでいる様子であった。じっと積み重ねてきた彼の策略が、ようやく実を結んだのだから無理はないだろう。キングはロックマンに敗れてからというもの、ＷＡＸＡのサーバーにハッキングをしかけて情報を集めていた。再び野望を叶えるために、戦いの時をじっくりと待っていたのである。気取られないように、ゆっくりとゆっくりと長い月日をかけてその時を待っていた。

リベンジを果たすための準備、それを約一年かけてようやく整えたのだ。

確かにプルト・キグナスの流星抹殺計画で、地球を支配出来ればそれが一番良かった。だが、失敗したのもキングの計算のうちであった。

キングは言葉を続けた。

「五里、私はねＷＡＸＡのサーバーにハッキングして、ある事実に気が付いたのだよ」

「何……？」

キングは知的にモノクルに指を添えて、月明かりを反射させた。

「四月にヘラによる誘拐事件が起きたのは知っているかね？」
「知らねえ」
「まあ、無理もない。これは極秘任務だったようだからね。しかし、興味深いデータが得られたよ」
「あ、データ……？」
「そう、それはヘラの乗ってきた宇宙船のデータだよ。そこから分かった事があるのだよ？　五ぉ里ぃー？」

ヘラの宇宙船で得たデータの詳細を、キングは事細かに述べていく。なぜ彼女が人々を誘拐していたのかという理由から、レギオンの動向に至るまできっちり調べ上げていたのであった。

「どうやら彼女は、誘拐した人間のデータを採取していたようだ。そしてそのことから、彼女はずいぶん長い間、地球に潜伏していた事が分かった。そんな彼女の潜伏記録と、それに関わるデータ。……そこから一つ分かった事がある……」

もったいぶるキングに五里がチップを投げつける。キングはそれを指の間に挟むと、たちまちチップをトランプのジョーカーに化かした。そんな見事な手品に五里は拍手するでもなく、悪態をつく。
キングはジョーカー——切り札を手元でちらつかせると、くつくつと笑い始めた。そして言うのだ。

「分かった事……それは……！　地球に潜伏していたレギオンは一人ではなかったという事！　おそらく、レギオンの目的は近くない過去から進行していたのだろうね」

レギオンの目的――キングの言うヘラの行動とデータから、それは人間のデータ採取である事がうかがえる。そんな危険なレギオンがまだ地球に潜伏していると言うのだ。五里はにわかには信じられなかった。

そして忘れてはならない事がある。それはヘラの宇宙船について、キング以上にＷＡＸＡが調査をしていただろう事だ。新たなレギオンの存在を、ＷＡＸＡが見逃すとはとても思えない。

しかしその当時、キングにとって嬉しい事態が起きていたのであった。それはヘラとの戦いの後すぐに起きた。そう、ＷＷＲによるノイズウェーブ占拠事件である。そのおかげで地球は、ＦＭ星との連絡も満足にとれない状態となってしまった。結局ノイズウェーブの方に人員を裂いてしまい、情報が錯綜、少しの混乱が生まれたのである。それらの要因が生んだＷＡＸＡの一瞬の隙を、キングが突いたのだ。手薄になった宇宙船のデータを、たちまちジャックして破壊、隠ぺいしたのだった。

その事から対レギオン用のデータをオーＰＧＭに組み込めなかった事情や、ゼロＰＧＭの導入が大きく遅れた背景がうかがえた。それもこれも全て、キングが裏からデータを破壊していたためだったのだ。

だが五里は頭が悪いので、キングの話を掴めずに首を傾げているばかり。するとキングは単刀直入に結論を述べてやった。

「分からないか、五里？　私は流星抹殺計画の騒ぎに乗じて、そのデータを辿り、例のレギオンと接触したのだよ。そして仲間に引き入れたのだ！　もちろんそれらデータはあらかた破壊したから、ＷＡＸＡにまずその事は割れていないだろう……！」

「マ、マジかよ……？！　だとしたら最強のカードじゃねえか」
「まあ、そうなるな。しかし驚いた事にヤツは、地球人と共に平和に暮らしていたよ……フッフッフッフッ」

五里は驚きを隠せないようだ。
しかし本当にレギオンの協力を得られたのかは定かではない。だがキングの自信に満ちた顔つきを見る限り、嘘をついているようには見えない。恐らく両者の間で何らかの契約をかわしたのだろう。
しかし五里はさらに驚くこととなる。キングが引き入れたレギオンはかなりの手練であったのだ。

「驚くのはまだ早い。何せ、彼はプルト・キグナスなんか足元に及ばない圧倒的な神なのだから！！　彼のレギオンズナンバーは『2』だ。そう、つまりは最上位のレギオンということ！！」

ナンバー2。つまりインフィニットとナンバー1に次ぐ、レギオンシリーズにおける三番目に優秀な個体ということだ。
どうやらとてつもない化け物が、ヘラと同じく地球に潜伏していたようだ。さらには地球人と平穏に暮らしていたというのだから、そのレギオンは異質である。
いくら異質でも、それは組織としての態勢が整いつつある事を意味している。そうなってくると五里はやる気に満ちてきたのであった。なぜならそのレギオンのおかげでプルト・キグナスの穴を埋めるばかりか、有り余るほどの戦力増強を実現しているのだから。

「そうか！　意外にやるじゃねえかアンタ！！」
「フフ、私を舐めるな……。レギオンの他に上質な戦闘員も多く確保した今、我がディーヴァに付け入る隙は……ない！」

さらにキングは、レギオンの他にトレイスに変わる戦闘員も用意

したと言うのだ。どこまでも完璧なキングに五里は感動してしまったようだ。酒を浴びるのも忘れてキングに熱い視線を注ぐ。

「キング……アンタって人は……！」

「フフフ、ハハハッハ！！　リフレインには後れはとらんよ！　アイツとロックマンに目にもの見せてやろう……！！」

五里が目頭を熱くさせる。すると、キングが車いすからエアディスプレイを展開させ廊下の方に目をやる。どうやら時間が来たらしい。キングは五里に対して長く立派な顎をしゃくってみせ、簡単に命令する。

「”彼”が来たな。五里、お客様だ。迎えて差し上げろ」

そう言い、キングは五里を学校の廊下に使わせ、その彼を迎えさせる。

そしてディーヴァのアジトに入ってきたのは、身なりの良い富豪風の男性だった。同伴する五里も金持ちで、身なりは良いはずだが下品な人間性は隠せておらず、その彼とはまるで対照的であった。

そんなすらりとした初老の男性は、キングと目が合うと軽く会釈した。彼は貴族。身分を隠しひっそりと暮らしていたが、キングに見つけられてしまいこうして出張ってきたという訳である。

「お久しぶりですな。ヴィシュヌ・クローヌ・ヴェルモンド・ジョルジョワーヌ伯爵」

「ジョルジョワーヌ卿でいい」

ヴィシュヌは首を振って額に手を当てて、溜め息をつく。すると彼の相棒でレギオンが苦言を呈した。低くて落ち着き払った声がヴ

ィシュヌをさらに困らせる。

『ヴィシュヌ。少々そっけないのでは……？』

「サン、少し放っておいてくれないか……」

ヴィシュヌが思いつめた様子で、サンの言葉を流す。するとサンは実体化してキングを見やった。

このサンというレギオンは異質だ。レギオンでありながら、今までずっとヴィシュヌと共に隠遁していたのだ。そんな彼は神の命令で、ヘラから送られてくるデータと地球での暮らしから、地球人というものを観察していたのだった。彼もまたインフィニットとの言う選別の時に備えていたのだ。

しかしインフィニットとディメンション・ゴーレムの選別の時を待たずして、サンはすでに結論を出していた。

燃える太陽のような彼は、まさに灼熱の瞳でキングをじっと見つめると、キングの執念を褒めてやった。

「私達の居場所を掴むとはなかなかやるじゃないか、キサマ」

「野望の為なら、造作のないこと。私は最後の瞬間まで支配者でいたいのです……」

「なるほど。ヘラのデータを辿って、私の居場所を突き止めるだけはある……。狂った情熱が見え隠れしているな」

サンはヴィシュヌを差し置いて、キングの目的に協力する姿勢を見せた。

「いいだろう。私もちょうど、地球人に見切りを付けたところなんだ。アイツらに進化の可能性はない。わざわざマスターの手を煩わせる必要もあるまい」

そしてサンはヴィシュヌを呼びつけると、キングや五里、ハイドに見せつけるかのように電波変還を始めようとする。そうやって、自分の実力をありありと彼らに刻みつけるのだ。

ヴィシュヌが少し戸惑いを見せるが、最上位のレギオンであるサンに睨まれては反抗が出来ない。彼は、高密度、高エネルギーを持つ電波人間へと姿を変え始めた。

「電波変還……！」

アジトが激しい光に照り返されると、その光源から一体の電波人間が現れる。キングはその神々しい太陽の化身に息を呑んだ。

「おお……っ！　これは」

神にも見紛う太陽の化身が降臨したのだった。

『今の私はレギオンズナンバー：2……サン・ゴッド。地球を監視していた者だ』

燃え盛る炎の電波人間は三人を見据えると、さらに宣言する。それはプルト・キグナスよりも、メテオGよりも過酷で絶望的な、人類への試練であった。人は氷河期を乗り越えて、今を生きているが、今度は灼熱の地獄を乗り越えなければならないのだ。

サン・ゴッド。彼は太陽の化身であり、太陽に隠されたある機能を操る事が出来るのである。

『私が太陽の活動を操り、地球を灼熱地獄にしてやろう。そうして愚かな地球人を選別してみせようではないか……！』

「フフフ……さすがは最上位のレギオン。太陽の前ではメテオGさえも遠く霞みますな……。フフフ……ハハハハ！！　これで私が人

類を恐怖にたたき込み、真の支配者となれるのだ！！」

アジトでキングの高らかな笑い声が響き渡り、ディーヴァによる空前絶後の大災害がもたらせられようとしていた。

五里もキングに同調して、興奮した様子で叫びあげる。地球人抹殺による支配者への覇道を実感しているようだ。空間が切り離されたこのアジトの事だ。地球がどうなろうが、彼らは知った事ではないのだろう。自分達は生き残り、支配者になれると高を括っているようにも見える。

しかしハイドはそんな恐ろしい破滅への一歩に、うすら寒いものを覚えたのであった。

選別という名の試練。進化への試練。戦いの連鎖は終わらない。

第一のレギオン【婦女誘拐犯】ヘラ・ローズガーデン。
第二のレギオン【殺運命】ヘル・スコルピオ。
第三のレギオン【時空破壊者】プルト・キグナス。
最強のレギオン【メシア】インフィニット。
そして第五のレギオン【太陽神】サン・ゴッド。

太陽神による絶望への火ぶたが切って落とされたのだった。

そして月日は流れ、二二ＸＸ年九月三日土曜日。

その時、スバル達は軌道エレベーターの中を通っていた。もっともエレベーターと言っても、中は列車の中とさほど変わりはない。向かいの座席にはゴン太とミソラがおり、隣にはミライが座っている。ただ、大地に対して垂直に設置されたパイプの中を列車は上っ

ていくので、そこはエレベーターと言える。
ふとスバルは空を上っていく列車の中から車窓を覗き、下に広がる景色を眺めた。現在ＴＫシティの駅から出発したところなので、すぐ下にはオフィス街や、繁華街、その間を縫う道路などが一望できた。それが徐々にジオラマよろしく小ぢんまりとしたものとなっていく。雲を突き抜ければ、宇宙はもうすぐそこであった。空が青から黒に移ろっていく。
なかなか貴重な体験に、スバルはワクワクしながら、月面都市への到着を今か今かと落ち着きがなかった。
何を楽しみにしているのかというと、今回のスバル達の目的にその理由がある。彼らは晴れて完成した空間転位装置の、運転開始記念の式典に招かれていたのだ。空間湾曲装置「フレンド」はかねてよりＦＭ星人と協力して作っていた、新しい交流の経路である。依然から利用していたノイズウェーブという道は一応あったが、とても危険で、情報と物資のやり取りがはかどらない。そのために、提案されたものであった。もちろんＷＷＲの件から、ノイズウェーブばかり頼りにしていてはいけないと踏んだのだ。
そんなＷＷＲの問題もあり建造は遅れていたが、ＦＭ星人に加えてＡＭ星人の協力も得られたので、何とか予定通りにそれは完成していたのだ。
そんな夢の架け橋に胸を弾ませるスバル。だがウォーロックの方はというと、つまらなさそうにハンターの中で寝転がりながら欠伸をしているだけだ。彼はここ一ヶ月の平穏に退屈しており、今回の外出も面倒なものとしか見ていなかった。

『……ったくよ。こんな乗り物に乗らなくても、電波変換すりゃすぐに月に行けるじゃねえか』
「もう、がっかりすること言わないでよ。今回は公務で行くんだし単独行動は出来ないでしょ。それに全員が電波変換出来る訳じゃないしね」

『ああーハイハイ。ま、俺は昼寝でもするから月に着いたら教えてくれよ』

ウォーロックはエアディスプレイの中で適当に手を振ってみせると、そのまま画面が暗転する。すぐにハンターがいびきをかき始めた。

スバルは苦笑して、ハンターをポケットにしまう。すると向かいのミソラに愚痴をこぼしたのだった。ミソラは横で牛丼を食べているゴン太の食べカスと格闘していた。

「まったく、ロックはロマンが分かってないよ」

「ま、まあ。ロック君は月面都市から地球に来たわけだし。珍しくもなんともないんじゃないかな？」

「ふーん……そういうものかな」

「そうそう。あ……パパ！」

スバルの愚痴に話を合わせていると、そんな時にミソラはワタルを発見した。彼は通路を歩いてミソラの席のそばに向かって来ていた。しかし彼の周りには数人のＷＡＸＡの職員がおり、何やら話し込んでいるようだ。

ミソラは手を振ってワタルに呼び掛ける。するとワタルも気が付いたようで、小さく手を振り返してくれた。だが職員との話が重要らしく、そのままミソラの脇を通り抜けてしまった。

スバルは少しむくれているミソラを見ると、少し微笑んだ。ミソラがちゃんとワタルと上手くやっているようだったから安心したのだ。

「あれ、もしかしてスねてる？　でも忙しそうだったね、ワタルさん」

ミソラがムッとして余裕ありげに、お高くとまってみせる。すると、ワタルの実情をこぼす。

「全然、すねてませーん。でも……まあ、パパが忙しいのはホントだね。事件が終わってもさ、色々とパパも問題を抱えているみたいなんだよねー……」

『ポロロン……。まあ、事情はどうあれ、ノイズウェーブ占拠による経済的損失とＦＭ星への攻撃は重罪だものねえ。ＦＭ王が口添えしてくれたから良かったものの、普通だったら一生日を見ることは無いはずだもの』

ハープがもっともな事を言ってミソラに意地悪をする。だが、彼女の言う事はまるで色のついてない事実であり、その償いとしてワタルがこうして月面都市に向かっているその目的は、ＦＭ星への労働派遣を意味していた。

ようやく一緒に暮らし始めたがそう上手くはいかないのだ。犯した罪は償わなければならないのだから。

ミソラはハープの言葉を素直に受け取って頷いた。

「ま、ハープの言う事はもっともだよね。あれだけの事をしておいても、それでも償わせてもらえるだけありがたい……ってね？」

『あら、成長したわねミソラ』

「フフ、そうでしょ」

するとミライがミソラ達に注意する。腕を組んで眠っていたかのようだったが、ずっと聞き耳を立てていたらしい。

「おい、お前達。お喋りはいいが、少し休んでおけよ。今日一日は長くなるだろうからな……」

「あ、お前！　もうリーダーじゃねえんだから偉そうにすんなよな」

「バカめ。食べカスをこちらへ飛ばすんじゃない」

ミライとゴン太が険悪な雰囲気となるが、そのままエレベーターは宇宙へ上っていくのだった。

ｅｄｅｎ―０２：エリアさん

軌道エレベーターにより宇宙に進出してからしばらく経ち、そのころスバル達一行は月面都市ルナプラントに足を踏み入れていた。

ここはＷＡＸＡ職員が住み込みで働いている空のない街。一般の住民は暮しておらず、あくまで工業の拠点である。

そんな街の中スバル達は、透明なパイプの中を通っていた。それら通路が、荒々しい月面を縫うように伝っているのだ。そのパイプの中には、擬似的な重力と生存可能環境が用意されている。月の重力が弱く、大気がないために備えられた設備であった。そんなライフラインが月面都市の研究施設や、その他の建物へと続いているのだ。その中を通り、スバル達は目的の場所へ向かっているという訳である。

「へえ、初めて月に来たけど面白いなー。ね、ロックもそう思うでしょ？」

透明な壁の向こうで広がる無機質で固い印象の町並みである銀色に、スバルは涼しげな気品のようなものを感じていた。自然豊かなコダマタウンでは、まず見られない光景である。しかしウォーロックの方はスバルの隣で、欠伸をしながら歩いているだけだ。とくに景色には興味がない様子。

そんなロマンのない彼にスバルが肩を落とす。そしてウォーロックに月の素晴らしさと神秘を伝えようとして、ハンターの中にある長年したためた秘密のファイルを取り出そうとする。

そんな時、ウォーロックが通路の端にあるハッチ式の扉を見つけた。おそらく整備用のハッチだろう。

「お、なんだ。ありゃ？」

「あ、ロック。どこに……」

スバルの熱弁を聞く前に、ウォーロックはふらふらとリフレイン率いる列から外れる。

ウォーロックがハッチの方に向かっていき、それに手を掛けようとする。その時、ヨイリーが彼の手を叩いた。ニッコリとした笑顔の奥に怒りが見えている。

「コラ、ロックちゃん。私達を殺す気？」

「ハハハ。いや、なんだ。興味本位ってヤツよ」

するとミソラのギターからハープが飛び出してきて、ウォーロックにきつい一撃をお見舞いする。

そうして気絶したウォーロックをハンターの中にしまうと、スバルは目的の場所であるＩ．Ｐ．Ｃの研究施設に向かうのだった。

Ｉ．Ｐ．Ｃ――それはバトルカードや、さまざまな生活必需品を提供する押しも押されぬ大企業である。そして、スバル達にとって関係部会人物が務めている会社でもある。そう、式典に招いてくれた人物とはリカ社長代理であった。かつてのヘラの宿主で、誘拐犯として猛威をふるったその人である。かつてリカの言っていた「いつかまたどこかで……」という言葉があったが、彼女は今日という日を予想していたのだろう。

「リカさん。元気にしてるかな」

『ああ、元気にしてたぜ』

「それは良かった。楽しみだな」

約半年前のそんな昔の事を思い出しながら、スバルはリカの待つ場所へ向かうのだった。

そして月のＩ．Ｐ．Ｃに辿りつくとスバル達は早速、受付嬢の元に向かう。リフレインが面会の取り付けをしようとするが、どうやらその必要はまったくなかったようだ。すでにエントランスホールではリカがわざわざ降りてきて待っていたのだから。きっちり赤いスーツに身を包んだ彼女は、かつて病院で会った時よりも血色がよく、より美しかった。彼女が持つ印象的なブロンドウェーブに、スバルはすぐに気が付いた。

「あ、リカさん……！」

早速スバル達はリカの元に挨拶に向かった。

まずリフレインやヨイリー、シドウといった大人グループとひとしきりの挨拶を済ますリカ。それが済むと、リカはスバル達子供グループの方に話しかけてきた。

「どうやら元気にしてたみたいね。会えて嬉しいわ」

リカは相変わらず豊沃な笑顔を浮かべると、手を差し伸ばす。スバルは握手を返すと、今までずっと言っておきたいと思っていたお礼を言った。

「あの、あの時はゼロＰＧＭをありがとうございました」

あの時、彼女がウォーロックを引きとめて、そのプログラムを渡していなければおそらくプルト・キグナスを倒す事は出来なかっただろう。そうなっていればレコードブレイカ―で恐ろしい未来を迎えていたはずだ。

スバルは頭を下げて感謝を示す。しかしウォーロックはそれが面白くないようである。

『おいおいスバル。礼なんか言わなくてもいいんだぜ。コイツが強引に渡してきたんだからよ』

「はあ、また君は失礼な事を……」

相変わらずなウォーロックにスバルはほとほと呆れかえった。するとリカは苦笑して、ウォーロックの言葉を受け入れたようで頷いている。どうやら彼女は悪くは思っていないらしい。おしとやかに笑っている辺り、その気配は全くなかった。

「フフ、確かにそうね。でもあの時のロックくんは、無茶をしようとしていてね……見ていられなかったの。すごくスバル君の事を心配していたのよね？」

『バ、バッキャロウ。テ、テメエ……！』

なんとなしにリカに突っかかる事は危険と感じたウォーロック。これ以上恥ずかしい思いをさせられては堪らないので、彼はハンターの奥に引っ込んでしまった。

するとリカは不思議そうに首を傾げると、ある事を思い出して手をパンと叩いた。

「あ、そうだったわ。前に会った時、私にはアナタと同じくらいの歳の娘がいるって言ってたわよね？」

「え？　言ってましたっけ……？」

ずいぶんと前の事なので、スバルはすっかり忘却しているようだ。もちろんゴン太もすっかり忘れている事は言うまでもない。それが少し寂しくて、リカが残念そうに俯いて、指先をいじり始めてしまった。するとここぞとばかりにミソラが名乗りを上げた。ミソラはちゃんと気遣いが出来て、人の話した事をきちんと覚えている素敵な女の子なのだ。

「あ、はい！　私は覚えてますよ！　実はずっと気になってたんです。キッとお母さんに似て美人なんだろうなあ」

「あら、嬉しい。こんな可愛いお姉さんにずっと覚えててもらえるなんて……っ。フフ、エリアも嬉しがると思うわ」

優しいミソラにリカが頬を綻ばせていると、噂をすれば影である。エレベーターの到着音がエントランスに響く。滑らかな音に乗ってリカの娘が現れたのだ。

リカはクスリと我が娘の隠しきれない可愛さに、微笑んだ。

「あらあら、エリアったら待ち切れずに来ちゃったみたいね。」

エレベーターの扉が開くとその中から、ドレスを着た少女が全力疾走でスバル達の方に向かってきた。服装にまるでそぐわない活発な少女なのだろう。ただそれは少々行き過ぎている節があるようだ。途中にいたシドウは少女に激しくぶつかられて、手に持っていたうまい棒が宙を舞った。それが地面に打ちつけられて砕けてしまう。

「俺のうまい棒がぁあー！！」シドウのこの世の終わりとも思える断末魔がいっぱいに広がった。だが少女はそんな事を気にするそぶりも見せないで、今度はゴン太に激突して華麗に彼の巨体を沈めたのだった。すると今度はゴン太が食べていた牛丼が宙を舞ったので

ある。
　牛丼がアクロバティックに宙を舞い、残念なことにすぐそばにいたミライの頭へと見事に降りかかった。漆黒の長髪がつゆだくになるとミライはわなわなと震えだす。
　そんな光景を満足気に見届けると、エリアはくるりとスバルの方に向き直って指差した。そんな不敵な彼女は身長が低く、メトリーと同じくらいしかない。とても同じ年くらいには見えないが、スバルはその有り様に圧倒されて言葉を失った。

「ふーん、アナタが星河スバルなのね。噂には聞いていたけど、実際に会ってみるとアレね。なんだか、とーっても弱っちそう！」
「え……？　なにこの子。とってもめんどくさい」

　スバルは手で口を覆うと絶句してしまった。しかしこのままではゴン太同様、身の危険が及ぶかもしれず、敵の事をよく観察して身を守ろうとする。とりあえず今のところ、元気だけはある理解不能な少女という認識だ。しかしそのような認識で完結してしまっては、スバルにとってもエリアにとっても残念なので、スバルは分析を開始する。
　身長はやはり低くて、スバルより三つは下に見える。そして服装は豪華で、スバルの来ている安物とは比べ物にならない。ひらひらがたくさん付いたドレスという、いかにもお嬢様といった立ち姿である。やはりお金持ちは服装からして違うようだ。そしてリカと同じくウェーブのかかったロングヘアーである。だが被さるような部分の髪の色は白に近い桃で、長く垂れた灰とのコントラストがとても印象的である。目付きはツンとしていてルナと似て強気な印象を醸し出す。
　そしてスバルの分析は、わがままであろう彼女の性格を弾きだした。そして確認の意味を込めて恐る恐るリカに問いかけた。リカからこれが生まれるとは悲惨だと思ったのだろう。リカの持つ性格面

の良いところが何一つ継承されていないのだ。

「あ、あの、彼女が娘さんですか……？」

「フフ、少しやんちゃだけどね、根はとっても素直な子なのよ。本当にアナタ達と会う事をすごく楽しみにしていたのよ？　スバル君の活躍を聞かせてあげるたびにホントに嬉しそうで……」

どうやら悪い子ではないらしい。

「それにね。エリアは月での生活が長いおかげで友達も少ないの……。だから、お友達になってあげてね。まあちょっと、生意気だと思うけど、よろしくお願いしますね」

リカは楽しそうにエリアの事をスバルに話し始める。どうやらリカは悪気がなくても余計な事を喋りすぎてしまう性分らしく、今度はウォーロックに続きエリアが顔を真っ赤にしてリカに文句を垂れた。

自分のおりいった所を他人に離されて、恥ずかしいのは誰でも同じという事だ。エリアもただの女の子である。

「ちょっとママー！　そういう事言わないでよっ。謎の美少女って設定なんだからさ！　それじゃ、まるで私が寂しがってたみたいじゃないーっ！」

そんな普通な女の子のエリアにやっと、スバルは落ち着きを取り戻して、何とか挨拶する事に踏み切れた。

最初こそ暴れん坊だと思っていたが、同い年くらいの子供と接する機会が極端に少なかったのだろう。それゆえに接し方が分からなかったのかもしれない。それが分かってしまえば、スバルでも怖気づく必要はなかった。

「えと、僕は星河スバル。キミのお母さんにはとってもお世話になったんだよ。ヨロシクね」

スバルは自分が少しお兄さんという自覚から、余裕気な態度を取ってちらりと歯を見せて笑う。その演出家ぶりに、エリアは不服そうに腕を組んでどっしりと構え、スバルをぎろりと見上げる。目付きは力強く鋭く少女にしては据わっている。そんな彼女は子供扱いされる事がとても嫌で、腹が立つのである。それに彼女は中々にませていた。いつも大人に囲まれていた事が原因だろう。

「あら、中々礼儀正しいじゃない。でも、その子供を宥めるような態度は感心しないわねー！　私はアナタと一つしか違わないんだから、ちゃんと”さん”付けで呼びなさい！」

「え？　なんで年下なのに……」

スバルが首を傾げて、エリアの頭を疑う。するとエリアは大股開きで地団太を踏んで、不満をあらわにする。ただその姿はあまり品がなかった。上辺だけでも取り繕うルナの方が、彼女よりわきまえているとスバルは思ったはず。

エリアは頬を頬を膨らませて、分かり良くないスバルに言いつけた。

「バカね！　あーんもう、バカヤロウ！　だってだって、私はもう博士課程まで修了してる天才美少女なのよっ！　それに今はここでママのお手伝いしてるから立派な社会人なの！　社会の先輩として”さん”付けは当然でしょ！　分かる？　スバル？！」

リカが否定しない辺り、確かに言う事は嘘でないのだろう。

だがちゃっかりスバルの事を呼び捨てにしているエリアにスバル

は感心できず、少々疲れを感じ始めていた。ウォーロックの方はそんなやり取りを面白いものとして笑っているだけだ。
スバルは月に来て早々、家に帰りたくなってきた。

「あぁ、そっちは呼び捨てなんだね……」
『ウワハハ！　コイツは大変なクソガキだな！　いっちょまえの口聞きやがるっ』

ウォーロックも相変わらず無礼である。それはいつもの事なので、スバルはなんとかエリアの処理に集中する。
とにかくこれ以上エリアと話す事は勘弁願うので、やり取りを手早く終わらそうとしたのだ。そのためなら歳下を敬称で呼ぶ事もいとわなかった。

「まあいいか。じゃ、改めてよろしくねエリアさん」
「よろしーい！　へへッ！　じゃあ、頭なでてーっ！」

スバルの心内も知らないようで、満足した様子でエリアはニヤニヤ笑っていた。
そんな折に突然頭をなでろと言われればスバルは戸惑いよりも、恐怖が先立つ。必死に背伸びしているだけで、本当はただの少女であるエリア。それだけにスバルは戸惑いを隠せなかった。このような面倒な相手はいまだかつていなかったのだ。
そしてさらに酷い事に、かねてよりリカからスバルの事を聞かされていたエリアは、少なくない感心をスバルに寄せていたのだった。もちろんスバルにとってはいい迷惑である。
らんらんとした瞳が眩しいエリアに、スバルは戸惑いの表情だけを送るしかなかった。

「なんなんだよ……この子は」

『ま、一発頭どついてやれば、黙るんじゃねーか？』
「サラッと酷い事言うね、ロック」
「はーやーくー！！」
（なんだかなー。委員長とメトリーを混ぜてミソラちゃんで割ったみたいな子だな……）
厄介な少女との出会いに先が思いやられるスバル。とにかく適当にエリアの頭を撫でてやり、その場をやり過ごす。だが少しもの悲しくなって溜め息を吐いた。
「はあ……、何やってんだ僕は」
うなだれるスバルとは対照的に、さきほどからうずうずしているミソラ。どうやらエリアの事が気に入ったらしい。
「じゃあさ、じゃあさ、次は私の番だね！」
するとミソラがこれでもかというくらい、エリアの頭を撫でまわし始めた。ちょうど妹に対する感情と似たような感覚なのだろうか。一人っ子のミソラは、こういう歳下の女の子には目がないらしい。思えばメトリーの時もこのような感じであった。
確かにエリアは見た目だけは可愛らしい。それだけはスバルも納得していた。しかしスバルは中身を重要視するのでミソラの感情はとうてい理解できなかった。
そしてエリアはエリアで、基本的にスバルのことしか認めていない。なので、ミソラに頭を撫でられる事が気に入らないようであった。なんとなく下に見られていると思ったのだろう。ブスっとして、ミソラから距離を置くときっぱり断りを入れておく。
「ちょっと、アンタ。気安く触らないでくれるー？！　私とアンタ

は住む世界が違うのー！！　べーっだ」
「ええっひどいよー、エリアちゃん。お姉さんと仲良くしようよっ」
「あーダメダメ。そういう上から目線が嫌なのっ！」

おかしなところでプライドが高いエリアであった。そのため偉そうにしてもいないミソラにきつく当たってしまう。そんなウォーロックに勝るとも劣らない失礼な物言いに、とうとうゴン太の堪忍袋の緒が切れたのだった。

牛丼を台無しにされた上に、この横暴さだ。やはりここはゴン太の出番だろう。ミライの時と同じく、最初のうちにきつく言っておかなければならない。それが二二ＸＸ年に生きるガキ大将としての役目だから。もちろんミライにきつく言った結果、返り討ちにあった事は言うまでもない。

「テメエ！　チビのくせにミソラちゃんを侮辱したなー！！　ミソラちゃんはなぁ、俺のアイドルでしかも性格も良くて完璧な美少女なんだ！　チビのお前とは格が違うんだよ」
「あらあら、スバルの手下のクセに言うじゃん。それにおデブちゃんにチビとか言われたくないっ！」

鼻息の荒いゴン太を嘲笑するエリア。
中々険悪な雰囲気となるゴン太とエリアだった。
するとハンカチで牛丼を拭いながら、ミライが間に割って入る。
これ以上ゴン太がエリアに絡むと、彼の身に危険が及ぶと知っていたのだ。
なぜならミライは任務の上で何度かエリアと会っており、そしてエリアの従えるアレの強さを承知していた。それゆえに好きでもないゴン太の身を案じていた。

「やめておけ牛島。エリアにあまり突っかからない方がいい」

「あ、ミライ！　また俺に意地悪する気かー?!」

普段からミライとゴン太は仲が悪いので、こういう時に信用してもらえない。それもそうかとゴン太の言葉を尊重して、ミライはゴン太に背を向けた。ゴン太に見切りつけて、ミライはリカの方に向き直ると式典の予定を確認する事にしたのだった。

「ではリカさん。これからの予定でも、博士達と上で話し合いましょうか」

するとゴン太の悲鳴がエントランス内でとてもうるさく反響する。どうやらエリアに返り討ちにあったようだ。

あまりものゴン太の乱暴さに我慢ならなかったらしく、エリアの隣には赤黒い剣士型のウィザードがウィザード・オンしていた。エリアを守ろうとしたのか、彼は華麗な剣捌きで、ゴン太の服をびりびりに切り裂いていたのであった。

そんなパンツ一丁のゴン太がエントランスの真ん中で、寂しく気絶していたのだった。

ｅｄｅｎ―０３：偉大なる一族

エリアのナイトである赤黒い剣士。彼は最新型のウィザードである。

第一世代が、軍用兵器から電波変換用ウィザードへの基盤となったレイダー。

第二世代が、汎用性に富んだ一般ウィザードや、高性能型のアシッドである。

第三世代がより電波返還の負担を軽減させた、万能型のトラッシュである。

第四世代が電波変換の負担を極限に軽減し、プロジェクトＴＣを完成させたアストラル。

第五世代である彼こそが、特殊電波変換――マルチ・エフェクトを可能にする『カペル』である。

カペルはある特殊なプログラム（Ｍ．ＴＷＰＧＭ）を搭載しており、そんな特別な電波変換を可能としていた。（Ｍ．ＴＷＰＧＭ―伊集院家に伝わる、友の忘れ形見を改良したもの）

そしてカペルは驚く事に、伊集院家に伝わる伝説のナビの戦闘データを組み込んでいるために、その戦闘力は単体にして電波人間にも引けを取らなかった。

彼はエリアを守る為の完璧なバトルウィザードである。

そんなカペルに服を全て台無しにされたゴン太は、社長室の隅っ

こでうずくまっていた。そんな状況の中、リフレイン達とリカがこれから始まる式典の最終確認をしているところである。

一方スバル達子供グループは大人の話には加われず、観葉植物が備えられた部屋の脇にあるソファーで話が終わるのを待っていた。それでもミソラはエリアとお喋りをしていて、中々上手くやっているようだった。エリアも嫌がっているふりをしているだけで、ミソラの事は言うほど嫌いではないようである。もちろんゴン太はゴン太で牛丼を食べるので忙しくて、芸術的な紋様で趣向を凝らしたカーペットに牛丼の汁を飛ばしていた。そしてミライは子供であるのに、ごく自然に大人グループに入って話しこんでいた。なのでスバルだけが暇なのである。

暇を持て余し社長室をきょろきょろと観察してみるスバル。シャンデリアに、大理石の置物、リカの趣味なのか可愛らしい人形がショーケースに飾られている。そしてスバルは歴代の社長のものであろう、威厳に満ち溢れた正面写真に目が止まった。それは高級なインテリアが贅沢にあしらわれている社長室の中でも、際立った存在感を示していた。もちろんリカは社長代理なので、彼女の写真はなかった。

「へえ、さすがに大企業だけあって……全員にただならぬオーラがあるな」

『そうか？　俺には全員ただのオッサンに見えるがな。』

ウォーロックはハンターの中で欠伸をして、まったく興味がないらしい。そもそもウォーロックが興味を示す事は、テレビを見る事と、あかねの料理を食べる事と、戦闘をする事くらいであった。特に最近のウォーロックは堕落しきっており、ウォーロックこそ「ただのおっさん」と変わりない。

しかしスバルはいつもの事なので、特にウォーロックに構う事はしない。するとある二人の人物にスバルの注意が留まった。彼らの

事はスバルも知っており、一人は授業で習い、一人は大吾の同僚であった。

「あ、この人。父さんと同じきずなクルーの……」

スバルは懐かしそうにきずなクルーの一人であり、現在の社長である彼の写真をしげしげと眺める。行方不明となった彼の代わりにリカは社長代理をしているのだろう。そして昔の事に思いを馳せた。

不幸な事故によって、宇宙で遭難してしまった彼ら。スバルは彼らを助けようと、戦い続けて大吾と約束を交わしたのだった。そしてブラッド・オリジンを倒してレベッカを取り戻し、ＷＷＲとの戦いを通じてジョニーの道を正す事が出来た。だが、まだまだ行方不明のきずなクルーはたくさんいたのであった。終りが見えなくて先が見えなくて、思わずスバルの気持ちが沈んでしまう。

するとスバルの背後に人影にがぬっと現われて、スバルの意表を突いた。まるで気配を感じさせない辺りに、彼の腕が確かであると感じさせる。彼はそっとスバルに説明するように呟いた。

「彼はスティーブ・ポート・伊集院……Ｉ．Ｐ．Ｃの現社長できずなクルーの一人である方です」

「うわっ……！」

気配もなく突然背後に立たれて、スバルはさすがに驚きを隠せず彼に振り返った。彼は滑らかでいて堅固で機能的な装甲を体にまとっているが、柔らかい表情を浮かべている。

「ああ、スミマセン。驚かせてしまいましたね」

「あ、キミはゴン太の服をびりびりにした……」

「カペルです」

「あ、そうそうカペルだったね。こんにちは」

「このたびははるか遠方より、来ていただき嬉しく思っています」
「あ、どうも」

赤黒い剣士は背中にかかる銀髪を撫で、深々とお辞儀をした。中々に礼儀正しい性格のようだ。言うなれば執事のような、そんな接客態度である。物腰柔らかく、達人特有のピリピリとした威圧感を上手く隠しているのだった。

スバルも頭を下げると、カペルの性格に安心したようで緊張を解いた。すると、スティーブについてカペルに質問してみる。大吾の仲間についてスバルの興味が尽きるところはないのだ。

「ねえ、スティーブさんってどんな人だったの？　父さんが言うには、頼りになる経験豊富なベテラン飛行士って感じだったと思うんだけど……」
「ふむ、スティーブ様についてですか。彼は歴代の社長の中でも、炎山様に優るとも劣らない優秀なお方です」

カペルはスティーブの事を尊敬しているようで、彼の口から出る事がらはスティーブの輝かしい経歴の数々であった。

スバルも大吾の事を尊敬するべき人物だと思っていたが、完璧という点においてはスティーブの方が勝っていると感じただろう。大吾が人を惹きつけてやまない人間で、ジョニーが純粋で自由な人間だとしたら、スティーブは全てを兼ね備えた人間である。それもそのはずで、本来きずなクルーの船長を務めるのは彼であったはずだから。

「スティーブ様は、アメロッパ軍、さらにはサテラポリスとＷＡＸＡにおいて素晴らしい経歴を残し、そしてきずなクルーに選ばれました。伊集院家に婿入りした人間として見ても、その商才は素晴らしく、兵役と戦闘経験を生かしてバトルカードシステムを考案。Ｗ

ＡＸＡと協力してシステムを普及させ、Ｉ．Ｐ．Ｃをここまで大きくしました」

「ス、スゴイね……。非のつけどころがないや」

「そうですね。なのであの方は、私の尊敬する人の一人です。しかし、それだけに行方不明である現状が残念でなりません」

きずなクルーが行方不明であるという現状。その事実にスバルは胸を痛めた。プルト・キグナスの件を思い出してしまったのだ。極限状態とはいえ、時間がなかったとはいえ、もしかしたらきずなクルーの情報を聞きだせたかもしれなかった。スバルはそれを悔いていた。

するとカペルはスバルの気持ちを察したようで、慌てて取り繕った。

「スミマセン。決してスバル様を責めるつもりでは……」

「いや、こっちこそ気を使わせてゴメンね」

気遣いもできるカペルにスバルは好感を抱いて、今度はもう一人の気になった人物について聞いてみる。もちろんスバルも彼については勉強させられたが、一族の関係者から得られる情報は、また違ったものであるだろう。

「じゃあさ、今度は炎山さんについて教えてほしいな」

「はい。お安いご用です。……そうですね、炎山様は伊集院家の歴史上で最も尊敬できる方でしょう」

どうやらカペルの中ではスティーブよりも、炎山の方を少しだけ高位の序列に置いているようだ。

もちろんスバルもその事には納得である。伊集院炎山と言えば教科書にも乗っている、光熱斗に次いでの有名人物であるのだから。

「授業で習ったけど、世界の危機を何度も救った一人なんだよね。すごいなあ……」

「そうです。それも小学生の時にですから、とてつもないと思います。歴代の社長はみな素晴らしい方ですが、やはり炎山様は群を抜いていますね」

カペルの言う通り、炎山は素晴らしい活躍を二〇〇年前の世界で見せていた。たび重なるＷＷＷ壊滅に関する活躍、対ゴスペルにおける潜入ミッション、インターネット解放におけるチームの指揮。その全てが小学生時点で成し遂げたと言うのだから、にわかには信じられないレベルである。

そして大人になってからも、オフィシャルの長官として輝かしい功績を残した。汚点があるとすれば、熱斗の過ちを正すことが出来なかったという事くらいである。結果としてフォルテやネットナビを救う事は出来なかったが、それでも炎山という人間が残した財産は大きくて、二〇〇年後の世界にも引き継がれていた。それはバトルカードや、携帯端末、生活用品となっている。

それら貴重な情報から、スバルは知識欲が少し満たされたらしく、カペルにニッと笑ってみせた。

するとウォーロックの方がもう我慢ならなかったようだ。さきほどから集院家の素晴らしさについて耳にたこが出来るくらいに聞かされて、おちおち寝ていられなかったらしい。居眠りの邪魔をされた事を不満に思ったのか、カペルの前に実体化して言いきってやったのだ。

「オイオイ、テメエ！　炎山だか剣山だか知らねえがな、こちとらスバルと一緒に地球を三回も救ってんだぜ？　あまり、いい気にならねえこったな」

あまりにも無茶苦茶な言いがかりに、スバルは慌ててウォーロックをハンターに引っ込ませた。
ハンターがズボンのポケットの中で暴れるが、スバルは気にせずにカペルに謝った。

「ゴメンよ。ロックのやつが礼儀知らずで。たぶん悪気はないと思うから許してあげてね」
「ハハハ、大丈夫ですよ。炎山様は世界を六回も救ってますから、気にしてません。ウォーロックさんの二倍ですから気にする必要がありません」

わざわざ指を立てて六という数を強調してみせるカペル。尊敬する炎山を剣山と一緒にされてしまって、少し怒っているようだ。どうやらウォーロックはカペルと早々に敵対してしまったらしい。
そんな困った相棒と、少し気不味い空気にスバルは作り笑いしか浮かべられなかった。

「あれ、もしかして怒ってる……？」

「ええ、怒ってるわよ！　大じじさまをバカにしたバカ犬にはね！」
『バカ犬だと！　このチビ卵ヘッドめ！』

Ｉ．Ｐ．Ｃでの段取りの確認も終わり、式典の会場へと向かうリカ、リフレイン一行。そんな中で、相変わらずウォーロックは火種をばら撒いていた。
口喧嘩も盛り上がりを見せて、エリアの髪型をバカにするウォーロック。確かに卵の殻を被ったように白っぽい髪が、黒い長髪に乗っている。そんな特徴的な髪型を気にしていたのか、エリアがわなわなと震えた。

「あっもう、ダメ。もう許せなーい！」

ご立腹なエリアはウォーロックの暴言に我慢ならず、スバルからハンターを取り上げ、それを透明パイプの壁に投げつけた。ハンターが故障したのか、ウォーロックはノイズ混じりに悲鳴を上げた。もちろんスバルも、お小遣いを溜めて買ったハンターが乱暴されて悲鳴を上げている。

『ガガガッ、ガガガッ！　ガーガガガッ！！　グワァ！　ヤベエぞ、スバル！　お前が大切にしていた「少し大人のデータ。パート１から３３４」まで消滅しちまった！』
「な、なんだってー！？　僕のお宝フォルダが……！」

まるでどこかの観覧車で繰り広げられた光景が、月面をなぞる通路の中で展開される。またしてもスバルは絶望へといざなわれた。

「くぅ……。確かあの時、ハンター買い換えたんだよなあ……。はあ……また母さんにお小遣い前借りしないと」

『しっかりしろスバル！　大丈夫だ。俺がお前の本命データは死守しておいた！！　くっ……おかげで、もう、俺は……！』

思わせぶりな言葉と共に、ハンターの中でウォーロックは苦しみだした。どうやら本命データとやらを守るために、少なくないダメージを受けてしまったようだ。

ウォーロックは壊れたデータの中に飲みこまれていく。普段から整理していないため、スバルのハンターの中は荒れ放題である。もちろんトラッシュがウィザードを勤めていた時は、きちんと整理整頓されていた。

それでも深刻なスバルとウォーロックのやり取りは真に迫る。徐々にとんでもない事をしてしまったのではないのかとエリアは感じ始めていく。そのため怒りを改め始め、次第に恐怖が段々膨れ上がっていったのだ。

「え、え？　なに、どういう事……」

心配したのかエリアは泣きそうになって、スバルの元におずおず歩み寄る。もうすっかり偉そうにする演技を忘れていた。

スバルはエリアを尻目に必死にウォーロックに呼びかけた。

「ローック！　ロォオーック。ク、クソ……もうダメなのか」

『お前と過ごした、日々を忘れないぜ……ガクッ』

「ロック？　……ロック！　ロォオーック！！」

「うわーん。ごめんなさーい！」

ウォーロックがあぶくを噴きだしたので、エリアはいよいよ怖くなって取り乱す。すると頃合いとみたのか、ウォーロックが実体化して、スバルに泣きつくエリアの卵の殻をポンポンと叩いた。そう、ウォーロックの俳優経験を舐めてはいけないのだ。ミソラとの経験値は馬鹿にできない。しかし当の本人ウォーロックはエリアを馬鹿にするのだ。

「バーカ、バーカ！　俺様の名演技に騙されたな?!」

ミソラとのCM撮影の一件からすっかり自信を持っていた彼は、胸を張ってエリアにニヤケ面を浮かべていた。

下手くそな演技すら見抜けなかったエリアもエリアだが、ウォーロックも大人げない。ウォーロックの演技に同調しておいたものの、スバルは少しエリアの事を気の毒に思った。

エリアは目に溜めたものを拭いながら、再び高飛車な態度を取り出す。ルナと違って、必死に背伸びしてるだけに微笑ましいだけだった。

「だ、騙したわね?!」

「へへんだ！　やっぱりガキだな！　俺様の大人の演技を見破れなったようだな!!」

「ごめんね、エリアちゃん。でも、ハンターには乱暴しないでね?」

「ちょっとスバル!!　どさくさにまぎれて、ちゃん付けしたわね?」

「あ、ごめんなさい。エリアさん」

「いや、まあでもエリアちゃんでいいわよ。ミソラに続いて特別に許してあげるっ！」

「何なんだよ、まったく……てゆうかミソラちゃんには許してたん

だね」

『ガハハ！　まったく、おもしれえガキだ！！』

何だかんだで仲良くやっているようなスバル達。楽しそうなやり取りを耳にしながら、先頭を行くリカは微笑んだのであった。

「フフ、お友達が出来たようで良かったわ」

ずっとルナプラントにいたために、エリアは同年代との関わりが稀薄で友達がいなかった。だがそんな母の心配は解消されたようだった。

一同は式典の会場に向かう。

それからしばらくすると、式典会場のある区画にスバル達は到着した。通路を抜けたそこでは透明なパイプが大きく広がり、巨大なドームを成す。そうやって大規模な居住空間を生み出していたのだ。コダマタウンがそのまま入ってしまうくらいの巨大な空間である。それが月の中にあるのだから少々、呆気にとられる。

そんな果てしない空間は荒々しい月面においても丁寧に舗装されており、全てのパイプ通路がそこへと集まっていた。まさに情報、物資、人材、それら流通をスムーズに行う巨大ターミナルである。まるで未来の都市を思わせるその場所は、フレンドというかけ橋のためにこしらえたのであった。

その名前にして、ルナプラントの基幹部分「キズナエリア」と呼ぶ。地球が長年夢見た宇宙との友好を、この場所から大きな一歩として踏みだすのである。もちろんその区画の名前には、先陣を切ったきずなクルーへの敬意が込められていた。きずなクルーは長い年

月を置いて、ようやくその役目を全うしたのであった。ジョニーやレベッカは鼻が高いことだろう。

かような土地柄だけにスバルはワクワクし、これから賑やかになっていくであろうその街の中を軽い足取りで歩いていく。どうやらキズナエリアは地球の住民を受け入れる態勢を整えているらしく、マンションなどの高層建造物がよく目に付いた。企業の進出も考えられているのだろう、そこにはＴＫシティにも負けない大都市の外観が出来あがりつつあった。

機能的な外観は男子にとっては、胸が高まるものである。ウェーブロードと並走する列車の線路が何ともロマンティックで、スバルには堪らないのだ。スバルの胸は弾むばかりだった。

そんな高い建物と、入り組んだ空中迷路が印象的な未来都市だが、その中でも群を抜いて巨大な建造物がそれらを押しのけて存在感を示している。それは頂上の霞む二本の巨大な柱のようで、それらが巨大なゲートを作っている。あれこそが空間湾曲装置――つまり交通用ワープ装置のフレンドである。完成したそれは暗い宇宙の中でも、鈍く重厚な輝きを反射して雄々しく佇んでいた。悠然とそびえるその場所こそが式典の会場である。

夢中になる時間とはあっという間なもので、ほどなくしてスバル達は会場である巨大施設に辿りついたのであった。会場の名前は宇宙との交易の場であるターミナルフレンド。そこにはすでに式典の開始を待っている人が何千も集まっていた。

巨大ゲートの前には、式典らしく赤いカーペットが床を染め上げており、赤い道の脇には出席者用の座席が扇状に広がっていた。さすが地球における一大プロジェクトらしく、人ごみの中、各国の首脳の姿が確認できた。

すると人ごみの中の一人が立ち上がり、スバル達に向かって手を振り呼びかけてきた。体格の良い男性だ。

「おーい、みんな！　こっちだ、こっちー」

手を振っているのはジョニーであった。すでに到着していたワタルたちＷＡＸＡ班と共に、彼はスバル達の席の場所を教えてくれていた。

「あ、ジョニーさん……っ！」

パッと表情を明るくさせて、ミライはすぐにジョニーの元に向かい始めた。心なしかスキップをしているようにも見え、スバルはミライの意外な一面を垣間見たのだった。ミライはＷＲの戦い以来、ジョニーを師事してより強くなろうと訓練を受けていた。そのために信頼関係が生まれていたのかもしれない。こと電波変換におけるセンスとテクニックなら、レベッカよりも上なのだから、ミライがここ一カ月で得たものは計り知れない。

少し子供っぽいミライにスバルはクスリとする。そうしてジョニー達と合流し、新しい時代の始まりに腰を据えて見届けることとする。

席に着くと、式典の始まりを待つだけだ。するとシドウが前の座席から振り向き、スバルへと身を乗り出して耳打ちをしてきた。

「おい、スバル。一応言っておくけど。お前、心の準備はできているよな……？」

シドウの神妙な面持ちと、やけに胸騒ぎを覚える言葉。スバルは首を傾げて、シドウに質問を返した。

「心の準備……？　え、どういう事ですか？」

「あれ？　確か一週間くらい前、お前にメールを送ったはずなんだが……。聞いてないのか？」

スバルは首を振ると、連絡の途絶えた原因を探る。すぐに見当が付き、犯人に目線を送る。熱い視線に、居眠りしていたウォーロックが起き上がって呑気に伸びをする。スバルは一抹の不安を覚えながら、彼に問いかけた。今思えば、スバルはウォーロックの自堕落な生活に慣れ切ってしまっていた。それがいけなかったのだろう。

「おはよう、ロック。ねえ、メールボックス見てくれないかな？」

するとウォーロックは面倒くさそうにメールボックスの中を漁り始めた。端末を管理するべきウィザードにあるまじき、彼のずさんな性格のおかげで、ボックス内では新着メールも既読メールもごちゃ混ぜとなっていた。これでは連絡が行き届かないわけである。

もうすでにスバルは嫌な予感を確信に変え始めていた。

『あー……、なんかごちゃごちゃしてんなぁ』

「君がちゃんと管理してないから……」

『データ管理なんかめんどくさくてやってられるかよ』

「ウィザードの仕事くらいちゃんとしてよ……」

溢れかえるデータの中をかき分けて、ウォーロックはシドウの言うメールを探す。するとようやくお目当てのメールを発見したようだ。画面の中で一仕事終えたウォーロックが、封の切られていないアイコンを掲げて一息吐く。

スバルの方は溜め息を吐いた。

『未読メールが下の方に埋もれてたぜ！　ああ、ちょうど一週間前に来てたようだ』

「や、やっぱり……」

さすがにウォーロックもウィザードの仕事を怠った事を悪いと思ったらしく、咳払いをすると手紙を読み上げた。ウォーロックなりに気を使ったのか、珍しく真面目な口調であった。

だがもう手遅れというものである。

『なになに。

「星河スバル様。

此度はＦＭ星の親善大使として、来週の式典に出席していただきたく思います。

ＷＡＸＡニホン支部長官」……だとよ』

「……だとよ、じゃない！　まったく何やってるんだよロックは！！」

「まあ、なんだスバル。とにかく今からでも心の準備をしておいてくれ」

苦労しているらしいスバルにシドウは内心で同情しつつ、改めてスバルにこれからのイベントを覚悟させた。しかしスバルは実感に沸かないようで、ただただキョトンとしてしていた。

「え、でも暁さん。なぜ僕なんかが親善大使なんて……」

「いやいやスバル。お前意外に誰がいる。ケフェウス王の友人であり、ＷＷＲからＦＭ星を救うために大活躍。まさにうってつけじゃないか！」

シドウの言う通りだが、スバルがＷＷＲとの戦いで感じたものは自分の無力さだけであった。圧倒的な強さを持つ敵の前に、成す術もなかった虚しさだけがよみがえった。キリン・ライトニングにしてもフェニックス・リボン、インフィニット、宇宙はとても広く誰

もかれも化け物と変わりはない。
「はあ……僕なんて」と、そんな風にすっかり落ち込んでしまうネガティブなスバルだった。だが、シドウは気を利かして朗報を送ってやる。何もスバルの努力は無駄ではなかったという事だ。

「まあ、お前らしいと言えばそうだが、あまり気に病むな。気楽にいっとけよ。あ、そうだ、喜べスバル。お前のオフィシャルウェーブバトラーとしてのランクも上がるそうだぞ」
「あ、そう言えばそんなもの貰ってましたね」

とぼけたようなスバル。おそらくオフィシャルウェーブバトラーというものに実感がわいていないのだろう。しかしこれからサテラポリスの一員として、任務に参加する以上ランクは軽視できないものである。もちろんオペレーションアポカリプスも、ランクホルダーでなければ戦いに参加できていなかった。
そんなスバルは現在Ａランクホルダーだ。ミライはＳＳランク。シドウはＳＳＳランクである。

親善大使からランクホルダーに関するお喋りも一段落したところ。いよいよフレンド開通の記念式典が始まるらしい。ざわついていた群衆が沈黙を決め込んだ。
座席に囲まれるようにして備えられた壇上にリフレインが上っていく。毅然とした振る舞いは相変わらずで、彼には慣れたものらしく、大観衆の前にもまったく緊張した素振りを見せない。
リフレインは巨大ゲートを背後に従え、皆の視線を一身に浴びながら言い切った。宇宙と地球との歴史に刻む、新しい時代の幕開けである。

「では、これよりＦＭ星との開通式を始めたいと思います」

ｅｄｅｎ―０５：地球人の第一歩

リフレインの口上と共に、式はおごそかに始まった。淡々と、それでいて言葉の奥に力強い威厳を乗せながら彼は語っていく。主にリカと段取りした通りの言葉の数々である。フレンド計画の目的から、その意義と、諸惑星との交流により得られる数々の利益。言ってしまえば、当たり障りのない事柄。

それら事項を受けて、各国の首脳は先行きの明るい未来を予感し、リフレインの言葉を満足気に頷いていた。しかし、子供にとってはあまり面白い話とは言えず、眠気を誘う。周りに大勢の人がいなければ、いびきが相槌の代わりになってしまうだろう。

もちろん、そんな状況が続けばゴン太は夢の中。それを尻目に、スバルは心の準備とやらのおかげで眠いどころか、眼が冴えて、心臓が高鳴っている。彼は人前に上がって注目を浴びることが、何よりも苦手なのだ。ニンジンを食べることくらい嫌いで、なるべくなら近づきたくはない。

しかしそれでもスバル一人に構ってはいられない。リフレインの話がＷＷＲとの戦いに移っていった。この話題になればロックマンの大立ち回りが、否が応でも繰り広げられる。そうなれば、戦果の表彰として、舞台に祀り上げられることが予想されるのだ。

それにしても、どういうことだろう。ＷＷＲの話題を切り出すとは、リフレインやリカも、ワタルに厳しい仕打ちをするものである。フレンド建設には切っても切れない事件だったとはいえ、ＷＷＲの先導者であった彼としては耳が痛いに違いない。やはりその話題は、罪の意識を掘り返すものだったようだ。彼は少し俯いて、気分がよ

ろしくないようであった。それでも彼はしっかりとリフレインの語りに耳を傾け続け、自分の犯した所業を受け止める姿勢は見せていた。

そんな殊勝な心がけにミソラは、父の事をほんの少しだけ誇らしく思ったようだ。膝の上に置いた拳が小さく握られたのだ。胸も少しだけ温かいもので満足していた。

しかし誇りとは別にして、ワタル本人はこれからの展望に少しだけ胸が痛かった。彼の先行きは暗いものであるのだ。なぜなら彼は地球上に存在する個の力としては、今やロックマン以上の逸材として認められている。正直なところ、各国にとっては良い研究材料であるのだ。プロジェクトＴＣがアストラルによって完成を見せたと言っても、まだまだ改善の余地がある。ロックマンクラスの量産電波人間を生み出すということが、お偉方の最終目標なのだから。

さらに言えば、極度に逸脱した力というものは均衡を台無しにする。まさにフェニックス・リボン自身がそれで、今の地球の軍事情勢に対するバランスブレイカーであった。電波を用いた半永久の無公害エネルギーを得た人類に、戦争はまったく必要ないが、フェニックス・リボンの存在はそれを度外視してしまうほどに危ういのである。彼が一人いれば小国ならば制圧することが可能であるのだから。

もちろん宇宙が異常事態となっている今、人間同士で争っている場合ではない。しかし人間は知恵をもっているがゆえに愚かでもある。計略を張り巡らし、自分に酔い痴れ、危険な綱渡りをどうしても行ってしまう生き物である。

そのような危険因子を察知し、とうとうニホン政府は、響ワタルをＦＭ星の復興という名目で地球から追い出す事に決めた。ジョニーやレベッカも危険生物ギリギリの水準に達しているが、英雄きずなクルーという立場があったのでワタルのようにはならずにすんでいた。もちろんそれら後ろ暗い要素はミソラには言えない大人の事情である。ＷＡＸＡを始めとした政府機関は、一見して正義の味方

ではあるが、全てにおいて潔癖とは言えない。
しかし悲しいものだ。カンナに本当に大切にするべき事を教えてもらったのに、自分自身の行いによってそれさえもワタルは叶えられない。ミソラと過ごした一カ月足らずは幸せの連続で、それだけに夢であり、訪れる終りはとても早かった。

そんなＷＷＲとの過酷な戦いが告げられる会場の中、スバルは自分の事で手いっぱいで、ワタルの気持ちを察する事も出来なかった。スバルももしかしたら、ある水準を超えてしまったら地球人としてではなく軍事兵器として目を向けられる日が来るのかもしれない。
ロックマンは英雄として取り上げられてはいるが、もしかしたら化け物として扱われる日が、いつか来るのかもしれない。
英雄と呼ばれる以上は、スバルは戦うしかない。化け物と呼ばれようとも、その時に全ての戦いが終わっていれば、それが平和という事になる。それがスバルを始め、戦う者たちが求める未来であるのだ。
式典の場にして各国の首脳が集まる空間である以上、世界の欲望がうっすらとスバル達を包むように立ち込めていた。
そんな中で、スバルは心の準備に奮起し、ワタルが心に影を落としている。すると、ようやくリフレインが話に一区きりをつけて、スバルの名前を上げたのであった。紹介の名分は「英雄ロックマン」であった。高まる緊張に連動する高鳴る心臓に踊らされたように、スバルは席を立った。
シドウからの激励の意味が込められたうまい棒を受け取ると、リフレインの元に歩いていく。人前に出ることは小学生の少年にとってはまだまだ不慣れなもので、この時ばかりはルナの事を尊敬してしまう。生徒会長と親善大使とでは多少の意味合いは違うが、それでもスバルにとってはどちらも計り知れない役目であった。
壇上に何とか上りきったスバルは人々の視線にさらされて、気が遠くなる。強敵からの命を狙う攻撃よりも、じっと見つめる大量の

瞳には独特の恐ろしさがあったのだ。何をするでもなく、ただ見つめているだけという行為が不気味である。

スバルは息を整えようと、そっと息を吸い込む。するとリフレインが小声で呼び掛けて、地に足が着かないスバルを落ちつかせた。厳格で良く知られた強面の中年が放つ、呆れるほどの優しげな声調はギャップに目覚ましく、慌ただしかったスバルの気持ちも紛れていった。

小首を傾げてスバルの調子を問うリフレインに、スバルはしっかりと頷いて顔を引き締める。

壇上でリフレインがスバルに求めた役がらは、先の戦いでの英雄であった。スバルはロックマンとして、地球の代表を努めなければならない。

しばし求められる分の姿勢を貫いていると、リフレインがスバルに表彰という形で、オフィシャルウェーブバトラーのライセンスカードを渡してきた。壇上で大々的に行われる昇進に、ロックマンは名実共の英雄に押し上げられたのであった。カードには「ＳＳ」という刻印が、誇らしげに存在を強調しており、スバルの目に飛び込んできた。彼はランクに興味がないが、周りの拍手に晒されると少しだけ鼻が高かった。

そして次にスバルに求められた役がらは、ＦＭ星と地球を繋ぐ親善大使だった。リフレインが不意に手を上げてどこかしらに合図を送る。すると、背後の巨大な門にエネルギー供給が行われて、塔と塔との間に薄い膜が張られる。ちょうどシャボン玉のような、雨の日の道に撒かれた燃料のような、鮮やかな色である。それを境にして地球側とＦＭ星側が現在繋がっているのだ。

事前に稼働テストは行っているだろうが、それでも第一歩を踏み出すその身にはプレッシャーと恐怖がのしかかる。一番最初にフレンドを介してＦＭ星の大地を踏む地球人となるのだ。理由などなくても、その責任は重大だろう。フレンドという門が今ばかりは、魔

界へと繋がる薄ら寒い、巨人の口に見えている。それでもスバルは観衆の視線を背負っているのだ。ＦＭ星への門をくぐろうと試み、一歩一歩足を踏みしめた。しかし巨人の口とはよく言ったもので、薄い膜の表面からは空気の震えから息づかいのようなものが漏れ出しているのである。それは近づけば近づくほどに顕著になっていく。フレンド装置にはリフレインの太鼓判が押されているが、ここまで来てスバルは不安になってしまった。

　するとウォーロックが見かねたのか、勝手に実体化して門をくぐってしまった。こういう時の彼は頼もしい。膜に吸収されたように彼の姿は消えてしまい、おそらくＦＭ星の大地に辿りついていることだろう。彼に引っ張られる形でスバルも勇気を振り絞り、思い切って目をつぶって飛びこんだ。海に飛び込む訳でもないのに、なぜか息まで止めて念には念を押している。

　一瞬だけピリッとした感覚が肌を突っついたが、大事はないようだ。足裏に残る壇上の固い質感が、柔らかなものに変わる。

　そして、恐る恐る目を開ける。心地よい風が頬を撫でて、雲ひとつない空が視界に飛び込んだ。視線を下ろすとそこにはウォーロックがおり、隣にはケフェウスがいた。王冠をかぶった緑色の少年で、マントを大きく背中から垂れ下がらせているのだから間違いない。見知った顔以外にも、ケフェウスと同じ電波生命体がちらほら確認できる。

　どうやらスバルは原っぱの上に降り立っており、ＦＭ星人の面々が出迎えてくれていたようだ。

　ケフェウスはスバルが来た事を確認すると、すっと手を差し伸ばしてくる。握手を求めているようだ。原因不明の電波化の実体化現象が起きている現在、電波体との握手は可能である。スバルはケフェウスの友好を求める呼び掛けに応じた。長い距離、長い時、数々の出来事を越えて向かいあう二人の友人。

　肌色と緑色の手のひらは途方もない距離を感じさせるが、それを越えて握手が交わされた時、ケフェウスは王族らしい柔らかな笑顔

を贈ったのであった。

「ようこそＦＭ星へ」

ｅｄｅｎ―０６：のどかな草原での出来事

スバルが地球人第一号としてＦＭ星に無事到着すれば、その他の一行もフレンドを介して続いてくる。リフレインや各国首脳陣、ＷＡＸＡ、サテラポリスの大人グループ。そしてミライやミソラといった子供グループ。スバルとケフェウスが会話に花を咲かせようとしていたところに、ぞろぞろと姿を現してくるのだった。

ケフェウスは地球人面々を認めると、王の立場に振り返り、彼らを王宮へと案内する事にする。

「地球の皆、よく来てくれた。さっそく我々の宮殿に案内させてもらうよ」

愛想よく言うと、後ろに控えていたお手伝いさんに、ケフェウスが目配せをする。しかし案内すると言っても、そこには原っぱが広がっていて、目に付くものと言えばフレンドの高いゲートくらいだった。乗り物が見えないあたり、徒歩を強いられそうである。それだけにゴン太が顔を苦くしてしまう。するとお手伝いさんがさすがの働きを見せたのだった。

電波生命体とは何とも便利な生き物なのだ。一見して歳を召した老人風のお手伝いさんだったのだが、粘土細工の要領で体を変化させると馬のような姿に変わった。後ろに控えていた数人のお手伝いさんも同様に変身してしまう。おそらく彼らは麒麟座かペガサス座の、そのどちらかの血筋なのだろう。ご丁寧な事に、荷車もマテリアライズしてくれて馬車の完成だった。まったくもってハイテクな

のかローテクなのか良く分からない一部始終である。
ケフェウスは乗り物が出来あがるのを見届けると、どこかおとぎ話のようなそれの中に乗り込んだ。脇から下がるカーテンから手をちょいちょいとさせ招いてくる。

「さ、遠慮せずに乗ってくれ」

少し驚いたのか、顔を見合わせる地球人一行。するとスバルが先陣を切って馬車に乗り込んだ。全員が乗り込むと、そのままのどかな原っぱの中、馬蹄を鳴らして駆けていった。

馬車の中は意外と広く、備えつけの座席も高級仕様で、腰がどこまでも沈む具合だ。そのため地球人でも居心地は良かったらしい。そんな落ち着ける場所を見つけたことで、スバルはふーっと一息吐く。

ほど良い暖かさの風がカーテンの間から吹き抜け心地よい。景色も緑でいっぱいで、無性に楽しいものを感じさせた。さすがに王族の足であって、安らかでのんびりとした一時を提供してくれている。

のんびりついでに、スバルはようやく再開した友人に語りかける事にする。何気ない会話を楽しめそうだと感じたのだろう。

「すごいねケフェウス。ここって、こんなに空気が気持ちいいんだね」
「そうだろう？　我がＦＭ星は緑豊かで、空気がうまいからな」
「コダマタウンよりもおいしいかもね」
「コダマタウン……スバルのお家がある場所だな？」
「そうだよ。家には母さんとメトリー、夜太郎さんがいてね、今は

お留守番してるんだよ。今度来てみるといいよ。もういつだって、遊びに来れるんだからね」

「ふふ、余はとても嬉しいぞ。なるほど、こういうのがトモダチというものなのか……」

感極まったのか、しんみりとするケフェウス。だが、これはいけないと思ったのか、すぐに思いなおり顔を上げる。そうやって元気良くスバル達に歓迎の意を示したのだ。

「おっと、いかんな。みんな、王宮に着くまでの間、この星の環境を楽しんでくれよ！」

「あはは、そうさせてもらうよ。この環境は羨ましいほどだからね」

確かに羨ましいほどのものをＦＭ星は持っている。この星は地球以上に技術が進歩しているのにもかかわらず、環境はまったく汚染されていない。地球人の歴史上どうしても両立できなかったことをさも当然のように実現していた。しかし、ずっと無公害な電波エネルギーを活用していたのだから、ある意味当然のことかもしれない。

そんなＦＭ星の牧歌的で美しい風景、淀みない空を満喫している一同。その中で思わずミソラは伸びをして、少しだけウトウトとし始めた。

「ホントに空気が澄んでいるって感じだねー」

『でもよミソラ。ホントは驚いてるんじゃねーか？　宇宙服なしで、他の惑星に行き来できることによ』

何とも女の子には面白くない話題を振って、雰囲気を壊してしまうウォーロックだった。のどかな場所なのに、現実的な話を持ち出して、白けさせるのだ。しかしスバルもスバルで食い付きが良かったのがまずい一方だ。ミソラは一気に現実を突きつけられたようで、

がっくりと肩を落とした。

「あーあ、ロック君……せっかく、シンデレラ気分だったのに」

『お、ワリイな！　でも、俺こそ驚いてるんだぜ？　だって、お前らが平然とこの環境に慣れちまってるんだもんな』

まるで反省していないウォーロック。それでも宇宙的な話題である以上、スバルも悪い気はしていないらしい。メルヘンチックな事よりも、この宇宙で遠く離れた星の中、息を吸って吐いているという事実だけで満足らしい。どうにもスバルのこういう所が、珠に傷だった。

もちろん同乗していたゴン太もロマンチストではない。繊細な乙女心など生まれた時に母親に預けてきたらしく、いつものように牛丼を食べていた。

ミライもミライで、頬杖をついてそっぽを向き、窓から覗く景色を眺めていた。一見、我関せずの姿勢を貫いているが、誰よりも乙女心を持っている彼こそ、この素敵な光景が楽しくてたまらないのだ。もちろん、そんな顔をスバル達に見られるのが嫌で、そっぽを向いているということはミライだけの秘密である。

もちろんウォーロックはそれにちょっかいを出すのである。

『へえぇー、コイツぁ……。おい、スバル！　このスカしマゲ、頬染めてやがるぜ！　うへへへ、このムッツリ野郎が！』

「え、あのミライ君が？！　嘘だ！」

クールで厳しいというイメージくらいしかミライに抱いてなかっただけに、スバルは信じられない様子だった。だが、ムッツリという単語が魅力的で、素早くミライの顔を覗きこもうとする。しかし、ミライも今までのイメージというものがあるらしく、首をグルンと回してスバルから逃げた。しかしミライが向いた方には、目をらん

らんと輝かせているミソラが待っており、鉢合わせとなってしまった。素早い反応でミソラはギュッと手を取り、ミライという同志の存在に感激する。ミライは恥ずかしくて死にそうだ。

しかし体に触られることがなによりも大嫌いなミライである。上気し、ふるふると首を振って手を払おうとする。だが、ミソラはがっしりと掴んでおり、振りきれなかった。

「ええいっ、離せ……！」

「うれしい、ミライ君って、そうだったんだね……！！」

「〝そう〟……って、なにか引っかかる言い方はやめてくれ！　俺は、そんなんじゃない！」

「いいんだよ、隠さないで！　うんうん、前々から怪しいと思ってたんだよー。男の子なのに顔も綺麗だし、何気に女心分かってるし……。それにハンターの中に可愛いぬいぐるみの画像がたっくさん！」

ぬいぐるみがたくさん。スバルは何事かと思った。ぬいぐるみがたくさん。あのミライが、そうなのだ。スバルはそっと考える事をやめた。

しかし昔の性分とはどうやっても隠しきれないようだ。必死に今まで隠していただけに、ミライの精神的ダメージは大きい。

「ひ、響……！　お前、見たのか？！　いつだ？　いつなんだ……？！」

「ガシャシャシャ――って言えば分かる？」

可愛く下品な笑い方でミライの天敵の真似事をするミソラ。皆まで言わなくても、ミライは全て悟ることができたのだ。

「あぁ……あの時か……」

「ゴメン、仕方なかったんだ。あの試合の後、錯乱したミライ君をお家に帰すために住所を調べたら……フフフッ！」

「……や、やめろ！　そ、その嬉しそうな笑いは何だ?!　わ、分かった。もういいから、離してくれ……っ」

憔悴しきったミライはがっくりとうなだれて、生気なく声を絞り出す。とにかくもう放っておいてほしいのだ。乙女チックな話しが分かる相手である以上、ミソラはまだまだ攻め手は緩めなかった。スバルにはまったく期待できない以上、ミライに対して執拗になってしまう。

そうなると、いままで積み上げてきたものが崩れるような、そんな音がミライの頭の奥から聞こえてきたのだった。

「エヘヘ、今度からは、ルナちゃんメトリーちゃんとエリアちゃんとで、一緒に可愛いもの探しに行こうね！　ルナルナ団として！」

「や、やめてくれ……！　あの委員長に知られたら……俺は……俺は……！　もう、学校に行けなくなる……」

さんざん格好つけて、少し上から目線でルナを小馬鹿にした態度を取り続けた以上、そのような部分を見られる訳にはいかないのだろう。何を言われるか分かったものではないのだ。そのため声が少しずつ消え入り、儚げである。

しかしその様子は、友達と急激に距離が縮まっているようにも感じ取れる。それが嬉しいのか、レイダーは心の中で微笑んでいのだった。

それに、厳しい戦いを勝ち抜いて、一度や二度でもない死線をくぐり抜けた以上、いまさら隠しごとも無粋であるだろう。――実は可愛いものが好きだった。たったそれだけの事である。ゴン太以外、誰も馬鹿にはしないだろう。

レイダーは心の中でそっと涙した。

（ミライ様……いつも任務が終わったら、一人で可愛いアイテムを探してましたね……。シドウさんとか、ヘイジさんに隠れて、ガチャガチャを回した日々はさぞ辛かったでしょう……。それでも使命のままに強くあろうと無理をして、でもやっぱり可愛いモノも大好きで・……あぁ！　胸が痛い！　そんな……そんな背中が少し寂しくて……私は密かに心配していたんですよ？　……でも、ようやく理解しあえるお友達が……。うぅ……レイダーは今、とても嬉しいです！！）

ｅｄｅｎ―０７：仕組まれたこの世界

馬車の中、レイダーやスバル達は楽しそうに過ごしていたが、それを見つめるケフェウスの表情は陰っていた。その原因はウォーロックの「ＦＭ星の環境に地球人が慣れきっている」という旨の言葉にあったのだ。

その言葉は、ＦＭ星のある宙域に伝わる伝承と密接に関係している事である。そしてこの世界に生きる知的生命体が、電波体と人間しかいない原因にも関係していた。それが今回、スバル達地球人をこうして招き入れた理由にもなっているのである。

伝承――そう、レギオンに関する伝承である。今日という日、ケフェウスは地球人達と一緒に、謎に包まれたレギオンの生体に迫らなければならないのだ。それらがケフェウスに少しだけ陰鬱なものを感じさせていたのである。ＷＷＲの件もひとえに、レギオンのリーダーであるインフィニットが仕組んだ事である以上、その感情も当然であった。大きく見れば、ＦＭ星を襲ったのもレギオンということになるのだ。

しかしそれでも馬車はひたすら進んでいき、やがてＦＭ星の市街に入っていった。のどかな原っぱだった景観が、ＷＷＲの爪跡が残るものを晒し始めていくのだ。復興を見せ始めているとは言っても、やはり瓦礫が道路までに及んでいる状態が散見された。この分では王宮もまだまだ荒れ果てた状態であろう。ましてや、インフィニットに細切れにされたのだから、建物として存在しているのかも分からない。

それからしばらく馬車に揺られていると、一行は王宮の前に到着したようだ。仕事を終え、お手伝いさんが人型に姿を戻すと、スバルも車の中から降りていく。一息つく地球人達に、ケフェウスは自分の城を改めて紹介した。手を後ろにやって示されるそこに、地球人達は注目すると目を丸くさせる。

驚いた事に、ことごとく細切れにされたはずのＦＭ王宮は、しっかりと建物の様相を成していたのであった。確かに、まだちらほらと崩れたところが見られるが、それでも王宮と呼ぶにふさわしい立派な佇まいである。

あの時、事の始終を見ていただけに、スバルは信じられず開いた口が塞がらなかった。

「驚いた……。もう、こんなに直ってるんだ」

スバルの率直な感想に、ケフェウスも同感らしく、何度か頷いて見せる。この場にいない立役者に感謝するように、彼は王宮の姿をまじまじと見上げて感慨深そうに言う。

「余も驚いているよ。手を貸してくれた女王とＡＭ星人達に感謝しないとな」

ここ一カ月の間で、どうやらＡＭ女王達ＡＭ星人のグループは王宮の復興に尽力していたようだ。自分の犯した罪の象徴であるこの王宮を、一刻も早く立て直して贖罪としたかったのだろう。

自分の惑星よりも、王宮の立て直しを優先したその働きから、彼女の誠意が伝わってくる。しっかりとけじめを着けて、フェニックスは今はＡＭ星で汗を流しているであろう。そんな相棒の素晴らしさに、ワタルは義手となった方の手で鼻先を擦ってみせた。少し熱い顔を、冷たい義手で冷やそうという事なのだろうか。

「なるほど。フェニックスのヤツ、粋な真似をしてくれるな」

片方の腕を喪失しても、感極まる彼の見た目には違和感ない。二三世紀の義手の性能は素晴らしいようで、ごく自然な動作で振る舞っていた。

そしてスバル達はケフェウスに導かれるように、正面の大仰な門をくぐっていく。

ワタルは王宮の中に入っていく一同に続くため、偽物の手に本物の優しさ込めて、ミソラの手を握ると一緒に歩き始めた。この星でやるべき事がある以上、最後の親子の時間を大切にしたいのだろう。

確かに大切にしなければならない。しかしワタルも、ミソラもまだ気がついていないのだ。これからの運命というものを。インフィニットの言っていた、秩序を取り壊した者への裁きというものを……。

そして一行を迎え入れたFM王宮の会議室。

そこでは大人グループが、ケフェウスとその幹部達とこれからの方針を決めるための話し合いを行っていた。さすがにこれ以上、宇宙収縮に関して手をこまねいている状況を続けるわけにはいかないのだ。そのためか、各国の首脳陣とリフレインの会議へ臨んでいる姿は、引き絞った弓の弦を思わせるほどの気配を感じさせていた。

この状況から分かる。フレンドという道を作ったのも、こうして顔を会わせたのも、式典を行うためではなく、こうやって星のトップ同士が話し合いをする為であるのだと。ノイズウェーブ経由では、とてもではないが電波変換が出来ない首脳陣が話し合うなんて事は出来なかっただろう。ここまで漕ぎ着けたことにより、謎だらけであるレギオンに対して、やっと本格的に攻め手に転じることができる土台を築いたのであった。

そうやって実現したこの会議の内容は、主にレギオンの今までとこれからの動向や、インフィニットの言った「機械仕掛けの神による選別」に対抗する手段。そしてＦＭ星人が持っている、レギオンの伝承に関する事柄の数々である。それら情報をやり取りして、終りに近づくこの宇宙が救われる方法を模索していく。

そして今の話題は、ケフェウスが持っているレギオンの情報についてであった。ケフェウスの語るそれは、にわかには信じられない内容であり、各国の首脳陣はずっと難しい表情を浮かべていた。首を傾げて唸る者もおり、よほど非現実的なのだろうとうかがえる。そこで地球側を代表して、リフレインがケフェウスに改めて内容の確認をとった。

「つまり……レギオンは宇宙の終わりに現れる存在。そして彼らは宇宙ではない世界――いわゆる『外の世界』からやってきた存在ですと……？」

肯定の意味を込め、ケフェウスがコクリと頷く。そんな事実が馬鹿馬鹿し過ぎて、チョイナの軍事担当の政治屋が憤った。よほどの富を吸ったのだろうその手は、はち切れんばかりの食用に値する。それがエアディスプレイで溢れる机に叩きつけられたのだ。汗が多分なのか瑞々しい破裂音と共に、早口で乱暴な言葉を発する。まるで余裕がない。

「ふ、ふざけるな！　ヤツらが宇宙の外から来ただと？　そんなの信じられるかっ。こっちはウラ世界でさえ信じられないってのに」

確かに宇宙の外から来たと言われても、ピンと来ない。人類は宇宙ですら、ほとんど把握していないと言っても過言ではないのに、そこから宇宙の外と言われて実感に沸くには無理がある。

もちろんケフェウス自身も宇宙の外を信じている訳でもないし、

レギオンの伝承全てを鵜呑みにしている訳でもない。しかし、それでも長いＦＭ星の歴史の中で途絶えることなく伝わってきた伝承だけに、無碍（むげ）にすることも出来なかった。それに、その伝承は、この世界に関わる”あるルール”に則している部分があり、それが冗談とはとても思えなかいところもあったのである。

そして、そのルールに当たる部分が、最もリフレイン達を苦しめていたのだ。リフレインの鋭い目つきがより鋭利なものとなって、そのルールについてケフェウスに投げかけられる。この疑問は、さすがに地球人の脳味噌では理解できないのだろう。

「ＦＭ王。この宇宙の知的生命は、電波生命体と人間しかいないとアナタは言っていますね？　そしてその理由が、地球でいうムーそして先の戦いで確認されたパトラ人と関係していると……。ですが、それは一体……」

リフレインの言葉尻をすくい上げるかのように、ケフェウスが言葉を継いだ。

「ああ、私も今まで信じていなかったのだが……ＷＷＲとの戦いで確信したよ。あのパトラという人種は間違いない……あの場所に記されていた者に違いない」

あの時の戦いで出会った不思議な人々であるパトラ人。まるで何かのシステムの一環とも呼べるくらいに、他者に対する友好的な性格が印象的だった。そう、何かを促して育てるようなものを感じさせるのだ。

ケフェウスはそんな彼らの存在に、伝承内の記述と一つの共通点を見出していた。そして、その一致する部分を裏付けする証言も、ずいぶんと昔に確認していたのだった。それらの符合が偶然ではないのだろう。

ケフェウスの浮かべる神妙な面持ちから、彼の握っている情報に重大な物を感じ、リフレインはさらに掘り下げに掛かった。

「FM王……。そのパトラ人に何かあるのですね？　私達の地球にもムー人の少年が一人いて、彼らと良く似ているのです。おそらく何らかの関係があるのでしょう」

「そうだ……。ムーとパトラ人は……レギオンと関わりがある。それはこの宇宙の成り立ちにもかかわる」

ケフェウスは幼いころから、王族としての教養を植え込まれていた。それの一つがレギオンの伝承だった。その伝承の出自は宇宙を監視するかのように設置されたとある遺跡であった。

そういった背景から、それら遺跡に対してFM星は謎の解明を求め、研究、調査をするという古い習慣が根付いている事がうかがえた。その習慣がなぜ定着したのかは定かではないが、そのおかげでレギオンの伝承が見つかったとも言える。

しかしここでFM星人達はある不思議な事に気付いた。レギオンの遺跡とされるそれが、この宇宙にたくさん散らばっているという事であった。それに比して、地球付近にはそういったものはまるで確認されていない。真ん中に太陽があり、複数の惑星が回っているだけなのだ。その美しい幾何学運動は、まるで何かを隠しているかのようで、ただ静寂を装っている。

それらの情報を王族として受け継いでいるケフェウスは、重い口を開くと沈んだ口調で話しだした。

「知っている事を話そう。ある昔、この星から行けるレギオンの遺跡へ調査に向かった部下が言っておった……」

「レギオンの遺跡……それはと言いますと？」

「ああ……その遺跡、そこでは古代文字がいたるところに刻まれていたそうだ。そして壁画にはムー人やパトラ人のような人が描かれ

ていたらしい……。黒い箱にのって、それが宇宙という海に広げていく……そのような壁画だ」

「それは……。そこに何が記されていたのか、もっと詳しく教えてもらえませんか……？」

「良いだろう。これは王族だけに伝わる最重要秘密事項だが……この状況だ。そしてパトラ人というものを目の当たりにした以上、語る必要がある」

ケフェウスの包み隠さず語る言葉の数々は、簡単な世界の成り立ちを示していた。

それは神話のようで現実味がない。

ある瞬間、ある場所で、何もない宇宙に対して、母と呼べる存在が命を生み出した。そして巨大な魔人がそれを黒い箱に乗せ宇宙へ送り届ける。それら命とは電波生命や人間（この場合、原始人とも）、動植物であるらしい。そして天より舞い降りた原始生命達は、星々に進化の可能性をもたらすという。可能性、それは彼らが携えたオーパーツが鍵となっていた。歴史上、本来なら存在しないその物体が、知恵というものを与えるのである。

地球の場合はこうである。恐竜なら、生き残るための競争を勝ち抜く最適化を種にもたらす。雷剣なら落雷に伴う、火をおこすという手段の発見。手裏剣なら、戦いに対するあらたな趣向を生み出す。それら要因が地球人の特徴を作り出した。生きるための競争、底のない探究心、戦争を重ねた争いの歴史というものだ。それら要素を具現するのが雷剣を模した剣により生み出された狂戦士や、携帯性に優れた手裏剣は隠密に生きる者を生み出した。恐竜という存在も種の淘汰という意味では、人類の出現に役立ったのだろう。

そんな環境設計が宇宙中のいたる惑星で行われた。そして結局、知恵を得るための最終的な姿かたちは、二足歩行による頭脳の発達を可能にした人間のようなものや、どんな環境にも対応できる電波体のようなものに行きついたのであった。

その事からムー人やパトラ人は、空から現れた全ての根源であるとうかがえる。根源――言いかえれば、それは黒い箱に乗ってきた者達。彼らの事を「オリジン」とも「トレイス」とも言う。

そんなオリジンの分化した形態が地球人の走りであり、地球人との生存競争に負けてしまったのがムー人である。この場合、長い歴史の間でムー人が持つ特異な能力を地球人が失ってしまった事が容易に想像できる。それでも僅かな名残として、電波体と電波変換する事による能力の活性化という特徴が、一部の地球人が有していた。そう、スバルやシドウが良い例である。そして、逆に生存競争にムー人が勝ち残った惑星のパターンがパトラという訳である。彼らの場合は、ムー人としての能力を惜しげもなく残していた。争いを好まない性格もオリジンの名残であり、環境設計を円滑に行うためのものであろう。

そしてトレイスも同様で、分化したものが現在のＦＭ星人やＡＭ星人であるのだ。彼らの場合は電波生命体が生存競争に勝ち抜いたのだろう。もちろん彼らの星でも環境設計が行われており、その過程で、人間の生存環境も整えられた事が分かる。そのためＦＭ星でも地球人は何不自由なく生存できるのである。

それを踏まえ、最後にケフェウスが語る事は恐ろしいものであった。それは問題のレギオンについて触れられている事だ。彼の言うレギオンの存在とは、環境設計における監査官であるという。そう、かつてデューオが言っていた間違った進化を止めるという旨に似通っていた。

今となって思えば、デューオの言うところの人類抹殺プログラムに従い、レギオンであるプルト・キグナスは行動していたのかもしれない。さらに言えば、インフィニットの言う選別の時も、これらの要素に関わっているのだろう。

そしてケフェウスはそれらの事柄を話し終えると、地球人達の方へ向き直った。ケフェウスとて信じてもらえる事を期待した訳ではない。だが、その言葉を薄ら寒い冗談として嘲笑する各国の首脳の

表情を確認すれば、肩を落とすしかなかった。

「まあ、信じろといっても信じられるものではないか……。無理はない、余だって信じられない話だからな」

そんな消沈したケフェウスに対して、リフレインだけは真摯な態度を取り続けている。彼はモノクルの位置を整えると、深く溜め息を吐いた。その長い吐息の中には、彼だけが感じているであろう複雑な思いが混ぜられていた。それはゼロプロジェクトやゼロフレームに関して付いて回っていた、レギオンと地球との関連について否定されたという安心感であった。宇宙中にレギオンの遺跡がある以上、地球との関係性は薄いと言えるからだ。

リフレインはそんな気持ちを隠すように、険しい表情のままに礼を言った。

「ありがとうございます。非常に興味深い話でした」

「お、おお。お主は信じてくれるのだな？」

「いえ、そのレギオンの遺跡についてもう少し詳しく調べてみない事には……」

リフレインが渋ったように、目を細めて同意しかねていると、アメロッパの防衛長官が声を上げた。彼もケフェウスの言葉をにわかには信じられないようだが、チョイナの陣営とは違って、真剣に検討をしているようだ。

そしてレギオンの遺跡と呼ばれる場所へ調査隊の編成を提案したのであった。

「真実はまだ分からない。……だったら、その場所に行ってみる他ないな。今すべきことは大切な友を、馬鹿にする事ではないのだから」

防衛長官はチョイナの方に目線を流す。するとアメロッパの態度を習い、シャーロ側も調査隊派遣に賛同の意思を示したのだった。

「アメロッパの言う事ももっとも……か。人類に残された時間は少ないのだからな」

そうなるとニホンの総理大臣も黙ってられないだろう。デン助にウインクして見せると、宣言して見せた。

「なら、決まりですね！　うちのロックマンがレギオンに隠された謎を明かして見せましょう！」

すると、アメロッパの大統領も拳を掲げて見せる。奇妙な一体感が芽生え始めると、会議の席とは言えケフェウスは段々嬉しくなってきた。

「いやいやニホンさん。我がアメロッパが誇るソウル・レイダーに任せていただきたいデース！」

「じゃあ、うちのキリン・ライトニングだって黙ってませんヨ！！」

ヨロシッカの代表議員も、忘れてならない彼の名を上げて、堂々の意志表明だった。ジョニーの名が上がれば、いつの間にか重苦しかった空気が払拭され、地球側とＦＭ側で、気持ちは一つになった事がうかがえた。

そんな盛り上がりを見せる会議室の中、目立った英雄を擁しないチョイナは少し寂しくて肩身が狭いのだった。

スバルたち子供グループが王宮の図書館で、大人たちの何か役に立とうと思って調べ物をしている頃のこと。

「うわあ……ここがＦＭ星の王宮図書館か。いろんな本がたくさん並んでいるな」などとスバルが言っているところの出来事である。その時、遠く離れた地球では身の毛もよだつ恐ろしい事態が起きようとしていた。

――レギオンシンジケート、ディーヴァが本格的に動き出したのである。サン・ゴッドは人類を蒸し焼きにするために、キングは人類最期の時を恐怖の支配者として君臨するために、五里は破壊衝動それだけのためにである。

しかしハイドはと言うと、そんな彼らの破滅的な考えについて行けなくなっていたのだった。彼は元々、オリヒメが実現しようとしていた地球征服を夢見ていただけであり、人類の滅亡を望んでいた訳ではなかった。ただ単に彼女の夢を叶えて、オリヒメという信仰する存在とブラザーを結びたかっただけであった。彼は繋がりに飢えていただけであり、それが彼を間違った道に進ませていた原因であった。

そんなハイドのディーヴァに対する不信感を決定的なものとしたのは、プルト・キグナスが全ての地球人類を抹殺しようとしていた事であった。表面上では地球の支配者の地位を約束しておいて、あの次元爆弾はハイドもろとも全てを葬ろうとしていたわけである。あの時、もしロックマンがレコードブレイカーを食い止めていなければ、地球人であるハイドはとうぜん命を失っていた事となる。も

はやレギオンなどハイドは信じられなくなっていた。
そしてさらに複雑な事があった。それはレギオンに対する不信感よりも厄介で、ハイドの僅かに残った良心の呵責をずっと責めていた。流星抹殺計画のあの時、ハイドはレコードブレイカーの干渉作用によって、ロックマンの命を懸けて戦う勇姿を見せつけられていたのであった。そして結果的にロックマンに命を救われてしまったのである。命がけで戦うロックマンの姿が、ハイドの脳裏に焼き付いてしまっていた。トラッシュという家族をスバルから奪ったも同然であるハイド。彼は苦悩していた。あの時以来、この整理のつかない感情は日に日に大きくなっていく。そしてとうとう彼はディーヴァのアジトを抜け出して、ある場所に向かっていたのだった。サン・ゴッドが動き出した今、もはや一刻の猶予もない。

「何という事だ。私は取り返しのつかない事をしてしまった……。あの少年に会わす顔はなくても……。知ってしまった私は伝えなければならない……！」

ある場所。そこはサテラポリスとＷＡＸＡのあるフジ山火口であった。ハイドは罪を償う事にしたのだ。そして人類を救う決意を静かに決めていた。

そしてハイドと同じく複雑な心境に悩む存在がもう一人。それはソロである。彼はＷＷＲとの最終決戦の舞台でシュンランと相対した。そして彼女が語る事実に、自分の全てを否定されていた。
それは、彼がムー人である以前に、星河スバルを導くためだけに生み出された特殊なオリジンだという受け入れがたいものだった。
ソロはそれでも、自分はムー人であるという誇りを忘れようとし

なかった。事実から目を背け、一族の誇りを維持しようと努力した。しかし、それは虚しさだけしか生み出さなかった。それもそのはず、彼は宇宙のシステムの一つでしかなく、この時間まで生かされていただけなのだから。ソロはムー人として最後の生き残りではなかった。神の実験をより確実なものにするロックマンの導き役として、ストックされていただけに過ぎなかった。ムーという文化も、地球に偶然発生したシステムの末端に過ぎないのだった。宇宙の規模からみれば、ムーは神の遊びによって生み出されたに等しい。

確かにソロは両親の顔を見たことがなく、いつの間にかムー人であるという認識を本能的に抱いていただけであり、突きつけられた事実に否定のしようはなかった。

そのことから、ソロは堪らない悔しさを赤い瞳に滲ませて、自分がなぜ生まれてきたのかというセンチメンタルな感情を初めて抱いていた。

するとそんなソロを心配する少女がさきほどからずっと隣にいて、可哀そうな彼の手を取りギュッと握りしめた。彼女は銀髪でソロの白髪に良く似た印象を与え、赤い瞳は瓜二つ。彼女の小さくて淑やかな声は、大切な家族を励ましたのであった。

「事実がどんなものでも、お兄ちゃんはお兄ちゃんだよ……？　厳しくても、本当は優しいお兄ちゃんに違いはないんだよ」

「うるさいぞ……ラプラス」

ソロはいつも以上に厳しい態度で少女に接した。その一言には今までの日々から得た全ての気持ちを乗せていた。

しかしその態度に文句一つ言わずに、少女は話題を変えソロの気を引こうとする。そして迫りくる終りの時を兄に伝えたのであった。そろそろインフィニットのいう選別の時が始まろうとしていたのだ。システムの一端を色濃く受け継ぐ少女は、本能的に察知していたのだろう。もちろんソロも同じで少女の言う事には気が付いている。

しかしソロは依然少女に厳しく当たる事をやめない。同じであるからこそ、彼は少女を否定したくて堪らないのかもしれない。繋がりどころか同一であるという事実が、彼にとって何より恐ろしいのだ。

「お兄ちゃん。もう少しで……彼らディメンションゴーレムとレギオンの監視が選別に変わる。もうあれは試練とは呼べない……。だから、スバルたちを助けに行こう……？」

「ラプラス……少し、口を閉じろ……。俺はイラついているんだ」

「お兄ちゃん……」

さきほどからソロの事を「お兄ちゃん」と呼ぶのはカノンであった。何度かスバル達のピンチを救った優しくて少し不思議だった少女である。そんなカノンは今、自分の事を受け入れてくれない兄に、悲しい表情を浮かべていた。

それでもカノンに構うつもりはないのか、ソロは手を振り払うと、きつく睨みつけて辛く当たった。

「黙れ。ラプラス……！　頼むから、黙っていてくれ……。もう俺には、お前が何なのか、俺が何なのか……何も分からないんだよ……！！」

「お、お兄ちゃん……っ」

自分を否定されて、潤んだ瞳が瞼に覆われる。精一杯慕ってもカノンの気持ちはソロには届かない。

そんなラプラスことカノンの正体――それはソロと同じようなものだった。彼女の場合、特殊なトレイスとしてスバルの導き役を担わされていたのである。何度か窮地を助けたのも、ロックマンとの戦いを拒んだのも導き役としての本能に依るものだろう。

もっともソロの場合は、その運命に無理やり抗って、孤高を証明

しようとしていた。あの決勝の舞台は、ソロにとってはロックマンとの戦いというよりも、自分自身との戦いだったのだろう。

もしかしたら彼がオーパーツにこだわっていたのも、今という全てを知った時を予期していた故なのかもしれない。ムー人としての誇りを確かな形に残しておきたかったのだ。

しかし、もう全てを知ってしまった。その上、オーパーツは一つも持っていない。さらにはカノンという繋がりを手に入れてしまい、孤高を貫く事も叶わない。

これからどうやって生きていくのか。そんな決断をソロは迫られていたのだ。彼にはもう、何もない。だからこそ決めなければならない。何かを見つけるために。

神の言いなりになるのか。それとも神に戦いを挑むのか。

その二つはどちらも辛い道だったが、その答えは一つしかない。悔しさ、惨めさ、虚無、失望、といった感情の全てを乗り越えて、自分を見つけなければならないのだ。

まるで治まる気配のない荒れ果てた思いの中で、気が付くとソロはにカノンへと問いかけていた。一か月ほど一緒に過ごしていたが、彼からカノンへ言葉を掛けるなどこれが初めてであった。

「ラプラス……なぜお前は俺に付いてきた？　俺はお前の事を道具としてしか見ていなかったのに」

「生まれた時から私には……お兄ちゃんしかいなかったの……。道具でも良かったから、私は繋がりが欲しかった」

繋がり。今さらになってソロは気が付いた。彼はいつも孤高を胸に、スバルの言う絆を否定していた。しかしソロにとっても繋がりがあり、それがムーであった。

繋がりを持ちそれに頼りながらも、自分ではその矛盾に気が付かず「慣れ合いは排除する」と言い、孤高を言い訳に使っていたのだ。そんな彼がロックマンに勝てるわけがなかった。自分の弱さと向か

い合い、それでも戦い続けたスバルに、自分のことさえ分からなかったソロが及ぶ訳がない。
ソロは自省しながらも、落胆する。彼の拠り所はもうないのだから。

「繋がり……か。俺にとってはムーがそれだったのかもしれない。だがあの女に否定され、それもなくなった。もう、何もない……」

その言葉の意味するところに、カノンは聞き捨てならない。ラプラスとして共に戦い、過ごしてきた日々は決して偽物ではなかった。確かに言葉を交わすことはなかったかもしれない。兄として慕ってきた事もおそらく伝わっていなかっただろう。しかしどこかで心は通じていたはずだ。それだけは嘘ではないはず。ソロが危機に陥った時にはいつだってカノンが刃となり、そんな中でカノンが浴びた血を彼はやがて拭ってくれるようになった。あの行為はソロ自身が気付いていない思いやりだった。女の子を血まみれにする事を良しとしない彼の深層心理が招いた結果だったのだろう。
そしてカノンがこうして本来の姿を取り戻せたのも、ソロ自身が変わり始めたからなのであった。
それが兄妹の絆の力というものかもしれない。
カノンはソロの手を取ると、何もかもが偽物のこの世界で本物の気持ちを伝えた。

「私がいるよお兄ちゃん……。私はずっとそばでお兄ちゃんを見てきたから……！　これからもずっとそばで付いていくから！　だから……何もないなんて言わないで」

ソロにとっての繋がり。それはずっと近くにいた。近すぎて気が付かなかっただけだ。
カノンの手を振り払う事はせずに、ソロはその可愛らしい顔を見

つめた。人間の顔など彼にとってはどれも同じに映っていたが、カノンのものには違う感想を抱く。自分と少しだけ似ている。すると今まで味わったことのない感覚が、胸のあたりに湧き始めた。ずっと独りだと思っていただけに、この気持ちが何かは分からない。しかし不思議と悪い気はしなかったはずだ。

「……全てが偽りだったこの世界。お前だけは俺を否定しないのか……」

そう考えて心に整理を付けると、ソロは瞼の奥に赤い反逆の炎を隠した。そうやってそっとカノンに対して背中を向けると、電波変換を行い漆黒の電波人間に姿を変える。

勝てるか分からない。しかし戦いたい。そうしてブライは神への戦いを静かに決断したのだ。孤高や絆はもう関係ない。ブライは自分の信じるものを探すために、神に戦いを挑むのだ。

この瞬間から彼は、何者にも頼らないからブライと名乗るのではなく、ムーや孤高といった誇り、信じ頼った物さえも失ったゆえにブライと名乗る事となる。

孤高という言い訳も捨て去り、明確な敵を定めたブライにもはやいちるの迷いもない。自分の信じるべきものを見つけるまでの間、彼は真のブライであり続けるだけだ。そこにはもう逃げの意味はなかった。

ブライは今までの自分と決別する。確かに今までの誇りや信念は本物だった。しかし神のシステムの上で生きながらえる以上、神を倒さなければ本物の誇り、信念は見つからない。

「ムー大陸、ラ・ムー、オーパーツ。……人間、動物、植物、宇宙、そして感情……。その全ては神が仕組んだシステムの一部に過ぎなかった……」

思い悩んだ気持ちを塞ぐように食いしばっていた口元が、綺麗な弧を作り、目の覚めるような不敵な笑みを作った。それは神に対する挑戦の意志を明確に示している。恐れるものは何もなく、失うものも何もない。それならば戦って手に入れるだけだという、ごく単純な理屈が裏付けとなっていた。

「フッ……だからこそ面白い。偽りだらけのこの世界で、俺は神を倒す！　それが俺の物語だ……！！」

さっきまでの暗い気持ちを全て払いのけて、ブライはウェーブロードに飛び上がった。

「行くぞ、カノン……！　ついてくるなら好きにしろ」

ブライなりに気を遣ったのか、妹の本当の名を呼んでやり、スバル達の元へ向かい始める。もちろんロックマン達と慣れ合うつもりがないのは確かだろう。しかし、ブライは変わったのだ。神を倒すためなら、孤高を言い訳にするつもりはないのである。

そんな僅かな変化にカノンも満面の笑みを浮かべ、兄の後に続いた。

「うん、お兄ちゃん……っ」

神の軍勢に対し世界が戦いを決意していく中。その物語の一端を担うハイドも、変化の時を迎えようとしていた。

現在ハイドは、オリヒメとルナと面と向かって、事の事情を説明していたのだった。ハイドの自首ともとれる突然の登場に、ＷＡＸ

Aは困惑を隠せない。もちろんルナも同様だ。スバルの動向が気になってＷＡＸＡに押し掛けていた彼女だが、まさかハイドとこうやって顔を会わすとは思わなかっただろう。つくづくこの二人には見えない縁があるのだと感じさせる。

とにかく今、ハイドは両手に手錠を掛けられた状態で、これから起きる恐ろしい事実を並べ立てていた。キングの野望と、前代未聞の強さを誇るレギオンの存在といった事態の数々。彼の表情はやたらと真に迫る。そんなハイドに掛けられた手錠は電波をジャミングするものである以上、彼はもはや逃げられない。やはり彼は本気なのだ。

「オリヒメ様！　どうか信じて下さい！　これからこの地球は恐ろしい事になります。太陽が……！　太陽が全てを燃やしつくします！」

「落ちつきなさい、ハイド。どうしていまさらになって、ここに来たのかしら？　まずそこから話してもらわないと信用できません」

オリヒメはハイドの必死さだけは感じ取っている。だが、彼の今までの動向を踏まえれば、敵の罠という可能性も捨てられない。何せ彼は、オリヒメと一緒になって犯罪を繰り返し、何度もロックマンを陥れようと計略を張り巡らせた。あげくの果てには、トラッシュを亡きものにして、知らなかったとはいえ地球人全ての命を危機に晒した。普通なら、同情の余地はない。しかしオリヒメもハイドの事を責めることができない過去を持っているだけに、話を聞いてやっているという状態だった。

そうなるとハイドにとっては幸いな事だ。現在ＷＡＸＡの主要人物は全員ＦＭ星に行ってしまっているので、この場の全権をオリヒメが握っている。同情の余地はないが、そのおかげで問答無用という事態は免れていた。

しかしルナが黙っていなかった。事のいきさつを説明しようとし

ていたハイドの頬に、思いきりの力で平手打ちを見舞ってやったのだ。ハイドは驚くでもなく、黙ってその気持ちを受け入れた。むしろそれを貫った事により冷静さを取り戻したようである。頬を貫いた痛みが、ハイドの決意をより固めたのだった。

ルナはルナで涙をいっぱいに溜めて、今までスバルが感じていたであろう気持ちをハイドに伝える。その言葉はとうぜん辛辣なものの数々であり、ルナの気持ちも多分に含まれている事が分かった。

あの時の事が思い出されているのだろう。結局最後まで、プルト・キグナスの口から謝罪の言葉は聞けなかったのである。ルナはずっとそれが悲しくて、後味が悪かった。スバルの家に遊びに行けばトラッシュの写真がかざってあり、それが余計に切なくてやりきれなかった。スバルは気丈に振る舞って、トラッシュの名前を出すことはなかったが、ルナが遊びに行って一番最初に見る光景はトラッシュの写真に手を合わせる彼の姿であった。その背中はいつも以上に小さく感じられ、どこか寂しそうであったのが印象に残っている。ルナはそれ以降、スバルの家に行く前には、トラッシュが眠っている展望台の原っぱに白い花を供えるようになった。

そう、ルナはあの場にいたのだ。そして死後の世界では、目の前で見ていた。あの光景を。スバルがどのような気持ちを抱いていたのか、誰よりも分かっていた。

ルナの頭の中には自分が何度もさらわれた事など微塵もないのだろう。

「いまさらになって……、どの面下げて出てきたってワケよ！！」

「ンフフ……も、申し訳ないと思っています。キミのことをヒロインとして何度もさらった事は……ンフフフ」

「私のことじゃないっ！　スバル君がどんな気持ちで今まで過ごしてきたか……。それをアンタは考えたの！？」

ようやくルナがトラッシュの事を言っていると悟り、ハイドは口

を閉ざした。少しふざけた調子だった自分を恥ずかしくも思う。

「スバル君はね……アンタの事を責めていなかった！　彼はずっと自分の事を責めていた！！」

「あの少年が……？」

「助けられなかった……って。……トラッシュを見殺しにしたって……そんな訳がないのに……っ」

　このような事を言われては悪人として非道の限りを尽くしてきたハイドも俯くばかりで、自分の愚かしさを呪うしかなかった。ルナの頬にポロポロと涙が伝っていく。

　トラッシュが屠られても、スバルはめげなかった。あの勇姿をルナは目の前で見ていた。命がけの決意が世界を救ったのだ。しかし世界を救おうとも、彼自身が救われる事はなかった。

　それがルナには忘れられなかった。その上ハイドがのうのうと生きながらえている事を知れば、彼女のやり場のない悲しみと怒りは収まらなかった。

「辛かったはず、泣きたかったはず。それでもスバル君は、地球の人を守るために戦った！　だからアンタだってそうやって生きている！　そしてトラッシュも、死後の世界で私達を助けてくれた。命を懸けて戦ったのに、命を失ってもなお、私達を助けてくれた！！　あの二人の勇気は本物だった……。なのにアンタは……っ」

「わ、私は……」

「なんで……！　なんでなの……？！　こうやってここに来る勇気がアンタにはあったのに……」

　ウォーロックが辿りつくまでの一時間にも満たない短い時間。後悔しか出てこないのだ。もしハイドがあの時、プルト・キグナスの下らないゲームを止めていれば。全てが憶測にすぎないが、もしか

したら今と違った未来が待っていたのかもしれない。しかし現実は無情だった。トラッシュは見殺しにされた。何百の刃を突き刺され、ゴミのように弄ばれて死んだ。

ルナは手で顔を覆って、座り込んでしまう。わずかに残っていたハイドの勇気が、トラッシュに向けられなかった事に涙したのだった。

「うぅぅ……それなのに……。なんであの時、勇気を振り絞ってキグナスを止めてくれなかったのよぉっ！　……その少しの勇気と優しさがあればっ、もしかしたらっ……もしかしたらっ！　トラッシュは救われたのかもしれないのに……！！」

「……申し訳ない」

「これじゃ……スバル君や、トラッシュが救われないじゃないの！　そんなの悲しすぎるじゃないのよ……！」

ルナの嗚咽がＷＡＸＡの指令室で響き、ハイドはあの時プルト・キグナスに立ち向かう事が出来なかった自分を責めることしかできなかった。

時を渡ることができない者の悲しみが、そこにあった。

ｅｄｅｎ―０９：孤高を捨てライバルに

ブライとハイドの決意から数時間後。ハイドの言葉通り、起こるべく事態がとうとう起きた。

サン・ゴッドによる太陽の操作。太陽の活動が異常な活性を見せたのだ。地球に降り注ぐ放射線量は、通常の何千倍にも跳ね上がった。太陽風によるウェーブロードの乱れ、そして電脳危機の混乱。

そして何よりも恐ろしい事が気温の上昇だ。まだ大した上昇値ではないが、地球の各地で平均気温が数度も上昇しているらしい。

そんなＷＡＸＡからの報告を、スバル達は王宮での晩餐会で耳にしたのだった。

スバル達は固まったように料理へ向かう腕を止めていた。サテラポリスの伝令ウィザードがフレンドを介してＦＭ星に飛んできて、食事の席に似合わない大声で現状を伝えていたのだった。

「気温の上昇は今だ続いています！　おそらく一週間としないうちに地球は死の星に変わってしまうでしょう」

「信じられない事になったな……」

リフレインはフォークとナイフを皿に添えるように置くと、各国の首脳の方へ振り向いて指示を仰ぐ。流石のリフレインも地球のトップ達がいる中で、独断とはいかないようだ。

「どうしましょうか？　私としては、遺跡への調査部隊の編成より

も太陽の異変に対処する方がよろしいかと……」

　すると禿げあがったシャーロの軍事担当官が、ハンカチで口を拭いつつ、リフレインに威圧的な目線を投げかけた。決してリフレインは間違った事を言っている訳ではなかったが、シャーロとしてはレギオンの遺跡をないがしろにしておきたくはなかった。そもそも太陽相手に人間がどうこうできるものではないだろう。

　大局的に見れば、レギオンの遺跡が重要だと判断したのであった。しかしそれは科学を知らないゆえの判断であり、リフレインはそれには賛成できない。バトルウィザードの情報通りだとすれば、地球は一週間も持たない。そうなってしまえば、宇宙を救う以前に、地球が滅んでしまう。分かり良く言えば、気温が数千度まで上がり海が干ばつ、緑の一切ない大地が広がるだけとなる、生物が生きることなど叶わない画に描いた地獄が出来あがるということだ。

　しかし政治家はなにぶん科学に疎い。人間を動かすことしか能がないので、検討違いな意見を出すだけだった。

「だがな博士、仮に太陽が異常な活動を始めているとしても、太陽相手にどうしろというのだ？　手の打ちようがないんじゃないのか」

「だったら諦めますか？　それはナンセンスです。それに、さっきのウィザードの話を聞く限り、科学者として言わせてもらうと刻一刻を争います」

　時間との勝負。それを感じてリフレインは伝令ウィザードに確認を取った。伝令ウィザードは息も落ち着いてきたようで、汗を拭うと答える。

「キミ、ディーヴァが動き出したというのはまだ今日の事なのだね？」

「ええ、ハイドのリーク情報によれば、レギオンの一体がアジトよ

り太陽の操作をしているとかで……」
「なら……リミットは三日くらいか」
「しかし原因のレギオンを倒さない事には……」
「ふむ・・…」

リフレインは喉を鳴らすと、考え込んでしまう。
そのやり取りから、レギオンの能力は天体までにも及ぶことが予想できた。科学に疎いと言っても、それは分かりやすい絶望であり、各国の首脳は目を見開くばかりだった。ヘラの時からそうであったが、どうにもレギオンという存在は一段も二段も常識や約束事といった壁を壊してしまっていた。まるで子供同士の喧嘩に大人が割り込んで大暴れするような印象なのだ。
太陽の操作など、でたらめがここに極まったかのような所業がその最たる例である。
僅かな動揺が喧騒を生む中、アメロッパの大統領がワインのグラスに目を落とし、ついつい弱音を吐いてしまった。

「太陽を操作……。そんな生物がいるなんて信じられない……人間なんて成す術がないではないか」

リフレインは小さく首を振った。諦めるわけにはいかないだろう。やはりここはレギオンの遺跡よりも、太陽の方を何とかしなければならない。

「絶望しても仕方がありません。すぐに太陽鎮圧部隊を編成しましょう」
「そ、そうだな。ここは博士の言う通りに」

声を合わせ政治家はリフレインに同調する。科学者に脅されたら、専門外である彼らは従うしかなかった。どうやらレギオンの遺跡調

査よりも、太陽鎮圧に行動を起こすように決まったらしい。
　しかしここでウォーロックが声を大にして訴えた。彼はすっかり平らげた料理の皿を乱暴にどかすと身を乗り出して、机上の空論を並べ立てる学者、政治家軍団にはっきりと言い放った。ウォーロックに同調するように、ジェミニもハープも表情が暗かった。そう、彼らが現場で作業するのである。それゆえに彼らは気付いていた。太陽の環境は、電波体にとっては天敵とも言えるのだ。核融合による強烈な風――太陽風ほどの電磁波を浴びてしまえば、電波体といえどひとたまりもない。さらに言えば、ウェーブロードなど太陽の周りには存在できなくてアクセスのしようがないのだった。

「オイオイオイ！　てめえら。勝手に話を進めてんじゃねえぞ！　太陽に突っ込んだ瞬間、電波人間といっても、一瞬でデリートされちまう！」
「ブロロロ……ウォーロックの言う通りだぜ。お偉いさん、さすがに自殺行為だな」

　するとリフレインは首を振って、伝令ウィザードに目線を送る。彼の言う通りだとすれば、恐らく対処するべきなのは太陽ではなく、ディーヴァのアジトの方である。そこにサン・ゴッドがいるのだ。

「落ちつけ、ウォーロック。話をよく聞けば分かるが、例のレギオン――サン・ゴッドはアジトより太陽を操作をしている。ならば、そこを叩けば勝機はある」
「そもそもハイドの言う事が信用できるのか？！　間違った情報で、タイムリミットに追い込むヤツらの作戦かもしれないぞ！」
「いや……問題ない。地球の方でオリヒメ君達が裏を取っているんだ。ハイドの言う通り、太陽も異常活動を始めているのだから……信じるに値する」

話にならないと思っているのだろう。それでも何か言いたいようで口元をむしゃくしゃさせるウォーロックだったが、リフレイン相手に口げんかしても不毛なだけだ。チッと舌打ちすると彼はスバルのハンターに引っ込んでしまった。スバルはその様子を見ていたが彼に何も言わなかった。今回だけはウォーロックの態度に共感していたのだ。ハイドを信じる事が癪に触れるのだろう。

「僕もハイドの言う事を信じるのは……」

ウォーロックから始まった疑念がスバルにも感染したようだ。まとまりかけた話が、英雄ロックマンの申し立てにより滞ってしまう。スバル自身、気が付いていないのだろう。地球を救った英雄である自分の発言権に。彼が否定すれば、現場側の人間の士気をいたずらにかき回すことになる。そういった人心と状況の掌握術をスバルはまだ知らなかった。

そうしてウォーロックが意見した事により、話がまとまらず、時間だけがいたずらに過ぎていった。料理もすっかり冷めてしまい、険悪な空気さえも漂い始める。元はと言えば、ハイドの存在がこの愚かな事態を招いている。本来なら、地球にすぐに戻って、夜の地域などに人々を避難させるのが常だろう。しかし、そうもいかないのが人間だった。

サン・ゴッドが見切りをつけるに至った、地球人の一面がこうして垣間見えていたのだ。

依然続く沈黙の席の中でただ一人、リフレインは内心で驚き、自分の思慮の無さを悔やんでいた。こんな事でロックマンが子供のような我がままを言うとは思わなかったのだろう。完全に計算違いだった。しかしそれには事情があり、それを考慮するべきだったのだ。リフレインは失策に頭を抱えて、ふと目線を脇に流した。すると入口付近に人影が二人目に入った。

食卓の席に、何者かが入ってきたのだ。フレンドを介してＦＭ星

まで訪れたのだろうか。その一人である黒い少年は相変わらずきつい目つきだったが、それでも少しの変化が見てとれて隣には可愛らしい少女を連れ添っていたのだった。そう、ブライである。そして少女の方はカノンだ。

彼は開口一番、情けなく尻込みしている地球人達に、侮蔑の言葉を投げかけた。

「フン、手を貸してやろうと思って来てみたが……キサマらは何をやっている……？　地球は今、大変なことになっているぞ」

そしてその言葉の矛先はスバルへと向かった。

「もう少し骨のあるヤツだとは思っていたんだがな……俺に説教したアイツはここにはいないようだな」

「ソロ……。どうしてここに……？　それにキミは僕の気持ちが分からないんだ」

自分の事情も知らずに好き勝手言うブライに、スバルは不信感と苛立ちを覗かせる。ブライは負けじと、強い瞳を投げ返した。

「キサマの気持ちなどどうでもいい。俺は偽物の世界を本物に変えるためにやってきた」

「何を言って……？」

「……オリヒメから事情は聞いている。それでも言おう。お前の気持ちなど関係ない！」

するとブライはいきなり現れたかと思うと、今度は我が物顔でこの陰鬱な空気を切り裂きながらスバルの方へ向かっていく。そしてスバルの胸倉を掴み上げると、言い放った。

フレンドを勝手に利用しようとした時、偶然オリヒメと言葉を交

わす機会があった。そしてハイドの決意とその他の事情を耳にしていたのだった。しかしそれでもブライは、スバルにトラッシュの事を忘れろと言う。

「立て、ロックマン！　確かにハイドが憎いだろう……！　だが、お前はいつだって俺にムカつく笑顔を向けてきた！　ハイドの前でも笑って向かいあえ。それが約束なんだろう……！」

「ソロ……キミは……」

初めてブライが見せた思いやりを感じさせる言葉。それにスバルは驚き以上の嬉しさを感じて口をつぐんだ。決勝後のあの時に言えなかった言葉があったが、今の彼なら相応しいだろう。

「キミは……変わったんだね」

「さあな……。だが、ふっ切れたことは確かだろう。お前はいつまで引きずるつもりだ？」

「ハハ……キミに励まされる日が来るなんてね……。うん、僕もふっ切れる。地球のために戦うよ……！」

「ふん、ムカつく笑顔だ……！」

eden―10：ダブルオペレーション！

ブライの登場により、スバルは戦う事を決意する。場所を会議室に移して、いよいよリフレイン達によって部隊編成が開始されたのであった。

しかしブライの登場により与えられたのは、スバルへの檄だけではなかった。ブライとカノンがもっとも重要視していた、インフィニットによる恐ろしい計画もスバル達に伝えられていたのだ。

彼によれば、レギオンの遺跡にて選別の時が始まりを告げるのだと言う。ディメンション・ゴーレムがインフィニットの手によって復活するという事だ。デウス・エクス・マキナのカギが完全に覚醒したのが、一ヶ月を置いた今日という日だったのである。そしてインフィニットは最終階層クリアウェーブを抜けた先の終末宇宙にいるらしい。ブライがそれを知り得たのはシュンランの言葉か、導き役としての本能のどちらかによるのだろう。

して最終階層、つまり決勝の舞台よりもさらに奥の世界に、目的地であるレギオンの遺跡があるということになる。そしてこちらにも太陽同様タイムリミットがあり、急がなければ宇宙の収縮に遺跡が飲み込まれてしまう。かつてのチームアルファのようになってしまうと言う訳だ。そうなってしまえばもはや、スバル達からはインフィニットに対して干渉できなくなってしまう。

そのため、太陽鎮圧とレギオンの遺跡に向かう二つの部隊が、急遽編成されることとなったのだ。

サン・ゴッドの方を見逃せば、地球は人類の住めない死の星となってしまう。

インフィニットの方を見逃せば、宇宙より魔人が現れて予想だにできない事態を招くだろう。

このことから、部隊編成には最新の注意を払う必要があると分かる。どちらを失敗しても、取り返しがつかなくなるのだから。

リフレインはそれらの要素を考慮しながら、部隊を編成し、各人に告げた。やはりイWWRとの戦いからインフィニットの危険度が大きいと察知しているのか、先にそちらに向けられる部隊が告げられた。

「では、レギオン遺跡攻略およびインフィニット討伐部隊、チームエクスのメンバーを告げる。

リーダー、ブライ。

サブリーダー、ソウル・レイダー。

以下、スカッド・エースやカペルといった、全戦力を注ぐ！」

戦力の規模としてはインフィニットの方に多く投入されるようだ。今までの経緯からしてディーヴァよりもレギオンのリーダーの方を手強く見ているのである。フェニックス・リボンを赤子扱いして、全知全能の力を手にしたカンナさえも倒した彼である。いくら戦力を注いでも足りないだろう。

しかし意外な事があり、伊集院グループからカペルも投入されるようである。貴重な５ｔｈウィザードを前線に送り込むとは、さすがに事態は窮しているのかもしれない。そうなるとミソラが、心配したようにエリアに話しかける。エリアはどう見ても戦える女の子には見えないのだ。少しの運動で音を上げてしまいそうな、ごく稀に見るか弱さだった。

「ねえ、カペルがメンバーに入ってるけど、エリアちゃんって戦え

るの……？」

「フッフッフッ。ミソラ、心配は無用よっ！　カペルは普通の電波変換用のウィザードじゃないから、私は遠くからオペレートするだけ。だから、ぜーんぜん危険じゃないのよ！」

お茶をすする身振り手振りで、特に心配には及ばないと言い張るエリア。彼女の済ました態度を崩さないあたり、どうやら強がりでもないみたいだ。なので、この小さな女の子の身に危険がないと把握し、ミソラは安堵した。

「そ、そう……？　なら、良いけど」

「そうそう！　私は見てるだけ。ねー、カペル？」

自信たっぷりなようでエリアはカペルを呼びつける。カペルはミライと作戦を話しあっていたようだが、お嬢様の命令にすぐに飛んできた。主の命令は絶対のようであり、何よりも優先事項である。

しかし見れば見るほど、洗練された戦士の風格を漂わす屈強な彼であった。確かに電波変換をせずとも十分に強そうである。カペルはエリアのそばで膝まづき、召使いのような態度で用件を問う。

しかしエリアは自慢がしたかっただけなので、用件などない。

「呼びましたか、エリアお嬢さま？」

礼儀だたしい騎士の姿勢に感心しながら、ミソラはマジマジと彼を観察する。やはり見れば見るほど頼もしい。流石に伝説のナビの力を受け継いでいるだけはある。

「へえ、確かに強そうだね」

「でしょー、ミソラ。カペルは私のナイトなんだから、きっと力になってくれるわよ」

「うん、そうだね。よーし、頑張ろうカペル！」

これから厳しい戦いを共にするカペルと、ミソラは握手を交わした。

「はい、私のマルチ・エフェクトでアナタ達の力になりましょう！」

マルチ・エフェクト――それは最新科学を結集して作られた電波変換補助システム。アストラルが汎用電波変換の完成機とするなら、カペルはそこから一歩進んだ、電波人間用マルチウェポンという訳である。

二〇〇年前の伝説が秘められた、Ｍ・ＴＷＰＧＭ由来の力は計り知れないのだ。

そしてリフレインはチームエクスから、次の部隊のメンバーを各員に告げる。こちらはサン・ゴッドを討伐する部隊であり、ハイドを作戦指揮に控えた特殊なチーム事情である。

「では、太陽鎮圧およびサン・ゴッド討伐、チームゼロを告げる。
リーダー、六角キミドリ。
サブリーダー、ハイド。
その他を星河スバル、裏霞夜太郎で構成する」

リフレインの告げたチームゼロは、かなりイリーガルなチーム構成だ。リーダーにキミドリを据え、その下にハイドと来て、夜太郎となっている辺り、特殊な人員運用である。

さすがにスバルも、リフレインのこの人選には疑問を持ったらしい。

「あの、リフレイン博士。なんで僕らの方はたった四人なんですか

？　それにリーダーがキミドリさんなんて……」

リフレインは説明不足であった事に詫びを入れると、スバルに事情を説明する。

「実は太陽の異常活動によって、地球の電波環境はほとんどダメになってしまっている。大部隊を運用するのは効率的ではないのだ……。それならば、あの化け物のインフィニットに戦力を注力した方が良いという判断だ」

「そ、そんな……。でも、たった四人じゃ……やっぱり、こっちは地球の命運だって懸かっているのに」

「いや、小数精鋭なのには他に理由がある」

『おい！　もったいぶってんじゃねーぞ。オッサン！』

ウォーロックがハンターから暴言を吐くがリフレインは取り合わず、スバルに地球での絶望的な現状を伝えた。太陽風による電波異常は深刻なものであるのだ。通常の数千から数万の規模のジャミング作用のおかげで電波体にとってはまともな環境ではなかった。全てを電波でこなしている社会である弊害が、はっきりと浮き彫りになってしまっていた。

「心して聞いてほしい。”今の地球では電波変換が行えない”……だから、大量の電波人間を送る事に意味はない。そして電波兵器も役に立たない。だから君たちには潜入任務をしてもらう事になる」

「え？　嘘……電波変換ができないなんて。それに潜入って」

『ヘッ……。やっぱりか』

ウォーロックもおおよそ予想していた事態のようで、かなりの困難が伴うであろう任務に対して武者ぶるいをしてみせた。

「ロック、気付いていたの？」
『まあな。普通のジャミング程度なら俺たちなら何とかなったろうが、さすがに太陽相手じゃ分がワリイ。……例えゼロＰＧＭがあってもな』
ウォーロックの表情は珍しく真面目そのものであり、冗談を言っているようではないようだ。
そこにリフレインがこの人選に至った理由を説明する。
「これは潜入ミッションだ。なるべく敵に見つからず、サン・ゴッドを無力化してくれ。だからハイドにはアジトへの道案内をしてもらう。メトリーもウイルスウィザードである以上、異常環境下でも力になってくれるだろう。そして君の場合は、言うまでもない……私は君に賭けているんだ。君なら地球を救ってくれると信じている……！」
リフレインは科学者にあるまじき、精神論でスバルに地球の命運を託していた。宇宙サイドはブライ率いるチームが、そして地球サイドはキミドリ率いるチームが挑むこととなる。
しかし良い笑顔を浮かべているリフレインに、ウォーロックはもっとも肝心な人選について言及した。彼の中でキミドリの評価は底辺であり、リーダーにそぐわなかったのである。
『なるほどな。言いたい事は分かった。でも、キミドリとかいう腰ぬけ女はいらねーだろ。アイツと同じチームで戦ったが、アイツはてんでダメだ。足手まといでしかねー！』
「ロ、ロック……。かなりの言いようだね……」
『じゃ、何かスバル？　アイツがトーナメントで一度でも役に立ったとでも言うのか？　あれならまだ、ゴン太の方がマシだな！』
「で、でもキミドリさんはチームの雰囲気を良くしてくれて……」

スバルも何とかキミドリを擁護しようとするが、頭の中ではふざけた様子の彼女が浮かぶばかりで、言ってて段々自信がなくなってしまう。

『バカ野郎！　雰囲気で地球が何とかなる訳ないだろっ』

「うっ……確かに」

さすがにこれ以上、キミドリの肩を持っても仕方がない。スバルが無念そうに肩を落としたところ、のんびりしている暇はないとリフレインは任務に向かうよう告げた。そう、時間はないのである。この宇宙がワイル粒子で満たされている以上、熱や電磁波の伝わりは異常に早い。地球の生存環境は持って三日で、それよりも短いかもしれない。

「キミドリ君に関しても理由はある。詳しい事は地球の方で聞くといいだろう。とにかくスバル君は地球の方でハイド達と合流してくれ。もたもたしていると、フレンドの方も太陽にやられるかもしれん」

スバルとウォーロックは、キミドリやハイド達と合流するために急遽地球に向かう事となった。ケフェウスやブライ、ミソラに別れを告げると、会議室を飛び出したのであった。

そしてすぐに電波変換をして、サン・ゴッドとの戦いに臨む。

ｅｄｅｎ―１１：デザインヒューマン

【地球サイド：軌道エレベーター】

部隊編成から数時間後。太陽の異常活動はどうやら本当の事らしい。地球に向かう軌道エレベーターの中で、通常の百倍以上にも膨れ上がった太陽をスバルは目の当たりにした。それは恐ろしい炎の魔物のようである。肉眼で見てとれるほどのプロミネンスの火柱が、生きて牙を剥く星の恐ろしさを実感させた。

そしてエレベーター内では、もはやハンターは満足に機能しなくなっている。そのためウォーロックも実体化して何とかやり過ごしている状態だった。電波化しようものなら、彼の中のデータが滅茶苦茶にかき混ぜられて正気を保っていられないのだろう。

そんな彼らを乗せたエレベーターは、地球に向かって落ちていく。

そしてさらに数時間後。スバルは電波変換できない事を非常にもどかしく思いながらも、何とか地上のＴＫ駅に辿りついたのであった。タイムリミットは刻一刻と近づいている。スバルは駆け足で、昇降口のあるエントランスに向かった。そこでキミドリ達と合流する予定なのだ。

しかし構内は蒸し風呂のようである。少し走っただけで全身から

汗が溢れてくる。もうすでに、地球の気温はかなり上がっているのだ。夏も終わった頃だと言うのに、すでに四〇度に迫ろうとしていた。さらにまだ早朝であるので、まだまだ気温の上昇が見込まれた。

スバルは汗まみれになりながらも、ようやくキミドリ達を発見することができた。手を振っているキミドリは半そでの制服姿で、ボタンを開けて胸元を大きく開けていた。夜太郎も流石に暑過ぎるのか、くたびれたシャツをネクタイもせずにだらしなく着ている。しかしハイドは恐ろしい。なんと深い紫のコートにシルクハットまで被っており見ていて暑苦しいばかりである。

そんな奇妙な一団を引きつれているのオリヒメであった。涼しげな態度でメガネを整えると、遅い登場を果たしたスバルを迎えた。太めの眉をへの字にして、彼女は少し焦っているように見える。

「やっと来たわねスバル君。アナタも実感していると思うけど、地球は大変な事になっているわ」

「確かに、太陽が空を覆うほど巨大に見えますね……」

オリヒメに一度だけ礼をして、挨拶を済ますとスバルは神妙な面持ちになって、現状を尋ねた。肌で以上は感じてはいるが、もっと詳しい事情を聞いておかなければ任務に集中できないだろう。

「それで、地球のみんなはどうしているんですか？」

「地球のみんな。それは、居残り組のサテラポリスの人のことかしら？　それとも一般市民の方かしら？」

「どっちもです」

手短にスバルは受け答えると、オリヒメは頷き、事の始終を話し始めた。

「そうね……昨日のお昼頃だったわね。電子機器が機能しなくなっ

たのが始まりだったかしら。それ以降、ウェーブロードも機能しなくなって情報が混乱……今に至るってところね」
「チッ、思ったよりマズイ状況だな」

ウォーロックはガラスの壁越しに、人っ子一人いないゴーストタウンと化したＴＫシティを見つめる。地面からのぼる熱気に、撹拌された溶媒のように景色が揺れている。どうやら大体の避難は完了しているようだが、このままでは先行きは暗いだろう。
オリヒメが続けた。

「現在、ツカサ君やジャック君といった地球に残ってるサテラポリスのメンバーに先導してもらって、地下シェルターの方に民間人を避難してもらっているところだわ」
「なるほどな。地球人の避難で精一杯てことだな。やっぱり、俺達四人で何とかするしかないみたいだな」
「それにしても地下って……。これから気温はどんどん上がるのに……」

サウナでひたすら我慢する光景を思い浮かべ、スバルが表情を曇らせる。百も承知なのだろうオリヒメは眉をひそめて頷いた。
いつまでもこのままではいけないとオリヒメ始め誰しもが思っている。だが、どうしようもないのである。いくら頭が良くても実を成す力がないので、彼女の焦りも納得である。

「ええ、おそらくこのまま異常な太陽活動が続けば、どこに逃げようと命はないわね。
でもね、太陽風の影響は凄まじくて、世界中で天変地異が起きているの。地震、雷、火災、竜巻、津波……挙げればきりがないけど、今のところ地下の核シェルターが安全ってワケなの。
残念だけど、私達の方でできるのはこれで精一杯」

オリヒメはスバル達に託すしかなかった。電波環境の異常のせいで、今回はオペレートをしてやることもできない。
スバルも何となくだが、厳しい戦いになる事を予感した。電波変換を用いずに電波体と戦う。それもレギオンでも最上位に位置する敵を相手にするのだ。
おそらく厳しいなんてものではないだろう。戦いになれば良い方かもしれない。

「そう……ですか」

俯いて意気消沈するスバルだった。すると、キミドリが士気を上げようと元気良く声をかけてくる。暑いのにはつらつとした笑顔は眩しくも暑苦しい。

「おい、スバルン！　確かに厳しい任務になるだろうけど、私がいれば大丈夫！　リーダーであるキミドリさんがいればねっ！！」
「あっ、キミドリさん。相変わらず元気ですね……ハハハ」

何度も何度もスバルの肩を叩いてくるので、苦笑いを浮かべてキミドリに悩んでしまう。しかし彼女の笑顔はなぜか自信ありげだったので、スバルも不思議と意味のない勇気を貰っていた。意味のない勇気。それこそ今、必要とされているのかもしれない。スバルはキミドリの前向きさを見習うことにした。
するとウォーロックが、オリヒメの方へリーダーの人選に疑問を呈した。彼女はどう見てもリーダーという柄ではないし、あまりにも楽天的で見ていて不安になる。これでもウォーロックは戦いに関しては頭脳派なので、賢哲な姿勢を貫いているのだ。

「おい、リフレインのオッサンがこの女をリーダーにしたようだが、

なんか理由があるのか？　俺の見立てじゃ、役に立たんぜコイツぁよ。ずっと見てきたから分かる」
「ちょっとー、ロック君！　そういうの酷くない？！　一緒にＦＭ星を救った仲じゃんー？」
「うるせー！　お前はずっと倒れてただけだろ。俺はオリヒメに聞いてんだ！」

どうにもウォーロックはキミドリとも折り合いが悪い様子だ。なれなれしいキミドリを毛嫌いした様子で、ペッペッっと唾を飛ばして近寄らせない。見ている分には微笑ましい光景だが、事態は切迫しているので、早いところ彼に説明してやる必要があるだろう。
六角キミドリという少女はただの女子高生ではない。オペレーション・アポカリプスに参加している時点でそれは明確ではあったが、結局ノイズウェーブトーナメントを通しただけでは、スバル達は彼女に関してほとんど何も知ることはできなかった。そのためにウォーロックがキミドリを過小評価していたのであった。だが、それは間違いである。
彼女は確かにロックマンほどの戦闘能力は有していなかったが、それでもＷＡＸＡの重要人物としてチームオメガという作戦の核に投入されるに至ったのには理由がある。
キミドリの背景がオリヒメの口から告げられた。

「キミドリちゃんはね、この状況における切り札なの。彼女はテンキュウ高校っていう施設の人間」
「だからどうした。スバルはコダマ小学校に通ってるぜ？」
「……そういう意味じゃないわ。なぜなら敵のアジトはテンキュウ高校にあるのだから。そこの地理に詳しい彼女の力は必要でしょ？」
「……だが、この女が足手まといな事に違いはねー」

敵のアジトがキミドリの高校にあると言われても、ウォーロック

からすれば関係のないこと。むしろノイズウェーブトーナメントを通して見てきた、キミドリの脆弱さが悪い意味で印象的だった。ハイドがいる以上、キミドリの価値はないに等しいと言っているのだ。

オリヒメはそんなウォーロックをなだめつつ言ってやる。

「まだ話は終わっていません。言いにくい事だけど、その高校はＷＡＸＡにとっての実験場みたいなもの。だから彼女にはプロジェクトＴＣにおける様々なモニターをしてもらっていたの。例えば人工電波変換における肉体への負荷、、あとノイズウェーブでの人体の影響とか、ね」

キミドリはプロジェクトＴＣにモニターデータを提供するという形で、ノイズウェーブトーナメントに参加していた。ここ一年足らずで５ｔｈまでの新型ウィザードをロールアウトできたのも、テンキュウ高校の人体実験があったからこそ。シドウのような、一人の天才だけではどうにもならない事もあるのだろう。

そういった事情に、ウォーロックは胸糞悪そうにしてキミドリを尻目に置くと、オリヒメに悪態を吐いた。人体実験など聞こえの良いものではない。それはＡＭ星人である彼にも同様であったらしい。

「つまりアレか。この女はモルモットか？」

「アナタ風にいえば、そうなるわね」

ウォーロックの粗暴さを暗に責めつつ、冷淡に言うオリヒメの姿は、科学者の在りようを示しているかのようだった。

そういった経緯を聞けば、スバルは初めてキミドリと出会った時を思い出さずにはいられなかった。無駄に笑顔が眩しく馴れ馴れしくて、それが少々行き過ぎてリフレインの怒りを貰ったものだ。今となっては笑い話の思い出である。しかしそういった黒い過去を経た上での笑顔となると、意味が違ってくる。

「そんな事情が、キミドリさんにあったんですね……」

初めてプロジェクトＴＣにおけるＷＡＸＡの事情を知ったスバルは、恐る恐るキミドリの方に向き直った。トラッシュやアストラル電波人間部隊、カペルといった強力な仲間達の登場を、無邪気に喜んでいたが、そんな自分が少し恥ずかしかったのだろう。そんな気持ちの表れなのか、少しキミドリから視線を外しながら質問した。

「キミドリさん……。もしかして、僕たちのチームに参加していたのも、人体実験の一環で……？」

「そう、アタリ。高いノイズ密度の中で、どれだけ人体が持ちこたえられるかっていうデータを取ってったってワケだね。さすがに人工ウィザードじゃきついから、スコープに協力してもらってたけどね！　それにしても、スバルン達に付いていくのでやっとだったよ。ナハハハッ！」

「チッ、笑っていう事かよ……！」

毒気を抜かれたウォーロックはそっぽを向いてしまう。

それを見届けると、オリヒメがキミドリの特異性を簡潔に説明した。

「少し話がそれたわね。とにかくそういう経緯があって、彼女は数々の強化改造を施してあります。俗に言うデザインヒューマンというものです。ありとあらゆる状況下を想定して、体や精神を改造しているの。

この崩壊した電波環境の中でも、彼女なら数分の間だけなら電波変換ができるでしょう」

「そ、そういう事！　だから大船に乗ったつもりでそこんとこヨロシク！　ちゃんと守ったげるから、私をリーダーってあがめてちょ

ーだいね！　へへッ、実はリーダーに憧れてたんだー。いよっし、頑張るぞ！」

キミドリは特に自分の境遇に不満を持っている様子はないようで、ただ単純にリーダーという役職に誇りを持っているようだ。ミライ辺りの活躍と、クールさを目の当たりにすれば仕方がないのかもしれない。

しかしどうだ。今思えばキミドリは色々なところでおかしかった。おそらく先の強化改造が原因だったのだろう。拳銃を頭に突きつけられても動揺する素振りも見せず、目の前で首が転がろうとも、平静を保っていた。色々と弄り回されたおかげで彼女は、大切な部分が欠落し普通ではなくなっているのかもしれない。その異常な明るさも欠陥の一部なのだろう。

ウォーロックはそういった彼女の背景に感づいたからこそ、毒気を抜かれた訳だが、スバルの方は本人が気にしていないようなので深くまで考えが及んでいないようだ。暑さに参って頭が回らないのだろう。

その一方で夜太郎はその話を聞き、胸を痛めていたのであった。見た目には可愛らしい少女でありながら、モルモットである事実が切なかった。特に父親であった身としては、切実な問題として来るものがあったのだろう。

（笑ってはいますが、あの子……。人には言えない辛い経験をたくさんしてきたはず……本当に強い子ですね）

ノイズウェーブトーナメントの際、特にチーム内で言葉を交わした訳でないが、夜太郎はキミドリの事を気にかけずにはいられなかった。

そんな彼は、とても大事なことにまだ気が付いていなかったのだった。

紆余曲折を経て、ようやくキミドリに対する疑問も解決した。それで、任務を開始する準備が整ったかに見えた。

しかしその前にスバルとウォーロックは決着をつけなければならないことがある。そう、今回の任務のキーマンであるハイドと、けじめをつけなければならないのだ。そうしないと、命を懸けた任務を共にすることなどできない。

そしてスバルは意を決し、暑苦しい格好をしてまで顔を隠そうとするハイドの元に歩み寄った。ハイドはスバルがそばにまで来ると帽子を深くかぶりなおして、やはり顔を隠す。

そんな様子にスバルは罵声を浴びせる気も起きなくなって、素直な気持ちを伝える事にした。エントランスの床はよく磨かれており、スバルの震える拳が映り込んでいる。彼は無意識のうちで何かを堪えているのかも知れなかった。

「ハイド、よく僕たちに協力してくれる気になったね……」

「少年……」

ハイドはもう一度、帽子を深く被りなおして、その表情をひた隠してしまう。すると、その煮え切らない態度に苛立ちを覚えたウォーロックがずんずんと詰め寄り、ハイドの胸倉を掴み上げた。その力は見た目通りの人間離れしたものであり、ハイドの両足はぷらぷらと地面に映り込む。

「黙ってんじゃねー！　これはトラッシュの分だ！！」

ウォーロックは逞しい自分の拳を握りしめると、ハイドの顔面に叩きこんだ。幸いどこもかしこもゴーストタウン状態なので、通報される事も邪魔が入る事もないだろう。

ハイドは宙を舞い、馬鹿力に勢いよく弾き飛ばされた。そのまま背中から観葉植物をなぎ倒し、ぐったりと壁際の椅子に体を預ける形となった。するとハイドは何を思ったのか、ウォーロックに向かって頷いて見せた。それに乗る形で彼に追い打ちを加えようと、ウォーロックがは飛びかかる。身の危険は感じているだろうに、彼は抵抗するそぶりは見せる事はなかった。変に気を遣われるより、ウォーロックの真っすぐな暴力を嬉しく思っているのだろう。

「次は委員長とミソラの分だ！！」
「グッ……！」
「オラッ、おふくろの分だ！！」
「ガハッ！！」

強烈な二発を貰い、ハイドは椅子ごと殴り飛ばされ、床に投げ出される。帽子も飛ばされコートもはだけてしまい、口から血筋を伸ばして天井を仰いでいた。口元を食い縛るだけで、言い訳を並べる気配もない。しかしウォーロックは殴る事をやめなかった。

「スバルは甘いからな。アイツの代わりにお前をぶちのめしてやる！　俺達一緒に戦えるなんて思うなよ！！」

ウォーロックはハイドに馬乗りになって爪をぎらつかると、スバルの悲しみや辛さを五本の刃に乗せた。生身の人間が彼の爪を貰えば一たまりもない。任務が始まる前にハイドが死んでしまえば、何もならないのだが、彼はそのようなことはお構いなしだった。

しかしそれでは何もならない。スバルは気付いていた。

「コイツはスバルの分――」
「やめろ！　ロックッ！！」

ビーストスイングがハイドに浴びせられようとした時、スバルが駆け寄って、待ったを掛けたのである。ハイドは目を疑ったようで、垂れ目を見開いてスバルを見つめていた。

そしてウォーロックの太い腕にしがみつきながら、息を飲ませるほどの真っすぐな目を向けて優しい相棒に訴える。

「やめろ、ロック。僕の分は僕がやる」
「スバルっ！」
「いいから。もう、これ以上はやるな」
「チッ……！」

さすがにこれ以上は野暮だと感じたようで、スバルにハイドを好きにさせる。

するとスバルはハイドに向かって一言。

「立てるかい？」
「……もちろんだとも」

ハイドは少しよろけて見せるが、なんとか立ち上がってスバルを申し訳なさそうに見つめる。今度は帽子もないので逃げる術はなくなっており、スバルの思いと怒りを受け取る覚悟を見せていた。

「殴りたければ殴りなさい……私にはその怒りを受け止める義務がある……」
「いや、キミの事は殴らない……。その代わり、僕の言葉を聞いて

くれよ。それが僕の分だ」

ハイドはスバルの真意を汲み取り、何も言わずに頷いた。スバルはそんなハイドに問う。

「その前に、どうして僕たちに力を貸してくれる気になったんだい。教えてよ？」

その言葉に、ハイドの頭の中では涙を呑んで戦うロックマンの姿がすぐに浮かび上がった。本当の事を正直に述べるのは、不慣れであったが、それでもスバルに嘘を吐くことを嫌って、言葉を飾ることはしなかった。

「それは、少年が必死に戦ってる姿を見たから……地球を守るために、そして私はそれに救われた。だから……全てが遅いと分かっていても、私も君を助けたくなった……」

ハイドの言葉に嘘は含まれていない。それをスバルも感じ取ったようで、握りしめて緊張していた拳を少し解きほぐした。

「そうか、そうだったんだね。……でもねハイド、僕があそこまで戦えたのには理由があるんだ。そして今の君になら、その理由が分かるはず」

あの時のスバルは体をボロボロに痛めつけられて、ほとんど戦う力も残っていなかった。本当なら、プルト・キグナスにどうやっても勝つことはできなかっただろう。

それでも不可能を打ち破り、スバルは勝利を手に入れた。人間には、レギオンにはない力を持っている。そしてそれは、元々キグナスにもあったものだ。もちろんハイドにも残っていたものでもある。

「それは……コ、ココロですか？」
「……そう。僕はトラッシュの勇気というココロを貰った。そして委員長にも貰った。二人は僕にかけがえのない力をくれたんだ。それがあったから僕はキグナスにも勝てた……！」

スバルはハイドの顔を見上げると、はっきりとした自分の気持ちを言い切っていく。ハイドがこうしてスバル達を助けようと思ったのも、トラッシュの勇気が伝わったからに違いないのだと。トラッシュの死は無駄ではなかったのだと。しっかりと受け継がれているのだと。

「そして、その勇気は君にも伝わった！　トラッシュの勇気が君の中にも生きている！！　トラッシュの命がけの勇気は、世界中に伝わって次に繋がったんだ！！」
「私にも……彼の勇気が伝わったですって？」
「そうだよ。父さんが言っていたんだ。勇気は繋がっていくってね。そしてそれは父さんが見つけた真実なんだ」

そしてスバルもまた大吾とは違った真実に気が付いていた。
少しの笑顔を送り、今までの戦いを通して手に入れた想いを自分だけの言葉に変えていく。それは周りの人たちから手に入れた、スバルにとって何ものにも代えがたいルールであった。

「それでね、僕もたくさんの出会いと戦いから、自分なりの真実に気付いたんだ。命を懸ける勇気、助けたいという優しさ、待ち続け信じる気持ち、死をも超える愛……」

それぞれの真実はトラッシュ、ルナ、ミソラ、ワタルから教えてもらった。そしてもう一人からも悲しいルールを教えてもらってい

た。

実はＷＷＲとの戦いの後、スバルに対してヨイリーや天地から「トラッシュを復元することができる」という旨の提案が貰っていた。しかしスバルはそれを断った。おそらくヨイリー達の言う復元では、心や思い出までは蘇らせることはできなかっただろうから。それになにより――カンナに教えてもらっていたのだ。

「そして、死んだヒトはもう生き返らない……っていうこともね。いくら望んでも、命は一回だけなんだ……！　僕たちはそういう世界に生きている」

スバルは辛い現実を目の当たりにして、そうやって一回きりの命を大切にしようと思ったのであった。そういった想いを全て胸に抱き、許せないかもしれないかつての敵であるハイドに手を差し伸ばした。お互い救われた命である。それを親友が愛した地球の為に燃やしてみたかった。

そのためならば、恨みを乗り越えて笑顔で敵に手を差し伸ばす。それが約束なのだ。だからスバルは、その熱い気持ちをハイドにぶつけた。

「だから受け止めた……！　トラッシュは帰ってこない！　もういないっ！！　だからこそ、今生きている僕たちがこの世界を守るんだ！　彼が命を懸けて守ったこの世界を！！」

ハイドの胸の中に宿った確かな勇気に遵守することをスバルは求めている。その熱い思いは確かにハイドに届いたことだろう。

「君が受け継いだその勇気を胸に、僕と一緒に戦って欲しい！　君の胸に宿った炎に約束するんだ！！」

ハイドとスバル。彼らにはたくさんの因縁があった。たび重なるルナの誘拐。そしてトラッシュの件。

それら過去の過ちを思い出しながらハイドは頭を下げて謝罪し、そして胸に宿った熱い思いをこれからの道しるべにする。そうしてスバルの手を取って、しっかりと握手を交わしたのであった。

「ほ、本当にすまなかった……スバル少年。分かってるとも、キミの友が愛したこの星……必ず救うと誓わせてもらう！！」

こうしてキミドリ、ハイド、夜太郎、スバル擁するチームゼロの戦いが始まりを告げたのであった。

オリヒメを残し駅から出ると、駐車してあったハイドの霊柩車にスバル達が乗り込んでいく。決戦の地であるテンキュウ高校に向かって、ハイドは霊柩車のアクセルを踏み込んだ。

ｅｄｅｎ―１３：楽園への旅

【宇宙サイド：第十階層ホワイトウェーブ】

ハイドの霊柩車が敵アジトのあるテンキュウ高校を目指す中、ブライのチームもＦＭ星から最終階層を目指しているところであった。そいして現在彼らは第十階層のホワイトウェーブを通っているところである。ちょうどその場所はブラックウェーブよりも、一つ奥に進んだところにあって白いノイズが飛び回る一見美しいノイズウェーブだった。白い粉雪のような、ノイズ片はレギオンのワイル粒子を思わせる。ここまで深い階層に来ると、知的生命体の文化の気配は全く漂ってこない。人工物は見当たらず、ただただ、神の聖域のような美しくも、不気味な世界を作っているだけである。

「お兄ちゃん……。本当に大丈夫なのかな？　インフィニットに勝てるのかな？」

「勝てるかじゃない。勝つんだ……神とかいうふざけた奴の思い通りにしてたまるか」

「うん……」

不安そうなカノンは、ブライと共にチームの一団を率いていた。そしてブライは、彼女の不安材料であるチームの方に振り返って様子を確認する。

こちらのチームは地球側よりも大所帯であり、戦力的にはキリン・

ライトニングやカペルといった地球の精鋭を結集させている。さらにはオリオンらＦＭ星が誇る屈強な戦士たちも同行していた。しかしＡＭ星人の助けはタイムリミットの関係で貸してもらえず、ワタルもフェニックスと別行動をしていたために、同行する事はできなかった。

正直なところ、インフィニットに勝てるかどうか分からない。

そのような少なくない不安要素を抱えながら、チームエクスはかれこれ数十時間もホワイトウェーブの中を彷徨っている状態だった。ホワイトウェーブは現存する知的生命体にとっては未知の領域である。なのでまともなガイドデータなどある訳がない。しかしそれでも、ブライとカノンは導き役としての部分からインフィニットの気配を察知しており、きちんと目的地に向かって進んでいる。だが進めどもクリアウェーブはまだまだ先のようだった。

焦っても仕方ないが、ブライは舌打ちして白い世界に嫌気を示す。

「チッ、イヤに長い道だな……」

「おい、ソロ。あんまり、イラつくな」

リーダーには余裕を持って欲しいらしく、スカッド・エースがちょんちょんと彼の肩を叩いて話しかけてきたのであった。電波うまい棒を手に持って、ブライに差しだしている様子は友好的だ。何だかんだで協力をしてくれるブライに、彼は親しみを込めて接してきているのだった。しかしブライはブライで、相変わらず慣れ合いを良しとしないので、時折挟まれるちょっかいを煙たそうに払いのけていた。そのたびに、カノンが申し訳なさそうに、兄の無愛想を詫びるということを繰り返している。

すると今度はハープ・ノートだった。よほど暇だったのか、白いノイズで小さな雪だるまを作っており、それをカノンにプレゼントしてくるのだ。カノンはニッコリ笑みを作って、頬に手を当てて感激していた。

ブライはそんな遠足気分なやり取りを横目に、額に手を当てる。カノンは仮にも自分の妹だ。あまり安っぽい、振る舞いはして欲しくなかったのである。

「おい、カノン。そんな不細工な人形で喜ぶな」
「え、でも……ミソラが作ってくれたから……」

ノイズだるまを大切そうに抱え込み、すっかりハープ・ノートとカノンは仲良しになっていた模様。もちろんハープ・ノートは、友達の兄にも親しく接してくる。

スカッド・エースと同時に話しかけられれば、ブライは困り果ててしまう。ブライは彼らと協力してはいるが、あまり仲良くする気はなかっただろう。というよりも、仲良くする方法を知らない。なのでカノンがハープ・ノートと仲良くなっている理由がよく分からなくて、妙に腹が立つのも嘘ではなかった。

そんなブライの複雑な気持ちを知る訳がなく、ハープ・ノートとスカッド・エースは馴れ馴れしい。

「ホーント、ビックリだよ。ラプラスの正体カノンちゃんで、そしてそのお兄ちゃんがソロ君だったなんてさっ」
「そうだそうだ！　ずるいぞソロ！！　こんな可愛い少女をいつの間にか手に入れやがって。……ほら、うまい棒でも食っとけ」
「うるさい、俺にかまうな……！！　もう少し緊張感を持て」

久しい人との触れ合いに、ブライは戸惑いを隠せず、とにかく乱暴な態度でハープ・ノート達と距離を置こうとする。

するとハープ・ノートが頬を膨らませて、ブライの頭をギターで叩いた。彼女からして見れば、ブライの事をとっくに仲間だと思っていたのだ。それはというのも何時間もホワイトウェーブを歩く中で、ブライの色んな一面をカノンから聞かされていたからだ。

実は料理が上手いことや、何気にゲームが好きだったり、そして妹思いの兄であると言った、心和ませるエピソードの数々だった。ムー人の誇りや、孤高など普段から言っているように見えるブライではあるが、カノンの目からしてみれば普通の少年にしか映っていなかったという訳だ。ちなみにカノンは、カリカリのウインナーが大好物らしい。デパートへ買い物に行った時には、よくねだっていたそうだ。「アア……ウアウア」などと言って、必死に可愛くおねだりしていたらしい。しかしソロ本人からしてみれば、さぞかし不気味に映っていたことだろう。それでも月に一度は買い与えており、兄の優しさであった。

そういったどこにでもいる少年だったからこそ、ハープ・ノートはブライのことを、大切な仲間だと思える。ＷＷＲとの戦いを通して感じた彼の本質は、もはや敵の見せるものではなくなっていたのだから。

だがブライはギターで叩かれる覚えはなく、わなわなと震える。しかしカノンやスカッド・エースが二人のやり取りにクスクスと笑っていた。なぜかブライは忘れかけていた感情を掘り返された気がした。

気が付くと訳も分からずにブライは、ハープ・ノートから距離を取っていた。動揺したためか、スカッド・エースからうまい棒を奪い取っている始末だ。

「ええい、俺にかまうんじゃない！」
「俺のうまい棒とったなー、ソロ！」
「黙れ！　もともと俺に差し出したモノだろうが」
「そりゃそうだ！」
「ごめんなさい、お兄ちゃんが……っ」

何となくカノンが頭を下げる。言葉が喋れるようになって嬉しいらしく、ブライの世話を焼きたがる年頃の女の子だった。

しかしプライドの高いブライは、仮にも妹であるカノンが簡単に頭を下げることを良しとしない。

「あ、おい……こんな奴に頭を下げるな！」

「ハハハ！　礼儀正しいグッドな妹だ！」

何気に愉快な立ち回りでブライを翻弄するスカッド・エースであり、さすがにサテラポリスのエースを自負するだけある。

そうして終始ペースを乱されてしまい、ブライはうまい棒に食らいつくしかなくなってしまった。さっそくサクサクする元孤高の戦士に、ハープ・ノートが吹き出してしまって目に涙を浮かべてしまう。

しかしここは裏世界の最も深い部分で、笑っている場合ではない。ハープ・ノートはスッと真面目な態度に直居って、ブライにこれからのチームの在り方を説く。それは本来ならスカッド・エースたち大人グループの役目だろうが、それでもハープ・ノートがブライのことを一番理解しているから適任である。ラ・マリアやインフィニットの攻撃に対する、彼の堂々たる立ち回りは鮮明な記憶だろう。

「さて、ソロ君。そろそろ心の壁は取っ払った方が良いんじゃないかな？　君も気付いていると思うけど、もう君は独りじゃない」

「……ああ、そうだな」

「あれ、意外な反応？！」

ブライは最後の一口を平らげたところで、呆気にとられるハープ・ノートに続きを言うように促す。

ブライだって馬鹿ではない。落ちついて考えれば、人間という存在のもう一つの部分に気が付く。ここまで親身に関わりを持とうとしてくれたら気が付く。それは幼いころからずっと感じて向けられた冷たいものではなく、今こうして彼女たちが向けてくるものの正

体であった。

「続きを言え。おそらく、お前の言おうとしている事は正しい」
「あっ……あ、うん。と、とにかくだよ。独りで突っ張らないでってこと！　私達はチームなんだからさ！　助け合っていこー。うん、そうだよ。そういうことっ。はぁー調子狂っちゃったかな……」

嫌に素直なブライにハープ・ノートは調子を狂わされて、せっかくしたためていた素晴らしい言葉の数々を台無しにされてしまった。しかし、そういった態度を取っているということは、ブライ自身も彼女が言わんとすることに気が付いているという証である。
ハープは成長した少年の姿に、お姉さんらしく物知り顔でハープ・ノートに耳打ちした。

『ポロロン。どうやら、彼も大事な事に気が付き始めているようね？』
「そ、そうだね。ハープ。それならそれが一番、だね。よし、これを機にお友達になるぞ！」
「うん、きっと大丈夫だよミソラ。お兄ちゃんは本当は優しんだから……ちょっと、恥ずかしがり屋ってだけなんだ」

三人のやり取りにブライはフッと笑みを浮かべると、うまい棒のおかわりをスカッド・エースに頼む。そうやってカノンにもうまい棒を与えてやった。兄として独り占めはよくないからだ。
そんなブライの様子を遠巻きで見ていたキリン・ライトニングは、まとまりのなかったチームに少しの結束が芽生えたことを感じたようだ。つかつかと変わり始めたリーダーの元に歩み寄り、ポンと肩を叩きながら言ってやる。そのまま先頭を切り、ホワイトウェーブの奥に進んでいった。

「よ、ソロ。今、お前が感じているモノこそ、人間の本質だよ。な、悪いもんじゃないだろう？」

その言葉にはブライとキリン・ライトニングにだけ分かる意味が含まれていた。そして今のブライはその本質というものを否定する事はなかった。

それどころか、きずなクルーに憧れを抱くスバルの気持ちが、ほんの少しだけ理解できた気がしたのだった。

ただ、口から出る言葉はまだまだブライだった。

「チッ、勘違いするなよ。お前が正しかったんじゃない。俺が見つけただけだ……」

ブライがキリン・ライトニングから列の先頭を奪い返そうと駆け出す。それに続くカノンとハープ・ノート達。

一見、穏やかな雰囲気のチームの様子ではあったが、彼らが足を踏み入れた領域はそろそろ宇宙の終わりに差し掛かるころである。そんな宇宙の終末にクリアウェーブがあり、そこからインフィニットの計画が渦巻く、レギオンの遺跡がある。

しかしその前に彼らにとって大きな困難が伴う事となる。ブライやカノンが、選ばれたオリジン、トレイスとしてインフィニットの存在を認識できるのなら、監視官ことレギオンの彼も然りだ。

ましてや封印されていたソロやカノンの真の力が芽生え始めているのなら、その存在を気取るなど神の最高作品には容易なこと。

そう、ブライ率いるチームエクスに、インフィニットが手荒い歓迎を寄こしていたのだ。

そんな刺客はクリアウェーブで待ちかまえている。インフィニットの信頼に足る彼の名は『パラス・アテナ』である。そしてレギオンズナンバーは6。数ある宇宙のうち、彼はこの宇宙におけるイン

フィニットの右腕に就いていた。
特徴である美しい水晶を手に持ちながら、占い師のようにして投影されるブライ達の様子を覗きこんでいる。ニヤリと笑うその顔の作りは、美しい女性のようだが、口振りは男性のそれである。そのためか彼に性別というものは存在しない。白金の長い金髪を指先で弄びながら、彼は静かに緑の瞳を覗かせる。
彼は今、レギオンの遺跡へと通じる大階段の前に座り込み、じっとその時を待っている。インフィニットから貰っていた命令は『ソロの封印を解き放て』と言うものであった。

「なるほど。ずっと昔にシュンラン様が施した、”他者を信じられなくする呪縛”を自力で突破したか……。後は心の壁――電波障壁の破壊だけか……。お前には完全な導き役『デコイ』になってもらわないといけないからな」

ｅｄｅｎ―１４：ＷＡＸＡ式カスタム霊柩車

【地球サイド：霊柩車内】

テンキュウ高校が立地する区画に、走る黒棺こと霊柩車が風を切りながら登場した。ハイドが駆るこの霊柩車はＷＡＸＡによる最新鋭の武装カスタマイズが施されており、並の霊柩車ではなくなっている。戦車並の装甲、武装と、自転車並みの小回りを実現する一般人の手に余るスーパー霊柩車である。さらに素晴らしい事に、ハイドの霊柩車はマニュアル式なので電波異常も何のその、紳士として鳴らしたドライビングテクニックの前ではまるで問題にしなかった。本領を発揮したハイドは、とんだじゃじゃ馬である霊柩車を乗りこなして、風と一体となっていく。その様子にスバルは鬼気迫る、達人のオーラを感じた。キミドリも助手席から高校の場所をナビゲートしていく。この一見何のまとまりのなかったチームは霊柩車の中で一つになっていった。

そしてＴＫシティの魔天楼が作るヘアピンコーナーへ霊柩車は雄々しく侵入し、美しい軌跡を描いて駆け抜けていく。車内のスバル達はハイドのシフトレバー捌きに翻弄され、鮮烈な横殴りのＧを感じる。コーナーを抜け、爽やかな解放感と共にハイドの革靴がアクセルを強く沈め、速く、速くあろうと霊柩車に魂を流し込む。五速、六速とギアが乗り、亡霊の叫びが、爆発する燃焼機関から轟き、エンジンの躍動からマフラーに盛大な漆黒のブレスを送り込む。するとすぐにテンキュウ高校の校舎が小さいながらも見え始めたのであ

った。

ハイドはハンドルを素早く切り返すと、霊柩車の尻を振らせながら最終コーナーを突破する。テンキュウ高校の校舎が、徐々に鮮明さを伴い景色を圧迫していく。

さすがにそこはＷＡＸＡ御用達の学び舎であり、一見すると軍事要塞に見えてしまうほどだ。電波受信用の巨大アンテナが、威圧的さから兵器を彷彿させた。

到着はもうすぐと感じたハイドは、リーダーに作戦の段取りを確認する。しかしそれどころではない。車を運転する男性の横顔とは凛々しいもので、キミドリは我を忘れていたのだ。だがハイドはそれさえも承知しており、さっとハンカチを差し出すのだ。この暑い車内での紳士の気配りには、脱帽せざるを得なかった。

「暑いですがしっかりして下さい、お嬢！　さて、作戦は潜入ミッションですが、いかがなさいましょう？！」

キミドリはハンカチを取ると、大きく息を吸い込み、眉を吊り上げる。そうやって暑苦しくて男らしい作戦を宣言したのだ。

今はキミドリがリーダーで、全権限を持っている。

「そんなの決まっている！　男なら正面突破よ！」

「な、何だって？！　キ、キミドリさん、作戦内容を聞いてましたか？　そ、それにアナタは女の人です！」

スバルは堪らず素っ頓狂な声を上げた。キミドリはどうやらオリヒメやリフレインの話を全く聞いていなかったらしい。

しかしキミドリは本気の本気だ。彼女は在校生であるゆえに、テンキュウ高校内部の恐ろしさを実感していたのだ。

「大丈夫！　私はバッチリ本気モードよ！　だって校内は軍事要塞

並の危険地帯！　そんな場所で理事長室のある中央校舎までたどり着くのは至難の業！！　きっと、キングおじさんは生徒を洗脳しているはずだからね！！　小細工は通用しないんだぜ、スバルン！」

「キャハッ正面突破だ！　で、理事長室ってなにー？」

メトリーはお子様ランチを食べながら、楽しげな雰囲気を察知したようだ。しかし任務前にお子様ランチとは、メトリーにも頭が下がるばかりだ。しかし仕方がない。まだ彼女は朝ご飯を食べていなかったのだから。霊柩車の湿っぽい空気も何のその、お腹が空けばケチャップご飯が食べたくなる。

スバルはメトリーの図太さを見習って落ちつくことにした。落ち着きついでに、ニホン語のお勉強だ。

「メトリー、理事長室はとっても偉い人がいる部屋なんだ。そういう場所に、敵のアジトがあるらしいんだよ？」

優しくニホン語を教えると、メトリーは大きく頷いてタコさんウインナーを仕留めにかかった。その一瞬の隙を突いて、スバルはキミドリに詳しい高校内の状態を尋ねる。キングの洗脳という物騒な響きは、放っておけない。

「キミドリさん。校舎の中は一体どうなってるんですか？　キングが生徒を洗脳って一体……」

キミドリはさすがに本気モードらしく、カチューシャを本気カチューシャに取り替えながらスバルの方に振り向く。しかし蝶ネクタイはだらしなく垂れているのはご愛敬だ。

スバルは少し間が抜けた物を感じて苦笑すると、キミドリは神妙な面持ちで高校内の様子を教えてくれた。どうやら、太陽風は太陽風でも、サン・ゴッドの持つオレンジ色のワイル粒子によって、共

鳴作用が働いているようだった。正真正銘の異常事態だ。

「えっとね。事件が起きた当日、サン・ゴッドによる太陽操作が始まったのは知ってるね？

んで、キングはその太陽風の強烈な電磁波を利用して、生徒たちに組み込まれたの電波変換制御装置を滅茶苦茶にハッキングしたってワケ！　その影響で、学校内にいた生徒たちは全員、暴走状態の電波人間になっているはずなの！」

事件から一日近く経ち、何万倍から何百万倍にも跳ね上がった太陽風の影響で、電波変換における制御が利かなくなっている。もちろん、この状況で電波変換を行えば、スバル達もテンキュウ生徒と同じ、生ける屍状態となるはずだ。それが電波変換を行えない原因で、そこをキングが突け入ったのだとすれば、さすがと言える。

そのようなキミドリの説明にスバルは納得しそうになるが、頷きかけたところで大きな矛盾点に気が付いてしまった。それはキミドリもその学校の生徒のはずなのに、平然と本気カチューシャのセッティングをしていることだった。

「あの、キミドリさん。だったら、なんでアナタはその暴走状態になってないんですか？」

スバルの抱いた疑問にキミドリはドンと胸を叩いて、企み顔のしたり笑みである。

「フフン！　甘いわよっスバルン。私はたまたま新聞部の取材で、校外にいたから平気なの！　中にいたら今頃私もゾンビだねっ。ウゴゴゴー！」

緊張感のないキミドリにウォーロックが堪らず声を張り上げた。

彼はこと戦闘においては、プロの姿勢を見せる。なので地球の危機を、アトラクションか何かの一種だと思っているようなキミドリの態度が許せない。素早いビーストスイングでカチューシャを取り上げると、キミドリの鼻の穴にそれを突っ込む。

「ウゴゴゴー！　……っじゃねーんだよ！　食らえ、ビーストノイズブレイク！」
「グアアッ！」

スバルはウォーロックが見せた無駄にカッコいいネーミングに感動する。だがハイドの方が切羽詰まった様子で、遊んでいるリーダーを助手席に引き戻した。もう、高校は目の前なのだ。怪しい電波人間が正門の前で、見張りをしていた。例の生ける屍だ。

「お嬢！　本当に正面突破で良いんですね?!　敷地内はかなり広く、中央校舎までかなりの距離があるますが、本当に良いんですね？」
「おう！　この霊柩車はオリヒメさんのスーパー改造を施してあるからね！　中央校舎まで突っ込むよ！」
「頑張れー！　紳士ー」

お子様ランチを食べ終わったメトリーの声援を合図に、ハイドはアクセルを踏み込みスーパー霊柩車をフルスロットルさせた。
そのままスーパー霊柩車は高校の正門を突き破ると、大胆に敷地内に侵入した。霊柩車はまるで王宮のそれであるような中庭を走行していく。スバルはこのまま中央校舎まで一直線だと思ったが、そうは問屋がおろさなかった。
突然車内で、けたたましい金属音が鳴り響いたのだ。メトリーが目を輝かせ、窓にほっぺたをつける勢いで、外の景色を眺め始めた。彼女は刺激的な光景に、笑みが絶えない。しかしハイドや夜太郎の

顔は真っ青だ。ボンネットには複数の小さなへこみが出来あがっていたのである。幸い装甲を突き破られた様子はないが、間違いなく敵の攻撃を浴びていた。

　するとメトリーが刺激的な演出を施した犯人を見つけたのだった。それも単独犯ではなかった。格納庫のある方角から、ぞろぞろと現れるのである。

「わー、カッコいい車がいっぱいだー！！」

　メトリーのはしゃぎっぷりはここに極まったが、ここは喜ぶべきところではない。なんとスバル達の霊柩車を迎えたのは、ＷＡＸＡが誇る最新鋭装甲車両だった。しかも今回の電波異常を見越しているオマケ付きであり、実弾兵器を仕込んでいる。キングはどこまでも徹底的に地球を滅ぼすつもりらしい。

　ハイドは敵の射撃を神業のドライビングテクニックでやり過ごそうとするが、被弾数は増えていく。激しい銃撃に晒されて、車内は並の戦争映画では実現できない臨場感となる。メトリーは楽しそうだが、スバルは胃がきりきりと痛かった。強化ガラスにヒビが入り、中央校舎まで車体が持つか分からない。

　ハイドはそれでも敵をやり過ごそうとするが、テンキュウ高校の中庭はとてもひらけており、中々振りきれない。すると霊柩車の命とも言える、貨物部分に飾られた天かける純金ドラゴンが吹きとばされた。ハイドは霊柩車のシンボルの喪失に強い衝撃を受けたのだった。

「クッ……じ、実弾兵器ですって……！　た、耐えてくれ下さいよ……我がジェントル号ッ！」

　キングの手の込みようは恐ろしい。電波異常を見越して、装甲車両に実弾兵器を容赦なく撃ち込んでいく。しかしキミドリも負けじ

と、霊柩車ことジェントル号に仕込まれた武器で反撃することを指示した。

「スバルン、夜太郎さん！　こっちも実弾兵器で反撃よ。ぶちまけちゃって！」
「わ、わかった！」
「ハ、ハイ！」

スバルと夜太郎は操作方法は分からないまでも、適当にクーラーを操作するボタンを押してみた。すると棺桶を収納するはずの貨物部分からガトリングガンが砲身を伸ばす。死者の眠るべき場所から伸びる兵器の数々は、少々シュールではあるが今はやるしかない。スバルと夜太郎はクーラーのボタンを連打した。するとガトリングが回り始め、バラバラと鉄の塊を弾きだしていく。

「うぉおおお！　僕達の魂の一撃を喰らえ！！」
「受けて下さいっ！　スーパーガトリングガン！！」
「イケー！　夜太郎ぉー、スバルゥー！」

ｅｄｅｎ―１５：俺サマが相手になってやる！！

爆裂するガトリング。

さすがオリヒメが施した改造兵器だった。おおよそ霊柩車とは思えない戦闘能力を発揮している。装甲車両のタイヤを的確に撃ち抜いて、走行不能に追いやっていく。ハイドのドライビングも相まって、ジェントル号は銃撃戦の中で一騎当千の活躍を見せたのだ。ハイドの的確なハンドル捌きと、一瞬の判断力が敵の操縦者の力量を大きく上回っていた。かつてはオリヒメやプルト・キグナスの元で死線をくぐり抜けてきた男である。理性を失った高校生に後れはとらないというわけだ。そしてさすがにスバルも夜太郎も裏世界の修羅場をくぐり抜けてきただけあり、射撃センスは申し分ない。

もはやこのジェントル号を止める事は出来ないだろう。キミドリの作戦が結果的に功を奏した。正面突破により中央校舎まで、最短経路で向かっていく。

そしてハイド、スバル、夜太郎の活躍により、何とか敵との距離を取る事に成功したのだった。反撃を嫌ったのか、装甲車は付かずとも離れずのところで様子をうかがっている。

キミドリはその様子にホッと胸をなで下ろし、頑張りを見せた三人にリーダーらしくパチパチ拍手してあげた。

しかしこの四人、曲者ぞろいではあったが中々良いチームになり始めていた。

リーダーを務めるデザインヒューマンの六角キミドリは、この状況下でも電波変換ができる切り札である。

ハイドに至っては天才的なドライビングテクニックが凄まじく、

そしてディーヴァについて良く知る需要人物だ。
夜太郎はうだつの上がらない四十代無職だが、相棒のメトリーがウイルスウィザードなので貴重な戦力だ。夜太郎がいないとメトリーが泣くので、夜太郎も重要なのだ。
そして忘れてならないのはスバルで、彼に秘められた未知なる可能性は予想できない奇跡を生み出す。あのリフレインですら、信頼をおく絶対のヒーローだ。
そんな四人を乗せたジェントル号は現在、中央校舎の存在するエリアに侵入しようとしていた。中庭が、武骨な鉄の密林へと変わっていく。遠くからも見えていた巨大な研究用のエリアである。実験用施設なのか、学校としての匂いはまるで感じられず、冷たい印象を突きつけられる。銀色のバリゲードが惜しげもなく校舎を囲い、景観への配慮などまるでない。
キミドリは侵入ポイントへ、ナビゲートを始めた。

「ふう、とりあえず。膠着状態には持ちこんだわね。相変わらず無愛想な、校舎ね」

キミドリが暑苦しそうに胸元を手で扇ぎながら、横に流れていく中央校舎の連なりを眺める。彼女には珍しく、思いつめた表情を覗かせたのだった。パタパタと手で扇ぐが、汗は止まらなかった。
しかし車内は異常に暑く、キミドリだけではなく全員、滝のように汗を流していく。それはそのはず、このジェントル号、クーラー部分を全てガトリングガンに回していたので冷房がない。サン・ゴッドの働きもあり、車内は五〇度に迫ろうかとしていた。
電波体はそれほどでもないが、人間には厳しい状況だ。ハイドに至っては、コートに帽子を着込んでおり、暑苦しいなんてものじゃない。スバルは見ていて熱中症になりそうだった。

「ハイド……その暑苦しい格好をどうにかしなよ。見ているこっち

が辛い」

スバルはいつもの赤い長そでを脱ぎ捨て、Tシャツ一枚だ。夜太郎もしわしわの白いタンクトップから、ネクタイを締め涼しくもおしゃれに着こなしている。メトリーはウイルスなのでへっちゃらしく、いつもの黄緑色のワンピースだった。

しかしハイドは譲れない何かがあるらしく、汗だくになりながらも、スバルの言葉に首を振った。

「いえ、この服装には紳士なりの誇りがあります！」

「ケッ！　紳士ってガラかよ！！」

ウォーロックは棺桶の中から悪態を吐いた。車内はせまくて、電波体グループは棺桶で待機しているという事情らしい。

するとキミドリが思い出したように鼻の穴を押さえると、わりと真面目にリーダーらしく各員へ作戦の確認を行った。

「じゃあ、ちょっと。今のうちに確認を行いますかっ。これから中央校舎に侵入するワケだけどさ。みんな、注意してね。校舎の中はおそらく、暴走した電波人間――アストラル・ジャマーってヤツが徘徊してるはずだから」

「アストラル・ジャマー？」

「ハーン、なんか邪魔臭そうな名前だな」

スバルが疑問を呈し、ウォーロックがネーミングにニヤつく。ピッと人差し指を立て、女教師を気取りながらキミドリは説明する。おそらくアストラル・ジャマーとは、キングがかつて言っていた戦闘要員のことなのだろう。

しかしキミドリは不満でいっぱいのようで、耳の穴をほじりだす。

「だーかーらー、さっきも言ったじゃん。暴走した電波人間がいるってー。暑いけど、ボケちゃぁーダーメよースバルーン？　で、アイツら太陽風の影響で制御がきかなくなってる感じだし、キングもロクでもない命令をインプットしてるだろうしで、なるたけお会いしたくない相手ってこと」

「なるほどな。じゃあ、小細工なしで理事長室まで直行だな？」

ウォーロックは単純な回答を示すが、キミドリの表情は思わしくないようで、汗を拭いながら憂い顔だ。

「そう簡単にいかないのよねー。ハイドさんが言うには、学校中のセキュリティが作動して、その部屋まで何重にもロックされてるって」

「じゃあ、キミドリさんが電波変換すれば……」

やはり暑過ぎて頭が回らないのだろう。スバルは、キミドリの電波変換が数分しか持たないことを失念していた。

「いや、私はサン・ゴッドの方を何とかないとだしね。サテラポリスの方も世界中の人が避難するまで増援に来てくれなさそうだし、無駄な変身はよしたいな」

「じゃ、どうすんだ。電脳世界からロック解除しようにも、この状況じゃ俺もサイバーインできねーぜ？」

ウォーロックが棺桶でゴロゴロしながら言う。サン・ゴッドの太陽風――ゴッドブレスの影響で普通のウィザードでは対処できない。すると夜太郎がおずおずと挙手して意見を出した。タンクトップにネクタイという、落ち武者のような雰囲気だが、夜太郎頭脳はで頭が切れる。

「あの、メトリーならどうでしょう？　この子はウイルスみたいなモノですからジャミングにも強いですし……」

夜太郎の素晴らしい提案に、キミドリはウインクをプレゼントする。当のメトリーは、後ろから追ってくる装甲車をワクワクと見つめていて呑気なものだ。

「あ、それ良い！　じゃ、メトリーちゃんに頑張ってもらおう！」

確かにこういう時の為にリフレインはメトリーを選んだのだろう。だが、安易な判断にスバルは首を傾げた。本当にそれが一番なのか疑問だろう。なによりメトリーは幼すぎて、サイバーインするのは危険すぎる。スバルはかつてオープンマンで苦労しているだけに、汚染された電脳世界の危険性を良く分かっていた。

メトリーをキミドリの方へ抱き寄せ、スバルは眉をひそめた。

「でも、それってメトリーが危なくないですか？」

「あん、スバル？　他に方法はねーだろ。このチビしかできねーんならやるしかねーんだ。心配なら、オッサンとお前で最高のオペレートをしてやるんだな」

「ロック、簡単に言うけどさ……。メトリーは……まだ小さいし」

ウォーロックの冷たいともとれる物言いに、スバルは苦言を呈する。スバルからして見たら、メトリーはどこにでもいる少女と普段から変わらない。あかねの家事の手伝いをして、買い物を一緒に行って、元気に近所の子供と遊んでいる。とても戦えるとは思えなかった。地球が懸かっているから提案こそしたが、実は夜太郎も同じ気持ちのはず。

しかしメトリー本人は、やる気満々だった。どうやら話を聞いていたようで、小さな拳を握りしめて、眉間に力を入れて頑張ってい

る印象である。

「大丈夫だよースバル。わたしって、エメリオルのおじさんにも勝ったんだから！　銀河連ぽーよりも強いんだもんっ。頑張っちゃうもん！」

本人がやる気になっており、スバルもそれを尊重するしかない。結局スバルと夜太郎がしてやれることは、最高のオペレートでメトリーをサポートするだけだ。

そんなやり取りをしていると、中央校舎がいよいよ目の前に迫ってきた。

するとおかしなことが起きる。さきほどまで追いかけてきていた装甲車両がとつぜん見当たらなくなったのだ。メトリーが目を離した隙に逃げ帰ったという訳ではないだろう。

次の瞬間。とつぜんハイドが悲鳴を上げた。「せ、戦車だ！！」そのひっくり返った声とほぼ同時に、車内が大きく横に揺れて、中にいたスバル達はゴロゴロと転がった。それはハイドの乱暴なハンドル操作によるものだ。すると彼の操縦に一瞬遅れる形で、激しい閃光が車窓からなだれ込んできた。つかの間の出来事だった。激しい爆風に車体が少し持ち上げられ、ジェットコースターにでも乗っているような感覚にスバル達が襲われる。

それでもスバルは一瞬の出来事を網膜に焼き付けた。戦車――と言うよりも要塞が前方に構えていたのであった。さすがに軍事施設並の実験施設だ。

そのことから先程の装甲車はスバル達を諦めたのではなく、巻き添えを喰らわないように撤退していたのだと分かる。

凄まじい一撃を放った後、間髪いれずに主砲が再びジェントル号に向けられる。ハイドは咄嗟の判断で大きくハンドルを切り返した。横に揺れる車体。また閃光と爆風だ。ハイドの的確な判断がなかったら、スバル達は車体ごと消し炭なっていただろう。

主砲の被弾地点には、十メートル大の巨大なクレーターが口を開け、黒い吐息を上空へ伸ばしていた。威力だけなら屈強な電波人間の出力並である。それを避けたのはさすがのハイドである。しかし爆風までは何ともならず、車体はフワリと持ちあげられてしまい、とうとう前のめりにひっくり返されてしまった。

クラッシュして激しく揺れる車内。至る個所から安全装置が働くが、その衝撃は尋常でなはい。スバルは頭がやられないように、咄嗟に手で頭部を覆った。しかし駄目だ。地面が天井になり、窓ガラスが刃に変わる。防御態勢なんてとれたものではない。

するとウォーロックが棺桶から飛び出してキミドリ、ハイド、スバル、夜太郎の人間達を大破した車内から乱暴に投げ飛ばした。おそらく彼は投げ飛ばした後のことは考えていない。しかし主砲のターゲットにされるよりかは全然ましだ。

空中を舞う四人。するとウォーロック達がまだ乗っているだろうジェントル号に、例の主砲が浴びせられた。激しく爆発し炎上すると、車体は跡形もなくなってしまう。スバルがハッとするが、人の心配をしている場合ではない。時速百キロ以上で、空中に投げ出されたのだから地面に激突すれば、タダでは済まない。

すると爆発して燃える黒煙の中から、幽霊のような電波体がスバルたち目がけて飛んできた。彼は腹の辺りから巨大な黒い手のひらを伸ばすと、スバル達四人をがっちりと掴む。

そのまま地面に着地した幽霊は、手のひらを広げてスバル達を地面に下ろす。すると中からスコープとメトリーも出てきた。だがウォーロックの姿はない。

ウォーロックはいないが、スバル達は何とか一命を取り留めたようだ。彼らを助けた幽霊はハイドのウィザードのオリジナル・ファントムであった。ニックネームはカゲロウ君だ。

「あ、ありがとう。助かったよ、カゲロウ君……」

「どういたしまして。でもお礼は後だよ。はやく中央校舎まで走る

んだ！」

オリジナル・ファントムことカゲロウ君は、口からすすを吐きだしながら立ち去るように言う。そう、要塞がまだスバル達を狙っていたのだ。主砲がスバル達を射線上に捉えた。

スバル達は主砲から逃れるように駆けだした。しかしメトリーが足をくじいてしまったようで、ペタンと座り込んでしまう。「メトリー！」叫ぶと、すぐに夜太郎がメトリーをおんぶして走り出した。しかしそのタイムロスが窮地を招いた。

だが夜太郎も愚かである。電波体であるメトリーなら主砲を貫っても何とかなったかもしれない。しかし人間はそうもいかない。夜太郎の父親だった部分が、最適な判断を下せなかったのだ。メトリーを娘と同一視していたために、死への片道切符と娘を交換するに至った。

夜太郎もこれは逃げられないと悟っただろう。スバル達が後ろを振り向くが、もう間に合わない。先を行く組は一瞬迷ったが、それでも中央校舎を目指して走った。しかしリーダーであるキミドリは立ち止って、ただの考えなしなのか夜太郎の元へ向かって逆走を始めたのだ。絶対に間に合わない。しかし彼女もそれは分かっている。だから切り札を使うつもりだった。そう、電波変換を。

だが主砲は待ってはくれず、夜太郎とメトリーを捉えた。キミドリはハンターを構えたが、彼女のすぐ横を青い流星が駆け抜けていったのだ。

「バカヤロー！　こんなところで変身するんじゃねえ！」

ウォーロックの声だ。焦げ臭い煙をまといながら、青い閃光はそのまま主砲を受け止めるように、夜太郎の前方に立ち塞がった。体中がすすけているが、大事はないようだ。そのまま腰を落とすと、自慢の爪に力を込めていく。

主砲が瞬いた。ボウリング大の鉄の塊が勢いよく襲いかかる。今のウォーロックは電波化できない実体だ。これは不味い。しかしウォーロックは男を見せた。

「ウォラアアア！！　ビーストォスゥイングァアアアッ！！」

それでも夜太郎を守るためにウォーロックは盾となったのだ。彼を中心に爆発が広がる。夜太郎は一瞬呆気にとられるが、中央校舎に向かって走り出した。

ボロボロのアーマーで乾いた音を鳴らし、鉄の床を転がるウォーロック。そんな彼は煙の緒を引きながらも、夜太郎とスバル達の背中を見送った。主砲の一撃をまともに貰ってしまい、無事では済まないだろう。

そして要塞はウォーロックを抹殺したと思ったようで、再び主砲をスバル達の方へ向ける。まだまだ射程距離の中なのだ。スバル達の逃げ足よりも、弾の装填の方が早いだろう。

すると諦め悪く、またもや青い流星が飛び出した。ビーストスイングを繰り出した方の腕は吹き飛んでしまっているが、諦めない。ゼロＰＧＭがなかったらデリートされてしまっていただろうが、諦めない。

「お前の相手は、俺だァア！！」

「僕も手を貸すよ！」

ウォーロックに助太刀する形でカゲロウ君も要塞に飛びかかる。がむしゃらに暴れて、スバル達が中央校舎に辿りつくまでの時間を必死に稼いでいる。

そうしてスバル達は、ウォーロックとカゲロウ君の身を挺した活躍により、何とか中央校舎に到達することに成功したのだった。

eden―16：マルチ・エフェクト

【宇宙サイド：最終階層クリアウェーブ】

スバル達が身を粉にしてようやくテンキュウ高校の中央校舎に潜入したころ。ブライ達も長いホワイトウェーブを抜けて、やっとの思いで最終階層クリアウェーブに辿りついていた。

ホワイトウェーブを通っているうちに、チーム内である程度親睦を深めたようだ。ブライをリーダーと認めて、全員が彼の後に付いていっている。スバル達のチームよりは落ち着いた状態である。

しかしここから先は何が起こるか分からない。生命が関与することのない、宇宙の末端にリンクする空間であるからだ。ここから先は言うなれば、神の領域である。そして宇宙の端というだけあり、いつ外の世界に飲み込まれるかも知れず、恐怖と焦りが行く者に襲いかかる。神秘的だが、決して甘い場所ではない。透明で透き通ったノイズは、この世界に訪れた者の表情を、鏡のように映し出すのであった。

そんな水晶のようなものを目の端に入れながら、ブライは迫りくる外の世界との距離をカノンに尋ねた。カノンは攻撃には向かないが、防御能力やハープ・ノートのように感知能力に優れていた。

カノンは銀髪をかき上げると、耳に手を当てて立ち止った。後に続く者も、カノンとブライの様子を見守る。

「……うん。聞こえる、宇宙の外にいる閉じ込められた人たちの声

が……」
「それで、どうなんだ？」
「大丈夫……、あと二日はここまで宇宙は収縮してこない」
「そうか」

ブライはひとまず不安材料を解決し、すたすたと一団の先頭を歩き始める。だが、それでも慎重を期しているのか、むやみに単独で走り出す真似はしなかった。ハープ・ノートの言葉を大切にしているのかもしれない。

そんなブライにカノンも急いで付いていこうとするが、キリン・ライトニングに肩を掴まれて引きとめられる。カノンの言っていた言葉に引っかかる部分があったらしい。

「なあ、カノンちゃん。さっき言ってた宇宙の外にいる人たちって……？」

カノンは先に行ってしまうブライの方を、何度か口惜しそうに見つめるが、観念してキリン・ライトニングの方に向き直った。

「アカシックレコードだよ。そんなものが宇宙の外にあるの……。そこにいろんな人が閉じ込められている。死んだ人、迷い込んだ人、神に逆らった人……たくさんの人がそこにいる」

カノンはかつてシュンランから貰った記憶を辿り、思い出しつつ、彼に教えてやった。

キリン・ライトニングもスバルやワタルの持っていた特殊な力からその存在は知っており、そしてずっと気になっていた。しかし、ＷＡＸＡがいくら調べてもその正体が判明することはなかった。

そのためカノンの情報にキリン・ライトニングが食いついたのは、ごく当然の成り行きだった。

「アカシックレコードについてもっと教えてくれ。スバル君やワタルのヤツがたまに口にするが……正直なところ良く分かってないんだ」

「宇宙の記録を溜める場所だよ。そこには人々の物語が詰まっているの。自分だけの物語――お兄ちゃんはずっとその力を探している。でもね、その力はこの世界に生きるみんなが持っている。気付かないだけで、アナタやミソラも持っているんだよ？」

「自分だけの物語の力、か。なるほどな、大切なことを教えられたよ」

「ううん。私だって全てを知っている訳じゃない。これだけでもアナタが喜んでくれるなら、私も嬉しいな」

柔らかな微笑みを残すと、カノンはブライの後に続くように駆けだした。どこまでも一途なの少女であり、後ろからブライの手を握るが、知らんぷりを決め込まれ不満そうだった。

慕われた様子のブライは、今でも自分の信じるべきものを探しており、それが彼女の言うところの自分だけの物語の力である。しかし彼の物語の意味は容易には見つからないだろう。現在、地球人で確認されているアクセス権限者はスバルとワタルの二人のみなのだ。

大きな困難が伴うことが約束されている。そんな一筋縄ではいかない事情を、かつて拳を交えたことのあるキリン・ライトニングは強く感じている。それでも彼はブライの物語の意味が見つかることを密かに願ったのだった。

だが、これからブライ達に、神の試練と称した恐ろしい出来事が待っており、その片鱗が垣間見えることとなる。ここはクリアウェーブ。神の領域だ。ブライとカノンが生まれた意味と、宇宙が生まれた意味が交差し、決められた運命をなぞり出す。

その手始めとしてナンバー6、パラス・アテナの言葉がブライ達に送られたのであった。

《やあ、愚か者ども。最終階層までよく来た》

ブライ達は気付く由もないが、彼の水晶は宇宙の外の技術で作られており、球の中に投影された者達に声をかける事ができる代物だ。しかし大階段の前で座っている彼の様子など知る訳もなく、戦慄がチームを襲う。白んだ空間の向こうで、パラス・アテナが落ち着きのないチームを迷える子羊と同一視して笑いを堪えていることだろう。その証拠として、彼の言葉の端々には馬鹿にしたようなつり上がった声が混じっている。

《フフ、インフィニット様に逆らおうとするとはな……っ。宇宙の仕組みの何一つ知らずに、生を欲するとは片腹痛い。代償としての進化という価値を見出せずにもがくばかり……っ》

どこからともなく浴びせられる中性的な音調の声が、おおよそ意味の分からないことをのたまうと、ブライ達はぴたりと立ち止って辺りを見回す。依然、揺さぶられている。しかしどこを見渡せど、氷のような透明な道が一直線に伸びているだけで、人の気配は感じられない。外灯もない道は、一見視界が悪い印象ではあるが、辺りを飛び回る透明なノイズがわずかに発光している。なので、雪の積もった夜中程度には視界は開けている。だが、誰もいない。

ブライは声を荒げた。

「ふざけたことを言う奴は……誰だっ。どこにいるっ？！」

《俺はナンバー6、インフィニット様がおられる”エデン”に通じる大階段前にいる》

「レギオンか……。それに、エデン……大層な名だな」

エデン、それは聞いたこともない名前だったが、おおよそ見当が

つく。そこにインフィニットがいるのだから、レギオンの遺跡の本当の名前という事になる。楽園とは言ってくれるものだ。この宇宙に生きる全ての者にとっては、そんなありがたいものではなく皮肉の意味でしかない。

しかしパラス・アテナには関係ないことのようで、粗野な印象を受ける口振りで言いつけてくる。彼はブライ達を試すつもりらしい。インフィニットはおろか自分にも刃を向けるに足る存在か推し量っていた。

《俺の元に来るなら、そうしたらいい。だがその前にだ……。お前らには、外と内が不安定に干渉し合う世界で”歴史”と戦ってもらうがな……！　それが、俺と会う最低条件だ》

当然ブライ達は、パラス・アテナの怪しげな言葉を疑って逡巡した。しかしクリアウェーブの道は一本しかなく、進むべき道が先を見せずに提示するだけだった。この神の領域を彼らは進む他ない。

それが例えパラス・アテナの思惑通りだとしても、さらにその奥にインフィニットがいるのだとしたら、選択の余地はないのだ。もちろんブライとカノンもインフィニットの気配とパラス・アテナの気配を一本道の先に感じていた。強大な周波数が嘘ではない現実を伴って確信させる。

ブライは目を鋭い切れ込みのように細めて、静かな怒気を瞼の奥に隠した。姿を見せずに好き勝手に言ってくれる、名も知らないパラス・アテナに、敵意を燃やしたのである。

「待ってろ。すぐにお前のふざけた態度を叩き直してやる」

《さて、俺の元に辿りつくことができるかな……？　そして、お前の生まれ持った運命を知った時、本当に強がっていられるかな？》

ブライはその挑発ともとれる言葉を軽く受け流し、チームの方に

向き直る。彼は成長しており、団結して進むことの重要性を認める事ができるようになっていた。それは足を引っ張り合う慣れ合いとは違うものだと気付けたのだ。今はただの協力関係だが、やがて絆に変わるのには、彼にとって遠くないだろう。

「サテラポリスにＦＭ星人。ふざけたレギオンの言葉を聞いていただろう？　今から俺達は、クリアウェーブの奥に突き進む！」

ブライが固く拳を握って、皆の意思を統一するかのように声を大にした。無意識のうちの行動だろうが、どうやら彼は学ばずともリーダーの資質を心得ているようだ。

「これは俺の物語で、その意味を見つける戦いだ！　そしてそれがお前達の宇宙を救う事に繋がるのなら、俺は協力してやる！　だからお前たちも、俺に全力を注げ！」

「お、お兄ちゃん。そんな言い方だと……！　み、みなさん、本当は一緒に戦いたいって言いたいんだと……」

「お前、余計なことを……！　俺は思ったことを口にしただけだ……」

態度と姿勢は立派ではあるが、なにぶん口下手であり、誤解を生むような表現だった。カノンが慌てて、チームの皆に向かってブライの真意を代弁するのだった。しかし、ここにいるメンバーはブライに対して理解を示していたので、その必要はなかったようだ。

ハープ・ノート、ソウル・レイダー、オリオンが苦笑している。その他のメンバーもしっかりと頷いて、呆れた様子の者や、闘志を燃やしている者もいる。

「うん、分かってるよ。ソロ君の気持ち、バッチリ伝わった」

「フン、なかなか難しいものだな。言い回しというものは……、俺

もそうだからかな？」

「真意は伝わっております。彼の本質を示す戦いぶりは、ＷＷＲとの戦いで刻んでますからな！」

少し照れ臭くなりブライは一笑する。そうして悪くない胸の高鳴りを覚えて、くるりとメンバーに背中を向ける。そして意を決して走り始めた。俺に付いて来いとでも言わんばかりの、迷いのない足の運びだ。

「ナンバー６を叩きに行くぞ！」

ブライは本当の仲間を手に入れた。カノンの全幅の敬愛がきっかけとなり、ハープ・ノート達のしつこいまでの友好の気持ちがようやく実を成したのであった。

しかしそれさえも、レギオンや神の意志であるとは、まだブライ自身が気づいていなかった。シュンランの言葉から神に戦いを挑んだのもまた、決まっていたことなのかもしれない。

全てはブライがデコイとなるための下準備に過ぎないのだから。

しばらく走れば、パラス・アテナの言う戦いの場が姿を現した。道はどうやらここで行き止まりのようだ。

ようやく辿りついた先は、開けたスケートリングのような場所で、氷の闘技場という様相だ。しかし観客などいる訳がなく、そこで美しい演技を披露するのではないと良く分かる。その代わり、円周部を囲うようにして十二の扉がそそり立っていた。それらは駆けつけたブライ達のありのままの姿を映し出し、それはどこまでも透明で美しい。

するとパラス・アテナがやはりブライ達のことを観察していたようで、その場所の役割を告げた。

《……時の流れとは、時計が良くあらわしている。その一周に込められた意味するところは歴史そのもの。この宇宙の成り立ちが込められている》

パラス・アテナの物言いは、暗喩的で分かりにくい。しかし時計が歴史と関与しているようなことを伝えたいのだろう。そのため確かにこの場所は時計を表現するように十二の扉が、ＩからＸＩＩの数字に対応して置かれていた。要はこのステージ全体で天文時計を模しているということだ。

《さあて、それらの扉の先に待ち受ける歴史の化身と語り合ってもらおう。お前達が本当にその歴史の上で生き、進化できる存在なのか確かめさせてもらう……。この時の試練でな》

行き止まりである以上、彼の言う通りにしなければ道は拓けそうもない。引き返そうにも、クリアウェーブは終末宇宙に食いちぎられてしまった世界で、これ以外の道はなかった。

するとソウル・レイダーが覚悟を固めたのか、Ｉの扉に向かって駆けだした。ＦＭ星人の戦士三体と、アストラル・ホープ二体を後ろに従えて果敢に挑む。切り込み隊長の姿はここでも健在だ。

しかしその扉は押しても引いても、ビクともしなかった。叩き壊そうにもそれは頑強で、思考錯誤するソウル・レイダー達を馬鹿にしたように映し出すだけだ。

そんな困った様子の彼らに、パラス・アテナが教えてやる。

《この試練……。一つの扉に一人しか入れない。一人でその扉の前に立った時、文字が浮かび上がるという仕組みさ。それを口述すれ

ば試練の場所へと導かれる》

「一人だと？　危険な賭けだな……」

ソウル・レイダーは敵の罠の可能性が高いと見るや、いったんチームの方に戻り、作戦会議を始める。

この試練の方式にチームが難色を示す中、ブライだけは元々単独戦闘が得意だっただけに、迷いなくカノンをラプラスブレードに変化させた。

「どのみち、試練とかいう茶番を突破しない以上、先は開かれない。俺は行く……！」

ブライの悪い癖で、早まった行動を起こしそうになる。するとカペルが声を上げて、引きとめにかかった。「ああん、もうっ！」それは男性のものにしては高い帯域の声だ。それも少女の声なものだから、チーム全員がぎょっとして彼に振り返る。もちろんブライも、気持ち悪そうにカペルの方を見咎めていた。肩に担がれたラプラスブレードもクスクスと笑っており、どこを見ても気持ちの悪い景色だ。

しかし当事者のらカペルも突然のことで戸惑っているらしい。それでも彼の口からは少女――エリアの声を送り続けていた。どうやら、彼はいま執事らしく通信媒体となっているようだ。

《やーっと、繋がったわね。どう、カペル、通信状態は？》

「ええ、大丈夫のようです。ですが、ディスプレイの方を介してもらわないと……私のイメージというものが」

カペルは自分自身がエリアの声を介することを気恥ずかしく感じて、エアディスプレイを広げた。するとすぐにエリアの顔が映り出す。画面の隅にはリフレインやワタルが覗きこんでおり、様子をう

かがっている。どうやらエリアは、ＦＭ星の王宮から通信を送っているらしい。遠く離れたところから通信とは恐れ入るが、宇宙の事情もワイル粒子を主な原因としてずいぶん変わり始めていた。その変化が通信を可能としているのだろう。宇宙収縮の影響で、間違いなく宇宙全体のスケールは小さなものとなっているのだ。

エリアは早速、チームエクスの調子を尋ねる。

《どう、そっちの経過は順調？》

相変わらずの上から目線なので、ブライはそっぽを向いて無視することを決め込んだ。するとスカッド・エースが、時の試練のことをエリアに伝える。

ふーん、とエリアはそれを聞いても特に問題視していないようだった。彼女は虚勢を張る癖があるが、今回はそれの類ではない。余裕気で、まだ意味の通る口振りから、本物の自信がうかがえた。

《大丈夫よ！　カペルのマルチ・エフェクトを使えば何とかなーるっ！》

エリアの不敵な笑みに、チーム一同は首を傾げた。この子は何を言っているのだろう？

マルチ・エフェクトという良く分からない機能は、さっそく不信がられている。しかしエリアの隣にリカがひょこりと現れて説明してくれれば、皆の疑問は即解決した。

彼女が言うにはカペルは特殊なウィザードで、マルチ・エフェクトという電波変換を強化する機能が備わっているそうだ。

そして百聞は一見に如かずということで、リカはエアディスプレイの向こう側から、オックス・ファイアを呼びつけた。彼はさきほどから、何かと目立つブライにライバル意識を燃やしていたようで、ようやく回ってきた出番に鼻息荒く意気込んだ。

「ブロロロ！　おうおう、俺様に何か用かい？」

《ウフフ。相変わらずの元気の良さ。じゃあ、ちょっとカペルの近くに寄ってもらえるかしら？》

オックス・ファイアはやんわりと笑われてしまって、勢いが殺されてしまう。すっかり不満な様子に逆戻りとなり、カペルの元にずかずかと歩み寄る。うっとおしいクリアノイズを爪弾き、それで多少の鬱憤を晴らす。カペルに対して、自然と無愛想な目線を送ってしまう。

一方カペルはというと、煙たそうにオックス・ファイアの吐息を払う。そしてリカとエリアの思惑はすでに承知しているようで、さっそく彼に向かって手をかざした。そうして彼の銀髪がふわりと持ち上がれば、並々ならぬ事態が起きる事を予想させた。チーム一同

は、これから起きるであろう、マルチ・エフェクトというものを固唾を呑んで見守った。

彼のサンブラスのようなバイザーがチカチカと輝き、機械的な信号が目の奥で走っているのが確認できる。赤黒い甲冑からは電子回路のような紋様が浮かび、幾何学的な刺青のようだ。それら走りの良いラインの数々が、肩から手のひらへ流れていく。

そしてプロジェクトＴＣ・５ｔｈウィザード・カペルの本領が発揮される。天性の才能を持ったシドウや、キミドリ擁するデザインヒューマンが、より完璧に導いた電波変換の極意が姿を見せる。

オックス・ファイアにマルチ・エフェクト情報が流し込まれていく。彼の分厚い装甲は、さらにどっしりとした重厚感を得ていく。角の先は二股に分かれて、より攻撃的な印象となる。体は赤と黄のコントラストが眩いばかりだ。

カペルは最後の仕上げに、グッと手のひらをオックス・ファイアの胸にあてがった。

「マルチ・トランスウェーブＰＧＭ、オーバークロック！」

カペルの特殊ＰＧＭは、在りし日の光熱斗が残した遺産が元となっている。それを伊集院家が引き取って、改良したものだ。もともとのトランスウェーブＰＧＭはかなり危険な代物だったために、デザインヒューマンの人体実験を何度も何度も繰り返さなければならなかった。そう、かつての悲劇を繰り返さないために。

そして悲劇や、実験を乗り越えて、人類は汎用可能な強化電波変換を手に入れた。赤い輝きの中から、強化オックス・ファイアが現れたのだ。

リカとエリアはひとまず安心したように、ホッと一息吐く。

《うん、大成功ねっ》

《よーし、ゴン太！　今のアナタの名前はオックス・ファイア２よ

！≫

強化オックス・ファイアの戦闘能力は飛躍的に向上していた。それは彼自身も信じられないほどで、不思議そうにクリアノイズに映る自分の姿を見つめていた。目に新しい、洗練されたフォルムが、男の子のロマンに的中する。何より炎の出力がすごいのだ。熱い男のゴン太には、それが最も嬉しい変化のポイントだ。そんな彼の姿に、チーム一同も呆気にとられる。

だが、カペルの能力の素晴らしさに気付いたようで、我先にとマルチ・エフェクトを掛けてもらおうと彼の元い殺到した。しかしブライの場合はマルチ・エフェクトの対象外であった。彼はプロジェクトＴＣの規格外なので、その恩恵を受ける事はできない。そしてアカシックレコードに汚染されているフェニックス・リボンや、さらにＲレポートにも汚染されたロックマンも同様である。

それでも個々の戦闘能力の飛躍は目覚ましいものだ。５ｔｈウィザードの性能は凄まじいばかりだ。パワー、スピードその戦闘能力が向上した今ならば、何とか時の試練に立ち向かう事が可能だ。

ブライはチームの準備が整ったことを確認すると、ＸＩＩの扉に向かって走り出した。そして残りのエース格もそれぞれの扉に一人で挑戦する。

そしてパラス・アテナの言っていたことは本当だったようで、それぞれの扉が一人分の周波数を認識すると、文字を浮かびあがらせる。それら文字列は古代のものだったが、扉に認められた者達は、脳内にそれの意味することが流れ込み、解読することが可能だった。たった一人で挑戦するという、この試練の性質を助長する機能だろう。

十二人の戦士たちが、一斉に文字列の意味を口述した。

『宇宙は無意味から始まり、時の流れの中で、意味のある価値を記録していく。今の世界は十二の世界を越えた、最後の機会……。今

までの進化と、向かいあう事を決意する……！』

意味深な言葉を言い終えると、何が待つのか分からない扉を見据えながら息を呑む。しかし扉が開く訳でもなく、しばしの沈黙が降りる。パラス・アテナが嘘を吐いていたのか？　と疑問を持ち始めた時、ふいに光の檻らしきものが十二人を取り囲んだ。罠だったか？！　そう思っても、身動きを取ることはできない。扉はフェイク。後悔する間もなく、残ったチームメイトは檻の破壊に臨んだ。何度か攻撃を加えて、ようやくそれの破壊に成功したのだが、そこにはブライや達の姿はなかった。

オリオンは、何が起きたのか分からずに、うすら寒いものを覚えた。

「これは一体……。かれらは何処に？」

オリオン達の目の前から姿を消した彼らは、檻が作る特殊な場によって別の空間に飛ばされていた。

ソウル・レイダーがⅠの世界。ブライがⅩⅠⅠの世界といったように、それぞれが試練の舞台に降り立っていた。そこはクリアウェーブとは違った景観で、そして宇宙空間とも違うようだ。十二人の中にアクセス権限者がいなかったために、誰も気付くことはなかったが、そこはアカシックレコードの世界に似通っていた。ただスバルやルナが訪れたライブラリとは違った空間のようで、薄緑の宇宙の中、バラバラと崩壊しかけた神殿が漂っている。そんな瓦礫が転がるウェーブロードの開けた場所に、戦うべき歴史そのものが待っていたのだ。彼らはそれぞれの世界で異なった姿を作っている。

ソウル・レイダーが辿りついたⅠの世界の場合、それは青い少年

であった。とてもロックマンとよく似ていた。背丈は低いが、ロックバスターのようなものを片腕に装備しており、決して無関係ではないと思わせる。

地面に置いていた青いヘルメットを被ると、少年は口を開いた。

「来たね。そうか、君が相手か……」

不思議な場所での不思議な出来事。ソウル・レイダーは剣の柄に手を掛けて少年に問う。相手は強い。恐ろしく。

「ここは一体……。お前は……だれだ？」

少年は柔和な笑みを作ると、崩壊しかけていた宇宙をどこか切なそうに見上げている。

「ここはアカシックレコード・レベル１の世界さ。……今となっては、忘れ去られた世界だけどね。そして僕は進化人類……アイツらはレベル１って呼んでいるよ」

「アカシックレコード……。星河の力のアレか……」

ソウル・レイダーは、スバルの持つラーニングレギオンという力を思い浮かべた。そんな彼の様子を見つめ少年は、見た目には似合わない悟ったような態度を取った。そうやってパチンと指を鳴らしたのだ。するとどうだ、小さく開けていただけに過ぎないウェーブロードは、少年を中心として、緑が生い茂っていく。たちまち自然豊かな空間が、アカシックレコードの世界に出来あがったのだ。小鳥のさえずりと、茂みから覗きこむ小動物の姿にソウル・レイダーは唖然とした。

どうやら本当に、ここは普通の世界ではないらしい。

「なっ……！」
「これは僕が一番好きだった場所さ。そして僕が守れなかった場所だ……」
「な、なんだここは……？」

動揺するソウル・レイダーに、少年は悲しそうに溜め息を吐いた。

「ここに誰かが訪れる事はずいぶんと前から……そうだね、千億年以上前からパラス・アテナに聞いていた。でも、それでも少し予定とは違ってきている。それは君たちが必死に戦った証拠さ……。レギオンの見つめている未来と、少しずつ変わってきているという事さ」
「なにを言って……」
「今は知らなくていい……というより、これ以上はアイツに発言権をブロックされていてね」

どうやら”アイツ”と呼ばれる者がアカシックレコードの全権限を握っているらしい。スバルがラーニングレギオンに目覚めた時、ウォーロックでありウォーロックでない彼もそう言っていた。

この少年も重大な事実というものを知っているのだろう。しかしそれを語ることは許されていないらしく、彼は黙って銃口をソウル・レイダーに向けた。

それを戦いの意志と受け取り、緊張を張り巡らせ二刀流の構えを取った。真っすぐな瞳を向けてくる少年は恐ろしく強い。

「先を行き、絶望を知った者として、僕は君を試させてもらう。そして、君だけの物語を見つけるきっかけになろう……！」
「自分だけの物語の力……か」
「そう、レギオンやアイツは人間の進化を望んでいる。だから進化なきものを、排除しようとするんだよ」

「つまり、お前を打ち倒せば、俺達は進化するとでも……？」
「さあ、どうだろう。それは君次第さ。……言っておくけど、僕は強いよ。あのインフィニットと、世界を守るために最後まで戦った存在だからね！」

少年は強気な笑顔で、強者の覇気を覗かせる。そう、ソウル・レイダーの感じていた強さの理由こそ、少年の語る全てなのだから。
彼は初めて、神の最高作品――インフィニットＩと死闘を演じた、伝説の一人なのだ。いくらソウル・レイダーといえども、その格は天と地ほどの差を有する。
しかし、ソウル・レイダーに勝機がないという事ではない。ここはアカシックレコードの世界で、奇跡が現実になる世界だ。人間の本質が、かけがえのない力となる世界だ。それは今の時代に生きている人間が手にする事ができる。
少年はもう死んだ存在で、この世界、時代には生きていない。しかしソウル・レイダーは今も生きており、これからも生きていくために戦える。

ソウル・レイダーはフッと一笑し、それに対し少年が頷きバスターを発射させる。そうして歴史との戦いが始まりを告げた。

そしてブライが訪れたＸＩＩの世界でも戦いが始まろうとしていた。ここはアカシックレコード・レベル１２の世界。ブライの相手をするのは、彼自身が良く知っており、決して忘れる事のない存在である。彼が変わるきっかけにもなった。
そう、ロックマン――流星のロックマンだ。
ブライはラプラスブレードを構えた。

「どうしてお前がここにいる……ロックマン！！」
「確かに僕はロックマンだったけど、君の知る彼じゃない。僕はレベル１２だ……！！」

そしてロックマンは懐かしそうに、ブライを見つめる。彼の中でもブライはよく知った存在なのだろう。

「それにしても、君は変わらないね。……いや、変わったのかな？少し、キミの心が穏やかだ。周波数で分かる」
「気味の悪いことを……」
「そうだね……。だけど、嬉しいんだ。そうやって、変わり始めた君と出会う事ができて、僕達の戦いが意味あるものだったって実感できるからね」
「……もういい、お前が何者かは詮索しない。俺はお前を倒す！」
「やっぱり、変わったね君は。世界の真実にも気付き始めても、その強い意志は変わらない……！　本当は君に謝っておきたかったけど、どうやら拳で語り合った方が良さそうだ」

ロックマンはロックバスターを構えて、気持ちよく自分の使命に従う事にした。そうやって成長したかつての友を祝福し、導いてやろうとしていた。

ブライも詮索こそしないが、導き役として、このロックマンが何者なのかは漠然と気付いていた。それゆえ彼を乗り越えることに意味を見出している。彼はインフィニットＸＩＩから世界を救おうと、最後まで戦った存在だから。

いわば、乗り越えるべき歴史の集大成だ。それが時の試練である。

「……お前を倒すことができなければ、俺は神を倒すことなどできない……！　だから、かつての友であったお前を乗り越える！！」

「嬉しいよソロ！　今の君は僕がずっと見てきたどの君よりも輝いている!!!　僕を乗り越えて、インフィニットやアイツを止めてくれ!!!　それが君の物語だ!!!」

ｅｄｅｎ―１８：メトリー．ＥＸＥ

【地球サイド：テンキュウ高校中央校舎】

ブライたち十二人の戦士が、歴史の集大成と戦っているころ。スバル達チームゼロの方も、いよいよ潜入ミッションが始まろうとしていた。

彼らは中央校舎から理事長室を目指しているところである。しかし中々奥へ進むことができないようで、現在、靴箱のある一角に身を潜ませている状態である。それもそのはず、構内はアストラル・ジャマーが定期的に巡回しており、迂闊に進むことができない。彼らに見つかればただでは済まないだろう。

だが不幸中の幸いにしてアストラル・ジャマーは高密度太陽風――ゴッドブレスとキングの洗脳の影響で、周波数を探る術は有してはいなかった。そもそもアストラル・ジャマーは操られているので、高次元な行動選択はできないようだ。せいぜい邪魔ものを排除すると言う命令くらいしか実行できないのだろう。なので生体反応から場所を気取られる心配はないだろう。慎重に進めば、少しずつだが目的地には辿りつけるという寸法だ。

しかし、アストラル・ジャマー以外にも彼らの道を阻むものがある。それは車内でキミドリの言っていた例のセキュリティシャッター。ちょうど、廊下に出たところを右手に曲がった直後にあって、鋼鉄の壁としてしっかり存在しているのだ。

そのため下足場に身を潜ませてアストラル・ジャマーの巡回パタ

ーンや、敵の数を分析してじっと機会をうかがっている。急がば回れである。

そんな状況に、キミドリはリーダーの責務から、何度か唸り眉を吊り上げて威厳というものを醸し出している。しかしコホンと咳払いするばかりで、何か具体的な命令をするという訳ではなかった。おそらく、気の利いた台詞でも考えているのだろう。ミライのようにビシっと決めてみたいようだ。ただ彼女は先程からしきりに廊下の方へ首を出して、何か忙しそうにはしている。ハンターの地図とにらめっこしている辺り、彼女なりに頑張ってはいるようだ。

そしてその一方でメトリーが、可愛い靴を見つけてしまったようで、自分の靴と取り換えっこして遊んでいた。サイズが合わずブカブカだ。くじいた足にくたびれたネクタイを巻いてはいるが、元気そうで何よりではある。

「見てみて夜太郎ー。この靴、ピンクで可愛いっ」

「こらこらメトリー。任務に集中しなさい」

夜太郎は靴を取り上げ、ピンクのそれをあった場所に戻すと、ふとスバルとハイドに目が留まった。彼らは大切なパートナーと離れ離れになってしまっている。あの要塞を相手にして無事で済むとは思えない。そんな事情から彼は、押し黙っている二人を励ました。

「だ、大丈夫ですよ。ロックさんもカゲロウさんもすぐに追いついてきますよ」

するとスバルはハンターをポケットから取り出して、ウォーロックへ通信を試みる。しかし電波異常が起きているこの環境では、無線が通じるわけがなく雑音ばかりが送られてくる。この先、ハンターの無線機能はほとんど使えないだろう。

「やっぱりダメか。無事だといいけど……」
「私のカゲロウ君とも連絡が取れません……ああ、我が友よ」

それぞれの友を案じ、ハイドとスバルは肩を落としている。するとメトリーがご立腹らしく、頬を膨らませながら二人の元に駆け寄ってきた。しかし彼女は裸足でペタペタとお行儀が悪いので、夜太郎が叱りつけようとした。しかしその時だ。

「大丈夫ー？　元気だしなよースバル、おじさーん」

何を思ったのか、駄々をこねる子供を言い聞かすような口振りで、メトリーは二人の頭を撫で始めたのだった。あかねの真似をしているつもりなのだろうか、その舐めた態度は圧巻である。しかしスバルはと言うとクスクス笑っている。慌てる夜太郎も何のそので、息を殺し小刻みに肩を震わせている。そしてハイドも幼女の凄まじい魅力に心奪われたようで、初恋のような胸の高鳴りに興奮していた。彼はルナからメトリーくらいの歳の間が好みの範囲らしい。少し狭いようだ。

「あ、っぁぁあ……っ。しょ、しょぉ……少女っ！　おなっ、オナッ、お名前は？！」

獲物でも狙っているかのような、野生の動きでメトリーの手を取るハイド。メトリーは首を傾げて、この不審者のいやらしい態度を面白がっている。彼はその瞬間、メトリーを自分のヒロインに認定したのだった。もうルナはいらないだろう。

そんなハイドの特殊性を面白い個性だと思ったのか、メトリーは満面の笑みを浮かべて名前を教えてやった。元気いっぱいの少女の可愛らしさに、ハイドも元気いっぱいになった。

「メトリーだよ！　ヨロシクね、おじさん！」
「おお……！　メトリーちゃんと言うのですね！　うん、素晴らしい！　今からアナタは私が命がけで守るヒロインです！　アナタのナイトであるハイドが誓います！！」
「よろしくねっ、ハイド」

調子の言いハイドであった。カゲロウ君のこともすっかりふっ切ったようである。それが彼の悪いところではあるが、同時にその欲望に忠実な姿勢は良いところでもある。
夜太郎はそんなハイドに危険性を感じてはいたのだが、ようやくリーダーであるキミドリが作戦開始に乗りだした。実は彼女、さきほどからずっと敵の行動パターンを見張っており、その規則性を見破っていたのだ。そして今が好機と判断したのであった。いくらキミドリといえども、どうしようもない無能ではないようだ。

「いよっし、みんな！　後五分はこの辺りの見張りは手薄になるよ！　さっさとセキュリティを突破しちゃおう！」

キミドリが得意げにハンターを掲げて、構内の見取り図をエアディスプレイに表示させている。ナビゲートは任せてくれと言う訳らしい。
そこに眼鏡っ子のＦＭ星人であるスコープが、お下げをピョコピョコ跳ねさせながら名乗りを上げた。彼女も役に立とうとやる気に満ちた表情で、鼻息が荒い。

「私もキミドリと一緒に、頑張って敵のことを見張るよ！」

どうやら望遠鏡座のＦＭ星人であるスコープは周波数を探ることは得意らしい。観測が一族の仕事だと言っていたので、これは期待できる。

そしてチーム一同は、道を阻むセキュリティ突破に踏み出した。ウォーロックとカゲロウ君を欠いてしまったが、観測能力に長けたスコープと、ジャミングに強いメトリーがいるのでまだまだ希望は残っている。

そして例のセキュリティ用シャッターが下りているその場所まで辿り着くと、スバルはまずポシェットからオリヒメから貰った有線のプラグを取り出した。それをハイドにも分けてやる。まさか電波技術の発達したこのご時世で、有線を用いることになるとは思わなかっただろう。

スバルはゴクリと唾を呑みこむと、シャッターの動作を制御しているコントロールパネルを開いて、端子にプラグを差し込んだ。ハイドもそれに習って接続すると、二人のハンターとコントロールパネルが繋がったのである。

準備が整ったところでハイドは夜太郎の方に向き直る。そうやって自分がオペレートしても良いのか、と尋ねた。やはりここは父親と変わらない彼が腕を振るうべきだと思ったのだろう。端子は二つしかなく、無線も使えない現状オペレーターの数は限られてくる。スバルはオープンマンで軍事兵器であるレイダーとやり合った腕前があるので、ここは外すわけにはいかない。キミドリとスコープは見張りをする。メトリーは電脳世界で戦わないといけない。残ったのはハイドと夜太郎だけだ。

そして夜太郎はハイドの気遣いに礼を言うと、首を振って娘のように可愛がってきたメトリーを任せる旨を伝えた。

「お二人に任せます。オペレーションのテクニックなら、私よりハイドさんの方が上ですから。メトリーの無事を祈るのなら、それが一番ですからね……」

「……了解しました。ンフフ、私のヒロインであるこの子を全力で守ると約束します」

「はい、電脳世界は任せます。現実世界の方は私とキミドリさんで頑張って見せますよ。電波通信カラテで極めたサラリーマンの格闘能力を見せましょう！」

かつて彼はニホンのサラリーマンとして活躍した企業戦士である。しかし十年ほど裏世界で、すさんだ生活を送っており、現在は四十代無職という先の見えない鉄壁なプロフィールである。そんな彼ではあるが、枝のような腕っ節で、小さな力コブを得意げに作って見せたのだ。さすがに電波通信カラテだけあり、それは見ていられないほど切ない光景だ。だがその気持ちは本物で、メトリーを元気付けることはできたようであった。セキュリティーシャッター1の電脳世界から、笑い声が届いてくる。

『キャハハ！　がんばってね夜太郎！　私も頑張るからねっ』

「ええ、メトリー！　頑張りますとも」

『よーし、夜太郎のヘナチョコ通信カラテが炸裂する前に、セキュリティ突破しちゃうぞ！』

その微笑ましいやり取りにスバルは心和ませるが、すぐに気持ちを切り替えてエアディスプレイにオペレーション用のバトルフォルダを設定する。オープンマンの時にはレイダーに完敗だったが、今回は地球の命運とメトリーの身が懸かっている。そしてあの時のような模擬任務ではなく、今回は紛れもない本番だ。否が応にも気持ちが引き締まってくる。

すっかり戦闘態勢に移ったスバルは、落ち着いた声色でメトリーに電脳の様子を尋ねる。

「よし、メトリー。そっちの状態はどうだい？」

『うーん……。あっちこっちが火事みたいに燃えている。暑いよースバル』

「少しの間の辛抱だ。準備はいいね？」

スバルはメトリーに最終確認を取って、ハイドの方に視線を流す。

「僕がメインオペレーターを務めるから、ハイドは各エリアの状況を解析してメトリーの安全を確保して」

「ンフフ了解した！」

スバルはさすがに場数を踏んでいるだけあって、テキパキと事を進めていく。キミドリはそれを感心した様子で見つめると、自分の持ち場に向かった。そうやって夜太郎とスコープの三人で、オペレーター側から死角となるポイントの見張りに付いた。

どこからもアストラル・ジャマーがやってきていない事を確認すると、キミドリはスバルの方へ小さく人差し指を振って合図を送った。

それを認めるとスバルとハイドは声を合わせて、セキュリティー突破ミッションへ意気込む。

《メトリー．ＥＸＥ！　オペレーション・セット……》

『シャキーンッ！！』

メトリーは自前の決め台詞を炸裂させると、あかねに買ってもらったお気に入りのワンピースをはためかせながら、ゴッドブレスで荒れ果てた電脳世界への挑戦を開始した。燃え盛る地獄のような電脳空間の中、人間の女の子と見た目は変わらな少女が走っていくのだ。非常にギャップだらけの光景だが、今はこれしか方法はなかった。汗を拭い、歯を食いしばり、メトリーは長い黄緑色の髪を後ろに流しながら、必死に駆けていく。

しかしこの時、メトリーの精神状態にスバルとハイドは気付いていなかった。エアディスプレイ越しでは確認出来ないだろうが、ず

っと電脳世界でメトリーは震えていたのである。元気いっぱいで怖いものがないように振る舞っていたが、実は泣きだしたいほど怖かったのだろう。

たった一人で、荒れ果てた電脳世界に投げ出されたのだから無理もない。エメリオルに勝ったと言っても、あれはほとんど夜太郎の頑張りのおかげだった。今、小さな女の子に与えられるには、重すぎるプレッシャーがのしかかっている。

それでもメトリーは頑張りたかった。詳しい理由は分からなくても、夜太郎がいる地球がお終いになるのは嫌だったのだ。メットリオのころでは考えられなかった、新しい発見と出会いがとても嬉しくて、それを守りたかった。

メトリーはもう人間の女の子で、大切な人達を守るために戦ってみたいと思えるのだ。それはウイルスでは絶対に得られない感情だった。

そのようにして芽生えた感情ゆえにメトリーは人間とまるで変わらない存在となった。しかしそのことが悲しい結末を生むことになる。

恐怖をひた隠し、メトリーが必死の頑張りを見せて、電脳内に設置された数々のファイアウォールを突破していく。セキュリティシステムの事をファイアウォールとはよく言ったもので、ゴッドブレスの影響から、まさに階層間を分かつ灼熱の壁と化していた。そのたびスバルが水鉄砲型のバトルカードを入力してやり、突破しているという次第だ。

そしてセキュリティーシャッター1‐8の電脳まで来ると、もはやメトリーのワンピースは火の粉や襲いかかるウイルス達のおかげでボロボロになってしまっていた。それでもスバルとハイドの的確なオペレーションのおかげで、彼女自身には傷はほとんどない。ただ、かすり傷はちらほら負っており、家に帰ればあかねに心配されるだろう。

だが、しょんぼりしながらもまだまだ頑張るメトリー。すると彼女のそばでオペレーターウィンドウが展開されて、スバルが心配そうに顔を覗かせてくる。もう一つそれが出てきて、ハイドも同じくだ。

『大丈夫かい、メトリー？　中は暑いだろう……』

「ぜんぜん平気だよ！　エヘヘッ、心配無用だもん！」

口では大丈夫と言うが、見ているだけで痛々しいメトリーの姿がある。それにここまでくれば、メインシステムまではもう少しなので、ハイドは即席のプログラミングを施して、素敵なアプリケーシ

ョンを構築する。ちょうどメトリーが開けた電脳空間に到着した時、それは完成した。

『ンフフ。少し休憩するといいでしょう』

エアディスプレイを素早くタッチしたかと思うと、あっという間にハイドは電脳空間に小さなベッドを組み上げたのだった。さすがにここは紳士的な対応と言えるだろう。しかし、そうやってメトリーのポイントを本気で稼ぎに行っている以上油断はできない。彼はニヤニヤしながら、メトリーをベッドに誘う。

『寝心地が悪かったら言ってください。すぐに変数を調整しますから。ンフフ』

『すごいねハイド。こんな悪環境でプログラムを組むなんて……』

『ンフフ！　紳士ですから……』

答えになっていないので、スバルは失笑しかできない。つくづく恐ろしい紳士だと思わせる。

それにニヤニヤした表情が鬱陶しくて、ウォーロックがいたら間違いなく殴りとばされるだろう。だがメトリー本人が嬉しそうなので大丈夫だ。

「わーありがとう、ハイド！」

『ンフフ。ささ、おやすみメトリーちゃん』

ハイドの作ったベッドで休憩したメトリーは少し体力が回復したようだ。休憩とは言っても、彼が組んだソフトを実行しただけなので、実質数秒だけの休憩だった。

そして心機一転、さらに勢い付いたメトリーは、とうとうセキュリティシャッターの電脳１‐９にまで辿りついた。ハイドが階層の

解析を行った結果、そこにシャッターの開閉を担当するメインシステムがあると判明した。

『ンフフ、どうやらここにメインシステムがあるようですね！　さあ、メトリーちゃん最後の一頑張りですよっ』

「分かったよ！　よーし、すぐにやっちゃうぞー！」

メトリーがワンピースの裾が邪魔にならないように固く結んで、軽快な足取りで駆けだした。辺りに転がる壊れた家電製品のような、破損データに躓かないように、まるで跳び跳ねるかの様子で進んでいく。

ハイドも自慢のプログラミングテクニックを用い、階層の分析を高速で行っていく。おまけにメトリーの道が通りやすいものとなるように、デバッグ処理までこなす真摯さだ。小さな気配りだが、道から破損データが消えていけば、多少は彼女の負担は減るだろう。

そしてスバルもバトルセンスが光るばかりで、出くわしたウイルスを的確なオペレーションで彼女に傷一つ負わせずにデリートしていく。さらにメトリーに負担がかからないよう、スタンダードランクのバトルカードしか選択していなかったが、ここまでウイルス相手にまったく問題にしていなかった。

しかしゴッドブレスの影響で、データ処理がもたついている感は拭えない。一枚バトルカードを読み込むたびに、数秒間もハンターがオーバーヒートしてしまう始末だった。階層が深くなるにつれて、その現象がより顕著になっていく。こんな状態だけにスタンダードランク以外は使えないのだろう。

そんな状況下でもメトリーは突き進んでいく。すると新たなターゲットを発見したのだった。しかしこの深い電脳空間には似合わないウイルスであった。スバルは取るに足らない敵の登場に、適当にキャノンのデータをメトリーに送ってやった。

『あ、メットリオか……。珍しいな、こんな電脳の深い所にいるなんて』

メットリオは最下級のウイルスである。かつてオープンマンが倒したメガリアDに比べたら、雑魚と言ってしまっていい。

そんなウイルスは、メトリーの行く道を通せん坊しようと、ご自慢のつるはしを取り出した。ぴょんぴょんとコミカルに飛び跳ねるその様子は、一見可愛くも見えるが地を伝うショックウェーブは中々のものである。小柄な体躯に似合わないパワフルな攻撃である。もちろんメトリーの得意技でもある。彼女は右腕をキャノンに変換し、左腕に黄緑色のつるはしを構えた。

『よし、メトリー！　つるはしを構えている今がチャンスだよ。キャノンを撃ち込むんだ！』

土木作業員がつけるようなヘルメットがメットリオの特徴なのだが、それを被られてしまうと、少々ダメージを与える事が困難になる。そんなことを踏まえたメトリーへの指示であった。

メトリーもキッと眉間に力を込めて、メットリオを仕留めに懸かる意気込みを見せる。そんな具合に、しばしメットリオの間抜け面とにらみ合いを行う。すると意外にもメトリーが根負けしてしまったのか、スバルの映るウィンドウに向かって、泣きごとを言い始めたのだ。

「む、無理だよ……！　メットリオはお友達だから……」

スバルは敵に背を向けるメトリーに驚倒する。メットリオはつるはしを振り抜いていたのである。当然だが、あちらは彼女のことを友達とは思っていないようだ。

呆気にとられていても仕方がないので、メトリーにバリアを張っ

てやる。彼女にいくら戦う気がなくても、スバルがオペレートしている以上はメットリオの処理など簡単だ。バリアがショックウェーブに砕かれるが、そんな些細なことに今さら驚く彼ではない。

メットリオが攻撃しようとモタモタつるはしを振り立てようとしているが、スバルからすればあまりにも遅く映っている。軽くカウンターを浴びせてやった。

『バトルカード、タケヤブランス！』

メトリーが言う事を聞かないのなら、彼女の意志とは関係ない自動型のバトルカードを使えばいい話である。バトルカードの特性を熟知しているスバルには、メトリーの抵抗などまるで意味がなかった。

背後から突然現れた複数の竹槍に貫かれ、驚いた顔を浮かべるメットリオは呆気なくデリートされてしまった。

『ふう、デリート完了っと……』

「バカッ！　スバルのバカぁッ！」

メトリーは友達をデリートされたことでスバルを責め立てる。具体的には、キャノンをペレーターウィンドウに向かって撃ち込んでくるのである。スバルは堪ったものではない。

『な……っ。バ、バカだって？　ぼ、僕が？！』

『ンフフ。紳士的な対応じゃありませんでしたね』

『ハイドにまで言われるなんて……く、屈辱だ！』

『まったくですね。ンフフフ！』

ハイドにも指摘されているようでは、スバルも良い気がしない。なのでメトリーに詳しく事情を聞いてみた。

『メットリオって言ったって、あれはウイルスだろう?』

ふるふると首を横に振って、メトリーはおもむろにメットリオが被っていた黄色いヘルメットを取り上げる。メトリーだって、かつては被っていたものである。すすの着いた部分を拭っている姿は、どこか寂しげだ。

メトリーは安全ヘルメットを被ると、素朴でそれゆえに的を得ている疑問を呈する。

「だったら、スバルは私もウイルスだっていうの?」

『紳士的にはアナタは私の筆頭ヒロインですねぇ。ンフフフ』

スバルはハイドのニヤついた笑顔に少し気分が悪くなるが、確かに彼の言う通りではある。ヒロインかどうかは知らないが、彼女は正真正銘の女の子。スバルにとってはもはや家族みたいなものだ。あかねなんかは娘のように可愛がっている。スバルが少し嫉妬するくらいである。

そう、メトリーはウイルスなんてもので括れてしまう存在ではなかった。

『いや、キミはメトリーだ。ウイルスなんかじゃない。な、何を言ってるんだよ……』

「でも、私だって昔はメットリオだったんだよ……? さっきの子と私は何が違うの?」

『どうしたんだよ……。いきなり、そんな事を聞いてさ』

困ったスバルは何とか話を逸らしてしまおうと試みる。現実世界の方にアストラル・ジャマーがいるので、あまりモタモタしていられない。

『と、とにかくだよ！　今はメインシステムの方を解除してしまおう！！』

メトリーは不安そうな表情のままだったが、コクリと頷いてスバルの言う事を聞いた。きっと彼女は、自分もウイルスと同じではないのかと？　と考え始めているのだろう。それはメトリーが人間らしい心を持っている何よりの証拠であるが、そんな事は彼女には分からない。

スバルが何のためらいも見せずにメットリオをデリートした時、消えゆくその姿を自分と重ね合わせていたのだった。

それでもメトリーは無事にメインシステムのロックを解除して、きっちりと仕事をこなした。

そしてシャッターも開き、現実世界に戻ってきたメトリーはすぐにスバルに謝った。どうやら彼女なりに、思う所があったらしい。今は小さな疑問よりも大切にすべきことがたくさんある。自分がウイルスか人間である是非よりも、地球の為の一分一秒を大切にしたい。今、スバルに頭を下げる小さな少女がいるが、そういった思いやりの心を夜太郎に教えてもらった結果であった。

「わがまま、言ってごめんなさい……うん、スバルの言う通りだよ」

すっかり反省しているようで、しゅんとした態度はしおらしい。最初からスバルも怒っていた訳ではないが、何だかメトリーに悪いと思ってしまう。

頬をポリポリ掻くと、キミドリのジトッとした瞳に弁解するため

なのか、理解ある言葉が口から出てくる出てくる。メトリーの黄緑色の髪の毛をそっと撫でて、いつものニット帽を被らせてやった。

「いや、いいよ。キミの気持ちももっともだもの。僕だってオペレーションに必死になりすぎてた部分もあったかもしれない」

するとメトリーは電脳世界から持ち帰ったのだろう例のメットリオのヘルメットを、スバルに被せてやった。これでお揃いと言う訳だ。仲直りと言う訳である。

「うん！　スバルはいい子だねっ。これは私のプレゼント！」

「ハハ、メトリーには敵わないな」

メトリーもいつもの調子に戻ったようで、スバルは一安心する。しっかりとヘルメットを深く被り込んで、防御も万全となった。

そして理事長室へ向かうため、廊下の先にある階段へと足早に向かう。途中、何度かスコープの索敵に助けられて、ようやく階段の踊り場に出てこれた。アストラル・ジャマーは、どうやら単純な命令しかこなせないようだ。物陰に隠れてやり過ごせば、ゆっくりとだが何とか進むことができた。

そのように順調に侵入を進めている。踊り場からキミドリとハイドがそれぞれ階下と階上の様子を覗きこんでいるそんな時、夜太郎の細長い指がスバルの肩を叩いた。そしてスバルに耳打ちをしてくる。どうやら、さきほどのメトリーの言葉を耳にしていたらしい。通信カラテの出番がなくて、耳ばかりが働いていたようだ。

「あの、スバル君。ちょっと、いいですか？」

スバルはコクリと頷こうとしたが、キミドリがちょいちょいと手をやって合図を送った。ハイドがわきを抜ければ、スバルも立ち話

はできない。一団は慎重かつ、迅速に奥へ進んだ。
とりあえず彼らは、階段を上りきったところにある空き教室に身を潜ませたようだ。教壇に腰掛けて落ち着くと、スバルは夜太郎の話の続きを聞いてやった。夜太郎もスバルの隣に腰を下ろす。

「なんですか？　さっきの話って」
「ええ、メトリーの事なんですが……」
「ああ、僕はもう気にしてませんよ」
「イヤ……そういうことではなくて」

夜太郎は思いつめた様子で、スバルの方へ目線を流す。元々くたびれた印象を受ける人物であるが、この時の彼はそれの比ではなく、魂が抜けてしまったように稀薄な印象を受ける。
スバルはどことなく不穏な予感を受けるが、それを助長するかのように陰気臭い口調で夜太郎は続けた。

「実はですね。メトリーはもともと、人間の感情と呼べるものはなかったはずなのです」
「え、でも……」
「はい……私と十年ほど一緒に過ごしてきたおかげで、どうやらココロが芽生えたようですね」
「確かに、メトリーと初めて出会った時、普通のウイルスとは違ってたね」
「そうです。そして、その影響がより顕著となったエメリオルさんとの戦いの時、完全にメトリーは私の深層心理をインストールしてしまったようなのです」

生きるか死ぬかの激闘を繰り広げた、グリット・メトリーとエメリオル。あの時の夜太郎はどこか神懸かっていたのが印象的である。
そしてあの時、夜太郎の強い気持ち――別れた家族を想う覚悟が電

波変換によってメトリーに強く干渉して、今の少女の姿となったのである。

あれ以来、夜太郎はメトリーのことを実の娘のように可愛がっている。髪の色こそ黄緑色で、栗色だった娘とは違うが、容姿や性格は夜太郎の愛したそれと同じだった。

それゆえ夜太郎は屈折した愛情をメトリーに抱いていた。彼女のことを、今もどこかで生きている娘と同一視している。それは生きている家族に対する姿勢としては、決して褒められたものではないだろう。

夜太郎は自省したのか、乾いた声をさらにカラカラと萎ませる。

「私はメトリーのことを娘のように思っていました……。ですが、彼女は本当の娘じゃない。本当の娘は妻と今もどこかで過ごしてるはずなのです」

スバルは夜太郎の意図を読めずに、首を傾げる。

「僕もメトリーは家族だって思ってるよ？　母さんなんか、とても可愛がってるし……。あ、僕のオペレーションが乱暴だったのなら謝ります……」

「いえ、スバル君のオペレーションは完璧でしたよ。……あの、折り入って私からのお願いを聞いてもらえますか？」

ようやく夜太郎は本題を切りだした。長々とした前置きは、彼なりの覚悟の表れだったようだ。

「私からのお願い、それは……もしスバル君やキミドリさん、ハイドさん、メトリーが同時に危機に陥った時……その時はメトリーよりも……人間であるアナタ達の身の安全を優先してあげて下さい。それが私からのお願いです」

「え……？　それって……。で、でも、さっきまでメトリーの心配をしてたじゃないか」

何を思ったのかメトリーを見捨てたような事をいう夜太郎である。そして彼は小さく首を振ると、自白でもしているかのような面持ちで続けていく。

この任務の最後に待ちかまえているのはサン・ゴッドである。たった四人と二体のメンバー、おそらく正攻法では、勝てる見込みはない。それこそ、何かを犠牲にしなければならないはずだ。

夜太郎はそんな事に気が付いていたのだ。もちろんこのチームを組んだリフレインも同じであった。

「サン・ゴッド……。ハイドさんが言うには、彼は恐ろしく強い。その強さはインフィニットにも匹敵するほどです……まずキミドリさんだけでは勝てないでしょう……スバル君がロックマンになれたとしても、勝てない。地球の全戦力を以ってしてもおそらくは、か、勝てない……！！」

「そ、そんな……。でもリフレイン博士は……！」

「いえ、クリアウェーブ側の相手はインフィニットです。恐らくこちらに回す戦力がなかったのでしょう……。それに太陽風の影響で、まともに行動もできない……ほとんど詰みです」

「じゃあ夜太郎さんは、リフレイン博士が地球や僕らを見捨てたとでも言うの……？」

恐ろしい疑問を投げかけるスバル。それに対して夜太郎はなぜか微笑むばかりで、そして悲壮な覚悟を見せるだけだった。

リフレインはずっと気付いていた。そして夜太郎も。この任務はまともに戦っても、絶対に成功しない。

だから夜太郎は覚悟を固めたのであった。リフレインの謝罪も快く受け取った。メトリーに会わす顔もないし、家族に会う可能性も

消える。だけど、それで良かった。

拳を小さく震わせて、与えられた運命を悟っているだけで幸せになれる。そうやって今まで何も持ちえなかった夜太郎は、何も知らないメトリーを見つめている。皮肉なもので、彼女はキミドリとお喋りをしていて楽しそうであった。それだけに、そのような無邪気さが彼の胸に辛く突き刺さっていく。メトリーがただのウイルスだったらどれだけ良かっただろうか。人間のように笑ったり、怒ったり、時には我がままを言って自分を主張したりしなかったら、どれだけ気が楽だったろう。

悲壮な覚悟と運命。ノイズ混じりでもしっかりと伝わった重い言葉。そう、リフレインからの最終指令である。それは、失敗するだろうキミドリの尻拭いをする二段構えを意味する。夜太郎とメトリーに与えられた最期の任務であった。死亡扱いである夜太郎と法律上人間ではないメトリーにはうってつけの任務だ。彼は彼はズボンのポケットからごそごそと、ある装置を取り出す。一見試験管のように見える、細長い鉄の塊だ。厳重にプロテクトが掛けられているのだろう、精密機械が内部から覗いている。

スバルは、夜太郎のただならぬ気配に怖気づいてしまった。こういった男の覚悟というものを、何度かスバルは見せつけられており、予感というには恐ろしいほどに胸がざわついていく。大吾も、シドウも見せた命がけの男の顔である。それはどこか遠くを見据えて、スバルには見えないどこかを感じさせる。

「や、夜太郎さん。そ、それは……？」

”次元爆弾”です。やはりあの人は天才ですよ。プルト・キグナスの生体データからこんなものまで作ってしまうんですからね……」

「そ、それがあれば、サン・ゴッドを倒せる……？」

「ええ、次元の狭間に閉じ込める事ができるでしょう……。そうすれば、一瞬のうちに対象を消滅させることができます……。いくらレギオンといえども、依存する座標を奪ってしまえば生きてはいら

れないでしょう」

勝利への予感から、予想が外れたと思い、スバルがホッと胸を撫で下ろした。だが夜太郎は悲しい現実を伝えた。そう、彼とメトリーは助からない事を伝えたのだ。スバルの予感は当たっていたという事だ。キミドリほどではないが、ウイルスウィザードのメトリーとなら、ゴッドブレスの環境下でも、少しの間だけ電波変換は可能だった。

決して夜太郎は微笑みをやめる事はない。スバルにとっての笑顔の意味は、勇気以外の何ものでもないから。

「確かに勝てます……。しかしこの状況下、遠隔操作は不可能です。よって、誰かが、直接この爆弾の操作をしなければなりません。……その場合、操作者はサン・ゴッドと同じく次元の狭間に閉じ込められてしまうでしょう。一瞬で消滅してしまい、二度と帰っては来れません。ですから……ここまで言えば、フフ、スバル君にも分かってもらえるでしょう？　キミドリさんはまだ若い……。ですから……」

「まさか夜太郎さん……！」

「ええ、私がメトリーと電波変換して、私がサン・ゴッドと刺し違える形で地球を救ってみせます……！　リフレイン博士が私に託してくれたのです！」

そして夜太郎は立ち上がると、メトリーを呼びつけた。メトリーは大好きな彼に何の疑問も抱かずに、無邪気に跳びつくだけだった。夜太郎はメトリーの頭を撫でつつ、スバルに勇気を与える。

「メトリーの事を本当の人間のように接してくれて……ありがとうございました。あかねさんにもそうお伝えください」

「そ、そんな……っ。ヒ、ヒドイよ！！　それって死ねって言って

るのと……！　ヒドイよ……あんまりだ！」

「元々は死んだような人生だったのです。後悔はありませんよ。それはメトリーも同じのはず。私の想いが生んだ偽りの存在でも……それでもあの子を愛してくれた事に感謝しています。あなた達がいたから、私は失った家族を取り戻せたような夢を見させてもらった。過ぎ去った過去がいつでも鮮やかに感じられた……」

「で、でも……っ」

「皆さまと共に戦い、過ごした日々は忘れません。どうかメトリーの事を忘れないであげて下さい……。あの子は寂しがり屋ですからね」

スバルは声を震わせるしかできなかった。スバルは心のどこかで、自分なら何とかできると思っていたのだが、どうしようもない現実がそこにはあった。もちろんメトリーは事を理解できていないようで、内緒話をする夜太郎の顔を不思議そうに見上げるだけだった。

「夜太郎ー、なんのお話してるの？」

ＦＭ星でリフレインが言えなかった詳しい事情。それは夜太郎とメトリーによる特攻ミッションだった。非道徳的で、時代錯誤的だが、それでも四十億年の歴史の前では、確かな正義と成り下がる。

ｅｄｅｎ―２０：試験体コード・キミドリ

このミッションの真実を知ったスバルは、それでも任務をこなさなければならなかった。現在、理事長室への道を阻む、セキュリティシャッターの電脳２へ挑戦している。そうしてハイドと共にメトリーのオペレーションを行っているのだが、やはり集中できていないようだ。ハンターのディスプレイを見てはいるが、認めてはいない。

そのおかげか、メトリーはオーラをまとった赤い虫ウイルス相手に苦戦しているようだ。足は六本あり、いかにもな昆虫だ。しかし中々どうして、つぶらな瞳は見ていて可愛らしく、油断したところに強烈な一撃を見舞う事が予想できる。イソギンチャクのような口を割ったかと思えば、メトリーの身の丈はあろう熱線を吐きだした。

メトリーも見た目にそぐわないフットワークで、攻撃をかわす。しかしお気に入りのワンピースがまた焦げてしまった。

「んん、もう！！　スバルっ、バトルカードお願い！」

メトリーは背後に浮かぶスバルのウィンドウに顔も向けずに急かした。太陽が荒れ狂ったような灼熱の電脳世界で、熱戦をしきりに撃たれては、避けるだけでも疲労する。髪が汗を吸って、だらんと垂れさがれば、メトリーの余裕のなさを語っているようだ。

スバルは慌ててバトルカードを入力した。

『あ、ゴメン。バトルカード……バリア！』

メトリーの周りに薄い膜が張られる。しかし熱線は易々とバリアを割って、彼女の身を焼いたのであった。バトルカードの強さは電波体の強さに依存するが、スバルは普段ロックマンとして戦っていただけに、メトリーの戦闘能力を考慮し忘れていたようだ。彼らしくないミスだった。

そして急遽ハイドがメインオペレーターに代わり、なんとかウイルスのデリートに成功する。しかしキミドリはすぐにスバルの異変に気が付いたらしく、セキュリティを突破した後すぐに、三階の空き教室連れ込んだ。スコープの索敵で、一通りの安全を確認すると、らしくないミスを犯した原因を尋ねた。スバルを適当な座席に座らせるとキミドリは椅子を引っ張り出して、彼と向かいあうように頬杖を突く。

どうやら彼女は怒っている訳ではないようだ。ハの字眉は心配から来ているのだろう。

「どうしたん？　やっぱり、さっきの夜太郎さんの事が原因かな……？」

「そうですよ……っ。このまま行けば、二人は……。それにメトリーなんか事情をよく分かってないようだし……！」

スバルの気持ちももっともだ。この任務の最後に待っている結末は夜太郎とメトリーとの別れである。

すると何を思ったのか、キミドリはおもむろに目を閉じた。そしてまるで前が見えているかのような手さばきで、スバルのビジライザーを取り上げると、そっと掛けてやる。すぐにスバルの視界には、荒れ果てた電波世界が広がった。黒板から伸びるウェーブロードは分断されており、窓から覗くＴＫシティは、ウェーブロードの瓦礫でいっぱいになっている。デンパ君が慌てて、当てもなく右往左往していた。

「スバルン……。もっと、世界をよく見てみな。今は、命を懸けなきゃいけない時なのよ……！　今は電波世界がダメージを受けているだけだけど、いずれ地球の気温は人間が住めないものになる！　紫外線や宇宙線だって人体を蝕む！」

「でも、だからって……！　夜太郎さんと、メトリーが死んじゃっていい訳が……！」

　するとキミドリが目を閉じたままで、スバルの額を突っついた。何度も突っついたかと思えば、今度はクスリと笑ってスバルの不信感を煽り立てる。

　スバルが文句の一つでも言ってやろうとしたら、それさえも見越したのかキミドリが被せてきた。

「ちょっと――」

「だーかーらー！　よく世界を見なよ、スバルン！」

「え？」

「君には見えないのかな？　私は目を閉じていてもよく見えるよ？　命がけの戦う姿……そう、スバルンの姿がさ！」

　するとキミドリの小粋でお茶目な言い回しに、ハイドも堪えるように笑いだした。いつもの笑みだが、嫌味はなくて中々趣深いものだ。

「ンフフ……。確かにそうですね。少年……アナタの目に私の姿が映っていないとは言わさないですよ？　メトリーちゃんを命がけで守ると誓ったこのハイドの姿を！！」

「ハイド……」

　どうやらハイドは冗談や酔狂の類でメトリーに命を懸けていた訳

ではないようだ。目を閉じれば見えてくるその勇姿――スバルに、トラッシュに、彼は遵守したのである。そんな気持ちから出た表現に、嘘偽りがある訳がない。

文字通り、ハイドは命を懸けてこの任務に臨んでいるだけだ。

するとキミドリも目を開ければ立ち上がった。スバルに真っすぐで、太陽のように輝かしい瞳を向けて、得意げな笑みだ。太陽が恐ろしいこの現状でも、この太陽ならスバルはずっと見つめていたいと思っただろう。そして彼女は自分の胸をドンと叩いて宣言したのだ。ミライのように格好良くはいかなくても、どこまでも真っすぐな、キミドリの燃えたぎる姿勢は確かにリーダーのそれであった。

「君の世界には私たちがいる！　目の前にいるんだ！　夜太郎さんとメトリーちゃんが命を懸けるなら、私だって命を懸ける！　ハイドだって命懸けだ！　二人の命で駄目なら、三人で！　それでも駄目なら、四人で！！　私達全員が命を懸けて二人を死なせやしない！！　世界が救われるその瞬間まで、私達は命を懸けまくる！！　だから、スバルンも私を信じてくれよ！　仲間を信じてくれよ！　君の世界はまだ終わっちゃいないんだぜ？」

「キミドリさん……ハハ、ホントに不思議な人ですね」

「不思議な事は何もないさ、最近の女子高生は贅沢でね！　プリクラ帳が遺影になるのは勘弁ならないってだけ！」

「そ、そうですね、ハハ……！　僕の悪いクセだな……。そうなんだよ……そうなんだ！　今は悲観するんじゃなくて、二人が死ななくても良いように！　僕も死に物狂いで頑張るしかないんだっ！」

「そう！　そういう事！！　夜太郎さんやメトリーちゃんを、私は死なせやしないんだからね！」

「ありがとうございます。キミドリさん……！」

今は全力で戦う。そうだ、キミドリの言うとおりだ。すぐに落ち込むスバルに、彼女は太陽のような存在である。ハイドだって、今

は熱く燃えているだろう。もしかしたらこのチームは、一たび力を合わせれば、どんな奇跡だって起こせるのかもしれない。キミドリ、ハイド、夜太郎、スバル、彼らは絶望を味わったゆえに、底辺を味わったゆえに、諦めは人一倍悪い。

そしてキミドリはスバルを立ち直らせると、夜太郎に満面の笑みを送って、親指を立てて見せた。ハイドもメトリーにニヤリと笑って見せる。スバルもビジライザーを額に掛けると、表情を引き締める。そうやって覚悟を、自分の命を懸ける事でがんじがらめに固めあげた。

そんな素晴らしい人たちと巡り合えた奇跡に、夜太郎はただただ感謝したのだった。

そして一同は理事長室に向かうため、空き教室から出ようと短い休憩を済ませる。しかし決意を固めたチームゼロに、水をさすかのような冷やかな男性の声が浴びせられた。どうやら黒板の上部に設置されたスピーカーから音声が送られているらしい。しかし声帯が潰れているのか、よく聞き取れない声質である。だがハイドだけは、それが誰のものなのか分かったようだ。

《フフフ。何をチョロチョロしているのかと思えば、もう三階まで来てしまったか……、中々粘るじゃないか……》

ハイドは戦慄しながらも、平静を装って声の主に宣言した。

「ンフフ、キング氏！　私達は止まりませんよ！！　アナタの馬鹿げた野望を止めて見せる！　ロックマンと素晴らしい仲間たちと共に！！」

《ハイドか……。どうやら裏切ったようだな……。だが、決心するのが少し遅かったようだ。サン・ゴッド様が動き出した以上、もはや破滅へのカウントダウンは止まらない！》

キングの嘲笑の混じった口調に、さすがにキミドリが黙っていられなくなったようで啖呵を切った。スピーカーの方に身を乗りだして気合が入っている。

「やいやいやい！　キングッ！！　私達が駆けつけたからには、無事で済むとは思うなよっ！！　このキミドリ様が、とっちめてやるんだからね！！」

《キミドリ……ああ、六角キミドリか……テンキュウ高校で最も優秀なモルモット……どうやら、私のハッキングを免れたようだな》

「余裕気だけどね、その減らず口をすぐに利けなくしてやる！！」

《フフ……私に向かってそんな口を聞いていていいのかな？　なあ、試験体コード・キミドリ？》

キングのその一言によって、さんざん調子の良かったキミドリの口がピタリと止まってしまった。

「え……な、何でそれを……？！」

《どうした、さっきまでの威勢は？　馬鹿な女だ。私が何でテンキュウ高校を支配しているのか分かっていないらしい……なあ、”リツ”？》

「な、なんで……？　……や、ヤメて……ッ！！」

《フフフ、いい感じじゃないか。あまり調子に乗らないことだな。今、私はＷＡＸＡのサーバーを支配している。お前の情報など手に取るように分かるのだよ》

「……っ！！」

《ハハハ、正体がバれるのが怖いか……？　リぃーツぅー……。必死に隠してきたモノなァ……？　ずっと……！　そう！　ずっとォッ！！　お前はずっと隠してきた！！　なァーにがー運命の悪戯かァー？　まァーさかァアァ……こんな事になるとはなァ？　魅せら

れたのだよ、お前はァ……！！》

キングの扇情的な物言いは、押し上げるように調子に乗っていく。すっかりキミドリは人が変わってしまったように黙り込んでしまい、すぐに教室から出ようとする。いつもの元気いっぱいな姿はない。

「い、行くよ……！　みんな！！　キングを早く黙らせないと……！！」

するとキングからの最後のプレゼントだ。

《おっと、注意したまえよ。私がずっと手をこまねいて見ていただけだと思わないことだ……》

キミドリは耳を貸さなかった。すぐに空き教室から脱出したいらしく、部屋の一番奥の扉から廊下に身を放った。

《フフ、私の忠告を無視か……よほど、動揺していると見える。フッフッフッ……！》

キングが聞き分けの悪い子供を観察するかのような、卑屈めいた笑みを浮かべる。

すると、「キャァアア！」という、キミドリの悲鳴が廊下から鳴り響いたのだった。

スバル達は慌てて廊下に繰り出す。すると足から血をドクドクと流すキミドリが廊下でうずくまっていた。彼女の前方には、実弾を装填しているのだろう拳銃をもったアストラル・ジャマーの姿があった。しかしキングの手が加えられてようで、彼のように顎が長くなったカスタムが施されている。きざっぽく、銃口に一息掛けて雰

囲気作りに熱心だ。

どうやらキミドリは、あの銃に足を撃ち抜かれてしまったらしい。肉のへこんだ部分が、赤さが染み出る源泉のよう。

一同はすぐにキミドリを抱えて、廊下の角の死角に身を隠す。その中でも、スコープは一人唖然としていた。それはそのはず、彼女の索敵にそんな電波人間の反応はなかったはずなのだ。しかし現に敵はいる。ゆっくりとだが、着実に歩み寄ってくる。ハンティングでも楽しむかのようにだ。

彼はキングからのプレゼントだ。複雑な命令をこなせるように、特別に電波変換装置に手を加えた個体。その名をアストラル・マージャ。

《フフフ、ある程度の周波数変換術は組み込んでおいたさ。さて、電波変換できない状況で、どこまでヤツから逃げ切れるかな?》

キングはそれだけ言い、スピーカーとの通信を切り上げた。毛羽立ったノイズ音だけを残して。

ｅｄｅｎ―２１：１０００億年の集大成

【宇宙サイド：アカシックレコード・レベル１２】

キングの策略により、チームゼロがアストラル・マージャと遭遇してしまったころ。ブライ達の方では、時の試練が佳境を迎えていた。

試練の一つであるＸＩＩの世界。構築されたその情景は、レベル１２（約百億年前のロックマン）の趣向からコダマタウンと瓜二つのものに変わっている。そんな失われたかつての世界を戦いの舞台にして、彼とブライの激闘が終わろうとしていた。暗黒闘気が最後の盛りを見せると、青い人影が芯が抜けてしまったかのように、ばたりと倒れ込んだ。

全力を出し切ったブライは電波変換を維持できなくなって、ガクンと膝を突き、ソロの状態へと戻ってしまう。そしてそのまま緑が生い茂る原っぱに手を突いて、ロックマンの方へ視線を落とした。

ソロの見つめる先では、ロックマンが展望台の原っぱに身を任せて、仰向けになっている。彼も全力を出し切ったようで、清々しい表情を徐々に闇が出張る青空に向けていた。そしてデータ体としてアカシックレコードの世界に定着していた彼は、激闘のダメージから消滅へと向かう。そんな消えゆく彼のすぐそばで、ソロは黙ってじっと見守っている。コダマタウンも同様にして、アカシックレコードの宇宙に帰っていく。レベル１２の思いが生んだ、歴史の集大成とも言える世界の最後であった。

分解されていき、光り輝く粒子が舞う世界の中、ソロは口元の血を拭うと、偉大なる先人に敬意を表した。戦いを通してこのロックマンから、歩むべき世界と、その世界の在り方を教えられた気がしていたからだ。

「ありがとう……。俺はお前が繋いでくれた世界のおかげで、お前を越える事ができた……。お前が伝えてくれようとしたモノは俺の中に伝わった……」

「お礼は……いいよ」

ロックマンは背の低い草を指に絡ませ掴むと、それを支えに上体を起こす。そしてソロの方へちらりと視線を流し、満足げに一息吐いた。彼はソロの力に喜びを覚えて、しっかりと受け継がれていたかけがえのない力に感動していた。

「戦って、確信した。……きっとね、キミの世界は素晴らしいものになるよ……。君は、あの時の君を確かに受け継いで、そしてそれ以上の存在になろうとしている。そんなずっと待ち望んでいた君が、僕にひしひしと伝わってきた。ハハ、嬉しいなぁ」

ロックマンの意味深な笑顔に、ソロは首を傾げる。彼はロックマンと直接言葉を交わして、この世界の真理を問うた訳ではなかったが、それでもうっすらと気が付く。

全てを知ってしまったこのロックマンに、ソロは発言権の範囲内でそれとなく尋ねた。

「素晴らしい……か。だが……この世界は神が作った場所でしかない……そうなんだろう？　だから、この世界は偽りでしかない……」

「確かに、そうなのかもしれない。僕は全てを知って、それを見た。それだけに君の言おうとしている事を否定はできない。……でもね」

ソロはロックマンに皆まで言わせずに、手をやって遮る。確かに偽りの世界ではあるが、それは彼にはどうでも良いことなのだ。

「ならば、俺は俺であり、お前の知る俺ではない……。しかし、俺はお前のかけがえのない友だったこともまた事実……。この世界がどうであろうと、それは揺るぎない」

ソロはすでに承知しており、ロックマンの笑顔を目を細めて見つめる。そして語り合うように交わした自分の拳に目を落とすのであった。

確かに伝わった。それを実感して、ロックマンは小さく頷く。自分の役目を終えたと実感したのだろう。彼の目の前にいるソロは、すでに彼の知っていたソロ近しくなり、そして越えようとしていた。

パラス・アテナが言っていた通りになったのだ。千億年以上も前から、ずっと彼が見つめていた結末がそこにあった。

「そう、君は僕の知っている彼とは違う……。だけど君の中には、君の辿ってきた千億年以上の歴史がしっかりと刻まれている……！だからソロ、キミならきっと見つける事ができるだろう……。本当の自分だけの物語を……！！」

ロックマンは半透明になってしまった左手をブライの禍々しく燃える右手に乗せてやる。

ソロはその手を払う事はせず呟いた。ロックマンは微笑むだけである。

「俺だけの物語……」

「そう、君だけの物語だ。僕の友であり、仲間であり、そして最高のライバルだったソロは、確かにそれを見つけていたんだ。

あの時の最後の戦いの前……君は僕に言ってくれた。『世界を決めるのは、シュンランでも、レギオンでも、アイツでもない！　この世界に生きているのは俺たちだ！　この世界で生き残るのは俺達だ！！』……ってね」

「世界の真実……」

「戦いを通して教えたはずだよ……。それがきっかけに……」

重ね合わせた手のひらの片方が、光の一部となって解けていく。消えるロックマンと、消えるコダマタウン。それは救われなかったあの時の全てだ。

それらを目の当たりにして、ソロはようやくこの世界の気持ち悪さの原因に気が付いた。そうやって時の試練の意味を悟ったのであった。そしてパラス・アテナというレギオンの意図も捉える事ができた。

レギオンは倒すべき敵だが、それ以上の闇がこの世界には広がっている。そういった意味では、レギオンは倒すべき敵ではなく、倒せなければならない敵なのだ。

そのことからソロは、様々な意味を持つ”扉”を頭の中で思い描いていく。その扉の向こうに、倒すべき存在がいると思ったのだろう。

倒すべき敵……その人物が、この世に神がいないということを証明することになるだろう。

「気付いたのかい？」

「……ああ。そうなんだ、そうだったんだ……！」

ようやくソロは、ロックマンの言わんとしていることの真意に気が付いた。戦いを通して、彼が教えようとしてくれていたこと。それはこの世界がどのようなものであり、どのように作っていくのかであった。確かにこの世界はソロの思う通り、神の実験場としての

システムの一環に過ぎない。しかし、それは神の都合である。彼には関係のないこと。この世界に生きている全ての命は確かに燃えていて、神の意志とは関係なく生きている。それがかつてのソロが見出した真実で、それが自分だけの物語を形作る、それが決して揺るがない力となる。

そして長い時を経て、歴史の集大成を乗り越えて、ソロは目覚めることとなる。そうやってはるか彼方よりの彼の呪縛――心の壁を突破したのであった。

ソロはきっかけを手に入れた。アカシックレコードに刻まれた、自分だけの領域。自分だけの物語。その扉を開けるカギを手に入れたのだった。

彼はふっ切れたように微笑して、ロックマンの元から立ち上がった。

「ありがとう……ロックマン。いや、星河スバル。お前は尊敬に値する戦士だったよ。俺だけの真実、そして物語……お前のおかげでそのカギを手に入れることができた……。そうだったんだ、ずっとこの心の壁が……。

ようやく俺は、本当の意味で戦う権利を手に入れた……！！」

「……そうだよソロ。後はその扉を開くだけ……。僕の力は、命との出会い、絆の力だった……。そして君の場合も……」

ソロはロックマンの言葉を受けると、小さく頷いて自分の手のひらを見つめる。褐色だった肌の色が、すっと引いていき、カノンのような白く神聖なものに変わり始める。今、彼は心の壁を完全に打ち破った。彼をずっと、小さくまとめてしまっていたのは、シュンランに施されていた心の壁であった。かつてオリヒメから孤高の証を授かっていたが、それよりも強力で、宇宙が生まれた時より施されていた絶対の壁。それこそがソロの最後の心の壁だったのだ。それが打ち払われ、ソロは完全なオリジンとして復活したのである。

今の彼は究極の導き役にして運命の調律者”デコイ”である。
乱暴に逆立っていた白髪も銀髪となり、神々しささえ思わせる落ち着いたものへと変わっていた。赤かった瞳の色も頬の封刻も、憎しみや、激しい闘争心を従えたように、うっすらと暖かな暖色に落ち着く。
真実を見出し、生まれ変わったソロは柔和な笑みを浮かべて、ロックマンに穏やかな眼差しを向けた。いつも何かに怒りを覚えていた彼の姿はもうない。気持ち悪かった世界の正体を知ることができて、自分と向かいあうことができるようになって、彼は怒りや恐怖に支配される必要はなくなったのだ。もちろん心の壁にだって縛られる必要もない。
生まれ変わったソロは、真実への道を突き進むだけだ。まず最初の目的は神を倒すこと。

「俺の力……それは神にも届く真実の力だった。この世界を象徴する力……そう、それはお前と同じ力だったんだな……」

自分で言ってて可笑しいようで、くすぐったそうにソロはこもった笑いを押し殺していた。

「そう、キミが目覚めていた力……世界との出会い、絆の力だ……！」
「ああ、それを俺は見つけ、手にしていた！　そして俺もその扉をこじ開けてやる！！」

やっとソロは自分だけの物語の力を知ることができた。あとはその扉を見つけて開くだけ。
何よりも完璧となり、全てを知り、今までの世界をしっかりと刻みこんだソロの旅立ちを、ロックマンは祝った。

「行けっ……ソロ！　君の世界に帰って、レギオン達に見せてつけてやるんだ！　千億年の力の集大成を！！　君たちの世界はまだ終わっちゃいない！　その輝かしい世界の力を見せつけるんだ！　今の君ならそれができるんだもの！」

「……ああっ！！」

ソロのどこまでも届くだろう、真っすぐな姿勢。もうロックマンの心配は何もいらないだろう。

迷いのない彼の返事に安心したようで、ロックマンはこの歴史の代表者として最後の力を振り絞る。そうやってクリアウェーブに通じる扉を構築して、彼を送りだしてやる。

「じゃあね。僕の最高のライバル……！　それと、今の世界の僕とも仲良くやってあげてね？」

「フッ……アイツはまだまだ甘過ぎる気がするがな……」

「だから君が導いてあげるんだよ」

ソロは何も言わずに小さく頷くと、クリアウェーブに通じる扉を開け放った。

そうして時の試練を無事に乗り越えることができたのだった。

結果としてはパラス・アテナの思い通りではあるが、これはソロにとって避けられる運命ではなかったという事だろう。

もちろんロックマンも、これが最も可能性のある選択だと感じたゆえの結果だった。

そしてソロが扉を抜けて、元いたクリアウェーブに戻る。すると、そこには時の試練に挑戦していたはずのソウル・レイダー達の姿が

あった。ハープ・ノートやキリン・ライトニング、どうやら全員無事に帰ってこれたようだ。それに一人一人が、それぞれの真実や大切なものを手に入れてきたようであった。オックス・ファイアに至っては、どこか神がかった気配すら感じさせるのだ。腕を組んで、一人離れたところで、クリアウェーブの白んだ闇を見つめている。大人の男の渋さがにじみ出ている。

ソロは周りの様子を確認して、ほっと一安心だ。

「どうやら俺が最後だったようだな……」

「お兄ちゃん。大丈夫……だった？」

どうやらカノンも時の試練を乗り越えたらしい。彼女はとても心配していたようで、すっかりボロボロになってしまったソロの世話を焼いている。どこから取り出したのか包帯を巻きだして一生懸命だ。

普段のソロなら、きつい態度を取ってカノンを泣かせるところだったが、今の彼は違う。心境の変化とは恐ろしく、妹の頭を撫で始めた。

「ありがとう……」

「ひゃ、え……えっえぇっ？　お、お兄ちゃん?!　どうしちゃったの……頭打った？」

基本的にソロからは睨みつけられたり、脅された記憶しかなかった彼女だけに、思考が止まってしまう。なによりソロがそのような行動に至るとは考えられなかった。もちろんカノンはずっとそういう優しさを求めていた訳だが、いざ注がれてみると、驚きが真っ先に来てしまうのだ。

そんなこともあり固まってしまったカノンに、ソロは恐ろしく穏やかな笑みを浮かべて見せる。いつもの彼の笑みは、小動物なら殺

してしまうくらいの邪悪なものだったはず。周りにいたソウル・レイダー達も呆然自失だった。ハープ・ノートに至っては、自分の頬をつねって涙目になっている。涙がぽろぽろ零れるが、どうやっても夢とはいかない。

「今思えば、お前の頭を撫でることも、ましてや笑顔を見せたこともなかったな……すまなかった」

「くすぐったいよ……。でも嬉しい……」

「フフ、今度お前が大好きなウインナーもたくさん買ってやる」

「わぁい」

そんな兄妹の姿からは、時の試練がもたらした計り知れない力を感じさせる。

もちろん他の挑戦者も、ソロと同じくらいの変化を手に入れたことだろう。

ｅｄｅｎ―２２：血筋が生んだ周波数

十二人全員が無事に帰ってきた訳だが、ソロはレベル１２との戦いですっかりボロボロとなってしまっていた。このままでは戦力に関わるので、ここはハープ・ノートの出番だろう。ソロ以外の全員が無傷であるのはひとえに彼女の働きのおかげであった。

それぞれＩからＸＩＩの世界で試練を乗り越えてきたわけだが、ハープ・ノートの場合、とても素晴らしい力を手に入れていた。彼女が行った世界で待ち受けていた相手は、レベル４という女の子型のロックマンだった。ピンク色で、大口径ロックバスターを肩から移植したような破天荒な少女である。それでいてとても可愛らしく、可憐な乙女を十分に認めさせる存在だった。そんなレベル４との戦いを通し、彼女は四番目の世界において最も上等な周波数変換術を身につけるに至った。それは人死にが酷かった四番目の世界で編み出された究極の回復技である。仕組みとしては、周りの環境周波数を肉体の周波数と同期させ、失った体電波情報を補うといったもの。彼女が言うには高等周波数変換術『チューンリカバリー』という名前であった。

もちろん、この技にはそれなりの資質を求められる訳だが、ハープ・ノートの場合はその条件を見事に満たしていた。かつてキリン・ライトニングが食事の席で感じた、彼女の特異な周波数。それを戦闘用でないと指摘していたが、ようやくその正体が判然とする。その傾向はフェニックス・リボンのムゲンリカバリーからも見て取れる。

キリン・ライトニングも言おうとしていたが、人間にも電波生命

体と同様で、周波数に音色がある。つまり生まれ持った資質のようなものだ。ミソラの場合、身の周りから肉体に親和する音色を見つける事ができるという資質を生まれながらに持っていた。その周波数は戦闘に向いているとは言えないが、柔軟で繊細なそれはとても貴重である。そんな敏感な彼女の周波数は、音楽の才能という面でも出現していた。

もちろん彼女の資質は、ワタルの持っていた資質が、強く遺伝した結果ともいえる。いくらフェニックスに回復の能力があろうとも、ワタル自身にそのような資質がなければ、ムゲンリカバリーのような特異な能力を扱えるはずがない。なぜならムゲンリカバリーもチューンリカバリーと同じ、高等周波数変換術の一種であるのだから。

そのような背景から、ミソラの血縁は回復系統の能力に優れているとうかがえる。父であるフェニックス・リボンの能力が、それを極めたものだから当然だろう。そして音楽の才能も一因であったのだ。

そのためハープ・ノートは、時の試練のメンバーの中でも最も成長していたと言える。自信に満ちた表情は頼りがいすら感じさせる。すぐに彼女はカノンとソロの元に歩み寄って、一生懸命なカノンの仕事を引き継いでやった。

「カノンちゃん。後は私がソロ君のケガを治してあげるよ」

「あっ……ミソラ。うん、お兄ちゃんを頼むね」

するとハープ・ノートはスッと目を閉じて、頭に付いた可愛らしい耳のようなアンプへと意識を集中させていく。そうやってソロと近しい音色を探っているのだ。

しかしソロの周波数は特殊なものであり、なかなか見つかるものではない。カノンの回復の時もかなり手こずったものだ。しばらく頑張るが、ハープ・ノートは目を開けると、周りをきょろきょろと見渡して口をすぼめた。どこを見ても水晶のように透き通ったノイ

ズが浮かんでいるだけで、ソロの回復作業は困難を極める。

「……うーん、見つからないなあ」

するとその様子を見かねたのか、オックス・ファイアがソロの元にのっしのっしと向かって睨みつける。ソロの見た目はすっかり変わってしまったので、彼としてはよく観察しておきたいのだろう。真っ白な肌に、落ち着いた髪型と柔和な笑顔とくれば、このチームのビジュアル担当を奪われてしまうという危機感が募る。自分こそが二枚目を自負するがゆえのそれゆえの行動だった。さきほどから渋めな雰囲気を漂わせていた彼だったが、どうやら時の試練を突破した自分に酔い痴れていただけのようだ。彼は何も変わっていなかった。

「おう？　おうおうおう？　お前はー……誰だっ？！　もう一度言おう。お前はー……誰だっ！？　うん、おうおう？！　あぁ、ええ、うおう？　まったくミソラちゃんを困らせやがってコイツめっ！　コラ！　聞いてんのか？！　このレジェンド・ゴン太様の言葉をぉオウヨおォオヨヨオォョ？！」

『おい、やめてやれよゴン太。ブロロ……あんまり睨めつけちゃ、スーパー大変身を遂げた俺達にビビっちまうだろう？　やれやれ……だぜ？』

ナルシストのようになってしまったオックス。しかし彼の忠告を守らずに酔っ払いのようなオックス・ファイアはソロを舐めまわすように見つめる。それはもう鬱陶しいほどにだ。以前のソロなら、問答無用で殴りとばして泣かしていたことだろう。しかし心をすっきりさせた彼には鬱陶しい彼は眼中にもなかった。

だがソロほど寛容な心を持ち合わせていないカノンは気分を害されたようだ。ソロの袖を引っ張って彼女は怪訝な顔を浮かべる。

「お兄ちゃん。気持ち悪いよ……この人」
「酔ってるんだろう。……ほっとけ」

ソロの冷たい一言に、いよいよオックス・ファイアがこのチームのビジュアル担当を名乗り出るが、ハープ・ノートのゲンコツを貰うと途端に大人しくなってしまった。

「コラ、ゴン太くん！　駄目だよ！　めっ！　めっ、だからね」
「ブロロぉ……」

すっかりシュンとしてしまって半泣きになるオックス・ファイア。何度か鼻をすすって涙を堪えると、悔しそうにプルプル震えて、キリン・ライトニングに慰めてもらおうとしっぽを巻いて逃げ帰る。もちろんソロに捨て台詞を吐くのを忘れない完璧さだ。

「この……！　お前……ちょっと、お前……アレだかんな！　お前ーっ！　ク、クソっ、うぅ。ジョ、ジョニーさーん！！　ミソラちゃんに怒られたー！　ヘンなヤツも調子に乗ってるゥウー！」

相変わらず慌ただしい彼であった。
ソロはオックス・ファイアの変わり果てた姿を見送ると、ハープ・ノートに目配せして事情を聞く。あれはただ事ではない。

「アレはどうなっているんだ？　以前にも増したヒドさじゃないか。とても見ていられない……」

するとハープ・ノートは困ったように視線を泳がせる。

「あぁー、えっとねー。私のチューンリカバリーで回復してあげた

んだけど……。どうやら、間違っておかしな電波も注入しちゃったみたい。……エヘッ！」

ハープ・ノートのチューンリカバリーを一番最初に受けて、オックス・ファイアはああなってしまったらしい。どうやら彼女もまだまだ不慣れのようだ。

ソロは並々ならぬ不安を抱いたが、アイドルの武器である笑顔を向けられると舌打ちする気も滅入ってしまう。さらにポカポカと自分の頭を小突いてる様子を見せられるとなると「なるほど……な」などと感心してしまった。アイドルなどに興味はなかったが、ソロは初めてテレビを持っていないことに後悔してしまう。

そしてハープ・ノートは舌をちょこんと出して、悪びれもせずに回復作業を再開した。グッと眉間に力を込めれば頑張る女の子が出来あがる。

「じゃ、気をとりなおして行ってみよー！　よーし、ソロ君の周波数を探しちゃうぞ！　見つけちゃうぞ！」

「ミソラー……、がんばれ、がんばれ」

カノンもどこからかマラカスを取り出してハープ・ノートを応援する。眠そうな目に、やる気なさげな立ち振る舞いだが、心の奥底には熱いものを持っているらしい。

しかしやはりソロの周波数は中々見つからない。どうやってもムー人は特異である。

「うぅーん……うぅうぅーん」

するとカノンの助太刀だ。ちょんと人差し指を立てて不慣れなウインクに挑戦する。

「ここでヒント……お兄ちゃんは、卵焼きが大好きです……！」
「な、なんだってー？　俺はうまい棒が好きだ！　しかし卵焼きも大好きだ！　ソロォ！　キサマー分かるやつなのか？！」
「……う、うるさい……っ」

自分の嗜好を皆に知られてソロは頬を染める。それにしてもスカッド・エースの食いつきの良さは異常だった。聞き耳を立てていたようで、どこからともなく現れて、どこからともなくうまい棒を取り出している。
ハープ・ノートはむむむっ、と名推理に頭を回転させる。

「ふむ、卵焼きですか……ありがとうカノンちゃん！　卵焼き……卵焼きっと……」

中々重大なヒントを貰ったので、ハープ・ノートは耳を澄ませて卵焼きの周波数をクリアウェーブの中から探す。
しかし見つからない。するとまたカノンだ。どこからかシルクハットを取り出して、司会者気分だ。真顔だけど、何気に楽しんでいる様子。大好きな兄のことをさりげなく皆に教えてくれようと頑張っているのだろう。きっと彼女から見たソロは、とても素敵な存在に違いない。

「じゃじゃん、さらにヒントです。お兄ちゃんはコダマデパートでは”白髪の悪魔”と呼ばれ、バーゲンセールでコダマ主婦と演じた死闘は、今もなお伝説です。そして電波障壁が作るお兄ちゃんだけの絶対空間は”昼下がりのブラックポケット”と称され恐れられています。そんなお兄ちゃんはとっても買い物上手です……っ。私の自慢ですっ」

誇らしげなカノンだった。鼻にかかった澄まし顔である。仁王立

ちまでして悦に入っている。
　すると思わずスカッド・エースは、彼女の明かす恐ろしい真実の数々に戦慄した。コダマデパートと言えば、知らない人がいないほどのニホン有数の激戦区である。バーゲンセールにおける値引き率は他の店舗の追随を許さず、誰も予想できない未曾有の事態を生み出してしまうことも多々あった。ノイズ率ではないが、値引き率が上がるほどに、店舗周辺は異様な周波数に包まれる。それはサテラポリスも極秘裏で警戒する戦闘周波数が発生するほどだ。酷い時には、立ちこめた周波数に影響されたコダマ主婦がジャミンガーになってしまうなどという、不幸な事件もあったものだ。そんなコダマ主婦が豹変する正午からの数時間を、プロジェクトＴＣの研究材料にしたことがあるのは、職員の間では有名だ。
　そんなコダマデパートに対する警戒が続いたある日。スカッド・エースことシドウは五陽田から、ある奇妙な案件を任されるに至る。それは『白髪の悪魔伝説』と『流星の主婦伝説』という、コダマ主婦の間で真しやかに伝わる噂に関わるものだった。そして噂を語る五陽田の真に迫る表情は、シドウの記憶に鮮烈に刻み込まれていた。経験豊富で様々な難事件を解決した男が、明らかな恐怖に怯えていたのだから当然だろう。
　しかし当初、噂をシドウはあまり本気にしていなかった。たかがデパートの噂だろう、という根拠のない先入観から高を括っていたのかもしれない。だが、上司である五陽田に任されてしまえば無碍にも出来ない。それにあの表情の意味するところも知っておきたかった。なので、適当な日にクインティアを連れて、お買いものデートを兼ねた調査任務を行うことになる。そしてシドウは、半分デート気分だったことを後悔することになるのだった。
　そしてデートの日、デパート内でシドウは目の当たりにしたのであった。クインティアも決して忘れないだろう。それはそのはず、彼らが訪れた日は伝説が生まれるというバーゲンセールの日だったのだ。なので、フロア一体が異様な熱気に包まれていた。この時シ

ドウは、もしかしたらクインティアと無事に帰ることはできないと思ったはず。主婦という主婦が、家事で鍛え上げた肉体を駆使して、商品を仕留めにかかる光景は恐ろしいばかり。理性を失った野生がそこにはあり、家計の為に修羅に徹する歴戦の戦乙女が戦っていた。中には物干し竿を取り出す者や、自転車を乗り回し一騎当千の活躍をする者もいてカオスが極まる。戦場に取り残された、子供達は母を探して泣き喚き、シドウの胸を抉った。「噂は本当だったのか！！」シドウは胸の奥に暑い警察魂が燃えたのであった。そうして気持ちを切り替えると、漆黒の悪魔と流星の主婦の正体を掴むために、覚悟を固めたのだった。

しかし目の前には血の流れない戦争が広がっており、むやみに手は出せない。シドウは戦慄しつつも、作戦を考える。そして、クインティアに買い物かごを持たせて、自分はカートを押し込み主婦の壁に突っ込んだのであった。郷に入っては郷に従えである。デパートにおける正装は、身を守る盾になるだろう。

だがすぐにシドウは自分の経験値のなさを悔いることになった。主婦の圧力は凄まじかった。まさか、服の下にラグビー用のプロテクターを仕込んでいるとは誰が想像するだろう。いくら彼の鍛え上げられた体でも、数百にも及ぶタックルを全方位から貰えば、徐々に体力を失っていく。彼はそれでも、真実を解き明かすため、クインティアを守りつつ戦場の中心部に向かった。買い物カートが悲鳴を上げる。

そして身を粉にして、何とか中心部に辿りついた。もはやクインティアの持っていたカゴはベコベコになってしまい、シドウの押していたカートも大破してしまっていた。しかし肌にかかる冷房が、キュッと気持ちを引き締めさせる。冷房は他のエリアよりも効いている。そこはタイムセールで食料品が八割引きという、垂涎ものの領域であった。家計簿を司る者にとってのサンクチュアリだ。ここでの戦果が向こう一カ月の生活を決定する。

そしてシドウはちょうど切らしていた米を買うために、その陳列

棚に足早に向かっていく。
　やはり聖域というだけはある。並の主婦では存在することも許されないようだ。シドウは米のコーナーまでに、何人かの主婦が倒れていることを確認した。警察としては放っておけず、すっと首筋に指先を添える。『トクントクン……』僅かな隆起が指先に伝わる。どうやら命はあるようだ。安心して胸をなでおろすシドウ。すると、クインティアが製菓コーナーの方から、悲鳴を上げた。事件の予感だった。
「ティアめっ！　黙ってお菓子を買いに行ったな！　食いしん坊めっ」シドウはクインティアのお茶目さに改めて感動するが、悲鳴とあれば急ぐだけだ。
　シドウは彼女の元まで辿り着くと、絶句した。そこにはジャミンガーが意識を失って、ぐったりと倒れ込んでいたのだ。よほどお菓子が大好きなのだろう、手にはドッシービスケを握っている。これはクインティアの一番の好物の大人気商品だ。サテラポリスで仕事をしている時も、いつもそばに置いていたのが記憶に新しい。そして彼女はシドウに気が付いたようで、推理を巡らせる彼に恐る恐る向き返った。ベコベコになったカゴには彼女が好きだったお菓子が詰め込まれているが、彼女の一番大好きなお菓子は……ない。
　クインティアが好物を我慢する訳がない。なのでシドウは彼女に事情を尋ねた。もちろん倒れているジャミンガーのことも一緒にしてだ。
　すると彼女が言うには、真っ先に大好きなお菓子を手に取ろうとしたらしい。しかしすでに先客がいたそうで、ドッシービスケの前に小太りの主婦が立っていたという。彼女はムスッとしながらも、主婦がそこを立ち去るのを、適当にお菓子を選びながら待っていたらしい。するとどうだ。主婦がいきなりブツブツとつぶやき始め、「タカシちゃぁあんンン！　ミソラちゃん味なんてないわよォオオオ！」と発狂してジャミンガーとなってしまったと言うのだ。そしてそのジャミンガーとドッシービスケの奪い合いを繰り広げること

になってしまった。しかし、ただの主婦がジャミンガー化には耐えられなかったようで、気絶して今に至るという顛末だった。

シドウはここにたどり着くまでに確認した力尽きた主婦と、変貌した主婦から考察して、このコダマデパートにはびこる異常な周波数を危険視する。

そしてシドウが思い悩んだように腕を組んで何度か唸って見た時のこと。彼の目の前を小さな少女が駆けていった。手には長ネギを持っており、お使いの子供かもしれない。後姿だけでも確認したところ、黄緑色の長い癖っ毛と同じ色のワンピースが特徴的であった。シドウは「なぜこんなところに、少女が……？」と訝しそうに目を細めた。デパートに長ネギを持った少女。謎が深まるばかりだ。すると突然スカッドが声を荒げて、さきほどの少女を追いかけるように言い出すのだ。口調は彼らしくなく興奮したようで落ち着きがない。ハッとしたシドウは「お前……年上好みだったはずだろ？」と不思議そうに首を傾げてしまう。この興奮の仕方は尋常ではない、と彼は不安になったのだろう。するとスカッドが頬を染めると慌てて否定する。「ち、違います……！　そんなんじゃないんです……！」するとシドウはますます不安になってしまう。だが今度はクインティアの方から、ヴァルゴが事の次第を伝えてきた。『てゆーか。さっきの子すっごいノイズを放ってたわよ？　この一体のカオスは彼女が原因じゃん？』

ヴァルゴの名推理に、シドウとクインティアは少女の後を追った。

シドウはそんなデパートの出来事を、カノンの言葉から思い出したのだった。とても思い出深かったのだろう、風景の一部となったクリアノイズにスカッド・エースはかつての記憶を馳せていた。

「そして俺はたどり着いた先のお米コーナーで、星河あかねさんを発見してしまった……！　なるほどな、さすがに大吾さんの妻だけはある。そして彼女はどうやら、夜太郎さんのトリッキーな動きと、メトリーの小回りを上手く駆使したテクニカルな戦法を得意として

デパートに君臨していた。そして付いた二つ名は”流星の主婦”！！　まるで流星のように流れるチームプレイが由来だそうだ……。近所に住むK・Nさんの証言だよ」

そしてスカッド・エースは「完敗だよ……」と言いたげに、肩を落とすとソロの方に目を向ける。その瞳には少しの称賛の意味が込められていた。

「しかし、流星の主婦の正体は分かったが、とうとう最後まで白髪の悪魔の正体までは分からなかった。あかねさんに聞いても、『あの子はタダ者じゃないわ……！　ただのお使いの動きじゃなかった！！　フフ、今度は負けないわよっ』としか言わない……。そして捜査は振りだしに、やがて永久に凍結されたんだよ。……まさかお前が白髪の悪魔の正体だったとはな。完敗だぜ……！　ソロ」

しかし当の本人は首を傾げるばかりだ。

「白髪の悪魔……？　一体何の事だ？　俺はただ、カノンのウインナーを……」

ウインナーが食卓に並ばないと、カノンはとても不機嫌になる。なのでソロはいつしか完璧な動きで買い物に臨むようになっていた。一切の無駄の排除をした動きと、無音高速の歩行術に、電波障壁……あかねを苦しめる訳である。

意識せずにそのようなレベルに達したという訳だ。スカッド・エースは言葉を失った。

「ウインナー……ま、まさか、お前？　まさか無意識のうちに？！」

スカッド・エースはどうやら、とんだ化け物と戦っていたようだ。

まるで格が――違う。
　するとカノンがニッコリと笑みを作って、彼に言ってやった。人差し指をちょこんと立てて、見上げてくるのである。もう勝てる気がしない。

「孤高を貫くのは大変なのですっ」

　カノンの笑顔にもスカッド・エースは完敗だった。
　そうやって長話が終わったところで、ようやくハープ・ノートもソロの傷を治せる環境周波数を見つけたのだった。ぴょんぴょん飛び跳ねて、早速チューンリカバリーを用いる。手のひらを天に掲げてその周波数を集めていく。見ている分には簡単そうだが、これがなかなか難しい。
　そして流石にソロに似た周波数らしく、それは目に見える白さである。以前の彼なら黒いのだろが、今の彼には白が似合う。そんな周波数を、彼女は音で聞こえているのだから凄まじい。
　ひとしきりそれを集めると、ハープ・ノートはエッヘンと胸を張ってソロに悪戯っぽく笑って見せる。手のひらには、白っぽい液体のような、固体のようなヨーグルトが漂っている。カノンはへぇ…と物珍しそうに指を咥えて見ている。
　そしてハープ・ノートはまた飛び跳ねて、スカートを行ったり来たりさせながらよほどの嬉しさを表現している。

「イヤッター！　見て見てソロ君。これが君の血肉だ！」
「生々しいな……」

　ソロがげんなりとする。俯いた彼に、すかさずハープ・ノートがずいっと身を乗り出す。アイドルの接近に彼はたじたじだ。
　含み笑いのアイドルに、妹も混ざりだして、はつらつとした意気込みで言い立てた。

「生もの注意！」
「お腹痛いの飛んで行け！」
《はい、リカバリー！！》

ハープ・ノートとカノンは仲良く声を合わせて、ソロの素を、胸のあたりにぐいぐい押し付けてやった。すると、彼のボロボロだった体が回復していく。見た目にはムゲンリカバリーと同じで、徐々に傷が塞がっていく。

ハープ・ノートはまだまだ未熟なのでかなり手こずっていたが、ワタルはこの大変な周波数変換術を半永久的かつ無意識的に行っているというのだから恐ろしいと言える。彼女のロックマン同様、彼を目標にしなければならないようだ。目標はフェニックス・リボン並の回復術を物にするといったところだろう。

しかし彼女はまだ気付いていない。このチューンリカバリー、ムゲンリカバリーにはない他者への回復作用さえも有している。これを極めることができれば、彼女は彼よりも高位の存在になることが可能なのだ。

それでも今は、ソロの傷をちゃんと治すことが出来たことに、満足気に頷いて自分で自分に納得していた。小さな成功を素直に喜んでいた。

「ふう、大変だったー。まだパパのように上手くは出来ないけど、でも頑張ってみんなの役に立ってみせるぞ！　オーッ！」
「おーっ」

ハープ・ノートが意気揚々と拳を掲げると、カノンも真似をして彼女のそれとくっつけ合いっこをする。どうやら本当に仲良しのようだ。

「ふふっ。カノンちゃんも頑張るんだもんねっ？」
「うん……私も頑張るよ！」

仲良しの女の子二人を、ソロは遠めから眺める。完璧に回復した訳ではないが、ずいぶん体も軽くなった。ソロはハープ・ノートの力の素晴らしさを実感して、密かに彼女のことを認めたのだった。
するとソロの視線に気が付いたのか、ハープ・ノートがカノンとのお喋りを切り上げて近づいてくる。なぜか膨れっ面だ。大変苦労させられたことが原因か。

「んもう、ソロ君ったら恥ずかしがり屋すぎだよ？！　君の周波数は中々しっぽを出さないんだもの！」
「ふん……悪かったな」

今度はクスリと笑う彼女。

「うん、でも、それでいいと思うよ？」
「なに……？」
「私ってほら、シンガーソングライターじゃない？　けっしてアイドルや女優なんかじゃないんだからね？！　……とまあ、それは置いっといってっ」
「ああ……」
「だから、なんていうのかな。一つ言っておくよ！」

ハープ・ノートはソロの耳に手を当てるとそっと耳打ちした。

「ソロ君……君の周波数、とっても素敵な音色だったよっ」
「……ああ」

するとハープ・ノートがまた膨れっ面になる。

「もう、さっきから『ああ……』とか『……ああ』とかそんなんばっかり！　そんなんじゃ友達出来ないぞー。まったくどういう使い分けだよ、もうっ！」
「ああ……」

やっぱりついつい出てしまう「ああ……」という素晴らしく便利な返事だった。適当に口を開けて、生返事を返せばこうなってしまう。なのでハープ・ノートのしかめっ面が酷かった。少し後悔して、ソロは目を逸らすと、適当にそれっぽいことを言ってみる。今だからこそ思うのかもしれないが、彼は自分の口数の少なさに自分で少し驚いている。

「あ……ああ、フン、余計なお世話だ」
「まあ、よく頑張ったと思います。うんうん」
「ああ……悪かったな」
「まあ、頑張ってねソロ君。そのイメチェン、中々カッコいいと思うよ？　じゃね！」

それだけ言ってハープ・ノートはカノンの元に帰っていく。去り際に鏡のようなクリアノイズを渡す辺り、それを見てみろと言っているらしい。

何となしにソロは自分の顔をクリアノイズに映し出してみる。すると見慣れない自分が覗きこんでいて、堪らず吹き出しそうになった。頑張ってセットしていた頭が台無しだった。

「ああ……」

すっかりソロの傷も回復し、再びブライに変身してチームエクスは準備万端となる。

すると見計らったように、パラス・アテナからのコンタクトだった。《さてさて、首尾はどうだ？》そのようにどこからともなく中性的な声が届けられて、透明な世界で響いている。相変わらず口調は男のそれであった。それでも多少の驚きが含まれていて、レギオンなりの彼らに対する感想が発せられる。

《中々やるじゃないか。時の試練を一人も欠くことなく突破するとはな。フフフ、存外こっちの世界は見込みがあるようだ……》

クスクスと一人で納得して笑っている彼は、いよいよ本番だと言いたげにここから先の道をブライ達に示してやる。時の試練はあくまでも前座という訳だ。進化なき人類が神の領域に侵入することを良しとしない、彼なりの使命感が生んだ試練だったのだろう。そして多少なりの進化の兆しを見せた彼らを認めるに至った。

《どうやら、お前達は他の世界のお前達よりも少しは可能性がありそうだ。いいだろう……道を開けてやる》

パラス・アテナはそのままブライ達に広場の真ん中に向かうように言う。一同は彼の言葉に警戒するが、その中でも時の試練に挑んだ者達は思う部分があったようで、時計を模したその中心部に歩い

ていく。彼らは先の試練で、少しの真実を目の当たりにしていた。ブライの場合は世界の真実、ソウル・レイダーの場合は物語の真実、ハープ・ノートは命の真実と言ったように、それぞれの大切な部分を得ていたのだ。アカシックレコードの一から十二の世界で、かつての英雄から教えてもらっていた。

パラス・アテナの放つ周波数の方へ、ブライは睨みを利かせると、自分の意思を示してやった。

「俺のことを操っている気になっているのか知らんが……俺は俺だ。そしてこの世界に生きているのも俺だ！　お前たちが世界をどうこうする権利も義務もない！　この世界は俺達が作っていく！！」

ブライはパラス・アテナへの挑戦の意思を示して、時の中心部で迷いない姿勢を貫く。ハープ・ノートも彼に続いた。

「あの世界で私は知った。この世界の命の意味を……、そしてインフィニットがいるエデンの意味も……！　スバルくん達もそこへ向かって頑張っている。だから私もアナタを倒して、宇宙を救うんだ！」

真実を知り始めたゆえに、まるでクリアウェーブのように澄んだ闘志がハープ・ノートの瞳に宿っていた。その素晴らしき第一歩にソウル・レイダーも共感したようで、尻込みしているチームエクスのメンバーに振り返る。そして彼は、世界最初の英雄と戦い進化した剣――エクスライサーを構えて、戦いへの決意を固めるよう言い放った。

「俺達には掴み取るべき未来がある！　そしてその未来は俺達にしか掴み取ることができない！　この世界はそんな人たちの願いで溢れているんだ！　行くぞ、みんな。未来を掴みに行くぞッ！！」

ソウル・レイダーの熱い気持ちに、チームは燃えあがった。恐れる必要はないのだ。彼らは戦って戦って戦い抜いてきた。どんな困難にも決して諦めずに、生き抜くためにどんな運命も打ち破ってきた。

そしてパラス・アテナが示す『道』の先に打ち破るべき運命と魔人、そして十二の歴史の破壊者がいる。逃げ帰る訳にはいかない。今はエデンへ向かうしかない。

神が宇宙を監視するために施したレギオンの遺跡ことエデン。楽園と言うにはあまりにも恐ろしいそんざいだったが、倒すべき敵の城としては相応しい。この宇宙に生きる、命の意味を燃えあがらせるには十分すぎる。

そしてアストラル・ホープの一人が立ち上がった。するとまた一人だ。今度はＦＭ星人。

すると、一つのチームが出来あがった。ブライを中心として、本当のチームが出来あがったのだ。

「そ、そうだ！　俺達は宇宙を救うんだ！」
「だったら、俺達は引き下がらない！」
「そ、そうでやんす！」
「わ、私達は戦って、戦ってそれでも戦い抜くのよッ！」

十二人の戦士に触発され導かれるようにして、ようやくチームエクスの気持ちは一つになった。そうやって時の流れが渦巻いていく中心部へ集まり、決意を胸に真実への挑戦を始めたのだ。

そんなものを見せられたらパラス・アテナも何度も見つめてきた人間の本質を受け取り、彼らに対する期待がふつふつと込み上げてくる。彼は思い始めていた。今回の世界、そしてその中のこの世界。もしかすると、マスターがずっと求めていたあの扉を、この彼らなら開くことができるのかもしれないと。

《ハッハハ……ハッハッハッハハハァアッ！　お前達はイイッ。まさかここまで強さという進化を提示してくれるとは……！　お前達の心の意味、しかと受け取ったぞ。俺が見つめてきた千億年以上の時の中でもお前達は……もしかすると！　ハハハ！　今分かったよ。インフィニット様がなぜ、数多ある並行世界の中でも、この世界でカギを作ろうと思ったのか！！》

けたたましいパラス・アテナの笑い声に空間が満たされたかと思うと、時計を模した広場が歪み始めた。渦のように捻じれていく、密度のある空間の落ち込みがチームを襲った。まるでプルト・キグナスのディメンションゲートのようである。もしかしたら、ナンバーズのレギオンは全員、時空間能力を持っているのかもしれない。

《さあ、来い！　ラストチルドレンたちよ！！》

歪む世界、それはパラス・アテナの能力なのだろう。プルト・キグナスと同等かそれ以上の空間操作で、ブライ達はエデン大階段前に飛ばされたのだ。穴すら開けずに、空間の落ち込みを指定座標にリンクさせると、ワープは完了する。

歪んだ世界が平静を取り戻すと、すぐに各員は周りの状況を確認した。見たところクリアウェーブの最終地点らしく、ノイズウェーブの道はもう奥には続いていなかった。ただただ氷のようなノイズが舞い踊っており、夢幻の世界を演出する。

確かにノイズウェーブの奥はもうなかったのだが、それとは別に巨大な階段が天高く伸びており、すぐに目に付いた。横への広がりはないが、その白くて眩しい階段は天高くどこまでも続き、先を霞

ませている。しばらく使われていなかったのだろう、クリアノイズが支柱や段差にまとわりついてまるで凍ってしまっているようだ。
ちらちらとノイズの反射光が眩しい中、一同は階段のある方に進む。
すると、階段の前に一体の電波体が腰を下ろしている姿が確認できた。ノイズが視界を邪魔するが、長い髪やくびれた腰から女性型と分かる。そう、彼こそがパラス・アテナだ。彼は熱心に宝石のように美しい水晶に目を落としていた。そうかと思えば、ブライ達の周波数を感じたようで、すぐに顔を上げるとまじまじと見つめ始めた。そうやって長い髪をさらさらと撫でながら彼らの観察をしている。
ブライ達が一歩詰め寄ると、彼は水晶を撫でつつニッと笑った。
「ようこそ。クリアウェーブ最終地点にして、エデンに通じる大階段前へ」
「お前がナンバー6か？」
ブライの問いかけにパラス・アテナが立ち上がり、すらりとした女性的な美貌を見せつける。顔立ちは美しい。長い髪も上質な織物のようで、さらさらと振る舞っている。体もよく締まっており、起伏した胸から足腰に駆けるラインは芸術的だ。まるで占い師と踊り子を混ぜたような姿かたちだった。
パラス・アテナは胸に指を埋めると、何度か頷いた。
「いかにも俺はナンバー6だ。そしてマスターの意志の元で行動するレギオンズナンバー。その名をパラス・アテナという」
「試練などと言い、俺達を試したのもお前ということか」
「そうだとも……。そしてお前達は俺の予想以上の結果を残してくれた。特にお前は俺の期待通り、シュンラン様の呪縛を突破した……！　お前はデコイとして目覚めたっ！　神の最後の実験がより完

壁に近づいたという訳だ……！」

薄気味悪い内容の弁にチームは難色を示す。しかしブライだけは違った。キッと目で睨みを利かせている。

神やシュンランという言葉に、彼は問い詰めにかかった。ずかずかと体が前に出て、パラス・アテナににじり寄ろうとする。だが身を乗り出したところで、カノンに手を引かれて制止されてしまう。彼の後ろでは、ハープ・ノートやキリン・ライトニングも首を振っている。相対している彼は、恐ろしい力を持っているのだ。どれだけ警戒しても足りないだろう。単独で戦うなんてもってのほかだ。

その一部始終を眺めると、パラス・アテナは血の気の多いブライへ、宥めるように手を左右に広げて見せた。そうしながらも上から見下している様子が、口元が引きつった含み笑いから感じ取れる。

「少し落ち着けよ。俺は第一回宇宙からマスターに仕えている存在。プルト・キグナスのような若造と思うと痛い目を見るだけだ……。もっとも、戦いは避けられない。エデンに入るには、俺を倒すしかないんだからなっ！」

語気を凄ませれば、ワイル粒子由来の戦闘周波数が彼から漏れ出してくる。肌で感じるレギオンの恐ろしさだ。ＷＷＲとの戦いが終わって一月、ずっと力を磨いてきたと言っても、やみくもに戦っては勝機はない。ブライは頭を冷やして、すっかり落ち着きを取り戻した。

「……なるほど。カノン、ヤツの力は？」

反省したのかブライは、注意を向けつつも、後ろに控えているカノンに尋ねた。そうして無理は禁物だと理解し、勝利への答えを探り始めている。

カノンはパラス・アテナの周波数を解析すると、神妙な面持ちで喉を鳴らした。

「……とんでもないよ。ここにいる誰よりも……強いっ」

フッと笑い、ブライは冷静に、そして熱烈に、勝ちに行くためカノンへ手を差し伸ばす。逆境など慣れたもので、どんな強い敵にもこの身一つで戦ってきた。そして今は一人じゃない。自然と笑みがこぼれてくるのだった。

「そうか、わかった。一人で突っ込むわけにはいかないな。……よしカノン、やるぞ！」

「うんっ」

そしてカノンはラプラスブレードに変化してブライの武器となる。ブライは荒々しい剣を担ぐと、後衛のスカッド・エースとキリン・ライトニングに協力を求めた。一人ではなく全員で勝ちに行くのだ。

言うまでもなく、二人はブライの隣に陣取ると、それぞれの武器を取って戦いに臨む。二丁拳銃のアシッドブラスターと、騎士の槍となるグングニールにオールトランスだ。

この三人で何とかパラス・アテナとの戦いの突破口を開くつもりなのだろう。そしてブライはカペルの方へ目を送る。もちろん勝つには彼の助けも必要だ。

「俺達で時間を稼ぐ。その間に、カペル……！」

「了解しました。マルチエフェクトでサポートします！」

《任せてちょうだいよ、ソロ！！　オペレーションは大得意なんだからねっ》

カペルとエリアの返事を受けると、作戦と準備を固めてブライは

頷いた。そしてキリン・ライトニングとスカッド・エースとともにレギオンに攻撃を開始する。

敵は一体。広がって全方位から攻撃を仕掛ければ、戦いのペースは掴めるだろう。

対してパラス・アテナは散らばって迫りくる三人を認めると、手に持った水晶をひょいと放り投げた。するとそれが分裂して、彼を取り囲むように複数の球がめぐり始める。

「いいだろう。お前達がエデンに入る資格があるのか。そして、インフィニット様の相手になり得るのか、確かめさせてもらう！　そう、全ては進化のために！！」

そうしてエデンへの道を懸け、チームエクスとレギオンズナンバー６：パラス・アテナの千億年越しの語らいが始まった。

ｅｄｅｎ―２４：太陽少女の真実

【地球サイド：中央校舎三階】

スバル達はキミドリを担ぎながら、アストラル・マージャから逃げていた。まともに戦っては命がいくつあっても足りはしない。敵は遊んでいる。それでもスバル達は必死に逃げ道と、僅かな突破口を探している。今は、スコープの索敵とナビゲートによって、なんとか道を探しながら廊下を渡っている状態だった。こんな時、ウォーロックとカゲロウ君がいれば、現状も少しは楽になるが、いない者を当てにしても仕方がない。

しかしキミドリが撃たれてしまったのは大誤算だったろう。これではまともな戦力がないのと同じなのだ。グリット・メトリーもいることはいるのだが、ゴッドブレスの影響下では特攻要員以外の何者でもない。今は逃げの一手しか打つことができなかった。

だがずっと逃げている訳にもいかなくて、意を決したスバルは背後から接近してくるアストラル・マージャに、ポケットに入れていたネジとかナットの塊を投げ入れてやった。アマケンに遊びに行った時に、よく貰って帰っていた。特性合金のロケットの組み立てに使われる極上品である。中々の名投手ぶりにヒュッヒュッと金属のがらくたがアストラル・マージャに振りかかる。すると洗脳電波人間はチカチカと黄色い発光を目に走らせて、拳銃を何度か砲口させる。耳を劈く高い金属音がスバルの耳に飛び込めば、アマケン特性のがらくたは正真正銘のゴミ破片に成り下がった。カラカラと虚し

い音が廊下より這いずってくる。敵の足音もそれらに同調して地を這い寄り、スバルの耳元でうすら寒い音色となって届いてくる。

こうなるとスバルは慌てて踵を返し、廊下の角を曲がれば全力疾走だ。そんな彼に、前方を走っていたハイドは、大声で呼び掛けた。キミドリを背負いながらだが、機敏な体捌きに隙のない立ち振る舞いはさすがと言えた。

「少年！　こちらからは手の出しようがありません。今は逃げることに集中しなさい！」

「う、うん。そうみたいだね。アストラル・ジャマーとは違って、かなり知能も高い」

スバルは息を跳ねさせながら、これ以上活躍を見込めないがらくたを廊下にポロポロと落としていく。すると夜太郎が立ち止り、ネクタイを腰に巻き始めた。やはりと言うべきか、ここ正念場で彼の電波通信カラテの出番かもしれない。

夜太郎は眼鏡の位置を何度か調整し、眉根をクッと引き締めれば、汗がしたたう格闘家の完成だった。たゆんだタンクトップから伸びる細い獅子は、柔術に適しているのだろう。あまりの無謀にスバルは悲鳴を上げた。

「や、夜太郎さん！」

「わ、私の電波通信カラテなら何とか……！」

「無理です」

こんなところで人死には御免こうむりたく、スバルは通り抜けざまに夜太郎の手を取って、一緒に逃げの一手を辿る。やっぱり夜太郎では限界の無理難題だったらしく、彼の体はよろよろと無抵抗にスバルに引きずられていく。子供にも負ける力では、どうやっても電波人間に勝てないだろう。結局電波通信カラテなど始めから役に

立たないという事だった。
あまりにもか弱い夜太郎の力に、スバルは意外だったようで目をまん丸にして、口元がぽかんと緩んだ。

「ほ、ほら、暑さですでに参っちゃってるじゃないですか！」
「くっ、かたじけない……」

スバルに手を引かれて逃げ惑う夜太郎。おろおろと情けなくて頼りない。そんな中年男性に、リーダーのキミドリは顔を強張った顔でハイドの背中に身を預けていた。どうにか作戦を考えて、この状況を打開しなければならない。もたもたしていれば、他のアストラル・ジャマーと遭遇する確立が爆発的に高まる。それが最悪で、彼女の表情がより険しくなる。激痛の装飾で、普段の彼女はすっかり鳴りをひそめていた。そのため隣を走っているスコープとメトリーも彼女の容体と心情を心配せずにはいられない。不安げに見上げてくる幼女二体に、キミドリは空元気を要求される。しかし彼女の足元からは汗で薄まった血が点々と落ちていき、残り少ない体力を奪っていることがうかがえた。これでは笑顔もあまり綺麗なものを作ってはくれない。拳銃の発砲音がたびたび鳴れば、笑顔も固まるだけだった。

「はは、心配無用だよ。心配無用……」

抵抗心からキミドリが苦笑すると、見かねたハイドが紳士的にハンカチを差し出した。せめて汗でも拭えという計らいだった。彼自身も汗だくだが、レディファーストを失念していない。

「あ、ありがとう……」

彼女はシルクのそれを受け取ると一言礼を言って、重苦しく黙り

込んだ。汗を拭う前に、柔らかな布地をいっぱいに握りこむ。下唇を噛みこみ、この事態を招いた自分の浅はかさを恨んでいるようだ。そしてキングの言葉も、握りこんだハンカチのように包み隠してしまいたいようで、握った拳が震えている。ずっと彼女の中では、空き教室で言われた言葉が反芻されていたのだった。激痛もそうだが、それが原因でキミドリは押し黙る。

彼女はデザインヒューマンだ。小さい頃は普通の少女として過ごしていたが、ある日、母親側に引き取られて実験の対象にされてしまった。彼女の母親、何を隠そうテンキュウ高校の理事長であった。

そんな母の意向もあって、彼女は小学生のころよりテンキュウ高校の実験区画でモルモット同然の扱いを受け育った。それでも、真っすぐに成長してこうして生きているのは奇跡的だろう。そんな日々が続き、繰り上がり式にテンキュウ高校三年になったころ、その母親に「５ｔｈ用の実験データが欲しいから、オペレーションアポカリプスに参加して……」と言われたこと記憶に新しいはず。そしてスバルと出会い、今に至る。今、キミドリの判断ミスからチームが危機に陥っている。そして今、彼女はリーダーだ。

コードキミドリ――。これ以上はもはや……。

決心して、キミドリはハイドの背中を叩くと耳元で囁いた。

「もういいわ。下ろしてハイドさん」

「え……？　それは、紳士的には同意しかねます」

怪我を負った女性を見捨てて逃げ出すなんてことはハイドの中の紳士像に反する行為だった。もっとも卑劣で、情けない負け犬の選択肢だ。

それでもキミドリは訴えた。もはや、隠す必要もないし、それでは皆を守れない。弱ったスバルに夜太郎にハイド、もうどうやっても隠せないのだ。

「いいから、私に任せてくれないかな……。レディの意思を尊重してよ。紳士さん？」

するとハイドの背中を突っぱねて、半ば無理やり自分の体を廊下へ投げ出させる。だがやはり傷は深く、足元から崩れ落ちてしまった。しかしここはリーダーとして体を張らなければならない。ミライがいつだって示してきたスタイルだった。だからこそ足首から脳髄を叩く激痛に耐えることができ、歯を食いしばりながらよろよろと立ち上がった。

スバル、夜太郎、ハイドは立ち止って、慌てて彼女の手を引こうとする。夜太郎の次はキミドリか、と言いたげに、自己犠牲を否定しにかかる。

「キミドリさんまで！　無理ですよ。逃げましょう」

スバルがグイッとキミドリの手を引くが、夜太郎の時とは違ってビクともしなかった。足元は血だまりができているのに、どうやって踏ん張っているというのだろう。驚きを隠せないスバルに、何を思ったかキミドリは首を振ると、天真爛漫ないつもの明るい笑顔を浮かべる。太陽が廊下の窓から覗いており、それは余計に輝かしい印象を与える。

「ハハハ！　ありがとうスバルン。でもね、ここは私に任せてちょうだいな！」

「で、でもケガ人を置いて逃げるなんて……」

「イヤ、逃げないでいいよ。敵は私が倒すから」

キミドリは考えがあるようで、自分の胸に手を当てて告白する。

視線は宙を仰いでいて、懐かしそうでも少し悲しそうでもある口ぶりだった。

「もう、隠せないんだ……。これからキングと戦う以上はね」
「え……？」
「フフ、おかしいと思わなかった？　なんで私みたいなか弱い乙女が、オペレーションアポカリプスに参加していたのか……」
　キミドリの意味深な言い表しにスバルは首を傾げるも、それでも逃げようと彼女の手を引いた。キミドリがどんな隠し事をしていようとも、どんな考えがあろうとも、そこにいるのは痛々しい少女だけだった。
　スバルの優しさを感じさせられるが、覚悟は固くキミドリは廊下の方を望みながら続きを話し始める。そろそろ廊下の角からアストラル・マージャが現れるだろう。

「実験データもそうだったんだけど、本当の所はお母さんに捨てられたんだよね、私……。お父さんから私を引き取ったのも実験体が欲しかっただけみたいなんだ！」
「な、何を言ってるんですか……？」

　スバルはキミドリの手を引く。何を言われてもここで誰かが死ぬのはおかしいからだ。例え母に捨てられようとも、死んでいい理由にはならない。
　敵の足音は迫ってくる。キミドリは唾をゴクリと飲んで、隠し通したかった本当の部分をさらけ出す。

「ウラトーナメント……。いつ死んでもおかしくなかった。事実、私もその時が来たら受け入れる覚悟はできていた。だって、お母さんは実験データだけが欲しくて、私がどうなろうと知ったことじゃなかったみたいだもの」

時折見せていたキミドリな不思議な態度。遊園地で銃を突きつけられても、取り乱さなかったのはそれが一因だったのだろう。彼女はどこかで生きることを諦めていたのかもしれない。

しかしスバル達と出会う事によって変わった。夜太郎とスバルの方を見つめると今度は微笑んだ。彼女が初めて見せたその表情は可憐の一言に尽きる。虚勢に包まれたものを取り払えば、麗しいばかりだった。

「でも、スバルンや夜太郎さん……チームのみんなに出会って一緒に戦って、私の気持ちは変わった。役立たずの私を仲間と認めてくれて、体を張って私を守ってくれた……！　だから私は生きたくなった！！　モルモットでも何でも良いから、生きたくなったんだ！」

「じゃ、じゃあ。なおさら逃げましょうよ……！　キミドリさん」

スバルの訴えにも、キミドリは決して首を縦には振らない。生きたいという気持ちは、死にたくないという事ではないからだ。生きるために、何ができるか。その答えが戦うという選択肢に宿っているだけだった。

キミドリは困ったように、頬をポリポリとかくとスバルの頭に手をポンと乗せた。

「ハハ、もうさ。……そのキミドリってのも、やめてもらえるかな。実はそれってコードネームなのよ……？　本名じゃないのさ」

「……コ、コードネーム」

「そ、コードネーム。だっておかしいでしょ？　こんな可愛い女の子の名前が、ただの色の名称なんてさ。モモとかじゃなくて、キミドリってのがまた可愛くないっ」

確かに言う通りキミドリは女性名にしては無機質な印象でしかない。苦笑しつつもそれだけ言うと、キミドリはスバルと夜太郎にく

るりと背中を回して背筋を伸ばすと、すっと敵との戦いに臨んだ。
　すると見計らったように廊下の角からアストラル・マージャが現れる。立ち止っている彼らに、少し不信に思ったようだが、すぐに命令を遂行しようと一歩一歩歩み寄ってくる。銃弾を装填しつつ、絶対に外さない距離まで詰めてくる。洗脳されても用意周到で見上げた姿勢だ。
　キミドリは目元に力を込めて、そんな敵を見据えた。眉間にしわが寄り、鬼気迫る乙女の姿が現れる。

「見ててスバルン、夜太郎さん。私がなぜキミドリってコードを付けられたのか……その本当の理由を見せるよ。だからさ……私の手を引くんじゃなくて、私の背中を押してあげてよっ。きっとそれが私の勇気になるからっ！！」

　そこまで言われると、スバルはキミドリの手を引くことをためらってしまう。だが、だからと言って彼女の背中を押す気持ちにもなれなかったのか、黙り込んで立ち尽くす。するとハイドが隣に現れた。彼は地球一の紳士として、この作戦に参加している。紳士なら、何をするのか答えは決まっていた。

「私は彼女の背中を押します！　そして、私は彼女の隣に立ちます！　女性が覚悟を固めたのです、紳士としては手を差し伸ばすのが定めでしょう……！！」

　ハイドはすっかり名実共の紳士に成長を遂げていたのだった。紳士を騙るでもなく、その真摯な姿勢で示してくれているのがなによりの証拠だ。
　すると夜太郎も感化される。ついさっきアストラル・マージャに立ち向かおうとしたその気持ちは、決して嘘ではなかったのだから。

「私も同感です。紳士ではないですが、サラリーマンとして女子高生を援助します！　まあ、もっとも今はサラリーマンではなく……四十二歳、無職、独身、無戸籍、というお先真っ暗のダークプロフィーラーの一人ですがね！」

するとメトリーがグッと拳を握って天に掲げた。

「よぉーし！　キミドリお姉ちゃんと一緒に頑張るぞー！」

「わ、私も頑張ります！　キミドリだけには任せてられないんだもん！」

スコープまで、決意を固める始末で、これ以上スバルが抵抗しても意味はないだろう。

「……まったく、ハイド、夜太郎さん、メトリー、スコープ……なんでこんなにも真っすぐなんだよ。まるで僕が悪者みたいだよ……」

スバルは観念したようにキミドリの背中を押してやり、気持ちも一つになった六人はアストラル・マージャに抗う事を決心する。

ハイドが紳士特注のステッキ――通称”エターナルオブジェント”を構える。

同じく夜太郎もコダマデパートのセール品のネクタイ――通称”男巻き”を腰に回して電波通信カラテの免許皆伝者としての本領を発揮する。

そしてスバルはポケットの中にあるアマケンのナット、ボルト、ビス――通称”アマット”、”アーボルト”、”アビスに”手を伸ばして、キミドリに言ってやった。

「行きましょう！　キミドリさん！！　僕たちがバックアップしますから。」

「へへ、まったく熱い奴らだぜ……！」

高揚感と安堵に気持ちを満たすと、キミドリはするするとリボンを解いて、最後の仕上げといく。慣れた手つきでボタンを解いていくと、少女の柔肌が柔肌になる。それなりの胸元に目が行くが、それ以上に目を引く異形な黒い装置がありありと存在していて、注目を辞させなかった。どうやら彼女の心臓部分には、手のひら大のチップが埋め込まれているらしい。それが鋼鉄のムカデのようになって、幾多の足を白い肌に突き刺さっていた。

「抑制解除……」

シャツを羽織る形となった彼女は、おもむろに胸元のチップをつまみ上げるとそのまま引き抜いてしまった。小さな赤い斑点が肌にいくつも浮かびあがると、彼女の体に異変が。

茶色だった瞳が紫色に。おっとりしていた目付きも少し鋭くなっていく。

そして何より目を引くのが、ボブカットだった彼女の髪がわらわらと伸びて、背中を覆うほどの長髪となっていることだ。緩やかなウェーブがかかっており、パッと見はお嬢様のようである。その色は黄緑で、スバルは思わず納得した。

「あっ……」

「どう、コードネームってけっこう単純でしょ？　デザインヒューマンの抑制解除をしたら黄緑の髪になるから、キミドリって名前なの。抑制解除で、見た目の変化は人それぞれだけど、私の場合は黄緑色だったみたいね」

スバルは息を飲んだ。その姿はまるで、見知ったあの少女をそのまま成長させたかのような。そう思えば、瓜二つだった。

「メトリー……」

気がつけば、スバルは思わずそんな言葉を発していた。しかしメトリーとは面白い言い回しだ。確かに、黄緑の髪はメトリーと同じ色だが、年齢からして違うし、それゆえハイドの怒りを買うには十分な表現となる。頬を膨らませて杖をカツカツ鳴らしていれば紳士さが薄れる。そんな彼を尻目に、キミドリは何も言わずに頷いた。

そして、チームを率いてアストラル・マージャとの戦いに駆けだしたのだ。身体能力は並の人間のものではなくなっており、弾を装填中の敵に距離をぐんぐん詰める。

今の彼女の状態は、いわば電波人間と生身の状態の中間地点にある。キミドリの場合髪の色が変わっているが、それは電波変換の際に出現する現象の一つとも取れる。電波化した時のキミドリの本当の姿とも言えるだろう。

電波化。きずなクルーが単独で電波化できる特殊体質を持つように、彼女もまたデザインヒューマンとして擬似的な特殊体質を実現しているという訳だ。

まさに百人力となったキミドリは、ハンターからバトルカードを入力する。電波人間ほどの威力は期待できなくても、それでもバトルカードを使えることは大きな優位性となる。

しかし電波変換ほどではないとは言え、この状態も、ゴッドブレスという強烈な太陽風下では負担は避けられない。もたもたしていられず、勝負を急がなければならないだろう。

「速攻で行くかんね！　バトルカード、ウッドブレード！！」

キミドリは右腕を緑色の剣に変化させて切り込んだ。

ｅｄｅｎ―２５：濃厚な愛の貴公子

キミドリは何度かバトルカードで攻撃を仕掛けるも、たかが拳銃ごときに防がれてしまう。この環境下では、電波化してもバトルカードの最大出力を発揮できないようだ。

彼女は人間にしては圧倒的な身体能力を得た訳だが、やはりアストラル・マージャは電波人間であり能力では及ばず、こうして苦戦を強いられていた。力の強さでいえば、数倍は開く。とにかく、そこは知恵と勇気で乗り越えるべきだろう。しかし、相手もキングの特殊改良を加えられているだけはある。拳銃での射撃の合間に、格闘を織り交ぜて、弾を温存するという中々いやらしい立ち回りだった。状況を把握、利用し、彼女が嫌う長期戦へと引きずり込もうとしているのだろう。

そんな中、後衛からスバル達も果敢に援護を加えるが、紳士の仕込み刃と、くたびれたカラテとガラクタ投擲では役にも立たない。今の彼らには何も期待できないだろう。

結果一人頑張りを要求される。汗が舞い、シャツがペタリと肌に吸いつく。くるりと身をひるがえし、孤軍奮闘キミドリはスカートをはためかせ跳んだ。苦手ではあったが、戦闘訓練の成果を見舞ってやる。アストラル・マージャへの回し蹴り。それはしなった鞭のようだった。しかし、ノイズが暴れ回る敵の脳天を叩く寸でのところで、がっしりと足首を握られてしまった。その握力は馬鹿にならず、傷に響く。食い締めつつキミドリは腕を変換させ、空気砲を叩きこむ。が、戦闘周波数の差は歴然だった。敵は装甲に張り付いたすすをパラパラと払いのけると、彼女の足の傷に指をねじ込んだ。

ずりゅりと肉壁を押し寄せる乱暴な指づかいに、彼女の息は上がった。電波化して、出血を抑えていたが、ほじくりかえされれば激痛が頭を叩き割る勢いで上ってくる。

「くぅうっ！　キッツイ！　キツキツ！！　この変態ヤロウ！」

悲鳴を上げながらも、黄緑色の髪を振り乱してもがき脱出を試みる。するとアストラル・マージャはキミドリの足をグイッと持ち上げる、あっさりと弾丸を叩きこんだ。やる時はやるプログラムらしく、容赦ない。何度も何度も、硝煙特有の匂いを生む爆発が響く。電波化していても、半分は生身なのでキミドリの腕や胸辺りから、細い線を引きながら血が垂れていった。

深く赤々としたそれは黒々と見栄えは酷く、普通の人間なら致命傷だ。しかし彼女だって、宇宙を股に掛けた戦いを経て成長しているし、その経験値は伊達ではない。銃弾、言ってしまえばだたの鉄。人智を越えた電波人間の一片には遠く及ばない。それならば可愛くも思えてくる。肝は据わり、技術もある。おかげで彼女は、周波数変換術の一つフレクバーストを利用して肉体を守ることに成功していた。厚い周波数層は流石の働きを見せ、数個の銃弾は貫通することなく肌にめりこんでいるだけ。黒子が増えたと思えば大事はないはずだ。

「へへん、さ、最近の女子高生の……鉄壁ガード舐めないでよね……！」

口振りは負けん気でいっぱいだが、強がっている場合ではない。そろそろ長期戦にもつれ込みつつあり、消耗の激しい周波数変換術も使わされてしまった。電波化を維持するだけでも精一杯だった。

キミドリもくらくらと頭がぼんやりして、目の焦点が定まらなくなってくる。

握られた足も結局は解けず、情勢が悪くなっているようだ。
その傾いた流れを決定的なものにするため、アストラル・マージャはキミドリを始末しにかかった。再び弾を装填して、乱暴に彼女を床に叩きつけてやる。悶えて、うずくまったところで、銃を下ろす。今度は周波数変換術の小細工もできないだろう。
スバルがガラクタを投げつけるが無駄だ。夜太郎に至っては、近づかせてすらもらえない。ハイドはコートの中から仕込みナイフを投げつけるも、手のひらで払われてしまう。
するとメトリーだ。自慢のつるはしを持ちだして、アストラル・マージャに渾身の一振りを叩きこんでやった。しかし小さな体躯から繰り出される一撃はとても非力で、どうやってもダメージは与えられなかった。むしろつるはしの方が欠けてしまうという始末だった。
すると泣きっ面に蜂だ。アストラル・マージャとの交戦中、巡回中のアストラル・ジャマー五体がスバル達の存在に気が付いてしまったのだった。むしろ今まで見つからなかったことが幸運すぎたのかもしれない。スコープも索敵で近づく彼らに気が付いていただろうが、キミドリが捕まってしまっており、どうしようもなかった。
もちろんアストラル・ジャマー達は銃を構えて、スバル達の方に向かってくる。そしてキミドリも電波化が解けてしまって、黄緑色の髪が栗色に戻ってしまった。それでも伸びてしまった髪は元に戻ることはないようで、だらりと廊下に広がっている。この状況が物語るものは絶体絶命だけ。結局のところ少数精鋭で、軍事要塞並の施設を攻略することはとうてい不可能だったということである。
そうやって誰もが絶望した時、アストラル・マージャが引き金を引こうとした時だ。廊下の窓ガラスを割って何者かが侵入してきたのだった。鮮烈に舞うガラスが巨大太陽に照らされて、視界は煌めく水面のように映え渡る。そんな景色の中、青い流星がスバル達の視界を切り裂くように敵の間を縫って駆け抜ける。たちまちアストラル・マージャとジャマーに鋭い爪跡が刻まれていく。だが、それ

でも、彼らの装甲は伊達ではなく、有効なダメージには至らない。
そうは言っても、キミドリに向いていた注意を惹きつけるには十分すぎる活躍である。スバルは帰ってきた相棒に歓喜の悲鳴を上げた。

「ロック！！　生きてたんだね！　てっきりもう……」
「当たり前だ。バカヤロウ！」

ウォーロックは相変わらずの乱暴な口振りで、健在な自分を強調した。しかし腕は一本吹き飛んでしまっており、その態度と口調に相反する痛々しい姿であった。青いアーマーも焦げたり欠けたりで、よほどの激闘を繰り広げてきたのだと思わせる。それでもこうやって助けに来てくれたことは何より心強い。きっと彼は、立っているのでやっとだろうが、士気の大切さを理解しているために弱音を吐かないのだろう。がさつで乱暴な態度には、経験則から導いた彼なりの勝負勘が大いに含まれている。
ウォーロックは戦士の風格を漂わせながら、アストラル・ジャマー達の方を見やって、適当な見積もりを立てる。相手は彼の渾身の一撃をまるで意に介していない。非常に厄介な敵である。しかし恐れるに足りはしないのだ。キングの野望も望むところで、彼がここに辿りつけたのも、あの要塞を倒せたのも、ここを突破するのも全てが可能であった。もはや確信に近い。
それを見越し鼻先を擦ると、へへッと笑い割れた窓ガラスに視線を流す。それに応えるかのように、すぐにそこからカゲロウ君が飛び出してきた。べろべろと舌を垂らしてお疲れ気味でも、ウォーロックと共に頑張った彼も戦士の風格だ。ゆらゆらと幽霊のように、ウォーロックの隣に並べば、死線を越えたコンビの誕生だった。
ハイドもカゲロウ君の登場に、溢れんばかりの勇気を貰った。戦意が高揚したのか、アストラル・マージャ達にナイフを投げつける。浮かべる表情は友の生還に対する歓喜の極みだった。

「カゲロウ君！　ナイスファイトでした！」
「ありがとぉお」

ハイドの労いの言葉に照れたのか、カゲロウ君は愛嬌があり、それでいて不気味な笑顔だった。そしてコミカルな動き――例えば壊れかけたゼンマイ人形のそれでウォーロックの方に向き直る。

「よぉおし。反撃だよぉ！」

お腹から大きな魔の手をだらしなくポロリさせる。ウォーロックも隻腕の爪をぎらつかせる。

「ヘッ、俺達は運が良いぜ……！　スバル、ここは俺達に任せろ！！」

カゲロウ君とウォーロックはアストラル・マージャ達に弾丸のごとく跳び出した。素早い動きで翻弄させつつ、コンビネーション攻撃を繰り出していく。ウォーロックの直線的な動きにカゲロウ君のトリッキーな動きが混ざれば、緩急に富んだ素晴らしい軌跡を描く。これではいくら電波人間といえどもすぐには看破できないだろう。

「ヘッ！　中々カテえな！」

ウォーロックがアストラル・ジャマーの一体を殴りとばす。そしてカゲロウ君が彼に目配せをする。、

「アニキ！」
「おうよっカゲロウ君！！」

カゲロウ君が魔の手で敵をビンタして弾き、ウォーロックが残ったもう一体を引っ掻いて、キミドリを囲っていたアストラル・ジャマー達を払い飛ばす。弱ったビーストスイングではダメージを与えられないだろうが、敵を引き離すことに意味があるのだ。そして、今が好機とばかりに彼は割れた窓ガラスの方に向かって魂の叫びを上げた。腹の底から呼びあげるのは、スバル達が聞いたことのない戦士の名前だった。しかし彼らこそがウォーロック達の要塞撃破を助け、そしてここまで導いたのだった。

「今だ！　来ォオオオい！！　ゴントゥァルゥエェースゥウッ！！！　ステファニィイイッ！！　ジェニファァアー！」

ウォーロックの呼びかけに答えるかのように、窓から颯爽と三体の電波人間が侵入してきた。彼らがゴンタレスとステファニーとジェニファーなのだろう。姿としてはアストラル・ジャマーと似ている一方、特別なカスタマイズが施されているらしく、黄緑色のカラーリングとなっていた。彼らはガラス片を踏みしめてしっかりと足場を固めると、黒光りの重火器類をアストラル・マージャ達に構え腰を落とす。その武器の取り回しは素人のものではない。

そして三体の中で一番体格のいい男が、人差し指を何度か振って合図を送る。その仕草はキミドリが見せた合図とどこか似ていると感じさせる。するとその合図を受け女性の二人が頷いたところで、ゴンタレスの野太い声が力強く響いた。

「ｆｉｒｅ……！！」

実弾と電波エネルギーをまとった攻撃がアストラル・マージャ達に浴びせられる。ガトリングが勢いよく回り、弾を吐きだし空っぽになった筒が廊下にバラバラと転がっていく。この環境下で電波変換が出来て、電波エネルギーを扱う事ができる彼らの攻撃は凄まじ

い威力を発揮する。きっと彼らもキミドリと同じデザインヒューマンなのだろう。事情はどうあれ、この様子だと敵を掃討する事が可能となりそうだ。

ゴンタレスが最後の仕上げに、狂おしい情熱を爆発させた。その挙動、その達振る舞い、なにより、男らしさ、何から何までそっくりだ。まるで海を渡ってやってきたゴン太の化身のようだった。

「ｆｉｒｅ！　ｆｉｒｅ！！　ｆｉｒｅ！！！　Ｉ' ｍ　Ｇｏｎｔａｌｅｚ！！」

ゴンタレスの叫びが響き、銃声にも負けない鬼気迫る緊迫を演じる。そしてステファニーとジェニファーが弾を撃ち尽くしたところで、ゴンタレスが最後の締めの台詞を言い放った。意外と流暢なニホン語にスバル達は思わず、胸を打たれた。

「罪を憎んで、人を憎まーずデース！」

ゴンタレスがくるりとスバル達の方に向き直りグッと親指を立てれば、アストラル・マージャ達の電波変換が解けて、廊下に崩れ落ちたのだった。そこにはただの高校生が少しの擦り傷と共に寝息を立てていた。

そしてゴンタレス達の方も時間切れらしく、電波変換が解けてしまう。すると碧眼金髪とそばかす眼鏡のティーンエイジャーの女子二人と、期待を裏切らないホワイトなゴン太が現れた。

白いゴン太ことゴンタレスは眩しくて男らしい笑顔を浮かべて、呆気にとられるスバル達に言ってやった。やはり中々流暢なニホン語だ。

「ウァタースィのぉお名前ーはァア、ゴンタレス・ブル・アイラーンでぅえース！　部長ぬぉピンチにお助け参上シマシタでござーる

！　ジャパニーズ、シヌォビ！　アンドゥ、スシ！　イッツァ、エキサイティングゥウ！！　ヨロシクーオネゲーシマース！」

ゴンタレスの挨拶にステファニーとジェニファーも続く。

「ハロー、私の名前はステファニー。そこの青い子と紫の幽霊君が戦ってるところを助けてあげたってワケよ。よろしく頼むわ」

これが金髪で、隣の彼女が眼鏡だ。

「で、私の名前がジェニファーね。キミドリはうちの新聞部の部長なの。で、さっきの牛みたいなのが副部長なんだよ！　ヨロシクねっ」

簡単な自己紹介も済ませたところで、ウォーロックがニヤリとして、スバルの肩に腕を回してくる。ピンチの所を助けてもらったおかげなのか、彼にしては珍しくゴンタレス達を高く評価しているようだ。

「どうだ、スバル。中々いいヤツらだろ？　特にこのゴンタレスとかいうのは中々頭のネジが吹っ飛んでやがる！　コイツぁ、きっと力になるぜえ」

スバルは苦笑しかできず、とりあえずウォーロックに同意しておくに留まる。それにずっとゴンタレスから熱い視線を貰っており、太陽のせいだけでなく嫌な汗が次々と噴き出してきていた。

「はは……これは、ありがたいね」

本当はあり得ないと言いたいところだが、恩人である以上、笑顔

は止められない。しかし何ともテンキュウ高校は国際色が豊かな学校と言えるだろう。

そしてスバル達は、倒した高校生たちに応急処置だけして空き教室で寝かせると、先を目指してその場を後にしたのだった。

eden―26：手遅れ

強敵アストラル・マージャを倒し、さらにはゴンタレスとステファニー、ジェニファーらテンキュウ高校新聞部員を仲間に加えて、スバル達は快進撃を開始したのだった。

電脳世界でメトリーがセキュリティシャッター解除を次々にこなしていき、現実世界ではスコープの索敵も大活躍であった。そして、慎重かつ順調に進んでいった結果、とうとう理事長室のある最上階までたどり着くことに成功した。

しかし、まだ油断はできない。最上階まで辿り着いたのはいいが、理事長室のある区画に行くにはまだセキュリティシャッターが一つだけ残っていた。

そのためチームゼロは途中にある医務室に忍び込んで、大詰めを前にした作戦会議を行っているところである。包帯や救急箱が転がっている机を囲み、少し重々しい空気を作っている。

リーダーのキミドリはハイドの紳士的な対応によって、足首に包帯を巻かれている。中々万能な彼の技能に苦笑しつつも、新聞部の女子二人と真剣な話を続けていた。しかし彼女の髪はすっかりお人形のように伸びてしまっており、印象が変わりきってしまっている。そんな彼女をちらちらと見つめつつも夜太郎はメトリーの破れた服を縫っていた。一方、気を利かしたスコープとカゲロウ君は、そんな彼らにお茶を振る舞っている。机に並べられた黄緑色の液体にウォーロックは喉を潤すと、オヤジ臭く大きく息を吐いた。

しかしそんな中で、スバルだけは落ち着かずにいた。なんとゴンタレスが彼に熱い視線を注いできていたのだった。備えつけのベッ

ドで寝そべっている巨躯から、その存在感は抜群である。その青い瞳の奥に宿る、ゴン太特有の雄々しさから、怪しげな気配が辺りに漂い始めているのは誰しもが気付いていた。おそらくゴン太が順調に成長すれば、ゴン太のような立派な青年になるのだろう。しかしその厳つさは伊達ではなく、まさにその情熱に晒されている彼は堪らない。堪らず咳払いして席から立つと、ゴンタレスに怪訝な顔を浮かべたのだった。失礼のないように、お茶の入ったカップを手にとってそれを渡してやる。

　ゴンタレスはウインクをすると、それを受け取った。スバルはさぶいぼを噴き出しながらも、メットリオのヘルメットをかぶりなおして何とか正気を保つばかり。

「あの……、さっきからずっと僕の事を……」

「オー。やっと、私のアッツイ眼差しに気付いてくれましたんデッカ？　毎度おおきにデース！　儲かりまっか？　イエス！　儲かりマース！！」

　知っているニホン語を並べ立てるという、独特な話術を繰り広げるゴンタレス。スバルは彼のペースに飲まれつつあるようだった。そんな奇妙な彼にウォーロックは喉の奥で笑い声を必死にこらえている。スバルはそれを尻目に首を振って肩を落とす。

「はあ……なんでアキンド弁」

「フォオゥ……ンハァ。ワターシは中々日本かぶれデシテネ。色んな地方の言葉を使いこなす、たぐい稀な男なのデス！　イエス、オンリーワン！　イエスイエス！！」

「……まあ、そんな事はどうでもいいです。アナタがゴン太に似ている理由ももはや聞きません。……ナンスカのゴンターガと言い、謎が深まるばかりだよ」

「ホワッツ？　ゴン太？！　エキサイティングな名前デースね！」

「ああ、気にしないでください。こっちの話ですから」

スバルは手を振って、食い入るような好奇心にあふれた眼差しを遮断する。このゴンタレスという男、なかなか捨て置けないだろう。

アメロッパ産のゴン太に、終始ペースを乱されながらも、スバルは本題を切りだした。あの熱い視線の正体をはっきりさせておかないと、任務に支障が出る。

「なぜ僕の事を凝視していたんですか？」

するとウォーロックだ。服を綺麗に整えてもらってご機嫌のメトリーをおんぶしながら、茶々を入れてくる。

「ん？　アイツ、まさかスバルにホの字なのか？　ウヘヘ、委員長とミソラに新たなライバルってか？！」

「んんーワンちゃん。ホの字ぃ……って？」

「おお、チビ助。そりゃ地球人には色んな輩がいてだな……そりゃあもう」

「コラコラ、ロック。気持ち悪い事を言わない！」

おかしな事をメトリーに吹聴し始めたのでスバルはウォーロックの後頭部を的確に狙って突っ込んでおいた。久しぶりの息の合ったかけ合いに、ウォーロックとスバルは内心でガッツポーズを作っていた。メトリーはよく分からなくて、指を唇にあてながら首を傾げている。もちろんゴンタレスも同じしぐさで、スバルに上目遣いだった。ここまで来るとゴン太の自由奔放さなど可愛く見えてくる。さすがアメロッパのゴン太と言える。

スバルは背筋を伝う稲妻のような衝撃に、ゴンタレスから注意を逸らした事を後悔したのだった。腰を抜かして、冷たい床に手を突く。

「ウワァアア！」
「どうした、スバル？！」
「わーすごい汗だね、スバルー」
「男の汗、したたる情熱デース！」
「ウ、ウワアアァ！」

しかしゴンタレスも馬鹿ではないようで、ベッドから立ち上がると、スバルに手を差し伸ばした。これ以上、いたいけな少年をからかっても仕方がないので本性を露わにしたのだった。

「立てるかい？　スバル君」
「……？！」
「テメエ……！！」

胡散臭いニホン語を急に取りやめたゴンタレスに、ウォーロックはただならぬ気配を感じてスッと爪を構えた。
すると彼は失笑した面持ちで、片眉を吊り上げつつ小首を傾げると、ウォーロックの様子を余裕たっぷりで見下すのだった。

「少しからかっただけだよ。気を悪くしたのなら謝ろうじゃないか。ハハハ。しかしなんだ、まったく六年前と変わらないねスバル君は」
「おい、スバル。コイツの事知ってるのか？」
「ううん。ゴン太シリーズはゴンターガ様しか……」
「だろうな……」

ウォーロックはゴンタレスからただならぬプレッシャーを感じつつも、鋭い視線と共に疑問を呈する。
六年前と言えば、スバルはたったの六歳である。そんな年端もいかない時から、ゴンタレスという男と運命的な出会いを果たしてい

た言うのなら、それは恐ろしい。それが事実なら、ゴン太の存在が根底から覆されることとなってしまうのだ。この地球に存在していままで出会ってきたスバルの中の価値観――通称ゴン太シリーズ。そのルーツがゴンタレスとなると、スバルの中の真実が１８０度変わってしまうだろう。

もちろんウォーロックもそんな六年Ａ組の危機を感じたが故に、厳しい口調となっていた。

「お前、スバルの何なんだ……？！」

「ロック……！　その質問の仕方に僕は意義を唱える！！」

「お前は黙ってろ！　暑いから頭が働いてねーんだ」

するとゴンタレスはベッドに腰を下ろすと短い足を組んで、腕を組んで帝王のような冷たい目を落としてくるのだった。どうやら彼は人心掌握術を学んでいるらしく、その圧倒的な存在感と決してぶれない姿勢に、スバルは金縛りにあったかのような体の重さを実感した。ただのゴン太ではこうはいかないだろう。

「な、なんてプレッシャーだ」

「ハハハ。私がスバルの何なんだ？　それは面白い質問だ。何の事はない、そのままの意味だ。私はスバル君の友人だよ。そう、ただのお友達だよ」

「お、お前なんて知らないぞ！！　ゴンタレス！！　僕の友だちはゴン太なんだ！　ゴンタレスなんて名前じゃない！！」

「フフフ、そうだろうな。あの時の君はまだ幼かった……。それに、あの事件だ。きっと無意識のうちに記憶から消去しているのかもしれない」

スバルは内心、急激な展開に混乱していたが、ゴンタレスの口振りは決して嘘ではないと感じていた。それに”事件”という言葉は

素直に気になる。

「その事件って……？」

スバルは浮かない顔で問う。

本当に何も覚えていないだろうスバルの様子をゴンタレスは認めると、小さく首を振って溜め息を吐いた。秘密を共有する友人だったはずの彼はもう、そこにはいないと感じ落胆しているようだった。

事件……それはある人間が起こした、アメロッパ史上最悪のエレベータージャックで、思い出すのさえ恐ろしいものだった。なので彼が覚えていないというのなら、それもまた幸せなことなのかもしれない。あの事件は小学一年生が経験するには凄惨すぎたのだから。犠牲となった人たちは計り知れなくて、大吾を始めとしたきずなクルーやヘイジの活躍がなければ、スバルは今こうして生きている事はなかったほどである。

そして事件を起こした犯人は、かつてハイドも収容されていた電磁波監獄ロストスクリームでひっそりと息をひそめているのだった。

ゴンタレスはかつての記憶をそっとしまい込んだ。

「……いや、覚えていないのなら良い。それなら、それが一番なんだろう」

「チッ、思わせぶりな事言いやがって！」

「ああ、ソーリーとでも言っておこう」

ゴンタレスは気の入っていない謝罪をしてベッドから腰を上げると、キミドリの元へ向かって、何事もなかったように席に着く。口調も独特な味わいのあるニホン語に戻っていた。スバルもこれ以上、ゴンタレスに調子を崩されるのも癪だったので、彼を一応の友人と認めて席に着く。

二人に何やら意味深なやり取りがあった事を感じたキミドリは、

彼らに向かって茶うけを差しだして聞いてやった。

「ゴンタレスの正体に驚いちゃった？　スバルン」

スバルはせんべいを手に取ると頷いて、スコープからお茶を受け取った。

「はあ、まあ……。色々と」

「ゴンタレスはね……新聞部の仲間と同時に、ＷＡＸＡの重役をパパさんに持っているお坊ちゃま」

「……はい？」

スバルは口からせんべいを落とす。キミドリは続けた。

「かつてはリフレイン博士とも覇権を争ったほどなんだ。だからこそ、リフレイン博士は彼らを信用して助っ人に送ってくれたのかも……何もデザインヒューマンは私だけじゃないんだし。現に助けられちゃったじゃん！」

そしてキミドリは手をパンと叩き、お得意の笑顔となってスバルの脇を突っつき始めた。この無邪気な様子はメトリーと瓜二つだった。スバルは身をよじって彼女に文句を言うも、緊迫した任務の中で貴重な安息を感じたのだった。どうやら彼女のリーダーの資質は、ミライと違った方向に秀でているようだ。彼がリーダーならここで笑顔は生まれない。

スバルが感じていたであろうゴンタレスへの不信感を取り払うと、キミドリはニヤリと笑って得意げだ。

「だからさ、ゴンタレスを信じてあげてよ。仲間は多い方が良いし！」

「分かってますよ。別に最初から、疑ってなんか……」
「じゃ、ゴンタレスと握手！　仲直りの印にね」
「いや、喧嘩なんて始めから……」

スバルがゴンタレスと握手する事を何かと嫌うが、キミドリがスバルの手を取って半ば無理やりゴンタレスと握手をさせる。ゴンタレスも基本は気のいい人物のようで、怪しく微笑みながらスバルの手を握り締めてくる。どうやら彼はキミドリ達の前では愉快なキャラクターを演じているようだ。しかしスバルにとって、それが余計に気持ち悪い。

スバルは思わず率直な感想が口からついて出た。

「撫でまわすような握手……！　なんてアメロパンなスキンシップなんだ！」
「ワターシは、本気の男デース！　私、アナタを感じてる！　アナタ、私を感じてルー？」
「ガハハ、やっぱゴンタレスはこうじゃなきゃな！！　正々堂々下男は嫌いはじゃねー」
「ロ、ロックー。笑ってないで助けてよー」

スバルの懇願にウォーロックはただただ爆笑するだけで、ゴンタレスの暑苦しい握手に最後まで付き合わされてしまった。しかしこの暑苦しい気温の中では、ゴンタレスが提供してくれる悪寒というものは貴重である。もしかしたらこの異常ともいえる気の触れた振る舞いは、帝王学や人心掌握術から編み出した、ゴンタレスが持つ究極の異能なのかもしれなかった。

結果、スバルとゴンタレスの仲を綺麗に取り持ったことになり、キミドリはいよいよ最後の決意を固めさせた。これからセキュリティシャッターを突破して理事長室に向かう訳だが、きっと一筋縄ではいかない事が予想できる。

しかしそれでも勝たないといけない。彼女らの敗北はそのまま地球の終わりを意味している。

「じゃあ、私から最後の命令だよ！」

キミドリは席から立つと、包帯を巻いた足を机に乗せ言い放った。はしたない姿に夜太郎は手で顔を覆うも、当の本人はそんな些細な見え隠れには気にしていないようだ。

「私を……私を地球を救った英雄にしてくれい！　以上ォッ！！」

「……って、なんだよ、それ！　もっと良い台詞を期待したのに！」

スバルは真面目に耳を澄ましていた自分がバカらしくなったのか、黄色いヘルメットを脱ぎ捨ててキミドリの正直さを非難した。しかし彼が、戦士としての在り方や地球を救った英雄としての心構えを必死に説けば説くほどに、キミドリはニヤニヤして上機嫌になっていく。暑さに頭がやられたのだろうか、と、スバルが余計な心配をしたところ、ジェニファーとステファニーコンビもキミドリに同調し始めたのだった。彼女らも暑さに参ったのかもしれない。金髪がお茶をすすり、野望めいた口振りであれば、眼鏡は挙手をして真面目なことだ。

「まあ、部長の言う通りかもね。私も英雄になりに来た訳だし。今のうちに、野望でも語っときましょうよ」

「ハイハーイ！　私も英雄になって、一生遊んで暮らしたいッ！」

するとウォーロックも納得したようで、綺麗な事柄を並べ立てるスバルをじっとりと見つめて、彼の思うがままの気持ちをぶちまける。

「ハッハ、そりゃそうだ。スバルよ、これから命を懸けるんだ。野望や夢を語るのも悪くねえぜ！　俺はただ暴れてえ！　それで地球が救えるなら儲けもんだかんな！」

するとハイドまで調子になりだして、欲望のままだった。

「私だって、メトリーちゃんを命がけで守った暁には、その……あの……！　ンフフンフフフ！！」

「ハイドさん！！」

あまりにも気持ち悪いハイドだったので、父親分の夜太郎が黙っている訳がなかった。ハイドからメトリーを隠すように割って入って、険悪な空気を醸し出す。

なにもここまで来て喧嘩など……と誰もが思っただろう。しかし夜太郎には地球と同じくらいメトリーが大切だっただけだ。彼は無職とは思えない、圧倒的な目力で訴える。ハイドも少し調子に乗りすぎる自分の性分を反省したに違いない。

「ハイドさん……！　その気持ちは嬉しいですが、メトリーはアナタの事をお友達としか思っていません」

「うん！　ハイドはただのオジサンだよ！」

「おおぉ……何という事だ。命を懸けてもわたしは自分のヒロインとブラザーを結ぶこともできないのか……！！」

ブラザー、それは人と人とが絆で結ばれる素敵な間柄だ。そう、ハイドはいつだってブラザーに飢えていた。メトリーを取って食おうとしていた訳ではないのだ。

それを聞き、夜太郎は自分の誤解を恥ずかしく思ったようだ。非礼を詫びると、メトリーをハイドの前に出してやる。

「そうですか、ブラザー……。そうですね、この戦いが終わればブラザーを結ぶ事を約束しましょう。……いいですね、メトリー？」
「うん、もちろん！　だって、お友達だもん」

メトリーの屈託のない笑顔にハイドは改めて、この身をささげる事を誓い、やる気見満ち満ちた表情を浮かべている。独特な笑い声はひっくり返っており、傍目にはすこし不気味だった。
その様子を夜太郎は微笑みながら見送ると、彼も自分の願いを語り始めた。
見つめる先にはキミドリがおり、彼は穏やかな表情でただ彼女の姿を目に焼きつけている。
今、思えばエメリオルとの戦いの時に気が付くべきだったのかもしれない。なぜあの時、メトリーが娘の姿に変わったのか。そしてスバルを始め、誰もが夜太郎の勝利を諦めた時、なぜ彼女だけが信じてくれていたのか。
そんな思いを抱き、しかし真実を決して口に出すことはなく、彼のささやかな願いを語るのだった。口惜しくても真実を語る必要はない。なぜなら十年も前に決着は着いた事だったから。それにキミドリがずっと隠してきたのなら、それは夜太郎から呼び掛けることではない。メトリーを娘に見立てて、甘い幻想に身を投じた以上、その資格もない。

「私の夢。それは別れた妻と娘の幸せです……。きっと娘は可愛らしく、美しく育った事でしょう。太陽のような笑顔でみんなを元気付けながら、いまもどこかで頑張っているはずです。私はそれだけです……」

危うい言葉が口からついて出てくるが、これ以上はさすがに言えなかったようで、夜太郎はメトリーの方に目を落とした。
キミドリも頷いて、その親子の姿を眺める。そして夢を叶えるた

めに一歩を踏み出すと、チームのリーダーとして溢れ出そうな気持ちを抑え言葉を紡いだ。普段と打って変わって、胸を打つほど淑やかに、それでいて力強く。そんな彼女はスバル達と出会った日を思い出して、メトリーや夜太郎の事を胸の奥にしまい込むのだった。

「行くよ、みんな！　夢を叶えにっ」

eden—27：灼熱の決意

医務室を飛び出した一行は、今、最後のセキュリティの突破に臨んでいるところだった。言うまでもなくメトリーは、スバル、ハイドと共に接続端子のところに向かっている。ゴンタレスたちは現実世界の方の見張りに徹する。しかし彼らが再び電波変換できる時間は数分だけ。それにアストラル・マージャとの時に、すでに電波変換をしてしまった。もう半分の時間しか電波変換することは出来ない。それでも、メトリーのバックアップを全力でしておかなければならなくて、ゴンタレスは力強くも聡明さをうかがわせる青い瞳をスバル達に注ぐと合図を送った。

巡回のアストラル・ジャマーはいないようだ。

ゴンタレスのその顔つきは引き締まっており、危機に陥ったとしてもすぐさま身を挺して戦うだろうと感じさせた。

そうしたチームの厳戒態勢の中、いつもの手順でセキュリティシャッターの電脳にメトリーを送りだしたスバルとハイド。これが最後だと意気込んでオペレートを開始する。数々の電脳を突破してここまで来たのは伊達ではなく、スバルとハイドとメトリーは見事なコンビネーションでセキュリティの壁を突破していき電脳の深層に侵入していった。そのように順調に事が運んでいる時の事だった。ふいにメトリーが立ち止まる。温い風に乗ったのか、黄緑色の髪の毛はゆらゆらと揺れていた。

セキュリティことファイアウォール、電脳世界におけるそれはまさに燃え盛る壁で、踏み入れたものを苦しめ侵入を拒むものである。しかし現在は違った。今、メトリーがいる場所はファイアウォール

が一つもなく、開けた電脳空間となっている。汗をいたずらに噴かせる熱気は落ち着き、じっとりとした空気に静けさが漂っている。壊れたデータ片もその空間を避けるようで、電脳本来の整然とした印象を醸し出していた。

メトリーがスバルのウィンドウに振り返って、首を傾げる。何も掴めていないような、そんな所在なさげな表情を浮かべている。それだけに彼女が、這い寄ってくる異様な空気を敏感に気取り、現実世界のスバルらに伝えようとしているのが確認できる。

「ヘンなの……。なんにもないよ」

籠った口調でのメトリーの呟きにより、スバルもディスプレイ越しに得体の知れない緊張を感じ取っているはず。ただ、それでもその場にいない以上、空気の質感や、肌に覚えるざわめきを感じる事までは出来ず、ただの電脳空間がそこに広がっているだけとしか実質的には判断はできない。そもそもファイアウォールが燃え盛って、異常な熱気を帯びている電脳が普通ではないのだからそれがごく当たり前の錯覚。

それでもスバルは集中を切らさなかったようで、ウィンドウに映る彼の表情は引き締まっていた。

《油断はできない。慎重に進んで》

こくりと頷いてメトリーが歩を進める。汗は治まったが、今度は背中から悪寒が上って来ているのか、彼女は口元を食いしばり、見えない何かから見え始めた怖気を我慢しているよう。

ここまで恐ろしいほどの灼熱地獄だったのに、沈んだ空気と整然と広がる空間がうすら寒い。燃えたける世界の中にある、くり抜かれたかのような領域が異質なだけだ。何も起きない事を期待しながら進む行為。まるでそれはルールの決められていない博打のような

感覚を生む。何も起きなければメトリーの勝ちで、何かが起きればそれはただでは済まない事を意味している。そして何歩か歩いたところで、奇妙な張りつめた空気を壊すかのように、彼女が感じていた違和感は現実のものとなった。

ハイドがメトリーに注意を促す。メトリーが感じている何とも言えない感覚は、思い過ごしではなく明確な敵意の表れだった。凄然としたこの場所は、キングが整えた処刑場だったようだ。ハイドは元メンバーだっただけに、いち早く気付く。

《……このエリア。外部からのアクセスを受けています。メトリーちゃん、注意してください》

「う、うん」

メトリーが頷いたところ、そして改めて前に進もうとしたところ。

「あぁっ……」と彼女は短く声を震わせた。なぜなら目の前の空間がバラバラと分解されていく。それは裏世界の住人だった彼女からすれば見慣れた光景だったが、見紛う周波数の冷たさに小さな口が閉じることはなかった。無意識に危険を感じ、そっと身を引いたところで、積み木のようなブロックが積み重なっていく事態の進行は止まらない。そうやって敵となる人の形を成していくのだった。

出来あがった敵は大きな足で地面を揺らす。メトリーは腰を落として構えた。

出てきたこの人間は原始人のような手入れの届いていない髪を振り乱し、臼のような歯を並べ立てている。そうやって歪んだ笑みを作りだす。その巨体にメトリーは圧倒されて見上げる。身長は三倍以上、体重なんて数百倍だろう。

敵はキングの名前を口に出して、溜まっていた衝動を晴らそうとメトリーに黄ばんだ眼球で睨みを利かす。メトリーの腕くらいはある指を鳴らして威圧している。どうやらキングは、本気で彼らの道を閉ざしにかかったようだ。そして紳士的な心得なのか、ここまで

きた彼らに敬意を払い、ディーヴァが誇る屈強な電波人間を寄こすに至った。

その電波人間はディーヴァの幹部で、犯罪者の五里門次郎。そしてプルト・キグナスから力を授かった擬似的なアクセス権限者でもある。手にした力は始まりの始祖生命の一体であるオリジナルイエティ。それと電波変換した今の姿をグランド・イエティという。彼は強くて、メトリー一人でどうにかなる相手ではなかった。

グランドイエティは二人っきりの処刑上をちらりと見つめて、遠くの方で燃えている炎を楽しんでいるようだった。しかしそれ以上に目の前の少女には感心できないらしい。

「……グハァ、舐められたものだな。こんなチビガキ一人を寄こしてくれて」

他愛のない対戦相手を見下ろして、不潔な原始人は口の中で歯の裏を執拗に舐めている。口からよだれが垂れてきた。そんな様子に常軌を逸したものを感じたスバルは、メトリーに全力疾走を促す。

《走れメトリー！　相手にする必要はない！》

「わかったっ！」

メトリーがグランド・イエティをかわそうと走り出す。大きく迂回して、最後の中枢システムに向かおうとしているようだ。

すかさずグランド・イエティはメトリーを捕まえようと巨躯を素早くよじって腕を少女に伸ばす。体格からくるリーチの差は圧倒的で、メトリーが必死に稼いだ数歩の差など意味を成さない。しかしハイドが機転を利かせていた。電脳世界にグランドイエティがアクセスした時に彼はハッキングをしかけていたらしく、積み重なる彼のデータを改ざんして攻撃していた。そのためグランド・イエティの足がボロボロと崩れ落ちて、赤ん坊のように地べたに手を突いた。

そして逃げるメトリーの背中に向かって悪態を吐いていた。

「ちくしょっ！　現実側に上等なハッカーがいやがったか。チッ、こんなもの！」

グランド・イエティはすぐに意識を下半身に集中させて、壊れたデータの構築に取り組む。しかしハイドはそれ以上の力を発揮した。メトリーを守ると約束した覚悟からなのか、神懸かり的なクラックでグランド・イエティのデータに攻撃を仕掛け続けている。そして現実世界からにも関わらずに電脳世界にいるグランド・イエティの修復処理を上回って見せた。彼の五指はエアディスプレイの上で弾けるように、激しく躍動していてまるで付け入る隙はない。スバルもハイドの神業に目を奪われる。グランド・イエティは口元を震わせて青筋を張らせることしかできなかった。

《五里！　アナタはそこで這いつくばっておきなさい！》

「おい……ハイド、話が違うぞォ……！」

太い腕を地面に叩きつけるグランド・イエティ。汚い言葉をハイドに浴びせている。

暴言にも耳を貸さずにハイドは攻撃を仕掛け続ける。噴きでる汗が鼻筋を這う。ハイドも辛いはずだ。気温は五十度に近く、現実世界から電脳世界の相手に対して処理速度で上回り続ける事はかなりの技量と体力を求められる。通常ならそのような芸当は不可能だが、ゴッドブレスのおかげでグランド・イエティも万全ではないらしい。ハイドはその脆弱性を攻め続ける。

スバルのディスプレイからメトリーの突破状況を確認すると、ハイドは眉間に力を込めて口元を食いしばった。グランド・イエティはそんなハイドの表情が気に食わないが、何かを了解したようだ。

「……ふっ、そうか、そういう事だな。てめえ。いくら足掻こうたって無駄なんだよ。無駄ァ！　地球はこのままお終いだ！　俺ら以外の人間は干物になっちまうんだからよ！　だから、その正義の味方を気取った表情をやめやがれ！！　この偽善者が！」

ハイドはグランド・イエティの言葉から逃げずに頷く。

《その通り。……偽善者ですよ。私はたくさんの人を傷つけてきた。そうやって今も生きながらえています！》

「ああ、お前は偽善者さ！　クズのクズだ！　いまさら、罪滅ぼしなんかしてもお前には友達一人も出来やしねえ！」

ハイドは頷く。するとグランド・イエティの腕が崩れ去った。

《友達……そうですね。気付いていましたが、私にはそのような存在が現れてくれそうにありません。ずっとそれだけが欲しかっただけなのに……気付いたら、私は犯罪者で、地球を滅ぼすとこまで来てしまった。友達なんかできる訳がありません》

「だったら、お前は俺達側のクズだ！　クズはクズのように、最後までクズでいろよッ、ハイド！！」

ハイドはそれでも攻撃を止めなかった。グランド・イエティの胴体がジワリジワリと消えていく。彼の活躍からスバルもメトリーを順調にオペレーションして、最終階層にまでたどり着こうとしていた。何も言わずにスバルはハイドの顔を横目に捉える。

スバルはグランド・イエティの言葉の数々を耳にして、ハイドの許しがたい行為の数々を改めて確認してしまっただろう。だが、スバルの隣にいるのはメトリーを守ろうと必死に戦っている男の姿だけであり、その瞳は汗を吸ったのか、水面のような輝きを見せている。ハイドはスバルに目もくれずに、サポートに徹している。スバ

ルも自省してメトリーのオペレーションに集中した。今の彼は頼れる仲間。スバルはそれだけを感じたのだろう。すっかりハイドを信用しきってしまっていた。

そしてハイドもグランド・イエティに言われるもなくその言葉の数々を平然と受け止めている。何度もロックマンを敵にして、何度もスバルから大切なものを奪った。許される訳がない。それでも今は戦わなければ、スバルと交わした言葉が嘘になってしまうはず。

《私は見ていたんだ……。いや、見ているだけしかできなかった。そのおかげで少年から大切な友を奪ってしまった！　それでも少年は諦めなかった！　心と体をボロボロにされても地球を守り抜いた！　だから私も、クズだろうが偽善者だろうが犯罪者だろうが、最後まで諦めたくない！》

とうとうグランド・イエティは何もさせてもらえずに達磨にされてしまった。彼もまさかこうなるとは思っていなかっただろう。それだけに今のハイドは素晴らしいと言えるのかもしれない。

ハイドはメトリーが最後の中枢相装置の所まで到着したのを見届けると、グランド・イエティに目を落とす。止めは刺さない。

《五里、何を言われても諦められないんです。なぜなから、今の気持ちは少年たちが教えてくれた勇気でいっぱいだから……》

「こ、この野郎……！！　あのカスどもに毒されやがって！　あの偽物のゴミは弱かったから死んだ！　ただ、それだけなんだよ！　今だって、弱い地球人が淘汰されて、俺たち強者が生き残ろうとしているだけだろうが！　そこに勇気もクソもねえっ！！」

キングに与えられた命令も失敗に終わってしまい暴言を飛ばすグランド・イエティ。

そしてメトリーがサイバーアウトをして現実世界に戻ってくる。

とうとうグランド・イエティは何もさせてもらえなかった。
そしてキミドリ率いるチーム一同が、いよいよ道が開かれた理事長室へ向かい始める。
だが、このままではキングやサン・ゴッドに見捨てられてしまうと思ったのか、グランド・イエティは作戦を変更して現実世界からスバル達を葬ることに手段を変える。道を塞ぐために幼女一人だけの電脳世界を狙ったのが結局のところ遠回りとなってしまったが、状況の有利さでは依然ディーヴァ側にあると言えるのだろう。
そうなってくると、ハイドはこの場に残ってグランド・イエティの足止めをしなければならない。スバルはシャッターを抜けたところでコントロールパネルに釘づけになっているハイドに呼び掛けた。喉が乾いてしまったのか声がかすれている。ハイドはそんなスバルを逆に心配したようだ。

「どうしたのハイド。先に進むよ！」
「イヤ、私はここでコイツの足止めをしておかなければ……。きっと現実世界に来てアナタ達の邪魔をする」

そんなハイドの賢明な様子に、データの損失で達磨状態となってしまったグランド・イエティは無様な格好でニヤリと笑っていた。
そしてハイドを馬鹿にしたように口元を引くつかせていた。

《いつまでそのハッキング攻撃がもつかな……？　お前の手が緩んだ瞬間、現実世界に出てきて、まずお前からグチャグチャニして次はさっきのチビガキだ……！》

ハイドの神業とも言えるハッキング技術から、メトリーのセキュリティ突破は成功したと言っても、ここからずっとグランド・イエティを相手にしてハッキングを加え続けるのは不可能に近い。現にグランド・イエティはすでに体内でワクチンを作り始めており、ハ

イドの攻撃を徐々に押し返し始めていた。あまり長くは持たないことがうかがえて、そうなるとハイドの命が保証されない。

先を急がなければならないが、ハイドを残して行くという事は、ハイドの命を見捨てるという事を意味していた。

もちろんスバルは、犯罪者のハイドといえども、彼を見捨てる事に良い気がしていないようだった。グランド・イエティの口振りから、ハイドのハッキングを突破するのももうすぐであり、ハイドを潰してしまうのも明確なのだ。

しかしキミドリは首を振って、優しいだけに愚かなスバルの手を引いた。彼女は奥に進むにつれて、徐々に真剣な表情を見せることが多くなっており、現在スバルに向けている顔も笑顔とは程遠く聞き分けの悪い子供をたしなめていた。今スバルのリーダーは気の良いお姉さんではなく、現実を割りきった強い女性だった。

「行くよ、スバルン……」

「でもそれじゃ、ハイドは……」

「何十億が救える時に、そういうこと聞く……？」

「……そんな、さっきだって僕たちを助けてくれたのに」

「じゃあ、彼を救ってあげよう。ハイドさんは私たちが地球を救う事を望んでいる。それで彼は救われるんだ」

ハイドはスバルに紳士的に頭を下げて、別れを言う。

「彼女の言う通りです。それで私は救われます。こんな私を尊重していただいて、ありがとうございます、心優しき少年」

ハイドはエアディスプレイに目を落としながらも、彼には似合わないニヤつきのない笑顔を浮かべていた。ハイドとスバル。一日足らず行動を共にしただけだが、互いに戦友と呼ぶに値する存在になったのだろう。

ハイドなりの戦いの終着点がこの場所にあるのだろう。そういった諦めに納得させて、スバルは唾をゴクリと飲みこんで、何も言わずにキミドリの方に向き直った。後ろの方でメトリーが事情を理解していないらしく、夜太郎におんぶをしてもらいながらハイドに向かって手招きをしていた。スバルはそれを視界に入れないようにして歩を進めるしかなかった。

「行きましょう、キミドリさん」

「うん」

暗い表情を浮かべるスバルとキミドリに、そこはアメロッパからの助っ人であるゴンタレスの出番だった。特にハイドには思い入れも何もないので明るくスバルらに接してくることが可能となっている。

ゴンタレスの逞しい腕がスバルの首に回された。

「ドンマイ！　なあ、キサマ。これってＤｏｎ'ｔ　ｍｉｎｄの略なんやで。知ってましたんデス？」

「ああ、きついよ。暑いし、暑苦しいし、苦しいし、臭いし……何

重苦だよ」

「スバルにしては暴言の数々だな。高気温のせいで気が短くなってやがる……！」

これにはウォーロックも驚いたようで、お気に入りのゴンタレスの耳を塞いでやる。ゴンタレスのナイーブなハートを丁寧に守ってやろうという魂胆なのだろう。もっともゴンタレスの本性は帝王のそれで、一般市民など蚊程にも思っていない図太いものなのだが。

メトリーは楽しそうだ。夜太郎の肩に顎を乗せながらそんな光景を眺めている。するとキミドリだった。本気カチューシャを取り払うと本気の嫌悪を露わにしていた。夜太郎はびくりとしてメトリーをそっと下ろした。

「……ゴンタレス！　今は空気を読むんだよっ。金持ちのボンボンでも空気ばかりは買えないでしょう？」

キミドリがムッとしてゴンタレスに注意を付けると人差し指でゴンタレスの喉ちんこを的確に突き刺して、悶絶させる。もちろんゴンタレスは普段の部活動の中から、キミドリのこういった敵意の鞭を受け取っており、まずいことにそれを愛情表現と誤認して喜ぶことを繰り返していた人柄である。もちろんそれは健在で、親愛なる部長の人差し指の柔らかい部分が自分の喉ちんこに触れられてしまって大変な様子なのだ。廊下に崩れ落ちると、少し震えている。その小さく刻む几帳面さに痙攣を覚えさせた。

「アァ、部長！　イィッ痛いです。痛いながらのイイ刺激！！　なううッ、スロートちんこがッ！」

キミドリはおろかステファニーとジェニファーまでもがゴンタレスから距離を取る。

呆れつつも、ウォーロックがお気に入りのゴンタレスを担ぎあげて、ハイドにその場を任せて先を急ぐことにする。そうやって、スバル達が理事長室に向かおうとした時の事だった。

スバルの横を人影が飛ばされるように、殴りとばされるように抜き去った。スバルはぎょっとして、ハイドが奮闘しているはずの突破済みシャッターの方に振り返った。だがいない。そこにはハイドはいなかった。いるのはグランド・イエティで、あろうことか現実世界に出て実体化している。そして前方に確認をとるとやはりハイドがおり、強く地面に叩きつけられたのかうずくまって悶えていた。グランド・イエティが投げ飛ばしたか殴りとばしたのだろう。しかしハイドの抵抗を突破するにしては早すぎる。ただ現に突破しているのは間違いなかった。

スバルはもちろんキミドリも、ゴンタレスに気を取られていたしばらくの間を振り返るが、それにしても早すぎるとしか言えない。長くても一分足らずの下らないやり取り。辛い戦いの合間の少しの精神的休憩に過ぎない。何も取り立てて大したことは起こらなかったはずで起こらないはずだった。それもそのはずで、ゴンタレスが変態の片鱗を垣間見せたというだけなのだから。警察はそうでも、悪夢が訪れるような事態が起きるはずがないのだ。

スバルらがそうやって考えている間に、乱暴されたハイドに向かってメトリーが駆け寄っていた。どうやら彼女は考えるよりも先に、ハイドを大切にしようと思ったらしい。メトリーからすれば彼の活躍と思いやりの質は最高峰で、ヒーロー的だったのだろう。

そしてスバルはそんな二人を目にしてより事態を重く受け止めた。お目当てのメトリーが接近しても、ハイドは笑顔一つ浮かべずに目をいっぱいに開いて廊下に目を落としていたのだ。普段のハイドなら夜太郎に現実逃避をさせるくらいの事はしてるはずだから。

今のハイドの口から血筋が垂れていく。赤いものが廊下に広がるにつれて、実感が湧いてくる。自分たちは不覚を取ったのだと。突きつけられて、その赤いものを自分たちの未来に重ねることも難し

くはないだろう。
そんな状況の理解にともなってハイドが一言だけ絞り出した。
「……キ、キン……グ」
ハイドは口に手を当てて、血を拭う。メトリーが頑張ってハンカチをスカートの深いところから差し出した。それでもハイドは喜ばなかった。
そこでグランド・イエティがゴッドブレスまみれになった地獄の世界を満喫するかのように大きく域を吸って吐く。そしてメトリーに心配される情けない紳士に対して、額に手を置いて天を仰いでみせた。
「まったくお互いバカだよなぁ？　なあ、ハイド……？」
グランド・イエティは指の間から太陽を覗きこんで、その強大な暴力に酔い痴れ甘い声を出す。
「キングからアイツらの道を塞ぐ事を頼まれたんだ……。俺はチビガキをブッ潰してお終いだと思った……」
「……紳士的な考え方じゃないですね」
「まったくだ。スマートじゃねえ。なに、話は簡単だった。現実世界でお前らをブッ潰してしまえばシャッターが開こうが開かなかろうが関係ねえ！　そうすればお前にも邪魔はされなかったろうよ。……いや、お前の脚本的には必要だったのか？　ま、俺の知ったこっちゃないがな。お前の考えは理解できない」
グランド・イエティはそれだけを伝えると、指と指とをいやらしくからませて、乾いた音をぱちゅぱちゅと鳴らしながら廊下に設置された放送用のスピーカーを見上げた。

「ありがとうよ、キングじじい。俺に汚名返上のチャンスをくれて」
《ハイドごときのサイバー攻撃に後れを取りおって……。まあいい、なかなかの臨場感だったよ。遊び過ぎないように潰してしまえ……！》

どうやらハイドの攻撃をキングが完全に無効化してしまったらしい。キングはリフレインと同等のサイバー管理技術がある。それのおかげでテンキュウ高校のジャックもＷＡＸＡサーバーのハックも可能となったのだろう。もちろんそれら使い方の間違った才能のおかげでサン・ゴッドが地球に牙を剥くこととなったのも、めぐり合わせとしては最悪である。

たとえハイドが紳士として高水準の域に達しているといっても、歳を重ねた老紳士であるキングにはまだまだ及ばなかったということだろうか。

キングは勝ちの目しかないゲームでさえも楽しむことができるようで、ジャラジャラとチップを弄ぶ音色をスピーカーに挟ませながら、かすれた笑いを送ってくる。

《さすがに雑魚相手に後れをとるなよ……？　唯一危険なロックマンも電波変換ができないのなら、ただの可愛い少年だ……。めいっぱい可愛がってやりたまえよ、ぅ五ォーる里ぃー》
「了解、だ……っ」

スバル達は逃げようとするが、おそらく逃げ切る事は出来ないだろう。グランド・イエティはロックマンでも苦戦をする相手だ。ただの人間が彼を出しぬける道理はない。

するとゴンタレスが今までの詫びの意味を込めているのだろうか、ウォーロックに下ろしてもらうとステファニーとジェニファーを従えて、スバル達を守るようにグランド・イエティに立ち塞がった。

今のゴンタレスは本性を表しており、ＷＡＸＡの副長官の息子としての雄々しい姿勢を貫いている。そしてスバルのかつての友として、道を切り開こうとしているのだ。もちろん愛すべき部長であるキミドリにも良い言葉をプレゼントしてやった。今、彼はきっと、かつて無理難題をぶち上げてスクープを確保した日々を振り返っていることだろう。

「部長、先に行ってください！　ここはミー達に任せて！！　一度は言ってみたい男の台詞デスよコレ！！」

「ま、私はティーンエイジャーの女のコだけどね」

「私もー。お肌を気にする年頃ガールなのにね。まったくゴンタレスは」

女性陣も文句は垂れつつも電波変換の準備はできているようだ。グランド・イエティがいつ何時スバル達に襲いかかっても良いように睨みを利かせている。

その光景にキミドリは胸が熱くなった。彼らは普段は気のいい学友で、その中、ゴンタレスは個性的で手に負えない存在でもあった。さらにしょっちゅうキミドリに言い寄って来て、興味のない新聞部まで足を運んできて、金の力でいつの間にか副部長の座にまで居座っていた。キミドリは彼の事はまったくタイプではなかったし、ＷＡＸＡのお金持ちという甘ったれた性根には反吐が出る。それは今も変わりはないはずだ。ただ、それでも命を張って地球の未来を切り開こうとする彼の姿はゴンタレスにしては格好良かった。

「ゴ、ゴンタレス……！！　アナタ……」

「ウフフフ、ミーに惚れて下さいね部長！　新聞部には興味なかったけど、アナタにはずっと興味シンシンでミーのど真ん中はジンジンしてました。でも、アナタと一緒にやって来て、少し気持ち変わりました。今、それを証明します！」

「フフ、ゴンタレスは部長目当ての薄汚い豚だったものね。でも、今は違う！」
「そうだね！　今は豚じゃない！　さあ、男の子なゴンタレス。戦うよ！　部長は先に行ってね！」
「イエス！　今日のスクープはＵＭＡです！　お題はビッグフット！　突撃取材イキまーす！」

『レッツ、ショータイム！』そんなゴンタレス達の気の良い叫び声と共に三体の電波人間が、グランド・イエティに飛びかかったのだった。
それに振り返りもせずにスバル達は理事長室に向かって走り出した。
その先に待ち受けているのはキングとサン・ゴッドだろう。

一方、命がけで立ち塞がるゴンタレス達。
彼らのせいでスバル達を取り逃がしてしまい、苛立ちを隠せないグランド・イエティがそこにあった。まずステファニーの顔面を砕く。ジェニファーは唖然としているようだ。そんな中、ゴンタレスはボロボロになりながらもまだまだ食らいついている。気に入った女性（キミドリ）の為にここまで体を張るとは見上げた根性だが、それではどうしようもないほどに実力差がありすぎた。
グランド・イエティがゴンタレスを殴り倒すと、頭を踏みつけた。そのまま頭蓋骨を粉砕するかどうかも彼の気分しだいだろう。

「ケッ、ゴミクズがっ！」
「グッ……やはり、ミーじゃ無理でした……か」
「まったく時間を無駄にしてくれたぜ。さて、とっ、そろそろハイ

ドに合流しないとな！」
「グハァッ……！」

ミシミシとゴンタレスの頭蓋骨が悲鳴を上げる。スバル達は無事に理事長室――アジトにたどり着いたのだろうか。そんなことが頭に沸いてきているのだろうか。ゴンタレスは震える手で装甲の裏から何かを取り出す。

「ハッ、そろそろくたばっちまいな！　いい加減アイツらを始末しないと、サン・ゴッド達に見切りを付けられちまう」
「……まだデース！」
「なっ、お、お前……！！」

グランド・イエティの足にゴンタレスはしがみついていた。そしてその手には、夜太郎の持っていたものと同タイプの爆弾が……。
グランド・イエティは言い知れぬ悪寒を感じただろう。確かにゴンタレスは今まで命がけで戦っていた、それでも自分たちもキミドリ達に追いつくつもりだったはずだ。しかし今の表情は完全に未来を諦めている。そして他の誰かに未来を見出している。そんな表情だった。

「リフレイン博士からのプレゼントだッ！！」

ゴンタレスが目を見開いて、常軌を逸した凶悪犯罪者、精神異常者だけが持っているようなものを浮かべていた。
叫び声に混じって、それが悲鳴とも絶叫ともとれる。きっと彼の頭の中では走馬燈が映っていることだろう。
小学生、彼はいじめっ子だった。なぜかそんなどうでもいい事が浮かんでいる。そして、事故が起きた。後悔。だが、もう遅い。そこで出会ったスバル。だが、変わってしまった。謝りたくとも、彼

らはもういない。そして高校生。キミドリと出会った。彼女もまた彼と同じような存在で、今度は助けたかった。面白い事や、おかしな事を言って笑わせようと努力した。アキンド弁が効果的だ。暗かった表情の彼女は、次第に笑顔を見せてくれるようになった。どうやら彼女は父親が大好きだったようだ。しかし行方不明になってしまったらしい。生きているかどうかも分からず、後日、母親が死亡届を出したそうだ。

そして続く実験の日々。辛くてモルモットのようだった。でも、それがみんなの為になると信じていた。

もう、これで最後。

「さようなら、セツナ、スバル、部長……」

空間が割れた。そんな中で最後に思い出したのはセツナの強く可憐な表情だった。

「ごめんなさい、セツナ……」

ゴンタレスは次元爆弾でグランド・イエティを道連れにして地球の未来をスバル達に託したのだった。

六年の月日を経てミライ同様、彼は英雄となったのだ。

ゴンタレス達の周波数は消えた。今、スバルはゴンタレス達が切り開いてくれた道を走っている。

そしてスバルはふとゴンタレスが話してくれた事を思い出していた。どうでもいいことも多々あったが、それ以外の部分が印象に強い。そのため走りながらで前を行くキミドリに、ゴンタレスについて尋ねてみる。何となくここで聞いておかなければ、もうずっと分からずじまいになると感じたのかもしれない。

「あの、キミドリさん。ゴンタレスについてだけど……なんか僕の事を知ってるみたいだった」

しばらく返答を待つが、前方の栗色の長い髪は忙しそうに歩に合わせて揺れているばかりで、質問に答える余裕はないのかもしれない。ほどなく悪い気がして反省から口をつぐんだ時、キミドリは少しスピードを落としてスバルの横に並んでくれた。

キミドリはスバルの鼻先にちょこんと乗った汗の玉を指先ですくい取ると、首を傾げてくる。ゴンタレ達の周波数が消えた。そんな事を胸の制御装置から感じ取っているのかもしれない。

「……スバルン、そんな事を聞いてどうするの？」

キミドリの煮え切らない態度だった。それが彼にとっては意外な返答で、胸に変なもやもやが出来てしまい、食い下がってしまう。

走るスピードを少し速め、場所は空高くに浮かぶ渡り廊下に差し掛かるところだ。理事長室もといアジトまではもう少し。スバルは前方を注視しつつも、弾む息を混ぜつつ口を開く。

「だって、気になるじゃないですか？　僕、あの人の事を知らないし……」

キミドリは肩を落とすと、逆にスバルに尋ねた。どうやら彼女はどうしても多くを語りたくはないようだ。そもそもキミドリは真面目な話をするのは苦手らしく避けたがっているように見えた。

「そっか、スバルンはミライ君から何も聞いてないんだね？」

「え？　なんで、ゴンタレスの話にミライ君が……」

「”ミライ”君……か。なるほど、本当に何も聞いてないんだ。きっと君は友達として大切にされているってことなんだろうね」

キミドリの言葉はスバルにはまったくもって意味が通らなかった。彼の中ではゴンタレスとミライには何の接点もないのだから当然だろう。空に浮かぶ廊下の窓からは太陽が近く思える。しかしその太陽は巨大化しているだけで目の錯覚に過ぎない。スバルの脳内でも何かを錯覚している。それは医務室でゴンタレスが語ろうとしたことだ。

しかしスバルにはそれを聞く資格がなかった。

「ぜんぜん分からない……。六年前に何かあったのか……？」

ぽつりと独り言のようにスバルがこぼすと、キミドリは溜め息を吐いた。彼女はスバルほど息が上がっていないらしい。

「それは私の口からは言えないな……。ただ、今までのミライ君を

見ていればおおよそ見当が……イヤ、無理かぁ」

馬鹿にされたと思ったのか、スバルはムッとして、今までキミドリに感じてきていた事を少しのオブラートに包んで言ってみる。彼女は一見、元気で無邪気な印象だが、それとは正反対に、本当のところで何を考えているのか分からない。それはミライ以上とも言えており、おそらくは感情表現に乏しいソロよりも得体が知れないだろう。

スバルはキミドリに対してウラトーナメントを通して、そんな評価をするようになっていた。彼女の長く伸びきった髪を見て、それはさらに強いものになっていく。

今もキミドリは不気味な存在だった。

「……キミドリさんって、真面目に相手にしてくれないね」

そんな言葉にキミドリこそムッとして、スバルを横目に下唇を巻きこむ。指先をしきりに揉みながら、なにか考えているらしい。彼女もスバルに意地悪をするつもりはないし、間違って勘違いされても困る。ただ残念なことに、これはゴンタレスとミライの問題というだけのことなのだ。だから彼女から言える精一杯の範囲で手を打つしかなかった。

「……じゃあ、ヒント。ミライ君さ、ゴン太くんと仲悪かったよね。あれって偶然じゃないそうだよ？」

「今度はゴン太……？　ますます意味が分からない。やっぱり、ゴン太シリーズに関係が……」

スバルはぽかんと口を開けて呆れかえってしまった。そして結局、彼の疑問が晴れぬまま、一行は高架橋のような廊下を渡り切ってしまった。そろそろアジトは近いはずだ。そのおかげなのか、メトリ

ーは夜太郎の背中で小さく丸まって、廊下の奥から感じるおどろおどろしい周波数を恐れているよう。そしてそれを熱心に見つめるハイドは、メトリーを心配している。たが彼も彼で手負いの状態でウォーロックにおぶさっている状態だった。

そんな状況を確認するとキミドリは足を止めて、皆に呼び掛けた。どうやら彼女は良くない事態に気がついているらしい。ここまで来るのに最小限の消耗で来たはずなのに、ハイドやメトリーはもう擦り切れている。そして不気味な事にアストラル・ジャマー達も見かけなくなった。キングのことだ。何か考えがあるのかもしれない。

圧倒的に不利な状況の中でここまで来てしまった以上、後悔するような事は残しておきたくない。特にさっきスバルに不信感を抱かれてしまって、キミドリはもう隠しごとに意味を見いだせなくなっていた。

リーダーゆえに、少なくとも自分は生きて帰ることができないかもしれないといった考えだ。彼女はチームの命を背負って、元の場所に帰す義務がある。そのため追い詰められて口から心内が零れてくる。

「みんな、アジトはもうすぐそこよ。だから最後に言っておかなきゃ……特にチームオメガだった人には隠し事はしておきたくないから」

ここにいるメンバーはキミドリ、スバル、ハイド、夜太郎、メトリー、ウォーロック、スコープ、カゲロウ君の八人だ。途中、ゴンタレス三人と合流したが、グランド・イエティを相手にして、もういない。

これから恐ろしい戦いが始まると予感して、キミドリは胸に手を当てた。彼女の心臓は高鳴っており、怯えており、鼓動が速く手のひらを執拗に叩いてくるのだった。

そしてキミドリはメトリーに目を落とすと、強張った様子で笑顔

を作り上げた。どうやら彼女はゴンタレスの覚悟を受けて、本当の事を告げようと決心したようだ。このままではきっといけないのだろう。

ずっと隠し通したかったが、死を実感すればゆえだった。

「聞いて……私の本当の名前はリツって言うんだ。これはお父さんがみんなと仲良くできるように……って」

「夜太郎……」

その話を聞き、メトリーが夜太郎の背中から降りてキミドリを見上げる。そしてその手は夜太郎の手を握っていた。

キミドリはそれを見つめながら、小さく頷いて経過してしまった長い時間を再認識した。

裏霞リツ――それがキミドリのかつての名前だ。夜太郎はキミドリの告白に怯えたのか、メトリーをかくまうようにしゃがみこんだ。いや、メトリーにすがっているように見える。彼は目線を定めずに、まるで動揺を隠せきれていない口調で言葉を絞り出していく。何を隠そう、みんなと仲良くできるように……そう願ってキミドリにその名を与えたのは彼だったのだから。

「キングの言葉……そして今の姿に名前……。アナタがそうでしたか……やっぱり、そうでしたか」

夜太郎の怯えきった様子にメトリーが心配したようで頭を撫でている。そしてメトリー自身もキミドリの姿と周波数から気付き始めている。

「ど、どうしたの、夜太郎ぅ……？」

「いや、大丈夫。メトリーは何も心配する必要はないんですよ……？」

「う、うん……」

夜太郎はメトリーに気丈に振る舞って見せると、恐る恐るキミドリに目を合わせて問いかけた。彼にはもうメトリーがおり、彼女と向かいあう事は出来ない。それでもどうしても聞いておかなければならないことがある。彼女から仕掛けたことだ。決着はつけてあげないといけない。

「キミドリさん……どうして今になってそれを……？　ずっと、私に隠してくれていたじゃないですか？」

「ううん。隠していたんじゃないんです。言いだせなかっただけ……、アナタとメトリーちゃんを見ていると……。もう、違うんだなって」

「そうですか……そうですね。確かに違ってしまった……。馬鹿です私は。アナタを守ろうと戦っていたつもりでしたが、全然守れていなかった……。オマケに現実から逃げて、メトリーに夢を見ていた……」

キミドリの今までの境遇を想うと、自分のしてきた行いを後悔したはずだ。そして夜太郎は言葉を呑みこむと、彼女に対して酷い仕打ちをしてきたのだと実感していく。

彼女は母親に引き取られても幸せではなかった。モルモットのように扱われて育っていった。そして十年が経ったウラトーナメント任務の時に運命的に夜太郎と出会う。きっと彼女は何度も名乗り出そうとしたはずだ。しかし、メトリーと幸せそうな夜太郎の姿を見せられると、そんな勇気を殺されてしまったのも容易に想像できた。それも全て、あの時、夜太郎の勝利を信じたことによる結果だった。

そららの要因から夜太郎はよろよろと立ち上がると、キミドリに対して頭を下げた。

「ずっと、アナタに酷い仕打ちをしてきてしまった……。悪気はなかったんです。ただ、メトリーがリツと瓜二つだったから……スミマセン」

「いいんです。最初は悲しかったけど、……メトリーちゃんと夜太郎さんは幸せそうだった。それは間違いなかった。……だから、いいんです。だから、踏ん切りはついた」

キミドリはメトリーをかつての自分に身立てる事で、満足していたのだろう。だから辛くて化け物だらけのＷＷＲとの戦いを最後まで頑張れたのかもしれない。

そして二人はお互いに決着をつけることができたようで、何も言わずにアジトの方に振り向いた。後腐れがないとは言えないが、今は長々と話している時間はない。

だた、そんな二人のやり取りにメトリーは困惑を隠し切れていないようで、夜太郎のズボンの裾を小さく握りこんでいた。いくら幼いメトリーといえども気付いてしまったのだろう。それだけに不安なのだろう。本物の登場に、ウイルスである彼女の居場所は、もうどこにもないのかもしれないから。

「夜太郎ぉ……っ、キミドリお姉ちゃんって、も、もしかして……。あ、あの……もしかして、夜太郎、私のことといらなくなっちゃうの？　だって、私……ウ……イルスだもんね……」

泣きそうなメトリーに夜太郎は首を横に振った。メトリーの声は所々ひっくり返っており、鼻水で声もくぐもっている。だから夜太郎は大きく、しっかりと首を横に振った。キミドリが見ている中でも、しっかりとメトリーの存在を肯定して見せた。それがリツの存在を否定する事になっても、夜太郎はそうするしかできない。

なぜなら時間を巻き戻すことなんて出来ないのだから。

「メトリーは私の家族です。これからもずっと、最後の瞬間までずっとです」
「そ、そっか。うん……それなら嬉しいねっ。えへへ」
「じゃ、メトリー行きましょうか」

夜太郎は、不安そうに涙ぐんでいたメトリーの頭をくしゃくしゃと撫でると、おんぶしてやる。
そしてキミドリも隠しごとをすっきりさせたようで、メトリーに謝罪すると元のリーダー役に返り始めた。まず唖然としているスバルの肩を叩いて、我に帰らせる。

「さっ！　スバルン、ボケっとしてないでやるわよ！　最後の戦いってヤツをね！」
「キ、キミドリさん。まさかアナタが夜太郎さんの……その……」
「おーい、湿っぽいのは無しよ？　私は決着をつけたかっただけなのっ。だから全部、ぜーんぶっ、昔の話さ。今の私は六角キミドリっていう可愛い女子高生ってだけなんだぜ？」

キミドリはいつもの調子でスバルの驚きをうやむやにしてしまう。ウォーロックもキミドリを一人の戦士と認めたようで、スバルに気を引き締めるように促すだけである。

「本人が気にすんなって言ってんだ、ほっとけよ。それに人はそれぞれ過去を背負ってるもんだ。お前だってそうだろう？」
「……わ、分かったよ。うん、行こう」

ｅｄｅｎ―３１：神の息吹

キミドリを先頭にしてしばらく、スバル達はとうとうディーヴァのアジトがある理事長室まで辿り着いた。最後のセキュリティシャッターを抜けて、渡り廊下を抜けた三〇〇メートルのところにその場所はあった。理事長室だけあって、テンキュウ高校の最上階、最深部にそこに続く扉は構えており、木造りのそれの表面には丹念な装飾が飾って太陽の光を鋭く反射していた。ちらほらと陽炎のように取っ手の部分が揺らいでいる。いや、異常な太陽活動による気温上昇に目が行きがちだが、ゴッドブレスノイズがチラついているのだろう。そのことから、これは次元の揺らぎと言えるかもしれない。

キミドリは取っ手に手を掛けると、スバル達に目配せする。チーム一同は沈黙のまま唾液を飲み込むと、頷いた。キミドリがゆっくりと手首を回すと、金属どうしが叩き会う乾いた音が鍵穴から漏れ出してきて、扉が開いていく。隙間からネオンライトのぼやけた光が漏れてくる。赤色が最初で青色が続いた。

ドアが完全に開き切ると、薄暗い部屋にまずウォーロックが先頭を切って侵入した。どうやら彼は部屋の中から感じる異常なゴッドブレスを感じていたらしい。彼なりに危険の有無を確認しておかなければと考えた行動だ。そしてウォーロックがトラップの類がない事を一通り確認すると、キミドリ達に合図を送って、残りもアジト内に潜入する。

ウォーロックは辺りを見渡しつつ、ハイドに中の様子を尋ねる。ハイドも杖を突きながら、キングとサン・ゴッドがいるであろうアジトの様子を見渡した。

「おい、ハイド。キング達はどこだ？　薄暗くてよく見えん」
「ンフフ、少し待って下さい。……カゲロウ君」
例の笑いを見せるとハイドは、相棒を呼びつけた。気の良いカゲロウ君は頷く。
「了解だよー」
ハイドに言いつけられてカゲロウ君が、ゆらゆらとアジトの奥に飛んでいく。薄暗い中を彷徨うカゲロウ君は本物の幽霊のようであったが、すぐに辺り一帯が明るくなり、カゲロウ君の人魂ごっこはあっさり終わった。どうやら壁際にあった照明スイッチを入れたらしい。
明瞭となった辺りの光景は、カジノのような様相だった。チェス盤のような模様の床に、ルーレットやビリヤード台が整列している。
そしてウォーロックがアジトの一番奥に目をやると舌なめずりをする。
そこには老人が、浮遊する車いすに乗っていた。グランドピアノのような漆黒に磨かれた乗り物の上でトランプをたしなんでいるのである。老人もスバル達に気が付いているようで、両手の間でトランプの束をパラパラと行ったり来たりさせながら様子をうかがっている。しかし、この老人のキングが一人だけで、サン・ゴッドらしき姿は見えない。これはおかしい。ハイドの言っていた情報とは異なる。
それでもウォーロックは爪をぎらつかせると、前傾姿勢を取ってスバル達にも注意を促した。彼も手負いだが、遠慮はないようだ。
「いたぜ、やっこさんがよ。スバル達は下がってろ……まず俺たちが仕掛ける……！　カゲロウ君、準備は良いな！？」

喧嘩っ早いウォーロックではあるが、今回のような場面では頼りになる。電波変換できない状況に、キミドリや夜太郎を温存する意味からも電波体の彼らがまず体を張ろうという方針を素早く決めているのだから。

一方、キングはそんな彼らの様子を見つめながら動じることもなく、トランプの一つを抜き取ると、それをウォーロックに投げつけた。ウォーロックは首を横に倒して避けるが、後ろの白黒チェックの壁にカードが深々と突き刺さった。そのカードはジョーカーで、絵柄は人間の首を狩る死神のようなものである。

スバルがかつて戦ったキングという老人は決して戦闘に秀でていた訳ではなかった。そのために違和感を覚えて、スバルは背筋に冷たいものを上らせた。

キングは長い顎に手を添えると、口角を上げて目尻にしわを数本だけ寄らせて見せる。

「ようこそ。我が組織『ディーヴァ』へ。ずっとモニターしていたが、なかなかやるではないか。……いや、それともアストラル・ジャヤマーも五里も役立たずだったというだけかな？」

キングの言葉に対して、息巻くウォーロックを筆頭にチームは闘争心を燃やしている。

それをあえて馬鹿にするようにキングは一つ咳払いすると、アジトに設置されたゲーム台を適当に見繕い始める。そしてスバル達に手のひらを差しだして、彼らの機嫌を窺うような真似事を始めたのだった。

「さて、適当に腰を掛けてくれたまえ。なんなら、お茶でも出そうか？」

「……舐めやがって！」

その行為を腹立たしく思ったようだ。ウォーロックはキングの賢く決め込んだ態度に易々と刺激されて、勢いよく飛びかかった。その鋭い爪で勘違いした得意面を裂いてやりたいのだろう。カゲロウ君も舌をべろべろさせながら続いた。長い話なんて飾りと言わんばかりの先手必勝だった。呑気な敵のペースに合わせてやる必要はまったくない。

ただそれは戦士の姿勢としては殊勝だが、キング相手には少々浅はかだったと言える。

キングは口をすぼめると明らかに呆れた態度で、溜め息を吐いて強者の自分を演出するのだ。語尾がひっくり返りそうな独特な口調が真意を掴ませなくて、まるで人を舐めた態度であった。

「まだ、私の話は終わっていないぞ？　んん、ウォーロックぅーう……？」

「ざけんな、問答無用だ！！　食らえビーストスイングッ！！！！」

「同じくモンドウ無用だーい！　うおお、ヨスデアメトイナ！！」

二人はそれぞれの得意技を繰り出した。ウォーロックはおなじみの力任せの引っかき攻撃で、カゲロウ君は暗黒の四重刃だ。しかしキングはまだまだ焦らない。

「……んぅふーヴァカめぇ」

短気なウォーロック達にキングはお仕置きと言わんばかりにトランプを投げつける。二人はトランプなど意に介さずにキングを仕留めに掛かったのだが、それがまずかった。たかがトランプ。たかがキング。そんな根拠のない前提条件が致命的な結果を生む。特にウォーロックはキングの事を負け犬と認識していた節があり、そのため彼の危険性を掴みきれなかった。かつてのキングの成れの果て―

―クリムゾン・ドラゴンを倒したという自信が大きすぎたということだ。

そういった先入観にも助けられてキングは焦る必要はないと言えた。そして何より彼は神の息吹の恩恵を受けている。彼のトランプにはサン・ゴッド由来のゴッドブレスノイズがふんだんに仕込まれており、先のように固い壁なら刻んでしまう威力だった。そしてそれは電波体に対しても、十分な威力を発揮して牙を剥く。ウォーロックはビーストスイングで叩き落すつもりだったのだろうが、それでは駄目なのだ。

カード内に仕込まれていたゴッドブレスノイズが爆発するかのように、飛散した。その圧縮された高密度のノイズは電波体の体の自由を奪う。

トランプを薙ぎ払おうとした瞬間、ウォーロックとカゲロウ君は蚊取り線香にでも捕えられたかのようにすんなり落ちたのである。その結果、彼らは悲鳴を大きく上げて痙攣する事になってしまうのだった。

「ぐわぁあ!!」
「んそおぉお!!」
「ハハハ、バカめ! たかが人間? いやいや、私を甘く見ない事だ! 私はすでに人類を超越したのだから。言うなれば神士!」
「グワガア……! コイツ……ッ、に、人間を捨ててやがるの……か」

まるで電撃を浴びせられたのように縮こまっている二人を見下ろしているキング。そして彼は這いつくばる二人とは対照的で、ここに来ても身だしなみに気を遣うのも忘れない。ちょろちょろと生えた髭を指先ですくようにピンと整えた。そして話の続きを始める。

「人の話を聞く事は紳士諸君のマナーだよ? 私は君たちを歓迎し

ようとしていたというのに……」
「……チィイ」

ウォーロックがキングを睨みつける。その瞳の中には、禁忌を犯した者への侮蔑の意味が強く込められていた。
キングはそれを一笑に付した。

「野蛮だな……。君たちは、そこで這いつくばっておけ。それが分相応というもの」

半分が火傷で覆われた顔面が作る威圧感は異常だった。キングはウォーロックらに見切りをつけるとスバル達の方に振り返る。

「さて、君たちの処遇についても考えなければらないな。手荒い歓迎は趣味じゃないが……どうやらそうも言ってられなさそうだ」

危険な匂いを仄めかせるキング。危険どころではないものを実感しただけに、ウォーロックはスバル達にかすれた声を振り絞った。

「気をつけろ！　コイツ、何かやってやがる！！」

彼の訴え通り、キングはサン・ゴッドに何らかの力を授かっているようだ。だが、それが分かったところでスバル達がやれることに変わりはない。どっちにしてもキングを倒さなければならない。
ただそれが一筋縄ではいかなくなったというだけのことだ。
そんな状況下で一人冷静なスバルは、キミドリに提案してみた。

「どうしましょう？　見たところサン・ゴッドもいないようだし……いったん退きますか？」
「いや、キングが一枚噛んでいるのは間違いないんだし、ここはき

つく絞る以外にないよ」

キミドリはそう言いながらスコープの方に目線を送って、電波変換をするべきか否かを考えているようだ。スコープは口元をキュッと閉じて、女の子らしい健気な勇気を振り絞っている。電波変換…本当ならサン・ゴッドの時まで温存しておきたいが、ウォーロック相手のキングの様子を見る限り、そうも言っていられなさそうだ。戦力は限られていている。そういう状況で、彼女が判断を誤れば後はなくて、意味づいてくる未来は暗い。

キミドリは自分がリーダーであるという事実に、改めて重い責任を実感していただろう。

それでも時間は惜しい。それは変わりなくて迷ってもいられないのだが、キミドリは一向に判断出来ずにいる。その様子を見かねたハイドは何を思ったのか、キングの方に一歩乗り出した。彼はダメージの負った体を引きずるようにして、杖で何とか体を支えている状態だ。今、ハイドは危険な賭けごとに名乗りを上げた。この絶望的状況を何とか打破したい。その為には情報が足りなかった。キングが油断している今のうちに何とかしなければならない。

ハイドはキミドリに目配せすると、リーダーに僅かな時間の猶予を作り出してやる。それがせめてもの謝罪と言える。

なぜなら、もう、終わったのだから。

「ンフフ、ミスターキング。まさかアナタまでも人間を捨てているなんて……」

「おぉ、お前は裏切り者のハイドではないか。ずっとモニターしていたが、中々図々しくヒーローごっこをしているようだね」

「……アナタまでそうおっしゃいますか」

「クズめ……。負け戦に加担しおって」

「確かに私は弱いでしょう。ですが、このチームは強いですよ……」

まるで申し合わせたかのようなやり取り。ハイドは五里にも言われたような事を軽く流しながら、キングを目線から外してアジトの奥を見つめた。やはりサン・ゴッドはいないようだ。彼はサン・ゴッドの行動を認識しており、確かにこのアジトから太陽を操作しているはずだった。しかし、そのハイドの言葉は嘘となっている。

ここにいないのにどこから太陽を操作しているのだろうか。事態の問題がややこしくなってきた。ハイドの言葉と食い違いが出てきており、もはやごまかせる度合いを越えようとしている。

「ハイド、何をきょろきょろしているんだ？」

「彼……サン・ゴッドが見当たりませんが、どうしたんですか？」

「裏切り者に教える必要はないだろぉう……？」

申し合わせたかのようなやり取り。ハイドはニヤリとした表情を浮かべる。キングが素直に答える訳がないはずだし、事態はよりまずい方向に傾いていく。仮にだ。仮にサン・ゴッドがこの場にいないのだとすれば、キングを倒すどころか、この場に居合わせる意味はまるでなくなってしまう。

キングはハイドに笑顔を浮かべている。ハイドもニヤケ面だ。口先から、白々しく言葉が出てくる。

スバル達は二人のやり取りを見ているだけしかできない。

「やはり……教えてはくれないようですね？　サン・ゴッドはこの場にはいない……それならなぜアナタはここに？」

するとキングが時間稼ぎをしているつもりのハイドの意図を見通したようで、口を覆ってくつくつと笑いだした。可笑しくてたまらないのだ。もはや、そんな事をする必要はないからだ。

「ハハハ。なるほど、賢明だなハイド。大方、残った戦力で何とか

する段取りでも考えていたのだろう？　だが、無駄だ。お前たちがここで出来る事など何もない……！！」

「そうですね……」

キングの突き放したかのような語気に、ハイドは計画の完了を予期したはず。

そしてキングは、地球の為に地獄へと迷い込んだ哀れな子羊達に引導を渡すことにした。

ここはディーヴァのアジトであると同時に、あのプルト・キグナスの息が掛かっている危険地帯だ。

キングがここに迫りくるスバル達をモニターして楽しんでいられたのも、ここに地の利があったからだ。そしてハイドがいたからだ。

彼はグランドピアノのような浮遊イスを走らせると、スイッチのある壁際まで行く。もちろんその際にキミドリ達をゴッドブレスのトランプで牽制するのも忘れない。そのスイッチは、ディメンションドアの開閉を担当していた。

キングは愚かなスバル達を見下したかのような目線を投げつけて、それでいて彼らの反抗の瞳は受け取ろうともしない態度で告げる。

「フフフ、これでロックマン達は袋のネズミとなった！　ディメンションドアのリンクを切断ンンン！！」

顔面を引っ張っり上げたかのような激烈な表情。切れ込みのようだったキングの目は大きく見開かれており、狂気を感じさせた。アメロッパ人にしては珍しい黄金の瞳がギョロギョロとうごめいたかと思うと、その二つがピタリと止まり、スバル一人を捉えた。

その時スバルは早急にこのアジトから退避しておくべきだったと痛感しただろう。キミドリに確認を取る必要などなかったのだ。もちろんキミドリも迷う必要などどこにもなかった。

アジトと学校の廊下は完全に分離されてしまい、現在アジトは地

球ではないどこかに存在する座標に場所に移し替えていた。しかし依然ゴッドブレスの影響下にあるので、太陽系のどこかであるとは推測できる。

今、このアジトは宇宙のどこかにある密室の孤島となった。

キングはスバル達を捕えて、スバルを瞳でも捉えるとその二眼に並々ならぬ、憎悪と復讐の炎を宿していく。

「さあ、始まりだ！　星河スバル！！　お前とその仲間に地獄を見せてあげようじゃァないかァア！！」

まるで自分しか見えていないし、自分の世界に浸っているキング。紳士の姿を借りた下賤な凄み方は、まさに悪党の名乗り上げと言えた。

スバルはハンターを構えて見せるが、バトルカードも何も使えない。せめてもの威嚇の姿勢という訳だが、キングはそれを軽くあざけるのだった。

「抵抗の意思か？　無駄だよ！　無駄ァ！！　ンーハハハ、ロックマンンンーンッ！　情けない、情けないなァ、変身できないお前など無力な子供だ！」

「キ、キング……？！」

「ハハハ！　見せてやる！　見せてやるぞ！！　神の翼を！　神の牙を！　神の器を！！」

キングは高笑いを上げていく。段々とその音量は大きくなっていき、そしてある瞬間から人間の放てる声量を大きく上回った。それと同時か、少し遅れた時点でスコープがキングの生命の息吹、つまり体周波数が変異していくことに気付いた。彼の体の中心に、辺りにはびこっていたゴッドブレスノイズが集まっていく。それが熱を持っていくのだ。周りの気温を考慮しても、それはとっくに人間が

耐えられる熱量を越えてしまっていた。それでもキングの笑い声は大きくなっていく。そしてその音色も化け物の雄叫びに変わった。

『見せてやろう！　麗しい本当の私の姿を！』」

キングの体が輝きだして、人だったはずのシルエットがグロテスクに崩れていく。それが人間のものを捨てると膨張して、骨のような、鎧のようなものが鋭く突き出していく。翼のようなものも見え始めていく。人間を越えたというキングの弁だったが、それはただの脅しではなかった。

目の前の悪夢の実現に、スバルは腰を抜かしてしまった。何がキングをここまで突き動かすのだろう……理解ができない。口は開け放ったままで怯えた声帯を情けなく震わせることしかできない。キミドリや夜太郎も化け物を目の前に言葉を失った。

そう、キミドリは迷う必要などなかったのだ。サン・ゴッドにも比肩する危険な存在が目の前にいたのだから。

どうやらキングはゴッドブレスノイズの力をサン・ゴッドから受け継いだようだ。人間を越えたという意味はそういう事だ。彼はかつてクリムゾンノイズを吸収して、紅龍へと姿を変えてロックマンと最後の決戦を演じた。そして、そして今回も同じである。

ただその姿は龍でも、それが有する恐ろしさはクリムゾンノイズの龍――クリムゾン・ドラゴンの比ではない。今のキングは黄金に輝く太陽のようなドラゴン。そしてその力の源であるゴッドブレスノイズは、バイオレット、クリムゾン、ジェイド、アンバー、ラピス、アッシュ、セピア、ルスト、ブラック、ホワイト、クリアのどのノイズよりも密度が濃く、純粋なエネルギーの塊だった。それも負のベクトルに特化した、まさに悪の象徴。

それによって生み出された黄金の三つ首龍は、戦闘周波数だけでいうのなら、全てを超越するに至る。

キングは黄金の輝きをまざまざと見せつけながら、スバル達を見

下ろした。同じく黄金の瞳の六つが、宝石のようであり、それでいて冷酷に威圧しスバル達の心の内を透かし映す。

キングは得意げに、高調した心情を覗かせながら語った。もう、地球はおろか、この宇宙に存在する何者でもコレは倒せないかもしれない。それほどに恐ろしい周波数とゴッドブレスを辺りに振りまいている。まさに神の息吹と呼ぶにふさわしい。サン・ゴッドはとんでもない置き土産を残していったものだ。

『見たまえ、この神々しい姿を！　今の私の名前はゴッドブレス・ドラゴンという！！　この神の息吹の前に、お前らなどゴミ同然なんだよォ？』

その黄金龍の姿を見るとウォーロックとキミドリ以外の全員が戦意を喪失してしまった。スコープがその戦闘周波数を口に出してしまったのだ。

「そ、そんなウソでしょ。戦闘周波数……５１０００ギガヘルツ……」

「ぜ、全部、罠だったのか……！」

アジトに来たこと、ゴッドブレス・ドラゴンを相手にしてしまったことをスバル達は後悔する以外になかった。

『サン・ゴッド様の居場所を知りたいのなら、このゴッドブレス・ドラゴンに直接ッ！　お前たちが訴えるしかないぞっ！！　果たして、そんなことができるのかーなぁー……？！』

ロックマンは電波変換ができず、僅かに残ったまともな戦力と言えば、スコープ・スナイパーとグリット・メトリーのみ。それも数分のタイムリミットがある。

対するゴッドブレス・ドラゴンはその力の源だけに限れば、フェニックス・リボンはおろかインフィニットすら上回る。
黄金の息吹とともに絶望が始まりを告げた。

ゴッドブレス・ドラゴンはスバル達に絶望を与えてくれる。そしてその絶望はさらに加速してスバル達に襲いかかった。その手始めとしてゴッドブレス・ドラゴンは後方に飛び上がると、アジトの壁という壁に向かって、超高濃度のノイズのブレスを吐きだして回り出したのだった。

『お前達にプレゼントだ。ブレス・オブ・ゴッドォオ！！』

アジトの壁などボロボロに解けて吹きとばされてしまい、次第にアジトの本当の姿が露わとなっていく。見たところ、どこかの研究施設のようだ。そしてスバル達はペタンと膝を突いて絶望に打ちひしがれてしまう。その研究施設、広さでいえばかなりのもので学校の校庭か、それ以上はある。

そんな場所にうごめくようにして、数百にも及ぶアストラル・ジャマーがいたのである。彼らは重々しい銃を構えて、長い銃身をスバル達に向けて狙いを定めている。どうりでさきほどから見当たらない訳だ。

この場所に追い込んで、キングは全てを終わらせる準備を整えていたのだ。その数はおそらくテンキュウ高校生のほぼ全員と言える。

そして悲劇は加速して、唯一闘争心を残していたウォーロックそして他の電波体に深刻な事態を見舞っていく。彼ら電波体は、致命的な病気に罹ったかのように体が徐々に分解されていき、身動き一つも取れなくなっている。この一帯にはさきほどまでとは比べ物に

もならないノイズの密度がはびこっている。スバルもノイズをビジライザー無しで視認することが可能となっているくらいだ。
ゴッドブレス・ドラゴンは高らかに勝利の宣言をして、絶望に確かな現実味を帯びさせた。

『見よ！　この圧倒的な戦力！！　この完璧な計画！　私は地球を滅ぼして、新たな世界の神となる！』

ゴッドブレス・ドラゴンの妄想はもはや冗談に聞こえなくなっており、スバルはようやく死の実感を感じ取った。このアジトにたどり着いたのはキングも望むところだったようだ。もしかしたらそうなるように仕組んでいたのかもしれない。
スバルはもはや弱音しか口から出てこない。

「こ、こんなの……勝てっこないよ」
「チッ……チクショウ、はめられたッ。どうなってやがる……。なんてノイズだ……ここは、一体……」

ウォーロックは凄まじいノイズの嵐に当てられて、自慢の爪がボロボロになっていく様子を見せられながら、抵抗も出来ずに這いつくばっている。カゲロウ君やスコープもそうだ。唯一メトリーだけが、かろうじで夜太郎にしがみついて体を支えていた。
ゴッドブレス・ドラゴンは哀れなチームに希望などどこにも残っていないことを教えてやった。この場所は太陽系の中でも最も太陽に近い惑星にあるのだから。

『動けまいウォーロック？　なぜなら、この星は太陽系第一惑星の水星。そしてここは、地球を滅ぼした後の私の拠点マーキュリーベースだ。この場所のゴッドブレスノイズの密度は地球の数億倍だよ！！』

どうやらキングは地球を滅ぼした後のことも考えていたようだ。全てが終わった時、この研究施設で生き延びようとしていたのだろう。おそらくディメンションドアを用いて、物資を水星に送って研究所を建設したのだと考えられる。もはや彼の計画は完璧というほどに、スバル達の勝利を奪い去っていた。そして勝者からの弱者への洗礼が始まる。

デリートを待つウォーロック達、そして無力なスバル達。それを囲う数百のアストラル・ジャマーとインフィニットさえも凌ぐ力のゴッドブレス・ドラゴン。これではどうにもならないだろう。

『ハハハ、もはやこうなってしまっては電波体は生存不可能！　もちろん人間ではここの戦力をどうすることなどできはしない！！詰みだよ、ロックマン！　星河スバルゥウ！！』

「……こんなの、こんなのって」

もう、どうしようもない。返す言葉もない。スバルが地面に目を落とした時だった。キミドリが立ち上がった。ハンターを構えた。スコープを抱きかかえる。確かに、アストラル・ジャマー程度ならスコープ・スナイパーで倒すことはできるだろう。ただ、そんな力の差を覆すほどに数が違いすぎる上に、このゴッドブレス・ドラゴンを倒せるとはとうてい思えない。

死を覚悟しても、どうにかなる訳がない。命の一つを懸けても、そんなものではどうにもならない。

だが、キミドリは諦めてはいなかった。自分が諦めたらこのチームが終わると感じていたからだ。

「スコープ……私と一緒に死んでくれっ！　なんとか、逃げ道だけは作るわよ！」

「う、……うん！　キミドリ！」

『ハハハ、何をするつもりかな？　リツーゥ？　フッフッフッ、聞きわけない子は悪い子だーなー』

ゴッドブレス・ドラゴンはキミドリの覚悟を小馬鹿にしたように笑って見つめている。彼女の電波変換をまるで脅威に思っていないようで、邪魔をする気配もない。アストラル・ジャマーもゴッドブレス・ドラゴンの合図が出るまで、一人の少女を監視するだけだった。

キミドリは数百の弾丸がいつ襲いかかるか分からない状況のまま電波変換した。

「電波変換！　六角キミドリ、オン・エア！！」

電波変換が完了すると、スコープ・スナイパーはゴッドブレス・ドラゴンに向かって駆け出した。ゴッドブレス・ドラゴンは黄金の爪を軽く振って見せてアストラル・ジャマー達に合図を送った。

『なるほど、なぜか諦めていないようだな。面白いなリツは。この軍勢に勝てるとでも……？』

「勝ってやる！　こんなところで死ぬわけにはいかないんだ！！」

スコープ・スナイパーは、ゴッドブレス・ドラゴンに自分の強い気持ちと不屈の闘志を見せつけるが、現実は非情で彼女は襲いかかるアストラル・ジャマーの相手に追われてしまう。そんな茶番とも呼べる悲劇が繰り広げられて、黄金龍は何をするという訳でもなく、ただ漫然と眺めるだけだった。まるで、虫を戦わせているのを傍観するかのような冷たい目だ。

時間がいたずらに過ぎていく。キミドリの電波変換にはタイムリミットがある。彼女は戦いながら、必死にスバルに呼び掛けていたが、スバルは茫然自失といった様子で動きもしなかった。彼の為に

身を挺して道を切り開こうとしているのに、これでは誰も救われないし救えない。

「スバル！　早く逃げろ！！　私はこれ以上もたない。立って逃げるんだ！！」

彼女は初めて、苛立ちを露わにしてスバルに怒声を浴びせた。夜太郎がスバルの手を引くがスバルは動こうともしない。時間が刻一刻と過ぎていく。

そんな中でメトリーは我慢ならず泣いていた。それはもう涙が止めどない。まじかに迫った死の予感と大切な人が消えていく気配に、心が摘まれていた。アストラル・ジャマーと戦うスコープ・スナイパー、それを傍観するゴッドブレス・ドラゴン、そして焦る夜太郎、絶望するスバルを見せつけられて、幼い少女が正気でいられるわけがない。

スコープ・スナイパーが必死に時間を稼いでくれているが、もう駄目だ。彼女は押し寄せる敵を捌き切れなくなって、徐々に電波人間の集まりが成す黒い渦のようなものに飲みこまれていく。そしてアストラル・ジャマーの一体が、銃の腹でスコープ・スナイパーの顔面を強打した。彼女はバランスを崩すと手に持ったライフルを落としてしまう。

ゴッドブレス・ドラゴンがその瞬間に満面の笑みを浮かべた。その彼女の隙を一気に突いてアストラル・ジャマーが怒涛の勢いで襲い始める。

その時、ゴッドブレス・ドラゴンが悪い考えを思いついたようで、彼女を袋叩きにし始めた軍勢に命令した。

『頭は狙うな……。間違っても殺すんじゃないぞ……こんな楽しい状況を終わらせるのはもったいない。もっとぉ、もっとぉ……！』

アストラル・ジャマーはいったん行動を止めると、銃をナイフに持ち替えて、行動を再開した。一人に何人も群がっていく。少女の悲鳴が研究所に響きわたった。

その声に怯えたようで、メトリーはスバルの背中に顔を埋めて何度も何度も負け犬となった彼の背中を叩いた。

「スバルぅ……！　このままじゃキミドリお姉ちゃんが殺されちゃうよ。立ってよう！　立ち上がっていつもみたいに悪い人をやっつけてよ……！　スバルッ！！」

するとスバルは吐き捨てるように言った。夜太郎も思わず面食らった。もはやスバルは成す術がないと分かっていた。いや、スバル以外の全員も分かっている。

「うるさいぞ、メトリー！！」

スバルはメトリーを突きとばすと怯えたようにゴッドブレス・ドラゴンの姿を見上げた。そして誰に言うでもなく、震えた声で諦めの声を絞り出した。

「僕にどうしろって言うんだよ?!　逃げるって言っても、ここは水星だろう?　どこに逃げろっていうんだよ?!　戦え?!　無理だよ、あんな化け物に勝てる訳ないだろう?!」

それは何度も地球を救ってきたロックマンの敗北宣言だった。

スバルが我を失っている間にも、時間は進む。

そしてアストラル・ジャマーの人ごみの中から、ボロボロになったキミドリが引きずり出された。電波変換が解けてしまっており、制服も引き裂かれて髪もぼさぼさだ。綺麗だった顔も腫れあがって、もう誰だか分からない。そんな変わり果てた彼女をアストラル・ジャマーの一体が引きずってゴッドブレス・ドラゴンの方に持っていく。夜太郎は思わず駆け出しそうになるがハイドに制止された。

異常事態だが、なぜかスバルは黙って見ているだけしかできなかった。キミドリを見つめるその瞳はすでに現実から目を逸らしている。

スバルが我を忘れるのには理由がある。彼はトラウマ負っていた。トラッシュの死の瞬間、何もできず圧倒的な力な差を見せつけられて、死を実感させられたことだった。そう、まるで今のようにだ。あの時、ウォーロックが帰ってきたことが希望となったが、今回はそうもいかない。その希望はスバルの目の前で力なく倒れているのだから。

スバルにもう戦意は残っていなかった。夜太郎も、そうかもしれない。

しかし、メトリーは違った。涙で顔がグチャグチャになってしまっているが、嗚咽を堪えるとスバルを見捨てて立ち上がった。

そしてずっと感じてきた思いを、涙ながらに吐露した。

「お、お姉ちゃんは死んじゃいけないんだっ！　夜太郎にはお姉ち

ゃんが必要なんだもん！！」

スバル同様、メトリーも冷静さを欠いていた。この任務で彼女は様々な思いを感じることとなった。キミドリの正体を知ってしまい、不安を煽られてとても怖かった。そしてそのキミドリが殺されてしまうと、今、実感している。

メトリーはずっと感じていた。夜太郎が愛してくれていたのは自分なのか、それとも違うのか。夜太郎は笑顔で見つめてくれるが、その瞳に自分は映っているのか。もしかしたら映っているのは、自分ではなくてその先にいる本物の方かもしれない。メトリーはずっとウイルスである事が悲しかった。

今までは幸せだったのは間違いないが、この幸せはどこか病んでいる。あかねもスバルも夜太郎もメトリーを受け入れてくれていたが、それはきっと正しいことではない。

そんな複雑な思いがメトリーの中で大きくなっていった。結局、メトリーはリツの代わりでしかないのだ。そのリツの身に危険が迫っている。だからメトリーは冷静ではいられなかったが、それでもスバルのように負け犬には成り下がらなかった。

夜太郎が何を求めて自分を生み出したのか知っていたから、メトリーは負け犬になる訳にはいかない。

「うわぁああ！！」

メトリーはつるはしを取り出すと、キミドリを助けるために走り出した。ゴッドブレス・ドラゴンは物分かりの悪い小さな少女に呆れただろう。当然アストラル・ジャマー達がメトリーの行く道を塞ぐ。

夜太郎はメトリーの身に危険を感じて追いかけるが、悲しいことにメトリーはやはり人間ではないので彼の足では追いつくことができない。

夜太郎は叫んだ。だがメトリーの耳には届かない。

「メトリー！　やめろ！！」

「お姉ちゃんをいじめるなァ！」

メトリーはアストラル・ジャマー目がけて、つるはしを振り下ろし道を切り開く。そのままの勢いを保ったまま、ゴッドブレス・ドラゴンの元に子供とは思えないスピードで走っていく。

だがメトリーの快進撃は長くは続かなかった。呆れた様子のゴッドブレス・ドラゴンは黄金の翼を羽ばたかせると中に飛び上がったのだ。研究室の天井は高く、ゴッドブレス・ドラゴンの巨躯も悠々としたものである。

黄金龍はゴッドブレスノイズを飛ばしてアストラル・ジャマーに命令を送り、メトリーを取り押さえさせた。

『まったく、この状況が分かっていないのか？』

ゴッドブレス・ドラゴンの三つの口腔内に辺りのノイズが集まっていく。ノイズが集まっていくおかげで、ウォーロックの体は少しだけ軽くなるが、今度はメトリーの身に危険が迫る。

『少々、おいたが過ぎたようだ。そろそろ大人しくする時間だよ。……ブレス・オブ・ゴッド！！』

ゴッドブレス・ドラゴンの口から放たれたおびただしいノイズの波が、付近にいたアストラル・ジャマーを巻きこみながらメトリーに直撃した。メトリーはウイルスでノイズにいくらかの耐性を持つが、それ以上に高密度のゴッドブレスノイズを受けてしまってはひとたまりはなかった。キミドリの次はメトリーが犠牲になってしまった。次は誰の番だろうか。

メトリー咳き込みながら、口からノイズの煙を吐くと力なく倒れてしまった。

『フッ、殺さないように手加減するのも大変だな……』

ゴッドブレス・ドラゴンは嘆息すると、生き残ったアストラル・ジャマーにメトリーを連れてくるように命令する。アストラル・ジャマーは正気ではないので、仲間を巻き添えにした黄金龍の命令でさえも大人しく守る。メトリーもキミドリと同じように、アストラル・ジャマーに引きずられていく。

そして黄金龍は両手にキミドリとメトリーを取ると、まじまじ見つめて極上の悪の笑みを浮かべた。黄金の爪が二人の肌に少しめりこんで、血筋が伝う。これ以上の悪党はそうはいないだろう。

そんな濁った瞳で黄金龍はここぞとばかりにスバルたちに問いかけた。彼はずっとＷＡＸＡのサーバーにハッキングしてきて、星河スバルの動向や弱点を探っていた。そして、彼が何を恐れるのかということを十分に研究していた。全てはこの瞬間の為だった。

『星河スバル君……。今の気分はどうかね？　この絶望的な状況……完膚なきまでに打ちのめされた気分は？』

ゴッドブレス・ドラゴンは数百のアストラル・ジャマーを従えて、優越感に浸っている。

どこで間違ってこんな事態になってしまったのだろうか。途中までは順調だったはず。

スバルはうんともすんとも言わない。ゴッドブレス・ドラゴンはそれを見つめると、なかなかリアルな反応に満足したのだった。

『さて、この状況……。似ているとは思わないかね？　そう、確かあの展望台での……』

ゴッドブレス・ドラゴンはわざとらしく言葉をスバルに浴びせていく。その瞳にはスバル、メトリー、キミドリを映し出している。高揚したのか、これから味あわせてやる絶望の味を予感して、舌なめずりを繰り出す始末だ。

ゴッドブレス・ドラゴンは囁くようにスバルの耳に吹き込んだ。

『人間の命は、ウィザードの比じゃないぞォ……？』

いやに響く、その恐ろしい言葉に端を発し、ゴッドブレス・ドラゴンは今まで手にした情報と、今、手にした人質を武器に最悪のゲームをスバル達に仕掛けた。どうやら圧倒的な力を手にした者は、他人の命で遊んでみたくなるようだ。プルト・キグナスがそうであったように。

『さて、始めようか。文字通り命がけのゲームを……！　私はキグナスのように甘くはないぞ』

ゴッドブレス・ドラゴンは様々なデータから、この状況下で味わせることができる最良の絶望を選び出した。まず、スバルと夜太郎にゲームの参加を強制させる。抵抗の意思さえ見せることができないように、アストラル・ジャマーが大挙してスバル達を銃で脅して、ゴッドブレス・ドラゴンの元に連行していく。

二人は無力で、どうしようもない。研究室の冷たい床を鳴らしながら、血の通わない冷酷な世界で絶望を噛みしめていく。ここは水星で、もう逃げ場などない。ゴッドブレス・ドラゴンの言われるがままだった。

まるで死人のような表情の二人を見下ろすと、ゴッドブレス・ドラゴンは堪え切れない狂喜を露わにした。かつて敗北を喫したロックマンに、圧倒的な力の差で思うがままにしているのだ。彼のどす

黒い欲望が満たされつつあるのだろう。
だが、それだけにスバル達に要求されるものは残酷としか言えなかった。楽に引導を渡してはくれはしない。いっそのこと殺してくれと、スバルが願い出すまで精神を蹂躙するのだろう。
残酷な、ゲームとは名ばかりの公開処刑が始まった。

『ルールは簡単。私の手に握られた二人の少女の命のどちらか一つだけを選べばいい……。
そして解答権は一人に一回。
君たち二人の意見が合致すれば、その少女一人と君たちは助けてやろう。
ああ、間違っても黙秘は無しだよ？　その場合は全員が助からない。そうだな、タイムリミットは隅の方で寝転がっているウォーロックがデリートされるまでの間にしておこうか。
さあ、考えたまえ。その間、私達は人間というものを楽しく観察させてもらうよ、フッフッフ』

ゴッドブレス・ドラゴンが一方的に押しつけてくるルールは一見すれば良心的なようだが、本質はまるで違った。これでは誰も助からない。スバルと夜太郎はキミドリとメトリーのうちから、一人を選ばなければならない。かと言って選ばずに黙っていれば、ゴッドブレスノイズによってウォーロックがデリートされてしまう。そして全員の命は奪われることとなる。迷っている間もウォーロックがノイズに分解されていく。
最善の答えはキミドリかメトリーを見捨てることだが、それが出来れば人間なんてやっていないだろう。
スバルはもう、考えるのも疲れてしまっていた。夜太郎もそうだったが、スバルのように思考を停止することは出来ない。何とかキミドリとメトリーの両方が助かる手段を見つけ出さなければならない。

「なぜ、このような事を……？！　アナタは私達と同じ人間じゃありませんか。こんなの人間がすることじゃない」
『君は確か……裏霞夜太郎君だったかな。ふむ、愚問だね。私は人間を越えた。ゆえに人間がどうなろうが知ったことではない』
「……ば、化け物め」
『好きに言えばいいさ。さあ、早く答えを出さないと、時間切れになるぞ？』
「クッ……」

夜太郎はゴッドブレス・ドラゴンの手に握られたメトリーとキミドリを見上げる。どうやら彼女たちはかろうじで意識を取り止めているようだった。どちらも普通の人間ではないので、意識を失えなかったのだろう。この状況は最悪だ。彼女らが見聞きしている中で、どちらかを捨てなければならない。残酷すぎて、特に夜太郎は選べるわけがなかった。メトリーは本当の娘のように接してきて、キミドリの正体は娘のリツである。
夜太郎は打ちひしがれて握った拳に血をにじませた。ゴッドブレス・ドラゴンは絶望の中であがき続ける人間を観察してさぞ満足そうだった。

『君のことも良く知っている。君に、この二人から一人だけを選べるかな？　……ハッハッハ！！』

夜太郎は動けずにスバルと同じように地面に目を落とした。キミドリはそれに見かねたようだった。苦痛にゆがんだ表情を、無理やりに笑顔にして夜太郎を楽にしてやろうとする。

「夜太郎……さん。私の事は良いから……メトリーちゃんを助けてあげて……！」

『おっと、リツ……！　お喋りは駄目だぞ？』
「キャアッ！」

キミドリが悲鳴を上げると、ゴッドブレス・ドラゴンの爪の間から血筋が垂れてきた。黄金龍は見た目こそ神々しいのにどこまでも卑劣だった。
するともう疲れ切ったスバルが、夜太郎に弱々しく訴えてきた。

「め、メトリーを助けましょう……」
「な……っ」
「もう、イヤだ！　こんなの耐えられない……！」
「選べるわけないでしょう?!　スバル君、落ち着いてください。まだ諦めちゃダメだ！」
「諦めるな……？　このままじゃ、みんな死んじゃうんだぞ！！　ハハ……夜太郎さんは知らないんだもんね、トラッシュがどんな風に殺されたか！！　見てないんだもんね！　命って、すごく簡単になくなるんだよ?!」

スバルは知っていた。両方を手に入れることは決して出来ないのだと。トラッシュが死んで、ウォーロックが帰ってきた。その現実だけがスバルの心を支配していた。
まさにキングの思惑通りの展開だった。スバルが何を考えて、何を思って、今まで戦ってきたかなど手に取るように分かるのだろう。
夜太郎は言葉を失った。ここまで非情な少年に、大人なのに正しい答えを教えることもできない。
スバルも自分が何を言っているのか分かっているのだろう。疲れ切って、もう逃げだしたくても、夜太郎の顔を真っすぐに見つめていた。その表情は恐怖に震えている。ここから先、一生キミドリの命を背負っていかなければならないのだ。スバルはそれを分かってキミドリを切り捨てた。

その勇気ある少年に、キミドリはゴッドブレス・ドラゴンの制裁を恐れずに感謝した。

「ありがとう。それが正解だよ……スバル……」

そのやり取りを見届けたゴッドブレス・ドラゴンはニヤリとしてスバルに責め立てた。あの英雄ロックマンを見事、人殺しにまで陥れることが出来た。そんな事実に満足したのか、その口はよく回る。ただ葬るだけでは気が済まないようで、スバルを追い詰める。追い詰めて、追い詰めて、スバルを内側から殺していく。

『ハハハ、星河スバル！　今、言ったな？　お前は偽善者だ！　私に正義を振りかざした癖に、お前は人間一人を救う事も出来ない！　お前はただの人殺しだ！！』

「……く……」

『偽善者ァアア！！』

「……うっ……くぅうう」

『ハッハハハハハ！　惨めだなロックマン！　涙を流そうとも、お前のその判断は一人の人間を殺すことに変わりはない！』

スバルは浴びせられる心ない言葉の数々に、ひたすら心を擦り切らした。少年が背負うには余りにも惨い悲劇がそこにはあった。

ウォーロックはゴッドブレス・ドラゴンの息の根を今すぐに止めてやりたいと思っただろう。だが、狂おしいほどに沸いた怒りをぶつけることさえもできず、ただ這いつくばるしかないのだ。

「ハァ……、ハァ……！　あのクズ野郎が……！！」

ウォーロックの残った腕の爪は、もうほとんど原形を残していない。

言葉は強くてもそれが現実だった。

ｅｄｅｎ―３４：地獄へのシナリオ

今、スバルの判断にゴッドブレス・ドラゴンが最後の確認を取ろうとしていた。しかし夜太郎は何としてでもそれを阻止しなければいけない。彼にはまだ切り札があった。

そう、次元爆弾だ。

夜太郎は気取られないようにポケットの次元爆弾に手を伸ばす。あの龍を倒すことを、彼はこの状況下においても諦めていなかった。二人の娘の命が懸かっている。どちらも捨てられないのだ。

確かにスバルの言う通り、トラッシュがどのように殺されたかは見ていない。だがスバルの普段の姿から、その悲しみと受けた傷は十分に承知していた。展望台に供えられた花束を見れば気付かない訳はない。そして夜太郎自身も、一度全てを失っていたのだ。家族を失っていた。娘を守ることも出来なかったという傷を負った。

だから夜太郎は諦めない。自分の命を賭して、家族を守りとおすと誓ったのだから。彼がここまで強くなれたのは、スバルと出会えたからだ。娘と出会えたからだ。

だからこそスバルを人殺しにする訳にはいかなかった。娘を殺す訳にはいかなかった

だから夜太郎は静かに機会をうかがう。絶対にチャンスが来るはずだと望みをまだ捨てていない。

ゴッドブレス・ドラゴンは最後の確認を取った。

『では、リツを殺してこの幼子を選ぶ。それで良いかな?』

ゴッドブレス・ドラゴンはまるで他人事のように淡々と告げている。夜太郎は怒りを必死に抑えて、必ず来る勝機をうかがう。ゴッドブレス・ドラゴンとの距離は近い。

そしてキングのことだ。約束を守る訳がなく、キミドリとメトリーを含めた全員を葬りにかかるだろう。スバルはまだ子供だから気付けなかったが、大人とは約束を守らないものなのだ。

そうなれば全員を葬りにかかろうとした時、必ずキングはアストラル・ジャマーに命令をする。あのノイズを飛ばす動作に一瞬の隙が出来るのだ。

なぜならキングは直接手を下さない。そう夜太郎は踏んでいた。現在もウォーロックや夜太郎を囲むように、アストラル・ジャマーが銃を構えているのが一因だ。それにキングは卑劣なので、きっと蜂の巣にされるスバル達を観察し悦に浸るだろうから。

その夜太郎の予想通り、ゴッドブレス・ドラゴンは急に口調を変えた。そう、約束など守らないのだ。純粋なスバルは面食らったように、固まって動けなかった。どこまでも卑劣で、最低の屑だ。

『さーて、ゲームは終わったので全員始末しようか！　約束？　守らない、守らないさ。ハハハ、なかなか楽しませて貰ったよ。ロックマンが偽善者という事も分かって十分だった！』

スバルは絶望を隠せないようだが、夜太郎はまだ予想の範囲内だったので、切り札を握りしめて集中を途切れさせない。今の夜太郎の耳には、スバルとゴッドブレス・ドラゴンのやり取りなど、どこか遠いところのように聞こえているだろう。

「え……キング？　助けるって言ったじゃないか」

『オイオイ、星河スバル君？　地球滅ぼそうとしている者に何を言っているのかな？　まったく子供は純粋で面白いな。はっきり言おう、お前達は死ぬ。いや、死ね！』

「あ……あぁ……」

全ての夢と希望を打ち砕かれ、スバルは全身の力が抜けて崩れ落ちた。少し考えれば始めから分かり切っていたことだ。強者と弱者の間では約束事など何一つ意味を成さないのが世の常だから。

ただ夜太郎は、裏世界で過ごした時間が長かっただけにその腐った考えを予期することができていた。ゴッドブレス・ドラゴンは夜太郎の思惑通りに、卑劣な振る舞いを続けた。

『さて、君たちが人間から、ただの肉の塊になるのをゆっくりと観察させてもらおうかな……？』

その言葉を当たり前のように言い放ったかと思えば、ゴッドブレス・ドラゴンは両手からキミドリとメトリーを解放した。そしてアストラル・ジャマーに連行させて、銃での包囲網に配置する。キミドリはすっかり観念した様子だった。メトリーも泣きじゃくっている。希望も何もあったものではなかった。

恐ろしい事態だが、ここまでは夜太郎の予想通り。やはりどこまでもキングは卑劣だ。

そしてスバル達も同じように銃の包囲網に連れて行かれそうになる。その時、ようやくチャンスがやってきた。ゴッドブレス・ドラゴンがアストラル・ジャマー達を操るために、注意をスバル達からアストラル・ジャマーの方に移したのだ。あの数百という数だ。操るのも至難の技に違いない。今ならこの僅かな距離を詰め切ることが可能となるだろう。

夜太郎はその瞬間、全身の毛が逆立ったような感覚にとらわれる。世界が止まったかのような錯覚、今なら何でも出来そうだ。

夜太郎は残った力の全てを振り絞り、走りだした。次元爆弾を片手に、ゴッドブレス・ドラゴンを道連れにする為、命を懸けた特攻だ。

大丈夫。まだ気が付いていない。距離はあと十メートルもない。零距離で爆弾を起動させれば、いくらゴッドノイズ・ドラゴンといえども命はないだろう。そうなれば、全員が助かる。夜太郎はさらに加速した。あと七メートル。距離が長く感じる。大丈夫、ゴッドブレス・ドラゴンはまだ気付いていない。

あと五メートル。もう少しで終わる。そして夜太郎の脳裏に走馬燈が走った。時間が長く感じられる中で、夜太郎は今までの人生を振り返った。

サラリーマンとして働いていた夜太郎。給料は低いが妻は金持ちだったので、そこまで生活に困ることはなかった。そんな中で娘が生まれた。名前はリツにした。

娘は健やかに成長していった。栗色の髪が美しくて、顔も夜太郎に似ていなくて可愛らしい。彼女はお父さんっ子だった。

そんな幸せの連続。だがある日、それは終わった。夜太郎が会社に解雇されると、妻は人が変わったように夜太郎を責め立てた。夜太郎は返す言葉がなかった。そして離婚の結末を迎える。

当然、娘の親権は妻の方に渡った。妻は電波技術研究における第一人者だった。ＷＡＸＡと合同で設置した高校の理事長になるほどだ。

世間は電波一色の社会で宇宙開発に躍起となっている。例えば、長い間宇宙で活動できるように人種改良も行うというほどだ。夜太郎は何となくそれが好きではなかった。

今思えば、妻はキミドリをその実験台にしたかったのかもしれない。そのため夜太郎が邪魔者だったのだろう。

夜太郎は日々、生きる気力もなくゴミのように過ごした。娘と面会させてくれと頼んでも、妻はそれを嫌った。女のまるでゴミを見る顔のような瞳は印象的で、手に金を握らされて夜太郎は門前払いだった。それが何度も続いた。夜太郎は握らされた金をクシャクシャにして涙で濡らした。その金で食べ物を買う惨めさと言ったらな

い。

そしてある日、夜太郎は一体のウイルスと出会う。メットリオというウイルスらしい。やたらと愛嬌があった。お互い何か惹かれるものがあったようで、夜太郎は現実世界から逃げ出すように闇の世界に身を投じた。

裏世界で過ごすこと十年。裏世界で宇宙の危機が噂されてた時、夜太郎はスバル達と出会った。スバルは夜太郎の思いを受け入れて、一緒に戦おうと言ってくれた。夜太郎は嬉しかった。そして戦いを重ねてメトリーに異変が起きた。その姿は娘と瓜二つだった。

そして戦いを重ねて、今、死のうとしている。

今、メトリーとキミドリの笑顔がだぶった。

夜太郎は走った。全力で駆け抜けた。そして残りの距離が僅かとなった時だ。もうすぐだ！　と夜太郎が爆弾のスイッチを入れようとした時だった。夜太郎に微笑む神はこの世にいなかった。その瞬間、ゴッドブレス・ドラゴンと目が合ったのだ。時が止まったかのような感覚。凍りついた世界に夜太郎は閉じ込められた気分だ。なぜ？　夜太郎は思うが答えは見つからない。距離はまだ少しある。これでは仕留められない。

夜太郎は血の気が引いていくのを確かに実感した。そしてさらなる絶望が襲うのだった。ふいに彼は後頭部に強い衝撃を受けて、バランスを崩す。あろうことか次元爆弾を落としてしまった。そして視界の端に黒いステッキが見え、ゾッとした。続いて編み込んだ金髪が一瞬映り込む。独特の笑い声も聞こえた。さらには漆黒のマントが視界を真っ黒に染め上げた。

後ろから攻撃を加えた者の正体に、夜太郎は息を呑んだ。スバルやキミドリも絶句している。どうやらキングの計画はどこまでも完璧だったようだ。前提として、スバル達が勝利する可能性は露ほどもなかった。

スパイ。今、夜太郎が落とした次元爆弾を手に拾い上げた電波人

間――オペラ・ファントムがそうである。この状況下で電波変換が出来ている。それはスバル達の敵ということを意味していた。

今、思えばサン・ゴッドもおらず、アジトに着いてからの仕組まれたような展開から、もはや疑う余地はないのかもしれない。今までの協力的な姿勢も、油断を誘うためか。

特にスバルはハイドを信じていただけに、ぽかんと茫然自失であった。

キングの策略はスバルを徹底的に追い詰めて潰していく、もう立ち直れないかもしれない。

「な、何やっているんだよ？　ハ、ハイド……？　あ、もしかして夜太郎さんを助けようと……」

望み薄な可能性にすがったスバル。そんな現実逃避が滲んでいく薄ら笑みだった。

哀れな彼に、ゴッドブレス・ドラゴンが答えた。今の黄金龍には勝者の貫禄さえ漂っていた。全てにおいて、スバル達の一枚も二枚も上手を行っていた。

『いや、違う。見ての通りだ。ハイドは始めからディーヴァを裏切ってはいなかった。それどころか、最初から私と結託して君たちをこの状況に追い込んだのだよ……！　まさに、計画通り！！』

「う、うそ……だ」

オペラ・ファントムは次元爆弾を手にそれを見つめるだけで、何も答えない。今まで、見せてくれた熱い姿は何だったのだろう。

ゴッドブレス・ドラゴンは可笑しく堪らないらしい。

『ハーハッハッハ！　まったくお人好しすぎて、笑いが止まらない……。何がトラッシュの勇気が伝わったんだ？　いや、何も伝わっ

てはいない。お前は愚かだ、星河スバルゥウ！！』
「あ……は、はは……ハイド言ったじゃないか？　約束したじゃないか。地球を守るって！　トラッシュの命に誓ったんじゃないのかよ！」
「スバル少年……私は私でした。最後まで脚本家……シナリオを作りだすことが私の役目……。ンフフ、ヒーローはロックマンで、それを支える仲間……感動的でした」
「な、なんで……？　なんでなんだよっ！　信じていたのに！」
『まだ認めないのか、星河スバルゥー？　なぜ、おかしいと思わないのか？　なぜ、突然ハイドが仲間になる？　アカシックレコードでの戦いの映像に感化された？　ハッ、バカめ！！』

ゴッドブレス・ドラゴンの怒号が響く。
スバルは耳を塞いだ。目も閉じた。震える体を丸めこんだ。ハイドが見せてくれた姿が全て嘘だったと、涙した。それを糧にゴッドブレス・ドラゴンは勢いづいた。

『私もその戦いを見ていたが……馬鹿馬鹿しい！　むしろ、あのままプルト・キグナスの手にかかって死んでしまえと思った。私はロックマンが絶望のうちに死ぬところを見たいだけなのだよ！』

ゴッドブレス・ドラゴンは、完膚なきまでにスバル達の精神をズタズタに駆逐していった。確かに彼の言う通りだ。どこにもハイドが仲間であるという証拠はなかった。この状況に陥ったのも全てが計画通りだったのだろう。夜太郎のあがきも全てはお見通しだった。
事態が事態だけにスバル達は冷静な判断が出来なかったのかもしれない。これぱかりは統率者であるリフレインの敗北と言えた。
今、夜太郎の切り札さえもハイドの手に渡り、万策は尽きたことになる。死の音がしっかりとスバル達に近づいてくる。
ゴッドブレス・ドラゴンは最後に夜太郎に目を落とすと、アスト

ラル・ジャマー達に処刑場に連れて行かせ、結末へ事を運ばせる。
夜太郎はオペラ・ファントムに訴えかけるような目線を送るが、それは見てももらえなかった。

「な、なぜです。アナタは言ったはずですよ。メトリーを守るって……！　ブラザーになろうって……アレは全て嘘だったのですか？！」

「アナタ達のおかげで私の脚本は完璧だった……。初めて成功しましたよ、ありがとうございます」

オペラ・ファントムは一礼した。皮肉なものだ。今まで脚本をロックマンにことごとく破られてきたハイドが今、こうやって完璧な脚本を成功させようとしている。
ゴッドブレス・ドラゴンは優秀な部下の存在が誇らしくあるようだ。その調子に乗った言葉の数々が、スバル達の耳に入り込んでいく。

『まったくだ。ハイドの脚本は完璧だった！　……まあ、もっとも、夜太郎君の次元爆弾には肝を冷やしたがね。その存在を知らなかったら、不味かったかもしれないなぁ』

わざとらしい口振りに夜太郎は完全なる敗北を実感した。
キングは万全に万全を期してスバル達を仕留めにかかっていたのだ。
そしてスバル達が待つ処刑場に夜太郎は投げ入れられた。周りには銃を構えたアストラル・ジャマー達が命令を待っており、それがおびただしくて恐ろしくて、非情なまでに隙間なく囲んでいた。浴びせられる銃弾の数を予想すれば生き残ることなど、とうてい不可能だと理解できる。
キングの非のつけどころのない作戦にスバル達もはや死を待つし

かなかった。

ｅｄｅｎ―３５：脚本家として、最初で最後のシナリオ

決着の時が来ようとしていた。すると非道なキングは何を思ったのか、アストラル・ジャマー達を後方に退散させた。研究所の開けた場所でスバル達は取り残される。相手の意図が読めず、スバル達はこれからの出来ごとに不安を駆り立てられた。

彼らの様子をまじまじと観察するゴッドブレス・ドラゴン。とても良からぬことを思いついたようで、黄金龍はオペラ・ファントムに告げた。蜂の巣にするより、仲間だと思っていた者に、止めを刺させることにしたらしい。なんと卑劣なのだろうか。しかし何者にも邪魔されないほどの力は絶対で、この場所に限ってはそれが正義となっている。

『さあ、ハイド、奪った次元爆弾をロックマン達に投げ入れろ……！　フフフ、信じていた者に裏切られた絶望の表情を見せてくれよ』

オペラ・ファントムはこくりと頷くと、自分の周波数を有りっ丈次元爆弾に注ぎ出した。念には念をという訳だろう。

スバル達は訴えた。彼らはハイドの今までの姿が嘘だったとはとても思えない。きっと何かの間違いだと思っている。あの優しくて、紳士的な姿が本物のハイドであってほしかった。そうでなければ、生きる希望さえ見つけられない。

「ハイド！　なんでなんだよ?！　今までの君はなんだったんだよ?！」

「チッ、トラッシュの名前を使って俺達を騙すなんて……！　舐めやがって！」

ウォーロックは這いつくばりながら、オペラ・ファントムを射殺すような眼光を飛ばすが、これから殺されるのは彼らの方だ。

キミドリはうなだれて、自分の情けなさを呪った。頼もしい仲間だと思っていた自分が恨めしい。

だがそんな中、メトリーは純粋で汚れなかった。ボロボロに痛めつけられてもなおハイドの事を信じていたのだ。なぜか彼女の瞳は真っすぐ希望を離さず、今映っている裏切り者の事をまだ友達だと思っている。さっきの凶行も夜太郎を助けるためだと受け止めたのだろう。メトリーは優しすぎる。

その間にも、次元爆弾の威力が彼らの命を一瞬で吹き飛ばすほどに膨らんでいく。

「ハイド。私……信じてるよ。だって、オジサンはね……私の事を助けてくれたもんね……っ、いっぱい、いっぱいっ。暑くて怖い世界で私を守って……くれた……。だから、怖かったけど……私、頑張れたよっ、ありが……とう」

メトリーもノイズの影響があるようで、声は消え入りそうだ。そんな取り留めもない意識の中で、ハイドのしてきた事を感謝している。今もきっと事情があるのだろうと、純粋無垢な心は汚されていなかった。

夜太郎は堪らずメトリーを抱き寄せて、非情な現実を覆い隠してやった。

「やめなさい、メトリー……！　やめなさい、そんな事を言うのは……！」

「なんで……夜太郎？　ハイドはブラザーになろうって言ったお友

達だよ。私を守るって言ったもん。スバルと一緒に、ハイド頑張ってたよね……？　見てたよね、夜太郎……？」

そんなやり取りにゴッドブレス・ドラゴンが苛立ちを見せて、幼いメトリーに現実を浴びせかける。大人の世界がどれだけ汚くて、どれだけの偽りと演技にまみれているのか。特にハイドの今までの生き方がどんなものだったか。彼は脚本家で、人を騙して操り、自分の都合の良い物語を作り上げる人間の屑であると分からせてやる。

『くどい！　いい加減に理解したまえ！　最初から決まっていたのだよ！！　ハイドが改心した？　あり得ない！！　それならＷＷＲとの戦いの時にはすでに仲間だったろうよ！！』

「そう、私は脚本家です……私のシナリオは美しい！」

『そうだ……、ハイド！　お前のおかげでようやくロックマンを葬れる！　そうとも、絶望のどん底で希望の全てを奪い取ってな！……これ以上の屈辱と絶望があろうか？　いいや、ない！！』

もうこれ以上、ゴッドブレス・ドラゴンからスバル達に与えられる絶望はないだろう。もう十分すぎるほど蹂躙した。これで終わりで、地球も終わりで彼の願いが叶う。

ゴッドブレス・ドラゴンと同様、刻一刻と迫る終りを感じてオペラ・ファントムはスバル達に感謝の言葉を述べた。嫌味が極まったような口調は相変わらずで、スバルは観念した。

「ありがとうございました、ロックマン。何度も邪魔された私の美しい脚本。まさかアナタが私を信じてくれる事で成功するとは思いもしませんでしたよ。ンフフ……ほんとうにありがとう」

「ハイド……ッ！」

「もし天国に行けたら、彼に謝らないといけませんね。そう、自らの愚かさをね……！」

『さて、ハイド、お喋りはお終いだ。フフ、終わらせてやれ……。仲間だった者に葬られる……、きっと本望だろうよ！』

ゴッドブレス・ドラゴンが心ない事を口から吐き捨てると、オペラ・ファントムは頷いた。

「さあ、終わらせましょうか……」

オペラ・ファントムは次元爆弾を強く握りこむと、覚悟を決めたように口を食いしばる。そして長かったハイドとスバルの戦いに終止符が打たれる事となる。

彼ほどロックマンに執着した敵はいない。彼ほどロックマンを羨ましく思った敵はいない。いつも仲間に囲まれて、信じあっていたロックマン達。ハイドの目には……それがとても眩しかった。間近で見たら、その輝きを自分も手に入れたいと思った。そしてその輝きをずっと見ていたいと……。

オペラ・ファントムは一人の脚本家として、意を決しゴッドブレス・ドラゴンの方に向き直ったのだ。その表情はハイドのものとはとても思えない、命を懸けた鬼気迫るものだった。

スバル達も何が起きたのか分からずに呆然とその光景を眺めている。おそらくゴッドブレス・ドラゴンも何が起きようとしているのか理解はできていないだろう。

『どうしたというのだ？　早くやれ』

「約束したんですよ、私は……」

『何……？』

「私はずっと勇気がなかった。そして取り返しのつかない事もしてしまった……。そんな私でしたが、彼らは受け入れてくれた。仲間が出来たんです！　こんな私にも！！」

今、オペラ・ファントムはスバルの仲間としてここに立っている。方法はこれしかなかった。何度も書き直したが、この結末しか書き上げられなかった。ハイドの脚本は今、最終シーンに突入した。スバル達は全力で演じ切り、ハイドの脚本を作り上げてくれた。後は彼が主役を演じ抜き、脚本を仕上げるだけなのだ。

『お、お前……！』

「だから私は誓ったのです……命に替えても守ると！！　少年とその親友に約束したのです！！」

ゴッドブレス・ドラゴンはその瞬間に全てを理解した。スバル達もだ。

次元爆弾に集まったエネルギーが殺人的に輝いていく。キングはゾッとしただろう。すぐにコイツを何とかしなければ……！　その思考は瞬時に最善策を弾きだし、命令を受けたアストラル・ジャマー達は銃を乱射してオペラ・ファントムに撃ち込んでいく。

『アストラル・ジャマー！！　こいつを殺せ！』

自身も爪でオペラ・ファントムを薙ぎ払おうとする。しかしカゲロウ君が身を挺して、その爪を弾き飛ばした。カゲロウ君は体の半分が消し飛ばされたが、彼もまた命を懸けているのだろう。もう片方の爪にしがみついて離さなかった。「……小癪な、このォ！」焦ったキングは今度はノイズを口に溜めて吹き飛ばそうとするが、ノイズの充填に時間がかかる。キングの思考は素早く巡るが、疑問がそれ以上に湧いてくる。二重スパイだった？　いつハイドが裏切ったのか？　いつから演技をしていた？　そんな事ばかりを考えていた。

ハイドは銃弾を一身に受けながらも、次元爆弾を守り通している。その貰った銃弾の数から、もはや彼は助からないだろう。そして脚

本家の最期を飾るように、彼は一世一代のシナリオにピリオドを打ち込んだ。
最後の一文は、【ラストシーン、私は紳士的に笑みを浮かべ、約束を守り通す】といった具合のはずだ。
オペラ・ファントムは穴だらけになった体を、ゴッドブレス・ドラゴンに張り付かせた。絶対に離さないという意志が見え隠れする彼の瞳は、熱く燃えていた。

「ンフフフ！　私達チームで完成させた最高の脚本を受け取れっキィイーングッ！！」
『謀ったなァァァア！　ハイドォオッ！！』

どちらの方が早かっただろうか、ゴッドブレス・ドラゴンが神の息吹を吐きだす。それとほぼ同時にハイドは次元爆弾を起動させた。
辺りが照らし出される。
その時スバルは、銃声と男の怒号が鳴りやまない世界で確かに聞いたのだった。

《これでトラッシュさんに会わせる顔ができそうです……さようなら》

この言葉こそハイドの本心で、彼が残した最後の言葉だった。
そして空間が引き裂かれたように割れて、ゴッドブレス・ドラゴンとオペラ・ファントムが飲みこまれていく。彼らはあらゆる物理法則から逸脱してスバル達からはもはや、細い紐のようにしか見えなくなっていた。そんな特異空間はすぐに終息していき静寂を取り戻していく。
世界からゴッドブレス・ドラゴンが消えたことにより、アストラル・ジャマー達は洗脳から解放されて次々と電波変換が解けていく。
そのおかげか辺りのゴッドブレスノイズの密度も下がり始めて、

ウォーロックたち電波体は何とか体を起こすことが可能となる。
結末は突然だった。
確かにキングの計画は完璧だった。あらかじめ、スバル達を騙そうとハイドを寄こしたのも間違いはないのだろう。ただハイドの脚本がそれ以上だったのだ。
いつからハイドが本当の意味でスバル達の味方になっていたのかは誰にもわからない。だが、彼が最後にスバル達の未来を選んだのは確かだった。ハイドは全ての約束を守り通して、地球を救う道をスバル達に託して死んだのだ。
さきほどまでとは一転して静寂が漂う中、スバル達はぼんやりとハイドがいた方を見つめていた。生気が抜けた様子で、まだ何が起きたのかを受け入れられていないようだ。ハイドとカゲロウ君が死に、スバル達が生き残った。それが現状だ。
そんな中で一番最初に口を開いたのはスバルだった。
「なにが……起きたんだ？　ハイド……君は……」
次はウォーロックだ。胸糞悪いらしく目付きは鋭いままだったが、ハイドの勇姿を思い出しているようだ。彼はハイドの事を全面的に信用していた訳ではなかった。事実、裏切りの姿勢を見せた時、彼を強く軽蔑した。しかしどうだ。この結末である。
ウォーロックは砕けた手で額を覆った。
「アイツがキングを道連れにして死んだんだ」
「え……？」
「いつから演技をしていたのかは分からない。だが、最後にアイツが俺達を助けたのは間違いねえ。……チッ、まさかアイツの脚本にいっぱい食わされることになるとはな」
「死んだ……ハイドが？」
「ああ、生きちゃいねえだろうよ」

「な、なんで……！」

「命を懸けて地球を守る……そこのチビガキを守る。あれが冗談じゃなかったってことだ。皮肉なもんだ。いつも苦しめられたアイツの脚本に、俺達は助けられたんだからな」

ウォーロックはそれだけ告げると、疲労しきった体を倒れこませて、これからどうするかを考え始めたようだ。キングを倒したと言っても、サン・ゴッドをどうにかしなければ何の解決にはならない。彼は冷徹なまでに現状を憂いでいるのだ。ハイドの死を惜しむ様子はまるでなかった。

一方、スバルは精神的に追い詰められ、疲れきった中で、ハイドの取った行動を悲しく捉えていたようだ。ぼうっと寝転がるウォーロックとは対照的に、涙を堪えながら拳を地面に打ち付けている。研究所の床は固い金属性なので、それは体に触るだろう。

「なんて、バカなことを……！」

すると今度は夜太郎だった。彼は医務室から持ってきていた少しの包帯でメトリーやキミドリの手当てをしているようで、作業をしながらスバルに言ってやる。

「スバル君。冷静になってください……。ああするしか、なかったんですよ。おそらく彼はずっと一人で戦っていたんでしょうね。あの状況です……誰かが犠牲にならなければいけなかった」

非常とも言える言葉にスバルは反論しそうになるが、自分のしてきた行いを省みると喉の奥で言葉を詰まらせた。スバルもゲームの時、キミドリを見捨てようとしていた。誰かが犠牲になる。それは確かとしか言えなかった。

「そう……ですね。僕も人の事は言えないや」

スバルも疲れが来ているので、体を横にした。

eden―36：血みどろの戦い

かつてのアストラル・ジャマーだった数百のテンキュウ高校生は意識を失っているようだ。スバル達もこれから先の事を考えなければならないだろう。サン・ゴッドが一体どこにいて、太陽を止めるために何ができるのか。その答えを早く見つけなければならなかった。しかしハイド亡き今、その答えはなかなか見つからない。現在地は水星だから無理もない。

一方メトリーは全身に巻かれた包帯で窮屈そうにしながら、夜太郎を眺めている。彼女らの手当てを終えた夜太郎は現在、研究所の設備を調べて回っているようだ。

メトリーは突然いなくなってしまったハイドの事を心配して、夜太郎に問いかけた。遠い所で夜太郎は忙しそうにして、機械類をいじることは止めなかった。

「ねえ、ハイドはどこに行っちゃったの?」

夜太郎に抱きかかえられていただけに、メトリーは一部始終を見ていなかった。結果として、メトリーの信じた通りハイドは約束を守り通した訳だが、可哀そうなことにメトリーは彼の最後を見届けることができていなかった。彼女の中でハイドはまだ生きていたのだ。

夜太郎はその答えを言える訳がなく、黙々と作業を続けているばかりだ。

これはおかしいと思ったのかメトリーは、寝転がるウォーロック

を呼び起こした。

「ねえ、ワンちゃん。ハイドはどこに行っちゃったの……？」

「……うるせえぞ。今はそれどころじゃねえんだ。お前も大人しく体を休めとけ」

お互い大怪我を負っているのだから、ウォーロックとしては大人しくしていてほしいが、メトリーは引き下がらない。

「イジワルは、めっだよ！　教えてっ」

不満そうに頬を膨らませるメトリー。ウォーロックは一度ばつが悪そうに黙りこむが、黙っていてもいずれ分かることだし、彼自身オブラートに包む事は苦手だ。結果的に思いやりのない言葉となってメトリーにハイドの今を伝えた。

「死んだ」

「え……？　死んだ……」

「もういいだろうっ。休め……！」

「う、うそだ……！　だって、ブラザーになるって約束をしたのに……」

うるうるし始めるメトリーだったが、ウォーロックはもう聞く耳を持っていないようで、起き上がると逃げるように夜太郎の手伝いに行ってしまう。これ以上絡まれては堪ったものではないのだ。

メトリーは納得がいかなかった。ハイドが死んだなんて信じられないのだろう。どうしても理解できない彼女は、ハイドがいた場所に向かいだした。傷付いた体に無理をさせて、ゆっくりとハイドの周波数が残っている場所に歩いていく。

そしてハイドが死んだ場所で、メトリーはある物を見つけた。そ

れはボロボロになった脚本だった。爆弾の影響なのか千切れてしまっている。それを取るとパラパラとめくっていく。
　すると、メトリーは口をまん丸にしてその脚本に魅せられた。

「わあ、すごい・・…っ」

　脚本の中にはメトリーやスバル達の絵が描かれていたのだ。まるで絵コンテのようである。それはとても精細で凝り性なハイドらしい絵柄だった。そうやってシナリオを綴っている。どうやら彼はとても多才な人物だったようだ。しかしいつの間にこんなものを描いたのだろうか。任務中にそんな時間はなかったはず。
　その答えは脚本の最初の方に書かれていた。どうやらこれは脚本の下書きらしい。それを読むと、メトリーはポロポロと涙を流した。

「……そっか。そうだったんだね。私を守るために……。そっか…
…頑張りぬいたんだね、ハイドは」

　メトリーはそっとハイドの脚本を閉じると、ハイドが残した勇気の周波数を確かに感じたのだった。トラッシュからハイド、ハイドからメトリー。この勇気で地球を救うと誓う。

「分かったよ、ハイド。私達みんなで地球を守ろうね！　私達はブラザーだもん」

　メトリーは何もない場所で小指を突き出して、ニッコリと笑うとブラザーの契約を交わす。生前のハイドの夢を叶えてやると、夜太郎の元に向かおうとその場に背を向けた。
　ハイド達は確かに勝利した。だが、キングはまだ敗北していない。
　するとどこからともなく声が聞こえてくるのだった。それは男性のもので背後から這い寄って来て、かすれて絞り出すような声調が

不気味だ。

《まだ終わっちゃいない……！》

その声は潰れているが、どこかで聞きおぼえがあるものだった。メトリーは声の方に向かってもう一度振り返った。男の人の声だ。もしかしたらハイドかもしれない。

「誰……？　ハイド……なの？」

メトリーはまじまじと声の方を凝視する。だが誰もいない。すると問いかけに答えるかのように空間が割れた。ハイド達が消えていった過程を巻き戻したかのような現象だった。

割れた空間から血だらけになった手が出てくる。白人の肌に赤い鮮血は鮮烈な印象だった。しかし出てきた人物はメトリーの期待を裏切り、恐怖させる。メトリーは慌てて逃げ出した。出てきた人物とは、ゾンビのように体の所々が崩れ落ち、それでかつ黄金龍の鱗を汚らしく混ぜ込んだキメラのようなキングだったのだ。言わばキングキメラと言ったところか。

メトリーの逃走は早かったが、キングキメラの反応は見た目以上に速い。人間とは思えない身のこなしで彼女を捕まえた。彼の左腕は金の鱗がささくれだって、そこから赤黒い爪が一本突き出ている。左腕にズワイガニとハリネズミを移植したのかと問いかけたいほどの変態ぶりだ。その爪でメトリーの服を引っかけるとひょいと持ち上げた。

「ああっ！　や、夜太郎ぉー！！」

メトリーは悲鳴を上げて助けを呼んだ。まさかキングが生きているとは、誰も予想していなかっただろう。もはや彼は次元さえも越

えてくる化け物だった。レギオンの力を手にしたとはそういう事なのだろう。もはや次元爆弾一つで何とかなる相手ではなかった。

そしてスバル達がすぐにメトリーの元に駆けつけた。特に夜太郎が速くて一番乗りだ。彼はメトリーから目を離した事を迂闊だったと後悔しているらしい。

それにしてもキングのしつこさには辟易せざるを得ない。ハイドが命を懸けても、まだ生きているとは異常なまでの執念だ。

キングキメラはメトリーを人質にとりながら往生際が悪く、スバル達に詰め寄った。

「お前達ぃいい……まさか私が後れを取るとは……！　私の完璧な計画を……！　お前達ィ、ハイドに何を吹き込んだ?!」

「お、お前……生きていたのか！」

スバルは緊張した様子で人間を完全に捨ててまで執着する化け物相手に戦闘態勢を取っている。今の状況は先程までとは違う。キングが人質を取っていると言っても、まだ絶望的ではない。まだ何とかなる。メトリーさえ救いだせれば、勝機はあるのだ。ウォーロックはキングを威嚇しつつ、背中の方に手を回して後方のキミドリに合図を送る。電波変換の合図を送っているらしい。

すぐにキミドリはハンターを構えた。しかしキングキメラはそれを見つけると、口を蛇のようにぱっくりと開いて大声で咆哮した。一瞬、気を失ってしまうほどの爆音だった。すると音の弾がキミドリのハンターを弾き飛ばす。

キミドリは慌ててハンターを拾い上げたのだが、あの音の弾はノイズの塊だったようで、ハンターはすでに駄目になっていた。キングキメラはさらに詰め寄った。

「つまらない真似はよせ！　私の質問に答えるんだ！　お前達はハイドに何を吹き込んだ？！　答えないと、このガキを殺すぞ……！」

キングキメラも余裕がないようで、紳士的な振る舞いが嘘であったかのような乱暴な態度で迫る。それほど、あのハイドの行動が信じられなかったのだろう。

そんなことさえも分からないキングは愚かと言える。夜太郎はなぜ彼が命を懸けたのか教えてやった。

「私達は彼になにもしていない……！　ただ地球を守るために一緒に戦ったというだけだ！　彼は私達の仲間だったというだけだ！」

「ふざけるなよ……アイツはそんな人間じゃなかった！　アイツは自分だけが大切で、自分のセカイしか見えていない人間の屑だった！！」

その何も分かっていない言葉の数々。キングは人間を越えたと言っていたが、これでは畜生にも劣る。スバルは沸き上がる怒りを爆発させた。夜太郎もだ。ウォーロックに至っては殴りかかっていた。

だがその中で一番怒りに燃えていたのはメトリーだった。彼女は涙ながらにキングキメラの顔面を蹴り飛ばした。彼女は脚本を通して知っていたのだ。ハイドはずっとスバル達の仲間になりたがっていたのだと。

「ハイドを馬鹿にするな！　運転がうまくて、プログラムがうまくて、絵がうまくて、勇気もある！　全然クズなんかじゃない！　ハイドは私のブラザーだ！！」

「グッ……！」

大暴れのメトリーだ。純粋な思いが乗った攻撃の数々に、キング

キメラが一瞬だけひるむ。
その隙を突きウォーロックが殴り、キングキメラをそのまま馬鹿力に任せて吹きとばしてしまった。そして爪から逃れたメトリーを助け出す。ここに来てチームの連携が光り、最後の仕上げだ。ウォーロックは力尽きたように倒れ込むとキミドリに叫んだ。
キミドリはもう走り出している。ハンターを投げ捨てると、そのまま根性だけで無理やり電波変換して、地面に倒れ込んだ憎き敵に魂の銃弾の嵐を撃ち込んでいく。

「消えろっ！　キング！！」

スコープ・スナイパーは何発もの銃弾をキングキメラに撃ち込んでいく。二度と息を吹き返さないように、相手を化け物と割り切って何度も何度も撃ち込んでいく。銃声が研究所で何度も鳴り響いた。キングキメラの悲鳴がだんだん弱くなっていく。割れた金色の鱗がフロアにバラバラと転がっていく。
そして百発近くの銃弾を撃ち込んだところで、ようやくキングキメラはピクリとも動かなくなった。ゴキブリ並の生命力だったが、さすがにこれで終わっただろう。
キミドリも限界だったらしく、キングの絶命と同時に電波変換が解けてしまった。

「お、終わった……っ」

もはや人間だったとは思えないキングの亡骸に背を向けると、キミドリはよろよろとした足取りで夜太郎達の方に歩いていく。もちろん片手にはメトリーが落としたハイドの脚本を手にしていた。これはきっとメトリーの大切なものだと分かったのだろう。お姉さん的な立場からキミドリは、妹分の気持ちを理解することができたようだ。

メトリーもキミドリの元に向かって走り出した。お互い包帯ぐるぐる巻きのお揃いで、ファッションセンスのない姉妹のようだった。夜太郎はそれを微笑ましく思い見つめている。

だが、その夜太郎の安堵も一瞬で終わった。次の瞬間、彼は走り出していたのだ。今、気付いているのはおそらく彼だけだろう。背後の様子にキミドリは気付いていない。メトリーはどうか分からない。嬉々として走っている背中が見えるだけ。

キミドリが仕留めそこなった？　いや違う。ゴキブリ並の生命力といったが、それ以上の生命力と執念だったということだ。キングは異常なまでの執念で肉体を失ってもなお、死ななかった。彼の死体にノイズが絡みつき、ノイズが意思を持ち始める。そうしてゴッドブレスノイズそれそのものの化け物が姿を現した。それはあらゆる悪霊をごちゃ混ぜにしたどす黒い炎のようなもので、キングの顔面が炎から何本も浮き上がっている。言わば、キングレギオンと言ったところか。しつこいなんてものじゃなかった。

夜太郎は急いだが、どうにも間に合いそうもない。スバルに至っては、今さら気付いた。ボロボロのウォーロックも何とか立ち上がった段階で、彼のスピードを以ってしても今からでは間に合わない。駄目だ。気付いたら夜太郎は叫んでいた。

「キミドリさん、後ろです！」

《ワタシハァアア、肉体という縛りスラも越えターー！　シねエェエエ！》

キミドリが振り返るが、駄目だ。キングレギオンはすでに数ある顔面の口から、死神が持つような鎌を噛みしめて振り抜いていた。電波変換の直後の疲労から反応できるはずはなかった。それに何より背後からの不意打ちに反応が遅れている。

駄目だ。このままではキミドリが上下に胴体を真っ二つにされて死ぬ。その次の瞬間、黄緑色の髪が宙を舞った。

ｅｄｅｎ―３７：ありがとう……お父さん

一瞬の刹那、少女の声が。

「危ない！　お姉ちゃん！！」

言うが早いか、メトリーはキミドリを後ろの方に引き倒していた。彼女は誰よりも早く、気付いていたのだった。生き返るキングに、キミドリの身の危険を瞬時に察知していた。嬉々として走っていたように見えた背中だったが、実際メトリーが浮かべていた表情はキミドリを助けようとした必死なものだったに違いない。

メトリーの活躍によって、キミドリを助けることができた訳だが、これではメトリーが助からない。無情にもノイズにまみれた鎌が、メトリーの腹を切り裂こうとしていた。

夜太郎は走りながら、自分の足の遅さを呪った。目と鼻の先だ。もう数メートルだけなのに手が届かない。キミドリも尻もちを突きながら、その光景に固まってしまい動けなかった。

すぐに赤い血がそれはもう噴水のように舞いあがった。致命傷だったことは誰の目にも明らかだ。なぜならメトリーの下半身が魂を失ったように転がり、上半身が宙を舞っているのだから。黄緑色の髪が目に鮮やかで赤い色と混じって、花束のようだった。だがすぐに現実に返らされる。あくまで大きめの生ごみのように、べちゃりと花束が地面に転がったのだった。

辺りのノイズが酷い。ウジ虫のようにメトリーの傷口に群がっていく。

夜太郎は一瞬何が起きたのか分からなかった。その間にもキングレギオンは追撃を加えようとしている。錯乱した夜太郎は頭の付いている方のメトリーを抱きかかえて、狂ったように叫ぶばかりで状況を理解できていないようだ。

これはまずいとウォーロックがビーストスイングを繰り出す暇もなく、勢い任せにキングレギオンに突っ込んで弾き飛ばす。ウォーロックはそのままキングレギオンと距離を取るために、片手にキミドリと夜太郎とメトリーの上の方を抱え込んで研究所の奥に逃げ飛んだ。彼は戦士で冷静だが、それでも焦りを感じている。そして戦士だけに今までたくさんの死を見てきた。今回の場合も経験から答えが出ているのかもしれない。

途中、彼はスバルとスコープに乱暴に言い放つ。さすがの彼も五人も抱えて逃げる事は出来ない。

「逃げるぞ、スバル！　どっかに身を隠す！　スコープを抱えて、走ってついて来い！」

「わっ、わかった」

スバルは呆気ないほどにすぐに事態を理解して頷いた。真っ赤に染まったウォーロックの腕を見て、事の深刻さを実感したのだろう。何よりあそこまで余裕のないウォーロックの態度がどんな説明よりも分かりやすく、スバルにこれから起きようとしている事を伝えていた。

それからほんの短い逃走を行い、六人は研究所のどことも分からない場所で、身を隠していた。途中、ウォーロックは治療ができる場所を探したのだが、まったくそのような部屋は見つからなかった。

いくら探そうとも、廊下には武骨な機械類が続くだけだった。無駄に高級そうな治療とは関係ない機器の数々が憎たらしく映ったものだ。

そして時間がすぎるほどに、メトリーの命がなくなっていく。ついにウォーロックは医務室を諦めて、比較的清潔そうな小部屋に身を隠したのだった。しかしそこには粗末なベッドが一つ備えつけられているだけで、とても治療ができる環境ではなかった。何よりここには医者がいない。

正直、ウォーロックの中ではもう結果は見えていた。

だが夜太郎はメトリーを勇気づけようと必死に呼びかけている。彼の上半身はメトリーの血で真っ赤だった。残念だが、彼の必死の励ましには何の意味はない。だが幸か不幸か、普通の人間なら即死の怪我を、メトリーはウイルスなので下半身を失おうともまだ息を残していた。それでも、どんな現実の前でも諦めきれない夜太郎は迫る死に抗った。メトリーを固いベッドに寝かしてやると、スバルとキミドリと協力して、ベッドのシーツをちぎって包帯を作り始めたのだった。スコープもカーテンの一部を洗面所で濡らしてきてメトリーの額の汗を拭ってやっている。ある種、奇妙な光景が繰り広げられた。悲劇のヒロインは下半身を失う重傷だが、治療道具はそこらで調達したままごと遊び……。

何もかもが即席で、全てが応急処置にもならない気休めだ。見かねたウォーロックはスバルからハンターを取り上げて、何か治療に使えそうなものを実体化させようとするが、辺りに充満するゴッドブレスノイズが邪魔をしてハンターはまともに機能しなかった。必死な夜太郎の表情に、ようやくウォーロックは現実味を感じたのだ。この状況下では手の打ちようがなかった。

そんな中でメトリーが小さく声を振り絞った。それは消え入りそうで、荒い呼吸に混じってほとんど聞き取れない。

「や……たろぉ。どこ……？　痛い……痛いよぅ」

メトリーは目に涙を溜めて夜太郎を探していた。小さな手をシーツに握りこませて夜太郎の名を呼んでいた。夜太郎はメトリーの手を取り、励ます。助かる！　だから、頑張れ、と。

「大丈夫ですよメトリー。今、みんながメトリーを助けようとしてますからね……！　だから、大丈夫……！　痛いけど、ガマン……です」

「う、うん……あり……がと……ガマンす……る……」

メトリーは小さく笑って、激痛と薄れ行く意識に抗い始めた。シーツに刻まれたしわの谷は深くなったり浅くなったりを繰り返していた。メトリーは震えていた。怖がっていた。そのたびに夜太郎が勇気づけさせる。だがメトリーの反応は次第に弱くなっていった。

キミドリはその光景に包帯を作る手を止めて、手に顔を当てて号泣してしまった。なぜこのような事に……キミドリは後悔しか出てこなかった。キミドリはずっとメトリーの事を羨ましく思ってきていた。心のどこかでずっと邪魔者だとも思っていた。上辺では気の良いお姉さんを演じていたが、羨ましくて堪らなかった。そんな自分が許せない。

「わたっ、私がいけなかったんだ……。私が、ずっとメトリーちゃんの事をいなくなれば……って思ってたから。……こんなことに、ご、ごめんなさい」

可哀そうなキミドリに、メトリーは頑張って首を小さく振った。荒い息に唇はもう乾いて萎れている。かすれた声。天井をぼうっと見つめがら、彼女は自分の気持ちを伝えた。なぜキミドリを助けたのか。彼女が何を思って過ごしてきたのかということを全部、教え

てあげた。

「ごめんね、お姉ちゃん。やたろう……を、ずっと、とっちゃって……ごめん……ね」

「メトリーちゃん……そんなこと……もう、喋らなくていい……」

「ううん。わたし……は、偽物だから……お姉ちゃんには生きてもらわなきゃ……生きて、夜太郎と……ね……それが……私の役……目」

「だめ……！　メトリーちゃんも生きるんだ。……っそ、そうだ、三人でやり直そう……！　う、うん、それが良いよ」

「……そ、そぉ？　なら……、みんなでお家を探さなきゃ……。だってね、これ以上増えたら……あかねを困らせちゃうだもん。あ、そうだ……お隣のお家が……いいかなぁ。」

　きっとスバルの家の隣の空き家のことを指しているのだろう。確かにあそこの家で暮らすことができれば、いつでもスバルやあかね、ウォーロックに会いに行くことができる。だが、悲しいもので、それはもう叶わない夢だった。

　メトリーの未来や希望、これからの全てが奪い取られたことに、ついにウォーロックが我慢ならなくなって、キングレギオンを仕留めに行こうと扉の方に向かいだした。ヒビ入った牙をガチガチと鳴らし打ち震えながら、見開いた目に涙を溜めていた。

　彼はずっとメトリーの事をチビガキと呼んでいたが、食卓を囲んだ日々や一緒にお使いに行ったりと一緒に過ごした時間は短くない。もっともメトリーはお使いのことを犬の散歩だと思っていたようだが、それが逆に可愛らしいというものだ。ウォーロックもそれをお守りだと思っており、お互い楽しく面白く過ごさせてもらっていた。そのメトリーが死のうとしている。もう一緒にお買い物に行けなくなる。バーゲンセールの帰りに、荷物持ちウォーロックの傍らで、あかねに洋服をねだるメトリーの姿はもう見れなくなる。

「もう、我慢ならねえ。アイツをぶっ殺してやる……！」
「そ……そんな体で何言ってるんだよ、ロック！」

ウォーロックはもうボロボロで、その言葉は強がりも良いところだ。腕なんて吹っ飛んでしまっている。今するべき事は死体を増やすことではない。

スバルは最後までメトリーを見守ることをウォーロックに目で訴えていた。

しばしの沈黙、それからスバルは多くは彼に求めず、メトリーの手当てに戻った。

シーツは真っ赤に染まっている。

メトリーの意識と命はもう風前の灯火だった。彼女は死を実感してウォーロックにそばにいて欲しいとねだった。脂汗を吹き出し、血の気の失せた顔色。それでも焦点の定まらなくなった瞳を必死にウォーロックに向けてくる。ウォーロックは堪らなかった。

「ワンちゃん……ワタシを置いてか行かないで……。みんなで一緒に……いて」

メトリーの目から零れていく涙。痛いなんてものではないのだろう。苦しいなんてものではない。

「こ、怖いよぉ……死にたく……ないよ……っ。ハイドもこんなに……怖かったのかな？」
「ち……ちくしょお……！」

ウォーロックは壁に拳を打ちつけて、声にならない悲痛な叫びを噛み殺した。

いよいよメトリーの生気が失われていく。握られる手も握り返し

てくれなくなった。無我夢中で夜太郎はメトリーを助けようと必死にあがいた。

「し、しっかり、メトリー！　そ、そうだ……！　リ、リカバリーを使えば……！　そうだとも！　もう、大丈夫だぞ、メトリー？心配ないぞ！」

思いだしたかのように、最後の希望にすがる夜太郎はハンターを取り出し、メトリーにバトルカードのリカバリーを使ってやろうとした。だが、現実は無情だった。ここは水星で、太陽風が強烈に吹きつけて、地球の最新技術で作ったバトルカードと言えども数億倍のジャミングの前では意味を成さなかった。バトルカードは虚しく塵となる。

「あ……」と、夜太郎は力なく、その手からハンターを落としてしまった。

もう、手の施しようがなかった。誰の目にも明らかだった。スバル達はメトリーに必死に呼びかけたが、メトリーはもうそれに応えることはできない。彼女はもう悟ったようで、目を閉じた。生きたいという願いが吸いだされるように彼女の体から力が抜けていく。

最後に夜太郎に感謝の言葉を贈り、キミドリ――リツとの幸せを願った。

「夜太郎……。ずっと、大好きだったよ。これからは……お姉ちゃんと仲良く……ね。バイバイ……お父さん」

そして、メトリーは動かなくなった。夜太郎の大好きな娘を守って、彼女は死んだ。

とうとう夜太郎は娘を守ることも出来なかった。

そしてウイルスだったメトリーは、その体さえも残してくれない。死亡と同時にその体をデータの塊に変えて砕け散った。散らばる彼

女の命の欠片はまるで宝石のようだった。

「メトリー……。メトリー……ごめんよ。守ってやれなくて……」

打ち震えながら、夜太郎はベッドに残った彼女の形見を手に取ると、静かに決意した。手に取ったものは、まるで彼女の髪の色のようで、美しいエメラルドの宝石だった。そして固めた決意は、彼女が願った幸せな未来を守るという事だった。地球にはたくさんの幸せの可能性があり、夜太郎はそれを守り切ると決意したのだ。

そして悲しんでいる暇はなかった。キングレギオンがスバル達を、地球の最後の希望を葬りにかかったのだ。

ウォーロックとスコープは真っ先に気付いた。恐ろしいほどの量と密度のノイズがある一点に集まっていく。

戦士としてウォーロックは、死の悲しみをすぐに切り替えると、キングレギオンへの怒りを露わにした。スコープも恐怖以上の怒りを感じているようだ。

「あの……野郎、この惑星ごと俺達を消し去るつもりか?!」

「ウォーロックさん……研究所の核実験エリアからすごいノイズと周波数が集まっていきます……!」

「わかった……悲しんでいる暇はねえ! やるしかねえ!! キングに引導を渡してやる!!!!」

どこまでも執着するキングと決着をつけなければならない。彼を許す訳にはいかないのだ。

ウォーロックを筆頭にチームは、ハイド達、メトリーの思いを懸けた決戦に臨んだのだった。

そして全速力でキングレギオンが力を蓄える核実験エリアに到着した一行。さすがに核実験施設というだけあり、おびただしい数の核ミサイルが設置されている。まさに決戦の場という、おどろおどろしい空気を演出していた。鉄の密林地帯という訳か。花粉を振りまくならまだしも、これは死の灰を振りまく。恐ろしい限りである。

そんな核ミサイルを背後に据えて、キングレギオンがゴッドブレスノイズを惑星中から集めて、戦闘周波数を爆発的に高めている。丸々と肥え太っていて、暗黒の太陽といった形容がよく似合う。

まるで今の彼は起爆スイッチだ。彼が最初に爆発して、核ミサイルに連鎖爆発、つまりスバル達はどうやっても生き残れないということである。

だがここに来て幸いなことがある。キングレギオンが惑星中はおろか、宙域に及ぶまでのゴッドブレスノイズを集め始めたおかげで、辺りのノイズ密度は極端に下がっていた。

今なら、電波変換が可能だ。希望はまだ残っている。

『やるぞ！　スバル！！』

ウォーロックはすぐに電波化して、スバルのハンターに収まる。時間がないので、最初から出し惜しみは無しで、今のロックマンが持てるありったけの力をキングレギオンに叩きこんでやるだけだ。

「電波変換！　星河スバル、オン・エア！！」

『次だ！　スバル！！』

「うん！　ラーニングレギオン！！　ロックマン・レアフェニックス！！」

ロックマンは最初から全力だ。フェニックス・リボンの領域にアクセスして、鳳凰のような姿に変化する。彼はすぐに虹色の緒を引

きながら、美しい羽をはばたかせて、キングレギオンに接近した。
出し惜しみは無しだ。全力を振り絞る。

「アカシャフォースビッグバン！　食らえ、キング！！　ハイド達とメトリーの思いを受け取れー！！」

ロックマンの羽は虹色に輝き、左右に大きく伸びて、一対の光の翼を作った。そのまま特攻戦闘機のように風を切りながら目に留まらない速度で、突撃攻撃を繰り出す。

「うぉおおおあああ！　レインボー・ディバイン！！」

今持てるロックマンの最高の力を、キングレギオンに炸裂させた。だが敵の執念が異常だった。虹色の羽が暗黒太陽を薙ぐように通過していくはずなのだが、驚いた事にその羽は太陽のノイズ壁に阻まれて弾かれてしまった。ロックマンは後ろに吹きとばされてしまう。ウォーロックも驚きを隠せないようだ。いくらダメージを負っていて万全とは言えないが、今持てる最強の力を見舞ってやったはず。

『なっ、嘘だろう？！』

それに対して、キングレギオンはひたすらに高笑いだ。だがノイズに支配されてほとんど意識を失っていたために、彼の理性は露ほどもなど感じさせなかった。

《ヴァヴァッヴァヴァア！　今の私はお星様ァアア！！　人間ヲ越えテ、ワタシは宇宙の一つになったのだァアア！！　ヴァヴァヴァアッヴァヴァアァ……アッー！！》

どうやらロックマンが今、相手取っているアレはもはや化け物で

すらないようだ。彼は星と同等の存在にまで上り詰めた。言わば、キングステラと言ったところだろう。
いよいよ星となったキングは、ロックマン達を道連れにしようと圧倒的な存在として立ちふさがる。
それでもロックマンは立ち上がった。

「クッ……でも、諦められないんだ！　僕はみんなの命を背負って戦ってるんだからー！」

ロックマンはありったけの力をキングステラに撃ち込んでいく。しかし星の規模となったノイズの壁は厚く、決定打に欠けている。時間がない。このままでは水星ごと、吹き飛んでしまう。

『チッ……！　このままじゃマズいぞ！！　アイツの戦闘周波数がどんどん上がってやがる。もう計測不能だ！！』

いよいよウォーロックが焦りを見せ始める。キングステラはみるみる肥えて膨張していく。だんだん、攻撃がキングレギオンに届かなくなってきてしまう。
孤軍奮闘のロックマンはそれでも攻撃を続けるしかなかった。今、戦えるのは彼らしかいないのだ。彼らだけが希望なのだ。
なのでキミドリと夜太郎はロックマンの勝利を信じて応援することしかできなかった。必死の呼びかけだ。彼らとしてはロックマンに何としてでも、キングの野望を打ち破ってもらわないといけない。そうでないとメトリーとハイド達の死が無駄になってしまうから。

「頑張ってください！　ロックマン！！」
「がんばれ……。スバル……！！　ロック！」

しかし応援は虚しく、ロックマン・レアフェニックスの攻撃はキ

ングステラを倒すには及ばなかった。暗黒太陽が膨張していく。
夜太郎たちも、これはもう駄目か……と絶望に覆われた時だった。
夜太郎の手に持ったエメラルドのような宝石が輝きだした。

《夜太郎ぉ……夜太郎ぉ……！》

あの子の声だ。
その声が夜太郎に訴えかけてくる。その子は暗黒の太陽を前にしても、まだ夜太郎達の勝利を信じていたのだ。夜太郎の手の中でもう一つの太陽が輝きを増す。

《諦めちゃダメだよ……！　ワタシは知ってるんだ。夜太郎が誰よりも……強くて、スゴイって事を……！！　夜太郎は、宇宙で一番強いんだ！》

それは天国からの贈り物だった。そしてメトリーの生きた物語が、スバル達が生きる世界の未来を切り開く。

「メ、メトリーなのか……？」

夜太郎はエメラルドを見て、驚き以上にメトリーの声に助けられたようだ。絶望に覆われて痩せこけた顔面に、少しの生気が戻る。現状は何も変わっていないし、ロックマンは相変わらず苦戦している。だが、メトリーの声に勇気が湧いてくる。

そんな夜太郎の様子が見えているのか、メトリーはクスクスと笑いつつ続けた。元気いっぱいで、もういなくなってしまったとは思わせない。きっと天国でも楽しく過ごしているのだろう。

《ワタシは今ね、ワンちゃんと一緒にいるんだよ？　ここが天国なのかなぁ。でもねワンちゃんは教えてくれないんだ》

「メトリー……」

《ワンちゃんはね。ワタシに言うんだ。スバルくんを助けてあげてって……ワタシの物語じゃ助けることができないって。すごく悲しい顔をしているの……。私に何かできるのかな？　私……》

メトリーは困った声の調子で少し考え込むと、夜太郎に問いかけた。

《ねえ、夜太郎？　私って何のために生まれてきたのかなぁ？　私の物語ってなんなのかなぁ？　難しい事はよく分かんないよ……》

その答えは簡単だ。夜太郎はメトリーに答えを教えてやった。それは当たり前で、とても大切な日々の連続そのものだった。

「それはねメトリー。今までみんなと一緒に過ごし感じてきた思い出がアナタの物語です。楽しい事も、辛い事もあったでしょう。アナタはそれを生きる中で実感していくために生まれたのです。そう、人間になるために……ね」

《……そっか。でも私は、人間になれたのかな?》

「ええ、なれましたとも……。アナタは私の掛け替えのない家族です。あなたはずっと、女の子だったじゃないですか?」

《夜太郎……うん！　分かったよ。それが私の物語だったんだね。嬉しいな、今なら、何でもできる気がするよ！》

メトリーの吹っ切れた様子は、嬉しさが爆発したかのようだった。そんな彼女の元気いっぱいの言葉に呼応するかのようにエメラルドの宝石が輝きを増した。

メトリーは夜太郎に奇跡をあげたのだ。

《ワンちゃんはね、言ってた。私なら、夜太郎やお姉ちゃん、スバルを助けることができるって！　ううん、地球のみんなだって！　だって私達は家族だもんっ！　いつも一緒で、いつも一番なんだ！　悪いオジサンなんかに負けないんだよ！！》

思い出の日々を糧にして、メトリーの力が夜太郎に受け継がれる。エメラルドの宝石が夜太郎の胸に入り込み、力を与える。

そして夜太郎はそっと胸に手を当てて、キミドリの手を握った。ずっと家族は一緒。そんな当たり前のことが宇宙一の力を彼に与えてくれる。ただのサラリーマンでも、ただの女子高生でも、メトリーとなら、家族と一緒なら、それは誰にも負けない力になる。

「ああ、そうか……これがメトリーの生まれてきた意味。私はずっと知っていたんだ……ずっと近くに……」
「夜太郎さん……」
「私に力を貸して下さいキミドリさん……。メトリーと一緒に……」
「はい……」

キミドリと夜太郎はメトリーの暖かさを感じながら、彼女がいるその場所に手を差し伸ばす。
まず夜太郎が電波化していき、キミドリもスコープと電波変換してスコープ・スナイパーとなる。最後にメトリーの手を取るだけだ。
エメラルド色に輝く夜太郎は暗黒太陽を見据えながら、力強く雄叫びをあげた。

「行きますよ、みなさん!! アカシックレコードレベル13……アクセス!! これが……これこそが私達の物語の、絆の力だァ!!”クァッド”!!」

爆発し一気に輝きが静まる。すると現れた電波人間が暗黒太陽に向かって弾けるように飛び出した。夜太郎とメトリー、キミドリとスコープが四重電波変換をして完成した電波人間はキングステラの戦闘周波数すら圧倒的に完膚なきまでに上回る。彼は目にも留まらないスピードを実現した。
ロックマンの意識を置き去りにして、四重電波人間は強烈な一撃を暗黒太陽に炸裂させた。直撃した箇所が、プロミネンスの火柱のように盛大に爆発する。そして息つく暇も与えさせず、ノイズの壁を突き破ろうとライフルと鎌が混じったような武器——ガンデスサイズを打ちつけていく。見る見るうちにノイズの鎧ともいえる固い守りが剥されていった。
その光景にロックマンは呆気にとられた。まるで付け入る隙がない。最前線で暗黒太陽を攻略していくエメラルド色の電波人間は、

圧倒的な力で未来を切り開いていった。

「す、すごい・……」

『四人分の電波変換だって……。なんて力だ……』

そして決着の時だ。キングステラが悲鳴を上げた。

《ヴァヴァ、アッ……アッ……アッー！！　ク、クソ、ヴァヴァァアああ！！》

キングステラはノイズの装甲全てを突き破られてしまい、そのまま四重電波人間に内部の侵入を許してしまう。

そして徐々に暗黒太陽が上空に持ち上がっていく。中から夜太郎達が押し上げているのだろう。やはりそのようで、暗黒太陽の中から四人分の声が混じった呼び掛けがロックマンに送られた。勝利へと、太陽が昇っていく。

《ロックマン！　私達はこのまま宇宙空間にコイツを突きあげて爆発させます。なので天井の破壊をお願いします！！　私達の道を作ってください》

「で、でもそれじゃ……キングの爆発に巻き込まれちゃうじゃないか！」

《時間がありません！！　早く！！》

「でも……！」

キングステラの戦闘周波数とノイズの密度は星一つ分はある。それが間近で爆発を起こせば、いくら四重電波人間でも命の保証はないだろう。

ロックマンは時間が追いたてる中で、判断を渋った。だが、夜太郎たちはロックマンに約束した。

《生きて、帰ります！！　必ずです！！　だから、今は私達を信じて下さい！！》

ロックマンはその一瞬で、夜太郎たちとの思い出がよみがえった。だが、ロックマン達は世界を救わなければならなかった。ロックバスターを空に向かって構えた。ロックマンはスバルとして、チームの仲間を、家族を信じて送り出す。

「……う、うわあああああ！！」

ロックマンはロックバスターにエネルギーを溜めて、天井に風穴を開け、道を開くべく発射した。エネルギーの弾は天井を突き破り、宇宙への道を、勝利への道を切り開いた。

四重電波人間はロックマンにお礼を言うと、太陽があるべき場所にキングステラを突き上げていく。

それを見上げ、不安に思ったロックマンは、太陽の中の英雄に叫んだ。

「必ずですよ！　地球は守りますから、生きて帰ってきて下さいよッ！！」

だが返事はない。太陽はすでに高く昇って、声が届いていなかったのだろうか。

そして少しの時間が経つと、夜太郎たちがキングステラに止めを刺したのだろう。穴の開いた天井から、目も眩む輝きが差し込んできた。遠いところで爆発したのか、宇宙が真空だからなのか、爆発音はまったく聞こえなかった。

ロックマンは全てが終わったのだと思い、膝を突いて上がった息を整える。

「や、約束ですよ……。帰る場所は守りますから、生きて……」

ロックマンは夜太郎たちの身を案じていたが、事態はまだまだ解決できていない。感傷に浸る間もなく、ウォーロックがこれからの作戦の方針を告げてくる。

『おい、スバル。時間がねえ。サン・ゴッドを探すぞ。太陽風がまた吹き込んでくる前に何とかしねーといけねえ』

「えっ、待ってよ。まず夜太郎さん達を探しに行こうよ。多分ケガをしていると思うから」

夜太郎達の救出を提案するロックマンだったが、ウォーロックは却下した。そんなことをしている時間はないのだ。

幸い、キングステラが辺りの星のノイズを喰らい尽くしたおかげで電波変換ができる状況になった。だが、また太陽風が吹き込んでくれば、本当に打つ手がなくなる。ウォーロックとしてはそれだけは避けたかったはず。

『ダメだ！　今はサン・ゴッドを探す！　それがアイツらの望みでもある。命を懸けて作ってくれたチャンスを無駄にするな』

「そ、そんな……」

『聞き分けろスバル。アイツらは帰ってくると言った。俺達はそれを信じるしかねえんだ！』

ウォーロックの言うとおりだった。ロックマンは立ち上がると、研究所の奥の方に向き直った。夜太郎たちが作ってくれたチャンスを無駄にする訳にはいかない。確かにそうなのだ。

「わ、分かった……」

ロックマンは研究所のデータからサン・ゴッドの居場所を探ることにした。

それからしばらく。マーキュリーベース研究所内にあるデータをロックマンは通覧している訳だが、めぼしい資料は見当たらなかった。どうやら、この研究所内に他の人間はいないようだ。

ロックマンは途方にくれていた。水星の施設の中で一人、ポツンと佇んでいる。するとウォーロックが仕方がないといった風にスバルに告げる。ここは危険だと判断したのだろう。

『仕方がねえ。いったん地球に戻るぞ。アレだ、キグナスの力を使え』

「……わ、わかった。同じ太陽系内なら何とかなるかも……」

渋々ながらだったが、ロックマンは頷く。我がままを言う場面ではなかったので、すぐに彼はラーニングレギオンを用いて、黒い鳥のような姿に変身した。

手を前方に伸ばして、空間を操作する。この作業は時間がとても掛かり、集中力を要する。プルト・キグナスのようにはいかないのだ。

数分ばかり格闘したが、ロックマンは割れ始めた空間の前で方膝を突いた。どうやら、地球に帰ることもできないようだ。

「む、無理だ……。宇宙空間にノイズが多すぎて、繋がらない……」

『マジかよ。これじゃ助けも求められねえじゃねえか』

いよいよ不味くなったのか、二人の間でしばし沈黙が続いた。ロックマンはぼんやりと割れが治まっていく空間を眺めている。ブラックホールのような黒いガラスのひび割れだ。ただそれは小さな通路に過ぎず、通れはしない。この時ばかりはプルト・キグナスの能力が羨ましい。

ロックマンはそんな事を思いながら、溜め息を吐いた時だった。何と割れた空間から、人の手が出てきた。ぎょっとして、思わず立ち上がる。白い色、それは白人の手だ。キングがまだ生きていた？

そんな悪い予感がロックマンの脳裏をよぎった。二度ある事は三度あるという。油断は出来ない。ウォーロックもロックマンから分離して、威嚇するように背中のたてがみを逆立たせていた。

「まだ生きていたのか……？」

「おいおい、冗談じゃねー。龍、カニ、肉玉、お星様と来て、お次はなんだってんだ？」

今まで多様な姿を披露してきただけに、さすがに次の形態を予想するというものだ。緊張した様子でウォーロックはその出てくる物体を凝視していた。

そしてすぐにその正体が判明する。何のことはない人間だった。キングと同じ白人ではあったが、細身の彼とは間逆で筋肉質だ。大吾といい勝負である。顔も印象的で奇妙な紋様なタトゥーを全身に刺していた。彼はロックマンの方に歩いていく。

出てきた彼は、頭に障害を患っているのか脈絡なくロックマンを殴り飛ばした。

その殴打の瞬間、ロックマンは彼のサングラス奥の目と視線が合った訳だが、本能で縮みあがってしまう。とても冷たい瞳だったのだ。氷をそのまま移植したのかという、現実感のなさだった。気後れし、ロックマンは頬を押さえながら、暴力的な刺青男を恐る恐る見上げた。身長も高くて、威圧的だった。

「な、何すんだ……」
『コイツ……どうやってここに来やがった』
刺青男はウォーロックを蹴りとばすと、道を無理やり作ってロックマンに詰め寄り、胸倉を掴んだ。
「イライラさせやがって！　遅いんだよ!!　ノイズを取っ払うまでに時間をかけ過ぎだ。チッ、おかげで祭りに出遅れてしまった」
「お、お前……なんなんだ？」
「へえ、覚えてないのか？　俺の事を」
刺青男は飽きたようにそのままロックマンを突き飛ばすと、研究所の様子を観察し始める。そのときロックマンは、辺り物色する彼の姿を見て驚愕した。彼の来ている服は囚人服だったのだ。白黒のシマウマで何の説明もいらない服装だ。
そんなまじまじとした視線に気がついたのか、刺青男は分かりやすく溜め息を吐くと、ポケットからナイフを取り出した。そうやって脅しを交えつつ、尋問してくる。確かに犯罪者でロクな人間でないことが確定した。
「おい、ジロジロ見てると殺すぞ。……っと、いけねえ。クソ……テンキュウ高のヤツらはどこだ？」
「……？　は、犯罪者に教えることは何もない……」
「おいおい、イラつくな。お前の意見は聞いてないんだよ？　質問に答えろ……っ」
刺青男は凄みを利かせた声で脅したかと思えば、人間とは思えない体捌きでロックマンの背後に回り込んで、首筋にナイフを突きたてた。ウォーロックも反応できない早技だ。最近の犯罪者は電波人

間を越えてくるらしい。

「さ、教えろ。俺は短気ですぐヤッちまう……コイツばかりはどうしようもねえな」

「なっ……」

「ああ、怯えるな。地球規模の異常事態だ。犯罪者だって仲間だろう、なぁ？」

刺青男はとても仲間とは思えない態度で、無理やりロックマンをテンキュウ高校生の居場所に連れていく。もちろん何度もウォーロックが襲いかかったのだが、彼にまるで隙はなく逆に痛めつけられた。

彼は人間とは思えないプレッシャーで、ずっとロックマン達を支配していた。

そしてロックマンは脅されながら、ゴッドブレス・ドラゴンがいた場所に案内させられた。そこでテンキュウ高校生たちが気を失い眠っている。

ロックマンは彼らの処遇をずっと悩んでいたが、刺青男の登場によって、肩の荷が下りる事になる。

「ご苦労」

刺青男はロックマンを解放すると、おもむろにテンキュウ高校生の方に歩いていく。すると手を前方にかざして、眠っている少年少女たちに狙いを定めたかのように集中し始める。チリチリと何かがほとばしり始めていた。

すると恐ろしい事態が起きた。寝転がっている高校生たちを取り囲むように、結界のような薄い膜の牢獄が出来あがっていくのだ。それも凄まじい速度で作り上げていき、数百の檻を瞬時に作りだし

た。
　すぐに良からぬ事をしでかす刺青男が予想できた。ウォーロックは刺青男に体当たりをしようとするが、檻と同じような物質の板に阻まれて逆に吹きとばされる。同じようにロックバスターも板に阻まれた。

「邪魔すんな。こっちは長年何も食ってないんで、エネルギー不足なんだ。これじゃ、祭りを楽しめないんだよ」

　邪魔をする彼らを鬱陶しそうにあしらうと、刺青男は太い腕に血管を浮き立たせて力を込める。
　そして高校生を囲んでいた牢獄の数々がひしゃげたように潰れだし、中身ごと小さく圧縮されていく。最後には檻だったものは小さなピンポン玉くらいに圧縮されて、ゆらゆらとした命のスープのようにたゆたうのだった。
　刺青男はそれを確認すると指をくいっと自分の方に曲げた。ピンポン玉が次々と巨漢に吸収されていった。ロックマンは言葉を失った。この男は目の前で数百の命を喰らったのだ。

「お、お前……」
「ふえぇ。生き返った……やっぱり品種改良した人間は美味だな。さて、これで準備は万端」
「さっきの人たちをどうした？」
「さて、始めるか」
「聞いてるのか？」

　刺青男は気にも留めていない。信じられなかっただろう。

「殺したのか……？」

ロックマンは化け物を見るような目で見つめ、刺青男に問いただす。それが刺青男にとっては鬱陶しくて堪らない。

「黙れ。どのみち、長時間ノイズで操られてたんだから助からねえ。ゴミの有効利用、リサイクルっていうのを知らないのか？」

刺青男は聞く耳を持たない。勝手に現れて、勝手に殺して、勝手に話を進める。何も悪びれた様子を見せずにロックマンに命令をする始末だった。

「サン・ゴッド達をやりに行くんだろう？　俺が力を貸してやるから、さっさと穴を開けろ」

「ふざけるな！」

「おいおい、ガキのクセに目上への態度がなってねえな」

この男は横暴さが極まっており、息をするように暴力をふるって他者を屈服させる。ロックマン相手でもそれは変わりなかった。

拳で訴えると、倒れたロックマンに言い放つ。

「俺はお前の意見を聞いてねえ。お前は俺の言う事を聞いておくのが一番でそれ以外は許さない。……強がるなよ。これから何をすればいいのか分からなかったんだろう？」

「この……っ」

「はぁー、イラつかせるねえ。やっぱりあの時殺しとくべきだったか……チッ。とにかく言う事を聞け、ガキ」

ロックマンは不満でいっぱいだったようで、この男の言う事を聞こうとはしない。しかし刺青男も馬鹿ではないようで、ロックマンの動かし方を心得ていた。

魅力的なフレーズを頑固な少年に吹き込んでやる。

「頑固なことも結構だが、早くしないと”お友達”が全員が死んじまうかもなァ……」
「なに……？」

刺青男はようやく食いついたロックマンに対してここぞとばかりに懐柔を試みる。彼にとって友達ごっこの人間なんて単純なものなのだろう。

「もう一つのチームが戦ってるんだろう？　相手はインフィニットだ。あれは、間違いなく殺される」
「なんでその事を……」
「仇に、すがらなければならない状況があるってことだ。同じようにお前らも今は犯罪者にすがらなければならない。これが最後の警告だ。俺の言う事を聞け……！」

この男は絶対に引き下がらない。ロックマンは選択を迫られると同時に、この男がある程度、今回の事件の経緯を知っていると感じ始めていた。ブライのチームの事を知っているあたりその推測は間違いではないだろう。だが、この男は信用ならない。

ロックマンは何度か、男を拒絶する事を考えた。だがそんな自分の価値観よりも大切にしなければならないことがある。結局、夜太郎やハイドの思いを尊重して、この男が示す可能性にすがるしかなかったのだ。皮肉なことに彼の言う通りだった。手詰まりで、犯罪者にすがるしかない。正義の味方が聞いて呆れる状況なのだ。

この男に特別な力がある事はテンキュウ高校生の命で理解していた。ロックマンはプライドを捨てて頷いた。

「お前の事は信用しない……許さないし、認めないけど。今だけは協力してやる」

「いい子だ。首を振ってたら、その首を飛ばしてるとこだったね」

冗談に聞こえないが、ロックマンは相手にしない。今すべき事を問う。

「で、僕はどうしたら良い？」

「太陽の中心部に座標を合わせて、穴を開けろ。ここからなら距離が近いから出来るだろう？」

「太陽って、そんなことしたら丸焼けになるんじゃ……それにノイズも」

「いや、そうでもないんだよな。間違っても太陽の表面じゃないぞ。”中”だからな。いいから俺の言う事を聞け」

「……分かった」

表面上の協力を約束して、ロックマンは再びラーニングレギオンをして、空間の壁を突き破り始める。

だが駄目だ。やはりノイズが邪魔してくる。すると約束通り男が手を貸してきた。周波数を流し込んでくる。その時、ロックマンはゾッとした。確かに力強い周波数でノイズの壁など払いのけてくれている。

だがそれ以上に不気味だったのは彼の周波数の質だった。彼の周波数はムー人に似ていた。いや、それよりももっと強烈な人間を逸脱した違和感を覚えさせられた。

ロックマンは確信する。この男が人間の皮を被った何かだと。

しばらくして、男の協力もあり太陽の内部に繋がる穴を開ける事に成功したのだった。

刺青の男はロックマンに祭りの始まりを予感させた。この祭りは尋常ではなく危険で魅力的であると、その悪に染まり切った笑みで伝えていた。

もちろんロックマンも分かっている。ここから先が始まりだと。思えばスタート地点に立つのでさえ多くの犠牲を擁した。きっと一筋縄ではいかないだろう。

「行くぜ、ガキ。太陽……いや太陽系エデンの中に！」

「そこにサン・ゴッドが……」

「なに、俺の言う事を聞いとけばいいんだ。さあ、祭りの始まりだ！」

そして穴に飛び込んで降り立った世界は、メトリーが解放していった電脳とは比べ物にならない灼熱の世界だった。元は遺跡だったのだろう、像らしきものと石板がちらほら転がっている。ただサン・ゴッドの仕業なのか道は全て燃えており、遺跡の神聖さも焼き払ってしまっていた。どこもかしこも炎が牙を剥く。暑過ぎて景色が大きく歪んで上下も分からないほどだ。電波人間でも汗が吹いて脱水する地獄であった。それでも幸い、内部には太陽周辺ほどのゴッドブレスノイズは漂っていない。だが、厳しい環境には違いないだろう。

ロックマンは頭がくらくらし辺りを見回す。すると男が涼しげな表情のままで、この世界を簡潔に説明した。どうやら彼はここと似たような所を知っているのかもしれない。

「よく聞け、ここはエデンっていう。コイツは恒星から惑星を監視するためにばら撒かれたムカつく装置。ちなみに大規模エデンが老朽化したものをブラックホールサーバーって言うんだよ」

「う、嘘だろう。太陽の中にこんな世界があるなんて……」

「油断するなよ。サン・ゴッドの手下がこぞって邪魔をしてくるは

ずだ」

男が言うや否や、灼熱世界の奥の方から、白い電波体が飛んできた。羽は二対で四枚。眩い天狼星のような装甲は際立つ白色だ。肌は冷たい青である。

ロックマンは見たこともない電波体に息を呑んだ。それも一体ではなく、群を成して大挙している。

男は先陣を切り、駆けだした。

「わらわらとドール共がさっそく来たか！」

エデンでの戦い、ロックマンと謎の男の太陽への挑戦が始まった。

eden―39：エデン

【宇宙サイド：エデン大階段前】

チームゼロが太陽エデンへ侵入したころ。

チームエクスも終末宇宙エデンへの切符を賭けて、パラス・アテナと長く続く戦いを繰り広げていた。体感時間としてはもう何時間も戦っているほどだった。

ブライやキリン・ライトニングを筆頭に攻撃のチャンスを作っていく。そしてカペルがマルチエフェクトで、チームのサポートをするといった作戦で立ち回る。個々の力ではパラス・アテナに劣るが、ここ一ヶ月の間で対レギオン用の戦闘訓練はしっかりと積んだ地球とFM星の戦士である。徐々に、パラス・アテナを押し始めた。

特にブライとカノンのコンビネーションが素晴らしい。普段、ブライはカノンを剣として使うのだが、今回ブライはカノンを盾として使っていた。守りを彼女の電波光壁に任せて、ブライは防御を切り捨てた圧倒的な手数の格闘を見舞っていく。

それでも相手はレギオンだ。その攻撃を見切ったパラス・アテナの重力玉がブライ目がけて何度も反撃を試みた。だが、電波光壁の守りは相変わらず固い。電波障壁を失ったブライの弱点を妹がしっかりカバーする。

一方ハープ・ノートは戦闘ではまるで役に立たなかった。だが、彼女の生まれ持った力は誰よりも特別で至宝だ。傷ついたチームの仲間を回復させてやるという無限ループ作戦に尽力し、チームに貢

献しているのだ。
　ブライが攻めて、カノンが守り、カペルが固め、ハープ・ノートが回復させるという、それぞれの得意技を炸裂させて敵を追い詰めていく。
　これではさすがのレギオンといえども、今までのような圧倒的勝利を収めることはできない。これではパラス・アテナは戦いの中でブライ達の評価を改めるしかない。彼はすでに、今までの歴史の中の最高の作品としてブライ達を認めて、余裕のない必死な戦いようだった。彼の美しい澄まし顔が恍惚の笑みに変わり始めていく。

「ウフフッ、俺の予想を上回ってくるのか……！　イイィッ！　お前らは素敵だ！　ス、スゴイよォオッ！！」

　パラス・アテナがチームエクスの十数体の電波体を相手取りながら、徐々に傷付きながらも歓喜の悲鳴を上げていく。男を装った声が女らしく、水っぽく泣く。今、ブライの暗黒闘気を込めた右ストレートが顔面にヒットした。「ブライアーツ！！」彼の雄叫びと同時に、次はフックにアッパー、浮かんだところで回し蹴りのコンビネーションを決める。さしものパラス・アテナも後ろに吹っ飛ばされてしまった。だがブライは逃がさない。さらに追撃して加速の付いたサマーソルトで感じ始めた魔女を空中に打ち上げる。
　するとそれを待っていたのか、タイミングを合わせて二体の残影がパラス・アテナに跳びかかる。打ち上げた所にキリン・ライトニングとソウル・レイダーが息を合わせ、渾身の一撃を繰り出したのだ。

「行くぞ！　ミライ！！」
「はい、師匠！！」

　一ヶ月間の師弟関係で編み出した技は協力に違いない。パラス・

アテナは瞠目した。
　これは雷速の騎士、神速の騎士の高速コンビネーション攻撃である。宙を縦横無尽に飛び回り、槍と剣が目にも留まらぬ圧倒的手数で痛めつけていく。

《ライトニング・アスタリスク！！》

　次の瞬間、雷が伴った星型の斬撃が炸裂して中央の一点を槍で貫いた。パラス・アテナの胴体に大きな風穴が空いて、突きとばされたその体は宙を舞い、大階段の踊り場に転がった。
　確かな手ごたえを感じたソウル・レイダーとキリン・ライトニングは着地すると同時に、チームの皆にエデンへの突入を指示した。キリン・ライトニングはエデンへの扉に向かうため、すでに大階段を駆け上がり始めていた。チームの残りも後に続く。
　しかし階段を上る途中で、キリン・ライトニングが立ち止り、槍を構えた。彼の目の前では穴の開いた魔女がニヤリとしながら、立ち塞がっている。驚いたことにまだ息があるようだ。
　キリン・ライトニングは眉をひそめる。ブライもリーダーらしく一歩前に出て、拳を構えた。

「おいおいよ。並の生命力じゃねえな……」
「……寄生虫が」

　そんな辛辣な評価を二人は口に出すと、魔女に止めを刺そうと、にじり寄る。するとパラス・アテナは吐血して咳き込むと、ふいに手に持っていた水晶をブライに投げつけた。ブライはそれを叩き割ろうとしたが、カノンが慌てて受け止める。
　パラス・アテナはカノンに向かってニヤリとして頷くと、彼らチームに道を譲った。その水晶は彼からの手向けだ。

「その水晶を持って行け。何かの役には立つだろう……」
「何のつもりだ？」
ブライは訝しげにきつく目をしかめる。彼にすれば敗者からの情けなど気分が悪い。頬なんて引きつっていた。そんな短気な彼がパラス・アテナに詰め寄っていく。それでもパラス・アテナは抵抗の意思さえ見せなかった。
「俺はお前達を試さなければならなかった。最後の舞台に立つ権利があるのかどうかを……。それで、お前達は合格だった。先に行って、全てを確認してくるといい」
「解せん！　なぜ、そのような真似を……」
「行けば、分かる。力なき者にはとても見せられない世界の全てを理解できる。ふっ、俺は先に休ませてもらおうか……もう、疲れたんだよ……」
全ての重荷から解き放たれたかのような、そんな安らかな声色で未来を少しだけ占うパラス・アテナだった。彼はそのまま踊り場の脇に腰を下ろすと、眠るように目を閉じて何も言わなくなった。氷のようなノイズが待っていたかのように、亡骸を分解し始める。
チームの各員は終始思わせぶりなパラス・アテナに難色を示すが、今は彼にかまっていても仕方がないし、もう彼は死んでいる。まるで役目を終えたかのように安らかな寝顔だった。
今は考えても仕方がない。今は行動を起こして未来を掴むだけだ。チームエクスは階段を駆け上がり、エデンへの門をゆっくりと開く。その門はまるで楽園へと続くかのようで、天使の彫像が両脇を固めていた。ただそれらは凍りついており神聖さと不気味さを醸し出す。
それでも門が口を開き、柔らかい光が差し込んでくる。空気は暖かい。本当に楽園のようだ。まるで錯覚をしてしまう光景が確かに目の前に広がった。死の世界クリアウェーブとは対照的に、理想郷

がそこにはあった。緑の野原が暖かな印象で、そこらに地球のものではない変わった建築方式の住居が並んでいた。まるでトーテムポールのよう。奥には古代神殿のような遺跡が確認できた。

ブライは息を呑むが、まずチームの先陣を切って、奥に進んでいく。ここが楽園と呼ばれるインフィニットの国だ。緊張を張りながら辺りを見回す。そしてふと青空を見上げた時だった。ブライは酷い頭痛を覚えて、頭を抱えて体を丸めた。シュンランと出会った時と同じような痛みの強さと周期らしく、脂汗が酷い。

「ウッホゥアッハァ！」

「お兄ちゃん！！」

カノンは慌ててブライに駆け寄り、背中を撫でてやる。しかし船酔いどころではないのでまるで効果がない。ブライは身震いすると、激痛に悲鳴を上げた。歯を剥いて、それはまるで死にそうな犬の表情だ。見る分には、思春期にありがちな統合失調症の患者だった。

チームの全員が何事かと、ブライの元に駆け寄って様子を見守る。ハープ・ノートはカノンと一緒になってブライの心配をし、チューンリカバリーで助けてやろうとする。だが効果がない。

今度はブライがブツブツと、何かに操られるようにうわ言を始めた。今度は末期の痴呆患者なのか。徹底しているものだ。

「クッ……こ、ここに来たのは……偶然じゃない……だと……？

お、俺は……舞台に……あっ」

「お、お兄ちゃん！　また女の人の声が？　大丈夫？」

「ア……イツが……やっぱり。俺が……んッ！」

汗を垂らしながら、必死に見えない何かと戦っているようだ。一人で何かと対話しているかのようなブライだったが、すぐに何者かからの声は聞こえなくなったようで、ピタリとその独り言は止まっ

た。落ち着いたようで、息を整えるとカノンに首を振って見せた。背中をさすられる自分を情けなく思ったらしい。

「もういい……大丈夫だ。」

「……声が聞こえたの？　大丈夫？」

ブライは頭を抱えた。見る分にはなかなか様になる。一人憂い顔で、役者に徹しきっているようだ。

だが彼は大まじめなのだろう。ぼんやりと遠くを見つめており、まさに悲劇のヒーローだ。

「アイツは俺を操るつもりなのか……？　ここに来たのもアイツの意思だとでも？」

「お兄ちゃん……大丈夫？」

ブライは立ち上がると、額に手をやって考え込む。指の間から目の前に広がる景色を睨みながら、この世界の全てに嫌気を示したのかようだ。そうやって唇を噛みしめている。しかし、あまり噛んでいても痛いだけなので、血が滲んだ唇を舐め取るとブライは溜め息混じりにチームの方に向き直った。

自分の不安定さを危惧して、自分の今の状況を説明してやった。以前の彼ならあり得ない行動だが、子供みたいなこだわりは捨てたということだろう。

「よく聞いてくれ……。俺はどうやら、普通の人間じゃない……アイツは俺の事をデコイという……。チッ、俺は囮だと……」

「大丈夫？」

カノンは不安そうに兄を見つめている。シュンランと出会ってからの彼は変わり始めてしまった。もちろん良い意味で変わり始めた

部分もあるが、彼の基本的な精神の安定は失われつつあった。時折儚さを見せる兄の背中が悲しいのだ。

ブライ本人もそれは承知らしい。だからこそ、チームの為に自分の現状を語っているのだろう。さんざん偉そうにしておいて、先のように動けなくなってしまってはチームの足を引っ張る。プライドが高い彼はそれを良しとしない。

「いつからだろう……。いや、いつもか……。俺は俺が何者であるか、ずっと知りたかった。昔の俺にとっての正体と拠り所はムー人とその誇りだったが、本当は違った……」

すると次の瞬間だ。皆がブライが落ち込んでいると思っているその瞬間である。彼は何を思ったのか、まるで他人事かのように爽やかに笑い飛ばしてみせた。その表情にチームの全員がハッと意識を改めさせられたはずだ。

「今、俺は自分が何なのかさえ分からない。もしかしたら操られているのかもしれない……。だからもしも、俺が俺じゃなくなった時、その時は俺を討て……！」

その言葉にハープ・ノートが首を振った。弱気なブライなんて、見る価値もないし、見ていて情けない。気持ち悪いとさえも思えて困ったものなのだ。ブライが許すのなら、彼女は思い切り顔面を殴り涙ながらに訴えたところだろう。ブライなんて我がままで、自分勝手で、周りに迷惑を懸けているぐらいが調度良いのだ。変にかしこまられてはペースを乱されて邪魔臭いだけ。

「ソロ君が操られているだって？　そんな訳ないよ。いつも頑固で、融通がきかないアナタが操られる訳ない！　何度サテラポリスの協力を断ったことか！　私は根に持っているからねっ」

「フッ……。無論、俺だって操られるつもりはない。俺が決意したこの気持ちが嘘だとは思いたくはないからな。俺が今、ここにいる理由は俺の意思だ！　少なくともそれだけは断言できる」

格好良いブライは良い表情をしていた。

ｅｄｅｎ―４０：天使に囚われた英雄

ブライを襲った偏頭痛こそあったが、それ以外は特に何も起こらなくて、チームは奥に見える遺跡に向かっていた。カノンとブライはそこからインフィニットの周波数と魔人の周波数を感じている。

そしてしばらく走れば、遺跡の入口付近にたどり着いた。遺跡の壁には血管のような赤い葉脈が伸びている。遺跡自体は上空に高く伸びて最上段は雲に隠れて見えないほどだ。ただブライ達は、その高さとは別に恐れを成して立ち止まってしまう。

遺跡の入り口に二人の人影が見えたのだ。このような宇宙の辺境に人間が住んでいる訳がない。意を決して恐る恐る歩み寄る。恐れるほどの周波数を放っている二人組にチームに緊張が走った。

そして彼らの正体が判明するほどに近づいたところで、カペルの隣のエアディスプレイが震えた声を上げた。もちろんカペルも驚きと共に、感激してしばし固まる。普段冷静な彼だったが我先にと二人組の方に走り出した。忘れもしない親愛なる人がそこにいたのだ。もちろん彼の隣のエアディスプレイも歓喜の悲鳴で大盛り上がりだった。

楽園にて奇跡が起きたのだ。二人組の正体は通信向こう側の居残り組のほとんど全員が知っている。そう、彼らは英雄である。

リフレインは声を失った。まさか生きていたとは思っていなかったのだろう。ワタルもエリアもケフェウスもそうだった。

《信じられん……。私は夢を見ているのか》

《いや、アレは間違いない……大吾さんですよ！　あの人の顔を忘

れる訳ない》
《そうよ、お父様よっ！　まあ、生きてらしたんだわっ》
《きずなの者が無事だったのか……わあ、良かったぁ》

リフレイン、ワタル、エリア、ケフェウスの口振りから、カペルの目の前の二人組がきずなクルーだと分かる。プルト・キグナスに連れ去られてこんな辺境の場所に送られてしまったのだろうか。しかしなぜこんなところにぽつんと立っているのか。いや、推測は後だ。カペルは駆け寄ると、二人に呼び掛けた。怪我はないか？　体調はどうか？　長い放浪が予想できただけにカペルの心配は当然のものである。

しかし奇妙なことに二人は黙りこくって反応を示さない。

カペルが不思議に思っていると、体格のいい初老の男性が口を開いた。彼はスティーブ・ポート・伊集院。大吾の右腕できずなクルーのベテラン宇宙飛行士だ。彼は生気の宿らない瞳をカペルに送り、じっと見つめて抑揚のない口調だった。

「ココにハ来るナ……。コレ以上はキケンだ。帰レ……！」
「スティーブ様……何をおっしゃいます」

カペルは何が何だか分からない。帰れだなんて言われる筋合いはないだろう。せめてスティーブたちも連れて帰らなければならないというものだ。おろおろとカペルはスティーブの手を取るが、拒絶されてしまう。

そんな奇妙なやり取りをしているカペルに、ブライ達が追いついた。すると今度は大吾が口を開く。スバルは彼似なのだろう、ひげ面と生気ない目を覗けばスバルの親と良く分かる。彼も抑揚のない口調であった。

やはり彼らはおかしかった。よく見ると彼らは服装も普通ではない。真っ黒な全身タイツを着こんでいる。まず地球のファッション

ではない。肩や胸に肉を抉ったような丸っこい穴が開いており、少し気味が悪い。胸の穴なんか心臓に届いているのではないかと思わせる。彼は宇宙飛行士だったはず。これではまるで実験モルモットではないか。管理用なのか、首にバーコードが刷られており疑いようがなかった。

そんな奇妙な風貌と口振りの大吾なのだったが、彼はカノンの水晶を見つけると、パラス・アテナの試練を突破してきたチームの背景を認識したようだ。もしかしたら彼の中身はすでに大吾とは別の何かかもしれない。

「ナルホド、舞台への権利ヲ……だが、お前達デハやはり……」

大吾は難色を示し口ごもったところ、今度は遺跡の入口から、呆れた声が聞こえてきた。乱暴な口振りと、淑やかな乙女の口調がきずなクルーを叱りつける。なにやら彼らの勝手な行動を責めているようである。

ブライ達は次から次にやってくる奇妙な出来事に、事態が理解できなかった。そしてすぐに入口から黒い電波体と、金色の電波体が現れた。彼らもきずなクルー同様で相当の実力者だった。そのためカペル含めブライ達は大きく後退した。きずなクルーが目の前にいるが、これ以上彼らに近づく事は危険だと察知した結果である。特にあの黒い方が持つ戦闘周波数は異常な数値だ。それに何より彼はウォーロックと瓜二つだった。横の金色乙女も、黒いウォーロックとほぼ同等の力を持っているため油断はできない。胸のざわめきを覚えつつチームは、その二体の電波体を監視する。いや釘づけにされていると言っても良い。

まず現れた彼らはきずなクルーのそばに寄ると、何かを耳打ちをした。

次に黒い電波体が大吾をなじったかと思えば、胸の穴に注射器を差し込んだ。ガラスの中にはドロドロとした液体が詰まっている。

そんなモルモットのような扱いに、ハープ・ノートが謎の電波体の行いを非難する。おそらく味方ではないので、ギターも構えて有事に備える。彼女はスバルから大吾の写真を何度か見せてもらっており、大吾の顔は知っていた。スバルの父への乱暴は許せない。

「何をやってるの、アナタ達！　オジサン達を離しなさい！！　それに君……ロック君にそっくりだけど何者？！」

黒いウォーロックは首を傾げ、ハープノートを睨みつけると、チームの一人一人を品定めするかのように見回す。その後わざとらしく肩を竦めて馬鹿にする。その辺りはウォーロックとよく似た仕草だ。

ただ大吾に乱暴する辺りがいただけない。やはり彼は内も外も黒いウォーロックと言える。

「はぁ？　離せと言われて離す訳はねー！　俺達が敵だってなんとなく分かってるだろう？　ションベンクソガキィ」

そして金色乙女は乱暴な黒いウォーロックをたしなめる。客人に失礼だと言っている。

「ダーメ、ウォーセヴティ。品のない言葉遣いは格好悪いって思うよ。それともオリジナルと比べられるのがイヤだったのかな？」

「ハッ、黙れ、ヴィーナス。俺の方が偉いんだから、偉そうにするのは当たり前だ。それに俺様は格好いい。あんな粗悪品よりも俺は全てが上だからなッ」

「あらあら、まあ……ジェラシー来てるね」

きずなクルーやハープ・ノートをよそに喧嘩を始めるウォーセヴティとヴィーナス。

そんな呑気なやり取りに、大吾が割って入ってハープ・ノートに訴えた。今でこそ彼らは和やかだが、内に秘めたものは恐ろしい。大吾はそれを刻みつけられて知っているのだろう。

もちろん大吾のその言動は余計な真似で、ウォーセヴティとヴィーナスの怒りを買ってしまう。

「ニゲロ……早ク。コイツらにハ……勝てナイ」

「お前ェ、余計な事をピーチクパーチク……！　オヤジとインフィニットを苛立たせるような真似はやめろ！　大人しくやがれってんだ」

黒いウォーロックが憤った。大吾の体に毒々しい液体をこれでもかと流し込むと、今度はヴィーナスに当たり散らす。

「おい、ヴィーナス！！　コイツらまだ意思を持ってるじゃねえかッ。他のヤツらはもう人形なのにどうなってやがる？！　しかもコイツら勝手に逃げ出すしよォ。オヤジに怒られるのはこっちだってのによ」

「あーらら？　そんなの私に言わないでよ。このオッサン達だけ異常な精神力なんでしょう。まー、早く連れてってパパに完璧にしてもらわないとね」

ヴィーナスはそう言うと、スティーブの体にも液体を流し込む。これでは二人は薬漬けだ。

そんな二人のやり取りと行動。どうやら大吾とスティーブは遺跡の中で何らかの洗脳を受けていることがうかがえる。そして他のきずなクルーはすでに洗脳済みのようだ。大吾とスティーブだけが異常な精神力で、脱走してカペルらに逃げるよう促したのだろう。

だが結局、ウォーセヴティらに追いつかれてしまい今の状況という訳だった。

薬漬けにされてしまい、倒れて動かなくなったきずなクルーの二人。ウォーセヴティとヴィーナスはブライ達を気にも留めていないようで、それぞれ大吾とスティーブと電波変換して、その場から立ち去っていってしまう。彼らは何事もなかったかのように遺跡の奥に消えていく。

ハープ・ノートは彼らを引き留めようとするが、意外なことにブライに制止された。余計な事を言うなと、彼は彼女に言う。あの二体の電波人間の戦闘周波数はインフィニットを優に上回っており、下手に気を損ねると間違いなく全滅を招く。幸い敵の方はまるでブライらに興味を示していない。今は堪えるしかないだろう。

するとウォーセヴティの方の電波人間が立ち止まり、チームの方に振り返ると警告してきた。全てお見通しらしい。

「ここから先に進むのは勝手だが、お勧めしないぜ？　まっ、俺は俺で仕事があるが、どのみちインフィニットに殺されるだけだぜ」

不吉な笑みを浮かべる電波人間はそれだけ伝えると、遺跡の中に消えていった。

ブライ達はまったく動けなかった。蛇に睨まれた蛙とはこの事で、今なお生きている実感がしていないはずだ。

ブライは苛立ちを浮かべると、舌打ちした。

「クソッ！　なんだアレは。あんなのが、この世界にいるのか……！」

まったく動けなかった事に怒りを浮かべているらしい。そんなブライに、エアディスプレイの方からエリアが急かしてきた。父親を見つけてしまったために興奮気味で、彼らに迅速な追走を求めている。ようやく見つけたのだから無理もないだろう。だがブライは溜め息を吐くと、キリン・ライトニングにエリアの相手を任せた。そ

んな簡単な問題ではない。現に心を折られかけた。
　キリン・ライトニングはエリアの対処に追われる。彼女は依然喚き散らして、さっさと追いかけろとうるさかった。よほどスティーブを救い出したいらしい。しかし実際に戦うのはキリン・ライトニング達だ。色々と考えるところがある。インフィニットが今回の任務で一番の強敵だと思っていたが、それをはるかに上回る電波人間が二体もおり、さらにはきずなクルーを洗脳して操っている。それでも大吾達は精神力で持ちこたえていたが、もうさすがに抗えないだろう。次に相対する時はお互い完全に敵同士だ。きずなクルーとおそらくレギオン。それらの組み合わせは危険すぎる。
　エリアの気持ちは汲まなければならないが、全滅は避けたいところだった。キリン・ライトニングはエアディスプレイに目をやると、後ろの方に映るリフレインに任務の方針を再確認した。今のでリフレインの考えが変わってしまったかもしれないのだ。

「ありゃなんですか、聞いてませんよ？　パッと見インフィニットよりもずっと……まったく、どこが楽園なんだか」
《マズイな……それにきずなクルーも敵の手に落ちてしまっているようだ。それにあの強さ……》
《だーかーらー！　早くお父様を助けに行きなさいよ！！　まんまと連れてかれちゃって、役に立たないわねー！》
《少し黙りなさい……今はジョニー君と話しているんだ》

　不満そうなエリアだったが、ケフェウスに後ろに引っ張られてエアディスプレイから退場させられた。気を取り直してキリン・ライトニングは現状の意見を述べる。

「で、どうしますか？　こっちの目的はインフィニットが言っていた計画を止める事です。はっきり言って、さっきのヤツらは想定外ですねえ」

《だが、せっかく生きていた彼らを見捨てる訳には行くまい。……何とか、そうだな……ヤツらの動きを止めることさえできれば。各個撃破に持ち込めるかもしれん》

するとキリン・ライトニングがニヤリと笑って、ブライとソウル・レイダーに向かって手招きする。彼らを話に加えてリフレインに一つ提案して持ちかけてみる。キリン・ライトニングだってきずなクルーだった。かつての仲間を助けたい気持ちは強いのだろう。

「そうですか、博士ならそう言ってくれると信じてましたよ。……決まりですね、俺達は遺跡に侵入しますよ。コイツらと一緒なら、多分何とかなるでしょう」

ずいぶんあっさりとした態度にリフレインが心もとなく思ったようだ。キリン・ライトニング、ブライ、ソウル・レイダーは確かに強いが、インフィニットレベルが相手では、さすがに……というものだ。

《ジョニー君……大丈夫なのか？　口で言うのは簡単だがな》

「元よりそういう作戦でしょう？　インフィニットが一人から三人に増えたというだけです。幸いアイツらは俺達を舐めている。ふいを突けば……俺達の連携ならきっと不可能じゃない」

さっきはキリン・ライトニング達が不意を突かれた訳だが、今度は不意を突き返してやればいい。それにパラス・アテナを倒したこのチームだ。恐れずに有利な状況に追い込めば、可能性は零ではない。

最優先はあくまでインフィニットだが、こうしてきずなクルーの救出も新たに任務に追加された。

リフレインもここから先は彼らに任せる他はないだろう。

《そうか、ならこれ以上言うまい。細かい判断は現場の君たちに任せよう。いいか、くれぐれも無茶をするなよ。危ないと思ったら、君の判断でチームを救うんだ。キミはきずなクルーなんだからな。宇宙の恐ろしさを一番知っている》

「了解っ。任務を続行します」

結局、任務の方針は変わらず続行が決められた。いくら化け物がいるといっても諦められるものではないのだ。

キリン・ライトニングは新たな任務内容をチームに告げていく。そんな中、我慢できなかった人がエアディスプレイの中に一人いた。それはワタルで、彼は戦う事も出来ずにもどかしく思っているようだ。もちろんチームの全員が口には出さずとも、フェニックス・リボンの不在を心もとなく思っている。彼がいればインフィニットとの戦いもずいぶんと楽になっただろう。あの時は負けこそしたが、連戦に次ぐ連戦を重ねており疲弊していた。万全の状態で戦えば、もしかしたら結果は違ったかもしれない。それにカンナを殺されたという事実がワタルをさらに強くしていた。

間違いなく地球最強の電波人間はフェニックス・リボンだ。だがそんな彼にも弱点がある。それはミソラだった。彼女までカンナのようになってしまってはワタルは生きていられない。だから親友に頼むしかなかった。

《ジョニー》

「おう、ワタル。ん、どうした？」

《ミソラを……娘を守ってやってくれ、頼む。悲しいな、俺もフェニックスがいればそこにいたのに……！》

「大丈夫さ。安心してそこから見ておけ。お前の娘が宇宙を救う瞬間を見せてやるよ。ついでにインフィニットの首も持って帰ってやるさ。どーんとな！」

《ハ、ハハ……ありがとう。カンナの仇……取ってくれよ！》

「おうとも！」

そうしてキリン・ライトニングは話を切り上げると、今度はブライの肩を叩いて、あくまで気楽に構えさせる。よほどショックだったようで思い詰め過ぎている。無駄に緊張していては勝てるものも勝てなくなる。いつだって心のどこかに余裕は持っておかなければならないと宇宙飛行士の彼は知っていた。

「おい、大丈夫か。リーダーがビビっちまってたら士気にかかわるぜ？」

「バカめ！　誰がそんな……！」

「うん、大丈夫そうだな。じゃ、リーダー、インフィニットの城に行くとしますかね？」

ブライは馴れ馴れしいキリン・ライトニングを払いのけると、すっかりいつもの調子に戻ったようだ。チームの先頭を率いてインフィニットの待ちかまえる遺跡へと乗り込んだのだった。

そこは一歩足を踏み入れれば、圧迫感が強く、僅かな音も耳につく場所だった。薄暗い遺跡の中は螺旋階段がずっと続いて上へ上へと限りがない。無言で上空を見上げるブライは、まず確認を取るため、壁に手を添える。彼には古代の血が流れており、その刻まれた血の記憶から古代遺跡のショートカットくらいなら探せると踏んでいた。事実ブラックママルの時もそうだった。

しかしエデンはブライさえも拒絶してしまう。流石のブライでも、内部構造を把握することができなかったのだ。舌打ちするとブライは仕方なく階段を駆け上がった。最下層内部の雰囲気は窮屈な空間に圧迫されて息苦しく、はやく上に上がってしまいたい。

もう、どれくらい時間が経っただろう。階段を駆け上っている途中、ブライの後ろでカノンが驚いた様子で短く声を上げた。ブライはそれを尻目に彼女に尋ねた。「どうした……？」その問いにカノンは困ったように眉をひそめているばかり。彼女の隣ではハープ・ノートが食い入るようにして、パラス・アテナから貰った水晶を見ているのが確認できる。水晶の中では何かが映っているのだ。確かあの時パラス・アテナは、水晶が役に立つとだけ言いそれを渡してきた。

ハープ・ノートはカノンと同じように驚きを隠せないままに、思わずと言った様子で口に出す。彼女は素直なので、水晶に映った者の感想をそのまま言葉にしていた。

「ス、スバル君……」

水晶の中には灼熱に燃えるような世界が映っていた。中ではロックマンと白髪の大男が青白い電波体を相手にしていた。どうやら、もう一つのエデンの様子を水晶が映し出しているらしい。

そしてハープ・ノートの呟きは、クリアウェーブでのパラス・アテナからブライ達への呼びかけと同じようになってロックマンの方の世界に聞こえていたようだ。ロックマンが青白い電波体を数体デリートすると、驚いたように上空をきょろきょろし始めた。もちろん戦闘中なので、彼はすぐにロックバスターを構えて、あさっての方に向き直る。もう一体デリートしたところでロックマンが反応を

示した。当たり前だが、こちらの様子は分からないようだ。まるで神様にでもなったようだ。パラス・アテナが偉そうになる訳だ。

《な、何だ、幻聴か？　さっきミソラちゃんの声が……》

「スバルくん！　私だよ。ミソラだよ」

《や、やっぱり。幻聴じゃないのか？　一体どうなってるんだ！　……あ、そうか！　実はミソラちゃんに依存しているという僕の深層心理の表れが、この極限世界で実現してしまったのか！　くぅ、恥ずかしいな！》

《おいスバル、そうなると俺もミソラに依存しているという気持ち悪い図式が出来あがるんだぜ！　あ、そうなるとあの犯罪者も同様ってことになるのか？　おいおい、獣と犯罪者が混じったカルテットってか。胸が熱いな！　ええ、スバル？》

《そ、それは……イヤすぎるよ、ロック！》

あちらではこちらを把握できないからか、太陽の中でなかなか馬鹿みたいな事を言っている。ミソラはその様子に苦笑しかできなかった。

それでもロックマンは大男に置いていかれないように必死に戦いながら、やはり困惑の表情を浮かべていた。彼らはどうやら炎の中を、青白い電波体から逃げながら奥に進んでいるらしい。

《オイ、ガキ！　何をぐちゃぐちゃ言ってんだ?!　お前の首から飛ばしてやろうか？　ええ?》

すると戦闘中にお喋りをしているロックマンに大男が怒鳴り散らした。ハープ・ノートは不思議そうにその光景を観察して彼らの状況を把握しようと努める。ロックマンと共闘している彼は少なくとも見たことのない男性だった。それに第一印象はとても悪い。ロックマンに浴びせている汚い言葉の数々に嫌悪してしまったのだ。例

えばこんな言葉だ。「おいおい、ボケっとしてふざけてんのか？　ケツの穴からガソリン入れて爆破すっぞ」というものだ。ハープ・ノートはその光景を想像して少し興奮するが、やはりこの男、言葉通り、行動通り、猟奇的と言える。水晶の中を観察してからすでに、ロックマンは大男に五発は殴られている。それも顔面ばかり。ハープ・ノートはムッとするが、ふと隣のカノンの様子に気付いた。

隣ではカノンが青ざめた表情を浮かべていたのだ。走っているという理由以上に大きく息を荒げており、怯えた体は震えていた。水晶の中に映し出された地獄のような世界を恐れたのかもしれない。そう考えたハープ・ノートだったが、その考えはすぐに否定された。カノンは例の白髪の大男ばかりを見て震えているのだ。あまり感情を表に出さない彼女だが、今は恐怖ばかりを主張している。

「カノンちゃん……？　どうしたの？」

「い、いや……な、なんでもないぃぃ」

「いや……どう見ても大丈夫じゃ……」

「ダ、ダイジョーブ……」

「全然大丈夫じゃない！」

《やっ、やっぱりだ。何か空から声が聞こえてくる……！》

《おい、ガキっ！　俺の言う事を聞けっ！　勝手に喋ったら絞めるって言いつけたよな！　なあ！！》

水晶の中、またロックマンは殴られていた。大男は青白い電波体を相手にしながらも、ロックマンを痛めつけるという奇行を繰り返す。見たところ信頼し合った仲間とは言えない。そして一通り、辺りの電波体を殲滅したところ、ロックマンは逃げ出すように大男から距離を置いて、ハープ・ノートに呼び掛けてきた。なぜロックマンがこのような男と一緒にいるのかは理解できないが、ハープ・ノートも色々と彼には聞いておきたい。

《やっぱりミソラちゃんだね。どこから呼び掛けてるの？　どうやらハンターでもエアディスプレイからの通信でもないようだけど……》

「うーん、ちょっと話せば長くなる事情があってね」

《そっか……》

「で、スバル君は今どこにいるの？　とても燃えてるようだけどさ」

ロックマンは白い大男から逃げるように燃え盛る世界を進んでいた。やはり奇妙な組み合わせだった。ロックマンはウォーロックに大男の相手をさせると答える。

《えっとね、エデンって場所らしいよ。太陽の中にそんな場所があって、僕も驚きさ》

「エデン、私達がいる場所と同じ名前……」

《ん？　どしたの、ミソラちゃん》

「いや。ちょっとね……あ、そうだスバル君。その一緒にいる男の人は？」

するとロックマンはボコボコにされているウォーロックを尻目にしながら、明らかに表情を曇らせて涙ぐむ。その表情から、あの男がろくでもない人間だと一瞬で理解できた。ロックマンは顔に手を当てて嘆いていた。

《それなんだけどさ。最悪だよアイツ……。すぐに暴力を振るうし、偉そうに命令してくるし……。でもアイツ、この場所のことを知ってるみたいだし。サン・ゴッドを倒しに行くつもりらしいし。今はついていくしかないんだよね》

「そっか、そっちも大変なんだね。あ、でも、他のメンバーは？　確かハイドとキミドリさん、それに夜太郎さんもいたはずだよね？　別行動中なの？」

《……え、あ、それは……ちょ、ちょっとね。そ、そう、別行動中……だよ。うん、そうだよ別れちゃった……》

明らかに動揺した様子のロックマンだった。不信に思ったハープ・ノートだったが、例の大男か会話に割り込んできた。いらだった様子で、空に向かってあちらからは見えないはずのハープ・ノート達をしっかりと見据えて威嚇してくる。ハープ・ノートはぎょっとして目を見開く。目線が合う訳がないのに、しっかりとこっちと目が合っている。恐ろしいとしか言えない。

《なんだ、さっきからうぜえな。どっからこそこそしてんだ？　覗き見してくれやがってイライラする……っ。あっ……あっぁっ、イライラするぅうぅーッ！》

その恫喝と変わらない狂った態度に鳥肌が全身に立つハープ・ノート。その横で悲鳴もあがる。カノンだ。

「あ、ああぁ……ダメ……ッ！　ミソラ、それ持っててて！」
「あっ、カノンちゃん！　どうしちゃったの？」

カノンはハープ・ノート以上に参っていたらしく、水晶を押し付けて、ブライの方に逃げ出してしまった。あんなカノンは初めて見る。何か事情があるのだとしたら、間違いなくあの大男に原因があり、大男に非があるのだろう。

明らかに普通ではない態度だったが、カノンの悲鳴に水晶の中の大男はニヤリとして笑っていた。そしてロックマンの首根っこを掴んで引きずりながら、炎の中を進み始めた。どうやらこちらの事情をあれだけで理解したようで、くつくつとした邪悪な笑みを強くしていく。

《なるほど……カノンがそっちにいるのか。そうかそうか、生意気に俺の呪縛を……。フッ、フフウッウヒュ、お前らも祭りをせいぜい楽しむんだな》

悪寒を感じながらハープ・ノートは無言でその男を見ていたのだが、カノンに泣きつかれたブライがやってきて、彼女から水晶を奪った。

「俺にソレをよこせ！」

ブライは水晶の中の大男に怒鳴りつける。

「おい、お前！　カノンに何をした？　アイツのあんな顔、初めて見る」

《……誰だお前は？　カノンねえ。そんなの俺の知ったこっちゃないさ。せいぜい死なないように自分の心配でもしておくんだな！　楽園は甘くないからな！》

「お前……この場所を知っているのか？」

《さあ……ねえ。ま、青白い電波体のドールには気をつけろよ。ヤツらはエデンの番人。そっちにもいるだろうよ》

ブライはこの男の事をただの人間だと思わなかったようだ。エデンについて語る辺り、その推測はおそらく正しい。ブライは男に食いかかった。しかし男はこれ以上は相手にしない。そもそもあちらはあちらの方で、サン・ゴッドを倒すという目的がある。空から聞こえてくる声の相手などしていられないのだ。

「お前、何者だ！　答えろ！　なぜロックマンと一緒にいる？　なぜエデンについて知っている？」

《馬鹿が！　俺に命令していいのは俺だけだ！　これ以上何か言っ

てきたら、お前必ず見つけ出して、お前を終わらせてやる》

「……このっ！」

男に敵意を抱くブライだったが、男は炎の中に消えてしまい、水晶からはもう確認出来ない。そして男の言うことは正しかったらしく、例のドールという電波体がブライ達の方のエデンで姿を現した。ブライ達チームエクスは螺旋階段の途中にある研究区画にたどり着いていたのだ。その円形の広場の中央に青白い電波体がいる。ただ彼はホログラムのようで、透明な体に背景を映りこませていた。

どうやらブライ達を待っていたようだ。

そしてブライは水晶のことなど忘れ去るほどの衝撃を受ける。階段を勢いよく上っていた足運びをは対照的に、恐る恐るその天狼星のような電波体に接近する。

彼はこの天狼星を知っていたし、倒していた。そう、かつてブラックホールサーバーでムーメタルを懸けて戦ったシリウスだったのだ。

深まるエデンの謎にブライはもちろんチームは困惑した。

シリウスと瓜二つの電波体は研究区画にたどり着いたチームに微笑みかけた。その青い顔にもちろん血の気がない。そんなもので笑顔を作られても暖かいものなど何も感じない。覚めるような星の輝きを強調するだけだ。

ドールは言う。

「ようこそ、エデンへ。私はエデン管理人のドールです。フフフ、待っていましたよ。そう、千億年も……ね」

もちろんかつて倒した敵の亡霊を目の当たりにすれば、ブライの気分は良いものではない。ドールに向かって睨みつけて、拳を握り込む。必要があれば、何とかしてデリートしてやる心づもりだ。

「お前……シリウスだな。生きていたのか……？」

「シリウス……さて、誰の事でしょうか？　私はアナタ達を待ってはいましたが、会った事はないはずですが……」

「とぼけるな……！　ブラックホールサーバーでの事を忘れたとでも言うのか？」

ブラックホールサーバーという単語にドールは反応する。何かを思い立ち、フワフワと漂っていくドールは亡霊のようだった。そして研究区画の隅にある端末に手を伸ばした。端末上部に設置されたパネルに指を這わせてエデンに溜めこまれた資料を参照していく。どうやら検索をかけているらしい。

「ブラックホールサーバー……。ああ、老朽化したエデンの事でしょうか。……確かに、そこにはムーメタルを所持したドールを配置した気がします……。確か個体番号はシリウス……」

「個体番号……？　お前はシリウスじゃないのか？」

「そうですね。私は彼であり、彼は私であると言えますかねえ。一応全てのデータは共有しているのでね。まあ、マザーサーバーが全て管理している訳ですが……」

「気味が悪いな……なぜ俺達を待っていた」
「私は普段、このエデンの管理を任されていますからね。まあ、宇宙の記録係とでも言えましょうか。だがら、あなた達にある程度の説明を……とね。そうでないと、心から先は大変ですからね」
「そんな説明はいらん……邪魔をする気がないのなら、ここを通らせてもらう。先を急いでいるんだ」

ブライは階段への道を辿り、ドールのうわ言を無視することにした。チームもその意向に従って先を急ぐ。しかしドールはブライ達を待っていた。このまま素通りさせる訳にはいかない。それではブライ達は何も知らないままインフィニットに殺されてお終いだ。それでは意味がないし、知らないのと知っているのとでは、勝利への可能性が変わってくる。

それにドールはさっき端末からシリウスの意向をダウンロードしており、ブライが今何を考えているのかは手に取るように分かった。

「おや、いいのですか？　そろそろ自分の正体を知りたいのでは……アナタの周波数、とても迷っている」

ドールは甘い言葉をブライに送り、彼の体を釘づけにした。予想通りで彼の足はピタリと止まる。

「お前……」
「誤魔化しても無駄ですよ？　それにシリウスもアナタの正体について教えてあげようとしていたようです。私にはお見通しです」

見つめてくる細い目にブライは全てを見透かされそうになるが、ギリギリのところで踏みとどまった。下らない問答に意味はない。とうの昔に答えは出した。自分が何者かなど、自分が決めればいいだけのことだ。他人から教えてもらって、何かを手に入れるほど落

ちぶれてはいない。
　ブライは少しの後悔を隠して言い切る。
「俺の正体……？　くだらん、俺は、俺だ！　それにあの女の言葉になんの価値もない！　もちろんそのシリウスの言葉にもな！」
　ブライはそれだけ吐き捨て、先に進もうとする。すると今度はカノンだった。彼女はブライの手を引いて離さなかった。導き役としてはカノンは、ブライよりもはるかに真理へと近いところにいる。その直感が兄にも歯向かう結果を生んだ。嫌われても良い。兄にこのまま死なれるよりはマシだったという訳か。
「待ってお兄ちゃん！」
　ブライは呆れて溜め息を吐いた。目を閉じて苛立ちを押さえている。相手がカノンでなかったらとっくに手が出ていただろう。
「なんだ、お前まで」
「……駄目。お兄ちゃんは知っておくべきだよ。なんでこんな場所があって、なんで私たちがここにいるのか……そしてお兄ちゃんの正体が何者で。お兄ちゃんは何をするべきなのか……！」
「カノン……。俺は少なくともお前だけは認めようと思っていたが、そんな事を言うようじゃな……」
　ブライは強がってドールの言葉を否定したのではない。今、何をするべきか、そんなものは分かり切っている。彼は自分で考えて自分で感じて、生きていたい。それだけを自分の人生で貫きたいのだ。誰かに与えられたもので自分を作りたくはない。ただそれだけの自分との約束を守っているだけだ。

「分からないか？　俺はな、自分で決めたいんだ、色んな事をな……！　自分の正体だって自分で決めたい。誰かに張られたレッテルなんて、俺はゴメンだ！　お前は俺の何を見てきた？　俺は人から何かを貰わなければ、何もできない可哀そうな人間だったか……？」
「違うけど……、私たちは何も知らないんだよ？　……このままじゃ、インフィニットに勝てないよ！　きっと！」
「カノン、俺を失望させるな……戦う前から諦めるな。どん底から這い上がる……まさに俺にぴったりじゃないか」
「……わ、分からず屋さんっ……！　お馬鹿！　このタマラー！！」
「……ぇ」

ブライはカノンの意思にビックリしてしまう。まだ心のどこかで言いなりになると思っていた。言いかえれば、ビビったのだ。まさかタマラーとは……それは卵料理を愛する男の象徴だ。それを蔑称に使われた。ブライは打ちひしがれる。

「な……オマ、こ、この、ソ、ソーセージオタク！」
「タマラー！」
「ぉぅ……ウ、ウインナー馬鹿ァー！」
「タマラー！！！！」
「……クゥッ……」

いよいよ兄妹喧嘩を始めてしまう。なので、キリン・ライトニングが保護者的な立場から、場を取り持つことになる。陽気な態度で、お互いの落とし所を提案した。彼としてはリフレインとのやり取りを通して、出来るだけ作戦のリスクを減らしておきたいと思ったのだろう。表面上ではふざけたようだが、なかなか考えている。それにこのようなグルメな喧嘩を見せられるとお腹が空いてくる。それは戦いの前では何としてでも避けなければならない。

「おいおい、喧嘩は止めてくれよ。お熱いのは良いことだが、そういうのはお家でやってくれ。ちなみに俺はな、おいなりさんが好きだなあ。ちなみに俺の……」
「キャー、ジョニーさん！！」
「おちょくるな！」

ブライの剣幕にキリン・ライトニングは頬をポリポリとかく。

「オーケー、悪かった。じゃ、提案だ。そのなんだ、あの電波体の話をいちおう聞こう。もちろんお前の正体とかそういうのは無しでだ。エデンの情報だけ貰っていこう。それなら文句はねーだろう？」

キリン・ライトニングの飄々とした語り口、そして意外とブライのプライドを立てた提案だった。それによって毒気を抜かれてしまったブライ本人だった。ちなみにキリン・ライトニングの好物はおいなりさんだった。中々のニホン通だ。

ブライばつが悪そうに壁際に歩いていくと、そのままどかっと腰を下ろしてふてくされる。おいなりさんが好きな奴に悪い奴はいない。彼はスーパーでの記憶から良く理解していた。

「チッ、時間がないってのに。まあいい、そういうことなら俺は隅の方で待っておく。勝手に情報収集でもするんだなっ。おいなりぃー？」
「おーおー、怖いリーダーだ。ま、お兄ちゃんの了承も得た訳だ。それじゃ、カノンちゃんも良いでちゅかー？」

猫なで声でカノンにも確認を取る抜け目のないキリン・ライトニング。案外気が利く彼にカノンも少し頬を赤くして、コクンと頷いた。とても恥ずかしかったのかハープ・ノートの後ろに隠れてしまう始末だった。

そしてキリン・ライトニングはドールに問う。あまり時間はとりたくない。簡潔に質問をまとめた。ドールを指差して、探偵気取りで攻め込む。

「じゃあ、不健康そうな肌のアンタに質問だ。エデンってのはなんだ。俺からすりゃ化け物が多くて敵わん。地獄の間違いだろうに」

「簡潔に説明しましょう。エデンは……それは監視システムの端末のようなものです。さっき兄妹喧嘩を監視していたアナタのような……ね。ウフフフフ」

「はあ、わかったような分からないような……。ウフフフフじゃねえよ……ったく」

キリン・ライトニングが困ったように、首を傾げて、暗にドールの説明の下手さを責めた。うまい事を言ったつもりらしいが、まったく意味が分からないのだ。チームに苛立ちが募った。それを感じたのか、ドールはさきほどの検索端末を操作してデータを参照する。手際が良くて、なるほど、宇宙の記録係と頷ける。今度、ドールはデューオの事を含めて説明した。

「エデンというのは、宇宙中の恒星と呼ばれるものの中にあります。アナタ達でいえば、太陽がそれと言えば分かりやすいでしょう……」

太陽、つまりは炎の塊。よって燃える世界が連想される。そうなってくるとハープ・ノートの名推理が爆発した。さきほどロックマンがいた世界と、太陽の異常活動をリンクさせたのだった。彼女は一人納得して頷いている。

「つまり、さっきスバル君がいた場所がエデンってことか。なるほど合点がいったよ。へえ、お日様って本当の意味で私達を見守ってたんだねえ」

呑気なハープ・ノートにドールは釘をさすかのように”監視”という言葉を強調した。あくまで監視だ。それは地球で何か不都合が生じれば、ただちに制裁を加えに行くということだ。例えば、地球を滅ぼしたりなんかする。

「見守るとはそんな甘いものではありません。アナタ達はずっと監視されているのです。生きている全ての生命は神に監視されている。アナタ達の進化は常に査定され、その進化が意にそぐわなければ滅ぼされる。つまりエデンとは防犯カメラのようなものです。……アナタ達地球人は一度その恐怖を味わったでしょう?」

その言葉を受けて、キリン・ライトニングは思いつめた表情を浮かべる。いよいよ、インフィニットが何をしようとしているのか理解し始めていた。

二百年前地球を襲った人類の危機、全ては太陽の監視からデューオが察知したのだ。そうでなければ、宇宙中の悪を摘むなどできる訳がない。ドールの話す宇宙の構造はとても気持ち悪かった。人間はまるでモルモット。使い捨てで、気に入られなければ即捨てられる。実験動物を人間は利用するが、人間もそれと同じだったという訳だ。これは笑えない。キリン・ライトニングは笑った。

「ハッ、なるほどね。太陽がずっと監視してたってワケか。それを通してデューオが来たってね……ハハ、気味がワリイ。そういや、むかし家の近所に似たようなババアがいたな……」

ショックを受けている暇はない。キリン・ライトニングはドールに最後の質問をぶつけた。この答えを聞けば、全宇宙がどうなるかようやく分かる。全宇宙、それは地球人にとっては少し規模が大きいが、見捨てるには少し関わりを持ちすぎた。ノイズウェーブトー

ナメントで宇宙にどんな生物がいるか知っていたのだ。銀河連邦やパトラの人、意地の汚い裏の住人。もちろんＦＭ星人やＡＭ星人もそうである。様々な人間性、多様性だったが、彼らは確かに生きていた。人間だった、命だった。

それが奪われようとしているのだ。裁きという下らない美徳の元に。

「これを聞いちゃ、俺達はもう引き下がれない……。だが、聞いておかなきゃインフィニットとまともに向かえない。つまり、つまりだ、機械仕掛けの神ってのはディメンション・ゴーレムで、全てのエデンに殲滅の認定をさせて送り込む。そうやってインフィニットは宇宙に生きる全ての命を裁こうとしている。……違うか？」

キリン・ライトニングはかつてデューオと会っていただけに、その推理に自信を持っていた。デューオも思わせぶりな事を言っていたが、まさかこうなるとはジョニー本人も思っていなかっただろう。出来れば外れていて欲しい推測だったがドールは首を縦に振った。

「……正解です。カギを使い、彼は全てのエデンを殲滅許可させます。そうなれば、ほとんどの生命は生き残れません。……世界の浄化、それが彼らの狙いなんです」

ハープ・ノート達は声を失った。ブライは聞かなくて正解だったのかもしれない。余計なプレッシャーを背負わなくて済むのだから。中には怖気づく者がいるほどの絶望が襲う。だが忘れてはならない。彼らは戦士。それも生半可な兵卒ではなく、修羅場をくぐり抜いた生粋の精鋭だ。それを絶望させるインフィニットが素晴らしいとしか言えない。

そんなチームの中であったがソウル・レイダーだけは密かに覚悟を固めていた。彼はとっくに死の恐怖など克服している。ミライと

して生まれた時に地球の英雄を背負わされた。エクスフレームという人類を超越した力を授かり、最強であり続ける事を命じられた。彼はあの時の刹那の瞬間を無限に引き延ばして、今を生きている。彼の時間はずっと六年前から止まったままなのだ。彼は人間を捨てている。

ただ悲しいことに、心はある。そんな彼の中にはスバルと共に戦った日々があり、学校の友人と時間を過ごした思い出がある。そのたび彼は自分の正体を錯覚しそうになった。だがすぐに現実を突きつけられた。彼はそれが悲しかったが、今は不思議と喜びを覚えている。それが覚悟を、決して砕けない固さに仕上げる。

この瞬間に立ち会えたことに彼は感謝していた。彼の存在理由はこの瞬間にだけあるのだから。

「いよいよ、覚悟を固める時が来たか……。俺はこの宇宙の刹那に立ち会うために生まれてきたんだから。そして未来を切り開こう……俺の剣で」

死の恐怖を実感するチームだったが、ぶれない覚悟を貫くソウル・レイダーやキリン・ライトニングにスカッド・エースを見せられれば、弱音は出てこない。

ドールはそんな勇気ある地球人やＦＭ星人たちに最後の言葉を送る。

「アナタ達には、私の一人が無限大の可能性を感じました。特にあそこで一人座っているブライには感謝しています。……私はインフィニットにも負けない無限の力を彼から感じました」

シリウスからダウンロードした記憶を辿っているのだろうか。かつてのブラックホールサーバーでの死闘で感じたブライの本質を少しだけ明かす。あくまで彼の意思を損ねない範囲で、彼の正体を語

った。

「彼は素晴らしい力を持っている。今はそれを見つけようとあがいている段階ですが……彼はきっと、救世主と共に世界を照らす光になるでしょう。私はそんな可能性を感じたのです」

しみじみとした様子のドールにハープ・ノートは問いかける。彼は怪しい風貌ではあるが、情報を与えてくれて力になってくれた。味方――という評価をして良いのかもしれない。

「どうして、あなたは私達に協力してくれたの？」

「フフ、私はあくまでコレクターです。インフィニットという絶対の壁を突破する……そんな珍しい記録をコレクションしたかっただけかもしれませんね」

「へ、ヘンタイ！」

クスリとしこれ以上をドールが語る事はないようだ。チームに先に進むようにそっと促す。ここより先に行ったところにインフィニットやおそらくウォーセヴティ、ヴィーナスらが待ちかまえているだろう。

勝てるかどうかは彼ら次第だ。

「さあ、行きなさい。インフィニットはもうすぐそこ。世界のメシア、そして命のメシア……どちらが本当のメシアなのか証明してくるのです」

ｅｄｅｎ―４３：地球の恋人

【地球サイド：太陽エデン最深部】

チームエクスがインフィニットとの最終決戦に臨もうかとしているところ、スバル達チームゼロ――とはもはや言えない状態のスバルと白髪男も最後の場所にたどり着いていた。場所はエデンの最深部、太陽の制御を司る頭脳部分である。

彼らは頭脳部分に到達するまでに何重ものセキュリティドアを解除してここに来ている。ロックマンだけでは何十年もかかったであろうセキュリティロックの数々だったが、白髪男の全てを見通したかのような手際の良さで、瞬く間に今の頭脳部分まで辿り着けていた。そして今、目の前に扉が一つだけだ。辺りはもう炎もなく、古代文字が血のように赤く灯って壁を走っているだけ。

潔癖な印象を受けるまっさらな扉を開くと、世界は一変する。

今いる場所は炎で燃える地獄とは逆のユートピア。背の低い草が野原を作る。所々で黄色い花がそよ風に揺れている。この場所は巨大な岩をそのまま島にした空中に浮かぶ楽園である。

青空が上にも下にも無限に広がっている。特に目に付くのは、青空に映し出されたモニターだ。そこには地球のあらゆる場所の情報を映像化している。灼熱の太陽にあぶられた大地。干からび始めた動植物。海にぷかぷかと浮かび上がって死んでいる大量の魚。そして核シェルターの中だ。集団疎開を思わせるそこでは、死の恐怖と戦いながら、チームゼロの勝利を信じている地球の人たちがいた。

サテラポリスの隊員に泣きつく子供の姿が確認できる。
ロックマンはそれを目の当たりにして、ここが地球を監視している所だと漠然と悟った。緊張した面持ちのロックマンに、白髪男が初めての緊張を覗かせた。彼はここまで来るのに、汗一つ流さず余裕な様子だったが、今回ばかりは違うらしい。

「ガキ……監視モニターを見ている場合じゃない。あっちの方にお目当てのターゲットがいる」

白髪男が前方を指差す。草原の向こう、少し遠くを見れば、今まで倒壊してボロボロだったものとは対照的な均整のとれた純白の社が見えた。周りに四つの柱があるだけで、屋根もなく決して豪華な造りではない方だ。短い階段が申し訳程度に上部に続いているだけ。
見た目は慎ましいが、白髪男はごくりと喉を鳴らして、ゆっくりと深呼吸を始める。

「フー……。さて、とぉ、そろそろ本気を出さないとな……」

白髪男は社に向かって歩いていく。ロックマンは付いていく。白髪男は社を見据えながら、背中越しにロックマンに告げた。

「サン・ゴッドはそんじょそこらのレギオンとは違う。流石の俺も本気を出さないと殺される。ガキ、少しでも手を抜いてみろ。終わるぞ……」
「……う、うん」

ロックマンは気後れした。今まで見てきたこの白髪男は性格こそ最悪だが、圧倒的強さと知識でエデン攻略を行っていた。その男が緊張している。ロックマンはどんな説明をされるよりも、嫌な予感を感じさせられた。

そして社の階段を上り始めた二人は、すぐに敵の姿を確認することになった。一人で立っている。これがサン・ゴッドという訳だ。体のいたるところに空いた穴から炎が噴き出していて、第一印象は荒々しいものだ。だが、そんな印象とは逆に、彼は二人に背を向けたまま空のモニターをじっと見上げていた。頭は燃えており太陽のようだが、全体の佇まいとしては落ち着いた雰囲気を醸し出している。杖を突いているその背中はどこか寂しそうで、モニターに映る人間達の表情に心を痛めたのかじっと動かなかった。

だが白髪男はその本性を見抜いており、サン・ゴッドに接近するにつれ、頬に汗を伝わらせていく。ロックマンはまだ気付かないが、一見穏やかなサン・ゴッドの隠している戦闘周波数はインフィニットすら軽く上回っている。白髪男はその隠した周波数に心地よい戦慄を感じたという訳だった。ロックマンだったらそうはいかないだろう。

ロックマン達が階段を上りきり、社に足を踏み入れたところでサン・ゴッドは空を仰いだままで語りだした。声はしわがれた老人のものだった。意外な声質にロックマンは少しだけ油断する。

「……エデンから、ずっと君たちの戦いは見させてもらっていたよ……ロックマン」

ロックマンは老人相手ならと思って調子づいたのか、まくし立てた。

「お前がサン・ゴッドだな！　太陽の異常活動を止めるんだ！！お前は許さないぞ！　お前のせいでみんなは……！」

それを聞いてサン・ゴッドはモニターを見たままで、より悲しそうにして言葉を続けた。ロックマンの訴えに心を痛めているようで、まるで孫を慰めるような口振りだった。

「それは、悪かったな。人間にもあんなのがまだ残っているとは思わなかった……特にあのハイドとメトリー……良い生き様だったよ」
「そう言うんだったら……だったら太陽を止めてよ!!　このままじゃ、みんな死んじゃうだろう?!」

気持ちを昂ぶらせたロックマンは、サン・ゴッドに訴えた。思ったより、話の通じる相手だと思ってしまっている部分もあるのだろう。しかしそれはいけない。白髪男がロックマンの胸倉を掴んで怒鳴りつけた。今のロックマンの態度はあまりにも危険なのだ。彼はそれを一瞬で把握した。サン・ゴッドの戦闘周波数が抑えきれずに漏れ出していく。

「やめろガキッ！　サン・ゴッドを刺激するなッ!!　アイツは根っからの……」
「この……離せ、何するんだ!!」

ロックマンと白髪男の言い合いに、サン・ゴッドがとうとう振り返ってロックマン達に面と向かって語り出す。彼の雰囲気が一変している。さっきまでの穏やかなものとは違い、燃え盛る太陽の怒りを思わせた。

「ああ、争い、争い、また争い!!　人間はなんと愚かか、身勝手か、私の前で争わないでくれ……!」

言い争いを目の当たりにして、穏やかだったサン・ゴッドは完全に変貌した。
白髪男は戦慄する。やはりサン・ゴッドは何も変わっていなかったのだ。彼の嫌な予感は的中してしまった。
サン・ゴッドはずっと地球を見てきたせいなのか、地球に生きる

命よりも地球そのものに恋をするに至ってしまう。このレギオンは変態の極みとでも言える。約四十五億年も地球に恋をする老人であり、性質が悪いなんてものではない、マニアックすぎて反吐が出る。

普段は人格者を装うサン・ゴッドだが、地球への淡い気持ちのために彼は全ての人類を抹殺する。

「私はずっと地球を見てきた。生まれたての地球……可愛い地球、綺麗な地球……。あの青く麗しい海に、優しさを見せる緑、そして彼女の心を表すかのような澄んだ大気！　私は地球に恋をした！」

太陽のような変態は止まらない。地球をまるで恋人かのように語りだして、周波数以上の恐ろしさをロックマン達に植え付ける。

「だがな、彼女の美しさは一瞬で奪われていった！　そう、お前たち人間のせいでな……！　私の地球は汚された……。溶け出す南極の氷はまるで、彼女の純潔が奪われて泣いているようだった！　脱がされていくオゾン層はまるで、人間共に裸にされて辱められているようだった！　私は堪らなかった……！　胸が痛かった！　締めつけられるようでぇえ！！」

サン・ゴッドの切ない恋心は溢れていく。地球への異常な思いは留まるところを知らなかった。今回の敵は強すぎる。ロックマンとは違った意味で地球を救おうとしていた。価値観が違い過ぎていた。

「父上の為だと思い見逃してきたが、もう我慢ならない！　だから、私は地球の肌荒れを綺麗にしてやるのさ！　お前たちだって、肌の荒れた女性は見ていられないだろう？」

「う、うわぁああ！　な、何なんだコイツは……？！」

「チッ、コイツは根っからの……地球に恋する変態ジジイなんだ！！」

サン・ゴッドの放つ強烈な個性とオレンジ色のワイル粒子の威圧感にロックマンは堪らず腰を抜かして、情けなく後ずさった。白髪男は予想通りの結果に舌打ちすると、そのままサン・ゴッドに向かって戦闘態勢を取る。彼独特の防御を捨てた攻めの姿勢である。

サン・ゴッドはそれを見て嘆いた。

「悲しいな、ジェイル……なぜ舞台を拒絶したお前がここに……？正義の味方ってワケではあるまい？」

「ちょっとな、昔に気が変わる事があったんだよ」

「それだけか……？」

白髪男ことジェイルは指をバキボキと鳴らしながら、邪悪な笑みを浮かべて歯を剥く。目なんて血走っており、どっちがロックマン側なのか分からなくなるほどだ。どうやら彼は彼で、目的があってサン・ゴッドと接触したようだ。

ジェイルはサン・ゴッドを指差すと、自信の表れからなのか、ただの精神異常からなのか、太陽神さえも獲物視した。

「テメエのゼロフレームを奪う！　ここから先、この体のままじゃちょっと不便なんでなァ！！」

「ハッハッハッ！　やっぱりお前は自分勝手だな。私からゼロフレームを……？　仕方がない、お前達をここで葬るかな。さあ、やろうかヴィシュヌ」

『……ああ』

戦いの合図はなかった。それとなくサン・ゴッドが杖で地面を小突き、地面を割る。ジェイルはそのまま後ろに飛びのくと、腰の抜けたロックマンを担いで地割れを回避する。着地と同時にジェイルは、ロックマンに頭突きをして、気合を注入する。そしてゲンコツ

を喰らわして、自分の鬱憤も晴らす。

「シャンとしろよ！！」

ロックマンはそんなジェイルに怒りを覚えるも、今は争っている場合ではない。サン・ゴッド相手によそ見は厳禁だ。すでに太陽神は有り余る周波数を操り、炎の槍をこちらに飛ばしてきていた。槍の雨が降りかかる。

ジェイルはロックマンを蹴りとばすと安全圏に追いやり、彼はそのまま暗黒物質の板で槍を凌いだ。そのまま勢いに乗ってサン・ゴッドの懐に飛び込んだのだ。体捌きに関しては杖突き老人よりも、ジェイルの方が上なのかもしれない。

ジェイルは右腕に血管を浮き上がらせると、暗黒闘気をみなぎらせて爆発させた。

「くらえ！　ダークネビュラッ！！」

ジェイルの渾身の一撃。しかしサン・ゴッドは慌てず、その攻撃を冷静に分析した。彼は自分の手のひらにワイル粒子をまとい、暗黒闘気のエネルギーをゼロにして攻撃をいなす。この現象はインフィニットとフェニックス・リボンとの戦いにも見られたものだった。まずレギオンを相手にするには、この粒子を何とかしなければならない。

渾身の一撃を無効化されて、ジェイルはロックマンに乱暴に言いつけた。

「おい、ガキ！！　ボサッとしてんな！　手え貸せ！！」

「わ、分かったっ！！」

ロックマンはバトルカードを入力して、何発か銃弾を発射した。

だが、ワイル粒子に阻まれて攻撃は霧散した。ジェイルもジェイルでサン・ゴッドに全ての攻撃を無効化されながらだったが、サン・ゴッドと互角の格闘を繰り広げていた。今ジェイルは、サン・ゴッドの持つ周波数全てを自身に向かわせている。

サン・ゴッドは狂犬のようなジェイルの手数の多さに手一杯らしく、杖を捨ててワイル粒子も総動員して攻撃を流している状態なのだ。だがそんな中でもロックマンの攻撃をきっちりと捌くサン・ゴッドである。さすがはナンバー2と言ったところか。

ジェイルはロックマンの役の立たなさに怒鳴りつけた。

「しっかり狙え！　粒子の薄いところを突くんだよ！！　俺が何のためにコイツを引きつけていると思ってんだ！！」

「わ、分かってるよ！！」

強がって返事はするが正直ロックマンは、この戦いについていける気がしていない。ジェイルはジェイルで化け物じみた力でサン・ゴッドを相手取っている。サン・ゴッドは言うに及ばずで、ジェイルを少し押し返し始めていた。

体のダメージからロックマンの照準がぶれて狙いが定まらない。ワイル粒子の薄いところを狙えと言っても、サン・ゴッドも巧妙に周波数を隠しているので簡単に狙える訳はなかった。周波数変換術でロックマンがサン・ゴッドに及ぶことはないだろう。

慌てるロックマン。だったが、こういう時にウォーロックの出番だった、浮足立った彼を少し落ち着かせる。

『落ちつけスバル。アイツがワイル粒子を引きつけているんだ。お前の力でもちゃんと狙えば、貫けるはずだ！』

「む、無理だ……サン・ゴッドのフレクリアで、周波数のムラが見えない」

「早くしやがれ！」

ジェイルが切羽詰まったようで、ロックマンに攻撃を急かす。ロックマンとしてはジェイルがこのまま死んでくれても気分としては悪くはないが、勝利の為には彼を助けなければならない。

ロックマンは今の手負いの自分に何ができるのかと、胸にそっと問いかけた。視界の横でジェイルがサン・ゴッドの炎に焼かれ始めた。やはり最上位のレギオンだ。ジェイルがいくら強いと言っても、差が出始めてくる。

しかし慌ててはいけない。慌ててもロックマンでは力になれない。今のロックマンは戦っている二人に比べたら、子犬のような力しか残っていない。その力だけでジェイルと協力してサン・ゴッドを倒さなければならない。

ワイル粒子の隙を狙い撃つ術を今、見つけなければいけないのだ。サン・ゴッドの巧妙な周波数変換を見抜いて勝利を狙い撃たなければ、未来はない。

そしてロックマンは考えた。今までの周波数変換術をどうにかして組み合わせれば……と。彼はバトルカードを入力してライフル銃を構えると腰をおろしてスコープを覗きこむ。そしてウォーロックにある疑問を投げかけた。

「ねえ、ロック。僕たちって、どうやって周波数を感じているんだろうね」

『ん、そりゃおめえ……。何だ、こう、肌にピリピリ来る感じだろ。それに強烈なヤツは目でも見れるしな』

「でも、今サン・ゴッドは周波数を隠して目に見えない。でも……あの強烈なワイル粒子を隠すのは簡単じゃない。どこかに綻びがあるはずだ。感じろ僕、落ち着いて、この肌で感じるんだ」

『へッ、分かってるじゃねえかスバル。心を落ち着かせろ……慌てるな……いつでも平静に、キミドリのように』

「え……？」

『お前に足りないのは、精神力だ。心がすぐ折られちまう。……アイツは駄目なところばっかりだったが、アイツはあれで常に自分だけは持っていた』

「……わ、分かった。自分を疑うのはやめる。キミドリさんのように希望を狙い撃つ……！！」

キミドリは一見ふざけた女だったが、それでもあの病的な明るさと常に自分を見失わない姿勢は評価できる。スバルもそうやって自分を信じる。

自分を信じれば、自然と相手の周波数を感じることが出来始めた。サン・ゴッドのフレクリアは完璧だが、ジェイルが攻撃を加える瞬間だけ僅かな綻びが生じたのだ。ほんの短い間だが、ワイル粒子の密度が薄くなっている穴を感じることができる。照準の震えが止まった。

後はスコープ・スナイパーのように敵を狙い撃つだけだ。

そしてジェイルの渾身の一撃をサン・ゴッドがいなした。今だ。

「そこだ！！」

ロックマンは自分の持てるありったけの周波数を込めて、サン・ゴッドを狙い撃った。

銃弾はサン・ゴッドの側頭部を貫いた。見事ワイル粒子の壁を突破したのだ。普通の敵なら、これで息の根を止められるはずだ。

しかしサン・ゴッドは倒れなかった。一瞬だけ体がよろけるが、ほとんどダメージがないようだ。ジェイルを炎の津波で押し流すと、ロックマンの方を振り向いた。

終わった……。

「ほう、私の周波数変換を見破ったか……。なるほど、素晴らしい集中力だな」

ロックマンは終わった……と思い。全身から力が抜けてしまった。サン・ゴッドはロックマンに歩み寄ると、彼を足元に置いて手に小さな太陽を作って構える。

「もう、力を使い果たしたようだな。ジェイルも私には勝てまい……終わりだな、ロックマン」

「太陽を止めろ……！」

「私は地球に恋をした……私は私の正義を全うしているだけだ」

サン・ゴッドの恋心をロックマンの覚悟では止められなかったらしい。ジェイルの野望を付け加えても、その思いは止まってはくれない。

それでもサン・ゴッドはロックマンの決死の覚悟に胸を打たれている。その他大勢の人間とは違うと感想を抱くには十分なここまでの戦いだった。

「十秒だけやろう……。その間に逃げだせば、わざわざ追ってまでお前をどうこうしようとはしない。残った短い時間で大切な仲間と過ごせるぞ？」

「ぼ、僕は……逃げないぞ！　絶対に太陽を止めてみせる！！」

しかしサン・ゴッドはそういう情に訴えようとする言葉に興味はないらしい。カウントを始めた。

「10」

ロックマンはロックバスターをサン・ゴッドに撃った。しかしロックマンだけに集中しているサン・ゴッドに隙はなく、ワイル粒子の前に全ての攻撃が霧散した。さきほどの一撃は、ジェイルがいてこそ成功した奇跡の瞬間だったとロックマンは認識させられた。

「9」
「ク、クソ」

サン・ゴッドの手のひらで浮かぶ太陽が一段と大きくなり、ロックマンを焼き滅ぼすにもう不便はなくなった。

「8」
『この野郎ァ!!』

ウォーロックの体当たり。やはりダメだ。彼の衝突による衝撃さえも霧散した。

「7」
「僕は諦めない!!　ラーニング――」
「6」

ロックマンのとっておきの奥の手だったが、サン・ゴッドがワイル粒子を飛ばして結局無効化させる。ロックマンの手はもう残っていない。

残りの時間はサン・ゴッドとロックマンの睨み合いだった。ロックマンはハイドやメトリー、そして夜太郎たちの思いを胸に逃げ出さなかった。ここで逃げだせば、彼らの命を全否定することになってしまうと思ったのかもしれない。

キングに偽善者と否定されたからなのかは分からない。だが少なくとも彼は今に命を懸けていた。この命、太陽真の前ではとても儚いものであると確信しているはずなのに、逃げ出さない。

そして時間が来た。

「……そうか、それがお前の答え」

タイムリミットを迎えても、ロックマンは鬼気迫る表情でサン・ゴッドを睨むだけだった。

とうとう逃げ出さなかったロックマンにサン・ゴッドは太陽をそっとしまう。今までのカウントダウンは脅しで、ロックマンの本性をあぶり出そうとしていたらしい。結局、彼はロックマンを殺すことができなかった。

「お前のような人間がまだ残っていたのか……なあ、ヴィシュヌ」

サン・ゴッドは気が抜けたような態度をとり、隣に男性を呼び出した。サン・ゴッドは分離して変身が解けてしまう。すると細身の貴族がサンの傍らできずなクルーと同じように電波体となって現れた。

伯爵は言った。

「お見事。諦めない心を確かに見させてもらった……。なるほど、人間はまだ捨てたものじゃなさそうだった」

そしてサンがロックマンに謝罪した。おそらくディーヴァの人間

を試して、人間の本質を見定めようとしていた事を指している。プルト・キグナスが関わっていた人間は彼にとってちょうど良かったのだろう。極限状態で力を手に入れた人間はどうなるのか、その結果の是非で……という彼なりの最後の情けだった。しかしその判断でメトリー達は死んでしまったのだ。

『キングについては残念だった。私はあの三人にチャンスを与えたつもりだったのだがな。その結果……お前たちの仲間は残念なことになった。すまなかったな』

サンが試した三人の悪しき人間の中で、ハイドだけは唯一正義の心に目覚めて遵守した。しかし残りの二人はだめだった。彼らは力に溺れて、地球を支配しようとした。これでは判断に困ってしまう。そこでロックマンを試すことになる。

今までの地球人の行いを帳消しにするほどの価値があるのか。エデンに映ったチームゼロの生き様から彼は判断しようとしたのだ。彼らは人間の可能性を体現していた。そして最後の脅しにもロックマンは屈しなかった。

しかしそれはサンの事情だ。ウォーロックはそんな事は知らないし知りたくもない。サンとヴィシュヌの態度の豹変に、裏を感じて疑う。

『いきなりどうした？　何を企んでいる……』

『どうしたも何もないさ。私は地球に恋をしたが、お前たちにも恋をしたというだけさ……。その一生懸命な姿勢に胸が熱くなった……！　もしかしたら私は人間を愛することができるかもしれない。お前たちも地球の一部なのだと、そう思えたのだ』

サンは紅潮しており、身の危険を感じたウォーロックは沈黙してしまった。ロックマンも言葉を失った。

気持ちは悪いが、どうやら人類は天の恵みに認められたようだ。四十億年の月日に比べれば、スバル達の生きた時間なんて一瞬だろう。それもチームゼロの任務の時間なんて、気の遠くなるほどの短い時間だ。それでもサンは四十億年分の輝きを感じたのだった。

初めて牙を剥いた太陽の前でさえも諦めずに挑戦した八人の戦士に、サンは敬意を表した。敵意はもうないのだろう。その周波数は穏やかそのものだった。

『見事だった、地球の戦士たちよ。確かに受け止めたよ。私はお前達を認めて、太陽の活動を通常に戻すと約束する』

「えっ、本当！」

『私は恋人に嘘を吐かない』

「……うぅ」

『ま、何だ。釈然とはしねえが……タイムリミットに間にあったようで良かったぜ』

ウォーロックは事件の解決を理解して、張りつめていた緊張をようやく解いた。

そしてサンは何か思い出したようで、ロックマンの方に向かって手を伸ばした。彼の手の上にはオーパーツのような古ぼけた板が乗っている。どうやらそれを受け取れという事らしい。

『おそらく君はこれから、過酷な戦いを強いられるだろう。この”アカシャＰＬＴ”を持っていきなさい』

「なんだ、これ……？」

『これはアカシックレコードの制御を可能にする制御板だ。見たところ君はアクセス権限者だ。きっと役に立つだろう』

「敵である僕になんで？」

『いや、私はもう君たちの敵ではない……。なぜなら、地球人を理解したいと思い始めたからだ。だから私は父上――いや、博士の計

画を止めようと思う……愚かな実験をな』

「博士……？　実験……？　インフィニットも言ってたけど……」

サンはその質問には答えずに電波変還すると、新たにウェーブロードを作り出した。彼はそのまま太陽の異常活動を止めるために、背を向けて作った道を歩き始めた。

最後に意味深な言葉を残して、彼は去っていく。

「私が教えるまでもない。なぜなら君はもう選ばれたのだから。ジェイルと共に真実を確かめに行くといい」

サン・ゴッドはそのまま上空に浮かぶモニターの一つを指差す。それを見て判断しろと言うことらしい。

そこにはブライが映っており、その他にハープ・ノート、ソウル・レイダーと言ったチームエクスの面々が確認できた。そして、そこにはインフィニットが待ちかまえたかのように構えていて、ブライ達と相対している。映像から声は伝わらないが、インフィニットが剣を抜くと一触即発の雰囲気がピリピリと伝わってきた。どうやらチームエクスも最終局面に差し掛かろうとしているようだ。

サン・ゴッドは去りながら最後の警告をした。

「このままでは彼らは殺されてしまうだろう。インフィニットに挑戦するにはまだ早い。なぜならインフィニットはその力の半分も出していないのだから……」

「え……？」

動揺を隠せないロックマンだったが、ジェイルの狂ったような叫び声を上げた登場によりそれはないものとされた。ジェイルはサン・ゴッドにわめき散らす。

「テメエ！　ゼロフレームを寄こしやがれェエ！！　勝ち逃げなんて許さねえ！！」
「……お前にゼロフレームはまだ早いよ。……それにまだやることがあるんじゃないのか？　じゃあな」

ロックマンとジェイルに別れを告げると、サン・ゴッドはそのまま青空の向こうに消えてしまった。
ロックマンは少し呆気にとられるし、ジェイルがなぜフレームにこだわるのか気になったが、それ以上にブライ達が気がかりだった。インフィニットに殺されると聞いて穏やかでいられる訳はないだろう。助けに行く必要があるだろう。ロックマンはジェイルに助けを求めるしかない。

「ア、アンタ！　ここに来た時と同じように……ブライ達の元に行くの手伝ってよ……！」
「チッ、ゼロフレームが手に入らなかったのは誤算だ……クソッ！！」
「聞いてるのか？」
「分かってるよ、うるせえなぁ！！　こっちもこっちで、祭りの準備が整わなかったんで、イライラしてんだ！！　黙れ！」
「でも、インフィニットを倒しに行かないと！！　お願いだ。早く手伝ってよ！！」

慌てた様子のロックマンにジェイルは苛立ちを露わにして、彼の口を手で覆って乱暴に塞いだ。ジェイルも予定とは違った事態に、少しの焦りを見せている。

「黙れ、こっちも消耗してんだ。イライラさせるな……。チッ、このままでアイツらをやりに行っても返り討ちだ……どうすれば」

ジェイルは一人で考え込んで、彼の欲望を満たせる答えを探そうとする。しかし結局この状況だ。彼一人では何ともならない。仕方なく彼は不本意な判断を下した。彼はロックマンの口から手を離すと、乱暴な口調はそのままに質問した。

戦力不足なら補えばいい。残念なことにジェイルは友達がいないのでここはロックマンに聞いてみる他ない。

「おい、ガキ。お前の知り合いで一番強いヤツはどいつだ？　一人だけでいい。そんなに多人数は通せないからな」

「え……？　どうしたんだよ藪から棒に……」

「このまま行っても勝算は薄い……。だったら仕方ない、そいつの力を貸してもらおうってことだ」

ｅｄｅｎ―４５：無限を超えたその先へ

【宇宙サイド：終末エデン最深部】

場所はエデンの最上階、神の実験室。そこでは太いパイプに繋がれた培養液の中、きずなクルー達が浮かんでいた。他にもレギオンの出来損ないのような電波体がカプセルの中で漂っている。定期的に使用されているようで、血の匂いとサビが混じった臭いが鼻にツンとつく。そのような実験の生々しい残り香が辺りに漂っていた。

さらに辺りには生体コンピュータらしき脳みそが細いコード類に繋がれて辺りを包囲している。そんな不気味な精密機械の脇を固めるようにウォーセヴティとヴィーナスが陣取っていた。その他に鉄の巨人ことデューオも奥の方にいるのが確認できる。彼はデウス・エクス・マキナのカギを手に持ち、仏頂面でやってきたチームエクスの顔ぶれを見定めていた。そうそうたる面子にここが決着の舞台だと感じさせる。

そして今、インフィニットはブライ達に向かって剣を抜いている。彼らチームはさきほどここに来たばかり。ここまで来た彼らの成長に、インフィニットは内心で驚いていた。

インフィニットはそのままブライ達の方に一歩踏み出すと、一言褒めてやる。

「たった一ヶ月で、よくもまあ……。とりあえず、宇宙の極にようこそ。ここは外と内が混じり合う、臨界点だ」

ソウル・レイダーも剣を抜き、単刀直入に宣言した。

「お前を……斬る！」

ソウル・レイダーの静かな決意に後押しされる形で残りのチームも武器を構えた。インフィニットは熟成したソウル・レイダーの姿をまじまじと見つめて品定めする。

そしてソウル・レイダーとの決着をつけてやることにする。それは、ここでミライの戦いが終わるという事だった。

「フッ、成長したな。とてもエクスフレームに馴染んでいる……。そろそろ、かもな」

「……？！　？　ッ！！」

エクスフレームという単語にソウル・レイダーは驚き、インフィニットの澄まし顔に釘づけにされてしまった。彼は堪らずエアディスプレイのリフレインに問いかけた。リフレインはエアディスプレイの奥で何やら慌てた様子だったが、彼の呼び掛けにすぐにディスプレイの前に戻ってくる。

エアディスプレイの奥で一瞬見えた見覚えのある三人の人影を気にするも、ソウル・レイダーはリフレインに弁明を求めた。

「博士、なぜアイツがエクスフレームの存在を……？　フレームは極秘の存在だったはず」

ソウル・レイダーはどこか嫌な予感を感じている。インフィニットに注意を向けつつも、リフレインが明らかに血の気が失せた表情を作っていくことを確認してしまうと、気分が悪くなる。そうして予感に確かな裏付けを得てしまったのだった。

ポーカーフェイスのリフレインをここまで揺さぶるとは、インフィニットの握っている秘密は恐ろしい。ソウル・レイダーもたったの一言に揺さぶられている。

「何か知っていますね博士……？」

《いや、わ、私は……なにも知らない……何も知ってる訳ないだろう！》

リフレインは言葉を濁して、ソウル・レイダーの言及をかわそうとしている。彼はおそらくインフィニットが握っている事実に気付いているのかもしれない。祖先の研究所で見つけた、ゼロフレームとゼロプロジェクトとエクスフレーム。いやな予感が連鎖的に繋がって爆発的に、理論的な可能性を求め出した。

インフィニットはそんなやり取りを見て、青ざめたリフレインに止めを刺す。

「リフレイン……いや、トニック。お前はセツナに本当の事を教えていないのか……？」

《知らない……知る訳ないんだ。私はあの文書を全て解読できなかった……》

「なるほど、エクスフレームは解読したクセに、ゼロフレーム、ゼロプロジェクトまでは解読出来なかったと……？」

その瞬間、ソウル・レイダーは理解したのだった。インフィニットはほとんどの全てを理解しているのだと。自分の本当の名前はおろか、自分たち親子の秘め事のほとんどを見透かしてさえもいた。そして意味の分からない言い合いが繰り広げられていく。とても気色が悪い。

ソウル・レイダーは気付いたら走り出していた。

「何を言ってるんだ！！　お前達はァッ！！」

ソウル・レイダーは気持ちの悪いやり取りをしている二人に怒鳴りつける。彼は今まで一番の動揺から荒れた。

インフィニットは全てを知り、弄んでいた。リフレインはそれに恐怖している。ソウル・レイダーは堪らなかった。

インフィニットに向かって飛びかかった。彼のインフィニットに対する冷静な殺意は、チームの一斉射撃を援護とし、自身の最高の力で刻みつけることに繋がる。

ソウル・レイダーのエクスフレーム・バージョン7がリミッターを解除して彼を虹色に包む。戦闘周波数は爆発的に上がったのだ。虹色の剣を振りかぶり、虹色の剣士は叫んだ。

「エクフレーム解放！！　レベルR！！」

二本の剣にインフィニット以上の戦闘周波数が流し込まれていく。ソウル・レイダーの最強の必殺技だ。

「食らえ！　レイン・ボウ・アスタリスク！！」

「ムゲンザン……」

今持てるソウル・レイダーの最強の必殺技だったが、インフィニットの剣術の前に軽くいなされてしまった。直情的な太刀筋はインフィニットの流れるような太刀筋の前に意味を持たない。もちろん援護射撃もインフィニットのワイル粒子の前では意味を成さなかった。

そしてインフィニットは独断専行の攻撃を行ったソウル・レイダーに本物の攻撃というものを見舞ってやる。

「レンゴクノハドウ」

息をする間もない次の瞬間だった。インフィニットの赤いワイル粒子がソウル・レイダーを吹きとばした。赤い煉獄の波動が刃の形を取り、ソウル・レイダーの体を分断したのだ。およそ体の２５％にも及ぶ欠損だった。普通の人間なら生きていられるものではない。

そんな風に変わり果て、電波変換が解けるソウル・レイダーを眺めながらインフィニットは冷たく言い放った。

「少し、浅いか……」

インフィニットはインフィニットセイバーの出力を上げると、強く握りこむ。するともう一言付け加えた。どうやら、上半身の半分を落としただけでは満足しないようだ。

「次は足を落とす。あまりちょこまか動かれたら鬱陶しいからな」

インフィニットは神の最高作品であり、何に置いても”斬る”ことだけに主眼を置かれて設計されている。五体不満足となって転がっているミライの姿が圧倒的な現実感を伴いながら物語っているのだ。

チームの全員がミライの容体を心配するが、少なくない数がミライの正体に驚いていた。彼の体の肩から腹に掛ける断面に目が行ってしまっている。彼の傷口からはオイルが人工血液と混じって溢れていく。

ミライは激痛を堪えながらも、辱めの乙女のようにすぐに肩に手を当てて、傷口を隠そうと試みた。しかし傷口が大きすぎて、とても隠しきれない。彼は恥ずかしさと恐怖が入り混じった表情を浮かべて目に涙を溜めると、浴びせられる視線から逃げるように目を閉じた。

今の彼には、心配したハープ・ノートの一言さえも重くのしかか

る。

「ミライ君……その体……！」

ミライの体は機械だった。エクスフレームという機械骨格により彼は尋常ではないシンクロ率と戦闘周波数を叩きだしていたという訳だった。そしてミライは涙をこぼしながら白状した。恐怖に怯えた表情で、ハープ・ノートに首を振って見せたのだ。

「見ないでくれ……頼む。こんな俺の姿を見ようなんてしてくるなよォ！」

取り乱したミライは珍しい。おそらく彼は自分の醜い正体をずっと隠していたかった。彼の体のほとんどは機械で、もはや人間とは言えない。それだけは絶対に知られる訳には行かなかった。たとえ命を共にした仲間であってもだ。

しかしハープ・ノートはミライの体の心配だけをして余計な詮索を入れず、傷の手当てをしてやった。

「分かった。今は何も聞かない。でも、傷の手当てだけは……させて」

「響……俺はッ、俺はッ」

「大丈夫、キミはキミだよ。インフィニットはみんなに任せて。大丈夫、怖がらなくていい……」

「あ、ありがとう……」

ミライは傷口を隠すことはやめて、手当てをハープ・ノートに任せた。きっと彼は恥ずかしくて死にそうなのだろう。彼の赤くなった頬が動かぬ証拠だ。まるで、少女のようでか弱い印象である。

その姿にインフィニットは舌打ちをした。

「チッ、こんなのが私の……」

インフィニットは汚いものを見るかのようにミライを睨みつけて軽蔑している。まるで自分の醜い部分を見せられたかのように、異常に毛嫌いしている様子が見て取れた。

するとそんなインフィニットに、研究所の奥から一人の老人が現れて事の首尾を尋ねる。杖を突き、かなりの高齢で顔にはシミが入って、狂喜を思わせる鋭い目つきだった。老人はリフレインと同じようにモノクルをしていた。

「どうじゃ首尾は？」

「はい、すぐに終わらせます」

「そうかそうか、楽しみじゃのう……」

老人の登場に、インフィニットに対して攻撃の機会をうかがっていたチームエクスの全員が声を失った。彼は二百年前に死んだはず。スカッド・エースが生唾を飲んで、インフィニットに物怖じ一つせずに語りかける老人に戦慄したのだった。

「こいつはとんでもない事になったな……」

老人はチームエクスのことなど意に介していないようで、ミライだけを見つめながら、インフィニットに命令する。

「インフィニットよ。ワシはそろそろセツナが欲しい……」

「了解しました。マスター」

インフィニットが剣を構えると、ミライが脂汗を吹き出しながら、老人の姿に唖然とした様子で固まってしまう。エアディスプレイの

リフレインも同じだった。

「お……おじい様」

《なぜ彼が……二百年前の人間がなぜ……》

二人と同じように、チームは動けない。インフィニットが隙を見せないこともそうだが、老人の正体が何に置いても衝撃らしい。

しかしインフィニットはその現状を少し憂慮している。今は老人の正体に驚きを隠せない面々だが、ここから先この場所は修羅場になる。インフィニットは老人の身を案じて、下がるように促した。

「マスター下がっていてください。ここは危険です」

「ワハハハハ、お前がそばにいて何が危険だというのだ。インフィニット？」

「ですが……」

インフィニットは聞き分けが悪い老人に困ってしまい、彼の相手をしている時に一瞬の隙ができた。チームはその一瞬の隙を見逃さなかった。老人の正体は今はどうでもいい。インフィニットを倒さなければいけないからだ。全火力を注いだ一斉射撃を見舞ってやる。間違ってもインフィニット相手に接近戦は挑まない。ミライのようになってしまう事が明らかだから。

しかし老人に気を取られているインフィニットに援護が入った。きずなクルーのカプセルを見張っていたウォーセヴティとヴィーナスが銃撃の嵐をワイル粒子で全て無効化したのだった。彼らもインフィニットと同じで化け物だと認識させられる。

ウォーセヴティがインフィニットに文句を垂れる。

「おい、気ぃ抜いてんじゃねえぞ。インフィニット」

すると老人がインフィニットの肩を持って、逆にウォーセヴティを叱りつける。老人のお気に入りはどうやらウォーセヴティよりもインフィニットらしい。

「まあ、そう怒るな。インフィニットはワシの我がままに付き合ってくれただけなんじゃ」

「チッ、オヤジはいっつもインフィニットだな！！」

ウォーセヴティは嫉妬を露わにした。そして老人の前で良いところを見せようとしたようで、治療を受けているミライの元に向かい始める。チームの全員はミライを守ろうとするが、ウォーセブティの滅茶苦茶なパワーの前では成す術はなかった。

「へッ、さあ、俺達と一緒に行こうか、ぼっちゃん」

ウォーセヴティはミライにだけは丁寧な対応をして、手を差し伸ばす。どうやら老人が見ている手前、ミライには乱暴出来ないらしい。その行動から彼とインフィニットの間には絶対の差があることがうかがえた。

もちろんミライはウォーセヴティの手を取ることはしない。

そしてミライはインフィニットの隣で事を傍観している老人に詰め寄った。

「あなたは、おじい様。いや、アルバート・W・ワイリー博士……。なぜ、生きているんですか？！」

「ハハハ、立派に育ったのうセツナ。さあ、強がってないで、ワシと一緒に来い。お前の役目はもう終わったんじゃ……」

「質問に答えろ！！」

「そうかそうか、そんなに知りたいかワシの正体が……」

ワイリーは我がままな子孫の言う事を可愛らしく思ったのかニヤリと笑ってみせ、ウォーセヴティにいったん引くように促す。そして剣を構えるインフィニットにも、ミライ達に時間の猶予を与えるように促した。さらには、ミライの隣のエアディスプレイに顎をしゃくり、リフレインに説明役を求めだしたのだ。

リフレインは声を失った。

リフレインはかつて先祖の研究所、つまりワイリーの研究所でワイリーの残した遺産に手を伸ばしていた。彼はあの時点でエクスフレームを解読してミライを作り出した訳だが、ゼロフレームとゼロプロジェクトだけは理解できなかった。いや、漠然と理解はしていたのかもしれない。だが、どうしても信じられなかったし信じたくなかった。死後のワイリーが電磁波骨格機械生命体を作ろうとしていたなんてあり得ないと思ったのだ。事実、研究所ではレギオンと思しき設計図が残されていただけだった。悪い予感だと信じたかったのだ。

しかしレギオンとの戦いを重ねるにつれて、ワイリー研究所の事が脳裏をよぎった。そして今、現実にワイリーが生きて目の前に現れて、レギオンを従えてリフレインに迫っている。レギオンは空想の産物ではなくて、現実に存在していた。今までの戦いで嫌な予感は大きくなっていたが、ここまでされてはリフレインの予感はもう、確信に変わっていた。

ワイリーはそんなリフレインの心情の全てを見透かしているのだろう。

「さあ、トニック、可愛い息子に説明してやれ。インフィニットの言葉に、ワシの登場、お前の中でもう答えは出ているはずじゃ。ゼロプロジェクトの正体ももう理解したんじゃないのか？」

リフレインは目をきつく閉じて、やり切れないといった様子で今までの自分の行動を後悔した。ミライを作り出したのも、全てはワ

イリーの思惑通りだったらしい。

《わ、私は……アナタの思い通りに操られていたってワケか……ク、クソ！！》

「そうさ……ワシはワシの子孫を信じて、ミライを託した。ワシが残すであろうゼロプロジェクトの全てを理解してくれることを望んで！」

《私は確かに吸い寄せられるようにアナタの残した研究所に足を運び、ゼロプロジェクトを解読しようと必死に研究を重ねた。そしてミライを作り出した……》

「そう、お前はミライを作り出した！　世界を照らす、世界を救う救世主をな……！　血は争えん。ワシの子孫はきっと、禁忌に手を伸ばすと信じていたよ。そしてミライは見事ロックマンを導き、舞台に上がれるまでに彼らを導いた。だからもう、役目は終わりなのだ。次の導き役はデコイにでも任せるといい」

ワイリーはブライの方にちらりと目線をやると、すぐにリフレインのモニターに向き直る。どうやらリフレインは苦悩しているようだ。

《わ、私は……こんなことになるなんて……これじゃ、世界は……》

リフレインは頭を抱えて、ミライという化け物を生み出した事を後悔していた。彼が理解してしまったゼロプロジェクトの通り、このまま世界が進むのだとしたら、彼の犯した罪は重いということだ。

だがワイリーはリフレインがミライを生み出したおかげで世界が救われると説く。両者の間で圧倒的な隔たりがあるようだ。

「なにを苦しむ必要がある？　お前がミライを作り出したおかげで、今度こそ世界は救われる！　ワシでは出来なかった機械に心を宿ら

せる事をお前は実現して見せたのだ！！　誇れトニック！　お前は間違いなくワシの血縁者の中で、最高の科学者だ！！」

ワイリーの叫びに、リフレインは心を打ちのめされたが、彼は科学者である前に一人の父親だった。一番辛いのはミライだと理解して、気丈に振る舞った。そしてチームの全員に世界の命運を託したのだった。

確かにリフレインはミライというメシアの半身を生み出した。しかし今はその罪を受け止めて、ワイリーとインフィニット達を討つしかなかった。それしか世界が救われる方法はない。なぜならゼロプロジェクトは世界を滅ぼす計画だからだ。

リフレインはミライに全てを白状して、それでも戦えと訴えた。ゼロプロジェクトが本当だとするならば、今目の前にいるワイリーはこの世界のワイリーではない。

《ミライ……いいや、セツナ。今、目の前にいるおじい様は私たちの先祖のおじい様と似て非なる者！　惑わされるな！　戦え！　私はお前にミライを託す！！》

そう言うと、リフレインはミライに最後の力を託した。彼はレイダーに施したエクスフレーム制御パッチを解除したのだ。ミライのハンターが輝き、少年にメシアとしての力を与える。

幸いワイリーはリフレインの最後のあがきを科学者としての悪癖から、楽しみそうに見守っている。

リフレインはミライに謝罪すると、一人の父親として息子に勝利への活路を見いださせた。

《今、お前のエクスフレーム7の全ての制限を解除した。今のお前はインフィニットにさえも負けないはずだ……！　セツナ、お前はよくやった。母さんもお前の成長を誇りに思うだろう……っ。お前

は私たちの自慢の息子だ！！≫

「は、博士……ぼ、僕は……」

リフレインはそうは言うが、ミライ本人はワイリーの登場や、次々に浴びせかけられる事実に困惑を隠せない。彼らの言う事が事実だとしたら、ミライはワイリーの欲望の為に生み出された人形という事になってしまう。それが悲しくて堪らない。恐ろしくて、潰れてしまいそうだった。自分が世界を滅ぼすために生まれてきたという事実に立ち向かえる子供は、そう多くはないのだから。

そしてここに来て、エクスフレームの本当の力を託された。世界を一度も救った事のないミライに全てを託されたのだ。怖いなんてものではないだろう。ミライはようやく、ロックマンという存在の偉大さを理解してしまう。ミライは世界を背負わされて初めての強い恐怖と戦い、先祖との戦いに震えあがった。

今のミライは、か弱かったころのセツナと同じで、心に作り上げた完璧な自分が崩れ去っていた。母親と交わした約束も守れそうもない事にミライは涙した。

だが、リフレインはミライを作った本当の気持ちを教えてやり、インフィニットを越えろと勇気づけさせる。彼がミライを生み出した理由はワイリーの意思ではなく、母親の強い遺志と父親の執念が生み出した奇跡の結晶だと言ってやった。

≪勘違いしないでくれセツナ。お前を生み出したのは、私と母さんがお前に生きていてほしかったからだ。世界の英雄や、世界の破壊者でもなく、私たちの息子としてお前に生きていてほしかったからだ！≫

「……と、父さん、僕は……それでも……やっぱり弱いままなんです」

≪大丈夫。お前は強い！　私に見せてくれたお前の生き様は誰が何と言おうが、宇宙一だった！　母さんは言っていた”セツナが自分

を信じられた時、あの子は誰にも負けなくなる”ってな》
「母さんが……そんな事を……」
《ああ、母さんはな、お前の未来をずっと楽しみにしていた……。見せてやれ、お前の歩んできた道の全てを！　天国の母さんにも届く力の全てを！！》

リフレインの熱い言葉に、ミライは泣く事をやめて、大好きだった未来にすがることもやめた。一人の男として、ワイリーやインフィニットから世界を救うと心に決めたようだ。彼は母親との約束を本当の意味で守ることにしたのだった。彼はレイダーをウィザード・オンさせると後ろでまとめた長い髪を切断するように命令した。

「レイダー、僕のこの髪を切れ……」
「ミライ様……いいのですか、未来様との約束では……？」
「いいんだ。母さんは僕に男らしくいてほしいといつも言っていた。僕はもう母さんにすがるのはやめた。だって僕はセツナだから」
「……そうですか、立派になられましたね。セツナ様……！」

レイダーは成長したセツナの姿に涙を浮かべると、長くて綺麗だった黒髪を切り落とした。そしてレイダーと頷き合うと電波変換を開始して、セツナの本当の力を解放した。

「電波変換。セツナ・W・リフレイン！　オン・エア！！」
『エクスフレーム最終解放。レベルインフィニット！！』

ｅｄｅｎ―４６：永遠の刹那

今、エクスフレームを究極解放して現れた電波人間の名は、インフィニット・ブレイカー。銀色に輝く彼はインフィニットの力さえも越える剣士である。なによりソウル・レイダーとの一番の違いはその髪で、白銀の髪の毛が後ろ向きに逆立っていた。エクスフレームの超回復により、傷も回復しているようだ。

しかしリフレインは熱く語っていはいたが、この変身はセツナの命を削るものだ。親子が命がけで作ったインフィニットを越える結晶である。つまり残された時間は少ないということ。

それでもインフィニット・ブレイカーは男となり、過去との決別の為、オックス・ファイアに向き直ると、今までの非礼を詫びた。彼はずっとゴン太とゴンタレスを重ねて、意地悪をしていた。それが何より、彼が子供だったという証拠であり、恥ずかしくも思う。しかしもう謝る機会は無いかもしれないので、彼は素直な態度になれたのだった。

「悪かったな、牛島、今までお前に意地悪をしてきて……すまなかった」

「い、いきなり、どうしたんだよ、ミライ」

「僕もまだまだ子供だったんだなぁ。お前はアイツとは違うのに……な」

子供だった自分にインフィニット・ブレイカーは苦笑すると一息置く。そしてチームの道を切り開くため、友の道を切り開くため、

語気を上げた。

「牛島……いや、ゴン太、そしてミソラ、それにみんなっ！　インフィニットは僕に任せて、きずなクルーの人たちを助けてあげてくれ！！」

インフィニット・ブレイカーはこの場を受け持つ事を宣言して、インフィニットセイバーとよく似た、赤色の剣――エクスセイバーを構えた。そうしてインフィニットに対して不敵な笑みを浮かべる。その表情は自信の表れと言えるだろう。

インフィニットはそれを頼もしくも思い、インフィニットセイバーを構えた。

「なるほど……、素晴らしい力を手に入れたようだな。セツナ」

「……インフィニット。僕はお前を倒すよ」

「出来るかな……お前に」

「やってみせるさ」

チリチリと刺すような周波数が立ち込める。そんなインフィニット・ブレイカーのぶれない自信にインフィニットも冗談とは受け止めなかったようで、ワイリーを後ろに下がらせ、デューオに確認を取る。デウス・エクス・マキナのカギで宇宙中のエデンの設定解除が終了したのか気になるのだろう。それさえ終われば、もうここにいる理由はないのだ。

インフィニットはデューオに目配せすると、鉄の巨人は頷いた。

「デューオ、エデンの認定は取れたか？」

「もうすぐで、全ての設定が解除できる」

「そうか。なら、お前達は博士と実験体を連れてジャンプポイントに退避しろ。……いいな？　ウォーセブティに、ヴィーナス」

インフィニットは一見、敵に対して目を離しているようだが、そのワイル粒子に微塵の隙はなかった。チームエクスをその場に釘付けにしながらテキパキと命令していく姿は完璧なワイリーの作品だと言えた。その姿にワイリーもこれ以上、わがままは言わずに研究室の奥に消えていく。ヴィーナスもワイリーを守ろうと、すぐに後についていった。

デューオもインフィニットの指示を了解して、奥に消えていく。

ただ、ウォーゼヴティだけはインフィニットに対する嫉妬からか、言う事を聞かなかった。

「てめえ、オヤジに気に入られてるからって調子に乗りやがって……っ」

「うるさいぞ、ウォーセヴティ。早くきずなの者たちを連れていけ……！」

しばしインフィニットとウォーセヴティは睨み合いするが、チームエクスが隙を探っている現状と、インフィニット・ブレイカーの油断ならない戦闘周波数を感じるとウォーセブティは舌打ちして、仕方なくインフィニットの指示に従うことになる。彼はきずなクルーが入ったカプセルを電波化させると懐に収め、研究室の奥に走って行った。

「待てっ！！」キリン・ライトニング達は後を追おうとするが、インフィニットがそれをさせてはくれなかった。彼は一定の範囲に自分のテリトリーを作っており、そこに入ろう者を全て切り捨ててしまうだろう。

インフィニット・ブレイカーもその予想される太刀筋を考慮して、今インフィニットと睨み合いをしている。両者一歩も引かずに、神経を削る戦いを繰り広げる。どちらが先にしかけてもおかしくない緊張した場で、先に仕掛けたのはインフィニット・ブレイカーだっ

た。彼は飛びかかると同時にチームにデューオらの後を追うように促した。

「今だ！　行け！！」

「分かった！！　行くぞみんな！！」

インフィニット・ブレイカーの合図にブライが応じ、チームはインフィニットをやり過ごそうと、デューオ達が消えていった研究室の奥に駆けだした。しかしインフィニットが黙っていない。

「させるか！！　コウホウ――」

「お前の相手は僕だ！　ビッグバン・アスタリスク！！」

インフィニットの攻撃よりも先に、そうはさせまいと、インフィニット・ブレイカーが割り込んだ。

まるで宇宙の始まりを思わせる激しくて重い一撃。インフィニット・ブレイカーの凄まじい剣術に、さすがのインフィニットもブライ達の方に気が回らなくなる。どうやら、チームをうまく追跡に回すことができたようだ。ここからはインフィニット・ブレイカーとインフィニットの一騎打ちである。

インフィニット・ブレイカーは何度かインフィニットを切りつけると、後ろに飛びのいて距離を置く。なんと彼はインフィニット相手に互角以上の戦いを繰り広げていた。インフィニットの頬に切り傷が付き、血が垂れていく。

するとインフィニットは研究室の奥に消えていくブライ達の背中を尻目に、嬉しそうに笑いを浮かべた。インフィニット・ブレイカーの圧倒的な力に興奮を隠し切れていないようだ。彼は冷静さを装い、獣の部分をひた隠す戦闘狂だった。

「アハハ、ハーハッハッハ！！　どうやら、リフレインはマスター

の残したエクスフレームの全性能を実現したようだな……！！　やはりこの世界でカギを作って……正解だった」

インフィニットはインフィニット・ブレイカーに剣を伸ばすと、燃えたぎる闘志を切っ先に注ぐ。そして彼は声高らかに喜びを爆発させた。

「喜べセツナ！！　お前は今、俺と同じ領域に足を踏み入れた！！　そう、世界を救う権利を手に入れたのだ！！」

「何を馬鹿な事を……！　それに僕はお前を越えた！！」

「そう……そうだとも。お前は俺を越えた！　だが、俺はそんなお前をさらに越える！　だって俺に限りは無いのだから！！」

目の前の少年の圧倒的な可能性を感じると、インフィニットもはや出し惜しみをする必要はなくなった。今までの自分の力の種明かしをして、決着をつけてやることにする。これは気持ちのいい戦いをする為に必要なことなのだろう。彼はぽつぽつと語り始めた。

「時の試練を受けてきたんだろう……？　そこで出会った俺のライバルたちはどうだった？」

「お喋りをする気はない！！　斬る！！」

インフィニット・ブレイカーは冷静だった。それが功を奏し、興奮して浮足立つインフィニットに切り込む判断ができたようだ。それもさっきよりも速いスピードで、それでかつ強い周波数を込めての攻めだった。

しかしインフィニットはそのスピードに対応してきて、インフィニット・ブレイカーの斬撃を受け止めた。さきほどまで対応できなかったはずなのに、軽々と見切られたのだ。

インフィニット・ブレイカーは面食らってしまう。するとすぐに

インフィニットの戦闘周波数が跳ね上がっている事を理解した。頬を冷たい汗が伝い、握った剣に汗が染みる。インフィニットは名前通り、その強さに限りがなかった。

インフィニットは剣を振り抜く。すかさず反応するインフィニット・ブレイカー。しかし銀色の腕は斬り飛ばされてしまった。反応は決して遅くなかったが、インフィニットがそれ以上に速かったらしい。

形勢逆転となり、インフィニットが話の続きを始めた。

「一つ言っておかないといけないな。今までの俺のゼロフレームの仕様はせいぜい四か五番目の世界のものでしかなかった。だが、お前がエクスフレームの真の力を解放した以上、遠慮はいらないな。今の俺はゼロフレーム１３を解放したインフィニットＸＩＩＩだ！」

前回の実験から一段階進化した彼は、十三段階もの力の制御が可能となっている。彼は敵のレベルに合わせて絶対にそれ以上に強くなる力の持ち主だった。敵が百の力を持つなら、二百の力で潰す。千なら万で潰す。兆なら無限の力で切り刻む。インフィニットはそんな存在だ。

インフィニット・ブレイカーは君臨する王の威圧をインフィニットから感じたに違いない。

「……コ、コイツ。今まで手を抜いて……！」

「いや、そうじゃない。俺は今までずっと本気だったさ。ただ俺の力はどこまでも限りなく強くなっていくだけということ。なぜなら俺はインフィニットだから！！」

「ふ、ふざけてる……！」

インフィニットはこの世界の仕様にあった力を解放してインフィニット・ブレイカーに迫る。彼は地面に転がる腕を拾い上げると剣

を取り、それをインフィニット・ブレイカーに投げてやった。まだまだ戦いはこれからという訳らしい。

「さあ、剣を取れ。私はまだまだ満足していない！！」

圧倒的な敵を前にインフィニット・ブレイカーは覚悟を固めるしかなかった。その時、彼はゴン太に謝ることができて、本当に良かったと思ったのだった。そしてもう、地球には帰れない事を悟った。彼は母親の言葉と父親の執念を胸に立ち上がった。

無限大が何だ？　それならば、さらにその上の無限大をいけばいいのだから。

「なるほど、お前はどこまでも限りがないのか……ハハ、面白い！　なら、僕とどっちが先に限界を迎えるか根比べだ！！」

無限大との根比べ。気が遠くなるほどの苦しい戦いに臨み、インフィニット・ブレイカーはさらにエクスフレームを解放した。命がどうなっても構わないという強い気持ちの元、この刹那に全てを捧げる。とっくに彼の中の時間は永延に凍結してしまっていた。だからその覚悟はとっくに付いていた。

機械の体、スバル達と一緒に成長していくことはできない。忘れ去られて、惨めな思いをするだけならば、その命を彼らの為に燃やしたかった。そうすることで偽りの命に、少しでも意味を持たせることができるのだから。それだけが、彼が今できる唯一の生き方だった。

「ウオオオォオオ！！　エクスフレーム、僕の体！！　僕のミライの全てを吸い尽くして、このセツナに全てをくれェッ！！！！！無限を越えるその先に僕を導いてくれ！！」

インフィニット・ブレイカーは未来の全てを捧げた。その姿はあらゆる無駄を省いた人間の――少年の姿そのものだった。セツナは剣を取ると、インフィニットに立ち向かった。男らしく、最後まで諦めない。絶対に負けない。相手が無限の強さを持っていたとしても、逃げ出す訳にはいかない。

インフィニットはこの期に及んで、力の底を見せないセツナを前にして身悶えした。

「な、なんという……お前も底なしか！！　素晴らしいじゃないか！！」

「知ってるか、インフィニット。無限大だってな、ひっくり返ればゼロになる。僕の剣でお前を切り割いてやる！」

セツナとインフィニットの戦いは苛烈を極めた。セツナは倒されるたびに力を増して立ち向かった。しかしそのたびにインフィニットがそれ以上に力を増して立ち塞がる。

一進一退の攻防の末、とうとう無限の底が見え始めた。インフィニットのゼロフレームがセツナの底なしの精神力と強さの前に悲鳴を上げたのだ。きっとワイリーも予想しなかったはずだ。エクスフレームがゼロフレームを越えてくるなんて。

そしてセツナの命がけの力が、ワイリーの野望とインフィニットの無限大の力を上回ろうとしていた。

流れはセツナに向かっている。そしてその流れは完全にセツナの方に渡った。最強の助っ人たちがエデンの最深部にたどり着いたのである。それはロックマンとジェイル、そしてフェニックス・リボンだった。彼らはサン・ゴッドを倒した後、ジェイルの提案により、いったんＡＭ星に向かった。そこで事情を説明してフェニックスを

迎え、今度はＦＭ星でワタルを引き入れて、フェニックス・リボンを仲間にして登場という次第だった。
　インフィニットは豪華な顔触れにいよいよ追い詰められていく。
「フフフ、なるほどな……何百億年振りだろう。ここまで追い詰められたのは」
　インフィニットはすでに虫の息だ。セツナの圧倒的な戦いの結果の前に、駆けつけたロックマンは声を失った。
「……あのインフィニットをここまで追い詰めるなんて。ミライ君……だよね？　凄すぎるよ！！」
　ロックマンは髪を切ってしまったミライを一瞬認識できなかったようだが、すぐに歓喜の表情を浮かべる。そしてインフィニットにロックバスターを構えた。インフィニットは膝を突いて、肩で息をしている。満身創痍と言えるだろう。
　するとセツナはロックマンに言った。
「ハァ……お前、どうしてここに？　サン・ゴッドはどうした？」
「うん、サン・ゴッドを仲間にして、ちゃんと太陽は止めた。地球はもう大丈夫！　さあ、インフィニットを倒そう！！」
「なるほど……それはよかった……だが、星河。ここは僕に任せて、お前たちは研究室の奥に向かってくれ。速くしないと、任務失敗になるかもしれない」
　セツナは今はインフィニットよりも、デューオらを追う事を促した。デウス・エクス・マキナのカギを壊してしまわないと、エデンが全ての生命に対して、殲滅を認定してしまうからだ。
　ロックマンは首を傾げるが、ジェイルがロックマンの首根っこを

掴んで、セツナの意向を汲んだ。ジェイル本人、あのインフィニットをここまで追い詰めたセツナに驚きを隠せていないらしい。

「コイツは驚いた。まさかインフィニットが倒されちまってるなんてな。ハハハ、俺は運が良い！！」

ジェイルにとって、願ってもない展開と言えるのだろう。そして彼はインフィニットに向かっていく。どうやら、サン・ゴッドから奪えなかったゼロフレームを奪おうとしているらしい。しかし彼は途中で思いとどまる。研究室の奥から逃げていくワイリーの周波数を感じたようだ。

「まずいな。アイツが逃げようとしてる……。チッ、こっちは後回しか・・…」

ジェイルはどうやら、他の目的があるらしく、研究室の奥に向かおうとする。しかしロックマンは乱暴されては気分は良くない。

「痛いな！　何するんだよ！！」

「いいから、お前も来るんだよ。あっちのガキも言ってたろう？！」

言い争う二人に。するとフェニックス・リボンが先を急ぐように言った。彼は変わり果てたインフィニットを複雑そうな表情を浮かべて見つめている。カンナを殺した張本人が今、こうやって這いつくばっているのだ。何とも言えない虚しさや、嬉しさを感じているのかもしれない。

「二人とも先に行ってくれ。インフィニットを倒したと言っても、事態はあまり思わしくないようだ？　だろう、ミライ君？」

「ええ、そうです。カギの方を何とかしないと……チームの方が追

っていると言っても心配で」

ブライ達がいると言っても、ウォーセヴティやヴィーナス、そしてデューオだ。おそらく簡単にはいかない。そんな過事を考えている途中で、セツナは気がついた。肝心のフェニックス・リボンはどうするのかという事だ。彼はかなり強い。時間を無駄にしてほしくはないものだ。

「ワタルさん、アナタはどうするつもりで……？」
「俺はコイツに……インフィニットに引導を渡す。カンナの為に俺はコイツを許せない！　自分の手で葬らないと……！！」
「そうですか。なら、何も言いません。速くコイツをデリートして、後を追いましょう」
「そうだな！」

話はまとまったようで、ロックマンとジェイルがチームの後を追いカギの破壊を、フェニックス・リボンとセツナが虫の息のインフィニットに止めを刺す方針となった。

「じゃ、じゃあ。僕たちは行くね」
「ほら、さっさと行くぞ、ガキ！！　アイツらに逃げられちまう！！」

ロックマンはジェイルに引っ張られながら、研究室の奥に消えていった。
それを見届けると、セツナは腰を下ろして、フェニックス・リボンにインフィニットを譲った。どうやら彼も限界だったようだ。

「もう、僕も限界です……後は頼みます」
「ああ、任せてくれ」

フェニックス・リボンはシナジーブレードを抜くと、インフィニットに向かって歩いていく。まさかこのような結末を迎えるとは……フェニックス・リボンとしては複雑かもしれない。あそこまで圧倒的で手も足も出なかったインフィニットが、力なく屈している。

達成感の無さからか、不思議とあまり気分が良くなかっただろう。

「インフィニット。最後に聞かせてくれ。なぜ、お前はカンナを生き返らせる手伝いをしてまで、カンナを二度も殺すような真似をした？」

フェニックス・リボンの問いかけに、インフィニットは圧倒的に不利な状況の中でも、特に焦りは見せずに淡々と教えてやった。カンナを二度も殺した事実は間違いないが、彼としては別にワタルを弄ぼうとする気はなかったらしい。彼は世界を救いたかったそれだけだ。

「デウス・エクス・マキナのカギは人間の強い心の周波数を必要とする。特に絶望や愛と言った強い感情をな。俺達レギオンには心がない……だから宇宙で一番上質なカギを生み出せる生贄を探していた。一つの宇宙に限らず、あらゆる時間の全てから探したものだ」

あらゆる時間。つまりインフィニットはカギを作るためにプルト・キグナスをレギオンにして、時空間渡りの能力も与えた。ワイリーは時空に干渉することを嫌ったが、上質なカギを作るために了承したのだろう。

「そしてプルト・キグナスを利用して、俺は最高のカギを作れる下準備をあらゆる時間軸に配置した……。その際、今までの歴史が多少改変されてしまったようだが、俺はそれでも良かった」

おそらくインフィニットがプルト・キグナスを用いて、歴史の操作を行ったおかげで、本来なら起こり得ない事態がスバル達の身の周りで起きたと言える。その代表格はトラッシュの存在だろう。彼は本来なら存在しなかった。

インフィニットは続けた。

「そうして見つけたのは、響ワタル、お前だった。お前とその家族が放つ周波数は上質なカギを作るのに最適だった。だから俺はそれを利用した。

母親が死ぬ家族の恐怖。

生き返らせようとする父の執念。

父親が消えた娘の悲しみ。

疑念。葛藤。期待。欲望。それらが絡み合って、とうとう星を越えた憎しみの連鎖が生まれた。俺の目論見通りだった……」

インフィニットは些細なきっかけから始まった憎しみと幸せの連鎖を、ひたすら繋げて育て上げた。それが極限まで高まったあの場でカンナからデウス・エクス・マキナのカギを奪い取ったのだ。

その事実にフェニックス・リボンはやりきれなかった。もはやインフィニットが汚い生命体にしか見えない。

「もうこれ以上は聞きたくない。お前をデリートする」

するとインフィニットは可笑しくて堪らなかったようで、目を閉じると抑えきれない笑いをこぼし始めた。彼がここまで追い詰められたことは、何百億年もなかった。こういった命の危険が伴う経験が恋しくて彼は堪らなかった。

そして目の前にいるのはセツナとフェニックス・リボンである。嬉しすぎて堪らないのだろう。なりふり構っていられない泥臭い状

況に憧れを抱いていた彼は喜びのまま、ふらつく体を起こした。

「お前……！！」

まだ力を残していたインフィニットにフェニックス・リボンは驚き、そのまま斬りつけた。

インフィニットはガクンと膝を突くが、まだ倒れない。それどころか再び戦闘周波数が復活し始めていた。フェニックス・リボンはおろかセツナも声を失った。

「な……っ、まだ底がないのか……！」

「喜べ、セツナ。お前ほどの力があれば、マスターもきっと喜んで下さるはずだ……！」

インフィニットは底なしだった。なぜなら彼はインフィニットだから。

赤色のワイル粒子が辺りを満たし始めた。

ｅｄｅｎ―４７：ワイル粒子の加護

インフィニットがいよいよメシアとしての力を見せ始めたところ。
ワイリー達の追跡をしていたチームエクスの面々はデューオに足止めをくらっていた。
デューオはデウス・エクス・マキナのカギをワイリーに渡すと、ジャンプポイントにある通路の途中で待ちかまえて、今こうしてチームを相手にしているという具合である。
鋼鉄の巨人は強く、チームエクスのメンバーは中々その壁を突破できない。何よりサイズが違いすぎる。デューオは見上げるばかりの巨体にものを言わせて、力づくの攻撃で圧倒してくるのだった。彼が通路に居座っている限り、蟻一匹通らないだろう。
なんとか壁を突破しようとする面々。その中で息を切らしながら、キリン・ライトニングは頑固な巨人に訴えていた。彼はかつてデューオと会っていただけに、彼が正義の代行者という事は理解していた。そしてこの状況だ。道を開けるように説得している。デューオが本当に正義の味方なら、ワイリー達を放っておけるはずはない。ましてや手を貸すなんて馬鹿げているのだ。
しかしデューオは頑なであった。キリン・ライトニングの言葉は届かない。

「そこをどけデューオ！　お前のでけえ図体が邪魔だってんだよ」
「駄目だ。ここを通す訳にはいかない」

デューオが首を振ると、巨大な拳を固める。それだけで武器とな

り、その拳が放つフックは殺人的だ。

「ギガントフックッ！！」

圧倒的なリーチを持つ二つの拳が、キリン・ライトニングの両サイドから攻め立てる。まず右腕からの流星のようなフックを貰って吹きとばされると、同時に左腕からの彗星のようなフックを貰ってキリン・ライトニングは叩きつぶされた。

キリン・ライトニングは一瞬意識を失うが、槍を杖に何とか体を支える。他のチームのメンバーはデューオ相手にどう立ち回っていいのか分からずに、キリン・ライトニングばかりに負担を掛けている現状が続く。

デューオはキリン・ライトニングの精神力だけは認めたようだ。

「まだ倒れないのか、大したものだ」

「ヘッ、オメエ……笑わせんなよ……！」

感心しているデューオに怒りが込み上げてくるキリン・ライトニング。彼は軽蔑のまなざしと共にデューオを責め立てた。今までのデューオの態度には感心できないようだ。

それもそのはずで、キリン・ライトニングは少なくない責任を感じている。カンナを二度も殺してしまう結果になったのは、彼の不徳の致すところが大きいのだから。その元凶が目の前にいるとなれば、ヒートアップもするだろう。

「何が正義の味方だ……っ。お前のやってる事はただの悪党だ！！お前は俺やワタル、ミソラの気持ちをを利用して、人間の命を弄んだんだ！！」

デューオもデウスエクスマキナの事を言ってるのだと気付いたよ

うで、表情を厳しく固めた。彼は正義の代行者でいつだって正しい行いをしてきたと自負している。キリン・ライトニングの言いがかりに正当性は認められないだろう。

大局的に見れば、自分の判断が正義だっただけなのだ。そこに小さな犠牲が不幸ながら付いてしまっただけなのだ。

「……私は言ったはずだ。あのオーパーツを受け取れば、宇宙が危機に陥ると」

「そう、お前はこうなる事を知っていたんだ。それなのに、傍観を決め込んでインフィニットに加担しやがった！！　間違ってもお前は……正義なんかじゃない！！」

「見解の相違だな……私は知っていたからこそ、私の正義にしたがっただけ」

「俺はお前が気に入らないね！」

両者の意見は食い違った。デューオもやれやれと言った様子で、キリン・ライトニングを黙らせることにする。見たところチームの数は二十前後。デューオの力の前では何の意味もなさない数だった。

正義の発言権は絶対の力が裏付けになる。デューオはその極論をインフィニットから教えてもらっていた。それを実行するだけだった。

「残念だ……私の正義を理解してもらえないとは」

デューオは大きく息を吸うと拳を構える。鉄拳制裁を愚かな人間達に加えるつもりらしい。

「これで終わりにしよう。メテオナックル！！」

デューオの必殺技が炸裂した。それはただの連続突きだが、彼の

巨大さだけにその威力は凄まじい。キリン・ライトニングが雷の龍で反撃するが、砕かれてしまう。カノンが電波光壁で守りを固めるがやはり砕かれてしまう。

　すると通路の後ろの方から男の声が響いた。

「事象障壁ィイ！！」

　男の声と同時に、カノンの電波光壁を邪悪に黒く染めたような壁が出来あがっていく。それがメテオナックルからチームの全滅を守ったのだった。どうやらジェイルとロックマンがようやく追いついたようだ。

　デューオはジェイルの登場に苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる。ジェイルはデューオを睨みつけて、道を開けるように怒鳴りつけた。

「どけっ、デカブツ！！」

「なんて邪悪な……！！」

　デューオがジェイルの悪に染まりきった周波数に嫌悪感を示す。するとロックマンが驚いた声をそのままにデューオに訴えかけた。デューオはロックマンもキリン・ライトニングと同じく口かと辟易した。

「あ、教科書に載ってた人だ……！　本当にいたんだ。と、とにかく道を開けてよ！！」

『へえ、なるほど。コイツは中々のイケメンだな！　だが頭が固そうでいけねえ！』

　ウォーロックは適当にデューオの勘定をする。するとデューオは不満そうな態度は強くした。

「何と言われようとも、私はここは通さない！！　ふん、なるほどな、二百年前の少年によく似ている。だが、それでも通す訳にはいかない！！」
『やっぱりだ。こういうのは分からず屋って相場が決まってんだ！』
ウォーロックは何か策があるようで、余裕気な態度でデューオを煽りたてる。デューオがいくら巨大で隙がないといっても、この壁を突破できる可能性は零ではないと言う事だ。
ジェイルはウォーロックの狙いを悟ったようで、後ろに控えていたカノンに怒鳴りつけた。カノンはジェイルの登場に終始怯えていたが、体に刻み込まれた恐怖から、彼の言う通りにするしかないようだ。
「カノン！！　アイツの足元に電波光壁を展開しろ！！」
「……あっ……」
カノンがあたふたしていると、ジェイルはお構いなしでデューオの足元に事象障壁を展開する。そしていい加減言う事を聞かないカノンに脅しを掛けた。
「早くしろ！！　俺の事を忘れたとは言わさねえぞ！！」
「……ひゃっ、は、はい……！　で、電波光壁！！」
光の箱もデューオの足を捉えた。それらジェイルの事象障壁とカノンの電波光壁によって、デューオの足の自由が完全に塞がれてしまう。するとウォーロックが得意げにデューオに言ってやった。
「踏ん張りが効かなきゃ、パンチはできねー！　脳筋はそこで突っ立ってな！」

「むぅ」

デューオは無表情だが、確かに動きが鈍っている。それを見届けると、ジェイルはカノンとロックマンを連れてワイリーの追跡を開始する。それを見たブライもロックマンの後に続いた。

その際ブライはチームの残りにデューオの足止めを命令する丹念な心がけだった。

「お前達はそのデカブツの足止めをしておけ。いまなら、何とかなるだろう」

「了解だブライ！　お前はロックマン達を追え！」

「言われなくても」

ブライはキリン・ライトニング達にその場を任せると、ロックマン達同様通路の奥に消えていった。

そして鬼ごっこもいよいよ最終局面で、ロックマン、ジェイル、カノン、ブライはワイリー達に追いついた。薄暗い廊下でウォーセヴティは舌打ちして、しつこい四人組に苛立ちを露わにしている。

ワイリーはヴィーナスにおんぶをしてもらっているくせに無駄に偉そうだった。禿げ散らかした頭を撫でながらロックマン達を観察している。そんな老人は頬にたくさんの飴玉を詰め込んでハムスターのようだった。

ヴィーナスはそんなワイリーのお守りで手いっぱいなようで、ロックマン達を気にも留めていない。彼女はワイリーに飴玉を舐めさせるのに忙しそうだった。

そんな光景と目の前にいる死んだはずのワイリーにロックマンは

驚きを隠せないようだった。ジェイルは欲望を露わにした獣を思わせる。ブライトカノンは少し緊張したのか、険しい表情だった。

まず口を開いたのはロックマンだった。

「これも教科書に載っていた人だ……」

『アルバート・W・ワイリー……二百年前の科学者だな。とっくの昔に死んじまったはずだが……コイツはどうしたもんかな』

するとワイリーはヴィーナスから風船ガムを受け取るとソレを噛みながら、ロックマンの姿をまじまじと見つめ返してくる。

ロックマンはワイリーの視線に気持ち悪さを感じて、目を逸らした。

ワイリーは口から風船を膨らませると、くちゃくちゃと音を鳴らしながら話し始める。彼としてはスバル達の世界のワイリーと自分を同一視して欲しくないらしい。不遜な態度にそのような過剰な自信が見て取れた。

「ワシは確かにワイリーじゃ。だが、お前達の世界におった腰ぬけと一緒にしないでもらいたい……。アイツは所詮ワシの出来損ないじゃからのう。世界を手に入れられなかったのが何よりの証拠じゃ」

「出来損ない？　何を言ってるんだ、あの人は……」

『ガムを食いながら喋る爺さんのことだ。たいていの常識は通用しねえよ。見たところ、スイッチが入っちまってる。この手合いに話は通じねえ』

ウォーロックの散々な言いようにワイリーはガムを吐き捨てると、今度はヴィーナスからショートケーキを受け取ってやはり食べながら話す。どうやら大の甘党らしい。それほど頭を使うのにエネルギーを消化するのだろうか。禿げてしまうのだから、その頭脳はよほどなのだろう。

しかしどうにもワイリーは髭にクリームをくっつけながらがっつくので少年のようだった。見た目死にかけの少年とはパンチが効いていた。

「ウォーロックよ、確かにワシに常識は通用しない。ワシは全てを超越したからのう！　この宇宙さえもワシの意のままじゃもの」

ワイリーは愛おしそうにショートケーキのイチゴを眺めながら語る。彼はショートケーキを手でむしりながら食べるので行儀が悪かった。それはまるで、今の宇宙もこのように彼に汚らしく食べられているという縮図を見せられているようだ。

すると突然、ワイリーは白目を剥く勢いで、天を仰いだ。かなりのマッドサイエンティストだ。完全に自分の世界に入ってしまっている。

「まさにワシの実験場じゃよ、この宇宙は！　ファーハッハッハッ！」

その高らかな笑いは耳に悪い。なのでそれを遮るかのようにブライは言葉を投げかけた。その言葉は確認だ。ブライの生きる理由それそのものかどうかをワイリー自身に尋ねる。ワイリーの正体を知っておかなければならない。

「お前が……神なのか、ワイリー？」

ワイリーは髭に絡んだクリームを舐め取りながら答えた。

「いかにもワシこそが神だ！　全知全能の神なのじゃ！！　シーシハッハア！」

「コイツが……神！　どうやってお前は生きながらえた？　お前は

どこからやってきた？　答えろワイリー！！」

ブライの質問攻めをワイリーはつまらなく思ったのか軽くかわしてしまった。どうやらとんでもない気分屋のようで、気に入らない事にはとことん興味を示さない。

イチゴを最後に口に放り込むと、もうブライには興味の欠片もないようだ。

「ふん、生意気なガキに教えてやることは何もないわ。それにアイツに発言権をブロックされているしな……まったくつまらん」

ワイリーは途端興醒めしたようで、ヴィーナスにこの場を去るように言った。そろそろデウス・エクス・マキナのカギによってエデンの認定が下りる。これ以上お喋りをしていても仕方がないのだろう。

つまりこの任務のタイムリミットが迫っている。もちろんワイリーは逃げに出る。

「ヴィーナス、もう帰ろう。はやく帰って実験の続きをしたい」

「ハーイ、パパ！　私も疲れちゃったし、急ぎましょう」

ヴィーナスはきらきらと輝きを振りまきながらワイリーに愛想を振りまくと、ロックマン達に手を振ってその場を後にしようとする。無邪気な様子に笑顔で送り出したくなるが、そうもいかない。

ロックマンはロックバスターを構える。ブライもラプラスブレードを握って、ワイリーに飛びかかった。

しかしウォーセヴティが黙って見ている訳がない。素早く割って入って、素早い身のこなしでブライとロックマンを一蹴してしまう。そしてハッと鼻で彼らを笑い飛ばすというオマケも付けてきた。仕草の端々にウォーロックを感じさせる。

そして態勢を立て直すロックマンとブライ。しかし追跡ができない。睨み合いをしていても仕方がないが、ウォーセヴティはかなりの強さを持っており、下手に前に出られなかった。

そうやっている間にワイリー達は逃げていってしまう。

任務失敗が濃厚となってきた。苛立たしいほどに邪魔な黒いウォーロックは道を通す気は無いらしく、ウォーロックは並々ならぬ闘志をかき立てられた。

『テメエっ、俺のファンか?!　俺様のパチモンみたいな格好しやがって!!』

ウォーロックの言いようにウォーセヴティは苛立った。爪をぎらつかせると、血走った目を剥く。狂喜だけが印象的だ。

「ああ、口には気をつけろよ!　お兄ちゃん!!　俺様は全てにおいてアンタを越えている!!　よく見ろよ、俺様の方がイケメンだろう……?」

『黙れパチモン!　絶対俺様の方がイケメンだ!　ちなみに俺様の方がイケメンボイスでもある!!』

「バカ野郎!!　俺様の方がだな……!!　全てにおいてイケている!!」

ウォーロックとウォーセヴティの下らない言い争いが繰り広げられている。そんな時、ブライが痺れを切らして、ウォーセヴティに斬りかかる。ラプラスブレードを思い切り振り回し、強行突破の姿勢だった。

「そこをどけ!!　ブライブレイク!!」

ブライ渾身の一撃が炸裂したかに見えたが、彼の重い一撃をウォ

ーセブティは方腕一本で受け止める。どうやらウォーロックを相手に口げんかしていても、しっかり周りに注意を向けていたらしい。
彼の爪はラプラスブレードの刃とまともにぶつかりあってもビクともしなくて、逆にラプラスブレードが悲鳴を上げて剣状態から、少女状態に戻ってしまった。ブライは舌打ちして、カノンを引きながら一歩後退する。
ウォーセヴティは肩を回して、ようやく準備運動の完了と言いたげだった。

「へッ、ここは通さねえよ！！」
「チッ……！　このままじゃワイリーに逃げられる」

ブライは具合悪そうに、ウォーセヴティの奥に目をやる。もうワイリーの姿は見えない。ウォーセヴティはおそらく隙を見せない。まだ彼らの力ではウォーセヴティは突破できない。しばしこう着状態に陥る。
すると不意に、通路の空気が少し震えて地面もわずかに振動した。それが合図だったようで、ウォーセヴティはくるりと返って背を向けた。どうやら彼の任務は成功したらしい。ジャンプポイントというものが作動したのかもしれない。それは同時にブライ達の任務は失敗したことを意味していた。
ウォーセヴティはヒラヒラと手を振って見せると、そのまま通路の奥に走っていく。

「はっ、もうここに用はねえな。あばよ」

ロックマンは悔しそうに舌を噛んでいる。ブライはウォーセヴティになおも食らいついた。彼は任務の成否よりもワイリーを抹殺したいのだろう。そんな意思に反応したように彼の右腕の暗黒炎は燃えあがった。

「待てッ、ブライアーツ！！」
「テクニカルスラッシュ！！」

諦め悪いブライに対する反撃として、ウォーセヴティは振り向きざまに引っ掻き攻撃を繰り出した。それはただの引っ掻きだが、スピードと身のこなしが一流でブライは一蹴された。

「根性だけは認めてやるよ。あばよデコイ野郎。ま、せいぜい、最後の舞台までお兄ちゃんたちを導いてやるんだな！」
「ク、クソッ！　好き勝手なことを……！」

このまま相手の思い通りではブライの溜飲は下がらない。そういった思いから、彼はワイリーをしつこく追おうとするのだが、ウォーセヴティはもう相手にもしていないようで、通路の奥へ奥へ消えていく。

プライドはズタズタだが、なおも食い下がろうとブライが立ち上がった時、カノンが彼の手を引いて制止した。彼女は首を振っていた。

ブライは無言でカノンを威圧する。手を離せ、邪魔をするなと言っているのだろう。

だがカノンはブライに負けず劣らずの頑固者だった。ここに来るまでにその片鱗は見せてはいたが、ブライ相手にも物怖じしない辺りは流石に兄妹か。

「ダメだよ！　これ以上はムリ！！」

カノンはブライを先には行かせない。流石にブライも苛立ちも頂点になる。乱暴な言葉がカノンに浴びせられた。

「お前、アイツが俺達を利用しようとしてるんだぞ？　俺達をまるで人形のように見てきたんだ……！　黙ってられないんだよ、俺は……！！」

ブライはワイリーから向けられた冷たい瞳が気に入らなかった。あの瞳は彼が常日頃から浴びせられていた人間以外の物体を見るかのようなものだったからだ。

しかしカノンは耳に手を当てると、目を閉じて、なおも首を振る。

「ダメ！　もう、宇宙の外が……ここまで浸食してくる。だから、これ以上はダメなの！！」

「なに……？！　お前、二日は大丈夫だって……」

宇宙の外が来ているとなると一大事だ。さしものブライも驚き顔を浮かべて、その急激な展開の原因を問い詰める。しかしカノンも理由は分からないようで困り顔だった。

するとジェイルだ。彼はずっとブライとカノンの喧嘩を仲裁するでもなく傍観していたのだが、収縮加速の原因を知っているようで説明してくれた。もちろんカノンは怯えてブライの背中に隠れてしまう。

「ワイリーがワイル粒子の濃度を調節しやがったんだ。この宇宙はアイツのさじ加減でどうにでもなるように出来ているからな」

ジェイルはそれだけ言うと、ウォーセヴティの後を追おうと、通路の奥に歩き始めた。どうやら彼はカノンの話をよく理解できていないようだ。このままここにいれば宇宙の外に放り出されることを失念しているようだった。そうでなければかなりのクレイジーだ。

もちろんロックマンはそんなジェイルに呆気にとられている。

「おい、アンタ、どこに行くんだよ!!　このままじゃここが、飲みこまれるって、カノンちゃんが言ってただろう」
「知ったことか！　俺はアイツらに用があるんだ。俺は俺のルールに従うだけなんだよ」
「あ、呆れた……」
『ほっとけスバル。ああいうのは一回死ななきゃ治らん』

ジェイルはロックマンの警告に耳を貸さずにジャンプポイントがある通路の奥に走り出してしまった。独断専行が極まった無謀な振る舞いにロックマンはもう付き合ってられなかった。死ににいくなら勝手にそうしたらいいのだ。

元々ジェイルは気に入らないし、どちらかと言えば忌み嫌うべき人間だったので彼は放置だ。そのままロックマンはブライ達にこの研究所からの脱出を促した。流石にこうなっては逃げるしかないだろう。

「時間がないんだろう。行こう、二人とも！」
「うん……！」
「クソォッ！」

カノンは素直に頷くが、ブライはまだまだ不満が残っているようだ。しかし今は逃げるしかない。宇宙の外に放り出されたらどうなってしまうか分からないのだから。エデンの認定阻止は出来なかったが、チャンスはまだあるはずだ。少なくともここでわけのわからない世界に飛ばされるよりはマシだろう。

ロックマン、カノン、ブライはエデンからの脱出を試みて、来た道を帰るように駆けだした。

ｅｄｅｎ：キミがいたことは忘れない

通路の途中まではロックマン達は順調に脱出できていた。そろそろデューオがいた地点に着くころだろう。そこでキリン・ライトニング達を迎えて、そしてインフィニットの所でセツナ達と合流しエデンを脱出する手はずだった。

しかしデューオの正義が彼らの行く道を阻んでいた。キリン・ライトニング達はワイリーを追うロックマン達の邪魔をさせないようにデューオの足止めをしていた訳だが、さすがにディメンションゴーレムの一体である彼の相手は厳しかったようだ。

キリン・ライトニングはボロボロになりながら、ディーオと未だに戦っていた。

デューオの方は相変わらずのようで依然自分の信じた正義を振りかざしている。どうやらこのまま素通りとは行かなさそうだ。

キリン・ライトニングはやってきたロックマンとブライ、カノンに気付くと逃げるように促した。おかしな話だが、今逃げているのはロックマン達で、これから逃げるべきなのはキリン・ライトニング達も同じだった。

よほどデューオが頑固なのだろう。痛めつけられたキリン・ライトニングの姿が彼の話の通じなさを物語っている。余裕がないのだろう。

「ブライ達か、なぜ戻ってきた？　さっさと引きかえせ！　デューオの野郎、かなりの石頭で、話が通じねえ。コイツはぜってえ、ムッツリだぜ」

ロックマンはジョークを飛ばす余裕のあるキリン・ライトニングに少し安心すると、事の事情を説明してやる。主にワイリーに逃げられたことや、宇宙の外が迫っていることなどだ。

キリン・ライトニングはその話を聞くと頷き、チームエクスのメンバーに脱出を命令する。

「みんな、聞いたか……？　どうやら任務失敗だ。エデンから脱出するぞ」

チームのメンバーは頷くが、デューオが黙って逃がす訳はなかった。彼は正義の味方で、ロックマン達を倒すべき悪と認定している。ワイリーとインフィニットにあることない事を吹聴されているのかもしれない。

「私がここを通すと思うなよ？」

デューオは自慢の拳を握りしめて、鉄拳制裁に名乗りを上げる。今、通路状ではデューオを挟むようにチームエクスとロックマン達は分断されている。合流して逃げるにはデューオに道を開けてもらうしかない。彼の大きな図体がここにきて、邪魔臭かった。

こいつを何とかしなければ……そう思ったロックマンはデューオに訴えた。彼が教科書で習ったデューオという存在は一応は正義の味方だったはず。宇宙のよりよい未来を案じて、結果的に地球を滅ぼそうとしたに過ぎない。

デューオはやり方こそ間違っているが、今までロックマンが戦ってきたどうしようもない悪とは違う。ロックマンはその可能性に賭けてデューオを説得しにかかる。

「そこをどいてくれ、デューオ！　ワイリー達と僕たち、どっちが

正しいか分かるだろう？」

「……お前はロックマンか。なるほど、アイツらはうまくカギを守り通したらしいな。どうやら宇宙中のエデンが生命駆逐モードに入ったようだ」

デューオはロックマンを冷たく見下ろすと、これから待ち受ける宇宙の危機を示唆した。お前達はこれで終わりだ、とでも言いたいのかもしれない。それでもロックマンはデューオに訴えた。ここでロックマン達が宇宙から消えれば、未来の可能性が零になる。

その先に待っている世界が、本当にデューオが望んでいるものなのかと投げかける。

「デューオ！　キミはワイリー達に騙されているんだよ！！　アイツらはこの世界が実験場か何かだと思っているんだ！　アイツは自分が神か何かだと思ってるんだ！」

ロックマンの訴えはデューオからすれば見当違いでしかない。ワイリーの本当の目的を知っている彼はロックマンの言葉を跳ねのけた。

当たり前なのかもしれないが、なぜインフィニットがメシアと呼ばれるのかロックマン達は分かっていない。

「お前は、何も分かっていない。ワイリーは決して神ではない。なぜならこの世界に神はいないのだから……。ワイリーも必死にあがくお前達と何も変わりはしない」

神はいない。その言葉にブライはピクリと反応を示すが、デューオは道を開けるつもりはないようだ。彼のプライドよりも今は逃げ道の確保を優先すべきだった。

しかし不味い。どうやらデューオはロックマン達よりもワイリー

達の方に未来の可能性を見ているようだ。彼のことだ。ずっとエデンから地球人を含めた生命の観察をしてきたはず。その上でワイリー達を選んだ彼の判断を覆すことは容易ではないだろう。
　すると痺れを切らした、ウォーロックが強行突破を試みる。今こそサン・ゴッドから受け取ったアカシャＰＬＴの出番という訳だ。

『スバル！　コイツは言っても聞きやしねえ！　ブッ倒して、道をこじ開ける！！』
「……仕方がない。サン・ゴッドから貰ったアレを使うよ！」
『オウよッ！！』

　ロックマンはハンターにアカシャＰＬＴを読みこませると、制御可能となったアカシックレコードの力を全開放した。
　眩い輝きに包まれていくロックマンにデューオは息を呑んだ。そしてあのサン・ゴッドがロックマンを認めた事を悟ったのだった。

「こ、これは……。サン・ゴッドめ、ワイリーよりもロックマンを選んだというのか……！」

　アカシャＰＬＴによって発現する完全究極の力はスバルのラーニングレギオンとウォーロックのＲデコードが互いの欠点を補いあって、混ざり合ったものだった。
　デューオはその力に圧倒された。体の大きさでは語れない、内に秘めた格の違いを見せつけられたのだ。
　究極ロックマンは、フェニックス・リボンの時に見せた力を完璧なものにして帰ってきた。今の彼はウォーロックの意識とスバルの意識の両方が健在だ。

「こ、この力は……アイツの……！」

デューオは神妙な面持ちとなってロックマンに見入っている。ワイリーとロックマン……これでは分からなくなってきたかもしれない。

ロックマンはデューオを睨みつけて最後の警告だ。

「さあ、道を開けるんだ！　そうじゃないなら、手加減はしない」

ロックマンは優しいのか、ただのバカなのか、この期に及んでデューオを説得しにかかっていた。デューオはそんなお人好しな彼に、光彩斗を重ねた。

これは、もしかしたら分からない。デューオの中の絶対の価値観が揺らぎ始めていた。サン・ゴッドがエデンで見た地球人の本質、彼はそれが気になったのかもしれない。今、目の前にいるロックマンは二百年前のロックマンと同じような瞳を向けていた。忘れかけていた、可能性を彼は思いだしたのだった。

そして気付いたらデューオはロックマンに道を開けていた。しかしあくまでもロックマン達の可能性をこの時点で断ち切るのは早計だと判断しただけなのだろう。

デューオは巨体をノッシノッシと揺らしながら、ワイリー達が逃げて行った方に帰っていく。その時、気まぐれからかロックマン達に一つだけ警告を残していく。

「十二月二四日……その日がエックスデーだ。それまでにワイリー達以上の力を手に入れろ……そうでなければ、お前達に未来はない」

「デューオ……ありがとう」

ロックマンはお礼を言うと、究極変身を解いてしまう。というより維持できなかったようだ。そのまま彼はチームのメンバーと合流して今度はインフィニットがいる地点まで脱出を図る。

そしてすぐにロックマン達はインフィニットがいる研究室まで辿り着いた。

どうやらセツナとフェニックス・リボンはインフィニットにまだ止めを刺せていないようだ。それどころか弱り切っていたインフィニット押されている。ロックマンは形勢逆転している状況に声を失った。まさかインフィニットがこれほどに底なしだとは思わなかったのだろう。

インフィニットの戦闘周波数は徐々に回復していっている。セツナとフェニックス・リボンは終わりないインフィニットの無限の力に圧倒されていた。ここはロックマン達も加勢するべきだ折るが、今は逃げに徹する。インフィニットの相手をしている場合ではない。

しかし今回デューオとは事情が違う。インフィニットは心の底からワイリーに肩入れしている。いや、ワイリーの作品だからそれが当たり前で、ワイリーの邪魔をする者全てを抹殺する心づもりのはずだ。

ロックマン達との衝突は免れないことが予想できる。そして予想通りで、インフィニットは引きかえしてきたロックマンを確認すると戦闘意欲を見せて、戦闘周波数をさらに上げた。このインフィニットを止めるのは容易ではない。

インフィニットはセツナの剣を軽くかわすと、剣をロックマン達の方に構える。数の不利などまるで意に介していないらしい。相変わらずフェニックス・リボンレベルの電波人間を苦にしない化け物だった。

「……マスターは無事に帰還されたようだ。さて、俺も俺で、任務の仕上げといこうか」

インフィニットは集中を高めて、この場からあり一匹逃さないといった、危機迫る周波数を辺りに充満させる。そして彼はブライに目線を送って礼を言った。彼は順調に導き役として、役目を全うしたからだ。

もちろんブライはそれが腑に落ちなくて、拳を握って構える。怒りからそれは震えている。

しかしインフィニットにはどうでもいいことだ。

「あの時、シュンランを連れて行って正解だった。おかげでマスターの実験のほぼ全ての工程が完了したのだから。これで、何の心配もなくセツナを連れていける」

ブライは「やはり」と言いたげに舌打ちした。おおよそ彼も理解していたのだろう。インフィニットの計画に、シュンランの口利き、今の状況が作り出される要素は十分に整っていた。だからと言って放っておけるわけもない。

ブライの苛立ちは募るばかりだった。インフィニットのブライに向ける瞳もまるでゴミを見るかのようなものだった。

「チッ……！　お前も俺を馬鹿にしたような目で……」

「お前は俺達からすれば、残りカスに過ぎん。だがアイツが舞台を拒絶した以上、残りカスのお前でも使ってやるしかないのさ。まったく迷惑な話さ」

「俺をゴミみたいに見るな！　俺は……俺だっ。俺の存在理由は俺が決める！！」

「お前の意思なんかどうでもいいさ。お前の意思なんか、俺達の前では意味なんてないからな」

「……くそ、くそ、くっ、くそったれがァッ！！」

インフィニットの全てを悟ったような物言いに、とうとうブライ

は我慢できなくなったようだ。ブライだって分かっている。だがその言葉全てがおそらく嘘ではないから、聞き逃すことはできない。

「バカめ……！」

インフィニットは溜め息を吐くと、これ以上ブライがわめかないように足を一本落とそうと剣を振る。

しかしその剣をセツナとフェニックス・リボンの二人がかりで受け止めた。二人は軽率な行動を取ったブライを責めた。ブライは血の気が引いたようで、その場に固まった。

「死にたいのか？！　コイツはもう僕達の手で終える範囲を超えているんだよ！」

「ここは任せて、お前達は早く逃げろ……！　外がもうそこまで来てるんだろう？」

どうやらフェニックス・リボンはロックマン達がなぜ引きかえしてきたのか事情は分かっているらしい。

セツナもフェニックス・リボンに続いた。彼らしくない、切羽詰まっているのが見て取れる。それほどインフィニットの力が限りがないと言う事なのかもしれない。今はまだ二人がかりで何とか抑えていられるが、もう手に負えないところにさしかかっている事は確かだった。

「コイツの目的は僕だ……！　僕がコイツを足止めしている限り、コイツはみんなを追ってはこれない」

セツナの言い分は合理的ではあった。しかし雲行きが怪しくなってきたのは隠しようがない。どうやら、このまま全員がエデンから逃げ切る展開は望めそうもない。それに時間がない。ましてやイン

フィニットが黙って通してくれるはずもない。おまけにインフィニットの狙いはセツナ。

どうやっても、誰かが足止めしなければならない。そしてその命がけの役目にセツナが適任という事は誰が考えても明らかだった。彼さえ残ればインフィニットを釘付けにする事ができる。そうすれば犠牲は最小限で済む。

だが、この条件を飲めるほどロックマンやハープ・ノート、今までセツナと一緒に過ごしてきたメンバーは大人ではなかった。

ロックマンはセツナも一緒に逃げるように促す。しかし彼の目の前ではインフィニットを相手にするのでいっぱいいっぱいな彼しか映らなかった。

それならば、とロックマンは加勢を試みる。しかし、セツナに体力の限界を見破られていた。

「早く逃げろ!!　僕がいつまでももつなんて思うな……!!」

インフィニットの力は徐々に増大している。ロックマンもそれは分かっている。

今はロックマンは現実を直視しなければならない。フェニックス・リボンのシナジーブレードがまるで小枝のように折られているのだ。インフィニットの強さは底なしだ。

セツナはまくし立てた。

「早くしろ……!　早く!!　僕なんかに気をとられるな!　どうせ僕はお前達とずっと一緒にはいられないんだ。だから、僕を置いて行くんだ!　僕という過去に囚われるな星河ァッ!」

「なに言ってるんだよ、ミライ君……!」

するとセツナは首を振った。表情には悔しさがにじみ出ている。口では言うが、彼も死にたくはないのだろう。だが、彼の生まれて

きた意味はここで仲間の為に散ることにあった。
セツナは強がった。
「大丈夫、僕はエースだ！　サテラポリスのエースなんだ！　信じてくれ僕を……！！」
エース。そんな言葉にスカッド・エースが奮起した。彼は何を思ったのか、セツナとフェニックス・リボンに加勢したのだ。子供のエースが命を懸けているのに先輩エースが黙ってはいられなかったのだろうか。しかしこれでインフィニットを足止めするのに今のところは不便しないだろう。
スカッド・エースは弱り切ったセツナを庇うように、身を乗り出した。
「加勢するぜ、セツナ……！」
「暁さん……ッ」
「ダブルエースで悪役を撃破ってのが、カッコいいと思うだろう？」
そしてスカッド・エースを引きいれて、勢いづいたのかフェニックス・リボンがロックマン達に叫ぶ。彼もインフィニットに対する因縁がある。この場を受け持つ覚悟は十分だった。何より、インフィニットの足止めには彼の力が絶対に必要である。
「大丈夫、俺がミライ君たちをサポートする！　だから先に行け！！」
このような事を言われれば、今度はハープ・ノートだった。せっかくワタルが帰ってきたのに、またこれでは意味がない。しかし男には譲れない時がある。何に替えても貫き通さなければならない筋がある。

それはきっとハープ・ノートには理解できないのかもしれない。

「な、何言ってるんだよ！　パパ！！」

「行けッ！！」

冷たく突き放すフェニックス・リボン。当然彼に余裕はない。この状況は危険すぎるのだ。インフィニットがいつセツナとフェニックス・リボンに止めを刺して、ロックマン達を仕留めにかかるか分からない。今の状況は奇跡的な運の良さが連続しているだけなのだ。

だからこそハープ・ノートは父親を置いていくしかない。

それに何よりフェニックス・リボンは響ワタルとしてインフィニットから逃げる訳にはいかなかった。

「ミソラ……俺はな、やっぱりコイツが許せないんだ！！　カンナを利用して殺したコイツが……！！　コイツから逃げ出しちゃいけないんだ俺は！」

「パパ……ッ」

どうやら何が最善か選択を誤っていたらしい。ハープ・ノートはそれに気付いた。それにフェニックス・リボンは不死身だ。きっとそうだ、と信じてやるしかないだろう。

そんなやり取りにキリン・ライトニングは二人の意思を汲んで、即座にエデンの出口に向かってチームを引っ張る。仲間の犠牲に気を取られている場合ではない。ジョニーはきずなクルーとしてこの場をまとめる。

「行くぞ！　ワタルとミライ君の意思を無駄にするな！　俺達にはまだチャンスがある！！　生きてればチャンスがあるんだ！！」

極限状態では宇宙飛行士の精神力が頼りになる。子供では出来な

い、正解を導き出せる。
そしてチームの全員がキリン・ライトニングの後についていきエデンの外に駆けだした。するとロックマンは振り返り、口惜しそうにインフィニットを相手にする仲間の背中を見つめた。
それに気付いたセツナとフェニックス・リボンはロックマンに最後の願いを託してやる。
セツナはスバルの友達として、ワタルはミソラの父親としての言葉だった。

「じゃあな星河。どうかセツナ・W・リフレインという友がいた事を思い出してくれ。悔しくて、残念だなあ、あと六年だけ遅く生まれてくればな……って今でも思うよ」
「ミソラの事を頼んだ……バカな俺の為にアイツを一人にしないでやってくれ。俺に立ち向かってきたキミの強さと優しさ……スバル君にならミソラを任せられる」

ロックマンはその願いを受け止めた。そして必ず叶えると心に誓ってエデンを脱出にその場を後にした。

そうして、宇宙と地球の二つを股に掛けたミッションは幕を閉じた。

ｓｂｒ―００：ショッピングバトラー

ワイリーがレギオンの製作者だった事が判明してから一週間後。とうとうセツナとワタル、シドウは帰ってこなかった。

あの二つの任務――太陽の鎮圧ミッションとインフィニット討伐ミッション（結果的にはワイリーの計画阻止ミッション）の犠牲は多大なものとなった。

太陽の方は任務事態は成功を収めたが、夜太郎、キミドリ、メトリー、ハイドが犠牲になった。結局、彼らも帰ってこない。

そしてレギオンの遺跡ことワイリー研究所ではセツナとワタルシドウが犠牲になった。ジェイルについても行方不明だが、彼は自分から進んで死ににに言ったので事情は違う。そして力及ばずで、こちらの任務は失敗に終わってしまった。デューオが言うには十二月二四日が運命の日らしい。

現在ＷＡＸＡとサテラポリスは行方不明となったセツナや夜太郎の捜索を打ち切って、来る日に備えて戦力の増強に追われている。そして、もはやＷＡＸＡやサテラポリスだけでは手に負えない問題となっており、地球のあらゆる武力組織から兵士を募るといった異常事態が続いている。

レギオンの黒幕であるワイリー達が本気になってきた今、なりふり構ってはいられないのだろう。

そんな風に世界が慌ただしくなって一週間が経ったのだが、当事者の一人であるスバルは学校にも行かずに家でぼーっと過ごしていた。目の前で人が死んでいったショックというよりも、自分の力の

なさに絶望しているようだ。
それでも塞ぎこむことはなかったようで、リビングにテレビを見に来る元気はあるらしい。ウォーロックがソファで寝転がる横で、ぼーっとスバルはテレビを見ている。あかねはその様子を黙って見ていることしかできなかった。
星河家もずいぶん寂しくなってしまった。ウォーロックが下品に笑っていることがありがたくなるほどである。普段なら夜太郎が朝食の用意を手伝っているのだが、今はあかね一人が台所にいる。メトリーがウォーロックとチャンネル争いをする光景もなくなった。
あかねは包丁で野菜を切りながら、誰に言うともなく呟いた。

「一週間と一日前だったわね。家にサテラポリスの方々が来たのよ……。そんな怖い顔をした人たちが、夜太郎さんとメトリーちゃんを連れて行っちゃったのよね……」

あかねは長く溜め息を吐く。どうやらメトリーの笑顔が蘇ってきたらしい。おそらくメトリーは遠足にでも行くのかという軽い気持ちで任務に向かったのだろう。

「夜太郎さんは何も言ってくれなかったし、メトリーちゃんは何も知らなかったようだし……私には何が何だか」

するとあかねはリビングのスバルに振り返って問いかけた。彼女は夜太郎たちが死んだとにわかには信じられなかったようだ。

「ねえ、スバル。本当に帰ってこないの二人は？」
「メトリーは死んだ。夜太郎さんは分からないけど、多分もう……」

スバルは気の抜けたままで答える。あかねは残念そうに肩を落とした。

「そう……でも、明日になったら帰って来そうで、信じられないわ」

スバルはそんな辛気臭いあかねに嫌気が差したようで、あかねのもとにずかずかと歩み寄ると、手のひらを差し出した。あかねは首を傾げる。スバルはフンと鼻息を飛ばして、不機嫌な様子だった。

「何？」

「お使いだよ。だから、お金」

「ああ、そうだったわね。頼んでたの忘れちゃってた」

「メトリーはもういない。それに夜太郎さんだって……だから僕がお使いに行くしかないじゃないかな」

「そうね、切り替えましょうか。スバル？　アナタも頑張って耐えてるし、私も頑張らなくちゃね」

「別に……学校もサボってるし。褒められたものじゃないさ」

「まあ、学校は気分が良くなってからで良いんじゃない？　地球を救ったんだから、特別に母さんが許します」

「ハハッ、それはいいや」

あかねの悪戯っぽい笑みにスバルは、久しぶりに笑みを浮かべる。そしてハンターにお金をチャージすると、ウォーロックを連れてコダマタウンに繰り出した。ずっと家にいたのでは、気分も暗くなるというものだ。幸い天気が良いので散歩も兼ねてちょうど良い外出だった。

すると道端に出るとすぐに、スバルはウォーロックに問いかけた。家では出来ない大人な会話というやつである。あかねに余計な心配を掛ける必要はない。

「ねえ、ロック。ワイリー博士についてだけど」

『ああ？　よくハゲてたな。将来スバルもああなるんだろうなァ…

…デコ、もうキテるしな』
「真面目に聞いてよ。そして僕はまだキテない！　それにハゲと言ったら、キミなんか毛が一本もないじゃないか。パーフェクトハゲだね」
「お前！　俺様の背中に生えている大胆かつワイルドなキザキザの緑の部分が見えないのかよ！」
「いや、それ毛じゃないだろう？　それにキザキザの緑の部分って……自分でもよく分かってないじゃないか！」
「じゃあ、お前の手首についてるわっかみたいなやつの名前は何だよ？」
「え？　えー……っと、サ、サイレントディフェンサー……？」
「今考えたろ！？」
「う、うるさい！！　話を逸らすな！　とにかくワイリー博士が何で生きてるんだよ？！　アレは普通じゃない」
「知るか？　そんなの死んでないから生きてるんだろう！　クワドラプル還暦オーバーとかスゲエよな！」
「んもう、このバカ！」
「バカって言う奴がバカなんだぜ！　バカ！」
「くぅ、腹立つなもう！」

ワイリーについて話していたのだが、途中からハゲの話になってしまってクワドラプル還暦に至る意味の無さだ。道端でずいぶん平和なことだった。どうやらスバルは相談する相手を間違えてしまったようだ。ウォーロックにとってワイリーは『長生きのハゲジジイ』でしかなかった。やれやれとスバルは溜め息を吐いて、コダマデパートに向かうことにした。ハゲジジイの事はとりあえず忘れる。
歩を進め、ふと前方を見るスバル。すると、通りすがりの三人組の姿が確認できた。どうやらこちらの方に向かって来ているらしい。デカイのと小さいのとお嬢様の組み合わせはスバルにとって見慣れたものだった。

どうやら学校の帰りらしく鞄を提げている。スバルは何となく買い物袋をぶら下げている自分に罪悪感を覚えたらしく、そっと買い物袋を後ろに隠した。

「委員長たちか。狙ったように出てくるとは、まるでストーカーだな……。するのは良いけど、されるのは好きじゃないな……」

『まあ、お前はムッツリだからな。しかしアイツら、お前ん家にでも行くつもりだったんだろうな。ほら、お前サボってるから』

「そうみたい……どうせ委員長に小言とか言われるんだろうな。『まーた引きこもりかしら、スバル君?!』ってさ」

『ほんともう、ヤんなっちゃう！　でも勘違いしないでよね！　本当はアナタの事なんか別に……なんだから！』

「そう、偶然よ！　偶然！　通りかかっただけだから、ありがたくストーキングされなさい！！」

『……なあスバル。俺達……無駄に上手いよな、委員長のモノマネ』

「毎日、寝る前に練習してるからね」

ウォーロックと談笑してスバルが適当に心の準備を済ませていると、ルナが手を振ってきた。どうやら機嫌は悪くなさそうだ。スバルはホッと一息吐くと、挨拶をするため歩み寄った。久しぶりに会うので挨拶は大切にしなければならない。

「やあ、久しぶりだね。委員長にキザマロ……えっと、ゴンタレス？」

テンキュウ高校での任務のおかげでスバルの中でゴン太とゴンタレスが結構ごっちゃになっている。しかしゴン太はゴンタレスなんて見たことも聞いたこともないので、適当にゴリラの真似をするしかなかった。ルナに小突かれるまで道端でゴリラがうるさかった。スバルは苦笑いした。

「ゴンタレスってのは、ゴリラじゃなくて人間だよ、ゴン太。確かに人間を越えかけてはいたけどさ……」
「てかさ、ゴンタレスって誰だよ！　俺はゴン太だよ。てかさゴンターガ様と来て、ゴンタレスとか世界の悪意を感じるぜ！！」
「いやー、キミは世界に選ばれたんだと思うよ？　しかしキミとゴンタレスが夢によく出てきて、暑苦しいよ。まったく」
「なるほどな。俺は見たこともないけど、相当な男だったんだろうな……」
「うん、相当なタマだよアイツは」
「へへッ、何か知らねえけど、嬉しいな！」
「フフ、僕も嬉しいさ」

よく意味の分からないやり取りをする二人。おそらくゴン太の中でのゴンタレスは相当な美男子だろう。現実はそうでもないので両者のやり取りは無駄でしかなかった。
そのためルナが咳払いをして、スバルの具合を尋ねてくる。彼女らにとってみれば、一週間も学校を休んだ不良少年がスバルである。あまり良くない印象だろう。事情はあると言っても心配にはなる。ゴン太は平気で学校に行っているが、彼は図太いだけでスバルの方が普通の反応と言える。こうなってくるとルナは世話を焼かなければならない。

「一週間、学校に来なかったわね。気分がすぐれないのかしら？　それとも体調が悪いの？」
「……そうでもないさ。気分も悪くはないし、体調も良好さ」

スバルは薄ら笑みだった。こういう笑みは見ていて不安になる。塞ぎこんではいないようだが、学校に来ない以上やはり良い状態ではないはずだ。

ルナは問い詰めた。

「嘘おっしゃい。表情に出てるわよアナタ。まるで負け犬の顔ね。強がって吠えているのがいい証拠」

「ワンワン。はは、確かにそうかも。ずいぶん長い間、勝利ってモノを手にしてない気がするや」

スバルはどこか遠いところを眺めて、ぼんやりとし始めた。どうやらスバルは少し無気力気味になっているのかもしれない。

そして彼がずっと家にいるのにも理由がある。それは夜太郎たちが帰ってくるとまだ信じていたからだ。約束した以上、負け犬でも男なら諦めたくないのだろう。

それは酷く女々しい。多少成長しているとはいっても、つくづくスバルは打たれ弱かった。ルナは呆れてしまう。

それでもスバルが外に出てきてこうして会う事ができたのは運が良かったといえる。

とりあえずルナはスバルの用事に付き合ってやることにした。適当に気分転換してやるのも悪くはないだろう。家に押し入って、出席を催促するよりかはずいぶんと健康的である。なので彼女はスバルが後ろに隠し持っていた買い物袋を指摘して切り口を開いた。

「まあ、いいわ。ところでアナタ、これからお使いに行くところだったんでしょう？」

「まあ……ね」

スバルはルナの目敏さに嫌気がさしながらも買い物袋を掲げた。

「じゃ、私たちも同行するわ」

「イヤだ！　……て言っても聞かなさそうだ。なるほどね、否定する権利が始めからないのが僕という人間……いくら地球を救っても

僕は委員長一人に満足に意見も出来ない……ワンワン」
「何をブツブツ言ってるの？　行くの、これ決定。いいわね！」
「分かったよ。分かったっていう事にしとくよ。じゃ今夜はカレーなのでそこのところヨロシク」
「ウホッ、カレー！」
「グワッ、やめろゴン太！！　やめるんだーッ！！　ウワーッ」
「ウホッ、ウホッ！　トーモーダーチー！」
「クッ、なんてパワーだ……！！」

ゴン太がカレーという言葉に反応して、スバルに抱きついてくる。行動の関連性は不明でスバルは恐怖を覚えてゴン太を突きとばした。とにかく時間の無駄だ。早いところデパートに向かわなければならないだろう。

とりあえずここはルナルナ団という事なので、ルナが仕切るのだ。仕切り直しにゴン太にゲンコツをお見舞いする彼女。

スバルは久しぶりのルナの仕切りに少しホッとする。彼は落ち込んでいるが、ルナ達と出会って久しぶりに楽しそうにしていた。

「じゃあ、行くわよ！　今夜はカレー！！　最高の材料を仕留めるわよ！！」

こうして四人は主婦たちの戦場であるコダマデパートに向かったのだった。

しかしスバルは気付いていない。なぜあかねがスバルにお使いというミッションを頼んだのかということを。

実はあかねはスバルを試している。スバルも星河家の人間なので、そろそろセール時のデパートを経験しておかなければならなかった。そんな厳しい母親の願いが込められている。そしてこの夕刻にかけた時間帯はカレーの材料一式の値段が異常なまでに下がるタイムセールが発動する。ここで生き残れなければ星河家の人間としてふさ

わしくないと言える。もちろん夜太郎やメトリーはクリアして、あかねの手となり足となり活躍した。そして伝説となったのだ。

そう、このお使いミッションは何を隠そう、最近のスバルの腑抜けっぷりに対するあかねからの挑戦状だったのだ。

結果的にその戦火にルナ達が巻き込まれていく形となってしまったということだ。戦いの連鎖はまだまだ終わらない。

はたしてスバルは星河家の人間でいられるのか、主婦の本領が発揮される未知の領域に、今、小学生たちが果敢に挑む。

コダマデパート……恐ろしい所だ。やはりスバル達では経験不足だったようだ。荷物係のゴン太の買い物かごはすでにベコベコだ。これ以上は危険かもしれない。キザマロに至っては活動限界を迎えようとしていた。彼の小さな体ではこの戦場はまだ早すぎた。そしてルナは行方不明。ここは彼らのような未熟者が来て良い場所ではなかった。

しかしもう遅い。スバルは前と後ろが分からない空間で中年女性たちにもみくちゃにされている。スバルは絶望し、母の強さを改めて実感していた。

「クッ……なんて圧力だ。これが、家計簿を司る者の真の力。クッ、クソォ……理屈じゃない、理屈じゃないんだ！！　母さんはこんな化け物たちとやり合っていたのか」

「スバルー！　俺はもう駄目だー！！」

背後からゴン太の断末魔が上がった。彼は人ごみに飲み込まれて消えてしまう。仲間が次々と失われていく恐怖は言葉に出来ない。スバルの焦りと恐怖は次第に彼の精神を追い詰めていく。

するとウォーロックが背後からの殺気に声を荒げた。

『油断するなスバル！　後ろだ！！』

半額となった卵を狙った主婦がスバルの死角を抉るように、腕を伸ばしたのだ。これは危ない。もし、もう少しスバルが横にずれていたら、彼のお使いは終了していただろう。

しかしこの主婦やり手だ。買い物カートに小さな子供を装備して、周りとの絶妙な距離感を取り、場を制圧しているのだ。この主婦は経験豊富らしくデパート内の掟というものが分かっている。小さな子供が乗ったカートというのは基本的に人が道を空けざるを得ない。子供や老人といった弱者に対する譲り合いの心を利用した高等テクニック。この主婦は我が子さえも利用し、戦場を完璧にコントロールしていた。

スバルはそのテクニックに見とれるが、すぐに我に返って半額卵に手を伸ばす。しかし駄目だった。商品を掴む前に先に奪われてしまう。どうやら主婦というのはポジショニングからして、ただの小学生とは一線を画しているらしい。彼女らは商品に対して素早いファーストコンタクトを実現するために、買い物かごを利き腕とは逆に持ち、その買い物かごで相手をけん制しつつ体を強引に入れてくる。そうやって商品との無駄のない距離を常にキープしているのだ。これはセール時において必須のテクニックである。ポジションを制する者はセールを制する。思えばあかねがいつも言っていた。

やはり実戦経験の少ないスバルでは商品との距離感、そして他者とのポジショニング争いに対する勘が上手く働かない。彼は苦戦を強いられる。これればかりは一朝一夕では身に付かない。

やがてスバルは満足に買い物もできない自分の非力さを呪っていく。買い物かごにはスバルが嫌うニンジン一本だけしか入っていない。このままでは楽しい食卓が地獄に変わるだろう。

「くっ……これが主婦……！　確かな技量に裏付けされた、ロックマンさえも翻弄するママさんクオリティ！　そうさ、まるでヴァルキリー！」

『しっかりしろスバル！　この卵はお一人様一パックだ！！　落ちつけ、落ち着いて待てば、絶対にチャンスは来る！！』

「お、おひとり様一パックだって？！　つまり、焦らずじっくり待てば、必ず僕の手にも商品が手に取るチャンスがくると言うことなのか！　そうなのかロック？！　な、なんてことだ。こんな簡単なことにも気付けないなんて！！　僕はまだまだだ……！」

スバルはポジショニング争いでは主婦では勝てないことを悟り、人の波が途切れることを待った。周りの主婦の数と残りのパック数からそれでも十分勝算はあると考えての行動だ。大丈夫、おひとり様一パックだ。焦りは禁物だ。特に卵は割れものである。焦って乱暴に扱って割ってしまっては意味がない。この人ごみの中で卵の安全を確保しつつ、素早く確保するテクニックは残念ながらスバルはまだ持っていない。だから待つ。自分の能力の限界を知り、その中で勝利を見出す。ロックマンがいつもやっていたことだ。

しかしどうだ。中々人の波は途切れない。スバルをあざ笑うかのように卵の残りが減っていく。おひとりさま一パックとは言え、スバルは焦り始めた。

「どうする？　このまま危険を冒して卵を取りに行くか……？」

『駄目だ！　ヤツらにスピードじゃ敵わねえ！　それにお前は未熟で卵を割っちまう可能性もある！』

「クッ、僕は無力だ……！」

『いいや、それは違うぞスバル！　たとえ今は主婦に敵わなくてもな、最後の一パックさえ取っちまえば、それは俺たちの勝利だろ？！』

「ロ、ロック……ありがとう」

スバルが感動して目頭を熱くしていると、そのチャンスが来た。残り一パックという所で、周りから主婦がいなくなったのだ。危なかった。ギリギリの戦いだった。まるで宝石のように残りの一パックは存在は輝かしい。

ウォーロックの言う通りだった。最後の一パックさえ取ってしまえばそれはスバルの勝ちなのだ。おひとり様一パックというルールに助けられた形だが、それでもスバルの勝ちだ。

スバルは勝利の余韻を噛みしめながら、ゆっくりと卵に手を伸ばす。これでニンジンサラダは免れた。

しかし最後まで油断してはいけないのがタイムセールという戦場だ。遠足とはわけが違う。家に帰るまでが遠足？　いいや、家にも帰れないのがタイムセールなのだ！

すなわち、スバルはやってはいけないミスを犯していたということだ。それは周りに対する警戒心を怠ったこと。それが原因となり、思わぬ刺客に意表を突かれてしまう。なんと小さな人影がどこからか走って来て、残り最後の一パックを取って行ってしまったのだ。スバルは一瞬何が起きたのか分からなかった。

「な、何が起きた……！　卵を奪われたのか……？」

訳も分からないままスバルは、小さくて素早い人影の方に振り返った。そしてその瞬間全てを悟った。高機動自立小型偵察機――通称：子供。子供は小さな体を駆使してデパート内を縦横無尽に駆け巡るまさに現代に生きる忍者。その視線の先には子供連れの主婦がしたり顔で笑みを浮かべていたのであった。やられた……っ。その子供の数、五人。どうやら子供を利用して一人で六パックもの卵を手に入れたようだ。

スバルはこんな簡単な基本戦術さえも見逃してしまった。スバルも小さいころによく意味も分からずあかねと一緒にレジに並ばされ

ていた。大抵そういう場合トイレットペーパーの買い溜めだった。
スバルは走馬燈のようにそのような事を思い出しながら、全身の力が抜けきってその場にへたり込んでしまう。

「クッ、一人で六パックもだと……！！　そんなの有りかよ！　常識の範囲内を越えている！！　あんなの反則だ！！」
『クソ、こんなのがいやがるとはな。完全に想定外だぜ……！　くそ、まんまと出し抜かれちまった！！』
「くそぉ！　これでカレーに添えるスライスゆで卵はなくなってしまったんだ」
『カレーの攻撃的な辛さを和らげてくれる卵が不在となると……これはマズイぜ。味の楽しみ方が減る……すなわち食の弱体化を意味する！　これは異常事態だ！！』
「辛さの中にまろやかさを追求する僕のグルメな部分が今、息を引き取った……」
『南無』

グルメな部分が消え失せてスバルはがっくりとうなだれた。完全なる敗北にもう立つ気力もない。そうやって敗北者は地面に手を突いて動かなくなってしまった。極度のストレスからスバルの頭髪はパラパラと抜け落ちる。これはまずいと言えた。スバルは慌ててシャンプー売り場に駆け出そうとするが、もう体が動かない。万事休すだ。
そんな危篤状態のスバルだったが、不意に聞き覚えのある無愛想な声が浴びせられた。それは少年の声だ。少年の登場に、次第に周りのざわめきが激しくなっていく。どうやらただ者ではないらしい。

「星河スバル……もう少しできるヤツだと思ったんだがな」
「あの……良ければこれを」

少年の声の次に女の子の声が優しくスバルに浴びせられて、買い物かごの中にそっと卵のパックが入れられた。もちろん育毛シャンプーのおまけ付きだ。スバルが顔を上げるとそこにはソロとカノンがいたのだった。ソロの買い物かごの中身は豪華だった。育毛シャンプーと卵、ニンジンだけのスバルと雲泥の差があった。ソロは少し誇らしげで、無性にスバルは恥ずかしくなった。

「ソロ、な、なんでここに……？」
「フン、ここは俺のホームグラウンドだからな」
「お兄ちゃんはここでは伝説の存在なんだよ？」
「伝説……ソロが？　一体どういう……」
『――！！　スバル、耳を澄ませろ！！』

いきなりウォーロックが早口でスバルに言いつけた。スバルは言われるがまま周りの声に集中した。するとどうだろう。周りの主婦たちが明らかにソロを警戒したような事を次々口にしているではないか。

ざわざわと「ア、アイツは昼下がりのブラックポケット！」「おい、アイツが何でここに？！　もう夕方だぞ！　クソッタレめ！！」「冗談じゃねえ、死人が出るぞ……！」と言った畏怖が込められた評価の数々だった。

どうやら伝説というのも冗談ではないらしい。

スバルはとりあえず卵の礼を言う。

「あ、ソロ。卵をありがとう……いや、昼下がりのブラックポケットさん」
「フン、その名は好きじゃない。それにもう、俺は電波障壁も使えないしな……だから、その異名はもう相応しくないのさ」
「カッコいいお兄ちゃん……」
『ちっ、まさかソロに助けられるとはな』

ウォーロックも今回ばかりはソロにしてやられたという訳だ。
そしてソロは少しの優越感からなのか、べらべらと聞いてもいない事を語り出していく。しかも卵に関する事ばかりで意味が分からない。カノンはそれを黙って聞いているが、やはり意味が分からなかった。ウォーロックはそもそもソロの趣向などどうでもいい。スバルもどうでもいい。普通は興味がない。

「一つ言っておく。卵はいいぞ……栄養価が高くて何よりたんぱく質が豊富だ……。生で食べるのも独特の食感が楽しみがあっていいが、やはり卵焼きにするのが一番だと俺は考える。ちなみに俺は砂糖を入れる派だな。砂糖の甘みが卵本来のコクに含みを持たせるからだ。そして中は半熟が良い。具として刻んだネギが入っているとベストだ。後はそうだな……」
「ペラペラうるさいな。……ん？」

呆れているとスバルはあることに気がついた。ソロの髪型が少し変わっていた。そもそも肌の色が少し浅くなっている。

「あれ？　髪のセットがちゃんと出来ていないよ、ソロ？　それに日焼けサロンもやめちゃったの？」

ソロはスバルの質問に怒るのかと思いきや、怪しく笑いながら頷いていた。どうやら買い物をしているせいなのか機嫌が良いらしい。ふだん戦闘面でしか彼を見ることがなかったので意外な一面と言える。なにより家庭的だ。

「ああ、そうさ。日焼けは知らんが、髪型は面倒だから放っておくことにした。髪を立てるとカノンが将来ハゲルとうるさくてな。それを危惧してシャンプーを買おうとした訳だが、目の前にキサマが

いたと言う次第だ。ま、もっとも俺はハゲたとして逃げも隠れもしないから、ありがたくキサマは育毛するがいいさ。俺はむしろハゲを武器にしてやるつもりだからな、フフ。俺の持論はこうだ。ハゲを隠すからそこに後ろめたさが生まれる。ハゲというのは男の定めだ。積み重ねた人生の歩みが頭皮に出るのだと考えれば、ハゲも誇らしくも愛おしくも思えるものさ」

「そうそう、お兄ちゃんはこっちの方が似合う……でもハゲはイヤだなあ……近所の仲間のおじさんもハゲてるし……イヤだなあ」

「あのオヤジは清潔にしていないからな……見苦しいから昨日差し入れにシャンプーを放り込んでやったところだ。そしたら新しい空き缶スポットを教えてもらえた……カノン、明日から忙しくなるぞ!!」

「え、スゴイ！　よかったねお兄ちゃん！」

『おいおいスバル。こいつら普段どういう生活してるんだ？　昼下がりのブラックポケット、そして育毛シャンプーに空き缶拾い……まるでロマンスだぜ!!』

「楽しそうで僕はいいと思うな。毎日がサバイバルとか痺れちゃうよ」

デパートでの出会い。何となくスバルはソロの生態を知ったような気がしたのだった。特にソロのハゲに対する独特な価値観は興味深かった。きっとワイリーもソロと似たような持論からハゲを隠さないのだろう。

ハゲは男の勲章である。

スバルは育毛シャンプーを手にとって、そっと自分の将来をワイリーに重ねた。

ｓｂｒ―０１：世界に棄てられた流浪の民

ソロとの出会いを通してスバルは彼に導かれるように、レジに並んで会計を待っている。レジに並ぶ彼の横顔にスバルは少し見入ってしまっていた。どこか漂う大人の落ち着いた雰囲気が堪らないのだ。

現在、レジに並んでいる人数は六人。買い物かごを持つソロとゴン太。その後ろに並んで様子を見守るカノンとスバル、ルナ、キザマロという布陣である。そこで百戦錬磨のソロが会計のスムーズな運びをスバルに教えてやった。

ソロは人差し指を立てると、強く言い切った。

「何をしているキサマら！　レジに並ぶのは俺とゴリラで十分だ。お前たちは先にレジ向こうに行け。そして各自持参した買い物袋を展開して待機だ！」

「はい、お兄ちゃん！」

「な、何が起きようとしているんだ……？」

「まったく、買い物になんてついてくるんじゃなかったわ」

「まさかソロが買い物をするなんて意外すぎます……」

「ごちゃごちゃうるさいぞ！　行けっ！！」

ソロは後ろに並んでいる他のお客さんに気を遣ってレジに並ぶスバル達を排除してしまう。カノンを先頭にスバル達はレジを脱出して、買い物袋を展開した。さあ、いつでも来いと言わんばかりの気迫だった。お嬢様のルナはそろそろ付き合っていられなかった。し

かしカノンという女の子が頑張っているので、一人で帰る訳にもいかないだろう。買い物くらい出来なければ女がすたるのだから。
しかしカノンの頬笑みにルナは苦笑いしか出来ていない。そもそも彼女はカノンと初対面だ。
それでもスバル達の準備は万端である。
そしてソロの会計が始まった。彼は腕を組んで、パートのおばちゃんウィザードをずっと凝視している。これにはさすがのゴン太も気が気でないようだった。このままではおばちゃんウィザードがソロに恋をしてしまうほどの熱い視線なのだから。

「おい、ソロ……。おばちゃんウィザードをそんなに見つめてやるなよ……」
「勘違いするな、俺はな、このおばちゃんウィザードのレジ打ちを観察しているだけなのさ……レジ打ちのスピードでデパートの評価が決まると言っても過言ではないのだ。俺はそこを大切にしたい」
「分かんねえ……分かんねえよお前が何言ってんのか？」
「お前も一人暮らしをするようになったら分かるさ。自然とレジ打ちのスピードが気になってしまってくるんだよ！」
「……コ、コイツ！　マジかよ」

ソロの買い物に対する姿勢は並のものではない。かなりの効率化を図っていて、まるで歴戦の主婦のようである。ゴン太はソロの背負っている物の大きさを始めて知った。一人暮らしで孤高を貫くにはそれなりの生活力が必要になってくるのだった。ゴン太ではソロにまるで歯が立たない。
完全なる敗北。呆気にとられるゴン太だったが、すぐにソロが彼の買い物かごを指して会計を済ませろと促した。どうやらソロの会計が終わったらしい。次はゴン太の番だ。

「ゴリラ、早く会計を済ませろ！　ポイントカードも忘れるなよ。

コダマデパートはポイントがお得だからな！　１０００ポイント百円でキャッシュバックだ！！」
「も、持ってねえよ……そんなの」
「何……？！　正気かキサマァッ！！　舐めた真似を……！！」
「ヒッ！？　お、怒るなよぅ……っ」

ゴン太はいきなり怒鳴りつけるソロに縮こまるが、すぐに彼の素直じゃない優しさに触れることとなる。なんとソロは自分のポイントカードを差し出してきたのだった。彼はそれを使えと促した。目を逸らして、ポイントカードを押しつけてくるとは恐れ入る。そして恥ずかしがり屋なのか耳が赤かいのもゴン太としてはポイントが高かった。

「つ、使えっ！」
「お前……！！」
「か、勘違いするなよ。キサマの為を思ってやってるんじゃないんだからな！」
「ソロ……」

ソロとゴン太という組合せだけでも珍しいのに、そのやり取りは究極的に発展している。そんな風景を目の当たりにしたスバル達は息を呑んだのだった。特にスバルは酷くて、同じチームであった彼らの仲を勘違いしている。

「ソロとゴン太が良い雰囲気になっている！！　いったいこの前の任務で二人の間でどんな進展が……！」

スバルの危ない推測を耳にするカノンはフンと鼻で笑った。彼女はソロが絡むと、少し人が変わってしまうらしい。時には酷く、ゴン太に対してはとにかく辛く当たる。

「あのね、スバル。ゴン太君はお兄ちゃんと自分のどちらがイケメンかを気にしてカラんできただけ……！　自分がチームのビジュアル担当だとか何とか言って本当に迷惑したんだよね……ウップ」
「ゴン太……なんてヤツだ。きみのビジュアルはゴンターガ様とゴンタレスを掛けてゴン太で割っただけに過ぎないと言うのに……。カノンちゃんに吐き気を催わせるなんて！！」
「私から言わせればただの牛ゴリラだよ……お兄ちゃんはカッコいいけどね！」
「意外と酷いこと言うよねカノンちゃん……さ」

とにかくカノンはゴン太に対しては酷いが、ソロを慕っている事だけは伝わった。

そしてソロとゴン太も会計を済ましたので、スバル達の方にかごを持って、得意げな表情を浮かべ向かってくる。それはそのはずで、昼さがりのブラックポケットと恐れられたソロの力は尋常ではなく、カレーの材料はおろか、その他の向こう一ヶ月の生活用品を仕留めることが出来てしまっていた。トイレットペーパーや、シャンプーの詰め替え用など、ソロの目利きの前では最安値で押さえられた。どこに何があるのか、ソロにとってはデパートは庭だ。カレー分の材料で、全てを手に入れるのだから神業としか言えなかった。

スバルはそんなソロに負けたよ……とでも言わんばかりにそっと目を閉じて、彼の勇姿をまぶたに焼きつける。そして尊敬を込めて握手を求めたのだった。彼がいなかったら今回の買い物はおそらく無事に成功しなかっただろう。

「ありがとう、ソロ。今日という日にキミと出会えたことに感謝する！」
「礼はいらん。だが、これで借りはチャラだ」
「借り……？」

「いや、何でもない」

借りというのは、ロックマンに対してピンチを救ってもらったということももちろんあるが、それ以上にあかねの存在が大きかった。彼がコダマデパートで伝説になれたのも、ひとえに彼女の存在が大きかったからだ。何も知らなかったソロに一人で生き残る方法を教えてくれたのは誰でもないあかねだった。もちろんあかねはそんな事は知りもしないだろう。

だが今、ソロは健やかに成長してあかねの最高のライバルとなった。

もちろんソロはそんなことをスバルに言いはしないが、星河家に貰った恩はこれで返せたということなのだ。彼の中の決着に、ソロは気持ちよさそうに一人で怪しく笑みを浮かべていた。

スバルはそんなソロを覗きこむように買い物袋を差し出した。もちろんエコバックである。舌打ちをしつつもソロはそれに卵を投げ入れてやる。

これがスバルとソロの初めての共同作業だった。

「ソロ……ニヤニヤしてるね」

「う、うるさいっ！！」

無事買い物を済ましたスバルとソロ一行。デパートを出て分かれ道に差しかかった所でお互いに別れを言う。膨れ上がった買い物袋を提げ、夕陽を背にしたやり取りは和やかな風景だった。

しかしルナだけは買い物袋を持つ気はないらしく、さすがのルナルナ団だった。ちゃんと荷物持ちをしているカノンとは対照的である。重い荷物にキザマロの身長が縮むことが心配された。

ソロはそんなキザマロを憐れんだのか、身長のびのびセミナーでもらった。秘密の粉を渡してやった。

「これを」

「こ、これは……！」

キザマロは電撃に貫かれたかのごとく身震いして、ソロを神でも崇めるかのように見上げた。その表情と言ったらなくて、何とも言えない喜びを表現しようとして表情金が痙攣している始末だ。

ソロは哀れなキザマロに言う。どうやらソロは実生活では無愛想ながらも優しい少年のようだ。

「これは、修了者に送られる。秘密の白い粉だ。これを飲めば身長が伸びる……」

「なんで？　これを？！　アナタは一体……？」

「言わせるな。だが、これだけは確かかもな……。以前の背を高く見せようとし、逆立たせた俺の髪型は――」

「お兄ちゃん！！　それ以上は駄目！！」

「……！！　ふ、そうだな、うまい話には裏がある。夢は見るものかもしれない。叶えられないからこそ夢に見るものだ……」

ソロの言おうとした事をカノンが止めて、ソロが自省して笑うという奇妙なやり取りだった。キザマロは困惑するが、ソロはだんまりを決め込んだ。

優しいカノンの気持ちを汲んでやらなければならない。

なぜならソロは知っていたから。悲しい事実をキザマロに教えてはいけなかった。身長のびのびセミナーがただのぼったくり宗教の窓口に過ぎないということは黙っていないとキザマロの夢が消える。

そう、夢は見るためにあるのだ。

キザマロに託した白い粉は身長のびのびセミナーの総本山が構え

る、とある宗教シンジケートに乗り込んだ時にソロが入手したものだった。その粉を渡した教祖はソロに「この白い粉を飲めば、全てを犠牲にして身長を手に入れることが出来る……！　これだけは嘘じゃない！！　だからサテラポリスだけは呼ばないでくれ！！」と言っていた。もちろんソロはその教祖をサテラポリスに突き出して、白い粉も奪取した。そして今それをキザマロに渡してやったというだけのことだった。

教祖の言っていたことが本当なら、キザマロは全てを犠牲にして身長を手に入れることが出来るだろう。そうすれば、身長のびのびセミナーが宗教の一環である事を知らずに身長を伸ばすことが出来る。これで皆が幸せになれるだろう。

キザマロは白い粉を握りしめると、小さく頷いた。

「あ、ありがとうございます！！　いかにも怪しげな白い粉ですが、大切しようと思います！！」

「ああ、がんばれ。現実に負けるなよ」

「はい！！」

とりあえずキザマロとも親交を深めたソロだった。

しかしルナはいい加減帰りたいらしい。怪しいクスリなどに興味もないのだ。眉を吊り上げて、荷物も持たないルナはその場を仕切りだす。

「もう、クスリとか！　ヤクとか、どうでもいいわ！！」

「ヤク……って」

ルナの白い粉に対する端的な表現にスバルは苦笑する。ウォーロックは怪しく笑うだけだ。あながち冗談に聞こえない辺り笑えなかった。

もちろんルナはウォーロックを無視して、さっさと帰路につく。

「もう、いいの！！　さ、帰るわよ！！」

ルナはお嬢様だからとまらない。そして最後にソロに釘を刺しておく。今回の彼の活躍は目を見張るものがあったが（例えば、行方不明となったルナを探しだし、お姫様だっこをしながら、主婦に対して大立ち回りを演じた等）所詮はソロはソロだ。ルナの中では仲間ではない。一般市民のルナと現場担当のスバル達の価値観は違っていて当たり前である。ルナの態度は、悲しくも現実的なものだった。

「言っとくけどね！　私はアンタの事なんか仲間だなんて思ってないんだからね！！　ショッピングで交友を深めようって魂胆でしょうけど、そうはいきません！！」

ルナの言いようにカノンが食いかかった。ミソラと同じように仲良くはなれない運命かもしれなかった。ソロを悪く言われれば妹代表として黙ってはいられない。

「お、お兄ちゃんはそんなつもりはない……！　スバル達が困ってたから、黙って見ていられなくて……こ、このバカ嫉妬女っ！」

「……バ、バカ嫉妬女ですって！！　妙に的を得ていて腹立つわ！！」

帰り際で喧嘩を始めるルナとカノン。もはやスバルではどうしようもないので、とにかく二人を引き離すしかないだろう。同じ場にいたら、危険すぎる。

「い、委員長！　もう帰ろう！　ほら、さっきまで帰る気満々だったじゃないか」

スバルはルナを引っ張っていく。とりあえずさっさと別れの挨拶をしてしまう。

「じゃあね、ソロ！　僕たちはこれで！」

「ああ、俺も帰ることにする」

ソロも頷いてカノンを引っ張っていく。カノンはルナを睨みつけていたがソロに言われれば大人しく従う。スバルとのカリスマ性の違いがまざまざと示されているようだ。

「行くぞ、カノン。ドリル衛星アホ女のことなど放っておけ」

「う、うん。ドリルマンは放っておくね！」

もはや女ですらなくなったルナだった。もちろんお互い最悪な印象のまま別れとなる。しかしそうは問屋が下ろさなかった。なんとソロ達は分かれを言った後もスバル達の後ろに付いてくるのである。もちろんルナが絡みに行くので手に負えない展開だ。

「ちょっと、アンタ達なんでついてくる訳?!」

「知るか、俺はこっちに用事があるんだよ。長官とかいう奴に呼ばれててな……」

するとカノンの補足だ。彼女はソロの口数の少なさをカバーしてくれる貴重な存在だった。ルナもムッとするが、カノンがいなくては話が進まないので耳を傾ける。どうやら、複雑な事情があるらしい。

ソロの今までの人生に大きな転機が訪れようとしていた。きっと先のエデンでの任務が彼の心境を変えた大きな要因だろう。

とにかくカノンがルナを指差して説明する。

「お兄ちゃんはね、ちゃんとしたお仕事に就く気になったんだよ！　サテラポリスって所にお勤めするの！　もう、ホームレス小学生なんて言わせないんだもん！！」

「こら、余計な事は話すなカノン。一般市民に言うことじゃないだろ。それにホームレス小学生とは中々ワイルドで良い響きだが、それ以前に俺は小学生ですらない。ただのホームレスだ！！」

ホームレス。その言葉の響きはどこか小学生には魅力的だった。何となくハートレスにも似ている語感だ。

スバルはソロのワイルドな生活実態を想像して、ワクワクと瞳を輝かせた。小学生にとってはホームレスの薄汚さよりも、野生動物としての力強さが先に来るらしい。

「わ、ソロって、ホームレスだったんだね。カッコいいなー」

『おいおい、スバル。地球じゃホームレスは最下級のヒエラルキーに分類されるって聞いたぜ？　ちなみに俺が芝刈り機ドライブをしていたら、ヤツが公園のカン拾いをしているのを何度も見かけた。あの背中は少なくとも格好良くはなかったぜ』

「くっ……ソロ……」

しみじみとするスバルだったが、そんなことはどうでもいい。どうやらソロはようやく正式にサテラポリスに協力する気になったらしい。そのためデン助に呼ばれたということらしい。しかしこれだけでは、なぜスバル達と同じ道をソロが帰り出すのか分からない。

スバルはイヤな予感を確かに感じたのだった。たしかソロが買い物で買っていた物はほとんど生活用品だった気がするのだ。

そして嫌な予感とは当たるもので、ソロは結局スバルの家の前ま

でついてきたのだった。
　しかしその帰路でのやり取りは奇妙の一言に尽きていて、お互いがお互いを見張るようにして、手に汗握る緊張感を演出していた。まるで『だるまさんが転んだ状態』だったのだ。結局、スバルの家の前では高度な駆け引きを織り込んだ、『電波人間板だるまさんが転んだゲーム』に発展していた。もちろんルナやキザマロは蚊帳の外で、ロックマンとブライが織りなすハイレベルなゲームに呆れるしか出来なかった。
　そしてスバルの家の前で勝負がついたのだった。ブライは初めてのお家暮らしに我慢が出来なくなって、ついつい動いてしまったのだった。ホームレスという真理を上手くついた、ロックマンの作戦勝ちだった。

「やったー僕の勝ちだ！！　ソロ！！」
「くっ、またロックマンに負けた！！　クソッタレめ！！」

　ブライは玄関の前で手を突くと地面を殴って、道路を駄目にする。すると玄関扉が開いて、あかねがひょっこりと顔を覗かせた。彼女は驚いた顔をしていた。それはそうだろう、玄関先でロックマンとブライが「だーるーまーさーんーがー」などと大声で言っていたら、うるさくて仕方がない。しかしソロとカノンの姿を見つけるとあかねは微笑んで歓迎の意思を示す。

「あら、来たわね。ソロ君にカノンちゃん。長官やみんなが先にきて待っているわよ。ほら、中に入ってらっしゃい」
「は、はい！」

　カノンは緊張したのか頬を軽く染めて、あかねの方に走っていく。ソロもソロで憧れのあかねとの対面に頬を染めていた。
　スバルはもう嫌な予感が確信に変わって吐き気がしている。

「ま、まさか……」
『おふくろのあの表情、これはマジだな』
スバルは不整脈を起こしそうな心臓の高鳴りを誤魔化しつつ、玄関扉に手をかける。きっとリビングには嬉しそうにしているあかねの姿があるのだろう。とりあえずスバルは溜め息混じりにルナ達と別れを告げた。この家の中で繰り広げられるだろう展開にもはや彼女達を巻き込む訳にはいかなかった。特にルナがいれば、うるさくて堪ったものではない。
「じゃあね、委員長」
「う、うん。私、いま、すごく嫌な予感がしている……」
「僕もだよ。委員長……きっとこれから大変なことになる気がする」
「いや、ソロ君は神ですよ！　だって僕にクスリをくれたんですから！」
「委員長、とりあえずキザマロに道を踏み外さないように言っといて」
スバルはキザマロのこれからを心配しつつも家の中に入る。すると、リビングの方から、言い知れぬプレッシャーが襲ってきた。スバルは下足場で昏倒しそうになるが、ウォーロックの励ましの言葉になんとか堪える。
『落ちつけスバル！　ここはお前ん家だ。ここはデパートじゃない！　お前のホームグラウンドだ！』
「そうだ……し、しっかりしろ……僕！　夜太郎さんが帰ってくるまでこの家を守り抜くと誓ったはずだ！」
スバルの決死の覚悟に廊下からあかねが手招きしてくる。あかね

はスバルの気持ちなどまるで分かっていない。それほど、無邪気でにこやかな表情だった。

「ほら、スバルー早くこっちにいらっしゃい。きっとビックリするからー」

「わ、わかったよ」

スバルは息を整えながら、リビングに向かう。そして敷居を跨ぐ時に覚悟を固める。しかし、スバルはここが自分の家ではないのではないのかという恐怖に襲われてしまった。敷居を跨ぐこともできずに彼は見えない壁をのれんの向こうに感じていた。

するとウォーロックが実体化して、スバルの背中を押してやる。精神的にも物理的にもだ。何が待っていようと、彼はもはや恐れる必要などありはしない。彼が乗り越えて来たものはそんなちっぽけではない。

「ほら行けよ！　自分の家の中でくらい堂々としやがれ！！」

「わあ、押さないでよ！」

「いいや、俺は押す！　ビーストソフトナックル！！」

「ぐわ、またそれかッ！！」

スバルはウォーロックの前で抵抗むなしくリビングに押し込まれた。そして目の当たりにする信じられない光景だ。いや予想はしていたが、信じたくない光景だった。

ソロが夕飯の準備をしていた。やはりだった……。ここまでされてはスバルはもう文句も言えやしなかった。ソロの背中は第二の夜太郎だ。しかしホームレスというのは、誰もかれも料理がうまい。どこで習ったのかという、異常な特性だった。きっと、ホームレス協会という組織がどこかにあって、一人で生きていける術を教えているのだろう。料理のスキルなど最たるものだ。

「まさかソロの作った夕飯を口に入れる日が来るなんて……」

『油断するなスバル！！　リビングの方に複数の生体反応をキャッチした！　クッ、なんてこった！　ぐわぁあ！』

「うあー！」

ウォーロックのノリは良いが、現在の状況を表す彼なりの努力だろう。そう、まだこの光景は序の口だったのだ。今まで台所の方に目線を奪われていたのだが、リビングの机に目を向けると、スバルはまたしても膝から崩れ落ちそうになった。

あかねはどこまで仕込んでいたのだろうか。いや、これはスバルが行ってきた行為に対する当然の結果だった。

「長官にヨイリー博士！　それにアンタは一体?!　それにカノンちゃんは初めてのテレビというものに興味がシンシンだ！　手に負えない！！」

スバルは長官ことデン助、ヨイリーの姿に目を奪われた。彼らがいると言うことは大人のブラックな話が味わえると言うことだ。そしてカノンは教育系テレビをあかねと熱心に見ていた。とんでもない混沌が星河家で渦巻いている。しかしもう一人いる。彼は金にうるさそうな顔をしているが、そんな人物はスバルは知らなかった。いや、知っているのかもしれないが、思い出せないというところだ。そんな人物がデン助とヨイリーと一緒に机を囲んでいたのだ。

とりあえずスバルはデン助とヨイリーに挨拶をする。挨拶は大切だからだ。もちろん金にうるさそうな顔をした真ん中分けの小太り成り金にも挨拶をする。サングラスなんて掛けている辺り、テレビの業界人のようだ。カーディガンを羽織っている念の入れようにスバルは感心してさえもいる。

「こ、こんばんは長官、そして博士。それに……えっと……」

喉の辺りまで出てくるが、それ以上は出てこない。そんなぼんやりとした程度の人物だった。顔が小悪党みたいなずる賢い物で、あまり思い出したくないたぐいの顔だった。

するといい加減名前の出てこないスバルに小悪党が痺れを切らしたようで、自分から名乗り出す。

「おい、アンタ！　俺の名前を忘れたとは言わさねえぞ！　ミソラの元マネージャーにして、世界で初めてロックマンに一発をお見舞いした男！　そう、金田だ！！」

「か、金田……？！」

「まだ思い出さないようだな。金に汚くて、ミソラに意地悪く迫り、そして歌を嫌いにさせたほどの小悪党！　あげく子供に手を上げる敏腕マネージャー！！　それが俺、金田なのさ」

『あーっ！　思い出した！！　コイツはー！』

「コイツは金田ー！　金に汚い金田さんだ！！　ミソラちゃんをい

じめた金田さんだ！　あと、僕をぶった金田さんだ！！」

スバルもようやく思い出したようで、金田に向かって失礼なことに指を指す。それでも金田はようやく思い出せてもらったことに満足したようで、腕を組むとイスに踏ん反り返った。まるでお客さんのような態度だ。いや、金田はお客さんだから、そうでいい。ただ悪い客という奴かもしれなかった。小太りなのでイスが良くしなった。

スバルの感じていた嫌な予感はもしかしたらソロの方ではなく、金田の登場を予期してのものだったのかもしれない。

そして金田はスバルを脇に置いたままで、デン助とヨイリーに詰め寄っていた。どうやら、机を囲んで挟む議論の中心に金田がいるらしい。彼のことだ。また金の匂いを嗅ぎつけて、ミソラに迫ろうとしているのだろう。ここはデン助とヨイリーの力の見せ所だ。大人の力を発揮して、金田からミソラを守らなければならない。

金田とのミソラを賭けた戦いが始まりを告げた。

まず金田は嫌らしく金に飢えた笑みを浮かべると、長官を脅しにかかった。机に身を乗り出して行儀が良くない。

「おい、アンタ。ミソラをこの家に預けるってのはどういうこった？」

スバルはこの家にミソラが来ることに驚くが、一方でデン助はばつが悪そうにだんまりを決め込んでいた。そんなデン助を良いことに、金田は図に乗ってまくし立てた。

何となく不安に駆られたスバルは、あかねに事情を尋ねようと目線を送るが、あかねは首を振って黙って見ておけと言うだけだ。どうやら大人の話に子供が首を突っ込むものではないらしい。

しかし金田は小悪党らしく口が良く回って止まらなかった。どうやらミソラの保護者を巡って争っているらしい。ワタルが宇宙の藻

屑となった今、息を潜めていた金田が金の成る木であるミソラを手に入れようと名乗りを上げた次第なのだろう。

「言っとくけどな俺にはな、ミソラの保護責任があるんだよ！　サテラポリスだがＷＡＸＡだかしらないけどな、勝手にミソラを引っ張り回してこっちは迷惑してるんだよ！」

金田の我がままな言いように、ヨイリーが事情を説明する。今までミソラが何をしていたのかという事を教えてやらなければならない。

「金田さん。落ち着いて聞いてください。ミソラちゃんは今まで、地球を守るためにですね……」

「ああ、地球？　そういえばこの前まで太陽がヤバかったな。……で、それとミソラがなんの関係があるの？　こっちは予定していたライブも中止になって大損害だ！」

「ですから……」

「ヨイリー博士、これ以上は極秘任務ですので……」

まさか一般市民である金田に、エデンの存在を伝える訳にはいかないだろう。そんな事をしたら信じてもらえないか、パニックになるかのどちらかだ。デン助はそれを懸念してヨイリーの口を止める。

しかしそうなってくると、金田が有利に話を進めることになる。結局のところ、ミソラの保護者の権利があるのは金田なのだ。ましてや星河家に預けられる訳もない。大人のセカイは真っ黒だからだ。金が絡めば金田のような人間が沸いてくる。

そして金田のような人間は大抵、法律を味方につけていた。彼は自信満々にデン助とヨイリーに書類を突きつけた。

「はあ、話にならね。じゃあ、この書類だ。ミソラの保護者が誰か

示してるか目を通してくれ！　カンナさんの印鑑も押してある！」
「博士。こ、これは……」
「おそらく、カンナさんが自分の死期を予測して、ミソラの保護を芸能事務所に頼んだ時のものね……まったく、やってくれるわ」
「どうだ！　法律上、ミソラの保護者は俺なんだよ！！」

書類の保護者欄には金田の名前がしっかりと記されていた。確かにカンナの印鑑も押されている。きっとカンナは自分が死んでしまえば、ミソラが一人ぼっちになると思ったのだろう。そしてちょうど、妾にしてくれていた芸能事務所が言い寄ってきたというところか。

ワタルがいなくて、カンナもいなくなればミソラは天涯孤独の身。頼る術はなかったのかもしれない。しかしカンナの選択が今、牙を剥いていた。

法律の力の前にヨイリーとデン助はぐうの音も出なかった。ましてや警察組織である、サテラポリスとその関連のＷＡＸＡが法律を破る訳にはいかない。

ワタルがいなくなってしまった今。ミソラの為と思って、星河家にミソラの身を頼んだデン助とヨイリーだったが、金田の力の前では無力だった。

金田は金の成る木であるミソラを再び手中に収められると実感して、歓喜の叫びを上げた。

「ハハハ、どうだ！　文句は言わせねえぞ！！　分かったなら、とっとミソラを出せ！　この家で匿ってるんだろう？」

金田は今すぐにでもミソラを連れて行くつもりらしい。そうやってまた無理やり歌を歌わせて金を儲けるつもりなのだろう。

ヨイリーは成す術がなくて、不安そうにデン助に目配せする。

「どうしましょうか……このままじゃミソラちゃんが」
「諦めちゃダメです。後少しだけ時間を稼げば、ワタル君がきっとミソラちゃんを守ってくれる……ワタル君ならきっとアレを残してくれているはずだ……！」

今はワタルがミソラの為に残したであろう、書類を信じて待つしかない。しかしワタルがそこまで気を配っていたかどうか分からない。時間は過ぎていく。

とうとう金田はミソラを探そうと、席を立った。

するとスバルは無意識のうちに金田の前に立ちふさがる。金田をリビングから出してはいけない。そんな気がしたのだろう。

「い、行かせないぞ。ほ、法律が何だ！！　ミソラちゃんが嫌がってるんだろう？　こんなのおかしいよ！」
「またお前か……。どうやらまた殴られたいようだな！」

金田は拳を作る。大人としては子供に手を上げることはあってはならないが金田にはそんな良識はない。

スバルは歯を食いしばる。すると金田が思い出したかのように、へらへらと笑いだした。

「あ、そうそう。お前に聞きたいんだけどさ。ワタルってやつ死んだんだって？　なあ、何て言ってた……？　ミソラの財産権利は放棄したのか？　親権は？　なあ、アイツの最後の瞬間を見たんだろう？」

スバルはその言葉に、今まで感じたことのないような怒りを感じ始めた。何か越えてはいけない一線を簡単に跳びこえてしまいそうな金田の振る舞いの数々である。ワタルが何を思って、インフィニットを相手取ったのか考えればやり切れない。

「なあ、どうなんだ？　しかしまあ、アイツが生きて帰ってきたと知った時はどうしたもんかと思ったが、やっぱりロクでもねえ奴だったようだな。娘を置いてまた蒸発だ！　でも、そのおかげでまたうまい汁が吸えるってもんよ！」

「ミ、ミソラちゃんは金儲けの道具じゃない！！　ワタルさんは宇宙で誰よりもミソラちゃん事を想ってた！！　お前なんか……！」

「何だって……？　もっぺん言ってみろ？！　やっぱり痛い目に会わないと分かんないらしいな！」

スバルはガチガチと体を震わせながらも拳を握った。ワタルをクズ呼ばわりして、ミソラを商売道具としか見ていないコイツが許せなかった。そして何より、スバルはワタルに頼まれていた。ミソラを守ってくれ――と。

「ミソラちゃんは僕が守るんだ……！　お前なんかに渡さないぞ！」

スバルは金田に殴りかかった時だ。するとリビングの外からミソラが駆け寄ってきて、スバルを止めた。どうやら一部始終を見ていたらしい。今にも泣きそうな表情だ。そしてミソラに続いて、天地が入ってくる。天地の登場にデン助はすぐに目配せする。すると天地がニッと笑って頷いて見せる。デン助はホッと一安心だ。どうやらワタルはちゃんと手を打っていたようだ。ミソラを金田から守るために、しっかりと書類を残してくれていたのだ。天地の手には一通の封筒が握られていた。

まず金田に引導を渡してやりたいが、その前にスバルを安心させてやらないといけない。

「良く頑張ったなスバル君。キミが時間を稼いでくれたおかげ、ミソラちゃんは幸せになれるぞ……！」

天地はスバルの頑張りに頭をくしゃくしゃと撫でてやると、ミソラとともに後ろに下がらせる。これ以上は子供が頑張る必要はないのだ。

天地は金田に向き直ると封筒の中身を取り出して金田に突きつけた。その書類の正体に金田はぎょっとする。そして天地はワタルの遺志を代弁する。

「これはワタルさんに頼まれていたものです。もしもの時に……探してくれって」

天地は元ＷＡＸＡ職員のよしみとして、ワタルに頼まれていた。きっとワタルとしては大吾の優秀な後輩だった天地に頼みたかったのかもしれない。

彼は地球に帰ってくると同時にミソラの現状を知った。そして金田からミソラを守るために自分の研究室に保険を残したのであった。そうして天地にその存在を話したのだろう。そう、このような事態が来ることをワタルは予期していた。

ミソラと再び一緒に暮らす中で聞いた彼女の今までで浮き彫りになった金田の存在。それを重く受け止めていたということだ。ワタルは結局デスクワーク派だったのだ。

金田は何歩か後ろに引くと明らかにうろたえた様子だった。

「な、何だそれは……？！」

「気付いているでしょう？　これが遺言書だって」

「クッ……！　あの野郎！！」

遺言書の登場に金田は具合悪そうに歯ぎしりをする。天地が止めを刺してやる。

「封筒の中には、ワタルさんの遺書と同時に保護者譲渡の書類が一緒に入れられていました。これは最新の書類で保護責任者よりも、優先度の高い親権者の印が押してあります。つまり保護責任者のアナタがいくら訴えようとも、ミソラちゃんの父親であるワタルさんの遺志が優先されると言う事です！」

「ば、バカな……！　じゃあ、その新しい保護者に誰が書かれてるってんだ？！」

「星河あかねさんです！　あかねさんが同意すれば、アナタはミソラちゃんとはもう赤の他人です！」

あかねがミソラの新しい保護者、それがワタルの遺志だった。もちろんあかねにも事前に話が通っていた。

金田の欲望が音を立てて崩れ去っていく。どうやらワタルの勝ちらしい。

ワタルはずっと思ってきたのだろう。自分がいなくなった時、ミソラを安心して任せられるのは、スバル達の家族だけだと。憧れの大吾を通してスバルを知り、戦いを通してスバルの強さを間も当たりにした。ミソラに新しい家族を与えてやれるのはこの家族しかないとワタルは思ったに違いない。信頼という意味ではジョニーでも良かっただろうが、彼は生活能力が皆無なので不適だった。何よりそれではミソラが困る。

そして天地はワタルの遺書を読み上げていった。

「よく聞いておいてください金田さん。

第一、保護に関して。響ワタルは響ミソラに関する全ての保護責任を星河あかねに譲渡する。

第二、芸能活動に関して。響ワタルは未成年である響ミソラの学業を優先して、事務所からの一切の勝手な干渉を許可しない。

第三、勉学に関して。今までの勉学の遅れを取り戻すために、響ミソラの適切な修学環境を要求する。

最後。”僕は絶対に帰って来ます。その時までどうか、ミソラをお願いします”
――以上がワタルさんの意志です」

金田はがっくりと肩を落として、その場に崩れ落ちた。まさかワタルがここまで手回ししているとは思わなかったのだろう。ワタルもきっと、後悔したのだろう。かつて、ちゃんと準備をせずに宇宙に旅立ってしまい、ミソラに悲しい思いをさせてしまったと。

だが、もうこれでミソラは安心だ。天地はあかねに書類を差し出すと、あかねは机に向かっていく。そしてワタルの遺志を継ぐために書類に記入をしていく。金田はその光景を黙って見ているばかりだ。指を咥えてみているしかできない。

しかし金田はここで終わる男ではない。何を隠そう、彼ほど金に執着する男はいないのだ。金田という苗字は伊達ではないのである。

金田は往生際悪く、ハンターを構えるとバトルカードを取り出した。ライターのようなイラストが描かれている黄色いカードだ。金田は悪者のように高笑いした。書類を燃やしてしまえば、契約は不成立で自分がミソラの保護者のままだと思ったのだろう。

「ミソラは俺の商売道具！　バトルカード、ヒート――！」
「黙れ！　キサマ！！」

凶行に出た金田だったが、素早い反応でソロが台所から飛び出すと、フライパンで金田の頭を殴った。まるで百八の煩悩を吹きとばすありがたい音色がリビングに響くと金田は口から泡を吹いて気絶した。

「ふん、うるさいんだよお前は。飯がまずくなるだろうが……っ！」

ソロはそのまま何事もなかったかのように、慣れた手つきでフラ

イパンを返して卵焼きを作っていく。彼の大活躍でようやく悪者退治は完了したのだった。

スバルはソロに感謝すると同時に、台所でせっせと仕事する彼の背中がもう何年も見慣れたものの気がするのだった。

ｓｂｒ―０３：カオスな星河家

金田を病院に送りつけたスバル達はソロも交えて、いよいよ本題に入ろうかとしていた。どちらかと言えば、ミソラの進退よりもソロの今後についての方がＷＡＸＡとしてもサテラポリスとしても大事だった。彼もミソラ同様、星河家で世話になる予定だ。ただ住むと言うより、スバルと行動を共にしなければならなくなるということだ。どうやらソロが今後の地球の命運を握っているかも知れなかった。

前回の任務でソロに降りかかった試練や意味深な言葉の数々。どうにもロックマンがカギを握っているようなのだ。ＷＡＸＡとしてはスバルとソロが別行動をとることは望ましくなかった。常に彼らの行動を把握しておきたいのだ。だから、ソロも星河家の厄介になるという事の運びだ。

しかしソロの料理は中々のものであった。それはあかねに迫ろうかという出来栄えである。そんな色どり美しくなった机を囲んでいるスバル達。まずデン助が事の経緯を説明する。

「まあ、話せば長くなるのでかいつまんで言いますと、これからスバル君にはソロ君と一緒にいてもらいます」

スバルは首を振った。ずっと一緒とは精神的に参ってしまう。

「嫌ですよ。僕がなんで……」

「別に良いじゃないかスバル君。トイレまで一緒に入れって言って

るんじゃないんだからさ。出来るだけ一緒にいてくればこっちが助かるんだよ」

　すると次はヨイリーだった。彼女はいい加減、ソロと協力関係を築いておかなければと思っているらしい。いつまでたってもブライが神出鬼没では不便極まりないのだ。

　もちろんずっと努力はしていたが、以前のソロは協力的ではなくて話にならなかった。しかし心境の変化からか、ソロは条件付きでならＷＡＸＡと協力することに同意してくれたのだ。その条件というのがスバルの監視だった。彼は導き役として、ロックマンと舞台に上がらなければならないらしい。どうやらソロにも事情はあるようだ。

　つまりＷＡＸＡの思惑とソロの目的が合致したのである。

　それでもスバルにとってはいい迷惑でしかない。確かに料理は上手いが、ソロと一緒にいては息が詰まる。上手い料理も台無しだ。

　スバルはソロの作った料理に舌鼓を打ちながら、やはり否定するのだ。箸の持ち方をソロに注意されるが、それでもお構いなしだ。そもそもこういう生活力のあるソロを見せられ気分が悪い事が何よりの理由かもしれない。イメージというものは大切だからだ。

「やっぱりだ、いやです！　この料理が美味しくても、それ以上にソロの存在は僕にとっては息苦しい！　それにこれ以上一緒にいると、僕の中のソロが壊れる！」

「酷い……スバル……！」

　カノンがウインナーを頬張りながら、スバルのウインナーを串刺しにして、不満を露わにした。イヤな攻撃方法にスバルは驚いて、卵焼きを喉に詰まらせてしまった。しかしそこはミソラの出番でありコップを渡してやって、なんとかやり過ごさせる。一方、ソロは一人で黙々と食べていた。見ている分には、何も問題ないように思

える。むしろチームワークさえも感じさせた。
あかねも楽しそうだし、やはり問題ない。だが、スバルは鼻からスパゲティを出しながら目に涙を溜めていた。これは問題ある。
「ゲホゴホッ。と、とにかくです！　僕は認めませんよ！」
スバルが鼻のスパゲティをちぎり取ったところで、デン助が提案する。
「じゃあ、私達の願いを聞いてくれるのなら、あるプレゼントを用意しよう！」
「何とかって言いますと？」
「キミの部屋を改造して、専用の秘密基地を作ったりだな……」
「ひ、秘密基地……なんて魅力的なフレーズだ！」
『おい、スバル。秘密基地だぜ！　これはお買い得じゃねえか？』
ウォーロックを味方に引き入れたデン助だった。秘密基地と言っておけば、大抵の男のロマンをくすぐれるのだ。スバルも秘密基地の魅力に負けそうになる。
しかし踏みとどまった。ここで釣られてはロックマンの名が廃るというものだ。カノンは残念そうに肩を落とすしかない。元気がなくなったのか、隙を見てスバルのウインナーを奪い取るということもしなくなった。
今度はあかねだった。ソロには並々ならぬ感情を抱いているのが主婦としての彼女である。かつてデパートで繰り広げた死闘が、お互いを意識させるのだ。それにソロを仲間に引き入れれば、買い物で困る事はもうない。主婦の味方としてソロは欠かせない存在だ。
そのためあかねはスバルの痛いところを抉ってくる。息子の弱点など母親はお見通しだった。特に年頃の男子なんて簡単で、異性への関係を弄ってやればいいのだ。

「あーら、スバル！　あらあら、ミソラちゃんとカノンちゃんについては何にも言わないのに？　ソロ君だけ拒絶？　いやらしい息子だわ、まったく！」

『うわ、いやらしいぞスバル！　お前、秘密基地を良いことに、秘密の場所で秘密なンフフってか、オメー？！』

『ポロロン。スバル君ってオマセさん』

スバルは散々な言われように箸を置くと一息ついた。そして何も言わずに自室に逃げかえった。

ミソラはそれが少し可哀そうに思い、あかねをなじった。確かにスバルはいやらしいが、秘密基地で秘密の何とかは酷過ぎた。

「ちょっと、あかねさん。何と言いますか、あれじゃスバル君が可哀そうです。今まで見てきましたけど、スバル君は女の子には興味ない感じですよ？」

「え？　……それはショックかも」

あかねが肩を落として明らかに勘違いしているので、ソロはその場の空気に耐えられなくなって席を立った。基本的にソロは堅物なのである。

「ごちそうさま。では、俺は秘密基地に行ってくる」

デン助は気の早いソロに待ったを掛ける。まだ秘密基地は出来ていない。悲しむソロを見るのは忍びない。

「まて、まだ秘密基地は――」

「勘違いするな！　俺の秘密基地は俺の中にある！！」

ソロはきちんと食器を台所に持っていくと、スバルの自室に向かって行った。カノンはそんなソロのカッコいい言葉に惚れ惚れしている。カノンはソロが絡むと頭が悪くなるらしい。ミソラは呆れ返って、ソロの料理にがっつくだけだった。

ヨイリーは溜め息を吐くと、デン助に目配せをしてあかねに挨拶をした。今日はとりあえず帰ることにする。後はスバルの問題だ。彼はデリケートなので、無理に押し付けるのも逆効果だろう。

「では、これで失礼しますね。スバルちゃんにもよろしく言っておいてください」

「はい、分かりました。今回はありがとうございました」

「いえいえ。でも、やっぱり、大吾ちゃんの家族って感じなのね。アナタ達ならきっと……」

ヨイリーはしみじみとテーブルに掛けられた大吾の写真に目を落とす。大吾はおそらく敵の手に落ちてしまった。だが、この家族なら大吾を取り戻すことが出来るかもしれない。宇宙を救う力がこの家族に秘められている。ヨイリーは科学者らしからぬ物思いにしばし耽った。

デン助に呼ばれると、ヨイリーはミソラ達に手を振って帰っていく。

「博士、行きますよ」

「じゃあね、ミソラちゃん、カノンちゃん。あかねさんの言う事をちゃんと聞くのよ？」

「はーい！」

「はい……！」

こうしてヨイリーは帰った訳だが、スバルとソロの方が心配だ。あかねにとってあの手の少年は初めてのタイプだったので、あれこ

れと余計な事を心配してしまう。するとカノンがそわそわする彼女に微笑んでウインナーを差し出した。彼女が大好物を差し出すと言う事は、最大の親しみの表れである。どうやらヨイリーの言葉を守り、あかねを高く評価しているらしい。

「あかねさん……。大丈夫、お兄ちゃんはああ見えて、思慮深いから」

「ありがとう。……でも、スバルったらやたらソロ君を嫌ってるっていうかねえ……心配だわ」

するとミソラがあかねにお代わりを要求しつつ、心配無用だと言い切った。カノンではないが、確かにソロはああ見えて、意外と考えて生きている。

下手に争い事は起こさないだろう。

「大丈夫ですよ！　ソロ君って、結構家庭的な所があるんですよ！　あかねさんはもう知ってますよね？」

「フフ、そうね。確かに彼のショッピングファイターの資質は凄まじかったわ」

あかねはソロを高く評価したらしく、スバル達の方を心配する事はやめたようだ。その証拠にミソラに渡してやる茶碗一杯にご飯をよそってやっていた。景気の良さからあかねの機嫌の良さも伝わってくるようだ。

ミソラも満面の笑みを浮かべて、箸が良く進んでおり何よりだ。

一方、あかねの予想に反してソロとスバルは険悪な雰囲気を醸し

出しながら、スバルの自室でお互いを監視し合っていた。どうにも達磨さんが転んだの続きではないようだ。ソロはスバルの方に向かっていく。スバルはベッドに寝転がっていたが、ソロが近づいてくれば跳ね起きる。

「な、なんだよ……？！　は、はは変な気分だな。僕の部屋にキミがいるなんてさ！」

「少し、話をしておきたくてな」

「話だって？　僕じゃないといけないの？」

「ああ、そうだ」

ソロは腰を下ろす場所を探して、部屋を何度か見回すとロフトに上って来て窓枠に腰を懸けてもたれかかる。横目に夜空を見上げると、星々の輝きに珍しくロマンチストを気取っているようだった。

「星が綺麗だな。コダマタウン……良い場所じゃないか」

「そりゃ、田舎の特権だからね。で、そんなナルシストみたいなことを言いに来たの？」

ソロはスバルの言い分ももっともだと思ったのか、夜空を楽しむのもやめて、質問をぶつけた。きっとこれはスバルにとっては重大な問題のはずだ。

「一つ聞こう。お前はこの星の全て作られたものだとしたらどうする？　いや、宇宙の全てがそうだとしたら……お前はどうする？」

ソロの問いかけにスバルは前の任務の事を思い出す。きっとソロは、自分を見失いかけているのだろう。

「エデンのことだね。太陽が僕たちを監視するために会ったとして

も、もし誰かの都合で星が作られたとしても、僕は宇宙が大好きさ」
「……気持ち悪くないのか？　この世界が」
「バカな事を言うなよ。僕はこの世界の事を一度でも気持ち悪いなんて思った事はない」
「本気で言ってるのか？」
「うん、本気さ。だって、僕たちはずっと自分達の世界を自分たちの意志で生きてきた。そんな世界を誰かのものなんて思えない。僕たちのものだ」
「……そんな風に考えてもみたが、俺には無理だった。俺はアイツを倒すまではこの世界を好きになれん」
「神……つまりワイリーかい？」
「知らん。アイツが神だとしたら俺はアイツを倒すだけだ。そしてヤツから世界を奪取する！」

ソロの言い分にスバルは苦笑した。布団を抱きかかえるようにして、ソロを見つめると、ニと笑って教えてやる。ソロは笑われるのが大嫌いだから、そっぽを向いてやり過ごす。

「ハハ、ソロ。キミってやっぱり変わったよ。そういうのってさ世界を守るって言ってるのと同じで、ヒーローの決まり文句なんだよ？」
「チッ……！　バカにして！」

ソロはスバルの舐めた態度に苛立ち、その感情のままスバルを布団で簀巻きにしてベッドから落としてやる。スバルは悲鳴を上げるが、ソロは許さない。馴れ馴れしいのはまだまだ許せないソロだから仕方がないのだ。簀巻きの上にパソコンのコードを持ちだして、ぐるぐる巻きにして解けないようにしてやる。もちろん窒息してしまわないように、首だけは出してやる配慮を忘れないのは高印象だった。悪ふざけを悲しい事故につなげないのがソロのクオリティの

高さを表している。
そのまま簀巻きを吊るし上げれば、この家でどちらが立場が上か判然とする。

「ふん、このままぶら下がってるんだな」
「おい！　良い雰囲気だと思ったのに！　やっぱり、出てけこの家から、バカ！！」
「俺は卵焼きもそういう風に巻いて作る。よく覚えておけ！」
「ギャハハハ！　ザマァねーぜ！」
「おいおい、ロック。どっちの味方だよー」

結局ウォーロックにも見捨てられてしまい、ソロの卵焼きの作り方を身をもって体験したスバル。しばらくしてからあかねとミソラに救出されて、スバルはお風呂に入って泣きながら就寝した。
もちろんミソラが入った後のお湯に興奮を禁じえなかったことは内緒だった。

ｓｂｒ―０４：裏庭の課外授業～悪夢の始まり～

「おい、起きろ！！　キサマ！」
「うーん、むにゃむにゃ……もう少し」
「チクショウめ。気持ち悪い寝顔だな」
「お兄ちゃん。スバルはきっとお疲れなんだよ……」
「お疲れっていうか、一週間も学校も行ってないんだっけ」
「フン……！　近所のホームレスでも、もう少し規則正しく生活しているぞ！」
「つまりスバルはホームレス以下ってことか」
「ヒドイよ、カノンちゃんー」

さすがのスバルも周りでホームレス云々言われれば目も覚ます。ホームレスは決して悪いことではないが、ミソラ辺りにそのような誤解を持たせる訳にはいかないだろう。とりあえず朝の陽ざしの気持ち良さに向かってスバルは置き上がった。空が青いので、今日も引きこもり日和だった。もちろん今日も学校に行くつもりはない。スバルは堕落していた。

「ふーっ、今日も引きこもるか。さて、記録はどれだけ伸ばせるか……」
『よう、スバル。もう罪悪感もなくなってきたか。いい感じに駄目になっていってるな』
「おはよう、ロック」

スバルは爽やかに笑ってみせた時だった。またソロに簀巻きにされて吊るし上げられてしまう。挨拶代わりに吊るされては堪らないので、スバルは暴れてもがいた。すると惨めに地面に転げ落ちた。

その様子にミソラはクスクスと笑って、手を差し伸ばす。その瞬間、スバルは「ああ、そう言えばミソラちゃんがこの家に来たんだー！　みなぎってくるなー！」という朝独特の高揚感に包まれていく。カノンはそんなスバルが醜くて堪らないので、適当にいつもの赤い服を投げつけてやる。

スバルは一息吐くと、改めて実感する。本当に自分の家にソロとカノンとミソラが来たのだと。ソロに限っては早くどこかに行ってほしいが、また吊るされるので、そっと胸にしまって服を着始める。

とりあえずパンツを脱ぎ始めたところでミソラに蹴り飛ばされた。しかもみぞおちのところなので、悶絶してしまう。ズボン程度ならミソラも許容範囲だが、パンツはいけなかったらしい。許容していない。そもそも着替えにパンツを脱ぐ必要がない事を指摘したいが、ソロはそっと胸にしまいこんだ。

お互い言いたいことも言えないソロとスバルの間を持つようにカノンが説明した。

「女の子の前でパンツを脱ぐのは駄目だよ！　さすがの私でも無理……！」

「ウインナー好きのカノンちゃんが言うなら、そういうことか」

「ス、スバル君ったら……！」

スバルの最低なボケにミソラは頬を染めて、そのまま下に逃げて行ってしまった。カノンも明らかにスバルを軽蔑してあかねの元に向かう。ソロだけは最後まで残って罵ってくれた。失敗した時に無視されるのが、一番怖い事をスバルはよく知っていたのでソロの罵倒はありがたい。

「朝っぱらから天晴れ奴だな……何がお前をそこまでさせる？　お前は愚かだが、同じ男として放っておけない」
「一緒に暮らす以上はさ、僕の駄目な所を早く見せておかないとね。特にミソラちゃんは僕に変な理想を抱いてる節があるからさ。早めのうちに失望させておかなきゃお互いの為にならないんだよ」
「なるほど……考えがあってのことか。ならば何も言うまい」
「ありがとう」

スバルは雑談をしながら着替えを終えると、ふと自分の部屋の異変に気がついた。何やらガタガタと音がうるさい。本棚の本がカタカタ震えて倒れている。図鑑が倒れるのだから相当な振動だ。しかし原因が良く分からないのでソロに事情を尋ねた。

「ねえ、ソロ。騒音がするんだけど」

ソロはその質問を待っていたようで、ニヤリと笑うと、ベランダのある窓側を指差す。ちょうど昨日スバルが簀巻きになったところだ。そこでＷＡＸＡの職員がせっせと働いていた。何やら家の裏で大型作業車を引っ張り出して工事を始めているようだった。
ソロも所詮は男の子であった。声に出ている辺り、沸き出る高揚感を隠せていない。

「秘密基地だ」
「え、本当？」

半信半疑でスバルが首を傾げたところ、スバルの部屋の壁がぶち抜かれた。どうやら本当らしい。

「今日の学校が終わるころには完成するそうだ」
「突貫工事じゃないか……」

「話は終わりだ。さっさと飯を食いに行く！　朝食は俺が作ってみた。それと洗濯物も持って降りろよ。洗濯もすませたいからな」
「何気に大活躍じゃないかソロ」

スバルはいい加減家事全般をこなし始めたソロに感心するも、ホームレスの生活能力の高さに驚きを隠せない。一般的にホームレスというのは人間の最底辺という印象だが、それは間違いである。ホームレスというのはあえて家を持たない人も含めているのであり、そこには当然、自給自足といったワイルドな生活をしている猛者もいる。ソロもそういった猛者からみれば可愛いものだ。ただそんな可愛さを神格化する風潮が根付いており、いかに電波社会にに生きる人間が恵まれているかが浮き彫りになる。人間はもはや野生動物ではないということだ。

スバルはそんな哲学的な疑問を提示しつつも朝食を食べに降りる。ソロが作ったのだから味は保証されているはずだ。すっかりスバルはソロが料理をしている事実を受け止めて慣れてしまっていた。

「おはようスバルー」

あかねがリビングでテレビを見ながら、挨拶をしてくる。普段のあかねは台所で朝食を作っているはずだが、ソロが大活躍したおかげで楽をさせてもらっているらしい。スバルは少し申し訳なくなってきた。引きこもり記録を更新しようとしていた自分が馬鹿すぎた。

「お、おはよう……」
「あら、元気ないわね」
「いや、うん。そうだ！　僕、今日から学校に行くよ。連続記録なんて馬鹿らしい」
「そう？　無理しなくていいわよ？　ソロ君は朝五時に起きて仕込みとかしてたけど、ミソラちゃんもお手伝いしたし、カノンちゃん

もロック君のお散歩してくれたし……だけど、スバルは寝てても良いのよ？」

スバルは意地悪なあかねに、その場で発狂して勢いのまま町を一周してしまいたい衝動に駆られたが、甘ったれていた自分が悪いのだ。これでは夜太郎にも示しがつかないだろう。今、自分がすべきことをする。難しいことではない。それだけをしていればいいのだ。小学生は小学校に通えばいい、それだけだ。

「行くよ！　仕込みとか本格的な事されちゃ黙ってられないよ！　それにロックもすっかりペット扱いだし……色々、焦っちゃう！」
「じゃ、頑張りなさい。あと女の子の前でパンツを脱がない」
「誰だ！　告げ口したのは！！」
『俺だ！』
「ロックー！」

スバルはウォーロックの油断のならなさに改めて、ショックを受けるが、結局これもスバルが悪い。たとえそれが頭脳プレーだとしても、一概には変態のそれと同じ行動だ。褒められないのだ。

そのためかスバルが席についても、ミソラは何も言ってこなかった。スバルが目の前で目玉焼きにソースをかけても何も言ってこなかった。ミソラは目玉焼きに味噌派だったはずだ。ここで突っ込みが入ってこない事は予想外なのだ。

「なんでなにも言ってこないの？　味噌派なんでしょ。味噌を投げつけてよミソラちゃん！」
「私はね自分の名前がミソラだから味噌派って言っただけ。なんで信じちゃうかなー……味噌派ってプッ……バカじゃないの？」

思えばスバルは今、奇跡的な経験をしたのだ。初めてミソラに罵

られた。これでこそ一緒に暮らす醍醐味だ。お互い遠慮をしていない良い証拠だった。

「今、僕をバカにしたねミソラちゃん！　うんうん、こういうのが良いんだよ。お互い気のおける仲っていう感じがして」

「何言ってるの、気持ち悪い。ホント一緒に暮らしてみると、スバル君のだらしなさが目に余るよ。失望と同時に親近感が沸いちゃうな！」

ミソラはスバルにウインクをして味噌を投げつけてくれた。これこそがスバルの求めていた心のキャッチボールだ。まだ慣れていないので少々ずれているところはあるが、家族のやり取りとしては十分だった。この下らなさが素晴らしくて、貴重なのだ。

そしてスバルはミソラの気を引こうとして、今日から学校に行くという旨を伝えた。それは目玉焼きに味噌を塗ってしまって後悔しても、それでも挫けないという攻めの姿勢であった。ぐいぐい来るスバルにミソラは満更でもない様子で、お高くとまって受け答えする。ルナの真似事を始める辺りにミソラの頑張りがうかがえた。スバルも無理をして頑張っているのだから、ミソラも応えない訳にはいかないのだろう。

「で、ミソラちゃん！　今日さ、僕学校に行ってみようと思うんだ！　凄くない？」

「凄いか、凄くないかを聞かれれば、もちろん凄くないけど、スバル君がずっと勘違いしているのなら、キミの中だけでは凄い事なんだと思うよ？　スゴイスゴイ」

「グサッと来るなー。今日のミソラちゃんは意地が悪くて新鮮だ！」

「まあ、ね。アナタの前だと理想の私じゃいられないってかんじかな？」

「来るね、その言葉！」

「エへへ、楽しいなー」

ミソラがクスクスしてスバルの興奮した様子を眺めていると、ずっとその会話を盗み聞きしていたソロがフォークをスバルに刺した。しっかりと刺されたのでもちろんスバルは悲鳴を上げた。少し血が出ているので、スバルは反泣きだった。

「イターッ！！　な、なにするんだよ！！　うわ、ガッツリ刺してるよ……。ハンコ注射じゃないんだからさーソロ」

「食事中にペラペラうるさいんだよ！！　それより何だお前はッ”いただきます”をちゃんと言ったのか？！」

「あっ……言ってない……」

「だから刺した。それだけだよ」

『へへッ。そりゃ刺されても仕方がないな。いただきますは基本だぜ！』

「クッ、相変わらずロックはどっちの味方か分からないけど、ソロの言い分はもっともだ！」

スバルはちゃんと手を合わせていただきますをした。これでもう刺されはしないだろう。

しかし時間が来てしまった。そろそろ学校に行かないといけない。

「おっと、もうこんな時間だ。学校に行かないと！　結局ミソラちゃんに罵られて、ソロに刺されただけだけど……ま、いっか」

『そこで、ま、いっかと言えるお前を俺は嫌いになれないね』

「ありがとう」

スバルは礼を言うと、教科書を等の整理をしなくてはならない。しかし自室に上がる途中で、あかねがカノンと何やらしているのが目に留まった。どうやら新しい服をカノンに与えているようだ。元

々の彼女の服は独創的で、学校に行けば間違いなくいじめの対象になるほどだ。それだけは避けたいあかねの親心なのだろう。

スバルは心を温ませたところで、次にあかねはソロを呼びつけた。そう言えば、ソロもいじめられてしまうような奇抜な格好をしていた。ソロの場合そういったトラブルが事件に発展しかねないので、わりとカッコいい今風の服をあかねは与えてやる。白っぽい服は今までのソロとは間逆のイメージだ。

そんなラフな洋服にソロは癇癪を起して服を床に投げつけそうになるが、師匠のあかねに対しては強くは出れなかった。ソロは自分との葛藤に何とか打ち勝って、衣服を持ち出して二階に上がった。

「さすがのソロも母さんには勝てないか」

『なんたって、おふくろはソロの師匠だからな！』

「初耳だな、それ」

『今日アイツが朝の散歩で言ってたんだよ』

「一緒に散歩に行く仲なんだね」

『だってアイツよ、ほっとくとすぐに空き缶を探しに行っちまうんだ。ほっとけねーよ』

「それはほっとけないね……」

ソロもウォーロックもお互い苦労をしているようだ。するとインターホンが鳴った。どうやらルナ達が迎えに来たらしい。そろそろ胃が痛くなってくる。普段なら居留守を使う訳なのだが、今回は学校に行くと言った手前居留守は使えない。ましてやミソラやソロ、カノンの登場に嫌な予感しかしなかった。

ソロはもちろんルナと折り合いが悪い。ゴン太とはどちらがビジュアル系かという不毛な争いを繰り広げている。キザマロに至っては白い粉だ。カノンもルナとは非常に仲が悪い。お互いをののしり合う仲だから救いようがなかった。そして一番問題なのが、ミソラの存在だ。ルナが事実を知った時、おそらくスバルが何らかの精神

的、肉体的被害を受ける。
　なのでスバルはソロ達を置いて、リビングの大きなガラス窓を開け放ってお花畑からルナ達をやり過ごすことにした。

「じゃあ、母さん行ってきます！　いつも母さんが綺麗に整えているお花畑から登校だ！」
『お、スバル！　またこそこそ行くのか！　まったくコソ泥じゃねえんだから』
「仕方ないだろう？　今の家の状況を知られたら、委員長辺りが発狂する！！　ゴン太もそうだし、キザマロに至っては手遅れかもしれないんだ！！」

　スバルはお花畑を飛び越えるように、ジャンプすると辺りを見渡してこそこそと家の裏から学校に向かおうとする。しかしスバルの予想外の展開がやってきた。秘密基地施工部隊ことＷＡＸＡの土木職員が大声で挨拶をしてきたのだった。

「あっ、星河さん！　チィーッス！！」
「あ、お仕事お疲れ様です。秘密基地楽しみだなー」
「あ、スバルさんチィース！」
「チィース！」
「ウホッ！　こんな所に子供が！」
「どうも、今日も良い天気ですねー本当、何て言うかね」
「アッー星河さんチィース！」

　すると家の裏にオジサン職員がわらわらと集まり、スバルは汗臭い土方に囲まれてしまった。四方八方が筋骨隆々の男どもで埋め尽くされる。スバルは身の危険を感じて後退するが、逃がしてもらえない。まさか自分の家の裏で、良い男たちに囲まれるとは……。

『数は十人前後。どいつもこいつも、分別が付きそうもねえ……！
スバル覚悟を固めやがれ！』
「あ……」

スバルは全てを諦めて、ルナ達から逃げようとした事を後悔した。
物陰は危険でいっぱいだ。
スバルが心の中でそっとルナ達に謝罪した時だった。ソロが颯爽と家の裏に現れたのだ。このような良い男の前に現れるとはソロも命知らずだ。しかし服装も心機一転、とても白くなったソロはもはやハンサムさんだった。そうなるとスバルからソロに良い男のターゲットが変更された。

「危ない！　ソロ！！」
「ブライアーー」

結局家の裏であれほどお祭り騒ぎをすれば、スバルはルナ達に見つかってしまった。そして現在登校しているのだが、ルナの機嫌が悪い。スバルにとってルナの機嫌など本当にどうでもいいことだが、自分の身に被害が来るので放っておくわけにもいかなかった。

「今日はイイ天気！」
『さっきの人たちは……』
「イイ男！！」

スバルはソロに目線をやって何とかルナを笑顔にさせようと、面白おかしく事情を説明していく。ソロの精神的ダメージは相当だが、今はルナに集中だ。

「俺のブライアーツが通じなかった……くそったれ」
「あれじゃブライアッーだったね」
『さて、と。そろそろ本題を切りださないといよいよヤバい』

スバルはゴクリと唾を飲み込んで事の事情を大慌てで説明した。
本当はルナなんて関係ないから放っておけよという気持ちはそっとしまい込んで、機嫌を取ってやる。
どうにもルナはお下品なことでは笑ってくれないらしい。ミソラとは少し対処の仕方が違いスバルはめんどくさくても頑張らなければならない。

「で、昨日お家に帰った後なんだけどさ。そしたら金の亡者がいたんだよ。あっ、金田さんって名前だよ。それでね、何故か法廷バトルが始まったんだ。そしたらソロのフライパンが決め手で、なんかミソラちゃんの保護者になってたんだ。そんな感じ」
「……意味分かんない」

ルナはぼそりと呟いた。確かに意味がわからない。スバルの説明が下手くそで作り話にしか聞こえない。

「意味分かんないのよ！　何よ法廷バトルって？　ふざけてるでしょ？！　ねえ、ふざけてるわよね！！」
「いや、ふざけてない。あれは確かに家庭裁判所とかで繰り広げられてそうな感じだった！！」
『まあ、確かにそんな感じだな。ミソラの保護権を巡る利権屋との戦い……！　刑事ドラマみたいだな』

ルナは呆れかえっているらしく、勝手に裁判ごっこをしていたスバル達に目まいが起きているらしい。頭を抱えて、何でもありにな

ってきたスバルの家庭環境を質問攻めしてくる。とにかく今度はソロについてだ。

お洋服まで新しく来ており、やっぱり意味が分からない。カノンに至っては裸足なので、考えるのもバカらしくなってくる。ルナルナ団が変人集団になりつつあったのだ。

「じゃあ、なんでソロとかカノンちゃんまでいるのかしら?!　何で、カノンちゃんは裸足なの?　なんでソロはイメチェンしてるの?」

スバルは次々と浴びせられる質問に参ってしまう。こうなるからルナと一緒には登校したくなかったのだ。これならばやっぱり良い男に囲まれた方がマシだったかもしれない。

「えっとね。ソロ達は神様を倒すために僕と一緒に頑張るからお家にいるの!　あ、それでソロは禿げるから髪型を変えたらしいよ?　そしてソロ達が服装を変えたのは僕の母さんがソロの師匠だから。それでカノンちゃんが裸足なのは良く分かんない」

「やっぱり、ふざけてるでしょ?　何よ神様って?　何よ師匠って?　何よ禿げるって!!　今考えたレベルじゃない!」

「だって、本当の事なんだよ……!　と、とにかくソロとカノンちゃんも今日からルナルナ団だ!!」

「キーッ!　謎だらけだわまったく!」

結局ルナは何も理解できないまま、ソロとカノンもルナルナ団になってしまった。

するとミソラが気を利かせて、ルナルナ団のメンバーの再確認を行うよう提案した。きっと素晴らしいメンバーが集まっているはずだ。そうなればリーダーのルナの機嫌も良くなるというものだ。

「あっ、ルナちゃん。で、そのルナルナ団って今どういう状態なの？　きっとスゴイ戦力になってると思うんだ！　そこのリーダーなんだからルナちゃんは限度を知らないよね！」
「あらそう？　私ってもしかしてスゴイのかしら！　ホホホ！」
「上手いミソラちゃん！　委員長の安っぽいプライドを上手く利用したヨイショ攻撃だ！」
『おい、スバル。そういうのは余計なことっていうんだぜ！』

スバルもミソラも言葉の選び方が下手くそだったが、それでもルナの損ねた機嫌を整えるのには十分だった。どうやらルナのプライドは本当に安っぽいらしい。
ルナはとりあえず人の上に立っていればいいらしく、ソロも含めてルナルナ団として、語り出した。こういう時のルナは生き生きしているので、当面は心配はないだろう。
定期的にヨイショという餌を与えておけばルナをコントロールすることができると、スバル達一行は小悪魔なミソラから学んだ。

「えーと、まずリーダーの私でしょ？
で、副リーダーの暁さん！」
「暁さんがいつの間に！　しかもスピード出世に流石のエースの貫録か！」
『でも、今は宇宙の藻屑だぜ！』
「そして、テクニカルアドバイザーのキミドリさん！」
「結局、何もアドバイスはしてくれなかったけど、実は頼りになったキミドリさん！」
『だけどアイツも宇宙の藻屑になっちまった……』
「で、戦闘隊長のミライ君」
「ミライ君……キミの勇姿は忘れない。やっぱりエースは強い！！」
『まあ、アイツも結局宇宙の藻屑なんだよな』
「そして広報隊長のミソラちゃん！」

「たしかにアイドルとしての広告塔にぴったり！」
『おっ、やっと生きてるメンバーか』
「で、後は全員ヒラ！」

結局ルナルナ団の幹部はミソラ以外全滅だった……。しかしゴン太たち古参のメンバーはやってられないだろう。努力が身を結ばない組織がルナルナ団で、優良企業とは程遠い態勢と言える。これからのルナの手腕に期待したいところだ。

そうして長い世間話が終わったところで、ようやくスバル達は学校に着いたのだった。スバルは久しぶりの学校に吐き気を催すが何とかこらえて教室に向かった。

「オース、今日もイイ天気だな。じゃあ、今日の連絡事項行いってみようかー」

育田はいつもの調子で、のんびりと教壇で語っている。一見舐め腐った態度だが、生徒の自主性を重んじているだけであり、実際生徒の信頼も厚い。私語もなく育田の言葉に耳を傾ける六年Ａ組は優良なクラスと言えた。

安心のクラスに育田はそのままの調子で連絡事項を伝えていった。

「じゃ、今日はちょっと不審者情報が入っているぞ。えーっとなんだ。星河の家の裏に秘密基地施工要員を装った変質者あ現れたそうだぞー。みんなも変質者には気をつけるように、特に温かくも寒くもない季節に変質者は大量発生するからなー。大人の階段は無理やり上らせられるものじゃない。自分の意思でも上っていくものだからなー」

『ヘッ、やっぱり今朝の野郎どもは変質者だったか……』

「たしかにＷＡＸＡの職員にしては良い男だと思ったよ……」

『家の裏に潜む恐怖……高い授業料だったな』

スバルは改めて身の周りに潜む危険を実感してこれからはより安全意識を高めようとしたのだった。確かに高い授業料だったが、何も知らずに取り返しのつかない事態になる前に危ない橋を渡っておいて良かったと言える。

そして育田はもう一つの連絡事項を告げた。

「じゃー、今日のメインディッシュー！　転校生の紹介だー！！色々と事情があって、こんな中途半端な時期になってしまったが、みんな仲良くするようにー」

《はーい》と皆が元気よく返事をする。これなら大丈夫だろうと、育田は教室の扉に向かって手招きして転校生を教室に呼ぶ。するとミソラとソロとカノンが入ってきた。ミソラはもちろんのことカノンの顔面クオリティの高さに教室は沸いた。もちろんソロも顔面クオリティ自体は高いので今のところ人気はあるようだ。だが、彼の本性を知れば六年Ａ組の女子はソロに近づく事はもう二度とないはずだ。

とりあえず育田は左からミソラ、カノン、ソロの順で自己紹介させる。

「じゃ、適当に自己紹介してくれ。くれぐれもクラスを刺激するようなことは言わないようにー。じゃ、響から」

ミソラは一歩前に出ると、人前での語りなど慣れたものですらすらと百点の自己紹介をしていく。自分の名前はもちろんの事、趣味から仕事までかたり、あげくの果てには自分が今度リリースする曲の宣伝までしていくのだ。最後にサイン会を開いて、圧倒今にクラスの人気者になってしまった。

「はーい、押さない押さない。握手は一人五秒だからねー」

勝手に開かれたサイン会に育田も並んでいるので、どうしようもない事態だった。ちなみにカノンも並んでいるので混沌としている。ソロだけはどうしていいか分からずに一人でポツンと取り残されていた。

しかしそこで事件が起きる。サイン会と称した握手会に便乗してミソラにセクハラする下衆が現れたのだ。五秒間の至福の時間に満足できない、救いようのないチャレンジャーが六年Ａ組にいたとすれば大事である。

ミソラは突然の出来事に当然驚き、慌てて辺りをきょろきょろ探しまわる。しかし不届き者は簡単に見つからない。彼女の尻に残った気味の悪い感触の残りは明らかに素人の仕業ではなかった。これはプロの犯行なのだ。

「だ、誰？　私のお尻を触る変態さんは？！」

『ポロロン学校はキャバクラじゃないわよ……？』

これには育田も困った様子だった。さすがにこういう事件が起きれば、ミソラの今後が心配されるというものだ。転校初日でこれでは、今度はリコーダーを盗まれて、あげく体操服を盗まれてと、とても大変なことになってしまう。そんな変に刺激的な学校生活はミソラとしても望むところではないだろう。

「おーい、アイドルにちょっかい出したい気持ちは分からんでもないが、今のうちに名乗り出ておけば、一週間便所掃除で許してやる」

育田の温情からとても軽い処罰で許しを得られることになったのだが、誰も名乗りを上げない。実は六年Ａ組のクオリティはそんなに高くないのかもしれない。

誰もが疑心暗鬼となる中で、カノンが挙手をして注目を集める。彼女は耳が良いので、脈拍とかで相手の気持ちが理解できる。すこし困った女の子なのだ。犯人としてはそれは危険だった。クラスに戦慄が走る。

「はいはーい。私なら変態さんを特定できます……！」

「お、頼りになるな。じゃキミのお名前を教えてくれ」
「はい先生……。私の名前はカノンです」
「よーし、カノンが今から変態を特定するぞー。変態は覚悟するように、もう便所掃除じゃ許さないからなー」

変態確保に乗り出し、カノンは耳を澄まして今までの任務で見せた集音術を披露する。術と言ってもただ耳に手を当てているだけだが、その集中力に辺りは静まり返っている。
そしてカノンが短く声を上げた。どうやら分かったようだ。

「見つけた……っ」

カノンは怪しげな脈拍を放つ、明らかな挙動不審な一人の人物に指を差した。するとその人物は心当たりがあるらしく勢いよく教室から飛び出してしまう。かなりのスピードでただの変態ではないと理解できる。しかもどうやら小学生ですらないらしい。背丈からして大人だった。
クラスメイトもざわざわと明らかなおじさんの登場に困惑していた。
しかしスバルだけはあのおじさんの正体に気がついていた。肉厚の我がままボディ、忘れもしない。そう、あれは今朝、家の裏で遭遇した――

「アイツは良い男！」
『チッ、あの野郎！　スバルを伏線に敷きやがったんだ。アイツの狙いはミソラのケツだったんだ！　お前のケツじゃなかったってことだ！！』
「なんという頭脳プレイ！！　なんという欲望への飢え！」
『感心してる場合じゃねーぞ！』

確かに感心している場合ではない。しかし良い男の逃げ足は天下一品なので、スバルが今から追いかけても無理だろう。だが、カノンの活躍に兄貴が黙って見ている訳がなかった。

誰もがミソラのお尻の感触を味わったおじさんの確保を諦めた時、そのオジサン本体が巻かれた簀巻きが教室の壇上で転がったのだった。どうやらソロがあらかじめハンターに入れておいた布団でぐるぐる巻きにしたようだ。こういうプレイがあるから、ソロは素晴らしいと言える。なにも無意味にスバルを簀巻きにしていたという訳でなかったのだ。全てはこの瞬間の伏線だったら格好いいかもしれない。

もちろんソロのスーパープレイに教室が沸き上がった。一躍ソロはミソラちゃんセクハラ事件解決のヒーローに成り上がってしまった。目の前で起きたサクセスストーリーにスバルは拍手して祝福した。

「おめでとうソロ！　キミはなんてヤツだ！」

『あらかじめハンターの中に布団を入れてたってのがポイント高いよな！』

歓声で溢れる教室の中で育田がソロの名前を尋ねてやる。もちろんクラスの全員がソロの正体を気にしていた。とくに女子はソロとお近づきしようと色目を使っている。明らかにカノンが不満そうに頬を膨らませているのが微笑ましかった。

ソロはそんな中で単刀直入に言った。男は多くを語らないを地で行っている。

「俺の名前はソロだ！　俺は神を倒すもの！！」

一見すれば宗教の教祖のような怪しい自己紹介だったが、女子にとっては男の夢は大きくあってほしいものだ。痺れてしまった女子

はソロの前にひれ伏した。神を倒すというフレーズが良く分からなくても何となく凄い男だと思わせたのだろう。

育田も痺れているらしい。大人になって忘れてしまった大きな夢というものをソロの言葉で思い出されたのかもしれなかった。

「神を倒す……よく分からなくて抽象的で、一見アホっぽいが！　ソロ！　お前は本物だ！！」

「な、なんだ……コイツら？　いきなり狂ったように興奮し出して……。ここが学校というところか……ひどく俺を不安定にさせてくれる……！」

自己紹介は無事にとは言えないが、一通り終わったようだ。今回の教訓は自己紹介中にサイン会を開いてはいけないというものだった。

ソロは大活躍をしてその人気を不動のものにした。一時限目が始まるまでの少しの間、クラスの女子生徒がソロと仲良くなろうとわらわらと群がっていた。もちろん彼女らはソロの本性を知らない。

女子らはソロに言い寄っており、ソロは不動明王のような表情を取っている。まるで固まったように動かない辺り、気味が悪かった。カノンはルナとミソラとで何やら話しこんでおり、ソロは孤独な戦いを強いられる。ソロにとって複数の女子を相手にするのは困難を極めるのだ。

「ねえソロ君ってどこから来たの？」

「俺は特に決まった場所に住んではいなかった」

「へー流浪の民って感じ？　イカすねー！」

「流浪？　違うな。俺は日々空き缶を拾って生計を立てていた……たまに犯罪組織を潰したりするが、もっぱら空き缶だ。あの空っぽになった筒を見ていると、まるで今の俺を見ているようで心が安らぐ……」

いよいよソロが本性を見せ始めた。女子は聞き間違いを疑ったのか、少しの困惑を浮かべてソロの話を聞いてやる。きっと聞き間違いでヒーロー像をまだソロに求めているようだ。

「え？　……空き缶？　アキレスティックカンピューターの略かしら？」

「いや空き缶だ。よく聞け、空き缶は良いぞ。百本拾えば、卵が一パック買える。つまりだ、これを繰り返せば無限ループで卵を買い続けることが出来るんだ！！」

女子がそろそろ引き始める。特にソロが熱く語り始めた辺りから雲行きが怪しくなってきた。ソロは彼女らの理想とはかなり別の所にいるので仕方がない。ソロは丸くなってしまい、可愛らしい趣味をいくつも持っているが、そんな事は彼女らにとってはどうでもいいことだ。むしろ気持ち悪い。

「なんならどうだ？　空き缶スポットを教えてやろう……フン、キサマらよく聞いておけ！」

「もういい！」

「なにコイツ！！　空き缶空き缶って空き缶みたいに頭空っぽじゃないの？」

「私もうカンカン！　空き缶だけに！」

豹変した女子にソロがうろたえてしまっている。スバルはそれをずっと見ていた訳だが、そろそろ見ていられなくなった。

「なっ、なに？　お前ら一体どうした？」
「バーカ！」
「アホ―！」
「缶詰でも食っとけ」

ソロは女子に振られてしまい、学校の恐ろしさを始めて味わった。今まで学校に行ったこともない彼のことだ。その恐怖はひとしおのはず。彼は自分の手が震えていることに気がついたようで、明らかに動揺していた。体で覚えた恐怖というのがこれが初めてだったのだろう。

そんなソロにスバルは歩んでいき、肩に手を乗せて励ましてやった。あまり舐めた態度をとるとまた簀巻きにされるが、今のソロなら弱っているので大丈夫だろう。

「大丈夫。キミは悪くない……」
「星河スバル……一体何が起きたんだ？　アイツらの俺を見る瞳は……クッ……まるでゴミを見るかのように。ここが学校……一筋縄ではいかないか……！！」

ソロは学校という強大な壁の前に、苦戦しつつも闘志を燃やしていた。この辺りがスバルと違う点だった。基本的に彼はめげないので見ていて清々しい所があった。

スバルはそんなソロを素直に応援してやった。もちろんソロが今感じてる苦しみはスバルも学校に通い始めた時に感じたものと同じだから、他人事は思えないのである。

「一歩、一歩、前に進んでいけばいいんだよ。キミと僕は似てないようでよく似ているのかもしれないからね。がんばろう！」
「チッ、俺を憐れむな！　今のは何かの間違いだ！　空き缶で無理

なら、バーゲンセールの戦い方でも教えてやるよ」
「駄目だ！　それじゃ駄目なんだよ、ソロ……！　キミの価値観は主婦に特化しすぎている！　サバイバル生活が長かったキミに普通の小学生のように考えろってのは無理かもしれないけど……。でも、バーゲンセールとか、空き缶スポットとか、料理のコツとかじゃ駄目だ！」
「ま、まさか……万事休すなのか？　俺はもしかしてずれているのか……？」
「うん、ずれまくってるよ。でも、それでいいと思う。ずれを強制する世の中は僕は嫌いだ。キミの個性は大切にしたらいい。……って母さんの受け売りなんだけどね」
「師匠の……？」

スバルは苦笑する。いい加減慣れないのだ。ソロがいちいちあかねの事を師匠と呼ぶたびに吹きそうになるのだ。真面目な話の時なので、勘弁してほしいだろう。そもそもなぜあかねがソロの師匠なのか。根本からおかしいだろう。

「前から気になってたんだけど、なんで母さんが師匠なの……？」
「……フ、フン！　キサマの知ったことか！」

ソロは酷く機嫌を損ねたらしく、女子にぼろくそに言われた精神ダメージを緩和するためにトイレに走っていった。
スバルは挙動不審なソロに溜め息を吐いて見送るが、今度はスバルがクラスの女子の餌食になってしまう。もっともスバルの場合は情報を絞り出すただの餌箱扱いのようである。もちろんミソラもルナもカノンとお話しているので、彼も一人で複数の女子を相手にしなければならなかった。

「おはよう星河君。久しぶりね！」

「あ、おはようございます」
『何で敬語なんだよ！』

ウォーロックがスバルの慌てように突っ込みを入れるが、スバルはそれどころではなかった。とうとうクラスの女子グループに囲まれてしまったのだ。この圧倒的アウェーで平静を装うのは草食系男子のスバルではきつい。ましてやソロのように空き缶がどうのなどふざけたことを言える気はまるでしなかった。この点ばかりはソロの無神経さに憧れてしまう。

そして女子の質問攻めが始まった。ずっと彼女らはミライの行方が気になっていたらしい。ゴン太辺りに聞けばいいのだが、彼は女子から距離を置かれており、忌み嫌われているので用を成さなかったのかもしれない。自称ガキ大将が聞いてあきれるばかりだ。

「ねーミライ君最近来てないよね？　先生が言うには、体調不良だっていうけどさ。私達ファンクラブとしてはそれは嘘だと睨んでるの！　今もどこかで地球の為に戦っておられるはずだわ！」
『女の勘は恐ろしいってかスバル？』
「ロックは黙ってて……！」

ひそひそとウォーロックとやり取りするスバル。何とか上手い事を言って、彼女らから逃れなければならない。しかしファンクラブとは恐れ入る。彼女らもまたミライの本性を知らないのだろう。彼が乙女的な男子だったなんてまるで思っていないだろう。しかし地球の為に戦っているとは上手い事を言ったものだ。確かにミライは生きていたら戦っているだろう。しかし生きている可能性は高くないだろう。

そんな事を頭も隅に追いやって、スバルは即席の話術を駆使する。そうやって女子の疑問をかわしていった。

「そう言えばミライ君ってさ。博士号取ってるからもう、小学校に行く必要がないんだよ？」
「えぇー嘘よ。そんなワケ……あるのかしら」
「あるある。何で博士が算数をしなきゃいけないんだよって事さ！」
『上手い事、言いくるめられそうだなスバル』

ウォーロックを無視してスバルは続ける。こういう話をしている時にウォーロックは非常に鬱陶しい。戦闘面では頼りになるが、実生活においては基本的に足を引っ張り、茶化してきたりとロクなものではなかった。
そのためスバルはうっかり口を滑らせてしまう。

「でも、ぜったい生きて帰ってくるって約束したんだ。だから大丈夫また会えるよ……！」
「生きて……？」
「あっ……それは、あのですね」

しどろもどろになってしまうスバル。するとウォーロックの助け船だった。彼の機転の速さは素晴らしくさすがに歴戦の戦士と言えるが、基本的に質が悪いので信頼には足らなかった。
今回も例に漏れず酷い演技だったのである。

『うお、スバル！　もうお前行けるんじゃないか？　そろそろ授業始まるぜ！　次は体育だぜ！　な？』
「わ、そうだった！　行きて行きてー、ウホウホホー」

スバルは誤魔化し切れたかよく分からないものの、ウホウホ言いながら、体育館に走って逃げて行った。ウォーロックもそうだが、スバルの演技も酷かった。

ｓｂｒ―０６：ＷＡＸＡ“スバルの部屋支部”

ミソラちゃんセクハラ事件からしばらく経ち、ソロ達の転校初日の学校は無事に終了した。

現在午後四時前、今は帰り支度をしているところである。スバルが教科書類をまとめているところに、ルナが彼の机にデータカードを置いた。その中身は今までの授業の内容が入っている。彼女は何だかんだ言っても優しかった。

「一週間ぶりも引きこもってたからね。受けとっときなさい」

「ありがとう委員長」

「ふふん、私の優しさに感謝なさい！」

「……はあ」

ルナの態度に呆れつつも、スバルはウォーロックにそのカードを保管させて、教室から出る。廊下を歩きながら、彼は後ろからついてくるルナに言ってやった。なにがお勉強だ。そんなもの余計なお世話だったと。

「僕は勉強に困ってない。委員長はもう少し、謙虚にして」

「あら、まあ」

ルナは明らかにスバルの生意気な態度に不満を示している。例えば、同級生が困っているだろうと、善意から取っておいたノートのデータ。そんな優しさに溢れた思いを、無下にされてしまったのだ。

なのですぐに彼女はスバルを睨みつけて、ウォーロックの口の中からデータカードを引っ張り出した。基本的にデータの管理はウィザードが行うのでスバルの場合は、ウォーロックの口の中に放り込むという安心設計だった。

ただルナが乱暴にウォーロックの口の中に手を突っ込むので、ウォーロックは嘔吐してしまった。彼の管理していたデータがボロボロと廊下に転がっていく。中にはミソラやルナには見られたくないだろうデータという名の教材が点々としている。

ハッとしたスバルは慌ててその教材を拾い上げると、すぐに逃げ出した。その場にいては女性陣からの冷たい視線に晒されてしまう。彼のガラスのハートでは再起不能になってしまうだろう。

ミソラとルナは情けなく逃げていくスバルの背中をじっとりとした目で見ているばかり。カノンは首を傾げていた。

「最近のスバル君にはがっかりの連続だね」

非難するように眉間にしわを寄せると、ミソラはスバルが回収しきれなかった置き土産を拾いパラパラと眺め出した。女子にはなんの魅力のない写真の数々に、ミソラは失望していく。ルナも同じくだった。

現在スバルの株価は急激に下降していっている。確かないやらしさにその勢いは止まらなかった。

とりあえずこのままではスバルの名誉が失われてしまう。ここはウォーロックが何とかフォローしてやらないといけないだろう。

「おいおい、お二人さん。アイツはな、お前達が思っているような気持ちで、その本を買ったんじゃないぞ！」

「だって、この本……ねえ、ルナちゃん」

「うん……言い分けのしようがないものね」

ミソラとルナはその本をきっちりとハンターに収めながら、スバルを見限ろうとしていた。

ウォーロックはそれでもスバルの相棒として彼の名誉を守ってやらないといけない。例えば、その本が二十一歳以下の年齢では見てはいけない本だったとしても、守り通さなければならない。スバルにはその本を購入しなければならない理由があった。とにかく性的な意味合いはまったくないのだ。

ここはウォーロックの話術に託すしかないだろう。

「聞くんだ！　アイツが何を思ってこの本を購入したのか！！　アイツが宇宙が好きなのは分かってるだろう？」

「確かに、スバル君は宇宙が好きだったね」

「ええ、そうね」

「だろう？　だったら、女の体も宇…・…」

ウォーロックは途中まで勢いよく言ったのだが、ミソラとルナの表情を見てしまえばこれ以上は恐ろしくて言えなかった。そもそも彼の言い回しが最悪であった。これ以上は無駄だろう。どうあってもスバルを助けてやることは出来そうもなかった。

「ク……クソ！！　すまねえスバル俺はもう駄目だ！！」

「あ、逃げた」

「逃げたわね」

ウォーロックも逃げだしてしまい、とうとうスバルの名誉は守られなかった。

結局スバルが購入した本というのは”週刊宇宙の神秘：ギリシャ神話編”という本である。これは星座をギリシャ神話を交えて説明した何とも賢そうな本なのである。一般の小学生には理解できない相当な学術的な本なのだが、スバルの読み込み方がいけなかった。

彼は星座を作る星の位置関係を明確に覚えるために、本に記されたイラスト部分にチェックを入れていた。例えば「アンドロメダ座の乳首の部分が一等星」とかである。それよりも酷いチェックの仕方はミソラ達を失望させるのに十分だった。しかも女神のイラストの部分にやたらと細かくチェックを入れている辺りに、スバルのたぐい稀な変態的几帳面さが浮き彫りになっていた。

これはスバルが健やかに成長している証拠だが、引きこもってまでこんなことをしていたのかと思うと悲しくなってくるのだろう。

そのため残された面々は何となく気不味くなってしまう。それでも憐れみの心からか、過ぎた宇宙への愛が生んだスバルの変態的な本の数々を回収してから帰路についた。

一方、一足先に家に帰ったスバルは一人自室にこもって泣いていた。ミソラに会わす顔がなかった。星座の勉強のためとはいえ、女神達を汚したのだ。これは神への冒涜に等しくて、許されない行為だった。

どうしたものかとスバルはベッドに寝転がったところ、窓から秘密基地が目に飛び込んできた。どうやら本当に出来あがってしまったようで、ベランダの先に物々しい武骨な建物が作られているのである。看板には”ＷＡＸＡスバルの部屋支部”と書かれている。ＷＡＸＡの突貫工事には目を見張るものがあった。それでも耐震設計にも抜かりがなさそうなので、頭が下がるばかりだ。

そんな魅力的なスポットの登場に、ミソラから向けられるであろう軽蔑の眼差しなどスバルはどうでもよくなった。それよりも男のロマンが大切だった。

「へえ、本当に学校から帰ってきたら出来上がってるや」

『まあ、リアルウェーブで組み立てりゃすぐだろうよ』

「うわ、いつの間に！」

ウォーロックの突然の登場にスバルはベッドから転げ落ちてしまう。そしてウォーロックも泣きそうな顔をしていたので、スバルは言葉を交わさずにお互いの状況を分かち合えた。

「さて、と。ミソラちゃんはどうやら僕を軽蔑したようだね」
『ああ、まるでゴミを見るかのような瞳だった』
「ゴミ……か」
『ああ、ゴミクズだ』

スバルは全てを理解して、涙を拭った。クズで結構だと言わんばかりに、迷いない足取りでベランダから秘密基地に逃げ込んだのだ。その際、ウォーロックに良い声で言っておく。

「夕飯になるまで秘密基地にこもっておく！　後はヨロシク！」
『おい、逃げるな！　俺も秘密基地に行くぜ！』

結局ウォーロックも夕飯まで秘密基地に身を隠すことにしたようだ。スバルを追いかけてベランダを飛び出した。

裏庭から広がるお花畑にそびえる秘密基地、その名前にして”ＷＡＸＡスバルの部屋支部”何とも支配欲をくすぐるネーミングである。見た目はこじんまりとした箱型の小屋だが、その慎ましさが秘密基地の醍醐味だ。ひっそりとしてこそ秘密が守られるというものなのだ。

そしてスバルは秘密基地に入るなり、驚くことになる。銭湯にあるようなのれんをくぐれば、なんとそこにツカサがいたのだ。どうやら彼は秘密基地の受付のバイトをしているようだ。おそらくデン助の計らいで、ツカサにも住処を与えてやろうという事なのだろう。下手をすればツカサも空き缶ライフを送ることになってしまうので、この判断は適切と言えた。

とりあえずスバルは驚きを置いといて、挨拶をする。挨拶は大切だ。自宅の裏庭で住むことになったツカサが相手だから言うまでもないのだ。

「やあ、ツカサ君。まさか自分の家の裏庭で出会うことになるとは思わなかったよ」

「そうだね。僕もこんなことになるとは思わなかったよ。とりあえずＷＡＸＡスバルの部屋支部にようこそ。何もない所だけどお茶ぐらいなら出すよ」

「う、うん、ありがとう。取り合えず夕飯まで、ここでくつろぐことにするよ」

スバルは奇妙な感覚にとらわれながらも、ツカサと談笑して時間を潰すことにした。話を聞けば、どうやらツカサは太陽の事件――通称ゴッドブレス事件の後、昇進したらしい。そのため施設の管理を任されることになったと言う。今まで根なし草だった彼のことだ。新しい住処を手に入れられて嬉しかっただろう。

こうして秘密基地でバイトをするに至ったという訳らしい。このことからツカサもソロと同じく中々ワイルドな生活をしてきたことがうかがえた。きっとツカサも料理が上手いはずだ。

そんなツカサの苦労話に耳を傾けていると、秘密基地の中にあかねが入ってきた。どうやら夕飯の時間らしい。

もちろんあかねは優しいので、ツカサも夕飯に招いてやる。ツカサもとうてい男とは思えない笑顔で頷くので、スバルの心は和んでしまう。

「あ、変態さんだ！」

リビングに降りてくるなり、ミソラが例の本を投げつけてきた。スバルはそれをキャッチすると、開き直ってミソラに詰め寄る。こ

のスバルの狂ったような男らしい行動にミソラは一瞬我を忘れてしまう。しかし彼女は心理戦が特異なので平静を装い、足を組んでソファに踏ん反り返ってみせる。ここで引いてはスバルに舐められると思ったのだろうか。

「どうしたのかなスバル君？　まったく宇宙の神秘を勘違いしないでいただきたい」

　ミソラの偉そうな態度にスバルはムッとするが、テレビを教育系のものにしてから戦いに臨んだ。教育テレビにしておけばその間だけカノンとソロの注意はテレビに向かう。つまり邪魔ものが入らず、ミソラとの勝負に集中できるのだ。

　そんな下らない争いを尻目にツカサは、配膳が大変そうなあかねの手伝いをしに台所に向かっていく。残念なことにやはりツカサもソロと同類だったようだ。生活力と経済力が反比例することが証明された瞬間だった。

　スバルはツカサに拍手を送りそうになるが、何とか踏みとどまってテレビから聞こえてくる愉快な音楽をバックにミソラに攻撃を開始した。ここで白黒つけておかないと星河家においてのミソラとスバルのパワーバランスが崩れかねない。

　あくまでスバルの方が立場が上で、ミソラはあくまで居候だと分からせないと彼の明日はない。

「言っておくけどね！　僕はやましい気持ちがあって女神を汚した訳じゃない！　宇宙の神秘に女神を見ただけだ！！」

　スバルの上手い所をぎりぎり突いてくる危険な発言に、ミソラは少しひるむがよくよく考えればその言葉の意味が分からなかった。

「なにそれ、意味分かんないよ！　そうは言うけど、本当は女の人

の裸を想像して興奮してたんでしょ！」
『お、鋭いじゃねえか。アイツはああ見えてなあ、中々の――』
『ポロロン！　乙女の右ストレート！』
『グフッ。アイツは……中々のテク――』
『乙女の左！』
『オフゥ！　ヤツはコダマ一のテク……カー……』

ウォーロックに余計な口出しをさせずにハープがウォーロックを電脳の彼方に棄てると、スバルの反撃が始まった。しかし危なかった。ウォーロックが口出しするとロクなことがない。
少しの緊張感からスバルの口調は少しきついものとなってミソラを責め立てる。もちろん乙女の秘密を考慮する余裕なんてスバルにはないのだろう。

「ミソラちゃんさ。僕にそうは言うけどさ。君だって、本当は……ねえ？」

スバルは意地悪く笑ってミソラのハンターに目配せする。ミソラは危険を感じたのかハンターをソファの隙間に埋めて、ハンター内のハープの言葉を封殺する。しかしハープがスバルの意図を汲んで実体化してきた。
ハープの手には数冊の本が。
ミソラの顔が青ざめていく。結局ミソラだって、スバルをバカに出来たものではないということだった。

「あ、ハープ……！！」
「ポロロン、まあ一緒に住むんだから隠し事はなしで良いんじゃない？」
「や、やめてー！」

ハープがその本をスバルに投げつけると、同時に教育テレビが終わった。しかし教育はまだ終わらない。人生とは常に勉強の連続だ。男も女も関係ない。

その瞬間スバルは力強く言い切ったのだ。静かに、そして高らかに。お仕置きも勉強のうちということだ。今のスバルは意地悪でミソラをチクチクと突っつく。

「……勝った！　僕は勝った！！　しかしどうだ。これは……まだ早いんじゃない？　え、ミソラちゃん？」

「……殺して」

「ハハハ、やーいやーい。……フウ、そろそろ食事の時間か」

スバルは冷静さを取り戻していき、夕飯の匂いに気を取られていく。もう、変態を巡った議論はどうでもいい。それよりも腹が減ったという気持ちでいっぱいなのだ。

もちろんミソラは違う。スバルは大きなミスを犯してしまったようだ。

「うえぇ……ひ、ひどいよ……スバル君。私は女の子なのに……」

「え……？」

ミソラが泣きだしてしまった。というよりもスバルが泣かせてしまった。スバルは大慌てで、ウォーロックを探した。こういう時には彼に助けを求めるというのが彼の行動パターンである。

しかしウォーロックはミソラ側に付いてしまった。やはりこの男、どちらの味方か分からない。しかしこれはまずい。騒ぎが大きくなれば、あかねに何を言われるか分かったものではない。

だがウォーロックは面白がって、スバルを責めてくる。楽しんでいるだけに彼を止められる者はいないだろう。

「おやおや。コイツはいけませんねえ？　女を泣かしちゃいけねえんだぜ、スーバルッ？」

おちょくってくるウォーロック。ここでヒートアップしてはいけないだろう。スバルに冷静な対応が求められている。

「い、いや……な、なんだ？　なんだ！　僕が悪いっていうのか！！　人間生きてたら一度や二度……！！」

「うえぇぇえーん！　バーカバーカ、アホタレー。うえっうぇっ」

「マ、マジ泣きじゃないか……ミソラちゃん」

鼻水を垂らして、汚らしいミソラの顔のリアリティと言ったらなかった。本気で襲ってくる柔道家の女の思わせる。それほど潰れた顔だった。

スバルはいよいよ取り返しがつかないことをしてしまったと思って、必死に解決策を模索する。とにかく泣きやませないといけない。このままではスバルに卑劣漢のレッテルが張られてしまう。

そしてスバルは覚悟を固めて飛び上がった。リビングという閉鎖空間を苦にしない、躍動的な跳躍に時間が止まったかのようにスバルが空中を舞う。そのまま彼は今までの戦いで得た体捌きの全てを駆使して空中で身をよじって態勢を整える。空中一回転の中に捻りも加えて、もはや芸術的だ。さらには膝を綺麗に丸めて腕を伸ばして、翼のないイカロスのようだ。

そうして技巧に凝らしたテクニックを織り混ぜた軌跡を描きながらスバルは着地と同時に土下座を決め込んだ。いくらロックマンといえど女の涙には勝てない。

「ゴメンなさい！　悪気はなかったんだ！！　ただ、あまりにも腹が立ったから、つい出来心でミソラちゃんをいじめました！」

完璧な土下座――選ばれた者にしか使えないジャンピング土下座。
それを使われてはミソラも首を横に振る訳にはいかなかった。
それにお腹が減ったので、喧嘩をしている場合ではない。そしてミソラは演技が上手くて最後に種明かしをしてやった。舌を出して笑っている。スバルはしてやられたのだ。

「バーカ。最初からウソ泣きだよ！　今回も私の勝ちだねスバル君！」

「え？　ウソ泣き……？」

「うん、そうだよ。女優業をこなす響ミソラにかかれば、三秒あれば涙は作れるのさ！」

「お、恐ろしー……」

スバルは星河家における序列を理解してしまった。ミソラには勝てないと、これからは大人しくしておこうと痛感したのだった。
少し塩味の効いた夕飯を噛みしめて、スバルは自分の身の程を知った。

ｓｂｒ―０７：あかねとソロの昔話

ミソラにいじめられたスバルはお風呂に入った時、間違ってミソラの下着を履きそうになってボコボコにされた。今は泣きながら自室で横になって眠ろうとしている。ソロ達が来てから、散々なスバルである。かつての勇ましい姿は鳴りを潜めてしまっていた。

そして結局眠れなかったようで、もう朝の五時となってしまった。

「はあ……何やってんだっ僕は。もう、朝だし寝られなかったか。鳥さんおはようございます」

朝早くから窓の外で鳴いている鳥に向かって挨拶をするスバル。返事はもちろんないので虚しくなってきたのか、ボーっと気の抜けた表情で天井を眺めている。

そろそろスバルも覚悟を固めなければならないだろう。エックスデーは待ってはくれないのだから。ずっと引きこもっていたのも、覚悟が固まらなかったからだ。一見平和な地球も終わりが近づいている。

スバルは宇宙の本質をほんの少しだが見てしまっていた。恐ろしいとしか言えなかった。ソロには強がって言ったが、やはりこの宇宙の抱える闇は深い。

「さて、どうしたものかな……このままじゃ、いつまでたっても」

スバルはハンターを取り体を起こす。普段、寝起き時の体はだる

いが、眠ってさえいないので頭は不思議と冴えていた。体もそこまでだるくない。

そしてあかねが言っていた事を思い出す。それはウォーロックが朝のお散歩に行っているということだ。まるで犬のようだが、散歩自体は悪くない。スバルはハンターの中に呼び掛けた。中で眠っている相棒を起こして、すぐに散歩に行ってしまいたい。

「朝だよロック！　起きてよ」

『うるせー、あと一万秒ほど寝かせてくれ……』

「１００００ー９９９９ー……って、長すぎだろ」

よくよく考えたら二時間以上なのでスバルは無理やりウィザード・オンしてやった。普段勝手にに実体化してくるので、仕返しには調度良いだろう。

「ぐはっ。背中からとは……！」

ウォーロックは安眠を妨害されてしまい、スバルに掴みかかる。乱暴者の寝起きは酷く暴力的らしい。

「テメッ！　このヤロ！」

「いたッ、いたいよ！！　ハープに言いつけるぞ！」

「ごめんよ、スバル君……」

「しおらしいっ」

きゅうに大人しくなるウォーロック。スバルにとってのルナと同じで、ウォーロックはハープばかりは苦手としていた。

とりあえず喧嘩をしていても仕方がないので、スバルは散歩を提案した。するとウォーロックも散歩は良いと快く了解した。

「へーへ、お前と朝の散歩としゃれこむのも悪くねえ。下で芝刈り機の準備してくるから、お前も準備しとけ」
「分かった」

ウォーロックは大好きな芝刈り機の元に向かって階下に下りていく。スバルも服を着て、準備を始める。
そして服を着終わったと同時くらいに、外から芝刈り機のエンジン音が聞こえてきた。とても大きな音なので近所迷惑を心配するが、ウォーロック相手にそんな事をいっても無意味だろう。しかし早朝の冷えた空気には良く響く。

「うるさいな……近所迷惑な芝刈り機だ」

スバルはぶつくさ文句を言いながら階下に下りていき、玄関から散歩を始める。
玄関を出れば、ウォーロックが芝刈り機を乗り回しながら、会長にお花畑を壊滅状態にしていた。スバルはあかねを気の毒に思いながらも、今日のお散歩コースを尋ねる。ウォーロックは散歩のプロだ。適切なコースを提示してくれるだろう。

「さて、どっちに行こうか」

スバルは暴れ回る芝刈り機に問いかける。見た目には間抜けな光景だが、ウォーロックが芝刈り機に夢中なので仕方がない。

『おう、コースは俺に任せとけ。さ、行くぜ。俺についてこいよ！ブイーン！　ブイーン！』
「朝っぱらから、元気だなー。ブイーン、ブイーンッ」

スバルは子供のようなウォーロックの後について歩き始めた。

しばらく歩いたところ、とある道端で、せっせと働く一生懸命な人影をスバルは見つけた。なにやら道路を物色しながら歩いている。片手には大きめのビニール袋を持っており、ボランティアの人か何からしい。

スバルは空き缶でいっぱいにしたビニール袋を見ながら、ボランティアの人に感心した。何とも朝の風景らしい出会いである。とりあえず挨拶をしておかなければならない。

「おはようございます」

「ああ、おーはー……って、お前は！？」

「あー！　まさかとは思ったけど予想を裏切らないなキミは！！」

『ブイーンブイーン！　って、ソロじゃねーか！』

ボランティアの人はソロだった。ルナ宅の前の道路で空き缶を拾っているところだった。ソロいわくこの高級マンションの前で空き缶のポイ捨てが多発しているようだ。明らかに不満そうな顔だが、空き缶を集めることに情熱を注いでいる部分も大きい彼は、マナーと卵の一パックの間で葛藤していた。

スバルは苦笑して、ソロに対してビニール袋を一つ求めた。朝と言えば空き缶拾いだ。太陽が上り始めた空の下で社会貢献すれば気分爽快だろう。

「僕も手伝うよ。君だけにボランティアはさせないよ」

「……ふん、さすがのロックマンと言ったところか。なら、お前も地球を守ってみせろ！」

「よし！　任せろ！！」

結局お散歩は途中から空き缶拾いに変わってしまった。そして帰り道のソロの嬉しさがにじみ出てしまっていた表情が不気味だった。スバルは「笑うなら、我慢しなくていいのに……」と思ってしまう

が、ソロはすぐ怒るので黙っておく。
そして拾った空き缶を秘密基地で換金する。今日の受け付けは宇田海だった。どうやら、受付のバイトは日によって変わるらしい。
しかし換金したのは良いものの、問題が発生する。ソロがお金の全てを卵代に充てるというのだ。コレは正気の沙汰ではない。スバルはあかねに渡すべきだと主張した。

「おいおい、ソロ！　結構な額なんだから、母さんに渡しておこうよ！　一万円とか子供には高すぎる！！」
「ふざけるな！！　俺はいつもこうやって金を稼いできたんだ！！　誰にも俺の邪魔はさせん！」

両者は一歩も引かない。お互いの主張は平行線をたどった。すると見かねた宇田海が一つ提案する。宇田海はメカニックとして名を馳せた科学者なので、そのお金を有効利用できるというのだ。

「あの……そのお金よろしかったら、私に預けてもらえませんか？」
「え、いきなりどうしたんですか宇田海さん」

スバルは難色を示すがソロはその比ではない。自分で稼いだ金を横取りされては気分は良くないだろう。
ソロは宇田海の胸倉を掴んで、大声で叫ぶ。これは近所迷惑なのでスバルがなだめるが、秘密基地の中での出来事は秘密と言わんばかりにソロは我がままだった。卵ごときでここまでヒートアップするとは驚きだ。
宇田海もソロの剣幕にすっかり、縮こまってしまっている。目にクマなんか作って弱々しい。

「ヒッ……！　スバル君、助けて下さい！」
「おい、やめなって。卵ならいつでも師匠と買いに行けばいいだろ

う？　とりあえず宇田海さんの話を聞こうよ！」
『そうだぜソロ。お前の憧れの師匠は卵くらい買ってくれるさ。むしろおひとり様一パックなんだから、お前がいなきゃ始まらないだろうよ？』

師匠の名を出されてはソロも落ち着きを取り戻す。どうやらスバルとウォーロックど同じで、ソロもあかねには頭が上がらないようだ。とりあえず宇田海の話を聞く気にはなったらしい。
宇田海を突きとばすと、そのまま六畳ほどの畳の床に腰をおろして不満そうに腕を組む。スバルもソロの隣に正座して座る。秘密基地の中は何もないので、宇田海はソロにお茶だけ出してやって説明を始めた。

「では説明を始めます。まずスバル君とソロ君には毎朝空き缶を拾ってきてもらいます」
「フン、そんなの俺の日課だ。言われるもない！」

ソロはお茶をすすりながら、まだ機嫌が悪い。スバルはやれやれとお茶に手を伸ばした。
ソロの存在に終始びくびくしながらも宇田海は続けていく。

「まあ、そう怒らないでください。……で、次にそのお金をＷＡＸＡスバルの部屋支部で換金してもらいます」
「ここまでは今日やったことだよね」

宇田海は頷く。しかし彼も可哀そうだ。こんな朝からスバルの家の裏庭で受付をやらされて、ソロに怒鳴られるのだ。彼の目のクマも酷くなるばかりだ。
それでも仕事は仕事なので大人な宇田海は頑張る。

「ここからが、大事です。そのお金を受付に預けて下されば、この秘密基地を便利になるように改造します。最新鋭の設備を整えていくことも可能ですよ！　ね、お得でしょ？」

「……へえ、なんか面白そう」

『空き缶拾いで秘密基地の拡張か。なかなか子供心が分かってやがる』

「そうです。きっと卵よりは有意義な結果を生むと思いますよ。だからお金を渡してください。そもそもそのお金が拡張費用や受付のバイト代になるんですから」

どうやら空き缶拾いはこの秘密基地の運営に必要不可欠な要素らしい。ここはソロとスバルの毎朝の頑張りに懸かっていると言える。もちろんソロが同意しなければ、この計画は破たんする。

スバルは秘密基地のバージョンアップのため、ソロに助けを求めた。彼のテクニックは必ず必要なのだ。もちろん茶うけを渡して彼の機嫌を取るのも忘れない。

ソロは無言でせんべいを口に運んで、奇妙な緊張感を生み出す。宇田海もバイト代が懸かっているので、彼の様子をじっと見守る。

そしてソロはお茶をすすると口を開いた。いつも通り、無愛想な口振りだ。

「まるで、子供の遊びだな。空き缶拾いはそんな簡単なものじゃない……！　俺……いや俺達は空き缶拾いに心血を注いできた！　ホームレス？　バカにするなよ！　俺達は社会に拒絶された！　人の輪に入れてもらえなかったんだ！　目の前で何人ものオッサンが保健所送りになった！　そう、人間なのにだ！！　俺達は人間としても扱ってもらえなかった……！　それでも生き抜いた！　お前達に俺の気持ちが分かるのか？　心のどこかで俺達をバカにはしていないのか？！　ぬくぬくと育った人間にお金の大切さが分かるのか？」

ソロは思いの丈を吐きだした。ホームレスと言えば聞こえは悪いが、ソロも被害者なのだ。彼の場合、ゴミのように扱われてそれでも生き残った。生への執着は人一倍ある。卵に執着するのだって、卵の栄養価の高さを知ってこそだ。

ソロは社会を厳しさを知っているからこそ、金にも卵にもシビアになる。

スバルはソロの思いから、改めて考えさせられた。

「ソロ……ごめんよ。キミの気持ちも分からずに」

場の空気が静まり返る。するとその静寂に終止符を打つかのように秘密基地に誰かが入ってきた。ソロはハッとしたように、すぐに正座する。師匠――そう、あかねが入ってきたのだ。あれだけ大声で騒げば、寝ていたあかねも起きてしまうというものだ。

あかねはソロの吐きだした思いの全てを耳にしていたようで小さく頷いている。そして忘れていた事を思い出したようで、懐かしそうにソロを見つめていた。

「やっぱり、アナタがそうだったのね……ソロ君。気付いてあげられなくて、ごめんなさい」

「師匠……」

「もう九年前……まだアメロッパに住んでるころだったかしら。金髪の男の子がゴミ捨て場でゴミを漁っていたって、大吾さんが連れてきたのよね……それがアナタだった。そうでしょう、ソロ君？」

「……俺は」

「アナタの目を見た時、私は震えあがったわ。まるで世界の全てを憎んでいる目だった。とても三歳児の目じゃなかった。ボロボロのアナタを私は見ていられなかった」

「……俺は怖かった。気付いたら一人で、誰からも助けてもらえなかった。だけど師匠だけは俺を助けようとしてくれた……それが怖

かったんです」

どうやらソロとあかねはずいぶんと昔に出会っていたらしい。その時のソロはボロ雑巾のようだとあかねは語った。そして赤ん坊の状態で捨てられていたので、人間界に順応出来ていない野性のままだった。

「言葉も喋れなかったアナタはまるで獣だった。大吾さんと私はアナタを家に迎えて、アナタをせめて人間にしようと社会のルールを教えた……読み書きや、生活するために必要な知識、色々な事を教えたわね」

「そのことについては感謝してます。おかげで俺は人間として生き残ることが出来た」

「でも、アナタは突然姿を消した……いままでどこにいたの？　見た目も変わってしまって、私も気付かなかったほどだわ」

「殺人衝動……」

「え……？」

「ある日、気付いたのです。地球人は敵だという本能的な衝動に……根絶やしにしろという衝動に……だから姿を消したのです。俺はアナタ達の家庭を壊したくなかった」

ソロはムー人もといオリジンだ。オリジンは地球上では地球人との生存競争に負けて、滅ぼされてしまった。以前ケフェウスが言っていたことだ。

そして長い年月が経ち、生き残りのソロが目覚めたのだ。彼に流れる血が叫ぶのだ。地球人を殺せと、おおよそ理解できない強い衝動に駆られていく。

前回の任務で殺人犯のジェイルという男がいたが、それと同じなのだ。

もちろんジェイルと違い、ソロはそれに抗った。そして血の滲む

ような努力の末なんとかその衝動を抑えられるようになったのである。しかしその結果、誰からも相手にされない孤高の道を歩むしかなくなった。

ソロはそのような今までの自分をあかねに告げた。

それを聞き、スバルはなぜあかねが師匠なのか理解できた。

話の全てを聞くと、あかねは小さく頷いた。ソロは変わってしまったが、あかねが教えたテクニックの全てを彼は受け継いでいた。

薄々気づいていたが、今なら言える。

「おかえりなさい、ソロ君」

「ただいま……師匠」

ふっと笑いあう二人。あかねはソロにエプロンを投げてやった。

一緒に朝食を作れというのだ。ソロは今まで無愛想だった表情を明るくさせて、大きく頷いた。

どうやら宇田海がこれ以上説得する必要はなさそうである。ソロはあかねと共に台所に向かっていく。スバルも立ち上がって、空き缶拾いで得た金を宇田海に渡してやる。

「じゃ、宇田海さん。秘密基地のこと頼みますね」

「ええ、ＷＡＸＡ本部にも負けないスーパー基地にして見せますよ！！」

今日一日の始まりはとても濃かった。空き缶拾いによる秘密基地拡張ミッションにソロの過去。

これからは忙しくなりそうだと感じさせる。スバルもさすがに引きこもってはいられないだろう。

ｓｂｒ―０８：音楽界の風来坊

ソロとツカサが腕によりを掛けて作った料理を食べているスバル達。そうやって温かな朝の風景がテーブルを囲んで行われている。

するとスバルが今朝の収穫をミソラに告げた。どうやらミソラにも空き缶拾いを手伝ってほしいようだ。手分けして空き缶を集めれば、それだけはやく秘密基地が拡張されていく。スバルの目標はＷＡＸＡ本部を越えることだ。彼は意気込んでいる。アイドルにも空き缶を拾わせることを辞さない姿勢である。

「時にミソラちゃん。空き缶に興味はあるかい」

「ないよ」

「いや、あるね。すましちゃってるけども、ホントは分かってるんだよ？」

スバルの物言いはうざったい。朝からこれではミソラの機嫌も悪くなる。ミソラは箸で醤油さしを示してスバルに取れと促した。彼女は相変わらず良く食べるので頬がハムスターのように膨らんでいる。スバルはそれを笑ってやろうかと思ったが、昨日の事があるので黙って醤油さしを取ってやった。

「はい、醤油」

「ありがとう」

「ミソラって名前なのに、醤油派なのか……ややこしいね。名前でも翻弄してくるとは、さすがのアイドル様だ」

「ねえ、バカにしてるよね？」

スバルの物言いはうざったいので、ミソラは不機嫌そうに目玉焼きを口に運ぶ。どうにもこれではいけない。このままではどうやってもミソラは空き缶を拾いに行きそうもなかった。なんとかして空き缶の魅力を分からせてやる必要がある。

なのでソロの出番だ。彼はテレビの前でカノンの相手をしているが関係ない。しかしカノンは魔法少女もののアニメが気に入ったらしい。そんな妹の今日学校に着ていく服にアイロンをかけて忙しそうにしているソロ。それでも彼の出番だろう。空き缶を語らせたらソロの右に出るものはいないのだ。

不審がるミソラをよそにスバルは空き缶マイスターに尋ねる。

「ソロ！　空き缶ってカッコいいよね？　空き缶の魅力をミソラちゃんに教えてやってよ」

ソロは首を傾げて、スバルの頭の調子を疑うが空き缶の良さを語りだした。アイロンがけがはかどりだした。これは良い。

「……？　まあ、空き缶は素晴らしいさ。あのシャープなボディで路上を転がる孤高の姿は、まさにかつての俺と言える」

「でも、それだけじゃない。空き缶拾いには大切な意味があるんだよね？」

「ふん、お前も分かりだしたか……。空き缶拾いには景観の改善と共に、交通安全の保全にも威力を発揮する。空き缶が転がっている道路を、自転車で走っててハンドルをとられてしまい、ヒヤリとした経験もあるはずだ。よく聞け。空き缶は通称、交通界の暗殺者とも言えるほどに危険な存在なのだ。一たび空き缶にハンドルを取られれば、スリップは免れない。そしてその連携が恐ろしく、交通界のデストロイヤーことガードレールで止めを刺されるという悲劇が

全国的に多発してる。ガードレールの鉄の爪を舐めてはいけないのだ」

景観の問題から交通界への配慮も欠かさないオールラウンダーのソロだった。ここまで言われれば空き缶拾いがどれだけ大切なことかアイドルにも分かるはずだ。歌って踊る前に、やるべき事がある。それが空き缶拾い。

ソロの熱い語りはミソラに届くはずだ。スバルはミソラに確認する。きっと大丈夫だと彼の自信は満々だ。

「わかったかいミソラちゃん？　キミは空き缶拾いをしなければならない運命なのだ！　世界を救う前に交通界を救うんだ！！」

「……うーん。どうしよっかなー」

どうやらソロとスバルの熱意は伝わったらしい。ミソラも迷っているようだ。空き缶拾いに確かな魅力を感じ始めているのかもしれない。

ミソラはあかねにおかわりを頼むと、頭を抱えて考え込む。こういう馬鹿らしいことにも真面目に取り組むミソラは高く評価できる。ルナ辺りなら、空き缶というフレーズの時点で話にならなかっただろう。

もう一押しなので、スバルが畳みかける。とっておきだ。秘密基地の拡張の存在を教えてやる。これがついてくれば、さすがのミソラも首を縦に振るはずだ。

「さーて、ここで朗報です。なんと今空き缶拾いをすれば、秘密基地ことＷＡＸＡスバルの部屋支部が拡張されます！　お得ですよー」

「秘密基地って、あの家の裏に立ってるヘンな建物？　なんかロケットのガラクタが集まったような、可愛くないんだよねアレ……」

「そうそう。あの中にはツカサ君とか宇田海さんとかがいるんだよ。

お茶とか出してくれるよ」
「カオスだね」
「うーん、でもね。たしかに今でこそ六畳間の畳敷きの一部屋だけだけど、空き缶拾いさえすれば、最終的にはＷＡＸＡ本部並の施設になるんだよ！　しかもミソラちゃんが願えば、ミソラちゃん専用のスタジオだって出来るはず！　可愛いは作れる！」
「え、本当？　それはお得だねー。カンカン拾いでマイスタジオかー。これでレコーディングとか楽になるかも……」

スバルのセールストークにようやくミソラが食いついた。多少大袈裟に言っているが、嘘ではないのでこれで良い。ミソラだって自分専用のスタジオが出来れば嬉しいはずだ。
宇田海の腕があればきっと可能なのだ。あともう一押しだ。
スバルは対ミソラ用のとっておきのフレーズを吹き込む。

「知ってる？　空き缶って楽器になるんだよ」
「え？！　そうなの？」
「なるなる。カンカンカンカン絶妙な音色だよ。ね。ソロ？」
「ああ、空き缶の中にある空洞は音を反響させるのにうってつけだ。交通界の暗殺者でありながら、ヤツは音楽界の風来坊でもあるのさ」

音楽界の風来坊……その何とも言えないむず痒い言葉にとうとうミソラが下ってしまった。彼女の音楽を愛する部分が見事に空き缶との親和性を実現した瞬間だった。
ミソラはスバルに約束する。

「そこまで言われたら、私もじっとしてられないね。毎朝五時に起床して、空き缶狩りに行くよ！　早寝早起きでお肌にも良くて、さらには景観、交通界にも優しくて、あげくの果てには音楽界にも新たなる旋風をもたらすなんて一石四鳥だね！」

「やったー！　ミソラちゃんが空き缶マイスターになった！」
「ふん、まだ見習いマイスターだがな！」

この瞬間新たなるマイスターが誕生したのだ。
あかねは空き缶戦士の誕生に微笑み、そろそろ学校に行くように言う。

「フフ、しっかり頑張りなさい。社会貢献なんて母さん嬉しいわ。さ、社会貢献も良いけど勉強もしっかりね！」
「よーし、今日の僕のテンションは異常だぞ！　空き缶に生きて空き缶に死ぬ！　そんな心境に突入した！」
「エヘヘ、私も今日から空き缶ガール！　頭も空っぽにして、頑張っちゃおう！　何もかもがスッカラカンさ！」
「さて、次はカノンを空き缶マイスターにしないとな……」

ソロがカノンを軍団に引き入れる事を画策するが、その時インターホンが鳴った。朝から空き缶を連呼しているが、そろそろ学校に行く時間なのだ。ルナ達のお迎えが来たということだ。
しかしいつもより少し時間が早い。スバルは空き缶の事をひとまず頭の隅にやって、玄関に向かった。

「あー委員長？　ちょっと、待ってて」

スバルは玄関扉を開けながらルナ達に待つように言うが、すぐにインターホンを鳴らしたのがルナ達ではないことに気付いた。玄関の前で立っていたのはリフレインとエリアだった。珍しい組み合わせだが、リフレインがわざわざ来るという事はただ事ではない。スバルはさきほどとは一転して、緊張してしまう。エリアが睨んでくるので余計緊張する。スティーブの事を根に持っているのかもしれない。

がたがた震えられては話にならないので、リフレインが咳払いして、スバルに家に上がって良いか尋ねた。

「ワイリー博士について話があるんだ。家に上がっていいかな？」
「あ、はい……」
「ありがとう」
「あの、もしかして今日僕って学校に行けないんですか？」
「ああ、そうだね」
「じゃあ、朝の空き缶拾いは？」
「……ん、空き缶？　まあ、頑張ればいいんじゃないか。空き缶は良いからな……」

リフレインは首を傾げるが、空き缶拾いなどどうでもいいらしくそのまま家に入っていった。エリアもスバルの耳を引っ張って玄関をまたぐ。

スバルはまだ事の重大さを理解していないのかもしれない。彼はいまだ空き缶拾いの心配をしているのだから。本当ならもうとっくに自分達の置かれた状況を理解していないといけない。

ｓｂｒ―０９：真実を求めてワイリー研究所へ

今回リフレインがスバルの元へ訪ねた理由は彼らの呪われた家系が関係していた。

リフレインはリビングのテーブル――いつも大吾が座っている場所に腰を掛けた。彼は回りくどい前置きを野暮ったいとしたようで、アメロッパ人らしく単刀直入だった。あかねの隣のスバルは思わず息を飲む。

あかねを席に交えている当たり、これは星河家の問題でもあると判断できた。もちろんソロも混じっており、彼も無関係ではいられない。

「私の先祖に……アルバート・Ｗ・ワイリーという科学者がいるのは知ってるね？」

リフレインの言葉にスバルが首を縦に振る。前回の任務が終わった時に、ＷＡＸＡから聞いていたからだ。ミライの本当の名がセツナということも知らされた。そしてセツナが普通の人間でなかったということも聞かされた。スバルの表情は曇ってしまう。少し大人びたセツナの態度は今、思えば当然のものだったのだ。

するとリフレインは少し息を吸って間を溜めた。歴史的にはワイリーは犯罪者としての印象が強いし、ミライの存在も彼に流れる血がワイリーと似ている事を暗示していた。普通の神経をしていたらそれは汚名で、あまり語るようなことではない。

しかしワイリーが大吾達きずなクルーを手駒にしている以上、星

河の一家は無関係では済まされなかった。そういった一族の責任と家族の繋がりがフレインに過去を語らせ、エリアも同伴している理由となっている。

もはや隠し事に意味はない。そしてスバル達に全てを知ってもらわなければならない。彼らは今まで何も知らずに戦っていた。リフレインもそろそろワイリーに立ち向かわなければならなかった。そうした神への反逆心からリフレインの語気は強くなる。

「ワイリー博士はロボット工学の権威だった。そして私もその思想に賛成していた……。そうだな、いつかは人間のようなロボットを生み出してみたいとも思っていた。それがこの世界の究極の形だと、ね。ワイリー博士も私もそう思っていたんだ……」

「でも……二百年前に光博士の情報社会が選ばれたんですよね？ロボットは危険だって学校で習いました。人間にとって代わる存在が現実に存在するのは許されないって。……だから電脳の世界に第二の人間を作ったんだ。光博士は、ワイリー博士と対局だった」

スバルはリフレインに学校で習った簡単な事実を教えてやった。もちろんリフレインもそれが常識だと頷く。この世界は情報化社会の発展上で成り立っている。電波社会も平たく言えば、効率化されたユビキタス社会だ。

しかしこの世界はインフィニット達によって歪められつつあった。光博士が作った情報化社会にワイリー博士の思想が無理やりねじ込まれつつあるのだ。あの老人はそれを実験と称して、世界を救世主と共に導こうとしている。しかしそれは選ばれなかった者にとっては死しか意味しない。

そんな恐ろしい野望の足がかりがレギオンである。彼らはワイリー博士が作ったゼロフレームというナノマシン制御の機械骨格で生命体として駆動している。この技術は圧倒的で、現在の地球では考えられないオーバーテクノロジーだった。いわゆる外の世界で発明

された技術である。外の世界つまりは、宇宙の外にあるどこかということだ。おそらくセツナ達が飛ばされただろう場所と推測できる。

リフレインはそういった要因から、ワイリーが干渉したこの世界の行く末を説明していく。リフレインはいつから気付いていたのだろうか。彼は良くも悪くも知りすぎていた。

「情報化社会……確かにスバル君の言う通りだ。だけども、レギオンの登場によって世界は変わりつつある。彼らは人間を進化させる……最終的にはどうなるか分かるかね？　この世界の人間をワイリー博士はどうしたいのか……分かるかい？」

「……分かりません。僕はワイリー博士と対面したけど、あの人は純粋に世界を救おうとしている風にも見えました。悪意というよりも使命感をも感じさせられたんです」

「いや、私達は救われない。ワイリー博士はこの世界を人類の永遠の楽園にするつもりだ。そう、全ての人間をレギオンと同じ擬似生命にしようとしているんだ。選ばれた人間が作る究極的に効率化された楽園。一切の無駄を排除した社会をね」

リフレインは自分が知り得た全てを話してやった。しかしさすがにスバルは信じられないといった様子で口をぽかんと開けている。あかねも同じくだが、ソロだけは薄々理解していたようだ。彼はこの世界をずっと気持ち悪いと感じているのだから当然かもしれない。

するとウォーロックが会話に割り込んできた。彼はさきほどからワイリーについて知りすぎているリフレインを不信に思っているようだ。無理もない。ワイリーが生きているというだけでも信じがたいのに、リフレインはそれをあたかも自分の事のように語っている。気味が悪いのだ。

思えば、ゴッドブレス事件の時から、リフレインの言動には不信な点が多かった。インフィニットの討伐任務――エデン事件についても同じだった。まるでインフィニットはミライ達を待っていたか

のような口ぶりだった。
　こういう時のウォーロックの予感はよく当たる。彼はリフレインに問い詰めた。

「おい、お前。さっきから聞いてりゃ、えらく事情を把握してんじゃねえか。お前一体どこまで知ってるんだ？　そしていつから知っていた？　場合によっちゃ、俺はお前を許さない！」

　ウォーロックは死んでいった仲間の姿を思い出しているのか拳を震わせてリフレインに、まだ隠している事実を要求する。彼は安全な場所から高みの見物を決め込んでいたリフレインが許せないのかもしれない。現場は地獄だった。口で教えてやるよりも、リフレインの体に教えてやるのが正しいと思わせるほどの、命がいくつあっても足りない場面の連続だった。
　そんな刺すような殺気を受けてなのか、リフレインはまず黙った。言葉を選んでいるようだ。ウォーロックが痺れを切らしそうになってようやく言い訳を始めた。

「……はっきりと言おう。ワイリー博士がレギオンの開発者だと考え始めたのはＷＷＲの事件が終わった後だ……。ちょうどセツナのエクスフレームを完璧に仕上げたころと同時期。……もっとも、ヘラを見た時、すでに予感めいたものは感じていた」
「てことはだ。太陽がおかしくなった時にはすでに、アンタは予想していたってワケだ」
「ああ……予想というにははっきりとした違和感をな。エデンの存在こそ知らなかったが、インフィニットがセツナを待っていたと知り、それは確信に変わった……」
「ブライをチームリーダーにしたのも、アンタの都合か……？」
「ああ、そうだ。彼らの道案内が必要だった……それに彼自身も因縁がありそうで、扱いやすそうだった」

リフレインはソロの方をちらりと見るが、ウォーロックから目を離すのは危険だ。いつ殴りかかってくるか分からない。

ウォーロックは続けた。

「じゃあ、サン・ゴッド相手にロクな戦力を回さなかったのもアンタの都合か？　はっきり言って、あの任務は無茶苦茶だった！　あれじゃまるで捨て駒だ！」

「そう受け取ってくれても構わない。私は何としてもレギオンの正体をはっきりさせなければならなかった。はっきり言って、キミドリ君たちのチームはジェイルが到着するまで時間を稼いでくれれば十分だった……」

「……そうか。おかしいと思ってたんだよ。なるほどな、お前、狂ってるぜ」

ウォーロックは前回の任務の全貌に怒りを露わにした。リフレインは自分の血塗られた使命とも言える因縁を優先して、スバル達のチームをおろそかにした。あげくジェイルという犯罪者を頼り、時間稼ぎに多くの犠牲者を出した。ジェイルは確かに強くて、事実サン・ゴッドを倒したが、こんなものを作戦とは言わない。

リフレインは現場を知らないのだ。だからこそウォーロックは黙ってられず、夢見がちな愚か者に殴りかかった。科学者という人種はどこか狂っているのだ。ここで腐った性根を叩き直さなければ、とてもＷＡＸＡに手を貸せない。デザインヒューマンの時からそうだったが、とうとうウォーロックの不信感が爆発してしまった。

彼らは結局、目的のためには手段を選ばない。究極的には悪との境界線がない。

「この野郎！　テメエの勝手な都合のせいで、どれだけスバル達の仲間が死んだと思ってやがる！」

「言い訳はしない……私は罪深い。だが、私の話は終わっていない」

リフレインは自分の愚かしさを重々承知の上で待ったをかけた。しかしウォーロックは身を乗り出して、その大きな拳を固めて後ろに引いた。軽い一撃で満足する彼ではなさそうだ。

するとスバルがウォーロックを引きとめる。あかねもだ。師匠に習ってソロもウォーロックを取り押さえた。

そして少し怯えた様子でエリアがテーブルを叩く。リフレインの肩を持つ訳ではないが、ウォーロックがリフレインを痛めつても事態が好転する訳ではない。そんなことをしても夜太郎もキミドリもメトリーもセツナも、誰一人帰って来るはずがなかった。

「今は仲間内で争っている場合じゃないでしょ！」

「なんだと殻オンナ！」

「まだ博士の話は終わってないわ！　最後まで聞きなさい犬ッコロ！」

これでは争いが加速するのであかねが割って入った。すこし距離を置いたところで、ソファから覗きこむようにミソラとカノンが怯えているのだ。喧嘩はよくないだろう。

話し合いは人間の特権だ。星河家にいる以上、ウォーロックにも人間らしくいてほしい。それがあかねの言い分だった。

「ロック君。この前の事件で何があったのかは知らないけど、博士の話を最後まで聞きましょう。それでも怒りが治まらないなら、夕日に向かって叫びなさい」

「おふくろ……今は朝」

「ありがとうございます、あかねさん。ここから先はアナタにも辛い話になるでしょうが、よろしいですね？」

「はい、スバルを生んだ時から覚悟は出来てます。きっとそれは大

吾さんも同じです」
「……分かりました。続きを話させてもらいます」

ウォーロックは舌打ちをするが、ここがあかねの家である以上ウォーロックはあかねに逆らえない。それにリフレインの話の続きに興味がないと言えば嘘になる。彼はスバルのハンターに収まって、事を静観することにする。自分がいてはまとまる話もまとまらないと感じたようだ。

あかねを立てたとはいえ、ウォーロックもちゃんと成長しているようだ。

リフレインはウォーロックに礼を言い、話し始めた。

「さっきも言ったように、ワイリー博士はレギオンを使って、世界を選別します。そしてその第一候補に選ばれた人たちが”きずなクルー”です」
「なんで父さんたちが……」

スバルはわなわなと震えて、リフレインに詳しい説明を求めた。思えばプルト・キグナスが連れ去っていった辺り、ワイリーは以前から彼らに目を付けていたのかもしれない。きずなクルーは実験体としては申し分ない素材だろう。

「落ち着いて聞いてください。ワイリー博士はおそらくきずなクルーを改造して……私達の敵として現れるでしょう。おそらく上位のレギオンとの組となってくるはずです。今までのどんな敵よりも恐ろしい組み合わせと言えます」

ジョニーとキリン、レベッカとトレイス、その程度の組み合わせでも凶悪だったのに、上位のレギオンときずなクルーの組み合わせは筆舌に尽くしがたい。

だがスバルがそんな詭弁を飲むわけがなかった。スバルにとって大吾がどれだけ絶対の存在か。ワイリーが何者であろうとも、大吾の負ける姿が想像できなかったのだ。

「な、なんでそんなこと分かるんだよ！　父さんなら、もしかしたら逆にワイリー博士を倒しちゃうかもしれないじゃないか？！　父さんは凄いんだぞ！　博士だって知ってるでしょ？　なんで悪い方にばかり考えるんだ！」

取り乱すスバルにリフレインは首を振った。子供には辛いだろうが、スバルはロックマンだ。現実を受け止めて、最前線で戦えるだけの戦力でいてもらわないといけない。例え父親と戦うこととなっても、彼には英雄でいてもらわなければいけなかった。そのためには最悪を予想して備えなければならない。

リフレインは非情な選択をごく簡単に下すことが出来る。それは冷静とも言えるが、冷徹とも嫌悪できるほどだ。

「スバル君こそ知っているはずだ。いや、君は目の前で見ていた。もはや正気じゃなくなっていた、自分の父親の姿を……君は見ていたんだ。そしてワイリー博士に連れ去られた瞬間にも立ち会っていた。……これ以上、私に言わせるのか？」

「……クソ！　あの時、ちゃんと連れ戻せば。なんで臆病風に吹かれたんだよ……っ」

スバルは机の下で拳を握りしめて、歯を食いしばった。大吾を救出するチャンスは何度かあったが、その度に邪魔が入った。その邪魔ものは誰もかれも太刀打ちできない者や状況だった。やり切れないのだ。

あの時、宇宙が閉じているとはいっても、ウォーセヴティ相手に最後まで食らいつけばもしかしたら可能性があったかもしれない。

だが、あの時の判断は逃げが正解だった。
　これればかりはウォーロックも逃げた事を責める訳にはいかないだろう。無謀と勇気は違う。月並みな表現だが、それが分かっている者が生き残る。死んだらそこで負けなのだ。

『終わったことを悔いても仕方がねえ……で、リフレインのオッサン。わざわざ家にまで来たんだ。情報だけ寄こして、とんずらじゃねえよな？』

　ウォーロックの嫌味っぽい言い回しに、リフレインがようやく笑顔を見せた。馬鹿は馬鹿でも話の分かる馬鹿は嫌いではないようだ。

「もちろんだとも。打倒レギオンもきずなクルーもまだまだ諦める訳にはいかない。敵はワイリー博士なんだ。この世界のワイリー博士なら何か知っているのかもしれないだろうさ」

　リフレインの言っている意味はよく分からない。スバルは首を傾げる。
　リフレインは苦笑した。言葉のままの意味なのだ。

「難しく考えることはない。私達の目の前に現れたワイリー博士は、この世界のワイリー博士ではないということだよ。言ってしまえば、ファースト・ワイリーってところか。そしてこの世界のワイリー博士がリトル・ワイリーとでも言える」
「え……っと、つまり。この世界のワイリー博士……リトル・ワイリーは悪者じゃないってこと？」
「一概にそうは言えない、ＷＷＷなんて組織を作って犯罪を犯した事実もあるしね。それでも世界のために尽力した晩年の彼を私は嫌いになれないのさ」

リフレインは祖先の間違いを恥じたようで、頬をかく。こういう仕草事態は可愛げがあって良い。
だがすぐにいつもの怖い顔だ。

「さて、伝えておきたい話も済んだ。では、行こうか」
「行くってどこにですか？」

スバルは明日の朝早く空き缶拾いをしなければならない。そうでないと宇田海が困ってしまうし、秘密基地がしょっぱいままだ。
だが、そんな用事はくだらないのでリフレインはさっさと席を立ち先を急ぎ、急がせる。

「決まってるだろう？　ワイリー研究所に行くんだよ。ここ最近、私はずっとそこで手掛かりを探しているんだ。君たちにもぜひ来てもらいたい」
『へえ、面白くなってきたじゃねえか。稀代の天才の研究所か……これは臭うな』

どうやら話がまとまったようだ。これからスバルは空き缶拾いも学校も返上して、ワイリー研究所にリフレインと向かうことになった。
場所はZ国。秘密の研究所という訳だ。

ｓｂｒ―１０：エリアの初めて

スバルはリフレインと共にワイリー研究所に行くことになってしまった。当然学校を休むことになってしまうので、あかねに相談する。あかねはニコニコしているだけで別段文句はなさそうだった。むしろ世界のために頼られている息子が誇らしそうだ。

「母さん、僕また不登校になっちゃったよ」

「社会見学だと思えばいいんじゃない？　とにかく先生方には私が話しておきますから、アナタはやりたいようにしなさい」

「わ、わかった。じゃあ空き缶拾いにいこっかな……」

するとミソラだ。とぼけたことを言うスバルに、首の付け根のあたりに的確にチョップする。スバルの体の弱点を熟知している彼女らしい愛の鞭だ。

真面目な場面で棺桶拾いは冗談でも笑えないのだ。なのでミソラが自分に任せろと胸をドンと叩いた。

「空き缶拾いなら、私に任せてスバル君は行ってきなよ」

「え？　ミソラちゃんは行かないの？」

「まあね。パパにちゃんと学校に通えって言われちゃったし、私はカノンちゃんといつも通り学校に行くよ。ルナちゃんにもちゃんと言い訳しとかないとだしね」

ミソラは良い嫁になる。スバルはきっとそう思ったはず。気配り

上手な彼女に彼は握手を求めた。

「ありがとう。じゃあ毎朝頑張ってね。出来るだけ早く帰るようにするからさ。宇田海さんにもよろしく」

ミソラは握手に応じて悪戯っぽく笑う。こういう時の彼女は悪い女の子なのだ。

「ふふ、握手かー。こういうお別れの時はさ、チュッてするんじゃない？　ほら唇と唇どうしで別れを惜しむってシチュエーションじゃん。大丈夫。歯磨きちゃんとしたから」

唇を尖らせるミソラだったが、スバルは適当にあしらう。空き缶拾いをミソラに任せて本当に大丈夫なのかと、それだけが心配らしい。

それと同じくらい宇田海のバイト代も心配だった。ツカサのバイト代も同じくで、これはとにかくミソラには頑張ってもらわないといけない。秘密基地が第一で、ふざけているミソラの相手はしても無駄だろう。ちなみに秘密基地のバイトはシフト制でツカサ、宇田海、クインティア、ジャック、尾上を主にして回している。

そんな事を考えながらスバルはミソラに対して互角以上の立ち回りを演じていた。

「今、ミソラちゃんがするべきなのは、性的に僕をからかうことじゃなくて、明日からの空き缶計画を決めることだよ。委員長辺りと協力して、ミッションを遂行してください。ちなみに僕は歯磨きしてないから」

「りょ、了解！　――って、ノリ悪くない？　せめてほっぺたぐらいにはさせてよ。そして歯磨きはしようね！」

「駄目だ！　僕のほっぺは空き缶千本分だ！　千本集めてから出直

して」

昨日の仕返しがあるのか今日のスバルは攻めに回っている。空き缶千本という条件からさりげなく空き缶拾いにミソラを誘導していくところに彼の頭脳プレーが炸裂していた。

だがこれではミソラが面白くない。

「高いのか、安いのか分かんないよ……でも、それなら頑張っちゃおうかな？　エヘ！　スバル君のハートを狙い撃ち！　バキュン！」

上目遣いのミソラだったが、スバルは冷蔵庫からジュースの缶を出して、飲み干してからミソラに投げつける。これであと九九九本。

どうやらスバルは昨日のジャンピング土下座を本格的に根に持っているらしい。

「くどい！　あと９９９本だよっ。じゃ、行ってくる！」

「ああん、ヒドイ！　でも行ってらっしゃいアナター！　９９９本頑張っちゃうよ！」

ミソラは投げキッスを投げて玄関まで見送ってやる。カノンも真似して投げキッスだ。もちろんソロは見向きもしない。

亭主関白を演じ切ったスバルはソロと共にリフレインに付いていった。ワイリー研究所に赴くメンバーはリフレインとスバル、ソロ、エリアの四人である。とくに危険なことをしに行く訳ではないので、これでも不便はないだろう。

それからスバル達はＺ国に向かうために、ＴＫ空港まで来ていた。

少しのんびりしすぎたようで、もう昼となっている。リフレインはお腹が空いただろうと、スバル達に昼食を誘ってやった。こういう時は良い父親と思わせる。きっと彼も普段から冷徹という訳ではないらしい。もちろんソロにも対して分け隔てなく接する完璧さだった。

人混みの中でリフレインは辺りを見回して、子供でも落ちつけそうな店を探す。発着時刻までもう少しあるので、現在はショッピングエリアにいるところだった。

するととんでもないお嬢様のエリアが高級レストランを指差した。現実派のソロは安物のラーメン店を指差す。お互い譲りそうもないし、険悪な雰囲気だ。スバルはその場で立ちつくすしかなかった。間違ってもファミレスとは言えないだろう。もちろんリフレインは困り果てる。彼もそれなりに金持ちだが、エリア基準だと破産する。ここは安物で行くべきだろう。

一行は安物ラーメン店に入った。すると安っぽい店員が安っぽい挨拶をしてくる。その時点でエリアは頬を引くつかせていた。しかしリフレイン達男組は中々その安っぽさが気に入っているようだ。どことなく家庭的な温かさのある安っぽさだ。

とりあえず安っぽいイスに腰を掛けて、ギシギシと今にも壊れそうな音を鳴らしながらメニューをとって注文を取った。定員の対応も安っぽい。しかしメニューの内容はここに極まった安っぽさだったのでお高いエリアは、頬杖を突いてむくれていた。どうやら彼女はよほどの温室育ちらしい。ルナでももう少し庶民のたしなみを心得ているのだが、彼女にはまるでない。ラーメンを陰毛スープとしか思っていないようだ。彼女の中でニホン人に変態のレッテルが勝手に張られた。

「なによ小汚い店ね。まったく博士は私側の人間だと思ってたのに……！」

「ラーメン屋は小汚いくらいがちょうどいい。重要なのは味なのだ

よ、エリア」
「馬鹿らしい。腹を壊したら博士のせいだから。まったくどこのどいつのどの毛を抜いてきたんだが、そんな汁を啜ってられないわよ」
するとソロが切れた。食べ物を悪く言うのは許せない。当たり前のように食べている食べ物だが、当たり前に食べられなくて苦しむことがどれだけひもじいかソロは知っていた。その惨めさと言ったらない。初めてゴミ箱を漁った時に呑んだ涙のしょっぱさは、忘れられない。人間の真似事さえさせてもらえなかったソロには、恵まれ過ぎたエリアが疎ましいだろう。
ソロはエリアとは対局で、分かり合う事はなさそうだ。

「さっきから、うるさい。ラーメンというのは職人が作れば芸術にもなる食べ物だ！　けっして卑しいモノではない！」
「うわ、ソロが良いこと言った」
『そうかぁ、卵がラーメンに変わっただけじゃねえか』

するとソロとエリアがまた険悪な雰囲気となる。もちろん今回はエリアが悪いのだが、表情はソロの方が悪者だ。小動物ならその一睨みで殺してしまいそうだ。
もちろん強がってソロに喧嘩を売っていたエリアだったが、すっかり怖がってしまいリフレインの後ろに隠れてしまう。彼女は小動物だったようだ。スバルもソロの後ろに隠れている。スバルも同じくだ。
エリアは必死に強がりながらもソロに向かって泣きそうになりながら高圧的な態度を頑張って取り続ける。だが、ソロの睨みが怖くてしどろもどろになってくる。見ていて可哀そうになる光景だった。

「な、なによアンタ！　そんなに睨んじゃってさ、べ、べちゅに怖くないんでひゅからね！　こ、この貧乏男ー……！　グス……っ」

「持てる者と持たざる者……食べ物にさえ感謝できなくなるくらいなら何も持って生まれてこなくて俺は良かったよ。キサマを見ているとそう思う……」

「うぅ……怖いよー博士ー。この馬鹿なんとかしてよ」

「エリア、どうやら君は少し外の世界を知った方が良いようだ。ソロ君をよく見ておけば、少しは現実を見つめることが出来るだろうさ」

「な、なによ！　博士までこの白髪の味方する気？」

元気なエリアにリフレインが諭すように言う。今度は説教でエリアがすねる。彼女はスバル以上に甘ったれている。

「さて、エリア……。君には何が足りないのかな？　君は自分の事ばかりで周りが見えていない。そんなんじゃお父様は救えないぞ？」

「ふんだっ！　カペルならお父様を絶対に助けてくれるもん！」

リフレインはやれやれと肩を落とす。まだまだカペルに依存しているようだ。自分でスティーブを助けるという気概があればまだ違ったが、これではどうしようもないだろう。

そうやって居心地悪い空気のまま、注文したラーメンがスバル達の元に届いた。意外や意外で、ラーメン事態は安っぽくない。周りが安っぽすぎるので、ラーメンがマシに見えているだけかもしれないが、少なくとも不味そうには見えない。エリアの言う陰毛スープには少なくとも見えはしない。

スバル、ソロ、リフレインはいただきますをして箸を伸ばす。

エリアはすねているので見ているだけ。目の前でずるずると音を鳴らして食べている姿を汚そうに眺めていた。

「まったく、ずるずる音を立ててんじゃないわよ。貧乏臭いったらないわね！」

「食べないのエリアさん？」

スバルはあえて敬称でエリアを呼んで馬鹿にする。早く食べないと伸びてしまうのに、意地を張っているエリアは馬鹿というわけだ。

スバルはわざと音を立てて見せつけるように食べている。するとエリアにラーメンの汁がほんの少しかかってしまう。もちろん彼女の高級ドレスが小汚い汁で汚れてしまう。彼女は怒り心頭だ。その布地はあえて絶滅危惧種から剥いだ毛で作っている。とんだ絶滅寸前なドレスだったのだから。

「あースバル！　何やってんのよ！」

「あ、ゴメン。あとでクリーニングだしとけば？」

「あ、ダメよ。こんな臭い服もう着てられないわ」

するとまたソロだ。ラーメンは臭くない。匂うだけだ。そんなことも分からないエリアに今度はお得意の格闘術を駆使してエリアを羽交い締めにして、拘束する。そしてスバルに向かっていつになく力強く言い放った。ソロはエリアが放っておけないのだろう。ここまで自分と間逆で可哀そうな彼女を見捨てることが出来ないらしい。

カノンが言っていたがソロは素直でないだけで、心優しい少年であった。

「星河スバル！　はやくこの哀れな女にラーメンを食わせてやれ！！　こいつは不幸だ！　俺とは逆の方向に世界と別離している！」

「きゃー、離せ！　なに気安く触ってんのよ、この変態！」

エリアが暴れるが、ソロの人間離れした力が解ける訳がない。スバルはなんとなくワクワクした。

「な、なんだ！　この状況？！　女の子を羽交い締めにして無理や

りラーメンを食わせるだと？　しかもソロが何か世界を語っているし、意味が分かんない」
「やれ、ロックマン！」

リフレインの後押しだった。意外とノリがよろしくてスバルは少し恐怖に包まれるが、このままエリアのラーメンが伸びてしまったらラーメンが可哀そうだ。ここはソロの言う通りにするべきだろう。

「うわああ、どうにでもなれー！」
「キャー、そんなもの近づけんな！」

エリアは頑なで、スバルの差し出した箸に対して口を固く閉じる。しかしスバルもこういった状況の対処法は熟知していた。人間は息をしなければ死ぬ。

「ソロ！　エリアさんの鼻を摘まめ！」
「ふっ、星河スバル！　中々のワルだな！」

ソロの悪い笑みと同時にエリアは鼻を摘まれて息が苦しくなる。エリアはバタバタと暴れるがそれでは息が余計持たない。リフレインはそんな楽しそうな光景を傍目に眺めているだけだ。ウォーロックは何秒間エリアの息が持つか数えていたが、十秒も持たなかったので爆笑した。

「プハァッ」

エリアが息を吸おうとして口を開いたその一瞬を突く。ロックマンとして鳴らした反射神経があれば造作もないことだ。それがあれば乙女の口にラーメンをピンポイントで突っ込むことが可能となるのだ。

「食らえ！　ストライク・ラーメン・デリバリー！！」
「ングッ！」

エリアにラーメンを食らわせて、スバルは見事にやりきった。エリアの口の中にラーメンを送り届けるというデリバリー任務を全うしたのだ。パチパチとリフレインが拍手をして祝福する。そしてエリアの反応に皆の注目が集まる。あれほどラーメンを忌み嫌っていたエリアのことだ。きっと何らかの反応を見せるはずだ。

しかしエリアは泣きながら、ソロに拘束されたままラーメンを食べさせられていくだけだった。抵抗するそぶりは見せない。一転して大人しい彼女はしくしくと鳴いているので、スバル達は少し罪悪感にさいなまれる。

「ううぅ、処ラーメンが……奪われた」
「なんか嫌な言い方だね」
『このガキ、お前と似てるとこがあるかもな』
「さあ、キサマ！　どうだ、うまいのか？　うまいのか？！」

ソロの問いかけに、エリアは何度かラーメンを噛みしめるとポロポロと涙をこぼしながら頷いた。

「この陰も……じゃなくてラーメン。すごく……おいひいです」

エリアはラーメンの美味しさに涙していた。ソロの熱い思いが伝わったらしい。どうやら彼女は食わず嫌いだったようだ。

こうしてスバル達一行の絆はラーメンという素晴らしい食べ物を介して深くなっていった。

エリアに庶民の味を教えることが出来た一行は、飛行機に搭乗してZ国に向かっていた。席はエコノミークラスである。リフレインは何気に庶民派だった。もちろん改心したエリアも文句を言うような無粋な真似をする事はなくなった。かれこれもう一時間近く四人でボックス席で談笑していた。

今のエリアにとって、一般市民と混じって空の旅も悪くはないのだろう。

スバルはそんなエリアを可愛く思う。さっきまでとても憎たらしくて仕方がなかったのに、不思議なものだった。このまま一生口を利かなければ、スバルとも良い仲になれるかもしれない。

「大人しくなったね、エリアさん。黙ってれば可愛いよ」

「偉そうに……！　いくらアンタだからって、お調子にならないでよね」

エリアが調子に乗りだしたので、スバルは悪戯っぽく笑ってエリアをからかう。

「フフ、強がっちゃって。でもラーメンは美味しかったんだろう？　んん？」

「は、はい……お、おいしかったです。で、でも、私にラーメンを食べさせたのスバルが初めてなんだからね……。責任とってよね？」

「ラーメンくらいで大袈裟だな……。バカみたい」

そろそろエリアがうざったくなってきたので、スバルは逃げるようにリフレインへ話を振る。ワイリー研究所には何があるのかあらかじめ知っておきたい。

「ねえ、ワイリー研究所で博士は何をしてたんですか？」

「ん？　ああ、そうだね。ずっとレギオンについて調べてたよ。つまりゼロプロジェクトについて探ってたんだよ」

ＷＷＲとの戦いが終わってから、リフレインはワイリー研究所に入り浸って、真実を暴こうとしていた。本来ならＷＡＸＡ職員の総出で挑むべきだが、彼は一族の罪の意識から信頼のおける優秀な科学者数人で調べることにしていた。他人――ましてや子供を呼ぶのはスバル達が初めてである。

もちろん初めてであるスバル達は疑問だらけとなっていた。

「ゼロ……プロジェクト？」

スバルは聞き慣れない言葉に不信感を露わにする。そう言えば、ワイリー辺りが同じ言葉を言っていたかもしれないが、あの時はそれどころではなかった。

きっとワイリー研究所に行けば、そういった疑問が次から次へと出てくるのだろう。スバルはそう思い、今のうちに出来るだけ聞いておくという次第だった。

リフレインも出来るだけ分かりやすくスバルに教えてやる。

「ゼロプロジェクトっていうのは、ファースト・ワイリーがワイリー博士……つまり我々一族に伝えたデータ群のことだ。晩年のワイリー博士もその研究に尽くしていたようだが、どうやらほとんど解明出来なかったらしい」

『で、その計画の解明をアンタが引き継いだってワケだな？』

ウォーロックの鋭い問いかけにリフレインは降参したように、口元で笑みを作った。基本的にウォーロックとリフレインは一触即発寸前の関係だが、お互い大人なので話の理解は早い。

「鋭いなウォーロック。そうだとも、我が一族はゼロプロジェクトの解明に尽力した。しかしファースト・ワイリーの技術力や発想はとても理解出来なかった。自分でも言うのもなんだが、我が一族は天才が多いのにファースト・ワイリーは天才を越えていた」

ワイリー博士はどうやら、この世界のワイリー博士を優に超える天才だったらしい。さすが全てのワイリーを超越したというだけはある。

リフレインはそうした困難に挑み、一族の英知の集大成であるエクスフレームを完成させたのだろう。もっとも完成度で言えばゼロフレームには遠く及ばない。そうした事実がリフレインの少し沈んだ表情に浮き出ている。

現役の科学者では地球一でも神を自称する男には到底及ばないということらしい。

「不甲斐ない話、私の代でようやくエクスフレームを作りだせたという体たらくなのさ」

「エクスフレーム、それがミラ……セツナ君の強さの秘密でしたっけ？」

「ああ、そうだ。私はレギオンやインフィニットを倒すために、セツナにエクスフレームを託した。しかし結果は知っての通りだ」

どうやらリフレインの家系は相当な禁忌を犯し続けてきたのだろう。そういった歪んだ執念がリフレインから見え隠れしていた。

スバルはそれを危うさととらえながらも、リフレインと共にZ国に向かう。

そして飛行機はZ国に到着した。見た目としては無法地帯と言える。この国は戦争のおかげで国力を使いきってしまっているようだ。国の玄関とも言える空港からして、もはやキャンプのようになっている。

しかしこれこそ、晩年のワイリーにとって、研究を行う場としては最適なまでのアングラだったとうかがえた。

一同はとりあえず空港から出て、手配していた車に乗り込む。Z国は軍事大国だったので、装甲車が空港とは名ばかりの荒れ地に置かれていた。物々しい車にスバルは少し気後れする。リフレインは慣れた様子でさっさと乗り込んだ。ソロも後に続く。

だがエリアはお嬢様なので、薄汚い国の景色にも物騒な車にも嫌気が差してしまい、車に唾を吐いて余計に汚くした。彼女はやることなすことが我がままだ。もうラーメン効果が切れたのだとしたら、見上げた性根だろう。

「はあ、やっぱりというか、なんというか汚い国……」

「じゃあ、何でついてきたんだよ」

先に乗り込んでいたスバルは小汚い四輪駆動車から手招きしながら、エリアにさっさとしろと促す。エリアは悪態を吐くが、このまま置いていかれたら寂しいので、文句を言いながら乗り込んだ。

全員が乗り込むと、狭い車内でリフレインが後部座席に振り返った。どうやら彼が運転を務めるらしい。彼はドライビングテクニックにも秀でているようだ。ハイドと良い勝負かもしれない。

「じゃあ、行こうか。結構な悪路を通るので、揺れるが我慢してくれ」
「ふん……俺は乗り物酔いなんかしない」
助手席のソロは心配無用だと、カッコよく親指をリフレインに立てる。リフレインは頷いてエンジンを掛けた。ボロ車はすでに良く揺れている。それでもスバルもこのくらいなら平気なようだ。
「僕も大丈夫かな」
「揺れるってマジ？　私自信ないかも……」
ただ一人、エリアだけは無理だったようだ。エンジンが掛かった程度の揺れでもすでにエリアはエチケット袋に手を伸ばそうとしている。それを見ていたスバルは隣から背中をさすってやった。
しかしこれは、やっとエリアが大人しくなるだろうという安堵からの打算的な優しさだった。もちろん彼女はそんな事も知らずにスバルに惚れこんでいた。
「あ、ありがとうスバル……優しいね」
「ゲロ臭い女の子に興味はないんでね」
『ラーメン食った後だしな』
「うん、相当だと予想できる」
「ちょっと、ちょっと！　なに失礼なこと言ってんの？」
好き勝手言う二人に、エリアが怒り心頭になるが、それ以上に吐き気が上ってくるので、口を閉じる。やはりスバルの予想が正しくて、当分彼女は大人しくなってくれるだろう。
準備がよろしいようなので、リフレインが車を発進させて、ワイリー研究所へ向かい始めた。

道はリフレインが言っていた通り、かなりの悪路となっていた。戦争の傷跡がのこる市街を出たらすぐに道路の舗装がなくなった。近いうちに雨が降っていたらしく、ぬかるんだ道が続く。そしてそのままうっそうと茂ったジャングルの中に四輪駆動車が乗り込んでいく。

エリアはもうすでに何度かエチケット袋のお世話になっている始末。お嬢様のプライドはズタズタだった。スバルはそれでも彼女の背中をさすってやるので、好感度はうなぎ登りだった。しかしソロがイライラしている。

さきほどの食べ物を戻すので、それは食べ物が可哀そうと言うものだ。彼にしてみれば、エリアは可哀そうでないらしい。

「チッ……、何で付いてきたんだ。家でぬくぬくしてればいいだろうに。バカめ」

ソロはしくしく泣いている乙女を横目にして吐き捨てた。彼は基本的に攻撃的な所があるので、一たび弱さを見せればエリアのように泣かされてしまう。

スバルはなんとなくエリアが可哀そうになってきたので、ソロに注意する。泣きながら吐かれたら堪ったものじゃないし、これ以上のペースは危険で、エチケット袋が切れたら大変だ。あまりエリアを刺激しないでほしいのだ。

「ちょっと、ソロ。あんまりエリアさんをいじめるなよ……。それにエリアさんのお父さんはワイリー博士に連れ去られたんだ。無関係じゃないだろう？」

「スバル……優しいね。キュンとしたわ」

「キミの笑顔は僕の鼻にツンと来るから黙ってて」

スバルの少し手厳しい切り返しにエリアがグスリと涙ぐむ。あまり構うと面倒なので、スバルはソロに集中した。そろそろソロにも優しくなってもらわないといけない頃だった。

「というわけでソロ。エリアさんにも優しくするように。思いやりだよ、思いやり」

「チッ……！　思いやりだと……？！　まあ確かに大切かもな。それにコイツの父親については俺の責任もある」

「す、素直だね」

「師匠が人と仲良くしろって言ってたからな」

「すごいなー母さん」

そうして半ば無理やりソロとエリアを仲良くさせて、車に揺られること数時間。エチケット袋が切れたとほぼ同時にワイリー研究所に到着した。

どうやら本当に秘密の研究をしていたようで、人里を離れたジャングルの中にその研究所は立てられていた。古い建物らしく、周りのフェンスにツタが回っており、建物も所々崩れている辺りは背丈の高い樹木に青々とした葉が幾層にも重なって覆っているので、もちろん日光は差し込まない。なので幽霊が出そうな雰囲気があたりに漂っている。

そんな場所だけに、げっそりとしたエリアがさらに精神的に追い詰められた。やれやれとスバルは背中をさすってやって慰める。社会の先輩を立てないといけないというスバルの計らいだ。少しばかり年下だがそういうのは問題ではない。心の問題だ。

「さて、博士。ここが研究所ですか」

「ああ、さっそく中に入ろう。見せたいものがあるんだ」

リフレインは怪しく笑みを浮かべて荒れたフェンスをくぐってい

く。ソロも怖いもの見たさに後に付いて行った。エリアは体調が優れないようなので、スバルがおんぶしてやって後に続く。

ワイリー研究所。それはゼロプロジェクト解明のための施設である。もちろんレギオンに関する重要な文献も残されている。スバル達は世界の闇に一歩足を踏み入れなければならないようだ。

そこには世界の真実への手かがリがちりばめられている。

リフレインの罪の十字架。ソロに託された使命。そしてナンバーズレギオンの正体。

ワイリー研究所は最後の舞台へ続く最初のメッセージである。

ｓｂｒ―１２：ラストワイリーナンバー

リフレインに連れられてスバル達はワイリー研究所のゼロプロジェクト解読本部に連れてこられた。道の途中、この研究所の中を観察していたスバル達だったが、どうやら外見こそ廃墟寸前ではあるものの研究所の中身自体は生きているらしい。二百年間もの間リフレインの一族がきっちりと維持していたようだ。

現在到着した解読本部では、数人のＷＡＸＡ職員がモニターに向かって何やら忙しそうにしている。上司であるリフレインが帰ってきたのに挨拶もない。

スバルはこの場所の詳しい情報を求めた。見たところ、ゼロフレームについて調べているようだ。奥に設置された水槽のようなものに何体か電波体が浮かんでいる。見た感じレギオンに似ていた。

「ここは？」

「ここは先人が残してくれた資料を解析して、擬似的な高次元電磁波生命体を作っている場所だ……まあレギオンコピーを作っているといった方が良いかな」

「うげ……なんか、気味が悪いな」

『はん、レギオンが作れりゃ苦労はねーよ』

スバルのハンターからウォーロックが嫌味を垂れてくる。どうやら彼はお見通しらしい。レギオンコピーと言っても、今まで戦ってきたそれらと比べたら、弱々しい周波数しか感じない。

リフレインは小さく首を振って肩を落とす。ファースト・ワイリ

ーの真似事をしているだけだと、恥ずかしそうに白状するのだった。

「ウォーロックの言う通り。レギオンそのものの力は再現出来ていない。あくまで対レギオン用のサンプルデータを取得するためのものだよ。この研究所をまともに稼働させてから、まだそんなに時間が経っていないから仕方ないのさ」

『さんざん偉そうにした割には、アンタも実際は分かってないことも多いんだな。で、実際この研究所全体のどれくらいが稼働しているんだ？　まだ復旧していないところもあるはずだ』

「ふ、ウォーロックには敵わないな……確かに、ワイリー博士の晩年の研究全てを解読していないところもあるかもしれない。……よし、付いてきたまえ」

リフレインは百聞は一見にしかずという事で、研究所内のとある場所に連れていく。そこにはかつて光熱斗と死闘を繰り広げたワイリー博士の仮想精神体が保管されている。

そんな彼にスバル達と直接話をしてもらおうという事なのだろう。リフレインはスバル達に出来るだけ多くの事を知っておいてほしいようだ。

解読本部からさらに奥に続く廊下を歩けばその場所に着く。そこは厳重なロックが掛けられており、部外者はおろかＷＡＸＡ職員でさえ入ることは許されていない。ワイリーの血筋の者の生体コードでしか開かない厳重なセキュリティが施されていた。

リフレインが認証パネルに手をかざすと説明する。

「ここは最近になって見つけた部屋だ。先人達は”アルバルーム”と呼んでいたらしい」

リフレインはくつくつと笑いながらモノクルに手をやる。どうやらこの奥は特別らしい。

「私自身、このセキュリティを解除するのにかなり手間取ったものだ。さ、この中にワイリー博士の精神体がいる。色々質問するといいだろう」

スバル達は息を飲んで、アルバルームに入っていく。その中はなんてことはない実験室と言ったところだが、辺りの資料やデータ類の日付は二百年前のままで止まっていた。リフレインの一族もこの場所だけは弄っていないらしい。

そして実験室の奥にホログラム映像が浮かんでおり、老人が宙に浮いていた。スバルはその姿をエデンで遭遇したワイリーと重ねた。いや、重ねたというよりもまるで同じだった。同一人物だ。

杖を突いた老人は目の焦点が定まっておらず魂が抜けているようだ。スバルはやや不安にかられるがワイリーの元に歩んでいく。

目の前まで行くと、スバルはリフレインに目配せする。リフレインは数個だけ注意点を述べた。

「この精神体はデータの劣化が進んでいて、複雑な質問には答えられない。そしてワイリー博士自身、全ての真実を知っている訳ではない。……その点に考慮して聞いてみるといい」

スバルは頷いて、ワイリーの精神体に質問をぶつけた。

「はじめまして星河スバルって言います。あ、あの二百年前、博士はここで何を調べていたんですか？」

数秒待ってみるが、反応がない。やはりデータの劣化が激しいらしくワイリーは遠い目をしたままだった。エリアが難色を示してボケてしまったワイリーを鼻で笑う。これでは糞の役に立たないとゲロを吐いた女が笑うのだから笑えない。

「はん、ぜんぜんダメじゃない。ボケてんじゃないのこのおじいさん」

するとリフレインがスバルに質問のコツを教えてやる。ボケてしまった老人の扱いには細心の注意が必要なのだ。

「ワイリー博士の劣化は酷いから、抽象的な質問には答えられない。具体的な単語を入れてみたまえ」

「じゃあ、ゼロプロジェクト……」

スバルが自分の知るキーワードを言いかけたところでワイリーが反応した。目線は遠いままに語りだしたのだ。傍目にそれは気持ち悪いといえる。生前のワイリーはきっと、長時間も精神データを残すためにあらゆる無駄を削除したようだ。感情のこもらない言葉がそれを説明しているかのようだ。

《ゼロプロジェクト……。２０ＸＸ年、科学省に戻って働いていたワシの前にヤツが現れた。ヤツはワシと同じ存在、つまり平行世界のワシ。そいつがワシに言った。ゼロプロジェクトの概要を渡す、と。

ヤツは自分の分身であるワシに、自らの理想を押しつけてきたのだ……。光に相談しようとしたが、ヤツはもういない。熱斗もまだ若い……。ワシは苦悩した。別れ際、アイツの言った事が不吉だった……》

スバルは話の続きを求めたがワイリーはそれ以上語らなかった。リフレインが首を振る辺り、これ以上はデータの劣化から聞き出すことは出来ないらしい。

しかしウォーロックはそれでは面白くないし、わざわざＺ国まで

来てこれでは馬鹿らしい。彼は実体化するとワイリーのホログラムに掴みかかる。しかしホログラムはゆらゆらと揺れてウォーロックをかわす。当然の結果だ。

スバルはウォーロックに呆れて、大人しくするように言う。

「何やってんだよ。これは映像だから、君は黙っててよ」

「チッ、うさんくせージジイだ」

ウォーロックはペッと唾を吐いて、壁際のテーブルに座って欠伸をする。張り合いのないワイリーに彼はもうつまらなさそうだった。

しかしワイリーがウォーロックを放っておかない。意識すらない老人は、不気味な言葉を呪文のように語りだす。

《周波数の識別……確認。特定ナンバーの反応と一致……セキュリティを解除します》

ウォーロックがふてくされたと同時に、ワイリーが訳のわからないことをのたまったのだ。突然敬語になり、ワイリーのその口振りが事務的で気持ち悪い。その光景にリフレインが驚いたようにワイリーの元に駆けつけた。どうやらこの反応はリフレインの知らないパターンのようだ。

ウォーロックがホログラムに掴みかかった時にどこかおかしくなってしまったのかもしれない。しかしそれにしてはワイリーの言葉が途切れることはなかった。

《ワシは……死ぬ直前に発明した……その名もラストワイリーナンバー……ゼロ……その答えがゼロプロジェクト……。アイツはこれを望んでいた……友の忘れ形見が現れた今……全てを……託……す》

「な、なんだ？　全ての言語パターンを解析して試したが、こんな応答パターンは初めてだ……！　ウォーロック、何をしたんだ？」

「知るかよ？　でも、初めてのパターンなんだろう？　新たなる発見じゃねーか。良かったんじゃねえの」

うろたえるリフレインにウォーロックは戸惑いつつも祝福してやるが、結局それどころではない。ホログラムが消えてしまいそうになっていた。ウォーロックが壊したのだとすれば、弁償で済む問題ではないだろう。

しかしリフレインはそれ以上の問題を感じて、わなわなと震える。さきほどのワイリーの言葉に戦慄していた。リフレインは見誤って、大きな誤解をしていたのだ。いや、その可能性に始めから気付くべきだったかもしれない。

「ワイリー博士はすでにセロプロジェクトを解明していた……？　でも、ならこんな回りくどい真似を……それにウォーロック……彼がカギだった……？」

やけに落ち着かないリフレインを見ているとエリアも落ち着かなくなってしまう。こんな場面に一人無関心なソロは貴重と言えた。ソロはリフレインに向かって冷静に状況の説明を求めた。一人で盛り上がられては良い気はしないというものだ。

「おい、何勝手に騒いでいる……？　説明しろ……！」

「待ってくれ。私も状況の整理をしているところなんだ。まさかワイリー博士が完成させていたなんて……いや、ワイリー博士だからこそ完成させていたと言えるのか。くそ、私はなんてバカなんだ。こんな簡単なことにも気付かないなんて」

つまりだ。ファースト・ワイリーとこの世界のワイリーは平行世界に生きる同一人物。ファースト・ワイリーが託したゼロプロジェクトを、同一人物のワイリーが解明できないはずがないということ

だ。至極簡単な下らない理論である。
　そしてワイリーの言葉が正しいのなら、彼はすでに極秘裏にゼロを開発した事になる。つまりそれが全てのレギオンのプロトタイプという訳だ。やはりリフレインのかつての疑問は正しかった。レギオンは地球で作られていた。そうだったのだ。
　そして消え入りそうなホログラムのワイリーは最後の道を示してやる。偶然にもウォーロックの干渉によって、事態は一変しようとしていた。

《研究所の隠し通路を通っていけば、コールドスリープした我が息子ゼロに会いに行ける……。ナンバーズレギオンの設計図も残してある……。そしてワシの分身の対処法も記しておいた……世界をヤツの好きにはさせるな……ゼロはワシの最後の足掻き……あとは頼む……ぞ。ロック……》

　ワイリーが言った通り、アルバルームの奥に隠し通路が現れた。
　しかしこの語り口からして、ワイリーは全てを予期していたのだろう。いつか友の忘れ形見であるウォーロックがここに来ることを。それを含めてゼロプロジェクトなのかもしれなかった。
　しかしこの隠し通路、見た目からして相当の技術レベルであると思われる。ノイズウェーブのように空間干渉型の出入り口だった。入口こそアルバルームの壁いっぱいに広がる大きさだが、中に入ればどうなるか分からない。
　突然の出来事にスバル達は尻込みするが、リフレインだけは祖先のメッセージに鳥肌を立てていた。そしてスバル達に奥に進むように言った。科学者としての性なのか、興奮を隠し切れていない。

「感謝するぞウォーロック。やはり君には敵わないな……！　さあ、奥に行くぞ。ワイリー博士の残した作品に会いに行こう……！」

しかし勇み足がちなリフレインにスバルが疑問を呈する。そもそもここに来たのはきずなクルーを助ける手がかりを求めてだった。もちろんリフレインが対レギオン用の研究を進めたいのは分かるが、スバルにとっては大吾の方が大きな問題だ。

それにワイリーが残した作品がゼロだとすると、エデンで見たインフィニットとワイリーから鑑みると、ゼロとインフィニットは同一となる。つまり危険すぎるのだ。コールドスリープと言っても、二百年前のものだ当てにはならない。

その危険性を危惧して、ワイリーもわざわざ空間干渉型の出入り口を設置したのだとスバルは主張した。しかし今までの疑問を全て解決できる答えが目の前にある以上、リフレインは止まらない。いや、止まる訳にはいかないのだろう。彼はワイリーの子孫だから、ゼロに想う所があるのかもしれない。

「ちょっと、博士。この中はきっと危険ですよ！　きっとゼロってやつがインフィニットに違いない。エデンであの二人を見ていたから、よく分かる！」

しかしソロがメンバーにいたことが運の尽きだ。彼はスバルの意見を却下した。それに彼は本能的にこの先に危険がない事を感じているのだろう。インフィニットのように恐ろしい周波数は穴から感じられない。

「俺は中に入る。大丈夫、中からおかしな周波数は感じない」

するとウォーロックもだ。彼がこの事態に陥った張本人なのに呑気なものだった。

「ま、今回ばかりはソロに賛成だな。とくに嫌な周波数は感じねーし、なにより敵の設計図があるのはありがたいことじゃねーか。ジ

ジイさまさまだぜ！」

そうなると穏健派はスバルとエリアだけになる、レギオンについて興味がある方と、きずなクルーについて興味がある方に綺麗に分かれた。スバルとしてはエリアだけは味方につけておかないと、気味の悪い通路を通ってしまうことになる。スバルは基本的にレギオンが苦手だった。彼らが絡んだものにはほとんど苦い思い出が付いて回っていた。

「おいおい、なんでそんなに不用心なんだよ?!」

「バッカおめえ、オメエがビビりなだけだろ？　いざって時は変身すりゃいいし、ソロもいるしで大丈夫だ！」

「バカ！　ゼロがインフィニットってことが分かってないのか……？」

「お前こそバカか？　ワイリーが言うにはゼロは仲間って感じだったぜ！」

スバルは楽観的なウォーロックに呆れてしまっている。仮に彼の言うようにゼロが仲間だとすれば、これほど頼りになる者はいないが、逆だとすればインフィニットが二体に増えることと同じだった。最悪すぎる。

無理をして穴にはいるよりもワイリー研究所できずなクルーを助ける算段でも立てていた方が建設的だ。

しかしエリアがとうとうスバル側からリフレイン側に寝返った。エチケットまみれになった彼女に優しくしたスバルの恩は仇で返された。

「ねえ、スバル。やっぱり行ってみようよ。レギオンの設計図が手に入れば、これからの戦いがグッと楽になるじゃない？」

「エリアさん……それはそうだけど……もしもの時にキミと博士を

守れる気がしない」

スバルもエリアの良い分には納得できるが、それでもゼロに会いに行くのが怖い。残された時間は三カ月もない。ここで一気に形勢逆転を狙いたい気持ちもあるが、インフィニットの存在が怖すぎた。彼の中ではメシアとは程遠く、圧倒的な力で絶望を振りまく破壊の権化でしかなかった。

するとカペルだった。彼はここに来るまでずっと黙っていたが、彼は光熱斗と伊集院炎山の思いがインプットされている。そこにワイリーが絡んでくれれば、出しゃばってしまうのだろう。

『大丈夫です。お嬢様は私が守ります。リフレイン博士もワイリー博士を信じて覚悟していることでしょう。行って後悔するよりも、行かなくて後悔する確率が高いと思われます』

一か八か、ゼロに会いに行く。それでレギオン達に立ち向かう術が出来るのなら……

「ふう……まったく。イヤになるね。どうなっても知らないからね」

スバルはやれやれと肩を落として、前向きな仲間たちに付いていくことにする。

ウォーロックの存在からゼロへの足がかりが出来てしまったが、それがどう転がるかは神のみぞ知るところだろう。

通路の中は隠しているというよりも、絶対に見つけられないように埋めてしまっているという感じだった。どこまでも地下に潜っていく。それでも中には切れかけの明かりがチカチカと瞬いているので、視界に困ることはない。閉塞感さえ我慢していれば、なんとか進むことができる。

ただエリアは基本的に足を引っ張る約があるので、秘密の通路内でも一行の足取りを乱していた。これではソロの言う通りで、家でぬくぬくとしていた方が彼女のためかもしれない。エリアは地面に手を突いて、しゃがみこんだ。傾斜のある通路が大変らしく、ゼロとの対面の前にエリアの体力が底を尽いた。

「はあ、疲れちゃった。もう、歩けないー……」

「チッ、足でまといが……置いていく。一人で大人しく待ってるんだな」

ソロはエリアが嫌いなので、シッシッと手で払って先に進んでしまう。しかしそれではエリアがあまりにも不憫なので、スバルが手を貸してやった。彼はウォーロックを呼びつけて、エリアをおぶるように言ったのだ。もちろんウォーロックは渋った。

「イヤだね。こんなヤツ、ここで待っとけばいいんだ。コレは遠足じゃねーんだ」

「でもさ、例えば……。例えばだよ、ロック」

エリアが冗談にならないくらいの嫌われ者となっているので、スバルは見ていられなくなった。なので彼女の肩を持って、現実主義のウォーロックを諭す。

「もしお父さんを助けたいと思って、こんな危険な場所まで女の子がついてきたのだとすれば、それを放っておくのはどうなんだろう。エリアさんは僕と境遇が似ているんだ……ほっとけないよ」

スバルとエリアは共にきずなクルーを父に持っていた。助けたいという思いは強いはず。そういった似通った境遇からスバルはエリアに対して優しく接するようにしていた。

まったくスバルには敵わない。ここまで言われて見捨てたらウォーロックが鬼畜になってしまう。彼は舌打ちすると、エリアの首根っこを捕まえて、自分の肩に乗せた。彼はおんぶという柄ではないので肩車らしい。彼なりのこだわりなのだろう。

「チッ、しょうがねえな。俺がイイ奴で良かったな。殻オンナ！」
「か、殻オンナじゃないもん……エリアだもん」
「よしよし、仲良くね」

スバルはホッと一息ついて、リフレインの後に続く。

それからしばらくが経ち、スバル達はゼロが眠っているスリープルームにようやく到着した。ここまで相当な道のりだった。地殻のずいぶん深い所まで来たことだろう。よほどワイリーはゼロの存在を隠したかったようだ。地球の奥深い所に隠す辺りに、その用意周

到さがうかがえた。
とにかく先を急ぐので部屋に入る一行。するとそこは流石のコールドスリープでひんやりとした空気が立ち込めていた。ここに来るまでの閉塞的かつじめじめとした空気と比べて心地よくすらあった。
エリアはウォーロックに降ろしてもらうと伸びをする。それからスリープルームを見渡す。二百年間もずっとほったらかしにされていたわりには整っている印象だ。空調を始めとした、制御用の機械は生きている。奇跡的とは言えるが、ワイリーの事なのでこれぐらいでは驚く必要はないだろう。
そして肝心なゼロが眠っているコールドカプセルが部屋の奥で棺桶のように横たわっていることが確認できた。スバル達はそのカプセルに駆け寄って、中身を確認する。

「へえ、これがゼロか……」

感心するスバルをよそにリフレインがさっそくカプセルの製造年月と言った情報を探り始める。さすが科学者だけあって機械類には強いらしく、手際よくカプセルに設置されたキーボードにコードを入力していく。どうやら一族だけがしっているシークレットコードらしい。

「おそらくこれで……セキュリティは解除できるはず」

リフレインは真剣な眼差しでコードを打っていく。彼だってゼロプロジェクトを追い、エクスフレームを開発した天才だ。ワイリーの施したセキュリティでも突破できるはず。
一同が見守る中、リフレインは最後に人差し指で弾くようにキーボードのエンターを押す。

《コードを確認しました。ゼロプロジェクトの管理者として認めま

す。システムをフリーに解放しました》
「よし……成功だ」
セキュリティを突破すればこっちのものだとリフレインはカプセルから次から次へと情報を引き抜いていく。
すると貴重な情報が次から次へと出てくるのだった。
「このカプセルは２０２Ｘ年ごろからスリープ状態なのか……。中身のコードはラストワイリーナンバー……ゼロで間違いない」
リフレインはブツブツとゼロの興味深いスペックにすっかり魅せられている。
スバルも期待と不安を胸にゼロを覗きこむが、予想よりもインフィニットに似ていなかった。彼は大人のような背格好だが、セロは子供のような姿だった。良くて十代半ばといったところか。それでも赤いボディや長い金髪などインフィニットの特徴と一致する部分は多い。
「思ったより怖くないな。それにしても死んだように眠っているな」
興味深そうにスバルはゼロを見つめる。するとリフレインが引き抜いた情報をまとめてスバル達に教えてやった。
「ふむ……。どうやらゼロはレギオンのプロトタイプで間違いなさそうだ。識別型はレプリカントアンドロイドと判明した。プロトゼロフレームを主にしてメカニカルな部分に電波情報を組み込んだ、擬似電波生命体だな」
ワイリーの技術力に驚きが隠せないも、リフレインは続けた。どうやらインフィニットもゼロと同型で、純粋なレギオンと言うより

もレプリカントアンドロイドの系譜と推測したらしい。この二体はプロトタイプで後のレギオンシリーズに繋がっていく。このことからレギオンはラストワイリーナンバーズの改良量産型と言えた。

しかし約二百年前にすでに人工電波生命体を完成させていたワイリーは恐るべきという他ない。リフレインも天才だが、エクスフレームという生命依存型の機械骨格しか作れなかった。独立して電波と調和しあう機械骨格のゼロフレームを作りだしたワイリーは人智を超えているとしか言えない。

リフレインは身震いしている。

「しかし驚いたな。ワイリー博士は一体どれほどの天才だったんだ……。時代がもしワイリー博士を認めていたら、今のような電波社会よりもロボット社会が究極的に発展していたにちがいない」

そのようにリフレインが興奮気味にゼロの存在に歓喜していると、以外にもソロが話に入ってきた。普段ならこういう小難しい話にはスバルが興味を示すのだが、彼自身ワイリーに因縁があるので、今回は別らしい。ソロは独自にワイリーについて調べ上げた事を口に出す。

ソロは知っていたのだ。ワイリーが二百年前すでにレプリカントアンドロイドなる技術を匂わせていたことに。きっとワイリーは電脳から現実世界に技術の活躍の遷移を夢見ていたに違いない。

「何も驚くことはない。二百年前、ワイリーはコピーロイドとかいうロボットを完成させていた。たしかアイリスとかいうＯＳを積ませていたな。あげく電脳獣とかいうＯＳもインストールして世界を征服しようとした。……二百年前の時点でワイリーはすでにロボット技術を完成させていたんだよ」

以外にも博識なソロにスバルは拍手してしまう。学校にも行って

いないのに、小賢しいものだ。

「へえ、すごいねソロ。学校にも行ってないのに、賢いね」

「フン……学校でしか勉強が出来ないという、認識がすでに間違っているんだよ、お前は」

ソロのもっともな言い分にスバルは舌を巻いた。しかし言い合っていても仕方がないのでエリアが眠っているゼロをどうするのかリフレインに尋ねる。今でこそ眠っているが、無理やり起こして危険がないとは言い切れない。ここはカプセルごと地上に引き揚げるのが得策かもしれない。

リフレインはすでにそういった可能性を承知しているようで、まずレギオンの設計図から探すことを提案する。

「そうだな、このカプセルのスリープ解除予定はあと百年後だが……どうしたものか。まあ、とにかくカプセルは置いといて、レギオンの設計図を探そう。床に散らばっている紙切れにも注意して探してくれ」

スバル達は散開してワイリーが残したレギオンの設計図を探し始める。空き巣みたいな光景だが、リフレインは親戚なので問題ない。一番怪しいのは壁際の机だろうか。あせた紙が卓上に広がっているし、引出しからも設計図らしきものがはみ出している。

そしてその予想は正解でスバルが一番にレギオンの設計図を見つけた。

「あったよ、みんな。レギオンの設計図だ！　ゼロプロジェクト実行体、ナンバーズレギオンって書いてるよ」

すぐにリフレインがスバルからその紙を受け取り、食い入るよう

に読み始める。どうやらゼロプロジェクトについて、それぞれの役割をレギオンに振っていたらしい。そういったものが詳細な設計データとともに記されていた。

リフレインは記載された内容を読み上げる。

「セロプロジェクト計画予定。

ゼロステージ。プロトタイプのゼロを完成……。型番はインフィニット……。

ファーストステージ。量産型レギオンの完成。役割は人類のデータ処理。型番はヘラを代表……。

セカンドステージ。空間干渉型レギオンの完成。役割は広範囲における人類管理。型番はプルートを代表……。

サードステージ。恒星監視型レギオンの完成。役割はエデンによる人類の一括管理。型番はサンを代表……。

フォーステージ。選別用レギオンの完成。役割は管理データに基づく劣悪人類の処理。型番はセヴティを代表……。

ラストステージ。扉開閉用レギオンの完成。役割は……駄目だ。読めなくなっている」

ラストステージの詳細こそは分からなかったが、これで大きな手掛かりが手に入った。そして圧倒的なアドバンテージも手に入る。ワイリー博士が解明したレギオンの詳細なスペックに至るまでの設計図が手に入ったのだ。これでこれからの戦いをより有利に進めることができるだろう。戦闘補助ＰＧＭも性能が格段に上がることが期待できる。

ワイリー研究所でスバル達は、真実に一歩近づく。その一歩には大きな意味が込められていた。

ｓｂｒ―１４：完成、ルナのお城！　ルナルナ団本部！！

それからスバル達は三日間ほどスリープルームに留まって、ワイリーの残した資料を調べ続けていた。途中、ＷＡＸＡの職員も引き入れての気の遠くなる作業だった。それもそのはずワイリーは死の直前にこの場所に全てのデータを残していたらしく、とても数日のうちにはまとめられそうもなかったのだ。天才であるリフレインも苦戦しているようで、一言もしゃべらずワイリーの残したメッセージと向かいあっている。。どうやらワイリーは二百年後でも十分最先端をいく天才だったらしい。

そして現在、ゼロの入ったカプセルが搬出班によって地上に上げられようとしているところだ。大人が数人カプセルに寄って、大層な機械にカプセルを引っ張らせていく。

スバルもそろそろ外に出なくてはならないだろう。彼は少々気が引けるも、夢中になってワイリーの遺産の解読に耽っているリフレインに歩み寄った。大人連中が出張ってきた今、スバルの出番はもうなさそうだ。もっと調べてみたい事はあるが、ここから先は専門家に任せた方が良い。

「あの、博士、そろそろ地上に戻りませんか？　素人の僕じゃこれ以上調べても意味がなさそうです」

「そうか。そう言えば、もう一日以上もここにいるか……」

「二日ですよ、博士」

「はは、時間が経つのも忘れてたようだ。じゃあ、そろそろ私も切り上げるとしようか」

リフレインは気恥ずかしそうに頭を掻いたかと思うと、いそいそと紙媒体のデータをまとめ始めた。その背中は嬉しそうで、今回の収穫が彼にとって大きなものなのだと感じさせた。

もちろん、スバル達にも収穫はあった。レギオンについて知ることができたのだ。彼らはプロジェクトＴＣのウィザードみたく、ナンバリングされたワイリーナンバーズだった。そして何よりウォーセヴティの概要について知ることができたのだ。データによると彼はフォーススステージのレギオンで、人類の選別をする為に生まれてきたらしい。おそらくデューオの言っていたエックスデーに彼と再び会いまみえることになるだろう。あの日こそが選別の日とデューオは語っていたのだから、ウォーセヴティが現れない理由がない。

そういった点からスバルの決意は満ちるも、それと同時に彼がウォーロックとなぜ似ているのか分からず妙な不安に駆られる。それでも彼らの目的が分かり、これからの展開に対処が出来る。

それにウォーセヴティと一緒にいたヴィーナスもフォーススステージであることが予想でき、彼らの特徴も判然とした。獲得したデータから彼らは優良人類用に調整されており、そういった要素からあの恐ろしい戦闘能力を実現していることが記されていた。この場合、優良人類とはきずなクルーの事を指していると考えられる。用はきずなクルーの力を十分発揮できるレギオンと言ったところだ。

結局大吾達を取り戻すためには、ウォーセヴティ達を倒さなければならないということである。あと三カ月ほどでそれほどまでに力をつけなければならないことを意味していた。

圧倒的な力で立ち塞がるウォーセヴティ達。彼らにに対してスバルとエリアは、父親を助けるために強くなろうと強く誓ったのだった。今までサードステージのレギオンを倒してきた。きっとフォーススステージのレギオンも倒せるはずだ。

「ウォーセヴティ、アイツが父さんを……」

するとエリアがスバルの手をとって励ます。畜生以下かと思っていたが、以外にも女の子で手が柔らかい。スバルはふっと笑い頷いた。

「がんばろうね、スバル！」
「うん！」

そうやって二人が盛り上がるが、二人っきりで頑張られてもウォーロックはつまらない。彼は久しぶりにハンターに姿を見せて、意気込んでみせる。彼もウォーセヴティには特別思う所があるらしい。あれほど似せられているのだから、無関心ではいられないのかもしれない。痛めつけてやって、洗いざらいウォーセヴティに謎である部分を吐かせたいのだろう。それだけウォーロックは自分と言うものを理解できていないのだ。その点はソロと同じと言えた。

『おいおい、お二人さん。オメエら二人じゃ無理だろうから、俺も一緒に暴れてやるぜ！　ていうか、あのウォーセヴティとかいうヤツ、気味が悪いからな……確実に仕留めておかねえと』
「そうだよね、お兄ちゃん？」
『チッ、バカにするなよ。スバル！』
「ハハハ、ごめんごめん」
『へへ……だがよ。ここに来てからじゃ、俺達がロックマンになったのも何か運命を感じるな……。どうやらロックマンは人類を評価するためのサンプルみてーじゃねえか』
「ロマンチストな君はお呼びじゃないよ。それにそういうのも全部ウォーセヴティやワイリー博士を倒せば分かると思うよ。君はいつものように暴れればいいんだよ」
『へん……オメエに慰められるとはな、まあロックマンが何者であろうと、俺達は俺達だ。それに間違いはねえ！！』

ワイリー研究所でゼロと出会い、隠された真相の一片に触れ、自分たちの目的を確かなものにしていくリフレイン、スバル、エリア。そしてソロもようやく自分のするべきことを見つけたらしく一人離れたところで佇んでいた。彼はだワイリーが残したゼロプロジェクトの資料から、自分――デコイがするべき役割を確認した。どうやらデコイはレギオンと同じでゼロプロジェクトには欠かせない存在らしい。

デコイというものはロックマンを舞台という場所に上がらせるために導く存在。具体的にはロックマンと共に強くなっていく存在だ。その計画の前篇ではセツナがそれを務めて、後篇ではソロが務める手はずとなっている。

ソロはずっと感じていた胸のつかえの正体をはっきりさせて、談笑しているスバルの方を見やる。やはりスバルを監視する必要があるらしい。一緒に暮らす事を選択して正解だったと感じていることだろう。神を倒すためにはまず舞台に上がらなければならない。そのためにならピエロを演じるのも仕方がない。

ソロは自分のプライドを捨ててでも目的を達せうすることの大切さを前回の任務で学んだ。ファースト・ワイリーとインフィニットを相手にするには、なりふり構っていては倒せないと感じてしまっている。それに、自分の過去と秘密をさらけ出し全身全霊で戦ったセツナの姿から教えてもらっていた。

「さて……俺も強くならないとな……あと三カ月……必ず舞台に上がってみせる」

リフレインはゼロプロジェクトの阻止、スバルとエリアはきずなクルー救出のための打倒フォースステージ、ソロは神への挑戦権を得るためにロックマンと共に力を蓄える……それぞれの決意を固めて、彼らはワイリー研究所を後にした。

ひとまずスバルとソロは家に帰り、エリアは月に戻ってリカとともに今回のデータから新型ＰＧＭの開発に乗り出す。リフレインも引き続きワイリー研究所にとどまって、ゼロプロジェクト解読本部をゼロプロジェクト対策本部に改めて、来る日に備え始める。

タイムリミットまであと１００日。

ワイリー研究所に向かったスバル達が星河家に戻ってきたのはそれから一週間後の事だった。スバルはあかねに色々と話したいことが出来たが、まずミソラの頑張りに驚かせることとなる。

どうやら彼女はスバルの言いつけを守って毎朝空き缶拾いを頑張っていたらしい。その数百万本……明らかに異常な本数で、きっと電波変換を駆使して世界中から空き缶をかき集めたとうかがえる。少々シュールな光景を思わせられるが、乙女の執念にスバルは確かな恐怖を覚えた。千本でほっぺたにキスだとしたら百万本だと何をされるかわかったものではない。少なくともキスの千倍はマズイことを要求されそうだ。小学生のスバルではそれには答えることはとうてい不可能だった。

なのでスバルはすぐさま自室に逃げ込む。ミソラが何か言いだす前に自分のテリトリーに逃げてしまわないといけない。こういう時の彼の反応速度はロックマンにも迫るのでさすがのスバルと言えた。

「じゃ、僕はこれで！」

世界にも通用する速さで階段を駆けあがるスバル。そして飛び込むように自室に逃げ込むと、彼は今度愕然とした。彼は一週間前ミソラにきつく当たったが、そんなことを後悔させられる。ミソラはどこまでも本気だった。秘密基地ことＷＡＸＡスバルの部屋支部は

明らかに巨大化していたのだ。むしろスバルの家本体がおまけみたいになっている始末だ。家の裏にある広々とした草原はＷＡＸＡ本部ほどではないにしても、ルナの住んでいる高級マンションに匹敵する立派さとなっていて威圧的だ。ミソラもそうだが宇田海も頑張りすぎだった。

「な、何だこれ……ちょっとしたもう秘密でも何でもない、ただの基地だ……」

スバルがわなわなと震えていると、部屋に今までなかったハッチ式の扉が開き、そこから宇田海が現れた。どうやら新しく設置されたこの扉は連絡橋を介してＷＡＸＡスバルの部屋支部とスバルの部屋を繋いでいる。無駄に本格的な仕様にスバルは肩から力が抜けていった。だが挨拶はしておく。勝手に部屋に入ってくる宇田海には、少し呆れるが放っておくしかない。

「こんにちは、宇田海さん」
「こんにちはスバル君」
「それにしても……凄いことになりましたね……」
「ハハハ、ミソラちゃんがすこぶる頑張ってくれましたからね！あとは委員長さんたちも頑張ってくれました！」

委員長という単語にスバルは嫌な予感を覚える。今日は学校が休みでいつどこからルナ達が出てくるか分からない。そして噂をすれば影でハッチからルナ達が現れた。キザマロとゴン太もおり、おまけにカノンとツカサとジャックまでいる。ついでにクインティアまでいた。大層な面子の登場にスバルはここが自分の部屋とはもはや分からなくなってくる。

「うわー……またぞろぞろと来たものだね。委員長君は一体どうし

てここに？」
「フフ、私も空き缶拾いをしてやったのよ！　その数、一万本！！」
「ゲッ……」

ミソラほどではないがこの数も大変危険だった。
するとゴン太が止めを刺す。彼を忘れては話しにならないだろう。

「俺様は千万本だ！！　お前のほっぺを一万回も狙える資格を持っている！！　どうだ凄いだろう？」

ゴン太の投げキッスが殺人的な挙動だったので、スバルは膝から崩れてうなだれた。ここにいては身が持たないと直感していることだろう。
しかしミソラ以上に頑張りを見せたゴン太が解せない。一体彼の何が千万という異常な数字を叩きだしたのだろうか。彼はきっと世界中にとどまらず、ノイズウェーブを介して宇宙中から空き缶を集めたに違いない。もはや気味が悪いレベルだ。
スバルは悲鳴を上げた。

「クッ、もういやだ。家に帰りたいよ……！」
『スバル、ここはお前の部屋だ』
「絶望を禁じえないね……」

ウォーロックの冷静な状況分析にスバルが身震いしていると、ルナがとうとう真実を突きつけた。これによってスバルのプライベートルームがなくなってしまう。

「あ、そうそうスバル君。あらかじめ言っとくけど、この秘密基地……今日からルナルナ団のの本部だからっ」

スバルは驚きのあまり飛び上がってそのまま二回も捻りを入れて綺麗に着地してしまう。クインティアとカノンがパチパチと拍手をくれるが、そんなことはどうでもいい。

スバルは着地点から一歩も動かないままルナを見上げて固まる。

「え、今なんて……？」

「だーかーらールナルナ団の本部になるの！　お分かり？」

「まさか……悪い夢だ」

「現実よ！　ちなみにスバル君の部屋に監視カメラを設置しておいたからね。アナタが部屋で何をしていようと、私に瞬時に伝わるってワケ！　これでいつでもルナルナ団として活躍できるわね、よかったわねスバル君！」

「ヨクないヨ……それジャ、ボクはナニもできない」

あまりのショックでスバルが片言になってしまう。このままではスバルが日本人ではなくなってしまうだろう。

するとルナが頬を染めながら、釘を刺してくる。もうスバルは考える事をやめた。ルナとスバルの間では圧倒的なまでの温度差がある。

「言っとくけどね……！　ミソラちゃんと一緒に住むからってミソラちゃんにヘンな事してもすぐに分かるんだからね！！」

「……ハハ、面白いね君」

『駄目だ！　スバルが考える事をやめて悟りを開いちまった。まるで賢者だぜ……！　こうなったスバルは誰にも止めれねー！』

スバルは悟りを開いてしまったが、ルナはお構いなしだ。新体制となったルナルナ団の新しいメンバー紹介を始め出す。呑気な様子だが、スバルにとっては深刻な問題といえる。メンバー紹介なのでハッチから続々と新しい仲間が出てくるのだ。

ぞろぞろと大挙して押しかけてくるので、ルナはリーダーシップを惜しげもなく発揮して楽しそうだった。

「じゃ、新メンバーはさっさと自己紹介しちゃって！　これからいろいろとお世話になる、スバル君の部屋の主に挨拶してちょうだい」

「お世話になるって……だれも世話する気は……」

「はい、そこ黙る！　挨拶は黙って聞きましょう！！」

「は、はい……スミマセンでした」

スバルがシュンとすると、ジャックとクインティアの姉弟が最初に自己紹介を始める。どうやら新しい住処をルナルナ団本部に移すらしい。新しい隣人にスバルは苦笑した。

「では、リーダーの紹介に預かりましたクインティアです。ルナルナ団における役割は“学校では教えてくれないことを教える先生”と言ったところでしょうか。よろしくお願いしますねスバル君。寝床は本部の方で満足しますが、お食事にはたまにお呼ばれになっちゃうかも……」

「よ、よろしくお願いします……」

ルナの考えた設定にちゃんと合わせてあげている大人なクインティアにスバルは思わず感心してしまう。止めにお淑やかな笑みを向けられれば、文句は出てこなかった。お姫様が隣人だとスバルもきっと捗るだろう。次は柄の悪い王子様なジャックだ。彼は柄こそ悪くて、ゴロツキみたいな見た目をしているが王子様だ。偉いのだ。

「さてー、次は俺の出番か。姉ちゃんと一緒に本部で世話になるジャックだ。ヨロシクだぜ。あとルナルナ団だっけか？　そこでの役割は戦術的な空き缶拾いを提案する……つまり“空き缶プランナー”だ。ソロ隊長の元、本部の維持管理を任された大事な役目なんだ

ぜ」

「は、はあ……よろしくお願いします」

空き缶プランナー……魅力的な仕事だとは思うスバルだが、その一方で何かがずれていると考える。基本的にルナルナ団本部の運営は空き缶拾いで行われるらしい。奇抜な発想だが、環境には良いので文句はやはり出てこない。そして何気にソロもルナルナ団に加入していることが判明して、驚いてしまう。

そしてツカサ、尾上、宇田海、天地、デン助、ヨイリー他多数の自己紹介が終わり、一段落する。どうやらデン助とヨイリーがルナルナ団に入っているあたり、スバルの家の裏にここまで大がかりな施設を作ることは最初から織り込み済みだったようだ。空き缶拾いというのも、子供だましの名目なのだろう。

ヨイリーとデン助としては、なるべく近くでロックマンとブライを監視する施設が欲しかっただけかもしれない。それがワイリー研究所で得たデータからの判断だ。それならばスバルの部屋に監視カメラがあるのも納得だ。ただルナとしては別の意味が大きいことは容易にうかがえた。

とにかく激変した状況にスバルは混乱してしまう。一週間ぶりに家に帰ったらこのようになってしまったのだから無理はないだろう。

ルナルナ団本部という名のロックマン監視体制……そして明らかになったレギオンの正体と、謎に包まれたゼロの存在、様々なところで運命の日に向かって準備が進んでいく。

ｓｂｒ―１５：ダメ、ゼッタイ！！　アブナイ手術！

日曜日の朝、スバル達はルナルナ団本部の訓練場でジョニーとレベッカと一緒になって特訓をしていた。新ルナルナ団の誕生したあの後、リフレインから通達があったのだ。それは世界中の軍事、警察組織に対して、来る日に備えて力を蓄えておけという内容の至上命令だった。

軍事組織は基本的にレギオンに対して有効な兵器の開発だが、サテラポリスは電波人間を数多く要するので、個々の戦闘能力の上昇が当面の目標となっている。

そのため実力者であるジョニーとレベッカにロックマンとブライの戦闘訓練を行うという白羽の矢が立ったという訳だ。そうなるとルナルナ団本部が家の裏にあるので、訓練を行うには便利なものだ。デン助とヨイリーの計画通りの結果といえる。そのため訓練も捗っているらしい。

訓練場でキリン・ライトニングとブラッド・ホープは二人に向かって基本的な周波数変換術の指南をしている。応用も大切だが、基本はもっと大切ということだ。どんなに力のさがあろうとも基本が出来ていれば勝機は零ではない。それはロックマンがサン・ゴッドと戦った時に彼自身良く分かっていた。圧倒的実力差があろうとも、ほんのわずかではあるがダメージを与えることが出来たのだ。

きずなクルーはそういった技のコツを教えていく。素質としては二人とも大したものだが、まだまだ電波変換を完璧にこなしている訳ではない。特にブライは酷くて、今まで周波数変換をまともに使っていなかった。これでよく今まで戦って来れたというのが、キリ

ン・ライトニング達の正直な気持ちだろう。
キリン・ライトニングはまずブライに自分の周波数を体で感じるように言う。これが一番最初のステップだ。これができないと何もできない。

「じゃあ、ブライ。言われたとおりにやってみろ」
「ふん、小細工なんて……」
「いいから、やってみな。実力じゃまだこっちのが上なんだから言うこと聞け！」
「……チッ」

ブライは素直でないが、キリン・ライトニングの実力は認めており確かにまだ彼の方が強いと感じている。渋々言われたとおりに、目を閉じて集中する。
しかしブライは単独で電波変換しているので、今までとくに周波数を感じることもなく直感で戦っていた。なので自分の周波数を認識することがとても困難だった。例えば心臓の鼓動を意識して止められないのと同じように、ごく当たり前のものとして体が認識している。つまり考えてどうにかできる状態ではない。
ブライは首を振った。

「分からない……なにも感じない」
「はあー……お前よくそれで今までやってこれたな」
「右腕の炎が俺の感情に呼応して、強くも弱くもなった。それだけで十分戦えていた。だから俺は環境周波数なら感じられるが、自分のものは感じられない」
「戦えていたってことは、今はそうでもないってことだな？」
「ああ、客観的に見て今の俺の実力はセカンドからサードステージレギオンの中間くらいの力だ。インフィニットは別としても、フォースステージを相手にするのは心もとない」

ブライはエデンで出会ったウォーセヴティとヴィーナスに委縮してしまった自分を思い出して、表情を強張らせる。動けなかった自分が情けなくて仕方がなかった。

キリン・ライトニングもフォースステージの強さを目の当たりにしており、今の地球の電波人間の誰一人も勝てないと認識している。フェニックス・リボンやソウル・レイダーでかろうじで相手になるといったレベルなのだ。その二人も今はもういない。残された時間で強くなるしか方法は残されていない。

するとキリン・ライトニングはある事を思いついた。なぜ自分なここまで電波変換がうまくなったのかという事を逆に考えたのだ。そうなると彼はウォーロックに向かって呼び掛ける。

ウォーロックはかつてきずなクルーを電波化して助けたことがある。そのおかげでジョニーもレベッカも異常なまでの力を手に入れることが出来たのだ。

時間がないので、正攻法で攻めても仕方がない。ブライにとっては荒療治だが、それもやむなしだ。

「おい、ウォーロック。お前、俺達にやったアレやってくれよ。人間を電波化するやつ」

『なに言ってやがる……アレは正直お勧めできねえ。あの時は時間がなかったからやったが、本来なら人間に使うもんじゃねえよ。たまたまお前ら全員が特別な訓練をした宇宙飛行士だったから成功しただけだ。それ以外の人間……ましてや体の出来てない子供に使ったら死んじまう』

ウォーロックの能力も完璧ではないようだ。それが出来るのなら最初からしているはずだ。選ばれた特別な人間……つまり宇宙空間での活動を視野に入れてデザインされた人間こときずなクルーだから耐えられたというだけのことだ。世界中探してもきずなクルー以

外では命の保証は出来ない。
　そんなウォーロックの懸念だったが、キリン・ライトニングは食い下がった。彼は今までソロの様子を見てきて、確信した事があったのだ。単独での電波化に、ノイズウェーブ空間でも生存できる生命力。それら全てはきずなクルーにも匹敵する条件である。そういった要素からウォーロックの電波化による電波変換最適化にもソロなら耐えられると踏んでいた。
　これが成功すればソロならきずなクルーを必ず越えてくる。おそらくはワタルさえも超えるはずだ。やってみる価値はある。

「ウォーロック。今さらだがソロは普通の人間じゃない。やってみる価値はあるんじゃないのか？　子供って事を置いといても、素材としてはきずなクルーよりも可能性があるはずだ」

　キリン・ライトニングの言うことも一理があるので、ウォーロックは実体化してブライを見定めるように、じっと眺める。
　するとロックマンがウォーロックに質問する。前々から気になっていたことだ。

「ねえロック。前から気になっていたんだけど、その人間を電波化する力って何なの？」
「知らん。気付いたら使えるようになっていた」
「知らんって……。でもさ、その力がどんな人にも使えるとしたら凄いよね。人間の新たな可能性を感じさせるよ。事実いままで戦ったきずなクルーは人間を越えてたしね」
「チッ、呑気なヤツだ。あいにく俺はこの力が好きじゃねえんだよ。小さいころ、周りのヤツらは俺のこの力を気味悪がってたからな」
「人間を進化させる力なのに？」
「ＦＭ星人やＡＭ星人から見たらそれはただの異常なんだろうよ」

ウォーロックはやれやれと肩を竦めると、今度はソロに問う。彼としてはソロが他人の力に頼ってまで強くなりたいのかどうかは疑問であった。それに危険があることに変わりはない。きずなクルーでさえ四年もかけて鳴らしてきた電波変換の最適化というステップを、一気にしてしまうのだ。素材の良し悪しの影響以上に危険性が爆発的に高まる。

「で、ソロよ。俺の電波化の力を受けてみたいのか？　ジョニーはああ言うが、決めるのは本人だ。言っておくがやるなら加減するつもりはねえし、もちろんそうなると身の保証はできない」

「……望むところだ。俺もちょうど手っ取り早く強くなりたいと思ってたところだからな」

「へえ、意外と素直だな」

「ロック、ソロは最近素直なんだよ」

ウォーロックは虚をつかれたようだが、対照的にロックマンは変わり始めたソロを知っていたので、別段驚いてはいない。彼はソロの静かな決意を汲んでやる他ない。

自分さえも分からずに生まれてきたソロのことだ。決して生半可な覚悟でこれから先の世界を生きていくつもりはないだろう。ウォーロックとソロは少し境遇が似ているので、多くは語る必要もないはず。

ウォーロックはこくりと頷いた。

「……よし、なら俺からは何も言わない。じゃ、ジョニーとレベッカさん、場所を変えさせてもらうぜ。もしもの時ここじゃ助からねーからな」

「うん、わかったわ。じゃあアタシに付いてきて、オペ室へ案内するわ」

ブラッド・ホープが電波変換を解いて、ルナルナ団本部のオペ室へ案内してくれる。

さすがに空き缶千万本超の手間暇がかかった施設だけあって、訓練場同様オペ室も大層なものだ。ここならいきなり心肺停止起こしても難なく助かるだろう。それだけ最新設備が整っている。おしゃれな居住空間を装ったハイテクな医療の現場だった。スバルの家の裏に立っているのがもったいないとしか言えない。

ウォーロックはそれら機械類を見繕いながら、天井を仰いで目をぱちくりさせる。どうやら先日の任務を思い出してしまい感極まってしまったらしい。しかし男の涙は見せ物ではないので、目薬代わりにしていた。

ある程度治まったところで、ウォーロックは部屋の真ん中にある手術台にソロを寝かせる。ここなら申し分ないので何が起きても対処が出来る。レベッカは宇宙ステーションきずなでは衛生管理を担当していたので医者の資格を持っている。準備は万全だった。

「じゃ、始めるかソロ。ちっとびりびり来るかも知れんが耐えろよ」

ウォーロックはそう言いながら手術台の電源を入れて、ソロの身動きが取れないように拘束具でぐるぐる巻きにする。苦痛が伴うので暴れるソロを予想した簡単な対処だった。

とりあえずそろそろ始めるので、ジョニーとスバルを外に出す。いても意味がないし、あまり人に見せるものではないからだ。それと同時にレベッカはソロを裸にして細い管と太い管を穴という穴に突っ込んでいく。一見奇妙だが、生命維持装置を繋げるのに遠慮をしていてはいけない。

そうしてソロは電波の拘束具で動けなくなってしまい、かつ生命維持装置で串刺し状態になると、ウォーロックに手早く済ませるように言う。スバルだったら震えあがっているはずだが、ソロはおくびにも出さない。しかし裸なのであまり締まらない。それでもちょ

っとしたロボットのようにマニアックな武装をしているように見えなくはないので男のロマンには触れてくるのだった。

「早くしてくれ。さっさと帰って、師匠と夕飯の準備をしなければらならないからな」

「それだけ言えりゃ心配ないな。言っとくが、手加減なしで一番きついのをお見舞いするからな！」

ウォーロックはソロが黙って頷いたのを見ると、勢いよく自分の腕をソロに突っ込んだ。そうやって無理やりソロの肉体情報を書き換えていく。現在ウォーロックは電波変換をするのに不必要なデータを削除していっている。この作業は一歩間違えれば死に至る危険なものだ。生命活動に必要な肉体情報とそうでない情報のぎりぎりのラインを見極めなければいけない。ソロをより強くするために、人間を捨てさせる覚悟で臨むウォーロック。彼も真剣でまばたき一つしなかった。ソロを小さくまとめている原因を取り払うのに彼は必死なのだ。

ソロが自分の周波数をうまく感じられないのは、自分の体のどこかにセーフティラインを敷いているからだ。単独で電波変換するのには当然、単独で生身の人間に戻る作業が要求される。いつかのミライとエメリオルのやり取りであったがそれは大変な困難を伴う。つまりソロは一人で電波変換を行うために大きなハンデを背負って今まで戦っていた。シンクロ率０％などが良い例だ。今回そのセーフティラインを必要最低限までのわずかなものにまで抑え込むという訳だ。

現在ソロは緑色にチカチカと輝いて傍目には感電して苦しんでいるようにしか見えない。拘束具がなかったら激しく痙攣しており見ていられなかっただろう。それでも悲鳴がうるさくて聞くに堪えない状況だった。

「ぐ……グァアアァアッ！！」

苦しむソロだが、同じくウォーロックもソロの肉体情報に苦戦しているようだ。ただの人間ではないとは知っていたが、規格外過ぎた。一見人の形をとっているが、中身はまるで別物だった。小さな宇宙がソロの中にある。

「クソ、ソロの野郎ッ。体の中になんて化け物を飼ってやがる……！　底が見えやがらねえ」

ウォーロックは初めての経験に苦戦するが手探りで何とか情報の最適化を行っていく。今のところソロが叫び続けているのでまだ死んではいない。

「ハァ、ハァ……。もうちっと頑張れよソロ……！　これが終われば間違いなくお前は地球最強だ！！」

「グワアアアァアー！」

「チッ……喜びやがれよ！」

「ウォーロックッ、ソロ君の心肺が弱まっているわ……。もう少し丁寧にやって。言っておくけど、生命活動に必須な情報まで切ったら駄目よ」

「あいにく俺は医者じゃねーんだよ。生きるも死ぬもコイツの根性次第だ！　タマが一つなくなっても、死にゃしねー！」

「キンタマってアナタね……」

レベッカは頬を染めるがウォーロックの言うことも一理ある。玉が一つなくなってもウォーロックの言う通り生命活動には支障はない。しかし、見栄えとバランスが悪いのは事実だ。アレはああ見えて、体の重心を安定させる役割を持っているので軽くは見れない。まるでジャイロバランサーのようなものなのだから。

なので、ここはやはりレベッカの言う通り、丁寧な情報の取捨選択が要求される。何を捨てて何を取るのかはウォーロックの趣味次第だが、術後のソロが可憐な乙女であったという結末はあまり望むところではない。玉が一つでもあれば男で良いが、何もないと女になる。棒はウォーロックの趣味次第だ。しかしそれにはムーの刺青が入っているので、あまり粗末に扱うべきではないかもしれない。まあ、もの自体は粗末なので、そこまで気を配る必要はないだろう。あまり下の方に気をとられて、心臓などの重要な肉体情報を切ってしまったら笑えないからだ。

ソロは激痛からか、悲鳴とも断末魔とも取れる声を叫び上げた。あまりの苦痛に目に涙を浮かべている。おそらく切れてしまったのかもしれない。

「アゥッ、グ……ググアッー！！」

「もうちょっとの辛抱だ！　気張れよ！！」

間違いなく致命的状況のソロをウォーロックが励ます。それに応えるようにソロが叫ぶ。気張ったらそのまま昇天してしまいそうな危険な状況が続く。だが、ようやくレベッカの施した全身麻酔が効いてきたようで、ソロはうとうとと眠りだした。

プロの犯行に手術室がようやく静かになった。これでウォーロックも作業に集中できるが、ここからが本番だった。もう少しとは言ったが、人間一人を一から作り直す作業なのでかなりの時間を擁するだろう。レベッカとウォーロックの二人三脚の長い戦いが始まりを告げた。

ウォーロックが主だってソロを書き換えていく訳だが、やはり乱暴なやり方としか言えず、ソロの命を無駄に削りかねないほどだった。そこを医者であるレベッカが生命維持装置を華麗に駆使して肉体の負担を軽減させている。デコボコだが確かな連携で作業は順調に進んでいく。そんな具合に十数時間が経過していったのだ。

一方、オペ室の外で待っているジョニーとスバルはそわそわして扉の前の長椅子に腰を掛けていた。まるで出産を待つお父さんのようだ。

スバルはその重い沈黙にたまりかねてジョニーに話を振った。

「あの、ウォーロックのあれって一体どんなものなんですか？」

ウォーロックのあれ……それは肉体の電波化のことだろう。

「んー、簡単に言えば、電波情報と肉体情報をリンクさせる感じだな。俺もおかげで電波化も肉体化も自由自在だ」

「ある意味人間を越えてますよね……」

「ウォーロックってのは、不思議なヤツだからなー。アイツ自身何も考えていないようだが、アイツの正体はきっとただ者じゃない。あの力もその片鱗なんだろう」

「確かにウォーロックがいなきゃ、ワイリー博士の残したゼロの元にたどり着けなかったんだよなあ。思えば、僕ってウォーロックのこと、あんまり良く知らないんだよな……。ＦＭ星人と思ってたら実はＡＭ星人だし、そうかと思えばＡＭ星人でもないみたいだし……あげくの果てにはウォーセヴティとかいうのまで出てくるしで良く分かんないよ」

スバルは頭を抱えて掻きむしる。それを見ていたジョニーは笑い飛ばした。あまり掻きむしると頭皮に悪いし、ジョニーも歳なので生え際が来始めていたので黙って見てられない。それに理屈で友情ごっこをするのは小学生にはまだ早い。

「おいおい、あんまりやると禿げるぜ？　それにウォーロックが何者でもお前の親友には変わりはない、そうだろう？　理屈じゃねえんだよな友情ってのは」
「は、はい。そうですね、確かに理屈じゃ……ないですよね？」
「ああ、そうだとも」
「でも、ソロ大丈夫かな……」
「多分、今やってるのは、肉体情報の最適化だろうな。俺達は宇宙を彷徨いながら四年間を掛けてやったがソロは一気にやっちまおうとしている。多分、リスクはデカイ……」

　するとスバルの疑問だ。きずなクルーに対してはスバルの疑問は尽きるところはない。そもそも疑問だったのだ。ただの電波化をするだけでも十分なのに、なぜ肉体を最適化する必要があったのかと。その当時、電波変換をするつもりなどなかったはずだから解せない。トーナメントでキリン・ライトニングの相手は大変だった。

「でも、なんでジョニーさんは肉体の最適化をしようと思ったんですか……？」
「ははーん？　スバル。お前は気付いてないな？」
「え……？　気付くって何を？」
「腹が減るんだよ。腹が……。電波化って言っても、肉体情報や生命維持に必要な情報が多すぎると、腹が空いていけねえ……それに、いつまで彷徨えばいいか分からなかったからな。出来るだけ省エネにしとこうって思ったんだよ」

　思ったより下らない理由にスバルは少し声を失った。もっと格好いい理由があると思っていたのだろう。しかしきずなクルーも人間だ。何もない宇宙で生き残るためには切実な問題だった。
　ジョニーは続けた。

「そうなると自然と肉体情報を切り詰めていくことになる。例えば、物は食わねえから胃はなくても良いなとか、息もしないから肺も小さめにとかな。いろいろ思考錯誤して四年もじり貧で飲まず食わず頑張ってたってわけさ。それが結局電波変換における最大の武器になっちまってただけのことだ」

「へえー……大変だったんですね。僕もよく電波変換はするけどそんなこと考えたこともなかった……」

「そういうのは基本的に電波体の方が処理してるからな。ウォーロックもあれでいて電波変換には結構気を使ってるんだよな」

「例えば、その処理をしないとどうなるんですか？」

スバルの素朴な疑問にジョニーはくすりと笑う。シドウ辺りがよく電波変換を解いた時に股間の具合をチェックしているのを思い出したからだ。一見ふざけているようだが、かなり切実な問題だ。

「よくある事例で言えば、電波変換を解いた時にキンタマが一個なかったとかザラにあるな。酷いヤツは竿まで持って行かれてたな……。プロジェクトＴＣの最初の壁がそれだって言えば幻滅するか？」

「い、いえ！　幻滅なんてとんでもない！　どんな技術にも切実な問題があると僕は思ってますし……。僕も男だし幻滅なんてとんでもないです！！」

スバルは慌てて否定する。彼は科学のなんたるかをよく分かっているようだ。大吾の教育が良かったせいかもしれない。

しかしジョニーの例え話から、シドウの苦労が絶えなかったことがうかがえる。彼はプロジェクトＴＣにおけるパイオニアだ。人には言えない恥ずかしい悩みもたくさんあったはずだ。玉は置いとくにしても、電波変換を解くたびに体に異変が生じなかったかどうかにかなり気を割いたはずだ。もちろん電波変換用として開発された

人工ウィザードのアシッドが情報処理を専門としていたのも、そういった問題を解決するためなのだろう。

そんなアシッドの開発はかつてアメロッパで起きた悲劇を教訓としていた。初代人工ウィザードのレイダーは圧倒的な出力を記録していたのだが、電波変換には向いていなかった。なぜかというとパワーの割に情報処理能力のバランスが悪かったからだ。そんな中でもある日、無理やり電波変換を試みたアメロッパ軍の兵士に悲劇が起きた。レイダーとの電波変換を終えたあと、トイレに行くと竿がなくなっていたのだ。普段ならスイートスポットに直撃するはずの小便が、空中で花火のように拡散したという証言がサテラポリス内での伝説となっている。後日、その軍人は軍隊を辞めて、アメロッパの城下町でソーセージ屋さんを営むに至る。

しかし悲劇はこれだけには留まらず、レイダーと電波変換をした者は、必ず体のどこかを失っていた。ある者は心臓、ある者は腕、ある者は頭部と悲劇に限りがなかった。そんな問題は機械骨格を有するミライの登場によって解決されるが、こういった事件により人工ウィザードの原則として情報処理能力の強化が定められた。そのためならば多少の戦闘能力の低下も仕方がないという方針である。人工ウィザードに知的な性格の者が多いのもこのためであろう。

問題の程度はあれども、プロジェクトＴＣは金玉の消失から重大な問題を見つけるに至ったのだ。どんな偉大な発明もその問題の提起は身近なことから起こるということだ。かの科学者も木からリンゴが落ちるのを見て万有引力の法則を発見したのと同じである。

つまりソロが現在行っているのはこれと逆のことだ。戦闘能力を求めて体の情報を削るという荒療治だ。もしかしたら大事な部分が吹っ飛ぶかもしれないのだ。

それら要因から電波変換とは意外と危険で溢れている。それを快適なものとして提供してくれる電波体達にスバルは改めて感謝するのだった。

「ありがとう、ロック……いっつも口は悪いけど、僕の大切なものを守ってくれて……」

少しほろ苦い思いと共にスバルは世界を救うために戦おうと思えたのだった。ジョニーもこれ以上は語らずに何度も頷いていた。きっと彼もおそらく……。

スバルが明らかに動揺しているジョニーを不信に思って問い詰めようとするが、その瞬間に赤々と灯っていた扉上部のランプが消えた。どうやら手術が終わったらしい。

長い戦いだった。もう二十時間近く経っている。扉が開くと中からレベッカが出てきた。長丁場に参ったのか少しやつれている。スバルは駆け寄ってソロの容体を尋ねた。

「ソ、ソロはどうなったんですか？　無事に終わったんですか！？」

「……とても難しい手術だったわ。ウォーロックもアタシも全力を出した……」

ここまで言うとレベッカは押し黙る。スバルは胸騒ぎを覚えながらも、手術の結果を聞きだす。するとレベッカが首を振った。レベッカの無念そうな表情のすぐ奥でウォーロックが天を仰いで呆然と立ち尽くしているのが確認できた。

「けどね、手術は失敗……。ソロ君は意識不明、結局短時間での肉体の最適化なんて無理だったのかも……」

スバルはその言葉が信じられなかった。ソロは確かに無愛想で、少し前なら死んでしまっても何でも良かったが、今の彼は料理の上手い何でもできてかつ、あかねを師事する見上げた少年だった。

そんな彼が意識不明の重体だ。キンタマの話をしてジョニーと盛り上がっていたのが悔やまれるばかりだった。

「手術失敗ってウソでしょ……？」
「途中まで良かったんだけどね。ウォーロックが最後の最後で取っちゃいけない情報を切り取っちゃったのよ。それっきりソロ君の意識は戻らない。かろうじで息をしてるだけ……」
「なんだよそれ……」
「全力は尽くしたわ。でもそれ以上にソロ君の体に秘められた闇が大きかったの」
「じゃあ、ソロはどうなるの……ずっと植物人間なの？　それじゃ、あんまりだよ」
「分からない……最後にウォーロックが切除した肉体情報の正体が良く分かってないの。ただ彼が言うには胸に根付いていたドス黒いガンのようなものだったって……。正直なところどうなるか分からないわね。とにかく、病室に搬送してそこで安静にさせましょう」

そしてウォーロックがソロの乗ったベッドを転がして行き、眠れる姫は病室に搬送された。
ウォーロックが切除したソロの胸に根付いていた黒い塊の正体も分からないままだ。
ルナルナ団本部の設備が最先端だと言っても、ソロはこのまま一生起き上がることはないかもしれない。

ｓｂｒ―１６：ソロが抱える闇

ソロが眠り姫となってしまってからというもの、スバル達は裏庭のルナルナ団本部に通いつめてお見舞いをしているばかり。力になれず、彼らではそれくらいしかしてやれない。そんな不毛な日々が数日続いた。

このままソロが植物人間だと、あかねの家事の負担が増えてしまうので困ったものだ。

しかし馬鹿馬鹿しい。何と言っても今回の事態を招いたのは、ウォーロックの乱暴な術式とジョニーの軽率な判断が原因だったと言える。本人が了承したとはいえ、避けれた悲劇ということだ。

もちろんこのような状況となってしまったのでカノンがウォーロックを執拗に非難する日々が続いている。具体的には寝ている彼を家の窓から蹴落とすという悪質なものだった。なので最近の彼はそこらじゅうがへこんでいる。今朝なんかは後頭部にフライパンが直撃していた。昨日の夕飯は熱いお味噌汁を目に掛けられていた。

そんな怒り心頭のカノンに対して、ウォーロックは返す言葉もないようで黙っていじめられている。

しかしソロの前で喧嘩する二人は病人には良くない。なのでミソラが見かねてとうとう仲裁に入った。彼女も彼女で空き缶拾いを頑張ったのにご褒美も何もあったものではないので機嫌が悪そうだった。

「あのー二人とも。こんなところで喧嘩しないでくれるかな？　ソロ君が可哀そうだよ」

「でも、ミソラ。ウォーロックがお兄ちゃんをこんなにしたんだよ……？　許せないよ」

「言い訳をするつもりはねーが、きずなクルー式肉体強化手術が失敗しちまったんだ。悪気があった訳じゃない……悪かった」

ウォーロックはカノンに頭を下げるとベッドの横に置いてあったウインナーの袋を渡してやる。そうやって機嫌を取ろうとするのだが、カノンは窓からウインナーを投げ捨てて抗議の意思を示すだけ。ソロが起きていたら間違いなくカノンは怒られているが、意識不明なのでやりたい放題だった。

ウォーロックは逃げるように窓際に置かれた花瓶の花に目をやって傷ついた心を慰める。カノンはそんな彼を口汚く罵った。

「バカ！　ハゲ！！　お兄ちゃんを元に戻せ！！」

「ッ……！　俺はハゲちゃいねー……しかし、ソロの胸にあったあのどす黒いのは一体……俺はてっきり病気か何かかと思って取っちまったが……って、終わったこと言っても仕方がないか」

ウォーロックもわざとソロをこんなにした訳ではない。良かれと思って胸の黒い塊を除去しただけなのだ。まさか意識不明になるとは思わなかった。

しかしカノンにして見ればただの言い訳でしかない。彼女はウォーロックに制裁を与えようと悪い笑みを浮かべた。口元が歪んでいるので、よほどの兄想いだ。

「言い訳すんな……っ。そこで待ってなよ、下からおっきい石を持ってきてぶつけてあげるから……！」

カノンはウォーロックを目の仇にしている。勢いよく病室から飛び出して、下の庭からガーデニング用のレンガを持ってくるつもり

らしい。このままではウォーロックは精神的にも物理的にもへこんでしまう。

スバルとしてはこれ以上へこまされたら修理代がバカにならないので、やれやれとウォーロックをハンターにしまった。カノンには悪いが、レンガで積み木でもしててもらうしかない。

とりあえずスバルは一息吐き、ルナルナ団としてソロを助ける方法をなんとかして考え始める。ソロだってルナルナ団の“戦略的空き缶収集隊長”なので、放っておく訳にいかない。ここはリーダーに指示を仰ぐべきだろう。

「委員長。さて、こうなったらどうしようか？　さすがにこれ以上、ソロを見守るだけじゃ忍びない。新しくなったルナルナ団の力で何とかしてあげようよ」

「そうね。やってみましょう」

ルナはコクリと頷くと、病室からでて数分経過。ゴロゴロとナースステーションから会議用のホワイトボードを引っ張ってきた。どうやら、やる気満々だ。ソロはこの本部の維持管理を統括している責任者なので、ここでなくす訳にはいかないのだろう。

ルナはペンを実体化させると、お嬢様らしく綺麗な字で作戦名を書き始める。

「さあ！　みんな注目！　ソロ君を助ける作戦……すなわち“オペレーション絆”を開始するわよ」

「わあ、カッコいい名前だね」

「フフン、そうでしょ？　じゃあ、さっそく街に繰り出して情報収集よ！！」

「さすが委員長！　頼りになる！」

「でもスバル君。この作戦は簡単じゃないと思うな……」

挙手された白い肌の手。受付のバイトの合間を見てお見舞いに来ていたツカサだった。彼は難しい顔をしながらホワイトボードに書かれた夢見がちな作戦に疑問を呈する。そしてルナに向かって中々酷いことを言ってしまう。悪気はないだけに心に突き刺さってくる。

「あの、委員長。まず疑問があるんだけど。なんで、ソロ君が意識不明になったのか原因を考えないの？　それに今町に行っても何の意味がないと思う……遠足じゃないんだから、よく考えて行動しないと」

「んぐ……中々言うわねツカサ君……。じゃあ、なんで意識不明になったか考えましょう。そうね！　原因が分からないとどうしようもないわね！」

ルナは一瞬、動揺するがすぐにいつもの偉そうな態度だ。そして自分の考えを発表してくれる。ツカサは呆れて溜め息を吐いた。

「私の考えだと……ソロ君はずばり、ウォーロックに乱暴されて、ショックで寝込んでいるんだと思うわ！」

「はぁー……まさかここまで、能天気だとはね……」

ツカサが馬鹿にしたように額に手を当ててクスリと笑った。これはスバルには出来ないルナに対する態度だった。ルナはツカサの攻撃的な瞳に怯んでしまう。すると彼の悪い癖でもう一人の人格が現れてしまった。馬鹿な女を口汚く罵るのには、ツカサでは少し不便するからだろうか。

中身が変わると態度にも出るのでツカサは足を組んで、ソロのベッドに乱暴に腰を掛ける。今の彼はヒカルだった。ルナに罵詈雑言を浴びせかけた。

「ヒャヒャ！　お前、本当にバカだな！！　頭の栄養全部、そので

っかいドリルに吸い取られてるんじゃねーの?!　どう考えても、原因はソロの胸にあった黒い塊だろーが!!　ああん?!　違うか、委員長さんよう?!　寝言は寝て言え、ブス!!」

「ひっ……!」

ルナはヒカルの口汚い罵りに、怯えてしまってミソラの後ろに隠れる。しかしヒカルの言うことも一理ある。口は汚いが、中々賢いらしい。ミソラは苦笑しながらルナの頭を撫でてやる。

「さーて、どうしようかルナちゃん。ブス呼ばわりはよくないけど、ヒカル君の言うこと、中々鋭いよね?」

「バーカ、バーカ!　ヒカルのバカチン野郎!」

「バカチンって意味分かって言ってんのか?　バカみたいにうっとりするチンコの男ってことだぜ?　まったくいやらしい女だな!　ブスでスケベとは救えねえ!!　ヒャヒャヒャ!!　黙りやがれ!!」

「うぅ、ミソラちゃんー……」

「よしよしルナちゃん。もう黙っとこうね」

「ケッ、何がルナルナ団だ!　バカみてー」

言いたい放題のヒカル。するとさすがにこれ以上はルナが泣きだしてしまうので、ヒカルが引っ込んでツカサが出てくる。彼は何事もなかったこのように微笑んでルナに具合を尋ねている。二重人格とは便利なものだ。

「あれ、どうしたのかな委員長?　ちょっと、涙出てるよ?」

ヒカルのおかげですっかり場の空気が悪くなる。しかし出てきた意見は貴重だった。このままじっとしていては気が滅入りそうなので、医者の元に行って話を進める必要がある。ルナルナ団はレベッ

カに黒い塊の正体を調べてもらうことにした。

研究施設のあるフロアに行くと、そこの職員用の食堂でレベッカが男性職員にパワーハラスメントをしていた。そんな光景がちょうどお昼時の爽やかな日差しが差し込むカフェで繰り広げられている。プライベートを楽しんでいるところに割って入っていいものかと悩む一同だったが、男性職員は泣きそうになっているのでむしろ割って入る必要がありそうだ。

近づいていくと、聞きたくもないやり取りが聞こえてくる。どうやらレベッカが一方的に男性職員に言い寄っているらしい。欲求不満だとしたら見ていられない。男性職員は身を引いて貞操を守ろうとしていた。

「あの……困りますよ。僕は彼女がいるんで……」

「いいじゃない。アタシの方がお金も地位もあるし、乗り換えなよ。アタシと一緒に出世コース入っちゃお？」

「うぅ、酒臭い……」

男性職員は昼間から酔っている上司の相手に苦労している。スバルは見かねて男性職員に声をかけた。思わぬ助け船に男性職員はパッと表情を明るくさせた。よほど迷惑だったと表情によく出ている。

「あの、レベッカさんを少しお借りしてよろしいですか？」

「ああ、もちろんだとも！　こっちはこんな田舎に転勤になってテンション下がってたのに、あげくおばさんに言い寄られて迷惑してたんだ！！　じゃ、僕はこれで！」

一応きずなクルーなのに酷い言いようだ。そのまま疾風のように去っていく男性職員。あの口振りだとルナルナ団本部への転勤は職員の間では外れコースらしい。突然出来た得体のしれない田舎の施設だから当然と言えば当然か。あげく酔っ払いに絡まれるのでは心中察するばかりだ。

スバルはベンチで寝転がるレベッカに呼びかける。確かに酒臭くて昼間からこれとはロクな女ではない。きずなクルーでなかったら、心の底から軽蔑する類の人間だったろう。

「レベッカさーん。振られましたよー起きて下さーい」

「うっせー酒寄こせ！」

これには心が広いミソラもあきれる。手術に失敗したのがよほど後に引いたのか。だとしてもこれは見るに堪えない。白衣がこれほど似合わない女はそうはいない。

「レベッカさんって案外だらしないね」

「前に会った時はもう少し頼りがいがあったのにね……」

ルナはレベッカの周りに転がっている酒瓶を眺めながら首を振る。酒臭いし、公共の場で寝転がるとは大人としては失格だ。

しかしこんな彼女でもソロを助けるためには力になってもらう必要がある。

どうしたものかと悩んでいると、ツカサがカウンターから水を持ってきた。氷入りでよく冷えており結露している。彼は柔らかい笑みで、良からぬ考えを述べた。

「ちょっと、荒っぽいけど顔に冷水をかけちゃおう。しかたないよね」

「ツカサ君って、なかなか大胆だよね……」

「ふふ、スバル君には敵わないよ。じゃ……それっ」

ツカサは冷水をレベッカの顔面にかける。それでもまだ眠っているので、氷を投げつける。やっと起きた。

「イッタイわね！　何すんのよ！」

「何って、冷水をかけただけですよ」

「そりゃ、冷たい訳だわ！　……ってアンタも中々男前ね。どう？　いっぱいやる？」

レベッカは転がる瓶を手に持ってツカサに言い寄る。見境がないのでスバルがそろそろ注意してやる。

「あの、レベッカさん。今は勤務中でしょう？　シャキッとしてください。今度はお酒をかけますよ」

「フフ、そこに火をつけたら面白そうだね」

「ツカサ君……冗談でも怖いよ……」

ツカサの冗談とも取れない冗談にようやくレベッカが真面目になった。さすがに火をつけられたら堪らないだろう。彼女は転がった酒瓶を足で払うとスバル達に席に着くように促した。

「オーケー。話があるなら聞きましょう。人間キャンプファイヤーはゴメンだからね」

スバルはホッと一息ついてレベッカの隣に座る。

「あ、やっと目が覚めましたか」

「そりゃ……ね。じゃ、用件を言ってちょうだいな」

スバル達はソロについて話してやる。黒い塊について詳しく教えてほしいと伝えたのだ。

しかしレベッカは話を聞くと酔いが醒めてしまったようで、とたん眉間にしわを寄せて腕を組んで考え込む。このまま眠ってしまうのかというくらいの、不動の構えだ。

「はぁー……やっぱり、そのことね。私としてもここ数日調べてみたんだけどさ……まったく分からないのよね。パッと見はガン細胞みたいなんだけど。だったら取っても良いはずだし……」

「レベッカさんでもお手上げですか……」

スバルはしょんぼりしてしまう。医者でも無理ならどうしようもない。もはや手の出しようもない……皆がそう思った時だ。連絡用アナウンスが館内に流れた。

《コダマタウンの展望台に不信な電波をキャッチ。職員はそれぞれの持ち場に戻ってください》

どうやら、事件が起きたらしい。食事をとっていた職員は慌ただしく、自分の仕事をしに戻っていく。レベッカも例外ではない。それでも散らばった酒瓶を元に戻していくだけの余裕はあるようで、立つ鳥跡を濁さない。

「ゴメンね。どうやら、この近くでなんか起きたみたい。ちょっと、研究室に戻るわ」

レベッカはすたすたとその場を去っていく。あの様子だとそれほど深刻な異常ではないのだろう。展望台と言えば、現在の場所からすぐそこだ。忘れそうになるがこの建物はスバルの家の裏に立てられているのだから。

スバルは困ったようにテラスから展望台の方を見つめる。別段何も起きてなさそうだ。大したことではなさそうなので、今はソロの方を優先したい。

「さて、異常な電波とか言ってるけど……ソロの方を何とかしないとな。でも振り出しに戻っちゃった」

するとミソラだ。

「じゃあ、病室に戻ってみようか。もしかしたらソロ君が起きているかも」

とうてい起きているとは思えないが、何もせずに突っ立っているだけなら、ソロを見守っておくほうがいいのかもしれない。

一同は渋々と病室に戻っていく。その途中でウォーロックがハンターからスバルに呼び掛けた。

『おい、スバル。さっきのアナウンス……展望体とか言ってたな。実は俺もさっきからアマケンの方から何かが来るのを感じてたんだが……』

「どうしたのさ。ただの電波異常だろう。サン・ゴッドの事件の影響がまだ残っているだけなんじゃない？」

『なんかイヤな予感がするんだ。漠然とだが、確実な胸騒ぎがする』

「何それ、意味分かんないよ……」

ウォーロックの良く分からない態度にスバルは疑問に思うが、ソロの方を何とかしないといけない。今は彼の予感を当てにしている場合ではなかった。

するとウォーロックが機転を利かせて、スバルに今度は違った話を振る。どうしても展望台に行きたいらしい。

『おい、スバル。そういや今月は墓参りに行ったのか？　ほら、今月はミソラやソロが家に来たり、ワイリー研究所とか行っててバタバタしてたじゃねえか』
「そういえば、行ってないかも。委員長がお花を供えてくれてるって言ってたけど、もしかしたら枯れているかもしれないな……」
『じゃあ、展望台に行こうぜ。そのついでにちょっと展望台の様子を見てみよう』
「わ、わかったよ。ヘンなロック……」

ウォーロックの調子の良い語りにスバルは不信に思いながらも、展望台に向かうことにする。ルナ達に少し外出すると言ってその場を後にした。

「みんな、ちょっと、展望台に行ってくるよ」
「あ、スバル君」

ルナが呼びとめようとするが、スバルは行ってしまう。

「どうしたのかしら、スバル君？」
「多分さっきのアナウンスが気になっちゃったんじゃないかな。ほらスバル君正義の味方だから」

ミソラはスバルの好きにさせてやろうと言った。彼はあれでもサテラポリスのＳＳランクホルダーだ。平和のために頑張るのなら止める必要はない。
ルナも納得してソロの病室に戻り始めた。

「そうね。家に引きこもってるよりかは良い事よね」

そしてスバルはウォーロックに言われるがまま、展望台に向かった。途中家で花束を調達してきたのだが、ウォーロックとしてはそれはどうでも良いことらしい。彼は展望台から感じるわずかな違和感だけを気にしている。

スバルは不信に思いながらも、ウォーロックの意向に従ってやる。走ればすぐそこなので、ほどなくして展望台に着いた。ひとまず花を供えようとトラッシュの墓に向かっていくスバル。すると一体の電波体に目が止まった。見覚えがある……というよりも忘れようがない。その電波体はトラッシュの墓の前でずっと動かない。こちらには気付いているはずなのに、墓の方にばかり執心している。それでも放っておく訳には行かないだろう。足を止めずに慎重に近寄っていく。

どうやらウォーロックのイヤな予感は当たっていたらしい。

『ヘッ、あの野郎、俺にだけ分かる電波信号を送ってやがった。さっきから頭にチラついてたがやっと確信したぜ』

「どういうことさ。君にだけ分かるって……そんなこと出来るの？」

『知るかよ。でもアイツが俺の事を“お兄ちゃん”と呼ぶことに関係してるのは間違いない』

目の前にいるのはウォーセヴティだった。何が目的かは知らないが、わざわざ地球に来てくれたのはスバル達にとっても仕留めるチャンスである。

そしてウォーセヴティはトラッシュの墓に何かを投げた。かと思うと、彼はスバル達の方に振り向く。その姿は相変わらずウォーロックと瓜二つだった。

「よお、お兄ちゃん。上手く逃げられたみたいだな。元気にしてたか？」

ｓｂｒ―１７：アイリスの花は散った

トラッシュの墓場で、大吾に深く関わるレギオンのウォーセヴティと邂逅してしまう。ここは色々と話しておかないといけないだろう。幸いウォーセブティの方も、暴れに来た訳ではないらしく、単独行動だった。ウォーロックに電波信号を送っていたことからも、彼の方も話があるのかもしれない。

まずウォーロックが実体化して口火を切った。

「なんでコソコソして俺にだけ信号を送ってやがった？」

「そりゃ、俺の周波数をそのまま出しちまうと、地球人が騒ぎ出すからな。オヤジにあまり目立つなって言われてるんだ。でもお兄ちゃんと俺は特別だからこうやって巡り合えたんだぜ？」

「チッ、気持ち悪いな……で、テメエ、何しにきやがった、ニセモノ野郎！」

ウォーロックは確かに彼を特別だと認めながらも、それと同じくらいの気味悪さを感じてウォーセヴティに敵意を見せる。ウォーセヴティは簡単に説明した。

「今日の俺はメッセンジャーだ。エックスデーまでお兄ちゃんたちには頑張ってもらいたいからなー……」

「つまりはインフィニットの使いパシリってことか」

この言葉にウォーセヴティのブライドが傷つけられてしまったよ

うで明らかに不満そうに唾を吐き捨てた。態度にすぐ出る辺りもウォーロックと似ている。どうやら彼はインフィニットに対して並々ならぬコンプレックスを抱いているらしい。
　ワイリーがインフィニットに溺愛しているのだから無理はないのかもしれない。

「おいおい、いくらお兄ちゃんでも口には気を付けな。俺はインフィニットよりスゲーんだ。あんな旧型以下な訳がねえ！」
「へッ、どうだかな」
「チッ……！　胸糞ワリイ！！　言っとくが俺はお兄ちゃんよりも圧倒的に性能面で上なんだぜ？！　これ以上バカにしやがったら、タダじゃおかねえ！！」

　癇癪を起こすウォーゼヴティ。ヒートアップしやすいらしく、ここもウォーロックに似ている。だが冷静さを失っている敵の状態はウォーロックとしても望むところだった。さらに単独行動ときているのならここで仕留めてしまえる可能性は高い。
　ウォーロックはハンターに収まって、いよいよ戦いに乗り出した。

『じゃあ、どっちが上か試してみるか？　ニセモノッ』
「なんだ？　もうヤル気になったのか……まったく短気でいけねえなお兄ちゃんは」

　ウォーロックはアカシャＰＬＴを手に入れたことから、こと戦闘において圧倒的なアドバンテージを感じている。なぜなら制御不可能だった零階層へのアクセスを可能にしていたのだ。その力がスバルの力と混ざり合った時、デューオさえも恐れさせた。それほどの力があるので、ウォーセヴティを相手にしてもきっと……。
　するとそんな算段をとっているウォーロックに、ウォーセヴティが自分の役割を思い返したようで一言告げた。

その言葉にスバルは耳を疑った。

「“星河アヤメ”そして“アイリスコード”」

『あ？　何言ってんだオメエ』

「何って、メッセージだよ。これをお兄ちゃんたちに伝えるのが俺の仕事だった」

ウォーセヴティの仕事はとても簡単なものだったらしい。人の名前らしきものを言ってそれでお終いだった。彼はそのまま帰ろうとする。トラッシュの墓に手を合わせると、草原を駆けだした。

ウォーロックがそれを阻止しようと、電波変換を試みるが、スバルが応えなかった。彼は呆けている。さっきの言葉がずっと頭の中でめぐっているのかもしれない。星河アヤメ……かつてあかねがスバルに言っていた人である。あかねに古ぼけた料理のレシピを託していた。

スバルの祖母だ。

「なんで、アイツがその名前を……」

『どうした、お前の親戚の名前なのか？』

「僕のおばあちゃんだよ。……小さいころに死んじゃったけど」

『じゃあ、ますます放っておく訳にはいかねーな！　アイツを絞めて洗いざらい吐かせるぞ！』

「わ、分かった……！　そうだね、今は動揺している場合じゃないね」

スバルは電波変換を試みるてハンターを構えるが、ウォーセヴティがそれをさせなかった。ワイル粒子を飛ばして電波変換を妨害してくる。流石にワイリーの作りだした夢の物質だ。思うがままに加減してくる。

ウォーセヴティは立ち止ると警告してきた。

「おい、止めとけよ。さすがに今のお兄ちゃん達に電波変換されたら、俺でも苦戦は必至だ。ここはお互い平和に行こうぜ」
『都合が良いことだな。そういう台詞は大吾を返してから言いやがれ！！』
「俺にそんな事を言うなよ。インフィニットが世界をいじくったから、ちょっと世界が変わっちまっただけだろうが」

ウォーセヴティとウォーロックの主張は平行線を辿った。このままでは電波変換もさせてもらえずに逃げられてしまう。どうやら一対一でレギオンと戦うためには、あらかじめ電波変換をしておかなければならなかったようだ。
ウォーセヴティはヒラヒラと手を振って、別れを言う。どうやら秘密も何も言うつもりはないらしい。

「アバヨ。言っとくが追ってきても無駄だぜ。俺の半径百キロ圏内で電波変換が出来ると思うなよな」

大袈裟な距離を言ってくるが、冗談と言う訳でもないらしい。擬似的なゴッドブレス空間がウォーセヴティの周りに出来ている。電波変換は出来そうもない。ウォーロックと似ている風貌から忘れがちだが、ウォーセヴティはかなりのやり手だ。おそらくサン・ゴッドと同等かそれ以上の最上位レギオンなのだろう。
手をこまねいていると、ウォーセヴティがウェーブロードに飛び上がって本格的に帰路につく。空に飛び上がられては、もう追うこともできない。
一応ウォーロック単体で追っても良いのだが、ウォーセヴティと電波変換も無しでぶつかるのは危険すぎるので手はない。
ウォーロックは舌打ちして空を見上げるしかできなかった。

『チッ……！　また、逃げられちまう』

打つ手なしかと二人が思った時、ウォーセヴティのいるウェーブロードに一体の人影が高速で接近してくるのだった。どうやらルナルナ団本部の方角からやってきたらしい。その人物は女性の声なのでミソラかカノンかのどちらかだろうか。

するとその人影はウォーセブティを殴りつけて、ウェーブロードから彼を落下させる。電波変換をしていないとはいえ、ウォーセヴティに攻撃を通すとは相当な実力だ。そのことからミソラとカノンではないと分かる。

落下地点では、相当な衝撃らしく草原が抉り返されていた。すぐに人影がそこに降り立って追撃を加えようとする。彼女はロックマンに向かって逃げるように促した。

その人物にスバルは目を疑った。それと同時にジョニーが語ったことを思い出す。そう、下らないことをだ。玉と竿――

「ソ、ソロ……だよね？」

「ああ、当たり前だ。どうやら、寝込んでしまっていたらしい……」

「どうしたのその声。それに胸も……おっきいよ」

「ん？　何を言ってるんだキサマは？　むしろ体に力が湧いてくるようだよ。まあ、同時に少し違和感があるが……寝起きだからだろうな」

そんな訳がない。スバルは恐る恐るソロらしき彼女に確認を取った。ジョニーが手術中に真面目に言っていたことから、彼女に股間の確認をさせる。確か、情報の取捨選択で恐ろしいことが起きると言っていたのだ――

ウォーロックの趣味が例え違ったとしても事故は往々にして起こりえる。それも手術失敗だったのだから、その可能性は極めて高い。

おそらくソロはアメロッパの城下町に行って、ソーセージ売りに

ならないといけなくなるかもしれない。
気付いたらスバルは叫んでいた。

「股間だ！　股間を確認するんだ！！」
「な……？！　どうした、こんな時に？　気でも触れたか」

敵がいるのに股間のチェックをしている場合ではない。ソロのもっとも疑問だったが、スバルは引き下がらない。これは大切な問題だからだ。男として黙っている訳にはいかない。

「良いから触るんだー！！　手遅れになっても知らないぞッ」
『マズイな、まさかこんなことになっちまうなんて。手元が狂ったか……』

ウォーロックは明らかに心当たりがありそうで、ハンターの奥底に引っ込んでしまう。そしてやたら真に迫ってくるスバルに、ソロは渋々と股間に手を伸ばした。敵がいるのに何とも間抜けな光景だが、後回しにしてしまってはとても戦えない。おそらく手遅れだが、もしかしたら大丈夫かもしれない。
すると次の瞬間ソロが固まったように動かなくなった。顔面蒼白だ。もう言うまでもない。それでもスバルはあえて確認を取った。まさか、そんな訳が……と思っているのかもしれない。往生際が悪い。

「ソロ、どうしたんだ?!」
「な、ない」
「ない……？　まさか、君は……」
「確かについていた、ムー仕込みの股間のメインアンテナが……ないんだ……！」
「メインアンテナ……！」

「そう、メインアンテナ！」
『チッ、マズイな……。おいソロ！　落ち着いてよく確認するんだ！　もしかしたら埋まっているだけかもしれねえ』
普通に考えてメインアンテナが埋まる訳がないがソロも必死なので、下着の中に手を突っ込んでメインアンテナを探し始める。しかし見つからない。どうやら、かつてアメロッパで起きた悲劇がソロに振りかかったらしい。
そして次の瞬間。ソロは腰から砕けて崩れ落ちた。ペタンと尻もちを突いて、びくびくと痙攣している。スバルは驚いてソロに駆け寄った。
「ど、どうしたんだ？　まさか、まだ体の具合が……？」
「いや、違う……。股間になんか変なコンセントが……」
「コンセント……？　なんだよそれ……」
『あーもう、やめろやめろ！！　聞いてるこっちが馬鹿らしい！！』
「な、なに言ってるんだよロック。体にコンセントが開いちゃったんだぞ！？　一大事じゃないか」
『わ、分かった……。い、一大事だが、これ以上は駄目だ……。オーケー……分かるな？』
ウォーロックは冷や汗を流しながら実体化すると、ソロに手を差し伸ばす。
「た、立てるか、ソロ……？」
「む、無理だ……！　なんか背中がゾクゾクするんだよっ。何だこれは……お、俺は一体どうしたんだ？！　俺は……死ぬのか？！」
間抜けだが本人らは真面目だ。ソロは泣きそうになって、まだ諦められないらしく股間のメインアンテナを探そうと必死だった。し

かしその指使いが余計な真似で、事態を悪化させる。堪りかねたウォーロックはソロの手を取り上げて、叱りつけた。いい加減にしないとウォーセヴティがそろそろ起きてくる。それにこれ以上はソロが間違った方に進んでしまう危険があった。それに今は戦闘中だ。間違ってもそんな事をしている場合ではない。

「もういいから、あんまり股間をいじるな！」

その光景にウォーロックは情けなくなって、ソロに真実を教えてやった。手術は失敗してしまった、と。

「よく聞け、お前のメインアンテナも、ゴールデンバランサーも吹っ飛んじまった。まあ、肉体の最適化は出来ているだろうから、戦闘能力は飛躍的に上がっているはずだ。それと引き換えに大切なものは失ったってことだ。あと戦闘中にナニはするんじゃねえ……！」

ソロはの表情は一瞬で絶望に包まれる。ご自慢のブツは吹っ飛んでしまったのだから、その精神的ダメージは計り知れない。

だが、それでも感傷に浸っている場合ではない。ウォーセヴティが土埃を払いながら立ち上がったのだ。しかし少し様子がおかしい。さきほどのソロの一撃が効いているのか、血反吐をペッと吐いた。

彼はソロを睨みつけるとじりじりと後退していく。危険を感じているのだろう。今のソロはクレイジーとしか言えないのだから。

「へ……、まさか、こんな短期間でここまで力をつけるとはな……デコイ野郎。しかし、戦闘中におっぱじめるとは……末恐ろしいヤツだ」

ウォーセヴティもソロの奇行にゾッとしているらしい。目の前で世紀の大発明をされては、流石のレギオンでもおののくというもの

だ。
　ウォーロックも今回ばかりはレギオンに同意せざるを得ないだろう。

「さしずめソロ電ってところか……。しかし、お兄ちゃんキャラが被りそうだったのに、こんなことになっちまうとはな。ちょうど良いのか悪いのか分かったもんじゃねーな」

　ウォーロックは女になってしまったソロを気の毒そうに目の端に捉えながら毒づいている。
　どうやらこうなってしまいソロは戦えそうもなかった。精神的にも肉体的にもとてもそんな状態ではないのだろう。ワイル粒子のおかげで電波変換が出来ない今、ここは大人しく引き下がるしかないだろう。
　ウォーセヴティもそのつもりらしく、捨て台詞を吐いてくれた。

「十二月……その時を楽しみにしてるぜ。お前達の生きた一年がどれほどの意味を持っていたのか、俺達が判断してやるよ……！　大吾と共になぁッ！！」

　それにはウォーロックも望むところだった。

「言ってろ！　お前とは大吾を賭けて決着をつけてやる。首を洗って待ってな」

　ウォーセヴティはニヤリと笑みを浮かべるとそのままウェーブロードに飛び上り、そのまま勢いよくコスモウェーブに上って消えてしまった。
　結局、ウォーセヴティが何を目論んで地球に来たのかは分からないが、ソロが大変なことになってしまった以上、こちらを優先しな

ければならない。ウォーセヴティとの決戦の機会はすでに用意されているのだから、焦りは禁物だ。彼を倒す時は、その場に大吾がいなくては意味がない。彼は星河家の仇敵と言える。

ウォーロックは溜め息をフッ吐いてスバルのハンターに戻った。

そしてスバルは困った様子でソロに歩み寄る。なんと声をかければいいのか分からない。とりあえず今日の夕飯はウインナーはやめておいた方がよさそうだ。カノンには我慢してもらうしかない。

「あ、あの、ソロ……ちゃん？」

どうしていいのか分からずスバルは適当にソロを女として扱ってやることにする。だが彼女はそれを良しとはしなかった。当然といえば当然かもしれない。

彼女は差し伸ばされた手を払いのけた。

「ええい！　俺に触るな！！」

普段のソロなら怖くてスバルも縮こまってしまうが、今のソロの声は甲高いので少々可愛らしい。胸もやたらと大きくて、かつての彼を思えば薄気味悪いが、今だけを見つめれば、なかなかどうして悪いものではなかった。

スバルはソロの今後を問う。

「でも、どうするのさ……髪の毛みたいにヤツは生えてこないよ？」

「クッ……、仕方がない。あの医者に聞くしかないようだな」

ｓｂｒ―１８：神殺しの試練

結果的にウォーセヴティを退けたソロとスバルは、ルナルナ団本部に戻ってレベッカの研究室を訪ねた。ソロはさっそく彼女に殴りかかる勢いで、歩み寄って胸倉を掴み上げた。大切なものを奪われて、怒り心頭だ。

レベッカは降参したように手を頭に乗せると、ソロの事情を尋ねた。

「わわ、なんだなんだ?!　いきなり何するんだよカノンちゃん?!　髪切った?」

どうやらレベッカは彼女がソロだと気付いてないらしい。カノンと勘違いしていた。確かに兄妹ではあるので、似てはいるのだろうが酷い態度である。

レベッカに煽られてソロは逆上した。見る分には中々可愛らしいが、中身がソロなので台無しだ。

「俺はソロだ!!　おい、キサマ!　俺のマグナムと玉はどうした?　さっさと出せ!」

「おいおい、ここはニホンなんだけど……。あいにく銃刀法は守るタイプなんでね。マグナムも弾も携帯していない」

レベッカは勘違いしているらしい。マグナムと玉をそのままの意味に捉えていた。これでは話が進まないので、スバルが懇切丁寧に

解説してやる。ソロの現状を物分かりの悪い彼女に分からせる。
　するとレベッカは明らかに笑いを堪えだした。これではソロが救われない。女には竿と玉の大切さが分からないようだ。

「プッ……。なるほど、ようするに男の象徴を取りに来たってワケね。オーケーオーケー、バッチリ保存してるわよ」
「ナニ……？　保存しているのか?!　吹っ飛んだって言っていたから、てっきりソテーにでもなっているかと思っていたが……良かった」
「まあ、あの後スタッフが美味しくいただこうと思ったけど、その時ニホンの風習を思いだしのよね」

　レベッカは悪戯っぽく笑って人差し指を立てた。言っていることはとても笑えないが彼女は微笑みをやめない。ソロはゴクリと生唾を飲んだ。

「ふ、風習だと……？」
「そうそう、確か……切り取ったヘソの緒を保存するっていうのが昔ながらにあったじゃない？　だから、棒と玉もそうだろうな……って」
「ほう、なるほどな……。どうやら俺はニホンの風習に助けられたらしい」

　二人ともニホン人ではないので、ヘンな誤解をしているらしい。確かにヘソの緒を保存はするかもしれないが、モノまでは保存したりはしない。そもそもモノが切断されるなんてパターンは滅多にない。
　なのでスバルが懇切丁寧に訂正してやった。

「あの、二人とも。ニホンにはそんな風習はありませんよ。そんな

事をするのはよっぽどの変態か、マグナムコレクターくらいです」
「わお！　ソレは驚きね……！　じゃあ、これは熱処分かしら？
悪趣味なタトゥーも彫ってあるし、気味が悪いと思ってたのよ」

ヤツにタトゥーを掘るのは、世界広しといえどもムー人くらいで、確かに気持ち悪いとしか言えない。ただ、それを電子レンジに入れてしまうのはよろしくない。ソロは慌てふためいた。

「わわ！　やめろ！！　電子レンジでチンをするんじゃない！　チンを！」
「チンチンだけに？」
「うるさいっ！」

見ていて微笑ましいやり取りだが、チンチンチンとうるさくて馬鹿すぎる。それでもレベッカがソロのブツを電子レンジに入れようとするので、ソロは慌てて止める。一進一退の攻防。何をふざけ合っているのかは知らないが、早く話を進めたいところだ。

ソロは電子レンジからナニの入った檜の箱を取り出すとホッと一息を吐く。見た目は可愛らしい女の子となったソロだが、自分のナニをじっと見ている姿は奇妙の一言に尽きる。美容整形外科ではこういった光景はよく見られるが、ルナルナ団本部ではやって欲しくはない。

するとソロが我に返って、本題を切り出した。大切な事をまだ言っていない。レベッカは医者なので、何とかしてもらわないといけない。

「おい、キサマ！　これをさっさと俺に移植しろ！！」

ソロはレベッカに檜の箱を突きつけた。中には神々しいモノが入っているが、レベッカは首を振った。

「無理よ。もうそれ壊死しちゃってるし……」

レベッカは汚いものを見るかのように腐ったタトゥー入りマグナムを見下ろす。ソロはその場に崩れ落ちた。最後の望みだった移植が出来ないとなると、もうソロが男に戻る手段がなくなる。

レベッカもソロを可哀そうだと思っただろうが、手の施しようがなかった。もう、手遅れなのだ。腐ったものは神の手を持つ医者でも移植は無理だろう。

「可哀そうだけど、移植はもう無理ね……」

「お、俺は……いや、私は……どうしたらいいのかしら」

「ま、マズイ！　ソロが心のマグナムまで失おうとしている！」

スバルは慌ててソロを抱き起こして必死に呼びかける。戻って来いと！　諦めるなと！　しかしスバルの目線は思いの他ソロの胸に行ってしまい、自分が男であると痛感させられた。

「クッ、ソロを助けなくちゃいけないのに……！　目が胸に行ってしまう、中々のものに嘘がつけない素直な僕が邪魔をする……！」

『マズイな……スバルまでもやられちまった』

ウォーロックが低く唸って、事態を憂慮する。このままではソロが壊れてしまう。そうなれば、だれがロックマンと一緒に戦ってくれるのだろうか。何としてもソロを立ち直らせてやらなければならない。

するとピンチに駆けつけてくれるヒーローがレベッカの研究室に入ってきた。よく言われるが、ヒーローは遅れてやってくるのだ。少々手遅れではあるが、颯爽とした登場に場の空気が一変した。

そう、ジョニーがやってきたのだ。彼はレベッカに言われて売店

で酒を買いに行かされて、ちょうど帰ってきたところだ。いわゆるパシリだ。

「レベッカさんー！　ハードトロピカルなんて酒どこにもないじゃないですかー」

「だーかーらー。ケンの店に行かないと無いって言ったでしょー？」

「いや、アイツ、サーフィンに出かけちゃってて……」

「まったくどいつもこいつも使えないわね」

「ジョニーさーん！」

レベッカがぶつくさ言い始めたところで、スバルがジョニーに泣きついた。このままではソロが大変なことになってしまう。事情を話して助けを求める。

ジョニーはアメロッパの悲劇が再び起きてしまったことを聞き、やり切れない表情と共にうなだれた。しかしすぐにスバルの肩に手を置いて励ましてやった。さすがにきずなクルーだけあって頼りになる男だ。彼ならばソロを救う事が出来るかもしれない。

「そうか、大変だったなスバル。ソロも……まったくイイ女になっちまってよ」

「ジョニーさん。どうにかしてソロを助けてあげることはできませんか？　このままじゃソロは、心まで女の子になってしまう……！」

「……そうだな、危険かもしれないが、方法なら一つだけある」

ジョニーは目を細めてソロの方を眺める。彼の中では一つの結論が出ているのだろう。しかしそのリスクから、言葉を詰まらせていた。

スバルはソロを助けたいと思い、ジョニーにその方法を聞きだす。

「ジョニーさん！　お願いします！！　教えて下さい！！」

「……ああ、分かったよ。こうなったのも俺の責任があるし……教えよう」

ジョニーは頷くとソロを呼びつけて、その危険な方法を説明する。一歩間違えば、ソロは人間ですらなくなる。かつてのキングが化け物となっていたが、あれと同じになってしまうのだ。

「スバル君には前にも言ったが、電波化が出来るのなら、肉体の最適化で肉体情報をいじることができる。それが電波変換における強みになるって言ったな」

「ああ、この前言ってましたね」

「そこでだ。ソロには自分で肉体情報をいじってもらって、女の体から男の体に情報を編集してもらう」

「で、できるのか……？　そんな事が？」

ソロは一筋の希望にすがるように、弱々しくジョニーを見上げる。そんなことが本当に出来るのか信じられないのだろう。

そんな不安を払しょくするようにジョニーは笑顔になってしっかりと頷いた。諦めなければ希望はあると、強調したのだ。まさにジョニーは規格外だ。絶望一色だったソロの心を希望でいっぱいに塗り替えてしまった。

「できるさ！　諦めなければ、お前の股間に前以上の魔天楼が光臨してくださる！」

「す、すごい……！　なんだが希望が湧いてきた！」

ソロは拳を握りしめて、涙を浮かべて股間に意識を集中させた。どうやらさっそく肉体情報をいじろうとしているらしい。だが、そこでジョニーがソロを止める。焦りは禁物だ。きずなクルーでも四年の時を必要としたのだ。無茶な肉体操作はキングのような化け物

を生んでしまうだけだ。急ぐあまり、ソロが化け物になったらさすがに笑えないだろう。

「急ぐなソロ！　焦るとロクなことにならん！　ゆっくりでいいから、イメージを大切にするんだ。かつての自分の相棒を少しずつイメージしていけばいいんだよ。それで十分間に合う」

「わ、わかった、焦らない。でも、そんなことで三か月以内に生えてくるのか……？」

「ああ、今のお前なら、三か月もあれば十分だよ。焦っても取り返しがつかなくなるだけだから、ゆっくり一本ずつ生やしていけ」

「わ、分かった……ありがとう！　フフ、五本は目指してみせるさ！　多いに越したことはないからな！」

　少し危険な勘違いをしているソロだが、どうやら焦らずじっくり肉体を変えていけば男の体に戻れるらしい。しかし、五本も生やせばそれは十分化け物と言えるだろう。だから焦りは禁物なのだ。キングが欲望に囚われたために、化け物になったのは記憶に新しい。そういった意味でもソロの良いストッパーにスバルはなってくれるだろう。

　様々な意味でソロのパートナーとなったスバルは手を差し伸ばす。そうやって握手を求め、ここから始まる二人三脚生活を共にする意志を示した。

「改めてヨロシク。キミがちゃんと男の子に戻れるように最大のサポートをするよ！」

「ふん、キサマの手など借りる気はないさ。だが、たまにはチェックしてもらうから覚悟しておけ！　キサマの自尊心をズタズタにしてやる！」

「そうだ！　その意気だよソロちゃん！」

「……チッ、バカにして！」

一見良く分からない会話だが、二人は奇妙な絆を深めたようだ。
今は男と女だが、いつか男同士で笑いあえる日が来たらそれほど素晴らしいことはないだろう。

sbr―19：アイリス

二人が家に戻るとミソラ達が出迎えてくれた。きっとソロはいきなり起き上がって、病室を飛び出して行ったのだろうから心配していたはず。

とりあえず女体化について触れてくるのも当然だった。ミソラがソロの胸をつっついて、神妙な面持ちになる。大きさ的には完敗だ。ミソラは自分の胸をつつくと涙ぐんだ。

「おかえりなさい。二人とも」

「チッ、お前！　俺の胸を触るんじゃない！」

「おっきいなー。いいなーいいなー……悔しいな」

ソロはタンクトップ一枚なので胸が強調されている。ミソラも女の子なので放っておく訳にはいかずに興味しんしんだった。

ただ見た目こそ、事情を知らなければ中々なものだが、彼女の中身を知っていれば大した問題ではない。スバルもすっかり慣れた様子でソロを扱っている。目標は五本なので、どうせなら今のうちに目に収めておこうというつもりなのだろうか。

「まあまあ、そんなものひっつけてたら、さすがにミソラちゃんも意識するってモノさ。君だって銭湯に行ったら人のモノを観察するでしょ？」

「い、言われてみたらそうだな……。だが、あまり気分のいいものではない」

ソロは自分の胸を邪魔臭そうに見下ろすと溜め息を吐く。確かに不便だろうが、焦っても仕方がない。家に帰ったら手を洗って夕飯にしてしまうべきだ。二人は手を洗うと、リビングに向かった。するとあかねがソロに駆け寄ってきた。よほど心配していたらしい。

「良かった、意識が戻ったのね！　おかえりソロ君！」

「師匠、心配をおかけしました」

ソロは礼儀正しく頭を深く下げる。

するとあかねもソロの異変にすぐに気がついて、いきなりタンクトップを脱がす。柔肌が露わになり、思わず凝視するスバルだが、さすがにミソラによって部屋から追い出されてしまう。あかねは口に手を当てて、彼女の体を観察していた。

きっと母親として、彼女の体に異変がないのか確認しておきたいのだろう。意識不明の重体だったのだから、この目で見ておかないと心配で堪らないという親心だった。

「あらまー。一体全体どうなっちゃったのかしら？　……でも、とくにおかしなところはなさそうね。よかったよかった」

実際はおかしなところしかない訳なのだが、健康ならばそれでよいというあかねの判断。

しかしまじまじと見られては困ってしまうソロだ。何となく恥ずかしく思ったのか頬を染めて俯いてしまう。するとウォーロックが事の事情を説明してやった。

あくまで事故だった事を強調するあたり彼は抜け目がない。

「ああ、おふくろ。話せば長くなるが……とどのつまり肉体改造手術に失敗しちまったんだよな。不幸な事故だったが、結果オーライ

だと俺は思う」

「へえ……特訓に行くって言ってたけど、性転換手術だったのね。ソロ君、気付いてあげられなくてごめんなさいね？」

「し、師匠！　俺は決してそういうのでは……おい、青いの！　へンな誤解を生むようなことを言うな！　俺は強くなりたかっただけだ！」

「まあ、そう怒るなよ。ジョニーが言うには、元に戻れるそうだし、今の内に女の体でも楽しんでおくんだな、ほら、女風呂とか覗き放題だ」

「そうね。覗きは良くないとしても……。せっかく、可愛くなったんだもの、新しく名前を付けてあげましょう」

あかねは悪気なくソロに素敵な提案をしてやる。思えばあかねのネーミングセンスは中々奇抜だった。トラッシュやメトリー。命名とは星河家に来た者に対して行われるある種のイニシエーションといえる。

親心から彼女は腕を組んで真剣に考え込む。今までの例からあまりは期待できないが、ソロ自身はそわそわとしていた。

「そうねー……こんなのはどうかしら“ヒトリ”ちゃんっていうのお名前は？」

ソロだから一人。一人、つまりヒトリ……存外、安直な名前だが、ミソラの賛同はすぐに得られた。確かにゲシュタルト崩壊を起こせば女の名前に聞こえないこともないかもしれない。ラ行が入っていればそれで良いという、あかねのネーミングテクニックが光った瞬間だった。

「わあ、素敵な名前！　さすがあかねさんっ！」

「ふふ、私って案外ネーミングセンスあるからね」

「へへッ、おふくろの単純な名前の付け方は俺は嫌いじゃねーな」

ソロもまんざらではないらしい。そもそも師匠にせっかく付けてもらったのだからソロには拒否するという思考はない。

「フフ、前衛的な名前ですね……！　俺が男に戻るまで、その名前ありがたく受け取らせてもらいます」

ソロはフッと笑うと、そのまま仁王立ちをして流石の貫録を醸し出す。上半身裸だがそんなものは些細な問題だった。あかね達に拍手される姿は天晴れだった。

するとスバルも我慢できずにソロに駆け寄って握手を求める。様々なところで我慢の限界を迎えていたようだ。

「よ、よろしくね！　ヒトリちゃん！　僕も歓迎するよ！　出来れば、もう二度とソロに戻っては欲しくないほどだ！」

「ふん、言ってくれるじゃないか。だが、必ず俺は帰ってくるさ！」

「ヘッ、ソロが女になった途端、手のひらを返しやがったなスバル……まあ、そういうお前も嫌いじゃねー」

どうやら話はまとまったらしい。ソロはタンクトップを着込むと、夕飯を頂こうと席につく。

そんな姿をあかねはしばし物惜しそうに眺めていた。どうやらタンクトップはもったいないと思ったらしい。彼女は在りし日のメトリーの成長を見込んで、女物の服を大量に買い込んでいた。きっと今のソロにはちょうどいい代物だ。

「あらヒトリちゃん。そんな服着てちゃもったいないわ。ちょっと、こっちにいらっしゃいな」

「そうそう、私も手伝っちゃうから！」

ミソラまで悪乗りしてくるので、ソロはそっと身を引く。タンクトップほど機能性に優れた衣服はそうない。多少乳がはみ出ても、それを補うあまりある運動性というメリットがあった。

それに乳がはみ出たとしてもスバルとしては一向に構わないはずだ。つまりデメリットなどどこにもないということだ。全員が幸せになれるのだから、何を着替える必要がある。いいや、ない。

そのためソロは首を振った。

「な、なにを言ってるんですか師匠……？　この服は動きやすくて、素晴らしいとしか……」

「駄目よ、スバルの教育上よろしくありません。もう少し、ガードを固めないとね」

「そうそう、あかねさんの言う通りだよ！　まったくけしからんヤツよ」

「でも、僕としてはこういうのもアリかと……」

「スバル君は黙ってて！　ていうかさっきごく自然に、ヒトリちゃんのおっぱい凝視してたよね！」

「してないよ！　ただ……ミソラちゃんにはない大いなる母性は感じたかな？」

「サイテー！」

下手なことを言ってしまったスバルは、ミソラに右ストレートからのコンビネーションで左フックを貰って、意識を失った。その隙にソロを連れさっていく。ソロは完全にあかねとミソラの玩具となってしまった。どこで道を踏み外したのか、孤高の戦士は新しい可能性に向かってひた走っていた。

そして意識を取り戻したスバルはテレビを見て時間を潰しているところ。そんな時間が数十分。ソロがリビングに戻ってきた。女装……とはこの場合言えないので、普通にめかしこんだ彼女の登場に

スバルは少しドキドキする。本能とは恐ろしいもので、中身が男でも見境がない。これでは食事にも集中出来ないので、スバルはトイレに逃げ込んだ。

スバルがトイレに逃げ込むと同時に、カノンが家に帰ってきた。さっきから姿が見えなかったが、どうやらあかねに頼まれてお使いに行っていたらしい。兄がいない間に代わりを務めようと頑張っていたのだろうか。だとしたら感動的だ。ただ、その買い物袋にはほとんどがウインナー類だった。これでは料理の幅は出ない。

そんな事は関係ないようで、純粋無垢な笑顔でカノンはあかねにレシートを渡す。ウインナーがたくさんで、もうそれだけで満足気だった。

「あかねさんー。買ってきたよ……っ！」

「あらあら、全部ウインナー……。たしかお野菜とかお肉を頼んだのにねー……。まあ、カノンちゃんらしくて良いと思うけど」

あかねはカノンの素直さに免じて、命令違反したことを水に流す。そしていよいよミソラがソロについてカノンに話を振った。

「ねえねえ、カノンちゃん！　このお兄ちゃんどう思う？　……あ、今はお姉ちゃんか！」

「え……？　お兄ちゃん？！」

カノンはあんぐりとしてソロに詰め寄る。すぐにスカートに手を突っ込むがそこにはウインナーはなかった……。

「え？　これじゃ、お兄ちゃんじゃない……いったいナニがどうなってるの？！」

「ナニがどうって……、それはナニがないとしか……。ええい！　こっちにもいろいろと事情があるんだ。俺のウインナーは今は檜の

箱の中で安らかに眠っている……まるで役目を終えたように冷たくなってるよ」

「そ、そんな……お姉ちゃん」

「お姉ちゃんではないぞ！　今でこそこんな格好だが、これは師匠の趣味であってだな……」

するとカノンはウォーロックの方に振り向いた。ソロの言い訳はもう耳に入っていないらしい。意識不明でも許し難かったのに、変わり果てたソロを目の前にしてしまえば、彼女の怒りの矛先は当然ウォーロックに向かう。

ウインナー好きということもそうだが、やはり兄が姉になった原因を作った彼は許せないはず。

「ウォーロック……！　お兄ちゃんを返せ！！」

カノンは窓を開けて、ガーデニングから大きめのレンガを持ちこんできた。確実にへこませる気だ。

ウォーロックは身ぶり手ぶりで事情を説明する。もはや意味はないと分かっていても態度で表すしかない。

「おいおい、勘違いするなよ！　これは事故だったんだ！　それに大丈夫だ！　ちゃんと生えてくるってジョニーが言ってた！」

「ちゃんと生えるってナニが……？」

「ナニが！」

「ナニ……？」

するとトイレから帰ってきたスバルが食卓に着きつつ、悲鳴を上げた。食べ物の横でうるさすぎるのだ。目の前のフランクフルトがヘンなものに見えてしまうのだ。綺麗にかけられたケチャップが、例の刺青に見えてくれれば食欲もなくなってくる。

「おいっ！　ナニをナニナニ言ってるんだ！　さっさと夕飯にするよ！　あまり食欲を奪わないでくれ！　カノンちゃんもレンガなんて家に持ちこまない！」

カノンとウォーロックがこう着状態に陥ると、さすがに付き合っていられないソロ、ミソラ、あかねは席に着いていただきますをした。

それを横目にウォーロックはカノンに休戦を持ちかけた。

「よーし……ここはひとまず仲直りだ。お前の大好きなお兄ちゃんは色んな意味で逞しくなって帰ってくる……約束する！　だから機嫌を直せ！」

するとカノンもフランクフルトが食べたいので、ウォーロックに理解を示す。それに兄が姉でも、良く考えたら悪くはないかもしれない。一緒に風呂でも入れば親睦は深まるはずだ。そういった思いから、最終確認だけ取って喧嘩を終わりにする。

カノンはニヤリとしてウォーロックにネタを提供する。

「逞しくって……ナニが？」

カノンからの前振りに、ウォーロックはここ一番の狂おしいまでに腹立たしい笑顔で言い切った。

「ナニだ！！」

その瞬間、食卓の方で声が揃った。何もかもが狙っているので、ミソラを始めニヤニヤしていた。

「「「まだ言ってるし！」」」

そして下品な笑いも提供されたところ、和気あいあいとした食事の席でスバルはウォーセヴティが言っていた祖母についてあかねに尋ねた。ずいぶんと前のことだが彼も記憶の隅で覚えていたのだ。いまどき珍しい紙媒体の切れはしについてあかねは思い出深そうに語っていた。その姿は印象深い。その時に出てきた人物が星河アヤメだった。そんなスバルにとっては何の変哲もない祖母である彼女がカスタムレプリカントアンドロイド――レギオンととてもではないが結び付けられなかった。あかねならきっと祖母のことをよく知っているだろう。

「ねえ、星河アヤメって僕のおばあちゃんだよね」

「うん、そうよ。どうかしたの？」

おかしなことを聞く息子にあかねはクスクスと笑っている。しかしスバルの次の言葉に凍りついたように固まった。

「じゃあ、“アイリスコード”って知っている？」

「――？！　ス、スバル！　どこでそんな事を聞いたの？！」

あかねはいつも落ち着いているし、滅多に動転しない肝っ玉なのだが、今回ばかりは違ったらしい。スバルを大いに驚かせている。何事も初めての瞬間には固まってしまうが、今がそうだった。あかねにとってもスバルにとってもだ。

スバルは我に返るとおずおずと事情を説明する。

「いや……ウォーロックがいきなり気配がどうのとか言いだして、そしたら展望台にウォーロックととてもよく似たウォーセヴティっていうのがいたんだよ。そいつがおばあちゃんの名前を言ってたん

だ。……まあ、母さんに聞いても分からないと思うけど。それにしてもトラッシュの墓に手を合わせたり気味が悪いよ……アイツ」

「まさか、お義母さん。ウソよ……スバルが……」

あかねは一人で深刻な面持ちになりながら、ブツブツと一人で考え込んでいる。どうやらウォーセヴティの言葉について心当たりがあるようだった。

そう、あかねはずっと恐れていたのだ。ウォーロックと共にロックマンとして戦っていたスバルにその片鱗を感じ取って恐怖した。しかし幸か不幸か、運命の悪戯でメテオGの事件後からウォーロックがスバルの前からいなくなってしまった。あかねは内心でスバルがもう戦わなくても良いことに安心した。新しくトラッシュが現れても、彼女はスバルが戦う事を最後まで固く拒んだ。できればスバルには戦ってほしくなかったのだ。母親として、彼女は異常なまでにスバルが戦いの場へ身を投じることを嫌っていたのは印象的だった。ＷＡＸＡ本部までついてくる執念には全て理由があったのだ。あかねはスバルの現状を知ってから運命の魔物から守り通そうとしていた。そう、ずっとだ。スバルが生まれた瞬間から、アヤメにそれだけはしつこく言われ続けていたのである。

しかしあかねの努力も虚しく、運命の魔物はスバルを捉えて離さなかった。ウォーゼヴティが現れ、星河家にメッセージを残して行った以上、スバルはもう逃れることはできない。

あかねは冷や汗を流すが、もう引き返せない。そして訝しそうに見つめてくるスバルに、無理して笑顔を作ってやることしかできなかった。

不穏な気配も感じさせた部分もあったが、夕食を済ませたスバル達は、ルナルナ団本部に赴いていた。今回はソロの“ヒトリちゃん変身記念日”ということで大きめのお風呂で裸の付き合いをしようという計らいだった。もちろん女性陣のみで行う秘密の集会のはずだったのだが、なぜかスバルもピッタリと着いてきている。あかねは年頃である息子の奇行にあえて触れないが、ミソラとしては放っておけない。

ミソラはそんなスバルに強い不安を覚えて、タライを投げつけた。しかし歴戦の戦士であるスバルはそれを片手で受け止めると、鼻で笑い飛ばしたのである。この余裕……やはり彼はただ者ではない。事実、彼は今日という日にかつてのリベンジを果たそうと闘志を漲らせていた。トラッシュと最後に共有した思い出である女湯への潜入ミッション。なので、失敗したままでは天国の彼に会わす顔がないということだ。スバルは負けたままではいられないし、それではトラッシュが報われないと感じている。純粋過ぎる優しさとは、時にある種の狂気を生むという良い例だった。

そんな優しさの狂気に取りつかれたスバルに、ミソラは警戒を強めていた。彼女はスバルの抱いた切ない思いなど分からないのだろう。

「ねえ、スバル君……ここから先は女湯なんだけど。なんでいるのかな……？　ちゃっかりお風呂セットも持ちこんでいるし、意欲的な姿勢が見て取れるばかりだよ」

確かに目の前には“女”と書かれたのれんがぶら下がっている。のれん向こうの床には裸の女性職員の姿がちらほら見られた。スバルは内心でＷＡＸＡのレベルの高さに感激しながらも、トラッシュとの約束を思い出して、紳士的な態度に努めて怪しまれないようにする。もう、作戦は始まっているのだ。意欲的な姿勢も紳士を装えば、それはレディファーストの概念となる。

「いや、僕に気を遣わなくていいよ……。いないものとして考えて」
「いや、さすがにそうはいかないと思うよ。……って何気にストレートに覗く気満々だね……！」
「僕にも譲れない部分はあるんだ！　中途半端なままじゃ、きっと彼は……」

スバルは不意に思いつめた表情をするのでミソラも声を失う。彼の背負っている闇は意外と大きくて、軽々しく口にして良いものではないと察知したのかもしれない。
なのでミソラは多くは語らずにスバルの意志を尊重した。

「分かった。私からは何も言わない。でもね、これだけは約束して。電波変換は使わないって……！」
「うん、始めからそのつもりさ。あの時と同じ状況で僕は最後まで全うする。そうしないと彼は安心してくれないからね」
「まったく、何言ってんだか……ほんと男の子ってバカね」

ミソラとスバルはあらかじめ約束事を取りつけると、握手を交わす。これは友好の印ではない。戦いの前の意志確認だ。

「じゃ、私達は行ってくるから」
「ぼくも男湯に行ってくるよ。言っとくけど、負けないからね！」

「私だって……！」

キリッとした良い笑顔を浮かべてスバルは男湯に向かうのだが、どさくさにまぎれてソロを連れて行こうとする。ソロとしていた約束をどうやら思い出したらしい。

「じゃ、ヒトリちゃんも行くよ！　こっちに来て！」

「あ、ああ、そうだった俺は心は男だ。それに途中経過が気になるし……よろしく頼む、星河スバル」

『まったくモノは言いようってか……』

思わず感心するウォーロック。

巧みな話術によってソロはスバルの言う通りに男湯に行こうとしてしまったのだ。しかしあまりにも馬鹿だ。堪りかねたミソラは、乳を揺らしながらで男湯に向かうその背中に向かってタライを投げつけた。せめてその脂肪の塊を置いていけと言いたいらしい。出来ればそれを自分にも分けろと言いたいらしい。

どうやらソロは決定的に男のロマンが分かっていないようだ。それは温泉においては致命的と言える。

「おバカ！　なにをフラフラとついて行こうとしているの?!　あなたはこっち！」

するとソロはこれ見よがしに乳を張って、舌打ちしてミソラに向かって難色を示す。こんなものが何だと言いたいらしい。そんな脂肪の塊より、大切なものがあるはずなのだ。それはソロの心の中でまだぶら下がっているのだ。

「チッ、なぜキサマの指図を受けなければならない？　言っとくがな、俺の心には立派なモノがぶら下がってるんだよ！　体とか関係

ないっ。こんな脂肪の塊知ったことか！　ええい、邪魔で仕方ない！」

「いや、ある！　関係しかないよ!!　今のアナタには、二つのおっぱいが付いてるの！　女の子の私の前でそれを馬鹿にしたら許さない！　絶対に許さない！　そう、絶対に!!」

『ポロロン……牛乳飲んでも中々上手くいかないものねーミソラ』

「ハープは黙ってて！　でもヒトリちゃんは性根から叩き直す必要がありそうだね……！」

「チッ……！　俺は何と言われようが男なんだ！　心のマグナムまでは捨てちゃいない！」

さすがにこうなってくると、見苦しい喧嘩を止めないといけないだろう。女湯の前でマグナム云々言われても仕方がない。あかねはソロを説得し始めた。

「あのね、ヒトリちゃん。ミソラちゃんはアナタの事を思って言っているのよ？　そんなわがままボディで男湯になんて行ってみなさい……きっと大変よ。もう少し自覚を持たなきゃダメねー……」

「で、ですが師匠……!!　俺はそれでも俺は――」

師匠の言葉にうろたえるソロだったが、女湯に入っては彼のプライドは儚くも崩れ落ちる。譲れないのだろう。

あかねは首を振ってソロの手を引く。

「ダーメ。アナタと色々と話したいことがあるのよ。逃がさないんだから!」

「し、師匠っ、何を……？」

「アナタがいままでどうやって生きてきたのか知りたいの。今だけはアナタのお母さんを演じてみたい。……ダメかしら？」

あかねにそこまで言わすとはソロも罪な女だ。彼女は気付いていないだろうが、あかねはずっとソロの事を心配していたはずだ。
ソロはスバルの誘いを断る他なかった。

「悪いな星河スバル……。どうやら俺は、今だけは師匠の娘を演じさせてくれ」
「……じゃ、僕が兄ってことで」
「フン、多少腹立たしいが、まあいいだろう。了解した」

こうしてスバルは男湯に一人で向かっていった。ソロ達女グループは女湯ののれんをくぐり着衣を脱いでいく。

そして男湯に着いたスバルは男性職員の圧倒的クオリティに度肝を抜かれながらも、ウォーロックと足の裏のツボを刺激し合っていた。
どうやらさきほどのあかねの態度で話が持ちきりらしい。ウォーロックがスバルの服を優しく脱がせながら、からかってくる。

「おふくろ……ソロにべったりだな。もしかしてスバルよ、こういう展開を狙ってたのか？」
「そうかもね。あえて変態を演じることによって生じた軋轢が、二人にとっての潤滑油となったのさ」
「哲学だな……」
「いや、そんなんじゃないよ。まあ、ソロのナニの途中経過も確認したかったけど、母さん達の邪魔はできないよね」

裸になったスバルは股間にタオルを引っかけ、天使のような微笑みを浮かべてウォーロックをドキリとさせる。やはり彼はかなり考えて行動していたのだ。今までの経験値は本物で決して嘘を吐かないということか。

そして二人は、男がごった返す風呂に入っていく。ここの温泉の効能は精力増強だ。きっとソロも促進されることだろう。スバルはそんなことを頭で思い描きながら、作戦を開始した。

まず男湯の内部構造から女湯に続く経路を探しだす。しかし今回の目的はあくまでも覗きではなく、ミソラ達に気付かれずに女湯に侵入して何事もなかったこのように、脱衣所から男湯に戻るというものだ。

覗きは紳士的ではないとスバルはハイドとの共闘から学んでいた。あくまでも女湯に侵入して無事に脱出することに意味があるのだ。一見何の意味もないような狂気じみた行為だが、トラッシュとスバルの間でどうしても解消しておかなければならない切実な問題だった。

とりあえずスバルは、辺りを物色して女湯との敷居である木製の壁に接近した。コンコンとノックしていき木材の腐り具合を調べていく。腐っている部分に打ちつけられた釘は抜けやすくなっているので、そこの木材を外せば女湯へのルートを確保できる。そんな高度な技術をスバルはハイドから教えてもらっていた。

ウォーロックは感心した様子でその職人技を眺めている。湯にも浸からず馬鹿みたいだが、本人は真剣なので魅力的に映るはず。

「なるほどな、まず侵入経路の確保か……中々サマになってるじゃねえかスバル」

「そうだね。僕もリベンジをする為に色々と調べてきたのさ」

「へへ、お前のそういうあくなき探究心、俺は好きだぜ」

「僕も自分のこういう部分は不思議と嫌いじゃない」

微笑み会う二人。するとスバルは腐って釘の打ち付けが弱くなっている例の箇所を発見した。軽く叩いても乾いた音は帰ってこない。指の骨に少し柔らかい感触が残る。間違いない。

「ビンゴ！」
「よし、ここは俺にまかせろ！」

ウォーロックがご自慢の爪で釘を丁寧に抜いていく。その職人芸に壁を作る木材の一枚が剥されて、女湯へのルートができた。いよいよ始まる……二人はほど良い緊張を感じ始めたのだが、そこに男性の声が浴びせられた。どうやら不審極まるスバルとウォーロックに男性職員の一人が気付いたらしい。スバルはハッとして、振り返った。もしかしたらとんでもないことをしでかしてしまったのかもしれない。

「おい、そこの君。なにをしているのかね」

声は老人のものだ。しわがれた声質の中でも人の良さそうな優しさを感じさせるものだった。

スバルは怪しまれないように、施設の管理業者を装った。

「いやー……。あれですよ。僕って水道局の職員の息子なんですけど、壁がボロくなっていないかと気になってしまいましてね」
「はて……？　みたところ女湯への道を開けようとしているみたいじゃったが……」

老人はスバルを不審に思ったらしく、開けられた壁の穴をまじまじと見つめている。すると老人は少し前かがみになると、スバルに耳打ちしてきた。お腹が痛いのかもしれない。

老人はどうやら事情を察知したらしい。

「なるほど。若気の至りってことかのう……」
「お、おじいさん……。黙ってここは見逃してください。僕は友達との思い出を完璧に仕上げてあげたいんです」

スバルの真っすぐな瞳に老人は観念したようだ。こんな素直な少年をサテラポリスに突き出すのは忍びない。

「よかろう。君のその目……よほどの事情があると見える。よし、ワシも協力しようじゃないか」

「あ、ありがとうございます……！」

スバルは男湯で高齢の男性職員を仲間にしたのだった。強力な助っ人にウォーロックも心強いらしく、意気揚々と自己紹介をした。とりあえず女湯を攻めいる前にお互いを知っておかなくてはならない。挨拶は大切だからだ。

「ヘッ、中々話の分かるジイさんで助かったぜ！　俺はウォーロック、よろしくな！」

「僕は星河スバルって言います！　よろしくお願いします！」

すると老人も股間にタオルを引っかけると、禿げあがった頭をペシペシと叩いて名乗る。

「ワシの名前は、うっかりシゲゾウじゃ。こう見えても昔、ＷＡＸＡではそれなりの偉い人だったんじゃぞ？」

シゲゾウと名乗る彼にスバルは思わず背筋を伸ばして、改めて頭を下げる。それもそのはず、うっかりシゲゾウという男は宇宙飛行士を目指す者の間では有名すぎるのだ。人類で初めて火星に着陸した英雄である。その体当たり的な宇宙活動から“破竹のシゲ”と呼ばれてＷＡＸＡ職員の間では伝説になっているほどだ。

スバルは生ける伝説との遭遇に歓喜した。まさか女湯に潜入するところで伝説と変態になれるとは思わないのだから。

「わ、本物のシ、シゲゾウさんだ……！　ウワサじゃハードトロピカルっていうお酒が大好きなシゲゾウさんじゃないですか！　会えて光栄です！　感激しました！」
「ふぉふぉふぉ、まあ、そんなにかしこまるでない。この場においてはワシもタダのスケベジジイじゃ」
「へッ、違いねえ……！」

もう何も怖くない。まさに麻薬のような陶酔感に襲われていく三人。そしてシゲゾウが先陣を切って女湯に慎重かつ大胆に潜入して行ったのだ。彼は露天風呂の女湯の植え込みに紛れながら上手く身を隠していた。そしてスバル達を呼びつける。

「ほら、君たちも来なさい。ミソラちゃんがいるあたり、孫へのみやげ話もできそうじゃ！」
「へッ、ロクなジジイじゃねーが、悪くねー！」
「よーし、行くぞ！」

意気込むスバル。だが焦る彼にシゲゾウはまず老年の知恵を見せつけた。露天風呂の植え込みには鮮やかな落ち葉や土、砂利といった自然の景観を演出するアイテムがたくさん設置されている。それを利用し老人は裸の体にまとっていく。見る見るうちに体が土色や、紅葉の鮮やかさを放ちだす。湿った裸の体にそれらは良く馴染んでこびり付き、秋の気配を感じさせるスニーキングスーツに早変わりだった。これで紅葉に彩る露天風呂内でのカモフラージュ率は相当なものに跳ね上がる。

その時スバルは確信する。シゲゾウのくぐった場数が半端ではないことに。

シゲゾウの確かなアシストを受けて、スバルは露天風呂の風景に完璧に溶け込みながら、女湯の奥に侵入して行く。前回の失敗の反

省点――つまり擬態を解決した完璧な滑り出しであった。

「す、凄いです！　シゲゾウさん……！　まさか早速こんなテクニックを見せつけてくれるなんて」

「ふぇふぇ、ワシも伊達に長く生きておらんということじゃ」

「しかしスゲエな。風景に完全に溶け込んでいるおかげで、周りのヤツら完全に気付いてねえ」

ウォーロックは砂利や落ち葉だらけになった自分の体を水面に映し出すと感心している。覗きは目的ではないが、ここまで面白いようにことが進めば周りの女どもに目が行くというものだ。もちろんシゲゾウもその辺りの男の部分はまだ元気らしい。二人はスバルを差し置いて、ミソラ達を探しだす始末だった。

「さて、ミソラ達はどこかな……？　ガールズトークには興味があるしな」

「ホッホッ、アイドルのプライベート温泉トークか……ビデオでも持ってくりゃ良かったかのう……」

しゅんとするシゲゾウ。スバルは慌てて二人に本来の目的を教えてやる。あくまでも覗きは目的ではない。そんなことは男として最低だと説く。しかし説得力も何もあったものではない。

「ちょっと、二人とも！　なにを覗く気満々になっているんだよ！　そんなの男として最低の行為だ！」

するとウォーロックだ。誰がどう見ても、すでに自分達は最低だと逆に教えてやる。基本的に覗こうが覗かまいが、女湯に泥とか落ち葉とかを体にこびり付けさせ擬態している男……もはや、それだけで十分に変態すぎる。それが世論だ。

「スバル……落ちつけ。今の俺達はどこからどう見ても変態だ。最低を極めた薄気味悪い連中となっているぜ！」

確かに湯船に映る彼らの姿は醜い。スバルは非情な現実を目の当たりにして、口をつぐんだ。返す言葉もないらしい。

「クッ……確かにウォーロックの言う通りかもしれない。言われてみれば、かつてないほどの変態じゃないか僕たち……」

「本格的に擬態している辺り悪質だよな」

「まあ、いいじゃろう。若気の至りというヤツじゃ」

特に若くもないシゲゾウが言うのでスバルは皮肉たっぷりに言う。刺激の強い女湯にいるのでいつポックリ逝くのか分かったものではないのだ。

「まあ、シゲゾウさんは棺桶に片足突っ込んでますけどね……」

「おおう？　言ってくれるなスバル君。ワシの精神年齢は五歳くらいで止まっておる。永遠の少年じゃ」

「五歳って……逆に気持ち悪いです」

スバルの物言いは酷いが、シゲゾウはある深刻な事情から、脳みそをいじくりまわす手術を受けており、精神年齢が五歳くらいになってしまっていた。なので記憶もあいまいで、いろんなことをうっかりしてしまう困った老人になり果てている。そもそもそんなお茶目な老人でなければ、ここにこうしていない。

そしてスバルが説得しても無駄であるという事は自明なので、三人はミソラ達のガールズトークを盗み聞きしに、温泉内を徘徊していく。その光景は不審者であるが、気付かれないなら、それで良い。

途中、年季の入った老婆の裸を見せつけられてしまい、げんなり

する一同だった。しかしそんなハプニングを乗り越えたところで、ようやくミソラ達を見つけるに至る。

やはり若いというのは素晴らしくて、ここまでくれば遠慮など野暮ったい。それに会話に花を咲かせているらしく気付く気配もなかった。スバル達は植え込みに擬態して、急接近した。実はスバルもなんだかんだでこの状況を楽しんでいるらしい。最低だが、地球を救ったのだからこれくらいは仕方がないかもしれない。すっかり当初の目的が忘れ去られていた。

そんな状況でも、ミソラたちは楽しそうで、罪悪感など消し飛ばしてくれる。

「あーぁ、良いお湯だね、あかねさん」

ミソラは濁り湯に油断しているのか、足をぱっくりと開いている。スバルはけしからんと思いつつも黙って見ているだけ。

あかねはそんなリラックスしているミソラに話を振った。

「そうねー良いお湯だわ。家の裏にこんな温泉があるなんて信じられないわね。それもこれも、ミソラちゃん達が家に来てくれたおかげかしら？」

確かにミソラ達が星河家の世話になるようになってから、周りの状況が一変した。世界の命運的にも、家庭の状況的にもだ。ルナルナ団の本部なんて出来てくるのだから世界の末期をも思わせる。

するとミソラは思いつめた様子であかねを見つめ始めた。スバルの家に来たのにはワタルがいなくなってしまったからという悲しい事情があったからで、十分すぎる暗い要素もある。インフィニットに対してどうしても譲れないものがワタルにあったとしても、ミソラとしては納得できない部分も少なくない。

「家に来た……そうですね。スバル君達と一緒に暮らせるようになったのは嬉しいけど……やっぱり、パパと一緒に暮らしたかったかな」

「……それはそうよ。まったくワタル君もこんな可愛い子を残して……男の人って、いっつもそうなのよね」

あかねは大吾のことを暗に責めている。ミソラも苦笑だ。

「あはは、また置いていかれちゃった。だけど、あの時のパパの背中は少しカッコよかったな……。きっと今までもずっと、ああやって戦ってきたんだなーって思わせられたんだ……」

「そうね。ワタル君の選択は間違ってなかった。それでも辛かったら、私やスバルに遠慮しないで頼ってね。私じゃカンナさんの代わりにはなれないと思うけど、ワタル君が帰ってくるまではアナタの母親はやらせてもらうつもりだから」

「あ、ありがとう……あかねさん」

あかねからの優しい気配りに何度かもじもじと指を突っついて、恥ずかしそうにしていたミソラだったが結局ママとは呼べないらしい。カンナを大切にした彼女だった。

そんな会話にスバルは裸であることも忘れてしみじみしていると、あかねは今度ソロを呼びつけた。当のソロはカノンに泳ぎの仕方を教えているらしいが、他人の迷惑なので止めてもらいたい。そうではあるが、姉妹の姿は微笑ましくてスバルの心は和んだ。中身がソロでなければ興奮を禁じえないだろう。しかしそれは同時にその大きな胸も隠さないという、覗き側にとっての圧倒的なアドバンテージを生む。隣のシゲゾウはがくがくと震えて心筋梗塞寸前まで追い詰められてしまった。片足まで棺桶だったが、両足までも棺桶に突っ込んでしまったようだ。スバルはそんな老人が気が気でないが、今は放っておくしかない。ソロ達から目を離せないのだ。

そしてあかねはソロと、女湯の前で言っていた話を始め出す。よくよく思えばスバルもソロの過去は良く知らないので、横で痙攣するシゲゾウなどどうでも良くなるくらいに集中することができた。

「ヒトリちゃん、いいえ今はソロ君と言っておきましょうか。はあ、まったく今までどこでなにをしていたのかしら……、心配してたのよ？　でも、スーパーで変わってしまったアナタの姿を見た時にまったく気付けなかったのは私も修行が足りないということかしらね……」

幼い頃のソロは金髪だったが、今は白髪でタトゥーまで彫っている。気付く訳がないだろう。

ソロは事情を話し始めた。あかねにだから言えるのだろう。

「師匠、俺は姿を消してから、ずっと一人で生きてました。アナタに生き方を教えてもらって、ゴミを漁ってでも生に執着しました。ですがそれと同時に……俺は他人とは違うと強く実感していき、他人との壁を突きつけられました」

「そうだったの。でも、なんでそんなことに……？」

「前にも言いましたが、殺人衝動ってヤツですよ。俺は生まれた時からそういった本能を埋め込まれていたのです。地球人は敵だ！という強迫観念……それでも周りには地球人しかいない。俺はおかしくなりかけましたが、ある日ふっ切れたら、髪も白くなり目も赤くなって、まるで別人に変わっていました。今思えば、あの時から俺は人間でもなくなったのかも……」

「人間じゃない……って、あなたは十分に人間らしいと思うわ。その証拠にアナタは私の教えたことを守り続けてたじゃない」

「そうだといいんですがね。だけど、体が女になってから不思議と気分は悪くないです……」

ふっと微笑み、ソロは自分の胸に目を落とす。スバルは目のやり場に困るが凝視することにした。どうやらソロは胸の黒いどす黒い塊の正体に気が付いていたらしい。それがウォーロックに体を女にされてもカノンほど怒らない理由なのだろう。むしろ彼のおかげで長年苦しんでいた衝動から解放されたと言える。

レベッカやウォーロックが言っていた胸のどす黒い塊はガンでもなんでもなくて、ソロが長年の間ずっと抑え込んで胸に溜めこんでいた人間への殺人衝動そのものだった。ムー人が長年地球人に抱いていた殺意の集合体。そんな恐ろしい負の歴史からソロはやっと解放されたのだ。その代償が女体化だとすれば、黙って受け入れられる。

ジェイルがどうやっても抑えられなかったものにソロは勝利したのであった。

「体が女になっても、不思議と安らかな気持ちになれるんです……自分でも不思議な話ですけど」

「それはヒトリちゃんにそういう趣味があったってことかしら？母さん、悲しくも嬉しくもあるわ」

物思いにふけっていたソロだったが、あかねが意地悪くソロの深層心理の変態的嗜好を指摘した。女になって安らぐとはそういうことだろうと彼女は言う。ソロの言い方にも誤解を生ませる部分はあるが、何よりあかねがからかいたいだけなのは誰が見ても明らかだ。

するとミソラまで便乗してくる。

「まあ、ヒトリちゃんは料理がうまいし、家事全般出来るしで、なんで男の子してるのかなとはずっと思ってた！　けど、結局天の思し召しで今の姿になったんだよね。よかったよかった！」

ソロの心は男なのでそんな事を言われても嬉しくはない。胸の脂

肪が邪魔臭いし、筋力も落ちてせっかく上がった戦闘周波数を存分に発揮できない。なにより睨みに迫力がなくて、カノンにも舐められる。そもそも料理や家事全般をたしなむのも、過酷な環境とホームレスとしてのプライドがあったからこそだ。心が安らいだのも、殺人衝動から解放されたからだ。けっしてそういう趣味がある訳ではない。

なのでソロは嫌味っぽくミソラの貧相な体を馬鹿にした。どう言えば女が悲しむのかはソロでも分かる。胸の脂肪に、男の股間と同じくらいのコンプレックスを抱いているものなのだ。

「チッ、貧乳め、心まで貧相らしい……！　男の俺でも料理が出来るというのにキサマというヤツはまったく……！」

「むむ、私はまだまだこれからだもん！　ってかね、君が大きすぎるんだよ！　一体全体どうなってるのかな、そのおっぱいは！」

ミソラがソロを睨んで、貧相な胸を手で隠す。小学生に貧相も何もあったものじゃないが、ソロの体を見せつけられてはそうは思えないのだろう。

そんなやり取りを見守るスバルはミソラはむしろ頑張っている方だと声を上げそうになるが、ウォーロックに止められる。シゲゾウは隣で泡を吹いている。どうしようもない。

しかしシゲゾウの危機的状況を知る由もないソロは得意げに立ち上がり仁王立ちだ。その年齢にそぐわない完璧なボディをミソラに見せつけてやる。何を隠そうきずなクルー式肉体改造手術を受けた彼女は胸の一つや二つを大きくするのは朝飯前だった。彼女は胸を邪魔臭いとは言うが、無いよりはあった方がいいとも思っている。それが河川敷でまとめて捨てられている本から得た結論だった。巨乳は普遍的なステータスだが、貧乳はある一定の変態にしか通用しないステータス。汎用性からして違うのだ。この世界の全員がハイドのような人間ではないという悲しい現実がその結論に隠されてい

た。

「俺はな、肉体操作で乳のでかさなんて自由に変えられるんだよ！　まあ、ナニは根こそぎ持っていかれたから苦労はしているがな……！」

「ていうか、何気に凄いよねそのきずなクルー式の電波化ってのは……！　私もロック君に頼もうかな……そしたらおっきくなるし」

「やめとけ。ヤツのことだ。女であるキサマにはきっとムーの大槍を生やすことだろう……！！　そうなったらもはや人間とは言えない……っ」

「きゃぁあああ！　それはイヤすぎる！」

ミソラは例のブツを恐ろしく思い、悲鳴を上げているが、そもそもウォーロックの電波化は危険なのでミソラでは受けることはできない。特殊訓練を受けたきずなクルーや、もとより電波化ができたソロだから可能だった離れ業なのだ。ミソラが仮に受けたとしても、キングのような化け物が出来るだけだろう。最悪の場合、肉棒の化け物になる。

ただウォーロック本人は盛り上がっている女性陣に溜め息を吐く。彼女らの中では、彼はよほどの変態として出来あがっているらしいからだ。

「まったく、言いたい放題言いやがって。好きでナニをフッ飛ばした訳じゃねーよ！」

小声で呆れるウォーロックだったが、いよいよシゲゾウがマズイ。スバルはシゲゾウの心肺が弱まっていることにようやく気が付いて、慌てふためいていた。原因はソロの過激な体を見てしまった事による、テクノブレイクだった。いわば自業自得なのだが、こんなことで伝説の男が死んでしまっては笑えない。

スバルは何とかして女湯から脱出する方法を考える。

「まずい、シゲゾウさんがテクノブレイクしかけてる……！」
「チッ、無茶しやがって……！　年寄りが張りきるもんじゃねーな」
「おふぉふぉふぉふぉふぉ……天国のバアサンが見える……見えるぞ！」
「あぁ、見えちゃいけないものまで見え始めた！　ついでに落ち葉がはがれて見えちゃいけないモノも見えてるし！」
「おい、ジイさん！　意識をしっかり持て！　孫に今日のこと話してやるんだろう？　立て！　立ち上がれ！！」

ウォーロックの呼び掛けにシゲゾウの別の部分が立ち上がった。
スバルは呆れかえってしまった。

「ぁあっー、シゲゾウさん違います！　そこじゃないです！」

てんやわんやの三人だったが、孫の笑顔を思いだしたシゲゾウがいったん持ち直す。だが、ここに来てソロが湯からあがって体を洗おうとこちらに接近してきた。いくらシゲゾウの精神年齢が五歳だとは言っても、肉体年齢は八十近いので、ソロの体の破壊力の前では成す術がなかった。心筋梗塞から脳梗塞まで併発して、危機的状態が危篤状態にまで発展した。

危篤でもシゲゾウは最後の力を振り絞って、ソロの胸めがけて這いずって行く。死をも賭した執念は天晴れだが、もはや自分で何をしているのかも分かっていないのだろう。状況を判断しかねた行動は命取りだった。シゲゾウを止めようとしたソロとスバルの目が合ってしまう。カノンが「ウインナーだ……！」と言った。その的確な発言にミソラとあかねがスバル達に気付いてしまい、その瞬間に全てが終わったと感じさせる。

スニーキングスーツまで作って擬態していたという悪質さから、

今回スバル達は重点的にボコボコにされてしまったのだ。
なのでスバルが布団の中ですすり泣きながら、就寝したのは言うまでもなかった。風呂に入りに行ったのに、体を砂利と落ち葉でいっぱいに汚したスバル。そして結局ボコボコにされたのだから、何しに行ったのか分からない。泣きたくなるのも無理はなかった。

「グスッ……痛いけど、ソロ、母さん、ミソラちゃん、カノンちゃん……というランキングが僕の中で確定したのは収穫か……でもやっぱり、まだ傷が痛む……うぅ」

『おい、スバル何をブツブツ言ってるんだ？　さっさと寝ろ！』

第二次スバルの潜入大作戦はこうして幕を閉じた。

ｓｂｒ―２１：ゼロの胎動

第二次スバルの潜入大作戦が終わったころと同刻。

数日前に地下から地上に引き上げられたゼロは、いよいよワイリー研究所で目覚めようとしていた。彼こそが、対インフィニット用の切り札として、リフレイン達に期待されている人物だ。言うなればセツナに変わる救世主。ゼロプロジェクト対策およびレギオン研究本部でＷＡＸＡ職員一同の注目が集まっていく。

この世界のワイリー博士が残した最後の希望に、子孫であるリフレインも特別な思いがあるのだろうか。そういった期待と不安が入り混じった表情を浮かべながら、彼はコールドスリープしているカプセルの設定を解除した。そうやってゼロの長い眠りを解いてやったのだ。しかしゼロのことを念のために警戒しているので、リフレイン達は目覚めと同時に彼の体を電波の拘束具で縛り上げた。

酷い仕打ちにもかかわらず、ゼロは目を開けると頭を抱えながら上半身を起こす。拘束もそうだが、まだ体が硬いようだ。動作の端々にぎこちなさが残っている。長い金髪を背負いながらで、まずゼロはリフレインに自分の名前を尋ねた。彼は目覚めたばかりできっと何も知らないのだろう。

「俺の名前は……？」

「ゼロだ。ワイリー博士が君に与えた名前だ」

「ゼロ……なるほど、もっともな名前だ。悪い気はしない」

そして次は年代だった。今がどんな世界でどんな時代なのか知っ

ておきたいのだろう。

「今は何年だ？　俺がコールドスリープについたのは２０ＸＸ年代だが……」

「今は２２ＸＸ年。キミが作られてから２００年後の世界だ」

「二百年後……どうやら、百年ほど目覚めが遅れたらしい……博士の設定じゃ２１ＸＸ年代に目覚める予定だったのだが……」

ゼロは凍った髪の毛を解きほぐしながら考え込むと、辺りを見回す。だんだん体が慣れてきたのか、拘束具をものともしていないようだ。そして自己解決したようで、ゆっくりと立ち上がった。彼が２２ＸＸ年に目覚めたという事実は、ワイリーが予期した状況に百年ほど遅れて進行しているということを意味している。なので考えても仕方がない。

「まあいい。俺が遅れて目覚めたという事は、計画が少し長引いているというだけのことか」

一人で納得したゼロはカプセルから下りると、すたすたと歩いていく。どうやら目的があるらしい。ワイリー博士が残した命令かもしれない。

彼は一人で研究室から出て行ってしまおうとする。もちろんリフレインは追いかけた。彼には対インフィニットの切り札として、ここに残ってもらわなければならないので、勝手な行動をしてもらっては困る。

「待て、目覚めていきなりどこに行く？」

「分からない。でも博士は俺に大切なものを残してくれた気がする……確かアイリス……そんな名前だったはず。探さないと」

アイリス……かつてワイリーが作ったナビの名前だ。しかし二百年も前の型落ち品にゼロは何の用があるのだろうか。だが彼の望みはおそらく叶わない。なぜならアイリスはもういない。リフレインはゼロを引き止めるためにそのことを教えてやった。

「彼女はとっくの昔に死んだ。電脳獣から世界を救うために……」

「そうか。でも俺はそれでも探しに行かないといけない。ワイリー博士は俺と同じようにアイリスも復活させてくれたはず。博士はそういう人だった……」

「そんなはずはない。ワイリー博士はそんなこと言ってなかった。キミは混乱しているんだ」

「いや……俺は確信している。博士の考えが頭の隅で息づいているのだから」

ゼロはそれだけ告げるとゼットセイバーを取り出して、研究所の壁を切り裂いてそのままウェーブロードに跳び上がってしまう。デスクワーク派のＷＡＸＡ職員ではとても追跡は出来なさそうだ。周波数から辿ろうにも、ゼロも例外なくワイル粒子で身をコーティングしているので困難だろう。

リフレインは溜め息を吐いて、ゼロの不可思議な言動に頭を悩ませる。ゼロの様子から一般市民に危害を加える様子はなさそうだが、それでも警戒をしておかなければならない。

「まったく、面倒なことになった。念のためにゼロにリミッターを施しているとは言え、放っておくのも心配だな……」

ゼロの目覚めから一夜明けたコダマタウン。スバルの家ではいつ

も通りの朝が始まろうとしていた。スバルはいつものように学校に行く準備を始めている。隣にはソロがおり、彼女は女の子として学校に改めてデビューする訳だが、服装はいくら師匠の言う事でも却下したらしい。彼女はタンクトップにホットパンツという色気のない格好をしていた。

　可愛い服など着る気は毛頭ないようだ。中身が男なので当然と言えば当然ではあるが、スバルは内心で勿体ないと思っているのもまた当然の結果だった。それだけソロの肉体は小学生離れしていた。ミソラやルナに対する当てつけとも言えるくらいだった。

「ねえソロ……。僕としては、ずっと女の子のままでいいと思うんだけど」

「ダメだ。股間に何もないと妙に落ち着かない」

「いや、その代わり胸が大きいじゃない。それで十分さ」

「バカめ……！　おだてても無駄だ。俺の体は俺が決める！！」

「分かった、分かったよ。ヘンなこと言って悪かったよ。でも、生えたとしても、また刺青を入れるの？」

「いや……俺は過去と決別するためにもうナニに墨は入れない」

「う、うん……過去との決別以前にそれが良いと思う」

　可愛い顔してブツに刺青を入れるか入れないかを真剣に語るソロは見ていて不安になる。スバルは何となく複雑な気分になりながらも準備を済ませてしまい、ソロと一緒に玄関で待たせているルナの元に向かった。

　そしてルナの前に女となってしまったソロを晒すことになる訳だが、彼女は特に驚くことはなかった。いつものように仕切って学校に向かう見慣れた彼女の様子である。スバルはまた何か言われるのではないかと覚悟を固めていただけに拍子抜けだった。

「あれ、委員長。何も突っ込まないの？」

「だって、もう私があれこれ言っても無駄っぽいし」
「なるほど……。もう見放されてる感じってことか」

スバルは寂しいような嬉しいような複雑な思いを抱きながらも、やっぱり安心して胸をなでおろす。こういうそっけないルナは嫌いではないのだろう。

だがルナはそんな態度を良しとせず、くるりと振り返って油断している彼に昨日の出来事を指摘する。どうやら彼女は全てお見通しらしい。スバルが女湯で大活躍したことも当然把握している。なぜならルナルナ団のリーダーだからだ。ルナルナ団本部で何が起きようとも手に取るように分かる。

「たしかに見限りそうね。だって昨日のアナタ、最低だったもの。女の子のお風呂を覗こうなんて……！」
「いっ?!　委員長?　なんでソレを……?」
「前にも言ったでしょ?　私はルナルナ団本部の全てを監視カメラで見張ってるって」
「え?　あれって冗談じゃなかったの?」
「それこそ冗談！　おかげで昨日のアナタに私、呆れて泣きそうになっちゃったじゃない！」
「いや……トラッシュとの約束であって……」
『やめとけスバル。あれはどう見ても俺達が悪い。自分で言うのもアレだが、あそこまで本格的な変態はそういねーよ』
「ロック……冷静な判断に思わず拍手をしそうになったけど。それどころじゃないようだ」

ルナの視線が突き刺さるようで、スバルは背中を丸めて肩身がひたすら狭い。とても言い訳のしようがないので、黙って言わせたいように言わせてやる。昨日ミソラから頂いた報復に比べれば大した問題ではない。

だがルナの言葉攻めは耳に辛くて、それに変な所で勘違いしているので手に負えない。

「それにアナタ！　お年寄りをそそのかして道連れにするなんて……。もう、呆れてものも言えない！」

「いや……どっちかというとシゲさんの方が乗り気だった……。というより、落ち葉スーツを発明したのも彼だし……そそのかされたのはむしろ僕の方……？」

スバルは嘘にはならない程度にシゲゾウに罪をなすりつけて上目遣いでルナに訴えた。あまり可愛くないし、むしろ腹立たしい態度だ。

ルナからすれば老人に罪をなすりつける落ち葉スーツの変態が、上目遣いをしているだけにしか見えていない。

「まあっ！　呆れた……！　ここに来てシゲゾウさんに罪をなすりつける気？」

「いや、勝手に女湯に入って、勝手に落ち葉スーツを開発して、勝手にミソラちゃんを探して、あげくテクノブレイクしかけるし……逆に僕にどうしろって言うんだよ！　立ち上がれって言われて、勃ち上がる八十歳なんだぞ？！　ぼ、僕は被害者だー！」

――と訳の分からない供述を繰り返しており、そのまま学校に向かって逃げるように走り出した星河スバル少年。

一同はその背中に憐れみの目を向けるだけだった。地球を救った英雄が聞いてあきれる光景だ。

そしてしばらくして、学校に到着した彼らはホームルームの途中だった。スバルはルナにこっぴどく叱られたようで、机に突っ伏していじけていた。現在、教壇では本性を隠したソロがソロの親戚として紹介されているところだ。事情を知らないクラスの男どもはダイナマイトガールの登場に興奮のるつぼだった。それもそのはず、乳がでかいだけで十分なのに、男勝りな性格な上に料理が得意で、家事も完璧にこなすあげく空き缶拾いの元ホームレスとくれば、もはや非のつけどころはない。その野性的な魅力からくる人気は正統派のミソラに匹敵するかというほどで、恐ろしいとしか言えなかった。

育田もそんな彼女の魅力に少々頬を染めているが、教師としての一線を大切にして、ホームルームを進行させているという具合である。

「と言う訳でソロ君は、下腹部を負傷してしまったので、入れ替わるように転入してきたこの子のお名前はヒトリちゃんだ。みんな仲良くするようにー。あと、この前みたいにセクハラはしないように」

「チッ……！　まったく、なんでまた二度も自己紹介をしないといけないんだ……！　バカバカしい」

ソロは口裏を合わせる気はないらしく、自分がソロであることを気取らせる危険な台詞を吐く。ざわつく教室の男子一同。確かに頬の刺青なんかはソロとまったく同じなので疑い出したらキリがない。

するとすぐにミソラがフォローを入れた。

「あぁーっと、ヒトリちゃんの中のもう一人の自分が疼きだしたようだよ！」

もう一人の自分が疼いたのなら仕方がないと、納得する男子一同。六年Ａ組は素直な子しかいないらしい。

ミソラのフォローのおかげで、こうしてソロは“頭のおかしな女の子”ポジションを射止めることが出来た。このポジションのおかげで少々おかしな発言をしても許してもらえるはずだ。

たまに乳でも見せておけば、ソロが男だとは永遠にばれないだろう。そうやってホームルームは無事に終わった。

そして時間が過ぎていき、体育の時間が終わったころ。とうとう恐れていた事態が発生してしまった。それは女子更衣室での盗難事件。なんとソロとミソラの私服が何者かに盗まれてしまったのだ。育田があれほどセクハラをしてはいけないと言ったのに、どうしようもない連中である。六年A組の男の子連中は素直でいい子だが、欲望にも素直なのが玉にきずだった。

しかしルナの服が盗まれなかったので、少し彼女は不満そうだった。なんとなく負けたと思ったのだろうか。それとも、また別の不満があるのか。逆にカノンはいつも裸足なので更衣室のロッカーにニーソックスが入れられていた。どうやら犯人は中々の変態のようだ。

もちろん女子の服が盗まれるなんていう事件は学校で起こり得る最悪レベルのイベントだったので、緊急ホームルームが行われる。給食の時間が殺伐とした一時に早変わりしてしまった。

教壇で神妙な面持ちの育田は、常套手段を用いてまず生徒たちの精神を揺さぶりにかかった。

「残念だが、響とヒトリの服が盗まれてしまった。これはゆゆしき事態だ……。みんな目をつむれ」

生徒たちはゴクリと唾を飲みこんで目をそっと閉じた。ゴン太だ

けは薄眼を開けていたので、育田のチョーク投げで目を潰される。
育田は生徒全員が目を閉じたのを確認すると、決まり文句だった。
「犯人は手を上げなさい。誰にも言わないから、正直に答えるんだ」
この一言に込められたプレッシャーは尋常ではない。何も悪いことをしていない大半の生徒の頬を冷や汗が伝っていく。まるでこの場所が刑務所であるかのような、殺伐とした空気だ。ここから逃げるためならば、嘘でも手を上げて楽になってしまいたい……そんな心理を巧みに利用したトリックだ。
育田は生徒の心をさらに揺さぶる。ここは心を鬼にしなければならないのだ。
「なんだ……言わないのか。自分から言ってくれれば、許されたかもしれないのになァ……。先生から言ってあげなければならないらしい。でも、それだとクラスのみんなからの信用がなくなるぞ？」
子供心をくすぐる話術に生徒たちが震えあがる。ここで名乗らなければ、クラス内で卒業まで変態のレッテルが張られてしまう。
もちろん育田は犯人を知ってはいないのだが、こう言っておけば名乗り出す可能性はグッと高くなる。要は魚釣りと一緒なのだ。見えない相手と腹の内を探り合う心理戦だ。これが小学校の醍醐味といえる。このクラスは巨大な釣り堀と化した。釣り師育田の手腕が生徒に襲いかかる。
そしてしばらくもなく、その育田の策にはまった哀れな少年がスッと挙手をしたのであった。そう、スバルだった。彼は手を挙げて犯人だと名乗りあげたのだ。
地球を救った英雄の凶行にクラスは戦慄した。

ｓｂｒ―２２：夜も眠れないほどにアナタが好きだった……

あまりにも悲しい結果だった。

「ス、スバル君……！　まさか、キミが私の服とかパンツを盗んだなんて」

「キサマ……！　俺の使用済みトランクスを！」

ミソラとソロがスバルのしでかしたとんでもない仕事にそれぞれの反応を示した。ミソラは手を口で覆って、給食を我慢して垂れたよだれを隠すしぐさで、ソロは胸の谷間から取り出した卵を割っておもむろに卵ご飯を作るしぐさ。今は給食の時間なので、仕方ない反応だった。

するとスバルはクラスの注目を一身に浴びながら自供を始める。今朝のこともあるのでルナを始め、誰もがスバルを変態と認めていた。

「仕方がなかったんだ……。今朝、委員長に怒られてとても悔しくて、見返してやろうと思ったんだ……でもやったことは後悔していない」

――と訳の分からない供述を繰り返すスバル。一体地球の英雄がなぜこんな下らない事を？　クラスの全員がそんな疑問を抱くが、スバルの本性が畜生にも劣るものだったということだ。ミソラはスバルに失望して、班ごとにしてくっつけっこしていた机を離して給食

を食べ始めた。他のメンバーもスバルから机を離していく。
それがきっかけとなり、スバルは誰からも相手にされなくなり、教室の隅で孤立した机で一人黙々と給食を食べ始めるしかなかった。しかし彼の目が死んでいないことに、ウォーロック以外誰も気付いていない。
そう、スバルは犯人ではない。彼は真犯人を庇って犯人を名乗り出ただけだ。そう、なんとしても真犯人を守らなければならない。その為にはクラス中から変態のレッテルを貼られることもやむなしだった。そう、彼は真実の一部始終を目の当たりにしていたのだ。

そしてお昼休み。スバルはクラスで孤立しつつも、何とかミソラとソロに話しかけることが出来て、本当の事情を話し始めた。教室の片隅で除け者がクラスの人気者に声を掛ける光景は残酷とも言えるが、スバルはそんなことを気にしている場合ではない。そういった思いや焦りから、自分が犯人でないことや、真犯人はこのクラスにいる他の誰かであるという事を伝えていく。
しかしミソラ達は信じてくれないようだ。昨日のことがあるので仕方ない。

「いきなり何を言ってるの……。キミが犯人なんでしょう？　昨日だって私のお風呂を覗いたし……」
「いや、違う。いや、昨日のは違わないけど、今日のは違うんだ」
『いや、正確には半分は犯人と言えるかもな……』
「あっ、コラ、ロック」

ウォーロックの余計な口出しにソロが首を傾げる。スバルはばつが悪そうに俯いた。

「どういうことだ？　星河スバルが犯人ではないけど半分は犯人とは一体……」

『スバル……いや俺達は昨日のリベンジつまり……女子更衣室に忍び込んだんだ』

「やっぱり、キミが犯人じゃない！　サイテーだよスバル君！！」

最近ミソラの中でスバルの株は急降下だ。変態に輪を掛けた変態と判明すれば仕方のないこと。

しかしスバルは懸命に弁解した。

「違う！　いや、違わないけど！！　僕は犯人じゃない！！　本当なんだ！　僕は何も盗っちゃいないー！！」

「キサマ！！　この期に及んでまだ言い訳するか！　だったらなんで自分から犯人を名乗り出た？」

「そ、それは……」

スバルはまたも口をつぐんで黙り込んでしまう。はっきりしない態度にソロがスバルの胸倉を掴んで持ちあげた。女性とは思えない腕力だが、スバルに胸を押しあてる形となっているので、あまり暴力的な印象は受けない。スバルにとっては良いサービスだ。

しかし呆けている暇はないので、スバルは興奮を隠しつつ、必死に言い訳を続ける。そして一つのキーワードをソロとミソラにそっと耳打ちする。

「だからさあ……、犯人は“早撃ちマーク”なんだよ……！！」

やはり意味の分からない供述をするスバル。ソロはイライラとしながらスバルを突きとばした。机の角に頭を打ってしまったスバルだったが、まだ言ってくる。開き直った態度は真に迫る。

「イテテ。ああ、そうかい！　分かった、分かったよ！　はっきり言うよ！！　僕は昨日のリベンジで確かに女子更衣室に潜入した！

だけど何も盗るつもりはなかったし、盗ってもいないーい！！」
「ご託はいい！　黙るんだ！　ゴミクズめ」
「だ、だから女子更衣室で僕は見たんだ！！　早撃ちマークが神速の早撃ちでミソラちゃん達の服を盗んでいくところを……！！」
「な、なん……だと……？」

ソロはスバルの証言に、身震いしてしまう。そしてスバルは立ち上がるとミソラとソロを早撃ちマークの所に連れていく。
早撃ちマーク……その本名は早内マッハだ。クラスの皆からはマー君と呼ばれて親しまれている男の子である。そんな彼は、ある社交界によって、知る人ぞ知る早撃ちマークという通り名がつけられたのだった。彼の犯行は鮮やかで何より速い。気付いたらもう盗んでいたというほどだ。
スバルもハイドのコネでその手の社交界に進出したばかりだったので、その名を耳にしてその存在は知っていた。しかし女子更衣室で偶然遭遇してしまうとは思わなかったはずだ。スバルも思った事だろうまさかマー君が……と驚きは隠せない。
それもそのはずスバルはマー君に好意を持っていた。マー君が誰よりも心優しい少年であると知っており……ミソラとソロの服を盗んだのにもきっと事情があるはずとも思っている。だから自分がその罪の全てを背負って庇ってやった。クラスから変態のレッテルを張られるマー君の姿など見たくなかったのだ。スバルは優しすぎた。
そんな複雑な思いが渦巻きせめぎ合いながらも、スバル達はマー君のいる男子トイレの個室に辿りついた。ミソラは女子なので入ることを少々渋ったが、ウォーロックに「何事も経験」と諭されて納得してしまう。
普段からマー君はお昼休みにいつも決まってトイレの個室にこもって何かをしているのは周知の事実。今回は……おそらく盗んだ品のチェックでもしているのだろう。
スバルはノックをした。マー君は優しげな声で返事をする。その

声色はとても早撃ちマークのものとは思えなかった。

「入ってます！」

平然とした言いように、スバルは大きく息を吸って覚悟を固めた。マー君はいい子だが、このまま放っておくとミソラとソロにも迷惑がかかり、なによりマー君のためにも良くはない。

「知ってるよ。さあ、盗んだ品を出すんだ“早撃ちマーク”！！」

『スバルも俺も早撃ちだが、お前も中々のもんだった。だが、ロックマンを相手にしたのが運の尽きだぜ！』

マー君はその言葉から全てを悟ったようだ。言い訳をすることもなくあっさりと罪を認めた。

「や、やっぱり、女子更衣室で会ったのはスバル君だったんだね……」

「そうだよ……。ミソラちゃんとヒトリちゃんが困っているから盗ったものを返すんだ。今なら、僕一人が悪者で済む。だから……！」

『お前にどんな事情があったのか知らないが……人様のモノは盗っちゃいけないぜ』

「……ははっ、早撃ちマークもロックマンには勝てないか」

スバルとウォーロックの言及にマー君はトイレの個室を開け放つと、頭を下げて涙をぽろぽろとこぼし始めた。きっと彼もスバルが罪を肩代わりしてくれたことに後ろめたいものを感じていたのだろう。

育田の揺さぶりに何より怯えていたのは彼だった。挙手をするスバルの姿が本当の英雄に見えたはず。

泣きながらマー君はスバルに事情を話し始めた。

「ぼ、僕にはどうしてもお金が必要だった……。お母さんもお父さんもいない僕の家族を守るためだったんだ。可愛い弟や妹たちには僕しかいなかった。そしたらミソラちゃんとヒトリちゃんの服を盗んでくればお金をくれるって、“あの人”に言われたんだ」

「あの人？　だ、誰だ……？！　マー君の優しい心を弄ぶなんて許せない……！！」

『へっ、どうやらこの事件には裏で糸を引いていた悪役がいたらしいなっ』

するとマー君はクシャクシャになった札束を握りしめながら、スバルに泣きついた。そしてミソラとソロに謝罪する。握らされたお金で今月の生活費を工面するつもりだったのだろう。これではマー君が可哀そうだ。

そして黒幕の名前を告げた。

「【コダマ小学校六十七代生徒会長及び六年Ａ組委員長並びにＰＴＡ会長の娘兼コダマタウンの成金貴族】鬼も逃げ出すヒステリーの塊こと白金ルナに頼まれたんだ！！　ゴメンよ、スバル君に二人とも。ごめんなさーい」

裏世界では早撃ちマークと恐れられてた彼も、実際は良き兄を演じようと必死だったらしい。マー君は悪くない……これは仕方がなかったのだ。

そんな事情からソロもミソラもマー君を責めることはしなかった。特にソロは兄を演じるということの大変さを知っている。

「早撃ちマークよ。泣くのはよせ。悪いのは白金ルナだ。お前は悪くないさ……その金を持って後でコダマデパートに来い。俺と師匠とで新しい世界に連れて行ってやる！」

「ひ、ヒトリちゃん……あ、ありがとう。おっぱいだけじゃなくて、心も大きいや」
『へっ、いいところを持っていきやがって』
その様子をハンターから見ていたウォーロックはもう出番はないと悟ったようで、ハンターの奥に消えていく。
ソロの不器用な慰めにマー君は少し気持ちが楽になったようだ。
するとスバルはミソラにもマー君を許してあげるようにを頼みこんだ。
「あの、ミソラちゃんも許してくれるかな……？　マー君も悪気はなかったんだよ」
「ううん……。こっちこそごめんなさい。スバル君の優しさにも気付かずに変態扱いしちゃって。クラスメイトのために罪を背負うなんて中々出来ることじゃないよ」
「いや、僕は大したことはしてないさ。クラスで孤立するのは慣れっこだからね！　そういうのは僕の役割ってだけ」
「へへ、カッコいい男の子だよスバル君は！」
「ありがとうミソラちゃん！！」
笑いあう二人。ワイリー研究所より帰って来てからずっとギスギスしていたが、もう大丈夫だろう。誤解を解いたスバル達は全ての元凶であるルナの元に駆けだした。
トイレから飛び出したスバル達は走ってはいけない廊下を全力で駆け抜けた。そして階段を上っていき、最上階の廊下一番奥の生徒会長室。そこでルナがソロとミソラの服を見つめながらブツブツと何やら言っていた。その瞬間をスバル達は押さえたのだ。決定的な瞬間を押さえられたルナは呆気にとられている。彼女はミソラとソロの服を手に持っているのだから、もはや言い訳のしようはない。
スバルはすっかり名探偵気取りだ。真犯人のルナを追い詰めてい

く。

「委員長！　なんでこんなことをしたんだー！　犯人はお前だー！！」

「ス、スバル君……っ、どうしてここに?!」

「マー君が全て話してくれた……一体どうしちゃったんだよ、委員長。君らしくない」

「ぐぬぬ……」

するとルナは開き直った。女のジェラシーは恐ろしいばかりだ。特に彼女のような気の強い女は、歯止めが効かなくなったら行くとこまで行くのである。どうやら原因はミソラやソロにあったらしい。

「そ、そうよ！　私がコダマ小の裏七不思議の一つである早撃ちマークに頼んで、二人の服を盗ませたのよ!!」

ルナは続けた。ここにきて責任転嫁をする始末だった。一体何が彼女をここまでさせるのだろう。

「言っておくけど、仕方がなかったの！　私の知らないところで勝手に話を進めていくアナタ達が悪いのよ！　だから、だからミソラちゃんとソロに嫌がらせをして学校から追い出してやろうとしただけよ!!」

ここまではっきり言ってくれると逆に清々しいというものだ。どう見てもルナが悪者だが、スバルはまだ彼女の誠実さを信じていた。誰よりも学校のルールを重んじていた彼女がこんなことをする訳がない。スバルは基本的に人が良いのだ。

「落ちつけ、委員長……！　いったい全体どういうことか……ちゃ

んと話しあおう」

するとルナが呆れたように溜め息を吐く。

「やっぱり鈍感ねアナタ。ミソラちゃんやソロまで来たら学校に私の居場所がなくなっちゃうって思わなかったの？　一緒に戦ってあげられない私の居場所は学校で触れ合うアナタしかいなかったのに」

「な、何を言ってるんだ……委員長。頭がおかしいのか……？」

スバルはさっぱり訳がわからなくて、頭の中の混乱は極まる。ルナが鈍感だと言ったがその通り。彼はルナの気持ちに気が付いていない。思えば、ルナのそれらしき行動はいくつもあった。彼はそれに気付かなかったというだけだ。

ルナの見つめる彼は、いつも大きなものを背負って戦っていた。そのそばにはミソラやソロがいた。ルナにとってそれはやりきれない。悔しくて堪らない。でも、学校という彼女だけの場所があり、そこでスバルと触れ合うことによって心の安定を保っていた。しかしそれもなくなった。

他人に頼んで物を盗むなんて凶行はルナのプライドを著しく傷つける行為だ。しかし、それをしてでもミソラとスバルを引き離したかった。気持ち悪い執念だが、それがルナの女心だ。気色悪いが、それがルナの素直な気持ちだ。

それにはまさかウォーロックも服の窃盗から色恋沙汰になるとは思っていなかったようで、ハンターの中でだんまりを決め込んでいた。下手に茶化せば後が怖いのだろう。

しかしスバルはまだ気が付かない。ミソラのパンツの柄を凝視しながら、一人でシリアスをしていた。

すると見かねたミソラがスバルの頭を叩いた。これ以上は見ていられないのだ。

「スバル君さ、いいかげんに気付いてあげなよ……ルナちゃんの気持ち」
「え……？　どういうこと」
「はあー呆れた。まさか気付いてないなんて……。もう、服のことはどうでもいいし、ルナちゃんを怒るつもりもなくなっちゃったよ。私のパンツの柄もばれちゃったし。もう、どうにでもなーれ」

もう事件のことなどどうでもいいのだろう。事件を起こすまでに膨れあがったルナの気持ちの方が大切である。
ミソラはスバルの鈍さに呆れつつも、ルナに向かって勇気を出せと促した。ライバルには正々堂々としていて欲しいものだから。

「さ、ルナちゃんそろそろ気持ちを伝えたら？　私はアイドルだから先攻は譲ったげる」

ミソラの助太刀にルナは顔を真っ赤にしてスバルを睨みつける。スバルは堪らず、後ろに何歩か後ずさって逃げだしそうになるのだが、ミソラに止められた。
そしてしばしの沈黙の後、ルナが口を開いた。その口元は震えあがっているが、しっかりとした口調で耳に残る。その瞬間、スバルはミソラのパンツのことなど頭から吹き飛んでしまったのだ。厳重に宝箱に保管していたパンツを爆弾で爆破された衝撃とでもいえる。
それほどのことなのだ。

「あ、あなたのことが好き」
「ほぁ？」
「だ、だから、あなたがのことが大好きなの！　夜も眠れないくらいに！　いつだってアナタのことを考えていた！　だから、なりふり構ってられなかった！！」

ルナは盗んだ服をミソラとソロに投げ返すと、思いの丈を暴露した。もっと時と場所を選んでほしいものだが、それだけ彼女の中の熱い気持ちは収まらなかったということか。

しかしこれではスバルは驚き以上に、突っ込みをしてしまう。とても告白をした女性に対する態度とは言えず、ミソラの顰蹙（ひんしゅく）を買うばかり。

「え？　ええ……？！　委員長が僕を？！　ていうか、なんてタイミングで告白してくるんだよ！！　ほらもっと、雰囲気とかあるだろう？　なんで、服の窃盗を問い詰めて、告白されるんだよ！　あ、ありえない！！」

『へへ、とうとうこの日が来ちまったか。いつか来るだろうとは思っていたが、まさかこのタイミングとは思わなんだ。ゲームオーバーだ。スバル！！』

ゲームオーバー、ウォーロックの言う通りかもしれない。

ｓｂｒ―２３：ロックマンとして生まれた少年

服の窃盗を問い詰めに行ったはずなのに、真犯人のルナから告白されてしまったスバル。結局事件の行方はうやむやとなって闇に葬られてしまった。

それから動揺を隠しつつも授業をこなしていき、現在スバルは帰り支度をしているところだった。隣にはミソラとルナがおり、いつもと何も変わらない。女は恐ろしい生き物だ。デザートが別腹であるように、脳みそもどこかで切り替わっているのかもしれない。

しかしスバルは、そんな姿を見せるルナに返事さえも返していなかった。好きだとも嫌いだとも言っていない。

気丈に振る舞ってはいても、ルナも返事を待っているはず。スバルは酷い男だ。

そんな優柔不断な男の横でルナとミソラがお喋りをしている。表面上は中の良さそうなやり取りで和むが、その心内は深い闇の中で恐ろしいばかりだ。

「フフフ、いよいよライバルとして認めるわミソラちゃん。一緒に住んでいようとも負けないんだからね！」

「私だって、今の状況を有効利用するだけだもん！　色んな事を仕掛けちゃうよ！！」

こんなことを言われたらスバルは夜も眠れない。何気にミソラもスバルに気があることを言ってしまっているのだ。もう隠す気もない二人に彼は気が気でない。お昼休みまでクラスで孤立していたの

に、女子二人から好意を寄せられていると知ったのだから無理もない。とうとう発狂した。

「う、うわー。僕の横で平然とそんな話をするなー！　委員長も少しは恥じらってくれ」

「あら、もう隠す気はないんだから。ガンガン行くわよ！　遠慮してたらミソラちゃんに負けちゃうもの！！」

「そういうことだよスバル君！　私とルナちゃんのどちらを選ぶかはあなた次第。それともヒトリちゃんを選ぶの？」

ミソラとルナ。どちらもスバルにとっては大きなイベントに立ち会ってきた人たちだ。

ルナはスターフォース、トライブチェンジ、ノイズチェンジ、スターダストロックマン、シューティングスターロックマンの変身の時に大きな存在となってくれた。

ミソラは初めてのブラザー、身を挺した裏切り、遊撃隊をともにして、ラーニングレギオン、Rデコードといった重大な出来事に深くかかわってくれた。

そしてソロは一粒で二度おいしく、カノンは従順で素直で、エリアはお金持ち、ついでにゴン太は男らしく、セツナも良く見れば女の子だ。ジャンルさえこだわらなければスバルにはこれほど素晴らしい人たちに囲まれている。

その誰もが魅力的で簡単には選べなく、やがてスバルは苦悩からカタカタと震えだす。

「や、やめろ……！　二人はともかくヒトリちゃんは男だ。今は凄い体でも、あと三カ月でその夢も終わる……！　五本咲きのモンスターを彼女にする気はない！！」

『まあ、一粒で二度おいしいとも考えられるがな……！　いや五本だから五度おいしいのか……？』

「うまい棒じゃないんだから、ロックは黙ってて！！」

スバルはとうとう結論を出すことを放棄して、ルナとミソラから逃げ出すように教室から飛び出した。情けない男だ。

そして逃げ帰ったスバルはひとまず台所で夕飯を作っているあかねに泣きついた。学校で怖い思いをしたと告げ口をしたのだ。まるでいじめられたかのような、真に迫るスバルの態度にあかねも神妙な面持ちとなる。

「母さーん。学校で告白されたー」

「あらあら、よしよーし、いじめられたのね――って告白？！」

まるで告白されたとは言えない、うろたえるスバルにあかねは度肝を抜かれる。スバルの教育方針を少し誤ったことを後悔した。

キョトンとして呆れかえっているあかねに、スバルは事情を話してやった。今日学校で起きたことの一部始終である。とても濃かったので、忘れもしないはずだ。

「うん、告白。委員長が僕のことを好きで夜も眠れないらしいよ？そのせいでミソラちゃんは服を盗まれたんだ。おかげで早撃ちマークはいい迷惑さ」

相変わらずスバルの説明は下手だった。これではまるでルナが危険人物だ。そもそも早撃ちマークの意味から分からない。あかねは要領の得ない説明に首を傾げるが、事の重大さを徐々に理解していくのだった。しかし当の本人はいまいち実感に湧いていないらしい。

「らしいよ？　……じゃないでしょっ。まったく何を言ってるのかしらこの子は、大吾さんに似て大らかでちょっとバカなんだから」

あかねは息子の純粋な様子に呆れてしまうが、つい最近まで引きこもっていた仕方がない息子の躍進としては素晴らしい。将来、お嫁さんを貰えるのか心配をしていたが、どうやらその必要もないらしい。異性に認められるという事は、生物として一歩大人に近づいたということだ。親としては嬉しいに違いない。

あかねはスバルを拍手で祝福した。

「おめでとうスバル！　アナタ、おめでたいわ！」

「あ、ありがとう、母さん。でも委員長さ、ガンガン来るって言ってたから正直怖いよ。家の裏にルナルナ団の本部があるしずっと監視されていると思うと、委員長じゃないけど夜も眠れない……」

「でも、それだけ好意を寄せられているってことよ。で、返事はしたの……？」

「してない。だって僕、委員長のことを……。いや、そりゃ引きこもってた僕にかまってくれた初めての女の子だけどさ……。なんというか今は女の子に興味がないんだ」

どうにも乗り気でないスバルにあかねは疑問に思うが、すぐにその原因を察した。スバルも大したものだとあかねは勝手に感心する。

「もしかしてミソラちゃん……？」

「ああ、それもあるね……。でもなんというかやっぱり、女の子自体に興味がわかないんだよ……」

スバルはどうやら末期症状らしい。たび重なるストレスに晒され続けて、正常ではなくなりつつある。あかねは息子の悲しい現状を

嘆く。包丁で指を切ってしまう動揺の仕方だった。

「まあ、この子ったら、まさかヒトリちゃんに気があるの？　でも、だめよ中身は男の子なんだから」

「母さんまでそういうこと言うの？　たしかにあの体は魅力的だとは何度でも何度でも語ってやるけど、そういうことじゃないんだよ。母さんにも言ったと思うけど、僕の身の周りで色んなことが起きすぎた。今は心の整理をつけておきたいんだ」

スバルは長い溜め息を吐いてくたびれた様子だった。そのままソファに寝転がると、テレビをぼんやりと見つめている。そのやる気ない背中は無気力症候群かと思わせる。

確かに彼の言う通り、この半年で色んなことが起きすぎたのかもしれない。レギオンの登場に、大吾がさらわれてしまい、もう一人のワイリー……セツナも消えてしまった。あげくの果てにウォーセヴティが星河アヤメという祖母の名を伝えてくるのだ。女との交友で浮かれることはおろか、一喜一憂するのも馬鹿らしい。女の子に興味がないという言葉の意味はそういう事である。女湯や女子更衣室に潜入するくらいの変態ではあるが、そこまでの変態ではないという事だった。

するとあかねはスバルに向かってある一つの提案をする。彼女もウォーセヴティが言っていた義理の母の件について気になっていたのだ。アヤメはあかねの料理の師匠であるのはもちろんのこと、もっと根本的に星河家の重大な部分を担っていた。ウォーセヴティがそのことを知っているとすれば、星河家に嫁いだ者としては放っておけないのだろう。もちろんスバルの告白記念もある。

「ねえ、スバル。おばあちゃんのお墓参りに行ってみない？　アナタが女の子に好きになってもらったことを伝えてあげないと……それに色々と気になることもあるからね」

「なにさ……藪から棒に。もしかしてウォーセヴティのことを気にしてるの？　放っておきなよ、タダの嫌がらせに決まってる。洗脳した父さん辺りから聞きだしたに違いない」
「ダメよスバル……あなたも星河の人間なんだから、おばあちゃんに挨拶しにいくの。わかった？」
「どうしたんだよ、大袈裟だな。おばあちゃん、おばあちゃんって……」

スバルは疲れているのに墓参りに行かなければならないことに嫌気が差す。先祖をないがしろにする訳ではないが、墓参りにならお盆に行ったところだった。いまさらというものなのだ。
だがあかねは料理を止めて、外出の準備を始めだしてしまった。彼女はタンスから例の紙媒体の古ぼけたレシピを取り出すと、その紙に向かって思い詰めたように目を落としている。色あせた紙にはレシピと称したあかねと大吾にしか分からない暗号が刻まれているのだ。
そしてスバルにも聞こえないだろう小さな声であかねは呟くのだった。まるでウォーゼヴティの登場を予期していたようで、スバルを尻目に悲しそうに目を細めている。

「とうとう、この時が来てしまいましたよお義母さん……あなたの言っていた通りになりました。私達のスバルは……」

ＷＡＸＡの前身である科学省。星河アヤメはそこの最後の科学者だった。在学中にあかねは彼女を師事して電波科学を学び、大吾と知り合って結婚した。その際、アヤメからあかねはその古い紙切れを受け取っていた。
それはワイリーとアヤメからの隠されたラストメッセージ。そう、ゼロが感じていた大切な最後のピースとなる。アヤメの暗号……さしずめアイリスコードと言ったところか。

生前のアヤメはしつこく言っていたのだ。スバルが世界の救世主となると……。もっとも、あかねや大吾はその当時はその言葉を信じていなかったはず。可愛い孫に対する大袈裟な評価というものだ。

だが、ウォーセヴティが現れた今、全ての歯車がかみ合おうとしていた。

あかねはスバルがロックマンとなったことを初めて知った時に、薄々とこうなることは感づいていたのかもしれない。

ｓｂｒ―２４：死の町、そして死の世界へ

「ただいまー」
「ただいま……っ」
「ただいま帰還しました、師匠！！」

スバルとあかねが墓参りの準備をしているところミソラとカノンとソロが家に帰ってきた。すると三人は不思議に思い、あかねに向かって外出の準備をするに至った経緯を尋ねる。あかねの服装はきっちりとしたスーツないし、黒っぽい礼服だったのだ。夕飯時にそんな格好をされたら疑問に湧くというものである。

ミソラはキョトンとした表情であかねと乗り気でないスバルを見比べる。

「どうしたの、あかねさん。珍しくきっちりした服を着て……」
「師匠、それは勝負服ですか？　でも、買い物にはあまり適さないかと」
「買い物？！　じゃあ、夕飯はウインナーの丸焼きだね、お姉ちゃん！」
「オネエじゃない、お兄ちゃんだ！！」

姉か兄かを巡って言い争う二人。ソロが兄を主張するがカノンはお姉ちゃんでいてほしいとねだっている。きっと彼女は姉の素晴らしさのやみつきになってしまったのだろう。一緒にお風呂に入ることが出来るのだから、兄にはない最大の利点である。

するとあかねが仕方のない二人にこれから外出する旨を伝えた。

カバンを二階の自室に置いてくるよう指を階上へ指して促す。

「まあまあ、二人抑えて。ちょっと、お墓参りに行くからアナタ達にもついてきて欲しいの」

するとミソラがリビングから出て行く途中、ドアに手を掛けたところで人差し指を唇に当てて戸惑いを浮かべた。

墓参りは基本的に親戚が行くものだ。ソロもカノンもミソラも親戚ではないので、少し悪い気がしたのかもしれない。

「私はいいんだけど。でも、関係ない私たちが行っても良いんですか？」

「大丈夫よ。アナタ達も同じ家族じゃない……おばあちゃんも喜んでくれるわ」

「師匠！　家族と言ってくれるのは嬉しいのですが、お祖母様に何の用が……？」

可愛い顔してソロは冷静沈着なので、もっともな疑問を呈するのであった。しかしあかねは悪戯っぽく笑ってごまかし、ソロ達にさっさと準備をするように急かすだけ。ついでに新しく買ってきた服をソロに着てくるように言いつけてくるので、話ははぐらかされた。ソロは星河家では完全に着せ替え人形状態だ。しかし師匠には逆らえないので、ソロとあかねの間では絶妙なところでバランスが取れている。

「さあさ、早く行くから支度なさい。ヒトリちゃんは可愛い服を買ってきておいてあげたからソレを着てくるように」

「師匠……！　はぐらかさないでくださいっ」

「ふりふりのスカートに、胸元を大胆に開けた可愛いお洋服よ！」

「し、師匠ー！！」

結局はぐらかされてしまったソロは、大胆な服装をしてお墓参りに赴くことになってしまった。一同は家から出ると、ウェーブライナーの発着場があるコダマ駅に向かった。

そしてウェーブライナーを乗り継ぐこと一時間ほど。アヤメの墓があるグレイブタウンに星河家一行は到着した。グレイブタウンとはその名の通り、お墓がその土地のほとんどを占める霊園都市である。住宅街の周りにお墓が取り囲むように広がったあまり住みたくない場所なのだ。町の印象としては灰色で、時の流れが止まってしまったかのように廃れている。所々でペットが廃棄されており、二百年前の面影を残しているほどだった。解体される前の科学省があったのもこのグレイブタウンである。

そんな辛気臭い街中で、何を想ったのかミソラはそっとスバルに耳打ちをしてくるのだった。どうやら学校でのルナとのやり取りのことを言っているらしい。墓石が延々と立ち並ぶ殺風景な景色がずっと続いているのに、恋愛話とはさすがの女の子だった。

「ねえ、スバル君」
「なにさ。どうでもいい事なら聞かないよ」
「どうでもよくないよ。今日はルナちゃんから告白された訳だけど、その感想を聞かせてほしいな」
「どうでもいいよ……」
「どうでもいいって……じゃ、私が告白してもどうでもいいの？」

鎌を掛けるミソラだったがスバルは引っかからずにぼんやりとしたままだった。夜太郎やセツナ達が消えてからの無気力状態に再び

戻ってしまっているらしい。目まぐるしく変わっていった状況にある種の錯覚を覚えていたのだろうが、実際は何も変わっていない。宇宙の危機はまだ続いているのだ。

こうなってはミソラが何を言っても耳に入らないだろう。例えここで告白をしてもどうでもいい事とみなされるはずだ。ミソラは頬を膨らませるとスバルに不満をぶつけてみる。

「はーあ、じゃあさ。どうしたら私たちに興味を持ってくれるの？ルナちゃんでも私でも……女の子に興味がないことはないでしょ？」

「うーん……どうだろう。はっきり言って、今はそんなことどうでもいいよ。女の子に興味がない。というかそんなこと考えている場合じゃない」

「昨日……お風呂を覗いたクセに？」

「それは抑えきれない欲求さ。愛じゃない」

「うっ……」

平気で恥ずかしいこと（それでも的を射ている発言）を口に出すスバルに、ミソラは口ごもった。言い訳をしないのは潔いが、乙女としてはスバルの発言は少々そっけない。

これ以上は言っても無駄だと感じたのかミソラは無念そうに、スバルをそっとしといてやる。それでも最後に少しだけ、宣戦布告をしておくのには抜かりがないと言えた。

「わかった。でもさ、全てが終わった時に私の思いをキミに伝えるから、覚悟しておいてよね！」

「……うん、分かったよ。覚悟しておく。全てが終わった時に、そういう事が言える世界だといいよね」

結局ミソラがスバルに思いを伝える時は宇宙が救われて、スバル

が心の重荷の全てから解き放たれた世界で、という事になった。告白する時はせめて、本当の平和を勝ち取った世界でしたいという乙女の願いであった。

色恋沙汰よりも重視することが多すぎる現状、今はとりあえず保留しておくしかないのだ。

そうしたミソラとスバルの何とも煮え切らない話が終わったところ、ようやくアヤメの墓に到着した。それは他の墓石より一回り大きいが、目立つという事はなく、一見は普通の墓だった。星河家らしく主張のないことだ。

呆気ないしそっけないが、ようやくの到着にスバルはそろそろあかねを問い詰めておく。何も知らずに墓参りをするのはご先祖に申し訳が立たないという、彼の良識から出た行動だった。

それにボロボロの紙きれの正体がそろそろ気になって仕方がない。何度もそれを見つめては溜め息を吐くことを繰り返す母親。そんな姿に何も感じない親不孝者ではないと自負しているスバルは、結果として余計な詮索をしてしまうのだった。

「母さん、さっきから様子がおかしいけど、アイリスコードって何なの？」

「……そうね。そろそろ言っとこうかしら」

あかねは墓に歩んでいきながらで例の紙切れを取り出した。スバルはずっと不思議に思っていたのだが、このご時世で紙媒体とは妙に引っかかる。本来ならハンターにでも保管しているはずだ。

そんな不安と疑問をとりあえず置いといて、あかねは続けた。

「この紙切れはね、おばあちゃんが残してくれたメッセージが記されているの。誰にも情報を盗み出されないように、ただのレシピ表を装っているけど……ほんとうは違う。これは大吾さんと私しか解読できないように、アナタのおばあちゃんが託してくれた暗号……」

「暗号って、一体なにが書いてるの？」

スバルの質問にあかねが順を追って説明してやる。まず星河アヤメについて教えてやらないといけないだろう。

アヤメはスバルが幼いころに死んだので、スバルにとって彼女は記憶の隅っこで居座る親戚でしかないだろうから。

「その質問に答えるのにはまず、おばあちゃんについて話さないといけないわね」

「知ってるよ、おばあちゃんは旧科学省の職員だったんでしょ？」

「いや、それだけじゃない……。おばあちゃんはリフレイン博士と一緒でワイリー博士の思想を受け継ぐ者の一人だったの」

「へー？」

「聞いて。おばあちゃんは情報工学の権威で、今の電波社会の基礎を作り上げた一人なのよ」

「な、なんだよソレ……おばあちゃんがワイリー博士の弟子だって言うの？」

「言い方を変えればそうね……。だからこそアイリスコードの名前を聞いた時、私は震えあがったの」

アイリスコード……それはラストワイリーナンバーであるゼロのプロテクトを突破する最後のコードだ。

生前のワイリーは死の間際に、熱斗を筆頭にした研究グループにゼロプロジェクトのとある部分を託していた。もちろんゼロプロジェクトである事は秘匿して、キーワードを仄めかす程度ではあったが、熱斗達はワイリーの託した研究を快く引き受けた。

その部分とはソフトウェアの開発である。

ハードウェアがレプリカントアンドロイドというロボットフレームで、ワイリーが完成させることができても、ソフトウェアは専門外で熱斗達の研究グループに託すしかなかった。そして二百年の月

日が経過した結果、アイリスコードが熱斗の研究を引き継いだアヤメによって完成された。
　このアイリスコードはゼロフレーム制御を行うカーネル部分に作用して、莫大な力を発揮する。まさに対インフィニットの最後の切り札だった。
　あかねは嫁入りする時にアヤメからそのようなことを聞いていたのだ。そしてゼロプロジェクトの片鱗も耳にしていた。どうやらリフレインと同じかそれ以上のところまでアヤメも真実に近づいていたようだ。

「おばあちゃんは言ったわ。アイリスコードはいつか絶対に必要になるって……そしてその時は、世界が崩壊する時だ……って。正直、私は信じられなかった。でもアナタの口からアイリスコードの存在を耳にすれば、信じるしかなかった」
「ぼ、僕は信じられないよ！　おばあちゃんがそんな事を……詐欺だ！」
「いいえ、信じて。そしてアナタも無関係じゃないのよスバル……。おばあちゃんが言うにはアナタは……世界の救世主になるって、いつもそう言ってたわ。引きこもっていたアナタからはそんな気配は微塵も感じなかったけど、ロックマンとして戦っていくアナタを見ていると、おばあちゃんの言葉はきっと嘘じゃなかったと感じ始めていった……」

　結局スバルは納得できないが、歩けば着いてしまう。あかねたちはとうとうアヤメの墓の前に辿りついてしまったのだ。
　しかしどうだ。墓参りとは方便で、あかねは紙切れに隠された暗号に従って、いきなり墓石を物色し始めたではないか。見ている分には罰当りだが、故人のメッセージを遂行しているだけなので仕方ないと言いたげだ。
　どうやら墓石にある何かを探しているらしい。

「本当はこんなことはしたくないんだけどね……」

あかねは紙切れの情報から、墓石にペタペタを手を這わせて隠されたあるモノを探していく。しばし格闘するとようやくそれは見つかった。どうやら墓石には見る分には絶対に分からない微妙な継ぎ目があって、それを押しこむとスイッチとなる仕掛けがあったらしい。

星河家の遊び心にソロ達は黙って見ているしかない。

「あった。隠しスイッチ！」

あかねが墓石の隠しスイッチを押しこむと、墓石が沈んでいく。一同は息を呑んで見守るが、傍から見ればただの墓荒らしだ。スバルは内心で良い気はしていない。

きっとミソラ達も同じ気分なのだろう。遺骨なんて見せられたら夜の寝付きが悪くなること請け合いである。

そんな嫌な予感を胸に抱きつつも、墓石は完全に沈みきってしまい、今度は墓穴から隠し階段が現れた。古ぼけた紙切れはどうやら料理のレシピではなく、本当に暗号を記していたらしい。不気味な階段を目の前にして、あかねはスバル達に奥に進むように言う。

とんでもない墓参りになってしまったとスバルは後悔した。

「じゃ、行くわよ、みんな」

あかねは先頭をきって墓穴の階段に消えていく。次にソロ、カノン、ミソラだ。残されたスバルはじっとりとした空気に悪寒を覚えるも、男は度胸という事なので、死臭が経ちこめる地下へ足を踏み入れた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2244h/

流星のロックマンＲ ラストナンバーズ

2012年1月13日19時03分発行